

言葉は 肉において現れる



序文

神を信じている人はたくさんいるが、神への信仰とは何を意味するか、神の心に従うためには何をしなければならないかを理解している人はほとんどいない。人々は「神」という言葉や「神の働き」のような語句はよく知っているが、神を知らないし、ましてや神の働きなど知らないからである。それなら、神を知らないすべての人々がでたらめな信仰に取りつかれているのは無理もない。人々は神への信仰を真剣には受け止めない。なぜなら神を信じることは彼らにとってあまりにもなじみのないものであり、あまりにも不慣れなことだからである。これでは、彼らが神の求めに応えることなどできない。言い換えれば、人々が神を知らなければ、神の働きを知らなければ、神に使われるには適さないし、ましてや神の望みに応じることなどできない。「神への信仰」とは神の存在を信じることを意味し、これは神に対する信仰の最も単純な考えである。さらに、神の存在を信じることは、真に神を信じることと同じではない。むしろそれは強い宗教的含みを持つ単純な信仰である。神への真の信仰とは、神はすべてのことに支配権を持つという信念に基づいて神の言葉と働きを経験することを意味する。墮落した性質から解放され、神の望みに応じ、神を知ることができる。そのような道程を経てのみ、神を信じていると言える。しかし、人々はしばしば神に対する信仰を、何か単純で取るに足らないものだと考える。このような形で神を信じる人は、神を信じることの意義を失っており、最後の最後まで信じ続けるかもしれないが、神の承認を得ることは決してない。なぜなら、彼らは間違った道を歩んでいるからである。今日でも、文字上でだけ、空しい教義上でだけ神を信じている人々がいる。彼らは自分たちの信仰には本質がないことや、自分たちが神の承認を得られないことに気が付かず、依然として平安と神からの十分な恩恵を願って祈っている。わたしたちは立ち止まって次のように自問するべきである。神を信じることは本当に地上で最も容易なことなのだろうか。神を信じることは神から十分な恩恵を得ることではないのだろうか。神を信じているが神を知らない人々、神を信じているが神に反抗している人々は本当に神の望みを満たすことができるのだろうか。

神と人を同等なものとして語ることはできない。神の本質と神の働きは人にとって最も深遠で理解しがたい。神が人の世で自ら働きを行わず、言葉を話さなかったら、人は決して神の旨を理解することはできないし、全生涯を神に捧げてきた人々でさえ、神の承認を得ることはできない。神の働きがなければ、人の行いがどんなによくても無駄である。神の考えはいつも人の考えより高く、神の英知は人にとって測り知れないものだ。

からである。そのため、神と神の働きを「完全に理解している」と主張する人たちは無能な輩で、皆自惚れていて無知だとわたしは言う。人は神の働きを決め付けるべきではないし、その上、人は神の働きを決め付けることはできない。神の目には人は蟻よりも小さいのに、どうして人が神の働きを推し測ることなどできようか。「神はあんな方法やこんな方法では働かない」とか「神はこのようである、あのようである」といつも言っている人々――彼らは皆高慢ではないだろうか。わたしたちは皆、肉なる人々は残らずサタンによって墮落させられていることを知るべきである。神に反抗するのは彼らの本性であり、彼らは神と同等ではなく、ましてや神の働きに助言することなどできない。神が人をいかに導くかは神自身の働きである。人は服従するべきであり、これこれしかじかの意見を持つべきではない。人はちり芥にすぎないのだから。わたしたちは神を見つけようとしているのであり、神が考慮すべき神の働きの上に自分たちの観念を重ね合わせるべきではないし、神の働きに故意に反対するために自分たちの墮落した性質を用いることなどもってのほかである。そのような行為はわたしたちを反キリストにさせるのではないだろうか。どうしてそのような人々が神を信じているなどと言えるだろう。わたしたちは神の存在を信じているので、神を満足させ、神を見たいと望んでいるので、真理の道を求め、神と融和するための道を探すべきである。わたしたちはかたくなに神に反抗するべきではない。そのような行動に何の益があるだろう。

今日、神には新しい働きがある。あなたはこれらの言葉を受け入れないかもしれない。あなたには奇妙な言葉に感じられるかもしれないが、わたしはあなたに本性を表さないよう忠告する。神の前で本当に義に飢えかわいている人々だけが真理を得ることができ、本当に敬虔な人々だけが神によって啓かれ、導かれることができるからである。口論を通して真理を求めてもそこからは何も生じない。静かに求めることによってのみわたしたちは結果を得ることができる。わたしが「今日、神には新しい働きがある」と言う時、わたしは神が再び肉となることに言及している。おそらく、あなたはこれらの言葉を気にしないか、これらの言葉を軽蔑するか、あるいはおそらくあなたにとって極めて興味深い言葉であるかもしれない。いずれにせよ、わたしは神の出現を本当に切望するすべての人々がこの事実を直視し、慎重に考慮することを希望する。結論に飛びつかない方がよい。これが賢い人々の行動すべきやり方である。

このようなことを考察するのは難しいことではないが、わたしたちそれぞれにこの真理を知ることが要求される。受肉した神は神の本質を有し、受肉した神は神による表現を有する。神は人間の姿になるので、なすべき働きを打ち出し、神は人間の姿になるの

で、自分が何であることを表して、人に真理をもたらし、人にいのちを与え、人に進むべき道を示すことができる。神の本質を含んでいない肉体が受肉した神ではないことは間違いなく、これについて疑う余地はない。受肉した神かどうか調べるためには、その人が表す性質や話す言葉からそれを決めなければならない。つまり、人間の姿になった神かどうか、それが真の道かどうかは、その人の本質から判断しなければならない。そこで、人間の姿になった神かどうかを決定するとき、鍵となるのは、外見よりもむしろその人の本質（働き、言葉、性質、その他いろいろ）に注意を払うことである。外見だけを見て本質を見落とす者は、自分の無知、単純さをさらけ出すことになる。外見は本質を決定しない。その上、神の働きは決して人の観念と一致することはない。イエスの外見は人の観念とはまったく違っていたではないか。イエスの外見と衣服はイエスの真の正体に関し何らの手がかりも与えることができなかったのではないだろうか。古代のパリサイ人がイエスに反対したのは、彼らがイエスの外見を見ただけで、イエスの語る言葉を真剣に受け止めなかったからではないだろうか。神の出現を求める兄弟姉妹には歴史の悲劇を繰り返さないで欲しい。あなたがたは、現代のパリサイ人になって神を再び十字架につけるようなことをしてはならない。あなたがたは神の再来をどのように歓迎するか慎重に考え、真理に服従する人になるにはどうしたらよいか、はっきりした考えを持つべきである。これが、イエスが雲に乗って再臨するのを待っているすべての人の責任である。わたしたちは霊的な目をこすり、非現実的な考えに満ちた言葉の餌食になってはならない。わたしたちは神が現実に行う働きについて考え、神の実際的な面を見るべきである。イエスをまったく知らず、見たこともなく、イエスの旨をどう行ったらよいかわからないあなたがたを引き上げるために、主イエスが突然雲に乗ってあなたがたのもとに降りて来る日をひたすら楽しみにしながら、調子に乗ったり、空想にふけて自分を見失ったりしてはいけない。現実的な事柄を考えているほうがよい。

あなたは研究のため、あるいは受け入れるつもりでこの本を開いたのかもしれない。あなたの態度がどうであれ、わたしはあなたがこの本を最後まで読み、簡単に脇に押しやってしまわないことを希望する。おそらく、これらの言葉を読んだ後、あなたの態度は変わるだろうが、それはあなたの動機と理解度次第である。しかし、あなたが知っておくべきことが一つある。神の言葉は人の言葉として語ることはできないし、ましてや人の言葉は神の言葉としては語ることはできない。神に使われる人間は受肉した神ではなく、受肉した神は神に使われる人間ではない。ここに実質的な違いがある。これらの言葉を読んだ後、あなたはこれらが神の言葉であることを受け入れず、ただ啓示を受け

た人の言葉として受け入れるかもしれない。そうだとすれば、あなたは無知ゆえに目が見えなくなっているのだ。どうして神の言葉が啓示を受けた人間の言葉と同じでありえようか。人の姿になった神の言葉は新しい時代を開始し、人類全体を導き、奥義を明らかにし、人に新しい時代に向かう方向を示す。人が獲得する啓示は単純な実践、あるいは認識にすぎず、人類全体を新しい時代に導くことはできないし、神自身の奥義を明らかにすることもできない。神は結局神であり、人は人である。神は神の本質を持っており、人は人の本質を持っている。神によって語られた言葉を単に聖霊による啓示と見なし、使徒や預言者の言葉を神自らが語る言葉として受け取るならば、それは間違っている。とにかく、あなたは決して正しいものを誤りとするべきではないし、高いものを低いものとして話すべきではないし、深いものを浅いものとして話すべきではない。とにかく、あなたは真理であると知っていることを決して故意に論駁するべきではない。神の存在を信じる人はすべてこの問題を正しい観点から考察すべきであり、神の新しい働きと新たな言葉を神の被造物の観点から受け入れるべきである――さもないと神に淘汰されるであろう。

ヤーウェの働きの後、人のあいだで神の働きを行うためにイエスは受肉した。イエスの働きは単独で実行されたのではなく、ヤーウェの働きの上に築かれた。それは律法の時代を神が終わらせた後の新しい時代のための働きであった。同様に、イエスの働きが終わった後、神は次の時代のためにさらに神の働きを続行した。神による経営（救い）全体はいつも前進しているからである。古い時代が過ぎると、新しい時代に置き換えられ、古い働きが完了すると、新しい働きが神の経営を続行する。今回の受肉はイエスの働きの完了に続く神の二回目の受肉である。もちろん、この受肉は単独で起こるのではなく、律法の時代と恵みの時代の後の第三段階の働きである。神の働きの新しい段階はそれぞれいつも新しい始まりと新しい時代をもたらす。そこで神の性質、神の働き方、神の働く場所、神の名にもそれに付随した変化がある。したがって、人にとっては、新しい時代の神の働きを受け入れるのが難しいのは無理もない。しかし、いかに人が反対しようと、それには関係なく、神はいつも自分の働きを行っており、いつも人類全体を前方に導いている。イエスが人の世に誕生した時、イエスは恵みの時代をもたらし、律法の時代を終わらせた。終わりの日において神はもう一度肉となり、今回人間の姿になった時、神は恵みの時代を終わらせ、神の国の時代をもたらした。神の二回目の受肉を受け入れる人々はすべて神の国の時代に導かれ、直接神の導きを受け入れることができるだろう。イエスは人間のあいだでたくさんの働きをしたが、全人類の贖いを完了して

人の贖罪のためのささげものとなるだけだった。人から墮落した性質のすべてを取り除くことはなかったのである。サタンの影響から完全に人を救うためには、イエスが贖罪のささげものとして人の罪を引き受けることが必要だっただけでなく、神にとっても、サタンによって墮落させられた人の性質を完全に取り除くためにもっと大きな働きを行うことが必要だった。そこで、人が罪を赦された後、神は人を新しい時代に導くために人間の姿に戻り、刑罰と裁きの働きを開始し、この働きは人をより高い領域に連れてきた。神の支配の下に従う人々はすべてより高い真理を享受し、より大きな祝福を受けらるだろう。彼らは本当に光の中に生き、真理、道、いのちを得るだろう。

人々が恵みの時代に留まっていれば、彼らは墮落した性質を決して免れないし、ましてや神の本来の性質を知ることはない。人々がいつも豊かな恵みの中に生きていても、神を知り、神を満足させることを可能にするいのちの道がなければ、いくら神を信じていても決して本当に神を得ることはないだろう。それはなんと哀れな形の信仰ではないか。あなたがこの本を読み終えた時、神の国の時代における受肉した神の働きの各段階を経験した時、あなたは長年の希望がついに実現されたことを感じるだろう。あなたはそのとき初めて本当に神を直接見たとを感じるだろう。初めて神の顔をじっと見つめ、神自らの発言を聞き、神の働きの英知を正しく理解し、神がなんと現実的で全能かを本当に感じるだろう。あなたは過去の人々が決して目にしたり、所有したりしたことのない多くの事柄を獲得したことを感じるだろう。この時、あなたは神を信じるとは何か、神の心に従うとは何かをはっきりと知るだろう。もちろん、あなたが過去の考えに執着し、神の二度目の受肉の事実を否定、あるいは拒絶するならば、あなたがたは手ぶらなままでとどまり、何も獲得せず、ついには神に反抗するという罪を犯すだろう。真理に従い、神の働きに服従する人々は再び受肉した神――全能者の名の下に集うだろう。彼らは神自らの導きを受け入れ、さらに多くの高い真理を手に入れ、本当の人生を受けるだろう。彼らは過去の人々がそれまで決して目にすることのなかったビジョンを見るだろう。

「そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった」（ヨハネの黙示録 1:12-16）。このビジョンは神の全性質の現れであり

、このような神の全性質の現れは、今回人の姿となった神の働きの現れでもある。刑罰と裁きを連発する中で、人の子は言葉を話すことによって本来の性質を表現し、その刑罰と裁きを受け入れるすべての人々が人の子の本当の顔、ヨハネが見た人の子の顔の忠実な描写である顔を見ることを認める。（もちろん、このすべては神の国の時代の神の働きを受け入れない人々には見えないだろう。）神の本当の顔は人間の言葉では十分明確に表現することはできないので、神はその本来の性質の表現を用いて人に本当の顔を示す。すなわち、人の子の本来の性質を経験した人々はすべて、人の子の本当の顔を見たのである。神はあまりに偉大なので、人の言葉で十分明確に表現することができないからである。いったん神の国の時代における神の働きの各段階を経験したら、ヨハネが燭台の明かりの中にいる人の子について語った言葉の意味を人は知るだろう。「そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった」。その時、あなたは、これほどの多くの言葉を語ったこの普通の人間が、本当は二度目の受肉した神であることをまったく疑う余地なく知るだろう。そしてあなたは自分がいかに祝福されているかを本当に感じ、自分がもっとも幸運であると感じるであろう。あなたはこの恩恵を受け入れたくないだろうか。

この本の第一部は「キリストの初めの言葉」である。これらの言葉は、恵みの時代の終わりから神の国の時代の始まりへの移行を表わしており、また聖霊が諸教会に向けた、人の子についての公の証しである。これらの言葉はまたヨハネの黙示録の中の「耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい」という言葉の成就でもある。これは神の国の時代に神が開始する働きである。この本の第二部は人の子が正式に自らを明らかにしたあとに直接に語った言葉を収めている。その中には預言、奥義の明示、いのちの道など数種類の発言といった豊かな内容が含まれている。神の国の未来の預言、神の経営（救いの）計画に関する奥義の明示、人の本性の詳細な分析、忠告の言葉や警告、厳格な裁き、心からの慰めの言葉、人生についての話、入ることについての話などがある。要するに、神の持っているもの、神であるもの、神の性質などすべてが神の働きと言葉の中に表されている。もちろん、神の今回の受肉において、神の働きは主に刑罰と裁きを通して神の性質を表すことである。これを基礎として、神は人により多くの真理をもたらし、より多くの実践方法を示し、こうして人を征服し、墮落した性質から人を

救うという神の目的を達成する。これが神の国の時代における神の働きの背後にあるものである。あなたは新しい時代に入りたいのか。あなたは自分の墮落した性質を排除したいのか。あなたはより高い真理を獲得したいのか。あなたは人の子の本当の顔を見たいのか。あなたは価値のある生涯を送りたいのか。あなたは神によって完全にされたいのか。そうならば、あなたはどのようにイエスの再来を歓迎するつもりなのか。

目次

第一部 キリストの初めの言葉——諸教会に向けた聖霊の言葉（1991年2月11日から1991年11月20日まで）

序論

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

第七章

第八章

第九章

第十章

第十一章

第十二章

第十三章

第十四章

第十五章

第十六章

第十七章

第十八章

第十九章

第二十章

第二十一章

第二十二章

第二十三章

第二十四章

第二十五章

第二十六章

第二十七章

第二十八章

第二十九章

第三十章

第三十一章

第三十二章

第三十三章

第三十四章

第三十五章

第三十六章

第三十七章

第三十八章

第三十九章

第四十章

第四十一章

第四十二章

第四十三章

第四十四章

第四十五章

第四十六章

第四十七章

第四十八章

第四十九章

第五十章

第五十一章

第五十二章

第五十三章

第五十四章

第五十五章

第五十六章

第五十七章

第五十八章

第五十九章

第六十章

第六十一章

第六十二章

第六十三章

第六十四章

第六十五章

第六十六章

第六十七章

第六十八章

第六十九章

第七十章

第七十一章

第七十二章

第七十三章

第七十四章

第七十五章

第七十六章

第七十七章

第七十八章

第七十九章

第八十章

第八十一章

第八十二章

第八十三章

第八十四章

第八十五章

第八十六章

第八十七章

第八十八章

第八十九章

第九十章

第九十一章

第九十二章

第九十三章

第九十四章

第九十五章

第九十六章

第九十七章

第九十八章

第九十九章

第百章

第百一章

第百二章

第百三章

第百四章

第百五章

第百六章

第百七章

第百八章

第百九章

第百十章

第百十一章

第百十二章

第百十三章

第百十四章

第百十五章

第百十六章

第百十七章

第百十八章

第百十九章

第百二十章

第二部 全宇宙への神の言葉（1992年2月20日から1992年6月1日まで）

序論

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

第七章

第八章

第九章

第十章

神の国の賛歌

第十一章

第十二章

第十三章

第十四章

第十五章

第十六章

第十七章

第十八章

第十九章

第二十章

第二十一章

第二十二章

第二十三章

第二十四章

第二十五章

汝ら民よ、みな喜びなさい！

第二十六章

第二十七章

第二十八章

第二十九章

第三十章

第三十一章

第三十二章

第三十三章

第三十四章

第三十五章

第三十六章

第三十七章

第三十八章

第三十九章

第四十章

第四十一章

第四十二章

第四十三章

第四十四章

第四十五章

第四十六章

第四十七章

附録 全宇宙への神の言葉の奥義の解釈（幾つかの章の解釈）

第一章

第三章

第四章

第五章

第六章

ペテロの一生

第八章

第九章

補遺：第一章

第十章

第十一章

補遺：第二章

第十二章

第十三章

第十四章

第十五章

第十六章

第十七章

第十八章

第十九章

第二十章

第二十一章

第二十二章と第二十三章

第二十四章と第二十五章

第二十六章

第二十七章

第二十八章

第二十九章

第三十章

第三十一章

第三十二章

第三十三章

第三十五章

第三十六章

第三十八章

第三十九章

第四十章

第四十一章

第四十二章

第四十四章と第四十五章

第四十六章

第三部 諸教会を歩くキリストの言葉（1992年6月から2014年8月まで）

序論

諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅰ）（1992年6月から1992年10月まで）

道……（1）

道……（2）

道……（3）

道……（4）

道……（5）

道……（6）

道……（7）

道……（8）

信者はどのような観点をもつべきか

神の働きの過程について

墮落した人間は神を体現できない

宗教的な奉仕は一掃されなければならない

神への信仰において、あなたは神に従うべきだ

神との正常な関係を築くことは極めて重要である

正常な霊的生活は人を正しい道へ導く

完全にされた人々への約束

悪人は必ず罰を受ける

正常な状態へ入るには

神の心になうように仕えるには

現実をどのように知るか

正常な靈的生活について

教会生活と実生活についての議論

一人ひとりが自らの役割を果たすことについて

神が人間を用いることについて

いったん真理を理解したら、それを実践すべきである

救いを得る人は真理を進んで実践する人である

牧者に適した人が備えているべきもの

経験について

新時代の戒め

千年神の国は訪れた

あなたと神との関係はどのようなものか

もっと現実集中しなさい

戒めを守ること、真理を実践すること

実際の神は神自身であることを知るべきである

真理を実践することだけが現実を自分のものにすることである

今日の神の働きを知ること

人が想像するほど神の働きは簡単なものか

神を信じるなら真理のために生きるべきである

七つの雷が轟く――神の国の福音が宇宙の隅々まで広まることを預言

受肉した神と神に使われる人との本質的な違い

暗闇の影響から脱すれば、あなたは神のものとされる

信仰においては現実集中せよ――宗教的儀式を行うことは信仰ではない

今日の神の働きを知る者だけが、神に仕えてもよい

神への真の愛は自発的なものである

祈りの実践について

神の最新の働きを知り、神の歩みに従え

性質が変化した人とは神の言葉の現実に入った人である

神の前で心を静めることについて

完全にされるべく、神の旨に配慮せよ

神は自身の心にかなう者を完全にする

真心で神に従う者は確かに神のものとされる

神の国の時代は言葉の時代である

すべては神の言葉が達成する

神の実際に絶対的に服従できる者は真に神を愛する者である

完全にされる者は精錬を経なければならない

辛い試練を経験することでのみ、神の素晴らしさを知ることができる

神を愛することだけが本当に神を信じることである

「千年神の国は訪れた」についての短い話

神を知る者だけが神に証しをすることができる

ペテロはどのようにしてイエスを知るようになったか

精錬を経験することでのみ、人は真の愛をもつことができる

神を愛する人は永遠に神の光の中に生きる

実践に集中する者だけが完全にされることができる

聖霊の働きとサタンの働き

真理を実践しない人への警告

あなたは神への忠誠を保たなければならない

あなたは生き返った人か

性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである

神を知らない人はすべて神に反対する人である

諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅱ）（1992年11月から1993年6月まで）

働きと入ること（1）

働きと入ること（2）

働きと入ること（3）

働きと入ること（4）

働きと入ること（5）

働きと入ること（6）

働きと入ること（7）

働きと入ること（8）

働きと入ること（9）

働きと入ること（10）

神の働きのビジョン（1）

神の働きのビジョン（2）

神の働きのビジョン（3）

聖書について（1）

聖書について（2）

聖書について（3）

聖書について（4）

実践（1）

実践（2）

受肉の奥義（1）

受肉の奥義（2）

受肉の奥義（3）

受肉の奥義（4）

二度の受肉が、受肉の意義を完成させる

三位一体は存在するのか

実践（３）

実践（４）

実践（５）

征服の働きの内幕（１）

なぜ進んで引き立て役になろうとしないのか

征服の働きの第二段階の効果はいかにして成し遂げられるのか

征服の働きの内幕（２）

征服の働きの内幕（３）

征服の働きの内幕（４）

実践（６）

実践（７）

実践(8)

イスラエルの民のように神に仕える

素質の向上は神の救いを授かるためである

モアブの子孫を救うことの意義

ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識

働きを理解しなさい——混乱したまま付き従ってはならない

あなたは道の最終行程をいかに歩むべきか

諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅲ）（1993年7月から1993年12月まで）

将来の使命にどのように取り組むべきか

人類の経営の目的

人の本質と地位

人に固有の身分と人の価値とはいったい何なのか
学習せず、無知なままでいる者たち。彼らは獣ではなかろうか
中国の選民はイスラエルのどの部族も代表できない
祝福をあなたがたはいかに理解しているか
神に対するあなたの認識はどのようなものか
本物の人とは何を意味するのか
あなたは信仰について何を知っているか
落ち葉が土に還る時、あなたは自分の行なったあらゆる悪事を後悔する
肉なる者は誰も怒りの日から逃れられない
救い主はすでに「白い雲」に乗って戻って来た
福音を広める働きはまた人間を救う働きでもある
あなたがたは人格が卑しすぎる
律法の時代における働き
贖いの時代における働きの内幕
若者と老人に向けた言葉
あなたは全人類がこれまでどのように発展してきたかを知らねばならない
呼び名と身分について
完全にされた者だけが意義ある人生を生きられる
地位の祝福は脇に置き、人に救いをもたらす神の心意を理解するべきである
自己の観念で神を規定する人がどうして神の啓示を受けられるのか
神とその働きを知る者だけが神の心になう
受肉した神の職分と人間の本分の違い
神はすべての被造物の主である
十三通の手紙をいかにとらえるか
成功するかどうかはその人の歩む道にかかっている

神の働きと人の働き

神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である

墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である

神の宿る肉の本質

神の働きと人間の実践

キリストの本質は父なる神の心への従順

人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く

神と人は共に安息に入る

諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅳ）（1996年から1997年まで、2003年から2005年まで）

あなたがイエスの霊体を見る時、神はすでに天地を新しくしている

キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である

招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない

キリストと融和する道を探せ

あなたは本当に神を信じる人なのか

キリストは真理をもって裁きの働きを行う

あなたは知っていたか。神が人々の間で偉大な業を成し遂げたことを

終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる

終着点のために十分な善行を積みなさい

あなたは誰に忠実なのか

終着点について

三つの訓戒

過ちは人間を地獄へ導く

神の性質を理解することは極めて重要である

どのように地上の神を知るか

極めて深刻な問題——裏切り（１）

極めて深刻な問題——裏切り（２）

神の国の時代に神に選ばれた人々が従わなければならない行政命令十項目

あなたがたは自分の行いを考慮すべきである

神は人間のいのちの源である

全能者のため息

神の現れによる新時代の到来

神は全人類の運命を支配する

神の経営の中でのみ人は救われる

諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅴ）（2013年10月17日から2014年8月18日まで）

神を知ることこそ、神を畏れ悪を避ける道である

神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか

神の働き、神の性質、そして神自身 1

神の働き、神の性質、そして神自身 2

神の働き、神の性質、そして神自身 3

唯一無二の神自身 1

唯一無二の神自身 2

唯一無二の神自身 3

唯一無二の神自身 4

唯一無二の神自身 5

唯一無二の神自身 6

唯一無二の神自身 7

唯一無二の神自身 8

唯一無二の神自身 9

唯一無二の神自身 1 0

附録：神の裁きと刑罰に神の出現を見る

あとがき

第一部

キリストの初めの言葉——諸教会に向けた聖霊の言葉

(1991年2月11日から1991年11月20日まで)

序論

1991年2月11日、神は最初の言葉を教会で発し、その言葉は当時聖霊の流れに生きていた一人ひとりに途方もない感銘を与えた。その言葉は「神の存する場所が現れた」、「宇宙の頭、終わりの日のキリスト——この方こそが輝く太陽である」といったことに触れていた。これらのきわめて意義深い言葉とともに、すべての人は新しい領域へと導かれた。この言葉を読んだ人々は誰もが新たな働き、すなわち神がまさに始めようとしている偉大な働きが暗示されているのを感じた。この美しく、甘く、簡潔な言葉が、神の新しい働き、新しい時代へと全人類を導いたのであり、今回の受肉における神の働きの基礎を築き、その準備をしたのである。そのとき神の発した言葉は、時代の橋渡しをするものであり、神が公に人類に話しかけたのは恵みの時代の始まり以来これが最初であり、また二千年間隠れていた後に神が話したのもこれが最初であり、そしてさらに、それは神の国の時代において神が始めようとしている働きの前置きにして、決定的な出発点であった、とすることができるだろう。

神が最初に言葉を発したとき、それは第三者の視点からの称賛というかたちで、優雅かつ平易な言葉づかいで行なわれた。また、それはいのちの施しでもあり、すぐさま容易に把握された。これをもって神は、主イエスの再臨を熱心に待ち望みつつ、神の恵みをいかに享受するかしかなかった少人数の集団を従え、神の経営（救いの）計画における働きの別の段階へと静かに導いた。このような状況において、神が最終的にどのような働きを行なおうとしているのか、この先の路上に何が待ち構えているのかを人類は知らず、ましてや想像しようとしなかった。その後、人類を一步步新しい時代へと導くために、神はさらに言葉を発し続けた。驚くべきことに、神の発する言葉はその一つひとつが異なる内容であり、そのうえ様々な形式を用いて讃美と表現を行なっている。これらの言葉は語調こそ似ているものの内容は多様であり、どれも一様に神の思いやりと心づかいの感情であふれており、そのほとんどに内容の異なるいのちの施しと、神から人間への注意、訓戒、慰めの言葉を含んでいる。これらの言葉には以下のような

節が繰り返して現れる。「唯一の神が肉となり、全てを命ずる宇宙の頭である」、「勝利を収めた王は栄光の玉座に着く」、「王はその手に万物を握る」などである。これらの節には一つのメッセージが込められている。あるいは、人類へのメッセージを伝えているとも言えよう。すなわち、神はすでに人間の世界へと来ており、さらに偉大な働きを始めようとしており、神の国は特定の人々の集団のもとへすでに降りてきており、神はすでに栄光を得て、無数の敵を打ち負かした、というメッセージである。神が発する言葉の一つひとつは、人間一人ひとりの心を捕らえる。神がさらに多くの新しい言葉を声にするのを、全人類が熱心に待つ。なぜなら、神は話すたびに人間の心を根底から揺さぶり、そのうえ人間のすべての動き、すべての情緒をつかさどり、支えているので、人類は神の言葉に頼り、そのうえそれを崇め始めるからである……。このようにして、多くの人が知らぬ間に聖書をすっかり忘れてしまい、時代遅れの説教や霊的人物の書いた文章にますます関心をもたなくなった。過去に書かれた文章の中に、神のこれらの言葉の根拠を見つけることができず、神がこれらの言葉を発する目的をどこにも見出すことができなかったからである。このようなわけで、人類はそれだけ余計に、これらの言葉がいまだかつて見聞きされたことのない神の声であること、誰であれ神を信じる人の手に届く範囲にないこと、過去の時代の霊的人物によって言われたあらゆること、また過去に神が発した言葉を超越していることを認めざるをえなかった。これらの言葉の一つひとつに鼓舞されて、人類は知らないうちに聖霊の働きの雰囲気の中へ、新しい時代の最前列にあるいのちへと入った。神の言葉に鼓舞されて、期待に満ちた人類は神の言葉に直接導かれることの甘美を味わった。わたしは、このつかの間の期間はすべての人間が終わることのない追憶をもって懐かしむ時になると信じるが、実際には、この期間に人類が享受したものは聖霊の働きの雰囲気に過ぎず、それはまた錠剤を覆う砂糖の甘さと呼べるものである。なぜなら、この時点以降、人類はいまだ神の言葉に導かれ、聖霊の働きの雰囲気の中にいながら、知らないうちに神の言葉の別の局面へと導かれたからである。それは神の国の時代における神の働きと言葉の第一歩、すなわち効力者の試練であった。

効力者の試練に先だって発せられた言葉は、おもに指導、訓戒、叱責、鍛錬の形をとっていたが、場所によっては、恵みの時代に使われた古い話しかけ方が用いられた。すなわち、人類が神に近づくのを容易にするため、あるいは人類が神との関係を近いものとみなすように、神に従う人々を「わたしの子ら」と呼んだのである。このように、人類のうぬぼれ、傲慢、およびその他の墮落した性質に神がどのような裁きを下そうとも

、人間は「子」という身分において、「父なる神」の言葉に対して敵意を抱くことなく、裁きに対処してそれを受け入れることができ、そのうえ「父なる神」がその「子ら」にした約束は決して疑われなかった。この期間中、全人類は赤子のような悩みのない生活を楽しみ、これによって神の目的が達成された。つまり、人類が「成人」となったとき、神は人類に裁きを下し始める、ということである。これはまた、神の国の時代において神が正式に着手する、人類への裁きの働きの基礎を築いた。今回の受肉における神の働きはおもに全人類を裁いて征服することなので、人間がしっかりと立ち上がったとたん、神はただちに働く態勢に入った。つまり、人間を裁いて罰する働きである。明らかに、効力者の試練の前に発せられた言葉はすべて、この転換を切り抜けるためのものであり、本当の目的は表向きのものと違っていたのである。可能な限り早く神の国の時代の働きを正式に始められるようにすることを、神は真剣に意図していた。砂糖でくるんだ錠剤を与えてひたすら人類をおだてることを神は決して望んでおらず、むしろ神の裁きの座の前で人間一人ひとりの真の顔を見ることを願っており、またそれ以上に、神の恵みを失った人類全体が神に対してとるであろう本当の態度を見ることを切望していた。神は過程ではなく、結果を見ることだけを願った。しかしその時、神の真剣な意図を理解した者は一人もいなかった。人間の心は自分の終着点と将来の展望にだけとらわれていたからである。神の裁きが何度も人類全体に向けられていたのも無理はない。神の導きのもと、人類が人間として正常に暮らすようになって初めて、人類に対する神の態度は変化したのである。

一九九一年は並外れた年であった。その一年を「黄金の年」と呼ぶことにしよう。神の国の時代の新しい働きに神は着手し、人類全体に向かって言葉を発した。同時に人類は、これまでにない温かさを享受し、さらには、神による人間へのかつてない裁きに続く痛みを経験した。人類はまるでいったん神を得て、また神を失ったかのように、これまで知ることとも感じることもなかった甘美、そしてこれまで知らなかった裁きと放棄を味わった。何かを手に入れていることの苦しみ、奪われていることの苦しみといった感情は、それを自ら経験した者にしかわからない。人間にはそれを描写する能力も手段もないのである。この種の傷は一種の無形の経験および財産として、神が人間に与えたものである。その年に神が発した言葉の内容は、実際には大きく二つに区分できる。一つは、神が人間の世に降臨し、人類を客として神の玉座の前に招いた箇所である。もう一つは、人間が欲しいだけ飲み食いした後、効力者として神に使われた箇所である。もちろん、前者こそ人類が何より大切にし、熱望する部分であることは言うまでもない。人

間はずっと以前から習慣として、神のあらゆるものを享受することを神への信仰の目的にしてきたので、これはなおさらである。だからこそ、神が言葉を発し始めたとき、人類はみな喜んで神の国に入るつもりになり、神が人々にさまざまな褒美を与えるのを待ったのである。このような状況にあった人々は、自分たちの性質を変化させたり、神に満足してもらおうとしたり、神の思いに気づかいを見せたりするといった正当な代価を払うことなどしなかった。表面的には、人々は神のために自分を費やして働くなど、常に忙しく動き回っているように見えたが、実際には、祝福を手にするため、あるいは王として君臨するため、次に講じるべき手段を心の隠れた奥底で計算していたのである。人の心は神を享受しつつ、神に対して計算していたとすることができるだろう。このような状態の人類は、神の強烈なる嫌悪と憎悪にあう。神の性質は人間が神を騙したり利用したりすることを許さない。しかし神の知恵はどんな人間の手にも届かない。神が自身の言葉の最初の部分を発したのは、このようなあらゆる苦しみにも耐えている最中だった。神がどれほどの苦しみにも耐えたのか、またその時どれほどの気づかいと思いを注いだのかは、人間には想像できないことである。神が発した言葉の最初の部分の目的は、人間が地位や利益を得たときに見せる、ありとあらゆる形の醜さをさらけ出すこと、人間の貪欲と下劣さをさらけ出すことである。しかしながら、神は話す際、愛情深い母親の真摯かつ真剣な口調で言葉をくるむ。神の心の奥にある怒りはあたかも敵に向けられているかのごとく、真昼の太陽のように燃える。いかなる場合であれ、神は普通の人間らしさに欠ける人々の集団に語りかけることを望まないのだから、話すたびに心の中の怒りを抑えつつ、言葉を絞り出しているのである。しかも、正常な人間性がなく、理知もなく、極限まで墮落し、貪欲さが習慣になり、徹底して神に対し不従順で反抗的な人間に、神は語りかけているのである。人類の墮落の深さと、人類に対する神の嫌悪の度合いは容易に想像することができる。人類にとって想像するのが難しいのは、自らが神に与えた痛みであり、それを言葉で表わすことはできない。しかし、このような背景があるからこそ、つまり神がいかに心を痛めているか、さらには人類がどれほど理知を欠いていて救いがたいかを誰も知らないという背景があるからこそ、すべての人はひとかけらの恥も良心の呵責もなしに、自分たちには神が人間のために準備した褒美をすべて受け取るという、神の子としての権利があると当然のように思うのである。そのひどさたるや、互いに競い合いながら、誰もが遅れをとりたくないと思い、負けることを激しく恐れるほどである。神の目から見て、当時のこうした人々がどのような地位を占めていたかは、いまや明らかなはずだ。このような人類がどうして神の褒美を受け取れるだろうか。しかしどのようなときも、人間が神から受け取るのは何より貴重な宝であり、反

対に神が人間から受け取るのはこの上ない痛みである。神と人間の関係が始まって以来、これが神から人間が常に受け取ってきたものであり、そしてその代わりに人間がいつも神に与えてきたものなのである。

神は苦悶に焼き尽くされるほどだったが、芯まで墮落した人類を見て、彼らが精錬されるよう火の湖に投げ入れるほかに手がなかった。これが神の言葉の第二の部分であり、そこで神は人類を効力者として使っている。この部分で、神はやさしかったのが厳しくなり、また方法と長さの両面で少数から多数へと移行し、「神の本体」という地位を餌に使って人間の墮落した本性を暴くと同時に、効力者、神の民、および神の子らという様々な分類^[a]を提示し、人類に選ばせた。神が予測したとおり、当然ながら誰も神の効力者になることを選ばず、代わりに誰もが神の本体になろうとした。この期間における神の話し方の厳しさは人々が想定していなかったばかりか、これまで聞いたことの無いものであったが、人々は地位について過剰に関心をもち、その上、祝福を得ることに没頭していたため、神の口調や語調について観念を形成する時間もなく、その代わりに自分の地位や、自分の将来に何が待ち受けているかといったことが自分の考えを絶えず占めていた。このように、人類は神の発した言葉によって、神が人類のために設けた「迷宮」へと知らぬ間に導かれた。否応なく誘惑され、将来と運命にひきつけられた人間は、自分たちは神の本体となるのにふさわしくないと知っていたが、さりとて神の効力者として行動する気にはならなかった。彼らはこの矛盾する考え方の板ばさみになり、神が人類のために割り当てたこれまでにない裁きと刑罰を無意識のうちに受け入れた。当然ながら、この種の裁きと精錬は、人類がまったく受け入れたくないものだった。しかし、この墮落した人類からおとなしい服従を引き出す知恵と力は神にしかなく、それゆえ、人々は好むと好まざるとにかかわらず、最終的には屈した。人類には選択肢がなかったのである。最後の決定権は神だけにあり、そして神だけがこのような方法を用いて人間に真理といのちを与え、方向を示すことができる。この方法は、神が人間に働きを行なうにあたって避けられないものであり、人間にとっても不可欠かつ必要なものであることに疑いや議論の余地はない。神は人類にこの事実を伝えるべく、このような方法で語り、働きを行なう。つまり、神は人類を救うにあたり、愛と慈悲から、そして自身の経営のためにそうするのである。人類が神の救いを受けるのは、神が直接語らずにはいられないところまで人類が落ちたからである。人間が神の救いを受けるのは、最も偉大な恵みであり、また特別な好意でもある。つまり、神が直接声を出して言葉を発していなければ、人類は絶滅の運命を辿っていただろう。神は人類を忌み嫌うと同時に、

依然として人間の救いのために代価を払う準備も覚悟もある。一方の人間は、神に対する自分の愛や、いかに自分がすべてを神に捧げているかをしつこく繰り返しつつ、神に反抗したり、あらゆる種類の恵みを神からゆすりとったり、同時に神を傷つけたり、言いやうのない痛みを神の心に与えたりすらしている。これが神と人間との間における、利他心と利己心の際立った対照なのである。

働きを行ない言葉を語る中で、神はある特定の方法に従うといった制約に縛られず、成果を挙げることを自分の目標にする。それゆえ、自身が発する言葉のこの部分において、神は自身の身分を明確にさらけださないことを重視し、「終わりの日のキリスト」や「宇宙の頭」といった二、三の語句を明らかにしただけだった。そのことはキリストの職分にも、神に関する人の認識にもまったく影響を与えておらず、特に当時の人は「キリスト」や「受肉」の概念について完全に無知だったので、神は謙虚にも「特別の機能」をもつ人となって言葉を発しなけりばならなかった。これは神の労を惜しまない気遣いと考えだった。なぜなら、当時の人々はこのような形の呼びかけしか受け入れることができなかったからである。神がどのような形の呼びかけを使おうと、神の働きの成果に影響することはない。神は自身が行なうすべてのことにおいて、人間が変われるようにすること、人間が神の救いを得られるようにすることを目的とするからである。何を行なおうと、神は常に人間の必要とすることを心に留めている。これが、神が働きを行ない言葉を語ることの背後にある意図である。神は人類のあらゆる側面を徹底的に注意深く考慮し、自身が行なうすべてのことにおいて完全に知恵深くあるものの、わたしは次のように言うことができるだろう。神が自分自身を証ししなければ、被造物である人類の中に、神を認識したり、立ち上がって神の証しをしたりすることができる者は誰もいない。神が働きにおける呼びかけの形態として「特別な機能をもつ人」を使い続けていたならば、神を神とみなせる人間は一人としていなかっただろう。これは人類にとっての悲しみである。つまり、被造物である人間の中に、神を知ることのできる者はおらず、ましてや神を愛し、神のことを思い、神に近づく者は誰一人いないのである。人間の信仰はひとえに祝福を得るためでしかない。特別な機能をもつ人としての神の身分は、すべての人間に手がかりを与えた。つまり人にとって、神を被造物である人間の一人と捉えるのは簡単だ、ということである。人類が神に与える最大の痛みと屈辱はまさに、神が公然と出現し働いていても、いまだに人間に拒絶され、忘れられさえする、ということなのである。神は人類を救うべく、この最大の屈辱に耐える。すべてを与える神の目的は、人間を救い、人間に認識されることである。神がそのすべてのために払っ

た代価は、良心をもつ人なら感じ取れるはずのものである。人類は神の言葉と働き、そして神の救いを得た。しかし同時に、では神が人類から得たものは何か、と尋ねようとは誰も考えたことがない。神の言葉の一つひとつから、人類は真理を得、変化することに成功し、人生の方向性を見出した。しかし、神が得たものは、人が神に対する負債を表現するために用いる言葉と、二、三のかすかな讃美のささやきだけである。まさかこれが、神が人間に求める恩返しではあるまい。

神の言葉の多くがいまや表わされてきたが、大半の人は神についての認識と理解において、神の初めの言葉に代表される段階に立ち止まったままで、そこから前進していない。これは本当につらい問題である。「キリストの初めの言葉」というこの部分は、人の心を開くための鍵に過ぎず、ここで立ち止まることは、神の意図を満たせずにいることである。神が自身の言葉のこの部分を語る目的は、人類を恵みの時代から神の国の時代に導くことだけである。人類が神の言葉のこの部分で立ち止まったり、さらにはこの部分を指針とみなしたりすることを、神はまったく望んでいない。そうでなければ、神の将来の言葉は不要、あるいは無意味になってしまう。神が自身の言葉のこの部分で人間に成し遂げるよう求めることについて、いまだそこに入っていない人がいるのであれば、その人が入っていけるかは未知のままである。神の言葉のこの部分は、神の国の時代における人間に対する神の最も基本的な要求事項であり、人が正しい道に入る唯一の方法である。何も理解していない人は、この部分の言葉を読むことから始めるべきである。

脚注

a. 原文に「という様々な分類」の語句は含まれていない。

第一章

シオンに讃美がもたらされ、神の存する場所が現われた。栄光に満ちた聖なる名が万民に讃えられ、広まる。ああ、全能神よ。宇宙の頭、終わりの日のキリスト。この方こそ、全宇宙に堂々と威厳に満ちてそびえ立つシオンの山に登った輝く太陽である。

全能神よ！ わたしたちは喜んであなたに呼びかけ、踊り、そして歌う。あなたは真にわたしたちの贖い主、全宇宙の偉大なる王！ あなたは勝利者の一団を作り、神の経営（救いの）計画を全うした。すべての民がこの山に集い、玉座の前に跪く。あなたこそ唯一の真の神であり、栄光と栄誉はあなたにふさわしい。すべての栄光、讃美、権威がその玉座にあるように。いのちの泉が玉座から流れ出て、神の民の群衆を潤し、養う

。いのちは日々変化し、新しい光と啓示がわたしたちに伴い、神についての新たな識見
が絶えず与えられる。わたしたちは経験の中で、神についての完全なる確信を得る。神
の言葉が絶え間なく現われ、正しい人に現われる。わたしたちはまさに祝福されている
！ 日々神に対面し、万事において神と交わり、すべてを神の統治に明け渡す。神の言
葉を注意深く思い巡らし、心は神の中で静まり、かくしてわたしたちは神の前に出て、
そこで神の光を受ける。自分の生活、行動、言葉、思い、考えにおいて、わたしたちは
毎日神の言葉の中で生き、常に識別することができる。神の言葉は針に糸を通す。つま
り、わたしたちの内面に隠されたものが不意に次々と現われる。神との交わりは少しの
遅れも許さず、わたしたちの思いや考えは神によって露わにされる。わたしたちは一瞬
一瞬をキリストの座の前で生きており、そこで裁きを受ける。わたしたちの身体のだの
部分もサタンに占領されたままである。今日、神の統治を取り戻すため、神殿を清めな
ければならない。完全に神のものとされるため、わたしたちは生死を賭けた戦いに加わ
らなければならない。古い自己が礎にされて初めて、キリストの復活したいのちによる
至高の統治が可能となる。

今や聖霊がわたしたちの隅々に突撃し、争奪戦を戦う。自己を否定し、進んで神に協
力する覚悟がある限り、神は必ずやわたしたちを内面から照らして清め、サタンが占領
していたものを取り戻す。それにより、わたしたちが一刻も早く神によって完全にされ
るためである。時間を無駄にしてはならない。一瞬ごとを神の言葉の中で生きよ。聖徒
とともに築き上げられ、神の国に連れて行かれ、神とともに栄光に入れ。

第二章

フィラデルフィアの教会が形を整えたが、これはひとえに神の恵みと憐れみによる。
神への愛が無数の聖徒たちの心に生じ、聖徒たちは霊の旅路においてよろめくことがな
い。聖徒たちは、唯一の真の神が肉となり、その神はすべてを司る宇宙の頭であるとい
う信仰を固守する。それは聖霊によって確証され、山のように揺るぎない！ そしてそ
れが変わることはない！

ああ、全能神よ！ 今日あなたはわたしたちの霊の目を開き、盲人を見えるようにし
、足の不自由な者を歩けるようにし、重い皮膚病の者を癒やした。あなたは天の窓を開
き、わたしたちに霊の世界の奥義を見せた。あなたの聖なる言葉に満たされ、サタンに
墮落させられた人間性から救われること。これがあなたの計り知れないほど偉大な働き
、計り知れないほど偉大な憐れみである。わたしたちはあなたの証人である！

あなたは長きにわたり、沈黙して謙虚に隠れていた。あなたは死からの復活と磔の苦しみ、人間として生きる喜びと悲しみ、迫害と苦難を経験した。人の世の痛みを経験してそれを味わい、時代に見捨てられた。受肉した神は神自身である。あなたは神の旨のためにわたしたちを汚物の山から救い、右手でわたしたちを持ち上げ、思うままにわたしたちに恵みを施した。労を惜しまず、わたしたちにあなたのいのちを注いだ。あなたが血、汗、涙で払った代価は聖徒たちの上に凝縮している。わたしたちはあなたの血のにじむような努力の産物^[a]であり、あなたが払った代価である。

ああ、全能神よ！ あなたの慈愛と憐れみ、義と威厳、聖さと謙遜ゆえに、すべての民はあなたの前にひれ伏し、永遠にあなたを拝する。

今日、あなたはあらゆる教会、フィラデルフィアの教会を完全なものとし、それにより六千年にわたる経営（救いの）計画を実現した。聖徒たちはあなたの前で謙虚に従うことができ、霊において互いに繋がり、愛の中で互いに伴い、泉の源に繋がっている。いのちの生ける水は絶え間なく流れ、教会の汚れた泥水をすべて洗い流し、あなたの神殿を再び清くする。わたしたちは実際の真なる神を知るに至り、神の言葉の中を歩み、自らの役割と本分をわきまえ、教会のために自分を費やすべく、あらゆることを行ってきた。あなたの旨がわたしたちの中で妨げられることのないように、わたしたちはあなたの前で静まるたび、聖霊の働きに留意しなければならない。聖徒たちのあいだには互いへの愛があり、力ある聖徒が他の聖徒の弱みを補う。聖霊による啓きと照らしを受け、聖徒たちは常に霊の中を歩くことができる。真理を理解するとすぐに実践し、新たな光に歩調を合わせ、神の足跡に従う。

積極的に神に協力しなさい。神に支配をゆだねることは、神とともに歩むことである。わたしたちの考え、観念、意見、世俗の束縛はすべて煙のように空中に消える。わたしたちは霊において神に至高の統治を委ね、神と歩み、それにより超越を得、世に打ち勝ち、わたしたちの霊は自由になって羽ばたく。それが、全能神が王になったときの結果である。どうして踊りと歌で褒め讃え、讃美と新しい賛歌を捧げずにいられようか。

神を讃美する方法は確かにいくつもある。神の名を呼ぶ、神に近づく、神のことを考える、祈りを唱える、交わる、黙想する、熟考する、祈る、讃美歌を歌う。このような讃美の行為には喜びがあり、また聖別がある。讃美には力があり、また重荷もある。讃美には信仰があり、新たな識見がある。

積極的に神に協力し、協調して奉仕を行ない一つになり、全能神の旨を満たし、急い

で聖い霊の体となり、サタンを蹂躪し、サタンの運命を終わらせなさい。フィラデルフィアの教会は神の前に携挙され、神の栄光の中に現われる。

脚注

a. 原文に「の産物」という語句はない。

第三章

勝利を収めた王は、栄光の玉座に着く。王は贖いを成し遂げ、自らの民をすべて導いて、栄光の中に出現させた。王は万物をその手中にしており、その神聖な知恵と力によってシオンを堅く打ち立てた。王はその威厳をもって、罪深い世界を裁く。すべての国々と民とを裁き、地と海とそこに住むあらゆる生き物を裁き、淫乱の葡萄酒に酔いしれた者たちにも裁きを下したのだ。神は必ずや彼らを裁き、必ずや彼らに怒りを示すだろう。そこに神の威厳があらわされる。神の裁きは一瞬のうちに、遅れることなく下される。神の怒りの炎は必ずや彼らの凶悪な犯罪を焼き尽くし、災いはいつでも彼らに降り注ぐだろう。そのとき彼らは、逃げ道も隠れる場所もないことを知り、涙を流して歯ぎしりし、自らに破滅をもたらすだろう。

神に愛された勝利の子らは、確かにシオンに留まり、決してそこを離れることはない。群衆は神の声にじっと耳を傾け、神の行いを注意深く見守り、讃美の声は絶えることがない。唯一の真の神が現れたのだ！ わたしたちは霊の中で神を確信し、しっかりと付き従う。全力で突き進み、もうためらうことはない。世界の終わりがわたしたちの目前で明らかになりつつあるのだ。正しい教会生活と、わたしたちを取り囲む人々、出来事、物事は今も、わたしたちの訓練を強化している。深くこの世を愛してしまった心を急いで取り戻そう。ひどく曇ってしまった視力を急いで取り戻そう。境界を越えないように、ここで歩みを止めよう。口を閉ざして神の言葉の中を歩み、自分の損得のために争うことをやめるのだ。ああ、俗世間と富への欲深い愛を手放せ。ああ、夫や息子、娘たちへの愛着から自らを解放せよ。ああ、独自の見解や偏見に背を向けよ。ああ、目を覚ませ、時間がないのだ。霊の中から見上げ、神に支配を委ねなさい。何があっても、ロトの妻のようになってはいけない。見捨てられるのはなんと惨めなことか。ああ、なんと惨めなことか！ ああ、目を覚ましなさい！

第四章

わたしたちは常に見張り、待ち望み、霊において静まり、純粋な心で求めるのだ。わ

わたしたちに何が降りかかろうと、盲目的に語ってはならない。わたしたちにただ必要なのは、神の前に静まり、絶えず神と交わることである。そうすれば、神の意図がわたしたちに明らかにされるだろう。わたしたちの霊はいつも見極める用意ができていなければならない、また鋭く、揺るぎないものでなければならない。わたしたちは神の前で生ける水、わたしたちの乾き切った霊に糧を与え、再び満たす水から汲んで飲まなければならない。わたしたちには、あらゆる時にも、わたしたちのサタンの性質から生まれたわたしたちの独善、傲慢、自己満足、うぬぼれから自分を清める心構えができていなければならない。わたしたちは心を開き神の言葉を受け入れ、わたしたちの生活を送る中で、神の言葉に拠り頼まなければならない。わたしたちは神の言葉を体験し、神の言葉について確信を持ち、神の言葉に関する理解を得、神の言葉がわたしたちのいのちとなるようにしなければならない。これがわたしたちの召命である。わたしたちは神の言葉によって生きる時のみ勝利するのだ。

今、わたしたちの観念は深刻過ぎる。わたしたちは軽薄にしゃべり過ぎ、早急に行動し、また聖霊に従うことができない。今日は過去のようにではないのだ。聖霊の働きは凄まじい速度で前進する。わたしたちは神の言葉を細部に至るまで体験しなければならない。わたしたちは一つひとつの考えと思い、一つひとつの動きと反応を心の中で見極めなければならない。わたしたちが人前で為すことも、人の陰で為すことも、何一つキリストの玉座の前の裁きを逃れることはできない。聖霊はわたしたちをさらに深い経験の中へと導き入れようとしている。そして、この経験をとおして、わたしたちは全能者への確信にさらに近付くのである。

宇宙の神はわたしたちの霊の目を開き、霊の中の奥義は絶えずわたしたちに明らかにされている。純粋な心で追い求めなさい。進んで代価を払い、全身全霊で前進しなさい。進んで己を拒みなさい。もう貪欲になってはならない。聖霊に従い、神の言葉を楽しみなさい。そうすれば、全宇宙的な新しい人間が現れるだろう。サタンの運命が終わりを迎える瞬間は目前であり、神の旨は成就し、世界のすべての国々はキリストの国となり、キリストは地上で永遠に王として統べ治めるだろう。

第五章

山や河は移り変わり、水は進路に沿って流れ、人間の命は天地のように永続しない。唯一全能神だけが、復活の永遠のいのちであり、世代を超えてとこしえに生き続ける。すべての物とすべての出来事は神の手中にあり、サタンは神の足の下にあるのだ。

今日神がわたしたちをサタンの魔の手から救ったのは、神が予め定めた選択による。神はまことにわたしたちの贖い主である。復活したキリストの永遠のいのちが、まさにわたしたちの内に形造られているので、わたしたちは神のいのちに繋がるよう運命づけられており、まさに神と向き合うことができ、神を食い、飲み、享受することができるのだ。これは神が心血を注いで行なった、無私無欲の施しなのだ。

季節が移り変わる中、風と霜とを経て、幾多の人生の苦痛や迫害や患難、この世の拒絶と中傷、また政府による数々の偽りの告発に直面しても、神の信念と決意はほんの少しも衰えることがない。神はその旨のため、そしてその経営と計画を成し遂げるため、全身全霊を捧げ、自らの命も顧みない。自らのすべての民のため、彼はどんな苦労も惜しまず、心を配って彼らに糧と水を与える。わたしたちがどんなに無知であろうと、どんなに強情だろうと、必要なのはただ彼に従うことであり、そうすればキリストの復活のいのちが、わたしたちの古い本性を変えてくれるだろう。……彼はすべての長子たちのため、たゆむことなく労し、食事も休息もとらない。幾日も幾夜も、焼け付くような暑さや凍える寒さもいとわず、彼は一心にシオンで見守っているのだ。

彼はこの世も、家庭も、仕事も、何もかもを自ら喜んで捨て去り、この世のどんな享樂とも関わりを持たない。……彼の口から発せられる言葉はわたしたちを突き刺し、心の奥底に隠していたことを露わにする。どうして確信せずにいられるだろうか。彼の口から発せられる一句一句は、いつでもわたしたちの中で実現される。わたしたちが何をしようと、それが神の前でであれあるいは神に隠れてであれ、彼が知らないこと、理解していないことは何一つない。わたしたち自身の計画や采配に関わらず、すべてはまさに彼の前に露わにされるのだ。

彼の前に座し、自らの霊の中で喜びを感じ、穏やかにくつろいでいながら、絶えず空しさと神への負い目を感じている。これは想像もできない奇跡であり、成し遂げるのは不可能である。聖霊は全能神が唯一の真の神であることの証明として十分であり、それは議論の余地のない証明だ。わたしたちの一団は言い尽くせないほど祝福されている。神の恵みと憐みがなければ、わたしたちは地獄に行ってサタンに従うしかない。唯一全能神だけが、わたしたちを救うことができるのだ。

おお、全能神、実践の神よ！わたしたちの霊の目を開かれたのはあなたであり、その結果、わたしたちは霊的世界の奥義をこの目で見た。神の国の展望は果てしない。わたしたちは油断なく待っていよう。その日はもう遠くはない。

戦火は巻き起こり、銃口からの煙が辺りに充満し、天候は温暖化し、気候は変動し、疫病が広がる。そして人々はただ死なねばならず、わずかな生存の希望もない。

おお、全能神、実践の神よ！あなたはわたしたちの堅固な要塞であり、わたしたちの避け所です。あなたの翼の下で身を寄せ合えば、わたしには災いが及びません。これがあなたの神聖な加護と配慮なのです。

わたしたちはみな声を張り上げて賛美を歌い、賛美の歌がシオン中に響きわたる。全能神、実践の神はわたしたちに、あの栄光に満ちた終着点を用意してくださった。注意して、油断なく見張っていなさい。今ならまだ遅くない。

第六章

万物の長である全能神は、玉座から王としての権力を振るう。神は宇宙と万物を支配し、全地でまさにわたしたちを導いている。わたしたちはどの瞬間にも神に近づき、静かに神の前に出て、一瞬の時も逃すことなく、いつでも教訓を学ばねばならない。わたしたちの周りの環境から、人々、出来事、事物までを含むすべてのものは、神の玉座に許可されて存在している。どんなことがあっても心に不平不満を抱いてはならない。さもないと、神はあなたに恵みを授けない。病を患ったなら、それは神の愛によるもので、神の善意が必ずその背後にある。体は多少の苦しみに耐えることになるかもしれないが、サタンによる思いは一切抱いてはならない。病気の只中で神を賛美し、賛美の只中で神を楽しみなさい。病気に直面しても気を落とさず、何度も繰り返し求めて諦めることがなければ、神はあなたに光を当てるだろう。ヨブの信仰はどうだったか。全能神は全能の医者なのだ。病の中に留まれば病気になるが、霊の中に留まれば健やかになるのだ。あなたに最後の息があるかぎり、神はあなたを死なせはしない。

わたしたちの内にはキリストの復活したいのちがある。わたしたちは間違いなく、神の前で信仰に欠けている。神がわたしたちの内に真の信仰を与えて下さいますように。神の言葉はまことに甘美だ。神の言葉はよく効く薬であり、悪魔やサタンを恥じ入らせる。神の言葉を把握すれば支えを得ることができ、わたしたちの心はすぐに救われるだろう。神の言葉はすべてのものを一掃し、すべてに平和をもたらす。信仰とは一本の丸太橋のようなもので、卑屈に命にしがみつく者がそれを渡るのは困難だが、自らを犠牲にする覚悟のある者は自信を持って不安なく渡ることができる。臆病な恐れに満ちた思いを抱く者は、サタンに騙されているのだ。サタンはわたしたちが信仰の橋を渡って神の中に入ることを恐れているため、あらゆる手段を講じてわたしたちにサタンの考えを

送り込もうとする。わたしたちは絶えず神の光に照らしてもらえるよう祈り、常にわたしたちの中からサタンの毒が清められるよう神に拠り頼み、常に神に近づく方法を霊の中で実践し、全存在を神に支配してもらわなければならないのだ。

第七章

周囲の状況は我々に、急いで霊に戻るよう促している。頑な心で行動し、聖霊が心配しているかどうかを無視してはならない。利口ぶるのもやめなさい。独り善がりになって自己満足したり、自分の苦難を大げさに考えすぎるのもやめなさい。唯一行うべきことは、霊とまこととをもって神を礼拝することだ。神の言葉をなおざりにしたり、聞く耳を持たなかったりすることは許されない。慎重に神の言葉を解き明かし、デボーションを繰り返し、言葉の中にあるいのちを把握しなければならないのだ。ただ丸呑みにして、消化する時間を持たないというような、無益なことはしてはならない。すべての行いにおいて神の言葉に拠り頼んでいるだろうか。子供のように得意げに話し、何か問題が生じるたびに混乱に陥るようであってはならない。毎日毎時間、霊の鍛錬に勤しみなさい。一瞬たりとも気を緩めてはならない。鋭敏な霊を持たねばならないのだ。どんな人物、出来事、物事に遭遇しようと、神の前に来さえすれば、辿るべき道が見つかるだろう。神の言葉を日々飲み食いし、怠ることなくその意味を解き明かし、もっと努力を注いで細部に至るまで理解し、完全なる真理を身に着けて、神の旨を誤解しないようにしなければならない。経験の幅を広げ、神の言葉を経験することに集中しなければならない。経験を通して、神をより確信できるようになる。経験がないのに、神について確信していると言うのはただの空しい言葉だ。我々は明晰な頭を持たねばならないのだ。目を覚ましなさい、もう気を緩めていてはならない。ずさんなやり方で物事に対処し、進歩のための努力を怠っているなら、あなたは実に盲目だ。聖霊の働きに焦点を当て、聖霊の声に注意深く耳を傾け、神の言葉に耳を開き、残された時間を大切にし、どんな代価でも払わなければならない。鋼を持っているなら、ここぞというときにそれを使って、強力な刃にきなさい。大切なものをしっかりと握りしめ、神の言葉を実践することに集中しなさい。神の言葉を捨て去っているなら、外見上どれほどうまくやってもすべては無駄になる。口先だけの実践は神には受け入れられない。変化はあなたの振る舞い、性質、信仰、勇気、そして識見を通してもたらされなければならないのだ。

時は迫っている。この世における最高のものも、すべて投げ捨てなければならない。どれほどの困難も危険も我々をひるませることはできず、空が落ちてきても我々を圧倒

することはできない。そのような決意がなければ、意義ある者となるのはあまりにも困難だ。臆病で意気地なく命にしがみついている者たちは、神の前に立つに値しないのだ。

全能神は実践の神である。我々がどんなに無知であろうと、神はなお我々に憐れみを示し、神の手は必ずや我々を救い、なお我々を完全にしてくれる。我々が本当に神を求める心を持っている限り、しっかりと付き従って落胆せずにいる限り、また切迫感を持って探求している限り、神は絶対に我々を不当に扱ったりはせず、必ずや我々に欠けているものを補い、我々を満足させてくださる。そのすべてが、全能神の優しさなのだ。

誰かが貪欲で怠け者で、常に腹を満たすだけの生活を送り、すべてのことに無関心でいるなら、損失を被るのは避け難いことを思い知るだろう。全能神は万物万象の上に君臨しているのだ。我々がいかなる時も心の中で神を仰ぎ、霊に入って神と交わっている限り、神は我々が求めるすべてのことを示し、神の旨は必ずや我々に露わにされる。そうすれば我々の心は喜びと平安を得て、完全に明瞭になり安定するだろう。不可欠なのは、神の言葉に従って行動できるということだ。神の旨を把握し、神の言葉に依り頼んで生きられるということだけが、真の経験といえるのだ。

神の言葉を理解できて初めて、神の言葉の真理が我々の中に入り、我々のいのちになることができる。何の実践経験もなしに、どうやって神の言葉の現実に入れるだろうか。神の言葉を自分のいのちとして受けとることができなければ、あなたの性質は変化できないだろう。

聖霊の働きは今や飛躍的に前進している。しっかりと付き従って訓練を受けていないと、そのような聖霊の歩調に遅れずについて行くのは難しくなる。急いで急激な変化を起こしなさい。サタンによって踏みにじられ、逃れられない火と硫黄の池の中へ落ちることがないように。投げ捨てられないように、最善を尽くして今求め始めなさい。

第八章

全能神——神の国の王——が証しされて以来、神の経営（救い）の領域は全宇宙にあまねく広がっている。神の出現は中国において証しされただけでなく、すべての国とすべての土地で全能神の名が証しされている。人々はみなこの聖なる名を呼び、あらゆる手段で神との交わりを持とうとし、全能神の旨を把握し、一致して教会で仕えている。これが聖霊の驚くべき働き方なのである。

さまざまな国の言語はみな異なっているが、霊はただ一つである。この霊は全宇宙の教会を一つに結びつけており、神と一体で、わずかな相違もない。これは疑いの余地のない事実である。聖霊は今や彼らに呼びかけており、その声は彼らを呼び覚ましている。それは神の憐れみの声である。皆が全能神の聖なる名を呼んでいるのだ。そして彼らは、讃美を捧げ歌っている。聖霊の働きには何の狂いもあり得ない。これらの人々はどんな苦勞も惜しまず、正しい道に沿って前進し、退くことはない。奇跡は次々と起こっている。これは人々にとって想像し難いことであり、推測するのも不可能なのだ。

全能神は宇宙のいのちの王である。神は栄光の玉座に就いて世界を裁き、すべての上に君臨し、すべての国々を支配する。すべての人は跪いて神に祈り、神に近づき、神と交わる。どれほど長く神を信じていようと、地位がどれだけ高かろうと、どれほど年功があろうと、心の中で神に逆らう人は裁かれなければならない、神の前にひれ伏して痛々しい懇願の声を出さねばならない。それはまさしく自身の行動の結果を刈り取ることなのだ。その嘆きの声は火と硫黄の池で苦しめられるときの声であり、神の鉄の杖によって懲らしめられるときの叫びである。それこそがキリストの玉座の前の裁きなのだ。

ある者は恐れ、ある者は罪惡感を抱き、ある者は用心を怠らず、ある者は注意してしっかりと耳を傾ける。またある者は、この上ない後悔を感じつつ悔い改めて新しく出直し、ある者は苦痛の苦い涙を流し、ある者はすべてを放棄して必死に探し求め、ある者は自分自身をふり返って無謀な行いをやめる。ある者は急いで神に近づこうと求め、さらにある者は自らの良心を吟味し、なぜ自分のいのちが進歩しないのかと自問する。ある者は混乱の中に留まり、ある者は足枷を振り捨てて勇敢に前進し、鍵を掴んで早急に自分のいのちに集中する。そしてある者はまだ躊躇しており、ビジョンをはっきりと理解していない。そのような者が心の中で負う重荷はまさに重いのである。

あなたの心が明瞭でなければ、聖霊があなたの中で働く術はない。あなたが重点を置くすべてのこと、歩む道、そしてあなたの心が切望するすべてのものは、あなたの觀念と独善で満たされているのだ。わたしは業を煮やしているのだ――あなたがたを皆すぐに完全にして、早くわたしが用いるにふさわしい者となってもらい、わたしの重荷を軽くできればとどんなに望んでいることか。しかしあなたがたの現状を見てみると、急いで成果を求めても無駄なことがわかる。わたしはただ辛抱強く待ち、ゆっくりと歩き、ゆっくりとあなたがたを支え導くしかない。ああ、あなたがたは頭をすっきりさせねばならないのだ。何を捨て去るべきか、何があなたの宝なのか、何が致命的な弱点なのか、何が障害なのか。そうしたことをもっと霊の中で深く考え、わたしと交わりなさい。

わたしが望むのは、あなたがたの心が黙ってわたしを見上げることであり、口先で仕えることではない。真にわたしの前で探求するなら、すべてをあなたに露わにしてみせよう。わたしの歩調は速まる。あなたが心でわたしを見上げ、いかなる時も付き従ってくるなら、わたしの旨はいつでも靈感によって与えられ露わにされるだろう。注意して待っている者たちは、糧を得て先へ進むことになるだろう。思慮のない者たちは、わたしの心を理解するのが難しく、やがて行き詰まることになるのだ。

わたしはあなたがたが皆、早く立ち上がってわたしと協力し、ただ一昼夜だけでなくいつでもわたしの側にいるようになることを願っている。わたしの手は常にあなたがたを引き寄せ、駆り立て、押しやり、説得して前に進ませ、懇願して前進させなければならない。あなたがたはどうしてもわたしの旨を理解しない。あなたがたは自らの観念による障害と、俗世のしがらみによる障害があまりに深刻なので、わたしともっと深い関係を持つことができないのだ。率直に言えば、あなたがたは問題があるとわたしのところに来るが、何の問題もないときは心が混乱する。その心は自由市場のようになり、サタンの性質で満たされ、俗事で占められて、どのようにわたしと交わればよいのかわからなくなる。どうしてあなたがたを心配せずにいられようか。しかし心配したところでどうにもならない。時間はあまりにも切迫しており、この仕事はあまりにも骨が折れる。わたしの歩みは飛ぶように進む。あなたがたは自分が持っているものすべてをしっかりと握り締め、いかなる時もわたしを見上げ、わたしと親しく交わらなければならない。そうすれば、わたしの旨はいつでも必ず露わにされる。わたしの心を理解したとき、あなたがたの前途は開けるだろう。もはや躊躇してはならない。わたしと真の交わりを持ち、偽りという手段を用いたり、過度に賢くなろうとしたりしてはならない。それはただ自分を欺くだけであり、いつでもキリストの玉座の前で暴かれることになるだろう。本物の金は火によって試されることを恐れない、それは真実である。ためらったり、落胆したり、弱気になったりしてはならない。もっと霊で直接わたしと交わり、辛抱強く待ちなさい。そうすればわたしは自分の時に応じて、必ずあなたに明らかにしよう。あなたは必ず用心して、わたしの努力を無駄にしないよう努めなければならない。一時も無駄にしてはならない。あなたの心が常にわたしと交わり、常にわたしの前で生きていれば、何者も、どんな出来事も、どんな物も、夫も、息子も、娘も、心の中でのわたしとの交わりを邪魔することはできない。あなたの心が常に聖霊によって制され、いつでもわたしと交わっていれば、必ずやわたしの旨が露わにされるだろう。常にそのようにわたしに近づくな、あなたは状況や直面する人、出来事、物事に関わらず、混乱に

陥ることなく、進むべき道を得ることになるだろう。

普段から大きなことも小さなこともなおざりにせず、思いや考えがすべて清められており、霊が静まっていれば、何かの問題にぶつかるたび、即座にわたしの言葉があなたの中に、自分を見直すための明るい鏡のように啓示され、そして進むべき道が開かれるだろう。それは病状に適した薬を得るということだ。そして病は必ず癒されるだろう――それが神の全能性なのだ。わたしは必ずや、義に飢え渴き真摯に探求しているすべての者に光と啓示を与える。わたしはあなたがた全員に、霊の世界の奥義と進むべき道を示し、古い墮落した性質をできるだけ早く捨て去れるようにする。そうすることであなたがたはいのちの成熟に達し、わたしが用いるのに適した者となり、福音の働きはすぐに支障なく前進することだろう。そのとき初めて、わたしの旨は満たされ、六千年にわたる神の経営（救いの）計画が可能な限り短時間で達成されることになる。神は神の国を獲得して地上に降臨し、わたしたちは共に栄光へと入ることになるのだ。

第九章

もう一度言うておくが、わたしの言葉についてはほんのわずかな曖昧さも不注意さも許されない。わたしの言葉には必ず注意を払い、従い、わたしの意図に沿って実践しなければならない。常に注意を怠ってはならず、決して傲慢で独善的な性質を持つてはならない。常にわたしに拠り頼み、自分に内在する生来の古い性質を振り捨てなければならないのだ。あなたはわたしの前で常に正常な状態を維持できなければならず、安定した性質を備えている必要がある。思考は冷静かつ明晰でなければならず、どんな人や出来事や物事にも支配されたり、左右されたりすることがあってはならない。わたしの前では常に心を静め、わたしとの絶え間ない親密さと交わりを保てなければならない。強さと気骨を示し、ゆるぎなくわたしを証ししなければならない。立ち上がってわたしのために語りなさい。他の人間たちが言うことを恐れてはならない。ただわたしの意図を満たし、誰にも支配されないようにしなさい。わたしが露わにしたことには、わたしの意図に沿って従わねばならず、それを遅らせてはならない。あなたは内心どう感じているのか。落ち着かないのではないか。やがてわかることだろう。なぜあなたはわたしのために立ち上がって語ることができず、わたしの重荷に気を配ることができないのか。あなたはけちな策略を巡らしてばかりいるが、わたしはすべてを見透している。わたしはあなたの支えであり、あなたの盾であり、すべてはわたしの手中にある。それなのに、あなたは何を恐れているのか。感情的になり過ぎていないか。感情はできるだけ早く

捨て去らねばならない。わたしは感情から行動することはなく、ただ義を行う。あなたの両親が何か教会のためにならないことをすれば、逃げることはできない。わたしの意図はあなたにあらわされているのだから、それを無視してはならない。すべての注意をそれに傾け、他のあらゆるものを投げ捨てて、一心に従わなければならないのだ。わたしはあなたをいつも手の中で守る。いつも臆病で、夫や妻に支配されているのをやめなさい。わたしの旨が成し遂げられるのを妨げてはならないのだ。

信仰を持ちなさい！ 信仰を持ちなさい！ わたしはあなたの全能である。このことについては何らかの見識を持っているかもしれないが、なお油断せず気を配らなければならない。教会とわたしの旨とわたしの経営のために、完全に献身しなければならないのだ。そうすれば、すべての奥義と結末がはっきりと示されるだろう。もう遅れることはなく、終わりの日が来ようとしている。あなたはどうすべきなのか。いのちをどう成長させ、成熟させるよう求めればよいのか。どうすればもっと早く、あなた自身をわたしに役立てることができるのか。どうやってわたしの旨が成し遂げられるようにすればよいのか。こうした問いに答えるには、深い考察と、わたしとのもっと深い交わりが必要になる。わたしに抛り頼み、わたしを信じなさい。決して油断してはならない。わたしの導きに従って物事を行えるようになりなさい。しっかりと真理を身に着け、それをもっと頻繁に飲み食いしなければならない。すべての真理は実践に移さないと、明確に理解することはできないのだ。

あなたは今、十分な時間がないと感じているだろうか。また、内面が以前と違い、重荷がとても重くなったように感じているだろうか。わたしの意図はあなたの上にあるので、頭を明晰に保ち、わたしの意図から離れないようにし、いつもわたしに繋がっていなさい。いつもわたしの近くに留まり、わたしと交わり、わたしの心を思いやり、皆と一致して仕えることができるようになりなさい。そうすればわたしの意図はいつもあなたがたに露わにされる。常に細心の注意を払っていなさい。細心の注意を。少しも気を抜いてはならない。それがあなたの本分であり、わたしの働きはその中に宿るのだ。

現時点であなたは多少の理解を得ているかもしれない、それを非常に素晴らしいと感じているかもしれない。過去には疑いを抱き、それが人間の観念、考え、思いとまったく違うと感じていたかもしれないが、今ではあなたは基本的に理解している。これがわたしの驚くべき働きであり、そして神の驚くべき働きでもあるのだ。あなたは絶対にしっかりと目を覚まして待ち、その中を歩まなければならない。時間はわたしの手の中にあるので、浪費してはならず、一瞬でも気を緩めてはならない。時間を浪費していると、

わたしの働きが遅れ、あなたの中でわたしの旨が妨げられることになる。あなたは深く思いを巡らせ、頻繁にわたしと交わらなければならない。またすべての行い、活動、思い、考え、家族、夫、息子や娘をみなわたしの前に連れて来なければならない。実践の中では、己に頼ってはならない。さもないとわたしは怒りを燃やし、あなたは大きな損害を被ることになる。

常に自らの歩みを制御し、常にわたしの言葉の中を歩きなさい。あなたはわたしの知恵を備えなければならない。困難にぶつかったらわたしの前に来なさい、そうすれば導きを与えよう。問題を起こしたり、無闇やたらに語り合ったりしてはならない。いのちに何の恩恵も受けられないとすれば、それはあなたが知識に欠けており、良い言葉と悪い言葉を区別できないからだ。あなたはそのことに、危害を受け、状態が悪くなり、聖霊の臨在を失うまで気づかないが、そうなった時にはもう遅いのだ。今や時が迫っているので、いのちの競争にほんの少しでも後れを取ってはならない。しっかりとわたしの足跡を辿りなさい。何か困難なことが起こったときは、わたしの近くに留まってよく熟考し、わたしと直接交わりなさい。この道を把握できれば、今後の入りが容易になるだろう。

わたしの言葉はあなたただけに向けられているのではない。教会の一人一人がさまざまな側面で欠けているのだ。あなたがたはもっと交わり、デボーションの時間に自主的に飲み食いすることができなければならず、鍵となる真理を把握して即座に実践できなければならない。わたしの言葉の現実を感じ取らねばならないのだ――その真髓と原則をつかみなさい、気を緩めてはならない。常に思いを巡らせ、常にわたしと交わりなさい。そうすれば物事は徐々に露わにされるだろう。しばらく神の近くに来て、神の前で心が静まる前に、他の何かが起こると気が散ってしまうようであってはならない。あなたはいつも混乱していて物事をはっきり理解せず、わたしの顔を見ることができずにいるので、わたしの心を明確に理解することができないのだ。たとえ少しばかり理解できても、確信を持てずまだ疑っている。わたしがあなたの心を完全に所有し、あなたの心がもはやこの世の物事に惑わされなくなり、澄み切った静かな心で待てるようになったとき、そのとき初めてわたしは、わたしの意図に沿って、一つ一つをあなたがたに少しずつ明らかにする。このわたしとの親密さという道を理解しなければならない。誰があなたを打とうが、罵ろうが、あるいは人々にどんな良いものを提供されようが、それが神の側にいることを妨げるなら、許されないことだ。あなたの心をわたしの掌中に委ねなさい、決してわたしの側を離れてはならない。このような親密さと交わりがあれば、

あなたの両親も、夫も、子供も、その他の家族関係も、そしてこの世の束縛も、みな流れ去るだろう。そしてほとんど言い表すこともできない甘さを心の中で楽しみ、芳醇で甘美な味わいを体験するだろう。そしてさらに、真にわたしから切り離されなくなるのだ。いつもそのようであれば、わたしの心の内にあるものが理解できるようになるだろう。前進し続ける中で、道を見失うことも決してない。なぜならわたしがあなたがたの道であり、すべてのものはわたしゆえに存在しているからだ。あなたのいのちがどの程度成熟するか、あなたがいつ俗世から離れられるようになるか、いつ自分の感情を捨て去れるようになるか、いつ夫や子供を残して去れるようになるか、いついのちが成熟するか……そうしたことはすべて、わたしの時に従って起こる。心を騒がせる必要はない。

入りは肯定的な側面から成し遂げなければならない。消極的に待っているなら、あなたはまだ否定的だ。積極的にわたしに協力しなければならない。勤勉に働きなさい、決して怠けてはならない。常にわたしと交わりを持ち、より深い親密さを得なさい。理解できないなら、早急に成果を上げようとしてはならない。わたしは教えないわけではなく、ただあなたがわたしの前にいるときわたしを頼るかどうかが、そして確信を持ってわたしに拠り頼むかが知りたいのだ。あなたは常にわたしの側に留まり、すべての問題をわたしの手に委ねなければならない。虚しく後戻りするのはやめなさい。しばらくの間無意識にわたしの側に留まっていれば、わたしの意図があなたに露わにされる。それを把握できれば、その時あなたは真にわたしと顔を合わせ、真にわたしの顔を見出したことになる。心の中には大いなる明瞭さと安定が得られ、拠り頼むものを持てるようになる。そして同時に、力と自信も得ることになり、前途に道を見出すだろう。そうならば、あらゆることがたやすく起こってくるようになる。

第十章

あれやこれやと恐れてはならない。あなたはどれだけ多くの困難や危険に直面しようと、どんな障害にも遮られることなく、わたしの前に固く立ち続けることができる。それによってわたしの旨は妨げなく遂行されるのだ。それがあなたの本分である。そうでなければ、わたしの怒りが降りかかり、わたしの手が……。そしてあなたは終わりのない精神的苦痛に耐えることになる。あなたはすべてに耐えねばならない。持てるものをすべて捨て去り、できることをすべてして、わたしに従い、全力を尽くす覚悟をしなければならないのだ。今はわたしがあなたを試す時だ。あなたは忠誠を尽くすか。忠誠心

を持って、道の終わりまで従うことができるか。恐れることはない。わたしの支えがあれば、誰にその道を塞ぐことができようか。このことを覚えていなさい、忘れてはならない。起こることはすべてわたしの善意によるのであり、すべてはわたしの監視下にある。すべての言動において、わたしの言葉に従うことができるか。火の試練が降りかかるとき、あなたはひざまずいて叫ぶだろうか。それともすくみ上がって、前進をやめてしまうだろうか。

あなたは自らの内にわたしの勇気を持たねばならず、未信者である親戚に直面するとき、原則を持たなければならない。しかしわたしのために、どんな暗闇の勢力にも屈してはならない。わたしの知恵に頼って完全な道を歩みなさい。サタンの陰謀に支配されてはならない。わたしの前に心を据えることに全力を尽くしなさい、そうすればわたしはあなたを慰め、平安と幸福を与える。他人の前でどうにかなろうと努めてはならない。わたしを満足させることのほうが、価値と重みがあるのではないか。わたしを満足させるほうが、恒久的な生涯続く平安と幸福に一層満たされるのではないか。現在の苦しみは、将来の祝福がどれほど大きいかを示している。それは言葉では言い表せないほどだ。どれほど大きな祝福を受けるか、あなたは知らない。それは夢見ることさえできないほどだからだ。今日、それは現実となった。本当に現実となったのだ。それはもう遠くない。見えるだろうか。そのすべてはわたしの中にある。前途は何と明るいことか。涙を拭い去りなさい、もう痛みも悲しみも感じることはない。すべてはわたしの手によって采配されるのだ。わたしの目標はあなたがたをすぐに勝利者にし、わたしとともに栄光へと導くことだ。自分に何が起きようともそれに感謝し、讃美に満ちていなければならない。それはわたしに大きな満足をもたらすだろう。

すべてを超越するキリストのいのちはすでに現れた。恐れることは何もない。サタンたちは我々の足元にあり、彼らの時間はもう限られている。目を覚ましなさい。放縱の世界を捨て去り、死の淵から自分を解き放ちなさい。何があろうとわたしに忠誠を尽くし、勇敢に前進しなさい。わたしはあなたの力の岩である。だからわたしに拠り頼みなさい。

第十一章

わたしはあなたの神なのか。わたしはあなたの王なのか。あなたはわたしを本当に王としてあなたの中で支配させたことがあるか。あなたは自分自身を十分に省みるべきである。よく吟味することなく新たな光を拒絶し、新たな光が来たときに従うことを止め

るほどになったのではないか。このために、あなたは裁きを受け、破滅の運命に落ちなければならぬ。あなたは裁かれ、鉄の杖で打ち叩かれ、あなたは聖霊の働きを感じることはないだろう。あなたはすぐさま泣きだし、嘆きながらひざまずいて礼拝するだろう。わたしはいつもあなたがたに語り、いつもあなたがたに言い、すべてをあなたがたに語った。慎重に思い返してみなさい。わたしがあなたがたに何かを言い損なったことがあるだろうか。それにもかかわらず、頑固にも間違ったやり方で物事を行っている人々がいる。彼らは疑いの霧の中に迷い、それは太陽の光を遮断し、彼らは決して光を見ない。それは彼らの「自己」の意志が強すぎるから、もしくは彼らの観念があまりにも大きいからではないのか。あなたはいつからわたしのことを気遣っているのか。あなたはいつから心の中にわたしの居場所を持っているのか。あなたがしくじり、無力になり、為すべき術がなくなったとき、初めてあなたはわたしに祈る。それでは、今からは自分ひとりで事を為せばよいではないか。あなたという人たちは！あなたを滅ぼしたのはあなたの古い自己なのだ。

ある人々は道を見つけることができず、新たな光について行くことができない。彼らは前に見たことについてのみ交わり、彼らにとって新しいものは何もない。それは何故か。あなたは自分の内側に住み、わたしに扉を閉ざしてしまったからだ。あなたは聖霊の働き的手段が変化するのを見て、心の中で、過ちを犯すことについていつも慎重である。神に対するあなたの畏れはどこにあるのか。あなたは神の前に静まってそれを求めたことがあるのか。あなたはただこう考える。「聖霊が本当にそのように働くだろうか」。ある人々は、それが聖霊の働きであることを目撃したにもかかわらず、それについてまだ何か言いたいことがある。ある人々は、それが神の言葉であることを認めるが、それを受け入れない。ことなる観念が彼ら一人ひとりを取り囲んでいる。そして彼らは聖霊の働きを理解せず、怠慢で不注意で、進んで代価を払うことがなく、わたしの前で真剣になろうともしない。聖霊は彼らに啓示を与えたが、彼らはわたしのもとに来てわたしと交わることも、わたしを捜し求めることもない。代わりに、彼らは自分の欲望に従い、何でもやりたい放題である。彼らの意図はいったい何であるのか。

第十二章

あなたが不安定な性質を持ち、風か雨のようにあちらこちらへ揺れ続けるなら、そして常に全力で前へ進み続けることができないなら、わたしの杖を避けることはできないだろう。取り扱いを受けているときは、環境が不利であればあるほど、迫害を受ければ

受けるほど、神への愛がいっそう強くなり、世の中に執着しなくなる。別の道はないため、あなたはわたしのもとに来て力と自信を取り戻す。しかしもっと安易な環境にあれば、ぼんやりと過ごしてしまうだろう。必ず肯定的な側面から入り、消極的ではなく積極的にならねばならない。どのような状況においても、誰にも何事にも動揺してはならず、誰の言葉にも影響されてはならない。安定した性質を持たねばならないのだ。人々が何と言おうとも、真理だとわかっていることをすぐに実践しなさい。誰と向き合っているときも、わたしの言葉が常に心の中で働いていなければならない。ゆるぎなくわたしを証しし、わたしの重荷に配慮できなければならない。混乱して自分の考えを持たないまま、盲目的に人に同意するようなことはせず、わたしから来ていない事柄には立ち上がって反対する勇気を持たねばならない。何かが間違いだとはっきりわかっていながら沈黙しているなら、あなたは真理を実行する人ではない。何かが間違いだと気づいていながら、話を変えてしまいサタンに妨害されて、無意味なことを話すだけで最後までやり抜くことができなくなるなら、それはまだ心に恐れを抱いているということだ。それならば、あなたの心はいまだにサタンの思いに満たされているのではないか。

勝利者とは何か。キリストの良き兵士というものは、勇敢でありわたしを信頼し、霊的に強くなければならない。そして戦士となり、サタンに決死の戦いを挑まねばならないのだ。あなたはいつも目を覚ましていなければならない、だからわたしはいつでも積極的にわたしと協力し、わたしに近づくことを学ぶよう求めているのだ。いつどんな状況でも、わたしの前で心を静め続け、わたしの話に耳を傾けて、わたしの言葉と行動に集中することができれば、揺らぐことも地歩を失うこともないだろう。わたしの中から受け取ったものは何でも実践可能だ。わたしの言葉は一つ一つがあなたの状況に向けられており、あなたの心を突き刺す。たとえ口でそれらを拒絶しても、心で拒絶することはできない。さらに、わたしの言葉を分析するなら裁かれることになる。つまり、わたしの言葉は真理であり、いのちであり、道なのだ。それは鋭い両刃の剣であり、サタンを打ち負かすことができる。わたしの言葉を理解し実践する道を持っている人は幸いであり、実践しない人は間違いなく裁かれることになる。これは非常に実践的なことだ。今日、わたしが裁く人々の範囲は広がっている。わたしを知る人々だけがわたしの前で裁かれるのではなく、わたしを信じない人々や、全力を尽くして聖霊の働きに抵抗し妨害する人々も裁かれることになる。わたしの前でわたしの足跡を辿っている人々はみな、神が燃え盛る炎であることを知るだろう。神は威厳である。神は裁きを行い、彼らに死の宣告をしている。教会で聖霊の働きに従うことに注意を払わない人々、その働きを

妨害する人々、自己顕示する人々、正しくない意図や目標を持っている人々、神の言葉を飲み食いすることに努力を傾けない人々、間抜けで疑い深い人々、聖霊の働きを吟味する人々——そうした人々にはいつでも裁きの言葉が下されるだろう。人の行いはすべて暴かれる。聖霊は人々の心の奥深くを探るのだから、ぼんやりせず油断なく注意していなければならない。むやみに勝手な行動をしてはならない。行動がわたしの言葉に沿っていなければ、あなたは裁かれることになる。模倣したりそれらしく振る舞ったりしても無駄であり、本当に理解していない場合も同様だ。あなたは頻繁にわたしの前に出て、わたしと交わらなければならないのだ。

わたしの中から受け取るものは何であれ、あなたに実践の道を与えるだろう。あなたはわたしの力を備え、わたしの臨在を得て、常にわたしの言葉の中を歩むことになり、世のすべてのものを超越し、復活の力を持つだろう。言葉、態度、行動にわたしの言葉と臨在を備えていないなら、そしてわたしから離れて自分自身の内に生き、自分の心が抱く観念や教義や規則の中で生きているなら、それはあなたが罪に心を向けている証拠である。言い換えれば、あなたは古い自我に固執していて、他人が少しでもそれを害したり、魂に損害を与えたりするのを許さない。そのような人はあまりにもお粗末な素質しか持っておらず、非常に愚かで、神の恵みを見ることもなければ、神の祝福に気付くこともない。そのようにのらりくらりと行動し続けるなら、いつわたしがあなたの中で働けるようになるのか。わたしが話し終えると、あなたは聞いていたのに何も覚えておらず、自分の問題が実際に指摘されたときは特に弱くなる。何と霊的背丈の低いことか！ いつもあなたをおだてていなければならないなら、わたしはいつあなたを完全にすることができるだろう。瘤やすり傷ができるのを恐れているなら、急いで行って他の人々に警告するべきだ——「わたしは誰にも自分を取り扱わせない。自分の生来の古い性質は自分で取り除くことができる」と。そうすれば誰もあなたを批判したり、あなたに触れたりしなくなり、誰にも心配されることなく、自由になんでも自分の望むやり方を信じられるようになる。そのようなことで、わたしの足跡を辿ることができるのか。わたしがあなたの神であり主であることを確信しているなどと言っても、それは虚しい言葉でしかない。本当に疑いを抱いていないのなら、こうしたことは問題にはならず、自分に与えられたものは神の愛であり恵みなのだと信じるだろう。わたしが語るときはわたしの息子たちに向けて言っているのであり、わたしの言葉は感謝と称賛で迎えられなければならない。

第十三章

あなたがたは現在の状態において、自己の観念に過度に執着しており、内心にはかなり深刻な宗教的妨げがある。そして霊で行動することができず、聖霊の働きを把握できず、新しい光を拒絶している。盲目的なため真昼の太陽を見ることができず、人々を知らず、決して「両親」を離れることができず、霊的な識別力に欠け、聖霊の働きを認識できず、わたしの言葉をどう飲み食いすればよいかまったくわかっていない。自分でそれを飲み食いする方法がわからないのは問題だ。聖霊の働きは日に日に驚異的な速度で進展しており、日々新たな光があり、日々新しく新鮮なことがある。だがあなたはそれを理解せず、代わりに研究することを好み、ものごとを慎重に考慮することなく個人的な色眼鏡でしか見ようとせず、ぼんやりと聞いているだけだ。霊で熱心に祈ることもなければ、わたしに目を向けることも、わたしの言葉をもっと熟考することもない。そのためあなたが持っているものは、文字や規則や教義ばかりだ。あなたはわたしの言葉を飲み食いする方法をはっきりと知らねばならず、もっと頻繁にわたしの言葉をわたしの前に持ち出さねばならないのだ。

今日の人々は自らを手放すことができず、常に自分が正しいと考えている。彼らは自分の小さな世界から抜け出すことができず、正しい人たちではなく、間違っただけの意図や目的を持っている。そうしたことに固執するなら必ず裁かれ、深刻な場合には排除されるだろう。あなたはわたしと絶えず交わりを持つことにもっと努力を注がなければならず、自分が好む者とばかり交わっていてはならない。自分が交わる人々のことを理解し、いのちにおける霊的な事柄について交わらなければならない。そうして初めて他の人たちにいのちを与え、彼らの不足を補うことができるのだ。説教するような口調で人々と接するべきではなく、そのような立場を取るのとは根本的に間違っている。交わりにおいては霊的な問題への理解がなければならず、知恵を持ち、人々の心にあるものを理解できなければならない。他の人たちに仕えるなら、あなたは正しい人でなければならず、自分が持っているものを用いて交わらなければならない。

今もっとも重要なことは、わたしと交わり、親しく交流し、自分で飲み食いし、神に近づけるようになることだ。できるだけ早く霊的な問題を理解し、自分の環境や周りに配置されているものをはっきり見抜けるようにならねばならない。あなたはわたしが何であるかを理解できるか。重要なのは、自分に欠けているものに基づいて飲み食いし、わたしの言葉に頼って生きることだ。わたしの手を認識しなさい。不平を言ってはならない。不平を言って抜け出せば、神の恵みを受ける機会を失うかもしれない。まずわたしに近づくことから始めなさい。あなたに欠けているものは何か、どうやってわたしに

近づき、わたしの心を理解すべきか。人々がわたしに近づくのが困難なのは、自己を手放すことができないからだ。彼らの性質はいつも熱くなったり冷たくなったりで一貫性がなく、少し甘さを味わった途端、思い上がって自己満足に陥る。一部の人々はまだ目を覚ましていない。あなたが言うことのうち、どれだけがあなた自身を体現しているのか。どれだけが自己防衛であり、どれだけが他人の模倣であり、どれだけがただ規則に従ったものなのか。聖霊の働きを把握も理解もできないのは、あなたがどのようにわたしに近づけばよいかを知らないからだ。あなたは外面上、常にものごとを思い巡らし、自己とその心の観念に頼っている。密かに探求してつまらない策略に従事しているが、それを明るみに出すこともできない。それはあなたが真に聖霊の働きを理解していないことを示している。何かが神から来ていないことが本当にわかっているなら、なぜ立ち上がってそれを拒むことを恐れるのか。わたしのために立ち上がり、語れる者は何人いるだろうか。あなたには男児の性格に備わっている強さのかけらすらない。

今整えられているすべてのことは、あなたがたを訓練していのちを成長させ、霊を鋭敏に鋭くし、霊の目を開いて神から来る物事を認識できるようにすることが目的なのだ。神から来るものは、あなたが能力と重荷を持って仕え、霊において固く立つことができるようにしてくれる。わたしから来ていないものはすべて空虚であり、何ももたらさず、霊を虚ろにし、信仰を失わせ、あなたとわたしの間に距離を空け、あなたを自分の心に閉じ込めてしまう。今やあなたは霊の中に生きれば俗世のすべてを超越することができるが、自分の心の中で生きることはサタンの虜となることであり、行き詰まりを意味する。それは今やとても単純なことだ。心でわたしを見上げなさい、そうすれば霊はすぐに強くなり、実践の道を得ることができる。わたしはあなたのすべての歩みを導く。わたしの言葉はいつでもどこでもあなたに露わにされる。どこにしようといつであろうと、状況がどんなに不利であろうと、わたしはあなたにはっきりと見せ、心でわたしを見上げるならわたしの心が露わにされる。そのようにすればあなたは行く手を走り抜くことができ、道を見失うことは決してない。一部の人々は、表面上は手探りで道を求めようとするが、霊の中では決してそうしない。彼らは多くの場合、聖霊の働きを把握できず、他の人々と交わるとさらに混乱して行くべき道を持たず、どうすればよいのかわからなくなってしまう。そのような人はなぜ苦しいのかわかっていない。多くのものを持ち、内面は豊かに満たされているように見えるかもしれないが、それが何の役に立つというのか。あなたは本当に行くべき道を持っているのか。何らかの光や啓示を得ているのか。何か新しい識見を持っているのか。前進したのか、それとも後退したのか。

新しい光に遅れず付いていくことができるのか。あなたには従順さがなく、いつも口にする従順はただの空話に過ぎない。あなたは従順ないのちを生きてきたのか。

人間の独善、自惚れ、自己満足、そして傲慢によって生じる支障はどれくらい大きいだろうか。あなたが現実に入れないのは誰のせいなのか。自分自身を慎重に吟味して、自分が正しい人間かどうかを見定めなければならない。あなたの目標や意図は、心にわたしを抱いて生み出されたものなのか。あなたの発言や行動はすべて、わたしの前で行われているのか。わたしはあなたの思いや考えをすべて調べる。あなたは罪悪感を覚えないのか。他人に見えるように偽りの姿を装い、落ち着いて独善的なそぶりを見せるのは、自身を守るためだ。そして自分の悪を隠すためにそうするだけでなく、さらにその悪を他の誰かに押しつける方法まで考え出す。あなたの心には何という欺瞞が宿っていることか。自分が言ったことをすべて思い返してみなさい。自分の魂が害を受けることを恐れてサタンを隠し、兄弟姉妹から飲み食いを無理やり奪ったのは、自分自身の利益のためではなかったのか。自分のことをどう説明するつもりなのか。サタンが今回奪った飲み食いを、次回に埋め合わせられるとでも思っているのか。今あなたにはそれがはっきりとわかっている。それはあなたに償えるものだろうか。失われた時間を取り戻すことができるのか。入念に自分自身をふり返り、ここ数回の集会でなぜ飲み食いが行われなかったのかを考え、誰がその問題を起こしたのかを確認しなさい。それがはっきりするまで、一つひとつ交わらなければならない。そのような人が強く抑制されなければ、兄弟姉妹たちは理解できないし、そういうことがまた起こるだろう。あなたがたの霊の目は開いておらず、あまりにも大勢の人が盲目なのだ。そして見える者たちはそういうことに不注意で、立ち上がって声を上げようとしない。だから、彼らも盲目なのだ。見ているのに声を上げない者は、口がきけない者だ。ここには障害を持った者がたくさんいる。

一部の人々は、真理とは何か、いのちとは何か、道とは何かを把握しておらず、霊をも理解していない。彼らはわたしの言葉をただの公式と見なしているが、それはあまりにも固いとらえ方だ。彼らは本当の感謝や讃美とは何かを理解していない。またある人々は、重要なことや主要なことを把握できず、補足的なことだけを把握している。神の経営を妨げるとはどういう意味なのか。教会建設を破壊するとはどういう意味なのか。聖霊の働きを妨げるとはどういう意味なのか。サタンのしもべとは何なのか。これらの真理ははっきりと理解しておかねばならず、曖昧にごまかしてはならない。今回飲み食いが行われなかった理由は何なのか。今日は大声で神を賛美すべきだと感じている人々

もいるが、どのように賛美すべきなのか。聖歌を歌い、踊るべきなのか。他の方法は賛美のうちに入らないのだろうか。また、歓喜して誉め讃えることが神を賛美する方法だという観念を持って集会に来る人もいる。人々はこうした観念を持っており、聖霊の働きに注意を払わないため、その結果としていまだに妨げが起こっている。この集会では、飲み食いはまったく行われなかった。皆が自分は神の重荷を思いやっており教会の証しを守るつもりだと言うが、一体誰が本当に神の重荷を思いやったのか。自問してみなさい、あなたは神の重荷に配慮を示した人間なのか。神のために義を实践することができるか。立ち上がってわたしのために語ることができるか。真理を揺るぎなく実践に移すことができるか。サタンのすべての仕業に大胆に立ち向かうことができるか。わたしの真理のために、感情を脇に置き、サタンを暴露することができるか。わたしの旨をあなたの中で成就させることができるか。最も重要なときに、自分の心を捧げたのか。あなたはわたしの旨を行う者か。こうしたことを頻繁に自問し、考えてみなさい。サタンの賜物があなたのうちにあるが、それはあなたの責任なのだ。なぜならあなたは人々を理解せず、サタンの毒を識別できないからであり、自分自身を死に導いているのだ。あなたはサタンに徹底的に欺かれて、完全に困惑してしまったのだ。淫乱のぶどう酒に酔いしれ、いつも揺れ動いて確固たる観点を持つことができず、実践の道も持っていない。正しく飲み食いせず、むやみな争いや口論に参加し、正しいことと間違っていることの区別もつかず、導く者には誰にでもついて行く。あなたは一体、少しでも真理を持っているのか。また中には、自分自身を弁護し、欺瞞さえ働く者もいる。彼らは他の人たちと交わるが、それによって彼らを袋小路に追いやるだけだ。こうした人々は、意図、目標、動機、そして源をわたしから得ているのだろうか。あなたは兄弟姉妹が飲み食いを奪われたという事実を償えると思っているのか。数人の人々と交わりを持ち、質問して考えを聞いてみなさい。彼らには何かが与えられただろうか。それとも、腹一杯汚れた水を飲まされゴミを詰め込まれ、行くべき道も持っていないだろうか。それでは教会が破壊されるのではないだろうか。兄弟姉妹の間の愛はどこにいったのか。あなたは秘かに誰が正しく誰が間違っているかを追求しているが、なぜ教会の重荷を負わないのか。あなたは通常、キャッチフレーズを叫ぶのは上手いが、実際に何かが起こると自信が持てなくなる。また、理解はしていても静かに呟くだけの人々もいれば、理解していることを語る人もいるが、他の誰も何も言わない。彼らは何が神から来ていて、何がサタンの働きなのかを知らない。いのちについての内なる感覚はどこにあるのか。あなたは聖霊の働きを一切把握できず、それを認識もしないので、新しいことをなかなか受け入れられない。受け入れるのは、人々の観念に沿った宗教的なことや世俗的なこ

とだけだ。その結果、あなたは勝手気ままに争っている。聖霊の働きを把握することができる者は何人いるのか。本当に教会の重荷を背負ってきた者は何人いるのか。あなたはそれを把握しているのか。聖歌を歌うことは神を賛美する一つの方法だが、あなたは神を賛美することの真理をはっきりと理解しておらず、さらに神を賛美する方法についても柔軟性に欠けている。それはあなたの観念ではないのか。あなたはいつも頑なに自分の観念にしがみ付いていて、聖霊が今日行おうとしていることに集中できず、兄弟姉妹たちが感じていることを感じられず、静かに神の旨を求めることができない。ただ盲目的に物事を行っていて、歌は上手に歌えるかもしれないが、その結果はまったくの混乱である。これが本当に飲み食いすることなのか。実際に誰が妨げを引き起こしているのか分かるだろうか。あなたはまったく霊の中に生きておらず、たださまざまな観念にしがみ付いている。それがどうして教会のために重荷を負うことになるのか。今や、聖霊の働きがますます迅速に進展しているのを見なければならない。自分の観念に堅くしがみ付いて聖霊の働きに抵抗しているなら、あなたは盲人ではないのか。それはハエが壁にぶつかって飛び回っているようなものではないか。そのようにあり続けるなら、あなたは放り出されることになるだろう。

災害の前に完全にされる者たちは、神に従順である。彼らはキリストに拠り頼んで生き、キリストを証しし、キリストを賛美している。彼らは勝利した男児たちであり、キリストの良き兵士である。今は自らを静め、神の近くに来て、神と交わることが最も重要だ。神に近づくことができないなら、サタンに捕らわれる危険を冒すことになる。わたしに近づきわたしと交わることができれば、すべての真理があなたに明かされ、生活と行動の基準を得ることになるだろう。あなたはわたしの近くにいるので、わたしの言葉は決してあなたの側を離れず、あなたも一生わたしの言葉から迷い出ることはなくなる。サタンはあなたを利用する術がなく、辱められ敗北して逃げ出すだろう。自分の内に欠けているものを外に探し求めれば、いくらかは見つかることもあるかもしれないが、見つかるものの多くは不要な規則や物事だろう。あなたは自らを解き放ち、わたしの言葉をもっと飲み食いし、それを熟考する方法を知らなければならない。何かが理解できなければ、頻繁にわたしに近づいてわたしと交わりなさい。そうすれば、あなたが理解することは現実的かつ真実なものになるだろう。まずわたしの近くにいることから始めなければならない。それが最も重要だ。そうでなければ、飲み食いの方法を知ることはないだろう。自分だけで飲み食いすることはできない。あなたの霊的背丈は本当に低すぎるのだ。

第十四章

まことに時は迫っている。聖霊はさまざまな方法を用いて、神の言葉にわたしたちを導き入れる。あなたはすべての真理を身につけ、聖別され、わたしに本当に近づいて交わりを持たねばならず、選り好みする余地は一切与えられない。聖霊の働きに感情はなく、あなたがどのような人間であろうと考慮されない。進んで探求し従い、言い訳をせず、自分の損得について議論することなく、飢えと渇きを持って義を探求するなら、わたしはあなたを啓く。あなたがどれほど愚かだろうが無知だろうが、そうしたことは重視しない。わたしが見ているのは、あなたが肯定的な面でどれだけ懸命に働くかということだ。まだ自己の観念にしがみ付いて、自分の小さな世界で堂々巡りしているなら、あなたは危機に直面していると言えるだろう……。携挙とは何か。見捨てられるとはどういうことを意味するのか。今日あなたは、神の前でどのように生きるべきなのか。どのように積極的にわたしと協力すべきなのか。自分の観念を捨て去り、自分を吟味し、仮面をはずし、自分の本当の姿をはっきりと見て、自分自身を忌み嫌いなさい。飢えと渇きを持って義を探求する心を持ち、自分自身には本当に何の価値もないと信じ、進んで自らを放棄し、自分のやり方をすべてやめられるようになりなさい。わたしの前で自らを静め、もっと祈りを捧げ、心を尽くしてわたしに拠り頼み、わたしを仰ぎ見なさい。わたしに近づき交わりを持つことを決してやめてはならない。こうしたことの中に鍵があるのだ。人々はしばしば自分自身の中に留まっていて、神の前にいないのだ。

聖霊の現在の働きはまさに、人々には想像し難いものであり、すべては現実に入る。それについて無思慮でいるのは実によろしくない。心と考えが正しくなければ、前途は見つからないだろう。最初から最後まで常に注意深くあり続け、怠慢にならぬよう用心しなければならない。常に注意し、待ち望み、わたしの前で静まっている者は幸いだ。いつも心の中でわたしを仰ぎ見て、注意深くわたしの声に耳を傾け、わたしの行動に注意を払い、わたしの言葉を実践する者は幸いだ。時はまさにこれ以上の遅れが許されず、あらゆる疫病が蔓延し、どう猛な血まみれの口を開けて、洪水のようにあなたがたを皆呑み込もうとしている。わたしの子らよ、時は来た。もう考え込んでいる暇はない。あなたがたをわたしの庇護のもとへと導く唯一の道は、わたしの前に戻ってくることだ。あなたがたは男児のような強い性格を持たねばならず、気弱になったり落胆したりしてはならない。わたしの歩調について来なければならないのだ。新たな光を拒んではならない。そしてわたしの言葉を飲み食いする方法を教えたら、それに従って正しく飲み食いしなければならない。まだ勝手気ままに争ったり競い合ったりしている時間がある

のか。たっぷりと食い充分に真理を身に着けることがないまま、戦うことができるのか。宗教を克服したければ、充分に真理を身につけなければならない。もっとわたしの言葉を飲み食いし、その言葉についてさらに考えを深めなさい。わたしの言葉を自発的に飲み食いして、まず神に近づくことから始めなければならない。これをあなたへの警告としなさい。注意していなければならないのだ。賢い者は早く真理に目覚めねばならない。手放したくないものすべてを棄て去りなさい。もう一度言うが、それらのものは本当にあなたのいのちに有害であり、何の益もないのだ。あなたがわたしに拠り頼んで行動できることを願っている。さもなければ、前途にあるのは死の道だけだ。それでどこへいのちの道を探しに行くのか。外面的なことにはばかりに勤しみたがる心を断ちなさい。他の人たちに逆らう心を断ちなさい。いのちが成熟できず見捨てられれば、あなたは自らを躓かせたことになるのではないか。聖霊の現在の働きは、あなたが想像しているようなものではない。自分の観念を放棄することができなければ、大きな損失を被るだろう。働きが人間の観念と一致しているなら、あなたの古い本性や観念を明るみに出すことができるだろうか。あなたは自分自身を知ることができるだろうか。あなたはおそらくまだ自分が何の観念も持っていないと思っているのだろうが、今回はあなたのさまざまな醜い面がすべてはっきりと明るみに出されるのだ。慎重に次のように自問してみなさい。

あなたはわたしに従う者か。

自分を捨てて、わたしに従う意志と準備があるか。

あなたは清い心でわたしの顔を求める者か。

どのようにしてわたしに近づき、わたしと交わりを持てばよいか知っているか。

わたしの前で自らを静め、わたしの旨を求めることができるか。

わたしがあなたにあらわす言葉を実行しているか。

わたしの前で正常な状態を保つことができるか。

サタンの狡猾な策略を見抜くことができるか。それを暴露する勇気があるか。

神の重荷をどのように思いやっているか。

あなたは神の重荷を思いやる者か。

聖霊の働きをどのように把握しているか。

神の家族の中で、どうやって調和しながら仕えているか。

どうやってわたしのために力強い証しをするのか。

どうやって真理のための善き戦いを戦うのか。

時間を取って、こうした真理を充分に考え抜かねばならない。その日がもう差し迫っていることは、事実によって十分に証明されている。災いが来る前にあなたがたは完全にされなければならない——これは早急に解決しなければならない、非常に重要な問題だ。わたしはあなたがたを完全にしたいと思っているが、あなたがたは実際どうも御し難いことがわかる。気骨はあるが、それを最大限に活かしておらず、最も重要なことは把握しないで、些細なことばかり把握している。そのようなことばかり熟考して何の役に立つのか。時間の無駄ではないか。わたしはこのように優しさを示しているが、あなたがたは何の感謝も示さず、ただ互いに争っているだけだ。これではわたしのすべての苦心が無駄になっていないか。そのままの状態にいるなら、あなたがたをなだめている暇はない。言っておくが、真理に目覚めないなら、聖霊の働きはあなたがたから断たれることになる。もう食べるものも与えられなくなるので、自分がよいと思うように信じればよい。わたしの言葉はことごとく語られた。聞くかどうかはあなたがた次第だ。ついに混乱し行き詰まって、真の光を見ることができなくなったとき、あなたがたはわたしを責めるのだろうか。何という無知だ。それほどまでに自己にしがみつき、手放すことを拒むなら、結果はどうなるだろうか。あなたがたの働きはただの無益な活動だったことになるのではないか。災いが降りかかったときに見捨てられるのは、どんなに惨めなことだろうか。

今は教会の建て上げにおける重要な段階である。積極的にわたしと協力し、全身全霊をもって自らを捧げ、すべてを捨てることができないなら、あなたは損失を被ることになるだろう。まだ他の意図を持つことができるのか。わたしはこのように寛容を示し、あなたがたが悔い改めて新たに出直すのを待った。しかしもう本当に時間が許さず、わたしは全体像を考慮しなければならない。神の経営（救いの）計画の目的のため、すべてが前へ進んでおり、わたしの歩みは日々刻々と、時を追って前進している。ついて来ることができない者は見捨てられるだろう。日々新たな光があり、新たな業が行われ、新しいことが起こっている。光を見ることができない者は盲目だ。ついて来ない者は排除されるだろう……。

第十五章

神の出現は、すでに諸教会で起こっている。語っているのは霊であり、神は燃え盛る火で、威厳を持ち、裁きを行っている。神は人の子であり、足まで垂れた上着を身に着け、胸に金の帯を締めている。その頭と髪の毛は羊毛のように白く、目は燃える炎のようだ。その足は炉で精錬された真鍮にも似て、声は大水のとどろきのようである。右手には七つの星を持ち、口からは鋭い諸刃のつるぎが突き出ており、顔は燃え盛る太陽のように照り輝いている。

人の子は証しされ、神自身が公に露わにされた。神の栄光が放たれて、燃え盛る太陽のように照り輝いている。神の壮麗な顔貌はまばゆい光とともに輝く。あえて反抗の目を向ける者がいるだろうか。反抗は死を意味する。心に何を思おうと、どんな言葉をおおうと、どんなことをしようと、わずかな憐れみも示されはしない。あなたがたは皆、自分が得たものが何であるかを理解し、目にするようになるだろう——それはわたしの裁き以外の何物でもない。あなたがたがわたしの言葉を飲み食いすることに努めず、気ままに妨害してわたしが建て上げたものを破壊するなら、そんなことに我慢ができれば。そのような人間に手加減はしない。あなたの態度がそれ以上深刻に悪化すれば、あなたは炎の中で焼き尽くされるだろう。全能なる神は霊の体で現れ、頭から足の先までを繋ぐ肉や血は少しも持っていない。神は宇宙世界を超越し、第三の天にある栄光の玉座に着き、万物を治めている。全宇宙と万物はわたしの手中にある。わたしが語ることは実現し、わたしが定めることはその通りになる。サタンはわたしの足下にあり、底なしの穴に沈んでいる。わたしの声が発せられると、天地は滅んで無に帰り、すべてのものは新たにされる。これは何の間違いもない不変の真理である。わたしはこの世に打ち勝ち、すべての邪惡な者に打ち勝った。わたしはここに座り、あなたがたに語っている。耳のある者はみな耳を傾け、生ける者はみな受け入れなさい。

この日は終わりを迎え、世のすべてのものは無に帰る。そして、すべてのものが新たに生まれ変わる。このことを覚えておきなさい。忘れてはならない。何一つ曖昧であってはならない。天地は滅びるが、わたしの言葉は滅びることがないのだ。再びあなたがたに忠告する。無駄に走り回ってはならない。目を覚ましなさい。悔い改めなさい、救いはもうすぐそこまで来ている。わたしはすでにあなたがたの間に現れ、声を上げた。わたしの声はあなたがたの前で上げられ、日々あなたがたと直接対峙しており、いつも新鮮で新しい。あなたはわたしを見、わたしはあなたを見る。わたしは絶えずあなたに語りかけ、直接向き合っている。それにもかかわらず、あなたはわたしを拒んでおり、わたしを知らない。わたしの羊はわたしの声に聞き従うが、あなたがたはまだ躊躇して

いる。そう、躊躇しているのだ。あなたの心は鈍くなっており、あなたの目はサタンによって盲目にされ、わたしの栄光ある顔貌を見ることができない。あなたは何と、何と惨めなことか。

わたしの玉座の前の七つの霊は、地の隅々にまで遣わされている。わたしはわたしの使者を遣わして、諸教会に語らせる。わたしは義であり、誠実であり、人の心の奥底を調べる神である。聖霊は諸教会に語りかける。わたしの子の内側から発せられるのは、わたしの言葉である。耳のある者はみな聞きなさい。生ける者はみな受け入れなさい。ただそれを飲み食いしなさい。そして疑ってはならない。わたしの言葉に従い、耳を傾ける者はみな、大いなる祝福を受ける。わたしの顔を真剣に求める者はみな、必ずや新たな光と新しい啓示、そして新たな識見を得るだろう。すべてが新鮮に、新しくなるのだ。わたしの言葉はいつでもあなたに示され、あなたの霊の目を開く。それによってあなたは霊的領域のあらゆる奥義を知り、神の国が人間の中にあることを目にするようになるのだ。避け所に入りなさい、そうすればすべての恵みと祝福が与えられ、飢饉や疫病はあなたに触れることができず、狼や蛇、虎や豹もあなたを害することはできなくなる。あなたはわたしと共に行き、わたしと共に歩き、わたしと共に栄光へと入ることになるのだ。

全能神よ！ 栄光ある体が公に出現し、聖なる霊体が現れ出る。彼こそが完全なる神自身なのだ。この世も肉も変えられる。山上における彼の変容は神の本体である。彼は頭に金の冠を戴き、その衣は真っ白で、胸に金の帯を締めている。世界のすべては彼の足台である。目は燃える炎のようで、口からは鋭い諸刃のつるぎが突き出ており、右手には七つの星を持っている。神の国への道は限りなく明るく、神の栄光が現れて輝きわたる。山々は喜び、水は笑う。太陽と月と星々はすべて整然と巡り、唯一の真の神を歓迎する。神の勝利の凱旋は、六千年の経営（救いの）計画の完成を告げているのだ。あらゆるものが喜びに湧き立ち、踊り上がる。歓喜せよ、全能なる神が栄光の玉座に座っている。歌え、全能者の勝利の旗は威厳ある壮大なシオンの山上に高く掲げられている。すべての国々が歓喜の声を上げ、すべての人々が歌い、シオンの山は喜び笑っている。神の栄光が現れたのだ。わたしは夢でさえ、神の顔を見られるなどとは思わなかったが、今日それを見たのだ。日々神と顔を合わせて、神に自分の心を露わにする。神は食べ物や飲み物を豊かに与えてくださる。生活、言葉、行動、思い、考え——神の壮麗な光がそれらすべてを照らしている。道の一步一步が神によって導かれ、反抗的な心にはただちに神の裁きが下されることになる。

神と共に食べ、共に過ごし、共に暮らし、神と共にいて、共に歩み、共に楽しみ、共に栄光と祝福を得、神と王権を共有し、共に神の国にいる——おお、何という喜びだろうか。おお、何と甘美なことか。日々神と顔を合わせ、日々話をして常に語り合い、日々新しい啓示と新たな識見を授かる。わたしたちの霊の目は開かれて、すべてが見えるようになり、霊のすべての奥義がわたしたちに露わにされる。聖なる生活は実に気楽なものだ。速く走り、止まることなく、ひたすら前へと突き進みなさい。先にはもっと素晴らしい生活が待っている。ただの甘美な味わいに満足することなく、常に神の中に入ることを求めなさい。神はすべてを包み込んで豊かに満ちており、わたしたちに欠けたあらゆるものを持っている。積極的に協力し、神の中に入りなさい。そうすればすべてが変わることだろう。わたしたちの生活は超越したものになり、どんな人間も物事も、それを邪魔することはできないのだ。

超越。超越。真の超越。神の超越したいのちは内にあり、すべてのものは本当に楽になった。わたしたちはこの世と世俗的なものを超越し、夫や子供たちへの愛着もまったく感じない。病気や状況による支配も超越する。サタンもわたしたちを邪魔しようとはしない。わたしたちはすべての災いを完全に超越する。それによって神は王位を得ることになるのだ。わたしたちは足元にサタンを踏みにじり、教会のために証しを立て、サタンの醜い顔を徹底的に暴露する。教会を建て上げることはキリストの中にあり、栄光の体が現れた。これこそが、携挙の中に生きるということなのだ。

第十六章

人の子が証しされた後、全能神は自身を義の太陽としてわたしたちに公に現した。これが山上の変容である。それは今やますます実際的になり、さらに現実となりつつある。わたしたちは聖霊の働きの方法を見た。神自身が肉の体から出現した。神は人間にも、空間にも、また地理にも制限されることはない。神は地と海の境を超越し、全宇宙と地の隅々にまで及び、すべての国々とすべての人々は神の声に静かに耳を傾けている。わたしたちが霊の目を開くとき、わたしたちは神の言葉が神の栄光の体から発せられるのを見る。それは肉から出現する神自身である。この方はまことなる完全な神自身である。神は公にわたしたちに語り、わたしたちと顔を合わせ、わたしたちに助言を与え、わたしたちを憐れみ、わたしたちを待ち、わたしたちを慰め、わたしたちを鍛錬し、わたしたちを裁く。神はわたしたちの手をとって導き、わたしたちへの神の思いは、神の中で炎のように燃える。熱心な心で神はわたしたちが目を覚まし、神の中へ入るようわ

たしたちを急がせる。神の超越的ないのちはわたしたちすべての中に造られる。そして、神の中へ入るすべての者たちは超越を成し遂げ、世とすべての邪惡な者たちに勝利し、神と共に支配するであろう。全能神は神の靈の体である。神が定めるとそれは成る。神が語るとそのようになり、神が命じるとそれは為される。この神は唯一の眞の神である！サタンは神の足の下に置かれ、底なしの穴にいる。宇宙のあらゆるものは神の手の中にある。時は来た。すべてが無に歸し、新たに生まれる。

第十七章

教会は建設されつつあり、サタンは必死にそれを破壊しようとしている。サタンはわたしの建設するものを何としても破壊したがつているのだ。そのため、教会は急いで清められねばならない。邪惡さのかけらも残ってはならず、傷一つなくなって以前同様清くあり続けるように、清められねばならないのだ。あなたがたは常に目を覚まして待ち、もっとわたしの前で祈らねばならない。サタンのさまざまな企てやずる賢い策略を見極め、靈を認識し、人々を知らなければならず、あらゆる人や出来事や物事を見分けることができなくてはならない。またわたしの言葉ももっと飲み食いしなければならず、さらに重要なのは、自分でそれを飲み食いできなければいけないということだ。あらゆる眞理を身につけてわたしの前に来なさい。そうすればわたしはあなたがたの靈の目を開き、靈の中に存在するすべての奥義を見せることができるだろう。……。教会が建設段階に入ると、聖徒が戦いへと行進していく。サタンのさまざまな忌まわしさが、あなたがたの前に明らかにされる。進むのを止めて後ずさりするのか、それとも立ち上がり、わたしに依り頼んで歩き続けるのか。サタンの墮落した醜い素性をすべて露わにしなければ。情に流されたり、憐れみをかけたりしてはならない。死ぬまでサタンと戦いなさい！ わたしがあなたの後ろ盾なのだから、男子の精神を持たねばならない。サタンは死力を尽くした戦いを繰り広げているが、わたしの裁きを逃れることはできない。サタンはわたしの足元にあり、同時にあなたがたの足にも踏みつぶされている。これは事実なのだ。

すべての宗教的な妨害者と、教会建設を破壊する者は、一切の寛容も示されることなくただちに裁かれる。サタンは暴かれ、踏みつけられ、完全に打ち砕かれ、隠れる場所もなくなる。どのような悪魔も幽霊も、すべて必ずその姿をわたしの前に露わにする。わたしはそれらを底なしの穴に落とし、そこから二度と解放することはなく、すべてをわたしたちの足下に置く。眞理のために善き戦いを戦おうとするなら、まずサタンに働

く機会を与えないことだ。そのためには一致団結して仕え、独自の観念、意見、視点、物事のやり方をすべて捨てて、わたしの中で心を静め、聖霊の声に集中し、聖霊の働きに心を傾けて、神の言葉をつぶさに体験しなければならない。抱く意図は一つだけ、つまりわたしの旨が行われるということだけでなければならない。それ以外に意図を持つてはならないのだ。心をこめてわたしを見上げ、わたしの行いとそのやり方をしっかりと見つめ、怠慢に陥ってはならない。霊を研ぎ澄まし、しっかりと目を開いていなさい。意図や目的が正しくない者、周りに注目されたい者、何かしたくてたまらない者、混乱を起こしやすい者、宗教的教義の説教を得意とする者、サタンのしもべなどといった者が、何かしようと立ち上がると、教会にとって通常やっかいな存在となり、それによって兄弟姉妹たちによる神の言葉の飲み食いが無駄になってしまう。そのような人々が芝居気に振舞うのを見たなら、即刻止めなくてはならない。度重なる忠告にもかかわらず変わらなければ、彼らは損害を被ることとなる。頑なに自分達のやり方を通す者たちが、自らを弁護してその罪を覆い隠そうとするなら、教会はすぐにそのような者たちを排除し、立ち回る余地を一切与えてはならない。わずかなものを惜しんで多くを失ってはならない。常に全体像を注視しなさい。

あなたの霊の目は今や開かれていなければならず、教会にいるさまざまな人々を見分けられなければならない。

霊的な事柄を理解し、霊を知っているのはどんな人か。

霊的な事柄を理解できないのはどんな人か。

邪悪な霊を持っているのはどんな人か。

内面でサタンが働いているのはどんな人か。

混乱を起こしやすいのはどんな人か。

内面で聖霊が働いているのはどんな人か。

神の重荷を思いやっているのはどんな人か。

わたしの旨を行えるのはどんな人か。

誰がわたしの忠実な証人か。

今日における最も崇高なビジョンは、聖霊が諸教会にもたらす啓きであることを知りなさい。こうしたことについて混乱してはならない。時間をかけてしっかりと理解

しなければならないのだ。これはあなたがたのいのちの進歩にとって極めて重要なことだ。目の前にあるこれらのことが理解できなければ、前途を進むことはできず、常に誘惑に陥って囚われる危険性があり、飲み込まれてしまうかもしれない。今重要なのは、心の中でわたしに近づけるようになることに集中し、もっとわたしと交わることだ。あなたに足りないものや求めているものは、そのようにわたしの近くにいて交わることで補われるだろう。あなたのいのちは必ず養われ、新たな啓きを得ることになる。わたしはあなたがたかつてどれほど無知だったかなど考えないし、あなたがたの過去の過ちを思い返すこともない。わたしが見ているのは、あなたがどれほどわたしを愛しているかということだ。他の何にも増してわたしを愛することができるか。わたしはあなたが戻ってきてわたしに頼り、無知を捨て去れるかどうかを見ているのだ。一部の人々はわたしに背き、公然とわたしに反抗し、他人を裁いている。彼らはわたしの言葉を知らないし、ましてやわたしの顔を見つけられるとは思えない。わたしの前で心からわたしを探し求める者、義に飢え渴く心を持つ者は、すべてわたしが啓き、明らかにし、自分の目でわたしを見られるようにし、直接わたしの旨を把握できるようにする。わたしの心は必ずやあなたに露わにされ、あなたは理解ができるようになるだろう。わたしがあなたの中で啓くことを、わたしの言葉に従って実践しなさい。そうでなければ裁かれる。わたしの旨に従いなさい、そうすれば道に迷うことはない。

わたしの言葉に入ることを求めるすべての人には、恵みと祝福が二倍に注がれ、彼らは日々新たな啓きと識見を得て、毎日わたしの言葉を飲み食いする中で、ますます新鮮な感覚を覚えるようになるだろう。彼らは自分の口でそれを味わう。何と甘美なことか。……慎重でありなさい、ある程度の識見を得て甘美さを味わったからといって、満足してはならない。大切なのは求め続けることなのだ。一部の人々は聖霊の働きが真に驚異的であり現実的だと考えている。これはまさに公に露わにされた全能神の本体であり、今後はさらに偉大なしるしと不思議が待っている。注意して、常に目を覚ましていなさい。源から目を離してはならない。わたしの前で自らを静め、注意深く耳を傾け、わたしの言葉に確信を持ちなさい。少しでも曖昧さがあってはならない。わずかでも疑えば、残念ながら門の外へ捨てられるだろう。明確なビジョンを持ち、確固たる地に立ち、このいのちの流れにどこまでもしっかりとついて行きなさい。人間的なためらいを少しでも秘めていてはならない。ただ飲み食いし、讃美し、清い心をもって求め、決して諦めてはならない。わからないことは何でも、頻繁にわたしの前に持ってきてなさい。決して疑いを抱かず、大きな損失を被ることのないようにしなさい。ついて来なさい。つ

いて来なさい。離れずにいなさい。妨げとなるものを振り払い、自堕落にならないようにしなさい。行って心から求めなさい、後戻りしてはならない。常に心を捧げ、一瞬も無駄にしないようにしなさい。聖霊は絶えず新たな働きを抱えており、日々新しいことをし、毎日新しい啓示も行なっている。山上の変容、神の聖い霊の体が現れたのだ！義の太陽が光と輝きを発し、すべての国とすべての人々が、あなたの栄光に輝く顔貌を見た。わたしの光はわたしの前に来るすべての人々の上に輝く。わたしの言葉はあなたを導く光である。右や左に逸れることなくわたしの光の中を歩きなさい、あなたがたの走りは無駄な努力にはならない。聖霊の働きをはっきりと見なければならぬ。その中にわたしの旨があるのだ。すべての奥義は隠されているが、徐々にあなたに露わにされる。常にわたしの言葉を心に留め、わたしの前に来て、もっとわたしと交わりなさい。聖霊の働きは前進していく。わたしの足跡を辿りなさい。偉大な不思議が用意されており、一つ一つ露わにされる。注意する者、待っている者、目を覚ましている者だけがそれらを見ることになる。怠けていてはならない。神の経営（救いの）計画は最終段階を迎えており、教会建設は成功することになり、勝利者の数はすでに定められている。勝利する男子が造られ、彼らはわたしと共に神の国に入り、わたしと共に王位に就き、鉄の杖を持ってすべての国を支配し、共に栄光の中に存在することになるのだ。

第十八章

教会を建てるのは簡単なことではない。わたしは心をこめて教会建設に取り組んでいるが、サタンは教会を取り壊そうとあらゆる手を尽くしてくるだろう。鍛えられたかったら、ビジョンを持たなければならない。わたしによって生きなければならない。キリストの証人となり、キリストを高く掲げ、わたしに忠実でなければならない。言い訳はせずに無条件に従うべきである。どのような試練にも耐えて、わたしを由来とするものすべてを受け入れなければならない。聖霊が導くためにすることは何であろうと従わなければならない。鋭い霊を持ち、物事を識別する能力を持たなければならない。人々を理解し、むやみに他人に従ってはならず、つねに澄みきった霊的な目を保ち、物事を完全に把握しなければならない。わたしと同じ心を持つ人々はわたしを証し、サタンに対して決定的な戦いをしなければならない。あなたがたは鍛えられ、かつ戦いに挑まなければならない。わたしはあなたがたとともにいる。わたしはあなたがたを支える。わたしはあなたがたの避難所のである。

まずなすべきことは、自分を清め、別人になり、気性を安定させることである。良い

状況、又は悪い状況においてもわたしによって生き、家にいようと、ほかのいかなる環境であろうと、誰かほかの人のせいで、あるいは何かが起きたせいで気持ちを揺るがせてはならない。そして断固とした態度をとり、いつもどおり、キリストを生かし出し、神自身を表現しなければならない。自分の役割を実行し、当たり前のこととして自分の本分を果たさなければならない。これはただ一度でなされることはできず、長期にわたって続けられなければならない。わたしの心を自分の心としてとらえ、わたしの意志はあなたの考えにならなければならない。状況を全体としてとらえ、あなたの中からキリストがにじみ出るようにし、ほかの人々と協力して奉仕しなければならない。聖霊の働きに歩調を合わせ、聖霊の救いの方法に身を投じなければならない。無心になり、無邪気で率直にならなければならない。兄弟姉妹と正常に交わり関わり合い、霊において物事を行えるようになり、互いに愛し、彼らの力によって自分の弱さを補えるようになり、教会の中で鍛えられるように努めなければならない。そうすればあなたは本当に神の国にあずかることができるだろう。

第十九章

聖霊の働きが前進を続ける中、神は再び我々を聖霊の新しい働き方へと導き入れた。その結果、わたしを誤解し、わたしに不平を言う者たちが出てきたのはやむを得ない。わたしに抵抗し、反対し、詮索する者もいる。しかしそれでもわたしは、あなたがたが悔い改め、改心するのを寛大に待っている。聖霊の働き方の変化というのは、神自身が公然と現れたことだ。わたしの言葉は決して変わらない。わたしが救っているのはあなたなのだから、途中で見放すつもりなど一切ない。ただあなたがたのほうで疑念を抱き、手ぶらで引き返したがつているのだ。前進するのをやめてしまった者もいれば、ただ様子を見ながら待っている者もいる。また、消極的に状況に対処している者もいれば、ただ物真似ばかりしている者もいる。あなたがたは本当に心を頑なにしてしまった。わたしが言ったことを受け取って、それを何か誇るべきもの、自慢するものに変えてしまった。このことをもっとよく考えてみなさい、これはあなたがたに与えられている憐れみと裁きの言葉に他ならないのだ。聖霊はあなたがたが実に反抗的なを見て、直接語りかけ分析する。あなたがたは恐れなければならない。無謀な行動をしたり、何事も性急に行ったりしてはいけない。うぬぼれたり、傲慢になったり、意固地になったりしてもいけない。もっとわたしの言葉を実践することに集中し、どこへ行ってもわたしの言葉を生きなさい。そうすれば、あなたはわたしの言葉によって本当に内側から変わり、わたしの性質を持つようになるだろう。そのような結果だけが本物なのだ。

教会が建て上げられるためには、あなたが特別な霊的背丈を備えて、心から絶えず求めなければならない。そしてさらに、聖霊の燃える炎と清めを受けて生まれ変わらなければならないのだ。そのような条件下でのみ、教会を建て上げることができる。聖霊の働きに導かれて、今やあなたがたは教会建設に着手した。これまで通り混乱してのろのろと振る舞い続けるなら、あなたに希望はない。あらゆる真理を身に備え、霊的な判断力を持ち、わたしの知恵に従って完全な道を歩まねばならない。教会が建て上げられるためには、あなたがいのちの霊の中にいなければならず、表面的に模倣するだけではない。いのちの成長過程は、あなたが建て上げられる過程と同じだ。しかし注意しなければならないのは、賜物に頼る人々、霊的な問題が理解できない人々、あるいは現実に欠けた人々は建て上げられることができず、常にわたしに近づいて交わることのできない人々も同様だ。観念に心を奪われている人々や教義に従って生きる人々は建て上げられることができないし、感情に導かれる人々も同様だ。神にどのように扱われようと、完全に従わなければならない。そうでなければ建て上げられることはできない。うぬぼれ、独善性、自尊心、満足感に凝り固まっている人々や、見下したり目立ったりするのが好きな人々も、建て上げられることはできない。他の人と協力して奉仕できない人々も建て上げられることはできず、また霊的識別力がなく、導こうとする人に盲目的に従う人々も建て上げられることはできない。同様に、わたしの意図が理解できず、古いままの状態で生活する人々も建て上げられることはできないし、新しい光について行くのが遅すぎる人々や、基盤となるビジョンを持たない人々も、建て上げられることはできないのだ。

教会は早急に建てられなければならない、そのことはわたしにとって差し迫った懸念となっている。あなたはまず肯定的なものに集中することから始めて、全力で自分を捧げることで、教会建設の流れに加わらなければならない。そうしないと、見捨てられることになるだろう。断念すべきものは完全に断念し、飲み食いすべきものは適切に飲み食いしなさい。わたしの言葉の現実を生き、表面的で取るに足らないものに集中するのをやめなさい。自問してみなさい、わたしの言葉をどのくらい受け入れたのか、わたしの言葉をどのくらい生きているのか。常に冷静さを保ち、何事も性急に事を進めるのは控えなければならない。そのような態度はいのちの成長を助けることにはならず、実際の成長を阻害するだろう。真理を理解し、それをどのように実践すべきかを知り、わたしの言葉を真にあなたのいのちとしなければならない。それが問題の核心なのだ。

教会建設は今や極めて重大な時期に到達したため、サタンはさまざまな計画を立てて

おり、全力を尽くして建設をやめさせようとしている。あなたがたは注意を怠らず、用心して進み、優れた霊的判断力を働かせなければならない。そのような判断力がなければ、大きな損害を被ることになるだろう。これは些細な問題ではなく、重大な問題と考える必要がある。サタンも偽の外観を装って偽物を広めることができるが、そうしたものは本来の質が異なる。人々は実に愚かしく不注意で、物事を区別できない。それは同時に、あなたがたが常に明晰な頭と穏やかな状態を保てないことも意味している。あなたがたの心はどこにも見つからない。奉仕は一方では名誉だが、他方では損失でもありうる。祝福につながることもあれば、災難につながることもある。わたしの前では静けさを保ち、わたしの言葉に従って生きなさい。そうすれば本当に注意深さが保たれ、識別力が働くようになるだろう。サタンがやってきたらすぐに身を守ることができるだろうし、やって来ることを感知できるだろう。霊の中で本物の不安を感じるからだ。現在のサタンの働きは、人々の動向に応じて変化する。人々が混乱して、注意深さに欠けていると、サタンに捕らわれたままになってしまう。常に注意し、目を凝らしていなさい。自分の損得について口論したり、自分の利益になるように計算を巡らしたりしてはいけない。それよりも、わたしの旨が成し遂げられることを求めなさい。

物体はまったく同じに見えても、品質は異なることがある。そのため、個人だけでなく霊を識別する必要があるのだ。識別力を働かせ、霊的な明晰さを保ちなさい。サタンの毒が現れても、すぐにそれを認識できなければならない。サタンの毒は神の裁きの光を逃れられない。もっと注意を払って、霊の中で聖霊の声によく耳を傾けなさい。他の人々に盲目的に従ったり、誤ったものを真実と誤解したりしてはならない。主導権を握っている者に単純に従ってはいけない、でないと大きな損害を被ることになる。こうしたことを聞いて、あなたはどのように感じるだろうか。その結果を感じたことがあるだろうか。でたらめに奉仕の邪魔をしたり、自分の意見を差し挟んだりしてはならない。さもないとわたしがあなたを打ち倒す。さらに、従うことを拒否して好きなことを言ったりしたりし続けるなら、わたしはあなたを追い払うだろう。教会はこれ以上人々をかき集める必要はない。教会が求めるのは、ただ心から神を愛し、実際にわたしの言葉に従って生きる人々だけだ。あなたは自分の実際の状況に気づいていなければならない。貧しい人が自分を金持ちだと思えるのは、自己欺瞞ではないだろうか。教会を建てるには、聖霊に従わなければならない。盲目的に行動して前進するのではなく、自分の場所にとどまって、自分がすべき働きをこなさい。自分の役割から逸脱することなく、全力を尽くして自分にできる働きをすべて果たさなければならない。そうすればわたしの

心は満足するだろう。それはあなたがた全員が同じ働きを行うということではない。そうでなく、それぞれが自分の役割を果たし、教会で他の人々と協力しながら自分の奉仕に専念しなければならないのだ。奉仕はどちらの方向にも逸脱してはならない。

第二十章

聖霊の働きは素早く躍進し、あなたがたを完全に新しい領域に連れて行く。つまり、神の国の本当の生活があなたがたの前に現れる。聖霊の話す言葉はあなたの心の奥底にあるものを直接明らかにし、その結果として実像が次々にあなたがたの目の前に現れる。義を渴望しているすべての人々、従う気持のあるすべての人々は必ずシオンに残り、新しいエルサレムにとどまるだろう。彼らは必ずわたしと共に栄光と賛美を得て、素晴らしい恩恵をわたしと共有する。あなたがたの霊の目は開いていないが、いまや霊の世界にはあなたがたがまだ見たことのない奥義がいくつかある。すべてのものは実に素晴らしい、奇跡や不可思議なこと、人々が考えもしなかったことが次第に明らかになるだろう。全能の神は、自身の最大の奇跡を示し、その結果、宇宙と地の隅々、そしてすべての国々、すべての民族は自分の目でその奇跡を見ることができ、またわたしの威厳、義、全能性がどこにあるのかを知ることできるだろう。その日は近づきつつある。今は極めて重大な時期である——あなたは引き下がるだろうか、それとも絶対に後戻りせず最後まで耐えるのだろうか。誰にも、何事にも、目を向けてはいけない。世の中にも、あるいは夫や子供たち、または生活についての不安にも目を向けてはいけない。わたしの愛と憐れみにだけ目を向け、わたしがあなたがたを得るために払った代価が何かを見なさい。わたしが何者であるかを見なさい。これらのことを知れば、十分な励みが得られるだろう。

その時はすぐそこまで来ており、わたしの旨は早急に達成されなければならない。わたしはわたしの名において人々を見捨てることはなく、あなたがたすべてを栄光の中に引き入れるだろう。しかし、今は極めて重大な時期であることがわかる。次の段階に進むことのできない人は自分のために一生嘆き悲しみ、後悔するが、もう遅すぎるだろう。今あなたがたの霊的背丈は、教会を建てられるかどうか、あなたがたが互いに従うことができるかどうかという実地試験で試されている。この観点から見ると、あなたの服従は、実際は自分勝手な服従なのだ——一人の人には従うことができても、他の誰かに従うことは難しいと気づくような服従なのだ。人間的な観念を信賴しているならば、服従していただけるわけがない。しかし、神の考えはいつも人間の考えを超えている。キリ

ストは死に至るまで従い、十字架上で死んだ。キリストはいかなる条件も理由もまったく語らなかった。父なる神の意志である限り、キリストは進んで従った。あなたの現在の服従はあまりにも限られている。あなたがた全員に言うが、服従とは人々に従うことではなく、むしろ聖霊の働きに従うこと、神自身に従うことである。わたしの言葉は内面からあなたがたを新しくし、変えている。そうでなければ、一体誰が誰に従うのだろう。あなたがたはみな他人に反抗的である。あなたがたは時間をかけて、服従とは何か、どうしたら従順ないのちを生きることができるかを考えなければならない。もっと頻繁にわたしの前に来て、この問題を語り合わなければならない。そうすれば徐々に理解できるようになり、結果として心の中の観念や選択を捨てるだろう。わたしが行うこのやり方を人々が完全に理解するのは難しい。それは人々が如何に善良かとか、如何に有能かということではない——わたしは神の全能性を明らかにするために、最も無知な人々、最も取るに足らない人々を使う一方、それと同時に何人かの人々の観念、意見、選択を覆している。神の行いは実に驚くべきものであり、人々の憶測を超えている。

あなたが本当にわたしの証しをする者になりたいなら、真理を純粹に受け入れ、誤った受け入れ方をしてはいけない。わたしの言葉を実行することにもっと心を注ぎ、あなたのいのちが速く成熟することを求めなければならない。価値のないものを求めるようなことをしてはいけない。そのようなものはあなたがたのいのちの向上にとって何の利益もない。いのちが成熟した時初めてあなたがたは建て上げられたと言える。そうなった時初めて、あなたがたは神の国に入ることができる——これに疑う余地はまったくない。それでもあなたにもう少し話をしたい。わたしはあなたに多くを与えたが、あなたはどのくらい本当に理解しているのだろう。わたしが言うことのうち、どのくらいがあなたのいのちで現実になっているのだろう。わたしが言うことのうち、どのくらいをあなたの生きる中でその通りに生きているのだろう。箆で水を汲むような無駄なことをしてはいけない——そんなことをすれば、結局何も獲得しないだろう。得られるのはむなしさだけである。他の人々は非常に容易に本当の利益を獲得した。あなたはどうか。武装せず、武器を何も携えずに、あなたはサタンを打ち負かすことができるだろうか。あなたはわたしの言葉にもっと依存して生きなければならない。わたしの言葉は自己防衛には最適の武器だ。あなたは次のことに注目すべきである。わたしの言葉を自分の所有物だと思ってはいけない。もしあなたがわたしの言葉を知らず、探し求めず、理解しようとせず、あるいはわたしと交流しようとせずに、自己満足しているならば、あなたは損害を被るだろう。いまや、あなたはこの側面を教訓とすべきであり、自分自

身の考えを脇へやり、自分の欠点を補うために他の人々の力を借りなければならない。自分の望むことだけをしてはいけない。「歳月人を待たず」である。兄弟姉妹のいのちは日ごとに成長し、彼らは変化を経験し、みな日ごとに新しくなる。兄弟姉妹には力が生じるが、これは素晴らしいことである。ゴールまで全速力で走りなさい。誰も他の人に注意を払うことはできず、わたしに協力するために自ら進んで努力をするだけである。ビジョンを持っている者、将来の見通しを持っている者、落胆していない者、いつも前方を見ている者は間違いなく、勝利を得ることが保証されている。今は重大な時期である。落胆したり、弱気になったりしないよう気をつけなさい。すべてのことに前向きになり、振り返ってはならない。すべてを断念し、人間関係のもつれはすべて捨て、全力で追求しなければならない。あなたに最後の一呼吸が残っている限り、最後の最後までやり抜きなさい。このことだけが、称賛に値するのだ。

第二十一章

聖霊の働きは今や、あなたがたを新しい天地へと導き入れた。すべてが新たにされつつあり、すべてがわたしの手の中にある。すべてが新たに始まっているのだ！ 人々はその観念ゆえにそれを理解できず、意味がわからないままにいるが、働きをしているのはわたしであり、そこにはわたしの知恵がある。だからあなたがたはただ、自分の観念や意見をすべて脇に置き、従順に神の言葉を飲み食いすることだけを考えていればよい。何も心配することはない。わたしはこのように働いているのだから、神聖な責任をこの肩に背負う。実際、人々がこうあるべきという特定のあり方といったものはない。驚くべきことをするのは神であり、神が自らの全能性を示すのだ。人々は神のことを自慢する以外、自慢をしてはならない。さもなければ損失を被るだろう。神は貧しい人を塵から引き上げ、謙虚な人は必ずや高く上げられる。わたしは自らの知恵をあらゆる形で用いて宇宙教会を支配し、すべての国と人々を支配する。そうすることですべてがわたしの中に存在し、教会のあなたがたがみなわたしに従えるようになるからだ。これまで従わなかった者も、今やわたしの前に従順にならねばならず、互いに従い、互いに寛容にならねばならない。いのちで互いと繋がり合い、愛し合い、他人の長所によって自分の短所を補い、協力して仕えなければならない。そうすれば教会は建て上げられ、サタンにもつけ込む隙は与えられない。そうして初めて、わたしの経営（救いの）計画は失敗しないことになる。ここでもう一つ、覚えておいて欲しいことがある。誰々はどういう人だからとか、こんな事をしたからといって、心の中に誤解を生じさせ、霊の状態を墮落させることがあってはならない。わたしから見れば、それは不適切であり無意味な

ことだ。あなたが信じているのは神ではないのか。それは誰か一人の人間ではない。役割が違うのだ。からだは一つであり、それぞれが自分の本分を尽くし、それぞれの持ち場で最善を尽くし（幾分熱があれば、その分光を発する）、いのちの成長を求める。そうすればわたしは満足するだろう。

あなたがたが考えるべきことは、わたしの前で心静かにしていることだけだ。わたしと親しく交わりなさい。理解できないことはさらに追い求め、祈りを捧げ、わたしの時間を待ちなさい。すべてのことを霊で明確に理解しなさい。向こう見ずな行動を避け、道から外れないようにしなさい。そのようにして初めて、わたしの言葉の飲み食いが真に実を結ぶのだ。頻繁にわたしの言葉を飲み食いし、わたしの言ったことを思い巡らし、わたしの言葉を実践することに注意を向け、わたしの言葉の現実を生きなさい。それが重要なのだ。教会を建て上げる過程は、いのちの成長の過程でもある。いのちの成長が止まれば、あなたは建て上げられることができない。自然に任せ、肉や熱意、貢献、資格といったものに頼っているなら、どんなに善良であっても建て上げられることはない。いのちの言葉の中に生き、聖霊による啓きと照らしの中に生き、自分の実状を知り、人として変わらなくてはならない。霊にあっても同じ識見を持ち、新たな啓きを持ち、新たな光に遅れずついて行くことができないからではない。絶えずわたしに近づいてわたしと交わり、わたしの言葉を日常生活のさまざまな行動の基準とし、わたしの言葉に基づいてあらゆる種類の人、出来事、物事に適切に対処できるようになり、わたしの言葉を基準として、生活のあらゆる活動においてわたしの性質を生きなければならないのだ。

わたしの旨を理解し配慮したいと願うなら、わたしの言葉に留意しなければならない。慌てて物事を行なってはならない。わたしが認めないものは悪い結末を迎える。祝福はわたしが賞賛したことによってのみもたらされる。わたしが語ることはその通りになる。わたしが命じることは確定する。わたしの激怒を避けるため、わたしが許可していないことは決して行なってはならない。そのようなことをすれば、後悔する時間すら得られないだろう。

第二十二章

神を信じることは容易なことではない。その過程で人は混乱し、すべてを食い、どれも非常に興味深く、実に味わい深いと思う。中にはいまだに褒めそやしている者たちもいるが、彼らは霊にまったく識別力がないのだ。この経験は入念に解釈してみる価値が

ある。終わりの日には、あらゆる種類の霊が現れてそれぞれの役割を演じ、神の子供らの前進に公然と反発し、教会建設の妨害に加担する。もしこのことを軽く考えて、サタンに働く隙を与えれば、教会に混乱がもたらされ、人々はパニックに陥って絶望し、深刻な場合はビジョンを失うことになる。そうなれば、長年に及ぶわたしの苦労がすべて水の泡になってしまうだろう。

教会が建設される期間は、サタンの狂乱が最も高まる時期でもある。サタンは幾人かの人間を通して混乱や妨害を引き起こすことがよくあり、霊を知らない者や新たに信者となった者は一番簡単にサタンの役を演じてしまう。人々は聖霊の働きを理解できないために、まったく思うまま自分のやり方や観念に沿って、思いつきで行動してしまうことがよくある。黙っていなさい、それはあなた自身を守るためなのだ。よく聞いて従いなさい。教会は社会とは異なる。自分の思うままに話してはならず、考えたことを何でも口に出してはならない。ここは神の家なのだから、そんなことはできないのだ。神は人のやり方は受け入れない。霊に従って物事を行い、神の言葉を生きなければならない。そうすれば他の人々はあなたに敬服するだろう。まず自分自身の中にある困難をすべて、神に頼って解決しなさい。自分の墮落した性質と決別し、自分の状態を真に理解し、どうすべきかがわかるようになりなさい。わからないことは交わって話し合いを続けなさい。自分を知らないままでいてはいけない。まずは自分自身の病を癒し、そしてわたしの言葉をもっと頻繁に飲み食いして熟考することで、わたしの言葉を基盤として自分の人生を生き、自分の物事を行いなさい。家にいても他の場所においても、神があなたの中で力を振るえるようにしなさい。肉と自然のままのあり方を捨てなさい。あなたの中を常に神の言葉が支配しているようにしなさい。いのちに変化がないと心配するには及ばない。徐々に、自分の性質が大きく変わったとを感じるようになる。以前、あなたは注目を浴びることに熱心で、誰の言葉にも従わないか、あるいは野心的で独善的で横柄だった。そうした性質は徐々に取り除かれていくだろう。今すぐにそれを捨てたいと思っても、それは不可能だ。なぜなら古い自我がそれを守って他人に触れさせようとせず、その根は非常に深いからだ。ゆえにあなたは主体的に努力する必要があり、前向きにそして積極的に聖霊の働きに従い、意志を用いて神に協力し、わたしの言葉を進んで実践しなければならない。罪を犯せば、神があなたを懲らしめる。立ち戻って理解を得れば、あなたの中ですべてがすぐによくなる。自分の好きなように話していると、すぐに内面で懲らしめられることになる。知っての通り神はそうしたものを喜ばないので、すぐにやめるなら心の中に平安が訪れる。新しい信者の中には、いのちがどのように感じ

るものか、どうすればその感覚の中で生きられるのかを理解できない者もいる。あなたも口には出さないが、時折なぜこんなに内面が落ち着かないのかと疑問に思うことがある。そのような時は、あなたの思いや心があるべき状態でないのだ。あなたは時に自分の選択、観念、意見を持つこともあれば、他の人を自分より劣っていると考えることもあり、また時には自分勝手な計算をして、祈りや自省をしないこともある。内面が落ち着かないのはそれが理由なのだ。おそらくあなたは何が問題なのかわかっているだろうから、すぐに心の中で神の名を呼び、神に近づけばよい。そうすれば回復する。心がますます動揺して落ち着かないときは、決して神が語らせてくれるなどと思ってはならない。新しい信者は特に、このことに注意して神に従わねばならない。神が人の内面に与える感覚は、平安、喜び、明瞭さ、確信である。理解できずに混乱して思うままに行動してしまう人がよくいるが、そうしたものはみな妨害となるので、よく注意しなければならない。もしそのような傾向があるなら、「予防薬」を用いてそれを防ぐ必要があり、そうでないと妨害行為を行なって、神に打たれることになってしまう。独善的になってはならない。他の人々の長所を利用して自分の弱さを正し、他の人々がどう神の言葉によって生きているかをよく見て、彼らの生き方や言動が見習うに値するかどうかを見極めなさい。他の人々が自分より劣っていると考えるなら、あなたは独善的で慢心しており、誰のためにもならない。今重要なのはいのちに焦点を当て、わたしの言葉をもっと飲み食いし、経験し、知り、真にあなたのいのちとすることだ――それが肝心なのである。神の言葉によって生きられないなら、人のいのちが成熟できるだろうか。そんなことはできない。常にわたしの言葉によって生き、わたしの言葉を生活の規範としなければならない。そうすれば、その規範に沿って行動すると神が喜び、別のやり方で行動すると神が嫌がることを感じられるようになる。そしてゆっくりと、正しい道を歩めるようになるのだ。何が神から来て何がサタンから来るのかを理解しなくてはならない。神から来るものはあなたに一層明瞭なビジョンを与え、ますます神に近づかせてくれる。あなたは兄弟姉妹と心からの愛を分かち合い、神の重荷に配慮できるようになり、決して弱まることのない神を愛する心を持つようになる。目の前には歩むべき道がある。サタンから来るものは、あなたのビジョンを消え去らせ、それまで持っていたものもすべて失わせる。あなたは神から離れ、兄弟姉妹に対する愛も失せ、憎しみの心を持つようになる。絶望して、もはや教会生活を望まなくなり、神を愛する心も失せる。それがサタンの働きであり、同時に邪悪な霊の働きがもたらす結末なのだ。

今は正念場である。あなたがたは最後まで持ち場にとどまらなくてはならず、霊の目

を澄み切らせて善悪を見分け、教会建設のために努力の限りを尽くさねばならない。サタンの下僕を追い払い、宗教的な妨害や邪悪な霊の働きを一掃しなさい。教会を清め、わたしの旨が妨げなく行われるようにしなさい。そうすれば災いを前にしたこの短い期間に、わたしはできる限り速くあなたがたを完全にし、栄光へと連れて行くだろう。

第二十三章

わたしの声を聞いたすべての兄弟姉妹たちへ。あなたがたはわたしの厳格な裁きの声を聞き、非常な苦しみに耐えてきた。しかし、あなたがたは、わたしの厳しい声の後ろにはわたしの意志が隠されていることを知るべきである。わたしがあなたがたを鍛錬するのはあなたがたを救うためである。わたしの愛する子らのためにわたしがあなたがたを訓練、刈り込み、まもなく完全なものにすることをあなたがたは知るべきである。わたしの心は非常に切望しているが、あなたがたはわたしの心を理解せず、わたしの言葉に従って行動しない。今日のわたしの言葉はあなたがたに向けられ、神が愛する神であることをあなたがたに本当に認識させる。そして、あなたがたはみな神の真摯な愛を経験している。しかし、わかったふりをしている人々も少数いて、他の人々の悲しみを見れば、彼らも目に涙を浮かべるだろう。表面上は神に負い目を感じているように見える人々もいて、表面では後悔しているように見えるが、心の中では本当には神を理解しておらず、神について確信を持っていない。むしろそれは見せかけにすぎない。わたしはこのような人々をもっとも嫌う。遅かれ早かれ、このような人々はわたしの都から追い出されるだろう。わたしの考えは、熱心にわたしを欲する人々をわたしは欲するのであり、真心からわたしを求める人々だけがわたしを喜ばせることができるのだ——このような人々に対してわたしは自分の両手を差し出して援助し、彼らはどんな災難にも出会わないことを保証する。本当に神を欲する人々は進んで神の心を思いやり、わたしの意志を行うだろう。そのようにして、まもなくあなたがたは現実性に入り、わたしの言葉をあなたがたのいのちとして受け入れるはずである——これがわたしの最大の重荷である。もし諸教会と聖者たちがすべて現実性に入り、すべてがわたしと直接交流することができるならば、わたしと向かい合い、真理と義を実行できるならば、そのとき初めて、彼らはわたしの愛する子らとなり、わたしは彼らに十分満足し、あらゆる大きな祝福を与えるだろう。

第二十四章

時はますます近づいている。すべての聖徒たちよ、目を覚まさない。わたしはあなたがたに向けて声を発する。聞く者はみな目を覚まさないといけない。わたしはあなたがたがこれまで長年にわたり信じてきた神である。今日、わたしは受肉し、あなたがたの目の前に現れている。この結果、誰が本当にわたしを必要としているか、誰がわたしのために進んで犠牲を払うか、誰が本当にわたしの言葉に耳を傾けるか、誰が進んで真理を実践するかが明らかになる。わたしは全能の神なので、闇に隠されている人の秘密をすべて見ることができ、誰が本当にわたしを必要としているか、誰がわたしに反抗しているかがわかる。わたしはすべてのものを探ることができる。

わたしは今、できるだけ早くわたしの心に従う人々の集団を作りたい。つまり、わたしの重荷を思いやることのできる人々の集団である。しかし、わたしはわたしの教会を浄化し、清めるのを止めることはできない。教会はわたしの心臓なのである。わたしは、あなたがたがわたしの言葉を飲み食いするのを妨げる邪悪な人々のすべてを嫌悪する。何故かと言うと、心の底からわたしを望むことをしない人々がわづかだがいるからだ。これらの人々は欺瞞に満ちていて、真の心でわたしに近づこうとせず、邪悪で、わたしの旨の実行を妨害する。彼らは真理を実践する人々ではない。これらの人々は独善と傲慢に満ちていて、極めて野心的であり、好んで他人を見下すような態度をとり、話す言葉は心地よく聞こえるが、内心では真理を実践していない。これらの邪悪な人々はみな追い出し、すっかり一掃しなければならない。彼らは災害の中で精錬されるだろう。これらの言葉はあなたがたを戒めて気づかせ、あなたがたの足がわたしの心意通りの道から外れないようにするためである。いつも自分の霊に戻りなさい。わたしは心からわたしを愛する人々を愛するからである。あなたがたがわたしに近づくので、わたしはあなたがたを守り、邪悪な人々から遠ざける。わたしはあなたがたをわたしの家でしっかり立たせ、最後まで保護する。

第二十五章

全能の神、とこしえの父、平和の君、私たちの神は王である。全能神はオリーブ山に降り立つ。何と美しいことか。聞きなさい。私たち見張り人は、声を張り上げて共に歌う。神がシオンに戻られたからだ。私たちはこの目でエルサレムの荒廃を見る。歓喜して共に歌え、神が私たちに慰めをもたらし、エルサレムを贖ったのだから。神はすべての国々の眼前にその聖なる腕を現し、まことの神の本体が姿を現した！ 地の隅々に至るまで、あらゆるものが私たちの神の救いを見たのだ。

ああ、全能神よ！ あなたの玉座から七つの霊がすべての教会へ遣わされ、あなたの奥義をすべて露わにしています。あなたは栄光の玉座に座り、あなたの国を治め、公平と義によってしっかりと安定させ、あなたの前にすべての国々を従わせました。ああ、全能神よ！ あなたは王たちの腰帯を解き、都の門をあなたの前に大きく開いて、二度と閉じないようにされました。あなたの光が到来し、あなたの栄光が昇って輝きを放っているからです。暗闇が地を覆い、濃い闇がすべての国民の上に垂れています。おお、神よ！ しかしあなたは私たちに姿を現され、私たちをあなたの光で照らされました。あなたの栄光は私たちの上にあらわされるでしょう。すべての国はあなたの光のもとへ、王たちはあなたの輝きのもとへとやって来ます。あなたが目を上げて辺りを見回すと、息子たちがあなたの前に集まります。彼らは遠くからやって来るのです。あなたの娘たちは、腕に抱えられ運ばれてきます。おお、全能神よ！ あなたの大きい愛は私たちをとらえました。あなたの国へと続く道で、私たちの歩みを導くのはあなたであり、私たちに浸透するのはあなたの聖なる言葉なのです。

ああ、全能神よ！ 私たちは感謝し、あなたを讃美します。私たちは誠実で落ち着いたひたむきな心であなたを見上げ、証しし、崇め、そして歌います。私たちが心一つにして、共に築き上げられんことを。そしてあなたがすぐに私たちを、あなたの心に適う者、あなたに用いられる者へと変えてくださいますように。あなたの旨が妨げられることなく、全地で成し遂げられますように。

第二十六章

わたしの息子たちよ、わたしの言葉に注意を払い、わたしの声に静かに耳を傾けなさい。そうすればわたしはあなたに啓示を与える。わたしの中で静まりなさい。わたしはあなたの神、あなた方の唯一の贖い主であるのだから。あなた方はいかなる時も心を静め、わたしの中で生きなければならない。わたしはあなたの岩、あなた方の支えである。別の心を持たず、一心にわたしに拠り頼みなさい。そうすれば、わたしは必ずあなたがたに現れるだろう――わたしはあなた方の神である。ああ、疑い深いものたち。彼らは決して固く立つことができず、何も獲得しないだろう。あなたは今がどういう時であるかを知らなければならない。どんなに重要な時であるかを。それは何と重要な点であることか。役に立たない物事のために慌ただしくしてはならない。すぐにわたしに近づき、わたしと交わりなさい。そうすればわたしはあなた方にすべての奥義を明らかにするだろう。

あなたは聖霊が教えるすべての言葉に耳を傾けなければならない。道端でそれらを落としてはならない。あなたは幾度もわたしの言葉を聞いたが、それらを忘れてしまった。ああ、軽率な者たちよ。あなたは非常に多くの祝福を失った。注意深く耳を傾け、わたしの言葉に注意を払い、もっとわたしと交わり、わたしに近づきなさい。わたしはあなたが理解していないことは何であれあなたに教え、あなた方を進むべき道へ導く。今は文字や教義を説く者たちが多くいて、ほんとうにわたしの現実を持っている者たちは極僅かなので、他の人々と交わることにあまり注意を払ってはならない。彼らの交わりは人を混乱させ、麻痺させ、どのように進めば良いか分からなくする。たとえ彼らに耳を傾けていても、文字や教義についてもう少し理解するようになるだけである。あなた方は自分の歩みに注意し、自分の心を守らなければならない。そして常にわたしの前に生き、わたしと交わり、わたしに近づかなければならない。そうすれば、わたしはあなたが理解しないことをあなたに見せるだろう。あなたは自分が言うことに気をつけ、自分の心を常に注意深く見張り、わたしが歩む道を歩まなければならない。

もう長くはないが、まだ少しは時間が残っている。早くわたし以外のすべてのものを捨て、わたしに従って来なさい。わたしはあなた方をぞんざいに扱うことはない。あなた方は幾度となくわたしの行為を誤解したが、どんなにわたしがあなたがたを愛しているか知っているか。ああ、あなたがたはわたしの心をどうしても理解しない。過去にあなたがたがどんなに疑おうが、どれだけわたしに負い目があるだろうが、わたしはそれを思い出さない。それでもわたしは、あなたがたが前進し、わたしの旨に沿って行動することができるように、あなた方を選んだ。

今は遅れを許さない時である。これからあなたがたが別の意図を持つなら、わたしの裁きがあなた方の上に降りかかるだろう。あなたがたが一瞬でもわたしから離れるなら、あなたがたはロトの妻のようになるだろう。聖霊の働きのペースは今やスピードを増しており、新しい光について行くことができない者たちは危険にさらされている。見張り続けない者たちは見捨てられるだろう。あなたは自分自身を守らなければならない。あなたの周りの環境にあるすべてのものは、わたしの許しによってそこにあり、わたしがそのすべてを定めることを、あなたは知るべきである。わたしがあなたに与えた環境の中で、明確に見極め、わたしの心を満足させなさい。恐れてはならない。万軍の全能神が必ずあなたと共にいるのだ。神はあなたのしんがりとなり、神はあなたの盾である。今日、人々はあまりにも多くの観念を持っており、それ故わたしは、他の人々が軽蔑する者たちを通してのみわたしの旨を表現することができる。うぬぼれており、独善的で、

傲慢で、尊大で、野心的で、人を見下す者は恥じ入るだろう。あなた方がわたしの重荷に心から配慮を示す限り、わたしはあなたがたのためにすべてを整える。ただわたしについて来なさい。

第二十七章

宇宙と万物を統治する唯一の真の神——全能神、終わりの日のキリスト！これが聖霊の証し、疑う余地のない証拠である！聖霊はあらゆる場所で証しとなるために働いており、それを疑う者はいない。勝利を収めた王、全能神！世に勝ち、罪に勝ち、贖いを全うした！全能神は、サタンによって墮落させられたこの人々の集団を救い、自身の旨を行うためにわたしたちを完全にする。全能神は地球全体を支配し、取り戻し、サタンを底なしの穴に追いやる。全能神は世を裁いており、その手から逃れられる者はいない。全能神は王として君臨する。

全地は喜び、勝利を収めた王を讃美する——全能神！とこしえからとこしえまで！あなたは栄光と讃美に相応しい。権威と栄光が宇宙の偉大なる王にあるように！

時間の余裕がない。全能神に従い、進み続けよ。誤りに気をつけ、全能神の重荷に配慮し、全能神と心をひとつにして、全能神の経営（救いの）計画のために自分を費やせ。自分の財産を持ち続けていてはならない。時間がない。財産を保持せず、すべて捧げよ！持っていてはならない！

第二十八章

時がこれほど素早く流れ去り、聖霊の働きが躍進して、あなたにこれほど大きな祝福を得させ、宇宙の王、輝ける太陽であり神の国の王である全能神を迎えさせたことにあなたが気づくとき——そのすべては、わたしの恵みと慈悲である。これ以上、何があなたをわたしの愛から切り離せるだろうか。慎重に考えを巡らしなさい、逃げようとしてはならない。常にわたしの前で静かに待ちなさい、いつも外をさまよってはならない。あなたの心はわたしの心の近くに寄りそっていなければならない。そしてどんなことが降りかかっても、むやみに自分勝手に物事を行ってはならない。わたしの旨に注意を払い、わたしが望むことは何でも行い、わたしが望まないものは捨て去る決意を持たなければならない。感情によって行動してはならない。わたしのよう義を実践しなさい、母や父に対してさえ感傷を抱いてはならない。真理と一致しないものはすべて放棄し、自分自身を捧げ、わたしを愛する純粋な心でわたしに尽くさなければならない。ど

んな人間や事物の支配も受けてはならない。それがわたしの旨と一致する限り、わたしの言葉に従って実践しなさい。わたしの手があるあなたを支えているのだから、恐れることはない。わたしはあなたをあらゆる悪人たちから守ろう。あなたのいのちはわたしのいのちに頼って生かされているのだから、あなたは自分の心を守り、いかなる時にもわたしの中に留まらなければならない。わたしから離れるなら、あなたはすぐに枯れてしまうだろう。

今は終わりの日であることを知らねばならない。悪魔サタンは吠えたける獅子のように、食い尽くすべき人々を探し求めて歩き回っている。今やあらゆる種類の疫病が蔓延し、あらゆる種類の悪霊どもがはびこっている。唯一わたしだけが真の神であり、わたしだけがあなたの避難所である。今あなたにできるのはわたしの秘密の場所に隠れることだけであり、わたしの内でのみ災害はあなたに降りかからず、どんな災難もあなたの幕屋には近づかないだろう。もっと頻繁にわたしに近づき、隠れた場所でわたしと交わらなければならない。他の人々といい加減に交わってはならない。わたしの言葉の中にある意味を把握しなさい――わたしはあなたが交わりを持つことを許さないと言っているのではなく、あなたにはまだ識別力がないと言っているのだ。この時期、悪霊による働きが蔓延している。彼らはあらゆる種類の人々を用いて、あなたに交わりを与える。彼らの言葉はとても響きがよいが、その中には毒がある。彼らの言葉は砂糖で覆われた弾丸であり、気付かぬ間にあなたの内に毒を注入する。今日ではほとんどの人が、酔ったように不安定だということを知らねばならない。あなたが自分の問題について他の人々と交わりを持っても、彼らが語ることは規則や教義ばかりで、それはわたしと直接交わるほど良いことではない。わたしの前に来て、あなたの中にある古いものを吐き出し、心をわたしに開きなさい。そうすれば必ず、わたしの心が露わにされるだろう。あなたの心はわたしの前で勤勉でなくてはならない。怠けてはならない、頻繁にわたしに近づきなさい。それが、あなたのいのちが最も早く成長するための道なのだ。あなたはわたしの中で生きなければならない。そうすればわたしはあなたの内で生き、あなたの内に王として君臨し、すべてにおいてあなたを導く。そうすれば、あなたは神の国にあずかることができるのだ。

若いからといって、自分を過小評価してはならない。自分自身をわたしに捧げなさい。わたしは人々の外見や年齢は気に掛けない。考慮するのはただ、彼らが心からわたしを愛するかどうか、わたしの道に従い、他のすべてを無視して真理を実践するかどうかということだ。明日がどうなるか、将来がどうなるかと心配するのはやめなさい。あな

だが日々わたしに依り頼んで生きる限り、わたしは必ずあなたを導く。「自分のいのちはあまりにも小さい、自分は何も理解していない」という思いに囚われるな。それはサタンが送ってくる思いなのだ。ただ自分の心を用いて、絶えずわたしに近づき、道の終わりまでわたしの足跡を辿りなさい。わたしの非難と警告の言葉を聞いたら、すぐに目を覚まして走り出さなさい。絶え間なくわたしに近づき、群れの歩みに遅れないように、目を前に向け続けなさい。わたしの前では心と魂のすべてを尽くして、あなたの神を愛さねばならない。奉仕の道においては、もっと頻繁にわたしの言葉を検討しなさい。真理を実践するときには、弱気になってはならない。強い心を持ちなさい。男児の覚悟と決意を持ち、強靱な心を備えなさい。わたしを愛したいなら、わたしがあなたの中で成し遂げようとするすべてにおいて、わたしを満足させなければならない。わたしに従いたいなら、持っているもの、愛するものをすべて捨て去らねばならず、純真な心でわたしの前にへりくだり従わなければならない。でたらめに物事を探ったり考慮したりせず、常に聖霊の働きに遅れずついて行かねばならないのだ。

ここで、あなたに助言を与える。わたしがあなたの内に啓いたすべてのことを固く守り、必ず実践しなさい。

第二十九章

時が迫っていることがあなたには分かるだろうか。あなたは短い期間でわたしに拠り頼み、わたしの性質と相容れないすべてのものを捨て去らなくてはならない——無知、遅い反応、不明瞭な思い、情のもろさ、意志の弱さ、愚かさ、大げさな感情、困惑、識別力の欠如。これらをできる限り早く捨て去らなければならない。わたしは全能神である。あなたが進んでわたしと協力する限り、わたしはあなたの病むところを全て癒やす。わたしは人の心の奥深くを見る神であり、あなたの全ての病と欠点を知っている。このようなものがあなたのいのちの成長を妨げているのであり、すぐに捨て去らなければならない。さもないと、わたしの旨はあなたに成就されない。わたしの光によって照らし出されたものがあれば、わたしに信頼して捨て去り、常にわたしによって生き、わたしに近づき、あなたの行いがわたしの似姿を現すようにしなくてはならない。自分が理解していないことについては、もっと頻繁にわたしと交わりなさい。そうすれば、わたしはあなたを導き、あなたが前に進めるようにする。確信がないときには、むやみに行動せず、わたしの時を待ちなさい。安定した性質を持ち、感情が熱くなったり冷めたりすることのないようにしなさい。いつもわたしを敬う心を持っていなさい。わたしの前

であろうが背後であろうが、あなたの行いがいつもわたしの旨に沿うようにしなさい。わたしのために誰かを容赦してはならない——たとえそれがあなたの夫や家族であってもだ。彼らがどれほど善人であっても、それは受け入れられない。あなたは真理に基づいて行動しなければならない。わたしを愛するなら、わたしはあなたに大いなる祝福を与えよう。抵抗する者に対しては、わたしは容赦しない。わたしが愛する者を愛し、わたしが憎む者を憎みなさい。どんな人や物事にも留意してはならない。霊の目でわたしに用いられる人をはっきりと見て、霊的な人たちにもっと接しなさい。無知であってはならず、判別しなければならない。麦は育つと必ず麦になり、毒麦が麦になることは決してない。だから異なる種類の人々を見分けなければならない。あなたの語る言葉には特に注意し、わたしの心に適った道から離れないようにしなければならない。これらの言葉を注意深く思いめぐらさなければならない。わたしの心を満足させるために、あなたはできるだけ早く反抗心を捨て去り、わたしが用いるに相応しい者となりなさい。

第三十章

兄弟たちよ、目覚めなさい！ 姉妹たちよ、目覚めなさい！ わたしの日は遅れることはない。時は命であり、時を取り戻すことは命を救うことだ。その時はもう遠くない。大学の入学試験に落ちたなら、勉強して何度でも受け直すことができる。だがわたしの日には、これ以上の遅れは許されない。覚えておきなさい。もう一度言う、覚えておきなさい。わたしはこうした善き言葉で、あなたがたに強く求める。あなたがたの目の前でこの世の終わりが始まり、大きな災害が急速に迫っている。あなたがたにとって、大切なのはいのちか、それとも寝ること、食べること、飲むこと、着ることなのか。そうしたものを比較し吟味する時が来たのだ。これ以上疑っていてはならず、確信することを避けてはならない。

何と惨めなことか。何と哀れなことか。どこまで盲目なのか。どこまで人類は非情なのか。わたしの言葉に耳を貸さないとは。わたしは無駄に話しかけているのか。なぜそれほどまでに不注意なのか。一体どういうことなのか。本当にこれまで、一度もそのことを考えたことがないのか。わたしは誰のためにこうしたことを語っているのか。わたしを信じなさい。わたしはあなたがたの救い主である。わたしはあなたがたの全能者である。見ていなさい。しっかり見ていなさい。失われた時は二度と戻らない、そのことを覚えておきなさい。後悔を治す薬など世界中のどこにもない。あなたがたにはどう伝えればいいのか。わたしの言葉は、慎重に繰り返し考えるには値しないのか。あなたが

たはわたしの言葉にあまりにも不注意で、自分のいのちに対して無責任すぎる。どうやってそれに我慢しろというのか。我慢などできるだろうか。

なぜこれまでずっと、あなたがたの間では正しい教会生活が生じられなかったのか。それはあなたがたが信仰に欠け、代価を払う覚悟がなく、自分を捧げる意志がなく、わたしの前で身を費やしたがないからだ。子らよ、目を覚ましなさい！ 子らよ、わたしを信じなさい！ 愛するものたちよ、なぜわたしの心の中にあるものを考慮してくれないのか。

第三十一章

わたしは心からわたしを欲するすべての者たちを愛する。あなたがたがわたしを愛することに集中すれば、わたしは必ずあなたがたを大いに祝福しよう。あなたがたはわたしの意図を理解しているのか。わたしの家では、高い地位、低い地位の区別はない。誰もがわたしの子どもであり、わたしはあなたがたの父であり、あなたがたの神である。わたしは至高の者であり、唯一である。わたしは宇宙のあらゆるものを支配している。

あなたはわたしの家で「へりくだって目立たずにわたしに仕える」べきである。このフレーズをあなたのモットーとすべきである。木の上の葉ではなく、木の根となり、いのちの中に深く根ざしなさい。いのちの真の経験の中に入り、わたしの言葉によって生き、あらゆることにおいてもっとわたしを探し求め、わたしに近づき、わたしと交わりなさい。何であれ外側のことには注意を払ってはならない。また、どんな人間や出来事や物にも支配されてはならない。ただ、わたしが何であるかについて、霊的な人々と交わりなさい。わたしの意図を理解し、わたしのいのちをあなたがたの間に流れさせ、わたしの言葉を生き、わたしの要求に従いなさい。

わたしがあなたに託したことに、あなたの全力を注ぎなさい。わたしの心を満足させるためにあなたのすべての能力を発揮しなさい。わたしはあなたの力であり、わたしはあなたの喜びである…わたしはあなたのすべてである。ただわたしを追い求めなさい。わたしはあなたの心の本当の願いを知っており、あなたがわたしのために心から尽くしていることを知っているが、あなたは、わたしの家でどのように自らをわたしに捧げ、どのようにして最後までわたしについて来ればよいのか知るべきだ。

教会はわたしの心であり、わたしは、わたしの教会を建て上げるための切望に燃えている。あなたは、少しも惜しむことなく自らを捧げることによって、わたしに尽くし、

わたしの心が満足するように、わたしの意図への配慮を示すべきである。

第三十二章

光とは何か。過去にあなたがたは実際、聖霊の働きの変容を光とみなしていた。真の光は常に存在する。それはあなたがたが、わたしに近づいてわたしと交わることを通して、神そのものを得ることを含み、神の言葉への明察を持ち神の言葉の中にある神の旨を把握することを含む——つまり、飲み食いする中で、あなたがたは神の言葉の靈を感じ、自分の中に神の言葉を受け取り、経験を通じて神が何であることを把握し、神との交わりの中で神の照らしを受ける。また、黙考と熟思の中で、常に啓示を受け、神の言葉への新しい明察を得るのだ。もしあなたが神の言葉を把握し、新たなる光を感じるなら、あなたはあなたの奉仕の中に力を得ないだろうか。あなたがたは奉仕する中で実によく思い煩う。それは、あなたがたが現実に触れていないからである。あなたがたには本当の経験や明察がないからである。あなたにほんとうの明察があったなら、あなたはどのように奉仕すればよいか分かるはずではないか。あなたに何かが降りかかるときは、あなたはそれを懸命に体験しなければならない。もしあなたが、容易で快適な環境でも神の顔の光の中に生きることができるなら、あなたは毎日神の顔を見るであろう。あなたがもし神の顔を見て、神と交わったならば、あなたは光を持つのではないか。あなたがたは現実の中に入らないで、いつも外側で探し求めている。その結果、あなたがたは何も見つけず、いのちにおけるあなたの進歩は遅れる。

外面を重視してはならない。心の中でひたすら神に近づき、十分深く交わり、神の旨を把握しなさい。そうすれば、あなたがたは自分の奉仕において道を見出すのではないだろうか。あなたがたは入念に注意を払って従う必要がある。すべてのことをただわたしの言葉に従って行い、わたしが指し示す道に入るならば、あなたがたは道を見出すのではないか。あなたが現実の中に入る道を見出したら、神に仕える道も見つかるだろう。それは簡単である。神の前にもっと出なさい。神の言葉をもっと熟考しなさい。そうすれば、あなたに欠けているものを得るだろう。あなたはまた、新しい明察、新しい啓示を得、そして光を得るであろう。

第三十三章

わたしの国には、正直で、偽善的でなく、偽りのない人々が必要だ。誠実で正直な人々は、この世では好かれないのではないか。わたしはまったくその逆だ。正直な人たち

がわたしのところに来るのは受け入れられる。わたしはそのような人を喜び、そのような人を必要としてもいる。それこそがわたしの義である。一部の人々は無知で、聖霊の働きを感じることができず、わたしの旨を把握することができない。彼らは自分の家族やその周囲が存在している環境をはっきり見ることができず、ものごとを盲目的に行い、恵みを得る多くの機会を失っている。幾度となく自分の行動を後悔するが、問題にぶつかるとやはりそれをはっきりと見ることができない。時には神に抛り頼んで、なんとか勝利を得ることができるが、後に同じような問題に遭遇すると古い病気が再発し、わたしの旨を把握することができないのだ。しかし、わたしはそうしたことに目を留めず、あなたがたの過ちを思い出さない。むしろ、あなたがたをこの淫らな地から救い、そのいのちを新たにさせたいと思っている。わたしはあなたがたを何度も赦してきた。しかし、今は最も重要な段階である。もはやあなたがたは混乱している場合ではなく、これ以上そのような行きつ戻りつのやり方で進むことはできない。あなたがたはいつになったら目的地に到達できるのか。最大限の努力をして、止まることなく決勝線に向かって走らねばならないのだ。この最も重大な時に、気を緩めることなく勇敢に前進すれば、豊かな祝宴が目の前にある。急いで礼服と義の衣をまとい、キリストの婚礼の席に着きなさい。家族の至福を永久に楽しみなさい。もはや以前のように落ち込んだり、悲しんだり、ため息をついたりすることはない。当時のものはすべて煙のように消え去り、キリストの復活したいのちだけが、あなたの中で力を持つことになる。あなたの中には浄化によって清められた神殿が存在し、あなたが得た復活のいのちは永遠にあなたの中に住み続けるだろう。

第三十四章

全能神はすべての権力を握る方、すべてを成し遂げる方であり、完全なる真の神である。七つの星を携えているだけでなく、七つの霊と七つの目を持ち、七つの封印を解いて巻物を広げる。そしてさらに、七つの疫病と七つの鉢を管理し、七つの雷を露わにする。神ははるか昔にも、七つのラッパを鳴らしたのだ。彼によって造られ完全にされたすべてのものは、彼を讃美し、彼に栄光を帰し、その玉座を高くかけねばならない。ああ、全能神よ！ あなたはすべてであり、すべてを成し遂げられた。あなたにあってはすべてが完全で明るく、解放されて自由であり、強く力に満ちている。隠されたものや覆われたものは何一つなく、あなたにあってはすべての奥義が露わにされている。さらにあなたは大勢の敵を裁き、威厳を露わにし、燃え盛る炎を現し、あなたの怒りを示される。そしてさらに、空前の永遠に続く無限の栄光を表されるのだ。すべての民は目

を覚まし、歓声を上げて、ためらうことなく歌い、この全能なる方、すべてが真実で生命に溢れ、豊かで栄光に満ちた、永久から永久へと存在する真の神を讃えねばならない。神の玉座は常に高められ、その聖なる名は讃えられ賛美されなくてはならない。これがわたしの、すなわち神の永遠の旨であり、神があらわしてわたしたちに授ける限りない祝福なのだ。わたしたちの中にそれを受け継がない者がいるだろうか。神の祝福を受け継ぐには、神の聖なる名を讃え、その玉座を囲んで崇拜しなければならない。他の動機や意図を持って神の前に出るものは皆、彼の燃え盛る炎によって溶け去るだろう。今日は彼の敵が裁かれる日であり、また彼らが滅びる日でもある。さらにこれは、全能神であるわたしが露わにされ、栄光と誉れを得る日でもあるのだ。ああ、すべての民よ。すぐに立ち上がって誉め讃え、全能神を歓迎しなさい。神はとこしえまでわたしたちに慈しみを与え、救いをもたらし、祝福を受け、彼の子らを完全にして神の国を成就させる。これが神の素晴らしき業だ。これが神の永遠の予定と采配であり、神自身がやって来てわたしたちを救い、わたしたちを完全にし、栄光の中へと連れて行くのだ。

立ち上がって証しをしない者は皆、盲人の祖先であり、無知の王である。そのような者たちは永遠に無知であり、永久に愚か者で、盲目的な永遠の死者となる。それゆえわたしたちの霊は目覚めなくてはならないのだ。すべての民が立ち上がらなくてはならない。栄光の王、憐れみの父、贖いの子、豊かさ溢れる七つの霊、そして威厳に満ちた燃え盛る炎と義の裁きをもたらす全能神、完全に満ち足り豊かさに溢れた全能で完全なる全能神を、歓声を上げて讃美し、終わることなく誉め讃えよ。全能神の玉座はとこしえまで高められる。すべての民はこれが神の知恵であることを目にしなければならない。これは神の素晴らしき救いへの方法であり、栄光ある旨の成就なのだ。立ち上がって証しをしないなら、その時が去ってしまえばもう後戻りはできない。祝福を受けるか不幸に見舞われるかは、旅路のこの段階によって決定されようとしている。それはわたしたちが今何をし、何を考え、何を生きるかによって決まるのだ。あなたがたはどう行動すべきか。とこしえまでも神を証しし、讃えなさい。終わりの日のキリストである全能神、永遠なる唯一の真の神を誉め讃えなさい。

今後は、神に証ししない者——この唯一の真の神を証ししない者、さらに神への疑いを抱く者——は、みな病んでおり、死んでおり、神に逆らう者だということをはっきりと知らねばならない。神の言葉はすでに、太古の昔から証明されているのだ。「わたしとともに集めない者は散らす者であり、わたしと共にいない者はわたしに敵対する者である」。これは石に刻まれた不変の真理なのだ。神を証ししない者はサタンの手下であ

る。そのような者たちは神の子らを混乱させ、騙し、神の経営を妨害するために来たのであり、剣によって打たれねばならない。彼らに善意を示す者は誰であれ、自らの破滅を招くことになる。あなたがたは神の霊が語ることを聞き、信じ、神の霊の道を歩き、神の霊の言葉を生きなければならない。そしてさらに、全能なる神の玉座をとこしえまでも高めなければならないのだ。

全能神は七つの霊の神である。彼はまた、七つの目と七つの星を持っている。神は七つの封印を解き、巻物全体が広げられた。そして七つのラッパが鳴らされ、七つの鉢と七つの疫病が彼の掌中にあり、彼の思いのままに解き放たれる。ああ、長く封印されてきた七つの雷よ。その封印を解く時が来た！ 七つの雷を放つ方が、すでにわたしたちの目の前に現れたのだ！

全能神よ！ あなたにあっては、すべては解放されており自由で、困難なことはなく、すべてが円滑に流れる。あなたを邪魔したり妨げたりするものはなく、すべてがあなたに従う。従わないものはすべて死ぬのだ！

全能神、七つの目を持つ神よ！ すべては完全に透き通っており、すべてが明るく、何も隠されたものはない。すべてが暴かれ、露わにされている。全能神においてはすべてが一点の曇りもなく明瞭であり、それは神自身だけでなくその子らも同様だ。彼とその子らの前では、人も物事も何一つとして隠れていることはできないのだ。

全能神の七つの星は明るく輝いている。教会は彼によって完全にされており、彼は自身の教会の使者を立て、すべての教会が彼の施しの中にある。彼は七つの封印をすべて解き、自らの経営（救いの）計画とその旨を全うする。巻物は彼の経営（救いの）計画に関する神秘的な霊の言葉であり、神はそれを開いて露わにしたのだ。

すべての民は神の七つのラッパの大音響に耳を傾けなければならない。彼にあってはすべてが明らかに示され、二度と隠されることはなく、悲しみももはや存在しない。すべてが露わにされ、すべてが勝利に満ちているのだ！

全能神の七つのラッパは、公然と栄光に満ちた勝利のラッパである。そしてまた、彼の敵を裁くラッパでもある。勝利のただ中で、彼の角が掲げられている。彼は宇宙全体を支配するのだ！

彼はすでに七つの疫病の鉢を用意しており、それを敵めがけて激しく降り注ぐ。敵は神の燃え盛る怒りの炎で焼き尽くされることになる。全能神は自らの力強い権威を示し、敵はみな滅びる。最後の七つの雷は、もはや全能神の前に封印されてはおらず、すべ

て開かれている。すべて開かれているのだ。彼は七つの雷で敵を打ち殺し、地を安定させて、その地を自らに仕えさせる。二度と地が荒廃することがないように。

義なる全能神よ！ わたしたちはあなたを永遠に賞賛します。あなたは終わりのない賛美に値し、止むことのない歓呼と賞賛に値する方！ あなたの七つの雷はあなたの裁きに用いられるだけでなく、あなたの栄光と権威のために用いられ、すべてを完成するためにあるのです。

すべての民は玉座の前で祝い、終わりの日のキリストである全能神を褒めそやし賛美する。その声は雷鳴のように全宇宙を揺り動かす。実にすべてのものが彼ゆえに存在し、彼ゆえに生まれ出る。誰が彼にすべての栄光、栄誉、権威、知恵、聖さ、勝利、そして啓示を帰そうとしないだろうか。これこそが彼の旨の成就であり、彼の経営における建設の最終的完成なのだ！

第三十五章

七つの雷が玉座から発せられ、宇宙を揺るがし、天と地をくつがえし、その響きは空を貫く。轟音は耳をつんざき、人々は逃げることも隠れることもできない。稲妻と雷鳴が発せられると、たちまち天地は変化し、人々は死の淵に立たされる。すると電光石火の速さで、宇宙全体が天から降り注ぐ激しい暴風雨に包まれる。それは地の隅々にまで流れ込み、頭の前からつま先まで洗い流し、染みひとつ残さない。隠れられるものなど一つもなく、逃れられる者は一人もいない。雷鳴の轟きは輝く稲妻のように不気味な閃光を放ち、人々を恐怖に震え上がらせる。鋭い諸刃の剣は反逆の子らを打ち倒し、敵の勢力は大災害に直面して隠れる場所もない。彼らは荒れ狂う風雨の中で呆然とし、打撃を受けてよろめきつつ、すぐさま息絶えて流れる水に落ち、押し流されていく。そこには死しかなく、生き残る術はない。七つの雷がわたしから放たれ、わたしの意図を伝える。その意図とはエジプトの長子を打つこと、邪悪な者を罰してわたしの教会を清めること、そしてその結果みなが互いに寄り添い合い、裏表なく行動し、わたしと心をつなぐこと、そして全宇宙のすべての教会が一つになることである。これがわたしの目的なのだ。

雷鳴が轟き、それに続いて泣き叫ぶ声が波のように響き渡る。一部の者たちは眠りから覚め、ひどく驚いて自分の心の奥を探り、急いで玉座の前に戻る。彼らは見境のない策略や非道な行いをやめる。そのような者たちが目覚めるのにまだ遅くはない。わたしは玉座から見ている。そして人々の心の奥深くを覗く。わたしは心から熱心にわたしを

求める者を救い、そのような者たちに憐れみをかける。わたしが救って永遠へと招き入れるのは、心の中で他の何にも増してわたしを愛する者たち、わたしの旨を理解する者たち、そして道の終わりまでわたしに従う者たちである。わたしの手が彼らを安全に守るので、彼らはこの光景に直面することはない、危害を受けることもない。中にはこの稲妻が走る光景を見て、言葉にできない悲嘆を感じ、この上なく後悔する者もいる。そのようなふるまいに執着するなら、彼らはもう手遅れだ。ああ、森羅万象よ！ すべてが終わりを迎える。これもまた、わたしの救いの一つの手段なのだ。わたしはわたしを愛する者を救い、邪悪な者を打ち倒し、地上にわたしの国を揺るぎなく安定させ、すべての国と人々、宇宙と地の隅々までのあらゆるものに、わたしが威厳であり、燃え盛る炎であり、すべての人の心の奥を探る神であることを知らしめる。これ以降、偉大な白い玉座の裁きが大衆に公に露わにされ、裁きが始まったことがすべての人に告げられる。語る言葉が心からのものでない者、疑いを抱いて確信を持とうとしない者、ただ無為に時間をつぶし、わたしの願いを知りながら実践しようとししない者――そうした者たちは間違いなく、みな裁かれなければならない。あなたがたは自分の意図や動機をよく吟味し、自分にふさわしい場所に立ち、わたしが言うことを本気で実践し、いのちの経験に重点を置かなければならず、うわべだけの熱意をもって行動してはならない。自分のいのちが成長し、成熟し、安定し、経験豊かなものとなるようにしなさい。そうして初めて、あなたがたはわたしの心に適うことができる。

サタンの手下や、わたしが建て上げるものを混乱させ破壊する悪霊どもには、物事を都合よく利用するどんな機会も与えてはならない。彼らは厳しく制限し、抑制しなくてはならない。彼らは鋭い剣をもって取り扱うしかないのだ。最も悪い者たちは、将来問題とならないように、ただちに根絶されなくてはならない。そうすれば教会は完全にされ、欠陥は一切なくなり、健全で生命力と活力に満ちたものとなるだろう。稲妻の閃光に続いて、雷鳴が轟く。無頓着でいてはならず、諦めずに全力で追いつこうとしなければならない。そうすれば必ず、わたしがこの手で何をするのか、何を得ようとしているのか、何を捨てようとしているのか、何を完全にしようとしているのか、何を根絶しようとしているのか、何を打ち倒そうとしているのかを見ることができるようだろう。そのすべてがあなたがたの目の前で展開され、あなたがたはわたしの全能性をはっきりと見ることができるようだろう。

玉座から宇宙と地の隅々に至るまで、七つの雷が響き渡る。大勢の人々が救われ、わたしの玉座の前にひれ伏すだろう。このいのちの光に続いて、人々は生き残る術を求め

、わたしの元へ来るしかなくなり、跪いて礼拝し、その口で全能なる真の神の名を呼び、哀願を声に出す。だがわたしに逆らう者たち、心を頑なにする者たちは、その耳に雷鳴が轟く。彼らは間違いなく消滅しなければならない。これこそが彼らを待ち受ける結末である。勝利を収めたわたしの愛する子らはシオンに留まり、すべての人が彼らの獲得するものを見る。そして大いなる栄光が、あなたがたの前に現れるだろう。まことにそれは素晴らしい祝福であり、語るのも難しい甘美さなのだ。

七つの雷鳴の轟きは、わたしを愛する者たち、わたしを心から求める者たちへの救いである。わたしに属する者たちと、わたしが予め定めて選んだ者たちは、みなわたしの名の下に集うことができる。彼らはわたしの声、すなわち神が呼びかける声を聞くことができる。地の果てにいる者たちに、わたしが義であり、誠実であり、慈愛であり、憐れみであり、威厳であり、燃え盛る炎であり、そして究極的に容赦ない裁きであることを知らしめなさい。

世のすべての人々に、わたしが実在する完全な神自身であることを知らせなさい。すべての人々は心から納得し、もう二度とわたしに抵抗しようとはせず、再びわたしを裁いたり中傷したりしようともしない。そのようなことをする者があれば、彼らはたちまち呪われ、災いが彼らに降りかかる。彼らは自らの破滅を招いたことで、ただ泣いて齒ざしりするしかないのだ。

すべての人々に知らせなさい。全宇宙と地の隅々に、すべての家庭に、そしてすべての人に知らしめるのだ、全能神こそが唯一の真の神であることを。すべての人が代わることがある膝をかがめてわたしを礼拝する。言葉を話し始めたばかりの幼子さえも、「全能神！」と呼び求める。権力を振りかざす官僚たちも、真の神の現れを目の当たりにし、そして彼らもまたひれ伏して礼拝し、憐れみと赦しを請うだろう。しかしそれはまさに手遅れである。彼らの崩壊の時が来たからだ。彼らはただ終わりを迎え、宣告を受けて計り知れぬ奈落の底へ落ちるしかない。わたしは時代そのものを終わらせ、わたしの国をいっそう強固にする。すべての国とすべての人々は、わたしの前に永遠に服従するのだ。

第三十六章

全能なる真の神、玉座の王たる神は、全宇宙を支配し、すべての国と民に向き合っており、天下のあらゆるものは神の栄光を受けて光り輝く。宇宙、そして地の隅々に暮らすすべての生物が見るだろう。山々、川、湖、陸地、海、そしてすべての生き物は、真

の神の顔貌が放つ光の中で自らの幕を開けた。彼らはみな夢から覚めるように、地中から現われる新芽のように生き返るのだ！

ああ！ 唯一の真の神が世に現われ出る。あえて神に抵抗する者がいるだろうか。誰もが恐怖に震える。誰もが完全に確信を抱き、繰り返し赦しを乞う。すべての者が神の前にひざまずき、誰もが口々に神を崇める。大陸も海も、山も、川も、あらゆるものがいつまでも神を讃美する。暖かなそよ風と共に春が訪れ、繊細な春の雨をもたらす。すべての人と同様に、小川は悲しみと喜びを織り交ぜて流れ、負い目と自責の念に涙を流す。川も、湖も、打ち寄せる波やうねりも、すべてが真の神の聖なる名を讃えて歌っている。讃美の音が鮮やかに響き渡る。かつてサタンに墮落させられた古いものは一つ残らず新たにされ、変化し、真新しい領域に入ることになる……

これは聖なるラッパであり、すでに鳴り始めた。耳を傾けなさい。その甘美な音色は玉座から発せられる声であり、すべての国と民に、時が来たこと、終末が来たことを告げている。わたしの経営（救いの）計画は終わった。わたしの国は公然と地上に現われ出た。この世の国は神であるわたしの国となった。わたしの七つのラッパが玉座から鳴り響くと、そうした驚くべきことが起こる。世界の隅々に暮らす人たちが、雪崩のような勢いと落雷のような力でもって、あらゆる方向から押し寄せる。船で海を渡ってくる者、飛行機で飛んでくる者、あらゆる形や大きさの車でやって来る者もいれば、馬を駆ってくる者もいる。目を凝らして見なさい。注意深く耳を傾けなさい。あらゆる色の馬に乗った人々は、奮い立って力強く堂々と、あたかも出陣するかのごとく、死をも恐れていない。馬のいななきと、真の神を叫び求める人々の喧噪の中で、数多くの男女と子供がたちまち馬の蹄に踏みつぶされる。死ぬ者、息を引き取ろうとする者、押しつぶされる者たちがヒステリックに叫び、痛みにもうめいても、誰も手を貸そうとしない。反逆の子らよ。これがあなたがたの最後の結末ではないのか。

わたしの声を聞いて、あらゆる国や土地から集まってくるわたしの民を、わたしは喜びと共に見渡す。すべての人は真の神の名を口ずさみながら讃美し、喜びにとめどもなく跳ね回る。彼らは世界に向かって証しをし、真の神を証しするその声は無数の川の轟音のようだ。すべての人がわたしの国に押し寄せて来るのだ。

わたしの七つのラッパは鳴り響き、まどろむ人々を目覚めさせる。早く起きなさい、まだ間に合う。自分のいのちに目を向けなさい。目を開けて、今何時か見てみなさい。何を探し求めるべきか。何を考えるべきか。そして何にこだわるべきか。わたしのいのちを得ることと、自分が愛しこだわるものをすべて得ることの、価値の違いを考えたこ

とがないのか。わがままをやめ、遊び回るのもやめなさい。この機会を逃してはならない。この時は二度とやって来ない。今すぐ立ち上がり、自分の霊を鍛える努力をきなさい。さまざまな手段でサタンのあらゆる企みやごまかしを見抜いて阻止し、サタンに打ち勝つことで、いのちの経験を深め、わたしの性質を生き、いのちを熟成して円熟させ、いつもわたしの足跡をたどれるようになりなさい。落胆せず、気弱にならず、まっすぐに道の果てまで一步一步絶えず前進しなさい。

七つのラッパが再び鳴り響くとき、それは裁きへの呼び出しである。それは反逆の子らに対する裁きであり、すべての国と民に対する裁きであり、各国は神の前にひれ伏すことになる。神の輝かしい顔貌は、必ずやすべての国と民の前に示されるだろう。誰もが完全なる確信を抱き、真の神に向かっていつまでも叫ぶことだろう。全能の神の栄光はますます輝き、わたしの子らはその栄光を分かち合い、王の尊厳をわたしと共有し、すべての国と民を裁き、悪人を罰し、わたしに属する人々を救って憐れみをかけ、神の国に堅固さと安定をもたらすだろう。七つのラッパの音を通じ、大勢の人が救われ、わたしの前に戻ってひざまずき、絶えず褒め称えつつ崇拜するだろう！

七つのラッパがもう一度鳴り響くとき、それは一つの時代の最終章であり、悪魔サタンに対する勝利を示すラッパの大音響が、地上の神の国において開かれた生活が始まったことを告げる礼砲となる。その気高い音は玉座の周りで反響し、天地を揺るがすこのラッパの大音響は、わたしの経営（救いの）計画の勝利を象徴すると同時にサタンの裁きとなり、この古い世界に完全な死と底なしの穴への逆戻りを宣告する。このラッパの大音響が意味するものは、恵みの門が閉まりつつあること、そして地上で神の国の暮らしが始まることであり、それは正しく正当なことだ。神を愛する人々を神は救う。彼らが神の国に戻ると、地上の人々は飢饉と疫病に直面し、神の七つの鉢と七つの疫病が次々に効力を生じることになる。天と地は消え去るが、わたしの言葉は決して消え去らない！

第三十七章

あなたがたはわたしの面前にあってまことに信仰を欠いており、しばしば自分を頼って行動している。「あなたがたはわたしがいなければ何もできない」。しかし墮落した人々であるあなたがたは、いつもわたしの言葉をただ聞き流している。今日の生活は言葉の生活である。言葉がなければいのちも経験もなく、そして言うまでもなく信仰もない。信仰は言葉の中にある。神の言葉にもっと自分の身を捧げて初めて、何でも得られ

るようになる。自分が成長できないのではと心配してはならない。いのちは実際に成長する。そしてそれは心配によってではないのだ。

あなたがたはいつも不安になりがちで、わたしの指示に耳を傾けない。あなたがたはいつもわたしの歩みを追い越したがつている。それはどういうことなのか。それは人間の野心だ。神から生じるものと自分自身から生じるものは、はっきり区別しなければならない。わたしの面前では、熱情は決して褒められない。あなたがたには最後まで変わらぬ忠実さでわたしに従えるようになってほしい。あなたがたはそのように行動することが神への献身だと信じている。盲目な人々よ。なぜもっとわたしの面前に来て探し求めず、勝手にぶらついてばかりいるのか。はっきりと見なければいけない。いま働いているのは決して人間ではなく、万物の支配者にして唯一の真の神、すなわち全能者なのだ。あなたがたは怠ることなく、自分が持つすべてのものを常にしっかりと掴んでいなければならない。わたしの日が近いからだ。本当に、この時になってもまだ目覚めないのか。まだはっきりと見ていないのか。あなたがたはいまだにこの世に組しており、それと手を切ることができない。なぜなのか。本当にわたしを愛しているのか。わたしに見えるように心をさらけ出すことができるか。自分の全存在をわたしに捧げることができるか。

わたしの言葉をもっとよく考え、いつもはっきりした理解を持ち続けなさい。困惑したり、中途半端な気持ちであったりしてはならない。わたしの面前でもっと多くの時を過ごし、わたしの純粋な言葉をもっと受け取りなさい。そしてわたしの意図を誤解してはならない。これ以上何を言ってほしいのか。人の心は頑なで、あまりにも多くの観念を抱えている。いつもなんとかやっていければ十分だと考え、自分のいのちを冗談の種にしている。愚かな子供たちよ。もう時は遅く、楽しみを求めている時ではない。目を開けて、今がどんな時か見てみなさい。太陽が地平線を横切って大地を照らそうとしている。目をしっかりと見開いて見なさい、注意を怠ってはならない。

これは重大な問題なのに、あなたがたはそれをこのように軽視し、このように扱っている。わたしは不安だが、わたしの心を思いやり、わたしの良き忠告を聞いて助言に耳を傾けられる者はほとんどいない。使命は困難なものだが、わたしのためにその重荷を分かち合える者が、あなたがたの中にはほとんどいない。あなたがたはいまだにそのような態度をとっている。過去に比べればいくらか進歩を遂げはしたが、ずっとその段階にとどまっていることはできないのだ。わたしの歩みは急速に前進しているが、あなたがたの速度は変わらないままだ。どうやって今日の光と歩調を合わせ、わたしの歩みに

ついて来れるのか。もうためらっていてはならない。何度も強調してきたが、わたしの日はもはや先延ばしにされないのだ。

今日の光は今日に属するものであり、昨日の光と比べることはできず、明日の光とも比較できない。新たな啓示と新たな光は一日ごとにより強く、より明るくなる。もうぼんやりしてはならない。愚かであってもならない。古いやり方にしがみつくのをやめ、わたしの時を遅らせるのも無駄にするのもやめなさい。

注意しなさい。注意しなさい。もっとわたしに祈り、わたしの面前でもっと多くの時を過ごしなさい。そうすれば必ずや、あなたはすべてを得ることになる。そうすることで、間違いなくすべてを得られるのだと信じなさい。

第三十八章

それは、あなたの信仰が立派だとか、純粹だとかいうことではなく、むしろ、わたしの働きが不思議だということである。全てはわたしの憐れみに拠る。あなたには利己的とか傲慢といった堕落した性質がほんの少しもあってはならない。さもないと、わたしはあなたに働きを行わない。人間が倒れてしまうか、それとも堅く立つかは、彼ら自身によるのではなく、わたしの故であることを、明確に理解しなくてはならない。今日、もしあなたがこの段階をはっきりと理解しないのならば、あなたは間違いなく神の国に入れないであろう。今日行われていることが神の奇しい業であることを明確に理解しなければならない。それは人間とは無関係である。人間の行いが何になるであろうか。身勝手さ、傲慢、誇らしさを見せない時は、神の経営を邪魔し、神の計画を壊す。堕落した人間たちよ！今日、わたしにより頼まなければならない。もしそうしないのならば、今日あなたに言う。あなたは何一つ達成しないと。全ては虚しく、あなたの試みには価値がないであろう。

もたついたり、ためらったりしてはならない。今日わたしを愛する者たちの上には誰であれ、わたしの不思議な働きが行われるであろう。わたしは自らを謙虚にしない者には用がない。今日、わたしは全く謙虚になる者たちだけを用いる。心からわたしを愛し、他の者たちからは見下され、わたしに完全に心を開くことができる者たち、わたしはあなたに対して、すべてを明かそう。わたしは、あなたにわたしの意図を理解させる。そうすれば、あなたはいかなる時も、わたしの前でわたしの祝福を受けるようになる。今日わたしのために自らを費やし、自らを捧げ、わたしの為に重荷を負う者たちを、わたしは決して不公平に扱うことをせず、そのことによって、わたしの義が明らかにされ

る。わたしに関して不平を言ってはならない。わたしの恵みはあなたがたに十分である。その比類なき甘美さを味わえるように、ここへ来てそれを受け取ればよい。それはあなたの中に、わたしへの愛を生じさせるだけでなく、また、その愛を深めるだろう。

わたしの働きは段階を追って実行される。それは絶対に不注意なやり方でなされるものでも、混乱したものでもない。わたしに従うためには、あなたがたはそのように物事を行わなければならない。わたしの振る舞いを見て、わたしから学びなさい。そのようにして、わたしの足跡をたどるならば、あなたがたは神の国の現れの中に招き入れられるであろう。声を一つに合わせて歓呼しなさい、我が子らよ！あなたがた一団の人々の上に、神の働きが成し遂げられる。あなたがたは祝福されていると思わないか。

そのことは実に計り知れない。あなたがたがわたしの奇しい働きを目にすることができるよう、わたしは今日あなたがたをここへ連れてきたのだ。

第三十九章

目を開いて見回してみなさい。わたしの偉大な力をどこにでも見ることができるだろう。どこにいてもわたしのことを確信できるだろう。宇宙と広大な大空が、わたしの大いなる力を拡大している。わたしが語った言葉は、天候の温暖化について、気候変動について、人々の異常と社会的動態の無秩序について、そして人々の心の欺瞞について、すべて現実となった。太陽は白くなり、月は赤くなり、すべてが混乱している。あなたがたにはまだこうしたことが見えないのか。

ここでは神の大いなる力が露わにされている。疑いなく彼こそが、人々が長年追い求めてきた唯一の真の神——全能者なのだ。誰が言葉を発するだけで、物事を生じさせることができるだろうか。それはわたしたちの全能神だけだ。彼が語るやいなや、真実が現れる。どうして彼が真の神だと言わずにいられるだろうか。

あなたがたがみなわたしに協力したいと思っていることは、心の奥でよく知っている。わたしの選んだ者たち、わたしの愛する兄弟姉妹たちは、みなそのような志を持っているはずだが、ただどうしても入りや実際の実践を行うことができず、現実の出来事に遭遇すると冷静に落ち着いていられなくなるのだ。あなたがたは神の意図を一切尊重せず、自分の個人的な利益を優先して、待つことなく勝手に行動してしまう。あなたがたに言うておくが、それでは決してわたしの意図は満たされない。子よ、ただ心を完全にわたしに捧げなさい。はっきりと知りなさい、わたしはあなたのお金も持ち物もいらな

いし、あなたが熱狂的に、不正直に、または狭量にわたしの前に来て奉仕することも望んでいない。問題が起こったら、静かにして純粋な心を持ち、待ち望み、求めなさい。そうすれば答えを与えよう。疑ってはならない。なぜわたしの言葉を決して真実だと信じないのか。なぜわたしの言葉が信じられないのか。あなたはこれほどまでに頑固であり、この期に及んでもそのような態度でいる。あまりにも無知で、まったく啓かれていない。あなたがたは致命的な真理をどれほど覚えているのか。本当にそれを経験したのか。あなたがたは問題に遭遇すると混乱し、向こう見ずに慌てて行動してしまう。現在重要なのは霊に入ってもっとわたしと交わることだ、あなたがたの心がしばしば問題を深く考え込むのと同じように。わかるだろうか。それが鍵なのだ。実践の遅れは本当に問題だ。急ぎなさい、遅れてはならない。わたしの言葉を聞いて、遅れることなくただちに実践する人々は、大いに祝福されるだろう。わたしはあなたがたに倍のものを授けるだろう。思い煩ってはならない。一秒の遅れもなく、わたしが言うとおりに行動しなさい。人間の観念はしばしばかくの如しであり、物事を先延ばしにしがちで、今日すべきことをいつも明日に遅らせてしまう。何と怠惰で不器用なことか。言葉では表せないほどだ。それは過言ではなく事実なのだ。信じられないなら、慎重に自分自身を吟味し、自分の状況を確かめてみなさい。そうすればそれが事実であることに気づくだろう。

第四十章

なぜあなたがたはそんなに鈍いのか。なぜあなたがたはそんなに麻痺しているのか。幾度も思い起こさせようとしたが、あなたがたはまだ目を覚まさない。このことはわたしを悩ませている。わたしは本当にこのようなわたしの子らを見るには忍びない。わたしの心がどうしてこれに耐えられよう。ああ、わたしは自分の手であなたがたを教えなければならない。わたしのペースは加速し続けている。わたしの子らよ。早く立ち上がり、わたしに協力しなさい。今心からわたしのために尽くす者は誰か。少しの不満もこぼさず、自らを完全に捧げることができるのは誰か。あなたがたはいつもとても麻痺していて鈍い。わたしの気持ちを思いやることができる者が何人いるだろうか。また、わたしの言葉の霊を本当に理解できるのは誰か。わたしができることは心配して待ち望むことだけである。あなたがたのどの行動もわたしの心を満足させることができないのを見て、わたしは何と言おうか。わたしの子らよ。今日、父が為していることは、すべてわたしの子らのためである。なぜわたしの子らはわたしの心を理解できないのか。また、わたしの子らは、なぜあなたがたの父、わたしをいつも心配させるのか。いつになったらわたしの子らは成長し、わたしを心配させなくなり、わたしが彼らに対して安心で

きるようにさせるのだろうか。いつになったらわたしの子らは独立して生活し、立ち上がり、父の肩の重荷を軽くすることができるのか。わたしは静かにわたしの子らのために涙を流し、神の経営（救いの）計画の完成とわたしの子ら、わたしの愛する者たちを救うために全力を注ぐ。わたしには他に選択の余地は無い。

わたしの約束は実現し、あなたがたの目の前に現れている。なぜあなたがたはわたしの心を思いやらないのか。なぜだ。なぜなのか。今まで数えたことがあるか。あなたはわたしの心を満足させること、および教会を養い、糧を与えることを何度行ったことがあるのか。慎重にこれを熟考しなさい。不注意になってはならない。真実な状況の一つでも見逃してはならない。外観にだけ焦点を当てて、本質を見過ごしてはならない。あなたの一つひとつの言葉や行動、そしてあなたのあらゆる動きがキリストの御座の前の裁きを受けたかどうか、また、あなたが新しい人の姿一模倣ではなく、むしろ、いのちの表現と共に奥深くから生じる姿——に変わったかどうかを、あなたはあらゆる時に調べなければならない。損害を被ることを避けるには、あなたのいのちを遅らせてはならない。急いでこの状況を改善し、わたしの心を満足させ、行動の原則を心に留めなさい。義と公正をもって物事を行い、わたしの心を満足させなさい。向こう見ずになってはならない。あなたはこのことを憶えておくか？

第四十一章

教会内で起こる問題については、あまり懸念を抱いてはならない。教会が建て上げられる中で、過ちが起こることは避けられないが、問題に直面しても慌ててはいけない。落ち着いて、冷静でいなさい。以前そう言ったではないか。頻繁にわたしの前に来て祈りなさい、そうすればわたしの意図をはっきりと示そう。教会はわたしの心であり、わたしの究極の目標なのだから、愛さずにいられようか。恐れてはならない、教会でこのような事が起こるときは、わたしの許しを受けて起こっているのだ。立ち上がってわたしのために語りなさい。すべての物事はわたしの玉座によって許可されており、そこにはわたしの意図が込められているのだと信じなさい。理不尽な交わりを続けるなら、問題が起こるだろう。その結果を考えたことがあるのか。そのようなことこそ、サタンに利用されるのだ。頻繁にわたしの前に来なさい。わたしは率直に話す。わたしの前に来ずに何かをするなら、それを完成できるなどと思ってはならない。わたしをこの立場に立たせたのはあなたがたなのだ。

落胆してはならない。弱ってはならない。そうすればわたしが物事を明らかにしよう

。神の国への道は平坦ではない。何事もそう簡単ではないのだ。あなたはたやすく祝福を得たいと思っているのではないか。現在は誰もが苦しい試練に直面しなければならない。そうでなければ、わたしに対する愛の心が強まることはなく、わたしへの真の愛を抱くこともないだろう。試練は単なる些細な状況だとしても、誰もが必ず通らねばならない。ただそれぞれ試練の度合いが違うというだけのことだ。試練はわたしからの祝福なのだ。頻繁にわたしの前に来て跪き、わたしの祝福を求める者がどれだけいるだろうか。愚かな子らよ。あなたがたはいつも、ちょっとした幸先の良い言葉がわたしからの祝福だと思っているが、苦しみもわたしからの祝福の一つだとは感じない。わたしによる苦しみにあずかる者は、必ずわたしによる甘美さにもあずかることになる。これがわたしの約束であり、あなたがたに対する祝福なのだ。わたしの言葉を飲み食いし、享受することをためらってはならない。闇が過ぎ去れば光が訪れる。夜明け前が一番暗いのだ。その後は徐々に明るくなり、やがて日が昇る。恐れたり臆病になったりしてはならない。今日、わたしはわたしの子らを支え、彼らのために力を振るう。

教会の問題に関しては、いつも責任逃ればかりしてはならない。誠実にわたしの前に問題を持ってくれば、道を見出せるだろう。このような些細な問題が起きたとき、あなたがたは恐れて混乱し、どうしてよいかわからなくなるのか。わたしは何度も言ったではないか、「頻繁にわたしに近づきなさい」と。わたしが求めたことを、あなたがたは誠実に実践してきたのか。何度わたしの言葉を思い巡らしたのか。そうしていないなら、明確な識見は一切得られない。それは身から出た錆ではないのか。あなたがたは他の人々を責めるが、なぜ自分自身を嫌悪しないのか。自分で面倒を引き起こしておきながら、まだ不注意でいい加減なままでいる。わたしの言葉に注意を払いなさい。

従順に服従する者は大きな祝福を得る。教会では揺るぎなくわたしを証しし、真理を掲げなさい。正しいことは正しく、間違っていることは間違っている。黒と白を混同してはならない。サタンと戦い、完全に打ち負かして、サタンが二度と立ち上がらないようにしなければならない。すべてを犠牲にして、わたしの証しを守らなければならない。これを目標として行動しなさい、このことを忘れてはならない。だが今、あなたがたは信仰を欠いており、物事を見分ける力も欠いており、いつもわたしの言葉とわたしの意図を理解できずにいる。しかし心配してはならない。すべてはわたしの段階に応じて進行する。不安は問題を生じさせるだけだ。もっとわたしの前で過ごしなさい。食べるものや着るものに重きを置いてはならない、それらは物理的な体のためのものだからだ。頻繁にわたしの意図を求めなさい、そうすればそれをはっきりと示そう。あなたは徐

々にすべてのことにわたしの意図を見出すようになり、その結果わたしは妨げなく、すべての人々の中で働けるようになる。そうすればわたしの心は満足し、あなたがたはわたしとともに、とこしえまでも祝福を受けることになる。

第四十二章

全能神の業は偉大である！ 何と不思議なものか！ 何と素晴らしいものか！ 七つのラッパが鳴り響き、七つの雷が轟き、七つの鉢が投げられる。これはただちに公然と明かされ、そこに疑いの余地はない。神の愛は日々私たちのところに来る。全能神だけが私たちを救うことができる。私たちが不幸に遭うか祝福を受けるかは、まったく神にかかっており、私たち人間にこれを決める術はない。心の底から自らを神に捧げる者は、必ずや豊かな祝福を受けるが、自分の生命を守ろうとする者は生命を失うだけである。すべての物事は全能神の手の中にある。もうあなたの歩みを止めてはならない。とてつもない変化が天と地に迫っており、人間に隠れる術はない。苦い痛みを感じながら嘆き悲しむしか、人間には選択の余地がない。聖霊が現在行なっている働きに従いなさい。聖霊の働きが進行してきた過程については、あなたは自分の中ではっきりしているべきであり、もはや他の人に思い出させてもらう必要はない。今はできるだけ多く全能神の前に戻り、すべてのことを尋ねなさい。全能神は必ずやあなたの内を照らし、大切な時にはあなたを守る。恐れてはならない。神はすでにあなたの全存在を所有している。神の加護と配慮があれば、恐れるものなど何があろう。今日、神の旨の成就が間近に迫っており、恐れる者は誰であれ損失を被ることになる。わたしがあなたに言っていることは真実である。あなたの霊の目を開きなさい。天は瞬時に変化できるが、あなたが恐れるものは何なのか。神の手がほんの少し動くだけで、天と地はすぐに滅ぼされる。ならば、人間がやきもきして何になるというのか。すべては神の手の中にあるのではないか。神が天と地に変わるように命じれば、それらは変わる。私たちは完全にされると神が言え、私たちは完全にされるのである。人間が心配する必要はなく、ただ静かに前進すべきである。しかし、できる限り注意を払い、警戒していなければならない。天は瞬時に変わり得る。どれほど大きく肉眼を開けていようと、人はほとんど何も見ることができない。今は見張っていなさい。神の旨が成就し、神の事業が完了し、神の計画は成功し、神の子らはみな神の玉座に到着した。彼らは全能神と共にすべての国と民を裁きに来る。教会を迫害し、神の子らを傷つけてきた者たちは厳しい懲罰を受ける。これは確かである！ 自分自身を心から神に捧げ、すべてを固守する者たちを、神は必ずや変わることなく永遠に愛するのだ！

第四十三章

わたしはあなたがたに思い出させなかつただろうか。不安になることはない。あなたがたは聞いていなかっただけだ。何と思慮のない人たちよ。いつになったらわたしの心が分かるのか。日々新しい啓示があり、毎日新たなる光がある。あなたがたは幾度それを自分で把握したことがあるのか。わたし自身があなたがたに言ったではないか。あなたがたは未だに突っつかなければ動かない昆虫のように受動的であるが、率先してわたしと協力し、わたしの重荷への配慮を示すことができない。あなたがた全員の生き生きとした素敵な笑顔を見、わたしの子らの活発で生き生きとした様子を見たいが、わたしは見ることができない。代わりに、あなたがたは頭が弱く、あさはかで、愚かである。あなたがたは自ら率先して探し求めるべきである。大胆に追い求めなさい。ただあなたがたの心を開いて、わたしがあなたがたの中に住むようにしなさい。注意して目を離さないようにしなさい。一部の教会の人々は惑わす者である。だから、あなたがたのいのちが影響を受けたり、損害を被ったりすることがないように、これらの言葉を常に強調すべきである。わたしのために立ち上がって話す勇気がある限り、わたしはその重荷をすべて背負い、あなたを力づけるから、安心していなさい。あなたがわたしの心を満足させる限り、わたしはいつもあなたにわたしの笑顔とわたしの旨を見せよう。あなたが強い気骨を持ち、男の子の性質を生きている限り、わたしはあなたを支え、あなたを重要な地位に置くであろう。わたしの前に来るときは、ただわたしのところに近づきなさい。話すことができなくても、恐れてはならない。求める心がある限り、わたしはあなたに言葉を与える。わたしは聞こえのいい言葉やお世辞は要らない。わたしは何よりも、この種のことを憎む。わたしはそういうタイプの人間に眉をひそめる。彼らはわたしの目の中のごみ、あるいはわたしの肉の棘のようなものであり、取り除かれなければならない。さもないと、わたしの子らはわたしのために力を発揮することができず、抑圧的な支配を受けることになる。なぜわたしは来たのか。わたしが来たのは、わたしの子らを支えて励まし、圧迫、いじめ、冷淡、虐待に耐える日々が永遠に消え去るようにするためである。

大胆になりなさい。わたしはいつもあなたと一緒に歩き、あなたと共に生き、あなたと話し、あなたと一緒に行動する。恐れることはない。躊躇しないで話しなさい。あなたはいつも感情的で、臆病で、恐れている。教会を建て上げるのに何の役にも立たない者は、取り除かなければならない。これには、信仰を持たないあなたの母親や父親はもちろんのこと、教会の中で状態が良くない者や、わたしの言葉に従って行動できない者

たちも含まれる。わたしはそれらのものは要らない。彼らは根絶されねばならず、誰一人残すべきではない。あなたの手と足の束縛を振りほどきなさい。あなたが自分の意図を調べ、それが利益と損失にも、名声と富にも、個人的な関係にも関わらない限り、わたしはあなたに伴い、あなたに物事を指摘し、いかなる時にも明確な導きを与える。

我が子らよ。わたしは何と言えばいいのか。わたしがこれらのことを言っても、あなたがたはまだわたしの心を思いやることはなく、未だに臆病過ぎる。あなたがたは何を恐れているのか。なぜあなたがたは依然として律法と規則に縛られているのか。わたしはあなたがたを解放したが、あなたがたにはまだ自由がない。どうしてこうなのか。もっとわたしと交わりなさい。そうすれば、あなたに教えよう。わたしを試してはならない。わたしは本物である。わたしには偽りがなく、すべてが本物である。わたしが言うことは真実であり、わたしは決して約束を破ることはない。

第四十四章

わたしは義であり、誠実であり、人の心の奥底を探る神である。わたしは誰が正しく誰が不正かをただちに暴く。恐れることはない、すべてはわたしの時に従って行われる。わたしを心から求めているのは誰か、そしてそうでないのは誰かを、一人一人教えよう。あなたがたがわたしの前に来るときは、ただ注意してよく食べ、よく飲み、わたしに近づくだけでよい。わたしが自らの働きを行う。すぐに成果を得ようと焦ってはならない。わたしの働きは一度にすべて成し遂げられるものではない。この働きにはわたしの段階と知恵があり、そのためわたしの知恵を露わにできるのだ。わたしの手で何ができるかをあなたがたに見せよう――それは悪を罰し、善に報いることだ。わたしは決して誰もひいきしない。ただわたしを心から愛する者を心から愛し、わたしを心から愛さない者には常に怒りをもって臨む。わたしが真の神であり、人間の心の奥底を探る神であることを、彼らが永遠に忘れないように。本音と建前を使い分けてはならない。わたしにはあなたのすることがすべてはっきりと見えている。他の人を欺くことはできても、わたしを欺くことはできない。わたしにはすべてがはっきりと見えているのだ。何も隠すことはできない。すべてはわたしの手の中にある。小賢しい計算で有利な結果を得られたからと言って、自分がとても賢いなどと思ってはならない。言っておくが、人間が何千何万と計画を立てたところで、最終的にわたしの手からは逃れられないのだ。万事万物はわたしの手支配されているのだから、一人の人間など尚更である。わたしを避けたり、隠れたり、おだてようとしたり、隠し事をしたりしてはならない。わたし

の栄光に満ちた顔貌、怒り、そして裁きが公にあらわされていることが、あなたにはまだわからないのか。わたしを心から求めない者はみな、ただちに容赦なく裁かれる。わたしの憐れみはすでに尽きた。もうこれ以上偽善者であることをやめ、狂気じみた無謀な生き方を捨て去りなさい。

我が子よ、用心して、もっとわたしの前で長く過ごしなさい。そうすれば、わたしがあなたを引き受けよう。恐れることなく、わたしの鋭い諸刃の剣を携え、わたしの旨に沿って、最後までサタンと戦い抜きなさい。わたしがあなたを守る、心配することはない。隠されているものはすべて開かれ、露わにされる。わたしは光を放つ太陽であり、すべての暗闇を容赦なく照らす。わたしの裁きは余すところなく下されており、教会が戦場となっている。あなたがたはみな支度を整え、全身全霊で最後の決戦に臨まねばならない。わたしは必ずあなたを守ろう、わたしのために善戦し勝利を収められるように。

気をつけなさい――最近の人々の心は偽りに満ちていて、何をするか予測がつかず、人間には他人の信頼を勝ち取る術がないからだ。完全にあなたがたの味方なのはわたしだけだ。わたしには偽りが無い。だから、ただわたしを頼りなさい。わたしの子らは最後の決戦で必ずや勝利を収める。サタンは間違いなく姿を表し、死闘を繰り広げるだろう。恐れてはならない。わたしがあなたの力であり、あなたのすべてなのだ。物事を何度も考えるのはやめなさい、あなたはそれほど多くの考えに留意することはできない。前にも言ったが、わたしはこれ以上あなたがたの手を引いて進むことはしない。時が迫っているからだ。これ以上あなたがたの耳を捕らえて、毎回言い聞かせている時間はない。そんなことはできないのだ。ただ、戦いの準備を整えておきなさい。わたしがすべての責任を取る。すべてはわたしの手の中にある。これは決死の戦いであり、一方は必ず滅びることになる。しかし、このことははっきり理解していなければならない。わたしは永遠の勝利者であり、打ち負かされることはなく、サタンが確実に滅びるということだ。これがわたしのやり方であり、わたしの働きであり、わたしの旨であり、わたしの計画なのだ。

もう成し遂げられた。すべては成し遂げられたのだ。臆病にならず、恐れずにいなさい。わたしとあなた、そしてあなたとわたしは、永遠の王となるのだ。わたしの言葉は一度語られると決して変わることがなく、出来事はすぐにあなたがたに降りかかるだろう。用心していなさい。わたしの言葉の一つ一つをよく考えなさい、これ以上曖昧なままでいてはならない。はっきりと理解しなくてはならないのだ。覚えておきなさい、で

きるだけ多くの時間をわたしの前で費やすことだ。

第四十五章

あなたは、まるで何でもないことのように、公然と兄弟姉妹たちを裁く。あなたは本当に善と悪を見分けることを知らない。あなたは恥知らずである。これはひどく厚かましい、無謀な行為ではないか。あなたがたは一人残らず混乱し、心が重い。あなたがたは余りにも多くの荷物を持っているので、あなたの中にはわたしの場所はない。盲目の人間たちよ。あなたがたは何と残虐なことか——それはいつ終わるのか。

わたしは幾度となく心からあなたがたに話しかけ、わたしの持っているものすべてを与えるが、あなたがたは非常にけちで、人間性の欠片もない。これは本当に理解に苦むことである。どうしてあなたは自分の観念にしがみつくなのか。なぜあなたは、あなたの中にわたしの居場所を設けることができないのか。どうしてわたしがあなたがたを傷付けることなどあろうか。あなたがたはこのようにふるまい続けてはならない——わたしの日は、本当に今からもう遠くない。不注意に話したり、無謀なふるまいをしたり、争ったり、問題を引き起こしたりしてはならない。それがあなたがたのいのちにどんな益をもたらすというのか。わたしはあなたがたに真実を告げる。わたしの日が来るときに一人として救われなくても、わたしはなおも、わたしの計画に従ってものごとに対処する。あなたがたはわたしが全能の神であることを知らなければならない。どんな物も、どんな人間も、どんな出来事もわたしの前進を妨げることはできない。あなたがたなしでは、わたしにはわたしの旨を実行するすべがないと思ってはならない。言っておくが、自分のいのちをこのように否定的に扱うならば、あなたは自分のいのちを滅ぼすだけであり、わたしはそれを全く気にも留めない。

聖霊の働きは一つの段階まで進み、証しは頂点に達した。これは明白な真実である。早くあなたがたのかすんだ目を開きなさい。あなたがたに対するわたしの苦心の努力を無駄にしてはならない。そして、もう自分を甘やかしてはならない。あなたがたはわたしの前では喜んで善行を為すが、わたしがいないとき、あなたがたの行動やふるまいは、わたしの目の前に示せるようなものであるのか。あなたがたは善と悪の違いが分からない。あなたがたはわたしに耳を傾けない。あなたがたはわたしの前ではひとつのことをし、わたしの背後では別のことをする。わたしが人間の心の奥底まで見透かす神であることにあなたがたはまだ気づいていない。何と無知なことか。

今後あなたがたの前途において、策略をめぐらせたり、偽りや曲がったことに加わっ

たりしてはならない。さもなければ、その結果は想像を絶するものになるであろう。偽りと曲がったことが何であるか、あなたがたはまだ理解していない。あなたがたがわたしに見せられず、明るみに出すこともできない行動やふるまいは、どれも偽りと曲がったことである。今あなたがたはこれを理解すべきである。今後、偽りや曲がったことに加わるなら、分からない振りをしてはならない。それは、知っていながら過ちを犯すことであり、さらに罪深いことである。このようなことをすれば、あなたがたは火で焼かれるか、さらにひどい場合は、自分を滅ぼすことになるだろう。あなたがたは理解しなければならない。あなたがたが今日直面しているのは、愛の懲らしめである。これは決して無慈悲な裁きではない。このことが分からないのなら、あなたがたはあまりにも哀れであり、あなたがたには全く何の希望もない。愛の懲らしめを喜んで受け入れないのであれば、無慈悲な裁きだけがあなたがたに下る。それが起こったら、わたしがあなたがたに告げなかったと不平を言ってはならない。わたしが責任を逃れたのではなく、あなたがたがわたしの言葉に耳を傾けず、わたしの言葉を実行しなかったのである。後で非難されることがないように、わたしは今このことをあなたがたに言うておく。

第四十六章

誠実にわたしのために自分を費やし、捧げるならば、わたしはあなたを最後まで必ず守る。わたしの手が必ずあなたを支えるので、あなたは常に平安で、いつも喜びがあり、日々わたしの光と啓示を受けるだろう。わたしは必ずあなたへの祝福を倍にするから、あなたはわたしの所有するものを所有し、わたしという存在そのものを所有するようになる。あなたの中に与えられるものは、あなたのいのちであり、何者もそれをあなたから奪い取ることはできない。やっかいなことが自分に起こらないようにし、また、気落ちしないでいなさい。わたしの内にあるのはすべて平安と喜びだけである。わたしは、わたしを心から仰ぎ、従う子供であるあなたを心から愛する。わたしが最も憎む者は偽善者であり、わたしは彼らを確実に一掃する。わたしはわたしの家から世の味をすべて消し去り、わたしが見るに堪えないものを消し去る。

わたしは、誰が誠実にわたしを求め、誰が求めているかを心の中で知っている。彼らは変装が得意で、賢いふりをし、世界一の役者であるとも言えるが、わたしには彼らの心の中にあるものがすべてはっきり見える。わたしがあなたの心の中にあるものを知らないと思ってはならない。実際、わたしより明確に理解できる者はいない。わたしはあなたの心の中にあるものを知っている。あなたは神に自らを捧げ、費やすことをいと

わないが、周りの人々をおだてて喜ばせようとだけはしない。しっかり見なさい。今日の神の国は人の力によって建てられたのではなく、すべてわたしの無数の知恵と苦心の努力によって建てられた。知恵を持ち、わたしの存在を内に持つものは誰でも、わたしの国の建設に加わることができる。これ以上心配してはならない。あなたは心配ばかりして、あなたの心の内なる、わたしの旨に関する啓示や照らしを考慮しない。いつまでもそのようであってはならない。自らの行動ゆえに苦しむことがないよう、どのような事についてもわたしと交わりなさい。

おそらく表面上は、わたしは全ての者に対して生ぬるく見えるかもしれない。だがあなたは、わたしが心の奥で考えていることを知っているか。わたしは常に、謙った者たちを高くし、うぬぼれる者たち、独りよがりな者たちを低くする。わたしの旨を理解しない者は多大な損失を被る。あなたは、これこそがわたしであり、わたしの性質であることを知らねばならない――何者もそれを変えることはできない。何者もそれを完全に理解することはできない。わたしの啓示を通してのみ、あなたは理解することができる。そうでなければ完全に理解することはできない。傲慢になってはならない。一部の人々は、口先では良いことを言うが、心の中では決してわたしに忠実ではなく、いつも密かにわたしに反対している。そのような人をわたしは裁く。

他者から指示を受けることばかりを考えるのではなく、わたしの姿勢や振る舞いに留意すべきである。そうして初めて、わたしの旨を徐々に把握するであろう。そうすれば、あなたの行動はわたしの旨に適い、過ちを犯さなくなるであろう。泣いたり、悲しんだりしてはならない。わたしには、あなたのすること、あなたの振る舞い、あなたの考えていることがすべてはっきりと見える。わたしはあなたの切実な欲求と願望を知っている。わたしはあなたを用いる。今は重大な時である。あなたを試す時が来たのだ。あなたはまだ見ていないだろうか。まだ理解できていないだろうか。わたしがあなたにこのような態度で接するのはなぜか。あなたには分かるだろうか。わたしはこれらの事柄をあなたに啓示したが、あなたの識見は僅かである。それでも止まってはいけない――靈的成長のために前進を続けるなら、わたしはあなたに啓示を与え続ける。あなたがわたしに従い、わたしを仰ぐほど、あなたの心の中は明るくなり、より多くの啓示を受けるということに気づいただろうか。また、わたしに対する認識が増えるほど、より多く経験するということに気づいただろうか。自分の観念にしがみついたらいいではない。そのようなことをしていると、わたしの生ける水の流れが滞り、わたしの旨の実行が妨げられる。一人の人間を完全に獲得することは容易でないことを、あなたは知ら

なければならない。複雑に考えてはならない。ひたすら従い、もはや憂慮してはならない。

第四十七章

義なる全能神——全能者よ。あなたにあって隠されたものは何ひとつない。太古の昔から永遠まで人間に明らかにされたことのない奥義のひとつひとつが、あなたにあって現され、すべて明瞭になる。わたしたちはもはや手探りで求めなくてもよい。今日、あなたの本体が堂々とわたしたちに示されたからである。あなたは明らかにされた奥義であり、実際の神自身である。あなたは今日、わたしたちと顔を合わせているからである。あなたの本体を目にしつつ、わたしたちは靈的領域の奥義をすべて見る。まさにこれは誰にも想像できなかったことである。今日、あなたはわたしたちのもとにあり、わたしたちの只中にもあり、わたしたちの間近にいる。それは言葉で表すことはできず、その中にある奥義は無比である。

全能神は経営（救いの）計画を完了した。彼は勝利した宇宙の王である。万事万物は、その手中の支配下にある。人は誰もがひざまずいて礼拝し、真の神、全能者の名を呼ぶ。すべては彼の口から発せられる言葉により成し遂げられる。あなたがたはなぜ、これほどに勢いがなく、真摯に神と共に働くことができず、親密に彼と結び付き、彼と共に栄光の中へ入ることができないのか。自ら進んで苦しみたいということなのか。放り捨てられたいのか。誰が心からわたしに献身しており、誰がわたしのために誠実に尽くしてきたのかを、わたしが知らないとてもあなたがたは思っているのか。無知な者たち。愚か者たち。あなたがたにはわたしの意図が分からない。ましてやわたしの重荷を思いやることなど到底できず、あなたがたのことをわたしに常に心配させ、わたしに骨を折らせる。こんなことがいつ終わるのか。

あらゆることにおいてわたしを生き、あらゆることにおいてわたしを証しすること——それはただ口を開けて、言葉をいくつかつなげることを意味するであろうか。あなたがたには善悪の違いがわからない。行ないにおいてわたしはおらず、日常生活にはなおさらわたしは不在である。あなたがたが神を信じることを真剣に捉えないことをわたしは知っている。それゆえ、あなたがたが実らせる果実はこのとおりである。あなたがたはまだ目を覚ましていない。このまま行けば、わたしの名を汚すことになる。

自問しなさい。あなたが話すとき、わたしはあなたと共にいるのか。あなたが食べ、服を着るとき、わたしの約束はそこにあるのか。あなたがたは本当に思慮に欠けている

。問題点が直接大喝されなければ、あなたは必ず本当の姿を現し、あなたがたのうち誰として従順ではない。そうでなければ、あなたがたは自分を偉大だと思い、自分の中に多くのものを所有していると思う。あなたがたの中身を満たしているのは、サタンの醜い顔であることを知らないのか。これらをすべて注ぎ出すために、わたしと共に働きなさい。わたしの存在そのものとわたしが持つものに、あなたの内面を完全に占めさせなさい。そうしなければ、あなたがわたしを生き、さらなる現実性をもってわたしを証しし、さらに多くの人をわたしの玉座の前で服従させることはできない。あなたがたの肩の重荷の重みを知らなければならない。無数の人が救いを得て、わたしの国が揺るぎなく強固に立ち続けるために、キリストを崇め、キリストを表し、キリストを証ししなさい。あなたがたが今日の働きの重要性を理解しないまま、混乱したまま歩まないように、わたしはこれらすべてを明瞭に指し示す。

問題に遭遇すると無力で、熱いフライパン上の蟻のように走り回る——これがあなたがたの性質である。外側は大人のように見えるが、内側のいのちは子供と同じである。問題を引き起こし、わたしの重荷を増やすことしかできない。わたしが気につけないことが少しでもあれば、あなたがたは問題を引き起こす。そうではないか。独善的になってはならない。わたしの言うことは真実である。ただ高尚に聞こえる言葉を使っているかのように、わたしが常にあなたがたに説教しているといつも思ってはならない。これがあなたがたの実状なのである。

第四十八章

わたしは心配しているが、わたしと心と意思を一つにできる者があなたがたの中に何人いるだろうか。あなたがたはわたしの言葉に注意を払わず、完全に無視して、それらに集中することを怠り、代わりに自分自身の表面的なものに集中するだけである。あなたがたはわたしの苦心の配慮と努力をゴミのように見なしているが、あなたがたの良心は責められないのか。あなたがたは無知で、理知に欠けている。あなたがたは愚か者であり、わたしをまったく満足させることができない。わたしは完全にあなたがたのために尽くしている——あなたがたはわたしのためにどのくらい尽くせるのか。あなたがたはわたしの意図を誤解した。そして、これは本当にあなたがたの盲目さ、物事を見る能力の無さであり、あなたがたは常にわたしを心配させ、あなたがたのために時間を費やさせている。今、あなたがたはどれだけの時間をわたしのために費やし、わたしのために捧げることができるのか。あなたがたはもっと自らに尋ねるべきだ。

わたしの意図はすべてあなたがたに関するものである——あなたがたはこのことを本当に理解しているか。あなたがたが本当にそれを理解していれば、ずっと前にわたしの意図を把握して、わたしの重荷を考慮していただろう。二度と不注意になってはならない。さもないと、聖霊があなたがたの中で働くことはなく、そうなれば、あなたがたの霊は死んで、ハデスに落ちることになる。それはあなたにとって、あまりにも恐ろしいことではないか。わたしがあなたがたに再び思い出させる必要はない。あなたがたは自分の良心を探り、自問すべきである。わたしはあなたがたのことをあまりにも残念に思い過ぎているということなのか。それとも、あなたがたがわたしにあまりにも多くの負債を負っているのか。正しいことと間違っていることを混乱させて、分別を失ってはならない。今は権力と利益のために争ったり、陰謀に加わったりしている時ではない。むしろ、いのちに非常に有害なこれらのものを直ちに脇へ置き、現実の中に入ることを求めなければならない。あなたがたはとても不注意である。あなたがたはわたしの心を理解することも、わたしの意図を悟ることもできない。言わなくてもよいはずのことがたくさんあるが、あなたがたは非常に混乱した人たちで、理解しないので、わたしはそれを何度も言わざるを得なかったのだ。しかしそれでも、あなたがたはまだわたしの心を満足させていない。

あなたがたを一人ずつ数えたところで、いったい何人の者が本当にわたしの心を思いやることができるのか？

第四十九章

協調して仕えるためには、人は生き生きとして、鮮やかなだけでなく、正しく参加しなければならない。さらに、他の人たちが施され満たされるために、人は精力と、活力を持ち、自信に溢れていなければならない。わたしに仕えるのなら、あなたはわたしが意図するように仕えなければならない。わたしの心に適うだけでなく、それ以上に、わたしが、あなたの中で成し遂げることによって満足するように、わたしの意図を満たさなければならない。あなたの生活をわたしの言葉で満たし、あなたの言葉をわたしの力で満たしなさい。これが、わたしがあなたに求めることである。あなたが自分の欲望に従うことがわたしの似姿を表すのか。それがわたしの心を満足させるのか。あなたは、わたしの意図を心から注意を払ったことがある者だろうか。あなたはほんとうにわたしの心を理解しようとしたことがある者だろうか。あなたは本当にわたしのために自分自身を捧げたことがあるか。あなたは本当にわたしのために自分自身を費やしたことが

あるか。あなたはわたしの言葉を熟考したことがあるか。

人はすべての面で知恵を用い、わたしの完全な道を歩むために知恵を用いなければならない。わたしの言葉によってふるまう者は、すべての人たちの中で最も賢明であり、わたしの言葉に従ってふるまう者は最も従順な人である。わたしが言うことは成るのである。あなたがわたしと議論したり、わたしを説得しようとしたりする必要はない。わたしが言うすべてのことは、（わたしが厳しかれ穏やかであれ）あなたのことを念頭に置いて言うのである。あなたが従順であることに集中するならば、それで良い。そして、これはまことの知恵の道である（また、神の裁きがあなたに降りかかるのを防ぐ道でもある）。今日わたしの家では、わたしの面前で丁寧なふるまい、わたしの背後では別のことを言うようなことがあってはならない。わたしはあなたが実践的であることを望む。花で飾った美辞麗句を言う必要はない。実践的な者には、すべてのものがある。そうでない者には何も無い。彼らの肉体でさえ無に帰するだろう。なぜなら、実践無くしては、空しさだけがあり、他に説明はないからである。

わたしは、あなたがたが神への信仰において真剣になり、自分の得失も、自分がかつすべてのものも一切考えないようにさせたい。あなたがたは、ただ真の道に足を据えることを追い求めるべきであり、誰にも揺るがされたり、支配されたりしてはならない。これが、教会の柱、神の国の勝利者となることとして知られていることだが、それは、そうしなければ、あなたがたはわたしの前に生きるには値しないことを意味する。

わたしに近づく方法と同様、状況も異なることがある。ある人たちは、わたしの面前ではひびきの良い言葉を言い、敬虔そうに行動することを好む。しかし、陰では、彼らは全く混乱しており、彼らの行うことには、わたしの言葉が全く欠けている。彼らは胸の悪くなるような、うっとうしい者たちである。彼らが誰かに啓発を与えたり、何かを施したりすることなどあり得ない。あなたがたは、わたしの心を考慮することができない。その理由は唯一、あなたがたがもっとわたしと親しくなることも、わたしと交わりを持つこともできず、いつもわたしに心配させ、あなたがたのために労苦してわたしを働かせるからである。

第五十章

すべての教会、すべての聖徒は未来に目を向けるのと同時に、過去も振り返って考えるべきである。例えば、あなたがたの過去の行動のうち、適格とみなされるものはいくつあるだろうか。過去の行動のうち、神の国の建設において役割を果たしたものはいく

つあったらどうか。自信過剰になってはいけない。あなたは自己の欠点をはっきり認識し、自分自身の状態を理解するべきである。あなたがたのうち、進んで努力をし、そのために時間を費やす人など誰もいないことはわかっている。だからあなたがたは何も達成することはできない。あなたがたは飲んだり食べたり、遊んだりして、すべての時間を無駄に費やしている。あなたがたは数人集まると遊び回り、生活上の霊的問題を分かち合ったり、お互いにいのちを提供し合ったりすることにはまったく注意を払わない。あなたがたが話す時、笑ったり、冗談を言ったりするのを見るのは耐え難い。それなのに、あなたがたは本当にばかげている。わたしは何回も言ったのに、あなたがたはわたしの言う意味がわかっていない——これはあまりにも明らかなことで、まさにあなたがたの鼻先にぶらさがっているようではないか。このようなことは以前にも言ったことがあるのに、あなたがたはまだ納得せず、わたしの言うことを認めず、それどころか、わたしがあなたがたを誤解しており、わたしの言うことは本当ではないと考えている。それとも、そうではないということなのか。

あなたがわたしをおさなりに取り扱うなら、わたしはあなたを脇へ置く。あなたは再び投げやりになるだけだ。再び無分別で不注意にしているだけだ。わたしの言葉は肉切りナイフのようなものである。わたしの意図に適合しないものは何であれ、このナイフで切り取られるだろう。そしてあなたは自尊心を過度に思い遣る必要はない。わたしはあなたが形になり、わたしの意志に従うことができるように、あなたを刻んで形作る。わたしの心を誤解してはいけない。受け入れることのできる唯一の方法は、あなたができるだけわたしの心を思いやることである。あなたがほんのわずかでも思いやりを示せば、わたしはあなたを軽蔑して背を向けたりはしない。いつも軽率にそのことを無視してはいけない。受け入れることのできる唯一の方法は、わたしの意志がいつもあなたに対して実行されるようにすることである。

多数の聖徒はみな異なる立場に位置しているので、もちろんあなたがたはみな、異なる機能を持っている。しかし、あなたがたはわたしのために誠実に全力を尽くして労すべきであり、あなたがたの本分はできるかぎりのことをすることである。あなたがたはこの点に忠誠を示し、快く厭わずに取り組むべきであり、及び腰になってはならない。そうでなければ、わたしの審判が下り、あなたがたの肉体、霊と魂はそれに耐えることができず、涙し、歯ざしりすることになるだろう。

第五十一章

おお、全能神よ。アーメン。あなたにあってすべては放たれ、すべては自由で、開かれ、明らかにされ、明るく、隠され秘密にされるものは一切ない。あなたは肉となった全能神である。あなたは王として君臨してきた。あなたは公然と明らかにされた。もはや謎ではなく、完全に明らかにされ、それは永遠である。まことにわたしは完全に明らかにされ、わたしは公に現れ、義なる太陽として現れた。今はもはや明けの明星が出現する時代ではなく、もはや隠匿の段階ではないからである。わたしの働きは閃く稲妻のようであり、突然の雷鳴のような速さで成就される。わたしの働きはこの段階まで進化した。無為に過ごしたり、怠けたりする者は誰であろうと容赦ない裁きに遭うだけである。わたしは威厳と裁きであり、もはやあなたがたが想像しているような憐れみや愛ではないことを特にはっきりと理解しなければならない。まだこの点を明瞭に理解していないのなら、あなたが受けるのは裁きである。認めていないものを自ら味わうことになるからである。さもないければ、あなたは今なお疑い、信仰において確固となる思い切りがないままになる。

わたしがあなたがたに託したことを、あなたがたは献身的に完了することができるのか。何かに着手することは知恵を要するとわたしは言う。しかし、あなたがたは物事を行ないつつも、わたしの忠告をどれほど繰り返し吟味し、さらに考慮したのか。たとえわたしの忠告の言葉の一つをある程度理解し、それを聞いたときは良いものとして受け入れても、後になると無視してしまう。言葉を聞くときは、自分の実際の状態に当てはめて、自分自身を蔑む。しかしその後、それを些細なことだと思う。今日の問題は、あなたのいのちが成長できるかどうかである。あなたが外面的にどのように着飾っているかという問題ではない。あなたがたは一人として覚悟がなく、なかなか決心がつかない。代価を払うことを望まず、地上のはかない快樂を捨てたくないが、天からの祝福を失うことも恐れている。いったいこれはどういう人間なのか。これは愚か者である。あなたがたは虐げられたように感じるべきではない。わたしが言ったことは事実ではないのか。あなた自身がすでに思っていたことが指摘されているだけではないのか。あなたには何の人間性もない。普通の人間の素質さえない。そして、これが現状であるのに、自分がどんなに貧弱であるのかがまだ分かっていない。あなたは一日中怠けて、呑気なままで、自己満足している。自分の不足がどれほど大きいのか、何が欠けているのか知らない。なんと愚かなことか。

わたしの働きがすでにここまで達したことが分からないのか。わたしの旨はすべてあなたがたの中にある。いつになったらあなたがたはそれを把握し、多少の配慮を示すの

か。怠け者よ。代価を払う意欲がなく、困難な仕事をする意欲もなく、時間を費やす意欲も、努力する意欲もない。わたしはあなたに告げる。苦難を受けることを恐れれば恐れるほど、あなたのいのちが受ける恩恵は少なくなり、いのちが成長するにつれて直面する妨げが増し、いのちが発展しにくくなる。わたしはもう一度あなたに思い起こさせよう（再び言いはいし）。自分のいのちに責任を持たない者には、わたしは関心を示さず、その者を見捨てる。わたしはすでにそのように実行している。あなたにはまだこれがはっきり見えないのか。これは取引でも商売でもない。いのちである。はっきり分かっただろうか。

第五十二章

わたしは義の太陽として現れ、あなたがたとわたしと一緒に栄光と良い祝福を永久に分ち合う。これは絶対に真実であり、それはすでにあなたがたの上に成就され始めている。わたしが約束したすべてのことを、わたしはあなたがたのために成就する。わたしが言うすべては現実であり、虚しく戻ってはこない。これらの良い祝福があなたがたの上にある。他の者がそれらを主張することはできない。それらはわたしと一致して協力したあなたがたの奉仕の実である。あなたがたの宗教的観念を捨て去りなさい。わたしの言葉が真実であることを信じなさい。疑ってはならない。わたしはあなたがたに冗談を言っているのではない。わたしは本気で言っているのだ。わたしが祝福を受ける者たちはそれを受け、わたしが祝福を授けない者たちはそれを受けることはない。これはわたしによって定められる。この世の幸運とは何であるのか。わたしの意見では、それは糞に過ぎず、一文の価値もない。それゆえ、この世の悦楽を過大評価してはならない。わたしと一緒に天の祝福を楽しむことの方が、はるかに意味のあること、はるかに報われることではないのか。

以前は真実が明らかにされていなかった。そしてわたしはまだ公に現れてはいなかった。あなたがたはわたしを疑い、わたしについて確信を得ようとしなかった。しかし今、すべてのことは明らかにされ、わたしは義の太陽として現れた。あなたがたがまだ疑っているのなら、これに対して何と言うのか。闇が地を覆っていたときは、あなたがたが光を知らないことはゆるされた。しかし今、太陽が暗闇の隅々まで照らし、隠されたものはもはや隠されておらず、秘められたものはもはや秘められていない。あなたがたがまだ疑っているのなら、わたしはそう簡単には容赦しない。今がわたしのことを完全に確信すべき時であり、進んでわたしに身を捧げ、わたしのために尽くす時である。

ほんの少しでもわたしに逆らう者には誰でも、考え直すことも一瞬の猶予もなく、裁きの火が直ちに注がれるだろう。なぜなら、今こそが容赦ない裁きが到来したからである。思いや考えが正しくない者たちには、直ちに裁きが下されるだろう。これがいわゆる、「わたしの働きは閃く稲妻のようである」ということの真の意味である。

それは迅速に進行している。それは人々を驚かさずにはおかず、人々を恐れさせずにはおかず、それはもはや遅らせることはできず、それを止めることはできない。わたしの働きは遂行されればされるほど、速く前進する。目を覚まして用意していない者は誰でも、常に捨て遣られる危険にさらされている。二度とあなたの心の中で試そうとしてはならない。わたしの働きはすでに始まっており、異邦人の国々と宇宙世界に向かって拡大している。裁きの火は誰にも情け容赦なく、憐れみも愛もない。神に忠実であっても、正しくない思いや考えを持つ者、あるいは、ほんの少しでも抵抗する者もまた間違いなく裁かれる。わたしの光に照らされる者は誰でも、その光の中に生き、光の中で行動し、道の終わりまでわたしに仕える。光の中に生きない者たちは、暗闇の中で生きている。わたしは彼らを裁いた後、彼らの罪責感に対する彼らの態度に応じて決断を下す。

わたしの日が到来した。以前わたしが語ったわたしの日が、今あなたがたの目の前にある。なぜなら、あなたがたはわたしと共に降臨するからである。わたしはあなたと、あなたはわたしと空中で出会い、共に栄光を分かち合った。わたしの日はまさに完全に到来したのだ。

第五十三章

わたしは初めであり、終わりである。わたしは復活した完全なる唯一の真の神である。わたしはあなたがたの前でわたしの言葉を語る。そしてあなたがたはわたしが言うことを固く信じなければならない。天地は滅び行くが、わたしが言うことの一点、一画としてすたれることはない。これを憶えておきなさい！憶えておきなさい！いったんわたしが語れば、一言も取り消されることはなく、一つひとつの言葉が成就されるのだ。今、その時が来た。あなたがたは直ちに現実において成長しなければならない。あまり時間がないのだ。わたしはわたしの子らを神の栄光の国へと導く。そして、あなたがたが努力して求め、切望してきたことは実現するであろう。わたしの子らよ。早く立ち上がって、わたしについて来なさい。あなたがたがくよくよ考えている暇はもうない。失われた時間は戻って来ない。暗闇の後には光があり、携挙があなたがたの目の前に迫って

いる。あなたがたは分かるか。目を開きなさい。早く目を覚ましなさい。交わりの中で、つまらないお喋りをしたり、教会建設のために有益ではないことを話したりすることは今許されない。重要なことは、あなたの実体験や、どれ程神の前に照らしを受けて、あなた自身を知ったかを兄弟姉妹に伝えることである。これを施すことができる者は誰でも十分な霊的背丈を持つであろう。今恐れていない人たちもいる。わたしが何を言っても、どれほど心配しても、あなたはまだ恐れることがない。あなたの古い自我は触れられることを許さないの、あなたはただこのまま続けてゆく。誰が減ぼされるのか見てなさい。あなたは常に世界をつかむことを考え、富を渴望し、自分の息子や娘や夫に強い愛着を感じている。それなら愛着を感じ続けるがよい。わたしの言葉があなたがたに告げられなかったということではない。あなたがたの好きなように続ければよい。近い将来、あなたがたはすべてを理解するだろう。しかし手遅れになり、あなたがたを待っているのは裁きだけである。

第五十四章

わたしは自分の手の甲のように各教会のことを知っている。わたしがそれを明瞭に知っていないとか、理解していないと思ってはならない。わたしは各教会の様々な人々のことはなおさら、全員理解し、知っている。わたしはあなたを訓練しなければならないという思いに迫られている。あなたがわたしの役に立つ日がもっと早く来るように、わたしはあなたを早く大人に成長させたいのだ。あなたがたがどこでも神を現すことができるように、わたしはあなたがたの行動がわたしの知恵に満ちていることを願う。このようにしてわたしの究極の目的は達成されるだろう。わたしの子らよ。あなたがたはわたしの意図への配慮を示すべきである。わたしがあなたがたの手を握ってあなたがたに教えるようであってはならない。あなたがたは、わたしの旨を把握し、問題の核心を見抜けるようにならなければならない。そうすることで、どのような問題に遭遇しても、指を鳴らすかのように難なくそれに対処できる。あなたがたは、おそらく訓練の中で、最初は理解しないだろう。そして二回目も、三回目も……。しかし、最終的にはわたしの意図が分かるだろう。

あなたがたの言葉は不可解な性質を持っており、それが知恵であると自分では思っているのではないだろうか。時には不従順になり、時には冗談を言い、時々人間の観念や嫉妬を抱き……。要約すると、あなたがたは落ち着きなく話し、他の人たちにいのちを与える方法も、彼らの状態を感じ取る方法も知らず、いい加減な交わりに携わっている

。あなたがたの思考は曖昧で、何が知恵で、何が狡猾さであるのか分からず、あなたがたの頭はただ混乱している。あなたがたは狡猾さと曲がったことを知恵と見なしているが、これはわたしの名に恥を塗ることではないのか。これはわたしを冒瀆することではないのか。これはわたしに罪を着せることではないのか。それならば、あなたがたが求める目標は何であるのか。あなたがたはそれを考えたことがあるか。あなたがたはそれをしようとしたことがあるか。わたしはあなたに告げる。わたしの意図はあなたがたが求めるべき方向と目標である。さもないければ、すべてが無駄であろう。わたしの意図を知らない者は、求める方法を知らない者であり、見捨てられ、根こそぎにされるであろう。明らかに、わたしの意図を発見することは、あなたがたが学ばなければならない最初の教訓である。それは最も緊急を要する作業であり、一刻も遅れてはならない。わたしがあなたがたを一人ひとり順番に叱責するまで待っていてはならない。あなたがたはいつも呆然として頭が鈍い。それは滑稽である。それほど頭が混乱しているとは、わたしは信じられない。あなたがたはわたしの意図を気にも留めない。行動する前に、わたしの意図をどの位頻繁に理解するのか自問してみなさい。あなたがたを訓練するのはあなたがた自身であるべきだ。あなたがたを一人ずつ取り扱うことをわたしに望んでいるが、それは不可能である。あなたがたは行動しながら経験を得て、見識と知恵を獲得することを学ぶべきである。あなたがたの口から出てくる言葉はよいが、実際の状況はどうだろうか。現実にはぶつかると、あなたがたは何もすることができない。あなたがたが言うことは現実と一致しない。わたしはあなたがたがしていることに我慢ならない。わたしはそれを眺めて悲しまざるを得ない。そのことを憶えておきなさい。将来はわたしの意図を悟ることを学びなさい。

第五十五章

いわゆる正常な人間性は、人々が想像するほど超自然的なものではない。むしろ、それはすべての人、出来事、および物体の束縛、そして環境から生じる迫害を超越することができる。あらゆる場所、あらゆる環境でわたしに近づき、わたしと交わることができるのである。あなたがたはいつもわたしの意図を誤解する。わたしが、あなたがたは正常な人間性を生きるべきだと言うと、あなたがたは自制し、自分の肉を制御する。しかし、あなたがたは、霊の中で慎重に探し求めることなく、上辺に何を装うかにだけ注意を払い、あなたの内のわたしの啓示とわたしによる感動を見過ごしている。あなたは何と不注意なことか。あまりにも不注意である。わたしがあなたに託したことを完成することは偉業なのか。あなたは愚かだ。あなたは深く根を下ろすことに注意を払っ

ていない。「木の葉ではなく、木の根になりなさい」——本当にこれがあなたのモットーなのか。思慮のない者よ。不注意な者よ。あなたは、自分がささやかな利益を得たと思うや否や満足する。あなたはわたしの旨を少しも気にかけない。これからは注意を払い、受動的になってはならない。否定的になってはならない。あなたが仕える時は、わたしにもっと頻繁に近づき、わたしともっと交わりなさい。これがあなたの唯一の脱出の道である。わたしはあなたがすでに自分自身を否定し、自分の欠点を知り、また自分の弱点を知っていることに気づいている。しかし、知ることだけでは十分ではない。あなたはわたしと協力しなければならない。そして、いったんわたしの意図を理解したら、それらをすぐに実行に移しなさい。これがわたしの重荷への配慮を示す最良の方法であり、わたしに従う最良の方法である。

あなたがわたしをどのように扱おうが、わたしはあなたとすべての聖徒たちの上にわたしの旨を遂行したいのだ。そしてわたしはわたしの旨が妨げられずに全土で成し遂げられることを願う。このことに十分留意しなさい。これはわたしの行政命令に関することである。あなたはほんの少しも恐れていないのか。あなたは自分の行動やふるまいを思い、恐れに震えていないのか。すべての聖徒たちの間に、わたしの意図を感じ取れる者はほとんどいない。あなたはわたしの旨を完全に熟慮する例外的な人間になりたくはないのか。あなたは知っているか。現在緊急なわたしの意図は、わたしの旨を完全に熟慮することができる一群の人々を探し出すことである。あなたはその一人になりたくはないか。あなたはわたしのために自らを費やし、わたしに自らを捧げたいとは思わないのか。あなたは最小限の代価を払おうとも、わずかな労力を捧げようとしめない。もしこのようなことが続くなら、わたしの苦心の努力はあなたがたに無駄に費やされたことになる。わたしがそれを指摘した後も、あなたはこの問題の深刻さをまだ理解しないのか。

「わたしのために心から尽くす者を、わたしは大いに祝福する」。これが分かるか。わたしはこれを何度もあなたに告げたが、あなたはまだ多くの疑念を持ち、家族環境を恐れ、外部の環境を恐れている。あなたは何が自分のためになるのか、本当に分かっているのか。わたしは正直で、単純で、率直な人たちだけを用いる。わたしに用いられることでは、あなたは幸せで、喜んでいるが、なぜまだそんなに心配しているのか。わたしの言葉はあなたに全く影響しないということだろうか。わたしは、あなたを用いていると言ったが、あなたはそれを堅く信じることができない。あなたは、わたしがあなたを見捨てることを恐れ、常に疑っている。あなたの観念はとても頑なである。わたしがあ

なたを用いていると言え、あなたを用いているのだ。どうしてあなたはいつもそんなに疑い深いのか。わたしは十分明瞭に語っていないということなのか。わたしが言った言葉はすべて真実である。真実でない言葉は一つもない。わが子よ！わたしを信頼しなさい。わたしに尽くしなさい。そうすれば、わたしは必ずあなたに尽くそう。

第五十六章

わたしは悪を行う者、権力を振るう者、そして神の子らを迫害する者たちを、罰する行動を開始した。これからは誰であれ、心の中でわたしに逆らう者には、必ずわたしの行政命令の手が下るだろう。このことを知りなさい。これはわたしの裁きの始まりであり、誰かに慈悲が示されることも、誰かが容赦されることも一切ない。わたしは義を実践する公平な神だからだ。このことは皆が認識しておいたほうがよい。

わたしは悪を行う者を罰したいわけではない。それはむしろ、彼らが自身の悪行によって自らにもたらした報いなのだ。わたしは誰をも急いで罰することはせず、誰をも不当に扱うことはなく、すべての者に対して義である。わたしはわたしの子らを間違いなく愛し、わたしに反抗する悪人たちを間違いなく憎む。これがわたしの行動の背後にある原則である。あなたがた一人一人が、わたしの行政命令について何らかの識見を得なければならぬ。そうでないと、わずかな恐れも持たず、わたしの前で不注意に行動することになる。さらに、わたしが何を完全にしたいのか、何を成し遂げたいのか、何を得たいのか、またわたしの国がどんな人間を必要としているのかも理解できないことだろう。

わたしの行政命令は次のとおりである。

1. 誰であれ、心の中でわたしに逆らう者は裁かれる。
2. わたしに選ばれた者たちは、間違った考えを持つとただちに懲らしめられる。
3. わたしを信じない者は、脇へ置いておき、最後の最後まで不注意に話し行動させておく。そして最終的に、徹底的に罰し懲らしめることになる。
4. わたしはいかなる時も、わたしを信じる者を守り世話する。そしていかなる時も、救いを通して彼らにいのちを与える。その人々はわたしの愛を得ることになり、決して躓いたり、道を見失ったりすることはない。彼らの持つどんな弱さもただ一時的なものとなり、わたしは決してそれらを思い出さない。
5. 信じているように見えても本当は信じてない者たち、すなわち神がいることは信

じているがキリストを求めはせず、かといって抵抗もしない者たちは、最も惨めな種類の人々である。わたしは自らの業を通して、彼らにはっきりと理解させる。そのような人々はわたしの行為を通して救い、取り戻すことになる。

6. 長子たち、すなわちわたしの名を最初に受け入れた者たちは、祝福されることになる。あなたがたには必ずや最高の祝福を授け、それを心ゆくまで楽しめるようにしよう。誰一人それを妨げることはないだろう。これはすべて、あなたがたのために完全に用意されている。これがわたしの行政命令だからだ。

あなたがたは万事において、わたしの手のあらゆる行いと、わたしの心のあらゆる思いを見ることができなければならない。すべてはあなたがたのためではないのか。あなたがたのうち、誰がわたしのためにいるのか。あなたがたは自らの心の中の思いや、話す言葉を吟味したことがあるのか。そうしたことに真面目に取り組んだことがあるのか。頭の混乱した者たちよ。自堕落な者たちよ。あなたがたは聖霊の抑制を受け入れない。わたしはあなたの中で何度となく声を発したが、何の反応もなかった。これ以上鈍感であってはならない。あなたの本分はわたしの旨を把握することであり、さらにそれはあなたが入るべき道でもある。あなたは当惑しており、識見がなく、わたしがあなたの中で何を成し遂げようとしているのかや、あなたから何を得たいと思っているのかを、はっきりと理解していない。わたしの旨を把握するには、まずわたしに近づき、もっとわたしと交わることから始めなければならない。あなたはいつもわたしの旨を把握できないと言っている。あなたがすでに自分自身のもので満たされていたら、どうやってあなたに働きかけることができようか。あなたは積極的にわたしの前に来ようとせず、ただ消極的に待っているだけだ。わたしはあなたを虫のようだというが、あなたはそれを不当だと感じ、受け入れようとしない。今度こそ立ち上がってわたしと協力するべきだ。消極的になってはならない。それはあなたのいのちを後退させる。積極的になることは、他人ではなく自分自身に利益をもたらすのだ。まだそのことを認識せず、理解していないのか。わたしの旨は絶えずあなたの中で露わにされている。それに気づいていないのか。なぜそれに注意を払ったことがないのか。なぜわたしの旨を把握できたことがないのか。わたしの旨を把握することは、本当に何の利益ももたらさないのか。

わたしはあなたがあらゆる面でわたしの旨に配慮を示すことを願っている。そうなればわたしは、あなたを通して、行くべき道と休むべき家を持つことができるからだ。もうわたしの邪魔をするのはやめなさい。それはあまりに無情だ。あなたはわたしの言葉をまったく理解しておらず、それに反応することもない。今がどういう時なのか見てみ

なさい、もう待っている場合ではないのだ。わたしの足跡にしっかりとついて来ないなら、もう手遅れになり、ましてそれを贖う術などあるはずもない。

第五十七章

あなたは自分の一つひとつの思い、考え、そして行動を吟味したことがあるか。そのうちのどれがわたしの旨と一致しているかしていないか、はっきり理解しているのか。あなたにはこれらを見分ける能力が全くないのだ。どうしてわたしの前に来なかったのか。わたしがあなたに言わないからか。それとも何か他の理由があるのか。あなたはこれを知るべきである。怠慢な者は絶対にわたしの旨を把握することができず、大いなる照らしと啓示を受けることができないことを知りなさい。

あなたは教会が糧を得ることができず、真の交わりに欠けている理由を見つけたか。これにつながった要因のうち、幾つが自分に関係しているのか、あなたは気付いているか。わたしは、あなたがいのちを与え、わたしの声を放つように指示したではないか。あなたはそうしたのか。あなたは兄弟姉妹たちのいのちにおける進歩を遅らせることへの責任をとることができるか。あなたは、問題に直面すると、静かに落ち着いているのではなく、むしろ取り乱している。あなたは本当に無知である。わたしの声は聖徒たちに向かって発せられるべきである。聖霊の働きを抑制してはならない。また、わたしの時間を遅らせてはならない。それは誰の恩恵にもならない。わたしは、あなたが自らを、心も体も、完全にわたしに捧げることを願う。そうすれば、あなたのすべての思いや考えがわたしのためとなり、あなたがわたしの考えと気遣いを共にし、あなたの為す一切のことが自分のためではなく、今日のわたしの国とわたしの経営（救い）のためになるのだ。それのみがわたしの心を満足させる。

わたしが為したことは何であれ、証拠がないわけではない。なぜあなたはわたしに倣わないのか。なぜあなたは自分が為したことの証拠を求めないのか。あなたはわたしにこの上何と言って欲しいのか。わたしはあなたの手を取って教えたが、あなたは学ぶことができなかった――あなたは非常に愚かである。もう一度最初からやり直したいのか。落胆してはならない。あなたはもう一度立ち直って、聖徒たちと共有する希望と願いのために、自分自身を完全に捧げなければならない。次の言葉を憶えておきなさい。「わたしのために心から尽くす者を、わたしは必ず大いに祝福するであろう」。

何をやるにしても、あなたは、やみくもにではなく、秩序ある方法でやらなくてはならない。あなたは自分の手の甲を知っているように聖徒の状態を知っているとでもほん

とうに言いたいのか。それは、あなたに知恵が欠けていること、このことをまったく真剣に受け止めておらず、そのことに少しも時間を費やしていないことを示している。あなたがそのことにほんとうに全部の時間を費やすことができれば、あなたの内的状態はどのようになるのか見てみなさい。あなたは主観的な努力をすることは求めず、ただ客観的な理由を探すだけで、わたしの旨に対して配慮の片鱗さえ示すことがない——それはわたしを深く傷つけた。このようなままでいてはならない。あなたは、わたしがあなたに与えた祝福を受け入れないということなのか。

ああ、神よ！あなたの子はあなたに負債を負っています。わたしは、あなたの働きを真剣に受け止めず、あなたの旨に考慮を示したことも、あなたの勧めに忠実だったこともありませんでした。あなたの子はこれらのすべてを変えたいと思っています。わたしを見捨てないでください。わたしを通してあなたが働きを為し続けますように。ああ、神よ！あなたの子をたったひとりにすることなく、いつもわたしと共にいてください。ああ、神よ！あなたの子は、あなたが愛してくださることを知っていますが、わたしはあなたの旨を把握することができず、あなたの重荷への配慮を示す方法を知りません。また、あなたがわたしに委ねられたことを達成する方法を知りません。教会を牧会する方法など、なおさら分かりません。あなたは、わたしがこのことで絶望し、悩んでいることを知っておられます。ああ、神よ！いつもわたしを導いてください。今になってやっと、わたしは自分にどれくらい欠けがあるかを感じることができます。それはあまりに多いのです。わたしはそれを言葉で言い表せません。あなたの全能の手によって、あなたの子に恵みを示し、あらゆる時にあなたの子を支え、あなたの子があなたの前で完全にひれ伏すことができるようにしてください。もう自分で選択することも、自分の思いや考えを抱くこともないようにしてください。ああ、神よ！あなたは、あなたの子がすべてを全くあなたのために、すべてを全く今の神の国のために為したいと願っていることを知っておられます。あなたは、わたしがこの瞬間何を考えているのか、わたしが何をしているのかを知っておられます。ああ、神よ！ご自分でわたしを探ってください。わたしはあなたがいかなる時にもわたしと一緒に歩き、わたしの人生の中でわたしと共にいてくださり、それによってあなたの力がわたしの行動に伴うことを、ただ願います。

第五十八章

わたしの旨を把握すれば、わたしの重荷を考慮することができるようになり、光と啓

きを得て、解放と自由に至ることができる。それはわたしを満足させ、わたしのあなたに向けた旨が遂行され、すべての聖徒に養いをもたらし、地上にあるわたしの国を固く揺るぎないものにする。今、最も重要なことは、わたしの旨を把握することである。これはあなたがたが入るべき道であり、さらに、一人ひとりが果たすべき本分である。

わたしの言葉はあらゆる病を治す良薬である。わたしの前に喜んで来ることを望む限り、わたしはあなたを癒し、わたしの全能性、素晴らしい業、義、威厳をあなたに見えようにする。さらに、あなたがたに自分の墮落と弱点をいま見ることができるようにする。わたしはあなたの中のあらゆる状態を完全に理解している。あなたはいつも心の中で物事を行い、外には見せない。わたしはあなたが行なうあらゆることについて、さらに明確に理解している。しかし、あなたはわたしが何を賞賛し、何を賞賛しないかを知っているはずである。この二つを明確に区別すべきであり、これをいいかげんに扱ってはならない。

「我々は神の重荷への配慮を示さなければならない」とあなたはただ口先で言うだけである。しかし事実直面すると、神の重荷が何であるかを十分に知っているにもかかわらず、まったく考慮しない。あなたは極めて混乱しており、愚かで、さらには極端なまでに無知である。人間を取り扱うことがいかに難しいかは、これで説明がつく。人間は、「どうしても神の意図を把握できないが、把握できれば、それに従って必ず行動する」などと、聞こえの良い言葉を口にするだけである。これがあなたがたの実状ではないのか。誰もが神の意図を、病気の原因が何であることを知っているが、極めて重大な問題は、進んで実践しないことである。これが人間の最大の困難である。直ちにこれを解決しなければ、いのちにとっての最大の妨害となる。

第五十九章

あなたが遭遇する環境において、さらにわたしの旨を求めなさい。そうすれば、必ずわたしの承認を得られる。探し求めることをいとわず、わたしへの畏敬を持ち続ける限り、あなたに欠けているものをすべてあなたに授ける。教会は今、正式な訓練に入り、すべてが正しい経路にある。それが未来に起こることの前触れであった時とは、事情はもはや違う。あなたがたは混乱してはならず、識別力を欠いていてはならない。あなたがたがあらゆることにおいて現実に入ることをわたしはなぜ要求するのか。あなたは本当にこれを経験したのか。わたしがあなたがたを満足させるように、わたしのあなたがたへの要求において、あなたがたはわたしを本当に満足させることができるのか。偽っ

てはならない。わたしはあなたがたに寛容であり続けるが、あなたがたはいつになっても善悪の区別ができず、感謝を表せない。

わたしの義、わたしの威厳、わたしの裁き、わたしの愛。わたしが所有し、わたしの存在そのものであるこれらのものを、あなたは本当に味わったことがあるのか。あなたがたは本当に思慮がなく、わたしの旨をどうしても察知しない。わたしが用意する祝宴はあなたがた自身が味わわなければならないと、わたしはあなたがたに繰り返し告げた。しかし、あなたがたはそれを何度もくつがえし、環境の良し悪しを見分けることができない。これらの環境のうちのどれが、あなたがた自身によるのか。どれがわたしの手によるのか。自己弁解は止めなさい。わたしにはすべてが完全に明瞭に見える。事實は、あなたがどうしても探し求めないということである。これ以上何が言えるのか。

わたしの旨を察知する者をわたしは常に慰め、彼らが苦しみ害を被ることを許さない。今最も重要なことは、わたしの旨に従って行動できることであり、これを行う者は必ずわたしの祝福を受け、わたしの保護の下に置かれる。誰が、本当に完全にわたしのために自らを費やし、わたしのために全てを捧げることができるのか。あなたがたは皆、中途半端である。家や、外の世界のこと、食べ物、衣服のことをいつも考えている。わたしの前で、わたしのために何かをしようとして、心の奥ではまだ家にいる妻や子供、両親のことを思っている。それらは皆あなたの所有物なのか。なぜそれらをわたしの手に委ねないのか。わたしを十分に信じていないのか。それとも、わたしがあなたに不適切な手配をすることを恐れているのか。どうしても肉の家族のことを心配するのか。あなたは常に家族を恋しがっている。あなたの心の中にはわたしの場所があるのか。まだわたしにあなたの内面を支配させ、あなたの全存在を占めさせることについて話している。これらはみな欺瞞的な嘘である。あなたがたのうち何人が心から教会のために尽くしているのか。誰が自分のことは考えずに、今日の神の国のために行動しているのか。このことを注意深く考えなさい。

わたしが自らの手であなたがたを打ち、駆り立てるしかないところまで、あなたがたはわたしを追い詰めた。わたしはもはやあなたがたをなだめて説得しない。それはわたしが知恵ある神だからである。わたしへの忠実さに従って、わたしは人をそれぞれ取り扱う。わたしは全能なる神である。誰がわたしの前進を阻もうなどとするであろうか。これからは、わたしに忠実でない者にはすべて、わたしの行政命令が必ず下り、彼らはわたしの全能性を思い知る。わたしが望むのは多数の人間ではなく、優秀な者たちである。誰であれ不忠実な者、不誠実な者、曲がった行為や欺瞞に関わる者をわたしは見捨

て、罰する。いまだにわたしが憐れみ深いとか、愛にあふれて優しいなどと思ってはならない。そのような思いは放漫である。わたしがあなたに調子を合わせるほど、あなたは否定的、受動的になり、自己を捨て去ることに気が進まなくなることを知っている。人がここまで難しくなると、わたしにできることは絶えず人を駆り立てて引きずることだけである。このことを知りなさい。これからは、わたしは裁きの神である。もはや人間が想像するような憐れみ深く、優しく、愛にあふれた神ではない。

第六十章

いのちが成長することは簡単なことではない。それには、ある過程が必要であるが、更には、あなたがたが代価を払うことができ、わたしと一致して協力しなければならないのである。そうすれば、あなたがたはわたしに称賛されるだろう。天地万物はわたしが発する言葉により建て上げられ、完成される。そして、わたしにあって、全てのことは達成可能である。わたしの唯一の願いは、あなたがたが早く成長し、わたしの肩の荷を取って自分の重荷として担い、わたしに代わって労することである。そうすれば、わたしの心は満足するであろう。父の重荷を背負おうとしない子がいるだろうか。子のために昼夜勞しない父親がいるだろうか。だがあなたがたはわたしの旨を理解しない。あなたがたはわたしの重荷について考慮せず、わたしの言葉はあなたがたにとっては重みがなく、あなたがたはわたしの言葉通りにはしない。あなたがたはいつでも自分が主人なのだ。何と利己的だろうか。あなたがたは自分の事しか考えていない。

あなたは本当にわたしの旨を理解しているのか。それともあなたは単に理解しないふりをしているのか。なぜいつもそのように気ままに振る舞うのか。自分がそのように行動する中でわたしを公平に扱っていると、あなたの良心は言っているのか。あなたは病の原因を知るや否や、なぜ癒やしを求めてわたしと交わらないのか。あなたに言おう。今後、あなたがたが肉体の病を患うことはない。もし体のどこかに不調を感じたならば、外部に原因を探して駆けずり回ってはならない。そうではなく、わたしの前に来て、わたしの意図を知ることが求めなさい。このことを覚えておくか。この日から、あなたがたは完全に自分の肉体を離れて、霊の世界に入る。つまり、あなたがたの体は二度と病に侵されることはない。これはわたしの約束である。あなたがたはこれを喜ばしく思うだろうか。嬉しいだろうか。これがわたしの約束であり、さらには、あなたがたが長く待ち望んだことだ。恵まれた人々よ、今日それがあなたがたの上に成就されたのだ。なんと素晴らしく、計り知れないことか。

わたしの働きは日夜前進し、一瞬も止まることがない。それは、わたしの差し迫った願いとは、あなたをわたしの心に適う者にすることだからであり、わたしの心はあなたがたによってすぐに慰められるためであるからだ。わが子よ！あなたがたがわたしの善き祝福にあずかる時がきた。過去に、あなたがたはわたしの名のために苦しんだが、あなたがたの試練の日々は終わった。誰かが、わたしの子らの髪の毛一本でも傷つけるのなら、わたしはその者を簡単には赦さず、その者が再び立ち上げられることも決してない。これがわたしの行政命令であり、これに違反する者は誰であれ、自らに危険を招くことになる。わが子たちよ。心ゆくまで楽しむが良い。喜びに歌い、歓呼せよ。あなたがたは二度といじめられたり、虐げられたりすることはなく、二度と迫害されることもない。わたしへの信仰においてこれ以上恐怖に囚われてはならない。あなたがたは自分の信仰を公に宣言すべきである。宇宙と地の隅々を震わせるほどの大声で、わたしの聖なる名を呼びなさい。彼らに見下され、痛めつけられ、拷問を受けた者たちが、彼らの上に立ち、彼らを支配し、治め、更に重要な事に、彼らを裁くようになることを、彼らに見せるのだ。

あなたがたは自分の霊的成長のことだけを考えなさい。そうすれば、わたしは更に素晴らしい祝福をあなたがたに与え、あなたがたがその祝福を享受するようにする。そしてその祝福によってあなたがたはその比類なき甘美さを更に味わうようになり、それらの祝福の限りない奥義と、それが計り知れないほど深遠であることを強く感じるようになるのだ！

第六十一章

自分自身の状態を知ったとき、あなたはわたしの旨を達成するだろう。実際、わたしの旨を把握するのは難しくない。過去にあなたはわたしの意図に沿って求めたことがないだけである。わたしが欲するのは、人間の観念や人間の思いではなく、ましてあなたのお金や財産ではない。わたしが欲しいのはあなたの心である。分かるだろうか。これがわたしの旨であり、それ以上に、それがわたしの得たいものである。人々はいつも心の中の観念を用いてわたしを裁き、自分の基準を使ってわたしの背丈を測定する。人間のうちにあるものでは、これは対処するのが最も難しいことである。そして、それはわたしが忌み嫌うもの、最も憎むものである。あなたは分かるだろうか。何故なら、これは最も一目瞭然なサタンの性質であるからだ。そして、あなたがたの霊的背丈は低いので、あなたがたは頻繁にサタンの狡猾な計略に陥る。あなたがたはどうしてもそれらを

識別することができない。あなたがたがサタンに騙されないように、いかなる時もあらゆる面で用心するように、わたしはあなたがたに何度も告げた。しかし、あなたがたは耳を傾けず、わたしの言うことを平気で無視するので、あなたがたのいのちにおいて損失を被ることになり、後悔しても遅すぎることになるのである。とにかく、これをあなたの将来の探求のための教訓とすることは、あなたにとって良いことではないだろうか。わたしはあなたに言う。すぐに否定的になることは、あなたのいのちに損失をもたらす。そして、そのひどさは極みにまで達するであろう。これが分かったら、あなたは目を覚ますべきではないか。

人々は早く結果を出すことに待ち切れず、目先のものだけを見る。わたしは権力を持っている者を罰し始めたと言っていると、あなたがたはさらに不安になり、尋ねる。「なぜそれらの人たちはまだ権力を持っているのですか。神は空しい言葉を語ったのか。」人間の観念は非常に頑固である。あなたがたはわたしが言うことの意味を理解しない。わたしが罰するのは、それらの邪悪な者たち、わたしを否定する者たち、わたしを知らない者たちであり、わたしは、わたしを信じているだけで真理を求めない者を無視する。あなたがたは本当に非常に無知である。あなたがたはわたしが言ったことを全く理解していない。これが事実であるにもかかわらず、あなたがたは自分が成熟している、物事を理解している、わたしの旨を理解することができると考えて、今もなお自分で自分を励ましている。わたしはしばしば、すべての物事はキリストへの奉仕であると言うが、あなたはこれらの言葉を心から理解しているか。あなたは本当にこれらの言葉を知っているか。わたしは誰をも軽率に罰することはない、とわたしは以前言った。宇宙世界の一人ひとりの人間がわたしの適切な采配に従うのだ。わたしの罰の対象となる者、キリストのために奉仕する者（わたしは彼らを救わない）、わたしに選ばれた者、わたしに選ばれたが後になって排除の対象となる者、これら全ての者たちをわたしの手の中に持っている。わたしが選んだあなた――わたしが更に理解するあなたのことは言うまでもない。わたしがこの段階でやることと、次の段階でやることは、すべてわたしの賢明な采配に従う。あなたはわたしのために何かを事前に準備する必要はない。ただあなたの楽しみを待っていなさい。これは、あなたにふさわしいことである。わたしはわたしのものを支配し、わたしは厚かましくも不平を言う者や、わたしについて別の意見を持つ者をそう簡単には容赦しない。わたしが定めた行政計画がこの段階まで進んだので、最近わたしの怒りはしばしば燃え上がる。わたしに感情がないと思ってはならない。何故なら、どんな物も、どんな人間も、どんな出来事も、わたしの歩みを妨げることはでき

ないとわたしは以前言ったからである。わたしはわたしの言うことを行うのであり、これがわたしそのものである。そしてさらに、それはわたしの性質の最も目に見えて明白な表明である。あなたがたは皆わたしの子であり、わたしはあなたがた全員を愛しているので、わたしはすべての人々を同じように扱う。自分の息子のいのちに責任を持たない父親がいるだろうか。息子の未来のために日夜勞しない父親がいるだろうか。あなたがたの中の誰が知っているのか。誰がわたしの心に配慮を示すことができるのか。あなたがたは常に自分の肉の快樂のための計画を立て準備しており、わたしの心については何ひとつ悟ることがない。わたしは心が裂かれんばかりにあなたがたのために心配しているが、あなたがたは肉の快樂、食べたり飲んだりすること、眠ること、服装のことはばかり渴望している――あなたがたには良心の欠片もないのか。そうであるなら、あなたがたは人間の服を着た獣である。わたしは言い過ぎてはおらず、あなたがたはそれを忍ぶことができるはずである。これがあなたがたを救う最善の方法であり、それ以上に、わたしの知恵がそこにある――サタンの致命的な弱点を狙い、サタンを圧倒的に敗北させ、完全に破壊する。あなたが悔い改めて、あなたの古い性質を取り除き、新しい人の姿を生きるためにわたしに抛り頼むことができる限り、わたしの心は完全に満足するだろう。それは、これこそが正常な人間性を生きることであり、わたしの名を証しすることであり、わたしを最も幸せにすることであるからだ。

あなたは絶えずわたしの近くにいななければならない。わたしの歩調は日々速くなることが分かるだろう。あなたがほんの束の間でも靈的な交わりを欠くなら、わたしの裁きが直ちにあなたの上に下されるだろう。この点について、あなたは深い認識をすでに得ている。あなたを懲らしめるのは、わたしがあなたを愛していないからではなく、あなたへの愛故にあなたを訓練するためであるからだ。さもなければ、あなたは成長せず、聖靈の抑制なしに常に放縱にふるまうだろう。これはわたしの知恵のさらなる一面である。

第六十二章

わたしの旨を把握するということは、単にあなたがそれを知るためではなく、あなたがわたしの意図に従って行動するためでもある。人々はわたしの心を理解しない。わたしが「東だ」と言えば、行ってそれを検討し、思い巡らしながら言う。「本当に東だろうか。たぶん違うのではないか。そんな簡単には信じられない。自分の目を見る必要がある。」あなたがたという人々は本当に扱い難い。また、あなたがたは真の従順が何か

を知らない。わたしの意図を知ったなら、ためらわずにただそれを行いなさい。考える必要などないのだ。あなたはいつでもわたしの言うことを疑ってかかり、馬鹿げた解釈をする。それではどうやって本当に識見を得ることなど出来ようか。あなたは決してわたしの言葉によって成長しようとはしない。以前にも言った通り、わたしが望むのは、大勢の人々ではなく、選ばれた僅かな人達なのだ。わたしの言葉によって成長することを重視しない者は、キリストの良き兵士となるに値せず、代わりにサタンの手下として行動し、わたしの働きを妨害するのだ。これを些細なことと考えてはならない。わたしの働きを妨げる者は誰でも、わたしの行政命令に違反するものであり、わたしはそのような者を絶対に厳しく懲らしめる。つまり、今後あなたが一時でもわたしから離れるなら、わたしの裁きがあなたに下るのである。わたしの言葉を信じないのであれば、わたしの顔の光りの中に生きるときにあなたがどのような状態であるか、また、わたしから去るときには、あなたがどのような状態であるのかを知るために、あなたは自分で試して見るがよい。

あなたが霊の中に生きていなくても、わたしは恐れない。わたしの働きは現段階まで継続されてきた。それならば、あなたに何ができるだろうか。わたしはわたしの段階に応じて事を行うのだから、あなたが心を騒がせることはない。わたしの働きはわたし自身が行う。わたしが何かをすれば、人々はみな完全に納得する。そうでなければ、わたしは人々を更に厳しい刑罰によって取り扱う。これはわたしの行政命令にもっと深く関わっている。わたしの行政命令は既に発布され、執行されていることが分かる。もう隠されてはいないのだ。あなたはそれをはっきりと見なくてはならない。全ての側面はわたしの行政命令に関連しており、わたしの行政命令に違反する者は誰でも多大な損害を被る。これは勿論、些細なことなどではない。あなたがたは本当にこのことに関する識見を持っているか。この側面をあなたがたは完全明瞭に理解しているか。それでは交わりを始めよう。世界の全ての国々と全ての人々は、わたしの手の中で管理されており、彼らの宗教に関係なく、みなわたしの玉座に集って来なければならない。勿論、裁きを受ける人々の中には、底なしの穴に投げ込まれる者もいれば（彼らは滅びの対象であり、完全に焼き尽くされて無くなるのである）、裁きの後にわたしの名を受け入れて、わたしの国の民となる者たちもいる（彼らは1000年間だけそれを享受する）。あなたがたは永遠にわたしとともに王位を持つ。また、あなたがたはこれまでわたしのために苦しんできたが、その苦しみに変えて、わたしはあなたがたに尽きることのない祝福を与える。わたしの民である者たちは残り、ひたすらキリストに奉仕する。享受するという

のはただ楽しむことだけを意味するのではなく、この人々が災いから守られることも意味する。それが、あなたがたに対するわたしの今の要求がかくも厳しく、万物に対する要求がわたしの行政命令に関連していることの内なる意味である。何故なら、もしあなたがたがわたしからの訓練を受け入れないなら、あなたがたが相続すべきものを、わたしがあなたがたに与えることなどないからである。そうは言っても、あなたがたはまだ苦しむ事を恐れており、魂が傷つくことを恐れ、常に肉の事に思いを馳せ、いつも自分のために準備したり計画したりしている。わたしはあなたがたに相応しい計画を立てたのではないか。それなのになぜ、あなたは自分のために準備し続けるのか。あなたはわたしをそしっている。そうではないか。わたしはあなたのために計画するが、あなたはそれを拒絶して自分の計画を立てるではないか。

あなたがたは口先では良いことを言うかもしれないが、実際には、わたしの旨を全く気にしない。あなたに言う。あなたがたの中に、心からわたしの旨に配慮を示すことができる者がいるなどとは、決してわたしは言わない。たとえあなたの行いがわたしの旨と一致しているとしても、絶対にあなたを褒めたたえなどしない。これがわたしの救いの方法なのだ。これが現状であるのに、あなたがたはいまだに自己満足している時があり、自分だけが素晴らしいと考え、自分以外の全ての人を軽蔑している。これは人間の墮落した性質の一側面である。あなたがたはみなわたしが指摘するこの点を認めるが、それは表面的である。ほんとうに変わることができる為には、わたしに近づかなくてはならない。わたしと交わりなさい。そうすればわたしはあなたに恵みを施す。ある者たちは何もしないで座ったまま、他の誰かが蒔いたものを刈り取ることを望む。手を伸ばすだけで服を着せてもらえ、口を開けるだけで食べさせてもらえろと思ひ、その食べ物でさえ、飲み込もうとする前に誰かが噛み砕いてくれるのを待つのである。そのような人達は最も愚かで、他の誰かが食べたものを好んで食べる。そして、これこそが人間の最も怠けた側面の現れなのである。これらのわたしの言葉を聞いたあなたがたは、これ以上聞き流してはならない。細心の注意を払うこと、これこそが正しい道である。そうして初めて、わたしの旨は満たされるのである。そしてこれこそが最善の服従なのだ。

第六十三章

自分自身の状態を理解しなさい。そしてそれ以上に、自分が歩むべき道を明確に知りなさい。わたしがあなたの耳を引っ張り上げて物事を指摘するのを、もうこれ以上待つ

ていてはならない。わたしは人の心の最も奥深いところを探る神であり、わたしはあなたの一つひとつの思いや考えを知っている。あなたの行いや振る舞いを知っているのは尚更である。だがあなたの行いや振る舞いには、わたしの約束を伴っているだろうか。わたしの旨を伴っているだろうか。そのことを本気で求めたことがあるだろうか。ほんとうに時間をかけて求めたことはあるだろうか。本気で努力したことはあるだろうか。わたしはあなたを批判している訳ではない。あなたがたはこの側面を無視しているだけだ。あなたがたはいつも混乱して何に関しても明確に理解することができない。あなたにはその原因が分かるだろうか。それは、あなたがたの考えが不明瞭で、あなたがたの観念はすっかり根付いてしまい、その上、あなたがたはわたしの旨になど配慮を示さないからだ。一部の人たちは次のように言うだろう。「わたしたちがあなたの御心に配慮を示さないなどと、どうして言えるのですか。わたしたちは常にあなたの御心を把握しようとしているのですが、どうしてもそれが把握出来ないのです。一体どうすればいいのでしょうか。わたしたちが何の努力もしないとあなたは本当に言えるのですか。」あなたに聞こう。あなたは、自分がわたしに対してほんとうに忠誠を尽くしているなどと言う気か。完璧な忠誠をもって自分をわたしに捧げているなどとあえて言うのは誰か。残念ながら、そう言える者はあなたがたの中にひとりとしていないだろう。何故なら、言うまでもなく、あなたがたはみな自分の選択と好みに従い、さらには、自分の意図を持っているからである。偽ってはならない。わたしはずっと前からあなたがたがその心に思うことを全て知っていた。敢えて説明する必要があるだろうか。あなたがたは、もっとあらゆる側面から吟味しなければならない（あなたの思いや考え、あなたが言うすべてのこと、一つひとつの言葉、あなたの一つひとつの動作における全ての意図と動機など）。そうすることで、あなたがたは全ての側面においてもっと靈的に成長することができ、更には全き真理を身に着けることができるようになる。

もしわたしがこのように話さなければ、あなたがたは未だに混乱したままで、一日中肉の快楽を渴望し、わたしの旨に配慮しようする意欲などとは全くないだろう。わたしは、あなたがたを救うために、絶えずこの愛の手を使っているが、あなたがたにはそれが分かるだろうか。それに気づいたことがあるだろうか。わたしは心からあなたを愛している。あなたはわたしを心から愛すると言うだろうか。自分に問うてみよ。わたしの前に出て、あなたのひとつひとつの行いにおいて、本当にわたしの吟味を受け入れることができるか。あなたは本当に自分の行動ひとつひとつをわたしに調べさせるだろうか。わたしが、あなたは放蕩にふけていると言うと、あなたはすぐに自己防衛しようと

する。わたしの裁きはあなたに下る。今あなたは真相に目覚めるべきだ。わたしの語ることは全て真実であり、あなたの内的実状を指摘する。ああ、人間たちよ！あなたがたは何と扱い難いことか。わたしがあなたの実状を指摘しなければ、あなたがたは言葉によって心の中で納得することがない。わたしがそうしないなら、あなたがたは、この地上に自分より賢い者はいないと思いながら、いつも自分の古い考えにしがみつき、自分の考え方にこだわる。あなたがたはただ独善的になっているだけではないのか。自己満足と無頓着に溺れ、傲慢でうぬぼれているだけではないのか。それを自覚すべきだ。自分が賢いとか非凡だなどと思わず、自分の欠点や弱点を常に意識すべきだ。そうすれば、わたしを愛するというあなたがたの決意が揺らぐことはなく、かえって益々強固になり、あなたがたの状態も益々良くなるのである。更に大切な事には、あなたがたのいのちが日々更に成長を続けるのである。

あなたがわたしの旨を把握するとき、あなたは自分自身を知るようになり、そうしてわたしをより良く知るようになり、わたしに対する確信が強まっていくのである。今この時にあって、ある人が90%の確信に達することができず、常に浮き沈みが激しく、熱くなったり冷たくなったりしているのであれば、その人は間違いなく捨てられる対象となるだろう。残りの10%は完全にわたしの啓示と照らしにかかっており、それがあって、100%の確信に達するのである。現在、つまり今日、どれだけの人がこのような霊的背丈に達することができるだろうか。わたしは絶えずわたしの旨をあなたに現すので、あなたには常に心の中にいのちの感覚があるはずである。それなのになぜあなたは霊に従って行動しないのか。過ちを犯すことを恐れているのだろうか。そうであれば、なぜ実践することに焦点を合わせようとしないのか。あなたに言おう。一度や二度試しただけではわたしの旨を把握することはできない。ある過程を経なければならないのである。わたしはこのことを何度もあなたに言ってきたのだが、なぜそれを実行に移さないのか。自分が不従順だとは思わないのか。あなたは何でも即座に終わらせたり、決して進んで努力しようとせず、時間をかけて物事をしようとすることもない。何と愚かで、それにも増してなんと無知なことか。

わたしがいつでも遠回しにではなく、はっきりと語っていることに、あなたがたは気づいていないのか。なぜいつも鈍く、麻痺していて、物分かりが悪いのか。もっと自分を吟味し、分からないことがあったなら、わたしの前に頻繁に来るべきなのである。わたしはあなたに言う。わたしがこれらのことをあれこれ言うのは、あなたがたをわたしの前に導き出すためだ。なぜいつまでもそれが分からないのか。わたしの言葉があなた

がたを混乱させたからなのか。それとも、あなたがたがわたしの言葉のひとつひとつを真剣に受け止めなかったからなのか。あなたがたがわたしの言葉を読むときは、自分たちのことを良く理解し、わたしに負い目があるとか、わたしの旨を把握できないとか言う。だがその後はどうだろうか。まるでそれらの言葉は自分たちには全く関係ないかのようで、あたかも、全く神を信じていない人のようではないか。見聞きしたことを消化する間もなく、ただ飲み込んでいるだけではないのか。あなたがたがわたしの言葉を享受するときは、馬にまたがって駆け抜けながら、ちらりと花を見るようなもので、わたしの言葉の中にあるわたしの心を把握しようなどとはしない。人々は次のようである。彼らはいつでも謙虚に見せたがるが、そのような人々は最も忌み嫌われるべきである。そのような人々が他の人達と交わる時は、いつでも他の人の前で、自分のことを知っていると言いたがるが、あたかも自分がわたしの重荷に考慮示しているかのようにならせたがるが、実は自分たちが一番愚かではなかった人間なのである。（彼らは、兄弟姉妹たちとの交わりの中で、わたしに関する真の識見や認識を分かち合うのではなく、ただ自己顕示したいだけ、目立ちたいだけなのである。わたしはそのような人々を最も忌み嫌う。彼らはわたしをそしり、わたしを軽んじているからだ。）

わたしは頻繁に、もっとも素晴らしい奇跡をあなたがたの中に現わす――あなたがたにはそれが見えないのだろうか。現実と呼べるものは、わたしを心から愛する者たちによって実際に生きられる。あなたがたはそれを見ていないのか。それはわたしを知ることが出来るということの最も良い証拠ではないのか。わたしに対する更に良い証しではないのか。だがあなたがたはそれを認識しない。教えて欲しい。サタンによって墮落させられた、汚く、穢れ、乱れきったこの地上で、現実を生きることが出来る者は誰か。人々はみな墮落し、空っぽではないのか。いずれにせよ、わたしの言葉は頂点に達した。これ以上分かりやすい言葉はない。どんな間抜けでもわたしの言葉を読んで理解することができる。それならば、あなたがたは全く努力をしていないというだけのことではないのか。

第六十四章

あなたがたはわたしの言葉に対して愚かな理解の仕方をしてはならない。わたしの言葉をあらゆる側面から理解し、更に解明しようとし、一日一夜に限らず、繰り返し熟考しなければならない。あなたがたは、わたしの言葉のどこにわたしの旨があり、どのようなことにわたしが労苦の代価を払うかを知らない。それでどうやってわたしの旨に配

慮を示すことが出来るというのか。あなたがたは細部に注意を払うことができない。ただ表面にだけ重点を置き、まね事をするしかできない。それがあなたがただ。それで霊的だなどと言えるだろうか。それは単なる人間の熱意でしかない。そのようなものをわたしは褒めないばかりか、忌み嫌うのだ。あなたに言う。わたしが忌み嫌うものは、ことごとく排除されなければならない、災害の中で精錬されなくてはならず、わたしの燃え盛る炎と裁きを受けなければならない。そうでなければ、人々は「恐れ」が何かを知ることはなく、放蕩にふけり、人間の視点でばかりわたしを見るようになる――彼らはそれほど愚かなのだ。わたしに近づき、わたしと交わることが、サタンの考えを排除する最善の方法である。あなたがたが皆、裁かれることを避け、いのちにおいて大きな損失を被ることを避けるために、この規則に従って行動することをわたしは願う。

人間を扱うのは非常に難しい。彼らはいつでも外部の人間、出来事、物事、そして自分自身の観念に囚われており、故にわたしの良い証しとなることができず、わたしと上手く協力することができない。わたしはいつでもあなたがたを支え、あなたがたを育てているのだが、あなたがたは最善を尽くしてわたしに協力することがどうしてもできない。このようなことは皆、あなたがたのわたしに対する理解が欠けていることを十分示している。あなたがわたしに対する疑いを全く持たなくなる時が来れば、誰もあなたが真理の道を歩むのを妨げることはできず、人間のいかなる観念もあなたをひき止めることはできない。なぜわたしはこのような事を言うのだろうか。あなたにはわたしの言葉の意味が本当に分かるだろうか。このような言葉をあなたがたにはっきりと示す時にだけ、あなたがたは多少は理解する。人々はそれほど愚かで頭が弱い。針が骨にまで達して初めて、人々は多少の痛みを感じ始める。つまり、わたしの言葉があなたの病の根源を指摘した時にだけ、あなたは完全に納得するということだ。それにも関わらず、あなたがたは時々わたしの言葉を実践したがらず、自分自身を知ろうとしない。ここまで来てもあなたがたが、人間は扱い難いということを理解しないのはなぜなのか。わたしの言葉がはっきりと完全明瞭に語られていないということか。わたしの望みは、あなたがたが心から、誠実にわたしに協力することだ。あなたが語る言葉が耳に心地よいかどうかに関わらず、あなたが率先してわたしに協力して、心からわたしを礼拝できるならば、あなたはわたしの保護の下に来るであろう。そのような人がたとえたいへん無知であったとしても、わたしは彼らが自分の無知を振り捨てることができるように、彼らに啓示を与える。それは、わたしの行いはわたしが言うことと一致しなければならないからである。わたしは、決して守ることのできない約束などしない全能神であるからだ。

わたしの旨は直ちに全ての教会と全ての長子に現わされ、以後隠されるものはひとつもないだろう。全てが明らかにされる日が到来したからだ。つまり、「隠された」という言葉が今後使われることはなく、ましてや、隠されたものが存在することなどもない。全ての隠された人々と出来事と物事は、ひとつひとつ露わにされなくてはならない。わたしは全ての権威を振るう知恵ある神である。全ての出来事と物事と一人ひとりの人間は、わたしの手に握られている。わたしはわたしの段階に応じてそれらを暴露し、それら全てをひとつずつ、秩序に従って露わにする。あえてわたしを騙したり、わたしから何かを隠したりしようとする者について言えば、わたしは必ずやその者を二度と立ち上がれないようにする。あなたがたがみなそれを見ることができるよう、わたしはそうのように行動する。はっきりと見るがよい。わたしの払った苦難の代価は無駄になることはなく、実を結ぶのだ。耳を傾けない者や従わない者は、直ちにわたしの裁きを受ける。それでも敢えてわたしに背こうとするのは誰か。あなたがたは皆、わたしに従わなければならない。あなたに言う。わたしが今日言うことと行うこと、わたしの一つひとつの動作、わたしが持っている思いや発想と計画するものは全て正しく、人間の考える余地はない。わたしがあなたがたに繰り返し、ただ従いさえすればよい、もう何も考える必要はない、と言うのはなぜだろうか。それがその理由である。それでもまだあなたがたに明らかにする必要があるだろうか。

あなたがたの観念があなたがたを妨げているにも関わらず、それでもあなたがたは、自分が努力していないからだとは思わず、わたしに理由があるとばかりにわたしの方を見て、わたしがあなたに啓示していないからだと言う。それは一体どう言うことか。自分では一切責任を負わず、わたしに不平ばかり言う。あなたに警告する。ずっとこのまま続け、代価を払うこともしないのならば、あなたは捨てられる。わたしは一日中大げさに話してあなたがたを怯えさせようとしている訳ではない。これはまったく事実である。そしてわたしは自分の言葉通りに行う。わたしの口から言葉が発せられると、それはたちまち成就され始める。以前であれば、わたしの語った言葉はゆっくりと成就した。しかし今は状況が異なり、物事はゆっくりとは進まない。はっきり言うと、わたしはもう押したりなだめたりすることはなく、あなたがたを駆り立て、あなたがたに強要する。もっと簡単に言えば、遅れずついて来られる者はついて来る。ついて来れない者、歩き続けることができない者は、排除されるということだ。過去には、あらゆる手段で忍耐深くあなたがたに語ってきたが、あなたがたは全く耳を傾けなかった。働きがこの段階まで進んで来た今、あなたがたはどうするつもりなのか。まだ自分の欲しいままに

するのか。そのような人間は完全にされる事はなく、必ずわたしの排除の対象となるであろう。

第六十五章

わたしの言葉はいつもの的を射て、あなたがたの弱みをつく。つまり、あなたがたの致命的弱点を指摘する。そうでなければ、あなたがたはいつまでもぐずぐずして、今がどんな時かもわからないままだろう。このことを知りなさい。わたしは愛という方法を用いてあなたがたを救う。あなたがたがどのように行動しようと関係なく、わたしは自分が認めた事柄を必ず完成させ、間違いは一切犯さない。義なる全能神であるわたしが、誤りを犯すことなどありえようか。それは人間の抱く観念ではなかろうか。答えてみなさい、わたしが行なったり語ったりすることは、すべてあなたがたのためではないか。中には控えめにこう言う人もいる。「ああ、神様！ あなたのなさることはすべてわたしたちのためですが、どのようにあなたと協調すればよいのかがわかりません」と。なんという無知だろう、どうわたしと協力したらよいかわからないとまで言うとは。それはみな恥ずべき嘘だ。そんなことを言うなら、なぜあなたがたは実際、繰り返し肉への配慮を示すのか。あなたがたの言葉は聞こえがよいが、その行動は気楽でも楽しいでもない。このことを理解しなさい、わたしは今日あなたがたに多くを求めておらず、わたしの要求はあなたがたの理解を超えるものでもなく、人間なら成し遂げられることだ。わたしはあなたがたを少しも過大評価していない。わたしが人の能力の限界を知らないことがあろうか。そんなものは完全にはっきりと理解している。

わたしの言葉は絶えずあなたがたを啓いているが、あなたがたの心はあまりにも頑なで、わたしの旨を霊で把握することができない。答えてみなさい、わたしはこれまで何度、食べ物や衣服や外見に注目せず、内なるいのちに注目するようにと注意を促してきたか。あなたがたはただ耳を貸そうとしないのだ。わたしはもう語るのにうんざりしている。あなたがたはそれほど麻痺してしまったのか。まったく感覚がないのか。わたしは言葉が無駄に語ってきたのだろうか。何か間違ったことを語っただろうか。わたしの子らよ、わたしの真剣な意図を思いやりなさい。あなたがたのいのちが成熟すれば、もう何も悩む必要はなくなり、すべてが与えられるだろう。今そうしたことに注目する価値はまったくない。わたしの国は完全に実現されており、公然とこの世に降りてきた。このことは、わたしの裁きが完全に下されたことを一層示しているのだ。あなたがたはそれを体験しただろうか。裁くのは気が進まないが、あなたがたはわたしの心に何の配

慮も示さない。わたしの望みはあなたがたが絶えずわたしの愛による配慮と保護を受けることであり、容赦ない裁きを受けることではない。あなたがたは裁かれることを望んでいるのだろうか。そうでないなら、なぜ繰り返しわたしに近づき、わたしと交わり、交流しようとししないのか。あなたはわたしに冷たく接するが、サタンに考えを吹き込まれると、得意になってそれが自分の意志と一致していると思い込む。あなたが行くことは何一つわたしのためではない。それほどまでにいつもわたしを残酷に扱いたいのか。

わたしがあなたに与えたくないのではなく、あなたがたが代償を払いたがらないのだ。だからあなたがたは手ぶらで、何も持っていないのだ。聖霊の働きがどれほど速く進展しているかわからないのか。わたしが苛立ってじりじりしているのがわからないのか。わたしは協力するよう求めているのに、あなたがたは相変わらず乗り気でない。あらゆる災害が次々に襲ってきて、すべての国、すべての土地が惨禍を経験するだろう。疫病、飢饉、洪水、干ばつ、地震が至るところで発生する。こうした災害は一か所や二か所だけで起こるのではなく、一日や二日だけ起こるのでもなく、広大な領域にわたって広がり、次第に激しさを増していく。そしてあらゆる虫害による疫病が次々に発生し、人同士の相食む現象があらゆる場所で起こるだろう。これはすべての国家、すべての民族に下すわたしの裁きなのだ。わたしの子らよ、あなたがたは災害の苦しみや困難を被ってはならない。わたしはあなたがたが早く大人になり、できるだけ早くわたしの肩の重荷を引き受けてくれることを願っている。どうしてわたしの旨をわかってくれないのか。これから先の働きは、ますます大変なものになるだろう。あなたがたは手一杯のわたしを放っておいて、一人で必死に働かせるほど冷酷なのか。もっとわかりやすく言うと、いのちが成熟する人々は避け所に入り、痛みや苦しみを被ることはない。いのちが成熟しない人々は、苦しみや困難を被らなければならない。わたしの言葉はこの上なく明確ではないか。

すべての者がわたしの聖なる名を知り、わたしを知ることができるよう、わたしの名はあらゆる方向へ、あらゆる場所へと広がらなければならない。アメリカ、日本、カナダ、シンガポール、ソビエト連邦、マカオ、香港、その他の国々のあらゆる職業や地位の人々が、一斉に中国に押し寄せ、真の道を求めるだろう。わたしの名はすでに彼らに証しされており、あとはあなたがたができるだけ早く成熟して、彼らを牧養し導くことができるようになるだけだ。だからわたしは、さらに多くの仕事が待っていると言うのだ。災害に続いてわたしの名が広く伝えられ、あなたがたは注意していないと自分の正当な取り分を失うことになる。怖くはないのか。わたしの名はあらゆる宗教、あらゆる

職業および地位、あらゆる国々、あらゆる宗派の人々に広がる。これはわたしの働きが秩序正しく、緊密な連結の中で行われているということであり、すべてはわたしの賢い采配によって生じる。わたしはただあなたがたが一步一步、わたしの歩みにぴったりと従って前進できることを願うのみだ。

第六十六章

わたしの働きは現在の段階まで継続され、全てわたしの手による知恵ある采配に従い、同時にわたしは偉大な成功を収めた。人間でそのような事ができる者などいるだろうか。むしろ人間はわたしの経営の妨げになるのではないか。わたしに代わってわたしの働きをすることができる者などおらず、まして妨害できる者など一人もないことを、あなたは知らなければならない。わたしがする事を出来る者はおらず、わたしの言うことを言える者もないからだ。それでも尚、人々はわたし——知恵ある全能神を知らない。あなたは、表面では公にわたしを否定こそしないものの、その思いと考えにおいては、わたしに逆らっている。愚か者よ。わたしは人の心の奥深くまで見る神であることを知らないのか。わたしはあなたの言動のひとつひとつを見ていることを、あなたは知らないのか。あなたに言う。二度とわたしは、この口で優しい言葉を発しない。代わりに、その言葉は厳しい裁きの言葉となる。あなたがそれに耐えられるかどうかを見よう。今後、心がわたしの近くにない者、つまりわたしに対する心からの愛がない者は、公然とわたしに反抗する者である。

今日、聖霊の働きは、これまでのやり方は採用されない時点に達し、新たなやり方へと移行するのである。積極的かつ活発にわたしと協力しない者は、ハデス——死の淵へと落ちるであろう（その者たちは永遠の地獄で苦しむ）。新たなやり方とは次のようである。もしあなたの思いと考えが正しくなければ、わたしの裁きは直ぐさまあなたに下る。それには、この世にしがみつ়くこと、富、家族、夫、妻、子ども、両親、食べることや飲むこと、着ることといった、霊の世界の外にある全てのものが含まれる。聖徒たちへの啓きは益々目に見えるようになる。つまり、いのちの感覚がそれまでになく明白になり、絶えず動き続けるようになる。僅かでも妨げになる者は誰でも酷い倒れ方をすることになり、いのちの走路で大きく遅れをとることになる。生ぬるい者、心を尽くして求めない者は、わたしに完全に見捨てられ、例外なくわたしに無視され、1000年間災いの中で苦しみながら過ごす事になる。熱烈に求める者、つまり、常にわたしを妨害する者は、わたしがその者の無知を捨て去り、わたしに忠誠を尽くすようにする。更に

は、そのような者は知恵と知性を得、さらに大きな信仰をもって求めるようになる。わたしの全ての長子に対して、わたしの祝福を二倍にして与え、わたしの愛は常にその者たちの上に留まる。わたしはあなたがたをいつも見守り、サタンの網に掛からないようにする。わたしは万民の間にわたしの働きを開始した。つまり、わたしは働きのプロジェクトをもうひとつ追加したのである。これらの人々は1000年間にわたってキリストに奉仕する者たちであり、膨大な数の人々がわたしの国に押し寄せるだろう。

子どもたちよ。あなたがたは自分の鍛錬を強化しなければならない。あなたがたを待っている働き、あなたがたが引き受けて完了させなければならない働きは数多い。わたしは、あなたがたが急いで成熟し、あなたがたに託した働きを完成させることだけを願っている。これはあなたがたの神聖なる責務であり、わたしの長子であるあなたがたによってなされるべき本分である。わたしはあなたがたを旅路の最後まで守り、永遠にわたしと至福を享受できるよう、あなたがたを守る。わたしが多くの犠牲を用意し、様々な環境を整えたのは、すべてあなたがたを完全するためであるという事実について、あなたがたひとりひとりが識見を持つべきである。これらはみなわたしからの祝福であることを、あなたがたは知っているのではないか。あなたがたはみなわたしが愛する子どもたちだ。あなたがたがわたしを心から愛する限り、わたしはあなたがたをひとりとして見捨てない。ただ、あなたがたがわたしと調和し、協力することができるかどうかにか
拋るのだが。

第六十七章

わたしの子らは公然と姿を現し、万民の前に現れる。わたしは彼らに公然と反抗する人々を厳しく罰する、それは間違いない。今日立ち上がって教会を牧養できる人々は、すべて長子の身分を獲得しており、今はわたしと共に栄光の中にいる——わたしのものはすべてあなたがたのものでもある。わたしに心から従うすべての人々に、わたしは豊かな恵みを与え、他の人々の力が及ばないほど強力にする。わたしの旨はそっくりそのままあなたがた長子に与えられる。わたしが望むのはただ、あなたがたができるだけ早く成熟し、わたしが委ねたことを完成させることだけだ。このことを知りなさい。わたしがあなたがたに委ねるものは、わたしの経営（救いの）計画における最後の企画だ。わたしが望むのはただ、あなたがたが存在のすべてを全身全霊でわたしに捧げ、すべてをわたしのために費やせるようになることだ。時は一切人を待ってくれない。誰も、どんなことも、どんな事物もわたしの働きを妨げることはできない。このことを知りなさ

い。わたしの働きはどの段階も、妨げられることなく順調に進展する。

わたしの足跡は宇宙と地の隅々まで行き渡っており、わたしの目はありとあらゆる人を絶えず細かく観察しており、さらにわたしは宇宙全体を見守っている。わたしの言葉は実際に宇宙の隅々で働いている。わたしに奉仕しようとしないう者、わたしに不実であろうとする者、わたしの名に裁きを下そうとする者、わたしの子らを罵り中傷しようとする者——真にそのようなことができる者は誰であれ、厳しい裁きを受けなければならない。わたしの裁きは完全に下される。すなわち今は裁きの時代であり、注意深く観察すれば、わたしの裁きが宇宙世界全体に及ぶことがわかるだろう。もちろんわたしの家も例外ではない。考えや言葉、行動がわたしの旨に一致しない者は裁かれることになる。このことを理解しなさい。わたしの裁きは全宇宙世界に向けられており、特定の人々や物事に向けられているのではない。このことに気づいたのだろうか。心の奥でわたしについての考えが葛藤を起こしているなら、あなたはただちに内面で裁かれることになるだろう。

わたしの裁きはあらゆる形と形式をとって行われる。このことを知りなさい。わたしは宇宙世界で唯一の賢い神である。わたしの力に勝るものはない。わたしの裁きはすべて露わにされる。思考の中でわたしについて葛藤しているなら、わたしはあなたを啓く。それは警告だ。それを聞こうとしなければ、わたしはただちにあなたを見捨てる（これはわたしの名を疑うということではなく、肉の快樂に関連する外的な行動を意味している）。わたしに対する考えが反抗的で、わたしに不平を言い、何度もサタンの意見を受け入れ、いのちの感覚に従わないなら、あなたの霊は暗闇に入り、肉体は痛みで苦しむだろう。あなたはもっとわたしに近づかなければならない。わずか一日か二日で正常な状態を回復することなど絶対に不可能であり、あなたのいのちは目に見えて大きく後れを取るだろう。自堕落に話す人々よ、わたしはあなたの口と舌を懲らしめ、あなたの舌を取り扱いの対象とする。抑制なく自堕落な行動をしている人々よ、わたしはあなたの霊に警告し、聞こうとしない者は厳しく罰する。公然とわたしを裁き反抗する人々、つまり言葉や行為で不従順を示す人々は、完全に排除し見捨て、滅びに至らしめて最高の祝福を失わせる。これは選ばれた後に排除されることになる人々だ。無知な人々、つまりビジョンが明確でない人々は、まだ啓示を与えて救うが、真理を理解していながら実践しない人々は、無知であろうとなかろうと、先に述べた規定に従って処罰されることになる。最初から誤った意図を持っていた人々は、永久に現実を把握できないようにし、最終的には徐々に一人ずつ排除していく。一人として残ることはないが、彼らはま

だ今はわたしの采配によって残っている（わたしは物事を急がず、秩序立てて行うからだ）。

わたしの裁きは完全に明らかにされ、さまざまな人々に向けられている。人々はみな所定の位置につかねばならない。わたしは人々がどの規定を破ったかに従って、彼らを管理し裁く。この名によらない者、終わりの日のキリストを受け入れない者には、ただ一つの規定が適用される――逆らう者は誰であれ、ただちにその霊、魂、体を取り上げ、ハデスに投げ入れるだろう。逆らわない者は皆、成熟するのを待ってから第二の裁きを行う。わたしの言葉はすべてを完全に明確に説明し、何も隠されることはない。わたしが望むのはただ、あなたがたが常にわたしの言葉を心に留めておけるということだけだ。

第六十八章

わたしの言葉はすべての国、場所、民族、宗派で実行されており、いつでも所定の時にあらゆる場所で成就している。至るところで起こる災害は、人々の間の戦いではなく、武器を用いた争いでもない。これ以降、もう戦争はないだろう。すべてはわたしの手中にある。すべてはわたしの裁きに直面し、災害のただ中で精錬される。わたしに抵抗する人々と、率先してわたしに協力しない人々は、さまざまな災害の苦しみを受けることになる。いつまでも泣いて歯ぎしりし、永久に暗やみの中に留まるがよい。彼らは生き残れない。わたしは率直かつ機敏に行動する。かつてあなたがどれほど忠実だったかは考慮しない。わたしに抵抗するかぎり、わたしの裁きの手は一秒たりとも遅れることなく、何の容赦もなく、あなたに素早く怒りを爆発させるだろう。わたしは約束を守る神だとずっと言ってきた。わたしの語る言葉はすべて成就し、わたしはその一つ一つをあなたがたに見せる。これが、すべてにおいて現実に入るといふことの真の意味なのだ。

この大災害は決して、わたしの子ら、わたしの愛する者たちには降りかからない。わたしは一分一秒も欠かさず子らの面倒をみる。あなたがたは決してそのような痛みや苦しみに耐える必要はない。要点はわたしの子らを完全にし、彼らの中でわたしの言葉を成就させることなのだ。その結果、あなたがたはわたしの全能性を知り、いのちにおいてさらに成長し、より早くわたしの重荷を背負い、わたしの経営（救いの）計画の完成に自分のすべてを捧げられるようになる。そのためあなたがたは喜びと幸せに歓喜するはずだ。わたしはすべてをあなたがたに引き渡し、支配させ、あなたがたの手に委ねる

。子供が父親の全財産を相続するというのが真実なら、あなたがた、すなわちわたしの長子たちにとってはなおさらではないか。あなたがたは本当に祝福されている。大災害に苦しむかわりに、永久に続く祝福を享受するのだ。何という栄光だろう。何と素晴らしい栄光だろう。

歩みを速めなさい。そしていつでもどこにあっても、わたしの足跡に従いなさい、遅れてはならない。心をわたしの心に従わせ、思いをわたしの思いに従わせなさい。心も思いも一つにしてわたしと協力しなさい。わたしと共に食べ、わたしと共に生き、わたしと共に楽しみなさい。享受し受け取るべき素晴らしい祝福が、あなたがたを待ち受けている。わたしの中には比類のない豊かさがある。そのごく一部さえ、他の人のために用意されたものではない。わたしはこのすべてを子らのために行なっているのだ。

現在わたしが考えていることは、今後成就されることである。あなたがたに向かって語り終えたとき、その事柄はすでに完了している。わたしの働きはそれほど速やかに進み、いつも変化しているのだ。一瞬でも注意を逸らせば、「遠心的な」現象が生じ、あなたがたは非常に遠くまで放り出され、この流れから外れてしまうだろう。真剣に探し求めなければ、あなたがたはわたしの血のにじむような努力を無駄にしてしまうだろう。将来には、さまざまな国の人々がいつでも押し寄せてくることになる。あなたがたは現在の水準で、彼らを導くことができるだろうか。わたしはこの短期間で、あなたがたが良い兵士になるよう徹底的に訓練し、わたしの委託を果たすことができるようにする。わたしが願うのは、あなたがたがあらゆる点でわたしの名を賛美し、わたしを立派に証しすることだ。彼らが軽蔑していた人々を今日彼らの上に立たせ、彼らを導かせ、支配させよう。わたしの意図が理解できるだろうか。わたしのこれまでの骨身を惜しまぬ努力に気づいただろうか。これはすべてあなたがたのためなのだ。それはただあなたがたが、わたしの祝福を享受することができるかどうかにかかっているのだ。

人間の思いと心を探る神であるわたしは、地の果てまで行く。わたしに奉仕しようとする者がいるだろうか。すべての国家間に緊張が高まり、国々は激しくもがくが、結局わたしの支配から逃れることはできない。わたしは決して彼らを簡単に放免はしない。各人の行動、この世での地位、そしてこの世での快樂に基づいて、一人一人に裁きをもたらす。誰にも容赦はしない。わたしの怒りは露わにされ始めており、すべて彼らに降りかかるだろう。すべては彼らの一人一人に成就される。これはすべて彼らが自分自身にもたらしたことなのだ。かつてわたしを知り得なかった人々や軽蔑していた人々は、今わたしの裁きに直面する。かつてわたしの子らを迫害した者たちには、その言った

ことや行なったことに応じて、特に刑罰を与える。子供でさえ容赦はしない、彼らは皆サタンの仲間なのだから。何も言わず何もしていなくても、心の奥でわたしの子らを憎んでいるなら、一人として容赦はしない。わたしは彼ら全員に、今日君臨し権力を有するのはわたしたち、すなわちこの一群の人々であり、決して彼らではないことを理解させる。このため、あなたがたが全力を捧げてわたしのために真摯に身を費やすことが、よりいっそう重要になるのだ。そうすることであなたがたは、あらゆる場所、地域、宗教、教派においてわたしの名を讃え、証しし、宇宙と地の隅々まで広めることができるのだ。

第六十九章

わたしの旨が発せられる時、あえて抵抗しようとする者、あえて裁いたり疑ったりする者は誰であれ、わたしはただちに追放する。今日、わたしの旨に従って行動しない者、あるいはわたしの旨を誤解する者は誰でも、わたしの国から追放され、排除されなければならない。わたしの国にいるのはすべてわたしの子ら、わたしが愛し、わたしに思いやりのある者たちである――他には誰もいない。さらに、彼らはわたしの言葉に従って行動する者たち、わたしの代わりに権力を持って支配し、すべての国々、すべての民族を裁くことができる者たちである。そのうえ、彼らは長子たちの集団で、穢れなく生き生きとしており、素朴で率直であり、正直で賢い。わたしの旨はあなたがたの中に満たされ、わたしがしようとすることはあなたがたの中で、ひとつの誤りもなく、完全に公に、明らかに成就する。誤った意図や目的を持つ人々――このような人々をわたしは見捨て始めており、彼らを一人ずつ転落させる。彼らが生き残れないところまで、わたしは彼らを一人ずつ滅ぼすのであるが、それは彼らの霊、魂、そして体を指している。

わたしの手が何を行っているかを理解しなさい――貧しい人々を助けること、わたしを愛する者たちを慈しみ、守ること、わたしの経営を邪魔しない無知で熱心な者たちを救うこと、わたしに抵抗する者たちやわたしに積極的に協力しない者たちを罰すること――これらのことすべてはわたしの語ったことに従って一つずつ確認されるだろう。あなたは本当にわたしを愛する者なのか。あなたはわたしのために忠実に尽くす者なのか。あなたはわたしの言葉に耳を傾け、それに従って行動する者なのか。あなたはわたしに逆らう者なのか。それともわたしと相容れる者なのか。あなた自身の心はこれらのことについてはっきりわかっているのだろうか。あなたは今わたしが語ったこれらのことに一つ一つ答えることができるだろうか。答えられなければ、あなたはわたしの旨を熱

烈に追い求めていても理解しない人である。このような人はもっとも安易にわたしの経営を妨害し、わたしの旨を誤解する。このような人が一時的に誤った意図を持つならば、わたしによる追放と破壊の対象となる。

わたしの中には無限の神秘があり、それは計り知れない。わたしはそれらを自分の計画に従って一つ一つ、人々に明らかにする。つまり、わたしの長子たちに明らかにする。わたしを信じない者たち、わたしに反抗する者たちに対して、わたしは彼らのなすがままにしておくが、最後には彼らにわたしが威厳であり裁きであることをわからせなければならない。今日わたしを信じない者たちは自分の目の前で起こることだけは知っているが、わたしの旨は知らない。わたしの子ら、わたしの愛する子らだけが、わたしの旨を知り、理解する。わたしの子らに対しては、わたしは公然と現れ、サタンに対しては、わたしは威厳であり裁きであり、決して隠されることはない。今日、わたしの旨を知るのに価するのはわたしの長子たちだけであり――ほかの誰もその資格はない――このことはわたしが創造より前に用意しておいたことである。誰が祝福を受け、誰が懲らしめを受けるかは早い段階にすべてわたしによって適切に用意されていた。わたしはこのことについてはっきり決めており、今日、それはすでに十分明らかにされている。祝福を受けた人々は祝福を享受し始めており、懲らしめられた人々は災害に苦しみ始めている。懲らしめを受けたくなくても懲らしめられる。これはわたしが定めたことであり、わたしの行政命令が予め定めたことだからである。正確には、どのような人が祝福を受け、どのような人が懲らしめられるのだろうか。わたしはすでにこれらのことを明らかにしている。これはあなたがたにとって神秘ではなく、むしろ公然と示されているのだ。わたしを受け入れるがその意図が間違っている人々、わたしを受け入れるが追いつめない人々、わたしを知っているが従わない人々、わたしをだますために曲がったことや不信行為に関わる者、わたしの言葉を読むが否定的な言葉を吐く人々、自分自身を知らず、自分が何であるかを知らず、自分は偉大だと考え、自分は成熟していると考える人々（サタンの典型である）――このような人々は懲らしめの対象である。わたしを受け入れ、意図がわたしの方を向いている人々（もし彼らが妨害するような場合、わたしは彼らの罪を覚えていることはないが、彼らの意図は正しくなければならない。そして、彼らは常に用心し、注意深くし、自堕落であってはならない。彼らはいつもわたしの言うことに耳を傾け、わたしに従うことを心に留めておかなければならない）。純粋な人々、率直な人々、正直な人々、誰にも、どのような物事にも支配されない人々、いのちは成熟しているが幼子のような人々、これらの人々はわたしの愛する者たち、わた

しの祝福の対象となる人々である。今、各々その条件に応じて自分のいるべき場所につかなければならない。あなたは自分が祝福されるか、懲らしめられるかを知るだろう――わたしがはっきり言う必要はない。祝福を受けた人々は喜び、幸せを感じ、懲らしめに苦しむべき者たちは動揺するべきではない。どちらもわたしの手によってすでに用意されているが、そのためにわたしを責めてはならない。あなたが積極的にわたしに協力せず、わたしが人の心の奥底を探る神であることを理解しないからだ。それはわたしが前もって決めたことである。あなたは自分の愚かなやり方で自分を傷つけた――自業自得だ。あなたがハデスに落ちても、それはあなたに対する虐待ではない。それがあなたの結末である。それがあなたの結果なのだ。

祝福を受けた長子たちよ。すぐに立ち上がって歓呼しなさい。すぐに立ち上がって賛美しなさい。これから後は苦しみも困難もなく、すべてはわたしたちの手の中にある。わたしと一致する者は誰でもわたしの愛する者であり、災害の苦しみを被ることはないだろう。あなたの心の望むことが何であれ、わたしはそれを成就する（それは決して気まぐれではない）。これがわたしの働きである。

第七十章

わたしの奥義が明らかになり、公けに現れ、もはや隠されていないのは、完全にわたしの恵みと憐れみによる。さらに、わたしの言葉が人に現れ、もはや覆い隠されていないのも、わたしの恵みと憐れみによる。心からわたしのために尽くし、わたしに身を捧げるすべての者をわたしは愛する。わたしから生まれていながらわたしを知らず、わたしに反抗さえするすべての者をわたしは憎む。心からわたしのためにある者をわたしは誰一人捨て去ることなく、それどころかその祝福を二倍にする。恩知らずでわたしの思いやりを無にする者には二倍の懲罰を与え、容易に赦しはしない。わたしの国には何の不正も欺瞞もなく、世俗性もない。つまり、死臭は存在しない。かわりにすべては清廉かつ義であり、すべては純粋で開放されており、何一つ隠されず覆われてもいない。すべてが新鮮で、すべてが喜びであり、すべてが高揚である。それでもまだ死人の臭いを漂わせる者は誰であれわたしの国に残ることはできず、わたしの鉄の杖に支配される。太古の昔から今日に至るまでの、すべての終わりなき奥義があなたがた、終わりの日にわたしのものとされる人の集団に完全に明らかにされている。祝福されていると感じるのではないか。すべてが公けに明らかにされる日は、また、あなたがたがわたしの統治に加わる日である。

王として真に統治する人の集団は、わたしの予定と選択にかかっており、そこに人の意志は一切関わらない。これにあえて参加する勇気があるならば、わたしの手による一撃を受けなければならない、そのような者はわたしの激しい火にさらされる。これはわたしの義と威厳のもう一つの側面である。わたしはすべてを支配しており、完全な権威をふるう知恵のある神であり、誰に対しても情け深くないと言った。わたしはまったく非情であり、私情は一切持ち合わせない。わたしは誰であろうとも（どれほど口が上手でも容赦しない）わたしの義と清廉と威厳をもって扱い、同時にわたしの業の不思議と、わたしの業が意味するものがすべての者にさらによく見えるようにする。わたしは悪霊を一つずつ、それらが犯したあらゆる行いゆえに懲罰し、それぞれを奈落の底へ投げ落とした。わたしはこの働きを時が始まる前に終え、それらから地位を奪い、業を行う場所を奪った。わたしの選民、つまりわたしが予定し選択した者の誰一人として悪霊に取りつかれることはなく、常に聖くある。わたしが予定し選択していない者はサタンに引き渡し、これ以上留まることは許さない。わたしの行政命令にはあらゆる面で、わたしの義と威厳が関わっている。わたしはサタンの働きを受けている者を誰一人として見逃さず、その体ごと冥府へ投げ落とす。わたしはサタンを憎むからである。サタンを決して簡単に許しはしないどころか、徹底的に打ち破り、その業を行う機会を一切与えない。サタンがある程度まで墮落させた者（すなわち災いを被ることになる者）は、わたしの手による賢明な采配のもとにある。これをサタンの凶悪さの結果として起こったことだと考えてはならない。わたしは全宇宙と万物を支配する全能神であることを知りなさい。わたしに解決できない問題はなく、まして成し遂げられないことや、発せられない言葉などない。人間はわたしの助言者であるかのように振る舞ってはならない。わたしの手に打ち倒され、冥府に落とされぬよう注意しなさい。あなたに言う。今日わたしと積極的に協力している者がもっとも賢いのであり、彼らは損失を免れ、裁きの痛みを逃れる。これはすべてわたしの采配であり、わたしが予定していることである。軽率な発言をせず、自分を偉大だと思って大げさに語ってはいけない。これらはすべてわたしの予定によるのではないのか。わたしの助言者気取りのあなたがたは、恥知らずである。あなたがたは自分の霊的背丈を知らないが、それはなんと哀れなまでに小さいことか。それでもそれを大したことではないと考えており、おのれを知らない。あなたがたは幾度となくわたしの言葉を見無視し、わたしの血のにじむような努力を無駄にして、その言葉がわたしの恵みと憐れみの表明であることに少しも気づかなかった。そのかわりに、何度となく自分の利口さを見せつけようとする。このことを覚えているか。自分をもっと賢いと思っている人が受けるべき刑罰は何か。あなたがたはわたしの言葉に無関心

で不実で、言葉を心に刻みもせず、わたしを自分のさまざまな行為の言い訳にする。悪人たちよ！ いつになったら、わたしの心を十分に思いやれるようになるのか。あなたがたはわたしの心など気にも留めないのだから、「悪人」と呼ぶのはひどい扱いではない。ぴったりの呼び名である。

今日わたしはあなたがたに、かつて隠されていたものを一つ一つ見せている。赤い大きな竜は奈落の底に落とされ、完全に打ち倒される。生かしておいても何の役にも立たないからである。すなわちキリストに奉仕することができないということである。これ以降、赤いものは存在しなくなる。それらは徐々に無に帰さなければならない。わたしは言うとおりに行う。これはわたしの働きの完結である。人間の観念を捨てなさい。わたしは言ったことをすべて行なった。利口になろうとする者は誰でも、自らに破滅と侮蔑をもたらしているだけであり、生きたいとは思っていない。そのため、わたしはその願いを叶え、そのような人を断じて残しておかない。それ以後は、人々は優秀度を増すが、わたしと積極的に協力しない者はみな一掃されて無に帰すことになる。わたしが認めた者を、わたしは完全にし、誰一人として投げ捨てない。わたしの言うことに矛盾はない。わたしと積極的に協力しない者はさらなる刑罰を受けるが、最終的には間違いなく彼らも救う。しかしそのときには、彼らのいのちの程度は大きく変わっている。そのような人になりたいか。立ち上がってわたしに協力しなさい。わたしは心からわたしのために尽くす者を決して粗末には扱わない。わたしに本気で自分自身を捧げる者には、わたしの祝福をすべて授ける。あなた自身を完全にわたしに捧げなさい。食べるもの、着るもの、そして未来はすべてわたしの手の中にある。わたしはすべてを正しく計らうので、あなたは終わりのない喜びを得られ、それは決して尽きることがない。それはわたしが、「心からわたしに尽くす者よ、わたしは必ずあなたを大いに祝福する」と言ったからである。あらゆる祝福が、わたしのために心から尽くす一人ひとりに与えられる。

第七十一章

わたしは、わたしのすべてをあなたがたに明らかにしたが、あなたがたはなぜ心と霊を尽くしてわたしの言葉をじっくり考えることができないのか。なぜあなたがたは、わたしの言葉をゴミのように見なすのだろうか。わたしの語ることは間違っているのだろうか。わたしの言葉はあなたがたの心の核心に触れただろうか。あなたがたはたえず先延ばしにしたり、たえずためらったりしているが、なぜそのように行動するのか。わたし

は、はっきり語らなかつただろうか。わたしの言葉を慎重に熟考し、細心の注意を払うべきだと、わたしは何度も言ったではないか。あなたがたの中には素直で従順な子はいらるだろうか。わたしが語ったのは無駄だったのだろうか。成果はまったくないのだろうか。あなたの心の中には、わたしの旨に適ったものがどのくらいあるのだろうか。たとえ一瞬でも、非難されないままでいれば、あなたは自堕落で自制がきかなくなる。どう行動すべきか、どう話すべきか、わたしがはっきりと述べなければ、あなた自身の心の中には何の考えもないということなのだろうか。あなたに言う。不従順な者、服従しない者、愚かなことを信じる者は損失を被るのだ。わたしの語ることに注意を払わず、その詳細を把握できないならば、わたしの旨を理解できないし、わたしに奉仕することもできないだろう。このような種類の人間はわたしに取り扱われ、わたしの裁きを受けらるだろう。詳細に注意を払わないのは、極めてあつかましいことであり、自分勝手に軽率なふるまいをすることである。従って、わたしはこのような人を憎み、手加減しない。憐れみではなく、威厳を示し、裁きを下すだけである。それでもまだあなたはあえてわたしを欺くかどうか、考えてみよ。わたしは人の心の奥底を調べる神である。この点はすべての人に示されるべきである。さもないと、彼らは適当に働きを行い続け、わたしをおざなりに扱うだけだろう。知らないうちにわたしに打ち倒される人がいるのは、このような理由によるのである。わたしは誰をも不当に扱わず、間違ったことはせず、すべてはわたしの手による賢明な采配に従って行われると言った。

わたしの裁きは、わたしを心から愛さないすべての人々に下され、その時、わたしが誰を予め定めて選んだか、誰がわたしによって排除されるかが明らかになるだろう。これらのことは、隠されることなく一つずつ明らかにされなくてはならない。すべての人々、出来事、物事は、わたしの言葉が成就するために成り立ち、存在し、わたしの口から語られる言葉を実現させるためにある。宇宙と地の隅々はわたしだけに支配されている。わたしは、わたしの言葉に逆らおうとする者や、わたしの行いを成立させない者は誰であれ打つだろう。したがって、そのような人はハデスに沈み、生存できないだろう。わたしの言葉はすべてふさわしく、適切で、不純なところは何もない。あなたがたの話し方はわたしの話し方に倣うものだろうか。あなたがたの話はすべて長たらしくて意味をなさず、明確な説明もないが、それでもあなたがたは、多少得たものがあるとか、大分うまくいったなどと考える。あなたに言おう。人は自己満足すればするほど、わたしの基準から遠ざかるのだ。彼らはわたしの旨を考慮しようとせず、わたしをだまし、わたしの名にひどい屈辱を与える。恥知らずだ。あなたは自分自身の霊的背丈に目を留

めていない。なんと愚かで無知なのだろう。

わたしの言葉はあらゆる時にあらゆる所で物事を指摘する。あなたはまだ理解せず、まだはっきりしていないというのか。あなたはわたしを落胆させるつもりなのか。気力を掻き立て、勇気を奮い起こしなさい。わたしを愛する人をわたしはいいかげんに扱ったりはしない。わたしは人の心の奥底を探り、誰の心の中もすべてわかる。これらのことはみな一つずつ明らかにされ、すべての人はわたしによって吟味される。わたしは、わたしを本当に愛する者を一人も見逃すことはない。彼らはみな祝福を受ける者たちである。彼らは長子たちの群れであり、王になることをわたしによって予め定められた者たちである。わたしを本当に愛さない人々は、自分自身の計略の標的となり、不運をこうむる者たちであり、それもわたしが予め定めたことなのだ。心配することはない。わたしが一つずつ明らかにする。わたしはこの働きを前もって十分に準備し、すでにそれを始めた。すべては整然としており、混乱はまったくない。誰を選び、誰を除外するか、わたしはすでに決めている。あなたがたに分るように、彼らは一人ずつ明らかにされるだろう。この期間、あなたがたは、わたしの手が為すことを見るだろう。わたしの義と威厳に背いたり抵抗したりすることは誰にも許されず、背いた者は誰であれ厳しい罰を受けるということを、すべての人が知るだろう。

わたしはすべて人の心の奥底をつねに探る神である。わたしの外観だけを見てはならない。盲目な人間たちよ。あなたがたは、わたしがはっきり語った言葉に耳を傾けず、完全な神自身であるわたしをどうしても信じない。あえてわたしを騙したり、わたしから何かを隠そうとしたりする者は誰であれ、わたしは決して容赦しない。

あなたはわたしが語ったことのすべてを覚えているだろうか。「わたしを見ることは、隠されている奥義の一つ一つを、とこしえからとこしえまで見ることと同じである。」あなたはこの発言を注意深く熟考したことがあるだろうか。わたしは神である。わたしの奥義はあなたがたに現わされている。あなたがたにはそれが見えないのか。あなたがたはなぜわたしに注意を払わないのか。また、なぜ自分の心に抱いている漠然とした神をそのように崇拝するのか。わたし――唯一の真の神――が、何か間違いを犯すことなどどうしてあり得ようか。このことをはっきりと理解しなさい。このことを確信しなさい。わたしのすべての言葉と行動、わたしのすべての行為と動作、わたしの微笑み、わたしが食べることや着ること、すべては神自身によってなされている。あなたがたはわたしを裁くが、それは、わたしが来る前にあなたがたがすでに神を見たということなのか。それでは、なぜあなたはいつも、あなたの心の中にある神とわたしを比べるのか。

。それはすべて人間の観念なのだ。わたしの行いとふるまいはあなたの想像するものとは一致しない。そうではないか。わたしの行いとふるまいが正しいかどうか、意見を述べることなど誰にも許さない。わたしは唯一の真の神である。これは変えることのできない、絶対に正しい真理である。自らの計略に欺かれてはいけない。わたしの言葉がそのことを完全明瞭に語っている。わたしの中には人間らしさが片鱗もなく、わたしのすべては神自身であり、隠されたものは一切なく、あなたがたに完全に現されている。

第七十二章

あなたは、自分の欠点や弱点を見つけたらすぐにわたしに頼って取り除かなければならない。先延ばしにしてはいけない。さもないと、聖霊の働きがあなたからはるか遠くに離れてしまい、あなたはすっかり遅れを取ってしまうだろう。わたしがあなたに任せた仕事は、あなたがしばしばわたしのいる所に近づき、祈り、わたしと交わりを持つことによってのみ成し遂げることができる。さもなければ、何の結果も得られず、すべては無駄になるだろう。今日のわたしの働きは以前と同じではない。わたしが愛する人々のいのちの範囲は以前とはまったく異なる。彼らは皆わたしの言葉をはっきり理解し、わたしの言葉を深く洞察している。これがもっとも明らかな側面で、わたしの働きの奇妙をもっともよく反映している。わたしの働きのペースは加速しており、この働きは確かに以前と異なっている。人々には想像しにくく、それ以上に、理解することは不可能である。あなた方にとっては、もはや神秘的なものは何もなく、むしろ、すべてが知らされ、明らかなのである。遮るものはなく、開かれ、その上、完全に自由である。わたしが愛する者たちは、いかなる人からも、出来事からも、物事からも、あるいはどのような空間や地形からもまったく制限を受けないだろう。彼らはどのような環境による抑圧も超越し、肉から出てくるだろう。これがわたしの偉大な働きの完成である。残されるものは何もないだろう。完全に終了するのだ。

偉大な働きの完成は、すべての長子たちと、わたしが愛するすべての人々に当てはめて語られる。今後、あなた方はどんな人からも、出来事からも、物事からも支配されることがないだろう。あなた方は世界の様々な国を旅し、宇宙全体を横断するので、あなた方の足跡は至る所に残るだろう。これが遠い先のことだと思ってはいけない。今すぐにもあなた方の目の前で実現することである。わたしが行くことはあなた方に任されるだろう。わたしが歩む場所にはあなた方の足跡が残るだろう。これが、あなた方とわたしが共に王として支配することの本当の意味である。わたしが与える啓示がさらに明確

になり、ますます明らかになり、ほんのわずかでも隠されることがないのは何故なのかを、よく考えたことがあるだろうか。なぜわたしが最高の証しをして、すべての奥義、すべての言葉をあなた方に語ったのか。その理由は上に述べた働きのために他ならない。しかし、現在あなた方の働きの速度はあまりにも遅い。あなた方はわたしの歩みについていくことができず、わたしにうまく協力できない。そして今のところ、あなた方はまだわたしの旨を達成することができない。わたしはあなた方をもっと熱心に訓練し、あなた方を完成する速度を速め、あなた方ができるだけ早くわたしの心を満足させることができるようにしなければならない。

今もっとも明らかなのは、長子たちの群れが完全な形となり、皆わたしによって承認されたことだ。そして、彼らは世界の創造のときからわたしによって定められて選ばれていたものであり、わたし自身の手によって一人ひとりが推奨されたということである。このことに人間が考慮する余地はなく、あなたの力の及ぶところではない。おごり高ぶってはいけない。すべてはわたしの優しさとおわれみによるのだから。わたしの見るところでは、すべてはすでに完成されている。あなた方の目があまりにもぼやけていて、今となっても、あなた方がわたしの行動の奇跡をはっきり見ることはできないだけなのだ。あなた方はわたしの全能性、わたしの英知、わたしのすべての行い、すべての言葉と行動について完全には確信しておらず、本当に理解しているのでもない。だから、わたしははっきりと言おう。わたしの子ら、わたしの愛する者たちのために、わたしは進んであらゆる犠牲を払い、進んで骨を折って働き、進んで全力を尽くす。あなたはわたしの言葉を通してわたしを理解しているだろうか。わたしはもっとはっきり話さねばならないのか。これ以上自堕落になってはいけない。わたしの心を理解しなさい。これほど素晴らしい神秘があなた方に語られた今、あなた方は何と言うだろうか。まだ何か不満があるのだろうか。あなた方が代価を払わず、一生懸命働くこともしないのなら、あなた方は、わたしのすべての苦勞に相応しいと言えるだろうか。

今日の人々は自分を制御できない。わたしがその人を好まなければ、彼らがいくら望んでも、わたしを愛することはできない。しかし、わたしが運命づけて、選んだ人々は、いくら望んでもわたしから逃れることはできない。どこへ行こうとも、彼らはわたしの手のひらから逃れることはできない。これがわたしの威厳であり、さらにはわたしの裁きである。すべての人々はわたしの計画に従って、そしてわたしの旨に従って自分たちの諸事に取り組まなければならない。今から後のすべては間違いなくわたしの手に戻り、彼らの思い通りにはならない。完全にわたしに支配され、定められる。もし人がわ

ずかでも関与したら、わたしはその者たちを簡単には解放しないだろう。今日を出発点とし、わたしはすべての人々にわたしを知らせ始める——わたしはすべてを創造した唯一の真の神であり、人々のところへ来て、彼らに拒絶され、中傷された神、すべてを支配し、定める神、王国を管理する王、宇宙を支配する神自身、さらには、人間の生死を支配する神、ハデスの入り口の鍵を持っている神である。わたしはすべての人々に対して、（大人であれ子供であれ、霊を持っていたいなくても、あるいは愚か者であってもなくても、障害をもっていたいなくても、）わたしを知らしめる。誰もわたしのこの働きから逃れることはできない。これはもっとも厳しい働きで、わたしが十分に準備してきた働きであり、まさに今始まった働きである。わたしが言うことは必ず実行される。あなたの霊の目を開き、自分の観念は捨て去り、わたしが宇宙を支配する唯一の真の神であることを知りなさい。わたしは誰からも隠れず、すべての人に向かってわたしの行政命令を実行する。

自分の事柄はすべて脇へ置きなさい。あなた方がわたしから得るものの方が価値があり、重要なのではないか。わたしから得るものとあなた自身が自分で得るクズ同然のものとの間には雲泥の差があるのではないか。無駄なものをすべてすぐに放棄しなさい。祝福が得られるか、不幸に出会うか、今決まるのだ。まさに今が、重大な、決定的な瞬間なのである。あなたはこれを理解できるだろうか。

第七十三章

わたしの言葉は、語られるとすぐに成就される。それらは決して変化せず、全く正しい。これを覚えておきなさい！ わたしの口から出る一つひとつの言葉と語句は、注意深く考慮されなければならない。あなたが損失を被ることなく、わたしの裁き、わたしの怒り、わたしの炎を受けることもないように、特に慎重にしていなさい。今、わたしの働きは極めて急速に進行しているが、粗雑であるということはない。それはごく繊細なものなので、肉眼で見ることはほぼできず、人の手で感じ取ることもできない。それは特に細微なのである。わたしの言葉は決して空しくはなく、全て真実である。あなたは一つひとつの言葉が真実で正確であることを信じるべきである。不注意になってはならない。今が重要な時である。あなたが祝福を得るか、それとも不幸に見舞われるかはまさにこの瞬間に決まり、その違いは天地の違いと同じである。あなたが天国に行くかハデスに行くかは、完全にわたしの支配の下にある。ハデスに行く者は最後の死闘の中にいる。一方、天国に行く者は最後の苦しみに耐え、わたしのために最後の努力を尽くし

ており、彼らの未来にあるのは、人々を悩ませる全ての些細なことなしに（結婚、仕事、やっかいな富、地位など）、楽しむことと讃美することだけである。しかし、ハデスに行く者にとって、彼らの苦しみは永遠であり（これは彼らの霊、魂、そして肉体を指す）、決してわたしの罰の手から逃れることはできない。これらの二つの面は、火と水のように相容れない。二つは絡み合うことがない。不幸に苦しむ者は不幸に苦しみ続け、祝福される者は心ゆくまで楽しむであろう。

すべての出来事と物は、わたしによって支配されており、あなたがた——わたしの子ら、わたしの愛する者たち——が、なおさらわたしのものであることは言うまでもない。あなたがたは、わたしの六千年の経営（救いの）計画の結晶、わたしの宝である。わたしが愛する者たちは皆、わたしの目に好ましい。なぜなら、彼らはわたしを表すからである。わたしが嫌う者たちを、わたしは見ることもさえずに軽蔑する。なぜなら、彼らはサタンの子孫であり、サタンに属しているからである。今日、誰もが自分自身を吟味しなければならない。あなたの意図が正しく、あなたが本当にわたしを愛しているなら、あなたは必ずわたしに愛されるだろう。あなたは真にわたしを愛さなければならない。わたしを欺いてはならない。わたしは人々の心の奥底を調べる神である。もしあなたの意図が間違っており、あなたがわたしに対して冷たく不実であるなら、あなたは必ずわたしに忌み嫌われる。あなたは、わたしによって選ばれたり、予め定められたりしていない。あなたは地獄に行くのをただ待つだけである！他の人々はこれらのことを見ることができないかもしれないが、あなたとわたし——一人の心の奥まで深く見ている神——だけがそれらを知っている。それらは、ある時になると明らかにされる。誠実な者は心配する必要はなく、不誠実な者は恐れる必要はない。それはすべてわたしの賢明な計画の一部である。

この仕事は緊急かつ骨の折れるものであり、この最後の働きを完了するためには、あなたがたがわたしのために最後にもう一度だけ費やす必要がある。わたしの要件は高くはない。あなたがたに必要なことは、わたしによく協力し、すべてのことにおいてわたしを満足させ、あなたの中でわたしの導きに従うことができることだけである。盲目的になってはならない。目標を持ち、あらゆる面から、そして、すべてのことにおいて、わたしの意図を感じ取りなさい。これは、わたしがもはやあなたがたにとっては、隠された神ではないからである。わたしの意図を理解するためには、あなたがたはこのことについて非常に明確でなければならない。非常に短い期間に、あなたがたは、真の道を求める外国人たちに出会うだけでなく、もっと重要なことは、あなたがたが彼らを牧養

する能力を持つべきことである。それがわたしの緊急な意図である。もしあなたがたがこれを見ることができなければ、どうにもならない。しかし、あなたがたはわたしの全能性を信じなければならない。人々が正しい限り、わたしは必ず彼らを良い兵士になるように訓練するだろう。すべてのことが、わたしによって適切に定められている。あなたがたは、わたしのために苦しむことを熱望しなければならない。今が重要な時である。これを逃してはならない。わたしは、あなたがたの過去の物事を覚えたい。あなたはわたしの前で頻繁に祈り、懇願しなければならない。わたしは、あなたが楽しみ使うために、十分な恵みを与えよう。恵みと祝福は同じものではない。あなたがたが今楽しんでいるのは、わたしの恵みであり、わたしの目には、言うに値しない。一方、祝福とは、あなたがたが将来無限に楽しむものである。それらは人々が考えたこともない、想像することもできない祝福である。わたしは、あなたがたがこれ故に祝福されているという――それは創造以来人間が享受したことのない祝福である。

わたしは、すでにあなたがたにわたしのすべてを明らかにした。わたしは、あなたがたがわたしの心を思いやり、すべてのことにおいて、わたしのことを考え、あらゆることにおいて、わたしのことを思いやり、その結果わたしがあなたがたの微笑む顔をいつも見ることを、ただ願っている。これから長子の地位を得る者は、わたしと共に王として治める人たちである。彼らは、どんな兄弟にいじめられることも、わたしによって懲らしめられたり取り扱われたりすることもないであろう。なぜなら、物事を為すことにおけるわたしの原則はこうであるからだ。つまり、長子たちの群れの中にいる者たちは、他人に見下され、いじめられ、人生のすべての苦難を受けてきた人々である。（彼らはわたしによって事前に取り扱われ、砕かれており、前もって完全にされている。）これらの人々は、事前に受けるべき祝福を、すでにわたしと共に享受したのである。わたしは義であり、決して誰をもえこひいきしない。

第七十四章

わたしの言葉を読み、それが成就すると信じている者は幸いである。わたしは決してあなたを不当に扱わず、あなたが信じていることをあなたの中で成就させる。これがあなたに授けられるわたしの祝福である。わたしの言葉は一人一人の中に隠されている秘密を突く。誰もが致命傷を負っており、わたしはそれを癒す良き医者である。ただわたしのところへ来ればよい。なぜわたしが、将来は悲しみも涙もなくなると言ったと思うのか。これがその理由である。わたしにあってはすべてが成し遂げられるが、人間にあ

ってはずべてが墮落し虚しく、人を欺くものだ。わたしの前であなたは必ずやすべてを受け取ることになり、想像もできなかったあらゆる祝福を確かに目にしかつ享受できる。わたしの前に来ない者は間違いなく反抗的であり、確実にわたしに抵抗する者だ。わたしは決して彼らを簡単に容赦はしない。この種の人間は厳しく懲らしめる。覚えておきなさい。人々はわたしの前に来れば来るほど、より多くを得ることになるが、それは単なる恵みである。後にはさらに大きな祝福を受けることになるだろう。

世界の創造以来、わたしはこの一群の民、すなわち今日のあなたがたを、予め定めて選び始めた。あなたがたの気質、素質、外見、靈的背丈、生まれた家族、仕事、結婚一髪や肌の色、生まれた時間さえも含むあなたのすべては、わたしの手によって定められたのである。あなたが日々為すことや出会う人たちも、わたしの手によって定められたのであり、もちろん今日あなたがわたしの前に来たという事実も、言うまでもなくわたしの采配である。混乱に陥ることなく、落ち着いて前進しなさい。今日わたしがあなたに享受させるのは、あなたにふさわしい取り分であり、それは創世のときからわたしが予定してきたものだ。人間はみな非常に極端で、過度に強情かまったくの恥知らずのどちらかだ。彼らはわたしの計画と采配に従って物事に対処することができない。そんなことはもう止めなさい。わたしにあっては、すべてが解放されている。自分自身を縛ってはならない、そうでないとあなたのいのちに損失が生じることになる。このことを覚えておきなさい。

すべてがわたしの手の中にあることを信じなさい。過去に奥義とみなされていたものは、今日すべて公に明かされており、もはや隠されてはいない（将来には何も隠されなくなる、とわたしが言ったからだ）。人々は忍耐に欠けることが多く、何かを完成させようと焦り、わたしの心に何があるのかを考慮しない。わたしはあなたがたがわたしの重荷を分かち合い、わたしの家を管理できるようになるよう訓練しているのだ。あなたがたが早く成長して、自分より若い兄弟たちを導けるようになり、わたしたちつまり父と子らが早く再会できること、そしてもう離ればなれにならないことを願っている。それによってわたしの意図は満たされるだろう。奥義はすでにすべての人々に明かされており、隠されているものはまったくない。わたしという、正常な人間性と完全な神性を備えた完全なる神自身が、今日あなたがたの目の前に示された。わたしの全存在（身なり、外観、体形）が神自身の完璧な現れであり、それは創世以来人が想像してきたが誰一人見たことのない、神の本体の具現化なのだ。わたしの行為がわたしの言葉も同然である理由は、わたしの正常な人間性と完全な神性が互いに補い合っているからだ。また

それによって、一人の普通の人間がこのような驚くべき力を宿していることを、すべての人々に見せることができる。真にわたしを信じる者がその信心を持っているのは、わたしが一人一人に真実な心を与え、わたしを愛せるようにしたからだ。あなたを取り扱うとき、わたしはあなたを光で照らして啓き、それによってわたしを知れるようにする。その結果、わたしにどう取り扱われようが、あなたは逃げることなく、むしろますますわたしのことを確信するようになる。あなたが弱るときもまたわたしの采配によるものであり、それによってあなたは自分がわたしを離れると死んで枯れてしまうことを悟るのだ。そのことから、わたしがあなたのいのちだと学ぶことができる。弱さを経験した後には強くなると、弱さも強さも自分自身によるものではなく、まったくわたし次第であることを悟れるようになるのだ。

すべての奥義は完全に明かされている。あなたがたの将来の活動については、わたしが一つ一つ指示を与えよう。わたしは曖昧なことはせず、極めて明白であり、直接あなたがたに語りもする。それはあなたがたが自分で物事を思案しなくてすむようにし、わたしの経営を妨げないようにするためなのだ。これが、今後はもう何も隠されなくなるとわたしが繰り返し強調している理由なのだ。

第七十五章

わたしの言葉が話されるやいなや、ほんの少しも逸脱することなく、全てのことが成就される。今から後、隠された全ての奥義は、はっきり見えなくなったり隠されたりすることは全くなく、あなたがた——わたしの愛する子ら——に明らかにされるだろう。わたしは、わたしの中でさらに大きなしるしと不思議をあなたに見せ、さらに大きな奥義を見せよう。これらのことは必ずあなたがたを驚かせ、全能なる神であるわたしをより良く理解させ、その中にあるわたしの知恵を悟らせるだろう。今日、あなたがたは創造以来、人間が一度も見ただけでなく唯一の真の神と顔を合わせるようになった。そして、わたしには何も特別なことはない。わたしはあなたがたと食べ、暮らし、話し、笑い、わたしはいつもあなたがたの中に住み、また同時にあなたがたのただ中で動いている。信じていない者や、自分自身の深刻な観念を持っている者にとって、これは躓きの石である。これがわたしの知恵である。わたしは、わたしの普通の人間性が知らないことについても、ある人たちに明らかにするが、これは、わたしが神自身ではないことを意味するのではない。それどころか、この点は、わたしが全能なる神であることを証明するに十分である。信じる人たちにとって、この点には決定的な効果があり、正にこの

点の故に、彼らはわたしのことを百パーセント確信するのである。余り心配しなくてもよい。わたしはあなたがたに物事を一つずつ現そう。

あなたがたのために、わたしは開かれており、隠されてはいない。しかし、未信者たち——不実な者たち、ある程度までサタンによって墮落させられた者たち——にとっては、わたしは隠されたままである。しかしながら、前にわたしが全ての人々にわたし自身を現すことについて話したとき、わたしは、わたしの義と裁きと威厳のことに言及していたのだ。それは、彼らが受ける結果から、わたしが宇宙と万物を支配していることを彼らが知るようになるためである。勇気を持って行動しなさい。頭を上げなさい。恐れてはならない。わたし——あなたがたの父——がここであなたがたを支えているので、あなたがたは苦しむことはないだろう。あなたがたがわたしの前で頻繁に祈り、懇願する限り、わたしはあなたがたに全ての信仰を授けるだろう。権力を持っている者たちは、外側から見ると悪質に見えるかもしれないが、恐れることはない。それは、あなたがたの信仰があまりに僅かだからである。あなたがたの信仰が成長する限り、難しいことは何もない。心ゆくまで歓呼し跳び上がりなさい。全てがあなたがたの足の下にあり、わたしの掌中にある。物事の達成も破壊も、わたしの一言によって決定されるのではないのか。

わたしが今用いている者たちは皆、ずっと前に、わたしによって一人ずつ認められたのだ。つまり、長子の群れの中の人々は、すでに決定され、わたしが世界を創造して以来、定められているのである。誰もこれを変えることはできず、全てはわたしの命令に従わなければならない。人間にはそれを為すことはできない。これらは全てわたしの采配である。わたしと共にあれば、全てが安定し、安全である。わたしと共にあれば、ほんの少しの努力を費やすこともなく、全てのことが適切かつ正しく行われるであろう。わたしが話せば、それは確立され、わたしが話せば、それは成し遂げられる。国際情勢が混乱の中にあるというのに、あなたがたは何故急いで訓練を始めないのか。あなたがたはいつまで待つのだろうか。あなたがたは、外国人が中国に殺到しあなたがたに会う日まで待つのだろうか。あなたがたは、以前は少し遅かったかもしれないが、もう自墮落であり続けることはできない。わたしの子らよ。わたしの苦心の意図に配慮しなさい。わたしにもっと頻繁に近づく者は、すべてのものを得るだろう。あなたがたはわたしを信頼しないのだろうか。

わたしの働きのペースは雷の閃きであるが、決して雷の轟きではない。これらの言葉の真の意味が分かるだろうか。あなたがたは、わたしにより良く協力し、わたしの意図

に配慮しなければならない。あなたがたは祝福を受けたがっているが、それと同時に苦しみを恐れている。これはあなたがたの曖昧な態度ではないのか。あなたに告げよう。今日祝福を受けることを望んでも、その目的のために全てを犠牲にしないのであれば、彼らが受けるのは、罰とわたしの裁きだけである。しかし、全てを犠牲にする者は、あらゆる事の中で平安を体験し、全てのものを豊かに持ち、彼らが受ける全てが、わたしの祝福になるだろう。今日、緊急に必要とされるのは、あなたがたの信仰であり、あなたがたが代価を払うことである。わたしの意図を誤解してはならない。全てのことが起こるであろう。そして、あなたがたは自分の目でそれを見て、それを直接経験しなければならない。わたしには、偽りの言葉や嘘は一つもない。わたしが言うことは全て真実であるが、知恵に欠けてもいない。半信半疑になってはならない。あなたがたの間で全てを成し遂げたのはわたしである。また、悪を行う者を裁き処分するのもわたしである。わたしはあなたがたを愛している。そして、あなたがたを完全にする。しかし、彼らには、わたしは全く反対である。つまり憎しみと破壊であり、何の余裕も与えず、彼らの痕跡を残すこともない。わたしの豊かさは、わたしが言うこと為すことのすべてに内在している。あなたがたはそれらを少しずつ調べたのだろうか。幾つかの言葉をわたしは何度も言ったが、どうしてあなたがたは、わたしが意味することを理解できないのか。あなたがたが、わたしの言葉を読んだ後、全てのことは、なるべきようになるのか。全てのことは、その時成し遂げられるのか。あなたにはわたしの心を配慮する意図が少しもない。何故わたしは完全なる権威があり、全ての知恵を持ち、人々の心の奥を見る唯一の真の神である、とわたしは言いうのか。あなたは、まだこれらの言葉の意味を理解していないのか。あなたは、わたしが強調した言葉を一つひとつ暗記したか。それらは実際、あなたの行動の仕方の原則になったのか。

わたしは全てのものの上に立って、宇宙全体を見渡す。わたしは、わたしの大いなる力と全ての知恵を全ての国々と人々に示す。今すぐ楽しみを追い求めるためにだけ、ただ全力を尽くしてはならない。世界の全ての国々が一つになる時、あなたがたのものにならないものがあるだろうか。それでも、わたしは、今あなたがたが何かに欠けることを許さず、あなたがたが苦しむことも許さない。わたしが全能なる神であることを信じなさい。全てのことが成し遂げられ、ますます良くなるであろう。わたしの長子たちよ。全ての祝福があなたがたのところへ来る。あなたがたはそれらを尽きることなく享受し、それは無尽蔵で、豊かに満ち溢れ、十分に補うであろう。

第七十六章

わたしの言葉はすべてわたしの旨の表明である。わたしの重荷に配慮することができるのは誰か。わたしの意図を理解できるのは誰か。あなたがたは、わたしがあなたがたに提起した質問を一つひとつ考慮したことがあるのか。なんという不注意だろう。わたしの計画を妨げるとは何たることだ。あなたがたは手に負えない。悪霊どものこのような働きが続くなら、わたしは直ちに彼らを死の底なしの穴へ投げ込む。わたしは長い間、悪霊どもの様々な行いをはっきりと見てきた。そして、悪霊どもに用いられる人々（誤った意図を持つ者、肉や富を渴望する者、自分を高める者、教会を混乱させる者など）もわたしはそれぞれ見透かしてきた。悪霊たちが追い出されたら、それですべてが終わると思ってはならない。わたしはあなたに告げる。これから後、わたしはそれらの人々を一人ひとり処分し、二度と用いない。つまり、悪霊によって墮落させられた人は誰であれ、わたしによって用いられることはなく、追い出されるということである。わたしに感情がないと思ってはならない。このことを知りなさい。わたしは聖なる神であり、わたしは汚れた神殿には住まない。わたしは、わたしに完全に忠実で、わたしの重荷に配慮することができる、正直かつ賢明な人々だけを用いる。なぜなら、そのような人々はわたしによって予め定められているからだ。悪霊はそれらの人々の上には絶対に働いていない。一つのことを明確にしておこう。今から後、聖霊の働きのない者はすべて、悪霊の働きを持つ。あらためて言う。わたしは悪霊が働きかけているような者は一人も望まない。彼らは皆彼らの肉と一緒にハデスに投げ込まなければならない。

過去、あなたがたへのわたしの要件は少し緩く、あなたがたは、肉のこととなるといつも自墮落であった。今日から、わたしはあなたがたにこのまま続けさせることはしない。あなたがたの言葉や行動があらゆる面でわたしを表さないなら、または、それらが少しもわたしの似姿でないなら、わたしは決してあなたがたを簡単には容赦しない。そうしなければ、あなたがたは、常に笑って冗談を言い、際限なく笑い転げるだろう。あなたが何か間違ったことをするとき、あなたは、わたしがあなたから去ったのを感じないのか。あなたは知っているのに、なぜまだ自墮落であるのか。あなたはまだわたしの裁きの手に触れられることを待っているのか。今日からわたしは、一瞬でもわたしの意図に一致しない者は、誰でも直ちに罰する。あなたが集まって噂話ばかりしているなら、わたしはあなたから去る。霊的な糧を与えないのなら、話してはならない。わたしはあなたがたを抑制するためにこう言うのではなく、わたしの業は今の段階に至るまで働いているので、わたしはわたしの計画に沿って継続するという意味である。あなたがたがいのちの中での霊的な事について交わるために共に座るなら、わたしはあなたがたと

共にいる。わたしはあなたがたの誰一人として、不公平に扱いはしない。あなたが口を開くなら、わたしは適切な言葉を授ける。あなたがたはわたしの言葉の中から、わたしの心を理解しなければならない。わたしはあなたがたに口が利けないふりをするように言っているのではない。また、つまらない世間話をするように言っているのでもない。

なぜわたしはあまり多くの時間は残っておらず、わたしの日は遅れてはならないと繰り返し言うのか。あなたがたは、このことを慎重に考えたことがあるか。わたしの言葉の意味を本当に理解しているのか。つまり、わたしは語り始めて以来、働いてきた。あなたがたの一人ひとりがわたしの働きの対象であり、それはある特定の人ではなく、さらには、他の誰でもない。あなたがたは、祝福を享受していないことばかり心配しているが、自分たちのいのちのことは考慮しない。あなたがたはなんと愚かなことか。なんと哀れなことか。あなたがたはわたしの重荷を考慮することが全くない。

わたしの骨の折れる努力のすべてとわたしが払った代価は、あなたがたのためであった。わたしの重荷を考慮することがないなら、あなたがたはわたしの期待に答えなかったのだ。すべての国々があなたがたの統治を待っており、すべての人々があなたがたの支配を待っている。わたしはあなたがたの手にすべてを託している。今、権力を持っていた者たちは、皆その地位を失い始め、失墜した。そして彼らは自分たちの上に下るわたしの裁きを待っている。はっきりと見なさい。世界は今崩壊しつつある一方、わたしの国は成功裡に建て上げられている。わたしの子らが現れ、わたしの長子たちは王としてわたしと共に治め、さまざまな国や民族を支配する。これを曖昧なことだとは思ってはいらない。それは明白な真実である。そうではないのか。あなたがたがわたしに祈り懇願すれば、わたしは即座に行動を起こし、あなたがたを迫害する者たちを罰し、あなたがたを邪魔する者たちを取り扱い、あなたがたが憎む者たちを滅ぼし、あなたがたに仕える人々、出来事、物事を管理する。わたしは幾度も言った。わたしはキリストのために奉仕する者（つまり、わたしの子のために奉仕を為す者）なら誰にでも救いをもたらすという訳ではない。わたしの子のために奉仕するということは、彼らが良い人々であるという意味ではないのだ。それは全てわたしの大いなる力と素晴らしい行い結果である。人間を重要視し過ぎてはいらない。このような人々は決して聖霊の働きを持っておらず、霊的なことを全く理解しない。わたしが彼らとの用を済ませると、彼らは何の役にも立たない。これを憶えておきなさい。これがあなたがたへのわたしの確認である。何でも鵜呑みにしてはいらない。これが分かるだろうか。

人々はどんどん少なくなっているが、教会員はますます精錬されている。これはわた

しの働き、わたしの経営（救いの）計画、そしてそれ以上に、わたしの知恵とわたしの全能性である。それはわたしの普通の人性とわたしの完全な神性の調和である。あなたがたはこれをはっきり理解しているか。この点を少しでも本当に理解しているか。わたしは、わたしの神性を通して、わたしの普通の人性から話したすべてのことを一つずつ達成する。これが、わたしが語ることはすべて何の曖昧さもなく実現する、とわたしが言い続ける理由である。むしろ、それはすべてとても明確かつ明白であろう。わたしが言うすべてのことは成就し、決して不用意に行われることはないであろう。わたしは空しい言葉は話さず、間違えることもない。あえてわたしを測ろうとする者は誰でも裁かれ、わたしの掌中から決して逃れられない。わたしの言葉が語られるやいなや、誰が敢えてそれに抵抗するだろうか。わたしを騙そうとしたり、わたしから何かを隠そうとするのは誰か。わたしは以前言ったはずである。わたしは知恵ある神である。わたしはわたしの普通の人性を用いて、すべての人々とそのサタンのような振る舞いを露わにし、間違った意図を持つ者、他人の前では一様にふるまい、他人の背後では違うふるまいをする者、わたしに抵抗する者、わたしに不実である者、お金を渴望する者、わたしの重荷を考慮しない者、兄弟姉妹に対して欺瞞や不正を行う者、口達者で人々を喜ばせる者、そして兄弟姉妹たちと心と思いにおいて一致して協力することができない者たちを暴露する。わたしの普通の人性の故に、実に多くの人々が密かにわたしに抵抗し、欺瞞や不正を行い、わたしの普通の人性は知らないだろうと思い込んでいる。そして、実に多くの人々がわたしの普通の人性に特別注意を払い、わたしに良い食べものや飲みものを与え、召使のようにわたしに仕え、心の中にあることをわたしに話している一方、わたしの背後ではいつも全く違うふるまいをしている。盲目な人間たちよ。あなたがたはわたしのことを何も知らない——人の心の奥底を見とおす神のことを。あなたは今なおわたしを知ってはいない。あなたが何をしているのかわたしは気づいていないと、あなたはまだ思っている。考えてみなさい。わたしの普通の人性故に、どれだけ多くの人々が自らを滅ぼしてきたことか。目を覚ましなさい。もうこれ以上わたしを欺いてはならない。あなたは、あなたのすべての行いとふるまい、一つひとつの言葉と行為をわたしの前に置いて、わたしの吟味を受け入れなければならない。

第七十七章

わたしの言葉に不確かであることは、わたしの行動に対して否定的な態度をとることと同じである。つまり、わたしの言葉はわたしの子の中から流れ出したが、あなたがたは、それを重視しない。あなたがたはあまりにも軽薄である。多くの言葉がわたしの子

の中から流れ出したが、あなたがたは疑いを抱き、それらについて確信していない。あなたがたは盲目である。あなたがたは、わたしが為した一つひとつのことの目的を理解していない。わたしがわたしの子を通して表現する言葉は、わたしの言葉ではないのか。直接言いたくないことがいくつかあるので、わたしは、わたしの子を通して話す。しかし、なぜあなたがたは、愚かにも、わたしが直接話すように言い張るのか。あなたがたはわたしを理解しておらず、いつもわたしの行為と業について疑いを持っている。わたしのすべての動き、わたしのすべての行為と業は正しいと、わたしは前に言わなかったか。人々はそれらの吟味を止めなければならない。あなたのけがれた手を引っ込めなさい。わたしはあなたに告げよう。わたしが用いるすべての人々は、わたしが世界を創造する前に予め定められたのであり、彼らは今日もわたしから承認されている。あなたがたはこのようにことに絶えず労力を注ぎ、わたしという人間を吟味し、わたしの行動を研究している。あなたがたはみな商売人の考え方を持っている。もしこういうことがまた起きれば、あなたがたは必ずわたしの手によって打ち倒されるだろう。わたしが言っていることとはこうである。わたしを疑ってはならない。わたしがやったことを分析したり考えたりしてはならない。さらに、そのようなことに干渉してはならない。これはわたしの行政命令に関することだからである。これは些細な問題ではない。

わたしが指示したすべてのことをする時をつかみなさい。また、警告として、もう一度言う。外国人たちが中国に殺到しようとしている。これは絶対にほんとうである。わたしは、ほとんどの人々がこのことを疑わしく思い、確信がないのを知っている。ゆえに、あなたがたがいのちの成長をすぐに求め、わたしの旨を満足させることができるよう、わたしはあなたがたに何度も思い起こさせる。今から、国際情勢はさらに緊迫し、様々な国が内部から崩壊し始めるだろう。もはや中国では幸せな日々はないであろう。つまり、労働者たちはストライキを行い、学生たちは勉学を放り出し、ビジネスマンは市場を捨て、工場はすべて閉鎖され、生き残ることができなくなるだろう。幹部たちは脱出するための資金を準備し始めるだろう（これもまた、わたしの経営（救いの）計画に役立つことになる）。また、中央政府の各階層の指導者たちはみな準備をしているが、他の物事を犠牲にしてまである種の物事に夢中になりすぎている（これは次の段階に役立てるためである）。そのことをはっきりと見なさい。わたしの働きは全世界に向けられているので、これは中国だけでなく、宇宙全体に関することであるが、それはまた、一群の長子たちを王にするためでもある。あなたがたには、これがはっきりと見えるか。急いで求めなさい。わたしはあなたがたを不公平に扱わない。わたしは、あなたが

たに心ゆくまで喜びを体験させよう。

わたしの行動は不思議である。世界に大きな災害があるとき、悪を為す者たちや支配者たちのすべてが罰を受けているとき——もしくは、もっと明瞭に言うと、わたしの名の外にいる悪を為す者たちが苦しむとき——わたしはあなたがたに祝福を授け始めよう。これは、わたしが過去に繰り返し言った、「あなたがたは必ずや災害による苦しみや危害を被らない」という言葉の本質的な意味である。あなたがたはこれを理解しているか。わたしが言う「今度」とは、言葉がわたしの口から出てくる時を指している。聖霊の働きは非常に急速なペースでなされる。わたしは一分一秒たりとも遅れたり、浪費したりすることはない。むしろ、わたしの言葉が話されたまさにその瞬間、その言葉どおりに行動する。わたしが、今日わたしは誰かを排除する、あるいは誰かを軽蔑すると言うなら、その人は即座に終わりになるだろう。つまり、わたしの聖霊は直ちに彼らから取り去られ、彼らは生きる屍となって、役に立たない人間になるだろう。彼らはまだ呼吸し、歩き、話し、わたしの前で祈っているかもしれないが、わたしが彼らから去ったことには、決して気づかないだろう。彼らは典型的な役立たずの人間である。これは絶対に真実で本当である。

わたしの言葉はわたしという人間を表している。これを覚えておきなさい。疑いを抱いてはならない。あなたがたは絶対に確信していなければならない。これは生と死の問題である。これは極めて深刻である。わたしの言葉が話されたまさにその瞬間、わたしがしたいことはすでに実現している。これらの言葉は、すべてわたしの子を通して話されなければならない。あなたがたのうちの誰が、この問題を真剣に熟考したことがあるのか。わたしは他にどのようにして説明できるのか。いつも怖れて臆病になってはならない。わたしは本当に他人の気持ちを全く考慮しない者であるのか。わたしが承認する者を、わたしはぞんざいに追放するだろうか。わたしが為す全てのことには原則がある。わたしは、わたし自身が定めた契約を破ることはしない。わたしは自分の計画を混乱させることはない。わたしはあなたがたのように未熟ではない。わたしの働きは偉大なことであり、人間にはできないことである。わたしは義であり、わたしを愛する者には、わたしは愛である、と言った。これが本当であることをあなたは信じないのか。あなたはいつも不安を抱き続ける。すべてのことについてはっきりした良心を抱いているなら、なぜあなたはまだそんなに恐れているのか。それはすべて、あなたが自らを縛っているからである。わが子よ。わたしは、あなたに悲しまないように、涙を流さないように、何度も思い起こさせてきた。そして、わたしはあなたを見捨てない。あなたはまだ

わたしを信頼できないのか。わたしはあなたをしっかりとつかみ、あなたを去らせない。わたしはいつもあなたをわたしの愛の中で抱きしめよう。わたしはあなたを世話し、あなたを守り、あらゆることにおいて、あなたに啓示と見識を与え、わたしがあなたの父であり、支えであることをあなたに見せよう。あなたがあなたの父の肩の重荷を軽くする方法を常に思い巡らしていることを、わたしは知っている。これはわたしがあなたに与えた重荷である。それを肩から振り落とそうとしてはならない。今日何人の者がわたしに忠実であることができるだろうか。わたしは、あなたが訓練を速め、わたしの心を満たすために、すぐに成長することを願っている。父は昼も夜も子のために労する。だから、子も父の経営（救いの）計画のことを毎分每秒考慮すべきである。これが、前にわたしが話していた、わたしとの積極的な協力である。

これはすべてわたしがやっていることである。わたしは、わたしが今日用いている人々に重荷を与え、知恵を与え、それによって彼らの行うことはすべてわたしの旨に適い、わたしの国が実現し、新しい天と地が現れるだろう。わたしが用いていない人々は全く反対である。彼らはいつもぼんやりしており、食べては眠り、眠っては食べ、重荷が意味するものをまったく分かっていない。これらの人々は聖霊の働きを欠いており、できるだけ早くわたしの教会から追放されるべきである。今わたしはビジョンの側面について、いくつかのことを伝えよう。教会とは神の国への前提条件である。教会がある程度建て上げられてから、人々は神の国に入ることができる。誰も神の国に直接入ることはできない（わたしによって約束されていないなら）。教会は最初の段階であるが、神の国は、わたしの経営計画の目的である。いったん人々が神の国に入ると、すべてが形をとり、恐れることは何もうなくなる。今、わたしの長子たちとわたしだけが神の国に入って、すべての国々と人々を統治し始めた。すなわち、わたしの国は組織されつつあり、王や我が民になる者はみな公表されている。将来の出来事はあなたがたに段階的に、順番に伝えられるであろう。あまりにも心を騒がせたり、心配してはならない。わたしがあなたに言った一つひとつの言葉を覚えているだろうか。あなたが本当にわたしの味方なら、わたしはあなたに真実を語ろう。偽りや曲がったことを行う者たちについては、わたしもそのお返しとして彼らをいい加減に扱い、このような振る舞いがいったい誰に滅びをもたらすか、彼らにはっきりと見せよう。

第七十八章

働きは、人間によってではなく、わたしによって行われると、わたしは以前言った。

わたしにとっては、全てのことがゆったりしており楽しいが、あなたがたにとっては、物事は非常に異なり、あなたがたが何をしようと、それは極めて困難である。わたしが承認するものは何でも、わたしによって必ず成し遂げられるであろう。一方、わたしが承認する者は誰でも、わたしによって完全にされるであろう。人間たちよ——わたしの働きに干渉してはならない。あなたがたが心配する必要があるのは、わたしの導きに従うこと、わたしが愛することを行い、わたしが憎む全てのことを拒むこと、罪から抜け出すこと、そして自らをわたしの愛の抱擁の中に委ねることだけである。わたしはあなたがたに自慢しているのでも、誇張しているのでもない。真実は本当にそうである。わたしが、世界を滅ぼそうとしていると言うなら、瞬く間に世界は灰になるであろう。あなたがたは、しばしばあまりにも心配し過ぎて、自らに重荷を加え、わたしの言葉が空しいものであることを深く恐れて、わたしのために逃れる道を見つけようとして走り回る。盲目的な愚か者たちよ。あなたは自分の価値さえ知らないのに、わたしの助言者になろうとしている。あなたにその価値があるのか。鏡でよく見てみなさい。

あなたに告げよう。臆病者は、その臆病のために懲らしめられなければならない、一方、極めて信仰の厚い者は、その信仰のために祝福を得るであろう。はっきり言うと、今最も重要な点は、「信仰」である。あなたがたの上に臨むであろう祝福がまだ現されていないときでも、あなたがたは、わたしのために全てを費やす必要がある。いわゆる「祝福される」と「災難を受ける」ということは、この側面を指している。わたしの子らよ。わたしの言葉は、まだあなたの心の中に刻まれているか。「わたしのために心から尽くす者よ、わたしは必ずあなたを大いに祝福するであろう」。今日、あなたは本当にその内に宿っている意味を理解しているか。わたしは空しい言葉は話さない。今から後、隠されたものは何もない。つまり、以前わたしの言葉の中に隠されていたことが、全く隠されることなく、一つ一つ、あなたがたに告げられるのだ。さらに、それぞれの言葉は、わたしが本当に意味することであり、わたしの前に隠されている全ての人々、出来事、物事を明らかにすることは容易に成し遂げられ、わたしにとって難しくないことは、言うまでもない。わたしが為す全てのことには、わたしの普通の人性の側面、それにわたしの完全な神性の側面が含まれている。あなたがたは本当にこれらの言葉をはっきりと理解しているだろうか。だからわたしは繰り返し言うのだ。あまり急ぎ過ぎてはならない。わたしにとって、人や物事を露わにするのは難しいことではないが、それにはいつもわたしの時がある。そうではないか。数多くの人々がわたしの前で真の姿を露わにされた。狐の霊、犬、あるいは狼であろうと、わたしが定めた特定の時に、誰もが

自分の真の姿を露わにする。それは、わたしが行う全てのことは、わたしの計画の一部だからである。この点についてのあなたの理解は明確でなければならない。

「その時はもう遠くない」ということが指しているものを、あなたは本当に理解しているだろうか。過去に、あなたはそれがわたしの日を意味するといつも思っていたが、あなたがたは皆、あなたがたの観念に基づいて、わたしの言葉を解釈してきた。あなたに告げよう。今から後、わたしの言葉を間違って解釈する者は誰でも、間違いなく愚か者である。わたしが話した「その時はもう遠くない」という言葉は、あなたがたが祝福を享受する日を指している。つまりそれは、全ての悪霊が滅ぼされて、わたしの教会から追い出される日であり、人間による物事のやり方が拒まれ、さらには、全ての大きな災害が降りかかる日を指している。これを覚えておきなさい。それは「全ての大きな災害」であり、もうこれを誤解してはならない。わたしの大きな災害は、わたしの手から全て同時に全世界に降りかかるであろう。わたしの名を得た者たちは祝福され、この苦しみを被ることは決してないであろう。あなたがたはまだ覚えているだろうか。わたしが言ったことをはっきり理解しているだろうか。わたしが話す時が、わたしが働きを始める時である（このとき大きな災害が来る）。あなたがたはわたしの意図を本当に理解していない。あなたがたは、なぜわたしがあなたがたにそのような厳しい要求をし、あなたがたに全く寛容を示さないのか理解しているか。国際情勢が緊迫しており、中国国内の（いわゆる）権力者たちが全ての準備をしている時は、時限爆弾が爆発しようとしている時とまさに同時である。七つの国からの真の道を求めている者たちは、どんな代価を払おうとも、水門を破る水のように必死になって中国に殺到するであろう。ある者はわたしに選ばれ、他の者たちはわたしのために奉仕するが、彼らの中に長子はひとりもない。これはわたしが為すことである。これはわたしが世界を創造したときにすでに行われた。人間の観念を取り除きなさい。わたしが意味不明なことを話していると思っ
てはならない。わたしが考えることは、わたしが成し遂げたことである。またわたしの計画は、わたしがすでに達成したものである。あなたがたはこのことについて、はっきりしているだろうか。

全てのことは、わたしの思いとわたしの計画にかかっている。わが子よ。わたしはあなたのためにあなたを選んだ。さらにそれは、わたしがあなたを愛しているからである。誰であれ心の中で逆らったり、嫉妬の思いを膨らませたりする者は、わたしの呪いと燃える炎によって死ぬであろう。今日神の国がすでに形成されているので、これはわたしの国の行政命令に関わることである。しかし、わが子よ、あなたは慎重でなければな

らず、これを一種の資本として扱うべきではない。あなたは父の心に配慮し、それを通して父の苦心の努力を理解すべきである。このことから、わが子は、わたしがどんな種類の人間を一番愛し、どんな種類の人間を二番目に愛し、どんな種類の人間を最も憎み、またどんな種類の人間を忌み嫌うのかを理解していなければならない。自らに圧力を加え続けてはならない。あなたがどのような性質を持っていようと、それは全てわたしによって予め定められており、それはわたしの神聖な性質の一面の現れである。あなたの不安を投げ捨てなさい。わたしはあなたに対して憎しみを抱くことはない。わたしはどのようにこれを言うべきなのか。あなたはまだ理解していないのか。あなたはまだ恐れに拘束されているか。誰が忠実であり、誰が熱心で、誰が誠実で、誰が不実であるか——わたしはそれを全て知っている。なぜなら、前にも言ったように、わたしは自分の手のひらのように聖徒たちの状態を知っているからである。

わたしの目には、全てのことがすでにずっと前に成し遂げられ、明らかにされている（わたしは人間の心の奥底を探る神である。それはただ、わたしの普通の人性の側面をあなたがたに示すためであり、それが全てである）。しかし、あなたがたにとっては、それは隠されており、達成されていない。これは全て、あなたがたがわたしを知らないからである。全てがわたしの手の中にあり、全てがわたしの足の下にあり、わたしの目は全てのことを探る。誰がわたしの裁きを逃れることができようか。全てのけがれた者、隠し事のある者、わたしの背後で裁く者、反抗心を抱く者など——わたしの目に貴くない人々は皆、わたしの前でひざまずき、自分の重荷を下ろさなければならない。おそらくこれを聞いた後、幾人かの者たちは少しは心が動かされるかもしれないが、他の者たちは、それがこれほど深刻なものだとは信じないだろう。わたしはあなたがたに警告しよう。賢い者は急いで悔い改めるがよい。あなたが愚か者なら、ただ待っていなさい。その時が来るとき、誰が災いに遭うのか見ていなさい。

天はまだ元の天であり、地はまだ元の地であるが、わたしの見解では、天と地はすでに変わっており、かつての天と地ではない。天とは何を指しているのか。あなたがたは知っているか。また今日の天は何を指しているのか。過去の天は何を指していたのか。これをあなたがたに伝えよう。過去の天とは、あなたがたが信じていたが、誰も見たことのない神を指していた。そして、それは人々が真の誠実さで信じていた神である（何故なら、彼らは神を見ることができなかったからである）。一方、今日の天とは、わたしの普通の人性とわたしの完全な神性、つまりこの実際の神自身を指している。それは同じ神であるが、なぜわたしは、わたしが新しい天だと言うのか。これは全て人間の観

念に向けられている。今日の地とは、あなたがたがいるところを指している。過去の地には、聖なる場所が一つもなかったが、あなたがたが今日行くところは、聖なるものとして区別されている。だからわたしは、それが新しい地だと言うのである。ここで言う「新しい」とは、「聖なる」ということを指す。新しい天と地は今や完全に実現した。あなたがたは、このことについてはっきりしているだろうか。わたしは全ての奥義をあなたがたに、1 ページごとに明らかにするであろう。慌てなくてもよい。さらに大きな奥義があなたがたに明らかにされるであろう。

第七十九章

盲目の者よ。無知な者よ。無価値なごみの山よ。あなたがたはわたしの普通の人間性を、わたしの完全な神性から分離している。これはわたしに対する罪だと思わないのか。それ以上に、それは赦しがたいことである。実践の神は今日あなたがたの中に来ているが、あなたがたは普通の人間性というわたしの一面だけを知っていて、完全に神性な側面をまったく見たことがない。誰が背後でわたしを欺こうとしているか、知らないとも思っているのか。わたしはあなたを批判しているのではない。ただあなたがどんなレベルに達することができるか、最終的にどうなるかを見定めようとしているだけだ。わたしの言葉は何十万回と語られてきたが、あなたがたは非常に多くの悪事を働いてきた。なぜ繰り返しわたしを欺こうとするのか。いのちを失わないよう注意しなさい。わたしをある程度まで怒らせれば、わたしは憐れみを示さなくなり、あなたは追放されることになる。わたしはあなたが過去にどうだったかなど気に留めない。忠実だったか熱心だったか、どれほど走り回ってきたか、どれだけわたしに尽くしてきたか、そういったことは一切目に留めない。ただあなたが今わたしを挑発すれば、わたしはあなたを底なしの穴に投げ入れる。誰がまだわたしを欺こうとするだろうか。このことを覚えておきなさい。これ以降、わたしが怒ったときは、それが誰に対してであろうと、ただちにその者を追い払い、将来の問題を排除するとともに、もう二度とその者を見なくていいようにする。あなたがわたしに背くなら、即座にあなたを罰する。あなたがたはこれを心に留めておくだろうか。利口な者は今すぐに悔い改めるべきである。

今日、つまり今、わたしは怒っている。あなたがたは皆わたしに忠実になり、全存在を捧げなければならない。これ以上遅れてはならない。わたしの言葉に耳を傾けないなら、わたしは手を伸ばしてあなたを打ちのめすだろう。そうすることで、すべての者にわたし自身を知らせるのだ。今日、わたしはすべての者に対して憤り、威厳に満ちてい

る（これはわたしの裁きよりも厳しいものだ）。わたしは非常に多くの言葉を語ったが、あなたがたは一切反応しなかった。あなたがたは本当にそこまで頭が鈍いのか。わたしはそうは思わない。悪さを働いているのは、あなたがたの中にいる古い悪魔なのだ。このことがはっきりわかるだろうか。急いで根本的な変化を起こしなさい。今日、聖霊の働きはこの段階にまで進んでいる。あなたがたはそれを見ていないのか。わたしの名はすべての国で、四方八方に家から家へと広がり、全宇宙世界で大人も子供も口をそろえてわたしの名を叫ぶことになる。これは絶対的事実である。わたしは唯一無二の神自身であり、さらに唯一の神の本体である。またそれ以上に、わたしという肉全体が、神の完全な顕現なのだ。わたしを畏れない者、その目に反抗を表す者、反逆する言葉を話す者は、誰でも必ずやわたしの呪いと怒りによって死ぬだろう（わたしの怒りによって呪いが引き起こされるのだ）。さらに、わたしに忠誠や子としての愛を示さず、わたしをごまかそうとする者は、必ずやわたしの憎しみによって死ぬであろう。わたしの義と威厳と裁きは永遠に続いていく。当初、わたしは愛と憐れみに満ちていたが、それはわたしの完全な神性の性質ではない。義、威厳、そして裁きこそが、完全な神自身であるわたしの性質をなすものなのだ。恵みの時代、わたしは愛と憐れみに満ちていた。わたしは終えなければならない働きのために慈愛と憐れみを持っていたが、その後はそうしたものは必要なかったのだ（そしてそれ以降は一切必要ない）。すべては義と威厳と裁きであり、それがわたしの普通の人間性と完全な神性が一体となった完全な性質なのだ。

わたしを知らない者たちは底なしの穴で滅びるが、わたしのことを確信している者たちは永遠に生き、わたしの愛の中で世話され守られることになる。わたしが一言発した瞬間、全宇宙と地の隅々までが震える。わたしの言葉を聞いて恐れ慄かない者がいるだろうか。畏敬の念に満たされずにいられる者がいるだろうか。わたしの業からその義と威厳を知ることができない者がいるだろうか。そしてわたしの業の中に、わたしの全能と知恵を見ることができない者がいるだろうか。注意を払わない者は、誰であれ必ず死ぬであろう。なぜなら注意を払わない者は、わたしに抵抗する者であり、わたしを知らない者だからだ。彼らは大天使であり、最も理不尽な者である。自分自身をよく吟味しなさい。理不尽で、独善的で、自惚れていて、傲慢な者は誰であれ、間違いなくわたしの憎しみの対象であり、必ず滅びることになるのだ。

わたしは今、わたしの国の行政命令を布告する。すべてがわたしの裁きの内にあり、すべてがわたしの義の中にあり、すべてがわたしの威厳の中にある。わたしはすべての

者に対して義を实践する。わたしを信じると言いながら心の奥でわたしに背く者や、心でわたしを捨てた者は追放されることになるが、すべてはわたしの時に応じて行われる。人に知られぬようにわたしのことを皮肉を込めて話す者は、ただちに死ぬであろう（彼らは霊も魂も肉体も滅びることになる）。わたしの愛する者たちを弾圧したり冷遇したりする者は、わたしの憤りによってただちに裁かれるだろう。つまり、わたしの愛する者たちに嫉妬心を抱き、わたしのことを義でないと思う者は、わたしの愛する者たちに引き渡され、裁かれることになる。品行方正な者、質素な者、正直な者（知恵がない者も含む）、そしてひたむきな誠実さでわたしに尽くす者は、みなわたしの国に留まる。訓練を受けていない者たち、つまり正直だが知恵と見識に欠けている者たちは、わたしの国で権力を持つことになる。しかし彼らも取り扱かわれ打ち砕かれてきたのだ。彼らが訓練を受けていないというのは絶対的なことではなく、むしろそのことを通して、わたしが全能性と知恵をすべての者に示すのだ。今もわたしを疑う者はすべて追放される。わたしはその中の一人も欲さない（このような時にまだわたしを疑っている者は非常に忌まわしい）。わたしは全宇宙にわたって行う業により、わたしの行為の素晴らしさを誠実な人々に示し、それによって彼らの知恵、見識、識別力を高める。そして不正直な人々は、わたしの驚くべき業によって一瞬のうちに滅ぼされる。最初にわたしの名を受け入れた長子たち（あの聖く穢れなき正直な人々）は皆、真っ先に神の国に入り、わたしと共に万国万民を支配し、神の国で王として治め、万国万民を裁くことになる（これは神の国のすべての長子たちを意味し、それ以外の者ではない）。万国万民の中で裁きを受けて悔い改めた者は、わたしの国に入り、わたしの民となる。一方、頑なで悔い改めない者たちは、底なしの穴に投げ込まれる（そして永遠に滅ぼされる）。神の国での裁きは最後の裁きとなり、それによってわたしは世界を完全に清めることになる。それ以降はもはやどんな不正も、悲しみも、涙も、嘆息もなくなり、そしてそれ以上に、世界も存在しなくなる。すべてはキリストの現れとなり、すべてがキリストの国となるのだ。何という栄光か！何という栄光だろうか！

第八十章

啓示と照らしが与えられるためには、すべてのことはわたしとのほんとうの交わりを要する。さらに、これを通してのみ、霊は平安であることができる。そうでなければ、霊は平安ではないだろう。今、あなたがたの中にある最も深刻な病は、わたしの普通の人性をわたしの完全な神性から分離することである。あたかもわたしが完全な神性も持っていることをまったく知らないかのように、あなたがたの大部分はわたしの普通の人

性ばかり強調する。これはわたしを冒瀆することである。あなたがたは分かるだろうか。あなたがたの病は実に深刻なので、あなたがたは、急いで回復しないなら、わたしの手によって殺されるだろう。わたしの面前ではあなたがたは一樣にふるまうが（立派な人間らしく見え、謙虚で忍耐強い）、わたしの背後ではまったく違うふるまいをする（ひたすら偽善的で、自堕落で、自制心がまったくなく、自分のやりたい放題行ない、徒党を組み、独立王国を築き上げ、わたしを裏切ろうと望んでいる）。あなたは盲目だ。サタンに惑わされてきたあなたの目を開きなさい。わたしが本当に誰であるのかを見なさい。あなたは恥知らずである。あなたはわたしの行為がいかに驚くべきものであるのか知らない。あなたはわたしの全能性を知らない。キリストのために奉仕するが救われていないとは、いったい誰のことを言っているのだろうか。あなたは、自分がどんな役割を果たしているのか知らない。あなたは実際、自分の魅力を見せびらかして、偽装してわたしの前に来る。なんと哀れなことか。わたしはあなたをわたしの家から追い出す。わたしは、予め定めず、選ばなかったので、この種の人間は用いない。

わたしはわたしが言うことを行う。悪を行う者は恐れてはならない。わたしは誰をも不当に扱わない。わたしはいつもわたしの計画に従って行動し、わたしの義によって行動する。悪を行う者たちは創造以来、サタンの子孫なので、わたしは彼らを選ばなかった。これは「豹は自分の斑点を変えることはできない」ということの意味である。人類が理解できない事柄については、わたしにとっては、すべてが明らかにされており、何も隠されてはいない。おそらく、あなたは、少数の人々の目からは何かを隠すことができ、多くの人々の信頼を得るかもしれないが、わたしに対して同じ事をするのは、そう簡単ではない。最終的には、あなたはわたしの裁きから逃れることはできない。人間の視野は限られている。そして、現代の状況のほんの一部でも理解できる者たちは、多少の能力を持っている者と見なされる。わたしにとっては、すべてが順調に進み、ほんの少しでもわたしの道を妨げるものは何もない。すべてはわたしの支配と采配の下にあるからである。わたしの支配に服従しない者は誰か。わたしの経営を邪魔する者は誰か。あえてわたしに不実であろうとする者、またはわたしに親不孝しようとする者は誰か。わたしに真実ではないことを告げ、嘘八百を並べる者は誰か。彼らのうちの一人としてわたしの怒りの手から逃れることはない。たとえあなたが今降参して、進んで刑罰を受け、底なしの穴に入ろうとしても、わたしはそう簡単にはあなたを容赦しない。あなたが逃げ込んだ所を見て、わたしは底なしの穴からあなたを引き上げ、あなたはもう一度わたしの怒りの罰（極限まで憎み尽くし）を受けることになるのだ。わたしが最も憎む

ことは、わたしの普通の人性をわたしの完全な神性から分離することである。

わたしに忠実である者たちは幸いである。つまり、わたしのことを綿密に人間の心を調べる神自身として認識する者たちは幸いである。そしてわたしは必ずやあなたの祝福を幾倍にもし、わたしの国で素晴らしい祝福を永遠に享受させる。またこれはサタンに恥をもたらし最も効果的な方法でもある。しかしながら、あまりにも性急になったり、心を騒がせたりしてはならない。すべてのことにはわたしが定めた時間がある。わたしが予め定めた時間が来ないなら、たとえそれが一秒前であれ、わたしは行動しない。わたしは理由もなく行動することはなく、正確にリズムに応じて行動する。人類に対してわたしは心配しておらず、泰山のように安定している。しかしあなたは、わたしが全能なる神自身だということを知らないのか。あまりにも性急になってはならない。すべてはわたしの手の中にあるのだ。すべてのことはずっと昔から準備されており、それらのものはわたしのために奉仕したくてたまらない。外側から見れば、全宇宙世界は混沌としているように見えるが、わたしの視点から見れば、それは秩序正しいのだ。わたしがあなたがたのために用意したものは、あなたがただけが楽しむためのものである。あなたがたはこのことに気づいただろうか。わたしの経営に干渉してはならない。わたしはわたしの行為から、万国万民にわたしの全能性を見せ、わたしの驚くべき業のためにわたしの聖なる名を誉め讃えさせる。なぜなら、わたしが行うことにはすべて根拠があり、あらゆることがわたしの知恵と力、わたしの義と威厳、そして何よりも、わたしの怒りで満たされているからである。

わたしの言葉を聞いてすぐに目覚めた者たちは、必ずわたしの祝福を受け、必ずやわたしの加護と気遣いを受ける。刑罰の苦しみを経験することではなく、むしろ家族の幸せを楽しむだろう。あなたはこのことを知っているか。苦しみは永遠であるが、喜びはもっと永遠である。それら両方は、今から経験される。あなたが苦しみか、それとも喜びを体験するかは、あなたが自分の罪を認める中でどのような態度をもっているかで決まる。あなたがわたしによって予め定められ選ばれた者たちの一人であるかどうかは、あなたが言ったことに照らし合わせて確信を得るべきである。あなたは、人々を欺くことはできるが、わたしを欺くことはできない。わたしが予め定め選んだ者たちは、今から大いに祝福されるだろう。わたしが予め定めも選びもしなかった者たちは、今からわたしに厳しく懲らしめられる。これは、あなたがたへのわたしの証明になるであろう。今祝福されている者たちは、間違いなくわたしに愛されている人々である。懲らしめられている者たちは、言うまでもなく、予め定められも選ばれもしなかったのだ。あなたは

、このことを明確にすべきである。すなわち、今あなたが受けているのがわたしの取り扱いであり、わたしの厳しい裁きの言葉であるなら、あなたはわたしの心の中で憎まれ、嫌われおり、あなたはわたしによって捨てられる者となるだろう。あなたがわたしの慰めとわたしのいのちの施しを受けるなら、あなたはわたしのものであり、あなたはわたしに愛されている者の一人である。あなたは、わたしの外観に基づいて、これを断定することはできない。このことで正気を失ってはならない。

わたしの言葉は、一人ひとりの実際の状況に話しかける。あなたがたは、わたしがただ思いつきで話題を並べるとでも思っているのか。気分になんて話すとでも思っているのか。絶対に違う。わたしの一つひとつの言葉の中にはわたしの知恵が隠されているのだ。ただわたしの言葉が真実であることを信じなさい。間もなく、真の道を探し求めている外国人たちが入って来るだろう。その時になれば、あなたがたは言葉を失って、すべてのことが何の困難もなく達成されるだろう。あなたがたはわたしが全能なる神であることを知らないのか。あなたがたは、わたしの言葉を聞いて、揺るぎなく信じるのではないか。わたしは間違ったことをしない。まして、間違ったことを述べることはない。あなたがたはそれを知っているか。したがって、彼らを導き牧養するよう、あなたがたがわたしの訓練をすぐに受け入れることをわたしは繰り返し強調してきたのだ。あなたがたはそれを知っているか。あなたがたを通して、わたしは彼らを完全にする。さらに重要なのは、あなたがたを通して、わたしはわたしの膨大なしるしと不思議な業を表す。つまり、人類によって見下されている者たちの中から、わたしは、わたしを表し、わたしの名に栄光を帰し、わたしのためにすべての責任を負い、わたしと共に王として統べ治める一群の人々を選んだのである。したがって、わたしが今あなたがたを訓練しているということは、世界の最も大いなる経営である。これは人類には成し遂げることができない驚くべきことである。あなたがたを完全にすることによって、わたしはサタンを火と硫黄の池に、そして底なしの穴に投げ込み、赤い大きな竜を、二度と立ち上がらないように、完全に死の中へ投げ込むであろう。したがって、底なしの穴に投げ込まれる者はみな赤い大きな竜の子孫である。わたしは彼らを極度に憎む。わたしがこれをもたらしたのだ。あなたがたにはそれが分からないのか。不実な者、曲がった事や欺瞞を行う者は皆暴露された。自分を誇る者、うぬぼれ者、独善的な者、厚かましい者は、大天使の子孫であり、サタンの最も典型的な者たち——すべてわたしの宿敵、わたしに逆らう者たちである。わたしの心の中の憎しみの火を消すために、わたしは彼らを一人ずつ罰しなければならない。わたしは項目ごとにこれを行い、項目ごとに解決する

。

さて、火と硫黄と池と底なしの穴とはいったい何であるのか。人間の想像の中では、火と硫黄の池は物質的なものであるが、人類はこれが非常に誤った説明であることを知らない。しかしながら、それはまだ人類の心の中で一定の位置を占めている。火と硫黄の池とは人類に刑罰を下すわたしの手のことである。火と硫黄の池に投げ込まれる者は誰でも、わたしの手によって殺されている。これらの人々の霊、魂、体は永遠に苦しんでいる。これは、すべてがわたしの手の中にあるとわたしが言ったことの本当の意味である。そして、底なしの穴とは何を意味しているのか。人間の概念では、それは終りがなく計り知れないほど深い大きな奈落であると思われる。ほんとうの底なしの穴とはサタンの影響のことである。もし人がサタンの手の中に落ちるなら、その人は底なしの穴の中にいる。たとえ翼が生えたとしても、彼らはそこから飛び出すことができないだろう。それ故、それは底なしの穴と呼ばれているのだ。これらの人々は皆、永遠の懲罰を受けることになるだろう。わたしがそれをこのように定めたのだ。

第八十一章

ああ、この邪悪で淫らな古い時代よ。わたしはあなたを呑み込もう。シオンの山よ。わたしを称えるために起き上がりなさい。わたしの経営（救いの）計画の完成のために、わたしの偉大な働きを成功裏に完了するために、立ち上がって歓呼しないのは誰か。立ち上がって、止むことなく喜んで跳び上がらない者は誰か。彼らはわたしの手によって死ぬだろう。わたしは、少しの憐みも慈愛もなく、また感情も表さずに、すべての者の上に義を行う。万民よ。立ち上がってわたしを讃美し、わたしに栄光を与えよ。すべての終わりのなき栄光は、とこしえからとこしえまでも、わたし故に存在し、わたしによって確立された。自分のために栄光を得ようとするのは誰か。わたしの栄光を物のように扱う者は誰か。彼らはわたしの手によって殺されるだろう。ああ、残酷な人間たちよ。わたしがあなたがたを創造し、あなたがたのために施し、また今日まであなたがたを導いてきたのに、あなたがたはわたしのことを少しも知っておらず、わたしを全く愛していない。どうしてあなたがたに再び憐みを示すことができようか。どうしてあなたがたを救うことができようか。わたしはあなたがたをわたしの憤りによってしか扱うことができない。わたしは、滅びによってあなたがたに報い、永遠の懲罰によってあなたがたに報いる。これこそが義であり、こうするしか道はない。

わたしの国は堅固で不動である。それは決して崩壊することなく、永遠までも存在す

る。わたしの子らとわたしの長子たちとわたしの民は、わたしと共に永遠に祝福を楽しむ。霊的なことを理解せず、聖霊から啓示を受けない者は、わたしの国から遅かれ早かれ切り離される。彼らは自らの意志で去るのではなく、わたしの鉄の鞭の支配とわたしの威厳によって無理やり追い出され、さらには、わたしの足によって蹴り出されるだろう。以前、しばらくの間（生まれて以来）悪霊に憑かれていた者はみな、今露わにされる。わたしはあなたを放り出す。あなたはわたしが言ったことをまだ覚えているか。わたし——聖なる汚れなき神——は、汚く穢れた神殿には住まない。悪霊に憑かれた者たちは自分で知っているので、わたしがはっきり説明する必要はない。わたしはあなたを予め定めなかった。あなたは古いサタンであるが、あなたはわたしの国に侵入しようとするのだ。絶対だめだ。わたしはあなたに告げる。今日あなたにそれをまったくはっきりさせよう。わたしが人類創造の時に選んだ者たちには、わたしは、わたしの資質とわたしの性質を染み込ませた。それゆえ、今日彼らはわたしだけに忠実であり、教会のために重荷を負うことができ、彼らは喜んでわたしのために自分自身を費やし、その全存在をわたしに捧げる。わたしが選んでいない者たちは、それゆえ、ある程度サタンによって墮落させられており、わたしの資質もわたしの性質もまったく持っていない。あなたがたは、わたしの言葉は矛盾していると思っているが、「あなたがたはわたしによって予め定められ選ばれているが、あなたがたは自分の行動の結果を負うのだ」という言葉はすべてサタンを指している。ここでわたしは一つの点について説明する。今日、立ち上がって、教会の権威を担うことができる者は、教会を牧会し、わたしの重荷に配慮し、特別な機能を持っている—これらの者のひとりとしてキリストに奉仕した者はいない。皆わたしが予定し選んだ者たちなのだ。わたしは、あなたがたが心配し過ぎず、あなたがたのいのちの成長を遅らせないように、これをあなたがたに告げる。何人の者が長子の地位を勝ち取ることができるだろうか。これは卒業証書を取得するのと同じくらい簡単なことだろうか。あり得ない。もしわたしがあなたがたを完全にするのでなかったら、あなたがたはずっと前にサタンによってある程度まで墮落させられていたことだろう。これは、わたしはわたしに忠実な者を常に世話して守り、彼らが害を受けたり苦しんだりしないようにするであろう、とわたしが繰り返し強調してきた理由なのだ。わたしが予め定めていない者たちは悪霊に憑かれている者、無感覚で鈍く、霊的に滞っており、教会を牧会できない者（熱意は持っているが、ビジョンに関しては、不明瞭である者を意味する）である。あなたはわたしの視界から速やかに取り除かれなければならない。わたしがあなたを見て嫌悪を抱き、怒らないよう、なるべく早くそうした方がよい。あなたが早く去るなら、少しの刑罰を受けるだけで済むだろうが、長くかかるほど

刑罰はより厳しくなるであろう。分かったか。恥知らずになってはならない。あなたは自堕落で抑制がなく、いい加減で不注意で、自分がどんなクズであるかをまったく知らない。あなたは盲目である。

わたしの国で権力を持つ者たちは皆わたしが慎重に選んで、繰り返し試験を受けた。誰も彼らを打ち負かすことはできない。わたしは彼らに力を与えたので、決して倒れたり迷ったりはしない。彼らはわたしの承認を得た。この日以来、偽善者たちは真相を現すであろう。そして、彼らは、あらゆる種類の恥ずべきことをすることができるが、最終的には、サタンを懲らしめ、燃え尽くすわたしの手から逃れることはない。わたしの神殿は聖なるもの、けがれののないものとなる。それはすべてわたしの証しであり、わたしの現れであり、わたしの名の栄光である。それはわたしの永遠の住まいであり、わたしの永遠の愛の対象である。わたしはしばしば愛の手でそれを愛撫し、愛の言葉でそれを慰め、愛の目でそれを気遣い、愛の胸にそれを抱きしめるので、それは悪い者たちの罠に陥ることも、サタンによって欺かれることもない。今日、わたしのために奉仕するが救われていない者たちは、わたしによって用いられ、それが用いられる最後の時となるだろう。どうしてわたしは急いでこれらのものをわたしの国から追い出すのだろうか。なぜわたしは彼らをわたしの目の前から追い出さなければならないのか。わたしは彼らをわたしの骨の髄まで憎む。なぜわたしは彼らを救わないのか。なぜわたしは彼らを忌み嫌うのか。なぜわたしは彼らを打ち殺さなければならないのか。なぜわたしは彼らを滅ぼさなければならないのか。（その灰も含め、彼らの片鱗さえも、わたしの目の前に残ることはできない）それはなぜか。赤い大きな竜、古い蛇、そして古いサタンは、わたしの国でさえたかろうとしている。これ以上幻想を抱いてはならない。それらはすべて無に帰し、灰となるだろう。

わたしはこの時代を滅ぼし、それをわたしの国に変え、とこしえまでも、わたしが愛する人々と共に生きて楽しむ。それらのけがれた者たちは、自分がわたしの国にとどまることができると思ってはならない。あなたは濁った水の中で魚が捕れると思っているのか。そのような幻想など忘れなさい。あなたは、あらゆることがわたしの目によって調べられていることを知らない。あなたは、すべてがわたしの手によって定められていることを知らない。自分は高く評価されているなどと思ってはならない。あなたがたの一人ひとり、自分に適切な位置につかなければならない。謙っている振りをしてはならない（祝福されている者たちを指す）。あるいは、震えて恐れている振りをしてはならない（災いに苦しんでいる者たちを指す）。今、誰もが自ら心の中で知るべきである

。わたしがあなたの名前を呼ばなくても、わたしは個々の人にわたしの言葉を向けたので、あなたはなおも確信すべきである。あなたがたがわたしに選ばれた者かどうかにかかわらず、わたしの言葉は、あなたがたの現在の状態のすべてに向けられている。つまり、もしあなたがたがわたしに選ばれた者たちの中に含まれるなら、わたしはあなたの表明に基づいて、わたしが選んだ者の状態を述べる。わたしに選ばれていない者についても、わたしは彼らの状態に応じて話す。したがって、わたしの言葉は要点について話された。それぞれの人間がそれをよく感じ取るべきである。自分を欺いてはならない。恐れてはならない。その人々の数は限られており、ごく僅かなので、欺瞞はうまくいかない。選ばれているとわたしが言う者は、誰であれ選ばれており、あなたがいかにうまくその振りをしていても、わたしの資質がなければ、あなたは失敗するだろう。わたしは自分の言葉を守るので、わたしは自分の計画をいい加減に混乱させたりはしない。わたしは自分がやりたいことは何でもする。なぜなら、わたしが為すことはすべて正しく、わたしは至高の存在であり、唯一無二の存在だからである。あなたはこれについて、はっきりしているか。あなたは理解しているのか。

さて、わたしの言葉を読んだ後、悪を行う者、よこしまで不実な者たちもまた懸命に働いており、前進することを求め、自分で努力している。彼らはわたしの国に忍び込むために、ただ小さな代価だけを払うつもりである。そのような考えは捨てなければならない。（わたしは彼らに悔い改める機会を与えなかったので、これらの人々には希望がない）わたしはわたしの国の門を守る。あなたは、人々が自分の思い通りにわたしの国に入ることができると思うのか。あなたは、わたしの国がどんながらくたでも受け入れると思うのか。わたしの国が価値の無いどんなゴミでも受け取ると思うのか。あなたは間違っている。今日、神の国にいる者たちは、わたしと共に王としての力を持っている人たちである。わたしは彼らを慎重に育てた。これは、ただ欲することだけで達成することではない—あなたはわたしによって承認されなければならないのだ。そして、これは誰とでも議論できることではなく、わたし自身が采配することである。わたしが言うことは何でも通るのだ。わたしの奥義は、わたしが愛する者たちに明らかにされる。悪を行う者、すなわち、わたしが選択しなかった者には、それを受ける資格はない。たとえ彼らがそれらを聞いても、彼らは理解しないだろう。なぜなら、サタンは彼らの目を覆い、彼らの心を虜にし、彼らの全存在を滅ぼしたからである。なぜ、わたしの行動は驚くべきもので、知恵があり、わたしはあらゆるものを動員してわたしに奉仕させるということが言われているのか。わたしは、わたしによって予め定められておらず、選

ばれていない者たちを、サタンに引き渡して、サタンが彼らを懲罰し、墮落させるようにする。そして彼らを懲罰するにあたり、わたしは自ら手を下さない。わたしにはこのような知恵がある。誰がこのようなことを思いつくだろうか。まったく何の努力もなく、わたしの偉大な働きは成し遂げられたではないか。

第八十二章

わたしの言葉を聞くとすべての者が恐れ慄き、一人一人が恐怖に満たされる。あなたは何を恐れているのか。わたしはあなたがたを殺したりしない。それはあなたがたが良心の呵責を感じており、わたしの背後で非常に軽薄で無価値なことをしているからだ。そのためわたしは本当にあなたを憎むようになり、予め定めて選び出さなかった者たちはすべて、底なしの穴に投げ入れて粉々に砕いておけばよかったと心底思っている。しかし、わたしには計画があり目標がある。今のところはあなたのつまらぬ命を残しておき、わたしへの奉仕が終わるまでは追い出さずにおこう。わたしはこのような生き物を見たくはない、彼らはわたしの名を辱めている。あなたはこれを知っているのか。理解しているのか。価値のない惨めな者よ。このことを理解しなさい。あなたが用いられるとき、それをしているのはわたしであり、あなたが用いられないときもまた、わたしがそう決めているのだ。すべてがわたしによって指揮されており、わたしの手の中ではすべてが行儀よく秩序立っている。あえて順序を狂わそうとする者は誰であれ、ただちにわたしの手によって打ちのめされる。わたしはよく「打ちのめす」と言うが、わたしが本当に自分の手でそう思うのか。そんな必要はない。わたしの行為は人間が想像するほど愚かではない。すべてはわたしの言葉によって確立され成し遂げられる、と言われるのはどういう意味なのか。すべてはわたしが指一本上げることなく成し遂げられる。わたしの言葉の真の意味が理解できるだろうか。

わたしは効力者を誰一人として救わないだろう。わたしの国に彼らの居場所はない。そうした人々はわたしの旨を行うことよりも、外部の問題にばかりいそしんでいるからだ。今わたしは彼らを用いているが、実際には彼らはわたしが最も憎み、最も忌み嫌う人々である。今日わたしは、わたしの旨を行える者、わたしの重荷に配慮できる者、そして真心と誠意をもってわたしにすべてを捧げられるすべての者を愛する。わたしは絶えず彼らを啓き、わたしのもとから立ち去らせない。わたしはよく「心からわたしに尽くす者よ、わたしは必ずあなたを大いに祝福する」と言うが、「祝福」とは何を意味するのか。あなたは知っているのか。現在の聖霊の働きという観点から言えば、それはわ

たしがあなたに与える重荷のことを指している。教会のために重荷を負えるすべての者、そして心からわたしに自らを捧げるすべての者は、その重荷も真心も、わたしから与えられた祝福なのだ。そしてまた、彼らに対する啓示もわたしからの祝福である。なぜなら今重荷を負っていない者たちは、予め定められ選び出されていないのであり、わたしの呪いはすでに彼らに降りかかっている。言い換えれば、わたしが予め定めて選び出した者たちは、わたしが語ったことの肯定的側面にあずかっており、一方でわたしが予め定めて選び出していない者たちは、わたしが語ったことの否定的な側面にしかあずかれない。多くの言葉が語られるほど、その意味は明確になる。わたしが語れば語るほど、それらはより明瞭になるのだ。わたしが予め定めていない、捻じ曲がった不正直な者たちは、一人一人が世界の創造以前にわたしによって呪われたのだ。なぜあなたがたが生まれた年、月、日、時、分、秒さえも、みなわたしによって適切に計画されたと言われるのか。誰が長子の地位を得ることになるかは、もうずっと前に定めてある。彼らには常にわたしの視線が注がれている。彼らはもうずっと前からわたしに貴いものと見なされ、長い間わたしの心の中に留まってきた。わたしが話す一つ一つの言葉には重みがあり、わたしの思いが込められている。人とは何者か。長子という地位を持つ、わたしが愛する少数の者を除けば、わたしの旨に少しでも配慮する者のなんと少ないことか。わたしの子らの価値はどれほどなのか。わたしの民の価値はどれほどなのか。従来、「わたしの子ら」という言葉はわたしの長子たちの呼称だったが、恥を知らないわたしの子や民は、それが自分自身の敬称だと思っていた。厚かましくもわたしの長子の役を演じてはならない。あなたはその呼称にふさわしいのか。今日、すでに検証を受けたのは、わたしの前の重要な位置に就けられた者たちだけであり、その人々は長子の地位を得ている。彼らはすでにわたしの玉座、わたしの王冠、わたしの栄光、そしてわたしの国にあずかっている。すべてはわたしによって入念に采配されているのだ。今日、長子の地位を受けている者はみな大きな苦痛、迫害、逆境を通り抜けてきた。それには生まれてからずっと家族の中で経験してきたことや、自分自身の将来の見通し、仕事、結婚なども含まれる。この長子たちは代価も払わずにその地位を得たのではなく、それどころか良いことも悪いことも、上り坂も下り坂も、人生のあらゆる側面をすでに経てきたのだ。以前世の人々から大いに尊敬され、家で快適に暮らしていた者たちは、誰一人長子に加えられることはない。彼らは長子となるに値せず、わたしの名を辱めるので、わたしは一切彼らを欲しない。わたしに選ばれた子や民も、この世で良い評判を得てはいるが、わたしの長子たちには遠く及ばない。現在わたしは特定の人々を用いているが、その多くはわたしの民となる資格さえない。彼らは永遠の滅びの対象であり、一時的にわ

たしに奉仕させるため用いられているが、長期的に用いられるわけではない。誰を長期的に用いるかは、わたしの心の奥底ですでに決定されている。つまり、わたしが重要な地位に就ける者はわたしの愛する者たちであり、わたしはずっと前に彼らを用い始めたのだ。言い換えれば、彼らの役割はすでに設定されている。わたしが忌み嫌う者たちは、現段階でただ一時的に用いられているだけだ。異邦人たちがやって来るとき、そのときこそ長子たちがあなたがたにはっきりと露わにされるだろう。

今わたしはあなたがたに、早く成長してわたしの重荷に配慮するよう求めている。この重荷はそれほど大きなものではないし、あなたがたにはその能力の範囲内のことしかさせない。わたしはあなたがたの霊的背丈を知っており、どんな役割を果たせるかを知っている。わたしはそのすべてを知り、理解しているのだ。子らよ、わたしはただあなたがたが進んで自制し、なんとかして本当にわたしが愛するものを愛し、わたしが憎むものを憎み、わたしがすることをし、わたしが言うことを言うよう願っているのだ。空間にも地理にも時間にも、またどんな人間にも支配されてはならない。わたしの願いは、あなたがたの霊がどこにいても自由であり、あなたがた一人一人が長子の立場になれることだ。今日、誰がわたしに自らの全存在を捧げているのか。誰がわたしのために忠実に尽くしているのか。誰がわたしのために昼夜を問わず目を覚ましているのか。誰がわたしの家事を取り仕切っているのか。誰がわたしの肩の重荷を軽くしてくれるのか。それはわたしの子らではないか。わたしがすることはすべて、わたしの子らを完全にするためであり、子らに対する奉仕である。わかるだろうか。すべてはわたしの長子たちのためであり、わたしは間違いを犯さない。わたしが人を見誤るなどと思ってはならない。そして、わたしがあなたを見下しているとも思ってはならない。わたしが大きな才能を十分に活用していないと思い込んだり、あなたを予め定めていないことは間違いだなどと思ってはならない。そうではなく、あなたがそれに値しないのだ。わかっているのか。ここで、あなたがたのためにいくつか確認しよう。頻繁にわたしの憤怒を引き起こし、頻繁にわたしの批判や取り扱いの対象となる者は、間違いなくわたしの憎しみの対象である。彼らは必ず死ぬであろう、そのことは石に刻まれている。わたしはもうわたしの長子たちを取り扱わないと言ったが、それは彼らがすでにわたしの厳しい試験をくぐり抜け、わたしの承認を得たからだ。わたしが不機嫌な顔を向ける者は、みな危険に直面している。あなたは怖くないのか。わたしの言葉がわたしの口から出るやいなや、多くの人々が死ぬであろう。一部の者たちはまだ肉体を維持するが、それはただ彼らの霊が死んでいるということだ。最も明らかな徴候は、彼らが聖霊の働きを得ておらず

、何物にも抑えられないということだ。（彼らはすでにサタンによって深いところまで墮落させられている。）彼らの肉体がいつ消されるにせよ、それはわたしの適切な計画の後、わたしが指定した時に起こる。彼らの霊的な死は、わたしにとって大した奉仕にはならない。わたしは彼らの肉を用いて、わたしの業の素晴らしさを示そう。このことから人々は確信を得て、終わりなく賛美し、わたしを敬い畏れない者は一人もいなくなるだろう。わたしはどんな細かいことも軽々しくは扱わない。すべての者がわたしのために生きるかまたは死ななければならず、わたしに奉仕を行うまでは誰一人去ることができない。サタンでさえ、わたしへの奉仕を行うまでは、底なしの穴に退くことができない。わたしの足取りは常に安定して確かであり、固い地についている。どの足取りも、非現実的なものは一切ないのだ。

誰がわたしと肩を並べようなどと思うのか。誰があえてわたしに逆らおうとするのか。わたしはただちにあなたを打ち倒す。その痕跡すら残さず、あなたの肉を消滅させる。これは絶対的な事実である。わたしは言ったことを即座に行動に移し、後戻りすることはない。世界は日ごとに崩れ落ち、人類は日ごとに滅んでいる。わたしの国は日に日に形成されており、わたしの長子たちは成長している。わたしの憤りは日ごとに増大し、刑罰はより激しくなっており、わたしの言葉はますます厳しさを増している。あなたがたはいまだにわたしがもっと優しく語りかけ、わたしの口調が軽くなるのを待っているが、そんなことはあり得ない。わたしの口調はどんな人々を取り扱っているかによって変わる。愛する者たちへの口調は優しく、常に慰めに満ちているが、あなたがたに対しては厳しさと裁きしか示すことができず、そこに刑罰と怒りを加えている。誰も気づかぬうちに、世界各国の状況は緊張を増しており、日に日に崩壊し混乱に陥っている。各国の首脳はみな最終的に権力を得ることを望んでいる。彼らはまったく気づいていないが、わたしの懲罰はすでに彼らに降りかかっているのだ。彼らはわたしの権力を奪おうとするが、それはただの幻想だ。国連のリーダーでさえ、わたしの赦しを請わねばならない。彼が犯した悪行は数え切れない。今は刑罰の時であり、わたしは簡単に彼を容赦しない。すべての権力者は冠を外さねばならない。万物を支配するにふさわしいのはわたしだけだ。すべてがわたしにかかっている――握りの異邦人さえも含む、何もかもすべてがだ。わたしを詮索する者たちはただちに打ち倒される。わたしの働きはすでにここまで来ているからだ。日々新しい啓示があり、日々新しい光がある。すべてが日増しに完成しつつある。サタンの最後の日は近付き、ますます明らかになっているのだ。

第八十三章

あなたは、わたしが全能の神であることを知らない。あなたは、すべての事や物がわたしの支配下にあることを知らない。すべてのものがわたしによって創造され完成したということは、どういう意味なのか。すべての人間の祝福や不幸は、全部わたしによる成就、わたしの行動に依る。人間に何ができるのか。考えることによって人間に何が達成できるのか。この最後の時代、このふしだらな時代に、サタンがある程度まで墮落させたこの暗い世界で、わたしの旨にかなう者は何と少ないことだろうか。それが今日であろうと、昨日であろうと、またそれほど遠くない未来であろうと、すべての者の人生はわたしによって決定される。彼らが祝福を受けるのか、不幸に苦しむのか、また彼らがわたしによって愛されるのか、嫌われるのかは、わたしによって一気に、かつ正確に決定された。あなたがたのうち誰が、自分の歩みは自分で決定し、自分の運命は自分で支配していると敢えて主張するのか。敢えてそのように言うのは誰か。そのように反抗的でいようとするのは誰か。わたしを恐れないのは誰か。心の奥底でわたしに不従順な者は誰か。自分の好きなように行動しようとするのは誰か。わたしはその場で彼らを懲らしめ、もう決して人類を憐れむことも救うこともない。今度、つまり、あなたがたがちょうどわたしの名を受け入れたときに、人類に対してわたしが寛容さを示す最後の時である。すなわち、わたしは、その祝福が永遠でなくても、わたしの恵みを豊かに享受したことのある一部の人類を選んだ。それゆえ、あなたが永遠に祝福されることがたとえ予め定められていなくても、わたしはあなたを悪く扱ってはおらず、あなたは、直接不幸を苦しむ者よりも、はるかにましである。

実に、わたしの裁きは、前例のない領域に入り、すでに高みに達した。わたしの裁きは一人ひとりの上に下り、今それは怒りの裁きとなっている。過去には、それは威厳の裁きであり、現在とは大きく異なっていた。過去、人類は、実際に裁きが下される場面に遭遇するまでは少しの恐怖も感じ始めることがなかったが、今は一言聞いただけで、胆をつぶすほど怖がっている。ある者は、わたしが口を開くことさえ恐れている。わたしが話し始めるとき、わたしの声が出るだけで、恐ろしさのあまり、どうすればよいか分からず、地面の穴に身を潜めたいと心から願って、一番暗い方隅に隠れてしまう。この種の人間は悪霊に憑かれているので救われぬ。わたしが赤い大きな竜、古い蛇を裁くとき、彼は臆病になり、人々に見られることさえ恐れるだろう。実に彼は暗闇の中で生まれたサタンの子孫である。

過去にわたしは、しばしば「予め定めて選ぶ」という言葉を使用した。それはいったいどういう意味であるのか。どのようにしてわたしは予め定めて選ぶのだろうか。なぜある人は予め定められ選ばれた者の一人ではないのか。これはどうしたら理解できるだろうか。これらはすべてわたしからの明確な説明が必要であり、わたしが直接話すことが要求される。もしわたしが、あなたがたの中でそれらのものを啓示したなら、そのような鈍い人は、それはサタンから与えられた考えだと誤って信じるだろう。そして、わたしは不公平に中傷されるだろう。今、わたしは何も隠し立てせず、率直に話そう。わたしはすべてのものを創造したとき、まず人類に役立つそれらの物を造った（花、草、木、森、山、川、湖、陸、大洋、あらゆる種類の昆虫、鳥、そして動物。あるものは人類が食べるためのものであり、またあるものは人類が見るためのものである）。地域ごとの違いに応じて、さまざまな種類の穀物が人類のために造られた。これらのものをすべて造ったあと、わたしはようやく人間を創造し始めた。人間には二つのタイプがある。一つ目はわたしが選び、予め定めた人であり、二つ目はサタンの資質を持っている。そしてこのタイプは、わたしが世界を創造する前に造られたものであるが、サタンによって完全に墮落させられてしまったので、わたしは彼らを捨てた。それから、わたしは、わたしが選び予め定めたタイプを造った。これらは、程度は異なるが、各々わたしの資質を持っている。したがって、今日わたしによって選ばれた者たちは、それぞれ程度に差はあるが、わたしの資質を持っている。彼らはサタンによって墮落させられているけれども、まだわたしに属する。各段階は、わたしの経営（救いの）計画の一部である。正直者が神の国を支配するということは、すべてわたしによって前もって計画されていたということである。曲がった偽りの者たちは、どうしても正直になることはできない。それは、彼らがサタンの末裔であり、サタンによって所有されており、いつもその命令のもとにあるサタンのしもべであるからだ。しかし、すべてはわたしの旨を成就するためである。わたしはあなたがたが推測しないようにそれを明確にした。わたしが完全にする者を、わたしは世話し、守る。わたしが忌み嫌う者たちは、彼らの奉仕が終わった後、わたしの所から出て行かなければならない。これらの人々が言及されるとき、わたしは憤る。わたしは、彼らのことが言及されるその時、どうしても彼らをすぐに処分したいが、わたしはわたしの行動において自制している。わたしは、わたしの行動と言葉において落ち着いている。わたしは一時の怒りによって世界を制圧することができるが、それはわたしが予め定めた者たちを除いてである。落ち着いてから、わたしは手のひらに世界を持つことができる。すなわち、わたしはすべてを支配している。人々が耐えられないほど世界が墮落しているのを見て、わたしはすぐにそれを滅ぼすだろ

う。それには、わたしの一言だけで十分ではないだろうか。

わたしは実践の神自身である。わたしは超自然的なしるしや不思議は行わないが、わたしの素晴らしい働きはいたるところに満ちている。前途は、比類なく輝かしいものになるだろう。わたしの各段階の啓示は、わたしがあなたがたに指し示す道であり、わたしの経営（救いの）計画である。つまり、その後、啓示はますます多くなり、さらに明らかになるであろう。千年神の国において、つまり近未来においてさえ、あなたがたはわたしの啓示とわたしの歩調に従って進まなければならない。すべてが形をとり、すべてが整えられ、祝福されたあなたがたには永遠の祝福が待っている。懲らしめられる者は、永遠の刑罰が彼らを待っている。わたしの奥義はあなたがたにはあまりにも多い。わたしにとって最も簡単な言葉も、あなたがたにとっては最も難解なものになり得る。したがって、わたしは、さらに多くのことを言う。なぜなら、あなたがたは余りにも僅かしか理解しないからだ。だから、あなたがたは一言ずつわたしに説明してもらわなければならない。しかし、あまり心配しなくてもよい。わたしは、わたしの働きに従ってあなたがたに話そう。

第八十四章

わたしに関する認識の欠如のため、人間はわたしの経営（救い）を妨げ、数え切れないほどわたしの計画を損ねた。しかし、彼らは決してわたしの前進の歩調を止めることはできなかった。それはわたしが知恵の神であるからだ。わたしには無限の知恵がある。わたしには無限で計り知れない奥義がある。太古の昔から永遠に至るまで、人間はそれを推し測ることも、完全に理解することもできなかった。そうではないか。わたしが話す一つひとつの言葉の中には、知恵だけでなく、わたしの隠された奥義もある。わたしにあってはすべてが奥義であり、わたしのすべての部分は奥義である。今日、あなたがたは、ただわたしの奥義を見たのだ。つまり、わたしの本体を見たということである。しかし、あなたはまだ、この隠された奥義を解明するには至っていない。人はわたしの導きに従うことによってのみ、わたしの国に入ることができる。そうでなければ、彼らは世界と一緒に滅び、灰となるであろう。わたしは完全なる神自身であり、他でもない神そのものである。「神の現れ」というような過去の言葉はすでに時代遅れである。それらは現在は適用されない使い古されたものである。あなたがたのうち何人がこれをはっきりと理解したのか。何人がこの程度わたしのことを確信しているのか。すべてのことはわたしによって明確に説明され、教えられねばならない。

サタンの国はすでに滅ぼされた。そしてサタンの人々は間もなく、わたしへの奉仕を終了するだろう。彼らは一人ずつわたしの家から追い出されるであろう。つまり、以前偽装してさまざまな役割を演じていた人たちの本当の姿が今日すべて露わにされており、彼らは全員わたしの国から切り離されると言うことである。あなたがたは憶えていなければならない。今日から、わたしが見捨てた者たちは、過去の者たちも含め、ただ演じている、見せ掛けだけの者である。彼らは、わたしのために演技をしているだけであって、一旦演劇が終われば、舞台を去らねばならない。わたしの真の子らは、正式にわたしの国に入り、わたしの愛を受け、すでにあなたがたのために用意したわたしの祝福を享受するだろう。長子たちは何と幸いなことか。あなたがたは以前わたしの訓練を受けたので、今日わたしが用いるのに相応しい。わたしが全能の神であることを信じなさい。人々に達成できないことを、わたしは滞りなく行うことができるのであって、そこには競争の余地は全くない。あなたがたは、自分は何もできないとか、わたしの長子になるには相応しくないなどと思ってはならない。あなたがたは十分それに値する。それは、わたしがすべてのことを行い、すべてのことを達成する者だからである。なぜあなたがたは今、自分の霊的背丈がこの程度だと感じているのか。それは、わたしが本当にあなたがたを用いる時がまだ来ていないからである。偉大な賜物をささいな目的のために使うことはできない。分かるだろうか。あなたがたは、全宇宙世界の中で、ちっぽけな中国だけに制限されているのか。と言うのも、全宇宙世界のすべての人々は、あなたがたが牧養し導くために、あなたがたに与えられるからである。なぜなら、あなたがたは長子であり、兄弟を導くことはあなたがたが果たすべき義務であるからだ。これを知りなさい。わたしは全能なる神である。わたしはもう一度強調しておく。わたしはあなたがたに楽しむことを許していると。働いているのはわたしである——聖霊はあらゆるところで指揮をとりながら直接働いている。

人々は、かつてはわたしの救いを理解しなかった——あなたは今それを明確に理解しているか。わたしの救いには、いくつかの側面が含まれている。そのうちの一つは、ある人々は予め定められることがまったくないということである。それは、彼らがわたしの恵みを享受することは全くないという意味である。もう一つは、初めは予め定められ、一定の期間わたしの恵みを享受する者たちがいるが、しばらくしてから、わたしによって取り除かれるということである。その時がいつであるかは、わたしによって予め定められており、彼らの人生は完全に終焉を迎えるのである。さらにもう一つは、わたしが予め定めて選び、永遠の祝福を享受する者たちもいるということである。彼らは、わ

わたしを受け入れる前と後に受けた苦難と、わたしを受け入れた後に受けた啓示と照らしを含め、最初から最後までわたしの恵みを享受するのである。その時から、彼らは祝福を享受し始めるのだ。すなわち、彼らこそわたしが完全に救う者たちである。これはわたしの偉大な働きの完成の最も明白な表現である。それではいったい祝福とは何を意味するのだろうか。わたしは尋ねよう。あなたがたが最もやりたいことは何か。あなたがたが最も憎むことは何か。あなたがたが最も得たいと思っているものは何か。あなたがたは、ただわたしを得るため、また、あなたがたのいのちが成長するために、過去に苦痛と困難を体験した。それらは恵みの一部である。祝福とは、あなたがたが憎むことは将来にはもう起こらないということである。つまり、それらのことは、もはやあなたがたの実際の生活に存在しなくなり、あなたがたの目の前から取り除かれるということである。家族、仕事、妻、夫、子供、友人や親戚、そしてあなたがたが毎日嫌っている一日三食の食事ですえ、消えて無くなるだろう。（これは、時間に制約されなくなり、完全に肉から抜け出すという意味である。あなたの体は、霊に満たされることによってのみ維持される。ここで言及されているのは、あなたの肉ではなく、あなたの体である。あなたは完全に自由になり、超越するだろう。これは、神が世界創造以来示した中で最も大いなる、最も明白な奇跡である。）あなたがたの体から土の成分はすべて取り除かれ、あなたがたは完全に聖なる汚れなき霊体となり、宇宙と地の隅々まで旅することができるだろう。それ以降、面倒な洗い物や擦り洗いもすべてなくなり、あなたがたはただ目一杯楽しむだろう。その時から、あなたがたは、もはや結婚の概念を持たなくなるだろう（何故ならわたしは一つの時代を終わらせるのであり、世界を創造するのではないからである）。そして、女性にとって最も辛い産みの苦しみも、もはや無くなるだろう。あなたがたは将来、もう働くことも労することもない。わたしの愛の抱擁に包まれ、わたしがあなたがたに与えた祝福を楽しむのだ。このことは確かな事である。これらの祝福を楽しんでいる間も、恵みはあなたがたにずっとついて来るだろう。わたしがあなたがたのために用意したもの、つまり、世界中の稀有で貴重な宝があなたがたに与えられるのだ。あなたがたは、現時点では、それを思い浮かべることも、想像することもできない。そして、このようなことを楽しんだことがある者は一人もいない。これらの祝福があなたがたの上に臨むとき、あなたがたはいつまでも心から楽しむが、これらはすべてわたしの力、わたしの行為、わたしの義、そして何よりも、わたしの威厳であることを忘れてはならない。（わたしは、恵みを示すよう選んだ者たちに恵みを示し、憐れみを示すよう選んだ者たちに憐れみを示す。）その時、あなたがたは親を持つことはなく、血縁関係もない。あなたがたは皆、わたしの愛する民、わたしの最愛の子らである。

それ以降は、誰もあなたがたを弾圧しようとしないうだろう。それは、あなたがたが大人に成長する時となり、あなたがたが鉄の杖で国々を支配する時となるであろう。わたしの愛する息子たちを妨げようなどとするのは誰か。わたしの最愛の息子たちを敢えて攻撃しようとするのは誰か。父が栄光を受けたので、彼らはみなわたしの愛する子らを敬うだろう。誰も想像すらできなかったことがすべて、あなたがたの目の前に現れる。それらは無限で、無尽蔵で、終わることがない。もうしばらくすれば、あなたがたはもはや太陽の焼けつく暑さに耐える必要はなくなる。また、寒さに苦しむ必要もなくなり、雨も、雪も、風さえもあなたがたには及ばなくなる。それは、わたしがあなたがたを愛しているからであり、それは完全にわたしの愛の世界になる。わたしはあなたがたが望むすべてのものを与えよう。また、あなたがたが必要とするすべてのものをあなたがたのために用意しよう。わたしは義ではないなどと言う者は誰か。わたしは直ちにあなたを殺す。それは前に言ったように、わたしの怒りは（邪悪な者たちに対して）永遠に続き、わたしはほんの少しも容赦しないからである。しかし、（わたしの最愛の子らへの）わたしの愛も永遠に続くだろう。わたしは少しもそれを惜しまない。

今日、わたしの言葉を裁きとして聞く者たちは、正常な状態でない人々であるが、そのことに気づいた時には、聖霊はすでに彼らを見捨てているだろう。長子たちは、全宇宙世界で、あなたがたの中から選ばれているが、子らと民はあなたがたのうちのごく一部を成す。わたしの重点は、全宇宙世界に置かれており、それは、子らと民が世界のすべての国々から選ばれていることを意味している。分かるだろうか。なぜわたしは、長子たちがすぐに成長し、それらの外国人たちを導くべきであると強調し続けるのだろうか。わたしの言葉の背後にある本当の意味を理解できるだろうか。なぜなら、中国はわたしが呪った国であり、それはわたしを最も迫害し、わたしはそれを最も憎む国だからである。わたしの長子とわたしは天から来たのであって、わたしたちが宇宙的な人間であることをあなたがたは知らなければならない。わたしたちはどの国にも属さない。人間の観念にしがみついてはならない。それは、わたしがあなたがたにわたしの本体を示したからである。すべてはわたしの思いのままである。わたしの言葉を憶えているだろうか。なぜわたしは、あなたがたの間でますます人が少なくなり、人々はますます精錬されていると言うのだろうか。それは、わたしの救いが次第に宇宙世界に向けられているからである。淘汰された者たち、わたしの名を受け入れた者たちは皆、長子たちを完全にすべく奉仕した者である。分かるだろうか。なぜわたしは、彼らがわたしの子らのために奉仕した者であると言うのだろうか。あなたがたは今、本当に理解したことだろ

う。その数は実に乏しく、確かに少ないが、それらの人々は、わたしの子ら故に、かなりの恩恵を受け、わたしの多くの恵みを楽しんだのである。そして、それが、わたしが人類を救うのは、これが最後であると言った理由である。わたしの言葉の中にある本当の意味が今分かったであろう。わたしは、わたしに抵抗する者は誰でも厳しく罰する。そして、わたしを守る者は誰にでも、わたしの顔を向けるだろう。なぜなら、わたしはいつも、最初から最後まで、威厳ある義なる神であり、すべてがあなたがたに明らかにされるからである。わたしは素晴らしい方法で迅速に働く。そしてすぐに、人間の想像を絶する驚くべき事が起こるであろう。わたしは、直ちに、すぐに、と言っているのだ。分かるだろうか。遅れることなく、いのちの中に入ることを求めなさい。わたしの最愛なる子らよ。すべてのものはあなたがたのために、ここにあり、すべてのものはあなたがたのために存在する。

第八十五章

わたしは様々な人々を用いてわたしの旨を達成する。わたしの呪いはわたしが罰する人々の上に実現し、わたしの祝福はわたしが愛する人々の上に実現する。誰が今わたしの祝福にあずかり、誰がわたしの呪いを受けるかは、わたしの一言、わたしの発する言葉次第である。あなたは、わたしがいま親切にする者は誰であれ必ず、常にわたしの祝福を授けられると知っている（つまり、徐々にわたしを知るようになり、ますますわたしのことを確信し、新しい光と啓示を得て、わたしの働きと歩調を合わせることができる）。わたしが忌み嫌う者は誰でも（これは人々が外見からは判断することのできない、わたしの心の中のことであるが）必ずわたしの呪いに苦しむ者となるだろう。また、彼らは間違いなく赤い大きな竜の子孫なのだから、赤い大きな竜に対するわたしの呪いを共に受けるだろう。わたしにとって見るに耐えない人々で、資質に欠けていると思われる、わたしには完全にすることも用いることもできない人々でも、まだ救われる機会があり、わたしの子らの一人になるだろう。わたしの資質をまったく持たず、霊的なことを理解できず、わたしを知らない人でも、熱心な気持ちを持っていれば、わたしの民の一人とみなされるだろう。わたしの呪いを受ける人々は救いがたく、悪霊に取り憑かれている者と、わたしはみなす。このような人々は何としても放りだしたい。彼らは赤い大きな竜によって生まれた者であるので、わたしはもっとも嫌悪する。今後、わたしは彼らの奉仕を必要としない——要するにわたしは彼らを望まないのである。そのような者は誰も要らない。わたしの前で泣いても歯ぎしりしても無駄である。わたしは誰にも目を留めず、彼らを放り出す——あなたはいったい何者だと言うのか。あなたはわたし

の前に出るに相応しいのか。あなたはそれに値するのだろうか。未だに善人のふりをし、謙遜を装っている。数えきれないほどの悪行を犯したあなたを、わたしは容赦するだろうか。しかも、あなたはわたしの前で立ちあがって、再びわたしに反抗する。あなたは良い意図など持ったことがなく、ただわたしをだましたがっている。あなたは赤い大きな竜の子孫でありながら、思い通りにできるだろうか。思い通りにできるだろうか。善人になることなどできるだろうか。不可能である。あなたはすでにわたしに呪われており、わたしは徹底的にあなたを裁く。わたしへの奉仕を心から、正直に、規律正しくやってから、あなたの底なしの穴へ戻りなさい。あなたはわたしの国に入れてもらいたいのか。あなたは夢を見ているのだ。恥を知りなさい。あなたは穢れて汚い体で、まったく墮落しているのに、未だにずうずうしくもわたしの前に立つ。どきなさい。これ以上ぐずぐずしていると、わたしはあなたを厳しく罰する。わたしの前で曲がったことや偽りにたずさわる者たちは皆、暴露されなければならない。あなたはどこに隠れられるというのか。どこに身を隠すことができるのか。どんなに身をかわしても、隠れても、わたしの支配から逃れることなどできるだろうか。わたしに十分奉仕しなければ、あなたの命はさらに短くなるだろう——あなたは直ちに滅ぼされるだろう。

わたしの長子たちとはどのような人々なのか、わたしはあなたがたにはっきり語り、正確に実証する。さもないと、あなたがたは自分に適切な位置を占めることができず、その位置がどうあるべきかを見境なく自分で決めてしまうだろう。謙遜しすぎる人もいれば、勝手気まますぎる人もいるだろう。そして、わたしの資質を持ち合わせていない人や資質があまりにも欠けている人は皆、わたしの長子になりたがるだろう。わたしの長子である者たちは、どのような表現をするのだろうか。第一に、わたしの旨を把握することに重点を置き、わたしの旨に配慮し、同時に、聖霊が彼らの中に働く。第二に、彼らはたゆむことなく霊において求め、ふしだらでなく、わたしが示す境界を超えることがなく、極めて正常であり、それらの行動は決して模倣ではない（彼らは聖霊の働きを感知することに重点を置いており、彼らに対するわたしの愛に配慮し、いかなる時も注意深く、わたしを裏切ったり、抵抗したりする心を持つことに深い恐れを抱いているからである）。第三に、彼らはわたしのために心から行動し、自分の全存在を捧げることができる。そして彼らは自分自身の将来の展望、生活、何を食べ、何を着て、何を使い、どこに住むかといった考えはすでに捨てている。第四に、彼らは義に飢え、義を渴望する心を絶えず持っており、自分には欠けた部分が余りにも多くあり、自分の霊的背丈があまりにも低いと思っている。第五に、わたしが以前述べたように、彼らは世間の評

判は良いが、世俗的な人々からは追放されており、男女関係においては道徳的に健全である人々である。これはすべて長子であることの実証だが、わたしの働きはまだその段階に達していないので、今それらをあなたがたに完全に明かすことはできない。長子たちよ、覚えておくがよい。あなたの心の中にある命の感覚、わたしへの畏敬の念、わたしへの愛、わたしに関する認識、わたしを求めること、あなたがたの信仰——これらのことはすべてあなたがたに対するわたしの愛であり、すべてはわたしがあなたがたに与える実証である。その結果、あなたがたは本当にわたしの愛する子となり、わたしと同じようになり、わたしと共に食し、共に住み、比類なき栄光の中で共に祝福を享受するようになる。

わたしは、誰であれ、わたしを迫害した者、わたしに関する認識のなかった人々（わたしの名が証しされる前のことも含めて）、わたしを人間だと信じていた人々、及び、過去にわたしを冒瀆し中傷した人々には、慈悲を示すことはできない。たとえ彼らが今誰よりも際だった証しをしたとしても、何の役にも立たないだろう。過去にわたしを迫害したことは、わたしへの奉仕であったし、彼らが今日わたしを証しするなら、彼らはやはりわたしの道具である。今日わたし自身によってほんとうに完全にされる者だけがわたしの役に立つ。わたしは義なる神自身であり、肉から出て、地上のあらゆる関係から自らを切り離れたからである。わたしは神自身であり、かつてわたしの周囲にいたすべての人々、すべての物事はわたしの手の中にある。わたしには感情がなく、すべてのことにおいて義を実行する。わたしは公正であり、ほんの少しのけがれもない。わたしの言葉の意味がわかるだろうか。あなたがたもこれを達成できるだろうか。人々はわたしも普通の人間性を持ち、家族や感情をもっていると考えている。しかしあなたがたは自分たちが完全に間違っていることがわかっているだろうか。わたしは神である。あなたがたはこのことを忘れてしまったのだろうか。あなたがたは混乱しているのだろうか。あなたがたは未だにわたしを知らない。

わたしの義はあなたがたに完全に明らかにされた。わたしがどのような人をどのようなに取り扱おうと、わたしの義と威厳が現される。わたしは怒りを帯びて来る神自身なので、わたしを迫害した者やわたしを罵倒した者は一人も罰を免れない。あなたがたはこのような厳しい要求のもとでも、このことがはっきりとわかるだろうか。王として支配する人々は、わたしの民になる人々よりずっと少ないはずだから、わたしが選び、予め定めた人々は、貴重な真珠か瑪瑙のように非常に少なく、極めて稀である。そしてこのことは、わたしの力とわたしの奇しい業を現す。わたしは、あなたがたに報いて、冠を

授け、わたしの中には尽きることのない栄光があると何度も言う。報い、冠、栄光とわたしが言う時、それは何を意味しているのだろうか。人々の観念では、報酬とは、食べるもの、着るもの、使用するものといった物質的なものであるが、これはまったく人々の古臭い考えであり、わたしの意味することではなく、誤った理解である。報いとは、今すぐに得られるもので、恵みの一部ではある。しかし、その中には肉の快樂に関連するものもあり、わたしに奉仕するが救われていない人々も、多少の物質的快樂は得ることができる（わたしに奉仕するものは、やはり物質的なものだが）。冠は役職の記章ではない。つまり、あなたがたが享受するようにわたしが与えるものは物質的なものではなく、むしろあなたがたに授ける新しい名前である。誰でもあなたの新しい名前に相応しく生きることができる者は冠を獲得した者であり、それはわたしの祝福を得ることである。報いと冠は祝福の一部であるが、恵みと比べるとずっと些細なもので、天と地ほどの違いがある。栄光は人々の観念では想像できない。栄光とは物質的なものではなく、人々が極端に抽象的なものとして心に抱くものだからである。では栄光とは一体何だろう。あなたがたがわたしと共に栄光に包まれて降りて来ると言うのは、どういう意味だろうか。わたしの全て、つまり、わたしが所有するものとわたしそのもの、（わたしの子らに対する）憐みと慈愛、（すべての人々に対する）義、威厳、裁き、怒り、呪い、そして火による焼き尽くし——わたしという存在は栄光である。なぜわたしは栄光がとこしえまでもわたしと共にあると言うのだろうか。それは、わたしには終わることのない知恵と比類なき豊かさがあるからである。それ故、わたしと共に栄光に包まれて降りるとは、あなたがたがすでにわたしによって完全な者とされたこと、わたしという存在とわたしが持っているものをあなたも持っており、あなたはわたしによって完全な者とされ、わたしを敬う心を持っており、わたしに反抗しないことを意味する。あなたがたはこれで理解できたはずだ。

地上のすべての国々の緊迫した状況は頂点に達しており、それらの国は皆、着々とわたしに奉仕し、わたしによって焼き尽くされる準備をしている。わたしの怒りと焼き尽くす炎が訪れる時、予兆となるものはないが、わたしには自分が為すことが分かっており、しかもそれは非常に明瞭である。あなたはわたしの言葉に確信を持つべきであり、急いですべての準備をし、外国から探し求めてやって来る人々を牧養する用意をしなければならない。このことを覚えておきなさい。中国——つまり、中国国内のすべての人、すべての場所——はわたしの呪いを受けている。わたしの言葉の意味があなたには分かるだろうか。

第八十六章

人々はわたしが慈悲深い神だと言い、わたしの創造した万物に救いを実行するだろうと言う——これらのことはすべて人類の観念に基づいて語られている。わたしを慈悲深い神と呼ぶことは、わたしの長子たちに向けられており、わたしが救いをもたらすのはわたしの子らとわたしの民に対してである。わたしは知恵に満ちた神であるので、わたしの心の中では、わたしの愛する人々は誰か、憎む人々は誰かがはっきりしている。わたしが愛する人々に関しては、わたしはいつも最後まで愛するだろし、その愛は決して変わることはない。わたしが憎む人々に関しては、どんなに善人であろうともわたしの心は少しも動かない。彼らはわたしから生まれたのではなく、わたしの本質もわたしのいのちも所有していないからである。つまり、わたしは予め彼らを運命づけて選んではないのだ。わたしには間違えがない。これは、わたしのすることは神聖で称賛に価すると言われ、わたしは決して後悔しないということだ。人々の目にはわたしがあまりにも冷酷だと映るだろう。しかし、あなたはわたしが義であり威厳のある神自身であることを知らないのか。わたしが携わることはすべて正しい。わたしが憎む人々は必ずわたしの呪いを受け、わたしの愛する人々は必ずわたしの祝福を受けるだろう。これはわたしの神聖で犯すべからざる性質であり、誰も変えてはならない。これは絶対的なものである。

今日、本当にわたしの意図と一致している人々は、必ずわたしによって完全な者とされるだろう。わたしの働きは率直かつ完全であり、やり残しはないからである。わたしが呪う人々は焼かれるだろう。ではなぜ大半の人々はわたしに呪われているのに、聖霊は未だに彼らに対して働きかけているのだろうか（これはわたしが汚れた神殿に住んでいないことに関して言われる）。あなたがたは諸事万端はキリストに奉仕するという真の意味がわかるだろうか。わたしが彼らの奉仕を利用する時、聖霊が彼らを通して働きを行うが、通常彼らがわたしに奉仕していない時、基本的に彼らは靈的に啓発されない。たとえ彼らがわたしを探し求めたとしても、それには熱心さによるもので、これはサタンの策略である。なぜなら、通常、彼らはわたしの働きには全然注意を払わず、わたしの重荷への配慮がまったくないからである。今や、わたしの長子たちが成長したので、わたしは、わたしが呪う人々を蹴り飛ばす。従って、わたしの霊はあらゆる場所から取り去られ、わたしの長子たちが特に重んじられる。わかるだろうか。すべてのことはわたしの行い次第であり、わたしの予定次第であり、そしてわたしの口から発せられるすべての言葉次第である。わたしの祝福を受けたすべての場所は、必ずわたしが働く場所

となり、わたしの働きが実行される場所となる。中国はサタンが最も崇拝されている国なので、わたしによって呪われている。中国はわたしを最も迫害してきた国でもある。わたしは赤い大きな竜の影響下にある人々のために働く気はまったくない。あなたはわたしの言葉の本当の意味がわかるだろうか。結局、わたしの子らとわたしの民の数は少ない。間違いなく、すべてはわたしの手の内にある。わたしが選び、予め定めた人のために活力を集中し、もっと多くの努力が払われるべきである。つまり、わたしの長子である人々は、できるだけ早くわたしの肩の重荷を背負うべくすぐに実践すべきであり、わたしの働きに全力で取り組むべきである。

わたしのために心を伴わずに奉仕する人々よ、聞きなさい。あなたがたはわたしに奉仕する時、わたしの恵みを多少受けることができる。つまり、あなたがたはわたしの後の働きと将来生じることがらについてしばらくの間は知るだろうが、それを享受することは絶対にないだろう。これがわたしの恵みである。奉仕が完了したらすぐに離れなさい。ぐずぐずしてはいけない。わたしの長子である人々は高慢であってはならないが、誇りはもってもよい。わたしがあなたがたに限りない祝福を与えたからである。滅びの標的になっている人々は自分自身に困難をもたらすべきではなく、自分の運命を哀れに思うべきではない。誰があなたをサタンの子孫にしたのか。わたしへの奉仕を終了した後、あなたは底なしの穴に戻るだろう。あなたはもはや一切わたしの役に立たないからである。こうして、わたしはあなたがたを、刑罰をもって扱い始める。わたしはいったん働きを開始したら、最後までやり抜く。わたしの業は成し遂げられ、わたしが成し遂げたことは永久に続く。これはわたしの長子たち、わたしの子ら、わたしの民に当てはまり、あなたがたにも同様に当てはまる——あなたがたに対するわたしの刑罰は永遠に続く。あなたがたには以前何回も話したことがある。わたしに抵抗する邪悪な人々は必ずわたしの罰を受けるだろう。聖霊から叱責を受けずにあなたがたに抵抗する時、あなたはすでに呪われており、その後わたしの手によって打ち倒されるだろう。あなたがわたしについて悪い考えを持つ時でも、聖霊から鍛錬を受けるなら、あなたはわたしの祝福を受けているのだ。しかし、あなたはいつも用心していなければならない。決して怠慢になったり、不注意になったりしてはいけない。

第八十七章

あなたがたは仕事の速度を速め、わたしが望むことをしなければならない。これがあなたがたに対して熱望するわたしの意図である。今頃になってもあなたがたはまだわた

しの言葉の意味を理解していないということだろうか。わたしの意図をまだ知らないということだろうか。わたしはますますはっきり語り、ますます多くを話しているが、あなたがたはわたしの言葉の意味を理解しようと努力していないのだろうか。サタンよ、わたしの計画を台無しにできるなどと考えるはいけない。サタンのために働く人々、つまり、サタンの子孫（サタンに取りつかれている人々のことである。サタンに取りつかれている人々は結果として必ずサタンのいのちを持っており、だから、サタンの子孫と呼ばれるのだが）は、泣いて、歯ぎしりしながらわたしの足元で慈悲を乞うが、わたしはそのような愚かなことはしない。わたしはサタンを許すことができるだろうか。わたしはサタンに救いをもたらすことができるだろうか。できるはずがない。わたしは自分が語ることを行い、決してその行いを後悔しない。

わたしが話すことはすべて実現する、そうではないか。しかし、あなたがたは未だにいつもわたしを信用せず、わたしの言葉を疑い、わたしがいつもあなたがたをからかっていると考える。それは実に馬鹿げている。わたしは神自身である。わかるだろうか。わたしは神自身なのだ。わたしに英知も力もなかったら、好きなように行動したり、語ったりすることができるだろうか。しかしあなたがたは未だにわたしを信用していない。わたしは繰り返しあなたがたに強調してきた。そして繰り返し語ってきた。なぜあなたがたの大部分は未だにわたしを信じないのか。なぜ未だに疑いを持っているのか。なぜ必死に自分の概念にしがみつくなのか。あなたの概念があなたを救えるだろうか。わたしは自分の言うことを実行する。あなたがたに向かって何度も言った。わたしの言葉が真実だと思いなさい。疑ってはいけない。あなたがたはわたしの言葉を真剣に受け取っただろうか。あなたは自力では何もできないのに、わたしのすることが信じられない。そのような人に向かって何を言えばよいのだろうか。遠慮なく言えば、あなたがたを創造したのはわたしではないかのようだ。つまり、あなたはあらゆる点でわたしの効力者となる資格はない。誰もがわたしの言葉を信じなければならない。すべての人が審査を受けなければならない。それをすり抜ける者は誰も、わたしが許さない。もちろん、これはわたしの言葉を信じている人々を除いてのことである。わたしの言葉を信じる人々は間違いなくわたしの祝福を受ける。それは、あなたが何を信じるかに応じて授けられ、あなたの中で成就される。わたしの長子たちよ。今、わたしはあなたがたにわたしの祝福のすべてを与え始める。あなたがたは肉による不快な束縛を少しずつ捨て去り始めるだろう。たとえば、結婚、家族、食事、衣服、睡眠における束縛、そして、あらゆる自然災害（風、太陽、雨、身を切るような強風、惨めな降雪、あなたがたが嫌悪するそ

の他すべてもの) による束縛も捨て去るだろう。あなたがたは空間、時間、あるいは地理的制限に影響されることなく海、陸、空を旅し、わたしの愛情あふれる抱擁に包まれて楽しみ、わたしの愛情あふれる保護に包まれてすべてを任されるだろう。

わたしが完全な者とした長子たちを誇りに思わない人がいるだろうか。わたしの長子ゆえにわたしの名前を誉めない人がいるだろうか。わたしが今、あなたがたにそれほど多くの神秘を示したいのはなぜだろう。なぜ過去ではなく今日なのだろう。このこと自体も神秘ではないか。なぜわたしは過去に、中国はわたしが呪っている国家だと言わなかったのだろうか。そしてなぜわたしはわたしに奉仕する人々を明らかにしなかったのだろうか。今日、わたしはあなたがたに次のことも言う。今日、わたしの考えでは、すべては達成された——わたしがこう言うのは、わたしの長子たちに関してのことである。(今日、わたしの長子たちはわたしと一緒に支配しており、それは形の上だけでなく、実際わたしと共に支配しているからである。いまや、聖霊が中に働いている人が確かにわたしと共に支配するのであって、このことは昨日でも、明日でもなく、今明らかにされる。) 今日、わたしは普通の人間性の中にわたしの神秘のすべてを明らかにする。わたしが明らかにしたい人々はすでに明らかにされているからであり、これがわたしの英知だからである。わたしの働きはこの段階まで進んでいる。すなわち、現段階では、わたしが現時点に間に合わせようと決めた行政命令の計画を実施しなければならないのだ。このように、わたしは長子たち、子供たち、民、効力者に適切な証明を授けているのである。なぜならわたしは権威を有し、裁きを下し、鉄の鞭を用いて支配するからである。あえてわたしに素直に奉仕をしない人がいるだろうか。あえてわたしに不平を言う者がいるだろうか。あえてわたしは義なる神ではないと言う者がいるだろうか。わたしは知っている。あなたがたの悪魔的性質はずっと以前にわたしの前に明らかにされていることを。わたしが親切にする人が誰であれ、あなたがたはその人に対して嫉妬し、彼らを憎む。これは完全にサタンの本性である。わたしは自分の子供たち優しくする——あなたは敢えてわたしが義ではないと言うのか。わたしはあなたを完全に追い出すことができる。幸運にもあなたはわたしに奉仕をしているから、今はその時ではない。そうでなければわたしはあなたを追い出していただろう。

サタンの仲間よ！野蛮であるのはやめなさい。これ以上話してはいけない。これ以上行動してはいけない。わたしの働きはすでにわたしの選んだ子供たちや民の中で実行され始めており、すでに中国の外側のすべての国、すべての宗派、すべての教派、あらゆる職業の人々の中で広がっている。わたしに奉仕する人々がいつも霊的に遮断されるの

はなぜだろう。なぜ彼らは霊的な問題を決して理解しないのだろうか。なぜわたしの霊がいつもこれらの人々の中で働いていないのだろうか。概して、わたしは自分が運命づけた、選んだりしていない人々に多くの努力を費やすことはできない。わたしの過去のすべての苦しみ、わたしの骨身を惜しまない配慮と努力はすべて、わたしの長子たちやごく一部の子供たちや人々のためであり、その上、わたしの将来の働きが円滑に完了するためでもあったので、わたしの意志を妨げるものは何もない。わたしは賢い神自身なので、働きの各段階を適切に手配してきた。わたしは誰も留めようとはせず、（これはわたしが選ばず、運命づけなかった人々を指している）。わたしは誰であれ不用意に打ち倒したりしない（これはわたしが選び、運命づけた人々を指している）。これはわたしの行政命令であり、誰も変えることはできない。わたしは嫌悪する人々に対しては非情である。わたしは愛する人々に対しては、見守り、保護する。こうしてわたしはわたしの言うことを実行する（わたしが選ぶ人々は選ばれる。運命づける人々は運命づけられる。これらのことは創造以前にわたしが決めたわたしの仕事である）。

わたしの心を変えられる者などいるだろうか。わたしが自分の望み通りに作った計画に従って行動する以外に、あえて軽率に行動し、わたしの命令に従わない人などいるだろうか。これらはわたしの行政命令であり、その一つでもあえてわたしから取り除こうとする人などいるだろうか。すべてはわたしの思いのままでなければならない。「あの人はずいぶん苦しんできたし、正直で、神の心に純粹に思いやりがあるのになぜ選ばれなかったのか」と言う人たちがいる。これもわたしの行政命令である。わたしがある人のことを、わたしの心に叶っている人だと言え、その人はわたしの心に叶っており、わたしが愛する人である。また別の人のことを、サタンの子供であると言え、その人はわたしが嫌悪する人である。誰の顔色もうかがってはならない。あなたは本当にその人の本質を見抜くことができるだろうか。これらはすべてわたしが決めることである。子はいつも子であり、サタンはいつもサタンである。つまり、人の性質は変わらない。わたしが変えさせなければ、すべての人は自分の持って生まれた性質に従い、決して変わることはできない。

わたしは働きを進めるにつれて、わたしの神秘をあなたがたに明らかにする。今日、どの段階までわたしの働きが進展しているか、あなたがたは本当に知っているだろうか。あなたがたは本当にわたしの霊の導きに従って、わたしがすることを行い、わたしが言うことを言うだろうか。中国はわたしが呪っている国だとわたしが言うのはなぜだろう。第一に、今日の中国の人々をわたしのかたちに創造した。彼らに霊はなく、早くか

らサタンによって墮落させられて、救われることができなかった。そこで、わたしはこれらの人々に腹を立て、呪った。わたしはこれらの人々をもっとも嫌悪し、彼らのことが話に出ると腹が立つ。彼らは赤い大きな竜の子供たちだからだ。このことから、世界の国々が中国を併合していた時代について考えることができる。今日でも未だに同じ状況であり、すべてはわたしの呪いの対象である——赤い大きな竜に対するわたしのもっとも強力な裁きである。ついに、わたしは別の種類の人々を作り、彼らの中にわたしの長子たち、子供たち、民、わたしに奉仕する人々を運命づけた。つまり、今日わたしがすることはずっと以前に手配していたことなのである。なぜ中国の権力者たちは繰り返しあなたがたを迫害し、虐げるのだろうか。赤い大きな竜がわたしの呪いに対して不満を抱き、わたしに抵抗しているからである。しかし、わたしがわたしの長子たちを完全な者とし、赤い大きな竜とその子供たちに強烈な反撃を与えるのは、まさにこの種の迫害と脅しの状況下においてなのである。後にわたしは彼らを懲らしめるだろう。あなたがたはわたしの言葉を聞いた後、あなたがたがわたしと共に支配するのをわたしが許すことの意味を本当に理解するだろうか。わたしが赤い大きな竜は完全に倒されて死んだという時、それはわたしの長子たちがわたしと共に支配する時でもある。長子たちに対する赤い大きな竜の迫害は、わたしに対する大きな奉仕となり、わたしの子供たちが成長してわたしの家の仕事を担うようになると、悪い僕たち（効力者たち）は脇へ蹴飛ばされるだろう。わたしの長子たちがわたしと共に支配を続け、わたしの意図を実行しているだろうから、わたしは効力者たちを一人ずつ燃える火と硫黄の池に投げ込むだろう。何としても彼らは火の池へ行かなければならない。サタンの同類もわたしの祝福を享受したいと望み、サタンの領地に戻りたくないことにわたしは十分気づいている。しかし、わたしには行政命令があり、それには誰もが従わなければならず、この命令は履行されなければならない。そして免除される者は誰もいない。あなたがたが背くといけないので、後でわたしはあなたがたに行政命令を次々に告げよう。

第八十八章

わたしの働きの速度がどの程度速まっているか、人々には想像できない。これは起こった奇跡であり、人には理解しがたいのだ。この世界を創造して以来、わたしの働きの速度は維持されており、働きが止まったことは一度もない。全宇宙は日ごとに変化しており、人々も着実に変化を続けている。これはすべてわたしの働きの一部であり、すべてわたしの計画の一部であり、さらにわたしの経営（救い）に属しているが、人は誰もこうしたことを知らず理解もしない。わたし自身があなたがたに語るとき、わたしがあ

あなたがたと面と向かって交わるとき、あなたがたはそのときだけわずかばかり知ることがあるが、そうでなければわたしの経営（救いの）計画の青写真を少しでも理解できる者は誰一人としていない。それがわたしの偉大な力であり、さらにわたしの驚異的な行為であり、誰もそれを変えることはできない。したがって今日わたしが言うことはその通りに実現し、それを変えることはできない。人間の観念の中には、わたしに関する認識は微塵もなく、そこにあるのは無意味な雑談だけだ。もう十分だとか、満足だなどと考えるはいけない。言うておくが、まだ先は長いのだ。わたしの経営（救いの）計画全体の中で、あなたがたが知っていることはわずかなのだから、わたしが言うことに耳を傾け、わたしが命じることは何でもしなければならない。すべてにおいてわたしの望む通りに行動しなさい。そうすれば必ずわたしの祝福を得るだろう。信じる者は誰でも受け取ることができるが、信じない者は誰でも、想像していた「無」が自らの中に実現されるだろう。これがわたしの義であり、さらにわたしの威厳、怒り、そして刑罰である。わたしは誰の思いも行為も、一つとして見逃すことはない。

わたしの言葉を聞いて、ほとんどの人は当惑して顔をしかめ、恐れに震える。わたしは実際、あなたを誤解しているのだろうか。もしかしてあなたは、赤い大きな竜の子供ではないのだろうか。あなたは善良なふりさえしている。そして、わたしの長子のふりさえしている。わたしが盲目だとでも思っているのか。人々を見分けることができないとでも思っているのか。わたしは人々の心の奥底を探る神なのだ。これはわたしがわたしの子らに言うことであり、あなたがた、赤い大きな竜の子らにも言うことだ。わたしはすべてをはっきりと見ており、少しの間違いも犯さない。わたしが自らの行動を知らないことなどあろうか。自分の行動はこれ以上もなくはっきりと知っている。なぜわたしは自分が神自身であり、宇宙と万物の創造主であると言うのか。なぜ自分が人々の心の奥底を探る神だと言うのか。わたしは一人一人の状況を十分に理解している。わたしが何をすべきか、何を言うべきか知らないと思っているのか。それはあなたがたが気にすべきことではない。わたしの手によって殺されないように気をつけなさい、さもないと損失を被るだろう。わたしの行政命令は寛大ではない。わかるだろうか。上述のすべては、わたしの行政命令の一部である。これをあなたがたに語った日以降は、もしさらなる違反があれば、当然の報いがあるだろう。以前あなたがたは理解していなかったからだ。

今、わたしはあなたがたに行政命令を公布する（これは公布したその日から有効であり、人々に応じてそれぞれの刑罰を割り当てる）。

わたしは約束を守り、すべてはわたしの手の中にある。疑う者は誰でも必ず殺される。考慮の余地はない。彼らはただちに根絶やしにされ、わたしの心からは嫌悪が取り除かれる。（これ以降、殺されるものは決してわたしの国に属する者ではなく、サタンの子孫に違いないことが確定する。）

あなたがたは長子として自分の立場を守り、自分の本分をしっかりと尽くし、他人のことに首を突っ込んでではない。あなたがたはわたしの経営（救いの）計画のために身を捧げ、行く先々でわたしをよく証しし、わたしの名を賛美しなければならない。恥ずべき行いはせず、わたしの子らやわたしの民すべての模範となりなさい。一瞬たりとも慎みをなくしてはならない。誰の前にも常に長子という身分で現れ、卑屈な態度をせず、胸を張って堂々と歩かなければならない。あなたがたにはわたしの名前を賛美し、それを汚さないよう求める。長子たちはそれぞれ自分の役割を持っており、何でもしてよいわけではない。これはわたしがあなたがたに与えた責任であり、それを逃れてはならない。あなたがたはわたしが委ねたことを全身全霊で、全力を用いて果たすことに専念しなければならない。

この日から長子たちには、世界中の至る所でわたしの子らとわたしの民をすべて牧養するという本分が委ねられる。それを全身全霊で遂行できない者は、誰であろうとわたしが罰するだろう。これはわたしの義である。わたしは長子たちでさえ、大目に見ることも容赦することもない。

わたしの子らかわたしの民の中に、わたしの長子の誰かを馬鹿にしたり侮辱したりする者がいれば、わたしはその者を厳しく罰するだろう。わたしの長子たちはわたし自身を表しており、誰かが彼らに対してすることは、わたしに対してすることでもあるからだ。これはわたしの行政命令の中でもっとも厳しいものである。わたしの子らや民の中にこの命令に背く者がいれば、わたしは長子たちに、わたしの義を思うさま実践させる。

わたしを軽薄に扱い、わたしの食べ物や衣服や睡眠にだけ注目する者、わたしの外面的事柄だけに興味を向けてわたしの重荷を考慮しない者、自分自身の役目をきちんと果たすことに注意を払わない者を、わたしはみな着々と見捨てていく。これは聞く耳を持つ者すべてに向けられている。

わたしへの奉仕を終えた者はみな、素直に粛々と引き下がらねばならない。注意しなさい、さもないとわたしはあなたを懲らしめることになるだろう。（これは補足的な命

令である。)

わたしの長子たちは今から鉄の棒を手に取り、わたしの権威を示す行動を始め、すべての国家や民族を統治し、すべての国家や民族の間を歩き、わたしの裁きと義と威厳をすべての国家や民族の中で遂行することになる。わたしの子らとわたしの民は止むことなくわたしを畏れ、褒め称え、わたしに喝采を送り、わたしを賛美する。わたしの経営（救いの）計画は完遂され、長子たちはわたしと共に支配することができるからである。

これはわたしの行政命令の一部である。これ以降、わたしは働きの進み具合に応じて、あなたがたに行政命令を告げる。この行政命令から、あなたがたはわたしが行う働きの速度と、その働きがどの段階に達したかがわかるだろう。これは確認である。

わたしはすでにサタンを裁いた。わたしの旨が妨げられることはなく、わたしの長子たちがわたしと共に賛美されているため、わたしはこの世とサタンに属するすべてのものに対し、わたしの義と威厳をすでに行使した。わたしはサタンには何の労力も払わず、目を留めもしない（サタンはわたしと話をするにも値しないからだ）。わたしは自分のしたいことをし続けるだけだ。わたしの働きは一步步順調に進展し、わたしの旨は地上のどこでも妨げられない。このことはサタンをある程度恥じ入らせ、サタンは完全に滅ぼされたが、それ自体でわたしの旨が成就されたわけではない。わたしは長子たちにも、わたしの行政命令を彼らに対して実行させる。わたしがサタンに見せるものは、一方では奴に対する怒りだが、他方ではわたしの栄光も目にさせる（つまり、わたしの長子たちをサタンの屈辱のもっとも顕著な証人として見せつける）。わたしはサタンを直接罰することではなく、長子たちにわたしの義と威厳を遂行させる。サタンは以前わたしの子らを虐待し、迫害し、抑圧したので、今日サタンの奉仕が終わった後、わたしは成熟した長子たちにサタンを懲らしめることを許す。サタンは崩壊に対して無力であった。世界中のあらゆる国家が麻痺していることがそのもっともよい証拠であり、戦っている人々や交戦中の国々は、サタンの王国が崩壊したことを明らかに示している。わたしが過去にいかなるしるしも不思議も示さなかったのは、徐々にサタンを辱め、わたしの名前を賛美させるためだった。サタンに完全にとどめを刺したとき、わたしは自分の力を示し始める。わたしの言うことは実現し、人間の観念と一致しない超自然的なことが成就するだろう（これはまもなくやって来る祝福のことだ）。わたしは実際の神自身であり何の規則もなく、経営（救いの）計画の変化に応じて語っているため、わたしが過去に言ったことは必ずしも現在に当てはまるとは限らない。自分の観念に固執するの

はやめなさい。わたしは規則に従う神ではなく、わたしにとってはすべてが自由で、超越的で、完全に解放されている。昨日語られたことは今日はもう古臭いかもしれず、あるいは今日は捨て去られるかもしれない（しかしわたしの行政命令は公布されて以来決して変わることはない）。これらがわたしの経営（救いの）計画の段階である。規則に固執してはいけない。毎日新しい光と新しい啓示があり、それがわたしの計画なのだ。毎日、わたしの光があなたの中にあらわされ、そしてわたしの声が全宇宙に発せられるだろう。わかるだろうか。これがあなたの本分であり、わたしがあなたに委ねた責任である。あなたはそれを一瞬たりとも怠ってはならない。わたしは最後まで、わたしが認める人々を使う。このことは決して変わらない。わたしは全能の神なので、どの種類の人々がどんなことをするべきか、どの種類の人々にどんなことができるかを知っている。これがわたしの全能性である。

第八十九章

あなたが行うあらゆることにおいて、わたしの意図に沿うことは容易ではない。それは、自らを強制してそのようなふりをするという問題ではなく、わたしに抛る世界の創造以前に、わたしがあなたにわたしの素質を授けていたかどうかによって決まるのだ。これは人間にできることではない。わたしは愛したい者を愛し、誰であれ、長子であるとわたしが言えば、それは確かに長子である。そのことはまさに正しい。あなたは長子の振りをしたいかもしれないが、それは無駄であろう。あなたはわたしがあなたを見分けられないと思うのか。わたしの前で行儀良くしているだけで十分なのか。それほど簡単なことだろうか。絶対に違う。あなたはわたしの約束を携え、わたしによって予め定められていなければならない。あなたがわたしの背後で何をやっているのか、わたしが知らないとも思っているのか。あなたはふしだらである。わたしへのあなたの奉仕が終わったら、さっさと火と硫黄の池に戻りなさい。あなたを見てわたしはうんざりし、胸が悪くなっている。わたしに仕えていながら、わたしのために忠誠を尽くさず、ふしだらで自制心がなく、わたしの意図が分からない者は皆、奉仕が終わった後、わたしの前から消え失せよ。さもなければ、わたしがあなたを放り出す。これらの人々はわたしの家（すなわち、教会）には、一時たりとも留まることはできない。わたしの名声を傷つけて、わたしの名に恥をもたらすことがないように、彼らはここから出て行かなければならない。これらの人々は皆、赤い大きな竜の子孫である。彼らはわたしの経営を邪魔するために赤い大きな竜によって送り込まれたのだ。彼らはわたしの働きを妨害するための欺瞞を専門にしている。わたしの子よ。これを見破らなければならない。これら

の人々と交わってはならない。この種の人間を見たら、すぐに彼らから遠ざかり、彼らの罠にはまってあなたのいのちに害が及ぶことのないようにしなさい。わたしは、不注意に話し、考えることなく行動し、ただ冗談を言っただけは笑い、つまらないお喋りに耽る人たちを最も忌み嫌う。わたしはこのような人間は誰もいない。彼らは皆サタンの種類である。何の理由もないのに人をからかい、彼らはいったい何であるのか。馬鹿げたことを話したり、やったりしても、彼らは恥を知らないのか。実際、この種の人間は、最も価値がない。わたしはずっと前にそれを見抜き、とっくに彼らを見捨てたのである。そうでなければ、どうしてわたしが彼らを鍛錬することなく、彼らが繰り返し馬鹿げたことを話していることがあるだろうか。彼らは本当に赤い大きな竜の子孫である。今わたしはこれらのものを一つずつ取り除き始めた。サタンの子孫をわたしの長子、わたしの子らやわたしの民として用いることができようか。それでは、わたしは混乱してしまうのではないか。わたしは絶対にそんなことはしない。あなたがたはこれをはっきりと理解しているか。

あなたがたが今日遭遇するあらゆることは、良いことであれ悪いことであれ、すべてはわたしの知恵の手によって定められたのである。すべてがわたしによって指揮され、支配されてきた。これは決して容易に人類ができることではない。ある人たちはまだわたしのことで心配し、手のひらに汗をかいている。彼らは全く心配する必要はない。彼らは主な任務を怠り、霊の中に入ることがないが、それでもいのちの成長を望んでいる。彼らの望みは無駄である。彼らは全く切望しないが、それでもまだわたしの意図を満たそうとしている。あなたはわたしのために心配するが、わたしは心配しない。あなたは何を心配しているのか。わたしのためのあなたがたの働きにおいては、あなたは白々しい嘘をつきながら、いい加減にふるまっている。わたしはあなたに告げる。わたしはこの瞬間から、わたしの家からこの種の人間を追い出す。そのような者はわたしの家でわたしに奉仕するに相応しくない。そのような者は自分の行動でわたしを冒瀆するので、わたしはこの種の人間を忌み嫌う。「わたしに対する冒瀆は赦されない罪である」と言うとき、これは誰を指しているのか。あなたがたはこれを明確に理解しているか。この種の人間は、すでにこういう罪を犯しているにも関わらず、問題はまだそれほど深刻ではないと信じている。本当にこの混乱した人は盲目で、無知で、彼の霊は塞がれている。わたしはあなたを放り出す。（これはわたしへのサタンの誘惑であるので、わたしはこれをこんなにも憎む。この課題は繰り返し言及されるが、そのつどわたしを怒らせる。わたしはそれを抑えられない。誰もそれを止めることはできない。もしその時が来

ていたら、わたしはとうの昔に彼を処分していただろう）（このことは、外国人が中国に群がるようになると信じていない人々が、現時点にまだたくさんいるという事実に関連している。今もなお彼らは信じておらず、わたしの怒りを煽り、それは煮えこぼれんばかりである。）

わたしの家では、どのような人間がわたしの心に適っているのか。つまり、創造の前に、わたしはどのような種類の人間を、わたしの家で永遠に生きるように予め定めたのか。あなたがたは知っているか。あなたがたは、わたしがどのような人々を愛し、どのような人々を憎むのか、考えたことがあるか。わたしの家は、わたしと心を同じくする人々、わたしと良い時と苦難を分かち合う者、すなわち、祝福と困難の両方を共有する人々のためにある。これらの人々は皆、わたしが愛することを愛し、わたしが憎むことを憎むことができる。彼らはわたしが忌み嫌うものを棄てることができる。わたしが、彼らは食べてはならないと言うなら、彼らはわたしの意図を満たすために、進んで空腹のままでいる。この種の人々は喜んでわたしに忠実であり続け、わたしのために自分を費やし、わたしの苦心の努力への配慮を示すことができ、常にわたしのために一生懸命働く。したがって、わたしはこの種の人には長子の地位を与え、わたしが持っているすべてのものを与える。わたしはすべての教会を導く能力を持っており、これを彼らに与える。わたしには知恵があり、これもまた彼らに与える。わたしは真理を実践するために苦しむことができ、わたしはまた、これらの人々に意志を与え、わたしのためにどんなことでも苦しむことができるようにする。わたしには優れた資質があるが、わたしはこれを彼らに与え、彼らをほんの少しの違いもなく、全くわたしと同じようにし、人々がこれらの人々を見るとき、わたしを見るようにする。今、わたしはこれらの人々の中にわたしの完全なる神性を注いでいる。それは彼らがわたしの完全なる神性の一つの側面を生き、わたしを完全に表現できるようにするためである。これがわたしの意図である。外見のこと（わたしと同じ物を食べ、わたしと同じ物を着ること）で、わたしのようになろうとしてはならない。そのすべては役に立たず、これらのことを求めるとき、あなたがた自らを滅ぼすだけである。何故なら、わたしの外観を模倣しようとする者は、サタンのしもべであり、この試みはサタンの策略であり、またサタンの野望である。あなたはわたしと同じになろうとするが、あなたはそれにふさわしいのか。わたしはあなたを踏みにじって殺す！わたしの働きは常に進行しており、世界のすべての国々へ拡大している。急いでわたしの足跡について来なさい。

第九十章

盲目の者たちは全員わたしから去らなければならない。一時もわたしのところに留ま
ってはいない。というのは、わたしが欲するのは、わたしを知ることができる者
、わたしを見ることができる者、わたしからすべてのものを得ることができる者だから
だ。そして、わたしから本当にすべてのものを得ることができるのは誰か。確かにこの
種の間人は極めて少ないが、彼らは必ずわたしの祝福を受けるだろう。わたしはこれら
の人々を愛している。そしてわたしは彼らを一人ずつ選び出して、わたしの右腕、わた
しの現われとする。わたしは、すべての国と民族が絶え間なくわたしを賛美し、これら
の人々のために歓呼し続けるようにする。ああ、シオンの山よ。勝利の旗を掲げ、わた
しのために歓呼せよ。わたしは宇宙と地の隅々を渡り歩き、山や川、そしてすべてのも
のの隅々まで歩き尽くしたあと、再びここに戻って来るからである。わたしは義と、裁
きと、怒りと炎と、それ以上に、わたしの長子たちと共に、勝利のうちに帰って来る。
わたしが嫌悪するすべてのもの、またわたしが忌み嫌うすべての人間と物事をわたしは
遠くへ投げ捨てる。わたしは勝利し、わたしがしたいことをすべて完了した。わたしが
働きを完了していないなどと言うのは誰か。わたしがわたしの長子たちを得なかったな
どと言うのは誰か。わたしが勝利のうちに戻って来なかったなどと言うのは誰か。彼ら
は確かにサタンの類であり、彼らがわたしの赦しを得るのは極めて難しい。彼らは盲目
であり、汚れた悪魔であるので、わたしは彼らを最も嫌悪する。これらのことについて
、わたしはわたしの怒りとわたしの裁きの全容を現し始め、わたしの燃える火を通して
、宇宙と地の端から端まで火を付け、その隅々まで照らす——これがわたしの行政命令
である。

いったんわたしの言葉を理解したら、あなたがたはそれらから慰めを得るべきである
。不注意にそれらをやり過ごしてはならない。裁きの言葉は日々下っているのに、あな
たがたはどうしてそんなに頭が鈍く麻痺しているのか。なぜわたしと協力しないのか。
あなたがたはそんなに地獄へ行きたいのか。わたしはわたしの長子、わたしの子ら、そ
してわたしの民にとって憐みの神であると言っているが、あなたがたはこれをどのよう
に理解しているのか。これは単なる声明ではなく、肯定的な観点から理解されるべきで
ある。ああ、盲目な人類よ。わたしはあなたがたを何度も救い、わたしの約束を得るこ
とができるように、サタンの手と刑罰から助け出した。それでは何故、あなたがたはわ
たしの心に何の配慮も示さないのか。あなたがたのうち誰かこのように救われることが
できるのか。わたしの義、威厳、裁きはサタンに何の憐みも示さない。しかし、あなた
がたにとって、それらはあなたがたを救うためのものである。それなのに、あなたがた

はわたしの性質を理解することができず、またわたしの行動の背後にある原則も知らない。あなたがたはわたしがわたしの行動の厳しさやその目標に注意を払わないで行動すると思っていた——何と無知なことか。わたしはすべての人々、出来事、物事をはっきりと見ることができるのだ。わたしはそれぞれの人間の本質を完全明瞭に理解している。つまり、わたしは人間が心のうちに抱いていることを完全に見透かしている。わたしはその人がイゼベルか売春婦であれば、明確に見ることができ、誰が隠れたところで何をしているのか知っている。わたしの前にあなたの魅力を見せびらかすな——惨めな者よ。今すぐここから出て行け。わたしの名に恥をもたらしはならないので、わたしはそのような人間には用はない。彼らはわたしの名を証することはできないどころか、非生産的に行動し、わたしの家族に恥をもたらす。彼らはわたしの家から直ちに追放されるべきである。わたしは彼らを欲しない。わたしは一秒の遅れも許さない。それらの人々にとっては、彼らがどう求めようが、それは無駄である。わたしの国では、すべてが聖なるものであり、いかなる傷もないからである。わたしの民も含めて、誰かを欲しないとわたしが言うなら、わたしの言うとおりのものだ。わたしが心を変えるのを待ってはいけない。以前あなたがわたしにどれほど良くても、わたしは気にかけない。

わたしは日々あなたがたに奥義を明らかにする。あなたがたはわたしの話す方法を知っているか。わたしは何に基づいてわたしの奥義を明らかにするのか。あなたがたは知っているか。あなたがたはしばしば、わたしは時に適ってあなたがたに施す神であると言うが、あなたがたはどのようにこれらの側面を理解しているか。わたしは、わたしの働きの段階に従って、わたしの奥義をあなたがたに一つずつ明らかにする。また、わたしはわたしの計画に従ってあなたがたに施し、さらに、あなたがたの実際の霊的背丈に応じてあなたがたに施す（施すことは、神の国の各人に関連して言及されている）。わたしの話す方法はこうである。わたしの家の人々には、わたしは慰めを与え、わたしは彼らのために施し、わたしは彼らを裁く。わたしはサタンには憐みを示さず、すべてが怒りであり、炎である。わたしは、わたしの行政命令を用いて、わたしが予め定めなかった者たち、あるいは、選ばなかった者たちを一人ずつわたしの家から放り出すであろう。不安になる必要はない。わたしが彼らに彼らの本来の姿を露わにさせた後（彼らが最後にわたしの子らのために奉仕した後）、彼らは底なしの穴に戻る。そうでなければ、わたしは決してこの事を収束させることができないし、手を緩めることもできない。人々はしばしば地獄やハデスのことを口にする。しかし、これらの二つの言葉は何を意味しているのか。また、二つの違いは何であるのか。本当にそれらはどこかにある冷た

くて暗い片隅を意味しているのか。人間の心は常にわたしの経営を妨害し、自分の気ままな考えがかなり良いと思っている。しかし、それらはすべて人間独自の想像である。ハデスと地獄の両方は、以前サタンや悪霊が住んでいた汚れた宮を指している。すなわち、以前サタンや悪霊によって占領された者は誰でも、彼ら自身がハデスであり、地獄なのである——これに間違いはない。だからわたしは、過去に繰り返し、汚れた宮には住まいと強調したのである。わたし（神自身）がハデスや地獄に住めるだろうか。それは理不尽な戯言ではないか。わたしはこのことを何度も言ったが、あなたがたはまだわたしの言う意味を理解していない。地獄に比べると、ハデスはサタンによってもっとひどく墮落している。ハデスに行く者たちは最も深刻な例であり、わたしはただこれらの人々を予め定めなかった。地獄に行く者たちは、わたしが予め定めた人々だが、彼らは取り除かれた。簡単に言えば、わたしはこれらの人々のひとりさえ選ばなかったのだ。

人々はしばしば自分がわたしの言葉を誤解する専門家であることを露わにしている。わたしが少しずつ、はっきりと指摘して明確にしなかったならば、あなたがたのうちの誰が理解するのだろうか。あなたがたはわたしが話す言葉でさえも半分しか信じておらず、以前言及されなかったことは、決して気に留めようとしめない。現在、あらゆる国で内部紛争が始まった。指導者と争う労働者、教師と争う学生、国家幹部と争う市民——動乱を引き起こすこれらすべての暴動が、まず初めに各国で起こる。そして、そのすべてはわたしへの奉仕の一部に過ぎないのである。なぜわたしは、それがわたしへの奉仕だと言うのだろうか。わたしは人々の不幸を喜んでいるのか。わたしは無頓着に座っているのか。決してそんなことはない。なぜなら、これはサタンが瀕死の苦しみの中で攻撃しているであって、否定的な面で、これはわたしの力のために引き立て役の役目を果たし、わたしの奇しき業のために引き立て役となっているのである。それはすべてわたしに対する力強い証しであり、サタンを攻撃するための武器である。ちょうど世界のすべての国々が領土と勢力をめぐる争っているとき、わたしの長子たちとわたしは王として統治し、それらの国々を処分する。そして、これらの悲惨な環境条件の下でわたしの国が完全に人間の間に実現されるということは、彼らの想像をはるかに超えている。さらに、彼らが権力をめぐる争い、他の人たちを裁くことを望んでいるとき、他の人たちは彼らを裁き、彼らはわたしの怒りによって燃え尽きるのだ——何と哀れなことか。何と哀れなことか。わたしの国は人間の間に実現される——これは何と栄光ある出来事であるか。

人間であれば（わたしの国の民であろうと、サタンの子孫であろうと）、あなたがたは皆、わたしの奇しき業を見なければならない。さもなければ、わたしは決してこのことを収束させることはできない。たとえあなたが進んでわたしの裁きを受け入れても、あなたがわたしの奇しき業を見ないのであれば、それはまだ十分でない。すべての人々は、心と言葉と視覚によって確信しなければならず、誰にも逃れることは許されない。すべての人々はわたしに栄光を帰さなければならない。最終的には、わたしは赤い大きな竜さえ立ち上がらせ、わたしの勝利を讃美させる。これがわたしの行政命令である——あなたはそれを憶えておくか。すべての人々はわたしをいつまでも賛美し、わたしに栄光を帰さなければならない。

第九十一章

わたしの霊は語り、わたしの声を絶えず発する。あなたがたのうちわたしを知ることができる者は何人いるか。どうしてわたしは肉となってあなたがたの間に来なければならないのか。これは大いなる奥義である。あなたがたは一日中わたしのことを思い、わたしを慕い、またわたしを讃美し楽しみ、日々わたしを飲食しているが、今日まだわたしを知らない。何と無知で盲目なことか。何とわたしを知らないことか。あなたがたのうちわたしの旨を配慮することができる者が何人いるのか。つまり、あなたがたのうち何人がわたしを知ることができるのか。あなたがたは皆、狡猾で邪惡な種類の間であるが、それでもわたしの旨を満たしたいのか。いい加減にしなさい。あなたに言うが、サタンの行為がどんなに立派でも、それはすべてわたしの建て上げるものを破壊し、わたしの経営を邪魔するためなのだ。サタンがどんなに立派に行動しても、その本質は変化しない——サタンはわたしを否定するのである。そのため、多くの人たちが知らないうちにわたしの手によって打たれ、知らないうちにわたしの家族から逃げ出している。今日、人によって指揮されることは（大小を問わず）何一つなく、すべてはわたしの手の中にあるのだ。誰かがすべてのものは人間の支配下にあると言うなら、あなたはわたしを拒否しているとわたしは言い、あなたを厳しく罰する、あなたが頭を休める所がどこにもないようにする。あらゆるものの中で、わたしの手の中にないものとは何か。わたしによって定められないもの、またわたしによって決定されないものとは何か。それでもまだ、あなたはわたしを知っていると言い続ける。それは真っ赤な嘘である。あなたは他人を欺いたので、わたしをも騙すことができると思っているのか。自分がしたことを他の誰も知らなければ何も起こらないと思っているのか。そう簡単に逃れられるとは思ってはならない。わたしはあなたをわたしの前にひざまずかせ、それを白状させね

ばならない。白状しないことは許されないことである。これはわたしの行政命令である。

あなたがたはわたしの霊が誰であり、人間としてのわたしが誰なのかを本当に理解しているか。わたしが受肉することの意義とは何か。あなたがたのうちの誰がこのような重要なことを慎重に熟考し、わたしから何らかの啓示を受けたことがあるのか。あなたがたは皆自分自身を騙しているのだ。なぜわたしはあなたがたにわたしの受肉の奥義を明らかにし、世界の創造以来、人間が解き明かすことができなかった奥義、わたしの憎しみの対象となった多くの者たちに滅びをもたらした奥義を明らかにする。そしてそれが今日なのである。わたしの肉故に、わたしが愛する多くの者たちが完全にされた。厳密には、なぜわたしは肉とならなければならないのか。そして、なぜわたしはわたしの現在の姿（わたしの身長、外見、背丈などのすべてのもの）を持っているのか。それについて一つでも何か言える者が誰かいるか。わたしの受肉にはそれほど多くの意義があるので、それについてすべてを言い尽くすことはできない。わたしはあなたがたに今その一部を告げよう（わたしの働きの段階がここまで達したので、わたしはこれを為し、これを言わなければならない）。わたしの受肉は主にわたしの長子たちを対象としている。それは、わたしが彼らを牧養し、彼らがわたしと顔を合わせて会話して、話すようになるためである。それはさらに、わたしとわたしの長子たちはお互いに親密であることを示す（つまり、わたしたちは一緒に食事し、一緒に住み、一緒に生活し、一緒に行動する）。そうしてわたしによって実際に養われるためである——これは空しい言葉ではなく、現実である。以前、人々はわたしを信じていたが、現実を把握できなかった。それはわたしがまだ受肉していなかったからだ。今日、わたしが受肉したことによって、あなたがたは皆、現実を把握することができ、誠実にわたしを愛する者たちは、わたしの話とわたしのふるまいと、わたしが事柄を扱う方法の背後にある原則を通して、わたし、つまり知恵ある神自身を知ることができる。またそのことによって、誠実にわたしを求めている者たちは、わたしのわずかな行動の中にあるわたしの人間性というわたしの側面を見るようになり、そこでわたしを否定し、次にわたしに打ちのめされて、「まったく何の理由もなく」死ぬであろう。サタンを辱めることにおいて、受肉はわたしのために最も圧倒的な証をする。わたしは肉から出て来ることができるだけでなく、肉の中に生きることもしることができる。わたしには空間的または地理的制限がない。わたしには何の障壁も一切なく、すべてがなめらかに流れる。サタンはこの点で最も恥をこうむり、わたしが肉から出て

来るとき、わたしは尚もわたしの肉を通して働き、わたしは何の影響も受けない。わたしは尚も山々、川、湖、宇宙の隅々、そしてその中にある無数のものを渡り歩く。わたしは、わたしから生まれたが、わたしに背くために立ち上がったすべての者たちを露わにするために受肉したのである。もしわたしが肉になっていなければ、彼ら（つまり、わたしの面前では一様に行動し、わたしの背後では別の行動をとる者たち）を露わにするすべはないだろう。もしわたしが霊のままであれば、人々はわたしを彼らの観念の中で拝み、わたしが形のない手の届かないところにいる神だと思うだろう。わたしは今日、人々の観念（わたしの身長と外見のことを言っている）とは反対に、ごく普通のあまり背の低い人間となって受肉した。サタンを最も辱めるのはこの点であり、それは人々の観念（サタンの冒涇）に対する最も強力な反撃である。もしわたしの外見が他の人間と違っていたら、それは厄介なことになるだろう——誰もがわたしを崇拜し、自分の観念によってわたしを理解するようになり、わたしのためにあのような美しい証しをすることはできないだろう。だからわたしは今日わたしが持っている姿を自分のためにとったのであり、それは理解するのにまったく難しくはない。誰もが人間の観念から抜け出すべきであり、サタンの狡猾な計略によって騙されてはならない。将来、わたしは、自分の働きの必要に応じて、もっと多くのことをあなたがたに続けて語るであろう。

今日、わたしの偉業は成功し、わたしの計画は達成された。わたしは、わたしと心をつなげて協力する人々の集団を得た。これはわたしによって最も栄光ある時である。わたしの愛する子ら（わたしを愛するすべての者たち）は、わたしと共に為すべきすべてのことを完了させることにおいて、わたしと心と意思をつなげることができる——これは驚くべきことである。今日から後、わたしが不満を持っている者たちに対しては、聖霊の働きはないだろう。つまり、過去にわたしが言ったことに従わない者たちは、わたしが廃棄処分する。人々はわたしが言うことに完全に従わなければならない。これを憶えておきなさい。それは完全に一致することである。誤解してはならない。すべてはわたし次第なのだ。人間よ、わたしに条件を言うてはならない。わたしがあなたには資格があると言うなら、それは石に書かれているように変わることはない。また、わたしがあなたに資格がないと言うなら、悲しそうにして天と地を責めてはならない——それらは全てわたしの采配なのだ。あなたが自分自身を侮蔑するようにしたのは誰か。あなたにそのような恥知らずの愚行をさせたのは誰か。たとえあなたが何も言わなくても、わたしから真実を隠すことはできない。わたしは人間の心の奥底を調べる神自身であるとわたしが言うとき、わたしは誰を指しているのか。わたしはそれらの正直で

ない者たちに言っているのだ。わたしの背後でそのようなことをするとは、何と恥知らずなことだ。あなたはわたしの目をくらまそうとしているのか。それは容易ではない。直ちにここから出て行け。反逆の子よ。あなたは自分自身を愛していない。あなたは自分自身を尊重していない。あなたは自分のことを考えないのに、まだわたしがあなたを愛することを望んでいるのか。いい加減にしろ。わたしはこのような卑劣な者はひとりも要らない。全員ここから出て行け！これはわたしの名に最も深刻な恥をもたらし、あなたがたにこれがはっきりと見えないなら、あなたがたのためにはならない。あなたがたは、この邪悪でふしだらな古い時代の中で、どんな汚れたものにも汚染されることがないように自分を守らなければならない。あなたは完全に聖なるもの、傷ひとつないものでなければならない。今日、わたしと一緒に王として支配する資格のある者たちとは、どんな汚れにもけがされてない人たちである。何故なら、わたしは聖なる神自身であり、誰であれ、わたしの名に恥をもたらす者を、一人として望んでいないからである。このような者たちは、わたしを試すためにサタンによって送り込まれたのであり、まさに撃退されねばならない（底なしの穴に投げ込まれなければならない）サタンのしもべたちである。

わたしの家族は聖なるものであり、傷ひとつなく、わたしの神殿は荘厳で威厳がある（つまり、わたしが持っているものとわたしの存在そのものを所有する者たちを意味する）。敢えてそこへ入り込み、やたらに騒動を引き起こそうとする者は誰か。わたしは決して彼らを赦さない。彼らは完全に滅ぼされ、大きな恥辱を受けなければならない。わたしは知恵によって行動する。ナイフも、銃も使わず、指一本上げることもなく、わたしは、わたしを否定し、わたしの名に恥をもたらす者たちを完全に打ち負かす。わたしは寛容であり、たとえサタンがこのような騒動を引き起こす時でも、安定した歩調でわたしの働きを続ける。わたしはサタンをまったく気にせず、わたしの経営計画の完成によってサタンを敗北させる。これがわたしの力とわたしの知恵であり、さらにそれは、わたしの終わることのない栄光のほんの一部である。わたしの目には、わたしを否定する者たちは泥の中を這い回る虫のようなものであり、わたしの意志にしたがっていつでも踏み潰し、死に至らしめることができる。しかし、わたしは知恵によって物事を行う。わたしは、わたしの長子たちが行って、彼らを処分することを望んでいる。わたしは決して急がない。わたしは念入りに、秩序立てて、何の誤りもなく行動する。わたしから生まれたこれらの長子たちは、わたしの存在そのものを持つべきであり、わたしの業の中に、わたしの終わりのない知恵を見るべきである。

第九十二章

一人ひとりが、わたしが話す言葉とわたしが為すことの中にあるわたしの全能性と知恵を見ることができる。わたしがどこへ行こうと、わたしの働きがそこにある。わたしの足跡は中国だけではなく、更に重要なことに、世界のすべての国にある。しかし、これらはわたしの働きの段階であるので、この名を最初に受け取るのは、以前言及した七つの国だけである。そして近い将来、あなたがたはそれについて完全に明確になり、十分に理解するだろう。わたしはあなたがたの霊的背丈に従ってあなたがたに語り、わたしの声を発すると以前わたしが言ったように、もしわたしが今あなたがたに告げるならば、恐らく大多数の者たちはそのために倒れてしまうだろう。そして、わたしが為すあらゆることの中には、誰も推し量ることができないわたしの終わりのない知恵が宿っているのである。それについてわたしはあなたがたに一度に少しだけしか教えられない。このことを知っておきなさい。あなたがたはわたしの目には永遠に子供である。あなたが踏み出す一步一步において、あなたはわたしによって導かれ、わたしによって指導されなければならない。人々よ、あなたがたは、わたしの指導のもとでのみ、全生涯を生き抜くことができるのである。わたしの指導がなければ、誰ひとり生き続けることはない。宇宙と世界全体がわたしの手の中にあるが、あなたはわたしがあくせくしているのを見ることはない。逆に、わたしはリラックスしており幸せある。人々はわたしの全能性を知らず、彼らは皆、わたしのために心配したいと思っている――何と自分を知らないことか。あなたはまだわたしの前で自分のゴミを見せびらかし、自分自身に感心している。わたしはずっと昔にこれを見抜いていた。そして、あなたはわたしの前で策略をめぐらす。侮蔑すべき卑劣な者よ。今すぐわたしの家から出て行きなさい。わたしはあなたのようなものは要らない。わたしはあなたのような侮蔑すべき卑劣な者を欲するよりも、むしろわたしの国にまったく誰もいないことを望む。わたしはもうあなたの上に働いていないことを知らなかったのか――あなたは今もいつもと同じように食べ、同じような服装をしているという事実にもかかわらず。しかしあなたは、自分がサタンのために生きていることを知っていたか――あなたはサタンのための奉仕していることを。それでも、あなたにはまだわたしの前に立つ神経があるとは――あなたは非常に恥知らずである。

以前、わたしはしばしば言った。「大きな災害がすぐに降りかかる。大きな災害はすでにわたしの手から降りかかっている」と。「大きな災害」とは何を指し、この「降りかかる」ということはどう説明されるべきか。あなたがたは、これらの大きな災害は、

人間の霊、魂、身体を傷つける、避けられない災害を指していると思い、わたしが話す「地震、飢饉、疫病」がこの大きな災害だと思っている。しかしあなたがたが知らないのは、あなたがたがわたしの言葉を誤解しているということである。そして、あなたがたは、この「降りかかる」ということが、大きな災害が始まったことを意味していると思っている。これは笑い話である。あなたがたは実際、それをこのように理解する。そして、わたしはあなたがたの説明を聞いた後、本当に怒る。人々が解明することができなかった奥義（最も秘密の奥義）は、時代を通じて最もひどく誤解されてきた奥義でもある。さらに、この奥義はこれまで誰も経験したことの無いものである（この奥義は終わりの日にのみもたらされるので、人は最後の時代にだけそれを見ることができるが、彼らはそれを知らない）。何故なら、わたしがそれを最も固く封印したからであり、人はそれを決して見抜くことができないのだ（彼らはそのほんの少しも見ることができない）。わたしの働きがこの段階まで続けられた今、わたしはわたしの働きの必要に応じ、あなたがたに啓示を与える。さもないと、あなたがたは決して理解しないだろう。今わたしは交わりを始める。だから、誰もが注意を払うべきである。さもないと、わたしの長子たちも含めて、誰でも不注意な者はわたしの裁きを受け、最も深刻な場合は、わたしの手によって打ちのめされるであろう（つまり、彼らの霊、魂、肉体が取り除かれる）。大きな災害はわたしの国の行政命令の一つひとつに関連して告げられており、わたしの行政命令の一つひとつが大きな災害の一部である。（わたしの行政命令はあなたがたに完全には明かされていないが、このことで心配したり心を騒がせたりすることはない。あなたがたが早く知り過ぎると、あなたがたにほんの少ししか恩恵をもたらさないことが幾つかある。このことを憶えておきなさい。わたしは知恵ある神である）それでは他の部分は何であるのか。大きな災害には二つの部分が含まれている。それはわたしの行政命令とわたしの怒りである。大きな災害が降りかかる時期とは、わたしが怒りを燃やし、わたしの行政命令を執行し始める時期である。ここでわたしは長子たちに告げる。あなたがたはこのために墮落しないように気をつけなければならない。あなたは、すべての物事はわたしによって予め定められていることを忘れたのか。わたしの子よ。恐れることはない。わたしは必ずあなたを守り、あなたは永遠にわたしと共に素晴らしい祝福を享受し、永久にわたしと共にいるであろう。あなたはわたしの愛する者なので、わたしはあなたを見捨てない。わたしは愚かなことはしない。苦心して完成させた物をわたしが打ち壊したなら、わたしは自分の墓穴を掘っているのではないか。わたしはあなたが心の中で何を考えているのか知っている。あなたは憶えているか。あなたは他に何をわたしに言わせたいのか。わたしは大きな災害についてさらに話そう。大き

な災害が降りかかる時期は最も恐ろしい時となり、それは人間の醜さを最も露わにするであろう。あらゆる種類の悪魔の様相はわたしの顔の光の中で暴露され、彼らには隠れる場所はどこにもなく、自分を覆うことができる場所は見つからない。彼らは完全に暴露されるのだ。大きな災害の成果は、わたしによって選ばれなかった者、あるいは予め定められなかった者全員を、泣いて歯ぎしりしながらわたしの前でひざまずかせ、赦しを請わせることである。これがサタンへのわたしの裁きであり、わたしの怒りの裁きである。わたしは現在この働きを行うことに携わっており、資格を持っている振りをして、威張りながら突き進みたいと思う人々も中にはいるかもしれないが、彼らがこのようであればあるほど、サタンはさらに彼らの上に働き、遂には彼らの元来の姿が露わになるであろう。

わたしはわたしの働きをする際慌てることはなく、わたしは一人ひとりの人間を自ら指揮し（これは彼らを風刺しているのだが、彼らが赤い大きな竜の子孫であることを証明し、わたしは彼らにまったく注意を払わないので、「指揮する」と言う言葉を使うのは過言ではない）、すべての業を自分で行う。わたしにおいては、すべてのことが成功し、それは安全かつ確実な成功である。わたしが段階ごとに行うすべてのことは、すでに定められているのだ。わたしは自分の旨とわたしの重荷のことを少しずつ告げよう。この時点から、わたしの言葉はすべての国とすべての民族に現れ始める。わたしの長子たちはすでに完全にされているので（わたしの言葉の焦点はわたしの子らとわたしの民にある）、わたしが働く方法は再び変わり始めた。あなたにはこれがはっきりと見えるか。あなたがたはここ数日、わたしの言葉の調子を感じただろうか。わたしはわたしの長子たちをその歩みの一步一步において慰めるが、これからは（わたしの長子たちはすでに完全にされているので）わたしは手にナイフを握る（それは最も厳しい言葉である）。わたしが一時的に好意を抱かないで目を留める者については（それはわたしによって予め定められも、選ばれもしなかった者を意味しており、そこに矛盾はない）、彼らがわたしに奉仕する者か、それ以外の何者かであるか、わたしは気にせず、わたしは彼らを直ちに廃棄処分する。わたしは全能なる神であり、わたしはすべての人々をわたしに奉仕させることができる。わたしはためらうことなくこの種の間人は手放す。わたしが彼らを要らないと言うなら、確かに要らないのだ。この時が到来した今、わたしに必要なのは、わたしを不愉快にする者を見ることだけであり、わたしは検証することなく直ちに彼らを捨て去るであろう。何故なら、わたしとわたしの言葉は同じだからだ。わたしに奉仕するようわたしが予め定めた者たちについては、あなたがどれほど善良かに

関わらず、また、あなたがわたしに反抗することをしたのかどうかに関わらず、もしあなたがわたしを不快にさせるならば、わたしはあなたを放り出す。わたしはこれから起こりうる問題を恐れない。わたしはわたしの行政命令を持っており、わたしとわたしの言葉とは同じであり、わたしの言葉は成就する。わたしがサタンをわたしのところに留めておくことができようか。人々よ、聞きなさい。あなたがたは恐れる必要はない。わたしがあなたに出て行けと言うときは、出て行かなければならない。わたしがあなたに言うことは何もないのだから、わたしに言い訳してはならない。わたしはこのような忍耐を示し、わたしの行政命令を執行する時間が到来し、あなたがたの終わりの日もやって来たからである。何千年もの間、あなたがたは墮落し、いつも強情で、自分勝手なやり方で物事をしてきたが、わたしはいつも忍耐であった（わたしは度量が大きいので、あなたの墮落がある程度に達することを許した）。しかし、今、わたしの忍耐の日々は終わりを迎え、あなたがたが所有されて、火と硫黄の池に投げ込まれる時が来た。急いで道をあけなさい。わたしは正式にわたしの裁きを執行し、わたしの怒りを注ぎ始める。

すべての国や世界のいたる所で、地震、飢饉、疫病、あらゆる種類の災害が頻繁に発生する。わたしがすべての国や世界のいたる所でわたしの大きい働きを為す時、これらの災害は、世界創造以来のどの時期よりもすさまじいものとなって起こるだろう。これがすべての民へのわたしの裁きの始まりである。しかしわたしの子らは安らかに休むことができる。あなたがたの上にひとつの災害も降りかかることはなく、わたしはあなたがたを守る（つまり、あなたがたはその後、肉ではなく、体の中で生きるので、どんな災害の苦痛も受けない）。あなたがたはわたしと一緒にただ王として支配し、すべての国とすべての民を裁き、宇宙と地の隅々で永遠にわたしと素晴らしい祝福を楽しむだろう。これらの言葉はすべて成就され、間もなくあなたの目の前で達成されるだろう。わたしは一刻、一日も遅れることなく、驚くほど迅速に事を行う。心配したり心を騒がせたりしてはならない。わたしがあなたに与える祝福は、誰もあなたから奪うことのできないものだ――これがわたしの行政命令である。わたしの業の故に、すべての人々がわたしに従順になるであろう。彼らは歓びし続けるだけでなく、さらに喜んで跳び上がり続けるだろう。

第九十三章

事実は人の目の前で達成され、すべてのことは達成された。誰も予期しなかったこと

であるが、わたしの働きはペースを増し、打ち上げられたロケットのように高く上昇している。事が起こった後に初めて、あなたがたはわたしの言葉の本当の意味を理解するだろう。赤い大きな竜の子孫も例外ではなく、彼らはわたしの驚くべき業を目の当たりにしなければならないのである。あなたがたの業を見た後、わたしについて確信しているからといって、わたしがあなたを見捨てないと思っはならない——それはそれほど単純なことではないわたしは、わたしが言ったこととわたしが定めたことの全てを必ず成就する。そして、それらは空しくわたしのところへ戻っては来ない。中国では、わたしの長子たちである少数を除くと、わたしの民はほとんどいない。だから今日、わたしはあなたがた（わたしを最もひどく迫害した赤い大きな竜の子孫）にはっきり言う。あなたがたはどんな大きな希望にもしがみ付いてはならない。そして、わたしの（創世以来の）働きの焦点は、わたしの長子たち、また中国の向こうにあるいくつかの国々に当てられている。それ故、わたしの旨は、わたしの長子たちが成長したときに、達成されるであろう。（わたしの長子たちが成長すると、すべてのことが行われる。何故なら将来の仕事は彼らに与えられているからである）。ひたすら赤い大きな竜が辱められるように、わたしは今これらの人々に、わたしの驚くべき業の一部だけを見ることを許す。これらの人々はそのことに喜びを見出すことがどうしてもできず、わたしに奉仕することに幸せを感じるだけである。彼らには他に選択の余地がない。何故なら、わたしにはわたしの行政命令があり、それに逆らおうとする者は一人もいないからである。

わたしは今、外国人の到来に関する幾つかの状況について交わりを持つ。それは、あなたがたが事前知識をもち、わたしの名を証しするためにすべてを正しく準備し、彼らの上に立って彼らを支配するためである。（何故なら、彼らの中で最も大いなる者でさえ、あなたがたの中では最も小さい者なので、わたしはあなたがたが彼らの上に立って支配するように言うのである）。これらの人々は皆、聖霊の啓示を得た。後に彼らは皆、あたかも事前に計画されていたかのように、一緒になって中国に殺到するであろう。赤い大きな竜は不意を突かれ、必死になって抵抗するが、一つのことを憶えておきなさい。わたしの経営計画は完全に実現しており、どんな事もどんな人間もわたしの歩みを妨げることはできない。わたしはあらゆる時に彼らに啓示を与え、彼らは聖霊の導きに従って行動する。彼らは決して赤い大きな竜の束縛に苦しまない。わたしにあっては、すべては解放と自由だからである。わたしはあらゆることを適切に整え、あなたがたが彼らを牧養するための準備の働きを整えるのを待っている。過去にわたしはすでにこのことをあなたがたに言ったが、あなたがたのほとんどは、まだ半分しか信じない。今の

状況はどうだろうか。あなたがたは啞然としている、そうではないか。

これらのことはみな二次的なことである。主なことは、あなたがたができるだけ早く準備の働きをすることである。驚いてはならない。その働きを為す者はわたしであり、その時が来れば、わたしが自分の働きを為す。わたしは赤い大きな竜を粉々に砕いた。つまり、わたしの霊はわたしの長子たちを除く、すべての人たちから取り上げられた（それによって今、誰が赤い大きな竜の子孫であるかを暴露するのがさらに容易になった）。これらの人々はわたしへの奉仕を終えたので、わたしは彼らを底なしの穴へ戻す。（それは、わたしが彼らのうちの一人として用いるつもりはないことを意味している。今からわたしの長子たちは完全に明らかにされ、わたしの側にいてわたしに用いられるにふさわしい者たちはわたしの長子となるであろう）。わたしの長子たちよ、あなたがたはわたしが授ける祝福を正式に享受し（何故なら、わたしが忌み嫌うすべての者がその本性を現したからである）、今後あなたがたがわたしに反抗するようなことは一切起こらないだろう。あなたは純粹にわたしについて百パーセント確信している。（今日このことが初めて完全に達成された。そしてわたしはこの時を予め定めていたのだ）。あなたがたが心と思いの中で考えていることは、わたしへの無限の愛、わたしへの畏敬の念だけであり、あなたがたは、あらゆる時にわたしを讃美し、わたしに栄光を帰す。あなたがたはまことにわたしの愛の配慮と守りのもとに生き、第三の天に住んでいるのだ。このような比類なき至福と幸福。それは人々には想像し難い別の領域——真の霊の世界である。

すべての災害は、前のものよりも激しさを増しながら続発し、状況は日々厳しくなる。これは災害の始まりに過ぎず、後に来る、より深刻な災害は人間の想像を絶するものである。わたしの子らに彼らを処分させよう。これがわたしの行政命令であり、わたしがずっと昔に定めたものである。人間が今までに見たことのないしるしや不思議のすべてがわたしから生じ、後から後へと万民（わたしの国の民を意味する）の前に現れる。これは近い将来に起こることである。心を騒がせてはならない。以前人々は皆、神の国に入ることについて話していたが、神の国に入る状況とはどのようなものであろうか。また、神の国とは何であろうか。それは物理的な都市であるのか。あなたがたは誤解している。神の国は地上や、物理的な空にあるのではなく、むしろそれは人が見ることも触れることもできない霊的な世界である。わたしの名を受け入れた後にわたしによってまったく完全にされ、わたしの祝福を享受する者だけが、そこに入ることができる。前にしばしば言及された霊的世界とは、神の国の表面である。しかし、本当に神の国に入

ることは簡単なことではない。そこに入る者はわたしの約束を得なければならず、わたし自身が予め定め、選んだ人でなければならない。したがって、霊的な世界は、人々が好きなように出入りできる場所ではない。かつてこのことに関する人々の理解は非常に浅いものであって、人間の観念でしかなかった。神の国に入る者だけが祝福を享受することができる。だから、人間にはこれらの祝福を享受することができないどころか、見ることができないのである。そしてこれは、わたしの行政命令の最後の一項目である。

第九十四章

わたしはわたしの長子たちと共にシオンに帰る—あなたがたは本当にこれらの言葉の真の意味を理解しているだろうか。わたしは、あなたがたが早く成長してわたしと共に治めるようになるのを望んでいることを、繰り返しあなたがたに思い起こさせた。あなたがたは憶えているだろうか。これらの事はすべてわたしの受肉に直接関連している。肉を通してわたしと心をつなげる一群の人々を得るために、わたしはシオンから肉となって世に來た。そしてわたしたちはまたシオンに戻るのだ。これは、わたしたちが肉から本来の体に戻ることを意味する。これが「シオンへ帰ること」の真の意味である。これはまたわたしの経営（救いの）計画全体の真の意味と焦点であり、それ以上に、誰にも妨げることができない、わたしの経営（救いの）計画の最も重要な部分であり、それは直ちに達成されるであろう。あなたが肉の中にあるなら、決して人間の観念や思考を取り除くことはできない。まして地上の雰囲気振り払うことも、塵を振り落とすこともなく、あなたは常に粘土のままである。祝福を享受する資格があるのは、あなたが体の中にいるときだけである。祝福とは何か。あなたがたは憶えているだろうか。肉においては、祝福を考慮することはできないので、すべての長子は肉から体への道を辿らなければならない。肉の中では、あなたは赤い大きな竜に圧迫され、迫害されているが（これは、あなたには力がなく、あなたが栄光を得なかったからである）、体の中ではそれは非常に異なり、あなたは誇りと大きな喜びを感じるだろう。弾圧の日々は完全に過ぎ去り、あなたは永遠に解放され自由になるだろう。わたしの存在そのものと、わたしが持っているものとをあなたがたの中に加えるなら、そうでなければならない。さもないと、あなたがたはわたしの資質しか持たない。どれほど人が他の人の外見を模倣しても、まったく同じものになることはできない。聖なる霊の体（つまり体を意味する）の中でのみ、わたしたちはまったく同じものになることができるのだ。（これは、同じ資質、同じ実存を持ち、同じものを所有し、分割されることなく、仕切りがなく、心をつなげて統一することができることを指している。と言うのも、すべてが聖なる霊の体

だからである。)

なぜあなたがたは今、世を憎み始め、食べたり、着たりすることなどの厄介なことにうんざりし始め、待ちきれずにそれらを捨て去るのか。これは、あなたが霊的な世界（体）の中へ入るしるしであり、あなたがたは皆（すべてが同じ程度ではないけれども）このことを予感する。わたしは様々な種類の異なる人々、異なる出来事、異なるものを使って、わたしの最も重要な段階に仕えさせる。そして、彼らは皆、わたしのために奉仕することになる。わたしはそうしなければならない。（まだその時が到来していないので、もちろんわたしはこれを肉において達成することはできない。わたし自身の霊だけがこの働きを為すことができるのである。）これは、宇宙世界全体の最後の小さな機能である。すべての者がわたしを賛美し、わたしを歓呼するであろう。わたしの大いなる働きは完成する。宇宙と世界、すべての国々と民族、山々、川、また、すべてのものに向かって、七つの鉢の災害がわたしの手から注ぎ出され、七つの雷が鳴り、七つのラッパが鳴り響き、七つの封印が解かれる。七つの災害の鉢とは何か。それらはどこに向けられるのか。なぜわたしはそれらがわたしの手から注ぎ出されると言うのか。誰もが確信し、誰もが完全に理解するまでには、長い時間が経過するであろう。わたしが今あなたがたに言っても、あなたがたはほんの一部分しか理解しないだろう。人間の想像によると、七つの鉢の災害は世界のすべての国々や民族に向けられているが、実際はそうではない。これらの七つの災害は、悪魔であるサタンの影響と、赤い大きな竜（わたしに奉仕させるためにわたしが使用する対象）の陰謀を指している。その時わたしは、子らと民を懲らしめるために、サタンと赤い大きな竜を解き放つ。そして、それによって誰が子であり、民であるかが明らかにされるだろう。騙された者たちは、わたしの予定の対象にならなかった人たちである。一方、わたしの長子たちは、この時わたしと共に支配するだろう。このようにして、わたしは子らと民を完全にする。七つの災害の鉢から注ぎ出されるものは、すべての国々と民族ではなく、わたしの子とわたしの民だけに影響を及ぼすのだ。祝福は容易にはもたらされない。それには十分な代価を払わなければならない。子らと民が成長すると、七つの災害の鉢は完全に消滅し、その後は存在しなくなる。七つの雷が鳴り響くとは何なのか。これを理解するのは難しくない。わたしの長子たちとわたしが体になる瞬間、七つの雷が鳴り響くであろう。あたかも天と地が逆さまになったかのように、これは宇宙全体を揺さぶるであろう。誰もがこれを知り、それを知らない者はひとりもないだろう。その時、わたしの長子たちとわたしは栄光の中でひとつとなり、次の段階の働きを始めるだろう。七つの雷が鳴り響くので、多く

の人々がひざまずいて憐みと赦しを求めるだろう。しかし、これはもはや恵みの時代でない。それは怒りの時となるであろう。悪を行うすべての人々（姦淫する者、あるいは汚れたお金を扱う者、男女の境界が不明瞭な者、わたしの経営を邪魔したり損なったりする者、霊が塞がれている者、あるいは悪霊に憑かれている者など—わたしの選びの民を除くすべての者たち）について言えば、誰ひとり放免されることも、赦されることもなく、全員がハデスに投げ込まれ、永遠に滅びるだろう。鳴り響く七つのラッパは、大きな悪い環境を指すのではなく、また世界に宣告されるものを指しているわけでもない。まったくそれは人間の観念である。七つのラッパとはわたしの怒りの言葉を指している。わたしの声（威厳ある裁きと怒りの裁き）が発せられると、七つのラッパが鳴り響く。（今、わたしの家では、これは最も激しく、誰ひとりそれを逃れることはできない。）そして、ハデスと地獄の悪魔たちは、大小問わず両手で頭を抱え、あらゆる方向に逃げ、泣きながら歯ぎしりして、恥をこうむり、どこにも隠れる場所がないだろう。現時点では、それは鳴り始める七つのラッパではなく、わたしの激しい怒り、またわたしの最も厳しい裁きであり、誰もそれを逃れることはできず、すべての者がそれを受けなければならないのだ。この時点で明らかにされているのは、七つの封印の内容ではない。七つの封印とは、将来あなたがたが享受する祝福である。封印を解くことは、ただあなたがたに知らせることを示しているが、あなたがたはまだこれらの祝福を享受していない。祝福を享受するときになると、あなたがたは七つの封印の内容を知るだろう。今は、あなたがたはまだ完全でないものの一部分に触れているだけである。将来の働きの中でそれが生じるたびに、わたしはひとつずつ教えるしかなく、そうすることで、あなたがたはそれを個人的に体験し、比類なき栄光を感じ、果てしない喜びの中で存在するだろう。

長子たちの祝福を享受することは簡単なことでもなく、ごく普通の人間が達成できることでもない。わたしはもう一度強調し、もっと力を込めて言おう。わたしはわたしの長子たちに厳しい要求をしなければならない。さもなければ、彼らはわたしの名に栄光を帰すことはできない。わたしは、誰であれこの世で評判の悪い者は、断固として拒否する。また、道徳的にだらしない者やふしだらな者はなおさら拒む。（彼らが神の民になることはない——この点について、わたしは特に強調する。）あなたが過去にやったことはもう終わっており、すでに解決済みだと思ってはならない——そんな都合の良いことがどうしてありえようか。長子の地位を得ることは、そんなに簡単なことだろうか。わたしは同じように、わたしに敵対する者、肉におけるわたしを認識しない者、自身

の旨を行うわたしを妨げる者、わたしを迫害する者を拒否する——わたしはかくも厳しいのである（それは、わたしがわたしの力を完全に取り戻したからである）。最後に、わたしは人生において挫折しなかった者たちを同じように拒否する。たとえそれが小さな苦しみであっても、わたしと同様に苦しみを経て来た者をわたしは欲する。さもなければ、わたしはこのような人を放り出すだろう。わたしの長子になりたがり、わたしの前をこれ見よがしに歩くような恥知らずなことをしてはならない。わたしのところから出て行きなさい。あなたは以前わたしの好意を勝ち取ろうとして、わたしにささいなことを話した。これは盲目である。惨めな者よ、わたしがあなたを憎んでいることを知らないのか。わたしがあなたのいかがわしい所業を知らないとでも思っているのか。あなたは幾度となく隠れる。あなたは自分の悪魔の顔を暴露したことを知らないのか。人々にはそれが見えないが、わたしもそれを見ることができないとでも思っているのか。わたしに奉仕する者たちは、良いものではなく、惨めな者の集団である。わたしは彼らを処分しなければならず、底なしの穴に彼らを投げ込み、焼き尽くす。

不信仰に話し、不忠実に行動し、正しく他の人と協力しない者、このような人間が王になりたがっている。あなたは夢を見ているのではないか。それはあなたの妄想ではないのか。あなたは自分が何であるのか分からないのか。あなたは惨めである。そのような人間が何の役に立つだろうか。急いでわたしの目の前から消え去りなさい。すべての者は、わたしが言っていることをはっきりと理解し、わたしの言葉によって霊を動かされ、わたしの全能性を認識し、わたしの知恵を知るべきである。聖なる霊の体が現れたとすでに頻繁に言われてきた。結局のところ、あなたがたは聖なる霊の体が現れたと言うのか、それとも現れていないと言うのか？わたしが言うことは中身の無い話だろうか。聖なる霊の体とは何か。聖なる霊の体は、どのような状況において存在するのか。人間にとって、それは想像を絶するものであり、理解できないことである。わたしはあなたがたに言う。わたしは完全無欠であり、わたしにあってはすべてが開かれており、すべてが解き放たれている（何故なら、わたしは賢明なことを行い、自由に語るからである）。わたしが為すことのうち、恥ずべきことは何ひとつなく、すべてが光の中で行われるので、誰もが完全に確信することができる。さらに、何かわたしに対して不利なことを掴める者はひとりもない。それが聖なる霊の体における「聖なる」ことの説明である。だから、わたしはそれらの恥ずべきことを行う者は誰も要らないと繰り返し強調してきたのだ。これはわたしの行政令の一項目であり、また、わたしの性質の一部でもある。霊的な体とはわたしの言葉のことである。わたしが言うことにはいつも目的があ

り、常に知恵があるが、支配の対象にはならない。（わたしはわたしが言おうとすることを言う。声を発しているのはわたしの霊であり、わたしという存在が話しているのだ。）わたしが言うことは自由に解き放たれ、それが人々の観念に合わないなら、それは人々を露わにする時である。それがわたしの正しい采配である。したがって、わたしという人間が話したり、行動したりするときはいつでも、サタンの本質を暴露する良い機会なのだ。わたしという人間が油を注がれた時、聖なる霊の体が現れる。将来には聖なる霊の体は体を指し、その意味には二つの側面がある。現在においてその意味の一つの側面があり、将来にはその意味の別の側面があるのだ。しかし、将来には、聖なる霊の体は現在のものとは大きく異なるだろう——それは天と地ほどの差がある。誰もそれを推し測ることはできず、わたしがあなたがたにそれを直接明らかにしなければならない。

第九十五章

実際にはそうではないのに、人々はすべてのことは極めて簡単であると考えている。すべてことの中には、隠された奥義があり、またわたしの知恵と采配が含まれている。細部のひとつさえ見過ごされず、すべてはわたし自身によって定められている。大いなる日の裁きは、わたしを心から愛さないすべての者に降りかかり（覚えておきなさい。大いなる日の裁きは、この名を受けるすべての者に向けられる）、彼らは泣いて歯ざりするようになる。この嘆きの声はハデスと地獄から来る。それは人々が泣いているのではなく、悪魔たちである。この嘆きと、わたしの経営（救いの）計画における人々への最終的な救いとをもたらすのはわたしの裁きである。以前わたしは何人かの人たちにある程度希望を持っていた。しかし、今見ていると、わたしはこれらの人々を一人ずつ見捨てなければならない。それは、わたしの働きがこの段階に達し、それは誰にも変えることのできないことだからである。わたしの長子でもわたしの民でもない者はみな見捨てられ、ここから出て行かなければならない。中国では、わたしの長子とわたしの民を除けば、他のすべての者は赤い大きな竜の子孫であり、投げ捨てられるべきであることを、あなたがたは理解しなければならない。結局、中国はわたしによって呪われた国であり、そこにいる僅かばかりのわたしの民は、わたしの将来の働きのために奉仕する者に過ぎないということを、あなたがたは理解しなければならない。別の言い方をすれば、わたしの長子たちを除いては、他に誰もいないのである——彼らはみな滅びることになっている。わたしの業においてわたしが極端過ぎると思ってはならない。これはわたしの行政命令である。わたしの呪いを受ける者たちは、わたしの憎しみの対象であり

、これは確かなことである。わたしは間違いを犯さない。わたしを不愉快にする者を目にすれば、わたしは彼らを追い払うだろう。そして、それはあなたがわたしに呪われており、赤い大きな竜の子孫であるという十分な証拠である。念を押してもう一度言う。中国には（わたしに奉仕するわたしの民の他には）わたしの長子だけがいる。そして、これはわたしの行政命令である。しかし、わたしの長子は非常に少なく、彼らはわたしによって予め定められているのである——わたしはわたしの為すことを知っている。わたしはあなたの消極性を恐れないし、あなたがひるがえってわたしに噛み付くことも恐れていない。何故ならわたしにはわたしの行政命令があり、怒りがあるからである。すなわち、わたしは大きな災害を手を持っており、わたしはすべてのことがすでに達成されたと見なしているのです、恐れることは何もない。そして、その日が到来するとき、わたしはあなたを完全に片付けるだろう。人を完全にし、啓発し、わたしの長子になるようにすることは人間には不可能なことであるが、むしろそれは、もっぱらわたしの予定に拠るものである。誰であれ長子であるとわたしが言えば、その人は長子である。そのために争ったり、それを手に入れようとしたりしてはならない。すべてのことはわたし、全能なる神自身にかかっている。

いつの日か、わたしはあなたがた全員にわたしの行政命令とわたしの怒りが何であるかを見せよう（すべての者がわたしの前にひざまずき、わたしを礼拝し、わたしに赦しを請い、すべての者が服従するだろう。今わたしは、わたしの長子たちにだけその一部を見せる）。わたしはわたしの長子を完全にするために、犠牲にすべき多くの者たちを選んだこと、また、赤い大きな竜が自らの狡猾な策略に陥るようにしたことを、わたしは赤い大きな竜のすべての子孫（わたしの長子を除くすべての者）に見せる。（わたしの経営計画では、赤い大きな竜は、わたしの経営計画を妨害するために、わたしのために奉仕する者たち——わたしの長子を除くすべての者たち——を送り出す。しかし、それは自らの狡猾な策略に陥ってしまい、彼らは皆わたしのために奉仕するのである。これは、すべての者を動員してわたしのために奉仕させることの真の意味の一部である。）今日、すべてのことが達成されたら、わたしは彼らをみな処分し、わたしの足で踏み潰し、このことを通して赤い大きな竜を辱めて、完全に恥をかかせる（彼らは何とか上手く祝福を得ようと試みるが、わたしのために奉仕するようになるとは思っていない）——これはわたしの知恵である。これを聞いて、人々はわたしが感情も憐みも持っておらず、わたしには少しも人性がないと思う。わたしは確かにサタンに対しては感情も憐みも持っておらず、さらにわたしは、人性を超越した神自身である。どうしてあなたは

、わたしが人性を持った神だと言えるのか。わたしはこの世のものではないことをあなたは知らないのか。わたしが万物の上にいることをあなたは知らないのか。わたしの長子たちを除いて、わたしのようなものは誰ひとりなく、わたしの性質（人の性質ではなく、神聖な性質）を持つ者は誰ひとりなく、わたしの資質を備えている者は誰ひとりいない。

霊の世界への門が開かれると、あなたがたはすべての奥義を目にし、自由な領域に完全に入ることができるようになり、わたしの愛の抱擁の中に入り、わたしの永遠の祝福の中に入ることができるようになる。わたしの手は人類を常に支えてきた。しかし、わたしが救う部分に含まれる人々と、救わない部分に含まれる人々がいる。（わたしが「支えてきた」と言うのは、もしわたしが全世界を支えなかったら、それはずっと昔にハデスの中に落ちていたはずだからである。）これをはっきりと見なさい。これはわたしの経営計画である。そして、わたしの経営計画とは何であるのか。わたしは人類を創造したが、決して一人残さず獲得するのではなく、ごく一部の人類を獲得することを計画したのである。それでは、何のためにわたしは多くの人間を造ったのか。わたしが以前言ったように、わたしにおいては、すべてが自由で解き放たれており、わたしは自分が望むとおりに行うのである。わたしが人類を創造したとき、ただそれは彼らが正常な生活を送ることができ、そこからわたしの長子、わたしの子ら、わたしの民であるごく一部の人類が生まれてくるためであった。すべての人々、物事、および対象は——わたしの長子、わたしの民、そしてわたしの子らを除いて——皆効力者であり、すべて滅びなければならないと言えるだろう。このようにしてわたしの経営計画全体が完結するのである。これがわたしの経営計画であり、それはわたしの働きであり、わたしの進行段階である。すべてのことが終わるとき、わたしは完全に安息に入る。その時には、あらゆるものが良くなり、すべてが平和で安全になるであろう。

わたしの働きのペースは非常に速いので、誰にも想像できない。それは日ごとに変わるので、追いつけない者は誰でも損失をこうむるだろう。人はただ日々新しい光にすごることしかできない（しかしわたしの行政命令、わたしが語ったビジョンと真理は決して変わらない）。なぜわたしは毎日語るのか。どうしてわたしは絶えずあなたに啓示を与えるのか。あなたはそこにある真の意味を理解しているのか。ほとんどの人たちは、まだ笑ったり冗談を言ったりしていて、真剣になることができない。彼らはまったくわたしの言葉に注意を払わず、それを聞くときは、しばらく不安を感じるだけである。その後、わたしの言葉はすぐに忘れられ、彼らはすぐに自分の身分を忘れて不注意にな

る。あなたは自分の地位が何であるか知っているか。誰かがわたしのために奉仕をするか、あるいは、わたしによって予め定められ選ばれているかは、わたしの手によってのみ管理され、誰にもこれを変えることはできない——わたしはこれを自分自身で行い、それらの人々を自分自身で選び、予め定めなければならない。わたしが知恵のない神であるなどと言う者は誰か。わたしが言う一つひとつの言葉とわたしが行うすべてのことは、わたしの知恵である。再びわたしの経営を妨げたり、わたしの計画を壊したりしようとする者は誰か。わたしは決してそのような者を赦さない。時間はわたしの手の中にあり、わたしは遅れることを恐れない。わたしの経営計画が終わる時を決めるのは、わたしではないのか。それはただわたしの思いひとつにかかっているではないか。完了したとわたしが言え、それは完了し、終わるとわたしが言え、それは終わるのだ。わたしは慌てることはなく、適切な処置を取るであろう。人間はわたしの働きに鼻を突っ込んでではなく、彼らはわたしのために自分勝手に物事をしてはならない。わたしは誰であれ鼻を突っ込む者を呪う——これはわたしの行政命令の一つである。わたし自身がわたしの働きを為すので、わたしは誰も必要としない（わたしはそれらの効力者たちが行動することを許す。そうでなければ、彼らはあえて早急または盲目的に行動することはないだろう）。すべての働きはわたしによって定められ、わたしによって決定される。何故なら、わたしは唯一の神自身だからである。

世界のすべての国々は、権力と利益をめぐってお互いに争い、領土をめぐって戦うが、驚いてはならない。これらのことは、すべてわたしへの奉仕なのだから。それでは、わたしは何故それらがわたしへの奉仕であると言うのか。わたしは指一本上げることなく物事を行う。サタンを裁くために、わたしはまず彼らが自分たちの間で論争するように仕向け、最終的には彼らに滅びをもたらし、彼らを自らの狡猾な策略に陥らせる（彼らは権力をめぐってわたしと争おうとするが、終りにはわたしに奉仕することになる）。わたしはただ語り、わたしの命令を下し、誰もがわたしの命じることを行わなければならない。さもなければ、わたしは直ちにあなたを滅ぼす。これらのことはすべてわたしの裁きの一部である。というのは、わたしはすべてのことを命じ、すべてのことがわたしによって定められているからである。何かをする者は、わたしの定めによって、無意識のうちにそうするのである。そして、わたしはあなたがたが、もうすぐ降りかかろうとしている出来事の中で、わたしの知恵に満たされることを願っている。何かが降りかかるときは、向こう見ずな取り組み方をするのではなく、より頻繁にわたしに近づきなさい。わたしの刑罰を侵害しないように、またサタンの狡猾な策略の餌食にならないよ

うに、あらゆる点でより注意深く、思慮深くありなさい。あなたがたはわたしの言葉から識見を得、わたしの存在そのものを知り、わたしが持っているものを見るべきである。あなたがたはわたしの顔色をうかがって物事をしなければならず、向こう見ずに行動してはならない。わたしがすることをして、わたしが言うことを言いなさい。あなたがたが過ちを犯すことを避け、誘惑されることを避けるために、わたしは事前にこれらの事をあなたがたに言うておく。それでは、わたしの存在そのもの、わたしがもっているものとは何であるのか。あなたがたは本当に知っているか。わたしが受ける苦痛は、わたしの普通の人性の一部であるように、わたしの存在そのものの一部でもある。そして、わたしの存在そのものは、わたしの完全なる神性の中に見ることができる——あなたがたはこのことを知っているか。わたしの存在そのものは二つの側面から成り立っている。ひとつはわたしの人性であり、もう一つはわたしの完全なる神性である。これら二つの側面が組み合わさったものだけが、完全なる神自身を成すのだ。わたしの完全なる神性にもまた多くのものが含まれている。わたしは、どんな人間や物事の拘束も受けない。わたしはすべての環境を超越している。わたしは時間や空間、地理の制限を超えている。まことにわたしは、わたしの手の甲のように、すべての人々、事柄、物を知っている。しかし、それでもわたしは触れることのできる形を持った肉と骨である。人の目にはわたしはまだこの人間であるが、性質は変わっている——もう肉ではなく体である。これらのことはそのほんの一部である。すべてのわたしの長子たちもまた将来このようになるだろう。これは歩んで行かなければならない道であり、運命が定められた者はそれから逃れることはできないのだ。わたしがこのことを為している間、予め定められていない者は皆（これは、わたしの言葉が正確かどうかを見るために、サタンがわたしを試しているのだから）、一人残らず追い出されるだろう。予め定められている者たちはどこへ行っても、それから逃れられず、あなたがたはそれによってわたしの業の背後にある原則を見出だすだろう。わたしが持っているものとは、わたしの知恵、わたしの見識、わたしの深慮、そしてわたしが語る一つひとつの言葉を指している。わたしの人性とわたしの神性の両方がそれを所有している。つまり、わたしの人性によって為されたことと、わたしの神性によって為されたことのすべてが、わたしが持っているものである。誰ひとりこれらのものを取り上げることも、取り除くこともできない。それらは、わたしが所有するものであり、誰もそれらを変えることはできない。これがわたしの最も厳しい行政命令である（何故なら人間の観念の中では、わたしが為すことの多くは彼らの観念に合致せず、人間には理解できないものであるからだ。これは全ての人間が最も侵害し易い命令であり、それはまた最も厳しい命令なので、彼らのいのちはそ

の点で損害をこうむるのである）。わたしはもう一度言おう。わたしがあなたがたに行うよう勧めることに対して、あなたがたは慎重に対処しなければならない——あなたがたは不注意であってはならない。

第九十六章

わたしはわたしから生まれていながらまだわたしを知らないすべての者を罰し、わたしのすべての怒りと大いなる力、そして完全なる知恵を示そう。わたしの中ではすべてが義であり、不義、欺瞞、不正はまったく存在しない。不正で不正直な者はみな、冥府で生まれた地獄の子に違いない。わたしの中ではすべてが明白である。わたしが達成されるということはすべて達成され、確立されるということは確立され、それを変えたり真似たりできる者はいない。わたしが唯一の神自身だからだ。これから起こることの中では、わたしが予め定めて選び出した長子の一群に含まれるすべての者が一人ずつ露わにされ、長子の一群に含まれない者はみな、それを通してわたしが取り除く。わたしの働きはそのように行われ成し遂げられる。今はただ一部の人々だけを暴き、長子たちがわたしのすばらしい業を見られるようにするが、後になればもうそのように働くことはない。彼らにその真の本性を一つずつ示させるかわりに、全体的な状況から進めていくことにする（悪魔は基本的にみな同じなので、例として少数を取り上げれば十分だからだ）。長子たちはみな心の中が明瞭になっているので、わたしが詳しく説明する必要はない（彼らは定められた時に必ず一人一人暴かれるからだ）。

約束を守ることはわたしの性質であり、わたしの中では何一つ隠されも覆われもしていない。あなたがたが理解すべきことについては何もかもすべて教えるが、知るべきでないことは何一つ教えない。そうでないと、あなたがたは堅く立てなくなってしまうからだ。些細なことにこだわって、重要なものを失ってはならない。そんなことをする価値はまったくない。わたしが全能の神であることを信じなさい、そうすればすべてが成し遂げられ、すべてが楽で心地よくなる。これがわたしのやり方である。信じる者には見せ、信じない者には知らせず決して理解もさせない。わたしの中に感情や憐れみはなく、わたしの刑罰に背く者は誰でも、手を止めることなく確実に殺し、すべての者を同じように扱う。わたしは誰に対しても同じである——わたしに個人的感情はなく、感情的に行動することは一切ないのだ。人がこのことからわたしの義と威厳を見ずにいられようか。これがわたしの知恵であり性質であり、誰もそれを変えることはできず、完全に知ることもできない。わたしの手はいついかなる時もすべてを指揮しており、常にわ

たしがあらゆることを計らい、思いのままにすべてのものに奉仕させる。無数の人々がわたしの経営（救いの）計画を完成させるため奉仕しているが、最終的に彼らは祝福を目にするものの、それを楽しむことはできない——何と哀れなことか。しかし、誰もわたしの心を変えることはできない。これがわたしの行政命令であり（行政命令というときは、誰にも変えられないものを意味するので、今後わたしが語るとき、わたしが何かを心に決めたなら、それは間違いなくわたしの行政命令である。覚えておきなさい。これに背いてはならない、さもないと損失を被ることになる）、またわたしの経営計画の一部でもある。それはわたし自身の働きであり、誰でもできることではない。わたしがこれを行い、計らわねばならないのだ。それはわたしの全能性を示し、わたしの怒りを明らかにするのに十分である。

ほとんどの人はまだわたしの人間性について知らず、はっきりと理解していない。そのことは何度か語ってきたが、あなたがたはまだよくわかっていない。しかしこれはわたしの働きであり、今この時点において知っている者は知っており、知らない者にわたしが強要することはない。そのようにしなければならないのだ。わたしはそれをはっきりと語っており、後でもう一度言うことはない（わたしはもう語りすぎており、しかも非常にはっきりと語っているからだ。わたしを知っている者は確かに聖霊の働きを得ており、疑いなくわたしの長子の一人である。わたしを知らない者は明らかに長子ではなく、それはわたしがすでにその人からわたしの霊を取り去ったことを証明している）。しかし最終的に、わたしはすべての者にわたし自身を知らしめ、人間性と神性の両方を完全に知らせる。これはわたしの働きの段階であり、わたしはこのように働かねばならないのだ。また、これはわたしの行政命令でもある。誰もがわたしを唯一の真の神と呼び、休むことなくわたしを讃美し、喜びをもって迎えなければならない。

わたしの経営計画はすでにすべて完了しており、すべてがずっと前に成し遂げられている。人間の目にはわたしの働きの多くがまだ進行中であるように見えるが、それらはすでに適切に計らわれており、後はただわたしの歩調に従って一つ一つが完成するだけだ（それはわたしが世界の創造以前に、誰が試練にしっかりと立ち向かえるか、誰が予め定められ選ばれることができないか、誰がわたしの苦しみを分かち合うことができないかを、予め定めたからである。わたしの苦しみを分かち合うことができる者たち、すなわち予め定められ選び出された者たちは、わたしが必ずや守り続け、あらゆることを超越できるようにする）。わたしの心の中では、誰がどの役割にあるかがはっきりしている。誰がわたしに奉仕し、誰が長子であり、誰がわたしの子らや民に含まれるかはよ

くわかっている。そのことについては完全に知り尽くしている。誰であれ、わたしが過去に長子だと言った者は今もなお長子であり、過去に長子でないと言った者は今もなお長子ではない。わたしは自分のしたことを後悔することはなく、簡単に変えることもない。わたしの言うことは文字通りの意味であり（わたしの中に不真面目なものは一切ない）、決して変わることがない。わたしに奉仕する者は常にわたしに奉仕するのだ。彼らはわたしの牛であり、わたしの馬である（しかしこの人々は決して霊が啓発されることはない。彼らは用いれば役に立つが、用いなければわたしは彼らを殺す。牛や馬と言うとき、それは霊が啓発されていない者、わたしを知らない者、そしてわたしに従わない者を意味しており、たとえ彼らが服従し従順で真面目で正直であっても、やはり本物の牛や馬なのだ）。現在、ほとんどの人はわたしの前で自堕落であり、拘束されず、奔放に話し笑い、不敬な振る舞いをしている。彼らはわたしの人間性だけを見ており、神性を見ていない。人間性においては、そうした行動を大目に見てなんとか赦すこともできるが、神性においてはそれはそれほど容易ではない。将来、わたしはあなたが冒涇の罪を犯したと断罪する。言い換えれば、わたしの人間性を侵害することはできるが、神性を侵害することはできないのだ。だから誰であれ、少しでもわたしに対立する者は、遅れることなくただちに裁かれる。あなたが何年もわたしという人間と交わり、親しくなったからといって、好き勝手に話したり行動したりできると思ってはならない。わたしはまったく気にしない。それが誰であれ、わたしはその人を義によって扱う。それがわたしの義である。

わたしの奥義は人々に日々明らかにされ、啓示の段階を経て日々明瞭になる。それはわたしの働きの歩調を示すのに十分だ。これがわたしの知恵である（わたしはそれを直接言うことはせず、ただ長子たちに啓示を与え、赤い大きな竜の子孫を盲目にする）。さらに今日、わたしの子を通して、あなたがたにわたしの奥義を露わにする。今日わたしはあなたがたに、人が想像もできないことを露わにし、十分に知らせ、はっきりと理解させる。さらにこの奥義は、わたしの長子以外のすべての者の中に存在しているが、誰もそれを理解することはできない。それは各人の中にあるが、誰もそれを認識できないのだ。わたしは何を言っているのだと思うか。この期間のわたしの働きと言葉の中では、しばしば赤い大きな竜、サタン、悪魔、そして大天使が言及される。それらは何なのか。それらの関係はどういったものなのか。それらは何によって現されるのか。赤い大きな竜の現れは、わたしへの抵抗、わたしの言葉の意味に対する理解力の欠如、わたしへの頻繁な迫害、そして策略を用いてわたしの経営を邪魔しようとするものである。

サタンの現れは、権力をめぐってわたしと闘い、わたしの選民を操ろうとし、否定的な言葉を発してわたしの民を欺くことだ。悪魔（わたしの名前を受け入れない者、信じない者はみな悪魔である）の現れは、肉の快楽を渴望し、邪惡な欲望に耽り、サタンの束縛の中で生きることであり、中にはわたしに抵抗する者もわたしを支持する者もいる（それでもわたしの愛する子らだとは証明されない）。大天使の現れは、横柄に話すこと、神を畏れないこと、しばしばわたしの口調を真似て人々に説教すること、外見的にわたしを真似ることばかり集中すること、わたしが食べるものを食べわたしが用いるものを用いることなどである。それは一言で言えば、わたしと同等になろうとすることであり、野心的ではあるがわたしの資質に欠けわたしのいのちも持っておらず、ごみ同然だということだ。サタン、悪魔、そして大天使はすべて赤い大きな竜の典型的な現れなので、わたしが予め定めて選び出していない者は、みな赤い大きな竜の子孫である。それは間違いないことなのだ。それらはすべてわたしの敵である。（しかし、サタンの妨害は除外される。もしあなたの本性がわたしの資質であれば、誰もそれを変えることはできない。あなたは今も肉の中で生きているので、時折サタンの誘惑に直面するだろう——それは避けられない——しかし常に気を付けていなければならない。）それゆえわたしは長子たちを除く、赤い大きな竜の子孫をみな捨て去る。彼らの本性は決して変わることがなく、それはサタンの性質なのだ。彼らが現すものは悪魔であり、彼らが生きるものは大天使である。これは間違いなく真実だ。わたしが言う赤い大きな竜とは、単なる一匹の大きな赤い竜ではない。それはわたしに敵対する悪霊であり、「赤い大きな竜」というのはその同義語なのだ。したがって聖霊以外のすべての霊は悪霊であり、また赤い大きな竜の子孫とも言えるのだ。このことはすべての者がこの上なく明確に理解していなければならない。

第九十七章

わたしは一人ひとりにわたしの奇しき業を見せ、わたしの知恵の言葉を聞かせる。それはひとり残さずすべての人間でなければならず、また、一つひとつの事柄に関していなければならない。これがわたしの行政命令であり、わたしの怒りである。わたしは一人ひとりの人間と、一つひとつの事柄に関わり、宇宙の端から端まですべての人々が自分の目で見ることができるようにする。さもなければ、わたしは決して止まらないであろう。わたしの怒りは全部注がれており、その片鱗さえ留められていない。それは、この名を受け入れるすべての人に向けられる（これは間もなく世界のすべての国に向けられる）。そして、わたしの怒りとは何であるか。それはどのくらい厳しいのか。わたし

の怒りはどういう人間に注がれるのか。ほとんどの人は怒りが最も度合の高い憤りだと思っているが、これはそれを完全に説明してはいない。わたしの怒りとわたしの行政命令は二つの切り離すことのできない部分である。わたしが行政命令を執行すると、そのすぐ後に怒りが続く。それでは、正確に言って怒りとは何であるのか。怒りとはわたしが人々に下す裁きの度合であり、わたしのどの行政命令の執行の背後にもある原則である。誰がわたしの命令の一つに違反しようと、どの命令が破られたかに応じて、わたしの怒りはそれ相応のものとなるだろう。怒りと共にわたしの行政命令は来て、わたしの行政命令と共に怒りが来る。わたしの行政命令と怒りとは、不可分な全体を形成するのだ。それは最も厳しい裁きであり、誰もそれに反することはできない。すべての人々がそれを守らなければならない。さもないと、わたしの手によって打ちのめされることを避けるのは難しいだろう。幾時代にも渡って、人々はそのことを知らなかった（ある人たちは大災害がもたらした苦痛を体験したが、それでもまだそのことを知ることはなかった。しかし、これは主に今、実施されつつある）。しかし、あなたがたが違反することがないように、わたしはそのすべてを今日明らかにしよう。

すべての人々がわたしの声を聞いて、わたしの言葉を信じるべきである。さもないければ、わたしは行動しないし、何の働きもしない。わたしの一つひとつの言葉と行動はすべて、あなたがたが従わなければならない模範である。それらはあなたがたの手本であり、あなたがたが従うべきひな型である。わたしが肉となった理由は、あなたがたが、わたしの人性の中に、わたしの存在そのものとわたしの持っているものを見るようになるためである。将来わたしは、わたしの神性の中にある、わたしの存在そのものとわたしの持っているものとをあなたがたに見せよう。物事はこのように段階的に進行しなければならない。さもないければ、人々は信じることができず、彼らがわたしを認識することはないだろう。代わりに、彼らはビジョンについて不明瞭で曖昧になるばかりで、わたしをはっきりと理解することができないだろう。わたしの言葉は、わたしの本質があなたがたに完全に現れたことを示している。ただ、人々は愚かで無知なので、彼らはわたしの言葉を聞いても、まだわたしを知らない。人々は未だにわたしの現在の受肉を否定するので、わたしは、わたしの怒りと行政命令を用いて、この邪悪でふしだらな古い時代を罰し、サタンと悪魔を完全に辱める。これが唯一の方法であり、それは人類の終着点であり、人類を待ちうけている終焉である。その結果は、誰にも変えたり、言い逃れしたりすることができない既定の結論である。最後の決定を下すのはわたしだけである。これがわたしの経営であり、わたしの計画である。人々は皆信じて、心で確信し

、言葉でそれを表現しなければならない。この世で幸福を得る者は確かに永遠に苦しみを受けるだろう。一方、この世で苦しむ者は必ず永遠に祝福されるだろう—これはわたしが予め定めたのであり、誰もそれを変えてはならない。誰もわたしの心を変えてはならない。また、わたしの言葉に一つの言葉も加えてはならず、勝手に言葉を取り除くことなどは、なおさら許されない。わたしは確かにすべての違反者を罰するであろう。

わたしの奥義は日々あなたがたに明らかにされている—あなたがたは本当にそれを理解しているか。それについて本当に確信を持っているか。サタンがあなたを欺いているとき、あなたはそれを見破ることができるか。これはあなたがたのいのちにおける背丈によって決まる。すべてのものはわたし自身によって予め定められているとわたしが言うなら、何故わたしは長子たちを完全にするために、受肉して人となったのか。さらに、何故わたしは人々が無意味だと思うような多くの働きをしたのか。混乱しているのはわたしなのか。このことを覚えておきなさい。わたしがするすべてのことは、長子たちを得るためだけではなく、より重要なことには、サタンを辱めるために為されるのである。サタンはわたしに背くが、わたしにはサタンの子孫をサタンに反抗させ、わたしを讃美するようにさせる力がある。さらに、わたしが行うすべてのことは、次の段階の働きが円滑に流れ、全世界が歓呼してわたしを讃美し、息のあるすべてのものがわたしの前にひざまずき、わたしに栄光を帰すようになるためである。その日こそまさに栄光の日になるであろう。わたしはすべてのものをわたしの手の中に持っており、七つの雷が轟くと、すべてのことは完全に達成され、決して変化することがなく、全てが固定される。その時点から、新しい天と地の新しいいのちに入ることが可能となり、まったく新しい状況に入り、神の国の生活が始まるであろう。しかし、神の国ではどのようなのか。人々はそれをはっきりと認識できない（なぜならこれまで誰も神の国の生活を味わったことがないからであり、それはただ人々の頭の中で想像され、彼らの心の中で思い巡らされてきたからである）。教会生活から神の国の生活に変わる際、すなわち現在の状態から未来の状態へと移行する際、人々が今までに想像もしなかった多くのことが、この時期に起こるだろう。教会生活は神の国の生活へ入ることの先駆けであり、神の国の生活が始まる前に、わたしは教会生活を促進する努力を惜しまないだろう。教会生活とは何であるのか。それは、わたしの長子を含め、すべての者がわたしの言葉を飲食し楽しみ、わたしを知り、そうして、わたしの行政命令とわたしの裁きとわたしの怒りを理解するために、わたしの焼き尽くす炎と清めを受け、その結果、神の国の生活の中で違反することを避けることができるようになることである。そして、神の国の生活と

は何であるか。神の国の生活とは、わたしの長子たちが、すべての国々とすべての人々を支配して、わたしと共に王として統治する所である（わたしの長子たちとわたしだけが神の国の生活を楽しむことができる）。すべての国々とすべての人々から来るわたしの子らとわたしの民は、神の国に入るが、彼らは神の国の生活を楽しむことはできない。霊の世界に入る者だけが、神の国の生活を楽しむことができるのだ。だから、わたしの長子たちとわたしだけが体の中で生きることができ、一方わたしの子らとわたしの民は肉の中で生き続ける。（しかし、これはサタンによって墮落させられた肉ではない。これが、わたしの長子たちがわたしと共に王として支配することの意義である。）その他のすべての人々は霊、魂、肉体を取り上げられ、ハデスに投げ込まれる。つまり、これらの人々は完全に滅び、存在しなくなる（それでも彼らは苦難や災害といったような、サタンのすべての束縛と残虐な行為を通らなければならない）。これが完了すると、神の国の生活が正式に軌道に乗り、わたしは正式にわたしの業を現し始めるであろう（公然と現され、隠されていない）。その時から、もう決して嘆きや涙はない。（というのは、人を傷つけたり、泣かせたり、苦しめたりすることが、もはや何もうなくなるからである。そして、これはわたしの子らとわたしの民にも言えることである。しかし、強調すべき点がひとつある。それは、わたしの子らとわたしの民は永遠に肉のままであるということである）。すべては陽気になり、喜びの光景となる。それは物理的なものではなく、肉眼では見ることはできないものである。わたしの長子である者たちもそれを楽しむことができる。これがわたしの奇しき業と力である。

わたしは、あなたがたがわたしの旨を追求し、どんな時にもわたしの心を配慮することができることを願う。はかない快樂はあなたの全人生を滅ぼし得るが、一時的な苦しみは永遠の祝福を迎え入れることができる。落ち込んではいならない。これは歩んで行かなければならない道である。わたしは以前しばしば言った。「心からわたしのために尽くす者よ、わたしは必ずあなたを大いに祝福する。」祝福とは何であるのか。それはただ今日得られるものではなく、それ以上に、将来楽しむべきものである—これのみが真の祝福である。あなたがたがシオンの山に戻ると、あなたがたは現在の苦しみ故に、尽きない感謝を表すだろう。これはわたしの祝福だからである。今、肉の中に生きていることがシオンの山に在ることであり（あなたがたの中に生きていることを意味する）、一方、明日、体の中に生きることは栄光の日となるだろう。そして、これはシオンの山の上では、なおさらそうなのである。わたしのこれらの言葉を聞いた後、あなたがたはシオンの山の意味を理解する。シオンの山とは神の国の同義語であり、それはまた

霊の世界でもある。今日のシオンの山では、あなたは肉の中にあり、慰めを受け、わたしの恵みを得ている。将来のシオンの山では、あなたは体の中にあり、王として支配する祝福を楽しむだろう。絶対にこれを無視してはならない。そして、祝福を得ることができる時を決して逃さないようにしなさい。結局のところ、今日は今日であり、それは明日とは非常に異なっている。あなたが祝福を楽しむようになると、今日の恵みは言うにも値しないとあなたは思うだろう。これが、わたしがあなたに委ねるものであり、わたしの最後の忠告である。

第九十八章

あらゆることがあなたがた一人ひとりの上に臨み、それらによってあなたがたはわたしについてもっと知り、より確信するだろう。それらによって、あなたがたは唯一の神自身であるわたしを知り、全能者であるわたしを知り、受肉した神自身であるわたしを知るだろう。その後、わたしは肉から出てシオンに戻り、わたしの住まい、わたしの目的地であるカナンの良い地に戻るだろう。それは、そこからわたしがすべてのものを創造した基礎である。あなたがたのうち誰もわたしが言っている言葉の意味を理解していない。これらの言葉の意味を理解できる人間は一人もいない。すべてがあなたがたに明らかにされたとき初めて、あなたがたはなぜわたしがこれらの言葉を言っているのか理解する。わたしは唯一の神自身であるので、わたしは世に属しておらず、宇宙にさえ属していない。宇宙世界全体はわたしの手の中にあり、わたし自身がそれを司っている。そして、人々はただわたしの権威に従い、わたしの聖なる名を口にし、わたしのために歓呼し、わたしを讃美するだけである。徐々にすべてのことがあなたがたに明らかにされるだろう。何も隠されてはいないが、あなたがたはまだわたしの話し方、またわたしの言葉の調子を理解できないだろう。わたしの経営（救いの）計画がいったい何であるかまだ分からないだろう。だから、わたしが言ったことで、あなたがたが理解していないことすべてについては、後であなたがたに教えよう。なぜなら、わたしにとってはすべてが単純明快であるが、あなたがたにとっては、それは極めて難しく、あなたがたはそれを全く理解しないからである。それゆえ、わたしは話す方法を変え、わたしが話すときは、物事を繋ぎ合わせることはせず、それぞれの点を明確にする。

死者の中からの復活とはいったいどういうことであるのか。それは肉において死んで、死後に体の中に戻るかどうか。これが死者の中からの復活と呼ばれているのだろうか。これはそれほど単純であるのか。わたしは全能なる神である。あなたはこれにつ

いて何を知っているのか。あなたはこれをどのように理解するのか。わたしの最初の受肉の間の死者の中からの復活は、本当に文字通りの意味に取ることができるだろうか。その過程は本当に文字で記載されている通りだったのだろうか。もしわたしが率直に話さず、明確に語らなかつたら、誰もわたしの言葉の意味を理解することはできないだろう、とわたしは言った。時代を通じて、死者の中からの復活がそのようであったと思わなかった者は一人もいない。世界の創造以来、誰もその真の意味を理解したことはない。わたしは本当に十字架に釘付けにされたのであろうか。そして死後、わたしは墓から出てきたのであろうか。本当にそのようであったのか。これは本当に真実であらうか。幾時代にも渡って、誰一人このことについて尽力したことがなく、誰もこのことからわたしを知ることはなく、それを信じていない者はひとりもおらず、誰もがこれを正しいと思っている。彼らは、わたしの一つひとつの言葉には秘められた意味があることを知らない。それでは、死者の中からの復活とは正確には何であるのか。（近い将来、あなたがたはこれを体験するので、それについて事前に言っておこう。）すべての造られたものは、死ぬよりもむしろ生きたいと思っている。わたしの観点から見れば、肉の死は本当の死ではない。わたしの霊が人から取り戻されると、その人は死ぬ。それゆえに、わたしはサタンによって墮落させられたすべての悪魔たち（信仰のない者、すべての未信者）を死者と呼ぶ。世界の創造以来、わたしは自分の霊を、わたしが選んだすべての者に与えてきた。しかし、創造に続く段階の後、人々はある期間、サタンによって占拠された。だからわたしは去り、人々は苦しみ始めた（言われているとおり、わたしが受肉し、十字架に釘付けにされたときに耐えた苦しみである）。しかし、わたしが予め定めていた時（わたしが人々を見捨てることが終わった時）には、わたしが予定した人々を取り戻し、わたしはもう一度あなたがたのうちにわたしの霊を宿らせ、あなたがたを生き返らせた。これを「死者の中からの復活」と言うのだ。今、本当にわたしの霊の中に生きている者たちは皆、すでに超越しており、彼らはみな体の中で生きている。しかし、間もなくあなたがたは皆、自分の考え方を棄て、自分の観念を棄て、この世のすべてのしがらみを振り捨てるだろう。しかし、それは、人々が想像するような、苦しみした後で死者の中から甦ることではない。あなたがたが今生きていることは、体の中に生きるための前提条件であり、それは霊の世界に入るために必要な道である。わたしが言う普通の人間性を超越することとは、家族も、妻も、子供も、何の人間的な必要もないことを意味する。それは、ただわたしの姿を生きること集中し、わたしの中に入ることに集中し、また、わたし以外のことは考えないようにすることである。あなたが行くところはどこでもあなたの家であるということ、これが普通の人間性を超越するというこ

とである。あなたがたはそれらのわたしの言葉を全く誤解している。あなたがたの理解はあまりにも浅過ぎる。正確に言って、わたしはすべての国々とすべての人々に、どのように現れるのか。今日の肉としてか。違う。その時が来ると、わたしは宇宙のすべての国々でわたしの体として現れるだろう。外国人があなたがたの牧養を必要とする時はまだ到来していない。その時になると、あなたがたは肉から出て、彼らを牧養するために体の中に入ることが必要となるだろう。これは真実であるが、人々が想像している「死者の中からの復活」ではない。定められた時に、あなたがたは知らないうちに肉から出て、霊の世界に入り、すべての国々をわたしと共に支配する。今はまだその時ではない。わたしがあなたがたに肉の中にいることを望むときは、あなたがたは肉の中に留まるのだ（わたしの働きの必要に応じて、あなたがたは今考えなければならない。あなたがたはまだ肉の中で生きなければならない。そして、わたしの段階にしたがって、肉の中で行う必要があることをまだ為すべきである。消極的待っていてはならない。それは物事を遅らせることになるからだ）。あなたがたが教会の牧者として体の中で行動することをわたしが必要とするとき、あなたは肉から出て、あなたの考え方を棄て、完全にわたしに抛り頼んで生きるであろう。わたしの力を信じ、わたしの知恵を信じなさい。すべてのことはわたしによって直接為される。あなたがたはただ楽しみにして待っていればよいのだ。すべての祝福があなたがたのところに來るだろう。そして、あなたがたは尽きることなく、どこまでも与えられるだろう。その日が来ると、あなたがたはわたしが何を原則としてこれを行うかを理解するだろう。あなたがたはわたしの素晴らしい業を知り、わたしがどのようにして長子たちをシオンに帰らせるかを理解するだろう。これは本当にあなたがたが想像するほど複雑ではないが、また、あなたがたが思うほど単純でもない。

わたしがこのように話すと、あなたがたはなおさらその背後にあるわたしの目的を把握することができず、さらに混乱することをわたしは知っている。あなたがたはそれをわたしが前に言ったことと混同し、その結果、何も理解することができなくなり、そこが行き止まりのように見えるだろう。しかし、心配することはない。わたしはあなたがたにすべてを教えよう。わたしが言うことにはすべて意味がある。わたしは存在するものを無に帰することができ、無から多様なものを作り出すことができる、とわたしは言った。人間の想像では、肉から体に入るには、人は死者の中から復活しなければならない。過去にわたしはこの方法を使い、わたしの最も大いなる奇跡を現したが、今日は過去のようにではない。わたしは直接あなたがたを肉から体へと連れて行く。これはさらに

大いなるしるしと奇跡ではないのか。これはわたしの全能のさらに大きな現れではないのか。わたしにはわたしの計画があり、わたしの意図がある。わたしの手中にない者がいるだろうか。わたしは働き、わたしは知っている。今日のわたしの働く方法は、結局、過去のものとは異なっている。わたしは時代の変化に応じてわたしの働く方法を調整する。わたしが十字架に釘付けにされた時、それは恵みの時代であったが、今は最後の時代である。わたしの働きのペースは加速している。それは過去と同じスピードではなく、過去よりも遅いことなどはなく、むしろ過去よりもはるかに速いのである。ただ、それを言い表す方法はない。多くの複雑な過程はまったく必要ない。わたしは自由に何でもすることができる。どのようにわたしの旨が成就されるのか、また、どのようにあなたがたを完全にするのかを決定するためには、わたしの権威の一言だけで十分であるということは、本当ではないか。わたしの言うすべてのことは必ず行われる。わたしは過去にしばしば、わたしは苦しむであろうと言った。そして、わたしは、わたしが以前耐えた苦しみについて、人々が話すのを許さなかった。そのことについて話すことは、わたしへの冒涇であった。それは、わたしが神自身であり、わたしにとっては、苦難はないからである。あなたがこの苦しみに言及すると、それは人々を泣かせるのである。わたしは、将来には何の嘆きも涙もないと言った。それは、この側面から説明されるべきであり、それによって、わたしの言葉の意味を理解することができる。「人間はどうしてもこの苦しみに耐えられない」という言葉の意味は、わたしは人間のすべての観念や考え方から脱することができ、肉の感情から脱し、世俗的である一切の痕跡から脱し、肉と決別することができ、そして、誰もがわたしに反論しているときでさえ、立ち続けることができるということである。これはわたしが唯一の神自身であることを証明するに十分である。わたしは言った。「すべての長子は、肉から霊の世界へ入らなければならない。これは、王としてわたしと共に支配するために歩まなければならない道である。」この文の意味は、あなたが過去に想像したことに遭遇するとき、あなたがたは正式に肉から出て体に入り、正式にその諸侯と王たちを裁き始めるということである。彼らはこの時に起こることに基づいて裁かれるだろう。しかし、それはあなたがたが想像するほど複雑ではなく、一瞬の内に行われるだろう。あなたがたは死から甦る必要はなく、苦しむ必要さえないだろう（なぜなら、地上でのあなたがたの苦しみや困難はすでに終わっており、わたしは、その後はもはやわたしの長子たちを取り扱うことはないだろうと既に言ったからである）。言われてきたように、あなたがたが知らないうちに霊の世界に入るという事実において、長子らは自分の祝福を享受する。なぜわたしは、これがわたしの憐みと恵みであると言うのだろうか。もし人が、死者の中から甦った後に

しか霊の世界に入れないなら、それは憐みと恵み豊かというものからは程遠いであろう。だから、これはわたしの憐みと恵みの最も明らかな表現であり、それはさらに、人々へのわたしの予定と選びを現している。わたしの行政命令がどれほど厳格であるかを示すだけで十分である。わたしは、わたしが望む者には、誰にでも恵み深く、誰にでも憐み深いであろう。誰も競ったり争ったりしてはならない。わたしはこのすべてを決定するであろう。

人々はそれを理解することができず、彼らは呼吸ができなくなるまで自分自身に圧力をかけるが、それでも依然として自分自身を束縛する。人々の思考は本当に限られているので、人間の思考や観念を取り除かなければならない。それゆえ、わたしはすべてを支配し、すべてを管理するために、肉から出て霊の世界に入らなければならない。これがすべての人々とすべての国々を支配し、わたしの旨を成就する唯一の方法である。それはもう遠くない。あなたがたはわたしの全能に対する信仰を持っておらず、わたしという人間を知らない。あなたは、わたしがただの人間だと思い、わたしの神性を全く見ることができない。物事は、いつでもわたしが完成を望むときに、完成される。必要なのは、わたしの口から出る言葉だけである。あなたがたは、わたしが最近言ったことの中のわたしの人性の側面とわたしの一つひとつの行動に注意を払っただけであるが、わたしの神性の側面には注意を払ったことがない。つまり、あなたがたは、わたしも思考や観念を持っていると思っている。しかし、わたしはすでに、わたしの思い、考え、心、わたしの一つひとつの動き、わたしがしていること、わたしが言っていることのすべては神自身の完全な現れであると言った。あなたがたはこれらすべてを忘れたのか。あなたがたはみな混乱した人たちである。あなたがたはわたしの言葉の意味を理解していない。わたしは、わたしが言ったことから、わたしの普通の人性の側面をあなたがたに見せたが（わたしは、わたしの日常生活、また現実の中で、わたしの普通の人性をあなたがたに見せた。それは、あなたがたがまだ、わたしがこの期間に言ったことから、わたしの普通の人性の側面を理解していないからである）、それでもなお、あなたがたはわたしの普通の人性を理解しない。そして、ただわたしの不利になるようなことを何か探し出そうとし、わたしの前でほしいままにふるまっている。あなたがたは盲目である。あなたがたは無知である。あなたがたはわたしを知らない。わたしがこんなにも長い間話してきたのは無駄であった。あなたがたはわたしを全く知らない。あなたがたは、どうしてもわたしの普通の人間性を完全なる神自身の一部分と見なさない。どうしてわたしは怒らずにおられようか。どうしてわたしは再び憐み深くすることができようか。

これらの不服従の子らには、わたしの怒りでしか対応できない。あなたは何とずうずうしく、何とわたしをしらないことか。あなたはわたしという人間が間違っただけをしたと思っている。わたしが間違えることなどあろうか。わたしがいい加減にどんな肉でも選んで取るであろうか。わたしの人性とわたしの神性は完全な神自身を構成する切り離すことのできない二つの部分である。今あなたがたはこれについて完全明瞭に理解すべきである。わたしはすでに、言うべきことはすべて言った。もうこれ以上は説明しない。

第九十九章

わたしの働きのペースは加速しているので、誰もわたしの歩みに追いつくことができず、わたしの心を見通すことはできないが、これが進むべき唯一の道である。これは、すでに述べられた「死からの復活」という語句における「死」である（それは、わたしの旨を把握することができず、わたしの言葉からわたしが意味することを理解することができないことを意味する。これは「死」のもう一つ別の説明であって、「わたしの霊によって見捨てられる」ことを意味するのではない）。あなたがたとわたしがこの状態から体に移行するとき、死者の中から復活するということの本来の意味が成就するだろう（つまり、これが死者の中からの復活の本来の意味である）。さて、あなたがたの状態は次のようである。あなたがたはわたしの旨を把握することができず、わたしの足跡を見つけることができない。さらに、あなたがたは、自分の霊の中で静まることができないので、心に不安を感じている。このような状態はまさに、わたしが言及した「苦しみ」であり、人々が耐えられないこの苦しみの中、あなたがたは一方で自分の将来のことを考え、もう一方では、あらゆる方向から放たれて自分たちを撃っている、わたしの燃え尽くす炎と裁きを受け入れている。それに加えて、あなたがたは、わたしが話す調子や話し方では、何の規則も理解することができず、また一日の言葉の中には、いくつかの種類の口調があるので、あなたがたは非情に苦しんでいる。これらはわたしの働きの段階である。これはわたしの知恵である。将来、あなたがたはこの点においてより大きな苦みを体験するだろう。そのすべては、偽善的な人々をみな露わにするためのものである—今これを明瞭にすべきである。わたしはこのように働くのである。このような苦しみに励まされ、死に等しいこの苦痛を経験した後、あなたがたは別の領域に入る。あなたは体に入り、わたしと共にすべての国々とすべての人々を治めるだろう。

何故わたしは最近、より厳しい口調で話しているのだろうか。何故わたしの口調は頻

繁に変わり、わたしの働きの方法も頻繁に変わったのか。これらのことの中には、わたしの知恵があるのだ。わたしの言葉は、（わたしの言葉が成就されると信じているかどうかにかかわらず）この名を受け入れたすべての者のために語られる。だから、誰もがわたしの言葉を聞き、見るべきであり、それらの言葉は抑圧されるべきではない。わたしにはわたしの働き方があり、わたしには知恵があるからだ。わたしは、わたしの言葉を使って人々を裁き、人々を露わにし、人間の本性を暴露する。そうして、わたしは選択しておいた者たちを選び出し、それによって、わたしが予定、または選択していない者たちを排除する。これはすべてわたしの知恵であり、わたしの働きの不思議である。これはまさに、わたしの働きのこの段階における方法である。人々の間で、わたしの旨を把握できる者が誰かいるだろうか。人々の中には、わたしの重荷を考慮できる者が誰かいるだろうか。働きを為している者はわたし、つまり神自身である。あなたがたがこれらのわたしの言葉の意義を完全に理解する日が来るだろう。そして、あなたがたは、わたしが何故これらの言葉を話そうとするのかを、完全に明確に理解するだろう。わたしの知恵は終りがなく、無限で、計り知れないものであり、人間には絶対に見通すことができない。彼らは、わたしがすることからその一部だけを見ることができるが、彼らに見えるものはまだ欠陥があり、まだ不完全である。あなたがたがこの段階から次の段階に完全に移行したら、それをはっきりと見ることができるだろう。覚えておきなさい。今は最も大切な時代である―それはあなたがたが肉の中いる最後の段階である。現時点のあなたがたの生活は、あなたがたの肉体における生活の最後である。あなたがたが肉から霊の世界に入ると、その時すべての苦痛はあなたがたを離れる。あなたがたは大いに喜び、歓喜し、止むことなく喜びながら跳び上がるだろう。しかし、あなたがたは、わたしが話すこれらの言葉は、長子たちだけに向けられたものであることをはっきりと知っておくべきである。何故なら、この祝福に値するのは長子だけであるからだ。霊の世界へ入ることは、最大の祝福、最高の祝福、そして最も価値のある楽しみである。今あなたがたが得ている食べ物、着る物は、肉の快楽に過ぎず、またそれは恵みであり、わたしはそれを全く考慮しない。わたしの働きの焦点は、次の段階（霊の世界に入り、宇宙世界に向かうこと）に絞られている。

赤い大きな竜がすでにわたしによって投げ倒され、打ち碎かれた、とわたしは言った。どうしてあなたがたはわたしの言葉が信じられないのか。何故あなたがたは、今なお、わたしのために迫害と逆境に耐えることを望むのか。これは払う必要のない代価ではないのか。わたし自らが働いている間、あなたがたはただ楽しむだけでよい、とわたし

は何度もあなたがたに思い出させたではないか。何故あなたがたは行動を起こそうと、そんなに躍起になっているのか。本当にあなたがたは楽しみ方を知らない。わたしはあなたがたのためにすべてのことを完全に準備した。何故あなたがたは誰もわたしのところに来てそれを取らないのか。あなたがたはわたしが言ったことについて、まだはっきりと分かっていない。あなたがたはわたしを理解していない。あなたがたは、わたしが中身の無い社交辞令を言っていると思い、本当に混乱している。（わたしが言っている完全な準備とは、わたし自らが働いて、わたしに反抗するすべての者を呪い、あなたがたを迫害するすべての者を罰する間、あなたがたがわたしのことをもっと見上げて、わたしの前でもっと祈るべきであることを意味する。）あなたがたはわたしの言葉について何も分かっていない。わたしは、あなたがたにわたしのすべての奥義を明らかにしているが、あなたがたのうちの何人が本当にそれらを理解しているだろうか。あなたがたのうちの何人がそれを深く理解しているか。わたしの玉座とは何であるのか。わたしの鉄の鞭とは何であるか。あなたがたの中の誰が知っているだろうか。わたしの玉座が言及されるとき、ほとんどの人たちは、それはわたしが座っている場所であると思うか、それがわたしの住んでいる場所、あるいはわたし自身、わたしという人間を指していると思う。これらはすべて間違った理解である―彼らはまったく無茶苦茶に混乱している。正しい者は一人もいないではないか。あなたがたは皆このようにしか理解せず、把握しない―これは単に、この上なく偏った理解である。権威とは何であるのか。権威と玉座との関係は何であるか。玉座とはわたしの権威である。わたしの長子たちがわたしの玉座を高く掲げる時、それはわたしの長子たちがわたしから権威を受ける時である。わたしだけに権威があるので、わたしだけが玉座を持っているのだ。言い換えれば、わたしと同じような苦しみを受けた後、わたしの長子たちはわたしの存在そのものとわたしの持っているものを受け入れ、わたしからすべてを受け取る。そしてこれが、彼らが長子の地位を得る過程である。それは、わたしの長子たちがわたしの玉座を高く掲げる時となり、また、彼らがわたしから権威を受け入れる時となるであろう。今あなたがたはこれを理解すべきである。わたしが言うすべてのことは、はっきりしており、曖昧さが全くないので、誰もが理解できる。自分の観念を脇に置き、わたしがあなたがたに現す奥義を待って受け入れなさい。それでは、鉄の鞭とは何であるのか。それは、前の段階では、わたしの厳しい言葉を意味したが、今は過去とは異なる。今、鉄の鞭とは、権威を担う大きな災害であるわたしの業を指している。だから鉄の鞭に言及するとき、それは権威と繋がっている。鉄の鞭の本来の意味は大きな災害を指している―それは権威の一部である。誰もがこれをはっきりと見なければならぬ。そして、このようにしての

み、彼らはわたしの旨を把握し、わたしの言葉から啓示を受けることができるのだ。誰であれ聖霊の働きを持っている者は、その手に鉄の鞭を持っており、その人こそ権威を持ち、どの大きな災害でも引き起こす権利を持つのである。これはわたしの行政命令の一項目である。

すべてがあなたがたには開かれており（これはすでに明確に指摘された部分を指している）、すべてがあなたがたから隠されている（これはわたしの言葉の秘められた部分を指している）。わたしは知恵によって語る。わたしは、あなたがたにわたしの言葉のいくつかの文字通りの意味だけを理解させる一方、他の言葉の意味も理解させる（しかし、ほとんどの人たちは理解できない）。何故なら、これはわたしの働きの順序だからである。わたしは、あなたがたがある霊的背丈に達したときにのみ、わたしの言葉の本当の意味をあなたがたに伝えることができる。これがわたしの知恵であり、これらはわたしの不思議な業である（それはあなたがたを完全にするため、また、サタンを徹底的に打ち負かして、悪魔を辱めるためである）。あなたがたは、別の領域に入るまでは、完全に理解できるようにはならないだろう。わたしはそれを、このように行わなければならない。何故なら、人間の観念では、人々が簡単には解明できない多くのことからであり、たとえわたしが明確に話しても、あなたがたは依然として理解しないだろう。結局のところ、人々の頭脳は限られており、あなたがたが霊の世界に入った後にしか、わたしがあなたがたに伝えることができないことがたくさんあるのだ。さもないければ、人間の肉はその働きには向いておらず、これはわたしの経営に干渉することしかできない。これが、わたしの言う「わたしの働きの順序」の真の意味である。あなたの観念で、あなたはどれくらいわたしを理解しているのか。あなたの理解は完璧であるのか。それはあなたが霊において持つ認識か。したがって、あなたがたがわたしの働きを完了し、わたしの旨を行うようになるためには、わたしはあなたがたを別の領域に移行させなければならない。では、この別の領域とはいったい何であるのか。それは本当に人々が考えるような、一種の超越的な光景であるのか。それは本当に見ることも、感じることもできないが、存在する空気のようなものであるのか。わたしが言ったように、身体の中にいる状態とは、肉と骨、姿と形をもつ状態である—それは実体のあるものである。これは絶対に真実であり、疑う余地がなく、誰もが信じなければならない。これが体の中の真の状態である。さらに、体の中には人々が憎む物はない。しかし、この状態は正確に言うと、どのようなものであるか。人々が肉体から体に移るとき、大きな一群が現れなければならない。すなわち、彼らは肉の家を後にするのである。そして、それ

それぞれが自分の種類に従うだろうとすることができる。肉は肉と共に集まり、体は体と共に集まる。今や自分の家、両親、妻、夫、息子、そして娘から決別する者たちは、霊の世界に入り始める。最終的に、それはこうである。長子たちが共に集まり、歌って踊り、わたしの聖なる名を賛美し、歓呼しているのが、霊の世界の状態である。そして、これは美しく、常に新しい光景である。すべての者はわたしの愛する子らであり、永遠に絶え間なくわたしを賛美し、永遠にわたしの聖なる名を高く掲げるのだ。これが霊の世界へ入った後の状態であり、これはまた、霊の世界に入った後の働きであり、わたしが言った状態でもあり、霊の世界で教会を牧会する状態である。さらにそれは、わたしの本質が宇宙のあらゆる国と、すべての国々と人々の間で、わたしの権威、怒り、わたしの裁きを帯びて現れ、さらには鉄の鞭を振るってすべての国々とすべての民を支配することである。このことは、すべての人々と全宇宙の中で、わたしへの証しをする。それは、天と地を震わせ、山々と川と湖と地の果てにいるすべての民とすべてのものにわたしを賛美させ、わたしに栄光を帰すようにさせ、また、万物の創造主であり、すべてを導き、すべてを管理し、すべてを裁き、すべてを成し遂げ、すべてを罰し、すべてを破壊する唯一の神自身であるわたしを知らしめる。つまりこれこそが、わたしの本質の現れなのである。

第百章

わたしは自分が予め定めて選び出さなかったすべての者を忌み嫌う。それゆえ、これらの者はわたしの家から一人ずつ追い出さなければならない。そうすればわたしの神殿は聖く穢れのないものとなり、わたしの家は常に新たになって決して古くならず、わたしの聖なる名は永遠に広まることができ、聖なる民はわたしの愛する者となれるだろう。そのような光景、そのような家、そのような神の国が、わたしの目標でありわたしの住まいであり、わたしの万物創造の基盤なのだ。誰一人それを揺るがすことも変えることもできない。そこにはわたし自身とわたしの愛する子らだけが共に住み、誰もそれを踏みにじることは許されず、何物もそれを占拠することは許されず、何の不愉快な出来事も起こることは許されない。すべては讃美と歓呼になり、すべてが人間の想像を絶する光景となる。わたしが望むのはただ、あなたがたが心と思いを尽くし、能力の限りを尽くして、すべての力をわたしに捧げることだ。今日であろうと明日であろうと、あなたがたがわたしに奉仕する者であろうと祝福を受ける者であろうと、皆わたしの国のために一定の力を尽くさねばならない。これは創造されたすべての人が担うべき義務であり、このように行われ実行されねばならない。わたしはあらゆるものを動員して奉仕さ

せ、わたしの国の美しさを常に新たにし、わたしの家を調和させ統一する。誰もわたしに逆らうことは許されず、逆らう者は必ず裁きを受けて呪われることになる。今、わたしの呪いはすべての国とすべての民族の上に降りかかり始めており、わたしの呪いは裁きよりもさらに厳しい。今はすべての人々を罪に定め始める時なので、これは呪いだと言われている。それは今が最後の時代であり、創造の時ではないからだ。時代が変わったため、今やわたしの働きの速度は非常に異なっている。またわたしの働きの必要性に応じて、必要とされる人々も異なっている。捨て去られるべき人々は捨て去られ、切り離されるべき人々は切り離され、殺されるべき人々は殺されることになり、そして残されるべき人々は残されねばならない。これは人間の意志とは無関係な避けがたい流れであり、誰もそれを変えることはできない。わたしの旨に従って行われなければならないのだ。わたしはわたしが見捨てようと思う者を見捨て、排除しようと思う者を排除する。誰も勝手に行動してはならない。わたしは残したい者を残し、愛したい者を愛する。このことはわたしの旨に従って行われなければならないのだ。わたしは感情によって行動しない。わたしには義、裁き、怒りしかなく、感情は一切ない。わたしには人間のかすかな痕跡もない。わたしは神自身であり、神の本体だからだ。なぜなら人々は皆わたしの人間性の側面を見ており、神性の側面を見ていないからだ。彼らは実に盲目で混乱している。

あなたがたはわたしが言うことを心に留め、わたしの言葉を通してわたしの心を理解し、わたしの重荷に配慮しなければならない。そうすれば、あなたがたはわたしの全能性を知るようになり、わたしの本体を見るようになるだろう。わたしの言葉は知恵の言葉であり、誰もわたしの言葉の背後にある原則や法則を理解することはできないからだ。人々はわたしが詐欺や不正を行なっていると思っており、わたしの言葉を通してわたしを知っておらず、逆にわたしを冒瀆している。彼らはまったく盲目で無知で、わずかな識別力もない。わたしが語るすべての文は権威と裁きを備えており、誰もわたしの言葉を変えることはできない。わたしの言葉が発せられると、物事は間違いなくその言葉に従って成し遂げられる。それがわたしの性質である。わたしの言葉は権威であり、それを改変する者は誰であれわたしの刑罰に背いているため、打ち倒さなければならない。深刻な場合、彼らは自分自身のいのちに破滅をもたらし、冥府か底なしの穴に落ちることになる。これはわたしが人類を取り扱う唯一の方法であり、人間にそれを変える術はない――これがわたしの行政命令である。このことを憶えておきなさい。誰もわたしの行政命令に違反してはならず、物事はわたしの旨に従って行われなければならないの

だ。これまでわたしはあなたがたに甘くし過ぎて、あなたがたはわたしの言葉だけに直面してきた。わたしが人々を打ちのめすことについて語った言葉は、まだ実現していない。しかし今日からはあらゆる災害（わたしの行政命令に関連する災害）が、わたしの旨に従わないすべての者たちを罰するため、次から次へと降りかかるだろう。事実の到来がなければならない、そうでないと人々はわたしの怒りを見ることができず、繰り返し放蕩に耽るだろう。これはわたしの経営（救いの）計画の一段階であり、わたしが次の段階の働きを行うやり方である。このことをあらかじめ伝えておくのは、あなたがたが過ちを犯して永遠の地獄に落ちることを避けられるようにするためだ。すなわちわたしは今日から、わたしの長子を除くすべての人々を、わたしの旨に従って適切な場所に就かせ、一人ずつ罰する。誰一人として見逃しはしない。もう一度放蕩に耽ろうとしてみるがよい。もう一度反抗しようとするがよい。以前、わたしはすべての者に対して義であり感情のかけらもないと言ったが、それはわたしの性質が侵すべからざるものであることを示している。これがわたしの本体であり、誰もそれを変えることはできない。すべての人がわたしの言葉を聞き、すべての人がわたしの栄光に満ちた顔貌を見る。すべての人はわたしに完全に、そして絶対に従わなければならない——これがわたしの行政命令である。全宇宙と地の隅々に至るまで、すべての人々がわたしを賛美し、その栄光を讃えなければならない。わたしは唯一の神自身であり、神の本体であるからだ。誰もわたしの言葉や発言、話やふるまいを変えることはできない。それらはわたしだけの問題であり、太古の時代からわたしが所有してきたもので、永久に存在するからである。

人々はわたしを試そうという意図を持っており、わたしの言葉の中に反駁できるものを見つけて中傷しようとする。わたしはあなたに中傷されるべきなのか。わたしは気軽に裁かれるべきものなのか。わたしの問題は気軽に論じられるべきものなのか。あなたがたはまったく自分にとって何が良いのかを知らない輩だ。あなたがたはわたしをまったく知らない。シオンの山とは何なのか。わたしの住まいとは何なのか。カナンの良い地とは何なのか。創造の基盤とは何なのか。なぜわたしはここ数日間、これらの言葉に触れ続けたのか。シオンの山、わたしの住まい、カナンの良い地、創造の基盤——これらはすべて、わたしの本体（体に関する）に関連して語られている。人々は皆これらが物理的に存在する場所だと思っている。わたしの本体がシオンの山であり、わたしの住まいである。霊的な世界に入る者は誰でもシオンの山に登り、わたしの住まいに入ることになる。わたしは万物をわたしの本体の中に造った。つまり、すべてのものは体の中

に造られたのであり、したがってそれが基盤なのである。なぜわたしが、あなたがたはわたしと共に体の中に戻ると言うと思うのか。そこに本来の意味があるのだ。「神」という名称と同様、これらの名詞はそれ自体では意味を持っておらず、さまざまな場所にわたしが与えたさまざまな名称なのだ。だからその文字通りの意味にはあまり注意を払わず、わたしの言葉を聞くことだけに集中しなさい。これらのことはそのように見なければならず、そうすればわたしの旨を把握できるようになるだろう。なぜ何度も繰り返し、わたしの言葉には知恵があると言うと思うのか。あなたがたのうち何人が、その背後にある意味を理解しようとしたのか。あなたがたはみなただ盲目的に分析しており、まったく不合理なのだ。

あなたがたは今も、わたしが過去に言ったことの大半を理解しておらず、いまだに不信の状態にあり、わたしの心を満足させることができない。いつの日か、わたしが語る一つ一つの文について確信できるようになれば、そのときこそあなたがたのいのちは成熟するだろう。わたしには一日が千年のようであり、千年は一日のようだ。わたしが語る時間のことを、あなたがたはどう考えているのか。どのようにそれを説明するのか。あなたがたはそれを誤解している。そしてさらに、ほとんどの人々がこのことでわたしと論争し、何かわたしに反論する種を見つけようとしている。あなたは本当に、自分にとって何が良いのかをわかっていない。気をつけなさい、さもないとわたしがあなたを打ち倒す。すべてのことが明らかになる日が来れば、あなたがたは完全に理解するだろう。今はまだあなたがたに言わずにおく（今は人々を暴露する時なので、誰もが注意深く慎重にわたしの旨を満たせなければならない）。わたしは言葉を通してすべての人を暴露する。それによって彼らの本来の姿が暴かれ、本物かどうかが示されるだろう。もし誰かが売春婦やイゼベルであれば、わたしは彼らを暴露しなければならない。以前わたしは指一本上げることなく物事を行い、言葉だけを用いて人々を暴露すると言った。わたしはどんな偽装も恐れない。わたしの言葉が発せられれば、あなたは本来の姿を露わにせざるをえなくなり、どんなにうまく自分を偽装しても、わたしは必ず見破るだろう。これがわたしの業の原則である。それは言葉だけを用い、何の力も費やさないということだ。人々はわたしの言葉が成就するかどうかと冷汗を流し、わたしのために不安になりわたしのことを心配するが、そのような気苦労はまったく不要であり、払う必要のない代価である。あなたはわたしのことを心配しているが、あなた自身のいのちは成熟したのか。あなた自身の運命はどうなのか。頻繁に自問しなさい、手を抜いてはならない。人はみなわたしの働きを考慮に入れ、わたしの業と言葉を通してわたしの本体を

知り、わたしについての認識を高め、わたしの全能性を知り、わたしの知恵を知り、わたしが万物を創造した手段と方法を知り、それによってわたしに絶え間ない讃美を捧げなければならない。すべての人に、わたしの行政命令の手は誰を捕えるのか、わたしが誰に働きかけるのか、何をしようとしているのか、何を完成させようとしているのかを見せよう。これは一人一人の人間が成し遂げねばならないことだ、なぜならわたしの行政命令だからである。わたしは自らの言ったことを成し遂げる。誰もわたしの言葉をいい加減に分析してはならず、皆がわたしの言葉を通してわたしの業の背後にある原則を知らねばならず、そしてわたしの言葉から、わたしの怒りとは何か、わたしの呪いとは何か、わたしの裁きとは何かを知らねばならない。これらのことはすべてわたしの言葉にかかっており、それを一人一人がわたしの一つ一つの言葉の中に見なければならないのだ。

第百一章

わたしはわたしの経営を妨げたり、わたしの計画を壊そうとしたりする者を容赦しない。すべての者が、わたしが言う言葉からわたしの意味することを理解し、わたしが話していることについて明確に理解すべきである。現在の状況を考慮してみると、誰もが自分自身を吟味すべきである。あなたはどんな役割を果たしているのか。あなたはわたしのために生きているのか、それともサタンに仕えているのか。あなたの行動はどれもわたしから出ているのか、それとも悪魔から出ているのか。わたしの行政命令に違反して、わたしの激しい怒りを引き起こすことにならないように、これはすべて明らかでなければならない。今振り返ると、人々はいつもわたしに不忠実で、親不孝者であり、無礼で、さらには、わたしを裏切ってきた。これらの理由から、このような人々は今日わたしの裁きを受けるのだ。わたしはただの人間であるかのように思われるが、わたしが承認しない者（あなたはここからわたしの言う意味を理解しなければならない。それは、あなたがどれほど美しく見えるか、あなたがどれほど魅力的であるか、ということではなく、わたしがあなたを予め定め、選んでいるかどうかということである。）はみな、わたしによる淘汰の対象となる。これは絶対に真実である。何故なら、わたしは人間に見えるかもしれないが、わたしの神性を理解するには、わたしの人間性の向こうにあるものを見る必要があるからだ。「普通の人間性と完全なる神性は、完全なる神自身の切り離すことのできない二つの部分である」とわたしは何度も言った。しかしながら、あなたはまだわたしを理解しておらず、あのぼんやりしたあなたの神のみを重視している。あなたがたは霊的な事を理解しない人々である。しかし、そのような人々がまだ

わたしの長子になりたがっている。何と恥知らずなことか。彼らは自分の身分が本当はどのようなものをわきまえていない。彼らはわたしの民となる身分でもないのに、どうしてわたしと一緒に王となるはずの長子になれるというのか。このような人々は自分自身を知らない。彼らはサタンの類いである。彼らはわたしの家の柱となるに値せず、それどころか、わたしの前で奉仕する価値もないのだ。それ故、わたしは彼らを一人ずつ取り除き、一人ひとりの真の顔を露わにする。

わたしは勝利を得て、全宇宙を王として統治してきたので、わたしの働きは邪魔されることなく、一步一步前進し、何の妨げもない。（わたしがここで言及しているのは、悪魔とサタンを倒した後、わたしは新たに権力を回復したということである）。わたしが長子たち全員を得ると、勝利の旗がシオンの山に掲げられる。すなわち、わたしの長子たちはわたしの勝利の旗、わたしの栄光、わたしの誇りである。彼らはわたしがサタンを辱めたことの印であり、また、わたしが働く方法である。（わたしが予め定めた後、サタンによって墮落させられたが、わたしのもとへ新たに返って来た一群の人々を通して、わたしは赤い大きな竜を辱め、すべての反逆の子たちを取り扱う。）わたしの全能性はわたしの長子たちにあり、彼らはわたしの不変で議論の余地のない大きな成功である。わたしの経営（救いの）計画を完成させるのは、わたしの長子たちを通してであり、これこそが、「すべての国とすべての人々をわたしの玉座の前に戻すのは、あなたがたを通してである」と以前わたしが言ったとき、わたしが意味したことである。さらにそれは、「あなたがたの肩の重荷」という言葉でわたしが意味したことである。それは、はっきりしているだろうか。あなたには分かるだろうか。長子たちはわたしの経営（救いの）計画全体の結晶である。それ故、わたしはこの集団を優しく扱ったことが一度もなく、常に厳しく訓練してきた。（この厳しい訓練とは、世の悲惨、家族の不幸、および両親、夫、妻、子供たちに見捨てられることである。要するに、世から見捨てられ、時代に捨てられることである。）そのようなわけで、あなたは今日、わたしの前に来るという幸運を得ているのだ。これが、「なぜ他の人たちはこの名を受け入れなかったのに、わたしは受け入れたのだろう」と繰り返しあなたがたが思い巡らした問いへの答えである。これで分かったことだろう。

今日、過去と同じようなものは何もない。わたしの経営（救いの）計画は新しい方法を採用した。わたしの働きは過去のものとはさらに違っており、わたしの言葉は今やもっと前例のないものになっている。それ故、わたしは、あなたがたは適切にわたしに奉仕すべきであると繰り返し強調したのである（これは効力者に向けて言われている）。

自らを否定的に扱ってはならない。熱心に追求し続けなさい。いくばくかの恵みを得るのは喜ばしいことではないか。それは世で苦しみことより遥かに良いことである。わたしはあなたに告げる。あなたが心からわたしに奉仕せず、それどころかわたしが義ではなかったと不満を抱くなら、明日はハデスと地獄に落ちるだろう。早死にすることを望む者はいない、そうではないか。たとえ寿命が一日だけ延びたとしても、その一日は意味があるので、あなたはわたしの経営（救いの）計画に自らを完全に捧げ、その後わたしの裁きを待ち、わたしの義なる刑罰があなたに下るのを待たなくてはならない。わたしが言っていることがばかげていると思ってはならない。わたしは、わたしの義とわたしの性質から話し、更にわたしは、威厳と義をもって行動する。人々はわたしが義ではないと言う。それは彼らがわたしを知らないからである。それは、彼らの反抗的な性質の明らかな現れである。わたしには感情はなく、代わりに義、威厳、裁き、怒りだけがあるのだ。時が経てば経つほど、あなたはさらにわたしの性質を見るであろう。現在は過渡期であるので、あなたがたはそのほんの一部分しか見ることができず、いくつかの外側のものしか見るできないのである。わたしの長子たちが現れたら、わたしはあなたがたにすべてを見せ、すべてを理解させる。誰もが心で確信し、言葉でそれを表現するだろう。わたしは、あなたがたが口を開いてわたしに対して証しし、永遠にわたしを讃美し賞賛するようにする。させるだろう。これは避けることができず、誰にも変えられない。人々はそれを信じることはおろか、想像することさえできない。

長子である者たちはビジョンについて、ますます明確に理解し、彼らのわたしへの愛はさらに大きくなっている。（これはサタンのわたしに対する誘惑であるロマンチックな愛ではなく、見抜かなければならない。それ故、過去にわたしは、わたしの前で自分の魅力を見せびらかす人たちがいたことについて述べたのだ。このような人々はサタンのしもべであり、わたしが彼らの外見に惹き付けられると信じているのだ。何という恥知らずな。最低の惨めな者よ。）しかし長子ではない者たちは、わたしがこの期間に語ったこれらの言葉をとおして、ますますビジョンについて不明瞭になり、わたしという人間への信仰を失ってしまった。その後、彼らは最終的に倒れるまで、徐々に無関心になってゆく。これらの人々はそうせざるを得ないのである。それは、わたしがこの期間に言っていることの目的であり、誰もがこれを見るべきである（わたしは長子たちに言っている）。また、わたしの言葉と行動をとおして、わたしの素晴らしさを見るべきである。なぜわたしは平和の君、永遠の父と呼ばれ、わたしは不思議であり、わたしは指導者であると言われているのか。これをわたしの身分、わたしの言葉、または、わたし

が為していることから説明するのは、あまりにも表面的である。それは言及する価値もない。わたしを平和の君と呼ぶ理由は、わたしの長子たちを完全にわたしの力、サタンへのわたしの裁き、そして、わたしが長子たちに授けた無限の祝福である。言い換えると、長子のみがわたしを平和の君と呼ぶ資格を持っているのだ。何故なら、わたしは長子たちを愛しており、「平和の君」という呼び名は彼らの口から発せられるべきだからである。彼らにとって、わたしは平和の君である。わたしは、わたしの息子たちとわたしの民には、永遠の父と呼ばれている。わたしの長子たちが存在し、わたしの長子たちはわたしと共に王権を振るい、すべての国とすべての民族（わたしの子らと民）を支配することができるので、子らと民は、わたしのことを、長子の上にいる神自身という意味である「永遠の父」と呼ぶべきである。わたしは、わたしの子、民、そして長子ではない人々には不思議である。わたしの働きの不思議さのために、未信者はわたしを全く見ることができず（わたしが彼らの目を覆ったからである）、わたしの働きをはっきりと見ることに到底できないので、彼らにとってわたしは不思議なのである。すべての悪魔たちとサタンにとっては、わたしは指導者である。なぜなら、わたしが行うすべてのことは彼らを恥じ入らせるように働くからであり、わたしが行うことはすべてわたしの長子たちのためであるからだ。わたしの一步一步は円滑に進み、わたしは一步踏み出す度に勝利を収める。さらに、わたしはサタンのすべての策略を見抜き、その策略を使ってわたしに仕えさせ、それを否定的な面から、わたしの目的に仕えるための対象にすることができる。これが、わたしが助言者であることの意味であり、誰もそれを変えることはできず、また、誰もそれを完全には理解できない。しかし、わたしの本質から言えば、わたしは平和の君であり、永遠の父であり、同時に助言者であり、不思議である。これには真実でないものは何もない。それは反論できない不変の真実である。

わたしは言いたいことがたくさんある。それは実に比べようのないものである。それ故、あなたがたは忍耐強く待つことが必要である。何をするにしても、衝動的に行動して立ち去ってはならない。あなたがたが過去に理解したことは、今日古くなっているので、もはや適用することができない。そして、現在は変化の時である一王権の交代のように。それ故、あなたがたは自分の考え方と古い観念を変える必要がある。これが「義の聖なる衣を着る」ことの真の意味である。わたしだけが、わたし自身の言葉を説明することができ、わたしだけが、わたしの取り掛かろうとすることを知っている。それ故、わたしの言葉だけには不純なものがなく、それはまったくわたしが意志するものであり、したがって、それは義の聖なる衣を着ることなのである。人間の観念による理解は

単なる想像である。彼らの理解は不純であり、わたしの心を達成することができない。それ故、わたしが自ら語り、わたしが自ら説明する。そしてこれは、「わたし自身が働きを為す」という言葉の背後にある意味である。それは、わたしの経営（救いの）計画の不可欠な部分である。そして、すべての人々がわたしに栄光を帰し、わたしを讃美しなければならない。わたしの言葉を理解することについては、わたしは人々にその力を与えたことは一度もなく、彼らはそのための能力を全く持っていない。これは悪魔を辱めるわたしの方法の一つである。（もし人々がわたしの言葉を理解して、すべての段階でわたしの考えを探ることができれば、サタンはいつでも人々を自分のものにすることができ、その結果、人々はわたしに逆らい、わたしは長子を選ぶというわたしの目標を達成できなくなるだろう。もしわたしがすべての奥義を理解し、誰も推し量ることのできない言葉をわたしという人間が話すことができたとしたら、わたしもまたサタンのものになり得るであろう。これが、わたしが肉の中にいるときは、わたしは全く超自然的でない理由である。）これらの言葉の意義をはっきりと理解し、わたしの導きに従って物事を行うことは、誰にとっても必要なことである。自分ひとりで深遠な言葉や教義を理解しようとしてはならない。

第百二章

わたしはある程度まで話し、ある程度まで働いた。あなたがたは皆、わたしの旨を把握し、程度の差はあるものの、わたしの重荷を考慮することができなければならない。現在は肉が霊の世界に移り変わる転換期であり、あなたがたは、時代を渡り歩く先駆者、宇宙と地の隅々まで駆け巡る宇宙の人間である。あなたがたはわたしの最愛の者である。わたしが愛するのは、あなたがたである。あなたがた以外にわたしが愛する者はいないと言ってよい。何故なら、わたしのこれまでの辛苦の努力はすべてあなたがたのためだからである——あなたがたがそれを知らないことなどあろうか。どうしてわたしはすべてのものを創造するのか。どうしてわたしはすべてのものを動員して、あなたがたに仕えさせるのか。これらはすべてあなたがたへのわたしの愛の表現である。山々と山々にいるすべてのもの、地と地の上にいるすべてのものがわたしを賛美し、わたしに栄光を帰す。それは、わたしがあなたがたを獲得したからである。まことに、すべてのことが成し遂げられた。そして、さらにすべてのことが完全に完了した。あなたがたは、わたしのために力強い証しをして、悪魔であるサタンをわたしのために辱めた。わたし以外のすべての人々、出来事、物ごとが、わたしの権威の下に服従し、わたしの経営（救いの）計画の完成により、全てはそれぞれの種類に加わる（わたしの民はわたしに属

し、サタンの類はみな火の池へ行く——彼らは底なしの穴に落ち、そこで永遠に嘆き、永久に滅びる）。「滅びること」と「その時から彼らの霊、魂、そして肉体を取り去ること」について話すとき、わたしは彼らをサタンに渡して、踏みにじらせることを言っているのだ。言い換えれば、わたしの家に属さないすべての者が滅びの対象となり、彼らはもはや存在しなくなるのだ。これは、人々が想像するように、彼らがいなくなってしまうことではない。そして、わたしの見方では、わたしの以外のものは何も存在しないとも言える。それが滅びの本当の意味である。人間の目にはまだ存在しているように見えるが、わたしの見方では、彼らは無に帰し、永遠に滅びるだろう。（誰であれ、わたしが働きかけない者、また、わたしの外にいる者に重点が置かれている。）人間の中では、どのように考えても、これを解明することはできず、どんな見方をしても、それを見破ることはできない。わたしが啓示を与え、照らしを与え、あからさまに指摘しない限り、誰も明確に理解できない。さらに、誰もがそれについて曖昧になるばかりで、さらに空虚になり、ますます行くべき道がないと感じるだろう——彼らはほとんど死人のようである。今、ほとんどの人々（長子を除くすべての人々を意味する）がこの状態にある。わたしはこれらのことを非常にはっきりと言うが、これらの人々は、まったく反応がなく、いまだに肉の快楽を求めている——彼らは食べては眠り、眠っては食べ、わたしの言葉を熟考することはない。たとえ彼らが活力を得ても、それはしばらくの間続くだけで、その後はまた前と同じままで、彼らはあたかもわたしの言葉をぜんぜん聞いていないかのように、まったく変わらないのである。彼らは、重荷を負わない典型的な無能な人間である——最も明らかな居候である。後で、わたしは彼らを一人ずつ見捨てる。心配しなくてもよい。わたしは彼らを一人ずつ底なしの穴に戻す。聖霊はこのような人間に働きを行ったことがなく、彼らが行う一切のことは、彼らが受け取った賜物から生じる。わたしがこの賜物について話すとき、これはいのちのない者、つまり、わたしの効力者を意味している。わたしは彼らのうちの誰も要らない。そして、わたしは彼らを排除する（しかし、今はまだ彼らは少しは有用である）。効力者であるあなたがた、聞きなさい。わたしがあなたを用いているからといって、わたしがあなたに好意を持っていると思ってはならない。これはそんなに簡単なことではない。わたしがあなたに好意を持つことを望むなら、あなたは、わたしに承認される者、わたしが自ら完全にする者にならなければならない。わたしが愛するのは、このような人間である。たとえ人々が、わたしが間違いを犯したと言っても、わたしは決して約束を破らない。あなたには分かるだろうか。奉仕する者たちは牛や馬である。どうして彼らがわたしの長子になれるというのか。それは馬鹿げたことではないだろうか。それは自然の法則を破るこ

とではないだろうか。誰であれわたしのいのち、わたしの資質を持っている者は、わたしの長子である。これは合理的なことである——誰もそれを反証することはできない。それはそのようであればならない。さもないと、その役割を果たせる者は誰もおらず、それに代わることができる者も誰もいないだろう。これは感情によって行動するようなことではない。何故なら、わたしは義なる神自身であるからだ。わたしは聖なる神自身である。わたしは威厳のある、背くことの許されない神自身である。

人間にとって不可能なことでも、わたしにとっては円滑かつ自由にすすむ。誰もそれを止めることはできず、誰もそれを変更することはできない。小さな悪魔であるサタンはもちろんのこと、この広大な世界は、わたしの手の中にある。もしわたしの経営（救いの）計画とわたしの長子たちのためであれば、わたしは死の悪臭が充満した、邪悪でふしだらなこの古い時代をずっと昔に滅ぼしていただろう。しかし、わたしは礼儀を守って行動し、わたしは軽々しく話さない。一度わたしが話すと、それは達成される。たとえそうでないとしても、そこにはわたしの知恵の側面があり、それがわたしのためにすべてを成し遂げ、わたしの行動のために道を開くのだ。わたしの言葉はわたしの知恵であり、わたしの言葉はすべてであるからだ。人々は根本的にそれらを理解することができず、それらを解明することができない。わたしはしばしば「火の池」について述べる。それはどういう意味であろうか。それは「火と硫黄の池」とどう違うのであろうか。「火と硫黄の池」はサタンの影響を指し、「火の池」はサタンの支配下にある世界全体を指している。世界のすべての者が火の池で燃やされるいけにえとなる対象である（すなわち、彼らはますます墮落してゆき、墮落がある程度に達すると、わたしによって一人ずつ滅ぼされる。それはわたしにとって簡単なことであり、それには、ひとつの言葉だけで十分である）。わたしの怒りが大きければ大きいほど、火の池全体の炎はさらに激しく燃える。これは人々の悪がさらに増すことを意味している。わたしの怒りが爆発する時はまた、火の池が爆発する時となるだろう。つまり、それは宇宙と世界全体が滅びる時である。その日、わたしの国は地上で完全に実現し、新しい生活が始まるだろう。これはもうすぐ実現されることである。わたしが話すので、すべてのことが目の前で成就される。これは人間の観点から見たことであるが、わたしの見方では、わたしにとってはすべてが簡単なので、物ごとは事前に完了している。わたしが話せば、それは成し遂げられ、わたしが語れば、それは確立される。

あなたがたは毎日わたしの言葉を食べ、わたしの神殿で豊かさを楽しみ、わたしのいのちの川から水を飲み、わたしのいのちの木から実を摘み取る。それでは、わたしの神

殿での豊かさとは何であるのか。わたしのいのちの川の水とは何であるのか。いのちの木とは何であるか。いのちの木の実とは何であるか。これらの一般的な句は、全く混乱し、それらが無責任に話し、無謀に用い、手当たり次第に適用している全ての人間には理解できない。神殿の豊かさは、わたしが話した言葉も、わたしがあなたがたに与えた恵みも意味しない。それでは結局のところ、それは何を意味するのか。昔から、わたしの神殿で豊かさを味わえる幸運な者は誰もいなかった。ただ終わりの日にだけ、わたしの長子たちの間で、人々はわたしの神殿の豊かさが何であるかを見ることができる。「わたしの神殿の豊かさ」で言及されている「神殿」とは、わたしの本質であり、それは、シオンの山、つまりわたしの住むところを指している。わたしの許可がなければ、誰もそこに入ることも、そこから出ることもできない。「豊かさ」とは何を意味するのか。豊かさとは、体の中でわたしと共に支配することの祝福を指している。一般的に言えば、これは体の中でわたしと共に支配している長子たちの祝福を意味しており、これを理解するのは難しくない。いのちの川の水には二つの意味がある。一方で、それはわたしの存在の奥底から流れ出る生ける水、つまり、わたしの口から出て来る一つひとつの言葉を指している。また一方、それは、わたしの行動の知恵と謀略、および、わたしの存在そのものと、わたしの持っているものとを指している。わたしの言葉の中には、無限の隠された奥義があり（奥義はもはや隠されていない、ということは過去を対照として語られているが、未来の公の啓示に比べれば、それらはまだ隠されている。ここで言う「隠されている」ということは、絶対的ではなく、むしろ相対的である）、それは、いのちの川の水は常に流れているということである。わたしの中には無限の知恵があり、人々は決してわたしの存在そのものと、わたしの持っているものとを少しも理解できない。すなわち、いのちの川の水は絶えず流れているのである。人間の視覚では、多くの種類の物質的な木があるが、誰もいのちの木を見たことはない。しかしながら、今日それを見ているにもかかわらず、人々はまだそれを理解していない。そしていまだに、彼らはいのちの木から実を食べることについてさえ話している。それは本当にばかげている。彼らはそれを見境なく食べる。何故わたしは、今日、人々はそれを見ているが、理解していないと言うのだろうか。わたしは何故そう言うのか。わたしの言葉の意味を理解しているだろうか。今日の実践の神自身とはわたしという人間であり、またそれはいのちの木である。人間の観念を使ってわたしを測ってはならない—外からは、わたしは木のようには見えないが、わたしがいのちの木であることをあなたは知っているか。わたしの一つひとつの動きと発言と態度は、いのちの木の実であり、それらはわたしの本質である——それらはわたしの長子たちが食べるべきものであり、最終的に、わたし

の長子たちだけがわたしとまったく同じになるのだ。彼らはわたしを生ることができ、わたしを証することができるようになる。（これらは、わたしたちが霊の世界に入った後に起こることである。体の中でのみ、わたしたちは全く同じになることができる。肉ではほぼ同じになることができるが、わたしたちにはまだ自分特有のものがある。）

わたしは長子たちの中にわたしの力を示すだけでなく、長子たちがすべての国々とすべての民族を治めることによって、わたしの力を示す。これはわたしの働きの一つの段階である。今が鍵であり、今は何よりも転機であるのだ。すべてのことが成し遂げられると、あなたがたはわたしの手の業とは何かを見、わたしがどのように計画し、どのように経営しているかを見るであろうが、これは曖昧なことではない。世界各国の動向によれば、それはあまり遠くない。それは人々が想像できないことであり、さらには、彼らが予知できないことである。あなたがたは、祝福され報われる機会を逃さないために、絶対に不注意になったり、怠ったりしてはならない。神の国の展望が見え始め、全世界は次第に死に倒れつつある。底なしの穴、また火と硫黄の池から、泣き叫ぶ声が溢れ出し、人々を恐怖に陥れ、恐れと恥を感じさせている。誰であれ、わたしの名によって選ばれ、その後で取り除かれた者は、底なしの穴に落ちるだろう。だからわたしが何度も言ったように、わたしは排除の対象を底なしの穴に投げ込む。全世界が滅ぼされると、滅ぼされたものはすべて火と硫黄の池に行く——つまり、それは火の池から火と硫黄の池に移される。その時、すべての者は永遠の滅び（わたしの外にいるすべての人々を意味する）、あるいは永遠のいのち（わたしの中にいるすべての人々を意味する）のいずれかに定められる。その時、わたしとわたしの長子たちは神の国から現れて、永遠の中に入るだろう。これは後で成就されることであり、わたしが今言っても、あなたがたは理解しないだろう。あなたがたはただ、わたしの導きに従い、わたしの光の中を歩み、わたしの愛の中でわたしに伴い、わたしの家でわたしと共に楽しみ、わたしの国でわたしと共に統治し、わたしの権威の中でわたしと共にすべての国々とすべての民族を支配することができる。わたしがここで述べたことは、わたしがあなたがたに与える尽きることのない祝福である。

第百三章

雷鳴のような声が発せられて、全宇宙を揺るがす。その声は人々の耳をつんざき、身をかわそうとしても間に合わない。ある者は殺され、ある者は滅ぼされ、またある者は裁かれる。それはまさに誰も見たことのない光景である。耳を澄ましてみなさい、雷鳴

の轟きとともに泣き叫ぶ声が聞こえる。その声は冥府から、地獄から響いてくるのだ。それはわたしに裁かれた反逆の子らの悲痛な声である。わたしの言うことを聞かずその言葉を実践しなかった者は、厳しく裁かれ、わたしの怒りの呪いを受けた。わたしの声は裁きであり、怒りである。わたしは誰一人優しく扱わず、誰にも憐れみを示さない。わたしは義なる神自身であり、憤怒を備え、燃え盛る炎を備え、清めを備え、破滅を備えているからだ。わたしの中に隠されたものや感情的なものは一つもなく、逆にすべてが開かれており、義であり、公平である。わたしの長子たちはすでにわたしと共に玉座に就き、すべての国とすべての民族を支配しているので、不正な不義の物や人々は裁かれ始めている。わたしは彼らを一つずつ精査し、何一つ見逃すことなく完全に暴く。わたしの裁きは完全に露わにされ、完全に開かれており、何一つ隠されてはいないからだ。わたしの旨に合わないものはすべて投げ棄て、永遠に底なしの穴で滅ぼし、そこで永遠に焼き尽くさせる。これがわたしの義であり公正さである。誰もそれを変えることはできず、すべてはわたしの命令に従わなければならない。

ほとんどの人がわたしの言葉を見做しており、言葉は単なる言葉で事実は事実だと思っている。彼らは盲目なのだ。わたしが誠実な神自身であることを知らないのか。わたしの言葉と事実とは同時に起こる。それはまさに真実ではないか。人々はわたしの言葉を一切把握できず、啓示を受けた者だけが真に理解することができる。これは事実である。人々はわたしの言葉を目にするやいなや、気が動転してしまい、隠れ場所を探して走り回る。わたしの裁きが下るときはなおさらだ。わたしが万物を創造したとき、わたしが世界を滅ぼすとき、そしてわたしが長子たちを完全にするとき――こうしたすべてのことは、わたしの口から出るただ一つの言葉で成し遂げられる。それはわたしの言葉そのものが権威であり、裁きであるからだ。わたしという人間が裁きであり、威厳であると言うことができ、それは不変の事実なのだ。これはわたしの行政命令の一面であり、わたしが人々を裁く一つの方法にすぎない。わたしの目には、すべての人、すべての出来事、すべての物を含む万物がわたしの手中にあり、わたしの裁きの下にある。誰も何物も、あえて無闇に自分勝手に行動しようとはしない。すべてはわたしが発する言葉に従って成し遂げられなければならない。人間はみなその観念の中から、わたしという人間の言葉を信じている。わたしの霊が声を発すると、皆が疑いを抱く。人々はわたしの全能性をかけらも認識しておらず、わたしを不当に非難さえする。今あなたに告げるが、誰であれわたしの言葉に疑問を抱く者、わたしの言葉を軽視する者は、まさに滅ぼされる者であり、永遠に地獄の子なのだ。このことから、長子である者は極めて少ない

ことがわかる。これがわたしの働き方だからだ。以前言ったように、わたしは指一本動かすことなく、言葉だけを用いてすべてを成し遂げる。つまり、そこにわたしの全能性があるのだ。わたしの言葉の中に、その根源と目的とを見出せる者は誰もいない。人がこれを達成することはできず、彼らはただわたしの導きに従って行動し、わたしの旨に沿うすべてのことをわたしの義に従って行うことができるだけであり、その結果、わたしの家族は義と平和を得て永遠に生き、永久にしっかりと揺るぎなく立つことができるのだ。

わたしの裁きはすべての者に下り、わたしの行政命令はすべての者に及び、わたしの言葉と本体はすべての者に露わにされる。今はわたしの霊による大いなる働きの時である（ここで祝福される者と災いを受ける者が区別される）。わたしの言葉が発せられるやいなや、祝福される者と災いを受ける者が区別されたことになる。すべてはこの上なく明瞭であり、わたしにはすべて一目で見分けられる。（これはわたしの人間性について言っているのであり、わたしが行なった予定と選択に矛盾するものではない）。わたしは全宇宙の山と川と万物の間を行き巡り、あらゆる場所を観察し清める。そして汚れた場所やみだらな地はすべて、わたしの言葉によって消え去り、燃やし尽くされて無に帰すのだ。わたしにはすべてが容易だ。もしも今が世界を滅ぼすようわたしが予定した時であるなら、わたしはただ一つの言葉を発して世界を呑み込むこともできるが、今はその時ではない。わたしがこの働きをする前にすべてが準備され、計画への妨害や経営の中断が起こらないようにしなければならない。わたしはそれを合理的に行う方法を知っている。わたしには知恵があり、わたし自身の采配がある。人々は指一本動かしてはならない――わたしの手によって殺されないように気をつけなさい。これはすでにわたしの行政命令に触れている。このことから人はわたしの行政命令の厳しさだけでなく、その背後にある原則も見ることができる。その原則には二つの側面があり、一つはわたしの旨に適わず行政命令に違反するすべての者が殺されるということで、他方はわたしの行政命令に違反するすべての者がわたしの怒りの中で呪われるということだ。この二つの側面は不可欠であり、わたしの行政命令の背後にある大原則である。すべての人は、どれほど忠実かによらず、この二つの原則に従って感情なしに扱われる。これはわたしの義、威厳、そして怒りを示すのに十分であり、それらが地上のすべてのもの、世のすべてのもの、そしてわたしの旨と一致しないすべてのものを焼き尽くすのだ。わたしの言葉の中には隠されたままの奥義があり、また同時に、露わにされた奥義もある。そのため人間の観念に従えば、人間の心の中ではわたしの言葉は永遠に理解不能であり、

わたしの心は永遠に計り知れないのだ。つまり、わたしは人間に観念と思考を捨て去らせなければならない。これはわたしの経営（救いの）計画の最も重要な事項である。わたしは長子たちを獲得し、成し遂げたいことを成し遂げるため、それをそのように行わねばならないのだ。

全世界の災害は日増しに悪化しており、わたしの家では壊滅的な災害がいっそう激しさを増している。人々にはまったく隠れるところがなく、顔を隠す場所もない。今はまさに過渡期であるため、誰も次にどこへ足を踏み出せばよいのかわからない。それはわたしの裁きの後になって初めて明らかになる。覚えておきなさい、これらはわたしの働きの段階であり、わたしの働き方なのだ。長子たちはわたしが一人ずつ慰め、一步一步引き上げる。効力者については、一人ずつ全員を排除し捨て去ることになる。これはわたしの経営計画の一部である。すべての効力者が暴かれた後、わたしの長子たちも暴かれることになる。（わたしにとってこれは極めて容易なことだ。わたしの言葉を聞くと、効力者たちは皆わたしの言葉による裁きと脅威を前にして徐々に退き、長子たちだけが残されることになる。これは自発的に起こることではなく、また人間の意志で変えられることでもなく、わたしの霊が直接働いているということなのだ。）これは遠くの出来事ではなく、あなたがたはこの段階のわたしの働きと言葉からある程度それに気づけなければならない。わたしがなぜこれほど多くを語るのかも、わたしの言葉の予測不能な性質も、人々には測り知れない。わたしは長子たちに対しては、慰めと憐れみと愛の口調で語りかける（わたしはいつも彼らに啓示を与え、彼らを離れることがないからだ。わたしが彼らを予め定めたからである）。一方で長子以外の者は、厳しい裁きと脅威と脅しをもって扱い、絶えず怯えさせて常に神経を緊張させておく。状況がある程度まで進展すると、彼らはその状態から脱するだろうが（わたしが世界を滅ぼすとき、この人々は底なしの穴に落ちるのだ）、わたしの裁きの手から逃れることも、この状況から抜け出すことも決してない。つまり、これが彼らへの裁きであり、彼らへの刑罰なのだ。異邦人たちが到来する日、わたしはこうした人々を一人ずつ暴くことになる。それらがわたしの働きの段階なのだ。わたしが以前こうした言葉を語った意図を、今あなたがたは理解しただろうか。わたしの見解では、成就されていないことはすでに成就されたことでもあるが、すでに成就されたことは、必ずしもすでに達成されたことではない。なぜならわたしには知恵と独自の働き方があり、それは人間には見当もつかないものだからだ。この段階の成果が得られたら（わたしに抵抗する邪悪な者たちをすべて暴いたら）、次の段階を開始する。わたしの旨は妨げられることがなく、誰もわたしの経営計

画を邪魔しようとはせず、何ものも障壁を作ろうとはしないからだ――みな道を空けなければならないのだ。赤い大きな竜の子らよ、聞きなさい。わたしはシオンから来て、この世で肉となった。それはわたしの長子たちを獲得し、あなたがたの父を辱め（これは赤い大きな竜の子孫たちに言っている）、わたしの長子たちを支え、わたしの長子たちに対して行われた悪を正すためだ。だから、もう野蛮になってはならない。わたしは長子たちにあなたがたを取り扱わせる。かつてわたしの子らは苛められ、虐げられた。父は子のために権力を行使するものなので、わたしの子らはわたしの愛の抱擁の中に戻り、もう苛められたり虐げられたりすることはない。わたしは不義ではない。このことはわたしの義を示しており、まさに「わたしが愛する者を愛し、わたしが憎む者を憎む」ということだ。わたしのことを不義であると言うなら、急いで出て行きなさい。恥もなくわたしの家で居候してはならない。わたしがもうあなたを見なくて済むように、すぐに自分の家へ帰りなさい。底なしの穴があなたがたの終着点であり、あなたがたの休み場である。わたしの家にいるとあなたがたには居場所がなくなる。あなたがたは荷役用の家畜であり、わたしが用いる道具なのだから。あなたがたの用途がなくなれば、わたしはあなたがたを火の中に投げ入れて焼き尽くす。これはわたしの行政命令であり、わたしはこのようにしなければならないのだ。このことだけがわたしの働き方を示し、わたしの義と威厳を露わにするのだ。そしてさらに重要なのは、こうすることでのみ、長子たちがわたしと共に権力をもって統治できるということなのだ。

第百四章

わたしの外にあるすべての人々、出来事、物ごとは過ぎ去り、無に帰するであろう。その一方、わたしの中のすべての人々、出来事、物ごとは、わたしからすべてを得て、わたしと共に栄光の中に入り、わたしの住まいであるわたしのシオンの山に入り、永遠にわたしと共に存在するであろう。わたしは初めにすべてのものを創造し、最後にわたしの働きを完了させ、また永遠に王として支配するであろう。またその間に、わたしは全宇宙を導き、指揮する。誰もわたしの権威を奪うことはできない。それは、わたしが唯一の神自身であり、また、わたしの長子たちがわたしと共に統治することができるように、わたしの権威を彼らに渡す力を持っているからである。これは永遠に存在し、決して変更することはできない。これはわたしの行政命令である。（わたしは自分の行政命令について議論するたび、わたしの国で起きることと、永遠に存在し、決して変えることができないものを指している。）誰もが心から確信し、わたしが愛するそれらの者の中に、わたしの大いなる力を見なければならない。誰もわたしの名を辱めることはで

きない——あなたがたは皆ここから出て行かなければならない。わたしに憐みがないわけではないが、あなたは不義である。もしあなたがわたしの刑罰に反するなら、わたしはあなたを処分し、永遠にあなたを死なせるだろう。（もちろん、これはわたしの長子ではない人々に向けられている）。わたしの家には、そのようなゴミは要らない。急いでここから出て行きなさい。一分、いや数秒たりとも遅れてはならない。あなたはわたしが言うことをしなければならぬ。さもなければ、わたしはあなたを一つの言葉で滅ぼすだろう。あなたはもう躊躇しない方がいい。あなたはもう欺かない方がいい。わたしの前にでたらめを並べる者、わたしの面前で嘘をつく者よ——直ちに立ち去れ。このようなものに使うわたしの時間は限られている。（奉仕をする時であれば彼らは奉仕し、去る時なら彼らは去るだろう。わたしは、一分一秒の誤差も、ほんの僅かもずれることなく、知恵によって物事を行う。それはすべて義であり、全く正確である。）しかし、わたしの長子たちには、わたしは無限に寛容であり、最後まで永遠に彼らを愛し、あなたがたがわたしと共に永遠に素晴らしい祝福と永遠の命を楽しむことができるようにし、その間、決して挫折や裁きに耐えなくてもいいようにする。（これは、あなたがたが祝福を楽しむ始める時を指している。）これが、わたしが世界を創造したときの、わたしの長子たちへの無限の祝福と約束である。あなたがたはその中にわたしの義を見るべきである——わたしは、わたしが予め定めた者を愛し、わたしが見捨て取り除いた者を永遠に憎む。

わたしの長子として、あなたがたは自分の本分に留まり、自分の地位に立ち、わたしの前に引き上げられる最初に熟した実となり、わたしの個人的な吟味を受け入れるべきである。その結果、あなたがたがわたしの栄光の姿を生きることができるようになり、わたしの栄光の光があなたがたの顔を通して照らし出され、わたしの言葉があなたがたの口から広げられ、わたしの国があなたがたによって支配され、わたしの民があなたがたによって支配されるためである。ここでわたしは、「最初に熟した実」と「引き上げられる」という言葉に言及した。「最初に熟した実」とは何であろうか。人々の観念によれば、それは引き上げられる最初の人々の集まり、あるいは、それは勝利者たち、または長子である人々を指していると考えられている。これらはすべて虚偽であり、わたしの言葉の誤った解釈である。最初に熟した実は、わたしから啓示と権威を得た人々である。いわゆる「最初に熟した」とは、わたしによって所有され、予め定められ、選ばれていることを指している。「最初に熟した」とは、順序の最初を意味するのではない。

「最初に熟した実」は、人間の目で見える物質的なものではない。いわゆる「実」とは

、香りを放つもの（これは象徴的な意味である）を指している。つまりそれは、わたしを生き、わたしを表し、わたしと永遠に生きることができる者たちである。「実」と言うとき、わたしは、わたしのすべての子らとわたしの民のことを言っているが、「最初に熟した実」は、わたしと共に王として統治する長子たちのことを指している。したがって、「最初に熟した」は権威を帯びていることとして説明されるべきである。それがその真の意味である。「引き上げられる」とは、人々が想像するように、低いところから高いところに連れて行かれることではない。これは大きな間違いである。「引き上げられる」とは、わたしの予定、そして選択を指しているのだ。それはわたしが予め定め、選んだすべての人々を対象としている。長子、子ら、または民の地位を得た者は皆、引き上げられた人々である。これは人々の観念と最も相容れないものである。将来わたしの家を分かち合う者は、わたしの前に引き上げられる人々である。これは絶対に真実であり、決して変わらず、誰も反論することはできない。これはサタンに対する反撃である。わたしが予め定めた者は、誰でもわたしの前に引き上げられるだろう。

人は「聖なるラッパ」をどう説明するだろうか。あなたがたはこれをどう理解しているだろうか。どうしてそれは聖なるものと言われ、それはすでに鳴り響いたと言われているのだろうか。これはわたしの働き of 段階から説明され、わたしの働き方から理解されるべきである。わたしの裁きが公表される時は、わたしの性質がすべての国々とすべての民族に現される時である。それが聖なるラッパが鳴り響く時である。つまりそれは、わたしの性質は聖なるものであり、犯し難いものである、とわたしがしばしば言うことである。それ故に、「ラッパ」を言い表すのに「聖なる」という言葉が使われているのだ。このことから、「ラッパ」とは、わたしの性質を指しており、わたしの存在そのものと、わたしの持っているものとは表していることが分かる。また、わたしの裁きは毎日進行し、わたしの怒りは日々注がれており、わたしの呪いはわたしの性質に合わない一つひとつのものの上に毎日降りかかっていると言ってもよい。そして、わたしの裁きが始まる時が、聖なるラッパの鳴り響く時であり、それは一瞬たりとも止まず、一分、一秒たりとも止まることなく、毎日鳴っていると言える。これから聖なるラッパは、大きな災害が徐々に降りかかるにつれ、ますます大きく鳴り響くであろう。つまり、わたしの義の裁きの啓示と共に、わたしの性質がますます公にされ、わたしの存在そのものと、わたしの持っているものが、わたしの長子たちの中にますます加えられるだろう。これが将来のわたしの働き方である。一方で、わたしの愛する者を支え、救い、また一方で、わたしの言葉を使って、わたしがさげすむ者を全員露わにする。憶えておきな

さい。これこそがわたしの働き方、わたしの働きの段階であり、それは絶対に真実である。これは創世以来わたしによって計画されており、誰にも変えることはできない。

わたしの言葉には人々が理解しにくい部分がまだたくさんあるので、わたしは、わたしの話し方と奥義を明らかにする方法をさらに進化させた。言い換えれば、わたしの話し方は、日々違った形式と方式により、毎日変化し、進化している。これらはわたしの働きの段階であり、誰にも変えることはできない。人々はわたしが言うことに従ってのみ発言し行動することができる。これは絶対に真実である。わたしは、わたしの存在とわたしの肉においての両方で、適切な采配を下した。わたしの人間性による一つひとつの行動と業の中に、わたしの神性の知恵のひとつの側面がある。（人類は全く知恵を持っていないので、長子たちがわたしの知恵を持っていると言うのは、長子たちが自らのうちにわたしの神としての性質を持っていることを指している）。長子が愚かなことをするのは、まだあなたがたの中に人間性の要素があるからだ。だから、あなたがたは人間性の愚かさを取り除き、わたしが愛することを行い、わたしが憎むことを拒まなければならない。誰でもわたしから来た者は、わたしの中に戻らなければならない。誰でもわたしの中で生まれた者は、わたしの栄光の中に戻らなければならない。わたしが憎む者は見捨てられ、一人ずつわたしから断ち切られなければならない。これらがわたしの働きの段階であり、わたしの経営であり、また六千年にわたるわたしの創造の計画である。わたしが見捨てる者は皆、従順に従い、わたしから去らなければならない。わたしが愛する者は皆、わたしが彼らに授けた祝福の故に、わたしを賛美しなければならない。それによってわたしの名がさらに栄光に満ち、わたしの栄光の顔に栄光の光が加わり、彼らがわたしの栄光の中でわたしの知恵で満ち、わたしの栄光の光の中で、わたしの名にさらに栄光を帰すようになるのである。

第百五章

わたしの言葉の原則、あるいは、わたしの働きの方法の故に、人々はわたしを否定する。これこそが、わたしが長い間語ってきた目的であった（それは、赤い大きな竜の子孫について語られたのである）。それは、わたしが働くときの知恵のあるやり方であり、赤い大きな竜に対するわたしの裁きである。これはわたしの戦法であり、それを完全に理解できる者はひとりとしていない。岐路に立つ毎に、つまり、わたしの経営（救いの）計画の移行期毎に、一部の人々が排除されなくてはならない。彼らはわたしの働きの順序に従って排除される。唯一これのみが、わたしの経営計画全体における働きの方

法である。わたしが取り除きたいと思っている者をひとりずつ投げ捨てると、わたしはわたしの働きの次の段階を開始する。しかしながら、今回の排除が最後の排除となる（それは中国の教会内で為される排除である）。そしてそれは、世界が創造されて以来、移行期における人々の排除としては最も多くの人々が排除される時である。歴史を通じて、人々が排除される時はいつでも、その後の働きへの奉仕のために一部の人達が残されていたが、今回はこれまでとは違う。それは迅速で整然としており、今までで最も厳しく、かつ徹底的である。わたしの言葉を読んだ後、ほとんどの人々は自分の心にある疑いを払い除けようとするが、最後にはそれを克服することができず、最終的に困難に陥る。そうなるかどうかを決めるのは人間ではない。なぜなら、わたしが予め定めた者たちは逃れることができず、予め定めていない者たちに対しては、わたしはただ蔑むだけだからである。わたしが好意的に見る者たちだけがわたしに愛される人たちである。そうでなければ、自由にわたしの国を出たり入ったりできる者は一人もいない。これはわたしの鉄の杖であり、これのみが、わたしの行政命令執行の力強い証しであり、その完全なる表明である。これは当然、生き生きとした心を持っているかどうかという問題ではない。わたしはなぜ、サタンは弱くなり、倒れたのだ、と言ったのか。初め、サタンには力があつたが、わたしの手の中にある。わたしが「横になれ」と言えば横になり、「立ってわたしのために奉仕せよ」と言えば必ずそのようにする。サタンが進んでそうするのではない。わたしの鉄の杖がサタンを支配しており、その時にだけ、サタンは口先だけでなく、心から納得するのである。わたしの行政命令がサタンを統治しており、わたしには力があるので、サタンは完全に納得せざるを得ず、全く抵抗することのないまま、わたしの足台になって踏み躪られなくてはならないのだ。過去に、わたしの子たちに対して奉仕していた頃は、サタンは極めて厚かましく、意図的にわたしの子たちをいじめてわたしを辱めようとし、わたしには能力がないと言わんばかりであった。何と盲目なことか。わたしはお前を踏みつぶして息の根を止める。お前はまたしても暴れるのか。お前はまたしてもわたしの子たちに冷たくするのか。人々が誠実になり、わたしの声に耳を傾け、わたしに服従すればするほど、お前はさらに彼らをいじめ、さらに孤立させる（これは人々を誘い出して徒党を組ませることを意味する）。今お前が暴れる日々は終わろうとしている。わたしは、少しずつお前との勘定を精算し始めている。そしてわたしは、お前を大目に見ることなど少しもないのだ。権力を握るのは、サタン、お前ではない。わたしがその権力を取り戻したのだ。そして、子たちを呼び出して、彼らにお前を取り扱わせる時が来た。お前は従わなくてはならず、全く抵抗することはできない。過去に、わたしの前どれ程立派に振る舞うことがあったとしても、それは今

、何の役にも立たない。お前がわたしの愛する者のひとりでなければ、わたしはお前を望まない。一人多過ぎても受け入れられず、わたしが予め定めた通りの人数でなければならない。ひとり少ないのは尚更良くない。サタンよ！邪魔をするな。わたしが誰を愛し誰を憎むのか、わたしが心の中ではっきりしないということなどあるだろうか。それをお前に思い出させてもらう必要があるだろうか。サタンはわたしの子たちを生むことができるだろうか。全ての者が馬鹿げている。全ての者が卑劣である。わたしは全ての者をことごとく、完全に捨て、ひとつも欲するものなどない。全ては出て行かなければならない。六千年の経営計画は終わりを迎えている。わたしの働きは終わり、わたしはこの野獣と畜生の群れを一掃しなければならない。

わたしの言葉を信じてわたしの言葉を行うものは、間違いなくわたしの愛するものであり、わたしはひとりとしてその者たちを捨てず、ひとりとして手放さない。だから、長子である者は思い煩うことはない。それはわたしにより授けられたものであり、それを取り上げることは誰にもできないからである。そしてわたしは、わたしが祝福する者に、必ずそれを与える。わたしが認めた者たちを（世界の創造以前に）、わたしは祝福する（今日）。これがわたしの働く方法であり、わたしの行政命令の各条項の主要な原則でもあり、だれもそれを変更することはできない。一行たりとも、ひと言たりとも追加されてはならず、ましてや一行たりとも、一語たりとも削除されてはならない。わたしは過去に、わたしの本体があなたがたに現れる、としばしば言った。では、本体とは何なのか、それはどのように現れるのか。単にわたしという人間を指しているのか。単にわたしの語る言葉ひとつひとつという意味か。これら二つの側面は、欠くべからずものであるものの、それは、ほんの一部にしか過ぎない。つまり、それがわたしの本体のすべてを現わしてはいないということだ。わたしの本体は、肉におけるわたし自身、わたしの言葉、わたしの行いを含むが、最も的を射た表現は、わたしの子たちとわたしがわたしの本体である、ということである。つまり、統治し、権力を握る、団体的基督者の一群は、わたしの本体だということである。それだから、長子のひとりひとはかけがえのない者であり、わたしの本体の一部である。それゆえ、わたしは、長子たちの数は一人多過ぎても（それはわたしの名を辱めることである）、もっと重要な事には、一人少な過ぎてもいけない（この場合、わたしを完全に現わすことができない）ことを強調する。そして繰り返しわたしは強調する。わたしの長子たちはわたしの最も大切な宝であり、わたしの六千年に及ぶ経営計画の結晶であると。長子たちだけが、完璧で完全なわたしの現れであり、わたしのみの場合は、ただわたしの本体の完全な現れであり、

長子を伴う場合のみ、完璧で完全な現れと言えるのである。そのような訳で、わたしの長子たちに関しては、わたしは厳格に要求し、何も見逃すことはしない。そして長子以外のものは全て繰り返し切り離し殺す。これがわたしの言ったことの根源であり、わたしの言ったことの究極の目標である。更に、わたしは、彼らはわたしに認められた者たちでなければならないこと、世界の創造以来、わたしが直接選んだ者たちでなければならないことを何度も強調する。それでは、「現れる」ということを今、どのように説明するのか。それは霊的世界に入る時であるのか。ほとんどの人達は、それは肉におけるわたし自身が油を注がれる時だとか、肉におけるわたし自身を見る時だなどと信じているが、どれも間違っている。それは見当違いもはなはだしい。「現れる」はその語源から理解するならば何も難しいことはないが、わたしの意図に沿ってそれを理解するのは、ずっと難しい。次のように言うことができる。わたしが人類を造ったとき、わたしはわたしの愛する一群の人々にわたしの素質を注ぎ入れ、彼らをわたしの本体とした。別の言い方をするならば、わたしの本体はその時すでに現れているのだ。わたしの本体はこの名を受けてから現れたというより、むしろわたしがこの一団の人々を予め定めた後に現れたのである。なぜなら、彼らはわたしの素質（彼らの本性は変わることがなく、今でもわたしの本体の一部である）を持っているからだ。だから、わたしの本体は世界の創造から今日まで、ずっと現れているのである。ほとんどの人は、肉におけるわたし自身がわたしの本体であるという観念を信じているが、それは全くの間違いである。その考えは人々の思考と観念から生じるものに過ぎない。もし肉におけるわたし自身だけがわたしの本体であるならば、サタンを辱めるには不十分である。わたしの名に栄光を帰すことはできず、むしろ逆効果で、それゆえわたしの名を辱め、時代を超えてサタンがわたしの名前を辱める印となる。わたしは知恵ある神自身であり、決してそのような愚かなことはしない。

わたしの働きは成果を挙げねばならず、それ以上に、わたしは様々な方法を使って言葉を語らなくてはならない。わたしの言葉とわたしの発言の全ては、わたしの霊に従い、わたしはわたしの霊がすることに従って語る。従って全ての者は、わたしの言葉を通して、わたしの霊を感じるべきであり、わたしの霊がしていることを見、わたしがしようと望むことがいったい何であるのかを理解し、わたしの言葉に沿ったわたしの働き方を知り、わたしの全経営計画の原則が何であるかを知るべきである。わたしは宇宙の全体像を注意深く見る。全ての人、出来事、そしてあらゆる場所は、わたしの命令に従う。わたしの計画を無視しようとするものはいない。わたしが指示した通りに、全てのもの

のは段階を追って前進する。これこそが、わたしの力であり、わたしの全計画を経営する知恵はここにある。全てを理解できる者はひとりもなく、明確に語れる者もない。全てはわたし自身によって直接行われ、わたしひとりによって支配される。

第百六章

わたしの言葉を知らない者たち、わたしの持つ普通の人間性を知らない者たち、そしてわたしの神性に反抗する者たちはみな、破壊されて無と化さなくてはならない。例外は一人もなく、全ての人がこの側面において合格しなければならない。と言うのも、それはわたしの行政命令であり、実践するのが最も厳しいものだからである。わたしの言葉を知らない者たちは、わたしがはっきりと指摘したことを聞いていながら、それを理解できない者たちである。つまり、霊的な事柄を理解できない者たちである（わたしはこの器官を人間の為の造っていないので、人間に多くを求めることはしない。ただ彼らがわたしの言葉を聞き、実践することのみ求める）。彼らはわたしの家の人々ではなく、わたしと同じ種類ではない。彼らはサタンの領域に属する。それ故わたしは、霊的な事柄を理解しないこのような人々をひとりも求めない。以前あなたがたは、わたしがやり過ぎだと感じていた。今日あなたがたは理解するだろう。獣が神と会話することなど出来るだろうか。それは馬鹿げたことではないだろうか。わたしの持つ普通の人間性を知らないものは、自分の観念を使って、人間性の中でわたし行う事を測る者である。服従する代わりに、彼らは自分たちの肉の目でわたしのあら探しをするのである。わたしの話しは無駄だったのだろうか。わたしは、わたしの普通の人間性は、完全な神自身であるわたしになくなくてはならない部分であり、またこれは、わたしの普通の人間性と完全な神性が調和して働く正しい方法である、とわたしは言った。わたしが普通の人間性を通して為す事が人間の観念に合わない時、わたしに反抗する者たちや、わたしの心に適わない者たちが露わにされる。その後、わたしの完全なる神性が人間性を通して語るのだが、このようにして、わたしは一部の人たちを扱ってきた。たとえわたしのすることがあなたに理解できなくても、あなたが従うなら、わたしはそのような人を罪に定めず、その人に啓きを与える。わたしはこのような者を愛し、あなたの服従ゆえに、わたしはあなたを啓く。わたしの神性に逆らう者たちの中には、わたしの言葉を知らない者たち、わたしの普通の人間性とは相容れない者たち、また、わたしが神性において行うこと（例えば、わたしが怒ることや教会を建設すること等）を認めない者たちなどが含まれる。このようなことはわたしの神性に対する反抗の現れである。だがわたしには強調すべきことがひとつだけある。そして、あなたがたは皆このことに留意しなければなら

ない。それは、今日のわたしという人間と相容れない者は、わたしの神性に抵抗しているということである。わたしという人間は完全なる神自身であると、わたしが繰り返す述べるのは何故か。わたしという人間の性質が、神聖な性質の全体を構成しているからだ。人間の観念を用いてわたしを測ってはならない。わたしが普通の人間性を有しているので、わたしのする事は必ずしも全てが正しいとは限らない、と言う人々が未だにいる。そのような人たちよ――あなたはただ死にたいのか。このような者たちはわたしの言うことをひとつも理解せず、間違いなく盲目な者の子孫であり、赤い大きな竜から生まれたものである。全ての者にもう一度言う。（そして、これからはもう同じことは言わない。これに背く者は誰であれ、必ず呪われる。）わたしの言葉、わたしが笑うこと、わたしが食べること、わたしが住むこと、わたしが話すこと、そしてわたしの振る舞いなどは全て神自身であるわたしがすることであり、その中には人間のかすかな痕跡も混ざっていない。全くないのだ！みな心理戦を止めて、けちくさい計算を止めるべきである。あなたがそんなことを続ければ続けるほど、あなたはさらに絶望的になる。わたしの助言に耳を傾けなさい！

わたしはいつでも一人ひとりの心の奥底を吟味し、ひとつひとつの言動を調べ、わたしが好む者と嫌う者を一人ずつ明確に分ける。これは人々には想像できないことであり、それを達成することは尚更できない。わたしは多くのことを語り、多くのことを行ってきた。わたしの言葉とわたしの働きの背後にある目的をはっきりと説明できるような者がいるだろうか。明確に語れるものなどひとりとしていない。今後、わたしは更に語る。一方でそれは、わたしが嫌う人々を排除し、もう一方では、この事に関してあなたがたをもう少し苦しめる。そうする事で、あなたがたがもう一度死人の中からの甦りを経験するようになるためだが、それは今まで以上の厳しさを伴う。これは人間によって決められることではなく、誰もそこから逃れることはできない。今そのことを承知していても、時が来たらその苦しみを避けることはできない。なぜなら、それがわたしの働き方だからである。わたしの目的を達成させるために、そしてあなたがたの上にわたしの旨を満たすために、わたしはこのように働かなければならない。それが、「あなたがたが体験すべき最後の苦難」と呼ばれるのはそのためである。あなたがたの肉体はその後、二度と苦しむことはない。なぜなら、赤い大きな竜はわたしによって滅ぼされ、二度と暴れようとすることがないからだ。これが、体に入る前の最後の段階であり、移行の段階である。だが恐れてはならない。度重なる危機の中、わたしはあなたがたを確実に導く。わたしが義なる神自身であることを信じなさい。わたしの言ったことは必ず

達成される。わたしは信頼に値する神自身である。全ての国々、全ての地、そして全ての教派はわたしのところに戻り、わたしの玉座に集まって来る。これはわたしの偉大な力であり、わたしは反逆の子たちの一人ひとりを裁き、火と硫黄の池に投げ込み、一人の例外なくすべての者が退かなくてはならない。これがわたしの経営（救いの）計画の最後の段階であり、これが完了する時、わたしは安息に入る。なぜなら、全てが完了し、わたしの経営計画は終了するからだ。

わたしの働きの速度が速まったため（わたしの心は騒いではないが）、わたしは、わたしの言葉をあなたがたに毎日現わし、わたしが持っている奥義をあなたがたに毎日現わし、あなたがたがわたしの歩みにしっかり付いて来られるようにする。（これは、人々を完全にし、また人々を打ち倒す言葉を用いるわたしの知恵である。全ての人はわたしの言葉を読み、わたしの言葉にあるわたしの旨に沿って行動する事ができる。消極的な者たちはみな消極的になり、暴露されるべき者たちはその真相を現わし、反抗的な者たちは反抗し、わたしを忠実に愛する者たちは更に忠実になる。このように、全ての者はわたしの歩みに従うことができる。わたしが説明した幾つかの状況は、どれも皆わたしの働き方の方法であり、わたしが達成したい目的である。）過去にわたしは次のように言った。「わたしがあなたがたをどのように導こうが、あなたがたはいつもと同じように追い求めなければならない。わたしが何を言おうと、あなたがたは聞かなければならない。それはどういう意味だったのか。あなたがたに分かるだろうか。わたしの言葉の目的と意義は何だろうか。あなたがたにはそれが分かるだろうか。どれだけの人たちがこれを明瞭に説明できるだろうか。「わたしがあなたがたをどのように導こうが、あなたがたはいつもと同じように追い求めなければならない。」と言う時、わたしは、わたしという人間がもたらす導きだけを指しているのではなく、それ以上に、わたしが語る言葉とわたしが歩む道をも指している。今日、この言葉は真に成就された。わたしがわたしの言葉を語るやいなや、あらゆる悪魔のような顔がわたしの存在の光に照らされて露わになり、あなたがたはそれら全てをはっきりと見るようになる。わたしのこの言葉はサタンへの通告であるだけでなく、あなたがた全員への委任である。あなたがたのほとんどは、この言葉を見ても無視し、それはあなたがたに対する委任だと信じてはいるが、あなたがたはそれが裁きの言葉であり、権威を有する言葉であることを理解しない。わたしの言葉の目的は、サタンがわたしに対して適切に奉仕し、完全にわたしに服従するように命じることである。過去にわたしが現わした奥義には、あなたがたがまだ理解していないものが多いので、わたしは今後さらにあなたがたに明らか

にし、あなたがたがもっとはっきりと完全に理解できるようにする。

災難が来ると誰もが恐れをなす。人々はみな悲しみに泣き叫び、自分が過去にした邪悪な事に嫌悪を感じるが、時既に遅い。なぜなら、もう怒りの時代になっているからだ。それはもう人々を救い、恵みを施す時ではなく、全ての効力者を排除し、わたしの子どもたちに、わたしに代わって支配させる時なのだ。それは無論これまでとは異なり、世界創造の始めから、このような前例はない。わたしは一度世界を創造したから、世界をもう一度滅ぼす。わたしが予め定めた事は誰にも変えられない。「団体的基督者」と「団体的宇宙新人」というふたつの表現が度々出て来たが、これらはどのような意味だと説明できるだろうか。団体的基督者とは、長子たちを意味するのだろうか。団体的宇宙新人も、長子たちを意味するのだろうか。そうではない。人々はこれらの言葉を正しく解釈してこなかった。人間の観念はこの程度しか理解できないため、わたしはあなたがたに今ここで明らかにしよう。「団体的基督者」と「団体的宇宙新人」の意味は同じではなく、それぞれ別の意味がある。これら二つの用語の言い方は極めて似ており、同じように思えるが、現状は全く逆である。「団体的基督者」とは、正確には誰を指しているだろうか。また、何を指しているだろうか。基督者と言うと、誰もがわたしの事を想像する。そうすることはまったく間違っていない。更に、人間の観念によると、「者」は間違いなく人間を指し、他の何かに関連付けるものはいない。「団体的」という表現に関しては、大勢の人々の集まり、ほとんどひとつになっていることを想像する。したがって、それは「団体的」と呼ばれる。ここで分かるのは、人間の考え方は余りに単純で、人間にはわたしが言う意味が全く理解できない。それでは、「団体的基督者」の意味に関して、正式に交わろう。（しかしみな自分の持つ観念を脇に置く必要がある。そうでなければ誰も理解することができず、わたしが説明したところで、人々は信じることも理解することもないだろう。）わたしが語るやいなや、わたしの長子たちは皆わたしの旨に沿って行動し、わたしの旨を表現することができるので、長子たちは同一の心、同一の口なのである。彼らが全ての国々と全ての人々を裁く間、彼らはわたしの義を行うことができ、わたしの行政命令を執行することができる。彼らはわたしの表現であり、わたしの現れである。それ故、団体的基督者は、長子たちがわたしの行政命令を執行している事実の現れであり、長子たちの手にある権威であると言ってよい。また、これは全てキリストに関連しているので、基督者という用語を使うのである。更に、全ての長子はわたしの旨に従って行動することができるので、わたしは「団体的」という表現を使うのである。「団体的宇宙新人」は、わたしの名にある全ての人々という意味

であり、つまりわたしの長子であり、子どもたちであり、わたしの民である。「新しい」という言葉はわたしの名を指す。彼らはわたしの名にあるので（わたしの名はすべてを含み、永遠に新しく、決して古くなることはなく、人間によって変えられることはない）、彼らは今後永遠に生き続ける。彼らは宇宙新人である。ここで言う「団体的」とは、人々の数に関係しており、既に述べた場合とは異なる。わたしの言葉が語られる時、全ての人はそれを信じなければならない。疑ってはならない。あなたがたの人間的な観念と人間的な考えを取り除きなさい。奥義を現わすわたしの今の過程とは、正に人間の観念と考えを取り除く過程なのである。（人々は自分の観念を用いてわたしとわたしが言うことを測るので、わたしは、わたしが現わす奥義を用いて人間の観念と思考を取り除く。）この働きは間もなく完了する。わたしの奥義がある段階まで現わされると、人々はわたしの言葉に対する思考過程をほとんど持たなくなり、自分の観念を使ってわたしを測ることを止める。彼らが日々考えることをわたしは露わにし、そして反撃する。ある時点までくると、人々はもはや考えることをしなくなり、頭が空っぽになって何の思考も持たなくなり、完全にわたしの言葉に従うようになる。それが、あなたがたが靈的領域に入る時である。これこそが、あなたがたが靈的領域に入ることをわたしが許す前の、わたしの働きの段階である。あなたがたは、聖く染みのないものとなって靈的領域に入る前に、人間の観念を取り除かなければならない。これこそが、「わたしは聖い靈的体である。」という言葉の本来の意味である。しかしあなたがたはわたしの段階に従って行動しなければならず、あなたがたが気づく前に、わたしの時は来る。

第百七章

わたしの言葉がある程度の厳しさに達する時、ほとんどの人はわたしの言葉故に退く。わたしの長子たちが明らかにされるのはまさにその瞬間である。わたしは、指一本上げることなく、わたしの言葉だけを用いて全てを成し遂げると言った。わたしはわたしが憎む全てのものを言葉によって破壊し、また言葉を用いてわたしの長子たちを完全にする。（わたしの言葉が語られると、七つの雷が轟き、その時にわたしの長子たちとわたしは姿を変えて靈的領域に入る。）わたしの霊が直接働くとわたしが言ったのは、わたしの言葉は全てを達成し、それによって人はわたしが全能であることを知るという意味である。よって、人はさらに明確に、わたしの一文一文に込められた目標と目的を知るのである。わたしがその人間性にあって言うことは、全てわたしの現れの一側面であると、わたしは以前言った。それ故、わたしが普通の人間性にあって言うことに確信を持ってない者や、それを心から信じない者はみな、排除されねばならない。わたしの普通

の人間性は、わたしの完全な神性の欠かせない側面であると繰り返し強調してきたが、あまりに多くの人々が未だにわたしの完全な神性に焦点を当てて、わたしの人間性を無視している。あなたは盲目なのだ。わたしはあなたの観念に一致しない、わたしという人間はあなたの神に一致しないと、あなたは言う。そのような人々がわたしの国に残れるだろうか。わたしはあなたをわたしの足で踏みにじるだろう。あなたは何としてもわたしに反抗しようとする。そのようなわがままを続けられるものなら続けなさい。わたしの微笑みはあなたの観念には合わず、わたしの語る言葉はあなたの耳には心地よくはなく、わたしの行いはあなたに益とはならない、そうではないか。これらのものはみな、あなたの好みに合わなければならない——それは神だと言えるだろうか。それでもこれらの人々は、わたしの家に留まり、わたしの国で祝福を受けることを願う。あなたは夢でも見ているのではないのか。どうしてそんな素晴らしいことがありえようか。あなたはわたしに逆らいたいのだが、それでもわたしの祝福を受けることを願う。あなたに言おう。それはならない！わたしの国に入り、わたしの祝福を受ける者は、わたしが愛する者でなければならないとは、これまで何度も言ってきたことである。なぜわたしはそれらの言葉を強調するのか。わたしは全ての者たちが心の中で何を思っているかを知り、理解しており、彼らの思いを指摘する必要などない。彼らの正体は、わたしの裁きの言葉によって露わにされ、わたしの裁きの座の前でみな悲しみに泣き叫ぶ。これは誰も変えることのできない明白な事実である。最終的に、わたしは彼らを一人ずつ底なしの穴へと入らせる。これが悪魔であるサタンへのわたしの裁きの最終的効果である。一人ひとりを扱うために、わたしは裁きと行政命令を用いなければならない。これがわたしの刑罰の方法である。あなたがたにはこの事に関する本当の識見があるだろうか。わたしはサタンに説明する必要はない。ただわたしの鉄の杖を使い、死ぬ一歩手前で繰り返し慈悲を請うまでサタンを打つだけだ。ゆえに、人々はわたしの裁きの言葉を読んだところでほんの少しも理解できないが、わたしの観点から見れば、その一行一行、文章のひとつひとは、どれもわたしの行政命令の遂行なのである。これははっきりとした事実である。

今日わたしは裁きについて語るのも、それは裁きの座に関連する。あなたがたは以前何度も、自分たちがキリストの玉座の前で裁きを受けると言っていた。あなたがたは裁きに関して理解しているが、裁きの座を想像することはできない。裁きの座とは、物理的なものとする人たちもおそらくいるだろう。彼らは、大きなテーブルを想像したり、この世の裁判の席を想像したりするかもしれない。もちろん、今回のわたしの説明で

は、わたしはあなたがたが言ったことを否定はしない。だがわたしに言わせれば、人々の想像するものにはいまだに象徴的な意味がある。したがって、人々の想像とわたしの元来の意味の間にある溝には、依然として天と地ほどの距離がある。人々の観念によれば、大勢の人たちが裁きの座の前でひれ伏し、悲しみに泣き叫びながら慈悲を請うというようなものである。人間の想像はそこまでが限界で、それ以上を想像できる者はいない。では裁きの座とは何であろうか。わたしが奥義を解き明かす前に、あなたがたはこれまでの考えを全て否定しなければならない。そうして初めて、わたしの目的が達成されるのだ。この領域にあるあなたがたの観念と考えを一掃するにはこの方法しかない。わたしが話すときは、あなたがたはいつも注意を払わなくてはならない。不注意であってはならない。わたしの裁きの座は、世界の創造以来ずっと確立されている。時代を超え、世代を超えて、多くの人々がわたしの裁きの座の前で死に、多くの人々が立ち上がり、甦った。最初から最後まで、わたしの裁きは止まることがないので、わたしの裁きの座は常に存在するとも言える。わたしの裁きの座が言及される時、人間はみな一抹の不安を感じる。勿論、今わたしがすでに語ったことから、あなたがたは裁きが何であるか全く理解していない。裁きの座と裁きは共存するが、それぞれ別のものである。（ここで言う「もの」は物理的な物ではなく、言葉を意味する。人間には全く見えないものである。）裁きはわたしの言葉を意味する。（厳しいものであれ優しいものであれ、すべてがわたしの裁きの中に含まれている。従って、わたしの口から出るものは全て裁きである。）以前人々は、わたしの言葉をいくつもの異なる種類に分けていた。裁きの言葉、優しい言葉、いのちを与える言葉というように。今日、わたしは裁きとわたしの言葉が互いに関連していることをあなたがたに明確にする。つまり、裁きはわたしの言葉であり、わたしの言葉は裁きである。あなたがたはそれらを別々のものとして語ってはならない。人々の想像では、厳しい言葉が裁きだが、それは部分的な理解に過ぎない。わたしの言うこと全てが裁きである。以前述べた裁きの始まりとは、わたしの霊があらゆる場所で正式に働き始め、わたしの行政命令を実施することを意味する。ここでの「裁き」は現実的なものを指す。それでは裁きの座について説明しよう。わたしは何故、裁きの座はとこしえからとこしえまで存在し、わたしの裁きとともにあると言ったのか。あなたがたは、裁きに関するわたしの説明からそれを理解できるだろうか。裁きの座とはわたしという人間を指している。とこしえからとこしえまで、わたしは常に声を発し、語っている。わたしは永遠に生きている。それ故わたしの裁きの座とわたしの裁きは永遠に共存する。この事を今明瞭に理解しなければならない。人々は自分の想像の中でわたしを物として扱うが、そのことについてわたしはあなたがたを咎めも非難もしな

い。わたしはひたすら、あなたがたが従順な心でわたしの啓示を受け入れ、それによってわたしが全てを包括している神自身であると知ることを願う。

わたしの言葉は人々には全く理解できず、わたしの足跡は人々には見つけることができず、わたしの旨は人々には把握することができない。従って、あなたがたの今の状態（わたしの啓示を受け、その中にあるわたしの旨を把握し、それを通してわたしの足跡を辿ることができている）は、全てわたしの奇しい業、わたしの恵みと憐れみの結果である。いつの日か、わたしはあなたがたにわたしの知恵さえ知るようにさせ、わたしがこの手で為してきたことを見せ、わたしの働きの奇しさを見させる。その時、わたしの経営（救いの）計画全体の青写真が完全にあなたがたの前で明らかにされるだろう。宇宙世界全体に日々わたしの奇しい業の現れがあり、その全ては、わたしの経営（救いの）計画が達成されるために役立つ。それが完全に明らかにされた時、あなたがたは、わたしがどのような人々に奉仕させ、どのような人々にわたしの旨を成就させることを定め、わたしがサタンを利用することで何を成し遂げ、わたし自身が何を達成し、どのような人々が泣き、どのような人々が歯ぎしりし、どのような人々が滅びを体験し、どのような人々が地獄の苦しみを味わうかを知るだろう。ここで「滅び」とは、わたしによって火と硫黄の湖に投げ込まれ、焼き尽くされる人のことを指し、「地獄」とは、底なしの穴に投げ入れられてそこで永遠に苦悩する人のことを指す。だから、滅びと地獄を同じものとして誤解してはならない。それどころか、それらは全く異なるものである。今日わたしの名を離れる効力者たちは地獄の苦しみを経験することになり、わたしの名によらない者は滅びへと陥る。それだから、わたしは、地獄を経験する者は裁きの後にわたしに永遠の讃美を捧げると言ったのだ。だがこれらの人々はわたしの刑罰を決して逃れることはなく、常にわたしの支配を受け入れることになる。底なしの穴が人々に刑罰を加えるわたしの手であるとわたしが言ったのはそれ故である。また、わたしは、全てはわたしの手の中にあると言う。「底なしの穴」はサタンの影響のことを指しているとわたしは言ったものの、それはまた、人々を罰するわたしの手の中にもある。だから、わたしが全てはわたしの手の中にあると言うとき、そこに矛盾はないのだ。わたしの言葉は無責任なものではない。それは適切で一貫性のあるものである。でっちあげでも、ばかげたものでもなく、誰もがわたしの言葉を信じるべきである。このこと故に、将来あなたがたは苦しむだろう。わたしの言葉故に、多くの人々が冷たくなり、失望し、落胆し、泣いたり涙したりする。実に様々な反応の仕方があるだろう。ある日、わたしの憎む全ての人々がなくなった時、わたしの働きは完成する。将来、多くの人々は長

子たちが理由で躓き、最終的には一步步離れて行くだろう。つまり、わたしの家は徐々に聖くなり、あらゆる悪魔はわたしの傍らからゆっくりと退く――静かに、服従して、不平ひとつ言わずに。その後、わたしの長子たちが明らかにされ、わたしは働きの次の段階を開始する。その時初めて、わたしの長子たちはわたしと共に王となり、全宇宙を支配する。これがわたしの働きの段階であり、わたしの経営（救いの）計画の重要な部分を構成する。これを見落としてはならない。さもないと、あなたは誤解することになる。

わたしの言葉があなたがたに明らかにされる時こそ、わたしが自身の働きを始める時である。わたしの言葉はひとつとして成就しないことはない。わたしにとって一日は千年のようで、千年は一日のようである。あなたがたはそれをどのように見るだろうか。あなたがたの時間の観念はわたしのものとはぜんぜん違う。なぜなら、わたしは宇宙世界を司り、全てを成し遂げるからだ。わたしの働きは日ごと、段階ごと、ステージごとに為され、更に、わたしの働きは一瞬たりとも止まることはなく、ひたすら前進し続ける。世界の創造以来、わたしの言葉が中断されたことはない。わたしは語り続け、声を発し続けてきて、今日も、そして今後もそれは変わりなく続く。しかしながら、わたしの時間は注意深く計画され、調整され、非常に整然としている。わたしは為すべき事を為すべき時に行い（わたしにおいては、全ては解放されており、全ては自由である）、またわたしの働きの各段階について、わたしはほんの少しも妨げられない。わたしはわたしの家の全ての者を整えることができ、世界の全ての者を整えることができるが、全く忙しくはない。それは、わたしの霊が働いているからであり、わたしの霊があらゆる場所を満たすからであり、また、わたしは唯一の神自身であり、宇宙世界全体がわたしの手の中にあるからである。こうして人は、わたしが全能であり、わたしには知恵があり、わたしの栄光は宇宙の隅々に満ちていることを見ることができる。

第百八章

わたしの中では、すべての者が安息を得て、自由になることができる。わたしの外にいる者たちは皆、自由も幸福も得ることができない。わたしの霊は彼らと共にいないからだ。そのような人々は霊のない死体と呼ばれる。一方わたしの中にいる者たちを、わたしは「霊を持つ生き物」と呼ぶ。彼らはわたしに属し、わたしの玉座に戻ってくることになる。効力者たち、そして悪魔に属する者たちは、霊のない死体であり、すべて滅ぼされて無に帰さねばならない。これはわたしの経営（救いの）計画の奥義であり、わ

たしの経営計画のうち人間には計り知れない部分である。しかし同時に、わたしはこれをすべての者に明らかにした。わたしに属さない者はわたしに敵対するものであり、わたしに属するものはわたしと相容れる者である。これはまったく疑う余地のないことであり、サタンに対するわたしの裁きの原則である。この原則はすべての者が知らねばならない、そうすればわたしの義と正しさを見ることができる。サタンから来る者はすべて裁かれ、焼き尽くされ、灰となる。これもまたわたしの怒りであり、ここからわたしの性質がさらに明らかになる。今後はわたしの性質が広く知らされることになり、徐々にすべての人とすべての国々、宗教、教派、あらゆる階級の人々に対して露わにされる。何一つ隠されることはなく、すべてが明らかにされる。わたしの性質と行動の原則は人類にとって最も隠された奥義であるため、こうしなければならないのだ（そうすることで長子たちはわたしの行政命令に背くことがなくなり、また同時に、わたしの露わにされた性質を用いてすべての人とすべての国々を裁けるようになる）。これがわたしの経営計画であり、これらはわたしの働きの段階なのだ。誰も軽率にそれを変えることはできない。わたしはすでに人間性の中で神性の完全な性質を生きているので、誰にもわたしの人間性を侵害させはしない。（わたしが生きるすべては神としての性質である。だからわたしは以前、自らが普通の人間性を超越した神自身だと言ったのだ。）わたしはわたしに背く者を決して赦さず、永遠に消滅させる。覚えておくがよい。これはわたしが決めたことであり、言い換えればわたしの行政命令の不可欠な部分なのだ。すべての人は知るがよい。わたしという存在は神であり、さらに神自身なのだ。このことはもう明確になっていなければならない。わたしは不注意に語ることはない。あなたが完全に理解するまで、わたしはすべてを明確に語り指摘する。

状況は非常に緊迫している。あなたがたにはわたしの家の中だけでなく、家の外ではなおさらのこと、すべての側面においてわたしの名を証しし、わたしを生き、わたしの証人となることを要求する。今は終末の時なので、すべての準備が整いすべてが本来の姿を維持しており、決して変わることはない。排除されるべきは排除され、保持されるべきは保持される。無理矢理しがみついたり、押しのけたりしてはならない。わたしの経営計画を妨害したり、わたしの計画を壊したりしてはならない。人間の目から見れば、わたしは人類に対して常に愛と憐れみに満ちているが、わたしから言えば、わたしの性質には働きの段階に応じて違いが出る。なぜならわたしは実践の神自身であり、唯一の神自身だからだ。わたしは不変であり、同時に常に変化している。これは誰にも理解できないことだ。わたしがあなたがたに語り、説明したときにのみ、あなたがたはそれ

を明確に理解し把握できるようになる。わたしは子らに対しては愛情深く、憐れみ深く、義であり、懲らしめることもあるが裁くことはしない（これは長子たちを滅ぼすことではないという意味だ）。長子以外の人々に対しては、わたしは時代の変遷に応じていつでも変化する。愛情深くもあり、憐れみ深く、義であり、威厳に満ちることもあれば、裁きを行い、怒りに満ち、呪い、焼き尽くし、最終的に彼らの肉を滅ぼすこともある。滅ぼされる者は霊と魂も同時に消滅する。だが効力者たちは、霊と魂のみ保たれる（これを具体的にどう実践するかについては、後ほど理解できるように説明する）。しかし彼らは決して自由を手に入れることはなく、解放されることもない。なぜなら彼らはわたしの民の下にあり、わたしの民の支配下にあるからだ。わたしがこれほど効力者たちを忌み嫌ったのは、彼らがみな赤い大きな竜の子孫だからであり、効力者でない者たちもまた、赤い大きな竜の子孫なのだ。つまり、長子たち以外の者はみな赤い大きな竜の子孫なのである。地獄に落ちた者たちがわたしを永遠に讃美すると言うのは、彼らが永遠にわたしに奉仕するという意味だ。このことは絶対不変である。その人々は常に奴隷であり、牛馬なのだ。わたしはいつでも好きな時に彼らを抹殺し、思いのままに支配できる。彼らは赤い大きな竜の子孫であり、わたしの性質を持ち合わせていないからだ。また彼らは赤い大きな竜の子孫なので、竜と同じ性質を持っている。つまり獣の性質を持っているのだ。これは紛れもない真実であり、永遠に変わることがない。これは、そのすべてをわたしが予め定めたからだ。誰もそれを変えることはできない（つまり、わたしは誰もこの規定に反して行動することを許さない）。それを試みるなら、わたしはあなたを打ち倒す。

あなたがたはわたしが明らかにした奥義から、わたしの経営計画と働きがどの段階にまで進んでいるかを知らねばならない。わたしがこの手で行うことを知り、わたしの裁きと怒りが誰に下るかを見なさい。これがわたしの義である。わたしは明らかにした奥義に基づいて、働きを展開し計画を経営する。これを変えられる者はいない。わたしの願望に従って、一步一步進められなければならないのだ。奥義とはわたしの働きが為される道であり、わたしの経営計画の段階を示すしるしである。誰もわたしの奥義に何かを足したり引いたりしてはならない。なぜなら奥義が間違っていれば、道も間違ったものになるからだ。なぜわたしは今、あなたがたに奥義を露わにするのか。その理由は何か。あなたがたの誰がそれを明確に説明できるのか。さらに、わたしは奥義が道であると言ったが、この道とは何を指しているのか。それはあなたがたが肉から体の中へ入るときに通る過程であり、重要な段階である。わたしが奥義を明らかにすると、人々の観

念は徐々に取り除かれ、思考は徐々に薄れていく。それが、霊的領域へと入る過程である。そのためわたしの働きは段階ごとに行われると言うのであり、それは曖昧なものではない。それは現実であり、わたしの働き方なのだ。誰もそれを変えることはできず、わたし以外の誰もそれを成し遂げることはできない。わたしが唯一の神自身だからだ。わたしの働きはわたし自身によって直接完成される。宇宙世界全体がわたし一人によって支配され、わたし一人によって整えられるのだ。あえてわたしに耳を傾けない者などいるだろうか。（「わたし一人」というのは神自身という意味だ。なぜならわたしという人は神自身であるからだ。だから自分の観念にしがみつくとはいえなさい。）わたしにあえて逆らう者がいるだろうか。そのような者は厳しく罰せられる。あなたがたは赤い大きな竜の結末を見ただろう。あれがその最後であり、そしてそれは避けられないことなのだ。その働きは、赤い大きな竜を辱めるため、わたし自身が行わなくてはならない。竜は二度と立ち上がることができず、永遠に滅ぼされるのだ。今、わたしは奥義を露わにし始めている。（覚えておきなさい、露わにされる奥義のほとんどは、あなたがたがしばしば口にするが誰も理解しないものだ。）すでに言ったように、人々には未完成に見えるすべてのものが、わたしの目にはすでに完成されており、わたしの目にはまだ始まったばかりものが、人々にはすでに完成されているように見えるのだ。これは逆説的だろうか。いや、そうではない。人々がそのように考えるのは、独自の観念と考えを持っているからだ。わたしが計画することは、わたしの言葉を通して完成される（わたしが確立されると言った時に確立され、わたしが完成すると言ったときに完成する）。しかしわたしには、わたしが言ったことが完成しているようには見えない。なぜなら、わたしのすることには制限時間があるからだ。そのためわたしにはそれらが未完成に見えるが、人々の肉の目には（時間観念の相違のため）、すでに完成されているように見えるのだ。最近ではほとんどの人が、わたしが露わにする奥義のために、わたしに対して懐疑的である。現実の到来のため、そしてわたしの意図が人間の観念にそぐわないため、人々はわたしに抵抗し、わたしを否定するのだ。これはサタンが自分で自分の罠に掛かっているのである。（彼らは祝福を得たいのだが、神が自分たちの観念からそれほど外れているとは思わなかったため、退いてしまうのだ。）これもまたわたしの働きの効果である。すべての人々はわたしを讃美し、歓喜の声を上げ、わたしに栄光を帰さねばならない。何もかもすべてのものがわたしの手中にあり、何もかもすべてのものがわたしの裁きの内にある。すべての人がわたしの山に流れ着く時、そして長子たちが勝利して戻ってくる時、それがわたしの経営計画の終着点だ。それはわたしの六千年の経営計画が完成する時となる。すべてはわたしが自ら整えたのであり、このことはすでに

何度も言った。あなたがたはいまだに自分の観念の中に生きているので、このことは繰り返し強調し、あなたがたがここで何か間違えてわたしの計画を妨げないようにしなければならない。人々はわたしの助けとなることもできなければ、わたしの経営に参加することもできない。あなたがたは現在のところ、いまだに肉と血によるものだからである（あなたがたはわたしに属してはいるが、今も肉の中で生きている）。だからわたしは、肉と血によるものはわたしの嗣業を受け継ぐことができないと言うのだ。これはまた、あなたがたを霊的領域に入らせる主な理由でもある。

世界においては、地震が災いの始まりとなる。まず最初に、わたしはこの世界、つまり地を変え、次に疫病と飢餓が続く。これがわたしの計画であり、これらがわたしの段階であり、わたしはあらゆるものを動員してわたしに仕えさせ、わたしの経営計画を全うする。こうして、わたしが直接関与することなく、宇宙世界全体が滅ぼされるだろう。わたしが最初に肉となり十字架にかけられたとき、地は激しく揺れたが、終わりの時にもそれと同じことが起こる。わたしが肉から霊的領域に入った瞬間に、地震が起こり始める。そのため、長子たちが災害に遭うことは絶対になく、一方長子以外の人々は災害の中に取り残されて苦しむことになる。それゆえ人間の観点からすれば、誰もが長子になることを望む。人々の予感によれば、それは祝福を享受するためではなく、災難の苦しみから逃れるためだ。これは赤い大きな竜の企みである。だが、わたしは赤い大きな竜を逃がしはしない。竜にはわたしの厳しい罰を受けさせ、その後立ち上がらせてわたしに奉仕させ（これはわたしの子らと民を完全にすることを意味する）、永遠に自分自身の策略に欺かれ、永遠にわたしの裁きを受け、永遠にわたしの炎で焼かれるようにする。これが、効力者たちにわたしを讃美させるということの本当の意味である（すなわち彼らを用いてわたしの偉大な力を示すのだ）。赤い大きな竜はわたしの国に忍び入ることを許さず、わたしを讃美する権利も与えはしない（竜はそれに値せず、将来も決して値しないからだ）。竜にはただ永久に、わたしに奉仕させるだけだ。ただわたしの前にひれ伏されるのだ。（滅ぼされる者たちは、地獄にいる者たちよりまだましである。滅びは単なる一時的な重い罰だが、地獄にいる者たちは永遠に厳しい罰を受けることになる。このためわたしは、「ひれ伏す」という言葉を使うのだ。これらの人々はわたしの家に忍び込み、多くの恵みを享受し、わたしに関する認識をいくらか持っている。ので、厳しい罰を与える。わたしの家の外にいる者たちについては、無知な者は苦しめないと言うこともできる。）人々の観念では、滅びる者のほうが地獄にいる者より悲惨だと考えられるが、逆に地獄にいる者たちは永遠に厳しい罰を受けなければならず、滅

ぼされる者たちは永久に無に帰するのだ。

第百九章

わたしは日々言葉を発し、日々語り、わたしの偉大なしるしと不思議を日々現わしている。これらは全てわたしの霊の働きである。人々の目にはわたしは一人の人間でしかないが、わたしがわたしの全てとわたしの偉大な力を現わすのは、正にこの人間においてなのである。

人々はわたしという人間と、わたしの行動を無視するので、彼らはこれらのことが人間によって為されたことと考える。だがあなたはどのように考えないのか。人々には、わたしが為すことを成し遂げることができるだろうか。人々はそれ程までわたしを知らず、わたしの言葉を理解せず、わたしの行いを理解できない。邪悪な、墮落した人間たちよ。いつお前を飲み込もうか。いつ火と硫黄の池に沈めようか。わたしは幾度もあなたがたの群から追い払われ、幾度も人々に侮辱され、嘲られ、中傷され、幾度も公に裁かれ、反抗されてきた。盲目の人間たちよ。あなたがたは自分がわたしの手の中にある一握りの土に過ぎないことを知らないのか。あなたがたは自分がわたしの創造物であることを知らないのか。今やわたしの怒りが発せられ、それから自分を防御できる者はいない。彼らは何度も憐れみを請う以外にない。しかしわたしの働きはここまで進んで来たので、それを変えられる者は一人もいない。造られたものは土に帰らなければならない。わたしが不義なのではなく、あなたがたが過度に墮落していて、好き勝手ばかりしているからであり、あなたがたがサタンの虜になり、その道具になっているからである。わたしは聖なる神自身であり、けがされることはなく、けがれた宮を所有することはない。今後、わたしの（怒りより重い）燃える怒りが全ての国々と人々に注がれ、わたしから出ているけれどもわたしを知らない屑をみな罰し始める。わたしは極限まで人間を憎み、これ以上憐れみをかけることはなく、わたしの全ての呪いを降らせる。これ以上絶対に慈悲も愛もなく、全ては焼き尽くされて無に帰す。そしてわたしの国のみが残し、わたしの民がわたしの家でわたしを賛美し、わたしに栄光を帰し、永遠にわたしを歓呼する（これがわたしの民の役割である）。わたしの手は、わたしの家の中にいる者たちと外にいる者たちの両方を正式に罰し始める。悪事を行う者はひとりとして、わたしの手とわたしの裁きから逃れることはできない。誰もがこの厳しい試練を経験してわたしを礼拝しなければならない。これがわたしの威厳であり、更に、わたしが悪事を行うものに宣言する行政命令である。他の者を救うことは誰にもできない。彼ら

はただ自分たちの世話をするだけで、何をしても、わたしの刑罰の手を逃れることはできない。わたしの行政命令が厳しいと言われる理由がここにある。これは誰もが自分の目で見ることができる事実である。

わたしが怒り始める時、悪魔は大きいものも小さいものも、皆わたしに打ち殺されることを恐れ、大慌てで逃げる。だがわたしの手から逃げられるものは誰もいない。わたしは拷問用の道具を全て握り、わたしの手は全てを支配しており、全てはわたしの掌中にあり、だれも逃れることはできない。これがわたしの知恵である。人間の領域に來た時、わたしは準備の働きを全て完了しており、人間の間でわたしの働きを始める為の基礎を築いていた（わたしは知恵ある神であり、すべき事とそうでない事を適切に扱うからである）。全てが適切に準備されると、わたしは肉となり、人間の領域に現れたが、誰ひとりとしてわたしに気づかなかった。わたしが啓いた人々を除いては、反逆の子たちはみなわたしに反抗し、わたしを辱め、冷たくあしらった。だが最後には、わたしは彼らをおとなしくさせ、従順にする。わたしが大したことをしていないように人々には見えるが、わたしの大いなる働きは既に完了している。（人々はみな、人間であるわたしに言葉と心の両方において完全に従う。これはしるしである。）今日、わたしは立ち上がって、わたしに逆らうあらゆる邪惡な靈を罰する。どれほど長くわたしに従って來たかに関わらず、彼らはわたしの傍らから去らなければならない。わたしは、わたしに敵対する者は誰も欲しない（彼らは靈的理解に欠ける者たちであり、一時的に邪惡な靈に取り憑かれた者たちであり、わたしを知らない者たちである）。わたしはそのような者たちを一人として欲しない。全員取り除かれ、地獄の子らとなるのだ。今日わたしの為に奉仕した後に、全員去らなければならない。わたしの家に残ってはならない。恥知らずな居候であってはならない。サタンに属する者はみな悪魔の子であり、永遠に消滅する。わたしに逆らう者はみな静かにわたしの傍らを去るので、わたしの働きは今のよう邪魔されたり中断されたりすることなく進む。全ての物事は何の障害も妨害もなく、わたしの命令によって為される。全てはわたしが見ている前で倒れ、わたしの火で焼き尽くされ滅びるであろう。これはわたしの全能性とわたしの完全なる知恵（わたしが長子たちの中で行ったこと）を示している。それはわたしの名に更に大いなる栄光を歸し、わたしに大いなる栄光を加えることになる。わたしの行う事とわたしの声の調子から、あなたがたはみな、わたしがわたしの家での働きを全て完了し、異邦人の国々へと目を向け始めたことを知るであろう。わたしはそこでわたしの働きを始め、次の段階の働きを実行しているところである。

わたしの言葉のほとんどは、あなたがたの観念には合わないが、わたしの子どもたちよ、わたしの元を去ってはならない。人間の観念に合わないということは、それがわたしの声ではないという意味ではない。正にそれこそが、これがわたしの声であるという証拠である。人間の観念に合うならば、それは邪悪な霊の働きである。だから、あなたがたはわたしの言葉にもっと努力を注ぎ、わたしのする事を行い、わたしの愛するものを愛さなければならない。この最後の時代は、全ての災難が再び起きる時代でもあり、なによりも、わたしがわたしの全ての性質を現わす時代でもある。わたしの聖なるラッパがみな鳴り響くと、人々は心から恐れ、邪悪な行いをしようとする者は一人もいなくなり、わたしの前でみなひれ伏し、わたしの知恵と全能性を理解するようになる。結局のところ、わたしは知恵ある神自身なのである。誰がわたしに反論できるだろうか。だれが立ち上がってわたしに敵対しようとするだろうか。誰がわたしの知恵を認めないことなどだろうか。だれがわたしの全能性を知らないことなどだろうか。わたしの霊があらゆる場所で大いなる働きをしている時、人々はみなわたしの全能性を知るが、わたしの目標はまだ達成されていない。わたしは、人々がわたしの怒り故に、わたしの全能性を知り、わたしの知恵を知り、わたしの本体の栄光を知ることを願う。（これは間違いなく、全て長子の中にある。彼らを除いては、誰もわたしの本体の一部となることはできない。これはわたしにより定められている。）わたしの家では、人々にははかり知れない奥義が限りなくある。わたしが語ると、人々はわたしが余りに情けがないと言う。彼らは、多くの人々が既にわたしをある程度愛していると言う。だが、彼らは赤い大きな竜の子孫だとわたしが言うのは何故か。そしてわたしが彼らを一人ずつ見捨てるのは何故か。わたしの家にいる人が多い方が良くはないか。それでもわたしはこのように行動する。わたしが予め決めた人数より、一人多くても、一人少なくてもいけない。（これはわたしの行政命令である。それは人々が変えられないだけでなく、わたし自身も変えることができない。なぜなら、わたしはサタンに屈する訳にはいかないからだ。わたしの知恵と威厳を示すにはこれで十分である。わたしは唯一の神自身である。人々はわたしの前にひれ伏すが、わたしが人々の前で屈することはない。）サタンを最も辱めるのは正にこの点である。わたしが選んだ人々はみな謙遜で、従順で、素直で、正直であり、謙虚で、誰にも知られずにわたしに仕えることができる。（サタンはこの事を利用してわたしを辱めようとしたが、わたしは反撃した。）わたしの性質はこれらの人々から知ることができる。わたしは戦いに勝利して戻った時、わたしの長子たちに油を注ぎ、わたしの国の王にする。そして、わたしはその時初めて安息を得始める。それは、わたしの長子たちがわたしの傍らで王となるからだ。わたしの長子たちはわたしの代

表であり、彼らはわたしを表現する。彼は謙虚に、誰にも知られずに仕える中で、わたしに従い、誠実さの中でわたしの言葉を実行し、誠実さの中でわたしの言うことを語り、謙虚さの中で、わたしの名に栄光をもたらす（横柄さも野蛮さもなく、威厳と怒りをもって）。わたしの長子たちよ。宇宙世界を裁く時が来た。わたしはあなたがたに祝福を受け、あなたがたに権威を与え、祝福をもって報いる。全てのことは既に完成し、あなたがたによって全ては支配され、采配されている。わたしがあなたがたの父であるからだ。わたしはあなたがたの堅固なやぐら、あなたがたの避け所、あなたがたの支え、更には、あなたがたの全能なる存在、あなたがたの全てである。全てのものは、わたしの手の中にあり、また、あなたがたの手の中にもあるのだ。今日だけでなく、昨日も明日もである。これは記念するに値しないだろうか。あなたがたが歓喜するに値しないだろうか。あなたがたは皆、自分の受けるべき分をわたしから受けるがよい。わたしはあなたがたにわたしの全てを与え、何一つ残しておくことはない。わたしの全財産はあなたがたのものであり、わたしの富みはあなたがたの上にあるからだ。わたしがあなたがたを創造したのち、「非常に良い」と言ったのはそれ故である。

あなたがたは、自分が今日する事、考える事、言う事を誰が指示しているか知っているだろうか。あなたがたがする事全ては何のためだろうか。あなたがたに尋ねる。小羊の婚宴にはどうやって出席するのだろうか。それは今日だろうか。それとも将来のことだろうか。小羊の婚宴とは何だろうか。あなたがたはそれを知らないのだろうか。それでは説明しよう。わたしは、人間の領域に来た時、今のわたしという人間に仕えさせる為に、あらゆる種類の人々と物事を準備した。全てが完了した今、わたしは効力者たちを放り出す。このことは小羊の婚宴と何の関係があるのだろうか。この人々がわたしに奉仕を提供する時、つまり、わたしが小羊とされる時、わたしは婚礼の宴の味を知るのである。言い換えると、わたしが生涯の中で体験したあらゆる苦しみ、わたしが為したあらゆること、わたしが語ったあらゆること、わたしが出会った全ての人々、そしてわたしが為した全ての事が婚宴を構成しているのである。人間であるわたしに油が注がれた後、あなたがたはわたしに従った（この時わたしは小羊だった）ので、わたしの指導の下、あなたがたはあらゆる苦痛、災難を経験し、この世から捨てられ、けなされ、家族に捨てられ、そしてわたしの祝福の中で生きている。これらは全て小羊の婚宴である。わたしが婚宴を用いるのは、わたしに導かれてあなたがたが為すことは、全てあなたがたを獲得するためのものだからである。だがこれは全て婚宴の一部である。将来（今日と言ってもよいが）、あなたがたが楽しむこと全て、あなたがたが得るもの全て、そし

てあなたがたがわたしと共有する王としての力は、全て婚宴であると言うことができる。わたしの愛は、わたしを愛する全ての者に訪れる。わたしが愛する者は永遠に残り、決して排除されることはなく、永遠にわたしの愛の中にいるであろう。永遠に、である。

第百十章

全てが明らかにされる時が、わたしが安息を得る時であり、更には、全てが秩序正しく整う時である。わたしは自分自身で働きを行う。わたしは自ら全てを指揮し、全てを采配する。わたしがシオンから出て来る時、そしてわたしが戻る時、わたしの長子たちがわたしによって完全にされる時、わたしの偉大な働きは完成しているであろう。人々の観念では、何かが為された時は、それは見えたり触れたりできるはずだが、わたしの見方によれば、わたしが計画した時点で全ては完成しているのである。シオンはわたしの住むところであり、わたしの終着点である。そこでわたしは、わたしの全能性を現わし、わたしの長子たちとわたしが家族の幸せを共有するのもそこである。そこでわたしは彼らと共に永遠に生きるのである。シオン、美しい場所。シオン、人々が恋い慕う場所。数え切れないほど多くの人々が、いくつもの時代を超えてシオンを熱望してきたが、初めからシオンに入れた者は一人もいない。（過ぎ去った時代のどの聖徒や預言者たちでさえも。それは、わたしが終わりの日にわたしの長子たちを選んでいからであり、彼らはみなこの期間に生まれてきているからである。そしてそれを通して、わたしが語ったわたしの憐れみとわたしの恵みが更に明らかになるのである。）今長子である者は一人ひとり、わたしとシオンに入り、その祝福を享受するであろう。わたしは、わたしの長子たちをある高みまで引き上げている。なぜなら、彼らはわたしの素質と栄光ある姿を有しており、彼らはわたしの証しとなることができ、同時にわたしに栄光を帰し、わたしを生きることができるからである。更に、彼らはサタンを打ち負かすことができ、赤い大きな竜を辱めることができる。そしてそれは、わたしの長子たちはきよいおとめだからである。彼らはわたしの愛する者たちで、わたしが選び、わたしが特別好意を寄せる者たちである。わたしが彼らを引き上げるのは、彼らが自分たちの地位に立っていらるからで、謙って、静かにわたしに仕え、わたしの力ある証しとなっているからである。わたしは、わたしの活力の全てをわたしの長子たちに費やし、あらゆる人々と物事が彼らに奉仕する為に注意を払って整えた。わたしは最終的には、誰もがわたしの長子たちからわたしの全ての栄光を見るようにし、わたしの長子たちにより、全ての人が納得するようにする。わたしはどの悪魔にも強制することはせず、悪魔どもがはび

こることも、彼らの無謀さも恐れない。なぜなら、わたしには証しがあり、わたしの手には権威があるからだ。注意して聞きなさい。サタンの仲間たちよ。わたしが発するすべての言葉、わたしが行うすべてのことの裏にある目的は、わたしの長子たちを完全にすることである、したがって、あなたはわたしの命令に注意し、わたしの長子たちに従わなければならない。そうでなければ、わたしはすぐさまあなたに地獄の苦しみを味わわせることで、あなたを取り扱う。わたしの長子たちは既にわたしの行政命令を実施し始めた。なぜなら、彼らはわたしの玉座を支えるに値し、わたしは既に彼らに油を注いだからだ。わたしの長子たちに従わない者は誰も全くろくな者ではない。間違いなく、彼らは、わたしの経営（救いの）計画を混乱させるために、赤い大きな竜に送り込まれた者たちであり、そのような悪党は直ちにわたしの家から追い出されなければならない。そのようなものにわたしの奉仕をさせたいとは思わない—そのようなものは永遠の滅びに直面するであろう。そして、遅れることなく、すぐに直面するだろう。わたしのために奉仕する者たちは、既にわたしの承認を得た人たちにちがいない。彼らは従順で、どんな代価を払うこともいとわない者でなければならない。もし彼らが反抗的であるなら、彼らはわたしへの奉仕には値せず、わたしはそのような被造物を必要としない。急いで立ち去りなさい。わたしはそのような者たちを絶対に望まない。あなたはこの点をはっきりと知らなければならない。わたしのために奉仕する者は、それをしっかりと行い、問題を起こさないようにしなければならない。もしあなたには希望がないと感じ、問題を起こし始めたならば、わたしは直ちに、あなたの息の根を止める。わたしのために奉仕している者たちよ、この点を明確に理解しているか。これはわたしの行政命令である。

わたしのために証しすることは、わたしの長子たちの本分であるので、わたしはあなたがたに何かをするように要求することはない。ただ、本分をしっかりと果たし、わたしが与える恵みを享受し、そうすることでわたしの心を満足させればよい。わたしが宇宙と地の隅々まで旅した時、わたしはわたしの長子たちを選び、完全にした。これは、わたしが世界を創造する前に完成したことである。このことを知る人間はひとりもおらず、わたしの働きは静かに達成された。それは人間の観念とは一致しない事なのである。しかし事実は事実であり、誰にも変えられないのだ。大小の悪魔どもは偽装を脱いでその正体を現わし、様々な程度で、わたしの刑罰の対象となった。わたしの働きには段階があり、わたしの言葉には知恵がある。わたしが言うこととわたしがすることから、あなたがたは何かを知っただろうか。ただの言動としてしか捉えなかつただろうか。わ

たしの言葉はただ厳しいだけ、裁きだけだろうか、それとも慰めだろうか。それは単純過ぎるが、人間にとって、それを見ることは単純どころではない。わたしの言葉にあるものは知恵、裁き、義、威厳、慰めだけでなく、そこにはわたしの持っているものと、わたしであるものがある。わたしの言葉のひとつひとは、人間によっては明らかにされることのない奥義である。わたしの言葉は全く不可解であり、たとえ奥義が現わされても、人間の能力に基づけば、なおも想像と理解の範囲を超えたものである。わたしにとって理解するのが最も簡単な言葉が、人間にとっては最も理解するのが困難なものであり、わたしと人間とは、天と地ほども違うのである。それ故、わたしは、わたしの長子たちの姿を完全に变えて、完全に体の中に入らせることを望む。将来、彼らは肉から体に入るだけではなく、体の中で様々な程度に応じて姿を変える。これがわたしの計画である。これは人間には出来ないことなので（人間には全く不可能である）、たとえ今わたしがあなたがたに詳細を話したところで、あなたがたは理解しないだろう。あなたがたは超自然的なものを感じるだけである。それは、わたしが知恵ある神自身であるからだ。

あなたがたが奥義を見る時、あなたがたはみな多少の反応を示す。心で奥義を受け入れたり認識したりはしないのだが、言葉においては認識する。このような人間は最も欺瞞に満ちている。わたしが奥義を明らかにする時、わたしはそのような者をひとりずつ排除し、見捨てる。けれども、わたしの行うことはすべて段階ごとに為される。わたしは軽率に事を行ったり、盲目的に結論を出したりはしない。なぜなら、わたしは神聖な性質を持ち合わせているからだ。わたしが今している事、次の段階でわたしがしようとする事は、人々には全く理解できない。わたしが一段階の言葉を語って初めて、わたしの働き方はわたしとともに一段階前進する。全てのことはわたしの言葉の中で起こり、全てのことはわたしの言葉の中に現わされる。それ故、待ちきれずに苛立ってはならない。しっかりとわたしに奉仕していれば十分である。ずっと昔、わたしはいちじくの木についての預言をした。だが幾時代にも渡って、誰ひとりとして、いちじくの木を見たことはなかったし、説明できるものは一人もいなかった。また、その語句は以前讚美の中でも触れているのだが、その本当の意味を理解できる者は一人もいなかった。その語句は、ちょうど「大災難」と同じように人々を混乱させた。そして、これは、わたしが人間には一度も解き明かしたことのない奥義であった。人々は、いちじくの木は恐らく良い果実の木の種類、あるいは、聖徒たちのことを指していると考えたが、それは本当の意味からはほど遠かった。終わりの日にわたしが巻物を開く時、わたしはあなたがた

に伝えよう。（巻物はわたしの語った全ての言葉、終わりの日のわたしの言葉を指す――それらは全てその巻物の中に書かれている。）いちじくの木はわたしの行政命令とわたしの行政命令の一つひとつを意味するが、それはいちじくの木の一部に過ぎない。いちじくの木が発芽は、わたしが肉において働き始め、語り始めることを指すのだが、わたしの行政命令はまだ知らされていなかった（なぜなら、わたしの名がまだ証しされておらず、わたしの行政命令を誰も知らなかったからだ）。わたしの名前が証しされて広められる時、わたしの名前が全ての人々によって讃美される時、また、わたしの行政命令が実を結ぶ時、その時こそ、いちじくの木が実を結ぶ時である。これが、ひとつも欠けの無い、完全な説明である――全てはここに現わされている。（わたしがこう言うのは、わたしのこれまでの言葉には、わたしが完全に明らかにしなかった部分があり、それ故、あなたがたは忍耐深く待ち、求める必要があったからだ。）

わたしが長子たちを完全にする時、わたしはわたしの全ての栄光と、完全な姿を宇宙世界に、体において現し、また全ての人々の上において、わたし自身の本体においてそれを現わす。それはわたしのシオンの山の上、わたしの栄光の中、とりわけ称赞の嵐の中に現れる。そして、わたしの周りで敵は退き、底なしの穴、火と硫黄の池に落ちていく。今日の人々が想像できるものには限界があり、わたしの本来の意図と一致していない。わたしが日々語る際、人々の観念と思考を対象にするのはそのためである。わたしの語ることが全てあなたがたに当てはまり、全く抵抗がなくなる日（体に入る日である）が来る。その時、あなたがたは自分の考えを持たなくなり、わたしももはや語らなくなる。あなたがたが自分の考えを持たなくなると、わたしは直接あなたがたを啓く――これが長子たちによって享受される祝福である。そしてこの時、長子たちがわたしと共に王として統治する。人間は自分が想像できないことは信じず、たとえ信じる者がいたところで、それはわたしの特定の啓きによるものである。そうでなければ誰ひとり信じることはない。これは通らなければならないものである。（この段階を通らなければ、わたしの偉大な力がそれを通して現わされることはない。つまり、わたしはわたしの言葉を用いて人々の観念を取り払う。わたし以外にこのことをすることができる者はおらず、わたしの代わりとなれる者はひとりもない。わたしがこの事を完成させることができる唯一の者であるが、それは絶対ではない。わたしは人間を通してこの働きをしなければならない。）人々はわたしの言葉を聞いて精を出す、最後にはみな退く。彼らはそうせずにはいられない。一方で、人々が把握できない奥義もある。何が起こるのか誰にも想像できず、わたしは、わたしが現わすものの中に、あなたがたがそれを見るよう

にする。それを通して、あなたがたはわたしが語った、「わたしは、わたしが用いるのに相応しくない者たちを根絶する。」という言葉の本当の意味を理解できる。わたしの長子たちは様々なことを明らかにし、わたしの敵もまた、様々なことを明らかにする。あなたがたに全てのことが一つひとつ明らかにされる。覚えておきなさい。長子たちを除いては、みな邪悪な霊による働きをする。彼らはみなサタンの僕である。（彼らは間もなくひとりずつ明らかにされるが、最後まで仕えなければならない者も数人おり、一定の期間だけ仕える者もいる。）わたしの言葉による働きの下、全ての者がその正体を明らかにする。

あらゆる国、あらゆる場所、そしてあらゆる教派はわたしの名の豊かさを楽しんでいる。大災難が現在迫りつつあってわたしの手中にあり、わたしはそれを徐々に降らせようと準備しているので、誰もが急いで真の道を探している。そうすることの代価が全てをあきらめることだとしても、それを探し求めなければならない。全てのことには、わたしの時がある。それが定められた時に完了するとわたしが言う、それは一分一秒もたがわず完了されるであろう。だれもそれを妨げることも、止めることもできない。結局、赤い大きな竜はわたしに敗れた敵である。わたしにとって、それはわたしのための効力者であり、わたしが言うことは何でも抵抗することなくするのである。それは正にわたしの役畜である。わたしの働きが完了すると、わたしはそれを底なしの穴、火と硫黄の池に落とす（それは滅ぼされる者たちを意味する）。滅ぼされた者は単に死を味わうだけでなく、わたしに対する迫害ゆえに、厳しい懲罰を受ける。これが、効力者を通してわたしが行う働きである――わたしは、サタンが自らを抹殺して滅ぼすようにしむけ、赤い大きな竜の子孫を完全に消し去る――これはわたしの働きの一部分であり、その後、わたしは異邦人の国々に向かう。これがわたしの働きの段階である。

第百十一章

すべての国々はあなたゆえに祝福され、すべての人々はあなたゆえにわたしを歓呼して迎え、賛美するだろう。わたしの国は繁栄し、発展し、永遠に続くことになる。誰もそれを踏みにじることは許されず、わたしに従わないものは何一つ存在できない。なぜならわたしは威厳ある神自身であり、背くことは許されないからだ。わたしは誰にもわたしを裁くことを許さず、わたしと相容れないことを許さない。これはわたしの性質とわたしの威厳を示すのに十分である。誰かがわたしに抵抗すれば、わたしは都合のよいときにその人を懲罰するだろう。わたしが誰かを懲罰するところを誰も見たことがない

のはなぜだと思うか。それはただわたしの時がまだ来ておらず、わたしの手がまだ本当に動いていないからだ。大きな災害が降り注いでいるが、それはただ大きな災害の内容が語られたというだけで、大きな災害の現実はまだ一人の人間にも降りかかっていない。あなたがたは一体、わたしの言葉から何か把握したのか。今日、わたしは大きな災害の現実を解き放ち始める。その後、わたしに抵抗する者は誰であれ、わたしの手によって打たれることになる。これまでわたしはただ幾人かの人々を暴いただけで、大きな災害はまだ到来していない。だが今日はこれまでとは異なる。わたしはもう大きな災害の内容をすべてあなたがたに話したので、定められた時に、大きな災害の現実を公表する。これまでは誰一人として大災害を被っていないため、ほとんどの人々（すなわち赤い大きな竜の子ら）は、無謀かついい加減に行動し続けてきた。現実が到来すると、そうした惨めな者たちは完全に確信することになるだろう。でなければすべての者がわたしのことを確信できず、誰もわたしのことをはっきりと理解できなくなる。これがわたしの行政命令だ。このことから、わたしの働き方（すべての人々の中での働き方）が変わり始めていることがわかるだろう。わたしは赤い大きな竜の子孫たちを通して、わたしの怒りと裁きと呪いを示しており、わたしの手はわたしに抵抗するすべての者を罰し始めている。長子たちを通しては、憐れみとわたしの慈愛を示している。そしてそれ以上に、長子たちを通してわたしの犯し難い聖なる性質を示し、わたしの権威を示し、わたしの本体を見せている。効力者たちは落ち着いてわたしに奉仕しており、長子たちはますます世に知られるようになっている。わたしは抵抗する者たちを打ち倒すことで、効力者たちにわたしの容赦ない手を見せ、恐れ慄いてわたしに奉仕するようにさせているのだ。そして同時に、長子たちにはわたしの権威を見せ、わたしをもっとよく理解させて、彼らのいのちを成長させている。わたしが最後の期間に話した言葉（行政命令、預言、そしてあらゆる種類の人々に対する裁きを含む）は、順番に成就し始めている。すなわち、人々はわたしの言葉が目の前で実現されるのを見て、わたしの言葉に実を結ばないものは一つもなく、すべてが実践的であることを知ることになる。わたしの言葉が成就される前に、多くの人々は、それらが成就されていないという理由で去ることになるだろう。これがわたしの働き方であり、それはわたしの鉄の杖の役割であるだけでなく、さらにわたしの言葉の知恵でもあるのだ。人はこのことから、わたしの全能性と赤い大きな竜への憎しみを見ることができる。（これはわたしが働きを始めた後にしか見ることができない。今は数人の人々が暴かれており、それはわたしの刑罰のごく一部にすぎないが、それを大きな災害に含めることはできない。これはわかりにくいことではない。したがって今後わたしの働き方は、人々にとってますます理解し難くなることだ

ろう。今日あなたがたにこう言うのは、その時が来たとき、あなたがたがこの理由で弱らないようにするためだ。これがあなたがたに委ねることである。なぜなら今後、人々が太古の昔から見たこともなく、自分の感情と独善性を捨て難くなるようなことが起こるからだ。) わたしがさまざまな手段を用いて赤い大きな竜を懲罰する理由は、竜がわたしの敵であり、わたしに対抗する者だからだ。わたしは竜の子孫をすべて滅ぼさなければならない。そのとき初めて、わたしは憎しみを心から取り除くことができ、初めて赤い大きな竜を正しく辱めることができる。そのみが、赤い大きな竜を完全に滅ぼし、火と硫黄の池、底なしの穴の中に投げ込むということなのだ。

わたしは昨日、長子たちをわたしと共に統治させ、わたしと共にすべての国々を治めさせ、祝福を享受させただけでなく、今日もそうしているし、さらに重要なことに、明日もそうしていく。わたしは働きを無事に為し遂げた――わたしはずっとそう言い続けてきたし、創世当初からそう言い始めていたと言ってもよいが、人間はわたしの言っていることを理解しない。創世時から今に至るまで、わたしは直接働いてはこなかった。言い換えれば、わたしの霊が完全に人の上の下って語り、働くことは一度もなかったのだ。しかし今日は過去と異なり、わたしの霊が宇宙世界の至るところで直接働いている。終わりの日には、わたしと共に権威を持って統治する一群の人々を得たいので、まずわたしと意思が一致しておりわたしの重荷を考慮できる、一人の人間を得ることにする。その後わたしの霊は完全にその人の上の下り、わたしの声を発し、宇宙世界にわたしの行政命令を発布して、わたしの奥義を露わにするだろう。わたしの霊が直接彼を完全にし、直接彼を鍛える。彼は普通の人間性をもって生きているので、誰も明確に見ることはできない。長子たちが体の中に入ると、わたしが今していることが現実であるかどうかは完全にはっきりするだろう。もちろん、人間の目と人間の観念の中では、誰も信じないし従順にもなれない。しかしこれは人々に対するわたしの寛容である。現実はまだ到来していないので、人々は信じることも理解することもできない。人間の観念の只中にいてわたしの言葉を信じる者は、誰一人いなかった。人々は皆かくの如くであり、ただわたしの肉が言うことだけを信じるか、またはわたしの霊の声だけを信じる。これは人のもっとも取り扱いが難しい点だ。自分の目で何かが起こるのを見ていないと、誰も自分の観念を棄てることができず、わたしの言うことを信じられない。だからわたしは、わたしの行政命令を使って、そうした不従順の子らを懲罰するのだ。

わたしは以前このようなことを言った。わたしは初めであり、終わりであり、最初から最後まですべてを司る者であると。終わりの日にわたしは、14万4千人の勝利した男

子を得ることになる。あなたがたはこの「勝利した男子」という言葉については幾分文字通りに理解しているが、「14万4千」という数についてははっきりとわかっていない。人間の観念では、数は人の数やものの数を指さなくてはならない。「勝利した男子」を修飾する「14万4千人」、すなわち「14万4千人の勝利した男子」については、14万4千人の勝利した男子がいるのだと考えている。さらに一部の人々は、この数字に何か象徴的な意味があると考え、「14万」と「4千」を別々に説明する。しかし、これら二つの解釈は間違っている。それは実際の数に指しているのではなく、ましてや何らかの象徴的な意味を表しているのでもない。人間にこれを見貫くことができる者は一人もいない。過去の世代の人々は皆、それが象徴的な意味を表すものかもしれないと考えていた。「14万4千」という数は勝利した男子たちに関連している。それゆえ「14万4千」は、終わりの日に統治する人々の群、わたしが愛する者たちを指している。つまり、14万4千はシオンから来て、シオンに戻る人々の群と解釈すべきものだ。「14万4千人の勝利した男子」の完全な説明は次のとおりである。彼らはシオンからこの世に来て、サタンに墮落させられた人々であり、そして最終的にわたしに取り戻され、わたしと共にシオンに帰ることになる。人はわたしの言葉から、わたしの働きの段階を見てとることができる。つまり、あなたがたが体に入るのは遠いことではない。そのためわたしは、この点について繰り返し説明し、あなたがたに思い出させてきたのだ。あなたがたははっきりと見ることになり、わたしの言葉から実践の道を見出すだろう。そしてわたしの言葉から、わたしの働きのペースを見出すだろう。聖霊の働きのペースを見出すには、わたしが明らかにする奥義からそれを判断しなければならない（聖霊の働きは誰にも見えず、見破ることもできないからだ）。そのためわたしは、終わりの日に奥義を露わにするのだ。

わたしの家には、何一つわたしに適合しないものがあってはならず、今からわたしは少しずつ粛清し清めていく。人々は誰も介入できず、誰もこの働きをすることはできない。このことはわたしがなぜ終わりの日に直接働きを行っているのかを露わにしている。そしてこれこそ、わたしが何度も、あなたがたはただ楽しんでいけばよい、指一本動かす必要はない、と言った理由なのだ。これによってわたしの力が露わにされ、わたしの義と威厳が露わにされ、人々には解くことのできないわたしの奥義のすべてが露わにされる。（人はわたしの経営（救いの）計画について何の知識も持ったことがなく、わたしの働きの段階を少しも理解したことがないので、それらは「奥義」と呼ばれている。）終わりの日にわたしが得るものとわたしが為すことが奥義である。世界を創造する

前、わたしは今日していることをしたことはなく、わたしの栄光の顔貌もわたしの本体の一部さえも人々に見せたことはなく、ただわたしの霊が一部の人々に働いただけだった。（なぜなら創造以来、誰もわたしを現すことはできず、誰もわたしを表現できなかったので、わたしは一度も人々にわたしの本体を見せたことはなく、わたしの霊が一部の人々に働いたのだ。）今日になって初めて、わたしは自らの栄光の姿と本体を人間に露わにし、彼らは今初めてそれを見たのである。だが、今日あなたがたが見ているものはまだ不完全であり、まだわたしがあなたがたに見せたいものではない。あなたがたに見せたいものは体の中だけにあり、今はまだこの条件を満たす者が誰もいない。言い換えれば、体に入る前には、誰もわたしの本体を見ることができない。それゆえわたしは、シオンの山でわたしの本体を宇宙世界に露わにすると言うのだ。このことから、シオンの山に入ることがわたしの事業の最終段階であることがわかるだろう。シオンの山に入るときには、わたしの国が見事に建て上げられることになる。言い換えれば、わたしの本体が神の国なのだ。長子たちが体に入るときこそ、まさに神の国が実現する時であり、それゆえわたしはこれまで長子たちがシオンの山に入ることについて何度も話してきたのだ。これが、これまで誰一人把握しなかった、わたしの経営計画全体の中核なのである。

わたしが働き方を変えると、人間の思考の及ばないことがさらに増えるので、その点に注意しなさい。人間の思考の及ばない物事があっても、それはわたしの言うことが間違っているということではない。それはただ、人々はさらに苦しむ必要があり、さらにわたしと協力する必要があるということなのだ。ふしだらで自堕落になってはならず、自分の観念だけに従っていてはならない。ほとんどの効力者はこの点で躓くからだ。わたしは言葉を用いて人間の本性を暴露し、人間の観念を暴く。（しかし効力者たちは、わたしが彼らの観念を変えないため、ただ倒れることになる。一方、わたしは長子である者たちの観念を変え、それによって彼らの思考を取り除く。）そのため最終的に、長子たちはわたしが露わにした奥義ゆえに、みな完全にされることになる。

第百十二章

「言葉と現実とは相並んで進む」というのは、わたしの義なる性質の一部である。こうした言葉から、わたしは必ずやすべての者にわたしの性質の全体像を見せる。人々はそんなことは達成できないと思っているが、わたしにとってそれはたやすく喜ばしく、何の努力も要らない。わたしの口から言葉が発せられると、ただちに誰にでも見える現実

が現れる。これがわたしの性質である。わたしは特定の事柄を語ったので、それらは必ず達成されることになる。そうでなければわたしは語らないだろう。人間の観念では、「救い」という言葉はすべての人々のために語られるものだが、それはわたしの意図と一致しない。かつてわたしはこう言った、「わたしはいつも無知な者や熱心に探し求める者を救う」と。その「救う」という言葉はわたしに奉仕する者について言ったものであり、それはわたしがそのような効力者を特別に扱うことを意味していた。言い換えれば、そうした人々の刑罰を減らすということだ。しかし心の曲がった不正直な効力者たちは、滅びの対象に加えられることになるだろう。つまり、わたしは彼らに厳しい罰を科す。（彼らは滅びの対象に加えられるが、滅ぼされる者たちとは大きく異なる。彼らは永遠の厳しい罰を受けることになり、こうした人々が受ける罰は、悪魔サタンが受ける罰である。それはまた、そうした人々は赤い大きな竜の子孫だとわたしが言ったことの真の意味でもある。）しかしわたしは、長子たちについてはそのような言葉を使わない。彼らについては、わたしが長子たちを取り戻し、彼らは再びシオンに戻る、と言う。それゆえわたしはいつも、長子たちとはわたしが予め定めて選んだ者のことだと言ってきた。長子たちはもともとわたしに属しており、わたしから来た者なので、わたしのいるここへ戻って来なければならない。子らや民を長子たちと比較すると、本当に天と地の違いがある。子らや民は効力者よりもはるかに優れているが、断じてわたしに属する者ではない。子らや民は、人類の中から追加的に選ばれると言ってもよい。それゆえわたしはいつも長子たちに集中して労力を注いできたのであり、長子たちにこの子らや民を完全にさせることになる。こうしたものが、わたしの将来における働きの段階である。今あなたがたに話しても意味がないので、わたしはそのことを子らや民にはめったに語らず、長子たちだけに繰り返し語り、言及してきた。これがわたしの語り方であり働き方だ。誰もそれを変えることはできない――ただ一人わたしだけが、すべての最終決定権を握っているのだ。

わたしは毎日あなたがたの観念に反撃し、日々あなたがたを一人一人分析している。わたしがある程度まで話すと、あなたがたは逆戻りして、再びわたしの人間性をわたしの神性から切り離してしまう。その時点で、人々が露わにされる時が来たことになる。人々はわたしがまだ肉の中に生きており、神自身などではなく、やはり人間であり、神はやはり神であって、わたしという人間とは何の関係もないと考えている。この人類は何と墮落していることか。以前わたしは非常に多くの言葉を語ったが、あなたがたはそれらを長いこと存在しないもののよう扱いしてきたので、わたしはあなたがたを心底憎

み、その憎しみはわたしの骨まで刻まれた。わたしは本当に、このためにあなたがたを忌み嫌っている。誰が気軽にわたしの気分を害そうとするのか、完全なる神自身であり、人間性と完全な神性の両方を備えたわたしを。誰が思考の中でわたしに抵抗しようとするのか。わたしの壊滅的な災害が降りかかり始めたら、わたしは彼らを一人ずつ罰し、誰一人放免せず、全員を厳しく罰する。わたしの霊自らが働くのだ。それはわたしが神自身でないことを意味するのではなく、逆にわたしが全能なる神自身であることをよりいっそう示している。人々はわたしを知らず、みなわたしに抵抗し、わたしの言葉からわたしの全能性を見ることなく、代わりにわたしの言葉の中に、何かわたしに不利なことやあらばかり見つけようとしている。いずれわたしが長子たちと共にシオンに現れる日、わたしはそうした惨めな者どもを取り扱い始める。この時期わたしは主にその働きを行なっているのだ。わたしがある程度まで語り終えたときには、大勢の効力者たちが退いており、長子たちもすでにあらゆる苦難を経験しているだろう。この二つの働きの段階が進行することで、わたしの働きは終結する。それと同時に、わたしは長子たちをシオンに連れ帰る。これがわたしの働きの段階である。

長子たちはわたしの国の不可欠な部分であり、そしてそのことから、わたしの本体が実際にわたしの国であることがわかる。わたしの国の誕生は、長子たちの誕生に続いて起こったのだ。言い換えれば、わたしの国は世界の創造以来存在しており、長子たちを得ること（長子たちを取り戻すこと）は、わたしの国を回復することなのだ。このことから、長子たちが特に重要であることがわかるだろう。長子たちが存在して初めて、わたしの国が出現し、権力による統治という現実が現れ、新しい生活が訪れ、すべての古い時代を完全に終わらせることが可能になる。この流れは避けられない。長子たちはこの地位に就いているため、世界の破壊、サタンの破滅、効力者の本性の暴露、そして赤い大きな竜が子孫を得ず火と硫黄の池に落ちることの象徴となるのだ。そのため権力を振るう者たちと、赤い大きな竜の子孫であるすべての者たちは、繰り返し妨害し、抵抗し、破壊を行う。一方わたしは長子たちを繰り返し高め、証しし、露わにする。なぜならわたしから出た者だけがわたしのために証しする資格を持ち、彼らだけがわたしを生きる資格を持ち、戦いに加わってわたしのために美しい勝利を得る基盤を有しているからだ。わたし以外の者たちは、わたしの手の中の小さな粘土の塊にすぎず、一人一人すべてが造られたものにすぎない。子らや民は被造物の中から選ばれたましな者にすぎず、わたしに属してはいない。したがって長子たちと子らの間には途方もない差がある。子らに長子と比較される資格はまったくなく、彼らは長子たちによって治められ支配さ

れる。このことについては今や完全に明瞭に理解しなければならない。わたしが話した言葉はすべて真実であり、決して偽りではない。このすべてがわたしの本体の現れの一部であり、それがわたしの言葉なのだ。

わたしは空しい言葉を話さず、間違いを犯さないと言った。それはわたしの威厳を示すのに十分である。しかし人々は善悪を区別することができず、わたしの刑罰が下って初めて完全に納得する。さもないと彼らは反抗的で頑固なままであり続ける。だからわたしは、刑罰を用いて全人類に反撃するのだ。人間はその観念によって、唯一の神自身しか存在しないのなら、なぜわたしから出た長子たちが大勢いるのか、と考える。それは次のように言うことができる。わたしは自らのことについては言いたいように言う。人がわたしに対して何ができようか。また、次のように言うこともできる。長子たちとわたしは同じ一つの姿ではないが、同じ霊によるものなので、彼らは皆わたしと一致して協力することができるのだ。わたしたちが一つの姿でないのは、すべての人がわたしの本体のすべての部分をこの上なくはっきりと見えるようにするためだ。それが、長子たちにわたしと共に権威を持たせ、すべての国々とすべての民族を治めさせる理由なのだ。これはわたしの行政命令の最終章である（わたしが言う「最終章」とは、わたしの口調が穏やかであり、わたしが子らや民に語り始めたという意味だ）。ほとんどの人はこの側面に疑問を抱いているが、それほど疑念を持つ必要はない。わたしはすべての人の観念を一つずつ暴き、彼らを恥じ入らせて、隠れる場所も失わせる。わたしは宇宙と地の隅々まで旅し、宇宙の全貌を観察し、あらゆる種類の人間を調べる――わたしの手から逃れられる者は一人もいない。わたしはあらゆることに関与し、わたしが直接対処しないものは何一つない。わたしの全能性を否定しようとする者がいるだろうか。わたしのことを完全に確信しようとしめない者がいるだろうか。わたしの前に完全にひれ伏そうとしめない者がいるだろうか。天はすべてわたしの長子たちゆえに変転し、さらには全地がわたしと長子たちゆえに激しく揺れ動くだろう。すべての人はわたしの本体の前にひざまずき、万物が必ずわたしの手で支配されるようになり、わずかな誤りも起こらない。誰もが完全に確信しなければならず、すべてのものはわたしの家に来て、わたしに奉仕することになるのだ。これがわたしの行政命令の最後の部分である。これ以降、さまざまな人々を対象としたわたしの行政命令のあらゆる項目が成果を挙げ始める（わたしの行政命令が完全に公表され、あらゆる種類の人間とあらゆる物事に対して適切な采配が下されたからだ。すべての人はそれぞれの適切な位置に就き、わたしの行政命令によってあらゆる種類の人間の真相が暴露されるだろう）。これが真実の、実際の行

政命令の到来である。

今わたしは、自らの働きの段階に従って言いたいことを言う。誰もがわたしの言葉を真剣に受け止めなければならない。あらゆる時代を通じて、すべての聖徒たちが「新しいエルサレム」について語ってきたし、誰もがそれを知っているが、その言葉の真の意味を理解している者は一人もいない。今日の働きはこの段階まで進んでいるので、あなたがたにこの言葉の真の意味を明らかにし、理解させよう。しかし、わたしの暴露には限界がある――わたしがどう説明しようと、どれほど明瞭に語ろうと、あなたがたは決して完全には理解できない。人間は誰もこの言葉の現実に触れることができないからだ。かつて「エルサレム」はわたしの地上の住まい、すなわちわたしが歩き活動する場所を指していた。しかしこの語は「新しい」という言葉によって変化するため、以前とはもうまったく異なっている。人々はそれを少しも把握できない。人によってはそれがわたしの国を指すと考えており、また別の人にはわたしという人間のしたことだと思ったり、新しい天地のことだと思ったり、またわたしがこの世界を滅ぼした後に現れる新しい世界のことだと思ったりしている。誰かの心が極端に複雑で想像力豊かだったとしても、このことについては何も理解できない。人々はあらゆる時代を通じて、この言葉の真の意味を知り、悟ることを望んできたが、その望みが叶えられることはなかった――彼らはみな失望し、強い願いだけを残して死んでいった。わたしの時はまだ来ていなかったため、わたしは誰にも簡単に伝えることができなかったのだ。今や働きはこの段階まで完了したので、あなたがたにすべてを教えよう。「新しいエルサレム」には四つのものが含まれている――すなわちわたしの怒り、行政命令、わたしの国、そしてわたしが長子たちに授ける無限の祝福である。「新しい」という言葉を使う理由は、この四つの部分が隠されているからだ。誰もわたしの怒りを知らず、わたしの行政命令を知らず、わたしの国を見たことがなく、わたしの祝福を享受したことがないので、「新しい」とは隠されたもののことを指しているのだ。わたしが言ったことを完全に理解できる者は一人もいない、なぜなら新しいエルサレムは地上に降臨したが、誰も新しいエルサレムの現実を個人的に経験したことがないからだ。わたしがどれだけそのことを十分に話しても、人々は十分には理解しないだろう。たとえ理解したとしても、その理解はただ彼らの言葉であり、彼らの心であり、彼らの観念である。これは避けがたい流れであり、誰も逃れることのできない唯一の道なのだ。

第百十三章

わたしがとる行動の一つ一つにはわたしの知恵が含まれているが、人間には根本的にその知恵を推し量る能力がない。人間はただわたしの行動と言葉を見ることができただけで、わたしの栄光やわたしの本体の現れは見ることはできない。人間には根本的にその能力が欠けているのだ。そのため、わたしは人を変えることはしないまま、長子たちと共にシオンに戻り、姿を変える。人がわたしの知恵と全能性を見ることができるようになる。人が今目にしているわたしの知恵と全能性は、わたしの栄光のほんの一部であり、言及するにも値しない。このことから明らかなように、わたしの知恵と栄光は無限であり、計り知れないほど深く、人間の心では根本的に考察も解釈も不可能なのだ。神の国を建て上げることは長子たちの本分であり、またわたしの仕事でもある。すなわちそれはわたしの経営（救いの）計画の一項目なのだ。神の国を建て上げることは、教会の建設と同じではない。長子たちとわたしはわたしの本体であり神の国であるので、長子たちとわたしがシオンの山に入るとき、神の国の建設は成し遂げられることになる。別の言い方をすれば、神の国を建て上げることは働きの一つの段階であり、それが霊の世界に入る段階である。（しかしわたしが創世以来してきたことはすべて、この段階のために行われたのだ。わたしはそれを一つの段階と呼ぶが、実際はまったくそうではない）。そのためわたしはすべての効力者をこの段階に仕えさせ、その結果として終わりの日には、大勢の人々が退くことになる。彼らはすべて長子たちに奉仕するのだ。この効力者たちに親切にする者は、誰であれわたしの呪いによって死ぬことになる。（効力者たちはみな赤い大きな竜の陰謀を表しており、サタンのしもべなので、これらの人々に親切にする者は赤い大きな竜の共犯者であり、サタンに属する者なのだ。）わたしは自らが愛するすべての者を愛し、わたしの呪いと焼き尽くしの対象となるすべての者を蔑む。あなたがたもそうすることができるだろうか。誰であれ、わたしに敵対する者は決して赦すことも、大目に見ることもない。それぞれの業を為す中で、わたしは大勢の効力者たちがわたしに仕えるよう采配する。このように、全史を通じてあらゆる預言者や使徒たちが奉仕を行ってきたのは、すべて今日の段階のためであったこと、そして彼らはわたしの心に適わずわたしから出たものでないことがわかる。（彼らの大半はわたしに忠実だが、誰一人わたしに属する者ではない。したがって彼らが走り回っているのは、わたしのためにこの最後の段階の基礎を作るためだが、彼ら自身について言えばそれはすべて無駄な努力である）。それゆえ終わりの日にはなおのこと、大勢の人々が退くことになるだろう。（「大勢」と言う理由は、わたしの経営計画が終結しており、わたしの国の建設が成功し、長子たちが玉座に座ったからだ。）それはすべて長子たちの出現による。長子たちが出現したため、赤い大きな竜は可能なあらゆる方法で危害を加え

ようと試み、あらゆる手段を尽くしている。竜はあらゆる悪霊を送り込み、その悪霊たちがわたしに奉仕し、この時期にその本性を露わにして、わたしの経営を妨害しようと試みた。こうしたことは肉眼では見えず、すべて霊の世界でのことである。そのため人は大勢の人々が退くことを信じていないが、わたしは自分のしていることを知っており、自分の経営を理解している。これが人間に干渉させない理由である。（あらゆる種類の邪悪な悪霊どもが、その本性を露わにする日が来る。そしてすべての人々が心から納得するだろう。）

わたしは長子たちを愛しているが、赤い大きな竜の子孫でわたしを熱烈に愛している者のことはまったく愛さない。実のところ、わたしは彼らをより一層忌み嫌う。（その人々はわたしのものではなく、彼らは善意を示して響きのよい言葉を話すが、それはすべて赤い大きな竜の策略なので、わたしは彼らを骨の髄まで憎む）。これがわたしの性質であり、わたしの義の全容である。人間はそれをまったく推し量ることができない。なぜわたしの義の全容がここに現されたのか。ここから人は、わたしの聖なる犯し難い性質を認識することができる。わたしは長子たちを愛し、長子でないすべての者たちを（忠実な人々だとしても）忌み嫌うことができる。これがわたしの性質である。あなたがたには見えないのか。人々の観念では、わたしは常に憐れみ深い神であり、わたしを愛するすべての者を愛する。この解釈はわたしに対する冒瀆ではないのか。わたしが動物や獣を愛せるだろうか。サタンをわたしの長子とし、それを楽しむことができるだろうか。馬鹿げている。わたしの働きはわたしの長子たちに対して行われるのであり、長子たちを除いてわたしが愛するものはない。（子らや民は追加されたものであり、重要でない。）人々はわたしが過去に多くの無駄な働きをしたと言うが、わたしの見方ではその働きは実際もっとも価値があり、もっとも意味のあるものだった。（これはすべて二つの受肉の間に行われた働きを指している。わたしは自らの力を露わにしたいので、肉となって働きを完了しなければならない。）わたしの霊が直接働きを行う、という理由は、わたしの働きが肉の中で完成するからだ。すなわち長子たちとわたしは安息に入り始める。肉におけるサタンとの戦いは、霊の世界での戦いよりも激しく、すべての人々が目にできるので、サタンの子孫でさえわたしのために美しい証しをすることができ、彼らはなかなか去ろうとしない。それこそが、わたしが肉となって働くことの意味そのものなのだ。それはおもに悪魔の子孫たちに悪魔自身を辱めさせるためなのだ。それは悪魔サタンにもたらされるもっともひどい屈辱であり、それによってサタンは身を隠す場所もないほど恥入り、わたしの前で繰り返し憐れみを乞うことになる。わたしは勝

利し、あらゆるものに打ち克った。わたしは第三の天を突き抜けてシオンの山に達し、長子たちとともに家族の幸福を楽しみ、永遠に天の国の大いなる祝宴に浸っているのだ。

長子たちのために、わたしはあらゆる代価を払い、あらゆる労力を費やした。（人はわたしが行なったすべてのこと、言ったすべてのこと、わたしがあらゆる種類の悪霊を見破ること、またあらゆる種類の効力者を消し去ったことが、すべて長子たちのためであったことをまったく知らない。）しかし多くの働きにおいて、わたしの采配は秩序正しく、働きは決して盲目的には行われぬ。あなたがたはわたしの日々の言葉の中に、わたしの働き方とその段階を見ることができなくてはならない。わたしの毎日の行動の中に、わたしの知恵と、物事に対処する際の原則を見なければならない。言ったように、サタンはわたしの経営を妨害する目的で、わたしに奉仕する者たちを送り込んできた。そうした効力者たちは毒麦だが、「麦」という言葉が指すものは長子たちではなく、長子ではないすべての子らや民である。「麦は常に麦であり、毒麦は常に毒麦だ」とは、サタンのものである人々の本性は決して変わらないことを意味している。要するに、彼らはサタンのままだ。「麦」は子らや民を意味する。なぜなら世界創造の前に、わたしがその人々にわたしの素質を加えたからである。以前わたしは、人間の本性は変わらないと言ったので、麦は常に麦のままである。では、長子たちとは何者なのか。長子たちはわたしから来た者であり、わたしによって造られた者ではないので、麦と呼ぶことはできない（なぜなら麦についての話は常に「蒔く」という言葉につながり、「蒔く」とは「造る」ことを意味するからだ。毒麦はすべてサタンによって密かに蒔かれ、効力者の役割を果たすことになる）。言えるのはただ、長子たちがわたしの本体の完全で豊かな現れだということであり、彼らは金と銀と宝石で現わされるべきものだ。このことは、わたしの再臨が盗人のようであり、わたしが金と銀と宝石を盗むために来たという事実に関係している。（なぜならこの金や銀や宝石はもともとわたしのものなので、わたしはそれらをわたしの家へ持ち帰りたいのだ）。長子たちとわたしが共にシオンに帰るとき、この金、銀、宝石はわたしによって盗まれることになる。その時期にはサタンの妨害や攪乱が起こるので、わたしは金、銀、宝石を手にしてサタンと決定的な戦いを始める。（これは決して単なる物語ではなく、霊の世界での出来事なので、人々はそれを曖昧にしか把握できず、単なる物語としてしか聞くことができない。しかしあなたがたはわたしの言葉から、わたしの六千年の経営計画とは何かを知らなければならず、絶対にこれを冗談事と思ってはならない。さもないと、わたしの霊はすべての人間か

ら離れるだろう。) 今日この戦いは完全に終わっており、わたしは長子たちを連れて（わたしのものである金、銀、宝石を持って）、共にわたしのシオンの山に帰る。金、銀、宝石は希少であり、貴重でもあるので、サタンはあらゆる手段でそれらを奪い取ろうとするが、わたしは何度でも繰り返し、わたしから来たものはわたしに戻らねばならないと言う。その意味は上に述べたとおりだ。長子たちがわたしから来たものでありわたしに属しているという言葉は、サタンに対する宣言である。誰もこれを理解しておらず、それは完全に霊の世界での出来事なのだ。このように人は、なぜわたしが長子たちはわたしに属していると繰り返し強調するのかを理解しない。今日、あなたは理解すべきなのだ。わたしの言葉には目的と知恵があると言ったが、あなたがたはそれを外面的にしか理解しておらず、誰一人としてそれを霊ではっきり見ることができていない。

わたしは語り続け、そして語れば語るほど、言葉はますます厳しくなる。ある程度まで達すると、わたしは言葉を使って人々をある程度動かし、心で確信させて言葉でそれを表現させるだけでなく、それ以上に、生死の間をさまよわせる。それがわたしの働き方であり、働きの段階の進み方である。そうでなければならず、そうであって初めてサタンを辱め、長子たちを完全にすることができるのだ（わたしの言葉を使って長子たちを最終的に完全にし、長子たちが肉から解放されて霊の世界に入れるようにするのだ）。人はわたしの発言の方法と口調を理解しない。あなたがたはみなわたしの説明から何らかの識見を得るべきであり、皆がわたしの言葉に従って、なすべき働きを完成させなければならない。これが、わたしがあなたがたに委ねたことだ。あなたがたはそれに気づかねばならず、外界からだけでなく、霊の世界からそれを認識することがより重要なのだ。

第百十四章

わたしは宇宙世界を創造した。わたしは山と川とすべてのものを造った。わたしは宇宙と地の隅々も形づくった。わたしはわたしの息子たちとわたしの民を導いた。わたしはすべての物と物質に命じた。今、わたしは長子たちを導いてシオンの山に帰らせ、わたしが住んでいる所に戻らせる。そして、これはわたしの働きの最終段階となるであろう。わたしが為したすべてのこと（創世の時から今に至るまでのすべてのこと）は、わたしの働きの今日の段階のためであり、さらにそれは、明日の支配、明日の神の国のためであり、また、わたしとわたしの長子たちが永遠の喜びを得るためである。これが万物創造におけるわたしの目標であり、それは創世におけるわたしの最終的な成果なのだ。

。わたしが言うこと、行うことの背後には目的と計画があり、何事もやみくもに行われることはない。わたしにとってはすべてが自由に解放されている、とわたしは言うが、それでも、わたしがやることにはすべて原則があり、わたしが為す全ては、わたしの知恵と性質に基づいている。あなた方は、これについて何か見たことがあるか。創世の時から今日に至るまで、わたしの長子たちのほかには、誰もわたしを知ることがなく、誰もわたしの本当の顔を見たことがない。わたしが長子たちのために例外を設けたのは、彼らが本質的にわたしという存在の一部だからである。

わたしが世界を創造したとき、わたしの要求に従って、人を四つの階級の部類に分けて造った。それは、わたしの子ら、わたしの民、効力者、そして滅ぼされる者である。なぜわたしの長子たちはこの中に入っていないのか。それは、わたしの長子たちが創造されたものではないからである。彼らはわたしから生まれたものであり、人類から来たものではない。わたしは肉になる前に、わたしの長子たちのために全てを準備した。彼らがどの家庭に生まれるのか、誰がそこで彼らのために奉仕するのか——これらのことが全てわたしによって計画された。わたしはまた、彼らのうちの誰が、いつわたしによって再び得られ、最終的にわたしと一緒にシオンに戻るのかも計画した。これはすべて創世以前に計画されていたので、それを知っている者はひとりもない。また、それはシオンの事である故、どの本にも記録されていない。さらに、わたしが肉になったとき、わたしはこの能力を人間に与えなかったので、誰もそれらのことを知ることはなかった。シオンに戻ると、あなた方は、あなた方が過去にどのようなであったか、今どのようなであるか、また、あなた方がこの世で何をしたのかを知るだろう。今のところは、わたしはあなた方にこれらのことを明瞭に、そして、少しずつ伝えているだけのことである。そうでないと、あなた方は、どんなに努力しても理解できず、わたしの経営を妨害するからだ。今日、わたしは肉という点において、わたしのほとんどの長子から離れているけれども、わたしたちの霊はひとつであり、わたしたちの肉体的外観は異なるかもしれないが、わたしたちは、始めから終わりまで、一つの霊である。しかしながら、サタンの子孫が、この機会を悪用することはない。あなたがどのように偽装しようと、それは表面的なままであり、わたしは承認しない。それゆえ、このことから、表面的なものに重点を置き、わたしの外見を模倣しようとする者は、100パーセント確実にサタンであることが分かる。彼らの霊は違っており、彼らはわたしの愛する者には属さないもので、わたしをどんなに模倣しても、彼らはわたしのようにはならない。さらに、わたしの長子たちは本質的にわたしと霊を一つにしているので、たとえ彼らがわたしを模倣し

なくても、彼らはわたしと同じように話し、行動し、彼らはみな正直で、純粹で、率直である（知恵が欠けている者に関しては、ただ世での彼らの経験が限られているからである。したがって、知恵が欠けているのは、長子たちの欠点ではなく、彼らが体に戻れば、すべてはうまくいくのである）。だから上記の理由から、ほとんどの人々は、わたしが彼らをどのように取り扱っても、自分の古い性質を変えようとししない。しかし、わたしの長子たちの場合は、わたしが彼らを取り扱わなくても、わたしの意図に服従する。それは、わたしたちが霊を一つにしているからだ。彼らは自分の霊の中で、わたしのために喜んで全力を尽くしたいと思っている。それ故、わたしの長子たちを除いて、わたしの意図を真実に心から考慮する者はいない。彼らが喜んでわたしのために奉仕するのは、わたしがサタンを征服した後だけである。

わたしの知恵とわたしの長子たちはすべてのものの上に立っており、すべてのものの上に君臨しており、どんな物も、人間も、事態も、立ち足かることはない。さらに、彼らの上に君臨できる人間も、事態も、物も、存在せず、むしろ、すべてのものはわたしの存在の前で従順に服従する。これは、人の目の前で起こる事実であり、すでにわたしが達成した事実である。誰でも不従順であり続ける者は（未だに不従順な者とは、サタンのことを指しており、サタンによって占拠されている者は間違いなくサタンである）、わたしが必ず根こそぎにして滅ぼし、将来問題が起こらないようにする。彼らはわたしの刑罰により、直ちに死ぬであろう。この種のサタンは、わたしに奉仕する意欲がないものであり、創世以来、これらのものは常にわたしに対して頑固に敵対し続けてきた。そして、今日も彼らは頑なにわたしに背き続けている（それはただ霊に関することなので、人々はこれを見ることができない。この種の人間はこのような類のサタンを表す）。わたしは、他のすべてのことが準備される前に、まず最初に彼らを滅ぼし、厳しい罰による懲らしめを永遠に受けさせる（ここで言う「滅ぼし」は、もはや存在しなくなることを意味するのではなく、むしろ彼らが受ける容赦ない仕打ちの程度を指しており、ここで言う「滅ぼす」とは、破壊される者に使われる「滅ぼす」という言葉とは区別される）。そして、彼らは、終わることなく、永遠に泣き叫び、歯ざしりするであろう。人間には、その光景を想像することはまったくできない。肉なる人類の思考では、霊的なことを理解することはできない。したがって、あなた方は、シオンに帰った後に、初めてもっと多くのことを理解するだろう。

わたしの将来の家には、わたしの長子たちとわたしを除いて誰もいないだろう。そして、その時になって初めて、わたしの目標は達成され、わたしの計画は完全に実現され

るだろう。何故なら、すべては本来の状態に戻り、それぞれはその種類に応じて分類されるからである。わたしの長子たちはわたしに属し、わたしの子らと民は被造物の間に属し、効力者と滅ぼされた人々はサタンに属する。世界を裁いた後、わたしとわたしの長子たちは再び神聖な生活を始め、彼らは決してわたしのもとを去らず、いつもわたしと一緒にいるであろう。人間の心によって理解できるすべての奥義は、少しずつあなた方に明らかにされるであろう。歴史を通して、自分自身を完全にわたしに捧げ、わたしのために殉教した人々が数え切れないほどいるが、結局のところ人間は造られた存在であり、彼らがどれほど良くても、神としては分類できない。これは避けられない傾向であり、誰にも変更することはできない。結局のところ、すべてを創造するのが神である一方、人間は造られたものであり、サタンはつまるところ、わたしが滅ぼす標的であり、わたしの憎むべき敵である——これが「山や川は動いて変わることがあっても、人の本性は変わらない」という言葉の真の意味である。この状態と段階の中にあるということは、今わたしとわたしの長子たちがやがて安息に入ることの前兆である。何故ならこれは、世界におけるわたしの働きは全て完成しており、わたしの働きの次の段階を完了するためには、わたしが体に戻るが必要になるからである。これらがわたしの働きの段階であり、わたしはずっと昔にそれらを計画した。この点をはっきりと理解しなければならない。さもないと、ほとんどの人々がわたしの行政法令に違反することになる。

第百十五章

わたしの心はあなたのために大いに喜び、わたしの手はあなたのために喜び踊る。また、わたしはあなたに終わりのない祝福を与える。なぜなら、あなたが創造に先立ちわたしから来たからだ。今日、あなたはわたしの側に戻らなければならない。なぜなら、あなたは世や地に属するものではなく、わたしのものであるからだ。わたしは永遠にあなたを愛し、永遠にあなたを祝福し、永遠にあなたを守る。わたしのもとから出た者たちだけが、わたしの旨を知り、わたしの重荷を考慮し、わたしが望むことをする。今、すべてのことはすでに達成されている。わたしの心は火の玉のようであり、わたしの愛する子らが早くわたしと再会し、わたしの存在が間もなく完全にシオンに戻ることを切望している。あなたは、このことをすでにある程度は理解している。わたしたちは、しばしば霊において互いに従うことはできないが、しばしば霊において互いに伴い、肉において会うことはできる。父と子たちは永遠に切り離すことができず、両者は密接につながっている。シオンの山へ帰る日まで、誰もあなたをわたしの側から連れ去ることは

できない。わたしはわたしから来るすべての長子たちを愛し、わたしに敵対するすべての敵を憎む。わたしは、わたしの愛する者たちをシオンに連れ戻し、わたしの憎む者をハデスに、地獄に投げ入れる。これがわたしの行政命令全体の主要原則である。わたしの長子たちが言うこと、行うことはすべて、わたしの霊の現れである。誰もが、それを明確に理解して、わたしの長子たちを証ししなければならない。これはわたしの働きの次の段階であり、もし反抗する者があれば、わたしは愛する子らに頼んで彼らを処分させる。今、事は違っている。わたしはすでにわたしの長子たちに権威を渡しているので、わたしの愛する者たちが裁きの言葉を一言話すならば、サタンは直ちにハデスで死ぬであろう。すなわち、今からは、わたしの長子たちとわたしが共に支配する時である。

（これは肉の段階におけることであり、体において共に支配することとは少し異なる。）心の中で背く者は、わたしという人間に反抗する者と同じ運命に苦しむだろう。わたしの長子たちは、わたしが扱われるのと同じように扱われるべきである。それは、わたしたちがひとつの体であり、決して切り離すことはできないからである。今日、わたしの長子たちは、わたしが過去に証しされたように、証しされるべきである。これがわたしの行政命令の一つである。すべての者が立ち上がって、証ししなければならない。

わたしの国は地の果てまで広がっている。そして、わたしの長子たちは、わたしと共に地の果てまで旅する。あなたがたの肉が邪魔するために、わたしの話す多くのことをあなたがたは理解できず、それ故に大部分の働きはシオンに戻ってから成し遂げられなければならない。わたしの言葉から、このことは遠い先のことなく、今にも起ころうとしていることが分かる。だから、わたしは常にシオンとシオンの事柄について話しているのだ。あなたがたは、わたしの言葉の目的が何であるか知っているだろうか。あなたがたは、わたしの心の中にあるものを知っているだろうか。わたしの心は、すぐにシオンに戻り、古い時代をすべて終わらせ、地上でのわたしたちの生活を終わらせ（わたしは地上の人々、事柄、ものを忌み嫌い、肉の生活はさらに憎んでいるからである。また肉による妨害は大きいので、すべてはシオンに帰った時にのみ繁栄するからである）、神の国でのわたしたちの生活を回復させることを切望している。わたしの最初の受肉の目的は、わたしの二度目の受肉の基礎を築くことだった。これは歩まなければならない道だった。わたし自身を完全にサタンに明け渡して初めて、わたしはあなたがたを最終段階でわたしの体へと贖い出すことができた。（わたしの最初の受肉を通してでなければ、わたしは栄光を受けることはできなかった。また、わたしは罪のための捧げ物を取り戻すことができず、あなたがたは罪人としてこの世に来たことだろう。）わたし

には無限の知恵があるので、そしてわたしがあなたがたをシオンから導き出したので、わたしは必ずあなたがたをシオンに連れ帰る。わたしの偉大な働きはずいぶん前に成し遂げられたので、道を塞ごうとするサタンの試みは成功しない。わたしの長子たちは、わたしと同じようであり、彼らは聖なるものであり、傷の無いものである。わたしは尚もわたしの長子たちと共にシオンに戻り、わたしたちが離されることは決してない。

わたしの経営（救いの）計画全体が徐々にあなたがたに明らかにされている。わたしはすべての国とすべての民族の間で、わたしの働きを始めた。これは、わたしがシオンに帰るその時がもう遠くないことを証明するに十分である。なぜなら、すべての国とすべての民族の間でわたしの働きを実行することは、シオンに帰った後に成し遂げられることであるからだ。わたしの歩調は徐々に速くなっている。（わたしがシオンに戻る日が近づいているので、わたしは、わたしが帰る前に地上でのわたしの働きを終わらせたいと願っている。）わたしは、わたしの働きで、ますます忙しくなりつつあるが、地上でわたしが為すべき働きは、徐々に少なくなってきたおり、もうほとんど残っていない。（わたしの忙しさは、霊の働きに向けられており、人間の肉眼では見えないが、ただわたしの言葉からだけ探り出すことができる。わたしの忙しさは、肉の中にいる時ほどではないものの、わたしが多くの仕事を計画したことを指している。）これは、わたしが言ったように、地上でのわたしの働きはすでに十分に完了しており、残りの働きは、わたしがシオンに戻るのを待たなければならないからである。（わたしが働くためにシオンに戻らなければならないのは、未来の働きは肉においては達成できないからであり、もしこの働きが肉において為されたら、わたしの名を貶めるからである。）わたしが、わたしの敵を倒してシオンに戻るとき、生活は幾時代か前の生活よりもいっそう美しく平和になるだろう。（これは、わたしが世を完全に克服し、わたしの最初の受肉と二度目の受肉のおかげで、わたしが完全に栄光を受けたからである。わたしの最初の受肉では、わたしは部分的に栄光を受けたただが、二度目の受肉では、わたしの存在は完全に栄光を受けるので、サタンが利用できる機会はもはやない。それ故、シオンでの未来の生活はいっそう美しく平和である。）赤い大きな竜を辱めるために、わたしの姿はいっそう栄光に輝いて、この世とサタンの前に現れるだろう。これがわたしのすべての知恵の中核である。わたしが外面的なことを話せば話すほど、あなたがたはもっと理解できるが、人間に見ることができないシオンのことを話せば話すほど、あなたがたには、これらのことがより空しく思われ、それらを想像するのがいっそう難しくなり、あな

たがたは、わたしがおとぎ話をしていると思うだろう。しかし、あなたがたは注意深くあらねばならない。わたしの口には空しい言葉はなく、わたしの口から出る言葉は信頼できる。あなたがたの考え方からは理解するのが難しいだろうが、これは絶対に真実である。（肉における限界のために、人間は、わたしの言うことを完全かつ十分に理解することができない。また、わたしが言った多くのことは、わたしはまだ完全には明らかにしていない。しかし、わたしたちがシオンに戻るとき、わたしが説明する必要はなく、あなたがたは自然に理解するだろう。）これは真剣に受け止められるべきことである。

人間には肉と観念の限界があるけれども、わたしはまだ、明らかにされた奥義を通して、あなたがたの人間的な考え方を改善し、あなたがたの観念に反撃したい。なぜなら、これがわたしの働きの一つの段階であるとわたしは何度も言ったからである（この働きはシオンに入るまで止まらない）。それぞれの人間の心の中にはシオンの山があり、それは各々によって異なっている。わたしはシオンの山のことを言い続けているので、わたしはあなたがたに、それについての一般的な情報を伝えて、あなたがたがそれを少しでも知ることができるようにしよう。シオンの山ににいるということは、霊の世界に帰ることである。それは、霊の世界を指しているが、人間が見ることも触れることもできない場所ではなく、これは体のことを指している。それは見ることや触れることが絶対にできないものではない。なぜなら、体が現れるときには形や姿があるが、体が現れないときは形や姿がないからである。シオンの山では、食べ物、衣服、日常の必要と住居の心配はなく、また結婚や家族もなく、性別もなく（シオンの山ににいる者は皆わたしの姿であり、ひとつの体であるので、結婚、家族、性別などはない）、わたしの姿が話すことはすべて実現されるだろう。人々が見張っていないとき、わたしの姿は彼らの間に現れ、人々が注意を払っていないときは、わたしの姿は消えるだろう。（肉と血からなる人々はこれを達成できないので、今あなたがたがそれを想像することは難しい）。将来もなお太陽、月、物理的天と地があるが、わたしの存在はシオンにあるので、太陽や昼間の猛暑はなく、自然災害に苦しむこともない。神がわたしたちを照らしてくれるので、もはやあかりも太陽の光もいらない、とわたしが言ったとき、わたしはシオンにいてのことについて話していたのだ。人間の観念によると、宇宙の中のすべてのものが取り除かれなければならない、人々はみなわたしの光の中に住む。彼らは、これが「神がわたしたちを照らしてくれるので、もはやあかりも太陽の光もいらない」ということの真の意味だと考えているが、それは間違った解釈である。「その木は毎月、十二種の実を結

ぶだろう」と言ったとき、わたしはシオンの事柄について言及していたのだ。この句は、シオンでの生活に関するすべてのことを表している。シオンでは、時間は限られておらず、地理や空間の制限もない。だから、わたしは「毎月」と言ったのである。「十二種の実」とは、あなたがたが今日生きているふるまいを表すものではなく、シオンにおける自由の生活を意味している。これらの言葉は、シオンにおける生活の一般化である。このことから、シオンの生活は豊かで多様であることが分かる（なぜなら、ここでは「十二」は「充足」を意味するからである）。それは悲しみも涙もない生活であり、搾取することも弾圧もなく、すべてが解放され、自由となるだろう。これは、わたしの存在の中にすべてが存在し、誰もそれらを切り離すことができず、すべてが美しさと永遠の新しさの光景となるからである。それは、すべてが整うときとなり、シオンへ帰った後のわたしたちの生活の始まりとなるであろう。

地上でのわたしの働きはすでに十分に完了したが、わたしにはまだ、わたしの長子たちが地上で働くことが必要なので、わたしはまだシオンに帰ることはできない。わたしはひとりでシオンに戻ることはできない。わたしは、わたしの長子たちが地上で働きを終えた後、彼らと共にシオンに戻る。このようにして、それは共に栄光を得ること、と呼ぶことができ、これはわたしの姿の完全な現れとなるのだ。（わたしの長子たちはまだ現わされていないので、地上での彼らの働きはまだ完成していない、とわたしは言う。この働きは忠実で正直な効力者たちによって行われなければならない。）

第百十六章

わたしの言葉には人々を恐れさせるものが多くある。わたしの言葉の多くは人々を恐怖に震え上がらせ、多くは人々を苦しめて希望を失わせ、さらに多くが人々に破滅をもたらす。誰一人わたしの言葉の豊かさを見抜くことも、はっきりと把握することもできない。わたしが一文一文を語り、あなたがたに露わにして初めて、あなたがたは物事の全体的な状況を知るが、それでも具体的事象の真の様相についてはまだ不明瞭なままだ。それゆえ、わたしは事実を用いてわたしの言葉をすべて露わにし、あなたがたがもっとよく理解できるようにする。語り方について言えば、わたしはただ言葉によって語っているのではなく、それ以上に言葉によって行動しているのだ。これが「言葉と達成が同時に起こる」ということの真の意味である。わたしにあってはすべてが自由で、すべてが解放されており、それを基盤として、わたしの為すことすべてが知恵に満ちている。わたしが不注意に語ることはなく、不注意に行動することもない。（人間性において

か神性においてかによらず、わたしは知恵をもって語り、行動する。わたしの人間性はわたし自身の切り離せない部分だからだ。) しかしわたしが語るとき、わたしの口調に注意を向けるものは誰もおらず、わたしが行動するとき、その働きの方法に注意を向けるものは誰もいない。これが人間の欠点である。わたしはすべての人間に対してわたしの力を露わにする。長子たちに対してだけでなく、それ以上にすべての国とすべての人々の間で、わたしの力を露わにするのだ。そうすることのみが、サタンを辱める力強い証しとなるのだ。わたしは愚かな行いはしない。多く人はわたしが長子たちを証しすることを誤りだと考えており、わたし以外にも神は存在し、わたしの行動は分別がなく、自らを貶めていると言う。そしてこのことから、人間の墮落がいっそう明らかになっている。わたしが誤って長子たちを証しすることなどありうるだろうか。あなたがたはわたしが間違っていると言うが、それならあなたがたは証しできるのか。わたしが彼らを高め証しすることがなかったなら、あなたがたはいまだにわたしの子を自らの下に押し下げ、冷ややかで無関心な態度で扱い、自分の召使いのように扱っているだろう。この獣の群れめ！ わたしはあなたがたを一人ずつ片付ける。一人として見逃しはしない。答えなさい、正常な人間性を持つ人と相容れないこれらのものは一体何なのか。それは疑いなく獣である！ わたしはそのようなものを見たくもない。もしあなたがたの証しを待っていたなら、わたしの働きはとうに遅れていただろう。この獣の群れよ！ あなたがたには人間性というものがまったくない。あなたに奉仕してもらう必要はない、今すぐにここから出て行きなさい！ あなたは本当に長い間、わたしの子をいじめ、抑圧してきた。わたしはあなたをぼろぼろになるまで踏みつぶす。もう一度野蛮になろうとしたらどうなるか、もう一度わたしを辱めようとしたらどうなるか、やってみるがいい。わたしはすでに偉大な働きを成し遂げたので、引き返してこの獣の群れを処分しなければならない。

すべてはわたしの手の中で成し遂げられ（これはわたしの愛する者たちについてである）、そしてすべてはわたしの手の中で滅ぼされる（これはわたしが憎む獣たち、そしてわたしが忌み嫌う人々や物事についてである）。わたしは長子たちに、これから行くことをすべて見せ、完全に理解させ、わたしがシオンから出て以来行なったすべてのことを見せる。その後わたしたちは共にシオンの山に入り、はるか昔わたしたちがいた場所に入り、新たな生活を始める。それ以降、この世界とこの獣の群れとの接触は一切なくなり、ただ完全に自由になり、すべてが順調で何の妨げもなくなる。誰が長子の一人にでも抵抗しようとするだろうか。誰が長子たちに反抗し続けようとするだろうか。わ

わたしはそのような者を簡単には容赦しない。あなたは過去にわたしを敬い畏れたように、今日わたしの長子たちを敬い畏れなければならない。わたしの面前での振る舞いと背後での振る舞いが異なるようであってはならない。わたしは一人一人のことをこの上なくはっきりと見ている。わたしの子に忠実でないということは、わたしに親孝行しないということだ。それは明らかな事実だ、わたしたちは一つの体なのだから。わたしに対する態度は良くても、長子たちへの態度は違うという者がいれば、それは間違いなく赤い大きな竜の典型的な子孫である。なぜなら彼らはキリストの体を分裂させるからだ。そのような罪が赦されることはない。あなたがた一人一人がこれを理解しなければならない。わたしを証しすることはあなたがたの本分であり、そしてそれ以上に、長子たちを証しすることがあなたがたの義務である。誰一人自分の責任を逃れてはならない。妨害する者は誰であれただちに処分する。自分を特別なもののように思ってはならない。言うておくが、一番そのようである者は、一番厳しい懲罰の対象となる。一番そうである者は一番望みがなく、誰よりも地獄の子なのだ。わたしはあなたを永遠に罰する。

わたしの働きはすべて、わたしの霊によって直接行われる。わたしはサタンの一味による干渉を一切許さない。計画が妨害されないようにするためだ。最終的には、大人も子供も立ち上がらせ、わたしと長子たちを誉め讃えさせ、わたしの素晴らしい業を讃美させ、わたしの本体の現れを讃えさせる。わたしは讃美の音色を全宇宙と地の隅々まで鳴り響かせ、山や河やあらゆるものを揺り動かし、サタンを徹底的に辱める。そしてわたしの証しを用いて、けがれた不道德な古い世界をすべて破壊し、聖くけがれのない新たな世界を建て上げる。（太陽、月、星、天体が将来も変わらないと言うのは、古い世界が存続するという意味ではなく、全世界が滅ぼされ、古い世界が新しいものにとって代わるという意味だ。わたしは宇宙を取り替えることはしない。）そうして初めて、世界はわたしの旨と一致することになる。そこには今日の圧制のようなものはなく、人々が互いを搾取する現在のような現象もない。代わりに、肉における完全な公正と合理性がある。（公正と合理性があるとは言いが、それは肉においてのことであり、わたしの国とはまったく異なるもので、天と地ほどの差があり、この二つを比較する術はない。結局のところ、人間の世界は人間の世界であり、霊の世界は霊の世界なのだ。）その時には、長子たちとわたしがその世界を管轄する（その世界にはサタンによる妨害はない。サタンはわたしによって完全に処分されているからだ）。しかしわたしたちの生活はやはり神の国の生活であり、それを否定できる者はいない。あらゆる時代を通して、人間は誰も（どれほど忠実であれ）このような生活を経験したことがない。なぜならあら

ゆる時代を通して、わたしの長子として行動した者は一人もいないからであり、彼らはそれでも後にわたしに奉仕することになる。こうした効力者は忠実ではあるが、結局のところわたしに征服されたサタンの子孫なので、肉が死んだ後にも、やはり人間の世界に生まれてわたしに奉仕することになる。これが、「子らはすべての子らに続き、効力者たちはサタンのすべての子孫に続く」ということの真の意味なのだ。あらゆる時代を通して、今日の長子たちに奉仕する人々がどれだけいるかは知られていない。効力者たちは誰一人逃げることができず、わたしは彼らを永遠に奉仕させる。彼らの本性について言えば、彼らはみなサタンの子であり、みなわたしに抵抗する。わたしに奉仕はするが、強制されてそうするのであり、誰も他に選択肢は持っていない。すべてはわたしの手によって支配されているからであり、わたしが用いる効力者は最後までわたしに奉仕しなければならない。そのため今日も、幾時代も前の預言者や使徒らと同じ性質を持った人々が大勢いる。それは彼らの霊が一つだからだ。そのためいまだに、わたしのために走り回る忠実な効力者は大勢いるが、最終的には（彼らは六千年の間絶えずわたしに奉仕してきたので、これらの人々は効力者に属する）、誰もはるか昔から望んできたものを手に入れることができない。わたしが準備したものは、彼らのためではないからだ。

わたしによるすべてのことは、すでに目の前で達成された。わたしは長子たちをわたしの家に、わたしの傍らに戻らせ、再びわたしと一緒にいさせる。わたしは勝利して凱旋し、完全に栄光をつかんだので、あなたがたを連れ戻しに来たのだ。かつて幾人かの人々が、「五人の賢いおとめと五人の愚かなおとめ」について預言をした。この預言は正確ではないが、完全に誤りでもない。それゆえ少し説明しよう。「五人の賢いおとめと五人の愚かなおとめ」は、両方とも人数を表しているのでもなければ、人のタイプを表しているのでもない。「五人の賢いおとめ」とは人々の数を表しており、「五人の愚かなおとめ」はあるタイプの人を表しているが、どちらも長子たちを指しているのではなく、被造物を表している。それが、おとめたちが終わりの日に油を用意するよう言われた理由だ。（被造物はわたしの資質を持たない。彼らは賢い者になりたければ、油を用意する必要があり、そのためにわたしの言葉を携えていなければならないのだ。）「五人の賢いおとめ」とは、わたしが造った人間の中の、わたしの子らと民を表している。彼らが「おとめ」と呼ばれるのは、地上に生まれはしたものの、わたしによって得られるからである。彼らは聖いと呼ばれることもあるため、「おとめ」と呼ばれる。前述の「五人」とは、わたしが予め定めた子らと民の数を表している。「五人の愚かなおと

め」とは効力者を指している。彼らはいのちを全く重視せずにわたしに奉仕し、外的なものばかりを追い求め（彼らにはわたしの資質がないため、彼らのすることはすべて外的なのだ）、わたしの有能な助け手となることができないので、「愚かなおとめ」と呼ばれるのだ。前述の「五人」とはサタンを表しており、彼らが「おとめ」と呼ばれるという事実は、彼らがわたしに征服されており、わたしに奉仕できることを意味しているが、そのような人間は聖くはないので、効力者と呼ばれるのである。

第百十七章

あなたは巻物を開く者である。あなたは七つの封印を解く者である。なぜなら、すべての奥義はあなたに由来しており、すべての祝福はあなたによって明らかにされるからである。わたしは必ず永遠にあなたを愛し、すべての民族に必ずあなたを崇めさせる。なぜならあなたはわたしの本体であり、豊富で完全なわたしの現れの一部であり、欠くことのできないわたしの体の一部だからである。したがって、わたしは特別な証しをしなければならない。わたしの本体の内にある者以外に、わたしの心に適う者がいるだろうか。あなたを証しするのはあなた自身ではなく、わたしの霊であり、あなたにあえて逆らう者が誰であれ、わたしは無論許さない。これはわたしの行政命令に関わるからである。あなたが言うことのすべてを、わたしは確実に達成し、あなたが考えることのすべてを必ず受け入れるだろう。あなたに忠実でない人がいれば、その人たちは公然とわたしに抵抗しているのであり、わたしは無論、彼らを許さない。わたしは、わたしの子に抵抗する者はすべて厳しく処罰し、あなたと相容れる人々は祝福する。これはわたしがあなたに与える権威である。過去に語られたこと、つまり長子たちに対して出された要求と基準において、あなたはその模範である。すなわち、あなたがあるように、長子たちもあるべく、わたしは長子たちに対して要求する。これは人の力でできることではなく、わたしの霊自身がすることである。あなたを証しするのは人間だと信じている者がいるなら、その者は間違いなくサタンの同類でありわたしの敵である。したがって、わたしの証しは決定的で、永久に変わらず、聖霊が確認していることである。誰も安易にそれを変えてはならない。さもないと、わたしは許さない。人間がわたしの証しをすることができないので、わたしは自らわたしの本体のために証しする。人々はわたしの働きの邪魔をしてはならない。これらの言葉は誰もが心に留めておかなければならない厳しい裁きの言葉である。

あなたがたはわたしの言うことを一つ残らず熟考し、留意すべきである。わたしの言

葉を不用意に扱わず、注意深く聞きなさい。わたしが、長子たちはわたしの本体であると言うのはなぜか。そしてわたしの国には欠かせない一部であると言うのはなぜか。歴史が始まる前、わたしたちは一緒にいて、離れたことがなかった。サタンによる崩壊によって、わたしが最初に人間の姿になった後、わたしは再びシオンに戻った。それからわたしたちは皆この世に来て、わたしが終わりの日に勝利を収めた後——つまり、わたしがあなたがたをサタンによって墮落させられた肉体から取り戻した後——わたしはわたしの本体が再び一つとなり、二度と離ればなれにならないように、あなたがたをシオンに連れ戻すだろう。その後、わたしが再び受肉することはなく、あなたがたがわたしの体から離れることは決してないだろう。すなわち、その後わたしは二度と世界を創造せず、シオンにいるわたしの長子たちと永久に離れることはないだろう。なぜならすべては余すところなく完成しており、今わたしは古い時代をすべて終わらせようとしているからである。新しい天と地の生活があるのはシオンだけである。わたしの本体はシオンにあるからである。ここから離れて存在する新しい天や新しい地はもうないだろう。わたしは新しい天であり、新しい地でもある。わたしの本体がシオン全体を満たすからである。わたしの長子たちは新しい天であり、わたしの長子たちは新しい地であると言うこともできるだろう。わたしの長子たちとわたしは一つの体であり、分けることはできない。わたしについて語ることは必然的に長子たちのことも含み、わたしたちを離れさせようとする者は誰であれ、わたしは無論許さない。わたしがすべての国々、すべての民をわたしの玉座の前に戻す時、サタンはすべて完全に面目をつぶされ、汚れた悪霊たちはすべてわたしから遠ざかる。そうすれば、義はすべての民の中に（つまり、わたしの子供たちと人々の中に）確かに存在するであろうし、すべての国々でサタンによる崩壊は確実になくなるだろう。わたしがすべての国々や民族を統治しており、わたしが宇宙世界全体に力を振るっており、サタンたちはすっかり壊滅し、完全に敗北し、わたしの行政命令による懲罰を受けているからである。

わたしはすべての民族の中で働きを進めているが、彼らはわたしの霊の啓きを受けるだけで、彼らの中にわたしの奥義を明らかにできる者は誰もおらず、わたしを表現する資質を持つ者は誰もいない。わたしから出る者だけがわたしの働きを行う資格を持ち、残りの者について言えば、わたしが一時的に使うだけである。わたしの霊は勝手気ままに人の上に降りて来るわけではない。わたしの中のすべては貴重だからである。わたしの霊が誰かの上に降ることとわたしの霊が誰かに働くことはまったく別のものである。わたしの霊はわたしの外側の人々に働くが、わたしの霊はわたしから出る者の上に降る

。これら二つは、完全につながりのない事柄である。わたしから出る者は聖いが、わたしの外側にいる人はどれほど善人でも聖くないからである。わたしの霊が些細な理由で誰かの上に降ることはない。人々は心配するべきではない。わたしは間違いを一切犯さず、自分のすることについて100パーセント確信している。わたしは彼の証しをしたのだから、必ず彼を守る。その者は絶対にわたしから出る者であり、わたしの本体にとって欠かせないからである。したがってわたしは、人々が自分の観念を傍らに置き、サタンに与えられた考えを捨て、わたしの発する言葉のすべてを真実だと信じ、自分の心の中にある疑念に負けないことを望む。これは人類に対するわたしの委託であり、人類に対するわたしの勧告である。誰もがこれらのことを忠実に守らなければならない。誰もが真摯にこれらのことに従わなければならない、わたしの言うことを基準としなければならない。

わたしはすべての国家と民族の中でわたしの働きを始めるつもりだが、それだけでなく宇宙世界の至る所でも始めるつもりである。そしてこれはさらに、わたしがシオンに戻る日が近いことを示している（すべての民の中で、そして宇宙世界で、わたしが働きを始める前にシオンに戻る必要があるからだ）。わたしの働きの段階や働き方を推測できる人がいるだろうか。わたしが霊の中で外国人と会うだろうという理由は、このことが基本的に肉においては行えないからであり、再び危険を冒すのは気が進まないからである。以上が霊の中で外国人と話を交わす理由である。これが本当の霊の世界であるべきで、肉において生きている人々が想像するような^{a)}曖昧な霊の世界ではない。その時わたしの語ることは、異なる時代に語るということで話し方だけが少し違う。したがって、わたしは人類に対して、わたしの話し方に注意するようにと、繰り返し促している。また、わたしが言うことの中には人にはわからない奥義があることも思い起こさせる。だが、なぜわたしがこれらのことを言うのかを誰も理解せず、わたしが今日語って初めてあなたがたは少しだけ理解できるが、まだ完全には理解してはいない。この段階のわたしの働きの後、わたしはあなたがたに少しずつ語るだろう（わたしは未だにこれを通して一部の人々を除外したいと思っている。そこで今は何も言わない）。これがわたしの働きの次の段階の方法である。誰もが注目して、わたしが知恵ある神自身であることをはっきりと知るべきである。

脚注

a. 原文に「人々が想像するような」の語句は含まれていない。

第百十八章

誰であれわたしの子を証しするために立ち上がるなら、わたしは彼らに恵みを授ける。誰であれわたしの子を証しするために立ち上がらず、抵抗して、人間の観念を用いて彼を測ろうとするなら、わたしは彼らを滅ぼす。誰もがはっきり見なければならない！わたしの子のために証しすることは、わたしを畏敬する行為であり、それはわたしの意志を満足させる。父を敬うだけで、子をいじめ、虐げる――そうする者たちは赤い大きな竜の子孫であり、わたしの子のために証しするのにこのような屑は必要ない。わたしは底知れぬ穴でその者たちを滅ぼす。わたしは忠実で誠実な効力者たちがわたしの子に仕えることを望む。その他の者は必要ない。これがわたしの義なる性質であり、わたしが汚れなき聖なる神自身であることを示すに足る。わたしは、わたしの行政命令に違反する者は誰であれ赦さない。家族の中であろうと、この世であろうと、過去にあなたに逆らったり、あなたを迫害した者が誰であれ、わたしは一人ずつ罰し、誰一人容赦しない。なぜなら、わたしには、血肉の部分はないからである。今日、あなたのために証しをするということは、これらの効力者たちがわたしへの奉仕を終えたことを示す。だから、どんな良心のとがめも、心配も必要ない。結局のところ、彼らはあなたの効力者であり、詰まるところ、あなたは天のものであり、最終的にわたしの体に帰るであろう。というのは、わたしの体はあなたなしには存在し得ないからである。過去にあなたに逆らい、あなたに一致しなかった者たちは（このことは他の人には見えないが、あなただけが心の中でそれを知っている）今や正体を明らかにして倒れた。なぜなら、あなたこそが神自身であり、あなたに逆らったりあなたに背く者を、あなたは容赦しないからである。外からは全く見るできないが、わたしの霊はあなたの内にあり、これには疑問の余地がない。すべての人がそのことを信じなければならない。さもないと、わたしの鉄の杖がわたしに逆らう者を残らず打ち倒すであろう。わたしがあなたを証しするのであるから、あなたは確かに権威があり、あなたが言うことはすべてわたしの表現であり、あなたがなすことはすべてわたしの顕れである。なぜなら、あなたはわたしの愛する者であり、わたしの本体のなくてはならない一部であるからだ。だから、あなたの一つひとつの行い、あなたが着るもの、使うもの、またあなたが住むところ、――これらは確かにわたしの行いでもある。誰もあなたの不利になることを見つけようとしたり、あなたの欠点をあげつらったりしてはならない。そのようなことをするなら、わたしはその者を赦さない。

わたしは、わたしの家からすべての悪いしもべたちを追い払い、わたしの家では、すべての忠実なしもべたちをわたしの長子たちの証人とする。これがわたしの計画であり

、そのようにわたしは働くのである。悪いしもべたちがわたしの子のために証しするときは、死者のような悪臭がするので、わたしはこれを忌み嫌う。忠実なしもべたちがわたしの子のために証しするとき、それは真剣で誠実であり、わたしに受け入れられる。だから、誰であれ、わたしの子を証しする意欲がないのなら、今すぐここから出て行け。わたしは強制はしない。わたしがあなたに去るように言うなら、あなたは去らなければならない。どのような結果になるのか、何があなたを待ちうけているのかを見よ。そしてこのことは、誰よりも奉仕を行う者たちが一番理解している。わたしの裁き、わたしの憤り、わたしの呪い、わたしの燃え尽くす炎、そしてわたしの激しい怒りは、誰であれわたしに逆らう者の上に今にも降りかかろうとしている。わたしの手は誰にも憐みを示さない。わたしに奉仕する者が、以前どれほど忠実であったとしても、今日わたしの子に逆らうなら、わたしはただちに彼らを滅ぼし、わたしの前に彼らを残さない。このことから、わたしの憐みの無い手を見ることができよう。人々はわたしを知らず、その本性はわたしに逆らうものなので、わたしに忠実な者たちでさえ、おのが快楽を追求している。自分に不利な影響を及ぼすことが起こると、彼らの心はすぐに変わり、わたしのそばから退くことを望む。これはサタンの本性である。あなたは自分自身が忠実であるという意見に固執してはならない。己のために益になることが何もないければ、この獣の群れはわたしに忠誠を尽くすことが全くできない。わたしがわたしの行政命令を宣言しなかったならば、あなたがたはずっと前に退いていただろう。あなたがたは皆、鍋と火の間に挟まれたまま、わたしのために奉仕をする意欲がない一方、わたしの手によって打たれることも望んでいない。誰であれわたしに逆らう者には大きな災いが今にも降りかかろうとしていることをわたしが告げなかったならば、あなたがたはずっと以前に退いていたであろう。人々が頼りにする策略について、わたしは知らないだろうか？ほとんどの人たちが今、小さな希望を抱いているが、その希望が失望に転じると、それ以上先に進む意欲を失い、引き返すことを求める。前にも言ったが、わたしは本人の意志に反して誰もここに引き留めることはしない。だから、結果があなたにとってどうなるのか、慎重に考慮せよ。これは事実であり、あなたに対するわたしの空脅しではない。わたし以外には、人間の本性を探ることができる者はいない。彼らは皆、自分の忠誠が不純であることを知らずに、自分たちがわたしに忠実であると思い込んでいる。これらの不純は、人々を破滅させであろう。というのは、それは赤い大きな竜の計略であるからだ。このことは、はるか昔にわたしによって露わにされた。わたしは全能なる神である。わたしがこれほど単純なことを理解しないことなどだろうか？わたしはあなたの血肉を透して、あなたの意図を見ることができる。わたしにとって、人間の本性を見抜

くことは難しくないが、人々は自分の意図を知っている者は自分以外にはいないと考えて、利口ぶる。彼らは、全能なる神が天と地と万物の中に存在することを知らないのか？

わたしはわたしの子を最後まで愛し、赤い大きな竜とサタンを永遠に憎む。わたしの刑罰は、わたしに逆らうすべての者たちに降りかかり、一人の敵もそれを免れない。わたしは以前言った、「わたしはシオンに大きな石を据える。信ずる者にとって、この石は彼らが築き上げられるための礎である。不信仰な人々には、これはつまづきの石である。悪魔の子らにとって、これは彼らを押しつぶし殺す石である。」これらの言葉はわたしが以前話ただけでなく、多くの人々によって預言され、多くの者たちがこの時代にそれを読んだ。さらに、何人かの者たちがこれらの言葉を説明しようとしたが、今まで誰もこの奥義を解明した者はいない。なぜなら、この働きは、現在の終わりの日にしか、行うことができないからである。したがって、何人かがこれらの言葉を説明しようとしたが、彼らの説明はすべて誤りである。わたしの長子たちのためにわたしが証しすることの重大さと、わたしがそうする目的をあなたがたが知ることができるように、わたしは今すべての意味を明らかにする。わたしはシオンに大きな石を据え、この石はわたしの長子たちが証しされることを指している。「大きな」という言葉は、この証しが巨大な規模で行われるという意味ではなく、むしろわたしの長子たちを証しすることにおいて、非常に多くの効力者たちが退くことを意味する。ここで言う「不信仰な者たち」とは、わたしの子が証しされたために退いた者たちを指し、それゆえ、この石はこの種の人間にとってつまづきの岩となることを意味する。この種の人間はわたしの手によって打ち倒されるため、わたしはそれが岩であるという。したがって、人々をつまづかせる岩とは、倒れたり、弱くなったりすることを指すのではなく、わたしの手によって打ち倒されるという意味で言われている。「信ずる者にとって、この石は彼らが築き上げられるための礎である」という言葉の中の「信ずる者」とは、忠実な効力者たちを指し、「彼らが築き上げられるための礎」とは、彼らがわたしへの忠実な奉仕を終えた後に受ける恵みと祝福を指している。長子たちが証しされてきたということは、この古い時代全体が間もなく過ぎ去ることを示し、それはサタンの国の破滅を象徴する。それゆえ、異邦人にとって、それは彼らを押しつぶし殺す岩である。それゆえ、すべての国を打ち砕くことは、全世界が完全に新しくされることを意味する。古いものは過ぎ去り、新しいものが確立される。――これこそが「打ち砕く」ということの真の意味である。あなたがたにはこのことが分かるか？この最後の段階でわたしが行う働きは、これらの

わずかな言葉で要約することができる。これはわたしの奇しき行いであり、わたしの言葉の中でわたしの意志を把握すべきである。

第百十九章

あなたがたは皆わたしの意図を把握し、皆わたしの機嫌を理解しなければならない。今はシオンへの帰還の準備をする時であり、わたしはそれ以外のことをする気はない。ただいつか近いうちにあなたがたと再会し、シオンで一刻一秒を共に過ごすことを願うのみだ。わたしは世を忌み嫌い、肉を忌み嫌い、さらに地上のすべての人間を忌み嫌っている。彼らに会う気はない。なぜなら彼らはみな悪霊同然であり、人間的性質のかけらもないからだ。わたしは地上で生活する気はない。わたしはすべての被造物を忌み嫌い、肉と血から成るすべてのものを忌み嫌う。全地は死臭に満ちている。わたしはすぐにでもシオンに戻り、地上から死体の悪臭をすべて取り除き、全地をわたしへの讃美で満たしたいと思っている。わたしはシオンに戻り、肉と世から離れよう。誰もわたしの前に立ちはだかつてはならない。人間を殺すわたしの手には何の情けもない。今後、誰も教会建設のことを話してはならない。誰かがそのことを話せば、わたしはその者を赦さない。（それは今がわたしの長子たちを証しする時であり、神の国を建て上げる時だからだ。教会建設のことを話す者は誰であれ、神の国の建設を破壊し、わたしの経営を邪魔しているのだ）。すべては準備され、すべては整った。残るのはただ、長子たちが高められ、証しされることだけである。それが起こったら、わたしは一刻の遅れもなく、形式にもこだわらず、ただちにシオン——あなたがたが日夜心の中で思っている場所——へ戻ることになる。今の世がいかに平穏に安定して続いているかだけを見てはいけない。この働きはすべてシオンに帰る働きなので、もうそれらのことに構ってはいならない。シオンへ帰る日が来れば、すべては完了する。早くシオンに帰ることを望まない者がいるだろうか。父と子らが早く再会することを望まない者がいるだろうか。地上の快樂がいかに愉快だろうと、わたしたちの肉体を捕まえておくことはできない。わたしたちは肉を超越し、共にシオンに戻るだろう。誰がそれを妨げようとするだろうか。誰が障壁を作ろうとするだろうか。そのような者は決して赦さない。障害はすべて一掃する。（これが、今すぐシオンに戻ることはできないという理由である。わたしはこの清めの働きを実行すると同時に、長子たちを証しもしている。この二つの働きは同時に進行している。清めの働きが完了する時、それは長子たちを露わにする時だ。「障害」とは多数の効力者たちのことであり、そのためこれら二つの働きは同時に起こっていると言うのだ。）わたしは長子たちを、全宇宙と地の隅々まで、山河とすべてのもの

を越えて、わたしと共に歩ませる。誰がそれを邪魔しようとするのか。誰が妨げようとするのか。わたしの手はどんな人間も簡単には放免しない。わたしは長子たちを除くすべての者に対して怒り、呪う。全地にわたって、肉なる者でわたしの祝福を受ける者は一人もおらず、すべての者がわたしの呪いを受ける。創世の時から、わたしは誰一人祝福していない。祝福を与えたときも、それは単なる言葉に過ぎず、決して現実ではなかった。なぜならわたしはサタンを徹底的に憎んでいるからであり、サタンを祝福することは決してなく、ただ懲罰するからだ。最終的に、わたしがサタンを完全に征服し、完全な勝利を得た後、わたしはすべての忠実な効力者たちに物質的な祝福を与え、わたしを讃美することを楽しませよう。その時にはわたしのすべての働きが完成しているからだ。

実に、わたしの時はそれほど遠くない。六千年の経営（救いの）計画が、あなたの目の前で完了しようとしている。（それは本当にあなたの目前にある。これは予示ではない。わたしの機嫌からそれを見てとれるだろう。）わたしはすぐに長子たちをシオンに連れて帰る。中には、「それが長子たちのためだけなら、なぜ六千年もかかるのか。そしてなぜ、こんなに大勢の人間が造られたのか」と言う人もいる。わたしは以前、わたしのものはすべて貴いと言った。なぜわたしの長子たちが、なお一層貴重でないことがあるのか。わたしはすべてのものを動員してわたしに仕えさせ、さらにわたしの力を露わにして、全宇宙世界にわたしたちの手中にないものは何一つなく、わたしたちに奉仕しない者は誰一人なく、わたしたちのために成し遂げられたのでないものは何一つないことを、すべての人々が見られるようにする。わたしはすべてのことを達成する。わたしには時間の観念はない。わたしは六千年の間に計画を完了し、働きを完成させるつもりだが、わたしにとってはすべてが解放されており自由なのだ。たとえそれが六千年未満であったとしても、わたしの目から見て時が来たのであれば、誰があえて反対を唱えようとするだろうか。誰が立ち上がって自分勝手に裁こうとするだろうか。わたしの働きはわたしが自ら行い、わたしの時間はわたしが自ら定める。どんな人も、どんな事も、どんな物も、あえて自分勝手に行動しようとはせず、わたしがすべてをわたしに従わせる。わたしにとっては正も不正もなく、わたしが正しいと言えればそれは間違いなく正しく、わたしが間違っていると言えればそれは間違いなのだ。いつも人間の観念でわたしを測ってはならない。長子たちとわたしは共に祝福されているのだ――誰があえて服従を拒もうとするのか。わたしはその場であなたを滅ぼそう。あなたは服従を拒んでいる。あなたは反抗的だ。わたしは人類に対する憐れみをまったく持っておらず、わたしの

憎しみはすでに限界に達した。もうこれ以上忍耐することはできない。わたしに言わせれば、全宇宙世界がただちに抹消されなければならない。そのとき初めて、わたしの大いなる働きが為し遂げられ、わたしの経営計画が完了し、そして初めてわたしの心の憎しみが解消されるのだ。今わたしは、長子たちを証しすることしか考えていない。他のことはすべて脇へ置き、重要なことを最初に為してから、次にそれ以外のことをする。これがわたしの働きの段階であり、誰もそれを侵害してはならない。すべての者がわたしの言うとおりにしなければならない。そうでなければ、わたしの呪いの対象となるだろう。

今や働きは完了したので、わたしは休むことができる。これ以降、わたしはもう働きを行わず、長子たちに命じて、成し遂げたいことをすべて行わせる。なぜなら長子たちはわたしであり、長子たちがわたしの本体だからだ。これは少しも間違っていない。観念を用いて判断してはならない。長子たちを見ることは、わたしを見ることである。なぜならわたしたちは一つであり、同じものだからだ。わたしたちを切り離す者はわたしに反抗しているのであり、わたしはその者を赦さない。わたしの言葉の中には、人間が理解することのできない奥義がある。わたしの愛する者だけがわたしを表現することができ、他の者にはそれができない。これはわたしが決定したことで、誰にも変えることはできない。わたしの言葉は豊かで包括的で測り知れない。すべての者はわたしの言葉に多大な努力を費やし、頻繁に熟考するよう努めなければならず、一言も一文も逃してはならない。さもないと彼らは誤った解釈を抱き、わたしの言葉を誤解するだろう。わたしの性質は犯すことが許されないと言ったが、それは証しされた長子たちに反対してはならないということだ。長子たちはわたしの性質のあらゆる側面を表しているので、聖なるラッパが響き渡る時こそ、わたしが長子たちを証しし始める時であり、かくしてその後、聖なるラッパがわたしの性質を徐々に大衆に告知することになる。言い換えれば、長子たちが露わにされる時こそ、わたしの性質が露わになる時なのだ。誰がそれを見抜くことができようか。言うておくが、すでに明らかにした奥義の中にさえ、人々には解き明かせない奥義が残っているのだ。あなたがたのうち誰が、これらの言葉の真の意味を本当に理解しようとしたのか。わたしの性質は、あなたがたが想像したように、人間の性格なのか。そのように考えるのは重大な誤りである。今日わたしの長子たちを見る者は、みな祝福の対象であり、わたしの性質を見る。これは絶対的な真実である。長子たちはわたしのすべてを表しており、疑いなくわたしの本体である。誰もこのことを疑ってはならない。従順な者は恵みによって祝福され、反逆する者は呪われる。こ

れはわたしが命じることであり、どんな人間も変えることはできないのだ。

第二百十章

シオンよ！ 歓呼せよ！ シオンよ！ 大声で歌え！ わたしは勝ち誇って戻ってきた。わたしは勝利して帰って来た。すべての民よ、急いで整列せよ。すべての被造物よ、動きを止めなさい、わたしの本体が全宇宙に向き合い、世界の東に現れるからだ。ひざまずいて崇めようとしない者などあるだろうか。わたしを真の神と呼ばない者などあるだろうか。畏敬の念を持って見上げない者などあるだろうか。讃美しない者などあるだろうか。歓呼しない者などあるだろうか。わたしの民はわたしの声を聞き、わたしの子らはわたしの国で生き残るのだ。山々も川もすべてのものが止むことなく歓呼し、休むことなく飛び跳ねる。今や誰一人退こうとする者はなく、立ち上がって抵抗しようとする者もない。これはわたしの素晴らしき業であり、そしてそれ以上に、わたしの偉大な力なのだ。わたしはすべてのものに心からわたしを崇めさせ、そしてさらに、すべてのものにわたしを称賛させる。これはわたしの六千年にわたる経営（救いの）計画の究極の目的であり、わたしが定めたことなのだ。一人の人間も、一つの物体も、一つの出来事も、あえて立ち上がって抵抗したり反逆したりすることはない。わたしの民は皆わたしの山（すなわちわたしが後に創造する世界）に流れ着き、わたしの前で服従する。わたしには威厳と裁きがあり、わたしが権威を宿しているからだ。（これはわたしが体に宿っているときのことである。わたしは肉においても権威を持つが、肉の中では時間と空間の制限を超越できないため、完全な栄光を得たとは言えない。わたしは長子たちを肉において獲得するが、それでも栄光を得たとは言えないのだ。シオンに戻り、外観を変えたとき初めて、わたしは権威を備え、すなわち栄光を得たと言えるのだ。）わたしに難しいことは何もない。わたしの口から出る言葉によってあらゆるものが破壊され、わたしの口から出る言葉によってあらゆるものが実現し完全にされる。それがわたしの偉大な力であり、わたしの権威である。わたしは力と権威に満ち溢れているため、わたしを妨げようとする者は誰もいない。わたしはすでにすべてのものに勝利し、すべての反逆の子らに打ち勝った。わたしは長子たちを自分と一緒にシオンに連れ戻す。わたしは一人でシオンに戻るのではない。そのためすべての者がわたしの長子たちを見て、わたしへの畏敬の念を抱くようになる。それこそが長子たちを得ることの目的であり、それが創世の時からわたしの計画なのだ。

すべての準備ができたとき、それはわたしがシオンに戻る日となり、その日はすべて

の人々によって祝われることになる。わたしがシオンに戻ると、地上のすべては静まりかえり、地上のすべてが安らぐ。わたしがシオンに戻ると、すべてのものは本来の姿を取り戻す。それからわたしはシオンで働きを開始し、悪人を罰し、善人に報い、わたしの義を実践し、わたしの裁きを実行する。わたしは言葉を使ってすべてを成し遂げ、あらゆる人とあらゆるものにわたしの刑罰の手を体験させる。そしてあらゆる人々に、わたしの栄光のすべて、知恵のすべて、豊かさのすべてを見せる。わたしの中にはすべてが完成されているため、立ち上がって批判する者は誰もいない。そしてここで、あらゆる人にわたしの名誉のすべてを見せ、わたしの勝利のすべてを味わわせよう。わたしの中にはあらゆるものが現れるからだ。ここからわたしの偉大な力と権威を見ることができる。誰もあえてわたしを憤慨させようとはせず、誰もわたしを妨げようとはしない。わたしの中ではすべてのことが明らかにされる。誰があえて何かを隠そうとするだろうか。わたしはそのような者には決して憐みを示さない。そのような惨めな者はわたしの厳しい罰を受け、そのような屑はわたしの目の前から追放されなければならない。わたしは鉄つえをもって彼らを支配し、わたしの権威を用いて彼らを裁く。一切の哀れみをかけることも、彼らの気持ちを考えることもない。なぜならわたしは神自身であり、感情を持たず、威厳に満ち、侵すことのできない者だからだ。すべての者がこのことを理解し、目にしなければならぬ。そうでないと、「原因や理由もなく」わたしに打ち倒され、滅ぼされることになる。わたしの鉄のつえはわたしに背くすべての者を打ち倒すからだ。わたしは彼らがわたしの行政命令を知っていようがいまいが気にはしない。それはわたしにはまったく重要ではない。わたしの本体は誰の背きも許さないからだ。このため、わたしは獅子だと言われているのだ。わたしが触れる者は誰でも、わたしに打ち倒される。そのため、今ではわたしを憐れみと慈しみの神と呼ぶことは冒涇だと言われているのだ。本質的に、わたしは子羊ではなく、獅子である。誰もあえてわたしに背くことはなく、わたしに背く者は誰であれ、わたしがただちに容赦なく死をもって罰する。このことはわたしの性質を示すのに十分である。そのため終わりの時代には、大多数の人々が身を引くはずであり、それは人間にとっては耐え難いことだが、わたしは安らいで満足しており、これを困難な仕事だとはまったく思っていない。これがわたしの性質である。

わたしはすべての人々が従順な心を持って、わたしによるすべてのことに従うよう願っている。そうすれば、わたしは必ず人類を大いに祝福する。なぜならわたしが言ったとおり、わたしと相容れる者は保たれ、わたしに敵対するものは呪われるからである。

わたしがそう定めたのであり、これを変更できる者はいない。わたしが決定したことはわたしが達成したことであり、それに反対する者は誰でもただちに罰される。わたしはシオンで必要なものはすべて持っており、望むものはすべて持っている。シオンにはこの世の片鱗さえなく、この世に比べるとシオンは豪華で壮麗な宮殿である。しかし誰もそこに入ったことはないため、人間の想像の中では、それは全く存在していない。シオンでの生活は地上での生活とは異なる。地上での生活とは、食べること、着ること、遊ぶこと、そして快楽を求めることだが、シオンでは大きく異なっている。それは喜びに浸る父と子らの生活であり、それが常に宇宙の全空間を満たしているだけでなく、いつも調和して共に集っている。事ここに至った今、わたしはあなたがたに、シオンがどこにあるのか告げよう。シオンはわたしが住む所であり、わたしの本体がある場所である。それゆえシオンは聖なる場所でなければならず、地上から遠く離れていなければならない。だからわたしは、地上の人々や物事を嫌悪し、飲むこと、食べること、遊ぶこと、そして肉の快楽を求めることを嫌悪すると言うのだ。なぜなら地上の快楽がどれほど楽しかろうとも、シオンの生活とは比べものにならないからだ。それは天と地の差であり、この二つを比較することはできない。地上に人間が解決できない多くの謎がある理由は、人々がシオンのことを聞いたことがないからだ。では、シオンとは一体どこにあるのか。人々が想像するように、別の惑星にあるのだろうか。いいや、そんなものは人間の心の中にあるただの空想だ。わたしが言及した第三の天は、人間には予兆的な意味があるものと見なされているが、人間が自分の観念で理解していることは、わたしの意味とは正反対だ。ここで言う第三の天は、何のまがい物でもない。だからわたしは太陽や月や星や天体を滅ぼすことはなく、天と地を消し去ることはないと言うのだ。わたしが自らの住む場所を滅ぼすことなどできるだろうか。シオンの山を消し去ることなどできるだろうか。それはばかげたことではないか。第三の天はわたしが住む場所だ。それはシオンの山であり、それは絶対である。（なぜ絶対だと言うかといえば、それはわたしが今言っていることを、人はまったく理解できないからだ。人はただ聞くことができるだけだ。人の思考の範囲はそこまで及ばないため、今はこれ以上シオンについて語らないことにする。でないと人々はそれをただの作り話だと思うだろう。）

わたしがシオンに戻った後も、地上の者たちは過去と同じようにわたしを讃美し続ける。こうした忠実な効力者たちは、わたしに仕えるためにこれまでどおり控えているが、彼らの役割は終わることになる。彼らにできる最善のことは、わたしが地上にいる状況をよく考えてみることだ。その時になると、わたしは災難を被ることになる人々に災

害をもたらし始めるが、それでもすべての者がわたしを義なる神だと信じる。わたしは決してそれらの忠実な効力者たちを罰することはなく、ただ彼らにわたしの恵みを受け取らせる。これはわたしが悪を行うすべての者を罰し、善を行う者たちはわたしが授ける物質的な楽しみを受け取るだろう、と言ったとおりだ。それはわたしが義と誠実の神自身であることを示している。わたしはシオンに戻ると、世界各国に目を向け始め、イスラエル人に救いをもたらし、エジプト人を罰する。これがわたしの働きの次の段階である。その時のわたしの働きは、現在の働きとは違ったものになる。それは肉における働きではなく、完全に肉を超越したものとなるのだ。わたしが言ったとおりにそれは成し遂げられ、わたしが命じたとおりにそれは堅く立つだろう。何が語られようと、それがわたしの口から出たものである限り、ただちに実現される。そしてそれが、わたしの言葉が語られるのとその実現は同時に起こる、ということの真の意味である。わたしの言葉自体が権威であるからだ。わたしは今、地上の人々が少し手がかりを得て、やたらな思い込みをせずにすむよう、いくつかの一般的なことを語っている。その時が来れば、すべてはわたしによって整えられるので、誰も自分勝手に行動してはならない。そうでないとわたしの手によって打ち倒されることになる。人間の想像の中では、わたしが話すことはすべて曖昧である。それは結局、人間の思考は限られており、人の思いとわたしが語ったこととは天と地ほどもかけ離れているからだ。そのため、誰もこれを理解することはできない。すべきことはただ、わたしが言うことに同調することだけであり、それは避けられない成り行きなのだ。わたしは言った、「終わりの日には獣が現れてわたしの民を迫害するであろう。そして死を恐れる者たちはしるしを付けられ、獣によって連れ去られるだろう。わたしを見た者たちは、獣に殺されるだろう」と。この言葉の「獣」とは間違いなく、人々を惑わすサタンを指している。これはすなわち、わたしがシオンに戻るとき、大勢の効力者たちが退くということ、つまり獣によって連れ去られるということだ。これらの生き物は皆、底なしの穴に落ち、わたしの永遠の刑罰を受けることになる。「わたしを見た者たち」とは、わたしに征服されたそれらの忠実な効力者たちを指している。「わたしを見た」というのは、わたしによって征服されたことを意味する。「獣に殺される」とは、わたしに征服されたサタンが、あえて立ち上がってわたしに抵抗しようとしなないことを意味する。言い換えれば、サタンはその効力者たちに対して何の働きもなさそうとはせず、そのためその人々の魂は救われるということだ。こう言われるのは、彼らがわたしに忠誠を尽くすことができるからであり、それはその忠実な効力者たちがわたしの恵みと祝福を受けられることを意味している。そのためわたしは彼らの魂が救われることになると言うのだ（これは第三の天に昇ることを言

っているのではない。それは単なる人間の観念である）。しかし悪しきしもべたちは再びサタンによって拘束され、底なしの穴に投げ込まれるだろう。これが彼らに対するわたしの罰であり、彼らへの報復であり、彼らの犯罪に対する報いなのだ。

わたしの働きの速度が上がるにつれて、地上でのわたしの時間は徐々に少なくなっていく。そしてわたしがシオンへ戻る日が近づいてくる。地上でのわたしの働きが終わりを迎えるとき、それはわたしがシオンに戻る時である。わたしは地上に住みたいとはまったく思わないが、わたしの経営（救い）のため、わたしの計画のために、すべての苦しみに耐えてきたのだ。今日、時はすでに到来した。わたしは歩調を速めるので、誰もわたしについて来ることができない。人が理解できようができませんが、わたしはあなたがたに、人には理解できないが、地上のあなたがたが知らねばならないすべてのことを詳細に教えよう。それゆえわたしは、自らが時間と空間を超越する神自身であると言うのだ。長子たちを得てサタンを倒すという目的がなかったなら、わたしはすでにシオンに戻っていただろう。そうでなかったなら、一切人類を創造したりはしなかっただろう。わたしは人の世界を嫌悪し、わたし以外の人々を憎んでおり、全人類を一挙に滅ぼすことを考えるほどである。しかしわたしの働きには順序と構成があり、均衡と節度の感覚が備えられており、それは無秩序なものではない。わたしが為すことはすべてサタンを倒すためであり、そしてそれ以上に、わたしができるだけ早く長子たちと一緒にいられるようにするためなのだ。それがわたしの目標である。

第二部

全宇宙への神の言葉

(1992年2月20日から1992年6月1日まで)

序論

「全宇宙への神の言葉」は、キリストが神自身の身分において発した言葉の第二部である。これは1992年2月20日から1992年6月1日までの分であり、全47章で構成されている。これらの神の言葉は、形式、内容、視点において、「キリストの初めの言葉」とはまったく異なっている。「キリストの初めの言葉」は、人々の外面的な振る舞いと単純な霊的生活を明らかにして導き、最終的には「効力者の試練」で終わる。しかし、「全宇宙への神の言葉」は、効力者という人の身分の終結と、神の民としての生活の開始で始まる。それは人々を神の働きにおける第二の頂点に導き、人々はその過程の中で火

の湖の試練、死の試練、そして神を愛する時代を経験する。これら数段階は神の前における人間の醜さと、その真の顔を完全に暴き出す。最終的に、神は最終章において人間から離れ、それにより神のこのたびの受肉で最初の人を征服する、すべての段階を完結させる。

「全宇宙への神の言葉」の中で、神は霊の観点から言葉を発している。神の話し方は、被造物である人類には不可能なものである。そのうえ、神の言葉の語彙と文体は美しく、感動的であり、人類の文学のいかなる形式もそれに取って代わることはできない。神が人を暴く言葉は正確で、いかなる哲学でも論破することはできず、すべての人を服従させる。神が人を裁く言葉は鋭い剣のごとく、人々の魂の深みにまっすぐ切り込み、人に身を隠す場所さえ与えない。神が人々を慰める言葉は憐れみと慈愛を伝え、愛情深い母親の抱擁のように暖かく、人々にかつてない安堵感を与える。これらの発言がもつ唯一最大の特徴は、神はこの段階においてヤーウェあるいはイエス・キリストの身分を使わず、終わりの日のキリストの身分も使わずに話すということだ。むしろ本来の身分、すなわち創造主としての身分を使うことで、神に従うすべての人、まだ従っていないすべての人に向かって話し、教えを説く。創世以来、神がすべての人類に話しかけたのはこれが初めてだと言っても過言ではない。神がかくも詳細に、またかくも系統立てて、被造物である人類に話したことはかつてなかった。もちろん、全人類にこれほど多くのことを、かくも長きにわたって話したのもこれが初めてである。それはまったく前例のないことなのである。そのうえ、これらの言葉は人類のあいだで神が発した初めての文章であり、神はその中で人々を暴き、導き、裁き、心を通わせて語っている。それはまた、神が人々に自身の足跡、横たわる場所、神の性質、神が所有するものと神そのもの、神の考え、そして人類に対する神の懸念を知らしめる最初の発言でもある。これらは、創世以来神が第三の天から人類に語りかけた最初の発言であり、神が本来の身分を使って言葉の中に現われ、心之声を人類に表現した最初の例だと言える。

これらの発言は深遠で計り知れない。簡単に理解できるものではないし、神の言葉の起源と目的を把握することも不可能である。ゆえにキリストは、人が理解しやすい言語を使って各章の後に説明を加え、発言の大部分を明確にした。発言それ自体と併せて、この説明は誰もが神の言葉を理解し、知ることを容易にする。わたしたちはこれらの言葉を「全宇宙への神の言葉」の附録にした。その中で、キリストはもっとも理解しやすい言葉遣いで説明をする。両者を組み合わせることは、人間性における神と神性との完全な合体である。附録において、神は第三者の視点で語っているが、これらの言葉が神

自ら発したものであることは、誰も否定できない。神の言葉を明確に説明できる人間はいないからである。神が発した言葉の起源と目的を解明できるのは、神自身だけである。したがって、神は多くの手段を用いて語るが、神の働きの目的は決して変わらず、神の計画の目的も決して変わらない。

「全宇宙への神の言葉」は、神が人と別れる一章で終わっているが、それは実のところ、人のあいだにおける神の征服と救いの働き、そして人々を完全にする神の働きが正式に明かされる時である。ゆえに「全宇宙への神の言葉」は、神による終わりの日の働きの預言とみなすほうがふさわしい。この時点を過ぎて初めて、受肉した人の子がキリストの身分を使って正式に働き、語り始め、諸教会を巡り歩いていのちを施し、自身のすべての民に水を与え、牧養したからである。そうして「諸教会を歩くキリストの言葉」にある多くの発言が生まれたのである。

第一章

わたしの言葉を目にした人は本当にわたしの言葉を受け入れているのか。あなたがたは本当にわたしを知っているのか。あなたがたは本当に服順するようになったのか。あなたがたはわたしのために誠実に努力するのか。あなたがたは赤い大きな竜を前にして、本当にわたしへの強い断固とした証しを立てたのか。あなたがたの献身は本当に赤い大きな竜を恥じ入らせるのか。わたしの言葉による試練を通してのみ、教会を清め、わたしを本当に愛する人を選ぶという目標をわたしは達成することができる。わたしがこのように働かなければ、人はわたしを知ることができるだろうか。誰がわたしの言葉を通してわたしの威厳、わたしの怒り、わたしの知恵を知ることができるだろうか。わたしは働きを開始し、働きを完了するのは確実だが、それでも人の心を深みまで調べるのはわたしである。実のところ、わたしを完全に知っている人はいないので、わたしは言葉を使ってあらゆる人を導き、新しい時代へと連れて行く。最後には、言葉を使って働きをすべて成し遂げ、わたしを誠実に愛する人をすべて服従させ、わたしの国へ帰らせ、わたしの玉座の前で暮らせるようにする。今の状況は以前とは異なり、わたしの働きは新たな開始点に入っている。そういうわけで、新しい取り組み方が出てくる。すなわち、わたしの言葉を目にし、まさに自分のいのちとして受け入れる人はすべてわたしの国にすることになり、わたしの国にいたので、わたしの国の民となる。このような人はわたしの言葉による導きを受け入れるので、わたしの民と呼ばれるが、この呼び名はわたしの「子」と呼ばれることに劣るわけではない。わたしの民にされれば、人はみなわ

わたしの国においてこの上ない献身をもって仕え、わたしの国において本分を果たさなければならない。わたしの行政命令を破る人は誰であれ、わたしの罰を受けなければならない。これはすべての人に向けたわたしの忠告である。

今や新しい取り組み方がされているので、過去を再び語る必要はない。しかし、以前言ったように、わたしは自分の言うことを固守し、固守することをわたしは必ず完成させ、このことは誰も変えることはできない。これは絶対である。わたしが過去に言った言葉であろうと、将来言う言葉であろうと、わたしはそれらすべてを一つひとつ実現させ、全人類にそれが実現するのを見せる。これがわたしの言葉と働きの背後にある原理である。教会の建設はすでに達成されたので、今はもはや教会を建てる時代ではなく、むしろ神の国の建設を成功させる時代である。しかし、あなたがたはまだ地上にいますので、地上での人の集まりは引き続き「教会」として知られる。だが、教会の本質はかつてと同じではなく、それは建設が成功した教会である。そのため、わたしの国はすでに地上に降りてきたとわたしは言うのである。誰もわたしの言葉の根源を把握できず、わたしが言葉を語る目的も知らない。今日わたしの語り方から、あなたがたは突然のひらめきを経験する。大声で激しく泣き出し苦しい涙を流す人もいれば、これがわたしの話し方だということに恐れを感じる人もいるかもしれない。自分の以前からの見方にしがみついて、わたしの一挙手一投足を見守る人がいるかもしれない。当時、わたしに不平を表明したことやわたしに抵抗したことを後悔する人もいるかもしれない。わたしの名から離れたことがないために、生き返ったことをひそかに喜ぶ人もいるかもしれない。ずっと以前にわたしの言葉に半分死んだようになるまで「苦しめられ」たので、意気消沈してがっかりし、わたしが表現の仕方を変えたにもかかわらず、もはやわたしの言葉に注目する気がない人もいるかもしれない。あるいは、ある程度までわたしに献身的に奉仕し、決して不平を言わず、疑わずにいたので、今日幸運にも解放されて、心の中でわたしに言葉にならない感謝の念を抱く人もいるかもしれない。これらすべての状況が、程度は違えど、すべての人に該当する。しかし、過去は過去であり、現在はずでにここに来ている。もはや過去を懐かしんだり、将来に思いをはせたりする必要もない。人間でありながら現実逆天に、わたしの指導に従って行動しない人は誰であれ、良い終わりを迎えることはなく、自分に困難をもたらすだけである。宇宙で起こるすべてのことのうち、わたしが最終的な決定権を持たないものはない。わたしの手の中にないものなどあるだろうか。わたしの言うことは何であれ実行されるが、人間のうちの誰にわたしの心を変えられるというのか。それが、わたしが地上で結んだ契約なのか。わたしの

計画が前進するを妨げるものは何もない。わたしは働きにも経営（救いの）計画にも同様に存在している。人間のうちの誰が手を出して介入できるというのか。これらを直接準備したのはわたしではないのか。今日この領域に入ることは、わたしの計画やわたしが予知したことから外れていない。すべてわたしがずっと以前に決めていたことである。あなたがたのうちの誰がわたしの計画のこの段階を推測できるというのか。わたしの民は確実にわたしの声に耳を傾け、わたしを本当に愛する人は一人ひとり確実にわたしの玉座の前に戻って来る。

1992年2月20日

第二章

新たな取り組みに着手した後、わたしの働きは新しい段階に入る。神の国なので、わたしは直接神性によって物事を行い、極めて詳細に至るまで正確にあらゆる段階を導き、人間の意図によって汚されることは一切ない。実際の実践方法の概略は以下のとおりである。苦難と精錬を経た人々が「民」という称号を得たのであり、また、彼らはわたしの国の民なので、わたしは彼らを厳しい要求のもとに留めておかなければならないが、この要求はかつての世代にわたしが行ったやり方よりも厳しい。それは言葉に関する現実だけでなく、さらに重要なことに、実践に関する現実であり、これが最初に達成されなければならない。すべての言葉と行いにおいて、彼らは神の国の民に要求される基準を満たさなければならず、わたしの名前に傷がつくのを避けるため、違反者は誰でも直ちに排除されるだろう。しかし、はっきり見ることができず、理解することのできない無知な者たちは例外である。わたしの国の建設にあたっては、注意してわたしの言葉を飲み食いし、わたしの英知を理解し、わたしの働きを通して確信を強めなさい。わたしのものではない書物の言葉に心を向ける者は誰であれ、わたしにはまったく必要ではなく、わたしに反抗的な、いわば売春婦である。使徒として、家に長く留まりすぎてはならない。これができない者をわたしは切り捨て、もはや使いはしないだろう。無理強いはしない。使徒たちは家には長く留まらないから、彼らが教化されるのは長期間教会で過ごすことによるのだ。教会で集会が二度開かれる場合には、使徒は少なくとも一度は参加しなければならない。そこで、同労者たちの集会は定期的なものにしなければならない（同労者の集会に含まれるもの：すべての使徒の集会、すべての教会指導者の集会、明確な洞察力を持つ聖者のためのすべての集会）。少なくともあなたがたの何人かは各集会に出席しなければならず、使徒たちは教会を見守ることに注意を払うだけであ

る。かつて聖者たちに向けられた要求はいっそう広範囲なものになった。わたしがわたしの名前を証しする前に過ちを犯した者たちに関しては、その者たちの献身ゆえに、一度試練に遭った後に、今後も用いるだろう。しかし、わたしの証しのあと、またしても過失を犯し、その後心を入れ替えた者たちに関して言えば、そのような者たちは教会内にただ留まるだけである。それでも、彼らは不謹慎であったりふしだらであったりしてはならず、むしろほかの人々よりも制約された生活をしなければならない。わたしが声を発した後もやり方を改めない人々に関しては、わたしの霊はただちに彼らから離れ、教会はわたしの審判を実行し、彼らを教会から去らせる権利を持つだろう。これは絶対的なものであり、考慮する余地などない。人が試練に失敗したなら、すなわち、離れてしまったなら、その人に対して誰も注意を払うべきではない。それは、わたしを試すことを避けるためであり、また、サタンが狂喜して教会に入り込むのを防ぐためである。これが、その人に対するわたしの審判である。離脱した者だけでなく、不正を行い、自分の感情に基づいて行動する人は誰であれ、わたしの民には数え入れられない。使徒たちのもう一つの役目は、福音を広めることに重点を置くことである。もちろん、聖人たちもこの働きを行うが、彼らは賢くそれを行い、面倒を引き起こさないようにしなければならない。上記は現在実践されているやり方である。また、人々の記憶に残るように、あなたがたは自分の説教をより深みのあるものにするよう注意しなければならない。そうすればすべての人がわたしの言葉の現実性において成長するからだ。あなたがたはわたしの言葉に注意深く従い、すべての人々がわたしの言葉を明確に、曖昧さを残さず理解できるようにしなければならない。これは最も重要である。わたしの民の中で裏切りの考えを抱いている者たちは追放されなければならない、わたしの家に長く留まることを許してはならない。わたしの名前を侮辱させないようにするためである。

1992年2月21日

第三章

今やわたしの民と呼ばれるあなたがたにとって、物事はかつてと同じではない。あなたがたはわたしの霊の語りかけに耳を傾け、従い、わたしの働きにしっかりと従うべきであり、わたしの霊と人の姿になったわたしを分けてはならない。わたしたちは本質的に一つであり、ふたつの別のものではないからである。霊と人の姿の神を別々のものとし、どちらかに心を注ぐ者は、誰であっても損害を受け、自分自身の苦い杯からしか飲むことはできない。言うべきことはそれだけである。霊と人の姿の神を不可分なものと

して見ることができる人々だけが、わたしに対する認識を確実に得る。そのような認識を得て初めて、そのような人々の中にあるいのちに変化が生じる。わたしの働きの次の段階が順調に、そして妨害されることなく進むよう、言葉の精錬を通してわたしの家に住む全ての者たちをわたしは試す。それを、働きという手段を用いて行い、そうしてわたしに従う者たちを試す。このような状況の中で、当然彼らはみな望みを失うと言える。人々は自分を取り巻く空間がすべて変わってしまったかのように、すべての者が否定的となり消極的となってしまう。天と地を激しく非難する者たちがあれば、絶望の中にあっても齒を食いしぼり、わたしの言葉による試練を受け入れる者たちもある。空を見上げて深くため息をつき、目に涙を浮かべ、あたかも生まれたばかりの赤子の早すぎる死に取り乱さんばかりの者たちもあれば、自分の生き方を恥じ入り、自分をすぐに取り去ってくれるよう祈る者たちもいる。また、まるで重病にかかっている、まだ意識が戻らないかのように一日中ぼうっとしている者たちもいれば、文句を言った後に静かに去る者たちもあり、わたしを依然褒めたたえはするが、少し否定的な者たちもいる。すべてが明らかにされた今、わたしは過去のことをこれ以上話す必要はない。もっと重要なことは、あなたがたが、今日わたしの与える場所から最大限の忠誠を変わず示すことができることである。そうすればあなたがたが行うすべてをわたしは認め、あなたがたの言うことすべてはわたしの啓きと照らしの成果となり、最終的にあなたがたはわたしの姿を生き、完全にわたしを現すのである。

わたしの言葉は時間や場所を問わずに発せられ、現され、あなたがたはいつでもわたしの前で自分自身を知るべきである。なぜなら、つまるところ今日という日は以前のどのようなものとも異なり、あなたはもはや望むことが何であれそれを達成するとはできないからである。それどころかあなたはわたしの言葉による導きの下に、自分の体を制圧することができなければならず、わたしの言葉を柱としなければならず、無鉄砲に行動してはならない。教会にとって真の実践への道は全て、わたしの言葉に見出すことができる。わたしの言葉に従って行動しない人々は、わたしの霊に直接怒りを引き起こす。故にわたしは彼らを滅ぼす。物事が今日あるまでに至ったのだから、あなたがたは過去の行為や行動をひどく悲嘆したり後悔したりする必要はない。わたしの寛大さは海や空のように果てしない――人の能力と、人のわたしに対する認識の範囲は、わたし自身の手の甲ほどにはわたしにはなじみがないのだろうか。わたしの手中にない人間などいるだろうか。あなたはわたしがあなたの霊的背丈を知らないとも思うのか。あなたはわたしがこのことを全く知らないと思い込んでいるのか。それはありえないことだ。

こうして、すべての人々が絶望の底にいる時、新たなスタートを待ちわびている時、何が起きているのかとわたしに聞きたい時、一部の人が放蕩にふけったり、抵抗しようとしたりする時、そして一部の人々が引き続き忠実に奉仕している時、わたしは裁きの時代の第二段階、すなわちわたしの民に対する清めと裁きを始める。つまり、わたしは正式にわたしの民の訓練を開始し、そうすることで、あなたがたはわたしに対する美しい証しとなるばかりか、わたしの民の席から、わたしのための戦いに見事勝利する。

わたしの民は常にサタンの狡猾な企みを警戒し、わたしの家の門をわたしのために守り、互いに支え合い、施し合わなくてはならない。そうすることで、あなたがたはサタンの罠に陥ることがなくなるだろう。その時は、もう後悔しても手遅れなのだから。なぜわたしはこれほど早急にあなたがたを訓練しているのか。なぜ霊の世界に関してあれこれ語るのか。なぜあなたがたに何度も思い出させ、熱心に忠告するのか。あなたがたはかつてこのことについて考えたことがあるだろうか。あなたがたは理解したことがあるだろうか。このように、あなたがたは過去の基盤に基づく熟練が必要なだけでなく、さらには今日のわたしの言葉に従って自分自身の中の不純物を追い出し、わたしの言葉の一語一語を根付かせ、あなたの霊において花咲かせ、さらに重要なことには、もっと多くの実を結ばせなくてはならない。わたしが求めるものは明るく、繁茂した花ではなく、豊富な果実――さらには、悪くならない果実だからである。わたしの言葉の本当の意味がわかるだろうか。温室の花は星の数ほどあり、旅行者たちを惹きつけるが、いったん萎れるとサタンの偽りの計画のようにぼろぼろになり、誰も興味を示さなくなる。しかし、風に打たれ、太陽に照らされ、わたしに証しを立てる人々にとって、これらの花は美しくはないが、花が萎れると実がなる。これがわたしの要求だからだ。わたしが語るこれらの言葉を、あなたがたはどのくらい理解しているだろうか。いったん花が萎れ、実を結び、その実った実のすべてがわたしの喜びとして供されたならば、その時わたしは地上におけるわたしの働きのすべてを終え、わたしの英知の結晶を楽しみ始めるだろう。

1992年2月22日

第四章

わたしの前で仕えるわが民はみな、過去を思い返すべきである。あなたがたのわたしへの愛は、不純なもので穢されていなかったか。あなたがたのわたしへの忠実な心からのものだったか。あなたがたのわたしについての認識は真実であったか。あなた

がたの心のどれほどの場所をわたしは占めていたか。わたしはそのすべてを満たしていたか。わたしの言葉はあなたがたの中でどれほどのことを成し遂げたか。わたしを侮ってはいけない。これらのことはわたしには完全に明確である。今日、わたしの救いの声が発されるにつれて、あなたがたのわたしに対する愛はいくらか増しただろうか。あなたがたの忠実の一部が純粹になっただろうか。あなたがたのわたしについての認識は深まっただろうか。過去の讃美は、今日の認識の堅固な土台を形成しただろうか。あなたがたの内面のどれほどをわたしの霊が占めているだろうか。わたしの姿はあなたがたの内においてどれほどの場所を占めているだろうか。わたしの語ったことは、あなたがたのアキレス腱を打っただろうか。あなたがたは自分の恥を隠す場所がどこにもないとほんとうに感じるだろうか。あなたがたはわが民となる資格がないと、ほんとうに信じるだろうか。もしあなたがたがこれらの問いにまったく気づかずにいるのなら、それは、濁った水の中で釣りをしているのであり、数を合わせるためにだけそこにいるのであり、わたしが予め定めた時には、必ずや除かれ再び底なしの淵に投げ込まれるということを示している。これらはわたしの警告の言葉であり、これらを軽んじる者は誰であれ裁かれ、定められた時に災いに見舞われる。そうではないか。わたしはまだ例を示してこれを説明しなければならないのか。あなたがたのために代表例を提示するべく、もっと平明に話さなければならないのか。天地創造の時から今日まで、多くの人々がわたしの言葉にそむき、そのためにわたしの回復の流れからうち捨てられ、除かれた。最終的に彼らの体は滅び、その霊はハデスに投げ込まれる。今日でも彼らはいまだに重い罰を受けている。多くの人々がわたしの言葉に従ったが、彼らはわたしの啓きと照らしにそむき、そのためわたしに退けられ、サタンの支配下に落ち、わたしに敵対する者になった。（今日、わたしに真っ向から敵対する者は、わたしの言葉の表面にだけ従い、わたしの言葉の本質には逆らう。）また、わたしが昨日語った言葉だけを聞いて、過去のくずにしがみつき、今日の産物を重んじない者が大勢いる。そうした人々はサタンにとらわれているだけではなく、永遠の罪人になり、わたしの敵になり、真っ向からわたしに反対している。そのような人々は、わたしの怒りの極致におけるわたしの裁きの対象であり、今日、まだ目が見えず、いまだに暗い牢獄にいる（つまり、そのような人々は腐ったサタンに操られるしなびた死体なのであり、彼らの目はわたしが覆っているので、彼らは目が見えないと言うのである）。あなたがたがそこから学べるように、参考として例を示すのがよいだろう。

パウロと聞くと、あなたがたは彼の生涯とともに、彼に関する逸話のいくつかを思い

起こすだろうが、それらの逸話は不正確で、現実とは異なっている。彼は幼いころから両親の指導を受け、またわたしのいのちを受けた。わたしが前もって定めた結果、パウロはわたしが要求する素質を備えたのである。十九歳のとき、パウロはいのちについて、さまざまな書物を読んだ。どのようにしてかは詳細は述べないが、彼の素質と、わたしの啓きと照らしとにより、パウロは靈的物事についてある程度の識見をもって語れただけでなく、わたしの意図を把握することもできた。もちろん、これは内的・外的要因を排除するものではない。ともかく、パウロの不完全性の一つは、その才能ゆえに彼は口達者で自慢好きであったことである。その結果、その一部が直接大天使を表したパウロの不服従のために、わたしがはじめて受肉したとき、パウロはあらゆる努力をしてわたしに逆った。彼はわたしの言葉を知らない者の一人で、彼の心の中のわたしの場所はずでなくなっていた。このような人々はわたしの神性に真っ向から敵対し、わたしに打ち倒され、最後の最後によりやく頭を垂れて自身の罪を告白する。したがって、わたしがパウロの長所を利用した後、つまり彼が一定期間わたしのために働いた後、彼は再び以前のやり方に戻り、わたしの言葉に直接逆らったわけではないが、わたしの内なる導きと啓きにそむいたので、それまでにパウロが行なった働きがすべて無益になった。つまり、彼の語った栄光の冠はむなしい言葉、彼自身の想像の産物となった。今日でも、彼はまだわたしの縛めの只中においてわたしの裁きを受けているからである。

上記の例から、誰でもわたしに敵対する者は（敵対するとは、肉にあるわたし自身だけではなく、さらに重要なことに、わたしの言葉と霊、つまりわたしの神性に逆らうことである）その肉の身にわたしの裁きを受けることが見て取れる。わたしの霊が人を離れると、その人は墜落し、まっすぐハデスに下る。そして、その人の肉の身は地上にあっても、精神を病んでいるようになる。つまり、その人は理知を失い、自分が死体になったようにただちに感じ、すぐさま肉の身を終わらせてくれるようにとわたしに乞うほどになる。あなたがた霊をもつ者のほとんどは、このような状況について深く理解しているから、これ以上詳しく述べる必要はない。過去にわたしが普通の人間性をもって働いたときには、たいていの人々は、すでにわたしの怒りと威厳に比べて自分を測っていて、すでにわたしの知恵と性質とについて少しは知っていた。今日、わたしは神性において直接話し、行動する。そして、わたしの怒りと裁きとをその目で見ることになる人々がまだ何人かいる。さらに、裁きの時代の第二部の主なる働きは、わが民のすべてにわたしの肉における業を直接知らせ、わたしの性質を直接あなたがたが見るようにすることである。しかし、わたしは受肉しているので、あなたがたの弱さを考慮している。

わたしの希望は、あなたがたが自分の霊、魂、体をおもちゃのように扱い、サタンに無頓着に捧げないことである。持てるものすべてを大切にし、もて遊ばない方が良い。これらはあなたがたの運命に関わっているからである。あなたがたは、わたしの言葉の真の意味をほんとうに理解できるだろうか。わたしの真の思いをほんとうに考えることができるのだろうか。

あなたがたは、天における祝福のようなわたしの祝福を地上で受けたいと思っているのだろうか。あなたがたは、わたしについての理解、わたしの言葉の享受、わたしについての認識をあなたがたの人生で最も貴重で意味深いものとして扱うつもりがあるだろうか。あなたがたは自分の前途を考えることなく、わたしに従うことがほんとうにできるのか。あなたがたは羊のようにわたしに殺されたり、わたしに導かれたりすることがほんとうにできるのか。あなたがたの中にこのようなことをなし遂げ得る人はいるだろうか。わたしが受け入れ、わたしの約束を受ける人はみな、わたしの祝福を受ける人だということがあり得ようか。あなたがたはこうした言葉から何かを理解しているのだろうか。もしわたしがあなたがたを試したら、あなたがたはほんとうにわたしにすべてを委ね、そうした試練の中でわたしの意図を探り、わたしの心を理解することができるだろうか。あなたが多くの感動的な言葉を述べたり、興奮するような物語を語ったりすることができることを、わたしは望まない。むしろ、わたしに立派な証しをすること、現実に関心深く入ることができることを求める。もしわたしが直接話さなければ、あなたは周囲のすべてを捨て、わたしに用いられることができただろうか。これがわたしが求める現実性なのではないか。誰がわたしの言葉の意味を把握できるだろうか。しかしわたしは、あなたがたがこれ以上不安に押しつぶされず、入りにおいて積極的になり、わたしの言葉の本質を把握するよう求める。これが、わたしの言葉を誤解したり、わたしの意味するところについて不明瞭であったり、わたしの行政命令に触れたりすることを防ぐだろう。わたしがあなたがたについて意図していることをわたしの言葉の中に把握してくれることを願う。もはや自分の前途については考えず、すべての物事における神の采配に委ねるとわたしの前で決心したそのとおりに行動しなさい。わたしの家の内に立つ者はみな、できる限りの努力をしなければならない。わたしの地上での働きの最終部分に自己の最善を差し出さなければならない。あなたは、このように実践する気持ちがほんとうにあるだろうか。

1992年2月23日

第五章

わたしの霊が声を発するとき、それはわたしの性質すべてを表現する。このことをあなたがたは、わかっているのか。この点について不明瞭なのは、わたしに直接反対しているに等しい。あなたがたは、ほんとうにこのことの重要性がわかっているのか。あなたがたは、わたしがどれほどの努力、どれほどの力をあなたがたのために用いているか、ほんとうにわかっているのか。あなたがたは自分のしたことをわたしの前にさらけ出す勇気がほんとうにあるか。そして、あなたがたは、大胆にもわたしに面と向かって、自分はわたしの民であると言う。あなたがたは恥知らずで、さらには理知に欠けている。遅かれ早かれ、そうした人々はわたしの家から追い出される。わたしを証しするために立ったからといって、ベテラン気取りするのはやめなさい。これが人間に行なえることなのか。あなたの意図したことや目指したものが何一つ残らなければ、あなたは、とうに別の道を進んでいただろう。人間の心がどれほどを収容できるか、わたしが知らないと思っているのか。たった今から、あなたは、あらゆることで実践の現実に入らなければならない。これまでしていたように、しゃべっているだけでは、もう十分ではない。昔はあなたがたの大半が、わたしの屋根の下でただで飲み食いできた。あなたが今日堅固に立っていられるのは、すべて、わたしの言葉の厳しさのゆえである。わたしの言葉には目的もなく、いい加減に語られるものと思っているのか。そんなことはない。わたしは高みからすべてを見渡し、高みからすべてを支配している。同様に、わたしは地上に救いを施した。わたしの隠れ場から、人間のあらゆる動き、人々が話し、行なっていることのすべてを、わたしが見守っていない瞬間はない。人間は、わたしにとって一目瞭然である。わたしにはすべてが一つひとつ見え、それらをすべて知っている。隠れ場はわたしの住まいであり、大空がわたしの横たわる寝床である。サタンの勢力はわたしに届かない。わたしは威厳と義、裁きに満ち溢れているからである。言い表すことのできない奥義がわたしの言葉の内に宿っている。わたしが話すとき、あなたがたは水に投げ入れられたばかりの鶏のように混乱して圧倒されるか、何かにおびえた赤子のようになにもしらない。あなたがたの霊が麻痺状態に陥ったからである。なぜわたしは、隠れ場がわたしの住まいだと言うのか。わたしの言うことの深い意味がわかっているのか。全人類の中で誰がわたしを知ることができるのか。人がその父と母を知るように、誰がわたしを知ることができるのか。わたしの住まいに憩い、わたしはしっかりと見る。地上のすべての人が忙しく動き回り、「世界中を巡り」大急ぎで行き来する。すべて自身の運命、未来のためである。しかし、わたしの国を築くために力を、息を吸い込むだ

けの力さえも割ける者は、ただの一人もいない。わたしは人類を創り、彼らを何度も患難から救った。しかし、その人間たちはみな忘恩の徒である。わたしの救いの実例をすべて挙げることのできる者は、ただの一人もいない。世界の創造から今日まで、何年も、何世紀もが過ぎた。また、わたしは数多くの奇跡を起こし、何度も知恵を示した。しかし、人間は認知症と麻痺状態にある精神病患者のようで、あるいは、もっと悪い場合、時には野獣が森で暴れているようなもので、わたしのことにまるで関心をもとうとしない。何度もわたしは人間に死刑を宣告し、死すべきものと定めたが、わたしの経営（救いの）計画は、誰にも変更できない。そこで、人間はいまだわたしの手の中にいて、自分の固執する古いものを見せびらかしている。わたしの働きの歩みのため、わたしは再びあなたがたを、墮落し、退廃的で、汚れ、浅ましい大家族に生まれたあなたがたを救った。

わたしの計画した働きは、一瞬もやむことなく進行している。神の国の時代に入って、あなたがたをわたしの国にわが民として移したので、新たにあなたがたに要求することがある。つまり、あなたがたの前に、この時代を統治する憲法の公布を始めるのである。

わが民と呼ばれているのだから、わたしの名に栄光をもたらさなければならない、つまり、試練の只中において証しするのである。もし誰かがわたしを騙して真実をわたしから隠そうとしたり、わたしの陰で不名誉な行為を働こうとしたりするなら、そのような者は例外なくわたしの家から追い出されて排除され、わたしに取り扱われるのを待つことになる。過去にわたしに対して不誠実かつ親不孝であって、今日再び立ち上がり、公然とわたしを裁こうとする人たちもまた、わたしの家から追い出される。わが民である人々は、常にわたしの負担を気づかい、また、わたしの言葉を知るように努めなければいけない。そうした人々だけをわたしは啓き、彼らは必ずわたしの導きと示しの下で生き、けっして刑罰を受けない。わたしの負担を思いやらず、自分の未来を計画することに集中する者、つまり、行いによってわたしの心を満足させることを目指さず、それよりは施しをねだる者、そうした乞食のような人々を使うことをわたしは絶対に拒む。そうした人々は、生まれたときから、わたしの負担を思いやるということの意味を何も知らないからである。彼らは正常な理知に欠ける人である。そうした人々は、脳の「栄養不足」に陥っていて、何か「栄養」をとるために家に帰らなければならない。わたしは、そうした人々に何の用もない。わが民の中で、すべての人はわたしを知ること、食べる、着る、眠るといった、一瞬も忘れないことのように、最後まで行うべき必須の

務めとみなし、しまいには、わたしを知ることが食べることに慣れ親しんだ技術、何の努力もなしにする手馴れた動作になるようにしなければならない。わたしの話す言葉については、どの一言も絶対に確かなものとし、完全に吸収されなければならない。おざなりの、その場しのぎであってはならない。誰でも、わたしの言葉に注意を払わない者は、真っ向からわたしに敵対しているとみなされる。誰でも、わたしの言葉を食べない者、あるいは、知ろうとしない者は、わたしに注意を払っていない者とみなされ、すぐさま、わたしの家の戸口から掃き出される。なぜなら、わたしが以前に述べたように、わたしが望むのは大勢の人々ではなく、優秀な者だからである。百人の中から、たった一人がわたしの言葉を介してわたしを知るようになるなら、わたしは喜んでその他の者たちを捨て去り、そのたった一人を集中的に啓き照らそう。このことから、多数だけでは必ずしもわたしを表現し、生きることができないことがわかる。わたしが望むのは、（実が詰まっていなくとも）麦であり、（たとえ実がいっぱいに詰まった立派なものでも）毒麦ではない。追い求めることには関心がなく、怠惰な行動をする者たちは、自分から立ち去るべきである。わたしはもう彼らを見たくない。彼らがわたしの名を汚すことのないように。わが民に求めることは、ここまでに述べた戒めで今はやめておき、状況の変化に応じて、さらに制裁を与える。

過去には、大多数の人々は、わたしが知恵の神そのもの、人間の心の奥底まで見通す神であると考えた。しかし、それはみな、表面的な話であった。もし人間がほんとうにわたしを知っていたなら、厚かましくも結論に飛びつくことをせず、わたしの言葉からわたしを知ろうとする努力を続けたことだろう。ほんとうにわたしの業を見る段階に達してはじめて、わたしが知恵であり、奇妙であると言う資格を得たはずである。あなたがたのわたしについての認識はあまりに浅い。世々を経て、多くの人々が何年もわたしに仕え、わたしの業を見て、真にわたしについて何かを知るようになり、それゆえわたしに対して従順な心をいつももち、ごくわずかもわたしに敵対しようなどという意図を心にいだくこともなかったというのか。というのも、わたしの足跡を探し求めることは、極めて困難なのだから。そうした人々の中に、わたしの導きがなければ、彼らは気短に行動しようなどとは到底思わず、長い年月の経験を生きた後で、やがてわたしについての部分的認識を総括し、わたしが知恵であり、奇妙であり、助言者であると言い、わたしの言葉は両刃の剣のようで、わたしの業は偉大で、驚くべきものであり、妙なものであり、わたしは威厳をまとい、わたしの知恵は大空より高いなどの見識を述べる。しかし、今日、あなたがたは彼らの置いた基礎の上でわたしを知っているだけである。だ

から、あなたがたの大多数は、オウムのように、ただ彼らの語った言葉を繰り返しているだけである。あなたがたのわたしについての認識がどれほど浅いものか、また、あなたがたの「教育」がどれほど貧弱なものかをわたしが考慮に入れているからこそ、あなたがたはそれほど罰せられずにいるのである。しかし、それでも、あなたがたの大多数は、まだ自分を知らず、あるいは、自分がすでに行いにおいてわたしの心に達しているから、そのために裁きを免れたと考えている。それとも、肉となってから、わたしが人間の行いをすっかり見失ったので、自分も刑罰を免れたと考えている。あるいは、自分の信じている神は広大な宇宙に存在していないと思って、神を認識することは、尽くすべき本分として常に心に抱くよりは、暇なときにする雑用として後回しにし、神への信仰を怠惰に過ごすはずの時間をつぶす手段としている。わたしがあなたがたの年功、理知、見識の不足を憐れまなければ、あなたがたはみな、わたしの刑罰の只中において消滅し、存在を抹消されるだろう。しかし、地上でのわたしの働きが終わるまでは、わたしは人間に寛容でいよう。これはあなたがた全員が知るべきことであり、良いことと悪いことを取り違えるのはやめなさい。

1992年2月25日

第六章

霊の内のことについては、細心の注意を払わなければならない。わたしの言葉を注意深く、慎重に聞きなさい。わたしの霊と肉の体、わたしの言葉と肉の体とを切り離すことのできない単一のものと見ることが出来る状態に至るように努め、わたしの前で全人類がわたしを満足させることができるようにしなければならない。わたしはこの足で全宇宙を踏み、宇宙の全体に目をやり、全人類の只中を歩き、人間であることの甘酸と苦辛を味わった。しかし、人間はけっして真にわたしを認識することがなく、歩き回っていてもわたしに気づかなかった。なぜなら、わたしは何も言わず、超自然のわざを何も行わなかったので、誰一人として真にわたしを見なかったからである。物事はかつてとは違っている。天地創造の初め以来、この世が見たことのないことをわたしは行なう。人間があらゆる時代をとおして、かつて聞いたことのない言葉をわたしは語る。なぜなら、全人類に肉におけるわたしを知るようになってほしいからである。それがわたしの経営（救い）の手順である。人類にはそれがどういうものか、まるで考えもつかない。わたしがそれについて公然と語っても、人はまだ頭が混乱しているため、すべてを詳らかに言い表してやることは不可能である。ここに人間の絶望的な低劣さがある。そうで

はないか。これこそ、わたしが人間の内で修復したいことである。そうではないか。長い年月、わたしは人間に何も働きかけてこなかった。長い年月、受肉したわたしの体と直接接触した者でさえ、わたしの神性から直接発せられる声を聞いた者はいなかった。だから、人間にわたしについての認識が欠けているのは、やむを得ないことである。しかし、この事はそれだけで、あらゆる時代をとおして、人間のわたしへの愛に影響しなかった。しかし、今では、わたしはあなたがたに無数の奇跡的で人には推し量ることのできない働きを示し、多くの言葉で語ってきた。それなのに、そうした状況にあっても、実に多くの人々がいまだに面と向かってわたしに敵対している。いくつか例を示そう。

毎日、人は漠然とした神に祈りを捧げ、わたしの意向を理解しよう、いのちを感じようとする。しかし、わたしの言葉に向き合うと、違った捉え方をする。わたしの言葉と霊とを一つの全体と見なしながらも、人間であるわたしには、根本的にこのような言葉を発することができず、わたしの霊に指示されているのだと信じ、わたしの存在を蹴り飛ばす。このような状況をあなたはどう認識するのか。人はわたしの言葉のある程度までは信じるが、わたしのまとう肉の身については大なり小なり自分なりの観念を抱き、毎日自分の頭で考えては、こう言っている。「なぜあの人はあるように物事を行なうのか。これは神から来ているものなのだろうか。ありえない。思うに、あの方は、わたしとほとんど同じで、普通のただの人間だ」。もう一度尋ねるが、こういう状況をどう説明するのか。

今わたしの述べたことについて、あなたがたの中に、そういう考えをもっていない人はいるだろうか。そんなふうを考えていない人がいるだろうか。それはまるで私有財産のようにしがみついている、ずっと手放すのを渋っているもののようだ。ましてや、積極的に努力しようという気持ちもない。それどころか、わたしが自分で働きをするのを待っている。実のところ、わたしを求めることなく、容易にわたしを知るようになる人間はただの一人もいない。まことに、わたしがあなたがたに教えを説くこれらの言葉は浅いものではない。なぜなら、参考として、異なった点から例を挙げることができるのだから。

ペテロの名を聞くと、誰もがみな称賛でいっぱいになり、ペテロについての物語のあれこれを思い出す。彼が三度神を否定したこと、さらに、サタンの手助けをしたこと、そうして神を試みたこと、しかし、最後には神のために十字架に逆さに釘で打ち付けられたこと、等々。今、わたしはペテロがどのようにしてわたしを知るようになり、最後

にはどうなったかをあなたがたに語ることをとても重視している。ペテロという人は、すばらしい素質の持ち主だったが、彼の境遇はパウロのそれとは異なっていた。彼の両親はわたしを迫害した。彼らはサタンにとりつかれた悪魔の側にいた。だから、二人がペテロに道を教えたとは言えない。ペテロは頭脳明晰で、生まれながらに豊かな知性を持ち、子供のころから両親に可愛がられて育った。しかしながら、成長してからは両親の敵になった。というのも、ペテロはいつもわたしを知ることを願い、その結果、両親に背を向けることになったからである。それはつまり、第一に、彼は天と地と万物は全能者の手の内にあり、すべてのよいものは神に発し、サタンの手を経ることなく、神から直接来ていると信じたからである。両親の悪い手本が引き立て役を務め、ペテロはかえってわたしの愛と憐れみとを直ちにみてとることができ、そうして、わたしを求める欲求がより強く燃え上がるようになった。彼はわたしの言葉を飲み食いするだけではなく、わたしの意図するところを把握しようと注意を払った。そして、常に思慮深く慎重に考えた。だから、彼はいつでも霊が敏感で、その行いのすべてにおいて、わたしの心に適うことができた。ふだんの生活では、失敗の網にかかるようなことを深く恐れ、過去に失敗した人々の教訓を元に、自ら奮起してさらに努力した。ペテロはまた、遠い昔から神を愛した人々すべての信仰と愛から学んだ。このようにして、ペテロは、否定的な側面においてだけでなく、より重要なことに肯定的な側面においても急速に成長し、わたしの前で最もよくわたしを知る者となった。このため、想像に難くないことだが、彼は所有するもののすべてをわたしの手に託し、もはや食べること、着ること、眠ること、どこに宿るかにおいてさえ、自分の主人であることをやめ、あらゆることにおいてわたしを満足させることを自らの基盤とし、それによってわたしの豊かさを享受したのである。わたしは何度もペテロに試練を与え、そのため、もちろん彼は死にかけたのだが、そうした何百もの試練の中にあっても、彼は一度たりともわたしへの信仰を失ったり、わたしに失望したりしなかった。わたしがもう彼を捨て去ったと告げた時でさえ、ペテロの心が弱ってしまったり、絶望してしまったりすることはなく、それまでと同じように、わたしを実際的なやり方で愛するために自分の信念を貫き続けた。わたしは彼に、たとえおまえがわたしを愛しても、おまえをほめず、最後にはサタンの手中に投げ込む、と言った。そうした試練の只中、それは肉への試練ではなく、言葉による試練であったのだが、ペテロはそれでもわたしに祈った。「おお、神よ。天と地ともろもろのものの中にあって、人間や生き物、あるいはその他のもので、全能者の手の中にないものが何かあるでしょうか。あなたがわたしに憐れみをお示しになりたいとき、その憐れみのためにわたしの心は大いに喜びます。あなたがわたしに裁きを下されるとき、わた

しはそれに相応しい者ではありませんが、その御業に計り知れない奥義をますます深く感じるのです。なぜなら、神は権威と知恵とに満ちておられるからです。わたしの肉は困難に苦しんでも、わたしの霊は慰められます。どうして神の知恵と御業とをたたえずにおられましょう。たとえ神を知った後に死ぬとしても、常に備えと心構えができています。おお、全能者よ。まことに、わたしに神のお姿を見させることを真に望んでおられないということではないでしょう。まことに、わたしは神の裁きを受けるのにふさわしくないということではないでしょう。わたしの中に、ご覧になりたくないものがあるということなのではないでしょうか」。このような試練の中であって、ペテロはわたしの意図を正確に把握することはできなかったが、わたしに用いられることを（たとえそれが、人類にわたしの威厳と怒りとを示すため、裁きを受けるだけだったとしても）誇りと栄光であると考え、試練にさらされても心碎けることがなかった。わたしの前で忠実であったため、また、わたしの与えた恵みのゆえに、ペテロは数千年もの間、人類のための手本、見習うべき者となった。これこそは、あなたがたが見習うべき例ではないのか。今このとき、わたしがなぜペテロのことをこれほど詳しく語っているのか、あなたがたはよくよく考えて、理解しなければならない。これをあなたがたの行動原則としなければならない。

たとえわたしを知る者がごく少なくとも、そのために人類のうえに怒りをぶちまけたりはしない。なぜなら、人間にはあまりに多くの欠点があるため、わたしの望む高みに至ることができないからである。だから、数千年の長きにわたり、今日に至るまで、わたしは人間に寛容であった。しかし、わたしが寛容であるからといって、あなたがたは自分に対して寛容過ぎてはならない。そうではなくて、ペテロを通してわたしを知り、わたしを求めるように努め、ペテロの物語すべてから、これまでになかったやり方で啓示を受け、そうして、人類がかつて到達したことのない域に達することを目指すべきである。宇宙と天空の至るところで、また天地のあらゆるもののあいだで、天地の万物がわたしの働きの最終段階に全力をささげている。まことに、あなたがたは傍観者でいて、サタンの勢力によってあちらこちらへ動かされていくことはないだろう。サタンはいつでも人間がわたしについて心にもつ認識をむさぼっている。そして、つねに牙と爪をむき出して、死闘の最期の苦しみの中にある。あなたがたは、今このときに、サタンの欺きに満ちた策略によって捕らえられたいのか。あなたがたは、わたしの働きの最後の段階が完成する瞬間に、いのちを断たれたいのか。まことに、あなたがたは再びわたしが寛容さを示すことを待っているのではあるまい。わたしを知ろうとすることが肝要だが

、実践に注意を注ぐことを怠ってはならない。わたしは、あなたがたがわたしの導きに
従い、自分の願望や意図をこれ以上抱かないことを願って、自分の言葉の中であなたが
たに直接識見を明かしているのである。

1992年2月27日

第七章

西面の枝はみな、わたしの声を聞きなさい。

過去、あなたがたはわたしに忠実だっただろうか。あなたがたはわたしの優れた助言
の言葉に従ってきただろうか。あなたがたは、曖昧で不確かなものではない、現実的な
希望をもっているだろうか。人間の忠誠、愛、信仰は、すべてわたしから生じているも
のであり、わたしが授けたものでないものはない。わが民よ、あなたがたは、わたしの
言葉を聴くとき、わたしの旨を理解しているだろうか。わたしの心がわかっているだろ
うか。過去に、あなたがたは奉仕の道をたどる際、浮き沈みがあり、前進したときや後
退したときもあった。また、倒れそうになったことも、わたしを裏切りそうになったこ
とさえあった。しかし、そんな時にもわたしは常にあなたがたを救うために行動してい
たことが、わかっていただろうか。いつ、どのようなときにも、わたしが言葉を発し、
あなたがたを呼び、助けてきたことがわかっているだろうか。何度、あなたがたはサタ
ンの網に落ちただろう。何度、あなたがたは人間の罠に捕らわれただろう。また、何度
、自らを捨て去ることができず、お互いに果てしない争いに巻き込まれてきただろう
か。いったい何度、体はわたしの家にありながら、心は誰も知ることもないところをさま
よっていただろうか。それでも、わたしは何度、あなたがたに救いの手を差し伸べて、
あなたがたを支えてきたことか。何度、あなたがたの間に憐れみの種を蒔いてきただろ
う。何度、苦しんでいるあなたがたの哀れな有様を見て耐え難い思いをしてきたことか
。いったい幾度なのか……あなたがたにはわかるか。

しかし今日、あなたがたはわたしの守りの下、ついにあらゆる困難を克服し、わたし
はあなたがたとともに喜ぶ。これはわたしの知恵の結晶だ。それでも、このことをよく
覚えておきなさい。あなたがた自身は強いままなのに、いったい誰が倒れたのか。一瞬
たりとも弱ることなく、強くあり続けたのは誰だろうか。人々の中で、わたしから来た
のではない恵みを享受したのは誰だろう。わたしから来たのではない不運を経験したの
は誰だろう。わたしを愛する者はみな、恩恵だけを受けているのだろうか。ヨブに不運
が降りかかったのは、彼がわたしを愛さず、わたしに逆らったためなのだろうか。パウ

口がわたしに忠実に仕えることができたのは、真にわたしを愛することができたからだろうか。あなたがたはわたしの証しを堅持するだろうが、あなたがたの中に、純金のようで、不純物が混ぜられていない証しをする者が、誰かいるだろうか。人間には真の忠誠が可能なのだろうか。あなたがたの「証し」がわたしに喜びをもたらすということは、あなたがたの「忠誠」と矛盾しない。なぜなら、わたしは誰からも多くを求めたことがないからだ。わたしが本来意図した計画から考えれば、あなたがたはみな「不良品」——つまり基準に達していない。これは、わたしの「憐れみの種を蒔く」と言ったことの実例ではないのか。あなたがたが見るのは、わたしによる救いなのか。

あなたがたはみな思い返してみるべきだ。わたしの家に戻って以来、自分の損得を考えず、ペテロのように、わたしを知るようになった者はいるだろうか。あなたがたは聖書の表面的なことは完璧に理解しているが、その本質を吸収しただろうか。たとえそうであっても、あなたがたは、まだ自分の「資本」にしがみつき、自己をほんとうに捨て去ることを拒んでいる。わたしが言葉を発したとき、また面と向かって話したとき、あなたがたのうちの誰が、閉じた「巻物」を置いて、わたしが明かした、いのちの言葉を受けようとしただろう。あなたがたはわたしの言葉を尊重せず、また、それを大切にもしなかった。それどころか、わたしの言葉を自分の敵に向かって発砲する機銃のように使って、自分の地位を維持しようとした。あなたがたは、わたしの裁きをほんの少しも、わたしを知るために受け入れようとはしなかった。あなたがたは誰もみな、他の誰かに武器を向けている。あなたがたはみな「無私」で、みな、どんな状況でも「他人を思いやっている」。あなたがたは昨日まで、正にこのとおりのことをしていたのではないか。そして、今日はどうか。あなたがたの「忠誠」は、少々点を増した。そしてみな、少しだけ熟練し、少しだけ成熟した。そのため、わたしを「恐れる」気持ちが少し増し、誰一人「軽々しく行動」しない。なぜあなたがたは、果てしなき受身状態の中に存在しているのだろうか。なぜ、あなたがたの内には積極的な側面がまったく見られないのか。ああ、わが民よ。過去はとうに過ぎた。あなたがたは、もはや過去にしがみついているのではない。昨日はしっかりと立ち、今日は心からの忠誠をわたしにささげるべきだ。そのうえで、明日はわたしについてよい証しをすべきだ。そうすれば、あなたは将来わたしの祝福を受け継ぐことになる。これこそあなたがたが理解すべきことである。

わたしはあなたがたの前にいないが、わたしの霊は必ずやあなたがたに恵みを与える。わたしは、あなたがたがわたしの祝福を大切にし、それを頼みとして、自分自身を知ることができることを願っている。これを自分の資本としてはならない。むしろ、あな

たがたの内に欠けているものをわたしの言葉から満たしなさい。そして、これによりあなたたがたの積極的な要素を引き出すのだ。これが、わたしがあなたたがたに贈る教えである。

1992年2月28日

第八章

わたしの啓示が最高頂に達し、わたしの裁きが終わりに近づくとき、わが民はみな明らかにされ、完全にされる。わたしは宇宙世界の隅々まで旅し、わたしの意図にかない、わたしが用いるにふさわしい者たちを永久に探し続ける。誰が立ち上がり、わたしに協力することができるだろうか。人間のわたしへの愛はあまりにささやかで、わたしへの信仰はあわれなほどに小さい。わたしの言葉の矛先が人間の弱さに向けられていなかったならば、人間はまるで地上のことに関して全知全能であるかのように、自慢し、誇張し、尊大に高尚な理論を唱えるだろう。かつてわたしに「忠実」だった者、および今日わたしの前に「堅く立っている」者のうち、今なおあえて自慢げに話そうとする者がいるだろうか。誰が自分の前途についてひそかに喜んでいないだろうか。わたしが直接暴露しなかったとき、人は隠れる場所もなく、恥にさいなまれた。わたしが他の手段で語ったなら、どれほどひどいことになるだろう。人々はより大きな負い目を感じるだろう。自分たちを治せるものは何もないと思い込み、自分たちの消極性のためにまったく動きがとれなくなってしまうだろう。人間が希望を失うと、神の国の礼砲が正式に鳴り響く。それは、人間が語るところの「七倍に強められた霊が働きをはじめる時」である。つまり、神の国の生活が公式に地上で始まる時であり、わたしの神性が（頭脳による処理なしに）直接行動するために現れる時である。すべての人は蜂のように忙しくなる。人々はまるでよみがえったようであり、夢から醒めたようであり、目覚めるとすぐに自らの置かれた状況を知って驚愕する。わたしは過去において教会を建てることについて多くを語り、多くの奥義を明らかにした。教会の建設は最盛期に至ると、突如として終わった。しかしながら、神の国の建設は異なる。霊的領域における戦いが最終段階に達したときにはじめて、わたしは地上で新たに開始する。つまり、人間が退こうとするときにはじめて、わたしは正式に新たな働きを始め、起こすのである。神の国の建設と教会の建設との違いは、教会建設では、わたしは神性に支配される人間性の下で働いたということである。わたしは人間の古い性質を直接取り扱い、人間の醜い自我を直接明らかにし、人間の本質をあらわにした。その結果、人間はそれに基づいて自己を知るよ

うになり、自分の心と言葉の中で確信を得た。神の国の建設では、わたしは直接神性のもとに行動し、すべての人々がわたしの言葉についての認識に基づいてわたしのもつもののおよびわたしであるものを知るようにし、最終的には、肉の体の中にあるわたしについての認識を得られるようにする。そうして、全人類による漠然とした神の追求は終わり、天にいる神の居場所を心の中でもつのをやめる。つまり、わたしが受肉しながら行う業を、わたしは人類に知らしめ、それでわたしの地上での時代は終わる。

神の国の建設は、靈的領域を直接目指している。つまり、わが民すべての間に靈的領域における闘いが明らかにされ、そこからわかるのは、すべての人々は常に戦っており、それは教会の中だけではなく、神の国の時代にはさらにそうであり、そして人間は肉の体をもっているが、靈的領域が直接明かされ、人間は靈における生活に携わるということである。だから、あなたがたが忠実であるようになると、わたしの働きの次の部分に正しく備えなければならない。あなたがたは心のすべてをささげなければならない。そうしてはじめて、わたしの心を満足させることができる。人間が以前に教会で何をしていたかは問わない。今日では、それはわたしの国の中にある。わたしの計画において、サタンは一步ごとにかかるとに噛み付いてきたのであり、わたしの知恵の引き立て役としてわたしの本来の計画を邪魔をする方法と手段をつねに探っている。しかし、わたしがサタンの欺きに満ちた策略に屈するものだろうか。天と地のすべてはわたしに仕えている。サタンの欺きに満ちた策略も同様ではないのか。これはまことにわたしの知恵の交わる場所、これはまことにわたしの業の驚くべきところであり、これはまことにわたしの全経営（救いの）計画が実行される原則である。神の国を建設する時代においても、わたしはサタンの欺きに満ちた策略を避けて、なすべき働きを続ける。宇宙と万物の中で、わたしはサタンの行いをわたしの引き立て役に選んだ。これはわたしの知恵ではないのか。これはまさに、わたしの働きの驚くべきところではないのか。神の国の時代に入る際には、天と地のあらゆる物事が大きな変化を遂げ、祝い、喜ぶ。あなたがたも同じなのではないのか。誰が蜂蜜のように甘い思いを心に抱かないだろうか。誰が心に喜びがあふれないだろうか。誰が喜び踊らないだろうか。誰が賛美の言葉を語らないだろうか。

わたしがここまで話してきたことから、わたしの言葉の目的と源を把握しただろうか。どうだろうか。わたしがこう尋ねなければ、たいていの人にはわたしがただしゃべり続けているだけだと信じて、わたしの言葉がどこから来たかを知ることができないだろう。もしあなたがたが注意深く考えれば、わたしの言葉の重要性がわかる。じっくりと読

んでみるとよいだろう。そのうちの何があなたのためにならないだろうか。どれが、あなたのいのちの成長のためにならないだろうか。どれが靈的領域の現実について語っていないだろうか。たいていの人は、わたしの言葉には何の根拠もない、何の説明も解釈もないと考える。わたしの言葉はほんとうにそれほど抽象的で、不可解なものだろうか。あなたがたはほんとうにわたしの言葉に従うだろうか。ほんとうにわたしの言葉を受け入れるだろうか。わたしの言葉を玩具扱いしないだろうか。わたしの言葉を自分の醜い外見を覆う衣として使わないだろうか。この広大な世界で、誰がわたしから直接調べられただろうか。誰がわたしの靈の言葉を直接聞いただろうか。まことに多くの人々が闇の中で手探しし、まことに多くの人々が逆境のさなかで祈り、まことに多くが飢え、凍えながら、希望をもって見守り、まことに多くの人々がサタンに縛られている。しかし、まことに多くの人々がどこに頼るべきか知らず、まことに多くの人々が幸福の中でわたしを裏切り、まことに多くの人々が恩を知らず、まことに多くの人々がサタンの欺きに満ちた策略に忠実である。あなたがたの中の誰がヨブなのか。誰がペテロなのか。なぜわたしは繰り返しヨブの名をあげてきたのか。そして、なぜわたしはペテロに何度も言及してきたのか。あなたがたはわたしがあなたがたに望んでいることを感知したことがあるだろうか。あなたがたはこのようなことについてもっと時間をかけて考えなければならない。

ペテロは長年わたしに忠実であったが、けっして不平を言わず、恨みがましい心をもたず、ヨブでさえペテロには及ばなかった。長い年月にわたって、聖徒たちもみなペテロには遠く及ばなかった。ペテロはわたしについての認識を求めただけではなく、サタンが欺きに満ちた策略を実行していた時にも、わたしを知るようになった。それが、長年のわたしの心にかなう奉仕をすることにつながり、その結果、サタンに利用されることがついになかった。ペテロはヨブの信仰から学んだが、明らかに彼の短所をも知っていた。ヨブは深い信仰の持ち主だったが、靈的領域のものごとに関する認識を欠いていた。そのため、現実に沿わないことを数多く言っていた。このことから、彼の認識がまだ浅く、完全には至ることができなかったことがわかる。そこで、ペテロは常に靈を理解しようとし、いつでも心して靈的領域の動態を観察していた。その結果、わたしの望みの何かを確信することができただけでなく、サタンの欺きに満ちた策略についても多少理解していた。そのため、ペテロの認識はいつの時代の誰よりも豊かだった。

ペテロの経験から、人間がわたしを知りたければ、靈において注意深く考察することに集中しなければならないということは、容易にわかるだろう。わたしはあなたに、外

面的に多くのものをわたしにささげることを要求しない。それは二義的な懸念である。わたしを知らないなら、あなたの語る信仰や愛、忠実はすべて幻想にすぎない。それは中身の無いものであり、あなたはわたしの前で大いに自慢するが、自分を知らず、そのため再びサタンの罠にかかり、自由になることができないという破目になるのは確実である。あなたは地獄の子になり、破滅の対象となる。しかし、わたしの言葉に冷淡で無関心であるなら、その人は必ずわたしに敵対している。これは事実であり、あなたは霊的領域の門の向こう側に大勢の多様な霊がわたしの刑罰を受けているのを見るとよい。彼らの中に、わたしの言葉に受動的でなく、冷淡でなく、わたしの言葉を拒まなかった者がいるだろうか。彼らの誰がわたしの言葉に冷笑的でなかっただろうか。彼らの誰がわたしの言葉に対抗するものを見つけようとしなかっただろうか。彼らの誰が自分を守るためにわたしの言葉を防御武器として用いなかっただろうか。彼らはわたしの言葉を通じて、わたしについての認識を求めず、単に玩具としてもてあそんだに過ぎない。そうすることで、彼らはわたしにじかに敵対したのではないのか。わたしの言葉とは誰のことなのか。わたしの霊とは誰のことなのか。わたしは何度も、こうした言葉をあなたがたに繰り返してきた。しかし、あなたがたの理解がさらに高度で明瞭であったことがあるか。経験が真実であったことがあるか。もう一度言う。わたしの言葉を知らず、受け入れず、実践しないのなら、必ずわたしの刑罰の対象となる。必ずサタンの餌食になる。

1992年2月29日

第九章

あなたは我が家の民の一人なのだから、また、わたしの国に忠実なのだから、自分が行なうすべてのことにおいて、わたしの求める基準に従わなければならない。わたしは、あなたが漂う雲以上のものであることは求めないが、あなたが輝く雪となってその実質をもつこと、またそれ以上に、その価値をもつことを求める。わたしは聖い地から来るのだから、名前だけで実質を伴わない蓮とは違う。蓮は聖い地ではなく、沼地から来るからである。また、新たな天が地に降臨し、新たな地が空に広がる時はまさに、わたしが正式に人間たちの中で働く時でもある。人間の中の誰が、わたしを知っているのか。誰がわたしの到着の瞬間をその目で見たのか。誰が、わたしには名があるだけでなく、それ以上に実質を備えていることを知っているのか。わたしは自らの手で白い雲を一掃し、空をじっくり調べる。天空には、わたしの手で秩序立てられていないものは何一

つなく、また天空の下では、わたしの大いなる事業にわずかでも貢献しない者は一人もない。わたしは地上の人々に面倒な要求はしない。わたしは常に実践の神であり、人間を創り、人間のことを熟知している全能者なのだから。すべての人は全能者の目の前にいる。地の遠い果てにいる者でさえ、どうしてわたしの霊の目から逃れられようか。人間はわたしの霊を「知って」いるが、それでもわたしの霊に背いている。わたしの言葉はすべての人の醜い顔、そして彼らの内奥の考えをさらけ出し、地上のすべてがわたしの光で明らかになり、わたしの吟味を受けて倒れるようにする。しかし、たとえ倒れても、彼らの心はわたしから遠く離れようとしめない。わたしの業の結果として、わたしを愛するようにならない者が被造物の中にいるだろうか。わたしの言葉の結果として、わたしを切望しない者がいるだろうか。わたしの愛の結果として、自分の中で愛着が生じない者はいるだろうか。人間がわたしの求める状態に達せていないのは、ひとえにサタンの墮落のせいである。わたしが求める最も低い基準さえ、人々の中に不安を生じさせる。サタンが暴れ回り、狂ったように横暴であるこの時代、つまり、人間がサタンによって踏みにじられ、身体がすっかり汚物にまみれているときのことは言うまでもない。人間が自身の墮落のため、わたしの心を案じることができなかったとき、わたしが嘆かなかったことがあるだろうか。わたしがサタンを憐れんでいるということだろうか。わたしが自分の愛において誤っているということだろうか。人々がわたしに従わないとき、わたしの心はひそかにすすり泣く。人々がわたしに抵抗するとき、わたしは彼らを罰する。人々がわたしに救われ、死からよみがえるとき、わたしはこの上ない注意を払って彼らに糧を与える。人々がわたしに従うとき、わたしの心は安らぎ、すぐさま天地と万物に大きな変化を感じ取る。人間がわたしを賛美するとき、どうしてわたしがそれを喜ばずにいられようか。人間がわたしの証しをし、わたしのものとされるとき、どうしてわたしが栄光を感じないことがあるだろうか。それは、人間のどのような行為や振る舞いも、わたしに支配され、糧を施されているのではないということだろうか。わたしが指示を与えないとき、人々は怠惰で無活動であり、そのうえ、わたしの背後で「賞賛に値する」汚い取り引きをする。わたしが身にまとう肉は、あなたの行ない、振る舞い、そして言葉を何一つ知らないとも思っているのか。わたしは長年にわたり雨風に耐えてきた。また、人間世界の辛さも経験した。しかし、よく考えてみると、どれほどの痛みも、肉の体を持つ人間にわたしへの希望を失わせることはできない。ましてやどんな甘さも、肉の体を持つ人間が、わたしに対して冷淡になったり、落胆したり、わたしを捨て去ったりするようにさせることはできない。わたしに対する人間の愛は、苦痛や甘さのない間だけに限られているというのか。

今日、わたしは肉に宿り、なすべき働きを正式に実行し始めた。人間はわたしの霊の声を恐れるが、わたしの霊の実質には逆らう。わたしの言葉の中で肉のわたしを知ることが、人間にとっていかに困難であるかは、詳しく述べるまでもない。先ほど述べたように、わたしは自分の要求を厳しく課しているのではなく、あなたがたがわたしを完全に知る必要はない。（人間には欠けているものがあるからであり、これは先天的な条件であって、後天的な条件でその埋め合わせをすることはできない）。あなたがたはただ、わたしが肉の姿で行ない、述べることをすべて知るだけでよい。わたしの要求は厳しくないのだから、あなたがたがみなこれらの言動を知り、達成できるようになることを望む。あなたがたはこの穢れた世界で、自身の不純なものを取り除かなければならない。この後進的な「王族」の中で進歩を遂げるよう励み、決して歩みを緩めてはならない。ほんの少しでも、自分を甘やかしてはならない。わたしがわずか一日に語ることを理解するだけでも、あなたはたいへんな時間と努力を捧げる必要があるだろうし、わたしが語るたった一つの文章を経験し、そこから認識を得るだけでも、生涯を要することだろう。わたしが語る言葉は、漠然とした抽象的なものではなく、中身の無い話でもない。多くの人がわたしの言葉を得ようと望んでいるが、わたしはそうした人たちを無視する。多くの人がわたしの豊かさを渴望しているが、わたしは彼らにほんの少しも与えない。多くの人がわたしの顔を見たいと望んでいるが、わたしはそれを隠し続けてきた。多くの人がわたしの声を熱心に聴くが、わたしは目を閉じて頭をそらし、彼らの「切望」に動かされない。多くの人がわたしの声の響きを恐れるが、わたしの言葉は常に攻勢をとっている。多くの人がわたしの顔を見ることを恐れるが、わたしはわざと姿を見せて彼らを打ち倒す。人間はわたしの顔を本当に見たことがないし、わたしの声を本当に聞いたこともない。人間はわたしを本当に知ってはいないからである。人間はわたしに打ち倒され、わたしのもとから去り、わたしの手によって罰されるだろうが、それでも自分のすることがみな、本当にわたしの心にかかっているかどうかわかっておらず、わたしがいったい誰に対して自分の心を明かしているかも知らずにいる。創世以来、真にわたしを知った者、真にわたしを見た者は誰一人いない。また今日、わたしは肉となったが、あなたがたはいまだにわたしを知らない。これが事実ではないのか。あなたは、わたしの肉における行ないや性質をほんのわずかでも目にしたことがあるのか。

わたしは天に横たわり、天の下に安息を見出す。わたしには住むところがあり、自分の力を示す時もある。仮にわたしが地上にいなければ、肉の内に自分を隠さなければ、また、わたしが謙虚に隠れていなければ、天地はずっと以前に変わっていたのではない

か。わが民は、すでにわたしに用いられていたのではないか。しかし、わたしの行ないには知恵があり、わたしは人間の狡猾さを熟知しているが、彼らの例に倣うことはせず、代わりに何かを与える。霊的領域について、わたしの知恵は尽きることがなく、肉におけるわたしの知恵は永遠である。これこそまさに、わたしの業が明らかにされる瞬間なのではないか。神の国の時代、わたしは今日に至るまで、何度も人間を赦し、容赦してきた。これ以上わたしの時を遅らせられようか。ひ弱な人間に対して、わたしはいくぶん慈悲深くなったが、ひとたびわたしの働きが完了したとき、それでも古い働きをすることで、自分に面倒をもたらすだろうか。サタンがわたしを非難するのを、あえて許すだろうか。人間がわたしの言葉の現実と、その本来の意味を受け入れさえすれば、わたしはそれ以外のことを必要としない。わたしの言葉は単純だが、その実質は複雑である。あなたがたがあまりに小さく、あまりに鈍くなってしまったからだ。わたしが肉において自身の奥義を直接明かし、わたしの旨を明らかにしても、あなたがたはまったく注意を払わない。あなたがたはその音を聞いても、意味は理解しない。わたしは悲しみにうちひしがれる。わたしは肉にあるが、肉の職分の働きはできないのだ。

肉におけるわたしの業について、誰がわたしの言動から知るようになったのか。わたしが書物で奥義を明かしたり、それを声に出して語ったりするとき、人々はみな啞然とし、黙って眼を閉じる。わたしの語ることがなぜ人間には理解できないのか。わたしの言葉はなぜ人間にとってかくも計り知れないのか。人間はなぜわたしの業に盲目でいるのか。わたしを見て忘れない者が誰かいるだろうか。人間のうち、誰がわたしの声を聞いて、むなしく過ぎ去るのを許さずにいられるのか。誰がわたしの旨を感じ取り、わたしの心を喜ばせられるのか。わたしは人々のあいだで暮らし、彼らのあいだを動き回り、人々の生活を経験するようになった。また人類のためにすべてを創ったのち、どれも良いと感じたが、人間のあいだでの生活から喜びを得ることはまったくなく、人々の幸福をうれしいとも思わない。わたしは人々を嫌って捨てることはしないが、彼らに感情を動かされることもない。人間はわたしを知らず、闇の中でわたしの顔を見るのが難しく、騒音の中でわたしの声を聞くのに困難を感じ、わたしが言うことを聞き分けられないからである。だから表面的に見れば、あなたがたが行なうことはどれもわたしに従っているのだが、心の中では依然わたしに従わない。人類全体の古い本性は、このようだと言えよう。誰が例外なのか。誰がわたしの刑罰の対象ではないのか。とは言え、誰がわたしの寛容のもとで生きていないのか。仮に人類が残らずわたしの怒りで滅ぼされたとしたら、わたしが天地を作った意義は何だろうか。わたしはかつて多くの人に警告し

、多くの人に勧告し、多くの人を公然と裁いた。人類を直接滅ぼすよりも、こちらのほうがずっとよくはないか。わたしの目的は人々を死に至らしめることではなく、わたしの裁きの中で、わたしのすべての業を知らしめることである。あなたがたが底なしの淵から這い上がる時、つまり、あなたがたがわたしの裁きから自分を解き放つ時、あなたがたの個人的な思慮や計画はみな消え去り、誰もがわたしを満足させようと努力するだろう。そうやってこそ、わたしの目標が達成されたのではないか。

1992年3月1日

第十章

結局のところ、神の国の時代は過去の時代と異なっている。それは人間の行いとは関係ない。むしろ、わたしが地上に降りて自ら働きを行ったのであり、それは人には理解できず、成し遂げるのも不可能なことである。世界の創造以来長年にわたり、その働きはひとえに教会の建設に関するものだったが、神の国を建てることは誰も聞いていない。わたしが自分の口でこのことを語ったところで、その本質がわかる者はいるだろう。わたしはかつて人間の世界に降り、人々の苦しみを目の当たりにして経験もしたが、受肉の目的を果たすことはなかった。神の国の建設が始まると、わたしは受肉して正式に職分を始める。つまり、神の国の王が正式に王権を握るのである。このことから、神の国が人間界に降りて来るのは、単に文字上のことなどではなく、実際の現実の一つなのは明らかである。これは、「実践の現実」という言葉がもつ意味の一側面である。人間はわたしの業を一つたりとも見たことがないし、わたしの発する言葉を一つも聞いたことがない。たとえわたしの業を見たとしても、何を見出しただろう。わたしが語るのを聞いたとしても、何を理解しただろう。世界中で、すべての人間はわたしの慈悲と愛情の中にいるが、同時にすべての人間はわたしの裁きの中におり、同じく試練に晒されている。すべての人間がある程度堕落していたときでさえ、わたしは人間に対して慈悲深く、愛情深くあった。すべての人間がわたしの玉座の前でひれ伏したときでさえ、わたしは人間に刑罰を下した。しかし、わたしが下した苦しみと精錬の中にいない人間が、誰かいるのか。ゆえに、数多くの人が闇の中で光を求めて手探しし、試練の中でもがき苦しんでいる。ヨブには信仰があった。しかし、彼は自分の助かる道を求めていたのではないか。わが民は試練の中で堅く立つことができるものの、声に出すことなく、心の奥底に信仰をもつ者はいるだろうか。むしろ、心の中でいまだに疑いを抱きつつ、自分の信仰を口にしているのではないか。試練の中で堅く立ってきた者、試練の際に心か

ら従う者は誰一人いない。わたしが顔を背けずこの世界をじっと見たなら、全人類はわたしの燃えるようなまなざしを受けて倒れるはずだ。わたしは人間に何も求めないからである。

神の国を迎える祝砲が鳴り響くとき、これはまた七つの雷が轟くときでもあるのだが、この音は天地を激しく揺さぶり、天空を震わせ、すべての人間の心の琴線を震わせる。神の国の讃歌が赤い大きな竜の地で厳かに鳴り渡り、わたしがその国を破壊し、わたしの国を建てたことを証しする。さらに重要なのは、わたしの国が地上に建てられることである。このとき、わたしは我が天使たちを世界のすべての国々に遣わし、わたしの子ら、わが民を牧養できるようにする。これはまた、わたしの働きの次なる段階にとって必要なことを満たすためである。しかしわたしは、赤い大きな竜がとぐろを巻いて横たわる場所に自ら赴き、それと対決する。すべての人間が受肉したわたしを知るようになり、肉におけるわたしの業を目の当たりにできるとき、赤い大きな竜のねぐらは灰となり、跡形もなく消え去る。わたしの国の民として、あなたがたは赤い大きな竜を心の底から嫌っているのだから、自分の行いによってわたしの心を満足させ、それによって竜を辱めなくてはならない。あなたがたは本当に、赤い大きな竜を憎むべきものと感じているのか。本当に神の国の王の敵だと感じているのか。わたしの素晴らしい証しをできる信仰が本当にあるのか。赤い大きな竜を打ち破る自信が本当にあるのか。以上があなたがたに求めることである。わたしが必要とするのは、ただあなたがたがこの段階に達することである。あなたがたにそれができるだろうか。それを成し遂げるだけの信仰があるのか。いったい人間に何ができるのか。むしろ、わたしが自らするのではないか。自ら戦いの地に降りるとわたしが言うのはなぜか。わたしが望むのはあなたがたの信仰であって、行いではない。人間は、わたしの言葉をありのままに受け取ることができず、横目で見ることしかできない。それによって、あなたがたは目的を達したのか。そのようにして、わたしを知るに至ったのか。実を言うと、地上の人間のうち、わたしの顔を正面から見ることのできる者は一人もおらず、わたしの言葉の純粋な、ありのままの意味を受け取れる者も一人としていない。ゆえに、自らの目標を果たし、人々の心にわたしの真の姿を植えつけるべく、わたしは前例のない事業を地上で始めた。そうして、観念が人々を支配する時代に幕を下ろすのである。

今日、わたしは赤い大きな竜の国に降り立つだけでなく、全宇宙に向き合い、天空全体を揺り動かす。わたしの裁きが下されない場所が一つでもあるだろうか。わたしの降らせる災難が存在しない場所が一つでもあるだろうか。わたしは行く先々に、ありとあ

らゆる「災いの種」を蒔いた。これは、わたしが働く方法の一つであり、人間を救う業であるのは間違いなく、わたしが人間に差し伸べるものは依然として一種の愛なのである。わたしは、さらに多くの人々がわたしを知り、わたしを見られるようにするとともに、そうして長きにわたって見られなかった神、いまや現実である神を崇められるようにしたい。どのような理由で、わたしは世界を創ったのか。人間が墮落した後、わたしが彼らを完全に滅ぼさなかったのはなぜか。全人類が災いの中で生きているのはなぜか。わたしが肉をまとった目的は何か。わたしが働きを行なうとき、人間は苦さだけでなく、甘さをも味わう。世の人々のうち、わたしの恵みの中で生きていない者がいるだろうか。わたしが人に物質的な恵みを授けなかったら、この世の誰が富み足りるだろうか。あなたがたが我が民として今の立場にいられるようにしたことは、果たして祝福だろうか。あなたがたが我が民ではなく効力者だとしたら、わたしの恵みの中で生きていないのだろうか。わたしの言葉の起源を理解できる者は、あなたがたの中に一人もいない。人間は、わたしの与えた呼び名を大事にするどころか、じつに多くの人々が内心で「効力者」という呼び名を嫌い、「我が民」という呼び名に心の中でわたしへの愛を育む。わたしを騙そうと試みてはいけない。わたしの目はすべてを見通す。あなたがたのうち、誰が進んで受け取り、誰が完全に従順であるのか。神の国の祝砲が鳴り響かなくても、あなたがたは最後まで真に従うことができるだろうか。人間のできることを、考えること、そして人間がどこまでできるかは、どれも遠い昔にわたしがあらかじめ定めたことである。

大多数の人々は、わたしの顔が発する光の中でわたしに焼き払われることを受け入れる。大多数の人々は、わたしの励ましに刺激を受けて力強く探求に突き進む。サタンの勢力が我が民を攻撃するとき、わたしは彼らを退ける。サタンの策略が我が民の生活を破壊しようとするとき、わたしはサタンを敗走させる。ひとたび去って、二度と戻らないように。地上では、ありとあらゆる悪霊が安息の地を求めて永遠にさまよい、人間の死体をむさぼり食うべく果てしなく探している。我が民よ。あなたがたは、わたしの保護と加護の中にとどまらなければならない。けっして自墮落なことをしてはいけない。けっして無謀に振る舞ってはいけない。あなたはわたしの家で忠誠を捧げなければならず、忠誠によってのみ、悪魔の狡猾さに反撃できる。いかなる状況においても、過去のように行動してはいけない。わたしの前であることをし、わたしの後ろで別のことをしてはいけない。そうするなら、あなたはすでに贖われなくなっている。このような言葉を、わたしは十分以上に述べてきたのではないか。わたしが人々に繰り返し注意しなけ

ればならないのは、ひとえに人間に根づいた本性が度し難いためである。飽きてはならない。わたしの言うことはみな、あなたがたの運命を確実なものにするためである。穢れた汚い場所こそ、サタンがまさに必要とするものである。どうしようもないほど救いがたく、放蕩に溺れれば溺れるほど、あなたがたは抑制に甘んじることを拒み、穢れた霊があらゆる機会を利用して、ますますあなたがたに取りつこうとする。そこまですると、あなたがたの忠誠は退屈なおしゃべり以外の何物でもなくなり、そこに現実は何一つなく、穢れた霊があなたがたの決意を呑み込み、それを不服従に変え、わたしの働きを妨げるサタンのたくらみに変えてしまう。そうすると、あなたがたはいつ何時わたしに打ちのめされるかわからない。誰一人、この状態の深刻さを知る者はいない。人はみな、耳に入ることを聞き流すばかりで、少しも用心しようとしめない。過去に何が行われたか、わたしは覚えていない。あなたは、わたしがもう一度「忘れる」ことで、自分に対して寛容になるのを待っているのか。人間はわたしに敵対したが、わたしは恨みに思わない。人間の霊的背丈はあまりに低いことから、わたしは過度に大きなことを要求しない。わたしが求めるのは、放蕩せず、抑制に甘んじることだけである。この一つの条件を守ることは、あなたがたの能力を超えてはいないはずだ。違うだろうか。大半の人々は、わたしがさらに奥義を明かすのを見て楽しもうと待っている。しかし、天の奥義をすべて理解するようになったところで、その知識でいったい何ができるというのか。それでわたしへの愛が増すというのか。それでわたしへの愛が燃え上がるというのか。わたしは人間を過小評価しないし、人間について軽々しく判断することもしない。これらのことが人間の置かれた実情でないなら、わたしはけっしてこのような呼び名を軽々しく人に冠さない。過去を振り返りなさい。わたしがあなたがたをけなしたことが何度あったというのか。あなたがたを過小評価したことが何度あったというのか。あなたがたの実情を考慮せず、あなたがたを見ていたことが何度あったというのか。わたしの発する言葉が、あなたがたを心から勝ち取らなかったことが何度あるというのか。わたしの話した言葉が、あなたがたの心の糸に深く響かなかったことが何度あったというのか。あなたがたのうち誰が、わたしによって底なしの淵に突き落とされることを深く恐れて恐怖に震えることなく、わたしの言葉を読んだというのか。誰がわたしの言葉による試練に耐えないというのか。わたしの発する言葉の中には権威があるが、これは安易に人間を裁くためのものではない。むしろ、わたしは人間の実情を考慮し、わたしの言葉がもつ意味を人間に絶えず示している。実際のところ、わたしの言葉の中に、わたしの全能を認められる者がいるだろうか。わたしの言葉を形作る純金を受け取れる者がいるだろうか。どれほどの言葉をわたしは語ったことか。誰がそれらを大事にしたことが

あるのか。

1992年3月3日

神の国の賛歌

あまたの民がわたしに喝采を送り、わたしを賛美する。万民が唯一の真なる神の名を呼び、わたしの業を仰ぎ見る。神の国が人の世に降臨し、わたしの本体は豊かで充実している。誰がこれを喜ばないのか。誰が歓喜のあまり踊らないのか。ああ、シオンよ。勝利の旗を掲げてわたしを祝え。勝利の歌を歌いあげ、わたしの聖なる名を広めよ。地の果てまでも存在するすべての被造物よ。直ちに自らを清めてわたしへの捧げ物となれ。大空の星よ。直ちにもとの位置に戻り、わたしの全能なる力を天空に示せ。わたしは地上の民の声に耳を傾ける。わたしへの無限の愛と畏れを歌に注ぐ民の声に。すべての被造物が蘇るこの日、わたしは人の世に降臨する。この瞬間、まさにこの節目、すべての花が一斉に咲き乱れ、すべての鳥が声を揃えて歌い、すべてのものが喜びに打ち震える。神の国の礼砲が鳴り響くと、サタンの国はよろめき倒れ、神の国の賛歌がとどろく中で滅び、二度と立ち上がることはない。

地上の誰があえて立ち上がり抵抗するというのか。地に降り立つわたしは焼き尽くす火をもたらし、怒りをもたらし、ありとあらゆる災難をもたらす。地上の国々はいまやわたしの国である。空の雲は激しく動いて渦を巻き、地の湖と川はうねりをあげ、感動的な旋律を喜んで奏でる。休んでいた動物はねぐらから現われ、万民はわたしにより眠りから呼び覚まされる。万民の待ち望んでいた日がついに来た。彼らは最も美しい歌をわたしに捧げるのだ。

この美しい瞬間、この心躍るとき、

賛美が天地のあらゆるところで鳴り響く。誰が興奮しないだろうか。

誰の心が明るくならないだろうか。誰がこの光景に涙を流さないだろうか。

空はかつての空でなく、いまや神の国の空である。

地はかつての地でなく、いまや聖なる大地である。

激しい雨が降ったあと、汚れた古い世界は何もかも新しくされる。

山が変わりゆく……水が変わりゆく……

人も変わりゆく……万物が変わりゆく……

ああ、汝静かなる山々よ。立ち上がってわたしのために踊れ。

ああ、汝静かなる水よ。絶えず自由に流れよ。

汝、夢を見ている人間よ。起きあがり追え。

わたしは来た……わたしは王……

全人類がその目でわたしの顔を見、その耳でわたしの声を聞く。

そして自ら神の国の生活を送る……

何と甘美なことか……なんと美しいことか……

忘れられない……忘れることなどできない……

わたしの怒りが燃えさかる中、赤い大きな竜はのた打ち回る。

威厳に満ちたわたしの裁きにおいて、悪魔はその正体を現わす。

わたしの厳格な言葉に人はみな深く恥じ入るが、どこにも隠れる場所がない。

人は過去を振り返り、いかにわたしを嘲りあざ笑ったかを思い出す。

人が自己顕示しなかったときはなく、わたしに挑まなかったときもない。

今日、泣いていない者がいるのか。自責の念を感じない者がいるのか。

全宇宙、全世界が泣き声で満たされる……

歓喜の声で満たされる……笑い声で満たされる……

比類なき喜び……比べるものなき喜び……

小雨がしとしと降り……大雪がしんしん降る……

人は悲喜こもごも……笑う者……

泣きじゃくる者……歓喜する者……

誰もが忘れてしまったかのよう……いまが雨と雲に満ちた春なのか、

花が咲き誇る夏なのか、豊かな収穫の秋なのか、

凍えるような冬なのか、誰一人知る者はいない……

空には雲が流れ、地では海がうねりをあげる。

子らは腕を振り……民は足を動かして踊る……

天使は働きにいそしみ……牧養している……

地では人々はみな忙しく立ち回り、地の万物はその数を増す。

第十一章

人間は誰もみな、わたしの霊による観察を受けなければならない。自分のすべての言葉と行動を細かく調べ、さらに、わたしの驚くべき行いを見なければならない。神の国が地上に来るとき、あなたがたは、どのように感じるだろうか。わたしの子らと民がわたしの玉座に流れ込んで来るとき、わたしは大きな白い玉座の前の裁きを正式に始める。これはつまり、自ら地上での働きを開始し、裁きの時代が終わりに近づくと、わたしの言葉を全宇宙に向け始め、わたしの霊の声を全宇宙に放つということだ。わたしの言葉を通して天と地のすべての人々と物事を洗い清め、地はもはや穢れと淫乱の地ではなく、聖なる国である。わたしはすべてを新たにし、わたしが用いることができるようにし、もはや地上の息を含まず、もはや土のにおいに汚れていないようにする。地上では、人間はわたしの言葉の目的と根源を手探りし、わたしの業を観察したが、誰一人ほんとうにわたしの言葉の根源を知らず、誰一人わたしの業のすばらしさを真に見ていない。ようやく今日、わたしが自分で人間たちの間に来て言葉を発してはじめて、人間はわたしについてわずかの認識を得、彼らの考えにあった「わたし」の場所を取り去り、意識の中に実際の神のための場所を作ったのだ。人間は観念と好奇心に満ちている。誰が神を見ることを望まないだろう。誰が神に会うことを望まないだろう。しかし、人間の心に確かな位置を占めるのは、ただ人間がぼんやりと抽象的に感じている神なのだ。わたしが平明に告げなければ、誰が気づくだろう。わたしがほんとうに存在していると、まことに疑いの影もなく、誰がほんとうに信じるだろう。人間の心にある「わたし」と実際の「わたし」との間には大きな隔たりがあり、誰一人、その二つの違いを述べることができない。わたしが受肉しなければ、人間はけっしてわたしを知らず、たとえわたしを知るようになったとしても、そうした認識は観念的なものに過ぎないのではないか。わたしは毎日、とだえることのない人間の流れの中を歩き、毎日、すべての人の中で働く。人間が真にわたしを見ると、わたしの言葉の内にわたしを知り、わたしの語る方法、わたしの心を理解する。

神の国が正式に地上に着くと、すべての中で、何が沈黙しないだろう。すべての人の中で、誰が恐れないだろう。わたしは宇宙世界のいたるところを歩き回る。すべては、わたしが自分で定めた。このとき、誰が、わたしの業がすばらしいものだと知らないだ

ろう。わたしの手はすべてを支え、同時に、すべての上にある。今日、わたしの受肉とわたしが実際に人間の間にいることとは、わたしの謙遜さと神秘のほんとうの意味なのではないか。表向きには、多くの人がわたしを善であるとしてたたえ、美しいとほめるが、誰がほんとうにわたしを知っているのか。今日なぜわたしは、あなたがたがわたしを知るように要求するのか。わたしのねらいは赤い大きな竜を辱めることではないのだろうか。わたしは、人間にわたしをたたえるよう強制はしたくない。しかしわたしを知り、それを通じてわたしを愛するようにさせ、そうしてわたしをたたえるようにする。そのようなたたえはその名にふさわしく、むなしい言葉ではない。そのようなたたえだけが、わたしの玉座に届き、天に昇るのだ。人間はサタンに誘惑され、墮落させられたから、人間は観念と思考に囚われてしまったから、わたしは自分で全ての人間を征服し、人間の観念を暴き、人間の考えを引き裂くために受肉したのだ。その結果、人間はもはやわたしの前で誇示せず、もはや自分の観念でわたしに仕えることをしなくなる。そうして、人間の観念の中にある「わたし」は完全に消される。わたしの国が来るとき、わたしはまず、この段階の働きをはじめ、それをわが民の間で行う。赤い大きな竜の国に生まれたわが民であれば、まことにあなたがたの中の赤い大きな竜の毒素は、ほんの少しでも、一部だけでもない。だから、わたしの働きのこの段階は、主にあなたがたに集中する。そして、これがわたしの中国での受肉の意義の一面なのだ。たいていの人には、わたしの語る言葉のかけらも理解できない。そして、たとえできたにしても、彼らの理解は曖昧で混乱している。これは、わたしの話す方法の転換点だ。もしすべての人がわたしの言葉を読み、その意味を理解できるなら、誰が救われて、ハデスに投げ落とされずに済むだろう。人間がわたしを知り、従うとき、わたしは憩う。そのときこそ、人間はわたしの言葉を理解できる。今日、あなたがたの霊的背丈は低すぎる。哀れなほどに小さく、わざわざ引き上げる価値もない——あなたがたのわたしについての認識は言うまでもない。

わたしの子らや民を牧養するために天使たちが派遣されはじめたと、わたしは述べているが、誰一人わたしの言葉の意味を理解できない。わたしが自分で人間たちの間に行き、天使たちが同時に牧養の働きを始めると、天使たちの牧養する間、子らと民はみな、試練と牧養とを受けるだけでなく、あらゆる幻をも、その目で見ることができる。わたしは神性において直接働いているので、全ては新しい始まりに入る。また、神性が直接働いているため、人性に少しも束縛されない。そして、人間の目には超自然的な状況下で自由に働いているように見える。しかし、わたしには、完全に正常である（人間

は直接神性を経験したことがないため、これが超自然現象だと思い込む)。そこには人間の持つ観念は存在せず、人間の考えを少しも含まない。人々は正しい道に入ってはじめて見るだろう。今は始まりであり、人間がその道へ入るということになると、人間には数多くの欠点があり、過ちや不透明さを避けて通ることはできない。今日、わたしがこの時点まで導いてきたのだから、わたしには適切な計画があり、わたし自身の目的がある。もしわたしがそれらについて今日語るなら、あなたがたは、ほんとうにそれがわかるだろうか。わたしは、人間の考え方と、人間が心に望むこととをよく知っている――自分で逃げ道を探したことがない人などいるだろうか。自分の行く末について何も考えたことがない人などいるだろうか。しかし、人間は豊かで多彩な知性を持っているが、長い時の果てに現在がこのようになるとは、誰が予想しただろう。これが、ほんとうにあなたの主観的努力の成果なのか。これが、あなたの疲れを知らぬ努力の報いなのか。これが、あなたが心に描いた美しい情景なのか。もしわたしがすべての人々を導かなければ、誰がわたしの定めから離れて別の出口を見出せるだろう。今日まで人間を導いてきたのは、人間の想像や願いなのか。多くの人は生涯、願いをかなえることなく生きる。これはほんとうに、その人たちの考えが間違っているせいだろうか。多くの人の生は、思いがけない幸福と満足で満たされている。これはほんとうに、彼らが多くを期待しないせいなのか。すべての人間の中で、誰が全能者の目に見守られていないのか。誰が全能者の定めの中で生きていないのか。人間の生死は自分の選択で生じるものなのか。人間は自分の運命を左右できるのか。多くの人は死を求める。しかし、それは彼らからは遠い。多くの人は人生において強くありたいと願い、死を恐れる。しかし、彼らの知らないところで死の時は近づいてきて、彼らを死の淵に陥れる。多くの人は空を見て、深い溜め息をつく。多くの人は激しく叫び、泣いて嘆きの声を上げる。多くの人は試練の中に倒れ、多くの人は誘惑に囚われる。わたしは姿を現して人間にはっきり見られるようにはしないが、多くの人はわたしの顔を見ることを恐れ、わたしが彼らを打ち倒すのではないか、彼らを消し去るのではないかとひどく恐れる。人間はほんとうにわたしを知っているのか、知らないのか。誰一人、確かなことは言えない。そうではないか。あなたがたは、わたしとわたしの刑罰を恐れる。しかし、あなたがたはまた、立ち上がって真正面からわたしに敵対し、わたしを裁こうとする。そうなのではないか。人間がわたしを知らずにきたのは、けっしてわたしの顔を見たことがなく、また、わたしの声を聞いたこともないからだ。そこで、わたしは人間の心の中にいるのだが、自分の心の中で、わたしが漠然とした存在でも、不可解な存在でもない者がいるだろうか。心の中のわたしが完全に明瞭な人が、誰かいるだろうか。わたしは、わが民までもがわたし

をぼんやりと、不明瞭に見ていることを望まない。そこで、この大いなる業に取り掛かったのだ。

わたしは静かに人間の間に来て、そっと去る。これまで誰か、わたしを見た者がいるだろうか。太陽は燃える炎があるから、わたしを見ることができるのだろうか。月はそのさやかな光のおかげで、わたしを見ることができるのだろうか。星々は空でそれぞれの場所にいるから、わたしを見る事ができるのだろうか。わたしがいつ来るのか、人間は知らないし、あらゆるものは知らずにいる。また、わたしがいつ去るかも、人間は気づいていない。誰がわたしについて証しできるのだろうか。地上の人々のたたえだろうか。野に咲く百合だろうか。空を飛ぶ鳥だろうか。山々で吠える獅子だろうか。誰一人、わたしを完全に証しできない。誰一人、わたしのする働きができない。たとえ人々がこの働きをしてみても、それでどんな効果があるのか。わたしは毎日、大勢の人々の行いを見、毎日、多くの人々の心や考えを探る。誰一人、わたしの裁きから逃れた者はいない。また、誰一人、わたしの裁きの実際を免れた者はいない。わたしは空の上に立ち、遠くを見やる。無数の人々がわたしに打ち倒された。しかしまた、無数の人々がわたしの憐れみと慈愛の中で生きているのだ。あなたがたもまた、そうした中で生きているのではないか。

1992年3月5日

第十二章

東から稲妻が走るときこれはまた、わたしがわたしの言葉を口にし始める、まさにその瞬間である――稲妻が光るそのとき、天空全体が照らされ、すべての星々に変化が起こる。全人類はあたかも選り分けられ、整理されたかのようである。東からの光芒の下、人間はみな本来の形を現し、目がくらみ、混乱し、動きがとれずにいる。まして、自らの醜い顔を隠すことができない。また、彼らはわたしの光から逃げて山の洞窟に隠れようと逃げる動物のようだ。しかし、わたしの光の中では、彼らの一人も姿を消せない。人間はみな仰天し、みなじっと待ち、みな見守っている。わたしの光の出現により、みな自分の生まれた日を喜び、同様に、みな自分の生まれた日を呪う。対立する感情は表現し難い。自己懲罰の涙が川と流れ、勢いの早い流れに運ばれ、瞬く間に跡形もなくなる。再び、わたしの日が人類の上に迫り、再び、人類を目覚めさせ、人類は新たな始まりを迎える。わたしの心臓が拍動し、その鼓動にしたがって、山々が喜びに飛び上がり、水が喜びに踊り、波が律動し、岩礁を叩く。わたしの心にあるものを言い表すのは

困難だ。わたしは、わたしの視線ですべての穢れたものが燃えて灰となり、不従順の子らがみな、わたしの目の前から一掃され、もはや存在しなくなることを望む。わたしは赤い大きな竜のすみかに新たな始まりをもたらしたばかりではなく、全宇宙で新たな働きを始めた。間もなく、地上の国々がわたしの国となる。間もなく地上の国々はわたしの国故に永遠に存在しなくなる。わたしがすでに勝利を得たのだから。わたしが勝利のうちに戻ったのだから。赤い大きな竜は、地上でのわたしの働きを打ち消そうと、わたしの計画を妨げるために考え得るあらゆる手段を用いたが、わたしが竜の欺きに満ちた策略のせいでくじけるだろうか。わたしが竜の脅しに怯え、自信を失うだろうか。天にも地にも、わたしのたなごころの内には一つもない。赤い大きな竜、わたしの引き立て役となっているものは、なおさらではないか。これもまた、わたしの手で操れるものではないのか。

わたしが人間の世界で受肉したとき、人間はわたしの導きの手に従って、知らず知らずのうちにこの日に至り、それと知らぬうちに、わたしを知るようになった。しかし、前に続く道をどう歩むかということは、誰にもわからない、誰も知らない。まして、その道がどこに続いているかは、誰も見当がつかないのだ。全能者の見守りがあってはじめて、人はその道を最後まで歩むことができる。東の稲妻に導かれてはじめて、人はわたしの国の敷居を跨ぐことができる。人間たちの間に、わたしの顔を見た者、東に稲妻を見た者は誰もいない。わたしの玉座から出る声を聞いた者は、どれほど少ないだろう。実際、遠い昔から、わたしの本体に直接触れた人間は一人もいない。今日初めて、わたしがこの世界に来て、人間はわたしを見る機会を得る。しかし、今でも、人間はまだわたしを知らず、わたしの顔を見、声を聞くだけで、わたしの意志を理解していない。人間はみな、そういうふうなのだ。わが民として、あなたがたは、わたしの顔を見て、大いに誇りを感じるのではないか。また、わたしを知らないことに惨めな恥ずかしさを覚えなだろうか。わたしは人間の間を歩き、人間の間で暮らす。わたしは受肉し、人間の世界に来たからだ。わたしの目的は、ただ人間がわたしの肉の体を見られるようにするだけではない。より重要なことは、人間がわたしを知ることができるようにすることだ。さらに、わたしは肉の体を通して、人間に対して有罪判決を下す。受肉した体によって、赤い大きな竜を打ち破り、そのすみかを一掃する。

地上に生きる人間は星の数ほど多いが、わたしは全員を自分の手のひらのように、よく知っている。また、わたしを「愛する」人間もまた海の砂のように多いが、わたしに選ばれたものはごく少数だ。わたしを「愛する」人々とは違い、まばゆい光を追い求め

る者だけだ。わたしは人間を過大評価も過小評価もしない。そうではなく、生まれながらに備わった特質に基づいて要求する。そこで、わたしの求めるのは、心からわたしを求める者だ――これは、わたしが人間を選ぶ目的を達するためだ。山々には無数の獣がいる。しかし、彼らはみな、わたしの前では羊のように穏やかだ。海の底には計り知れない神秘が潜んでいる。しかし、それらは、わたしには地上のすべての物事同様、明瞭に見える。天には、人間がけっして到達できない領域がある。しかし、わたしはそうした、到達不能の場所を自由に歩き回る。人間はけっして光の中でわたしを認識しておらず、闇の世界でだけ、わたしを見ている。あなたがたは、今も同じ状況にあるのではないか。赤い大きな竜が最大の猛威を振るっているときに、わたしは働きを始めるために正式に受肉した。赤い大きな竜がその真の姿をはじめて現したとき、わたしは、わたしの名を証しした。わたしが人間の道を歩き回ったとき、ただ一つの生き物、ただ一人の人間も、驚いて覚醒することはなかった。だから、わたしが人間世界で受肉していたとき、誰もそれを知らなかった。しかし、わたしの受肉した体で働きを始めると、人間が目覚める。わたしの雷鳴のような声に驚いて夢から醒め、その瞬間から、わたしの導きのもとでの生活を始める。わが民の中で、わたしは再び新たな働きを始めた。地上での働きが終わっていないと言った。これは、わたしが話した民は、わたしが心の中で必要と認めた者たちではないにも関わらず、それでもまだ、そうした人々の中から何人かを選んでいくことを十分に示す。このことから、わたしは、わが民が受肉した神を知ることができるようにしているだけではなく、わが民を清めていることが明らかになる。わたしの行政の厳しさにより、大多数の人々はまだ、わたしに除かれる危険がある。あなたがたが精一杯自分を取り扱い、自分の体を抑制する努力をしない限り、そうしない限り、必ずわたしの嫌い捨てる存在になり、地獄に投げこまれる。パウロがわたしの手から直接刑罰を受けたのと同様、それは逃れようがない。あなたがたは、わたしの言葉に何かを見出しているのだろうか。以前と同様、わたしはまだ教会を清めるつもりであり、わたしの必要とする人々を清め続ける。なぜなら、わたしは全く聖く汚れのない神自身だからである。わたしの神殿は虹色に輝くだけではなく、清浄無垢で、内部も外部と調和するものにしているつもりだ。わたしの前で、あなたがたは一人残らず、過去に何をしていたかを思い起こし、今日、わたしの心に完全な満足を与えようと決心できるかを判断しなければならない。

人間は単に肉におけるわたしを知らないだけではなく、さらに悪いことに、肉の体をもつ自分というものを理解することができずにいる。何年もの間、人間はわたしを欺き

、わたしをよそから来た客人として扱ってきた。何度も、人々はわたしを「彼らの家の戸口」で締め出した。何度も、わたしの前に立って、わたしを無視した。何度も、他の人々の間でわたしを拒んだ。何度も、悪魔の前でわたしを否定した。そして、何度も、口論する口でわたしを攻撃した。しかし、わたしは人間の弱点を記録していないし、また、わたしに逆らったからといって、「歯には歯で」という対応はしない。わたしがしたのは、人間がついにわたしを知るように、不治の病を癒すために人間の病に薬を用い、そうして健康にすることだ。わたしがしてきたことはすべて、人間の生存のためだったのではないか、人間に生活する機会を与えるためだったのではないか。わたしは何度も人間の世界に来たが、わたしが自身の姿で訪れたとしても、人間は、わたしに気づかなかった。その代わり、人間たちは自分にとってふさわしいと思える振る舞いをし、自分で道を見出そうとした。天の下のどの道も全てわたしに発していることを、彼らはほとんど知らない。天の下のものはすべてわたしの采配によることを、彼らはほとんど知らない。あなたがたの誰が心に恨みをもつだろう。あなたがたのうち誰が、安易に決断を下そうとするだろう。わたしは、ただ静かに人間たちの間でわたしの働きをしている。それだけのことだ。わたしが受肉していた間、人間の弱さに同情していなければ、すべての人間は、わたしが受肉したというだけで怯えきり、その結果、ハデスに落ちていただろう。わたしが身を卑しくして自分を隠したから、人間は破滅を免れ、わたしの刑罰から救われ、そうして今日に至っているのだ。今日に至ることがどれほど困難なことであったかを念頭に置いて、これから来る明日を大切に思うべきではないか。

1992年3月8日

第十三章

わたしの言葉と発言の中には、わたしの意図がいくつも隠れている。しかし、人はそのことを何も知らず理解せず、わたしの言葉をひたすら外側から受け入れ、ひたすら外側から従い、わたしの言葉の内側からわたしの心を理解したり、わたしの思いを悟ったりすることができない。たとえわたしが言葉を明瞭にしても、誰が理解するというのであろうか。わたしはシオンから人類のもとにやって来た。わたしは普通の人間性と人間の肌をまとったので、人は外側からわたしの外見を知るようになるだけで、内にあるいのちを知らず、霊の神に気づかず、肉の体を持つ人だけを知っている。実際の神自身は、あなたがたが知ろうとするに値しないのであろうか。実際の神自身は、「分析」しようとあなたがたが努力するのに値しないのであろうか。わたしは全人類の墮落を憎むが

、人類の弱さを憐れむ。わたしはまた、全人類の古い性質を取り扱ってもいる。中国にいるわたしの民の一人として、あなたがたもまた人類の一員ではないのか。わたしのすべての民の中で、また、わたしのすべての子らの中で、つまり、全人類の中からわたしの選んだ者の中で、あなたがたは最低の集団に属する。そのため、あなたがたに最大量の精力、最大量の努力を注いだ。あなたがたは、今日享けている幸いな生活を大切に思っているのではないのか。あなたがたは、まだ心を硬くして、わたしに逆らい、自分の計画を実行しようとしているのか。わたしの憐れみと愛が続いていなければ、全人類はとうの昔にサタンに捕らえられ、その口で「おいしい食べ物」になってしまっていたであろう。今日、あらゆる人々の中で、わたしのためにほんとうに自己を費やし、ほんとうにわたしを愛す者は、いまだに片方の手で数えられるほど少ない。今日、「わが民」という称号は、あなたがたの私有財産となりうるであろうか。あなたの良心は、ただ氷のように冷たくなったのであろうか。あなたはほんとうに、わたしが要求する民となるにふさわしいであろうか。過去を振り返り、また今日を見て、どちらのあなたがわたしの心を満足させているのであろうか。どちらが本当にわたしの思いを気づかったであろうか。わたしが促さなければ、あなたがたはいまだに目覚めず、冬眠しているかのように凍ったような状態のままでいたであろう。

逆巻く波の中に、人はわたしの怒りを見る。渦巻く黒い雲の中、雷雨に流されることを恐れるかのように、人は恐怖に我を忘れ、逃げ惑う。それから、激しく吹き荒れた雪嵐がようよう通り過ぎると、人の気持ちはゆったりと穏やかになり、自然の美しい眺めを楽しむ。しかし、そのとき、わたしが人類に抱く無限の愛を誰が経験したというのであろうか。人の心にはわたしの形しかなく、わたしの霊の本質はない。人間は公然とわたしに逆らっているのではないのか。嵐が去ると、人類はみな新しくなったかのようにある。患難を通して練られ、光といのちとを再び得たかのようにである。あなたがたもまた、わたしの与えた打撃に耐えて、今日に至る幸運を得たのではないのか。しかし、今日が去り、明日になったとき、あなたがたは大雨の後の清さを保つことができるであろうか。精錬された後の忠誠心を維持できるであろうか。今日の従順さを保つことができるであろうか。あなたがたの忠誠心は、堅固で変わらないままでいられるであろうか。まことに、これは人間のなし得る能力を超える要求であろうか。毎日、わたしは人類とともに生き、人々とともに行動する。しかし、誰一人としてこれに気づいていない。わたしの霊の導きなしに、全人類の中の誰が今のこの時代にまだ存在できるというのか。人間とともに生き、行動するというとき、わたしは誇張しているのであろうか。以前、

「わたしは人間を創り、すべての人間を導き、すべての人間に命令した」と言ったが、これは実際そうだったのではないか。もしや、これらの経験があなたがたには不十分だということなのであろうか。「効力者」という語だけでも、説明するのにあなたがたの全生涯が必要となるであろう。実際の経験なしには、人間はけっしてわたしを知るようにならない。わたしの言葉によってわたしを知るようにもなれない。しかし、今日わたしは、自らあなたがたのもとに来ている。これはあなたがたの認識に役立つのではないであろうか。わたしの受肉はあなたがたにとっての救いでもあるのではないか。もしわたしが人として人間のもとに来ることがなければ、全人類はとうにもろもろの観念に満たされていたであろう。つまり、サタンのものになっていただろうということである。あなたの信じるものはサタンの姿でしかなく、神自身とは何らの関わりもないからである。これはわたしによる救いではないのか。

サタンがわたしの前に来て、わたしは、その醜悪さに後ずさりすることもなく、そのおぞましさに怯えることもない。ただ無視する。サタンが誘惑してきても、わたしはその策略を見通すので、サタンは恥入り屈辱を受けて、こそこそと立ち去る。サタンがわたしと戦い、わたしの選民を奪おうとするとき、わたしは肉の身でサタンと戦う。そして、わたしの民が容易に倒れたり迷ったりしないように、肉の身で彼らを支え、牧し、一步一步導いて行く。そして、サタンが敗れて引き下がると、民はわたしに栄光をささげ、わたしに美しく響き渡るような証しを立てる。それゆえ、わたしの経営（救いの）計画から引き立て役を取り払い、これを最後として底なしの淵に投げ入れる。これがわたしの計画であり、わたしの働きである。あなたがたが生きている間に、このような状況に出会う日が来る。あなたは進んでサタンに捕らわれるのか。それとも、わたしに得られるのか。これはあなた自身の運命なのだから、よくよく考えなければいけない。

神の国での生活は、民と神自身との生活である。すべての人間はわたしの世話と守りの下であり、赤い大きな竜との命がけの戦いに臨んでいる。この最終的な戦いに勝利するためには、赤い大きな竜にとどめを刺すためには、すべての人がわたしの国で彼らの存在のすべてをわたしにささげなければならない。ここで「神の国」というのは、神性の直接の支配下で生きる生活という意味であり、そこではわたしが全人類の羊飼いであり、全人類はわたしからの直接の訓練を受け入れるので、まだ地上にありながら全人類の生活はあたかも天国にいるようになる。まさに、第三の天での生活の実現である。わたしは肉の身の中にあっても、肉の限界に縛られない。わたしは何度、人の祈りを聞くために人のもとにやって来たことか。また、人々のまわりを歩いて、彼らのたたえを喜

んだことか。人間はけっしてわたしの存在に気づかなかったが、わたしは今でもそのようにして、わたしの働きを行っている。わたしの住むところ、それはわたしが隠れているところだが、それでも、その住まいですべての敵を打ち破った。わたしの住むところで、地上に生きるということを真に体験した。わたしの住むところで、人間のあらゆる言葉と行いとを観察し、全人類を見守り、采配を振るっている。もし人間がわたしの意図を気づかって、わたしの心を満足させ、わたしを喜ばせたいと願うのなら、わたしは必ず全人類を祝福しよう。これがわたしが人類のためにしようとしていることではないのか。

昏睡状態にある人類は、わたしの雷鳴のとどろく中、はじめて夢から醒める。目を開くと、多く的人是冷たい光が激しく輝くせいで目を痛め、方向感覚を失い、どこから来て、どこへ行くのかわからなくなる。ほとんどの人はレーザーのような光線に打たれ、嵐の中に折り重なるように倒れてしまう。彼らの体は激しい流れにさらわれ、あとかたも残らない。光の中、生存者はついにわたしの顔をはっきりと見ることができる。そのときはじめて、わたしの外貌の幾分かを知る。それゆえ、わたしがまた彼らの肉を罰し、呪うのではないかと深く恐れて、もはやわたしの顔をまともに見ようとしない。多く的人在泣き叫び嘆き悲しむ。多く的人在絶望にくれる。多く的人在川のように血を流す。多く的人在あてどなく漂う死体となる。多く的人在光の中に自分の場所を見出し、長い年月の不幸を思い、突然胸に痛みを覚え、涙を流す。多く的人在光のために、自らのけがれを告白し、自己を改めようと誓わずにはいられなくなる。多く的人在失明し、生きる喜びもすでに失い、そのため、もはや光に気づきもせず、よどんだままで終わりの時を待つ。そして、多く的人在生活の帆を揚げ、光の導きの下、明日を待ち望む。……今日、人類の誰がこの状態にいないというのか。わたしの光の中に誰がいけないというのか。たとえ強くても、あるいは弱くても、わたしの光の到来をどうして免れることができるのか。

1992年3月10日

第十四章

世々を経て、人間は一人も神の国に入っていない。だから、誰一人神の国の時代の恵みを享受していない。だれひとり神の国の王を見ていない。わたしの霊の光の中で多く的人在神の国の美しさを預言したが、彼らが知っているのは外観だけで、内側のすばらしさは知らないのだ。今日、地上に神の国が現実存在するようになっても、ほとんど

の人間は、神の国の時代に何が成し遂げられるのか、どこに人間は最終的に連れて行かれるのかを知らない。これについて、残念なことに、人間はみな混乱しているようだ。神の国の実現する日がまだ完全に来ていないため、すべての人間は混乱していて、はっきり見ることはできない。神性におけるわたしの働きは、神の国の時代とともに正式に始まる。神の国の時代の正式な開始とともにわたしの性質が徐々に人間に示される。そうして、その時に聖なるラッパが正式に響き出し、あらゆるものに告げる。わたしが正式に権力を握り、神の国の王として支配すると、わが民はみな、やがて、わたしによって完全にされる。世界のすべての国々が分裂すると、そのときこそ、わたしの国が確立され、形作られ、また、わたしが変容して全宇宙に向き合うときである。その時、すべての人はわたしの栄光の顔、わたしの真の顔つきを見る。世界の創造以来、サタンによる人間の墮落から、人間が今日墮落している度合いに至るまで、人の目から見て、わたしはますます隠され、ますます計り知れないものになっていったのは、その墮落のためだった。人間はけっしてわたしの真の顔を見たことがないし、けっしてわたしと直接接することがなかった。人間の想像した「わたし」は、聞き伝えや神話の中にだけいた。だからわたしは、人間の想像力、つまり、人間の観念に合わせて、人間の考える「わたし」に取り組み、彼らが永きにわたって抱いていた「わたし」というものを変える。これがわたしの働きの方針だ。これを知り尽くすことのできた人間は、ただの一人もいない。人間はわたしにひれ伏し、わたしの前に来て拝んだが、わたしはこのような人間の行いを喜ばない。人々が心に抱いているのはわたしの姿ではなく、わたし以外の者の姿だからである。ゆえに、彼らにはわたしの性質に関する認識がないので、わたしの素顔にまったく気づかない。したがって、わたしに抵抗したり、わたしの行政命令に違反したりしたとしても、わたしはやはり見ないことにする。そこで、人間の記憶では、わたしは人々を罰するのではなく、むしろ慈悲を示す神であるとか、言うことが当てにならない神自身だということになっている。そうしたことはみな人間の考えから生み出された想像であり、事実と一致していない。

日々、わたしは立って宇宙を観察し、自分のすみかに謙虚に身を隠しながら人間の生活を経験し、人のあらゆる行いをよく観察する。誰一人、本当に自身をわたしに捧げたことがない。誰一人、真理を追求した者はない。誰一人、わたしに対して真面目であった者はない。誰一人、わたしの前で誓いを立て、本分を果たした者はない。誰一人、わたしをその内に宿らせた者はいない。誰一人、自分の命と同じくらいにわたしを大事にした者はいない。誰一人、わたしの神性のすべてを実際に目にした者はいない。誰一人

、実践の神自身とやりとりをしようとしな。水が人間をそっくり呑み込むと、わたしは淀んだ水から救い出し、新たに生きる機会を与える。人間が生きる自信を失うと、死の瀬戸際から引き戻し、生きる勇気を与え、わたしを存在の基礎とするようにする。人間がわたしに不服従であるとき、わたしはその不服従の中でわたしを知るように仕向ける。人間の古い本質を考慮し、わたしの哀れみにより、人間を死に至らしめるよりは、悔い改めて新たに始めさせる。人間が飢饉に苦しむと、一息でも残っていれば、わたしは彼らを死から奪い、サタンの罠に陥らないようにする。何度、人々はわたしの手を見ただろう。何度、人々はわたしの親切的な顔、笑顔を、何度、わたしの威厳、わたしの怒りを見ただろう。人間は、けっしてわたしを知らないのだが、わたしは彼らの欠点につけ込んで無用な厄介事を引き起こしはしない。人間の困難を経験したため、わたしは人間の弱点に同情する。人間の不服従、忘恩に対してだけ、わたしは程度に応じて刑罰を下す。

わたしは、人間が忙しい時には身を隠し、暇な時に姿を現す。人間は、わたしのことを博識で、あらゆる願いをかなえる神自身であると思っている。だから、たいていは、わたしを知りたいという欲求からではなく、神の助けを求めてわたしの前に来る。病の苦しみにあるとき、人間はわたしにあわてて助けを求める。困難な状態にあるとき、人間は、自分たちの難儀を除くことをひたすらに願って、自分たちの苦しみについて打ち明ける。しかし、安楽な状態にあるときにわたしを愛せた者は一人もいない。安らかで幸福な時に、喜びを分かち合おうと、わたしに手を差し伸べた者は一人もいない。自分のささやかな家庭が幸福で安らかな時、人々は家庭の幸福を享受できるよう、ずっと前からわたしを押しつけ、あるいは戸口から締め出し、入れないようにしてきた。人間の心はあまりに狭いので、愛情深く、慈悲深く、親しみやすい神であるわたしを受け入れさえしない。楽しい笑いの場で、何度、わたしは人間に拒絶されたことか。人間が倒れたとき、何度、彼らはわたしを支えにしようと、寄りかかってきたか。何度、病に苦しむ人間に、医者役目を強いられたか。人間とは何と残酷なのだ。まったく理不尽で不道德だ。人間が備えているはずの感情でさえ彼らの中に感じられない。彼らには人間性の痕跡がほとんどない。過去を振り返り、現在と比べて見よ。あなたがたの内に変化が起こっているだろうか。現在において、その過去はますます作用しなくなっているか。それとも、その過去はまだ置き換えられていないのか。

いたるところを、わたしは移動し、世の浮き沈みを経験した。わたしは人々の間を歩き回り、人々の中で長い間暮らした。しかし、人間の性質はほとんど変わらないようだ

。そして、まるで人々の古い本性が根付き、成長しているようなのだ。彼らはけっして古い本性を変えられず、もともとの基礎にあったものを向上させているだけだ。よく言うように、本質は変わっていないが、形式はずいぶん変わっている。人々はみな、うまくごまかしてわたしに気に入られようと、わたしを騙して惑わそうとしているようだ。わたしは、人間の企みなど見ないし、注意を払いもしない。憤るよりは、わたしは見ても見ないふりをする。わたしは人にある程度の余裕を与え、その後すべての人間をまとめて扱うつもりだ。人間はみな自尊心のない無価値な恥知らずで、自分を大事にすることがないのだから、どうしてわたしが新たに慈悲と愛を示す必要があるのか。例外なく、人間は自分を知らず、自分がどれほどのものか、わかっていない。彼らは重さを測るために秤に乗らなければいけない。人間はわたしを無視しているのだから、わたしも彼らをまともには扱わない。人間はわたしに無関心なのだから、わたしも彼らのためにこれ以上努力して働きを行なう必要はない。これは両者にとって得なことではないか。それがあなたがたの姿なのではないか、わが民よ。わたしの前で誓いを立て、後になってそれを捨てない人がいたか。わたしの前で、しきりにあれこれ誓いを立てるのではなく、長きにわたる誓いを立てた人がいたか。人間はいつでも安楽な時には、わたしの前で誓いを立てるが、苦しい時には、それをみな取り消す。後になって、またその誓いを取り上げて、わたしの前に置く。わたしは、まったく尊敬に値しないから、人間がゴミの山から拾ってきたクズを気楽に受け入れるというのだろうか。自分の誓いを堅持する人間は、ほとんどいない、慎重深い人は、ほとんどいない。また、最も大事なものをわたしのために犠牲にする人も、ほとんどいない。あなたがたはみな、こういうふうではないのか。わたしの国でわが民の一員として自分の本分を尽くせないのなら、わたしに嫌われ捨てられる。

1992年3月12日

第十五章

人間はみな自己認識をもたない生き物であり、自分を知ることができずにいる。それにもかかわらず、掌を指すかのごとく他の全員のことを知っており、他人のすべての言動はまず彼らの目の前で「吟味」され、承認を得てからなされたかのようなものである。結果として、他の全員のことを心理状態まですべて知り尽くしているかのごとき有様だ。人間はみなこのようなものである。今日、人間は神の国の時代に入ったものの、その本性は変わっていない。わたしの前では依然わたしと同じことを行なうが、わたしの背後で

は自分独自の「仕事」をし始めている。とは言え、その後はわたしの前に来るのだが、まるで完全に別人のようで、見たところ冷静で臆しておらず、顔つきも穏やかで脈も安定している。これこそまさに、人間を卑しいものになっているのではないか。かくも多くの人が二つのまったく違う顔をもち、一つはわたしの前にあってもう一つはわたしの背後にある。かくも多くの人が、わたしの前では生まれたばかりの子羊のように振る舞いながら、わたしの背後にいるときは獰猛な虎と化し、その後は丘を楽しく飛び回る小鳥のように振る舞っている。かくも多くの人がわたしの前で抱負と決意を示す。かくも多くの人がわたしの言葉を切に渴望してわたしの前に来るが、わたしの背後では、わたしの発する言葉が邪魔物でもあるかのように、それらにうんざりして捨て去っている。じつに何度も、人類がわたしの敵に墮落させられるのを見て、わたしは人間に希望を託すことを諦めた。じつに何度も、人間がわたしの前に来て、涙ながらに赦しを乞い求めるのを見てきたが、人間の自尊心の欠如と度し難い頑固さに、たとえ彼らの心が本物で、その意図が誠実だったとしても、わたしは怒りの中で目を閉じてきた。じつに何度も、人間がわたしに協力するだけの信心をもっているのを見てきたが、彼らはわたしの前にいるとき、わたしに抱かれ、そのぬくもりを味わっているかのようである。じつに何度も、わたしの選民の無垢さ、活発さ、愛らしさを見てきたが、そうした様子に大きな喜びを感じずにいられようか。人間は、わたしの手の中にある、あらかじめ定められた恵みをどう享受すればよいか知らない。なぜなら、「祝福」および「苦しみ」とはいったい何かを理解していないからである。そのため、人間はわたしのことを求めるにあたり、まったく誠実ではない。仮に明日が存在しなければ、わたしの前に立つあなたがたの誰が、降りしきる雪のように白く、翡翠のように無垢であるだろうか。わたしに対するあなたの愛は、おいしい食事や上等な衣服、あるいは高給を伴う高い地位と引き換えられるものだということなのか。他人があなたに抱く愛と交換できるものなのか。試練を経たせいで、人間がわたしへの愛を捨て去るといふことなのか。苦難と艱難のせいで、人間がわたしの采配について文句を言うようになるのか。わたしの口の中にある剣を本当に味わった者は誰もいない。人間は表面的な意味しか知らず、そこに伴うものを本当に把握してはいない。仮に人間が本当にわたしの剣の鋭さを見ることができたなら、ネズミのように穴に逃げ込むだろう。人間は鈍感なので、わたしの言葉の真の意味を何一つ理解できない。そのため、わたしの発する言葉がどれほど恐るべきものであるかも、人間の本性をどれほど暴くかも、自分自身の墮落がそれらの言葉によってどれほど裁かれてきたかも、まるでわかっていない。そのため、わたしの言葉に対する生半可な理解の結果、大半の人は中途半端な態度をとってきたのだ。

神の国では、わたしの口から言葉が発せられるだけでなく、わたしの足が各地のいたるところを厳かに踏んで行く。このようにして、わたしは穢れて汚れたすべての場所で勝利した。それによって、天が変わりつつあるだけではなく、地でも変化が進み、やがて新たになる。わたしの栄光の輝きの中、宇宙ではすべてが新たなもののよう輝き、まるで人間の想像力が作り出した天の上の天にいて、サタンに煩わされることも、外敵の攻撃にさらされることもないかのように、五感を恍惚とさせ、精神を高揚させるという、心温まる様相を示す。宇宙のはるかてっぺんでは、無数の星々がわたしの指示で定められた位置につき、闇の時に星界を照らしている。反抗的な考えをあえて抱くものは何一つ存在しない。そのため、わたしの行政命令の本質にしたがい、全宇宙はよく整い、完全な秩序を保つ。騒乱は決して起きないし、宇宙が分裂したこともない。わたしは星々の上を飛び越え、太陽が光を放つと、その温かみをぬぐい取り、ガチョウの羽毛ほどもある巨大な雪を両手から降らせる。しかし、わたしの気が変わると、雪は残らず融けて川になる。たちまち、空の下のいたるところに春が訪れ、若葉の緑が地上の風景を一変させる。わたしが天空にさまよい出ると、地はわたしの陰のせいですぐさま深い闇に包まれる。何の予告もなく「夜」が訪れ、世界中がすっかり暗くなり、目の前にある自分の手も見えないほどになる。ひとたび光が消えると、人間たちはその瞬間を捉えて互いを滅ぼそうと狼藉の限りを尽くし、人のものをつかみ取り、略奪する。混沌たる不協和に陥った地上の国々は、救いようのない泥流のような状態になる。人々は苦しみの中であがき、苦痛のただ中で嘆き、呻き、苦悩にもだえて悲痛な泣き声を上げつつ、光が突如として人間世界に再び訪れ、闇の日々を終わらせ、かつての生命力が戻ることを切に願う。しかし、わたしはとうに袖をひるがえして人間から離れており、世の不正のために人間を憐れむことは二度としない。わたしは地上のいたるところの人間をずっと以前から忌み嫌い、拒み、そこの有様に目を閉じ、人間のあらゆる動作や仕草から顔を背け、人間の未熟さと無垢を喜ぶことをやめていた。わたしはこの新たな世界がより早く再生して、二度と沈むことがないようにするため、世界を新たにする別の計画にとりかかっている。人間の中であって、非常に多くの異様な状態がわたしに正されるのを待っており、わたしが自ら防ぐ誤り、わたしが一掃する埃、わたしが解き明かす奥義はかくも数多い。すべての人がわたしを待ち、わたしの到来を切望している。

地上にいるとき、わたしは人の心の中に留まる実際の神自身である。天にいるとき、わたしはあらゆる被造物の主である。わたしは山々に登り、川瀬を渡り、人のあいだをふらりと訪れては去った。誰が実際の神自身にあえて公然と敵対するだろう。誰が全能

者の支配からあえて離れるだろう。誰がみじんの疑いもなく、わたしが天にいとあえて断言するだろう。さらに、わたしが疑問の余地なく地上にいと、誰があえて断言するだろう。わたしが住まう場所について、すべてを細かく明確に語ることができる者は、すべての人間の中に誰一人いない。天にいととき、わたしは常に超自然的な神自身であり、また地上にいととき、わたしは実際の神自身だということなのか。当然、わたしが実際の神自身であるかどうかは、わたしがあらゆる被造物の支配者であること、またはわたしが人間世界の苦しみを経験するという事実によって決まることではない。違ふだろうか。そうであれば、人間は救いようもないほど無知なのではないか。わたしは天にいとが、地上にもいとる。わたしは無数の被造物のあいだにいとて、万人のあいだにもいとる。人間は毎日わたしに触れることができ、そのうえ、毎日わたしを見ることができる。人間に関する限り、わたしは時に隠れ、時に目に見えるようである。わたしは実在しているようでありながら、実在しないかのようでもある。わたしの内には、人間には窺い知れぬ奥義が潜んでいる。人間はみな、わたしの内にさらなる奥義を見つけ出し、それによって内心の不安な思いをかき消そうと、顕微鏡でわたしを覗き込んでいるかのようだ。しかし、たとえX線を使ったところで、どうして人間にわたしが抱く秘密を発見することができようか。

わたしの働きの結果、我が民がわたしとともに栄光を得るまさにその瞬間、赤い大きな竜のすみかが暴かれ、泥とごみがきれいに一掃され、長い年月の間にたまった汚水がわたしの燃える炎で残らず干上がり、もはや存在しなくなる。すると、赤い大きな竜は火と硫黄の池で死ぬ。あなたがたは竜にさらわれないよう、本当にわたしの愛ある気遣いを受けたいのか。欺瞞に満ちた竜の策略を、あなたがたは本当に憎んでいるのか。誰がわたしのために力強い証しをできるのか。わたしの名のために、わたしの霊のために、わたしの経営計画全体のために、誰が持てる力をすべて捧げることができるのか。今日、神の国が人間世界にある時こそ、わたしが自ら人のあいだにきた時である。そうであれば、臆することなくわたしの代わりに戦場へ臨める者が誰かいるだろうか。神の国が形をなすように、わたしの心が満ち足りるように、そしてさらに、わたしの日が来るように、無数の被造物が生まれ変わり、豊かに育つ時が来るように、人間が苦しみの海から救われるように、明日が来るように、その明日が素晴らしく花開き、豊かに生い茂るように、そしてさらに、未来の享受が実現するように、すべての人間が、わたしのために惜しみなくすべてを犠牲にして、全力で進む。それが、わたしがすでに勝利し、わたしの計画が完了したしるしなのではないか。

終わりの日にいればいるほど、人々は世の虚しさを感じ、人生を生きる勇気が弱くなる。そのため、無数の人が失望の中で死に、他の無数の人が探求する中で失望し、さらに無数の人がサタンの手に操られて苦しんでいる。わたしはまことに大勢の人を救い、支えてきた。そして、人間が光を失ったとき、たびたび彼らを光のある場所に戻し、光の中でわたしを知り、幸福の中でわたしを享受するように手助けした。わたしの光の到来により、わたしの国に住む民の崇敬の念は増す。わたしは人間が愛する神であり、人間が愛着をもってしがみつく神だからである。そして、人間はわたしの姿について忘れがたい印象に満たされる。それにもかかわらず、結局、それが霊の働きなのか、肉の働きなのか、理解できる者は誰もいない。この一つのことをつぶさに経験するだけでも、人は一生涯を要する。人間は心の奥底でわたしを嫌ったことなど一度もない。むしろ、霊の奥底でわたしにしっかりしがみついている。わたしの知恵は人間の崇敬の念を高め、わたしが行なう不思議は彼らの目を楽しませ、わたしの言葉は人間にとって計り知れないものであるが、それでも人間は、それらを心から愛している。わたしの実際は人間を呆然とさせ、驚かせ、戸惑わせるが、それでも人間はそれを進んで受け入れる。これこそが、人間のあるがままの背丈なのではないか。

1992年3月13日

第十六章

人間に言いたいことは、実に数多くある。わたしが人間に言わなければならないことが実に多いのだ。しかし、人間の受け入れる力はあまりに限られている。わたしが語る言葉をそのまま完全に把握することができないのだ。そして、一面だけを理解し、他は知らずにいる。だが、人間が無力だからといって、死に至らせることをわたしはしない。また、人間の弱さに心を悩ませることもしない。たとえ人間がわたしの心を理解しなくとも、わたしはただ自分の働きをし、ずっとそうしてきたように語るだけである。その日が来れば、人々はわたしのことを心深く知り、わたしを念頭に置くようになるだろう。わたしが地上を離れるその時こそ、わたしが人間の心の玉座につく時なのだ。つまり、そのときにはすべての人がわたしを知る。わが子らと民とが地を支配する時もそうなるだろう。わたしを知る者は、必ずやわたしの国の柱となり、彼らだけがわたしの国で支配し力を振るう資格を持つ。わたしを知る者はみな、わたしであるものがその人のうちにあり、すべての人々の間でわたしを生きることができる。人間がどれほどわたしを知っているかは、わたしは気にしない。誰一人、わたしの働きをどのようにしても妨

げることはいない。そして、人間はわたしを手伝うことも、わたしのために何かをすることもできない。人間にできることは、わたしの光の中でわたしの導きに従い、その光の中でわたしの心を求めることだけである。今日、人々は資格を得、自分たちがわたしの前を意気揚々と歩き、心のままにわたしとともに笑い、冗談を言い合えるもの信じている。そして、対等の者としてわたしに話しかける。それでも人間はわたしを知らない。それでいて、わたしたちは本質的に同じであって、等しく肉と血をもち、人間の世界に住んでいると信じている。人間のわたしへの崇敬は貧弱過ぎる。わたしの前にいるときはわたしを畏れるが、霊の前でわたしに仕えることはできない。まるで、人間にとって霊がまったく存在していないかのようだ。その結果、誰一人霊を知らず、わたしの受肉において、人々は肉と血の体だけを見て、神の霊は見ない。そんなことでほんとうにわたしの心を行えるのだろうか。人々はわたしを欺くのが巧い。わたしを欺くためにサタンから特別の訓練を受けたようだ。しかし、わたしはサタンに悩まされることはない。わたしは自分の知恵で人類すべてを征服し、すべての人類を墮落させる者を打ち負かす。わたしの国がこの地上に築かれるように。

人間の中には、星々の大きさを測り宇宙の広さを見極めようとする者たちがいる。しかし、彼らの研究は実を結んだためしがない。そして、落胆して頭を垂れ、失敗を甘受するしかない。すべての人々の間にあって、人間の失敗のありさまを観察していると、誰一人完全にわたしを信じている者はなく、心からわたしに従い、身を委ねている者もないことがわかる。人間の野心とはなんと大きなことか！ 淵の表面がすべて濁っていたとき、人々の間にあって、わたしはこの世の苦しみを味わい始めた。わたしの霊は世界中を巡り、あらゆる人々の心を調べる。そうしてさらに、顕現した肉の身においても人類を征服する。人間にはわたしは見えない。盲目だからだ。人間はわたしを知らない。鈍化しているからだ。人間はわたしに敵対する。反抗的だからだ。人間はわたしの前に来てひれ伏す。わたしが征服したからだ。人間はわたしを愛するようになる。わたしがもともと人間の愛にふさわしいからだ。人間はわたしを生きる、わたしを表す。わたしの力と知恵とが、人間をわたしの心に適う者にするからだ。わたしは人間の心の内に宿るが、その霊において人間の愛を受けたことはない。まことに、人間の霊には人間が何よりも愛しているものがあるが、わたしはそのうちの一つではない。それゆえ、人間の愛はシャボン玉のようなものなのだ。風が吹けば、はじけて消え、二度と見えなくなる。わたしは常に変わらない態度で人間に接してきた。人間の中に誰か同じようにできた者がいるだろうか。人間の目には、わたしは空気のように気づき難く目に見えない

。そのため、大多数の人々は無限の空や波打つ海原、また、穏やかな湖、あるいは虚しい言葉や教義の中にわたしを求める。人類の本質を知る者は一人もいない。まして、わたしの内の奥義について何かを語れる者は誰もいない。それゆえ、自分に求められていると人間が想像している最高の基準を、わたしは人間に対して達成するよう求めない。

わたしの言葉の中で山は崩れ、水は遡り、人は従順になり、湖はやむことなく流れ出す。海原は空に向かって荒れ狂うだろうが、わたしの言葉の中にあっては、湖の表面のように穏やかになる。わたしの手のごくわずかな動きで、激しい嵐は直ちに消え去り、わたしを離れる。そして、人間世界はすぐに静寂に戻る。しかし、わたしが怒りを放てば、山は直ちに引き裂かれ、地面はすぐに激しく揺れ動き出し、水はあっという間に涸れる。そして、人間はたちまち災害に見舞われる。わたしは怒りのために人間の叫びを聞かず、訴えに応じて手助けすることもない。わたしの怒りが募っているからだ。わたしが天にあるとき、星々はわたしがいることで混乱に陥ることは決してなく、星々はわたしのために心から働く。だから、わたしは彼らにさらに光を与え、彼らがより明るく輝くようにし、わたしのためにさらなる栄光を得るようにした。天が明るければ明るいほど、その下の世界は暗くなる。まことに多くの人々が、わたしの采配がふさわしくないと訴えた。実に多くの人々が、自分たちの王国を造るためにわたしを離れ、それをわたしへの裏切りに用い、今ある闇のありようを変えようとする。しかし、誰が自分の意思でそれを実現したのか。また、誰が自分の意思を成し遂げたのか。誰がわたしの手で采配されたものを翻せるのか。大地に春が広がるとき、わたしはひそかにかつ肅々と世に光をもたらし、地上で人間が空気の中に突然さわやかさを感じるようにする。しかし、まさにその瞬間、わたしは人間の目を覆い、もやが地上を覆っているようにしか見えないようにするので、人間も物もみな区別がつかなくなる。人々は、どうして光はつかの間しか続かなかったのかと、ため息をつくしかない。どうして神はもやもやと曖昧なものしか与えてくれないのか。人々が絶望していると、たちまちもやは消えるが、人々がほのかな光をみたと思ったとき、わたしは激しい雨を降らせ、人々は眠っている間耳が雷鳴で何も聞こえなくなる。慌てふためいても、隠れる暇もなく、大雨にのみ込まれる。たちまちのうちに、天の下のすべてのものは、わたしの激しい怒りの中、洗い清められる。人々はもはや、大雨の中も不平を言わず、みな畏敬の念をもつようになる。この突然襲ってきた雨のため、人々の大多数は天から降り注ぐ水に溺れ、水中の死体となる。わたしは地上全体を眺めて、多くが目覚め、悔い改め、大勢が小舟で水の源を探し求め、多くがわたしの前にひれ伏して赦しを求め、多くが光を見、多くがわたしの顔を

見、多くが生きる勇気をもち、全世界が変革されたのを見る。この大豪雨の後、すべてのものはわたしの心にあったものへと戻り、もはや不従順ではない。やがて、全地上が笑い声に満ち、地上のあらゆるところが賛美の雰囲気醸し出し、わたしの栄光の及ばないところがなくなる。わたしの知恵は地上のあらゆるところにあり、全宇宙にあまねく。あらゆるものの只中にわたしの知恵の果実がみのり、すべての人々の只中にわたしの知恵の傑作が満ち満ちる。何もかもわたしの国にあるすべてのもののようである。すべての人々はわたしの天の下、わたしの牧場の羊のように安心して暮らす。わたしはすべての人々の上を動き、至る所を見ている。何一つ古びて見えるものがなく、誰一人かつてと同じ人はいない。わたしは玉座に座し、全宇宙上に横たわり、満ち足りている。すべてのものが聖さを取り戻し、わたしは再びシオンで安らかに暮らすことができるからだ。そして、地上の人々はわたしの導きの下、穏やかで満ち足りた生活ができる。諸国民は、わたしの手の中であらゆることを管理している。諸国民はかつての知性と本来の姿を取り戻した。彼らはもはや塵におおわれてはいない。わたしの国では、人々は翡翠のように聖く、人の心の中の聖い者のような顔をもつ。わたしの国が人々の間に打ち立てられたからである。

1992年3月14日

第十七章

わたしの声は雷のように轟き、四方すべてと地上全体を照らす。そして雷鳴と稲光の中、人類は打ち倒される。雷鳴と稲光のただ中でしっかりと立ち続けた者はいない。たいていの人間はわたしの光が来るのを見て恐れて我を失い、どうしていいかわからなくなる。東に微かな明かりがほのめくと、多くの人々、このわずかな光に揺さぶられ、瞬時に幻覚から醒める。しかし、まだ誰もわたしの光が地上に降る日が訪れたことに気づいていない。大部分の人々、突然の光の到来に呆然としている。光の動きと光が近づいてくる方向を奇妙な魅了されたような目つきで見ている人もいる。あるいは、備えをして光に向かい、光が来る源をもっとはっきりと知ろうとする人もいる。いずれにしろ、今日の光がどれほど貴重なものか、誰か気づいただろうか。誰かその光の特異性に目覚めただろうか。大多数の人々、ただ混乱している。彼らは光のせいで目を傷め、泥の中に投げ倒されている。このかすかな光のもとで、地は混沌に包まれ、耐え難い惨めなありさまとなり、近づいて見ると、この上ない憂鬱で襲いかかってくると言うことができる。このことから、その光が最も強い時には、地上の状態は、人間がわたしの前に立つ

ことができないものになることがわかる。人類はその光の輝きの中にいる。またもや、全人類はその光の救いの中にいるが、光が与える傷の中にもいる。光の激烈な衝撃の中にいない者がいるだろうか。光に焼かれることを免れる者がいるだろうか。わたしはこの手でわたしの霊の種を蒔きながら、宇宙のいたるところを歩いた。地上の全人類がそのために、わたしに動かされるようにである。天の最も高いところから、わたしは地上全体を見下ろし、地上の被造物たちの奇怪で奇妙なありさまを眺める。海の表面は地震の衝撃を受けているように見える。海鳥が魚を見つけて飲み込もうとして、あちらこちらを飛び交っている。一方で、これは海底には全く知られていない。海面の状態は海底を目覚めさせることはできない。なぜなら、海底は第三の天のように穏やかだからである。ここでは生きるものたちは、大きいものも小さいものも調和のうちに共存し、けっして「口と舌の紛争」には関わらない。無数の奇怪で風変わりな現象の中で、人類はわたしを喜ばせることに最も困難を覚える。わたしが人間に与えた地位があまりに高く、そのため人間の野望は大き過ぎ、人間の目にはいつでも、ある程度の反抗心がある。わたしの人間への鍛錬、人間への裁きには、細心の注意、善意が多くあったが、そうしたことについて人類は少しも思い至らない。わたしはどの人間も過酷に扱ったことはない。ただ、人類が不服従であったときには、ふさわしい罰を与え、そしてただ、人類が弱いときには、適当な助けを与えてきた。しかし、人類がわたしから遠ざかり、さらにサタンの欺きに満ちた策略を用いてわたしに逆らうときには、わたしは人類を直ちに滅ぼし尽くし、わたしの前でそのような能力を誇示する機会を誰にも与えない。もはや地上で我が物顔に振る舞い、他人を脅かすことなどできないようにするためである。

わたしは地上において権威を振るい、わたしの働きの全体を展開する。わたしの働きの内のことはすべて地上に反映される。地上において人類はけっして、わたしの天国での動きを把握できなかったし、わたしの霊の軌跡や歷程を余すところなく熟考することもできなかった。人間の大部分は霊の実際の状態を理解することができず、霊の表面のごく小さな部分を把握しているに過ぎない。わたしが人類に求めていることは、天にいるわたしという曖昧な存在から来るのでも、地上にいるわたしという計り知れない存在から来るのでもない。わたしは地上にいる人間の霊的背丈に応じて適切な要求をしているのである。わたしは誰をも困難な状況に置いたことはないし、わたしの楽しみのために「血を絞り出せ」と要求したこともない。わたしの要求は、そうした条件のみに制限されることがあり得ようか。地上の無数の被造物の中で、わたしが口にする言葉の采配に従わないものはどれか。これらの被造物の中で、わたしの前に来たとき、わたしの言

葉とわたしの燃える炎とで完全に焼き尽くされないものはどれであろうか。これらの被造物の中で、大胆にもわたしの前で誇らしげに自己を誇示するのはどれであろうか。これらの被造物のうちわたしの前に頭を垂れないのはどれであろうか。わたしは被造物に沈黙を強いるだけの神だろうか。わたしは、無数の被造物のうち、わたしの意図を満足させるものを選ぶ。人類の無数の人の中から、わたしの心を重んじるものを選ぶ。わたしは、すべての星々の中で最高のものを選び、そうして、わたしの国に微かな輝きを加える。わたしは地上を歩み、いたるところにわたしの芳香を放ち、あらゆるところにわたしの影を残す。一つひとつの場所がわたしの声の音色で反響する。いたるところの人々が過日の美しい眺めを懐かしく思い出す。全人類が過去を記憶しているからである…。

全人類はわたしの顔を見ることを願っているが、わたし自身が地上に降り立つと、みな、わたしの訪れを嫌い、近づく光を追い払う。まるで、わたしが天国で人間の敵であるかのようである。人間は警戒するような光を目にたとえわたしにあいさつし、常に警戒心をもち、わたしが他の企みをもっているのではないかと深く恐れている。人間はわたしを見慣れない友として見ているので、わたしに無差別殺人の意図でもあるかのようになわたしを見る。人間の目には、わたしは恐ろしい敵対者なのである。患難の中でわたしの暖かさを体験しても、人間はわたしの愛に気づかず、いまだにわたしを退け、わたしに逆らおうとする。人間がわたしに敵対しようとしているこの状態を利用するどころか、わたしは人間を温かい抱擁の中に包み込み、人間の口を甘味で満たし、その腹を必要な食物で満たす。しかし、わたしの激しい憤りが山々や河川を揺さぶるとき、わたしはもはや、人間の臆病さのために別の形の援助を与えることをしない。今この瞬間、わたしは怒りに燃え、あらゆる生き物に悔い改める機会を与えず、人間に対する希望をすべて捨て、人間にふさわしい報いを与えよう。その時には、雷鳴がとどろき、稲妻がはためき、海原の波が怒りに荒れ狂うように、幾万の山々が崩れ落ちるようになる。人間はその反抗心のせいで雷鳴と稲妻とに打倒され、他の被造物は雷と稲妻とで一掃され、全宇宙が突然混沌の淵に落ち、全被造物は生命の始まりの息を取り戻せない。無数の人間たちは雷鳴から逃れることができない。稲光がはためく中、群れをなした人間たちが次々と急流に転げ落ち、山々から流れ下る激流にさらわれていく。突然、人間の「終着点」に「人間」の世界が合流する。死体が広い海面を漂う。全人類がわたしの怒りにより、わたしからはるか遠くに去る。人間がわたしの霊の本質に対して罪を犯し、その反抗がわたしに対して罪を犯したからである。しかし、水のない場所では、他の人間たち

は笑いと言歌の中で、わたしが彼らに与えた約束をいまだに楽しんでいる。

全人類が静かになったとき、わたしはその目の前に微かな光を発する。すると、人々は頭がはっきりとし、目が明るくなり、沈黙していようとするのをやめる。そうして靈的感覺が直ちに心の中に呼び起こされる。その時、全人類はよみがえる。わたしの発する言葉によって生き残る新たな機会を得て、口には出さない不満を捨て去り、すべての人間はわたしの前に来る。それは、人間はみな地上で生きたいからである。しかし、その中の誰がわたしのために生きる意図をもったことがあるだろうか。わたしを喜ばせるために、誰が自らの内にある素晴らしいものを明らかにしたことがあるだろうか。わたしの魅惑的な香りを誰が感じ取ったことがあるだろうか。人間はみな、粗雑なものである。外側は眩いばかりに見えるが、本質的には心からわたしを愛してはいない。なぜなら、人間の心の奥底には、わたしの極小の一部さえ存在したことがないからである。人間はあまりに不完全である。わたしと比べると、天と地ほどの違いがあるように見える。しかし、それでも、わたしは人間の弱くもろい点を突こうとは思わないし、その人の欠点をあざ笑うこともしない。わたしの手は数千年もの間、地上で働きをしてきて、その間ずっと、わたしの目は全人類を見守ってきた。しかし、一人の人間の生命もおもちゃのように扱おうと軽々しく奪ったことはない。わたしは人間が経験した苦勞を見、人間の支払った代償を理解している。人間がわたしの前に立つとき、その油断に付け込んで懲らしめようとは思わないし、望ましくないものを人間に与えることも願わない。むしろ、わたしはひたすら人間に施し、与えてきた。そうして、人間が享受するものはことごとくわたしの恵みであり、わたしの手から出る賜物である。わたしがこの地上にいたので、人間はけっして飢えに苦しむことがなかった。それどころか、わたしは人間がわたしの手から享受するものを受け、わたしの祝福の中で生きられるようにする。すべての人類はわたしの刑罰の下に生きているのではないのか。山々の深いところに豊かなものがあるように、水の中に豊穡さが秘められているように、今日わたしの言葉の中で生きている人々には、享受して味わう食物がなおさらあるのではないか。わたしは地上におり、人類は地上でわたしの恵みを享受している。わたしが地上を離れるとき、それはまたわたしの働きが完了する時でもあるが、その時には、人類は、弱いからといってわたしに甘えることはもはやない。

1992年3月16日

第十八章

稲光の中、すべての動物は真の姿を明らかにする。そして、わたしの光に照らされて、人間もまた、かつての聖さを取り戻した。ああ、過去の墮落した世界よ。それはついに汚い水の中へと崩れ去り、水面の下に沈み、溶けて泥となった。ああ、わたしの創った全人類が、ついに再び光の中でよみがえり、存在のための基礎を見出し、泥の中でもがくことをやめた。ああ、わたしの手の中のもろもろの被造物よ。それらがどうしてわたしの言葉によって新たにならないことがあるのか。どうして、光の中でその機能を果たさないことがあるのか。地はもはや、死んだように動きがなくも沈黙してもいい。天はもはや荒涼として悲しいところではない。天と地とは、もはや虚無で隔てられてはおらず、ひとつになって、決して再び裂かれることがない。この喜ばしい時、この歓喜の瞬間、わたしの義と聖さは全宇宙に広まっており、人類全体が止むことなくほめたたえる。天の町々は喜びに笑い、地上の王国は喜びに舞い踊る。この時に、誰が喜ばずにいようか。そして、この時、誰が泣かずにいるのか。地は、そのはじめは天のものである。そして、天は地とは、ひとつである。人間は天と地とを結ぶ絆であり、人間の聖さのおかげで、人間の再生のおかげで、天はもはや地から隠されてはいない。そして、地はもはや天に対して沈黙していない。人類の顔は安堵の笑顔に飾られ、心には限りない甘美さが満ちる。人間は互いに言い争うことがなく、また、殴り合うこともない。わたしの光の中で他の人々と平和的に生きない者がいるだろうか。わたしの日にわたしの名を汚す者が誰かいるだろうか。人間はみな畏敬のまなざしをわたしに向け、その心が沈黙のうちにわたしに叫んでいる。わたしは人間のあらゆる行いを探った。清められた者の中に、わたしに逆らうものは誰もいない。わたしを裁く者もない。人間はみな、わたしの性質に満たされている。誰もがわたしを知るようになり、わたしに近づき、わたしを愛する。わたしは人間の霊の中に確固として立ち、人間の目に最も高い頂きに上げられ、その血管を血として流れる。人間の心の喜びにあふれる高揚が地のいたるところを満たし、空気は爽やかに澄み、濃い霧が地面を包むことは、もはやない。そして、太陽がまばゆく輝く。

今、わたしの国を見なさい、わたしがすべての王として支配する領域を。創造の初めから今のこの時まで、わたしの子らがわたしの導きに従い、人生の多くの苦難、世にあるまことに多くの不正を経験し、世の浮き沈みを経てきたが、今はわたしの光の中で暮らしている。誰が昨日までの不正にすすり泣かずにいられるだろう。誰がここに至るまでの苦難に涙を流さずにいられよう。そしてまた、この機会をとらえて自らをわたしに捧げない者が、誰かいるだろうか。この機会をとらえて、胸にあふれる熱情を表現しな

い者がいるだろうか。今この時に、自分たちの経験したことを語らない者がいるだろうか。今この時に、すべての人間は自身のもっとも良い部分をわたしに捧げている。どれほどの人々が、昨日までの無知な愚行を悔いる思いに苦しみ、どれほどの人々が昨日までの追求を嫌悪せずにいられるだろう。人間はみな自身を知り、サタンの行いとわたしのすばらしさを見た。彼らの心の中に、わたしのための場所がある。もはやわたしが人々の間で避けられ、拒否されることはない。わたしの偉大な働きがすでに成し遂げられ、もはや妨げられることがないからである。今日、わたしの国の子らの中に、自分自身について心配していない者が、誰かいるだろうか。わたしの働きが行われる方法についてさらに考えない者が誰かいるだろうか。心からわたしのために身を捧げている者が、誰かいるだろうか。あなたがたの心の中の不純物は減っているだろうか。それとも、増えているだろうか。もし心の中の不純物が減りも増えもしないのなら、わたしはそのような人を必ず見捨てよう。わたしが求めるのは、わたし自身の心にかなう聖い人たちであって、わたしに逆らう汚れた悪魔ではない。人類に対するわたしの要求は高くなく、また人間の心の内はまことに複雑なため、人間にはわたしの心にすみやかに従ったり、直ちにわたしの願うことを満たしたりはしない。人間の大多数は、最後に勝利の冠を手にしようと、密かに努力している。大多数の人間は、再びサタンの手に落ちることをひどく恐れ、一瞬たりともたゆむことのないよう、全力で努力している。彼らはもはや、わたしに恨みを抱かず、わたしの前で常に忠誠を示そうとしている。わたしは、実に多くの人が心からの言葉を語るのを、実に多くの人が苦難の中で経験した痛みを語るのを聞いてきた。人々が最も苦しい中でゆらぐことなくわたしに忠誠をささげるさまを、わたしは見てきた。また、実に多くの人が、険しい道を歩むとき、出口を求めるのを見てきた。そうした中で、その人たちは、けっして不平を言わなかった。光を見出すことができず、落胆することはあっても、けっして不満を言わなかった。しかし、わたしはまた、実に多くの人々が心の底から悪態をつき、天を恨み、地を呪うのを見た。また、実に多くの人々が苦しみのただ中で絶望に諦めきり、屑入れにゴミを放り込むように身を捨てて、塵芥に覆われるのをも見た。わたしは実に多くの人が、地位の変化のせいで互いに言い争うのを聞いたが、それは顔つきの変化につながり、そのため仲間との関係が変わって、友人たちが友であることをやめ、敵対するようになり、互いを言葉で責めるようになった。大多数の人々は、わたしの言葉を機銃の弾丸のように使って相手を不意打ちし、世界のいたるところが、平穏を打ち破るやかましい騒ぎに満ちるようになった。幸い、いまや今日に至っている。そうでなければ、どれほどの人々が止むことのない機銃掃射の中で死んでしまったか、わからない。

わたしから出た言葉に従い、全人類の状態に合せて、わたしの国は着実に地上に降りてきた。もはや人は不安を抱かず、他の人のことを「考慮に入れ」たり、人々のことを「心配する」ことがない。そこで、地上で争いごとはもうなく、わたしの言葉が発せられると、現代の様々な「武器」もまた、使われなくなる。人間は再び他の人間との間に平和を見出し、人間の心は再び調和の精神を放ち、もはや誰も、密かな攻撃に身構えることがない。すべての人類は正常な状態に戻り、新たな生活を始める。新たな境遇の中に住み、多くの人は周囲を見回し、真新しい世界に入ったかのように感じる。そのため、すぐに新しい環境に馴染むことはできないし、直ちに正しい道に踏み出すこともできない。そこで、人間に関しては、「意欲はあっても、肉は弱い」ということになる。わたしは人間のように苦難の苦さを味わうことはなかったが、人間の弱点については、すべて心得ている。わたしは人間の必要を詳らかに知り、人間の弱さに関するわたしの理解は完璧である。そのため、わたしは人間の短所をからかったりはしない。ただ、不義に対処し、適正な「指導」をして、誰もが正しい道を歩めるようにする。そうして、人間はさまよう孤児であることをやめ、家のある、愛される赤子となる。それでも、わたしの行いは原則に基づいている。もし人間がわたしの内の幸いを享受したがいなければ、わたしにできることは、彼らにしたいようにさせ、底なしの淵に送り込むことだけである。その時点では、誰一人、もはや心に不平を抱えてはいけいない。わたしの采配の中に、誰もが、わたしの義を見ることができなければならないのだ。わたしは、わたしを愛するよう、人間に強いることはしない。また、わたしを愛したからといって、人間を打つこともしない。わたしの内には完全な自由、完全な解放がある。人間の運命はわたしの掌中にあるが、わたしは人間に自由意志を与えた。それはわたしに左右できるものではない。そのようにして、人間はわたしの行政命令のために厄介な事態に陥る方法を考え出すことなく、かえって、わたしの寛容さを頼みにし、解放を勝ち取るのだ。そうして、多くの人は、わたしに束縛されるというよりは、解放されて、自分の道を求めていくことになる。

わたしは常に人類を寛大に扱い、けっして解決不能の問題を与えなかったし、誰をも困難な状況に追いやらなかった。そうではないか。まことに多くの人々はわたしを愛していない。しかし、そうした態度に悩むのではなく、わたしは人間に自由を与え、苦しみの中で泳ぎ回る余地をもたせてやった。人間は優れた器ではないのだ。人間はわたしの手の中にある祝福を見るが、それを楽しもうとはせず、サタンの手から災厄を掴み取りたがる。そうして、サタンに「滋養」としてのみ込まれるはめになる。もちろん、中

には、その目でわたしの光を見て、現在の霧の中に生きてはいても、そのせいで光への信仰を失わず、障害だらけの道ではあるが、霧の中を手探しし、探し求める事続ける人々もいる。人々がわたしに逆らうとき、わたしは激しい憤りを注ぐので、大勢が不服従のせいで死ぬだろう。人間がわたしに従うとき、わたしは彼らの目から隠されている。そのようにして心の深いところに愛が、わたしを騙すのではなく、わたしに喜びをもたらす愛が湧くようにする。人間がわたしを求めるとき、わたしは幾度となく目を閉じて沈黙し、その人に真の信仰が生まれ出るようにした。しかし、わたしが話さなければ、人間の信仰はすぐさま変化し、そこで、見えるのはまがい物の「商品」ばかりということになる。人間が心からわたしを愛したことは、けっしてなかったからだ。わたしが姿を現したとき初めて、人間はみな、おおげさな「信仰」表明をする。しかし、わたしが秘密の場所に隠れていると、彼らの心は弱く、臆病になる。まるで、わたしを不快にさせるのを恐れるかのように。中にはわたしの顔を見ることができず、わたしを「あれこれいじり回す」ことで、わたしが存在する事実を否定する者さえいる。極めて多くの人がそうした状態にあり、極めて多くの人がそのような心持ちでいる。しかし、これはみな、人間がすべて、内にある恥ずべきものを隠すのに巧みだからである。そのため、人々は自身の弱点を見るのをいやがり、歯ぎしりして顔を隠しながら、わたしの言葉が真実であることを認めるだけである。

1992年3月17日

第十九章

わたしの言葉を自身の生存の基盤とするのが人類の正しい責務である。人間はわたしの言葉の各部分において、各自の分を確立しなければならない。そうしなければ、滅びと軽蔑を自ら招くことになる。人間はわたしを知らない。そして、そのため、引き換えに自分の生命をわたしに捧げるのではなく、わたしの前でがらくたを手に、意気揚々と歩き回り、それでわたしを満足させようとするだけなのだ。しかし、わたしはそうした現状に満足するどころか、人類に要求し続ける。わたしは人間の貢献を愛するが、要求は憎む。人間はみな貪欲に満ちた心をもっている。人間の心は悪魔の虜になっているようなもので、人は自由になって心をわたしに捧げることができない。わたしが話すとき、人間は夢中になってその声に耳を傾ける。しかし、わたしが話すのをやめると、また自分の「事業」にとりかかり、わたしの言葉に注意することをすっかりやめてしまう。まるで、わたしの言葉が自分の「事業」の付属物でもあるかのようなのである。わたしは

けっして人間を甘やかしたことはないが、人間に対して忍耐強く、寛大であった。そして、わたしが寛大であった結果、人間はみな自分を過大評価し、自己を知ること、自らを省みることができなくなり、わたしの忍耐を利用して、わたしを欺こうとする。そうした者たちのうちの一人として心からわたしのことを思わず、誰一人、わたしを心から愛すべき対象として大切にすることはなかった。たまたま暇な時にだけ、おざなりな注意を払う。わたしが人間に注いだ努力は、すでに計り知れないものである。わたしはかつてないほどの働きを人間にしてきた。そしてそれとは別に、人間にさらなる重荷を与えた。それによって、わたしの持っているものとわたしの存在そのものから認識を得て変化するようである。わたしは人間に単なる「消費者」になるように求めているのではなく、サタンを打ち負かすことのできる「生産者」になるように求めている。わたしは人間に何も要求しないかもしれないが、それでも、わたしの要求することには確かに基準がある。なぜなら、わたしが行うことには目的があり、わたしの行動には根拠があるからである。わたしは、人間が想像しているように、やみくもに遊びまわっているわけではない。また、自分勝手な気まぐれで天と地と無数の被造物を形造っているわけでもない。わたしの働きの中に、人間は何かを見、何かを得ることができはすである。人間は「青春」の日々を無為に過ごしたり、自分の命をまるで塵が積もるに任せた衣服のように扱ってはならない。むしろ人間は、わたしのためにもうサタンのところには戻れないようになるまで、また、わたしのためにサタンに攻撃を仕掛けるまで、わたしが彼らのために備えた豊かさを享受し、自身の守りを固めなければならない。わたしが人間に求めているものは、このように単純なことではないのか。

ほのかな光が東方に現れると、全宇宙にいる全ての人々はそのような訳で、そのときだけ、東の光に注意を向ける。もはや眠りに埋もれてはおらず、人類は東の光の源を見に行くが、人間の力の限界のため、誰一人、光の出所を見ることはできない。宇宙の中のすべてのものがすっかり照らし出されると、人間は眠りと夢とから醒め、その時初めてわたしの日がゆっくりと世に訪れようとしていることを知る。全人類が、光が到来したので、それを祝い、それ故、もはや眠りこけていないし、無感覚でもない。わたしの光の輝きの下、すべての人間の心と目が明晰になり、突然、生きる喜びに目覚める。わたしは霧に身を包み、その中から世界を見る。動物たちはみな休んでいる。ほんのりと光が現れたことで、あらゆる被造物は新たな生活が来ようとしていることを感知する。そのため、動物たちもみな、食物を求めて、洞窟から這い出してくる。植物も、もちろん、例外ではない。まばゆい光の中で、緑の葉が鮮やかな光沢にきらめき、わたしが地

上にいる時に、それぞれがわたしに捧げ物をしようと、待っている。人間はみな光の到来を願っているが、それでも、みなその到来を恐れ、自分たちの醜さがもはや隠されないことを心配している。それは、人間は真っ裸で、身を覆うものがないからである。どれほど多くの人々が光の到来の故に狼狽し、光が現れたために衝撃を受けていることか。どれほど多くの人々が光を見て後悔に襲われ、自分のけがれた状態を忌み嫌うことか。しかし、すでに達成されてしまった事実を変えるには無力で、わたしの下す判決を待つしかない。闇の中で苦しむことで精錬された大勢の人々が、光を見て、その深遠な意味に突然打たれ、それ以来、二度と失うまいとひどく恐れながら胸の内に光を抱きしめる。どれほど大勢の人々が、光の突然の出現によって、それまでの軌道から外れることなく、ただ日常の仕事を続けるだろうか。というのは、そうした人々は、長年盲目であったので、光が訪れたことに気づかず、それを喜びもしないからである。人間の心において、わたしは高くも低くもない。人間に関する限り、わたしが存在するかどうかは、どうでもいいことなのだ。それはあたかも、わたしが存在しなくても、人間の暮らしがこれ以上孤独になることはないし、わたしが存在したとしても、楽しさが増すわけでもないというようだ。人間はわたしを大切にしないので、わたしが彼らに与える喜びはごく少ない。しかし、人間がごくわずかでもわたしへの敬愛を示すなら、わたしもまた、人間に対する態度を変えよう。そのため、人間が、この原則を把握してはじめて、幸いにも自らをわたしにささげて、わたしの手の中にあるものを要求することができる。まことに、人間のわたしへの愛とは、自分の興味だけにとらわれたものではないのだろうか。まことに、彼らのわたしへの信仰は、わたしが与えるものにとらわれたものではないのだろうか。わたしの光を見るまでは、人間は信仰によって心からわたしを愛することができないということなのだろうか。まことに、人間の強さと活力とは、今日の状態に制限されてはいないだろうか。人間がわたしを愛するためには、勇気が必要なのだろうか。

わたしの存在を頼りとして、無数の被造物がそれぞれが生きる場所でわたしに従い、わたしの懲らしめがなくとも、放埒な行為にふけりはしない。だから、山々は陸で国々の境界となり、水は陸と陸との間で人々を隔てる。そして、空気は、地の上で人と人との間を流れるものとなる。人間だけがわたしの心の要求することに真に従うことができないでいる。だからわたしは、すべての被造物の中で人間だけが不服従なものの部類に属すると言うのだ。人間はけっして真にわたしに従うことがなかった。そして、そのために、わたしはずっと人間を厳しい鍛錬の下においてきた。人類のただ中であって、わ

わたしの栄光が全宇宙に広まるなら、わたしは必ずや、わたしのすべての栄光を得て人類の前に示そう。人間はけがれているため、わたしの栄光を目の当たりにするには相応しくない。わたしは数千年もの間、けっして公に姿を現さず、隠れていた。そのため、かつてわたしの栄光が人類の前に示されることはなかった。そして、人間は常に罪の深い淵に沈んでいた。わたしは人類の不義を赦してきたが、人間は自己を守る方法知らない。そして、いつでも自らを罪にさらし、罪のために自らを損なってきた。これは人間には自尊心や自己愛が欠けているということではないか。人間たちの中に真に愛することのできる者がいるだろうか。人間の忠誠心の重さとは、どれほどささやかなものなのか。粗悪品がいわゆる本物の中に混じっているのではないか。人間の忠誠心は、まったくのごたまぜから成っているのではないのか。わたしが求めるのは、人間の全き愛である。人間はわたしを知らず、わたしを知ろうとしても、ほんとうの真摯な心をわたしにささげはしない。人間が進んで与えようとしのないものを、わたしは要求しようとはしない。人間が忠誠心を捧げるなら、わたしは遠慮なく受け取る。しかし、人間がわたしを信頼せず、ほんの僅かも自身をささげないのなら、そのことで苛立ちをつのらせるよりは、何か別の方法でその人たちを処分し、彼らにふさわしい終着点を用意する。雷が空に轟き渡り、人間を打ち倒す。高い山々は崩れ落ち、人間を埋める。飢えた野獣たちが人間をむさぼり食う。そして、海の大波が人間の頭の上を覆う。人間同士が殺し合いをするなか、人間はみな自分たちの只中で起こる災いの中で、自らの滅びを招くことになるであろう。

神の国は人間たちの間で拡大している。神の国は人間たちのただ中で形作られている。神の国は人間たちのただ中で建て上げられている。わたしの国を滅ぼすことのできる勢力はない。今日の神の国にいるわたしの民のうち、あなたがたの誰が人間たちの中にあっても、人間ではない者がいるだろうか。あなたがた、誰が、人間である状態の外にあるのか。わたしの新たな出発点が大衆に告げられるとき、人間は、どのように反応するだろうか。あなたがたは、その目で人類の状態を見てきた。あなたがたはまさか、この世で永遠に存在し続けようという希望はもう抱いてはいまい。わたしは今、わが民の間を歩き回り、わが民の中で生きている。今日、わたしに本物の愛を抱いている者たちは幸いである。わたしに服従する者は幸いである。その人たちは必ずや、わたしの国にとどまるであろう。わたしを知る者は幸いである。その人たちは、必ずや、わたしの国で権力を振るうであろう。わたしを追い求める者は幸いである。その人たちは必ずやサタンの束縛から逃れ、わたしの中にある祝福を享受するであろう。自らを捨てることの

できる者は幸いである。その人たちは、必ずやわたしのものとなり、わたしの国の富を相続するであろう。わたしのために走り回る者を、わたしは記憶し、わたしのために尽くす人を、わたしは喜んで抱こう。わたしに捧げ物をする人に、わたしは喜びとなるものを与えよう。わたしの言葉に喜びを見出す者を、わたしは祝福する。その人たちは必ずや、わたしの国の棟木を支える柱となるであろう。その人たちは、必ずやわたしの家で何もののにも及ばない豊かさを得、彼らに並ぶものは一人もいない。あなたがたは、自分に与えられた祝福を受け入れたことがあるか。あなたがたは、あなたがたのために結ばれた約束を求めたことがあるか。あなたがたは、必ずや、わたしの光の導きの下、闇の力の抑圧を打ち破るだろう。あなたがたは、闇のただ中であっても、あなたがたを導く光を絶対に見失いはしないだろう。あなたがたは、必ずや、すべての被造物の主人となる。あなたがたは、必ずや、サタンの前で勝利する。あなたがたは、必ずや、赤い大きな竜の国が滅びるとき、無数の大衆の中で立ち上がり、わたしの勝利を証しするであろう。あなたがたは、必ずや、秦の国にあって、決意を固くし、揺らぐことがないだろう。あなたがたの耐え忍ぶ苦しみによって、あなたがたはわたしからの祝福を相続する。そして、必ずや、全宇宙にわたしの栄光を輝かせるだろう。

1992年3月19日

第二十章

わたしの家の富は数知れず、計り知れない。しかし、人間は誰も、それを享受しに來たことがない。人間は自分でそれらを享受することができず、自分の力で自らを守ることもしない。その代わりに、いつでも他者を頼みとしてきた。わたしの見てきた者たちの中で、自分の意思で直接わたしを求めてきた者は一人もいない。彼らはみな、他人に促され、大多数にしたがってわたしの前に来る。そして、自分の生活を豊かにするために、代価をはらったり、時間をかけたりすることを好まない。それゆえ、人間の中で、これまで現実の中で生きたものは一人もおらず、みな無意味な人生を生きている。人間の長年の間に培われた習慣のため、すべての人の体は、地の土のにおいに満ちている。その結果、人間はますます感覚を失い、世界の荒廃に鈍感になり、その代わりこの凍えた世の中で自らの楽しみを求めることに忙しい。人間の生活には、少しのぬくもりもなく、人間らしさの痕跡や光がまったくない――それなのに、人間は好き放題に、価値のない人生を送り、何事も成し遂げず、走り回っている。瞬く間に死が迫り、人間は悲痛な死を迎える。人間はこの世で何事も成し遂げず、何も得ない――ただあわただしく

やって来て、大急ぎで去ってゆく。わたしの目に入ったもののうち、誰一人として何ももたらさず、何も持ち去らなかった。そこで、人間は、この世が不公平だと感じる。しかし、誰も急いで去ろうとは思っていない。わたしの天からの約束が突然人間の中に実現する日を待っているだけだ。そうなれば、たとえ道を踏み外しても、その時には、もう一度永遠の命への道が開かれるというのだ。そうして、わたしがほんとうに約束を守るかどうか、わたしのすることなすことすべてをじっと見ている。患難の中にいるとき、あるいは、はなはだしい苦痛の中にいるとき、試練にさらされ、倒れそうなとき、人間は生まれた日を呪い、少しでも早く苦境から抜け出し、別の理想的な場所に移りたいと考える。しかし、その試練が過ぎ去ると、人間は喜びに満たされる。地上に生まれた日を祝い、自分の誕生日を祝福するよう、わたしに願う。その時点では、もはや以前の誓いには触れず、再び死が訪れるのではないかと、深く恐れる。わたしの手が世界を引き上げると、人々は喜びに舞い踊る。もはや悲しまず、わたしを頼みとする。わたしが顔を手で覆い、人々を地中に押し込むと、人々はただちに息苦しくなり、かろうじて生きているという状態になる。人々はわたしが彼らを滅ぼすことを恐れ、わたしに向かって声を上げる。人間はわたしが栄光を得る日を目の当たりにしたいと願っているからである。人間はわたしの日を自身の存在の資本だと考え、わたしの栄光が訪れる日の到来を待つために今日まで存続しているのだ。わたしの口から出た祝福は、終わりの日に生まれた者は幸いで、わたしの栄光すべて見ることができると告げている。

長い間に、大勢が失望して、しぶしぶこの世を去った。そして大勢が希望と信じる心を持ってこの世に来た。わたしは大勢が来るようにし、大勢を去らせた。無数の人々がわたしの手を通り過ぎた。多くの霊がよみに投げ込まれ、多くが肉の体で生き、多くが死んでは、この世に生まれ変わった。しかし、けっして誰も今日の神の国の祝福を受ける機会を得なかった。わたしは人間に実に多くを与えた。しかし、人間はほんのわずかしが得ていない。サタンの勢力が襲ってきて、人間がわたしの富を享受できないようにしたためだ。人間は、目にする幸いを得たが、けっして完全に享受することはできなかった。人間は、天からの富を受け入れる宝庫をその体の中に発見することがなかった。そのため、わたしが与えた祝福を失ったのだ。人間の霊はまさに、自分とわたしの霊を繋ぐためのものではないか。なぜ人間は、けっしてその霊においてわたしにつながることはないのか。なぜ人間は肉においてわたしに近づきながら、霊においては、そうできないのか。わたしの真の顔は、肉のものなのか。なぜ人間はわたしの本質を知らないのか。人間の霊には、わたしの痕跡がほんとうに存在しないのか。わたしは人間の霊から

完全に消え去ったのか。もし人間が霊界に入らないのなら、どうしてわたしの意図が把握できよう。人間の目には、霊界を直接見通すことのできる力があるとでもいうのか。わたしは何度も霊で人間に呼びかけた。しかし、人間は、わたしに突き刺されたかのように振る舞い、わたしが別の世界に連れて行こうとしているのではないかと、ひどく恐れ、離れた所からわたしを見ている。何度も人間の霊に問いかけてみたが、人間はまったく気づかないで、わたしが彼の家に入って、その機会に持ち物をすべて奪うのではないかと、深く恐れている。そのため、人間はわたしを締め出し、わたしは、固く閉ざされた冷たい「扉」に向かい合うことになった。人間が倒れ、わたしが助けたことは何度もあるが、人間は気がつく、すぐさまわたしを去り、わたしの愛に触れず、用心深い目を向ける。人間の心が温かくなることはなかった。人間は感情のない冷血動物だ。わたしの抱擁に温まっても、けっしてそれで深く動かされることがない。人間は山の野蛮人のようなものだ。人間は一度たりとも、わたしの人類に対する思いを大切に思ったことがない。人間はわたしに近づきたがらず、山々の中に住むことを好む。そこでは野獣に脅かされているのだが、それでも、わたしの内に逃げ込もうとはしない。わたしは人間に強制しない。わたしの働きをするだけだ。陸地のすべての富を楽しみ、海に飲み込まれる危険から解放されようと、いつの日か人間は大海原をわたしに向かって泳ぐことだろう。

わたしの言葉が完成するにつれて、わたしの国は徐々に地に形を現し、人間は次第に正常に戻り、そうして、地上にわたしの心の国が築かれる。その国では、神の民全員が正常な人間の生活を取り戻す。凍える冬は去り、春の訪れた町々の世界となり、一年中春が続く。もはや人々は暗く惨めな人間世界に臨まない。もはや人間世界の凍える寒さを耐えることがない。人々は互いに戦うことなく、国々は互いに戦争を仕掛けることがない。もはや大虐殺が行われて血が流されることはない。地はすべて幸福に満たされ、どこも人と人のぬくもりが満ちる。わたしは世界を動き回り、玉座の上から楽しむ。わたしは星々の間で暮らす。そして、天使たちがわたしに新しい歌や踊りをささげる。天使たちは、もはや自身のもろさに涙がほおを伝うことはない。もはや天使がわたしの前ですすり泣くのを聞くことがない。そして、もはや誰も苦難をわたしに訴えることがない。今日、あなたがたはわたしの前で生きている。明日、あなたがたはみな、わたしの国で暮らすようになる。これは、わたしが人間に与える最大の祝福ではないか。あなたがたは、今日支払う代価のために、将来の祝福を相続し、わたしの栄光の中で生きることになる。あなたがたはそれでもわたしの霊の本質と関わりたくないのか。あなたがた

は、まだ自分を殺したいのか。人間は、それがはかないものであっても、自分の目に見える約束は追い求めたがる。しかし、それがたとえ永遠のものであっても、明日の約束を受け入れようとする者は誰もいない。人間の目に見えるものを、わたしは根こそぎにする。人間には感知できないことを、わたしは成し遂げる。これが神と人との違いである。

人間はわたしの日を数えてきた。しかし、誰一人、厳密な日付を知った者はいない。そのように、人間は昏迷した状態で生きる。人間の切望が無限の空に響き渡り、そして消えるので、人間は何度も繰り返し希望を失い、そのために、現在の状況に陥ったのだ。わたしの言葉の目的は、人間に日付を追わせることなく、また、絶望の結果、自滅に追い込むことでもない。人間がわたしの約束を受け入れることを願う。世界中の人々がわたしの約束に与ることを願う。わたしが求めるのは、生き生きとした生き物である。死に染まった死体ではない。わたしはゆったりと国のテーブルにつき、地のすべての人々に、わたしの審査を受けよと命じる。わたしの前には、清くない者の存在を許さない。人間がわたしの働きの妨げをすることは、誰にも許さない。わたしの働きの妨げる者はみな、地下牢に放り込まれ、釈放された後でも、災いに見舞われる。地上の焼きつけるような炎を浴びるのだ。わたしが受肉しているとき、誰でも肉の体のわたしと、わたしの働きについて議論する者を、わたしは憎む。わたしには地上に身内がないのであり、誰であっても、わたしを同等の存在と見て、わたしを引き寄せて共に昔のことを語ろうとする者は滅ぼされるのだということを、すべての人間に、わたしは何度も思い起こさせた。これがわたしの権限である。そうしたことについて、わたしは人間に対して、まったく許容しない。わたしの働きの妨げてわたしに意見しようとする者は、刑罰を受ける。けっして赦されることがない。もしわたしが率直に話さなければ、人間はけっして理解するに至らず、気づかないままわたしの刑罰を受けることになる。人間は肉の体のわたしを知らないからである。

1992年3月20日

第二十一章

人間はわたしの光のただ中で倒れ、わたしによる救いを受けて堅固に立つ。わたしが全宇宙に救いをもたらすとき、人間はわたしによる回復の流れに加わる方法を見つけようとする。しかし、この回復の激流で大勢が跡形もなく流される。溺れ、激流に流される者が大勢いる。また、激流の中に堅固に立ち、けっして方向感覚を失わないものも大

勢いる。そういう者は、今日まで流れに従ってきたのだ。わたしは人間と足並みをそろえて進む。しかし、人間はまだ誰もわたしを知らない。人間はわたしが外側にまといっている衣服しか知らない。そして、わたしの内に隠されている富を知らない。わたしは毎日人間に施し、与えているのだが、人間は真に受け入れるということを知らず、わたしの与える富をすべて受け取ることができない。わたしは人間の墮落を一つ残らず知っている。わたしにとって、人間の内面は水面の明るい月のように明瞭である。わたしは人間をいい加減に扱っているのではなく、人間に対していい加減なことをしているのではない。単に、人間は自分の責任を負うことができず、それゆえ人類全体が常に墮落しており、いまなおそうした墮落から抜け出せないままにいる、ということなのだ。惨めな、哀れな人間たちよ。人間がわたしを愛しても、わたしの霊の意向に従うことができないのは、なぜだ。わたしはほんとうに自分を人類に明かしたではないか。人類はほんとうに、けっしてわたしの顔を見ていないのか。わたしが人類に憐れみを示すことが少なすぎるのか。おお、全人類の反逆者たちよ。彼らはわたしの足の下で滅ぼされなければならない。彼らはわたしの刑罰により、消えなければならない。そして、わたしの大事業が完成する日、全人類が彼らの醜い顔を知るよう、人類の中から追い出されなければならない。人間がほとんどわたしの顔を見ることがなく、また、わたしの声を聞くこともないのは、全世界があまりに混乱していて、その騒音が大きすぎるので、人間がわたしの顔を捜して、わたしの心を理解しようとしなかったためだ。これが人間の墮落の原因なのではないか。だから人間は貧しいのではないのか。人間はみな、いつでもわたしから与えられてきた。そうでなければ、わたしが憐れみ深くなければ、誰が今日まで生きてこられただろう。わたしの内の富は比類ない。しかし、あらゆる災いもまた、わたしの手の内にある――そして、いつでも好きな時にわたしの災いから逃れることのできる者が、誰かいるのだろうか。人間の祈りで災いを免れることができるのだろうか。それとも、人間の心の流す涙で災いを免れることができるのだろうか。人間は真にわたしに祈ったことが全くないので、全人類のうち誰一人としてその生涯を光の中で過ごした者はいない。人間たちは、断続的に現れる光の中で生きているのだ。そのために、人間は今日の貧しい状態になったのだ。

わたしから何かを得るために、わたしのために全力を尽くそうと、誰もがうずうずしている。そこでわたしは、人間の心の働きに対応して、真の愛を人間の内に呼び起こすために約束をする。人間を強くするのは、ほんとうに人間の真の愛なのだろうか。天なるわたしの霊を動かしたのは、人間のわたしへの忠誠だろうか。人間のすることによっ

て天が感動することはいささかもなかった。そして、もしわたしの人間に対する扱いが、人間の行動すべてに基づいているのなら、人間はみなわたしの刑罰を受けながら生きることになる。大勢の人が涙で頬をぬらしているのを見た。また、大勢の人がわたしの富と引き換えにしようと心をささげるのをも見た。そうした「敬虔さ」にもかかわらず、そうした人間の衝動的行為の結果として、わたしがすべてを人間に与えたことは、ない。人間はけっして、すすんでわたしの前に自身のすべてをささげることがないからだ。わたしはすべての人間の仮面をむしりとり、火の海に投げ込んだ。その結果、人間のいわゆる忠誠心と訴えは、けっしてわたしの前で長続きしなかった。人間は空の雲のようなもので、風が吹きすさぶと、その強烈な力を恐れ、急いでその後をふわふわと追っていく――従わなければ撃たれるだろうと深く恐れて。これが人間の醜い顔ではないのか。これが、いわゆる人間の従順ではないのか。これが人間のいわゆる「真心」、偽りの善意なのではないか。多く人は、わたしの口から出る言葉を信じようとしないし、わたしの評価を受け入れようともしない。そこで、彼らの言葉と行いには反抗的な意図が反映される。わたしの話すことは、人間の本来の性質と正反対のものだろうか。わたしは人間に、「自然界の理法」にしたがって、ふさわしい定義を与えたのではないか。人間は、真にわたしに従うことをしない。もしほんとうにわたしを求めていれば、こんなに語る必要はなかった。人間は無価値な屑で、人間を前進させるには刑罰を用いなければならない。もしそうしなければ、たとえわたしが与える約束が人間を喜ばせるには十分だとしても、どうして人間の心を動かすことができよう。人間は長い年月、苦しみの中を足掻きながら生きてきた。人間は常に絶望の中で生きてきたと言える。その結果、落胆し、肉体的にも精神的にも疲れ果てており、そのため、わたしが与える富を喜び受けることをしない。今日でも、わたしから霊の喜びをすべて受け入れることのできる者は、誰一人いない。人間は、貧しい状態にとどまることしかできず、終わりの日を待っている。

多く人は、ほんとうにわたしを愛したいと願うが、彼らの心が自分のものではないために、自身を制御できない。多く人は、わたしの与える試練の中で、ほんとうにわたしを愛している。しかし、わたしが本当に存在することを把握できず、わたしの実在ではなく、単に空虚の中でわたしを愛しているに過ぎない。多く人はわたしの前に心を差し出した後、自分の心に注意を払わない。そして、彼らの心は機会があるたびサタンに掠め取られ、その後はわたしを離れる。多く人は、わたしが言葉を与えるとき、ほんとうにわたしを愛する。しかし、霊でわたしの言葉を愛するのではなく、公共物で

でもあるかのように気安く用いて、気が向けばいつでも元の場所に投げ戻すのだ。人間は苦痛の中でわたしを求め、試練の中であって、わたしを探す。平和の時にはわたしを楽しみ、危険になると、わたしを否定する。忙しい時にはわたしを忘れ、暇な時には、わたしに対しておざなりな態度をとる。しかし、けっして誰も生涯を通じてわたしを愛しはしない。人間がわたしの前で熱心であればいいと思う。わたしに何かよこせとは言わない。ただ、すべての人がわたしを真剣に受け止め、わたしを騙すのではなく、誠意を人間の内に取り戻せるようにしたいのだ。わたしの啓きや照らし、努力はすべての人にあまねく行き渡る。しかし、人間のあらゆる行動の真相も人々にあまねく行き渡り、それはわたしに対する欺きも同じである。人間には母の胎にいるときから欺きの種が備わっていたものででもあるかのようなのだ。生まれながら欺きの特別の技術をもっているかのようなのだ。そのうえ、人間はけっしてそのことを漏らさない。誰一人、そうした欺きの技術の源を見通した者はいない。その結果、人間はそれと気付かずに欺きの中で生き、自身を許しているかのように、それが、自分で意図的にわたしを騙そうとしているのではなく、神の計らいでもあるかのように振る舞う。これこそが、人間がわたしを欺く原因なのではないか。これは人間の狡猾なしわざではないのか。わたしはけっして人間の巧みな言葉に惑わされたことはない。わたしはずっと以前に人間の本質を見抜いていたのだから。人間の血にどれほどの不純物が含まれているか、どれほどサタンの毒がその髓に潜んでいるか、誰が知っているのか。人間は日々にそれに慣れ、サタンのしわざに無感覚になり、「健康的な生き方」を見つけることには何の関心もない。

人間がわたしから距離を置いているとき、人間がわたしを試すとき、わたしは雲の中に身を隠す。そのため、人間はわたしの痕跡も見出すことができず、悪人の手の内で生きて、言われるままのことをしているのだ。人間がわたしと親しくしているとき、わたしはその前に現れ、隠れない。そして、そういう時には、人間はわたしのやさしい面を見る。人間の目が突然開かれ、それとは知らないうちに、わたしへの愛がその内に生じる。心に突然、たてようもない温かさを感じ、宇宙にわたしの存在することをどうして知らなかったのかと、不思議に思う。そうして、人間はわたしの愛の深さをより感じる。さらにはわたしの尊さをも、より深く感じる。その結果、二度とわたしから離れたくないと願う。わたしを生きていくための光と見て、わたしが去ることを深く恐れ、しっかりとわたしを抱く。わたしは人間の熱意に動かされないが、その愛には憐れみをもって応える。この時、人間は直ちにわたしの試練の中で生きる。わたしの顔が心から消えると、人間はすぐさま、人生が虚しく思われ、逃れたいと思うようになる。そうした

とき、人間の心が明らかになる。わたしの性質のゆえにわたしを抱くのではなく、愛するのなら守ってほしいと願うのだ。しかし、わたしの愛が人間に反攻すると、すぐさま気が変わる。わたしとの契約を破棄し、わたしの裁きから離れる。わたしの慈しみ深い顔を二度と見ようとせず、そこで、わたしについての意見を変え、わたしが人間を救ったことはないと言うのだ。真の愛は、ほんとうに憐れみだけしか意味しないのか。人間は、ほんとうに、わたしの輝く光の中にいるときだけ、わたしを愛するのか。人間は昨日を振り返るが、今日を生きる――それが人間の状態ではないのか。あなたがたは、ほんとうに、明日もまだこのような状態なのだろうか。わたしが望むのは、表面的なものでわたしを満足させるのではなく、心の底からわたしを求める気持ちをもつことなのだ。

1992年3月21日

第二十二章

人間は光の中に生きていながら、光の貴さには気づいていない。人間は光の本質、光の源、さらに、光が誰のものであるかについては、無知である。わたしが人間たちに光を与えると、直ちに人間たちの状態を調べる。光があるので、人々はみな変わりつつあり、成長し、闇を去っている。わたしは全宇宙の隅々まで見渡す。山々が霧に包まれ、水が冷氣の中で凍り、光が到来したため、人々は何かもっと貴重なものを見つけようと、東を見ている――しかし、霧の中では、はっきりと方向を見定めることができないでいる。全世界が霧に包まれているので、わたしが雲の中から見ていると、わたしの存在は人間には絶対にわからない。人間は地上で何かを探している。あちこちあさっているようだ。どうやら、人間はわたしの到着を待っているらしい――しかし、人間はわたしの日を知らないから、何度も東方の微かな輝きを見やるしかない。すべての人々の中に、わたしは、ほんとうにわたしの心にかなう者を探す。わたしはすべての人々の間を歩き、すべての人々の間に生きるが、人間は地上にいて安全で健やかであり、それで、ほんとうにわたしの心にかなう者はいないのだ。人々は、わたしの心をどう気にかけたらよいか、わからない。彼らには、わたしの行いは見えない。そこで、光の中を動き回って、光に照らされることができない。人間はいつもわたしの言葉を大事にしているが、サタンの欺きに満ちた策略を見通すことができない。人間は霊的背丈が足りないので、心で願うことが実行できないからだ。人間はわたしを心から愛したことがない。わたしが人間の地位を高めると、人間は自分がふさわしくないと感じるが、だからといって

、わたしを満足させようと努力するわけではない。ただわたしの与えた「地位」を手にして、それをじっくり調べる。わたしの素晴らしさには気付かず、置かれた地位の恵みを貪ることに熱中する。これが人間の欠点ではないか。山々が動くとき、あなたの地位を考慮して迂回するものだろうか。水が流れるとき、人間の地位があるからといって、止まるだろうか。天と地は、人間の地位次第で入れ替わるだろうか。わたしは、かつて人間に憐れみをかけた、何度も何度も――しかし、誰一人、それを胸に抱き宝ともしなかった。ただ、それを作り話として聞くか、小説として読むだけなのだ。わたしの言葉は本当に人間の心に触れないのだろうか。わたしの言葉は、ほんとうに何の効果もないのか。これは、誰一人わたしの存在を信じていないということだろうか。人間は自分自身を愛さない。かえって、サタンと組んで、わたしを攻撃し、サタンをわたしに仕えるための「資産」として用いる。わたしはサタンの欺きに満ちた策略全部を見通し、サタンの存在ゆえにわたしに敵対しないよう、地上の人々がサタンの欺きを受け入れるのを止める。

神の国では、わたしは王だ――しかし、人間は、わたしを王として扱う代わりに、わたしを天から降りてきた救い主として扱う。そのため、人間はわたしから施しをもらうことを期待し、わたしを知ることを追求しない。まことに大勢が、わたしの前で乞食のように叫んだ。まことに大勢が「袋」を開いて、生きるための食物をくれるよう願った。まことに大勢が、飢えた狼のように、わたしを食べ尽くし、腹を膨らませようと、貪欲な目で見つめた。まことに大勢が、自分たちの過ちのために恥じて、黙って頭を垂れ、寛容を祈り、あるいはわたしの刑罰を受けようとした。わたしが話すと、さまざまな人間の愚行が不合理に思われる。そして、人間の真の姿が光の中に明かされると、輝く光の中で人間は自分を許すことができない。そこで、急いでわたしの前に来てひれ伏し、罪を告白する。人間の「正直さ」のため、わたしはもう一度救いの車に載せる。人間はわたしに感謝し、わたしを愛情のこもった目で見ると。しかし、それでも人間は、まだほんとうにわたしの内に逃げ込むつもりはなく、完全にわたしに心を捧げてはいない。人間はただわたしのことを誇るが、ほんとうにわたしを愛しているのではない。心をわたしに向けていないからだ。その人の体はわたしの前にあるが、その心はわたしの後ろにある。規則に関して、人間の理解はあまりに不十分であり、また、わたしの前に来ることには関心がないので、わたしは適切な助けを与え、頑固な無知の状態を改めさせようとする。これがまさに、わたしが人間に与える憐れみであり、わたしが人間を救うために奮闘する方法である。

全宇宙の人々は、わたしの日の到来を祝い、天使たちがすべてのわたしの民たちの間を歩く。サタンが問題を起こすと、天使たちが天での仕えにより、いつでもわが民を助ける。彼らは人間の弱さのせいで悪魔に欺かれることはないが、闇の勢力の攻撃の結果、よりいっそう霧の中で人生を経験しようと努める。民たちはみな、わたしの名の下に従い、誰もけっして公然とわたしに敵対しようと立ち上がらない。天使たちの働きにより、人間はわたしの名を受け入れ、みな、わたしの働きの流れの中にいる。世界は崩壊しつつある。バビロンは麻痺している。ああ、宗教界よ。どうしてこれが、わたしの地上の権威により破壊されないことがある。誰がまだわたしに逆らい、敵対しようとするのか。律法学者たちか。すべての宗教関係者か。地上の支配者や権力者か。天使たちか。誰がわたしのからだの完全さと豊かさをたたえないだろう。すべての民の中で、誰がわたしの讃えをやむことなく歌わず、誰がいつでも幸福でないのか。わたしは赤い大きな竜のすみかのある国に住んでいる。しかし、わたしはそれで恐れに震えたり、逃げたりはしない。その民がみな、すでに赤い大きな竜を嫌い始めているからだ。竜のために、竜の前でその「本分」が何か尽くされたことはない。その代わり、みな自分がふさわしいと思う振る舞いをし、それぞれの道を進んでいる。どうして地上の国々が滅びないことがある。どうして地上の国々が倒れないことがある。どうしてわが民が歓声を上げないことがある。どうして喜びに歌わないことがある。これが人間の働きだろうか。これが人の手のしていることだろうか。わたしは人間に生存する基盤を与え、物質的なものを与えた。しかし、人間は現在の状況に不満で、わたしの国に入りたがる。しかし、代価を払うことなく、また、無私の仕えをささげることを望まないで、どうしてそう容易にわたしの国に入れるだろう。人間から何かを取り立てる代わりに、わたしは人間に条件を出し、地上のわたしの国が栄光に満ちるようにする。人間はこの時代までわたしが導いてきた。人間はこのような状態にあり、わたしの光の導きの中にいる。そうでなければ、地上の人々の誰が、自分たちの前途を知るだろう。誰がわたしの心を理解するだろう。わたしは人間の要求にわたしの条項を加える。これは、自然の法則に適うことではないのか。

昨日、あなたがたは、雨風の中で暮らしていた。今日、あなたがたは、わたしの国に入り、その民になった。明日、あなたがたは、わたしの恵みを享受する。誰が、こうしたことを想像したろう。生涯にどれほどの苦難と困難を経験するか、あなたがたには、わかっているだろうか。わたしは雨風の中を進む。何年も人間の中で過ごし、それが今日まで続いた。これは、わたしの経営（救いの）計画の手順なのではないか。誰がわた

しの計画に付け足しをしたらう。誰がわたしの計画の手順から抜けられるだろう。わたしは何億もの人々の心の中に住む。わたしは何億もの人々の王だ。そして、わたしは何億もの人間に拒まれ、罵られてきた。わたしの姿は、ほんとうの意味では人間の心にはない。人間はただ、わたしの言葉に、うっすらと、わたしの栄光に満ちた顔を認めるだけだ。しかし、自分の考えが邪魔をして、自分の感覚を信用しない。人間の心には輪郭のはっきりとしないわたしがいるだけだが、それほど長くは、そこにとどまらない。さらに、人間のわたしに対する愛もまた、同様である。人間は気まぐれに愛する。まるで、自分の気質に応じてわたしを愛するかのよう。まるで、朧な月の下で人間の愛が見え隠れしているようなものだ。今日、わたしの愛があるから、人間は存続し、生き残る幸運に与っているのだ。もしそうでなければ、人間の誰が、そのやせ細った体をレーザー光線で切り倒されないだろう。人間はまだ自身を知らない。人間はわたしの前で誇り、わたしの後ろで自慢するが、誰一人、わたしの前で「敵対」しようとはしない。しかしながら、人間はわたしの言う敵対の意味を知らない。代わりに、わたしをだまそうとし、自分を誇り続ける――それは、わたしの前でわたしに敵対しているのではないか。わたしは人間の欠点は大目に見るが、人間が自分からする敵対行為は、わずかも許容しない。人間は、意味はわかっている、その意味にしたがって行動するつもりはない。ただ、自分の都合に応じて行動し、わたしを欺いているだけである。わたしはいつでも、わたしの言葉の中で、わたしの性質について明白にしている。しかし、人間は敗北を受け入れられない――同時に、人間は自己の性質を明らかにしている。わたしの裁きの中で人間は文句なく納得し、わたしの刑罰の中で、人間はついにわたしの姿を生かし出し、地上でのわたしを顕示するものとなる。

1992年3月22日

第二十三章

わたしの声が響き渡り、わたしの目が火を放ち、わたしは全地を見渡す。わたしは全宇宙を見ている。人間はみな、わたしに向かって祈り、仰ぎ見て、怒りを鎮めるよう懇願し、もう逆らわないと誓っている。しかし、今はもう昔ではない。これは今のことだ。誰がわたしの心を元に戻すことができるのか。人間の心の祈りではないし、また、彼らの唇から出る言葉でもない。わたしなしで、誰が今まで生き延びることができたらう。わたしの口からの言葉なしに、誰が生き延びることができるのか。誰が、わたしの目の下に倒れ伏さないでいるのか。わたしが全地の上に新たな働きを行うとき、誰がそれ

から逃れることができただろう。山々は高いからといって、それを避ける事ができるのだろうか。水は膨大な広がりがあるからといって、それを避けることができるだろうか。わたしの計画では、けっして何物も軽々しく手放しはしない。だから、いかなる人間も、いかなる物も、わたしの手を逃れたものはない。今日、わたしの聖い名が全人類の間に讃えられているが、また、わたしに対する抗議の声が、人々の中に起こっている。そして、わたしが地上にいるという伝説が、全人類の間で盛んに語られている。わたしは、人間がわたしについて裁くのを許さないし、また、彼らがわたしを分析することを許さない。まして、彼らがわたしについて悪口を言うことも許さない。人間はけっして真にわたしを知っていないので、わたしの霊を愛さず、わたしの言葉を大切にすることもせず、人間は、いつも、わたしに逆らい、欺こうとしている。人間のすることなすことすべて、また、わたしに対する態度に対して、わたしは相応の「報い」を与える。そこで、人間はみな報い目当てに行動するが、自己犠牲を必要とする働きをする者は、一人もいない。人間は利他的献身をしたがらず、価なしに得られる報酬を喜ぶ。ペテロはわたしの前に自分をささげたが、それは、明日の報酬のためではなく、今日の認識のためなのである。人間は、けっしてわたしと真のつながりをもっていない。しかし、容易にわたしに認められようと、うわべだけ、わたしと関わろうとしたことが何度もある。そこで、わたしは人間の心の深奥を覗き込み、そこで、その最も深い奥底に、「多くの富の鉱脈」を見つけた。人間自身、その存在に気づいていないのだが、わたしは新たに見出したのだ。そこで、人間たちは「物証」を見つけて、はじめて、聖人ぶった卑下をやめ、手のひらを差し伸べて、自身の汚れた状態を認めるのだ。人間たちの中には新しく新鮮なものがあって、全人類が享受できるよう、わたしに「引き出される」のを待っている。人間の無能力さゆえにわたしの働きをやめるところか、わたしはもともとの計画のとおり、人間を刈り込む。人間は果樹のようなものだ。刈り込みや剪定なしでは、木は実をつけることができず、結局、地面に果実はひとつも落ちておらず、ひからびた枝と落ち葉しか見えないということになる。

わたしは、わたしの国の「奥の部屋」を日々に装飾しているが、いきなりわたしの「作業場」に飛び込んできて仕事の邪魔をした者は、誰もいない。人々はみな、全力でわたしに協力しようとし、「お払い箱にされ」、「地位を失う」ことをひどく恐れ、生の行き止まりに着くと、サタンが支配してきた「砂漠」に陥りさえするのだ。人間が恐れるので、わたしは毎日慰める。毎日、愛するように仕向け、さらに、日々の生活の中で指導する。人間はみな、生まれたての赤ん坊のようなものだ。ミルクを与えられなけれ

ば、すぐにこの地上を去り、二度と見られない。人間の嘆願の中、わたしは人間の世界に来る。すると、人間はただちに光の世界に生きようになり、もはや彼らが天に向かって嘆願の声を上げていた「部屋」に閉じ込められてはいない。彼らはわたしを見ると、胸にたまっていた「苦情」をしつこく訴える。わたしの前で口を開き、食物を投げ入れてくれるよう、願う。しかし、その後、「恐怖が静まって落ち着く」と、もはやわたしから何も求めない。ぐっすりと眠るか、そうでなければ、わたしの存在を否定し、自分たちの用事をしに行ってしまう。人間の「放棄」のさまから、人間がわたしに対する「公平な裁き」を「感情」のかけらもなく行なっているのは明らかである

。だから、人間の不快な面を見て、わたしは黙って立ち去り、もはや、彼らがどんなに懇願しても、そうやすやすとは降りて来ない。人間がそれと知らないうちに、日ごとに問題が積もっていく。そこで、艱難辛苦の最中に突然、わたしの存在を見出す。「だめだ」と言われても承知せず、わたしの襟首を掴み、自分の家に客として引っ張り込む。しかし、わたしのために豪勢な料理を並べはしても、けっしてわたしを身内とは考えず、何かしらの助けを得るために、客人としてもてなすのだ。そこで、この時に、人間は突然自分の惨めな状態をわたしに示し、わたしの「署名」を得ようとし、事業に融資が必要な人物のように、全力で交渉にあたる。その人物の一挙手一投足から、その人物の意図がちらちらと見える――人間の表情の意味することや、言葉の裏の意味、あるいはどうやって人間の心の底を読み取るかなど、わたしにはわからないと思い込んでいるようだ。そこで人間は、これまでの経験・出来事を事細かに正確に内密で打ち明ける。その後で、わたしに要求を持ち出す。わたしは人間の行為の一つ一つを憎み嫌う。人間の中には、わたしの愛することをした者は一人もいない。人間たちは意図的にわたしを敵に回し、わざとわたしの憤怒を引き寄せているかのようだ。彼らはみな、わたしの前を意気揚々と歩き回り、わたしの目の前でやり放題をする。人間たちの中には、わたしのために生きている者は一人もいない。そのため、全人類の存在は無価値・無意味であり、だから、人間は虚無の中に生きているのだ。それでも、人間はまだ目覚めることを拒み、わたしに逆らい続けながら、あくまでその空虚さの中に留まる。

その経てきた試練の中で、人間は一度たりともわたしを満足させなかった。彼らの残酷な悪行のため、人間はわたしの名を証しようと思わない。そうではなくて、生存をわたしに頼りながら、反対側に走っているのだ。人間の心は、わたしに完全に向いていない。そこで、サタンが、人間の体が傷だらけで、すっかり汚物にまみれるほどに痛めつける。しかし、それでも人間は、自分がどれほど不快な存在であるか、気づかない。そ

うして、わたしの後ろでサタンを崇め続けているのだ。そのため、わたしは怒りをもって人間を底なしの淵に投げ入れ、けっして自分では脱出できないようにする。それでも、その哀れな嘆きの中、人間は心を改めようとはしない。惨めな最期に至るまでわたしに敵対しようとし、そうして、わざとわたしの憤りをかきたてようとしているのだ。人間のしたことに関しては、その行いに鑑み、罪人として扱い、わたしの温かい抱擁を与えない。そもそものはじめから、天使たちは、わたしに仕え、変わることなく、たゆみなく、わたしに従ってきた。しかし、人間はいつも正反対で、まるで、わたしから出たのではなく、サタンから生まれたかのような。それぞれの持ち場にいる天使たちはみな、わたしに最大限献身する。サタンの力に動かされることなく、ただ本分を果たす。天使に養育されて、無数のわたしの子らと民はみな強く健康になり、その一人も力弱く虚弱な者はいない。これがわたしの働きであり、わたしの奇跡である。わたしの国の始まりを祝う祝砲が鳴り響く中、天使たちは伴奏に合わせてきびきびと歩き、わたしの壇の前に来て居並ぶ。彼らの心には不純物や偶像のけがれがないので、わたしに見られることを嫌がらないのだ。

疾風のうなりとともに天は一瞬の内に降りてきて、すべての人類を窒息させ、もはやそうしたくとも、わたしに呼びかけることができないようにする。気がつかないうちに人間はみな倒れる。木々は風の中で激しく揺れ、時折、枝の折れる音が聞こえる。そして、しおれた木の葉はみな吹き飛ばされる。地上は突然、寒々と荒廃した感じになり、人々は互いにしがみつき、身構える。秋の後に訪れる災害がいつ襲い来るか、わからないからだ。丘の鳥たちはあちこち飛び回り、誰かに悲しみを訴えているかのような。山の洞窟では、ライオンが、骨の髄までぞっとして髪がそば立つような声で吼える。それはまるで、人類の終わりを予言する不吉な感情があるかのような。わたしが自分の定めた時に彼らを処理する時を待とうとせず、人間はみな、沈黙のうちに天の支配者である主に祈る。しかし、小川を流れる水の音が、どうして疾風を止められよう。どうして人間の祈りの声で突然に止められよう。人間が怯えているからといって、どうして雷鳴の中心にある憤怒を鎮められよう。人間は風の中でふらふらと揺れる。雨から身を守ろうと右往左往する。わたしの怒りの下、人間たちは、わたしの手が彼らに触れるのではないかと深く恐れて、震えおののく。まるでわたしがいつでも彼らの胸に突きつけられている銃口でもあるかのように。また、わたしの敵なのに、それでもわたしの友であるかのように。人間はけっして、人間についてのわたしの真の意図を見出さなかったし、けっしてわたしの目的を理解しなかった。そこで、知らないうちにわたしを怒らせ、知

らないうちに、わたしに敵対する。それでいて、それと知らずに、わたしの愛を見もしたのだ。わたしが憤怒しているとき、人間がわたしの顔を見るのは困難だ。わたしは怒りの黒い雲の中に隠れている。そして、立ち、雷鳴の中、全宇宙に人間への慈悲を送る。人間はわたしを知らないのだから、わたしの意図を理解しないからといって、わたしは人間を罰しはしない。人間の目には、わたしは時折憤りを表す。わたしは時には微笑む。しかし、人間がわたしを見るときにも、人間はあまりに無感覚で冷酷になっているので、けっしてわたしの全性質を見はしないし、いまだに、甘美なラッパの音を聞くことができないのだ。まるで、わたしの姿が人間の記憶の中に、わたしの形が人間の考えの中に存在しているかのようだ。しかしながら、人類の発展を通じて、ほんとうにわたしを見た者は、ただのひとりもいなかった。なぜなら、人間の脳はあまりに貧弱だからだ。人間はわたしを「大解剖」しようとしたが、人類の科学はあまりに原始的で、今まで、人間の科学研究は最終的な結果を生み出さなかった。そこで、「わたしの姿」という問題はずっと全くの空白で、誰一人埋められなかったし、世界記録を更新する者はいない。人間が現在の足場を保っているだけでも、不幸の中では、すでに計り知れない慰めなのだから。

1992年3月23日

第二十四章

わたしの刑罰はすべての人間に下るが、それはまた、すべての人間から遠いままである。すべての人の生活全体は、わたしへの愛と憎しみで満たされているが、誰一人、わたしを知らなかった。そこで、人間のわたしへの態度は熱くも、あるいは冷たくも吹き、普通の状態であることがない。しかし、わたしはいつでも人間を心遣い、守ってきた。人間がわたしの行いのすべてを見ることも、わたしの切なる意図を理解することもできないのは、人間の鈍感さのせいなのだ。わたしはすべての国々の主、そしてすべての人の中で至高者である――ただ、人間はわたしを知らない。長い年月、わたしは人間の間で暮らし、人間世界での生活を経験してきた。しかし、人間はいつでもわたしを無視し、宇宙から来た者のようにわたしを扱ってきた。その結果、性質と言語の違いのせいで、人々は、通りにいるよそ者のようにわたしを扱う。わたしの衣類は、あまりに風変わりなようで、その結果、人間は自信を持ってわたしに近づくことができない。そのときはじめて、わたしは人間の間で生きる荒涼感を覚え、そうしてはじめて、人間世界の不公正を感じ取る。わたしは通りを行く人々の間を歩き、みな顔をじっと見る。人々

は、まるで病の中にあるように顔を憂鬱で満たす。まるで刑罰の中で生きているようで、解放することができない。人間は自身に足かせをつけ、慎み深さをひけらかす。たいていの人わたしの中の自身について誤った印象をもっていて、わたしにほめられようとする。また、多くの中は、わたしの助けを得ようと、意図的に哀れげに見えるようにする。わたしの後ろで、人々はみなわたしを騙し、わたしに逆らう。そうではないか。これが人間の生存の道なのではないか。誰か、その生活の中でわたしを生かし出したものがいるか。誰か、人々の間でわたしを崇めた者がいるか。誰か、霊の前で縛られた者がいるか。誰か、サタンの前に堅固に立ち、わたしを証しした者がいるか。誰か、わたしへの「忠実さ」に真実を加えた者はいるか。誰か、わたしのために赤い大きな竜に滅ぼされた者はいるか。人々はサタンとぐるになり、今や泥沼にはまっている。彼らはわたしに逆らう名手であり、わたしに反攻する発明家で、わたしを取り扱う形式的な方法において「成績優秀な生徒」だ。自身の運命のために、人間は地のあちこちを探し回る。わたしが手招きすると、わたしの貴さを感じることができず、他者の「負担」となることをしながら、自身を頼みとする「信仰」を持ち続ける。人間の「志」は貴いが、誰一人の志が満点を達成したことがない。彼らはわたしの前でふらふらと倒れそうである。したがって、そっと音もなく倒れる。

毎日わたしは話し、毎日、新しいこともする。もし人間が全力を出さないならば、わたしの声を聴くのが困難だろう。そして、わたしの顔を見るのが難しいだろう。恋しい人はこの上なくすばらしい。その声は最高に穏やかだ。しかし、人間は容易にその輝かしい顔を見ることも、その声を聞くこともできない。長い間、誰一人わたしの顔を容易に見た者はいない。わたしはかつて、ペテロに話しかけ、パウロの前に「顕現」した。しかし、イスラエル人以外、誰一人、わたしの顔を真に見た者はいない。今日、わたしは自ら、共に住むため人々の中に来た。これはほんとうに、めったにない、貴重な機会だとは思わないか。あなたがたは、時を最も有益なものにしたいのか。このようにして時が無駄に流れるのを願っているのか。人々の心の中で時針が突然止まるのか。それとも、時が逆戻りするのか。それとも、人間は再び若くなるのか。今日の幸いな生活は、再び訪れることがあるのだろうか。わたしは人間の「浪費」にふさわしい「報酬」を与えない。ただ、他のすべてのこととは無関係にわたしの働きを続け、人間が忙しいからとか、叫び声が聞こえるからといって、時の流れを止めはしない。数千年間、誰一人わたしの力を分散させることはできなかった。また、誰一人、わたしの本来の計画を狂わせることのできる者もない。わたしは空間を超越し、時代を超え、全てのものの

上に、そしてその間で、わたしの全計画の核心部分を展開する。口を開いてそれらのために祈っても、手を伸ばしてすべてのことを忘れ、わたしにそれらのことを要求しても、わたしから特別待遇を受けたり、わたしの手から「賞品」を受け取ったりできた者は誰一人いない。そういった人々のうちの誰一人、わたしに影響を与えなかったし、みなわたしの「無情な」声で押し戻された。たいていの人々は、自分たちは「若すぎる」と信じていて、わたしが大いなる慈悲を示すのを、再び憐れみを示すのを待っている。そして、裏口から入れてくれと頼む。しかし、どうしてわたしが自分の計画を簡単に変更できようか。人間が幼いからといって、この地上で数余年分に生きられるようにと、地球の自転を止めてやるだろうか。人間の頭脳は、まことに複雑であるが、また、欠陥もあるようだ。その結果、人間の頭には、しばしばわたしの働きを意図的に妨げる「すばらしい方法」が浮かぶ。

人間の罪を赦し、弱さを考慮して特別の恵みを示したことは何度もあるが、また、その無知のため、ふさわしい処置を行ったことも、何度もある。しかし、人間には、わたしの親切をどう受け止めるか、けっしてわからない。だから現在の始末になっているのだ――塵にまみれ、衣類はぼろぼろ、髪の毛は雑草の茂み、顔は汚れに覆われ、足は手作りの粗雑な靴で包み、手は死んだ鷲の鉤爪のようで、体の横に力なく垂れ下がっている。わたしが目を開け、見ると、人間は、たった今、底なしの淵から出てきたばかりのようだ。憤らずにいられない。わたしはいつでも人間に寛容であったが、悪魔がわたしの聖なる国に自由に出入りするのを、どうして許せよう。乞食がわたしの家でただ食いのを、どうして許せよう。汚れた霊が家の客になるのを、どうして許せよう。人間はいつでも「自分に厳しく」、「他人には寛容」であったが、わたしに対してはまったく礼に欠けている。わたしは天の神なので、別物として扱い、わたしに対し、ほんのわずかの愛情ももたない。まるで、人間の目はとりわけ鋭敏であるかのようで、わたしに出会くと、すぐさま表情が変化し、冷たく無表情だった顔に、わずかばかりの表情を加える。わたしは人間の態度を見ても、そのために適切な制裁は加えはしない。しかし、全宇宙の上から大空を見やり、地上での働きを行うだけだ。人間の記憶の中で、わたしはけっして誰にも親切であったことはないが、また、誰をも虐待していない。人間は自分の心の中にわたしのための「空席」を用意していないので、わたしがずかずかと人間の中に宿ると、人間は全く遠慮なしにわたしを追い出し、それから、自分はあまりに欠点が多く、わたしを楽しませることができないのだと、言葉巧みに言い訳をする。話しているとき、しばしばその顔が「暗い影」に覆われる。まるで今にも災いが訪れようと

しているかのようだ。しかし、それでも、それに伴う危険などまるで考慮しないで、わたしに去るように願う。わたしが人間に言葉とやさしい抱擁を与えても、人間はまるで耳がないかのようで、わたしの声にまったく注意を払わない。それどころか、頭を抱えて逃げて行くのだ。わたしは、いささか失望し、しかし、少しく憤りも覚えながら、人間から離れる。その一方で、人間は、たちまち激しい突風と大波に襲われ、消え去る。間もなく、人間はわたしに向かって叫ぶが、どうして人間に風や波の動きを止められよう。徐々に人間の痕跡は消え去り、どこにも見えなくなる。

遠い昔、わたしは全宇宙の上から全地を眺めた。わたしは地上で大いなる仕事を計画した。自分の心にかなう人類の創造、そして、天のそれのような、地上の国の建設、わたしの力で大空を満たし、わたしの知恵を宇宙に広めることだ。そして今日、数千年後、わたしは計画を続けている。しかし、誰一人わたしの計画と地上の経営（救い）について知らない。まして、地上にあるわたしの国を見もしない。そうして影を追いかけて、わたしの前に来て、わたしを欺こうとし、無声の代価と引き換えに、わたしの天の祝福を得ようとする。その結果、わたしの怒りを招き、わたしは裁きを下すが、それでも目覚めない。これは、まるで、人間は地下で働いているかのようだ。地上にあるものをまったく知らず、ただ自分の前途を追っている。すべての人々の中で、わたしの輝く光の下に住む者を、これまで誰も見ていない。彼らは闇の世界に住んでいて、暗闇の中で生きることに慣れているようだ。光が来ると、彼らは遠く離れている。まるで、光が人間たちの仕事を妨げているかのようだ。その結果、少しくんざりするようである。光が平和を破り、ぐっすり眠れなくしたかのようだ。そのため、人間は光を追いかけるために全力を絞る。光もまた、「自覚」がないようで、眠っている人間を起こす。人間が目覚めると、腹を立てて、目を閉じる。どういうわけか、人間はわたしに腹を立てるが、わたしの心の中では、事の次第がわかっている。わたしは徐々に光を強め、すべての人がわたしの光の中で生きようにする。そこで、じきに光と関わることに慣れ、さらに、みなは光を大切に思うようになる。その時、わたしの国は人間の間に来て、すべての人は喜びに祝い踊る。地上は突然歓喜に満たされる。数千年の沈黙が光の到来により破られたのだ。……

1992年3月26日

第二十五章

時は過ぎ、瞬く間に今日が訪れた。わたしの霊の導きにより、すべての人はわたしの

光の中で生き、もはや誰も過去のことを思わず、昨日のことを煩わない。誰が今を生きてこなかっただろう。誰が神の国ですばらしい月日を送らなかっただろう。誰が太陽の下で生きてこなかっただろう。神の国は人間たちの間に降りてきたが、誰一人、ほんとうにその暖かさを経験していない。人間はただ外観を見るだけで、その本質を理解していない。わたしの国が形作られている間、誰がそのことを喜ばないだろう。地上の国々は、ほんとうに免れることができるだろうか。赤い大きな竜は、ほんとうにその狡猾さで逃れることができるだろうか。わたしの行政命令は全宇宙に公布され、それによってわたしの権威はすべての人の間に展開され、全宇宙で効力を発する。それでも、人間はけっして本当にこのことを知っていない。わたしの行政命令が全宇宙に示される時はまた、地上でのわたしの働きが完了する時でもある。わたしがすべての人間の間で支配し、力を振るい、唯一の神自身であると認められた時、わたしの国は完全に地上に降りてくる。今日、すべての人は新たな道で新たな始まりを得る。人々は新たな生活を始めているが、しかし、誰一人ほんとうに地上で天のような生活を経験していない。あなたがたは、ほんとうにわたしの光の中で生きているだろうか。あなたがたは、ほんとうにわたしの言葉の中で生きているだろうか。誰が自分の前途について思いをいたさないだろう。誰が自分の運命を悲しまないだろう。誰が苦しみ的大海でもがかないだろう。誰が自由になりたいと願わないだろう。神の国の恵みは、人間の地上での厳しい労働の代償として得られるものだろうか。すべての人の願望は、そのとおりにかなうものだろうか。わたしはかつて、人間に神の国の美しい眺めを見せた。しかし、人はただ貪欲な目で見つめただけで、本当にそこに入ろうと切望する人は、一人もいなかった。わたしはかつて、地上の真の状態を人間に「報告した」が、人は、ただ聞いただけで、わたしの口から出た言葉を心に受け入れようとはしなかった。わたしはかつて、人間に天のありさまを伝えたが、人は、わたしの言葉をすばらしい作り話として扱い、わたしの口の表現したものを真に受け入れはしなかった。今日、神の国の風景が人間たちの間にぱっと現れたが、誰か、それを探すために「山や谷を越えて」行っただろうか。わたしが促さなければ、人間はまだ夢から醒めていなかったろう。人間は、そんなにも地上での生活に夢中なのだろうか。ほんとうに人間の心に高い基準というものはないのだろうか。

わたしがあらかじめ定めた民は、わたしに身を捧げて、調和のうちにわたしと生きることができる。彼らはわたしの目に貴く、わたしの国でわたしへの愛に輝いている。今日の人々の中で、誰がそういう条件を満たすことができるだろう。誰がわたしの条件で合格できるだろう。わたしの条件は、ほんとうに人間に困難をもたらすのだろうか。わ

わたしは意図的に人間を誤らせるだろうか。わたしはすべての人に寛容で、みなを優遇している。しかしながら、これは中国にいるわが民だけにである。あなたがたを過小評価しているのではなく、あなたがたを疑いの目で見ているわけでもない。わたしはあなたがたに対して実質的であり、現実的なのである。人間は生きていれば、家庭のことや、もっと広い世界のことや、必ず挫折を味わう。しかし、自分の困難を自らの手で用意する人などあるだろうか。人間には、わたしを知ることができない。人間はわたしの外見について、なにがしかの理解はしているが、わたしの本質については何も知らない。人間は自分の食べているものの成分を知らないのだ。誰がわたしの心を注意深く読み取ることができるだろう。誰がほんとうにわたしの前でわたしの心を理解できるだろう。わたしが地上に来るとき、地上は闇に包まれ、人間は「ぐっすり眠っている」。わたしはあらゆるところを歩き回るが、見えるものはどれも、破れ、ぼろぼろで、見るに堪えないものばかりだ。これはまるで、人間は楽しみたいだけで、「外の世界の物事」を知ろうという気持ちがまるでないようなのだ。すべての人の知らないうちに、わたしは地上をくまなく調べるが、いのちに満たされたところは、どこにもない。すぐさま、わたしは光と熱を発して第三の天から地上を見下ろす。光は陸を照らし、熱がその上に広がっていくが、光と熱だけが喜んでいるようだ。それらは、快適さの中で楽しんでいる人間の中に何も引き起こさない。これを見て、わたしはすぐさま、用意していた「鞭」を人間の間に下す。鞭が下ると、光と熱が徐々に散り、地上はただちに荒廃し、暗くなる。そして、闇のために、人間はその機会を逃さず、お楽しみを続ける。人間は、わたしの鞭が下ったことに、いくらか、僅かに気づいているが、反応することなく「地上の恵み」を楽しみ続ける。次に、わたしの口がすべての人間の刑罰を告げると、全宇宙の人々は十字架にさかさまに張り付けにされる。わたしの刑罰が下ると、山々が崩れ、大地が引き裂かれる音に、人間は震え上がる。その後になって突然目が覚め、人間はショックを受け、恐怖に怯える。逃げたいと思うが、すでに遅すぎるのだ。わたしの刑罰が下ると、わたしの国が地上に降りて来て、すべての国々は粉々に打ち砕かれて消え去り、あとには何も残らない。

毎日、わたしは全宇宙の表面を眺め、毎日、人間の間で新しい働きをする。しかし、人々はみな自分の働きに我を忘れ、誰一人わたしの働きの動きに注意を払わず、自分たち以外の物事がどうであるかには興味を示さない。まるで、人々は自分たちで作った新たな天と新たな地に暮らしていて、他人に介入されることを望んでいないようだ。彼らはみな享楽に夢中で、自分に酔い、自分たちの「体操」をしている。人間の心には、ほ

んとうにわたしの居場所はないのだろうか。わたしはほんとうに人間の心の支配者でいることができないのだろうか。人間の霊は、ほんとうに人間を去ったのだろうか。誰が、わたしの口から出た言葉について、注意深く考えたことがあるだろう。誰がわたしの心の願いを理解しただろう。人間の心は、ほんとうに何か別のものに乗っ取られているのだろうか。わたしは何度も人間に大声で呼びかけたが、これまで誰か、憐れみを感じた者はいるだろうか。誰か、人間性を持って生きたらどうか。人間は肉の体で生きているが、人間性はない。人間は動物の王国に生まれたのだろうか。それとも、人間は天に生まれ、神性を持っているのだろうか。わたしは人間にわたしの要求を示しているが、あたかも人間はわたしの言葉が理解できないかのようだ。あたかもわたしがまったく異質な、近づきがたい怪物でもあるかのようだ。まことに何度も、わたしは人間に失望させられた。まことに何度も人間の成績不良に激怒し、また、まことに何度も人間の弱さに悲しい思いをした。なぜわたしは人間の心に霊的感觉を呼び起こせないのだろうか。なぜわたしは人間の心に愛の思いをを起こせないのか。なぜ人間はわたしを何よりも大事なものとして扱えないのか。人間の心は自分のものではないのか。他の何かが人間の霊に住み着いているのだろうか。なぜ人間は、やむことなくわめき続けているのか。なぜ人間は常に悲しんでいるのか。なぜ人間は悲しいとき、わたしの存在を無視するのか。わたしが人間を突き刺したということなのか。わたしは、わざと人間を見捨てたのだろうか。

わたしの目には、人間は万物の支配者だ。わたしは人間に少なからぬ権威を与えた。地上の万物を扱わせた――山々の草、森の動物たち、そして、水の中の魚。しかし、それで幸福でいるどころか、人間は不安にとらわれている。人間の生涯は苦しみに満ち、走り回り、むなしさに楽しみを加え、全生涯に何の発明も創造もない。誰一人、このむなしい人生から自由になることができず、誰一人、意味ある人生を見出せず、誰一人、真の人生を経験していない。今日の人々はみな、わたしの輝く光の下で生きているが、天での生活について、何も知らない。もしわたしが人間に対して憐れみ深くなくて、人間を救うことをしなければ、すべての人はむなしく生まれることになり、地上で無意味に生き、何一つ誇りに思うことなしに、無益に死んでいく。あらゆる宗教、社会の領域、国家、宗派はみな、地上のむなしさを知っており、彼らはみな、わたしを求め、わたしの戻るのを待っている――しかし、わたしが到着したとき、誰がわたしを知ることができるのだろうか。わたしは万物を創った。わたしは人間を創り、今日、人間たちの間に降り立った。しかしながら、人間はわたしに殴り返し、仕返しをする。わたしが人間に

している働きは、人間のためになっていないのだろうか。わたしは、人間を満足させることができないのだろうか。なぜ人間はわたしを拒むのか。なぜ人間は、わたしに対してあれほど冷たく無関心なのか。なぜ地上は「死体」に覆われているのか。これは、わたしが人間のために創った世界の状態なのか。なぜ、わたしは人間に比類のない富を与えたのに、人間はお返しに空っぽの手を差し出すのか。なぜ人間はほんとうにわたしを愛さないのか。なぜ人間はけっしてわたしの前に来ないのか。わたしの言葉はみな、ほんとうに無駄だったのか。わたしの言葉は水の熱のように消えたのか。なぜ人間は、わたしに協力したがないのか。わたしの日の到来は、本当は人間の死の瞬間なのか。わたしはほんとうに、わたしの国が建てられるとき、人間を全滅することになるのか。なぜ、わたしの経営（救いの）計画の全体を通して、誰一人、わたしの意図を把握していないのか。なぜ、人間は、わたしの口から出た言葉を大事にするのではなく、嫌い、拒むのか。わたしは誰をも罪に定めない。ただ、すべての人を穏やかにさせ、自省の働きをさせるだけだ。

1992年3月27日

汝ら民よ、みな喜びなさい！

わたしの光の中に、人々は再び光を見る。わたしの言葉の中に、人々は自分が享受するものを見つける。わたしは東方から来た。わたしは東方より出ず。わたしの栄光が輝く時、あらゆる国が光で照らされ、すべてに光がもたらされ、何ひとつ暗闇に留まることはない。神の国では、神とともに生きる神の民の生活は、計り知れないほどの幸せに満ちている。水は幸福に満ちた民の生活を喜びながら踊り、山々は民とともにわたしの豊かさを享受する。すべての人が努力し、懸命に働き、わたしの国への忠誠を示す。神の国にはもはや反乱も抵抗もない。天地は互いを拠り所とし、人とわたしは生活の甘美な喜びを通して、互いにもたれかかるように深い感情の中で距離を縮めている……。今この時、わたしは正式に天国での生活をはじめ。もはやサタンによる妨害はなく、民は安息を得る。全宇宙において、わたしの選民はわたしの栄光の中で生きる。人々の間で生きるのではなく、神とともに生きる者として、比類なき幸福を受けながら。すべての人間はサタンによる墮落を経験し、人生の甘さと苦さを味わい尽くしてきた。いま、わたしの光の中で生きながら、どうして喜ばずにいられようか。どうしてこの美しい瞬間を軽くあしらい、手放すことができようか。汝ら民よ、わたしのために心からの歌を歌い、喜びに踊りなさい。その誠実な心を持ち上げ、わたしに捧げなさい。わたしのた

めに太鼓を打ち鳴らし、喜びの音楽を奏でなさい。わたしの喜びで全宇宙を照らそう。栄光に満ちたわたしの素顔を民にあらわそう。わたしは声高に叫ぶ。わたしは宇宙を超越する。すでにわたしは民の上に君臨している。民はわたしを称揚している。わたしは蒼天をさまよい、民はわたしとともに歩く。わたしは民とともに、我が民に取り囲まれながら歩く。民の心は喜びにあふれ、その歌声は宇宙を揺るがし、天空を割る。もはや宇宙が霧で覆われることはなく、泥や汚水も存在しない。宇宙の聖なる民よ！わたしがつぶさに調べれば、あなたがたは真の表情をあらわす。あなたがたは汚れに覆われた者ではなく、翡翠のように純粋な聖人なのだ。あなたがたはみなわたしの愛する者であり、わたしの喜びである。万物はいのちに立ち返る。すべての聖人がわたしに仕えるために天へと戻り、わたしのあたたかな抱擁の中、泣くこともなく、不安を覚えることもなく、自分自身をわたしに捧げ、わたしの家へと戻ってくる。そして自分の故郷において、絶えることなくわたしを愛し続ける。永遠に変わることはない。悲しみはどこか。涙はどこか。肉体はどこか。地が終わりを迎えても、天は永遠である。わたしは万民の前に姿を現わし、万民がわたしを称える。悠久の過去から終わりの時に至るまで、この生活、この美しさが変わることはない。これが神の国の生活である。

第二十六章

誰がわたしの家に住んだのか。誰がわたしのために立ち上がったのか。誰がわたしのために苦しんだのか。誰がわたしの前で誓ったのか。誰が今までわたしに従い、それでいて無関心にならなかったのか。なぜ人間はみな冷たく無情なのか。なぜ人間はわたしを捨てたのか。なぜ人間はわたしに飽いたのか。なぜ人間の世界には何の温かみもないのか。シオンで、わたしは天の暖かさを感じていた。また、シオンでわたしは天の恵みを享受していた。さらに、わたしは人間の只中に生き、人間世界の苦さを味わった。わたしはこの目で、人間たちの中に存在するあらゆる状態を見た。人間は無意識にわたしの變更に沿って変わり、そうしてはじめて現在に至った。わたしは、人間がわたしのために何かできることを要求しない。また、人間がわたしのために何かを増すことを求めない。わたしはただ、人間がわたしの計画に調和できることを望む。わたしに反抗することも、わたしの恥のしるしとなることもなく、わたしについて力強い証しをすることを。人間の中には、わたしについてよき証しをし、わたしの名に栄光をささげた者がいる。しかし、人間の行い、人間の行為がどうしてわたしの心に適うだろう。どうして人間がわたしの望みをかなえ、わたしの心を果たすだろう。地上の山々や水、地上の花、草、木の中で、わたしの手の業を示さないものは、一つもない。わたしの名のゆえに存

在しないものは、一つもない。しかし、なぜ人間は、わたしの要求する基準に達することができないのか。これは、人間の卑しさのせいだろうか。これは、わたしが人間を高めたためだろうか。これは、わたしが人間に残酷すぎたということだろうか。なぜ人間はいつも、わたしの要求を恐れているのか。今日、わたしの国の無数の民の中で、なぜあなたがたは、わたしの声を聞くだけで、わたしの顔を見ようとししないのだろうか。なぜあなたがたは、わたしの言葉を見るだけで、それをわたしの霊と合わせようとししないのか。なぜあなたがたは、わたしを上の方と下の地に分け続けるのか。地上にいるわたしは、天にいるわたしとは異なっているということか。天にいるわたしは、地上に降りて来ることができないということか。地上にいるわたしは、天に連れられて行くに値しないということか。まるで、地上にいるわたしは卑しいもので、天にいるわたしは崇めるべき存在であり、天と地の間には越えることのできない裂け目があるようではないか。しかし、人間の世界では、そうしたことがどこから来ているかは何も知られておらず、ずっとわたしに背き続けている。まるで、わたしの言葉は音だけで意味がないようだ。人間はみな、わたしの言葉を調べ、わたしの外見がどういうふうなのかを自分なりに調査するが、みな失敗して、なんらの成果も上げられず、わたしの言葉に打ち倒され、二度と立ち上がろうとしない。

わたしが人間の信仰を試すと、ただの一人も真の証しをする能力がなく、ただの一人もすべてを捧げることができない。人間は隠れ、まるでわたしが人間の心を奪おうとしているかのように、心を開くことを拒んでいる。ヨブでさえ、けっしてほんとうに試練に立ち向かおうとせず、また苦しみの中で香りを放たなかった。人間は皆、春の暖かさに緑をほの見せる。だが彼らはけっして冬の冷氣の中で緑を保たない。人は霊的背丈が痩せ細っており、わたしの目的を達成できない。すべての人間の中で、他の手本となる者は、誰一人いない。人間は基本的に同じで、他人と異なるところがなく、区別すべき特徴も、ほとんどない。このため、今日でも、人間はまだわたしの業を完全に知ることができない。わたしの刑罰がすべての人間の上の下って始めて、知らずにわたしの業に気づき、わたしが何もしなくても、強いなくても、人間はわたしを知るようになり、そこでわたしの業を見ることになる。これがわたしの計画であり、これはわたしの業の現れであり、これが人間の知るべきことだ。わたしの国では、無数の被造物がよみがえりを始め、生氣を取り戻す。地上の状態が変化したため、地と地の境界にもまた、変化が起こる。以前、わたしは預言した――地が地から離れ、地が地とつながると、そのとき、わたしは国々を打ち砕くと。このとき、わたしはすべての被造物を新たにし、

全宇宙を区切りなおす。それにより、全宇宙を秩序立て、古い状態を新しいものに変える。これがわたしの計画だ。これらがわたしの業だ。国々と世界の人々がみな、わたしの玉座の前に戻ると、わたしは天の富をすべて人間の世界に与え、わたしによって、比類ない富にあふれるようにする。しかし、古い世界が存続する間、わたしは国々の上に怒りを投げつけ、わたしの行政命令を全宇宙に公布し、違反する者には刑罰を下す。

わたしが全宇宙に向かって話すと、人間はみなわたしの声を聞き、そこで、わたしが全宇宙で行なってきた業を見る。わたしの心に逆らう者、つまり、人間の行いでわたしに敵対する者は、わたしの刑罰を受けて倒れる。わたしは天の多くの星々を取ってそれらを新しくし、わたしにより、太陽と月は新たになる――空はもはや以前のものではない。地上の無数の物事が新たになる。すべては、わたしの言葉により完全になる。全宇宙の多くの国々は新たに区切られ、わたしの国に置き換わる。それにより、地上の国々は永遠に消え去り、すべてがわたしを崇める一つの国になる。地上のすべての国々は破壊され、存在しなくなる。全宇宙の人間のうち、悪魔に属する者はみな、滅ぼし尽くされる。サタンを礼拝する者はみな、わたしの燃える炎に倒れる――つまり、今、流れの中にいる者以外は、灰になるのだ。わたしが多くの民を罰するとき、宗教界にいる者は、わたしの業に征服され、程度の差はあれ、わたしの国に戻る。彼らは聖なる方が白い雲の上に乗って降臨するのを見たからである。人間はみな、種類に従い、それぞれの行いに応じて刑罰を受ける。わたしに敵対した者たちは、みな滅びる。地上での行いがわたしと関わりのなかった人たち、その人たちは、自分たちの行いによって、地上にわたしの子らとわが民の支配下で存在を続ける。わたしは無数の人々と無数の国々にわたしを現し、わたしは自ら声を発して地上にわたしの大いなる働きの完了を告げ、全人類が自分たちの目でそれを見られるようにする。

わたしの話が深くなる中で、わたしはまた宇宙のありさまも見ている。わたしの言葉によって、無数の被造物がみな新たになる。天は変わり、地も変わる。人間は本来の形を現し、ゆっくりと、それぞれ同じ種類のものたちと共に、それと知らぬ間に家族のもとに戻っていく。そこで、わたしは大いに喜ぶだろう。わたしは妨げられることなく、わたしの大いなる働きは知らぬ間に成し遂げられ、無数の被造物は変化する。わたしが世界を創ったとき、わたしはすべてのものをそれぞれに創った。すべての形あるものをそれぞれの種類に集まるようにした。わたしの経営（救いの）計画が終わりに近づくと、天地創造当初の状態を回復させ、すべてを本来の姿に戻す。すべては大きく変わり、すべてはわたしの計画の内に戻る。時は来た。わたしの計画の最後の段階が終わろうと

している。ああ、不浄な古き世界。必ずや、わたしの言葉に倒れる。必ずや、わたしの計画で無になる。ああ、無数の被造物たち。あなたがたは、みな、わたしの言葉の内ですたないのちを得る。あなたがたには主を持つのだ。ああ、純粹でしみ一つない新たな世界。必ずやわたしの栄光の中でよみがえる。ああ、シオンの山よ。もはや沈黙するな。わたしは勝利の内に帰ってきた。被造物の中から、わたしは全地を調べる。地上で、人間たちは新たな生活を始め、新たな希望を得た。ああ、わが民よ。どうして、あなたがたがわたしの光の中で復活しないでいられようか。どうして、あなたがたがわたしの導きの下、喜びに跳ね上がらないことがあるか。地は歓喜の声を上げ、水は楽しい笑い声を響かせる。ああ、よみがえったイスラエルよ。わたしの定めをどうして誇りに感じないことがあるか。誰が泣いたのか。誰がうめき声を上げたのか。かつてのイスラエルは、もうない。そして、今日のイスラエルは立ち上がった、塔のようにまっすぐに、この世に、すべての人間の心の中に立ち上がった。今日のイスラエルは必ずや、わが民を通じて存在の源を得る。ああ、忌まわしいエジプトよ。まことに、もうわたしに敵対はしないだろう。どうしてわたしの憐れみを利用してわたしの刑罰を免れようとするのか。どうしてわたしの刑罰の内に存在できないのか。わたしの愛する者はみな、必ず永遠に生き、わたしに敵対する者はみな、必ず永遠に刑罰を受ける。わたしはねたみ深い神だから、わたしは人間の行いを軽々しく赦さない。わたしは地上すべてを観察し、世界の東に義と威厳、怒り、刑罰をもって現れ、すべての人間たちにわたしを現す。

1992年3月29日

第二十七章

人間の行いがわたしの心を動かしたことは一度もないし、貴重だという印象をわたしに与えたこともない。人の目には、わたしがいつもその人に対して厳格で、いつも権威を振るっているかのように映っている。人のあらゆる行為のうち、わたしのためになされるものはほとんどないし、わたしの目の前で確固たるものもほとんどない。結局のところ、人に関するすべてのものは、わたしの前で音一つなく崩れ落ち、その後初めて、わたしは自分の行為を明らかにし、誰もが自分の失敗を通してわたしを知るようになる。人間の本性は変わらないままである。その心の中にはわたしの旨と一致せず、わたしが必要とするものではない。わたしがもっとも嫌うのは人の頑固さと常習的な悪行であるが、人間はどのような力に突き動かされてわたしのことを知らずにい続け、いつもわたしと距離を置き、わたしの前で決してわたしの旨に従って行動せず、むしろ

陰でわたしに反対しているのか。これが人の忠誠なのか。これがわたしに対する人の愛なのか。悔い改めて生まれ変わることができないのはなぜなのか。なぜ人々は泥のない場所に住もうとせず、いつまでも沼地に住もうとするのか。わたしが彼らを虐待してきたということなのだろうか。彼らを誤った方向に導いてきたということなのだろうか。彼らを地獄に導いているということなのだろうか。誰もが「地獄」で生きようとしている。光が来るとたちまち目が見えなくなる。彼らの中のあらゆるものが地獄から来ているからである。しかし、人々はこのことに気づかず、これら「地獄の祝福」を享受するばかりで、宝物のように胸に抱きしめさえする。わたしがそれらを奪い取り、自分を「根無し草」のまま取り残してしまうのを恐れているのだ。人々はわたしを恐れ、だからこそ、わたしが地上にやって来ると、わたしから距離を置き、わたしに近づくことを嫌う。「自分が面倒に巻き込まれる」ことを好まず、むしろ家族の調和を維持し、それによって「この世の幸せ」を享受することを望むからだ。しかしわたしは、人類が自分たちの思い通りに行動するのを許すわけにはいかない。人の家族を破壊することこそ、わたしがここすべきことだからである。わたしが到着した瞬間から、人の家庭に平安がなくなる。わたしは、人の家族は言うまでもなく、すべての国家を粉々に打ち砕くつもりである。誰がわたしの支配から逃れられよう。祝福を受ける人々が、気が進まないからといって逃れることなどできようか。そもそも刑罰に苦しむ人々が、怖がっているおかげでわたしの同情を得られることなどあり得ようか。人々はわたしのあらゆる言葉の中にわたしの旨と行為を見たが、自分自身の思考のもつれから誰が抜け出せようか。一体誰がわたしの言葉の中から、あるいはわたしの言葉のないところから抜け出す道を見つけられようか。

人はわたしの暖かさを経験し、心からわたしに仕え、心からわたしの前で服従し、わたしの前でわたしのためにすべてを行ってきた。しかしそれは、今日の人々には成し遂げられないことである。あたかも飢えた狼に連れ去られたかのように霊の中で泣きわめくばかりで、どうすることもできずにただわたしを見て、絶えず泣き叫ぶことしかできない。だが結局、その苦境から逃れられないのである。過去の人々が、わたしの親切に愛をもって報いると、わたしの前で約束し、わたしの前で天地に誓ったことを思い出す。彼らはわたしの前で悲しみも露わに涙を流し、その泣き声は悲痛で聞くに耐えないものであった。わたしはその決意のゆえに、しばしば人々に助けを与えた。人々は幾度となくわたしの前に出てわたしに服従したが、その素晴らしい態度は忘れがたい。人々は幾度となくわたしを愛したが、その忠誠心は揺るぎなく、誠実さは称賛に値した。人々

は幾度となく、自分の命をも犠牲にするほどわたしを愛し、我が身以上にわたしを愛したが、わたしはその誠実さを見て彼らの愛を受け入れた。人々は幾度となくわたしの前で自分を捧げ、わたしのために死を前にしても意に介さなかった。わたしは彼らの不安を和らげ、彼らの表情を注意深く見つめた。わたしが彼らを大切な宝物のように愛したことは無数にあったし、わたし自身の敵のように憎んだことも無数にあった。それにもかかわらず、人はわたしの心に何があるかを推し測れないままである。人々が悲しんでいるとき、わたしはそばに来て彼らを慰め、彼らが弱い時にはそばに来て協力する。彼らが迷ったときには方向を示す。彼らが泣いているときには涙を拭き取る。しかし、わたしが悲しんでいるとき、誰が心からわたしを慰められるだろう。わたしがひどく心配しているとき、誰がわたしの気持ちを察してくれるだろう。わたしが悲嘆に暮れているとき、誰がわたしの心の傷を癒せるだろう。わたしが誰かを必要とするとき、誰がわたしに協力することを申し出るだろう。人々のわたしに対するかつての態度はいまや失われ、決して戻らないということなのか。それが何一つ彼らの記憶に残っていないのはなぜなのか。これらのことをすべて忘れてしまったのはどういうことか。それはひとえに、人類がその敵によって墮落させられたからではないのか。

天使たちがわたしを讃えて音楽を奏するとき、人に対するわたしの同情がかき立てられずにはいられない。わたしの心は即座に悲しみに満たされ、わたしからこのつらい感情を取り除くことはできない。人から引き離され、その後再会する喜びと悲しみの中で、わたしたちは感情を交わすことができない。上にある天と、下にある地とに引き離され、人とわたしが会えることは滅多にない。過去の感情に対する懐古の情から誰が抜け出せよう。過去の思い出にふけるのを誰がやめられよう。過去の感慨が続くことを誰が望まないだろう。わたしの再臨を誰が切望しないだろう。わたしと人の再会を誰が待ち焦がれないだろう。わたしの心は深く悩み、人の霊には深い憂いがある。霊においては似ていても、わたしたちはあまり一緒にはいられないし、頻繁に会うこともできない。だから、人類の人生はどれも悲しみに満ち、活力に欠けている。人がいつもわたしを渴望してきたからである。人間はあたかも天から叩き出された物体のようである。彼らは地上でわたしの名を呼び、地上からわたしを見上げる。しかし、飢えた狼の口からいかにして逃れることができようか。狼の脅しや試みからいかにして逃れることができようか。わたしの計画の采配に従うがゆえに、人間はどうして自分を犠牲にしないでいられようか。彼らが大声で懇願するとき、わたしは彼らから顔をそむけ、もはや見つめることに耐えられない。しかし、どうして彼らの涙ながらの叫びを聞かずにいられようか。

わたしは人間界の不正義を正す。わたしは世界中において自らの手で働きを行い、サタンがわたしの民に危害を加えるのを禁じ、敵が好き放題に行うのを禁じる。わたしは地上の王になり、玉座をそこに移し、わたしの敵をすべて地面に倒し、わたしの前でその罪を自白させる。わたしの悲しみに怒りが混じり合い、わたしは全宇宙を踏みつけて平らにし、誰も見逃さず、敵の心に恐怖を抱かせる。わたしは全世界を廃墟とし、敵をその廃墟に落とし入れるので、これ以降敵が人類を墮落させることはない。わたしの計画はすでに決定しており、誰も、何者であろうとも、それを変えてはならない。わたしが全宇宙の上方を堂々と荘厳に歩き回るとき、全人類は新しくなり、すべては復活する。もはや人が嘆くことはなく、助けを求めてわたしに叫ぶこともなくなる。そのとき、わたしの心は大いに喜び、人々はわたしを祝うために戻って来る。そして全宇宙が上から下まで喜びに湧きかえる……

今日、世界の国々で、わたしは成し遂げるべく着手した働きを行っている。わたしは人類の間で動き回り、わたしの計画にある働きを残らず行っており、全人類はわたしの旨に従って各国を解体している。地上の人々は自分自身の終着点にしっかり注意を向けている。その日が実際に近づきつつあり、天使たちがラッパを吹き鳴らしているからである。これ以上遅れることはなく、すべての被造物がすぐに歓喜して踊り始める。誰がわたしの日を自分の意志で引き延ばせるのか。地球の人間だろうか。それとも空の星だろうか。それとも天使だろうか。わたしがイスラエルの民の救いを始めようと声を発するとき、わたしの日は全人類の上にのしかかる。すべての人はイスラエルが戻るのを恐れる。イスラエルが戻る時、それはわたしの栄光の日であり、すべてが変化し、新しくされる日でもある。義なる裁きがまもなく全宇宙に差し迫るにつれて、すべての人は臆病になって怯える。人間界では誰も義について聞いたことがないからである。義の太陽が現れると、まず東方が、次に全宇宙が照らされ、すべての人に光が届く。人が本当にわたしの義を実行することができれば、恐れるものなどあるだろうか。わたしの民はみなわたしの日の到来を待っている。みなその日を心待ちにしている。彼らは、わたしが義の太陽としての役割に従って、すべての人類に報いをもたらし、人類の終着点を采配するのを待っている。わたしの国は全宇宙の上で形をなしつつあり、わたしの玉座は何億もの人々の心を統治する。天使たちの助けを借りて、わたしの偉業はまもなく実現される。わたしの子らとわたしの民は、みなわたしが戻るのを待ち切れず、自分たちが二度と切り離されないよう、わたしと再会することを切望している。わたしの国の多くの民が、わたしが自分たちと共にいるのを祝い喜んで、互いに駆け寄らずにはいられま

い。これは代価を支払う必要のない再会なのだろうか。わたしはすべての人の目に尊敬すべき者として映り、すべての人の言葉にのぼる。そのうえ、わたしは戻るとき、すべての敵の力を征服する。時は来た。わたしは自分の働きを始動させ、人々の王として支配する。わたしは今まさに戻る。そしてわたしはまもなく立ち去る。これはすべての人が望んでいること、彼らが希望することである。わたしは全人類にわたしの日の到来を見させよう。すると彼らはみな、わたしの日の到来を喜びのうちに歓迎するはずだ。

1992年4月2日

第二十八章

わたしがシオンから来た時、あらゆるものがわたしを待っていた。そして、わたしがシオンに戻る時、すべての人間に迎えられた。わたしが往来する時、けっして敵意あるものに歩みを妨げられることがない。したがって、わたしの働きは滞りなく進んだ。今日、わたしがすべての被造物の間に来ると、すべてのものが沈黙して迎える。わたしが再び去り、彼らへの助けをやめてしまうのではないかと、深く案じているのだ。すべてのものはわたしの導きに従い、みな、わたしの手の指し示す方向を見つめる。わたしの口から出る言葉は、多くの被造物を完全にし、多くの不従順の子らを罰した。だから、人間はみな、わたしの言葉に注目し、わたしの口から出る言葉に注意深く耳を傾け、このよい機会を逃すことを深く恐れている。このために、わたしは話し続けたのだ。わたしの働きがより速やかに行われるようにし、喜ばしい状態がより早く地上に実現し、地の荒廃した眺めが改善されるようにと。わたしが大空を見る時、再び全人類に目を向ける。全地は直ちに生命に満たされ、塵はもはや空中に浮いていない。そして、地面はもはや泥に覆われていない。わたしの目は直ちに光を放ち、地の人々はみなわたしを仰ぎ見、わたしの内に逃れる。わたしの家にいる人みなを含め、今日の世の人々の中で、誰が本当にわたしの内に保護を求めているのか。誰が、わたしの支払ったものの代価として、心を差し出しているのか。かつて誰が、わたしの家に安らかに住んだのか。かつて誰が、ほんとうに自らをわたしに差し出したのか。わたしが人間に何かを要求すると、相手はすぐさま「小さな倉庫」を閉ざす。わたしが人間に与えると、相手はすぐさま、わたしの富をこっそり得ようと、口を開ける。そして、その心は、わたしが反撃するのではないかと深く恐れて、震える。だから、人間の口は半分開き、半分閉ざされているのだ。そこで、わたしの与える富を真に享受することができない。わたしは安易に人間を罪に定めない。しかし、人間はいつでもわたしの手を取り、憐れみをかけてくれと願

う。人間が願ったときにだけ、わたしは再び「憐れみ」をかける。そして、わたしの口から最も厳しい言葉を与えるので、人は直ちに恥じ入り、直接わたしの「憐れみ」を受け取る事ができず、別の人に渡してもらうようにする。人間が完全にわたしの言葉を把握すると、わたしの願いどおりの成長を遂げ、その嘆願は実を結び、むなしく無益なものではなくなる。わたしは人類の心からの、見せかけではない嘆願を祝福する。

わたしは長い間働き、話してきた。しかし、わたしが今日語っているような言葉を人間はかつて聞いたことがなかったし、また、わたしの威厳と裁きに触れたこともなかった。過去の世のいくらかの人々は、わたしについての伝説を聞いたことはあるが、わたしがどれほど豊かであるかを真に知った者は、誰もいない。今日の人々はわたしの口から言葉を聞くが、どれほどの奥義がわたしの口にあるか、知らないままである。そこで、豊穡の角のような無限の豊かさだと考える。すべての人は、わたしの口から何かを得たいと願う。国家機密であろうと、天の奥義であろうと、霊的世界の動きであろうと、あるいは、人類の終着点であろうと、すべての人は、そうしたものを得たいと願う。そこで、わたしが人々を集めて、「物語」をすると、人々はわたしの道を聞こうとして、「病の床」からすぐさま起き上がる。人間には、あまりに欠点が多い。人間はただ「栄養を補うもの」が必要なだけでなく、それよりも、「精神的支え」や「霊的供給」も必要とする。人間にはみな、そうしたものが欠けているのだ。それがすべての人間の「病」なのだ。わたしは、よりよい効果が得られるよう、みなが健康を取り戻すよう、わたしの治療法により、人々が正常な状態に戻れるよう、人間の病の治療法を与える。あなたがたは、ほんとうに赤い大きな竜を憎んでいるのか。ほんとうに、心から竜を憎んでいるのか。なぜわたしは、こんなに何度も尋ねているのか。なぜわたしは、この問を何度も繰り返しているのか。あなたがたは、赤い大きな竜について、どんな印象をもっているのか。それはほんとうに除かれたのか。ほんとうに、竜を自分の父とは考えていないのか。すべての人は、わたしの問の中にわたしの意図を理解しなければならない。これは、人々を怒らせようというのではなく、人々の間に反乱を起こさせようというのでもない。また、人間に自分で解決法を見つけさせようというのでもない。すべての人が赤い大きな竜の縛めから自由になれるようにと、していることなのだ。しかし、誰も心配することはない。すべてはわたしの言葉で成し遂げられる。誰一人、手を出すことはできない。また、誰一人、わたしのしている働きをすることはできない。わたしは全地の空気をきれいに拭い、地上にいる悪魔たちの痕跡を一掃しよう。わたしはすでに始めている。そして、わたしの刑罰の働きの第一段階を赤い大きな竜のすみかで始める。そ

うして、わたしの刑罰が全宇宙に及ぶと、赤い大きな竜とあらゆる不浄な霊が無力で、わたしの刑罰を免れないことがわかる。わたしは全地を調べるのだから。地上でのわたしの働きが完了すると、つまり、裁きの時代が終わると、わたしは正式に赤い大きな竜を刑罰する。わが民は、わたしが赤い大きな竜に与える義の刑罰を見る。人々は、わたしの義のゆえにたたえをささげ、わたしの義のゆえに、永遠にわたしの聖なる名を称える。そこで、あなたがたは、正式に本分を果たし、全地で正式にわたしをたたえる。永遠に絶えることなく。

裁きの時代のさなか、わたしは働きを終えることを急がない。そうではなく、刑罰の時代の証拠を折り込み、その証拠が、わが民みなに見られるようにする。すると、そこからすばらしい実が結ばれるだろう。この証拠は、わたしが赤い大きな竜を刑罰する手段であり、わたしは、わが民がその目で見えるようにする。彼らがわたしの性質をよりよく知るようにするためである。わが民がわたしを享受する時は、赤い大きな竜が刑罰される時である。赤い大きな竜の民が立ち上がり、竜に逆らい背くようにするのがわたしの計画であり、これが、わが民を完全にするわたしの方法である。それは、わが民すべてが、いのちにおいて成長する、すばらしい機会である。明るい月が昇ると、直ちに夜の静寂が破られる。月は欠けているが、人間は意気高く、月光の下で、光に照らされた美しい風景を眺め、穏やかに座っている。人間は自分の感情を表現できない。まるで、過去のことを振り返るようだ。未来を見たがっているようだ。現在を楽しんでいるようだ。人間の顔に笑みが浮かぶ。そして、心地よい空気の中、爽やかな香りが漂う。微風が起こり、人間は豊かな芳香を感じ、それに酔い、醒めることができないでいるようだ。まさにその時、わたしが自ら人間の間にやって来るのだ。人間はさらに強い芳香を感じ、すべての人は芳香の中で生きる。わたしは人間と平和的關係にあり、人間はわたしと調和の中で生きる。もはやわたしを別の目で見ることはいない。もはやわたしは人間の欠陥に対する刈り込みをしない。もはや人間の顔に悲しみはない。また、もはや全人類は死に脅かされない。今日、わたしは人間と共に刑罰の時代に進み、人間と並んで進む。わたしは、わたしの働きをしている。つまり、わたしの杖を人間の中で振るい、それは人間の中の反抗的なものを打つのだ。人間の目には、わたしの杖に特別な力があるように見える。それは、わたしの敵である者たちすべてを打ち、容易に彼らを逃さない。わたしに敵対する者たちの中で、杖はその本来の目的どおりの役目を果たす。わたしの手の中にあるものは、どれもわたしの目的にしたがってすべきことをし、けっしてわたしの意にそむいたり、その本質を変えたりしない。その結果、水は轟き、山々は倒

れ、大河はばらばらになり、人間は気まぐれになり、太陽は薄暗くなり、月は暗くなり、人間はもはや心安らかに生きられない。もはや地に穏やかな時はない。天はけっして再び穏やかで静かではなく、二度と再び耐えることをしない。すべてのものは新たになり、本来の姿を取り戻す。地のすべての家は引き裂かれ、地のすべての国は散り散りになる。夫と妻が再会することはなく、母と息子も二度と会うことはなく、父と娘が再会することも二度とない。かつて地にあったものは、みなわたしが砕く。わたしは人々に感情を解き放つ機会を与えない。わたしには感情がないからであり、人々の感情を極度に嫌うようになったからだ。人々の間に感情があるから、わたしは横に押しのけられ、それでわたしは彼らの目に「よそ者」になった。人々の間に感情があるから、わたしは忘れられた。人間に感情があるから、人間はその機会をつかんで「良心」を拾う。人間に感情があるから、いつもわたしの刑罰にうんざりとしている。人間に感情があるから、人間はわたしが不公平で不正だと言い、わたしが人間の気持ちにお構いなく物事を進めると言うのだ。わたしも地上に身内がいるのか。誰がわたしのよう、食べ物や眠りのことを考えずにわたしの経営（救いの）計画全部のために日夜働いてきたのか。どうして人間が神に比肩しよう。どうして人間が神に味方することができるのか。どうして創造者である神が、被造物である人間と同類であり得よう。どうしてわたしは常に人間と共に地上に生き、行動できるのか。誰がわたしの心を案じるのか。それは人間の祈りだろうか。わたしはかつて人間と共に歩くことを承知した――そして、今日まで、人間はわたしの世話と守りを受けてきた。しかし、人間がわたしの世話から離れることができる日はいつか来るのだろうか。人間はけっしてわたしの心を案じたことはないが、誰が光のない世界で生きていけるのか。わたしの祝福があるからこそ、人間は今日まで生きてきたのだ。

1992年4月4日

第二十九章

万物が蘇った日、わたしは人間のあいだに来て、人間とともにすばらしい日夜を過ごしてきた。そのとき初めて、人間はわたしの親しみやすさを少しばかり感じる。そして交流がより頻繁になる中、わたしが所有するものとわたしそのものをいくらか知るようになり、その結果、わたしについて多少の認識を得る。すべての人のあいだで、わたしは頭を上げて見守り、彼らはみなわたしを見る。しかし、世界に災いが降りかかると、彼らはたちまち不安になり、彼らの心からわたしの姿が消える。災いの到来のせいで恐

怖に駆られた彼らは、わたしの言いつけを聞こうとしない。わたしは何年も人間のあいだで過ごしたが、人間はいつもわたしに気づかず、決してわたしを認識しなかった。今日、わたしは自分の口で人間にこのことを話し、すべての人がわたしの前に来て、わたしから何かを受け取るようにさせるが、それでも彼らはわたしから距離を置くので、わたしを認識せずにいる。わたしの歩みが宇宙をまたぎ、地の果てへと至るとき、人間は自身を省みるようになり、すべての人がわたしのもとに来て、ひれ伏してわたしを崇める。これこそ、わたしが栄光を得る日、わたしが再臨する日、そしてまた、わたしが立ち去る日でもある。今、わたしは全人類のあいだで自身の働きにとりかかり、全宇宙でわたしの経営計画の仕上げを正式に開始している。この瞬間から後、注意深くない者は無慈悲な刑罰の中に落ちるのを免れず、これはいつでも起こり得る。わたしが無情だからではなく、むしろそれはわたしの経営計画の一段階であり、すべてはわたしの計画の各段階に沿って進められなければならない。そして誰一人、これを変えることができない。わたしが正式に働きを始めると、すべての人はわたしの動きに合わせて動く。そのようにして、全宇宙の人々はわたしと歩むことに没頭し、全宇宙に「歓声」が響き渡り、人間はわたしと共に勢いよく前進する。その結果、赤い大きな竜はうろたえ、狂乱し、わたしの働きに仕え、望まずとも、自分のしたいことができず、わたしの支配に従うしかなくなる。わたしの計画のすべてにおいて、赤い大きな竜はわたしの引き立て役、わたしの敵、そしてまた、わたしのしもべである。このように、わたしは竜への「要求」を緩めたことが一度もない。したがって、肉におけるわたしの働きの最終段階は、竜の家の中で完了するのである。このようにすれば、赤い大きな竜はよりよくわたしに仕えることができ、それによって、わたしは竜に打ち勝ち、計画を完了するのである。わたしが働く中、すべての天使がわたしとともに決戦に臨み、最終段階においてわたしの望みを成就させようと決意する。それにより、地上の人々は天使たちと同じくわたしの前で服従し、わたしに逆らおうという気持ちを一切持たず、わたしに逆らうことを何もしないようになる。それが全宇宙におけるわたしの働きの動態なのだ。

わたしが人間のもとに来る目的と意味は、全人類を救い、全人類をわたしの家に連れ帰り、天と地を再び一つにし、天地のあいだで人間に「合図」を伝えさせることである。それが人間本来の役目だからである。人類を創ったとき、わたしは人類のためにすべてを準備しており、後に、人類がわたしの要求に応じて、わたしの与える豊かさを受け取れるようにした。だからこそ、わたしの導きのもと、全人類が今日に至ったのだとわたしは言う。そして、これはすべてわたしの計画である。全人類のうち、無数の人がわ

わたしの愛の加護の下で存在し、無数の人がわたしの憎しみの刑罰の下で生きている。人はみなわたしに祈るが、それでも現状を変えられずにいる。ひとたび希望を失うと、自然のなすがままとなり、わたしに逆らうのをやめる。人間にはそれしかできないからである。人間の生活状況について言えば、人間はいまだ真の人生を見出しておらず、世の不公平、荒廃、惨めな状態を見通していない。そのため、災いの到来がなければ、大半の人は依然として母なる自然を信奉し、「人生」の味わいにひたっていることだろう。これが世の現実ではないのか。これが、わたしが人間に向けて語る救いの声ではないのか。人類の誰一人として、真にわたしを愛したことがないのはなぜか。人間が、刑罰と試練のさなかにあるときだけわたしを愛し、わたしの加護の下にあるときは、誰もわたしを愛さないのはなぜか。わたしは何度も人類に刑罰を与えた。人間はそれを見ても無視し、その時にそれを調べることも、深く考えることもしない。そのため、人間には無慈悲な裁きだけが下る。これはわたしの働きの方法の一つに過ぎないが、それでも人間を変え、わたしを愛するようにさせるためのものなのだ。

わたしは神の国を支配し、さらに全宇宙を支配している。わたしは神の国の王であり、全宇宙の頭でもある。今から後、わたしは選民でない者をすべて集め、異邦人のあいだで働きを始める。そして、わたしの行政命令を全宇宙に告げ、わたしの働きの次なる段階を無事開始できるようにする。わたしは刑罰を用いて異邦人のあいだにわたしの働きを広める。つまり、異邦人である者たちには力を用いるということだ。当然、この働きは、選民たちのあいだでの働きと同時に進められる。わたしの民が地上で支配し、力を振るう時はまた、地上のすべての人が征服される日であり、そしてさらに、わたしが憩うときでもある。そのとき初めて、わたしは征服された全員の前に姿を現わす。わたしは聖なる国で姿を現わし、汚れの地では姿を隠す。征服され、わたしの前で従順になった者はみな、その目でわたしの顔を見ることができ、その耳でわたしの声を聞くことができる。これが終わりの日に生まれた者の恵み、わたしが予め定めた恵みであり、いかなる人間にも変えることができない。今日、わたしは将来の働きのために、このように働きを行なっている。わたしの働きはすべて相互に関連していて、そのすべてに呼びかけと反応がある。どの段階も突然止まったことはなく、またどの段階も他のものと独立して実行されたことはない。そうではないか。過去の働きは、今日の働きの基礎ではないのか。過去の言葉は、今日の言葉の先触れではないのか。過去の歩みは、今日の歩みの起源ではないのか。わたしが正式に巻物を開くとき、全宇宙の人々は罰せられ、世界中の人々が試練を受ける。それがわたしの働きのクライマックスである。すべての人

が光のない場所で暮らし、またすべての人が環境の脅威にさらされながら生きる。つまりこれは、創世から現在に至るまで、人間が経験したことのない生活であり、すべての時代を通じて、こうした生活を「享受」した者は誰一人いない。だからわたしは、かつて行なわれたことのない働きをしたと言う。これが物事の実際の状況であり、その内なる意味である。わたしの日が全人類に近づいており、それは遠くに見えるものでなく、人間の眼前にあるのだから、誰が結果として恐れずにいられよう。そして、誰がこれを喜ばずにいられよう。汚れたバビロンの都市はついに終わりを迎える。人間は真新しい世界に再び出会い、天と地は変わり、新たになった。

わたしが万国万民の前に現われるとき、白い雲が空で激しく渦を巻き、わたしを護る。また、地の鳥たちもわたしのために喜んで歌い踊り、地上の空気を生き生きとさせる。そうして、地上の万物に活気を与え、もはや「徐々に沈み込む」ことなく、代わりに活力のある雰囲気の中で生きられるようにする。わたしが雲の中にいると、人間はわたしの顔と目をうっすら認め、そのとき少しの恐怖を感じる。その昔、人間は伝説の中でわたしに関する歴史的記録を聞いたことがあり、その結果、わたしについて半信半疑である。わたしがどこにいるか、わたしの顔がどれほど大きいのか、人間にはわからない。それは海ほど広いのか、それとも、緑の草原のように果てしないのか。誰一人、そうしたことを知らない。今日、人間が雲の中にあるわたしの顔を見て初めて、伝説のわたしは実在すると感じ、そこでわたしにもう少し好意を抱くようになる。わたしの業があればこそ、わたしに対する人間の崇敬は少しだけ増す。しかし、人間はいまだわたしを知らず、雲の中にわたしの一部を見ているだけである。その後、わたしは両腕を伸ばし、人間に見せる。人間は驚き、わたしの手で打ち倒されるのではないかと深く恐れ、口を手で塞ぐ。そこで、わたしへの崇敬の念に少しばかりの畏れが加わる。よそ見をしている隙にわたしに打ち倒されるのではないかと深く恐れ、人間はわたしの一挙一動から目を離さずにいる。しかし、人間に見られているからといって、わたしはそれに縛られず、手を動かして働きを続ける。わたしが行なうすべての業の中でのみ、人間はわたしをいくぶん好意的に見、そうして徐々にわたしの前に来て、わたしと交流するようになる。わたしのすべてが人間に明かされると、人間はわたしの顔を見、それ以後、わたしはもはや人間から自分を隠したり、ぼかしたりすることはない。全宇宙で、わたしは公然と万民の前に現われ、血と肉でできた者はみな、わたしの業を残らず見る。霊に属する者は、必ずやわたしの家で安らかに暮らし、必ずやわたしとともにすばらしい祝福を享受する。わたしが思いやる者たちは、必ずや刑罰を免れ、間違いなく霊の痛みと肉の苦

しみを免れる。わたしは万民の前に公然と現われ、支配し、力を振るう。そうして、死臭が全宇宙を満たすことはなくなり、代わってわたしのさわやかな香気が全世界に広まる。わたしの日が近づいているので、人間は目覚めつつあり、地上のすべてが整然とし、地の生存の日々が終わった。わたしが到着したのだから。

1992年4月6日

第三十章

人間のあいだにいながらにして、かつてわたしは人間の不服従と弱点をまとめあげ、それゆえ人間の弱点を理解し、人間の不服従に精通するようになった。人間のもとに来る前には、そのずっと以前より人間のあいだにある喜び、悲しみを理解するようになっていた——このため、わたしには人間にはできないことができるのであり、人間には言えないことが言えるのであり、しかもこれらを容易に行なう。これがわたしと人間の違いではないであろうか。そして、これは明らかな違いではないであろうか。生身の人々がわたしの働きを成し遂げ得ることなどありえるであろうか。わたしが被造物たちと同種に属することなどありえるであろうか。人々はわたしを同様の部類にふりわけてきた——そしてこれは、人々がわたしのことを知らないからではないのか。人間のあいだに高くそびえ立つかわりに、なぜわたしは謙虚に振舞わなければならないのであろうか。なぜ人類はわたしを拒絶し続けるのか。なぜ人類はわたしの名を宣言することができないのか。わたしの心には大いなる悲しみがあるが、どうして人々が知ることができよう。どうして見る事ができよう。わたしに関わることを自分たちの生活における最重要事項として取り扱わないことで、人々はまるで睡眠薬を飲んだところのようにぼんやりとし、混乱してしまった。わたしが彼らに呼びかけても、ただ夢見続けるだけで、これまでわたしの行いに気づいた者は誰もいない。今日、ほとんどの人々がいまだに眠り込んでいる。神の国の賛歌が聞こえるときだけ、人々はその眠い目をあけ、心に哀愁を少し感じるのである。わたしの鞭が人類を打ち破るときでさえ、わずかに注意を払うだけでまるで自分たちの運命は海の中の砂ほどに無価値であるかのようである。ほとんどの人々は、なんらかの気づきがあるにしても、わたしの歩みがどこまで進んだのかは知らない——これは彼らがわたしの心を理解しようと努めないからであり、そのためサタンの束縛から自らを解放することができずにいるからである。わたしはあらゆるものの上を進み、あらゆるものに囲まれて暮らし、そして同時にあらゆる人々の心の中の中央舞台に立つ。このため人々はわたしを異なるものとみなし、わたしを非凡であるとか、さ

もなければ到底理解できないと考える——その結果として、人々のわたしへの信頼は日に日に強くなる。かつてわたしは第三の天に横たわり、宇宙におけるすべての人々とあらゆるものを眺めた。わたしが眠るとき、人々はわたしの休息を妨げることをひどく恐れて静かになる。わたしが起きると、人々は特別にわたしに向けて喜びをもたらす仕事をしているかのように突然元気になる。これが地上の人々のわたしへの態度ではないのか。今日の人々の中に天のわたしと地上のわたしをひとつとして見ている者がいるであろうか。天のわたしを崇めない者がいるであろうか。地上のわたしを見下さない者がいるであろうか。なぜ人間はいつもわたしをばらばらにするのであろうか。なぜ人間はいつも二つの異なる態度をわたしにとるのであろうか。地上で肉となった神は、天ですべてを支配する神ではないのか。天のわたしは今は地上にいるのではないのか。なぜ人々はわたしを目にしながらも、わたしを知らないのであろうか。なぜ天と地にはこれほどの大いなる距離があるのであろうか。これらのことは人間が深く掘り下げるのに値しない事柄であろうか。

わたしが働きを行なうとき、そしてわたしが声を出して話すあいだ、人々はいつもそこに「香料」を追加したがる。まるで自分たちの臭覚の方がわたしの臭覚より敏感であるかのように、まるでもっと強い芳香を好むかのように、まるでわたしが人間に必要なものに気づいていないために、人間を「煩わせて」わたしの働きを「補って」もらわなければならないかのように。わざと人々の積極性をくじこうというのではないが、わたしを知っているということを基盤として自分たちを浄化することをわたしは人々に要求する。不足があまりに大きいことから、自分たちの欠乏を補うためにさらに努力してわたしの心を満足させるようにしてはどうであろうか。かつて人々は自分たちの観念においてわたしを知っていたが、これにはまったく気づいていなかった。そのため彼らの慈しみ方は、まるで砂を黄金として扱うかのごとくであった。わたしが彼らにこれを気づかせると、彼らはその一部分を取り除いただけで、銀や金でできた物とともになくなった部分を入れ替える代わりに、手元に残った部分を享有し続けてきた——その結果、わたしの面前では彼らはつねに謙虚で忍耐強いのである。彼らはあまりに多くの観念をもっているため、わたしと融和することができない。そのためわたしは人間の所有しているもの、人間であるもののすべてを奪い、遠くへ投げやることにしたのである。すべてのものがわたしとともに生き、もはやわたしから離れることがないようにするためである。わたしの働きのせいで、人間はわたしの意図を理解しないのである。ある人々はわたしが同じ働きをもう一度を終結させ、人々を地獄へ投げ込むであろうと考える。また

ある人々はわたしが新しい話し方を開始するであろうと考えており、ほとんどの人々が恐怖で震えている。わたしが働きを終え彼らを行く先のない状態に放置することを、わたしが彼らを再び見捨てることを強烈に恐れているのである。人々はいつも古い観念を用いてわたしの新しい働きを押し量ろうとする。人々はわたしの働き方を把握していないとわたしは言った——はたして今回は彼らはまともな結果を残せるであろうか。人々の古い観念はわたしの働きを妨害する武器ではないであろうか。わたしが人々に話すとき、わたしの目が彼らの上にとどまるのをひどく恐れて、いつも彼らはわたしのまなざしを避ける。そのため彼らはわたしから検査を受けているかのように頭を垂れる——これは彼らの観念が原因ではないのでであろうか。わたしは今日まで謙遜してきたのに、なぜ誰も気づいていないのでであろうか。わたしは人間に額ずかなければならないのでであろうか。わたしは天から地上に来了。わたしは高みから秘密の場所に降り立ち、人間のあいだでわたしの所有しているもの、わたしであるもののすべてを人間に顕した。わたしの言葉は誠実かつ真剣であり、忍耐強く優しい——しかし、わたしの所有しているもの、わたしであるものを見たことのある者がいるのでであろうか。わたしは未だに人間からは隠されているのか。わたしが人間と出会うのはなぜこのように困難なのでであろうか。人々が仕事で忙しすぎるからであろうか。わたしが自分の働きを怠っているから、そして人々は皆成功を追及することに没頭しているからであろうか。

人間の思考においては、神は神であり、簡単に関わり合いをもたないものであり、一方、人間は人間であり、容易に自堕落になってはならないのである——しかし、人々の行いはいまだにわたしの前に持ってこられるほどのものではない。これはわたしの要求が厳しすぎるということであろうか。人間は弱すぎるということであろうか。なぜ人々はわたしが要求する基準をいつも遠くからながめるのでであろうか。これらは本当に人間には達成できないものなのでであろうか。わたしの要求は人々の「体質」に基づいて計算されているので、人間の霊的背丈を越えたことがない——それにもかかわらず、人々はわたしが要求する基準を達成できないままである。数え切れないほど何度も、わたしは人間に見放され、数え切れないほど何度も人々はわたしを嘲るような目で見つめた。それはまるでわたしの体がとげで覆われていて、人々にとっては忌まわしいものであるかのように。このように人々はわたしを嫌い、わたしを無価値だと考える。このように人間はわたしをあちこちに押しやるのである。数え切れないほど何度も人々はわたしを安値で持ち帰り、数え切れないほど何度も、わたしを高値で売りつけた。そしてこのために今日わたしは現在の状況にいるのである。まるで人々がいまだにわたしに向けて陰謀

を企てているかのようである。ほとんどの人がいまだにわたしを売って何億ドルもの利益をあげたがっている。人間はわたしを慈しんだことなどないのだから。まるでわたしは人々のあいだの手段か、彼らのあいだの戦闘に用いられる核兵器か、彼らのあいで調印された協定にでもなったかのようである——その結果、わたしはつまるところ人間の心においてまったく価値のないもの、これといって有用でもない日用品なのである。だからといって、わたしは人間を責めはしない。わたしがするのは人間を救うことだけであり、わたしは常に人間に憐れみ深く接してきたのである。

人々は、わたしが彼らを地獄へ投げ入れれば、わたしは安楽を感じるのであろうと考えている。まるでわたしが特別に地獄との取引をしているかのよう、まるでわたしが人間を売ることを専門とする何かの部署であるかのよう、まるでわたしが人間を詐欺する専門家で、ひとたび人間を手中に入れたならば高値で売りつけるつもりであるかのよう。人々は口にしてこそ言わないが、心の中ではこのように信じている。彼らは皆わたしを愛してはいるが、秘密裏に愛しているのである。わたしはこれほど大きな代償を払い、これほど費やしたのに、その見返りとして人々からはこんなちっぽけな愛しか得られないのか。人々は詐欺師であり、わたしはいつもだまされ役を演じる。まるでわたしが純真過ぎるかのようである。人々はひとたびこの弱点に気づけば、わたしをだまし続ける。わたしの口から発せられる言葉は、人間を死に追いやるためや、でまかせに人々に烙印を押すことを意図していない。わたしの言葉は人間の現実を語っているのである。ことによると、わたしの言葉の一部は「行き過ぎる」かもしれない、その場合はわたしには人々の許しを「請う」ことしかできない。わたしは人間の言語に関しては「熟練して」いないので、わたしの言うことのほとんどは人々の要求を満たすことはできない。ことによると、わたしの言葉の一部は人々の心突き刺すかもしれない、わたしには彼らに寛容であるように「請う」ことしかできない。わたしは人間の人生哲学については詳しくなく、話術にも気にかけていないので、わたしの言葉の多くが人々に困惑をもたらすかもしれない。ことによると、わたしの言葉の一部は人々の病根に訴えかけ、その病を暴露することになるので、そのときはわたしがあなたのために用意した薬を服用することを勧める。わたしにはあなたを傷つける意図はなく、この薬には一切の副作用がないのだから。ことによると、わたしの言葉の一部は「現実的」に聞こえないかもしれないが、わたしは人々に慌てないように「請う」——わたしの手足は「鋭敏」ではないので、わたしの言葉はまだ実行されていない。わたしは人々にわたしに対して「我慢強く」いてくれることを求める。これらの言葉は人間の役に立つであろうか。これらの

言葉から人々が何かを得ることをわたしは望む。わたしの言葉が必ずしも無駄にないように。

1992年4月9日

第三十一章

わたしはこれまで人々の心の中に居場所を持ったことがない。わたしが本当に人々を探し求めようとすると、彼らは目をギュッと閉じ、まるでわたしの行うすべては彼らを喜ばせるための試みであるかのようにわたしの行動を無視し、その結果、彼らはいつもわたしの行いにうんざりする。まるでわたしには自己認識がなく、いつも人前で目立とうとして、「正直で高潔だ」と思っている人間をひどく怒らせているとでもいうようだ。とは言え、わたしはそのようなひどい状況下でも我慢し、わたしの働きを続けている。したがって、わたしは人として経験する酸いも甘いも、苦さや辛辣さも味わったし、風とともに来て雨とともに去ると言う。家族の迫害を経験し、人生の浮き沈みを経験し、肉体から去る苦しみも経験した、と言うのである。しかしながら、わたしが地上にやって来た時には、かつてわたしが人々のために受けた苦難によってわたしを歓迎するどころか、人々はわたしの善意を「丁寧に拒絶」した。このような仕打ちを受けて、どうしてわたしが苦しまずにいられようか。悲嘆に暮れないでいられようか。ひょっとしてこのようにすべてが終わるためにわたしは人の姿になったのだろうか。なぜ人はわたしを愛さないのか。なぜわたしの愛は人の憎悪という報いを受けるのか。ひょっとしてわたしはこんなに苦しむように定められているのだろうか。人々は地上でのわたしの苦難に同情して涙を流し、わたしの不運は不当であると憤慨した。しかし、わたしの心を本当に分かる者がいるのだろうか。わたしの気持ちに気付ける者がいるのだろうか。かつて人はわたしに深い愛情を抱き、かつてしばしば夢の中でわたしを待ち焦がれていた——だが、地上の人々が天にいるわたしの心をどうして理解できるだろう。人々はかつてわたしの悲しみの感情を理解したが、苦しむ仲間としてわたしの苦痛に同情した人がいたのだろうか。ひょっとして地上の人々の良心がわたしの悲嘆に暮れる心を動かし、変えることができるか。地上の人々は彼らの心の中の言い表せないほどの苦難についてわたしに告げることはできないのだろうか。人々の魂と霊はお互いに頼り合っているが、人の姿という障壁のために人々の頭はいわば「制御を失った」。わたしはかつて人々にわたしの前に来るように促した——だが、わたしが呼びかけても人々はわたしの求めに応じることはなく、目に涙を浮かべ、ただじっと空を見つめるだけであ

った。あたかも言葉に言い表せない苦難を抱えているかのように、あたかも何かが妨げになっているかのように。したがって、彼らは両手を握り締め、わたしに懇願して地上で頭を下げる。わたしは慈悲深いので、人々に恩恵を授けると、目にも止まらぬ速さでわたしが人々の中に直接出現する瞬間が到来する――しかし、人はかなり以前に天に対する誓いを忘れてしまった。これこそ、人の不服従ではないか。なぜ人はいつも「健忘症」にかかるのだろうか。わたしは人を中傷しただろうか。人の体を打ち倒しただろうか。わたしは人に向かって自分の心の中の感情を語るのに、なぜ人はいつもわたしを避けるのか。まるで、人々が「記憶」の中で何かを失い、それはどこにも見つからず、記憶も不確かであるかのようなのだ。したがって、人々は暮らしの中でいつも物忘れに苦しみ、全人類の日々の生活は混乱している。しかし、誰もこれを管理せず、人々は踏みにじり合い、殺し合うだけなので、その結果、今日では悲惨な敗北状態になり、世の中のすべての人々は汚水とぬかるみの中に倒れこむことになり、救いの機会はまったくない。

わたしがすべての人々の中に来た時は、まさに人々がわたしに忠実になった時であった。この時、赤い大きな竜も人々に残忍さを加え始めていた。わたしは「招待」を受け入れ、人々と共に「宴席に着く」ためにやって来た時、人からの「招待状」を携えてきた。わたしを見た時、人々はまったく注意を払わなかった。豪勢な衣装で身を飾っていなかったし、人と同席するために「身分証明書」しか持っていなかったからである。顔にはぜいたくな化粧もせず、頭上には王冠もなく、普通の自家製の靴しか足に履いていなかった。人々が最もがっかりしたのは唇に口紅を塗っていないことだった。そのうえ、わたしは丁寧な言葉を話さず、話し方は物書く人の筆のようにすみやかではなかった。だが、わたしの語る一語一語が人の心の奥底を突き刺し、わたしの口から出る言葉は人々にずっと「好意的な」印象を与えた。この印象が、人々がわたしに「特別待遇」を与えるのに十分だったから、彼らはわたしを現世に関する知識も英知もない、田舎からやって来た田舎者として扱った。しかしすべての人が「祝い金」を手渡す時、人々はまだわたしを尊敬に値する者とはみなさず、まったくお構いなしに無関心な様子でわたしの前に足を引きずって来ただけであった。わたしが手を差し出すと、彼らはたちまち驚いてひざまずき、大きな叫び声をあげて、わたしの差し出した「金銭」をすべてかき集めた。かなりの金額だったので、彼らはただちにわたしを大金持ちだと思い、同意も得ずにわたしの体からぼろ着を剥ぎ取り、新しい衣服に着せ換えた――しかし、これはわたしを喜ばせなかった。わたしはこのような楽な生活に慣れていなかったし、この「第一級」の特別待遇を軽蔑していたので、また、わたしは聖なる一家に生まれたとはいえ

「貧しい環境」に生まれたので、人々がかいがいしく仕えるぜいたくな生活には慣れていなかった。わたしは人々がわたしの心の中の感情を理解することができ、わたしの口から出る心地よくない真理を受け入れるために些細な苦難に耐えられることだけを望んでいる。わたしは決して理論について話すことはできず、あるいは人々と付き合うために、人々の交際の秘訣を使うこともできず、また、わたしの言葉を人々の顔色や心理に従って調整することができないので、人々はいつもわたしをひどく嫌い、付き合うに値しない者と考え、わたしがきつい言い方をし、いつも人々を傷つけると言う。しかし、わたしには選択肢がない。わたしはかつて人の心理について「研究」し、かつて人の人生哲学を「見習い」、かつて人の言語を学ぶために「語学学校」へ行き、人々が話す手段を習得して、彼らの表情にふさわしい話し方をしようとした——だが、大いに努力し、多くの「専門家」を訪れたにもかかわらず、すべては無駄であった。わたしの中には人間性はまったくなかった。何年も努力したが、わずかな成果も得られなかったし、わたしには人の言語を習得する才能はみじんもなかった。したがって、「努力は報われる」という人の言葉はわたしによって「信用を失い」、その結果、これらの言葉は地上では無意味なものとなった。人々が気付かないうちに、この格言は天の神によって誤りであることが証明され、このような言葉は擁護できないことが十分に立証された。したがって、わたしは人に謝罪するが、なすべきことは何もない——誰がわたしをこんなにも「愚か」にしたのか。わたしは人の言語を学ぶことができず、人生哲学に熟達することができず、人々と交際することができない。わたしは人々に我慢強くあれ、怒りを胸の中で抑え、わたしのせいで自分を傷つけるなと忠告するだけである。誰がわたしたちを交流させたのか。誰がわたしたちをこの時期に出会わせたのか。誰がわたしたちにお互いの理想を共有するようにさせたのか。

わたしの性質はわたしの言葉のすべてに表れているが、人々はわたしの言葉でわたしの性質を把握することができない。彼らはわたしの言うことについて、細かいことにこだわるだけである——そんなことをして何の意味があるだろう。わたしに関する彼らの考えは彼らを全き者にできるだろうか。地上の物事はわたしの心を達成することができただろうか。わたしは人々にわたしの言葉の話し方を教えようと努力を続けたが、人はあたかも口がきけないようで、わたしが願うようにわたしの言葉の話し方を学ぶことがまったくできなかった。わたしは口移しで教えたが、人はまったく学ぶことができなかった。この後ようやくわたしは新たな発見をした。どうして地上の人々に天の言葉を話すことなどできるだろう。これは自然の法則の侵害ではないか。しかし、わたしに対す

る人々の熱心さと知的好奇心のために、わたしは人に対する別の働きに着手した。わたしは能力不足を理由に人に恥ずかしい思いをさせたことは決してなく、欠けているものに応じ人に必要なものを与える。こうすればこそ、人々はわたしに多少好意的な印象を持ち、わたしがこの機会を利用して人々を再び呼び集めることになり、人々はわたしが豊かに持っているものの別の部分を享受する。この時点で人々は再度幸福感にどっぷり浸り、空のバラ色の雲の回りには喝采と笑い声が漂う。わたしは人の心を開き、人はたちまち新たな生命力を持ち、もはやわたしから隠れようとはしない。人は蜜の甘い味を試食したからであり、わたしがゴミ集積場か廃棄物管理所にでもなったかのように、そこで人は持っていたすべての二級品を取り出して良いものと交換する。したがって、掲示された「お知らせ」を見ると、人々はわたしの前にやって来て、熱心に参加する。というのも彼らは「お土産」を少し手に入れることができると考えているようだからで、したがって、わたしが計画した行事に参加したいと、こぞってわたしに「手紙」を送る。この時点で彼らは損失を恐れていない。これらの活動の「元金」は大きくないからで、そこで彼らはあえて危険を冒して参加する。参加することでなんのお土産も得られないなら、人々は活動の舞台を去り、返金を求めるだろうし、わたしが彼らに支払う義務のある「利子」も算出するだろう。今日の生活水準が上昇し、「控えめなレベルの繁栄」に達し、「近代化」を達成し、「上級幹部」と共に直接「田舎へ行き」、働きを手配するので、人々の信頼はたちまち何倍にも拡大する。そして彼らの「体質」がますます良くなっていくので、彼らは感嘆してわたしを見つめ、わたしの信用を得るために快くわたしと関りを持つ。

1992年4月11日

第三十二章

人々がわたしと共に集う時、わたしの心は喜びで満たされる。直ちにわたしは手の中にある恩恵を人々に授け、人々がわたしと集うことができるようにする。わたしに従わない敵ではなく、わたしと共に生きる友人になるようにするのだ。したがって、わたしも人に心から接する。わたしの働きの中では人をハイレベルな組織のメンバーと見なしているので、わたしは人に対してことさら注意を払う。なぜなら人はいつもわたしの働きの目的だからである。わたしは人々がわたしを尊敬する気持ちになるように人々の心の中にわたしの場所を定着させた――しかし彼らはなぜわたしがこうするのかまったく知らず、ただ待つだけなのだ。人々の心の中にはわたしが定着させた場所があるのに、

彼らはわたしがそこに住むことを求めない。それどころか、彼らは「聖なる神」が心の中に突然やってくるのを待っている。わたしの姿はあまりにもみすぼらしいので、人々の求めに合わず、したがってわたしは彼らから「排除」される。彼らが望んでいるのは高貴で強力な「わたしの姿」だから――わたしが世の中に来た時、人々にはそうは見えなかったもので、彼らは遠くを見つめ、心に抱く神を待ち続けた。わたしが彼らの前に現れた時、彼らは大衆の前でわたしを拒絶した。わたしは片隅に立ち、人から「取り扱い」を受けるのを待ち、人々がこの欠陥だらけの「製作品」であるわたしを結局どう扱うか確かめるために見守っているしかなかった。わたしは人々の傷跡は見ないで、傷のない部分を見るようにし、このことで満足する。人々の目には、わたしは空から降りてきた「小さな星」にすぎず、天国で一番小さい者であり、今日地上に来たのは神に任命されたからなのだ。その結果、人々は神とわたしを同じ一つのものと認めるのをひどく恐れ、「わたし」と「神」という言葉により多くの解釈を思いついた。わたしの姿には「神」の風貌がまったくないので、人々は皆わたしが神の家族ではなく、使用人であると信じて、これは神の姿ではないと言う。おそらく神を見たことのある人々がいるだろう――しかしわたしは地上では見識に欠けているから、神はわたしに「現れる」ことがなかったというのだ。おそらく、わたしには「信仰」があまりにも足りないために、人々の目にはわたしがみすぼらしい者と見えるのだろう。人々は、本当の神なら創造主なのできっと人の言語に堪能だろうと想像する。しかし、事実はまさに反対である。わたしは人の言語が下手なだけでなく、人の「欠点」を「補う」ことさえできない時がある。その結果、わたしは少し「罪悪感」を感じる。人々の「要求」通りに行動しないで、ただ材料を用意し、彼らに「欠けているもの」に応じて働くだけだからである。わたしが人に要求するものは決して大きくないが、人々はその反対であると思っている。したがって、彼らの「謙虚さ」があらゆる動きに明らかにされる。彼らはわたしが迷うのを深く恐れ、わたしが山の奥深くにある古代の森にさまよい入るのではという恐怖に怯え、いつもわたしの前を歩き、わたしのために道案内をしようとする。その結果、人々はわたしが地下牢の中に歩いて行ってしまうのを深く恐れ、いつもわたしを前方へと導いている。わたしは人々の「信仰」にはやや「好ましい印象」を持っている。彼らは食べ物や睡眠のことを考えず、わたしのために精を出して働き、わたしに対する労働のため昼も夜も眠らず、白髪にさえなるほどであった――これは彼らの信仰が全世界の人々を「超越」し、各時代を通して使徒たちや預言者に「まさっている」ことを十分に示している。

わたしは人々が優れた能力を持っているからといって歓喜して拍手することもなく、欠点があるから彼らを冷たく見つめることもない。わたしは手の中にあるものを行っているだけで、誰にも特別待遇は与えず、単に計画にしたがって働いている。しかし、人々はわたしの旨を知らず、わたしから何かを得ようと求めて祈り続ける。まるでわたしが彼らに授ける富では彼らの要求に応えることができないかのようであり、まるで需要が供給を上回っているかのようだ。しかし今の時代、人々は皆「インフレ」があることを感じている――その結果、彼らの両手は楽しむためにわたしが与えたもので一杯になっている。このため、彼らはわたしに飽き飽きしてしまい、その生活はすっかり混とんとし、何を食べるべきか、何を食べずにおくべきかわからない。楽しむためにわたしが与えたものをぐいと握り、ただじっと見つめている人さえいる。人々はかつて飢饉に苦しんで、今日の楽しみを手に入れるのは生易しいことではないので、皆限りなく感謝するが、わたしに対する彼らの態度に多少の変化が生じている。わたしの前では彼らは叫び続ける。わたしは彼らにとっても多くを与えたので、わたしの前では彼らはわたしの手を取り、「感謝の声」を挙げ続ける。わたしは世界の上空を動き、歩きながら世界中の人々を観察する。地上の群衆の中にわたしの働きに適した人、あるいはわたしを本当に愛している人はこれまで一人もいなかった。したがって、いまや、わたしはがっかりしてため息をつく。人々は直ちに散り散りになり、わたしが「彼らを一網打尽」にすることをひどく恐れてもはや集まらない。わたしはこの機会を利用して人の中に来て、この散り散りになった人々の間でわたしの働き――適切な働き――をして、働くのに適した人々を選ぶ。わたしは人々が決して逃げられないように、刑罰のまっただ中で「拘束する」ことは望まない。しなければならない働きを行うだけである。わたしは人の「助け」を求めてやって来た。わたしの経営の働きには人の行為が不足しているので、わたしの働きを首尾よく完成させることは不可能で、わたしの働きは効果的に進められない。わたしの望みは、人々がわたしに協力しようと決心してくれることだけだ。彼らがわたしにおいしい食べ物を料理したり、枕するのに相応しい場所を用意したり、素敵な服を作ってくれたりすることを要求するわけではない――わたしはこのようなことには少しも気を使わない。人々がわたしの旨を理解して、わたしと共に進んでくれれば、わたしは心の中で満足するだろう。

一体全体誰が心からわたしを受け入れたことがあるだろう。誰が心からわたしを愛しただろう。人々の愛はいつも次第に薄められていく。彼らの愛がカラカラに乾燥せず、薄められないままにできないのか。わたしにも、その理由が「わからない」。このよう

に、ほかにも人の心の中には多くの「謎」が含まれている。被造物の中で、人は「奇跡的」で「理解しがたい」ものだと考えられているので、わたしの目には、人は「様々な能力」を持っており、まるでわたしと同等の立場にあるかのように見える――しかし、人は自分のこうした「立場」についてまったく奇妙だと思っていない。この点で、わたしは人々がこの位置に立ち、それを享受することを許さないのではなく、彼らが礼儀正しくすること、自分をあまりに高く評価しないことを望んでいるのだ。天と地の間には距離があり、神と人の間に距離があることは言うまでもない。双方の間にはさらに大きな距離があるのではないだろうか。地上で人とわたしは「同じ船の中」にいて、わたしたちは「一緒に嵐を乗り切る」。わたしの姿かたちがみすばらしいために、わたしは人間世界の苦難を経験することを免れないし、このために今日わたしはこのような状況に陥っているのだ。わたしは地上で平穩に暮らす場所を持ったことはなく、そこで人々は「人の子は枕する場所を持ったことがない」と言う。その結果、人々はわたしへの同情の涙を流し、わたしの「救済資金」用に数十元を別にとっておく。このためわたしはようやく休息の場を持つ。人々の「助け」がなかったら、どこかでわたしが死んでしまっても、誰も分らないだろう。

わたしの働きが終わる時、もはやわたしは人からこの「救済のための資金」を求めないだろう。それどころか、わたしは本来備わっている機能を実行し、「わたしの家のもの」を下ろして、すべての人々が楽しむために差し出す。今日、すべての人はわたしが与える試練のまっただ中で試される。わたしの手が正式に人々に届くと、彼らはもはや感嘆の目でわたしを見上げることはなく、憎しみをもってわたしを扱う。その瞬間、彼らの心臓は直ちにわたしによってえぐり出され、標本になる。わたしは人の心臓を「顕微鏡」で観察する――わたしへの本当の愛はそこにはない。何年もの間、人々はわたしをだまし、からかい続けてきた――彼らの左心房にも右心室にもわたしに対する憎しみの毒が含まれていることがわかるから、わたしが彼らにそのような態度をとるのも不思議ではない。しかし、彼らはまったくこのことを知らず、認めさえしない。わたしが観察した結果を彼らに示しても彼らは目を覚まさない。彼らの心の中では、これらは過去の問題で、今日再び持ち出すべきではないと思っているかのようである。したがって、人々は「わたしの観察結果」を無頓着に見るだけである。彼らは観察記録を返却し、大股に立ち去る。その上、彼らはこのようなことを言う。「これらは重要ではない、わたしの健康に何の影響もない。」彼らは軽蔑的に少し笑い、次に少し威嚇的な眼差しを示し、わたしに対して、そんなに率直であるべきではなく、おざなりでなければならない

と暗に伝えているかのような態度を示す。まるで、わたしが彼らの内なる秘密を明らかにするのは人の「おきて」を壊すようなものだと言わんばかりである。そこで彼らはわたしをさらに憎むようになる。そうやってようやくわたしは人々の憎しみの源を見る。これは、わたしが見ている時には彼らの血液は流れていて、体内の動脈を通過したあと、血液が心臓に入った時に初めてわたしが新しい「発見」をするからなのだ。しかし、人々はこのことを何も考えない。彼らは完全に不注意で、得るもの、失うものについて考えてみることもなく、そのことは彼らの「私心のない」精神を示すのに十分である。彼らは自分自身の健康状態には何の配慮もせず、わたしのために「飛び回る」。これも彼らの「忠実性」であり、彼らに関して「称賛すべき」ことである。そこでわたしは、彼らはこれによって幸せになるだろうという内容の「称賛」の手紙をもう一度彼らに送る。しかし、この「手紙」を読むと、彼らはすぐに少し腹立ちを感じる。彼らの行うすべてのことについて、わたしが手紙を書かなかったからである。いつもわたしは人々が行動する時指示をしてきたが、彼らはわたしの言葉をひどく嫌悪しているように思われる。したがって、わたしが口を開くとすぐに彼らは目をギュッと閉じ、耳を両手で塞ぐ。彼らはわたしが愛を与えても、尊敬の念を持ってわたしを見上げることはなく、常にわたしを憎んでいる。わたしが彼らの欠点を指摘し、彼らの所有するすべての品物を暴いたからであり、そのため彼らは仕事で損をし、生活の手段をなくしてしまった。そういうわけで彼らのわたしに対する憎しみは増加しているのだ。

1992年4月14日

第三十三章

わたしの家にはかつてわたしの聖なる名を称える人々、地上におけるわたしの栄光が大空を満たすよう精力的に働く人々がいた。このため、わたしはひどく嬉しくなり、心は喜びで満たされた——しかし、わたしの代わりに昼も夜も眠らず働ける人がいるだろうか。人がわたしに示す決意はわたしに喜びを与えるが、反抗心はわたしの怒りを呼ぶ。このように、人は決して義務を守ることができないので、人に対するわたしの悲しみはますます大きくなる。なぜ人はいつもわたしに献身的になることができないのだろうか。なぜ彼らはいつもわたしと取引しようとするのだろうか。わたしは貿易センターの総支配人なのだろうか。わたしは人々が要求することを心から叶えようとしているのに、なぜわたしが人に求めることは無になってしまうのだろうか。わたしは仕事に熟達していなくて、彼らは熟達しているということなのだろうか。なぜ人々はいつも巧みな口先とお

だてでわたしをだますのだろう。なぜ人々はいつも「贈り物」を携えてやって来て、戻る道を尋ねるのだろう。わたしが彼らにそうするよう教えたのだろうか。なぜ人々はそのようなことを素早く手際よく行うのだろう。なぜいつもわたしをだまそうとするのだろう。わたしが人々と一緒にいると、彼らはわたしのことを創造された存在と見なす。わたしが第三の天にいと、すべての物を支配する全能の神と考える。わたしが天空にいと、すべての物を満たす霊として見る。要するに、人々の心の中にわたしの適切な場所はない。まるでわたしが招かれざる客で、人々はわたしをひどく嫌っているから、わたしが切符を手に入れて着席しても、彼らはわたしを追い出し、ここにわたしが座る場所はない、来た場所が間違っていると言うので、わたしは急いで立去るしかないかのようだ。わたしはもう人とは関わるまいと決心する。彼らはあまりに心が狭く、寛大さに乏しすぎるからである。わたしはもう彼らと同じテーブルで食事はしないつもりである。地上でこれ以上彼らと共に時を過ごさないつもりである。しかし、わたしがそう話すと、人々は驚き、わたしが去ってしまうのを恐れ、わたしを引き留めようとする。彼らのわざとらしさを見ると、わたしはすぐに少し憂鬱でわびしい気持ちになる。人々はわたしが去るのを恐れ、わたしが彼らと決別する時、すぐに泣き叫ぶ声が国中を満たし、人々の顔は涙だらけになる。わたしは彼らの涙をぬぐい取り、もう一度彼らを元気づけると、彼らはわたしをじっと見て、その訴えかけるような目はわたしに立ち去らないようにと懇願しているようである。彼らの「誠実さ」のためにわたしは彼らと共にいる。しかし、わたしの心の中の苦しみを誰が理解できるだろう。わたしの言葉では表せない事柄を誰が心に掛けるだろう。人々の目には、わたしはまるで感情がなく、わたしたちはいつも二つの異なる家族の出身であるかのようだ。どうして彼らにわたしの心の悲しみがわかるだろうか。人々は自分の楽しみをむやみに欲しがるだけで、わたしの意志など気にしない。なぜなら現在に至るまで、人々はわたしの経営計画の目的を知らないままだからであり、そこで、今日彼らはまだ黙って懇願する——このようなことは、何の役にも立たない。

彼らと共に暮らす時、わたしは彼らの心の中に一定の場所を占めている。わたしは人の姿で現れ、彼らは古い肉で暮らしているので、彼らはいつもわたしを肉を通して扱う。人々は肉しか有しておらず、ほかの付属物は持っていないので、「持っているものすべて」をわたしに与えてきた。しかし、彼らは何も知らず、ただわたしに「心から献身する」だけである。わたしが受けるものは価値のないごみなのだが、彼らはそうは思わない。彼らが与えてくれる「贈り物」をわたしが自分の持っているものと比べると、人

々はすぐにわたしの尊さを認め、そこで初めてわたしがいかに計り知れないものであるかに気付く。彼らが称賛するからと言ってわたしは誇らしく思うことはなく、人の前に現れ続け、人々が皆わたしを十分に知るようにする。わたしが彼らにわたしの全体を示すと、彼らは目を丸くしてわたしを見て、塩の柱のようにわたしの前で動かなくなってしまう。彼らの奇妙な様子を見ると、わたしはほとんど笑いを止めることができない。彼らはわたしに物を求めて手を伸ばしているので、手の中の物を与えると、彼らはそれらを生まれたばかりの赤子のように大切に胸に抱えるが、それはほんの一瞬の動きにすぎない。わたしが彼らの住む環境を変えると、彼らはすぐに「その赤子」を脇に放り投げ、頭を抱えて逃げ出す。人々の目に映るわたしはいつでもどこでも間近にいる助力者であり、まるで呼ばれるとすぐにやって来るウェイターのようなものなのだ。したがって、人々はまるでわたしが大惨事に立ち向かう限りない力を持っているかのようにいつもわたしを「見上げ」、それで彼らはいつもわたしの手を放さず、国中を巡る旅にわたしを連れて行き、支配者がいることをすべて人にわからせるので、誰ひとり敢えて彼らを騙そうとしない。わたしは長いこと人々の「虎の威を借る狐」のトリックを見破ってきた。彼らは皆言わば「看板を掲げて商売を始め」、策略によって利益を得ようと望んでいるからである。わたしはずっと以前から彼らの油断のならない、悪意のある計画の本質を見破ってきたが、わたしは自分たちの関係を傷つけないだけなのだ。わたしは何もないところからいざこざを引き起こしたりはしない——そんなことをしても何の価値もないし、重要でもない。わたしは人々の弱点を考慮しながら、なすべき仕事をしているだけである。そうでなければ、わたしは彼らを灰に変えて、もはや存在することを許さないだろう。しかしわたしの働きには意味があるので、わたしは簡単には人を罰しない。人々がいつも自分の肉を思いどおりにしているのはこのためである。彼らはわたしの意志を守らず、わたしの裁きの席の前でいつもわたしを騙してきた。人々はとても勇敢である。すべての「拷問具」で脅されても彼らは少しも動揺しない。この事実を前にしては、人々は事実を提供することができないまま、頑固にわたしに抵抗するだけである。わたしが不潔なものすべてを取り出してしまえと彼らに命じても、彼らはただ空っぽの両手をわたしに示すだけだ——こうしたやり方を他の者たちが「模範」として使わないはずはない。この人々の信仰が非常に深いので、彼らは「称賛に値する」からである。

わたしは世界中でわたしの働きに着手した。世界の人々は突然目を覚まし、わたしの働きである核心の回りを動き、わたしが彼らの中を「旅する」時、すべての人はサタン

の束縛を逃れ、サタンの苦痛の中で苦しむことがなくなる。わたしの日が到来するので、すべての人々は幸福感に満たされ、心の中の悲哀は消え失せ、空の悲しみの雲は空中で酸素に変わり、そこに浮かんでいる。この時、わたしは人間と共にいることの幸せを享受する。人の行動は趣を感じさせるから、わたしはもはや悲嘆に暮れない。そして、わたしの日の到来に伴って、地上の活力あるものが存在の根を再び手に入れ、地上のすべての物事は再び活気づき、その存在の基礎としてわたしを受け止める。わたしがすべての物事をいのちで輝かせ、一方では、すべてを無言のうちに消滅させるからである。このように、すべてのものはわたしの口から発せられる命令を待ち、わたしが行うこと、語ることによって喜びを得る。万物の中でわたしは至高である——にもかかわらず、わたしはすべての人々と共に住み、人の行動を天地創造の現れとして使う。人々がわたしを大いに褒め称える時、わたしはすべてのものの中で賛美される。こうして、地上の花は熱い太陽の下で一層美しく成長し、草はさらに青々と茂り、雲間の空は青々と晴れる。わたしの声を聞いて、人々はあちらこちらを走り回る。今日、わたしの国の人々の顔は喜びで満たされ、彼らのいのちは成長する。わたしはわたしの選民すべての中で働き、わたしの働きが人間の考えによって汚染されるのを許さない。わたしは直接わたしの働きを実行しているからである。わたしが働く時、天と地、その中にあるすべてのものは変化し、再び新しくなり、わたしが働きを完了すると、人は完全に新しくなり、もはやわたしの求めるもののために苦悩しながら生きることはない。幸福の響きが世界中に聞こえるからであり、わたしはこの機会を利用して人々の中にわたしが与える祝福を授ける。わたしが神の国の王である時には、人々はわたしを恐れるが、わたしが人々の中の王であり、人々と共に住んでいる時には、わたしに何の喜びも見出さない。わたしに対する彼らの観念はあまりに嘆かわしいもので、その考えがあまりに深いため、取り除くのがむずかしいからである。人の心を明らかにするために、わたしは適切なわたしの働きを行う。わたしが空高くに立ち上がり、怒りを人々に向かって放つ時、わたしに対する人々のさまざまな意見はただちに消え失せる。わたしに対する考えについてもう少し話すよう彼らに求めるのだが、彼らはまるで何もないように、まるで謙虚であるかのように、驚いて物が言えない。わたしが人々の観念の中で生きていればいるほど、彼らはますますわたしを愛するようになり、わたしが人々の観念の外で生きていればいるほど彼らはわたしを避け、わたしに関するさまざまな見解を持つようになる。世界を創造して以来今日まで、わたしはいつも彼らの観念の中で生きてきたからである。今日人々の中にやって来る時、わたしは彼らの考えを一掃する。すると、彼らはただ拒絶する——しかし、わたしには彼らの考えを扱う適切な方法がある。人々は心配したり、不安

になったりするべきではない。わたしはわたし特有の方法ですべての人類を救い、すべての人々がわたしを愛するようにし、彼らが天でわたしの恩恵を享受するのを許すのだ。

1992年4月17日

第三十四章

わたしはかつて人をわたしの家に招いたが、人はわたしの呼びかけを聞くと、わたしに客として招かれたどころか、処刑地に連れて来られたかのように逃げ回った。そのため、わたしの家は空のままになっていた。人がいつもわたしを避け、わたしに対して常に警戒していたからである。このためわたしには自分の業を行う術がなかった。即ち、わたしが人のために用意した饗宴を取り消さざるをえない状況であった。人がこの饗宴を楽しむ気がなかったので、わたしも彼にそれを強いることはなかった。しかし、人は突然飢えに苦しみ、わたしに助けを求めて扉を叩く。そんな悲惨な状況にある人を見て、どうしてわたしは人を救わずにいられるだろうか。従って、わたしは人が楽しめるように再び饗宴を催す。これで初めて人はわたしのすばらしさを感じ、わたしに頼るようになる。また、わたしのこのような態度故に、人は次第にわたしを「無条件に」愛するようになり、わたしに「火葬の地」に送られるのではないかと恐れなくなる。わたしにそのような意志はないからである。わたしの心を知って初めて人は本当にわたしに頼るようになる。このことから、人がいかに「用心深い」かが分かる。しかしわたしは人の偽り故に人を警戒することはなく、わたしの温かい抱擁で人々の心を動かす。これこそわたしが今していることではないのか。これこそ現段階の人々において現れているものではないのか。彼らにはどうしてそのようなことができるのか。彼らはどうしてそのような感情を有すのか。それは彼らが真にわたしを知っているからなのか。わたしに対して本当に果てしない愛を抱いているからなのか。わたしは誰にもわたしを愛することを強いず、ただ彼らが自分たちで選択できるように自由意志を与える。そうする中でわたしは干渉することもなければ、人々が自分たちの運命を選択する際に手助けすることもない。人々はわたしの前で自分たちの決意を固め、それをわたしに吟味してもらうためにわたしの前にそれを持ってきたが、わたしが「人の決断」の入った袋を開けると、中は色々なものがごちゃ混ぜになっていた。それでも中の物はかなり「豊か」であった。人々はわたしに自分たちの決断を抜き取られるのをとても恐れ、目を大きく開けてわたしを見た。だが、人の弱さのため、わたしは初めのうちは裁きを下さず、袋を閉じて、

わたしのなすべき業を続けた。しかし人は、わたしの業が始まってわたしの導きに従わず、自分の決断がわたしに褒められたかどうかに関心を持ち続ける。わたしは多くの業を行い、多くの言葉を語ったが、人は未だにわたしの旨を把握できず、困惑させるようなその行動にわたしの「頭はくらくらする」。なぜ人はいつもわたしの旨を理解できず、物事を勝手気ままに行うのか。人の脳は衝撃を受けたのか。わたしの語る言葉を理解できないのだろうか。常にまっすぐ前を向いて行動するのに、なぜ道を切り開いて未来の人々の模範となることができないのか。ペテロの前に模範となることができた人はいたのだろうか。ペテロが生き延びたのはわたしの導きの下ではなかったか。どうして現代の人々にはそれができないのか。倣うべく手本を与えられてもどうしてわたしの旨を満足させられないのか。このことから、人は未だにわたしを信頼していないことが明らかである。それが現在の惨めな状況を引き起こしたのである。

わたしは小鳥たちが空を飛んでいるのを見て喜ぶ。彼らはわたしの前に決意を表明することもなく、わたしに「提供する」言葉もないが、わたしが与えた世界に楽しみを見出している。しかし人にはそれができず、その顔は憂鬱に満ちている。もしやわたしは人に返済不可能な負債を負っているのか。人の顔にはなぜ常に涙がつたっているのか。わたしは丘に咲くユリを賛える。草花は斜面を覆うが、ユリは春の訪れの前に、地上におけるわたしの栄光に輝きを加える。人にはそれができるか。人はわたしが戻る前に地上においてわたしに証しできるのか。赤い大きな竜の国でわたしの名のために自分を捧げることができるのか。あたかもわたしの言葉は人に対する要求に満ちているかの様である。人はこの要求故にわたしを忌み嫌う。体が弱く、わたしが求めることが基本的に達成不可能なため、人はわたしの言葉を恐れる。わたしが口を開けると、人々は飢饉を逃れるかのように四方八方に逃げ出す。わたしが顔を覆う時、振り向く時、人々はすぐにパニックに襲われる。わたしが去ることを恐れ、どうしてよいか分からないのである。彼らの観念では、わたしが去る日は災いが天から降って来る日であり、彼らに対する刑罰が始まる日なのである。しかしわたしのすることは人の想像とは正反対である。わたしは人の観念通りに行動したことなどなく、人の観念をわたし自身と一致させたことなど一度もない。わたしが行動する時は、正に人が暴露される時である。つまり、わたしの行動は人の観念では測れないのである。創造の時から今日まで、わたしのなすことにおいて「新大陸」を発見した者はいない。わたしがいかなる法によって行動するかを把握した者はなく、新たな道を切り開いた者もない。したがって、正しい道こそ現在の人々に必要なもので、彼らは正しい道に進まなければならないにも関わらず、正しい

道に入れないままである。創造の時から今日まで、わたしはこのような事業を始めたことなどなかった。終わりの日のわたしの業に新しい作品をいくつか加えただけである。しかしそれほど明らかな状況下でも、人々はわたしの旨を把握できずにいる。これこそ彼らに欠けていることではないのか。

わたしは新たな業を始めてから、人に対して新たなことを要求する。人にとって過去の要求はあたかも何の効果もなかったかのようで、それ故彼らは過去の要求を忘れる。わたしはいかなる新たな手段によって動くのか。人に求めることは何か。人々自身も過去の自分たちの行いがわたしの旨に適っていたか、わたしの要求の範囲内の行いだったか判断できる。わたしがすべてを個別に調べる必要はない。人々は自分たちの状態を把握できているし、そのため自分たちがどれだけできるか分かっており、わたしが彼らにはっきり教える必要はない。わたしが語る時、恐らく一部の人々はつまずくだろう。そのため、わたしは人々が弱くならないように、わたしの言葉のこの部分だけは語らずにいた。この方が人の追求にとってずっと有益ではないか。人の進歩にずっと有益ではないか。自分の過去を忘れ、前進しようと思わない者がいるだろうか。わたしの「思慮のなさ」故に、わたしが語る手段が既に新たな領域に入ったことを人々が理解しているかどうか、わたしには分からない。加えて、わたしの業がそのようにわたしを「多忙」にしていたため、人々がわたしの語る口調を理解しているかどうかを調べる時間がなかった。したがってわたしはただ人々にもっと理解してくれとしか頼まないのである。わたしは自分の業に「忙しい」ため、個人的にその業の拠点を訪ねて人々を指導することができない。そのため、彼らに対する「理解に乏しい」。要するに、いずれにせよわたしは人を新たな出発と新たな手段へと正式に導き始めた。わたしの語る言葉すべてにおいて、その口調がひょうきんさとユーモア、そして特に強い嘲りを含むことを人々は感じた。そのため、人とわたしとの調和がいつの間にか乱され、人々の顔が濃い雲に覆われる。しかしわたしはこれに制約されることなく自分の業を続ける。なぜなら、わたしの言うことなすことは全てその計画の重要な一部であり、わたしの口から語られるものはすべて人を助け、わたしがなすことにささいなことなどひとつもなく、わたしの言葉は人々を啓蒙する。人には欠けが多いため、わたしは彼らの好きなようにさせ、語り続けるのである。一部の人々は恐らく、わたしに新たなことを要求されるのを待ち焦がれている。そうであればわたしは彼らの欲求を満たす。しかしわたしはあなたがたにひとつのことを再確認しなければならない。わたしが語る時、人々が洞察力を得、人々が更に分別を得、わたしの言葉からより多くを得、わたしの要求を満たせるようになることを

望む。以前は教会で人々が重視したのは、取り扱われ、碎かれることだった。わたしの言葉を飲み食いすることは、彼らの目的と源を理解することを前提としていた。しかし現在は過去とは違い、人々はわたしの言葉の源を全く理解できず、そのためわたしに取り扱われ、碎かれる機会がない。わたしの言葉を単に飲み食いすることだけにすべてのエネルギーを費やしているからである。しかしこのような状況下でも彼らはわたしの要求を満たせないでいる。そのためわたしは彼らに新たなことを要求する。わたしと共に試練を受け、刑罰を受けることを。だがひとつだけ念を押す。これは人を死に至らしめるものではない。わたしの業が要求するものである。なぜなら、現段階ではわたしの言葉は人には余りにも理解しがたく、人はわたしと協力できないからである。手の施しようがない。わたしは、人がわたしと一緒に新たな方式に入るようにさせるしかない。他に何ができるのだろうか。人の欠点故に、わたしも人と同じ流れに入らなくてはならない。わたしこそが人々を完全にするのではないだろうか。わたしこそがこの計画に着手するのではないのか。もう1つの要求は困難ではないが、最初の要求に劣るものではない。終わりの日の集団におけるわたしの業は前例のない事業であるため、わたしの栄光が宇宙を満たし、すべての人々はわたしのために最後の苦難に遭わなければならない。あなたがたにはわたしの旨が分かるだろうか。これがわたしの人に対する最後の要求である。つまり、わたしは全ての人々が赤い大きな竜の前で、力強く、明確なわたしの証しとなれることを望む。最後に彼らがわたしのために自らを捧げ、最後にもう一度わたしの要求を満たすことを望む。あなたがたにはこれが本当にできるか。かつてのあなたがたはわたしの心を満たすことができなかった。最後の時にこの型を破ることができるか。わたしは人々に反省の機会を与え、最終的にわたしに答える前に深く考えさせる。そうすることは間違いなのか。わたしは人の応答を待つ。人から「手紙による返事」が来るのを待つ。あなたがたにはわたしの要求を満たすだけの信仰があるだろうか。

1992年4月20日

第三十五章

わたしは人のあいだにわたしの働きを実行し始め、人々がわたしと同じ流れの中で生きることを許した。働きを終わらせるとき、わたしは依然として人のあいだにいたろう。と言うのも、彼らはわたしの経営計画全体を通じて管理される対象であり、彼らが万物の主人となることがわたしの望みだからである。そのため、わたしは人のあいだを歩き続ける。人間とわたしが今の時代へ入るにつれ、わたしは大いに安らぐ。わたしの

働きのペースが速まったからである。人間がどうして追いつけようか。わたしは麻痺して頭の鈍い人々に多くの働きを行なってきたが、彼らはわたしを大事にしていなくて、ほぼ何も得ることができない。わたしはすべての人のあいだで暮らしており、彼らが地上でも地下でもどこにしようと、その一挙手一投足を観察してきた。「人間」に分類されるすべての人は、あたかも「わたしに抵抗すること」が人の仕事であるかのように、またその仕事をしなければ、引き取り手のいない、さまよい歩く孤児になってしまうかのように、わたしに抵抗している。しかし、わたしは人の行ないや態度に基づいてその人を恣意的に判断したりはしない。むしろ、彼らの霊的背丈に応じて支援し、施す。人間はわたしの経営計画全体の中心人物なので、わたしは「人間」という役割を与えられた人々をさらに導き、彼らが心と能力の限りを尽くしてその役割を演じられるようにし、わたしが監督を務めるこの劇が感動的な成功に至ることを目指す。これが人類に対するわたしの願いである。わたしが人類のために祈らなければ、彼らは自分の役割を演じることができないだろうか。そうならば、わたしは人々から求められることを達成できるが、彼らはわたしから求められることを達成できないのではないだろうか。わたしが力で人を押さえつけることはない、と言える。むしろ、これはわたしの最後の要求であり、真剣に誠意を尽くして彼らに懇願しているのだ。彼らは本当にわたしが求めることを行なえないのか。わたしは長年にわたって人々に与え続けてきたが、お返しとして何も受け取っていない。これまでわたしに何かくれた人がいたのだろうか。わたしの血と汗と涙は山にかかった霞のようなものだということか。わたしはこれまで何度も人々に「予防接種」をして、わたしの要求は苛酷ではないと語ってきた。では、なぜ人々は絶えずわたしを避けるのか。捕まった途端に殺される雛のように取り扱うからか。わたしは本当にそこまで野蛮で非人間的なのか。人間はいつも自分の観念によってわたしを評価する。彼らの観念の中のわたしは、天におけるわたしと同じなのか。わたしは人々の観念を楽しむ対象とは考えていない。むしろ、わたしは彼らの心を楽しむべきものとして見ている。とは言え、彼らの良心にはひどく苛立ちを覚える。なぜなら、人々によれば、わたし自身に良心はないことになっているからである。したがって、わたしは人々の良心に関してさらにいくつか意見を持っている。しかし、彼らの良心を直接批判することは断る。むしろ辛抱強く、整然と彼らを導き続ける。結局、人間は弱く、何の働きも行なえないのだ。

今日、わたしは無限の刑罰の領域へと正式に一步踏み込み、人類と共にそれを享受する。また、わたしは自らの手で指示を発しており、わたしの指示のもと、人類は礼儀正

しく振る舞っているのもあって、誰もあえてわたしに反対しようとはしない。すべてはわたしの導きのもとにあり、わたしが割り当てた働きを行なっている。なぜなら、それが彼らの「仕事」だからである。天上天下の万物の中で、わたしの計画に服従しない者がいるだろうか。わたしの支配下にはいない者がいるだろうか。わたしの言葉や働きに対して称賛や賛美の言葉を発しない者がいるだろうか。人間はわたしの業や行動を称賛する。それゆえ、わたしの一挙手一投足のために、わたしの働きの流れに飛び込むのである。誰がそこから逃れられようか。誰がわたしの整えた働きから離れられようか。わたしの行政命令によって、人間は留まることを強いられる。それがなければ、彼らはみな「前線」からこっそりと戻り、「脱走兵」になっていただろう。死を恐れない者がいるだろうか。人々は本当に自分のいのちを危険に晒せるのか。わたしは誰にも無理強いはいしない、なぜなら、ずっと以前に人の本性を完全に理解したからである。ゆえにわたしは、人々がかつて行なったことのない計画に絶えず着手している。誰もわたしの働きを実行できなかったのも、わたしは自ら戦場に足を踏み入れ、サタンと生死を賭けた戦いを繰り広げてきたのだ。今日、サタンは極限まではびこっている。わたしがこの機会を利用してわたしの働きの中心を見せつけ、わたしの力を明らかにしようとしなのはなぜか。以前に言ったように、わたしはサタンの策略を引き立て役として利用している。これは最高の機会ではないのか。今初めて、わたしは満足の笑みを浮かべるが、それは目的を達成したからである。わたしはもはや走り回って、人々に「助け」を求めたりしない。忙しく動き回るのはやめたし、放浪者の生活を送ることもない。これからは平穏に暮らす。人間も同様に安全で無事だろう。わたしの日が来たからである。わたしは地上で人間の忙しい生活、多くの不正が生じたと思しき生活を送ってきた。人の目には、わたしが彼らの喜びや悲しみだけでなく、逆境をも共有したと映っている。人間同様、わたしも天の下と地上で暮らしてきた。したがって、彼らはいつもわたしを被造物と見なしてきた。人間は天にいるわたしを見たことがないので、わたしのためにあまり努力をしてこなかった。しかし、今日の状況を考えると、わたしが自分たちの運命の支配者であり、雲の上から語りかける話者であることを、人々は認めざるを得ない。ゆえに、人間はわたしの前で地面にひれ伏し、わたしを崇めた。これはわたしの凱旋の証拠ではないのか。すべての敵対勢力に対するわたしの勝利の描写ではないのか。世界が終わりに近づきつつあり、人類は大々的な浄化を経験するだろうという予感を、すべての人が抱いている。しかし実際には、わたしが求めることを意識して実行することができないので、わたしの刑罰を受けて泣きわめくしかない。何ができるというのだ。誰が人間たちに服従すると言ったのか。誰が彼らに最後の時代に入れと言ったのか。なぜ彼らは終

わりの日に人間の世界に生まれたのか。すべてはわたしが自ら取り決め、計画しているのだ。誰が文句を言えようか。

創世以来、わたしは人のあいだを歩き回り、地上で暮らす彼らと付き合ってきた。しかし、過去の世代の中に、わたしによって選ばれた者は一人としていなかった。誰もがわたしの声なき手紙によって拒絶されたのである。これは、過去の人々がひたすらわたしに仕えなかったからであり、ゆえにわたしも彼らだけを愛することはなかった。彼らはサタンの「贈り物」を受け取り、それから振り向いてそれらをわたしに捧げた。これはわたしへの中傷ではなかったか。そのような捧げものが出されているとき、わたしは嫌悪を示さず、むしろこれらの「贈り物」を経営の資材に加えることで、彼らの企みを活用した。後に彼らが機械によって処理されていたら、わたしはその中の滓をすべて焼き捨てるだろう。現代において、人間はわたしに多くの「贈り物」を捧げてきたわけではないが、わたしはそのために彼らを責めたりしない。これらの人々はずっと極貧で何も持っていなかった。ゆえに、わたしは彼らの状況の現実を観察した後、人間の世界に来てからは決して彼らに理不尽な要求をしなかった。むしろ、彼らに「材料」を与えた後で、わたしが望む「完成品」を探し求めてきたのだ。これが人間に達成可能な限度だからである。わたしは苦難の中で長年過ごし、適切な要求を考え出す前に人として生きることを意味を学んだ。わたしが人間の生活を経験していなければ、人にとっても話し合うのが難しい事柄をどうしてわたしが理解できただろう。それにもかかわらず、人間はそうのように考えず、わたしが全能で、超自然的な神自身だと言う。これはまさに、すべての人が歴史を通じて抱いてきた観念、今日に至るまで抱いてきた観念ではないのか。わたしを本当に、かつ完全に知ることができる人は地上に皆無だとわたしは言った。この見解には言外の意味がある。つまり、ただの無駄話ではないということだ。わたしはこのことを自ら経験し、観察してきたので、その詳細を理解している。わたしが人の世に降臨していなければ、誰がわたしを知る機会を持つだろう。誰がわたしの言葉を直接聞けるだろう。誰が自分たちのあいだでわたしの姿を見られるだろう。時代を通じて、わたしはいつも雲の中に隠れていた。また早くから、「終わりの日に人の世へ降臨し、彼らの模範としての役割を果たす」と預言していた。このため、今日の人々は幸運にも自身の視野を広げられる。これは、わたしが彼らに授けた親切ではないのか。彼らはひょっとして、わたしの恵みをまったく理解していないのではないだろうか。なぜ人間はそこまで麻痺して頭が鈍いのか。ここまで来ながら、なぜいまだに目覚めないのか。わたしはこの世に長年いるが、誰がわたしを知っているのか。わたしが人々を罰するの

も無理はない。彼らはわたしが権威を振るう対象であるかのようだ。わたしの銃に込められた弾丸で、いったん発砲したら全員「逃げ出す」かのようである。人々はそのように想像している。わたしはいつも人間を尊敬してきたのであり、奴隷のごとく恣意的に搾取したり取引に使ったりしたことはない。わたしが彼らから離れられず、彼らもわたしから離れられないからである。このようにして、生と死の絆がわたしたちの間に作られてきたのだ。わたしは人をずっと大切に愛してきた。人がわたしを大切にすることはないが、いつもわたしのほうを向いており、そのためわたしは彼らに努力を注ぎ続けている。わたしは人々をわたし自身の宝物のように愛している。彼らは地上におけるわたしの経営の「資本」だからである。したがって、わたしが彼らを淘汰することはまずない。人間に対するわたしの旨は決して変わらない。彼らは本当にわたしの誓いを信じられるのか。どうすればわたしを満足させられるのか。これが全人類の課題であり、わたしが彼らに割り当てた「宿題」である。彼らがみな、それを完成させるために一生懸命働くことがわたしの望みである。

1992年4月23日

第三十六章

すべてはわたしの手によって采配される。誰があえて自分の好き勝手な行いをするだろうか。誰がそれを簡単に変え得るだろうか。人は、埃が舞うかのように、薄汚れた顔で空中を漂い、頭からつま先までひどく不快なものとなる。わたしは雲の中から打ち沈んだ心でそれを見る。かつて活気に溢れていた人は、なぜこのようになったのか。なぜ人はそれに気づかず、気にもとめないのか。なぜ人は何も構わずに、汚れにまみれるままにするのか。それは人に自分自身に対する愛と尊重がないからである。人はなぜいつもわたしが求めることを避けるのか。わたしは人に対して極めて残酷で無慈悲であるということなのか。わたしは極めて気まぐれで理不尽だということなのか。なぜ人はいつも怒りに燃えた目でわたしを見るのか。なぜ人はいつもわたしを嫌うのか。わたしは彼らを追い詰めたのだろうか。人は己のくびきを両手で握りしめ、敵を見張るかのような目つきでただわたしをじっと睨むばかりで、わたしの刑罰に何も見出さなかった。わたしはこのとき初めて、人がどれだけ衰弱しているかを認識する。試練の中で揺るぎなく耐え忍んだ者は誰もいないとわたしが言うのは、このためである。人の霊的背丈とはまさにこのようなものではなかろうか。具体的な「測定値」を人に知らせる必要があるだろうか。人の「身長」は地にうごめく小さな芋虫ほどしかなく、その「胸幅」は蛇のそ

れと同じくらいしかない。わたしは、こう言うことで人を見くびっているのではない。人の霊的背丈とはちょうどそのようなものではないか。わたしが人を悪化させただろうか。人は跳ね回る子供のようだ。動物と遊ぶことさえあるが、変わらず幸福である。人は、何の不安も悩みもない猫のようだ。これは霊の導きによるものかもしれないし、天の神の役割によるものかもしれないが、わたしはこの世の人の贅沢な生活にひどくうんざりしている。寄生虫と変わらない人の生活のために、「人生」という言葉に対するわたしの「関心」はいくらか増した。ゆえに、わたしは人生に対して多少「敬意」を持つようになったのである。意味のある生活を創り出すことができるのは人しかないように思われ、わたしにそうする能力はないからである。それ故わたしはただ「山」にこもる。人の中であってその苦難を経験し、観察することはわたしにはできないからである。それでも人はわたしにそれをしきりに強要し、わたしにはそうする以外に選択肢がないのだ。わたしは人の采配に従うことしかできず、人と共に経験を要約し、人と共に人生を経験する。わたしはかつて、天で都全体を旅してまわり、天の下では全ての国々を旅してまわった。しかし誰もわたしを見出さず、わたしが動き回る音を聞いただけである。わたしは何の形跡も残さずに行き来するように人の目には映る。それはあたかもわたしが彼らの心の中の見えない偶像になったかのようであるが、人はそうは考えない。これがすべて人の口から告白された事実ではないということなのか。この点で、彼らが罰せられるべきだと考えない人がいるのだろうか。確固たる証拠を前に、人はまだ堂々と振る舞うことができるのか。

わたしは人の間で「商取引」をする。わたしは彼らの汚れと不義をすべて拭き去る。こうして、彼らがわたしの心に敵うように彼らを「処理」するのだ。それでも釣ったばかりの魚のように飛び跳ねてばかりいる人間が協力してくれることが、この段階での業には不可欠である。このため、わたしは事故防止のために釣った「魚」をすべて殺し、魚が従順で不平を全く言わなくなるようにした。わたしが人を必要とするときにはいつも彼らは姿を隠す。まるでびっくりするような場面には一度も出くわしたことがないか、田舎で生まれて都会の事は何も知らないかのようである。わたしは人に欠如する部分にわたしの知恵を与え、彼らがわたしを知るようにする。人はあまりに貧しいため、わたしは直接人の中に来て、彼らに「富への道」を与え、彼らの目を開く。こうすることによって、わたしは人を救っているのではないのか。これは人に対するわたしの憐れみではないのか。愛は無条件に与えることか。ならば憎悪は刑罰なのであろうか。わたしは異なる観点から人に説明したが、人はこれを言葉と教義としか見なさない。わたしの

言葉は、あたかも人の手によって在庫処分のために売られる不良品のようである。それだから、暴風雨が来て山村を呑み込んでしまうとわたしが言っても気にする者はおらず、数人が疑いつつも住まいを移すだけである。あとの者は無関心であるかのように、まるでわたしが空のツバメでもあるかのように、その場所に留まる。彼らはわたしの言うことを全く理解しない。山々が崩れ、地が裂けて初めて、人はわたしの言葉を考える。そのとき初めて人は夢から覚めるのだが、時すでに遅く、大洪水に飲み込まれ、彼らの死骸が水面に浮かぶ。この世の無残な姿を目の当たりにし、人の不運にわたしはため息を漏らす。わたしは人の運命のために多くの時間を費やし、大きな代価を支払った。わたしには涙腺がないと人は思っているが、涙腺のない「奇人」であるわたしは、人のために多くの涙を流した。しかし人はこれに全く気づかず、わたしが存在しないかのように、地にあって玩具で遊んでいるだけである。このため、今日の状況において、人は無神経で頭が鈍いままであり、未だ洞窟に横たわっているかのように、地下室で「凍った」ままなのである。そのような人の行いを見たわたしは、去る以外にはないのだ。

わたしが人のためになることを多くしたように人には映るため、彼らはわたしをこの時代の模範と見なす。しかし、彼らはわたしを人の運命の支配者、万物の創造主と見なしたことはない。あたかもわたしを理解できないかのようにである。人はかつて「理解万歳」と叫んだが、時間をかけて「理解」という言葉を分析した者はおらず、人がわたしを愛したいと願っていないことがわかる。今日、人はわたしを全く尊重せず、彼らの心にわたしの居場所はない。迫り来る試練の日々に、彼らがわたしに真の愛を示すことは出来るだろうか。人の義は形なきままで、見ることも触れることもできない。わたしが望むのは人の心である。人の最も大切な部分は心だからだ。わたしの行いは、人の心によって報われるに値しないのか。人がわたしに心を渡さないのはなぜか。なぜいつも心を自分の胸の内に抱き込んで、それを解き放とうとしないのか。人の心は、その人の生涯を通じて平安と幸福を確保できるのか。わたしが人に何かを求めるとき、地の埃をつかみ取ってわたしに向かって投げつけるのはなぜなのか。これは人のずる賢い企てなのか。まるで行く当てのない通りすがりの人をだまして自宅に誘い込んだ後に狂暴になり、その人を殺そうとするようなものである。人々は、わたしに対してもそのようなことをしようとした。まばたき一つせずには人を殺す死刑執行人、人を殺すことを第二の天性とする悪魔の王であるかのようにである。そして今度はわたしの前に来て、同じ手段を用いようとする。だが彼らには彼らの計画があるように、わたしにも対応する手段があるのだ。たとえ人々がわたしを愛さなくても、わたしの手段を今このときに人に明らかに

しないでいられようか。わたしには、人を扱うことにおける無限で計測不可能な技能がある。人のすべての部分はわたしが直接操り、処理する。最終的にわたしは、人に己の愛するものと離れる苦悩を耐えるようにさせ、わたしの采配に屈するようにさせる。そのとき人にはどのような不満があるだろうか。わたしが行う事は、すべての人のためではないのか。これまで人に対していくつもの段階における働きに関して語ったことは一度もなかった。だがこれまでとは違う今日にあって、わたしは人々にわたしの働きについて前もって語る。この働きはこれまでのものと異なるため、人がその働き故に躓いてしまわないためである。これは人に対する予防接種ではないだろうか。理由がどうあれ、人々はわたしの言葉を真面目に受け取ったことなど一度もない。空腹のあまりに何を食べるかをこだわらず、その結果胃が弱ってしまったかのようである。しかし、人々は自らの「健康体質」が極めて優れていると解釈し、「医師」の忠告を無視する。彼らの鈍感さを見て、わたしは人を憂う。その未熟さと、人生での経験不足故に、人は恐れを知らない。彼らの心の中には「人生」という言葉は存在せず、人生を重んじることもなく、あたかもとりとめなく話し続ける老女の言葉のように、わたしの言葉にただうんざりする。要するに、いずれにせよ、わたしは人がわたしの心を理解できることを願うのである。人を死の地へ送ることはわたしの望むところではないからだ。この瞬間わたしがどんな気分かを人が理解でき、たった今わたしが抱えている重荷を察してくれると良いのだが。

1992年4月26日

第三十七章

長い世代を超えて、わたしが行ってきたすべての働き——その働きのすべての段階——にはわたしの働きの適切な方法が含まれている。そのことによって、わたしの愛する人々はますます純粹になり、ますますわたしに用いられるのに相応しくなってきた。しかし同じ理由から、残念なことに、わたしの働きの方法が増すにつれて人々の数は減少し、そこで人々は深く考え込むようになってしまう。もちろん、今日のわたしの働きも例外ではなく、ほとんどの人々はふたたび深い考えに捕らわれ、それで、わたしのやり方が変化することによって、一部の人々は立ち去るだろう。これは、次のようにも述べるができるだろう。すなわち、これはわたしが運命づけたものだが、わたしが行ったことではない。創造の時代から今日まで、わたしの働きのやり方によって、とても多くの人々が倒れ、とても多くの人々が自分の道を失っている。だが、わたしは人々がど

のようであるか、彼らがわたしを愛情深くないと感じるかどうか、あるいは残酷すぎると感じるかどうかは気にしないし、たとえ人々の理解が正しくても間違っている、わたしは説明をすることは避ける。まず、この話し合いの重要な点に関して交わり、誰もが完全に理解を得られるようにしよう。なぜ人々は苦しむのか、その理由を彼らが理解するのを妨げないようにするためだ。わたしは人々に強制し、口のきけない人が黙って苦しむようなことはさせない。その代わり、すべてははっきり説明し、人々がわたしに向かって不平を言わないようにする。そうすればいつかすべての人々は刑罰の真ただ中でも真の称賛の言葉を発するだろう。さてこの方法に、あなたは賛同するだろうか。それは人々の要求に叶うだろうか。

そもそもの始まりから刑罰の時代まで、わたしはまず人々にその「時代」の背後にある一般的な意味を話し、彼らがわたしを怒らせないようにする。つまり、わたしは自分の働きの段取りをし、誰にもそれを変えさせはしない。変えようとする者には誰であれ大目に見ることはなく、罪に定める。このことを覚えておきなさい。これらはすべて「予防接種」である。新しいやり方の中で、すべての人々がまず理解しなければならないのは、自分の実際の状態を理解することを何よりも先に達成すべきだということである。自分自身についていくらか理解を得ていなければ、不注意に教会で話すことは誰にも許されないだろう。そして、この規則を破る人々をわたしは必ず罰するだろう。今日この日から、あちこちの教会ですべての使徒の名前が挙げられ、あちこち意のままに動くのは禁止されるだろう。そんなことをしても、あまり成果がない。彼らはみな自分の義務を果たしているように見えたが、実際はわたしを騙していた。過去がどのようなものであったかに関わらず、今日そのすべては消え去り、ふたたび持ち出してはならない。今後は、「使徒」という用語は廃止され、二度と使われなくなり、そして、すべての人々は自分たちの地位から降りて、自己を知るようになるだろう。これはもちろん彼らの救いのためである。「地位」とは栄誉を示すものではなく、呼びかけの用語にすぎない。わたしの意味するところがわかるだろうか。教会を導く人々は依然として自分の教会内で教会生活を送っているだろう。そして、もちろんこれは厳格な規則ではない。必要なとき、彼らは他のかつての使徒たちとともに何か所もの教会を訪れることができる。もっとも重要なことは、教会のメンバーが誰も実際に教会生活を送っていないということがないかぎり、教会の交わりが増えなければならないということである。それにもかかわらず、あなたがたはみな自分自身を知るために団結して、赤い大きな竜に反抗しなければならないことをわたしは強調しなければならない。これがわたしの意図である。どのく

らい人々が話すかは重要ではなく、むしろわたしの民全員が一つに団結できることが極めて重大なのであり、それが真の証しをする唯一の方法である。かつて、誰もが自分自身を理解するようになってしまった。しかし、わたしが数えきれないほどの言葉を発してきたのに、あなたがたはどのくらい自分自身を理解するようになったらう。地位が高ければ高いほど、自分自身を脇に置くのは難しくなる。希望が大きければ大きいほど、刑罰を受けている間にいっそう苦しむことになる。これがわたしが人間に与える救いである――おわかりだろうか。これをそのまま額面通りに受け取ってはいけない。そうすることはあまりに浅はかであり、何の価値もない。あなたがたはその根底にある意味を理解するだろうか。教会の人々が本当に自分自身を理解することができるなら、それは、そのような人々がわたしを本当に愛しているという証拠だ。つまり、あなたがたは人々と食事を共にしなければ、彼らの困難を理解しないだらう。あなたがたはこれらの言葉をどのように理解するだらう。結局、わたしは、すべての人々が刑罰を受けている間に自分自身を理解するようにさせ、彼らが刑罰を受けている間に歌い、笑うようにさせる。あなたがたはわたしを満足させるに足る信仰を本当に持つだらうか。そこで、あなたがたはどのようなことを実践すべきだらうか。今後は各教会の仕事はその教会の適切な人たちによって取り扱われ、使徒たちはただ教会の生活を送るだけになるだらう。それが「生活を経験する」と呼ばれることなのだ。おわかりだろうか。

人類に対して刑罰が正式に下される前に、わたしは人々全員が最終的にわたしに満足するように、まず「あいさつの働き」をする。わたしから離れていく者たちさえ、去る前に苦しんで、証をし終えなければならない。さもなければ、わたしはその者たちを大目に見ることはない。このことは人々の攻撃を許さないわたしの性質、そして自分の話すことは成し遂げるというわたしの性質を示している。こうして、わたしの口が語る次の言葉が果たされる。「わたしは本気で言っているのであり、わたしが語ることは成し遂げられるだらう。そしてわたしが成し遂げることは永久に続くだらう。」言葉がわたしの口から離れるとき、わたしの霊はただちにその働きを始める。誰があえて手に持っている「おもちゃ」で遊ぼうとするだらうか。人々はわたしの刑罰を恭しく、従順に受け入れなければならない。誰が刑罰を逃れることができようか。わたし以外に道があるだらうか。今日、わたしはあなたが地上にいることを許しているから、あなたは歓声を上げているのだ。明日、わたしはあなたが天に入ることを許すだらう、そうすれば、あなたはわたしを褒め称えるだらう。明後日、わたしはあなたを地下に送り、そこであなたは刑罰を受けるだらう。これらはすべてわたしの働きにとって必要なことではないだ

ろうか。わたしの要求によって、不幸に苦しめない人がいるだろうか、祝福を受けない人がいるだろうか。あなたがたは例外になれるのだろうか。地上のわたしの民として、あなたがたは、わたしの要求に対して、わたしの旨に対して、何をすべきか。あなたがたはわたしの聖なる名前をあなたがたの口で称賛するが、心の中ではひどく嫌っているということがあり得るだろうか。わたしのために働き、わたしの心を満足させ、同時に自分自身を理解し、赤い大きな竜に反発することは、決して容易な課題ではなく、あなたがたはそうするために代償を払わなければならない。わたしが「代償」と言うとき、あなたがたはその語をどう理解するのだろうか。そのことについて今話し合うつもりはない。人々に直接答えを与えないからである。その代わり、わたしは彼ら全員に自分自身照らし合わせてじっくり考えさせ、その後、わたしの間に対して彼らの行動や態度を使って実際に答えさせる。あなたがたにはそれができるだろうか。

1992年4月27日

第三十八章

人類の経験の初めから今に至るまで、わたしの姿があったことはなく、わたしの言葉が指導力を発揮したこともなかったので、わたしはいつも距離を置いて人間を避け、その後人間から離れた。わたしは人類の不服従をひどく嫌っている。なぜかはわからない。最初から人を憎んでいたようだが、人に深く同情もしている。そのため人々は常にわたしに対して二つの態度を持ってきた。わたしが人を愛し、かつ憎んでいるからである。人間のうちの誰がわたしの愛を本当に心に留めるだろうか。そして誰がわたしの憎しみを心に留めるだろうか。わたしの目に映る人々は、死物で、いのちに欠け、まるであらゆる物のあいだに立っている粘土の像のようである。時々、人の不服従はわたしの怒りを引き起こす。わたしが人々と共に住んでいた時、わたしが突然現れると、彼らは薄笑いを浮かべたものだった。なぜなら、彼らはわたしが地上で彼らと遊んでいるかのように、いつもわたしを意識して探し求めていたからである。彼らは決してわたしを真剣に受け止めないで、彼らのわたしに対する態度のせいで、わたしは人類「担当部局」から「引退」するほかなかった。「引退」したとはいえ、わたしの「年金」は一円も欠けていないはずであることを明言したい。わたしは人類「担当部局」での「勤続年数」が長いから、わたしが受け取るべき支払いを人々に要求し続ける。人はわたしから離れたが、どうしてわたしの支配から逃れることなどできようか。わたしは一度、ある程度人々に対する支配の手を緩め、自由に肉体的願望にふけることを許したので、彼らは遠慮

がなくなり、大胆な態度で振る舞い、少しも抑えがきかなくなった。彼らは誰もが肉の中に生きているので、わたしを心からは愛していないことがわかる。ひょっとして真の愛とは肉と引き換えに与えられるものなのだろうか。ひょっとしてわたしが人に求めるすべては肉の「愛」なのだろうか。もしこれが本当なら、人はどんな価値を持っていると言うのだろうか。彼らは皆価値のないゴミではないか。わたしの辛抱強い「超自然的力」がなければ、わたしはずっと前に彼らから離れていただろう。なぜわざわざ人間のもとに留まって、彼らの「いじめ」を受け入れるのか。しかし、わたしは我慢した。わたしは人間のビジネスを奥底まで調べたかったのだ。地上での働きを終えたら、わたしは高い空に昇り、万物を「支配する者」を裁く。これがわたしの主要な働きなのである。すでに人をひどく嫌っているからである。敵を憎まない人がいるだろうか。敵を絶滅させたくない人がいるだろうか。天では、サタンがわたしの敵であり、地上では人がわたしの仇である。天と地は繋がっているので、彼らは九世代にわたり連座して同罪と見なされるべきであり、誰も許されない。誰が彼らにわたしに抵抗せよと言ったのだろうか。誰が彼らにわたしに従うなと言ったのだろうか。なぜ人は古い本性から解き放たれることができないのだろうか。人間の肉がいつも人間の内部で増殖しているのはなぜだろう。このことすべてはわたしが人に審判を下す証拠である。敢えて事実には屈服しない人がいるだろうか。わたしの審判は感情に左右されていると敢えて言う人がいるだろうか。わたしは人とは違うのだから、人からは離れた。わたしは人間ではないからである。

わたしが行くことはすべて、ある理由のためである。つまり、人がわたしに「真実」を「明らかにする」時、わたしは彼らを「処刑場」に護送する。人間の罪はわたしの刑罰に十分値するからである。だから、わたしはむやみに人々を罰したりはしない。むしろ、彼らに対するわたしの刑罰はいつもその罪の真実にふさわしいものである。さもなければ、人類はわたしに向かって頭を垂れて罪を認めることなどしないだろう。反抗心を持っているからである。人々は皆その場の状況に応じて仕方なく頭を垂れるが、心の中では納得していない。わたしは人々に「バリウム」を飲ませるので、彼らの内臓はレンズの前にはっきりと見える。腹の中には汚物や不純物が根絶されないまま残っている。さまざまな種類の汚物が静脈を流れているので、体中の毒が増加する。人は長い間このような生き方をしてきたので、それに慣れてしまい、おかしいと思わない。その結果、体内の病原菌が成熟し、人々の本性になり、誰もがその支配下で暮らす。人々が野生馬のように、そこら中を「走り回りに行く」のはそのためである。それでも彼らはこのことを決して全面的には認めない。ただうなずいて黙諾を示すだけである。実は、わた

しの言葉をまじめに聞き入れていない。彼らがわたしの言葉を療法として受け止めるなら、「医者命令に従い」、その療法で体内の病気を治すだろう。しかし、わたしの心では、彼らの振る舞い方は、この望みを満たすことはできない。そこでわたしはただ「ぐっところえて」彼らに語り続けるしかない。彼らが耳を傾けようが傾けまいが、わたしはただ自分の義務を果たしているのである。人はわたしの祝福を享受しようとせず、地獄の苦痛を受けようとするので、わたしは彼らの要求を受け入れることしかできない。しかし、わたしの名前と霊が地獄で辱められないために、わたしはまず彼らを鍛錬し、次に彼らの希望に「従い」、彼らが「心からの喜び」を経験できるようにする。人がいつでも、どこでも、わたし自身の旗印を掲げてわたしを辱めるのを許すつもりはない。これが、わたしが彼らを繰り返して鍛錬する理由である。わたしが語る厳しい言葉の抑制がなければ、どうして人は今日まだわたしの前に立っていられるだろうか。わたしが去ってしまうのを恐れるという理由だけで人々は罪を犯さないのか。刑罰を恐れるという理由だけで人々が不平を言わないのは本当ではないのだろうか。誰の意志がわたしの計画のためだけなのか。人々は皆、わたしは「知性という特性」に欠ける神性であると考えているが、わたしが人間性の中にいる時すべてを見通せるということを誰が理解できるだろうか。まさに人々が「小さい釘を打つのに、なぜ大きな金槌を使うのか」と言うとおりである。人がわたしを「愛する」のは、彼らの愛が持って生まれたものだからではなく、刑罰を恐れているからである。人々のうちの誰が生まれつきわたしを愛しただろうか。わたしを自分の心臓を取り扱うようにわたしを取り扱う者はいるだろうか。そこでわたしはこのことを人間界のための格言とともに要約する。人々のうちにわたしを愛する者は誰もいない。

地上でのわたしの働きを終わらせたいので、人がわたしからはるか遠くに投げ飛ばされ、果てしない海に落ち込まないように、わたしはこうして働きを速めている。わたしが物事の真相を前もって話したので、彼らは多少警戒しているのである。そうでなければ、激しい風や波に直面しそうなときに誰が帆を上げるだろうか。人々は皆見張りの働きをしている。彼らの目にはまるでわたしが「強盗」になったかのようである。彼らはわたしが彼らの家にあるすべての物を取り上げるのを恐れて、皆あらん限りの力を出して「扉」を押さえつけながら、わたしが突然侵入してくるのを死ぬほど恐れている。彼らが臆病なネズミのように振る舞うのを見ると、わたしは黙って去る。人の想像においては、「大惨事」が近づきつつあるようで、皆混乱し、正気を失って逃げまどう。わたしの目には、その時初めて幽霊が地上を徘徊しているのが見える。わたしは笑わ

ずにはいられず、その笑い声の只中において人は驚き、おびえる。その時、わたしは真実を悟り、笑顔を抑え、もはや世界を見渡さず、代わりにわたしの本来の計画に戻る。わたしはもはや人を、わたしの研究のために標本の役割を果たす見本とは見なさない。なぜなら人は屑にすぎないからである。いったんわたしが捨てたら、彼らはもはや使い道がない。彼らはごみの破片である。この時点で、わたしは彼らを取り除き、火の中に投げ入れる。人の考えでは、わたしの審判と威厳と怒りの中には憐みと慈しみが込められている。しかし、わたしが長い間、彼らの弱さを見逃し、ずっと以前に憐みと慈しみは撤回し、そのため、彼らが現在の状態に至っていることを彼らはまったく知らない。誰もわたしを知ることはできないし、わたしの言葉を理解することも、わたしの顔を見ることもできず、わたしの旨を理解することもできない。これが人の現在の状態ではないだろうか。それならどうしてわたしに憐みあるいは慈しみの心があると言えるのだろうか。わたしは人の弱さには関心がないし、不適當な点を「考慮してやる」ことはない。それでもこれがわたしの憐みと慈しみの心なのだろうか。そしてそれでも彼らへのわたしの愛なのだろうか。人々は皆、わたしが「口先だけの社交辞令」を話していると考えている。そこで彼らはわたしが話す言葉を信じない。しかし、「時代が違うので、今はわたしの憐みと慈しみの心は存在しない。しかし、常にわたしは語るとおりに行う神である」を誰が理解するのか。わたしは人類のあいだにおり、人々は心の中でわたしをいと高き神と見ているので、彼らはわたしが英知を使って話すのが好きなのだと信じている。したがって、人はいつもわたしの言葉を話半分にしか聞かない。しかし、誰がわたしの話の裏にある規則を理解できるのか。誰がわたしの言葉の源を把握できるのか。誰がわたしが実際に成し遂げたいことを推測できるのか。誰がわたしの経営（救いの）計画の結末の詳細を理解できるのか。誰がわたしの腹心の友になれるのか。全てのものの中で、わたし以外に、わたしが行っていることを正確に理解できる者がいるだろうか。そして、誰がわたしの最終目的を知ることができるのか。

1992年4月30日

第三十九章

毎日わたしは宇宙の上を巡り、わたしの手で創り出したあらゆるものを観察する。天の上にはわたしが休む場所があり、天の下にはわたしが動く地がある。わたしはそこにある全てのものを支配し、全てのもののあらゆる事柄を統制し、そこにある全てのものが自然の成り行きに従い、自然の命ずるところに従うようにする。わたしは不服従なも

のを蔑み、わたしに反対し、自分自身の分類から外れるものを嫌悪するので、全てのものを無抵抗でわたしの采配下に従わせ、これら全てのものと宇宙にある全てのものを整えよう。誰がまだあえて自分の好き勝手にわたしに抵抗しようものか。誰がわたしの手による采配に従おうとしないのか。人はどうしてわたしに齒向かうことに「関心」を持つことができるのか。わたしは人々を彼らの「先祖」の前に連れ行き、先祖たちに人々を家族のもとに連れ戻させよう。彼らが先祖に抗い、わたしのもとに戻ってくることは許されない。これがわたしの計画である。今日、わたしの霊は地上全域を行き来し、あらゆる類の人々に番号を割り振り、あらゆる類の人々に異なるしるしを付ける。これは、その先祖が彼らを上手く家族に連れ戻すことができるようにするためであり、わたしが彼らについて「心配」し続けなくてもよくするためである。そんな心配は極めて煩わしい。このため、わたしはまたこの努めを分割し、この取り組みを分配する。これはわたしの計画の一部であり、誰もこれを妨げることはできない。わたしは、全ての事柄を管理するために存在するすべてのものから適切な代表者を選び出し、全ての人の秩序だった従順がわたしの前にもたらされるようにする。わたしは、天の上をしばしば歩き回り、天の下をしばしば歩く。人々が行き来する偉大なる世界を見て、地上にひしめく人類を観察し、地上に住む鳥や獣を見ていると、心の中で感情的にならざるを得ない。天地創造の時、わたしは全てのものを創った。そして全てのものが各自の場所でわたしの采配の下にその義務を果たす。わたしは天の高みから笑い、天の下にいる全てのものがわたしの笑う声を聞き、それらは直ちに靈感を受ける。まさしくその瞬間、わたしの偉大なる事業が完成するからである。わたしは、わたしの代表者とするために人を創り、わたしに逆らうのではなく、心の底からわたしを褒め称えるように人を創ったので、わたしは人の中に天の知恵を加え、人が全てのもののの中でわたしを代表するようにする。これらの単純な言葉を誰が全うできるのか。人がいつも心を自分自身だけに向けるのはなぜなのか。人の心はわたしのためのものではないのか。わたしは人にあれこれを無条件に求めているわけではない。人は常にわたしに属しているのである。自分に属するものを簡単に他人に引き渡すことなどできようか。わたしが作った「衣服」を他の誰かが着るように手放すことなどできようか。人々の目には、わたしは正気を失い、精神の病に侵されて、人間のあり方を全く理解しないばかり者であるかのようである。このため、人々はいつもわたしを純真な者として見るが、決してわたしを心から愛さない。人がすることは全て意図的にわたしを欺くためのものであるため、わたしは憤怒に駆られて全人類を絶滅させる。わたしが造った全てのもののの中で、人類だけがいつもわたしを欺く方法を考え出そうとしている。人は全てのものの「支配者」だとわたしが言うのはこのた

めである。

今日、わたしは全ての人々を「大きな炉」に投げ込んで精錬する。わたしは天の高みに立ち、火の中で人々が焼かれ、火に強いられて事実を吐き出すのをしっかりと見守る。これはわたしが働きを行うひとつの方法である。そうでなければ、人々は自分を「謙虚」であると公言し、自分自身の経験を語るために最初に口を開こうとする者はおらず、皆互いに顔を見合わせるだけであろう。これこそがわたしの知恵の結晶である。わたしは時の前に今日の事柄を運命づけたからである。このため、人々は、綱に導かれてきたかのように、感覚を失ってしまったかのように、無意識のうちに炉に入り込む。誰も炎の猛攻から逃れることはできない。彼らはなおも炉の中の自分の運命に当惑し、焼き死ぬのではないかとひどく恐れつつ、互いに「攻撃」し合い、「喜んで走り回る」。わたしが火をかき立てると、火はすぐに激しくなって空に向かって燃え上がり、炉に引き込もうとするかのように炎はしばしばわたしの衣にまとわりつく。人々は大きく見開いた目でわたしを見る。わたしはすぐさま炎に従って炉に入る。その時炎は燃え、人々は大声を上げる。わたしは炎の中を歩きまわる。炎は燃え盛るが、炎にわたしを傷つける意志はない。わたしはもう一度わたしの衣を炎に手渡そうとするが、炎はそれでもわたしに近づこうとしない。人々はその時になって初めて、炎の灯りによってわたしの真の顔をはっきりと見る。彼らは焼けつく炉の真ただ中にいるため、わたしの顔ゆえにあらゆる方向に逃げ出し、炉はすぐさま「煮え立ち」始める。炎の中にいる者は全て、炎の中で精錬される人の子を見る。人の子の体を覆う衣は平凡であるが、それは極めて美しい。人の子の足が履く靴は何の変哲もないが、大きな羨望をかき立てる。人の子の顔からは炎のような輝きが発せられ、その目は光り輝き、人々が人の子の真の顔をはっきりと見るのは、その目の光のためのようである。人々は畏敬の念に打たれ、人の子の白い衣と、肩に垂れる羊毛のように白い髪を見る。とりわけ、胸にある金の帯は眩いばかりに光輝き、人の子の足の靴はさらに素晴らしい。人の子の履く靴が炎の中にあって燃えないことから、人々はそれらを驚くべきものだと信じる。痛みがほとばしるときにのみ、人々は人の子の口を見る。彼らは精錬の火の中にあっても、人の子の口から出る言葉を何ら理解しないため、この時、彼らには人の子の喜ばしい声はそれ以上聞こえないが、人の子の口にある鋭い刀は見える。人の子はもはや何も言わないが、その刀は人を傷つける。炎に襲われ、人々は痛みを耐える。彼らは、好奇心ゆえに人の子の非凡な姿を見詰め続け、この瞬間初めて人の子の手にあった七つの星がなくなったことを見出す。人の子は地上ではなく炉の中にいるため、その手の中の七つの星は象徴でしかないた

めに取り去られる。この時、それらが言及されることはなくなるが、人の子のあらゆる部分に当てられる。人々の記憶では、七つの星の存在は不安をもたらす。今日、わたしはもはや人に対して物事を困難にはしないが、人の子から七つの星を取り去り、人の子の全ての部分をひとつに合わせる。人は、この時初めてわたしの全像を見る。わたしは地上から天の高みに昇ったため、人々がわたしの霊と肉体を分けることはなくなる。人々はわたしの真の顔を見て、わたしを引き裂くことはなくなり、わたしが人の悪口に耐えることはなくなる。わたしは人と共に大きな炉の中に歩み入るので、人は今もわたしにたより、意識の中でわたしの存在を感じ取る。このため、純粋な金であるものは、全て燃える火の中でわたしのもとに徐々に集められる。これこそが、おのおのが種類によって分けられる瞬間である。わたしは「金属」を種類別に分類し、全てをそれぞれの家族に戻らせる。その時やっと、全ての物事が活気を取り戻し始めるのである……。

わたしが人を炉に投げ入れて燃やすのは、人がひどく汚れているからである。それでも人は炎によって絶やされず、そのかわりにわたしが人に喜びを覚えることができるように精錬される。わたしが望むのは、まじり物がない純粋な金でできているものであり、不潔な汚染されたものではないからである。人々はわたしの心情を理解しないため、彼らは「手術台」に上る前、あたかもわたしが彼らを解剖した後で、手術台に横たわる彼らを殺すかのように不安に駆られる。わたしは人々の心情を理解しているため、人類の一人のように見える。わたしは人の「不幸」に対して深い憐みを持っており、人が「病を患った」理由を知らない。健康であり、奇形がないならば、代価を払い、手術台の上で時間を費やす必要があるだろうか。しかし、真実を撤回することはできない。誰が「食品衛生」に注意を払わないよう人に言ったのか。誰が健康でいることに注意を払わないよう人に言ったのか。今日、他にどのような手立てがわたしにあるというのか。人に対するわたしの憐みを示すため、わたしは人と共に「手術室」に入る。誰が人を愛せとわたしに言ったのか。従って、わたしは自ら「外科医のメス」を手に取り、後遺症を防ぐために人を「手術」し始める。人に対するわたしの忠誠心のため、人々はわたしに感謝の意を表すために痛みの中で涙を流す。人々はわたしが義を重んじ、わたしの「友」が困っているときに手を差し伸べると信じている。そして人々はわたしの思いやりにますます感謝し、病が治ったらわたしに「贈り物」をしようと言う。しかし、わたしは彼らの言葉を気に留めず、かわりに人を手術することに集中する。人の肉体的な弱さのため、メスの影響下で人は目を固く閉じ、手術台の上でぼうぜん自失し、横たわる。わたしはそれに構わず、ただわたしの手にある働きを行い続けるのみである。手術が終わったと

き、人々は「虎の顎」から逃れ出たのである。わたしは豊かな栄養で彼らを養う。彼らは知らないが、その栄養は彼らの中で少しずつ増える。そしてわたしは彼らに微笑む。彼らは健康を取り戻した後でのみわたしの真の顔をはっきりと見るので、彼らはさらにわたしを愛し、わたしを彼らの父とみなす。これが天と地の結びつきなのではなかろうか。

1992年5月4日

第四十章

人は、わたしが今にも天を破滅させると言わぬばかりに、わたしの一挙一動に固執する。そして、わたしの行いが全く理解しがたいものかのよう、いつもわたしの挙動に当惑する。それゆえに、彼らは天を怒らせて「死すべき人間の世」に投げ込まれることをひどく恐れ、行うこと全てにおいてわたしに倣う。わたしは人を責める口実を見つけようとしたり、彼らの不完全さをわたしの業の標的にしたりはしない。このとき、人は幸福で、人はわたしに頼る。わたしが人に与えるとき、人は自分の命を愛するようにわたしを愛するが、わたしが彼らに何かを求めるとき、彼らはわたしを拒絶する。これはなぜであろうか。人の世の「公正さと合理性」を実践することさえできないのであろうか。わたしはなぜ人に対してこのような要求を何度も繰り返すのだろうか。わたしが何も持っていないということなのであろうか。人はわたしを乞食のようにあしらう。わたしが人に何かを求めるとき、彼らはわたしの前に「残り物」を置いて「お食べなさい」と言い、わたしに特に気を使っているとさえ言う。わたしは人の醜い顔と奇妙な行動を見て、再び彼らから去る。こうした状況の中、人々は理解できないままとなり、わたしが彼らに対して拒絶したものを再び取り戻し、わたしが再び戻るのを待つ。わたしは人のために多くの時間を費やし、大きな代償を払った。しかし今、どういうわけか、人の良心はこれまでにないほどそれらの元々の機能を果たせない状態である。このため、将来の世代の「参考」となるように、わたしは彼らの根強い疑念を「奥義の言葉」に載せる。これらは、人の「努力」から生まれた「科学研究の成果」だからである。それらを簡単に消し去ることなどできようか。これは人の善意を「裏切る」ことにならないであろうか。何とんでもわたしには良心があるので、人へのずる賢い狡猾な行いには関与しない。わたしの行いはこのようなものではないのか。これは、人が言う「公正さと合理性」ではないのか。現在に至るまで、わたしは人の中で休みなく働いてきた。今日のような時代が来ても、人はまだわたしを知らず、他人のように扱い、わたしが彼らを「

苦境」に陥れたと言って、ますますわたしを憎みさえもする。今、彼らの心の中の愛が跡形もなく消え去って久しい。わたしは自慢しているわけでもなく、ましてや人を軽視しているのでもない。わたしは人を永遠に愛することができ、永遠に嫌悪することもできる。わたしには忍耐があるゆえ、これは決して変わらない。しかし、人はこの忍耐力を持たず、わたしに対する態度をいつもころころと変え、わたしが口を開くときにはいつもさほど関心を示さず、わたしが口を閉ざして何も言わずにいと、広い世の中の波に紛れてしまう。従って、わたしはこれを別の警句にまとめよう。人には忍耐が足りないために、わたしの思いを果たすことができない。

人が夢見る間、わたしは世界の国々を旅して、人の中にわたしの手にある「死の臭い」を振りかける。人々はすぐに生命力を失い、人生の次の段階に入る。人間の中に生けし者を見ることはできなくなり、屍があちこちに散らばって、生命力に満たされたものは直ちに跡形もなく消え去り、屍の息の詰まるような臭いが地に充満する。わたしはすぐにわたしの顔を覆って人から離れる。よみがえった者に生きる場を与えて、すべての人が理想の地に住むことができるようにするという、わたしの業の次なる段階を始めるからである。これは、わたしが人のために備えた祝福された地、悲しみやため息のない地である。谷の泉から湧き出る水は清く、底が見えるほど透明で、絶え間なく流れて枯れることがない。人は神と調和して暮らし、鳥は歌い、優しい風と温かな日の光の中で、天と地は共に休む。今日、ここではすべての人の屍が無秩序に横たわる。わたしは人知れずわたしの手の内にある疫病を放つ。人の体は腐り、肉は頭からつま先まで跡形もなく朽ち落ち、わたしは人から遠く離れたところへ行く。わたしが再び人と集うことは決してなく、人の内に来ることもし決してない。わたしの経営全ての最後の段階が終わりを迎え、わたしが再び人間を創造することはなく、人を再び心に留めることもないからである。わたしの口から出た言葉を読んだ後、人はすべて、死にたくないがゆえに希望を失う。しかし、「生き返る」ために「死」なない人があろうか。わたしには人を生き返らせる不思議な力はないとわたしが人に言うとき、彼らは苦痛の中で泣き叫ぶ。実に、わたしは創造主ではあれども、人を死なせる力しか持たず、人を生き返らせる力はない。これについては、人に詫びを言おう。それゆえに、わたしは人に「わたしはあなたに対して支払えない負債を負う」と前もって伝えたが、人はわたしが単に礼儀正しいだけだと考えた。今日、その事実の到来において、わたしは今なおこう言う。わたしが話すとき、わたしは真実に背かない。人は観念の中で、わたしの話し方は多すぎると思いつ込んでいるため、いつも他の何かを望みながらわたしが彼らに与える言葉にしがみつ

。これは、人の誤った動機ではなかろうか。人がわたしを心から愛してはいないとわたしがあえて「はっきりと」述べるのは、これらの状況ゆえである。わたしは良心に背を向けず、真実をゆがめることもない。わたしが人を理想の地に連れて行くことはないからだ。そしてついにわたしの業が終わる時、わたしは人を死の地へと導くであろう。それゆえに、人はわたしについて不平を言わないほうがよい。わたしがこう言うのは、人がわたしを「愛して」いるからではないのか。人の祝福に対する望みが強すぎるからではないのか。人が祝福を求めたくないならば、どうしてこの「不幸」があり得るのだろうか。わたしは、わたしに対する人の「忠実さ」ゆえに、人が何年もの間わたしに従い、全く貢献しなかったにも関わらず懸命に働いたゆえに、「秘密の部屋」で起こっている事柄を彼らに少しながらも明らかにする。今日、わたしの業は特定の段階にまだ達しておらず、人はまだ火が燃え盛る穴に投げ込まれていないことから、わたしは彼らにできるだけ早く立ち去るように勧告する。居残る者は全員、不幸に見舞われて運にも恵まれず、最後には死を避けることもできない。わたしは彼らのために「富への扉」を大きく開く。立ち去る意思のある者は、できるだけ早く立ち去るべきである。刑罰が訪れるまで待つならば、手遅れとなる。これらの言葉は偽りではなく、まさしく真実である。わたしの言葉は良心に従って人に語られるものである。今すぐ立ち去らないならば、いつ立ち去るというのか。人は本当にわたしの言葉を信じることができるのであろうか。

わたしはこれまで人の運命についてあまり考えたことはなかった。わたしは人にとらわれず、わたし自身の意思に従うだけである。人が恐れるからと言って、わたしが手を引くことなどできようか。わたしの経営（救いの）計画の全体を通じて、わたしはこれまで人の経験のために余計な采配をしたことは一切ない。わたしは、わたしの元々の計画に従って行動するだけである。過去に、人は彼ら自身をわたしに「捧げた」が、彼らに対するわたしの思いは熱くも冷たくもなかった。今日、彼らはわたしのために自分自身を「犠牲」にしたが、それでもわたしは彼らに対して熱くも冷たくもない。わたしは、人がわたしのために命を犠牲にするからといって自己満足することはなく、大喜びすることもないが、わたしの計画に従って彼らを処刑場に送り続ける。罪を告白するときの彼らの態度にわたしが気を留めることはない。わたしの凍るような冷たい心が人の心に動かされることがあり得ようか。わたしは人間の中の感情的な動物の一人であらうか。わたしは、わたしには感情がないと何度も人々に言い続けてきたが、彼らは微笑むにすぎず、わたしが単に礼儀正しくしているだけだと思い込んだ。わたしは「人間の人生哲学など全く知らない」と言ったが、人がそれを真に受けたことは決してなく、わたし

が語ることには多くの意味があると言った。限りある人の概念のため、わたしはどのような口調で、どのような方法で人に語ればよいかわからない。したがって、わたしには言い聞かせるような口調で単刀直入に告げるしか方法はないのである。他に何かできるというのであろうか。人が語ることには多くの意味がある。彼らは「感情に頼ることはなく、義を実践している」と言う。これは長い間彼らが叫び続けてきた標語のようなものであるが、人は自分の言葉どおりに行動することができず、彼らの言葉には意味がない。ゆえに、わたしは人に「言葉に実践を伴わせる」能力がないと言うのである。人は心の中で、そのように行動することがわたしに倣うことだと思い込んでいるが、わたしには彼らがわたしに倣うことに対する関心はなく、もはやうんざりしている。なぜ人はいつも彼らを養う者に敵対するのであろうか。わたしは彼らに十分与えなかったのではあろうか。なぜ人はいつもわたしに隠れて悪魔を崇拝するのであろうか。これはあたかも、人がわたしのために働くが、彼らの生活費をまかなうにはわたしの与える月給が不十分なゆえに、彼らは給料を2倍にしようと勤務時間外に別の仕事を探すかのようである。これは、人が多くを費やしすぎてどのように生活していけばよいかわからないからである。もし本当にそうなのであれば、わたしは彼らにわたしの「工場」から去るように言おう。わたしはとうの昔に、わたしに仕えても特別扱いされることはない人に説明した。例外なく、わたしは人を平等かつ合理的に扱い、「懸命に働けばより多くを得る、あまり働かなければ得るものも少ない、まったく働かなければ何も得ない」というシステムを採り入れた。わたしが語るとき、わたしは何も隠さずに語る。わたしの「工場の規則」が厳しすぎると思う人がいれば、今すぐ工場を去るべきである。「交通費」は支払おう。そのような人の扱いにおいてわたしは「寛大」であり、働き続けることを強制しない。無数の人々の中で、わたしの心にかなう「労働者」を見つけることはできないのであろうか。人はわたしを侮るべきではない。人がわたしに背き続け、他での「雇用」を探したいならば、強制はしない。わたしにはそれを喜んで受け入れるほか選択肢はないのである。それはわたしの「規則と規定」が多すぎるからではないのか。

1992年5月8日

第四十一章

わたしはかつて人の間で大いなる努力をしたが、人は気付かなかった。そのため、言葉を使って一步一步人に明らかにしなければならなかった。それでも、人はわたしの言葉を理解せず、わたしの計画の目的について無知なままであった。あまりに多くを欠き

、短所が多いので、人間はわたしの経営（救い）の妨げとなり、汚れた霊がそのすきに現れた。人間は汚れた霊の餌食となり、汚れた霊に苦しめられた人間は、遂にはすっかり汚れてしまった。その時初めてわたしには人間の意図と目的がはっきり見えた。わたしは雲中からため息をついた。なぜ人はいつも自分のために行動するのか。わたしの刑罰は、人間を完全にするためではなかったのか。わたしはわざと人間の積極的な態度を攻撃しているのか。人間の言葉はとても美しく優しいが、その行動は極めて醜い。わたしが人にする要求はなぜいつも何の結果ももたらさないのか。わたしは犬に木に登れと言っていることになるのか。わたしは空騒ぎをしているのか。わたしの全経営計画を実行するにあたり、様々な「試験的な土地」を作った。しかし、あまりに土地が痩せており、長年太陽の光が射さず、地形は変わり続け、遂には崩れてしまったので、わたしはこのような土地を数え切れないほど見捨てたことを覚えている。今日でさえこの土地の大部分が変わり続けている。いつの日か土地が本当に別のものに变化したならば、わたしはそれを手でさっと脇へやる。わたしの働きの現段階はまさにこのようではないのか。しかし人間はそれを全く感じる事ができない。わたしの指示の下、刑罰を受けているだけである。それが何の役に立つのか。わたしは人類を罰するために来た神なのか。わたしがかつて天において計画したことは、わたしが人々と共におり、人々をひとつとし、わたしの愛する全てのものたちと何ものにも引き離されることなく近くいることであった。しかし現状はといえば、今日の状況の中で、人間とわたしが繋がっていないばかりか、わたしの刑罰故に人間はわたしから離れている。彼らがいらないからと言って、わたしが涙を流すことはない。問題解決のためにできることは何か。人は誰もが何であれ演奏中の曲に合わせて歌ってしまう役者である。彼らを自由にすることもできるし、彼らを異国の地からわたしの工場へ戻らせることも勿論できる。そうしてもらった彼らがわたしに不平を言うだろうか。人間がわたしに何ができよう。人間は壁の上に生える草のようではないか。それでもわたしは人間をその欠点故に罰することをせず、栄養をつけさせる。彼らの行動を力ないものにしたのは誰か。彼らを栄養不足にしたのは誰か。わたしの暖かな抱擁で人間の冷たい心を動かす。そのような事を誰ができるだろう。この働きをわたしが人の間で広めたのはなぜか。人間にわたしの心が本当に理解できるのか。

わたしはわたしが選んだ人たちと「取引き」をする。そのためわたしの家には絶えず人々が入り出る。彼らはわたしの家で、まるでわたしと商談でもするかのように様々な手続きをし、そのためにわたしは非常に忙しくなり、時には人間の小競り合いに対

処する時間もなくなった。人間がわたしの重荷を増やさないよう、人々に強く要求する。彼らは、わたしに頼ってばかりいるのではなく、自分で自分の道筋を決めたほうがよい。わたしの家で、子どものように振る舞ってばかりいてはならない。そんなことに何の利益があるというのか。わたしの働きは大事業である。近所の店や小さな商店とは違う。人間はすべて、わたしの気持ちを理解できず、わたしに対して故意に悪ふざけをしているかのように、飽くことのない遊びへの欲を持った聞き分けのない子どもたちであるかのように、物事を真剣にとらえようとせず、多くがわたしが与えた「宿題」を完成させることができなくなっている。そんなことでどうして「先生」に顔向けできようか。人間たちが自分の本分を尽くそうとしないのはどういうわけか。人の心とはどのようなものなのか。未だにはっきり分らない。人の心が常に変化するのとはなぜか。まるで6月の気候のようで、あるときは強い日差しが容赦なく照りつけ、あるときは雲が立ちこめて真っ暗になり、またあるときは強風が音を立てる。なぜ人間は経験から学ぶことができないのか。このように言うのは大げさかもしれないが、人間は梅雨の時期に傘を持ってでかけるということを知らないほど無知なため、天からのわか雨に幾度となくずぶ濡れになってきた。あたかもわたしが人間をからかっていて、人間は天からの雨に困っているかのように。それとも、わたしがあまりに「残酷」で、人間がみなぼんやりと注意散漫になってしまい、どうしてよいか全くわからなくなってしまったのだろうか。わたしの働きの目的や重要性を、本当に理解した者はひとりとしていない。それ故人間はみな、問題を起こすことばかりをし、自分自身を懲らしめる。わたしが意図的に人間を懲らしめていることなどあるだろうか。なぜ人間は、自ら問題を引き起こすのか。なぜいつも自ら罠にかかるのか。なぜわたしと交渉せずに自分で仕事を見つけてしまうのか。わたしの与えるものが少なすぎるということか。

わたしは人類にわたしの最初の作品を公表したが、わたしの作品を人々があまりに驚き、それを注意深く観察したので、その調査から多くを学んだ。わたしの作品はまるで複雑な内容の小説か、恋を詠った散文詩、政治番組のトーク、経済界の常識とされる込み入った内容のようである。わたしの作品があまりに豊かなので、人々の見方は様々である。わたしの作品の序文を要約できるものはいない。人間には「特別優れた」知識や能力があるが、わたしのこの作品だけでも、すべての英雄たちが驚きのあまりに困惑するだろう。「血を流し、涙を流しても、顔を伏せてはならない」と人は言うが、知らず知らずのうちにわたしの作品に降伏して顔を伏せる。自分の経験で学んだことから、人間はわたしが書いた作品をあたかも天から降って来た書物のようにまとめる。だがわた

しは、あまり過敏になりすぎないようにと人間に勧める。わたしは、わたしにとって新しい事は何一つ言っていない。けれども人間たちが、わたしの作品の中の生活百科事典から生き方を見つけ、「人間の終着点」から人生の意味を見つけ、「天の奥義」からわたしの旨を見つけ、「人の進むべき道」から生きることの素晴らしさを見つけることを願っている。そうなればずっと良くはないか。わたしは人間に何も強要しない。つまり、わたしの作品に興味を持たない者には、わたしの本の代金を「払い戻し」、「手数料」も払い戻そう。人間に嫌々何かをさせるようなことはしない。この本の著者として、わたしは読者がわたしの作品を読んで気に入ってもらえることをひたすら望むが、人々はいつもあれこれと色々なものを楽しいと感じる。だからわたしは、人間が面子を気にして将来妥協しないよう勧める。もし面子を気にして将来を妥協しているとしたら、心優しいわたしにとって、耐え難い屈辱ではないか。わたしの作品を気に入ってくれたならば、あなたの貴重な意見をわたしに伝え、わたしの文章がより良いものとなり、人間の欠点を通してわたしの作品が一層充実するようにしてほしい。そうすれば著者と読者の両方のためになるのだが。わたしがそのように言うことが正しいかどうかは分からない。だがそうすることで、おそらくわたしの文章力が向上し、あるいはおそらくわたしたちの友情が強化されるだろう。概してすべての人がわたしの働きを妨害することなく協力し、わたしの言葉が各家庭に広がってゆき、地球の全ての人間がわたしの言葉の中に生きようになることがわたしののぞみである。それがわたしの目標である。わたしの言葉の中のいのちの章を通して、すべての人間が何かを得ることを望む。たとえば人生の行動原理、人類が犯す過ちに関する知識、わたしが人間に要求すること、あるいは神の国に今日住む人たちが持つ「秘密」といった何かを。だが同時に、人間が今日犯している不祥事にも目を留めるよう勧める。そうすることがあなたがたの役に立つからだ。「最新の秘密」を読むのもいいだろう。人のいのちに関して役に立つものだ。注目の話題もあるのだから、益々人間のいのちには役立つのではないだろうか。わたしの助言を役立て、効果を確認、わたしの言葉を読んでどう感じたかをわたしに説明して、わたしが必要な薬を処方できるようにしても害はないだろうし、そうすることで最終的に人間の病を根絶することができるのだ。わたしの提案が受け容れられるかどうか分からないが、参考にしてくれることを願う。あなたがたの考えはどのようなものだろうか。

1992年5月12日

第四十二章

新しい働きが始まるとすぐに、すべての人々が新たに真理に入り、手に手を取ってわたしと一緒に進み、わたしたちは神の国の大きな道を一緒に歩き、そして人とわたしは大変に親密である。わたしの気持ちを示し、人に対するわたしの態度を見せようとして、わたしはいつも人に語りかけた。しかし、これらの言葉には人々の大きな助けになるものもあれば、人々を傷つけるかもしれないものもあるので、わたしの口から出る言葉をより頻繁に聞くよう人々に忠告する。わたしの言葉が特に優雅ではないとしても、それはすべてわたしの心の底から生じる言葉である。人類はわたしの友なので、わたしは人の中でわたしの働きを続け、そして人もまた、わたしの働きをさえぎることを深く恐れて、わたしに協力するよう全力を尽くす。このようなとき、わたしの心は大きな喜びで満たされる。わたしは一部の人を得て、わたしの「企業」はもはや不景気に陥ってはおらず、もはや空虚な言葉から成っているのではなく、わたしの「特別製品市場」はもはや不況ではないからである。結局のところ人々は賢明で、わたしの名前と栄光のために進んで「自らを捧げ」ようとし、このようにして初めてわたしの「特別製品店」は新しい「商品」を取得し、そうして霊的な世界で多くの「顧客」がわたしの「商品」を買いに来る。このようなときにのみ、わたしは栄光を手に入れ、その時にのみ、わたしの口から話された言葉は空虚な言葉ではない。かつてわたしは勝利し、勝利の内に再来し、そしてすべての人々がわたしを賛美する。わたしへの賛美を示し、わたしの膝の下に屈服することを示そうとして、この瞬間に赤い大きな竜も「賛美する」ようになり、そしてわたしは栄光を得る。創造の時から今日まで、わたしは多くの戦いに勝利し、多くの嘆賞すべきことを行った。かつて多くの人がわたしを賛美し、わたしを讃え、わたしのために踊った。こうした光景は感動的で忘れられないものだったが、わたしは笑顔を見せなかった。まだ人を征服していなかったからであり、創造に似た働きの一部のみを行っていたからである。今日は過去とは異なる。わたしは玉座の上で笑み、わたしは人を征服し、人々はすべてわたしを崇拜し、わたしの前で頭を垂れる。今日の人々は過去の人々ではない。わたしの働きが現在のためではなかったのはいつだろうか。わたしの働きがわたしの栄光のためではなかったのはいつだろうか。より明るい明日のために、わたしは何度も人の中でわたしの働きのすべてを明らかにし、それだから、わたしの栄光のすべてが創造された人の中に「留まる」だろう。わたしはこれをわたしの働きの原則とみなす。わたしと協力しようとする人々は立ち上がり一生懸命に働きなさい。そうすることで、わたしの栄光がさらに大空を満たすだろう。今こそ壮大な計画を実行する時である。わたしの愛の労りと守りの下にいる人々はすべて、ここ、わたしの場所で自らの力を使う機会を持ち、わたしはすべてのことがわたしの働きの方に向くようにする

だろう。空を飛ぶ鳥は空のわたしの栄光であり、地球にある海は地上のわたしの行いであり、すべてのものの主はその中でわたしの現れであり、わたしは地上にあるすべてをわたしの経営（救い）の資本として使い、すべてのものを増やし、繁栄させ、いのちで満たす。

創造の時に、わたしは地上でのわたしの働きが最後の時代に完全な終わりを迎えると決めていた。わたしの仕事が終わるのは、わたしのすべての行いが大空に現われるまさにその時である。わたしは地上の人々にわたしの行ないを認めさせ、わたしの業は「裁きの座」の前で証明され、それはわたしに従う地上のすべての人のあいだで認められる。したがって、その後、わたしは過去何世代にも渡って行われたことのない事業に着手する。今日以降、わたしはわたしの行動を段階的に明らかにし、そうしてわたしの知恵、わたしの不思議と深淵は社会のあらゆる領域で認められ、証明される。特に、地上のあらゆる支配層がわたしの業を認識するようになり、わたしの行いが「裁判官」により裁かれ、「弁護士」によって弁護される。こうしてわたしの行いが認められることで、すべての人々が頭を下げ、従う。この時以降、わたしの行動はあらゆる社会の領域で認知され、これはわたしが地上でのすべての栄光を得る時となる。その時、わたしは人に姿を示し、もはや隠されないだろう。現在、わたしの行いはまだ頂点に達していない。わたしの働きは進展しており、頂点に達するときにはわたしの働きは終わる。わたしは諸国の人々を完全に征服し、獰猛な獣をわたしの前の子羊のように飼いならし、地上の人々のように赤い大きな竜をわたしの前に服従させる。わたしは天上のすべてのわたしの敵を破り、地上のわたしの敵をすべて征服するだろう。これはわたしの計画であり、わたしの行いの不思議である。人間はわたしの導きの下で自然の影響を受けてのみ生き得る。人は自ら決定をすることはできない。誰がわたしの手を逃れられるのか。わたしは自然の全てを分類して法の中に存在させた。地上に春の暖かさや秋の涼しさといった法があるのはただこのためである。地上の花が冬に枯れ夏に咲くのは、わたしの手の不思議のためであり、冬にガチョウが南に向かうのはわたしが気温を調えるからであり、海が轟くのは水面上の物を溺れさせるためである。わたしにより計画されないものは何かあるだろうか。この瞬間以降、人の「自然経済学」はわたしの言葉により完全に征服され、人々は「自然法」の存在のために、わたしの存在を再び根絶することはない。一体誰がすべての物の支配者の存在を再び否定するのだろうか。天上ではわたしは支配者である。あらゆるものの中でわたしは主である。すべての人の間でわたしは最上位である。誰がやすやすと「ペンキ」でわたしを覆おうとするのか。偽りは真理の存在を混乱さ

せ得るか。この貴重な機会に、人の妨害を受けることなく、機械を運転させながら、わたしはもう一度わたしの手にある働きを始める。

わたしはわたしの言葉の中にいろいろな「味付け」を加えた。ゆえに、わたしがまるで人の有名シェフのように見えるかもしれない。人々は味付けの方法を知らないが、その味を楽しむ。「皿」を持ち、人々はわたしが用意した「料理」を味わう。わたしが個人的に準備する食べ物を人々がより食べたがるのはなぜなのか分からない。それはまるで人々がわたしをあまりにも高く見ており、あらゆる調味料の中で最高と見ており、そして他人をまったく顧みないかのようである。わたしは自尊心があまりにも大きいので、わたし自身の理由で他人の「鉄飯碗」を破壊しないことを願う。それだから、わたしは「調理場」から退き、他人が自らを見分ける機会を与える。このような方法でのみ、わたしの心は不動である。わたしは人々がわたしを見上げて他人を見下すことを好まない。それは正しくない。人々の心に地位を持つことの価値は何であろうか。わたしは本当にそれほどがさつで無分別なのだろうか。わたしは本当に地位を求めようとしているのか。もしそうなら、わたしはなぜこのような壮大な事業に着手するのだろうか。名誉と富を他人と奪い合うことをわたしは望まず、地上の名誉と富を軽蔑する。それはわたしが追求するものではない。わたしは人を模範とは見ず、戦いや奪い合いを行わないが、わたしの「技能」により生計を立て、不当な行いをしない。したがって、わたしが地上を歩くとき、わたしは最初に行動し、後に「手仕事の支払い」を求める。これのみが人により公正で妥当とされているもので、これには誇張はなく、わずかでも欠けるところがない。わたしは事実を本来の意味通りに話す。公正で道理をわきまえた人を探して人の間を行き来するが、何の効果もなかった。そして、人々は駆け引きを好むため、価格は時に高すぎ時に低すぎ、わたしは依然としてわたしの手にある義務を行っている。なぜ人が自らの義務を守らないのか、なぜ自らの霊的背丈がどれほどなのかを知らないのか、今でもわたしは分からない。人々はそれが数グラムなのか何両なのかさえ人々は知らない^[a]。それだから、彼らは依然としてわたしを騙す。あたかもわたしの働きがすべて無駄に終わり、わたしの言葉がただ大きな山々のこだまであるかのようになり、そしてわたしの言葉や発言の根源を誰も気が付かなかったかのようである。そして、わたしはこれを三番目の警句を要約する基礎として使用する。人々にはわたしが見えないため、わたしを知らない。あたかも人々がわたしの言葉を飲み込み、消化を助ける薬を飲み、薬の副作用が強いので記憶喪失に苦しみ、そのためにわたしの言葉は忘れ去られたものになり、わたしがいる場所は人々が忘れる一隅になったかのようだ。わたしはそれを見

てため息をつく。わたしがとても多くの働きを行なっても、その証しの人々にはないのはどうしてなのか。わたしは十分な努力を払わなかったのか。それとも、わたしが人の必要を把握していなかったからなのだろうか。わたしの考えは底をつき、わたしの唯一の選択は、すべての人々を征服するためにわたしの行政命令を使うことである。わたしはもはや愛情のある母親ではなく、厳しい父親としてすべての人を管理するのだ。

1992年5月15日

脚注

a. 「両」は中国の重さの単位で、1両は50グラム。

第四十三章

おそらく、人々がわたしの言葉に「大きな関心」を抱いたのは、ひとえにわたしの行政命令のためである。わたしの行政命令によって統治されていなければ、人々はみな眠りを妨げられた虎のように吠えているだろう。日々わたしは雲のあいだをさまよいつつ、わたしの行政命令を通じてわたしの拘束を受けながら、地を覆って動き回る人類を見る。このようにして人類の秩序は保たれ、わたしの行政命令は継続される。そのとき以降、地上の人々はわたしの行政命令のためにありとあらゆる刑罰を受け、こうした刑罰が下る中、人々はみな大声で叫び、あらゆる方向に逃げまどう。その瞬間、地上の国々はたちどころに滅び、各国の境界は消滅し、場所が分割されることはもはやなく、人々を疎外させるものも存在しない。わたしは人々のあいだで「思想的な働き」を始め、それによって人々が平和に共存し、もはや戦わないようにするとともに、わたしが人々のただ中で橋を築き、つながりを確立するにつれ、人々が一つになるようにする。わたしは自分の業の顕示で天空を満たし、地上のあらゆるものがわたしの力の下にひれ伏し、そうして「世界統一」に向けたわたしの計画を実行し、わたしのその願いを実現するようにさせる。それにより、人々が地表を「さまよう」ことはなくなり、すぐに適切な終着点を見つける。わたしはあらゆる方法で人を熟慮し、全人類がいますぐ平和と幸福の地に住むようになり、人々の生活の日々がもはや悲しくも惨めでもなく、わたしの計画が地上で無になることのないようにする。人がそこに存在するので、わたしは地上にわたしの国を建てる。と言うのも、わたしの栄光の一部は地上に現われるからである。天上では、わたしの町を正し、それゆえ天地ですべてを新しくする。わたしは天地に存在するものをすべて一つにし、それによって地上のすべてのものは天上のすべてのものと一つになるだろう。それがわたしの計画であり、わたしが最後の時代に成し遂げること

である。誰もわたしの働きのこの部分に干渉しないように。わたしの働きを異邦の諸国に広めることは、地上におけるわたしの働きの最終部分である。わたしが行なう働きを理解することは誰にもできず、それゆえ人々はすっかり混乱する。わたしは地上での働きに忙しく取り組んでいるので、人々はこの機会に「遊び回る」。人々が手に負えなくなないように、わたしは当初彼らをわたしの刑罰の下におき、火の湖の鍛錬に耐えるようにした。これはわたしの働きの一段階であり、火の湖の力を使ってわたしの働きのこの段階を成し遂げる。さもないと、わたしの働きを実行するのは不可能だろう。わたしは全宇宙の人々をわたしの玉座の前に服従させ、わたしの裁きに従って彼らを様々な範疇に分け、これらの範疇に沿って分類し、さらに彼らを家族に整理し、それによって人類全体がわたしに背くのを止め、代わりに、わたしが名づけた分類に沿って整然とした秩序ある配列に収まるようにする。何者も無秩序に動き回ってはならない。わたしは全宇宙で新しい働きを行なった。宇宙の至るところで、全人類がわたしの突然の出現に呆然とし、驚きで口がきけなくなり、またわたしが公の場に出現したことで、人々の視野は大いに広がった。今日はまさにこのようなものではないか。

わたしは万国万民のあいだで第一歩を踏み出し、わたしの働きの最初の部分を始めた。わたしは計画を中断して新たに始めることはしない。異邦の諸国における働きの順序は、天におけるわたしの働きの手順を基にしている。人がみな目を上げてわたしの一挙手一投足を見つめるのは、わたしが世界を霧で覆うときである。たちどころに人々の目は曇り、砂漠の荒地にいる羊のように方向がわからなくなる。大風が唸りだすと、人々の叫び声は唸る風にかき消される。風浪の中、人の姿はかすかに見えるものの、人の声は聞こえず、人々が声をかぎりに叫んでも、その努力は無駄である。このとき、人々は大声で泣き叫び、救い主が突然空から下り、自分たちを無限の砂漠から導き出してくれることを望む。しかし、人々の信仰がどれほど大きくても、救い主は不動のままであり、人の希望は打ち碎かれる。灯した信仰の火は砂漠からの疾風に吹き消され、人は荒れ果てた無人の地に横たわり、燃える松明をもはや掲げることもなく、意識を失って倒れる……。その機に乗じて、わたしは人の目前にオアシスを出現させる。しかし、人の心は大いに喜ぶものの、その体は反応するには虚弱すぎ、四肢は弱って力がない。美しい果物がオアシスで成長しているのを見ても、人には摘む力がない。人の「内なる資源」がすっかり尽き果てたからである。わたしは人が必要とするものを取り、それを人に提供するが、人がするのは笑顔を一瞬浮かべることで、顔にはまったく活気がない。人の活力は跡形もなく消え去り、移動する空気の上で消滅する。そのため、人の顔には

まったく表情がなく、血走った目から、子供を見守る母親のような優しい慈悲と共に、一条の愛が放たれるのみである。干からびてひびの入った唇が時々動き、あたかも話そうとするかのようであるが、そうする力はない。わたしが水を与えても、人は頭を振るだけである。こうした不規則で気まぐれな行動から、人がすでに自身への希望をすべて失い、まるで何かを乞うように、嘆願の目をわたしに向け続けるだけであることを知る。しかし、人の慣習や習俗を知らないわたしは、人の表情や行動に当惑する。そのとき初めて、人の存在の日々が急速に終末へと近づいていることを、わたしは突然発見する。そして同情の視線を人に向ける。また、そのとき初めて、あたかもあらゆる願いが成就したかのようになり、人はわたしに喜びの笑みを見せ、わたしに向かって頷く。人はもはや悲しまない。地上において、人々はそれ以上人生の空しさを訴えず、「人生」とのあらゆるやり取りを断念する。それ以降、地上にもはやため息はなく、人類が生きる日々は喜びで満たされる……。

わたしは自身の働きに取り掛かるのに先立ち、人の問題を適切に処理する。人が絶えずわたしの働きを妨げないようにするためである。わたしにとって、人の問題は中心的な課題ではなく、人類の問題はまったく取るに足りない。人はあまりに度量が小さく、蟻にすら慈悲を示したが見えたり、あるいは蟻が人の敵であるかのように見えたりするので、人々のあいだでは常に不和が生じている。人の不和を耳にしつつ、わたしは再び人から離れ、人の話にもはや注意を払わない。人の目から見て、わたしは「住民」同士の「家庭紛争」の解決を専門とする「住民委員会」である。人々はわたしの前に来ると、決まって自分の理由を持ち込み、横柄なくらい熱心に自らの「異常な経験」を事細かに語り、そうしながら自分の注釈を付け加える。わたしは人の異常な振る舞いをじっと見る。人々の顔はほこりで覆われている。汗による「灌漑」のもと、そのほこりはたちまち汗と混じり合い、「独立性」を失う。そして人の顔は、足跡がちらほら見られる砂浜のように、さらに「豊かに」なる。人々の髪は死者の幻影の髪に似て、光沢がなく、地球儀に刺さった藁くずのようにまっすぐ立っている。人の気性は非常に激しく、怒髪天を衝くほどであり、その顔は散発的に「湯気」を放ち、あたかもその人の汗が「沸き立っている」かのようである。人を綿密に吟味すると、人の顔が燃えさかる太陽のような「炎」で覆われていることがわかる。顔から熱い湯気が立ち昇っているのはそのためであり、自分では気にしていないようだが、その人の怒りが顔を焼き尽くすのではないかと心から心配になる。そうしたとき、わたしはほんの少し怒りを和らげるよう人に促す。こうして何の役に立つというのか。なぜ自分をこのように苦しめるの

か。怒りのために、この「地球」の表面に立つ藁の茎は、太陽の炎によってほとんど燃え尽きている。このような状況では、「月」でさえも赤くなる。怒りを和らげるよう、わたしは人に促す。自分の健康を守ることは重要なのである。しかし、人はわたしの忠告を聞かず、わたしに「不平不満をぶつけ」続ける。それが何の役に立つのか。わたしの豊かさは人が享受するのに十分でないのか。それとも、わたしが与えるものを人は拒否するというのか。わたしは腹立ちまぎれに卓をひっくり返し、人は自分の話の中から興奮する逸話を語ろうとしなくなる。わたしによって「収容所」へと連れていかれ、そこで数日待たされるのが恐ろしいのだ。そして、わたしの癩癧がもたらした機会を利用してそっと立ち去ろうとする。さもないければ、人は決してそうしたことを取り下げようとせず、自分が関心をもつことを述べ立てるだろう。まさにその音がわたしを苛立たせる。人が心の底でかくも複雑なのはなぜなのか。わたしが人の中にあまりに多くの「部品」を組み入れたということなのか。人がいつもわたしの前で芝居を打つのはなぜなのか。紛れもなく、わたしは「民事紛争」を解決する「コンサルタント」などではないのだが。わたしのもとに来るようと、わたしが人に頼んだのか。まさか、わたしは郡の行政官などではないのだが。人の問題がいつもわたしの前に持ち込まれるのはなぜなのか。人が自分で自分の面倒を見て、わたしの邪魔をしないことがわたしの望みである。わたしにはなすべき働きがあまりに多くあるのだから。

1992年5月18日

第四十四章

人々はわたしの働きを添え物として扱い、わたしの働きのために食べ物や睡眠を控えたりしない。だから、わたしは人間への要求をわたしに対する彼らの態度に相応しいように合わせるしかない。わたしはかつて人間に十分な恵みと多くの祝福を与えたが、人間はそれらをつかみ取るとすぐに去ったことを思い出す。まるでわたしが無意識に人間に恵みや祝福を与えていたかのようだ。だから人間はいつも自己の観念の中でわたしを愛してきた。わたしは人間が本当にわたしを愛することを望んでいるのだが、今日、人々はまだぐずぐずしていて、わたしを本当に愛することができない。彼らの想像では、わたしに本当の愛を示せば、自分たちには何もなくなってしまうだろうと信じている。わたしがそんなことはないと言うと、彼らは体中を震わせる――それでも、彼らは相変わらずわたしへの本当の愛を示そうとしない。彼らは何かを待っているかのようであり、だから彼らは先を見越し、実際何が起きているか、わたしには決して語らない。口が

粘着テープで閉じられたかのように、彼らは絶えず口ごもる。人間を前にして、わたしは冷酷な資本主義者になったかのように思われる。人々はいつもわたしを恐れている。わたしを見ると、彼らはわたしに自分たちの状況について尋ねられるのを恐れて、何の痕跡も残さず姿を消す。人々は「仲間の村民」は心から愛することができるのに、心の真っ直ぐなわたしを愛することができないのはなぜか、その理由がわたしにはわからない。そこで、わたしはため息をつく。なぜ人々はいつも人間の世界では愛を表明するのだろう。なぜわたしは人間の愛を味わうことができないのだろう。わたしが人類の一人ではないからだろうか。人々はいつもわたしを山岳に住む野蛮人のように扱う。まるでわたしには正常な人であるための何かに欠けているかのようなのだ。そこで、人々はわたしの前でいつも気品があるふりをする。彼らはしばしばわたしを目の前に引き出して、就学前の子供を叱るようにわたしを強く非難する。人々の記憶では、わたしは道理のわからない、無学な者のようで、彼らはいつもわたしの前では教育者の役を演じる。わたしは彼らに欠点があるからといって罰したりはせず、適切に援助し、彼らが通常の「経済的援助」を受け取れるようにしている。人間はいつも大災害の中に暮らしていて、そこから逃れるのは難しいと思い、この災害のまっただ中でいつもわたしに呼び掛けてくるので、わたしはきちんと人間の手に「穀物の供給」を届け、すべての人々が新時代の大家族の中で暮らし、大家族の暖かさを経験できるようにする。人間の中の働きを観察するとき、わたしは多くの欠点を見つけ、結果として人間を助ける。現時点でさえ、人間の間にはまだ並外れた貧困があり、このためわたしは「貧困に陥った地域」に適切な配慮を与え、彼らを貧困から引き上げてきた。わたしはこうしたやり方で、すべての人々ができるだけわたしの恩恵を享受できるようにしている。

地上の人々は無意識のうちに刑罰を与えられて苦しむので、わたしは大きな手を広げ、わたしの傍らに彼らを引き寄せ、地上でわたしの恩恵を享受する幸運を与える。地上で、空虚でないもの、無価値でないものはあるだろうか。わたしは人間世界のあらゆる場所を歩き回る。有名な名所旧跡や快適な自然の風景はたくさんあるが、わたしが行くところはどこもずっと以前に活力を奪われてしまっている。その時になってようやくわたしは地上の陰気さと荒廃を感じる。地上では生命はずっと以前に消えてしまい、死の臭いしかない。このため、わたしは人間に、この苦痛に満ちた土地を急いで離れるよう呼び掛けてきた。わたしが見るものはすべて虚しさを暗示する。わたしはチャンスをつかんで、わたしが選んだ人々に向かって手の中にある生命を投げつける。たちまち、大地には緑の一画が現れる。人々は地上で活力のあるものを進んで享受するが、わたしは

このことに何の喜びも感じない。人々はいつも地上の物事を大切に、決してその空虚さを見ないので、今日この時点に達しても地上になぜ生命が存在しないか、彼らにはまだわかっていない。今日、わたしは全宇宙の中を歩いているので、人々はわたしが存在する場所の恩恵を享受することができ、これを元手として受け取るが、決していのちの源を追求しない。彼らは皆、わたしが元手として与えるものを使うが、誰も活力の本来の機能を実行しようとしな。彼らは天然資源の使い方や開発の仕方を知らないの、極貧のままである。わたしは人々の間に住み、人々の間で暮らしているが、人間は今日まだわたしを知らない。人々はわたしが故郷からはるか遠くにいるために、わたしを大いに助けてくれたが、まるでわたしが人間との正しい友情を確立していないかのようであり、このため、わたしはまだ人間世界の不公平さを感じる。わたしの見るところでは、人類は結局空虚であり、彼らの中には価値のある宝物は何もない。わたしは人々が人生についてどのような考えを持っているか知らないが、要するに、わたし自身の考えは「空虚」という言葉と切り離すことはできない。人々がこのためにわたしを悪く思わないことを希望する――これがわたしであり、わたしは率直で、礼儀正しくあろうとはしない。しかし、人々にわたしの考えにもっと注意するよう忠告する。わたしの言葉は結局彼らの役に立つからである。わたしは人々が「空虚さ」についてどう理解しているか知らない。わたしは、彼らがそれを理解することに少し労力を費やすことを希望する。彼らは、人生を立派に経験し、そこに価値ある「鉱石」を見つけることができるかどうかを見ることができる。わたしは人々の積極性を減退させようとしているのではない。彼らにわたしの言葉について多少の認識を得て欲しいだけなのだ。わたしはいつも人間の諸事情のために忙しく働いているが、今日この段階にまで到達したのに、人々はまだ感謝の言葉を言っていない。彼らはまるで忙しすぎて、言うのを忘れてしまったかのようだ。今日でさえ、わたしは一日中忙しく働いている人間がどんな結果をもたらしているかまだ理解していない。今日まで、わたしはまだ人々の心の中に居場所を占めていないので、もう一度深く考え込んでいる。わたしは「なぜ人々はわたしを本当に愛する心を持っていないのか」について調べる作業に取り掛かり始めている。わたしは人間を「手術台」に載せ、その心を解剖し、人の心の中で道を塞いで、わたしを本当に愛することを妨げているものは何かを調べよう。「メスの刃」の下で、人々は目を固く閉じ、わたしが始めるのを待つ。このとき、人々は完全に屈服しているからである。わたしは、彼らの心の中に他にも粗悪なところをたくさん見つける。彼らの心の中の粗悪さの主なものは、人々自身の事柄である。彼らは体の外にはほんの少ししか物を持っていないが、体内にあるものは数えきれない。まるで人間の心は、特大の貯蔵箱のようだ。その

中には富をはじめ、必要なものがすべていっぱい入っている。そのときになってようやくわたしは人々がわたしをまったく尊重しない理由がわかる。彼らは自己満足度が高いからなのだ――彼らはわたしからどんな助けが必要だというのだ。だから、わたしは人間から離れる。人々はわたしの助けなど必要ないのだから。どうしてわたしが恥知らずな振る舞いをして人に嫌われるように仕向ける必要などあるのか。

理由は誰にもわからないだろうが、わたしはいつも人間に進んで話しかけてきた――まるで自分を抑えることができないかのようである。そのため人々はわたしを無用の者と見なし、いつもわたしを価値のないものとして取り扱い、尊敬の念など払わない。彼らはわたしを大事にせず、いつでも家まで引きずって行き、また放り出し、わたしを大衆の面前に「さらす」。わたしは人間の下劣な振る舞いにこの上ない嫌悪感を抱き、このため人間には良心がないと露骨に言う。しかし、人々は頑として考えを変えず、自分たちの「剣と槍」を取り、わたしと戦う。彼らは、わたしの言葉は実際の状況とは食い違っており、わたしは彼らをけなしていると言う――しかし、わたしは彼らの乱暴な振る舞いに対して報復を与えたりはしない。わたしは、ただ己の真理を使って彼らを納得させ、自分自身を恥ずかしく思うようにさせ、その後黙って退却させるだけである。わたしは人間と張り合うことはしない。そんなことをしても何の益もないからだ。わたしは自分の本分を守り、人間もその本分を守り、わたしに逆らった行動をしないことを希望する。このように穏やかにやっていくほうがよいのではないだろうか。わたしたちの関係を傷つけることはないだろう。わたしたちは長年にわたりうまくやってきた――両者の間に問題を引き起こす必要はないだろう。わたしたち双方の評判にとって何の益にもならないではないか。わたしたちは長年にわたる「古い友情」、「古くからの知り合い」の関係にあり、辛辣な言葉を交わして別れる必要などあるだろうか。そんなことをしても益があるだろうか。人々にはその影響に注意を払い、何が自分たちのためになるか知って欲しい。人間に対する今日のわたしの態度は、人間が一生を通じて話し合いをするのに十分である――なぜ人々はいつもわたしの思いやりを認めることができないのだろう。彼らには表現する力が欠けているからだろうか。彼らは十分な語彙に欠けているのだろうか。なぜ彼らはいつも言葉に詰まるのだろう。わたしがどのように行動するか知らない人がいるだろうか。人々は完全にわたしの行動に気づいている。彼らはいつも他人をうまく利用することを好むだけなのだ。だから、決して自分の利益を諦めようとはしない。一言でも彼らの利益に触れるならば、彼らは自らが優勢になるまで妥協するのを拒む――そうすることの趣旨は何なのか。人々はどのくらい与えられるかを競お

うとせず、どのくらい得られるかを競うのだ。自己の地位に楽しみがなくても、彼らはそれを大いに大切に、貴重な宝物と見なしてさえいる――だから、彼らは地位の祝福を諦めるくらいならむしろわたしの刑罰に耐えようとする。人々は己をあまりにも高く評価しており、このため、自分自身を決して脇に置こうとしない。おそらくわたしの人間評価には多少正確さに欠ける点もあるだろう。あるいはわたしは辛辣でも寛大でもないラベルを人に貼ったのかもしれない。――しかし、要するに、人々がこれを警告として受け取ることをわたしは希望する。

1992年5月21日

第四十五章

わたしはかつてわたしの家に残す良い物品を選び、その中に並ぶもののない富を入れて飾り、それによって楽しみを得ようとした。しかし、わたしに対する人間の態度によって、そして人々の動機によって、わたしはこの働きをひとまず止めて、ほかのことをせざるを得なかった。わたしは自分の働きを完成させるために人間の動機を利用し、すべてのことがわたしに役立つように操作し、わたしの家が結果としてもはや陰鬱で寂れたものにならないようにするだろう。わたしはかつて人間の中で次のように観察した。肉と血でできているものはすべて意識がもうろうとしていて、わたしの存在の祝福を経験したものは一つとしてなかった。人々は祝福に包まれて生きているのに、自分たちがどんなに恵まれているか分かっていない。人類に対するわたしの祝福が今日まで存在しなかったら、彼らの中で誰が消滅しないで現在までやり遂げていただろう。人が生きるとはわたしが与える祝福であり、人はわたしの祝福の中で生きるということを意味する。人は本来何も持っていなかったからであり、彼らには本来天と地の間で生きるための元手がなかったからである。今日、わたしは人間を助け続けており、このおかげだけで人はわたしの前に立ち、幸運にも死を免れている。人々は人間存在の秘密を要約したが、これがわたしの祝福であることを気づいた人は誰もいない。その結果、すべての人々は世の中の不正をのろい、彼らは皆自分の生活が不幸だと言って、わたしに対して不平を言う。わたしの祝福がなかったら、今日生きている者などいないだろう。人々は皆、快適に暮らすことができないので、わたしに対して不平を言う。もし人間の生活が明るく、さわやかであったなら、もし暖かい「春の突風」が人間の心の中に送り込まれて、体全体に比類なき楽しさを引き起こし、少しも痛みのないままにしておくなら、人間の中には不平を言いながら死ぬ者などいないだろう。わたしは人間の絶対的誠意を得ること

に大いに苦労している。人々にはずる賢い計画が多すぎるからだ――要するに、頭を混乱させるほど多いからである。しかし、わたしが彼らに異議を唱えると、彼らはわたしを冷たくあしらひ、わたしに注意を払わない。わたしの異議は彼らの魂に触れ、彼らを頭の先からつま先まで啓発されないままにしたからである。このため、人々はわたしの存在をひどく嫌う。わたしがいつも彼らを「ひどく苦しめる」ことを好むからなのである。わたしの言葉によって、人々は歌い、踊り、わたしの言葉によって、彼らは黙って頭を垂れ、わたしの言葉によって彼らはわっと泣き出す。わたしの言葉に人々は落胆し、わたしの言葉に彼らは生き残るための光を得る。わたしの言葉によって彼らは昼も夜も眠れず寝返りを打ち、わたしの言葉によってそこら中を飛び回る。わたしの言葉は人々をハデスに追い込み、次に刑罰に追い込む――しかし、人々は気付かないままにわたしの恵みも享受する。このことは人間の力で達成可能なのだろうか。人々の不断努力と引き換えにもたらされるのだろうか。誰がわたしの言葉による采配を逃れることができようか。人間にはこのように欠点があるのだから、わたしは自分の言葉を人類に与え、人間の弱点がわたしの言葉によって強化されるようにし、人類の生活に並ぶもののない豊かさを与えるのだ。

わたしはしばしば人々の言葉や行為を詳しく調べる。彼らの行動や顔の表情の中に、わたしは多くの「奥義」を見つけている。人々の他者とのやりとりには、「秘密のレシピ」が事実上最高位を占めている――このため、わたしが人間に関与する時、わたしが得るものは「人間のやりとりの秘密のレシピ」であり、それは人間がわたしを愛していないことを示している。わたしは人間の持つ欠点ゆえにしばしば人を叱責するが、それでも、彼らの信頼を得ることはできない。人はわたしに殺されるのを嫌がる。「人間のやりとりの秘密のレシピ」では、人間が致命的な災害に苦しんだことなどこれまでまったく見つかっていないからである――人は不幸な時期にわずかな挫折に苦しんだだけである。人々はわたしの言葉によって泣き叫ぶが、彼らの嘆願にはいつもわたしの冷酷さに対する苦情が含まれている。まるで彼らはみな人間に対するわたしの本当の「愛」を探し求めているかのようだ――しかし、彼らがどうしてわたしの厳しい言葉の中にわたしの愛を見つけることなどできようか。その結果、彼らはいつもわたしの言葉によって希望を失う。まるでわたしの言葉を読むや否や、「死に神」を見て、恐怖で震えるかのようである。それを見てわたしは悲しくなる。なぜ肉の体を持つ人々は、死に囲まれて暮らしているのに、いつも死を恐れているのだろうか。人間と死は憎い敵同士なのだろうか。なぜ死の恐怖はいつも人々に苦悩を引き起こすのだろうか。彼らの生活の「例外的な

」経験全体を通して、彼らは死をほんの少し経験するだけなのだろうか。人々が言葉を発する時、彼らがいつもわたしに対して文句を言うのはなぜだろう。このため、わたしは人間の暮らしに対して第四の格言をまとめる。すなわち、人々はわたしにほんの少ししか従わず、こうして、いつもわたしを嫌っている。人間が嫌うので、わたしはしばしば彼らから離れる。なぜわたしはこのようなことをしなければならないのだろうか。なぜわたしはいつも人々に嫌悪感を引き起こさなければならないのだろうか。人々がわたしの存在を歓迎しないのに、なぜわたしは臆面もなく人間の家に暮らさなければならないのか。わたしは「手荷物」を持って、人間のもとを離れるほかはない。しかし、人々はわたしを出て行かせることに耐えられず、わたしを去らせたくなく、わたしが去ることを深く恐れて声を出して泣き、彼らが生きるために頼りにしているものを失う。彼らの嘆願するような眼差しを見ると、わたしの心は和らぐ。世界の海のまただ中で、誰がわたしを愛することができよう。人間は、海の力に飲み込まれ、汚れた水に覆われている。わたしは人間の不従順をひどく嫌っているが、すべての人類の不運に深い同情を感じてもいる——人間は結局未だに犠牲者なのだから。弱くて無力な人間を、わたしが海に投げ込むことなど、どうしてできようか。人間が落ちこんでいるときに蹴り飛ばすほど、わたしは残酷だろうか。わたしの心はそんなに冷酷だろうか。人間がわたしと一緒にこの時代に入るのは人類に対するわたしの態度によるのだ。だから、人間はこうした例外的日々をわたしと共に過ごしてきたのだ。今日、人々は喜びで切なくなるほどであり、わたしの愛をいっそう強く覚え、わたしを一生懸命に愛する。それは、彼らの暮らしには活力があり、彼らが地球の果てまでさまよう放蕩息子であることを止めるからである。

わたしが人間と共に住んでいる間、人々はわたしに頼っている。わたしがすべてのことにおいて人間に思いやりがあり、人間への気遣いは細部まで行き届いているので、人々はいつもわたしに温かく抱かれて暮らしており、強風にも、土砂降りの雨にも、あるいは燃えるような日差しにも襲われることはない。人々は幸せに生き、わたしを愛情深い母親のように扱う。人々は温室の中の花のように、「自然災害」の猛攻撃に耐えることはまったくできず、しっかりと立っていることも決してできない。このため、わたしが彼らを猛り狂う海の試練の中に入れると、彼らは絶え間なく「揺れ動く」ことしかできず、抵抗する力は全くない——彼らの霊的背丈はあまりにも不足しているし、体力は弱すぎるので、わたしは重荷を感じる。このようなわけで、気が付かないうちに、人々はわたしの試練を受ける。彼らはあまりにももろく、うなり声をあげて吹く風や燃える

ような日差しにも耐えることができないからである。これがわたしの現在の働きではないだろうか。わたしの試練に直面した時、人々がいつもわっと泣き出すのは、なぜだろう。わたしは彼らを不当に扱っているのだろうか。わたしは故意に彼らを虐待しているのだろうか。なぜ愛すべき人間の状態が減び、決して復活しないのだろうか。人々はいつもわたしを掴んで放さない。彼らはこれまで決して独り立ちできなかったのも、いつもわたしの手で導かれるままに身を任せてきて、ほかの誰かに連れ去られるのをひどく恐れている。彼らの全人生はわたしに導かれているのではないのか。苦しみに満ちた人生の間、峰を越え、谷を渡る時、彼らは多くの激動を経験してきた――これはわたしの手によってもたらされたのではないか。人々がわたしの心をまったく理解できないのは、なぜだろう。なぜ彼らはわたしの善意をいつも誤解するのか。なぜわたしの働きは地上では円滑に進まないのか。人間は弱いから、わたしはいつも彼らを避けてきた。だから、わたしの心は悲しみに満たされる。わたしの働きの次の段階が人間に実行できないのはなぜだろう。だからわたしは黙り込み、慎重に彼らの品定めをする。なぜわたしは人間の欠点に制約されるのだろうか。なぜわたしの働きにはいつも障害があるのだろうか。今日、わたしはまだ人間の中に完全な答えを見つけていない。人間はいつも考えをコロコロ変え、決して正常ではなく、わたしを徹底的に嫌うか、あるいは最大限の愛を示すか、のどちらかだからだ。正常な神そのものであるわたしは、人間からのそのような苦痛に我慢できない。人々の精神がいつも異常だから、わたしはうわべでは人間を少し恐れており、彼らの一挙手一投足を見ると、彼らは異常だと考えてしまう。わたしは、無意識のうちに人間の中に奥義を見つけてきた。人間の背後には黒幕がいることが分かる。そのため、人々はいつも大胆で、自信に満ちている。あたかも、自分たちが何か理にかなったことをしてきたかのようなのである。このため、人々はいつも大人のふりをし、甘い言葉で「幼い子供」をだます。人間のおかしな動作を見ると、わたしは激怒せざるを得ない。なぜ人々はそんなにも愛を持たず、自分自身の尊厳を持たないのだろうか。なぜ彼らは己を知らないのだろうか。わたしの言葉は彼らの心に留まらなかったのだろうか。わたしの言葉は人間の敵なのだろうか。わたしの言葉を読む時に人々がわたしに対して怒りっぽくなるのは、なぜだろう。なぜ人々はいつもわたしの言葉に自分自身の考えを付け加えるのだろうか。わたしは人間に対してあまりにも理不尽なのだろうか。すべての人々はこのことについて、また、わたしの言葉のなかに何が含まれているかについて真剣に考えるべきである。

1992年5月24日

第四十六章

わたしにはわからない。人々がどれくらいうまくわたしの言葉を存在の礎にしているのかなど。わたしはいつも人間の運命について心配してきたが、人々がそれを感じ取っているとは思えない。それ故、人々はわたしの行いを一度も気に留めたことがなく、人間へのわたしの態度に対して崇拜の心を育んだこともない。これはまるで人々がわたしを満足させるため、遙か昔に感情を捨て去ってしまったかのようなのである。このような状況に直面して、わたしはまたしても沈黙する。なぜわたしの言葉は人々の考慮と更なる成長に値しないのか。これはわたしに「現実がない」のに、人々に対して利用できる何かを見つけようとしているからなのか。なぜ人々はいつもわたしを「特別扱い」をするのか。わたしは自らの病室にいる病人なのか。なぜ、物事が今日のような状態に達しているのに、わたしに対する人々の見方が違うのか。人間に対するわたしの態度に落ち度があるのか。今日、わたしは宇宙の上で新しい働きを始めた。わたしは地上の人々に新しい始まりを与え、その全員にわたしの家から出て行くように頼んだ。人々はいつも自分自身を甘やかしたがるので、人々にそれを自覚するよう、そしてわたしの働きを邪魔しないようにと、わたしは人々に助言した。わたしが開いた「ゲストハウス」では、人間ほどわたしに嫌悪感を抱かせるものはない。なぜなら人々はいつもわたしにトラブルをもたらし、がっかりさせるからだ。人間の行動はわたしに恥をかかせるものであり、未だかつてわたしが「堂々と顔を上げて」いられたことはない。だから、わたしは彼らに穏やかに頼むのだ。なるべく早くわたしの家を去ってほしい、そしてただでわたしの食べ物を食べるのを止めてほしいと。わたしの家に留まりたければ、苦しみを経験してわたしの懲らしめに耐えなければならない。人々は心の中でこう思っている。わたしが彼らの行いに全く気づいておらず、何も知らない。だから、彼らはわたしの前に堂々と立ちはだかり、倒れる兆しさえない。人間の振りをして人間の頭数を揃えているだけだ。わたしが人々に要求すると、人々は仰天する。長年善意で優しくった神が、そのような言葉、無慈悲で不当な言葉を言うなど、人々は考えたこともなく、絶句する。このような時、わたしは人々がまた文句を言い始め、人々の心の中でわたしへの憎しみがまた高まるのに気づく。人々はいつも地上を非難して、天国に呪いをかける。それでも彼らの口から自らを呪う言葉は聞かれない。彼らの自己愛が強すぎるからだ。ここで人間生活の意味をまとめよう。人々は自己愛が強すぎるため、その全人生が苦悩に満ちた空虚なものになっている。わたしを憎むあまり自ら身を滅ぼす。

人間の言葉には、語られていないわたしへの「愛」はあるものの、これらの言葉を「

研究室」に持ち込んで調べ、顕微鏡で観察すると、その言葉の中に含まれるもの全てが明瞭になる。この時点でわたしはもう一度人間のもとにやってきて、人間に自分の「医療記録」を眺めさせ、人間に心から確信させる。人々は医療記録を見ると、その顔には悲しみが溢れ、後悔の念を感じる。そしてあまりに気がかりで悪の道を断って正しい道に戻り、そうすることでわたしを喜ばせたくてたまらない。彼らの決意を見ると、わたしは非常に嬉しい。わたしは喜びに圧倒される。「地上で人間以外の誰がわたしと喜びと悲しみを分かち合えるだろうか。分かち合えるのは人間だけではないのか。」それでもわたしが去ると、人々は医療記録を引き裂いて床に投げ捨て、気取った歩き方で去って行く。それ以来、わたしは人々がわたしの心になうように行動するのをほとんど見たことがない。それでも、彼らの決意はわたしの目前でかなり高まった。彼らの決意を見ると、わたしは嫌悪感を覚える。というのは、この決意には、わたしが喜ぶものとして掲げられるものがひとつもなく、あまりに穢れているからだ。わたしが決意を無視したのを見て、人々は冷淡になる。その後、人々が「申請」を提出することはごく稀である。なぜなら人間の心がわたしの前で褒められたことは一度もなく、いつもわたしに拒否されてきたからである。人々の生活に霊的な支援はもはやなく、そのため人々の熱情は消え、「焼けるような暑さ」をわたしが感じることは、もはやない。人々は生涯を通して苦労し、それは今日の状況が訪れて、人々がわたしによって苦しめられて生死の境を漂っているほどである。その結果、人々の顔に明るさがなくなり、「生氣」を失っている。皆成長してしまったからだ。刑罰を受ける間の人々の哀れな状態をわたしは見るに堪えない。――それでも誰が人間の惨めな失敗を埋め合わせることができるのだろうか。誰が惨めな人間生活から人間を救うことができるのだろうか。なぜ人々は苦悩の海という奈落の底から一度も抜け出すことができないのだろうか。わたしはわざと人々にわなを仕掛けていたのだろうか。人々は一度もわたしの気持ちを理解したことがない。だからわたしは、天と地の万物の中で、未だかつてわたしの心を理解したものはいない、本当にわたしを愛したものはいない、この宇宙を嘆く。今日でさえ、なぜ人々がわたしを愛することができないのか、未だにわたしにはわからない。彼らはわたしに心を捧げることができる。わたしのために自分の終着点を犠牲にできる。しかし、なぜわたしに愛を捧げることはできないのか。彼らはわたしが望むものを持っていないのか。人々はわたし以外のものを愛せるのに――なぜわたしを愛せないのだ。なぜいつも人々の愛は隠されているのか。なぜ今日まで人々はわたしの前に立っているのに、わたしは人々の愛を一度も見ることがないのか。愛は彼らにないのか。わたしはあえて物事を人々にとって難しくしているのか。今でも人々に良心の呵責はあるのか。人々は愛する相手を

間違えること、自分自身を是正できないことが怖いのか。人々には無数の計り知れない謎がある。だから、わたしはいつも人間の前では「臆病で怖がっている」。

今日、神の国の門へと進む時になると、人々は皆、力強く前進を開始する。――しかし、人々が門の前に着くと、わたしは門を閉める。わたしは人々を締め出して、入門証を見せるよう人々に要求するのだ。このような奇妙な行動は人々の予想外であり、皆仰天する。今までいつも大きく開いていた門が、なぜ今日突然ぴしゃりと固く閉ざされるのか。人々は足踏みをしながら歩き回る。彼らは想像する。ごまかして門の中に入れるのではないかと。しかし、彼らがわたしに偽の入門証を手渡すと、わたしはその入門証を炎の中に放り込むのだ。そして、人々は自分たちの「必死の努力」が炎の中にあるのを見て、希望を失う。人々は神の国の美しい景色を見ても、中に入れないので、顔を覆って泣くのだ。それでも、わたしは哀れな状態の彼らの中に入れない。誰が好き勝手にわたしの計画を台無しにできようか。未来の祝福は人々の熱意と引き換えに与えられるのか。人間の存在の意味は、人間の好きなようにわたしの国に入ることにあるのか。わたしはそれほど卑しいのか。わたしがきついことを言わなければ、遥か昔に人々は神の国に入れたのではないか。だから、人々はいつもわたしを憎んでいる。わたしの存在が彼らにとってひたすら邪魔になるからだ。わたしが存在しなければ、彼らは現在神の国の祝福を享受できていただろう。――そしてこの苦しみを耐えることに、どのような必要性があっただろうか。だからこそわたしは人々に、ここから去った方が良いと言うのだ。今の状態であれば解決策が見つかる。若い今のうちに、何らかの技術を身に付けろ。今やらなければ、手遅れになる。わたしの家では、今まで誰も祝福を受けたことがない。わたしは人々に言う。急いで去れ。「貧困」生活に固執するなど。いつか後悔しても遅すぎるのだ。自分にあまり厳しくするな。わざわざ厳しくする必要はないだろう。それでも、わたしはまた人々に言う。祝福を得られなくても、誰もわたしについて不満を言っただけならぬ。人間に対して言葉を語り、時間を無駄にすることはできないのだ。わたしの望みは、この言葉が人々の心の中に刻まれること、この言葉を人々が忘れないことである。これらの言葉とは、わたしが告げる不快な真実である。わたしが人間を信じなくなってから、かなりの時が経つ。わたしが人々に希望を見いだせなくなってから、かなりの時が経つ。というのは、人々に大志がないからだ。神を愛する心を人々がわたしにくれたことが一度もないからだ。その代り、人々はいつもわたしに自分の意欲を伝えてきた。わたしは人間に多くを語ってきたが、未だに人々はわたしの助言を無視している。だから将来わたしの心を誤解しないように、わたしは人々にわたしの

見解を伝えよう。今後人々の生死は、人々の問題である。わたしにはどうすることもできない。人々は自分で生き残りの道を見つけてほしい。わたしはこれに関して無力である。人間はわたしを真に愛してはいないのだから、わたしと人間は道を分かっただけである。今後、もはやわたしたちの間に交わす言葉はない。もはや語るべきこともない。互いに干渉することもない。それぞれ自分の道を行くだけである。人々はわたしを探しに来てはならない。わたしももう二度と人間の「助け」を求めはしない。これがわたしたちの間柄である。今後いかなる問題も生じないよう、わたしたちは曖昧な言葉を使わずに話してきた。これで物事がもっと簡単にならないか。わたしたちはそれぞれ自分の道を歩み、互いに関わりあわない。――このどこが悪いのだ。人々はこの件に関して少し考慮してほしい。

1992年5月28日

第四十七章

人々をいのちにおいて成熟させ、人々とわたしが共通の理想で結果を出せるようにと、わたしはいつも人々を気ままに振る舞わせ、わたしの言葉から栄養と滋養を獲得させ、わたしの豊かさをすべて受け取らせた。わたしは人々が困惑する原因を与えたことはないが、人はわたしの気持ちを決して考慮しない。これは人が無情で、わたし以外のすべてのものを「軽蔑する」からである。人々の欠点のために、わたしは人々に大変同情し、地上にいる間は豊かさをすべて十分享受できるように、人々のために努力を惜しまなかったのである。わたしは人を不公平に扱わず、何年もわたしに従ってきた人々を考えて、彼らのために優しさを抱き続けてきた。あたかも彼らの上に手を置いて働きをするのが忍びないかのようであった。だから、わたしは自らを愛するようにわたしを愛するやせこけた人々を見て、わたしの心にはいつも説明できない痛みがあるが、だからと言ってそのために誰がしきたりを破るだろうか。誰がそのために自分の手を煩わすだろうか。にもかかわらず、わたしは人々が十分楽しめるように溢れんばかりの恩恵をすべて与えた。このことに関しては人間を不当に扱ったことはない。それだから、人間は今でもわたしの慈悲深く思いやりのある顔を見るのである。わたしはいつもで耐え、そして待った。人々が満ち足りるまで楽しみそして飽きると、わたしは彼らの求めを「満足」させ、人々がみな空虚な生活から逃れられるようにし、その後は人々を取り扱うことをしない。地上において、以前わたしは海水を使って人間を呑み込ませ、飢餓により人間を制御し、虫の大発生により脅かし、地上で海水によって人々を呑み込ませ、飢えて

人々を支配し、昆虫の異常大発生で人々を脅かし、人々の上に大雨を降らせたが、人は命の虚しさを感じることはなかった。今でも人々は地上に生きる意義を理解していない。わたしの存在の中で生きることが人の生活の最も意味深い側面なのだろうか。わたしの内に生きることで、災害の脅威から逃れられるのか。地上のどれほどの肉体が自我を享受する自由の中に生きただろうか。肉に生きる虚しさを誰が逃れたか。そして、それを誰が知るだろうか。わたしが人類を創造してから今まで、地上で非常に意義ある人生を送った者はおらず、何の意味もない生き方をして人生を浪費してきたが、この窮地を逃れようとする人はおらず、虚しく疲れた人生から抜け出そうとする人もいない。人々の経験において、わたしを最大限享受しても、肉に生きる者で人間の世界の習慣から逃れた者は一人もいない。それどころか、人々はいつも自然の成り行きにまかせ、自らを欺いた。

わたしが人の存在を完全に終わらせるときには、迫害に耐える人は地上からいなくなり、その時にわたしの大いなる働きは完全に達成されたと言える。終わりの日にわたしが受肉して、わたしの働きで成し遂げたいことは、人に肉体で生きることの空しさを理解させることであり、それによってわたしは肉を滅ぼす。その後、地上には人がいなくなり、地上の空虚について再び叫ぶものはいなくなり、肉の辛苦を再び語るものはいなくなり、わたしが不公平だと再び訴えるものはいなくなり、すべての人々と物事は安息に入る。その後、誰も駆け巡らず、あちこち地上で探し回ることはない。人々はふさわしい終着点を見つけたからである。その時、人々は顔に笑みを浮かべるだろう。そして、わたしはそれ以上を人に求めず、人々とさらに論争することはない。わたしたちの間にもはや契約はない。わたしは地上にあり、人は地上に住む。わたしは人々と共に生き、住む。人はわたしの存在に喜びを感じる。それゆえ、人はむやみに去ることを望まず、代わりに、わたしがもう少し長く滞在することを望む。苦悩が地上にはびこるのを見ながら何もしないでなどいられようか。わたしは地の者ではない。今日までわたしが地上に留まっているのは、嫌々ながらではあるものの、忍耐によってである。人々の絶え間ない懇願のためでなければ、わたしはずっと以前に去っていただろう。今日、人々は自らの世話ができ、わたしの手助けを必要としない。人々は成熟し、人々に食物を与えるわたしを必要としないからである。それだから、わたしは人々と勝利の祝典を持とうとしている。その後、わたしは人々に別れを告げ、人々はこのことに気づくだろう。もちろん、気まずく別れることは良いことではないだろう。わたしたちの間に不平や不満はないからである。それだから、わたしたちの間の友情は永遠である。わたしたちが別

々の道へ進んだ後、人間がわたしの「相続」を続けられるようになり、わたしの生涯でわたしが与えた教えを忘れないことを、わたしは望んでいる。彼らがわたしの名に不名誉をもたらすようなことを何もせず、わたしの言葉を心に留めておくことを望んでいる。わたしが去ったとき、人間がわたしを満足させるために最善を尽くすことを願う。わたしの言葉を人間が自らの礎とすることを願う。わたしを失望させてはいけない。わたしの心は常に人々を労り、片時も離れなかったからである。人々とわたしはかつて共に集まり、天にある祝福と同じ祝福を地上で享受した。わたしは人々と共に暮らし、人々と共に住み、人々はいつもわたしを愛し、わたしはいつも人々を愛した。わたしたちは互いに親しみを感じていた。人と一緒だったわたしの時を思うと、わたしたちの日々は笑い喜びで満ちており、それ以上に、言い合ったことも思い出す。それにもかかわらず、わたしたちの間の愛はこの基礎の上で確立され、お互いの交流が途切れることはなかった。何年にもわたる繋がりの中で、人々はわたしに深い印象を残した。わたしは人々に多くの楽しみを与え、それに対して人々はいつも大きな感謝の念を表した。今、わたしたちが会うのは以前のどのようなものとも違う。誰もがこの別れの瞬間を逃したくない筈だ。人々はわたしに深い愛情を持ち、わたしは人々に無限の愛があるが、それについて何をなし得るだろうか？誰が父なる神の求めに逆らおうとするだろうか？わたしはわたしの住まいに戻り、そこでわたしの働きの別の部分を完成させる。おそらく再会の機はある。人々が過度に悲しまないこと、そして人々がわたしを地上で満足させることをわたしは願う。天にあるわたしの霊は人々にしばしば恵みを与える。

創造の時、わたしは終わりの日にわたしと心がひとつである人々の集まりを作ることを預言した。終わりの日に地上で模範を確立した後、わたしはわたしの住みかに戻らうと予告した。人々がみなわたしを満足させた時には、人々はわたしの求めを達成しており、わたしはもはや人々から何も求めないだろう。その代わり、人々とわたしはお互いにわたしたちの昔話をし、その後わたしたちは別々の道を歩む。わたしはこの働きを始め、人々を精神的に備えさせる。人々がわたしを誤解したり、わたしが残酷で無慈悲であると思わないように、わたしはすべての人々にわたしの意図を理解させるだろう。そう思われるのはわたしの意図ではない。人々はわたしを愛していながらわたしが自分に適した休息の場を持つことを拒むだろうか。人々はわたしのために父なる神に嘆願したいとは思わないのだろうか。人はわたしに同情して涙を流さなかったか。人々はわたしたち父と子が速やかに出会うのを助けなかったか。なぜ人々は今、よろこんでそれをしようとししないのか。地上のわたしの任務は果たされた。人々と別れてから、わたし

は以前と変わらず人々を助け続けるだろう。それは良くないだろうか。わたしの働きがより効果的であり、相互に有益なものであるように、辛いことではあるが、わたしたちは別れなければならない。わたしたちの涙は静かに落ち、わたしはもはや人々を咎めないだろう。過去には、わたしは人々の心を刺し通す多くのことを言い、人々は悲しみの涙を流した。それにつき、わたしはここで人々に謝罪し、人々の許しを求める。わたしを妬み、憎まないでほしい。わたしが言ったことはすべて人々のためを思っていたことから。それだから、人々がわたしの心を理解することをわたしは願う。以前わたしたちは口論したが、振り返ってみると、わたしたちはどちらもそこから得たものがあった。こうした論争を通じて神と人々の間には友情の架け橋が形成されたが、それはわたしたち双方の努力の成果ではないのか。わたしたちはみなこれを享受すべきである。わたしの以前の「誤り」を許すよう、わたしは人に願う。そして人々の罪もまた、忘れられる。人が将来わたしの愛に報いることができる限り、それは天にあるわたしの霊に慰めを与えるだろう。この点で人々の決心がどのようなものであるのか、あるいは人がわたしの最後の求めを果たしたいと思っているか否か、わたしは知らない。わたしは人々がわたしを愛することの他に何も求めておらず、それで十分である。これはなされ得るか。わたしたちの間に起こった不愉快なことはすべて過去のものとし、わたしたちの間には常に愛があるように。わたしは人々に実に多くの愛を与え、人々は多大な犠牲を払ってわたしを愛した。だから、人間がわたしたちの間にある混じり気のない純粋な愛を宝物とし、わたしたちの愛が人々の世界全体に広がり、永遠に受け継がれるよう願う。わたしたちが再会するとき、わたしたちがやはり愛で結ばれており、わたしたちの愛が永遠に続き、すべての人々により賞賛され、語られるように。それによりわたしは満足し、わたしは笑顔を人々に示すだろう。わたしが人々に託したすべてを人が思い出すことをわたしは願う。

1992年6月1日

附録

全宇宙への神の言葉の奥義の解釈 (幾つかの章の解釈)

第一章

神が次のように語った通りである。「誰もわたしの言葉の根源を把握できず、言葉の

背後にある目的も把握できない。」神の霊による導きがなければ、神の言葉の到来がなければ、すべては神の懲罰のもとに消滅するだろう。なぜ神はそんなに長い間人を試すのだろう。5か月もの間である。これはわたしたちの交わりにとって焦点といえる大切な事柄であり、神の英知の中心点でもある。わたしたちは次のように推測することができる。この試練がなく、神が墮落した人類を攻撃せず、殺さず、めった打ちにせず、教会の建設が今日まで続いているならば、何が成し遂げられるだろう、と。そこで神は発言の一行目で核心を語り、この数か月に渡る働きにどのような結果を望むかを説明するが、それは驚くほど正確である。それはこの期間に渡る神の行いの英知を示すためである。すなわち、試練を通して服従と誠実な献身を学ぶことを教え、痛みを伴う精錬を通して神をよりよく理解する方法を教えるためである。人々は失望を経験すればするほど、ますます自分自身を理解できるようになる。実を言うと、彼らが直面する精錬が痛みを伴うものであればあるほど、彼らは自分の墮落をよりよく理解でき、そうする中で自分たちが神の効力者になる価値がないこと、この種の奉仕を提供することは神によって高められていることを学びさえする。そこでいったんこれが達成されると、いったん人が自分自身を使い果たすと、神は陰からではなく、はっきり姿を見せて憐れみの言葉を発する。数か月後、神の新しい働き方が今日を起点にしていることが容易に見て取れるようになる。神はそれを誰が見てもはっきりするようにしたのである。と言うのも、神はかつてしばしばこう言ったからである。「神の民と呼ばれる権利を得ることは簡単ではない」。神はこの言葉を効力者と呼ばれる人たちにおいて実証したのだが、そのことは、神が疑いの余地なく信頼に足ることを十分示している。神が述べることのすべては程度の差はあるが実現し、神の言葉は少しも空虚ではない。

すべての人が取り乱し、悲嘆に暮れている時、神からのこれらの言葉は希望のないすべての人々の胸を突き、彼ら را呼び起こす。これ以上の疑いを排除するために、神は次のように付け加えた。「彼らはわたしの民と呼ばれるが、この呼び名はわたしの『子供たち』と呼ばれることまったく同じである。」この言葉で人は神自身の権威を守れるのは神だけであることがわかり、それを読んだ時、人々は、これは一つの働き方ではなく事実であることをさらに強く信じる。さらに一歩進めると、人々のビジョンが曇ることのないよう、神の新しいやり方においてはすべての人の身分がはっきりしている。このことから、人々は神の英知を知ることができる。こうして、人々は神が人間の心を見抜く力を持っていることをいっそうよく理解する。彼らが行うことのすべて、考えることのすべては、まるで人形のように神によって操られている。これは疑う余地のないこ

とである。

始めに戻ると、神が最初に語ったのは、その働きの第一歩である「教会を清めること」が完了したことであった。「状況は以前とは異なり、わたしの働きは新たな開始点に入っている」。この発言から、神の働きは新しい開始点に入ったことがわかり、神はその後まもなく次の段階の働きの青写真をわたしたちに示した――教会建設が終了すると、神の国の時代の生活が始まる。「今はもはや教会建設の時代ではなく、むしろ神の国が首尾よく建設される時代だからである」。さらに神は、人々はまだ地上にいますので、彼らの集会は教会と呼ばれ続け、こうして、人々が想像する非現実的な「神の国」が実現するのを避けられると述べた。次に、ビジョンの問題について考えてみよう。

今は神の国の建設の時代で、教会建設が終了する時である。しかし、なぜすべての集会がいまだに教会と呼ばれるのだろうか。過去、教会は神の国の先駆けで、教会がなければ神の国もあり得ないと言われてきた。神の国の時代は神が人の姿になってその神の職分を実行するのと同時に始まり、神の国の時代は人の姿になった神によってもたらされる。神がもたらすのは神の国の時代であって、神の国が公式に降りてくるのではない。これを想像するのはむずかしいことではない。語られている人々は神の国の時代の人々のことであって、神の国の人々のことではない。したがって、地上の集会は相変わらず教会と呼ばれるのは道理にかなっている。昔、神は普通の人間性を通して行動し、人々は神自身だとは思わなかった。だから、神の国の時代は人々の間ではまだ始まらなかった。すなわち、わたしが言ったように、わたしの霊は人間の姿になったわたしの中で正式な働きを始めていなかった。神自身が証しされた今、神の国は人々の間で実現される。このことは、わたしが神性の中で働き始めることを意味し、そのためわたしが神性において語る言葉と、わたしが神性において行なう業とを享受できる人々は、神の国の時代におけるわたしの民として知られるようになる。ここから「神の民」が生じたのである。この段階で、わたしは主としてわたしの神性を通して働き、語る。人はわたしの計画を邪魔することができないし、中断させることもできない。いったん神の言葉が一定の点に到達すると、その名前は証言され、人類に対する神の試練が始まる。これは神の働きにおける英知の頂点である。これは次の段階を始めるための、そして最後の段落を終わらせるための確かな基礎を構築し、基盤を築く。人にはそれを知る方法はなかった。これは裁きの時代の第一部分と第二部分の合流点である。人を精錬する数か月がなければ、わたしは神性を通じて働くことはできなかった。この数か月の精錬の期間はわたしの働きの次の段階への道を開く。これらの数か月の働きが終了することは、次の働き

の局面にいっそう深く入る合図である。人が本当に神の言葉を理解するなら、神がこの数か月を使ってその働きの次の段階を開始し、働きをいっそう実り豊かなものにするのがわかるだろう。わたしの人間性の妨げが、わたしの働きの次なる段階に障壁となったので、この数か月にわたる、苦しみによる精錬を通していずれの側面も教化され、実質的な益が得られている。その結果、人は今初めて、自分に対するわたしの言及の仕方を大事にし始める。だから見方を変えて、神が人をもはや「効力者」とは呼ばず、むしろ「神の民」と呼ぶと言った時、人々は皆大喜びした。これが人の一番の弱点、すなわちアキレス腱だったのだ。神があのように語ったのはまさに、人が持つこの致命的な弱点を捕らえるためだったのである。

さらにすべての人類を納得させ、一部の人々の献身の思いの中に見られる不純物を指摘するために、神はさらに踏み込んで人々のさまざまな醜い特徴を指摘し、このようにして神の言葉を次のように実現した。「何人の人が本当にわたしを愛しているのだろうか。自分の未来を考慮して行動しているのではない人がいるだろうか。試練の最中に決して不平を言わなかった人がいるだろうか。」これらの言葉から人々は自分の不従順、不忠実、孝行心のなさを知ることができ、したがって、神の慈悲と愛が、あらゆる段階において神を探し求めるすべての人々に対してあることを知る。このことは次の言葉から窺い知ることができる。「一部の人々が今にも退却しようとしている時、わたしの話し方を変えてほしいと思うすべての人々が失望する時に、わたしは救いの言葉を発し、本当にわたしを愛するすべての人々をわたしの国に、わたしの玉座の前に連れ戻す。」ここで「本当にわたしを愛する人々」という語句と「何人の人が本当にわたしを愛しているのだろうか」という修辞疑問文は矛盾しない。これは、真実の人が不純物を持っているという意味である。神は何も知らないということではなく、むしろ、神が「誠実さ」など、墮落した人類に対する皮肉の言葉を用い、神への借りがあることをすべての人により深く感じさせ、自分をさらに厳しく咎めさせ、自分の心の苦悩がすべてサタンに由来することを気づかせたのは、まさに神が人の心の奥底を見通せるからである。「献身」といった言葉を見ると誰もが驚き、密かにこう考える。「わたしは何度も天地を罵り、何度も去りたいと思ったが、神の行政命令を恐れたので、物事に対処してなんとか乗り切り、群衆と歩調を合わせ、神に取り扱われるのを待った。本当に希望がないとわかって、ゆっくり手を引く時間はあるはずだと思いながら。今、神はわたしたちを献身的な神の民と呼ぶが、これは神が本当に人々の心の奥底を通して見ることができるという意味なのだろうか」。まさに最後になってようやく神はこの種の誤解を避けるために、さ

さまざまな種類の人々の心の状態を指摘した。そのおかげで、最初心の中では疑いながら言葉の上では幸せにしていた人々は、心でも、言葉でも、目でも悔悟の念を抱いた。このようにして、神の言葉に対する人の印象は一層深くなり、その結果、人は以前よりも神を恐れ、敬虔になり、神をよりよく理解するようになった。最後に、人の不安を軽減するために、神は次のように語った。「しかし、過去は過去であり、今は現在なので、もはや過去を切望する必要はなく、将来を心配する必要もない。」このようにきっぱりして調子が良く、しかも簡潔な話し方は一層大きな結果を生み、そこで神の言葉を読むすべての人々は絶望の中でもう一度光を見て、次に神の英知と行いを見、それから「神の民」という呼び名を得て、その後心の中の疑念を除去し、やがて自分の心理状態が移り変わるパターンから自分自身を知るようになる。この言葉の中には、順番に悲しみと悲嘆、幸福と喜びの両方を見ることができる。神はこの章において人間の有様を実物そっくりに表示した。それは完璧なまでに明快だが、人には達成できないことである。本来に人の心の奥底にある秘密をさらけ出す。これは人ができるものだろうか。

さらに重要なのは下記の一節で、その中で神は人に直接行政命令を明らかにしている。そしてこれがもっとも重要な部分である。「現実逆らい、わたしの指導に従って行動しない人々は良い終わりを迎えることはなく、自分の身に困難をもたらすだけである。世界で起こるすべてのことの中で、わたしが最終決定権を持たないものはない。」これは神の行政命令ではないだろうか。それはこの行政命令に反した行動をする人々については数えきれないほどの例があることを示す。さらに、すべての人に自分の運命について考えないよう警告する。神の采配から逃れることを望むと、結果は想像を超えた恐ろしいものになるだろう。したがってそれは、これらの言葉によって啓発と光を経験するすべての人々に神の行政命令をよりよく理解させ、神の威厳を傷つけてはならないことも理解させる。その結果、彼らはより経験を深め、落ち着くようになり、風雨に耐えた松のように厳寒の脅威にいどみ、自然の中で成長する樹木のような生命力を増し続ける。この記述はほとんどの人々をめまいがするほど当惑させ、まるで彼らは一種の迷路に迷い込んだかのようになる。それは、神の言葉の内容が比較的早く変化するからであり、そのため、自分の墮落した性質を理解しようとする、10人の中の9人までが迷路に入り込んでしまう。より円滑に働き、人の疑念を取り除き、すべての人が今後も神の誠実さを信じるようにするため、神は引用文の最後で強調する。「わたしを本当に愛する一人一人がわたしの玉座の前に戻るだろう」。かくして、数か月にわたる神の働きを経験してきた人の心から、不安の一部が即座に取り除かれる。さらに、あたかも空中に

ぶら下がっているかのような感じられた彼らの心は、重たい石が地面に落ちるように元いた場所へと戻る。彼らはもはや自分の運命を心配せずともよく、そのうえ、神は空虚な言葉をこれ以上語らないと信じる。人々は独善的なので、神に対して自分が最大限の献身を示していると思わない者は一人としていない。このため、神は「本当に」という語を意図的に強調する――それはより大きな結果を達成するためである。これは神の働きの次の段階に向けての道を整え、基礎を構築するためである。

第三章

今日はもはや恵みの時代ではないし、慈悲の時代でもなく、神の民が明らかにされる神の国の時代であり、神が神性を通して直接物事を行う時代である。したがって、神の言葉のこの章で、神はその言葉を受け入れるすべての人々を霊的領域に導く。出だしの段落で神は前もってこれらの準備を行い、人が神の言葉について認識を持っているなら、彼らはメロンを得るために蔓をたどる人のように、神がその民に対して達成しようとすることを直接把握するだろう。以前、人々は「効力者」という呼び名によって試されたが、今日では試練を受けた後に、訓練が正式に始まる。それに加えて、過去の神の言葉に基づいた神の働きについてさらに知らなければならず、そのうえ言葉と人、霊と人を、分けることのできない一つの全体――一つの口、一つの心、一つの行動、一つの源――として見なさなければならない。これは天地創造以来神が人に求めてきた最大の要求である。このことから、神がその努力の一部を神の民のために費やすことを望み、彼らにいくつかのしるしと不思議を示すことを望み、さらに重要なこととして、すべての人が神の働きと言葉に完全に従うことを望んでいることが見て取れる。一つの点において神自身が証しを守り、別の点では神の民にいくつかの要求をし、大衆に行政命令を直接出している。したがって、今やわたしの民と呼ばれるあなたがたにとって、物事はかつてと同じではない。あなたがたはわたしの霊の語りかけに耳を傾け、従い、わたしの働きにしっかりと従うべきであり、わたしの霊と人の姿になったわたしを分けてはならない。わたしたちは本質的に一つであり、ふたつの別のものではないからである。この言葉の中で、人々が人の姿になった神を無視するのを防ぐため、「わたしたちは本質的に一つであり、ふたつの別のものではないからである。」という箇所を改めて強調している。このように神を無視することは人の欠点であるため、このことが神の行政命令に再度記載されているのだ。次に神は、人々が神の行政命令を破った結果について知らせ、何も隠さず、次のように語る。「彼らは損害を受け、自分自身の苦い杯からしか飲むことはできない。」人は弱いので、これらの言葉を聞いた後、心の中でよりいっそう神

を警戒せずにはいられない。「苦い杯」は人々をしばらくの間考えこませるのに十分だからである。人々は神が語るこの「苦い杯」の意味についていろいろ解釈し、たとえば、言葉によって裁かれること、神の国から追い出されること、一定期間孤立させられること、サタンによって肉体が墮落させられ、悪霊に取りつかれること、神の霊に見捨てられること、肉体が終りを告げ、黄泉の国へ追いやられることなどを考える。これらの解釈は人々の頭脳で考えつけることであり、そこで人々は想像力でそうした解釈を越えることはできない。しかし、神の考えは人の考えとは異なる。すなわち、「苦い杯」は上述のどれも言及しているのではなく、神の取り扱いを受けた後の人々の神に関する認識の程度に言及している。もう少し明確に言うと、誰かが勝手に神の霊と神の言葉を分けるなら、あるいは神の言葉と人を、または霊と神自身が纏っている肉の姿を分けるなら、この人物は神の言葉の中にある神を知ることができないばかりでなく、神に対して少し疑いを持つと彼らは至る所で正しい判断ができなくなるのだ。これは自分たちが直接排除されるという人々の想像とは異なり、むしろ彼らは徐々に神の刑罰の手に落ちていく――すなわち、彼らは大惨事に陥り、誰も彼らと共生することはできない。まるで彼らは悪霊に取りつかれているかのようであり、頭のないハエのようにどこへ行っても何かにぶつかっているようである。それにもかかわらず、彼らはまだ去ることができない。彼らの心の中では、物事は言いようもなく困難で、彼らの心の中には言語に絶するほどの苦しみがあるかのようである――しかし、彼らは口を開くことができず、一日中夢見心地で過ごし、神を感じることはできない。神の行政命令が彼らを脅すのはこうした状況下なので、彼らは何の楽しみもないのに教会を敢えて離れようとししない――これがいわゆる「内外からの攻撃」であり、人々にとってはひどく耐え難い。ここで語ってきたことは、人々の観念とは異なる――その理由は、そのような状況下でも、彼らはまだ神を求めることを知っており、これは神が彼らに背を向けるときに起こり、さらに重要なことは、不信心者と同様に、彼らはまったく神を感じることはできないからである。神はそのような人々は直接には救わない。彼らの苦い杯が空になる時、それは彼らの終りの日が来た時である。しかし、この瞬間でも彼らはまだ神の旨を求め、もう少し楽しみたいと望む――しかし、今回は特別な事情がない限り以前とは異なる。

これに続いて、神はすべての人々に積極的な面も説明し、したがって彼らは再びいのちを得る――過去の時代、神は効力者にはいのちがないと言ったが、今日神は突然「うちにあるいのち」について語る。いのちについて話す時に初めて、人々は自分たちの中に神のいのちがまだあることを知る。このようにして、神に対する彼らの愛は徐々に増

していき、彼らは神の愛と慈悲についていっそう多くの認識を得る。したがって、これらの言葉に留意した後、すべての人々は過去の過ちを悔い改め、秘かに悔恨の涙を流す。ほとんどの人は神を満足させなければならないと秘かに決心もする。時には神の言葉は人々の心の奥底を突き刺すので、人々はそれらの言葉を受け入れがたく、平安な気持ちでいられなくなる。時には神の言葉は誠実で、熱心で、人々の心を温かくするので、その言葉を読んだ後、人々は数年迷った後母親に再会した時の子羊のようになる。涙が目には浮かび、彼らは感情に圧倒され、神の抱擁に身を投げたくてたまらなくなり、むせび泣いて苦しみ、長年心の中にあり、言葉では言い表せない苦悩を解放し、神への忠誠心を示す。数か月の試練によって、彼らは少し神経過敏になっており、何年も寝たきりの病人のようにあたかも精神病に苦しんでいるかのようだ。神の言葉に対する断固たる信仰を彼らに持たせるために、神は繰り返し次のように強調する。「わたしの働きの次の段階が順調に、そして妨害されることなく進むよう、言葉の精錬を通してわたしの家に住む全ての者たちをわたしは試す。」ここで、神は「わたしの家に住む全ての者たちをわたしは試す」と言う。これらの言葉を綿密に読むと、人々が効力者として行動する時、彼らはまだ神の家の中にいる人々であることがわかる。さらに、これらの言葉は「神の民」という呼び名に対する神の忠実さを強調し、人々に一定の安心感をもたらす。では、人々が神の言葉を読んだ後、あるいは「神の民」の呼び名がこれから明かさされるべき時に、人々が心の中に感じる事柄を、神は何故繰り返し多く指摘するのだろうか。それは神が人の心の奥深くを見る神であることを示すためだけであろうか。これは理由の一部にすぎない――しかも、それは二次的重要性しかない。神がそうするのはすべての人々を完全に納得させるため、すべての人が神の言葉を通して自分の不十分な点を知り、いのちに関し自分の過去の欠陥を知るため、さらに重要なことには次の働きの段階の基礎を築くためである。人々は、自分自身を知ることが基礎にして神を知り、神を見習おうと努力することしかできない。これらの言葉によって、人々は否定的で消極的な態度から積極的で前向きな態度に変わり、この結果、神の働きの第二部のための基礎がしっかりと造られる。この基礎の段階がしっかりしたことにより、神の働きの第二部はたやすくなり、必要な努力はごくわずかですむ。したがって、人々が心の中の悲しみを追い払い、積極的で前向きになる時、神はこの機会を最大限に利用して、民にその他の要求をする。「わたしの言葉は時間や場所を問わずに発せられ、現され、あなたがたはいつでもわたしの前で自分自身を知るべきである。なぜなら、つまるところ今日という日は以前のどのようなものとも異なり、あなたはもはや望むことが何であれそれを達成するとはできないからである。それどころかあなたはわたしの言葉による導きの下に

、自分の体を制圧することができなければならず、わたしの言葉を柱としなければならず、無鉄砲に行動してはならない。」ここで、神は主に「わたしの言葉」という表現を強調する。過去においても神は「わたしの言葉」に何回も言及し、したがって、誰もが注意の一部をこれに向けざるを得ない。こうして、神の働きの次の段階の核心が示される。すべての人々が神の言葉に注意を向けるようになり、ほかの何かを好きになることはなくなるだろう。すべての人々は神の口から語られる言葉を大切にしなければならず、軽々しく扱ってはならない。したがって、一人の人が神の言葉を読み、多くの人がアーメンと言って従うような過去の教会のやり方は終わるだろう。当時人々は神の言葉を知らず、自分自身を守るための武器だと考えていた。この考えを変えさせるために、神は人に新しく、より高いものを地上で要求する。神の高い基準と厳しい要求を見た後、人々が否定的で消極的にならないように、神は次のように繰り返し言って人々を勇気づける。「物事が今日あるまでに至ったのだから、あなたがたは過去の行為や行動をひどく悲嘆したり後悔したりする必要はない。わたしの寛大さは海や空のように果てしない――人の能力と、人のわたしに対する認識の範囲は、わたし自身の手の甲ほどにはわたしにはなじみがないのだろうか。」これらの真剣で誠実な言葉は突然人々の心を開かせ、すぐに彼らの心を絶望から神への愛へと変え、積極的で前向きにする。神は人々の心の中の弱さをつかみ取って話すからである。人々はそのことに気づかず、いつも自分の過去の行動のために神の前で恥ずかしいと感じ、何度も繰り返し深い後悔の念を表す。このように、神はこれらの言葉を取りわけ自然に、普通に明らかにするので、人々は、神の言葉を堅苦しく活気がないと感じることがなく、厳しくて穏やか、生氣にあふれ、真に迫っていると感じるのだ。

天地創造から今日まで、神は霊の世界から黙って人のためにすべてを整えて、決して霊の世界の真実を人に説明したことはなかった。しかし今日、神は突然霊の世界で荒れ狂う戦いの要点を述べ、そのため当然人は当惑して頭を掻きむしり、神は深遠で理解しがたいという印象を強め、彼らにとって神の言葉の根源を見つけるのはいっそう難しくなっている。霊の世界の難問を抱えた状態はすべての人々を霊に引き込むと言える。これは将来の働きの中で最初の非常に重要な部分であり、人々が霊的領域に入るための手がかりである。このことから、神の働きの次の段階は主に霊を対象にしていることがわかる。そして、その主要な目的は、人の肉体の中で神の霊が行う奇跡をすべての人にいっそうよく知らせ、こうして神に忠実なすべての人々にサタンの愚かさ、サタンの本質をいっそうよく知らせることであることがわかる。彼らは霊的領域に生まれたのではな

いが、彼らはあたかもサタンを見たかのように感じ、いったん彼らがこの感情を持つと、神は直ちに話す手段を変更する――いったん人々がこの考え方を獲得すると、神は尋ねる。「なぜわたしはこれほど早急にあなたがたを訓練しているのか。なぜ霊の世界に関してあれこれ語るのか。なぜあなたがたに何度も思い出させ、熱心に忠告するのか。」等々――人々の頭の中に多くの疑問を生じさせる一連の質問を提示する。なぜ神はこのような調子で話すのだろう。なぜ神は霊的世界の事柄について話し、教会建設中に人々に要求することについて話さないのか。なぜ神は奥義を明らかにして人々の考えを攻撃しないのか。もう少しだけ思慮深くなりさえすれば、人々はさまざまな段階の神の働きについて多少の認識を獲得し、それによって、彼らが将来誘惑に出くわす時、彼らにはサタンに対する本当に強い嫌悪の気持ちが生まれるのだ。そして、将来試練に出くわす時でさえ、彼らはまだ神を知ることができ、いっそう深くサタンを嫌悪し、したがってサタンを呪うことができるのだ。

最後に、神の旨は完全に人に明らかにされる。「わたしの言葉の一語一語を根付かせ、あなたの霊において花咲かせ、さらに重要なことには、もっと多くの実を結ばせなくてはならない。わたしが求めるものは明るく、繁茂した花ではなく、豊富な果実――さらには、悪くならない果実だからである。」神が繰り返し神の民に要求することすべての中で、これがもっとも包括的なものであり、中心点であり、単刀直入に提出される。わたしは普通の人間性で働くことから完全な神性で働くことに移行した。したがって、以前はわかりやすい単純な言葉で話したので説明を付け加える必要はなく、ほとんどの人々はわたしの言葉の意味を理解することができた。その結果、当時に必要だったのは、人々がわたしの言葉を知り、現実について語れるということだけだった。しかし、今回の段階は極めて異なる。わたしの神性は完全に勝っており、人間性が関与する余地は残っていない。したがって、わたしの民の中の人々がわたしの言葉の真の意味を理解しようと望むと、彼らはかなり苦労する。わたしの話しかけを通してのみ、彼らは啓発と光を獲得することができ、この手段を通さない限り、わたしの言葉の目的を把握しようとする考えはどんなものでも無意味な白昼夢となってしまう。すべての人々がわたしの話しかけを受け入れてわたしに関する認識を深める時、その時こそ、わたしの民がわたしの生き方に従う時であり、人の姿となったわたしの働きが完了する時であり、人の姿となったわたしの神性が全うされる時である。この時点ですべての人々は人の姿をしたわたしを知り、神は人間の姿で現れたとすることができる。これが結実である。これは、神が教会建設にうんざりするようになったさらなる証拠である――すなわち、「温室

の花は星の数ほどあり、旅行者たちを惹きつけるが、いったん萎れるとサタンの偽りの計画のようにぼろぼろになり、誰も興味を示さなくなる。」神は教会建設の時代にも直接働いたが、神はいつも新しく、決して古くならない神なので、過去の事柄に対するノスタルジアはない。人々が過去を振り返って考えるのを止めるために、神は次の言葉を用いる。「サタンの偽りの計画のようにぼろぼろになる」。この言葉は神が教義に盲従しないことを示している。一部の人は神の旨を誤って解釈して次のように尋ねることがあるだろう。神自身が行った働きに対して、なぜ神は「いったん萎れると誰も興味を示さなくなる」と言ったのだろう。これらの言葉は人々に啓示を与える。もっとも重要なのは、この言葉がすべての人々に新しく、正確な開始点を持たせることだ。それが可能になって初めて、彼らは神の旨を満足させることができる。こうして、ついに、神の民は強いられたのではなく、本当に、心から神を褒め称えることができるだろう。これが神の六千年にわたる経営（救いの）計画の中心になるものである。すなわち、この六千年にわたる経営（救いの）計画の結晶化である。すべての人々に神の受肉の意味をわからせ——神が人の姿になったこと、すなわち人の姿をした神の行いを彼らに实际的にわからせる——その結果、彼らは曖昧な神を否定し、今日の神、昨日の神、それだけではなく、明日の神が本当に、実際に永遠に存在していることを理解するようになる。そうして初めて神は安息に入るだろう。

第四章

否定から肯定への変化の後、人々がみな別の方向を向いて流されてしまうのをやめさせるため、神の言葉の前章で、神の民への神の最も高い要求を神が語り、神が人々に神の経営（救いの）計画のこの段階における神の旨を告げた後、神は人々に神の言葉を熟考させ、最終的に神の心を満たすよう人々が決断するのを助ける。人々の状況が肯定的であるとき、神はすぐに問題の別の面について人々に問い始める。神は人々が理解することが難しい一連の問いを尋ねる。「あなたがたの、わたしへの愛は、不純なもので穢されていなかったか。あなたがたの、わたしへの忠誠は純粋で心からのものだったか。あなたがたの、わたしについての認識は真実であったか。あなたがたの心のどれほどの場所をわたしは占めているだろう」などである。この段落の前半では、ふたつの非難を除いて、残りはすべて質問である。特に、「わたしの語ったことは、あなたがたのアキレス腱を打つだろうか」は非常に適切な質問であり、人々の心の深みにある最も秘密の事柄を正確に突き、無意識のうちに人々に自問させる。神に対するわたしの愛は本当に誠実なものか。心の中で人々は無意識のうちに自分の過去の奉仕の経験を思い起こす

。自己寛容、独善、うぬぼれ、自己満足、ひとりよがり、誇りに駆られていた。人々は網にかかった大きな魚のようなものだった——そして、網にかかった後、自らを解放することは容易ではなかった。さらに、人々はしばしば抑制を欠き、神の普通の人間性をしばしば欺いて、あらゆる行いの中で自らを優先させた。「効力者」と呼ばれるに先立ち、人々は生まれたばかりの虎の子のようなもので、活力で満たされていた。人々は若干いのちに心を注いでいたが、ときどき心を注いでいるふりをした。奴隷のように、人々は神に対しておざなりだった。効力者だということが周囲に分かると、人々は否定的で、脱落し、悲しみで満たされ、神について不平を言い、意気消沈してうなだれなどした。自らの素晴らしい、人の心を動かす物語の各段階は、人々それぞれの心にいつまでも残る。眠ることさえ困難になり、意識がもうろうとして昼を過ごす。人々は神によって二度除去され、ハデスに落とされたようで、逃げるができない。神は最初の段落でいくつかの難しい問いを提示すること以外には何もしていないが、じっくり読むと、このような問いは、神の目的は人々自身のために問いを尋ねること以上のものであると示している。その中にはより深いレベルの意味が含まれており、それはより詳細に説明されることが必要である。

かつて神がどのみち今日は今日であり、昨日はもう終わったのだから懐古の念を求めることはないと言い、その一方で、最初の文で人々に神は尋ね、過去を振り返って考えさせるのはなぜか。考えなさい。人々が過去を懐かしく思わないようにと言いながら、過去を振り返って考えるよう神が求めるのはなぜか。神の言葉に間違いがあるだろうか。これらの言葉の原典が間違っているのだろうか。当然、神の言葉に注意を払わない人はこうした深遠な問いを尋ねない。しかし、現時点ではこれについて話す必要はない。まず、上記の「なぜ」を説明しよう。もちろん、神は空虚な言葉を話さないと言ったことを誰もが知っている。言葉が神の口から発せられるならば、そこには目的と意義があり、それが問題の核心に触れる。人々の最大の失敗は有害な方法を変えることができないことと人々の古い本性の度し難さである。すべての人々にもっと徹底的かつ現実的に自らを知らしめようと、最初に神はより深く自分自身を省察し、神の言葉の一つでも空虚ではなく、神の言葉のすべてが異なる人々の中で異なった程度で成就されることを知るべく、過去を振り返ってよく考えるよう人々を導く。過去に、神が人々を取り扱った方法は人々に神についての少しの認識を与え、神に対する人々の誠実さをもう少し心がこもったものにした。「神」という言葉は人々と人々の心のほんの0.1%を占めている。この程度の成果は神が莫大な量の救いをもたらしたことを示す。この人々のグループ

、つまり、大きな赤い竜によって搾取され、サタンに取り付かれたグループにおける神のこれほどの成果は、人々が好きなように行うことはないようなものと言ってもいい。それは、サタンに取り付かれている人々の心を神が100%を占領することは不可能だからである。次の段階で神に関する人々の認識を増やすために、神は過去の効力者の状態と今日の神の民の状態と比較し、人々の恥の感覚を高める明確な対照を作り出す。神が言ったように「自分の恥を隠す場所がどこにもない」。

それならば、神は人々のためだけに問いを尋ねているわけではないとなぜわたしは言ったのか。初めから終わりまで詳細に読むと、神が提起した質問は完全には説明されていないが、すべて神に対する人々の忠誠と神に関する認識の程度に言及している。言い換えれば、人々の実際の状態に言及している。それは悲惨で、人々が打ち明け難いものである。このことから、人々の霊的背丈はあまりにも貧弱であり、神に関する人々の認識はあまりにも表面的であり、神に対する人々の忠誠はあまりにも汚く、不純であることが理解される。神が述べたように、ほとんどすべての人々は濁った水の中で釣りをしており、数を合わせるためにだけそこにいる。神が「あなたがたは、わが民となる資格がないと、ほんとうに信じているだろうか」と言うとき、これらの言葉の真の意味は、すべての人の中に神の民に相応しい人は誰もいないということである。しかし、より大きな効果を達成するために、神は問いという方法を使う。人々の心を突き刺すほどに人々を情け容赦なく攻撃し、切り刻み、殺した過去の言葉よりもこの方法ははるかに効果的である。「あなたがたがわたしに忠実でなく、あなたがたの忠誠は汚れており、あなたがたの心の中にわたしは絶対的な場所を持っていない……わたしはあなたに自らを隠す場所を残さないだろう、あなたがたのうちの誰もわたしの民となるのに十分ではないからである」といったありふれて面白味のない何かを神直接語ったとする。あなたは両者を比較するかもしれない。内容は同じだが、それぞれの口調は異なる。問いを使う方がはるかに効果的である。したがって賢明な神は初めの口調を使い、神が語る際の芸術性を示す。これは人によって達成不可能であり、「人々はわたしに使われる道具にすぎず、人々の唯一の違いはある人々は卑しく、ある人々は貴重である」と神が言ったことは不思議ではない。

読み続けよう。神の言葉はどんどん現れ、一休みする機会をほとんど人々に与えない。神は決して人を容赦しないからである。人々が最大の後悔を感じると、神はもう一度人々に警告する。「もしあなたがたが、今のような問いにまったく気づかずにいるのなら、その人たちは、濁った水の中で釣りをしているのであり、数を合わせるためにだけ

そこにいる。その人は、わたしが予め定めた時には、必ずや除かれ、再び底なしの淵に投げ込まれるだろう。これは、わたしの警告の言葉である。これを軽んじる者は裁かれ、定められた時に災いに見舞われる」。このような言葉を読んで、人々は底なしの淵に放り込まれたときを思わざるを得ない。破局に脅かされ、神の行政命令に支配され、人々自らの終わりは人々を待ち、長い間苦しみ、落ち込み、不安で、心にある憂鬱を誰かに語ることができず——これに比べれば、肉を浄化された方が人々はいっそう幸せであった……これを考えると、人々は苦しみを感じざるを得ない。過去どうであったか、今どうか、そして明日どうであるかを考え、心の悲しみが増え、人々は無意識に震え始め、それゆえ神の行政命令をさらに恐れるようになる。「神の民」という言葉も語る手段であるかもしれないということが心に浮かぶにつれ、人々の心の歓声はすぐに苦しみに変わる。人々の致命的な弱点を使って神は人々を打ち、この点において、神は自らの働きの次の段階を始め、絶えず人々の神経が刺激されるようにし、神の行いは計り知れず、神は到達不能で、神が聖で純粹であり、人々は神の民の一人であるにはふさわしくないという人々の気持ちを増強している。その結果、人々は自らを改善する努力を倍増させ、遅れようとはしない。

次に、人々に教訓を与え、自らを知らしめ、神を崇拝させ、恐れさせるために、神は新しい計画を始める。「創造の時から今日まで、多くの人々がわたしの言葉にそむき、そのためにわたしの回復の流れからうち捨てられ、除かれた。最終的に彼らの体は滅び、その魂はハデスに投げ込まれる。そして、今日でも、その者たちは、まだ重い罰を受けている。多くの人々がわたしの言葉に従ったが、彼らはわたしの啓きと照らしにそむいた……そしてある人たちは……」。これらは本当の例である。これらの言葉で、神はすべての神の民に長年にわたる神の行いを知らしめようとして真の警告を与えるだけでなく、靈的世界で起きていることの一部を遠回しに描写する。これは、神に対する不服従からは何もいいことがないことを人々に知らしめる。人々は恥の永遠の印となり、サタンの化身となり、サタンの生き写しとなるだろう。神の心の中で、意味のこの側面は二次的に重要である。これらの言葉はすでに人々を震えさせ、困惑させたからである。このことの肯定的な側面は、恐怖に震えるにつれて人々も靈的世界の詳細をある程度得ることである——しかし、ある程度であるため、少し説明しなければならない。靈的世界の門から、あらゆる種類の靈がいることが理解される。しかし、いくらかの靈はハデスにおり、いくらかは地獄におり、あるいは火の湖におり、底なしの淵にいる靈もある。ここに追加するものがある。表面的に言えば、これらの靈は場所によって分類され得

る。しかし表面的に言えば、神の刑罰によって直接扱われる霊もあれば、サタンの拘束にある霊もあり、それは神によって使われる。さらに具体的に言うと、人々の状況の重大さによって人々の刑罰は異なる。この点でもう少し説明する。神の手によって直接罰せられる者は地上に霊がなく、これはそのような人々は生まれ変わる機会がないことを意味する。サタンに支配されている霊は——神が「わたしに敵対する者になった」と言うときの敵であるが——地上の事柄に関連している。地のさまざまな悪霊はすべて神の敵であり、サタンのしもべであり、その存在理由は神の行いの引き立て役として奉仕することである。それゆえ、「そうした人々はサタンにとらわれているだけではなく、永遠の罪人になり、真っ向からわたしに敵対しているのだ」と神は言う。次に、神はこの種の霊の終わりを人々に伝える。「そうした人々は、わたしの怒りの最中にわたしの裁きを受けることになる。」神はまた人々の現状を明確にする。「今日、まだ目が見えず、今も暗い牢獄にいる」。

神の言葉の真実性を人々に示すために、証拠として神は実例を使い（神が話すパウロの場合）、それだから神の警告は人々にさらに深い印象を残す。パウロについて言われたことを物語として扱うのを人々にやめさせようとして、また人々が自らを傍観者と考えるのを妨げ、人々が神から知見を得た何千年も前に起こったことを自慢することをやめさせようとして、パウロの生涯の経験に神は専心しない。代わりに、神はパウロにとっての結果と最後、パウロが神に敵対した理由、そしてその結果パウロがどのように終わりを迎えたかに焦点を当てる。神が焦点を当てるのは最後にパウロの輝かしい希望を神が否定したことを強調することで、霊的世界におけるパウロの状況を直接明らかにすることである。「パウロは神によって直接罰せられる」。人々は無感覚で、神の言葉のいかなるものも理解できないため、神は説明（発言の次の部分）を加え、別の領域の問題を語り始める。「誰でもわたしに敵対する者は（敵対するとは、わたしの肉の体だけではなく、さらに重要なことに、わたしの言葉と霊、つまり、わたしの神性に逆らうことである）その肉の身にわたしの裁きを受けることになるのだ」。表面的に言えば、これらの言葉は上記のものとは無関係であるように見え、両者の間には何の相関関係もないように見えるが、うろたえてはいけない。神には神の目的がある。「上の例が証明する」といった簡単な言葉は一見無関係なふたつの問題を有機的に結合する——それは神の言葉の独創性である。それだから、人々はパウロの記述を通して啓かれ、そのため、上と下の文章のつながりのため、神を知ることへの人々の追求は、パウロの教訓によって増やされる。これは、まさにこうした言葉を語ることで達成しようと神が望んだ効果

である。次に、人々がいのちへ入るための援助と啓きを与えるいくつかの言葉を神は語る。わたしが語る必要はない。理解しやすいとあなたは感じるだろう。しかし、わたしが説明しなければならないのは、神がこのように言うときである。「過去にわたしが普通の人間性をもって働いたときには、たいていの人間は、すでにわたしの怒りと威厳とに比べて自分を測っていて、すでにわたしの知恵と性質とについて、少しは知っていた。今日、わたしは神性において、直接話し、行動する。そして、まだわたしの怒りと裁きとをその目で見える人々がいる。さらに、裁きの時代の第二段階の主なる働きは、わが民にわたしの肉における業を直接知らせ、わたしの性質を直接見るようにすることなのである」。こうしたわずかな言葉は、普通の人間性における神の働きを終了し、神性の中で行われる裁きの時代の神の第二段階の働きを正式に開始し、一部の人々の終わりを予告する。この時点で、人々が神の民になったときにこれが裁きの時代の第二段階であると神が人々に言わなかったことを説明する価値がある。代わりに、神の心とこの期間に神が達成しようと望む目的と、地上での神の働きの最後の段階について人々に話して初めて、これは裁きの時代の第二段階であると神は説明する。言うまでもなく、ここには神の知恵もある。人々が病床から立ち上がったばかりのとき、人々が気にする唯一のことは死ぬかどうか、病気を追いはらえるかどうかである。体重が増えるか、相応しい服を着ているかには注意を払わない。それゆえ、神が要求を段階的に話し、今日はいかなる時代であるかを人々に伝えるのは、神の民の一人であると人々が完全に信じるときだけである。それは、回復してから数日後には神の経営（救い）の段階に集中するだけの活力しか持っていないためであり、それだから、人々に語る最適の時である。人々が理解して初めて分析を始める。これは裁きの時代の第二段階であるため、神の要求はより厳しくなり、わたしは神の民の一人となった。このように分析するのは正しいことで、それは人によって達成可能で、それゆえ神はこの語る方法を使う。

人々が少し理解すると、神は語るためもう一度霊的世界に入り、人々は再び待ち伏せに陥いる。この一連の問いの中で神の心がどこにあるのか分からず、神の問いのどれを答えるか分からず、そしてさらに神の問いに答えるためにどの言葉を使うか分からず、混乱し、誰もが頭を掻きむしる。また。笑うべきか泣くべきか訝る。人々には、これらの言葉はあたかも非常に深遠な謎を含んでいるように見えるが、事実には正反対である。ここで少しあなたのために説明を加えたい。それであなたの頭を休ませることができるだろう。それはじっくり考える必要がない単純なものだと感じるだろう。実際、多くの言葉があるが、そこには神の唯一の目的しか含まれていない。これらの問いを通して人

々の忠誠を得ることである。しかし、これを直接言うのは得策ではないので、神はもう一度問いを用いる。しかし、口調は殊の外穏やかで、最初とは異なる。人々は神によって問われているが、この種の対照は人々にある程度の安心感をもたらす。それぞれの問いをひとつずつ読むのがよいだろう。過去にこれらのことはしばしば言及されていなかっただろうか。これらわずかの単純な問いには、豊かな内容がある。いくつかのものは人々の心理の記述である。「天に似た地上のいのちを楽しみたいか」。いくつかのものは神の前での人々の「戦士の誓い」である。「あなたがたは、羊のように、わたしに殺されたり、わたしに導かれたりすることを、ほんとうに受け入れられるのか」。そして、いくつかのものは人に関する神の要求である。「もしわたしが直接話さなければ、あなたは、周囲のすべてを捨て、わたしに用いられることを受け入れられるだろうか。これが、わたしが求める実際なのではないか……」。あるいは、人々への神の励ましの言葉と安心させる言葉である。「しかし、あなたがたは、もはや不安に悩むことをやめ、積極的にわたしの言葉の本質を把握しなさい。それが、わたしの言葉を誤解したり、わたしの意味するところを正確に理解できず、わたしの行政に触れたりすることを防ぐだろう」。最後に、神は人への希望を語る。「わたしの言葉の中から、わたしがあなたがたについて意図していることを理解してくれることを願っている。自分の前途については、もう考えず、わたしの前で、万事において神の指揮に服従すると決心したそのとおりに行動しなさい」。最後の質問には深遠な意味がある。思考を刺激し、人々の心に感銘を与え、耳のそばにかかる鈴のように絶え間なく鳴り響き、忘れるのは難しい……。

上記は、参考としてあなたが使うための説明のいくつかの言葉である。

第五章

神が人々にとって解釈するのが難しい要求を行い、神の言葉が人間の心に直接突き刺さり、神が喜ぶようにと人々が誠実な心を捧げるとき、神は人々に熟考し、決心し、実践の道を追求する機会を与える。このようにして神の民である人々はすべて、決意を固めて拳を握り、再び自らの全存在を神に捧げる。おそらく中には、自分たちを奮い立たせて働く準備をしながら、計画を立案し、日々の予定を立て、神の経営（救いの）計画に栄光をもたらし完結を早めるために、彼らのもつ活力をその計画に捧げる人々もいることであろう。そして、人々がこの心理状態にまさに入り込み、日々の雑用をこなしながらもこうした事柄を心に抱きながら、語り、働くにつれ、神はこれにすばやく答えて、再び語り始める。「わたしの霊が声を発するとき、それはわたしの性質すべてを表現

する。このことあなたがたは、わかっているだろうか。」決意が固いほど、人は神の心を理解しようとやっきになり、神に要求されることを真剣に願う。そして、神は人々が望むものを与え、この機会を利用して、長い間準備が整っていた神の言葉を人々の存在の奥深くにまで伝える。これらの言葉は少し厳しく荒々しく聞こえるが、人々にとっては比類なく甘美である。人々の心はただちに喜びで快活になり、まるで天国にいるか、他の世界に連れて行かれたかのようである。その世界は紛れもない想像の楽園で、外界の物事はもはや人々にかかわらない。人々が過去に常習的に行っていたように、外部から語ったり行動したりして適切な基礎を定めることができなくなることがないように、そんな事態を回避するために、人々が心で願うことが達成される。さらに、人々が情熱的な熱意をもって働く準備をすると、神はさらに語り方を人々の心理状態に適応させ、即座にためらうことなく、人々の心にあるあらゆる熱狂と宗教的儀式を論破する。神が「あなたがたは、ほんとうにこのことの重要性がわかっているだろうか」と言ったように。何か決心する前か後かに関わらず、人は神の行いや言葉において神を知ることに関心を置かず、代わりに「神のためにわたしは何ができるか。これは重要な問題である」と考え続ける。これは神が「そして、あなたがたは、大胆にもわたしの前で自分がわたしの民であると言う——あなたがたは恥知らずで、さらには理性に欠けている」という理由である。神がこの言葉を発するや否や、人々はすぐに認識し、電気ショックを受けたかのように、神の怒りを再び惹起することをひどく恐れ、胸の安全な場所に急いで手を引きこめる。さらに神は「遅かれ早かれ、そうした人々はわたしの家から追い出される。わたしを証しするために立ったからといって、ベテラン気取りではない」とも語った。このような言葉を聞くと、人々はライオンがいることに気付いたときのようになり、さらに恐れる。人々は心の中では十分に分かっている。ライオンに食べられないように心配している一方で、どこに逃げようかと困惑している。この瞬間、人の心の中の計画は跡形もなくすっかり完全に消え去る。神の言葉を通して、わたしは人の恥ずかしさのあらゆる面を見ることができるようを感じる。頭を下げ、打ちひしがれた振る舞いで、大学入試に失敗した受験生のように、崇高な理想、幸せな家族、明るい未来などすべてが、2000年までの四つの近代化と並んで空虚な話になり、SF映画の想像上のシナリオを作り出した。これは受動的な要素を能動的な要素と入れ替え、受動性のただ中にいる人々を神が人々に割り当てた場所で立ち上がらせるためである。特に重要なことは、人間がこの名称を失うことを深く恐れているということであり、そのために人は自らの役職の記章に必死にしがみつki、それらを誰かが奪おうとするのをひどく恐れている。人々がこのような気持ちのとき、人々が受動的になることを神は心配せず、神は

それに応じて裁きの言葉を問いの言葉に変える。神は人々が一息つく機会を与えるだけでなく、以前持っていた大志を今抱き、将来の参照のために整理する機会を与える。不適切なものは修正し得る。これは、神がまだその働きを始めていないからである——これは不幸中の幸いである——そしてさらに、神が人々を非難しないからである。だから神にわたしの献身のすべてを傾け続けさせていただきたい。

次に、恐怖のために神の言葉を捨てるべきではない。神が新しい要求をしているか確認しなさい。確かに、あなたは次のような要求を見いだすだろう。「たった今から、あなたは、あらゆることで実践を始めなければならない。これまでしていたように、しゃべっているだけでは、もう十分ではないのだ」。ここにも神の知恵が現れている。神は常に自らの証しを維持してきており、過去の言葉の現実が終焉に至ったときには、「実践」の知識を理解できる者は誰もいない。これは神が語った「わたしは自分で働きを行い始める」という真理を証明するのに十分である。これは神性の働きの真の意味に関係しており、新たな始点に達した後でも人々が依然として神の言葉の真の意味を理解できない理由に関係している。過去に大多数の人々が神の言葉の現実性に固執していたのに対し、今日では実践の現実性についての手掛かりがなく、神の言葉の本質を理解せずに表面的な側面しか理解していないからである。さらに重要なのは、今日、神の国の建設においては、誰も妨害することは許されず、ロボットのように神の命令に従うだけだからである。これをよく覚えておきなさい。神が過去を持ち出すたびに、神は今日の実際の状況について語り始める。これは、前に来るものと後に来るものとの間に際立った対照を作り出す語りの形式であり、このため、より良い成果を達成でき、人々に過去と現在を並べて比較させることができ、このようにして両者の違いをごちゃ混ぜにするのを避けることができる。これは神の知恵の一面であり、その目的は働きの成果を達成することである。その後、神は人々が毎日神の言葉を飲食することを決して忘れないように、さらに重要なことに、毎日自らを知り、毎日学ばなければならない教訓として理解するよう、人々の醜さをもう一度明らかにする。

これらの言葉を語り終えるとき、神は自らが元来意図した効果を達成したことになる。それゆえ、人々が神を理解したか否かにそれ以上注意を払わず、神はいくつかの宣告でこれを払いのける。サタンの働きは人間とは何の関係もないからである。これに関して人間は何も知らない。さて、霊的世界から離れ、神が人々への要求をどう行うかをさらに見ることにする。「わたしの家に憩い、わたしはくわしく見る——地上のすべての人が忙しく動き回り、『世界を経巡り』大急ぎで行き来する。すべて自身の運命、未来

のために。しかし、わたしの国を築くために力を、息を吸い込むだけの力さえも割ける者は、ただの一人もない」。これらの慣例を人々と交わした後も、神は依然として人々に注意を払わず、霊の観点から語り続け、これらの言葉を通して人類のいのちの全体の状況を明らかにする。「世界を経巡り」そして「大急ぎで行き来する」ことから、人のいのちには内容がないことが明らかに見て取れる。神の全能の救いがなければ、中国の皇帝の血統の落ちぶれ果てた拡大家族に生まれた者は全生涯をますます無為に過ごし、生まれるよりはハデスと地獄に落ちるほうがよい。赤い大きな竜に支配され、そのような人々は自ら知らないまま神に背き、自然に、そしてまた知らないうちに、神の刑罰を受けた。このような理由から、神はそのような「苦難から救われた」人々と「忘恩の徒」を取り上げ、対照的に並列した。人々が自らをさらに明確に知ることとなり、これから神の救いの恩寵への引き立て役を作るためである。これはさらに有効な結果にはならないであろうか。もちろん、わたしがそれほど明白に言う必要もなく、神の語りの内容から、人々は非難の要素、そしてまた救いと嘆願の要素と、そしてさらにまた悲しみのわずかな暗示を推察できる。これらの言葉を読んで、人々は無意識のうちに悲しみを感じ始め、涙を流さずにいられない……。しかし、神はいくばくかの悲しみの気持ちのために制約を受けることはなく、また、全人類の墮落のために、神の民を規律に従わせ、神の民に要求をする働きを放棄しない。このため、神の題目は今日のような状況に真っすぐに触れ、さらに、神の計画が今後も続くように、神は自らの行政令の威厳を人類に宣する。このために、神は適切な速さでこれに継続し鉄を熱いうちに打ちながら、この究極的に重要な時に、時代のために憲法を公布する。これは、人々が神の心を理解できる以前に十分注意してあらゆる条項を読まねばならない憲法である。今はこれ以上詳しく語る必要はない——人々はただ、もっと注意深く読まねばならない。

今日あなたがた、ここにいるこの集団は真に神の言葉を理解できる唯一の人々である。それでも、神を知ることにおいて今日の人々は過去の誰よりもはるかに劣っている。このことから、この数千年にわたってサタンが人々に注いだ努力の程度と、それにより人々が墮落した程度は十分に明らかである。それはあまりにも大きく、神がこれほどまで多くの言葉を語ったにもかかわらず、人々は依然神を理解することも知ることもなく、それでもなお立ち上がり、公然と神に敵対しようとする。そこで、神はしばしば過去の時代の人々を取り上げ、無感覚で鈍感な今日の人々と比較し、後者に現実的な参照点を与える。人間には神に関する認識がなく、神への真の信仰がないため、人々には資格と理知が欠けていると神は見なしており、それゆえ神は再三再四人々に寛容を示し、救

いを与えた。霊的世界ではこの線に沿って戦いが行われる。サタンの空しい望みは、人類をある程度墮落させ、世界を汚れて邪悪な場所にし、人を泥の中に引きずり落とし、神の計画を破壊することである。しかし、神の計画は全人類を神を知る人々にすることではなく、人類全体を代表する一部の人々を選択し、残り的人々は塵芥の山に捨てられる廃棄物として、不良品として放置することである。それゆえ、サタンの観点からは、少数の人を我が物とすることは神の計画を破壊する絶好の機会に見えるが、そのような愚か者が神の意図について何を知るといのか。これはずっと以前に神が「この世を見るのを避けるためにわたしは顔を覆った」と言った理由である。わたしたちはこれについて少しは知っており、人間が何かを行えることを神は願っておらず、むしろ神が行うことは奇跡的で理解し難いと人々が悟り、心の中で神を尊敬するよう願ってる。人間が想像するように、神が状況に関係なく人を罰するのならば、全世界ははるか以前に滅びていたであろう。これはサタンの罠にまっすぐに落ちることを意味したのではないであろうか。それゆえ、神は自らの心にある成果を得るためにのみ言葉を用いる。事実の到来はめったにない。これは「わたしがあなたがたの資格・理知・見識の不足を憐れまなければ、あなたがたはみな、わたしの刑罰を受けて死に、存在を抹消されるだろう。しかし、地上でのわたしの働きが終わるまでは、わたしは人間に寛容でいよう」と神が語ったことの実例ではないのか。

第六章

神が霊的領域で偉大な業を行なったことに気づき、人間は神の言葉に口がきけないほど驚いている。それは人には行なえず、神のみが達成できることである。この理由から、神はもう一度人類に寛容の言葉を唱えるが、それによって人々の心は矛盾で満たされ、「神は慈悲や愛のない神で、むしろ人類を打ち倒すことにひたむきな神である。それならば、なぜ神はわたしたちに寛容を示すのか。神は再び違う方法に転換したということなのか」と言って訝る。この観念、この思いが心の中で形作られるこの瞬間、人々は全力でそれと戦う。それにもかかわらず、神の働きがしばらくの間進展し、聖霊が教会内で偉大な働きを始め、ありとあらゆる人間がその機能を果たすべく働き始めると、その時、人類全体が神のこの方法に入った。神が語り行うことに誰も不完全さを見ることはなく、神が実際に次に行うことについては、誰もそれを知らず、推測すらできないからである。神が自ら、「天の下に住むすべての民のうち、わたしの手のひらの中にいない者はいるだろうか。わたしの指示に従って行動しない者はいるだろうか」と言ったように。しかし、わたしはあなたがたにちょっとした助言を与える。あなたがたの誰も、

自らが完全に理解していない事柄を語ったり行ったりしてはいけない。わたしが今言ったことはあなたの熱意を押しつぶすためではなく、あなたの行いにおいて神の指示に従うことを奨励するためである。わたしが「不完全さ」について語ったことにために決して落胆したり、疑ったりしてはいけない。わたしの目的はおもに神の言葉に注意を喚起することを思い出させることである。「霊の内のことについては、細心の注意を払わなければならない。わたしの言葉を注意深く、慎重に聞きなさい。わたしの霊と肉の体、わたしの言葉と肉の体とを切り離すことのできない単一のものと見ることができる状態に至るように努め、わたしの前で全人類がわたしを満足させることができるようにしなければならない」と神が言うとき、これらの言葉を読みながら、人類は再び衝撃を受ける。人々が昨日受けたのは警告の言葉で、神の寛容の一例だったが、今日、話は突然霊の内の問題に変わった。一体これは何を意味するのか。なぜ神は話し方を変え続けるのか。そして、なぜこのすべてが切り離すことのできない単一のものと見なされるのか。神の言葉には現実が欠けているということか。これらの言葉を反芻しながら、このようなことに気づく。神の霊と肉とが別々の時、その肉は身体の属性を持つ身体、つまり人々が歩く屍と呼ぶものである。受肉した肉体は霊に由来する。神は霊の受肉であり、つまり、言葉は肉になる。言い換えれば、神自身が肉の中に住む。このことから、人から霊を分けようとする試みの重大な間違いがそこにあることが分かる。このため、たとえ神が「人」と呼ばれていても、神は人類に属さず、人間の属性もない。これは神が自らを装う人であり、これは神が認める人である。言葉の中には神の霊が具現化され、神の言葉は直接肉において顕される。これにより神は肉に住み、実践的な神であることがより明白になり、そこから神が存在することが証明され、神に対する人々の反乱の時代を終わらせる。そして、神を知ることにつながる道を人々に教えた後、神は再び主題を変え、問題の別の側面を取り上げる。

「わたしは、この足で全宇宙を踏み、全宇宙の隅々にまで目をやり、すべての人間の間を歩き、人間であることの甘、酸、苦、辛を味わった」。その単純さにも関わらず、この発言は決して簡単には理解できない。主題は変わったが、本質的には同じである。それは依然として、神の受肉において人々が神を知ることを可能にする。なぜ神は「人間であることの甘、酸、苦、辛を味わった」と言うのか。なぜ神は「すべての人間の間を歩き」と言うのか。神は霊であるが、神はまた受肉した人である。人の限界に縛られない霊は宇宙全体を歩くことができ、宇宙全体をさっと見渡して包み込む。このことから、神の霊は宇宙の広がりを満たし、地球を極から極まで覆うことが分かる。神の手に

よって整えられなかった場所はなく、神の足跡がない場所はない。たとえ霊が肉となり、人として生まれても、霊としての神の存在のために、人間が必要とするすべてのものを必要とすることがなくなることはなく、普通の人のように食べ物を食べ、服を着て、眠り、住居に住み、普通の人が行うあらゆることを行う。同時に、内面の本質は異なるため、神は通常人として語られるものと同じではない。神は人類の苦しみのすべてを負うが、それだからといって霊を放棄しない。神は祝福を享受するが、それだからといって霊を忘れない。霊と人は静かな交感で結ばれる。両者は隔てられず、隔てられたこともない。人は霊の受肉であり、霊に由来し、形を持つ霊に由来するので、肉の中にある霊は超越的でなく、すなわち、神は特別なことをすることはできず、それはつまり、この霊は身体を離れられない。離れるのであれば、肉となる神の行いはそのすべての意味を失うからである。霊が身体に完全に発現されている場合に限り、人々は実践的な神自身を知ることができ、そうして初めて神の心が成就される。神が人の盲目と不服従を指摘するのは、神が霊と肉を別々に人々に示してからである。「しかし、人間はけっして真にわたしを認識することがなかった」。一方で神は世界に知られずに、自らを肉体に隠し、決して超自然的な事を行なって人々に見せたりしないと言う。他方で神は人々が神を知らないために、人々に対して不平を言う。しかし、ここに矛盾はない。実際、細部で見れば、神が目的を達成するための方法にはふたつの側面があることを理解することは困難ではない。今、神が超自然的なしるしや不思議を行えば、偉大な働きを始める必要なく、神の言葉で人が死ぬよう呪うだけで、その人はその場で死に、そうすれば全ての人間は納得するだろう。しかし、これは肉となる神の目的を達成しないだろう。もし神が本当にこれを行えば、人々はその意識的な心により、神の存在を信じ得ず、真に信じることができず、さらに悪魔を神と誤解するだろう。さらに重要なことに、人々は神の性質を決して知ることがないだろう。これが神が肉となることの意味の一つの側面ではないのか。人々が神を知ることができないなら、神は常に漠然とした神、超自然の神であり、人間領域に君臨する。これは人の観念が人間を占有してしまう一例ではないだろうか。あるいは、これをもっと明白に言い換えれば、サタン、つまり悪魔が君臨しているのではないか。「なぜわたしは力を取り戻すと言うのか。なぜ受肉にはあまりにも多くの意味があると言うのか」。神が受肉する瞬間、これは神が力を取り戻す時である。これはまた神の神性が直接神の働きを行うべく表れる時である。一歩ずつ、全ての者は実践的な神を知るようになり、このため、神の場所が拡大される間に、人の心の中でサタンに占められる場所は完全に抑圧される。以前は、人々の心の中に存在していた神は、悪魔的な姿、実体のない、見えない神として把握されていた。この神が存在する

だけでなく、あらゆる種類の超自然的なしるしや不思議を行うことができ、悪魔に取り付かれた者のおぞましさのような、あらゆる種類の奥義を明らかにすることができる信じられていた。これは、人々の心にある神は神の姿ではなく、むしろ神以外の実在の姿であることを証明するのに十分である。人の心の0.1パーセントを占める場所を取りたいと、これは神が人々に要求する最も高い基準であると神は言う。この発言には表面的側面だけでなく、現実的な側面もある。このように解釈されなければ、神が人々をほとんど理解していないかのように、神が人々に対して行う要求はあまりにも低いと人々は考えるだろう。これが人間心理ではないのか。

上記のことを理解し、以下のペテロの例と合わせれば、ペテロは神を最も理解していた人であったと人々は気づくだろう。漠然とした神に背を向けることができ、実践的な神の認識を追求することができたからである。なぜ神はペテロの両親が神に敵対する悪魔であることを特に主張したのか。このことから、ペテロは自分の心の神を追求しておらず、ペテロの両親は漠然とした神を象徴していることが証明される。これがペテロの両親の例を上げる神の意図である。大多数の人々はこの事実に関心を払わず、代わりにペテロの祈りに注意を向ける。そのため漠然とした神をペテロの認識と対比することを考えもせず、ペテロの祈りを口と心に絶えず留めている人々がいるほどである。なぜペテロは両親に背を向け、神を知ることを求めたのか。なぜペテロはより大きな努力へと自らを鼓舞しようと、これまでに失敗した人々から学んだ教訓を統合したのか。なぜペテロは時代を超えて神を愛したすべての人々の信仰と愛を同化したのか。肯定的なものはすべてが神に由来することをペテロは理解した。それはサタンによるいかなる加工も受けずに神から直接来る。このことから、ペテロが知っていた神は実践的な神であり、超自然的な神ではないと理解できる。なぜ神は、ペテロは時代を超えて神を愛したすべての人々の信仰と愛を同化することに特に注意を払ったと言うのか。このことから、時代を超えて人々が失敗したおもな理由は人々が信仰と愛を持っていただけで実践的な神を知らなかったということであり、だから人々の信念は漠然とし続けていたと理解できる。なぜ神は、ヨブが神を知っていたとは一度も言わず、ヨブをペテロより劣った者と呼びながら、何度もヨブの信仰についてだけ言及するのか。「わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなたを拝見いたします」というヨブの言葉から、ヨブは信仰だけを持っていたが認識はなかったことが分かる。「両親の悪い手本のおかげで、ペテロはかえって、わたしの愛と憐れみとをみてとることができ」という発言を読んで、ほとんどの人はたくさんの質問を出したくなるだろう。直接ではなく

、悪い手本に対して際立たせられてのみ、ペテロが神を知るのはなぜか。ペテロは慈悲と愛を知るのみで、他のことは言及されないのはなぜか。実践の神の認識を追求できるようになるのは、漠然とした神の非現実性が認識されるときだけである。この言葉の目的は人々を導き、心から漠然とした神を根絶することである。人々がいつも、創造の初めから今日に至るまで、神の真の顔を知っていたならば、「山を越えるまでは平地が分らない」という諺から知られているように、サタンの方法に熟知していなかっただろう。これは、これらの言葉を語ったときの神が意味したことを十分に明確にする。人々を導き、神が挙げた例の真実を人々がより深く理解することを神は望むため、神は慈悲と愛をわざと強調し、ペテロが生きた時代は恵みの時代だったと証明する。別の観点から見ると、これはただ人々を捕らえて墮落させる悪魔のおぞましい顔立ちをより鮮明に示し、それにより、鋭く対照的に神の愛と慈悲を際立たせる。

神はまたペテロの試練についての事実のあらましを述べ、さらに試練の実際の状況についても説明する。これは、神には慈悲と愛があるだけでなく、威厳と怒りもあり、平和に生きる者は必ずしも神の祝福の中で生きているわけではないことを人々がより良く理解できるようにである。さらに、試練の後のペテロの経験について人々に伝えることで、「われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」というヨブの言葉の信ぴょう性がより明確に示される。これはペテロが神について前例のない認識に至っていたことを示すには十分で、それはそれまでの時代の誰も達成しなかったことである。これはペテロが時代を超えて神を愛したすべての人々の信仰と愛を同化し、さらに自らを鼓舞するために、これまでの失敗から学んだ教訓を統合したときに得たものであった。このため、神についての真の認識を身につけた者は「果実」と呼ばれ、ペテロはその中のひとりである。神へのペテロの祈りにおいて、試練を経てペテロが得た神についての真の認識が理解できるが、小さな問題はペテロは神の心を完全には理解できなかったことである。そのため、ペテロによって得られた神の認識の基礎の上に築きながら、神は「人の心の0.1パーセントだけを占める」という要求を明らかにした。神を最もよく知っていた人であるペテロでさえ神の心を正確に把握できなかったという事実を考慮して、人々はただ神を知るための器官を備えていないと結論づけられる。サタンがすでに人間をかくまで墮落させたからであり、そしてこれは人間性の本質を知るように全ての人々を導く。このようなふたつの前提条件——人々には神を知るための器官が欠けており、さらにサタンにより徹底的に浸透されたということ——は、神の偉大な力を見せつける状況を提供する。というのは、ただ言葉を発することにより、どんな

種類の働きを始める必要もなく、神は人の心の中で一定の位置を占めたからである。0.1パーセントに到ることが神の心の実現を意味するのはなぜか。問題になっている器官を神が人に授けなかったという事実の観点からこれを説明すれば、この器官なしに人々が100パーセントの認識に到るならば、神のすべての動きと行動は人に明白なものとなり、人固有の本性を考えると、人はすぐに神に反抗し、公然と神に反対すべく立ち上がるであろう（サタンはこのように滅びた）。それゆえ、神は人を見くびらない。これは、神がすでに人を徹底的に解剖したためで、それゆえ、人の血の中にどれだけの水が混じっているのかに至るまで極めて明晰に神はすべてを知っている。人の明白な本性ならば、さらにどれほど明確に神は理解しているだろうか。神は決して間違いを犯さず、さらに、言葉を発する際に、神はかなり正確に言葉を選ぶ。この理由から、ペテロが神の心を理解するにおいて不正確であったという事実は、ペテロが同時に神を最もよく知っていた人であるという事実と矛盾するものではなく、その上、このふたつの事は完全に無関係である。神がペテロの例を挙げたことは、人々の注意をペテロに集中させるためではなかった。ヨブのような人でさえ神の認識を得られなかったなら、なぜペテロは神についての認識を得ることができたのか。人には神の認識を得る能力があると言いながら、しかしそれは神の偉大な力によるとなぜ神は言うのだろうか。それは本当に、人々の生得的な資質は善良という問題だろうか。人々がこの点を理解するのは容易ではない——わたしが説明しなければ、誰もその内的意味を知ることはないだろう。これらの言葉の目的は人々に何らかの形の知覚に到らせることで、そこから人々は神と協力する自信を得るだろう。このようにして、人の神と協力しようとする努力に支えられてのみ、神は行動を起すことができる。これは霊的領域における実際の状況であり、人類には完全には理解できないことである。人々の心にあるサタンの場所を除外し、その場所を神に与える。これはサタンの猛攻を撃退することを意味し、これによってのみ、キリストが地上に降りたと言うことができ、そして初めて、地上の国々はキリストの国になったと言うことができる。

ここにおいて、ペテロは何千年もの間人類の模範であり手本であったと述べられる。これはペテロが模範であり手本であるという事実を単に説明するためだけではない。これらの言葉は、霊的領域における戦いの実際の場面を反映したものである。昔からずっと、人類を飲み込んで、それにより神に世界を破壊させ証人を失わせるという空しい希望において、サタンは人に働きかけてきた。しかし神は、「人の心の中で最小の場所を取れるよう、わたしは最初に手本を作ろう。この段階で、人々はわたしを喜ばせず、わ

たしを完全には知らない。それにもかかわらず、わたしの大きな力に頼り、人はわたしに完全に服従できるようになり、わたしに反抗しなくなるだろう、そしてわたしはサタンを征服するべく、この例を使おう。つまり、0.1パーセントから成るわたしの場所を使い、サタンが人行使してきたあらゆる力を抑え込もう」と言った。それゆえ、今日神は、ペテロが人類全体が従う見本となるようにペテロの例を挙げた。これを冒頭の一節と合わせると、霊的領域における実際の状況について神が語ったことの信ぴょう性が理解できる。「物事は、かつてとは違っている。わたしは創造の初めから世界の誰も見なかったことをしよう。わたしは人間が、はるか昔からずっと、かつて聞いたことのないことを語ろう。なぜなら、すべての人間が肉におけるわたしを知るようになってほしいからだ」。これにより、神が語ったことを神は今日始めたことがわかる。人間は物事が外面に現れるにつれて理解できるのみで、霊の領域内の実際の状況は理解できない。この理由から、神は直接的かつ率直に、「それがわたしの経営（救い）の手順である。人間にはそれがどういうものか、まるで考えもつかないことなのだ。それらについて、わたしが公然と語っても、人々はまだ頭が混乱しているため、すべてを詳らかに言い表してやることができないのだ。ここに人間の絶望的な低劣さがあるのだ。そうではないか」と言った。これらの言葉の内部には暗黙の言葉があり、上記で暗に示されたように、霊的領域で起こった戦いを説明している。

ペテロの話を簡単に説明しても神の心は完全には達成されないので、ペテロの事柄に関して、神は次の要求を人間に行う。「宇宙と天空の至るところで、また天地のあらゆるもののあいだで、天地の万物がわたしの働きの最終段階に全力をささげている。まことに、あなたがたは傍観者でいて、サタンの勢力によってあちらこちらへ動かされていてたくはないだろう」。ペテロの認識を目の当たりにすることは、人類にとって深く啓示的なため、より良い結果を達成しようとして、神は放縦な無節制さと神についての無知がもたらす結果を人々に理解させ、さらに人々に、再度、より正確に、霊的領域での戦いの実際の状況について人々に告げる。このようにしてのみ、サタンによって捕らえられないよう、人々が自らを守る上でより慎重になることができる。さらに、次に人々が墮落すると、今回受けたようには神からの救いを受けないだろうということが明らかにされている。まとめると、神の言葉への人々の印象を深める上で、このようないくつかの警告は人々に神の慈悲をより大切にさせ、警告の言葉をより身近にとらえさせ、それゆえ人類を救う神の目的に真にかなっている。

ペテロの一生

ペテロは神が掲げた人類のための模範であり、あらゆる人に知られていた著名人である。なぜ彼のような平凡な人物が神に模範として揚げられ、後世に称えられているのだろうか。言うまでもなく、これはペテロによる神への愛の表現や彼の神を愛する決意と切り離せない。神を愛するペテロの心がどのように表現され、彼の生涯における経験が実際どのようなものであったかに関しては、恵みの時代に戻って当時の習慣を見直し、その時代のペテロを検討しなければならない。

ペテロは、普通のユダヤ人農家に生まれた。両親は農業で家族全員を養い、ペテロは長子で四人の弟妹がいた。もちろん、これは今から話すことの主題ではない。ペテロがわたしたちにとっての中心人物である。ペテロが五歳の時、両親は彼に読むことを教え始めた。当時、ユダヤ人の学識はかなり高く、特に農業、工業、商業などの分野において進んでいた。社会的環境の結果、ペテロの両親はどちらも高い教育を受けていた。地方出身だったが教養があり、今日の平均的な大学生に匹敵した。明らかに、そのような好ましい社会状況に生まれたことは、ペテロにとって幸運だった。彼は賢く、理解が早く、新しい考えを容易に習得した。学業を開始すると、授業で学ぶ物事をよく理解した。ペテロの両親はそのような賢い息子をもったことを誇りに思い、学校に行かせるためにあらゆる努力を払い、彼が頭角を現し、社会で何らかの公職に就けることを望んだ。一方、ペテロは知らないうちに、神に関心をもつようになっていた。そのため、高校時代に十四歳になると、学んでいた古代ギリシャ文化の履修課程、特に古代ギリシャ史に登場する架空の人物や事柄にうんざりするようになった。その時以来、ちょうど青春の入り口にいたペテロは、人生や広い世界についてさらに知ろうとするようになった。両親が払った労に報いようという良心の呵責は感じなかった。なぜなら、人はみな自分をごまかしながら生き、無意味な生き方をして、名誉と富を勝ち取るために人生を台無しにしていることをはっきり知っていたからである。彼の識見は、おもに彼が置かれた社会環境に関連していた。人が知識を持てば持つほど、人間関係や人の内面の世界は複雑になり、そのため、人はますます虚空に存在するようになる。このような状況下で、ペテロは時間のある時にあちこち訪ねるようになった。訪ねた先の大半が宗教者だった。人間世界の不可解なことすべてを宗教が明らかにできるのではないかと、心の中で漠然と感じていたようである。そのため、彼は近くの礼拝堂をしばしば訪れ、礼拝に出席した。両親はこのことに気づいていなかった。まもなく、常に性格がよく学業にも優れていたペテロが、学校へ行くことを嫌いだした。両親の監視のもと、彼は辛うじて高校を卒業すると、知識の海から岸へと泳ぎ着き、深呼吸した。それ以降は、もはや誰も彼を

教育したり制限したりしようとはしなかった。

学校を卒業後、彼はあらゆる種類の本を読み始めた。しかし、十七歳の彼にはまだ広い世界を経験したことがあまりなかった。卒業した後は農業で自活する一方、できるだけ多くの時間を見つけて本を読み、宗教の礼拝に参加した。彼に大きな期待を寄せていた両親は、この「親不孝な息子」についてしばしば天を呪った。しかし、それさえも、義に飢え、かわいていた彼を妨げることはできなかった。ペテロは経験のなかで数多くの挫折に苦しんだが、飽くことのない心を持っていたので、雨の後の雑草のように成長した。まもなく、彼は「幸運にも」宗教界の長老的人物に何人か出会った。彼の切望する気持ちが非常に強かったために、より頻繁に長老たちと関わるようになり、時間のほぼすべてを彼らと過ごすようになった。しかし幸福感に浸っていた彼は突然、長老たちの大半の信仰は口先だけで、彼らは信仰に心を捧げていないことに気がついた。正直で純粋な魂を持つペテロが、このような衝撃にどうして耐えられるだろうか。自分に関わりのあるほとんどすべての人は人間の衣装を身に付けた獣であることに、彼は気づいた。つまり、人間の顔つきをした動物だったのである。その頃のペテロは非常に世間知らずだったので、幾度か彼らに心から懇願した。しかし狡猾で悪賢い宗教者たちが、どうしてこの情熱的な若者の懇願に耳を傾けるだろうか。ペテロが人生の真の虚しさを感じたのはその頃だった。人生の舞台上の第一歩で、挫折した……。その一年後、彼は礼拝堂から距離を置き、独立した生活を始めた。

この挫折のおかげで、十八歳のペテロは以前に増して成長し、見識を深めていった。若さゆえの世間知らずな部分はもはやなく、若者らしい無邪気さと飾り気のなさは、経験した挫折によって無情にもみ消された。彼は漁師として生活するようになった。それ以来、釣舟の上で彼の説教に耳を傾ける人々の姿が見られるようになった。漁師として生計を立てながら、行く先々で説教をしたのである。彼の説教を聞いた人はすべてその説教に魅了された。彼の話すことは庶民の心に響き、人々はみな彼の正直さに深く感動したからだ。彼が人々に頻繁に教えたのは、心から相手に対応し、あらゆることにおいて天地万物の主を頼りにし、自分の良心を無視したり、恥ずかしいことをしたりせず、あらゆる事柄において心の中で愛する神を満足させよということだった……。人々は彼の説教を聞いた後、しばしば深く感動した。人々はみなペテロに鼓舞され、よく涙を流した。当時、ペテロは彼に従っていた人たちみなから大いに称えられていた。彼らはみな極貧で、当時の社会状況のせいで当然ながら数は少なかった。ペテロはまた当時の社会における宗教界から迫害も受けた。このようなわけで、二年間にわたり絶えず住処を

変え、ひとりで生活した。特異な経験をしたこの二年間にかなりの識見を養い、以前は知らなかった多くの物事を学んだ。その結果、ペテロは十四歳の頃とはまったくの別人になり、以前の彼と現在の彼との間に共通点は何もないようだった。この二年間、彼はあらゆる種類の人に出会い、社会についてのあらゆる類の真実を見た。その結果、彼は次第に宗教界の一切の儀式から抜け出していった。彼はまた、当時の聖霊の働きの展開にも深く影響を受けていた。その頃には、イエスもすでに長年にわたって活動していたので、ペテロはまだイエスに出会っていなかったものの、ペテロの働きもまた当時の聖霊の働きの影響を受けていた。そのためペテロは、説教している時に、過去の何世代にもわたる聖徒たちにはなかったものを多く獲得した。もちろん、当時、彼はイエスについて少しは知っていたが、直接会う機会はまだなかった。ペテロは聖霊から生まれた天の人に会うことをただ望み焦がれるだけだった。

ある日の夕暮れ時、ペテロは舟で漁をしていた（当時ガリラヤ湖として知られていた岸辺近くで）。彼は釣り竿を手にしてはいたが、心には他の事があった。沈む太陽が水面を照らして、広い血の海のように見えた。若いのに落ち着いた冷静なペテロの顔に光が反射した。深く考え込んでいるように見えた。その時、そよ風が吹いてきた。彼は突然、自分の人生の孤独さを感じ、たちまち侘しい気持ちになった。湖岸に押し寄せる波が光に輝くにつれて、漁をする気分でないのは明らかだった。考えに耽っていると、突然背後で誰かが、「ユダヤ人シモン・バルヨナ、あなたの暮らす日々は孤独だ。わたしについてくるか」と言うのを聞いた。驚いたペテロは持っていた釣り竿を落とした。釣り竿はたちまち湖底に沈んだ。ペテロが急いで振り返ると、舟の中に男がひとり立っていた。ペテロはその男をしげしげとながめた。男の髪は肩までかかっていて、太陽の光で少し明るい黄色に見えた。着衣は灰色、中背で、頭の天辺からつま先までユダヤ人の身なりをしていた。黄昏の光の中で、男の灰色の着衣はやや黒っぽく見え、顔は少し輝いて見えた。ペテロはこれまで何度もイエスに会おうとしてきたが、一度も実現しなかった。この時、ペテロは魂の奥深くで、この人は確かに自分の心にある聖なる方だと信じた。そこで彼は舟の中で平伏して言った。「天国の福音を伝えるために来られた主はあなたでしょうか。わたしはあなたの経験について聞いていますが、今までお目にかかることはありませんでした。あなたに従いたいと思っていましたが、あなたを見つけられませんでした」。その時にはイエスはすでにペテロの舟の船倉まで来て、静かに座っていた。イエスは言った。「起き上がって、わたしの横に座りなさい。わたしがここにいるのは、わたしを本当に愛する人を見つけるためである。わたしは特に天国の福音を広め

るために来た。わたしと心をつにする人を探し求めて各地を巡る。あなたはわたしに従うか」。ペテロは答えた。「わたしは、天の父に送られた人に従わなければなりません。聖霊に選ばれた人を認めなければなりません。天の父を愛するわたしが、どうして進んであなたに従わずにいられるでしょうか」。ペテロの言葉には宗教的観念があふれていたが、イエスは微笑み満足げに頷いた。その瞬間、ペテロへの父親の愛のような感情がイエスの心の中で育った。

ペテロは何年にもわたりイエスに従い、他の人にはない多くのことをイエスに見た。一年間イエスに従った後、ペテロはイエスに十二使徒の中から選ばれた（もちろん、これをイエスは声高に言ったのではなく、他の人はこのことにまったく気づいていなかった）。生活において、ペテロはイエスのすることすべてを基準にして自己を評価した。イエスの説教は特にペテロの心に刻まれた。ペテロはイエスに徹底的に献身して忠実であり、決してイエスに対する不平不満を口にしなかった。そのため、彼はイエスが行く先々で忠実な同伴者になった。ペテロはイエスの教え、イエスの穏やかな言葉、食べ物、着る物、宿、旅の仕方を観察した。ペテロはあらゆる点でイエスを見習った。ペテロは決して独善的になることなく、時代遅れのことをすべて投げ捨てて、言動においてイエスの例に従った。天地万物は全能者の手の中にあるとペテロが感じたのはその頃で、そのため、彼は個人的な選択をしなかった。ペテロはまた、イエスという存在のすべてを吸収し、それを見本とした。生活を通して、イエスが行動において独善的ではなく、自慢するどころか、人を愛によって動かすことが見て取れた。さまざまなことがイエスという存在を示し、そのためペテロはあらゆることにおいてイエスを見習ったのである。この経験により、ペテロはますますイエスの素晴らしさを感じ、次のように言った。

「わたしは全宇宙で全能者を探し求め、天地万物のふしぎを見た。それゆえわたしは全能者の素晴らしさを深く実感した。しかし、これまでわたしは心に純粋な愛を抱いたことはなかったし、全能者の素晴らしさをこの目で見たこともなかった。今日、わたしは全能者から好意的に見られ、ついに神の素晴らしさを感じた。人類が神を愛するようになるのは、神が万物を創造したからだけではないことが、ようやくわかった。日常生活の中で、わたしは神の無限の素晴らしさを見つけた。それがどうして現在見えることだけに限られるだろうか」。時が経つにつれて、その素晴らしさの多くがペテロからも表出した。彼はイエスにとっても従順になり、もちろん、かなりの挫折にも苦しんだ。イエスが説教のためにペテロをさまざまな場所に連れて行くと、ペテロはいつも謙虚にイエスの説教に耳を傾けた。長年イエスに従っているからといって、決して高慢にならな

った。イエスがペテロに、自分がこの世に来た理由は十字架につけられてその働きを終えることだと語った後、ペテロはしばしば心に苦悩を感じ、一人でそっと泣いた。しかし、あの「不運な」日がやって来た。イエスが捕えられた後、ペテロは自分の釣舟に乗って一人で泣き、このために多くの祈りを唱えた。だが心の中では、これは父なる神の旨であり、誰にも変えられないとわかっていた。彼はその愛ゆえに、苦悩したまま目に涙をたたえていた。もちろん、これは人間の弱点だった。そのため、イエスが十字架に釘で打ち付けられると知った時、ペテロはイエスに尋ねたのである。「あなたが去られた後、わたしたちのもとに戻ってきて、わたしたちを見守ってくださいますか。わたしたちは、またあなたにお会いできるでしょうか」。この言葉は非常に未熟で、人間的観念に満ちていたが、イエスはペテロの苦しみの辛さがわかっていたので、愛ゆえにペテロの弱さを思いやった。「ペテロ、わたしはあなたを愛してきた。それがわかっているか。あなたの言うことには何の道理もないが、わたしが復活した後に四十日間人々の前に現れることを、父は約束した。わたしの霊が何度もあなたがた全員に恵みを与えることを信じないのか」。これにペテロは少し安心したが、まだ何かがひとつ欠けていると感じた。そこで、復活後、イエスは初めにペテロの前に公然と現れた。しかし、ペテロが自分の観念に固執し続けないように、ペテロがイエスのために用意した豪華な食事を拒絶し、あっという間に姿を消した。その瞬間から、ペテロはついに主イエスをより深く理解し、さらに愛するようになった。復活後、イエスはしばしばペテロの前に現れた。四十日経って昇天した後も、イエスはペテロの前にさらに三度現れた。イエスの出現は毎回必ず聖霊の働きがまもなく完了し、新しい働きが開始される時だった。

ペテロは全生涯を通して漁師として生計を立てたが、それ以上に説教するために生きた。晩年には、ペテロの第一と第二の手紙を書き、当時のフィラデルフィア教会に数通の手紙を書いた。当時の人々は彼に深く感動した。自分の資格を利用して人々に説教するのではなく、ペテロは人々に相応しいのちを施した。一生を通じて彼はイエスが去る前に与えた教えを決して忘れず、その教えに鼓舞され続けた。イエスに従っている間、ペテロは主の愛に死をもって報い、あらゆることにおいてイエスの手本に見習うことを決意した。イエスもこれに同意し、そのためペテロが五十三歳になった時に（イエスが去った後、二十年以上経ってから）、ペテロの望みをかなえるためにイエスは彼の前に現れた。それから七年間、ペテロは自己を知ることに日々を費やした。その七年間が終わろうとしていたある日、彼は逆さ十字の刑を受け、その数奇な生涯は幕を閉じた。

第八章

神が霊の立場からその言葉を語る時、その語調は全人類に向けられる。神が人間の立場からその言葉を語る時、その語調は神の霊の導きに従う者すべてに向けられる。神が（人々が傍観者と呼ぶ）第三者の立場からその言葉を語る時、人々が神を評者として見られるよう、神はその言葉を直接人々に表している。そして、神の口からは人間が知るところのない無限の物事、人間が理解するところのない物事が発せられるように見えるが、それは全く正しい。神が霊の立場からその言葉を語る時、全人類は驚く。「人間のわたしへの愛はあまりにささやかで、わたしへの信仰はあわれなほどに小さい。わたしの言葉が人間の弱さを直接打たなければ、人間はまるで地上のことに関して全知全能であるかのように、自慢し、誇張し、尊大に、高尚な理論を唱えるだろう。」こうした言葉は人間の本性と人間の心の内における神の位置を明らかにするのみならず、人類全体の生き方を露わにするのである。各人は自分が特別であると信じており、実際、「神」という言葉があることすら知らないため、高尚な理論をでっち上げるのである。しかし、この「高尚な理論をでっち上げる」という行為は、人々が理解しているような「話す」という行為ではない。それどころか、人類はサタンにより墮落させられており、人類の為す事はすべて神に背き、神に直接反するものであり、人間の行いの本質はサタンに由来し、それは神に反する独立した行為であり、神の心に逆らうものである。それゆえ神は、全ての人間は高尚な理論をでっち上げるというのである。神はなぜ、自らの言葉の矛先が人間の弱さに向けられていると言うのであろうか。それは、神の意図によれば、もし神が人間の心の内界に隠されたものを明らかにしないならば、人間は誰も服従せず、従って自分を理解せず、神に対し畏敬の念を持つこともないからである。つまり、人間の意図が露わにされないならば、人間は敢えてどんな行いも為し、天国や神を呪うことすらするであろう。それが人間の弱さなのであり、それ故に神は「わたしの歩みは宇宙世界の隅々に及ぶ。わたしの心にかない、わたしが用いるにふさわしい者たちを、いつでも探しているからだ」と言うのである。この言葉は、神の国の礼砲が正式に鳴り響くという後の言葉とともに、神の霊が地上で新しい仕事に携わっていることを示すものであり、ただ人類の肉の目ではそれを見ることができないだけである。霊が地上にあって新しい働きを行っているということは、宇宙世界全体も重大な変化を遂げる。神の子らと神の人々が神の受肉の証を受け入れ始めるだけでなく、さらに、あらゆる宗教、あらゆる教派、あらゆる職業および地位、あらゆる場所の人々も、程度は異なるものの、それを受け入れる。それは、霊的領域での宇宙世界の大きな動きである。それは宗教世界をその核心まで揺るがす。それは、過去に言及された「地震」を一部意味する。次に、天使がその正式な働きを始め、イスラエルの民はその故国に帰って二度とさまよ

うことなく、そこに含まれるすべての人々が神の牧養を受け入れるようになる。その一方で、エジプト人はわたしの救いの範囲から外れ、つまり、わたしの刑罰を受けるようになる（が、それはまだ正式には始まらない）。そして、世界においてこうした重要な変化が同時に起こるこの時に、神の国の礼砲は正式に鳴り響くのである。この時こそが、人々の言う「七倍に強められた霊が働きをはじめるとき」である。こうした局面（またはこれらの移行期）にあって神が回復の働きを何度行なっても、すべての人々は聖霊の働きを感じることができる者はいない。それ故に、「人間が希望を失う」という神の言葉は正しく思えるのである。さらに、人類が希望を失ったり、この潮流は間違っていると感じたりするこうした変化の局面の度に、神は新たに仕事を始め、その働きの次の段階に進むのである。創造の時から今に至るまで、神が行う回復の働きと、その働きの方法の変化は、このように似通っている。大抵の人々は、程度は異なるものの、その一部の側面を把握できるとはいえ、最終的には、その霊的背丈が余りに小さいため、潮流に押し流されてしまう。神の働きの段階を把握できずに排除されてしまうのである。しかし、これはまた、神が人々を清める手段でもあり、人類の古い観念に対する神の裁きである。人々の礎が築き上げられるのに伴い、神に関する宗教的観念も大きくなり、捨ておけないものとなる。人々は古いものに執着し、新しい光を受け入れるのは難しい。その一方で、人が立っているには何らかの礎が必要であるが、大抵の人々は自らの観念を捨てられずにいる。これは特に、明確で理解しやすい今日の神の受肉に対する観念について当てはまる。

今日の言葉において、神はビジョンについて多くを語るが、詳しく述べる必要はない。神は、いかに教会の建設において神の国の礎を築くかということを主に語る。具体的に言うと、教会の建設時における中心的な目的は、自分の目で見て神の受肉を知っていなかったにもかかわらず、人々にそれを心の内と言葉から、確信させることであった。人々は心の内で信仰を持っていたとしても、その段階では神と人とは区別できなかったため、神の受肉を知らなかったのである。神の国の時代においては、すべての人が心の内で、言葉で、そして目で、確信を示さなければならない。このことから、すべての人が心の内で、言葉で、そして目で、確信を示すためには、神が肉に生きていることを肉の目をもって知ることが許されなければならないが、それは、人々が他に選択肢を持たないために何かをせざるを得ない状況であったり、軽々しい信条を持っていたりする状況では実現不可能である。そうではなく、人々が理解することで心の内で、そして言葉で確信するのである。従って、この建設の段階では、鞭打つことも殺すこともない。代わりに

、人々は神の言葉を通じて啓示を受けるのを許され、それを通じて求め探り、無意識に神の受肉を知るようになる。そこで神にとってはこの働きの段階はずっと容易なものとなり、自然の成り行きのままに進み、人類に反することもないのである。最終的には人間が自然に神を知るようになるのを許すのであるから、悩んだり、不安になったりしてはならない。神が「わが民すべての間に霊的領域における闘いが明瞭になり、」と言った時、それは、「人々が正しい軌道に乗って神を知るようになる時、各人は心の内でサタンに誘惑されるばかりでなく、教会内にあってもサタンに誘惑されるかもしれない」ということを意味している。しかし、それが誰もが歩まなければならない道であるので、誰も恐れることはない。サタンの誘惑は何通りかの形を取る。ある者は神の言う事を無視したり、打ち捨てたりし、否定的な事を言って他者の前向きな気持ちを損なうかもしれない。だが、普通はそれによって他者をそそのかしているわけではない。こうした事は人間には見分けが付き難い。そういう人がそうした事をする主な理由は、例え集会に積極的に参加していても、ビジョンに対しては不明瞭だからである。もし教会がそういう人に対して警戒しなければ、教会全体がその否定的な態度に誘われて、神に対し生半可な態度で反応するようになり、その結果神の言葉に注意を向けなくなってサタンの誘惑に見事に負けてしまうかもしれない。こういう人は神に直接反抗しないかもしれないが、神の言葉が理解できず、神を知らないために、心の内に不満や反感を持つかもしれない。神に見捨てられ、そのために啓示や光を受けられない、と言うかもしれない。教会を去りたいかもしれないが、心の内に密やかな恐怖を感じるがために、神の働きを、神から来ていない、悪霊の働きだと言うかもしれない。

神がペテロについて頻繁に述べるのは何故であろうか。また、ヨブでさえペテロに及ばないと言うのは何故であろうか。そう言うことで、人々がペテロの行いに注意を向けられるようになるだけでなく、心の内にあるあらゆる例を、最大の信仰を持っていたヨブの例もそうであるように、捨てるようになるからである。それによってのみ、あらゆるものを捨ててペテロを模範とし、それにより神を知るのに一歩近づき、より良い結果が得られるのである。神は、神を知るためにペテロが取った実践方法を人々に教えたが、その目的は基準とする点を人々に与えることだったのである。次に神は、サタンが人間を誘惑する方法の一つを予想し、「しかし、わたしの言葉に冷淡で無関心であるなら、その人は必ず、わたしに敵対している。これは事実である」と言う。神はこの言葉の内にサタンが用いようとする巧みな策略を予言し、それを警告と見なすよう人々の注意を喚起している。誰もが神の言葉に冷淡ではないものの、一部の人々はこの誘惑に捉え

られるであろう。そこで、神は最後に「わたしの言葉を知らず、受け入れず、実践しないのなら、必ずわたしから刑罰を受けることになる。そのような人は、必ずサタンの餌食になる」と、再び強調して言うのである。これが神の人類に対する忠告であるが、結局は神が予言したように、一部の人々はサタンの餌食になってしまうのである。

第九章

人々の想像では、神は神であり人は人である。神は人の言葉を話さず、人は神の言葉を話せず、神にとっては人の神への要求はとてもたやすいことであるが、人への神の要求は人にとっては達成できず、想像もできない。しかし、事実は正反対である。神は人に「0.1パーセント」のみを要求する。これは誰にとっても驚きであるばかりではなく、人々を途方に暮れたかのように非常に困惑させる。ただ神の啓きと神の恩寵のおかげで、人々は神の心を少し知るだけである。しかし3月1日、人々はみな再度困惑し頭を掻きむしった。神の民は漂う雲ではなく輝く雪であるよう神は求めた。それならば、この「雪」は何を指しているのか。そして「漂う雲」は何を示しているのか。この時点において、神は故意にこれらの言葉の内的意味を何も述べていない。これは人々を混乱させ、よって追求するにつれて人々の信仰は高まる—それは、神の民に具体的な要求であり何か他のものではないので、気が付くと誰もが自発的にこのような理解し難い言葉について考えを巡らす時間を増やしていた。その結果、さまざまな考えが頭に生じ、人々の目の前で漂う雪片はひらめき、空を漂う雲がたちどころに人々の頭脳に現れる。神の民が漂う雲ではなく雪であるようになぜ神は求めるのか。この真の意味は何か。これらの言葉は具体的に何を指しているのか。「雪」は自然をきれいに見せるだけでなく、農地にもよい。細菌を殺すのによいのだ。大雪の後、すべての細菌は輝く雪で覆われ、全空間はすぐにいのちで溢れる。同様に、神の民は受肉した神を知るだけでなく、神の受肉の事実に従服し、そうして正常な人間性を生きなければならない。このように雪は景観を美しく見せる。最終的に、神の民の成熟は赤い大きな竜に終止符を打ち、地上に神の国を確立し、神の聖なる名を広め、讃美し、地上の国全体が神の義に満ち、神の輝きを放ち、そして神の栄光に輝き、平和と満足、幸福と成就、そして常に新たにされる美がいたるところにある。現存する様々な疫病—不義、不正、欺瞞、邪悪な欲望などの墮落したサタンの性質—はすべて根絶され、それゆえ天と地は共に新しくなる。これが「大雪の後」の真の意味である。漂う雲である人々は神によって語られた群れに従う人々のようなものである。サタンの誘惑、または神の試練があると、そのような人々はすぐに漂流し、もはや存在しなくなる。その本質さえも、ずっと前に消散しているので、生

き残らないだろう。人々が漂う雲であるなら、神の姿を生きることができないばかりでなく神の名に恥をもたらし。そのような人々はいつでもどこでもさらわれる危険性があり、サタンが消費する食物であり、サタンの囚われとなると神を裏切り、サタンに仕えるからである。これは明らかに神の名に恥をもたらし、神が最も憤るものであり、神の敵である。したがって、彼らには普通の人々の本質がなく、実際の価値がない。神がその民にそのような要求するのはこのためである。しかし、これらの言葉の何かを理解した後、人々は次に何をすべきか途方に暮れる。神の言葉の題目は神自身に変わったからで、それは人々を難しい立場に置く。「わたしは聖い地から来るのだから、名前だけで実質を伴わない蓮とは違う。蓮は聖い地ではなく、沼地から来るからである」。神の民への要求を語った後、神はなぜ神自身の誕生を説明するのか。それらの間につながりがあるのだろうか。確かに、それらには固有のつながりがある—そうでなければ、神はどのように人々に語らないだろう。緑の葉の中で、穏やかな風に蓮は揺れ動く。それは目を喜ばせ、とても美しく思われる。人々は際限なく手に入れたくなり、水中を泳いで茎を摘み取り、もっと近くで見たくて仕方がない。しかし、蓮は泥沼に育ち、名前だけを持ち、実体がないと神は言う。神は蓮を全く重要視していないようで、神が蓮に強い嫌悪を抱いていることが神の言葉からはっきりと見て取れる。時代を通じて、蓮は泥沼から汚れに染まらないまま姿を見せるため、蓮は比類なく、言葉では言い表せないほどすばらしいとまで、多くの人々が蓮に賞讃を注いできた。しかし、神の目から見て、蓮は価値がない—それがまさに神と人の違いである。したがって、神の人との違いは、天の頂と地の底との距離ほど大きいことがわかる。蓮は泥沼に育つので、必要な栄養はすべて泥沼からくる。それはまさに蓮が変装でき、それゆえ目の保養になり得るということである。多くの人々は蓮の美しい外観だけを見ており、蓮の中のいのちは汚く、不純であることは誰も見ない。それゆえ、蓮には名前があるのみで実体がないと神は言う—それはまったく正しく真である。これは正しく神の民の現在の状態ではないのか。神の民は外面的に神に従い、信じるのみである。神の前で神の民は神の顔色をうかがい、これ見よがしに歩き回り、神を満足させようとする。しかし内では、神の民は墮落したサタンの性質で一杯であり、その腹は不純物で満たされている。それゆえ神は人に問いを投げかけ、神への忠誠が不純物で汚染されているのか、純粹で心のこもったものであるのかを問うのである。効力者であったとき、神の民の多くが口々に神を賞讃したが、心の中では神を呪った。口では神に従順だったが、心の中では神に背いた。口からは否定的な言葉が発せられ、心の中で神への敵対を隠した。行動を調整していた人々すらいた。口から猥雑な言葉を放ち、手ぶりで表現し、完全に自墮落で、赤い大きな竜の真の顔

の鮮やかで生き写しの表現を見せていた。そのような人々は本当に赤い大きな竜の子孫と呼ばれるに相応しい。しかし今日、彼らは忠実な効力者の立場にあり、神の忠実な民のように行動する一何と恥知らずなことか。当然である。そのような人々は泥沼に育ったため、自らの本当の姿を見せずにはいられない。神は聖で純粋で、実在的で実際的であるため、神の肉は霊に由来する。これは明確で疑いの余地はない。神自らに証を立て得るのみならず、神の心を完全に行うこともできる。これは神の本質の一面である。姿のある霊に肉が由来することは、霊が身にまとう肉は人の肉と本質的に異なることを意味し、この違いは主に霊にある。姿のある霊が示すのは、正常な人間性により覆われた結果として、神性が内面的にどのように正常に働けるのかということであり、これは少しも超自然的なものではなく、また人間性により制限されることもない。「霊の姿」は完全な神性を指し、人間性により制限されない。そのようなものとして神固有の性質と真の姿は受肉した肉において完全に生きることができ、それは正常で安定しているだけでなく、威厳と怒りを備えている。最初の受肉は人々の観念としての神のみを表すことができた。すなわち、神はしるしと不思議を行い、預言を述べることはできなかった。それゆえ神の現実を神は十分に生きることができず、姿のある霊の体現ではなかった。神はただ神性の直接の現れであった。そして、神は正常な人間性を超越したため、完全な実践の神自身と呼ばれず、神には天にいるあいまいな神の部分が少しあった。神は人々の観念の神であった。これが受肉した肉体二体の本質的な違いである。

宇宙の最も高い点から神は人の一挙手一投足、人々が言うことを行うことをすべて観察する。人々の心の奥のひとつひとつの考えすら、絶対的な明確さで神は観察し、見逃すことはない—それだから、神の言葉は真っ向から人々の心を切りつけ、あらゆる考えを突き、神の言葉は鋭く、誤りがない。「人間はわたしの霊を『知って』いるが、それでもわたしの霊に背いている。わたしの言葉はすべての人の醜い顔、そして彼らの内奥の考えをさらけ出し、地上のすべてがわたしの吟味を受けて倒れるようにする」。このことから、人に対する神の要求が高くはないとはいえ、人々はやはり神の霊の凝視に耐えられないということが分かる。「しかし、たとえ倒れても、彼らの心はわたしから遠く離れようとしな。わたしの業の結果として、わたしを愛するようにならない者が被造物の中にいるだろうか」。これは神の完全な知恵と全能性をさらによく示しており、それゆえ神の民が効力者の立場にあるときに考えたことすべてを明らかにする。失敗に終わった「取り引き」に続き、人々が思い浮かべる「数十万」や「数百万」が無になったものの、神の行政命令ゆえに、そして神の威厳と怒りゆえに、たとえ人々が悲しみに首

を垂れたとしても、人々はやはり消極性の中で神に奉仕し、人々の過去の実践はすべて空談になり、完全に忘れ去られた。その代わりに、暇をつぶし、時間を無駄に過ごそうとして、自分たちと他の全ての人々を楽しませて幸せにする事柄を気の向くままに行った…。これは人の間で実際に起こっていたことだった。それゆえ神は人に心を開き、「わたしの言葉の結果として、わたしを切望しない者がいるだろうか。わたしの愛の結果として、自分の中で愛着が生じない者はいるだろうか」と言う。実を言うと、人々はみな神の言葉を受け入れる用意があり、神の言葉を読みたくない人はいない—ただ、本性により妨げられているため、人々は神の言葉を実践することができないということである。神の言葉を読んだ後、多くの人々は神の言葉から離れていることに耐えられず、神への愛は人々の中で湧き上がる。こうして神は再びサタンを呪い、そして再びその醜い顔を晒す。「サタンが暴れ回り、狂ったように横暴であるこの時代」は、神がその本格的な偉大な働きを地上で始める時代である。次に、神は世界を滅ぼす働きを始める。つまり、サタンが猛威をふるえばふるうほど、神の日が近づくのであり、そして神が悪魔の残酷さを語れば語るほど、神が世界を滅ぼす日が近づいていることが示される。これはサタンへの神の宣言である。

なぜ神は「……そのうえ、わたしの背後で『賞賛に値する』汚い取り引きをする。わたしが身にまとう肉は、あなたの行ない、振る舞い、そして言葉を何一つ知らないとも思っているのか」と繰り返し言ったのか。神はそのような言葉を一度や二度言ったのではない—それはなぜか。ひとたび人々が神によって慰められ、神の人への悲しみに気づくと、人々が努力しながら前に進みつつ過去を忘れるのは容易である。しかし、神は人に全く寛容ではない。神は人々の考えを追い続ける。それゆえ神は人々に何度も自らを知り、放蕩をやめ、それらの「賞賛に値する」汚い取り引きにもはや関わらないよう、肉にある神をもう二度と欺かないよう求める。人々の本性は変わらないものの、人々を数回気づかせることには恩恵がある。この後、人の内で奥義を明らかにするべく、神は人の視点から語る。「わたしは長年にわたり雨風に耐えてきた。また、人間世界の辛さも経験した。しかし、よく考えてみると、どれほどの苦しみも、肉の体を持つ人間にわたしへの希望を失わせることはできない。ましてやどんな甘さも、肉の体を持つ人間が、わたしに対して冷淡になったり、落胆したり、わたしを捨て去ったりするようにさせることはできない。わたしに対する人間の愛は、苦痛や甘さのない間だけに限られているというのか」、「この世のすべては空である」、これらの言葉には確かに内的な意味がある。それゆえ、人に神への希望を失わせるものや、神に対して冷淡にさせるもの

は何もないと神は語っている。神を愛さないなら、その人は死ぬほうがよい。神を愛さないなら、その人の苦しみは無駄であり、その人が享受する祝福は空しく、罪をさらに増す。一人として真に神を愛していないため、「わたしに対する人間の愛は、苦痛や甘さのない間だけに限られているというのか」と神は言う。人の世界で、苦痛や甘さなしにどのように人は存在できるのか。繰り返し神は「人間はわたしの顔を本当に見たことがないし、わたしの声を本当に聞いたこともない。人間はわたしを本当に知ってはいないからである」と言う。神は人は真に神を知らないと言いつつ、なぜ神を知るよう求めるのか。これは矛盾ではないか。すべての神の言葉にはある目的がある。人がますます麻痺したため、神は100%人を通じて自身の働きを行い、最終的に各人の心の0.1パーセントを自分のものにするという原則を採用する。これは神が働く方法であり、神は自らの目的を達成するためにこのように行動しなければならない。これもまさに神の言葉の知恵である。あなたがたはこれを理解したか。

「わたしが肉において自身の奥義を直接明かし、わたしの旨を明らかにしても、あなたがたはまったく注意を払わない。あなたがたはその音を聞いても、意味は理解しない。わたしは悲しみにうちひしがれる。わたしは肉にあるが、肉の職分の働きはできないのだ」と神は言う。ある点では、人々が麻痺しているため、これらの言葉は人々に神と協力する主導権を取らせる。別の点では、神は受肉した肉体において神性の真の顔を明らかにする。人々の霊的背丈が小さすぎるため、神が受肉している間の神性の啓示は人の受け入れ能力によるしかない。働きのこの段階では、ほとんどの人は完全に受け入れることができず、これは人々の受け入れ能力がどれくらい貧弱かを十分に示す。したがって、働きにおいて神性はその本来の機能を完全には果たさない。これはごく一部にすぎない。これは、将来の働きにおいて、人の回復の状態に応じて神性が徐々に明らかにされることを示す。しかし、神性は徐々に成長するものではなく、受肉した神が本質的に持つものであり、人の霊的背丈とは異なる。

神による人の創造には目的と意味があった。それゆえ神は「仮に人類が残らずわたしの怒りで滅ぼされたとしたら、わたしが天地を作った意義は何だろうか」と言った。人が墮落した後、神は自らの喜びのために人間の一部を得ようと計画した。それは、すべての人々が破壊される、あるいは神の行政命令のわずかな違反ですべての人々が根絶されるということではない。これは神の心ではない。神が言ったように、それは無意味であろう。神の知恵が明白にされるのは、この「無意味さ」のためである。最終的に真に神を愛する人たちを選びつつ、すべての人々を罰し、裁き、打ち倒すために多くの手段

で神が語り、働くことに、より大きな意味はないであろうか。そして、神の行いが明らかになり、人の創造がより意味深くなるのは、まさにこの方法である。したがって、神の言葉のほとんどは漂い過っていく。これはひとつの目的を達成するためであり、これだけが神の言葉のいくつかの現実である。

補遺：第一章

わたしがあなたがたに行動するよう要求しているのは、わたしが口にする曖昧で空虚な理論ではないし、人間の頭で考えつかないことでもなく、人間の肉により達成できないことでもない。誰がわたしの家の中で完全な忠誠心を示せるだろう。そして、誰がわたしの国の中で自分のすべてを提供することができるだろう。わたしの旨が明らかにされなければ、あなたがたはわたしの心を満たすことを自分に本当に求めるだろうか。誰もこれまでわたしの心を理解しなかったし、誰もわたしの旨を把握しなかった。これまで誰がわたしの顔を見たり、わたしの声を聞いたりしただろうか。ペテロだろうか。それともパウロか。ヨハネか。ヤコブか。これまでわたしに衣服を着せられたり、制御されたり、用いられたりした人がいるだろうか。わたしが初めて肉の姿になったのは神性によってであるが、わたしはその姿は肉ではなかったので、わたしが身に着けた肉の姿は、人間の苦しみを知らなかった。それゆえ、肉が完全にわたしの旨を行なったとは言えなかったのだ。普通の人間性を持つ人の姿をしながら、わたしの神性が支障も妨害もなく思い通りに行ったり話したりすることができて初めて、わたしの旨が肉において行なわれるのだと言える。普通の人間性は神性を隠すことができるので、こうして、控えめで、秘かにというわたしの目的は達成される。肉の姿で働く段階の間、神性は直接行動するが、そのような行動を人々が見ることは容易ではない。それは、普通の人間のような生活と行動をしているからである。この受肉した姿は、最初の受肉の時のように、40日間断食することはできないが、普通に働き、話をする。奥義を明らかにするが、まったく普通の人である。その声は、人々が想像するような、雷のようなものではなく、顔も人々が想像するように光かがやいたりしてはおらず、歩いても天は震動しない。そのような場合、そこにわたしの英知はなく、サタンを辱めたり、打ち負かしたりすることは不可能だろう。

普通の人間性を盾にしてわたしの神性を見せる時、人々はわたしを最大限に賛美し、わたしの大きな働きは完成される。困難を示すものは何もない。これは、わたしの受肉の主な目的は、わたしを信じるすべての人々が肉の姿のわたしの神性による行いを見ら

れるようにするため、そして実践の神を見ることによって、心の中の見ることにも触れることもできない神の場所を払拭するためなのである。わたしは普通の人同様、食べ、衣服を身に付け、眠り、居住し、行動するので、また、普通の人として話し、笑い、普通の人として様々なものを必要とし、しかも完全な神性の本質を所有しているので、わたしは「実践の神」と呼ばれる。これは抽象的な意味ではなく、理解しやすい。つまり、どの部分にわたしの働きの核心があるかが分かるし、また、働きのどの段階にわたしの活動の中心があるかを見ることができる。普通の人間性を通してわたしの神性を明らかにすることは、わたしの受肉の主要な目的である。わたしの働きの中心は、裁きの時代の第二部にあることは容易に見て取れる。

わたしの中には、人間の命も人間の痕跡もなかった。人間の命はわたしの中に場所を占めることはなかったし、わたしの神性の啓示を妨げることもなかった。このようにして、天のわたしの声とわたしの霊の旨を表せば表すほど、神はサタンを辱めることができ、そこで、普通の人間性においてわたしの旨を行なうことは容易になる。このことだけでサタンを打ち負かし、サタンはすでに徹底的に辱められた。わたしは姿を表さないが、このことによってわたしの神性の言葉と行動が妨げられることはない――それは、わたしが勝利を収めていて、完全に栄光を受けていることを十分に示している。肉の姿でのわたしの働きには何の支障もなく、実践の神は今や人々の心の中に居場所があり、彼らの心の中に根を下ろしているので、サタンがわたしに打ち負かされたことは完全に証明されている。そして、サタンは人間の中でもはや何もすることができず、サタンの性質を人間に吹き込むことは困難なので、わたしの旨は支障なく進行する。わたしの働きの内容は、主に、人々がわたしの驚くべき行いを見て、わたしの本当の顔が見えるようにすることである。わたしは人の手の届かない存在ではなく、空高くそびえ立ってもおらず、実体のない存在でもなく、一定の形を持たない存在でもない。わたしは空気のように目に見えないわけではなく、たやすく吹き飛ばされる雲のようでもない。それどころか、わたしは人間の中で生活し、人間の中の酸いも甘いも、苦さも激しさも経験しているが、わたしの肉は根本的に人間のそれとは異なる。ほとんどの人々はわたしに関与することに苦勞するが、関与することを熱望もする。受肉した神には巨大で、計り知れない神秘があるかのようである。神性を直接見せ、人間としての外見を隠すため、人々はわたしが憐れみに満ちた愛ある神であると敬遠するが、わたしの威厳と激怒を恐れてもいる。こういうわけで、彼らは、心の中では真剣にわたしと話したいと望んでいるのに、望み通りに行動することができない――彼らは心の願望を実行する力に欠けてい

る。これが今の状況におけるすべての人の状態である――そして人々がこのようであればあるほど、わたしの性質のさまざまな側面の啓示の証明は大きくなり、その結果、人々が神を知るといった目的が達成される。しかし、これは、最も重要なことではない。最も重要なのは、人々にわたしの肉の姿の行いを示してわたしの驚くべき行動を分からせ、彼らに神の本質を知らしめることである。わたしは人々が想像するように、異常でも超自然的でもない。それどころか、わたしはすべての事において普通である実践の神である。人々の概念の中の「わたしの」場所は払いのけられ、彼らは実際にわたしを知るようになる。そうしてようやくわたしは人々の心の中にわたしの本当の場所を持つのである。

すべての人々の前で、わたしは人々が大切にしてきた超自然的なことを一切行わなかっただけでなく、極めて普通で正常である。つまり、わたしは人々に対し、受肉した姿に神のかすかな徴候を示すものを一切見せないように意識してきた。しかし、わたしの言葉によって、人々は完全に征服され、わたしの証しに服従している。こうしてようやく、人々は不安なしに、神は実際存在すると完全に信じることを基礎にして、肉の姿のわたしを知るようになるのだ。このようにして、わたしに関する人々の認識はより現実的になり、よりはっきりとし、人間たちの良い振る舞いによって少しも毒されることはない。すべては、わたしの神性が直接行動し、わたしの神性についてより多くの認識を人々に与えている結果である。神性だけが神の真の顔であり、神に本来備わっている特質だからである――人々はこのことを理解しなければならない。わたしが望むのは神性による言葉、行為、行動である――わたしは人間性による言葉や行動に関心はない。わたしの目的は神性によって生き、行動することである――わたしは人間性に根付き、人間性によって成長することを望まず、人間性に存在することを望まない。わたしの言っていることがあなたがたにはわかるだろうか。人間性に関してわたしは客人ではあるが、わたしは人間性を望まない。わたしは完全な神性で行動する。このようにしてようやく人々はわたしの真の顔をよりよく理解することができるのだ。

第十章

教会建設の時代、神の国の建設について神が語ることはほとんどなかった。それを持ち出したときでさえ、当時の言葉で話した。ひとたび神の国の時代が到来すると、神は教会建設時における手法や懸念を一筆で取り消し、以降それについて言葉を発することは一切なかった。これはまさに、常に新しく決して古くなることのない、根本的な意味

合いでの「神自身」を表わしている。過去になされたであろう事柄と同じく、それらも結局は過ぎ去った時代の一部であり、ゆえに神はこうした過去の出来事を、紀元前に起こったものとして分類し、一方で現代は紀元後という名で知られている。そのことから、教会の建設は神の国の建設の必要条件だったことがわかる。それによって神が自らの国で主権を行使する基盤が据えられたのである。教会の建設は今日の一場面であり、地上における神の働きはおもに、神の国の建設というこの部分に重点を置いている。教会の建設を終わらせるのに先立ち、神はすでにすべての働きがなされる準備をしており、適切な時になったところで自身の働きを正式に始めた。それゆえ神はこう述べたのである。「結局のところ、神の国の時代は過去の時代と異なっている。それは人間の行ないとは関係ない。むしろ、わたしが地上に降りて自ら働きを行なったのであり、それは人には理解できず、成し遂げるのも不可能なことである」。確かに、この働きは神自身が行なわねばならない。そのような働きを行なえる人はおらず、まったく手に負えないからである。神を除き、人類の誰がこうした偉大な働きを行なえるのか。人類全体をなかなば死に至らしめるほど「苦しませる」ことを、他に誰ができるというのか。人間がそのような働きを采配するなどいったい可能なのか。神が「わたしが地上に降りて自ら働きを行なったのであり」と言うのはなぜか。神の霊がすべての空間から本当に消えてしまったということがあり得るだろうか。「わたしが地上に降りて自ら働きを行なったのであり」という一節は、神の霊が受肉して働きを行なったことと、神の霊が人類を通じて明確に働きを行なっていることの両方を指している。神は自ら働きを行なうことで、多くの人が自分の肉眼で神を見られるようにする。そうした人たちが、自分の霊において神を注意深く探す必要はないのである。さらに神は、すべての人間が自分の目で霊の働きを見られるようにし、人の肉と神の肉に本質的な違いがあることを示す。同時に、あらゆる空間、そして宇宙において、神の霊は働きを行なっている。神によって啓かれ、神の名を受け入れた神の民はみな、神の霊が働くさまを見ることができ、それによって受肉した神をさらに知るようになる。このように、神の神性が直接働きを行なう場合のみ、つまり神の霊が干渉を一切受けずに働きを行なえるときにのみ、人は実際の神自身を知ることができる。これが神の国の建設の本質である。

神は何度受肉したのだろうか。数回だろうか。神が一度ならず「わたしはかつて人間の世界に降りて、人々の苦しみを見、経験もしたが、受肉の目的を果たすことはなかった」と言ったのはなぜか。神は何度か受肉したのに、人類の誰もそのことを知らなかったということなのか。この言葉はそうした意味ではない。神が初めて受肉したとき、そ

の目的は実のところ、人間に対して神を知らしめることではなかった。むしろ、神は自身の働きを行ない、誰にも気づかれることなく、人が神を知る機会さえないまま姿を消した。神は人々が神を完全に知ることを許さず、また受肉の意義を完全に有しているわけでもなかった。そのため、神が完全に受肉したとは言えなかったのである。最初の受肉において、神は罪深い本性を有さない肉体を用いて働きを行なうだけであり、その働きが完了したあと、それについてさらに触れる必要はなかった。各時代に神に用いられた人間について言えば、そうした実例を「受肉」と呼ぶ価値はなおさらない。普通の人間性の中に隠れつつ、完全なる神性を自身の中にもち、人類に神を知らしめることを目的としている、今日における実際の神自身だけが、真の意味で「受肉」と呼ばれ得るのである。神がこの世界に初めて降臨したことの意義は、今日受肉と呼ばれるものがもつ意義の一側面である。しかしその降臨は、今日受肉の名で知られるものの完全な意義を構成しているわけでは決してない。神が「受肉の意義を満たすことはなかった」と言ったのはそのためである。「人の苦しみを見、経験した」という言葉は、神の霊と二度にわたる受肉を指している。そのため神は、「神の国の建設が始まると、わたしは受肉して正式に自身の職分を始めた。つまり、神の国の王が正式に王権を握ったのである」と述べたのである。教会建設は神の名の証しだったものの、その働きはまだ正式には始まっていなかった。今日になって初めて、それは神の国の建設だと言えるのである。以前になされたことはどれも前触れに過ぎず、現実のことではなかった。神の国はすでに始まったと言われてはいたが、その中ではまだ何の働きも行なわれていなかった。神の神性の中で働きが行なわれ、神が正式に自身の働きを開始した今、人類はついに神の国へと入ったのである。このように、「神の国が人間世界に降りて来るのは、単なる言葉上の表われでは決してなく、実際の現実なのである。これは、『実践の現実』がもつ意味の一つなのだ」。この抜粋は先に述べた説明を適切に要約している。神はこの説明を与えた上で人類の一般的な状態を特徴づけ、人々を常に多忙な状態にした。「世界中で、誰もがわたしの慈悲と慈しみの中にいるが、同時にすべての人間がわたしの裁きを受け、わたしの試練に晒されている」。人の人生は、神が定めたとおり、ある種の原則と規則に支配されているが、それらは、幸福のとき、落胆のとき、さらには困難による精錬に耐えなければならないときがある、というものである。したがって、幸福だけの、または苦しみだけの人生を送る者はおらず、誰の人生にも浮き沈みがある。人類全体を通じて、神の慈悲と慈しみだけでなく、神の裁きと全性質が明らかになっている。すべての人は神の試練のただ中で生きていると言える。違わないだろうか。この広大な世界において、人は自力で抜け道を見つけようとあくせくしている。自分たちが果たすべき役割

もわからず、中には運命のために人生を損なったり、失ったりする人もいる。ヨブでさえこの法則の例外ではない。彼もまた神の試練に耐えたものの、自力で抜け道を探した。神の試練において揺るぎなく立てる者はかつていなかった。人間の貪欲さと本性のせいで、自分の現状に十分満足できる者は一人もおらず、試練の中で揺るぎなく立つ者もない。誰もが神の裁きのもとでもろくも崩れてしまう。神が人類に本気で向き合ったなら、そしてそのような厳しい要求をなおも人々に突きつけるなら、「全人類はわたしの燃える目で見つめられて倒れるだろう」と神が言ったようになるはずだ。

神の国の建設は正式に始まっているが、神の国の礼砲はまだ鳴り響いていない。現在、それはこれから起こることの預言に過ぎないのである。民がみな完全にされ、地上のすべての国がキリストの国となると、それは七つの雷鳴が轟くときである。現在はその段階へと大きく前進するときであり、その日に向かってすでに進撃している。これが神の計画であり、近い将来実現する。しかし、神は自身が語ったすべてのことをすでに達成している。したがって、地上の国々が砂上の楼閣に過ぎず、大波が押し寄せれば揺れ動くのは明らかである。終わりの日は迫っており、赤い大きな竜は神の言葉の下に倒れる。神の計画が成功裏に遂行されることを確実にすべく、天使たちが地上に降り、神を満足させるために最善を尽くしてきた。そして肉となった神自身が出陣し、敵に戦いを挑んできた。受肉した神がどこに現われようと、敵はその場で滅ぼされる。真っ先に滅ぼされるのは中国で、神の手によって破壊される。神は中国を一切容赦しない。赤い大きな竜が次第に崩壊していることは、人々が絶えず成熟していることによって証明されている。これは誰にとっても一目瞭然である。人々の成熟は敵が消滅することの兆候であり、「競争する」という言葉の意味を少しばかり説明している。このように、神に美しい証しを捧げ、赤い大きな竜の醜さである観念が人の心に占めている地位を打ち消すよう、神は事あるごとに人に思い出させた。そうすることで、神は人々の信仰にいのちを与え、自身の働きを成し遂げる。なぜなら、神はこのように言ったからである。「人間にいったい何ができるのか。むしろ、わたしが自ら行なうのではないのか」。人はこのようなものである。つまり能力がないだけでなく、すぐに落胆し、失望する。そのため、人は神を知ることができない。神は人の信仰を蘇らせるだけでなく、絶えず密かに人々へ力を吹き込んでいるのだ。

次に、神は全宇宙に向かって語り始めた。中国で新たな働きを始めただけでなく、全宇宙で今日の新しい働きを開始したのである。働きのこの段階において、神を裏切ったすべての人が再び神の玉座の前に出てひれ伏すよう、神は世界の至るところで自身の業

のすべてを表わそうと望んでおり、そのため神の裁きには依然として慈悲と慈しみが含まれる。神は世界中で現在の出来事を用い、人々を狼狽させ、彼らが神を求め、神のもとに戻るようにする。ゆえに、神はこう言うのである。「これは、わたしの働く方法の一つで、必ずや人を救う行ないなのであり、わたしが人に差し伸べるものは、何であれ、一種の愛なのである」。ここで神は人の真の本性を、比類なき鋭さで難なく正確に暴き出す。それにより、人は恥じ入って顔を隠し、この上ない屈辱を感じる。安楽なときに人々が自己認識することを忘れぬよう、また自己認識は昔の務めであると考えぬよう、神は語るたびに何とかして人の恥ずべき行ないを指摘する。人の本性によると、神がたとえ一瞬でも欠点を指摘しなければ、人は自堕落で傲慢になりがちである。そのため、神は今日、再び次のように言うのである。「人間は、わたしの与えた呼び名を大事にするどころか、じつに多くの人々が内心で『效力者』という呼び名を嫌い、『我が民』という呼び名に心の中でわたしへの愛を育む。わたしを騙そうと試みてはいけない。わたしの目はすべてを見通す」。人はこの文章を読むやいなや不安を覚える。過去の行ないがあまりにも未熟で、神を怒らせる穢れた振る舞いだと感じるのだ。最近、人は神を満足させたいと望んできたが、その気持ちは十分過ぎるほどであっても、そうする力に欠け、何をすべきかわからない。無意識のうちに、人は新たな決意を吹き込まれている。それが安楽になった後でこの言葉を読むことの効果である。

神は、サタンが極度に常軌を逸していると述べる一方で、ほとんどの人間が有する古い本性は変わっていないと指摘している。このことから、サタンの行動が人を通じて示されているのは明らかである。そのため、人がサタンに呑み込まれることのないよう、神は人に対して自堕落になってはならないと頻繁に注意する。これは、一部の人々による反逆を預言しているのみならず、それ以上に、過去を急いで脇にのけ、現在を求めるよう警鐘を鳴らしているのである。悪魔に取り憑かれたり、悪霊に打ち負かされたりすることを望む者は一人もいないので、神の言葉はますます彼らへの警告および勧告となる。しかし、大半の人が両極端に傾き、神の言葉を一つ残らず重視するとき、神はそれに対して次のように言う。「大半の人は自分の目を楽しませようと、わたしがさらに奥義を明かすのを待っている。しかし、たとえ天の奥義をすべて理解するようになったとしても、それでいったい何ができるだろうか。それでわたしへの愛が増すのだろうか。それでわたしへの愛が生じるのだろうか」。このことから、人が神の言葉を用いるのは、神を知って愛するためではなく、自分の「小さな倉庫」の蓄えを増やすためであることは明らかである。ゆえに、神は「目を楽しませる」という表現を用いて人の行き過ぎ

を表わすのであり、そのことは神に対する人の愛がいまだ完全に純粋なものではないことを反映している。神が奥義を明らかにしなければ、人は神の言葉を重視せず、疾走する馬の背から花を愛でるかのごとく、ほんの一瞬、ちらりと目をやるくらいだろう。そのような人は、時間を割いて神の言葉を心から振り返ったり、熟考したりはしない。ほとんどの人が神の言葉を真に大切にしておらず、労苦を惜しまずに神の言葉を飲み食いすることもなく、おざなりにざっと目を通すくらいである。神が昔と異なる方法で今語るのはなぜか。神の言葉がどれも計り知れないのはなぜか。その例として、「わたしは決してこうしたラベルを軽々しく彼らに冠さない」の「冠する」や、「わたしの言葉を形作る純金を受け取れる者が、誰かいるだろうか」の「純金」や、神が以前に言及した「サタンによる処置を経ることなく」の「処置」といった言い回しがある。神がなぜこのように語るのか、人には理解できず、神がなぜこうした滑稽で、ユーモラスで、思考を刺激するような方法で語るのかがわからない。神が言葉を発する目的は、まさにこれらの中に示されている。始まりから現在に至るまで、人は常に神の言葉を理解できたことがなく、神の発言は実に厳粛かつ厳格であるかのように思えた。言葉のあちこちに気の利いた表現を織り込み、わずかにユーモアを交えることで、神は自身の言葉の雰囲気や和らげ、人にリラックスさせることができる。そうすることで、神はさらに大きな効果を挙げ、人に自身の言葉を熟考させることができるのである。

第十一章

人の肉眼には、この期間の神の言葉には変化がないように見える。これは人々は神が語る法則を理解できず、神の言葉の文脈を理解していないからである。神の言葉を読んだ後、人々はこれらの言葉に新たな奥義があるとは信じない。そのため、彼らは極めて新鮮な生活を送ることができず、代わりに停滞して活気のない生活を過ごす。しかし神の言葉にはより深い意味があり、それは人には理解できず、手が届かない。今日、人が幸運にもこのような神の言葉を読めることは、すべての祝福の中でも最大のものである。この言葉を誰も読まないならば、人は永遠に傲慢で独善的で、自らを知らず、自分がどれくらい弱点を持っているかを知らないままであろう。神の深遠で、理解しがたい言葉を読んだ後、人々はひそかに神の言葉を賞賛し、心には真の確信をもち、それは虚偽で汚れていない。人々の心は偽造品ではない本物になる。これは本当に人々の心に起こるものである。誰もが自分の心に自分の物語を持っている。これは人々が独り言を言っているかのようである。これはほぼ間違いなく神自らが言ったことである。もし神ではないなら、他に誰がこのような言葉を発し得るのか。なぜわたしはこのような言葉を話

せないのか。なぜわたしはこのような働きを行なえないのか。神が語る受肉した神は確かに現実で、神そのもののようである。わたしはもはや疑わない。さもなければ、神の手が届くとき、後悔には遅すぎるということになりそうである……これがほとんどの人が心の中で考えることである。神が話し始めたときから今日まで、神の言葉の支えなしにはすべての人々は崩れ落ちていただろうと言ってもいい。この働きのすべては人ではなく神自らによって行われるとなぜ言われるのか。神が教会のいのちを支えるために言葉を使わなければ、誰もが跡形なく消えるであろう。これは神の力ではないのか。これが本当に人の雄弁術なのか。これは人の特異な才能だろうか。絶対に違う。解剖しなければどの血液型の血が血管を流れているか、心臓をいくつ持っているのか、脳をいくつ持っているのか誰も知らない。しかし神のことは知っていると言っているように思われる。自らの認識の中にまだ抵抗が含まれていることを人々は知らないのか。「人間は誰もみな、わたしの霊による観察を受けなければならない。自分のすべての言葉と行動を細かく調べ、さらに、わたしの驚くべき行いを見なければならない」と神が言うのは不思議ではない。これにより、神の言葉は無目的ではなく、根拠がないわけではないと理解できる。神はいかなる人も不当に扱ったことはない。ヨブでさえ、あれだけの信仰を持っていたとしても放免されなかった。ヨブも細かく調べられ、恥から隠れる場所がなかった。今日の人々については言うまでもない。それゆえ、神は間髪を入れずに「神の国が地上に来るとき、あなたがたは、どのように感じるだろうか」と尋ねる。神の質問は大した問題ではないが、人々を困惑させる。わたしたちはどう感じるだろうか。神の国がいつやって来るかまだ分からないのに、どうして感じる言えるだろうか。加えて、手掛かりがない。わたしが何かを感じなければならないのであれば、それは「驚いた」であり、それ以外はない。実際、この質問は神の言葉の目的ではない。とりわけ「わたしの子らと民がわたしの玉座に来るとき、わたしは大きな白い玉座の前の裁きを正式に始める」という一文は、霊的領域全体の展開を要約している。この間、霊的領域で神が何をしたいのかは誰も知らず、神がこれらの言葉を発して初めて人々は少し気が付く。神の働きには異なった段階があるため、宇宙全体での神の働きも変わる。この間、神はおもに神の子たちと民を救う。つまり、天使に導かれ、神の子たちと民は取り扱われ、分割されることを受け入れ始め、本格的に彼らの考えや観念を一掃し始め、この世の痕跡に別れを告げる。言い換えれば、神が語った「大きな白い玉座の裁き」が本格的に始まる。それは神の裁きであるため、神は声を発する必要がある。内容はさまざまだが、目的は常に同じである。今日、神が語る口調から判断すると、神の言葉は特定の人々の集団に向けられているようである。実際、これらの言葉はとりわけすべての人々の本性に対

処している。人の脊髄を直接切りつけ、人の感情を容赦せず、何も通さず何も見逃さず、人の本質全体を明らかにする。今日から始まって、神は本格的に人の真の顔を明らかにし、それゆえ「わたしの霊の声を全宇宙に放つ」。最終的に達成される効果は「わたしの言葉を通して天と地のすべての人々と物事を洗い清め、地はもはや穢れと淫乱の地ではなく、聖なる国である」と言う。これらの言葉は神の国の未来を表しており、それは完全にキリストの国であり、神が言ったように「すべては良い果実であり、すべては勤勉な農民である」。当然これは宇宙全体に起きるもので、中国に限定されるものではない。

観念の中で人々が神を少し知るのは、神が話し、行動し始めてからである。当初、この認識は人々の観念にのみ存在するが、時間が経つにつれて、人々の考えはますます人間が使うにはそぐわず、役に立たなくなる。したがって、人々は「意識の中に実際の神のための場所を作る」という範囲で、神の言うことすべてを信じるようになる。人々が実践の神のための場所を持っているのは意識の中だけである。しかし、実際には人々は神を知らず、空虚な言葉だけを話す。しかし、過去と比較すれば人々は驚異的な進歩を遂げているが、まだ実践の神自身とは大きな違いがある。「わたしは毎日、とだえることのない人間の流れの中を歩き、毎日、すべての人の中で働く」と神がいつも言うのはなぜか。そのようなことを神が言えば言うほど、より多くの人々が神の言葉と現在の実践の神自身の行動とを比較することができ、実践の神を実際により良く知ることができる。神の言葉は肉の観点から話され、人の言語を使って発せられるので、物質的なものに照らして神の言葉を推し量ることによって人々は神の言葉を理解することができ、それによってより大きな効果が達成される。さらに、再三再四神は人々の心の中の「わたし」の姿と現実の「わたし」の姿について語り、それにより心の中の神の姿を人々に進んで放棄させ、それゆえ実践の神自身を知り、実践の神自身と関わりをもとうとさせる。これは神の言葉の知恵である。そのようなことを神が言うほど、神についての人々の認識に対する恩恵は大きくなり、それゆえ神は「わたしが受肉しなければ、人間は決してわたしを知らず、たとえわたしを知るようになったとしても、そうした認識は観念的なものに過ぎないのではないか」と言う。実際、自らの観念に基づいて人々が神を知らなければならないなら、それはたやすいことで、人々は寛いで幸せでいられるであろうし、それゆえ人々の心の中の神は永遠に漠然として、実践的ではないであろう。それは、神ではなくサタンが全宇宙を支配していることを証明するであろう。そして、「力を取り戻した」という神の言葉は永遠に空虚であるだろう。

神性が直接活動し始める時はまた神の国が本格的に人の世界に降臨する時である。しかし、ここで言われているのは、神の国が人のもとに降臨するということで、神の国が人間のそばで形を成すということではない。それゆえ、今日語られることは神の国の構築であり、それがどのように形を取るかではない。なぜ神はいつも「万物は沈黙する」と言うのか。それは万物が静止するということだろうか。巨大な山々が本当に沈黙することはあるだろうか。そうならば、人々にはなぜこの感覚がないのか。神の言葉が間違っていることがあり得るだろうか。あるいは神は誇張しているのか。神が行うすべてはある環境の中で行われるため、誰もそれに気が付かないか、自らの目で知覚できず、できることと言えば、神が語るのを聞くことである。神が働きを行う威厳のゆえに、神が来るときは、まるで天と地に甚大な変化があったかのようなのである。神にとって、万物がこの瞬間を見ているようである。今日、事実はまだ届いていない。人々は神の言葉の文字どおりの意味の一部から少しだけ学んだだけである。真の意味は人々が自らの観念を追放する時を待ち構えている。そのときになってようやく人々は受肉した神が今日地と天で何をしているのか気が付く。中国の神の民には赤い大きな竜の毒だけがあるのではない。赤い大きな竜の本性もまたよりふんだんに、より明確に、人々の中に現れる。しかし、神はこれを直接的には言わず、赤い大きな竜の毒について少し触れるのみである。このように、神は人の傷跡を直接さらすことはなく、それは人の進歩にとってより有益である。赤い大きな竜の子孫は、他人の前で赤い大きな竜の後裔と呼ばれるのが好きではない。あたかも「赤い大きな竜」という言葉が彼らに不名誉をもたらすようである。彼らのうち誰もこの言葉を語ろうとせず、それゆえ神は「だから、わたしの働きのこの段階は、主にあなたがたに集中する。そして、これがわたしの中国での受肉の意義の一面なのだ」と言うのみである。より正確には、神はおもに赤い大きな竜の子孫の典型的な代表者たちを征服するために来た。これが中国における神の受肉の意義である。

「わたしが自分で人間たちの間に行き、天使たちが同時に牧養の働きを始める。」実は、これは天使たちが諸国民の間で働きを始めてやっと神の霊が人の世界に来る、と文字通りには受け取れない。そうではなく、ふたつの働き、つまり神性の働きと天使の導きは同時に行われる。次に、神は天使の導きについて少し語る。「子らと民はみな、試練と牧養とを受けるだけでなく、あらゆる幻をも、その目で見ることができる」と神が言うとき、ほとんどの人は「幻」という言葉について豊富な想像を働かせる。幻とは人々の想像力における超自然的な出来事を指す。しかし、働きの内容は実践の神自らの認識に留まる。幻は天使が働きを行う手段である。天使は人々に感情や夢を与え、天使

の存在を感知させる。しかし、天使は人には見えないままである。天使が神の子供たちと神の民のもとで働きを行う方法は、人々に直接啓示を与え、照らし、それに加えて人々を取り扱い、分割することである。天使が説教をするのはまれである。当然のことながら、人々の間の交わりは例外である。これは中国以外の国々で起こっていることである。神の言葉の中に含まれているものは、全人類が生きる環境の啓示であり、当然これは主に赤い大きな竜の子孫に向けられている。全人類のさまざまな状態から、神は模範として役立つ代表的なものを選択する。こうして、神の言葉は人々を裸にし、人々は恥を知ることもなく、そうでなければ輝く光から隠れる時間もなく、得意な分野で敗北を喫する。人の多くの振る舞いは大量の心像であり、それは神が古代から今日まで描き、そして今日から明日まで描くものである。神が描くものはすべて人の醜さである。目から失われた視力に心を痛めたようで、闇の中で泣く人もいれば、笑う人、大きな波に襲われる人、起伏する山の道を歩く人、弓の弦がはじけただけの音に驚く鳥のように、山の野生動物に食われることを深く恐れて恐怖に震えながら広大な荒野の中を捜す人もいる。神の手の中で、これらの多くの醜い振る舞いは感動的な生き写しの絵画的な描写となり、ほとんどのものは見るにはあまりにも恐ろしく、あるいは人々の身の毛をよだたせ、困惑させ、混乱させる。神の目には人の中に現れているのは醜さだけであり、たとえそれが同情を引き起こすとしても、それはやはり醜さである。神と人が違う点は他人に対して優しさを示す性向に人の弱さがあるということである。しかし、人にとっては神は常に同じであり、それは神が常に同じ態度を取ってきたことを意味する。子供のことを真っ先に心に思う経験豊かな母親のようだと言った人が想像するほど神はいつも優しくはない。現実には、神が赤い大きな竜を征服するための一連の方法を使いたくなかったなら、人の限界を自ら受け入れるような屈辱に身を委ねたりはしないであろう。神の性質によれば、人々が行い言うことすべては神の怒りを引き起こし、人々は罰せられるべきである。神の目には人間の誰一人として標準に達しておらず、誰もが神によって攻撃される者である。中国での神の働きの原則のために、またさらに赤い大きな竜の本性のために、それに加えて中国は赤い大きな竜の国であり、受肉した神が住む土地であることから、神は怒りを飲み込み、赤い大きな竜の子孫をすべて征服しなければならない。それでも、神はいつまでも赤い大きな竜の子孫を嫌い、つまり、神は常に赤い大きな竜に由来するものすべてを嫌うであろう。そして、これは決して変わることはない。

どのようなものであれ神の行動に気づいていた人はおらず、何かによって神の行動が見られていたことはない。例えば、神がシオンに戻った時、それに誰が気づいたのか。

したがって、「わたしは静かに人間の間に来て、そっと去る。これまで誰か、わたしを見た者がいるだろうか」という言葉は、人は本当に霊的領域の出来事を受け入れる能力がないことを示している。過去に、シオンへ帰還するときに「太陽は燃え、月が輝く」と言った。人々はまだ神のシオンへの帰還に気をとられているため、まだそれを忘れてしまえないため、人々の観念に合致するよう、神は「太陽は燃え、月が輝く」と直接発言する。その結果、人々の観念が神の言葉の打撃を受けると、人々は神の行動は非常に驚くべきであると見届け、神の言葉は深遠で、理解不能であり、誰にとっても解読不可能であると理解する。このように、人々はこのことを完全に忘れ、あたかも神がすでにシオンに戻ったかのように気分が少しははっきりするのを感じ、それゆえこのことに大きな注意を払わない。それ以来人々は心をついにし、思いをついにして神の言葉を受け入れ、神がシオンに戻ると災難が起こりはしないかとはもはや気にしない。そのときになってようやく、神の言葉に注意をすべて集中させ、人々は容易に神の言葉を受け入れ、それ以外のことを考えたいという気持ちはなくなる。

補遺：第二章

人々が実践の神を見る時、そして直接神自身と共に生活を送り、共に並んで歩み、共に住む時、彼らは長年にわたり心に抱いていた好奇心を脇へ押しやる。過去に語られた神に関する認識は、第一段階にすぎない。人々は神に関する認識を持っているが、心の中には多くの根強い疑問が残っている。すなわち、神はどこから来たのだろうか。神はものを食べるのだろうか。神は普通の人々とはかなり異なっているのだろうか。神にとって、すべての人々との関わりは容易く、子供の遊びのようなものだろうか。神の口から語られることはすべて天の奥義なのだろうか。神が語るすべては、すべての創造された者が語ることもより高度なのだろうか。光は神の目から輝くのだろうか、などなど——これは、人々の概念で思いつくことである。これらのことはほかのすべてのことに先立ってあなたがたが成長しなければならない事柄である。人々の概念では、受肉した神はいまだに漠然とした神である。実践的認識によらなければ、人々は決してわたしを理解できないだろう。そして決してわたしの行いを彼らの経験の中で見ることはないだろう。人々がわたしの旨を「把握できない」のは、わたしが肉の姿になったからである。わたしが肉の姿にならなかつたら、そして、まだ天に、つまりまだ霊の領域にいたら、人々はわたしを「知り」、頭を垂れ、わたしを崇め、彼らの経験を通して、わたしに関する彼らの「認識」を語つただろう——しかし、そのような認識が何の役に立つだろうか。参考になるような価値があつただろうか。人々の概念によって得られる認識は現実と

なり得るだろうか。わたしは人々が頭で考えだす認識など欲しくはない——わたしが欲しいのは実践的認識である。

わたしの旨はいつでもあなたがたの間で明らかにされ、そこにはいつもわたしの照らしと啓きがある。そしてわたしが神性によって直接行動する時、人間の頭を通してフィルターをかけられることがない。「味付け」する必要がないのだ——これは神性の直接的な行いなのである。人々には何ができるのだろうか。創造の時から今日に至るまで、すべてはわたしが直接行ってきたのではないだろうか。かつて、わたしは七つの強化された霊について話したが、誰もその本質を理解できなかった——霊に気づいた時でさえ、彼らは完全に理解することはできなかった。わたしが神性に支配されて人々の中で働きを行う時、この働きは、人々が超自然的ではなく、普通だと信じている状況の中で実行されるので、聖霊の働きと呼ばれる。わたしが直接神性によって働く時、わたしは人々の概念に拘束されず、人々の概念の中にある「超自然的」なものによる制限の影響を受けないので、この働きはすぐに効果を表し、問題の核心に触れ、すぐに核心を突く。結果として、この段階の働きはより純粋なものとなり、倍の速度で進み、人々の認識は加速し、わたしの言葉は増加するので、すべての人々は大急ぎでついて来ようとする。その効果はさまざまで、わたしの働き的手段、性質、内容は同じではないので——そしてさらに、わたしは正式に肉の姿で働き始めているので、前記のことを考慮して、この段階の働きは七つの強化された霊の働きと呼ばれる。それは抽象的なものではない。わたしがあなたがたの中で働くやり方の変化に続いて、そして神の国の出現に続いて、七つの強化された霊が働き始め、この働きは絶えず深まっていき、いっそう強まる。すべての人々が神を見て、神の霊が人々の中にあるとわかると、わたしの受肉の意味が完全に明確にされる。要約する必要はなく——人々はこのことを自然に理解する。

多くの側面を考慮すると——わたしの働き方、わたしの働きの段階、今日のわたしの言葉の調子等々——今、わたしの口から出るものだけが真の意味で「七つの霊の言葉」なのである。わたしは過去にも語ったが、それは教会建設の段階におけるものであった。いわば小説の序文や目次であり、本質はなかった。今日語られる言葉のみが、真の本質の観点から、七つの霊の言葉と呼ぶことができる。「七つの霊の言葉」とは玉座から発せられる言葉を表す。すなわち、それらは神性によって直接発せられる。わたしの言葉が天の奥義を明らかにし始める瞬間は、わたしが直接神性によって話した瞬間であった。言い換えれば、人間性に拘束されずに、わたしは直接霊的領域の神秘や状況のすべてを明らかにした。かつては人間性の限界に左右されていた、とわたしが言うのはなぜ

か。これには説明が必要である。人々の目から見れば、誰も天の奥義を明らかにすることはできない。神自身でなければ、地上にいるものは誰も、これらの奥義について知ることにはできない。このようなわけで、わたしは人々の概念に向かって言う。かつて、わたしは人間性の限界に縛られていたから、どんな奥義も明らかにしなかった。しかし、さらに厳密に言えば、そうではない。わたしの働きが変わればわたしの言葉の内容も変わるのだ。このようなわけで、わたしが神性によってわたしの働きを実行し始めた時、わたしは奥義を明らかにした。かつて、わたしはすべての人々が普通とみなす状況で働かなければならなかった。そして、わたしが語る言葉は人々の概念で到達することができた。わたしが奥義を明らかにし始めた時、そのうち一つでも人々の概念で到達できるものはなかった——わたしの奥義は人間の考えとは異なっていたからである。それで、わたしは正式に神性によって話し始めた。それが真の意味での七つの霊の言葉である。過去の言葉は玉座から発せられたものであったが、人々が到達できることに基づいて語られたので、神性によって直接発せられたものではなかった——その結果過去の言葉は真の意味で七つの霊の言葉ではなかった。

第十二章

すべての人々が注意を払い、すべてのものが再び新たにされて復活し、あらゆる人がためらわずに神に服従し、神の重荷の重い責任を負おうとするとき、東から稲妻が現れ、東から西を照らし、この光の到来で地のすべてを畏怖させるのである。この瞬間、神は再び神の新しい生活を始める。つまり、この瞬間、神は地上で新しい働きを始め、宇宙すべての人々にこう布告する。「東から稲妻が走るとき——これはまた、わたしが話し始める、まさにその瞬間である——稲妻が光るその瞬間、天空全体が照らされ、すべての星々が変化し始める」。それでは稲妻が東から現れるのはいつか。天が暗くなり地が暗くなるのは神が顔を世界から隠すときであり、そして天の下のもうすべてが激しい嵐に苦しむ時である。この時、すべての人は恐怖に襲われ、雷鳴を恐れ、稲妻の明るさを恐れ、洪水の猛襲にはそれ以上に怯え、ほとんどの人々は目を閉じて、神が怒りを放ち人々を打ち負かすのを待つようである。さまざまな事態が発生する中、東の稲妻はすぐ現れる。すなわち、東の世界では、神自身が証しされ始める時から、神が働きを始め、神性が地上で主権を発揮し始めるまでである。これは東の稲妻の輝く矢であり、宇宙全体をいつも照らしていた。世の国々がキリストの国になる時は、宇宙全体が照らされる時である。東の稲妻が現れ、受肉した神が働きを始め、さらには神性の中で直接語るのは今である。神が地上で語り始めるときは、東の稲妻が現れるときと言える。正確に言え

ば、生ける水が玉座から流れるとき――玉座から言葉が発せられ始めるとき――それはまさに七つの霊の言葉が正式に発せられ始めるときである。このとき東の稲妻が出現し始め、その継続時間から照らしの程度も変わり、その輝きの範囲にも限界がある。しかし、神の働きが進むにつれ、神の計画が変わると、つまり、神の子らや神の民への働きが変わるにつれ、稲妻は次第にその本来の機能を果たし、宇宙すべてのものが照らされ、くずやかすは残らない。これは神の六千年間の経営（救いの）計画の結晶であり、神が享受した果実である。「星々」は空の星を指すのではなく、神のために働くすべての神の子らや神の民を指す。この子らや民は神の国で神の証しとなり、神の国で神を象徴しており、そしてこの子らや民は被造物であるため、「星々」と呼ばれる。「変化」は身分と地位の変化を指す。つまり、この子らや民は地上の人々から神の国の民に変わり、そしてさらに神は人々と共にあり、神の栄光はそのような子らと民にある。その結果、そのような子らと民は神の代わりに主権をふるい、その中の毒と不純物は神の働きのために清められ、最終的に神に用いられるために適切なものとなり、神の心に適うものとなる。それは、こうした言葉の意味の一面である。神からの光の矢がすべての地を照らすと、天と地のすべてのものが様々に変化し、空の星もまた変わり、太陽と月は新しくなり、地上の人々もその後新しくなるだろう。これは天と地の間で神によって行われたすべての働きであり、驚くことではない。

神が人々を救うとき、そこには当然選ばれた人々以外は含まれていないが、それは神が人を清め、裁き、神の言葉のために人々がみな激しく泣き、寝床で病に伏し、倒れ、死の地獄へ落ちるまさにその時である。人々が自らを知り始めるのは神の発言のためのみである。もしそうでなければ、人々の目はヒキガエルの目であろう。人々は見上げ、一人として信ぜず、自らを知る者はおらず、どれほどの重さがあるかを知らないであろう。人々はまさにサタンによって極度に墮落させられている。人の醜い顔がはっきりと描き出されるのは正に神の全能の故であり、それを読んだ後で、人は自分の真顔と比較するようになる。人々の醜い顔や心の奥の考えは言うまでもなく、頭の中にどれだけ多くの脳細胞があるのかも神には明白であると、人々は知っている。「全人類はあたかも選り分けられ、整理されたかのようである。東からの光芒の下、人間はみな本来の形を現し、目がくらみ、混乱し、動きがとれずにいる」という言葉から、神の働きが終わるとき、すべての人が神によって裁かれるという事が分かる。誰も逃げることはできず、神はすべての人々を、ひとりも見落とすことなくひとりずつ扱い、そうして初めて、神の心は満たされる。そして、神はこう言う。「また、彼らはわたしの光から逃げて山の

洞窟に隠れようと逃げる動物のようだ。しかし、わたしの光の中では、彼らの一人も姿を消せない」。人々は卑しく劣等な動物である。サタンの手の中に住み、彼らはあたかも山の奥深くの古代の森に避難したかのようであるが、すべてのものは神の炎によって焼かれることから逃れられないので、たとえサタンの勢力の「保護」の下にあっても、神に忘れられることなどあろうか。人々が神の言葉の出現を受け入れるとき、神のペンはすべての人々のさまざまな奇妙な形やグロテスクな状態を描く。神は人の必要と心理にふさわしいように語る。したがって、人々にとって、神は心理学に精通しているように思われる。それは神が心理学者であるかのようであり、神が内科の専門家であるかのようでもある。「複雑」な人間を神が理解しているのも不思議ではない。人々がこのことをさらに考えると、神に対する大切さの感覚は大きくなり、そして人々は神が深遠であり、計り知れないとさらに感じるようになる。あたかも人と神の間には越えることができない天の境界があるように、しかし人と神はまるで楚河^[a]の対岸からそれぞれを見ていて、お互いを見ること以外できないかのようである。言い換えれば、地上の人々は目で神を見るだけで、神を精査する機会はなく、人々が持つのは愛着感だけである。心の中で、人々はいつも神は美しいと感じているが、神はとても「つれなく無情」なので、神の前で心の苦しみを語る機会がなかった。人々は夫の前の美しい若い妻のようである。夫の高潔ゆえに、彼女は本当の気持ちを打ち明ける機会が一度もなかった。人々は自らを蔑む卑しい存在である。人々はそのはかなさ、自尊心の欠如のため、人に対するわたしの憎しみは無意識のうちに幾分増え、わたしの心の怒りは爆発する。わたしの心は、まるでトラウマを負ったかのようである。わたしは随分前に人に対して希望を失ったが、「再び、わたしの日が人類の上に迫り、再び、人類を目覚めさせ、人類は新たな始まりを迎える」ため、わたしは再度勇気をふりおこし、すべての人を征服し、赤い大きな竜を捕らえて敗北させる。神の本来の意図は以下の通りである。中国にいる赤い大きな竜の子孫を征服する以上のことは何もしない。これだけのことで赤い大きな竜の敗北とみなされ、赤い大きな竜の征服であり、地上の王として神が君臨することを証明するのに十分なのはこれのみであり、神の偉業の達成を証明し、そして神は新たな始まりを迎え、地上で讃えられる。最後の場面の美しさ故に、神は心の中の熱情を表現せずにはいられない。「わたしの心臓が拍動し、その鼓動にしたがって、山々が喜びに飛び上がり、水が喜びに踊り、波が律動し、岩礁を叩く。わたしの心にあるものを言い表すのは困難だ」。これにより、神が計画したことを、神がすでに達成したことが分かる。それは神によって事前に決められていて、そしてそれはまさに神が人々に体験させ見させるものである。神の国の展望は美しく、神の国の王は勝者であり、頭からつま先に

至るまで肉や血の痕跡がなく、そのすべては神聖である。その全身は神聖な栄光で輝き、人の考えで汚されておらず、上から下に至るまでその全身は義と天のオーラに満ちあふれ、魅力的な香りを放つ。「雅歌」の愛された人のように、神はあらゆる聖人よりもさらに美しく、古代の聖人よりも気高く、神はすべての人の中の模範であり、人に比べられない。人々は神を直接見るには堪えない。誰も神の輝かしい顔、神の姿、または神の形になることはできず、誰も神と競うことはできず、誰も口で軽々しく神の輝かしい顔、神の姿、または神の形を賞賛することはできない。

神の言葉には終わりが無い。泉から湧き出る水のように、神の言葉は尽きることがなく、神の経営（救いの）計画の奥義を推測することは誰にもできない。しかし、神にとってそのような奥義は無限である。異なった方法と言葉を使って、宇宙全体の再生と完全なる変容について神は何度も語り、そのたびに深遠さは増していった。「わたしは、わたしの視線ですべての穢れたものが燃えて灰となり、不従順の子らがみな、わたしの目の前から一掃され、もはや存在しなくなることを望む」、なぜこのようなことを神は繰り返して言うのか。人々がこうしたことにうんざりするのを神は恐れていないのか。人々は神の言葉のただ中で模索するのみで、このようにして神を知りたいと願い、しかし人々自らを考察することを決して思い起こさない。それゆえ神はこの方法を用いて、人々自身を知るように思い起こさせ、そうして人々が自らを通して人の不従順を知るようになり、自らの神に対する不従順を根絶するようになる。神が「清めと分類」を望んでいることを読んで知ると、人々の気分はすぐに不安になり、筋肉も動きを止めるようである。人々はすぐに神の前に戻り、自分自身を批判し、神を知るようになる。このあと、人々が態度をはっきりさせると、神は機会を利用して、人々に赤い大きな竜の本質を示す。そうして、人々は霊的領域に直接関わり、人々の決意が演じる役割によって人々の心も役割を担うようになり、人と神の間の感情も増す。これは肉における神の働きにはより大きな利益である。このようにして、人々は無意識のうちに過ぎ去った日々を振り返りたいと願う。過去、何年ものあいだ、人々は漠然とした神を信じ、何年ものあいだ、決して心の中で自由になることはなかった。大いなる喜びを持たず、神を信じているものの、人々の生活に秩序はなかった。人々が信仰を持つようになる前と変わらないかのように、人々の生活はやはり空しく絶望的で、当時の信仰は一種のもつれであり、信じていない方が良かったかのようにであった。人々は今日の実際の神自身を見たので、天と地が再び新たにされたかのようにであった。人々の生活は輝き、もはや希望がないということはなくなり、実際の神の到来のために、人々は心の中で不動を感じ、霊には

平安を感じる。もはや人々は自らの行いに風を追わず、影を掴まず、人々の探求は無意味ではなく、ばたばたすることはない。今日の生活はさらに美しく、人々は思いがけなく神の国に入り、神の民の一人となり、そしてその後は……心の中で人々が思うほど甘美は大きくなり、人々が思うほど人々はさらに幸せになり、神を愛するようさらに鼓舞される。それだから、人々が気づかないうちに、神と人の間の友情は強くなる。人々は神をさらに愛し、神をさらに知り、人の中の神の働きはますます容易になり、もはや人々を強制することではなく、自然の流れに従い、そして人は自分固有の機能を果たす。こうして初めて、人々はしだいに神を知ることができるようになる。これは神の知恵以外の何物でもない。それはわずかな努力も伴うものではなく、人の本性にふさわしいものとして力を発揮する。それだから、この瞬間に神は言う。「わたしが人間の世界で受肉したとき、人間はわたしの導きの手に従って、知らず知らずのうちにこの日に至り、それと知らぬうちに、わたしを知るようになった。しかし、前に続く道をどう歩むかということは、誰にもわからない、誰も知らない。まして、その道がどこに続いているかは、誰も見当がつかないのだ。全能者の見守りがあってはじめて、人はその道を最後まで歩むことができる。東の稲妻に導かれてはじめて、人はわたしの国の敷居を跨ぐことができる」。これは上述の人の心の中に関して書いたことの要約ではないか。ここに神の言葉の秘密がある。人が心の中で考えることはまさに神の口から語られたものであり、神の口から語られるものはまさに人が渴望するものである。これはまさに人の心を露わにするのに神が熟達しているところである。もしそうでなければ、どうすれば人々がみな心から信じるだろうか。これは、神が赤い大きな竜を征服する際に達成したいと望んでいる効果ではないか。

実際、神の意図がそれらの表面的な意味を示すものではない言葉が数多くある。神の多くの言葉で、神はただ意図的に人々の観念を変えて、人々の注意をそらしている。神はこれらの言葉にいかなる重要性も付加しておらず、それだから多くの言葉は説明に値するものではない。神の言葉による人の征服が今日到達したところに到達すると、人々の力はある点に達し、神はその後、さらに多くの警告の言葉を発する。それは神の民に発する憲法である。「地上に生きる人間は星の数ほど多いが、わたしは全員を自分の手のひらのように、よく知っている。また、わたしを『愛する』人間もまた海の砂のように多いが、わたしに選ばれたものはごく少数だ。わたしを『愛する』人々とは違い、まばゆい光を追い求める者だけだ」。神を愛していると言う人は確かに多いが、心で神を愛する人はほとんどいない。それは目を閉じていても明確に分かるかのようである。こ

れが神を信じる人々の世界全体の実際の状況である。これにより、今や神は「人々を分類する」働きを始めたことがわかり、それは神が求めるもの、そして神を満足させるものが今日の教会ではなく、分類の後の神の国であることを示している。今の時点で、神はすべての「危険物」にさらなる警告を発する。神が行動しない限り、神が行動するやいなやこれらの人々は神の国から拭い去られる。神は物事をおざなりに行わない。神は常に「ひとつはひとつ、ふたつはふたつ」という原則に従って行動し、見たくない人々がいればそうした人々を除去すべくあらゆることを行い、そうした人々が将来問題を起こさないようにする。これは「ごみの除去と徹底的な清掃」と呼ばれている。神が人に対する行政を発表するのは、神が神の奇跡的な行いを示し、神の中にあるすべてのことを示すその時である。そして、神はこう述べる。「山々には無数の獣がいる。しかし、彼らはみな、わたしの前では羊のように穏やかだ。海の底には計り知れない神秘が潜んでいる。しかしそれらは、わたしには地上のすべての物事同様、明瞭に見える。天には人間がけっして到達できない領域がある。しかし、わたしはそうした到達不能の場所を自由に歩き回る」神の意味は次ようである。人の心はすべてのものよりも偽るものであり、人々の観念にある地獄のように、一見すると無限に怪しげであるとしても、神は人の実際の状態を神の手の甲のように知っている。すべてのもののの中で、人は野生の獣よりも激しくて残忍な動物だが、神が人を征服したため、誰もあえて立ち上がり反抗しようとはしない。実際、神の意味として、人々が心で考えることはあらゆる事柄の中のすべてのものよりも複雑で、推測できないが、神は人の心を気にかけない。神は神の目の前の小さな虫として人を扱う。自らの口から発せられる言葉をもって、神は、望むならいつでも人を征服し、その手のわずかな動きで人を打ち、人を罰し、意のままに人を断罪する。

今日、人々はみな暗闇の中にあるが、神の出現のために神を見た結果、人々は光の本質を知るようになる。世界のいたるところで大きな黒い鍋が地上でひっくり返ったようである。誰も息をすることはできず、人々は皆状況を元に戻したいと思うが、黒い鍋を持ち上げた人はいない。これはひとえに神の受肉のためであり、それにより人々の目が突然開かれ、人々は実際の神を目撃し、そうして神はいぶかしげに人々に尋ねる。「人間はけっして光の中でわたしを認識しておらず、闇の世界でだけ、わたしを見ている。あなたがたは、今も同じ状況にあるのではないか。赤い大きな竜が最大の猛威を振るっているときに、わたしは働きを始めるために正式に受肉した」霊的な領域で何が起きているのかを神は隠さず、人の心に起きていることを隠さず、そうして神は繰り返し

人々に思い出させる。「わたしは、わが民が受肉した神を知ることができるようにしているだけではなく、わが民を清めるためにそうしているのである。わたしの行政の厳しさにより、大多数の人々はまだ、わたしに除かれる危険がある。あなたがたが精一杯自分を取り扱い、自分の体を抑制する努力をしない限り、そうしない限り、必ずわたしの嫌い捨てる存在になり、地獄に投げこまれる。パウロがわたしの手から直接刑罰を受けたのと同様、それは逃れようがない」そのように神が言うほど人々は自らの歩みに慎重になり、人々は神の行政を恐れる。このようにして初めて神の権威は力を発揮し、神の威厳が明白になる。ここで再びパウロが言及され、それにより人に神の意志を理解させる。人々は神に罰せられる人々であってはならず、しかし神の心を大切にする人々でなければならない。そうすることが唯一、恐れの中にあって、神の前での人々の決心が神を完全に満足させなかったと人々に思い至らせ、そして人々にさらに大きな後悔をもたらし、実際の神に関するより多くの認識を与え、そうして初めて人々は神の言葉に疑いを持たなくなる。

「人間は単に肉におけるわたしを知らないだけではなく、さらに悪いことに、肉の体をもつ自分というものを理解することができずにいる。何年もの間、人間はわたしを欺き、わたしをよそから来た客人として扱ってきた。何度……」こうした「何度」により、神に対する人の抵抗の現実が列挙され、人々に刑罰の実例を示す。これは罪の証であり、再び論駁することは誰もできない。人々はみな日常的なもののよう神を使い、それはあたかも神は人々が望むままに使うことのできる日用品のようである。誰も神を大切にしない。誰も神の美しさと栄光に満ちた顔を知ろうとしたことはない。ましてや、神に服従しようとする者などいない。心で愛するものとして神を見た者もない。人々はみな必要なときに神を引きずり回し、必要でないときには傍らに投げつけて神を無視する。まるで人にとって神は人形であり、人が自由に操作できるもので、人が望み希望する何であれ、要求できるかのようである。しかし神は言う。「わたしが受肉していた間、人間の弱さに同情していなければ、すべての人間は、わたしが受肉したというだけで怯えきり、その結果、ハデスに落ちていただろう」これは、神の受肉の意義がどれほど大きいかを示す。肉となった神は、霊的な領域から全人類を根絶するのではなく、人を征服するために来た。そのため、言葉が肉となった時、それを知る者はひとりとしていなかった。もし神が人の弱さを気遣わず、神が受肉した時に天と地が逆さまになったなら、すべての人々は絶滅しているだろう。新しいことを好み古いことを嫌うのは人の本性であり、物事がうまくいっていると悪い時を忘れがちで、どれほど祝福されている

のか分からないため、神は繰り返し、今日に至ることがどれほど大変なことであるかを心に銘記するよう、人々に思い出させる。明日のために人々は今日をさらに大切にしなければならず、動物のように高いところへ登り、主人を認めないことがあってはならず、人々が受けている祝福を知らないことがあってはならない。こうして人々はよく振る舞い、もはや傲慢でも高慢でもなくなり、人の本性が良いのではなく、神の憐れみと愛が人に与えられていることを知るようになる。人々は刑罰を恐れ、あえてそれ以上何もしようとはしない。

脚注

- a. 中国語で、「楚河」は歴史上の出来事に由来する言葉で、国境や戦線を指すために使われる。

第十三章

神は赤い大きな竜の子孫をすべて憎み、赤い大きな竜をそれ以上に憎む。これが神の心の中にある激しい怒りの根源である。神は赤い大きな竜に属するすべてのものを炎の湖、地獄の業火に投げ込み、焼き尽くしてしまいたいように思われる。神が自ら手を伸ばして直接拭い取ってしまいたいように思われるときさえある——そうしなければ心の中の憎しみを消し去ることができないかのようである。赤い大きな竜の住み家にいる者は誰でも人間性を持たない獣であり、そのため神は怒りを強く抑えて次のように言う、「わが民全員の中で、また、わたしの子ら全員の中で、つまり、全人類の中からわたしの選んだ者の中で、あなたがたは最も低いグループに属している……」。神は赤い大きな竜の国で竜と決定的な戦いを開始しており、神の計画が実を結ぶとき、竜を滅ぼし、竜がこれ以上人類を墮落させたり、人類の魂を破壊したりするのを許さないだろう。神は毎日、眠っている神の民を救うために彼らに呼び掛けるが、彼らは皆睡眠薬を飲んだかのようにぼんやりした状態にいる。神が彼らを一瞬でも目覚めさせなければ、彼らは睡眠状態に戻り、まったく気づかない。神の民全員のうち、三分の二は麻痺しているようである。彼らは自分が必要とするものも、自分の欠点も知らず、何を着るべきか、何を食べるべきかさえわからない。このことから、赤い大きな竜が人々を墮落させるために努力を振り絞ってきたことが見て取れる。竜の醜さは中国の全地域に広がっており、人々は苛立ち、もはやこの退廃的で、がさつな国に留まることを望んでいない。神が最も嫌うのは、赤い大きな竜の本質であり、そのため、神は一日も欠かさず怒りの中で人々に思い出させ、人々は毎日神の怒りの眼差しにさらされて暮らしている。たとえそうであっても、大半の人々はまだ神を探し求めることがわからず、ただそこに座ってながめ、手で食べ物を与えられるのを待っている。飢え死にしそうでも、彼らは進んで自分

の食べ物を探しに行こうとしない。人々の良心はサタンによってとくに墮落させられており、本質的に冷酷な心になってしまっている。神が次のように言うのももっともである。「わたしが促さなければ、あなたがたはいまだに目覚めず、冬眠しているかのように、凍ったような状態のままでいただろう」。人々は冬眠して冬を過ごしており、食べることも飲むことも要求しない動物のようである。これがまさに神の民の現在の状態であり、そこで神は、肉の姿の神を光の中で知ることだけを要求する。神は人々が大いに変わることを、あるいは彼らがいのちにおいて目覚ましい成長を遂げることは要求しない。それでも不潔で汚い赤い大きな竜を打ち負かし、神の偉大な力を明らかにするのに十分であろう。

人々が神の言葉を読むとき、彼らが理解できるのは文字通りの意味だけであり、その霊的意味を理解することはできない。「逆巻く波」という表現はすべての英雄を困惑させた。神の怒りが示される時、神の言葉、神の行動、神の性質は逆巻く波ではないだろうか。神が全人類に審判を下す時、それは神の怒りの現れではないだろうか。これはそれらの逆巻く波が効力を生じる時ではないだろうか。人間の墮落のために、逆巻く波の真ただ中に生きていない人がいるだろうか。つまり、神の怒りの真ただ中で生きていない人がいるだろうか。神が人類に大災害を与えたい時、人々が見るものは「渦巻く黒い雲」ではないだろうか。人間の中で大災害から逃げていない人はいるだろうか。神の怒りは豪雨のように激しく降り注がれ、荒々しい風のように人々を吹き飛ばす。人々は皆渦巻く吹雪に出会ったかのように神の言葉を通して清められる。人類にとって最も不可解なのは神の言葉である。神は言葉を通して世界を創り、言葉を通して全人類を導き、清める。そして最後に神は言葉を通して全世界の清さを取り戻すだろう。神の霊の存在が空虚でないことは、神の言葉のあらゆる部分に見て取ることができる。人々が生き残る道のほんの少しでも見ることができるのは神の言葉の中だけである。神の言葉にはいのちの糧が含まれているので、人々は皆神の言葉を大切にすることができる。人間が神の言葉に集中すればするほど、神は人間に多くの問題を提示するだろう――このため彼らはすっかり当惑し、答える時間がない。神の一連の質問は、それ自体が、人々を長時間あれこれ考えさせるに十分であり、その他の神の言葉も言うまでも無い。神においては、すべては豊かで充分であり、欠けているものは何もない。しかし、人々はあまり享受することができず、神の言葉の表面的な面を知るだけで、いわば鶏皮を見ることはできるが鶏肉を食べることはできないかのようである。これは人々が幸運に欠け、神を享受することができていないことを意味する。人々の観念では、それぞれが心の中に

一定の神を抱いており、そのため、誰も漠然とした神とは何か、あるいはサタンの姿はどんなものかまったくわからない。そこで、神が「あなたの信じるものは、サタンの姿でしかなく、神自身とは何らの関わりもないからだ」と言ったとき、人々は皆長年にわたり信じていたにも関わらず、自分たちが信じていたのが神自身ではなくサタンであったことに気づかなかったことに啞然とした。彼らは突然喪失感を感じたが、何と言ったらいいかわからなかった。その時、彼らは再び混乱し始めた。このように働くことによってのみ、人々は新しい光をよりよく受け入れることができ、その結果古いものごとを否定することができる。それらがどんなによく見えても、古いものは役に立たないだろう。人々が実践の神自身を理解するには、そう働くことがより有益なのだ。それによって人々は自分の観念を抱く状態から解放され、神自身のみを占領してもらうことができるようになる。このようにしてようやく受肉の意味が達成され、人々は自分自身の目で実践の神自身を知ることができる。

神は人々に何回も霊的世界の状況について語ってきた。「サタンがわたしの前に来ても、わたしは、その醜悪さに後ずさりなどしないし、そのおぞましさに怯えたりしない。ただ無視する」。このことから人々が理解したことは現状だけであり、霊的世界の真実は知らない。神は肉の姿になったので、サタンはあらゆる方法を用いて神を非難し、このように神を攻撃しようとしている。しかし、神はこのために退却したりはしない——神はひたすら人類の中で語り、働き、人々が肉となった神の姿から神を知ることを許している。サタンは怒りで目を赤くし、神の民を否定的にさせ、退却させ、迷わせようとすら考えて必死に努力した。しかし、神の言葉の効果のために、サタンは失敗し、さらに猛り狂うようになった。このため神はすべての人々に思い起こさせるために次のように言った。「あなたがたが活着ている間に、このような状況に出会う日が来る。あなたは進んでサタンに捕らわれるのか。それとも、わたしに得られるのか」。人々は霊的世界で起こることに気づいていないが、このような言葉を神から聞くとすぐに、用心し、恐れる——このことはサタンの攻撃を撃退するが、それは神の栄光を示すのにふさわしいことである。人々はずっと以前に新しい働き的手段に入っていたが、まだ神の国での生活を明確に理解していない——たとえ理解しても、彼らには明瞭さが欠けている。そこで、人々に警告を発したあと、神は彼らに神の国での生活の本質を伝えた。「神の国での生活は、民と神自身との生活だ」。神自身が肉の姿なので、第三の天の生活はこの地上で達成された。これは神の計画であるだけでなく、神によって達成もされている。時が経つにつれて、人々は神自身をますます知るようになり、そのため、いっそう天

の生活を味わえるようになる。彼らは、神は地上にあり、天の漠然とした神ではないことを本当に感じたからである。そこで、地上の生活は天の生活のようなものである。現実には、神が肉の姿になり、人間社会の苦しみを味わっていることであり、肉の体で苦しみを味わうことができればできるほど、実践の神自身であることが証明される。それゆえ、今日の神の実践性を証明するには以下の言葉で十分である。「わたしの住むところ、そこにわたしは隠れているのだが、それでも、その住まいですべての敵を打ち破った。わたしの住むところでは、地上に生きるということを真に体験した。わたしの住むところでは、人間のあらゆる言葉と行いとを観察し、全人類を見守り、采配を振るっている」。実際に肉の身で生活し、実際に肉の身で人間生活を経験し、実際に肉の身の中から人間のすべてを理解し、実際に肉の身で人類を征服し、実際に肉の身で赤い大きな竜との決定的な戦いを行い、肉の身で神の働きを全て行うこと——これがまさに実践的神自身の存在ではないだろうか。しかし、人々が神によって語られたこれらの普通の言葉に隠されたメッセージを見る人々はほとんどいない。彼らはさらっと聞くだけで、神の言葉が貴重なことも、希少であることも感じない。

神の言葉はとてもうまく移行する——「眠りこけている人間たちは」という語句は神自身の説明をすべての人類の状態の説明へと移行させる。ここで「冷たい光の輝き」が表わすのは東方の稲妻ではなく、神の言葉、つまり、神の働きの新しい方法のことである。このように、人々のあらゆる種類の原動力をこの中に見ることができる。新しい方法に入ったあと、彼らは皆方向感覚を失い、どこから来て、どこへ行くのか、わからない。「たいていの人はレーザーのような光線に打たれ」という語句は、新しい方法を通じて除去された人々、試練に耐えられない人々、あるいは苦しみの精錬に耐えられない人々で、そのため、底なしの穴に再び投げ込まれる人々のことを表す。神の言葉は人類をある程度まで暴露する——人々は神の言葉を見る時、恐れるようであり、銃身が直接心臓に向けられているのを見たかのようにあえて何も言わない。しかし、神の言葉には良い事柄があることも感じている。彼らの心はひどく葛藤しており、どうしたらいいかわからないが、その信仰ゆえに、神に捨てられる恐怖からひたすら自らを研ぎ澄まし、神の言葉を掘り下げる。神が次のように言う通りである。「この状態にいないものはいらるだろうか。わたしの光の中にいないものなどいるだろうか。たとえ強い人であっても、あるいは自分は弱いと思っていても、どうしてわたしの光の到来を免れようか」。神が誰かを用いるなら、たとえその人が弱くとも、神は刑罰の中で彼らに光をあて、啓き、その人が神の言葉を読めば読むほど、神をいっそう理解し、ますます崇敬するように

なり、向こう見ずなことをしなくなる。人々が今日まで来ることができたのはひたすら神の偉大な力があったからである。人々が神を畏れるのは、神の言葉の持つ権威ゆえ、つまり、神の言葉の中にある霊ゆえである。神が人類の真の顔を明らかにすればするほど、彼らは神に畏敬の念を抱き、神の存在の現実を確信する。これは人類が神を理解するために神が示す行路の標識である。これは人々がたどるために神が与えた経路である。あなたがたがこのことを注意深く考えれば、その通りであると思わないだろうか。

上記が示しているのは、人類の目の前にある道の標識ではないだろうか。

第十四章

人間は神の言葉からまったく何も理解していない。それどころか、それらを表面的に「大切」にするだけで、本当の意味はわかっていない。したがって、大半の人は神の発する言葉を好んでいるが、実は大切にしていると神は指摘する。その理由は、神の見たところ、神の言葉は宝なのに、人々がその真の甘さを味わっていないためである。それゆえ、彼らは言わば「梅干しを想像して喉の渴きを癒し」、それによって強欲な心を静めることしかできない。神の霊がすべての人のあいだで働きを行なっているだけでなく、もちろん人々は神の言葉による啓きも授かっている。ただ人々はあまりに軽率なので、その本質を本当に理解することができないのだ。人々は心の中で、今は神の国が完全に実現されつつある時代だと考えているが、実際はそうではない。神が預言するのは神がすでに成し遂げたことであるが、実際の神の国はまだ完全には地上に到来していない。それどころか、人類の変化と共に、働きの進展と共に、そして東方からやって来る稲妻と共に、つまり神の言葉が深まるのと共に、神の国はゆっくりと地上に現われ、徐々にではあるが完全に地上へと降臨する。神の国が降臨する過程は、地上における神性の働きの過程でもある。一方、神は全宇宙において、歴史上のどの時代にもなされたことのない働きを始めた。つまり、地を丸ごと再編するという働きである。例えば、イスラエルという国の変化、アメリカ合衆国の政変、エジプトの変化、ソ連邦の変化、中国の崩壊など、驚異的な変化が宇宙の至るところで起きている。ひとたび全宇宙が落ち着き、正常な状態に戻ると、地上における神の働きは完了する。それはつまり、神の国が地上に降臨するときである。これが「世界のすべての国々が分裂すると、そのときこそ、わたしの国が確立され、形作られ、また、わたしが変容して全宇宙に向き合うときである」という言葉の本当の意味である。神は人類に一切隠し立てをせず、人々に神の豊かさのすべてを絶えず語ってきたが、彼らはその意味を理解できず、愚か者のように神

の言葉をただ受け入れるだけである。この働きの段階において、人間は神の計り知れなさを学んだ。その上、神を理解するという課題の難しさを今や認識することができる。このため人々は、神を信じるのは他の何より難しく、豚に歌を教えるのと同じようなことだと最近になって感じている。彼らは完全に無力であり、まるで罠にかかった鼠である。実際、人にどれほど力があるろうと、どんなに技量が優れていようと、あるいは、人が無限の能力を有していようと、神の言葉のこととなると、そうしたことには何の意味もない。神の目から見て、人類は燃やした紙の灰の山に過ぎず、使い道がないのは言うまでもなく、まったく何の価値もない。そのことは、「人の目から見て、わたしはますます隠され、ますます計り知れないものになっていった」という言葉の真意を完全に説明している。このことから、神の働きの自然の成り行きに従っており、人間の知覚器官でも認知できるものに沿って行なわれることは明らかである。人類の本性が確固として揺るぎないとき、神が発する言葉は完全に彼らの観念と一致し、そうした観念は神とまったく同一で、違いは皆無であるように思われる。これによって人々は「神の現実性」に多少気づくが、それが神の主たる目的ではない。神は地上における真の働きを正式に始める前に、人々を落ち着かせている。したがって、人々を非常に混乱させるこの初まりの段階において、彼らは自分たちの以前の考えが間違っていたこと、神と人類が天と地ほどに異なっており、まったくもって同じではないことに気づきつつある。神の言葉はもはや人間の観念に基づいて評価することができないので、人間はすぐに神を新たな角度から見始め、結果として、驚きのまなざしで神を見つめる。それはまるで、実際の神は目に見えず触れることもできない神と同じくらい近づきがたく、受肉した神の肉体は単なる外殻にすぎず、そこに本質はないかのようである。受肉した神は霊の化身だが、いつでも霊の姿に戻り、漂いながら去ることができるというのだ。したがって、人々は多少の警戒心を抱いた。神について話すとき、人々は神を自分の観念で飾り立て、神は雲や霧に乗ったり、水上を歩いたり、人間の中に突然現われたり、消えたりすることができると主張する。中にはさらに具体的な説明をする人もいる。人々は無知で洞察力に欠けているので、神は次のように語った。「わたしに抵抗したり、わたしの行政に違反したりしたとしても、わたしはやはり見ないことにする」。

神は無類の正確さで人類の醜い顔つきと内なる世界を暴き、そこに狂いは一切ない。神が間違えることなどまったくないとさえ言える。これは人々を完全に納得させる証拠である。神の働きの背後にある原理のために、神の言動の多くは消すことのできない印象を与え、それゆえ人々は、あたかも神の中により貴重なものを見つけたかのように、神

への理解をさらに深めるものと思われる。「人間の記憶では、わたしは人々を罰するのではなく、むしろ慈悲を示す神であるとか、言うことが当てにならない神自身だということになっている。そうしたことはみな人間の考えから生み出された想像であり、事実と一致していない」。人類が神の本当の顔を重視したことはないものの、彼らは「神の性質の側面」を掌を指すかのように知っており、いつも神の言葉や行動のあら探しをしている。なぜなら、人々は絶えず否定的な事柄に注意を払おうとし、肯定的な事柄は無視した上で、神の業をただ見下しているだけだからである。自分は住みかの中で謙虚に身を隠すと神が言えば言うほど、人類は神に対してますます大きな要求をする。彼らは次のように言う。「受肉した神が人類のすべての行ないを観察し、人間の生活を経験しているなら、たいていの場合、わたしたちの実情について知らないのはなぜだろう。神が本当に隠れているという意味なのか」。神は人間の心の奥底を見通すが、それでも人類の実情に合わせて働きを行ない、漠然としてもいなければ超自然的でもない。人類の古い性質を完全に取り除くべく、神は努力を惜しまず様々な観点から語りかけ、人々の真の本性を暴き出し、彼らの不服従に裁きを下した上で、ある時にはすべての人に対処すると言い、次にはある集団の人々を救うと述べてきた。神は人類に要求を出したり、彼らに警告したりする。そして彼らの臓器を解剖して治療することもある。このように、神の言葉による導きの下、人はまるで地球の隅々まで旅をして、一本一本の花がもっとも美しく咲こうと張り合っている、豊穡なる庭に入り込んだかのようなのである。神が何を言おうと、人類は神の言葉へと入るだろう。それはあたかも、神が鉄分を含むものを引き寄せる磁石であるかのようなのだ。「人間はわたしを無視しているのだから、わたしも彼らをまともには扱わない。人間はわたしに無関心なのだから、わたしも彼らのためにこれ以上努力して働きを行なう必要はない。これは両者にとって得なことではないか」という言葉を読んだ神の民は、みな再び底なしの穴に叩き落とされるか、再度急所を叩かれて完全にショックを受けたような状態になる。こうして彼らは再びその方法に入るのである。そして次の言葉についてとりわけ混乱する。「わたしの国でわが民の一員として自分の本分を尽くせないのなら、わたしに嫌われ捨てられる」。ほとんどの人は傷つくあまり涙を流し、このように考える。「わたしは底なしの穴から這い出そうと苦労したのに、もしまた穴に落ちたらまったく望みが一切なくなるだろう。わたしは人間世界で何も得られず、人生のあらゆる困難や苦難を経験してきた。とりわけ信仰に入ってから、愛する者たちに見捨てられ、家族から迫害を受け、世間の人々から中傷されており、世の中の幸せを享受したことがない。もしも再び底なしの穴に落ち込んだら、わたしの人生はなおいっそう空しいものになるのではないか」（このように考えれば考える

ほど、人の悲しみは増してしまう)。「わたしの望みのすべては神の手に委ねられている。もし神に見捨てられるなら、今すぐ死んだほうがましだ……。さて、すべては神によって予定されているのだから、今わたしにできるのは神を愛することを追求するだけで、他はどれも二次的なことだ。誰がこうしたことをわたしの運命にしたのだろう」。このように考えれば考えるほど、人々は神の基準と神の言葉の目的に近づく。このようにして、神の言葉の目的は達成される。神の言葉を目にした後、人はみな内なる観念的葛藤を経験する。運命が命じることに従うしか選択肢はなく、このようにして神の目的は達成される。神の言葉が厳しければ厳しいほど、結果として人類の内なる世界は複雑になる。これはちょうど傷口に触れるようなものである。つまり、傷口に強く触れれば触れるほど、痛みはいっそう激しくなり、生死のあいだをさまよって生き延びる自信さえ失うほどになる。このように、この上なく苦しみ、絶望の深みにいる時に限り、人は自分の本当の心を神に委ねることができる。人間の本性は、ほんの少しでも望みが残っていれば神に助けを求めようとせず、その代わりに自然と生き延びるべく、自主的な方法を採用しようとするものだ。なぜなら、人類の本性は独善的であり、人々は他の全員を見下しがちだからである。このため、神は次のように語った。「安楽な状態にあるときにわたしを愛せた者は一人もいない。安らかで幸福な時に、喜びを分かち合おうと、わたしに手を差し伸べた者は一人もいない」。これは実に嘆かわしいことである。神は人類を創造したが、神が人間世界に来ると、人々は神に抵抗しようとし、あたかも神が世界を放浪する孤児か、国を持たない俗世の人間のように、自分たちの領土から追い払おうとする。誰も神に愛着を覚えず、誰も真に神を愛さず、誰も神の到来を歓迎したことがない。それどころか、神の到来を見ると、彼らの嬉しそうな顔は瞬く間に曇ってしまう。それはまるで、迫り来る嵐に突然遭ってしまったか、神が自分の家族の幸せを奪ってしまうかのようであり、神は決して人類に祝福を与えず、その代わりにただ人類に不幸をもたらしたかのようである。ゆえに人の考えの中で、神は恩恵でなく、むしろ自分たちを常に呪う存在なのだ。そのため、人々は神を気に留めず、歓迎することもなく、いつも神に対して冷淡であり、常にそうあり続けてきた。人はこうした事柄を心に抱いているので、人類には理不尽で不道德だと神は言い、人間が備えているはずの感情でさえ彼らの中に感じられないと言う。人は神の感情にまったく配慮を示さず、その代わりにいわゆる「義」を使って神に接する。彼らは長年にわたってこのようであり、そのため神は彼らの性質は変化していないと言った。そのことは、彼らが一握りの羽根ほどの実体しか有していないことを示すことになる。人間は自身を大切にしないので、価値のない見下げ果てた者だと言える。自分を愛することさえなく、それどころか自分を踏

みにじるなら、自分に価値がないことを示しているのではないか。人類は自分をもてあそび、進んで他人に汚されようとする不道德な女性のようなものである。たとえそうでも、人々は自分がどれほど卑しいかいまだにわからない。彼らは他人のために働くことや、他人と語らうことに喜びを感じ、こうして自ら他人の支配下に入る。これはまさに人類の汚さではないか。わたしは人類のあいだで人間の生活を経験していないし、真に人生を経験していないが、人間のあらゆる動き、あらゆる行動、あらゆる言葉、あらゆる行ないを極めて明確に理解している。わたしは人をこの上ない羞恥に晒し、彼らがもはや自分の陰険さを示したり、自分の欲望に譲歩したりしないようにすることさえできる。殻の中に引っ込むカタツムリのように、彼らはもはや自分の醜い状態をあえてさらけ出しはしない。人は自分自身を知らないのも、その最大の欠点は、醜い顔つきを見せびらかしながら他人の前で自分の魅力を振りまこうとすることであり、これは神がもっとも嫌うことである。なぜなら、人間同士の関係が異常で、正常な人間関係が存在せず、ましてや人と神との正常な関係などないからである。神は多くを語ってきたが、そうする中で、神の主たる目的は人々の心の中に一定の場所を占めることであり、それによって人々がそこに巣くうすべての偶像を取り除けるようにすることなのだ。その結果、神はすべての人に力をふるい、地上に存在する目的を達成することができる。

第十五章

神と人との最大の違いは、神の言葉は常に物事の核心にまっすぐ切り込み、何一つ隠さない点にある。ゆえに、神の性質のこの側面は、今日の最初の一文に見て取ることができる。それは人の素顔を暴くと同時に神の性質を公然と明かす。これが、神の言葉が成果を挙げ得ることに関する諸側面の根源なのである。しかし、人はそれを把握できず、単に神の言葉を通じて自己認識するようになるばかりで、神を「分析」したことはない。それはあたかも、神を怒らせることを恐れている、あるいは自分の「注意深さ」のせいで神に殺されるのを恐れているかのようである。実のところ、大半の人は神の言葉を飲み食いするとき、肯定的な視点からでなく否定的な視点からそうしている。人はいま、神の言葉による導きのもと、「謙虚さと服従に集中」し始めたと言えるだろう。そのことから、人が別の極端に走り始めた、つまり神の言葉にまったく注意を払わなかったのが、過度に注意を払い始めたのは明らかである。しかし、肯定的な視点から入った者は誰一人おらず、神が人に神の言葉に注意を払わせるうえで何を目標にしているのかを真に把握した者もない。神が述べることから、神は教会生活を自ら経験せずとも、教会にいる全員の実情を誤りなく正確に理解できることがわかる。彼らは新たな方法へ

の入りを成し遂げたばかりなので、否定的な要素を自分から完全には取り除けておらず、教会の中にはいまだ死臭が漂っている。それはあたかも、人は薬を飲んだばかりでまだぼんやりしており、意識が完全に回復していないかのようである。依然として死に脅かされており、そのため恐怖に囚われたまま、自分を超越することができないのだ。「人間はみな自己認識をもたない生き物であり」という言い方は、やはり教会の建設が根底にある。教会の全員が神の言葉に注意を払っているにもかかわらず、自身の本性が深く根を下ろし、取り除けないまま残っている。そのため神は、前の段階と同じように語って人を裁き、思い上がりの中にいる彼らが神の言葉に打たれることを受け入れるようにした。人は底なしの穴で五ヵ月にわたる精錬を経たものの、いまだ神を知らないというのが実情である。依然として放埒で、神を一層警戒するだけだった。この一歩は、人が神の言葉を知る道へと踏み出すうえで、最初の正しい一歩である。したがって、神の言葉の本質と結びつけば、以前の働きが今日のために道を整えたこと、およびいま初めてすべてが正常になったことは容易にわかる。人の致命的な弱点は、個人的な自由を勝ち取り、絶えず束縛されるのを避けるべく、神の霊を肉体から切り離す傾向がある点である。神が人間のことを「楽しく飛び回る」小鳥だと述べるのはこれが理由に他ならない。それが人類全員の実情である。そのためすべての人はごく容易に躓いてしまい、そこで最も道に迷いがちなのである。その中で、人におけるサタンの働きがこの働きに過ぎないのは明らかである。サタンが人々の中でその働きを行なえば行なうほど、彼らに対する神の要求は厳しくなる。神が自身の言葉に意識を集中するよう人に求める一方、サタンはそれを打ち破ろうと懸命に働く。しかし神は、神の言葉にもっと意識を集中させよと絶えず人々に注意しており、それが霊の世界で繰り広げられている戦いのクライマックスである。神が人において行なおうと望むことは、まさにサタンが滅ぼそうとすることであり、サタンが滅ぼそうと望むことは、人を通じて何一つ隠されることなく表わされると言えよう。神が人において行なうことには明確な実例がある。つまり、その人の状態がますますよくなることである。また、サタンが人を滅ぼすことについても、明確な表われがある。すなわち、その人はますます墮落し、状態もさらに落ち込んでゆく。ひとたび状況が十分悪化すると、その人はサタンに囚われてしまう。これが神の言葉において表わされた教会の実情であり、霊の世界の実情でもある。それは霊的領域の動態を反映している。神と協力する信念がなければ、その人はサタンに囚われる危険に晒されている。これは事実である。自分の心を完全に捧げ、神に占められることができるなら、それは「わたしの前にいるとき、わたしに抱かれ、そのぬくもりを味わっているかのようである」と神が述べた通りである。これは、人に対する神の要求が高くない

ことを示している。神が必要とするのは、人が立ち上がって神と協力することだけなのだ。これは簡単かつ喜ばしいことではないのか。すべての英雄や偉人を困惑させてきたことではないのか。それはあたかも、将軍たちが戦場から引き上げさせられ、代わりに編み物をするよう命じられたかのようである。これら「英雄」たちは苦難のせいで動けなくなり、何をすべきかわからないのだ。

人に対する神の要求のうち、どの側面が最も大きかろうと、人に対するサタンの攻撃が最も激しいのはその側面においてであり、ゆえにすべての人の状態はそれに応じて明らかにされる。「わたしの前に立つあなたがたの誰が、降りしきる雪のように白く、翡翠のように無垢であるだろうか」。すべての人がいまだ神を欺き、神から物事を隠し、依然として自分独自の企みを実行している。彼らは神を満足させるために自分の心を神の手に完全に委ねてはいないが、それでも熱心であることによって神の報酬を得ようと望んでいる。人はおいしいものを食べるとき、神を脇へのけ、そこに立たせっぱなしにし、「処置」されるのを待っている。また美しい服があれば鏡の前に立って自分の美しさに見とれ、心の奥で神を満足させていない。地位があったり贅沢な楽しみがあったりすると、自分の地位にあぐらをかき、それを享受し始めるが、神が高めてくれたおかげだと謙遜することはない。それどころか高い場所に立って立派に響く言葉を語り、神の臨在に注意を払うことも、神の尊さを認識しようと努めることもない。心の中に偶像があったり、心が他の誰かに囚われたりしているとき、それはその人が、神が自分の心の侵入者であるかのように、神の臨在をすでに拒んだことを意味している。神が自分に対する他人の愛を盗み去り、自分は孤独を感じるのではと恐れているのだ。神の本来の意図は、地上の何物によっても人が神を無視せず、たとえ人々のあいだに愛があっても、その「愛」から神を追い払えなくする、というものである。地上の一切の物事は空虚であり、見ることも触れることもできない人間同士の感情さえも例外ではない。神の存在がなければ、すべての被造物は無に帰するだろう。地上では、すべての人に自分の愛する物事があるものの、神の言葉を自分が愛するものとして受け止めた人はいまだかつていない。それにより、神の言葉に対する人の理解度が決まる。神の言葉は厳しいが、誰もそれで怪我をすることはない。人は神の言葉に心から注意を払わず、むしろ花と同じようにそれを眺めるからである。人は神の言葉を、自分の味を確かめる果実のようにには捉えない。だから神の言葉の本質を知らないのである。「仮に人間が本当にわたしの剣の鋭さを見ることができたなら、ネズミのように穴に逃げ込むだろう」。正常な人の状態にある者は、神の言葉を読んで驚愕し、恥ずかしさで一杯になり、他人に顔向けでき

ないはずだ。だが今日、人はまさに正反対であり、神の言葉を他人に打撃を与える武器として使っている。本当に恥知らずなことだ。

神の発する言葉とともに、わたしたちは次の状態へと導かれた。「神の国では、わたしの口から言葉が発せられるだけでなく、わたしの足が各地のいたるところを厳かに踏んで行く」。神とサタンの戦いにおいて、神は途中の各段階で勝利を収めている。そして自身の働きを全宇宙へと大規模に拡大させていて、至るところにその足跡と神の勝利のしるしがあると言えよう。サタンはその企みの中で、国々を分裂させることで神の経営を滅ぼそうと望んでいるが、神はその分裂を利用して全宇宙を再編してきた。とはいえ、消し去ったわけではないのだが。神は日々新しいことをしているが、人はいまだ気づいていない。霊的領域の動態に注意を払わないので、神の新たな働きを見ることができないのだ。「わたしの栄光の輝きの中、宇宙ではすべてが新たなもののよう輝き、まるで人間の想像力が作り出した天の上の天にいて、サタンに煩わされることも、外敵の攻撃にさらされることもないかのよう、五感を恍惚とさせ、精神を高揚させるといふ、心温まる様相を示す」。この一文は、地上におけるキリストの国の喜びに満ちた光景を預言するとともに、第三の天の状況を人類に紹介している。つまり、そこには神に属する聖なるものだけがあり、サタンの勢力による攻撃は一切存在しないということだ。しかし最も重要なのは、地上における神自身の働きの状況を人々に見させることである。つまり天は新たな天であり、それに続いて地も同じく新たにされるということである。これは神自身の導きのもとでの生活なので、人はみな計り知れないほど幸福である。人々の意識の中で、サタンは人の「捕囚」であり、サタンが存在するからといって臆病になることも恐れることも一切ない。神性による直接の指示と導きゆえにサタンの企みはすべて無に帰すが、これはまたサタンがもはや存在せず、神の働きによって消し去られたことも十分に示す。それゆえ、「……天の上の天にいて」と言われるのである。神は「騒乱は決して起きないし、宇宙が分裂したこともない」と述べたとき、霊の世界の状況を指していた。それはサタンに対する神の勝利宣言の証拠であり、神の最後の勝利のしるしである。神の心を変えられる者は誰一人おらず、それを知る者もない。人は神の言葉を読んで真剣にそれを検証してきたが、その本質を表わせずにいる。たとえば、神は次のように言った。「わたしは星々の上を飛び越え、太陽が光を放つと、その温かみをぬぐい取り、ガチョウの羽毛ほどもある巨大な雪を両手から降らせる。しかし、わたしの気が変わると、雪は残らず融けて川になる。たちまち、空の下のいたるところに春が訪れ、若葉の緑が地上の風景を一変させる」。人はこれらの言葉を心の中で想

像できるかもしれないが、神の意図はそう単純なものではない。天下の誰もが茫然としているとき、神は救いの声を発し、それによって人の心を目覚めさせる。しかし、ありとあらゆる災害が降りかかるせいで、彼らは世の荒廃を感じ、それゆえ誰もが死を求め、寒く凍えそうな洞穴の中で暮らす。彼らは猛吹雪の冷氣によって凍てつき、地の温もりがないために生き残れないまでになる。人がますます残酷に互いを殺し合うのは、人の墮落した性質のためである。また教会においては、大多数の人が赤い大きな竜に一飲み込まれるだろう。すべての試練が過ぎたあと、サタンによる妨害は除去される。そうして変化のさなか、全世界に春が訪れ、温もりが地を覆い、世界は活力に満ちるだろう。これらはどれも経営計画全体の諸段階である。神が述べた「夜」とは、サタンの狂気が頂点に達したときのことを指しており、それは夜に起きる。それがいま起きていることではないのか。人はみな、神の光の導きによって生き延びているが、夜の闇の苦痛に晒されている。サタンの束縛から逃れられなければ、永遠に闇夜の中で生きることになるだろう。地上の国々を見よ。神の働きの諸段階のため、地上の国々は「駆けずり回り」、それぞれが「自国にふさわしい終着点を求めて」いる。神の日がまだ来ていないので、地上のすべては泥流の状態に留まっている。神が公然と全宇宙に姿を見せるとき、その栄光はシオンの山を満たし、万物は神の手による采配を受けて秩序正しく整然となる。神の言葉は今日に向けて語られるだけでなく、明日をも預言している。今日は明日の基礎なので、今日について言えば、神の発する言葉を完全に理解できる者は誰もいない。神の言葉が完全に成就して初めて、人はそのすべてを理解できるのだ。

神の霊は宇宙のあらゆる空間を満たしているが、神はすべての人の中でも働きを行なう。このように人の心の中では、あたかも神の姿が至るところにあり、あらゆる場所に神の霊の働きが含まれているかのようである。事実、神が肉において現われた目的は、サタンを体現するこれらの者たちを征服し、最後は自分のものにすることである。しかし、霊は肉において働きを行ないつつ、肉と協力してこれらの人を変えてもいる。神の業は全世界に広がり、神の霊は全宇宙を満たしているが、神の働きの段階ゆえに、悪事をなす者がいまだ懲罰を受けていない一方、善をなす者も依然報われていないと言えるだろう。そのため、神の業は地上のすべての人によって讃えられてはいないのである。神は万物の上と中にいる。さらに、すべての人のあいだにいる。これは、神が実在することを示すのに十分である。神がいまだすべての人の前に公然と姿を見せていないので、彼らは「人間に関する限り……わたしは実在しているようでありながら、実在しないかのようでもある」といった幻想を膨らませてきた。現在神を信じるすべての人のうち

、神が実在することを完全に、百パーセント確信している者はいない。みな三つ疑い二つ信じているのだ。これが人の現状である。今日の人はみな、神の存在を信じてはいるが神を見たことはない、あるいは神の存在を信じてはいないものの、人には解決できない数多くの困難を抱えている、という状況にある。人をがんじがらめにして逃れられなくする何かが常にあるように思える。そのような人は神を信じてはいるものの、絶えず若干の曖昧さを感じているようだ。とは言え、神を信じなければ、神が存在する場合に自分が損害を被るのではと恐れている。これが人の矛盾した心理なのである。

「わたしの名のために、わたしの霊のために、わたしの経営計画全体のために、誰が持てる力をすべて捧げることができるのか」。神はこうも言った。「今日、神の国が人間世界にある時こそ、わたしが自ら人のあいだに来た時である。臆することなくわたしの代わりに戦場へ臨める者が誰かいるだろうか」。神の言葉の目的は、受肉した神が神性の働きを直接行なっていなければ、あるいは神が受肉せず、その代わりに聖職者を通じて働きを行なったとしたら、神は赤い大きな竜を征服することも、人のあいだに王として君臨することも決してできないはずだ、ということである。人は現実には神自身を認識できず、ゆえにサタンが支配するままだろう。したがって、働きのこの段階は神によって直接、受肉した肉体を通じてなされなければならない。その肉が変わったなら、計画のこの段階は決して完了しないはずだ。なぜなら、それぞれの肉の意義と本質が同じはずはないからである。人はその言葉の文字通りの意味しか把握できない。神が根源を握っているからである。神は「それにもかかわらず、結局、それが霊の働きなのか、肉の働きなのか、理解できる者は誰もいない。この一つのことをつぶさに経験するだけでも、人は一生涯を要する」と言った。人は長年にわたってサタンに墮落させられ、霊的な物事への意識をはるか昔に失ってしまった。そのため、神の言葉のわずか一文が人の目にはご馳走なのである。神の霊と人の霊との距離のため、神を信じる者はみな神への思慕を感じ、全員が進んで神と近づき、自分の心を捧げようとしている。しかし、あえて神と接触しようとはせず、ただ畏怖するばかりである。これが、神の霊が持つ魅力というものである。神は人が愛すべき神であり、神の中には人が愛する無限の要素があるので、誰もが神を愛し、神と心を通わせたいと願っている。事実、誰もが心の中に神への愛を抱いているが、サタンによる妨害のせいで、麻痺して頭が鈍い哀れな人々が神を認識できないだけなのだ。そのため神は、人間が神に抱く本当の心情について語った。

「人間は心の奥底でわたしを嫌ったことなど一度もない。むしろ、霊の奥底でわたしにしっかりしがみついている……わたしの実際は人間を呆然とさせ、驚かせ、戸惑わせる

が、それでも人間はそれを進んで受け入れる」。これが、神を信じる人たちの心の奥底の実情である。人が真に神を知るとき、神に対するその人の態度は自然と変わり、自身の霊の働きのおかげで心の奥底から讃美の言葉を発することができる。神はすべての人の霊の奥底にいるが、サタンによる墮落のせいで、人は神とサタンを取り違えてきた。神による今日の働きはまさにこの問題から始まるのであり、霊の世界において、最初から最後まで戦いの焦点であり続けてきたのである。

第十六章

人々にとって、神はあまりにも大きく、あまりにも豊かであり、あまりにも不思議であり、あまりにも計り知れない。彼らの目には、神の言葉は高く上昇し、世界の偉大な傑作のように見える。しかし、人々にはあまりにも多くの欠点があり、心はあまりにも単純で、その上、彼らの受け入れ能力はあまりにも乏しいので、神がその言葉をいかにはっきり語ろうと、彼らはまるで精神病に苦しんでいるかのように、座ったままで動かない。空腹になっても、食べなければならないことがわからず、のどが渴いても飲まなければならないことがわからない。彼らは大声で叫んだり、悲鳴をあげたりするばかりで、まるでその霊の奥底に言葉では言い表せない困難があるかのようなのである。だが、それについて話すことができない。神が人類を創造した時、神の意図は、人間が通常の間性を持って暮らし、神の言葉をその本能に従って受け入れることであった。しかし、そもそも最初の時点で人間がサタンの誘惑に負けたので、今日までその状況から抜け出すことができず、何千年にもわたりサタンが人を騙そうと実行してきた企みを見抜くことができない。それに加えて、人間は神の言葉を十分に知る能力にも欠けている——こうしたことのすべてが現在の状況を招いているのである。今のところ、人々はまだサタンの誘惑の危険の中で暮らしているので、相変わらず神の言葉を完全に理解することができない。正常な人々の性質にはひねくれた点や不正直さはなく、人々はお互いに正常な関係にあり、孤立していないし、その生活は凡庸でもなければ退廃的でもない。そこで神もすべてのものから褒め称えられ、神の言葉は人間の間を広がり、人々はお互い平和に神の配慮と保護のもとに暮らし、地上は調和で満たされ、サタンの妨害はなく、神の栄光が人間の間で最も重要なものになっている。このような人々はまるで天使である。純粹で、活気があり、けっして神について不平を言わず、地上の神の栄光だけに、ひたすら努力を捧げる。今は暗い夜の時である。すべての人が手探りで探し求め、真っ暗な夜のせいで身の毛もよだち、身震いせずにはいられない。じっと耳を澄ませていると、うなりを上げて次々と吹きつける北西の突風に、人間の悲しげなすすり泣きが混じっ

ているように思われる。人々は自分の運命を嘆き悲しむ。なぜ彼らは神の言葉を読みながらも、それを理解することができないのだろうか。まるで彼らの生活が絶望に瀕し、死がすぐそこに来ているかのようであり、彼らの終わりの日が目前にあるかのようである。このようなみじめな状況はまさにかよわい天使たちが神に向かって呼びかけ、自分たちの苦難についてとめどなく泣き叫びながら訴えている瞬間と同じである。このため、神の子らや神に従う人々のもとで働く天使たちは二度と再び人間のところに降りてこようとしな。それは、人の姿をした天使たちがサタンの悪巧みに捕えられて抜け出せなくなるのを防ぐためである。そこで天使たちは人間の目には見えない霊の世界でだけ働く。こうして、神が「わたしが人間の心の中の玉座に就く時は、わが子らと民が地上を支配する時である」と言う時、それは地上にいる天使たちが天にいる神への奉仕という恵みを受けている時を意味している。人間は天使の霊の現れであるので、人間にとって地上にいることは天にいるようなものであり、人間が地上で神に奉仕することは天使が天で直接神に奉仕するようなものであると神は言う――したがって、人間は地上にいる間に第三の天の恵みを受けている。これらの言葉の中で実際に語られているのは、こういうことなのである。

神の言葉には隠されている意味がかなりある。「その時が来れば人々はわたしのことを心深く理解し、わたしを念頭に置くようになるだろう」という言葉は人の霊に向けられている。意志が弱いために、天使たちはいつもあらゆる事で神に頼り、いつも神を慕い、崇拝してきた。しかし、サタンが混乱させるため、天使たちは自分を抑えることができず、自制することができず、神を愛したいと望んでいるのに心の底から神を愛することができないので、苦しむ。神の働きがある時点に達する時だけ、哀れな天使たちの真に神を愛したいという望みが叶い、それゆえに神が上記の言葉を語ったのである。天使たちは、もともと神を愛し、大切にし、従う本質を持っているが、これまで地上でこの本質を発揮できず、現在に至るまで耐えているしかなかった。あなたはこのような今日の世界を見ているのかもしれない。すべての人々の心の中に神がいるものの、人々は自分の心の中にいる神が真の神なのか、あるいは偽の神なのかを識別することができない。彼らはこのような自分たちの神を愛しているが、本当に神を愛することができない。これはつまり、自制することができないという意味である。神によって明らかにされる人間の醜い顔は霊的領域のサタンの真の顔である。人間は本来無邪気で罪がなかった。したがって人間の墮落した、醜い態度はすべて霊的領域におけるサタンの行動であり、霊的領域の進展の正確な記録である。「今日、人々は資格を得ると、わたしの前を意

気揚々と歩き、心のままにわたしとともに笑い、冗談を言い合えるものと信じている。そして対等の者としてわたしに話しかける。それでも人間はわたしを知らないのだ。それでいて、自分たちは本質的にわたしと対等であって、等しく肉と血をもち、人間の世界に住んでいると信じている」これはサタンが人間の心に対して行ったことである。サタンは神に反対するために人間の概念と肉眼を利用するが、神はこうしたサタンの行動について明快に人間に語り、人間がこのような大災害に逢わないように図る。すべての人々の致命的弱点は、彼らが「血と肉だけを見て、神の霊は見ない」ことである。これはサタンが人間を誘惑するときの一側面の基盤となっている。人々はこの肉にある霊だけを神と呼ぶことができると信じている。今日、霊がそのまま肉になり、実際自分たちの目の前に現れていると信じる人は誰もいない。人々は神を二つの部分——「衣服と肉」——として見て、誰も神を霊の受肉とは見なさず、その肉の本質が神の性質であるとは考えない。人々の想像では神は特に正常だが、この正常性の中に神の深遠な意味を持つ一面が隠れていることを知らないのだろうか。

神が世界中を被い始めた時、世界は真っ暗闇になった。そして人々が眠っているあいだに、神はこの機会を利用して人間のもとに降臨し、正式に地上の隅々に向けて霊を放ち、人類救済の働きに乗り出した。このような肉の姿を取り始めた時、神は直接地上で働いたとすることができる。こうして、神の霊の働きが始まり、正式に地上でのすべての働きが始まった。二千年の間、神の霊は世界の至る所で働いてきた。人々はこのことを知らないし、気づいてもいないが、終わりの日、この時代がまもなく終了する時、神は直接働くために地上に降りてきたのだ。これは終わりの日に生まれた人々にとって恩恵である。彼らは肉の姿で暮らす神を直接見ることができるからである。「淵のおもてがすべて濁っている時、人々の間にあって、わたしは、この世に生きる苦しみを味わい始めた。わたしの霊は世界中を巡り、あらゆる人々の心を調べる。そうしてさらに、顕現した肉の身においても、人類を征服する」これが天にいる神と地上に降りた神の調和のとれた連携である。最終的に、人々の考えでは、地上の神は天の神であること、天と地、およびそこにあるすべてのものは地上の神によって創造されたこと、人間は地上の神によって制御されていること、地上の神は天における働きを地上で行うこと、天の神が肉の姿で現れたことを、人々は信じるだろう。これが地上における神の働きの最終的目標であり、そこで、この段階が肉の姿の期間における働きの最高の基準であり、神性で実行され、すべての人々を心から納得させる。人々が観念の中で神を求めれば求めるほど、ますます地上の神は本物ではないと感じる。それゆえ、人々は空虚な言葉や教義

の中に神を探し求めると神は言う。人々が観念の中で神を知れば知るほど、彼らはそのような言葉や教義を話すことにますます熟達し、ますます立派になる。言葉や教義を話せば話すほど、人々はますます神から反れていき、ますます人間の本質を知ることができなくなり、ますます神に造反し、ますます神の要求から離れていく。人間に対する神の要求は、人々が想像するほど超自然的ではないが、神の意志を本当に理解した者はこれまで誰もいない。したがって神は「人々は無限の空や波打つ海原、それとも、穏やかな湖、あるいは虚しい言葉や教義の中にわたしを求めようとする」と言うのである。神が人間に求めるものが多ければ多いほど、人々は神が手の届かない存在だと感じ、神は偉大だと信じるようになる。したがって、彼らの意識では、神の口から語られるすべての言葉は人間には達成できないものであり、神は自ら行動せざるをえなくなる。その一方、人間は神と協力する気持ちはまったくなく、ただ頭を垂れ、罪を告白し、謙虚で従順であろうとし続ける。そういうわけで、いつの間にか人々は他の新しい宗教に、現在の宗教的な教会をも上回る、さらに極端な宗教的儀式に入っていく。このために、人々は否定的な状態を肯定的状態に変えることによって正常な状態に戻らなければならない。そうでなければ人間はさらに深刻な誘惑に陥るだろう。

なぜ神は多くの発言の中で山と海を描写することに集中するのだろうか。これらの言葉には象徴的な意味があるのだろうか。神は人間に人の姿をした神の行いを見ることを許すだけでなく、天空における神の力を理解することも許す。このようにして、人々は、この人こそ人の姿をした神だと疑いなく信じるのと同時に、実践の神の行いも知るようになり、こうして地上の神は天に送られ、天の神は地上に降り立ち、その後ようやく人々は神のすべてを完全に見ることができ、神の全能性についてより大きな認識を得ることができる。神が肉において人類を征服し、肉体を超越して全宇宙の上を、またその隅々を動き回ることができればできるほど、人々は実践の神を見ることを基礎にしていっそう神の行いを見ることができ、したがって、全宇宙の至る所で神の働きの真実性を知り、それが虚偽ではなく本当であると知る。そこで彼らは、今日の実践の神は霊の体現であり、人間と同じ種類の肉体ではないと知るようになる。このようなわけで、神は「しかし、わたしが怒りを放てば、山は直ちに引き裂かれ、大地はすぐに激しく揺れ動き出し、水はあっという間に涸れる。そして、人間はたちまち災害に見舞われる」と言うのである。神の言葉を目にすると、人々は言葉を受肉した神の姿と関連付けるので、霊的領域における働きと言葉は人の姿をした神を直接指し示し、そのため有効性は拡大する。神が話す時は天から地上へ、そしてもう一度地上から天へということがよくあ

るので、人は誰も神の言葉の動機と発端を把握することができない。「わたしが天にあるとき、星々はけっして混乱に陥ることはなく、星々はわたしのために心から働く」天の状況とは、そういうものなのである。神は第三の天で念入りにすべてを用意し、神に仕える者たちはすべて、神のためにそれぞれの務めを行う。彼らは神に反抗するようなことはけっして行ったことがないので、神が語った恐怖には投げ入れられず、それどころか仕事に心を捧げ、混乱はまったくなく、したがって天使たちはすべて神の光の中で暮らす。その間に、地上の人々はすべて不服従のために、また、神を知らないために、暗闇の中で暮らす。彼らが神に反対すればするほど暗闇の中で暮らす。「天が明るければ明るいほど、その下の世界は暗くなる」という神の言葉は、神の日がすべての人類にますます近づいていることを語っている。このようなわけで、第三の天における六千年に及ぶ神の多忙はまもなく終了するであろう。地上のすべてのことは最終章に入っており、まもなくそれぞれが神の手から切り離されるだろう。人々が終わりの日に深く入れば入るほど、彼らは人間世界の墮落をさらに味わうことができるようになる。しかも、終わりの日に深く入れば入るほど、彼らは自分の肉の欲に甘くなる。世界のみじめな状態を覆したいと望む人々はたくさんいるが、彼らはみな神が行うことを見ては、ため息をついて希望を失う。このように、人々が春の温かさを感じていても神が彼らの目を覆うので、彼らはうねる波の上を漂い、一人としてはるか彼方の救命艇にたどり着くことができない。人々は本質的に弱いので、事態を好転できる人は誰もいないと神は言う。人々が希望を失うと、神は宇宙全体に向かって語り始め、すべての人類の救済を始める。そして物事が好転した後の新しい生活を人々はようやく享受できる。今日、人々は自己欺瞞の段階にいる。彼らの前の道は荒れ果てて、ぼやけており、彼らの未来は「無制限」で「境界がない」ので、この時代の人々には戦う気持ちはなく、寒號鳥^[a]のように日々を過ごすことしかできない。本気で生きることの意味を追求し、人生の認識を追求した人はこれまで誰もいないし、それどころか、彼らは天の救い主が突然降臨して世界のみじめな状況を変える日を待っている。その後初めて彼らは真剣に生きる試みに取り組むだろう。これがすべての人類の本当の状態であり、すべての人々の精神構造である。

今日、神はこの時期の人間の精神的態度に照らして人の未来の新しい生き方を予言するが、神の予言にはかすかな光がある。神が予言するのは最終的に神によって達成されることであり、サタンに対する神の勝利の成果である。「わたしはすべての人々の上を動き、至る所を見ている。何一つ古びて見えるものがなく、誰一人かつてと同じ人はい

ない。わたしは玉座に座し、全宇宙上に横たわり……」これは神の現在の働きの結果である。神の選民はすべて最初の形に戻り、そのため、長年にわたり苦しんできた天使たちは解放される。神が「人の心の中の聖者のような顔」と言うとおりである。天使たちは地上で働き、地上で神に仕え、神の栄光が世界中に広がるので、天は地上にもたらされ、地上は天に持ち上げられる。したがって、人間は天と地を結ぶ絆である。天と地にはもはや隔たりはなく、もはや分離しておらず、一つのものとしてつながっている。世界の至る所で、神と人間だけが存在する。ほこりも汚れもなく、すべてのものは再び新しくなり、子羊が大空の下で緑の草原に横たわっているように、神のすべての恵みを享受している。そして、一面の新鮮な緑が現れたことから、生命の息吹が輝き出る。というのも永遠に人間と共に暮らすために神がこの世に来るからである。神の口から「わたしは再びシオンで安らかに暮らすことができる」と語られたとおりである。これはサタンの敗北の象徴であり、この日は神の安息の日であり、すべての人々によって褒めそやされ、称えられ、すべての人に祝われる。神が玉座で安息している時は、神が地上における働きを終了する時でもあり、まさに神のすべての奥義が人間に示される瞬間である。神と人間は永久に調和し、離れることはないだろう——これらは神の国の美しい光景である。

奥義の中に奥義が隠れており、神の言葉は本当に深遠で理解しがたい。

脚注

a. 寒號鳥の話はイソップのアリとキリギリスの寓話によく似ている。寒號鳥は温暖な気候の時は巣を作らずに眠っていることを好み、隣に住むカササギが繰り返し警告したにも関わらず巣を作らず、冬が来ると寒號鳥は凍死してしまう。

第十七章

実際、神の口から語られる言葉のすべては人間の知らない事柄である。すべて人々が聞いたことのない言語で語られる。このことについては、次のように考えることができる。つまり、神の言葉そのものが神秘的なのだ。ほとんどの人々は、人間の概念が届かない事柄、現在、神から許されて人々が知ることができる天上の物事、あるいは神が靈的世界で行うことに関する真実のみが神秘的なのだと信じているが、これは間違いである。これは、人々が神の言葉のすべてを等しくは扱わず、大切にもせず、自分たちが「神秘的」と信じるものだけに重点を置いていることを示している。これは、人々が神の言葉とは何か、あるいは神秘とは何かをわかっていない証拠である——彼らは自分の観念の

中だけで神の言葉を読んでいるのだ。神の言葉を本当に愛する者は一人もいないというのが現実である——「人々はわたしを欺くのに巧みである」と言われる理由の根源はここにある。神が、人々には長所がまったくないとか、彼らはまったく混乱しているとか言っているわけではない。これが人類の実情なのである。人々は、自分の心の中で神が実際どのくらいのスペースを占めているのか、あまりよくわかっていない——そのことを完全に知っているのは神のみである。そこで現時点では人々は乳飲み子のようなものである——彼らはなぜ自分たちが乳を飲むのか、何のために生き延びているのか、まったく気づいていない。彼らには何が必要なのかをわかっているのは母親だけであり、母親は彼らを餓死させないし、食べ過ぎて死ぬこともさせない。神は人々にとって必要なものを一番よく知っている。そこで時には神の愛はその言葉の中に具体化され、時には神の裁きが言葉の中で明らかにされ、時には神の言葉が人々の心の奥底を傷つけ、時には神の言葉が誠実でまじめなこともある。このため人々は神の思いやりや近づきやすさを感じることができ、神は人々が想像している「堂々とした姿」ではなく、触れられない存在でもなく、人々の心の中の「天の子」でもなく、直接顔を見ることのできないものでもなく、特に、無実の人々を虐殺すると想像されている「死刑執行人」ではないと感ずることができる。神の性質のすべてはその働きの中で明らかにされ、今日人の姿となった神の性質が、やはりその働きを通して具体化される。したがって神の実行する働きは言葉の働きであり、神が何を行うかとか、神の外観がどのようなかということではない。結局すべての人々は神の言葉から啓発を得て、言葉によって完全にされるのだ。人々は経験する中で、神の言葉の指導により実践の道を得て、神が語る言葉を通して神の性質全体を知るだろう。神の言葉により、神の働きのすべてが実行され、人々は活気づき、敵はすべて敗北するだろう。これが神の主要な働きであり、誰も無視することはできない。わたしたちは神の次の言葉を見るとよい。「わたしの声は雷のように轟き、全世界の隅々まで照らす。そして、雷鳴と稲光の中、人間たちは打ち倒される。雷鳴と稲光のただ中でしっかりと立ち続けた者はいない。たいていの人間はわたしの光を見て恐れに我を失い、どうしていいか、わからなくなる」。神が口を開くと言葉が出てくる。神は言葉を通してあらゆることを成し遂げ、物事はすべて神の言葉によって変えられ、すべての人々は神の言葉を通して再び新しくされる。「雷鳴と稲光」は何を意味するのだろうか。そして「光」は何を意味するのだろうか。神の言葉から逃れられるものは一つとしてない。神は言葉を使って人々の心の中をさらけ出し、彼らの醜さをあらわにする。神は言葉を使って人々の古い性質を取り扱い、神の民のすべてを完全にする。これが神の言葉の重要性ではないだろうか。全世界で神の言葉の助けと支えがなければ、全人類はとう

の昔に破壊されてもはや存在していなかっただろう。これが、神が行うことの原則であり、神の六千年に及ぶ経営（救いの）計画の働き方である。こうしたことを通して、神の言葉の重要性をはっきり見ることができる。神の言葉は人類の霊の奥深くまで直接刺し通す。彼らは神の言葉を見るや否や、驚愕し、恐怖に怯え、急いで逃げる。彼らは神の言葉の現実性から逃れたがり、そのためこれらの「避難民」は至る所に見られる。神が言葉を発するとすぐに人々は一目散に逃げ出す。これは神が表現する人類の醜さの一面である。まさに今、すべての人々は次第に昏睡状態から目覚めつつある。まるですべての人々が以前に痴呆症を患った経験があるかのようだ。そして今は神の言葉を目にしても、病気の影響が長引いて以前の状態を取り戻すことができないかのようだ。これがすべての人々の現状であり、次の文章に書かれているとおりである。「多くの人は、このわずかな光の刺激により、すぐに幻覚から醒める。しかし、わたしの光が地上に降る日が訪れたことを知る者はいない」。こういうわけで、神は次のように語った。「大多数の人間は、突然の光の到来に呆然とする」。このように表現をすることは全く適切である。人類に関する神の記述は針先ほどの余地も残していない――神は極めて正確に誤りなくこれを行った。そのためすべての人々は完全に納得し、気づかないうちに彼らの神に対する愛は始まり、心の奥底から高まっていった。このようにしてのみ、人々の心の中における神の立場はますます本物となった。これも神の働き方の一つである。

「大多数の人間は、ただ混乱している。彼らは光のせいで目を痛め、泥の中に投げ倒されたのだ」。彼らは神の意志に逆らっている。（すなわち、神に抵抗している。だから、）そのような人は神の言葉が来た時、反抗心のために刑罰を受ける。こういうわけで、彼らは光によって目を痛めると言われるのだ。このような人はすでにサタンの手に渡されているので、新しい働きに入ったとき、啓示も照らしもない。聖霊の働きを持たないすべての人々はサタンに支配されており、心の奥に神のための場所はない。したがって彼らは「泥の中に投げ倒された」と言われる。この状態にある人々はみな混乱している。彼らは正しい軌道に乗ることも、正常さを取り戻すこともできず、彼らの思考はみな正反対のことばかりである。地上のすべての人々はサタンによって極みまで墮落させられている。彼らには生命力がなく、死体の臭いに満ちている。地上のすべての人々は伝染病菌に悩まされて生きていて、誰もそこから逃れることはできない。彼らは自ら進んで地上に生きているわけではないが、何かもっと偉大なものがあり、いつか自分でそれを見ることができると感じている。そこですべての人々は無理をして生き続けようとする。人々の心はとうの昔に力を失っており、目に見えない希望を精神的支柱として

使っているだけだが、胸を張って一人前の人間のように振る舞い、地上での日々を生き抜いているだけなのである。あたかも人々はすべて人の姿をした悪魔の子らのようである。だから、神は次のように語った。「世界は混沌に包まれ、耐え難い惨めなありさまとなり、よく調べると、この上ない憂鬱に閉ざされているのだ」。このような現状があるから、神は全宇宙に向かって「わたしの霊の種を蒔き」始め、全世界で救いの働きを実行し始めたのだ。神はこの働きを促進するためにあらゆる種類の災害が人間に降り注ぐようにし、そうすることで人間を救おうとした。神の働きの各段階において、救いはやはり様々な災害の形をとり、運命づけられた者は誰もそこから逃れられない。最後になってようやく、「第三の天同様に穏やかで、ここに生きるものたちは、大きいものも小さいものも調和のうちに共存し、けっして『くちびるの言葉で争う』ことがない」という状況が地上に現れる。神の働きの一面は、言葉を用いて全人類を征服し、選民を獲得する。また別の面では、神の働きは様々な災害を通して反逆の子らを全て征服する。これは神の大規模な働きの一部である。神の望む地上の国を完全に達成するにはこの方法しかなく、これは純金のような神の働きの一部である。

神はいつも人々が天の変遷を理解することを要求している。人々は本当に理解できるだろうか。人々の現在の状況に基づくと、5900年以上にわたりサタンによって墮落させられてきたので、彼らをペテロと比較することはできず、彼らが理解することはできない。これは神の働きの方法の一つである。神は人々にただ待つだけの消極的な態度をとらせるのではなく、積極的に求めさせる。このようにしてのみ、神は人々の中で働く機会を持つ。これはもう少し説明した方がいいだろう。さもないと人々は表面的にしか理解できないだろう。神が人類を創造し、霊を与えた後、もし彼らが神を呼び求めなければ、彼らは神の霊と繋がることができず、したがって天からの「衛星テレビ放送」は地上で受信することが不可能であるように神が命じた。神がもはや人々の霊の中にいなければ、他のものが入り込める空席が残され、そこにサタンが入り込む機会をつかむ。人々が心から神と繋がれば、サタンはただちにパニックに陥り、大急ぎで逃げ出す。人類の叫びによって神は彼らに必要なものを与えるが、初めから彼らの中に「住む」ことはない。神は彼らの叫び求める声によっていつも援助するだけで、人々はその内面の力から忍耐力を得るので、サタンは思うままに人の心に入って「遊ぶ」ことはしない。このように、人々が常に神の霊と結びついていれば、サタンは混乱を引き起こしに来ようとはしない。サタンが混乱を起こさなければ、人々のすべての生活は正常であり、神はまったく妨害なしに彼らの中で働く機会を得る。こうして、神が行いたいと思うことは

人間を通して達成することができる。このことから、なぜ神がいつも人々に信仰を増すように要求し、次のように語っているかもわかる。「わたしは地上にいる 人間の背丈に応じて適切な要求をしているのである。わたしは誰をも困難な状況に置いたことはないし、わたしの楽しみのために『血を絞り出せ』と要求したこともない」。ほとんどの人は神の要求に当惑し、自分たちにはそれに応える能力がないし、回復しようのないほどサタンに墮落させられているのに、なぜ神は要求ばかりするのだろうかと言う。神は人々を困難な状況に立たせているのではないだろうか。人々のまじめな顔を見て、次にとても気まずい様子を見ると、あなたは笑わざるを得ない。人々のさまざまな醜さは非常に滑稽である――時には彼らは遊ぶのが大好きな子供のようにであり、時には「お母さんごっこ」をする少女のようである。ネズミを食べる犬のような時もある。これら彼らの醜い状態のすべてに笑うか泣くか分からず、人々がますます神の心を理解できないほど、ますます彼らは困難に陥りやすくなることは多い。だから、「わたしは被造物に沈黙を強いるだけの神だろうか」という神の言葉から、人々の愚かしさがわかり、誰も神の旨を理解できないことが分かる。たとえ神が自分の旨は何かをはっきり語っても、彼らは察することができない。彼らは人間の意志に基づいて神の働きを行うだけなので、どうして神の旨をそのまま理解することができようか。「わたしは地上を歩み、いたるところに芳香を放ち、あらゆるところにわたしの形を残す。すべての場所がわたしの声に反響する。いたるところの人々が以前の美しい眺めを懐かしく思い出す。全人類が過去を記憶しているからだ……」これが神の国が形成される時の状況であろう。実際、数か所で神は王国実現の美しさを予言している。もしそれらをすべて結びつけば、それが王国の完全な姿である。しかし、人々はそれに注意を払わない――彼らはその完全な姿をアニメのように見ているだけである。

数千年に及ぶサタンの破壊によって、人々はいつも暗やみの中に暮らしてきたので、暗やみでも困らないし、光を求めもしない。これは光が今日到来した時の次の言葉につながるものである。「みな、わたしの訪れを嫌い、光の近づくのを追い払う。まるで、わたしが天国で人間の敵であるかのように。人間は用心深く探るような目でわたしにあいさつする」。ほとんどの人々は純粋な気持ちで神を愛しているが、神はまだそのことに満足せず、人類を非難する。これは人々にとって不可解なことである。人々は暗やみの中に生きているので、神への奉仕はまだ光の欠けていた時と同じように行われている。すなわち、人々は皆自分の概念を使って神に仕え、神が来る時、人々は皆この種の状態にあるから、新しい光を受け入れて神に仕えることができず、自分の経験のすべてを

使って神に仕える。神は人類のこのような「献身」からは喜びを得ないので、暗闇の中にいる人類は光を称賛できない。これが神が上記の言葉を語った理由である――それは非現実などではない。神が人類を虐待しているのではないし、不当に扱っているのが神なのでもない。世界の創造から今日に至るまで、一人として神の温情を本当に味わった者はいない――彼らは神に対して警戒心を持ち続け、神に打ち倒されて滅ぼされることを深く恐れている。そこで、これまで六千年にわたり、神は人々が誠実さを示せばいつも温情を行使し、事あるごとに忍耐強く彼らを導いてきた。これは人々がとても弱いからであり、彼らは神の旨を十分に知ることができず、心から神を愛することができないからである。なぜなら、彼らはサタンの策略に従わざるを得ないからである。しかし、たとえこうした場合でも神はやはり寛容であり、これを一定の日まで我慢するが、その日、すなわち世界を再生する時、神はもはや母親のように人々の面倒をみることはないだろう。むしろ、神は人類に適切な報いを与え、だから、その後、「死体が広い海面を漂う」ことが起こり、一方「水のない場所では、他の人間たちが、まだ笑いと歌の中で、わたしが彼らに与えた約束を楽しんでいる」ことになる。これは罰せられる者と報われる者の終着点の比較である。「広い海面」は神が語る人類への懲罰を意味する底なしの穴である。それはサタンの終着点であり、神に背くすべての人々のために神が用意した「安息所」である。神はいつも人類に純粋な愛を望んでいるが、人々にはそれがわからず、気づいてもおらず、彼らは相変わらず自分の仕事をしている。こういうわけで、神は、自分が語るすべての言葉の中で、いつも人々に物事を求め、彼らの欠点を指摘し、実践の道を指摘するので、彼らはこれらの言葉に従って実践することができる。神は人々に対する自分の態度にも光をあててきた。「しかし、一度たりとも、おもちゃのように扱って生命を奪いはしなかった。わたしは人間の注いだ心血を見、人間の支払った代償を理解している。人間がわたしの前に立つとき、その無防備さを利用して懲らしめようとは思わない、また、望ましくないものを与えもしない。むしろ、わたしはひたすら人間に施し、与えてきた」。神からのこうした言葉を読むと、人々はすぐに神の温情を感じ、次のように考える。「しかし、一人の人間の生命もおもちゃのように扱おうと軽々しく奪ったことはない。わたしは人間が経験した苦労を見、人間の支払った代償を理解している。人間がわたしの前に立つとき、その油断に付け込んで懲らしめようとは思わないし、望ましくないものを人間に与えることも願わない。むしろ、わたしはひたすら人間に施し、与えてきた」。この時人々は、本当に自分の顔を平手打ちしたいと思う。あるいは人によっては鼻をぴくぴくさせて大声で泣く。神は人々の気持ちを理解し、それに応じて語り、厳しくもやさしくもない短い言葉は神に対する人々の愛を引き起

こす。最後に神は、地上で神の国が形成される時にその働きが変化すると予言した。つまり、神が地上にいる時、人々は災害や苦難から免れ、恩恵に浴することができ、最後の審判を始める時は神がすべての人々の中に現れる時であり、地上における神の働きのすべては完了するだろう。その時、終わりの日が来たので、「不義な者はさらに不義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」と聖書に書かれていたようになるだろう。不義な者は刑罰を受け、聖なる者は神の玉座の前に来るだろう。神に甘やかされる者は一人としていないだろう。神の国の子らや民でさえそうしてもらうことはできない。すべては神の義であり、すべては神の性質を明らかにしているのだろう。神は人類の弱点に対する心遣いを二度と示さないだろう。

第十八章

神のすべての言葉には神の性質の一部が含まれている。神の性質を言葉で完全に表すことはできないので、このことから神にどれほどの豊かさがあるかが十分にわかる。人間が見たり触れたりできるものは、結局、人間の能力同様に限られている。神の言葉は明確だが、人はそれを十分に理解することができない。次の言葉を例として考えてみよう。「稲光の中、すべての動物は真の姿を明らかにする。そして、わたしの光に照らされて、人間もまた、かつての聖さを取り戻した。ああ、過去の墮落した世界よ。それはついに汚い水の中へと崩れ去り、水面の下に沈み、溶けて泥となった」。神の言葉のすべてには神の存在が含まれており、人々は皆この言葉に気づいているにもかかわらず、その意味を知る者は誰一人いたことがない。神の目には、神に抵抗する者すべてが敵であり、すなわち、悪霊に属する者は動物である。このことから、教会の真の状態を見て取ることができる。すべての人は神の言葉により照らされ、他の人からの訓戒や懲らしめや直接的な排除を受けることなく、また他の人間的なやり方の対象にされることも、他の人からの指摘を受けることもなく自己を省みる。人間は「顕微鏡的な観点」から自分の内部に実際どれほどの病気があるかを見る。神の言葉において、すべての種類の霊は分類され、その原形が明らかにされる。天使の霊はますます光に照らされ、啓示を受ける。そのため、神の言葉は、「人間もまた、かつての聖さを取り戻した」と述べている。この言葉は神が達成した最終的結果に基づいている。もちろん、今はまだ完全には達成できず、これは前触れにすぎない。これを通して、神の旨が見える。すべての人が次第に聖くなる過程で、多くの人は神の言葉のうちに倒れ、敗れることを示すのにこの言葉は十分である。ここでの「溶けて泥となった」という表現は、神が火で世界を焼き滅ぼすことと矛盾せず、「稲光」は神の激しい怒りを意味する。神が激しい怒りを放つと

、その結果、全世界は火山の噴火のようなあらゆる種類の災害を経験する。天空に高く立つと、地上ではあらゆる種類の災難が人類全体に日ごとに近づきつつあることがよくわかる。高みから見下ろすと、地球は地震の前に見られるようなさまざまな光景を見せる。火の海が止めどなく襲いかかり、溶岩がそこら中に流れ、山々は動き、冷たい光があたり一面に光る。全世界は炎の中に沈んでいる。これは神が激しい怒りを放つ光景であり、神の裁きの時である。血肉からなる者は誰も逃れることはできない。こうして、全世界を破壊するために国家間の戦争、人々の間の争いは必要ではなくなり、世界は神の刑罰というゆりかごの中で「意識しながら楽しむ」のである。誰もそれを逃れることはできず、誰もがこの試練を一つずつ経験しなければならない。その後、全宇宙はもう一度聖なる輝きできらめき、全人類はもう一度新しい生活を始める。そして神は宇宙の上で安息し、全人類を毎日祝福する。天は耐え難いほど荒涼としてはおらず、天地創造以来失っていた活力を取り戻し、「六日目」を数えるのは神が新しい生き方を始める時である。神と人類はどちらも安息に入り、世界はもはや不透明でも汚れてもおらず、新たにされる。こういうわけで神は次のように言ったのである。「地はもはや、死んだように動きがなくも沈黙してもいい。天はもはや荒涼として悲しいところではない」。天の御国に不義や人間の感情があったことはなく、人類の墮落した性質も一切なかった。サタンによる妨害がそこにはないからである。「人」は皆神の言葉を理解することができ、天国の生活は喜びでいっぱいである。天国にいる者はすべて神の知恵と尊厳を持っている。天と地の間の違いゆえに、天の住人は「人」とは呼ばれず、神は彼らを「霊」と呼ぶ。これら二つの言葉には本質的な違いがあり、今「人」と呼ばれる者は皆サタンに墮落させられているが、「霊」は墮落していない。結局、神は地上の人を天の「霊」の属性を持つものに変え、それによりもはやサタンの妨害にさらされなくなる。これが次の言葉の真の意味である。「わたしの聖さが宇宙全域に広まり」「地は、そのはじめは天のものである。そして、天は地とは、ひとつである。人間は天と地とを結ぶ絆であり、人間の聖さのおかげで、人間の再生のおかげで、天はもはや地から隠されてはいない。そして、地はもはや天に対して沈黙していない」。これは天使の霊を持つ人に関して言われ、その時点で「天使」はもう一度平和的に共存し、最初の状態を取り戻すことができ、もはや肉により天と地の二つの領域に分けられることはない。地上の天使は天の天使と連絡することができ、地上の人は天の奥義を知り、天の天使は人の世の秘密を知る。天と地の間に距離はなくなり、天と地は結合する。これが神の国実現の素晴らしさである。それこそ神が完成するものであり、すべての人間と霊が望むものである。しかし、宗教界にいる者たちはこのことを何も知らない。彼らは救い主イエスが白い雲

に乗ってやって来て、彼らの魂を連れ去り、地上の至る所に「ごみ」を残していくのを待っているだけである（ここで「ごみ」は死体を意味する）。これはすべての人間が共有する観念ではないだろうか。だから神は次のように言ったのである。「ああ、宗教界よ。どうしてこれが、わたしの地上の権威により破壊されないことがあろう」。地上にいる神の民の完成により、宗教界は転倒させられる。これが、神の語った「権威」の真の意味である。神はこう言った。「わたしの日にわたしの名を汚す者が誰かいるだろうか。人間はみな畏敬のまなざしをわたしに向け、その心が沈黙のうちにわたしに叫んでいる」。これは宗教界の破壊の結果について神が語ったことであり、神の言葉ゆえに、すべては神の玉座の前に服従し、もはや白い雲が降りて来るのを待ったり、空を見上げたりせず、その代わりに神の玉座の前で征服される。そのため、「その心が沈黙のうちにわたしに叫んでいる」という言葉が述べられたのである。これは宗教界の結末であり、すべては神によって征服される。これが神の全能性の指すことである。宗教的な人たち、つまり人類のうちもっとも反抗的な人を打ち倒し、彼らが神を知り、二度と再び自分の概念にしがみつくとすることはなくなる。

神の言葉は繰り返し神の国の美しさを預言し、そのさまざまな側面について語り、異なる観点から描写しているが、それでも神の国の時代のすべての状態について十分に表現することはできない。人々の受け入れ能力があまりにも不足しているからである。神が発するすべての言葉は語られたが、人々はいわばX線を備えた特殊装置を通してその言葉の内側を見なかったので、明瞭さと理解を得られず、当惑さえしている。これが肉の最大の欠点である。心の中では、人々は神を愛したいと思っているが、サタンに邪魔されて神に抵抗するので、神は人々の物分かりの悪い麻痺した心に何度も触れて、生き返らせようとしてきた。神が明らかにするのはすべてサタンの醜さなので、神の言葉が厳しければ厳しいほどサタンは恥じ入り、人々の心がサタンに束縛されることがなくなり、人々の愛はいっそう目覚める。神はこのように働くのである。サタンはむき出しにされ、正体を見破られているので、もはや人々の心を占拠しようとはせず、したがって、天使たちはもう嫌がらせを受けることはない。こうして彼らは心をこめて神を愛する。この時になってはじめて、天使たちはその本来の姿において神に属し、神を愛することが明らかになる。神の旨を達成できるのはこの道を通じてしかない。「彼らの心の中に、わたしのための場所がある。もはやわたしが人々の間で避けられ、拒否されることはない。わたしの偉大な働きがすでに成し遂げられ、もはや妨げられることがないからである」。これが上述の内容の意味である。サタンの嫌がらせのせいで、人々は神を愛

する時間を見つけられず、いつも世の中のさまざまな事柄に巻き込まれ、サタンに騙されているので、混乱状態で行動する。だから神は、人類は「人生の多くの苦難、世にあるまことに多くの不正を経験し、世の浮き沈みを経てきたが、今はわたしの光の中で暮らしている。誰が昨日までの不正にすすり泣かずにいられるだろう」と言ったのである。これらの言葉を聞くと、人々はまるで神は自分が惨めな状態にある時の同伴者で、自分に同情しており、その時、人間のさまざまな不満を共有しているように感じる。人々は突然人の世の苦しみを感じ、考える。「本当にその通りだ。わたしはこの世で何も享受したことがない。母の胎から生まれ出て以来今日に至るまで、人生を経験してきたが、得たものは何もなく、とても苦しんできた。何もかもまったく虚しい。そして今やサタンにこれほどまで墮落させられている。ああ、神の救いがなければ、死が訪れるとき、わたしは全人生を無為に過ごしたことになるのだろうか。人生に何か意味はあるのだろうか。神が太陽の下にあるものすべては虚しいと言ったのも当然だ。神が今日わたしを啓いていなければ、わたしはまだ暗やみにいただろう。なんて惨めなことだ」。この時、彼らは心の中で心配になる。「神の約束を得ることができなければ、どうしてわたしは生き続けることができるだろう」。このような言葉を読むと、人は皆泣きながら祈る。これが人間心理である。これを読んで何の反応もないのは、精神状態が正常である限り、不可能である。神は毎日あらゆる種類の人の状態を明らかにする。時には神は人の代わりに不満を発散させる。時には人が自分の環境を克服し、上手に切り抜けるのを助ける。時には人の「変化」を指摘する。さもないと、自分がどれほどいのちの成長を遂げたか、人は知ることがない。時には人の実際の経験を指摘し、時には人の不適切な点や欠点を指摘する。時には人に新しい要求を出し、時には人が神を理解している度合いを指摘する。しかし、神はこうも語った。「わたしは、実に多くの人が心からの言葉を語るのを、実に多くの人が苦難の中で経験した痛みを語るのを聞いてきた。人々が最も苦しい中でゆらぐことなくわたしに忠誠をささげるさまを、わたしは見てきた。また、実に多くの人が、険しい道を歩むとき、出口を求めるのを見てきた」。これは前向きな人物の描写である。「人間の歴史ドラマ」の各エピソードには、前向きな登場人物だけでなく、否定的な登場人物もいた。それゆえ、神はこうした否定的な登場人物の醜さを明らかにし続ける。このように、「正しい人間」の揺るぎない忠誠心や恐れを知らない勇気が明らかにされるのは、「裏切り者」との対比を通してのみである。すべての人の生き方には否定的な要素があり、例外なく前向きな要素もある。神はこれら二つの面からすべての人の真実を明らかにするので、裏切り者は頭を垂れ、罪を認め、正しい人間は励ましを受けて忠誠であり続ける。神の言葉の言外の意味は非常に深い。人々

は、時には言葉を読んでは体をよじって笑い、時には黙ってうなだれ、時には思い出にふけり、時には激しく泣いて自分の罪を認め、時には模索し、時には探し求める。神が言葉を語る状況が異なるため、概して人々の反応には変化がある。ある人が神の言葉を読むと、傍観者は間違っってその人のことを精神病患者と思うこともある。次の言葉を見るがよい。「そこで、地上で諍いごとはもうなく、わたしの言葉が発せされると、現代の様々な『武器』もまた、使われなくなる」。「武器」という語句一語だけで、一日分の笑いの種になり、「武器」という語句をたまたま思い出すたびに、ひとりで大笑いすることになる。そうではないだろうか。どうしてこれに笑わずにいられるのだろうか。

笑うとき、神が人類に何を求めているかを把握することを忘れてはいけない。また、教会の実情を見ることを忘れてはいけない。「すべての人類は正常な状態に戻り、新たな生活を始める。新たな境遇の中に住み、多くの人々は周囲を見回し、真新しい世界に入ったかのように感じる。そのため、すぐに新しい環境に馴染むことはできないし、直ちに正しい道に踏み出すこともできない」。これが教会の現在の実情である。すべての人をすぐに正しい道に入らせようと躍起になってはいけない。聖霊の働きがある点まで進めば、人々は皆気づかないうちに正しい道に入る。神の言葉の本質を理解すれば、聖霊がどの点まで働いたかがあなたにわかる。神の旨は次の通りである。「ただ、不義に対処し、適正な『指導』をして、誰もが正しい道を歩めるようにする」。このような方法で神は語り、働き、それは人類にとって特別な実践の道でもある。この後、神は人々のために人類のまた別の状態を指摘した。「もし人間がわたしの内の幸いを享受しながらなければ、わたしにできることは、彼らにしたいようにさせ、底なしの淵に送り込むことだけである」。神は余すところなく話し、人々に不平を言う機会を一切残さなかった。まさにこれが神と人間の違いである。神はいつも人間に対して隠し立てせず、率直に話している。神が語ることをすべてにおいて、人は神の真摯な心を見ることができる。これにより人は自分の心を神の心と比較して推し量るようになり、自分の心を神に開くので、虹の連続体のどこに各人が位置するのかを神は見決めることができる。神は決して誰の信仰も愛も称賛したことはないが、いつも人々に要求を出し、人々の醜い面をさらけだしてきた。これは人々の「霊的背丈」がいかに小さいか、「体質」がいかに貧相であるかを示している。これらの不足を補うために、人はもっと「修練」する必要がある。だから、神はいつも人々に向けて怒りを放出しているのである。いつか、神が人類についてすべての真実を明らかにした時、人々は完全にされ、神は安心する。人々はもはや神を騙すことはなく、神はもはや人々を「教育」しない。それ以降、人々は「自分

で生きる」ことができるようになるが、今はその時ではない。人の中にはまだ「偽物」と呼べるものが多いので、数回の試験が必要であり、さらに「チェックポイント」を設定し、「税金」がきちんと支払われるようにする必要がある。まだ偽造品があれば、販売されないように没収され、密輸品は破壊される。これは良い方法ではないだろうか。

第十九章

人々は、神は非常に高尚で計り知れないものと想像しているように思われる。それはまるで、神は人のあいだで暮らすのではなく、とても高尚なので人々を軽蔑しているかのようである。しかし、神は人々の観念を打ち砕いてすべて消し去り、「墓」に埋めて灰にする。人の観念に対する神の態度は死者に対する態度と同様であり、神は人の観念を思いのままに規定する。あたかも「観念」には何の反応もないかのようである。ゆえに、神は創世から今日に至るまでこの働きを続け、決してやめなかった。人間は肉のせいでサタンによって墮落させられ、また地上におけるサタンの行動のせいで、経験の過程においてあらゆる種類の観念を作り上げる。これは「自然形成」と呼ばれる。今は地上における神の働きの最終段階なので、神の働きの方法は頂点に達しており、またその最後の働きの中で人々が完全になり、最終的に神の旨が満たされるよう、訓練を強化している。従来、人のあいだには聖霊による啓きと照らししかなく、神自身が語る言葉はなかった。神が自身の声で語った時、すべての人は驚愕したが、今日の言葉は人々にとって、よりいっそう不可解である。それらの意味を推し測るのはますます困難であり、人間は幻惑されたかのようである。と言うのも、神の言葉の半分は引用符に囲まれているからである。「わたしが話すとき、人間は夢中になってその声に耳を傾ける。しかし、わたしが話すのをやめると、また自分の『事業』にとりかかり、」。この一節には引用符で囲まれた単語が含まれている。ここでそうしているように、神がユーモアを交えて話せば話すほど、人は引き込まれて読むようになる。人々は、くつろいでいる時なら取り扱いを受け入れることができる。しかし、それはおもに、神の言葉を理解していない時に落胆したり失望したりする人を減らすためである。これがサタンとの戦いにおける神の戦法である。そうすることでのみ、人々は神の言葉に興味を抱き続け、その意味を辿れない時でさえ、やはりその言葉に注意を払い続ける。しかし、引用符に囲まれないすべての言葉にも大いに魅力があり、そのためいっそう目立ち、それによって人々が神の言葉をもっと愛し、神の言葉の甘美さを心の中で感じるようにする。神の言葉はさまざまな種類の形で現われ、豊かで多様であり、そして神の多くの言葉の中には名詞の繰り返しがないので、人々は第三の感覚の中で、神はいつも新しく決して古くない

と信じる。例えば「わたしは人間に単なる『消費者』になるように求めているのではなく、サタンを打ち負かすことのできる『生産者』になるように求めている」という文章に現われる「消費者」および「生産者」という単語には、過去に何度か語られた単語と同様の意味があるのだが、神は頑なではない。むしろ、人々に神の新鮮さを気づかせ、それによって神の愛を大切にさせる。神の話の中のユーモアには、人間に対する裁きと要求が含まれている。神の言葉にはすべて目的があり、意味があるので、そのユーモアは単に空気を明るくするとか、人々を大笑いさせるとか、あるいは単に筋肉をほぐすことを意図しているのではない。そうではなく、人々が神の言葉をよりよく受け入れられるよう、人間を5000年にわたる束縛から解放し、二度と束縛されないようにするのが神のユーモアの目的である。神の方法はスプーン一杯の砂糖で薬を飲みやすくするものであり、人間に苦い薬を無理に飲ませようとはしない。甘さの中に苦さがあり、苦さの中にも甘さがある。

「ほのかな光が東方に現れると、全宇宙にいる全ての人々はそのような訳で、そのときだけ、東の光に注意を向ける。もはや眠りに埋もれてはおらず、人類は東の光の源を見に行くが、人間の力の限界のため、誰一人、光の出所を見ることはできない」。これは宇宙の至る所で起きていることであり、神の子らと神の民のあいだだけのことではない。宗教界の人々や未信者たちもみなこのように反応する。神の光が輝く瞬間、彼らの心は次第に変化し、自分の生活には意味がなく、人生には価値がないことを、無意識のうちに悟りだす。人々は未来を追求せず、明日のことを考えず、明日のことを心配せず、むしろまだ「若い」うちにもっと飲み食いするべきで、終わりの日が来たら何事にもそれだけの価値があるだろうという考えにしがみついている。人間は世界を統べる願望をまったく持っていない。世界を愛する人類の活力はすべて「悪魔」によって盗まれてしまったが、誰もその根源が何なのかを知らない。できることと言えば、お互いに連絡し合いながらあちこち駆け回ることだけである。神の日がまだ来ていないからである。いつの日か、誰もがこの計り知れない奥義のすべてに対する答えを見つけるだろう。これがまさに、「人間は眠りと夢とから醒め、その時初めてわたしの日がゆっくりと世に訪れようとしていることを知る」と神が言った際の真意である。その時が来たら、神に属するすべての民は、「わたしが地上にいる時に、それぞれがわたしに捧げ物をしようと、待っている」緑の葉のようであるだろう。中国にいる神の民の多くは、神が声を発した後も逆戻りするので、神は次のように言う。「しかし、すでに達成されてしまった事実を変えるには無力で、わたしの下す判決を待つしかない」。それでもやはり、彼ら

の中には淘汰されるべき者もいるだろう。全員が変わらないまゐるわけではないのだ。むしろ、人々は試験を受けて初めて基準に達することができ、それによって「品質証明」が発行される。そうでなければ、彼らは廃棄物の山に積み上げられる屑になるだろう。神は人間の真の状態を絶えず指摘するので、人々は次第に神の神秘性を感じるようになる。「もし神でなかったら、どうして私たちの真の状態をあのようによく知ることができるだろう」。にもかからず、人間の弱さのせいで、「人間の心において、わたしは高くも低くもない。人間に関する限り、わたしが存在するかどうかは、どうでもいいことなのだ」となる。これはまさに現実ともっともよく一致するすべての人の状態ではないだろうか。人間に関する限り、人間が求めるときに神は存在し、求めないときには存在しない。言い換えれば、人間が神の助けを必要とした瞬間、神はその人の心に存在するが、もはや神を必要としないときは、神もそれ以上存在しない。これが人間の心の中にあるものなのだ。事実、地上のすべての人は「無神論者」も含めてこのような考え方であり、神に対する「印象」も曖昧かつ漠然としたものなのである。

「だから、山々は陸で国々の境界となり、水は陸と陸との間で人々を隔てる。そして、空気は、地の上で人と人との間を流れるものとなる」。これが創世の際に神が行なった働きである。ここでこのことを述べると、人々は混乱する。ひょっとして神は別の世界を創造したいのだろうか。神が話すたび、その言葉には世界の創造、経営、そして破壊が含まれている、と言うのは正しい。神の言葉が時に明快で、時に漠然としている、というだけのことである。神の経営のすべてはその言葉の中で具体化されるのであり、人にはそれらを識別できないということに過ぎない。神が人間に授ける祝福はその人の信仰を100倍にさせる。表面的にはまるで神が人間に約束をしているように見えるが、本質的には神の国の民に対する神の要求の物差しなのである。用いるのに適した人たちは留まるが、そうでない人たちは天から下る災難に飲み込まれるだろう。「雷が空に轟き渡り、人間を打ち倒す。高い山々は崩れ落ち、人間を埋める。飢えた野獣たちが人間をむさぼり食う。そして、海の大波が人間の頭の上を覆う。人間同士が殺し合いをするなか、人間はみな自分たちの只中で起こる災いの中で、自らの滅びを招くことになるであろう」。これは基準を満たさない人々、後に神の国で救いを受けられない人々に与えられる「特別扱い」である。「あなたがたは、必ずや、わたしの光の導きの下、闇の力の要塞を打ち破るだろう。あなたがたは、闇のただ中にあっても、あなたがたを導く光を絶対に見失いはしないだろう」。神がこのようなことを言えば言うほど、人々はますます自分が尊敬に値する存在なのだと気づくようになり、そうして信仰を深めて新し

い生き方を求めるようになる。人間が求めれば、神は施す。ひとたび人間をある程度暴き出すと、神は自らの話し方を変え、最善の結果を得るために祝福の口調を使う。このような方法で人に要求することで、より実践的な成果を挙げることができるのだ。人は誰しもビジネスについて相手と進んで話すから、つまり人はみなビジネスの専門家なのだから、これこそまさに神がそう述べるときに目指していることである。では、「秦の国」とは何か。ここで神が意味しているのはサタンに墮落させられた地上の王国のことではなく、むしろ神のもとから来たすべての天使の集まりのことである。「決意を固くし、揺らぐことがない」という語句は、天使たちがサタンのすべての勢力を打ち破り、それにより秦の国が全宇宙に打ち立てられることをほのめかしている。ゆえに、秦の国の本当の意味は、地上におけるすべての天使の集まりのことなのである。ここでそれは地上を意味する。そのため、後に地上に存在する国は「神の国」ではなく「秦の国」と呼ばれるだろう。地上の「神の国」に本当の意味はなく、実質的には「秦の国」が「神の国」なのだ。したがって、「秦の国」の定義と結びつけなければ、「必ずや、全宇宙にわたしの栄光を輝かせるだろう」という言葉の本当の意味を知ることはいできない。これは未来における地上のすべての人の格付けを明らかにしている。秦の国の人はみな、地上のすべての民が刑罰を受けた後、彼らを統治する王となる。地上のすべては秦の国の人々による統治のおかげで正常に機能する。これは状況を大雑把に示した概略図にすぎない。すべての人間は神の国の中に留まる。つまり、彼らは秦の国に残されるのである。地上の人間は天使と連絡し合うことができるだろう。そこで天と地はつながれる、言い換えれば、地上のすべての人間は天にいる天使たちと同じく神に従い、神を愛するのである。その時、神は地上のすべての人の前に公然と現われ、彼らが神の真の顔を肉眼で見られるようにし、人々にいつでも自分の姿を見せるのだ。

第二十章

神は全人類を創造し、今日まですべての人々を導いてきた。したがって、神は人間の間で生じることはすべて知っている。神は人間世界の苦しみを知っており、人間世界の甘美を理解しているので、毎日すべての人類の生活状態を説明し、その上、すべての人類の弱さと墮落に対処している。すべての人類が底なしの穴に投げ入れられるのも人類全体が救われるのも神の心からの切望ではない。神の行動にはいつも原則があるが、誰にも神が行うすべての法則を把握することはできない。人々が神の権威と激怒に気づくと、神はすぐに慈悲と愛に調子を変えるが、人々が神の慈悲と愛を知ると、すぐに再度調子を変え、言葉をまるで生きている鶏を食べるのと同じように硬いものに

する。神のすべての言葉で、始まりが繰り返されたことは一度もなく、昨日の言葉の原則に従って話された言葉は一語もない。言葉の調子も同じではなく、内容に関連性もない——こうしたすべては人々をさらに惑わせる。これが神の英知であり、神の性質の表れである。神は、人々の概念を追い払うために、サタンを困惑させ、サタンから神の行いを害する機会を取り除くために、その話の調子とやり方を使う。神の行動がすばらしいので、人々の心は神の言葉によって動揺したままになる。彼らは正面玄関を見つけることがほとんどできないし、本当に「神のために費やすために眠りや食べ物を控える」ことを達成できるよう、いつ食べるか、休息するかさえわからない。だが、この時点でさえ、神は現在の状態に相変わらず不満で、いつも人間に腹を立てており、真実の心を明かすよう強いる。さもないと、神からほんのわずかな慈悲を示されただけで、人々はすぐに「従い」、だらしなくなる。これが人間の卑しいところである。人間をおだてに乗せることはできず、動かすためには叩いたり、引っぱったりしなければならない。「わたしの見てきた者たちの中で、自分の意思で直接わたしを求めてきた者は一人もいない。彼らはみな、他人に促され、大多数にしたがってわたしの前に来る。そして、自分の生活を豊かにするために、代価をはらったり、時間をかけたりすることを好まない。」世の中のすべての人の状況はこんなものである。したがって、使徒や指導者の働きがなければ、すべての人々はずっと以前にばらばらになっていただろう。そこで、遠い昔から使徒や預言者がいなかったことはない。

これらの言葉で、神は全人類の生活状態を要約することに特に注意を払っている。「人間の生活には、少しのぬくもりもなく、人間らしさの痕跡や光がまったくない——それなのに、人間は好き放題に、価値のない人生を送り、何事も成し遂げず、走り回っている。瞬く間に死が迫り、人間は悲痛な死を迎える。」のような言葉はすべてこのタイプである。なぜ神は今日まで人類の生活を導いてきたのに、人間世界の生活が無意味であることも明らかにするのだろうか。そして、なぜ神はすべての人々の生活全体を「急いでやって来て、急いで去っていく」と表現するのだろうか。これはすべて神の計画だと言うことができ、すべては神によって定められており、そういうものとして、別の観点から言えば、神が神性の生活を除いたすべてをいかに軽蔑しているかを反映している。神はすべての人類を創造したが、けっしてすべての人類の暮らしの楽しみを本当に取り上げたことはなく、人類がサタンによる墮落の下に存在することをただ許している。人類がこの過程を経験した後、神は人類を全滅させるか、または救う。こうして、人間は空虚ではない地上の生活を達成するだろう。これはすべて神の計画の一部である。そして

、人間の意識にはいつも願望があり、それが原因で誰一人喜んで罪のない死に方をする気にはなっていない――しかし、この願望を達成する者たちだけが終わりの日の人々なのである。今日、人々はまだ取り消すことのできない虚しさのなかで暮らしており、目に見えない願望をいまだに待っている。「わたしが顔を手で覆い、人々を地中に押し込むと、人々はただちに息苦しくなり、かろうじて生きているという状態になる。人々はわたしが彼らを滅ぼすことを恐れ、わたしに向かって声を上げる。人間はわたしが栄光を得る日を目の当たりにしたいと願っているからである。」今日すべての人々の状況はこのようなものである。彼らはみな「酸素」のない「真空」の中に生きているので、呼吸困難になっている。神は、すべての人類の生存を援助するために人間の意識下の願望を利用する。そうでなければ、すべての人は「家庭を離れ、修道士になる」だろう。そしてその結果、人類は絶滅し、終わってしまうだろう。したがって、人間が今日まで生存しているのは、神が人間に与えた約束のおかげである。これは真実であるが、人間は一度もこの規範を発見していないので、なぜ「再び死が訪れるのではないかと、深く恐れる」のかわからない。人間なので、誰もこのまま生きていく勇氣はないが、死ぬ勇氣もない。したがって神は、人々は「悲痛な死を迎える」と言う。人間の間の本当の状況とはそうしたものである。おそらく、将来を見通して、挫折に直面し、死を考えた人々もいただろう。しかしこれらの考えはけっして実現しなかった。おそらく、家族の争いのために死を考えた人々もいただろうが、愛する者たちの身を案じて、願望を達成できないままにいる。そしておそらく、結婚に打撃を受けたために死を考えた人々もいただろうが、彼らはそれをやり遂げる気持ちはない。こうして、人々は心に不満、あるいは永遠に続く後悔を抱いたまま死ぬ。すべての人々のさまざまな状態とはそうしたものである。人間の広い世界を見渡すと、人々は終わりのない流れの中を行ったり来たりしている。そして彼らは生よりも死の方が喜びがあるだろうと感じているが、その一方でそれはやはり口先だけのことであって、死後戻ってきて、生きている者たちに死をどんなに享受したか、模範を示した者は誰もいない。人々は卑しむべき悪党である。彼らには恥も自尊心もない。そしていつも約束を破る。計画の中で、神は神の約束を享受する人々の集団を予め決めた。そこで次のように言う。「多くが肉の体で生き、多くが死んでは、この世に生まれ変わった。しかし、けっして誰も今日の神の国の祝福を受ける機会を得なかった。」今日の神の国の祝福を受けるすべての人々は、天地創造以来神によって運命づけられている。神はこれらの霊が終わりの日に肉の姿で暮らすよう手配した。そして結局神はこの集団の人々を獲得し、彼らが秦の国にいるよう手配する。これらの人々の霊は実質的には天使なので、神は次のように言う。「人間の霊には、わたしの痕

跡がほんとうに存在しないのか。」実際、肉の体で暮らす時、人々は霊界の物事に無知なままである。これらの「『人間』はわたしに用心深い目を向ける」という単純な言葉から、神の気分を見ることができる。これらの単純な言葉には神の複雑な心理が表されている。天地創造の時代から今日に至るまで、神の心の中にはいつも怒りと裁きをともなった悲しみがあつた。地上の人々は神の旨に気を配ることができないからである。「人間は山の野蛮人のようなものだ。」と神が言う通りである。だが神はこうも言う。「陸地のすべての富を楽しみ、海に飲み込まれる危険から解放されようと、いつの日か人間は大海原をわたしに向かって泳ぐことだろう。」これは神の旨が達成することであり、避けられない傾向として述べることもでき、神の働きの達成を象徴している。

神の国がすっかり地上に降りて来ると、すべての人々は最初の姿を取り戻すだろう。したがって、神は次のように言う。「わたしは玉座の上から楽しむ。わたしは星々の間で暮らす。そして、天使たちがわたしに新しい歌や踊りをささげる。天使たちは、もはや自身のもろさに涙がほほを伝うことはない。もはや天使がわたしの前ですすり泣くのを聞くことがない。そして、もはや誰も苦難をわたしに訴えることがない。」これは、神が完全に栄光を得る日は人間が休息を享受する日であることを示している。人々はサタンの妨害にあつて右往左往することはもはやなく、世界は前進することをやめ、人々は安楽に暮らす――天空の無数の星は更新され、太陽、月、星など、そして天や地のすべての山と川はみな変化するからである。そして人間が変化し、神が変化するので、すべてのものも変化するだろう。これが神の経営（救いの）計画の最終的目標であり、最後には達成されるものである。これらの言葉すべてを話す時、神の主な目的は人間に神をわからせることである。人々は神の行政命令を理解しない。神の行いはすべて神自身によって計画され、整えられる。そして神は誰であれ、邪魔させない。それどころか、すべては神が整え、人間には達成不可能であることを人々に見届けさせる。人間がそれを見ることができたとしても、あるいは想像することは困難だと気づいても、すべてを支配しているのは神だけであり、神はそれがほんの僅かな人間の考えによって汚されることも望まない。神はたとえほんの少しでも参加する者は誰であれ、けっして許さないだろう。神は人間に嫉妬する神であり、神の霊はこの点に関して特に神経過敏なようである。したがって、邪魔をしようという気持ちがほんの少しでもある者は、神が放つすべてを破壊する炎に襲われ、灰になってしまう。神は人々が自分の賜物を思うままに誇示することを許さない。賜物のある者は皆いのちがないからである。これらの賜物と思われるものは神に奉仕するだけであつて、サタンが起源である。したがって神に特に

軽蔑され、神はこれにはまったく譲歩しない。しかし、神の働きに参加するのは生命のない人々であることが少なくない。そのうえ、彼らの参加は見つからないままである。才能によって偽装されているからである。遠い昔から、賜物のある人々はけっして揺るぎなく立っていたことがない。彼らにはいのちがないからであり、したがって抵抗力にまったく欠けているからである。そのため神は次のように言う。「もしわたしが率直に話さなければ、人間はけっして理解するに至らず、気づかないままわたしの刑罰を受けることになる。人間は肉の体のわたしを知らないからである。」肉と血の体の人々はみな神によって導かれるが、サタンの束縛の中でも生きている。そこで人々は、熱望のためであれ、憧れ、あるいは自分たちが整えたい環境のためであれ、お互いに正常な関係を持ったことがない。そのような異常な関係は神がもっとも嫌悪することであり、「わたしが求めるのは、生き生きとした生き物である。死に染まった死体ではない。わたしはゆったりと国のテーブルにつき、地のすべての人々に、わたしの審査を受けよと命じる。」のような言葉が神の口から出てくるのはこうした関係のためである。神は全宇宙の頭上にいるとき、毎日肉と血の体の人たちのあらゆる行動を観察し、一つの行動もけっして見逃さない。これらは神のなす行為である。そこでわたしはすべての人々に自分の考え、着想、行動を調べるよう促す。わたしはあなたが神に対する恥辱の印であることを求めるのではなく、神の栄光の表明になることを求め、あなたの行動、言葉、生活のすべてであなたがサタンの悪ふざけの標的にならないことを求める。これがすべての人々に対する神の要求である。

第二十一章

神の目には、人間は動物の世界にいる動物のように見える。彼らはお互いに争い、殺し合い、お互いに途方もないやりとりをする。神の目に彼らは、年令や性別に関係なく、お互いに悪巧みをする猿のようにも見える。それゆえ、人類全体が行うこと、表現することはすべて神の心に叶ったことがない。神が顔を覆う時はまさに世界中の人々が試されている時である。すべての人々は痛みで苦しんでうめき、みな大災害を恐れながら暮らし、これまでに一人として神の審判から逃れた者はいない。実際、神が肉の体になる主な目的は、肉の体で人間を裁き、罪を咎めることである。神の考えでは、その本質に応じて誰が救われるか、誰が破壊されるかはずっと以前から決められている。そしてこれは最終段階で次第に明らかにされるであろう。月日が経つにつれて、人々は変化し、彼らの最初の形が明らかにされる。卵の中が鶏のひなか、鴨のひなかは殻が割れて開けばはっきりする。卵が割れるときとは、まさに地上の災害が終わるときである。この

ことから、卵の中が「鶏のひな」なのか、「鴨のひな」なのかを知るためには「卵」を割ってみなければならないことがわかる。これは神が考えている計画であり、成し遂げられなければならない。

「惨めな、哀れな人間たちよ。人間がわたしを愛しても、わたしの霊の意向に従うことができないのは、なぜだ。」人間はこのような状態なので、神の旨を満足させるために取り扱われなければならない。そして神は人類を嫌っているために、神は何回も次のように公言する。「おお、全人類の反逆者たちよ。彼らはわたしの足の下で滅ぼされなければならない。彼らはわたしの刑罰により、消えなければならない。そして、わたしの大事業が完成する日、全人類が自身の醜い顔を知るよう、人類の中から追い出されなければならない。」神は肉においてすべての人類に話しかけ、霊の世界、すなわち全宇宙の頭上ではサタンにも話しかけている。これが神の旨であり、神の6000年に及ぶ計画によって達成されることなのである。

実際、神はとりわけ正常で、神が直接実行し、その目で見なければ達成できない事柄がいくつかある。人々が想像しているのとは違い、すべてが神の望むように進んでいる間、神はそこで横になっているわけではない。これは、サタンが人々を混乱させているためであり、その結果、人々は神の真の顔を曖昧にしか知らないことになる。それゆえ、最後の時代に、神は受肉し、何も隠さず真実の姿を人間に明らかにした。神の性質についての説明のなかにはまったく大げさなものもある。たとえば、神は一言で、あるいはほんの少し考えただけで世界を全滅させることができるなど。その結果、ほとんどの人は「神は全能なのに、サタンを一口で飲み込むことができないのはなぜだろう」などと言う。こうした言葉は不合理で、人々が未だに神を知らないことを表している。神が敵を全滅させるには一定の手順が必要なのだが、神は全てに勝利すると言える。最終的には神が敵を打ち負かすことになる。強国が弱小国を打ち負かすときには、時には力を用い、時には戦略を用いて、着実に勝利を達成しなければならないのと同様である。手順があるとはいえ、強国には新世代の核兵器があり、弱小国はかなり劣っているから戦わずして降参するだろうと言うことはできない。それは不合理な議論というものである。強国は必ず勝ち、弱小国は必ず敗れると言えるだろうが、強国は直接弱小国に攻め入って初めて、相手より大きな力を持っていると言えるのである。それゆえ神は、人間が神を知らないと常に言うのである。では、上述のことは人間が神を知らない理由の一面なのだろうか。これらは人間の概念なのだろうか。なぜ神は人間が神の現実性を知ることだけを求め、その結果、自分が肉の体になるのだろうか。実際に、ほとんどの人は熱

心に天を崇拝するが、「人間のすることによって天が感動することはいささかもなかった。そして、もしわたしの人間に対する扱いが、人間の行動すべてに基づいているのなら、人間はみなわたしの刑罰を受けながら生きることになる。」

神は人間の本質を見抜く。神の言葉によると、神は人間に「ひどく悩まされている」ので、人間に対してこれ以上注意を払う気持ちがなく、希望も少しもないように思われる。人は救いようがないように思われる。「大勢の人が涙で頬をぬらしているのを見た。また、大勢の人がわたしの富と引き換えにしようと心をささげるのをも見た。そうした『敬虔さ』にもかかわらず、そうした人間の衝動的行為の結果として、わたしがすべてを人間に与えたことは、ない。人間はけっして、すすんでわたしの前に自身のすべてをささげることがないからだ。」神が人間の本質を明らかにすると、人間は自分を恥じるが、これは表面的な知識にすぎず、神の言葉によって自分の本質を真に知ることはできない。このように、ほとんどの人は神の旨を理解せず、神の言葉の中に自分の生き方の道を見つめることができない。そこで彼らの頭が鈍ければ鈍いほど、神はいっそう厳しく彼らをあざ笑う。こうして、彼らは無意識のうちにおぞましい役割を始める——その結果、「柔らかい刀」で刺されるとき、自分自身を知るようになる。神の言葉は人間の行為を称賛し、励ますように思われる——しかし、人々は、神は自分たちを嘲笑していると常に感じている。そこで、彼らは神の言葉を読むとき、まるで震えているかのように顔の筋肉が時々引きつる。これは彼らの良心が汚れているからであり、心ならずも彼らの顔が引きつるのはこのためなのだ。彼らは、笑いたいのになぜか笑えず、泣きたいのに泣けないという痛みを苦しむ。人々の滑稽さは遠隔操作の「VCR」で再生されるが彼らにはスイッチを切ることができず、耐えるほかないからである。「神の言葉に集中する」ことは共働者のすべての会合で説かれているが、赤い大きな竜の子供たちの性質を知らない者がいるだろうか。面と向かうと、彼らは子羊のように従順だが、背を向けると、狼のように獰猛になり、それは神の次の言葉が示すようである。「多くの人は、わたしが言葉を与えるとき、ほんとうにわたしを愛する。しかし、霊でわたしの言葉を愛するのではなく、公共物でもあるかのように気安く用いて、気が向けばいつでも元の場所に投げ戻すのだ。」なぜ神はいつも人間を暴いてきたのだろうか。これは、人間の古い性質は微動だにしないものであることを示している。泰山のように、その本質は何億もの人々の心の中に高くそびえているが、愚公が山を移す日が来るだろう。そしてこれが神の計画である。神の言葉では、神が人間に要求しない時はなく、警告しない時も、あるいは暮らしの中で明らかにされる人間の本質を指摘しない時も一瞬とてない。「人間

がわたしから距離を置いているとき、人間がわたしを試すとき、わたしは雲の中に身を隠す。そのため、人間はわたしの痕跡も見出すことができず、悪人の手の内で生きて、言われるままのことをしているのだ。」実際、人々は神が存在するところで暮らす機会はほとんどない。求める気持ちがあまりにも少ないからである。その結果、ほとんどの人は神を愛しているのに、邪悪な者の手元で暮らし、行動の全ては邪悪な者に指示されている。人々が本当に神の光の中で暮らし、日々一瞬毎に神を求めていれば、神がこのように話す必要はないだろう。そうではないか。人々はテキストを脇へ置くと、すぐに神のこともテキストのことも脇へ置き、自分の事業に関心を持ち、その後神は彼らの心から消える。しかし、彼らが再びテキストを取り上げると、神を心の片隅に置いていたことに突然気づく。「記憶のない」人間の暮らしとはそんなものである。神が話せば話すほど、言葉は高くなる。言葉が頂点に達すると、すべての働きは終了し、その結果、神は言葉を発するのを止める。神の働きの原則は、働きが頂点に達した時に止めるということなのだ。つまり、神は働きが頂点に達すると働きを続行せず、突然に止める。神は不必要な働きはけっして行わない。

第二十二章と第二十三章

今日、すべての人々は神の旨を把握し、神の性質を知ることが厭わないが、なぜ自分たちが自らの望みに従うことができないのか誰も知らないし、自分の心がなぜいつも自分を裏切るのか、なぜ自分の望むことを達成できないのか、彼らにはわからない。その結果、彼らはまたしても激しい絶望感に襲われるが、怯えてもいる。こうした矛盾する感情を表すことができず、彼らはただ悲しんでうなだれ、自問し続けるほかない。ひょっとして神はわたしを啓かなかったのだろうか。ひょっとして神はこっそりわたしを見捨てたのだろうか。おそらく、他の人はみな大丈夫で、神はわたし以外のすべての人々を啓いたのだろうか。なぜ、わたしは神の言葉を読むときいつも困惑するのだろうか、なぜわたしは何も把握できないのだろうか。人々はこれらのことを考えるのだが、誰もあえてそれを表現しない。彼らは心の中であがき続けているだけである。実際、神以外の誰も神の言葉を理解することはできないし、神の本当の心を把握することはできない。しかし、神はいつも人々が神の心を把握することを求める――これはカモを止まり木に追い立てようとするようなものではないか。神は人間の欠点を知らないのだろうか。これは神の働きの交差点であり、人々にはわからないことである。そこで、神は次のように言う。「人間は光の中に生きていながら、光の貴さには気づいていない。人間は光の実体、光の源、さらに、光が誰のものであるかについては、無知である。」神の言葉と神が

人間に要求することによれば、誰も生き残れないだろう。人間の肉には神の言葉を受け入れるものは何もないからなのだ。だから、人々が神の言葉に従うことができ、神の言葉を大切にして切望し、人間の状態を指摘して神が発する言葉を適用し、自分自身を知るならば、これはもっとも高度な基準となるのだ。神の国が最終的に実現するときには、肉の体で暮らす人間はまだ神の旨を把握することができず、神から直接指導を受ける必要があるだろう。それは人々が単にサタンの妨害を受けることなく、正常な人間生活を送ることであり、それがサタンを打ち負かす神の目的であり、主に神が創造した人間の本来の本質を取り戻すためである。神の考えでは、「肉」は次の事を意味する。すなわち、神の本質を理解できないこと、霊の世界の出来事を見ることができないこと、さらには、サタンに堕落させられるが、神の霊の指示も受けることができること。これが神の創造した肉の本質である。もちろん、人類の生き方における秩序不足から生じる混乱を避けるためでもある。神が話せば話すほど、そして神の言葉が鋭くなればなるほど、人々はいっそう神の言葉を理解するようになる。人々は無意識のうちに変化し、無意識のうちに光の中に生きる。こうして「光のために、すべての人々は成長していき、暗闇を離れた。」これが神の国の美しい光景であり、昔しばしば次のように語られたことに似ている。「光の中に暮らし、死から離れる。」秦の国が地上で実現するとき――つまり、神の国が実現するとき――地上ではもう戦争は起こらないだろう。二度と再び飢饉も疫病も地震も起こらず、人々は武器の生産をやめ、すべての人は平和と安定の中に暮らし、人同士はに普通にに関わり合い、国同士も普通にに関わり合うだろう。だが、現在の状態はこれとは比べものにならない。天の下のすべては混乱しており、各国でクーデターが徐々に起こり始めている。神が声を発するにつれて、人々は徐々に変わっていき、国内では、各国がゆっくりとばらばらになりつつある。バビロンの揺るぎない基礎は砂上の城のように揺れ始め、神の心が変わるにつれて、気づかないうちに激しい変化が世界に生じる。そしてあらゆる種類の兆候が常に現れ、人々に世界の終りの日が来たことを示す。これが神の計画であり、これらは神が働く一連の段階であり、各国は確実にばらばらにされ、古いソドムは再度滅ぼされるだろう。そこで神は次のように言う。「世界は崩壊しつつある。バビロンはまひしている。」神以外には誰も完全にこれを理解することはできない。結局、人々の認識には限界がある。たとえば、国内事情担当の大臣たちは、現在の状況は不安定で混乱していることを知っていても、それに取り組むことはできない。彼らはただ流れに乗って、堂々と顔を上げることができる日が来ることを望み、太陽が再び東から昇り、国中を照らし、この惨めな事態を好転させる日が来ることを切望することしかできない。しかし彼らは、二度目に太陽が昇るときとは、その

日の出はかつての秩序の回復を意味するのではなく、完全な変化による復活を指すのだということを知らない。それが全世界に関する神の計画である。神は新しい世界をもたらすが、とりわけ、まず人間を新しくする。今日、人々に神の言葉をわからせることが、極めて重要であり、人々に身分の恩恵を享受させるだけが重要なのではない。そのうえ、神は次のように言う。「神の国では、わたしは王だ――しかし、人間は、わたしを王として扱う代わりに、わたしを天から降りてきた救い主として扱う。そのため、人間はわたしから施しをもらうことを期待し、わたしを知ることを追求しない。」すべての人々の本当の状況はこうしたものである。今日、極めて重大なのは完全に人間の飽くことのない強欲さをなくし、人々が何も求めずに神を知るようにさせることである。そこで、神が次のように言うのは何の不思議もない。「まことに大勢が、わたしの前で乞食のように叫んだ。まことに大勢が『袋』を開いて、生きるための食物をくれるよう願った。」これらのさまざまな状態は人々の強欲さを指摘し、人々は神を愛さずに要求ばかりすること、さもないければ、自分たちが望むものを得ようとすることを示している。人々は飢えた狼のような性質を持っており、誰もがずるくて欲深い。したがって、神は繰り返し彼らに要求をし、心の中の強欲さを引き渡し、真摯に神を愛するよう強いる。実際、今まで人々は心のすべてをまだ神に捧げていない。彼らは二つの船にまたがり、時には自分自身に頼り、時には神を完全には信頼しないまま神に頼る。神の働きがある点に到達すると、すべての人々は真の愛と信仰のなかで暮らすだろう。そして神の旨が満たされるだろう。このように神の要求は高くはないのだ。

天使たちは神の子らと神の民の間を絶えず動き回っており、天と地の間を急いで走り、毎日霊の領域に戻っては、また人間世界に降りる。これは彼らの義務であり、こうして、毎日神の子らと神の民は牧養され、彼らの生活は次第に変化する。神が自分の姿を変える日、地上における天使の働きは正式に終了し、彼らは天の領域に戻るであろう。今日、すべての神の子らと神の民は同じ状況にある。時が刻々と進むにつれてすべての人々は変わっていき、神の子らと神の民は次第に成熟度を高めていく。それとは対照的に、すべての反逆者も大きな赤い竜の前で変化している。人々はもはや大きな赤い竜に忠実ではなく、悪魔はもはや竜の計画には従わない。それどころか、みな「自分がふさわしいと思う振る舞いをし、それぞれが最適と思う道を選んでいる。」そこで神が「どうして地上の国々が滅びないことがあろう。どうして地上の国々が倒れないことがあろう。」と言うとき、天は一瞬にうちに降りてきて…。それは、まるで人類の終わりを予言する不吉な感情があるかのようである。ここで予言されているさまざまな不吉な兆候

はまさに大きな赤い竜の国で起こっていることであり、地上の人々の誰もそれを逃れることはできない。神の言葉で予言されるのは、このようなことである。今日、人々の予感では、猶予する時間がなく、人々は災害が今にも襲ってくると感じているようである――しかし、彼らには逃れる手段はないので、誰にも希望はない。神は次のように言う。「わたしは、わたしの国の『奥の部屋』を日々に装飾しているが、いきなりわたしの『作業場』に飛び込んできて仕事の邪魔をした者は、誰もいない。」実際、神の言葉の意味は、言葉で神を人々に知らせることだけにあるのではない。とりわけ、神の言葉は、神がその働きの次の段階に備えて、全宇宙にあらゆる種類の発展を毎日準備していることを示している。「いきなりわたしの『作業場』に飛び込んできて仕事の邪魔をした者は、誰もいない。」と神が言うのは、神が神性で働いているからであり、たとえ望んでも、人々は神の働きに参加することはできないからである。わたしはこう尋ねたい。あなたは全宇宙のすべての発展を手配することができるだろうか。あなたは地上の人々に祖先を否定させることができるだろうか。全宇宙の人々を操って神の旨に仕えさせることができるだろうか。あなたはサタンに暴動を起こさせることができるだろうか。人々に世界は荒廃して、空虚だと感じさせることができるだろうか。人々にそのようなことはできない。昔、サタンの「腕前」がまだ完全に抑えられていなかったとき、サタンはいつも神の働きの各段階で妨害をしたものだった。今の段階では、サタンは策略を使い果たしたし、そのため、神はサタンが本性を現わし、すべての人々がわかるようにさせている。これが「誰もわたしの働きの邪魔をしたことはない。」という言葉の本当の意味である。

毎日、教会の人々は神の言葉を読み、彼らは毎日、いわば「手術台」で解剖される。たとえば、「地位を失う」、「お払い箱にされ」、「恐怖が静まって落ち着く」、「放棄」、「『感情』のかけらもなく」のような嘲りの言葉は、人々を恥のあまり沈黙させる。彼らの全身のどの部分も――頭からつま先まで、内も外も――ひとつとして神に認められていないかのようだ。なぜ神の言葉は人々の生活をそんなにも剥ぎ取ってむき出しにしてしまうのか。神はわざと物事を人々にとってむずかしくしているのだろうか。まるですべての人々の顔は洗い落とすことのできない泥で汚れているかのようである。彼らは頭を垂れ、あたかも詐欺師のように毎日己が罪の釈明をする。人々はサタンに墮落させられ、自分自身の本当の状態に十分気づかないほどである。しかし、神の目から見れば、サタンの毒が人々の体の隅々まで、骨の髄にまで及んでいるのだ。その結果、神の暴露が徹底的であればあるほど、人々の恐怖は深まる。こうして、すべての人々は

人間の中のサタンを知ることができ、人間の中のサタンを見ることができる。彼らは肉眼ではサタンを見ることができなかったからである。そしてすべてが現実になったので、神は人間の性質を暴露する――つまり、サタンの姿を暴露する――そして人間に現実であり、触れることのできるサタンを見せるので、その結果、人々は実践的な神をよりよく知るようになる。神は人間が肉の神を知ることを許し、サタンの姿を具体化する。このため、人間はすべての人々の肉の中にあり触知できる実際のサタンを知ることができる。これらのさまざまな状態はすべてサタンの行為を表している。そして、肉にある人々はみなサタンの姿の具現化であると言ってもいいだろう。神は敵とは相容れず、お互いに敵対心を持っていて、二つの異なる力なので、悪魔は悪魔、神は神であり、両者は火と水のように相容れないし、天と地のようにいつも別々である。神が人間を創造した時、ある種の人々は天使の霊であったが、ある種の人々は霊を持たず、そのため、悪魔の霊にとりつかれ、悪魔と呼ばれている。結局、天使は天使であり、悪魔は悪魔である――そして神は神である。これが、その種類に従って分類されるという言葉が意味するものであり、そこで天使が地上を支配し、恵みを享受するとき、神は自身の住み家に戻り、残りの者たち――神の敵――は灰になる。実際、外見上すべての人々は神を愛する――しかしその根源は彼らの本質にある。天使の本性を持つ人々がどうして神の手を逃れて、底なしの穴に落ち込むことがあるのか。そして、悪魔の本性を持つ人々がどうして本当に神を愛することができようか。実質上、これらの人々は本当には神を愛していないので、どうして神の国に入る機会を持つことができるだろう。天地創造以来、すべては神によって手配された。神が次のように言うとおりでである。「わたしは雨風の中を進む。何年も人間の中で過ごし、それが今日まで続いた。これは、わたしの経営（救いの）計画の手順なのではないか。誰がわたしの計画に付け足しをしたらだろう。誰がわたしの計画の手順から抜けられるだろう。」肉の体になった神は、人間の生活を経験しなければならない。これが実践の神の本当の一面ではないだろうか。神は人間が弱いからと言って人間に何の隠し立てもしない。それどころか、神は真実を人間に暴露し、次のように言う。「わたしは何年も人間の中で過ごした。」神が何年も地上で過ごしたのは神が受肉した神だからである。それで、あらゆる過程を経験した後に、神が初めて受肉したのだと見なされ、その後神はようやく肉にある神性によって働くことができるようになるのだ。そしてすべての奥義を明らかにしてからようやく神は姿を変えるだろう。これが「非超自然」のもう一つの説明であり、直接神によって指示されているものである。

人々は神の言葉の試練を、とおり一遍のやり方によってではなく、ひとつひとつ通過しなければならない——そうさせることが神の委託である。

第二十四章と第二十五章

この二日間の言葉は、丁寧に読まなければそこから何も見つけ出すことはできない。実際は一日で話すべき言葉であったが、神は二日に分けて語った。すなわち、この二日間の言葉は一つのまとまりなのだが、人々が受け入れやすいように神は二日間に分け、人々に一息入れる機会を与えた。これが人間に対する神の考慮なのである。神のすべての働きの中で、人々はみな自分の場所でそれぞれの役割と本分を尽くす。協力するのは天使の霊を持つ人々だけではない。悪魔の霊を持つ人々も、サタンのすべての霊がするように「協力する」。神の言葉の中に神の旨が見られ、神の人に対する要求が見られる。「わたしの刑罰はすべての人間に下るが、それはまた、すべての人間から遠いままである。すべての人のすべての生活は、わたしへの愛と憎しみで満たされている。」という言葉から、神が刑罰を用いてすべての人々を脅し、神についての認識を得させようとしていることが明らかになる。サタンの墮落と天使たちの弱さが原因で、神は行政命令を使わず、言葉のみを使って人々に刑罰を与える。天地創造の時から今日に至るまで、これが天使とすべての人々に関する神の働きの原則であった。天使たちは神に属しているので、いつかは必ず神の国の民になり、神の慈しみを受け、神に守られる。その一方で、ほかのすべての者たちも種類に応じて分類され、サタンのさまざまな悪霊たちのすべては懲罰を受け、霊のないすべての人々は神の子らと神の民によって支配されるだろう。それが神の計画である。そこで、神はかつて次のように言った。「わたしの日の到来は、本当は人間の死の瞬間なのか。わたしはほんとうに、わたしの国が建てられるとき、人間を全滅することになるのか。」これら二つは単純な疑問であるが、これらは全人類の終着点のための神の取り決めなのである。神が到来するときは、「全宇宙の人々は十字架にさかさまに張り付けにされる」ときである。神がすべての人の前に現れ、神の存在を人々に知らせるために刑罰を用いるのは、このためである。神が地上に降臨するときは最後の時代で、地上の国々がもっとも騒然としている時なので、神はこう言う。「わたしが地上に来るとき、地上は闇に包まれ、人間は『ぐっすり眠っている』。」そこで、今日受肉した神を知ることができる人はほんの一握りしかおらず、ほとんど誰もいないと言ってよい。今は最後の時代なので、実践的神について誰も本当には知らず、神についての認識は表面的でしかない。そしてこのために、人々は痛みをともなう精練の中で暮らしている。人々が精練されるのを止めるときは刑罰を受け始める時でもある。

り、神がすべての人々の前に現れ、直接神を見ることができるようにする時である。受肉した神によって人々は災害に陥り、抜け出すことができない――それは大きな赤い竜に対する神の罰であり、神の行政命令である。暖かい春になり、花々が開花し、そして天の下のがすべてが緑に覆われ、地上のすべてのものがあるべき場所に納まると、すべての人々と物事は次第に神の刑罰を受けることになるだろう。そしてその時、地上における神のすべての働きは終わるだろう。神はもはや地上では働かないし、住まないだろう。神の偉大な働きが完了しているからである。人々はこの短い期間、自分の肉を忘れることはできないのだろうか。神と人の間の愛を裂き得るものは何だろうか。誰が神と人の間の愛を引き裂き得るだろうか。それは両親だろうか、夫か、姉妹か、妻か、それとも痛みをともなう精練だろうか。良心が持つ感情は人間の心の中の神の姿を消し去ることができるだろうか。人々の互いの恩義と行動は、自ら出た行為だろうか。それらを人間は矯正することができるのだろうか。誰が自分自身を守ることができるだろう。人々は自らに施すことができるだろうか。人生で強いのは誰だろう。わたしから離れて独り立ちできるのは誰だろう。自分を顧みるようにと、すべての人々に向かって神が幾度も要求するのはなぜだろう。なぜ神は次のように言うのだろうか。「自分の困難を自らの手で用意する人などあるだろうか。」

目下のところ、世界中が闇夜に包まれており、人々は無感覚で頭が鈍いが、時の手はいつも前に向かって時を刻み、一秒一分も止まらず、地球、太陽、月の回転はだんだん速くなる。人々は、あたかも彼らの終わりの日は目の前にあるかのように、その日が遠くないことを感覚的に知っている。人々は自らが死ぬ時のためにすべての準備を絶え間なく行い、死ぬ用意ができるようにしている。そうでなければ、彼らは無駄に生きたことになり、後悔が残るのではないだろうか。神が世界を滅ぼすとき、神は諸国の国内事情に変化をもたらすことから始め、それによってクーデターが起こる。こうして、神は全宇宙の人々の奉仕を結集する。大きな赤い竜がとぐろを巻いている地は、示威地域である。国内がばらばらになり、内国事情は大混乱に陥り、誰もが自己防衛だけを行っており、月に脱出しようと準備しているが――しかし、彼らが神の手による支配を逃れることなどできようか。神が、人々は「自分自身の苦い杯から飲む」と言ったとおりである。国内紛争の時はまさに神が地上を離れる時である。神は大きな赤い竜の国にとどまり続けず、すぐに地上における働きを終わらせるだろう。時が経つのは早いので、時間はあまり残っていないと言ってよい。神の言葉の調子から、神はすでに全世界の終着点について話していること、ほかのものに関しては言うことは何もないことがわかる。こ

れが、神が人間に明らかにすることである。神が次のように言うのは、人間を創造する目的ゆえである。「わたしの目には、人間はすべての支配者だ。わたしは人間に少なからぬ権威を与えた。地上のすべてを扱わせた――山々の草、森の動物たち、そして、水の中の魚。」神が人間を創造した時、神は人間が万物の主人になるよう前もって定めた――だが、人間はサタンによって墮落させられたので、自分たちが望むように生きることができない。この結果が今日の世界になり、人々は野獣と何ら変わらず、山々は河川と一緒に、「人間の生涯は苦しみに満ち、走り回り、むなしさに楽しみを加える。」という結果になった。人間の生活には何の意味もないので、そしてこのことが人間を創造した神の目的ではなかったので、全世界は濁ってしまった。神が全宇宙をきちんと整えるときに、すべての人々は正式に人間生活を経験し始め、そうして初めて彼らの生活は意味を持ち始める。人々は神によって与えられた権限を利用し始め、正式に万物の前に主人として現れ、地上における神の導きを受け入れ、もはや神に背かず、神に従うだろう。しかし、今日の人々はそれとはかけ離れている。彼らが行うすべては神を通して「私腹を肥やす」ことであり、そこで神は「わたしが人間にしている働きは、人間のためになっていないのだろうか。」のような一連の質問をする。もしも神がこれらの質問をしなければ、何も起こることはないだろう。しかし、神がそのような質問をすると、堅く立っていることが出来ない人々もいる。彼らの良心は恩義を感じているからで、彼らは純粋に神に味方するのではなく、自分自身に味方しているからである。何もかもがむなし。何もかもがむなし。そこで、これらの人々と「あらゆる宗教、社会の領域、国家、宗派はみな、地上のむなしさを知っており、彼らはみな、わたしを求め、わたしの戻るのを待っている。」すべての人々は、神が戻ってきてむなし古い時代を終わりにすることを熱望しているが、大災害に陥ることも恐れている。宗教界全体はすぐに荒廃し、すべての人々から顧みられなくなるだろう。つまり、彼らは現実性に欠け、自分たちの神に対する信仰が曖昧で抽象的であることに気づくだろう。社会のあらゆる領域の人々も散り散りになり、すべての国家や宗派は混乱に陥るだろう。要するに、すべてのものの秩序は四分五裂し、すべては正常性を失い、そこで、人々も本当の顔を剥き出しにするだろう。それゆえ、神はこう言う。「わたしは何度も人間に『大声で呼びかけた』が、これまで誰か、憐れみを感じた者はいるだろうか。誰か、人間性を持って生きてだろうか。人間は肉の体で生きているが、人間性はない。人間は動物の王国に生まれたのだろうか。」人間の間にも変化が起きており、この変化によって、各人は種類に応じて分類される。これは終わりの日に神が行う働きであり、終わりの日の働きによって成し遂げられる効果である。神が人間の本質を明確に話せば話すほど、それによっ

て神の働きの終わりが近いことが証明され、そのうえ、神が人々からいっそう隠されるので、人々はますます落ち着きを失う。人々が神の旨に注意を向けることが少なければ少ないほど、終わりの日の神の働きに対して彼らが払う注意が少なくなる。この結果、人々による妨害は阻止されるので、誰も注意を払わないときに、神は予定していた働きを行う。これがすべての時代を通じて見られる神の働きの一つの原則である。神が人々の弱点について配慮することが少なければ少ないほど、神の神性がより明らかになり、神の日が近づきつつあることが示される。

第二十六章

神の語るすべての言葉から、神の日が日ごとに近づいていることがわかる。あたかも、神の日がまさに人々の目前にあるかのようであり、明日にもやって来るかのようである。そこで、神の言葉を読んだ後、すべての人々は恐怖に襲われ、そよ風に吹かれて小雨と共に落ちてしまう木々の葉のように、世界の荒廃を感じている。すべての人々が地上から完全に消えたかのように、人々は跡形もなく消え去る。彼らはみな不吉な感情を抱いている。すべての人々は、懸命に努力して神の意志に応え、神の意志が妨害を受けずに順調に進行するようにと願っているが、こうした気持ちはいつも不吉な感覚と入り混じっている。今日の神の言葉を取り上げてみよう。言葉が大衆に広められ、全世界に向けて公表されたら、そのとき、すべての人々は頭を垂れて涙するだろう。「わたしは地上すべてを観察し、世界の東に義と威厳、怒り、刑罰をもって現れ、すべての人間たちにわたしを現す。」という言葉によって、霊的事柄を理解するすべての人々は、神の刑罰を逃れることは誰もできないこと、すべての人々は刑罰の苦しみを経験した後、自分たちと同じ種類の人々に従うであろうことを理解するからである。真にこれは神の働きの一段階であり、誰もそれを変えることはできない。神がこの世界を創造したとき、人類を導いた時、神はその英知と驚くほどの力とを示した。そして神がこの時代を終わらせるときに初めて人々は神の真の義と荘厳さ、怒り、刑罰を見るのだ。さらに、神が与える刑罰を通して初めて、人々は神の義と威厳、怒りを見ることができるようである。これは、終わりの日に神の受肉が必要不可欠であるのと同様、人々が辿らなければならない道なのである。神は全人類の終りを宣言した後、神が人間に対して今日行う働きを示す。例えば、神は次のように言う。「かつてのイスラエルは、もうない。そして今日のイスラエルは立ち上がった。塔のようにまっすぐに、この世に、すべての人間の心の中に立ち上がった。今日のイスラエルは必ずや、わが民を通じて存在の源を得る。」「ああ、忌まわしいエジプトよ。……どうしてわたしの刑罰の内に存在できないのか。」

神は人々に向かって、神の手で正反対の二つの国から得た成果を故意に示す。ある意味では世俗的なイスラエルに言及し、別の意味では神に選ばれた者すべてを指し示す――すなわち、神に選ばれた者たちが、イスラエルが変化するのに伴いどう変化するかを指摘する。イスラエルが完全に本来の形に戻ったとき、選民たちはすべてそれ以後完全なものにされるだろう――すなわち、イスラエルは神の愛する人々の意味のある象徴なのである。その一方で、エジプトは神が嫌う者たちの代表の集合である。エジプトが腐敗すればするほど、神に嫌われる人々も墮落していく――そして、バビロンはその後滅びる。このことは明確な対比を形成する。イスラエルとエジプトの終焉を宣言することによって、神はすべての人々の終着点を明らかにする。このように、神はイスラエルについて述べる時、エジプトについても語る。このことから、エジプトの崩壊の日是世界が壊滅する日であり、神がすべての人々に刑罰を与える日であることがわかる。そしてこれはまもなく起こるだろう。つまり、これは神によって今にも達成されようとしており、人間の肉眼にはまったく見えないものだが、なくてはならないものでもあり、誰も変えることはできないことだ。神は次のように言う。「わたしに敵対する者はみな、必ず永遠に刑罰を受ける。わたしはねたみ深い神だから、わたしは人間の行いを軽々しく赦さない。」なぜ神はこのように絶対的な表現で話すのだろうか。そして神が赤い大きな竜の国で直接肉の姿になったのはなぜだろう。神の言葉から神の目的が見て取れる。神が来たのは、人々を救うためとか、人々に対して思いやりを示すため、あるいは心遣いをするため、あるいは守るためではない――そうではなく、神に反対するすべての者たちに刑罰を与えるために来たのである。なぜなら、神はこのように言うからだ。「誰もわたしの刑罰を逃れることはできない。」神は肉の体で生きており、そのうえ、普通の人の姿をしているが、人々が主観的に神を知ることのできない弱さを持っているという理由で神が人を許すことはない。それどころか、「普通の人」の姿を用いて人間の罪をとがめ、神の肉の姿を見るすべての人々に刑罰を受けさせる。こうして、これらの人々は赤い大きな竜の国の国民ではない人々の犠牲になってしまう。しかし、これは神の受肉の主要目的の一つではない。神が受肉した主な目的は、肉の体で赤い大きな竜と戦い、戦いを通して竜の面目をつぶすためである。神の偉大な力は、霊としてよりも肉の姿で赤い大きな竜と戦うことによっていっそう証拠立てられるので、神は肉の体で戦い、神の行いと無限の力を示すのだ。神の受肉によって、無数の人々が「罪なく」非難されてきたし、数えきれないほどの人々が地獄に投げ込まれ、刑罰を受けてきて、肉の体で苦しんでいる。これは神の義なる性質の証明であり、神に反対する人々が今日どのように変わろうとも関係なく、神のまっすぐな性質はけっして変わらないだろう。一度非難

された人々は永久に非難され、再び立ち上がることはけっしてできない。人の性質は、神の性質ようになることができないのだ。神に反対する者たちに対して、人々は熱くなったり冷たくなったりし、左右に揺れ、上下に行き来し、始めから終わりまで一定であることができない。時には彼らを骨の髄まで憎み、時には強く抱きしめる。このような状況はもう発生している。なぜなら人々は神の業を知らないからである。神が次のような言葉を言うのはなぜだろう。「天使は結局天使で、神は結局神である。悪魔は結局悪魔である。不義なる人々はやはり不義であり、神聖なる人々はやはり神聖である」。あなたがたはそれを理解できないのだろうか。神の記憶が間違っているということだろうか。そこで神は言う。「それぞれ同じ種類のものたちと共に、それと知らぬ間に家族のもとに戻っていく。」このことから、次のようなことがわかる。すなわち、今日、神はすでにすべての物を種族別に分類しているので、世界はもはや「無限世界」ではなく、人々はもはや同じ大きな釜の飯を食う仲間ではなく、それぞれの義務をそれぞれの家で実行し、自分の役割を果たしているのだ。これは天地創造時の神の本来の計画であった。すなわち、人々は種類に応じて分類された後、「それぞれ自分の食事を採り」――神は裁きを始めようとした。そこで、神の口から次の言葉が出てきた。「天地創造当初の状態を回復させ、すべてを本来の姿に戻す。すべては大きく変わり、すべてはわたしの計画の内に戻る。」これがまさに神のすべての働きの目的であり、容易に理解できる。神はその働きを完了する――人間は神の働きを妨げることができるだろうか。そして神は人間との間に確立した約束を破棄することができるだろうか。誰が聖霊の行いを変えることができようか。人間の中にできる者がいるだろうか。

昔、人々は神の言葉には決まりがあることを理解していた。神が話すや否や、話したことがすぐに成し遂げられた。このことにうそはない。神がすべての人々を罰と言っているし、さらに、神の行政命令を出しているから、神の働きがある段階まで実行されたことが見て取れる。すべての人々に対してこれまでに発せられた決まりは、彼らの暮らしと神に対する彼らの態度に向けられていて、人々の本質には至らなかった。それは神の定めに基づくのではなく、当時の人間の態度に基づくと言われた。今日の神による行政命令は特別なもので、「人間はみな、種類に従い、それぞれの行いに応じて刑罰を受ける」と、そのやり方が語られている。綿密に読まなければ、この言葉の中に何の問題も見つけれない。神がすべてのものに対して己の種類に従うようにするのは最後の時代になってからのことなので、ほとんどの人はこの言葉を読んでも理解できず、混乱したままであり、相変わらず熱意に欠け、時代の緊急性がわからない。そこで彼らは

これが警告だとは受け取らない。この時点で、神の行政命令が――これは宇宙全体に広められるのだが――人間に示されるのはなぜだろう。これらの人々が全宇宙のすべてのものを代表するのだろうか。その後、神はさらにこれらの人々に対して同情を加えるということだろうか。これらの人々は頭を二つ発達させたのだろうか。神が全世界の人々を罰するとき、あらゆる種類の大惨事が襲ってくるとき、これらの惨事の結果として太陽と月に変化が起こり、これらの大惨事が終わるとき、太陽と月は変わってしまっているだろう――そしてこれが変遷と呼ばれる。敢えて言うなら、将来の大災害は耐え難いものであろう。夜は昼に取って代わり、太陽は一年間現れないかもしれない。燃えるような暑さが数か月続き、下弦の月がいつも人類に向かっていて、太陽と月と一緒に昇ってくるなどの異様な状態が現れるかもしれない。数回の周期変動に続いて、時が経過したあと、こうした周期がまた繰り返されるだろう。神は悪魔に属する人々への処遇に特別な注意を払う。そこで神は意識してこう言う。「全宇宙の人間のうち、悪魔に属する者はみな、滅ぼし尽くされる。」これらの「人々」が自分の本当の特徴を示す前に、神はいつも彼らの奉仕を利用する。結果として、神は彼らの行為には留意せず、彼らがよく行っても彼らに「褒美」を与えないし、彼らの行動が酷くても神は彼らに支払うべき「賃金」を切り詰めない。かくして、神は彼らを見做し、よそよそしい態度をとる。彼らが「善良」であるからといって、神は突然態度を変えたりはしない。時間や場所に関係なく、人間の本質は変わらないからである。ちょうど神と人間の間に定められた契約のように、まさに「たとえ海が枯れ、岩が砕けようとも、何の変化もないだろう」と人が言うように。このように、神は人々を分類するだけであり、人々をたやすく心に留めることはしない。天地創造から今日に至るまで、悪魔はけっして申し分ない振る舞いはしていない。いつも妨害し、混乱させ、異議を申し立ててきた。神が行動したり、話したりするとき、悪魔はいつも加わろうとする――しかし、神は目もくれない。悪魔の話しとなると、神の怒りは抑制がきかないほど湧き出てくる。悪魔は聖霊を持つ者に属さず、関連がなく、隔たり、分離されているからだ。七つの封印が啓示されたあと、地上の状態は次第に歩み寄り、すべてのものは「七つの封印と肩を並べて前進し」、少しも後れを取らない。神の言葉全体を通して、神は人々が麻痺した状態だと見なしていることがわかるが、彼らはまだまったく目を覚ましていない。もっと高い点に到達するため、すべての人々の力を呼び起こすため、さらに、神の働きをその最高時に終わらせるために、神は人々に、腹いっぱいになるほどに一連の質問をし、こうして神はすべての人々を奮い立たせる。これらの人々には霊的背丈が実際に備わっていないため、実際の状況に基づくならば、神の言葉で腹がいっぱいの者はいわば基準に達している品物であり

、膨らんでいない人々は使い物にならないごみである。これが人間に対する神の要求であり、神の語り方の目的である。特に、神が「地上にいるわたしは、天にいるわたしとは異なっているということか。天にいるわたしは、地上に降りて来ることができないということか。地上にいるわたしは、天に連れられて行くに値しないということか。」と言うとき、これらの質問は人々が神を理解できるように、さらに踏み込んだものとなる。神の言葉から、神の差し迫った心は見られる。だが、人々は神の心に応えることはできず、神は繰り返し条件を加え、こうして、すべての人々に地上にいる天の神を知るところを気づかせ、天の神でありながら、神は地上で生活していることを気づかせる。

次のような神の言葉から人間の状態が見て取れる。「人間はみな、わたしの言葉を調べ、わたしの外見がどういうふうなのかを自分なりに調査するが、みな失敗して、なんらの成果も上げられず、わたしの言葉に打ち倒され、二度と立ち上がろうとしない。」誰が神の悲しみを理解できるだろう。誰が神の心を慰めることができるだろう。神が要求するとき、誰が神の心に応えられるだろう。何の成果も上げられないとき、人々は自己を否定し、神の指揮にたいして気まぐれに振る舞う。彼らが本当の心を示すにつれて次第に、それぞれが自分自身の種類に従い、こうして天使の本質は神への純粋な服従であることがわかる。そこで、神は次のように言う。「人間は本来の形を現し。」神の働きがこの段階に達するとき、その働きのすべてが完了することになる。神は自分が神の子らと神の民の手本であることについては何も言わず、その代わりにすべての人々に本来の形を示させることに重点を置いているようである。あなたがたはこれらの言葉の真の意味がわかるだろうか。

第二十七章

今日、神の言葉はその頂点に達した。すなわち、裁きの時代の第二部分が頂点に達した。しかし、最高点ではない。この時点で神の口調は変わり、嘲るのではなく、おどけるのでもなく、攻撃もしなければ、罵りもしない。神はその言葉の調子を和らげた。今、神は人と「感情の交換」を始める。神は裁きの時代の働きを続行しつつ、働きの次の部分の道筋を開いている。だから、神の働きはそのすべての部分がお互いに繋がっている。神は人の「頑固さと常習的悪行」について語る一方、他方では「人と切り離され、その後再会する喜びと悲しみ」について語る——そのすべてが人々の心の中に反応を引き起こし、もっとも麻痺した人間の心さえも感動させる。神がこれらの言葉を語る主な目的は、すべての人が最後には囁きすらせず神の前に平伏するように、彼らを導くこと

であり、その後はじめて、「わたしは自身の行動を明らかにし、すべての人に彼ら自身の失敗を通じてわたしを理解させる。」この段階では、神に対する人々の認識はまったく浅薄なままで、本当の認識ではない。彼らはできるだけ一生懸命努力するが、神の旨を実現することはできない。今日、神の言葉は頂点に達しているが、人々は初期の段階にとどまり、そのため今この場での言葉に入り込むことができない——このことは神と人とがまったく異なっていることを示している。それ故、神が語り終える頃になって、人々はようやく神の言葉の最も低い地点に辿り着くことになるだろう。神は、赤い大きな竜によって完全に墮落させられた人々に対してこのような方法を用いて働き、最適な効果を達成するためにこのように働かなければならないのだ。教会に所属する人々は神の言葉にもう少し注意を払うが、神の意図は、彼らが神の言葉の中に神を知ることができる、ということである——そこには違いがあるのではないか？しかし現状では、神はもはや人の弱さを心に留めず、人々が神の言葉を受け入れることができようができませんが、気にせず語り続ける。神が意図するように、神の言葉が終わる時は地上での神の働きが完成する時である。しかしこの働きは過去のものとは違う。いつ神の言葉が終わるかは誰にもわからない。いつ神の働きが終わるかは誰にもわからない。いつ神の姿が変わるかは誰にもわからない。神の知恵とはこうしたものである。サタンからのどのような非難も避け、敵意ある力によるどのような妨害も避けるために、神は誰も知らないうちに働く。この時、地上の人々は何の反応もしない。神が変容する徴候についてはかつて語られたが、今は誰もそれを感知することはできない。人がこのことを忘れてしまって、注意を払わないからである。そして内外からの攻撃によって——外界の災害と神の言葉による焼き尽くしと清めによって——人々はもはや神のために骨を折って進んで働こうとはしない。自分自身の仕事に忙しすぎるからである。すべての人が過去の認識と過去の追求を否定する時、すべての人が自分自身をはっきり見る時、彼らは失敗し、彼らの自己はもはやその心の中に場所を持たなくなるだろう。そうやって初めて人々は心から神の言葉を切望し、そうやって初めて神の言葉は本当に彼らの心の中に場所を占め、そうやって初めてこれらの言葉は彼らの存在の源になる——そしてこの時点で、神の旨が満たされたことになるだろう。しかし、今日の人々はそこからまだまだ遠く離れている。なかには辛うじて三センチほどしか動いていない者もいる。そこで神はこれを「常習的悪行」と言う。

神の言葉のすべてには多くの問いが含まれている。なぜ神は次のような問いを続けるのだろうか。「なぜ彼らは悔い改め、生まれ変わることができないのだろうか。なぜ人々は

泥のない場所に住もうとせず、永久に沼地に住もうとするのだろう。……」かつて神は、物事を直接指摘するか、あるいは暴露することによって働いた。しかし、人々が極めて大きい苦しみを受けた後、神はそれまでのように直接的に話すことはなくなった。一方では、人々は神からの問いの中に自分の欠点を見て、また他方では、彼らは実践への道筋を把握する。人々は皆すぐに得られるものを食べることを好むので、神は彼らの要求に応じて、彼らがじっくり考え得る話題を提供する。これが神の問いのひとつの意味である。もちろん、いくつかの神の問いの意味はこれではない。たとえば、わたしは彼らを虐待してきたということなのだろうか。彼らに誤った方向を指し示してきたということなのだろうか。彼らを地獄に導いているということなのだろうか。誰もが「地獄」で生きようとしているのだ。このような問いは人々の心の奥底にある観念を指している。彼らは口ではそのようなことは言わないが、ほとんどの人々の心中には疑いがあり、神の言葉が人々をろくでなしと表現していると信じている。もちろん、そのような人々は自分自身のことを知らないが、結局のところ、彼らは神の言葉には負けることを認めるだろう——これは避けられないことなのだ。これらの問いに続けて、神はこうも言う。「わたしは人の家族は言うまでもなく、すべての国家を粉々に打ち砕くだろう。」人々が神の名を受け入れる時、その結果、すべての国家は揺れ動き、人々は次第に精神構造を変化させ、家族内では父と息子、母と娘、あるいは夫と妻の関係は存在しなくなるだろう。その上、家族内の人々の間の関係はさらに疎遠になっていくだろう。彼らは大家族に加わり、ほとんどすべての家族の暮らしにおける規則性はばらばらにされるだろう。そしてこのために人々の家族の観念は次第に曖昧になるだろう。

神の今日の言葉では、なぜそんなにも多くの言葉が人々との「感情の交換」に充てられているのだろう。もちろん、これは何らかの効果を達成するためでもある。そこから神の心が不安で満たされていることがわかる。神は次のように言う。「わたしが悲しい時、誰が心からわたしを慰めることができるだろう」と。神がこれらの言葉を言うのは、神の心が悲しみで打ちのめされているからである。人々は神の旨にあらゆる配慮をすることができず、いつも自堕落で、自分を制止することができず——好きなように振る舞うからである。彼らはあまりにも卑しく、いつも自分を許し、神の旨を心に留めないからである。しかし、人々は今日までサタンによって堕落させられていて、自由の身になることができないので、神は次のように言う。「どうしたら彼らはひどく飢えた狼の口から逃れられるだろう。どうしたら彼らは狼の脅しや誘惑から逃れることができるだろう。」人々は肉に生きている——飢えた狼の口の中で。このため、そして人々は自己

認識がなく、いつも気ままにし、放蕩生活にふけているので、神は不安を感じずにはいられない。神がこのことを人々に気づかせれば気づかせるほど、彼らは気分がますます晴れて、ますます進んで神に関与するようになる。そうなった時に初めて人と神は仲良くなり、両者の間には別離も距離もなくなるだろう。今日、全人類は神の日の到来を待っている。だから人類は決して前へ進んでいない。しかし、神は言う。「義の太陽が現れると、東方に光が当てられ、次に光は全宇宙に当てられ、すべての人に到達する。」言い換えれば、神がその姿を変える時、東方にまず光が当てられ、東の国が最初に造り換えられ、その後残りの国々が南から北まで新しくされるだろう。これが秩序であり、すべては神の言葉に従うだろう。そしてこの段階が終われば、すべての人々にわかるだろう。神はこの秩序に従って働いている。この日を目にする時、人々は大喜びするだろう。この日がそう遠くないことは神の差し迫った旨から知ることができる。

今日の言葉の中で、第二、第三の部分は神を愛するすべての人々に苦悩の涙を流させる。彼らの心は直ちに陰に包まれ、この時以降、すべての人々は神の心を思いやって深い悲しみで一杯になる——神が地上での働きを終えた後で、ようやく彼らは気持ちが安らぐだろう。これが一般的な傾向である。「押し寄せる悲しみの感情をともなって、怒りがわたしの心の中で膨らむ。わたしの目が人々の行いやすべての言葉と行動を汚いものとして見る時、怒りが沸き上がり、わたしの心の中には人の世が不正に満ちているという思いが大きくなり、そのためわたしはいっそう悲しくなる。わたしは人の肉の姿を直ちに終わらせたいと熱望する。わたしはなぜ人が肉の姿の身を清めることができないのか、なぜ人が肉の姿の自分を愛することができないのかわからない。肉の姿の「役割」はそんなに大きいということなのだろうか。」今日の神の言葉では、神は心の中の不安をすべて隠さず、公然と人に明らかにしている。第三の天の天使たちが神のために音楽を奏でる時、神はまだ地上の人々を切望している。そのため、神はこのように言う。「天使たちがわたしを称えて音楽を奏でる時、それは人に対するわたしの同情を掻き立てずにはいられない。たちどころにわたしの心は悲しみで満たされ、このつらい感情をわたしから取り除くことはできない。」神が次のように言うのはこのためである。「わたしは人間世界の不正な行為を正すつもりである。わたしは自分の手でわたしの働きを世界で行い、サタンがわたしの民を再び害するのを許さないし、敵が何でも好き勝手に行うことを許さない。わたしは地上の王になり、玉座をそこに動かし、わたしのすべての敵を地面に倒し、わたしの前で彼らの罪を告白させる。」神の悲しみは悪魔たちに対する神の憎しみを増し、そこで神はあらかじめ彼らの終焉を大衆に明らかにする。これ

が神の働きである。神はいつもすべての人々と再び共にいて、古い時代を終了させたいと願っている。宇宙の下にいるすべての人々は移動し始めている——すなわち、宇宙の下にいるすべての人々は神の指導に入り始めている。その結果、彼らの考えはそれぞれの皇帝たちに反抗し始めている。まもなく、世界の人々は大混乱に陥り、すべての国の首長たちは四方八方に逃げ、ついには民衆の手でギロチン台に載せられるだろう。これが悪魔の王たちの最終的結末である。結局のところ、誰も逃れることはできず、全員がそれを経験しなければならない。今日、「賢い」人々は引き下がり始めている。事態が良好ではないから、彼らは手を引いて、大災害の苦難を逃れようと、この機会を利用する。しかし、わたしは率直に言う。終わりの日に神が行う働きは主として人に対する刑罰であるので、これらの人々は逃れることができないのだ。今日は第一段階の時である。ある日、全宇宙のすべての人々は戦争の混乱に陥るだろう。地球上の人々は二度と再び指導者を持つことはなく、全世界は誰にも統治されない、崩れやすい砂の山のようになり、人々は他の誰のことにも無頓着で、自分の命だけを気にかけるようになるだろう。すべては神の手によって支配されているからである——だから、神が次のように言うのだ。「すべての人間はわたしの旨にしたがって、世界のさまざまな国家を壊してばらばらにしている。」神が今「天使たちのラッパ」と言うのは、一つの合図であり、人に対して警鐘を鳴らしているのだ。ラッパが再び鳴るのは、世界の終りの日が到着した時だ。この時、神の全刑罰が完全な形で地上を襲う。これは無情な裁きであり、刑罰の時代が正式に開始される。イスラエルの人々の中では、しばしば神の声が生じて、さまざまな環境を通じて彼らを導く。そこで天使も彼らの前に現れるだろう。イスラエルの人々はわずか数か月で完全な者にされるだろう。彼らは大きな赤い竜の毒を一掃する段階を経験する必要がないので、さまざまな種類の指導の下、正しい進路に入るのは容易だろう。このようなイスラエルの発展から全世界の状況を見ることができ、これによって神の働きの段階が如何に早いかがわかる。「時は来た。わたしは自分の働きを始動させ、わたしは人々の間にいて王として支配する。」かつて、神は天にいて支配していた。今日、神は地上にいて支配する。神はその権威のすべてを取り戻す。そこで、全人類は二度と再び普通の人間としての生活を送ることはないだろうと予告される。神は天と地を整理し直し、人は誰も神を邪魔することは許されないからである。こうして、神はしばしば人に「時は来た」ことを思い出させる。イスラエル人が全員国に帰る時——イスラエルの国家が完全に取り戻された日に——神の偉大な働きは完成するだろう。誰も気づかないうちに、全宇宙の人々は暴動を起こし、全宇宙の国々は空の流れ星のように落ちて、たちまち廃墟になるだろう。廃墟を処理した後、神は心から愛する王国を建設す

るだろう。

第二十八章

今日、神の言葉はその頂点に達した。すなわち、裁きの時代の第二部分が頂点に達した。しかし、最高点ではない。この時点で神の口調は変わり、嘲るのではなく、おどけるのでもなく、攻撃もしなければ、罵りもしない。神はその言葉の調子を和らげた。今、神は人と「感情の交換」を始める。神は裁きの時代の働きを続行しつつ、働きの次の部分の道筋を開いている。だから、神の働きはそのすべての部分がお互いに繋がっている。神は人の「頑固さと常習的悪行」について語る一方、他方では「人と切り離され、その後再会する喜びと悲しみ」について語る——そのすべてが人々の心の中に反応を引き起こし、もっとも麻痺した人間の心さえも感動させる。神がこれらの言葉を語る主な目的は、すべての人が最後には囁きすらせず神の前に平伏するように、彼らを導くことであり、その後はじめて、「わたしは自身の行動を明らかにし、すべての人に彼ら自身の失敗を通じてわたしを理解させる。」この段階では、神に対する人々の認識はまったく浅薄なままで、本当の認識ではない。彼らはできるだけ一生懸命努力するが、神の旨を実現することはできない。今日、神の言葉は頂点に達しているが、人々は初期の段階にとどまり、そのため今この場での言葉に入り込むことができない——このことは神と人とがまったく異なっていることを示している。それ故、神が語り終える頃になって、人々はようやく神の言葉の最も低い地点に辿り着くことになるだろう。神は、赤い大きな竜によって完全に墮落させられた人々に対してこのような方法を用いて働き、最適な効果を達成するためにこのように働かなければならないのだ。教会に所属する人々は神の言葉にもう少し注意を払うが、神の意図は、彼らが神の言葉の中に神を知ることができる、ということである——そこには違いがあるのではないか？しかし現状では、神はもはや人の弱さを心に留めず、人々が神の言葉を受け入れることができようができませんが、気にせず語り続ける。神が意図するように、神の言葉が終わる時は地上での神の働きが完成する時である。しかしこの働きは過去のものとは違う。いつ神の言葉が終わるかは誰にもわからない。いつ神の働きが終わるかは誰にもわからない。いつ神の姿が変わるかは誰にもわからない。神の知恵とはこうしたものである。サタンからのどのような非難も避け、敵意ある力によるどのような妨害も避けるために、神は誰も知らないうちに働く。この時、地上の人々は何の反応もしない。神が変容する徴候についてはかつて語られたが、今は誰もそれを感知することはできない。人がこのことを忘れてしまっ、注意を払わないからである。そして内外からの攻撃によって——外界の災害と神の

言葉による焼き尽くしと清めによって——人々はもはや神のために骨を折って進んで働くとはしない。自分自身の仕事に忙しすぎるからである。すべての人が過去の認識と過去の追求を否定する時、すべての人が自分自身をはっきり見る時、彼らは失敗し、彼らの自己はもはやその心の中に場所を持たなくなるだろう。そうやって初めて人々は心から神の言葉を切望し、そうやって初めて神の言葉は本当に彼らの心の中に場所を占め、そうやって初めてこれらの言葉は彼らの存在の源になる——そしてこの時点で、神の旨が満たされたことになるだろう。しかし、今日の人々はそこからまだまだ遠く離れている。なかには辛うじて三センチほどしか動いていない者もいる。そこで神はこれを「常習的悪行」であると言う。

神の言葉のすべてには多くの問いが含まれている。なぜ神は次のような問いを続けるのだろうか。「なぜ彼らは悔い改め、生まれ変わることができないのだろうか。なぜ人々は泥のない場所に住もうとせず、永久に沼地に住もうとするのだろうか。……」かつて神は、物事を直接指摘するか、あるいは暴露することによって働いた。しかし、人々が極めて大きい苦しみを受けた後、神はそれまでのように直接的に話すことはなくなった。一方では、人々は神からの問いの中に自分の欠点を見て、また他方では、彼らは実践への道筋を把握する。人々は皆すぐに得られるものを食べることを好むので、神は彼らの要求に応じて、彼らがじっくり考え得る話題を提供する。これが神の問いのひとつの意味である。もちろん、いくつかの神の問いの意味はこれではない。たとえば、わたしは彼らを虐待してきたということなのだろうか。彼らに誤った方向を指し示してきたということなのだろうか。彼らを地獄に導いているということなのだろうか。誰もが「地獄」で生きようとしているのだ。このような問いは人々の心の奥底にある観念を指している。彼らは口ではそのようなことは言わないが、ほとんどの人々の心中には疑いがあり、神の言葉が人々をろくでなしと表現していると信じている。もちろん、そのような人々は自分自身のことを知らないが、結局のところ、彼らは神の言葉には負けることを認めるだろう——これは避けられないことなのだ。これらの問いに続けて、神はこうも言う。「わたしは人の家族は言うまでもなく、すべての国家を粉々に打ち砕くだろう。」人々が神の名を受け入れる時、その結果、すべての国家は揺れ動き、人々は次第に精神構造を変化させ、家族内では父と息子、母と娘、あるいは夫と妻の関係は存在しなくなるだろう。その上、家族内の人々の間の関係はさらに疎遠になっていくだろう。彼らは大家族に加わり、ほとんどすべての家族の暮らしにおける規則性はばらばらにされるだろう。そしてこのために人々の家族の観念は次第に曖昧になるだろう。

神の今日の言葉では、なぜそんなにも多くの言葉が人々との「感情の交換」に充てられているのだろう。もちろん、これは何らかの効果を達成するためでもある。そこから神の心が不安で満たされていることがわかる。神は次のように言う。「わたしが悲しい時、誰が心からわたしを慰めることができるだろう」と。神がこれらの言葉を使うのは、神の心が悲しみに打ちのめされているからである。人々は神の旨にあらゆる配慮をすることができず、いつも自堕落で、自分を制止することができず——好きなように振る舞うからである。彼らはあまりにも卑しく、いつも自分を許し、神の旨を心に留めないからである。しかし、人々は今日までサタンによって堕落させられていて、自由の身になることができないので、神は次のように言う。「どうしたら彼らはひどく飢えた狼の口から逃れられるだろう。どうしたら彼らは狼の脅しや誘惑から逃れることができるだろう。」人々は肉に生きている——飢えた狼の口の中で。このため、そして人々は自己認識がなく、いつも気ままにし、放蕩生活にふけっているので、神は不安を感じずにはいられない。神がこのことを人々に気づかせれば気づかせるほど、彼らは気分がいつそう晴れて、ますます進んで神に関与するようになる。そうなった時に初めて人と神は仲良くなり、両者の間には別離も距離もなくなるだろう。今日、全人類は神の日の到来を待っている。だから人類は決して前へ進んでいない。しかし、神は言う。「義の太陽が現れると、東方に光が当てられ、次に光は全宇宙に当てられ、すべての人に到達する。」言い換えれば、神がその姿を変える時、東方にまず光が当てられ、東の国が最初に造り換えられ、その後残りの国々が南から北まで新しくされるだろう。これが秩序であり、すべては神の言葉に従うだろう。そしてこの段階が終われば、すべての人々にわかるだろう。神はこの秩序に従って働いている。この日を目にする時、人々は大喜びするだろう。この日がそう遠くないことは神の差し迫った旨から知ることができる。

今日の言葉の中で、第二、第三の部分は神を愛するすべての人々に苦悩の涙を流させる。彼らの心は直ちに陰に包まれ、この時以降、すべての人々は神の心を思いやって深い悲しみに一杯になる——神が地上での働きを終えた後で、ようやく彼らは気持ちが安らぐだろう。これが一般的な傾向である。「押し寄せる悲しみの感情をともなって、怒りがわたしの心の中で膨らむ。わたしの目が人々の行いやすべての言葉と行動を汚いものとして見る時、怒りが沸き上がり、わたしの心の中には人の世が不正に満ちているという思いが大きくなり、そのためわたしはいっそう悲しくなる。わたしは人の肉の姿を直ちに終わらせたいと熱望する。わたしはなぜ人が肉の姿の身を清めることができないのか、なぜ人が肉の姿の自分を愛することができないのかわからない。肉の姿の「役割」

はそんなに大きいということなのだろうか。」今日の神の言葉では、神は心の中の不安をすべて隠さず、公然と人に明らかにしている。第三の天の天使たちが神のために音楽を奏でる時、神はまだ地上の人々を切望している。そのため、神はこのように言う。「天使たちがわたしを称えて音楽を奏でる時、それは人に対するわたしの同情を掻き立てずにはいられない。たちどころにわたしの心は悲しみで満たされ、このつらい感情をわたしから取り除くことはできない。」神が次のように言うのはこのためである。「わたしは人間世界の不正な行為を正すつもりである。わたしは自分の手でわたしの働きを世界中で行い、サタンがわたしの民を再び害するのを許さないし、敵が何でも好き勝手に行うことを許さない。わたしは地上の王になり、玉座をそこに動かし、わたしのすべての敵を地面に倒し、わたしの前で彼らの罪を告白させる。」神の悲しみは悪魔たちに対する神の憎しみを増し、そこで神はあらかじめ彼らの終焉を大衆に明らかにする。これが神の働きである。神はいつもすべての人々と再び共にいて、古い時代を終了させたいと願っている。宇宙の下にいるすべての人々は移動し始めている——すなわち、宇宙の下にいるすべての人々は神の指導に入り始めている。その結果、彼らの考えはそれぞれの皇帝たちに反抗し始めている。まもなく、世界の人々は大混乱に陥り、すべての国の首長たちは四方八方に逃げ、ついには民衆の手でギロチン台に載せられるだろう。これが悪魔の王たちの最終的結末である。結局のところ、誰も逃れることはできず、全員がそれを経験しなければならない。今日、「賢い」人々は引き下がり始めている。事態が良好ではないから、彼らは手を引いて、大災害の苦難を逃れようと、この機会を利用する。しかし、わたしは率直に言う。終わりの日に神が行う働きは主として人に対する刑罰であるので、これらの人々は逃れることができないのだ。今日は第一段階の時である。ある日、全宇宙のすべての人々は戦争の混乱に陥るだろう。地球上の人々は二度と再び指導者を持つことはなく、全世界は誰にも統治されない、崩れやすい砂の山のようになり、人々は他の誰のことにも無頓着で、自分の命だけを気にかけるようになるだろう。すべては神の手によって支配されているからである——だから、神が次のように言うのだ。「すべての人間はわたしの旨にしたがって、世界のさまざまな国家を壊してばらばらにしている。」神が今「天使たちのラッパ」と言うのは、一つの合図であり、人に対して警鐘を鳴らしているのだ。ラッパが再び鳴るのは、世界の終りの日が到着した時だ。この時、神の全刑罰が完全な形で地上を襲う。これは無情な裁きであり、刑罰の時代が正式に開始される。イスラエルの人々の中では、しばしば神の声が生じて、さまざまな環境を通じて彼らを導く。そこで天使も彼らの前に現れるだろう。イスラエルの人々はわずか数か月で完全な者にされるだろう。彼らは大きな赤い竜の毒を一掃する段階

を経験する必要がないので、さまざまな種類の指導の下、正しい進路に入るのは容易だろう。このようなイスラエルの発展から全世界の状況を見ることができ、これによって神の働きの段階が如何に早いかがわかる。「時は来た。わたしは自分の働きを始動させ、わたしは人々の間にいて王として支配する。」かつて、神は天にいて支配していた。今日、神は地上にいて支配する。神はその権威のすべてを取り戻す。そこで、全人類は二度と再び普通の人間としての生活を送ることはないだろうと予告される。神は天と地を整理し直し、人は誰も神を邪魔することは許されないからである。こうして、神はしばしば人に「時は来た」ことを思い出させる。イスラエル人が全員国に帰る時——イスラエルの国家が完全に取り戻された日に——神の偉大な働きは完成するだろう。誰も気づかないうちに、全宇宙の人々は暴動を起こし、全宇宙の国々は空の流れ星のように落ちて、たちまち廃墟になるだろう。廃墟を処理した後、神は心から愛する王国を建設するだろう。

第二十九章

人々が行う働きの中には、神から直接指示を受けて実行されるものもあるが、一部に関しては、神は明白には指示を与えない。これは、神が行うことが、今日、まだ完全には明らかにされていないことを十分に示している——すなわち、多くは隠されたままで、まだ公になっていない。しかし公にしなければならないものもあれば、人々を困惑させ、混乱させたままにしておかねばならないものもある。これこそ神の働きにとって必要なことなのだ。例えば、神が天から人々の中にやって来ることにしては、神はどのようにやって来たか、どの瞬間に来たか、あるいは、天と地、そしてすべてのものが変化を経験したかどうか——こうした事柄に人々は混乱せざるを得ない。このことは実際の状況にも基づいている。人間の肉そのものが直接霊的領域に入れられないからである。そこで、たとえ神がどのように天から地へ降りてきたかをはっきり述べるとしても、または、神が「万物が蘇った日、わたしは人間のあいだに来て、人間とともにすばらしい日夜を過ごしてきた」と言っても、このような言葉は誰かが木の幹に向かって話しかけているようなもので、人々の反応はまったくない。人々は神の働きの段階を知らないからである。本当に気づいている時でさえ、彼らは、神は妖精のように天から地上に降りてきて、人々の中に再び生まれたと信じている。人間が考えつくのはこの程度である。人間が神の実体を理解できず、霊的領域の現実を理解できないのは、人間の本質によるのである。人々の本質に頼るだけでは、彼らは他者の模範として行動することはできないだろう。人々の生来の本質が同じで、違いがないからである。そこで、他の人々が従う

ように手本となるよう求めることも、他の人々の模範となることも空しく、水から立ちのぼる水蒸気のようになる。だが一方、神が「人間はわたしの持っているもの、わたしが何者かについて何らかの認識を得る」と言うとき、これらの言葉はただ、神が肉で行う働きを明らかにするために語られるのである。言い換えれば、それらは神の真の顔――神性に向けられており、主に神の神性の性質に言及している。すなわち、神がこのような方法で働くのはなぜか、神の言葉によってどのようなことが成し遂げられるのか、神は地上で何を達成しようと望んでいるのか、神は人間の中に何を得ようと望んでいるのか、神が話す方法や、人間に対する神の態度はどうか、などの事柄を人々が理解することが求められるのだ。人間には自慢する価値のあるものは何もないと言える、すなわち、他の人々を従わせる模範を示すことができるものが何もないのだ。

神が次のように言うのは、まさに肉の姿の神が正常だからであり、天の神と肉の姿の神が似ておらず、肉の姿の神が天の神から生まれたようには見えないからである。「わたしは何年も人間のあいだで過ごしたが、人間はいつもわたしに気づかず、決してわたしを認識しなかった」。神はこうも言う。「わたしの歩みが宇宙をまたぎ、地の果てへと至るとき、人間は自身を省みるようになり、すべての人がわたしのもとに来て、ひれ伏してわたしを崇める。これこそ、わたしが栄光を得る日、わたしが再臨する日、そしてまた、わたしが立ち去る日でもある」。この日だけ神は真の顔を人間に見せる。しかし、そのことによって神の働きが遅れることはない。神はただなすべき働きを行うだけである。神は裁きを下す時、肉の姿の神に対する人々の態度に応じて罪に定める。これが、この期間における神の言葉の主な筋道の一つである。例えば、神は次のように言う。「全宇宙でわたしの経営計画の仕上げを正式に開始している。この瞬間から後、注意深くない者は無慈悲な刑罰の中に落ちるのを免れず、これはいつでも起こり得る」。これが神の計画の内容であり、異常でも奇妙でもなく、神の働きの段階のすべてである。一方、海外にいる神の民と神の子らは教会での行いすべてに応じて神から裁きを受ける。そして神はこう語る。「わたしが働く中、すべての天使がわたしとともに決戦に臨み、最終段階においてわたしの望みを成就させようと決意する。それにより、地上の人々は天使たちと同じくわたしの前で服従し、わたしに逆らおうという気持ちを一切持たず、わたしに逆らうことを何もしないようになる。それが全宇宙におけるわたしの働きの動態なのだ」。これが、神が全地で実行する働きにおける違いである。神は誰に向けるかに応じて、異なる方法を用いる。今日、教会の人々はすべて熱望する気持ちを持っていて、神の言葉を飲食し始めている――神の働きが終りに近づいていることを示すには

それで十分である。空から見下ろすことは、枯枝と落ち葉、そして秋風に吹かれる黄土のもの悲しい光景をもう一度見つめることに似ており、大災害が人々の間に今にも起こりそうな感じがして、すべてが荒れ地に変わりそうに思われる。おそらく、霊の感受性によって、いつも心の中には不幸せな感覚があり、ほんのすこし穏やかな慰めもともない、これにも多少の悲しみが混じり合っているのだろう。これを表現したのが、次のような神の言葉であろう。「人間は目覚めつつあり、地上のすべてが整然とし、地の生存の日々が終わった。わたしが到着したのだから。」。人々はこれらの言葉を聞いた後、多少消極的になるかもしれない。あるいは神の働きに少し落胆する、あるいは自分たちの心にある感情にかなり集中するかもしれない。おそらく神は地上での働きの完了に先立って、人々にそのような幻想を持たせるほど愚かではないだろう。もしあなたが本当にそのような感情を持つなら、それはあなたが自分の感情に注意を払いすぎることの表れであり、あなたが好きなように振る舞い、神を愛さない人であることの表れである。そして、そのような人々が超自然的なことに注意を払いすぎ、神をまったく気に留めないことの表れである。神の手があるから、人々はどんなに逃げようとしても、この状況から逃れることはできない。誰が神の手を逃れることができようか。あなたの地位や状況が、神によって整えられなかったことがあるだろうか。あなたが苦しもうと、恩恵を受けていようと、どうしてあなたは神の手から抜け出すことができようか。これは人間の問題ではなく、完全に神が必要とすることである——こういう理由で神に従おうとしない人がいるだろうか。

「わたしは刑罰を用いて異邦人のあいだにわたしの働きを広める。つまり、異邦人である者たちには力を用いるということだ。当然、この働きは、選民たちのあいだでの働きと同時に進められる」。これらの言葉を発して、神は全宇宙でこの働きに着手するが、それは神の働きの一つの段階であり、すでにこの時点にまで進んでいる。誰も後戻りさせることはできない。大災害は人類の一部を始末し、彼らを世界と共に消滅させるだろう。宇宙が正式に刑罰を受けると、神は正式にすべての民の前に現れる。そして、神の出現により、人々は刑罰を受ける。その上、神はこうも言った。「わたしが正式に巻物を開くとき、全宇宙の人々は罰せられ、世界中の人々が試練を受ける」。このことから、七つの封印の内容は刑罰の内容であることがはっきりわかる。すなわち、七つの封印の中には災害がある。だから、今日、七つの封印はまだ開かれない。ここで言及している「試練」とは、人間が苦しむ刑罰であり、この刑罰の真ただ中で、一群の人々は神に獲得され、神が発行する「証明書」を正式に受け取り、こうして彼らは神の国の民

になるだろう。これらの人々が神の子らと神の民の始まりであるが、今日、そうした人々はまだ決められておらず、将来の経験のために基礎を築いているだけである。本当のいのちを持っている人ならば、試練の間もしっかり立つことができるだろう。そしてもし彼らがいのちを持っていなければ、それは、神の働きが彼らに何の影響も与えておらず、荒海で釣りをするように、神の言葉を重視していないことを十分に証明している。これが終わりの日の働きであり、神が働きを続行せず、この時代を終わりにすることなのだ。だから、神は次のように言う。「つまりこれは、創世から現在に至るまで、人間が経験したことのない生活であり、だからわたしは、かつて行なわれたことのない働きをしたと言う」。またこうも言う。「わたしの日がすべての人類に近づいており、それは天の果てにあるのではなく人間の目の前にあるのだから」。かつて、神は直接いくつかの都市を破壊したが、最後の時と同じ方法で破壊された都市は一つもない。かつて、神はソドムを破壊したが、今日のソドムは過去と同様に扱われることはないだろう——直接は破壊されず、まず征服され、次に裁かれ、最後に永遠に続く罰を受けることになるだろう。これが働きの段階であり、結局、今日のソドムは過去の世界の破壊と同じ順序で滅ぼされるだろう——それが神の計画なのである。神が出現する日は今日のソドムに正式な有罪判決が下される日であり、神の出現はソドムを救うためではない。こうして、神は次のように言う。「わたしは聖なる国で姿を現わし、汚れの地では姿を隠す」。今日のソドムは汚れているので、神は本当にそこには現れず、このような方法を用いて刑罰を与える——あなた方はこのことを、まだはっきりと理解していないのか。地上の誰も神の本当の顔を見ることはできないと言うことができる。神は人間の前に現れたことは一度もないし、誰も神が天のどのあたりにいるか知らない。このような理由で、今日の人々は今の状況の中にいることが許されている。人々が神の顔を見ることができたら、その時こそが彼らの終りが明らかにされるとき、それぞれが種類に応じて分類されるときである。今日、神性の言葉が直接人々に示され、その言葉が人類の終りの日がすでに到着し、それほど長くは続かないだろうことを予言している。これは、神がすべての人々の前に現れるとき、人々が試練に曝されるというしるしの一つである。このため、人々は神の言葉を享受しながら、まるで大災害が今にも身に降りかかるかのように、いつも不吉な感情を抱いている。今日の人々は凍結した土地にいる雀のように、まるで死に負債を強要され、生き残る道が閉ざされているかのようなのだ。人間が背負う死という負債の返済によって、すべての人々は自分たちの終わりの日が到来したことを感じる。これは全宇宙で人々の心の中に起きていることであり、彼らの表情には表れていないが、その心の中にあるものをわたしの目から隠すことはできない——これが人間の現実

なのである。おそらく、こうした言葉の多くは選び方がやや不完全だろう——しかし、まさにこれらの言葉は問題を示すのに十分である。神の口から語られる言葉は過去の語でも、現在の語でも、その一語一語が実現されるだろう。それらの言葉は事実を人々の前に示し、彼らの目にとって喜ばしいものになるだろう。その時、人々は目がくらみ、混乱するだろう。あなた方はまだ今日がどんな時代か、はっきり見ていないのだろうか。

第三十章

神の言葉に関して少々の識見をもつ人たちがいるかもしれないが、その中の誰ひとりとして自分の感情を信じていない。彼らは消極性に陥ることを激しく恐れている。そのため、彼らはいつも喜びと悲しみのあいだを行ったり来たりしてきた。すべての人々の生活は悲嘆に満ちていると言うことができる。これをもう一歩進めると、すべての人々の日常生活には精錬があるが、霊における解放を日々得る者はいないと言うことができる。まるで三つの巨大な山が頭上に重くのしかかっているかのようである。彼らの中に生活がいつも幸せで喜びに満ちている者はひとりとしていない——たとえ少しは幸せであっても、単に幸せそうに見せているだけなのである。人々は心の中では、何かが未完成のままであるという感覚を絶えずもっている。そのため彼らは心においては不動ではなく、生活においてはものごとは空虚で不公平に感じられる。神への信仰に関しては、人々は忙しく時間がないか、さもなければ神の言葉を飲み食いする時間がないか、神の言葉を適切に飲み食いする方法を知らないでいる。誰ひとりとして、心の中が平安で澄み切っていて不動である者はいない。まるで常に曇り空の下で暮らしてきたかのようであり、まるで酸素のない空間に生きているようであり、これが彼らの生活に混乱をもたらしたのである。神はいつも人々の弱みに直截に語りかける。神はいつも人々のアキレス腱に一撃を加える——神がこれまでに話してきた調子にはっきりと気づかなかったのか。神は人々に悔い改める機会を与えておらず、すべての人を酸素のない「月」で生活させる。始めから今日まで、神の言葉は外見上は人間の本性を暴露してきたが、これらの言葉の本質を明確に見抜けた者はまだいない。人間の本質の暴露によって、人々は己を知るようになり、そして神を知るようになったようだが、これは本質的な道ではない。神の言葉の調子と偉大な深淵は、神と人間の明らかな違いを示している。このため人々は感情においては、神は手の届かない、近づくことのできないものであると無意識に考えている。神はすべてを明るみに出す。そして誰も神と人間の間を以前の状態に戻すことができないようである。神のすべての発言の目的があらゆる人々を「倒し」、そ

れにより神の働きを達成することであると理解するのは困難なことではない。これらは神の働きの段階である。しかしこれは人々が心で信じていることではない。人々は神の働きはその頂点に達しつつあり、赤い大きな竜を征服するために神の働きの最も識別しやすい結果に近づきつつあると信じている。つまり、諸教会を繁栄させ、誰も肉となった神についての観念をもたず、さもなければすべての人々が神を知るようになるという結果である。しかし、神の言葉を読んでみよう。「人間の思考においては、神は神であり、簡単に関わり合いをもたないものであり、一方、人間は人間であり、容易に自堕落になってはならないのである—その結果、わたしの面前では彼らはつねに謙虚で忍耐強いのである。彼らはあまりに多くの観念をもっているため、わたしと融和することができない」。ここから分かるのは、神の言うことや人間のすることにかかわらず、人々には神を知ることが完全に不可能だということである。人間の本質の果たす役割のせいで、どんなことがあろうと、人間は結局は神を知ることができないのである。したがって、神の働きは人々が自分たちのことを地獄の子として認めたときに終了する。神がその経営（救い）の全体を終了するために、怒りを人々の上に爆発させたり、人々を直接断罪したり、最終的には死刑に処したりする必要はない。神はただ独自のペースであれこれとしゃべるだけなのである。まるで神の働きの完了は偶発的で、一切の努力なしに空き時間に達成されるものであるかのように。外側からは、神の働きには何らかの緊急性があるかのように見える——しかし、神は何も行なっていないし、何もせず話すだけである。諸教会のあいだでの働きは、昔と同じ偉大な規模ではない。神は人を増やしたり、追い出したり、暴露したりはしない——このような働きはあまりに瑣末的である。神はこのような働きをする意向はないかのようなのである。神はただ神が言うべきことを少しだけ語り、その後は向きを変えると跡形もなく消えるのである——これは、もちろん神の発言の完了場面である。この瞬間が来ると、あらゆる人々はその眠りから目覚めるであろう。人類は何千年も無気力に眠ってきた。ずっと昏睡状態にあるのである。そして何年ものあいだ、人々は夢の中であちらこちらを駆け巡り、心の中にある不正を語ることができないまま夢の中で叫び声さえ上げるのである。そのため彼らは「心に哀愁を少し感じるのである」——しかし、目覚めたときには、真相を発見し「そうか、こんなことが起こっているのか」と叫ぶことであろう。そのため、「今日、ほとんどの人々がいまだに眠り込んでいる。神の国の賛歌が聞こえるときだけ、人々はその眠い目をあけ、心に哀愁を少し感じるのである」。と言われているのである。

誰の霊も未だかつて解放されていない。誰の霊も気楽で幸せであったことがない。神

の働きが完全に終了するとき、人々は一人ひとりその種類によって分類されており心の中が不動になるので、人々の霊は解放される。これはちょうど遠方に旅に出ている人が家に帰り着いたときに心が安定するようなものである。家に帰り着いたとき、人々はもはや世界は空虚で不公平だとは感じることはなく、家で平和に暮らすこととなる。これが人類すべての境遇となるであろう。それで神は、人々は「サタンの束縛から自らを解放することができずにいるからである」と言うのである。肉体にあるあいだは、誰もこの状態から自分自身を救い出すことはできない。現時点では人間の様々な状態について神が語ることは脇へやって、神がまだ人間に明かしていない奥義についてだけ語ろう。

「数え切れないほど何度も人々はわたしを嘲るような目で見つめた。それはまるでわたしの体がとげで覆われていて、人々にとっては忌まわしいものであるかのよう。このように人々はわたしを嫌い、わたしを無価値だと考える」。これに反して、実質的には、人間の本当の姿は神の言葉に明らかにされている。つまり、人間はとげで覆われており、そこには感じのよいものは一切なく、したがって神の人間への憎悪は高まる。というのも人間は素敵なことの一切ない、とげで覆われたハリネズミに過ぎないからである。表面的には、これらの言葉は神に対する人間の観念を描写しているかのようである――しかし現実には、神は人間の姿にもとづいた人間の絵を描いているのである。これらの言葉は神による人間の描写であり、神は人間の姿の上に定着剤を噴霧したかのようである。そのため、人間の姿は宇宙全体におよび高くそびえ立ち、人間をも驚かせる。神は話し始めたときから、人間との大きな戦いのために戦力を配置してきたのである。神はまるで人間に関する事実を提示する大学の数学教授のようであり、神が列挙する事実により証明されること――証明と反証――は、すべての人々を完全に納得させるのである。これが神のすべての言葉の目的であり、このために神はこのような不可解な言葉を気軽に人間に投げかけるのである。「その結果、わたしはつまるところ人間の心においてまったく価値のないもの、これといって有用でもない日用品なのである」。これらの言葉を読んだ後、人々は心の中で祈りを唱えずにはいられず、神への恩義を認識するようになる。これにより人々は己を非難し、人間は死ぬべきであり一切の価値もないと考える。神は「そしてこのために今日わたしは現在の状況にいるのである」と言うが、これを今日の実際の状況と関連づけると、人々は自らを非難することになる。これが事実ではないであろうか。もしも己を知るように導かれたならば、「わたしは絶対に死ぬべきだ」などといった言葉が口から出るものでしょうか。人間の真実の境遇とはこのようなものであり、これはあまり考える価値のあるものではない。これはただ適当な例であるというだけである。

神が人間の許しや寛容さを請うとき、ある意味では人々には神が自分たちをからかっているということが分かる。別の意味では、人々は自分たちの治しようのない性格を理解する——人々はただ神が人間のためにその力を最大限に発揮するのを待っているのである。さらに、人々の観念に関して、神は人間の人生哲学や言語に精通していないと言う。つまり、ひとつの見方では、これにより人々はこれらの言葉を実際の神と比較することになり、また別の見方では神の意図をその言葉に見出すことになる——神は人間の本当の様相を暴露しているということを人々は理解するため、神は人々をからかっているものであり、神はその本当の状況を人々に語っているのではない、という意図である。神の言葉の本来の意味は、人間に対するからかい、あざけり、嘲笑、憎悪で満ちている。これはまるで人間はその行なうことすべてにおいて、法律をねじ曲げわいろを受け取っているかのようなのである。人々は娼婦であり、神が語るためその口を開くと、自分たちについての真実がすっかり暴露され、恥ずかしさのあまり誰にも顔向けできなくなることを大いに心配し、恐怖で震えるのである。しかし事実は事実である。神は人間の「悔い改め」を理由に発言を止めることはない。人々が筆舌に尽くしがたいほど恥じ入り、言葉にできないくらいに当惑すればするほど、神はその燃えるまなざしをますます人々の顔にすえる。神の口から出る言葉は人間の醜い行いをすべてはっきりとさらけ出す——これだけが公正で偏りのないことであり、これだけが青天^[a]と呼ばれ、これだけが最高人民法廷の判決である。それゆえ神の言葉を読むと人々は突然心臓発作に襲われ、血圧は上昇する。それはまるで彼らが冠状動脈性心臓病を病んでいるかのようなであり、まるで脳出血のせいで今にも西方極楽浄土へ送り返され、先祖と対面することになるかのようなのである——これが神の言葉を読むときの人々の反応である。人間は何年もの労苦のせいで虚弱になった。人間は内側も外側も病んでいる。人間の何もかも、心臓から血管まで、大腸、小腸、胃、肺、腎臓など、すべてが病んでいる。人間の体全体で健康なものはない。それゆえ、神の働きは人間には達成できない水準に達することはないが、人々が己を知るきっかけとなる。人間の体は病原体に蝕まれているため、そして人間は歳をとったため、死の日は近づいており、引き返すことはできない。しかしこれは事の一部に過ぎない。人間の病の根源は探求されているところであり、内なる意味は未だ明らかにされていない。現実には、神の働きの全体が終了するのは、神の地上における働きが完了するときではない。というのは、働きのこの段階がひとたび終了すると、その先の働きを肉体にあるままで行なうことは不可能であり、神の霊が働きを完了しなくてはならないからである。したがって、神は「わたしが公式に巻物を開くのは、宇宙全体の人々が罰を受けるときであり、わたしの働きがその頂点に達するときであり、世界中の

人々が試練にさらされるときである」と言うのである。肉体における働きが終了するのは、神の働きがその頂点に達するときではない――今回の頂点は単にこの段階における働きを指し、経営（救いの）計画全体における頂点のことではない。したがって、神の人間への要求事項は高度ではない。神はただ人々に己を知ることを要求しており、これは神の旨が達成されているであろう働きの次の段階に役立つためである。神の働きが変化するとともに、人々の「働きの構成単位」も変わる。今日は神の地上における働きの段階にあるので、人々は草の根の働きを行なわなければならない。将来においては、国を治めることが必要になるであろうから、人々は「中央委員会」に再任命されることになる。外国を訪問するのであれば、海外に行くための手続きに対処しなければならない。このようなとき、彼らは母国から遠く離れて外国にいることになる――しかし、これも神の働きの要求事項のためである。「わたしたちは必要なときには神のために命を投げうちます」と人々が言ったように――これが将来において歩くべき道ではないのであろうか。このような生活をかつて享受した者がいるのであろうか。あちこちを旅行し、海外を訪問し、地方で指導し、一般大衆のあいだに溶け込むことができ、また上層部組織のメンバーと国にかかわる重要事項について話すこともできる。そして必要なときには地獄の生活を自ら味わい、その後には元に戻り天の恵みを楽しむことができる――これらは人間にとっての恵みではないのであろうか。神に匹敵した者がこれまでにいたであろうか。あらゆる国々をくまなく旅した者がこれまでにいたであろうか。実は、助言や解説がなくても人々は神の言葉の一部を少しは理解することができる――ただ、彼らは自らを信じておらず、このため神の働きは今日まで延長されてきたのである。人々にはあまりに欠如がありすぎるため――神は「彼らには何もない」と言った――今日の働きは人々にとっては途方もない困難をもたらすのである。さらに、この弱点が当然ながら神の語りに制約を加えた。これらはまさしく神の働きを妨害している事柄ではないのであろうか。まだこのことが分からないのか。神の言うことのすべてには隠れた意味がある。神は語るとき、手近にある問題を取り上げる。そして寓話のように、神の語る言葉のすべてには深い意味が含まれている。これらの簡単な言葉は深い意味を含んでおり、したがって重要な問題を解説している――これが神の言葉が最も巧みに行なうことではないのであろうか。このことを知っているのか。

脚注

a. 「青天」は帝政時代の公正無私の判官（包青天）を指している。

第三十一章

神の性質は神のことばのすべてに広がっているが、神の言葉の筋立ての糸はすべての人類の反逆を明らかにし、彼らの不従順、不服従、不公正、不義、本当に神を愛する能力がないことなどを暴露している。神の言葉は、人々の体の毛穴のひとつひとつまで神への反抗が詰まっているので、毛細管にでさえ神に対する反抗心が含まれていると語るまでに至っている。人々がこのことを詳しく検討しようとしなければ、彼らはいつも反抗的気持ちに気づくことができず、決してその気持ちを投げ捨てることができないだろう。すなわち、神に対する反抗心のウィルスが彼らの体中に広がり、最後にはあたかも彼らの白血球が赤血球を食い尽くし、全身から赤血球がまったくなくなってしまうかのようなになる。結局彼らは白血病で死ぬだろう。これが人の現状であり、誰もそれを否定することはできない。赤い大きな竜がとぐろを巻いている国に生まれたので、それぞれの人々の中には赤い大きな竜の毒を象徴し、実証するものが少なくとも一つはある。このようにして、この働きの段階で神の言葉の至る所に張り巡らされた筋立ての糸は、人が自分を知り、否定し、見捨て、殺すことであった。これは終わりの日に神が行う主要な働きであり、この段階の働きはすべての中でもっとも包括的で完全なものであると言える――それによって神がこの時代を終わらせようと考えていることがわかる。誰もこれを予期していなかったが、彼らが感覚的に予想していたことでもある。神はそれほどはっきりとは話さなかったが、人々の感覚は非常に鋭いのだ――彼らは時間が短いことをいつも感じているのだから。人がこのことを感じれば感じるほど、時代に関する明確な認識を持つと言える。世界が正常だと考えて神の言葉を否定するわけではなく、神が働く手段を通して、神の働きの中身を知る。これは神の言葉の調子で決定される。神のことばの調子には秘密があるが、誰もそれに気づいておらず、人々がそれを学ぶことこそ最もむずかしい。人々が神の言葉を理解できない問題の核心は、彼らが神の話す調子を相変わらずわかっていないことにある――そして彼らがこの秘密を習得すれば、神の言葉を多少は知ることができるだろう。神の言葉はいつも一つの原則に従っている。つまり、神の言葉はすべてであることを人々にわからせ、人の困難のすべてを神の言葉を通して解決するという原則である。霊の視点を通して、神は神自身の行動をわかりやすいものにし、人の視点を通して神は人の観念を暴露し、霊の視点を通して神は、人が神の旨を心に留めていないと語り、人の視点を通して神は、人の経験の酸いも甘いも、苦さも辛さも味わい、風の中を来て雨とともに去り、家族からの迫害を経験し、人生の浮き沈みを経験したと語る。これらは異なる視点を通して語られた言葉である。神が神の人々に向かって話す時は、家政婦が奴隷に向かって言う小言や、コメディータッチの寸劇のようである。神の言葉に人々は身の隠しようもなく赤面し、封建時代に権力者

から自白しろと厳しい拷問を受けつつ監禁されているかのようである。神が人々に向かって神について話す時、神は、中央政府内部のスキャンダルをあばいて抗議する大学生のように、手加減なしである。神の言葉のすべてが人をあざけているものならば、人々がそれを受け入れるのはむずかしいだろう。したがって、神が人に向かって語る言葉は単刀直入で、暗号めいたものは含まれておらず、人の実際の状態を直接指摘する——それは人に対する神の愛が単なる言葉ではなく、現実のものであることを示している。人々は現実性を評価するが、彼らの神に対する愛には現実性がまったくない。これが人に欠けているものである。神に対する人々の愛が現実でなければ、すべてのものは空虚で幻影であり、このためすべては消えてしまうかのようである。神に対する彼らの愛が全宇宙にまさるものなら、彼らの地位や身分も、これらの言葉さえ現実であり、空虚ではない——これがわかるだろうか。あなたは神が人に要求するものを理解したことがあるだろうか。人は地位の祝福を享受するだけではいけない。その現実性を実際に生きなければならない。これは神が神の人々に対して、そしてすべての人に対して要求することであり、偉大で空虚な理論ではない。

なぜ神は次のような言葉を話すのだろうか？「まるでわたしの行うすべては彼らを喜ばせるための試みであるかのようになわたしの行動を無視し、その結果、彼らはいつもわたしの行いにうんざりする」。あなたは人が神を嫌悪する気持ちを本当に言葉にして表明することができるだろうか。人々の観念では、人と神は「情熱的に愛し合って」おり、今日、人々が神の言葉を熱望する気持ちは神を一飲みにしてしまいたいと思うほどまでに達している——しかし、神は次のような言葉を話す。「人はわたしを軽蔑する。なぜわたしの愛は人の憎悪という報いを受けるのか。」これは人の心の中の鉱床のようなものではないだろうか。これは掘り出すべきではないだろうか。これは人々の追求に伴う欠点であり、解決すべき主要な問題であり、神に関する人の認識の途上に立つライオンのようなものであり、人のために追い払わなければならない——これはなすべきことではないだろうか。人も豚と同じように記憶がなく、いつも快樂をむやみに欲しがるので、神は人に健忘症用の薬を与える——神はさらに語り、さらに話し、人々の耳をつかんでしっかり話を聞かせ、補聴器をはめ込む。神の言葉の中には、一度聞いただけでは問題を解決できないものもある。そうした言葉は何度も繰り返し聞かなければならない。なぜなら「人々は暮らしの中でいつも物忘れに苦しみ、全人類の日々の生活は混乱している」からである。このようにすることで、人々は「時間がある時に読み、暇な時に聴き、時間がない時はほっておく。今日、言葉が語られると、人々は注意するが、明日語

られなければ、聞いた言葉を心の片隅に追いやってしまう」状態から救われる。人々の本性に関する限り、今日、神が彼らの本当の状態について話し、彼らがその完全な認識を持つようになると、彼らは後悔の念で一杯になる――しかしその後従来のやり方に戻り、神の言葉を風に向かって投げ、気づかされると上記のことを繰り返して行く。したがって、あなたが働いたり、話したりする時、人のこの本質を忘れてはいけない。働く時、この本質を無視するのは誤りである。どのような働きをする時も、人々が観念に照らして話すことは特に重要である。とりわけ、あなたは神の言葉に自分の見識を加え、それを人々と語り合うべきである。これが人々に施し、人々が己を知るようにする方法である。神の言葉の内容に基づいて人々に施す時、彼らの本当の状態を把握することは必然的に可能になるだろう。神の言葉によれば、人の本当の状態を把握し、人に施せばそれで十分であり――そういうわけで、わたしは「神が招かれた地上の宴席につく」ことに関して語った神の言葉についてこれ以上語ることはない。

第三十二章

神の言葉は人々の頭を悩ませ続ける。まるで神は、話す時に人を避け空に向かって話しているかのようであり、人の行動にこれ以上注意を払うつもりは微塵もなく、人の能力には完全に無頓着のようである。また、神が最初に意図した通りに、神が話す言葉は人々の観念に向けられているのではなく、人を遠ざけているかのように思われる。数多くの理由で、神の言葉は人には理解しがたく、測り知れない。だが、これは驚くにはあたらない。神のすべての言葉のそもそもの狙いは、人々がその言葉からノウハウあるいはコツを得ることではない。それどころか、神の言葉は神が働きを開始してから今日に至るまで用いてきた手段の一つである。もちろん、神の言葉から人々は神秘的な事に関してさまざまなこと、ペテロ、パウロ、ヨブに関してさまざまな教えを受けるのは確かである――しかし、これは人々が達成すべきことであり、彼らには達成する能力があり、適性もあるから、この目標はすでに達せられている。神が達成を求めている結果は高くないのに、なぜ神はそのように多くの言葉を話したのだろうか。これは神が語る刑罰に関係しており、もちろんすべては人々が気づかないうちに自然に達成される。今日、人々は神の言葉の攻撃を受けて、前より大きな苦しみに耐えている。表面的には、誰も神に扱われたようには見えず、人々は解放されて自分たちの仕事を始め、効力者たちは神の人々と呼ばれて高められ――こうして人々には自分たちが喜びの世界に入ったように見える。だが実は現実とは異なり、彼らは皆洗練される状態からいっそう厳しい刑罰の状態に入っている。神が次のように語っている通りである。「わたしの働きの段階は一

つの段階から次の段階へと密接に結びついており、段階ごとに高くなる。」神は効力者たちを底なしの大穴から拾い上げ、火と硫黄との池に投げ込むが、そこでの刑罰はさらに悲惨である。したがって、彼らはもっとひどい困難に苦しみ、そこから逃げだすことはほとんどできない。そのような刑罰はさらに悲惨ではないだろうか。より高い領域に入ったのに、なぜ人々は幸福よりも悲しみを感じるのだろうか。サタンの手から救い出されたのに、なぜ彼らは赤い大きな竜に引き渡されると言われるのだろうか。あなたは神が「働きの最後の部分は赤い大きな竜の住み家で完了する。」と語ったのを覚えているだろうか。あなたは神が「最後の苦難は、赤い大きな竜の前で強く確固たる証しをすることである。」と語ったのを思い出すだろうか。赤い大きな竜に引き渡されなければ、人々はどのようにして竜の前で証しをすることができるだろう。自殺した後に「わたしは悪魔を打ち負かした」などと言った人がいるだろうか。自分の肉体を敵と見なした後で自殺する——このような行為に何の意味があるのだろうか。では神はなぜ次のように語ったのだろうか。「わたしは人々の傷跡は見ないで、傷のない部分を見るようにし、このことで満足する。」傷のない人々が神を表わす者となることを望んだのなら、なぜ神は人の視点に立つ多くの言葉を忍耐強く、熱心に語って人々の観念に反撃したのだろうか。なぜ神はそのようなことで頭を悩ませたのだろうか。なぜ神はわざわざそのようなことをしたのだろうか。つまり、それは神の受肉には本当の意味があり、神は肉となってその働きを完了させた後、肉体を「切り捨てよう」としなかったことを表す。なぜ「金は純金のはずはなく、人は完全なはずはない」と言われるのだろうか。これらの言葉はどうしたら説明できるのだろうか。神が人の本質について話す時、神の言葉は何を意味しているのだろうか。人々の肉眼には肉体は何もできないものと映るか、あるいは、肉体には欠けが多すぎると映る。神の目からすればこれはまったく重要ではない——しかし人々にとっては大きな問題である。彼らはこの問題を解決することがまったくできず、天の神に直接扱ってもらわなければならないと思っているかのようである——これが人々の観念ではないだろうか。「人々の目には、わたしは空から降りてきた『小さな星』、天の小さな星にすぎず、今日地上に来たのは神に任命されたからなのだ。その結果、『わたし』と『神』という言葉により多くの解釈を思いついた。」人は無価値なのに、なぜ神はさまざまな視点から人の考えを明らかにするのだろうか。これも神の英知なのだろうか。このような言葉は馬鹿げていないだろうか。神は次のように言う。「人々の心の中にはわたしが定着させた場所があるのに、彼らはわたしがそこに住むことを求めない。それどころか、彼らは『聖なる者』が心の中に突然やってくるのを待っている。わたしの身分はあまりにも『低い』ので、人々の求めに合わず、したがってわたしは彼らから淘汰される。」

人々が評価する神のレベルは「あまりにも高い」ので、多くのことは神には「達成不可能」であり、そのため神は「困難に」陥る。神にはできるのだからと考えて要求するのは彼ら自身の観念であることがわかっていない。これが「策士策に溺れる」ということの実際の意味ではないだろうか。これは、「猿も木から落ちる」という言葉がまさにあてはまる。説教する際に、あなたがたは人々に向かって彼らの観念にある神を捨てるようにと言うが、では、あなたがたの考える神は消えてしまったのだろうか。「わたしが人に要求するものは決して大きくない」という神の言葉はどのように解釈したらいいだろう。この言葉は人々を消極的で自堕落にするためではなく、人々が神の言葉を純粹に理解できるようにするためである——わかるだろうか。受肉した神は本当に人々が想像するような「高潔で強大なわたし」なのだろうか。

神が語る言葉をすべて読んで、大体の意味を示せる人々はいるが、神の究極の目的は何かを話せる人はいらぬだろうか。この点が人には欠けている。どのような視点から語ろうと関係なく、神の全体的目的は受肉した神を人に知らしめることである。人間性が何もなかったら——持っているすべてが天の神の属性だけならば——神がそんなに多くを話す必要はないだろう。人々に欠けているものは、神の言葉と関連する直接的な資料になると言える。すなわち、人の心の中に示されているのは、神が人の観念に向けて語る事柄の背景部分だけであり、したがって人々は神の語ることに奉仕する。もちろん、これは人々の観念に向けて神が語る事柄によるのだが——このようにしてはじめて、理論と現実が結びつくといえるし、そうしてはじめて、人々はより効果的に真剣に自分を知ることができるといえるのだ。受肉した神が人々の観念と適合し、神も受肉した神の証しをすればしたら何の意味があるだろう。神が消極的な側から働き、人々の観念を用いて神の偉大な力を強調するのはまさにこのためである。これが神の英知ではないだろうか。あらゆる人のために神が行うすべてはよいことである——だから現時点で賛美しようではないか。物事がある時点に達したら、あるいはその日が来たら、あなたはペテロのように幾多の試練に囲まれながら心の奥底から祈りを発することができるだろうか。ペテロのように、あなたがサタンの手の中にいる時でも神を称えることができる場合に限り、「サタンの束縛から解放され、肉体を克服し、サタンを克服すること」の本当の意味があるだろう。これは神に対するより現実的な証しではないだろうか。これだけが「行動するために現れる神性、人に働きかける7倍に強化された聖霊」によって達成される結果であり、だからこそそれは「人の姿となった者から出てきた聖霊」が達成した結果でもある。そのような行動は現実的ではないだろうか。かつてあなたは現実には注意

を払っていたが、今日現実について本当の認識を持っているだろうか。「わたしが人に要求するものは決して大きくないが、人々はその反対であると思っている。したがって、彼らの『謙虚さ』があらゆる動きに明らかにされる。彼らはわたしが迷うのを深く恐れ、わたしが山の奥深くにある古代の森にさまよい入るのではという恐怖に怯え、いつもわたしの前を歩き、わたしのために道案内をしようとする。その結果、人々はわたしが地下牢の中に歩いて行ってしまうのを深く恐れ、いつもわたしを前方へと導いている。」これらの単純な言葉についてあなたがたはどのくらいわかっているのだろうか――あなたがたは本当に、そこに存在する神の言葉の根源を把握することができるのだろうか。あなたがたは神があなたがたのどの考えに対してこのような言葉を話したのか注意しただろうか。あなたがたが毎日注意を払っているのはこの要点だろうか。すぐ後に続く次の部分の第1文で神はこう語っている。「しかし、人々はわたしの旨を知らず、わたしから何かを得ようと求めて祈り続ける。まるでわたしが彼らに授ける富では彼らの要求に応えることができないかのようであり、まるで需要が供給を上回っているかのようだ。」この文章の中にあなたがたの心の中の観念を見て取ることができる。神はあなたがたが過去に何をしたか覚えていないし、調べもしないので、過去の事柄についてはもはや考えなくてよい。もっと重要なのは、未来へ向かう途中であなたがたが「最後の時代のペテロの精神」を作り出すことができるかどうかである――あなたがたにはこれを実現する信念があるだろうか。神が人に求めるものはペテロの模倣にほかならず、人々が最終的に赤い大きな竜に恥をかかせるための道を構築することである。これは、神が次のように語っているからである。「わたしの望みは、人々がわたしに協力しようと決意してくれることだけだ。彼らがわたしにおいしい食べ物を料理したり、枕するのに相応しい場所を用意したりすることを要求するわけではない…」――世間では1990年代の「雷鋒の精神」を持つことが要求されるが、神の家では、神はあなたがたに「ペテロの独特なスタイル」を作り出すことを要求する。あなたがたは神の旨を理解できるだろうか。あなたがたは本当にこのために努力できるだろうか。

「わたしは世界の上空を動き、歩きながら世界中の人々を観察する。地上の群衆の中にわたしの働きに適した人、あるいはわたしを本当に愛している人はこれまで一人もいなかった。したがって、いまや、わたしはがっかりしてため息をつく。人々は直ちに散り散りになり、わたしが「彼らを一網打尽」にすることをひどく恐れてもはや集まらない。」ほとんどの人はおそらくこれらの言葉は理解しがたいと思うだろう。なぜ神は人から多くを求めないのかと彼らは尋ねるが、神の働きに適している者はいないので、神

は落胆してため息をつく。ここに矛盾はあるだろうか。文字通りに言えば、矛盾はあるが――しかし実際には矛盾はない。たぶんあなたは神が次のように語った時のことをまだ思い出すことができるだろう。「わたしの言葉は、すべてわたしが望む結果をもたらすだろう。」神が人の姿になって働く時、人々は神がまさに何をしようとしているかを見ようと、神の行いのすべてをじっと見つめる。神が霊の領域でサタンに対して新しい働きを実行する時、言い換えれば、人間の姿になった神のせいで地上の人々の間にはありとあらゆる観念が生み出される。神が落胆してため息をつく時、つまり、神が人の観念のすべてについて話す時、人々は最善をつくしてその観念に取り組もうとするし、神についての独自の観念を持っている人々はすべて神の敵だと神が言うので、自分たちには希望はないと信じる人々さえいる――それならば、いったいどうして人々はこうしたことのせいで「散り散りになる」ことなくいられるだろう。特に今日、刑罰が下る時、人々は神が自分たちを取り除くのではないかといっそう恐れる。彼らは、罰を受けた後に神が「彼らを一網打尽にする」と信じている。しかし事実はそうではない。神は次のように言う。「わたしは人々が決して逃げられないように、刑罰のまっただ中で『拘束する』ことは望まない。わたしの経営の働きには人の行為が不足しているので、わたしの働きを首尾よく完成させることは不可能で、わたしの働きは効果的に進められない。」神の旨はすべての人々が死に至った時点でその働きを終わりにすることではない――そうすることで何の意義があるだろうか。人々の中で働き、彼らを罰することにより、神は彼らを通してその行いをはっきりさせる。人々は神の語調にちゃんと刑罰が含まれていることをまったくわかっていなかったのも、彼らの意識が成長することはなかった。人々には決心を表す能力がなく、したがって神はサタンの前で何も言うことができないので、神の働きは前に進むことが阻止される。したがって神は言う。「わたしはかつて人をわたしの家に招いたが、人はわたしの呼びかけを聞くと、わたしに客として招かれたどころか、処刑地に連れて来られたかのように逃げ回った。そのため、わたしの家は空のままになっていた。人がいつもわたしを避け、わたしに対して常に警戒していたからである。このためわたしには自分の業を行う術がなかった。」神がはっきり人への要求を提示するのは人の働きに誤りがあるからである。また、神が語りかける言葉をさらに加えるのは、人々がこの段階の働きを完成できないからである――それはまさに神が言う「人に対するこれまでとは別の働きかけ」である。しかし、神が話す「彼らを一網打尽にすること」については、わたしは詳しく論じない。なぜならこれは今日の働きにほとんど関係がないからである。もちろん、「全宇宙への神の言葉」の中で、神の言葉の多くは人間を取り扱っている。しかし人々は神の旨を理解しなければならない。神

の言うことが何であれ、神の意図することはいつも良い。神が語る手段は非常に多いので、人々は神の言葉について100%の確信はなく、神の言葉のほとんどは神の働きの必要性のために語られ、現実的なものはほとんど含んでいないと信じてしまう。そのため、自分の考えに混乱し、意気消沈する——彼らの観念の中では、神はとても賢く、完全に彼らの手の届かない存在であり、彼らは何も知らず、神の言葉をどのように消化したらよいかについてまったく手がかりがないかのようである。人々は神の言葉を抽象的で複雑なものにしてしまう——「人々はいつもわたしの言葉に香りをつけたがっている」と神が言う通りである。彼らの考えはあまりにも複雑で、神には「ほとんど理解できない」ので、神の言葉の一部は人によって制約されてしまうから、神は単刀直入で公明正大な方法を用いて話すしかない。人々の要求は「あまりに高く」、彼らの想像力はあまりにも豊かなので、まるで彼らは霊的領域に侵入してサタンの行いをじっくり見ることができかのようである——このため神の言葉は減らされてしまった。神が話せば話すほど人々の顔はますます憂鬱になるからである。なぜ彼らは自分の終わりをじっと考えたりせずに、ただ従うことができないのだろう。このようなことをして、何の利益があるのだろう。

第三十三章

実のところ、神が人々に行ったこと、与えたこと、ならびに人々が所有しているものに基づいて考えてみると、神が人々に要求するものは過度ではなく、神は彼らに多くを求めないと言うことができる。それではどうして彼らは神を満足させようとすることができないのだろう。神は100%を人に与えるのに、人々からはわずか1%の数分の一しか要求しない——これでも要求しすぎというのだろうか。神は何もないところからもめ事を引き起こしているだろうか。しばしば人々は自分自身を知らず、神の前で自らを省みないので、過ちを犯すことがよくある——このような有様をどうして神と協力していると考えることができるだろう。神が人々に重い負担をかけない時があれば、彼らは泥のように粉々に砕け、なすべきことをあえて見つけようとはしないだろう。それが消極的であれ否定的であれ人というもので、積極的に神と協力することができず、いつも自分に屈する否定的理由を探している。あなたは本当に自分のためでなく、神を満足させるためにすべてを行う人だろうか。あなたは本当に感情に頼らず、個人的な選り好みがなく、神の働きが必要とするもの満足させる人だろうか。「なぜ彼らはいつもわたしと取引しようとするのだろうか。わたしは貿易センターの総支配人なのだろうか。わたしは人々が要求することを心から叶えようとしているのに、なぜわたしが人に求めることは

無になってしまうのだろう。」なぜ神は続けて何回もこのようなことを尋ねるのだろう。なぜ神はそうに失望して叫ぶのだろう。神は人々から何も獲得していない。神が見るものは彼らを選び出す仕事だけである。なぜ神は、「わたしが人に求めることは無になってしまう」と言うのだろう。あなた自身に次のように聞いてみるがよい。自分が選んだのではなく義務である仕事を終始一貫してすることなど、誰ができるだろう、と。自分の心の中の感情に基づいて行動しない人がいるだろうか。人々は自分の個性のままに振る舞い、自分がすることに忍耐強くもなく、例えば三日間釣りをしても網を放ったままにしてその後の二日間何もしない。彼らは交互に熱くなったり、冷たくなったりする。熱い時には、地球上のすべてのものを焼いて灰にし、冷たい時には、地球上のすべての水を凍らせることができる。これは人の機能ではなく、人の状態についてのもっとも適切な類推である。これは事実ではないだろうか。おそらくわたしは人々の「観念」を掌握している、おそらくわたしはそれらを非難している——しかし、それにもかかわらず、「真理とともに世界中を歩む。真理なくしては、どこへも至ることができない。」これは人の格言であるが、ここで使うのにふさわしいとわたしは思う。わたしはわざと人々に冷水をかけているのではないし、彼らの行いを否定しているのでもない。あなた方にいくつかの質問をしたい。神の働きを自分たちの本分と見なしているのは誰か？「神を満足させることができる限り、わたしは自分のすべてを与える」といえるのは誰か？「他の人々に関係なく、わたしは神が必要とするすべてを行い、神の働きの長さが長くても短くても、私は自分の本分を尽くす。神の働きを終わらせることは神の仕事であり、わたしが考えることではないのだから」と誰が言えるだろう。誰がそのような認識を持つことができるだろう。あなた方が何を考えるかは問題ではない——多分あなたはもっと高い洞察力をもっているだろう。それなら、わたしは黙認して敗北を認めよう——しかし、わたしはあなた方に、神が望むものは誠実で情熱的な忠誠心であり、感謝の念を持たない狡賢い心ではないと言わなければならない。あなた方はこの「駆け引き」について何を知っているというのだ。あなた方は終始「世界を旅して」いるのだ。ある時あなた方は永遠の春の昆明にいても、一瞬のうちに苛酷なほど寒く、雪に覆われている「南極」に到着してしまうのだ。これまでに自分自身を裏切らなかった者がいるだろうか。神が求めるものは「死に至るまで休息なし」の精神であり、神が人々に対して求めるものは、「南の壁に当たるまで後戻りしない」精神である。もちろん、神の意図は人々が間違った道に進むことなく、この精神を採用することである。神が次のように言うとおりである。「彼らが与えてくれる『贈り物』をわたしが自分の持っているものと比べると、人々はすぐにわたしの尊さを認め、そこで初めてわたしがいかに計

り知れないものであるかに気付く。」これらの言葉はどのように説明すればよいのだろう。おそらく、上述の言葉を読めば、あなたには多少わかるだろう。神は人の心を切り開いて中身をすっかり取り出すから、その時人々はこれらの言葉を知るようになるのだ。しかし、神の言葉には深くて、隠された意味があるため、人々は古い肉については曖昧なままである。彼らは医科大学で学んでいないし、考古学者でもないからである。そこで、彼らはこの新しい用語は理解しがたいと感じる——そしてその時初めて彼らは少し屈服する。というのも、人々は古い肉体の前では無力だからである。古い肉体は獰猛な野獣のようにではないし、原子爆弾のように人類を完全に破壊することもできないとはいえ、それをどう処理すべきかについては、彼らは無力であるかのごとくまったくわからない。しかし、わたしには古い肉体を扱う方法がいくつかある。人が対策を考える努力をまったくしないために、人のさまざまな異常な点がわたしの目の前で絶えずきらめいている。神が次のように言ったとおりである。「わたしが彼らにわたしの全体を示すと、彼らは目を丸くしてわたしを見て、塩の柱のようにわたしの前で動かなくなってしまう。彼らの奇妙な様子を見ると、わたしはほとんど笑いを止めることができない。彼らはわたしに物を求めて手を伸ばしているので、手の中の物を与えると、彼らはそれらを生まれたばかりの赤子のように大切に胸に抱えるが、それはほんの一瞬の動きにすぎない。」これらは古い肉体の行動ではないだろうか。今日、人々は理解しているのに、なぜやめないどころか続けているのだろう。実際、神の要求の一部は人には達成不可能ではないが、人々はそのようなことはまったく留意しない。なぜなら、「わたしは簡単には人を罰しない。人々がいつも自分の肉を思いどおりにしているのはこのためである。彼らはわたしの意志を守らず、わたしの裁きの席の前でいつもわたしを騙してきた」からである。これは人の背丈ではないのだろうか。神がわざとあら捜しをしているのではなく、これは事実である——神はこれを説明しなければならないだろうか。神が次のように言うとおりでである。「人々の『信仰』が非常に深いので、彼らは『称賛に値する』からである。」このため、わたしは神の取り決めに従い、このことについてあまり語らない。人々の信仰のため、わたしはこれをぐっと掴み、わたしが思い出させなくても彼らにその機能を実行させるために彼らの信仰を利用する。こうすることは間違っているだろうか。これがまさに神が必要とすることではないだろうか。おそらくそのような言葉を聞くとすぐに、うんざりとする人々も中にはいるだろう——そこで、わたしは彼らに少し余裕を与えるために何か他のことについて話す。全宇宙の神の選民すべてがこの刑罰を経験する時、そして人の心の中の状態が修正される時、人々はあたかも試練を逃れたかのように、心中秘かに喜ぶだろう。この時点で、人々はもはや自分で選ぶこと

はしないだろう。これはまさに神の最後の働きを行う間に達成される結果だからである。神の働きが今日の段階まで進んできた現在、神の子たちや人々はすべて刑罰の段階に入っており、イスラエル人もこの段階を逃れることはできない。人々は心が不純に汚されているからであり、そこで神はすべての人々を純化するために巨大な溶解炉に導き入れるが、それは必要な通り道である。いったんこの段階が過ぎると、人々は死から復活させられるが、これはまさに神が「七つの霊の発言」の中で予言したことである。人々の反感を買わないために、わたしはこのことについてもうこれ以上話さない。神の働きは実にすばらしいので、神の口から語られた予言は最終的に達成されなければならない。人々にもう一度自分たちの観念を話すように神が求めると、彼らはものが言えないほどびっくりするが、それで誰も当惑したり、不安になったりするべきではない。わたしが次のように言ったとおりである。「わたしのすべての働きの中で人の手で実行された段階があっただろうか。」あなたにはこれらの言葉の本質がわかるだろうか。

第三十五章

今日、すべての人間は、程度に差はあるが、刑罰の状態に入っている。神が次のように言った通りである。「わたしは人間と一緒に出ていく」。これは完全に本当であるが、人々はまだこの点を完全には理解できていない。その結果、彼らが行った働きの一部は不必要になっている。神はこう語った。「彼らの霊的背丈に応じて支援し、施す。人間はわたしの経営計画全体の中心人物なので、わたしは『人間』という役割を与えられた人々をさらに導き、彼らが心と能力の限りを尽くしてその役割を演じられるようにする」。またこうも語った。「しかし、彼らの良心を直接批判することは断る。むしろ辛抱強く、整然と彼らを導き続ける。結局、人間は弱く、何の働きも行なえないのだ」。神の考えはこうである。たとえ最終的に神がこれらすべての人間を根絶することになるとしても、地上における神の働きは最初の計画に従ってさらに続くであろう。神は無駄な働きは行っていない。すべて神が行うことは申し分がない。ペテロが次のように言ったとおりである。「たとえ神が人間をおもちゃのようにもてあそんでいたとしても、どうして彼らは文句を言うことができるだろう。彼らはどのような権利を持っているのだろうか」。今日において、これは神が人類に達成していることではないだろうか。人間は本当にこのような見解を持つことができるのだろうか。今日の近代化したハイテクの時代に生きる「ペテロたち」にはできないのに、なぜ二千年前のペテロはそのようなことを言えたのだろうか。わたしには歴史が進化しているのか、退化しているのか、断言することはできない。科学が一段と進歩しているのか、後退しているのかは、これまでのと

ころ誰も答えることのできない問題である。神が人々に対して行ってきたことのすべて
は彼らを積極的にし、いのちにおいて成長できるようにすることである。人々はこれが
理解できないのだろうか。あなたを否定的にするものはすべてあなたの弱点なのである
。それは脆弱性という致命的な点であり、サタンの攻撃を受けやすい。これがわかるだ
ろうか。なぜ神はこのように語ったのだろうか。「（わたしがまったく）真剣に誠意を尽
くして彼らに懇願しているのだ。彼らは本当にわたしが求めることを行なえないのか」
。これらの言葉は何を意味するのだろうか。なぜ神はこのような質問をしたのだろうか。こ
れは、人間には否定的面が多すぎるが、人間をつまずかせるのにはたった一つの否定的
要素があれば十分であるという意味だ。あなたは否定的なやり方を続けることが何をも
たらすか考えてみるとよい。神が行うすべては人間性を完全にすることに使われている
。このことに更に説明の必要があるだろうか。わたしはそうは思わない。人間はサタン
にとりつかれていると指摘することはできるが、人間は消極性にとりつかれていると言
ったほうがずっと良いだろう。これは人間が自分を表現する方法の一つである。消極性
は彼らの肉体の付属物である。したがって、彼らは皆無意識のうちに消極的状态に陥っ
ており、それとともに刑罰に陥る。これは神が人間のために準備した罠であり、この時
に人間はもっとも苦しむ。人々は消極性の中に住んでいるので、刑罰から脱却するのは
むずかしい。これはまさに今日の物事の実情ではないだろうか。しかし、人間はどうし
て神の次の言葉を見捨てるだろうか。「今日、サタンは極限まではびこっている。わ
たしがこの機会を利用してわたしの働きの中心を見せつけ、わたしの力を明らかにしよ
うとしないのはなぜか」。わたしが人々に何か気づかせることを言うや否や、あちこち
の教会の人々は直ちに刑罰に陥る。これは神が2か月間働いたが、人々がまだ重要な内
部変化を経験していないからである。彼らは自分の考え方で神の言葉を分析するだけな
のだ。そして実際には彼らの状態はまったく変わっていない。彼らは相変わらず否定的
なままである。こういう状況だから、神が刑罰の 때가 間近だと言うと、人々はすぐに動
揺して次のように考える。「わたしは神によって運命づけられているかどうかかわからな
いし、この刑罰の下で毅然としていられるかどうかともわからない。人々を罰するために
神がどのような方法を用いるか知ることはさらに難しい」。人間は皆刑罰を恐れている
が、変わることができない。彼らはただ黙って苦しむが、毅然としていられないことも
恐れている。このような状況では、彼らに課される刑罰と言葉による責め苦がなくても
、人々は無意識のうちにいつの間にか刑罰の状態に入った。このように、彼らは皆緊張
して、落ち着きがない。これは「自分がまいた種を刈る」と呼ばれる。人間は神の働き
をまったく理解しないからである。実のところ、神はこれらの人々のためにこれ以上言

葉を無駄にする気はない。つまり、神は本当の刑罰ではない、別の方法を採用して彼らを取り扱っているように思われる。人がひよこを捕まえ、それが雌鶏か雄鶏かを見るために取り上げる時のようである。これは大したことではないように思われるかもしれないが、この小さいひよこは、今にも人間に殺されて食べられてしまうのを怖がっているかのように非常におびえて、自由になろうともがくだろう。ひよこには自分自身がまったくわかっていないからである。わずか数十グラムの重さしかないひよこをどうして殺して食べることがあり得よう。馬鹿げた話である。まさに神が次のように言ったとおりである。「では、なぜ人々は絶えずわたしを避けるのか。捕まった途端に殺される雛のように取り扱うからか」。したがって、人々が苦しむのはすべて「無私の献身」のせいであり、無駄な支払いとすることができる。人々が恐れるのは自分自身を知らないからである。その結果、彼らは自分のいのちを危険にさらすことができない。これが人類の弱点である。神が語った「最後には、人間に自己を分からせよう。これがわたしの最終目標である」という言葉は時代遅れなのだろうか。自分自身を本当に知るものなどいるのだろうか。自分自身を知らなければ、刑罰を受ける権利を誰が与えるのだろうか。子羊を例に取り上げてみよう。子羊が成長して羊にならなければ、屠殺されることなどないだろう。実を結んでいない樹木が人々に喜ばれるだろうか。誰もが「予防接種」を重要視しすぎる。このようにして、人々は皆断食を実行し、それで空腹になる。これは自分が蒔いた種を刈り取る一例である。彼ら自身が自分に害を及ぼしているのであって、神が野蛮だとか、非人間的であるということではない。ある日、人間が突然自分自身を知り、神の前で恐怖に震えるならば、神は彼らを罰し始めるだろう。このようにしてはじめて、人間は従順に、進んで困難を受け入れるだろう。だが、今日の有様はどうだろう。人々は皆、食事を作らされる子供のように、自分の意志に反して刑罰を受け入れる。そのような状態で、人々が不安を感じずにいられるだろうか。誰でも次のように考える。「まあいいさ。刑罰を受けている間、わたしは頭を下げて、有罪を認めたほうがよい。わたしに何ができるだろう。たとえ泣いていても、わたしは神を満足させなければならぬのだから、わたしに何ができるだろう。誰がわたしにこの道をまっすぐ歩いて行けと言ったのだろうか。まあ、いいさ。わたしは運が悪いと思うことにしよう」。人々はこのように考えるのではないだろうか。

神は次のように言った。「人類は礼儀正しく振る舞っているのであって、誰もあえてわたしに反対しようとはしない。すべてはわたしの導きのもとにあり、わたしが割り当てた働きを行なっている」。明らかに、一人として進んで刑罰を受けようとする者はい

ないし、しかも、それは神からの刑罰である。なぜなら、人間は皆動揺と混沌の中にいるよりものんびりと暮らす方を望むからである。神は次のように言った。「死を恐れない者がいるだろうか。人々は本当に自分のいのちを危険に晒せるのか」。これは完全に正しい。怒りや絶望に駆られた場合はもちろん別として、誰でも死を恐れているのだ。これは人間の本質であり、解決するのは非常に難しい。今日、神はまさにこの苦境を解決するためにやって来た。人間は皆無力なので、人々のこうした病を治す専門病院を設立するために、神はわざわざ無理して彼らの中に現れた。人々はこのやっかいな病から抜け出すことができないので、皆非常に不安になり、口内炎が生じたり、腹部が膨れたりする。そのうちに体内のガスの量が増え、圧力が増す結果になる。最後に胃が破裂し、彼らは皆死ぬ。したがって、その時点で、神はこの深刻な人間の病気を治療したということになる。なぜなら誰もが死んでしまったからである。これは人間の状態を治療したことになるのではないだろうか。神はこの働きをしようという計画のもとにやって来た。人々が死を過度に恐れているので、神は人間と同じ仕事を分かち合うために自身でやって来た。人々はあまりにも勇気がないので、神は彼らに実演して見せることから始めた。この先例を見た後ようやく誰もが進んで従うようになる。こういうわけで、神は次のように言ったのだ。「誰もわたしの働きを実行できなかったので、わたしは自ら戦場に足を踏み入れ、サタンと生死を賭けた戦いを繰り広げてきたのだ」。これは、魚が死ぬか網が破れるか、天下分け目の戦いである。これは確かである。精神が結局は勝利を収めるので、死の標的が肉であるのは間違いない。ここで言わんとすることが分かるだろうか。しかし、神経過敏になってはならない。この文章は単純かもしれないし、複雑かもしれない。どちらにせよ、人々はそれを理解できない。これは確かである。人間はその苦しみの中から神の言葉による精錬を受け入れることができる。それなら、これは彼らの幸運であると言えるだろう。しかし、彼らにとって不運であるとも言えだろう。それでも、わたしは皆に神の意志は正しいことを思い起こさせたい。結局――神の意志は、いつも自分自身のために計画や取り決めを行う人間の意志とは違うのだ。あなたがたはこのことをはっきりさせておくべきであり、堂々巡りの熟慮に陥ってはならない。これはまさに人間の弱点ではないだろうか。彼らは皆次のようである。つまり、神に多大なる愛を抱くよりはむしろ、自分自身に多大なる愛を抱いている。神は人間に嫉妬する神であるから、いつも彼らに要求を出す。人々が自分自身を愛すれば愛するほど、神は彼らにますます神を愛すように要求し、その要求はさらに厳しくなる。あたかも神はわざと人々をからかっているかのようである。人々が本当に神を愛すれば、神は彼らを受け入れないように思われる。このため、人々は皆熟慮する時、頭を掻き、耳をひっ

ばっている。これは神の性質についての話であり、一つか二つの事を簡単に述べているだけである。だが、これは神の意志である。人々が知ようと神が要求していることであり、必要不可欠なことである。これは新しい課題であり、人々は一生懸命努力してその困難を打ち破り、新たな進歩を遂げなければならない。これがわかるだろうか。この件に関しわたしはもっと話す必要があるだろうか。

過去の時代に関し、神は次のように言った。「わたしによって選ばれた者は一人としていなかった。誰もがわたしの声なき手紙によって拒絶されたのである。これは、過去の人々がひたすらわたしに仕えなかったからであり、ゆえにわたしも彼らだけを愛することはなかった。彼らはサタンの『贈り物』を受け取り、それから振り向いてそれらをわたしに捧げた。これはわたしへの中傷ではなかったか」。これらの言葉はどのように説明できるだろう。「すべての才能はサタンが起源である」と神が言った通りである。過去の時代の使徒と預言者は、働いている間は完全に才能に依存しており、その後の長い年月の間に、神は働きを行うためにその才能を使ってきた。そういうわけで、才能に恵まれたすべての人々の奉仕はサタンに由来していると言われている。しかし、神はその英知のために次のように言う、「わたしはサタンの策略を引き立て役として利用している」と。このように、神は才能に恵まれた人々の奉仕を「サタンからの贈り物」と呼んでいる。彼らがサタンに属しているので、神はこの行為を「中傷」と呼ぶ。これは人間に対する根拠のない非難ではなく、十分な根拠に基づいた、適切な説明である。このような訳で神は次のように言った。「わたしは嫌悪を示さず、むしろこれらの『贈り物』を経営の資材に加えることで、彼らの企みを活用した。後に彼らが機械によって処理されていたら、わたしはその中の滓をすべて焼き捨てるだろう」。これは神の働きの素晴らしい点であり、人々の概念とはもっとも一致しない点である。というのは、「王として君臨する人々は才能に恵まれた人々ではなく、神が愛するのは才能に恵まれていない人々である」ということを誰も考えないからだ。ご承知のように、ウィットネス・リーやウォッチマン・ニーの考えや望みはすべて灰と化してしまった――そして才能に恵まれた今日の人々も例外ではない。今、神はこの働きを始めており、神の働きの引き立て役として仕える人間の中での聖霊の働きをすべて、徐々に撤回している。神の働きが完全に終了すると、これらの人々は全員元の場所に戻るだろう。しかし、わたしがいま言ったことを聞いて、無鉄砲な行動をしないでほしい。あなたがたは神の働きの段階に従って流れに身を任せ、働きの妨害をしないようにするべきである。この点がわかるだろうか。これは神の働きの段階と方法だからである。神がこれらの「贈り物」を「加

工処理」して「完成品」にする時、神の意図のすべては明らかになり、神に奉仕を提供する贈り物はすべて除去されるだろう。しかし、神が享受するものは完成品である。わかるだろうか。神が望むものは完成品であり、人間が提供する高価な贈り物ではない。すべての者が正しい場所を占める時に限り、つまり、神が本来の位置に戻り、悪魔も自分の席に着き、天使も、例外なく席に着いた時——その時初めて神の顔に満足の笑みが浮かぶだろう。神の意図が満たされ、目標は達成されたからである。神はもはや「悪魔」からの「援助」を求めないだろう。神の意図が人間に公然と明らかにされたので、人間にそれらを再度伝えさせる必要がないからである。この時、人々の肉体と魂が一つになるだろう。神が人間に明らかにするのはこのことである。それは霊、精神、肉体の終着点である。それは「人間性」の元々の意味の要約である。これについて詳細に調べる必要はない。それについて一つか二つの事を知れば十分である。よろしいだろうか。

第三十六章

神は人への刑罰を始めたと言われているが、人に下されたこの刑罰の意図は本来の意図によるものかどうかを断言できる者はおらず、はっきり答えられる者はいない。神は次のように言う。「人は己のくびきを両手で握りしめ、敵を見張るかのような目つきでただわたしをじっと睨むばかりで、わたしの刑罰に何も見出さなかった。わたしはこのとき初めて、人がどれだけ衰弱しているかを理解する。試練の中で揺るぎなく耐え忍んだ者は誰もいないとわたしが言うのは、このためである。」神は、人に下されようとしている刑罰に関して、ひとつ残らず詳細に語っている。あたかも人間に対する刑罰が始まっており、揺るぐことなく立ち続けていることができないかのようである。神は人の醜い性質を鮮明に、そのまま描写する。人々が圧力を感じるのはこのためである。——試練の中で耐え忍んだ者は誰もいないと神が言うのに、どうしてわたしが世界記録を破って、しきたりに反して認められようか、と。このとき、彼らは真剣に考え始める。実際には、神が「わたしは彼らを追い詰めたのだろうか。」と言った通りである。もちろん、神は全ての人を追い詰めた。故に、人の意識の中では、神は間違いなく常に残酷で無慈悲なのである。神はこの世の苦難の海から全ての人を釣り上げた後、「事故防止のために釣った『魚』をすべて殺し、魚が従順で不平を全く言わなくなるようにした。」のである。これは事実ではなかろうか。神は死の苦い海から全ての人を引き上げ、別の死の淵に投げ入れた。神は彼らを全員「首切り台」に引きずって行き、彼らを無理やり追い詰めた。神はなぜこれと同じことを自身の他の息子たちや人々にはしないのだろうか。赤い大きな竜の国でこのような業を行う神の意図は何であろうか。神の手はなぜこ

れほど「悪意あるもの」なのか。「わたしが人を必要とするときにはいつも彼らは姿を隠す。まるでびっくりするような場面には一度も出くわしたことがないか、田舎で生まれて都会の事は何も知らないかのようである。」ことも不思議ではない。事実、人の中で次のように問う。「神にはどのようなご計画があってこのようなことをされているのだろう。神は我々を死に追いやるのではないか。そのようなことをする意味は何なのか。神の業の段階が次々ともたらされるのはなぜか。神がわたしたちに全く寛容を示されないのはなぜだろうか。」しかし、人はそれをあえて口に出さない。そして神の言葉は彼らにそのような考えを放棄させ、それ以上考える余裕を与えないので、そのような考えを無視する他ないのである。神は人間の観念を明らかにし、人々は自分の観念を心の奥に押し込め、出てこないようにしているだけのことだ。かつて彼らは赤い大きな竜の子孫だと言われた。実のところ、はっきり言って彼らは赤い大きな竜の化身なのである。神が彼らを道の終わりまで強制的に追い込んで彼らを殺すとき、その時には、間違いなく赤い大きな竜の霊は彼らの中で働く機会がなくなる。このように、人が道の終わりまで行き着いた時は、赤い大きな竜が死ぬときでもあるのだ。死をもって神の「偉大な慈悲」に報いていると言えるだろう。これは、大きな赤い竜の国における神の働きの目的である。人々が自らの命を犠牲にする覚悟がある時、全てがささいなものとなり、彼らをしのぐ者はいなくなる。命よりも大切なものがあるだろうか。だから、サタンは人の中でこれ以上何も行なえず、人に対して何もできなくなる。「肉体」の定義では、サタンによって墮落させられているものとあるが、人々が自分自身を真になげうち、サタンに振り回されることがないなら、誰も彼らを打ち負かすことはできない。そのとき、肉体は別の機能を果たし、正式に神の霊の導きを受け始める。これは必要な過程であり、段階的に進まなくてはならない。そうでなければ、神が人間の頑なな肉に対して働く術はない。神の知恵はそのようなものである。このように、全ての人は今日の状況に無意識に入り込んでしまった。人を「その道の終わり」へと連れていったのは神ではないのか。人間が開いた新たな道などあるだろうか。あなたがたの経験を見ると、神があなたがたに対して極めて残酷な手段を用い、それによって神の義が示されているようだ。あなたがたはどうして褒め称えずにいられるのか。あなたがたに対する神の働きにより、人々は神の義なる性質を目の当たりにする。これはあなたがたの神への讃美に値しないだろうか。古い時代がまだ存在し、新しい時代が実現されていない岐路にいる今日、あなたがたはどのようにして神の証しになれるのか。これほど重大な課題を、深く考える価値がないのだろうか。このことと無関係の物事をまだ考えているのか。何故神は、「人はかつて『理解万歳』と叫んだが、時間をかけて『理解』という言葉进行分析した者

はおらず、人がわたしを愛したいと願っていないことがわかる」と言うのか。神がそのようなことを言わなかったとしたら、あなたがたは、あなたがた自身の自由意志で神の心を理解しようとせずにおられようか。

昨今では、神の受肉の目的と核心を多少理解するようになった人もいるが、神が人に率直に話さなければ、神の受肉の目的と核心を推測できる人はいないと断言できる。これは間違いない。それでもまだあなたには不明瞭だろうか。神が人の中にすることは全て自身の経営（救いの）計画の一環であるが、人は神の旨を正確に理解することができない。これは人に欠ける部分であるが、神は人が何かの能力を持つようにと要求されることはなく、「医師の忠告」を聞くようにと言うだけである。「医師の忠告を聞く」ということが、神が人に求めることである。「彼らの心の中には『人生』という言葉は存在せず、人生を重んじることもなく、あたかもとりとめなく話し続ける老女の言葉のように、わたしの言葉にただうんざりする。」ため、神は全ての人が真の「人生」を知るように求めている。人の目には、神の言葉は毎日使う道具のようで、大切になどしないのである。従って、人々は神の言葉を実践できない。真理を知ってはいるが実践しない惨めで不幸な存在となってしまった。だからこうした人の過ちだけでも、一定期間神が嫌悪感を抱くのには十分である。人々が神の言葉を心に留めないと何度も言うのはこのためである。それでも彼らの観念故に、次のように考える。「わたしたちは日々神の言葉を研究し、分析しているのに、わたしたちが神の言葉を心に留めないなどと言われるのはどういう訳だろう。これは不当ではないだろうか。」あなたのために少し細かく分析しよう。――これを聞くと人々は赤面するであろう。神の言葉を読む彼らは、まるでよだれを垂らしながら飼い主の機嫌を取るパグのように頷き、右脚を後方へ引きながらおじぎをする。それだから、この時人々は自分達が相応しくない者と感じ、涙が頬をつたい、悔い改めて再出発したいかのようである。だが暫くするとまた、羊のようにおどおどした態度は失せて貪欲な狼のようになる。神の言葉は脇に置いてしまい、己のこと最優先、神のことは最後にしている彼らにとって、神の言葉を実践することなどできないのである。何か事が起こると、彼らはひじを外側に向けて曲げる^[a]。これは身内に対する裏切りである。神が「生存をわたしに頼りながら、『反対側に走っているのだ。』」と言うのも不思議ではない。神の言葉には偽りはなく、全て真実で、少しの誇張もないが、それでも控えめに言われているようであることが、このことでやっと分かる。人の霊的背丈があまりに低く、神の言葉に耐えられないからである。神の言葉はこれまでに人に関してその内外両面を明確に描写しており、サタンの顔そのものをこれ以上ないほ

どははっきりと描き出している。今の段階ではまだ人々は全てを明瞭に理解していないため、自らを理解できていないと言うのである。それゆえわたしは、この訓練は継続されなくてはならないと言う。人々が己を理解できた時に神は栄光を受ける。これは容易に理解できるので、詳しい説明は不要であろう。1点だけ確認することがあるが、その前に次の神の言葉を読もう。「今日、人はわたしを全く尊重せず、彼らの心にわたしの居場所はない。迫り来る試練の日々に、彼らがわたしに真の愛を示すことは出来るだろうか。」これらの言葉は何を意味するのか。神は、刑罰まだ人間に対して下されていない。つまり、「己を知る」という表現には秘められた意味があるということである。これに気づいただろうか。苦難と精錬を経験することなくして、どのように己を知ることができるのであろう。己を知らなければ、この言葉は空虚なものではないだろうか。あなたは神の語られること全てを心から信頼しているだろうか。神の言葉をしっかり把握できるだろうか。神が「そのような人の行いを見たわたしは、去る以外にはないのだ」、そして「山々が崩れ、地が裂けて初めて、人はわたしの言葉を考える。そのとき初めて人は夢から覚めるのだが、時はすでに遅く、大洪水に飲み込まれ、彼らの死骸が水面に浮かぶ」というような言葉を繰り返すのは何故か。神はなぜ「人はわたしの言葉に従う」ではなく、「人はわたしの言葉を考える」と言うのか。山々が崩れ、地が裂けるというのは本当なのか。人々は神の言葉を心に留めず、聞き流してしまうため、神の言葉において「困難」を経験する。軽率すぎるのだ。人のこの弱点故に、神は「涙腺のない『奇人』であるわたしは、人のために多くの涙を流した。しかし人はこれに全く気づかない」と言う。人が神の言葉に注意を払わないため、人が思い起こして「助け」を得られるように、そのような手段を用いる。

今は世界がどう発展するかは預言せず、人の運命に関しての預言を語ろう。わたしは人に己を知るよう求めなかつただろうか。このことをどう説明すればよいだろうか。人はどのように己を知るべきだろうか。人々が生死の間をさまようようになるほど神が酷く彼らを「苦しめる」とき、彼らは人生の意味に関して何らかの理解を得るようになる。そして人生を憎み、人の人生など全て夢に過ぎないのだとはっきり分かるのである。人生とは苦しみであり、人は何ら達成することなく死を迎えるのであり、己の人生には何ら意味も価値もないとはっきり知るのである。人生は単なる夢に過ぎず、悲しみと喜びがやって来ては去っていくものに過ぎないと知るのである。今日、神のために生きてはいるが人の世に住んでいる人の生活は空虚で無価値のままであり、故に全ての人が神にある喜びなど一時の慰めでしかないと考える。神にある喜びを感じることなく、神を

信じていながら肉の生き方をしているのであれば、そこにどんな意味があるというのだろうか。肉は人間にとって空虚なものでしかない。人はいくつもの試練を通り、年老いて髪は白くなり、シワが刻まれ、手はたこで硬くなる。大きな代償を払ったものの、得たものは無に等しい。それ故、わたしの言葉はさらに続く。肉に生きる者にとっては全てが空虚である。これに疑いの余地はなく、これを詳しく検証する必要はない。神が繰り返し語った人生の元の意味とは、このようなものなのである。神は、人の弱さ故にこれらの言葉を控えるということはせず、自身の本来の計画通りに行動するのである。恐らく、人に支援と理解を与える言葉もあれば、それと反対に作用し、人を死の境遇に追い込もうとするものもある。人が苦しむのはまさにそのためである。ゆえに、神は故意に人々を誤った方向に導く「空城の計」^[a]を打ち立てるが、人は全くこれを理解できず、闇に留まる。それでも全ては神の手中にある。たとえ人が神の戦略を知っていたとしても、自らをその戦略から守ることなどできようか。従って、刑罰の脅威から逃れることのできるものはひとりもない、誰もどうすることもできないのである。人は神の采配に従う他ない。これは神が人を掴んで離さないからではないのか。神の脅威にさらされて、人は初めて自然の成り行きに従うことができる、そうではないか。神の采配がなければ、どうして進んで敗北を認めることができようか。そんなことは冗談でしかない。人生は空虚であっても、心地よい生活をしているのに黙って人間の世界を離れて神を満足させようとする者などいようか。人は無力感の中で死ぬのである。望む物全てを持っていながら、豊かさの中で死ぬものなどいただろうか。そのようなことをするのは、空から降ってきた「星」以外にはない。星が満喫していた第三の天での生活に比べたら、地上の生活は地獄に住むようなものだろう。それほどの環境であれば、星が進んで死ぬこともあろう。だが今日、天の星のような人とは誰のことであろうか。その点はわたし自身も「不明瞭」である。そのような人を見つけることができるかどうか、周りをよく見てみよう。そのような人が見つかったならば、わたしの言葉通りに行動できるかどうかをその人に尋ねられるように、わたしを助けてほしい。ただ、あなたがたひとりひとりに対する警告がある。誰も、「英雄」ぶったり、死ぬことを志願したりしてはならない。これが理解できたかどうか。

脚注

a. 「ひじを外側に向けて曲げる」とは中国の慣用句で、両親、子供、親戚または兄弟姉妹などの近親者を犠牲にして他人を助ける人を意味する。

b. 「空城の計」は古代中国の兵法書『兵法三十六計』の第三十二計。この戦略には、

敵を欺くために一見大胆な態度を取って準備不足を隠す戦術が含まれる。

第三十八章

人類に本来備わっている特徴、すなわち、人類の真の姿を考えると、今日まで人類が存続できたことは本当に簡単ではなかった。そしてこのことを通して初めて神の偉大な力が明らかになった。人の肉の本質、およびこれまでの赤い大きな竜の腐敗に基づいて考えると、神の霊の導きがなければ、人が今日生きていることはなかっただろう。人は神の前に出る価値はないが、神はその経営（救い）に基づいて人類を愛し、また、その偉大な働きを近い将来達成するために人類を愛する。実際、生きているうちに人類に対する神の愛に報いることのできる人は誰もいない。おそらく一部の人は命を犠牲にして神の恵みに報いたいと望むだろうが、わたしはあなたに次のように言う。人は神の前で死ぬのに値しないので、その死は無駄である。神にとって一人の人の死は述べる価値さえないし、一円の価値もない。むしろ一匹の蟻の死ほどのものである。わたしは人間に忠告する。自分自身に高すぎる価値を置いてはいけない。神のために死ぬことは泰山のような大きな重みを支えることに匹敵するなどと考えるとはいけない。実際、一人の人の死は一枚の羽根のように軽いものなのだ。それは注目にも値しないものだ。とはいっても、人の肉体は死ぬ運命にあるので、肉体は地上で終わらなければならない。これは偽りのない真実で、誰も否定することはできない。これは人として地上で暮らした経験全体からわたしが引き出した「自然の法則」である。人間が気づかないうちに、神は人間の終焉をこの法則にのっとって規定してきた。わかるだろうか。神が次のように語るのも当然である。「わたしは人類の不服従をひどく嫌っている。なぜかはわからない。最初から人を憎んでいたようだが、人に深く同情もしている。そのため人々は常にわたしに対して二つの態度を持ってきた。わたしが人を愛し、かつ憎んでいるからである。」

神の存在や出現を称えない人がいるだろうか。このように言うと、わたしはまるで人の心の不潔さや邪悪さをすっかり忘れていたかのようだ。人類の独善性、自信過剰、不服従、反逆、その反抗のすべて――わたしはこうしたすべてを心の奥に押し込んで忘れる。人類のそうした状態によって神が制約されることはない。神とわたしは「この同じ苦痛を共有」しているので、わたしもこの難題から己を解放し、これ以上人類に制約されないようにする。そのようなことに思い悩んだりもしない。人はわたしと共に神の家に加わることを望んでいないので、彼らを抑えるためにどうしたらわたしは持てる力を

使うことができるだろう。わたしは彼らに力を押しつけるために物事を進めたりはしないし、それは当然のことである。なぜなら、わたしは神の家族に生まれたからであり、もちろん人とわたしはいつも異なっているからである。このことが今日の惨憺たる敗北につながっている。しかし、わたしは人の弱点を避け続ける。ほかにどんな選択肢があるだろう。これはわたしに力がないからではない。神が人類の「代理人」から「退く」ことを望み、自分の「年金」を求めるのは当然である。わたしが人の観点から語ると人は耳を貸さない。では、神として語ったらそれでも従わないだろうか。おそらく、神が本当に突然人類の「代理人」から「退く」日が来るだろう。その時が来たら、神の言葉は以前に増して厳しいものになるだろう。今日、神がこのような話し方をするのはわたしのせいだろう。そしてその日が来たら、神はもはやわたしが「保育園で子供たちに物語を語ってやる」ように忍耐強く語ることはないだろう。ことによると、わたしが言うことはあまり合わないかもしれない。だが神は、人の姿になった神だけを理由に神は人への支配力を少し緩めたがるが、そうでなければこの展望は恐ろしすぎて凝視できないだろう。神が次のように言ったとおりである。「わたしは一度、ある程度人々に対する支配の手を緩め、自由に肉の願望にふけることを許したので、彼らは遠慮がなくなり、大胆な態度で振る舞い、少しも抑えがきかなくなった。彼らは誰もが肉の中に生きてるので、わたしを心からは愛していないことがわかる。」なぜ神はここで「願望にふける」とか「肉の中に生きる」とか言うのだろう。正直に言って、こうした言葉はわたしの解釈を必要とせず、自然に理解できる。おそらく、理解できないと言う人々も中にはいるだろう。しかし、あなたは真実を知っているがただ知らないふりをしているだけだとわたしは言おう。次のことを言わせてもらおう。なぜ神は「わたしは人に協力を頼むだけだ」と言うのだろう。なぜ神は人の性質は変えにくいと言うのだろう。なぜ神は人の性質を嫌うのだろう。人の性質とはいったい何だろう。人の性質でないものは何か。これらの疑問をじっくり考えた者がいるだろうか。おそらく、これは人にとって新しいテーマだが、それでも、わたしは人が十分考慮するよう求める。そうしなければ、あなたは「人の性質は変わらない」というような言葉によって神をいつも怒らせるだろう。そのように神に逆らった行動をすることに何の益があるだろう。最終的には面倒を誘発するだけではないだろうか。結局、石に卵を投げつけているようものではないだろうか。

実際、人に降りかかる試練や誘惑のすべては神が人に与える教訓である。神の意図によると、人が何か自分の大切な物を犠牲にしなければならないとしても、人はこれらを

達成できる。だが人はいつも自分自身を愛しているので、本当に神と協力することができない。神は人からあまり多くは求めない。神が人に求めるものはすべて容易に、愉快に達成されるよう意図されている。つまり、人が困難に苦しむことを嫌がっているだけなのだ。子供のように、質素に暮らしてわずかなお金を工面し、両親に尊敬の念を表わし、果たすべき本分を果たすことだってできる。しかし、彼らは十分食べられないこと、着るものが質素すぎることを恐れているので、どういうわけか、彼らは両親の愛と配慮を受け取ると、それを遥か彼方の雲へ投げてしまう。まるで大金を稼いでから神との協力を始めようとでもいうようだ。しかし、このことから人が両親を愛する親孝行の気持ちを持っていないことがわかる――彼らは親不孝な子供たちである。おそらく、これは極端すぎるだろうが、わたしは事実反して無意味なことを捲し立てることはできない。わたしは自分自身を満足させるために神に抵抗し、「他の人たちをまねる」ことはできない。世界の誰も子としてふさわしくないという理由だけで神は次のように語った。「天では、サタンがわたしの敵であり、地上では人がわたしの仇である。天と地は繋がっているので、彼らは9世代にわたり連座して同罪と見なされるべきである。」サタンは神の敵である。わたしがこのように言うのは、サタンが神の偉大な好意と親切に対して報いるどころか、むしろ「流れに逆らって舟を漕ぐ」からであり、そうすることによって神に対する「親孝行」を果たさないからである。人々もサタンと同じではないだろうか。彼らは「両親」に対して子としての尊敬の念をまったく示さず、「両親」から受けた養育と援助に決して返礼をしない。このことは地上の人々が天のサタンと同類であることを十分に示している。人とサタンは神に対する心と気持ちが同じなので、神が9世代を同罪として巻き込み、赦される者は誰もいないのは当然のことである。昔、天には神が人類を管理するために呼び寄せた下僕がいたが、下僕は耳を傾けず、気分任せて行動し神に反抗した。反抗的な人類もこの下僕と同じ方向へ大股で歩いているのではないだろうか。神がどんなに「手綱」を引き締めても、人々は決してためらわず、振り返らない。わたしの考えでは、このままでいけば彼らは破滅するだろう。そしておそらくこの時あなたは次の言葉の本当の意味を理解するだろう。「人は古い性質から解放たれることがない。」神は様々な機会に次のように語って人に気づかせてきた。「人が服従しないので、わたしは人を離れた。」なぜ神はこのことをくり返し語るのだろう。神は本当にそれほど無情なのだろうか。なぜ神は「わたしは人間ではない。」とも語るのだろう。多くの怠惰な日々を過ごす間に、誰が本当にこのように詳細な問題を詳しく調べただろう。人類が神の言葉にもっと取り組み、気安く扱わないようにとわたしは促す。これはあなたのためにならないし、他の人たちのためにもならない。言う必要の

ないことは言わない方がよいし、よく考える必要のないことは考えない方がよい。そのようにする方が簡単ではないか。このことからどんな悪い結果が生じるというのだろうか。神が地上における働きの終了を宣言する前に、誰も「動き」を止めてはならない。誰も自分の義務から手を引くべきではない。今はその時ではない。神の案内人あるいは先導者として行動してはいけない。わたしは今動きを止め、前進するのをやめるのは早すぎると思う――あなたはどうか。

神は人に刑罰を与え、死の雰囲気の人を包むが、一方神は、人が地上で何をするかを望んでいるのだろう。家にある衣装箆笥のように行動することだろうか。それなら食べることも、着ることもできず、見られるだけの存在である。そうだとすれば、なぜ多くの複雑なプロセスを用いて人々に肉の苦しみを経験させるのだろうか。神は次のように言う。「わたしは彼らに付き添って『処刑の場所』に行く。人間の罪はわたしの刑罰に十分値するからである。」この時、神は人々を自力で処刑の場所まで歩かせるのだろうか。なぜ誰も彼らのために赦しを請わないのだろうか。では人はどのように協力すべきなのだろうか。神が審判を行う時のように、人は本当に感情に左右されずに物事を行うことができるのだろうか。これらの言葉のもたらす効果は、ほとんど人の行動次第である。父親がお金を稼いできても、母親が父親に協力して家庭を管理する方法を知らなければ、その家庭はどのような状態になるだろう。現在の教会の状態を見るがよい。あなた方は指導者として何を考えるだろう。あなた方は誰もが個人的な気持ちを話せる集会を開くことができるはずだ。母親が家庭の管理を台無しにしたら、この家族の子供たちはどのようなになるのだろうか。孤児になってしまうのか。乞食になるのだろうか。神がつぎのように語ったのも当然である。「人々は皆、わたしが『知性という本質』に欠ける神であると考えているが、わたしが人間のすべてを見通せることを誰が理解できるだろう。」そのように明らかな状況に関しては神の神性から話す必要はない。まさに神が次のように言うとおりである。「釘を打つのに、大ハンマーを使う必要はない。」この時、おそらく、「人々の中でわたしを愛する者は誰もいない」という神の格言について実際に経験した人々がいるだろう。このことについては、神が次のように言ったとおりである。「人々は皆その場の状況に応じて仕方なく頭を垂れるが、心の中では納得していない。」これらの言葉は望遠鏡のように遠方を見通している。近い将来、人は別の状況に入るだろう。これはどうしようもないこととみなされる。あなた方はわかるだろうか。次に挙げる神の二つの質問に対する答えがこれなのである。「わたしが去ってしまうのを恐れるからという理由だけで人々は罪を犯さないのか。刑罰を恐れるからという理由

だけで人々が不平を言わないのは本当ではないだろうか。」実際、今、人々は少々怠慢で、あまりにも疲労しているようであり、彼らは神の働きに注意を払うことにまったく興味を示さず、自分の肉のための取り決めや計画にだけ関心がある。これが本当のことではないだろうか。

第三十九章

神の言葉の枠を超えて、いのちに関する事柄について少し話そう。これは、わたしたちのいのちが開花し、神のわたしたちに対する望みに応えることができるようにである。特に、人がそれぞれの種類によって分けられる時、刑罰の時である今の時代の到来により、大局に焦点を当て「集団的な関心」に注意をむける必要が高まっている。これが神の心であり、全ての人々が達成すべき事である。天の神の心のために自らをささげられないわけなどなからう。神は「人々の先祖が彼らを上手く彼らの家族に連れ戻すことができるようにする」ために、「あらゆる類の人々に番号を割り振り、あらゆる類の人々に異なるしるしを付け」る。これは、人々が種類によって分けられ、その結果としてあらゆる類の人々が真の姿を明らかにしていることを示す。このことから、人は神ではなく、その先祖に対して忠実であると言って差し支えないであろう。しかし、すべての人々はまた、先祖の指示に従って神に奉仕している。これは神の働きの驚くべき点である。すべてのものは神に仕え、サタンが人々の邪魔をすることはあっても、神はこの機会を使って、「地域資源」を活用して神に仕えさせる。しかし、人々はこれを認識できない。神は、「このため、わたしはまたこの努めを分割し、この取り組みを分配する。これはわたしの計画の一部であり、誰もこれを妨げることはできない」と言う。人は、神によって定められる全ての事柄、神が達成することを望むすべての全ての事柄を、神が行ってしまう前に認識することができない。神の働きが全うされたときにのみ、人はそれを認識する。認識しないなら、人は盲目で、何も見えていないことになる。

今日、神には諸教会における新たな働きがある。神は全ての事柄が自然の成り行きに従うようにし、これによって人の役割が真に課されることになる。神は、「わたしはあらゆるものの全てを支配し、全てのもののあらゆる事柄を統制し、そこにある全てのものが自然の成り行きに従い、自然の命ずるところに従うようにする」と言う。「自然の成り行きに従う」ことについてあなたがたがどのような知恵のある識見を持っているかわたしは知らないので、これについて話し合おうと思う。これがわたしの解釈である。人はその先祖によって故郷に導かれるので、あらゆる類の人が姿を現して「遂行」しな

なければならない。人は自然の成り行きに従うので、それぞれの元々の役割を担うために人が生まれながらに持っているものが使われ、人はこの法則に従って聖霊の導きに従うことになる。聖霊の働きは各個人の内なる状態に応じて行われる。正確に言うと、これが「神はすべての事柄を神に仕えるように操られる」ということであり、したがって自然の成り行きに従うことにつながる。悪魔の要素を内に秘めている人でも、神はこれを使い、人が生まれながらに持つものの基盤に聖霊の働きを付け加え、人を神に仕えるに十分な状態にする。「自然の成り行きに従う」ことについてわたしが言うのはこれだけであるが、あなたがたにはこれより高尚な提案があるかもしれない。貴重な意見を提供していただきたいと思うが、いかがだろうか。あなたがたに、自然の成り行きに従うこと協力していく意志はあるだろうか。神の働きを分担する意思はあるだろうか。これをどのように達成するか考えたことがあるだろうか。わたしは、人々が神の心を理解し、共通の理想のために神を満足させようと一致団結して働き、神の国への道を共に進んでいくことができることを願っている。不必要な概念を思いつく必要などあるであろうか。今日まで、神のために存在しない人などいたであろうか。これは真実である。ならば、悲しみ、嘆き、ため息の必要性などあるのであろうか。これは誰のためにもならない。人の人生はすべて神の手中にあり、神の前における決心がなければ、誰が空虚な人の世界で無駄な人生を送ろうと思うのか。わざわざそうする必要があるのであるのか。慌しくこの世に来て去っていき、神のために何も行わないならば、人生すべてを無駄にすることにはならないであろうか。もし神があなたの行為を語るに値しないと見なしたとしても、死ぬ瞬間、喜びの笑みを浮かべないだろうか。前進し、後退しないように努めるべきである。これはより良い実践ではあるまいか。あなたの行いが純粋に神を満足させるためだけのものであれば、否定的になることも後退することもない。人の心には常に理解しがたいことがあるため、気付かないうちに彼らの顔は暗い雲で覆われる。これにより、知らないうちに彼らの顔に幾つかの「溝」が現れる。これは地が絶えず裂け開いているからであると思われる。地が動き続け、人が知らないうちに地上の「小さな丘」や「くぼみ」が場所を移動するかのようである。わたしはこう述べることで人を嘲笑っているのではなく、「地理学的知識」について話しているだけである。

神はすべての人々を刑罰へと導いたが、これについては何も言わない。その代わり、神はこの題目を意図的に避けて新たな題目について話し始める。これは、一つの観点から見ると神の働きによるものであり、別の観点からは働きのこの段階を直ちに完了するためである。働きのこの段階を遂行することにおける神の目的はずっと前にすでに達成

されているため、これ以上述べる必要はない。今日、あなたがたが神の働きにおける手立てをどれだけ目にしてきたかわたしにはわからない。わたしの意識の中では、神の働きは、以前ほど明確に段階や時代に分けられていないと常を感じている。その代わり、日ごとに働きを行うための手立てがあり、ほぼ三日から五日ごとに変化が起こり、五日間でさえも、神の働きに二つの異なる内容が生じる場合もあり得る。これは神の働きの迅速さを示している。人が反応してよく観察する時間を得る前に、神は跡形もなく去ってしまう。このため、神は常に人にとって把握できない存在であり、それは聖霊の働きを感知できない状態につながっている。神が常に「そこでわたしは人を残して去った」といった言葉を口にするのはなぜだろうか。人はこれらの言葉に少々の注意を払うかもしれないが、その意味を理解していない。今はどうだろうか。あなたがたは理解しているだろうか。人が聖霊の存在を全く把握していないのも不思議ではない。人による神の探求は、いつも薄暗い月明りの下で行われる。これは完全なる真実である。神が意図的に人をからかっていて、全ての人々の脳を腫れ上がらせて、目まいを感じ混乱するようにしているのかのようである。人は、夢でも見ているかのように自分がしていることをほとんど理解しておらず、目が覚めても何が起きたのか知らない。人を迷わせておくには、神からの何でもない言葉だけで充分である。神が「今日、わたしは全ての人々を『大きな炉』に投げ込んで精錬する。わたしは天の高みに立ち、火の中で人々が焼かれ、火に強いられて事実を吐き出すのをしっかりと見守る」と言うのも無理はない。神の変わり続ける言葉の中で、人は何をすればよいか全くわからない。実際、神が言うように、刑罰はずっと前から始まっており、人がこれに気づいていないことから、人は神がはっきりとそう言うまで知らず、神が知らせた後でしか注意を払わない。人は、神の働きがこの時点まで進められた今になってはじめて刑罰について学び始めると言える。これは人が原爆について知ったときと同じである。その時はまだ来ていないため、人は注意を払わない。誰かがそれを作り始めてからでしか、人は注意を払い始めない。原爆が明るみに出て初めて、人はそれについてよりよく理解する。神が人を炉に投げ入れると言う時にのみ、人はそれに多少気付くようになる。神が何も言わなければ、誰も気付かない。そうではなかろうか。このため、「人々は、綱に導かれてきたかのように、感覚を失ってしまったかのように、無意識のうちに炉に入り込む」と神は言う。これを分析しようではないか。人が真実を吐き出すのは、刑罰が始まったと神が言う時なのか、それとも刑罰が始まったと神が言う前なのか。このことから、神が刑罰について話す前に、人が告白し始め、それは神が話す前に刑罰が始まったということを示している。これが真実ではなかろうか。

第四十章

神にとって人は、手に握られた玩具のようなものであり、手中にある手延べ麵のようなものである。つまり、神が望むままに薄くも厚くもすることができ、思いのままに操ることができるものである。人は実に神の手の内にある玩具だ、それは婦人が市場から連れて来たペルシャ猫のようなものだと言っても差し支えないだろう。人が神の手の中の玩具であることは間違いない。従って、ペテロの知識に何ら誤りはなかったのである。このことから、人の中における神の言葉と働きが容易に喜びをもって達成されることがわかる。神は、人々が想像するように、知恵を絞ることも計画を立てることもない。神が人の中で行う働きは、神が人に話す言葉と同様に、ごく自然のものなのである。神が話すとき、神は自分の舌が滑らかになるがままにしているように見受けられる。神は心に浮かぶあらゆる事柄を自由に口にする。しかし、神の言葉を読んだ後、人々はすっかり納得し、言葉を失い、目を丸くして驚きのあまり口もきけなくなる。何が起きているのであろうか。これは、神の知恵がどれほど偉大であるかをよく表している。人々が想像するように、人の中での神の働きが精密で正しくあるために緻密に計画されなければならないならば、またこれらの想像をさらに一步進めて考えると、神の知恵、驚くべき素晴らしさ、そして深淵さも計測し得るということになる。これは人々の神に対する評価があまりに低いことを明らかにしている。人の行いには常に愚かさが伴うため、神を自分と同じはかりで計るのである。神は自分の働きのために計画したり手配をすることはない。その代わりに、働きは神の霊によって直接行われる。そして神の霊が働く原則は自由で制約がない。それはちょうど、神が人の状態に注意を払うことなく思うがままに話すようなものである。それなのに、人は神の言葉から離れることができず、それは神の知恵のためである。結局のところ、事実はあるのである。すべての人の中での神の霊の働きは極めて明白であるため、これだけでも神の働きの原則を示すには十分である。被造物の中での働きにおいて神がそれほど大きな代償を支払わなければならないか。これは上質の木材を取るに足らない目的に使うようなものではないだろうか。神は自ら行動するべきであろうか。そのような価値はあるのだろうか。神の霊は実に長い間働いてはいても、このような方法で働いたことはこれまで一切なかったため、神が働きを行う方法と原則を知る人はいなかった。それらが明確にされたことはなかったのである。今日、それらが明確になった。神の霊が直接明らかにしたからである。これが神の霊によって直接示されたもので、人によって要約されたものではないことは疑う余地もない。第三の天に出向き、これが本当に起こっていることなのか、これら

の働きを行った後、その務めによって神が疲れ果て、背中や足を痛めていないか、さもなくば食事や睡眠もままならないことになっていないかどうかを確認してみてはいかがでしょうか。神は、これら全ての言葉を語るために大量の参考資料を読まなければならなかったでしょうか。神の言葉の草案は机の上に散らばっているのでしょうか。神は多くを語りすぎて口が乾いているのでしょうか。事実はその真逆である。上記の言葉に、神が住んでいる場所と通じ合うものは一切ない。神は「わたしは人のために多くの時間を費やし、大きな代償を払った。しかし今、どういうわけか、人の良心はこれまでにないほどそれらの元々の機能を果たせない状態である」と言う。人が神の悲しみを実感しているか否かに関わらず、その良心に逆らうことなく神の愛に近づくことができるならば、これも理にかなった妥当なことだと見なされるだろう。人が良心に元々の機能を果たさせる意思がないことが、唯一の恐れなのだ。あなたは思うだろうか。これは正しいだろうか。これらの言葉はあなたの助けになるだろうか。わたしの望みは、あなたがたが良心のない屑ではなく、良心をもつものの範疇に属することである。これらの言葉について思うだろうか。このような実感を持っている人はいるだろうか。心臓に針が突き刺さっていれば痛まないだろうか。神は感覚のない屍に針を突き刺さすだろうか。神は間違っているのだろうか。老齢のために視野が曇ったのだろうか。そのようなことは決してない。いずれにしても、これは人の落ち度に違いのないのである。病院に行って、確認してみてはいかがでしょうか。人の心臓には間違いなく問題があり、新しい「部品」を取り付けなければならない。どうだろうか。そうするだろうか。

神は「わたしは人の醜い顔と奇妙な行動を見て、再び彼らから去る。こうした状況の中、人々は理解できないままとなり、わたしが彼らに対して拒絶したものを再び取り戻し、わたしが再び戻るのを待つ」と言う。この「新テクノロジー時代」に神が依然として牛が引く手押し車について話しているのはなぜであろうか。その理由は何であろうか。神は口やかましく言うのが好きだからだろうか。他にすることがないために暇をつぶしているのだろうか。人と同じように、腹いっぱい食べてだらだらと時間を過ごしているのだろうか。これらの言葉を何度も繰り返して得るものがあるのだろうか。わたしは、人は愚かで、話をするにはいつも耳をつかまなければならないと言った。今日言葉が人に語られても、明日には記憶喪失にでもかかっているかのようにその言葉をすっかり忘れていだろう。ゆえに、これは語られなかった言葉があるということではなく、その言葉が人々によって達成されていないということなのである。何かが一、二度語られただけでは、人は無知のままであるため、三度は語られなければならない。これは最低

限の回数である。十回も二十回も言わなければならない「老人」さえもいる。このように、人々が変わったかどうかを確かめるため、同じ事柄が異なる方法で何度も繰り返して告げられる。あなたがたは本当にこのように働いたのであろうか。人々を叱りつけたくはないが、彼らは皆、神をもてあそんでいる。もっとたくさんの栄養剤を取ることは知っていても、神のために不安を感じることはない。これが神に仕えるということなのであろうか。これが神を愛することなのであろうか。どうりで一日中のんきにぶらぶらと何もせず過ごしているわけである。そのようであっても、一部の人はまだ満足しきれず、自ら悲しみを作り出す。わたしは少々厳しすぎるのかもしれないが、これが自分自身について感傷的になるということなのである。あなたを悲しませているのは神なのであろうか。これこそ自分自身に苦しみをもたらす例なのではないか。神の恵みのいずれもあなたの幸福の源となり得ないのだろうか。これまでずっと、あなたは神の心に注意しなかった。悲観的で、弱々しく、悲しんでばかりいた。それはなぜか。あなたを肉体のうちに生かせることは神の心なのか。あなたは神の心を理解していない。心の中に不安を抱え、不平不満を漏らし、一日中うなだれて過ごし、肉体の苦痛と苦悶に悩まされる。それは当然の報いなのだ。あなたは、他の人は刑罰のさなかに神を褒め称え、刑罰を乗り越えて、それに縛られないことを求めるのに、あなたは刑罰に陥り、それから逃れられない。董存瑞（とうそんずい）の「自己犠牲の精神」を見習うには何年もかかる。あなたが教えと教義を説くとき、恥を感じないだろうか。自分自身を知っているのだろうか。自分を脇に置いたのだろうか。心から神を愛しているだろうか。自分の将来の展望や運命を脇に置いたのだろうか。人こそが驚くべき理解不可能なものであると神が言うのも当然である。人の中にまだ掘り起こされていないたくさんの「宝」があるなどと誰が考えただろうか。今日、「人の目を開く」にはその光景だけで十分である。人々はなんと「素晴らしい」ことか。わたしは数を数えられない子供になったようである。今でも、わたしにはどれだけの人が心から神を愛しているか分らない。その数を思い起こすことなど決してできはしない。それゆえ、「不忠」のために、神の前で報告をするときが来ると、いつもわたしの手は空っぽで、望み通りにことを成すことができず、常に神に負い目がある。その結果、報告をするときはいつも神から叱責を受ける。人々がこれほど残酷で、そのためにいつもわたしを苦しめる理由はわたしにはわからない。人々はそれを見て腹を抱えて笑う。彼らは決してわたしの友ではない。わたしが苦境にいても、彼らは助けてくれず、故意にわたしをあざける。本当に彼らには良心などないのである。

第四十一章

神は人間にどのように働きかけるのか。あなたはこのことを解明したのか。このことははっきりしているのか。そして、神は教会ではどのように働くのか。このようなことについてどう思うのか。このような疑問を考えたことがあるのか。神は教会での働きを通して何を達成したいのか。あなたにはこれらのことはすべてはっきりしているのか。もしはっきりしていないならば、あなたのすることはすべて役に立たず虚しい。この言葉はあなたの心に響いたのか。消極的に後退することなく、ただ積極的に進歩しているだけで神の心意を満たすのか。盲目的に協力するだけで十分なのか。ビジョンについて不明瞭ならば、何をすべきなのか。さらに探し求めなくてもいいのか。神は言う。「わたしはかつて人の間で大いなる努力をしたが、人は気付かなかった。そのため、言葉を使って一步一步人に明らかにしなければならなかった。それでも、人はわたしの言葉を理解せず、わたしの計画の目的について無知なままであった」。この言葉は何を意味するのか。あなたはその目的について考えたことがあるか。わたしはただ軽々しく目的もなくそのようなことをしたのか。もしそうなら、その要旨は何だったのか。目的が人に不明瞭で理解不可能ならば、真実の協力がいかに達成できるのか。神は、人は果てしない海の上で、空虚な言葉で書かれた教義の真中を探し求めていると言う。あなたがたの探求と言え、それがどの分類に属するのかを自分で言うことさえできない。神は人間において何を達成したいのか。これらのことをすべてはっきりさせなければならない。それは赤い大きな竜を否定的に恥じ入らせるためなのか。赤い大きな竜を恥じ入らせれば、神は手ぶらで山にこもって隠遁生活をするのか。では、神の欲するものは何なのか。神は本当に人間の心が欲しいのか。あるいは人間の命が欲しいのか。それとも人の富や所有物だろうか。それらが何の役に立つというのか。神にとっては何の役にも立たない。神が人間に多くの働きをしてきたのは、サタンに対する勝利の証拠として人を使うためだけ、神の力を表明するためなのか。それでは神はかなり「狭量」に見えないか。神はそのような神なのか。大人を他人とのけんかに巻き込む子供のような神なのか。それにどのような意味があるというのか。人はいつも観念に基づいて神を推し量る。神はかつて言った。「一年には四つの季節があり、各季節には三か月ある」。人はこの言葉を聞き、記憶し、一つの季節には三か月あり、一年には四つの季節があるといつも言った。神が「一年にはいくつ季節があるか。各季節にはいくつの月があるか」と尋ねたら、人は声をそろえて、「四つの季節、三ヶ月」と答えた。人はいつも規則的に神を規定しようとする。今になって「一年には三つの季節があり、各季節には四か月ある」時

代に入っても、人は気づかないままで、盲目になったかのようにあらゆることに規則を求める。そして今、人類は自分の「規則」を神に適用しようとしている。人類は本当に盲目である。今や「冬」はなく、「春、夏、秋」だけしかないことがわからないのか。人は本当に愚かである。この通過地点まで来て、まだいかに神を知るべきか知らず、まるで輸送手段は不便だと考え、歩いたり小さな口バを牽いたりするべきだと考えたり、あるいは石油ランプを使うべきだとか、原始的な生活様式がいまだに広まっていると考える1920年代の人のようなものである。このようなことはすべて人間の心にある観念ではないのか。なぜ今日になっても憐れみと愛について話すのか。それが何の役に立つのか。それはまるで老女が昔話をとりとめもなく話しているようである。そのような言葉に何の意味があるのか。結局、現在は現在である。時間を二十年も三十年も前に戻すことができるのか。人は誰もが潮流に従う。これを受け入れるのをなぜそんなにためらうのか。この刑罰の時代に、憐れみや愛について語ることが何の役に立つのか。憐れみと愛、神に関してはそれですべてなのか。この「小麦粉と米」の時代になぜ人は「雑穀の皮と野生の野菜」をふるまい続けるのか。神が行うつもりのないことを、人間は神に無理強いする。もしも神が抵抗したら、神は「反革命的」という烙印を押される。神は本質的に憐れみ深くも、愛情深くもないと繰り返し言われてきたものの、誰が耳を貸すというのか。人はあまりにもばかげている。神の言葉には何の効果もないようである。人はいつも別の見方でわたしの言葉を見る。神はいつも人に脅されてきており、それはまるで罪のない人に根拠もなく犯罪が転嫁されたかのようなものである。それで誰が神と同じ心でいられるというのか。あなたがたはいつも進んで神の憐れみと愛の中で生きようとしているが、ならば神には人の侮辱に耐える以外に何ができるというのか。しかし、あなたがたが神と議論する前に聖霊がいかに働くのかを徹底的に研究することを、わたしは望む。それでも、神の言葉の本来の意味を注意深く検討するように促す。神の言葉が「希釈されている」と信じて、自分が賢いと思ってはいけない。そんな必要はない。神の言葉がどれほど「希釈されている」か、誰にわかるというのか。神がそうだと直接言うかはっきりと示さないかぎり、誰にもわからない。自分を過大評価してはいけない。神の言葉から実践する道を見ることができれば、神の要求に応えている。ほかに何が知りたいというのか。神は言った。「わたしは人間の弱さにそれ以上憐れみを示さない」。この明快で単純な言葉の意味さえ把握できないならば、さらに研究し、調査してどうなるというのか。力学の最も基本的な知識なしに、ロケットを作る資格があるのか。そのような人はただ自慢したいだけではないのか。人には神の働きを行う資力はない。神が人間を得意にさせるのである。神が何を愛し、何を憎むかを知らず、ただ神に仕えるのは

、災難を保証しているようなものではないのか。人は自分を知らないのに、自分を特別であると考えている。自分を誰だと思っているのか。人は善悪の違いがわからない。過去を振り返って考え、将来を展望しなさい。これがどう聞こえるのか。その後、自分を知りなさい。

神は人の意図と目的について多くを明らかにしてきた。神は言った。「その時初めてわたしには人間の意図と目的がはっきり見えた。わたしは雲中からため息をついた。なぜ人はいつも自分のために行動するのか。わたしの刑罰は、人間を完全にするためではなかったのか。わたしはわざと人間の積極的な態度を攻撃しているのか」。この言葉からあなたは自分についてどれほど学んだのか。人の意図と目的は本当になくなったのか。それを自分で調べたことがあるのか。神の前に出て、これを理解しようとしてみればよい。あなたがたにおける神の刑罰の働きはどのような成果を成し遂げたのか。これを要約したことがあるのか。おそらく成果はわずかである。さもないと、あなたがたはすでに大げさな表現でそれについて語っているはずである。神はあなたがたに何を達成させるのか。あなたがたに向けて語った多くの言葉のうち、結実したのはいくつか、無に帰したのはいくつか。神の目から見れば、言葉のうちわずかしが結実しなかった。これは人が神の言葉の本来の意味をいつまでも解釈することができず、人が受け入れるのは壁が返す言葉のこだまに過ぎないからである。これが神の心を知る道なのか。近い将来、人間が行うべき働きを神はさらに与える。人間は今の小さな霊的背丈でその働きを達成することができるのか。逸脱していなければ誤っているか傲慢である、というのが人間の本性のようである。わたしには理解しがたいことがある。神があれば多く語っているのに、人はなぜそれを心に受け止めないのか。神は人にほんの冗談で話しかけて、一切の成果を求めていないということがありえようか。それとも、「喜び、怒り、悲しみ、幸福」という題の劇を人間に演じさせているとでも言うのか。人を一瞬だけ幸せにし、次に泣かせ、その後舞台を降りれば人は勝手にしてよいとでもいうように。これがどのような成果をもたらすのか。「わたしが人にする要求はなぜいつも何の結果ももたらさないのか。わたしは犬に木に登れと言っていることになるのか。わたしは空騒ぎをしているのか」。神の言葉はすべて人間の実際の状態に向けられている。誰が神の言葉のうちに生きているかを見るために、あらゆる人間の中身を見ても害にはならないであろう。「今日でさえこの土地の大部分が変わり続けている。いつの日か土地が本当に別のものに变化したならば、わたしはそれを手でさっと脇へやる。わたしの働きの現段階はまさにこのようではないのか」。確かに、神は今でも、この働きを行なっている。

しかし、神が「手でさっと脇へやる」と言ったのは将来のことである。すべてには過程が必要だからである。これが神の現在の働きにおける動向だが、このことは明瞭なのか。人間の意図には欠陥があり、汚れた霊がこの機会をとらえて入ってきた。この時、「土地が本当に別のものに變化し」、人は質的に變化するが、本質においては変わらないままである。なぜなら、改善された土地にはほかのものがあるからである。言い換えれば、もともとの土地は劣っていたが、改善後は使用できるのである。しかし、一定期間使われた後、もはや使われなくなると、次第に元の姿に戻っていく。これが神の働きの次の段階の要約である。将来の働きはもっと複雑になる。あらゆるものが種類別に分類される時だからである。ものごとが最後を迎える集会の場所では、混乱が必然的に生じ、人には強い信念がなくなる。それはちょうど神が言ったとおりである。「人は誰もが何であれ演奏中の曲に合わせて歌ってしまう役者である」。人は演奏中の曲に合わせて歌う能力を持っているので、神は働きの次の段階を進めるために人のこの欠点を利用し、すべての人がこの欠点を治せるようにする。これは、人には実際の靈的背丈がなく壁の上に生える草のようだからである。靈的背丈を得れば、人は空に届くほど高くそびえる木ようになる。神は悪霊の働きの一部を利用し、一部の人を完全にするつもりである。それにより、人が悪魔の悪行をすっかり見通すことができるようにし、すべての人が自分たちの祖先を真に知ることができるようにする。そうしてのみ、人は完全に自由になることができ、悪魔の子孫だけでなく、悪魔の祖先をも見捨てることができる。これが、神が赤い大きな竜を徹底的に打ち負かす真の目的であり、それは全ての人間が赤い大きな竜の真の姿を知り、その仮面を完全に引き剥がし、その真の姿を見つめるようにである。これこそ神が成し遂げたいことであり、地上で行なったすべての働きの最終目標であり、全ての人において達成を目指していることである。これは、神の目的に仕えるためにあらゆるものを動員することと呼ばれる。

将来の働きについては、どのように行われるかはっきりわかっているのか。このようなことを理解しなければならない。例えば、人間はすべきことに決して注目しないとなぜ神は言うのか。神が与えた「宿題」を仕上げられない人が多くいるとなぜ神は言うのか。このようなことはいかに達成できるのか。あなたがたはこのような問題について考えたことがあるのか。このようなことがあなたの交わりの主題になったことがあるのか。働きのこの段階では、人は神の現在の意図を理解しなければならない。これができたら、そのほかのことについても話し合うことができる。これは素晴らしい物事への対応の仕方ではないのか。神が人において達成したいことを明確に説明しなければならない

い。さもないと、すべてが無駄になり、人はそれに入っていくことができず、ましてやそれを達成することなどいっそうありえず、すべては虚しい話になる。神が今日言ったことについては、それを実践する道を見つけたのか。人はみな神の言葉について不安を感じている。言葉を完全には理解することができないが、神を不愉快にさせることも恐れている。これまでに、神の言葉を飲み食いする方法のうちいくつかが見つけれられたのか。ほとんどの人はどのように飲み食いすべきかを知らない。これはどのように解決できるのか。今日の言葉のなかに飲み食いの方法を見つけたのか。そうすることで、どのように協力しようとしているのか。そしていったんあなたがた全員が言葉を飲み食いしたら、それについての印象をどのような手段を通じて話し合うのか。人はこれをするべきではないのか。ある病気に効く薬はいかに処方するのか。神が直接発言することをまだ必要としているのか。それが必要なのか。すでに述べた問題は どうしたら完全に根絶できるのか。これは、あなたがたが実践的な行いにおいて聖霊に協力できるかどうかにかかっている。適切に協力すれば、聖霊は偉大な働きをする。適切な協力がなく、むしろ混乱しかなければ、聖霊はその力を放つことができない。「己を知り敵を知れば、必ず勝利を収める」。この言葉を最初に言ったのが誰であれ、この言葉はあなたがたに最も適切にあてはまる。要するに、自分の敵を知る前に自分自身をまず知らなければならず、両方を知って初めてあらゆる戦いに勝つことができる。これはすべてあなたがたにできなければならないことである。神があなたに何を求めようとも、あなたはそれに向けて全力で努力さえすればよい。そして神の前に来て、最後にはあなたの最高の忠誠心を神に捧げることができることをわたしは望む。玉座につきながら神が満足そうに微笑むのを見ることができる限り、たとえその瞬間にあなたが死ぬことが決まっていっても、あなたは笑い微笑みながら目を閉じられるはずである。あなたは地上にいる間に、神のために最後の本分を果たさなければならない。昔、ペテロは神のために逆さ磔にされた。しかし、あなたは最後に神を満足させ、神のためにあなたの全精力を使い尽くすべきである。被造物が神のために何ができるのか。だからすぐにでも神に身を委ね、神が思い通りにあなたを扱えるようにすべきである。それで神が喜び、満足しているならば、神が望み通りにあなたを扱えるようにしなさい。不平の言葉を言う何の権利が人間にあるというのか。

第四十二章

今日の発言に何らかの変化があったことに人々が気づいたか、わたしにはわからない。中には少しの変化を認めた人もいるだろうが、あえて断言しようとはしない。他の人

々はおそらく何も気づかなかったのだろう。今月の12日から15日にかけて、神の発言にこうした大きな違いがあったのはなぜだろうか。それについてじっくり考えたことがあるだろうか。あなたはどのような見方をしているのか。神による発言のすべてから何かを把握したか。4月2日から5月15日にかけて行なわれたおもな働きは何であったか。あたかもこん棒で頭を叩かれたように、人々が今日混乱し、まごついているのはなぜか。現在、「神の国の民によるスキャンダル」というタイトルのコラムがないのはなぜか。4月2日と4日に、神は人の状態を指摘しなかった。同じく今日から数日間、神は人々の状態を指摘しない。なぜだろうか。そこには間違いなく未解決の謎がある。つまり、なぜ180度の転換があったのか、である。最初に、神がこのように語った理由について少し話そう。神の最初の言葉を見ると、そこで神は「新しい働きが始まるとすぐに」と即座に言った。この一節は、神の働きが新たな始まりに入り、神が再び新たな働きを始めたという最初の暗示を与えている。これは刑罰が終わりに近づいていることを示す。刑罰はすでに佳境に入っていると言うことができ、そのためあなたがたは、立ち遅れて捨てられることがないように、時間を最大限に活用して刑罰の時代の働きを正しく経験しなければならない。これはすべて人の働きであり、人が全力で協力することが求められる。刑罰が完全に終焉を迎えたとき、神は働きの次なる部分を始める。「……わたしは人の中でわたしの働きを続け……このようなとき、わたしの心は大きな喜びで満たされる。わたしは一部の人を得て、わたしの『企業』はもはや不景気に陥ってはならず、もはや空虚な言葉から成っているのではない」と神は言うからである。過去において、人々は神の言葉の中に神の切迫した旨を見て取った。そこに偽りはない。そして今日、神はより急速に働きを行なう。人にとって、これは神の求めと完全には一致していないように見えるが、神にとって自身の働きはすでに完了している。人の思考はあまりに渦を巻いており、物事に対する見方がしばしば複雑すぎるからである。人は人間に対してあまりに厳しい要求をするが、神は人にそこまで厳しく要求せず、そのために、神と人との違いがいかに大きいかを見て取れるかもしれない。人々の観念は、神が行なうすべてのことにおいて露わになる。神が人々に厳しい要求をし、人々がその要求に応えられないのではなく、人々が神に厳しい要求をし、神がその要求に応えられないのである。数千年にわたってサタンに墮落させられてきた人類には手当てを受けた後も後遺症があるため、人々はいつも神に対してそうした厳しい要求を行ない、少しも寛大でなく、神が喜んでいないことを深く心配している。したがって、人々が多くの事柄において自分の務めをこなせないという事実は、彼らが自分に自己刑罰を科しているということであり、自分の行ないの結果を負っているのであって、それはまさに苦しみである。人が耐え

る苦難のうち、99%以上は神に軽蔑されている。ありのままに言うと、誰も神のために本当に苦しんだことがないのである。人はみな自分の行ないの結果を負っており、当然ながらこの刑罰の段階も例外ではない。それは人が造った苦い杯であり、人はそれを口元に掲げて飲む。神は自身の刑罰の本当の目的を明らかにしていないので、呪われた人が一部にはいるものの、それは刑罰を表わすものでない。祝福されている人も一部にはいるものの、未来において祝福されるというわけではない。人にとって、神とは自分の言葉を守らない神のようである。心配してはいけない。これらの言葉はいささか言い過ぎかもしれないが、否定的になってはいけない。わたしが話すことは確かに人間の苦しみと関連しているが、わたしが思うに、あなたは神との良好な関係を築かなければならない。あなたは神にもっと多くの「贈り物」をしなければならない。そうすることで、神はきっと喜ぶはずだ。神に「贈り物」をする人を神は愛していると、わたしは信じる。どうだろうか。これらの言葉は正しいだろうか。

今のところ、自分の将来への展望をどれほど脇にのけただろうか。神の働きはすぐに終わる。だから、あなたがたはあらゆる展望を多かれ少なかれ脇にのけたはずだ。そうではないか。自分を顧みるのもよいかもしれない。あなたがたは高く立ち、自分を称揚し、自らを誇示するのがいつも好きである。これは何だろうか。今日、わたしは依然として、人々の将来への展望が何であるのかを知らない。人々が本当に苦しみの海に呑み込まれ、苦難の精錬の中で生きたり、さもなくば様々な拷問具に脅かされながら生きたりしているなら、あるいはすべての人に拒絶され、空を見上げて深くため息をつきつつ生きているなら、そのような時に思考の中で将来への展望を脇にのけるかもしれない。なぜなら、人々は絶望のただ中で別世界の理想郷を探していて、快適な環境の中にいる人は誰も美しい夢の追求を断念したことがないからである。これは非現実的かもしれないが、人々の心にあるものではないことをわたしは願う。あなたがたはいまだに生きたまま引き上げられることを望むのか。依然として自分の肉の姿を変えたいと望むのか。あなたがたの意見が同じかどうかは知らないが、これは非現実的だとわたしはいつも感じていた。そのような考えは突飛すぎるように思えるのだ。人々は「将来への展望は脇にのけて、より現実的になれ」といったことを言う。祝福されるという考えを人々が捨てることをあなたは求めるが、あなた自身はどうなのか。祝福されるという人々の考えを否定しつつ、自分は祝福を求めるのか。他人が祝福を受けるのは許さないのに、自分は祝福を受けることをずっと密かに考えている。それであなたはどうなるのか。詐欺師である。あなたがこのように行動するとき、あなたの良心は非難されないのか。心の中

で負い目を感じないのか。あなたは詐欺師ではないのか。あなたは他人の心の言葉を詮索するが、自分の心にある言葉については何も言わない。あなたは何と無価値なくずであることか。あなたがたは話すときに心の中で何を考えているのか。聖霊に咎められるということがあり得ないのか。これに尊厳を乱されることはないのか。あなたがたは自分にとって何が良いのか全然わかっていない。あなたがたはみな、常に南郭処士のようなもの、つまりペテン師である。「(人々は)進んで『自らを捧げ』ようとし」の「自らを捧げ」に、神が引用符をつけたのも無理はない。神は掌を指すように人を知っている。人の欺瞞がいかに巧みだろうと、たとえ人が手の内を明かさず、顔を赤くせず、心臓を高鳴らせなくても、神の目は明るく、人は常に神の視線を逃れるのに苦労してきた。あたかも神が透視能力をもっていて、人のはらわたを見られるかのようであり、また人々を見通し、検査をせずともその血液型を判断できるかのようである。こうしたものが神の知恵であり、人が模倣することはできない。「わたしがとても多くの働きを行なっても、その証しが人々にないのはどうしてなのか。わたしは十分な努力を払わなかったのか」と神が言うとおりである。人による神との協力はあまりに足りず、また人には否定的なものがあまりに多く、積極性があることはほとんどないと言える。多少の積極性があるとしても時折で、しかもあまりに汚れている。これはまさに、人々が神を愛する程度を示しており、あたかも人の心に占める神への愛の割合がわずか1億分の1で、そのうち50%がすでに汚されているかのようである。そのため、人から証しを得られないと神は言うのである。神の言葉の語気がとても無情でつれないのは、まさに人の不従順のためである。過ぎ去った時について神が人と語り合うことはないが、人々は常に追憶し、それによって神の前で自分を誇示したがる。そして、過ぎ去った時代についていつも語りたがるが、神が人の昨日を今日として扱うことは決してなかった。その代わりに神は今日の見地から、今日の人々に接する。これが神の態度であり、神は其中でこれらの言葉を明白に述べ、神はあまりに理知がないと人々が将来言わないようにしたのである。と言うのも、神は不当なことをせず、人々がしっかり立てなくなることがないように、人々に本当の事実を伝えるからである。結局、人は弱いからである。このような言葉を聞いて、これについてどう思うか。耳を傾けて服従し、それ以上考えないようにする覚悟が自分にあるのか。

以上の話は本筋からそれており、話題になっているか否かは重要でない。あなたがたが異議を唱えないことを願う。神は言葉の働きを行なうようになり、ありとあらゆることについて語り合うのを好むからである。それでもあなたがたがこれらの言葉を読み、

無視しないことを願う。どうだろうか。そうしてもらえただろうか。今日の言葉の中に、神は新しい情報を明らかにしたとあった。つまり、神が働きを行なう方法は変わりつつある。そのため、まさにこの最新の話題に集中したほうがよいだろう。今日の発言はすべて将来の事柄を預言していると言える。それらの発言は、神が自身の働きの次なる段階を整えているということである。神は教会の人々の中での働きをほぼ完了し、その後は怒りとともにすべての人の前に現われるだろう。「わたしは地上の人々にわたしの行ないを認めさせ、わたしの業は『裁きの座』の前で証明され、それはわたしに従う地上のすべての人のあいだで認められる」と神が言うとおりである。あなたがたはこれらの言葉に何かを見出ただろうか。ここにあるのは神による働きの次なる部分の要約である。第一に、神は政治的権力をふるうすべての番犬を心から納得させ、歴史の舞台から自発的に身を退かせるとともに、地位を巡って争ったり、企みや陰謀に関わったりすることが二度とないようにする。この働きは神を通じて、地上でさまざまな災害を起こすことで実行されなければならない。しかし神が現われるということは決してない。そのとき、赤い大きな竜の国は依然として汚れた地であり、それゆえ神は現われず、刑罰を通じて出現するに過ぎない。それが神の義なる性質であり、そこから逃れることは誰にもできない。その間、赤い大きな竜の国に住むすべての人は惨禍を経験するだろう。当然そこには地上における神の国（教会）も含まれる。これがまさに事実の現われる時であり、よってすべての人が経験し、誰も逃れることはできない。これは神によって予定されたことである。「今こそ大いなる計画を実行する時である」と神が言うのは、まさにこの段階の働きのためである。なぜなら、未来において地上に教会はなく、災いの到来のため、人々は目の前にあるもののことしか考えられずに他の一切を無視し、また災いのただ中で神を享受することは難しいからである。そのため、人々は機会を逃さないよう、この素晴らしい時に心を尽くして神を愛することを求められる。この事実が過ぎ去るころになれば、神は赤い大きな竜を完全に打ち負かしており、かくして民による神の証しの働きは終了している。その後、神は次なる段階の働きを開始し、赤い大きな竜の国を荒廃させ、最終的には世界中の人々を逆さまにして十字架にかけ、それから全人類を絶滅させるだろう。これが神の働きの将来の段階である。したがって、あなたがたはこの平和な環境において、全力で神を愛することを求めなければならない。将来、あなたがたが神を愛する機会はなくなるだろう。人々には肉において神を愛する機会しかないからである。別の世界で暮らすとき、神を愛することを語る者はいないだろう。これは被造物の責任ではないのか。そうであれば、自分の人生の日々において、あなたがたはどのように神を愛すべきなのか。それを考えたことはあるか。死後になるまで神

を愛さないつもりなのか。それは空虚な話ではないか。今日、神を愛することを追い求めないのはなぜなのか。多忙でありながら神を愛することが、神への真の愛になり得るのか。神の働きのこの段階はすぐに終わると言われる理由は、神がサタンの前ですでに証しを自分のものにしたからである。ゆえに、人は何もする必要がなく、生きているあいだに神を愛することを追求するよう求められるだけである。これが大切なのである。神の要求は高くなく、そしてさらに、神の心には燃えるような不安があるので、この段階の働きが終わる前に、神は働きの次なる段階の要約を明らかにした。そしてそれは、時間がどれほどあるかを明瞭に示している。神が心に不安を抱いていなければ、これほど早くにこうした言葉を語るだろうか。神がこのように働くのは、時間があまりないからである。あなたがたが自分のいのちを大切にするように、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神を愛することが望まれている。それが究極の意義をもつ人生ではないだろうか。他のどこに人生の意義を見つけ得るのか。あなたはそれほどまでに盲目ではないのか。あなたは進んで神を愛するつもりか。神は人の愛にふさわしいのか。人々は人の崇拝に値するだろうか。ならば、あなたは何をすべきなのか。無条件で勇敢に神を愛し、神があなたに何を行なうかを見よ。神があなたを殺すかどうか確かめよ。要するに、神を愛するという務めは、神のために何かを書き写したり書きとめたりすることよりも重要なのである。あなたの人生がより価値をもち、幸せで満ちるように、最も重要なものを最優先にすべきである。そうして、自分に対する神の「判決」を待つべきである。あなたの計画に神を愛することは含まれているだろうか。一人ひとりの計画が神によって成就されるものになり、すべて現実になることを願う。

第四十四章と第四十五章

神が人間に「神への愛」について語った時以来——これはすべての教訓の中でもっとも重大なものであるが——神は「七つの霊の言葉」でこの話題について語ることに焦点を合わせ、すべての人々に対して人間生活の空虚さを知る努力をさせて、こうして、彼らの心の中にある真の愛を掘り起こそうとした。だが、現在の段階に存在する人々はどのくらい神を愛しているのだろうか。あなたがたは知っているだろうか。「神を愛すること」の教えには限度がない。すべての人々の人生に関する認識はどうなっているのだろうか。彼らの神を愛する態度はどうなっているのだろうか。彼らは進んで愛する気があるのだろうか、それともないのだろうか。彼らは大衆に従うのだろうか、それとも肉の姿をひどく嫌うのだろうか。これらはすべてあなたがたがはっきりさせ、理解しなければならないことである。人々の心の中には本当に何もないのだろうか。「わたしは人間が

本当にわたしを愛することを望んでいるのだが、今日、人々はまだぐずぐずしていて、わたしを本当に愛することができない。彼らの想像では、わたしに本当の愛を示せば、自分たちには何もなくなってしまうだろうと信じている。」これらの言葉の中で、「本当の愛」とは実際には何を意味するのだろうか。今の時代には、「すべての人々が神を愛している」というのに、今なお神が人々の本当の愛を求めるのは、なぜだろう。このように、神の意志は、いわば人に対して、解答用紙に本当の愛の意味を書くよう求めるようなものであり、そこで、これはまさに神が人間のために用意した宿題である。今日のこの段階はどうかと言うと、神は人間に多大な要求はしていないにもかかわらず、人々は神が人間に求めている本来の要求をまだ達成していない。言い換えれば、彼らはまだ全力をつぎ込んで神を愛していない。このように、人々が不熱心である間も、この働きが効果をあげ、この働きの中で神の栄光が称えられるまで、神は人々に要求を出し続ける。実際、地上での神の働きは神への愛によって終了する。従って、その働きを終了する時ようやく、神はすべての働きの中でもっとも重要なものを人間に示す。神の働きが終わる時に、神が人間に死を与えるなら、人間はどうなるだろう、神はどうなるだろう、そしてサタンはどうなるだろう。地上における人間の愛が引き出された時ようやく、「神は人間を征服した」と言うことができる。そうでなければ、人々は、神が人間を脅していると言い、神は辱められるだろう。神はその働きを囁きもせずに終わらせるほど愚かではない。このようなわけで、神の働きがまもなく終わろうとする時、神への愛に対する熱情が沸き起こり、神への愛は人々の熱心な話題になる。もちろん、この神への愛は人間によって汚されることはない、純粋な愛であり、夫に対する忠実な妻の愛、あるいはペテロの愛のようなものである。神はヨブやパウロのような愛は望まず、ヤーウェへのイエスの愛、すなわち父と子の間の愛を求める。「個人的な損得は考えず、父のことだけを思い、ほかの誰でもなく父だけを愛し、ほかのことは何も求めない」——人間はこのようなことができるだろうか。

わたしたちがイエスの成したこと、完全な人間性による者ではないイエスの成したことと己とを考え合わせてみたら、わたしたちはどう考えるだろう。あなたがたの完全な人間性はどの程度進んでいるのだろうか。あなたがたはイエスの成したことの十分の一でも達成することができるだろうか。あなたがたは神のために十字架につく資格があるだろうか。神に対するあなたがたの愛はサタンを辱めることができるだろうか。そしてあなたがたは人間に対する愛をどのくらい排除しただろうか。神に対する愛が人に対する愛に取って代わっただろうか。あなたがたは神への愛のために本当にすべてに耐えるだ

ろうか。かつてのペテロについて考えてみなさい、そして今日のあなたがたについて考えてみなさい——双方の間には実に大きな違いがあり、あなたがたは神の前に立つ資格はない。あなたがたの心の中では、神に対する愛の方が大きいのか、それとも悪魔に対する愛の方が大きいのか。これは秤の左右に交互に置いて、どちらが高くなるか見なければならぬ——あなたがたの心の中には神への愛が実際どのくらいあるだろう。あなたがたは神の前で死ぬ資格があるだろうか。イエスが十字架の上で耐えることができた理由は、イエスの地上における経験がサタンを辱めるのに十分であったからであり、その理由でのみ、父なる神は大胆にイエスにその段階の働きを完了することを許したのである。それはイエスが経験した困難と神への愛によるものであった。しかしあなたがたにそのような資格はない。こういうわけで、あなたがたは経験を重ねて、神以外は何も抱かない心を実現しなければならない——あなたがたはこれを達成することができるだろうか。このことからあなたがどれほど神を嫌っているか、どれほど神を愛しているか、見て取ることができる。神が人間に対して要求しすぎているということではなく、人間が一生懸命努力していないということである。これが実態ではないのか。そうでなければ、あなたは神の中にどのくらい愛すべきものを発見し、あなた自身の中にどのくらい忌まわしいものを見つけるだろう。あなたはこれらのことを十分に検討しなければならない。天の下で神を愛する者はごくわずかしかいない、と言ってもいいだろう——しかし、あなたは開拓者になり、世界記録を塗り替えて、神を愛することができるだろうか。神は人間に対して何も要求しない。人間はこの点で神に敬意を払うことができないのだろうか。あなたはこのことさえ達成できないのだろうか。ほかに何か言うことなどあるだろうか。

第四十六章

これらの言葉の中でも、今日の言葉ほど忘れがたいものはない。神の言葉により、既に人間の状態や天の奥義が明らかになっているが、それでも今回の言葉は過去の言葉とは異なっている。嘲笑ったりからかったりするのではなく、全く予想外のものである。神が座って静かに人々と話したのである。神の意図は何か。神の以下の言葉をあなたはどうか捉えるか。「今日、わたしは宇宙の上で新しい働きを始めた。わたしは地上の人々に新しい始まりを与え、その全員にわたしの家から出て行くように頼んだ。人々はいつも自分自身を甘やかしたがるので、人々にそれを自覚するよう、そしてわたしの働きを邪魔しないようにと、わたしは人々に助言した。」神の語るこの「新しい始まり」とは何か。以前神は人々に去るように言ったが、そのときの神の意図は人々の信仰を試すこ

とであった。では、今日違う口調で話すとき、神は誠実なのか嘘を言っているのか。以前、人々は神が語った試練をわかっていなかった。効力者の働きの段階を通してのみ、神の試練を人々は自分の目で見、自分自身で経験することができた。そのため、その時以来ずっと、ペテロの何百もの試練の手本のせいで、人々は往々にして「あれは神の試練だった」と信じるという間違いを犯してきた。更に、神の言葉で事実が語られることは稀である。そのため、人々は神の試練について更に盲信したので、神が語ったあらゆる言葉のうち、これこそが神が実施した事実の働きであるとは人々は思わなかった。人々はそうは思わず、神は他にどうしようもなかったのもので、特に言葉を使って人々を試したと信じていた。人々が従ったのは、このような試練の最中であり、それは希望がないものの、希望を得られそうにも思われた。「居残る者は全員、不幸に見舞われて運にも恵まれず」と神が言った後でも、まだ人々は神に従うことに専念し、したがって神のもとを去るつもりはなかった。このような幻想の中で人々は従い、希望がないと大胆にも確信した者は一人もいなかった。これは神が勝利した証の一つである。神の視点で見ると、あらゆるものを神に奉仕させるべく、神が全てを動かしている。人々は幻想を抱いていたので、いつどこであろうと、神のもとを去る気にならなかった。そのため、神はこの段階で人々に神のために証言させるべく人々の不完全な動機を活用するのだが、これは神が「わたしは一部の人を得て」と言うときの深い意味である。サタンは人間の動機を利用して妨害を生じさせるが、神は人間の動機を利用して人間を奉仕させる。これこそが、神の以下の言葉の本当の意味である。「彼らは想像する。ごまかして門の中に入れるのではないかと。しかし、彼らがわたしに偽の入門証を手渡すと、わたしはその入門証を炎の中に放り込むのだ。そして、人々は自分たちの『必死の努力』が炎の中にあるのを見て、希望を失う。」神はすべての事柄を神に仕えるように操る。だから、神は人間の様々な意見を疎んじないが、堂々と人々に去れと言う。これは神の働きの驚異と英知である。率直な言葉と手法を一つにまとめ、人々を当惑させ狼狽させたままにする。このことから、神が人々に神の家から出るようにと本当に言っており、これが何らかの試練ではないことがわかる。神はこの機会に「それでも、わたしはまた人々に言う。祝福を得られなくても、誰もわたしについて不満を言ってはならぬと。」と言う。神の言葉が本物か偽者か把握できる者はいない。なのに、神はこの機会を利用して人々を安定させ、人々の去りたいという欲望を取り除く。だから、ある日、人々が呪われても、神の言葉で予め警告されているはずである。これはちょうど人々が「不愉快な言葉は良い言葉、つまり良薬口に苦し」というのと同じである。今日、人々の神への愛はひたむきで誠実である。そのため誠実なのか嘘なのかわからない言葉で人々は征服され、神

を愛するようになった。だからこそ、神が「わたしは既に偉大な働きを達成した」と言ったのである。「人々は自分で生き残りの道を見つけてほしい。わたしはこれに関して無力である。」と神が言う時、これら全ての言葉の中でも、これこそが神の言葉の現実性であるが、人々はそうは考えない。その代り、人々はいつも神の言葉に全く注意を払わずに従ってきた。だから、「今後、もはやわたしたちの間で交わす言葉はない。もはや語るべきこともない。互いに干渉することもない。それぞれ自分の道を行くだけである。」と神が言う時、これらの言葉は現実であり、全く穢れていない。人々が何を考えようと、これは神の理不尽さなのである。神は既にサタンの前に証言して、いつどこであろうと、誰一人として神のもとを去らせはしないと書いた。そのため、この段階の働きは完了し、神は人間の不満に耳を傾けない。それでも、神はこれを最初からはっきりさせている。だから、人々は無力で置き去りにされ、屈辱を味わわされている。神とサタンの戦いは全て人間をめぐる戦いである。人間には自分自身を統制することができない。人間はまさに操り人形であるが、神とサタンは裏で糸を引く。神が人々を使って神のために証言させる時、神は考えつくことやできることを全てを行い、人々を神に奉仕させる。これが原因で、人々はサタンに操られ、更に神に指示される。神が望む証言が終わると、神は人々を脇に投げだし、そこで人々を苦しむまま放っておく。そうしながら、神は人々とは一切関わりがないかのように振る舞う。神がまた人々を使おうとする時には、もう一度人々をつまみあげ、使用に供する。しかも、人々は全くこれに気づかない。人々は主人の気に召すがままに使われる牡牛か馬のようなものにすぎず、誰も自分自身を統制することができない。これは少々悲しく聞こえるかもしれないが、人々に自分自身が統制できようとできなかりと、神への奉仕は栄誉であり、動揺することではない。まるで神はこのように行動すべきであるかのようなのである。全知全能の神の必要を満たせるのは、誇れることではないのか。あなたは思うのか。あなたは今までに神に奉仕する決意をしたことがあるか。まだ自分自身の自由を求める権利に固執したいのではないか。

とにかく、神がすることは全て素晴らしく真似するに値するが、人間と神は結局のところ異なる。これに基づき、神があなたの愛に関心があろうがなかろうが、あなたは人間の心で神を愛すべきである。神の心に大きな悲しみもあることが、神の言葉に表れている。人々が精錬されるのは、ひとえに神の言葉のおかげである。それでも結局、この働きは昨日行われたのである。神は次に一体何をするのであろうか。今日までこれは秘密のままである。そのため人々には理解も推測もすることができず、神の音楽に調子を

合わせて歌うことしかできない。それでも、神の言うことは全て本当のことであり、全て実現する。これは疑う余地もない。

第三部

諸教会を歩くキリストの言葉 (1992年6月から2014年8月まで)

序論

神の言葉のうち、この部分は四つの節から成り、すべて1992年6月から2005年9月にかけてキリストが表わしたものである。その大半は、キリストが諸教会を巡回した際に行なった説教と交わりの録音を基にしている。これはまったく修正されておらず、またキリストによる後の変更もない。その他の節はキリスト本人が執筆したものである（キリストが執筆を行なう際は、考えるために手を休めたり、編集を行なったりせず、一気に書き上げ、その言葉はすべて聖霊の表現であり、このことに疑いの余地はない）。この二種類の言葉を分けることなく、言葉が発せられた本来の順序によって提示している。これにより、言葉全体から神の働きの各段階を見ることができ、それぞれの時期において神がいかに働きを行なうかを理解することができる。これは人が神の働きの各段階と神の知恵を知る上で有用である。

「諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅰ）」の最初の八章はまとめて「道」と呼ばれ、キリストが人間と同じ立場から語った言葉のほんの一部である。表向きは無味乾燥な言葉だが、人類に対する神の愛と気づかいで満ちている。これに先立ち、神は第三の天という視点から語ったが、そのことで神と人との間に大きな距離が開いてしまい、人は神に近づくことを恐れるようになり、まして神にいのちの施しを頼むことなどできなくなった。そのため「道」では、神は同格のものとして人に語り、進むべき方向を示し、それにより人と神との関係を元の状態に戻した。神が依然として何らかの語り方を用いているかどうかについて、人々はもはや疑わなくなり、死の試練への恐怖に取りつかれることもなくなった。神は第三の天から地上に降り、人々は火と硫黄の湖から神の玉座の前に来て、「効力者」の幻影を振り払うと、生まれたての子牛のように神の言葉のバプテスマを正式に受け入れた。その時初めて神は人々と親しく語り、いのちを施す働きをさらに行なえるようになった。神が人として自らを卑しめた目的は、人々に近づき、人との距離を縮め、人の認知と信頼を得られるようにし、いのちを求めて神に従う確信を人

に生じさせることだった。「道」の八章は、神が人々の心の扉を開く鍵と表現することができ、その全体が、神が人間に与える糖衣錠なのである。神がこれを行なって初めて、人々は神によって繰り返し語られる教えと叱責にじっと注意を払えるようになった。その後初めて、神はこの現段階の働きにおいて、いのちを与え真理を語る働きを正式に開始したと言えるだろう。それは、「信者はどのような観点をもつべきか」、「神の働きの過程について」などといったことを神が語り続けた通りである。このような方法こそ、神の知恵と熱心な意図を示しているのではないだろうか。これはまさに、キリストがいのちの施しを始めた出発点であるため、ここで表わされる真理は、後の節より若干浅いものとなっている。その背後にある原則はごく単純である。つまり、神は人類の必要に応じて働きを行なうのであって、闇雲に行動したり語ったりすることはない。神だけが人類の必要を完全に把握しているのであり、神よりも人を愛し、理解している者は他にいない。

「働きと入ること」の（１）から（１０）において、神の言葉は新しい段階に入る。そのため、これらの言葉が冒頭に置かれている。その後、「諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅱ）」が誕生した。この段階で、神は自身に付き従う者に対してより細かなことを要求した。その要求には人の生き方についての知識、および人の素質に求められることなどが含まれている。それらの人たちは神に付き従うことを固く決心しており、もはや神の身分や本質についてまったく疑わなかったので、神は彼らを神の家の成員として正式に扱い始め、天地創造から現在に至る神の働きの内幕について語り、聖書の背後にある真実を明らかにし、神の受肉の真の意義について教えた。この節における神の言葉により、人々は神の本質と神の働きの本質についてよりよく理解し、自分たちが神の救いから得たものは、歴代の預言者や使徒たちが得たものを超えていることを深く認識することができた。神の言葉の一行一行から、神の知恵だけでなく、人間に対する神の細やかな愛と気づかいをも余すところなく感じ取れる。神はそのような言葉を表わすだけでなく、人間がそれまで抱いていた観念や誤った考え、人がかつて思いもよらなかったこと、さらには人が未来に歩むべき道についても一つひとつ公然と明らかにした。おそらくそれは、人間が経験できる狭義の「愛」そのものだろう。何とんでも、神は一切出し惜しみすることも、見返りとして何かを求めることもなく、人が必要とするすべてのもの、そして人が求めるものを何でも与えてきたのである。

この節には聖書を扱う特別な章がいくつかある。数千年間にわたり、聖書は人間の歴史の一部だった。さらに、人は聖書を神のように扱い、そのため終わりの日、聖書は神

の座についてしまうほどで、神はそれを嫌悪している。よって時間が許す時に、聖書の内幕と起源を明確にしなければならないと神は感じた。神がそうしなければ、聖書が人々の心の中で神の座を占め続けたらうし、人々は聖書の言葉を使って神の業を測り、断罪したはずだ。神は聖書の本質、構造、および欠点を説明したが、そうすることで決して聖書の存在を否定したわけでも、聖書を断罪したわけでもない。むしろ、聖書の本来の姿を蘇らせ、人々が聖書に対して抱いていた誤解を解き、聖書に関する正しい見方を彼らに与える、適切かつふさわしい説明を提示したのであり、それによって人々は聖書を崇拝することも迷うこともなくなった。つまり、聖書の真の背景や欠陥と向き合うことすら恐れて、聖書への盲信を神への信仰や崇拝と誤解することがなくなったのである。ひとたび聖書を純粹に理解すれば、良心の呵責を感じることなく聖書を脇にのけ、神の新しい言葉を果敢に受け入れることができる。これが、この数章における神の目標である。ここで神が人に伝えんとする真理は、どのような理論や事実も今日の神の働きと言葉に取って代わることはできず、神の代わりになれるものは何もないということである。聖書の落とし穴を逃れることができなければ、神の前に出ることは決してできない。神の前に出たいと願うならば、まずは神に取って代わり得るものを心の中から一掃しなければならない。そうすれば、神を喜ばせることができる。ここで神は聖書についてのみ説明しているが、聖書以外にも人々が本気で崇拝している誤ったものが多数あることを忘れてはならない。人々が崇拝しないのは、真に神から来るものだけである。神は聖書を単に例として用いることで、人々が誤った道を歩まないよう、また神を信じてその言葉を受け入れながら、再び極端に走って混乱に陥ることがないように、彼らに念押ししているにすぎない。

神が人間に与える言葉は浅きところから深きところへと進む。神の言葉の題目は、人の外面的な振る舞いや行動から、その墮落した性質へと間断なく進み、そこから神は言葉の矛先を人の魂の最深部、すなわちその人の本性に向ける。「諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅲ）」が表わされていた間、神の言葉は人の本質と地位および本物の人とは何を意味するのか、つまり、人によるいのちへの入りに関する最も深遠な真理と本質的な問いに重点を置いている。もちろん、「諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅰ）」で神が人間に施した真理を振り返ると、「諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅲ）」の内容はそれに比べて驚くほど深遠である。この節の言葉は人の将来における道や、人がいかにして完全にされ得るか、人類の未来の終着点、神と人間がいかにして共に安息に入るかについても触れている（これらは、人の本性、使命、終着点について、神がそれまで人々に語

ってきた言葉であり、最も理解しやすいものだと言えることができる）。これらの言葉を読む人が、人間のもつ観念や想像から自己を切り離し、神の語るすべての言葉を心の奥底で純真に受け止められる人であるというのが、神の望みである。さらに、これらの言葉を読むすべての人が、神の言葉を真理、道、いのちとして受け止めることができ、神を軽んじたり、欺いたりしないことを神は願っている。神を考察したり、吟味したりするような態度でこれらの言葉を読むならば、それらの言葉はその人にとって理解不能なものになるだろう。真理を求め、神に従う決意があり、神に対して微塵の疑いもない人だけに、これらの言葉を受け入れる資格がある。

「諸教会を歩くキリストの言葉（IV）」は、「全宇宙への神の言葉」に続く、別の部類に属する神性の発言である。この節には、キリスト教諸教派の人々に向けた神の勧め、教え、暴きが含まれている。例えば、「あなたがイエスの霊体を見る時、神はすでに天地を新しくしている」、「キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である」などである。また、「終着点のために十分な善行を積みなさい」、「三つの訓戒」、「過ちは人間を地獄へ導く」などといった、人類に対する神の最も基本的な要求事項も含まれている。あらゆる種類の人々に対する暴きと裁きや、いかにして神を知るかについての言葉など、多くの側面が扱われている。この節は人類に対する神の裁きの核心と言えよう。本節で最も印象的な箇所は、神が自身の働きに幕を下ろそうとした際、人のまさに真髄にあるもの、すなわち裏切りを暴いたことである。神の狙いは、次に挙げる事実を人々が最後に知り、それを心の奥深くに焼き付かせることである。その事実とは、神にどれだけ長く従っていようとも、あなたの本性はなおも神を裏切ることである。つまり、神を裏切るのは人の本性なのである。と言うのも、人はいのちにおいて絶対的な成熟に至ることができず、その性質には相対的な変化しか起こり得ないからである。「裏切り（1）」および「裏切り（2）」という二章は、人にとって衝撃ではあるが、まさしく神の最も誠実かつ善意ある警告である。少なくとも、ひとりよがりや自惚れた人は、この二章を読んだ後には邪心が抑えられて落ち着く。この二章を通じて、いかにいのちが成熟していようとも、いかに深い経験をしていようとも、いかに強い確信を抱いていようとも、どこで生まれてどこに行こうとも、神を裏切るというあなたの本性はいつでもどこでも正体を現わしかねないということを、神はあらゆる人に気づかせる。神が一人ひとりに伝えんとしているのは、神を裏切るのはあらゆる人が生まれながらにもつ本性だということである。もちろん、神がこの二章を語る狙いは、人類を淘汰したり非難したりする口実を見つけることではなく、人々に人間の本性をもっと意識させ、彼

らがいかなる時も神の前で心して生き、神の導きを受け取れるようにすることである。それにより、人が神の臨在を失い、引き返すことのできない道に足を踏み入れるのを止められる。この二章は神に従うすべての人への警鐘である。願わくは、人々が神の熱心な意図を理解するようになってほしい。つまるところ、これらの言葉はどれも議論の余地のない事実である。それならば、神がいつどのようにその言葉を語ったかを人間が議論する必要はあるだろうか。神がそれらのすべてを内に留め、これらの言葉を神が語るのほっともだと人が思うようになるまで待ったとしたら、遅すぎるのではないだろうか。いつならば一番ふさわしいと言うのか。

この四つの節において、神は様々な語り方と視点を用いている。例えば、皮肉を用いることもあれば、直接的な施しや教えという方法を使うこともある。また、例を挙げることもあれば、厳しい叱責をすることもある。全体的に見れば、そこにはあらゆる種類の語り方があるが、その目的は人の様々な状況や好みに合わせることである。神が語る視点も、様々な発言の方法や内容によって変化する。例えば、神が「わたしは」「わたしに」のように語ることがある。つまり、神自身の視点から人に語りかけるのである。また、「神は」こうである、ああであるというように、三人称で話すこともあれば、人間の視点で語ることもある。どのような視点で語ろうとも、神の本質が変わることはない。いかに語ろうとも、神が表わすことはすべて神自身の本質だからである。それはすべて真理であり、人類が必要としているものなのである。

諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅰ）

（1992年6月から1992年10月まで）

道……（1）

生涯において自分がどのような挫折を経験するのか、どのような精錬を受けるのかを知る者はいない。挫折や精錬が職業上のことである者もいれば、将来の見通しに関する者、生家に関連する者、結婚に関する者もいる。しかし、そうした者と本集団に属するわたしたちとの相違点は、現在わたしたちは神の言葉のために苦難を受けているということである。つまり、神に仕える者は神を信じる道において挫折を経験するが、それはあらゆる信者が通る道であり、わたしたち全員の足許にある道である。わたしたちの神への信仰の過程が正式に始まり、人間としての生涯の幕が開け、人生の正しい道を歩み始めるのはそこからである。つまり、神が人間の傍らで生きている、正常な人間が歩む

正しい道をわたしたちが歩み始めるのはその時である。神の前に立って神に仕える者として、つまり神殿で祭司の衣を身に纏い、神の威厳と権威をもつ者として、わたしはあらゆる者に対し次のように宣言する。明瞭に述べるならば、以下の通りである。神の栄光ある表情はわたしの栄光であり、神の経営（救いの）計画はわたしの中核である。わたしは来たるべき世界において百倍の益を求めているのではなく、肉にあるわたしの微力ながらの努力によって僅かながらでも神が栄光を受けられることが出来るように、この世において神の旨を行うことを求めるのみである。それがわたしの唯一の求めるところである。わたしの意見では、そのことがわたしの唯一の霊的な糧であり、それが肉にあって生き、情緒に溢れた者の「最終的な言葉」であるべきだを考える。それが現在わたしの足許にある道である。このわたしの展望は肉においてのわたしの最後の言葉であり、人々がわたしについてその他の観念や考えを持たないことを望む。わたしはそれにわたしの全てを捧げたものの、未だに天の神の旨を満たすことが出来ない。わたしは、何故これが肉の本質であるのか、と計り知れぬ悲しみを覚える。過去にわたしが行った業と、神がわたしに対して行われた征服の働きのおかげで、わたしは今になってやっと人間の本質を深く理解することが出来た。その時以来初めて、わたしは、神の旨を行うことのみを求め、それに自らの全てを捧げ、良心を苦しめるものは一切もたない、という自分自身に対する最も基本的な基準を定めた。神に仕える他の人々が自分たちに対してどのような要求事項を定めているかについて、わたしは全く考えない。すなわち、わたしは神の旨を行うことを決意した。これは、神に仕える被造物の一人として、神に救われ、愛され、神に打たれた者としてのわたしの告白である。これは、神により見守られ、保護され、愛され、大いに用いられてきた者の告白である。わたしに神から託された重要な務めを果たすまで、わたしは今後もこの道を歩み続けるであろう。しかし、わたしの意見では、道の終点は差し迫っている。なぜなら、既に神の働きは完了しており、現時点において人間は自分に出来ること全てを行ったからである。

中国本土が復興の流れに乗って以来、聖霊の働きを中心に現地の教会が次第に発展してきた。それらの現地の教会において、神は絶えず働きを行なってきた。なぜなら、落ちぶれた皇帝一族において、そうした教会は神の中核となったからである。神はそのような家族において現地の教会を確立したので、神は喜びに満ちあふれたに違いない。それは筆舌に尽くしがたい喜びである。中国本土に現地教会を設立し、世界各地にある他の教会の兄弟姉妹に福音を広めた後、神は大いに歓喜した。それは、神が中国本土で行うことを望んだ働きの第一歩であった。あらゆる物や人間にとって難攻不落の悪魔の都

市のような場所で、神が働きの第一歩を開始することが出来たことは、これは第一幕であつたと言えるであろう。それは神の大いなる力ではなかろうか。この働きの復興のために悪魔の肉切り包丁により無数の兄弟姉妹が殺され、殉教したことは明らかである。今、このことについて述べるのは悼ましいが、それでも大部分において、苦難の日々は終わった。今、わたしが神のために働き、現況まで辿り着くことが出来たのは、ひとえに神の力のおかげである。神が殉教者として選ばれた人々をわたしは大いに尊敬している。殉教者は、神の旨を行い、自らを神のために犠牲にすることが出来た。忌憚なく話をすると、神の恵みと憐れみが無ければ、わたしは遥か昔に崩れ去っていたであろう。神に感謝。わたしは神が安らかでいられるように神に全ての栄光を捧げることを望む。わたしに「お立場のために死ぬべきではないのに、神が死について述べられる時、なぜあなたは幸福なのですか」と尋ねる者がいる。わたしは直接的に回答せず、単に微笑んで「それがわたしの追求すべき道であり、絶対に従わなければならない道だから」と答える。人々はわたしの答えを理解できずに驚いた表情をする。彼らはわたしに少し戸惑う。しかし、これがわたしの選んだ道であり、わたしが神の前でした決心であるので、いかに困難が大きくてもその道を進むために、ひたすら努力を続けるのみである。それは神に仕える者が掲げるべき約束であるとわたしは考える。神に仕える者は自分の言葉を少しでも取り消すことは出来ない。また、それは遥か昔の律法の時代に定められた決まりごと、規則であり、神を信仰する者が理解すべきことでもある。わたしの経験において、神に関するわたしの認識は優れておらず、わたしが実際に経験したことはわずかであり、触れる価値すらなく、語るべき賢い識見もないのだが、神の言葉は高く掲げる必要があり、反抗してはならないものである。正直に言わせてもらえば、わたしの実経験はわずかだが、神がわたしの証しに立ち、人々が常にわたしという人間を盲目的に信じているので、わたしにどうすることが出来ようか。それでもなお、神を愛することについて人々が自分の見方を正すことを望んでいる。わたしという人間は取るに足りない者である。なぜなら、わたしもまた神への信仰の道を追い求めており、わたしが歩む道は神への信仰の道以外の何物でもないからである。人はたとえ優れていても、崇拝の対象となつてはならない。従うべき模範的存在となつてよいだけである。わたしは他人の行動を気にしないが、わたしも神に栄光を捧げており、御霊の栄光を肉に捧げないことを、人々に述べておく。このことに関するわたしの感情を誰もが理解できることを望む。それはわたしの責任を減じるのではなく、それが事の全体像なのである。これは完全に明瞭であるべき事であり、今後再述する必要は無いであろう。

本日、わたしは神の前で啓かれた。地上における神の働きは救いの働きである。それは他の何物にも汚されていない。そう考えない者もいるであろうが、わたしは聖霊が救いの働きの段階を行っており、他の働きは行っていないと常に感じている。これは明白なはずである。今初めて、中国本土における聖霊の働きが明らかになった。では、神はなぜこのような場所で、悪魔がはびこるこの場所で全ての道を開き、働きを行いたいのであろうか。このことから、神が行っている働きがおもに救いの働きであることが分かる。より正確には、それはおもに征服の働きである。初めからイエスの名前が呼ばれた。（これを経験していない者もいるかも知れないが、これは聖霊の働きの一段階であったと述べておく。）これは、恵みの時代のイエスから離れるためであり、そのため事前に一部の人々が選択され、次のその集団から人数が絞られた。その後、中国本土でウィットネス・リー（李常受）の名前が呼ばれた。これは、中国本土における復興の働きの第二部であった。これは聖霊が人間を選び始めた働きの第一段階であり、まず人々が選抜され、その人々を世話する牧者を待った上で、「ウィットネス・リー」の名が用いられ作業が行われた。「力ある者」という名の証しの働きを基盤に、神が自ら働きを行なったが、それ以前は準備段階であった。ゆえに、その正誤は問題ではなく、神の計画において主要な問題ではない。「力ある者」の名の証しの後、神は自らの働きを正式に開始し、その後、肉にある神の業が正式に開始された。「力ある主」の名により、神は反抗的かつ反逆的な者全てを支配下に置いた。彼らは、二十三、四歳になった人が大人らしく見え始めるのと同じように、人間らしさを身に付けだした。つまり、人は正常な人間の生活を送り始めたばかりだったのである。効力者の試練を通して、神の働きは神性の働きを行う段階へと自然に移行した。この段階の働きのみが、神の多数の働きの中核であり、主要な段階であると言えることが出来る。人々は自らを知り、嫌悪する。人々は自分を呪うことの出来る段階までたちし、自らの命を喜んで捨て、神の愛しさをかすかに感じる。これを基礎として、人々は人生の真の意味を理解する。それは、神の旨を実現することである。中国本土における神の働きは終わりに近づきつつある。神はこの汚れた土地において数年にわたって準備作業を行なってきたが、人々は現在到たちしている段階にたちしたことはこれまでなかった。つまり、神は現在になって始めてその働きを正式に開始したのである。これについてさらに詳しく、あるいはさらにはっきり説明する必要はない。この働きの段階は疑いなく神の神性により直接行われているが、人間を通して実施されている。これは誰も否定出来ない。現在この放縦な地の人々の間で神の働きが到たちしている範囲にたち成出来たのは、間違い無く神の大いなる力のためである。この働きの成果は、あらゆる場所で人々を納得させることが出来る。これを敢え

て軽率に非難して否定する者はいないであろう。

道…… (2)

我々の兄弟姉妹たちは、中国本土における神の働きの順序、段階、方法の概要のようなものを多少把握しているかもしれないが、ここで改めてこうした点をふり返り、簡単にまとめてみたいと思う。わたしはただこの機会に自分の心中を少し語るだけであり、この働き以外の事は話さない。兄弟姉妹たちにはわたしの気持ちを理解してほしいと思う。また、わたしの言葉を読むすべての人が、わたしの霊的背丈の低さ、いのちの経験が不十分であること、そして神の前で堂々としていられないことを理解し、許していただきたいと願う。しかしわたしの印象としては、こうしたことは単なる客観的な理由でしかない。要するに、いかなる者も出来事や物事も、何があろうと神の前におけるわたしたちの交わりを阻むことはできないのであり、わたしは兄弟姉妹たちが神の前でわたしと共にさらに努力してくれることを望んでいる。わたしは次の祈りを捧げたい。「神よ、わたしたちを哀れんでください。わたしと兄弟姉妹たちが共通の理想の支配下で共に奮闘し、死ぬまであなたに忠実であり、決して後悔せずにいられますように」。この言葉はわたしが神の前で行う決意だが、同時に神に用いられる肉ある者としての、わたしの座右の銘とも言えるだろう。わたしはこの言葉を、わたしの側にいる兄弟姉妹たちとの交わりの中で何度も分かち合ってきたし、わたしの周囲にいる人々にもメッセージとして与えてきた。人々がそれをどう思うかは分からないが、いずれにせよこの言葉には、主観的努力の側面だけでなく、それ以上に客観的理論の側面も含まれていると思う。そのため一定の意見を持つ人々もいるかもしれないし、あなたもこの言葉を自分の座右の銘として、神を愛することへの自分の意欲がどれほど大きくなるかを見てみるとよいだろう。人によっては、この言葉を読んだ時に一定の観念を抱き、こんな風に思うだろう。「どうしてこんな日常的で普通の言葉が、神を死ぬまで愛するほどの強い意欲を人々に与えられるだろうか。それに、これは今の話の主題である『道』とは無関係だ」。この言葉は確かにそれほど魅惑的なものではないかもしれないが、わたしはいつもこの言葉が、人間を正しい道へと導き、落胆したり後戻りしたりすることなく、神への信仰の道のあらゆる試練に耐えることを可能にすると考えてきた。だからわたしはこの言葉をいつも座右の銘としているのであり、人々もこの言葉についてよく考えてほしいと思う。しかしわたしの目的は皆にわたしの見方を強制することではないので、これは単なる提案である。人々がわたしのことをどう思うかに関わらず、神はわたしたち一人一人の心の動きを理解していると思う。神は常にわたしたち一人一人の中で働きを行なっ

ており、その働きは弛みないものである。わたしたちは全員が赤い大きな竜の国に生まれたので、神はわたしたちの中でこのように働くのである。赤い大きな竜の国に生まれた者は、幸いにして聖霊のこの働きを受けることができる。わたしはその一人として、神の愛しさ、尊敬に値する性質、そして神の素晴らしさを強く感じている。これはわたしたちを気遣う神である。このような後進的、保守的、封建的、迷信的で墮落したプロレタリアートの帝国が、神のこのような働きを受けられるということは、わたしたち、つまり最後の時代のこの集団が、いかに祝福されているかを示している。霊の目が開かれており、この働きを見ることが出来る兄弟姉妹たちは皆、それゆえに歓喜の涙を流すだろう。その時には、踊り上がって神に喜びを伝えるのではないだろうか。心の歌を神に捧げるのではないだろうか。その時あなたは、神に自分の決意を示し、神の前で新たな計画を立てるのではないだろうか。こうしたことはすべて、神を信じる普通の人々が行うべきことだと思う。わたしたちは人間として、一人一人が神の前で何らかの表現をする必要があるはずだ。これは感情を持つ者ならば行うべきことである。わたしたち全員の素質と生まれた場所を考えてみれば、神がわたしたちのところへ来るために、どれほど大きな屈辱に堪え忍んだかがわかる。わたしたちの心の中には神について多少の認識があるかもしれないが、わたしたちが知っていること、すなわち神は非常に偉大であり、至高の存在であり、崇敬すべき存在だということだけでも、人間の中での神の苦難がどれほどのものだったかを浮き彫りにするに十分である。しかしわたしのこの言葉はまだ曖昧であり、人々はそれを文字や教義としてしか扱えない。我々の間にいる人々は、あまりにも愚鈍で物分かりが悪いからだ。そのためわたしにできるのは、わたしたちの霊が神の霊によって動かされることができるよう、受け入れる気のある兄弟姉妹全員に、さらに努力してこの問題を説明することだけだ。神がわたしたちのために払った代償、尽くした努力、費やした労力を理解できるよう、神がわたしたちの霊的な目を開いてくれますように。

中国本土で神の霊を受け容れた人間のひとりとして、わたしはわたしたちの素質がいかに不足しているかを痛感している。(兄弟姉妹たちがこのせいで後ろ向きにならないことを望む。これは単なる現状である。)実際の生活の中で、わたしはわたしたちの持っているものやわたしたちのあり方が、すべて非常に遅れていることをはっきりと見てきた。主要な点について言えば、わたしたちが生活および神との関係においてどう行動するかということであり、二次的な点について言えば、わたしたちのあらゆる思想や考えのことである。これらはすべて客観的に存在するものであり、言葉やごまかしで隠し

おおせるものではない。そのためわたしがこのように言うと、ほとんどの人が頷いて認め納得するが、正常な理知を欠いている人はその限りではない。その種の人、わたしのこうした見解を受け容れることができない。おそらく、そうした人々を大っぴらに正真正銘の獣と呼ぶわたしが無礼すぎるのだろう。それはそうした人々が、赤い大きな竜の国では最も下等であり、豚や犬のようなものだからである。彼らより素質が劣る者はなく、彼らは神の前に出るに値しない。おそらくわたしの言葉はあまりに「厚かましい」のだろう。わたしはわたしの中で働く神の霊を代弁して、こうした獣のような不浄な者を呪い、兄弟姉妹たちがこのために弱められることがないように願っている。もしかするとわたしたちの中にこのような者はいないかもしれないが、いずれにせよ、わたしはそうした者はこのように扱われるべきだと考える。あなたは思うだろうか。

赤い大きな竜の帝国の歴史は数千年に及ぶが、この国は常に墮落していた。そして常に神を拒んできたため、神の呪いと怒りを買ひ、そして神の刑罰を受けた。神に呪われたこの国は常に人種差別の対象となり、現在もまだ遅れた状態にある。わたしたちが生まれた国は、ありとあらゆる不浄な悪霊に満ちており、悪霊は結果として見境なくこの地を支配しようとしている。そのことは、この国に生まれた者が汚されることを意味している。人々の習慣、風習、思想、概念は遅れた古風なものなので、彼らは神に関してあらゆる観念を作り上げ、それを現在に至るまで捨て去ることができずにいる。特に、人々は神の前では特定の行動を取り、背後では別の行動を取って、サタンを奉ることを神に仕えることだと勘違いしている。これは彼らが最も遅れた者であることを示している。神は中国本土で非常に多くの働きを行い、多くの言葉を語ってきたが、人々はいまだにまったく愚鈍かつ無関心である。人々は従来どおりの仕事をしており、神の言葉をまったく理解していない。神が未来も希望もないと宣言したとき、夏の盛りで活気に満ちていた教会は、即座に凍て付く冬に入った。人々の真の姿が白日の下に曝され、それまでの信念、愛、強さはすべて跡形もなく消え去った。そして現在も、生命力を取り戻した者はいない。人々は口では神を愛すると言い、心の中でもあえて不平は言わないが、いずれにしても、彼らの心にその愛はない。これはどうしたことか。兄弟姉妹たちなら、この事実を認めるだろうと思う。願わくば神がわたしたちを啓き、わたしたち皆が神の素晴らしさを知り、心の底から神を愛し、神に対する愛を皆がさまざまな立場から表現できるようになりますように。神を真摯に愛する揺るぎない心を、神がわたしたちに授けてくれますように。これがわたしの望みである。しかしこうは言うものの、わたしはわたしと同じくこの不浄の地に生まれた兄弟姉妹たちに少し同情している。そして

それゆえに、わたしは赤い大きな竜に対する憎しみを覚えるようになった。この竜はわたしたちの神への愛を妨げ、将来の見通しに対する貪欲さを引き出す。またわたしたちをそそのかして否定的にし、神に反抗させる。これまでわたしたちを騙し、墮落させ、荒ませて、心から神の愛に報いることができないようにしてしまったのは、この赤い大きな竜である。わたしたちの心には意欲があるものの、それにもかかわらず、わたしたちは無力である。わたしたちは皆竜の犠牲者である。このためわたしは心の底からこの竜を憎んでおり、滅ぼす日を待ちきれずにいる。しかし考え直してみると、それは無駄な努力であり、神に困難をもたらすだけであろう。ゆえにわたしは、神の旨を行うことに心を定め、神を愛するという言葉に戻ることにする。これがわたしの歩んでいる道であり、神に造られた者として歩むべき道であり、わたしが採るべき生き方である。これはわたしの心からの言葉であり、兄弟姉妹たちがこの言葉を読んで何らかの励みを得てくれることを願っている。そうすればわたしの心は多少の安らぎを得ることができる。わたしの目標は、神の旨を行うことで光に満ちた有意義な生涯を送ることだからだ。それによってわたしは何も悔いることなく、満足して安らかに死ぬことができるだろう。あなたもそうすることを望むだろうか。あなたもそのような決意を持つ者だろうか。

「東アジアの病んだ者」と呼ばれる人々の中で神が働くことができるのは、神の偉大な力の現れであり、神が謙遜で隠れた者だからである。神のわたしたちに対する辛辣な言葉や刑罰にこだわらず、わたしたちは神の謙遜を心の底から讃美し、そのために終わりの時まで神を愛するべきである。数千年にわたりサタンに拘束されていた人々は、常にサタンの影響下で生きており、サタンと訣別できずにいる。彼らは暗中模索と苦闘を続けてきた。かつて人々は香を焚き、頭を垂れてサタンを奉り、家族や俗世のしがらみだけでなく、社会的な交流にも固くしばられていた。それらを打ち捨てることはできなかったのである。このような食うか食われるかの社会で、誰がどこで有意義な人生を見出すことができようか。人々が物語るのは苦難の人生だが、幸いにも神はこのような罪なき者を救い、そのいのちを神の庇護下に置かれたので、わたしたちの生活は喜びで満たされ、もはや悩みに満ちてはいない。現在まで、わたしたちは神の恵みの中で生活を続けてきた。これは神の祝福ではないか。誰が厚かましくも神に贅沢な要求をすることができようか。神に与えられたものはそんなに少ないか。あなたはまだ満足しないのか。わたしは今や、神の愛に報いるべき時が来たと思っている。わたしたちは神への信仰の道を歩むことで、多くの嘲笑、罵倒、迫害の対象となるかもしれないが、それは有意義なことだと信じている。これは栄誉であって恥ではなく、何が起ころうともわたした

ちが享受する祝福は数多い。これまでの幾度にもわたる落胆の中で、神の言葉は安らぎをもたらし、悲しみはいつの間にか喜びに変わっていた。幾度にもわたる欠乏の中で、神は祝福をもたらし、わたしたちは神の言葉を通して養われてきた。幾度にもわたる病の中で、神の言葉がいのちをもたらし、わたしたちは危険から解放され、安全な場所へと逃れてきた。あなたは気付かぬうちに、こうした非常に多くのことを享受してきたのだ。それを一つも覚えていないというのか。

道…… (3)

わたし自身の生活において、わたしは常に自分自身を身も心も全て神に捧げることをいとわない。そうすればわたしの良心の呵責はなく、多少安心できる。いのちを追い求める者は、まず自分の心を全て神に捧げなくてはならない。これが前提条件である。わたしは兄弟姉妹がわたしと共に「神よ、わたしの心が全てあなたに向かい、わたしの霊があなたに動かされ、わたしが心と霊においてあなたの愛しさを見、地にある者があなたの麗しさを見る祝福を受けることができるよう、天にあられるあなたの御霊が、地にあるわたしたちに恵みを授けてくださいますように。神よ、わたしたちの愛が長く続いて変わることがないように、あなたの御霊が再びわたしたちの霊を動かしてくださいように」と神に祈ることを望む。神がわたしたち全員の中において行うのは、最初にわたしたちの心を試すことであり、わたしたちが自らの心を神に注ぐ時、神はわたしたちの霊を動かし始める。神の愛しさ、至高、偉大さを理解できるのは、霊の中のみである。これが人間の中における聖霊の道である。あなたにはこんな生活が有るであろうか。あなたは聖霊の生活を経験したであろうか。あなたの霊は神に動かされたであろうか。聖霊が人々の中でいかに働くかを見たことがあるであろうか。あなたは自らの心を全て神に捧げているであろうか。心を全て神に捧げると、聖霊の生活を直接経験することができ、神の働きが明らかにされ続けることがかなえられる。この時、あなたは聖霊に用いられる者となることが出来る。あなたはそのような者となることを望むであろうか。わたしの記憶では、わたしが聖霊に動かされて自分の心を初めて神に捧げた時、わたしは神の前に崩れて「神よ、わたしがあなたの救いを認識できるように、わたしの目を開かれたのはあなたです。わたしは自らの心を全てあなたに捧げることを望み、あなたの御旨が行われることのみがわたしの願いです。わたしの心があなたの御前で認められ、あなたの御旨を行うことがわたしの唯一の望みです」と叫んだ。この祈りはわたしにとって最も忘れ難いものである。わたしは深く感激し、神の御前で号泣した。それは救われた者としてわたしが神の御前で最初に成功させた祈りであり、またわたしの最初の念

願であった。その後、わたしは聖霊により頻繁に動かされた。あなたにはこうした経験が有るであろうか。あなたの中で聖霊はどのように働いたであろうか。神を愛することを求める人は誰もが、程度の差こそあれ、こうした経験があるとわたしは思うが、皆それを忘れてしまう。このような経験をしたことがないと誰かが言った場合、それはその人が未だに救われずにサタンの領域にいることを示す。聖霊がすべての人の中で行う働きは、聖霊の道であり、神を信じて求める者の道でもある。聖霊が人において行う働きの最初の段階は、彼らの霊を動かすことである。その後、人は神を愛し始めていのちを追い求め、この道を歩む者はみな聖霊の流れの中に存在する。これは中国本土のみならず、全宇宙における神の働きの流れである。神は全人類に対してこの働きを行う。これまで一回たりとも動かされたことがない場合、それはその人が復興の流れの外部にいることを示す。わたしは心の中で絶え間なく神に祈り、ありとあらゆる人が神によって動かされ、この道を歩むよう、神が全ての人を動かすことを願う。おそらく、これはわたしの神に対する些細な願いかも知れないが、神はそれを行われると信じている。わたしの兄弟姉妹全員がこのために祈りを捧げ、神の旨が行われ、神の働きが間もなく完了して天にある神の霊が安らかとなるよう祈ることをわたしは望む。これはわたし自身の僅かな望みである。

神は悪魔の都のひとつで働きを行うことができるのだから、宇宙全体に無数にあるその他の悪魔の都でも働きを行えるに違いないとわたしは思う。わたしたち最後の時代の人間は、神の栄光の日を迎えることは確実である。これは「最後まで付き従うことが救いにつながる」ということである。神の働きのこの段階において神に取って代われる者はいない。それが可能なのは神のみである。なぜなら、それは特別なものだからである。それは、征服の働きの段階であり、人間が他の人間を征服することは不可能だからである。人間を征服出来るのは、神自身の口から出た言葉と、神が直接に行なう業だけである。全宇宙の中で、神は赤い大きな竜の国を試験の場として用い、その後は宇宙のあらゆる所でこの働きに乗り出す。このようにして、神は宇宙全体で一層大いなる働きを行い、宇宙の全ての人々が神の征服の働きを受けるであろう。あらゆる宗教や教派の人々が、この段階の働きを受けねばならない。これは通らねばならぬ道であり、誰も避けられない。あなたは神により託されたものを受け入れる覚悟があるであろうか。聖霊により託されたものを受け入れることは、栄光あることだとわたしは常に感じている。わたしの見方では、それは神の人間に対する最大の信頼である。神が宇宙のあらゆる所で、そして上の領域において讃えられ、わたしたちの人生が無駄にならないよう、わたし

の兄弟姉妹がわたしと共に懸命に努力し、神からのこの使命を受け入れることを願う。わたしたちは神のために何かしらの行動を取るか、あるいは誓いを立てるべきである。神を信じているが追求する目的を持っていない場合、人生は無に帰する。そして死ぬ時が来ると、見えるのは青空と埃っぽい地だけである。それは有意義な人生であろうか。神の要求を生きているうちに満たせるのであれば、それは素晴らしいことではなかろうか。あなたが常に問題を求め、落ち込んでいるのはなぜだろうか。そうすることで、神から何か得られるだろうか。また、神はあなたから何か得られるだろうか。わたしが神にした約束においては、わたしはただ自分の心を神に捧げ、自分の言葉で神を騙さない。わたしはそのような事をしない。わたしはただ天にある神の霊が安まるように、心から愛する神を慰めたいだけである。心は貴重かもしれないが、愛はそれ以上に貴い。神が受け取るのが、わたしが持っているもののの中で最も美しいものであるように、またわたしが神に捧げる愛により神が満足するように、わたしは自分の心の中で最も貴い愛を神に捧げることを望んでいる。あなたは神に愛を捧げ、神に喜ばれることを望んでいるであろうか。そうすることを自分自身の生存のための資本にすることを望んでいるであろうか。わたしが経験から理解したことは、神に捧げる愛が多ければ多いほど、一層大きな喜びと共に生きていくと感じ、限りない強さがあり、心身のすべてを犠牲とすることをいとわず、神をこれ以上愛することは不可能であると常に感じる、ということである。あなたの愛は、些細な愛であろうか、それとも無限で計り知れない愛であろうか。真に神を愛したいのであれば、常に一層多くの愛で神に報いるであろう。その場合、何が神に対する自分の愛を阻めるであろうか。

神は人間の愛を全て貴いと考える。神を愛する者全員に対して、神は一層多くの祝福を与える。なぜなら、人間の愛は極めて得難く、極めて寡少であり、殆ど見つからないからである。宇宙全体において、神は人間に神の愛に応えて神を愛するように要求したが、現在の時代に至るまで、神の愛に本当の愛で応えた者は数少ない。わたしが覚えている限りでは、ペテロはそのひとりであったが、ペテロはイエス本人に導かれており、自分の愛を全て神に捧げたのは、ペテロの死の時であり、それをもってペテロの人生は終わった。ゆえに、こうした忌まわしい条件の下、神は宇宙における働きの範囲を狭め、赤い大きな竜の国を実例の場として用いると共に、その活力と努力の全てを一箇所に集中した。自身の働きをより効果的にし、自身の証しにより大きな益をもたらすためである。そうした二つの状況下において、神は宇宙全体における自身の働きを中国本土の最も素質に劣る人々へと移行し、愛による征服の働きを開始し、それらの人々が神を愛

すことが出来るようになった後、次の段階の働きを行うことが出来るようにした。これが神の計画である。こうすることで神の働きの成果は最大となる。神の働きの範囲には中核と限度の両方がある。神が払った代償がいかに大きいか、神がわたしたちに対して働きを行うための努力がいかに大きいか、わたしたちの時が来たことは、明らかである。これはわたしたちに与えられた祝福である。ゆえに、人間の観念に則していないのは、わたしたちが好ましい場所に生まれたことを西洋人が羨望しているが、わたしたちが自分達を賤しくみずばらしいと考えていることである。神がわたしたちを引き上げているのではないのか。常に踏みつけにされてきた赤い大きな竜の子孫が西洋人から尊敬されている。これはまさにわたしたちに与えられた祝福である。わたしがこのことを考える時は、神の優しさ、尊さ、親密さに圧倒される。このことは、神が行なうすべてことは人間の観念と相容れないことを示している。そのような人はみな呪われているにもかかわらず、神は律法による制限に縛られておらず、働きの中心を意図的にこの地域へと移した。わたしが喜びと限りない嬉しさを感じるのは、そのためである。イスラエルの人々の祭司長と同様、この働きを主導する役を担う者として、わたしは神の霊の働きを直接行い、霊に直接仕えることが出来る。これはわたしの祝福である。誰が敢えてこのような事を考えるであろうか。しかし現在、それがわたしたちに予期せずして起こった。それは真に大いなる喜びであり、祝うに相応しいことである。糞土の中にあるわたしたちが大いに神のために役立ち、神の愛に報いることが出来るよう、神が引き続きわたしたちを祝福し、引き上げることをわたしは願う。

神の愛に報いることが、現在わたしが歩んでいる道であるが、それは神の旨でも、わたしが歩むべき道でもないと感じる。神の旨は、神に大いに使われることであり、それが聖霊の道である。わたしは誤解しているかも知れない。これが、ずっと前に神の前で決意を固めた時以来わたしが歩んでいる道であるとわたしは思う。出来るだけ早くわたしが入るべき道に入り、神の旨を満足させることが出来るよう、神に導かれる事を望んでいる。他人がどう思おうと、神の旨を行うことが最も重要であり、わたしの人生において最も重要な事だとわたしは信じる。わたしが有するこの権利を奪うことが出来る者はいない。これはわたし個人の考え方であり、それを理解できない者もいるであろうが、誰に対しても自分の考えを正当化する必要はないと思う。わたしは進むべき道を進むつもりだ。ひとたびその道を見分けたら、その道を進み、引き下がらない。ゆえに、先述した通り、わたしは、神の旨を行うことを決意した。兄弟姉妹がわたしを非難しないことを期待する。全体として、わたしの個人的見解では、他人は好きなように言うであ

ろうが、神の旨を行うことは不可欠であり、その上で制約を受けるべきではないとわたしは感じる。わたしが神の旨を行う上で誤ることはあり得ず、それを行うことを自分自身の利益に基づいて計画することは出来ない。神はわたしの心の中を見透かしていると思う。それでは、あなたはこれをどう理解すべきであろうか。あなたは自分の全てを神に捧げることをいとわないであろうか。神により用いられることをいとわないであろうか。あなたが決心したことは、神の旨を行うことであろうか。兄弟姉妹が、わたしの言葉から幾ばくかの支援を得られることをわたしは願っている。わたし自身の意見は極めて表層的だが、それでもわたしたちが皆、障壁無く心から会話できるように、また神がわたしたちの中に永遠に残られるように、わたしはわたしに言えることを述べる。この言葉はわたしの心からの言葉である。さて、本日のわたしの心からの言葉は、以上である。兄弟姉妹が引き続き懸命に努力し、神の霊が常にわたしたちを見守られていることを願っている。

道……（４）

人々が神の愛しさを見出し、現代において神を愛する道を探求できること、そして現在における神の国の訓練を喜んで受け入れていることは、いずれも神の恵みであり、それ以上に神が人間を高めているのである。このことを考えるたび、わたしは神の愛しさを強く感じる。神はわたしたちを心から愛している。そうでなければ、誰が神の愛しさを見出せるだろう。こうして初めて、この働きがどれも神自身により直接行なわれていること、および人々が神により導かれ、指揮されていることを理解できる。わたしはこれについて神に感謝し、兄弟姉妹もわたしと共に神を讃美してもらいたいと思う。「至高の神よ、あなたにすべての栄光がありますように。あなたの栄光が倍増し、選ばれてあなたのものとなったわたしたちのうちにその栄光が現われますように」。神はわたしを啓いた。わたしたちが遠い昔に予定されていたこと、および神が終わりの日にわたしたちを得て、それによって宇宙と万物がわたしたちを通して神の栄光のすべてを見られるようにしたいと望んでいたことを、神はわたしに示したのである。ゆえに、わたしたちは六千年にわたる神の経営（救いの）計画の結晶であり、宇宙全体における神の働きの見本であり標本である。神がどれほどわたしたちを愛しているか、そして神がわたしたちにおいて行なう働きや神が語ることは、過去の時代に比べて百万倍以上であることを、わたしはいま初めて認識した。イスラエルにおいて、あるいはペテロにおいてさえも、神はこれほど多くの働きを自ら行なったり、ここまで多くの言葉を語ったりはしなかった。そのことは、わたしたち、すなわちこの集団が極めて恵まれていること、過去

の聖徒たちとは比較にならないほど恵まれていることを示している。最後の時代の人々は祝福されていると神が常に述べてきたのはこのためである。他人が何と言おうと、わたしたちは神に最も祝福されているとわたしは信じている。わたしたちは、神から授かった祝福を受け入れるべきである。神に不平を言う者もいるかもしれないが、これらの祝福が神に由来するものなら、そのことは、わたしたちがそれにふさわしいことを証明しているとわたしは信じる。他人がわたしたちに不平を言ったり、わたしたちに不満だったりしても、他の誰も神からわたしたちに与えられた祝福を受け継いだり、それをわたしたちから取り去ったりすることはできないと、わたしはいまなお信じている。神は他ならぬわたしたちにおいて働きを行い、差し向かいで語るのだから、自分の望み通りにしている。それに人々が納得していないのであれば、それは自ら問題を引き起こしているだけなのではないか。そうすることで、自分が軽蔑されるようにしているのではないか。わたしがそのようなことを言うのはなぜか。それは、わたしはそのことを深く理解しているからである。神がわたしにおいて行なう働きを例にとろう。その働きを受けられるのはわたししかいない。他の誰にできようか。わたしはこの使命を神から託されるほど幸運だったわけだが、他の誰がそれを思いつきでできようか。しかしわたしは、兄弟姉妹がわたしの心を理解してくれることを願う。わたしは自分の実績を自慢しているのではなく、一つの問題を説明しているのである。わたしたちの心が神の前で清められるよう、すべての栄光が神に帰すこと、そして神がわたしたち一人ひとりの心を見守ることをわたしは望む。自分が完全に神のものとされ、祭壇の上に捧げられる純粋な乙女となること、そしてそれ以上に、羊の従順さを備え、全人類の前に聖なる霊体として現われることを、わたしは心から願う。これはわたしの約束であり、わたしが神の前で示した誓いである。わたしはその約束を果たし、これを通して神の愛に報いることを望む。あなたも喜んでそうするだろうか。わたしのこの約束はより多くの若い兄弟姉妹に活力を与え、より多くの若者に希望を与えると信じる。わたしにとって、神は若者を取りわけ重要視しているように思える。わたしの偏見かもしれないが、若者には将来への見込みと希望があると常を感じる。神は若者に対してより多くの働きを行なうように思える。若者には洞察と知恵がなく、生まれたての子牛のように威勢がよくて軽薄かもしれないが、長所がまったくないわけではないと思う。若者には若さの純真さがあり、新しい物事をすぐに受け入れるのが見て取れる。若者は傲慢で激しがちであり、衝動的になる傾向が確かにあるものの、そうしたことは新たな光を受け取る若者の能力に影響しない。なぜなら、若者が時代遅れの古い物事にしがみつくと減多にないからである。わたしが若者に無限の将来性を見出し、また彼らの活力を見るのはこのためであ

り、そうしたわけで彼らに対して優しい気持ちになるのである。わたしは年長の兄弟姉妹を嫌ってはいないが、彼らに関心を抱いているわけでもない。そのことについては心から謝罪する。今述べたことは失礼で配慮に欠けた発言かもしれないが、あなたがた全員がわたしの無鉄砲さを許してくれることを望む。なぜなら、わたしは若すぎて自分の話し方に注意を払うことができないからである。しかし、本当のことを言うと、年長の兄弟姉妹もやはり役割を果たしており、まったく役に立たないということはない。なぜなら年長の兄弟姉妹は問題を扱う経験があり、着実に物事に対処し、あまり多くの間違いを犯さないからである。これらは年長の兄弟姉妹の強みではないだろうか。神の前で全員がこう言おう。「神よ、わたしたちがみなそれぞれの立場で自分の役割を果たし、あなたの御旨のために最善を尽くせますように」。それが神の旨に違いないとわたしは信じる。

わたしの経験から言うと、この流れに公然と反対する人、つまり神の霊に直接反対する人の多くは年長者である。これらの人たちは非常に強い宗教的観念をもっており、事あるごとに神の言葉と陳腐な物事を比較し、過去に受け入れられた事柄を神の言葉と一致させようとする。彼らは馬鹿げてはいないだろうか。そのような人たちが神から託された働きを行なえるだろうか。神は自分の働きにおいてそのような人たちを使えるだろうか。聖霊には日々働くにあたっての方法がある。人々が時代遅れの物事に固執するのであれば、彼らが歴史の舞台から押しのけられる日が来るだろう。神は自身の働きの各段階において、新しい人々を用いる。廃れた物事で他人に指導する人は、人々に破滅をもたらすのではないか。その人たちは神の働きを遅らせているのではないか。そうであれば、神の働きはいつ完了するのか。わたしが今述べたことについて、何らかの観念を抱く人がいるかもしれない。おそらく彼らは納得しないだろう。しかし心配しないでほしい。近い将来、このようなことが数多く生じ、それらは事実でしか説明できない。重要人物や一流の牧師、あるいは聖書の解説者を訪ねて、この流れを彼らに説こう。最初、彼らが公然と抵抗することはないに違いない。しかし、聖書を取り出してあなたに挑むだろう。彼らはあなたにイザヤ書とダニエル書を説明させ、さらに黙示録も説明させるだろう。あなたが説明できなければ、彼らはあなたを拒み、偽キリストと呼び、馬鹿げた道を広めていると言うだろう。一時間後、あなたは濡れ衣を着せられ呼吸もままならない。それは公然たる抵抗ではないだろうか。しかし、それはまだ始まりに過ぎない。彼らが神の働きの次なる段階を妨げることはできず、程なくして聖霊が彼らに受け入れることを強いるだろう。それは止めようのない流れであり、人間には行なうことも想

像することもできない。神の働きは妨げられることなく宇宙全体に広まるとわたしは信じる。それが神の旨であり、止められる者はいない。神がわたしたちを啓き、わたしたちにより多くの新たな光を受け入れさせ、その点に関してわたしたちが神の経営を邪魔することのないように。わたしたちが神の栄光の日の到来を目の当たりにできるよう、神がわたしたちを憐れむように。神が全宇宙で栄光を受ける時はまた、わたしたちが神と共に栄光を得る時でもある。またその時は、共に歩んで来た人々とわたしが別れる時でもあると思われる。兄弟姉妹がわたしと共に大きな声で「神の大いなる働きがすぐに完了し、わたしたちが生きているうちに神の栄光の日を見られますように」と嘆願することをわたしは望む。わたしは生きている間に神の旨を成し遂げることをいまなお望み、また神がわたしたちにおいて働きを続けること、邪魔するものが何もないことを望んでいる。これがわたしの永遠の念願である。神がいつもわたしたちと共にあり、神の愛によってわたしたちのあいだに橋が架けられ、わたしたちの親交がより貴重なものとなるように。愛がわたしたちのあいだの理解を深め、愛がわたしたちをより一層親密にして一切の距離を取り除き、わたしたちのあいだの愛がますます深く、広く、甘美なものになることをわたしは願う。これこそが、わたしの神の旨に違いないとわたしは信じる。兄弟姉妹がわたしと一層近づき、わたしたちが共に過ごす束の間の日々を大切にし、それがわたしたちにとって美しい思い出となることを願う。

中国本土における神の働きにはさらに多くの段階があったかもしれないが、それらは複雑なものではない。そのことを考えると、神の働きの各段階には道理があり、それぞれが神によって直接実行され、誰もがこの働きの中で役割を演じてきた。「一幕一幕」が本当に笑えるものであり、これらの人たちがこうした劇を演じ、その演技が一つひとつの試練において極めて忠実であり、ありとあらゆる人が神の筆によって鮮明かつ完璧に描写され、各人が白日の下に多くを晒されようとは誰が想像しただろうか。しかしわたしは、神が自身の働きを通して人々をからかっていると言っているのではない。それは無意味なことだろう。神の働きには目的があり、神は意義や価値のないことは決して行なわない。神が行なうすべてのことは、人々を完全にし、彼らを得るために行なわれる。そのことから、神の心がひとえに人間の恩恵のためであることをわたしは真に理解している。わたしはそれを劇と呼んだかもしれないが、その劇は実生活からとられたものだとも言える。その劇の総合監督である神にとって、人々は神に協力してその働きを完了させるためにいる、というだけのことである。しかし別の意味では、神はこれを用いて人々を自分のものとし、彼らが神をさらに愛するようにさせる。それが神の旨では

ないのか。ゆえに、わたしは誰も懸念を抱かないことを願う。あなたは神の旨をまったく知らないのか。わたしは多くのことを話したが、兄弟姉妹がそれを残らず理解し、わたしの心を誤解しなかったことを願う。あなたがた全員が神のものとされることに、わたしは疑いを抱いていない。人はそれぞれ異なる道を歩む。あなたがたの足許の道が神によって開かれた道であり、そしてあなたがたが神に祈って「神よ、わたしの霊があなたのもとに還れるよう、あなたがわたしを得てくださることを望みます」と言うように。あなたは自分の霊の奥底で神の導きを求める準備ができているのか。

道……（5）

かつて聖霊を知る者はおらず、ましてや聖霊の道について認識している者はいなかった。そのため、人々は神の前で常に愚かにふるまっていたのである。神を信じる人々のうち、ほぼ全員が霊を知らず、その信仰は混乱していると言っても過言ではない。人々は明らかに神を理解しておらず、口では神を信じていると言うかもしれないが、その行動から見れば、本質的に神ではなく自分自身を信じている。わたし自身は実体験として、神が受肉の神を証しするのを見たし、外側から見ると、人々はこれまで神の証しを認めざるを得なかったように見える。かろうじて言えるのは、人々が神の霊に誤りはないと信じているということだけだ。しかし人々が信じているのはこの人ではなく、ましてや神の霊でもなく、自分自身の感情だと思う。それは単に自分自身を信じているということではなかろうか。わたしが語ることは真実である。わたしは人々のことを決め付けるつもりはないが、1つのことは明確にしておかなければならない。人々が今日まで導かれてきたのは、彼らが明瞭に理解しているか混乱しているかによらず、すべて聖霊の働きによるものであり、人が決められるものではないということだ。これはわたしが以前話した、聖霊が人々に信仰を強制しているという事実の一例である。これが聖霊の働き方であり、聖霊の採る道なのだ。人々が本質的に誰を信じているかを問わず、聖霊は人間にある種の感情を強制的に与え、人間が心の中で神を信じるようにする。あなたの信仰はこうしたものではないだろうか。あなたは自分の神への信仰が奇妙なものだと感じないだろうか。自分がこの流れから逃れられないことを、奇妙だと思わないか。これについて考えてみたことはないのか。これはあらゆるしるしや驚異の中でも最大のものではないか。あなたは何度も逃げ出したい衝動に駆られたが、そのたびに大いなるいのちの力があなたを惹き付け、逃げることをためらわせた。そのような状況に遭遇するたび、あなたはいつも泣き出し、どうしてよいかわからなくなる。逃げようとする者もいるが、そうすると心臓に刃を向けられたようで、幽霊に魂を抜かれたように感じ、心が

不安で落ち着かなくなる。そしてその後、覚悟を決めて神の許へ戻らざるを得なくなるのだ。…そんな経験をしたことがあるのではないか。若い兄弟姉妹たちは心を開くことができるので、きっとこう言うはずだ。「そうです、何度もそんな経験をしました。思い出すと恥ずかしいです」と。わたしは日常生活で、若い兄弟姉妹たちを親友として扱うのがいつも嬉しい。彼らは純真さにあふれ、純粹で愛らしいからだ。彼らはまるでわたし自身の仲間のようなのだ。だからわたしはいつも、親友たち全員を集めて、我々の理想や計画について話し合う機会を楽しみにしているのだ。願わくば、神の旨がわたしたちの中で行われ、わたしたちが皆互いに障壁や距離を持たない肉親のようになりますように。そしてわたしたちが皆、こう祈れますように。「神よ、それがあなたの御旨であれば、わたしたちが心の望みを叶えられるよう、適切な環境を授けてください。若く理知に欠けたわたしたちを哀れみ、心の強さを発揮させてください」と。わたしはこれが神の旨だと信じている。なぜなら昔、わたしは神の前で次のように懇願したからだ。「父よ、わたしたち地上の者は常にあなたを呼び求め、あなたの御旨が地上ですぐになされることを願っています。わたしはあなたの御旨を追求する覚悟です。あなたの望むところを行われ、わたしに委託された事をできるだけ早く完了されますように。あなたの御旨が早く実現するのであれば、わたしたちの間に新たな道が開かれることも覚悟しています。わたしの望みはただ、あなたの働きが早く完了することだけです。いかなる規則もそれを止めることはできないと信じています」。これが現在神が行なっている働きである。あなたには聖霊が歩んでいる道が見えないか。わたしは年輩の兄弟姉妹たちに会うとき、いつもこの説明しがたい圧迫感を感じる。彼らに会うと、社会の臭気を放っているのがわかる。彼らの宗教的観念、物事に対処した経験、話し方、言葉遣いなど、すべてが腹立たしい。彼らは「知恵」に満ちていることになっているのだ。わたしはいつもできるだけ彼らと距離を置くようにしている。個人的にわたしは、この世界で生きていくための哲学を備えていないからだ。彼らに会うたび、わたしは疲労困憊し、頭が汗だくになり、時には圧迫感がひどくて息ができなくなることもある。そうした危機的な時に、神はわたしに最適な出口を授けられる。それは単なるわたしの思い違いかもしれない。わたしはただ神に有益なことだけを考えており、神の旨を行なうことが最も重要なのである。わたしはこうした人々から距離を置いているが、彼らと会うことを神が要求するなら、わたしはそれに従う。彼らが忌まわしい者なわけではないが、彼らの「知恵」や観念、この世での処世哲学が非常に不快なのだ。だがわたしは神がわたしに委託したことを完遂するために行くのであり、彼らのやり方を学ぶためではない。神はかつてわたしにこう言った。「地上では父の旨を行ない、父があなたに委託した物事を完

遂することだけに努めなさい。それ以外のことはあなたと無関係である」と。このことを考えると、わたしは少し安心する。わたしには人々の問題はいつも複雑過ぎて、理解もできないし、どうしてよいかわからないからだ。そんなわけでわたしは、このために幾度となく心を乱され、人類を嫌ってきた。人はなぜこれほどまでに複雑でなければならないのか。なぜ単純になれないのか。なぜわざわざそんなにも利口になろうとするのか。わたしが人々に会うときは、ほとんどが神の委託に基づいている。そうでないときも数回はあったかもしれないが、誰がわたしの心の奥底を知ることができようか。

わたしは共にいる兄弟姉妹たちに、心から神を信じるべきであり、自分自身の利益を求めず、神の旨に配慮するようにと、何度も忠告してきた。わたしは神の御前で、なぜ人々は神の旨に配慮しないのだろう、と何度も苦悩の涙を流してきた。神の働きが理由もなく、跡形もなく消え去るなどということがあるだろうか。そしてわたしには次のことも理解できず、これはほとんどわたしの心の中で謎となっているのだが、人々はなぜ聖霊が歩む道をまったく認識せず、以上な人間関係が続けるのだろうか。そのような人々を見ると、わたしは吐き気を催す。彼らは聖霊の道に心を向けず、人の行ないだけに集中している。これで神を満足させられるだろうか。このせいでわたしは悲しくなることがよくある。これはほとんどわたしの重荷になっていて、そして聖霊もまたこのことに動揺している。あなたの心は咎を感じないのか。どうか神がわたしたちの霊の目を開いてくれますように。わたしは人々を導き神の働きに入らせる者として、神の御前で何度も祈ってきた。「父よ、わたしがあなたの御旨を核心に据え、御旨を追求することができますように。あなたがこの人々を得られるよう、わたしがあなたの委託に忠実でありますように。わたしたちを自由の国へと導いてください、わたしたちが霊であなたと接することができるように。わたしたちの心の霊的感覚を目覚めさせてください」と。わたしは神の旨が完了することを願っているので、神の霊がわたしたちを啓き続け、わたしたちが聖霊の導く道を進めるよう、神に間断なく祈っている。わたしの歩む道は聖霊の道だからである。誰がわたしの代わりにこの道を行くことができようか。このためわたしの負担は一層重くなる。わたしは今にも倒れそうな気がしているが、しかし神は決してその働きを遅らせることはないと信じている。神の委託が完了した時、おそらくわたしたちは別れることになるだろう。だからわたしが常に人と違うように感じてきたのは、おそらく神の霊の影響なのだろう。まるで神は何かの働きを行なおうとしているが、わたしはまだそれを把握できずにいるかのようだ。しかしわたしは、地上にわたしの親友たちよりも優れた者はおらず、彼らが神の御前でわたしのために祈ってくれると

信じている。だからわたしは限りなく感謝しているのだ。兄弟姉妹たちには、わたしとともに次のように言ってほしいと思う。「神よ、あなたの御旨が最後の時代に生きる人、すなわちわたしたちの中で完全に顕されますように。そしてわたしたちが霊的生活に恵まれ、神の霊による御業を目にし、神の素顔を見ることができるよう」と。この段階に達したら、わたしたちは真に霊の導きの下で生きることになり、その時初めてわたしたちは神の素顔を見ることができるだろう。つまり、人々はあらゆる真理の真の意味を理解できるようになり、人間の観念ではなく神の霊の旨による啓きに従って、物事を理解し把握するようになる。これは完全に神自身の働きであり、人間の考えは一切含まれない。これが神が地上で明らかにしようとしている行いのための働きの計画であり、神の地上における働きの最終部分である。あなたはこの働きに参加することを望むか。この働きの一部になりたいか。聖霊により完全にされて、霊的生活を享受することを望むだろうか。

今日重要なのは、わたしたちの元来の基盤からさらに深く入り込むことである。わたしたちは真理、ビジョン、そして生活により深く入り込まなければならない。しかし兄弟姉妹たちにはまず、この働きの段階に入るには従来観念を捨てる必要があることを思い出してもらわねばならない。つまり、従来の生き方を変え、新たな計画を立てて、まったく新しい生活を始めなければならないのだ。以前大切にしていた物事に固執し続けるなら、聖霊はあなたの中で働くことができず、神は何とかあなたのいのちを維持できるだけだろう。何も求めず、何にも入らず、計画も立てない人々は、聖霊から完全に見捨てられるだろう。だから彼らは、時代から見捨てられた者と呼ばれるのだ。わたしは兄弟姉妹たちが皆、わたしの心を理解してくれることを願っている。そしてさらに多くの「新参者」が立ち上がり、神と連携してこの働きを共に完了してくれることを願っている。わたしは神がわたしたちを祝福してくださると信じている。そしてまた、神がわたしにさらに多くの親友を授けてくださり、わたしがあらゆる地の果てまで歩き通して、わたしたちの間に一層大きな愛が生まれることを信じている。さらにわたしは、神がわたしたちの努力のゆえに、神の国を拡大してくれるだろうと信じている。わたしたちのこうした努力がかつてない水準に達し、神がより多くの若者を得ることができるよう。わたしは皆さんと共に、このことをより長く、絶え間なく祈り続けたいと思う。わたしたちが生涯神の御前で生き、できるだけ神の近くにいられるように。わたしたちの間に二度と何も問題が起こりませんように、そしてわたしたち全員が神の御前で、「共に努力し、最後まで忠実に、決して別れず、常に共にある」という誓いを立てられ

ますように。兄弟姉妹たち全員が神の御前でこのことを約束できますように。わたしたちの心が決して変わらず、決意が決して揺るがないように。神の旨が実現されるよう、わたしはもう一度繰り返す。皆で共に努力し、全力を尽くそう。神は必ずわたしたちを祝福されるだろう。

道……（6）

わたしたちが現代に至ったのは神の働きのおかげであり、それゆえわたしたちは神の経営（救いの）計画における生存者である。わたしたちが現在に留まっているのは神の大いなる称揚である。なぜなら、神の計画によると、赤い大きな竜の国は滅ぼされるべきだからだ。しかし、神はおそらく別の計画を立てたか、あるいは働きの別の部分を実行することを望んでいるのだとわたしは思う。そのため今日でも、わたしはそれを明瞭に説明できない。それは解けない謎のようなものである。しかし概して言えば、わたしたちのこの集団は神により予め定められていたのであり、わたしは今も、神はわたしたちに何か他の働きを行なうものと考えている。わたしたち全員で天にこう求めよう。「あなたの御旨が成就し、あなたがもう一度わたしたちの前に姿を現わされ、御隠れにならず、あなたの栄光と御顔をわたしたちがより鮮明に見られますように」。神がわたしたちを導く道は真っ直ぐでなく、深い穴だらけの曲がりくねった道であると、わたしは常に感じている。さらに、その道が岩だらけであればあるほど、わたしたちの愛情に満ちた心が示されると神は言う。しかし、わたしたちの中にそのような道を開ける者は誰一人としていない。わたしはこれまでの経験において、岩だらけの危険な道を何度も歩き、多大な苦難に耐えてきた。時として悲しみに打ちひしがれ、泣き叫びたくなることさえあったが、今日までこの道を歩んできた。これは神に導かれた道だと信じ、すべての苦難に耐えて前に進み続けている。なぜならこの道は神が定めたものであり、誰がそこから逃れられようか。わたしは、祝福を受けることは求めない。わたしが求めるのは、神の旨に沿ってわたしが歩むべき道を歩めることだけである。他者を真似て他者の歩む道を歩くことは求めない。わたしが求めるのは、わたしに定められた道を、忠誠を尽くして最後まで歩むことだけである。わたしは他者の助けを求めない。率直に言うと、わたしもまた他者を助けられない。この問題について、わたしは極めて敏感なようである。他者が何を考えているか、わたしにはわからない。なぜなら、個人がどれほど苦しいかなければならないのか、自身の道でどれほどの距離を歩まなければならないのかは、神によって定められており、誰も他者を実際に助けることなどできないと、わたしは常に信じてきたからである。熱心な兄弟姉妹の中には、わたしには愛がないと言う者もいる

かもしれないが、これがわたしの考えである。人は神の導きを頼りに自らの道を歩むのであり、兄弟姉妹の大半はわたしの心を理解するとわたしは信じている。そして、わたしたちの愛がより純粋になり、友情がより貴いものとなるよう、神がこの側面においてさらに多くの啓きをわたしたちに与えることを望む。願わくは、この題目についてわたしたちが混乱することなく、より明確な理解を得るばかりで、その結果、神の主導という基盤の上に人間関係が築かれんことを。

神は中国本土で長年にわたり働きを行ない、あらゆる人のために大きな代価を払い、遂にわたしたちを今日いるところへと到達させた。あらゆる人を正しい道へと導くために、この働きはすべての人が最も弱い状態から開始されなくてはならないと、わたしは考える。そうして初めて、人は最初の難関を突破して前進し続けることができる。その方が良いのではないか。中華民族は数千年にわたって墜落しながらも、現在まで生き延びた。ありとあらゆる「病毒」が絶え間なく進行し、至る場所に疫病のように広がっている。人々の関係を見れば、どれほど多くの「病原菌」が人々の中に潜んでいるか一目瞭然である。神にとって、そのように固く閉ざされ、病毒に汚染された地域で働きを進展させることは極めて難しい。人々の性格、習慣、物事の行ない方、生活で表わすあらゆること、そして人間関係がすべてぼろぼろになっており、人の知識と文化が神によって残らず死刑を宣告されているほどである。人々が家族や社会から得た様々な経験は言うまでもない。これらはすべて神の目から見て罪に定められてきた。なぜなら、この地に住む人々はあまりに多くの病毒を飲み食いしてきたからである。それは人々にとって日常茶飯事であり、そのことを何とも思っていない。ゆえに、ある場所で人々が墜落すればするほど、彼らの人間関係はさらに異常になっていく。人々の関係には陰謀が蔓延し、互いに策略を巡らせ、虐殺し合い、それはあたかも悪魔の共食いの城のようである。そのような幽霊のはびこる恐怖に満ちた場所で、神の働きを実行するのは極めて難しい。人々に接しなくてはならないとき、わたしは絶え間なく神に祈る。なぜなら、人々に接するのが怖く、わたしの性質が彼らの「尊厳」を侵すことを非常に恐れるからである。わたしは、それらの不浄な霊が無鉄砲に振る舞うのを心の中で常に恐れているため、わたしを守りたまえと絶えず神に祈る。ありとあらゆる異様な関係がわたしたちの間で顕在化しており、そのすべてを見ているとわたしの心の中に嫌悪感が生まれる。なぜなら、人々は自分たちのあいだで人間に関する「取引」に絶えず没頭しており、神について一切考えないからである。わたしはそのような人たちの振る舞いを骨の髄まで嫌う。中国本土の人々に見られるのは墜落したサタンの性質でしかないので、神がこれらの

人に働きを行なうにあたり、彼らの中に価値あるものを見出すのはほとんど不可能である。すべての働きは聖霊によって行なわれているのであり、聖霊が人々の心をさらに動かし、彼らの中で働いているに過ぎない。それらの人を役立たせるのは不可能に近い。つまり、聖霊が人々の協力を加えつつ、人々の心を動かす働きを行なうことはできないのである。聖霊は人々の心を動かそうとひたすら努めるが、そうしたところで、人々は依然麻痺して感受性がないままで、神が行なっていることが何であるか見当もつかない。それゆえ、中国本土における神の働きは、天地創造の働きに匹敵する。神はすべての人を生まれ変わらせ、彼らのあらゆる面を変える。なぜなら、人々の中に価値あるものが一切存在しないからである。これは胸の張り裂けることである。悲しみの中、わたしはそうした人々のために頻繁に祈る。「神よ、あなたの偉大な力がこの者たちの中に示され、あなたの霊が人々の心を大いに動かし、麻痺して頭の鈍いこれらの病人が目覚め、もう二度とぼんやり眠ることなく、あなたの栄光の日を見られますように」。みんなで神の前に出て祈ろう。「神よ！ わたしたちの心が完全にあなたに向けられ、わたしたちがこの不浄の土地から逃れ、立ち上がり、あなたがわたしたちに託したことを成し遂げられるよう、今一度わたしたちを憐れみ、慈しんでください」。わたしたちが神の啓きを受けられるよう、神が今一度わたしたちの心を動かすことをわたしは願う。そして神がわたしたちを憐れみ、それによりわたしたちの心が次第に神を向き、神がわたしたちを得られることを願う。これはわたしたち全員の願いである。

わたしたちの歩む道は、完全に神に定められている。要するに、わたしはこの道を必ず最後の最後まで歩むと信じている。なぜなら、神が絶えずわたしに微笑みかけ、わたしは常に神の手により導かれているようだからである。したがって、わたしの心は他の何物にも汚されることがなく、わたしは常に神の働きを心に留めている。わたしは、神がわたしに託すことを献身的に全力で遂行し、わたしに割り当てられていない仕事に干渉することも、その仕事を行なう他者と関わることも一切しない。なぜなら、それぞれの人間は自分の道を歩むべきであり、他者に介入すべきでないと考えているからである。それがわたしの見解である。それはおそらくわたし自身の性格によるものであるが、兄弟姉妹がわたしを理解し、赦すことを願う。と言うのも、わたしは父の命令に逆らうことをするつもりは決してないからである。わたしはあえて天の旨に反抗することはない。「天の旨には反抗できない」ということをあなたは忘れたのか。わたしのことを自己中心的だと思う人もいるかもしれないが、自分は神の経営の働きの一部を実行するため特に来たのだと、わたしは信じている。わたしは人間関係に巻き込まれるために来

たのではないし、他者とうまく付き合っていく方法を学ぶつもりなどない。しかし、神から託されたことにおいて、わたしには神の導きがあり、信仰と執念をもってその仕事を成し遂げる。わたしはあまりにも「自己中心的」かもしれない。しかし、神の公正かつ無私無欲の愛を感じること、神と協調することに、誰もが進んで取り組むことをわたしは願う。神の威厳が再び降臨するのを待っていてはならない。そんなことは誰のためにもならない。わたしたちは次のことを考慮すべきだと、わたしは常に考えている。「わたしたちは神を満足させるために、あらゆる手を尽くしてなすべきことを行なわなければならない。わたしたち一人ひとりに神が託すことは異なる。わたしたちはそれをどのように成し遂げるべきか」。あなたは自分の歩む道が何であるかを悟らなければならず、それを明確に理解することが不可欠である。誰もが神を満足させることを望むなら、なぜ自分自身を神に捧げようとししないのか。わたしは初めて神に祈ったとき、自分の心をすべて神に捧げた。親、姉妹、兄弟、同僚など、わたしの周りにいる人たちは、わたしの決意によって心の奥底に押しやられ、わたしにとって一切存在しないかのようにだった。なぜなら、わたしの念頭には常に神があり、神の言葉があり、あるいは神の英知があったからである。こうしたことが常に心の中にあり、わたしの心の中で最も尊い位置を占めていた。したがって、処世哲学で溢れんばかりの人にとって、わたしは冷酷で無感動な人間である。そうした人たちは、わたしの身の処し方、わたしの行ない方、わたしの一挙手一投足に心を痛める。わたしという人物が解けない謎であるかのように、わたしに奇妙な視線を向ける。わたしが次に何を行なうか分からず、心の中で密かにわたしという人物を見定めている。彼らが何をしようと、わたしの道を邪魔することなどどうしてできようか。おそらく彼らは妬んでいるか、うんざりしているか、ばかにしている。それでもやはり、わたしはひどい飢えと渴きを感じているかのように、神の前で祈ることに徹する。この同じ世界にわたしと神しか存在せず、他に誰もいないかのように。外界の力がわたしのすぐそばに絶えず群がっているが、神に心を動かされているという感覚もまたわたしの中に湧き上がっている。このジレンマに陥ると、わたしは神の前に跪いて祈る。「神よ！ あなたの御旨に嫌気がさすなどどうしてあり得ましょうか。あなたの目にはわたしが精錬された金のごとく高潔に見えていても、わたしは暗黒の力から逃れることができません。わたしはあなたのために全人生をかけて耐え忍びます。わたしはあなたの働きを一生の仕事とし、この身をあなたに捧げるのに適した安息の地を与えてくださるよう、あなたに請い求めます。神よ！ わたしは自分をあなたに捧げることを望みます。あなたは人間の弱さをよくご存じです。それなら、なぜわたしから隠れておられるのですか」。その瞬間、わたしは人知れず風に揺さぶられて香る山百

合であるかのような感覚を覚えた。しかし天はすすり泣き、わたしの心も一層深い苦悩を抱えているかのように泣き続けた。すべての力と人間による包囲は晴天の霹靂のようだった。誰がわたしの心を理解できようか。そして、わたしはもう一度神の前に出て、言った。「神よ！ この不浄の地であなたの働きを行なう術はないのですか。なぜ他者は、迫害のない快適かつ協力的な環境にしながら、あなたの心を思いやることができないのですか。わたしは自分の羽を広げたいのに、なぜ飛び去ることがこれほどまでに難しいのですか。あなたはそれをよしとされないのですか」。これについて何日も泣き続けたが、神が悲嘆に暮れているわたしの心に安らぎをもたらすだろうと、わたしは常に信じていた。わたしの懸念を理解する者はいまだかつて一人もいない。おそらくこれは神からの直観であるが、わたしは神の働きのために絶えず心の中で火を燃やしており、息つく間もないのである。わたしは今日まで依然として祈っている。「神よ！ それがあなたの御旨であるなら、あなたのより偉大な働きを実行できるよう、どうかわたしをお導きください。それにより、あなたの働きが宇宙に広まり、あらゆる国と教派に開かれ、わたしの心にささやかな平和がもたらされますように。そして、わたしがあなたのために安息の地に生き、何にも干渉されずにあなたのために働き、生涯をかけて、安らぎの心であなたに奉仕することができるよう」。これがわたしの心の願いである。兄弟姉妹はおそらく、わたしが傲慢で自惚れていると言うだろうが、わたし自身もそのことを認識している。なぜなら、それは事実であるからだ。若者には傲慢さしかないのである。それゆえ、わたしは事実を無視することなく、ありのままを伝えるのだ。あなたはわたしの中に、若者のあらゆる特徴を見るだろうが、他の若者と異なる面も見えるだろう。それは、わたしの落ち着きと穏やかさである。この件を題目として取り上げるつもりはない。神はわたし以上にわたしのことを理解しているとわたしは考える。これらはわたしの心からの言葉であり、兄弟姉妹が気を悪くしないことを願う。わたしたちが心の中の言葉を語り、各人が何を求めるかを考察し、神を愛するわたしたちの心を比較し、わたしたちが神に囁く言葉を聴き、わたしたちの心の中の最も美しい歌を歌い、わたしたちの心の中の誇りを言葉にし、それらにより、わたしたちの人生がもっと美しくなることを願う。過去は忘れ、未来に目を向けよ。神はわたしたちのために道を開くだろう！

道……（7）

わたしたちの実験的な経験において、神自らが何度もわたしたちのために道を切り開くのを目にしてきた。わたしたちの足下にある道がさらに強固で現実的になるようにで

ある。それは神がはるか昔よりわたしたちのために切り開いてきた道であり、何万年もの時を経てわたしたちの世代へと受け継がれてきた道だからである。このようにして、最後まで歩き通すことのなかった先人たちから、わたしたちは道を引き継いできた。道の最終段階を歩むべく、わたしたちは神に選ばれたのである。したがってこの道は神がわたしたちのために特別に用意したのであり、わたしたちが恵まれていようと不運に苦しんでいようと、わたしたち以外には誰もこの道を歩むことはできない。このことについて、わたし自身の識見を追加したい。どこかに逃げようと考えたり、他の道を探そうとしたり、地位をやたら欲しがったり、自分の王国を築こうとしたりしてはならない。これらはみな幻想である。わたしの言葉について何らかの先入観を抱いているかもしれないが、その場合は、そのような混乱状態から脱することを勧める。このことについてはもっと深く考えた方がよい。賢くなろうとせず、また、善悪を取り違えてはならない。そうしないと神の計画が実現したとき後悔することになる。わたしがここで言っているのは、神の国が訪れると、地上の国々は粉々に打ち碎かれる、ということである。その時、あなた自身の計画も消滅し、罰せられるべき人も打ち碎かれるのがわかる。ここにおいて神はその性質を完全に現す。これはわたしにとってあまりに明白なことなので、あなたが後にわたしを責めないように、あなたに伝えるべきだと思う。わたしたちが今日までこの道を歩むことができているのは神の定めによる。したがって、自分自身を特別だと考えたり、逆に不運だと考えてはならない。神の現在の働きについて何人なりとも断言をすることは許されない。さもなくば粉々に打ち碎かれる。わたしは神の働きにより啓かれた。何があろうとも、神はこの集団を完全なものにする。神の働きは二度と変わることなく、神はこの集団を道の終点まで導き、地上における働きを完了させる。わたしたちは全員このことを理解すべきである。ほとんどの人は「先のことを考える」ことが大好きで、その欲求には限りがない。この中に現在の神が抱いている差し迫った心意を理解するものは一人としておらず、皆が逃げることを考えている。まるでただ荒地をさまよいたがる放れ馬のようである。カナンの良き地に定住し、人として生きる道を追求する者はほとんどいない。乳と蜜の流れる地に足を踏み入れたのに、それを享受しないのであれば、一体それ以上の何を望むというのか。真実を明かせば、カナンの良き地の向こうにあるのは荒地ばかりである。人は安息の地に足を踏み入れても、本分を果たすことができない。これではただの淫婦ではなかろうか。神に完全にされる機会を逃すならば、残りの人生を後悔して過ごすことになる。その悔恨は永遠に続く。カナンの地を見つめながらも享受することができず、拳を固く握りしめ、悔いに満ちた死を迎えたモーセのようになる。これを恥ずべきこととは感じないのか。他人から愚弄され

ることを恥ずかしいとは思わないのか。他人にあえて侮辱されようというのか。自分のためにも立派な行いをしたいとは思わないのか。神により完成された高貴で高潔な人間になりたいとは思わないのか。本当に何の志もないのか。あなたには他の道を選ぶ覚悟はない。それなのに、神があなたに定めた道も歩みたくないというのか。大胆にも天の意思に背こうというのか。あなたの「能力」がいかに優れていようと、本当に天に背くことができるのか。わたしたちは自己を正しく知ろうと努める方がよいとわたしは考えている。神が発する一言には天国と地上を変える力がある。では、貧相でちっぽけな人間は神の目にどのように映るだろうか。

わたしの経験によれば、あなたが神に反すれば反するほど、神はその威厳に満ちた性質を顕示し、神があなたに「ふるまう」刑罰は一層厳しいものになる。神に従えば従うほど、神はあなたを愛し守る。神の性質は処罰の器具に似ている。従順であればあなたは安全無事だが、自分を誇示したり策を弄したりと常に試みるならば、神の性質は即座に変化する。神は曇り空の太陽のように、あなたに見えないところから怒りを露わにする。神の性質は六月の天気のようにでもある。空は広く晴れ渡り、水面にはさざ波が広がるかと思えば、突如として流れが速まり荒れ狂う大波になる。そのような神の性質を前にして、あなたはそこまで向う見ずになれるというのか。兄弟姉妹の大半の経験では、白昼に聖霊が働いているあいだは信仰に満ちているが、何の前触れもなく神の霊が離れていくと、苦悩のあまり神の霊がどちらに消えたのかとあちこち探して、夜も眠れなくなってしまう。どんなことをしても、神の霊がどこに行ったかを探し当てることはできない。だが、何の前触れもなく神はあなたの眼前に再び現れる。すると、突然主イエスを再び目にしたペテロのようにあなたは歓喜し、そのあまり叫び出しそうになる。これを何度も何度も経験してきたのに、あなたは本当に忘れてしまったというのか。受肉し十字架にはりつけられ、その後復活して天に昇った主イエス・キリストはいつも、しばらくの間あなたから隠れては一時的にあなたの前に姿を見せる。イエスはあなたの義ゆえにあなたに姿を現し、あなたの罪ゆえに怒りあなたから離れる。では、なぜあなたは神にさらに祈らないのか。五旬節の後、主イエス・キリストが地上で別の使命を持っていたことを知らないのか。あなたは主イエス・キリストが受肉して地上に降り、十字架にはりつけられたという事実しか知らない。あなたが以前信じていたイエスは随分前に働きを他の人に委ね、その働きははるか昔に完了しており、したがって主イエス・キリストの霊は、働きの別の部分を実行するために肉体となって再び地上に降り立っている。このことにあなたは気づいていない。ここで付け加えたいことがある。あなたがたは

今この流れの中にいながらも、はっきり言えば、この人物は主イエス・キリストがあなたがたに授けた「その人」であることを信じている者はあなたがたの中にほとんどいない。あなたがたは神を享受することしか知らず、神の霊が再び地上に降りてきていることを認めず、現代の神は何千年も前のイエス・キリストその人であるということも認めない。だからこそわたしは言う。あなたがたは皆、目を瞑ったまま歩いている。最後にどこにたどり着こうとも、ただそれを受け入れるだけで、まったく真剣ではない。このように、口先ではイエスを信じているものの、神が今日証明する「その人」に露骨に反抗してはばからない。愚かではないだろうか。現代の神はあなたの過ちには関心がなく、あなたを断罪しない。あなたはイエスを信じると言うが、ならばあなたの主イエス・キリストはあなたを大目に見てくれるというのか。神のことを、自分が憂さ晴らしをし、嘘をついて騙す場所だと考えているのではないのか。あなたの主イエス・キリストが再び現れるとき、現在のあなたのふるまいに基づいて、あなたが義であるか悪であるかをイエスは判断する。ほとんどの人はわたしが「兄弟姉妹」と呼ぶものについて、結局は観念を持つようになり、神の働き的手段は変わると信じている。これでは死を招いているのと同じではないのか。神はサタンを神自身として証しすることができるというのか。そうすることは神を断罪することではないのか。誰でも神そのものになれると考えてはいないか。もしあなたが本当に認識していたならば、観念を一切抱かないはずである。聖書には、「万物は神のためにあり、神に帰す。神は多くの子らを栄光に導き、神は我々の指揮官である……故に神はわたしたちを『兄弟たち』と呼ぶことを恥とは思わない」という言葉がある。あなたはこの一節を簡単に暗唱できるかもしれないが、これが実際に何を意味しているかを理解してはいない。あなたは目を閉じたまま神を信じているのではないのか。

わたしたちの世代は恵まれているとわたしは考えている。それは、先人たちが完遂できなかった道を引き継ぐことができ、過去何千年間にわたって在る神、わたしたちのもとと万物の内に在る神の再臨を目の当たりにすることができるからである。この道を歩むことをあなたは想像することなどできなかった。こんなことがあなたにできるだろうか。この道は聖霊が直接導く道であり、七倍に強化された主イエス・キリストの霊が導く道であり、今日の神があなたのために開いた道である。何千年前の過去からあのイエスがあなたの前に再び現れようとは、いくら想像をたくましくしても思いつかなかったはずである。満たされた気持ちにならないのか。誰が神と面と向かって逢うことができるというのか。わたしは、この集団が神からさらに偉大な祝福を受け、神から寵愛され

、神のものとされるようにと祈ることがよくある。しかし、さらに偉大なことを見ることができるように、わたしたちを啓いてくださいと神に懇願しながら、悲痛な涙を流したことも数限りなくあった。常に神を欺こうとして何の志も持たない人や、肉のことに気を取られたり富や名声を得て注目を浴びようとしたりする人を目にして、どうして激しい心痛を感じないでいられようか。どうして人はそこまで理性を欠くことができるのか。わたしの働きには本当に何の効果もないのか。子供が親に対して反抗的で親不孝だったならば、良心がなく、自分のことだけしか考えず、親の気持ちを完全に無視し、成人したとたんに親を家から追い出したならば、親はその時どういう気持ちになるだろうか。子育てのために費やした血と汗と犠牲の数々を思い出し、涙があふれてくるのではないだろうか。そのように、わたしはこれまで数えきれないほど神に祈り、「神よ、あなたの働きゆえにわたしが重荷を背負っているかどうかを知っているのはあなただけです。わたしの行ないがあなたの心意にそぐわないときはわたしを懲らしめ、完全なものにし、わたしに気づかせてください。わたしがあなたに求める唯一のことは、この人たちをさらに動かしてくださることです。それにより、あなたの栄光が間もなく讃えられ、彼らがあなたのものとなり、あなたの働きがあなたの心意を全うし、あなたの計画が少しでも早く実現できるようにです」、と言ってきた。神は刑罰により人を征服することを望まず、人をいつも無理やり導くことを望まない。神は人が秩序正しく神の言葉と働きに従い、それにより神の心意を満たすことを望んでいる。それなのに人は恥を知らず、常に神に反抗している。わたしたちにとって最善なのは、神を満足させる最も単純な道を見つけること、つまり神の采配に完全に従うことだとわたしは考えている。もしこれを本当に達成できたなら、あなたは完全にされる。これは簡単で喜ばしいことではないのか。進むべき道を選びなさい。他人が言うことは気にせず、考え過ぎてはならない。あなたの未来と運命はあなたの手中にあるのか。あなたは世俗的な道を進みたくて、いつも逃げようとしている。しかし、なぜ逃げられないのか。分かれ道で何年も迷った挙句、結局はまたこの道を選んでしまうのはなぜなのか。何年も横道に逸れた後で、自分でも気づかないうちにまたこの家に戻ってきたのはなぜなのか。これはあなたの判断によるものなのか。この流れの中にいるのに、わたしを信じていないならば、聞きなさい。もしここを去るつもりならば、神がそうさせるか、聖霊があなたをどのように動かすかを見なさい。自分でこれを経験しなさい。率直に言うと、不運に苦しむとしても、この流れの中で苦しまなければならない。もし苦難があるならば、今日ここで苦難しなければならない。あなたは他のどこに行くこともできない。このことをはっきり理解しているのか。一体どこに行こうというのか。これは神の行政命令である。神がこ

の集団の人たちを選んだことに意味はないと思うのか。今日の働きにおいて、神は簡単に怒ることはないが、人がその計画を邪魔しようとするならば、神の顔は明るい表情から陰鬱な表情に直ちに変わる。だから、腰を落ち着けて神の計画に服し、神があなたを完全にできるようにしなさい。こうする人だけが聡明である。

道……（８）

神が地上に来て人間と交流し、人々と共に生活するようになってから過ぎた時間はわずか一日や二日ではない。おそらくその間、人々は神のことをかなり知り、神に仕えることについて少なからぬ識見を得て、神への信仰において熟達したかもしれない。いずれにせよ、人々は神の性質を多少なりとも理解し、自分の性質を無数の形で表わしている。わたしの見るところ、人が表わす様々なものは、神が標本として用いるのに十分であり、彼らの精神的活動は神が参考とするのに十分である。これは人と神との協力の一側面かもしれず、人間はそれに気づかぬまま、神の指揮によってごく鮮明に、かつ生き生きとこの演技を行なっている。わたしはこの劇の総合監督として、兄弟姉妹にこれらのことを言っている。つまり、わたしたち各人はこの劇を演じ終えた後、自分自身の考えや感情に語りかけ、この劇の中で人生をどのように経験するかについて話し合うことができる。まったく新種の討論会を開催し、心を開いて自分たちの演技について話し合い、次回の上演時により高水準の演技を見せ、各人が自分の役をできる限り演じて神を失望させないように、神が一人ひとりをどのように導くかを確かめるのもよいかもしれない。兄弟姉妹がこのことを真剣に捉えるよう、わたしは願っている。誰もこれを軽々しく扱ってはならない。なぜなら、役をきちんと演じるのは一日や二日で実現できることではないからである。そのためには、わたしたちが人生を経験し、長期にわたって実生活の深部に達し、様々な生活を実際に経験する必要がある。そうして初めてわたしたちは舞台に上がることができる。わたしは兄弟姉妹に対する希望に満ちており、あなたがたが落胆したり挫けたりせず、神が何をしようとも、火のるつぼのようであると信じている。つまり、決して熱意に欠けることなく、神の働きが完全に現わされ、神が監督する劇が完全に終わるまで、最後まで貫徹できると信じているのだ。わたしがあなたがたに求めることはそれ以外になく、あなたがたが持ちこたえること、結果を気にしてそわそわしないこと、わたしのなすべき働きが成功するようわたしと協力すること、中断させたり妨害したりする者が一人もないことだけを望む。働きのこの部分が完了したとき、神はあなたがたにすべてを明かすだろう。わたしの働きが完了した後、わたしはあなたがたの功績を神の前に示して報告する。そのほうが良くはないか。互いに助け合っ

てわたしたち自身の目標を達成する。これがすべての人にとって完璧な解決策ではなかろうか。今は困難な時代であり、代価を払うことがあなたがたに求められる。わたしが現在監督であるために、あなたがたの中に苛立つ者がいないことを願う。これが、わたしが行なっている働きである。おそらくある日、わたしはもっと適切な「作業部門」に切り替え、あなたがたにそれ以上苦勞させないようにするだろう。あなたがたの見たいものが何であれ、わたしはそれを見せるし、あなたがたの聞きたいことが何であれ、わたしはそれを授ける。しかし、今ではない。現在の働きはこの働きであり、わたしはあなたがたの自由にさせることも、あなたがたに好き放題させることもできない。そうすれば、わたしの働きが難しくなるだろう。率直に言うと、そうしたところで何の効果もなく、あなたがたにとっても利益はない。したがって、あなたがたは今、「不公平」に苦しむ必要がある。わたしの働きのこの段階が完了する日が来たとき、わたしは自由になり、そこまでの重荷を背負わず、あなたがたがわたしに何を求めようと、それに応じるだろう。あなたがたのいのちに有益である限り、わたしはあなたがたの要求を満たす。現在、わたしは重責を担っている。父なる神の命令に背けず、わたしの働きの計画を中断することもできない。業務を通じて私事を管理することも不可能である。あなたがた全員がわたしを理解し、赦してくれることを願う。なぜなら、わたしの行動はすべて父なる神の願いに沿うものだからである。神が何を望もうと、わたしは神に求められたことを何でも行ない、神の怒りを招くつもりはない。わたしはすべきことだけをする。したがって、父なる神に代わり、もう少しだけ堪え忍ぶよう、あなたがたに忠告する。誰も懸念する必要はない。わたしがすべきことを完了させた後、あなたがたは何を望もうともそれを行ない、見たいものを何でも見ることができる。しかしわたしは、行なうべき働きを完了させなければならない。

この段階の働きにおいては、極限の信仰と愛がわたしたちに求められている。些細な不注意から躓くこともあるだろう。と言うのも、この段階の働きは過去のいかなる働きとも異なるからである。神が完全にしているのは人類の信仰であり、それは見ることも触れることもできない。神が行なっているのは、言葉を信仰、愛、そしていのちに変換することである。人々は数百回の精錬に耐えてヨブよりも大きな信仰を得る段階に達しなければならない。一瞬たりとも神から離れず、信じ難い苦難とあらゆる拷問に耐えなければならないのだ。それらの人たちが死ぬまで従順であり、神への大きな信仰を持ったとき、この段階の神の働きは完了する。わたしが担っているのはこの働きなので、兄弟姉妹がわたしの苦境を理解し、わたしに他のことを一切求めないよう願う。これはわ

わたしに対する父なる神の要求であり、わたしはその現実から逃れられない。わたしはなすべき働きをなさねばならない。わたしはただ、あなたがたがこじつけや不正な論理に頼らないこと、さらに識見を得て問題を単純に考えすぎないことを願う。あなたがたの考えは幼稚で純朴過ぎる。神の働きは、あなたがたが想像するほど単純ではなく、神はしたいことをするだけではない。そうであれば、神の計画は台無しになるだろう。あなたがたはそう言わないのか。わたしは神の働きを行なっている。単に人々のために雑用をしているのでも、したいと思うことをしているのでもないし、何かを行なうかどうかを個人的に決めたりしているのでもない。現在、物事はそれほど単純ではない。わたしは監督として行動するために父によって遣わされた。あなたがたは、わたしがそれを自分で決めて選択したと思っているのか。人の考えはしばしば神の働きを阻みがちである。そのため、わたしが一定期間働いた後、人々からの要求が多数あるものの、わたしはそれらを叶えることができず、人々はわたしに関する考えを変えてしまう。あなたがたはみな、そうした自分の考えについて明瞭に理解すべきであり、わたしはそれらを個別に指摘するつもりはない。わたしにできるのは、わたしが行なう働きを説明することだけである。わたしの感情がそのために傷つくことはまったくない。ひとたびそれを理解したら、このことについてどのように考えてもよい。わたしは反論しない。なぜなら、それが神の働き方だからである。わたしにそのすべてを説明する義務はないのだ。わたしは言葉の働きを行ない、また言葉の指示を通じて働き、この劇が演じられるようにすべく来ただけである。それ以外のことについて語る必要はなく、それ以外のことは何もできない。わたしは言うべきことをすべて説明した。あなたがたがどう考えようと構わないし、わたしに関係のないことである。ただ、それでもなお、神の働きはあなたがたが想像するほど単純なものではないことを、あなたがたに思い出させたいと思う。人々の観念に一致しなければいけないほど、その重要性は深まり、人々の観念に一致するものであればあるほど、その価値は失われ、実際の重要性がなくなる。この言葉を慎重に検討してほしい。それについて、わたしはこれだけしか述べないので、あとはあなたがたが自分で分析すればよい。わたしは一切説明しない。

人々は、神が特定の方法で物事を行なうと想像するが、わたしたちがここ一年ぐらいで神の働きに関して見たり経験したりしたことは、人間の観念と本当に一致していただろうか。創世から現在に至るまで、神の働きの段階や規則を把握できた者は一人もいない。仮に把握できたとすれば、これが神の現在の働き方であることを宗教指導者が理解していないのはなぜなのか。今日の現実を理解している人がほとんどいないのはなぜな

のか。このことから、神の働きを理解している者は一人もいないとわかる。人々は神の霊の導きによってのみ行動すべきであり、神の働きに規則を厳格に当てはめてはならない。イエスの姿と働きを取り上げ、神による現在の働きと比較するなら、それはユダヤ人がイエスとヤーウェを一致させようと試みたのと同じことである。そうすることは損ではないか。終わりの日における神の働きがどのようなものになるかは、イエスでも知らなかった。イエスが知っていたのは、自分が成し遂げるべきは磔刑を受ける働きであるということだけだった。ならば、どうして他の者が知り得ただろうか。神が今後どのような働きを行なうのか、どうして他の者が知り得ただろうか。サタンのものにされた人間に対し、神がどうして自身の計画を明かせただろうか。それは愚かなことではないか。あなたが神の旨を知り、理解することを、神は求めている。神の今後の働きをあなたが考慮することを、神は求めている。わたしたちは神を信じ、神の導きに沿って物事を行ない、実際の困難を実践的に取り扱い、神に対して問題や面倒を引き起こさないことだけに専念すればよい。わたしたちはすべきことをせねばならない。神の現在の働きのただ中にいられるのであれば、それで十分だ。これこそが、わたしがあなたがたを導いている道である。前進することだけに集中すれば、神はわたしたちのうち誰一人として不当に扱わない。あなたがたは、昨年のもとの経験から多くの物事を得た。あなたがたはそのことをそれほど辛く感じないものと思う。わたしがあなたがたを導いている道は、わたしの働きと任務であり、わたしたちがここまで、現在まで至ることを運命づけられるよう、神によってはるか昔に定められたものである。わたしたちがこれを行なえたことは大いなる祝福であり、順調な道のりではなかったが、わたしたちの友情は永遠であり、今後も時代を通じて受け継がれるだろう。喝采であれ、笑いであれ、悲しみであれ、涙であれ、すべて美しい思い出にしようではないか。わたしの働きの日が残りに少ないことに、あなたがたは気づいているかもしれない。わたしには働きの企画が多数あるので、頻繁にあなたがたと共にいることができない。あなたがたが理解してくれることを願う。なぜなら、わたしたちの本来の友情は変わらぬままだからである。おそらくいつの日か、わたしは再びあなたがたの前に現れるかもしれないが、あなたがたがわたしを困らせないことを願う。結局、わたしはあなたがたととは違うのだ。わたしは働きのために様々な場所を旅しているのであり、ただホテルでぼんやりしながら人生を送っているのではない。あなたがたがどのような状態であろうと、わたしはひたすらすべきことを行なう。これまでに共有したことが、わたしたちの友情の花となることを願う。

この道はわたしにより開かれ、苦楽を問わず、わたしがその道を先導してきたと言える。わたしたちが現在まで続けてこられたのは、ひとえに神の恵みのおかげである。わたしに感謝する者もいれば、わたしに文句を言う者もいるだろうが、そのどれも重要ではない。わたしが見たいと思うのは、この集団において成し遂げられるべきことが成し遂げられることだけである。それは祝われるべきことなのだ。ゆえにわたしは、わたしに不満を述べる者に遺恨を抱かない。神の心がすぐに安らぐよう、自分の働きをできるだけ早く完了させることが、わたしの唯一の望みである。そのとき、わたしは重荷を背負わず、神の心に懸念はないだろう。あなたがたには、よりよく協力する覚悟があるのか。神の働きをきちんと行なうことを目標にしたほうがよいのではないか。この期間中、わたしたちは無数の苦難に耐え、ありとあらゆる喜びや悲しみを経験したと言っているだろう。概して言えば、各人の演技は基本的に十分だった。おそらく今後、あなたがたに要求されるより優れた働きがあるかもしれないが、わたしのことをいつまでも考えず、ひたすらすべきことをしなさい。わたしが行なうべきことはすぐそこまで迫っている。あなたがたが常に忠実であり、わたしの働きを懐かしがらないことをわたしは望む。わたしが来たのは働きの一段階を完了させるためであって、神の働きのすべてを行なうためでは決してないということを、あなたがたは知るべきである。あなたがたはこれを明瞭に理解しなければならず、それについて別の考えを抱いてはならない。神の働きを完了させるには、さらに多くの手段が必要となる。あなたがたはいつもわたしに頼ってははいられない。わたしが来たのは単に働きの一部を行なうためであり、それはヤーウェやイエスを代表するものではないということに、あなたがたはもう気づいているかもしれない。神の働きは多くの段階に分かれているので、頑なになりすぎてはならない。わたしが働いている間、あなたがたはわたしに耳を傾けなければならない。神の働きは時代ごとに変わり、どれも同じ型から切り出されたのではなく、働きのたびに同じ古い歌が歌われているわけでもない。また、神の働きの各段階はそれぞれの時代にふさわしいものであり、時代が変われば変化する。ゆえに、あなたはこの時代に生まれたのだから、神の言葉を飲み食いし、それらの言葉を読まなければならない。わたしの働きが変わる日も来るだろうが、その場合でも、あなたがたはそうすべきように前進し続けなければならない。神の働きが間違っていることなどあり得ないのだ。外の世界がどう変わるに気を取られてはならない。神が間違っていることはあり得ず、神の働きが間違っていることもあり得ない。時として神の古い働きが過ぎ去り、新たな働きが始まるというだけのことである。しかしそれは、新たな働きが到来したのだから、古い働きは間違っているという意味ではない。それは誤謬である。神の働きの正誤を述べることはできず

、述べられるのはそれが早いか遅いかだけである。これが神に対する人々の信仰への手引きであり、軽々しく扱ってはならない。

信者はどのような観点をもつべきか

初めて神を信じたあと、人が得てきたものは何か。あなたは神について何を知るようになったのか。神への信仰により、あなたはどれほど変わったのか。今日、あなたがたはみな、人による神への信仰は単に魂の救いと肉の幸福のためではなく、神の愛を通して自分の人生を豊かにさせるためなどでもないことを知っている。そのように、もしあなたが肉の幸福や一時的な快樂のために神を愛するなら、たとえ最後に神に対するあなたの愛が頂点に達し、あなたがそれ以上何も求めないとしても、あなたが求めるこの愛は依然として不純な愛であり、神には喜ばれない。自分のつまらない存在を豊かにし、心の空虚さを埋めるために神を愛する人は、楽な生き方に貪欲な人であって、神を真に愛することを求める人ではない。このような愛は強いられたものであり、精神的満足を追求するものであって、神はそれを必要としない。では、あなたの愛はどのようなものか。あなたは何のために神を愛するのか。まさにいま、あなたの中には神に対する真の愛がどれほどあるのか。あなたがたの圧倒的多数が抱いている愛は先に述べた通りのものである。このような愛は現状を維持することしかできず、不変性を得ることも、人に根づくこともできない。この種の愛は、花が咲いても実をつけず、そのまましておれてしまう花のようでしかない。言い換えると、そのような形で神を愛しても、誰かがその道を導いてくれなければ、あなたは崩れ落ちてしまう。神を愛する時代に神を愛せるだけで、その後もいのちの性質が変わらないままなら、あなたは引き続き暗闇の力に覆われ、そこから逃れることができず、サタンの束縛とたくらみから自由になることもできないままである。そのような人が完全に神のものとなることはできない。最終的に、その人の霊、魂、体は依然としてサタンに属している。このことに疑いの余地はない。完全に神のものとされることができない人は、残らず自分の本来の場所に戻る。つまり、サタンの所に戻り、神による次の段階の懲罰を受けるため、火と硫黄の池に落ちるのである。神のものとされる人は、サタンを捨て去ってその支配下から逃れる人のことである。そのような人は正式に神の国の民として数えられる。神の国の民はこのようになるのである。あなたはこの種の人になりたいのか。進んで神のものになりたいのか。進んでサタンの支配下から逃れ、神の元に戻りたいのか。あなたはいまサタンに属しているのか、それとも神の国の民として数えられているのか。これらのことはすでに明白であるべきで、これ以上説明する必要はない。

かつて、多くの人が並外れた野心と観念を胸に、自分の希望のために追い求めた。こうした問題はしばらく脇にのけよう。いま極めて重要なのは、あなたがた一人ひとりが神の前で正常な状態を維持することができ、サタンによる支配の足かせから次第に自由になることができる実践の道を見つけることである。そうすれば、あなたがたは神のものとされ、神があなたがたに求める地上での生き方ができる。そのような形でのみ、あなたは神の旨を満たせるのである。多くの人が神を信じているが、神が望むものは何か、サタンが望むものは何かを知らない。彼らはばかげた、混乱した信じ方をし、ただ流れに乗るだけなので、クリスチャンとしての正常な生活を送ったことがない。さらに、彼らは正常な人間関係をもったことがなく、ましてや神との正常な関係をもったこともない。このことから、人間の問題と欠点、および神の旨を邪魔し得るその他の要因が数多くあることがわかる。そのことは、人がいまだ神への信仰の正しい軌道に乗っておらず、真の人生経験に入っていないことを証明するのに十分である。では、神への信仰の正しい軌道に乗るとはどういうことか。正しい軌道に乗るとは、あなたが神の前で常に心を静め、神との正常な交わりを享受することができ、人間には何が欠けているかを次第に知るようになり、神に関するさらに深い認識を徐々に得ることである。これにより、あなたの霊は日々新たな洞察と啓きを得るのである。そしてあなたの切望も膨らみ、真理に入ることを求めるとともに、新しい光と認識が日々存在するようになる。この道を通じ、あなたは次第にサタンの支配から自由になり、いのちにおいて成長を遂げる。このような人は正しい軌道に入ったのである。自分の実体験を評価し、信仰において自分が追求した道を検証しなさい。そのすべてと自分を照らし合わせなさい。あなたは正しい軌道に乗っているか。どのような事柄において、サタンの足かせと支配から自由になったのか。いまだ正しい軌道に乗っていないなら、あなたとサタンのつながりは切れていない。そうであれば、神を愛そうと求めたところで、本物で、純真で、純粋な愛へと導かれるだろうか。神に対する自分の愛はゆるぎなく、心からのものだと言あなたが言うが、あなたはまだサタンの足かせから自由になっていない。あなたは神をからかおうとしているのではないか。神に対する自分の愛が不純でない状態へと至り、完全に神のものとされ、神の国の民として数えられたいなら、あなたはまず自分自身を神への信仰の正しい軌道に乗せなければならない。

神の働きの過程について

外見的には、神の現在における働きの過程は完了し、すでに人間は神の言葉による裁きと刑罰、強打、精錬を受け、効力者の試練、刑罰の時代の精錬、死の試練、引き立て

役の試練、そして神への愛の時代といった段階を経ているように見える。だが、各過程における非常な苦しみにもかかわらず、人は神の心意を知らないままである。たとえば、効力者の試練について考えてみなさい。人はそれによって自分が得たもの、知るに至ったこと、神が望む成果について、いまだに明確に理解していない。神の働きの速度からすると、人間が現在の速度に遅れないでついていくことは完全に無理なようである。こうした働きの過程を神はまず人間に明らかにするが、どの過程においても必ずしも人間に想像できる程度に達することなしに、神は一つの問題に光を投げかける、ということが分かる。神が誰かを完全にし、その人が本当に神に得られるためには、神は先に挙げた全過程を遂行しなければならない。この働きを遂行する目的は、神が人間の一集団を完全にするために行わなければならない過程を示すことである。このように、外見的には神の働きの過程は完了してはいるが、本質においては神が人類を完全にする過程は正式に始まったばかりである。人はこのことを理解しなければならない。つまり、神の働きの過程は完了しているが、働き自体はまだ終わっていないのである。しかし人は観念において、神の働きの過程はすべて人に明らかにされたと考え、それゆえ神の働きが完了したことを疑わない。こういう物事の見方は完全に間違っている。神の働きは人間の観念とは正反対で、あらゆる面において人間の観念を打ち返す。神の働きの過程は特に人間の観念とは一致しない。これはすべて神の知恵を証明している。ここで分かるのは、人間の観念は常に混乱を引き起こし、神は人間が想像することすべてに反撃することである。これは実際の経験において明らかになる。神の働きは速すぎだと誰もが考え、誰も知らないうちに、人が認識する前に、いまだに混乱状態にあるうちに、神の働きは完了してしまう。神の働きの全過程がこのように過ぎていく。大部分の人は神が人間をもてあそんでいると考えているが、神の働きにそういう意図はない。神の働き方は反すう法である。最初は馬の背にまたがって花々を見渡しながら駆け抜け、次に細部を観察し、その後、同じ細部を徹底的に調べる。それは人間の不意を襲う。あるところに到達するまで何とか上手く切り抜けられれば、神は満足するだろうと考え、人は神を騙そうとする。ところが実際には、人間が何とか切り抜けようと試みたところで、どうして神が満足させられるというのか。働きから最良の効果を得るために、神は人間の不意を襲い、気付かぬ間に打撃を与える。これにより人は神の知恵についての認識をさらに深め、神の義、威厳、犯すことのできない性質についての認識をさらに深めることになる。

今、神は人間を完全にする働きを正式に始めた。完全にされるために、人は神の言葉

による暴き、裁き、刑罰を受け、神の言葉による試練と精錬（効力者の試練など）を経験しなければならず、死の試練に耐えることができない。つまり、神の裁き、刑罰、試練の中にあっても神の心意を真に順守する人は、心の底から神を賞賛し、完全に神に従い、自身を放棄することができ、そうすることにより誠実でひたむきで純粋な心をもって神を愛する。こういう人が完全な人であり、それがまさに神が意図する働きであり、神が達成すべき働きでもある。神が働く方法について人は早合点すべきではない。ただ、いのちに入ることを追求すべきある。これが基本である。神が働く方法を絶えず詮索してはならない。これは将来の展望の妨げになるだけである。神が働く方法をどれくらい見たというのか。どれほど従順であったというのか。神の働きの方法の一つ一つから、どれほど得たというのか。神に完全にされる覚悟があるというのか。完全になることを願っているのか。これらはすべて、明確に理解して、入っていくべきことである。

堕落した人間は神を体現できない

人は常に闇のとばりに覆われて、サタンの影響にとらわれたまま、逃れることができずに生きてきた。その性質はサタンに操られて、ますます堕落している。人は常に堕落したサタンの性質の中に生きており、真に神を愛することができないのだと言える。そのため神を愛したいと願うなら、独善、自尊心、高慢、うぬぼれといった、サタンの性質であるものを捨て去らなければならない。そうでなければその人の愛は不純な、サタンの愛であり、神に認められることは断じてできない。聖霊によって直接完全にされ、取り扱われ、砕かれ、刈り込まれ、訓練され、懲らしめられ、練られることがなければ、誰も真に神を愛することはできない。もし自分の性質の一部は神を現しているため、自分は神を真に愛せると言うなら、あなたは傲慢な言葉を語る人であり、非常識な人である。そのような人は大天使だ！ 人の生まれつきの性質は神を体現することができない。人は神に完全にされることを通して生来の性質を捨て去らねばならず、その後、神の旨に配慮し、神の目的を果たし、さらに聖霊の働きを受けることで、初めてその生き方が神に認められるようになる。聖霊によって用いられている人を除けば、肉に生きる者で神を直接体現できる者はいない。聖霊に用いられている人でさえ、その性質と生き方が神を完全に体現しているとは言えない。ただその人の生き方が聖霊によって導かれていると言えるだけであり、その人の性質が神を体現することはできない。

人の性質は神によって定められており、そのことに議論の余地はなく、それは肯定的

なことと考えられるが、その性質はサタンによって操られているため、人の性質は全体としてサタンの性質なのである。中には、神の性質とは行いがまっすぐで率直なことであり、それは自分にも表れていて、自分もそのような性格をしているから、自分の性質は神を体現していると言う人がいる。それは一体どんな人だろうか。墮落したサタンの性質が、神を体現できるというのか。自分の性質は神を現しているなどと宣言する人は、神を冒瀆し、聖霊を侮辱している！ 聖霊の働き方を見ると、神の地上での働きはあくまで征服の働きであることがわかる。そのため人間のサタンの性質の大半は清められておらず、人の生き方は依然としてサタンの似姿であり、それを人は良いものと信じている。そしてそれは人の肉の行いを表しており、具体的に言えばサタンを体現していて、間違いなく神を体現するものではない。たとえ誰かが非常に神を愛していて、地上ですでに天の生活を楽しめるほどであり、「ああ神よ、どれほどあなたを愛しても足りません」などとさえ言うことができ、最高の領域に達しているとしても、それですらまだ神を生き、神を体現しているとは言えない。人の本質は神の本質とは異なるからだ。人は決して神を生きることとはできないし、ましてや神になることなどできない。聖霊が人に指示しているのは、ただ神の求めに従った生き方をすることだけだ。

サタンの行いはすべて人に体現されている。人の行いは今やすべてサタンの表現であり、神を現すことはできない。人はサタンの化身であり、人の性質が神の性質を表すことはできない。中には良い性格の人たちもいて、神がそのような人たちの性格を通して何らかの働きを行うことはあるかもしれない、彼らの働きは聖霊によって導かれる。それでも、彼らの性質が神を体現することはできない。神が彼らに対して行う働きは、ただ彼らがすでに持っているものを用い、それを発展させるものにすぎない。昔の預言者や、神によって用いられた人たちも、誰一人神を直接体現することはできない。人々は状況のためやむを得ず神を愛するようになるだけで、誰一人自ら進んで神と協調しようと努める者はいない。肯定的なものとは何だろうか。神から直接もたらされるものはすべて肯定的である。しかし人の性質はサタンに操られており、神を体現することはできない。肉となった神の愛、苦難を受ける覚悟、義、従順、そして謙虚さと秘密性のみが、直接神を体現している。なぜなら彼が到来したとき、罪深い性質を持たず、神から直接やって来たからであり、サタンに操られていなかったからだ。イエスは罪深い肉のような姿を取っているだけで、罪を体現してはいない。そのため十字架を通した（十字架の苦難も含む）働きが達成されるまでのイエスの行動、行なった業、そして言葉は、すべて直接神を体現している。イエスの例は、罪深い本性を持つ者は誰も神を体現できず、

人の罪がサタンを体現していることを証明するに十分である。すなわち罪は神を体現しておらず、神には罪がない。聖霊により人の中で行われた働きでさえ、聖霊によって導かれたものと言えるだけで、人が神に代わって行ったと言うことはできない。人に関しても言えば、その罪もその性質も神を体現してはいない。聖霊が過去から現在に至るまで人に行ってきた働きに目を向ければ、真理を生きる人がその真理を持っているのは、ひとえに聖霊がその人に働きを行ったからだということがわかる。聖霊による取り扱いと懲らしめを受けた後に、真理を生きられる人はほとんどいない。それはすなわち、聖霊の働きだけが存在しており、人間の側の協力が無いということだ。このことははっきり理解できただろうか。それでは、聖霊が働くときに最善を尽くして協力し、本分を尽くすにはどうすればいいだろうか。

宗教的な奉仕は一掃されなければならない

全宇宙における神の働きが始まって以来、神は多くの人々を神に仕えるように運命づけてきた。そこにはあらゆる社会的地位の人々が含まれている。神の目的は、神の心を満たすことと、神の地上での働きが、必ずとどこおりなく成就するようにすることである。これが神に仕える人々を神が選ぶ目的である。神に仕える人は誰もがこの神の旨を理解しなければならない。この神の働きを通して人々は、神の知恵、神の全能性、また神の地上における働きの原則をよりよく見て取ることができる。神が実際に働きを行うために地上に来て人々と接触するのは、人々が神の業をより明確に知ることができるようにである。今日、あなたがたのこの集団は幸運にも実践の神に仕えている。これはあなたがたにとって計り知れない祝福である。実のところ、これは神が人を引き上げているのである。神に仕える人の選択において、神は必ず神自身の原則をもっている。神に仕えることは、人々が想像するように、ただ熱心さの問題ではないことは絶対である。今日あなたがたは、神の前で神に仕える人は誰であれ、それは彼らに神の導きと聖霊の働きがあるから、また、彼らは真理を追究する人々であるから、そうしているのを見ている。これらは、神に仕えるすべての人に要求される最低限の必要事項である。

神に仕えることは単純な作業ではない。墮落した性質が変わらないままの人は決して神に仕えることはできない。もしあなたの性質が神の言葉により裁かれ、罰されていないのならば、その性質はいまだにサタンを表している。これは、あなたの奉仕があなた自身の善意から出ていることの十分な証明である。それはサタンの性質にもとづく奉仕である。あなたは自分の元来の性格のまま、また個人的好みに従って神に仕えている。

さらに、自分が行いたいことが何であれ、神はそれを喜び、行いたくないことが何であれ、神はそれを嫌うとあなたは思い続けている。そして働きにおいては、自分の好みに完全に左右されている。これを神への奉仕と呼ぶことができるであろうか。あなたのいのちの性質は、究極的には少しも変えられることはない。それどころか、自分は神に仕えているのだからと、ますます頑固になり、そのため、墮落した性質はさらに深く根付いたものとなる。このようにして、おもに自分の性格にもとづいた神への奉仕に関する規則と、自分自身の性質に従った奉仕から派生する経験をあなたは内面的に作り上げるようになる。それらが人間の経験と教訓であり、この世における人間の人生哲学である。このような人々はパリサイ人と宗教官僚に属する。このような人々は目を覚まして悔い改めないならば、必ずや終わりの日に人々を騙す偽キリストおよび反キリストとなる。話に出てくる偽キリストと反キリストは、このような人々の中から現れる。もし神に仕える人々が自分たちの性格に従い、自分たちの意思のままに行動したならば、彼らはいつでも追放される危険にある。他人の心を獲得し、見下すような態度で他人に訓戒し人々を制限するために自分の長年の経験を神への奉仕に応用する人、そして決して悔い改めず、自分の罪を告白せず、地位からくる恩恵を諦めない人は、神の前に倒れるであろう。このような人はパウロと同類の人間であり、自分の経歴の長さゆえに大胆に振る舞ったり、資格を見せびらかしたりする。神がこのような人々を完全にすることはない。このような奉仕は神の働きのじゃまをする。人は古いものに固執することを好む。過去の観念、過去からの物事に固執する。これは奉仕への大きな障害である。それらを捨て去ることができなければ、それらがあなたの全生涯を圧迫するであろう。たとえ脚を折るほど走り回ったり、大変な労苦を背負っても、また神への奉仕において殉教したとしても、神は少しもあなたを褒めることはない。それどころか逆であり、神はあなたを邪悪な行いをする者だと言うであろう。

宗教的な観念をもたず、古い自分自身を脇へやる覚悟ができており、純朴に神に従う人々を、神は今日から正式に完全にし、また神の言葉を待ち望む人々を神は完全にする。このような人々は立ち上がり、神に仕えるべきである。神には終わることのない豊かさや無限の知恵がある。神の驚くべき働きと貴い言葉は、それらを享受するさらに多くの人々を待っている。現状では、宗教的な観念をもつ人、経歴の長さゆえに尊大に振る舞う人、自分自身を脇へやることができない人は、これらの新しい物事を受け入れるのに困難を感じる。このような人々を聖霊が完全にする見込みはない。もし人が服従の決心をせず、神の言葉を渴望していないのならば、新しい物事を受け取ることはできない

。そのような人々はますます反抗的に、ますます狡猾になり、最終的には悪い軌道に乗ってしまう。神は現在その働きを行いながら、神を真に愛し、新しい光を受け入れることのできるさらに多くの人々を引き上げる。そして自分の経歴の長さゆえに尊大に振る舞う宗教官僚たちを、神は完全に切り捨てる。変化を頑固に拒む人々も、神は一人として欲しない。このような人になりたいのか。あなたは自分の好みに従って神に仕えるのか。それとも神が求めることを行うのか。これはあなたが自分自身で知っておくべきことである。あなたは宗教官僚の一人なのか。それとも神に完全にされる生まれたばかりの赤子なのか。あなたの奉仕のどれほどが聖霊に褒められるのか。神がわざわざ記憶するほどでもないものがどれほどあるのか。長年の奉仕の後、いのちのどれほどが変化したのか。あなたはこれらのことをよくわかっているのか。もし真の信仰があるのなら、以前からの古い宗教的観念を脇へやって、新しいやり方で神にさらによく仕えるであろう。今、立ち上がるのは遅すぎない。古い宗教的観念は、人のいのちを抑えつけてしまう。人が得る経験は、人を神から遠ざけ、独自のやり方で物事を行うようにしてしまう。もしそれらを捨てないのならば、それはいのちの成長のつまずきの石となる。神に仕える人々を神は常に完全にしてきた。神はそのような人々を軽々しく追放することはない。もし神の言葉による裁きと刑罰を真に受け入れるならば、もし古い宗教的実践と規則を脇へやることができ、古い宗教的観念を今日の神の言葉を判断する基準として用いるのをやめるならば、そのとき初めてあなたには未来がある。しかし、もし古い物事に執着し、いまだにそれらを大切にすれば、救われることはない。神はこのような人々には一切気を留めない。もし本当に完全にされたいと望んでいるのならば、以前からのあらゆるものを完全に捨て去る決心をしなければならない。たとえ以前になされたことが正しかったとしても、たとえそれが神の働きであったとしても、それを脇へやり、それに執着することをやめることができないと望むべきではない。たとえそれが明らかに聖霊の働きであり、聖霊により直接に行われたことであっても、今日はそれを脇へやらなくてはならない。それにしがみついてもはならない。これが神が要求することである。すべては刷新されなければならない。神の働きと神の言葉において、神は以前にあった古い事柄に言及することはなく、神は昔の歴史を追究することはない。神は常に新しく、決して古いことがない神である。神は過去の神自身の言葉にさえ執着することはない、このことから、神はいかなる規則にも従わないことが明らかである。この場合、もし、人間であるがゆえに、あなたが常に過去の物事にしがみついても、捨て去ることを拒否し、それらを形式的なやり方で堅苦しく適用するものの、神はもはや以前のやり方では働いていないのであれば、あなたの言動は破壊的ではないであろうか。あなたは神の敵

になってしまったのではないだろうか。あなたはそれらの古い物事のせいで自分の全生涯を破滅させてしまうつもりなのか。それらの古い物事のために、あなたは神の働きを妨害する人となる。あなたがなりたいのは、このような人なのか。こうなるのを本当に望まないのであれば、今していることを直ちに止めて、向きを変えなさい。そして、初めからやり直しなさい。神はあなたの過去の奉仕を覚えていることはない。

神への信仰において、あなたは神に従うべきだ

どうして神を信じるのか。ほとんどの人はこの質問に戸惑う。そのような人は実際の神と天の神について、常に二つのまったく異なる観点をもっている。そのことは、彼らが神を信じるのは神に従うためではなく、何らかの恩恵を被るため、あるいは災難がもたらす苦しみから逃れるためであることを示している。そのときだけ、彼らは多少従順になる。その従順さは条件付きであり、彼ら個人の将来的な見込みのためであって、彼らに押し付けられたものである。では、あなたはなぜ神を信じるのか。ただ自分の将来の見込みや運命のために神を信じるなら、はなから信じないほうがよい。そのような信仰は自己欺瞞、自己安心、自己讃美である。あなたの信仰が神への従順という基礎の上に築かれたものでないならば、あなたは神に反抗した咎で最終的に懲罰される。自分の信仰において神への従順を求めない者はみな神に反抗する。神は、人々が真理を求め、神の言葉を渴望し、神の言葉を飲み食いし、それを実行に移し、それによって神への従順に達することを求めている。これがあなたの真意ならば、神は必ずやあなたを引き上げ、必ずやあなたに対して恵み深くなる。このことに疑問の余地はないし、変わることもない。あなたの意図が神に従うことではなく、何か他の目的があるならば、あなたのあらゆる言動、すなわち神の前での祈り、さらにはあなたの行動の一つひとつでさえ、それらは神に反抗するものである。あなたは穏やかな話し方と温厚な振る舞いをし、あらゆる行動や表現が正しいものに思われ、神に従う者のように見えるかもしれないが、あなたの意図と神への信仰に関する見解について言えば、あなたが行なうことはどれも神に反しており、悪である。表面上は羊のように従順に見えるものの、心に邪悪な意図を抱いている人々は、羊の皮を被った狼である。このような人は直接神を犯し、神は彼らを一人として容赦しない。聖霊は彼らを一人残らず暴露し、あらゆる偽善者は必ずや聖霊に忌み嫌われ、拒絶されることを万人に示す。心配しなくてもよい。神はそのような人間を一人残らず処理し、一人ひとり処分する。

もしあなたが神の新しい光を受け入れられず、今日神が行なうすべてのことを理解で

きず、それを求めず、さもなければそれを疑ったり、批判したり、あるいはそれを吟味したり分析したりするなら、あなたには神に従うところがない。いまここに光が現れるとき、依然として昨日の光を大事にし、神の新しい働きに反抗するなら、あなたはただの馬鹿者にすぎず、わざと神に反抗する者の一人である。神に従う秘訣は、新しい光を正しく認識し、それを受け入れて実践できることである。それだけが本当の従順である。神を切望する意志のない者は、進んで神に服従することができず、現状に満足する結果、神に反抗するだけである。人が神に従えないのは、以前来たものにとりつかれているからである。以前来たものは、神についてのありとあらゆる観念と想像を人々に与え、それらが人々の心における神のイメージになってしまったのである。ゆえに、人々が信じているものは彼ら自身の観念であり、彼ら自身の想像の中の標準である。あなたがもし、今日実際の働きを行なっている神を、あなた自身の想像上の神と比較して推し測るなら、あなたの信仰はサタンに由来するものであり、自分の好みに汚されている。神はこのような信仰を望まない。実績がどれだけ立派でも、どれだけ献身的でも、たとえ神の働きのために一生努力を捧げて殉教しようとも、神はこのような信仰をもつ者を誰も認めない。神は彼らにささやかな恵みを授けるだけで、ほんの束の間、彼らにそれを享受させるだけである。このような人は真理を実践することができない。聖霊は彼らの内では働かず、神は彼ら一人ひとりを順に排除する。老若を問わず、自身の信仰において神に従わず、間違った意図をもっている者は、神の働きに反抗してそれを邪魔する者であり、このような人は間違いなく神によって排除される。神への従順の片鱗さえ見られない者、ただ神の名を認め、神の優しさや愛らしさについて多少認識しているだけで、聖霊の歩みに歩調を合わせず、聖霊の現在の働きや言葉に従わない者は、神の恩恵のただ中で生きているにもかかわらず、神のものとはされないし、神によって完全にされることもない。神は人々を、その従順さを通して、神の言葉を飲み食いし、享受することを通して、そして生活における苦しみと精錬を通して完全にする。このような信仰を通してのみ、人々の性質は変化し、そうして初めて人々は神を本当に知ることができる。神の恩恵のただ中で生きることに満足せず、積極的に真理を切望して探求し、神のものにされるよう求めることが、意識して神に従うことの意味である。これがまさに神が望んでいる信仰である。神の恩恵を享受するだけの人は、完全にされることも変わることもなく、彼らの従順、敬虔、愛、そして忍耐はすべて表面的である。神の恩恵を享受するだけの人は本当に神を知ることができず、神を知ったとしてもその認識は表面的であり、「神は人を愛する」とか、「神は人に対して憐れみ深い」などと言う。これは人のいのちを表してなどいないし、人が本当に神を知っているとは言えない。神の言葉が

人を精錬するとき、あるいは神の試練が人に降りかかるとき、神に従うことができず、それどころか疑い深くなってつまずくなら、その人はほんの少しも従順ではない。彼らには神への信仰に関するたくさんの規則や制限があり、長年にわたる信仰の結果である古い経験があり、聖書に基づくさまざまな教義がある。このような人が神に従うことなどできるだろうか。これらの人たちは人間的なもので一杯なのだから、どうして神に従えるだろうか。彼らの「服従」は個人の好みに従っている。神はこのような従順を望むだろうか。これは神への従順などではなく、教義の遵守であり、自分を満足させて慰めているのである。これが神への従順だとあなたが言うなら、それは神を冒涇しているのではないか。あなたはエジプトのファラオであり、悪を行ない、あからさまに神に反抗する働きに関わっている。あなたがそのように奉仕することを神は望んでいるのか。あなたは急いで悔い改め、自己認識しようと努めたほうがよい。そうできなければ、ただ立ち去るほうがましである。そのほうが、あなたの言う神への奉仕よりも自分のためになる。妨げたり混乱させたりすることもなく、自分の場所を知って快適に暮らせる。そのほうがよくはないだろうか。それに、神に反抗した咎で懲罰されることもないはずだ。

神との正常な関係を築くことは極めて重要である

人間が神を信じ、愛し、そして満足させる方法というのは、自分の心で神の霊に触れ、それによって神の満足を獲得すること、そして自分の心で神の言葉に接し、神の霊に感動することである。正常な霊的生活を実現させ、神との正常な関係を築きたいと願うなら、まずは自分の心を神に捧げなければならない。神の前で心を静め、その心を残らず神に注いで初めて、徐々に正常な霊的生活を送れるようになる。人々が神への信仰の中で、自分の心を神に捧げず、心を神の中に置かず、神の重荷を自分自身のものとして扱わなければ、何をしようとそれは神を欺く行為、宗教人によく見られる行為となり、神の称賛を受けることができない。神はそのような人から何も得ることができず、その種の人には神の家の装飾品のよう、場所を取るだけで何の役にも立たず、神の働きの引き立て役以外に使い道がない。神はそのような者を用いない。そのような人の中では、聖霊が働きを行なう機会がないだけでなく、その人には完全にされる価値すらない。こうした類の人間は、実のところ生ける屍なのだ。このような者たちには聖霊によって用いられることのできる要素が一切なく、逆に、彼らのすべてがサタンによって占有され、深く墮落させられている。神はこうした人々を一掃することになる。現在、聖霊は人々を用いるにあたり、彼らの望ましい部分を活用して物事を成し遂げるだけでなく、同

時に彼らの望ましくない部分を完全にし、変化させている。神に心を注ぎ、神の前で心を静めていられるなら、あなたは聖霊に用いられ、聖霊の啓きと照らしを受ける機会と資格を得ることになり、そしてそれ以上に、聖霊に自分の欠点を補ってもらえる機会を得ることになる。神に心を捧げると、肯定的な面では、より深い入りを成し遂げ、より高次の洞察を得ることができる。否定的な面では、自らの過ちや欠点が一層よくわかり、神の旨を満たすことを一層熱心に求めるようになり、受動的になることがなく、積極的に入るようになる。そうしてあなたは正しい人間になるのだ。あなたの心が神の前で静まっていられるとすれば、あなたが聖霊から称賛を受ける人かどうか、神を喜ばせる人かどうかは、積極的に入れるかどうか鍵を握っている。聖霊が人を啓いて用いるとき、その人は決して消極的になることがなく、常に積極的に前進する。たとえ弱さがあっても、その弱さに基づいて生き方を決めることは避けられる。そして自分のいのちの成長を遅らせることを避け、神の旨を満たすことを求め続けられる。これが基準である。これを満たせるなら、それはあなたが聖霊の臨在を得たことの十分な証明になる。常に消極的で、啓示を受けて自分自身を知った後も依然として消極的かつ受動的なままであり、立ち上がって神と調和しながら行動することができないなら、その種の者は神の恵みを受けるだけで、聖霊がその人と共にいることはない。人が消極的であるとき、それはその人の心が神に向いておらず、その人の霊が神の霊によって感動していないことを意味する。このことはすべての者が認識していなければならない。

経験からわかることだが、最も重要な課題の一つは神の前で心を静めることであり、それは人々の霊的生活といのちの成長に関する課題である。神の前で心が静まっている場合にのみ、真理の追求と性質の変化の追求は実を結ぶ。なぜなら、あなたは重荷を背負って神の前に出て、自分には至らない点が数多くあり、知るべき真理や経験すべき現実が多くあって、神の旨にすべての注意を集中させねばならないと常に感じており、そのことが絶えずあなたの心を占めているからである。あたかもそうしたことに圧迫され、その力たるや息もできないほどなので、あなたは心が重くなっている(しかし、消極的な状態にあるのではない)。このような人たちだけが、神の言葉による啓示を受け、神の霊に感動する資格をもつ。彼らはその重荷のゆえに、また心の重さゆえに、そしてまた神の前で払った代価と受けた苦しみのゆえに、神の啓きと照らしを受けることができる。神は誰も特別扱いしないからである。神は人々を常に公平に扱うが、同時に人々に対して恣意的に、または無条件に与えることもしない。これは神の義なる性質の一面である。実生活においては、ほとんどの人がいまだこの領域に達していない。少なくとも

も、人々の心はまだ完全には神のほうを向いておらず、それゆえ人々のいのちの性質にはまだそれほど大きな変化が生じていないのだ。それは人々が神の恵みの中に生きていくだけで、まだ聖霊の働きを得てはいないからである。人々が神に用いられるために満たさねばならない条件は、心が神に向いていること、神の言葉の重荷を負っていること、渴望する心をもっていること、そして真理を求める決意があることである。そのような人だけが、聖霊の働きを得て、頻繁に啓きと照らしを得ることができる。神に用いられる人は、外面的に見ると不合理で、他の人たちと正常な関係をもっていないように見えるが、礼儀正しく話し、軽率に語ることがなく、神の前で常に心を静めておくことができる。そのような人こそ、聖霊によって用いられるにふさわしい。神が語るところのこうした「不合理な」者は、他の人たちと正常な関係をもっていないように見え、外面的な愛や実践にしかるべき配慮を払っていないように見えるが、霊的なことを伝えるときは心を開き、神の前での実経験から得た啓きと照らしを私心なく他の者たちに分け与えることができる。彼らはこのようにして神への愛を表わし、神の旨を満たすのだ。他の人たちがみな彼らを中傷して嘲るときも、彼らは外部の人々や出来事、物事によって支配されずにいることができ、なおも神の前で静まっていられる。そのような人は独自の洞察を有しているように見え、他の人たちが何をしようと、彼らの心は決して神を離れない。他の人たちがにぎやかに面白おかしく喋っているときも、彼らの心は依然として神の前にあり、心の中で神の言葉について熟考したり、黙して祈ったりしながら、神の意図を求めている。彼らは他の人たちとの正常な人間関係を維持することを決して重視しない。このような人は処世哲学をまったくもたないように見受けられる。表面的には陽気で愛想よく無邪気だが、同時に冷静さも備えている。これが、神が用いる人の人間像である。処世哲学や「正常な理知」といったものは、このような人の中でまったく働かない。これが自分の心をすべて神の言葉に捧げ、心に神しかないように見える人である。そのような人が神の言うところの「理知のない」人間であり、神が用いるのはまさにそのような人である。神に用いられている人の印は次の通りである。つまり、いついかなる場所でも心がいつも神の前にあり、他人がいかに放埒であろうと、どれほど欲情と肉に耽溺していようと、その人の心は決して神を離れず、その人が群衆に付き従うことはない、ということだ。そのような人だけが神に用いられるのに適しており、聖霊によって完全にされる。こうしたことを成し遂げられなければ、あなたには神のものとされ、聖霊によって完全にされる資格はない。

神との間に正常な関係を築きたければ、自分の心を神に向けなければならない。それ

を土台として、他の人たちとも正常な関係をもてるようになる。神との正常な関係がなければ、他の人たちとの人間関係を維持するために何をしようと、どれほど努力しようと、どれほどの労力を費やそうと、それはやはり人間の処世哲学に属するものになる。あなたは人々から賞讃されるよう、人間の観点と哲学を通じて、人々の間における自らの地位を維持しているが、神の言葉に従う形で人々との正常な関係を築いてはいない。人々との関係に重点を置かず、神との正常な関係を維持していれば、そして自分の心を進んで神に捧げ、神に従うことを学ぼうとしていれば、すべての人との関係は自然と正常なものになるだろう。このように、そうした関係は肉においてではなく、神の愛という土台の上に築かれるのである。そこに肉体的な交流はほとんどないが、霊における交わり、互いへの愛、相互の慰め、そして互いに対する施しがある。これらはすべて、神を満足させる心を基礎として行なわれる。このような関係は人間の処世哲学に依存することで保たれるのではなく、神のために重荷を負うことで自然と形成される。それは人為的な努力を必要としない。あなたは神の言葉の原則に従って実践するだけでよい。あなたには神の旨に配慮する意志があるのか。神の前で「理知のない」者となる意志があるのか。自ら進んで心を完全に神に捧げ、人々の間における地位を度外視する意志があるのか。あなたが接するすべての人のうち、あなたは誰と一番良い関係を築いているのか。誰と最悪の関係を築いているのか。あなたの人々との関係は正常なものか。あなたはすべての人を平等に扱っているか。あなたと人々との関係は、自分の処世哲学に従って保たれているのか、それとも神の愛という基盤の上に築かれているのか。神に自分の心を捧げない人は、霊が鈍感になり、麻痺し、意識を失ってしまう。そのような人は神の言葉を決して理解せず、神と正常な関係をもつことも決してない。この種の人々の性質は決して変わることがない。性質を変化させるというのは、心を完全に神に捧げる過程、神の言葉から啓きと照らしを受ける過程である。神の働きは、人が積極的に入れるようにするだけでなく、人が自分の消極的な側面を認識した後、それらを取り除くことを可能にする。自分の心を神に捧げられる段階に達すると、あなたは自分の霊の中の微妙な動きを一つ残らず感じ取れるようになり、神から受けたすべての啓きと照らしを認識する。それをしっかりと続けなさい。そうすれば、聖霊によって完全にされる道へと徐々に入ることになる。神の前で心を静められれば静められるほど、あなたの霊は一層敏感かつ繊細になり、聖霊による感動を霊が感知できるようになればなるほど、あなたの神との関係はますます正常になってゆく。正常な人間関係というものは、神に心を捧げることを基盤として成り立つのであり、人間の努力によって築かれるものではない。心に神がなければ、人々の対人関係は単なる肉の関係である。そうした関係は正常なもの

ではなく、自身を情欲に明け渡すことであり、神が嫌悪し忌み嫌う関係である。自分の霊が感動したと言いながら、自分が好きな人や自分が高く評価している人といつも交わりをもちたがり、別の求道者がいてもその人を好きでなく、その人に偏見さえ抱き、その人と関わろうとしなければ、それはあなたが感情に支配されており、神との正常な関係をまったく有していないことをさらに証明している。あなたは神を欺き、自らの醜さを隠そうとしているのだ。たとえ何らかの理解を分かち合うことができたとしても、正しくない意図を抱いていれば、あなたがすることはどれも人間の基準に照らして良いことに過ぎない。神はあなたを褒めはしない。あなたは神の重荷でなく肉に従って行動している。神の前で自分の心を静め、神を愛するすべての人と正しく交流できれば、そのとき初めてあなたは神に用いられるのにふさわしい者となる。このように、他人とどのように交わるにせよ、それは処世哲学に従うのではなく、神の前で神の重荷を思いやりながら生きることである。あなたがたの中にそのような者は何人いるのか。あなたと他の人たちとの関係は本当に正常なのか。それはどのような基盤の上に築かれているのか。あなたの中には処世哲学がいくつあるのか。それらを捨て去ったのか。心を完全に神に向けることができないなら、あなたは神のものではなく、サタンから来た者であり、最終的にはサタンのもとへ戻される。あなたには神の民の一人となる価値がない。こうしたことをすべて慎重に考慮しなければならない。

正常な霊的生活は人を正しい道へ導く

あなたがたはまだ神の信者としての道のりのごくわずかしかな歩んでおらず、未だに正しい道のりに入っていない。そのため、まだ神の基準を満たすにはほど遠い。現在のあなたがたの霊的背丈は神の要求を満たすには不十分である。あなたがたの素質と墮落した本性のせいで、あなたがたは常に神の働きを不注意に扱い、真剣に扱わない。これがあなたがたの最も深刻な欠点である。聖霊の歩む道を見極めることは誰にもできない。あなたがたのほとんどはそれを理解せず、はっきり見ることもできない。さらに、あなたがたのほとんどはこれをまったく気に留めることもなく、ましてや心に留めることなどない。もしこのようであり続け、聖霊の働きを知らないまま生きるならば、神の信者としての歩みは無駄である。なぜならあなたがたは神の心を満たそうとして最善を尽くすことなく、神としっかりと協力しないからである。神があなたに働きかけなかったわけでもなく、聖霊があなたを動かさなかったというわけでもない。あなたがたがあまりに不注意で聖霊の働きを真剣に捉えていないのである。今すぐにでもこの状況を逆転させ、聖霊が人を導く道を歩むべきである。これが本日の主題である。この「聖霊が導く

道」というのは、霊において照らしを得ること、神の言葉を認識すること、進む道が明らかであること、一步ずつ真理に入っていけること、神をさらに知るようになることである。聖霊が人を導く道とは、基本的に、神の言葉についてのさらに明確な理解に向かう道であり、そこにはずれや誤解がなく、またその道を歩む人はその道に沿ってまっすぐに進んでいく。これを達成するには、神と調和して働き、実践すべき正しい道を見出し、聖霊の導く道を歩む必要がある。これには人間側の協力が要件となる。つまり、神があなたがたに要求することを満たすために何をすべきか、そして神への信仰の正しい道に入るためにどのように振る舞うべきかということである。

聖霊の導く道に踏み出すことは複雑に見えるかもしれないが、実践する道が明瞭であればそれはもっと単純だということがわかる。実のところ、人間は神の要求することすべてが可能なのである。神は豚に空を飛ぶことを教えようとはしていないのではない。すべての状況において、神は人の問題を解決し人の懸念を鎮めようとしているのである。あなたがたはみなこのことを理解しなければならない。神を誤解してはならない。聖霊の歩む道は神の言葉にしたがって人を導くのである。前に述べたように、心を神に捧げなければならない。これは聖霊が導く道を歩むための必要条件である。正しい道に入るためにしなければならないことである。人はどのように意識的に心を神に捧げる働きを行うのか。日常生活にて神の働きを経験して祈る際、あなたがたは不注意に行い、何かをしながら神に祈る。これは心を神に捧げていると言えるのだろうか。家事や肉的なことについて考え、心は常にふたごころである。これは神の前で心を静めていると言えるだろうか。あなたの心はいつも外的なことに気をとられていて、神の前に帰っていくことができないからである。神の前にて真に平安な心でいたいと願うのであれば、意識して協力しなければならないのである。つまり、あなたがたひとりひとりが周りの人や物事を脇においてディボーションをする時間を持ち、神の前にて心を落ち着かせ静まるのである。各自は自分のディボーションの記録を取り、神の言葉についての認識や霊がどのように動かされたかを、内容の深い浅いに関係なく記録すべきである。誰もが意識して神の前で心を静めなければならない。毎日々、二時間を真の霊的生活に捧げることができれば、その日あなたの生活は豊かになり心は明るく明晰になる。日々このような霊的生活を送るならば、あなたの心はますます神のものとなるように立ち返ることができ、あなたの霊はますます強くなり、あなたの状態は絶えずよくなり、聖霊の導く道を歩むことがさらに可能になり、神はますますあなたを祝福するようになる。霊的生活の目的は、聖霊の臨在を意識的に得ることである。それは規則を守ることでも宗教的儀式を

行うことでもなく、神と真に調和して行動し、身体を真に訓練することである。これが人間のすべきことであり、それゆえ最大の努力をもってそうすべきである。神との協力がよくできればできるほど、また、努力すればするほど、心は神に立ち返ることができる。神の前で心を静めることができるようになる。ある時点において、神はあなたの心を完全に獲得する。そうすると誰もあなたの心を揺さぶることも捕えることもできなくなり、あなたは完全に神のものとなるのである。この道を歩めば神の言葉があなたに常に明らかになり、理解できないことについても啓きが与えられ、これはすべてあなたの協力を通して達成することができる。それゆえ、神は常に、「わたしと協調するものには、二倍を与える」と言うのである。あなたがたはこの道をしっかり見ていなければならない。正しい道を歩みたいのであれば、神の心を満たすために出来ることをすべてしなければならない。霊的生活を獲得するために出来ることをすべてしなければならない。始めはこの追求において立派な成果を達成できないかもしれないが、後戻りしたり、否定的になったりすることなく、全力で取り組み続けなければならない。霊的生活を送れば送るほど、心は神の言葉で満たされ、このようなことを常に考えるようになり、常にその重荷をになうようになる。その後、霊的生活を通して心の一番奥にある真実を神に示しなさい。あなたに何をする覚悟があるのか、何を考えているのか、神の言葉の理解と見方を神に伝えなさい。小さなことであっても、何も隠してはいけない。心の中にある言葉を口にし、神に本当の感情を明らかにする練習をしなさい。心の中にあることであれば、必ず言いなさい。このように話せば話すほど、あなたは神の素晴らしさを感じるようになり、あなたの心はますます神へと引き寄せられる。こうなると、あなたにとって神が誰よりも大切だと感じるようになる。何があっても決して神のそばを離れなくなる。このような霊的ディボーションを日々実践し、それをおろそかにすることなく、自分の人生における極めて重要なことと捉えるならば、神の言葉があなたの心を占領するようになる。これが聖霊に触れられるということなのである。それはあたかも心がずっと神のものであったかのようで、あなたが愛するものが常に心にあるようなものである。それを誰もあなたから取り上げることはできない。こうなると、神は真にあなたの内に生きていて、あなたの心には神のための場所が存在するようになるのである。

完全にされた人々への約束

神はどのような道をたどって人を完全にするのだろうか。どのような側面を含んでいるだろうか。あなたは神があなたを完全にするのを喜んで受け入れるだろうか。神の裁きや刑罰を喜んで受け入れるだろうか。このような問いについてあなたは何を知ってい

るだろうか。もしあなたがこう言った知識について語るができないなら、このことは、あなたが依然として神の働きについて知らず、聖霊によって全く啓かれていないことを示している。そのような人は神に完全にしてもらうことはできない。彼らは、少しの恵みを受けてつかの間楽しむだけであり、長きにわたって恵みを持ち続けることはできない。もし神の恵みを単に楽しむだけなら、神に完全にしてもらうことはできない。一部の人たちは、肉の平和と喜び、逆境や不運のない安楽な人生、争いやいさかいもなく家族と平和に生きること、などで満足するかも知れない。彼らは、このことが神の祝福であるに違いないとさえ信じるかも知れない。しかし実際は、それは単なる神の恵みにすぎない。あなたがたは、神の恵みを楽しむだけで満足してはいけない。このような考え方は、あまりにも低俗である。あなたが日々、神の言葉を読み、毎日祈りを捧げ、そしてあなたの霊が特別な喜びや平和を感じるとしても、結局のところ、あなたは、神やその働きに関するどんな認識についても話すことはできなかつたり、そのようなことをした経験も持っていなかつたりする。そして、あなたがどれ程たくさん神の言葉を飲み食いしたとしても、もし霊の中で平和や喜びを感じ、神の言葉はまるで十分に喜び尽くせないかのように比類なく甘美であると感じるだけで、あなたが神の言葉について実際の経験を持たず、神の言葉を現実的に自分のものとしていないのであれば、あなたはそのような神への信仰のあり方の結果として、何を受け取ることが出来るだろうか。もしあなたが、神の言葉の本質を生きることができないなら、あなたが神の言葉を飲み食いすること、そしてあなたの祈りはすべて宗教的なものである。そうであれば、そのような人々は神に完全にしてもらうことはできず、神のものとされることもできない。神のものとされる人とは真理を追求する人である。神のものとされるのは、人の肉でもなければ所有するものでもなく、人の内にある、神に属する一部である。ゆえに、神が完全にするのは人の肉ではなく心であり、そうすることによって、人の心は神のものとされる。言い換えれば、神が人を完全にすることの本質は、人の心が神に向きを変え神を愛するようになるために、神が人の心を完全にする、ということである。

人の肉体はみな肉のものである。人の肉を獲得することは、神のいかなる目的にも役立ちはない。というのは、時間と共に減衰していくのは避けられないからである。人の肉は、神からの嗣業や祝福を受け取ることができない。もし神が、人の肉だけを獲得し、人の肉をその流れの中に置いたままにするなら、名目上、人はその流れの中にいるだろう。しかし、その心はサタンに属するだろう。そうであれば、人は神を表わせなければかりか、神の重荷になるだろう。こうして、人を選ぶ神の行為は無意味になるだろう

。神に完全にしてもらうことができる人たちは、神から祝福や嗣業を受け取ることで
きる人たちである。すなわち、そのような人たちは、神が所有するものそして神という
存在を取り入れる。そうすることによって取り入れたものは彼らが内部に持つものとな
る。すなわち、彼らは、神の言葉が彼らの中に働いたものすべてを所有している。神と
いう存在が何であれ、あなたがたは、その存在のすべてをまさにそのまま受け入れるこ
とができる。そうすることによって、真理を生きることができる。これが、神によって
完全にされ、神のものとされた人である。そのような人だけが、次に掲げる、神が授け
る祝福を受け継ぐ資格がある。

1. 神の愛のすべてを受け取ること。
2. あらゆる事柄において神の旨に沿って行動すること。
3. 神の導きを受け取り、神の光の下で生き、神の啓示を受けること。
4. 地上で神によって愛された姿を生きること、すなわち、ペテロと同じように真に
神を愛すること、神の為に十字架にかけられ、死が神の愛に対する報いに相応しいと感
じるほどに神を愛すること、そしてペテロと同じ栄光を受けること。
5. 地上のすべての人によって愛され、敬われ、称賛されること。
6. 死やハデスの束縛のすべてを克服すること、サタンに働く機会を与えず、神のも
のとされていること、新鮮でいきいきとした霊的状态であること、いささかの疲れもな
いこと。
7. 人生のあらゆるときに、あたかも神の栄光の日の到来を見てきた人のように、言
語を絶するほどの高揚感や気持ちの高まりをもてること。
8. 神とともに栄光を受け取ること、そして神の最愛の聖人たちに似た容貌をもてる
こと。
9. 神が地上で愛するもの、すなわち神の最愛の子になること。
10. 姿を変えて、神と共に、肉を超越して第三の天まで引き上げられること。

このような神の祝福を受け継ぐことができる人だけが、神によって完全にされ、神の
ものとされた人である。あなたは、何かを獲得してきただろうか。どれほどまで、神は
あなたを完全にしてくださるだろうか。神は手当たり次第に、人を完全にしない。そこには
人が見ることができる条件と明白な結果がある。人が思うように、神への信仰がある限

り神によって完全にされ神のものとされ、神の祝福や嗣業を地上で受け取ることができる、ということではない。そのような事柄は極めて難しく、姿を変えろというような話になるとなお一層難しい。現在、あなたがたが主として追求すべきことは、すべての事柄において神によって完全にされることであり、そしてあなたがたが向かい合っているすべての人、事柄、物事を通して、神によって完全にされることである。そうすることによって、神という存在のより多くのものがあなたがたの中へ取り込まれる。あなたがたは神から、より多くより大きな祝福を受け継ぐ資格を得る前に、まず地上で、神からの嗣業を受け取らねばならない。今述べたことのすべてが、あなたがたが追求すべきことであり、最初に理解すべきことである。あなたが、すべての事柄において神によって完全にされることを追求すればするほど、あなたは、すべての事柄において神の手を見ることができ、そこから様々な観点を通じ、また様々な事柄において、神の言葉の存在と現実に入ること積極的に求めるようになる。あなたは、単に罪を犯さない、あるいは観念を持たない、処世哲学を全く持たない、人間としての意思を持たないといった、消極的な状態に甘んじてはいけない。神は、いろいろなやり方で人を完全にする。結果的にあなたがあらゆる事柄において完全にされることは可能である。あなたは、肯定的なことから完全にされることが可能であるだけでなく、否定的なことからも完全にされることができ、結果的にあなたが得るものを豊かにする。毎日、神によって完全にされる好機そして神のものとされる時がある。そのような経験をする、あなたは大きく変わる。するとあなたは自然に、以前には理解できなかった多くの事柄に対し洞察力を獲得することができるだろう。すなわち、誰かがあなたに教える必要もなく、無意識のうちに、あなたは神によって啓かれ、あらゆる事柄において啓示を受け、細部に至るまで経験するようになる。神は、あなたを、どちらの側にも曲がって進まないように導くだろう。そしてあなたは、神によって完全にされる道を進むだろう。

神によって完全にされることは、神の言葉を飲み食いすることによって完全にされることに限定されない。このような経験のあり方は、あまりにも偏っていて、必要なものを網羅していない。人を非常に狭い範囲に閉じ込めるだけである。このような場合、大いに必要とされる霊の養分が得られない。もし、あなたがたが神によって完全にされることを望むなら、あらゆる事柄を経験することを学び、直面するいかなる事柄においても、神の啓きを与えられなくてはならない。何かに向き合うときは常に、良いことであれ悪いことであれ、あなたにとって得るものがなければならない。あなたが消極的になることがあってはならない。何が起ころうと、あなたは、神の側に立ってそれを考える

ことが求められるのであって、人の観点から分析あるいは検討してはいけない（これは、あなたの経験における逸脱である）。もしあなたの経験の仕方がこのようであれば、あなたの心はいのちの重荷で一杯になるだろう。あなたは常に神の顔の光の下で生き、経験において容易に逸脱することはないだろう。そのような人は、大きな展望を持つ。人が神に完全にしてもらえる機会は多く存在する。すべてが、あなたがたが神を真に愛する人々であるか、そして神によって完全にされ、神のものとされ、さらに神の祝福や神からの嗣業を受け取る決意を持っているかどうかにかかっている。決意を持つだけでは不十分である。あなたがたは多くの認識を持たなければならない。さもなければ、実践においていつも逸脱してしまうだろう。神は、あなたがた一人ひとりを完全にしたいと思っている。現在、多くの人たちが長きにわたって、神の働きをすでに受け入れてきた。しかしながら、彼らは単に神の恵みに浴することだけにとどまり、肉の慰めを受け取ることに熱心であるのが、現状である。彼らはより多くの、より高度な啓示を受け取ることに熱心でなく、人の心は依然として、いつも外側の世界に属していることを示している。人の働き、奉仕、そして神への愛の心は、以前ほど不純でないにしても、人の内なる本質や無知な考え方に関する限り、人は依然として、平安と肉の喜びを絶えず求めるだけで、神によって完全にしてもらう為の条件や、神が人を完全にする目的が何であるかには関心を持たない。したがって、大部分の人たちの生活は、依然として、いささかの变化もなく、俗悪で退廃的である。彼らは全く、神への信仰を重要問題と見なさない。むしろ、他人のために信仰を持っているかのように、真剣さあるいは熱心さを欠いており、目的もなくふらつきながら、最小限の労力でなんとかやっているような状況である。あらゆる事柄において神の言葉へ入ることを求め、より豊かな物事を獲得し、そして今日、神の家のより大きな富となり、さらに多くの神の祝福を受ける人はほとんどいない。もしあなたが、あらゆる事柄において神によって完全にされ、地上で神の約束を受け継ぐことを求めるなら、もしあなたが、あらゆる事柄において神に啓かれ、年月が怠惰に過ぎ去るままにしないなら、これは、積極的に入っていくべき理想の道である。このようなやり方によってのみ、あなたは神によって完全にしてもらう価値と資格のある人間になることができる。あなたは真に、神によって完全にされることを求める者だろうか。あなたは真に、あらゆる事柄において勤勉な者だろうか。あなたは、ペテロに匹敵する神への愛の心を持っているだろうか。イエスが愛したように神を愛する意志を持っているだろうか。あなたは長年、イエスへの信仰を持ち続けてきた。ところであなたは、イエスがどのように神を愛したかを理解しているだろうか。あなたが信仰しているのは、真にイエスなのだろうか。あなたは、今日の実践の神を信じている。

ところであなたは、肉を持つ実践の神が天上の神をどのように愛するかを理解しているだろうか。あなたは、主イエス・キリストに対する信仰を持っている。それは、人類の罪を贖うためのイエスの十字架上の死と彼が行った奇跡が一般的に受け入れられた真実であるがためである。しかしながら、人の信仰は、主イエス・キリストについての認識や正しい理解から生まれたのではない。あなたは、イエスの名前だけを信じ、彼の霊に対する信仰心は持っていない。なぜなら、あなたは、イエスがどのように神を愛したかに注目しないからである。あなたの神への信仰は、あまりにも子供じみている。あなたは、長年にわたってイエスへの信仰心を抱いてきたが、神をどのように愛すべきかを、あなたは知らない。このことは、あなたを世界最大の愚か者にしてしまわないだろうか。このことは、長年の間、あなたは、主イエス・キリストにある食べ物を無駄に食べてきたことを示す。わたしはそのような人を嫌うだけでなく、あなたが崇拝する主イエス・キリストもまたそのような人を嫌うと確信する。一体どのようにして、そのような人が神に完全してもらうことができるだろうか。あなたは赤面しないのだろうか。恥ずかしく思わないのだろうか。あなたは依然として、あなたの主イエス・キリストに顔を向ける厚かましさを持っているのだろうか。あなたがたは皆、わたしの言葉の意味が理解できるだろうか。

悪人は必ず罰を受ける

自分自身を見つめ、すべての行いにおいて義を実践しているかどうか、そしてすべての行動が神の監視を受けているかどうかを確かめなさい。これは神を信じる者が物事を行う際の原則である。神を満足させられること、神の世話と保護を受け入れることによって、あなたがたは義であるとされる。神の目から見れば、神の世話と保護、そして神に完全にされることを受け入れ、神のものとされるすべての人が義であり、神はそれらの人を皆かけがえのないものとみなす。神の現在の言葉を受け入れれば受け入れるほど、神の心意を受け取り理解することができるようになり、それによりさらに神の言葉を生き、神の求めを満たすことができるようになる。これがあなたがたに神が委ねる任務であり、あなたがたの誰もがこれを成し遂げることができなければならない。まるで神が変化しない粘土の像でもあるかのように、自分の観念によって神を押し測り限定したり、神を聖書に由来する特性にすっかり限定し、限られた働きの範囲に閉じ込めたりするなら、それは神を断罪したことを証明している。旧約聖書時代のユダヤ人は、神はメシアという名称以外では呼ばれることなどありえず、そしてメシアと呼ばれるものだけが神であるかのように、神を自分たちの心に描いた形の固定した偶像とみなしたため

に、そしてまた人は神を（命のない）粘土の像であるかのように仕え崇拝したために、彼らは当時のイエスを十字架に張り付け、死刑を宣告した。こうして罪のないイエスは死刑に処されたのである。神はなんの罪もなかったのに、人は神を許そうとせず、神を死刑にすることを強く要求したため、イエスは磔刑に処された。人は神は不変であるといつも信じており、聖書という一冊の書物に基づいて神を定義する。まるで人が神の経営を完全に理解しており、人が神のなす事すべてをその手中に収めているかのようである。人々は極度に愚かであり、極度に傲慢で、誰にも誇張の才能がある。神についてのあなたの認識がいかに優れていようとも、わたしは言う。あなたは神を知らず、神に最も敵対する者であり、神を断罪した。神の働きに従い、神に完全にされるための道を歩くことがあなたにはまったくできないからである。神はなぜ人の行いに決して満足しないのか。それは人が神を知らず、観念を持ちすぎており、人の神についての認識が現実とまったく一致しておらず、それどころか、同じ主題を代わり映えもなく単調に繰り返す、どのような状況でも取り組み方が同じだからである。そのために、今日地上にやってきた神は、再び人間によって十字架に張り付けられる。人類のなんと残酷なことか。共謀と陰謀、お互いからのひったくり合い、名声や富の奪い合い、殺し合い……一体いつ終わるのか。神が語った何十万語もの言葉にもかかわらず、誰一人として目覚めてはいない。人々は自分の家族、息子や娘、職業、将来の見通し、地位、虚飾、金のために、また食べるもの、着るもの、肉体のために行動する。しかし一体、真に神のために行動している者はいるのか。神のために行動している者でさえ、神を知っている者は非常に少ない。自身の利害のために行動しない人はどれほどいるのか。自身の地位を守るために他人を抑圧したり排斥したりしない人はどれほどいるのか。だから神は幾度となく無理やり死刑に処され、無数の野蛮な裁判官が神を断罪し、再び十字架に張り付けたのである。真に神のために行動ゆえに義人と呼ばれうる者はどれほどいるのか。

神の前で聖者や義なる者として完全にされるのはそれほど容易なことであろうか。「地上に義なる者はなく、義なる者はこの世にない」という言葉は真実である。あなたがたが神の前に出るとき、自分の着ているもの、自分の言葉と行動のひとつひとつ、考えと思いのひとつひとつ、さらには毎日見る夢について考えなさい。これらはすべて、あなた自身のためのものである。それが真実の状態ではないか。「義」とは、他者に施しを行うことではなく、隣人を自分自身のように愛することでもなく、口論や喧嘩、強奪や盗みをしないということでもない。義とは、神に託された任務を自分の本分とし、神による采配と取り決めとを自分の天与の使命として、時と場所を選ばず、ちょうど主イ

エスがすべてを行ったように、それらに従うことである。これが神の言う義である。ロトが義と呼ばれることができたのは、神から送られた二人の天使を損得を顧みずに救ったからである。ただし、彼がこの時に行ったことが義と呼ばれうるだけであり、彼を義なる者と呼ぶことはできない。それはあくまで、ロトが神を見ており、二人の娘を天使と引き換えに差し出したからであり、彼の過去の行いすべてが義を表していたわけではない。そのためわたしは、「地上に義なる者はいない」と言う。現在回復の流れにある者の中にも、義と呼ばれうる者はいない。あなたの行為がいかに良いものであっても、いかに神の名を讃えているように見えても、人を殴ることも呪うこともなく、人から盗むことも奪うこともなくとも、それで義なる者と呼ばれることはできない。それは普通の人でも行えることだからである。今ここで重要なのは、あなたが神を知らないということである。今言えるのは、あなたは現在幾ばくかの正常な人間性を有しているということだけであり、神が言う義の要素は一切有していない。それゆえ、あなたがすることは何一つ、あなたが神を知っているということを証明できないのである。

以前、神が天国にいたとき、人は神を欺くようなふるまいをした。現在、神は人のもとにおり、すでに何年が経過しているか誰も知らないが、物事を行うのに人はいまだに形ばかりの行いをして神をごまかそうとしている。人間の考えはあまりにも退歩していないか。これはユダも同じであった。イエスが現れる前、ユダは嘘をついて兄弟姉妹を騙しており、イエスが現れた後も変わることはなかった。ユダはイエスを少しも知ることなく、最後にはイエスを裏切った。これはユダが神を知らなかったからではないのか。もしも今日、いまだに神を知らないなら、あなたがたもユダになる可能性があり、その結果として、二千年前の恵みの時代に起こったイエスの磔の悲劇は再び繰り返されるであろう。信じないのか。これは事実である。現在、大半の人は同じ状況にあり、こう言うのは少し早すぎるかもしれないが、そのような人はみなユダの役割を演じている。わたしは戯言を言っているのではなく、事実に基づいて語っているのであり、人は納得せざるを得ない。多くの人が謙遜なふりをするが、心の中には腐った水たまり、悪臭を放つどぶがあるだけである。現在、教会にはこのような人が多すぎるが、あなたがたはわたしがそれにまったく気づいていないと思っている。今日、わたしの霊がわたしのために決断し、証言する。わたしが何も知らないと思っているのか。あなたがたの心の中の不正な思い、心に秘めている物事をわたしが何も理解していないと思っているのか。神を出し抜くことはそんなに容易か。神を自分の思い通りのやり方で扱ってよいと思っているのか。昔、あなたがたが束縛されるのではないかと心配し、わたしはあなたがた

に自由を与え続けたが、人間はわたしが好くしてやっていることがわからず、寸を与えれば尺を取っていった。お互いに尋ねてみなさい。わたしはほとんど一度も誰かを取り扱ったことはなく、誰かを軽く叱責したこともない。しかし人間の動機や観念についてはこの上なく明確に知り抜いている。神が、神自身が立証するその神が愚かだとでも思っているのか。そうであれば、人はあまりに盲目であるとわたしは言う。わたしはあなたを暴くことはしないが、あなたがどこまで墮落し得るか見てみようではないか。あなたの抜け目ない小さな計略があなたを救ってくれるのか、それとも神を愛そうとする最大限の努力があなたを救えるのかを見てみようではないか。今日、わたしはあなたを非難しない。神の時が到来するのを待ち、神があなたにどのような報いを与えるか見ようではないか。今あなたと無駄なお喋りをしている時間はなく、わたしのもっと大事な仕事をあなただけのために遅らせる気もない。あなたのようなうじ虫には、神が取り扱うのに必要な時間をかけるだけの値打ちはない。だからただ、あなたがどれだけ自墮落になれるかを見てみようではないか。このような人は神を認識することを少しも求めず、神への愛も少しも持ち合わせていないのに、神に義と呼ばれることを望む。これは笑い話ではないのか。少数の人が実際に正直なので、わたしは人間にいのちを与え続けることにだけ集中していく。今日、わたしは今すべきことをするだけだが、将来は、それぞれがしてきたことに応じて各人に報いをもたらす。これで言うべきことはすべて言った。これがまさにわたしの行う働きだからである。わたしは行うべきことだけを行い、行うべきでないことは行わない。しかし、あなたがたがさらに時間をかけて熟考することを望む。あなたの神の認識のうち、実際にどれほどが正しいのか。あなたは神を再び十字架に張り付けた者なのか。わたしの最後の言葉はこれである。「神を十字架に付ける者に災いあれ」。

正常な状態へ入るには

神の言葉を受け入れれば受け入れるほど、人はより啓かれ、神を認識することの追求においてますます飢えと渇きを感じるようになる。神の言葉を受け入れる人だけが、より豊かで深遠な経験をすることができる。そしてそのような人は、いのちが胡麻の花のように成長し続けられる唯一の者たちである。いのちを追求する人はみな、それを自分の定職として扱うべきである。また、「神がおられなければ、わたしは生きられない。神がおられなければ、わたしは何も成し遂げられない。神がおられなければ、何もかもが空虚だ」と思わなければならない。そこで、そのような人は「聖霊の臨在がなければ、わたしは何もしない。神の言葉を読んでも効果がなければ、わたしは何かをすること

に無関心だ」という決意も抱くべきである。自分を甘やかしてはならない。いのちの経験は神の啓きと導きから生じるのであって、それはあなたがたの主観的な努力の結晶である。あなたがたは自分自身に対し、「いのちの経験について言えば、わたしは自分の好きなようにすることはできない」と求めるべきである。

時として異常な状態にある場合、あなたは神の臨在を失い、祈っても神を感じられなくなる。そのような時に不安を感じるのは正常なことである。あなたは直ちに探求を始めなければならない。そうしなければ、神があなたから離れてしまい、一日か二日、あるいは一ヵ月か二ヵ月にもわたり、あなたには聖霊の臨在がなく、またそれ以上に、聖霊の働きがなくなってしまう。そうした状況において、あなたは信じられないほど麻痺し、再びサタンに囚われ、ありとあらゆる行ないに手を染められるまでになってしまう。無闇に富を欲しがり、自分の兄弟姉妹を騙し、映画や動画に夢中になり、麻雀をして遊び、果ては煙草を吸って酒を飲みさえしても、懲らしめられることがない。あなたの心は神から離れてしまっており、あなたは密かに自分の道を進み、神の働きについて自分勝手に判断を下してきた。性的な罪を犯しても羞恥を一切感じないほど、人々が低く沈んだ場合もある。このような人は聖霊に捨てられたのであって、実際のところ、聖霊の働きはずっと以前からこのような人の中に存在していない。人が目の当たりにできるのは、悪の手がさらに伸びる中、彼らが墮落へとますます低く沈んでいくという光景だけである。彼らはしまいにはこの道の存在を否定し、罪を犯すにつれてサタンに囚われる。自分に聖霊の臨在だけがあり、聖霊の働きはないことがわかったとしたら、それはすでに危険な状況である。聖霊の臨在を感じることをさえできなければ、あなたは死の淵に立たされている。悔い改めなければ、あなたはサタンのもとへと完全に立ち返ったことになり、淘汰される者の一人となるだろう。ゆえに、聖霊の臨在がある（つまり、罪を犯さず、自制し、露骨に神に抵抗するようなことをしていない）だけで、聖霊の働きがない（祈っても感動せず、神の言葉を飲み食いしても明白な啓きや照らしを得られず、神の言葉を飲み食いすることに関心がなく、自分のいのちが少しも成長せず、ずっと以前に偉大な照らしを奪われてしまった）状況に自分がいるとわかったら、そのようなとき、あなたはよりいっそう警戒しなければならない。自分を甘やかさず、これ以上自分の性格の自由にさせてはいけない。聖霊の臨在はいつ消えるかわからない。だからこそ、そうした状況は危険なのである。自分がそうした状態にあると気づいたなら、できるだけすぐに方向転換するよう試みなさい。まずは悔い改めの祈りを捧げ、自分にもう一度憐みを授けてくれるよう神に願いなさい。もっと真剣に祈り、心を静めて神の言葉を

さらに多く飲み食いしなさい。それを基礎として、祈りに費やす時間をもっと増やさなければならぬ。歌うこと、祈ること、神の言葉を飲み食いすること、そして自分の本分を尽くすことに二倍の努力を費やしなさい。あなたが弱り切っているとき、あなたの心はいともたやすくサタンに取り憑かれる。そうなれば、あなたの心は神から奪われ、サタンのもとに戻される。すると、あなたには聖霊の臨在がなくなる。そのようなとき、聖霊の働きを取り戻すのは二倍難しくなる。聖霊がまだあなたと共にいるうちに、その働きを求めたほうがよい。そうすることで、神はより多くの啓きをあなたに授けることができ、あなたを捨てることもしないだろう。祈ること、讃美歌を歌うこと、自分の役割を果たすこと、神の言葉を飲み食いすることはどれも、サタンが働きを行なう機会を得られないようにするために、そして聖霊があなたの中で働きを行なえるようにするためである。このようにして聖霊の働きを取り戻すのではなく、ただじっと待つだけなら、聖霊の臨在を失ったとき、聖霊があなたを特に感動させたり、ひとときを照らして啓いたりしない限り、聖霊の働きを取り戻すのは容易でない。たとえ聖霊によって感動したり、聖霊の照らしと啓きを得たりしたとしても、あなたの状態が回復するには一日や二日では済まず、一切回復せずに半年経つこともあるだろう。これはひとえに、人々が自分に甘すぎ、正常な形で物事を経験することができず、そのため聖霊に捨てられるからである。たとえ聖霊の働きを取り戻しても、あなたは依然として神の現在の働きを明瞭に理解できないだろう。と言うのも、あたかも一万里も後方に取り残されたかのごとく、いのちの経験において大きく後れをとったからである。これは恐ろしいことではないか。しかし、わたしはそうした人たちに言うておくが、いま悔い改めても手遅れではないものの、一つ条件がある。つまり、より懸命に働き、怠惰の中に浸らないこと。他の人たちが一日に五回祈るなら、あなたは十回祈らなければならない。他の人たちが神の言葉を一日二時間飲み食いするなら、あなたは四時間ないし六時間そうしなければならない。そして他の人たちが二時間にわたって讃美歌を聴くなら、あなたは少なくとも半日耳を傾けなければならない。自分が感動し、心が神のもとに立ち返り、これ以上あえて神から離れないようになるまで、神の前で頻繁に心を静め、神の愛について考えなさい。そのとき初めてあなたの実践は実を結び、以前の正常な状態を取り戻すことができる。

多くの熱意を自分の追求に込めながら、正しい軌道に乗れない人がいる。それは、彼らがあまりに不注意であり、霊的な物事に一切注意を払わないからである。彼らは神の言葉をどう経験すべきかわからず、聖霊の働きや臨在が何であるかを知らない。そのよ

うな人は熱心だが愚かであり、いのちを追い求めていない。それは、霊に関する認識がほんの少しもなく、聖霊が現在行なっている働きの進展について何も知らず、自分自身の霊における状態に関して無知だからである。そのような人の信仰は愚かな信仰ではないか。そのような人の追求は最後に何も生み出さない。神への信仰においていのちの成長を成し遂げる鍵は、神が行なう働きを自分の経験の中で認識し、神の素晴らしさを目の当たりにし、神の旨を理解することで、神のすべての采配に従い、神の言葉を取り入れて自分のいのちとし、それによって神を満足させることである。あなたの信仰が愚かな信仰で、霊的な事柄やいのちの性質の変化に注意を払わず、真理に向かって努力することがなければ、あなたは神の旨を把握できるだろうか。神が求めることを理解しなければ、あなたは経験することができず、ゆえに実践の道をもたない。神の言葉を経験する際に注意を払わなければならないのは、それらがあなたの中で生み出す効果であり、それによって神の言葉から神を知るようになる。神の言葉を読むことしか知らず、それらをどう経験するかを知らなければ、そのことは、あなたが霊的な事柄について無知であることを示しているのではないか。現在、ほとんどの人が神の言葉を経験できずにおり、ゆえに神の働きを知らずにいる。これはその人の実践における失敗ではないのか。このようにし続けるなら、彼らはどの時点で物事を十分豊かに経験し、いのちの成長を成し遂げることができるのか。それは単なる空虚な話にしかないのではないか。あなたがたの中には教義にばかり集中し、霊的な事柄について何も知らず、それでいて自分が神によって立派に活用され、神に祝福されることを願う人が大勢いる。それはまったく非現実的だ。したがって、あなたがたはこうした失敗に終止符を打ち、全員が霊的生活の正しい軌道に乗り、真実の経験をもち、神の言葉の現実へと真に入れるようにならない。

神の心になうように仕えるには

神を信じる時、いったいどのようにして神に仕えるべきか。神に仕える人はどのような条件を満たし、どのような真理を理解しなければならないのか。また、あなたがたは奉仕をする中でどこへ逸脱するだろうか。これらすべてについて、あなたがたは答えを知らなければならない。これらの事柄は、あなたがたがどのように神を信じるか、聖霊が導く道をどのように歩むか、また、あらゆる事においてどのように神の采配に服従し、それにより、あなたがたの内になされる神の働きの一つひとつの歩みを認識できるようになることに関係している。そこに到達すると、あなたがたは神への信仰とは何であるのか、いかにして神を正しく信じるべきか、そして、神の心になって行動するた

めには何をすべきかということを充分に理解できるようになる。それによって、あなたがたはすっかり完全に神の働きに従うようになり、ひとつの不満もなく、神の働きを裁くことも、分析することもせず、ましてや研究することなど全くなくなる。そういうわけで、あなたがたは皆死に至るまで神に従うことができるようになり、神があなたがたを羊のように引き連れ、屠ることに身をまかせるようになる。そうすれば、皆1990年代のペテロになることができ、たとえ十字架上においても、一言の不満もこぼさず、神を愛し尽くすことができるようになる。その時初めて、あなたがたは1990年代のペテロとして生きることができるようになる。

決心すれば誰でも神に仕えることはできるが、神の心にあらん限りの注意を払い、神の心を理解する人々でなければ神に仕える資格や権利はない。わたしは、あなたがたの間で発見したことがある。多くの人々、神のために熱心に福音を広め、神のために各地を巡回し、自らを神のために費やし、神のために物事を諦めるなどしていれば、それが神に仕えることだと信じている。より多くの宗教的な人々は、神に仕えることは、聖書を抱えて走り回り、天の国の福音を広め、罪を悔い改め告白させることによって人々を救うことを意味すると信じている。また、神に仕えることは、高度な学問を修め神学校で訓練を受けた後に礼拝堂で説教し、聖書を読んで人々に教えることだと考えている宗教官僚が大勢いる。さらに、貧しい地域には、神に仕えるということは兄弟姉妹のもとで病人を癒したり、悪霊を追い払ったり、あるいは兄弟姉妹のために祈り仕えることだと信じている人々もいる。あなたがたの中には、神に仕えることは、神の言葉を飲み食いし、毎日神に祈り、また各地の教会を訪れ働きを為すことだと信じている人がたくさんいる。また、神に仕えるということは結婚することも家族をもつこともなく、自分の存在すべてをひたすら神に捧げることだと信じている兄弟姉妹もいる。しかし、神に仕えることが実際何を意味するのかを知っている人はほとんどいない。神に仕える人は空にある星の数ほど多いが、神に直接仕えることができる人の数、神の旨に沿って仕えることができる人の数は微々たるもので、極めて少ない。なぜわたしはこう言うのか。わたしがこんなことを言うのは、あなたがたが「神への奉仕」という言葉の本質を理解していないからであり、神の心になうように仕えるにはどうすればいいのか、ほとんどわかっていないからである。人々は一刻も早く、神に対するどのような奉仕が神の旨になうのかを理解しなければならない。

あなたがたが神の心になうように仕えたいと望むならば、どのような人が神を喜ばせ、どのような人が神に忌み嫌われるのか、どのような人が神によって完全にされ、ど

のような人に神に仕える資格があるのかをまず理解しなければならない。これはあなたがたが身に着けておかなければならない最小限の認識である。その上、あなたがたは神の働きの目的と、神が今ここで行う働きを知るべきである。これを理解した後、神の言葉の導きを通して、あなたがたはまず入り、まず神の任務を受けるべきである。あなたがたが神の言葉を実際に経験し、本当に神の働きを知れば、あなたがたには神に仕える資格がある。そして、あなたがたが神に仕える時、神はあなたがたの霊の目を開き、あなたがたが神の働きをより深く理解し、いっそう明確に見ることができるようになる。この現実に入ると、あなたの経験はより深く、現実的になる。そのような経験をした人は皆、諸教会を巡り歩き、兄弟姉妹に必要なものを提供することができるようになり、その結果、あなたがたは、お互いの長所を利用し合い自分の欠点を補い、霊においてより豊かな認識を獲得する。この結果を達成して初めてあなたがたは神の心にかなうように仕えることができ、奉仕する過程で神によって完全にされる。

神に仕える人は、神の知己でなければならず、神を喜ばせ、神に最大限忠実でなければならない。内密に行動しようと、公然と行動しようと、神の前で神を喜ばすことができ、神の前ではしっかり立つことができる。また、他の人々があなたをどのように扱おうとも、いつも歩むべき道を歩み、神の重荷に一心に注意を払う。こういう人だけが神の知己である。神の知己が直接神に仕えることができるのは、彼らが神から重大な任務や重荷を与えられているからである。彼らは神の心を自分の心とし、神の重荷を自分の重荷とすることができ、自分自身の将来の展望など一切考慮しない。将来の展望が何もなく、何も得られそうにない時でさえ、彼らは常に愛に溢れる心で神を信じる。だから、このような人は神の知己なのである。神の知己は、神の心を知る人でもある。神の心を知る人だけが、神の絶え間ない憂慮や神の考えを共有することができる。肉体は痛み弱くとも、彼らは痛みを耐え、神を満足させるために、自分の愛するものを断念することができる。神はそのような人にさらなる重荷を与え、神がしたいと望むことはこのような人の証しの中に示される。従って、このような人は神を喜ばせ、神自身の心に適った神の僕である。そして、このような人だけが神と共に統治することができる。あなたが本当に神の知己になった時が、まさに神と共に統治する時なのである。

イエスが神の任務、すなわち全人類を贖う働きを完了することができたのは、イエスが神の心に全ての注意を払い、自分自身のためには一切計画を立てたり準備をしたりしなかったからである。だからイエスも神の知己であり、また神自身であった。それはあなたがたが皆とてもよく理解しているとおりである。（実際、イエスは神によって証し

された神自身であった。わたしがこのことをここで述べるのは、イエスに関する事実によりこの問題を解説するためである。) イエスは神の経営(救いの)計画を全ての中心に置くことができ、いつも天の父に祈り、天の父の心を求めた。イエスは祈り、次のように語った。「父なる神よ。あなたの心にかなうとおりに成し遂げてください。わたしの望みどおりにではなく、あなたの計画どおりに行なってください。人は弱いかもしれませんが、あなたが人のことを気遣うべきでしょうか。あなたの手の中では蟻のような人間が、どうしてあなたの配慮に価することがありえるでしょうか。わたしが心の中で願うのは、あなたの心を成就することだけです。わたしの望みは、あなたがわたしの内で行う業を、あなたが望むとおりに行えることです」。エルサレムへ向かう途上、イエスは苦悶して、あたかもナイフが心に捻じ込まれているかのように感じたが、その言葉を取り消す思いは微塵もなかった。いつも強い力がイエスが十字架にかけられる場所までイエスに付き添っていた。最終的に、イエスは十字架に釘付けにされ、罪深い肉と同様になり、人類を贖う働きを完了した。イエスは死と黄泉の束縛から自由になった。イエスの前に、死も、地獄もハデスも力を失い、イエスに打ち負かされた。イエスは三十三年生きたが、生涯を通して彼はいつも全力を尽くし、その時の神の働きに従って神の心を満たし、決して自分の個人的損得は考慮せず、いつも父なる神の心のことを思った。そのため、イエスが洗礼を受けた後、神は「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言ったのである。神の前におけるイエスの神への奉仕は神の心にかなうものだったので、神はイエスの肩に全人類を贖うという大きな重荷を負わせ、それをイエスに成し遂げさせた。そして、イエスにはこの重要な任務を完成する資格と権限があった。生涯を通じて、イエスは神のために計り知れないほどの苦しみに耐え、幾度となくサタンの試みにあったが、決して落胆することはなかった。神がイエスにこれほど重大な任務を課したのはイエスを信頼し、愛していたからである。従って、神は自ら「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言ったのである。当時、イエスしかこの任務を果たすことができず、これは恵みの時代における全人類を贖うという神の働きの完成の実際的な一側面であった。

もしあなたがたが、イエスのように神の重荷に一心に注意を払い、自分の肉に背を向けることができるなら、神は重要な任務をあなたがたに委ね、あなたがたは神に仕えるための必要条件を満たすこととなる。そのような状況の下でのみ、あなたがたは自分が神の旨を行い、神の任務を果たしていると思い切って言うことができ、その時初めてあなたがたは本当に神に仕えていると言い切れる。イエスの例と比較して、あなたは自分

が神の知己だと思い切って言えるだろうか。神の旨を行なっていると言い切れるだろうか。神に本当に仕えていると思い切って言えるだろうか。今日、あなたは神にいかにか仕えるかを理解していないのに、それでも自分が神の知己だとあえて言うつもりか。もし神に仕えていると言うなら、神を冒瀆していることにならないであろうか。よく考えなさい。あなたは神に仕えているのか、それとも自分自身に仕えているのか。あなたはサタンに仕えているのに、頑固に神に仕えていると言い張る。そうすることで、神を冒瀆していないであろうか。多くの人がわたしに隠れて地位の恩恵をむやみに欲しがり、食べ物をもさばり食い、眠り呆け、思うことは肉の思いばかりで、肉の出口がないことをいつも恐れている。彼らは教会で正しい役割を果たさず、教会に居候しているか、あるいはわたしの言葉で兄弟姉妹を訓戒し、権威ある立場から他人に対して威張っている。これらの人々は神の旨を行なっていると言い張って、自分は神の知己だといつも言う。これはばかばかしくないであろうか。あなたに正しい意図があっても、神の旨に沿って仕えることができなければ、あなたは愚かなのだ。しかし意図が正しくないのに、それでもまだ神に仕えていると言うなら、あなたは神に背く人であり、神から罰を受けるべきである。わたしはそのような人にはまったく同情しない。彼らは神の家に居候し、いつも肉の安逸をやたらに求め、神の益となることは全く考慮しない。彼らはいつも自分たちに益になるものを求め、神の心には何の注意も払わない。何をする際にも神の霊による吟味を受け入れない。彼らはいつも兄弟姉妹を操り欺いている。彼らは二心の者で、ブドウ畑の狐のように、いつもブドウを盗み、ブドウ畑を踏み荒らしている。そのような人々が神の知己でありえるであろうか。神の祝福を受けるにふさわしいであろうか。あなたは自分のいのちのためにも教会のためにも負担を負わないのに、神の任務を受けるのにふさわしいであろうか。あなたのような人を誰があえて信頼するというのか。あなたがこのように仕えるなら、神はあえて大きな任務をあなたに託すだろうか。そうすれば、働きに遅れが生じるのではないか。

わたしがこう言うのは、神の心になんて仕えるためには、どのような条件を満たさなければならないかをあなたがたがわかるようにである。あなたがたが心を神に捧げなければ、あなたがたがイエスのように神の心に一心に注意を払わなければ、あなたがたは神に信頼されることはできないし、最終的には神の裁きを受けることになる。おそらく今日、あなたは神に仕える際、神を欺く意図を常に抱え、おざなりなやり方で神と接している。要するに、他の一切のことはさておき、あなたが神をだますと、情け容赦ない裁きがあなたに下される。あなたがたは神に仕えるための正しい道筋にちょうど入っ

たことを活かして、二心の忠誠ではなく、まず神に心を委ねるべきである。神の前であれ、他の人々の前であれ、あなたの心はいつも神の方に向いているべきであり、あなたはイエスが愛したように神を愛する決心をすべきである。そうすれば、あなたが神の心になつた神の僕となれるように、神はあなたを完全にする。あなたが本当に神に完全にされることを望むなら、また、神の心になうように仕えることを望むなら、神への信仰に関するこれまでの考え方を変え、これまでの仕え方を変えるべきである。そうすれば神に完全にされるあなたの部分は次第に大きくなる。このように、神はあなたを見捨てず、ペテロのように、あなたは神を愛する人々の先頭に立つ。あなたが悔い改めないままにいるなら、ユダと同じ最後を迎えることになる。これは神を信じるすべての人が理解すべきことである。

現実をどのように知るか

神は実際的な神である。神の全ての働きは現実であり、神が話す全ての言葉は現実であり、神が示す全ての真理が現実である。神の言葉でないものは全て空虚で、存在しないも同然であり、確かでない。今日、聖霊は人々を神の言葉に導いている。もし人々が現実に入ることを追求しようとするならば、彼らは現実を求めて、現実を知らなくてはならない。そしてその後、現実を体験し、また現実を生きなければならない。人々が現実を知れば知るほど、ますます他者の言葉が現実であるかどうか見分けることができるようになる。人々が現実を知れば知るほど、ますます観念を持たなくなる。人々が現実の体験をすればするほど、ますます神の真実の業を知るようになり、ますます、墮落したサタンの性質から自由になるのが容易になる。人々が現実を積みば積むほど神を知るようになり、ますます肉を嫌悪し真理を愛するようになる。そして、人々が現実を積みば積むほど、ますます神の要求する基準に近づくようになる。神のものとされた人々は現実が備わり、現実を知り、現実の体験を通して神の現実的な業を知るようになった人である。実際に神と協力し自分自身を抑制すればするほど、ますます聖霊の働きを得るようになり、さらなる現実を得るようになり、神による示しと導きを得るようになる。こうして、あなたの神の真の業に関する認識がますます広がっていく。もしあなたが現在の聖霊の光の中に生きることができれば、実践への現在の道はあなたにとってより明確になるだろうし、そして過去の宗教的観念と古い習慣からあなた自身がもっと切り離されることができるようだろう。今日、現実には焦点を当てている。人々が現実を積みば積むほどますます人々の真理に関する認識が明確になり、神の心の理解が増し加わる。現実には全ての文字や教義に優り、全ての理論や専門知識に優る。人々が現実には焦点を当

てれば当てるほど、心からさらに神を愛するようになり、神の言葉に対する飢え渴きが強くなる。あなたが常に現実に焦点を当てていれば、あなたの処世哲学、宗教的観念、そして生来の個性が、神の働きを受けて自然に消滅していくだろう。現実を追求しない人々、現実に関する認識を持っていない人々は、超自然的なものを追及しやすいがゆえに、彼らは簡単に騙されてしまうであろう。聖霊はこのような人々に働く術を持たず、ゆえに彼らは虚しさを感じ、自分の人生には何の意味もないと感じる。

聖霊は、実際にあなたが自分自身を訓練し、実際に探し求め、実際に祈り、そして真理を探究するための苦痛もいとわない時にのみ働くことができる。真理を求めない人々は、文字や教義、空虚な理論ばかりで、真理を知らない人々は、当然ながら神に関して多くの観念を持っている。こういった人々は、神が彼らの肉の体を霊の体に変えて、第三の天に昇れるようにしてもらうことだけを切望している。なんて愚かな人たちだ！このようなことを言う人たちは全て、神の認識や現実に関する何の認識も持ち合わせていない。このような人々は、神と協力することはできず、受動的に待っているだけだ。人々が真理を理解し、真理を明確に知り、さらには真理に入り、真理を実行するには、実際に自分自身を訓練し、実際に探求し、実際に飢え渴きを持たなくてはならない。あなたが飢え渴く時に、そしてあなたが実際に神と協力する時に、神の霊は確実にあなたの心を動かし、そしてあなたの内に働く。それは、あなたにさらなる啓示を運び、さらなる現実に関する認識を増やし、あなたのいのちのもっと助けとなる。

もし人々が神を知ろうとしたら、人々はまず神が現実の神であることを知り、神の言葉を知り、肉となった神の現実的な出現、神の現実的な働きを知らなくてはならない。神の全ての働きが現実であることを知った後でのみ、あなたは神と実際に協力することができ、それを通してのみ、あなたはあなたのいのちを成長させることができる。現実の認識を持たない人はみな、神の言葉を経験する術を持たず、彼らは自分たちの観念にのみ込まれてしまい、空想の中に生きる。その結果、彼らは神の言葉に関する認識を何も持たない。あなたの現実の認識が広ければ広いほど、あなたは神により近くなり、神とさらに親密になる。反対に、あなたがぼんやりとした抽象的なものと教義を求めれば求めるほど、あなたは神から遠く離れてしまうであろう。その結果、神の言葉を体験することはより厳しく難しく、神の言葉に入ることがより出来なくなってしまうと感じるようになる。神の言葉の現実に入り、霊的な生活の正しい軌道に乗りたいのであれば、あなたはまず現実を知り、曖昧で超自然的な物から離れなければならない。つまり、聖霊がどのように実際に内側からあなたを啓かせ、導くかを理解しなければならない。こ

のように、もしあなたが、あなたの中に働かれる聖霊の実的な働きを真に把握することができるならば、あなたは、神によって全き者とされる正しい道へと入るであろう。

今日、全てのことは現実から始まる。神の働きは最も現実的なものであり、人々が触れることができるものである。それは人々が体験でき、また達成できるものである。人々の中には曖昧で超自然的なものが多く存在し、自身が神の現在の働きを知ることの妨げとなっている。従って、人は経験において常に逸脱しており、常に困難を感じているが、それは全て人の観念によって引き起こされている。人々は聖霊の働きの原理を把握することができなく、現実を知らず、そのため自らの入りの過程において常に消極的であり、神の要求を遠くから見ただけで、達成することはない。彼らは神の言葉が本当に良いということが分かるだけで、入る道を見出すことはできない。聖霊はこの原則によって働く。人々の協調を通して、人々が積極的に祈り、探求して神に近づくことで成果が達成し、聖霊による啓発を受け、光に照らされる。聖霊が一方的に行動する、あるいは人が一方的に行動するというわけではない。両者の行動が必要不可欠である。人々が聖霊と協力すればするほど、そして、神の要求する基準に達することを求めれば求めるほど、聖霊の働きは大きくなる。聖霊の働きに人々の真の協力が伴ってのみ、神の言葉の本当の経験と実質的な認識が生まれる。このような経験を通して徐々に、完全にされた人が最終的に生み出される。神は超自然的なことは行わない。人は、神が全能で、全てのことが神によってなされるという観念を持っている。その結果、人々は消極的に待ち、神の言葉を読んだり、祈ったりせず、聖霊に触れられることを待っているだけである。しかし正しい理解を持っている人々は次のように信じている。「神の行いはわたしが協力する範囲にのみに及び、わたしの中における神の働きの効果は、わたしがどう神と協力するかにかかっている。神が語られるときには、わたしは神の言葉を求め、神の言葉に向かって突き進むために、あらゆる努力をすべきだ。これがわたしの達成すべきことだ」。

ペテロとパウロのうち、現実により注意を向けたのはペテロであることは明らかだ。ペテロの経験したことを見ると、彼の経験は過去に失敗している人の教訓をまとめ上げたものであり、かつての聖徒たちの優れた点を自分のものにすることが分かる。このことから、ペテロの経験がいかに現実的なものであったかが分かる。人々が触れ、実践でき、達成可能なものであった。しかしパウロは違った。第三の天に行くことや玉座へと昇ること、義の栄冠など、彼が話したこと全てが曖昧であり、目に見えないものばかりである。パウロが焦点を当てたことは外側のもので、地位や、人々への叱責、自らの長

い経験の誇示と聖霊に触れられることなどである。彼が追求したもので現実的なものは何一つなく、大部分が空想であった。聖霊がどれほど人の心を動かすか、どれほど大きな喜びを人々が楽しむか、第三の天に行くこと、もしくは通常の訓練やそれをある程度楽しむこと、また神の言葉を読み、それをある程度楽しむことなど、全てが超自然的であり、いずれも現実的ではない。全ての聖霊の働きは普通であり、現実である。あなたが神の言葉を読み、祈る時、あなたの内側は輝き、揺るぎないものとなり、外の世界に妨げられることはない。あなたは喜んで神を愛し、すすんで前向きなものに関わろうとし、邪悪な世界を嫌う——これは神の内に生きているということである。それは、人が言うような、楽しくてたまらないことではない。そのようなものは現実的ではない。今日、全ては現実から始まらなければならない。神が行うこと全てが現実であり、あなたの経験において、あなたは真に神を知ること、神の働きの足跡を探し求めることに注意を払い、聖霊が人々に触れ、導き示す手段に注意を払うべきである。あなたが神の言葉を飲み食いし、祈り、より現実的な方法で協力し、ペテロのように過去の良いものを取り入れ、悪いものを拒絶し、あなたが耳で聞き、目で観察し、頻繁に祈り、心で思い巡らし、神の働きに協調するためにできる限りのことをするならば、神は確かにあなたを導くであろう。

正常な霊的生活について

神への信仰は正常な霊的生活を必要とし、それが神の言葉を経験し現実性に入るための基礎である。祈り、神に近づき、讃美歌を歌い、賛美し、瞑想し、神の言葉を熟考するといった、現在あなたがたが実践していることはすべて「正常な霊的生活」になっているのか。あなたがたの誰もわからないようである。正常な霊的生活は、祈り、讃美歌を歌い、教会生活に参加し、神の言葉の飲み食いすることなどの実践に限定されない。むしろ新しく生き生きとした霊的な生活を送ることからなる。大切なことは、いかに実践するかではなく、実践がどんな実を結ぶかである。正常な霊的生活には、祈り、讃美歌を歌い、神の言葉を飲み食いし、神の言葉について熟考することが絶対に必要であるとほとんどの人が信じている。そのような実践が実際に成果を生んでいるかや、真の認識につながるかは無関係である。そのような人は表面的な手続きに従うことばかり気にして、その結果については無頓着であり、宗教儀式の中に生きていても、教会の中では生きておらず、まして神の国の民などではない。彼らが祈り、讃美歌を歌い、神の言葉を飲み食いするのは、すべて規則に従うことにすぎず、強迫的に、また時流に乗るために行っているのであって、自発的でも心からでもない。そのような人たちがどれだけ祈

り歌おうとも、その努力は実を結ばない。彼らが実践しているのは宗教の規則や儀式であって、神の言葉を真に実践しているわけではないからである。自分がどのように実践するかにはばかり気を取られ、神の言葉を従うべき規則として扱う。そのような人は神の言葉を実践しておらず、ただ肉を喜ばせ、人に見せるための演技をしているにすぎない。そのような宗教の規則や儀式はすべて人間が起源であり、神から来たものではない。神は規則に従うことはなく、いかなる律法に支配されることもない。むしろ神は日々新しいことを行い、実践的な働きを成し遂げている。三自愛国教会の会衆は、毎日朝の礼拝に参加し、夕の祈祷と食前の感謝の祈りを捧げ、すべてにおいて感謝するなどの実践しかしない。どれだけ回数を重ねても、どれだけ長い間行っても、聖霊の働きを得ることはない。人が規則の中で生き、実践方法にこだわっていると、聖霊は働けない。人の心の中が規則や人間の観念で一杯になっているからである。それでは神は人に干渉し働きかけることができず、人は律法の支配下でしか生き続けられない。そのような人たちは永遠に神から称賛を受け取ることができない。

正常な霊的生活とは神の前に生きることである。人は祈ると神の前に自分の心を静めることができ、祈りを通して聖霊の啓きを求め、神の言葉を知り、神の旨を理解することができる。神の言葉を飲み食いすることで、神の現在における働きをさらに明確かつ完全に認識することができる。新しい実践の道も得て、古いものに執着しなくなる。実践することはすべて、いのちの成長に至る。祈りは、聞こえの良い言葉を少し語ったり、自分がいかに恩を受けているかを示そうと神の前に泣き崩れたりすることではない。むしろ祈りの目的は霊の用い方を訓練することであって、神の前に心を静め、あらゆることにおいて神の言葉による導きを求めるよう訓練することである。そうすれば人の心は日々真新しい光に惹きつけられ、消極的で怠惰にならず、神の言葉を実践に移すという正しい軌道に足を踏み入れることができる。最近ほとんどの人が実践方法を重視しているものの、真理を求めていのちの成長を達成するためにそうしているのではない。人はここで迷ってしまっている。新たな光を受け取ることができても実践方法が変わらない人もいる。彼らは現在の神の言葉を受けたいと思いながらも、古い宗教観念を持ち込むため、受け取るものはなお宗教観念に彩られた教義であって、今日の光をそのまま受けるには至らない。その結果、実践は汚れ、上辺は新しくとも中身は古いままである。どんなにうまく実践しても、彼らは偽善者である。神は日々新たなことをして人を導き、毎日人が新たな識見と認識を得るように、時代遅れで型にはまってしまわないように要求している。もし長年神を信じているのに実践方法がまったく変わっておらず、外

側の事には熱心で忙しくしているのに、神の前で心を静めて神の言葉を味わうことがないなら、何も得られない。神の新たな働きを受け入れることにしても、計画を変更せず、新しい方法で実践に取り組むこともなく、いかなる新しい認識も求めず、代わりに古いものにしがみついて、新たな光を限定的にしか受け取らず、実践方法は変えないならば、そのような人はこの流れの中にいるといっても名ばかりで、実際は聖霊の流れの外にいる宗教的パリサイ人なのである。

正常な霊的生活を送るには、日々新たな光を受け取ることができ、神の言葉を真に認識しようと求めなければならない。真理をはっきりと見すえ、すべてにおいて実践の道を見出し、日々神の言葉を読んで新たな問題を発見し、自分の不備に気づかなければならない。それは自分の全存在を揺り動かすほど慕い求める心を持ち、遅れをとることを深く恐れて、いつでも神の前に静まることができるようになるためである。そのような慕い求める心を持ち、絶えず入って行こうとしている人は、霊的生活において正しい道を歩んでいる。聖霊に動かされ、さらなる向上を願い、神による完成を進んで求め、神の言葉をさらに深く認識することを切望し、超自然的なものを求めず、むしろ実際の代価を払い、真に神の心意を思いやり、自分の体験がさらに純粋で実際的になるよう実際に入り、空しい言葉や教義を求めたり超自然的なものを感じようとしたりせず、偉人を崇拜しない人、このような人が正常な霊的生活に入っているのである。彼らがすることはすべて、いのちのさらなる成長を達成し、霊において新鮮で生き生きとするためであり、それゆえ彼らは常に積極的に入っていくことができる。知らず知らずのうちに真理を認識し、現実性に入るのである。正常な霊的生活を送っている人は、日々に霊の解放と自由を見出し、神の言葉を自由に実践して神を満足させることができる。このような人にとって祈りは形式でも手続きでもない。日々彼らは新たな光に歩調を合わせることができる。たとえば、神の前に心を静めるように訓練し、実際に神の前で心を静めることができ、誰にも邪魔されない。このような人の正常な霊的生活を阻止できる人、出来事、ものは何もない。そのような訓練は成果を上げるためであって、人を規則に従わせるのが目的ではない。この実践は、規則に従うためではなく、人のいのちにおける成長を促すために行われるのである。このような実践を単に従うべき規則ととらえるなら、いのちは決して変わらない。他の人たちと同じように実践していて、その人たちがついには聖霊の働きと歩調を合わせて歩むことができるようになって、あなたは聖霊の流れから除外されるとすれば、自分を欺いていることにはならないのか。こういうことを言う目的は、人が神の前に心を静め、心を神に向けることで、人の中の神の働きが妨げ

られることなく実を結ぶためである。その時はじめて人は神の心意にかなうことができる。

教会生活と実生活についての議論

自分は教会生活の中でのみ変化することができると人々は感じている。まるで実生活の中で変化するのは不可能だとでもいうように、教会生活の中でなければ変化は不可能だと思っている。このことの問題点がわかるだろうか。わたしは以前神を実生活に持ち込むことについて話をしたが、それは神を信じる者にとって、神の言葉の現実へと入るための道である。事実、教会生活は人を完全にする限定的な方法でしかない。人を完全にするための主な環境は、やはり実生活なのである。それがわたしの話した実際の実践および実際の訓練であり、それによって人は日常の中で正常な人間性のある生活を実現し、真の人間らしく生きることができる。一方、人は学ぶことによって自分の教養水準を向上させ、神の言葉を理解し、受け取る能力を獲得する必要がある。また他方では、人間として生きるために必要な基本的認識を備え、正常な人間性の見識と理知を獲得しなければならない。なぜなら人々にはこうした部分がほぼ完全に欠如しているからである。さらに、教会生活を通じて神の言葉を味わい、徐々に真理を明確に理解していかなければならない。

神を信じるなら、神を実生活に持ち込まなければならないと言われるのはなぜか。人々を変えるのは、教会生活だけではない。それ以上に重要なこととして、人々は実生活において現実に入らなければならない。あなたがたはこれまで、自分の霊的状态や霊的な問題についてはいつも話をするものの、実生活においては多くの物事を実践せず、それらに入ることを怠っていた。ただ毎日読み書きして話を聞き、さらには料理しながらこう祈ったりした。「ああ、神よ！ あなたがわたしの中でいのちとなりますように。今日がどんな日であろうと、どうかわたしに祝福と啓きをお授けください。今日、あなたがわたしをどう啓いてくださるにせよ、あなたの御言葉がわたしのいのちとして働くよう、それを今すぐ理解させてください」。そして食事中もこのように祈った。「ああ、神よ！ あなたはわたしたちにこの食事を授けてくださいました。どうかわたしたちを祝福してくださいますように。アーメン！ どうかあなたのお力で生きられますように。あなたがわたしたちと共にいてくださいますように。アーメン！」。そして食後は皿を洗いながら、だらだらとこう語りだす。「ああ神よ、わたしはこの椀です。サタンに墮落させられたわたしたちは使用後の椀のようなもので、水で清められなければなり

ません。あなたが水であり、あなたの御言葉がわたしのいのちに糧を施す生ける水なのです」。そしていつの間にか寝る時間となり、あなたはまた語り始める。「ああ、神よ！ あなたは一日中わたしに祝福を与え、導いてくださいました。心から感謝いたします……」。あなたがたはこのように一日を過ごし、そして眠りに就いていた。ほとんどの者がこうして毎日を過ごし、現在に至っても実際に入ることを怠り、祈りの中でお世辞を並べることだけに集中している。これが人々の以前の生活、昔の生活である。ほとんどの者がこのようであり、実際の訓練は一切しておらず、現実の変化をほとんど経ていない。こうした者は祈りの中でお世辞を並べ、ただ言葉だけで神に近づくが、彼らの理解には深みがない。一番わかりやすい例として、家の片づけを挙げてみよう。あなたは家が散らかっていることに気づき、腰を下ろして祈る。「ああ、神よ！ サタンがわたしに引き起こした墮落をご覧ください。わたしはこの家のように汚れています。ああ、神よ！ わたしは心からあなたを讃え、あなたに感謝いたします。あなたの救いと啓きがなければ、わたしはこの事実気づかなかったことでしょう」。あなたはただ座して喋り続け、長いこと祈り、その後は何事もなかったかのように、愚痴っぽい老女のごとく振る舞う。あなたはこのように、現実へと真に入ることをまったくしないまま、表面的な実践ばかりで霊的生活を送っているのだ。実際の訓練へと入ることには、実生活や実際的な問題が関わってくる。それが、人々が変化する唯一の道なのだ。実生活なくして、人が変化することはできない。祈りでお世辞を並べて何になるというのか。人間の本性を理解していなければ、すべては時間の無駄であり、実践の道がなければ、すべては徒労に終わる。正常な祈りは人々の内面を正常な状態に保つ一助となるが、それだけで人間が完全に変化することはできない。人間の独善性、傲慢、自惚れ、尊大さ、そして墮落した性質に関する認識は、祈りを通じて得られるものではなく、神の言葉を味わうことによって見出され、実生活における聖霊の啓きを通じて知られるものなのだ。昨今の人々は誰もが話術に長けており、きわめて高尚な、過去のどれよりも高尚な説教を聴いてきているが、そのうち実生活で実行に移されていることはほとんどない。つまり、人々の実生活に神はおらず、彼らは変化した後の新しい人としての生活を得ていないのだ。人々は実生活で真理を生きることがなく、神を実生活に持ち込むこともない。そしてあたかも地獄の子のように生きている。これは目に余る逸脱ではないだろうか。

正常な人間らしさを取り戻すには、つまり正常な人間性を獲得するには、ただ言葉で神の歓心を買うだけではいけない。そのようにしても自分自身を害するだけで、自分の入りや変化に役立つことはない。したがって変化を達成するには、少しずつ実践しなけ

ればならない。時間をかけて入り、少しずつ追求と探求を行ない、肯定的な面から入り、真理の実践的生活、すなわち聖徒の生活を送らねばならないのだ。それ以降は現実の物事、現実の出来事、そして現実の環境によって、実践的な訓練を受けることができる。お世辞を並べる必要はなく、代わりに現実の環境で訓練することが必要なのだ。人々はまず自分の素質が乏しいことを自覚するようになり、それから神の言葉を正常に飲み食いし、正常に入って実践する。そうすることでのみ現実を得られるのであり、そしてそれが入りを一層早く生じさせる方法でもある。人々を変化させるには何らかの実践性がなければならず、人は現実の物事、出来事、環境で実践する必要がある。教会生活に頼るだけで、真の訓練を成し遂げられるだろうか。それで現実に入れるだろうか。そんなことは不可能だ。実生活へと入れないなら、旧来の生活様式や物事のやり方を変化させることはできない。このことは人間の怠惰や強い依存だけが原因となっているのではなく、むしろ人間に生活能力がまったくないこと、そしてさらに、神が求める正常な人間らしさの基準をまったく理解していないことが理由なのだ。かつて人々はいつも話し、語り、交流していて、しまいには「演説家」になる者さえいたが、誰一人いのちの性質の変化を求める者はおらず、ただ無闇に深遠な理論を追求していた。そのため今日の人々は、生活における宗教的な信仰様式を変化させる必要がある。一つの出来事、一つの物事、一人の人に集中して、実践に入らなければならない。それは集中して行なう必要があり、そうして初めて成果を挙げることができる。人々の変容は、まずその人の本質の変化から始まる。働きは人間の本質、生活、そして怠惰、依存、卑屈さに対して行なわれなければならない、そうすることでのみ、人間を変容させることができる。

教会生活は一部の分野で成果を挙げることができるものの、重要なのはやはり実生活が人々を変化させられるということである。実生活なくして、人の古い本性を変化させることはできない。ここで例として、恵みの時代におけるイエスの働きを見てみよう。イエスはそれまでの律法を廃して新たな時代の戒めを定めたとき、実生活の実例を用いて話をした。安息日にイエスが弟子たちを連れて麦畑を歩いたとき、弟子たちは空腹になり、穂を摘んで食べた。パリサイ人たちはそれを見て、イエスと弟子たちは安息日を守っていないと言った。そしてまた、安息日に穴へ落ちた牛を救うことは許されない、安息日には何の仕事もしてはならないから、とも言った。イエスはこのような出来事を引用して、徐々に新たな時代の戒めを広めていった。当時、イエスは多くの実践的な問題を用いて人々の理解と変化を促した。これが、聖霊が働きを行なう際の原則であり、人間を変化させられる唯一の方法である。実践的な問題がなければ、人々は理論的かつ

知的な理解しか得ることができず、それは効果的な変化の方法ではない。ではどうすれば、訓練を通じて知恵と見識を得ることができるだろうか。人間は話を聞いたり本を読んだり認識を高めたりするだけで、知恵や見識を得られるのだろうか。それはなぜだろうか。人間は実生活において理解し、経験しなければならない。ゆえに訓練が必要であり、実生活から離れてはならない。人は教育水準、表現力、物事理解力、識別力、神の言葉を理解する能力、人間性の常識と規則、そしてその他の身につけるべき人間性に関連する物事など、様々な側面に注意を払い、それらに入らなければならない。理解を得ることができたら、その後は入りに集中する必要がある、そうして初めて変化を成し遂げることが可能になる。理解を得ても実践を怠れば、どうして変化を生じさせることができようか。現在、人々は多くを理解しているが、現実を生きていないため、神の言葉の本質的な理解をほとんど得ていない。あなたはかろうじて啓かれているに過ぎず、聖霊の照らしをいくらか受けてはいるが、実生活にまったく入っていないか、あるいはそれを気にも留めていないため、変化が弱められている。人々は長い年月を経て多くを理解してきた。そして理論に関する認識については多くを語ることができるものの、外面的な性質は変わらぬままであり、元来の素質も当初のままで、少しも高まることがない。このような状態で、あなたはいつになったらようやく入るのだろうか。

教会生活は人々が集って神の言葉を味わう生活でしかなく、人の生活のごくわずかな部分を占めるに過ぎない。もし人々の実生活も教会生活と同様で、正常な霊的生活を送り、神の言葉を正常に味わい、正常に神に祈って神へと近づき、万事が神の旨に沿って行なわれる実生活を生き、万事が真理に沿って行なわれる実生活を生き、神の前で祈って心を鎮めることを実践し、讃美歌を歌って踊ることを実践する実生活を生きているなら、そのような生活だけが、人を神の言葉の生活へと導くことになるだろう。ほとんどの人は、自分の教会生活の数時間だけに重点を置き、その時間以外の生活については「気にする」こともなく、何の関心もないかのようだ。また神の言葉を飲み食いするとき、讃美歌を歌うとき、あるいは祈るときだけ聖徒の生活に入り、それ以外のときは従来の自分に戻る人も大勢いる。そのような生活が人々を変えることはできず、ましてや神を知らしめることなどできない。神を信仰する中で自らの性質の変化を望むなら、自分を実生活から切り離してはならない。実生活においては、自分を知り、自分を捨て、真理を実践することを知るだけでなく、万事における自己管理の原則、常識、および規則を学ばなければならず、そうして初めて徐々に変化を遂げられるようになる。理論的な認識だけに重点を置き、現実には深く入り込むことも実生活に入ることもなく、宗教的儀

式の中だけで生活しているなら、あなたは決して現実に入ることがなく、自分自身や真理や神を知ることもなく、永遠に盲目で無知なままとなるだろう。人々を救うという神の働きの目的は、彼らが短期間のうちに正常な人間生活を送れるようにすることでも、彼らの誤った観念や教義を変えることでもない。神の目的は人々の旧来の性質を変え、古い生き方のすべてを変え、時代遅れな考え方と精神的態度のすべてを変えることなのだ。教会生活だけに重点を置いて、人々の旧来の生活習慣や長年送ってきた生活のあり方が変わることはない。何があろうと、実生活から離れてはならない。神が人々に求めているのは、教会生活だけでなく実生活で正常な人間性を生きること、教会生活だけでなく実生活で真理を生きること、そして教会生活だけでなく実生活で自分の役割を果たすことなのだ。現実に入るには、すべてを実生活に向けなければならない。神を信じていても、実生活への入りを通じて自分を知ることができず、実生活で正常な人間性を生きることができなければ、その人は落伍者となるだろう。神に従わない者はみな、実生活に入れない者たちである。そうした者はみな人間性について語りつつ、悪魔の本性を生きる者である。彼らはみな真理について語りつつ、教義を生きる者である。実生活で真理を生きられない者は、神を信じてはいるが、神に嫌悪され拒絶される者である。あなたは実生活で入りを実践し、自分の欠点と反抗心と無知を知り、自分の異常な人間性と弱さを知らねばならない。そうすることで、あなたの認識が自分の実際の状況や困難に組み入れられる。そのような認識だけが本物であり、それによってあなたは自分の状態を真に把握し、性質の変化を成し遂げることができるのだ。

今や人の完全化が正式に開始されたため、あなたは実生活に入らなければならない。ゆえに、変化を実現するには、まず実生活への入りから始めて、少しずつ変化していく必要がある。正常な人間生活を避けて霊的な問題ばかり語っていると、物事は退屈かつ単調になり、非現実的なものとなる。そうなれば人々はいかにして変化できようか。今あなたは、真の経験に入るための基盤を築くべく、実生活に入って実践するよう言われている。これは人が行なわねばならないことの一側面である。聖霊の働きは主に導くことであり、それ以外は人の実践と入りにかかっている。誰もがそれぞれ別の道を通して実生活に入ることができ、神を実生活に持ち込み、真の正常な人間性を生きることができる。それこそが唯一の有意義な人生なのだ。

一人ひとりが自らの役割を果たすことについて

現在の流れにおいては、神を真に愛するすべての人に、神によって完全にされる機会

がある。若かろうと年老いていようと、心の中で神への従順を抱き、神を畏れる限り、そのような人は神によって完全にされることが可能である。神は人の様々な役割に応じてその人たちを完全にする。自分の全力を振るい、神の働きに服従する限り、あなたは神によって完全にされることが可能である。今のところ、あなたがたは誰一人として完全になっていない。時には一種類の役割を果たすことができ、また別の時には二種類の役割を果たすことができる。ただ全力を尽くして神のために自分を費やす限り、最後には神によって完全にされる。

若者たちには処世哲学がほとんどなく、知恵や見識も欠如している。神は人間の知恵と見識を完全なものとするために来る。神の言葉は彼らに欠けているものを補う。しかしながら、若者たちの性質は不安定であり、神によって変えられなければならない。若者たちの宗教的観念や処世哲学は比較的少ない。彼らは何事も単純に考え、その内省は複雑なものではない。それは彼らの人間性のうち、まだ形を成していない部分であって、褒められるべき部分である。しかし、若者たちは無知で知恵に欠けている。それは神によって完全にされる必要があるものである。神によって完全にされることで、あなたがたは識別力を発達させることができる。多くの霊的なことをはっきり理解できるようになり、神に用いられるのに相応しい者へと徐々に変化してゆく。年配の兄弟姉妹にも果たすべき役割があり、彼らは神から見捨てられていない。年配の兄弟姉妹にも、望ましい側面と、望ましくない側面の両方がある。彼らはより多くの処世哲学と宗教的観念をもっている。行動する中で数多くの厳格な慣習に従っており、また規則を好み、融通を利かせず機械的に適用する。これは望ましくない側面である。しかしながら、こうした年配の兄弟姉妹たちは、何があっても冷静さを失わず、動じることもない。彼らの性質は安定しており、激しい気性がないのである。物事を受け入れるのが遅いかもしれないが、それは大きな欠点ではない。服従すること、神の現在の言葉に従うことができ、神の言葉を詮索しない限り、また服従して付き従うことにのみ気をつけ、神の言葉について判断を下したり、それらに関してその他の悪しき考えを抱かない限り、そして神の言葉を受け入れて実践する限り、あなたがたはこれらの条件を満たすことで、完全にされることが可能となる。

老若男女を問わず、兄弟姉妹はみな自分が果たすべき役割を心得ている。若年の者たちは傲慢でなく、年配の者たちは受動的になることも、退行することもない。そのうえ、彼らは互いの長所を使ってそれぞれの短所を補い、何の偏見もなく互いに仕えることができる。若い兄弟姉妹と年配の兄弟姉妹との間に友情の架け橋が築かれ、また神の愛

のおかげで、あなたがたは互いをより良く理解することができる。若い兄弟姉妹が年配の兄弟姉妹を見下すことはなく、年配の兄弟姉妹は独善的でない。これは、調和に満ちた相互関係ではないだろうか。このような決意があなたがた全員にあれば、神の旨はあなたがたの世代において必ず達成される。

あなたが将来祝福されるか呪われるかは、今日におけるあなたがたの行動と振る舞いを基に決められる。あなたがたが神によって完全にされるのであれば、それはまさに今、この時代に違いない。将来別の機会が訪れることはないだろう。今、神はあなたがたを完全にしたいと真に望んでいる。そして、これは話だけのことではない。将来あなたがたにどのような試練が降りかかろうとも、何が起きようとも、あるいはどのような災害に見舞われようとも、神はあなたがたを完全にすることを願っている。これは議論の余地がない確かな事実である。どこでそれがわかるのか。それは、各時代や各世代を通じ、神の言葉が今日ほどの高みに登ったことがないという事実からわかる。それは最も高い領域に達し、今日の全人類に対する聖霊の働きは前例のないものである。過去の世代の人のうち、このようなことを経験した者はほとんどいない。イエスの時代にさえも、今日の啓示は存在しなかった。あなたがたに語られた言葉、あなたがたが理解していること、そしてあなたがたの経験はどれも新たな頂点に達したのである。試練と刑罰の中、あなたがた人々は立ち去らないが、それだけでも神の働きが前例のない輝きを得た証拠として十分である。それは人間に行なえることでも、人間が維持していることでもない。むしろ、それは神自身の働きなのである。したがって、神による働きの現実の多くから、神が人間を完全にしたいと望んでいること、そして必ずやあなたがたを完全にできることがわかる。あなたがたがこの識見をもち、この新たな発見をするなら、イエスの第二の到来を待つことはないだろう。その代わり、神が現在の時代においてあなたがたを完全にさせられるようにするはずだ。したがって、あなたがた一人ひとりが全力を尽くし、努力を惜しまず、そうすることで神によって完全にされるようにしなければならないのである。

今、否定的なことに気を取られてはならない。まずは、自分を否定的に感じさせるものをすべて脇にのけ、無視しなければならない。物事に対処する際は、探し求めて模索する心、神に従う心をもってそうしなさい。自分の中に弱さを発見するたび、それに操られることなく、自分が果たすべき役割を果たすのであれば、あなたがたはすでに好ましい進歩を遂げている。たとえば、年配の兄弟姉妹には宗教的観念があるものの、あなたは祈りを捧げ、服従し、神の言葉を飲み食いし、讃美歌を歌うことができる……。つ

まり、自分にできることが何であれ、自分に果たせる役割が何であれ、全力を振り絞って自分自身を捧げるべきである。受身になって待ってはいはならない。本分を尽くす中で神を満足させられることが第一歩である。そうして、ひとたび真理を得て、神の言葉の現実に入ることができたなら、あなたは神によって完全にされたことになる。

神が人間を用いることについて

聖霊から特別な指示と導きを与えられている人を除けば、自立して生きられる人間は一人もいない。なぜなら人間には、神に用いられている人々の働きと牧養が必要だからである。そのため神は各時代に様々な人を起こし、神の働きのために教会を牧養するという仕事に没頭させる。つまり神の働きは、神が好ましく思い、神が認める人々を通じてなされなければならないのである。聖霊が働きを行なうには、そうした人々の中にある、用いるのに相応しい部分を使う必要があり、彼らは聖霊によって完全にされることで、神に用いられるのに適した者となる。人間はあまりにも理解力に欠けているため、神が用いる人々によって牧養されなければならない。それは神がモーセを用いたのと同じことである。当時、神は用いるのに適した多くのものをモーセの中に見出し、それを用いてその段階の働きを行なった。この段階において、神は人を用いるとともに、その人のうち、聖霊が働きに利用できる部分を活用する。また、聖霊はその人を指導すると同時に、用いることのできない残りの部分を完全にする。

神によって用いられる人が行なう働きは、キリストや聖霊の働きに協力するためのものである。その人は人間の中で神によって起こされた者であり、神の選民を残らず率いるために存在しており、また人間による協力の働きを行なうよう神に起こされた者でもある。このような、人間による協力の働きを行なえる人を用いることで、人間に対する神の要求と、聖霊が人間の中で行なわねばならない働きが、その人を通じてさらに多く実現される。別の言い方をすれば、神がその人を用いる目的は、神に従う者全員が神の旨をよりよく理解し、神の要求をより多く達成できるようにすることなのだ。人々は神の言葉や神の旨を直接理解することができないので、神はそうした働きを行なわせるために用いる人を起こしたのである。神に用いられるこの人は、神が人々を導く際の媒体とも、神と人との意思疎通を図る「翻訳者」とも言える。そのためこうした人は、神の家で働く者たちや神の使徒である者たちとは異なる。こうした人も彼らと同様、神に奉仕する人だと言えるものの、その働きの本質と神に用いられる背景において、他の働き手や使徒とは大きく異なる。その働きの本質と神に用いられる背景について言えば、神

に用いられる人は神によって起こされ、神の働きのために神によって用意され、神自身の働きに協力する。その人に代わってその仕事を行なえる者は決していないだろう。それが、神性の働きとともに欠くことのできない人間の協力である。一方、他の働き手や使徒が行なう働きは、教会に関するその時々を取り決めについて、その多くの側面を伝えて実行するもの、さもなければ教会生活を維持するためのちょっとした単純ないのちの施しの働きである。そうした働き手や使徒は神に任命されるのではなく、ましてや聖霊に用いられる者と呼ぶことはできない。彼らは教会の中から選ばれ、一定期間の訓練を受けて養成された後、適した者が残され、適していない者は元いた場所に帰される。こうした人々は教会の中から選ばれるため、中にはリーダーになるとその本性を現わす者もあり、様々な悪事を働いて最終的に淘汰される者すらいる。一方、神に用いられる人は神によって用意された人であり、ある種の素質を備え、人間性を持ち合わせている。その人はあらかじめ聖霊によって用意され、完全にされており、ひとえに聖霊によって導かれ、特にその働きについては聖霊から指示と命令を受ける。その結果、神の選民を導く道から逸れることは一切ない。なぜなら神は自らの働きに必ずや責任をもち、常に自らの働きを行なっているからである。

いったん真理を理解したら、それを実践すべきである

神の働きと言葉は、あなたがたの性質に変化を生じさせるためのものである。神の目標は、あなたがたに神の働きと言葉を理解させたり、知らしめたりするだけではない。それでは不十分である。あなたがたは理解する力がある人なのだから、神の言葉を難なく理解できるはずだ。なぜなら、神の言葉の大半は人間の言語で書かれており、神はとても平易に語るからである。たとえば、神が自分に何を理解して実行するよう求めているのか、あなたがたは完全に学ぶことができる。これは、理解する能力を備えた普通の人間にできて当然のことである。特に、神が現段階で述べていることは、ひととき明瞭かつ明晰であり、人間が考慮したことのない多くのこと、およびありとあらゆる人間の状況について、神は指摘している。神の言葉はすべてを含むものであり、満月の光のように明るい。ゆえに現在、人は様々な問題を理解しているが、依然として欠けているものがある。つまり、神の言葉を実践することである。人は、手に入るものを何でも吸収しようとただ待つのではなく、真理のあらゆる側面を詳細に経験し、それをさらに細かく探究し、追い求めなければならない。さもなければ寄生虫も同然になってしまう。彼らは神の言葉を知っているが、それを実践しない。この種の人々は真理を愛しておらず、最後に淘汰される。1990年代のペテロのようになるというのは、あなたがた一人ひと

りが神の言葉を実践し、自分の経験において真の入りを得て、神と協力する中でさらに偉大な啓きをより多く得るべきだという意味であり、それによって自分のいのちがさらに支えられる。たとえ神の言葉をたくさん読んでいても、文章の意味を理解するだけで、実際の経験を通じた神の言葉に関する直接的な知識がなければ、神の言葉を知ることはいないだろう。あなたにとって、神の言葉はいのちではなく、いのちのない文字の羅列に過ぎない。そして、いのちのない文字を見つめながら生きるだけなら、神の言葉の真髄を把握することはできず、神の旨を理解することもないだろう。実体験の中で神の言葉を経験して初めて、神の言葉の霊的な意味があなたに明かされる。また経験を通じてでなければ、数多くの真理の霊的な意味を把握することはできず、神の言葉の奥義を解明することもできない。あなたがそれを実践しなければ、神の言葉がいかに明瞭でも、あなたが把握したのは空虚な字義や教義だけであり、それらがあなたの宗教的規則になってしまったのだ。それはパリサイ人たちが行なったことではないのか。あなたがたが神の言葉を実践し、経験するならば、それはあなたがたにとって実践的なものになる。神の言葉を実践することを求めないなら、神の言葉はあなたにとって第三の天の伝説程度のものに過ぎない。実のところ、神を信じる過程は、神によって獲得される過程であるとともに、あなたがたが神の言葉を体験する過程でもある。より明確に言うと、神を信じるというのは、神の言葉に関する認識と理解を得ること、そして神の言葉を体験し、それを生きることである。そうしたことが、あなたがたの神への信仰の背後にある現実である。自分の中にあるものとして神の言葉を実践することを求めないまま、神を信じ、永遠のいのちを望むのであれば、あなたがたは愚かである。それはあたかも、宴に赴き食事を見て、それらの御馳走を暗記するだけで、実際には何一つ味わわないようなものだろう。そのような人は愚か者ではなからうか。

人間が自分のものとすべき真理は神の言葉の中にあり、それは人類にとって最も有益で役立つ真理である。それはあなたがたの体に必要な滋養と糧であり、人が正常な人間性を回復することを助ける。またそれは、人間が備えているべき真理である。神の言葉を実践すればするほど、あなたがたのいのちはより早く開花し、真理がますます明確になる。自分の霊的背丈が成長するにつれ、あなたがたは霊的世界の物事をより明瞭に理解し、さらに力を得てサタンに勝利するだろう。神の言葉を実践する時、あなたがたが理解していない真理の多くも明らかになるだろう。ほとんどの人は神の言葉の文面を理解するだけで満足し、自分の経験を実践において深めることなく、むしろ教義を身につけることに重点を置くが、それはパリサイ人のやり方ではないのか。ならば彼らに

とって、「神の言葉はいのちである」という言葉がどうして真実であり得ようか。単に神の言葉を読むだけでは、人のいのちが成長することはできず、神の言葉が実践されて初めて成長できる。もしもあなたの信仰が、神の言葉を理解しさえすればいのちと霊的背丈を得ることができる、というものであれば、あなたの理解は歪んでいる。神の言葉の真の理解は、あなたが真理を実践する時に生まれる。そしてあなたは「実践して初めて真理を理解できる」ということがわかっていなければならない。今日あなたは、神の言葉を読んでも、自分は神の言葉を知っていると言えるだけで、それを理解しているとは言えない。真理を実践する唯一の方法はまず真理を理解することだ、と言う者たちもいるが、それは部分的に正しいだけで、すべて正しいということは決してない。一つの真理の認識を得るまでは、その真理を経験したことにはならない。説教で聞いたことを理解したと感じても、それは本当に理解したのではなく、真理の字句を身につけているだけであり、その中にある本当の意味を理解することと同じではない。真理に関してただ表面的な知識があっても、それは実際に真理を理解しているという意味でも、真理に関する認識があるという意味でもない。真理の本当の意味は、それを体験することから見出せる。それゆえ、真理を経験して初めて、あなたはそれを理解することができる。そしてその時初めて、あなたは真理の隠された部分を把握できるのである。自分の経験を深めることが言外の意味を把握し、真理の本質を理解する唯一の方法である。したがって、真理があればどこにでも行けるが、自分の中に真理がないのであれば、宗教的な人々はもちろんのこと、自分の家族さえも説得しようなどと思ってはならない。真理がなければ、あなたはひらひらと舞う雪のようであるが、真理があれば幸福で自由になることができ、あなたを攻撃できる者は一人もいない。いかに強力であっても、理論が真理に打ち勝つことはできない。真理があれば、世界そのものを揺るがし、山や海をも動かせるが、その一方で真理がなければ、強力な都市の防壁がうじ虫によって瓦礫と化すことにつながり得る。それは明白な事実である。

現段階においては、まず真理を知り、次にそれを実践し、真理の本当の意味をさらに身につけることが極めて重要である。あなたがたはその達成を追い求めるべきである。他人を自分の言葉に従わせることを追い求めるだけでなく、他人に自分の実践を見習わせなければならない。そうすることでのみ、あなたは有意義なものを見出すことができる。自分に何が起きようと、誰に遭遇しようと、自分に真理がある限り、あなたは揺るぎなく立つことができる。神の言葉は人に死でなくいのちをもたらすものである。神の言葉を読んだ後も、いのちを得ずに依然として死んでいるのであれば、あなたには何ら

かの問題がある。しばらく神の言葉をたくさん読み、実践的な説教を数多く聞いた後も、あなたが死んだ状態であるなら、それは、あなたが真理を重視する者でも、真理を追い求める者でもないことを証明している。真剣に神を得ようとしているのであれば、教義を身につけることや、高尚な教義で他人を教えることに重点を置かず、神の言葉を経験し、真理を実践することに集中するはずだ。それこそが、今あなたがたが入ろうとすべきことではないのか。

神が人間の中で働きを行なう時間は限られているが、あなたが神に協力しなければ、どのような結末になり得るだろうか。ひとたび神の言葉を理解したらそれを実践するよう、神があなたがたにいつも求めているのはなぜか。それは、神が自身の言葉をあなたがたに示したからであって、あなたがたの次なる段階はそれを実際実践することである。あなたがたがそれらの言葉を実践する限り、神は啓きと導きの働きを行なう。それはこのようにしてなされる。神の言葉によって人間はいのちを開花させることができ、また神の言葉の中に、人間が逸脱したり消極的になったりする原因となり得る要素はない。あなたは、自分は神の言葉を読んでそれを実践したのに、いまだに聖霊から働きを受けたことがないと言う。あなたの言葉は子供騙しに過ぎない。あなたの意図が正しいかどうか、他の人たちは知らないかもしれないが、神にもわからないことがあり得ると思っているのか。他の人たちが神の言葉を実践して聖霊の啓きを受けているのに対し、あなたがそれを実践しても聖霊の啓きが得られないのはどういうことか。神には感情があるのか。あなたの意図が本当に正しく、あなたが協力的であれば、神の霊はあなたと共にあるだろう。いつも自分の旗を立てたがる人がいるのに、神が彼らを立ち上がらせて教会を導かせることがないのはなぜか。また、ただ自分の役割を果たし、自分の本分を尽くしているだけなのに、知らぬ間に神の承認を得た人もいる。そんなことがどうしてあり得るのか。神は人の心の奥底を調べるが、真理を追い求める人は、正しい意図で追い求めなければならない。正しい意図のない人は、揺るぎなく立つことができない。あなたがたの目的の核心は、神の言葉が自分の中で効果を発揮するようにすることである。言い換えれば、自分が神の言葉を実践する中で、その言葉を真に理解することである。おそらく、あなたがたが神の言葉を理解する能力は乏しいだろうが、あなたがたが神の言葉を実践する時、神はこの欠点を直すことができる。そのため、あなたがたは数多くの真理を知るだけでなく、それらを実践しなければならない。これが無視することのできない最大の重点である。イエスは三十三年半の生涯において数多くの恥辱と苦しみ耐えた。彼がかくも大いに苦しんだのは、ひとえに真理を実践し、あらゆることに

において神の旨を行ない、神の旨しか大事にしなかったからである。この苦しみは、イエスが実践を経ずに真理を知っていたとすれば、決して受けたはずのないものである。イエスがユダヤ人の教訓に従い、パリサイ人に従っていたとすれば、彼は苦しまなかったことだろう。人間に対する神の働きの効果は人間の協力から生じるものであるということを、あなたはイエスの業から学ぶことができる。そしてそれは、あなたがたが認識しなければならないことである。イエスが真理を実践しなかったとしたら、彼はどのように十字架の上で苦しんだらうか。イエスが神の旨に従って行動していなかったとしたら、あれほど悲痛な祈りを捧げていただろうか。それゆえ、あなたがたは真理を実践するために苦しむべきである。それが人間の受けるべき苦難である。

救いを得る人は真理を進んで実践する人である

正しい教会生活を送ることの必要性については、説教の中でよく触れられている。それなのになぜ、教会生活はいまだに改善されておらず、相変わらず昔のままなのだろうか。なぜまったく新しい別の生活様式が存在していないのだろうか。90年代の人間が、過ぎし時代の帝王のように生きていることは正常と言えようか。人々が今飲み食いしているものは、前の時代にはまれにしか味わえなかったごちそうだが、教会生活には何ら大きな転換がないままで、あたかも古い葡萄酒を新しい瓶に入れているかのようだ。これでは神がどんなに沢山語っても、何の役に立つというのか。ほとんどの地域の教会は何一つ変わっていない。わたしは自分の目でそれを見たので、そのことはわたしの心の中ではっきりしている。わたし自身が教会生活を経験したわけではないが、教会の集まりの状態については自分の手の甲のようによく知っている。教会はあまり進歩していない。先に述べたとおり、まるで古い葡萄酒を新しい瓶に入れているかのようだ。何一つ変わってはいない。誰か牧す者がいるとき、人々は炎のように熱く燃えるが、誰も支える者がいないときは氷の塊のようだ。実践的なことについて語れる者は少なく、舵を取れる者は極めてまれである。説教は高尚だが、入りを成し遂げた者はほとんどいない。神の言葉を大切にする者も非常に少ない。彼らは神の言葉を受け取ると涙ぐみ、それを脇に置くと陽気になり、神の言葉から離れると味気なくなって輝きを失う。率直に言って、あなたがたはとにかく神の言葉を大事にせず、今日神自身の口から出た言葉をまったく宝と見なししていない。ただ神の言葉を読むと不安になり、それを暗記するときは骨が折れると感じ、その実践に至っては、まるで馬の尻尾の毛で引っぱって井戸ポンプのハンドルを回そうとしているようなもので、どんなに頑張っても十分なエネルギーをかき立てられずにいる。神の言葉を読むといつも活気に溢れるが、実践するときになる

と忘れっぽくなる。実際のところこれらの言葉は、こんなにも苦労して辛抱強く繰り返して語られる必要はないのだが、人々は神の言葉をただ聞くだけで実践に移さないで、それが神の働きの妨げとなっているのだ。わたしはこのことを採り上げないわけにはいかず、話さないわけにはいかない。語らざるを得ないのだ。他者の弱みを暴露することを楽しんでいるわけではない。あなたがたは自分の実践が多かれ少なかれ適切であり、啓示が頂点に達したら自分の入りも頂点に達すると思っているのか。それはそんなに単純なことだろうか。あなたがたは最終的に自分の経験を打ち立てるための基盤を、一切検討しようとしていない。現時点で、あなたがたの集まりはまったく正しい教会生活と呼べるものではなく、正しい霊的生活をかけらも形作っていない。ただ一群の人々が集まって、雑談や歌を楽しんでいるだけだ。厳密に言うと、そこには大した現実性がないのだ。さらにはっきり言えば、真理を実践しないなら、現実はどこにあるのか。あなたが自分は現実を得ていると言うのは、ただの自慢ではないのか。いつも働きを行っている者たちは傲慢で自惚れているが、一方でいつも従っている者たちは、ただ黙ってうつむいたまま、訓練の機会をまったく得られずにいる。働きを行う者たちはただひたすら語り、高尚そうな説教を延々と続け、従う者たちはただ聞いている。そこに言及に値する変化はなく、すべてただ昔のままのやり方だ。今日、あなたが神に従えるようになり、干渉したり自分勝手に行動したりしなくなったのは、神の行政命令が到来したおかげであり、あなたが体験を通して得た変化ではない。あなたが今日、この行政命令を破るいくつかのことをあえてしなくなったのは、神の言葉の働きが明らかな効果を上げ、人々を征服したからである。誰かに尋ねるが、あなたが今日成し遂げたことのうち、どれくらいが自らの労苦の汗によって獲得したものなのか。そしてどれくらいが、神から直接教えられたものなのか。あなたなら何と答えるか。啞然として言葉を失うだろうか。他の人々は多くの実体験について語り、あなたに糧を与えることができるのに、あなたはなぜ他人が作った料理をただ味わうだけなのか。恥ずかしいと思わないのか。比較的うまくやっている人々に次のような質問をして、実態調査をしてみるとよい――真理をどのくらい理解していますか？ 最終的にどれくらいのことを実践に移していますか？ 神と自分自身のどちらをより愛していますか？ 与えることと受け取ることのどちらが多いですか？ 自分の意図が間違っていたときに、何度古い自分を捨て去り、神の旨を満たしたことがありますか？――たったこれだけの質問でも、多くの人々は困惑することだろう。ほとんどの人たちは、自分の意図が間違っていることに気付いても、あえて間違った行いを続けるので、自分の肉を捨て去るには程遠い。ほとんどの人が自らのうちに罪をはびこらせ、罪に自分の行動すべてを支配させている。彼らは自分の罪を克服

できず、罪の中で生き続けているのだ。この段階に至った今、自分が何度邪悪な行為をしたか知らない者がいるだろうか。知らないと言うなら、それは白々しい嘘だ。率直に言って、それはただ古い自分を捨て去ろうという意志がないだけだ。無価値な「心からの悔い改めの言葉」をいくら並べたところで、何の意味があるだろうか。それはあなたのいのちにおける成長に役立つのか。己を知ることは、あなたのフルタイムの仕事だと言える。わたしは人々の従順と、神の言葉の実践を通して、彼らを完全にする。もしあなたが、衣服を着て粹なしゃれた外見を装うように、神の言葉をただ着用しているだけなら、自分自身と他人を騙しているのではないのか。話をするだけでそれを実践しないのなら、あなたは何を成し遂げるというのか。

多くの人々が、実践について多少は話すことができるし、個人的な感想を述べることもできるが、その大部分は他人の言葉から得た明察である。そこには自分自身の個人的な実践からもたらされたものも、自分の体験から知ったことも一切含まれていない。わたしはこの問題を詳しく吟味したことがある。わたしが何も知らないなどと思わないことだ。あなたはただの張子の虎に過ぎないのに、サタンに打ち勝つこと、勝利の証しをすること、そして神の似姿を生きることを語るのか。まったく馬鹿げた話だ。今日神が語っている言葉がすべて、ただ聞いて感心するためだけのものだと思っているのか。あなたの口は古い自分を捨て去り真理を実践することを語っているが、あなたの手はそれと違うことをしており、あなたの心は他のことを企んでいる。あなたは一体どういう人間なのか。なぜあなたの心と手は一致していないのか。非常に多くの説教がただの空虚な言葉になってしまっているのは、何と心が痛むことか。あなたが神の言葉を実践に移せないなら、それはあなたがまだ聖霊の働き方に入っておらず、まだあなたの中で聖霊が働いておらず、またあなたが聖霊の導きを得ていない証拠である。神の言葉を理解することはできるが、それを実行に移すことはできないと言うなら、あなたは真理を愛さない人間なのだ。神はそのような人間を救うために来るのではない。イエスは途方もない苦痛を受けて十字架にかけられ、罪人を救い、貧しい者を救い、あらゆる卑しい者を救った。イエスの磔刑は罪のいけにえの役割を果たしたのだ。神の言葉を実践できないのなら、できるだけ早く立ち去りなさい。居候として神の家に長居してはならない。多くの人々は明らかに神に背くことだとわかっていることさえ、やめるのに困難を感じている。彼らは死を招いているのではないだろうか。どうして彼らが神の国に入ることを語れようか。ずうずうしくも神の顔を見る度胸があるのか。神が与えてくれる食物を食べながら神に背く曲がったことを行い、神が授けた祝福を享受させてもらっていないながら

、悪意を持ち、陰険になり、陰謀を企てている。そうした祝福を受けとるとき、自分の手が焼かれるように感じないのか。顔が赤くなるのを感じないのか。神に反することをし、行い、「自分勝手に物事を行う」という企みを成し遂げた今、あなたは恐れを感じていないのか。何も感じないのなら、どうして未来など語ることができようか。あなたにはもうずっと前から未来などなかったのに、これ以上どんな大きな期待を抱いていられるのか。恥知らずなことを言っても何の咎めも感じず、心に何の認識もないのなら、それはあなたがすでに神に見捨てられていることを意味するのではないか。気ままに何の自制心もなく話し行動することが本性となっているあなたが、どうして神に完全にされることができようか。あなたは世の中をやすやすと歩いて行けるだろうか。誰があなたに説得されるだろうか。あなたの本性を知る者は、あなたと距離を置くだろう。それは神の罰ではないか。いずれにせよ、話ばかりで行動が伴わないのなら、決して成長はない。あなたが話しているときは聖霊があなたの上に働いているかもしれないが、実践しないなら聖霊はその働きをやめるだろう。あなたがこれからもそのままなら、どうして未来のことや、自分の全存在を神の働きに捧げることなど語れようか。あなたは自分の全存在を捧げることが語れるだけで、神に真の愛を捧げていない。神があなたから受け取るものは言葉の献身だけであり、真理を实践しようという意図ではない。これがあなたの実際の霊的背丈なのだろうか。あなたがこれからもそのままなら、いつ神に完全にされるのか。あなたは自分の暗く陰鬱な未来に不安を感じないのか。神があなたへの望みを捨てたのを感じないのか。神がより多くの新たな人々を完全にしようとしていることを知らないのか。古いものがそのまま持ち堪えられるだろうか。あなたは今日、神の言葉に注意を払っていない。それで明日を待っているのか。

牧者に適した人が備えているべきもの

聖霊が人々に働きかける時にその人が置かれる多くの状態をあなたは理解しなければならない。特に、一体となって神への奉仕を行なう人は、聖霊が人々に行なう働きによってもたらされる多くの状態をさらにしっかりと把握していなければならない。単に多くの経験や、入りを成し遂げる数多くの方法について語るだけであれば、それはあなたの経験が一方的過ぎることを示している。自分の真の状態を知らず、真理の原則を把握していないなら、性質の変化を成し遂げることはできない。聖霊の働きの原則を知らず、それが生み出す成果を理解していなければ、悪霊の働きを識別することは難しい。悪霊の働きや人間の観念を暴き、単刀直入に問題の核心に触れなければならない。また、人の実践における数多くの逸脱や、神への信仰において人が抱えるであろう問題を指摘

し、その人がそれを認識できるようにしなければならない。少なくとも、人を否定的あるいは消極的に感じさせてはならない。しかし、大半の人に客観的に存在する困難をあなたは理解しなければならず、理不尽であったり、「豚に歌を歌わせようと」したりしてはならない。それは愚かな行為である。人が経験する数多くの困難を解決するには、まず聖霊の働きの動態を理解し、聖霊が様々な人にどう働きかけるのかを理解し、人が直面する困難やその人の欠点を理解しなければならない。そしてその問題における重要な課題を見抜き、逸脱したり誤ったりすることなくその根源に達しなければならない。このような人だけに一体となって神への奉仕を行なう資格がある。

重要な課題を把握し、多くの物事をはっきり見ることができるかどうかは、個人的な経験次第である。あなたが経験する方法は、あなたが他の人たちを導く方法でもある。字句や教義を理解していれば、他の人たちが字句や教義を理解するよう導くだろう。あなたが神の言葉の現実を経験する方法は、他の人たちを導き、神が発する言葉の現実へと入れるようにする方法でもある。多くの真理を理解でき、神の言葉に由来する様々な事柄について明確な識見を得られるなら、あなたは他の人たちを導いて数多くの真理を理解させることができ、あなたが導く人たちもビジョンを明確に理解できる。もしもあなたが超自然的な感覚を把握することに重点を置くなら、あなたに導かれる人たちも同じようにする。もしもあなたが実践を怠り、代わりに話し合いを重視するなら、あなたに導かれる人たちも、まったく実践しないまま、あるいは性質の変化を成し遂げないまま、話し合いに重点を置く。そして真理を何ら実践することなく、表面的に熱心になるだけである。人は誰でも自分自身がもっているものを他の人たちに提供する。その人がどのような人物であるかによって、他の人たちを導く道が決まり、またどのような人たちを導くかが決まる。神に用いられるのに真に相応しくなるには、強い願望だけではなく、神からの多くの啓き、神の言葉からの導き、神に取り扱われる経験、神の言葉による精錬も必要である。あなたがたはそれを土台として、自分の観察、考え、思案、結論に普段から注意を払い、適切に吸収または排除すべきである。それらはどれもあなたがたが現実に入るための道であり、どれ一つとして欠かすことはできない。神はこのように働きを行なう。神が働きを行なうこの方法にあなたが入るなら、あなたは神によって完全にされる機会を毎日得ることができる。そしてどんな時であろうと、環境が厳しいか好ましいかにかかわらず、また試練に遭っているのか、それとも誘惑を受けているのか、働いているのか、それともいないのか、個人で生活しているのか、それとも集団の一員として生活しているのかにかかわらず、あなたは常に神によって完全にされる機会

を見出し、一つも逃すことはない。あなたはそのすべてを見出すことができ、そうして神の言葉を経験する秘訣を見つけることになる。

経験について

ペテロはさまざまな経験をする中で、何百もの試練に遭遇した。今日の人々は、「試練」という言葉を知ってはいるが、その真の意味や状況をまったく理解していない。神は人間の決意を強化したり、信心を精錬したり、人間のあらゆる部分を完全にしたりするが、それはほとんど試練を通して成し遂げられる。試練もまた、聖霊の隠れた働きである。試練を受けると、人間には自分が神に見捨てられたかのように見えるため、気をつけていないと試練をサタンの誘惑とみなしてしまう。実際、多くの試練は誘惑とみなすことができ、それが神の働きの原則であり掟なのだ。真に神の前で生きていれば、人はそのようなものを神から来た試練と捉え、見過ごすことはない。もし誰かが、「神がわたしとともにおられるので、サタンがわたしに近づくことなどない」と言うなら、それは完全に正しいとは言えない。もしそうなら、イエスが荒野で40日間断食をした後に誘惑を受けたことをどう説明するのか。神への信仰の見方を真に矯正できれば、人は多くの物事をはるかに明確に理解できるようになり、その理解が偏ったり間違ったりすることはなくなる。神に完全にされるという決意を真に固めているなら、直面するあらゆる問題に対して、右にも左にも傾くことなく、さまざまな角度から取り組まなければならない。神の働きについての認識がないと、神とどのように協力すればよいかがわからない。神の働きの原則を知らず、サタンがどのように人の中で働くのか気づいていないと、実践の道を得ることはできない。ただ熱心に追い求めるだけでは、神が要求する結果を達成することはできない。そのような経験の仕方は、ラウレンシオのやり方に似ている。つまり、サタンの働きとは何なのか、聖霊の働きとは何なのか、神の臨在がないと人間の状態はどうなるのか、神はどのような人々を完全にしたいのか等のことを一切認識せず、物事を識別することなく、ただ経験だけに焦点を合わせるやり方である。そうした人は、どのような原則に従ってさまざまな人々に対応すべきか、神の現在の旨をどのように把握すべきか、神の性質をどのように知るべきか、そして神の憐れみと威厳と義はどのような人々、状況、時代に向けられるのか、といった物事を一切識別しない。さまざまなビジョンを経験の基盤としなければ、いのちなど問題外となってしまう、経験はなおさらで、ただ愚かにもすべてに従い、すべてに耐え続けるだけになる。そのような人々を完全にするのは極めて困難である。上述したようなビジョンを一切持っていないなら、それはあなたが愚か者であり、イスラエルに立ち続ける塩の柱に似ている

ことの十分な証拠だと言える。そのような人々は、使い物にならないまったくの役立たず。また一部の人々は、いつもただ盲目的に従い、常に自己を認識しており、新しい物事に対処するときは必ず自分のやり方を貫くか、話す価値もないような些細な事柄に「知恵」を用いて対処する。そのような人々には判断力がなく、彼らはただ辛く当たられることに甘んじて常に変わらずにいるのが本性であるかのように、決して変化することがない。そのような人々は、わずかな判断力もない愚か者である。彼らは決して状況やさまざまな人々に合わせた対策を講じようとしなない。そのような人々には経験がない。中には自分自身の認識に捕われすぎていて、悪霊の働きにとりつかれた者に直面しても、頭を垂れて罪を告白し、あえて立ち上がって糾弾しようとしなない人々もいる。そして彼らは明らかな聖霊の働きに直面しても、あえて従おうとしなない。そのような人々は悪霊も神の手中にあると信じており、立ち上がって抵抗するような勇氣は一切持ち合わせていないのだ。そのような人たちは神を辱める者であり、神のために重荷を負うことなどまったくできない。そのような愚か者たちは何一つ識別しない。すなわちそのような経験の仕方は捨て去らねばならない。神の目から見て擁護できないものだからだ。

神は人々の中で実に多くの働きをしており、ある時は人を試し、ある時は人を鍛えるための環境を作り、またある時は言葉を発して人を導きその欠点を改めたりする。聖霊は時折、神が用意した環境へと人々を導き、彼らが自分に欠けている多くのものを知らぬ間に発見できるようにする。聖霊は人々が言うことやすること、そして他の人への接し方や物事への対処の仕方を通して、彼らを知らず知らずのうちに啓き、それまで理解していなかったことを気づかせ、多くの物事や人々をもっとよく理解できるようにし、それまで気づかなかった多くのことを見抜けるようにしてくれる。人はこの世と関わっていると、徐々に世の中の物事を見分けられるようになり、そして死が近づくと、「人でいるのは本当に大変なことだ」という結論に達するかもしれない。神の前でしばらく経験を積み、神の働きと性質を理解できるようになってくると、無意識のうちに大いに洞察力を得て、霊的な背丈も徐々に伸びてくる。そして多くの霊的な事柄をよく理解できるようになり、特に神の働きをはっきりと理解できるようになる。そうになると、神の言葉、神の働き、神のあらゆる行為、神の性質、そして神が所有するものと神そのものを、自分のいのちとして受け入れるようになる。もしあなたがただこの世をさまよっているだけなら、あなたの翼はどんどん硬くなり、神への抵抗はますます強くなる。それでどうやって神があなたを用いることができようか。あなたの中には、「わたしの意見では」という部分が大きすぎるので、神はあなたを用いない。神の前にいればいるほど

、多くの経験を得ることができる。もしあなたがいまだに獣のようにこの世で暮らして、口では神への信仰を公言しながらも心はどこか別のところにあり、まだ世俗的な処世哲学を学んでいるなら、それまでの労苦はすべて無駄だったことにならないだろうか。したがって神の前にいればいるほど、神に完全にされることは容易になる。これが聖霊の働く道筋である。このことが理解できないなら、正しい軌道に乗ることは不可能であり、神に完全にされることは問題外となる。あなたは正常な霊的生活を送ることができなくなり、まるで障害を負っているかのように、自分自身の過酷な働きだけを行い、神の働きは一切しないという状態に陥る。これはあなたの経験に間違いがあるということではないのか。神の前に出るためには、必ずしも祈る必要はない。人は神のことを黙想したり神の働きについて熟考したりしているとき、物事に対処しているとき、そして何らかの出来事で自分が露わにされたときなどに、神の前に出ることがある。ほとんどの人は、「わたしはよく祈っているのだから、神の前にいるのではないのでしょうか」などと言う。多くの人が、「神の御前で」祈り続けている。そのような人々は常に祈りの言葉を口にしてしているかもしれないが、本当に神の前で生きているわけではない。そのような人々はその方法でしか、神の前で自らの状態を保つことができないのだ。自らの心をもって常に神と繋がっていることは一切できず、また熟考や黙想を通すにせよ、心の中で精神を尽くして神の重荷に思いを馳せることで神と繋がるにせよ、経験を用いて神の前に出ることはまったくできないのだ。彼らはただ口で天の神に祈りを捧げている。ほとんどの人の心は神を失っており、神がそこにいるのは彼らが神に近づくときだけだ。ほとんどの時間、神はまったくそこにいない。これは心に神を持っていないことの表れではないか。本当に心に神を持っているなら、泥棒や獣がするようなことができるだろうか。神を本当に畏れる人は、真心で神と触れ合い、その思いや考えは常に神の言葉で占められるようになる。そのような人は言葉においても行為においても誤りを犯すことはなく、明らかに神に背くことは一切行わない。それが信者であることの基準なのだ。

新時代の戒め

神の働きを経験する中で、あなたがたは神の言葉をじっくり読み、真理を備えなければならぬ。しかし、あなたがたが何をしたいのか、どのようにそれをしたいのかについて言えば、あなたがたの熱心な祈りや嘆願は不要であり、実のところそれらは無用である。しかし現在、あなたがたがまさに今直面している問題は、神の働きをどう経験すべきかわからず、かなりの消極性を自分の中に抱えているということである。あなたが

たは数多くの教義を知っているが、現実さはほどない。それは間違っているしるしではないのか。あなたがた一団には、多くの間違いが見て取れる。今日、あなたがたは「効力者」といった試練に達することはできないし、神の言葉に関連するその他の試練や精錬を想像することも、達成することもできない。あなたがたは実践すべき多くのことを固く守らなければならない。つまり、人々は自分の為すべき多くの本分を固守しなければならないということである。これが、人々が守りまた実行すべきことである。聖霊によって為されるべきことは、聖霊にまかせなさい。そこには人間の介入する余地はない。人間は人間によって為されるべきことを固守すべきであり、そこに聖霊との関係はない。これが正に人の為すべきことであり、それは旧約の時代に律法を守るのとちょうど同じように、戒めとして守るべきなのである。今は律法の時代ではないが、律法の時代の言葉と同一の多くの言葉がやはり存在し、それらを守らなければならない。そして、それらの言葉は、ただ聖霊によって感動させられることに頼ることで実行されるのではなく、それらは人が守るべき事である。例えば、実際の神の働きを裁いてはならない。神によって証しされている者に反抗してはならない。神の前では、自分の立場をわきまえ、放蕩であってはならない。あなたは口を慎み、自分の言葉と行動が神によって証しされている者の采配に従うものでなければならない。あなたは神の証しを敬い畏れなければならない。神の働きと神の口から出る言葉を見無視してはならない。神の言葉の口調と目的を真似てはならない。外から見て、神が証しする者に明らかに逆らうことは一切してはならない。そしてその他のことも。これらは各人が守るべき事である。神は各時代に律法に似た、人間が守らなければならない多くの規則を定める。これを通して、神は人の性質を拘束し、人の誠実さを見極めるのである。旧約聖書の時代の言葉「あなたの父と母を敬え」を例にしてみなさい。この言葉は今日では適用されない。当時、これらの言葉は、単に人の外面的な性質をいくぶん拘束していただけであり、人間の神への信仰の誠実さを示すために使われ、それは神を信じる者の印であった。今は神の国の時代であるが、人が守らなければならない規則はまだ多くある。過去の規則は適用できないため、現在は人が実行するのにより適切な実践がたくさんあり、それらは不可欠である。それらは聖霊の働きとは関係なく、人によって為されなければならない。

恵みの時代に、律法の時代の実践の多くは、当時の働きにおいて特に効果がなかったため廃止された。それらが廃止された後に、当時に適する多くの実践が定められ、その多くが今日の規則にもなっている。今日の神が到来した時、これらの規則は除去されて、守る必要がなくなり、今日の働きに適する多くの実践が定められた。今日これらの実

実践は規則ではなく、成果を得るためのものであり、今日に適している。――おそらくそれらは将来、規則になるであろう。要するに、あなたは今日の働きのために実を結ぶものを守るべきなのである。明日の事は気にしなくても良い。今日のことは今日のために為されるのである。もしかしたら将来、あなたが行うのにもっと良い実践があるのかもしれない。――しかし、あまりそれには注意を払わずに、神に背かないよう今日守るべきことを守りなさい。今日人が守るべきことにおいて、次のことよりも重要なことはない。目の前にいる神を騙したり、神から何かを隠したりしようと試みてはならない。あなたの前にいる神の前で、みだらなことや傲慢なことを言ってはならない。神の信頼を得ようとして、あなたの目の前の神を上手い言葉やたくみな話で欺いてはならない。神の前で不遜なふるまいをしてはならない。あなたは神の口から出る全ての言葉に従うべきであり、それに対し抵抗したり、逆らったり、反論してはならない。神の口から出る言葉を自分勝手に解釈してはならない。あなたの舌を戒めなければならない。悪い者の偽りの計略に陥らないよう、あなたは口を慎むべきである。神があなたのために定めた境界線を超えないよう、あなたの歩みに注意しなければならない。そんなことをすればあなたは、神の観点から、自惚れた大げさな言葉を話すことになり、その結果神に忌み嫌われる。神の口から出た言葉をむやみに広めてはならない。でなければ他人があなたをあざけり悪魔が嘲笑するだろう。今日の神の働きの全てに従わなければならない。たとえそれが理解できなくても、それを裁いてはならない。あなたにできることは、ひたすら探求し、交わりを持つことだけである。誰も神の本来の地位を超えてはならない。あなたにできるのは、人間としての立場から、今日の神に奉仕することだけである。人間としての立場から今日の神を教えることは道に外れたことである。誰も神によって証しされている者の地位に立ってはならない。あなたがたの言葉、行動、最奥の思いにおいて、人間としての立場に立ちなさい。これは守るべきことであり、人間の責任であり、変更することは誰にも許されず、そうすることは神の行政命令に背くことである。これは全ての人が覚えておくべきことである。

神が長い間、話し、声を発してきたため、人は神の言葉を読んで暗記することを第一の勤めと見なすようになった。誰も実践することに注意を向けず、また守るべきことさえ実践しないので、あなたがたの奉仕に多くの困難と問題が生じている。もし神の言葉を実践する前に、あなたが守るべきことを守らなければ、あなたは神に忌み嫌われ捨てられる者のひとりである。これらの実践を固守する際、あなたは真剣かつ誠実であるべきだ。それらを束縛と思わず、戒めとして守るべきである。どのような成果を挙げるべ

きかということは、今は考えずとも良い。要するに、これが聖霊の働く様であり、誰であれそれに背く者は懲罰されなければならない。聖霊に感情はなく、あなたが現在どれほど理解しているかということは考慮しない。もしあなたが今日神に背けば、聖霊はあなたを懲罰するだろう。もし聖霊の「管轄内」で背けば、聖霊はあなたを容赦しない。聖霊は、あなたがどれほど真剣にイエスの言葉を守っているかに気を留めることはない。もしあなたが神の今日の戒めを破るなら、神はあなたを罰し、死の罪に定めるであろう。あなたがそれらを守らないことなど許されるだろうか。あなたは守らなければならない——たとえそれが多少の痛みを受けることを意味しても。いかなる宗教、各界、国々、あるいは教派であろうと、将来はこれらの実践に皆、従わなければならない。誰もそれを免れることはなく、ひとりとして容赦されない。それは、これらの実践は今日聖霊が為すことで、誰もそれに背いてはならないからである。それらは大きな事ではないが、復活して天に昇ったイエスによって人のために定められた戒めであって、各人がそれを行なわなければならない。「道…… (7) 」に、イエスの定義によれば、あなたを義とするか罪とするかは、あなたの今日の神に対する態度によると記されていないだろうか。誰もこの点を見逃してはならない。律法の時代、パリサイ人たちは先祖代々神を信仰してきたが、恵みの時代が到来したとき、イエスを知らず、イエスに反抗した。したがって、彼らが行ったことは全て無駄になり、神はそれを受け入れなかった。もしあなたがこのことを見抜けるなら、あなたは容易に罪を犯さないだろう。おそらく多くの人たちが自分を神と比較してきただろうが、神に逆らうとき、どんな味がするのだろうか。それは苦いのだろうか、甘いのだろうか。あなたは、このことを心得るべきである——知らないふりをしてはならない。おそらく心の中では未だに納得していない人たちもいるだろうが、試してみるようあなたに勧める——どんな味がするのか試してみなさい。そうすることで、多くの人々がいつも疑わないで済むのである。多くの人たちが神の言葉を読みながらも、心の中では神に逆らっている。そのように神に逆らった後、あなたはナイフで胸がえぐられるように感じないだろうか。それが家庭での不和でないとしても、それは身体の不調、または息子や娘たちに関する悩みではないだろうか。たとえばあなたの肉体が死を免れたとしても、神の手から逃がれることはできない。あなたはそれをそれほど単純なことだと思っているのか。特にこれは、神に近い多くの者たちが注意すべきことである。あなたは、時が経つにつれてこのことを忘れ、気付かないうちに誘惑に陥り、全てのことに無頓着になり、そしてそれは、あなたが罪を犯すきっかけになるだろう。これは些細なことだと、あなたには思えるだろうか。もしこのことをうまくできれば、あなたは完全にされる機会を得る——神の前で、神の口から助言を受け

るために。もしあなたが不注意なら、あなたは問題にぶつかるだろう——あなたは神に対し不遜になり、あなたの言葉と行動がだらしなくなり、遅かれ早かれ強風と巨大な波にさらわれるであろう。あなたがたは一人ひとり、これらの戒めを心に留めるべきである。もしそれらに違反するならば、神によって証しされている者は、あなたを罪に定めないかもしれないが、神の霊はあなたへの取り扱いを終えていないし、神の霊はあなたを容赦しない。あなたは、自分が神に背いた結果を背負えるのか。そういうわけで、神が何を言おうが、あなたは神の言葉を実践し、あらゆる手段を尽くして忠実にそれらを守らなければならない。これは決して容易なことではない。

千年神の国は訪れた

この一団に神が行おうとしている働きが何かを見ただろうか。千年神の国にあってもなお、人々は神の言葉に従い続けなければならない、将来も神の言葉はカナンの良き地で人々の生活を直接導くであろうと、かつて神は言った。モーセが荒野にいたとき、神は直接彼に指示を与え、語った。神は天から人々に食べ物と水とマナを送り与えた。今日も神は人々を楽しませるため自ら食べ物と飲み物を送り与え、人々を罰するため自ら呪いをかけてきた。このように、神の仕事のすべての段階は神によって自ら行われる。今日、人々は事が発生するのを待ち望み、しるしや奇跡を見ようとするが、そのような人々はすべて打ち捨てられる可能性がある。神の働きは益々現実となっているからである。神が天から降りてきたことを知る人は誰もおらず、神が天から食べ物や栄養となるものを与えてきたことに人々はまだ気づいていないが、神は実際に存在するのであり、人々が思い描く千年神の国の熱い場面にも、神が自ら言葉を発する。これは事実であり、これだけが神とともに地上において支配することである。地上における神との支配は肉を意味する。肉でないものは地上にはないので、第三の天に至ろうとする人々の努力は無駄になる。いつか全宇宙が神に戻るとき、全宇宙における神の働きの中心は神の発する言葉に従うだろう。他の場所では、ある人は電話で、ある人は飛行機に乗って、ある人は船で海を渡って、またある人はレーザーを使って、神の発する言葉を受け取るだろう。誰もがあこがれ、渴望し、神に近づき、神の前に集い、そして神を礼拝する。これらすべてが神の業なのである。覚えておきなさい。神がどこかよそで新しく始めることは決してない。神はこの事実を成し遂げる。彼は全宇宙のすべての人々を彼の前に迎え、地上の神を礼拝させる。他の場所での神の仕事は終わり、人々は真の道を求めなければならないだろう。それはヨセフのようだ。みな食べ物を求めて彼のもとを訪れ、頭を垂れた。彼は食べ物を持っていたためである。飢饉を避けるために、人々は真の道

を求めなければならない。宗教界全体が深刻な飢餓に苦しみ、今日の神のみが、人の喜びのために提供される、枯れることのない生ける水の泉であり、人々は彼のもとに来て彼を頼るだろう。その時神の業は明らかにされ、神は栄光を受けるだろう。宇宙の至るところにいるすべての人々が、この目立つ訳でもない「人」を礼拝するだろう。これは神の栄光の日ではないだろうか。いつか、老牧師たちは生ける水の泉から、水を求めて電報を送ることだろう。彼らは年老いているが、彼らが軽蔑しているこの人に礼拝をしにやってくるだろう。彼らは口々に認め、心の中で信頼するだろう。これはしるしと不思議ではないだろうか。神の国全体が喜ぶ時は、神の栄光の日であり、あなたがたのもとに来て神のよい知らせを受ける者は皆神によって祝福され、これらの国々とこれらの民は神によって祝福され、顧みられるだろう。将来の方向性は次のようになる。神の口から言葉を得る者は、地上で歩むべき道を知っており、ビジネスマンや科学者であれ、あるいは教育者や実業家であれ、神の言葉のない人には、一步進むことさえ難しく、彼らは真の道を求めることを余儀なくされるだろう。「真理とともに世界中を歩む。真理なくしては、どこへも至ることができない」とはこのことを言うのである。事実是这样である。神は道（つまり神の言葉全て）で全宇宙を支配し、人を治め征服する。人は常に、神による働きの方法が大きく転換することを望んでいる。率直に表現すれば、神が人を支配するのは言葉を通してであり、あなたは望むと望まざるとを問わず、神の言うことをしなければならない。これは客観的な事実であり、すべてのものはこれに従わなければならない、避けることのできない、全ての者に知られた事実である。

聖霊は人々に感覚を与える。神の言葉を読んだ後、人々の心は揺るがず、安らかであり、一方で神の言葉を得ない人は虚しさを感じる。これは神の言葉の力である。人々はそれらを読まねばならない。読後には豊かになり、それなしにはいられなくなる。それはアヘンを摂取するようなものである。それは人に力を与え、なくなると人はそれに強く引きつけられ、力を失う。これは今日の人々の傾向である。神の言葉を読むことは人々に力を与える。それらを読まなければ、物憂げになるが、読後は直ちに「病床」から立ち上がる。これが、神の言葉が地上で力をふるい、神が地上で支配するということである。一部の人は立ち去りたがるか、神の仕事にうんざりしている。それでも彼らが神の言葉から離れることはできない。人々がどれほど弱いものであっても、神の言葉によって生きなくてはならず、どんなに反抗的であっても、あえて神の言葉から離れようとはしない。神の言葉が真にその力を示すときは、神が支配し、権力を行使するときであり、このように神は働く。結局のところこれが、神が仕事を行う手段であり、誰もそれ

を離れることはできない。神の言葉は無数の家に広がり、すべてのものに知られるようになり、このようにしてのみ、神の仕事は全宇宙に広まる。つまり、神の仕事は全宇宙に広げるには、神の言葉が広められなければならない。神の栄光の日に、神の言葉はその力と権威を示すだろう。大昔から今日まで神が語ってきたすべての言葉が成就し、現実となるだろう。このようにして、栄光は地上で神のものとなる。つまり、神の言葉が地上で全てを支配するようになる。悪者はすべて神の口から語られる言葉によって罰せられ、義人はすべて神の口から語られる言葉によって祝福され、すべては神の口から語られる言葉によって確立され成就される。また、いかなるしるしや不思議も神は示さない。すべてが言葉によって成就され、言葉は事実を生み出すだろう。老若男女問わず、地上にいるすべての人は神の言葉を称え、神の言葉の下にすべての人々は服従する。神の言葉は肉に現れ、鮮明かつ生きているようなそれらの言葉を、人々が地上で見られるようにする。これが、言葉が肉になるということである。神は主に、「言葉が肉になる」という事実を成し遂げるために地上に来た。つまり神は、言葉が肉から発せられるよう来たのである（神が直接天から語った旧約のモーセの時代とは異なる）。その後、千年神の国時代にはそれぞれの言葉が成就し、人々の目に見える事実になり、少しの誤りもなく、おのこの目で見ることになるだろう。これが、神の受肉の最高の意味である。つまり霊の働きは、肉体を通し、言葉を通して達成される。これは「言葉が肉になる」および「言葉の肉における出現」の真の意味である。神だけが霊の意志を語ることができ、肉における神のみが霊に代わって語ることができる。神の言葉は受肉した神の中に明らかにされ、他のすべての人はそれらによって導かれる。誰もそこから外れることはなく、みなこの範囲内にいる。これらの言葉からのみ、人々は知ることができる。このようにして獲得しない者たちが、自分は天から発せられた言葉を得られると思っているのであれば、それは白昼夢を見ているのである。これが、受肉した神に示された権威であり、全ての人を信服させるのである。最も優れた専門家や牧師でさえ、これらの言葉を話すことはできない。彼らはこれらに従わねばならず、誰も新しく始めることはできない。神は言葉によって全宇宙を征服する。肉体によってではなく、受肉した神の口から発せられた言葉によって、全宇宙にいるすべての人を征服する。これこそ、言葉は肉となるということであり、これこそ、肉における言葉の出現である。人々には、神がさほど多くの仕事を為していないように見えるかもしれないが、神が言葉を発するだけで、人々は完全に納得し、圧倒される。事実がなければ、人々は喚き散らし、神の言葉があれば、彼らは沈黙する。神はこの事を必ず成し遂げるだろう。地上への言葉の到来を達成することは、神の長年に亘る計画だからである。実際、わたしが説明する必要は

ない。地上に千年神の国が到来したということは、地上に神の言葉が到来したということである。天から新しいエルサレムが降るのは神の言葉の到来であり、神の言葉が人の中で生き、人間の全ての行動や内なる考えの全てに伴うことである。これはまた、神が成し遂げる事実であり、千年神の国の素晴らしい光景である。これは神によって定められた計画である。言葉は千年の間地上に現れ、それらは神のすべての業を明らかにし、地上での神のすべての仕事を完了させ、それにより人類のこの段階は終わりを迎える。

あなたと神との関係はどのようなものか

神を信仰する中で、少なくとも神と正常な関係を持つという問題を解決する必要がある。神との正常な関係がなければ、神を信仰する意味は失われる。神との正常な関係の確立は、神の前で心を鎮めることができれば完全に実現できる。神との正常な関係とは、神のいかなる働きをも疑ったり否定したりせずにいられること、そして神の働きに従えることを意味する。さらに神の前で正しい意思を持ち、自己を顧みず、何をするときも神の家の利益を最も重視し、神の吟味を受け入れ、神の采配に従うということをも意味する。あなたは何をするときにも、神の前で自分の心を鎮めることができないならぬ。たとえ神の旨を理解できなくても、自己の本分を尽くし、責任を果たすために全力を尽くす必要がある。ひとたび神の旨が明らかにされてから、それを実践しても手遅れではない。あなたと神との関係が正常になれば、あなたと人々との関係も正常になるだろう。すべては神の言葉という基盤の上に確立されている。神の言葉を飲み食いしてから、神の求めを実践に移し、自らの見解を正し、神に逆らったり教会を乱したりすることを避けるようにしなさい。兄弟姉妹のいのちに役立たないことはせず、他の人々の役に立たないことを言わず、恥ずべきことをしないようにしなさい。何をすることにも、公正かつ高潔に、神に見られても恥ずかしくないようにしなさい。肉体は時として弱いことがあるにせよ、あなたは自己の利益を求めることなく、神の家の利益を最優先し、義を行うことができないならぬ。このように行動できるなら、あなたと神との関係は正常になる。

何をすることにあたって、常に自分の意図が正しいかどうかを吟味しなさい。あなたが神の求めに従って行動できるなら、あなたと神との関係は正常である。これが最低限の基準である。自分の意図を吟味した結果、間違った意図が出てきた場合は、それに背を向け、神の言葉に従って行動できるようになりなさい。そうすれば、あなたは神の前において正しい者となるだろう。それはあなたと神との関係が正常であること、そしてあ

あなたの行なうすべてのことが自己のためでなく神のためであることを示す。何かをしたり言ったりするときには、常に心を正して義にかなうように行動し、感情に流されたり、自分の意志に従って行動したりしないようにしなさい。これが、神の信徒が自らを律すべき原則である。人の意図や霊的背丈は小さな物事の中に現れるため、神により完全にされる道に入るためには、まず自分自身の意図と、神との関係を正す必要がある。神との関係が正常になって初めて、神により完全にされることが可能になり、そうやって初めて、神によるあなたの取り扱い、刈り込み、鍛錬、精錬があなたの中で望ましい効果を上げられるようになる。それはつまり、人々が心の中に神を抱き、自己の利益を追求せず、自己の将来を（肉的な意味で）考えず、いのちに入るための重荷を背負って、真理の追求に最善を尽くし、神の働きに従うことができるなら、あなたの追求する目標は正しく、あなたと神との関係は正常になるということだ。神との関係を正すことは、霊的な旅を始めるための最初の一步だと言える。人の運命は神の手中にあり、神があらかじめ定めたもので、人が自分で変えることはできないが、あなたが神により完全にされうるかどうかが、神のものとされうるかどうかは、あなたと神との関係が正常かどうかによって決まる。あなたには弱い部分や従順でない部分があるかもしれないが、あなたの見解や意図が正しい限り、そしてあなたと神との関係が正しく正常なものである限り、あなたには神によって完全にされる資格がある。あなたが神と正しい関係を持たず、肉のためや自分の家族のために行動するなら、どんなに一生懸命に働いても何の役にも立たない。あなたの神との関係が正常であれば、他のすべてはあるべきところに落ち着く。神が見ているのは、神への信仰におけるあなたの見解が正しいかどうかだけであり、それ以外は何も見えていない。見解とは、あなたが誰を信じ、誰のために信じ、なぜ信じているかということだ。あなたがそのようなことをはっきりと認識し、そうした正しい見解をもって実践することができれば、あなたのいのちは成長し、正しい道に入ることも保証されるだろう。神との関係が正常でなく、神の信仰についてのあなたの見解が逸脱したものであるなら、それ以外のすべては台無しになり、どれほど神を信仰しても何も得られないだろう。神との関係が正常になってから、肉に背を向け、祈り、苦しみ、耐え、従い、兄弟姉妹を助けて、より深く神に貢献するなどしたときに、初めて神の称賛を得ることができるだろう。あなたのすることが価値や意義を持つかどうかは、あなたの意図が適切であり、あなたの見解が正しいかどうかによって決まる。近頃では多くの人が、首を捻じ曲げて時計を見るように神を信仰しており、すなわちその視点がねじ曲がっている。この状況は打開され正されなければならない。この問題が解決されれば万事落ち着するが、解決されなければ万事が無に帰すだろう。一部の人は、わたしの

前では行儀よく振る舞うが、背後ではわたしに逆らっただけにいる。これは不実と不正直の現れである。この種の人にはサタンの使いであり、神を試す典型的なサタンの化身である。あなたはわたしの働きと言葉に従うことができ、初めて正しい人となる。あなたが神の言葉を飲み食いできる限り、そして神に見られても恥ずかしくないことだけを行い、すべての行為を公正かつ高潔に行っている限り、そしてまた恥ずべきことや他者のいのちに害のあることをせず、光の中で生き、サタンに付け込む隙を与えない限り、あなたの神との関係は正常である。

神を信じるにあたっては、自分の意図と見解を正さなければならない。あなたは神の言葉と神の働き、神が整えるすべての環境、神によって証しされる人間、そして実践の神を正しく理解し、正しく扱う必要がある。自分個人の考えに従って行動したり、つまらない策略を練ったりしてはならない。あらゆることにおいて真理を求め、神の被造物として、神のあらゆる働きに従うことができないとしない。あなたが神によって完全にされることを求め、いのちの正しい軌道に入ることを望むなら、あなたの心は常に神の前で生きなくてはならず、放蕩することなく、サタンに従ったり、サタンに働きを行う機会を与えたり、自分を利用させたりしてはならない。あなた自身を完全に神に委ね、神の支配を受ける必要がある。

あなたはサタンの使いになりたいか。サタンに利用されたいか。あなたが神を信じ、神を求めているのは、神によって完全にされるためか、それとも神の働きの引き立て役になるためか。あなたは神のものとされて、意味のある人生を生きたいか、それとも価値のない空っぽの人生を生きたいか。あなたは神によって使われたいか、それともサタンに利用されたいか。神の言葉と真理によって満たされたいか、それとも罪とサタンで満たされたいか。こうしたことをよくよく考えてみなさい。日々の暮らしの中で自分の言ったことやしたことのうち、神との関係を異常にしかねないものを把握し、自らを改めて正しい方法に入らなければならない。常に自分の言葉、行動、一挙一動、すべての考えや思いをよく吟味しなさい。自分の真の状態を正しく把握し、聖霊の働きの方法に入りなさい。これが神と正常な関係を持つための唯一の方法である。自分と神との関係が正常かどうかを測ることで、あなたは自らの意図を正し、人の本性と本質を理解し、真に自分自身を理解することができるようになる。そしてそれを通して、あなたは実体験に入り、真に自分自身を捨て去り、意図を持って従うことができるようになる。自分と神との関係が正常であるかどうかに関するこれらの事柄を経験する中で、あなたは神によって完全にされる機会を見出し、聖霊の働きのさまざまな状態を把握できるようになる。

なり、サタンの策略や陰謀の多くを見抜くこともできるようになる。このようにしてのみ、あなたは神によって完全にされることが出来る。あなたは神との関係を正すことで、神の采配に完全に従い、実体験により深く入り込み、聖霊の働きをより多く受け取れるようになる。神との正常な関係を実践するときは、ほとんどの場合、肉を捨て去り神と真に協力することで成功できる。「協力の心がなければ、神の働きを受け取ることは難しい。肉の試練を経なければ、神からの祝福はない。霊が葛藤しなければ、サタンを恥じ入らせることはできない」ということを理解する必要がある。このような原則を実践しはっきりと理解すれば、神の信仰についてのあなたの見識は正されるだろう。あなたがたは現在の実践において、「飢えを満たすためにパンを求める」という考え方や、「すべては聖霊によって成され、人が介入することはできない」という考え方を捨てる必要がある。このように言う人々はみな、「人はなんでもやりたいことができ、時が来れば、聖霊が神の働きを行う。人は肉を抑制する必要も協力する必要もなく、ただ聖霊に動かしてもらえばよい」と考えている。このような見解はすべてばかげている。このような状況では、聖霊が働くことはできない。このような見解が、聖霊の働きに対する大きな障害になるのである。聖霊の働きは多くの場合、人の協力を通して実現される。協力もせず決意もしていないのに、自身の性質を変え、聖霊の働きを受け、神によって啓かれ照らされることを望む人々は、まったく虫の良い考えを抱いている。このような態度が、「自分を甘やかし、サタンを大目に見ている」と言われるのだ。このような人々は神と正常な関係を持っていない。あなたは自分自身の中にある多くのサタンの性質の現れを見つけ出し、神の現在の要求に反している自身の実践を確認しなければならない。あなたは今後はサタンを見捨てることができるか。あなたは神との正常な関係を獲得し、神の意図に従って行動し、新たな人となって新たないのちを得なければならない。過去の過ちを振り返らず、過度に後悔せず、立ち上がって神と協力し、自分の果たすべき本分を果たせるようにしなさい。そうすることで、あなたと神との関係は正常になる。

この言葉を読んだ後、あなたがそれを受け止めると言うだけで、心を動かされず、神と正常な関係を持とうとしないなら、それはあなたが神との関係を重視していない証拠である。また、あなたの見解がまだ正されておらず、あなたの意図も自分が神のものとされることや神に栄光をもたらすことに向けられておらず、サタンの陰謀が蔓延ることや、自分の個人的な目的を達成することに向けられている証拠である。この種の人はいわゆる間違った意図や不正な見解を抱いており、神が何をどのように言おうがまったく無関心で

、少しも変わることはない。彼らの心はまったく恐れを知らず、恥じ入ることもない。この種の人には霊のない愚か者である。神の一つ一つの言葉を読み、それを理解したらすぐに実践に移しなさい。かつてあなたの肉は弱かったかもしれないし、反抗的だったり反逆したこともあるかもしれないが、過去にあなたがどのように振る舞っていたにせよ、それは大きな問題ではなく、あなたのいのちが今成長することを妨げるものではない。今日あなたが神と正常な関係を持つことができるなら、そこには希望がある。あなたが神の言葉を読むたびに変わり、他の人々もあなたの生活がよい方向に変わったと認めるなら、それはあなたと神の関係が今や正常であり、正されたことを示している。神は人々を、犯した過ちを基準に扱うことはない。あなたが理解し自覚して、反抗したり逆らったりすることを止めさえすれば、神の慈悲を受けることができる。あなたが理解を得て、神により完全にされることを求めようと決意するならば、神の前でのあなたの状態は正常になる。何をしているときにも、必ずこう考えなさい。「わたしがこれをしたら、神はどう思うだろうか。これは兄弟姉妹のためになるだろうか。神の家の働きにとって有益だろうか」と。祈り、交わり、発言、行動、さらに人々との接触においても、自分の意図を吟味し、あなたと神との関係が正常かどうかを確認しなさい。自分自身の意図や考えを見定めることができないならば、あなたには判断力がないということであり、それはあなたが真理を知らなすぎることを証明している。あなたが神の行うあらゆることを明確に理解し、神の側に立ちつつ神の言葉を通して物事を把握することができるなら、あなたの見解は正されたと言える。従って、神と良好な関係を築くことは、神を信仰する人にとっての最優先事項であり、誰もがこれを最も重要な課題として、また人生における最大の出来事として扱うべきである。あなたの行いはすべて、神との関係が正常であるかどうかによって照らして判断される。あなたの神との関係が正常であり、あなたの意図が正しいならば、行動を起こしなさい。神との正常な関係を維持するためには、個人的な利益を失うことを怖れてはならず、サタンが蔓延ることを許してはならず、サタンに付け入る隙を与えてはならず、サタンがあなたを笑いものにすることを許してはならない。そうした意図を持つことは、あなたと神との関係が正常であることの現れである。それは肉のためではなく、霊の平安のためであり、聖霊の働きを得るためであり、神の旨を満たすためである。あなたが正しい状態になろうとするなら、神と良好な関係を築かなければならず、神の信仰についての自分の見解を正さなければならない。それは、神があなたを自分のものにするため、また神の言葉があなたの中に結実し、あなたがさらに啓かれ照らされるようになるためである。このようになれば、あなたは正しい道に進んだことになる。神の現在の言葉を飲み食いし続け、聖霊の現在における働

きの方法に入り、神の現在の求めに従って行動し、古臭い慣習に従うことをやめ、物事の古いやり方にしがみつくのをやめ、今日の働きの方法にできるだけ早く入りなさい。そうすることで、あなたと神との関係は完全に正常なものになり、あなたは神を信仰するための正しい道に踏み込んだことになる。

もっと現実に集中しなさい

神に完全にされる可能性はすべての人にあるので、どのような奉仕が最も神の旨に適っているのかを皆が理解する必要がある。ほとんどの人は神を信じるということの意味を知らず、なぜ神を信じるべきなのかも理解していない。つまり、ほとんどの人は神の働きや神の経営（救いの）計画の目的をまったく理解していないのだ。大半の人々は今も、神を信じることの目的は、天国へ行って魂の救いを得ることだと考えている。彼らは神を信じることの厳密な意義を何も知らず、さらに神の経営計画の最も重要な働きについても一切理解していない。理由は個人によりさまざまだが、誰もが神の働きに一切関心を持っておらず、神の意図や経営計画について考えることもまったくない。一人一人がこの流れの中にいる者として、神の経営計画全体の目的と、神がもうずっと前に成し遂げた事柄、この一群の人々を選んだ理由、彼らを選んだ目的と意味、そしてその人々の中で何を実現しようとしているのかを知らねばならない。神が赤い大きな竜の国でこのような目立たない一群の人々を起こすことができたこと、そして現在に至るまで働きを続け、あらゆる方法で彼らを試み完全にし、無数の言葉を語り、多くの働きを行い、多数の役立つ物事を送り出してきたこと――神が単独でこのような偉大な働きを成し遂げたことは、神の働きがいかに意義深いかを示している。現時点で、あなたがたはそれを完全に認識することができない。それゆえ、神があなたがたの中で行なった働きを些細なものと考えてはならない。それは小さなことではないのだ。神が今日露わにした物事だけでも、あなたがたは見抜き理解しようと努めるのに精一杯だ。それを真にかつ完全に理解して初めて、あなたがたの経験は深まり、いのちが成長できるのだ。現在、人々が理解し行動していることはあまりにも少なく、彼らに神の意図を完全に成し遂げることはできない。これは人間の欠点であり、人は自分の本分を尽くすのに失敗しているため、望まれる結果を出すことができないのだ。聖霊が多くの人々の中で働きを行う術を持たないのは、人々が神の働きについて非常に浅い理解しか持っておらず、神の家の働きを貴重なものとみなして行おうとしていないからだ。彼らは相も変わらず形ばかりの働きをしてやり過ごすか、でなければ単に多くの人に従ったり、人に見せるためだけに働いたりしている。現在この流れの中にいる人はそれぞれが、自分の活動や行為の

中でできるだけのことをしたかどうか、全力を尽くしたかどうかをふり返ってみる必要がある。人々は本分を尽くすことに完全に失敗しているが、それは聖霊が働きを行っていないからではなく、人々が自分の働きを行わないため、聖霊がその働きを行えずにいるからなのだ。神はすでに言うべき言葉を語り終えているが、人間はそれにまったくついて行けずひどく遅れており、一つ一つの段階から離れずにいること、子羊の足取りにしっかりと付き従うことができずにいる。彼らは守るべきことを守っておらず、実践すべきことを実践しておらず、祈るべきことを祈っておらず、捨て去るべきことを捨て去っていない。こうしたことをいずれも行っていないのだから、宴に参加するなどという話は空虚であり、何の現実的な意味もなく、人々の空想の産物でしかない。今になってみると、人々は自らの本分をまったく果たしてきていないと言える。すべては神自身が行い語ることに依存しており、人間が果たしてきた役割はあまりにも小さい。人は神と協調することができない、役立たずの屑なのだ。神は無数の言葉を語ってきたが、人はそのいずれも実践に移していない。神の言葉は、肉を捨てること、観念を捨て去ること、万事において神への服従を実践しつつ判断力を養い見識を得ること、心の中に人の居場所を作らないこと、心の中の偶像を消し去ること、不正な意図に抗うこと、感情に基づいて行動しないこと、物事を公平に偏見なく行うこと、語るときには神の利益と他者への影響にもっと配慮すること、神の働きのためになることをもっと多く行うこと、あらゆる行動において神の家の利益を念頭に置くこと、感情に行動を支配させないこと、自分の肉を喜ばせる物事を捨て去ること、自分勝手な旧来の観念を排除することなど、多岐に渡っている。実際、人々は神が突きつけるこうした要求の一部を理解してはいるが、単にそれを実践に移す気がないのだ。神には他に何ができるだろうか。他にどんな方法で、人間を動かすことができるだろうか。神の目から見た反逆の子らは、どうやっていまだに厚かましくも神の言葉を取り上げ称賛することができるのか。どうやって厚かましくも神の食べ物を食べられるのか。人々の良心はどこにあるのか。彼らは自分が尽くすべき最低限の本分すら尽くしておらず、全力を注ぐことなど言うまでもない。彼らは夢の中にも生きているのではないか。実践なくして現実を語れるはずがない。それはこの上なく明白な事実である。

あなたがたはもっと現実的な教訓を学ぶ必要がある。人々が感服するような、大げさで空虚な話は必要ない。認識について語ることにについては、各人が次々と上達しているにもかかわらず、皆がいまだに実践の道を得ていない。実践の原則を理解している者は何人いるだろうか。実際に教訓を学んだ者は何人いるだろうか。誰が現実について説教

できるのか。神の言葉についての認識を語れることは、本物の霊的背丈を持っていることを意味するわけではなく、ただあなたが生まれつき利口で才能があることを示すだけだ。道を指し示すことができないなら結果は得られず、あなたは役立たずの屑になるのだ。実際の実践の道について何も語れないなら、あなたはただ知ったかぶっているだけではないのか。自分の実際の経験を他者に示し、学べる教訓や辿れる道を与えることができないなら、ただごまかしているだけではないのか。あなたは偽者ではないのか。あなたに何の価値があるというのか。そのような人は「社会主義理論の創始者」の役割しか演じられず、「社会主義実現の貢献者」にはなれないだろう。現実が欠如しているということは、真理を持っていないということだ。現実が欠如しているということは、何の役にも立たないということだ。現実が欠如しているということは、生ける屍だということだ。現実が欠如しているということは、言及に値しない「マルクス・レーニン主義の思想家」だということだ。わたしはあなたがた一人一人が、理論を語るのをやめ、現実の物事や本物で実体のある物事について語るよう求める。少し「現代芸術」を研究し、現実的な話をし、何か実際の貢献をし、献身の精神を持つようにしなさい。語るときには現実と向き合い、非現実的で大袈裟な話に没頭して人を喜ばせたり、注目を浴びるよう努めたりしてはならない。そんなことに何の価値があるのか。人々に暖かく扱ってもらうことに何の意味があるのか。話をするときは少し「芸術的」になり、行動するときにはもう少し公正に振る舞い、物事を扱うときはもう少し合理的になり、言うことはもう少し現実的にし、すべての行動において神の家に利益をもたらすことを考え、感情的になったときは自分の良心に耳を傾け、恩を仇で返したり恩知らずになったりしないようにし、偽善的にならないようにしなさい。そうでないと、あなたは悪い影響を及ぼすようになる。神の言葉を飲み食いするときは、それをもっと密接に現実と結びつけ、交わりを持つときはもっと現実的なことを話すようにしなさい。人を見下してはならない。それは神を満足させない。他の人々と交流するときにはもう少し忍耐強くなり、もう少し譲歩し、もう少し寛大になって、「宰相の精神^[a]」から学びなさい。良くない考えを抱いたときは、もっと肉を捨て去ることを実践しなさい。働くときはもっと現実的な道について語り、高尚になり過ぎないようにしなさい。高尚になり過ぎると、人々はあなたの言うことを成し遂げられなくなる。楽しみを減らし、貢献を増やして、無私な献身の精神を示しなさい。神の意図にもっと配慮し、自分の良心の声にもっと耳を傾け、もっと注意深くなり、神が毎日あなたがたに忍耐強く熱心に語りかけていることを忘れないようにしなさい。「昔の暦」をもっと頻繁に読み、もっと祈りを捧げ、もっと頻繁に交わりを持ちなさい。そんなにぼんやりしていないで、少し理知を示し、少し見識を得

なさい。罪の手が伸びたときは、その手を引き戻し、遠くまで伸ばさないようにしなさい。それは何の役にも立たず、神から得るものは呪いだけになるので注意することだ。他人に対しては憐れみの心を持ち、いつも武器を手にして攻撃するのをやめなさい。真理の認識についてもっと交わりを持ち、もっといのちについて語り、他人を助ける精神を持ち続けなさい。行動を増やし、語ることを減らしなさい。もっと実践に力を注ぎ、調査や分析は減らしなさい。もっと聖霊に動かされるようになり、神に完全にされる機会を増やしなさい。人間的要素をもっと排除しなさい。あなたがたはまだあまりに多くの人間的 방법으로物事を行なっていて、その表面的な行動や態度は他者にとって非常に不快だ。そうしたものをもっと排除しなさい。あなたがたの精神状態はまだあまりにも忌まわしいので、その是正にもっと多くの時間を費やしなさい。あなたがたはまだ人々に多くの地位を与えすぎているので、神にもっと高い地位を与え、そのように不合理であることをやめなさい。「神殿」は常に神のものであり、人間に占領されてはならないのだ。要するに、もっと義を重視し、感情を重視するのはやめなさい。最もよいのは肉を排除することだ。もっと現実を語り、認識を語るのは避けなさい。最もよいのは口を閉ざし、黙していることだ。もっと実践の道について語り、価値のない大袈裟な話は避けなさい。実践は今すぐ始めるのが一番だ。

人間に対する神の要求は、それほど高度なものではない。多少の努力をすれば、「及第点」を取れるだろう。実際、真理を理解し、知り、把握することは、真理を実践することよりも複雑である。真理を知り把握することは、真理を実践した後になる。それが聖霊の働く手順であり、方法なのだ。どうしてそれに従えないことがあるのか。自分のやり方で物事を行って、聖霊の働きを得られるのか。聖霊はあなたの都合で働くのか、それとも神の言葉に照らしたあなたの欠陥に基づいて働くのか。このことをはっきり理解できないなら意味がない。なぜほとんどの人は、多大な労力を費やして神の言葉を読んでいながら、その後にもただ認識を得るだけで、現実の道について何も言うことができないのだろうか。認識を得れば、そのまま真理を得ることになると思っているのか。それは混乱した見方ではないか。あなたは砂浜の砂粒ほど膨大な数の認識を語ることができるが、そのどれにも現実の道は含まれていない。あなたはその話で人々を欺こうとしているのではないか。ただ空虚な見栄を張っているだけで、その裏付けとなる実質は何もないのではないか。そのような行為はすべて人々に有害だ。理論が高尚で現実性が欠如していればいるほど、人々を現実に導くことはできなくなり、理論が高尚であればあるほど、あなたは神に背き反抗するようになる。最も高尚な理論を貴重な宝の

ように扱うのはやめなさい。そうした理論は悪質であり、何の役にも立たない。一部の人は最も高尚な理論を語れるかもしれないが、そこには何の現実も含まれていない。彼らはそれを自分で経験しておらず、そのため実践の道を一切持っていないからだ。そのような人は他者を正しい道に導くことができず、道に迷わせるだけだ。それは人々にとって有害ではないか。あなたは最低限として、人々の現在の問題を解決し、彼らに入りを成し遂げさせることができなければならない。それだけが献身と見なされるのであり、そうして初めてあなたは神のために働く資格を得ることになる。尊大で非現実的な言葉ばかり語ったり、多くの不適切な実践で人々を縛って自分に従わせたりしてはならない。そのようにしても何の効果もなく、彼らをますます困惑させるだけだ。そのようにしていると、数多くの教義が生み出され、それが原因で人々はあなたを嫌悪するようになるだろう。これは人間の欠点であり、極めて恥ずかしいことだ。だから、もっと実際に存在する問題について語りなさい。他人の経験を自分自身の財産として扱ったり、それを他人に見せびらかしたりしてはならない。一人一人が自分自身の解決策を探し出さねばならないのだ。それが、各人が実践すべきことなのである。

あなたの説教が人々に歩むべき道を与えられるなら、あなたは現実を備えていることになる。何を語るにせよ、あなたは人々を実践へと導き、皆が従うことのできる道を与えなければならない。人々が認識を得られるようにするだけでは不十分であり、もっと重要なのは歩むべき道を持つことなのだ。神を信じるには、神が働きによって導く道を歩まねばならない。すなわち神を信じる過程とは、聖霊に導かれる道を歩む過程なのだ。そのためあなたがたは、何としても歩むことのできる道を得なければならず、神に完全にされる道に踏み出さなければならない。あまり後れを取ったり、あまり多くの事柄を心配したりしてはならない。神に導かれる道を、妨げることなく歩んだ場合のみ、聖霊の働きを受けて入りの道を得ることができる。そしてそれだけが、神の意図に沿っていること、人間の本分を尽くしていることとみなされるのだ。各人がこの流れの中の一人として、自分の本分を適切に尽くし、人がすべきことをより多く行い、自分勝手な行動を慎む必要がある。働きを行う者は言葉を明瞭にしなければならず、付き従う者は苦難に耐えることと従うことにもっと集中しなければならず、皆が自分の場所に留まり、そこから逸脱しないようにする必要があるのだ。それぞれの心の中で、自分がどのように実践すべきか、どんな役割を果たすべきかが明確になっていなければならない。聖霊に導かれる道を歩み、道に迷ったり、道を誤ったりしないようにしなさい。あなたがたは現在の働きを明確に把握しなければならない。実践すべきことは、現在の働き

方に入ることだ。それが、あなたがたがまず入らねばならないことなのだ。それ以外の
ことについて、それ以上無駄な言葉を費やすのはやめなさい。今日神の家の働きを行う
ことがあなたがたの責任であり、今日の働き方に入ることがあなたがたの本分であり、
今日の真理を実践することがあなたがたの重荷なのだ。

脚注

a. 宰相の精神：心が広く寛大な者を表す中国の慣用表現。

戒めを守ること、真理を実践すること

実践において、戒めを守るとは真理の実践と結びつけるべきである。戒めを守りながら真理を実践しなければならないのである。真理を実践する際は、戒めの原則を破ったり、戒めに反した行動をとったりしてはならない。神が自分に求めることは何でも行なわなければならない。戒めの遵守と真理の実践は相反するものでなく、相互に関連するものである。真理を実践すればするほど、より一層戒めの本質を遵守するようになる。真理を実践すればするほど、戒めに示されている神の言葉をより深く理解することになる。真理を実践することと戒めを守るとは相反する行動ではなく、両者は相互に関連している。最初のころ、人間は戒めを守って初めて真理を実践し、聖霊の啓きを得ることができた。しかし、それが神の本来の意図ではない。神は、あなたが立派に振る舞うだけでなく、神への礼拝に心を捧げるよう求めている。とは言え、あなたは表面的にでも戒めを守る必要がある。経験を通じて神のことをよりはっきり認識したあと、人は次第に神への反抗と抵抗を止め、神の働きについてそれ以上疑いを抱かないようになる。そうすることでのみ、人は戒めの本質に従うことができる。ゆえに、真理を実践せず単に戒めを守るのは効果がないことであり、神に対する真の崇拝とはならない。なぜなら、あなたは真の霊的背丈を得ていないからである。真理がないまま戒めを守っても、それは規則を固く遵守することにしかない。そうする中で、戒めが自分の律法となるだろうが、それはいのちの成長に役立たない。それどころか、戒めはあなたの負担となり、旧約の律法のように自分を固く束縛するものとなり、あなたが聖霊の臨在を失う原因となるだろう。したがって、真理を実践することでのみ、あなたは効果的に戒めを守ることができ、また真理を実践するために戒めを守る。戒めを守る過程の中で、あなたはさらに多くの真理を実践し、また真理を実践する際に、戒めの実際の意味をより深く理解するようになる。人間は戒めを守らねばならないという神の要求の裏にある目的と意義は、その人が想像するように、規則を遵守させることではなく、むしろその人

のいのちへの入りに関連するものである。あなたのいのちの成長度によって、どの程度戒めを守れるかが決まる。戒めは人間が守るべきものだが、戒めの本質は、人間のいのちの経験を通じてでなければ明らかにならない。大半の人は、戒めを立派に守ることは「準備万端、あとは引き上げられるだけ」という意味だと思い込んでいる。これは突飛な考えであり、神の旨と一致していない。こうした発言をする者は進歩したがらず、肉を無闇に欲しがっている。これは馬鹿げている。現実離れしている。実際に戒めを守ることなく、単に真理を実践することは、神の旨ではない。そのようにする者は不具者であり、片脚のない人間も同然である。規則に従うかのごとく戒めを守るだけで、真理を自分のものにしていなければ、それもまた神の旨を満たすことはできない。そうする人たちも、片目を失った人間のように一種の障害に苦しむ。戒めを立派に守り、実践の神に関する明瞭な認識を得るのであれば、あなたは真理を自分のものにしようと言える。相対的に言えば、あなたは真の霊的背丈を得ているはずだ。実践すべき真理を実践するなら、あなたはまた戒めも守っており、これら二つは互いに矛盾しない。真理の実践と戒めの遵守は二つの異なる体系であり、いずれもいのちの経験における不可欠な部分である。人間の経験は戒めの遵守と真理の実践の分割ではなく、それらの統合により構成されるべきである。しかし、これら二つの事柄には、相違点と関連する点の両方がある。

新時代の戒めの公布は、この流れの中にいるすべての人、すなわち今日神の言葉を聞くすべての人が新しい時代に入ったことの証しである。それは神の働きにとって新たな出発であり、6000年にわたる神の経営（救いの）計画の最終部の始まりでもある。新時代の戒めは、神と人間が新たな天と新たな地の領域に入ったこと、またヤーウェがイスラエルの民の間で働きを行ない、イエスがユダヤ人の中で働きを行なったのと同じく、神が地上において一層実践的な働きを行ない、より偉大な働きをさらに行なうことを象徴する。それらの戒めはまた、この人々の集団が神からより偉大な使命をさらに受け、神からの施し、糧、支え、気遣い、そして加護を実践的な形で授けられると共に、神によるより実践的な訓練、および神の言葉による取り扱い、破碎、そして精錬を受けることを象徴する。新時代の戒めの意義は極めて深遠である。それらは、神が実際に地上に現われ、そこから全宇宙を征服し、神の栄光のすべてを肉において表わすことを示唆している。それらはまた、自身の選民を一人残らず完全にすべく、実践の神が地上でより実践的な働きを行なうことも示唆している。さらに、神は言葉によって地上であらゆることを成し遂げ、「受肉した神が最も高い所に昇って讃えられ、あらゆる民と国々が

跪いて大いなる神を崇拝する」という法令を明らかにする。新時代の戒めは人間が守るべきものであり、そうすることは人間の本分にして義務であるが、それら戒めの意義はあまりに深遠であり、ひと言ふた言では十分説明できない。新時代の戒めは、ヤーウェとイエスが公布した旧約の律法や新約のしきたりに取って代わる。これはさらに深遠な教えであり、人々が想像するほど簡明ではない。新時代の戒めには実践的な意義の側面がある。すなわち、それらは恵みの時代と神の国の時代との接点として機能するのである。新時代の戒めは、旧時代の実践やしきたり、そしてイエスの時代やそれよりも前の実践にすべて終止符を打つ。それはまた、人間をより実践的な神の前に連れ出し、その人が神によって直接完全にされ始めるのを可能にする。それは完全にされる道の始まりである。したがって、あなたがたは新時代の戒めについて正しい態度をとるべきであり、いい加減に付き従ったり、あざ笑ったりしてはならない。新時代の戒めは、ある点に強い重点を置いている。それはつまり、人間は今日における実践の神自身を崇拝しなければならないということであり、そこには霊の本質により実践的に従うことが含まれる。その戒めはまた、神が義の太陽として現われたあと、人間を罪人もしくは義なる者として裁く際の原則も強調している。その戒めは、実践することよりも理解することのほうが簡単である。そのことから、人間を完全にしようと望むなら、神は自らの言葉と導きによってそれを行なう必要があり、人間は自分自身に内在する知性だけで完全になることができないということがわかる。人間が新時代の戒めを守れるかどうかは、実践の神に関するその人の認識と関係している。したがって、あなたが戒めを守れるかどうかは、たかだか数日で解決する問題ではない。これは非常に深遠な学ぶべき教えである。

真理の実践は、人間のいのちが成長し得る道である。真理を実践しないのであれば、あなたがたに残るのは理論に過ぎず、実際のいのちはない。真理は人間の霊的背丈の象徴であり、あなたが真理を実践するかどうかは、真の霊的背丈を有しているかどうかと関係している。真理を実践しなかったり、正しく行動しなかったり、感情に左右されて自分の肉に気を取られたりした場合、あなたは戒めの遵守からかけ離れている。これは最も深遠な教えである。すべての時代には、人々が入って理解しなければならない真理が多数ある。しかしそれぞれの時代には、それらの真理に付随する異なる戒めもある。人々が実践する真理は特定の時代と関連しており、彼らが守る戒めも同じである。各時代には、実践すべき固有の真理と、守るべき固有の戒めがある。しかし、神が公布した様々な戒め次第で、つまり様々な時代次第で、人間による真理の実践の目的と効果は大いに異なる。戒めは真理に役立つものであり、真理は戒めを維持するために存在すると

言える。真理しか存在しなければ、神の働きには語るべき変化がないだろう。しかし、戒めを参照することで、人間は聖霊による働きが進展する程度を突き止め、神が働きを行なう時代を知ることができる。宗教においては、律法の時代に人々が実践していた真理を実践できる人が多数いる。しかし、そうした人は新時代の戒めを心得ておらず、それを守れることもできない。彼らはいまだに古い道を守り、原始時代の人間のまま留まっている。彼らは新たな働き的手段が身についていないので、新時代の戒めが見えない。そうしたわけで、そのような人には神の働きがないのである。それはあたかも、中身のない卵の殻だけがあるようなものだ。つまり、中に雛が宿っていないならば、そこに霊はない。より正確に言えば、そこにはいのちがないのである。そうした人たちは新時代に入っておらず、何歩も遅れてしまった。したがって、より古い時代の真理があっても、新しい時代の戒めがなければ無益である。あなたがたの多くは今日の真理を実践しているものの、その戒めを守っていない。あなたがたは何も得ず、実践する真理は価値も意味もなく、神はあなたがたを讃えないだろう。真理の実践は、聖霊による現在の働き方の範囲内で、今日の実践の神の声に反応する形で行なわれる必要がある。そうしなければ一切が無効であり、ざるで水を汲もうとするようなものである。それはまた、新時代の戒めを公布する実際の意義でもある。戒めに従うというのであれば、少なくとも肉において現われる実際の神を混乱することなく知るべきである。つまり、人々は戒めに従う原則を理解すべきなのだ。戒めに従うということは、でたらめに従ったり、勝手に従ったりするのではなく、根拠、目的、原則に基づいて従うことを意味する。まずは、あなたのビジョンを明確にしなければならない。あなたが現在における聖霊の働きについて徹底的に認識し、今日の働き方に入っていくのであれば、あなたは戒めの遵守を自然とはっきり理解できるだろう。あなたが新時代の戒めの真髄を見通し、それを守れる日が来るのであれば、その時あなたは完全にされる。それが真理を実践し、戒めを守ることの実際的な意義である。あなたが真理を実践できるかどうかは、新時代の戒めの真髄をどのように知覚するかによって決まる。聖霊の働きが絶えず人間の前に現われ、神は人間に対してますます多くのことを要求するだろう。それゆえ、人間が実際に実践する真理はより多く、より偉大なものになり、戒めの遵守による効果は一層深くなるだろう。したがって、あなたがたは真理の実践と戒めの遵守を同時に行なう必要がある。誰一人、この問題を見逃してはならない。この新時代において、新たな真理と新たな戒めを同時に開始させようではないか。

実際の神は神自身であることを知るべきである

実際の神についてあなたが知るべきことは何だろうか。実際の神自身は、霊、人、そして、言葉から成り立っている。これが実際の神自身の本当の意味である。あなたがこの人だけを知っていて——つまり、彼の習慣と性格のみを知っていて——霊の働きを知らなければ、あるいは、霊が肉の中で何をするのかを知らず、ただ霊と言葉に注意を払って、霊の前で祈るだけで、実際の神における神の霊の働きを知らなければ、それは、あなたがまだ実際の神を知ってはいない証拠である。実際の神を知ることには、神の言葉を知り、経験すること、聖霊の働きの規則と原則を理解すること、そして、神の霊が肉の内でのどのように働くかを把握することが含まれる。その中には更に、肉となった神のすべての行為は聖霊によって支配されており、彼が語る言葉は聖霊が直接表現したものであるということを理解することも含まれている。したがって、あなたが実際の神を知りたいと願うならば、人間性においてまた神性において、神がどのように働くかをまず知らなければならない。そのことはすべての人々が関係している霊の表現というものにつながってゆく。

霊の表現には何が含まれるのだろうか。神は人間性において働くこともあれば神性において働くこともある。しかし、全体としてどちらの場合も霊が支配している。したがって、どんな霊が人の内に住んでいようが、外側の表現はこのようである。聖霊は普通に働くが、霊による支配には2つの部分がある。その一つは人間性における働きであり、もう一つは神性を通しての働きである。あなたはこのことをはっきり知るべきである。聖霊の働きは状況により変化する。人間性による働きが必要な場合、聖霊は人間性を支配してこの働きを行い、神性の働きが必要な場合は、神性が直接現れて実行する。神は肉において働き、肉において現れるので、人間性においても、また神性においても働く。人間性における神の働きは聖霊によって支配される。それは、人々の肉体的必要を満たすためであり、神との接触を容易にするためであり、人々が神の現実性と正常性を見ることができるようにするためであり、神の霊が肉の中にとどまり、人の間に存在し、人と共に暮らし、人と交わることを人がわかるようにするためである。神性において働くのは、人々のいのちを満たし、あらゆることにおいて人々を肯定的側面から導き、人々の性質を変え、霊が肉において現れることを実際にその目で見ることができるようにするためである。主に、人々のいのちにおける成長は神性の働きと言葉を通して直接達成される。神性の働きを受け入れることによってのみ、人々は自分たちの性質を変化させることができ、その時初めて霊的に満ち足りるのである。これに人間性における働き、すなわち人間性における神の牧養、支え、そして施しを加えられる場合に限り、神の

働きの成果が完全に達成される。今日言及する実際の神自身は、人間性においても神性においても働きを行う。実際の神の出現によって、神が普通の人間として行う働きと生活と同時に、完全に神性となる働きも達成される。人間性と神性は一つに結合され、両方の働きは^[a]言葉を通して達成される。人間性であろうと神性であろうと、神は言葉を発する。神が人間性において働く時は、人々が神と交わり理解できるように、人間の言葉を話す。神の言葉は平易で理解しやすいので、すべての人々に供給することができる。知識があろうと、教育が不十分であろうと、彼らは皆神の言葉を受け取ることができる。神性の働きも言葉を通して行われるが、それは溢れるばかりに豊富で、いのちに満ち、人の意志に汚れておらず、人の好みを含まず、人間性の限界に縛られず、普通の人間性の範疇の外に存在する。神性における働きも肉において実行されるが、それは聖霊の直接的な表現である。もし人々が人間性における神の働きを受け入れるだけならば、彼らは一定の範囲に閉じ込められてしまうので、ごくわずかな変化を人々にもたすだけでも、絶え間のない取り扱い、刈り込み、鍛錬が必要になるだろう。とはいえ、聖霊の働き、あるいは臨在がなければ、人々はいつも古いやり方を繰り返すだけだろう。神性の働きを通してのみ、これらの弊害や欠陥が正される。そして、その時初めて人々は完全にされるのである。絶え間のない取り扱いと剪定に代わって必要なのは、積極的ものの供給であり、人々の全ての欠点を補い、人々のあらゆる状態を露わにし、人々の生活、発言、行動の全てを支配し、その意図と動機を暴露するために言葉を使うことである。これこそが、実際の神の真の働きである。したがって、実際の神に対するあなたがたの態度について言えば、あなたがたは神の人間性の前におとなしく従い、神を認識し、認め、さらに神性における働きや言葉も受け入れ、それらに従うべきである。神が肉において現れることは、神の霊の働きと言葉のすべてが、神の持つ普通の人間性、および神の受肉を通して行われることを意味する。言い換えれば、神の霊は人間性の働きを指揮し、肉において神性の働きを実行する。そして受肉した神の中にあなたは人間性における神の働きと同時に、完全なる神性の働きも見ることができる。これが、実際の神が肉において現れることの真の意義である。このことをはっきり見ることができれば、あなたは神の様々な部分を全てつなぐことができ、神性の働きを重要視し過ぎることも、人間性における働きを軽視することもなくなる。また、極端に走ることも、回り道することもなくなるだろう。総括すると、実際の神の意義とは、人間性の働きと神性の働きは同じ霊によって支配され、肉体を通して表されるということである。それを通して人々は、神が鮮やかに生きているようであり、現実的で、実在していることを見ることができるのだ。

人間性における神の霊の働きには移行期がある。人間性を完全にすることによって、神はその人間性が聖霊の支配を受けることができるようにし、その後、神による人間性が教会に施し、牧養できるようになる。これが神の普通の働きの一つの現れである。したがって、もしあなたが人間性における神の働きの原理を明確に理解できるならば、神の人間性における働きに対して観念を抱く可能性は低い。それにもかかわらず、神の霊に間違いはありえない。神は正しく、誤りはない。神は間違ったことは決してしない。神性の働きは神の心の直接的現れであり、人間性による干渉はない。それは完全にされる過程を経ることなく、霊から直接来る。それでも、神が神性において働きをするのは、神の持つ普通の人間性の故である。超自然的なものは、その片鱗さえ見あたらず、普通の人によって実行されているように見える。神が天から地上に来たのは主に肉を通して神の言葉を表すためであり、肉を使って神の霊の働きを完成させるためであった。

今日、実際の神に関する人々の認識は相変わらず偏り過ぎており、受肉の意義への理解はまだあまりにも取るに足らないものである。神の受肉のこととなると、人々は神の働きと言葉を通して、神の霊にはとても多くが含まれており、非常に豊かであることを知る。しかし、それにもかかわらず、神の証しは最終的には神の霊からもたらされる。つまり、神は肉を通して何を為すか、どのような原則によって神は働くのか、人間性において何をするのか、また神性において何を為すのかについての証しである。人々はこのことを認識していなければならない。今日、あなたはこの人を礼拝することができるが、実際には神の霊を礼拝しているのである。人々が受肉した神についての認識を得るには、少なくとも次のことを達成しなければならない。つまり、肉を通して霊の本質を知ること、肉における霊の神性による働きと人間性による働きの双方を知ること、肉における霊の言葉と発言をすべて受け入れ、神の霊がどのように肉を支配し、肉において神の力を示すのかを理解することである。すなわち、人は肉を通して天にいる霊を知るようになる。実際の神自身が人々の中に出現することによって、人々の観念における漠然とした神は一掃された。実際の神自身を礼拝することによって、神に対する従順さは増加し、肉における神の霊の神性の働きと人間性の働きを通じて、人は啓示を受け、牧養され、人のいのちと性質に変化がもたらされる。これのみが、肉に霊が来ることの実際の意義であり、それは主に、人々が神と関わり、神に頼り、神に関する認識を得るためである。

概して、実際の神に対してどのような態度を取るべきだろうか。受肉について、言葉が肉において現れることについて、肉における神の出現について、実際の神の業につい

て、あなたはどのように理解しているだろうか。そして今日、わたしたちは主に何について話しているのだろうか。受肉、肉によることばの到来、肉における神の出現——これらの問題をすべて理解しなければならない。あなたがたの背丈と時代に基づいて、いのちの経験を積む中で、これらの問題を徐々に理解し、それらについて明確な認識を持つようにならなくてはならない。人々が神の言葉を経験する過程は人々が肉における神の言葉の現れを知る過程と同じである。神の言葉を経験すればするほど、人々はますます神の霊を知るようになる。神の言葉を経験することによって、人々は霊の働きの原則を把握し、実際の神自身を知るようになる。実際、神が人々を完全にし、人々を自分のものにする時、神は人々に実際の神の業を知らせているのである。神は実際の神の働きを通して人々に受肉の実際の意義を示し、神の霊が実際に人の前に現れたことを示す。人々が神のものにされ、神によって完全にされる時、実際の神の表現は人々を征服し、実際の神の言葉は人々を変え、神のいのちを人の内に与え、人を神自身であるもの（人間性のものにせよ、神性なものにせよ）で満たし、神の言葉の本質で満たし、人々が神の言葉を実行して生きるようにさせる。神が人々を獲得する時、神はおもに実際の神の言葉と発言を通して、人々の欠点を取り扱い、反抗的な性質を裁き、明らかにし、人々に必要なものを得させ、神が人々の間に到来したことを示すためである。最も重要なことだが、実際の神の行う働きは、すべての人をサタンの影響から救い、彼らを汚れた地から切り離し、彼らの墮落した性質を一掃することである。実際の神に獲得されることの最も深遠な意義は、実際の神を模範として、手本とすることができ、正常な人間として生き、実際の神の言葉と要求を実践できるようになり、少しのズレや逸脱もなく神の言われる通りを実践し、神が求めることを達成できるようになることである。このようにして、あなたは神のものとされる。神のものとされる時、あなたは聖霊の働きを所有するだけではなく、何よりも実際の神の要求の通りに生きることができる。単に聖霊の働きを持っているだけでは、いのちを持っていることを意味するわけではない。ここで鍵となるのは、あなたが、実際の神の要求に応じて行動できるかどうかであり、それはあなたが神のものとされるかどうかに関連している。これらの事は肉における実際の神の働きの最も偉大な意義である。すなわち、神は実際的に肉において現れ、いきいきと命に溢れて人々に見られ、肉において実際に霊の働きを行うことによって、また肉において人々の模範とすることによって、ひとつの群れを神のものとして獲得する。神が肉として到来するのは、おもに神の実際の業を人々が見ることができ、形のない霊を肉において実体化し、人々が神を見たり触れたりできるようにするためである。このようにして、神によって完全にされる人々は神を現すように生き、神のものとされ、神の心に適

うものとなる。神が天において話すだけで、実際に地上に来なかったのなら、人々はまだ神を知ることができず、空虚な理論を使って神の業を説くことができるだけで、現実として神の言葉を持つことができない。神が地上に来たのは何よりも、神に獲得されるべき人々の模範、手本として行動するためである。このようにしてのみ、人々は実際に神を知り、神に触れ、神を見ることができ、そうして初めて神のものとして獲得されるのである。

脚注

a. 原文では「そして両者は」。

真理を実践することだけが現実を自分のものにすることである

神の言葉を取り上げて臆面もなく説明できたとしても、あなたが現実を自分のものにしていることにはならない。物事は、あなたが想像するほど単純ではない。あなたが現実を自分のものにしているかどうかは、あなたが何を言うかではなく、あなたが何を生きているかに基づいている。神の言葉があなたのいのちとなり、あなたの自然な表現となって初めて、あなたには現実があると言うことができ、またその時初めて、真の理解と実際の霊的背丈を得たと見なされる。あなたは長期にわたる試験に耐え、神が求める人間らしさを生きることができなければならない。それは単なるポーズではなく、自分から自然と流れ出るものでなければならない。その時初めて、あなたは真に現実を自分のものとし、いのちを得ていることになる。誰もがよく知っている効力者の試練を例に取りよう。効力者に関する高尚な理論を持ち出すことは誰にでもできて、誰もがこの主題についてそこそこ理解している。彼らはそれについて話し、あたかも競い合っているかのごとく、一人ひとりの話が直前のものより優れている。とは言え、大きな試練を経たことがないなら、その人に優れた証しがあるとはとても言い難い。要するに、人間が生きることには依然として大いに不足があり、その人の理解とまったく正反対のものである。したがって、それはいまだ人間の実際の霊的背丈になっておらず、依然として人のいのちでもない。人間の理解がいまだ現実の中にもたらされていないので、その人の霊的背丈は依然として砂上の楼閣のようにぐらつき、今にも崩壊しそうである。人間が自分のものにしている現実はいかに乏しく、人間の中に何らかの現実を見出すことはほとんど不可能である。人間から自然と流れ出る現実はいかになく、彼らが生きている現実はいかに強いられたものである。そのためわたしは、人間には現実がいかにない

と言うのである。人は、神に対する自分の愛は決して変わらないと主張するが、彼らがそう言うのは、試練に直面する前だけである。ある日突如として試練に見舞われると、彼らが語ることは再び現実離れしたものになり、そのことは人間に現実がまったくないことをまたもや証明する。自分の観念に合わないことや、自分自身を脇にのける必要があることに遭遇するたび、そうしたことはあなたの試練だと言える。神の旨が明かされるのに先立ち、誰もが厳しい試験と計り知れない試練を経る。あなたにそれが理解できるだろうか。神は人々を試そうとする時、実際の真実が明かされるのに先立ち、いつも彼らに選択させる。つまり、神は人を試練に晒す時、決して真実を伝えないということである。人はそのようにして暴かれる。これは神が自身の働きを行なう一つの方法であり、それによってあなたが今日の神を理解しているかどうか、現実を自分のものになっているかどうかを確かめるのである。あなたには神の働きに関する疑念が本当はないのか。大いなる試練があなたに臨む時、本当に揺るぎなく立つことができるだろうか。「何の問題もないことは請け合います」などとあえて言う者がいるだろうか。「他の人たちは疑念を抱いているかもしれませんが、わたしは決して疑いません」などとあえて断言する者がいるだろうか。それはまさに、ペテロが試練に晒された時と同じである。真実が明かされる前、彼は常に大口を叩いていた。これはペテロだけの個人的な欠点ではなく、誰もが現在直面している最大の問題である。もしもわたしが数ヵ所を訪れたり、何名かの兄弟姉妹たちを訪問したりして、今日の神の働きに関するあなたがたの理解がどのようなものかを確かめるなら、あなたがたは自分の認識についてきっと多くのことを語ることができ、また何の疑念も抱いていないように見えるだろう。「あなたは本当に、今日の働きが神自身によって行なわれていると断定できるのか。何の疑念もなく」と、わたしがあなたに尋ねたならば、あなたはきっと「まったく疑いの余地なく、それは神の霊によって行なわれている働きです」と答えるだろう。ひとたびそのように答えた後、あなたに一抹の疑念もないことは確実に、自分は少しばかり現実を得たと思い、大いに満足さえするはずだ。物事をこのように認識しがちな人は、自分のものになっている現実が少ない人である。自分は現実を得たと考えれば考えるほど、試練に直面した際に揺るぎなく立つことができなくなる。傲慢で横柄な者に災いあれ。自分自身を知らない者に災いあれ。このような人間は、口は達者だが、言葉を行動に移す際に最もひどい目に遭う。ほんの少しでも困難の兆しがあると、このような人たちは疑念を抱き始め、あきらめようかという思いが心に忍び込む。彼らは現実を一切持ち合わせておらず、彼らにあるものといえば、宗教の上位にある理論だけで、神が現在要求している現実はまったくない。理論の話をするだけで、現実を一切自分のものにしていない者を、わたしは

最も忌み嫌う。彼らは自分の働きを行なう時こそ一番大きな声で叫ぶが、現実には直面するとたちまち動揺する。そのことは、この人たちに現実が一切ないことを示しているのではない。風や波がどれほど激しくても、あなたが一抹の疑念も心に入るのを許さずに立ち続け、たとえ他に残された者がいなくなっても揺るぎなく立ち、一切否定しないでいられるなら、あなたは真の理解を得て、現実を本当に自分のものにしているとみなされる。風の吹くほうを向くばかりで、多数派に付き従い、他人の言うことをそのまま繰り返すことを学ぶなら、あなたがどれほど雄弁であろうと、それはあなたが現実を自分のものにしている証拠にはならない。したがって、空虚な言葉を早まって大声で叫んだりしないよう、あなたに勧める。あなたは、神が行なおうとしていることを知っているのか。ペテロのように振る舞ってはならない。さもないければ、あなたは自分に恥をもち、堂々としていられる能力を失う。こんなことは誰の為にもならない。大半の人には真の霊的背丈がない。神は実に多くの働きを行なったが、人々に現実をもたらしてはいない。より具体的に言うと、神はまだ誰も自ら罰していないのである。中には、このような試練によって暴かれた者もいる。つまり、おのれの罪深い手をさらに伸ばしつつ、神に勝るのは簡単であり、好きなことを何でもできると考えている者である。彼らは、この種の試練にさえ耐えられないので、さらに厳しい試練はもっての他、現実を自分のものにすることもまた問題外である。彼らは単に神を欺こうとしているのではない。現実を自分のものにすることは、見せ掛けられることでもなければ、知ることでも達成できることでもない。それはあなたの実際の霊的背丈に左右され、また、あなたがあらゆる試練に耐えられるかどうか次第である。あなたは理解できただろうか。

神が人々に要求するのは、現実について語る能力だけではない。それはあまりに簡単なことだ。そうではないか。ならば、神はなぜいのちへの入りについて語るのか。なぜ変化について話すのか。現実について中身のない話しかできないのであれば、その人たちは性質の変化を成し遂げることができるのか。神の国の精兵は、現実について話したり、自慢したりすることしかできない集団となるよう訓練されているのではない。むしろ、いかなる時も神の言葉を生き、いかなる挫折に直面しても屈せず、絶えず神の言葉にしたがって生き、この世に立ち返らないように訓練されているのである。これが、神が語る場所の現実であり、神が人間に要求するものである。したがって、神が語る現実を簡単に考え過ぎてはならない。単なる聖霊からの啓きは、現実を自分のものにすることと等しくはない。そうしたものは人間の霊的背丈ではなく、神の恵みであり、それに対して人間は何一つ寄与しない。一人ひとりがペテロの苦難に耐えなければならず、

またそれ以上に、ペテロの栄光を自分のものにしなければならない。神の働きを得た後、彼らはそれを生きるのである。これ以外に現実と呼べるものはない。現実について語ることができるからといって、自分に現実があると考えてはならない。それは間違った考えである。そうした考えは神の旨と一致しておらず、実際の意義が一切ない。今後そんなことを語ってはならない。そのような発言は消し去りなさい。神の言葉を誤って理解している者はみな未信者である。彼らは真の認識を少しも持ち合わせておらず、まして真の霊的背丈など備えてはいない。彼らは現実をもたない無知な人々である。言い換えると、神の言葉の本質から外れて生きる者はみな未信者である。人々から未信者とみなされた者たちは、神の目から見ると獣であり、神から未信者とみなされた者たちは、神の言葉を自分のいのちとしていない者である。したがって、神の言葉の現実を自分のものにしておらず、神の言葉を生きていない者は未信者である。神の旨は、誰もが神の言葉の現実を生きるようにすることであり、単に誰もが現実について語るようにすることではなく、それ以上に、誰もが神の言葉の現実を生きられるようにすることである。人間が認識している現実とは極めて表面的であり、何の価値もなく、神の旨を満たすことはできない。それはあまりに卑しく、言及する価値すらない。欠けているところがあまりに多く、神の要求の基準にまったく達していない。あなたがた一人ひとりが徹底した検査を受け、あなたがたのうち、自身の認識についてどう話すべきかを知っているだけで、道を示すことができない者は誰かが確かめられるとともに、役に立たないくずは誰かが突き止められる。今からは次のことを憶えておきなさい。中身のない認識について語ってはならない。実践の道と現実についてだけ語りなさい。本当の認識から本当の行動への移行、そして実践から本当に生きることへの移行について語るのだ。他人に説教したり、真の認識について語ったりしてはならない。もしもあなたの理解が道であるなら、自由に言葉を発しなさい。そうでなければ、口を閉じて黙ってほしい。あなたが話すことは役に立たない。あなたが認識について語るのは、神を欺き、他人を羨ましがらせるためである。それがあなたの野望ではないのか。あなたは故意に他人を弄んでいるのではないのか。そうすることに何か価値があるのか。自分が経験した後で認識について話すなら、あなたは自慢しているとはみなされない。そうでなければ、あなたは傲慢な言葉を吐き出す者である。あなたの実体験には克服できないことが数多くあり、あなたは自分の肉に反抗することができない。あなたはいつも自分の好きなことを何でも行っており、決して神の旨を満たさない。それなのに、理論的な認識について話す図々しさがいまだにある。あなたは恥知らずだ。あなたはいまだ大胆にも、神の言葉に関する自分の認識について語っている。あなたは何と厚顔無恥なのか。演説することや自慢げに

話すことがあなたの本性となり、あなたはそうすることに慣れてしまった。自分が語ろうと思うたび、あなたは気軽にそうするが、いざ実践となると、飾り立てることに没頭する。これは他人を騙す方法ではないのか。あなたは人間を欺けるかもしれないが、神は決して騙されない。人間はそれに気づかず識別することもできないが、神はこうした事柄に真剣であり、決してあなたを容赦しない。兄弟姉妹はあなたを支持し、あなたの認識を称賛し、あなたに感心するかもしれないが、あなたが現実を自分のものにしていなければ、聖霊はあなたを容赦しない。おそらく、実践の神はあなたの過ちを見つけようとはしないだろうが、神の霊はきっとあなたを無視するし、それはあなたにとって十分耐えがたいことだ。あなたにそれが信じられるか。実践の現実についてもっと話さない。もうそれを忘れたのか。実際の道についてもっと話さない。もうそれを忘れたのか。「高尚な理論や無益な誇張した話を減らし、今すぐ実践を始めるのが一番である」という言葉を、あなたはもう忘れてしまったのか。あなたはまったく理解していないのか。あなたには神の旨に関する理解が一切ないのか。

今日の神の働きを知ること

今日神の働きを知ることとは、おもに、終わりの日における受肉した神の主要な職分が何であるか、何をするために地上に来たかを知ることである。わたしは以前、神は（終わりの日に）地上に来たのは去る前に模範を示すためであるという言葉述べた。神はどのように模範を示すのか。言葉を発し、地上のいたるところで働き、語ることによって模範を示すのである。これが終わりの日の神の働きである。神がただ話すだけなのは、地上を言葉の世界にするため、またすべての人が言葉により施しを受け、言葉により啓かれ、それにより人間の霊が目覚めてビジョンが明らかになるようにするためである。終わりの日に受肉した神が地上に来たのは、おもに言葉を述べるためである。イエスが来た時、天国の福音を広め、十字架の贖いの働きを成就した。イエスは律法の時代を終わらせ、古いものをすべて取り除いた。イエスの来たことで律法の時代が終わり、恵みの時代を招き入れたのである。終わりの日の受肉した神が来て、恵みの時代は終わった。神は、おもに言葉を述べるために来た。言葉を用いて人間を完全にし、人間を照らし、啓き、人間の心にある漠然とした神のいる場所を取り除くために来た。これはイエスが来たときに行った段階の働きではない。イエスが来た時には、多くの奇跡を行い、病人を癒やし、悪霊を追い払い、十字架で贖いの働きを行なった。その結果、人間の観念では、神はこのようではなければならないと考える。イエスが来た時、漠然とした神の姿を人間の心から取り除く働きはしなかったからである。イエスが来た時、十字架につ

けられ、病人を癒やし、悪霊を追い払い、天国の福音を広めた。ある意味で、終わりの日の神の受肉は、人間の観念において漠然とした神が占めている場所を除き、それにより人間の心に漠然とした神がもはや存在しなくなるようにするのである。神はその実際の言葉と働き、地上のあらゆる場所を移動すること、そして人々の間で行う極めて現実的かつ普通の働きを通じて、人々に神が実在することを知らせ、人間の心にある漠然とした神の場所を取り除くのである。別の意味では、神は肉の体が語る言葉を使って人間を完全にし、すべてを成就する。これが神が終わりの日に達成する働きである。

あなたがたが知るべきことは次の通りである。

1. 神の働きは超自然的ではない。そういう観念を抱いてはいけない。
2. 受肉した神が今回行うために来たおもな働きを理解しなければいけない。

神は病人を癒やしに来たのではない。また、悪霊を追い払うためでも、奇跡を行うためでもない。悔い改めの福音を広めるためでも、人間を贖うために来たのではない。イエスがすでにこの働きを終えているので、神は同じ働きを繰り返さないからである。今日、神は恵みの時代を終わらせ、恵みの時代の実践をすべて捨て去るために来た。実際の神が来たのは、おもに自分が現実存在することを示すためである。イエスが来たときは、そう多くを語らなかった。イエスはおもに奇跡を示し、しるしや不思議を行い、病人を癒やし、悪霊を追い払った。他には自分がほんとうに神であり、公平な神であることを人々に信じさせ知らせるために預言をした。最後に、磔刑の働きを完成した。今日の神は、しるしも不思議も行わず、病人を癒やすことも悪霊を追い払うこともしない。イエスが来た時に行った働きは、神の一部を示すものであったが、今回の神はこの段階ですべき働きをするために来たのである。神は同じ働きを繰り返さない。神は常に新たな神であり、決して古くない。だから、あなたが今日見るものはすべて、実際の神の言葉と働きである。

終わりの日の受肉した神は、おもに言葉を発するために来た。また、人間のいのちに必要なことをすべて説明し、人が入るべきものは何かを示し、人に神の業、神の知恵、全能性、驚くべきさまを見せるために来た。神はさまざまな方法で語るが、人間はそこに神の至高、神の偉大さ、さらに、神の謙虚と隠秘性を見る。人間は神が至上の存在であることを見るが、神は謙虚で隠されており、最も小さい者になれる。神の言葉は霊の観点から直接語られることもあれば、人間の観点から直接語られることもあり、またある言葉は第三者の観点から語られる。ここから神の働きの方法が変化に富んでいること

がわかるが、神は言葉を通して人間にそれがわかるようにする。終わりの日における神の働きは正常かつ实际的である。そして、終わりの日における一群の人たちは最大の試練にさらされる。神の正常性と現実性とのため、すべての人がそうした試練の中に入って行った。人間が神の試練に陥ったのは、神の正常性と現実性のためである。イエスの時代、試練や観念はなかった。イエスの働きのほとんどは人間の観念に合致していたため、人々はイエスに従い、イエスについての観念も抱かなかった。今日の試練は人間がこれまでに直面してきたもののうちでも最大である。その人たちは大きな患難を経てきたと言うとき、指しているのはまさにそのような患難である。今日、神は信仰、愛、忍耐、受苦、従順をこの人たちの中に生じさせるために話す。終わりの日の受肉した神の語る言葉は、人間の本性の实质、人間の行動、および人間が今日入るべきことに沿って語られる。神の言葉は現実的かつ普通のものである。神は明日のことは話さない。また、昨日を振り返ることもない。今日入って行き、実践し、理解するべきことについてだけ話す。この時代に、しるしや不思議を起こし、悪霊を追い払い、病人を癒やし、多くの奇跡を行える人が現れて、またその人が自分は再来したイエスであると主張したなら、それはイエスのまねをしている邪霊による偽物である。これを覚えておきなさい。神は同じ働きを繰り返さない。イエスの段階の働きはすでに完了し、神は二度と再びその段階の働きをしない。神の働きは人間の観念とは相容れない。たとえば、旧約聖書はメシアの到来を預言し、この預言の結果はイエスの出現であった。これはすでに起きたことであり、別のメシアがまた来るというのは間違っている。イエスはすでに一度来た。だから、イエスがこの時代に再び来るというのは間違いである。すべての時代には一つの名前があり、名前はそれぞれ各時代の特徴を含んでいる。人間の観念では、神は常にしるしや不思議を見せ、病人を癒やし、悪霊を追い払い、いつでもイエスのようであればならない。しかし今回神はまったくそのようではない。もし終わりの日に神がいまだにしるしや奇跡を示し、まだ悪霊を追い払ったり病人を癒やしたりしていたら、神がイエスとまったく同じようにしたならば、神はイエスと同じ働きを繰り返していることになり、イエスの働きは無意味で無価値ということになる。だから、神は時代ごとにひとつの段階の働きをするのである。ひとたびその段階の働きが完了すれば、すぐさまそれを邪霊がまねをし、サタンが神のすぐ後ろをついてくるようになれば、神は方法を変更する。ひとたび神が一つの段階の働きを完了すると、邪霊がまねをする。このことをよく理解しなければならない。なぜ今日、神の働きはイエスの働きと異なっているのか。なぜ今日の神はしるしや奇跡を示さず、悪霊を追い払わず、病人を癒やもしないのか。もしイエスの働きが律法の時代に行われた働きと同じであれば、イエスは恵みの時

代の神を表すことができただろうか。磔刑の働きを完了できたろうか。もし律法の時代のようにイエスが神殿に入り、安息日を守ったなら、誰からも迫害を受けず、みなに受け入れられたであろう。それならば、磔刑に処せられたであろうか。贖いの働きを完了できたであろうか。終わりの日の受肉した神がイエスのようにしるしや不思議を見せたなら、何の意味があるのか。終わりの日に神が働きの別の部分、つまり経営（救いの）計画の部分を表す働きをしてはじめて、人間は神についてより深い認識を得ることができるのであり、そうしてはじめて神の経営計画は完了するのである。

終わりの日において、神はおもに言葉を発するために来た。神は聖霊の観点から、人間の観点から、第三者の観点から話す。神は異なった話し方をする。ある期間は一つの話し方をし、人間の観念を変え、漠然とした神の姿を人間の心から取り除くための話し方をする。これが神が行う主要な働きである。人間は神が病人を癒やし、悪霊を追い払い、奇跡を行い、人間に物質的な祝福をもたらすために来たと考えているため、神はこの段階の働き、つまり刑罰と裁きの働きをそうした観念を人間の思考から取り除くために行う。人間が神の現実性、神の正常を知るように、そしてイエスの姿が人間の心から消え、新たな姿に置き換えられるようにである。人間の心の中にある神の姿が古くなると、ただちにそれは偶像になる。イエスが来てその段階での働きをしたとき、神の全体を表さなかった。イエスはいくつかのしるしや不思議を示し、言葉を語り、最後に磔刑に処せられた。イエスは神の一部分を表した。イエスは神の全体像を表すことはできず、神の働きの一部を行うことで神を表した。これは、神があまりに偉大で、驚くべきであり、また計り知れないからであり、神はそれぞれの時代にその働きの一部だけをするからである。神がこの時代に実行する働きは、おもに人間のいのちのための言葉を与えること、人間の堕落した性質および人間の本性の実質を暴くこと、そして宗教的観念、封建的思考、時代遅れの考え、さらに人間の知識と文化を一掃することである。これらのことはすべて神の言葉による暴きを通して清められなければならない。終わりの日において、神はしるしや不思議ではなく、言葉を用いて人間を完全にする。神は言葉によって人間を露わにし、裁き、罰し、人間を完全にし、それにより人間が言葉の中に神の知恵と愛らしさを見、神の性質を知り、神の業を目にするようにする。律法の時代、ヤーウェは言葉によりモーセを導いてエジプトを脱出させ、イスラエル人に言葉を語った。当時、神の業の一部はわかりやすいものであったが、人間の素質が限られていて、認識を完全にすることができなかったため、神は話し、働き続けた。恵みの時代、人間は再び神の業の一部を見た。イエスはしるしや不思議を見せ、病人を癒やし、悪霊を追い

払い、十字架につけられ、三日後によみがえり、人間の前に肉の身で現れることができた。神について、人間はこれ以上のことを知らなかった。人間は神の示されたことだけを知っているが、神がそれ以上人間に見せなければ、それで神について人間が把握できることはそこまでに限られる。だから、神は自分に関する人間の認識が深まるように、人間が徐々に神の実質を知るようにと働き続ける。終わりの日に神は言葉を用いて人間を完全にする。あなたの墮落した性質は神の言葉により明らかになり、宗教的観念は神の現実性に置き換えられる。終わりの日の受肉した神が来たのはおもに「言葉は肉となり、言葉は肉に現れ、そして言葉は肉となって現れる」という言葉を成就するためであるが、このことを完全に認識していなければ、堅く立つことはできない。終わりの日に、神はおもに言葉が肉において現れるという働きをするつもりだが、これは、神の経営計画の一部である。だから、あなたがたの認識は明確でなければならない。神がどのように働こうと、人間が神を限定することを神は許さない。もし神が終わりの日にこの働きをしなければ、人間の神についての認識はそれ以上進まない。神が十字架につけられることができ、ソドムを滅ぼすことができ、イエスが死からよみがえってペテロの前に現れることができることだけを知っているだろう……。しかし、神の言葉はすべてを成し遂げることができ、人間を征服できるとはあなたは絶対に言わないであろう。神の言葉を経験してはじめて、そうした認識について話せるのである。また、神の働きを経験すればするほど、神についての認識が充実していく。そうしてはじめて、自分の観念の枠内に神を限定しなくなる。人間は神の働きを経験して神を知るようになる。これ以外に神を知る正しい方法はない。今日、何もせずにするしや不思議を目にすること、大災害の時が来るのを待っている人が大勢いる。あなたは神を信じているのか。それとも、大災害を信じているのか。大災害が起こるときにはもう手遅れであり、もし神が大災害を起こさなければ、神ではないということになるのか。あなたはしるしや不思議を信じるのか。それとも神自身を信じているのか。イエスは人々にあざけられた時、しるしや不思議を示さなかった。ではイエスは神ではなかったのか。あなたはしるしや不思議を信じているのか。それとも、神の実質を信じているのか。人間の神への信仰についての考え方は誤っている。ヤーウェは律法の時代に多くの言葉を語ったが、今日でも、そのいくつかはまだ実現していない。ヤーウェは神ではないと言えるだろうか。

現在、この終わりの日にあって、おもに「言葉は肉となり」という事実が神に成し遂げられるということをあなたがたはみな明確に知っていなければいけない。神はその地上での実際の働きにおいて人間が神を知り、神と関わり、神の実際の業を見るようにす

る。神はしるしや不思議を示せるが、そうすることのできない場合があり、それは時代による、ということが人間にはっきりわかるようにする。このことから、神はしるしや不思議を示すことができないのではなく、なすべき働きと時代によって働き方を変えるのだということがわかる。現在の働きの段階では、神はしるしや不思議は示さない。イエスの時代にしるしや不思議を示したのは、その時代の働きは異なっていたからである。神はその働きを現在ほしない。そこで、神はしるしや不思議を示すことができないと思ったり、しるしや不思議を示さなければ、それは神ではないと考えたりする人がいる。それは誤りではないのか。神はしるしや不思議を示せるのだが、異なった時代に働いているから、そうした働きをしないのである。今は別の時代であって、神の働きは別の段階にあるから、神が明らかにする業もまた異なっている。人間の神への信仰は、しるしや不思議を信じることではないし、奇跡を信じることもなく、新たな時代における現実の働きを信じることである。人間は神の働き方によって神を知り、この認識が神への信仰を人間の内に生み出す。つまり、神の働きと業への信仰である。今の段階の働きで、神はおもに話す。しるしや不思議を目にするのを待っていてはならない。そんなものは見えない。あなたは恵みの時代に生まれたのではないからである。もし恵みの時代に生まれたのだったら、しるしや不思議を見られただろうが、終わりの日に生まれたのだから、あなたに見えるのは神の現実性と正常だけである。終わりの日に超自然のイエスを見ることを期待してはいけない。あなたが見ることができるのは、正常な人間と変わるところのない受肉した実際の神だけなのである。それぞれの時代に、神は異なった業を明らかに示す。それぞれの時代に、神はその業の一部だけを明らかにする。各時代の働きは神の性質の一部、神の業の一部だけを表す。神が明確に示す業はその働く時代によって異なる。しかし、どれもみな人間に神についてさらに深い認識、さらに真実に近くさらに地に足のついた信仰を与える。人間が神を信じるのは、神の業すべてのためであり、神がまことに不思議で偉大だから、神が全能で測り知れないからである。もし神がしるしや不思議を示し、病人を癒やし、悪霊を追い払えるから信じるというのなら、その見方は誤っている。「邪霊もまたそういうことができるのではないのか」とあなたに言う人がいるであろう。それは神の姿をサタンの姿と取り違えていることになるのではないか。今日、人間が神を信じるのは、神が行う多くの業と働き、そして神による数多くの話し方のためである。神はその言葉によって人間を征服し、完全にする。人間が神を信じるのは、神の数多くの業のためであり、神がしるしや不思議を見せられるからではない。人間は神の業を目の当たりにすることで、神を知るようになるだけである。神の実際の業、神がどのように働くか、神がどのような知恵のある方法を用いるか、

どのように話すか、どのように人間を完全にするか、こういう面を知ることによってのみ、神の現実性と性質を人は理解することができ、神は何が好きで、何が嫌い、神はどのように人間に働きかけるかを知るようになる。神の好き嫌いを理解することで、物事の是非を区別できるようになり、また、神についての認識により、いのちの成長がある。つまり、神の働きについて認識しなければ、神への信仰についての考え方を正さなければいけないのである。

人が想像するほど神の働きは簡単なものか

終わりの日における神の働きと、神が今日あなたの中で行なっている、神の計画の働きとを受けることで、自分がいかに究極の称揚と救いを得てきたかを、神を信じる一人ひとりが正しく認識すべきである。神は人々のこの集団を、宇宙全体におよぶ神の働きの唯一の焦点に据えた。神はあなたがたのために、心血を残らず注いだのである。神は宇宙全体の霊の働きをことごとく取り戻し、あなたがたに与えてきた。だからわたしは、あなたがたは幸運な人たちだと言うのである。そのうえ、神はイスラエルから、すなわち自身の選民からあなたがたへと自らの栄光を移し、この集団を通じて自身の計画の目的が完全に現れるようにする。ゆえに、あなたがたが神の遺産を受け取る者である。それ以上に、あなたがたは神の栄光の相続人である。あなたがたはみな、この言葉を覚えているだろう。「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである」。あなたがたはみな、この言葉を以前耳にはしたが、その本当の意味は誰も理解していなかった。今日、あなたがたはこの言葉の真の意義を深く認識している。この言葉は、神によって終わりの日に実現され、また、赤い大きな竜がとぐろを巻く地で、その竜から熾烈な迫害を受けている人たちにおいて成就する。赤い大きな竜は神を迫害し、神の敵であるから、この地において、神を信じる者は辱めと迫害を受け、またその結果として、神の言葉があなたがた、つまりこの人々の集団において成就する。神の働きは、神に敵対する地で始まるので、その働きはことごとく熾烈な妨害にあい、神の言葉の多くが成就するまで時間がかかる。したがって、人々は神の言葉の結果として精錬されるのだが、それはまた苦難の一部でもある。赤い大きな竜の地で、神が自身の働きを成し遂げるのは非常に困難である。しかし、神はこの困難を通じて働きの一段階を行い、自身の知恵と不思議な業を明らかにし、これを機にこの人々の集団を完全にする。また、人々の苦しみ、人々の素質、そしてこの不浄の地にいる人々のあらゆるサタンの性質を通じて、神は清めと征服の働きを行うが、それは、このことを通じて栄光を勝ち取るため、自身の業を証しする人々を得る

ためである。これが、この集団のために神が払ったあらゆる犠牲の全体的な意義である。つまり、神は自身に盾突く者を通じて征服の働きを行い、またそれを通じてのみ、神の偉大な力が明らかになるということである。言い換えれば、不浄な地に住む者だけが神の栄光を受け継ぐに値するということであり、そうしてこそ神の偉大な力が浮き彫りになる。ゆえにわたしは、神の栄光は不浄の地から、また不浄の地に住む人々から獲得される、と言うのである。それが神の旨である。イエスによる働きの段階も同じだった。イエスは自分を迫害するパリサイ人の中でこそ栄光を受けることができた。パリサイ人による迫害とユダの裏切りがなければ、イエスは嘲笑されることも、中傷されることもなく、ましてや十字架にかけられることもなかっただろう。それゆえ栄光を得ることもなかったはずだ。神が各時代に働くところ、神が肉において働くところは、神が栄光を得るところ、神が得ようとする人たちを得るところである。これが神の働きの計画であり、神の経営である。

数千年にわたる神の計画のうち、二つの働きが肉において行われた。一つは磔刑の働きであり、これゆえに神は栄光を受ける。もう一つは終わりの日における征服と完成の働きであり、これゆえに神は栄光を受ける。これが神の経営である。従って、神の働きや、あなたがたに託された神の任務が簡単なものだと思ってはならない。あなたがたはみな、神が溢れんばかりにもたらす永遠の栄光の重みを受け継ぐ人なのであり、このことは神によって特別に定められたのである。二つの部分から成る神の栄光のうち、一つはあなたがたにおいて現れる。神の栄光の一部分がことごとく、あなたがたに授けられるのだが、それがあなたがたへの遺産となろう。そのことは、神があなたがたを称揚しているのであり、はるか昔に神が予定した計画でもある。赤い大きな竜が住む地で神がなした働きの偉大さからすれば、この働きがもしも別の場所に移されていたら、とうの昔に大きな実を結び、人にたやすく受け入れられたことだろう。さらには、神を信じる西欧の聖職者にも実に易々と受け入れられたはずだ。イエスによる働きの段階が前例としてあるからである。これが、神が現段階の栄光の働きを別の場所では成し遂げられない理由である。人々に支持され、国家に認められる立場では、それを確立させることができない。これがまさに、この地で現段階の働きを確立させることの重要な意義である。あなたがたのうち、法律で守られている人は一人もいない。むしろ法律により処罰されている。さらに問題なのは、人々があなたがたのことを理解しないことである。親戚であれ、親であれ、友人であれ、同僚であれ、誰一人あなたがたのことを理解しない。神に「捨てられ」たら、あなたがたは地上で生き続けることができない。たとえそうで

も、人々は神から離れていることに耐えられない。それが、神が人々を征服することの意義であり、神の栄光なのである。今日あなたがたが受け継いだものは、各時代の使徒や預言者が受け継いだものを超えており、モーセやペテロが受け継いだものよりも大きい。一日二日で祝福を得ることはできない。祝福は、多大な犠牲を通じて獲得されなければならない。つまりあなたがたは、精錬を経た愛、大きな信仰、そして神があなたがたに獲得することを求めている、数多くの真理を自分のものにしなければならない。さらには、怯えることも逃げることもなく、正義に真正面から向き合い、神に対して不変かつ衰えることのない愛をもたなければならない。あなたがたは不屈の意志をもたなければならない、自分のいのちの性質に変化が生じなければならない、墮落は癒されなければならない、神の指揮をことごとく、不平を言わずに受け入れなければならない。また、死に際しても従順でなければならない。これが、あなたがたが達成すべき神の働きの最終目標であり、神がこの人々の集団に求めることである。神は、あなたがたに与えるからには、必ずや見返りを求め、適切な要求をあなたがたにする。ゆえに、神の働きにはすべて理由があるのであって、そのことは、神がかくも厳密かつ過酷な働きを繰り返す理由を示している。それゆえ、あなたがたは神への信仰で満ちていなければならない。つまり、あなたがたが神の遺産を受け継ぐにふさわしくなれるよう、神の働きはことごとくあなたがたのために行われるのである。それは神自身の栄光のためではなく、あなたがたの救いのため、そして不浄の地でひどく苦しんできたこの人々の集団を完全にするためである。あなたがたは神の旨を理解しなければならない。そこでわたしは、洞察力も理知もないあまたの無知な人に忠告する。神を試すな。神に二度と抵抗するな。神は、人には耐えられない苦しみをすでに耐え忍んできた。人に代わって、はるか以前にもっとひどい屈辱を耐え忍んだ。あなたがたに手放せないものなど他にあるか。神の旨以上に大事なものがあろうか。神の愛以上に高いものがあろうか。この不浄の地で神が働きを成し遂げることでだけでも、十分困難である。その上、もし人が分かっているが意図的に過ちを犯したら、神の働きは延長せざるを得ない。要するに、延長など誰のためにもならず、誰の利益にもならないのである。神は時間に縛られない。神の働きと栄光が最優先である。ゆえに神は、どんなに時間がかかろうとも、自身の働きのためにあらゆる代価を支払う。これが神の性質である。神は自身の働きを全うするまで休まない。神が二つ目の栄光を獲得して初めて、神の働きは終わる。全宇宙において神の二つ目の栄光が完成しなければ、神の日は決して到来せず、神の手は自身の選民から決して離れず、神の栄光はイスラエルの上に降りず、神の計画は完結しない。あなたがたは、神の旨を見ることができなければならない、また神の働きが天地と万物の創造ほど簡単

なものではないことを知らなければならない。それというのも、今日における働きとは、感覚が麻痺しきっている墮落した人間を変えることであり、創造されながらサタンによって加工されてしまった人たちを清めることだからである。それはアダムとエバの創造でもなければ、まして光やあらゆる動植物の創造でもない。神は、サタンに墮落させられたものを清めたあと、それらを新たに自分のものとする。それらは神に属するものとなり、神の栄光となる。これは人が想像するようなことではなく、天地とそこにある万物の創造、あるいはサタンを奈落の底に突き落とす呪いの働きほど簡単なことでもない。むしろ、それは人を変える働きであり、否定的で神に属さないものを、肯定的で神に属するものへと変えるのである。これが、現段階における神の働きの背後にある真実である。あなたがたはこのことを理解し、物事を過度に単純化することを避けなければならない。神の働きは普通の働きとは違う。その素晴らしさと知恵は人の知性を超えている。現段階の働きにおいて、神が万物を創造することはないものの、万物を破壊することもない。代わりに、自身が創造した万物を変え、サタンに汚された万物を清める。神はこのようにして偉大な事業へと乗り出すのであり、それが神の働きの全体的な意義である。これらの言葉の中に見る神の働きは、本当にかくも簡単なものだろうか。

神を信じるなら真理のために生きるべきである

すべての人に共通する問題は、真理を理解していても実践しないことである。これは、一方では代償を払う意志がないためであり、他方では、識別が足りなすぎるためである。そうした人は日常生活の困難の多くをあるがままに見ることができず、正しく実践する方法を知らない。人の経験は浅すぎ、素質が不足しすぎ、真理の理解度が限られているため、日常生活で遭遇する困難を解決するすべがない。口先だけで神を信じており、日常生活に神を入れることができない。つまり、神は神であり、生活は生活であり、人は生活の中で神とは関係ないかのようである。誰もがそう考えている。このように神を信じているので、現実には人が神に得られ、完全にされることはない。実のところ、神の言葉が完全に現れなかったということではなく、むしろ人が神の言葉を受け取る人の力が単に足りなすぎるのである。神の本来の意図に従って行動する人はほとんどいないと言える。むしろ、自分自身の意図、過去に持っていた宗教的観念、物事のやり方にしがって神を信じている。神の言葉を受け入れた後に変容を遂げ、神の心意に従って行動し始める人はほとんどいない。その代わり、誤った信念に固執する。人が神を信じるようになるとき、宗教の慣例に基づいて信じ、自分の処世哲学だけに基づいて生き、他者と関わる。これは十人のうち九人に当てはまると言える。神を信じるようになって

から別の計画を立て、改心する人はほとんどいない。人類は神の言葉を真理と見なさず、または真理として受け取り実践しなかった。

たとえば、イエスを信じることを考えてみよう。信じ始めたばかりの人でも、非常に長い間信じてきた人でも、みな自分が持つ何らかの才能を使い、自分が有する何らかの技能を見せただけである。人は単純に「神を信じる」という五文字を自分の通常の生活に加えただけで、自分の性質は変えず、また、神への信仰は少しも増大しなかった。そうした人の追求は熱くも冷たくもない。自分の信仰をあきらめるとは言わなかったが、すべてを神に捧げることもなかった。神を本当に愛したことも、従ったこともなかった。彼らの神への信仰は本物と偽物の混合であり、片目を開き、もう片方を閉じたまま対処し、信仰を実践することに熱心ではなかった。このような困惑した状態を続け、最終的には混乱したまま死んだ。こんなことをして何の意味があるのか。今日、実際的な神を信じるには、正しい道を歩まなければならない。神を信じるなら、祝福を求めるだけでなく、神を愛し、神を知るべきである。神の啓きを通して、自己による追求を通して、神の言葉を飲み食いし、神についての真の認識を育て、心の底から真に神を愛することができる。言い換えれば、神への愛がまことに真実なもので、神への愛を誰も破壊したり邪魔したりすることができないとき、あなたは神を信じる正しい道を進んでいる。これは、あなたが神に属していることを証明する。なぜならあなたの心はすでに神が所有し、それ以外はあなたを所有できないからである。経験を通して、払った代償を通して、神の働きを通して、あなたは神への不断の愛を育てることができる。そうすれば、あなたはサタンの影響から解放され、神の言葉の光の中に生きようになる。闇の影響から自由になって初めて、あなたは神を得たと言うことができる。あなたは、神の信仰において、この目標を追求しなければならない。これは、あなたがた一人一人の本分である。あなたがたは一人として現状に満足するべきではない。あなたは神の働きに対して迷うことはできないし、それを軽視することもできない。あらゆる点において、常に神を思い、何をするにも神のために行わなければならない。そして、話したり行動したりするときはいつでも、神の家の利益を優先すべきである。そうしてはじめて、神の心に叶うことができる。

神の信仰において、人の最大の欠点は、言葉でしか信じないことであり、日常生活に神が完全に不在であることである。実際、人はみな神の存在を信じるが、神は日常生活の一部になっていない。人は口で神に多くの祈りを捧げるが、心に神の居場所はほとんどないので、神は何度も人を試す。人は不純であるため、人がこうした試練の中で恥ず

かしく思い、自己を知ることができるように、神は人を試すしかない。そうでなければ、人類は大天使の子孫に姿を変え、ますます墮落するであろう。神の信仰の過程では、神の絶え間ない浄化の下で、人はそれぞれの個人的な意図や目的の多くを捨て去る。そうでなければ、神は誰かを使うことも、神が為すべき働きを人において為すこともない。神はまず人を清め、この過程を通して、人は自身を知ることになり、神が人を変えることがある。そうしてはじめて、神はそのいのちを人に注ぎ入れ、そうすることでのみ、人の心は完全に神に向けられる。だから、神を信じることは人が言うほど単純ではないとわたしは言うのである。神の視点からは、あなたに認識はあっても神の言葉をいのちとしていなければ、そして自分の認識だけに制限され、真理を実践することも神の言葉を生きることもできないなら、それはやはりあなたに神を愛する心がないことの証明であり、あなたの心が神のものではないことを示している。人は神を信じることで神を知ることができる。これが最終的な目標であり、人が追求すべき目標である。あなたの実践において神の言葉が実を結ぶように、神の言葉を生きる努力をしなければならない。教義的な認識しかなければ、あなたの神の信仰は無駄になる。あなたが神の言葉を実践し、神の言葉を生きる場合にのみ、信仰は完全で、神の心意に一致するとみなされる。この道では、多くの認識を語ることができる人は多いが、彼らが死ぬ時、その目は涙で溢れ、人生を無駄にし、高齢まで無用に生きたことを恨む。彼らは単に教義を理解しているだけで、真理を実践することも、神に証しをすることもできない。代わりに、あちこちをハチのように忙しく駆け回るだけで、死の寸前でようやく真の証しがないこと、神を全く知らないことを悟る。これでは手遅れではないか。なぜ今を生き、愛する真理を追い求めないのか。なぜ明日まで待つのか。人生において真理を求めて苦しむことも、真理を手に入れようとするものもないなら、今際の際に後悔したいということではないのか。もしそうなら、なぜ神を信じるのか。実際、ほんのわずかな努力をすれば、真理を実践し、それによって神を満足させることができる事柄は多くある。人の心が悪魔に取りつかれているからこそ、神のために行動することはできず、肉のために絶えず駆け回り、最終的に達成するものは何もない。このため、人は常に苦しみや困難に悩まされる。これはサタンによる責め苦ではないのか。これは肉の墮落ではないのか。あなたは調子のよいことを言って神をだまそうとすべきではない。むしろ、具体的な行動を取らなければならない。自分を欺くな。それに何の意味があるのか。自分の肉のために生き、利益と名声を得るために奮闘することで何を得ることができるのか。

七つの雷が轟く——神の国の福音が宇宙の隅々まで広まるこ

とを預言

わたしは異邦人の国々に働きを広めている。わたしの栄光は全宇宙に閃く。わたしの旨は星のように点々と散らばる人々の中に具現化され、皆がわたしの手によって導かれ、わたしが与えた仕事をしている。この時点からわたしは新しい時代へと入り、すべての人々を別の世界へ連れて行く。わたしは自分の「故郷」へ戻ったとき、当初の計画に含まれる働きの、また別の部分に着手した。人々がわたしをより深く知れるようにするためだ。わたしは宇宙全体を眺めて、今が働きに絶好の機会だとわかったため^[a]、急いで行き来しながら、人々に新しい働きを行なっている。いずれにせよこれは新たな時代であり、わたしはより多くの新しい人々を新たな時代へと引き入れ、淘汰すべき者達をより多く投げ捨てるため、新しい働きをもたらした。赤い大きな竜の国家で、わたしは人々に理解し難い働きの段階を実行し、彼らを風の中で揺らす。その後、多くの者が風に吹かれて静かに漂い去る。これこそまさに、わたしが一掃しようとしている「脱穀場」だ。それはわたしが切に願っていることであり、またわたしの計画でもある。というのも、わたしが働いている間に多くの悪い者たちが忍び込んだからだ。しかしわたしは彼らを追い払うことを急いではない。適切な時が来たら、彼らを追い散らすつもりだ。そうして初めてわたしはいのちの泉となり、真にわたしを愛する人々がわたしからいちじくの実やゆりの香りを受け取れるようになる。サタンがとどまる塵の地には、砂があるだけで純金は残っていない。こうした状況なので、わたしは働きのこのような段階を実行するのだ。わたしが自分のものとするのは砂ではなく、精錬された純金であることを知らなければならない。悪い者がどうしてわたしの家に残れるだろうか。わたしの楽園に狐が寄生することなど許せるだろうか。わたしは考えられるすべての方法で、こうしたものを追い払う。わたしの旨が露わになるまでは、誰一人わたしがしようとしていることに気づかない。わたしはこの機会を利用して悪い者たちを追い払い、彼らはわたしから去らざるを得なくなる。わたしは悪い者たちをこのように扱うが、彼らがわたしに仕える日はまだあるだろう。人々は神の恵みを望む心が強すぎるので、わたしは向きを変えて、栄光に満ちた顔を異邦人たちに示し、人々がみな自分の世界に住んで自らを裁けるようにする。そして同時に、わたしは言うべき言葉を言い続け、人々が必要とするものを与え続ける。人々が我に返るころには、とうの昔にわたしの働きが広まっていることだろう。それからわたしは人間にわたしの旨を表し、人間に対する働きの第二の部分に着手する。すべての人間をわたしにしっかりと付き従わせて働きに協力させ、能力の限りを尽くしてこの必要な働きをわたしとともに遂行させるのだ。

わたしの栄光を見るという信念を持つものは誰もいない。わたしは彼らに強要することとはせず、ただ人々の間からわたしの栄光を奪い去り、別の世界へと移す。人々が再び後悔するなら、わたしは信仰を持つより多くの人々へわたしの栄光を示すだろう。これがわたしの働きの原則である。わたしの栄光はカナンの地から去る時もあり、選ばれた者たちから去る時もあるからだ。さらに、わたしの栄光が地上全体から去る時もある。そのとき地上は光を失って暗闇へと陥り、カナンの地さえ太陽には照らされなくなる。すべての人々は信仰を失うが、誰もカナンの地の香りを失うことには耐えられない。わたしは新たな天地へと進むときに初めて、わたしの栄光のもう一つの部分を、まずカナンの地で現す。すると夜の真っ暗闇の底に沈んだ全地にかすかな光が輝き、全地がその光のもとに集まる。地上のすべての人々がその光から力を得て、わたしの栄光は増大しすべての国々に新たに現れるだろう。わたしがはるか昔から人間の世に現れており、はるか昔にわたしの栄光をイスラエルから東方へともたらしたことを、すべての人々に気づかせよう。わたしの栄光は東方から輝きを放つのであり、恵みの時代から今日へともたらされたからだ。しかしわたしが出発した地はイスラエルであり、そこから東方に到着した。東方の光が徐々に白く変わって初めて、地上の暗闇は光に変わり始める。その時初めて、人はわたしがはるか昔にイスラエルを去っており、東方で新たに現れようとしていることを知るだろう。わたしは一度イスラエルへと下り、その後そこから立ち去ったため、再びイスラエルに生まれることはできない。なぜならわたしの働きの全宇宙を導くからであり、さらに稲妻は東から西へとひらめき渡るからだ。だからわたしは東方へと下り、カナンの地を東方の人々にもたらしたのである。わたしは全地の人々をカナンの地へ連れて行きたいと願っている。それゆえ全宇宙を支配するため、カナンの地で声を発し続ける。現在、カナンの地以外のどこにも光はなく、すべての人々は飢えと寒さにさらされている。わたしはまずイスラエルにわたしの栄光を与え、その後それを奪い去って、後にイスラエルの人々を東方へ連れて行き、すべての人々を東方へと導いた。わたしは彼らをみな光へと導き、彼らが光と再会して光と交われるようにし、もう探し求めなくていいようにした。わたしは探し求めるすべての者が再び光を見られるようにし、わたしがイスラエルに示した栄光を目にできるようにするつもりだ。わたしがはるか昔に白い雲に乗って人々の間に降り立ったことを彼らに理解させ、無数の白い雲と豊かな果実を見せ、さらにイスラエルのヤーウェ神を目撃させよう。そして彼らに、ユダヤ人の先生であり、待望のメシアであり、歴代の王たちによって迫害されてきたわたしの完全な姿を見せよう。わたしは全宇宙に対して働き、偉大な働きを行い、わたしのすべての栄光と業を、終わりの日の人々に対して露わにする。そしてわたしの栄光に

満ちた顔を、長年わたしを待っていた人々、わたしが白い雲に乗ってくるのを熱望してきた人々、わたしの再来を熱望してきたイスラエル、そしてわたしを迫害するすべての人間に対して、余すところなく示そう。それによって、わたしがはるか昔にわたしの栄光を運び去って東方へともたらししており、それがもはやユダヤにはないことを、すべての者が知るだろう。なぜなら、終わりの日はすでに到来しているからである。

わたしは宇宙の隅々まで自らの働きを行っており、東方では雷のような轟音が終わりなく発生し、すべての国々と教派を震わせている。すべての人々を現在へと導いてきたのはわたしの声である。わたしはすべての人がわたしの声によって征服され、この流れの中に入り、わたしの前に帰服するようにするつもりだ。わたしははるか昔に全地からわたしの栄光を取り戻し、それを東方で新たに発したからだ。わたしの栄光を見ることを願わない者がいるだろうか。わたしの再臨を心待ちにしない者がいるだろうか。わたしが再び現れることを渴望しない者がいるだろうか。わたしの愛らしさを思慕しない者がいるだろうか。光のもとへ来ようとしめない者がいるだろうか。カナンの地の豊かさを目にとめない者がいるだろうか。贖い主の再来を待ち望まない者がいるだろうか。偉大なる全能者を敬慕しない者がいるだろうか。わたしの声は地上の隅々まで行き渡るだろう。わたしは選ばれた者たちと向き合って、もっと彼らに話しかけたいと願っている。山々や川を震わせる強大な雷のように、わたしは全宇宙と人類にむかってわたしの言葉を語りかける。こうしてわたしの口から出る言葉は人の宝となっており、すべての人々はわたしの言葉を大切にしている。稲妻は東から西へとひらめき渡る。わたしの言葉は、人が手放したがらないと同時に人には理解し難いものだが、それ以上に彼らに大きな喜びをもたらすものである。すべての人々は生まれたての赤児のように喜びに満ち、わたしの到来を祝っている。わたしはすべての人々を、わたしの声によってわたしの前へ連れてくる。その時からわたしは正式に人類の中へ入り、彼らはわたしを崇拝するようになる。わたしが放つ栄光とわたしの口から出る言葉によって、人々はみなわたしの前へ来るようになり、稲妻が東方から閃くこと、そしてわたしが東方の「オリーブ山」にも降臨したことを知るようになる。彼らはわたしがすでにずっと前から地上にいたことを知り、すでにユダヤ人の息子ではなく、東方の稲妻であることを知るだろう。なぜならわたしはずっと前に復活し、人々の間から去って、その後再び栄光とともに人々の中に現れたからである。わたしは幾時代も前に崇拝された神であり、幾時代も前にイスラエル人によって見捨てられた赤児である。そしてそれ以上に、今この時代の栄光に満ちた全能神なのだ。すべての者をわたしの玉座の前に来させ、わたしの栄光に満ちた顔

を見せ、わたしの声を聞かせ、わたしの業を目撃させなさい。これがわたしの旨のすべてであり、わたしの計画の結末かつ頂点であると同時に、わたしの経営の目的でもある。すべての国々にわたしにひれ伏させ、すべての人にその言葉でわたしを認めさせ、すべての人にわたしを信頼させ、またすべての人がわたしに服従するようにしなさい。

脚注

a. 原文に「だとわかった」の語句は含まれていない。

受肉した神と神に使われる人との本質的な違い

長年にわたり、神の霊は地上で働きつつ、止まることなく探してきた。またこれまでの時代を通して、神は働きを行うために多くの人を使ってきた。しかし、その間ずっと、神の霊には相応しい安息の場所がなかった。そのため、神は様々な人のあいだを絶えず動き回りながら働きを行う。全体的に見れば、神の働きは人を通してなされるのである。つまり、これまでの長年において、神の働きは止まったことがなく、きょうまでずっと人において実行され続けてきた。神は多くの言葉を語り、かなりの働きを行ってきたものの、人間はいまだに神を知らない。それはひとえに、神が人間の前に現れたことがなく、また神には目に見える形がないからである。それで神はこの働き、すなわちあらゆる人に実際の神の実際的な意義を知らしめる働きを完遂しなければならない。この目的を達成するために、神は自身の霊を人類の目に見える形で顕し、人々のあいだで働きを行わなければならない。つまり、神の霊が物理的な姿をとり、肉と骨をもち、人々のあいだを目に見える形で歩き、ときには姿を見せ、ときには隠れながら、人と生活を共にして初めて、人々は神についてのより深い認識に到達できる。神がひたすら肉に留まっていれば、自身の働きを残らず完成させることはできないであろう。肉において一定期間働きを行い、肉において行われなければならない職分を全うした後、神は肉を離れ、肉の姿で霊界において働くことになる。それはちょうど、イエスが一定期間、普通の人間性において働き、完成させるべき働きをすべて完成させた後にそうしたのと同じである。あなたがたは、「道…… (5) 」にある「父がわたしに『地上においては、ただあなたの父の旨を行い、父から託された任務を完成させることだけを求めなさい。他のことは一切あなたに関係ない』と語ったことを覚えている」という節を覚えていることだろう。この一節に何を見ることができだろうか。神は地上に来るとき、神性の働きのみを行う。これが、天の霊が受肉した神に委ねたものである。神は来るとき、あらゆるところで語り、その発言をさまざまな方法で、さまざまな視点から声にするだけ

である。おもに人間に施すことと教えることを自らの目標、および働きの原則とし、人間関係や人々の生活の詳細といった事柄には関与しない。彼のおもな職分は、霊の代わりに語ることである。つまり、神の霊が目に見える形で肉において現れるとき、彼は人間のいのちを施し、真理を解き放つだけである。彼は人間の働きに関わらない。つまり、人間性の働きには加わらないのである。人間には神性の働きを行うことはできず、神は人間の働きに加わらない。働きを行うべくこの地上に来て以来ずっと、神は常に人々を通して働きを行ってきた。しかし、これらの人々は受肉した神とは考えられず、神によって使われる人々に過ぎない。一方、今日の神は神性の視点から直接語ることができ、霊の声を送り出し、霊の代わりに働きを行う。これまでの時代を通して神が用いてきたすべての人もまた、神の霊が肉体において働いた実例であるが、それではなぜ彼らは神と呼ばれることができないのだろうか。しかし、今日の神もまた肉において直接働きを行う神の霊であり、イエスもまた肉において働きを行う神の霊だったのであって、両者とも神と呼ばれる。それでは、違いは何なのか。これまでの時代を通して、神が用いた人々はみな、普通の思考と理知を駆使することができた。人間としての行動の原則を理解していたのである。彼らは正常な人間の思考をもち、正常な人がもつべきあらゆるものを備えている。彼らのほとんどが並外れた才能や生来の知性をもっている。神の霊はこれらの人々に働きかけるにあたり、神からの授かりものである彼らの才能を役立てる。神の霊は彼らの才能を活用し、彼らの強みを用いて神のために役立てる。しかし、神の本質に思考や発想はなく、人間の意図も混ざり込んでおらず、普通の人間が備えているものを欠いてさえいる。つまり、神は人間の行動の原則に精通すらしていないのである。これが、今日の神が地上に来るときの様子である。その働きと言葉には、人間の意図や思考が混ざり込んでおらず、それらは霊の意図を直接体現しており、今日の神は直接神を代表して働く。これは霊が直接語るということであり、つまり、人間の意図をほんの少しも混じり込ませることなく、神性が直接働きを為すことを意味している。言い換えると、受肉した神は神性を直接体現し、人間の思考や発想をもたず、人間の行動の原則に関する理解を有していないということである。もし神性だけが働いていたならば（つまり、神自身だけが働いていたならば）、神の働きが地上で実行されることは決してなかったであろう。だから神は地上に来るとき、自身が神性において行う働きと関連して、人間性において働きを行うために用いる少数の人々を必要とする。言い換えるならば、神は神性の働きを支えるために人間性の働きを使うのである。そうでなければ、人が神性の働きに直接携わる術はないだろう。イエスとその弟子たちもそうだった。この世での生涯において、イエスは古い律法を廃して新しい戒めを定めた。イエスは

また多くの言葉を語った。これらの働きはすべて神性において行われた。ペテロやパウロ、ヨハネといった他の者はみな、イエスの言葉を基礎としてその後の働きを築いた。言い換えると、神はその時代における働きに着手し、恵みの時代の始まりを導いた。つまり、神は新しい時代をもたらし、古い時代を廃し、さらに「神は初めであり、終わりである」という言葉を成就させたのである。言い換えるならば、人間は神性の働きを基礎として人間の働きを行わなければならないのである。イエスは語るべき言葉をすべて語り、地上での働きを終えた後、人間のもとから去った。その後、すべての人はイエスの言葉に表された原則に基づいて働き、イエスが語った真理に従って実践した。これらはみなイエスのために働く人々だった。働きを行なったのがイエス一人だけだったなら、いかに多くの言葉を語ったとしても、人々がイエスの言葉と触れ合うことはなかっただろう。なぜなら、イエスは神性において働き、神性の言葉しか語れず、普通の人がその言葉を理解できるところまで物事を説明できたはずがないからである。だからイエスは、自分の後に続いた使徒や預言者に、自身の働きを補足させなければならなかったのである。これが受肉した神の働き方の原則である。すなわち、神性の働きを完成させるべく、受肉した体を用いて語り、働き、さらに、神の心にかなう少数の人、あるいはもっと多くの人を用いて神の働きを補うのである。つまり、神は人間性において牧し、潤すという働きを行うために、自身の心にかなう人々を使い、それにより神の選民が真理の現実に入れるようにするのである。

肉とった神が神性の働きだけを行い、神の心に従いつつ神と協力して働く人々がいないければ、人間は神の旨を理解することも、神に関わることもできないだろう。神は自身の心に従う普通の人々を用いてこの働きを完成させ、諸教会を見守り牧し、人間の認知機能と頭脳が思い描ける水準に達しなければならない。言い換えれば、神は神性において行う働きを「翻訳」するために、自身の心に従う少数の人々を使うのであり、それにより神性における働きを開くことができる、つまり神性の言語が人間の言語に変換され、人々がそれを理解し、把握できるようになるのである。もし神がそうしなかったなら、誰も神の神性の言語を理解しないだろう。なぜなら、神の心に従う人々は結局のところ少数派であり、人間の理解力は弱いからである。そのため、神は受肉した体において働くときにのみ、この方法を選ぶのである。神性の働きしか存在しなければ、人間は神の言語を理解しないので、人間が神を知り、神と関わることはできないだろう。人間がこの言語を理解できるのは、神の心に従う人々の仲介を通してのみであり、その者たちが神の言葉を明確にするのである。しかし、人間性において働くそのような人々しかい

なければ、それは人間の普通の生活を維持することしかできず、人間の性質を変化することはできないだろう。神の働きが新しい出発点を得ることはできず、以前と同じ古い歌、陳腐な言葉があるだけである。神は受肉している間に語られるべきことをすべて語り、行われるべきことをすべて行い、その後人々は神の言葉に従って働き、経験するのであるが、その受肉した神の仲介を通してのみ、人々のいのちの性質は変わることができ、人々は時代とともに進むことができる。神性において働くものは神を表し、人間性において働くものは神に用いられる人々である。つまり、受肉した神は、神によって用いられる人々とは本質的に異なる。受肉した神は神性の働きを行えるが、神によって用いられる人々にはできない。それぞれの時代の始まりにおいて、神の霊は自ら語り、新しい時代を始め、人間を新しい始まりへと導く。神が語り終えたとき、それは神性における神の働きが完了したことを意味する。その後、人々はみな神によって用いられる人々の導きに従い、いのちの経験に入る。同様に、これもまた神が人間を新しい時代へ導き、人々に新しい出発点を与える段階である。そのとき、肉における神の働きは完結するのである。

神が地上に来るのは、自身の普通の人間性を完成させるためでも、普通の人間性の働きを行うためでもない。神が来るのはひとえに、普通の人間性において神性の働きを行うためである。神が普通の人間性について語ることは、人間が想像するものとは違う。人間は「普通の人間性」を、妻あるいは夫、そして息子や娘をもつことだと定義する。これが普通の人であることの証明である。しかし、神はそのような見方をしない。神は普通の人間性を、普通の人間の思考をもち、普通の人間の生活をし、普通の人々から生まれることだと見なしている。しかし、神の普通性には、人間が普通性について語るように、妻あるいは夫、および子どもをもつことは含まれない。つまり、神が語る普通の人間性は、人間からすると、ほとんど感情がなく、見るからに肉体的要求がないかのような、人間性の欠如と考えられるものであり、ちょうどイエスのように、普通の人間の外見をし、普通の人間のごとく見えるものの、本質的に言えば、普通の人があるべきものを完全に有しているわけではないのである。このことから、受肉した神の本質は普通の人間性全体を含んでいるのではなく、普通の人間生活の決まり事を支え、普通の人間の理知を維持するために人々がもつべきものの一部だけを含んでいることがわかる。しかし、それらのものは、人間が普通の人間性で見なすものとは一切関係ない。それらは受肉した神がもつべきものである。しかし、受肉した神は、妻や息子や娘、つまり家族をもって初めて普通の人間性をもっていると言うことができると主張する人々が

いる。これらの人々が言うには、それらがなければ普通の人間ではないのである。それでは尋ねるが、「神に妻がいるのか。神が夫をもつことは可能なのか。神は子をもてるのか」。これらは間違った考えではないのか。しかし、受肉した神が岩の割れ目から飛び出したり、空から落ちてきたりすることはありえない。普通の人間の家族に生まれることしかできないのである。これが、受肉した神に親や姉妹がいる理由である。それらは受肉した神の普通の人間性がもたなければならないものである。イエスの場合がそうだった。イエスには父と母、兄弟姉妹がおり、これはすべて正常なことだった。しかし、イエスに妻や息子、娘がいたならば、イエスの人間性は、受肉した神がもつようと神が意図した人間性ではなかっただろう。そうだったなら、イエスは神性を代表して働くことができなかったはずだ。イエスが神性の働きを行えたのは、イエスに妻や子どもはいなかったものの、普通の人から普通の家族に生まれたからこそである。このことをさらに明確にするならば、神が普通の人と見なすものは、普通の家族に生まれた人である。そのような人にのみ神性の働きを行う資格がある。一方、その人に妻や子ども、あるいは夫がいたならば、その人は神性の働きを行うことができないだろう。なぜならその人は、人が求める普通の人間性だけをもち、神が求める普通の人間性をもつはずがないからである。神の考えることと人々が理解していることはしばしば大きく異なり、かけ離れている。神の働きのこの段階において、人々の観念に真っ向から反し、大きく異なることが多くある。神の働きのこの段階は、ひとえに神性が直接行う働きから成っており、人間性が補助的な役割を果たしていると言えるだろう。神は人間に神の働きをさせるのではなく、自ら行うために地上に来るのだから、自ら受肉して（完全ではない普通の人として）働きを行うのである。神はこの受肉を用いることで、人類に新しい時代をもたらし、神の働きにおける次の段階を伝え、神の言葉に表される道に従って実践するよう人々に求める。これにより、肉における神の働きは完結する。神は人類のもとを去ろうとしており、もはや普通の人間性の肉の中に留まっておらず、むしろ働きの別の部分に着手すべく人間から離れつつある。そして、神の心に従う人々を用い、この人々の集まりの中、神は地上での働きを続けるが、それはこの人々の人間性においてである。

受肉した神が永遠に人とともに留まることはできない。なぜなら、神には他にすべき働きが多くあるからである。神は肉に縛られていることができない。たとえ肉の姿でその働きを行うにしても、神は肉を脱ぎ捨ててなすべき働きを行わなければならないのである。神は地上に来るとき、普通の人々が死んで人類のもとから離れる前に達すべき形

になるまで待つことはない。その肉体の年齢に関わらず、自身の働きが完了したとき、神は人間のもとを離れて行く。神に年齢というものはなく、人の寿命にそって自身の余命を数えることはない。その代わりに、神は自身の働きの歩みに沿って、その肉体における生涯を終える。肉となった神は、ある段階まで歳をとり、成人し、老年に達し、肉体が衰えて初めて去るはずだと思っている人がいるかもしれない。それは人間の想像である。神はそうに働かない。神は行うべき働きを行うためだけに肉となるのであり、両親のもとに生まれ、成長し、家族を築き、仕事を開始し、子どもをもち、人生の浮き沈みを経験するといった、普通の人のあるゆる活動から成る、普通の生涯を生きるためではない。神が地上に来るときは、神の霊が肉をまとい、肉になるのだが、神は普通の人間の生涯を送るのではない。神は自身の経営（救いの）計画の一部を達成するためだけに来る。その後、神は人類のもとを去る。神が肉になるとき、神の霊はその肉体の普通の人間性を完全にしない。むしろ、神があらかじめ決めた時に、神性が直接働き出すのである。そして、神が行うべきあるゆることを行い、自身の職分を完了させた後、その段階における神の霊の働きは完了し、この時点で神の肉体がその寿命を全うしたか否かに関わらず、受肉した神の生涯も終わる。つまり、その肉体が生涯のどの段階に到達しようと、またその肉体が地上でどれほど長く生きようと、すべては霊の働きにより決められるのである。それは、人間が普通の人間性に見なすものとは一切関係がない。例としてイエスを考えてみよう。イエスは肉体において33年半のあいだ生きた。人間の肉体の寿命としては、その年齢で死に、去るべきではなかった。しかしそれは、神の霊にとってまったく重要なことではなかった。自身の働きが終わったので、その時点で肉体は取り去られ、霊とともに消え去った。これが、神が肉において働く原則である。だから、厳密に言えば、受肉した神の人間性には特に重要なところがない。繰り返すと、受肉した神が地上に来るのは、普通の人間の生涯を送るためではない。まず初めに普通の人間生活を確立し、次に働きを開始するのではない。むしろ、普通の人間の家族に生まれる限り、受肉した神は神性の働きを行うことができる。その働きは人間の意図によって汚されておらず、肉的なものではなく、社会のやり方を取り入れることも人間の思考や観念を含むことも絶対になく、ましてや人の処世哲学に関わることもない。これが受肉した神の行おうとする働きであり、それはまた神の受肉の実際的な意義でもある。神が肉になるのはおもに、他の取るに足りない過程を経ることなく、肉において行われるべき段階の働きを行うためである。そして、普通の人を経験について言えば、神はそれらをもたない。受肉した神の肉が行うべき働きに、普通の人を経験は含まれていない。だから、神が肉となるのは、肉において成し遂げなければならない働きを成し遂げ

るためである。残りのことは受肉した神とは無関係であり、それほど多くの取るに足りない過程を経ることはない。ひとたび受肉した神の働きが終わると、その受肉の意義もまた終わる。この段階を終えることは、神が肉において行うべき働きが終わり、神の肉における職分が完成したことを意味する。しかし、神はいつまでも肉において働き続けることはできない。働くために別の場所、つまりその肉の外にある場所へ移動しなければならない。そのようにしてのみ、神の働きは完璧に行われ、発展してさらに大きな効果を生み出せる。神は自身の本来の計画に従って働く。自分が何の働きを行うべきか、何の働きを完了させたかについて、神は掌を指すかのごとく明確に知っている。神は一人ひとりの人間を導き、自身があらかじめ定めた道に沿って歩かせる。誰もこれを逃れられない。神の霊の導きに従う人だけが安息に入れる。その後の働きにおいては、人間を導くために神が肉において語るというのではなく、目に見える形をもつ霊が人間の生活を導くことになるかもしれない。そのとき初めて、人間は実際に神に触れ、神を見、神が求める現実によりよく入り、実際の神により完全なものとされる。これが、神が達成するつもりの働きであり、また長きにわたり計画してきたことである。このことから、あなたがたはみな自分が進むべき道を見ることだろう。

暗闇の影響から脱すれば、あなたは神のものとされる

暗闇の影響とは何か。このいわゆる「暗闇の影響」とは、サタンが人を騙し、墮落させ、束縛し、操る影響のことであり、サタンの影響は死の雰囲気を帯びた影響である。サタンの支配下で生きる者は残らず滅びる運命にある。

神への信仰を得たあと、あなたはどのようにしてサタンの影響から逃れられるか。ひとたび心を込めて神に祈ると、あなたは自分の心を完全に神へと向け、この時点で、あなたの心は神の霊によって感動する。あなたは自分を残らず神に捧げたいとますます思うようになり、その瞬間、暗闇の影響から脱していることになる。人の行なうあらゆることが神を喜ばせ、神の要求にかなっているなら、その人は神の言葉の中で、神の気遣いと加護のもとで生きる人である。人々が神の言葉を実践できず、神を騙そうと常に試み、神に対していい加減に振る舞い、神の存在を信じていないのであれば、それらはみな暗闇の影響下で生きている人である。神の救いを受けていない人たちはサタンの支配下で生きている。つまり、そのような人はみな暗闇の影響下で生きているのだ。神を信じない者はサタンの支配下で生きている。神の存在を信じている者でさえ、必ずしも神の光の中で生きているとは限らない。なぜなら、神を信じる者であっても、実際には神

の言葉の中で生きておらず、神に従うこともできないかもしれないからである。人間は神を信じるのが限界であり、また神についての認識がないので、依然として古い規則や死んだ言葉の中で生き、暗く不確かな生活を送り、神によって完全に清められることも、完全に神のものとされることもないのである。したがって、神を信じない者が暗闇の影響下で生きていることは言うまでもないが、神を信じる人でさえも、依然としてその影響下にあるかもしれない。なぜなら、その人たちには聖霊の働きが欠けているからである。神の恵みや慈悲を授かっていない者、聖霊の働きを見ることができない者はみな、暗闇の影響下で生きている。そしてたいていの場合、神の恵みを享受するだけで、神を知らない者もまたそうである。神を信じながらも人生の大半を闇の影響下で過ごすなら、その人はすでに存在意義を失っている。そうであれば何の必要があって、神が存在することを信じていない人に触れなければならないのか。

神の働きを受け入れられない者、あるいは神の働きを受け入れながら神の要求を満たせない者はみな、暗闇の影響下で生きる人である。真理を追い求め、神の要求を満たせる者だけが、神から祝福を受けるのであり、またそうした者だけが暗闇の影響から脱する。解放されておらず、何らかの物事に絶えず支配され、神に心を捧げられない者は、サタンに束縛され、死の雰囲気の中で生きる人である。自分の本分に忠実でない者、神から委ねられた使命に不忠な者、そして教会で自分の役割を果たさない者は、暗闇の影響下で生きる人である。教会生活を故意にかき乱す者、兄弟姉妹にわざと不和の種を蒔く者、および徒党を組む者は、サタンによる束縛の中、暗闇の影響下のさらに深いところで生きる人である。神との関係が異常な者、贅沢な欲望が常にある者、自分にとって有利なことを絶えず求める者、自身の性質の変化を決して求めない者は、暗闇の影響下で生きる人である。常に自堕落で、真理の実践において真剣でない者、神の旨を満たすことを求めず、その代わりに自分の肉を満足させることだけを求める者もまた、死に包まれながら闇の影響下で生きる人である。神のために働きを行なう際、不正や欺瞞に手を染める者、いい加減なやり方で神に対応する者、神を騙す者、絶えず自分のために計画を立てる者は、闇の影響下で生きる人である。神を誠実に愛せない者、真理を追い求めない者、自分の性質を変化させることに重点を置かない者はみな、暗闇の影響下で生きる人である。

神に讃えられたいと望むなら、まずはサタンによる暗闇の影響から脱し、神に心を開き、完全に神のほうへ向けなければならない。あなたが現在行なっていることを、神は讃えるだろうか。あなたは心を神に向けたのか。あなたが行なってきたことは、神があ

なたに求めることなのか。それらの行ないは真理にかなっているのか。常に自分を検証し、神の言葉を飲み食いすることに集中しなさい。自分の心を神の前に曝け出し、誠実に神を愛し、自分自身を神のために忠実に費やしなさい。そのようにする人は、必ずや神の称賛を受けるだろう。

神を信じながら真理を追い求めない者はみな、サタンの影響から逃れる術をもたない。人生を正直に生きない者、人前での振る舞いが背後での振る舞いと違う者、上辺は謙虚で、忍耐と愛があるように見えるものの、その本質は陰険で、悪賢く、神への忠実さが一切ない者。こうした人たちは暗闇の影響下で生きる者の典型的な代表例である。彼らはへびの同類である。ひたすら自分の益のために神を信じるだけの者、独善的で横柄な者、自分を誇示する者、自分の地位を守る者は、サタンを愛し真理に反抗する人である。このような人たちは神に抵抗し、完全にサタンのものとされている。神の重荷に気を配らない者、心から神に仕えない者、常に自分や家族の利益ばかり考えている者、すべてを捨てて神のために自分を費やせない者、決して神の言葉によって生きようとしなない者は、神の言葉の外で生きる人である。このような人たちが神の称賛を受けることはできない。

神が人間を造った時、それは、人間が神の豊かさを享受し、神を真に愛せるようにするためだった。そのようにして、人間は神の光の中で生きるのだ。今日、神を愛することができず、神の重荷に気を配らず、自分の心を完全に神に捧げられず、神の心を自分の心とすることができず、神の重荷を自分のものとして背負えない者全員について言えば、神の光がそうした人たちを照らすことはなく、それゆえ彼らはみな暗闇の影響下で生きている。彼らは神の旨に真っ向から反する道を歩み、彼らが行なう一切のことには真理の片鱗さえない。彼らはサタンとぐるになって悪事を行ない、暗闇の影響下で生きる人である。神の言葉を頻繁に飲み食いして神の旨に気を配り、神の言葉を実践することできるなら、あなたは神のものであり、神の言葉の中で生きる人である。サタンの支配から逃れて神の光の中で生きることを、あなたは望んでいるのか。あなたが神の言葉の中で生きるなら、聖霊には働きを行なう機会があるだろう。サタンの影響下で生きるなら、あなたが聖霊にそうした機会を与えることはないだろう。聖霊が人間に対して行なう働き、聖霊が人間を照らす光、そして聖霊が人間に与える確信は、ほんの一瞬しか残らない。ゆえに、もしも人々が不注意で配慮を怠ったならば、聖霊の働きは彼らの前を素通りする。人間が神の言葉の中で生きるならば、聖霊は彼らと共にあり、彼らに対して働きを行なう。人間が神の言葉の中で生きていないならば、彼らはサタンの束縛の

中で生きている。人間が墮落した性質の中で生きているならば、彼らには聖霊の臨在も働きもない。あなたが神の言葉の範囲内で生き、神が求める状態の中で生きているならば、あなたは神のものにされた人であり、あなたに対して神の働きが行なわれる。あなたが神の要求の範囲内でなく、サタンの支配下で生きているならば、あなたは間違いなくサタンの墮落の中で生きている。神の言葉の中で生き、神に自分の心を捧げることでのみ、あなたは神の要求を満たすことができる。あなたは神の言う通りに行動し、神の発する言葉を自分の存在の基礎とし、自分のいのちの現実としなければならない。そうして初めて、あなたは神のものとなる。もしもあなたが神の旨にしたがう形で実際に実践するならば、神はあなたに対して働きを行ない、あなたは神の祝福の下、神の顔から放たれる光の中で生き、聖霊が行なう働きを理解し、神の臨在の喜びを感じるだろう。

暗闇の影響から脱するには、まず神に対して忠実であり、真理を追い求める熱意が心になければならない。そうして初めて、あなたは正しい状態になることができる。正しい状態で生きることが、暗闇の影響から脱する必要条件である。正しい状態にないというのは、神に忠実でなく、真理を求める熱意が心にないということであり、暗闇の影響から脱することなど問題外である。わたしの言葉は、人間が暗闇の影響から脱する基礎であり、わたしの言葉にしたがう形で実践できない人は暗闇の影響の束縛から逃れることができない。正しい状態で生きるというのは、神の言葉の導きの下で生き、神に対して忠実な状態で生き、真理を求める状態で生き、神のために真摯に自分を費やす現実の中で生き、神を真に愛する状態で生きることである。このような状態、このような現実の中で生きる者たちは、真理の奥底に入るにつれて徐々に変化する。また彼らは、働きが深まるとともに変化して、最後は必ずや神に得られて心から神を愛する人になる。暗闇の影響から脱した者たちは徐々に神の旨を確かめられるようになり、また徐々に神の旨を認識するようになって、やがては神の知己になることができる。彼らは神についての観念を抱くことも、神に反抗することもないだけでなく、以前に抱いていたそれらの観念や反抗心をますます憎み、神に対する真の愛が心の中に生じるようになる。暗闇の影響から脱け出すことができない者はみな、肉によって完全に占められており、反抗心で一杯である。彼らの心は人間の観念と処世哲学、そして自身の意図と思案で満たされている。神が求めるのは人間からの一途な愛、そして人間が神の言葉によって、神への愛に満ちた心によって占められることである。神の言葉の中で生き、自分が求めるべきものを神の言葉の中から探し、その言葉ゆえに神を愛し、神の言葉のために奔走し、神の言葉のために生きることこそ、人間が努力して成し遂げるべき目標である。すべては

神の言葉の上に築かれなければならない。そうして初めて人間は神の要求を満たすことができる。神の言葉を備えていなければ、その人はサタンに取り憑かれた蛆虫に過ぎない。次のことを考えなさい。神の言葉のうち、自分の中に根づいているものはどのくらいあるのか。自分はどの物事において、神の言葉にしたがって生きているのか。自分はどの物事において、神の言葉にしたがわずに生きてきたのか。神の言葉がいまだに自分の中で完全に根づいていないなら、自分の心を占めるのはいったい何なのか。日常生活において、自分はサタンに支配されているのか、それとも神の言葉によって占められているのか。神の言葉が自分の祈りの基礎となっているか。自分は神の言葉の啓きによって否定的な状態から脱したのか。神の言葉を自分の存在の基盤にすることが、誰もが入らなければならないことである。神の言葉があなたの生活に存在していなければ、あなたは暗闇の影響下で生き、神に反抗し、神に逆らい、神の名を汚している。このような人たちの神に対する信仰は害悪と攪乱以外の何物でもない。自分の人生のうち、あなたはどれほどの期間を神の言葉にしたがって生きてきたのか。また自分の人生のうち、どのくらいの期間を神の言葉にしたがわずに生きてきたのか。神の言葉があなたに要求したことのうち、どれほどのものがあなたの中で成就されたのか。どれほどのものがあなたの中で失われたのか。あなたはこうしたことをじっくり見つめたことがあるのか。

暗闇の影響から脱するには、聖霊の働きと人間による献身的な協力の両方が必要である。わたしはなぜ、人間は正しい道に乗っていないと言うのか。正しい道に乗っている人は、まず自分の心を神に捧げることができる。それは入るのに長い時間を要する作業である。なぜなら、人類は常に暗闇の影響下で生き、数千年にわたってサタンに束縛されてきたからである。したがって、この入りはたかが一日や二日で達成できるものではない。わたしが今日この問題を取り上げたのは、人間が自分の状態を把握できるようにするためである。暗闇の影響とは何か、光の中で生きるとはどのようなことかをひとたび識別できれば、入りはずっと簡単になる。なぜなら、サタンの影響から逃れられるようになるのに先立ち、あなたはまずサタンの影響とは何かを知らなければならないからである。そうして初めて、あなたはそれを捨て去る術を得る。その後何をすべきかについて言えば、それは人間自身の問題である。何事も肯定的な側面から入り、受け身になって待っていてはいけない。そうすることでのみ、あなたは神に得られることができる。

信仰においては現実に集中せよ——宗教的儀式を行うことは

信仰ではない

あなたは宗教的慣習をいくつ守っているだろうか。神の言葉に逆らって、自分の道に行ってしまったことが何回あるだろうか。神の重荷を真に考慮し、神の旨が成就されることを求めて、神の言葉を実行したことが何度あるだろうか。神の言葉を理解して、それを実行に移しなさい。すべての行動と行いに原則を持ちなさい。それは規則に従うということではなく、体裁のために何かを渋々するというだけでもなく、真理を実践し、神の言葉によって生きるということである。そのような実践こそ、神を満足させることができるのだ。神を喜ばせる行為とは、規律を遵守することではなく、真理を実践することである。一部の人々には周りの注意を引こうとする傾向がある。そのような人たちは、兄弟姉妹の前では神に恩義があると言うかもしれないが、陰では真理を実践することもなく、まったく違うことを行っている。彼らは宗教熱心なパリサイ人ではないか。神を心から愛し、真理を持っている人というのは、神に忠実でありながらそれを誇示しない人のことだ。そうした人は必要であれば喜んで真理を実践するし、良心に逆らって話したり行動したりするようなことはしない。そして問題が起きると賢明さを示し、どんな状況下でも原則に基づいて行動する。このような人こそ、真に神に仕えることができる。中にはただ口先だけで神に恩義があると言う人もいる。彼らはしかめっ面をし、わざとらしくみじめな表情を装って日々を過ごしている。なんと卑劣な態度だろう。もし彼らに、「どんな風に神様に恩義があるのか教えてください」と尋ねたら、彼らはきっと言葉を失うだろう。あなたが神に忠実ならば、そのことを大っぴらに話してはいけない。その代わり、神に対するあなたの愛を実践で示し、そして心から神に祈りなさい。神にただ言葉でおざなりに対応している人たちは、すべて偽善者である。一部の人たちは祈りのたびに神に対する恩義を語り、聖霊に動かされていないにも関わらず、祈るたびに涙を流す。このような人たちは宗教的儀式と観念に捕われており、そうした儀式や観念に従って生きながら、いつもそのような行為を神が喜び、表面上の信心深さや悲しみの涙を神が好むと信じている。そのような馬鹿げた考えを持つ者から、どんな良いことが生まれようか。また一部の人々は、謙虚さを示そうと、他の人の前で話すときは上品に振る舞ったりする。また人前で故意に卑屈になり、無力な子羊のように振る舞う人たちもいる。これが神の国の民にふさわしい態度だろうか。神の国の民とは、生き生きとして自由で、純真で率直で、正直で愛らしく、束縛されない生き方をするものだ。彼らには品性と尊厳があり、どこに行っても神に証しを立てることができる。そのような人は神と人の両者から愛されている。信仰において未熟な人たちは、外的な実践にこ

だわりすぎる。彼らはまず神に取り扱われ、打ち碎かれる時期を経なければならない。心の奥に信仰を持つ人々は、外見は他者と同じであっても、その行動や行いは称賛に値する。そのような人たちこそ、神の言葉を生きていると言えるのだ。もしあなたが毎日さまざまな人々に福音を宣べ伝え、彼らを救いに導こうと努めているとしても、結局のところ規則や教義に従って生きているなら、神に栄光をもたらすことはできない。そのような人たちは単なる宗教家であり、同時に偽善者なのである。

宗教熱心な人々の集まりではいつも、「姉妹よ、最近はどうされていましたか?」、「わたしは神様に恩義があるのに、神様の旨を満たせないような気がするんです」などというやり取りがあったりする。また別の人も、「わたしも神様に恩義があるのに、神様を満足はさせられない気がするんです」などと言ったりする。こうしたわずかな言葉だけでも、彼らの心の奥深くにある卑劣さが見て取れる。そのような言葉は実に忌まわしく、極めて不快なものだ。こうした人たちの本性は神に敵対している。現実に関心を合わせている人は、心にあることをそのまま言葉にし、交わりの中で自分の心をさらけ出す。偽りの行いはひとつもせず、形式的な礼儀にもこだわらず、空虚な社交辞令も言わない。いつも単刀直入で、現世の規則に縛られることもない。また一部の人々は、見せびらかすことにこだわる傾向があり、挙句の果てにまったく分別を失っているほどだ。他の人が歌うと踊り始め、鍋の米が焦げていることにも気が付かない。そのような人たちは敬虔ではなく、尊敬にも値せず、あまりにも軽率だ。こうしたことはすべて現実の欠如の顕れである。一部の人々は霊的いのちについて交わりを持つとき、神に恩義があるなどと言いはしなくても、心の奥に神への真の愛を秘めている。神に恩義があるというあなたの感情は、他の人々とは無関係だ。なぜならあなたは人ではなく神に恩義があるのだから。それを絶えず人に話したところでどうなるのか。外見上の熱心さや見せかけではなく、現実に入ることに重点を置きなさい。

人のうわべだけの良い行いは何を表すだろうか。それは肉を表しており、外面上最善の実践をしたところで、それはいのちではなくただあなた個人の性質を表すだけだ。人の外面的な実践では、神の願いを成就することはできない。あなたは絶えず神に恩義があると言っているが、誰かにいのちを与えたり、神を愛するよう誰かを導いたりすることもできない。それで神を満足させられると信じているのか。あなたは自分のしていることが神の旨にかなっており、霊的なことだと感じているが、実際にはすべてが実にばかっている。あなたは自分が嬉しいと思うことや自分がしたいと思うことが、まさに神も喜ぶことだと信じている。あなたの好みは神の好みを表すだろうか。人の性格が神を

表すことができるだろうか。あなたが喜ぶものはまさしく神が嫌悪するものであり、あなたの習慣は神が忌み嫌い拒絶するものだ。もし神に恩義を感じるなら、神の前に出て祈りなさい。それを誰かに話す必要などない。神の前で祈ることもせず、人の注目を引いてばかりいるなら、神の旨を成就することなどできるだろうか。あなたの行動が常に見せかけだけなら、それはあなたが極度にうぬぼれの強い人間だということだ。表面上良い行いをするだけで現実性に欠ける人間とは、どんな種類の人間か。それは偽善者のパリサイ人であり、単なる宗教家でしかない。あなたがたが見せかけの実践をやめず、変わることができないなら、あなたがたの中にある偽善的要素はさらに増大するだろう。偽善的要素が大きければ大きいほど、神への抵抗が強くなる。そして最終的に、そのような人々は必ず排除されることになるのだ。

今日の神の働きを知る者だけが、神に仕えてもよい

神の証しとなり、赤い大きな竜を辱めるためには、一つの原則に立つ必要があり、また一つの条件を満たすことが必要だ。それは、心から神を愛し、そして神の言葉に入ること。あなたが神の言葉に入らない限り、サタンを辱めることはできない。あなたのいのちの成長を通して、あなたが赤い大きな竜を断ち切り、それに完全な侮辱を与えてこそ、赤い大きな竜を真に辱めることができる。神の言葉を実践しようとするほど、あなたの神への愛の証明と赤い大きな竜の嫌悪は大きくなる。神の言葉に従えば従うほど、あなたの真理を求める証明は大きくなる。神の言葉を求めない人々は、いのちのない人々である。そのような人々は神の言葉の外にあり、宗教に属している。真に神を信じている人々は神の言葉を飲み食いすることを通して、さらに深い神の言葉に関わる認識を持つ。あなたが神の言葉を求めないのであれば、あなたは神の言葉を真に飲み食いすることはできず、もしあなたが神の言葉に関わる認識を全く持っていなければ、神を証しすることも神を満足させることも全くできない。

あなたが神を信じることにおいて、どのように神を知ればよいだろうか。あなたは、逸脱したり誤った考えを持つことなく、今日の神の言葉と働きに基づいて神を知るようにすべきであり、何よりもまず神の働きを知るべきである。これが神を知る基礎である。神の言葉の純粋な理解に欠けるこれらの誤った考えはみな宗教的な観念であり、逸脱し、誤った理解である。宗教家は、過去に受け入れられた神の言葉を取って、今日の神の言葉と照合する技術に長けている。過去に聖霊により照らされたことにしがみついたまま今日の神に仕えようとするなら、あなたの奉仕は妨害をもたらし、あなたの行いは

古いただの宗教儀式となってしまう。もしあなたが、神に仕える者は外から見てへりくだっていて辛抱強くなければならないと信じているとしたら、そしてもしあなたがそのような認識を今日実践しているとしたら、そのような認識は宗教的な観念であり、そのような行いは偽善的である。「宗教的な観念」とは、（以前に神が語った言葉の理解や直接聖霊により示された光も含む）古くすたれたものを指しており、それらを今日実行するならば、それらは神の働きの妨害であり、人への益をもたらさない。もし人がそのような内に持つ宗教的な観念に属するものを一掃することができなければ、それらは人の神への奉仕における大きな妨げとなってしまう。宗教的な観念を持った人々は、聖霊の働きの歩みについていくことができず、一步そしてまた一步と遅れをとる。これらの宗教的な観念が人を非常にひとりよがりで傲慢にになってしまうからだ。神は自らが語ったことや過去に行なったことについて懐旧を抱くことはなく、それがすたれたものであれば、それを取り除く。まことにあなたは、あなたの観念を手放すことができるのではないか。あなたがもし過去に神が語った言葉にすがりついているならば、神の働きを知っているということの証明になるだろうか。もしあなたが今日の聖霊の光を受け入れることができず、過去の光にしがみついているとしたら、神の足跡に従っている証明になるだろうか。あなたはまだ宗教的な観念を手放すことができていないだろうか。もしそうであれば、あなたは神に反対する人になってしまうだろう。

もし人が宗教的な観念を手放すことができれば、その人は自分の考えを使って今日の神の言葉や働きを測ったりせず、直接従うだろう。今日の神の働きが過去のものとは明らかに違っていても、あなたは過去の見方から離れて今日の神の働きに直接従うことができる。神が過去にどのように働いたかということに関係なく、今日の神の働きに最も重きをおくべきだということを知っていれば、あなたは自分の観念を捨て、神に従い、そして神の働きと言葉に従い神の足跡についていくことのできる人である。これにより、あなたは真に神に従う人になれるのである。あなたは神の働きを分析したり、調査したりしない。それはあたかも、神が過去に行なった働きを忘れ、同様にあなたも忘れたかのようなものである。現在は現在であり、過去は過去であり、神自身が過去に行なったことを忘れるのであるから、あなたがそれに浸っていてはならない。そうしてはじめて、あなたは神に完全に従う人になり、完全に宗教的な観念を手放したと言える。

神の働きにはいつも新しい進展があるので、新たな働きが生じた際には、すたれて古くなる働きも出てくる。この古い働きと新しい働きは矛盾するものではなく、補い合うもので、そのひとつひとつが過去から続いている。新しい働きがあるから、もちろん、

古い働きは取り除かれなければならない。たとえば、長年実践されてきた慣習や習慣的に用いられてきた言い習わしは、人の長年の経験や教えと相まって、人に様々な観念を形成した。人によるそのような観念の形成にとってさらに好都合なことに、古代から長年伝えられた理論の広まりに結びついて、神が自分の顔や本来の性質をまだ完全には人に現していないということである。人が神を信じる過程において、様々な観念の影響により、神についてのありとあらゆる観念的な認識が人々の中で継続的に形成され、進化した。それによって神に仕える数多くの宗教人が神の敵になったと言えるだろう。したがって、人々の宗教的な観念が強ければ強いほど、彼らは神に反対し、神の敵となってしまう。神の働きはいつも新しく古いものは何ひとつなく、規則を形成することも一切なく、むしろ、継続的により大きい範囲で変化したり小さい範囲で変化したりして、新しくなっている。この働きは神自身の本来の性質の表れである。それはまた神の働きの本来の原則でもあり、神が自身の経営を成し遂げる手段の一つである。もし神がこの方法で働かないとしたら、人は変わらず、神を知ることもできず、サタンが打ち負かされることもないだろう。よって、彼の働きのうちに一貫性のないように見える変化は継続して起きるが、それは実は周期的なものである。しかしながら、人が神を信じる方法は全く異なり、古い、親しみのある教えや制度にしがみつき、より古いものを心地よく感じる。石のように頑固で愚かな人の考えが、どのようにして神の計り知れない多くの新しい働きと言葉を受け入れることができようか。人はいつも新しく古いことが一切ない神を嫌悪する。人が好むのは、歳をとり、髪が白く、同じ場所から動かない古い神だけだ。つまり、神と人はそれぞれ好み異なるため、人は神の敵となった。このような不一致は、神が新しい働きをして六千年近く経った今日も多く存在する。故に、もう救済策もないのだ。それは人の頑なさが原因かもしれないし、神の行政命令が人間には不可侵であるが故かもしれない。だが神自身はまた完成されていない経営の働きを隣に誰もいないかのように進め、これらの宗教家たちは未だに、古くさい本や書物にすがっている。これらの不一致により、神と人とは敵対し、和解不可能にさえなっているが、神はそのような不一致は存在しないかのように、目を留めることはない。しかし、人は自分の信念にしがみつき、それらを手放すことはない。それでもひとつははっきりとしていることは、人が自分自身の姿勢を変えることがなくても、神の足はいつも動いており、神はいつも状況によって自分の姿勢を変え、最終的に戦わずして打ち負かされるのは人間である。一方、神は敗北した全ての敵にとっての最大の敵であり、打ち負かされた人々およびまだ打ち負かされていない人々の勝者でもある。誰が神と競って勝利できるのか。人の観念の多くは神の働きが発端となるため、神から来るように思える。しかし、だか

らと言って神は人を赦すことはしないし、神の働きに引き続いて、神の働きから外れた「神のため」の製品を次々製造する人を褒めそやすことももちろんしない。かえって、神は人の観念や古くて敬虔な信仰にとっても嫌気がさして、これらの観念が生まれた日を認めるつもりすらない。人の観念は人により広まり、それらの源は人の考えや心であり、神からのものではなく、サタンによるものであるため、彼はこれらの観念を自分の働きによるものだとは全く認めない。神の意図は、自身の働きを、古いものや死んだものではなく、常に新しく生き生きとしたものとし、人の拠りどころとなるものが時代や期間に合わせて変化し、永遠に続くものであったり不変のものであったりしないことである。彼は人を生かし新たにさせる神であり、人を死に至らせ古くする悪魔ではないからである。あなたがたはまだこれが分からないか。あなたは心を閉ざしているので、神について持っている観念を手放すことができない。神の働きが理不尽だからでも、人間の願望と合致していないからでもなく、無論神がいつも自分の義務に怠慢だからなどでもない。あなたが自分自身の観念を手放すことができないのは、あなたが不従順すぎるからであり、そしてあなたに神の被造物らしさが少しもないからで、神があなたに対してことを難しくしているのではない。全てはあなたに起因していて、神とは関係ない。全ての苦しみと不幸は人が引き起こしている。神の意思はいつも良いもので、彼はあなたに自らの観念を作り出してほしいと願ってはいない。あなたに時代とともに変わり、新しくなってほしいと願っている。それでもあなたは大切なことを見極めることができず、いつも調査か分析をしている。神があなたに対してことを難しくしているのではなく、あなたが神への畏れを持っておらず、あなたがあまりに不従順なだけだ。かつて神に与えられたもののほんの一部を取り、それから身を翻して神を攻撃しようとする小さな被造物は、人の不従順ではないのか。人には神の前で自分の考えを表明する資格がまったくなく、ましてや悪臭を放つ無意味で腐った美辞麗句を好きなようにひけらかす資格などないと言える。カビの生えたような観念など言うまでもない。それらはもっと価値のないことではないか。

真に神に仕える人は、神の心にかない、神に用いられるのにふさわしく、宗教的な観念を手放すことのできる人である。もしあなたが神の言葉を飲み食いすることで豊かな実りを得たいと望むなら、あなたの宗教的な観念を手放さなければならない。神に仕えたいと望むなら、まずは宗教的な観念を手放し、万事において神の言葉に従うことがなおさら必要である。これが、神に仕える人が持つべきものである。あなたがこのことを認識として持っていないなら、仕え始めてすぐに妨害や障害を引き起こしてしまう。そし

でもしあなたが自分自身の観念にすがり続けるなら、神に打ち倒されることは避けられず、二度と起き上がれないだろう。現在を例えに説明しよう。今日の多くの言葉や働きは聖書に沿っておらず、神が以前に行なった働きにも沿っていない。だからもしあなたが従うことを望まなければ、いつでも躓いてしまう。もしあなたが神の旨に従って仕えたいと願うなら、まず宗教的な観念を手放し、自らの見解を正さなければならない。これから語られることの多くは過去に語られたことと相いれず、もし今、あなたに従う意志が欠けていれば、あなたはこの先歩み続けることはできない。神が働く方法のひとつがあなたのうちに根付いていてそれを一切手放すことができなければ、その方法はあなたの宗教的な観念となってしまう。もし神であることがどのようなことか、それがあなたの中に根付いていれば、あなたは真理を得ており、神の言葉と真理があなたのいのちになれるのなら、あなたはもはや神への観念を持っていない。神に関わる真の認識を持つ人々は観念を持たず、教義に固執することはない。

以下の質問をして常に警戒を怠らないように。

- 1.あなたの内にある認識が神への奉仕の妨げになっているか。
- 2.あなたの日常生活にはどれだけの宗教的な行為があるか。敬虔さを装うだけであれば、あなたはいのちにおいて成長し、成熟したといえるか。
- 3.あなたは神の言葉を飲み食いする時、宗教的な観念を手放すことができるか。
- 4.あなたが祈るとき、宗教的な儀式に関係なく祈ることができるか。
- 5.あなたは神に用いられるにふさわしい人か。
- 6.あなたの神に関する認識は、どれくらい宗教的な観念を含んでいるか。

神への真の愛は自発的なものである

すべての人々は、神の言葉によって精錬を受けている。神が受肉していなかったなら、人類はそのような苦しみにあずかるという祝福を受けることなどなかっただろう。言い換えれば、神の言葉による試練を受け入れることができる人々は、みな祝福されている。人々はその元来の素質、行動、そして神に対する態度に基づいて考えれば、このような精錬を受けるには値しない。この祝福を享受しているのは、神によって高められたからである。人々はかつて、自分は神の顔を見るに値せず、神の言葉を聞く資格もないと言っていた。現在人々が神の言葉による精錬を授かっているのは、もっぱら神によって高められたことと、神の憐れみのおかげである。これが終わりの日に生まれた者一人

一人に与えられる祝福なのだ。あなたがたは自分自身それを体験しただろうか。人間がどの側面で苦難や挫折を体験するかは、神によって予め定められており、人間自身の要求によって決まるものではない。これはまぎれもない事実である。神を信じるものは皆、神の言葉による試練を受け入れ、その言葉の中で苦しむ能力を持っていなければならない。このことをはっきりと理解できるだろうか。だからあなたは、経験した苦難と引き換えに、今日の祝福を得たのである。神のために苦しまなければ、神の称賛を得ることはできない。あなたはかつて不平を言っていたかもしれないが、これまでにどれだけ不平を言ってきたとしても、神はそのことを思い出さない。もう今日という日が来たのであり、昨日のことをふり返る必要はないのだ。

神を愛そうとしても愛せないと言う人々がいる。しかし彼らは、神が去ろうとしていると聞くと、突然神への愛を抱く。また中には、普段は真理を実践していないが、神が怒って去ろうとしていると聞くと、神の前に来て祈る人もいる。「おお神よ、どうか行かないでください。もう一度だけチャンスをお願いします。神よ、わたしは今まであなたを満足させていませんでした。あなたに負い目があり、あなたを拒んでいました。しかし今日、わたしはこの体と心を捧げ尽くし、これからはあなたを満足させるつもりです。今をのがせば、二度と機会はないでしょう」。あなたはこんな祈りをしたことがあるだろうか。このように祈るのは、神の言葉によってその人の良心が呼び覚まされたからである。人間はみな無気力で愚鈍であり、刑罰と精錬を受けても、神がそれによって何を達成しようとしているのかわからない。もし神がそのように働かなかったら、人々は混乱したままでいるだろう。どんな人間も、人の心に靈感を吹き込むことはできない。そのような実を結ぶことができるのは、人間を裁き暴露する神の言葉だけである。そのためすべてのことは、神の言葉によって達成され成就されるのであり、人類の神への愛が呼び覚まされたのは、ひとえに神の言葉のゆえである。人間が自分の良心だけに基づいて神を愛しても、望ましい成果は得られないだろう。人間はこれまで、自分の良心を神への愛の基盤としていたのではないか。自らの意志で率先して神を愛した者が一人でもいただろうか。人間が神を愛したのは、神の言葉の励ましによってでしかなかった。そして次のように言う人もいる。「わたしは長年にわたって神に従い、神の大きな恵みと数々の祝福を享受してきた。また、神の言葉による精錬と裁きも受けてきた。だからわたしは多くのことを理解するようになり、神の愛を目にした。わたしは神に感謝し、神の恵みに報いなければならない。わたしは死んでも神を満足させ、自分の良心にかけて神を愛する」。自分の良心的感情だけに依存するなら、人は神の愛しさを感じる事が

できない。良心だけに依存するなら、神への愛は弱々しいものになるだろう。神の恵みと愛に報いることだけを語っているなら、あなたの神への愛には何の活力もないだろう。自分の良心的感情に基づいて神を愛することは受け身なやり方である。なぜそれは受け身なやり方なのか。これは現実的な問題だ。あなたがたの神に対する愛は、一体どんな愛なのか。それはただ神をたぶらかし、神を愛するふりをしているだけではないのか。ほとんどの人は、神を愛しても報酬はなく、どのみち神を愛さないことで同じ刑罰を受けるのだから、結局のところ罪を犯さないだけで十分だ、と考えている。それゆえ、良心的感情に基づいて神を愛し神の愛に報いるというのは受け身なやり方であり、心の中から神への愛が自発的に生じるのとは異なる。神への愛はその人の心の奥底からわき出る真の感情でなければならない。また、次のように言う人もいる。「わたしは神を追い求め、神に従う意志がある。もし今神がわたしを見捨てようとしていても、わたしはなお神に従いたい。神がわたしを求めていようがいまいが、わたしはなお神を愛し、最終的には神を得なければならない。わたしは神に自分の心を捧げ、神が何をしようと、生涯を通して神に従うつもりだ。何があろうと、わたしは神を愛し、神を得なければならない。神を得るまで休むことはない」。あなたには、このような決意があるだろうか。

神を信じる道は、神を愛する道と同一である。神を信じるなら、神を愛さなければならない。しかし神を愛するということは、神の愛に報いることや、良心的感情に基づいて神を愛することだけを指すのではない。それは神への純粋な愛を意味する。時には、ただ自らの良心を基盤とするだけでは神の愛を感じられないこともある。わたしがいつも、「神の霊がわたしたちの霊を動かしてくださるように」と言っていたのはなぜだと思うか。なぜ、人々の良心を動かして神を愛させてくださるように、とは言わなかったのか。それは、人間の良心は神の愛しさを感じることができないからだ。この言葉に確信が持てないなら、自分の良心を使って神の愛を感じようとしてみなさい。一時的にある程度の活力を得ることはあるかもしれないが、それはすぐに消え去るだろう。良心のみで神の愛しさを感じているなら、祈っている時には活力を感じるが、それはすぐに消えてなくなってしまう。それはなぜか。良心だけをを用いるなら、神への愛を呼び覚ますことはできない。心の中で本当に神の愛しさを感じると、霊が神によって動かされ、そのとき初めてあなたの良心は本来の役割を果たすことができるようになる。つまり、神が人の霊を動かし、人が認識を得て心に励ましを得たとき、すなわち経験を得たとき、初めて有効に良心で神を愛することができるようになるのだ。良心で神を愛することは

誤りではないが、それは神に対する最も低いレベルの愛である。「神の恵みにかろうじて正当に応える」ような愛し方では、積極的な入りへと駆り立てられることはない。人々は聖霊の働きをいくらか得たとき、すなわち自分の実体験の中で神の愛を見て味わったとき、また神について多少の認識を得て、神がどんなに人間の愛にふさわしくいかに愛しい方であるかを真に知ったとき、人間は初めて神を心から愛することができるようになるのだ。

人々が自分の心で神に接したとき、心を完全に神に向けることができたとき、それは人間が神を愛することの第一歩である。神を愛したいなら、まず心を神に向けることができないといけない。心を神に向けるとはどういうことか。それは心の中で行うあらゆる追求が、神を愛し神を得ることを目的とするということであり、それはあなたが自分の心を完全に神に向けたことを意味する。あなたの心には神と神の言葉以外にほとんど何もなくなり（家族、富、夫、妻、子供など）、たとえ何かがあったとしても、それに心を占められることはない。また自分の将来の見通しについて考えることもなく、ひたすら神を愛することを追求するようになる。そのときあなたは、完全に自分の心を神に向けたことになるのだ。もし依然として心の中で自分の計画を立て、常に自分個人の利益を追求し、「いつ神にちょっとした願い事ができるだろう。わたしの家族はいつ裕福になるだろうか。どうやっていい服を手に入れよう」などといつも考えているとしよう。そのような状態で生活しているなら、それはあなたの心が完全には神に向いていないことを示している。あなたの心にあるものが神の言葉だけであり、あなたが常に神に祈って、どんな時でも神に近づくことができるなら――まるで神がとても親しく、神があなたの中にいて、あなたが神の中にいるかのように――それはあなたの心が神の前にあることを意味する。毎日神に祈り、神の言葉を飲み食いし、いつも教会での働きのことを考え、神の旨に配慮し、心を尽くして真に神を愛し神の心を満足させているなら、あなたの心は神のものになる。もしあなたの心が他の多くのことで占められているなら、あなたの心はまだサタンに占拠されており、本当の意味で神に向いてはいない。ある者の心が本当に神に向かうと、その者は神への真の自発的な愛を持ち、神の働きに配慮できるようになる。まだ愚かさや理不尽さを示すことがあったとしても、神の家の利益、神の働き、そして自らの性質の変化に配慮するようになり、その心は正されることになる。中には、自分のすることはすべて教会のためだと言いながら、実のところ自分自身の利益のために行動している人々もいる。そのような人々は誤った意図を持っており、その心は曲がっていて偽りに満ち、為すことのほとんどは自分個人の利益のためだ。

この種の人々は神を愛することを追求しない。彼らの心は依然としてサタンのものであり、神に向かうことができない。そのため神には、この種の人間を得る方法がないのだ。

真に神を愛し神に得られることを望むなら、まず第一歩として、心を完全に神に向けることだ。為すことすべてにおいて、自分の心を探り、次のように自問しなさい。「わたしはこれを、神を愛する心に基づいてやっているだろうか。何か裏に個人的な意図がないだろうか。この行動の実際の目的は何だろうか」。神に心を捧げたいなら、まず自分の心を抑制し、自分の意図をすべて捨て去り、完全に神に尽くすという状態に達さなければならない。これが神に心を捧げることを実践する道である。自分の心を抑制するとは、どういうことを意味するのか。それは肉の贅沢な欲望を捨て去り、安逸や地位の恩恵をむさぼらず、あらゆることを神を満足させるために行うことであり、また自分の心を自分自身のためのものではなく、完全に神のためのものとするものである。それでは足りるのだ。

神への本物の愛は、心の奥底から生じる。それは神に関する認識に基づいてのみ存在する愛である。ある者の心が完全に神に向かえば、その者は神への愛を持つことになるが、その愛は必ずしも純粹ではなく、また完全でもない。なぜなら、その人の心が完全に神に向かうことと、その人が神を真に理解し神への本物の敬愛を持つことの間には、まだある程度の隔たりがあるからである。人が神への真の愛を得て神の性質を知るための方法は、心を神に向けることだ。神に真心を捧げると、その人はいのちの体験に入り始めることになる。そうすることでその人の性質は変化し始め、神への愛が次第に成長し、神に関する認識もまた徐々に増してゆく。つまり、心を神に向けることは、単にいのちの体験の正しい道を歩むための前提条件なのだ。人々が神の前に自分の心を置くと、彼らには神を渴望する心しかなく、神への愛の心はない。なぜなら神に関する理解がないからである。そのような状況で神への愛を多少は持っていたとしても、それは自発的なものではなく、本物の愛ではない。なぜなら、人間の肉から来るものは何であれ感情の産物であり、真の理解から来るものではないからだ。それは一時的な衝動に過ぎず、持続する敬愛にはなりえない。神に関する理解を得ていないと、人は自分の好みや個人的観念に基づいて神を愛することしかできない。この種の愛は自発的な愛と呼べるものではなく、また本物の愛とも呼べない。人の心が真に神に向かうと、その人はあらゆることにおいて神の利益に配慮できるようになるが、神についての理解がなければ、真に自発的な愛を抱くことはできない。その人にできるのはただ教会で何らかの役割を

果たしたり、本分をわずかに尽くしたりすることだけで、しかもその行動には基盤がない。そのような人の性質はなかなか変化しない。彼らは真理を追求していないか、あるいは真理を理解していないのだ。また、心を完全に神に向けたとしても、それで神を愛する心が完全に純粹だということにはならない。なぜなら、心に神を持っている者たちが、必ずしも心に神への愛を持っているとは限らないからだ。このことは、神を理解することを追求する者とししない者の違いに関わっている。神に関する理解を得ているなら、それはその人の心が完全に神に向いていることと、その心にある神への真の愛が自発的であることを意味する。そのような人だけが、心に神を持っているのだ。心を神に向けることは、正しい道へと踏み出し、神を理解し、神への愛を得るための前提条件である。それは神を愛するという本分を尽くした印でもなければ、神への真の愛を持っているという印でもない。神への真の愛を得るための唯一の方法は、心を神に向けることであり、それは同時に、神の被造物の一つとしてまず行わねばならないことでもある。神を愛する者とは、いのちを求めるすべての人々、すなわち真理を追求し、真に神を求める人々である。彼らはみな聖霊の啓示を得ており、聖霊によって動かされている。彼らはみな神の導きを得ることができるのだ。

神に負い目があると感じることができるなら、それはその人が霊に動かされているためだ。そのように感じる人々は、渴望する心を持つ傾向があり、いのちの入りを目指すことができるだろう。しかし、ある段階で止まってしまえば、それ以上の深みへ達することはできない。そしてまだサタンの罠にかかる危険性があり、ある時点でサタンに囚われてしまうだろう。人は神が当てる光によって、自分自身を知るようになり、それから神に対する負い目を感じるようになる。そして神に協力しようという意志を持ち、神に喜ばれないものを捨て去るのだ。これが神の働きの原則である。あなたがたは皆、いのちにおいて成長すること、そして神を愛することを追求する意志がある。それならば、自分の表面的なふるまいを捨て去ったのだろうか。ただ表面的なふるまいを捨て去り、混乱を引き起こしたり自慢したりするような行動を控えるだけで、本当にいのちにおける成長を追い求めているといえるだろうか。表面的なふるまいをすべて捨て去っても、神の言葉に入っていないなら、それは、あなたが何の積極的な進歩もない人間であることを意味している。表面的なふるまいの根本的な原因は何だろうか。あなたはいのちにおける成長を成し遂げるために行動しているのか。それとも、神の選民の一人になりすますことを目指しているのか。それが何であれ、あなたは自分が重点を置いていることを生きることになるのだ。表面的なふるまいに重点を置くなら、あなたの心は多く

の場合外向きになり、いのちにおける成長を追求する方法はなくなる。神はあなたに性質の変化を要求しているが、あなたは常に外面的なものを追い求めている。そのような人は自分の性質を変化させることができない。いのちの成熟に達する過程では、各人が特定の経路を経なければならず、神の裁きと刑罰を受け入れ、神の言葉によって完全にされることを受け入れなければならない。神の言葉を持たず、自分の自信と意志だけに頼っているなら、あなたがすることはすべて熱意だけに基づくものになる。つまり、いのちにおいて成長したいなら、より多く神の言葉を飲み食いして理解しなければならない。神の言葉によって完全にされた者は皆、神の言葉を実際に生きることができる。神の言葉による精錬を受けず、神の言葉による裁きを受けない者は、神が用いるに相応しい者とはなれない。ではあなたがたは、どの程度神の言葉を実際に生きているだろうか。神の言葉を飲み食いし、それを自分のいのちの状態と比較し、わたしが挙げた問題を踏まえて実践の道を見つけることができれば、初めてあなたがたの実践は正しく、神の旨に沿ったものとなる。そのような実践をする者だけが、神を愛する意志のある者なのだ。

祈りの実践について

あなたがたは日常生活において祈りを重視しない。人は祈りに関することを見過ごしてきた。従来の祈りはいい加減で、人が神の前でひととおりの動作をするだけである。自分の心を完全に神の前に捧げて神との真の祈りをする人は誰もいなかった。人が神に祈るのは、何かが起こった時だけである。この長いあいだ、あなたは本当の意味で神に祈ったことがあるのか。神の前で痛恨の涙を流した時があるのか。神の前で自分自身を知るにいたった時があるのか。神と心を通わせて祈ったことがあるのか。祈りは訓練を通じて生じる。普段から自宅で祈らないのであれば、教会で祈ることなどない。普段から小さな集会で祈らないのであれば、大きな集会で祈ることは不可能である。普段から神に近付き、神の言葉を熟考しないのであれば、祈る時になっても何も言うことがなく、たとえ祈ったとしても、それは口先だけで、真の祈りではない。

真の祈りとは何か。それは心の中にあることを神に話すことであり、神の心意を把握しつつ神と交わること、神の言葉を通して神と気持ちを伝え合い、神をとくに身近に感じ、神が自分の目の前にいると感じ、神に何か言うべきことがあると信じることである。心は光で満たされ、神はなんと愛しいのかと感じる。あなたはとくに鼓舞され、あなたの語ることに耳を傾けることで兄弟姉妹は喜びに満たされる。兄弟姉妹はあなたが話

す言葉は彼らの心にある言葉であり、彼らが語りたい言葉であると感じ、それはまるであなたの言葉が彼らの言葉になったかのようなものである。真の祈りとは、このようなものである。真に祈った後、心は安らぎ、喜びに満たされる。神を愛する強さがこみ上げ、人生において神を愛する以上に価値があり大切なことはないと感じる。これらはすべて、祈りが効果的であったことを証明する。あなたは、このように祈ったことがあるのか。

また、祈りの内容についてはどうであろうか。祈りは心の実際の状態と聖霊の働きにそって一步一步進むべきである。神の心意と神が人間に要求することに則して、神と交わるのである。祈りの訓練を開始する時は、まず最初に自分の心を神に捧げなさい。神の心意を把握しようとしてはならない。ただ心にある言葉を神に語ろうとしなさい。神の前に来て、このように言いなさい。「おお神よ、わたしは今日になって初めて、あなたに逆らっていたことを知りました。わたしは本当に墮落しており、忌み嫌われるべきです。わたしはただ時間を無駄にしていました。わたしは今日からあなたのために生き、意義のある人生を生き、あなたの心意を満足させます。あなたの霊がいつもわたしの内で働き、絶えずわたしを照らし啓きますように。わたしにあなたの前で響きわたるような力強い証をさせてください。あなたの栄光とあなたの証しと、あなたの勝利の証拠がわたしたちの内に現れるのをサタンに見せてください」。このように祈る時、あなたの心は完全に解放される。このように祈ったことで、あなたの心は神にいっそう近付く。そして頻繁にこのように祈ることができるならば、聖霊は必然的にあなたの中で働く。常にこうして神を呼び求め、神の前で決意するならば、あなたの決意が神の前で受け容れられるものとなり、あなたの心と存在すべてが神のものとされ、最終的にあなたが神に完全にされる日が訪れる。祈りとは、あなたがたにとって極めて重要なものである。祈り、聖霊の働きを受ける時、あなたの心は神に動かされ、そこから神を愛するための力が溢れてくる。心で祈らず、心を開いて神と交わらないならば、神はあなたの中で働きようがまったくない。もし、祈り、胸中の言葉を話した後にも、神の霊が働きを開始せず、鼓舞されたと感じないのであれば、それは誠実さが足りないこと、あなたの言葉が不実でいまだに不純であることを示している。もし祈った後に喜びを感じたならば、あなたの祈りが神に受け容れられるものであり、神の霊があなたの中で働いているのである。神の前に仕える者として、あなたは祈りなしではいられない。神との交わりを有意義で、貴いものであると本当に思うのなら、祈りを捨てることなどできるだろうか。神と交わらずにいられる者など一人もいない。祈りがなければ、あなたは肉の中で、サタンに束縛されて生きることになる。真の祈りがなければ、闇の影響下で生きること

になる。わたしは、あなたがた兄弟姉妹が日々真に祈ることができることを願っている。これは規則を守ることではなく、ある成果を達成することである。朝の祈りを捧げ神の言葉を楽しむために、少しばかりの睡眠と快楽を犠牲にする覚悟があなたにはあるか。このように純粋な心で祈り、神の言葉を飲み食いするならば、あなたは神にさらに受け容れられる。毎朝そのようにし、心を神に捧げて神と語らい交わることを毎日訓練するならば、神についてのあなたの認識は必ず増し加わり、神の心意をもっとよく把握できるようになる。あなたは次のように言いなさい。「おお神よ、わたしは自分の本分を尽くすことを望みます。わたしたちの中であなたが栄光を受け、わたしたちからなるこの集団による証しをあなたが喜んでくださるように、わたしは自分の全存在をただあなたに捧げます。わたしがあなたを真に愛し、満足させ、あなたをわたしの目標として追求することができるように、わたしたちの中で働いてください」。あなたがこの重荷を負う時、神は必ずあなたを完全にする。自分の恩恵のためだけに祈るのではなく、神の心意に従い神を愛するために祈るべきである。これが最も真なる祈りである。あなたは神の心意に従うために祈るのか。

あなたがたは以前は祈り方を知らず、祈りに関することを無視した。現在は祈りの訓練に最善を尽くさなければならない。あなたの内にある力を呼び起こして神を愛することができなければ、どのように祈るべきか。こう言いなさい。「おお神よ、わたしの心はあなたを真に愛することができません。わたしはあなたを愛したいのですが、わたしにはその力がありません。どうすれば良いのでしょうか。あなたがわたしの霊の眼を開き、あなたの霊がわたしの心を動かしますように。わたしがあなたの前に来ると、消極的なものをすべて捨て去り、どのような人や物事にも束縛されることなく、心をあなたの前に完全に曝け出し、わたしの全存在をあなたの前に捧げられるようにしてください。あなたがわたしをどのように試そうと、わたしは用意ができています。今わたしは自分の将来の展望を一切考えることはなく、死のくびきにも縛られていません。あなたを愛する心で、人生の道を求めることを望みます。あらゆる物事、なにもかもすべてがあなたの掌中にあり、わたしの運命もあなたの手の中にあり、わたしの一生そのものもあなたの手の中にあります。今、わたしはあなたを愛することを追い求め、わたしがあなたを愛することを、あなたの許しがあろうとなかろうと、サタンがいかにして邪魔しようと、わたしはあなたを愛する決意をしています」。そのような問題に遭遇した時は、このように祈りなさい。毎日このように祈るならば、神を愛する強さは次第にかき立てられる。

真の祈りにどのように入っていくのか。

祈る時は、心は神の前に静まっていなければならない、真摯でなければならない。神と真に交わり、神に祈っているのだから、美辞麗句で神を欺こうとしてはならない。祈りは神が現在達成したいことを中心としなければならない。一層の啓き照らしを与えるよう神に願い、自分の実状や問題を神の前にさし出して祈りなさい。それには神の前で固めた決意も含まれる。祈りは手順に従うことなく、真摯な心で神を求めることである。神があなたの心を守り、あなたの心がいつも神の前で静かでいられるように神に願いなさい。神があなたを置いた環境において、あなたが自分を知り、自分を嫌い、自分を捨て去り、それにより神との正常な関係を持つことができ、真に神を愛する者となるように神に願いなさい。

祈りの重要性とは何か。

祈りは人間が神と協力する方法のひとつであり、人間が神を呼び求める手段のひとつであり、人間が神の霊に動かされる過程である。祈りのない者は霊のない死人であると言える。そのような人には神に心を動かされる能力が欠けている証拠である。祈りがなければ、正常な霊的生活を送ることはおそらく不可能で、ましてや聖霊の働きに付き従うことなどできない。祈りがいないことは、神との関係を絶ち切ることで、神の承認を得ることは不可能であろう。神を信じる者として、祈れば祈るほど、つまり神に動かされれ動かされるほど、決意で満たされるようになり、神から新たな啓きを受けることがさらにできるようになる。その結果、このような人だけが早く聖霊により完全にされることができる。

祈りが達成すべき成果とは何か。

人は祈りを実践し、祈りの重要性を理解することができるかもしれないが、祈りが効果的であることは、単純なことではない。祈りとはひととおりの動作を行うことでも、手順に従うことでも、神の言葉を暗唱することでもない。すなわち、祈りとは何らかの言葉をオウム返しに繰り返すことでも他人を真似ることでもないのである。祈りにおいて、人は心を神にさらけ出して、心が神に動かされるように、心を神に捧げることでできる状態に達しなければならない。祈りが効果的であるためには、祈りは神の言葉を読むことに基づいていなければならない。神の言葉の中から祈ることによってのみ、人はさらに啓きと照らしを得ることができる。真の祈りは次のように表出する。神が要求することすべてを求める心を持ち、さらに神が要求することを果たしたいと願う。神が憎

むことを憎み、それを基礎に、それについてある程度の理解を得、神が解き明かす真理についてある程度の認識と明瞭性をもつ。祈りに続いて決意と信仰、認識、実践の道があるときのみ、それを真の祈りと呼ぶことができ、このような祈りだけが効果的であり得る。しかし、祈りは神の言葉の享受の上に打ち立てられなければならない、神の言葉の中で神と交わるという基盤の上に確立されなければならない。心は神を求め、神の前で静まることができなければならない。このような祈りは、すでに神との真の交わりの段階に入っているのである。

祈りの最も基礎的な知識

1. 何でも思いついた言葉をやみくもに述べてはならない。心に重荷があるべきである。つまり、祈る時には目標がなければならない。
2. 祈りには神の言葉が含まれていなければならない。すなわち、祈りは神の言葉に基づいていなければならない。
3. 祈る時は、時代遅れの事柄を蒸し返してはならない。あなたの祈りは神の現在の言葉に関するものでなければならず、祈るときは心の奥底の考えを神に伝えなさい。
4. 集会での祈りには一つの中心が必要であり、それは必然的に聖霊による現代の働きである。
5. あらゆる人が取りなしの祈りを習得しなければならない。これは神の旨への配慮を示す方法の一つでもある。

個人の祈りの生活は、祈りの重要性和基礎知識を理解することを基盤としている。日常生活において、自分の欠点のために頻繁に祈り、自分のいのちの性質の変化が起こるように祈り、神の言葉について自分が認識していることを基礎として祈りなさい。各自が自分の祈りの生活を確認すべきであり、神の言葉を知るために祈り、神の働きを知ることが求めて祈るべきである。自分の個人的な状況を神の前にさらけ出し、自分の祈り方にこだわり過ぎることなく実際的にならなくてはならない。要は、真の認識を得ることと、神の言葉を実際に体験することである。霊的生活に入ることを追求する者は、様々な方法で祈ることができなければならない。黙祷、神の言葉を熟考すること、神の働きを知るようになることなどは、どれも目的のはっきりとした霊的交わりの働きの例である。それは正常な霊的生活に入ることを達成するためであり、神の前における自分の状況を絶えず向上させ、いのちにおいて更に大きな発展を遂げるように人を導く。要するに、あなたが行うことはすべて、それが神の言葉の食べ飲みであれ、黙って祈ること

であれ、大声で宣言することであれ、あなたが神の言葉と働き、神があなたにおいて達成しようとしていることを明瞭に理解できるようになるためである。さらに重要な事として、あなたが行うことはすべて神が要求する基準に到達するためと、あなたのいのちをさらに高く上げるために行われるということである。神が人間に要求する最小限のことは、人間が心を神に開くことができることである。人が神に真の心を捧げ、心の中にある本音を告げるならば、神はその人において働くことをよしとする。神が望むのは人の曲がった心ではなく、純粹で正直な心である。人が神に心から話さないならば、神はその人の心を動かすことも、その人において働くこともない。したがって、祈りの核心は心から神に話し、自分の欠点や反抗的な性質を神に告げ、ありのままの自分を神の前に完全に曝け出すことである。そうして初めて、神はあなたの祈りに関心を抱く。そうでなければ神はあなたから顔を隠す。祈りの最低基準として、心を神の前で平静に保つことができなければならず、また心が神から離れてはならない。おそらくこの期間には、これまでより新しく高い識見を得ることはないかもしれないが、そうであれば祈りを用いて現状を維持しなければならない。後戻りしてはならない。これが達成すべき最小限である。それすら成し遂げられないならば、それはあなたの靈的生活が正しい軌道上にない証拠である。その結果、あなたは当初のビジョンを持ち続けることができなくなり、神への信仰を失い、それに次いであなたの決意は弱まる。靈的生活に入ったか否かは、祈りが正しい軌道上にあるかどうかにより示される。あらゆる人がこの現実性に入っていくべきであり、祈りにおいて自らを意識的に訓練する働きをしなければならない。消極的に待っているのではなく、意識的に聖霊に動かされることを求めなければならない。そうして初めて、真に神を求める人となるのである。

祈りを始める時は、無理をし過ぎず、一度に何もかも成し遂げることを望んではならない。口を開けばすぐに聖霊に動かされたり、啓き照らされたり、神が恵みを授けてくれるなどと期待して大それた要求をすることはできない。そんなことは起こらない。神は超自然的なことは行わないのである。神は時に応じて人の祈りを叶える。また、時にはあなたが神の前に忠実であるか否かを見るために、あなたの信仰を試すこともある。祈る時には、信仰、根気、決意が必要である。ほとんどの人が祈りの訓練を始めてすぐに聖霊に動かされないため、失望してしまう。それではいけない。粘り強くなくてはならない。聖霊の動きに、また追い求め探究することに集中しなければならない。実践の道が間違っている時があり、また個人的な動機と観念が神の前で揺るぎなく立っていることができない時もあり、そのために神の霊があなたを動かさないのである。また、神

はあなたが忠実であるか否かを確かめることもある。要するに、訓練においては、さらに高い代償を払わなければならないのである。実践の道から逸脱していることが分かれば、祈り方を変えればよい。あなたが誠実な心で求め、受けることを望むかぎり、聖霊があなたを現実性の中へと導くのは確実である。誠実な心で祈るが、特に動かされたと感じないこともある。その場合、あなたは信仰に依り頼み、神があなたの祈りを見ていることを信頼しなければならない。祈りにおいては不屈の忍耐が必要である。

正直な人であり、心の中にあるごまかしを取り除くために神に祈りなさい。常に祈りを通して自分を清め、祈りを通して神の霊に動かされなさい。そうすれば、あなたの性質は次第に変化する。真の霊的生活とは祈りの生活である。それは聖霊に動かされる生活である。聖霊に動かされる過程は、人間の性質を変える過程である。聖霊に動かされない生活は霊的生活ではなく、宗教儀式的生活に過ぎない。聖霊に頻繁に動かされ、啓かれ照らされる者だけが、霊的生活に入った人である。人の性質は、人が祈るにつれて変化し続ける。神の霊に動かされれば動かされるほど、人はそれだけ積極的で従順になる。また、人の心も次第に清められ、その人の性質も次第に変化する。これこそが真の祈りの成果である。

神の最新の働きを知り、神の歩みに従え

現在、あなたがたは神の民になることを追い求め、正しい道への全面的な入りを始めるべきである。神の民になることは、神の国の時代へ入ることを意味する。今日、あなたがたは神の国の訓練へと正式に入り始め、あなたがたの未来の生活は以前のように怠慢でいい加減なものではなくなる。以前のように生きるならば、神が求める基準に達することはできない。緊迫感がないのであれば、それはあなたに自分を改善する願望がなく、あなたの追求はまごつき混乱しており、あなたは神の旨を満足させられないことを示している。神の国の訓練に入ることは、神の民の生活を始めることを意味する。あなたはそうした訓練を受け入れる覚悟があるか。緊迫感をもつ覚悟があるか。神の鍛錬の下で生きる覚悟があるか。神の刑罰の下で生きる覚悟があるか。神の言葉があなたに臨み、あなたを試すとき、あなたはどう行動するのか。あらゆる事実直面したとき、あなたは何をするのか。過去において、あなたはいのちに重点を置いていなかった。そして今日、あなたはいのちの現実に入り、いのちの性質の変化を追い求めなければならない。それが神の国の民によって達成されなければならないことである。神の民である者はみないのちをもち、神の国の訓練を受け入れ、いのちの性質の変化を追い求めなけれ

ばならない。それが神の国の民に対して神が求めることである。

神の国の民に対する神の要求は次のとおりである。

1.神が託す任務を受け入れなければならない。つまり、神による終わりの日の働きで語られた言葉をすべて受け入れなければならない。

2.神の国の訓練に入らなければならない。

3.自分の心が神によって感動することを追い求めなければならない。あなたの心が完全に神へと立ち返り、正常な霊的生活があれば、あなたは自由の領域で生きることになり、それは神の愛の配慮と加護のもとで生きingことを意味する。神の配慮と加護のもとで生きて初めて、あなたは神のものになる。

4.神によって得られなければならない。

5.地上における神の栄光の顕示とならなければならない。

以上の五点があなたがたに託すわたしの任務である。わたしの言葉は神の民に向けて語られており、もしもあなたにこれらの任務を受け入れる気がないのであれば、わたしは強制しない。しかし、もしも誠実に受け入れるなら、あなたは神の旨を行なうことができる。今日、あなたがたは神が託す任務を受け入れ始め、神の国の民になること、そして神の国の民であるために求められる基準に達することを追い求める。これが入りの第一歩である。神の旨を完全に行なうことを望むなら、これら五つの任務を受け入れなければならない、これらを達成することができれば、あなたは神の心にかない、神は必ずやあなたを大いに用いるだろう。今日重要なことは、神の国の訓練に入ることである。神の国の訓練への入りには、霊的生活が関わっている。これまで、霊的生活について語られたことはなかったが、今日、神の国の訓練に入り始める中、あなたは霊的生活へと正式に入ることになる。

霊的生活とはどのような生活なのか。霊的生活とは、あなたの心が神へと完全に立ち返り、神の愛に思いを馳せることができる生活である。それは神の言葉の中で生きる生活であり、心を占めるものは他になく、今日の神の旨を把握することができ、そして自分の本分を尽くすべく、今日の聖霊の光によって導かれる生活である。人と神とのそのような生活こそが霊的生活である。もしも今日の光に従うことができなければ、神との関係において距離が開いたのであり、関係が絶たれたことさえあり得る。そして、あなたには正常な霊的生活がないのである。神との正常な関係は、今日の神の言葉を受け入

れるという基盤の上に築かれる。あなたには正常な霊的生活があるのか。神との正常な関係があるのか。あなたは聖霊の働きに従う人なのか。今日の聖霊の光に従うことができ、神の言葉の中にある神の旨を把握し、これらの言葉に入ることができるなら、あなたは聖霊の流れに従う人である。聖霊の流れに従わなければ、あなたは間違いなく真理を追求しない人である。自分を改善する願望がない人の中で聖霊が働く機会はなく、その結果、そうした人たちは決して力を奮い起こせず、常に消極的である。今日、あなたは聖霊の流れに従っているか。聖霊の流れの中にいるか。消極的な状態から脱したか。神の言葉を信じる人、神の働きを基盤とする人、今日の聖霊の光に従う人はみな聖霊の流れの中にいる。神の言葉は疑問の余地なく真実で正しいと信じるなら、そして神が何を言おうとその言葉を信じるなら、あなたは神の働きへの入りを追い求める人であり、このようにして神の旨を成就させる。

聖霊の流れに入るには、神との正常な関係をもたなければならず、まずは消極的な状態から抜け出さなければならない。常に群衆に従い、心が神からあまりに遠く離れた人がいる。そのような人には自分を改善したいという願望がなく、追い求める基準はあまりに低い。神を愛し、神に得られるのを追い求めることだけが神の旨である。自分の良心だけを使って神の愛に報いようとする人もいるが、それでは神の旨を満たせない。追い求める基準が高ければ高いほど、よりいっそう神の旨にかなう。正常な人、神への愛を追い求める人として、神の国に入って神の民の一人になることは、あなたがたの真の未来であり、それはこの上ない価値と意義をもつ人生であって、あなたがた以上に祝福されている人はいない。なぜわたしはそう言うのか。それは、神を信じない人は肉のために生き、サタンのために生きているが、今日あなたがたは神のために生き、神の旨を行なうために生きているからである。あなたがたの人生にはこの上ない意義があるとわたしが言うのはそのためである。神によって選ばれたこの人々の集団だけが、この上なく有意義な人生を生きることができる。地上の誰もそのような価値と意義のある人生を生きることはいない。神に選ばれ、神に引き上げられているために、またそれ以上に、あなたがたに対する神の愛ゆえに、あなたがたは真の人生を把握しており、この上なく有意義な人生をどう生きるかを知っている。これはあなたがたの追求が優れているからではなく、神の恵みのためである。あなたがたの霊の目を開いたのは神であり、あなたがたの心を感動させ、神の前に出るという幸運を与えたのは神の霊だった。神の霊があなたがたを啓いていなければ、あなたがたは神のどこが美しいかがわからず、神を愛することもできないだろう。人々の心が神へと立ち返ったのは、ひとえに神の霊が彼ら

の心を感動させたからである。神の言葉を享受しているとき、あなたの霊が感動し、自分は神を愛さないわけにはいかない、あるいは自分の中に大きな力があり、自分に捨てられないものは何もないと覚えることがある。このように覚えるならば、あなたは神の霊によって感動し、心が神へと完全に立ち返ったのである。そしてあなたは神に祈り、このように言うだろう。「神よ。わたしたちは本当にあなたによって予定され、選ばれました。あなたの栄光はわたしに誇りを与え、自分が神の民の一人であることを光栄に感じさせます。わたしはあらゆるものを費やし、あらゆるものを捧げてあなたの御旨を行ない、わたしのすべての年月と一生の努力をあなたに献上します」。このように祈るとき、あなたの心には神への果てしない愛と真の服従がある。あなたはこのような経験をしたことがあるか。神の霊によって頻繁に感動すると、人は祈りの中で特に進んで自分を神に捧げようとする。「神よ、わたしはあなたの栄光の日を見ること、あなたのために生きることを望みます。あなたのために生きることに価値や意義のあることはなく、サタンや肉のために生きたいという願望は少しもありません。今日あなたのために生きられるようにしてくださることで、あなたはわたしを引き上げてくださいます」。このように祈るとき、自分は神に心を捧げずにはいられず、神を得なければならず、生きている間に神を得ないまま死ぬのは耐えられないと覚えるだろう。そのような祈りを唱えると、あなたの中には尽きせぬ力があり、あなたはその力がどこから来るのかわからない。あなたの心の中には無限の力があり、神はとても美しく、愛する価値があるという感覚をもつ。神によって感動するとこのようになる。こうした経験をした人はみな神によって感動したのである。神によって頻繁に感動する人には、いのちに変化が起こる。彼らは決意することができ、自ら進んで完全に神を得ようとする。心の中で神への愛がさらに強くなり、心は完全に神へと立ち返り、家族、世間、複雑な人間関係、そして自分の未来を顧みることがなくなり、一生の努力を神に捧げようとする。神の霊によって感動した人はみな真理を追い求める人であり、神によって完全にされる希望をもつ人である。

あなたは自分の心を神に立ち返らせたのか。あなたの心は神の霊によって感動したのか。そのような経験をしたことがないのであれば、そして、そのように祈ったことがないのであれば、それはあなたの心に神の居場所がないことを示している。神の霊によって導かれ、神の霊によって感動した人はみな神の働きを有しており、そのことは、神の言葉と神の愛がその人の中に根付いたことを示す。中には、「祈るとき、わたしはあなたほど真剣ではなく、神によってそれほど感動することはありません。瞑想して祈ると

き、時々神は美しいと感じ、心が神によって感動するくらいです」と言う人がいる。人の心より重要なものはない。あなたの心が神へと立ち返ったなら、あなたの全存在が神へと立ち返ったことになり、その際あなたの心は神の霊によってすでに感動しているだろう。あなたがたの大半はそのような経験をしたことがあり、ただ各自の経験の深さが同じではないというだけである。中にはこのように言う人がいる。「わたしは祈りの言葉をさほど口にせず、ただ他の人々の交わりに耳を傾けますが、そうするとわたしの中に力が湧いてきます」。これは、あなたが内面において神によって感動したことを示している。内面において神によって感動した人は、他の人の交わりを聞くと鼓舞される。鼓舞するような言葉を聞いても心がまったく感動しないのであれば、聖霊の働きがその人の中にないことを証明している。そうした人の中に渴望はなく、それは決意がない証拠であり、ゆえにそのような人には聖霊の働きがない。神によって感動した人は、神の言葉を聞くと反応を起こす。神によって感動していなければ、その人は神の言葉に関わっておらず、それらと無関係であり、啓かれることができない。神の言葉を聞いても反応しなかった人は、神によって感動しなかった人である。そのような人は聖霊の働きがない人である。新しい光を受け入れられる人はみな感動し、聖霊の働きを有している。

あなた自身を評価しなさい。

- 1.あなたは聖霊の現在の働きのただ中にいるか。
- 2.あなたの心は神に立ち返ったか。神によって感動したか。
- 3.神の言葉があなたの中に根付いたか。
- 4.あなたの実践は神の要求の基盤の上に築かれているか。
- 5.あなたは聖霊の現在の光による導きの下で生きているか。
- 6.あなたの心は古い観念によって支配されているか、それとも神の現在の言葉によって支配されているか。

これらの言葉を聞いて、あなたがたの中にどのような反応が生じただろうか。長年にわたって信仰してきて、あなたは神の言葉を自分のいのちとしているのか。以前の墮落した性質に変化があったのか。いのちをもつとはどういうことか、いのちをもたないとはどういうことかを、今日の神の言葉にしたがって認識しているか。それはあなたがたにとって明らかなのか。神に従う中で最も重要なのは、すべては神の現在の言葉に拠らねばならないということである。いのちへの入りを追い求めているのであれ、神の旨を

成就させることを追い求めているのであれ、すべては神の現在の言葉を中心にしなければならぬ。あなたが交わり、そして追い求めるものが神の現在の言葉を中心にしていなければ、あなたは神の言葉を知らない人であり、聖霊の働きを完全に失っている。神が望むのは神の歩みに従う人である。あなたが以前に理解したことがどれほど素晴らしく、また純粋なものであっても、神はそれを望んでおらず、あなたがそうしたことを脇へのけられないなら、それは将来におけるあなたの入りにとって大きな障害になるだろう。聖霊の現在の光に従える人はみな祝福されている。過去の人々も神の歩みに従ったが、今日まで従うことはできなかった。これは終わりの日の人々の祝福である。神が自分をどこへ導こうともそれに付き従うほど、聖霊の現在の働きと神の歩みに従える人たちは、神に祝福される人である。聖霊の現在の働きに従わない人たちは神の言葉の働きに入っておらず、どれほど働こうとも、苦しみがどれほど大きくとも、どれほど駆け回ろうとも、そのどれも神には意味がなく、神はそうした人を賞賛しない。今日、神の現在の言葉に従う人はみな聖霊の流れの中にある。神の現在の言葉を知らない人は聖霊の流れの外にあり、そのような人は神に賞賛されない。聖霊が現在発する言葉から離れた奉仕は肉の奉仕であり、観念の奉仕であり、それが神の旨にかなうのは不可能である。宗教的観念の中で生きるなら、その人は神の旨にかなうことを何一つ行なえず、たとえ神に奉仕しても、それは想像や観念の中での奉仕であり、神の旨に従う形で奉仕することはまったくできない。聖霊の働きに従えない人は神の旨を理解せず、神の旨を理解しない人は神に奉仕できない。神は自身の旨にかなう奉仕を望んでおり、観念や肉の奉仕を望まない。聖霊の働きの歩みに従うことができないのであれば、その人は観念の中で生きている。そのような人の奉仕は妨害と混乱を引き起こし、そのような奉仕は神に真っ向から反している。そのため、神の歩みに従えない人は神に奉仕することができない。神の歩みに従えない人は間違いなく神に逆らっており、神と相容れることができない。「聖霊の働きに従う」とは、今日の神の旨を理解し、神の現在の要求に従う形で行動すること、今日の神に服従して付き従うことができ、神が発する最新の言葉に従う形でのちに入ることを意味する。聖霊の働きに従い、聖霊の流れの中にいるのはそうした人だけである。そのような人は神の賞賛を受け、神を目の当たりにできるばかりでなく、神の最新の働きから神の性質を知ることができ、そして人の観念や不従順、人の本性と本質を神の最新の働きから知ることでもある。さらに、奉仕する中で自分の性質を徐々に変えることができる。このような人だけが神を得ることができ、真の道を本当に見つけた人である。聖霊の働きによって淘汰される人は、神の最新の働きに従うことができず、神の最新の働きに反逆する人である。そのような人が公然と神に反対するのは、

神がすでに新しい働きを行ない、神の姿が彼らの観念の中にあるものと同じではないからである。その結果、公然と神に反対し、神について判断を下し、そのため神は彼らを嫌悪し、拒絶する。神の最新の働きについて認識をもつのは簡単なことではないが、神の働きに従い、神の働きを求める心構えがあれば、その人は神を見、聖霊の最新の導きを得る機会に恵まれるだろう。神の働きにわざと反対する人は、聖霊の啓きや神の導きを受けられない。そのため、神の最新の働きを受けられるか否かは、神の恵みと、その人の追求と、その人の意図にかかっている。

聖霊が現在発する言葉に従える人はみな祝福されている。そのような人が過去どうであったか、聖霊が人々の中でどのように働いていたかは問題ではない。神の最新の働きを得た人は最も祝福され、今日の最新の働きに従えない人は淘汰される。神は新しい光を受け入れられる人を望んでおり、神の最新の働きを受け入れ、それを知る人を求めている。貞節な乙女でなければならないと言われるのはなぜか。貞節な乙女は聖霊の働きを求め、新たな物事を理解することができ、さらには、古い観念を脇へのけて今日の神の働きに従うことができる。今日の最新の働きを受け入れるこの人々の集団は、神によってはるか昔に予定された人たちであり、人々のなかで最も祝福されている。あなたがたは神の声を直接聞き、神の出現を目の当たりにするので、天地を通じて、時代を通じて、あなたがた、つまりこの集団以上に祝福された人はいない。これはすべて神の働きの故であり、神の予定と選択の故であり、また神の恵みの故である。もしも神が語らず、言葉を発しなかったなら、あなたがたの状況は今日のようにあり得ただろうか。それゆえ、神にすべての栄光と賛美あれ。これはひとえに神があなたがたを引き上げるからである。これらのことを念頭に置くな、依然として消極的でいられるだろうか。力を奮い起こすことがいまだにできないだろうか。

神の言葉の裁き、刑罰、打撃、そして精錬を受け入れることができ、またそれ以上に、神が託す任務を受け入れられることは、はるか昔に神が予め定めたことなので、刑罰を受けるときはあまり悲嘆してはならない。あなたがたの中でなされた働き、あなたがたに授けられた祝福、そしてあなたがたに与えられたすべてのものを取り去ることは誰にもできない。宗教の人々はあなたがたとの比較に耐えられない。あなたがたには聖書に関する偉大な専門知識がなく、宗教理論もないが、神があなたがたの中で働いたので、過去の時代の誰よりも多くのものを得た。つまり、これがあなたがたの最大の祝福である。そのため、あなたがたは神に対してさらに献身的でなければならず、よりいっそう神に忠実でなければならない。神があなたを引き上げるので、あなたはますます努力

せねばならず、靈的背丈を整えて神が託す任務を受け入れなければならない。神から与えられた場所にしっかり立ち、神の民の一人になることを追い求め、神の国の訓練を受け入れ、神によって得られ、最終的には神への栄光の証しとならねばならない。あなたにその決意があるのか。このような決意があれば、あなたは最後に間違いなく神によって得られ、神への栄光の証しとなるだろう。託されたおもな任務は神によって得られること、そして神への栄光の証しになることだと、あなたは理解しなければならない。それが神の旨である。

聖霊の現在の言葉は聖霊の働きの動きであり、この期間に聖霊が絶えず人を啓くことこそ、聖霊の働きの動向である。では、今日における聖霊の働きの動向はどういったものか。それは民を神の現在の働きへと導くこと、正常な靈的生活へと導くことである。正常な靈的生活に入るにはいくつかの段階がある。

1.まず、神の言葉に自分の心を注がねばならない。過去の神の言葉を追い求めてはならず、それを研究したり今日の言葉と比較したりしてはならない。その代わり、神の現在の言葉に心を完全に注がねばならない。過去の神の言葉、靈的書物、あるいは説教の記録を読むことを依然として望み、聖霊の現在の言葉に従わない人がいれば、それは最も愚かな人である。神はそのような人を忌み嫌う。今日の聖霊の光を進んで受け入れようとするなら、神が現在発する言葉に心を完全に注ぐこと。これが最初に成し遂げなければならないことである。

2.神が現在語る言葉を基礎として祈り、神の言葉に入り、神と親しく交わり、神の前で決意し、自分がどのような基準を達成したいのかを定めなければならない。

3.聖霊の現在の働きを基礎として、真理に深く入ることを追求しなければならない。過去の時代遅れの発言や理論に執着してはいけない。

4.聖霊によって感動することを求め、神の言葉に入らなければならない。

5.今日聖霊が歩む道へ入ることを追求しなければならない。

聖霊によって感動することをどのように求めるのか。重要なことは神の現在の言葉の中で生き、神の要求を基に祈ることである。このように祈れば、聖霊は必ずやあなたを感動させる。神が現在語る言葉を基礎として求めないなら、それは無益である。あなたはこう言って祈るべきである。「神よ。わたしはあなたに逆らい、あなたに多くの借りがあります。わたしは大変不従順であり、あなたに満足していただくことがどうしてもできません。神よ。どうかわたしをお救いください。わたしは最後まであなたに奉仕す

ることを願い、あなたのために死ぬことを望みます。あなたはわたしを裁き、罰しますが、わたしに不満はありません。わたしはあなたに逆らっているので、死に値します。そうならば、すべての人がわたしの死の中にあなたの義なる性質を見ることができるでしょう」。このように心から祈るとき、神はあなたの言葉を聞き、あなたを導く。聖霊の現在の言葉を基に祈らないなら、聖霊があなたを感動させる可能性はない。神の旨に従って祈り、神が今日行おうと望むことに従って祈るなら、あなたはこのように言うだろう。「神よ。わたしはあなたが託される任務を受け入れ、あなたが託される任務に忠実であることを望みます。そして、自分の一生を喜んであなたの栄光に捧げるつもりですが、そうすることで、わたしの行なう一切のことが神の民の基準に到達できます。わたしの心があなたによって感動しますように。あなたの霊がいつまでもわたしを照らし、わたしの行なうすべてのことがサタンに恥をもたらし、わたしが最後にあなたのものとされることを望みます」。あなたがこのように祈れば、つまり神の旨を中心とする形で祈れば、聖霊は必ずやあなたの中で働く。祈りの言葉がどれほど長いかは問題ではない。重要なのは、あなたが神の旨を把握するかどうかである。あなたがたはみな次のような経験をしたことがあるかもしれない。集会で祈っているさなかに聖霊の働きの動きが頂点に達し、すべての人の力を湧き上がらせることがある。祈りながら悲痛な泣き声とともに涙を流し、神の前で良心の呵責に圧倒される人もいれば、自分の決意を示し、誓いを立てる人もいる。これが聖霊の働きによって達成される効果である。今日、すべての人が自分の心を完全に神の言葉に注ぐことが重要である。過去に語られた言葉に集中してはならない。以前来たものに依然としてしがみつくな、聖霊があなたの中で働くことはないだろう。これがいかに重要か、あなたはわかっているのか。

聖霊が今日歩く道をあなたがたは知っているのか。上に挙げたいいくつかの点は、現在と将来において、聖霊によって達成されることである。それらは聖霊が歩く道であり、人が追求すべき入りである。いのちに入るとき、少なくとも神の言葉に心を注ぎ、神の言葉の裁きと刑罰を受け入れることができなければならない。心は神を切望せねばならず、真理への深い入りと神が要求する目標を追い求めなければならない。あなたにその力があるならば、それはあなたが神によって感動し、あなたの心が神に立ち返り始めたことを示している。

いのちへの入りの第一歩は、神の言葉に自分の心を完全に注ぐことである。その次の一歩は、聖霊によって感動することを受け入れることである。聖霊によって感動することを受け入れると、どのような効果が生まれるのか。それは、より深遠な真理を渴望し

、求め、探求できるようになること、そして積極的なやり方で神と協力できるようになることである。今日、あなたは神と協力する。それはつまり、あなたの追求と祈り、そして神の言葉の交わりには目的があり、あなたは神の要求に従う形で本分を尽くすということである。神との協力はそれ以外にない。神に行動させることについて語るだけで、何の行動も起こさず、祈りも求めもしないのであれば、これは協力と呼べるだろうか。あなたの中に協力というものが少しもなく、目的をもって入りの訓練をしないなら、あなたは協力していない。「すべては神の予定次第です。すべては神自身によってなされます。神がなさらないのであれば、どうして人にできますか」という人がいる。神の働きは正常であり、まったく超自然的なものではなく、あなたが積極的に求めて初めて、聖霊は働きを行なう。なぜなら、神が人に強制することはないからである。あなたは神に働きを行なう機会を与えなければならない。あなたが追い求めることも入ることもせず、心にほんのわずかな渴望もなければ、神に働きを行なう機会はない。あなたはどの道を通じて、神によって感動することを求められるのか。祈りを通じて、そして神に近づくことを通じてである。しかし憶えておきなさい。最も重要なのは、神の語る言葉を基にしなければならないということである。神によって頻繁に感動するなら、あなたが肉の奴隷になることはない。夫、妻、子供、そして金といったものは、どれもあなたを縛ることができず、あなたはただ真理を追求し、神の前で生きることを望む。その時、あなたは自由の領域で生きる人になるだろう。

性質が変化した人とは神の言葉の現実に入った人である

聖霊が人の中で働く第一歩は、まず何より人間の心を入りや出来事や物事から引き離して神の言葉へ導き入れ、神の言葉には疑いの余地が一切なく完全に真実であることを、人が心の中で信じるようにすることである。神を信じているのであれば、神の言葉を信じなければならない。長年にわたり神を信じてきたのに、聖霊が歩む道に気づかないままなら、あなたは本当に信者なのか。正常な人間生活、つまり神との正常な関係がある正常な人間生活を実現するには、まず神の言葉を信じなければならない。聖霊が人の中で行なう働きの第一歩を、あなたが達成していないのであれば、あなたには何の基盤もない。最も小さな原則にさえ達することができなければ、あなたはどのようにして前途を歩むつもりか。神が人間を完全にする正しい道に足を踏み入れることは、聖霊による現在の働きの正しい道に入るという意味であり、聖霊が歩む道に足を踏み入れるという意味でもある。目下のところ、聖霊が歩む道とは、神の現在の言葉である。このように、聖霊の道に足を踏み入れるのであれば、その人は受肉した神の現在の言葉に従い、それ

を飲み食いしなければならない。受肉した神が行なう働きは言葉の働きであり、あらゆる事が受肉した神の言葉から始まり、すべては受肉した神の言葉の上、その現在の言葉の上に築かれる。受肉した神について確信することであれ、あるいは受肉した神を知ることであれ、その一つひとつが受肉した神の言葉により多くの努力を注ぐことを求めている。さもないと、人は何一つ成し遂げることができず、その人には何も残らない。神の言葉を飲み食いすることを基礎とし、それによって神を知り、神を満足させるようになることでのみ、人は徐々に神との正常な関係を築くことができる。人にとって、神の言葉を飲み食いし、それを実践すること以上に、神とのよりよい協力は存在しない。このような実践を通じ、人々は神の民の証しにおいてもっともよく立つことができる。神の現在の言葉の本質を理解し、それに従えるとき、その人は聖霊によって導かれる道を生きており、神が人を完全に正しい軌道に乗っている。それまでは、ただ神の恵みを求めていれば、あるいは安らぎと喜びを求めていれば、人は神の働きを得ることができた。しかし今は違う。受肉した神の言葉がなければ、その言葉の現実がなければ、人は神の承認を得ることができず、神によって一人残らず淘汰される。正常な霊的生活を実現させるには、まず神の言葉を飲み食いし、それを実践に移してから、それを基に神との正常な関係を確立させなければならない。あなたはどのように協力するのか。神の民の証しにおいてどうしっかり立つのか。神との正常な関係をいかに築くのか。

次に挙げるのは、日常生活においてあなたが神と正常な関係にあるかどうかを確かめる方法である。

1. あなたは神自身の証しを信じているか。
2. 神の言葉は真実であり、絶対に誤りがないと、あなたは心の中で信じているか。
3. あなたは神の言葉を実践する人か。
4. 神が託す使命に忠実か。神が託す使命に忠実であるべく、あなたは何をすべきか。
5. あなたが行なうすべてのことは、神を満足させ、神に忠実であるためのものか。

上に挙げた各項目により、自分が現段階において神と正常な関係にあるかどうかを検討することができる。

神から託された任務と約束を受け入れ、聖霊の道に従うことができるなら、あなたは神の旨に従っている。あなたの中で聖霊の道は明瞭だろうか。現在、あなたは聖霊の道

に従って行動しているか。あなたの心は神に近づいているか。聖霊の最新の光と歩調を合わせたいと望んでいるか。神に得られたいと願っているか。地上における神の栄光の現われになりたいと望んでいるか。神が自分に求めることを成し遂げる決意があるか。神の言葉が語られるとき、あなたの中に協力する決意、神を満足させる決意があれば、そしてそれがあなたの心構えであれば、神の言葉があなたの中で実を結んだことを意味する。あなたにそうした決意がなく、何の目標もないのであれば、あなたの心がいまだ神によって感動していないということである。

ひとたび神の国の訓練へと正式に入ると、その人に対する神の要求はより高い水準に達する。そうしたより高い要求は、どの点において見ることができるのか。以前、人々にはいのちがないと言われていた。今日、彼らはいのちを求め、神の民になること、神に得られること、そして神によって完全にされることを求めている。それがより高い水準ではないのか。実際のところ、人々に対する神の要求は以前よりも単純である。効力者になることや死ぬことは求められておらず、唯一の要求は神の民になることだけである。これはより単純なことではないか。行なう必要があるのは、自分の心を神に捧げて神の導きに従うことだけであり、そうすればすべてが結実する。それはとても難しいと、どうしてあなたは感じるのか。今日語られているいのちへの入りは、以前よりも明瞭である。過去、人々は混乱し、真理の現実とは何かを知らなかった。実際のところ、神の言葉を聞いて反応し、聖霊による啓きと照らしを受け、神の前で完全にされ、性質が変化した人はみな、いのちをもっている。神は死んだ物体でなく、生きている存在を求めている。あなたが死んでいるのであれば、あなたにいのちはなく、神はあなたに語らないし、ましてや神の民の一員としてあなたを引き上げることもない。神に引き上げられ、神からかくも大きな祝福を得たということは、あなたがたがみないのちをもつ人であることを示しており、いのちをもつ人は神のもとから来るのである。

いのちの性質の変化を追い求めるにあたり、実践の道は単純である。実体験において聖霊の現在の言葉に従い、神の働きを経験できるなら、あなたの性質は変わることができる。聖霊が何を言おうとそれに従い、それを求めるなら、あなたは聖霊に従う人であり、あなたの性質に変化が生じる。人の性質は、聖霊の現在の言葉とともに変化する。あなたがいつも昔の経験や過去の規則にしがみつくなれば、あなたの性質は変化できない。すべての人が正常な人間性の生活に入るよう、聖霊による今日の言葉が求めているにもかかわらず、あなたがあくまで外面的な物事に固執し、現実について混乱してそれを真剣に捉えないのであれば、あなたは聖霊の働きに歩調を合わせられなかった人、聖霊

による導きの道に入っていない人である。あなたの性質が変化できるかどうかは、あなたが聖霊の現在の言葉に歩調を合わせられるかどうか、あなたに真の認識があるかどうか次第である。これは、あなたがたが以前に理解していたこととは異なる。あなたがたが理解していた性質の変化とは、早合点しがちな自分が神の鍛錬によって不注意に話すことをやめた、というものである。しかし、それは変化の一面に過ぎない。現時点で最も重要なのは、聖霊の導きに従うことである。神が何を言おうとそれに従い、服従すること。人は自分の性質を変えることができず、神の言葉による裁きと刑罰、苦難と精錬を経験するか、あるいは神の言葉による取り扱い、懲らしめ、そして刈り込みを受けなければならない。そうして初めて、その人は神への従順と忠誠を実現することができる、もはや神に対していい加減ではなくなる。人の性質が変わるのは、神の言葉による精錬のもとである。神の言葉による暴露、裁き、懲らしめ、そして取り扱いを受けることでのみ、その人はあえて軽率に行動することがなくなり、平静沈着になる。最も重要な点は、神の現在の言葉、および神の働きに従えることであり、たとえそれが人間の観念と一致しない場合でも、それらの観念を脇にのけて進んで従うことができる、ということである。過去、性質の変化について話すとき、それは主として自分を捨て去れること、肉が苦しむのを甘受すること、自分の肉体を懲らしめること、そして肉の好みを自分から取り除くことを指していた。それが性質の変化の一種だというのである。だが今日、性質の変化の真の現われは、神の現在の言葉に服従し、神の新たな働きを真に認識することだと、誰もが知っている。このようにして、自分の観念に彩られた、神に関する以前の理解は消し去られ、その人は神に対する真の認識と服従を成し遂げることができる。性質の変化については、それ以外に真の現われは存在しない。

いのちへの入りに対する人々の追求は神の言葉に基づいている。以前は、すべては神の言葉ゆえに成し遂げられると言われていたが、その事実を見た者は誰もいない。もしも現在の歩みを経験することへと入るなら、あなたにとってすべてが明瞭になり、あなたは将来の試練に向けて素晴らしい基盤を築いていることになる。神が何を語ろうと、神の言葉への入りにだけ集中しなさい。これから人々を罰し始めると神が言うのであれば、神の刑罰を受け入れなさい。神が人々に死ぬことを求めるのであれば、その試練を受け入れなさい。あなたが神の発する最新の言葉の中で常に生きているなら、神の言葉は最後にあなたを完全にする。神の言葉に入れば入るほど、あなたはすぐさま完全にされる。わたしが交わりに次ぐ交わりの中で、神の言葉を知ってそこに入るよう、あなたがたに求めるのはなぜか。神の言葉を追い求めて経験し、その言葉の現実に入って初め

て、聖霊はあなたの中で働く機会を得る。したがって、あなたがたはみな、神が働きを行なうあらゆる手段への参加者であり、あなたがたの苦しみがどの程度であろうと、最後に全員「記念品」を受け取ることになる。あなたがたが最終的に完全になることを遂げるには、神のすべての言葉に入らなければならない。聖霊が人々を完全にするのは、一方的なことではない。聖霊は人々の協力を求め、誰もが意識的に聖霊と協力することを必要とする。神が何を語ろうと、神の言葉への入りにだけ集中しなさい。それがあなたがたのいのちにとってより有益なものになる。すべてはあなたがたが性質の変化を遂げるためである。あなたが神の言葉に入るとき、あなたの心は神によって感動し、働きのこの段階において神が達成しようと望むすべてのことを知ることができ、それを成し遂げる決意をもつ。刑罰の時ににおいて、それは働きの手段だと考え、神の言葉を信じなかった人がいる。その結果、彼らは精錬を経験せず、何一つ得ることも理解することもないうまま刑罰の時から抜け出した。疑いの片鱗も抱かず、それらの言葉へ真に入った上で、神の言葉は誤りのない真理であり、人類は罰せられるべきだと言った人もいた。彼らはその中で一定期間苦闘し、自分の将来と運命を捨て去った。そしてそこから抜け出すと、彼らの性質はいくらか変化を遂げ、神についてのより深い理解を得ていた。刑罰から抜け出た人はみな神の素晴らしさを感じ、働きのその段階が自分に下る神の大いなる愛を体現していること、そしてそれが神の愛による征服と救いであることに気づいた。彼らはまた、神の思いは常に善であり、神が人において行なうすべてのことは憎しみでなく愛から生じると言った。神の言葉を信じなかった者、神の言葉に目を向けなかった者は、刑罰の時に精錬を受けておらず、その結果、聖霊は彼らと共におらず、彼らは何も得なかった。刑罰の時に入った者は精錬を受けたものの、聖霊は彼らの中に隠れて働きを行っていた。そしてその結果、彼らのいのちの性質は変わったのである。外面的にはたいへん積極的で、一日中朗らかさで一杯のように見える人もいたが、彼らは神の言葉による精錬の状態に入っておらず、ゆえにまったく変わらなかった。それは神の言葉を信じなかった結果である。あなたが神の言葉を信じないのであれば、聖霊はあなたの中で働きを行なわない。神は自身の言葉を信じるすべての人の前に現われ、神の言葉を信じて受け入れる人は神の愛を得ることができる。

神の言葉の現実へと入るには、実践の道を見つけ、神の言葉をどう実践すべきかを知らなければならない。そうすることでのみ、あなたのいのちの性質に変化が生じる。またその道を通じてでなければ、神によって完全にされることができず、そのようにして神によって完全にされた人だけが、神の旨にかなうことができる。新たな光を受けるに

は、神の言葉の中で生きなければならない。聖霊によって感動しても、それが一度だけならまったく役に立たない。もっと深くに進まなければならないのである。一度しか感動していなければ、その人の中で熱情が生じ、探求することを望むものの、それは決して長続きしない。そのような人は、聖霊によって絶えず感動しなければならない。わたしは過去何度も自分の望みを口にした。それはつまり、神の霊が人々の霊を感動させることで、彼らがいのちの性質の変化を追い求めるようになること、また彼らが神によって感動することを求めつつ、自分の欠点を認識し、神の言葉を経験する過程で自分の中の不純物（独善、傲慢、観念など）を捨てることである。新たな光を積極的に受ければそれでいいと考えてはならない。あなたは否定的な物事をも一切捨てなければならないのである。あなたがたは積極的な側面から入らなければならない一方で、否定的な側面から見れば、すべての不純物を自分から取り除く必要がある。絶えず自分を検証し、自分の中にどの不純物がまだ残っているのかを確かめなさい。人類の宗教的な観念、意図、希望、独善、傲慢といったものは、どれも不潔なものである。自分の内側に目を向け、あらゆるものを神によるすべての暴きの言葉と一緒に並べ、自分がどの宗教的観念をもっているかを確かめなさい。本当に認識して初めて、あなたはそれらを捨て去れる。中には、「今は聖霊の現在の働きによる光に従うだけで十分だ。他のことで悩む必要はない」と言う人がいる。そうであれば、宗教的観念が生じたとき、あなたはそれらをどう取り除くのか。今日の神の言葉に従うのは簡単なことだと思っているのか。もしもあなたが宗教の人であれば、あなたの宗教的観念や、あなたの心にある伝統的な神学理論に妨害されることがあり得る。そしてそうした物事が生じるとき、それはあなたが新しい物事を受け入れるのを妨げる。それらはどれも本当の問題である。聖霊の現在の言葉を追求するだけであれば、あなたに神の旨を満たすことはできない。聖霊の現在の光を追い求めると同時に、自分がどの観念や意図を抱いているのか、自分にどのような人間の独善があるのか、どの振る舞いが神への反抗なのかを認識すべきである。そしてそうした物事をすべて認識した後、それらを捨て去らなければならない。以前の行動や振る舞いを捨てさせるというのはひとえに、聖霊が今日語る言葉に従えるようにさせるためである。性質の変化が神の言葉を通じて成し遂げられる一方、それは人間の協力を必要とする。神の働きがあれば人間の実践もあり、両者はともに不可欠である。

将来の奉仕の道において、あなたはどうすれば神の旨を満たせるだろうか。重要な点は、いのちへの入りを追い求めること、性質の変化を追い求めること、そして真理へのより深い入りを追い求めることであり、それが完全にされ、神に得られる道である。あ

あなたがたはみな、神からの任務を受け取る人だが、それはどのような任務なのか。それは次なる段階の働きに関連しており、次なる段階の働きは、全宇宙で行なわれるさらに偉大な働きとなる。ゆえに今日、あなたがたはいのちの性質の変化を追い求め、それによって自分が将来、神が働きを通じて栄光を得ることを真に証明する者となり、神の将来の働きの模範とならなければならない。今日の追求はひとえに将来の働きの基礎を築くためであり、それによってあなたは神によって用いられ、神への証しを行なえるようになる。それを自分の追求の目標とするなら、あなたは聖霊の臨在を得られるようになる。自分の追求に対して高い目標を設定すればするほど、あなたはより完全にされることができる。あなたが真理を追求すればするほど、聖霊は働きを行なう。自分の追求に活力を注げば注ぐほど、あなたはより多くのものを得る。聖霊はその人の内なる状態に応じて人を完全にする。中には、自分は神に用いられることや完全にされることを望まず、自分の肉が安全で、いかなる不幸にも苦しまなければそれでいい、と言う人がいる。また、神の国に入ることを望まず、底なしの穴に降りることを望む人もいる。その場合、神もあなたの望みを叶えるだろう。あなたの追い求めることが何であれ、神はそれを実現させるのだ。では、あなたは現在何を追い求めているのか。それは完全にされることか。あなたの現在の行動や振る舞いは、神によって完全にされ、神に得られるためなのか。あなたは日常生活の中で、絶えず自分をこのように評価しなければならない。ただ一つの目標の追求に自分の心を残らず捧げれば、神は確実にあなたを完全にする。それが聖霊の道である。聖霊が人々を導く道は、その人たちの追求によって獲得される。あなたが神によって完全にされ、神に得られることを渴望すればするほど、聖霊はあなたの中で働きを行なう。求めなければ求めないほど、あなたは否定的になって退歩し、聖霊から働きを行なう機会を奪う。そして時間が経つにつれ、聖霊はあなたを捨てる。あなたは神によって完全にされることを望んでいるのか。神に得られることを望んでいるのか。神に用いられることを望んでいるのか。あなたがたは、神によって完全にされること、神に得られること、そして神に用いられることのために、すべてを行なうことを追い求めるべきである。それによって宇宙の万物は、あなたがたの中に神の業が現われるのを見ることができる。あなたがたは万物の主人であり、存在するすべてのものの中で、神が自分を通じて証しと栄光を享受できるようにする。そのことは、あなたがたがあらゆる時代の人の中で最も祝福されていることを証明している。

神の前で心を静めることについて

神の前で自分の心を静めることは、神の言葉に入る上で最も重要な段階の一つであり

、現在すべての人が至急入る必要のある課題である。神の前で自分の心を静める境地に入る道は以下の通りである。

- 1.外部の物事から自分の心を取り戻し、神の前で静まり、心を集中して神に祈る。
- 2.神の前で静まった心で、神の言葉を飲み食いし、享受する。
- 3.心で神の愛について黙想・沈思し、神の働きについて熟考する。

まず祈ることから始めなさい。精神を集中して、決められた時間に祈りなさい。時間的にどれほど切迫していても、どれほど多忙でも、またどんなことがあっても、いつものように日々祈り、神の言葉をいつものように飲み食いしなさい。神の言葉を飲み食いしている限り、周りの状況がどうであれ、霊はひととき喜びを覚える。また、周囲の人や出来事や物事に悩まされることもない。常時神のことを心の中で黙想していれば、それ以外の出来事に煩わされることはない。それが、霊的背丈があるということである。まず祈りから始めなさい。神の前で安静に祈るのが最も効果的である。その後は神の言葉を飲み食いし、神の言葉に思いを巡らせ、光を得て、実践の道を見出し、神が発した言葉の目的を知り、偏ることなく理解するよう努めなさい。普段から、外部の物事に心を乱されることなく、心の中で正常に神へと近づき、神の愛について黙想し、神の言葉を熟考しなさい。熟考できるほど心が安らいでおり、どのような環境にいようとも、心の中で神の愛について黙想し、本当に神に近づき、最終的に心の中で神を讃美する程度に達したなら、それは祈りにも勝ることであり、その点においてあなたはある程度の霊的背丈を有している。以上の状態に達することができるなら、それはあなたの心が神の前で真に静まっている証拠である。それが第一段階であり、基本的な訓練である。神の前で静まることができ初めて、人は聖霊によって感動し、聖霊から啓きと照らしを受けることが可能となる。またその時初めて真に神と交わることや、神の旨と聖霊の導きを把握することが可能となる。その際、人は自分の霊的生活において正しい道を歩きだしたことになる。神の前で生きる訓練をしてある程度に達し、それによって自分自身に反抗し、自分自身を忌み嫌い、神の言葉の中で生きられるようになれば、それがまさに神の前で自分の心を静めるということである。自分を忌み嫌い、呪い、自分に反抗することができるのは、神の働きが達成する成果であるが、人間には不可能である。したがって、神の前で自分の心を静めることは、人がただちに入るべき課題である。普段から神の前で自分の心を静めることができないだけでなく、祈る時でさえ心が静まっていない者もいる。これは神の基準からまったくかけ離れ過ぎている。自分の心を神の前で静められなければ、聖霊によって感動することがあり得ようか。神の前で静まることがで

きないのであれば、誰かが来ると気が散り、人が話していても気が散ってしまい、他人が何かをしていれば心がそれに惹きつけられ、ゆえにあなたは神の前で生きる者ではない。あなたの心が神の前で本当に静まっているのであれば、外の世界で何が起きていようとそれに煩わされず、どんな人や出来事や物事にも心を奪われることはない。あなたがこのような境地に入るなら、それらの否定的な状態や、人間の観念、処世哲学、人間同士の異常な関係、意見や考えなどといったすべての否定的なものは自然となくなるだろう。あなたは常に神の言葉を熟考し、あなたの心はいつも神に近づき、神の実際の言葉で満たされているので、そうした否定的な物事は無意識のうちに取り去られる。肯定的な新しい物事があるあなたの心を占めるとき、否定的な古い物事が入る余地はなくなるので、そうした否定的な物事に注目してはならない。そうした物事を操ろうとして努力する必要はない。神の前で静まることに注意を払い、神の言葉をもっと飲み食いして享受し、もっと多くの賛美歌を歌って神を讃え、神があなたに働きかける機会を与えなさい。なぜなら、神は今自ら人々を完全にすること、そしてあなたの心を獲得することを求めているからである。神の霊はあなたの心を感動させる。そしてあなたが聖霊の導きに従って神の前で生きるならば、あなたは神を満足させるだろう。神の言葉の中で生きることにより心を配り、聖霊の啓きと照らしを得るべく真理に関する交わりにより専念するなら、それらの宗教的観念や独善、自惚れは消え去り、神のためにどう自分を費やし、どのように神を愛し、どのように神を満足させればよいかを知るだろう。神以外の物事は、その時無意識のうちに忘れられる。

神の実際の言葉を飲み食いすると同時に、神の言葉を熟考し、神の言葉について祈ることが、神の前で静まることの第一歩である。神の前で真に静まることができるなら、聖霊の啓きと照らしがあなたと共にあるだろう。すべての霊的生活は、神の前で静まることによって達成される。聖霊によって感動することができるためには、まず祈りにおいて神の前で静まらなければならない。神の言葉を飲み食いする際に神の前で静まることによって、啓きと照らしを受け、神の言葉を真に理解することが可能になる。通常の黙想と交わりにおいて、また自分の心で神に近づく際、神の前で静まって初めて、あなたは神と本当に親しくなり、神の愛と神の働きに関する真の認識と、神の意図に対する本当の思慮深さが得られるのである。神の前で普段から静まることのできればできるほど、あなたは一層照らされることができ、自分の墮落した性質、自分に欠けているもの、自分が入るべきこと、自分が担うべき役割、そして自分の欠点がどこにあるのかをより理解できるようになる。それらはどれも、ひたすら神の前で静まることによって成し

遂げられる。神の前にて静まる中で、本当にある程度の深みに達したなら、あなたは霊における何らかの奥義、神が今あなたに為したいと願っていること、神の言葉に関するさらに深い認識、神の言葉の真髄、神の言葉の本質、神の言葉の存在に触れることができ、実践の道をもっと深くかつ正確に理解できるようになる。もしも霊においてある程度の深さまで静まることができなければ、あなたは聖霊によって多少感動するだけだろう。自分の中で力といくつかの喜びや平安を感じるが、それ以上の深みに触れることはないのである。前にも言ったように、人が全力を尽くさないのなら、わたしの声を聞くことも、わたしの顔を見ることも難しい。それは外面的な努力ではなく、神の前にて静まる中で深みに達することを指している。神の前で本当に静まることができる人は、自分を世の一切のしがらみから解き放ち、神に自分を占めてもらうことができる。神の前で静まることのできない人は、みな間違いなく自堕落かつ無節操である。神の前で静まることのできる者たちは、みな神の前で敬虔な人々であり、神を待ち望む人々である。いのちに注意を払い、霊の交わりに気を配り、神の言葉を渴望し、真理を追求するのは、神の前で静まっている人だけである。神の前で静まることに一切注意を払わず、神の前で静まることを実践しない者はみな、完全に世に執着し、いのちをもたない見かけだけの人である。このような人たちが神を信じると言っても、それはただ口先だけのことである。最終的に神が完全にし、完成させる者たちとは、神の前で静まることのできる人である。したがって、神の前で静まる人は、大いなる祝福の恵みを受けている人である。日頃神の言葉を飲み食いする時間を少ししか取らない人、外部の出来事にすっかり心を奪われている人、いのちの入りに注意を払わない人はみな、将来成長する見込みのない偽善者である。神の前で静まることができ、真に神と交わることができる者たちこそ神の民である。

神の前に来て神の言葉を自分のいのちとして受け入れるには、まず神の前で静まらなければならない。神の前で静まっている時にのみ、神はあなたを啓いて理解させる。神の前で静まれば静まるほど、人は神の啓きと照らしをより一層得ることができる。これらのことには、敬虔さと信仰をもつことが要求される。このようにしてのみ人間は完全になることができる。霊的生活に入るための基本的な訓練は、神の前で静まることである。あなたの霊的訓練はどれも、あなたが神の前で静まっている時にのみ効果的なものとなるだろう。自分の心を神の前で静められないのであれば、聖霊の働きを受けることはできない。あなたが何をしているかに関わらず、あなたの心が神の前で静まっているなら、あなたは神の前で生きる者である。あなたが何をしているかに関わらず、あなた

の心が神の前で静まり、神に近づいているなら、それはあなたが神の前で静まる者だという証拠である。他人と話をしているとき、また歩いているときに「わたしの心は神に近づいており、外部の物事にとらわれてない。そしてわたしは神の前で静まっていることができる」と言うことができる。それが神の前で静まっている者である。あなたの心を外に引きつける物事と接触してはならない。また、あなたの心を神から引き離し得る人たちと接してはならない。あなたの心が神に近づくのを邪魔し得る物事は、それが何であれすべて捨てるか近づかないようにしなさい。そのほうがあなたのいのちにとってより有益である。今は聖霊による大いなる働きの時である。神が自ら人々を完全にしていく時である。今この瞬間に神の前で静まることができなければ、あなたは神の玉座の前に立ち返る者ではない。神以外の物事を追求するのであれば、神によって完全にされる可能性は一切ない。今日、神の発するこのような言葉を聞くことができながら、神の前で静まることができない者たちは、真理を愛さない人、神を愛さない人である。今自分を神に捧げないのであれば、いったいいつ捧げるのか。自分を神に捧げることは、神の前で心を静めることである。これが真の捧げ物である。今本当に神に心を捧げる者は誰であれ、神によって完全にされることが間違いなく可能である。何であれ、あなたを煩わせる物事は一切ない。あなたに対する刈り込みであれ、取り扱いであれ、またあなたが挫折や失敗に直面しようとも、あなたの心は常に神の前で静まっているべきである。人が自分をどう扱おうと、あなたの心は神の前で静まっているべきである。逆境、苦難、迫害など、どのような状況に直面しようとも、また様々な試練があなたに降りかかろうと、あなたの心は常に神の前で静まっているべきである。これが完全にされる道である。あなたが本当に神の前で静まっている時にのみ、あなたにとって神の現在の言葉が明瞭になる。そうして聖霊の啓きと照らしを逸脱せずに一層正しく実践でき、神の意図をますます明確に把握し、自分の奉仕において一層明瞭な方向性をもち、聖霊による感動と導きをもっと正確に把握でき、聖霊の導きの下で生きることが保証される。これらが神の前で真に静まることで達成される成果である。人々が神の言葉を明瞭に理解しておらず、実践する道をもたず、神の意図を把握できなければ、あるいは実践における原則を欠いているのであれば、それはその人の心が神の前で静まっていないからである。神の前で静まることの目的は、真剣かつ実践的になり、神の言葉の正確さと明瞭さを探求し、最終的に真理の理解と神の認識に至ることである。

自分の心が神の前で絶えず静まっていないのであれば、神はあなたを完全にすることができない。ある人に意志がなければ、それは心がないことと同じであり、心のない人

は神の前で静まることができない。そのような人は、神がどれほど多くの働きを行なうのかも、どれほど多くのことを語るのかも知らず、またそれらを実践する方法も知らない。こうした者は心のない人間ではなかろうか。心のない人間が神の前で静まれるだろうか。神は心のない人間を完全にすることができない。そのような者は獣に属する。神は極めて明確かつ徹底して言葉を語ったが、あなたの心は依然として感動せず、あなたは神の前で静まることができない。これでは動物と同じではないか。神の前で静まることを実践する中で、迷ってしまう人もいる。彼らは料理すべき時に料理せず、働くべき時に働かず、ひたすら祈り、瞑想する。神の前で静まることは、料理しないことや働かないこと、生活を見捨てることを意味するのではなく、あらゆる正常な状態において神の前で自分の心を静められること、および心の中に神の居場所をもてることを意味する。祈る時は、神の前できちんと跪いて祈りなさい。働く時や食事を用意する時は、自分の心を神の前で静め、神の言葉を熟考するか賛美歌を歌うかしなさい。どのような環境に置かれようと、あなたには実践の道がある。あらゆる手を尽くして神に近づき、神の前で心を静めなさい。状況が許すならば、一心に祈りなさい。状況が許さなければ、自分の手で仕事しながら、心の中で神に近づきなさい。神の言葉を飲み食いすることができるときは、神の言葉を飲み食いしなさい。祈ることができる時は祈りなさい。神について黙想することができる時は、神について黙想しなさい。自分が置かれた環境に基づいて、あらゆる手を尽くして入りの訓練をしなさい。何も無い時には神の前で静まれるが、何かが起きるとすぐさま心がそれを追いかける人もいる。それは神の前で静まることではない。経験すべき正しい方法とは、いかなる場合も自分の心が神から離れず、外部の人や出来事、物事に煩わされないことである。神の前で静まっている人とは、このような人のことである。集会で祈っている時は、自分の心を神の前で静めることができるものの、交わりの時になると、神の前で心を静められず、考えが乱れる人もいる。それは神の前で静まるということではない。ほとんどの人が現在こうした状態にあり、彼らの心は神の前で常に静まることができない。したがって、あなたがたは、この分野の訓練に一層努め、いのちの経験の正しい軌道に一步一步入り、神によって完全にされる道を歩む必要がある。

完全にされるべく、神の旨に配慮せよ

あなたが神の旨に配慮すればするほど、あなたの重荷は大きくなり、その重荷が大きければ大きいほど、あなたの経験は一層豊かになる。あなたが神の旨に配慮するとき、神はあなたに重荷を与え、あなたに委ねた務めについてあなたを啓いてくださる。神が

あなたにこの重荷を与えると、あなたはそれに関連するすべての真理に留意しながら、神の言葉を飲み食いするようになる。あなたが兄弟姉妹のいのちの状態に関する重荷を負っているとすれば、それは神があなたに委ねた重荷であり、あなたは日々の祈りの中で常にその重荷を負うことになる。神の行いはあなたに課せられており、あなたは神が望むことを喜んで行なう。これが、神の重荷を自らの重荷として背負うということである。この時点であなたは、神の言葉を飲み食いする際、この種の問題に集中し、そして考えるようになる―「どうやってこの問題を解決すればいいだろうか。兄弟姉妹が解放され、霊的喜びを得られるようにするにはどうすればいいだろうか」と。また交わりにおいてもこうした問題の解決に集中し、神の言葉を飲み食いする際は、そうした問題に関する言葉の飲み食いに集中する。そして神の重荷を負いつつ、神の言葉を飲み食いする。ひとたび神の要求を理解すれば、あなたは歩むべき道を明確に理解できるようになる。これがあなたの重荷によってもたらされる聖霊の啓きと照らしであり、またあなたに与えられた神の導きでもある。わたしがこう言うのはなぜか。重荷がなかったとしたら、あなたは不注意に神の言葉を飲み食いすることになるが、重荷を負いつつ神の言葉を飲み食いすれば、神の言葉の本質を把握し、自分の道を見出し、神の旨に配慮することができる。だから神に祈るときは、自分にもっと多くの重荷を与え、より大きな任務を委ねてくださるよう祈りなさい。前途により多くの実践の道を得て、神の言葉の飲み食いをより効果的に行い、神の言葉の本質を把握し、より一層聖霊によって感動することができるようになるために。

神の言葉を飲み食いし、祈りを実践し、神の重荷を受け容れ、神が自分に委ねる任務を受け容れることはすべて、自分の前途を拓くためである。神の委託による重荷が大きければ大きいほど、神によって完全にされることが容易になる。神に仕える中で、召し出されても他者と協力したがない者がいるが、そうした者は怠惰で、ただ快樂に溺れることを望んでいる。他者と協力して神に仕えることを求められれば求められるほど、得られる経験が多くなる。そしてより多くの重荷と経験を持つことで、完全にされる機会も増えることになる。そのためあなたが誠意を持って神に仕えることができれば、あなたは神の重荷を心に留めるようになるので、神によって完全にされる機会を一層多く得られるようになる。現在完全にされているのは、まさにこうした人々である。聖霊があなたに触れるほど、あなたは神の重荷を心に留めるために割く時間が増え、より一層神によって完全にされ、より神のものとされて、最終的には神に用いられる者となる。現在、教会のための重荷をまったく担っていない者もいる。そうした者は怠惰で不注意

で、自らの肉のことしか考えていない。彼らは極度に自分勝手に、盲目でもある。この事実を明確に理解できないなら、あなたは重荷を担わないだろう。あなたが神の旨に配慮すればするほど、神があなたに託す重荷も大きくなる。自分勝手な者はそうした物事に煩わされたがらず、代償を払いたがらず、その結果として、神に完全にされる機会を失うのだ。これは自らを害する行為ではないだろうか。あなたが神の旨に配慮する者であれば、教会のために真の重荷を抱くようになる。実際、それは教会のために担う重荷というよりも、自分自身のいのちのために担う重荷と呼んだほうがいい。なぜならあなたが教会のために抱くこの重荷は、あなたがその経験によって神に完全にされるためのものだからだ。したがって、教会のために最大の重荷を担う者、いのちに入るための重荷を負う者は、神によって完全にされる者である。このことを明確に理解しているか。あなたが属する教会が砂のように乱れているにもかかわらず、あなたが憂慮も懸念もせず、兄弟姉妹が神の言葉を普通に飲み食いしていなくても見て見ぬふりさえしているなら、あなたは何の重荷も負っていない。そのような者は神に好まれない。神が好む者は、義に飢え渴き、神の旨に配慮している。だから、あなたがたはたった今神の重荷を心に留めるべきである。神がその義なる性質をすべての人間に表したら、それから神の重荷を心に留めようというって待っていてはならない。そのときにはすでに手遅れではないか。今は神に完全にされる好機である。もしこの機会を逃したなら、あなたは一生後悔するだろう — カナンの良き地に入れずに一生後悔して、自責のうちに死んだモーセのように。神がその義なる性質をすべての民に表すと、あなたは後悔の念に満たされることになる。神があなたを罰しないとしても、あなたは自責の念で自らを罰するだろう。このことに納得しない者もいるが、信じないなら、ただ見ていればいい。これらの言葉を全うすることだけを目的としている者もいるのだ。あなたは、この言葉のために身を捧げる意志があるだろうか。

神によって完全にされる機会を求めず、誰よりも早く完全にされるよう努めないならば、最終的には後悔の念で満たされることになるだろう。完全にされる絶好の機会、絶好の時は、今である。神に完全にされることを熱心に求めなければ、神の働きが完了した時にはすでに手遅れで、あなたは機会を逸したことになる。どれほど強く願っても、神がもう働きを行っていないければ、どんな努力を払っても、決して完全にされることはできない。あなたはこの機会をとらえ、聖霊がその大いなる働きを行っている間に協力する必要がある。この機会を逃せば、どれほど努めても二度と機会是与えられない。中には「神よ、私は喜んであなたの重荷を心に留め、あなたの旨を喜んで満たします」と

叫ぶ者もいるが、そうした者には実践の道がないので、重荷は長く続かない。目の前に道があるなら、あなたは一步ずつ経験を得ていき、その経験は体系的に整理されたものになるだろう。1つの重荷が完了すると、別の重荷が与えられる。あなたのいのちの経験が深まるほど、あなたの重荷も深みを増す。人によっては、聖霊に触れられたときだけ重荷を負い、しばらくして実践の道がなくなると、それ以降は重荷を負わない者もいる。あなたの重荷は、ただ神の言葉を飲み食いするだけで抱けるものではない。あなたは多くの真理を理解することで分別を身に付け、真理を用いて問題を解決できるようになり、神の言葉と旨についてのより正確な認識を得るだろう。こうしたことによってあなたは重荷を抱えるようになり、そうやって初めて、正しい働きを行えるようになる。重荷を抱えていても真理を明確に理解していなければ、それもまた意味がない。あなたは神の言葉を直接体験し、それを実践する方法を知らなければならない。自分自身が現実に入って初めて、他者に施し、他者を導き、神に完全にされることができるようになるのだ。

『道(4)』には、あなたがたは皆神の国の民であり、それはあらゆる時代の前に神が予定したことで、誰も奪うことはできない、と記されている。また、神はあらゆる者が神に用いられ完全にされることを望んでおり、あらゆる者が神の民として立つことを求めており、人は神の民となることで初めて神の旨を満たせる、とも書かれている。当時、あなたがたは皆この問題について交わりを持ち、神の民の基準に基づく入りの道について話し合った。そのため当時聖霊が行った働きは、あらゆる者を否定的な状態から連れ出して肯定的状態へと導くことであった。当時の聖霊の働きによる結果の傾向として、あらゆる者が神の民として神の言葉を享受できるようになり、さらにあなたがた一人一人が、自分たちはあらゆる時代の前に定められた神の民であること、サタンはあなたを奪えないということを、明確に理解できるようになった。そのためあなたがたは皆、次のように祈った。「神よ、私はあなたの民となることを望みます。それはあらゆる時代の前にあなたが定められたことであり、あなたがその地位を私たちに授けてくださったからです。私たちはその立場から、あなたを満足させるつもりです」。あなたがそのように祈るたび、聖霊があなたに触れた。それが聖霊の一般的な働き方であった。現在、あなたは祈り、神の前で心を静めるよう訓練することで、いのちを追い求め、神の国の訓練に入ることを求めなければならない。これが第1段階である。現在の神の働きは、すべての人が正しい道に入り、正常な霊的生活を送り、真の経験をし、聖霊によって動かされ、そうしたことを基盤として、神の委託を受け容れるようにするためのもので

ある。神の国の訓練に入ることの目的は、あなたがたのすべての言葉、行為、動作、思い、考えが神の言葉に入るようにすること、そしてより頻繁に神に触れることであな
あなたがたの中に神への愛が生まれるようにすること、さらに神の旨の重荷をより多く引
き受けることですべての人が神に完全にされる道に入り、正しい方向へ進むようにする
ことである。この神に完全にされる道を歩み始めたならば、あなたは正しい方向へ進ん
でいる。あなたが自分の思いや考えだけでなく誤った意図をも修正できるようになり、
自らの肉に配慮することをやめて神の旨に配慮出来るようになり、誤った意図が生じた
ときもそれに心を奪われることなく、神の旨に従って行動できるようになったなら、
そのような変化をあなたが実現できるなら、あなたはいのちの経験の正しい道を歩ん
でいる。あなたの祈りの実践の道が正しければ、祈りの中で聖霊があなたに触れるだろ
う。あなたが祈るたび、聖霊があなたに触れ、あなたは神の前で心を静めることができる
ようになる。あなたが神の言葉の一節を飲み食いするたびに、現在神が行っている働き
を把握し、どのように祈り、協力し、いのちに入るべきかを学べるようになったら、そ
のとき初めて、あなたは神の言葉を飲み食いしたことの成果を得られるのである。あな
たが神の言葉によって入りの道を見出し、神の働きの現在の動向と聖霊の働きの傾向を
把握することができるようになれば、それはあなたが正しい道を歩んでいることを意味
する。あなたが神の言葉を飲み食いしていながらもその要点を把握しておらず、その後
も実践の道を見出すことができないなら、それはあなたがまだ神の言葉をどうやって正
しく飲み食いすればよいか知らず、その方法や原則を見出していないことを意味する。
神が現在行っている働きをまだ把握していないなら、神に託される任務を受け入れるこ
とはできないだろう。神が現在行っている働きは、人間が今まさに入り、理解しなけれ
ばいけない働きなのだ。あなたがたはこうしたことを理解しているだろうか。

神の言葉を効果的に飲み食いすれば、あなたの霊的生活は正常になり、どのような試
練に直面し、どのような状況に遭遇し、どのような肉体の病に耐え、どのような兄弟姉
妹との不和や家庭内の問題を経験しようとも、あなたは神の言葉を正常に飲み食いし、
正常に祈り、正常に教会生活を送ることができる。そのすべてを成し遂げることができ
るなら、それはあなたが正しい道を歩んでいることを意味する。人によっては過度に繊
細で根気に欠ける者もいる。そうした者は些細な障害に遭遇すると泣き言を言い、否定
的になってしまう。真理の追求には根気と決意が必要だ。もし今回神の旨を満たすこと
に失敗したなら、自分自身を嫌悪し、次回神の旨を満たすと心の奥で静かに決意でき
なければならない。もし今回神の重荷を心に留めていなかったのなら、将来同じ障害に

遭遇したときには断固として肉に背き、神の旨を満たすと決意を固める必要がある。そうすることで、あなたは称賛に値する者となるのだ。自分自身の思いや考えが正しいかどうかすら知らない者もいるが、そうした者は愚かである。自分の心を抑えて肉に背きたいのなら、まず自分の意図が正しいかどうかを知る必要があり、その後初めて自分の心を抑えることができるようになるのだ。自分の意図が正しいかどうかを知らずに、自分の心を抑えて肉に背くことができるだろうか。肉に背いたとしても、曖昧なやり方になるだけだ。あなたは自分の誤った意図に背くことを知らなければならない。それが自分の肉に背くということなのだ。自分の意図、思い、考えが正しくないことに気づいたら、すぐに方向を変えて正しい道を歩む必要がある。まずこの問題を解決してから、この側面における入りを達成できるよう訓練しなさい。自分の意図が正しいかどうかを最もよく知っているのは自分自身だからである。誤った意図が正され、すべてが神のためとなったなら、自分の心を抑えるという目的を達成したことになる。

現在あなたがたにとって最も重要なことは、神と神の働きについて知ることである。また、聖霊が人間に対してどのように働きを行うかも知らなければならない。これが、正しい道に入るために必須の行いである。あなたがこの重要な点を把握できれば、正しい道に入ることは容易になるだろう。あなたが神を信じ、かつ神を知っていることは、神に対するあなたの信仰が本物であることを意味する。いくら経験を積んでも、最終的にまだ神を知ることができないなら、あなたは間違いなく神に逆らう者である。イエス・キリストのみを信じ、現在の受肉した神を信じない者は皆、罪に定められている。そうした者は皆現代のパリサイ人である。彼らは現在の神を認めず、皆神に背いているからである。そうした者がどれほど献身的にイエスを崇拝しても、すべては無駄であり、神の称賛を受けることはない。神を信じると大声で言いつつ、神に関する正しい認識を心の中に一切持たない者は、皆偽善者である。

神に完全にされることを求めるには、まず神に完全にされるということの意味と、完全にされるために満たすべき条件とを知る必要がある。そうしたことを把握できたら、次に実践の道を追求しなければならない。神に完全にされるためには、一定の素質を備えている必要がある。多くの者はそのような崇高な性質を生まれつき備えてはいないため、代償を払って主体的に努力する必要がある。性質が劣っていればいるほど、一層主体的に努力しなければならない。神の言葉に関する認識が多ければ多いほど、そして神の言葉を多く実践すればするほど、完全にされる道に入れる時期が早まる。祈ることにより、祈りの領域で完全にされることができる。また神の言葉を飲み食いし、その本質

を把握し、その現実性を行動で示すことによって、完全にされることが出来る。神の言葉を日々経験することで、あなたは自分に欠けている物事を知るようになるだけでなく、自分の致命的な欠点や弱点を認識し、神に祈り嘆願するようになるはずだ。そうすることで、あなたは徐々に完全にされる。完全にされる道とは、祈りを捧げること、神の言葉を飲み食いすること、神の言葉の本質を把握すること、神の言葉の経験に入ること、自分に何が欠けているかを知ること、神の働きに従うこと、神の重荷を心に留め神への愛をもって肉を捨てること、そして兄弟姉妹との交わりを頻繁に持つことである。こうした交わりはあなたの経験を豊かにし、それが社会的な生活か個人的な生活かを問わず、また大規模な集会か小規模な集まりかを問わず、すべて経験を積み訓練を受けるのに役立つため、それによってあなたは神の前で心を静め、神へと還ることができるようになる。これはすべて完全にされる過程の一部である。前述した、神の言葉を経験するということは、実際にその言葉を味わい、それを行動で示せるということの意味する。それによってあなたは神への一層大きな信仰と愛を得るのである。このようにして、あなたは次第にサタンのような堕落した性質を払拭し、不適切な動機から脱却し、正常な人間らしさを行動で示すようになるだろう。神に対するあなたの愛が大きければ大きいほど、つまりあなたの中で神に完全にされた部分が多ければ多いほど、サタンによって堕落させられた部分は少なくなる。あなたは実際の経験によって、徐々に完全にされるための道に足を踏み入れるだろう。それゆえ、完全にされることを願うなら、神の旨に配慮することと、神の言葉を経験することが特に重要である。

神は自身の心にかなう者を完全にする

今、神は一種の人々の集団、つまり神と協力することに努め、神の働きに従うことができ、神が語る言葉は真実だと信じ、神の要求を実践できる人から成る集団を獲得することを望んでいる。このような人は、心の中に真の認識を有している者たちであり、完全にされることができ、必ずや完全への道を歩める者たちである。完全にされることができない者とは、神の働きをはっきり認識しない人、神の言葉を飲み食いしない人、神の言葉に注意を払わない人、心の中に神への愛がまったくない人である。受肉した神を疑い、受肉した神についていつも確信がなく、その言葉を決して真剣に扱わず、受肉した神を絶えず騙す者は、神に抵抗し、サタンに属する人であり、このような人を完全にする術はない。

完全にされたいことを望むのであれば、まずは神の好意を得なければならない。なぜな

ら、神は自分が好意をもつ者、自身の心にかなう者を完全にすることからである。神の心にかなうことを望むのであれば、神の働きに従う心を持ち、真理の追求に努め、万事において神の吟味を受け入れなければならない。あなたが行なうすべてのことは、神の吟味を経たのだろうか。あなたの意図は正しいだろうか。あなたの意図が正しければ、神はあなたを褒めるだろう。あなたの意図が正しくなければ、あなたの心が愛しているのは神でなく、肉とサタンであることを示している。したがって、あなたは万事において神の吟味を受け入れる手段として、祈りを用いなければならない。あなたが祈るとき、わたしは自らあなたの前に立っているわけではないが、聖霊があなたとともにあり、あなたが祈っているのはわたし自身と神の霊の両方である。あなたはなぜこの肉を信じているのか。あなたが信じているのは、この肉に神の霊があるからである。神の霊がないなら、あなたはこの人を信じるだろうか。この人を信じる時、あなたは神の霊を信じている。この人を畏れる時、あなたは神の霊を畏れている。神の霊への信仰はこの人への信仰であり、この人への信仰は神の霊への信仰でもある。祈るとき、あなたは神の霊が自分とともにあり、神が目の中にいると感じ、それゆえあなたは神の霊に祈る。今日、大半の人は恐ろしさのあまり、自分の行ないを神の前に示すことができない。また、神の肉を欺くことはできても、神の霊を欺くことはできない。神の吟味に耐えられない物事は、どれも真理と一致しないので、捨て去られなければならない。そうしないのは、神に対して罪を犯すことである。だから、祈るときであれ、兄弟姉妹と話して交わるときであれ、自分の本分を尽くして仕事を進めるときであれ、あなたは自分の心を絶えず神の前に晒さなければならない。あなたが自分の役割を果たすとき、神はあなたと共にあり、あなたの意図が正しく、神の家の働きのためである限り、神はあなたが行なうすべてのことを受け入れる。ゆえにあなたは、自分の役割を果たすよう真摯に献身すべきである。あなたが祈るとき、心の中に神への愛があり、神の気遣い、加護、そして吟味を求め、そうしたことがあなたの意図であれば、あなたの祈りには効果がある。たとえば、集会で祈るとき、心を開いて神に祈り、偽りを述べることなく心の思いを神に話すなら、あなたの祈りは必ずや効果的である。心の中で熱心に神を愛しているなら、次のように誓いなさい。「天地と万物の間におられる神よ、わたしはあなたに誓います。わたしが行なうすべてのことをあなたの霊が吟味なさり、どんな時にもわたしを守り、お気遣いくださり、わたしの行なうすべてのことがあなたの前で持ちこたえられますように。万が一にも、わたしの心があなたを愛さなくなったり、あなたを裏切ったりしたならば、わたしを厳しく罰し、呪ってください。この世でも、次の世でも、わたしを赦さないでください」。このように誓う勇気があなたにあるだろうか。そう誓えないのであ

れば、あなたが臆病者であり、依然として自分自身を愛していることを示している。あなたがたにそうした決意があるのか。それが本当にあなたの決意ならば、そのように誓うべきである。あなたにそのような誓いをする決意があるなら、神はあなたの決意を成就させる。あなたが神に誓うとき、神は耳を傾ける。神はあなたの祈りと実践を尺度として、あなたが罪深いか義であるかを判断する。それがあなたがたを完全にする今の過程であり、もしもあなたが、自分が完全にされることを本当に信じているのであれば、自分が行なうすべてのことを神の前に示し、神の吟味を受け入れるだろう。一方、あなたがひどく反抗的なことをしたり、神を裏切ったりしたならば、神はあなたの誓いを成就させる。ゆえに、永遠の滅びであれ、刑罰であれ、あなたに何が起きたとしても、それはあなた自身の問題である。あなたは誓いを立てたのだから、それを守るべきである。誓いを立てても守らないのであれば、あなたは永遠の滅びに陥るだろう。それがあなたの誓いなのだから、神はその誓いを成就させる。祈った後で不安になり、「すべて終わりだ。放蕩や悪事を行ない、世俗の欲にふける機会がなくなった」と嘆く者たちもいる。このような人は依然として世俗の物事と罪を愛しており、間違いなく永遠の滅びに陥る。

神を信仰する者になるというのは、自分が行なうすべてのことを神の前に示し、神の吟味に晒さなければならないということである。自分が行なうすべてのことを神の霊の前に示せても、神の肉の前に示せないのであれば、あなたが神の霊による吟味に晒されていないことを示す。神の霊とは誰のことか。神が証しする人とは誰のことか。両者は同一の者ではないのか。大半の人は両者を別々の存在と見なし、神の霊は神の霊で、神が証しする人物は人間に過ぎないと信じている。しかし、あなたは間違っているのではないか。その人物は誰のために働きを行なうのか。受肉した神を知らない者たちには、霊的な認識がない。神の霊と、受肉した神の肉は一つである。なぜなら、神の霊がその肉の中に具現化されているからである。もしもこの人物があなたに対して不親切ならば、神の霊は親切だろうか。あなたは混乱しているのではないか。現在、神による吟味を受け入れられない者は、誰も神の承認を受けることができず、受肉した神を知らない者は完全にされることができない。自分が行なうすべてのことに目を向け、それを神の前に示せるかどうかを確かめなさい。自分が行なうすべてのことを神の前に示さなければ、それはあなたが悪を行なう者であることを示している。悪を行なう者が完全にされ得るだろうか。あなたが行なうすべてのこと、一つひとつの行ない、一つひとつの意図、一つひとつの反応を神の前に示さなければならない。あなたの日々の霊的生活、つまり

、あなたの祈り、神との親密さ、神の言葉を飲み食いする仕方、兄弟姉妹との交わり、教会における生活、そしてあなたが共同で行なう奉仕さえも、神の前に示して吟味され得る。あなたがいのちの成長を遂げるにあたり、それを助けるのはこのような実践である。神の吟味を受け入れる過程は、清めの過程である。あなたが神の吟味を受け入れられればられるほど、あなたはいつそう清められ、神の旨と一致するので、放蕩に引き込まれることがなくなり、あなたの心は神の前で生きる。あなたが神の吟味を受け入れれば受け入れるほど、サタンの屈辱はますます大きくなり、あなたはさらに肉を捨てることができる。したがって、神の吟味を受け入れることは、人が従うべき実践の道である。あなたが何をしようとも、たとえ兄弟姉妹と交わっているときでさえも、あなたは自分の行ないを神の前に示し、神による吟味を求め、神自身に従うことを目標にすることができる。それにより、あなたが実践することははるかに正しいものとなる。自分が行なうすべてのことを神の前に示し、神の吟味を受け入れなければ、あなたは神の前で生きる人とはなれない。

神に関する認識がない者は、決して神に完全に従うことができない。そのような人は不服従の子である。彼らは野心が強過ぎ、過剰な反抗心が中にあるので、神と自分との間に距離を置き、自ら進んで神の吟味を受け入れようとししない。このような人は、容易に完全にされることができない。神の言葉をどう飲み食いして受け入れるかについて、選り好みする人もいる。そのような人は神の言葉のうち、自分の観念と一致する部分は受け入れるが、一致しない部分は拒絶する。それは神に対する最も露骨な反逆と反抗ではないか。長年にわたって神を信じているにもかかわらず、神に関する認識を少しも得ていないのであれば、その人は不信者である。進んで神の吟味を受け入れる者は、神についての認識を追求する者であり、進んで神の言葉を受け入れる者である。彼らは神の遺産と恵みを授かる者たちであり、最も祝福されている。神は心の中に神の居場所がない者を呪い、そうした人たちを罰して捨てる。あなたが神を愛さないなら、神はあなたを捨て、あなたがわたしの言葉に耳を傾けないなら、神の霊があなたを捨てるだろうと約束する。それが信じられないなら、試してみるがよい。今日、わたしはあなたに実践の道を明らかにするが、それを実践するか否かはあなた次第である。あなたがそれを信じず、実践に移さないなら、聖霊があなたの中で働くかどうか、身をもって知るだろう。あなたが神について認識することを追求しないのであれば、聖霊はあなたの中で働かない。神は、神の言葉を追い求め、それを貴ぶ者たちの中で働きを行なう。あなたが神の言葉を貴べば貴ぶほど、神の霊はますますあなたの中で働く。人が神の言葉を貴べば

貴ぶほど、その人が神によって完全にされる確率も高くなる。神は、真に神を愛する者たち、心が神の前で安らいでいる者たちを完全にする。神のすべての働きを貴び、神の啓示を貴び、神の臨在を貴び、神の気遣いと加護を貴び、神の言葉が自分の現実となり、自分のいのちに糧を施すことを貴ぶのは、いずれも神の心に最もかなうことである。あなたが神の働きを貴ぶなら、つまり、神があなたに対して行なったすべての働きを貴ぶなら、神はあなたを祝福し、あなたが所有するすべてのものを何倍にも増やすだろう。あなたが神の言葉を貴ばないなら、神はあなたの中で働きを行なわず、あなたの信仰に応じてわずかな恵みを与えるか、もしくは、わずかな富であなたを、わずかな安全であなたの家族を祝福するだけだろう。あなたは、神の言葉を自分の現実とし、神を満足させ、神の心にかなうことができるよう努めるべきである。ただ神の恵みを享受するためだけに努力してはならない。信者にとって、神の働きを受けること、完全になること、そして神の旨を行なう者となること以上に重要なことはない。これがあなたの追求すべき目標である。

恵みの時代に人間が追求したものは今や役に立たない。なぜなら、現在ではより高水準の追求が存在するからである。追求されるものはより高尚かつ実践的であり、人間の内面的必要をよりよく満たすことができる。過去の時代において、神は人々に対して今日のように働きを行なわなかった。人々に対して今日ほど多く語ることもなく、彼らへの要求も今日の要求ほど高くはなかった。神が現在あなたがたにこれらのことを語るのは、神の最終的な意図があなたがた、すなわちこの人々の集団に重点を置いていることを示している。あなたが神によって完全にされることを心から望むのであれば、それをあなたの目標の中心として追い求めなさい。あなたが奔走していようが、自分を費やしていようが、何らかの役割を果たしていようが、神が託す任務を受け取っていようが、目標は常に、完全にされて神の旨を満たすこと、そしてそれらの目標を達成することである。もしも誰かが、自分は神によって完全にされることも、いのちに入ることも追求めず、肉の安泰と快樂だけを追い求めると言うのであれば、その人は最も盲目な者である。いのちの現実を追求せず、次の世における永遠のいのちと、この世における安全だけを追求する人は、最も盲目な者である。したがって、あなたが行なうすべてのことは、神によって完全にされ、神に得られることを目的としてなされるべきである。

神が人々の中で行なう働きは、彼らの様々な必要に応じて彼らに施すためのものである。人のいのちが大きければ大きいほど、その人はいっそう多くのものを必要とし、さらに多くのものを追求する。もしこの段階であなたに何も追求するものがないなら、そ

それは聖霊があなたを捨てた証拠である。いのちを追求する者はみな、決して聖霊に捨てられることがない。このような人たちは常に追い求め、常に心の中で渴望している。このような人たちは決して現状の物事に満足しない。聖霊による働きの各段階は、あなたの中で効果を発揮することを目的としているが、あなたが自己満足して何も必要としなくなり、聖霊の働きを受け入れなくなったなら、聖霊はあなたを捨てるだろう。人々は神による日々の吟味を必要としている。彼らは神から施される日々の豊かな糧を必要としている。神の言葉を日々飲み食いすることがなければ、人は対処できるだろうか。神の言葉をどれだけ飲み食いしても満足できず、常に神の言葉を求め、それに飢え渴いているなら、聖霊はその人の中で絶えず働きを行なう。人が渴望すればするほど、その人の交わりからより実践的な物事が生じる。真理を強く求めれば求めるほど、その人は自分のいのちをより早く成長させ、経験豊富になり、神の家の豊かな住人となるだろう。

真心で神に従う者は確かに神のものとされる

聖霊の働きは日毎に変化し、段階毎に高まっている。明日の啓示は今日よりも高く、段階が進むにつれてさらに高まる。これが神が人間を完全に作る働きである。人がこれに付いて行けないのであれば、いつでも取り残されうる。人間が従順な心でいなければ、最後まで従うことはできない。これまでの時代は過ぎ去った。今は新しい時代である。新しい時代には新しい働きがされなければならない。とりわけ、人間が完全にされる最後の時代になると、神はそれまでになく素早く新しい働きをする。それゆえ、人が従順な心を持たないならば、神の足跡を辿ることを困難と感じる。神はいかなる規則に従うこともなく、自身のどの働きの段階をも不変のものとして扱うことはない。むしろ、神の為す働きは常に新しく、常に高みへと登り続ける。神の働きは段階を追うごとに益々実践的になり、益々人間の実際の必要に則したものとなる。人間はこのような働きを経験して初めて、最終的な性質の変化を遂げることができる。人のいのちに対する認識はますます高まり、同様に、神の働きも益々高みへと上る。このようにしてのみ、人は完全にされ、神に用いられるに相応しい者となることができる。神はこのように働いて人間の観念に反論し、覆す一方で、人を高みへ、そしてより現実的な状態、神への信仰の最高の領域へ導き、その結果、最終的に神の旨が成就するのである。故意に反抗する不従順な本質を持つ者は、神が即座に、すさまじい勢いを持って働くこの段階から置いて行かれる。進んで従い、喜んで身を低くする者だけが、道を最後まで進むことができる。このような働きにおいては、あなたがたはみな、どのように従い、自分の観念をどのように脇に置くかを学ぶべきである。進む一步一步において注意深くあるべきである

。不注意であるならば、間違いなく聖霊に拒絶されるような、神の働きを妨害する者となる。この働きの段階を経験する前は、人間の古い規則や法律はあまりに多かったため人間はそれに夢中になってしまい、その結果のぼせ上がり、我を忘れた。これらはみな、人間が神の新しい働きを受け入れる上で障害物となる。人間が神を知る上で敵となる。もし人が服従する心も真理への熱望も持っていなければ、その人は危険な状態にある。もしあなたが、単純な働きと言葉にのみ従い、激しさが深いものは受け入れることができないのであれば、あなたは古いやり方に固執し、聖霊の働きに付いて行くことのできない人である。神の働きは時代ごとに異なるのである。もしあなたが、ある局面では立派に従うが、次の局面になるとそれ程従わないか全く従わないというのであれば、神はあなたを見捨てるだろう。今の段階を神が上がっていくにつれ神に付いて行っているのであれば、次の段階でも神に付いて行かなければならない。そうして初めて、あなたは聖霊に従順な者となる。あなたは神を信じているのだから、絶えず従順でなければならない。従いたい時にだけ従い、従いたくない時は従わないということではいけない。そのような従い方は神に認められない。わたしが語る新しい働きに付いて来ることができず、昔聞いたことに固執するのであれば、どうしてあなたのいのちが進歩できるだろうか。神の働きというのは、神の言葉を通してあなたに施すことなのだ。あなたが神の言葉に従って受け入れるのであれば、聖霊があなたの中で間違いなく働くのである。聖霊はわたしが語る通りに働く。わたしの言う通りを行いなさい。そうすれば聖霊はすぐにあなたの中で働く。わたしはあなたがたのために新たな光を放ち、あなたがたがその光を見て現在の光へ来るようにする。あなたがこの光の中へ入っていく時、聖霊はあなたの中で直ちに働く。「わたしはあなたの言う通りにはしない」などと言う扱い難い人もいるかもしれない。そのような人に言う。あなたの道は先がない。あなたはもうこれまでで、あなたの命は終わる。それだから、自分の性質の変化を経験するときに最も重要なのは、今の光に付いて行くことなのである。聖霊が働くのは神に用いられる特定の人々だけではなく、教会においてそれ以上に働く。聖霊は誰においても働くことができる。今はあなたの中で働いているかもしれないが、やがてあなたはその働きを経験する。そうすると、次は別の人の中で働くかもしれない。その場合、あなたは急いでついて来なければならない。今の光にしっかりついて来るなら、あなたのいのちは更に成長できる。どのような人間であれ、聖霊がその人の中で働いているなら、必ず従いなさい。その人の経験を自分の経験と重ねてそこから学びなさい。そうすれば、あなたは更に高尚なものを受けるであろう。そうすることで、あなたの進歩は更に速まる。これが人間が完全にされる道であり、いのちが成長する道である。完全にされる道には、聖霊の働

きに従うことで到達する。あなたは、神がどのような人を通してあなたを完全にする働きをするかを知らず、どのような人、どのような出来事や物事を通してあなたを獲得し、あなたが識見を得るようにするかを知らない。あなたがこの正しい道を進むことができるのであれば、それはあなたには神によって完全にされる望みが大いにあるということを示している。もしあなたが正しい道を進むことができないのであれば、あなたの将来は暗く、光りがないということである。あなたが正しい道に入れば、全ての事において啓示が与えられる。聖霊が他の人たちに何を啓示するかを問わず、その人達の認識を基盤にして前進し、自らも経験するのであれば、それはあなたのいのちの一部となり、その経験を通して他の人たちに施すことができる。ただ言葉を真似て他の人たちに施す者は何の経験もない者である。まず他の人が受けた啓示や照らしを通して実践の方法を見つけ出し、それから自分の実際の経験や認識を語るようにしなさい。これはあなた自身のいのちに大いに益となる。あなたは、神から出る全ての事に従い、このように経験しなさい。万事において神の旨を求め、全てのことを教訓とし、あなたのいのちが成長するようにしなさい。このように実践するならば、極めて速い進歩が得られる。

聖霊はあなたの実践的経験を通してあなたを啓き、あなたの信仰を通してあなたを完全にする。あなたは完全にされることを本当に願っているか。あなたが神により完全にされたいと本当に願っているのであれば、自分の肉を捨てる勇気を持ち、消極的にも弱ることもなく神の言葉を実行できる。神から出る全てのことに従うことができ、公の場であれ私的な場であれ、あなたの全ての行いは神の前に見せることができるものとなる。あなたが誠実な人間であれば、そして全てのことに於いて真理を実践するのであれば、あなたは全き者とされる。人前でする事と陰ですることが違うような偽りに満ちた者は、進んで完全にされようとはしていない。それは地獄と破滅の子であり、神ではなくサタンに属する者である。神に選ばれる種類の人間ではない。もしあなたの行動や振る舞いが神の前に見せられないものであったり、神の霊に見てもらえるものでない場合、あなたの何かが間違っていることの証拠である。神の裁きと刑罰を受け入れるのでなければ、そして性質の変化に重点を置くのでなければ、完全にされるための道に入ることはできない。もしあなたが本当に神に完全にされたいと願い、神の旨を行いたいと願っているのであれば、一切不平を言わず、あつかましくも神の働きを評価したり判定したりせず、神の全ての働きに従うべきである。これらが神に完全にされるための最低限の要求である。神によって全き者とされることを欲する者に必要なことはこれである。すなわち、全てのことを、神を愛する心で行うこと。「神を愛する心で行う」と

はどういう意味であろうか。それは、あなたの行動や振る舞いが全て、神に見せる事ができるものであるという事である。あなたの意図は正しいので、あなたの行いが正しいかどうかに関係なく、神の前に、そして兄弟姉妹の前に、行動や振る舞いを見せることをあなたは恐れない。あなたは自分のあらゆる意図、考え、思いを神の前に示し、神の吟味を受けなければならない。あなたがこのように実践して入っていくならば、あなたのいのちの進歩は速いであろう。

あなたは神を信じているので、あなたは神の言葉とその働きの全てに信仰を持たなければならない。つまり、あなたは神を信じているので、神に従わなければならないということである。それが出来なければ、あなたが神を信じているかどうかなど問題ではない。もしあなたが長年神を信じており、それでも神に従ったことがないか、神の言葉を全て受け入れたことがないばかりか、神が自分に従うよう求めたり、自分の観念に沿って行動するように求めたりするようであれば、あなたは最も反抗的な人間であり、神を信じない者である。そのような人間が、人の観念とは一致しない神の言葉や働きに従うことなど出来るだろうか。最も反抗的な者とは、意図的に神に逆らい拒絶する者である。そのような者は神の敵であり、反キリストである。そのような者は常に神の新しい働きに対して敵対する態度をとり、従う意志など微塵も示さず、喜んで服従を示すことや謙虚になることなど一度たりともないのである。他の人たちの前で得意になり、誰に対しても従うことをしない。神の前では、自分が説教者として最も長けており、他の人に働きかけることに自分が一番熟練していると考ええる。自分が獲得した宝を決して手放そうとせず、家宝として拝み、説教の題材にし、自分を崇拜するような愚か者への訓戒に用いる。このような人が、教会内に確かに数名存在する。このような人々は、「不屈の英雄」と呼ぶことができ、世代を超えて神の家に留まるのである。彼らは神の言葉（教義）を語ることを自分の最高位の本分と解釈する。何年も、何世代も、彼らは精力的に自らの「神聖で犯すべからざる」本分を続ける。彼らに触れる者は誰ひとりおらず、公然と非難する者もひとりもない。神の家で「王」となり、何代にも亘ってはびこり、他の者を圧制する。このような悪魔の一団は、互いに手を組んでわたしの働きを潰そうとする。このような生きた悪魔をわたしの目の前に生かしておけるだろうか。半分だけ従っている者でさえ最後まで歩き続けることはできないのに、従う気持ちが微塵もないこのような暴君が最後まで歩き続けられないのは尚更である。神の働きは人間によって簡単に獲得されるものではない。人間が全力を尽くしても、その一部だけを得て最後に完全にされるだけである。そうであれば、神の働きを潰そうとしている大天使の後代は

どうであろうか。彼らが神のものとなる望みは更に薄いのではないか。わたしが征服の働きをする目的は、単に征服することそのものにあるのではなく、征服することによって義と不義を明らかにし、人に対する懲罰のための証拠を入手し、邪惡な者を罪に定め、更に、進んで従う者達を完全にするために征服するのである。最後には、全ての人がそれぞれの種類に従って分けられる。完全にされた全ての者には従順に満ちた考えと発想がある。これが最後に完成される働きである。しかし、反抗的なやり方に満ちている者は罰せられ、燃える炎の中に送られ、永遠の呪いの対象となる。時が来れば、過去のいくつもの時代に及ぶ「偉大な不屈の英雄」が最も低い者となり、最も敬遠される「弱く、無力な臆病者」となる。このようにしてのみ、神の義のあらゆる側面を描き出し、人間による少しの反撃も容赦しない神の性質を現わす。唯一これが、わたしの心にある憎しみを鎮める。あなたがたも、これが全く理に叶っていると思わないか。

聖霊の働きを経験する者の全てがいのちを得るわけではなく、この流れの中にいる人々全てがいのちを得るわけではない。いのちは全ての人間が所有できるものではなく、性質の変化は誰にでも簡単に達成できるものではない。神の働きに対する服従ははっきりと見て取れるものでなければならず、それを生きたものとして現わさなくてはならない。表面的な服従は神の承認を得ることができず、自らの性質の変化を求めずに神の言葉の表面的な部分だけに従うのであれば、神の心を喜ばせることはできない。神に対する従順と神の働きに対する服従はひとつであり、同じものである。神に服従するだけで神の働きには服従しない者は従順であるとは見なされない。心から従わずに表面的に媚びへつらう者は尚更である。心から神に従う者は皆、神の働きから得るものがあり、神の性質と働きを理解するようになる。そのような者だけが、本当に神に従順なのである。そのような者は新しい働きから新しい認識を得ることができ、新しい働きから新しい変化を経験する事ができるのである。そのような者だけが、神に認められる。そのような者だけが、完全にされる者であり、性質の変化を経験した者である。神の承認を得る者は、喜んで神に従う者で、神の言葉と働きにも従う者である。このような者だけが正しいのである。このような者だけが、心から神を求め、神を追求しているのである。口先だけで神に対する信仰を語り、実際には呪っている者は、仮面を被った、蛇の毒を持つ、最も信用できない者である。遅かれ早かれ、そのような悪党はその酷く不快な仮面を剥がされる。それが今日為されている働きではないのか。邪惡な人間は常に邪惡であり、決して懲罰の日を逃れることはない。善なる人間は常に善であり、働きが終わる時に明らかにされる。邪惡な者が義と見なされることはなく、義なる者が邪惡な者と見な

されることもない。わたしが誰かを不当な非難に曝すことなどあるだろうか。

いのちが進歩するに従って、常に新たに進入しなければならず、段階ごとに深まる新たな、そして更に高い識見を持たなければならない。これが、全ての人間が進入すべき点である。交わり、説教を聞き、神の言葉を読み、何かに対処したりすることで、あなたは新たな識見を得、新たな啓示を受ける。古い規則に沿って、古い時代に生きてるのではない。常に新たな光の中を生き、神の言葉から迷い出ることはない。正しい道に入るとは、このような事である。表面的に代価を払っても無意味である。日々、神の言葉は更に高い領域に入り、新しい事が日々現れる。人は日々新たな進入が必要である。神は語るとともに、語ったことを全て成就させる。付いて行けなければ遅れてしまう。あなたはあなたの祈りにおいてより深く入らなければならず、神の言葉を飲食することを途切れさせてはならない。あなたが受ける啓きと照らしを深め、あなたの観念と想像は徐々に減少しなければならない。また、判断力を強化し、どんなことに直面しようとも、それについて自分の考えを持ち、自分の観点を持たなければならない。霊において幾つかのことを理解することによって、あなたは外部のことへの洞察力を得、どんな問題の核心をも把握しなければならない。このようなものを備えていないのであれば、どうして教会を率いていくことができるだろうか。文字や教義ばかりを語り、現実も実践方法も伴わないのであれば、しばらくの間しか続けられないであろう。信者になったばかりの人に語るのであれば、辛うじて受け入れられるかもしれないが、しばらくすれば、その信者も多少自分でも経験するようになり、そうなれば、あなたはもうその信者に施すことは出来なくなる。そうなれば、どうして神に用いられるに相応しい者でいるのか。新たな啓示なくして、あなたは働くことができない。新たな啓示のない者は、どのように経験すべきかを知らない者で、そのような者が新しい認識を得ることも新しい経験をする事も決してないのである。そして、いのちを施すことに関しては全く機能できず、神に用いられるに相応しくあることができない。このような者は役に立たず、浪費家でしかない。実際このような者は、働きにおいて全く機能を果たすことができず、何の役にも立たない。機能を果たさないばかりか、教会に無用の負担を多くかける。このような「立派な老人たち」を周りの人たちがこれ以上見なくて良いように、急いで教会を離れる様、忠告する。彼らのような人間は、新しい働きを理解しないばかりか、どこまでも自分の観念に満ちている。教会で何の役割も果たしていない。むしろ、損害を与えて否定的なものをいたるところに蔓延させ、教会にあらゆる過ちと妨害をもたらす程になり、物事の識別ができない人々を混乱と無秩序に巻き込むほどである。これらの

生きた悪魔、邪悪な霊は直ちに教会を去り、教会を駄目にしないようにすべきである。あなたは今日の働きを恐れてはいないかもしれないが、明日の義なる懲罰は恐くないのか。教会には多くの居候も、神の正常な働きを妨害する狼も多くいる。このような者は全て悪魔が送った悪霊であり、何も知らない子羊たちを貪り食おうとする凶暴な狼である。名ばかりは人間と呼ばれるそれらは追放されないと、教会の寄生虫となり、献金を貪り食う蛾となるであろう。このように卑劣で無知で、さもなく、酷く不快な蛆虫は、いつの日か罰せられるのである。

神の国の時代は言葉の時代である

神の国の時代、神は言葉を用いて新たな時代の到来を知らせ、その働きの方法を変え、その時代全体の働きを行う。これが言葉の時代における神の働きの原則である。神はさまざまな視点から語るために肉となって、肉に現れた言葉である神を人間が真に目のあたりにし、神の知恵と驚くべき素晴らしさを目にできるようにした。このような働きは人間を征服し、完全にし、淘汰するという目的をより効果的に達成するために行われており、それが言葉の時代に言葉を用いて働きを行うことの真の意味なのである。こうした言葉を通して、人々は神の働き、神の性質、人間の本質、そして人間が何に入るべきかを知るようになる。言葉を通して、神が言葉の時代に行おうとしている働きの全体が実を結ぶのだ。こうした言葉を通して、人間は明らかにされ、淘汰され、試される。人々は神の言葉を目にし、その言葉を聞き、その言葉の存在を認識した。その結果、人間は神の存在、神の全能性と知恵、そして神の人間への愛と、人間を救いたいという願望とを信じるようになった。「言葉」という語は単純でごく普通かもしれないが、受肉した神の口から出る言葉は宇宙全体を揺るがし、人々の心を変革し、人々の観念と古い性質を変革し、世界全体の古い現れ方を変革する。多くの時代の中で、今日の神だけがこのように働いてきており、そして今日の神だけがこのように語り、このように人間を救いに来る。これ以降、人間は言葉の導きの下に生き、神の言葉により牧され、施しを受けることになる。人々は神の言葉の世界で、神の言葉の呪いと祝福の内に生きている。そしてさらに多くの人々が、神の言葉の裁きと刑罰の下に生きるようになっていく。これらの言葉とこの働きはすべて人間の救いのため、神の旨を成就するため、そして過去の創造による世界の元来の状況を変えるためである。神は言葉をもって世界を創造し、言葉をもって全宇宙の人々を導き、言葉をもって彼らを征服し救う。そして最終的に、神は言葉をもって古い世界全体を終わらせ、その経営（救いの）計画全体を完了させる。神の国の時代全体を通じて、神は言葉を用いて働きを行い、その働きの成果を得

る。神は不思議や奇跡を行うことなく、ただ言葉をとおして働きを行う。これらの言葉によって、人間は養われ、施しを受け認識と真の経験とを得る。言葉の時代の人間は格別の祝福を受けている。肉体的な痛みに苦しむことなく、ただ神の言葉の豊かな施しを享受し、無闇に探し求めたり旅をしたりする必要もなく、安穩の只中から神の出現を目にし、神がその口で話すのを聞き、神が施すものを受け取り、神が自らその働きを行うのを見守っている。これらは過去の時代の人々には享受できなかったことであり、彼らが決して受けることのできなかった祝福なのである。

神は人間を完全にすると決意しており、どの視点から語るにせよ、すべては人々を完全にするためである。霊の視点から語られる言葉は人間には理解し難く、人間は理解能力が限られているため、実践のための道を見つける方法がない。神の働きはさまざまな成果を達成するものであり、神は常に目的を持って働きのそれぞれの段階を行っている。さらに神はさまざまな視点から語ることが不可欠であり、そうすることによってのみ、人間を完全にすることができる。もし神が霊の視点からのみ声を発するなら、働きのこの段階を完了することはできないであろう。神が語る口調から、神がこの人々を完全にすると決めていることがわかる。では、神に完全にされることを望む一人一人にとって、とるべき最初の一步は何だろうか。まず何よりも、神の働きを知らなければならない。今日では新しい方法が神の働きに導入され、時代は推移し、神の働き方も変わり、神の話し方も異なっている。現在は神の働きの方法が変わっただけでなく、時代も変わっている。今は神の国の時代であり、そして神を愛する時代でもある。これは千年神の国の時代の先駆けであり、千年神の国の時代は言葉の時代でもある。言葉の時代、神は多くの方法で語って人間を完全にし、さまざまな視点から語って人間に施す。時代が千年神の国の時代に移行すると、神は言葉を用いて人間を完全にし始め、人間がいのちの現実に入れるようにするとともに、人間を正しい軌道へと導く。人間は神の働きの多くの段階を経験した結果、神の働きが不変ではなく、絶えず発展し深化することを目にしてきた。人々がこれほど長い間経験してきた働きは、繰り返し展開され、何度も変化してきた。しかしどれほど変化しようとも、人間に救いをもたらすという神の目的からその働きが逸れることは一切なく、一万回の変化を経ようとも、元来の目的から外れることは決してない。神の働きの方法がどのように変化しようとも、その働きが真理やいのちから離れることは一切ない。働きが行われる方法の変化は、ただ働きの形式や神が語る視点の変化でしかなく、神の働きの中心的目的に変化があるわけではない。神の口調や働きの方法の変化は、特定の効果を得るために行われる。口調の変化は、働きの背後に

ある目的や原則の変化を意味するものではない。人間が神を信じるおもな目的はいのちを追い求めることであり、もし神を信じていながらいのちを求めもせず、真理や神の認識を追求もしないのなら、それは神への信仰ではない。それでも神の国に入り王になることを望むのは、現実的なことだろうか。いのちの追求を通して神への真の愛を達成する、このことのみが現実である。真理の追求と実践は、すべて現実である。神の言葉を読み、その言葉を経験することで、あなたは現実の経験の中で神の認識を得るようになる。それこそが、真に追求するということの意味なのである。

今は神の国の時代である。あなたがこの新たな時代に入っているかどうかは、あなたが神の言葉の現実に入っているかどうか、そして神の言葉があなたのいのちの現実となっているかどうかによる。神の言葉がすべての人に知らされているのは、最終的にすべての人が神の言葉の世界に生きるようになり、神の言葉が一人一人を内から啓き、照らすようになるためである。もしこの期間にあなたが不注意に神の言葉を読み、神の言葉にまったく関心を持たなければ、それはあなたの状態が間違っていることを示している。あなたが言葉の時代に入れないなら、聖霊はあなたの中で働きを行わない。もしあなたがこの時代に入っているのなら、聖霊はその働きを行う。言葉の時代が始まる今、聖霊の働きを得るためには何ができるだろうか。この時代、神はあなたがたのもとで次のような事実を実現する。つまり、一人一人が神の言葉を生き、真理を実践できるようになり、誠実に神を愛するようになる。そしてすべての人々が、神の言葉を基盤かつ自身の現実として用い、神を敬い畏れる心を持つようになる。さらに神の言葉の実践をとおして、人間が神とともに王のような力を振るうようになるのである。これが、神によって達成される働きである。あなたは神の言葉を読まずに生きることができただろうか。現在、神の言葉を読まずには一日や二日も生きられないと感じる人々が大勢いる。彼らは神の言葉を毎日読まずにはいられず、時間がないときには代わりにそれを聴く。これは聖霊が人々に与える感情であり、人々を動かし始めるときのやり方である。つまり神は言葉をとおして人間を統治し、人間が神の言葉の現実に入れるようにするのである。もし、一日だけ神の言葉を飲み食いしなかった後、闇と渴きを感じ、それに耐えられなかったなら、それはあなたが聖霊によって動かされており、聖霊があなたから離れていないことを意味する。そうであれば、あなたはこの流れの中にいる。しかし神の言葉を飲み食いせず一日か二日経った後、何も感じず、渴きもなく、まったく動かされていないなら、それは聖霊があなたから離れてしまったことを意味する。そうであれば、それはあなたの内面状態の何かが間違っているということであり、あなたは言葉の時

代に入っておらず、遅れをとったのである。神は言葉を用いて人間を統治する。あなたは神の言葉を飲み食いすれば気分が良くなり、それをしなければ、たどるべき道がなくなる。神の言葉は人間の食物となり、人間を動かす力となる。聖書には「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」とある。今日、神はこの働きを完成させ、あなたがたの中でこの事実を成就させる。なぜ、過去の人々は神の言葉を何日間も読まなくても普通に食べて働くことができたが、今はそうではないのだろうか。この時代、神はおもに言葉を用いてすべてを統治する。神の言葉を通して人間は裁かれ、完全にされ、そして最終的には神の国へと導かれる。神の言葉だけが人間にいのちをもたらし、神の言葉だけが人間に光と実践の道を与えることができる。これはとりわけ神の国の時代における事実である。あなたが神の言葉の現実から離れず、毎日神の言葉を飲み食いしている限り、神はあなたを完全にすることができるだろう。

いのちの探求は焦って成し遂げられることではない。いのちの成長は、一日や二日で起こるものではないのである。神の働きは普通で实际的であり、たどらねばならない過程がある。受肉したイエスが十字架の働きを完了するには、三十三年半を要した。では人間を清め、人間のいのちを変化させるという、最も困難な働きはどうだろうか。これは極めて困難な働きである。神を体現する普通の人間を作るのは、容易な業ではない。これは赤い大きな竜の国で生まれた人々についてはなおさらで、彼らは素質に乏しく、長期間の神の言葉と働きを必要とする。だから、結果を見るのを急いではない。あなたはただ積極的に神の言葉を飲み食いし、神の言葉にもっと努力を注がなければならない。神の言葉を読み終えたら、それを実践に移し、神の言葉における認識、識見、識別、知恵を増やすことができなければならない。それを通して、あなたは知らぬ間に変わっていく。神の言葉を飲み食いし、それを読み、知り、経験し、実践することを自分の原則として取り入れることができれば、あなたは知らないうちに成熟していく。中には、神の言葉を読んでもそれを実践できないと言う者もいる。何を急いでいるのか。ある程度の霊的背丈に達すれば、神の言葉を実践できるようになる。四、五歳の子供が、両親を養ったり敬ったりできないなどと言うだろうか。あなたは自分の現在の霊的背丈を知るべきだ。実践できることを実践し、神の経営を妨げる者とならないようにしなさい。ただ神の言葉を飲み食いし、それを今後の自分の原則としなさい。当面は、神があなたを完全にしてくれるかどうかと心配してはならない。まだそのことは深く考えず、ただ自分のもとに來た神の言葉を飲み食いしていれば、必ずや神はあなたを完全にして

くれるだろう。ただし神の言葉を飲み食いするときには、従うべき原則がある。それをむやみに行ってはならない。神の言葉を飲み食いするにあたっては、一方で自分が知るべき言葉、つまりビジョンに関連する言葉を探し求め、他方では実際の実践に移すべきこと、つまり自分が入っていくべきことを探し求めなさい。一方の側面は認識に関連しており、もう一つの側面は入りに関連している。ひとたびこの両面を把握すれば、つまり自分が知るべきことと実践すべきことを把握できれば、神の言葉をどのように飲み食いすべきかがわかるようになるだろう。

いずれは神の言葉について語ることが、あなたが話すときの原則になる。あなたがたが集まるときは通常、神の言葉についての交わりを持ち、神の言葉を交流の内容とし、それらの言葉について知っていること、それをどのように実践するか、そして聖霊がどのように働くかについて話し合いなさい。神の言葉について交わりを持っている限り、聖霊はあなたを照らすだろう。神の言葉の世界を実現するには、人間の協力が必要になる。あなたがこれに入っていかなければ、神は働くことができない。あなたが口を閉ざしたまま、神の言葉について語らなければ、神はあなたを照らすことができない。他のことに従事していないときはいつでも、神の言葉について話し、無駄なおしゃべりをしないようにしなさい。日々の生活を神の言葉で満たしたとき、初めてあなたは敬虔な信者となる。あなたの交わりが表面的なものであっても、それは問題ではない。表面なしに深みもありえないからだ。過程というものが必要なのだ。あなたは訓練を通して、自分に対する聖霊の照らしを把握し、神の言葉を効果的に飲み食いするにはどうすべきかを知るのである。しばらくの手探りの後、あなたは神の言葉の現実に入ることになる。協力する決意をして初めて、聖霊の働きを受けることができるのだ。

神の言葉を飲み食いする原則の一つは認識に関連し、もう一つは入りに関連している。まず、どのような言葉を知るべきか。それはビジョンに関連する言葉である（神の働きが今どの時代に入ったか、神が今何を成し遂げようとしているか、受肉とは何か、その他のことに関連する言葉は、みなビジョンと関連している）。人間が入るべき道とは何を意味しているのか。それは人間が実践し、入るべき神の言葉を意味している。これが、神の言葉を飲み食いすることの二つの側面である。これからは、このように神の言葉を飲み食いしなさい。ビジョンに関する神の言葉を明確に理解しているなら、絶えずそれを読み返す必要はない。最も重要なのは、どのように心を神に向けるべきか、どのように神の前で心を静めるべきか、どのように肉に背くべきかといった、入りに関する言葉をさらに飲み食いすることである。これらはあなたが実践すべき事柄である。どの

ように神の言葉を飲み食いすべきかを知らなければ、真の交わりは不可能である。ひとたび神の言葉をいかに飲み食いすべきかを知り、何が鍵なのかを把握できれば、交わりは自由なものとなり、どのような問題が提起されても、それについて話し合い、現実を把握することができるようになる。神の言葉について交わりを持つとき、現実を持っていないのなら、それは何が鍵かを把握していないからであり、あなたが神の言葉をどのように飲み食いすべきかを知らないことを意味している。中には神の言葉を読んでうんざりする人もいるかもしれないが、それは正常な状態ではない。正常な状態とは、神の言葉を決して読み飽きることなく、常に神の言葉を渴望し、常にそれを良いものと感じることである。これが、真に入りを成し遂げた人が神の言葉を飲み食いするやり方である。神の言葉を非常に实际的でまさに人間が入るべきものだと感じ、その言葉を極めて役に立つ人間に有益ないのちの糧であると感じるとき、その感情を与えているのは聖霊であり、聖霊があなたを動かしているのである。これは聖霊があなたの中で働いており、神があなたから離れていないことを証明している。中には神がいつも語っているのを見て、神の言葉に飽き、それを読んでも読まなくても大したことではないと考える人もいるが、それは正常な状態ではない。彼らには現実に入ることを渴望する心がなく、このような人々は完全にされることを渴望も重要視もしていない。自分が神の言葉に渴いていないと気づいたときはいつでも、あなたが正常な状態でないことを示している。昔は神が自分から離れたかどうかは、自分の内面が穏やかであるか、喜びを感じているかどうかで判断することができた。今では、鍵となるのは神の言葉に渴きを覚えるか、神の言葉が自分の現実となっているか、自分が忠実か、そして神のためにできることをすべて行えるかということである。言い換えれば、人間は神の言葉の現実によって判断されるのだ。神はその言葉を全人類に向けている。それを読む気があるなら、神はあなたを啓いてくれるが、そうでないなら神に啓かれることはない。神は義に飢え渴く人々と、自らを探し求める人々に啓きを与える。中には、神の言葉を読んでも神からの啓きが与えられなかったという人々もいる。しかし、その言葉をどのように読んだのか。もし乗馬しながら花に目をやる人のように神の言葉を読み、現実を一切重視しなかったなら、どうやって神があなたを啓けるだろうか。神の言葉を大切にしない者が、どうして神に完全にされることができるだろうか。神の言葉を大切にしないなら、あなたは真理も現実も得ることはない。神の言葉を大切にすれば、真理を実践することができ、そうして初めて現実を得ることになる。そのため、忙しいかどうか、逆境にあるかどうか、試練の最中にあるかどうかにかかわらず、いつも神の言葉を飲み食いしなければならないのである。結局のところ、神の言葉は人間の生存の基盤である。誰一人として神の言

葉から離れることはできず、三度の食事のように神の言葉を食べなければならない。神に完全にされ、神のものとされることが、そんなに簡単でありうるだろうか。現在あなたが理解しているかどうか、神の働きを見抜いているかどうかにかかわらず、できるだけ多くの神の言葉を飲み食いしなければならない。それが積極的な入りというものである。神の言葉を読んだら、自分が入っていけることを急いで実践し、入っていけないことはとりあえず脇へ置いておきなさい。当初は神の言葉の多くが理解できないかもしれないが、二、三ヶ月後、あるいは一年後には理解できるようになる。なぜそのようになるのか。それは、神が人間を一日や二日で完全にすることはできないからである。神の言葉を読んでも、多くの場合すぐには理解できないかもしれない。その時点ではただの文章にしか見えないかもしれず、理解できるようになるには、ある程度の期間それを経験する必要がある。神は非常に多くを語っているので、あなたは神の言葉の飲み食いに最大限努めるべきであり、そうすることでいつの間にか理解できるようになり、いつの間にか聖霊があなたを啓くのである。聖霊が人を啓くとき、多くの場合人はそれに気づかない。聖霊があなたを啓き導くのは、あなたが渴き探し求めているときである。聖霊の働きの原則は、あなたが飲み食いする神の言葉を中心としている。神の言葉を一切重視せず、神の言葉に対して常に態度を変え、混乱した考えをもって、神の言葉を読むか読まないかなどどうでもいいと考えている人々は皆、現実を得ていないのである。そのような人の中には、聖霊の働きも聖霊による啓きも見ることができない。そのような人々はただ惰性で生きているのであり、ちょうど寓話の南郭氏^[a]のように、真の資格を持たない偽善者なのである。

神の言葉を自分の現実としていなければ、あなたに本当の霊的背丈はない。試練の時が来ても、あなたは必ず倒れ、そのときに真の霊的背丈が明らかにされるだろう。しかし常に現実に入ろうと努めている人々は、試練の時に神の働きの目的を理解するようになる。良心を持ち神を渴望する人は、実際的な行動をもって神の愛に報いなければならない。現実を持たない人々は、些細な事柄に直面しただけでも、しっかりと立っていられなくなる。それが、本当の霊的背丈を持つ人々と持たない人々の違いである。彼らはいずれも神の言葉を飲み食いしているのに、なぜ一方は試練に揺るぎなく立ち向かうことができ、他方は試練から逃げ出すのだろうか。明らかな違いとして、一部の人々には本当の霊的背丈がなく、彼らは自身の現実となる神の言葉を持っておらず、神の言葉は彼らの中に根づいていない。そして彼らは試練に遭うと、すぐに音を上げてしまう。では、試練の中でもしっかり立てる人がいるのはなぜなのか。それは真理を理解してビジ

ヨンをもち、神の旨と要求を認識しているからであり、ゆえに試練のさなかでもしっかり立てるのである。それが本当の霊的背丈であり、それもまたいのちなのだ。また神の言葉を読みはしても、実践に移すことはなく、真剣にとらえない人々もいるかもしれない。神の言葉を真剣にとらえない人々は、実践をまったく重視しない。自身の現実となる神の言葉を持たない人々には、本当の霊的背丈がなく、彼らは試練を揺るぎなくやり遂げることができない。

神の言葉が発せられたら、ただちにそれを受け取って飲み食いしなければならない。どれほど理解しているかにかかわらず、固守すべき一つの観点は、神の言葉を飲み食いし、知り、実践するということである。それが、あなたができなければならないことだ。自分の霊的背丈がどれほど立派になれるかについては気にせず、ただ神の言葉を飲み食いすることに集中しなさい。それが、人間が協力しなければならないことである。霊的生活とはおもに、神の言葉を飲み食いしそれを実践するという現実に入るよう努めることである。それ以外のことに集中する必要はない。教会の指導者はすべての兄弟姉妹を指導して、どのように神の言葉を飲み食いすべきかを伝えることができないといけない。これが一人一人の教会指導者の責任である。老若を問わず全員が神の言葉を飲み食いすることを重視し、神の言葉を心に留めなければならない。この現実に入ることは、神の国の時代に入ることを意味する。最近ではほとんどの人が、神の言葉を飲み食いせずには生きていけないと感じ、神の言葉はいつでも新鮮だと感じている。これは彼らが正しい軌道を歩み始めていることを意味する。神は言葉を使って働きを行い、人間を養う。すべての人が神の言葉を求め渴望するようになったとき、人類は神の言葉の世界に入ることになる。

神はこれまで非常に多くのことを語った。あなたはそれをどれくらい知り、どれくらい入ったのだろうか。教会指導者がその兄弟姉妹たちを神の言葉の現実へと導いていなければ、彼らはその本分をないがしろにし、責任を果たすことができなくなるのだ。あなたの理解が深かろうが浅かろうが、あるいはあなたの理解がどの程度かにかかわらず、神の言葉をどのように飲み食いすべきかは必ず知らなければならず、神の言葉に細心の注意を払い、それを飲み食いすることの重要性と必要性を理解しなければならない。神はすでに非常に多くのことを語っているので、神の言葉を飲み食いしなかったり、それを求めようとしなかったり、実践に移さなかったりするのなら、それは神の信仰とは言えない。あなたは神を信じているのだから、神の言葉を飲み食いし、神の言葉を体験し、神の言葉を生きなければならない。それだけが神への信仰と呼べるのだ。口では神

を信じると言いながら、神の言葉を一つも実践できていなかったり、何の現実も生み出せていなかったりするのなら、それは神への信仰とは言えない。それは単に、「飢えを満たすためにパンを求めている」だけだ。あなたが取るに足らない証しや役に立たない事柄、表面的な物事について話すだけで、現実を少しも得ていないなら、それは神への信仰ではなく、神を信じる正しい道をまったく把握していないことになる。なぜ神の言葉をできるだけ多く飲み食いしなければならないのか。神の言葉を飲み食いせずに、ただ天に昇ることだけを求めているのなら、それは神への信仰であろうか。神を信じる人が進むべき最初の一步は何だろうか。神はどのような道によって人間を完全にするのだろうか。神の言葉を飲み食いせずに、人が完全にされることはできるだろうか。神の言葉を現実として持つことなく、神の国の民とみなされることができだろうか。神への信仰とは、正確には何を意味するのか。神を信じる人々は、最低限として外見上よい振る舞いをしなければならず、何よりも重要なことは、神の言葉を持っていることである。何があろうとも、神の言葉から離れることはできない。神を知ること、神の心を満たすことは、すべて神の言葉を通して達成される。将来的にはすべての国、教派、宗教、領域が神の言葉を通して征服される。神は直接語りかけ、すべての人々は神の言葉をその手に抱き、それによって人類が完全にされる。内にも外にも、神の言葉はあらゆるところに行き渡る。人類は自らの口で神の言葉を語り、神の言葉にそって実践し、神の言葉を心の中に留め、内も外も神の言葉に満たされ続ける。このようにして人は完全にされる。神の心を満たし、神の証しをすることができる人々は、神の言葉を自身の現実としている人々なのである。

言葉の時代、つまり千年神の国の時代に入ることは、今日完了されつつある働きである。これからは、神の言葉についての交わりを持つ訓練をなささい。神の言葉を飲み食いし、神の言葉を経験することによってのみ、あなたは神の言葉を生きることができる。他の人々を説得するには、いくらかの実践的経験を生み出さねばならない。神の言葉の現実を生きることができなければ、誰も説得することなどできない。神に用いられる者たちは皆、神の言葉の現実を生きることができる。この現実を生み出して神の証しをすることができないのなら、それは聖霊があなたの中で働いておらず、あなたが完全にされていないことを意味する。これが神の言葉の重要性である。あなたには神の言葉を渴望する心があるか。神の言葉を渴望する人々は、真理を渴望しており、そのような人々だけが神に祝福されている。将来的に、神はあらゆる宗教と教派に向けてさらに多くの言葉を語る。神はまずあなたがたの間で語り、声を出し、あなたがたを完全にしてく

ら、次に異邦人の間で語り、声を出し、彼らを征服する。神の言葉を通して、すべての人が心から完全な確信を得る。神の言葉と暴露をとおして、人間の墮落した性質は弱まり、人は人間の姿を呈するようになって、反抗的な性質も弱くなる。言葉は権威をもって人間に働き、神の光の中で人間を征服する。神が現在の時代に行う働きも、またその働きの分岐点も、すべては神の言葉の中にある。神の言葉を読まなければ、何も理解することはできない。あなた自身が神の言葉を飲み食いし、兄弟姉妹との交わりに参加し、そして実際の体験を持つことで、神の言葉についての包括的な認識を得られるようになる。そのとき初めて、あなたは神の言葉の現実を真に生きられるようになるのである。

脚注

a. 原文に「寓話の」の語句は含まれていない。

すべては神の言葉が達成する

神はそれぞれの時代において言葉を語り、働きをする。そして神は異なる時代において異なる言葉を話す。神は規則に従わず、同じ働きを繰り返さず、過去の事柄への懐旧の念を抱かない。神は常に新しく、古さとは無縁であり、毎日、新しい言葉を話す。あなたは今日従うべきことに従うべきである。それが人の責任であり本分である。現在における神の光と言葉を軸として実践することが不可欠である。神は規則に従わず、神の知恵や全能性を明らかにするために多くの異なる視点から話すことができる。神が霊の視点から話すか、人の視点から話すか、あるいは第三者の視点から話すかは問題ではない。神は常に神であり、人の視点から話すので神は神ではないと言うことはできない。神が様々な側面から話す結果、一部の人に観念が生まれた。そのような人は神について何の認識ももっておらず、神の働きについても何の認識もない。神が常に一つの視点から話せば、人は神に関して規則を定めないのであろうか。人がそのように振舞うことを神が許すことができるであろうか。神がどの視点から話すにせよ、神にはそうする目的がある。もし、神が常に霊の視点から話したなら、あなたは神と関わりをもつことができるであろうか。それゆえ、神は時おり第三者の立場で語り、あなたに言葉を与え、あなたを現実性へと導く。神が行なう万事が適切である。要するに、すべては神になされているのであり、あなたはこのことを疑うべきではない。神は神であり、それゆえ、どの視点から話しても、神は常に神である。これは不変の真理である。どのように働きをしても、神は依然として神であり、神の本質は変わることがない。ペテロは深く神を愛し

、神の心に叶う人であったが、神はペテロを主あるいはキリストとして証ししなかった。なぜなら、存在するものの本質は、それ自体であり、決して変わることはできないからである。働きにおいて、神は規則に従うのではなく、働きを効果的にし、人の神についての認識を深めるために種々の方法を用いる。神が働きをする方法のすべてが、人が神を知るのを助け、そしてそれは人を完全にするためである。神がどのような働きの方法を用いても、それぞれが人を作り上げ完全にするためである。神が働きをする方法の一つが非常に長い時間続いたかもしれないが、それは人の神への信仰を強化するためである。したがって、あなたがたの心には疑いがあるてはならない。これらはすべて神の働きの過程であり、あなたがたはそれらに従わなければならない。

今日の話は、現実に入っていくことである。天に昇ることや、王として支配するといったことではない。現実に入ることの追求めることのみについて話している。これよりも実践的な追求はない。王としての支配についての話は実践的ではない。人は好奇心が強く、宗教的観念を用いて神の現在の働きをいまだに評価する。神が働きをする方法を数多く経験してきたにもかかわらず、人はいまだに神の働きを知らず、相変わらずしるしや不思議を求め、そして依然として神の言葉が成就したかどうかを知ろうとする。これは驚くべき無知ではないであろうか。神の言葉が成就しなかったとしても、あなたはなお神が神であることを信じるであろうか。今日、教会で数多くのこのような人がしるしや不思議を見ようと待っている。彼らは、「もし神の言葉が成就するなら、その人は神である。もし神の言葉が成就しないなら、神ではない」と言う。それでは、あなたは神の言葉が成就したという理由で神を信ずるのであるであろうか、あるいは神が神自身であるから信ずるのであるであろうか。神への信仰についての人の考え方は、正されなければならない。神の言葉が成就しなかったとわかると、人は走り去っていく。これが神への信仰であろうか。神を信じているなら、すべてにおいて神の采配に委ね、神のすべての働きに従うべきである。神は実に多くの言葉を旧約聖書で語った。そのうちのどれかが成就したのをあなたは自分自身の目を見たのであるであろうか。それを見なかったために、ヤーウェは真の神でないと言うことができるであろうか。たとえ多くの言葉が成就しても、人間はそれをはっきり見ることはできない。なぜなら、人間には真理がなく、何も理解していないからである。神の言葉が成就していないと感じると、逃げ去りたがる人がいる。そうするがいい。逃げ去ることができるかどうかを試してみなさい。走り去った後で、やはりあなたは帰ってくる。神はあなたを言葉で支配するのであり、もし教会や神の言葉から離れて行くなれば、あなたには生きるすべがなくなる。もしこのことを信じない

のなら、試してみるがよい。本当にただ去って行けると思っているのであろうか。神の霊があなたを支配している。あなたは離れていくことはできない。これが神の行政命令である。もし試したいと思う人がいるなら、試してみればよい。この人は神ではない、とあなたは言う。ならば、神に対して罪を犯せばよい。そして神が何を行うかを見てみればよい。あなたの肉は死なず、今までどおり食べ、衣服を着ることは可能である。しかし、精神的には耐え難いものとなる。あなたは圧迫と苦しみを感じ、それ以上の苦しみはない。人は精神的な苦しみと荒廃に耐えることはできない。おそらく肉の苦しみに耐えることはできるが、持続する精神的な圧迫や長く続く苦しみにはまったく耐えることができない。今日、しるしや不思議が一切見えないせいで否定的になる人がいる。しかし、どれほど否定的になっても、あえて逃げ去ろうとする人はいない。なぜなら、神は言葉で人を支配するからである。事実がいまだ到来していないにもかかわらず、誰も逃げられないのである。これは神の行為ではないであろうか。今日、神は人にいのちを与えるために地上に来た。神は、人が想像するように、神と人の平和な関係を確認なものにするためにしるしや不思議を示して人をなだめるようなことはしない。いのちに集中せず、神にしるしや不思議を示してもらおうとすることにはばかり気持ちが向いているような人は皆パリサイ人である。イエスを十字架に釘付けしたのは、パリサイ人であった。神の言葉が成就したら神を信じ、成就しなかったら神を疑い、神を冒瀆さえして、神への信仰に関する独自の考えに従って神を評価するならば、あなたは神を十字架に釘付けしているのではないであろうか。このような人は、本分において怠慢であり、貪欲に快樂に浸っている。

ある面において、人の最大の問題は神の働きを知らないことである。人は否定の態度はとらないにしても、疑いの態度を示している。否定することはしないが、完全に認めてもない。もし人に神の働きについての完全な認識があるなら、逃げ去ったりはしない。別の面の問題は、人が現実を知らないということである。今日、各々が関わってきたのは神の言葉である。本当に、未来において、しるしや不思議を見ることを考えるべきでない。わかりやすくあなたに説明するならば、今の段階であなたが知ることができるのは神の言葉だけである。そして、事実がなくとも、神のいのちはそれでもなお、人の中に作り込まれることが可能である。千年神の国のおもな働きとはこの働きであり、この働きを感じ取ることができないなら、あなたは衰えて倒れ、試練に陥り、また一層悲痛なことに、サタンの囚われの身となる。神はおもに言葉を話すために地上に来た。あなたが関りをもつのは神の言葉である。あなたが知るのは神の言葉である。あなたが

聞くのは神の言葉である。あなたが従うのは神の言葉である。あなたが経験するのは神の言葉である。そしてこの肉となった神は、人を完全にするのにおもに言葉を用いる。しるしや奇跡を示さず、イエスが過去に行った働きは特に行わない。どちらも神であるが、肉でもある。両者の職分は同一ではない。イエスが現れたとき、イエスは神の働きの部分も行い、言葉も話した。しかし、イエスが成し遂げたおもな働きは何であろうか。イエスがおもに成し遂げたのは磔の働きであった。イエスは磔の働きを完成し全人類を贖うために罪深い肉の似姿になった。そしてイエスが罪の贖いの供え物となったのは、全人類の罪のためであった。これが、イエスが成し遂げたおもな働きであった。最終的に、イエスは後から来る人たちを導くために、十字架の道を与えた。イエスが現れたとき、それはおもに贖いの働きを完了するためであった。イエスは全人類を贖い、天の国の福音を人にもたらし、そして天の国へ至る道をもたらしした。その結果、その後に来た人は皆、「我々は十字架の道を歩き、十字架のために我々自身を犠牲にすべきだ」と言った。もちろん、最初イエスは、人に悔い改めさせ罪を告白させるための他の働きも行い、そのための言葉も語った。しかし、イエスの職分はやはり磔であり、イエスが道を説きながら費やした三年半は、その後に起こるべき磔への準備であった。イエスが何度か祈ったのも磔のためであった。イエスの普通の人としての生涯と地上での三十三年半は、おもに磔という働きを完成するためであった。それはこの働きに取り組む力をイエスに与えるためであり、その結果として神はイエスに磔という働きを託した。今日、肉となった神は、どのような働きを成し遂げるのでであろうか。今日、神はおもに「言葉が肉において現れる」という働きを完成するために、言葉を用いて人を完全にするために、そして人が言葉による取り扱いと精錬を受け入れるように、肉になった。神の言葉において、あなたは神に施され、いのちを与えられる。神の言葉において、あなたは神の働きと業を見る。神はあなたを罰し精錬するために言葉を用いる。したがって、もしあなたが苦難に会うなら、それはまた神の言葉によるものである。今日、神は事実でなく言葉を用いて働く。神の言葉があなたに届いてはじめて、聖霊はあなたの中で働きをすることができ、あなたに苦痛を感じさせたり甘美さを感じさせたりすることができる。神の言葉だけが、あなたを現実に至らせることができ、神の言葉だけが、あなたを完全にすることができる。したがって、終わりの日に神が行う働きはおもに言葉を用い、すべての人を完全にし、人を導くことであることを、せめてあなたは理解しなければならない。神はその働きのすべてを言葉を通じて行なう。神はあなたを罰するために事実を用いない。時には神に抵抗する人もいる。神はあなたに大きな不快感をもたさず、あなたの肉は罰せられず、あなたは苦痛を味わうことはない。しかし、神の言葉があな

たに届き、あなたを鍛錬するようになるとただちに、それはあなたにとって耐えられないものになる。そうではないであろうか。効力者の期間に、人を底なしの穴に投げ入れると神は言った。人は実際に底なしの穴に落ちたであろうか。人を鍛錬するための言葉だけで、人は底なしの穴に入っていった。このように、神が肉となる終わりの日には、神はすべてを成し遂げ、すべてを明らかにするためにおもに言葉を用いる。神の言葉の中においてのみ、神であるものを知ることができる。神の言葉の中においてのみ、神が神自身であることを知ることができる。肉となった神が地上に来るとき、神は言葉を話すこと以外のどのような他の働きもしない。したがって、事実が必要でない。言葉で十分である。おもにこの働きをするために、神の力と至高を人が神の言葉の中に見ることができるように、神が身を低くして自身を隠していることを人が神の言葉の中に見ることができるように、そして神の完全性を人が神の言葉の中に知ることができるように、神は来たからである。神が所有するものおよび神の存在のすべてが、神の言葉の中にある。神の知恵や素晴らしさも神の言葉の中にある。この中に、神が言葉を話す多くの方法を人は見ることができる。これまでずっと、神の働きのほとんどは、人間への施しであり、明かしであり、取り扱いであった。神は軽々しく人を呪いはしないし、そうするときでさえ言葉を通して行う。したがって、この肉となった神の時代において、神が再び病人を癒やし、悪魔を追い出すのを見ようとしてはならず、また常にしるしを探し続けてはならない。それは無意味である。そのようなしるしは、人を完全にしはしない。わかりやすく言うならば、つまり、今日、肉となった現実の神自身は行動せず、話すだけなのである。これが真理である。神は言葉を用いてあなたを完全にし、あなたに食べ物を与え、水をやる。神はまた言葉を用いて働き、さらに神の現実性をあなたに知らせるために、事実の代わりに言葉を用いる。このような神の働き方を感知することができるなら、否定的でいることは難しい。否定的なことに集中する代わりに、肯定的な事柄にのみ集中すべきである。つまり、神の言葉が成就しようとしまいと、あるいは事実の到来があろうとなかろうと、神はその言葉から人がいのちを得ることを可能にする。これはあらゆるしるしの中の最大のしるしである。そしてさらに、それは議論の余地のない事実である。これこそ、神を知るための最良の証拠であり、しるしよりも偉大なしるしである。このような言葉だけが、人を完全できるのである。

神の国の時代が始まるや否や、神は言葉を放ち始めた。未来において、これらの言葉が徐々に成就していく。そしてそのときには、人はいのちへと成長する。人の墮落した性質を明らかにするために神が言葉を用いることは、より現実的であり、そしてより必

要である。そして神は、人の信仰を完全にするために働きを行うのに言葉以外の何ものも用いない。なぜなら、今は言葉の時代であり、そしてそれは、人の信仰、決意、協調性を必要とするからである。終わりの日の、肉となった神の働きとは、人間に奉仕し与えるために言葉を用いることである。肉となった神がその言葉を話し終えてはじめて、言葉は成就し始める。神が話している間は、神の言葉は成就しない。なぜなら、神が肉の段階にあるとき神の言葉が成就することはできないからである。これは、神が肉であり霊ではないのを人が見ることができるようにするためだからである。この結果、人は自身の目で神の現実性を見ることが出来る。神の働きが完了する日、すなわち地上で神によって話されるべきすべての言葉が話されたその日、神の言葉は成就し始める。今は、神の言葉の成就の時代ではない。なぜなら神は言葉をまだ話し終えていないからである。従って、神が地上でその言葉をまだ話しているのを見ると、あなたは神の言葉が成就するのを待ち構えてはいけない。神が言葉を話すのを止め、地上での神の働きが完了する時、それが神の言葉が成就し始める時である。地上で神が話す言葉の中には、ある観点では、いのちの提供が存在し、もう一つの観点では、預言が存在する。来るべき諸事についての預言、行われるであろう諸事についての預言、さらに未だ成し遂げられていない諸事についての預言である。イエスの言葉の中にも預言はあった。ある観点からは、イエスはいのちを供給し、別の観点からは、イエスは預言を話した。今日、言葉と事実を同時に遂行することについて語られることはない。なぜなら、人が自身の目で見ることが出来ることと、神が行うこととの間の差異は大きすぎるからである。ひとたび神の働きが完了したなら、神の言葉は成就し、言葉の後に事実が到来する、とだけ言うことができる。終わりの日において、肉となった神は地上において言葉の職分を果たす。そしてこれを実行するとき、神は言葉だけを話し、その他の問題には注意を払わない。ひとたび神の働きに変化が現れたら、神の言葉は、成就され始める。今日、言葉はまず、あなたを完全にするために用いられる。神が全宇宙で栄光を獲得する時、それは神の働きが完了する時、話されるべきあらゆる言葉が話され、全ての言葉が事実になった時である。神は、人類が神を知ることができるよう言葉における働きをするため、終わりの日に地上にやって来た。その結果、人類は神であるものを知り、神の知恵と、神の言葉がもたらす神の驚くべき業を全て知ることが可能になる。神の国の時代を通じて、神は全人類を征服するために言葉を用いる。未来においては、神の言葉は、あらゆる宗教、分野、国家、教派にも届くであろう。神はすべての人を征服し、神の言葉が権威や力を帯びるのをすべての人に知らしめるために、言葉を用いる。したがって今日、あなたがたは、神の言葉にのみ面するのである。

今の時代に神によって話される言葉は、律法の時代に話された言葉とは異なり、また恵みの時代に話された言葉とも異なる。恵みの時代には、神は言葉の働きをせず、全人類を贖うためにキリストは十字架に磔にされると語っただけである。聖書は、イエスがなぜ磔にされる運命にあったのか、さらに、イエスが十字架上で受けた苦しみ、そして人がどのように神のために磔にされるべきかだけを記述する。その時代を通じて、神によってなされる働きはすべて、キリストの十字架上の死を中心に展開していた。神の国の時代には、肉となった神は、神を信ずるすべての人たちを征服するために、言葉を用いる。これが、「言葉が肉において現れる」ということである。神は、この働きをするために終わりの日にやって来た。つまり、神は、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げるためにやって来た。神は言葉を話すだけであり、事実の到来は稀である。これがまさに、言葉が肉において現れることの実質である。そして肉となった神が自身の言葉を話すとき、これが肉における言葉の出現であり、肉へ入り来る言葉である。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。そして言は肉となった」。このこと（言葉が肉において現れるという働き）が、終わりの日に神が成し遂げるだろう働きであり、自身の全経営計画の最終章である。したがって、神は地上に来て、肉の中で自身の言葉を表さなければならない。今日行われること、未来において行われるであろうこと、神によって成し遂げられるであろうこと、人の終着点、救われるであろう人々、滅ぼされるであろう人々、等々、最後に成し遂げられるべきこのような働きはすべて、明確に述べられてきた。そしてこれらはすべて、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げることを目的にしている。かつて発行された行政命令や憲法、滅ぼされるであろう人々、安息へ入るであろう人々、これらの言葉はすべて成就されなければならない。これが、終わりの日を通じて、肉となった神によっておもに成し遂げられた働きである。神は、神によって運命づけられた人々はどこに属し、運命づけられない人々はどこに属するか、神の民や息子たちはどのように分類されるか、イスラエルに何が起こるか、エジプトに何が起こるかを人々に理解させる。未来には、これらの言葉のすべてが成し遂げられる。神の働きの歩調は加速している。神は、あらゆる時代に何がなされるべきか、肉となった神によって終わりの日に何が行われるよう予定されているか、そして行われるべき神の職分が何であるかを、人に明らかにするための手段として言葉を用いる。これらの言葉はすべて、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げるためのものである。

わたしは以前「しるしや不思議を見ることを重視する者は、見捨てられるだろう。彼

らは、完全にされる人たちではない」と言った。わたしは非常に多くの言葉を話してきたが、人はこの働きについての認識を微塵も持ち合わせない。そして、ここにいたって、人は依然として、しるしや奇跡を求めている。あなたの神への信仰はしるしと不思議を見ることの追求でしかないのでしょうか。それともいのちを獲得するためなのか。イエスも多くの言葉を話したが、その一部は今日まだ達成されていない。イエスは神ではないと言うことができるでしょうか。神は、彼がキリストであり、神の愛する子であることを示した。あなたにこれを否定することができるのか。今日、神は言葉を話すだけである。そしてもし、あなたがこのことを完全に知らないなら、あなたはしっかりと立つことはできない。あなたは神であるという理由で神を信じるのか。あるいは神の言葉が成就されたかどうかにもとづいて、神を信じるのか。あなたは、しるしや奇跡を信じるのか。それとも神を信じるのか。今日、神はしるしや奇跡を示さない。それでもそれは本当に神なのか。もし、神が話す言葉が成就されないなら、それは本当に神なのか。神の実質は、神が話す言葉が成就したかどうかによって決められるのか。神を信じる前に神の言葉の成就をいつも待望している人がいるのは何故なのか。このことは、彼らが神を知らないということを意味しないのであろうか。このような観念をもつ人たちは、神を否定する人たちである。彼らは、神を評価するのに、自らが持つ観念を用いる。もし、神の言葉が成就するなら、彼らは神を信じ、もし言葉が成就しないなら、彼らは神を信じない。さらに、彼らは常にしるしや不思議を見ることを追求する。このような人は現代のパリサイ人ではないであろうか。あなたが堅く立つことができるかどうかは、あなたが真の神を知っているかどうかにかかっている。これは決定的に重要である。あなたの中で神の言葉の实在性が偉大であればあるほど、神の实在性に関するあなたの認識も偉大になり、あなたは試練の中でますます堅く立つことができるようになる。しるしや不思議を見ることを重視すればするほど、堅く立つことができなくなり、試練の中で躓く。しるしや不思議は、基礎ではない。神の实在のみがいのちである。一部の人は、神の働きによって達成されるべき効果を知らない。彼らは、神の働きについての認識を追求せず、当惑の中で日々を送っている。彼らが求めるのは、神に彼らの欲望を満たしてもらうことだけである。そうやってはじめて、彼らは自らの信仰において真摯になる。彼らは、もし神の言葉が成就するならいのちを追求するが、神の言葉が成就しないなら、いのちを追求する可能性はないと言う。人は、神への信仰は、しるしや不思議を見ることを追求することであり天国や第三の天まで引き上げられることを追求することであると考えている。神への信仰は、神の实在性に入っていくとすること、いのちの追求、さらに神のものとされることの追求であると言う者は一人もいない。その

ような追求における意味は何であろうか。神についての認識や神の満足を追求しない者は神を信じない者である。彼らは神を冒瀆する者である。

今やあなたがたは、神への信仰とは何かを理解したのであるか。神への信仰は、しるしや不思議を見ることを意味するであろうか。それは天国に昇ることを意味するであろうか。神を信じることは簡単なことでは絶対でない。あのような宗教的慣行は、一掃されるべきである。病人の癒しや悪魔の追放を求めること、しるしや不思議を重視すること、神の恵みや平和や喜びをさらに欲しがること、明るい未来や肉の快楽を求めること、これらは宗教的慣行であり、そのような宗教的慣行は、漠然とした信仰の種類である。今日の実際の神への信仰とは何なのか。それは、神の真の愛を達成するために、神の言葉をあなたのいのちの現実として受け入れることであり、神の言葉から神を知ることである。明確に言うならば、すなわち神への信仰は、あなたが神に従うこと、神を愛すること、さらに、神の被造物によって為されるべき本分を遂行することに資するものである。これが、神を信じることの目的である。あなたは、神の美しさ、神がいかに尊敬に値するか、造ったものの中で、神がいかに救いの働きを行いそして彼らを完全に行うかについての認識を達成しなければならない。これが、神への信仰における最低必要事項である。神への信仰はおもに、肉の生活から神を愛する生活への転換、墮落の中の生活から神の言葉のいのちにおける生活への転換である。そしてそれは、サタンの領域下から出て神の配慮と保護の下で生きることであり、肉への従順ではなく神への従順を達成できることであり、神があなたの心のすべてを獲得しあなたを完全にすることを可能にすることであり、さらにあなた自身を墮落したサタンのような性質から自由にすることである。神への信仰はおもに、神の力と栄光があなたの中で明らかに示されるためのものである。その結果、あなたは、神の旨を行い、神の計画を成し遂げることができ、さらに、サタンの前で神への証しとなることができるようになる。神への信仰は、しるしや不思議を見たいという願望を中心とせず、個人的な肉のためであってもいけない。それは、神を知ること、神に従うことができること、そしてペテロのように、死ぬまで神に従うことを追求することでなければならない。これが、神への信仰の主要な目的である。神の言葉を飲み食いするのは、神を知るためであり、神を満足させるためである。神の言葉を飲み食いすることは、神についてのより大きな認識をもたらす。そうやってはじめて、あなたは神に従うことができる。神についての認識があってはじめて、あなたは神を愛することができ、そしてそれが、人が神への信仰において持つべき目標である。もし、神への信仰において、いつも、しるしや不思議を見ようとするなら、

そのような神への信仰の考え方は間違っている。神への信仰とは、おもに、いのちの現実として神の言葉を受け入れることである。神自身の口から出た言葉を実践し、あなた自身の内部でそれらの言葉を実行することでのみ、神の目的は達成される。神を信じることに於いて、人は神によって完全にされるように、神に服従することができるように、神に完全に従順でいられるように努力すべきである。もし不平もなく神に従うことができ、神の希望を心に留め、ペテロの霊的背丈に達し、そして神が言うところのペテロの流儀を所有するなら、それはあなたが神への信仰に成功したときであり、そしてそれは、あなたが神のものとされたことを意味するのである。

神は自身の働きを全宇宙において行う。神を信じる者はすべて、神の言葉を受け入れ、神の言葉を飲み食いしなければならない。何人といえども、神によって示されるしるしや不思議を見ることで神のものとされることはあり得ない。時代を超えて、神は常に、人を完全にするのに言葉を用いてきた。したがって、あなたがたの注意のすべてをしるしや不思議に向けるべきではなく、神によって完全にされるよう努めるべきである。旧約聖書の律法の時代において、神はいくつかの言葉を語った。そして恵みの時代において、イエスもまた多くの言葉を話した。イエスが数多くの言葉を話した後、後の使徒や弟子たちが人々を導き、イエスが発した戒めに従って実践し、イエスの語った言葉と原則に従って経験するようにさせた。終わりの日において、神は人を完全にするのに、おもに言葉を用いる。神は、人に圧力をかけたり人を確信させたりするのに、しるしや不思議を用いない。それは、神の力を明らかにしない。もし神がしるしや不思議を示すだけならば、神の存在性を明らかにすることは不可能である。したがって、人を完全にすることも不可能である。神は、しるしや不思議によって人を完全にせず、人を潤し牧養するのに言葉を用いる。そしてその後、人は完全な従順と神についての認識を達成することができる。これが、神が行う働きと神が話す言葉の目的である。神は、人を完全にするのにしるしや不思議を示すという方法を用いない。神は言葉を用い、多くの異なる働きの方法を用いて人を完全にする。それが精錬であろうと、取り扱い、刈り込み、あるいは言葉の施しであろうと、神は、人を完全にするために、人に神の働き、神の知恵や驚くべき力についてのより大きな認識を与えるために、多くの異なる観点から話す。終わりの日に神が時代を終え、人が完全にされたならば、そのとき、人はしるしや不思議を見るにふさわしくなる。神を認識するようになり、神が何をしようと神に従うことができるとき、あなたはしるしと不思議を見ても、神についての観念をこれ以上もたなくなる。今、あなたは墮落し完全に従順であることはできない。あなたはそんな状

態にいる自分のことを、しるしや不思議を見るにふさわしいと思っているであろうか。神がしるしや不思議を示す時は、神が人を罰するときであり、時代が変わるときでもある。さらに、時代が完結するときでもある。神の働きが順当に遂行されているとき、神はしるしや不思議を示さない。しるしや不思議を示すことは神にとって極めて容易であるが、それは神の働きの原則ではないし、神による人の経営（救い）の目的でもない。もし、人がしるしや不思議を見たら、そしてもし、神の霊の体が人の前に現れるようなことがあったら、神を信じない人がいるであろうか。わたしは以前、東方から勝利者たちを獲得する、彼らは大きな苦難のただ中からやって来ると言ったことがある。この言葉は何を意味しているのか。それは、このような神のものとされた人たちは、裁きと刑罰、取り扱いと刈り込み、そしてあらゆる種類の精錬を経た後に、ただ真に従順であったということを意味する。そのような人の信仰は漠然としておらず、抽象的でもなく、本物である。彼らはしるしや不思議、そして奇跡も見ることがない。彼らは難解な文字や教義あるいは深遠な洞察について話さない。その代わり、彼らには実在性さらに神の言葉、そして神の実在についての本物の認識がある。そのような集団は、神の力を一層明らかにすることができないであろうか。終わりの日の神の働きは、実際の働きである。イエスの時代に、イエスは人を完全にするためではなく、人を贖うためにやって来た。したがって、イエスは人々を自身に従わせるためにいくつかの奇跡を見せた。なぜなら、イエスはおもに磔という働きを完了するためにやってきたのであり、しるしを示すことは彼の使命の働きの一部ではなかった。そのようなしるしや不思議は、イエスの働きを効果的にするために行われた働きであった。それらは追加的な働きであり、その時代全体の働きを表すものではなかった。旧約聖書の律法の時代においては、神はいくつかのしるしや不思議を示した。しかし、神が今日行う働きは、実際の働きであり、神は今や、決してしるしや不思議を示さない。神がしるしや不思議を示したとすれば、神の実際の働きは掻き乱され、神はそれ以上の働きを行うことができなくなるであろう。もし神が言葉を用いて人を完全にするといいながら、しるしや不思議も示したとしたら、人が神を真に信じるかどうかを明らかにすることができるであろうか。したがって、神はそのようなことは行わない。人の内面には宗教的なものがあふれている。人の内面にある宗教的な観念や超自然的な事柄のすべてを追い出し、人に神の実在性を知らしめるために、終わりの日に神はやって来た。抽象的で空想的な神のイメージを、言い換えれば、全く存在しない神のイメージを取り去るために、神はやって来た。したがって、今や、唯一の貴重な事とは、あなたが実在性について認識を持つことである。真理は、あらゆるものより優先する。あなたは今日、どれだけ多くの真理を持っているだろうか。

しるしや不思議を示すものはすべて神なのか。悪霊もしるしや不思議を示すことができる。彼らはすべて神なのか。神への信仰において、人が求めるのは真理であり、追求するのはいのちである。しるしや不思議ではない。これが神を信じる人すべての目標でなければならない。

神の実際性に絶対的に服従できる者は真に神を愛する者である

実際性に関する認識と神の働きに関する明確な理解を得ることは、いずれも神の言葉に見られるものである。そして神が発する言葉を通じてでなければ、あなたは啓きを得られない。それゆえ、あなたは神の言葉をより多く備えるべきである。神の言葉に関する自分の認識を交わりの中で伝えなさい。そうすれば他の人たちを啓いて道を与えることができる。それが実践的な道である。神があなたのために環境を整える前に、あなたが一人ひとりがまず神の言葉を備えなければならない。これは誰もが行なうべきことであり、緊急の優先事項である。まずは神の言葉をどう飲み食いすべきか知っている段階に至らなければならない。自分にできない物事があれば、神の言葉から実践の道を探し、理解できない問題や自分が抱える困難に関しては、それらの発言を調べなさい。神の言葉を自分の糧とし、実際の困難や問題の解決に役立てるようにしなさい。また神の言葉が、生活における自分の助けとなるようにしなさい。それにはあなたの努力が必要である。神の言葉を飲み食いする中で、あなたは成果を挙げ、神の前で自分を静められるようになり、問題にぶつかるたび神の言葉にしたがって実践するはずだ。何の問題にもぶつからなければ、ただ神の言葉を飲み食いすることにだけ集中すべきである。時には祈りを捧げて神の愛を深く考え、神の言葉に関する自分の認識を交わりの中で分かち合い、自分の中で経験した啓きと照らし、および神の言葉を読んだ際の自分の反応を伝えてもよい。さらにあなたは、人々に道を与えることができる。それ以外に実践的なことはない。そうすることの目的は、神の言葉があなたの実践的な糧となるようにすることである。

あなたは一日のうち何時間を真に神の前で過ごすのか。一日のうちどのくらいの時間が神に実際捧げられているのか。どのくらいの時間が肉に捧げられているのか。心を絶えず神に向けることが、神によって完全にされる正しい道への第一歩である。肉のため、家族のため、あるいは自分の個人的な願望のためでなく、神の家の益のために、自分の心身と真の愛のすべてを神に捧げ、それらを神の前に置き、神に完全に従順であり、

神の旨を絶対的に配慮し、万事において神の言葉を原則および基礎とすることができるなら、そのようにすることで、あなたの意図や観点はすべて正しい場所にあり、あなたは神の前で神の称賛を受ける人となる。神が好むのは、絶対的に神へと向かう人であり、そのような人はひたすら神に献身する者である。神が忌み嫌うのは、神に対して熱心でなく、神に反抗する者である。神を信じ、神を享受することを常に望むが、神のために自分を完全に費やせない者を、神は忌み嫌う。神を愛していると言いながら、心の中で神に反逆する者を、神は忌み嫌う。雄弁な美辞麗句を用いて欺く者を神は忌み嫌う。神に対して真に献身的でない者、神の前で真に服従したことがない者は、本性が背徳的で過度に傲慢である。正常な実際の神の前で真に従順になれない者は、それにも増して傲慢であり、特に大天使の忠実な子孫である。神のために自分自身を真に費やす人は、自身の全存在を神の前に並べる。そうした人は神が発するすべての言葉に心から従い、神の言葉を実践することができる。また神の言葉を自分の存在の基礎とし、どの部分を実践すべきなのか突き止めるべく、神の言葉の中を真剣に探し求めることができる。これが真に神の前で生きる人である。あなたの行なうことが自分のいのちに有益であり、またいのちの性質が変わるよう、神の言葉を飲み食いすることを通じて内面的な要求や不十分な点を満たすことができるなら、それは神の旨を満たすだろう。神の要求に応じて行動し、肉ではなく神の旨を満足させるなら、それは神の言葉の現実に入ったということである。神の言葉の現実へと入ることについてさらに現実的に語れば、それは自分の本分を尽くして神の要求を満たせることを意味する。この種の実践的な行動だけが、神の言葉の現実に入ることと呼べる。この現実に入れるなら、あなたは真理を自分のものにする。これが現実に入る端緒である。まずはその訓練を行ない、その後初めてさらに深い現実へと入ることができる。戒めをどう守るべきか、神の前でどう忠実であるべきかを考えなさい。自分はいつ神の国に入れるのかということを、常に考えていてはならない。あなたの性質が変化しなければ、あなたが何を考えても、それは無益である。神の言葉の現実へと入るには、まず自分の考えや思いのすべてが神のためであるところに至らなければならない。それが最低限必要なことである。

現在、試練の最中にありながら、神の働きを理解していない人が多数いる。しかし、あなたにこれを言うておく。理解していないのであれば、それについて判断しないほうがよい。おそらく、真実が残らず明るみに出て、あなたが理解する日が来るだろう。判断を下さないことはあなたにとって有益だが、ただ消極的に待つだけではいけない。積極的に入ることを求めなければならないのであり、そうして初めて真に入る者になる。

人は自身の反逆性のために、実際の神に関する観念を絶えず膨らませている。そのせいで、すべての人がどう従順であるべきかを学ぶ必要が生じる。なぜなら、実際の神は人類にとって巨大な試練だからである。揺るぎなく立てないのであれば、すべて終わりである。実際の神に関する現実を理解していなければ、あなたが神によって完全にされることはあり得ない。人が完全にされ得るかどうかにおいて重要な段階は、その人が神の実際性を理解することである。地上に来た受肉した神の実際性は、すべての人にとって試練である。この点において揺るぎなく立てるならば、あなたは神を知る者、神を真に愛する者である。この点において揺るぎなく立てず、霊だけを信じ、神の実際性を信じられないのであれば、神への信仰がどれほど大きくても、それは無益である。目に見える神を信じられないのであれば、神の霊を信じられるだろうか。あなたは単に神を欺そうとしているのではないか。あなたは目に見える有形の神の前で従順ではないが、霊の前では従えるのか。霊は目に見えず無形である。ならば、神の霊に従うと言うのであれば、あなたは無意味なことを話しているのではないか。戒めを守る上で重要なのは、実際の神を理解することである。ひとたび実際の神を理解すれば、戒めを守れるようになるだろう。戒めを守ることは二つの要素から成っている。一つは神の霊の本質を固く掴み、霊の前で霊の吟味を受け入れられるようになることである。もう一つは、受肉した身体を真に理解し、真の従順を成し遂げることである。肉の前か霊の前かを問わず、人は神に対する従順さと畏れを常に抱かなければならない。そのような人にだけ、完全にされる資格がある。実際の神の実際性を理解しているなら、つまりこの試練において揺るぎなく立ってきたのであれば、あなたの手に余ることは何一つないはずだ。

中には、「戒めを守るのは簡単だ。神の前では率直かつ敬虔に話し、身振りなどしなければそれでいい。それが戒めを守るということだ」と言う人がいる。それは正しいだろうか。それならば、陰で神に抵抗する事柄をいくつか行なっても、戒めを守っていると見なされるだろうか。戒めを守ることには何が含まれているのかについて、あなたがたは徹底的に認識していなければならない。それは神の実際性を本当に認識しているかどうかに関連している。実際性に関する認識があり、この試練のさなかに躓いて倒れることがなければ、あなたに強い証しがあると見なされる。神のために鳴り響くような証しをすることは、おもに実際の神に関する認識があるか否か、そして普通であるだけでなく正常なこの人の前で服従し、死に至るまで従い続けられるかどうかと関連している。この従順さによって神のために真の証しをするならば、それはあなたが神によって得られたことを意味する。死に至るまで服従し、神の前で不満がなく、判断したり中傷し

たりせず、観念を抱かず、秘めたる意図を一切もたずにいられるなら、神はこのようにして栄光を得る。人から見下されている普通の人の中で従順になること、そして観念を抱かず死ぬまで従えることこそが、真の証しである。神が人々に入るよう要求する現実とは、あなたが神の言葉に従い、それらを実践し、実際の神の前にひれ伏し、自分の墮落を知り、神の前で自分の心を開き、最終的にこれらの神の言葉によって神に得られることができることである。それらの言葉があなたを征服し、神に対して完全に従順にするとき、神は栄光を得る。神はそれによってサタンを辱め、自身の働きを完了させる。受肉した神の実際性についてあなたが何の観念も抱かないのであれば、つまりこの試練において揺るぎなく立ってきたならば、あなたはその証しを立派にしたことになる。実際の神を完全に理解し、ペテロのように死に至るまで神に従える日が来るならば、あなたは神によって得られ、完全にされるだろう。神が行なうことのうち、あなたの観念に則していないものはすべてあなたにとっての試練である。神の働きがあなたの観念に則していれば、あなたはそのために苦しんだり精錬されたりする必要はないだろう。そうした観念を捨て去る必要があるのは、神の働きが極めて実践的であり、あなたの観念に則していないからである。それがあなたにとって試練であるのはそのためである。すべての人が試練の最中にあるのは、神の実際性のためである。神の働きは実践的であり、超自然的ではない。神の実践的な言葉と発言を、観念を抱かず完全に理解し、その働きがますます実践的になるにつれて神を真に愛せるようになることで、あなたは神によって得られるだろう。神が得る人の集団は、神を知る者たち、すなわち神の実際性を知る者たちである。さらに彼らは、神の実践的な働きに服従できる者たちである。

人々が想像するのと違い、肉にある期間中、神が人々に求める従順さに、判断や抵抗を避けるといったことは含まれない。むしろ、自身が生きる上での原則、および自身の生存の基礎として神の言葉を用い、神の言葉の本質を絶対的に実践し、神の旨を絶対に満たすことを神は要求する。受肉した神に服従するよう人々に求めることについて、その一つの側面は神の言葉を実践することであり、もう一つの側面は神の普通性と実際性に従えることを指している。これらは両方とも絶対的でなければならない。これらの側面を両方とも成し遂げられる者はみな、心の中に神への真の愛を抱く者である。彼らはみな神によって得られた者であり、自分のいのちを愛するように神を愛する。受肉した神の働きには、普通かつ実際的な人間性がある。このように、受肉した神の普通で実際的な人間性の外殻は、人々にとって巨大な試練となり、最大の困難となるのである。しかし、神の普通性と実際性は避けることができない。神はあらゆる手を尽くして解決策

を探したが、普通の人間性の外殻を自分から取り除くことは結局できなかった。つまり、彼は受肉した神であり、天なる霊の神ではないからである。受肉した神は人間が見ることのできない神ではなく、被造物の一員という外皮をまとった神である。ゆえに、その普通の人間性の外殻を自分から取り除くのは、決して容易ではない。したがって、受肉した神は何があっても、依然として肉の見地から自ら望む働きを行なう。この働きは普通で実際の神の表われなのだから、人々がそれに従わなくてよいことがどうして有り得ようか。神の行動について人々にいったい何ができようか。受肉した神は望むことを何でも行ない、自身が満足しているものはすべてそのままである。それに従わないのであれば、他に健全な策があるだろうか。今のところ、人々を救えてきたのは服従だけであり、それ以外の優れた発想をした者はいない。神が人々を試すことを望むなら、それについて何ができるといえるのか。しかし、これらはどれも天なる神が考え出したことではなく、受肉した神によって考え出されたことである。受肉した神がそうすることを望むのだから、それは誰にも変えられない。天なる神は受肉した神が行なうことに干渉しないのだから、それはなおさら人々が彼に従うべき理由になるのではないか。彼は実践的かつ普通であるものの、それは完全に受肉した神である。彼は自身の考えに基づいて、望むことを何でも行なう。天なる神はすべての任務を彼に委ねている。彼が何をしようと、あなたはそれに従わなければならない。彼には人間性があり、極めて普通であるものの、そのすべてを意図して采配したのだから、人々が目を見ひらき、非難の眼差しで彼を睨みつけることがどうしてできようか。普通であることを望めば、彼は普通である。人間性の中で生きることを望めば、彼は人間性の中で生きる。神性の中で生きることを望めば、彼は神性の中で生きる。人々はそれをどのようにでも考えることができるものの、神はいつまでも神であり、人間はいつまでも人間である。幾つかの細かいことを理由として、彼の本質を否定することはできない。また一つの些細なことを理由として、彼を神の「位格」の外へ追い出すこともできない。人には人間の自由があり、神には神の尊厳があり、両者が相互に干渉することはない。人は神にわずかな自由も与えられないのか。神がすこしだけ気ままなことに我慢できないのか。神に対してそう厳しくなっていくけない。それぞれが互いに寛容になるべきである。そうすれば、万事解決しないだろうか。それでも仲たがいが残るだろうか。そうした些細なことに我慢できなければ、寛大な人、あるいは真の人間になることを、どうして考えることさえできようか。神が人類に困難を引き起こしているのではなく、人類が神に困難を引き起こしているのである。人間はいつも、もぐらの塚を山にすることで物事に対処している。些細なことを大袈裟に受け止めるが、これは本当に余計なことである。神が普通の実際

な人間性の中で働くとき、行なうのは人間の働きではなく、神の働きである。しかし、人間は彼の働きの本質を見ず、常に彼の人間性の外殻しか見ない。人間はそのような大いなる働きを見たことがないのに、神の普通かつ正常な人間性を見ることに固執してそこから離れない。どうしてそれを神の前での服従と呼べるだろうか。天なる神は今や地上の神へと「変身」し、地上の神が今や天なる神なのである。両者の外見が同じかどうか、両者がいったいどう働きを行なうのかは関係ない。結局、神自身の働きを行なうのは神自身である。好むと好まざるとにかかわらず、あなたは従わなければならない。これはあなたに選択権がないことなのである。神は人間に服従されなければならない、人間は一切見せかけることなく神に完全に服従しなければならない。

受肉した神が今日得ようと望む人々の集団は、神の旨にかなう者たちである。彼らはひたすら神の働きに従い、天なる神という考えに絶えず囚われるのをやめ、漠然とした状態で生きたり、受肉した神に困難をもたらしたりしなければそれでよい。受肉した神に従えるのは、その言葉を絶対的に聞き、その采配に従う者たちである。そうした人たちは天なる神が実際にはどのような存在か、天なる神が現在どのような働きを人間のあいだで行なっているかを一切気にせず、自身の心を地上の神へ完全に捧げ、自分の全存在をその前に置く。決して自らの安全を考慮せず、受肉した神の普通性や実際性に関して騒ぎ立てることも決してない。受肉した神に従う者は、受肉した神によって完全にされることができる。天なる神を信じる者は、何も得ることがない。なぜなら、人々に約束と恵みを授けるのは、天なる神ではなく地上の神だからである。人は地上の神を単なる凡人と見なしつつ、天なる神を絶えず過大に見ていてはならない。それは不公平である。天なる神は偉大で素晴らしく、驚異的な知恵をもっているが、そんなものはまったく実在しない。地上の神は至って普通で取るに足らない存在であり、極めて平凡でもある。地上の神は非凡な精神をもたず、地を揺るがすような業を行なうこともない。至って普通に、かつ实际的に働きを行ない、話をする。地上の神は雷鳴を通じて語ったり、雨風を起こしたりはしないが、まことに天なる神の受肉であり、人間のもとで生活する神なのである。人は、自分が理解でき、自分の想像に合う存在を神として誇張しつつ、自分が受け入れられず、想像もつかない存在を卑しいものとみなしてはならない。そうしたことはどれも人間の反逆性に由来するのであり、神に対する人間の反抗の源である。

完全にされる者は精錬を経なければならない

あなたが神を信じているのであれば、神に従い、真理を実践し、自分の本分をすべて尽くさなければならない。それに加えて、自分が経験すべき物事を理解しなければならない。単に取り扱い、懲らしめ、そして裁きを経験するだけで、神を享受することはできても、神があなたを鍛えたり取り扱ったりしている際、それを感じられないままでいるなら、それは受け入れ難いことである。あなたはおそらく、こうした精錬に臨むとき、しっかり立つことができるだろうが、それだけではまだ十分ではない。あなたは前進し続けなければならない。神を愛することを学ぶにあたり、それが止まることはなく、そこに終わりはない。人々は神を信じることを、極めて単純なものとしているが、ひとたび実際の経験を得ると、神への信仰は人々が想像するほど簡単ではないことに気づく。神が働きを行なって人間を精錬するとき、人間は苦しむ。人間に対する精錬が大きいほど、神に対するその人の愛は大きくなり、その人の中で神の力がさらに示される。逆に、人の受ける精錬が少なければ少ないほど、神に対するその人の愛も少なくなり、その人の中で示される神の力も少なくなる。人に対するこうした精錬と苦痛が大きいほど、またその人の経験する苦悶が多いほど、神に対するその人の愛が深まり、神への信仰もさらに純粋なものとなり、神に関する認識もより深いものになる。あなたは自分の経験の中で、精錬を受けながら大いに苦しむ人、多くの取り扱いと懲らしめを受ける人を目の当たりにし、神への深い愛を抱き、神に関するさらに深遠で鋭い認識をもつのはこのような人だと理解する。取り扱いを経験していない人には表面的な認識しかなく、ただ「神は本当に良いお方だ。人々が神を享受できるよう、彼らに恵みを授けられる」と言うことしかできない。取り扱いと懲らしめを経験していれば、神に関する真の認識について話すことができる。したがって、神が人間の中で行なう働きが驚異的であればあるほど、それはいっそう貴重であり、有意義なものになる。それがあなたにとって測り知れないものであればあるほど、またそれがあなたの観念と相容れないものであればあるほど、神の働きはますますあなたを征服することができ、またあなたを獲得して完全にすることができる。神の働きの意義はなんと大きいことか。神がこのようにして人間を精錬しなければ、またこのような方法によって働きを行なっていなければ、神の働きは効果に乏しく、その意義を失ってしまうだろう。神がこの集団を選んで獲得し、終わりの日に完全にするであろうことは、過去に語られていた。その中に、並外れて大きな意義がある。神があなたがたの中で行なう働きが偉大であればあるほど、神に対するあなたがたの愛はいっそう深く純粋なものとなる。神の働きが偉大であればあるほど、人は神の知恵に関する何かをいっそう把握し、神に関する認識もより深くなる。終わりの日には、六千年にわたる神の経営計画が終焉を迎える。それがたやすく終わるなど、本

当にあり得るのか。神がひとたび人類を征服すれば、神の働きは終わるのだろうか。これほど単純なことなのか。人はまさに、それはこんなに単純なのだと思っているが、神が行なうことはそれほど単純なものではない。あなたが神の働きのどの部分に触れようとも、神の働きはどれも人間にとって測り知れないものである。仮にあなたがそれを推し量れたとしたら、神の働きの意義や価値は失われてしまうだろう。神によってなされる働きは測り知れないものであり、あなたの観念とまったく正反対のものである。そして、それがあなたの観念と一致しなければいけないほど、神の働きは有意義であることがよりいっそう示されるのである。もしもあなたの観念と一致するならば、それは無意味なものとなるはずだ。現在あなたは、神の働きはとても不思議だと感じているが、不思議だと感じれば感じるほど、神は測り知れないとますます感じるようになり、神の業がいかに偉大かを理解するのである。仮に、神が表面的かついい加減な働きだけを行なって人を征服し、その後は何もしなかったとすれば、人は神の働きの意義をその目で見ることができないだろう。あなたは今少しばかりの精錬を受けているが、それはあなたのいのちの成長に極めて有益なものである。ゆえに、あなたがたがそうした困難を経るのは不可欠なことなのである。今日、あなたは少しばかりの精錬を受けているが、後になれば神の業を真に目の当たりにすることができ、最終的に「神の業は実に不思議だ」と言うだろう。それがあなたの心の声なのだ。神の精錬（効力者の試練と刑罰の時）をしばらく経験して、最後に「神を信じることは実に難しい」と言った人がいる。その人たちが「実に難しい」という言葉を使った事実は、神の業が測り知れないものであること、神の働きに大きな意義と価値があること、そして神の働きには人間によって大切にされる価値があることを示している。わたしがこれほど多くの働きを行なった後、もしもあなたに認識が一切なかったとしたら、わたしの働きにはそれでも価値があるだろうか。あなたはそれを受けてこう言うだろう。「神への奉仕は実に困難だ。それに、神の業はほんとうに不思議で、神には真に知恵がある。神は実に美しい」。一定期間の経験を経た後、もしもあなたにこのような言葉が言えたなら、それは自分の中で神の働きを得たことを証明している。いつの日か、あなたが海外に福音を広めている際、誰かから「あなたの神への信仰はどうなっているのか」と訊かれたら、あなたは「神が行なうことは実に素晴らしい」と言えるようになるはずだ。すると相手は、あなたの言葉は実際の経験から語られたものだと感じる。これこそが、ほんとうに証しをするということである。あなたは、神の働きは知恵に満ち、自分の中での神の働きが真に自分を確信させ、自分の心を征服した、と言うだろう。神は人類の愛にふさわしい以上の存在なのだから、あなたは常に神を愛する。こうしたことを話せるならば、あなたは人々の心を感動

させることができる。そのすべてが証しをするということである。鳴り響くような証しをして涙を流すほど人々を感動させることができるならば、それは、あなたが真に神を愛する者であることを示している。と言うのも、あなたは神への愛を証しすることができる、あなたを通じて神の業が証しされるからである。そしてあなたの証しを通じ、他の人は神の働きを探し求め、神の働きを経験するようになり、どのような環境においても揺るぎなく立てるようになる。これが証しをする唯一の真の方法であり、まさに今あなたに求められていることである。神の働きは極めて貴重で人によって大切にされる価値があり、神はかくも貴重で豊富さに溢れていることを、あなたは理解すべきである。神は語るだけでなく、人々を裁き、彼らの心を精錬し、彼らに喜びをもたらし、彼らを自分のものとし、征服し、完全にすることができる。神が非常に素晴らしいであることを、あなたは自分の経験から知るだろう。では、あなたは今、どれほど神を愛しているのか。これらのことを本当に心から言えるのか。これらの言葉を心の底から表現できるとき、あなたは証しすることができるだろう。ひとたびあなたの経験がこの段階に達すれば、あなたは神の証人になることができ、その資格を得るだろう。自分の経験においてこの段階に達していなければ、あなたは依然として遠くかけ離れている。精錬される過程において、人が弱点を見せるのは普通のことだが、精錬された後には、「神はとても賢く働きを行なう」と言えなければならない。それらの言葉に関する実践的な認識を本当に得られれば、それはあなたにとって大切なものになり、あなたの経験に価値が生まれる。

今、あなたは何を追い求めるべきか。あなたが神の働きを証しできるかどうか、神の証しと顕示になれるかどうか、神によって用いられるのにふさわしいかどうか、あなたの求めるべきことである。神はあなたの中で、実際にどれほどの働きを行なってきたのか。あなたはどれほど見て、どれほど触れたのか。どれほど経験して味わったのか。神があなたを試したかどうか、取り扱ったかどうか、あるいは懲らしめたかどうかにかかわらず、神の業と働きがあなたに対してなされてきたのである。しかし、神を信じる者として、そして神によって完全にされることを進んで追い求める者として、あなたは自分の実際の経験を基に、神の働きを証しできるのか。自分の実際の経験を通じ、神の言葉を生きることができるのか。自分の実際の経験を通じ、他の人々に糧を施し、自分の生涯を捧げて神の働きを証しすることができるのか。神の働きを証しするには、自分の経験、認識、そして支払った代価に頼らなければならない。そうすることでのみ、あなたは神の旨を満たすことができる。あなたは神の働きを証しする者なのか。あなたに

そうした志があるのか。神の名、さらには神の働きを証しすることができ、神が自身の民に求める姿を生きることができるなら、あなたは神の証しをする人である。あなたは実際に神をどう証しするのか。それには、神の言葉を求め、それを生きることが切望し、また自分の言葉で証しを行ない、人々が神の働きを知り、神の業を見られるようにしなさい。そのすべてを心から求めるなら、神はあなたを完全にする。神によって完全にされ、最後に祝福されることしか求めないのであれば、あなたの神への信仰に対する見方は純粹ではない。あなたは実生活において神の業をどう見るべきか、神の旨が示されたときに神をどう満足させるべきかを追い求め、神の不思議と知恵をどう証しするべきか、神が自分を懲らしめ取り扱うことをどう証しすべきかを探し求めるべきである。これらはすべて、今あなたが熟考しているべきことである。神に対するあなたの愛の目的が、神によって完全にされた後、神の栄光に預かれるようになることだけであれば、それはまだ不十分であり、神の要求を満たせない。実践的な形で神の働きを証しし、神の要求を満たし、神が人々に行なう働きを経験できなければならないのである。苦痛であれ、涙であれ、あるいは悲しみであれ、あなたはそのすべてを実践の中で経験しなければならない。それらの目的は、神の証しをする一人としてあなたを完全にすることである。今、あなたはいったい何のために苦しみ、完全にされることを求めるよう強いられているのか。あなたの現在の苦しみは本当に神を愛して神の証しをするためなのか。あるいは肉の祝福のため、自分の将来的な見込みと運命のためなのか。あなたの意図、動機、そして追い求める目標はすべて正される必要があり、それらを自分の意志で導くことはできない。祝福を受けて権力を握るために完全にされることを求める人がいる一方、神を満足させ、神の働きを実際に証しするために、完全にされることを追い求める人もいるならば、この二つの追求の仕方のうち、あなたはどちらを選ぶだろうか。前者を選ぶのであれば、あなたはまだ神の基準から遠くかけ離れている。わたしは以前、自分の業を全宇宙に公然と知らしめ、この宇宙で王として君臨するだろうと語った。その一方、あなたがたに託されているのは神の働きを証ししに行くことであり、王となって全宇宙に君臨することではない。宇宙と天空は神の業で満たされよ。あらゆる者にその業を見せ、それを認めさせよ。これらの言葉は神自身に関連して語られるのであり、人間が行なうべきは神の証しをすることである。あなたは今、神をどれほど知っているのか。神についてどれほど証しできるのか。神が人間を完全にする目的は何か。ひとたび神の旨を理解した後、あなたはいかにして神の旨への配慮を示すべきか。自分が完全にされる意欲、自分が生きるものを通じて神の働きを証しする意欲があなたにあり、それがあなたの原動力になるのであれば、難しすぎることは何もない。人々が今必要としてい

るのは信仰である。あなたにこの原動力があれば、否定的態度、消極性、怠惰、肉の観念、処世哲学、反抗的性質、そして感情といったものをすべて容易に捨て去れる。

人が試練を受けている際に弱くなったり、自分の中で消極性が生じたり、神の旨や自分の実践の道が明らかでなくなったりするのは普通のことである。だがいずれにせよ、あなたはヨブのように神の働きを信じなければならず、神を否定してはならない。ヨブは弱く、自分が生まれた日を呪ったにもかかわらず、人生におけるすべての物事がヤーウェによって授けられること、そしてそのすべてを奪うのもまたヤーウェであることを否定しなかった。いかにして試されようとも、ヨブはこの信念を堅持した。あなたが自分の経験の中で、神の言葉を通じてどのような精錬を受けようとも、神が人類に求めるのは、要するに神への信仰と愛である。神がこのようにして働きを行なうことで完全にするのは、人々の信仰と愛、そして志である。神は人々を完全にする働きを行なうが、人はそれを見ることも、それに触れることもできない。こうした状況において、あなたの信仰が必要とされるのである。肉眼で見えない何かがあるときに、人々の信仰が必要とされる。また、あなたが自分の観念を捨てられないとき、あなたの信仰が必要とされる。神の働きについてよく理解できないとき、あなたに求められるのは信仰をもつこと、そして揺るぎなく立って証しをすることである。ヨブがこのような状態に達したとき、神がヨブの前に現われ、ヨブに対して語った。つまり、あなたが神を見られるのは自分の信仰の中からのみであり、あなたに信仰があるとき、神はあなたを完全にするのである。信仰がなければ、神はそれを行なうことができない。あなたが何を徳たいと望もうと、神はそれを授ける。あなたに信仰がなければ、あなたは完全にされることができず、神の業を見ることもできないし、ましてや神の全能を見ることなどできない。自分の実際の経験の中で神の業を見るという信仰があれば、神はあなたの前に現われ、あなたを中から啓いて導く。この信仰がなければ、神がそれを行なうのは不可能である。あなたが神への望みを失ったとしたら、どうして神の働きを経験できるだろうか。したがって、あなたに信仰があり、神に対して疑いを抱かず、神が何をしようと神に対する真の信仰をもっているときにだけ、神はあなたの経験を通じてあなたを啓いて照らし、そのとき初めてあなたは神の業を見ることができる。これらはすべて信仰を通じて成し遂げられる。信仰は精錬を通じてのみ生じるのであって、精錬なくして信仰が育まれることはあり得ない。「信仰」というこの言葉は何を指すのか。信仰とは、見ることも触れることもできないものがあるとき、神の働きが人間の観念にそぐわないとき、また、それが人間の手に届かないときに、人間がもつべき真の信念であり、誠実な心である。こ

れこそが、わたしの言う信仰である。苦難や精錬のとき、人は信仰を必要とする。そして信仰の後には精錬が続く。精錬と信仰は切り離せないのである。神がどのように働きを行なおうと、また自分の環境がどのようなものであろうと、あなたはいのちと真理を追い求め、神の働きに関する認識を求め、神の業を理解し、真理にしたがって行動することができる。そうすることが真の信仰をもつということであり、あなたが神への信仰を失っていないことを示している。あなたが精錬を通じて真理を追求することにしがみつき、神を真に愛し、神への疑念を募らせない場合にのみ、そして神が何をしようとも真理を実践して神を満足させ、神の旨を深く求め、神の旨に気を配ることができる場合にのみ、あなたは神に対する真の信仰をもつことができる。以前、あなたが王として治めるだろうと神が語ったとき、あなたは神を愛した。また、神があなたに自身を公然と示した際、あなたは神を追い求めた。だが現在、神は隠され、あなたは神を見ることができない。そして、あなたは多くの問題にぶつかっている。ならば今、あなたは神への望みを失うのか。ゆえに、あなたはいかなる時もいのちを追い求め、神の旨を満たすことを求めなければならない。これが真の信仰というものであり、最も美しい真実の愛である。

かつて、人々はみな神の前に出て決意を固め、「たとえ他の誰も神を愛さなくても、わたしは神を愛さなければならない」と言ったものだ。しかし今、精錬があなたに降りかかり、それが自分の観念にそぐわないせいで、あなたは神への信仰を失っている。これが真の愛なのか。あなたはヨブの行ないについて何度も読んでいるが、それらを忘れてしまったのか。真の愛は、信仰の中からのみ形を成すことができる。あなたは自分が受ける精錬を通じて神への真の愛を育む。また、あなたが実際の経験の中で神の旨に気を配れるのは信仰を通じてであり、自分の肉を捨てていのちを追い求められるのも信仰を通じてである。これこそが人の為すべきことである。あなたがそれを行なえば、神の業を見られるだろう。しかし、あなたに信仰が欠けているなら、神の業を見ることも、神の働きを経験することもできない。もしも神によって用いられ、完全にされたいと望むのであれば、次に挙げるものをすべて備えていなければならない。すなわち、苦しみ意志、信仰、忍耐、服従、そして神の働きを経験し、神の旨を把握し、神の悲しみを思いやれる能力などである。一人の人間を完全にするのは容易なことではなく、あなたが経験する一つひとつの精錬において、あなたの信仰と愛が必要とされる。神によって完全にされたいのであれば、ただ道へと駆け出したり、神のために自分を費やしたりするだけでは十分でない。神によって完全にされる者となり得るには、多くのものを備えてい

なければならない。苦難に直面したときは肉への不安を脇にのけ、神に不満をぶつけずにいられる必要がある。神があなたから隠れているときは、神に付き従う信仰をもち、以前の愛が揺らいだり、消え去ったりすることがないように維持できなければならない。神が何を行なおうと、あなたは神の意図に従わなければならない、また神に不満をぶつけるのではなく、自らの肉を呪う覚悟をしなければならない。試練に直面した際は、たとえ苦い涙を流したり、愛するものとの訣別が嫌だったりしても、神を満足させなければならない。それだけが真の愛、真の信仰なのである。あなたの実際の霊的背丈がどの程度であろうと、まずは苦難を受ける意志と真の信仰をとともに備え、肉を捨てる意志も備えていなければならない。神の旨を満足させるべく、自ら進んで自分の苦難に耐え、個人の利益を失うことを惜しんではならない。また、自分に後悔することもできなければならない。過去、あなたは神を満足させることができなかったが、今では悔いることができる。これらのどの点においても欠けがあってはならない。神はこれらのことを通じてあなたを完全にするのである。これらの基準を満たせなければ、あなたが完全にされることはない。

神に仕える者は、神のためにどう苦しむべきかを知るだけでなく、それ以上に、神を信じる目的は神への愛を追い求めることだと理解しなければならない。神があなたを用いるのは、単にあなたを精錬したり、苦しませたりするためでなく、むしろあなたが神の業を知り、人生の真の意義、とりわけ、神に仕えることが容易な業ではないことを知るようにするためである。神の働きを体験することは、恵みを享受することではなく、むしろ神に対する自分の愛のために苦しむことに関係している。あなたは神の恵みを享受しているのだから、神の刑罰も享受しなければならない。そのすべてを経験しなければならないのである。あなたは自分の中における神の啓きを経験できるが、自分に対する神の取り扱いと裁きも経験できる。このように、あなたの経験は包括的なのである。神はあなたに裁きと刑罰の働きを行なった。神の言葉はあなたを取り扱ったが、それだけでなく、あなたを啓いて照らしもした。あなたが否定的かつ弱くなったとき、神はあなたのことを心配している。この働きはどれも、人間に関するすべてのことが神の指揮下にあることをあなたが知るようになるためである。あなたは、神を信じるとは苦難を受けること、または神のためにありとあらゆることを行なうことだと考えているかもしれないし、神を信じる目的は自分の肉が平和であるため、人生において万事が順調に進むため、あるいは自分があらゆることにおいて快適かつ気楽でいられるためだと思っているだろう。しかし、これらの目的はどれも、神への信仰に付随させるべきではないもの

である。あなたがそうした目的のために信じているのであれば、あなたの見方は誤りであり、あなたが完全にされることは不可能である。神の業、神の義なる性質、神の知恵、神の言葉、そして神の不思議と計り知れない性質は、どれも人々が認識すべきことである。そうした認識をもち、またそれを使うことで、自分の個人的な要求、希望、および観念を心の中から残らず取り除きなさい。これらのことを排除して初めて、あなたは神から求められる条件を満たすことができる。そうすることでのみ、あなたはいのちを得、神を満足させられるのである。神を信じる目的は、神を満足させ、神が求める性質を生きること、神の業と栄光がこの無価値な人々の集団を通じて示されるようにすることである。これが神を信じる正しい観点であり、あなたが追求すべき目標でもある。あなたは神を信じることについて正しい観点をもち、神の言葉を得ることを求めなければならない。神の言葉を飲み食いし、真理を生きられるようにならなければならない、とりわけ神の実際の業、全宇宙を通じて為される神の素晴らしい業、そして、神が肉において行なう実践的な働きを見られるようになる必要がある。人は実際の経験を通じ、神が自分にどう働きを行なうのか、自分に対する神の旨が何かを理解することができる。それはどれも、人々の墮落したサタンの性質を排除するのが目的である。自分の中にある汚れと不義を一掃し、誤った意図を取り除き、神に対する真の信仰を育んだ後、真の信仰をもつことでのみ、あなたは神を真に愛することができる。神への信仰を基礎としなければ、あなたは本当に神を愛することができない。神を信じることなく、神への愛を実現できるだろうか。あなたは神を信じているのだから、それについて混乱してはならない。中には、神への信仰が自分に祝福をもたらすことを知るやいなや、活力に満ち溢れるものの、精錬を受けなければならないことを知ったとたん、すべての精力を失う人がいる。それが神を信じることなのか。最終的に、あなたは自分の信仰において、神の前で完全無欠の服従を成し遂げなければならない。あなたは神を信じているが、依然として神に要求を行ない、捨てきれない宗教的観念、諦めきれない個人的な利益が数多くあり、いまだに肉の祝福を求め、神が自分の肉を助け出し、自分の魂を救うことを望んでいる。これらはみな誤った観点をもつ人々の振る舞いである。宗教的な信念をもつ人々は、神を信仰してはいるものの、自分の性質を変えることや、神に関する認識を追い求めず、自分の肉の利益しか求めない。あなたがたの多くは、宗教的信念の範疇に属する信仰をもっている。それは神に対する真の信仰ではない。神を信じるには、神のために苦しむ覚悟がある心と、自分を捧げる意志をもっていなければならない。この二つの条件を満たさない限り、神に対するその人の信仰は無効であり、性質の変化を成し遂げることはできない。心から真理を追い求め、神に関する認識を求め、いのちを追い求

める人だけが、真に神を信じる者である。

試練が自分に臨むとき、あなたは神の働きをどう当てはめてその試練に対処するだろうか。否定的になるだろうか、それとも神による人間への試練と精錬を肯定的な側面から理解するだろうか。あなたは神による試練と精錬から何を得るだろうか。神に対するあなたの愛は成長するだろうか。精錬を受けるとき、あなたはヨブの試練を当てはめ、神があなたの中で行なう働きに真剣に取り組むことができるだろうか。神がどのように人間を試すのか、あなたはヨブの試練を通じて理解できるだろうか。ヨブの試練はあなたにどのような靈感をもたらすだろうか。自分の精錬のただ中で、神のために証しする意欲があなたにあるだろうか。それとも快適な環境で肉を満足させることを欲するだろうか。神への信仰に関するあなたの観点は、いったいどのようなものなのか。それは本当に肉のためでなく、神のためであるのか。探し求める中で、あなたの追求には実際のところ目標があるのか。神によって完全にされるために、自ら進んで精錬を受ける気があるのか。それとも、むしろ神によって刑罰を受け、呪われたほうがよいと思っているのか。神のために証しをするという問題について、あなたの見方はいったいどのようなものなのか。真に神の証しをするには、人間は置かれた環境の中で何をすべきなのか。実際の神はあなたの中で実際の働きを行なうにあたり、数多くのことを明かしたというのに、あなたはなぜ立ち去ろうという考えを常に抱いているのか。神に対するあなたの信仰は、神のためなのか。あなたがたの大半にとって、信仰とは自分のために行なう計算の一部であり、自分の個人的な利益が目的である。神のために神を信じる人はほとんどいない。それは反逆ではないのか。

精錬の働きの目的は、おもに人々の信仰を完全にすることである。最終的に、あなたは立ち去りたいのに立ち去れないという状態に至る。中には希望のひとかけらを奪われてもなお信仰をもてる人もいる。そして人々は自分の将来の見込みについて、もはや何の希望も抱かない。そのとき初めて神の精錬は完了する。人間はいまだ生死のあいだを彷徨う段階に達しておらず、死を味わったことがないので、精錬の過程はまだ終わっていない。効力者の段階にある者たちでさえ、極限までには精錬されてはいなかった。ヨブは極限の精錬を経ており、頼れるものが何もなかった。すべての希望を失い、頼るものが何もなくなるところまで、人は精錬を受けなければならない。それだけが真の精錬である。効力者の時期において、あなたの心が神の前で常に静まり、神が何を行なおうと、あるいは自分に対する神の旨が何であろうと、常に神の采配に従ったなら、あなたはその道の果てに、神がなしたすべてのことを理解するだろう。あなたはヨブの試練を

受けると同時に、ペテロの試練も受ける。ヨブは試された際に証しを行ない、最後にヤーウェがヨブに示された。証しを行なった後、ヨブは初めて神の顔を見るのにふさわしい者となったのである。「わたしは汚れた地から隠れ、聖なる国に自分を現わしている」と言われたのはなぜか。それは、聖くなって証しを行なわなければ、神の顔を見る品位は得られない、という意味である。神の証しを行なえなければ、あなたには神の顔を見る品位がない。精錬に直面した際、退いたり、神に不満をぶついたりして神の証しを行わず、サタンの笑い者になったとしたら、神の出現を得ることはできない。あなたがヨブのように、試練のただ中で自らの肉を呪い、神に不満をぶつせず、文句を言うことも、自分の言葉で罪を犯すこともなく、自分の肉を忌み嫌うことができれば、あなたは証しを行なっている。ある程度の精錬を受けてなお、ヨブのように神の前で完全に服従し、神にその他の要求をしたり、自身の観念を抱いたりしないのであれば、神はあなたの前に現われる。今、神はあなたの前に現われない。なぜなら、あなたが観念、個人的な先入観、勝手な考え、個人的な要求、そして肉の利益をあまりに多く抱いており、神の顔を見るに値しないからである。もしも神を見たのであれば、あなたは自分の観念を通じて神を押し測り、またそうすることで、神を十字架にかけることになる。自分の観念にそぐわないことが数多く起きても、あなたがそうした観念を脇にのけ、それらのことから神の業に関する認識を得て、精錬のただ中で神を愛する心を示せるなら、それが証しを行なうということである。自分の家庭が平穏で、肉の快適さを享受し、あなたを迫害する者が一人もおらず、教会の兄弟姉妹が自分に従っている場合、あなたは神を愛する心を示せるだろうか。そうした状況があなたを精錬し得るだろうか。神に対するあなたの愛は精錬を通じてのみ示されることができ、またあなたは、自分の観念にそぐわない出来事を通じてのみ完全にされ得る。神は数多くの逆境や否定的な物事を役立たせ、ありとあらゆるサタンの表われ、つまりサタンの行動、非難、妨害、そして欺瞞を用いることで、あなたにサタンの忌まわしい顔をはっきり見せ、それによってサタンを識別するあなたの能力を完全にする。そうすることで、あなたはサタンを憎んで捨てることができるのである。

あなたは数多くの失敗や弱さを経験し、消極的な状態に何度も陥ったが、それはすべて神の試練だと言える。なぜなら、あらゆることは神に由来し、すべての物事や出来事も神の掌中にあるからである。あなたが失敗しようが、弱かろうが、躓こうが、そのすべては神次第であり、神の手の内に握られている。神の視点から見れば、それはあなたの試練であり、あなたがそのことを認識できなければ、それは試みになるだろう。人々

が認識すべき二種類の状態がある。その一つは聖霊に由来するものであり、もう一つの根源はサタンの可能性がある。前者は、聖霊があなたを照らし、あなたが自分を知り、自分を忌み嫌い、自分について悔いるようにし、神に対する真の愛をもち、神を満足させることを決心できるようにする状態である。後者は、自分のことを知っているものの、消極的かつ弱いという状態である。この状態は神の精錬だと言えるし、サタンの試みだとも言えるだろう。それは神による自分の救いであると認識し、自分はいま神に大きな借りがあると感じ、その時から神にその借りを返そうとして、そのような墮落に二度と陥らず、神の言葉を飲み食いすることに努力し、自分のことを常に至らない存在であると見なし、切望する心をもつならば、それがまさに神の試練である。苦難が終わり、あなたが前進を再開した後も、神は引き続きあなたを導き、あなたに照らしと啓きを与え、糧を施すだろう。しかし、あなたがそれを認識せず、否定的になり、ただ自暴自棄になって失望し、そのように考えるのであれば、サタンの試みがあなたに臨むだろう。ヨブが試練を受けたとき、神とサタンは互いに賭けをし、神はサタンにヨブを苦しめることを許した。ヨブを試していたのは神だったが、実際にヨブのもとへ来たのはサタンだった。サタンとしてはヨブを試みたのだが、ヨブは神の側についていた。そうでなければ、ヨブは試みに負けていたはずである。人間は試みに負けるとすぐ危険に陥る。精錬を受けることは神からの試練だと言えるが、あなたが良い状態になれば、それはサタンによる試みだとも言える。あなたがビジョンを理解していなければ、サタンはあなたを責め、あなたのビジョンを曖昧にさせるだろう。あなたは知らぬ間に試みに負けるのだ。

神の働きを経験しなければ、あなたが完全にされることは決してない。あなたはまた、自分自身の経験の中で、その細部にも入らなければならない。例えば、自分が観念や有り余る動機を膨らませるのは何が原因か、それらの問題を解決するにあたり、どのような実践がふさわしいのか、といったことである。神の働きを経験できるなら、それはあなたに霊的背丈があることを意味する。ただ活力があるように見えるだけなら、それは真の霊的背丈でなく、あなたは絶対に揺るぎなく立つことができない。神の働きを経験することができ、いかなる時でも、どの場所においてもそれを経験して熟考でき、また羊飼いを離れ、神に頼って独立して生きることができ、神の実際の業を見ることができ、その時初めて神の旨が成就する。現在、ほとんどの人がそれをどう経験すべきかわかっておらず、問題に直面した際、それに対処する方法を知らない。そのような人は神の働きを経験できず、霊的生活を送ることができないのである。あなたは神の言

業と働きを、自分の実際の生活に取り入れなければならない。

時として、神はあなたにある種の間を与える。それは、あなたが内なる喜びを失ったり、神の臨在を失ったりして、闇へと陥る原因になる感情である。それは一種の精錬である。何をしてもうまく行かなかったり、壁にぶち当たったりすることがある。これは神の鍛錬である。時として、神に従順でなく反抗的なことをしても、誰にも知られないことがある。しかし、神はそれを知っている。神はあなたを立ち去らせず、あなたを懲らしめる。聖霊の働きは極めてきめ細やかである。聖霊は人々の一つひとつの言動、一つひとつの行動と動き、人々のあらゆる思いと考えを注意深く観察し、それによって人々がこれらのことについて内面的な認識を得られるようにする。一度何かをしてうまく行かず、再びやってもまだうまく行かなければ、あなたは少しずつ聖霊の働きを理解するようになる。訓練の時を何度も経て、神の旨に適うためには何をすべきか、また、神の旨に適わないものは何であるかを知る。最終的に、自分の中から聖霊に導かれたとき、あなたは正確に反応するようになる。あなたは時として反抗的になり、内面から神によって叱責されることもあるだろう。それはどれも神の鍛錬から来るのである。神の言葉を大事にせず、神の働きを軽視するなら、神はあなたのことを一切気にかけない。あなたが神の言葉を真剣に捉えれば捉えるほど、神はあなたをますます啓く。現在、教会には、曖昧かつ混乱した信仰をもつ人がおり、鍛錬を受けずに不適切なことを数多く行なっている。そのような人の中には聖霊の働きが明瞭に見受けられない。鍛えられることのないまま、金を稼ぐために自分の本分を置き去りにし、事業に打って出る人もいるが、そうした人はいっそう大きな危険に晒されている。そのような人は、現在において聖霊の働きがないだけでなく、将来完全にされるのも難しい。内面において聖霊の働きも神の鍛錬も見受けられない人が多数いる。そのような人は神の旨を明瞭に理解しておらず、神の働きを知らない者たちである。精錬のさなかに揺るぎなく立つことができ、神が何を行なうかに関わらず、神に付き従い、また、少なくとも立ち去らずにすることができる人、あるいは、ペテロが達成したことの0.1%を達成できる人は、よくやってはいるのだが、神に用いられるという観点から言えば、彼らに価値はない。多くの人は物事を迅速に理解し、神に対する真の愛を抱き、ペテロのレベルを超えることができる。神はこのような人を完全にする働きを行なう。そして鍛錬と啓きがそうした人たちに臨み、自分の中に神の旨と一致しないものがあれば、彼らはそれをすぐに捨て去れる。このような人々は金であり、銀であり、宝石であって、彼らの価値は極めて高い。神が様々な働きを行なったのに、依然として砂や石のようであったなら、あなたは無

価値である。

赤い大きな竜の国における神の働きは驚くべきものであり、測り知ることができない。神によって完全にされる人々の集団もあれば、淘汰される集団もある。と言うのも、教会にはあらゆる種類の人がいるからである。真理を愛する人と愛さない人、神の働きを経験する人としらない人、本分を尽くす人と尽くさない人、神のために証しをする人としらない人。その一部は不信者であり悪人だが、彼らは必ずや淘汰される。神の働きを明瞭に知っていなければ、あなたは消極的になるだろう。なぜなら、神の働きが見受けられるのは少数の人々の中だけだからである。その時、神を真に愛する者とそうでない者が明らかになる。神を真に愛する者には聖霊の働きがあり、神を真に愛していない者は神の働きの各段階を通じて暴かれる。彼らは淘汰の対象になるのである。これらの人たちは征服の働きの過程で暴かれ、完全にされる価値のない人々である。そして、完全にされた者はすべて神のものとされ、ペテロのように神を愛することができる。征服された者たちには自発的な愛がなく、受動的な愛だけがあり、神を愛することを強いられている。自発的な愛は実際の経験を通じて得た認識によって育まれる。この愛は人間の心を占め、彼らを自発的に神に献身させる。また、神の言葉が彼らの基礎となり、彼らは神のために苦しむことができる。もちろんこれらは、神によって完全にされた人が所有するものである。あなたが征服されることだけ求めるのであれば、神の証しをすることはできない。神が人々の征服を通じて救いの目的を達成するだけなら、効力者の段階で仕事は終わる。しかし、人々を征服することが神の最終目標ではない。それは人間を完全にすることである。したがって、この段階は征服の働きというより、むしろ完全と淘汰の働きだと言うべきである。いまだ完全に征服されていない人がおり、彼らを征服する過程において、人々の集団が完全にされる。これら二つの働きは調和して実行される。これほど長きにわたる働きの中でさえ、人々は立ち去らずにいる。そのことは、征服することの目標が達成されたことを示す。これが征服されるということの事実である。精錬は征服されるためのものではなく、完全にされるためのものである。精錬がなければ、人々が完全にされることはないだろう。ゆえに、精錬はまさに貴重である。今日、人々の一集団が完全にされ、得られている。以前に言及された十の祝福は、どれも完全にされた者たちを対象とするものだった。地上で姿を変えることに関する一切の物事は、完全にされた者たちを対象としている。完全にされていない者たちには、これを達成することができないのである。

辛い試練を経験することでのみ、神の素晴らしさを知ること

ができる

今日、あなたはどれほど神を愛しているのか。また、神があなたに行なったすべてのことのうち、あなたはどのくらいを知っているのか。これらがあなたの学ばなければならないことである。神が地上に来るとき、人に行なったすべてのこと、そして人に理解させたすべてのことは、人が神を愛し、真に神を知るようにするためのものである。人が神のために苦しむことができ、ここに至ることができたのは、ある意味では神の愛のおかげであり、別の意味では神の救いのおかげ、さらには神が人に行なった裁き、そして刑罰の働きのおかげである。神の裁き、刑罰、試練がなく、神があなたがたを苦しめていなければ、率直に言って、あなたがたが真に神を愛することはない。人に為された神の働きが偉大であればあるほど、そして人の苦しみが大きければ大きいほど、神の働きがどれほど意義深いか明らかになり、その人の心は真に神を愛することができる。あなたはどうすれば神の愛し方を学べるのか。苦痛や精錬、つらい試練がなければ、さらに、神が人に与えたものが恵みと愛と慈悲だけだったなら、神を真に愛するところまで達せるだろうか。神による試練の中、人は自分の欠点を知り、自分を取るに足りない、軽蔑すべき卑しい存在であり、自分には何もなく、自分は何物でもないことを知る一方、同じく神による試練の中、神は人間のために様々な環境を創り、人が神の素晴らしさをより良く経験できるようにする。苦痛は大きく、時として乗り越えられないこともあり、打ち砕くような悲しみに達することさえある。しかし、人はそれを経験することで、自分における神の働きがいかに素晴らしいかを知り、またそれを基礎とすることのみ、自分の中に神への真の愛が生まれるのである。今日、神の恵みと愛と慈悲だけでは真に自己認識することができず、ましてや人の本質を知るなど不可能であることを、人は理解している。神の精錬と裁きによってのみ、また、精錬それ自体の過程においてのみ、人は自分の欠点を知り、自分に何もないことを知る。このように、神に対する人の愛は神の精錬そして裁きという礎の上に築かれる。もしもあなたが神の恵みだけを享受し、平和な家庭生活や物質的な祝福があるのであれば、あなたは神を得ておらず、神への信仰が成功したとは考えられない。神はすでに肉における恵みの働きの一段階を行っており、人に物質的な恵みを授けてきたが、人は恵みと愛と慈悲だけでは完全になれない。人は自分の経験の中で神の愛の一部と出会い、神の愛と慈悲を知っているが、一定期間経験すると、神の恵みと愛と慈悲が人を完全にすることはできず、人の中にある堕落を明らかにすることも、その人の堕落した性質を取り除くことも、その人の愛と信仰を完全にすることもできないのだと理解する。神による恵みの働きは一時の働きで

あり、人は神を知るにあたり、神の恵みを享受することには頼れないのである。

神はどのような手段で人を完全にするのか。それは神の義なる性質によって成し遂げられる。神の性質はおもに義、怒り、威厳、裁き、呪いから成り立っており、神はおもに裁きという手段で人を完全にする。中にはそれが理解できず、なぜ神は裁きと呪いによってしか人を完全にできないのかと問う人がいる。そのような人は「神が人を呪ったら、人は死ぬのではないか。神が人を裁いたら、人は断罪されるのではないか。それにもかかわらず、人はどうして完全になれるのか」と言う。神の働きを理解しない人はこのように言うのである。神が呪うのは人間の不従順であり、神が裁くのは人間の罪である。神の言葉は厳しく容赦がないものの、人の中にあるあらゆるものを明らかにし、そうした厳しい言葉を通じて人の中にある本質的な物事を露わにするが、神はそのような裁きを通じて肉の本質に関する深遠な認識を人に授け、そうして人は神の前で服従する。人の肉は罪から成り、サタンに属するものであり、不従順であり、神の刑罰の対象である。ゆえに、人に自分を認識させるには、神の裁きの言葉がその人に降りかかり、ありとあらゆる精錬が用いられなければならない。そのとき初めて神の働きは成果を生む。

神の語る言葉から、神はすでに人の肉を断罪したことがわかる。では、その言葉は呪いの言葉ではないのか。神によって語られる言葉は人の本性を暴き、その人はそうした暴きを通じて裁かれる。そして神の旨を満たせないと知ったとき、心の中で悲しみと悔恨を感じ、自分が神に大きな借りがあり、神の旨に到達できないことを感じるのである。時として、聖霊が内側からあなたを懲らしめることがあるが、この懲らしめは神の裁きに由来する。時として、神があなたを責め、あなたから顔を隠し、あなたに注意を払わず、あなたの中で働きを行わず、あなたを精錬すべく無言で罰することがある。人における神の働きは、おもに神の義なる性質を明らかにするためのものである。最終的に、人は神に対してどのような証しを行なうのか。神が義なる神であること、そして神の性質が義、怒り、刑罰、裁きであることを、人は証しする。つまり、人は神の義なる性質を証しするのである。神は自身の裁きを用いて人を完全にしており、人を愛し、救ってきた。しかし、神の愛にはどれだけのものが含まれているのか。そこには裁き、威厳、怒り、呪いがある。神は過去に人を呪ったが、底なしの淵に完全に放り投げたわけではなく、そうした手段を用いて人の信仰を精錬した。人を死に追いやったわけではなく、人を完全にすべく業を行なったのである。肉の本質はサタンに属するものである。それは神が言った通りなのだが、神が為した事実はその言葉通りに成就したのではなか

った。神があなたを呪うのは、あなたが神を愛するようになるため、肉の本質を知るようになるためである。神があなたを罰するのは、あなたが目覚めるようにするため、そして内なる欠点を認識し、人が完全に無価値であることを知るようになるためである。このように、神の呪い、裁き、威厳、怒りはどれも、人を完全にするためのものである。神が今日行なうすべてのこと、神があなたがたの中で明らかにする自身の義なる性質は、いずれも人を完全にするためのものである。それが神の愛である。

人は自身の伝統的な観念の中で、神の愛は恵み、慈悲、そして人の弱さに対する憐れみだと信じている。それらも神の愛ではあるが、あまりに一方的であり、神が人を完全にする主たる手段ではない。病気のために神を信じ始める人もいるが、その病気はあなたに対する神の恵みである。それがなければ、あなたは神を信じることはなかったはずだ。そして神を信じていなければ、ここまで到達することはなかっただろう。ゆえに、そうした恵みでさえも神の愛なのである。イエスを信じていたとき、人々は真理を理解していなかったので、神に愛されないようなことを多数行なった。しかし、神には愛と慈悲があり、人をここに至らせた。そして、人が何も理解していないにもかかわらず、神は人が自分に従うのを許し、さらには人を今日へと導いてきたのである。これは神の愛ではないのか。神の性質において表わされるのは、神の愛である。これはまったく正しい。教会の建設が頂点に達したとき、神は効力者という段階の働きを行ない、人を底なしの淵に放り投げた。効力者の時代における言葉はすべて呪いだだった。つまり、あなたの肉への呪い、墮落したサタンの性質への呪い、そしてあなたに関するもののうち、神の旨を満たさないものへの呪いである。その段階で神が行なった働きは威厳として表わされた。その直後、神は刑罰という段階の働きを実行し、死の試練がもたらされた。そのような働きの中、人は神の怒り、威厳、裁き、刑罰を目の当たりにしたが、同時に神の恵み、愛、そして慈悲も見たのである。神が行なったすべてのこと、そして神の性質として表わされたすべてのことは人に対する愛であり、神が行なったすべてのことは、人の必要を満たすことができた。神がそれを行なったのは人を完全にするためであり、人の霊的背丈に応じて糧を施したのである。神がそれを行なっていなければ、人は神の前に出られず、神の真の顔を知る術は一切なかったはずだ。人が最初に神を信じ始めた時から今日に至るまで、神は人の霊的背丈に応じて徐々に糧を施し、人が内面において少しずつ神を知るようにしたのである。今日に至って初めて、人は神の裁きの素晴らしさに気づく。効力者という段階の働きは、創世から今日に至るまでの中で、最初になされた呪いの働きの実例だった。人は呪われて底なしの淵に放り込まれたが、仮に神が

それを行なわなければ、人は今日、神に対する真の認識を得ていなかっただろう。神の呪いを通じてでなければ、人が正式に神の性質と出会うことはなかったのである。人は効力者の試練を通じて暴かれる。自分の忠誠が受け入れ難いものであり、霊的背丈があまりに小さく、神の旨を満たせず、いつでも神を満足させるという自分の主張が言葉に過ぎないことを理解したのである。効力者という段階の働きにおいて、神は人を呪ったものの、今振り返ると、神の働きのその段階は素晴らしいものだった。人にとって素晴らしい転機となり、いのちの性質を大きく変えたからである。効力者の時代の前、人はいのちを追い求めること、神を信じる意味、あるいは神の働きの知恵を何ら理解しておらず、神の働きが人を試せることも理解していなかった。効力者の時代から今日に至るまで、人は人知を超える神の働きがいかに素晴らしいかを目の当たりにしている。人の頭脳では、神がいかに働きを行なうかなど理解できないし、自分の霊的背丈がいかに小さいかや、自分に不従順な物事があまりに多いことを悟ってもいる。神が人を呪ったとき、それはある効果を生じさせるためであり、人を死に追いやることはなかった。神は人を呪ったものの、それは言葉によって行なわれたのであり、神の呪いが実際に人に降りかかることはなかった。なぜなら、神が呪ったのは人の不従順であり、ゆえに神が呪いの言葉を発したのは人を完全にするためでもあったからである。神が人を裁くにしても、あるいは呪うにしても、それは人間を完全にする。どちらも人の中にある不純なものを完全にすべくなされるのである。この手段を通じて人は精錬され、人の中に欠けているものが神の言葉と働きを通じて完全にされる。厳しい言葉であれ、裁きであれ、あるいは刑罰であれ、神の働きの各段階は人を完全にするものであり、絶対的に適切なものである。どの時代においても、神がこのような働きを行なったことはない。今日、あなたがたが神の知恵を理解するよう、神はあなたがたの中で働きを行なっている。あなたがたは内面においていくばくかの苦痛を味わってきたが、心は安定していて平安である。神の働きのこの段階を享受できるのは、あなたがたの祝福である。将来得られるものが何であるかにかかわらず、あなたがたが今日、自分における神の働きの中で見られるものは愛である。神の裁きと精錬を経験しなければ、その人の行ないや情熱は表面的なものにとどまり、性質はいつまでも変わらない。それで神に得られたと言えるのか。今日、人の中には傲慢やうぬぼれがいまだ数多くあるものの、その性質は以前に比べてずっと安定している。神があなたを取り扱うのはあなたを救うためであり、取り扱われる際に苦痛を感じることもあっても、あなたの性質に変化が起こる日はいずれやって来る。その時、あなたは振り返って神の働きがいかに賢明かを知る。またその時、あなたは神の旨を真に理解できる。今日、自分は神の旨を理解していると言う人がいる。しか

し、それはまったく現実的でない。実際のところ、彼らは嘘をついている。と言うのも、目下のところ、神の旨が人を救うことなのか、それとも呪うことなのか、彼らはまだわかっていないからである。おそらくあなたは、今ははっきりとわからないだろう。しかし、神の栄光の日がすでに訪れたことを知るときがいつか来る。また、神を愛することがいかに意義深いかを知ること、あなたは人生を知るようになり、あなたの肉は神を愛する世界に生きる。あなたの霊は解放され、あなたの生活は歓びに溢れ、あなたは常に神のそばにいて神を仰ぎ見る。その時あなたは、今日の神の働きがいかに価値あるものかを真に理解する。

今日、大半の人はそのような認識をもっていない。そうした人たちは、苦しみには価値がなく、自分は世の中から見捨てられており、家庭生活には問題があり、自分は神に愛されておらず、将来の見込みは暗いと信じている。中には苦しみが極限に達し、死を考えるようになる人がいる。それは神に対する真の愛ではない。そうした人は臆病者であり、忍耐力がなく、弱くて無力なのである。神は人に愛されることを強く願っているが、人は神を愛すれば愛するほど苦しみが大きくなり、愛すれば愛するほど人の試練も大きくなる。もしもあなたが神を愛するなら、あらゆる苦しみがあなたに降りかかる。もしも神を愛さなければ、おそらく何もかもが順調にゆき、あなたの周囲では何もかもが平和だろう。あなたが神を愛するとき、周囲の多くのことが克服し難いと感じ、またあなたの霊的背丈があまりに小さいために精錬される。さらに、あなたは神を満足させることができず、神の旨はあまりにも崇高で、人の及ばぬところにあるといつも感じる。そのすべてのために、あなたは精錬されるのである。自分の中に多くの弱さがあり、神の旨を満たせないものが数多くあるため、あなたは内面から精錬されるのである。とは言え、精錬を通じてでなければ清められることはない、あなたがたははっきり理解しなければならない。したがって、あなたがたは終わりの日に神への証しをしなければならない。あなたの苦しみがいかに大きくても、最後まで歩まなければならない。最後の一息になってもなお神に対して忠実であり続け、神に身を委ねなければならない。これだけが真に神を愛するということであり、またこれだけが鳴り響くような強い証しなのである。サタンの試みを受けたら、あなたはこう言うべきである。「わたしの心は神のものであり、神はすでにわたしを得た。あなたを満足させることはできない。わたしのすべてを捧げて神を満足させなければならない」。神を満足させればさせるほど、神はあなたを祝福し、神に対するあなたの愛は強くなる。そして、あなたは信仰と決意をもち、神を愛することに生涯を捧げることほど価値や意義のあるものはないと思うだろう。

。神を愛しさえすれば悲しみがなくなるとも言える。自分の肉が弱り、多くの実際の問題に悩むことがあっても、その間あなたは心から神にすがり、霊の内側で慰められ、確信を抱き、頼るものがあると感じるだろう。このようにして、あなたは多くの状況を克服することができ、降りかかる苦しみので神に不満を抱くこともないはずだ。その代わりにあなたは歌い、踊り、祈り、集って交わり、神のことを考えたいと思うだろう。そして自分の周囲にある、神によって整えられたすべての人や出来事や物事はふさわしいものだと感じるだろう。もしもあなたが神を愛さないなら、何を見ても退屈で、目を楽しませるものは一切ない。霊においては自由がなく虐げられており、心の中で絶えず神に不満を抱き、自分の苦しみはあまりに大きく、まったく不公平だと常に感じる。幸福のために追求するのではなく、神を満足させるため、サタンにそしられないために追求するのであれば、そうした追求は神を愛する多大な力を与えてくれる。人は神によって語られたすべてのことを実行でき、その人が行なうすべてのことは神を満足させられる。これが現実を自分のものにすることである。神を満足させることを追求するのは、神への愛を用いて神の言葉を実践することである。いかなる時も——たとえ他の人たちに力がない時であっても——あなたの中には神を愛し、深く求め、その存在を懐かしむ心が依然として存在する。これが真の霊的背丈である。あなたの霊的背丈がどれほど大きいかは、神への愛がいかに強いのか、試練を受けたときに揺るぎなく立ち続けられるかどうか、ある環境に置かれた際に弱いかどうか、兄弟姉妹に拒まれたときに自分の立場を守れるかどうかによって決まる。訪れる事実は、神に対するあなたの愛がいったいどのようなものかを示す。神の働きの多くから、神が本当に人を愛していることがわかるのだが、人の霊の目はいまだ完全には開いておらず、神の働きの多くと神の旨をはっきり見ることができず、神にまつわる数多くの素晴らしいことも見えない。人は神に対して真の愛をごくわずかししか抱いていない。あなたはずっと神を信じてきたが、神は今日、逃れる手段をすべて断ち切った。現実的に言うと、あなたには正しい道を進むしか選択肢がない。その正しい道とは、神の厳しい裁きと至高の救いによってあなたが導かれてきた道である。苦難と精錬を経験して初めて、人は神の素晴らしさを知る。今日までの経験により、人は神の素晴らしさの一部を知ることになったと言える。しかし、それだけでは十分でない。人には欠けているものがあまりに多いからである。神の素晴らしい働きと、神が用意するあらゆる苦しみの精錬を、人はさらに経験しなければならない。そうして初めて、人のいのちの性質は変わり得るのである。

神を愛することだけが本当に神を信じることである

今日、神を愛し、知ろうとする時、ある一面においてあなたがたは困難と精錬に耐えなければならない、別の面においては、代償を払わなければならない。神を愛することから学ぶ教訓ほど深い教訓はなく、人が生涯にわたる信仰から学ぶ教訓は、いかに神を愛するかであると言える。つまり、神を信じるなら、神を愛さなければならない。神を信じるだけで、神を愛さず、神についての認識を獲得しておらず、心の底から湧き上がる本当の愛で神を愛したことがなければ、神への信仰はむなしい。神を信じていても神を愛さなければ、あなたは無駄に生きていることになり、あなたの全生涯はあらゆる生涯の中で最も低いものになる。生涯を通じて神を愛することも、神に満足させることもなかったら、あなたが生きていることの意味は何なのだろう。あなたが神を信じることの意味は何なのだろう。それは無駄な努力ではないだろうか。つまり、人が神を信じ、愛するのなら、代償を払わなければならない。何らかのやり方で外へ向かって行動しようとするよりはむしろ、自分の心の奥底にある真の識見を求めるべきである。歌や踊りに熱心であっても、真理を実践することができなければ、神を愛していると言えるだろうか。神を愛するには、あらゆる事において神の旨を求めることが必要で、しかもあなたに何かが起きた時には内面を深く探り、神の旨を把握しようと努め、その問題における神の旨は何か、神は何を達成するように求めているのか、どのように神の旨を覚えるべきかを知ろうと努めなければならない。例えば、あなたが困難に耐えなければならない何かが生じたら、その時、あなたは神の旨が何であるか、どのように神の旨を大切にするかを理解するべきである。自分自身を満足させてはならない。まず自分自身ことは脇へどけておきなさい。肉体ほど卑しむべきものはない。あなたは神を満足させようとしなければならないし、本分を果たさなければならない。そのように考えていれば、神はこの問題に関してあなたに特別な啓発を与え、あなたの心も安らぎを見つけることができる。大きくても小さくても、あなたに何かが起きた時、まず自分自身は脇へどけて、肉体はすべての物事の中で最も卑しいものとみなさなければならない。あなたが肉体を満足させればさせるほど、肉体はますます勝手な行動をとる。今回肉体を満足させると、次回にはさらに多くのものを求める。このまま続くと、人は肉体をさらに愛するようになる。肉体はいつも途方もない欲望を持っており、いつもあなたに肉体を満足させることを要求する。それが食べ物や着る物に関することであろうと、落ち着きを失い、自身の弱さや怠惰に付け込むことであろうと、あなたが心の中でそれを満足させることを要求する。肉体を満足させればさせるほど、その欲望は大きくなり、肉体はますます墮落して、ついには人の肉体は一層深い観念を抱き、神に背き、得意になり、神の働きに疑いを持つようになる。肉体を満足させればさせるほど、肉体の弱点は大きくな

る。あなたはいつも、だれも自分の弱点に同情してくれないと感じ、神は行き過ぎたと決めつけ、「どうして神はこんなに厳しいのだろうか。なぜ神は人に休息を与えてくれないのか」と言う。人が肉体を満足させ、あまりにも大切に扱うと、自分自身を滅ぼす。あなたが本当に神を愛し、肉体を満足させなければ、神の行いのすべては正しく、優れており、あなたの反抗に対する神の呪いやあなたの不義に対する神の裁きは正当であることがあなたにはわかる。神があなたを懲らしめたり罰したりする時や、あなたを鍛える環境を作りあげて、あなたを神の前に立たせる時がある。そしてあなたは神が行っていることは素晴らしいといつも感じるだろう。このように、あなたはあまり苦痛はないかのように、神はとても愛しいと感じる。あなたが肉体の弱点に迎合し、神は行き過ぎたと言うなら、あなたはいつも苦痛を感じ、いつも意気消沈していて、神の働きのすべてについて曖昧になり、あたかも神は人の弱点にはまったく同情せず、人の困難には気付かないかのように感じられる。そのように、あなたはひどい不正に苦しんでいるかのように、みじめで孤独な気分になり、この時不平を言い始めるだろう。このようにあなたが肉体の弱点に迎合すればするほど、ますます神は行き過ぎたと感じるようになり、ついに事態は悪化し、神の働きを拒絶し、神に反対し始め、まったく不従順になる。したがって、あなたは肉体に反抗しなければならず、迎合してはならない。「夫（妻）、子供たち、将来の見通し、結婚、家族など、これらはどれも重要ではない。わたしの心の中には神しかいない。わたしは神に満足していただくために最善を尽くさなければならず、肉体を満足させてはならない」。あなたはこのように決意しなければならない。このような決意をいつも持っていれば、真理を実践し、自分自身は脇にどけようとする時、あなたはほんの少しの努力でそれが実践できる。昔、路上で凍って硬直している蛇を見た農夫の話がある。農夫は蛇を拾い上げ、抱きしめたが、蛇は息を吹き返すと農夫をかみ殺してしまった。人の肉体はこの蛇に似ている。その本質は人のいのちに害を与えることであり、肉体が好き放題にすれば、あなたのいのちは取り上げられてしまう。肉体はサタンに属している。肉体の中には途方もない願望があり、肉体は己のことだけを考え、快適さと娯楽を享受することを望み、怠慢と無為にふけるので、ある程度まで肉体を満足させると、あなたは最後には肉体に食べ尽くされてしまう。つまり、今回肉体を満足させるなら、次回はもっと要求してくるのである。肉体はいつも途方もない欲望と新しい要求を持っており、あなたが肉体に迎合するのを利用し、あなたが肉体を一層大事にし、肉体の快適さの中で生きるように仕向ける。そして、肉体に打ち勝たなければ、あなたは最後には自分自身を滅ぼす。神の前でいのちを得られるかどうか、最終的結末はどうなるか、それはあなたが肉体にどのように反抗するかにかかっている。

神はあなたを救い、選び、運命づけたが、その一方で、あなたが神を満足させたいとも、真理を実践したいとも、神を本当に愛する心を持ってあなた自身の肉体に反抗したいとも思わないならば、最後にはあなたは身を滅ぼし、それゆえ極度の痛みに耐えることになる。いつも肉体に迎合していると、サタンが次第にあなたを呑み込み、あなたを完全にいのちのない、あるいは神の霊との接触のない状態のままにしまい、ついには心の中が完全に暗黒になる日が来る。暗黒の中で生きていると、サタンのとりこになり、もはや心の中に神を持たなくなり、その時あなたは神の存在を否定し、神を離れる。従って、神を愛したいなら、痛みの代償を払い、困難に耐えなければならない。熱心さや困難を表立って示すことも、読書量を増やしたり、さらに走り回ったりする必要はない。そうではなく、心の中にあるもの、つまり、途方もない思い、個人的利益、自己判断、観念、意図などを脇にどけるべきである。これが神の旨である。

人の外面的性質を取り扱うことも神の働きの一部である。例えば、人の外面的で異常な人間性、あるいは生活様式や習慣、流儀や慣習、ならびに外面的実践や熱心さなどを神は取り扱う。しかし、神が人に真理を実践し、性質を変えるよう要求する時、おもに取り扱われるのは心の中の意図と観念である。外面的性質を取り扱うだけなら難しくはない。それはあなたに好きなものを食べるなど要求するようなもので簡単である。しかし、心の中の観念に関連するものを取り除くのは簡単ではない。そのためには、肉体に反抗し、代償を払い、神の前で苦しまなければならない。これは人の意図に関し特に当てはまる。神を信じるようになって以来、人は多くの間違った意図を心に抱いてきた。真理を実践していない時、あなたは自分の意図はすべて正しいと感じているが、自分に何かが起こると、あなたは自分の中には間違った意図がたくさんあることがわかる。従って、神が人を完全にすると、神は神に関する人の認識を妨害する観念が人の中にはたくさんあることに気付かせる。自分の意図が間違っていることを認めた時、自分の観念や意図に従って実践するのをやめることができ、自分に起こるすべてのことにおいて神へ証しをすることができ、自己の立場を守ることができるなら、これはあなたが肉体に反抗したことの証明となる。肉体に反抗する時、あなたの中では必然的に戦いが生じる。サタンは人を肉体に従わせようとし、肉体の観念に従い、肉体の利益を維持させようとする。しかし、神の言葉は人を啓き、心の中に光を当てる。この時、神に従うか、サタンに従うかはあなた次第である。神は人に真理を実践に移すよう要求するが、それは心の中の物事をおもに取り扱い、神の心に従っていない思いや観念を取り扱うためである。聖霊は人の心を感動させ、人を啓き、そして光を当てる。ゆえに、起こることすべ

ての背後には戦いがある。人が真理を実践するたびに、あるいは神への愛を実践するたびに、激しい戦いがあり、すべては肉体にとってうまく行っているように見えるかもしれないが、実のところ、人の心の奥底では生と死の戦いが起こりつつあり、この激しい戦いの後で初めて、膨大な熟考をした後ようやく、勝利か敗北かが決められる。人は笑うべきか、泣くべきかわからない。人の中の意図の多くが間違っているのも、あるいは神の働きの多くは人の観念と食い違っているのも、人が真理を実践に移す時、激しい戦いが舞台裏では行われる。この真理を実践に移した後、舞台裏で人は悲しみの涙を数えきれないほど流し、ついに神を満足させる決心をする。人が苦しみや精錬に耐えるのはこの戦いのためである。これは本当の苦しみである。戦いになった時、本当に神の側に立つことができれば、あなたは神を満足させることができる。真理を実践する際、内なる苦しみを被ることは避けられない。真理を実践する時、人の心の中のすべてが正しかったら、人は神に完全にされる必要はなく、戦いもなく、人は苦しまない。人の心の中には神が使用するのに適さないものがたくさんあり、肉体の反抗的性質も多いので、人は肉体に反抗する教訓をもっと深く学ぶ必要がある。これが神が人に神と共に経験することを要求した苦しみである。あなたが困難に出会ったら、急いで神に次のように祈りなさい。「おお、神様。わたしはあなたに満足して頂きたいのです。わたしはあなたの心に満足していただくために最後の困難に耐えたいです。そしてわたしが出会う挫折がどんなに大きくても、わたしはあなたに満足していただくかなければなりません。たとえわたしの全生涯を諦めなければならないとしても、わたしはあなたに満足していただくかなければなりません」。この決意を持って、このように祈る時、あなたは固く証しに立つことができる。真理を実践するたびに、精錬を受けるたびに、試されるたびに、そして神の働きが人に及ぶたびに、人は激しい痛みには耐えなければならない。このすべては人への試練であり、そのためすべての人の心の中では戦いがある。これは人が支払う実際の代償である。神の言葉をさらに読み、さらに走り回することはその代償の一部である。それは人がしなければならないこと、本分、果たすべき責任であり、心の中にあって脇にどけておくべきものは、脇にどけなければならない。さもないとあなたの外面的苦しみがいかに大きくても、走り回ろうとも、すべては無駄になる。つまり、心の中を変えることだけがあなたの外面的困難に価値があるかどうかを決定することができる。あなたの内面的性質が変わり、あなたが真理を実践した時、あなたの外面的苦しみはすべて神の承認を得られる。内面的性質に変化がまったくなければ、いかに苦しみに耐えようとも、外面から見ていかに走り回ろうとも、神からの承認はない。そして神に認められない困難は無駄である。従って、払った代償が神に認められるかどうかは、あなた

に変化があったかどうか、あなたが真理を実践して、神の旨の満足、神に関する認識、神への忠誠心を得るために自分の意図や観念に反抗するかどうかによって決定される。どんなに走り回ろうとも、自分自身の意図に反抗することをいまだ知らず、外面的行動や熱心さを追い求めるだけで、いのちに全く注意を払わなければ、あなたの困難は無駄なことになるであろう。ある環境下で何か言いたいことがあっても、心の中では、それを言うのは正しくなく、兄弟姉妹のためにならないし、彼らを傷つけるかもしれないと感じているならば、あなたはそれを言わず、むしろ内面で苦しむほうを好む。これらの言葉が神の旨にかなうことはできないからである。この時、あなたの中では戦いがあるが、あなたは進んで痛みに苦しみ、あなたが愛するものを断念する。神を満足させるためにこの困難に進んで耐え、心の中で痛みに苦しむが、肉体に迎合することはなく、神の心は満たされるので、あなたも心の中で慰められる。これが本当に代償を払っていることであり、神が希望する代償である。あなたがこのように実践すれば、神は必ずあなたを祝福する。これを達成できなければ、あなたがどんなに理解しても、いかにうまく話すことができようと、すべては無益である。神を愛する道を歩んでいる途上で、神がサタンと戦う時に、神の側に立つことができ、サタンの方へ後戻りしないならば、あなたは神への愛を獲得し、固く立って証しをしたことになる。

神が人において行う働きのあらゆる段階において、それはあたかも人の手配により、あるいは人の干渉から生まれたかのように、外面的には人々の間の相互作用のように見える。しかし舞台裏では、働きのあらゆる段階、起こるすべてのことは、神の面前でサタンが作った賭けの対象であり、人は神への証しにおいてしっかりと立つことが要求される。ヨブが試練に会った時のことを例にとってみよう。秘かにサタンは神と賭けをしており、ヨブに起こったことは人間の行為であり、人間による干渉であった。神があなたがたにおいて行う働きの各段階の背後にはサタンと神との賭けがある。その背後にはすべて戦いがある。例えば、あなたが兄弟姉妹に対して偏見を持っているなら、あなたには言いたい言葉、神にとって不愉快かもしれないとあなたが感じる言葉があるだろうが、それを言わなければ心の中に不快を感じる。そしてこの時、あなたの心の中には戦いが始まる。「わたしは話すべきか否か」。これは戦いである。従って、あなたが遭遇するすべての中に戦いがある。あなたの心の中に戦いがある時、あなたの実際の協力と実際の苦しみのおかげで、神はあなたの中で働く。結局、心の中であなたは問題を脇にどけておくことができ、怒りは自然に消滅する。これが、あなたが神に協力した結果である。人が行うすべては、その人が一定の代償を努力で支払うことを要求する。実際の

苦難がなければ、人が神に満足してもらうことはできないし、神に満足してもらうことに近づくことさえなく、空虚なスローガンを吐き出しているに過ぎなくなる。そのような空虚なスローガンが神を満足させることができるだろうか。神とサタンが霊的領域で戦う時、あなたはどのように神を満足させるべきか、どのように固く証しに立つべきであろうか。あなたは自分に起こることのすべては大いなる試練であり、その試練の時に神があなたの証しを必要とすることを知るべきである。外面的には重要ではないように見えるかもしれないが、これらのことが起こると、それはあなたが神を愛しているかどうかを示す。愛していれば、あなたは神への証しに固く立つことができるが、神への愛を実践に移していなければ、これはあなたが真理を実践しない人であること、あなたには真理もなくいのちもないこと、あなたは無用の物であることを示す。人に起こるすべてのことは、人が神への証しに固く立つことを神が必要とする時に起こる。現在あなたには重要なことは何も起こっていないし、あなたは重大な証しはしていないが、あなたの毎日の生活の詳細はすべて神への証しに関連している。あなたが兄弟姉妹、家族、周囲のすべての人から称賛を得られたら、また、いつか未信者が来て、あなたの行うことのすべてを称賛し、神の行うことはすべて素晴らしいことがわかったら、その時、あなたは証しをしたことになるのである。あなたには識見がないし、素質は乏しいが、神があなたを完全にすることによって、あなたは神を満足させて神の旨に留意することができ、神が最も素質の乏しい人に行ってきた働きの偉大さを他者に示せるようになる。その人々が神を知るようになり、サタンの前で勝利者になり、極めて神に忠実になると、この一群の人々ほど気骨を持っている人はいない。これが最大の証しである。あなたは偉大な仕事をすることはできないが、神を満足させることはできる。他の人々は自分の観念を脇にどけておくことができないが、あなたにはできる。他の人々は自分が実際に経験している間、神に証しをすることはできないが、あなたは実際の背丈と行動を使って神の愛に報い、神への響き渡るような証しをすることができる。これだけが実際に神を愛することとみなされる。これができなければ、あなたは家族の前で、兄弟姉妹のあいだで、あるいは世間の人々の前で証しをすることはできない。あなたがサタンの前で証しができなければ、サタンはあなたを笑い、あなたを冗談、おもちゃとして扱い、しばしばあなたをばかにし、頭をおかしくさせる。将来、大きな試練があなたに起こるかもしれない。しかし、今日、真実の心で神を愛すなら、これから先の試練がどんなに大きくても、何が起ころうとも、固く証しに立つことができ、神を満足させることができるのなら、あなたの心は慰められ、将来遭遇する試練がどんなに大きくても恐れることはない。あなたがたは将来何が起こるか知ることはできない。今日の状況下で神を満足

させることができるだけである。あなたがたは大きな働きをすることはできないが、現実の生活で神の言葉を経験することにより神を満足させることに集中するべきであり、また、サタンを辱める強力で響き渡るような証しをするべきである。あなたの肉体は満たされないままで、苦しむことになるが、あなたは神を満足させ、サタンを辱めているであろう。あなたがいつもこのように実践していれば、神はあなたの前に道を開く。いつか、大きな試練が来たら、他の人々は倒れるだろうが、あなたはしっかり立っているであろう。あなたが払った代償のために、神はあなたを守るので、あなたはしっかり立っていることができ、倒れない。通常、あなたが真理を実践することができ、神を本当に愛する心で神を満足させることができれば、神は将来の試練の間、必ずあなたを守るであろう。あなたは愚かで霊的背丈は低く、素質に乏しいが、神はあなたを差別しない。あなたの意図が正しいかどうかにかかっている。今日、あなたは神を満足させることができる。その際、細部にまで気を配り、すべてにおいて神を満足させ、本当に神を愛する心を持ち、真実の心を神に捧げ、理解できないことがいくつかあっても神の前に来て、あなたの意図を修正し、神の旨を求めることができ、神を満足させるために必要なすべてのことを行う。おそらく、兄弟姉妹はあなたを見捨てるだろうが、あなたの心は神を満足させるだろうし、あなたは肉体の喜びを切望しない。あなたがいつもこのように実践していれば、大きな試練が訪れたとき、あなたは守られる。

人の心の中のどのような状態に試練は狙いを定めているのか。試練は、神を満足させることのできない人間の反抗的性質を対象としている。人の心の中には汚れたものや偽善的なものがたくさんある。だから神はそれらを清めるために人を試練に遭わせるのである。だが今日、もしもあなたが神を満足させられれば、将来の試練はあなたを完全にする過程となる。今日、もしもあなたが神を満足させられなければ、将来の試練はあなたを誘惑し、あなたは無意識のうちに倒れてしまう。その時、あなたは自分自身を助けることはできない。それはあなたが神の働きについていくことができず、実際の背丈がないからである。そこで、将来しっかり立っていることができ、神をさらに満足させ、最後の最後まで神に従うことを望むなら、今日、あなたは強い基礎を構築しなければならない。すべてのことにおいて真理を実践することによって神を満足させ、神の旨を心に留めておかなければならない。いつもこのように実践していれば、あなたの中に基礎ができ、神はあなたに神を愛する心を生じさせ、あなたに信仰を与える。いつか、試練が本当にあなたに降りかかった時、あなたは多少の痛み、苦しみに苦しむ。しかし、あなたの神への愛は変

わらず、一層深くなる。それが神の祝福である。神が今日語り、行うすべてのことを従順な心で受け入れることができるならば、あなたは必ず神に祝福され、それであなたは神の祝福と約束を受ける人になる。今日、あなたが実践しなければ、いつか試練が降りかかる時、あなたには信仰も、愛する心もなく、その時、試練は誘惑になる。あなたはサタンの誘惑の真っただ中に投げ込まれ、脱出する手段はない。今日、小さな試練が降りかかる時、あなたはしっかり立っているかもしれないが、いつか大きな試練が降りかかる時、必ずしもしっかり立っていることはできないであろう。うぬぼれていて、自分達はすでに完成に近づいていると考える人もいる。そのような時、深刻にならず、現状に満足したままでいると、あなたは危険に陥る。今日、神は大きな試練の働きは行っておらず、外見上、すべてはうまくいっているように見えるが、神があなたに試練を課す時、あなたは自分に欠けているものがあまりにも多いことに気付く。というのも、あなたの背丈はあまりにも取るに足らないので、大きな試練に耐えることができないからである。あなたが今と同じ場所にとどまり、緩慢な状態のままでいるなら、試練が来た時、あなたは倒れる。あなたがたは自分の背丈が取るに足らないものであることを常に確認すべきである。そうして初めてあなたは進歩するのである。あなたが自分の背丈が取るに足らないものであること、自分の意志の力がとても弱いこと、あなたの中に実的なものはほとんどないこと、あなたは神の旨には適さないことを知るのが試練の間だけであるなら、そしてこれらのことにその時になって初めて気付くのであれば、それは遅すぎるのである。

神の性質を知らなければ、あなたは試練の最中に必ず倒れる。なぜならあなたは神がどのように人々を完全にするか、どのような手段で神が人々を完全にするのかに気付いていないからである。それゆえ、神の試練があなたに降りかかり、それがあなたの観念に合わないとき、しっかり立っていることができない。神の本当の愛は神の全性質であり、神の全性質が人に示される時、これはあなたの肉体に何をもたらすのであろうか。神の義である性質が人に示される時、その人の肉体は必然的にひどい痛みを苦む。あなたがこの痛みを苦しまなければ、あなたは神に完全にされることができず、本当の愛を神に捧げることもできない。神があなたを完全にすれば、神は必ずその全性質をあなたに示す。天地創造の時から今日まで、神が人間にその全ての性質を見せたことはなかった。しかし、終わりの日のさなか、神は自ら運命づけて選んだこの人々の一群に神の性質を明らかにし、人を完全にすることによって神の性質をさらけ出し、それによって人々の一群を完全にする。それが人への神の本当の愛である。人への神の本当の愛を経

験するには、激しい痛みを耐え、高い代償を払うことが要求される。そうして初めて人は神のものとされ、その本当の愛を神に返すことができ、そうして初めて神の心は満ち足りる。人が神により完全にされることを望むなら、また、神の意志を行い、真実の愛をあますところなく神に捧げることを望むなら、人は多くの苦しみとたくさんの苦痛を周囲の状況から経験しなければならず、死よりもひどい痛みを苦しむことになる。最終的には人は真実の心を神に返すことを強いられる。人が本当に神を愛しているかどうかは、困難と精錬の間に明らかにされる。神は人の愛を清めるが、これも困難と精錬の真ただ中でなければ達成されない。

「千年神の国は訪れた」についての短い話

あなたがたは千年神の国のビジョンをどのように捉えているのだろうか。ある人たちは、そのことについて大いに考え、千年神の国は地上で千年続くだろうと言う。それなら、教会の年長の信者で未婚の者は、結婚しなければならないのだろうか。わたしの家族にはお金がないからわたしはお金を稼ぎ始めるべきだろうか。……千年神の国とは何か。あなたがたは知っているだろうか。人々の目はかすんでおり、きびしい試練に苦しんでいる。実のところ、千年神の国はまだ公けには到来していない。人々を完全にする過程においては、千年神の国はその序奏でしかない。神の語る千年神の国の時には、人は完全にされているのである。かつては、人々は聖者のようになり、シニムの地にしっかり立つようになると言われていた。人々が完全にされる時にはじめて、即ち、神が語る場所の聖者となる時、千年神の国は到来するのである。神が人々を完全にする時、神は彼らを清め、人々は清くなればなるほど、神によってより完全にされる。汚れ、反抗、敵対心、あなたの中にある肉に属するものが取り除かれ、あなたが清められた時、あなたは神に愛されるであろう（言い換えれば、あなたは聖者になる）。あなたが神によって完全にされ、聖者になった時、あなたは千年神の国の中にいるであろう。今は神の国の時代である。千年神の国の時代では、人々は神の言葉に依存して生き、あらゆる国の民たちが神の名のもとに集い、神の言葉を読むようになる。その時、電話を使ったり、ファクスを使ったりする人たちもいるだろう……彼らは神の言葉に触れるためにあらゆる手段を用い、そして、あなたがたも神の言葉の下に集う。これらのことはすべて、人々が完全にされた後で起こることである。今日人々は言葉を通して完全にされ、精錬され、啓発され、導かれている。これが神の国の時代であり、人々が完全にされる段階であり、千年神の国の時代とは全く関連がない。千年神の国の時代では、人々はすでに完全にされており、彼らの中の墮落した性質は清められている。その時、神が語る言葉

は人々を一步一步導き、天地創造の時から今日に至るまでの神の働きの奥義をすべて明らかにする。神の言葉は、人々にそれぞれの時代と日々の神の業について語り、神がどのように人々を内面から導くか、神が霊界で為す働きについて、また霊界の動的状態について彼らに語る。その時初めて本当に言葉の時代が訪れる。今はまだその序奏部分にすぎない。もし人々が完全にされず、清められなければ、地上で千年も生きるすべはなく、肉体が朽ちることは避けられない。人々の内面が清められ、もはやサタンと肉に属さないなら、地上で生き残れる。今の段階ではあなたはまだ目がかすんでいおり、あなたがたが経験するのは神を愛することと、あなたがたが地上で生きる日々、神のために証しすることだけである。

「千年神の国の到来」は預言であり、預言者の預言に類似しており、その中で神は将来起こることを預言する。神が将来話す言葉と神が今日話す言葉は同じではない。将来の言葉は時代を導き、一方、今日神が語る言葉は人々を完全にし、精錬し、取り扱う。将来の言葉の時代は今日の言葉の時代とは異なる。今日、神によって語られるすべての言葉は、神が語るのに用いる手段に関係なく、要するに、人々を完全にし、人々の中にある汚れを清め、彼らを神の前に聖なる、義なるものとするためのものである。今日語られる言葉と、将来語られる言葉は二つの別個の事柄である。神の国の時代に語られる言葉は、人々をあらゆる訓練に入らせ、人々をすべてのことにおいて正しい道に至らせ、彼らの中にある汚れたものをすべて取り除くためのものである。それがこの時代に神がすることである。神は一人ひとりの中に言葉の基礎を創り、神の言葉をすべての人のいのちとし、あらゆる時に、言葉よって彼らを内面から照らし導く。人々が神の心を大切にしていない時は、神の言葉は内側から彼らを責め懲らしめる。今日の言葉は、人のいのちとなるのであり、人が必要なものすべてを直接供給する。あなたの内面に欠けているものは、すべて神の言葉によって満たされ、神の言葉を受け入れる人々は皆、神の言葉を飲食することによって照らしを受ける。未来に神によって語られる言葉は、全宇宙の人々を導く。今日、これらの言葉は中国でしか語られていないので、全宇宙で語られる言葉を表していない。千年神の国が到来する時に初めて、全宇宙に向けて神は語るのである。今日神によって語られる言葉はすべて人々を完全にするためであることを理解しなさい。この段階で神が語によって語られる言葉は、人々の必要を満たすためであって、あなたが神の奥義を知ったり、神の奇跡を見るようになるためではない。神が多くの手段を通して語るのは、人々の必要を満たすためである。千年神の国の時代はまだ到来していない。ここで言う千年神の国の時代とは神の栄光の日である。ユダヤにおけ

るイエスの働きが完了した後、神は働きを中国本土に移し、もう一つ別の計画を創り出した。神はあなたがたにおいてその働きの別の部分を行う。つまり、神は言葉で人々を完全にする働きを行い、言葉を使って人々に多くの苦痛を体験させ、また多くの恵みを得させる。この働きの過程は、勝利者の集団を生み出し、神がその勝利者たちを創った後、彼らは神の業を証しできるようになり、現実そのものを生きることができるようになり、実際に神を満足させ、死に至るまで神に忠実でいることができ、このようにして神は栄光を受ける。神が栄光を受け、神がこの人々の集団を完全にした時、千年神の国の時代になる。

イエスが地上にいたのは三十三年半であり、十字架の働きを成し遂げるために地上に来た。イエスの磔刑を通して、神は栄光の一部分を受けた。神が肉となって来た時、へりくだり、目立たず、途方もない苦しみに耐えることができた。彼は神自身であったが、それでもあらゆる辱めと悪口雑言に耐え忍び、また贖いの働きを完了するために十字架に釘付けにされるといふ激痛に耐えた。この段階の働きが終了した後、人々は神が大いなる栄光を受けたのを見たが、それは神の栄光のすべてではなかった。それは神の栄光のほんの一部であり、神はそれをイエスから得たのである。イエスは、あらゆる困難に耐え、へりくだり、目立たず、神のために磔刑につくことを成し遂げたが、神は栄光の一部を得ただけで、その栄光はイスラエルで得た。神にはさらに別の栄光がある。それは、地上に来て実際に働き、人々の一集団を完全にすることである。イエスはその働きの段階において、超自然的なことをいくつか為したが、その段階の働きは、しるしと奇跡を行うためだけでは決してなかった。それはおもに、イエスが神のために苦しみ、十字架にかかることができたこと、神を愛するが故にイエスは極度の苦痛に耐えることができたこと、神が彼を見捨てたにもかかわらず、彼は神の旨のために喜んで命を犠牲にしたことを示すためであった。神がイスラエルでの働きを終え、イエスが十字架に釘付けにされた後、神は栄光を受け、神はサタンの前で証しした。あなたがたは、神が中国でどのように肉となったのか知らないし、見てもいない。では、どうしてあなたがたが神が栄光を受けたのを見ることができようか。神があなたがたにおいて多くの征服の働きをし、あなたがたがしっかりと立つ時、神のこの段階の働きは成功であり、これは神の栄光の一部となる。あなたがたはこれだけを見るのであり、まだ神によって完全にされていないし、あなたがたはまだ心を完全に神に捧げていない。あなたがたはまだこの栄光の全容を見ていない。神がすでに自分たちの心を征服したこと、自分たちは決して神から離れることができず、最後の最後まで神に従い心変わりしないこと、そして

これが神の栄光であることを知るだけである。あなたがたは何において神の栄光を見るのか。人々における神の働きの成果においてである。人々は神がとても美しいことを見て心の中に神を抱き、神から離れようとしな。これが神の栄光である。教会の兄弟姉妹たちの力が生じて、心から神を愛することができ、神の働きの絶大な力、神の言葉の比類のない力を見ることができ、神の言葉には権威があり、神が中国本土のゴーストタウンでその働きを始めることができるのを見る時、また、人々がその弱さにもかかわらず、心を神の前にへりくだらせ、すすんで神の言葉を受け入れる時、そして、彼らが弱く不相応であるにもかかわらず、神の言葉は美しく、大切にすることに値するものであることが理解できる時、それは神の栄光である。人々が神によって完全にされ、神の前に身を委ねることができ、完全に神に従うことができ、自分たちの将来性や運命を神の手に委ねることができる日が来る時、神の栄光の第二部が完全に獲得されたことになる。つまり、実際の神による働きが完結した時、中国本土における神の働きは終了する。言い換えれば、神によって予め定められ選ばれた人々が完全にされた時、神は栄光を受ける。神は、栄光の第二部を東方にもたらしたと語ったが、これは肉眼では見ることはできない。神はその働きを東方にもたらした。神はすでに東方に到来したこと、これは神の栄光である。今日、神の働きはまだ完成していないが、神が働くことを決めたので、それは必ず成し遂げられるであろう。神はこの働きを中国で完了させると決め、あなたがたを完成させようと決意した。従って、神はあなたがたに逃れる道を与えない。神はすでにあなたがたの心を征服した。だから、あなたは、望もうが望むまいが、進み続けなければならない。そして、あなたがたが神のものとなる時、神は栄光を受ける。今日、神はまだ完全には栄光を受けていない。なぜなら、あなたがたがまだ完全にされていないからである。あなたがたの心は神のもとに立ち返ったかもしれないが、あなたがたの肉にはまだ多くの弱点があり、あなたがたは神を満足させることができず、神の心を大切にすることもできず、自分から取り除かなければならない消極的な事柄がたくさんあり、数多くの試練と精錬を経なければならないからである。そうすることでのみ、あなたがたのいのちの性質は変わり、あなたがたは神のものとなることができる。

神を知る者だけが神に証しをすることができる

神を信じ、神を知ることは、天の法則であり地上の原則である。そして今日、受肉した神がその働きを自ら行なっているこの時代は、神を知るのに特に良い時である。神を満足させることは神の旨の理解を基盤として達成されるものであり、神の旨を理解するためには、神について多少の認識をもつことになる。この神に関する認識とは、

神を信じる者が持つべきビジョンであり、人の神に対する信仰の基礎である。この認識がなければ、人間の神への信仰は曖昧な状態で、空論のただ中に存在することになるだろう。このような人々が神に従う決意を持っていたとしても、何も得るものはない。この流れの中で何も得るものがない人々は皆、排除される者であり、たかり屋である。神の働きのどの歩みを経験するにせよ、強力なビジョンを備えていなくてはならない。そうでなければ、新しい働きのそれぞれの歩みを受け入れることは困難になるだろう。なぜなら神の新しい働きは人間の想像力の範疇を超えており、人間の観念の範囲外にあるからだ。そのため人間の世話をし、ビジョンについての交わりに携わる羊飼いがいなければ、人はこの新しい働きを受け入れることができない。ビジョンを受け取ることができなければ、神の新しい働きを受けることはできず、神の新しい働きに従うことができない。神の旨を理解することはできず、神についての認識も結果的に無に帰すであろう。神の言葉を実行する前に、まず神の言葉を知らねばならず、つまり神の旨を理解しなければならない。そうやって初めて、神の言葉は正確に、神の旨にかなう形で実行されることになる。これは真理を求めるすべての者が所有しなければならないものであり、神を知ろうとするすべての者が経なければならない過程でもある。神の言葉を知る過程は、神と神の働きを知る過程でもある。そのためビジョンを知るということは、受肉した神の人間性を知ることの意味するだけでなく、神の言葉と働きを知ることでもある。人々は神の言葉によって神の旨を理解するようになり、神の働きによって神の性質と、神であるものを知るようになる。神への信仰は神を知ることの第一歩である。この初期の信仰から最も深い信仰へと進んでいく過程は、神を知ようになる過程であり、神の働きを経験する過程である。もしあなたの信仰が、あくまで信仰のためだけの信仰であり、神を知るためのものでないなら、そこに現実はなく、その信仰が純粹になることはできず、そのことに疑いの余地はない。人が神の働きを経験する過程で徐々に神を知ようになると、その人の性質は徐々に変化し、その信仰はますます真実なものになる。このように神への信仰において成功を収めると、その人は完全に神を得たことになる。神が自らその働きを行なうため、これほどの苦勞をして再び肉となった理由は、人間が神を知り、神を見ることができるようにするためだった。神を知ること^[a]は、神の働きの最後に達成される最終的な成果であり、神が人類につきつける最後の要求である。神がこれを行なう理由は、神の最終的な証しのためである。神は人が最終的に完全に神に向き合えるよう、この働きを行なっているのである。人は神を知ることによってのみ神を愛せるようになり、神を愛するには神を知らなければならない。人はどのように求めようと、何を得ることを求めようと、神についての認識に到達できなければ

ならない。そうして初めて、神の心を満足させることができる。人は神を知ることによってのみ神への真の信仰を持つことができ、そして神を知ることによってのみ、神を真に畏れ従うことができる。神を知らない人々は、神への真の服従と畏敬に決して到達しない。神を知るということには、神の性質を知り、その旨を理解し、神の存在そのものを知ることが含まれる。しかしどの側面を知るにせよ、人は必ず代価を払い、従う意志を持つことを要求される。その意志がなければ、誰も最後まで従い続けることはできないだろう。神の働きは人の観念とまったく相容れないものであり、神の性質と神であるものは難解すぎて人が知れるものではなく、神が言い行なうすべてのことも人には不可解すぎる。神に従いたいと思いつつ、神に服従しようとしなければ、何も得ることはない。天地創造から今日に至るまで、神は人には理解不能で受け入れ難く感じられる多くの働きを行い、人の観念が修復され難くなるような多くのことを語ってきた。しかし人が大いに困難を感じているからといって、神がその働きを中断したことはない。むしろ神は働き語り続けており、多数の「戦士たち」が途中で挫折したものの、引き続き働きを行なって、新しい働きに従う覚悟のある人々の集団を次から次へと間断なく選び続けている。神は倒れた「英雄たち」への憐れみは持っておらず、代わりに神の新しい働きと言葉を受け入れる人々を大切にしている。しかし神は何の目的で、このように段階的に働いているのだろうか。なぜ、常に一部の人々を排除し、別の人々を選んでいるのだろうか。なぜ常にこのような方法を用いるのだろうか。神の働きの目的は、人が神を知り、それによって神のものとされるようにすることである。神の働きの原則は、神が現在行なっている働きに従える人々に対して働くことであり、過去の働きには従ったが現在の働きには反抗している人々に対して働くことではない。ここに、神がこれほど多くの人々を排除してきた理由があるのだ。

神を知るための学びの成果は、一日や二日で達成できるものではない。人は経験を重ね、苦しみを経て、真の従順を成し遂げなければならない。まず神の働きと神の言葉から始めなさい。必ず理解しなければならないのは、神についての認識に何が含まれるのか、その認識にいかに関与すべきか、そして自分の経験の中でいかに神を見るべきかということである。これはまだ神を知らない人々が皆しなければならないことである。神の働きと言葉を一挙に把握することは誰にもできないし、神の全体像を短期間で認識することもできない。経験という必要な過程があり、それなしには誰も神を知ること、神に真摯に従うこともできない。神が働きをすればするほど、人は神を知るようになる。神の働きが人の観念と異なっていればいるほど、神についての認識は改められ深みを

増す。もし神の働きが永遠に固定された不変のものであれば、人の神についての認識はあまり多くなならないことだろう。天地創造から現在に至るまで、神が律法の時代に行ったこと、恵みの時代に行ったこと、そして神の国の時代に行なうことについて、あなたがたはこの上なく明確なビジョンを持たなければならない。あなたがたは神の働きを知らなければならない。ペテロはイエスに従って初めて、霊がイエスの中で行った働きの多くについて徐々に知るようになった。ペテロは次のように言った。「完全な認識に到達するには、人間の経験に頼るだけでは不十分である。神を知るのに役立つ新しいものを、神の働きから多く得なければならない」。当初、ペテロはイエスのことを使徒のように神から遣わされた人だと思い、キリストとは見なしていなかった。ペテロがイエスに従い始めたとき、イエスはペテロに「バルヨナ・シモンよ、わたしについて来るか」と尋ねた。ペテロはそれに答えて言った、「私は天の父から遣わされたお方に従わなくてはなりません。わたしは聖霊によって選ばれたお方を認めなければなりません。私はあなたに従います」と。ペテロの言葉から、ペテロがイエスについては何も知らなかったことがわかる。ペテロは神の言葉を経験し、自らを取り扱い、神のための苦難にも耐えていたが、それでも神の働きについては何も知らなかった。ある程度の経験を経るうち、ペテロはイエスの中に多くの神の業を見、神の素晴らしさを見、多くの神であるものを見た。そしてさらに、イエスの話した言葉が人には話せるはずのないものであることを目にし、イエスが行った働きが人には行えるはずのないものであることを目にした。そしてイエスの言葉と行いの中に、さらにさまざまな神の知恵と、多くの神性の働きを目にした。ペテロはこうした経験の中で、自らを知るようになっただけでなく、イエスの行動のすべてに注目し、そこから多くの新しいことを発見した。すなわち神がイエスを通して行った働きには実践の神の表現が多く見てとれること、そしてイエスがその言葉や行いのほか諸教会を養うやり方や行なう働きにおいても、普通の人とは異なるということに気づいたのである。そしてペテロは学ぶべき多くのことをイエスから学び、イエスが十字架にかけられそうになった時には、イエスについてある程度の認識を得ていた。この認識はペテロのイエスに対する生涯を通じた忠誠の基盤となり、それによって彼は主のために逆さ十字架にかけられた。当初ペテロはいくつかの観念を持っており、イエスについての明確な認識はなかったものの、それは墮落した人間の一部として避けられないことである。イエスは出立の際、十字架にかけられることは自分に定められた働きであり、自分はそれを行なうために来たのだとペテロに告げた。自分が時代に見捨てられること、この不純で古い時代がイエスを十字架にかけることは、必要なことなのだ。そして自分は贖いの働きを完成させるために来たのであり、その働きが終わっ

たため、自分の職分は終わろうとしている、と。ペテロはこれを聞いて悲しみに襲われ、一層強くイエスを慕った。イエスが十字架にかけられると、ペテロはひそかに号泣した。その前に、ペテロはイエスにこう尋ねていた。「主よ、あなたはご自分が十字架にかけられるとおっしゃいます。あなたが去られた後、いつ再びお目にかかれますか」と。ペテロが語った言葉には、混ぜ物の要素はなかっただろうか。何の観念も混じり込んでいなかっただろうか。ペテロは心の中で、イエスが神の働きの一部を完成させるために来たのであり、イエスが去った後は霊が自分と共にあること、そしてたとえイエスが十字架にかけられ天に昇ったとしても、神の霊が自分と共にあることを知っていた。当時ペテロはイエスについてある程度の認識を持っており、イエスが神の霊により遣わされたこと、神の霊がイエスの中にあること、そしてイエスが神そのものでありキリストであることを知っていた。しかしペテロはイエスへの愛ゆえに、人間としての弱さゆえに、そのような言葉を語ったのだ。もし人が神の働きの一つ一つの歩みにおいて、観察し労を惜しまず経験することができるなら、徐々に神の素晴らしさを発見できるようになるだろう。ではパウロは、何を自分のビジョンとしたのだろうか。イエスがパウロに現れたとき、パウロは「主よ、あなたはどなたですか」と言った。それに対しイエスは、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と答えた。これがパウロのビジョンであった。ペテロはイエスの復活と、その後四十日間にわたる出現、そしてイエスの生涯にわたる教えを、その旅路の終わりまで自らのビジョンとした。

人は神の働きを経験し、自らを知るようになり、自身の墮落した性質を一掃し、そしていのちにおける成長を求める。それらはすべて、神を知るためである。もし自らを知りその墮落した性質を取り扱うことだけを求めて、神が人にどんな働きを行なうか、神の救いがいかに偉大か、人がどのように神の働きを経験し神の業を目撃するかといったことを一切知らないなら、その経験は浅はかなものである。真理を実践し忍耐することができれば、いのちが成熟していると考えのなら、それはあなたがいのちの真の意味、あるいは神が人を完全にすることの目的を、まだ把握していないということだ。いずれ宗教的な教会で、悔い改めの教会やいのちの教会のメンバーたちといるとき、あなたは多くの敬虔な人々に出会うだろう。彼らの祈りは「ビジョン」を含んでおり、彼らはいのちの探求の中で感動し言葉によって導かれている。さらに彼らは多くの物事において、忍耐し、自分を捨て、肉に操られずにいることができる。そのときあなたには違いがわからず、彼らがすることはすべて正しく、すべてがいのちの自然な表現だと感じ、彼らが信じるものの名前が間違っているのはなんと残念なことかと思うだろう。そのよ

うな見方は愚かではないだろうか。なぜ、多くの人にはいのちがないと言われるのか。それは彼らが神を知らないからであり、そのため彼らの心には神がなく彼らにはいのちがないと言われるのだ。あなたの神への信仰がある段階に達しており、神の業、神の現実性、そして神の働きの各段階を完全に知ることができるなら、あなたは真理を備えている。もし神の働きと性質を知らないなら、あなたの経験にはまだ何かが欠けている。イエスが働きのあの段階をどのように行ったか、この段階はどのように行われているのか、神が恵みの時代に働きをどのように行い何の働きが行われたのか、この段階ではどんな働きが行われているのか——そうしたことを完全に認識していないなら、あなたは決して確信を持つことがなく、いつも不安に感じるだろう。一定の経験を経た後、神による働きとその働きの歩みすべてを知ることができるようになったら、そして神がその言葉を語る目的と、これまでに語られた言葉のうち成就していないものがなぜこれほど多いかについて完全な認識を得たなら、あなたは心配や精錬から自由になり、大胆にためらうことなく目の前の道を進むことができるようになる。あなたがたは神がどんな方法で多くの働きを成し遂げるのかを目にする必要がある。神は自身が語る言葉を用い、さまざまな類の言葉をもって、人を精錬し人の観念を変化する。あなたがたが耐えてきたすべての苦難、経験してきたすべての精錬、心の中で受け入れてきた取り扱い、経験してきた啓き——それらはすべて、神が語った言葉によって成し遂げられた。人は何の理由で神に従うのか。それは神の言葉のためだ。神の言葉は非常に神秘的であり、そのうえ人の心を動かし、人の心の奥深くに潜む物事を明らかにし、過去に起きたことを人に知らしめ、未来を見抜かせることができる。そのため人は、神の言葉ゆえに苦難に耐え、また神の言葉ゆえに完全にされる。そのとき初めて、人は神に従うのだ。この段階で人がすべきことは、神の言葉を受け入れることであり、完全にされるか精錬の対象となるかを問わず、鍵となるのは神の言葉である。これが神の働きであり、そして人が今日知るべきビジョンでもあるのだ。

神はどのように人を完全にするのか。神の性質とはどのようなものか。その性質には何が含まれているのか。これらをすべて明らかにすることは、神の名を広めることだとも、神を証しすることだとも、神を高めることだとも言われる。人は神を知ることが基盤として、最終的にそのいのちの性質が変化される。人は取り扱いと精錬を受ければ受けるほど活気づき、神の働きの歩みが多ければ多いほど完全にされる。現在、人の経験の中では、神の働きの歩みの一つ一つが人の観念に反撃しており、すべてが人の知性を超越しその予想を超えたところにある。神は人に必要なすべてのものを与えるが、それ

はあらゆる点で人の観念と食い違う。神はあなたが弱っているときに言葉を発する。そうすることによってのみ、神はあなたにいのちを与えることができるのだ。神はあなたの観念に反撃することで、あなたに神の取り扱いを受け入れさせる。そうすることによってのみ、あなたは自己の墮落から抜け出すことができるのだ。受肉した神は今日、ある面においては神性の状態に留まって働くが、別の面では普通の人間性の状態で働く。あなたが神のいかなる働きをも否定できなくなり、神が普通の人間性の状態で何を言おうと何をしようとしてそれに服従できるようになり、神がどのような普通性を表そうとそれに服従しそれを理解できるようになり、そして実際の経験を得たとき、初めてあなたはの方が神だと確信できるようになり、観念を作り出すことを止め、最後まで神に従えるようになるのである。神の働きには知恵があり、神は人間がいかに揺るぎなく神に証しを立てられるか知っている。また神は人の致命的な弱点がどこにあるかを知っており、神の語る言葉はあなたの致命的な弱点を攻撃することができるが、同時に神はその威厳と知恵に満ちた言葉を用いて、あなたに揺るぎない神の証しを立てさせる。こうしたことが、神の奇跡的な業である。神が行なう働きは、人の知性によって想像できるものではない。肉である人間がどのような墮落にとりつかれているか、そして何が人間の本質を成しているか、そうしたことはすべて神の裁きを通して明らかにされ、それによって人間は自分の恥から隠れる場所がなくなるのだ。

神は裁きと刑罰の働きを行なうが、それは人が神についての認識を得られるようにするためであり、また神の証しのためでもある。神が人の墮落した性質を裁かなければ、人は犯すべからざる神の義なる性質を知ることができず、神についての古い認識を新たにすることもできない。神はその証しのため、そして神の経営（救い）のため、その存在すべてを公にし、それによって人は、その神の公的な出現を通して、神の認識に到達し、性質を変化させ、明確な神の証しを立てられるようになる。人の性質の変化は、神のさまざまな働きを通して成し遂げられる。そのような性質の変化なくして、人は神の証しを立てることができず、神の心にかなうこともできない。人の性質の変化は、人がサタンの束縛と闇の影響から解放され、真に神の働きの見本かつ標本、神の証人、そして神の心にかなう者となったことを意味する。今日、受肉した神はその働きを行なうため地上に到来した。そして神は、人が神を認識し、神に服従し、神の証しとなって、神の実際的な普通の働きを知り、人の観念と合致しない神の言葉と働きのすべてに従い、神が人間を救うために行なうあらゆる働きと人間を征服するために成し遂げるあらゆる業の証しをすることを求めている。神の証しをする人々は、神についての認識を持たな

なければならない。この種の証しだけが正確かつ現実的であり、この種の証しだけがサタンを恥じ入らせることができる。神はその裁きと刑罰、取り扱いと刈り込みを経験することで神を知るようになった人々を用いて、自らを証しさせる。神はサタンにより墮落させられた人々を用いて自らを証しさせると同時に、性質が変わったことで神の祝福を得た人々を用いて自らを証しさせる。神は人による口先だけの称賛を必要とせず、神に救われていないサタンの同類による称賛や証しも必要としない。神を知る人々だけが神の証しをする資格があり、その性質が変化させられた人々だけが神の証しをする資格がある。神は人が意図的に神の名を汚すことを許さない。

脚注

a. 原文では「神を知る働き」。

ペテロはどのようにしてイエスを知るようになったか

ペテロは、イエスと共に過ごした期間、イエスの中に多くの愛すべき性質、模倣するに値する多くの側面、そして彼に与えられた多くのものを見た。ペテロは様々な形でイエスの中に神の存在を見、多くの愛すべき資質を見たけれども、最初はイエスを知らなかった。ペテロは二十歳の時にイエスに従い始め、六年間そうし続けた。その間、ペテロは決してイエスを知ることがなかったが、純粹にイエスへの敬服から喜んで従って行った。イエスが最初にガリラヤ湖の岸辺でペテロに呼びかけたとき、イエスは、「シモン・バルヨナ。あなたはわたしについて来るか」と尋ねた。ペテロは、「わたしは天の父が遣わされたお方に従わなければなりません。わたしは聖霊に選ばれたお方を認めなければなりません。わたしはあなたについて行きます」と言った。当時、ペテロは、預言者の中の大預言者、神の愛するひとり子であるイエスという名の人のことを話に聞いていたので、いつもイエスを見つけないかと願い、イエスに会う機会を待ち望んでいた（その時彼はこのようにして聖霊に導かれたからである）。ペテロはそれまで一度もイエスに会ったことがなく、ただイエスについて噂を聞いていただけだったが、心の中ではイエスに対するあこがれと敬愛が次第に大きくなり、いつかイエスに会いたいとしばしば切望するようになった。それではイエスはどのようにペテロに呼びかけたのだろうか。イエスもまたペテロという男のことを話に聞いていたが、それは聖霊がイエスを導いたからではなかった。「ガリラヤ湖に行け。そこにはシモン・バルヨナと呼ばれる者がいる」。イエスは、シモン・バルヨナと呼ばれる人がいて、人々は彼の説教を聞き、彼も天の国の福音を宣べ伝えており、彼の話を聞いた人々はみな感動して涙を流していた

と誰かが言うのを聞いた。これを聞いて、イエスはその人について行き、ガリラヤ湖へ向かった。その時ペテロはイエスの召命を受け入れ、イエスについて行った。

イエスに従っている間、ペテロはイエスについて多くの意見を持ち、常に自らの観点からイエスのことを判断していた。ペテロはある程度は霊について理解していたけれども、その理解がいささか曖昧だったので、彼は「天の父によって遣わされたお方に従わなければならない。聖霊によって選ばれたお方を認めなければならない」という言葉を発したのである。ペテロはイエスが行なったことを理解していなかったし、それについて明瞭さを欠いていた。しばらくイエスに従った後、ペテロはイエスが行なうこと、言うこと、またイエス自身に次第に興味を持ちはじめた。ペテロはイエスが愛と尊敬の念を呼び起こすのを感じるようになり、イエスと交わり、イエスのそばにいたいと思うようになった。そして、イエスの言葉を聞くことによって彼は、満たしと助けを得た。長らくイエスに従って、ペテロはイエスの生活の全て、つまりイエスの行動、言葉、動作、表情などを観察し、心に留めた。ペテロはイエスが尋常の人のようにではないことを深く理解した。イエスの人間としての外観は極めて普通であったが、イエスは人間に対する愛、憐れみ、寛容で満ちていた。イエスが行なったこと、言ったことの全てが他の人々の大きな助けとなり、ペテロはイエスの側で今まで見たことも得たこともないことを見たり学んだりした。イエスには大きな背丈や並外れた人間性はなかったが、実に驚くべき非凡な雰囲気があることをペテロは見た。ペテロはそれを完全には説明できなかったけれども、イエスの行動が他の誰とも違っていることを見ることはできた。というのは、イエスが行なったことは、普通の人が行なうこととまったく異なっていたからである。ペテロはイエスと接するようになってから、イエスの性格が普通の人とは違っていることにも気づいた。イエスは常に落ち着いて行動し、決して焦ることも、誇張することもなく、物事を控えめに表現することもなく、ごく普通で称賛に値する性格を表わすような生活を送った。イエスは会話においては、上品で、優雅で、率直で、朗らかでありながらも、穏やかで、働きを実行するときも決して威厳を失うことはなかった。ペテロは、イエスがあるときは無口になったり、またあるときは絶え間なく話したりするのを見た。イエスは嬉しさのあまり、あちこち動き回ってはしゃいでいる鳩のように見えることもあれば、悲しみの余り、まるでくたびれ疲れ果てた母親のように、まったく口をきかないこともあった。時としてイエスは、勇敢な兵士が敵を殺すために突進するように、また時には吠え猛るライオンのように憤りで一杯になることさえあった。イエスは時には笑い、時には祈り泣くこともあった。イエスがどのように行動するかに関わら

ず、ペテロは限りのない愛と敬意をイエスに抱くようになった。イエスの笑い声はペテロを幸せで満ちし、イエスの悲しみはペテロを嘆きに落とし入れ、イエスの怒りはペテロを脅かしたが、その一方、イエスの憐れみ、赦し、そして人々に対する厳しい要求によって、ペテロはイエスに対して真の畏敬と憧れを抱くようになり、ほんとうにイエスを愛するようになった。もちろん、これらのこと全ては、ペテロが数年イエスのもとで生活して、次第に分かってきたことである。

ペテロは生まれつき聡明で、特に思慮深かったが、イエスに従っていたとき、かなりたくさん愚かなことをした。ペテロは一番最初の頃、イエスについてある観念を持っていた。彼は尋ねた。「人々はあなたのことを預言者と言っていますが、あなたが八歳の頃物事を十分理解できたとき、あなたはご自身のことを神であると知っておられましたか。あなたは聖霊によって身ごもられたことを知っておられましたか」。イエスは答えた。「いや、わたしは知らなかった。あなたにはわたしがごく普通の人には見えないのか。わたしは他の人と同じだ。父が遣わすのは普通の人であり、特別な人ではない。それにわたしが行なう働きは、わたしの天の父を代表しているが、わたしの姿、わたしという人、そしてこの肉の身体は父を完全に表すことができず、その一部分しか表せない。わたしは霊から生まれたが、やはり普通の人であり、わたしの父はわたしを特別な人としてではなく、ごく普通の人としてこの地上に送った」。ペテロはこれを聞いたときはじめて、イエスについて少し理解できたのである。そして、イエスの教え、イエスの指導、イエスの支えなどについて、数えきれないほどの長い時間イエスの働きを経験してはじめて、彼はさらに深い理解を得たのである。イエスは三十歳のとき、自分がこれから十字架につけられること、ある段階の業、すなわち十字架の業を行なって全人類を贖うために自分が来たことをペテロに話した。イエスはまた、十字架につけられた三日後に、人の子は復活し、復活してから四十日間人々に現われることもペテロに語った。このような言葉を聞いて、ペテロは悲しみ、これらの言葉を心に留めて、それ以来イエスにさらに近づいていった。しばらくの経験の後、ペテロはイエスが行なった全てのことは、神の存在によることだと認識するようになり、イエスは非常に愛すべき方であると思うようになった。このように理解できるようになってはじめて、聖霊が彼の内から啓発したのである。イエスはそれから弟子たちやイエスに従う他の者たちに向かって言った。「ヨハネ、あなたはわたしをだれだと言うのか」。ヨハネは、「あなたはモーセです」と答えた。それからイエスはルカに向かって、「そしてルカ、あなたはわたしをだれだと言うのか」と尋ねた。ルカは、「あなたは最も偉大な預言者です」と答えた。

次にイエスがひとりの姉妹に尋ねると、姉妹は、「あなたはとこしえからとこしえまで多くの言葉を語る最も偉大な預言者です。誰の預言もあなたのものほど偉大ではなく、誰の知識もあなたの知識を超えません。あなたは預言者です」と答えた。それからイエスはペテロに向かって、「ペテロ、あなたはわたしをだれだと言うのか」と尋ねた。ペテロは「あなたは、生ける神の御子キリストです。あなたは天から来られ、地のものではありません。あなたは神の創造物と同じではありません。わたしたちは地上にいて、あなたはわたしたちとここにいますが、あなたは天のものです。あなたはこの世のものでも、地のものでもありません」と答えた。聖霊によって啓示を与えられるという経験を通して、ペテロはこのことを理解できるようになったのである。この啓示の後、ペテロはイエスが行なった全てのことをさらに褒めたたえ、イエスのことをさらに愛すべき方だと思うようになり、イエスから離れたくないという思いを常に心に抱くようになった。だから、イエスが十字架につけられ、復活した後にイエスが初めてペテロに現れた時、ペテロはこの上もない幸せとともに大声で叫んだ。「主よ！ あなたはよみがえられました！」それから、泣きながら、ペテロは大きな魚を捕まえ、それを料理し、イエスに差し出した。イエスは微笑んだが、語ることはなかった。ペテロはイエスが復活したことを知っていたけれど、彼はその奥義を理解していなかった。ペテロがイエスに魚を差し出したとき、イエスは拒絶しなかったが、話すことも座って食べることもしなく、突然消えてしまった。これはペテロにとってあまりにも衝撃的なことだったが、復活したイエスと以前のイエスとは違うことを、その時はじめて理解した。一旦これを理解すると、ペテロは悲しんだが、主が自身の任務を完成したことを知って慰めを得た。ペテロは、イエスが任務を完成したこと、イエスが人と共にいる時が終わったこと、今後人は自分の道を歩んでいかななくてはならないことを知った。イエスはかつてペテロに、「あなたもわたしが飲んだ苦い杯（これはイエスが復活の後言ったことである）を飲まなければならない。あなたもわたしが歩いた道を歩み、わたしのために命を捧げなければならない」と言った。今とは違い、当時の働きでは、面と向かって会話しなかったのだ。恵みの時代では、聖霊の働きは全く隠されており、ペテロは大きな困難に苦しみ、時には次のように叫ぶことさえあった。「神よ！ わたしにはこのいのちしかありません。あなたにとってはあまり価値がないでしょうが、わたしはこのいのちをあなたに捧げたいのです。人間はあなたを愛するに値せず、人間の愛も心も価値がありませんが、あなたは人の心の望みを知ることができるとわたしは信じています。たとえ人の肉体はあなたに受け入れられなくても、あなたにわたしの心を受け入れて欲しいのです」。このような祈りをすると、彼は励ましを受けた。特に、「わたしは進んで神に心を完全に

捧げます。たとえ神のために何もできなくても、わたしは進んで忠実に神を満足させ、神に自分自身を心から捧げます。わたしは神がわたしの心を見てくださいに違いないと信じています」と祈ったときは、そうであった。ペテロは言った。「わたしは人生に何も求めませんが、神へのわたしの愛の思いとわたしの心の願いが受け入れられるよう願っています。わたしは長い間、主イエスと共にいましたが、イエスを愛したことはありませんでした。これこそわたしの最も大きな負い目です。わたしはイエスと共にいましたが、イエスを知りませんでした。また、イエスの陰で何か不適切なことさえ言いました。これらの事を考えると、わたしは主イエスに負い目を感じます」。ペテロはいつもこのように祈った。彼は、「わたしは塵よりも小さいものです。わたしは神にこの忠誠心を捧げる他には何もできません」と言った。

ペテロの体がほとんど砕かれた時がペテロの経験の頂点だったが、イエスは彼の内に励ましを与えた。そしてイエスはペテロに一度現れた。ペテロが非常に大きな苦しみに遭い、心が打ち砕かれるように感じたとき、イエスはペテロに教えた。「あなたは地上でわたしと共にいたが、わたしもあなたと共にいた。わたしたちが天国で共に一緒になる前だけれども、それでも結局のところは霊の世界のことである。今、わたしは霊の世界に戻っているが、あなたは地上にいる。何故なら、わたしは地のものではないし、あなたも地のものではないけれど、あなたは地上での自分の役割を果たさなければならぬからだ。あなたはしもべであるので、できる限りあなたの本分を果たさなければならぬ」。ペテロは、神のもとへ戻ることができると聞いて、慰められた。ペテロは寝たきりになるほど苦しんでいた時、「わたしはあまりにも墮落しており、神に満足していただくことができない」というほどまでに自責の念にかられていた。イエスは彼に現れ、言った。「ペテロよ。あなたはわたしの前で決心したことを忘れてしまったのか。わたしが言ったことを本当に全て忘れてしまったのか。あなたがわたしのために決意したことを忘れてしまったのか」。ペテロはそれがイエスであると分かったと、床から起き上がった。イエスは彼を慰め、こう言った。「わたしは地のものではない。もうすでにあなたにそう言っておいただろう――あなたはこのことを理解しなければならないが、わたしがあなたに言ったもうひとつのことも忘れてしまったのか。『あなたも地のものではなく、世の者でもない』と。今、あなたには行わなければならない働きがある。あなたはこのような嘆き、このような苦しんでいてはいけぬ。人間と神は同じ世界に住むことはできないが、わたしにはわたしの働きが、あなたにはあなたの働きがあり、いつかあなたの仕事が終わるとき、わたしたちは同じ領域で一緒になり、永遠にわたしと共

にいるようあなたを導くだろう」。ペテロはこの言葉を聞いて慰められ、再び確信を得た。彼は、この苦しみは耐えて体験しなければならないものであることを知った。そして、それからのち靈感が与えられた。イエスはペテロに要所要所で特別に現れ、特別な啓示や導きを与え、彼の内で多くの働きをした。そしてペテロは何を一番後悔したのだろうか。イエスはペテロに別の質問をした（それはこのようには聖書に記録されていないが）。それは、ペテロが、「あなたは生ける神の子です」と言ってから間もないことで、それは、「ペテロよ、あなたはかつてわたしを愛したことがあるのか」という質問だった。ペテロにはイエスの言ったことの意味が分かった。そして、「主よ！ わたしはかつて天の父を愛しましたが、わたしはあなたを愛したことがなかったことを認めます」と答えた。するとイエスは、「人が天の父を愛さないなら、地上の子をどうして愛することができるのだろうか。もし人が神によって遣わされた子を愛さないなら、彼らは天の父をどうして愛することができるのだろうか。もし人が地上の子を本当に愛するなら、彼らは天の父も本当に愛しているのだ」と言った。ペテロはこれらの言葉を聞いたとき、自分の欠点に気づいた。彼はいつも「わたしはかつて天の父を愛しましたが、あなたを愛したことは一度もありませんでした」と言って涙を流すほど後悔した。イエスが復活し、昇天してから、ペテロはさらに自責の念にかられ、悲しんだ。自分の昔の働きや現在の背丈を思い出して、彼は神の願いを満たしていなかったことや、神の基準に達していなかったことを常に後悔し、負い目を感じて、しばしば祈りの中でイエスのもとへ行った。これらのことは彼の最大の重荷となった。ペテロは、「いつかわたしは、わたしが持っているもの全てと、わたしの全てをあなたに捧げます。わたしはもっとも価値あるものをなんでもあなたに捧げます」と言った。また彼は、「神よ、わたしには一つの信仰と一つの愛しかありません。わたしの命には何の価値もありませんし、わたしの体にも何の価値もありません。わたしには一つの信仰と一つの愛しかないのです。わたしの思いの中ではあなたへの信仰を持っており、心の中ではあなたへの愛を持っています。あなたに捧げるものはこの二つしかなく、他には何もありません」と言った。ペテロはイエスの言葉で大いに励まされた。それは、十字架につけられる前にイエスがペテロに「わたしはこの世の者ではない。あなたもこの世のものではない」と言ったからである。後に、ペテロが苦悩の絶頂に達したとき、「ペテロよ、あなたは忘れてしまったのか。わたしはこの世のものではない。わたしが早く去って行ったのは、わたしの働きのためだけだ。あなたもこの世のものではない。忘れてしまったのか。あなたに二度言ったが、覚えていないのか」とイエスは彼に思い出させた。ペテロはイエスの言葉を聞いて「わたしは忘れていません！」と叫んだ。それからイエスは言った。「あなたは

天で一度わたしと幸せな時を過ごし、わたしのそばでしばらく過ごしていた。あなたはわたしがいなくて寂しく思っているが、わたしもあなたがいなくて寂しい。わたしの目には被造物は言うに値しないが、純朴で愛しい者をどうして愛さずにはいられようか。あなたはわたしの約束を忘れてしまったのだろうか。あなたは地上でわたしが与えた使命を受け入れなければならない。わたしが託した任務を果たさなければならない。いつかあなたを必ずわたしのそばに導くであろう」。これを聞いて、ペテロは増々励まされ、さらに大きな靈感を受け、その結果、彼が十字架につけられたとき、「神よ！ わたしはあなたをいくら愛しても十分ではありません。たとえあなたがわたしに死ねと言われても、やはりわたしは十分愛したとは言えません。あなたがわたしの魂をどこに送られても、あなたが過去の約束を果たされても果たされなくても、あなたがその後何をなされても、わたしはあなたを愛し、信じます」と言うことができた。彼がしっかり持っていたのは彼の信仰と真の愛だった。

ある夜、ペテロを含めて数人の弟子たちは漁をするため舟に乗っていた。彼らはイエスと一緒にいて、ペテロはイエスに「主よ！ わたしは長い間お尋ねしたいと思っていた質問があります」と非常に未熟な質問をした。イエスは、「それなら尋ねなさい！」と答えた。するとペテロは、「律法の時代になされた働きはあなたがなされたことですか」と尋ねた。イエスはまるで「この子は、なんと未熟なのだろう！」と言っているかのように、微笑んだ。そしてイエスは意図的に、「それはわたしの働きではない。それはヤーウェとモーセがしたことだ」と続けて言った。ペテロはこれを聞いて、「ええっ！ あなたがなさっているのではなかったのですか」と叫んだ。ペテロがそう言うと、イエスはそれ以上何も言わなかった。ペテロはひとり思った。「それをされたのはあなたではなかったのですね。どうりであなたは律法を滅ぼしに来られたわけです。それはあなたがなされたことではなかったのですから」。また彼の心は「軽くなった」。その後、イエスは、ペテロがずいぶん未熟であることに気づいたが、その時はまだ察しがつかなかったので、イエスは他に何も言わなかったし、直接反論しようとしなかった。一度、イエスは、ペテロも含めて多くの人たちのいる会堂で説教をした。その説教でイエスは言った。「とこしえからとこしえまで来る者は人類を罪から贖うために、恵みの時代に贖いの働きをするが、その者は人を罪から導き出すにあたって、何の規律に縛られることもない。その者は律法から歩み去り、恵みの時代に入る。その者は全人類を贖うであろう。その者は律法の時代から恵みの時代へと躍進するが、誰もヤーウェから来たその者を知らない。モーセが行なった働きはヤーウェから授けられたものである。モ

ーセはヤーウェが行なった働きの故に、律法を書きとめたのだ」。こう言ってから、イエスはさらに続けた。「恵みの時代において恵みの時代の戒めを廃止する者たちは、大きな災いに見舞われるだろう。彼らは神殿に立ち、神による破壊を受けなければならない、火が彼らの上にふりかかるだろう」。ペテロはこれを聞き終わると、少しは反応を示したが、ペテロの経験の期間、イエスはペテロを養い、支え、心を通わせてペテロと話したので、ペテロはイエスのことをもう少し良く理解できるようになった。ペテロはその日イエスが説教したことを思い返し、釣り舟に乗っていた時にイエスに質問したこと、イエスの答え、そしてイエスが笑った様子を思い出し、そのときはじめて、ペテロは全てを理解した。その後、聖霊がペテロを啓発し、それによってのみ、ペテロはイエスが生ける神の子であることを理解した。ペテロの理解は聖霊の啓示によるものだが、それには過程があった。質問したり、イエスが説教するのを聞いたり、イエスとの特別な交わりやイエスの特別な養いを受けたりすることを通して、ペテロはイエスが生ける神の子であることを認識するようになったのだ。それは一夜にして成し遂げられたことではなく、過程であって、それは彼の後の体験に役立った。イエスは他の人たちには完全になるための働きはしなかったのに、なぜペテロにだけそれを行なったのだろうか。それは、ペテロしかイエスが生ける神の子であることを理解せず、他には誰も知らなかったからである。イエスに従って行く間に、多くの弟子たちがたくさんの認識を得たが、彼らの認識はうわべだけのものであった。これこそが、完全にされる模範としてペテロがイエスに選ばれた理由である。イエスがその時ペテロに語ったことは、今日人々に語っていることであり、彼らの認識や霊的成長もペテロの域に到達しなければならない。それは神が全ての人を完全にするための条件と道に一致している。現代の人たちはなぜ真の信仰とまことの愛を持つことが要求されるのだろうか。ペテロが体験したことは、あなたがたも体験しなければならないし、ペテロが自分の体験から得た実は、あなたがたの中にも顕れなければならない。そして、ペテロが受けた苦しみは、あなたがたも必ず経験しなければならないのである。あなたがたが歩く道はペテロが歩いたのと同じ道である。あなたがたが受ける苦しみはペテロが受けた苦しみである。あなたがたが栄光を受けるとき、またあなたがたが真のいのちを生きるとき、あなたがたはペテロの像を生きているのである。道は同じであり、これと一致することにより、人は完全にされるのである。しかし、あなたがたの素質はペテロのそれと比較すると少々欠けている。というのは、時代が変わり、墮落の度合いも変わったからである。またユダヤは古代文化を伴った長い歴史のある国家だった。だから、あなたがたは自分自身の素質を向上するよう努力しなければならない。

ペテロは非常に思慮深く、すること全てに鋭敏で、またたいへん正直だった。彼は多くの挫折を体験した。ペテロは十四歳で社会に出て、しばしばユダヤ会堂に出席する一方、学校にも行っていた。彼は非常に熱心で、いつも集会に喜んで出席した。そのとき、イエスはまだ公には働きを始めておらず、それは恵みの時代の始まりに過ぎなかった。ペテロは十四歳のとき、宗教関係者と接し始めた。十八歳になる頃には、宗教エリートと接するようになるが、その後舞台裏で宗教的無秩序を見てから、彼らから離れていった。この人たちがどんなに悪賢くて、狡猾で、争いによりもたらされたかを見て、彼は非常にうんざりしたのである（彼が完全にされるために、その時聖霊がこのように働いたのである。聖霊は特にペテロの心を動かし、彼の中で特別な働きをした）。そしてペテロは十八歳のときに会堂から退いた。ペテロの両親は彼を迫害し、彼に信じさせなかった（彼らは悪魔に属し、信仰もなかった）。とうとう、ペテロは家を出て、意のままに旅をし、二年間魚を捕ったり、説教したりして、その間、かなりの人たちを導いた。今、ペテロがどんな道を歩んだのか、あなたは明確に見ることができるはずである。もしこれがはっきり見えたら、今日なされている働きを確信するようになり、あなたは不満を言ったり、消極的になったり、何かを切望したりすることもないだろう。あなたは当時のペテロの気持ちを体験すべきである。彼は悲しみに打ちひしがれ、もはや未来もどんな祝福も求めることはなかった。彼は現世の利益、幸福、名声、富などを求めることはせず、最も意義のある人生を生きることだけを求めた。それは神の愛に報い、彼にとって貴重この上ないものを神に捧げることであった。そうすることで、彼の心は満たされた。ペテロはしばしば次のような言葉で祈った。「主イエス・キリスト様、わたしはかつてあなたを愛していましたが、本当には愛してはいませんでした。わたしはあなたを信じていると言いましたが、わたしは決して真の心であなたを愛してはいませんでした。わたしはあなたを尊敬し、お慕いし、お会いしたいと思いましたが、あなたを愛していたのでもなく、心からあなたに信仰を持っていたのでもありませんでした」。彼は常に決意するために祈り、絶えずイエスの言葉によって励まされ、それらの言葉をやる気へと変えたのである。しばらくの経験の後、イエスは、ペテロがイエスをもっと慕うように促して、あえてペテロを試した。ペテロは言った。「主イエス・キリスト様、わたしはどんなにかあなたと一緒にいたいと願い、あなたを見上げる時を待ち焦がれていることでしょう。わたしには余りにたくさん欠けた所があり、あなたの愛にお応えすることができません。わたしを早く取り除いてくれるよう切にお願いします。あなたはいつわたしを必要とされるのでしょうか。あなたはわたしをいつ取り除いてくださるのでしょうか。わたしはいつあなたの御顔をもう一度拝することができるのでしょうか。

この体でこのまま生き、墮落し続けることを望んではいません。またこれ以上反抗することも望んではいません。わたしが持っている全ての物をできるだけ早くあなたに捧げる用意ができています。そして、あなたをこれ以上悲しませたくありません」。ペテロはこのように祈ったが、その時はイエスが彼の中で何を完全にするのか、彼にはまだ分からなかった。ペテロが試みの中で苦しんでいる間、イエスは彼に再び現れ、言った。「ペテロよ、わたしはあなたを完全にしたいと思っている。わたしがあなたを完全なものとするわたしの働きの結晶として、あなたが一つの実となり、わたしの喜びとなるためである。あなたはまことにわたしの証しとなることができるのか。わたしがあなたに願ったことをあなたはしたのか。わたしが語った言葉をあなたは生きてきたのか。あなたはかつてわたしを愛した。あなたはわたしを愛したけれども、わたしを生かし出したのか。わたしのために何をしたのか。あなたは自分がわたしの愛にふさわしくないことを認めたが、わたしのために何をしたのか」。ペテロはイエスのために何もしてこなかったことを悟り、神に自身のいのちを捧げるという以前の誓いを思い出した。それから、彼はもはや不平不満を言わなくなり、その後の彼の祈りはさらに素晴らしくなった。ペテロはこう言って祈った。「主イエス・キリスト様、わたしはかつてあなたから去りましたが、あなたもわたしから去られました。わたしたちはともに離れて過ごしたり、いっしょに過ごしたりしてきました。でも、あなたは他の誰よりもわたしを愛してくださいました。わたしはあなたに何度となく反抗し、あなたを悲しませました。そのようなことをどうして忘れることができますよう。あなたがわたしの中で行われた働き、またわたしに託してくださったことなど、わたしはいつも覚えており、決して忘れることはありません。あなたがわたしにしてくださった働きでもって、わたしは最善を尽くしました。あなたはわたしができることを御存知で、わたしが果たせる役割はもっとご存知です。わたしはあなたの指揮に服従することを望み、持っている全てのものをあなたに捧げます。わたしがあなたにできることは、あなただけが御存知です。サタンはわたしをずいぶん欺き、わたしはあなたに反抗しましたが、あなたはこのような過ちを犯したわたしを覚えておられず、それを基準にわたしを取り扱われたいと信じています。わたしはあなたにわたしの全生涯を捧げたいのです。わたしは何も求めませんし、他の望みも計画も持っていません。わたしはただあなたの意図に従って行動し、あなたの御心を行なうことを望むだけです。わたしはあなたの苦い杯から飲み、あなたの命じられるとおりにします」。

あなたがたは自分が歩く道について明確でなければならない。あなたがたが将来行く

道について、また神が何を完全にするのか、そして、あなたがたが任されたことなどについても明確でなければならない。おそらくいつの日か、あなたがたは試されるだろう。そしてもしその時あなたがたがペテロの経験から靈感を得ることができるなら、それはあなたがたがまことにペテロの道を歩いていることを示している。ペテロは彼の真の信仰、愛、神への忠誠のために、神に褒められた、そして神が彼を完全にしたのは、彼の実直と彼の心のうちの神へのあこがれの故であった。もしあなたが本当にペテロと同じ愛と信仰を持っているなら、イエスは必ずあなたを完全にしてくれるであろう。

精錬を経験することでのみ、人は真の愛をもつことができる

あなたがたはみな試練と精錬のさなかにある。精錬の間、あなたはどのように神を愛すべきか。精錬を経験した人は神に真の賞賛を捧げることができ、また精錬のさなか、自分に欠けているものが非常に多いことを理解できる。精錬が大きいほど肉を捨てることができ、人々への精錬が大きいほど神に対するその人たちの愛はより大きくなる。これはあなたがたが理解しなければならないことである。なぜ人は精錬されなければならないのか。どのような効果を挙げるのが目的なのか。人における神の精錬の働きの意義は何か。真に神を求めていれば、神の精錬をある程度まで経験した後、精錬というのは極めて素晴らしく、この上なく必要なことだと感じるだろう。精錬の間、人はどのように神を愛すべきか。神を愛する決意を行ない、神の精錬を受け入れることによってである。精錬されている間、あなたはナイフで心をえぐられるかのように、内なる苦しみに苛まれる。それでもあなたは神を愛する心によって神を満足させようとし、肉を労わろうとはしない。これが神への愛を実践することの意味である。あなたは内面で傷つき、痛みもある程度に達しているが、それでも喜んで神の前に出てこう祈る。「ああ、神よ！ わたしはあなたから離れることができません。わたしの中には暗闇がありますが、それでもあなたに満足していただきたいのです。あなたはわたしの心をご存知です。どうかあなたの愛をもっとわたしにお授けください」。これが精錬のさなかにおける実践である。神への愛を基礎として使えば、あなたは精錬によっていっそう神に近づき、神との親密さが増す。あなたは神を信じているのだから、神の前で自分の心を差し出さなければならない。神の前で自分の心を捧げ、神に委ねるなら、精錬の間、あなたが神を否定したり、神から離れたりすることはあり得ない。このようにして、神との関係がより親密に、より正常になり、神との交わりもより頻繁になるだろう。いつもこのように実践すれば、あなたはさらに多くの時間を神の光の中で過ごし、神の言葉の導きの下でより多くの時間を生きるようになる。あなたの性質にもますます多くの変化が

起き、認識は日々増えるだろう。神の試練が突如降りかかる日が来ても、あなたは神の側に立つことができるだけでなく、神への証しも行なえる。その時、あなたはヨブのように、ペテロのようになるのである。神への証しを行なったあなたは、真に神を愛し、神のために喜んで命を差し出すだろう。あなたは神の証人であり、神に愛される者となるだろう。精錬を経た愛は強く、弱くはない。いつ、どのように神があなたを試練に晒そうとも、あなたは自分の生死に関する懸念を捨て去り、神のために喜んですべてをなげうち、神のためにどんなことでも耐えることができる。かくして、あなたの愛は純粹になり、信仰は本物になる。その時初めてあなたは真に神に愛される者、神によって真に完全にされた者となる。

人がサタンの影響下に陥ると、その人の中に神への愛はなく、それまでのビジョン、愛、そして決意は消え去ってしまう。人々はかつて、自分は神のために苦しまなければならないと感じていたのに、今はそうすることを恥と考え、不平不満に事欠かない。これがサタンの働きであり、人がサタンの支配下に陥ったしるしである。この状態に陥ったならば祈りを捧げ、できるだけ早くそれをひっくり返さなければならない。そうすればサタンの攻撃から守られる。人がサタンの支配下に最もたやすく陥るのは苦しい精錬のさなかである。では、そのような精錬において、あなたはどのように神を愛すべきなのか。自分の意志を奮い立たせ、自分の心を神の前で晒し、自分の時間を残らず神に捧げるべきである。神がどのようにあなたを精錬しても、あなたは真理を実践して神の旨を満たし、自ら神を求め、交わりを求めるべきである。そのようなときは消極的になればなるほど否定的になり、容易に後退してしまう。自分の役割を果たすことが必要なときは、たとえうまくそれを果たせないにしても、ただ神への愛を使ってできる限りのことを行ないなさい。あなたがうまく行ったとか失敗したなどと他人は言うだろうが、他人が何を言おうとあなたの意図は正しく、あなたは独善的ではない。あなたは神のために行動しているからである。他人があなたを誤解しても、あなたは神に祈り、このように言うことができる。「ああ、神よ。他人がわたしに寛容であることも、わたしをよく扱うこともわたしは願いませんし、わたしを理解したり認めたりすることも願いません。心の中であなたを愛することができ、心穏やかになり、良心が澄み切っていることだけを願います。他人がわたしを賞賛することや高く評価することをわたしは願いません。あなたに満足していただくことを心から願うだけです。わたしはできる限りのことを行なって自分の役割を果たします。わたしは愚かで分別がなく、素質に乏しく盲目ですが、あなたが素晴らしいことはわかっておりますので、わたしがもつすべてのものを

喜んであなたに捧げます」。このように祈ったとたん、神に対するあなたの愛が現われ、あなたの心は大いに安心する。これが神への愛を実践するということである。経験を重ねるにつれ、二回失敗しても一回成功し、五回失敗しても二回成功するようになるだろう。このように経験を重ねるうち、あなたは失敗の中でのみ神の素晴らしさを理解し、自分に欠けているものを見出すだろう。次にこのような状況に遭遇したら、自分自身に注意を払い、歩みを加減し、より頻繁に祈るべきである。そうすれば、そのような状況で勝利する力を徐々に得るだろう。そうなったとき、あなたの祈りには効果があったのである。今回勝利したのがわかれば、あなたは内なる喜びを感じ、祈るときに神を感じることができ、聖霊の存在が自分のもとを去っていないことがわかるだろう。そのとき初めて、自分の中で神がどのように働くのかがわかるのである。このように実践することで、あなたは経験に至る道を得る。真理を実践しなければ、あなたの中に聖霊の存在はない。しかし、ありのままの物事に遭遇した際に真理を実践すれば、たとえ内側で傷ついても、その後は聖霊があなたと共にいて、祈りの際に神の存在を感じることができ、神の言葉を実践する力をもつ。そして、兄弟姉妹との交わりにおいて、あなたの良心の重荷となるものはなくなり、あなたは平安を感じる。このようにして、自分が行ってきたことを明らかにできるのである。他人が何を言おうと、あなたは神との正常な関係をもつことができ、他人に制約されず、あらゆるものを超越する。そしてその中で、神の言葉の実践が効果的であったことを実証するのである。

神の精錬が大きいほど、人の心は神をさらに愛することができる。心の苦しみはその人のいのちに有益であり、神の前でより安らぎ、神との関係がより近くなり、神の至高の愛と救いをよりよく理解できる。ペテロは何百回も精錬を経験し、ヨブは数度の試練を受けた。あなたがたが神によって完全にされることを望むのであれば、同じく何百回もの精錬を経験しなければならない。この過程を経てこの段階に頼らなければ、神の旨を満たして神によって完全にされることはできない。精錬は、神が人を完全にする最良の手段である。精錬と厳しい試練だけが人々の心に神に対する真の愛をもたらすのである。苦難がなければ、人々は神に対する真の愛をもたない。試練によって内側から試されず、真に精錬を受けなければ、人々の心は常に外側を漂い続けるだろう。ある程度まで精錬された後、あなたは自分の弱さと困難を理解し、自分に欠けているものがどれほどあって、遭遇する数多くの問題を乗り越えることができないのか、そして自分の不従順がいかに大きなものかを知るようになる。人が自分の実際の状態を真に認識できるのは試練のあいだだけであり、試練こそが人をよりよく完全にできるのである。

その生涯を通じ、ペテロは数百の精錬を経験し、苦しみに満ちた試練を数多く受けた。この精錬は神に対するペテロの至高の愛の基礎となり、ペテロの一生で最も重要な経験となった。ペテロが神に対する至高の愛をもてたのは、ある意味では、神を愛する決意のためだった。しかし、より重要なのは、それがペテロの経験した精錬と苦しみのためだったことである。この苦しみは神を愛する行路の指針となり、ペテロにとって最も記憶に残るものとなった。神を愛する際に精錬の苦しみを受けなければ、人の愛は不純なものと自分の好みに満ちている。そのような愛はサタンの考えに満ちており、神の旨を満たすことが根本的にできない。神を愛する決意を抱くことは、真に神を愛することと同じではない。人が心の中で考えていることは、どれも神を愛して満足させるためのものであり、人の思考はひたすら神に捧げられ、人間の発想など一切ないように思えるが、その人の思考が神の前に出されたとき、神はそのような思考を賞賛も祝福もしない。人がすべての真理を十分理解し、そのすべてを知るようになったとしても、それは神を愛するしるしだとは言えず、そうした人たちが実際に神を愛しているとも言えない。精錬を経ずして多くの真理を理解したとしても、人はそうした真理を実践することができない。精錬のさなかにおいてのみ、人はこれらの真理の本当の意味を理解し、そうして初めてそれらの内なる意味を真に認識できる。そのとき再び試みれば、真理を適切に、神の旨にかなう形で実践することができる。その際、人々の人間的な考えは少なくなり、人間としての墮落も減り、人間的な感情も減少する。そのとき初めて人々の実践は神に対する愛の真の表明となる。神に対する愛という真理の効果は、認識を話すことや、精神的な意思によって挙がるものではなく、単にその真理を理解することだけで挙がるものでもない。人々は代価を支払い、精錬のさなかに多くの苦痛を受ける必要があり、そうして初めて彼らの愛は純粹になり、神自身の心を求めるようになる。人は神を愛せよという神の要求において、人が情熱や自分の意志によって神を愛することは求められない。忠誠を抱き、真理を用いて神に仕えることでのみ、人は真に神を愛することができる。しかし、人は墮落の中で生きており、それゆえ真理と忠誠によって神に仕えることができない。また、人は神についてあまりに情熱的であるか、あるいはあまりに冷たく無頓着であり、極端に神を愛するか、極端に神を憎むかのどちらかである。墮落の中で生きる者は常にこの両極端のあいだで生きており、常に自分の意志によって生きながら、自分は正しいと信じている。わたしはそのことに何度も触れてきたが、人々はそれを真剣に捉えることも、その重要性を完全に理解することもできず、それゆえ自己欺瞞の信念に生き、自分の意志に依存する神への愛という錯覚の中で生きている。歴史を通じて、人類が発展していくつもの時代が過ぎる中、人間に対する神の要求はますます

高くなり、神に対して人が絶対視することを神はますます求めるようになった。しかし、神に関する人の認識はますます曖昧かつ抽象的になり、それに伴い神に対する人の愛はますます不純になった。人の状態とそのすべての行ないも、さらに神の旨と調和しないものになっている。なぜなら、サタンによってますます深く墮落させられたからである。そのせいで、神はさらに偉大な救いの働きをより多く行なう必要がある。人はますます神への要求を厳しくし、神に対する人の愛はよりいっそう減っており、真理がないまま不従順に生き、人間性のない生活を送っている。人々は神に対する愛のかけらもないばかりか、不従順と反抗に満ちている。自分はすでに神に対して最高の愛を抱いており、神に対してこの上なく寛容だと思っているが、神はそうには考えていない。神に対する人の愛がいかにか汚れているかなど、神は完全に見通しているし、人が迎合したからといって人に対する考えを変えたことはなく、献身の結果としての善意に報いたこともない。人間と違い、神は区別することができる。真に神を愛しているのは誰か、愛していないのは誰かを神は知っており、熱情に圧倒されて人の一時的な衝動のために自身を失ったりせず、人の本質と振る舞いに応じてその人を処遇する。神は結局神であり、神には神の尊厳と洞察力がある。人は結局人であり、その愛が真理と矛盾するとき、神がそれによって振り向くことはない。逆に、神は人が行なうすべてのことを適切に扱うのである。

人の状態と神に対する人の態度に直面した神は新しい働きを行ない、人が神に対する認識と服従、そして愛と証しをもつことを可能にした。したがって、人は神による精錬、裁き、取り扱い、刈り込みを経験しなければならず、それがなければ神を知ることは決してなく、神を真に愛し、神への証しを行なうこともできない。神による人間の精錬は単に一面的な効果のためでなく、多面的な効果のためである。神はこのような方法のみ、進んで真理を求める人々の中で精錬の働きを行ない、それによってその人たちの決意と愛を完全にする。進んで真理を求める者、神を切望する者にとって、このような精錬以上に意味のあるもの、大きな支えとなるものはない。つまるところ、神は神なのだから、神の性質が人によってそれほど容易に知られたり、理解されたりすることはない。最終的に、神が人と同じ性質をもつことはあり得ず、したがって人が神の性質を知るのは容易なことではない。真理は人が本質的に有しているものでなく、サタンによって墮落した人々が容易に理解できるものでもない。人には真理がなく、真理を実践する決意もないので、苦しみを受け、精錬されたり裁かれたりすることがなければ、その人の決意が完全なものになることは決してない。すべての人にとって精錬は耐え難く、非

常に受け入れ難いものであるが、神が自身の義なる性質を人に明らかにし、人に対する要求を公にし、より多くの啓き、そしてより現実的な刈り込みと取り扱いを与えるのは精錬のさなかである。事実と真理の比較を通じ、神は自己と真理に関するより大きな認識を人に授け、神の旨をより深く理解させ、そうしてより真実かつ純粋な神への愛を人が抱けるようにする。それらが精錬を実行する神の目的である。人の中で神が行なうすべての働きには固有の目的と意義がある。神は無意味な働きをせず、人に恩恵がない働きもしない。精錬とは人々を神の前から取り除くことでなく、地獄で人々を滅ぼすことでもない。それはむしろ、精錬のさなかに人の性質を変え、その人の意図や従来の見方を変え、神に対する愛を変え、生活を変えることを意味する。精錬は人に対する実際の試練の一つであり、実際の鍛錬の一形態であって、精錬のさなかでのみ人の愛はその本質的な機能を果たすことができる。

神を愛する人は永遠に神の光の中に生きる

大半の人の神に対する信仰の実質は、宗教的な信仰である。彼らは神を愛することができず、ロボットのように神に付き従うことしかできない。心から神を切望することも、慕い求めることもできないのである。このような人は黙って神に付き従っているに過ぎない。神を信じる人は多いものの、神を愛する人はほとんどいない。人々は災難を恐れて神を「畏れる」だけか、さもなければ神が高く偉大な存在なので「崇めて」いるかに過ぎない。しかし、彼らの畏れや敬慕には、愛も、心からの切望もない。人々は自身の経験の中で、真理の些細な部分、あるいは取るに足らない奥義を求めている。大半の人は単に従うだけで、漁夫の利を得ようとしている。そのような人は真理を求めず、また神の祝福を受けるべく、心から神に従うこともない。すべての人が送る、神への信仰の生涯は無意味である。そこに価値はなく、自分の個人的な考慮と追求しかない。彼らは神を愛するために神を信じているのではなく、祝福を受けるために信じている。多くの人は思うがままに振る舞い、好きなことをするばかりで、神の益を考慮せず、自分の行ないが神の旨に適っているかどうかを考えることもない。そのような人は神を愛するどころか、真の信仰をもつことさえできない。神の本質は、単に人間が信じるべきものではない。それ以上に、人間が愛すべきものである。しかし、神を信じる人の多くは、この「秘密」を見いだすことができない。人々はあえて神を愛そうとせず、愛そうと試みることもない。神には愛すべき点が数多くあるのを見出したことがなく、神が人を愛する神であること、人が愛すべき神であるのも見出したことがない。神の愛すべき素晴らしさはその働きに示されている。人は神の働きを経験してはじめて、神の愛すべき素

晴らしさを見出す。人は実際の経験の中でしか、神の愛すべき素晴らしさを理解できない。そして実生活においてそれを目の当たりにしなければ、誰一人神の愛すべき素晴らしさを見出せない。神には愛すべき点が数多くあるものの、実際に神と関わらなければ、人はそれを見出せない。つまり、もし神が受肉しなければ、人々は実際に神と関わることができず、実際に神と関わるができなければ、その働きを経験することもできない。そのため、神に対する人々の愛は、数多くの偽りや想像によって汚されることになる。天なる神への愛は、地上にいる神への愛ほど現実的なものではない。と言うのも、天なる神に関する人の認識は、その目で見たり自ら経験したりしたことではなく、自分の想像に基づいているからである。神が地上に来ると、人々は神の実際の業と、神の愛すべき素晴らしさを目の当たりにできる。神の実際的かつ普通の性質をすべて見られるのであり、それらはみな、天なる神についての認識より数千倍も現実的なものである。人々が天なる神をどれほど愛そうと、その愛に現実的なところは何ひとつなく、人間の考えで満たされている。地上にいる神への愛がどれほどささやかなものであっても、その愛は現実のものである。たとえごくわずかであっても、やはり現実のものなのである。神は実際の働きを通して人々に自分を知らしめ、それによって人々の愛を得る。ペテロもこれに似ている。イエスと共に暮らしていなければ、ペテロがイエスを愛することは不可能だったろう。イエスに対するペテロの忠誠心もまた、イエスとの交わりを通して築かれたものである。人間が自分を愛するようにすべく、神は人の間に来て人と共に生きてきた。そして神が人に見させ、経験させるものはみな、神の現実なのである。

神は現実と事実を用いて人々を完全にする。人々を完全にするにあたり、神の言葉はその一部分を担っているが、それは導きの働き、道を開く働きである。つまり、あなたは神の言葉の中に実践の道を見出し、ビジョンに関する認識を見出さなければならない。これらを理解することで、実践において道とビジョンを得、神の言葉によって啓きを得ることができる。それらが神から出たものであることを理解し、多くのものを見分けられる。理解した後はただちにこの現実に入り、神の言葉によって、現実の生活において神を満足させなければならない。神は万事においてあなたを導き、実践の道を示し、神がひとときわ愛すべき存在であることを感じさせるとともに、自分における神の働きの各段階は、自分を完全にするのが目的なのだと理解できるようにする。神の愛を目の当たりにし、それを真に経験したいのであれば、現実と実際の生活に深く入らなければならない。そして、神のすることはみな愛と救いであり、また神が行なうすべてのことによって、人は汚れたものを捨て去ることができ、人の内にある物事のうち、神の旨を満

たせないものを精錬できるのだと理解しなければならない。神は言葉を用いて人に施す。神は現実の生活における状況を采配して、人にそれを経験させる。そして人は、神の言葉を数多く飲み食いし、それらを実践に移したとき、神の数多くの言葉を用いて生活の困難を残らず解決できる。つまり、現実深く入るには、自分に神の言葉がなければならない。神の言葉を飲み食いせず、神の働きがなければ、現実の生活で道をもつことはない。神の言葉を飲み食いしなければ、何かが起きた際に当惑する。神を愛すべきだと知るだけで、何ひとつ見分けることができず、実践の道をもたなければ、あなたはまごついて混乱し、肉の欲求を満たすことが神を満足することだと思い込むことさえある。これはどれも、神の言葉を飲み食いしない結果である。つまり、神の言葉に支えられることなく、現実の中で手探りしているだけでは、実践の道を見出すことが根本的にできないのである。このような人は、神を信じるということがどういう意味かをまったく理解しておらず、ましてや神を愛することがどういう意味かなど理解していない。神の言葉による啓きと導きを用いてしばしば祈り、探り、求め、それによって実践すべき事柄を見出し、聖霊の働きの機会を見つけ、真に神と協力し、まごついて混乱することがないなら、あなたは現実の生活において道を持ち、真に神を満足させる。神を満足させれば、あなたの中には神の導きがあり、神から格別の祝福を受ける。あなたはそれによって喜びを覚える。神を満足させたことをひとときわ光栄に感じ、内なる光を特に感じ、心は明瞭で安らかになる。良心は穏やかで、責められることがない。また兄弟姉妹を見るとよい心地になる。これが神の愛を享受するということであり、これだけが真に神を喜ぶということである。神の愛は経験を通して享受できる。苦難を経験して真理を実践することで、人は神の祝福を得る。神は自分を本当に愛し、人のために重い代価を本当に払い、忍耐強く、そしてやさしく多くの言葉を話し、いつでも人々を救ってくれると口にするだけなら、あなたがこれらの言葉を発することは、神を喜ぶことの一面に過ぎない。しかし、さらに大きな喜び、すなわち真の喜びは、現実の生活において真理を実践することであって、その後、心は安らかで明晰になる。自分の中で大きな感動を覚え、神は最も愛すべき存在であり、自分の払った代価は十分過ぎるほど妥当だと感じるようになる。そして大きな代価を払って努力したことで、あなたはとりわけ明るい気持ちになる。自分が真に神の愛を享受していると感じ、神が人々に救いの働きをしてきたこと、神による人々の精錬は人々の清めであること、そして神が人々を試すのは、本当に神自身を愛しているかどうかを調べるためだということがわかる。このようにして絶えず真理を実践するなら、神の働きの多くに関する明確な認識が徐々に育まれ、そのときには自分の前にある神の言葉が水晶のごとく明瞭に感じられる。多くの真理を明確に理解でき

るなら、すべてのことは容易に実践でき、どんな問題や誘惑であっても打ち勝てると感じ、問題など何もないと思う。そのことは、あなたを大いに解放して自由にする。そのとき、あなたは神の愛を享受しているのであり、神の真の愛が自分にもたらされたのである。神はビジョンをもつ人、真理をもつ人、認識をもつ人、心から神を愛する人を祝福する。神の愛を目の当たりにしたければ、現実の生活において真理を実践し、進んで苦痛に耐え、愛するものを捨てて神を満足させ、たとえ涙することがあっても、神の旨を満足させられなければならない。そうすれば、神は必ずあなたを祝福する。そして、そうした困難を耐え忍ぶなら、聖霊の働きがそれに続く。現実の生活を通して、そして神の言葉を経験することで、人々は神の愛すべき素晴らしさを目の当たりにでき、神の愛を味わってはじめて、人は真に神を愛せるのである。

真理を実践すればするほど、より多くの真理が自分のものになる。真理を実践すればするほど、神の愛がますます自分のものになる。そして真理を実践すればするほど、神の祝福をさらに受ける。いつでもこのように実践するなら、ペテロが神を知るに至ったのと同じく、あなたに対する神の愛のおかげで、あなたは徐々に見えるようになる。ペテロは、神には天地と万物を創造する知恵があるだけでなく、それ以上に、人々の中で実際的な働きを行う知恵があると言った。神が人々の愛にふさわしいのは、天地と万物を創造したからだけではなく、それにもまして、人間を創り、人間を救い、人間を完全にし、人間に愛を授ける力があるからだと述べたのである。ゆえにペテロは、神には人間の愛にふさわしい点が数多くあるとも言っているのである。ペテロはイエスにこう言った。

「あなたが人々の愛を受けるにふさわしいのは、天地と万物をお創りになったのが唯一の理由ですか。あなたには愛されるにふさわしい点がもっとあります。あなたは現実の生活の中で働き、動いておられます。あなたの御霊はわたしの内に触れ、わたしを懲らしめ、わたしを咎められます。こうしたことはずっと、人々の愛によりふさわしいのではありませんか」神の愛を見て経験したいと望むのであれば、それを現実の生活の中で探し求め、進んで自分の肉を捨てなければならない。あなたはこの決意をしなければならぬのである。決意をもち、万事において神を満足させることができ、怠ることなく、肉の喜びに貪欲にならず、肉のためではなく神のために生きられる人にならないといけない。神の旨を満たせないときもあるだろう。それは神の旨を理解していないからである。次はもっと努力する必要があったとしても、あなたは神を満足させなければならないのであって、肉を満足させてはならない。このようにして経験していくと、あなたは神を知るようになる。神が天地と万物を創造できることを知り、また人々が実際に

神を目の当たりにし、神と関われるよう、神が肉となったことを知るのである。そして、神が人々の間を歩けること、神の霊が現実の生活の中で人々を完全にし、人々が神のすばらしさを目の当たりにし、その鍛え、懲らしめ、祝福を経験できるようにすることがわかるのである。絶えずこのような経験をしていれば、現実の生活において神と離れ難くなり、いつの日か、神との関係が正常のものでなくなっても、叱責を受けて後悔を覚えられるようになる。神と正常な関係にあるときは、決して神と離れようと思わず、ある日、神が去ると言うことがあれば、あなたは恐れ、神と離れるくらいなら死んだほうがましだと言うだろう。そうした感情を抱くとすぐ、あなたは神から離れられないと感じ、そうして基礎ができ、真に神の愛を享受できる。

人々はよく、神を自分のいのちにさせることを口にするが、彼らの経験はまだそこまで至っていない。あなたは単に、神は自分のいのちで毎日自分を導いてくれる、自分は毎日神の言葉を飲み食いしている、そして自分は毎日神に祈っているのだから、神が自分のいのちになったと言う。こうしたことを言う人の認識は極めて表面的である。多くの人には基礎がない。神の言葉は植えつけられたが、まだ芽を出しておらず、まして実を結んでなどいない。今日、あなたはどの程度まで経験したのか。ここまで神が強引に連れてきてやっと、あなたは神と離れることはできないと感じる。いつか、あなたの経験が一定のところに達した際には、神があなたを去らせようとしても、あなたはそうすることができないはずだ。あなたはいつでも、自分の中に神がなくてははいられないと感じるだろう。夫や妻、子供、家族、父母、肉の喜びはなくてもいられる。しかし、神なしでははいられない。神なしでいるのはいのちを失うようなもので、神なしでは生きてはいられないはずだ。あなたの経験がここまでになると、神に対するあなたの信仰は一定の基準に達したことになる。そして、このようにして、神はあなたのいのちとなり、あなたの生存の基礎となっている。あなたは二度と神から離れられない。この程度まで経験を積むと、あなたは真に神の愛を享受したことになり、また神との関係が十分親密になると、神があなたのいのちと愛になり、あなたは神にこう祈る。「おお、神よ。あなたから離れることができません。あなたはわたしのいのちです。他のすべてがなくともやっていけますが、あなたがいなければ生きていけません」これが人の真の霊的背丈、そしてまことのいのちである。中には、今日いるところまで無理に連れてこられた人もいる。望むと望まざるとにかかわらず、その人たちは進まなければいけない。彼らはいつも、自分が苦難の板挟みとなったかのように感じている。あなたは、神が自分のいのちになり、自分の心から神を奪われたなら、それはいのちを失うようなものである、とい

うところまで経験しなければいけない。神は自分のいのちであって、神から離れることはできないという状態にならないといけない。そうすれば、あなたは本当に神を経験したことになり、そのとき神を愛するなら、真に神を愛するのであって、それは唯一の純粋な愛である。いつの日か、自分のいのちがある程度に達するほど経験を積み、神に祈り、神の言葉を飲み食いしたとき、あなたは自分の中で神から離れることができず、たとえそうしたいと思っても、神を忘れることができない。神があなたのいのちになったのである。世界を忘れることはできる。妻や夫や子供を忘れることもできる。しかし、神を忘れるのは難しい。そうすることは不可能であって、それがあなたの真のいのちであり、神への真の愛である。神への愛がある程度に達すると、神への愛に匹敵する愛はなくなり、神への愛が最優先となる。そのようにして、他のすべてを捨て去ることができるようになり、神によるすべての取り扱いと刈り込みを進んで受け入れるようになる。神への愛が他のすべてを超えるまでになると、あなたは現実の中で、神の愛の内に生きようになる。

自分の中で神がいのちになるやいなや、人々は神から離れることができなくなる。これこそが神の業ではないのか。これ以上の証しはない。神はある段階まで働いた。神は人々に、奉仕せよ、刑罰を受けよ、あるいは死ねと言ったが、人々はひるんでおらず、彼らが神に征服されたことは明らかである。真理を持つ人々は、実体験において証しに堅く立つことができ、自分の立場をしっかりと守り、神の側に立ち、決して退くことがなく、神を愛する人々と正常な関係を持つことができ、自分たちに物事が起こった時は完全に神に従うことができ、そして死に至るまで神に従うことができる。実生活におけるあなたの実践と表現は神への証しである。それらは人の生きる道であるとともに神への証しなのであり、これこそが真に神の愛を享受しているということなのだ。この段階まで経験を重ねてくると、しかるべき成果が生み出されている。あなたは実際に生きることができ、そのあらゆる行いに対して他の人々から称賛の目が向けられる。服装や外見が平凡であっても、この上なく敬虔に生きており、神の言葉を伝えるときは神によって導かれ、啓かれる。自分の言葉で神の旨を語るができ、現実を伝えることができ、霊において奉仕することを深く理解している。話し方は率直で、礼儀正しく高潔で、対立的になることがなく気品があり、物事が降りかかったときは神の采配に従うとともに証しに堅く立つことができ、また、どのような事を取り扱う場合にも穏やかで落ち着いていられる。このような人は真に神の愛を見てきている。その中にはまだ若い人々もいるが、彼らは壮年者のように振る舞う。彼らは成熟しており、真理を自分のものにし

ていて、他の人々から感心される。彼らは証しをもち、神を明示する人々である。つまり、ある程度の経験を積むと、心の中に神に対する理解力が養われ、外に現れる性質もやはり安定するのだ。多くの人は真理を実践せず、証しに立つことがない。そのような人々には、神の愛、あるいは神への証しが存在しない。そして、こうした人々が神から最も嫌われる人なのだ。彼らは集会で神の言葉を読みはするが、生きているのはサタンであり、それは神の名誉を汚し、神を貶め、神を冒瀆することである。そのような人々の内には神の愛のかけらもなく、聖霊の働きがまったくない。ゆえに、人々の言動はサタンを表わしている。もしあなたの心がいつでも神の前で安らかであるなら、また、周囲の人々や物事、自分の周りで起こっていることに常に注意を払い、神の負っているものについて心を留めているなら、また、常に神を敬い畏れる心をもっているなら、神はあなたを内から啓く。教会には「監督者」なるものがいて、他の人々の過ちにことさら注意を払い、それを真似て見せる。彼らは見分けることができず、罪を憎まず、サタンの物事を嫌うことも不快に思うこともない。そのような人々はサタンの物事に満たされており、ついには神から完全に見放される。あなたはいつも神の前で敬い畏れる心を持ち、言動は穏やかであらねばならず、神に敵対したり、神を悲しませたりすることを望んではならない。あなたの内にある神の働きを無にしたり、これまで耐えてきた苦難や実践してきたことをすべて無にしたりすることを決して望んではならない。あなたは前途においてもっと一生懸命働き、さらに神を愛さなければならない。こうした人々は自身の基盤としてビジョンをもつ人である。こうした人々は前進を求める人なのである。

神を敬い畏れる心で神を信じ、神の言葉を経験するなら、そのような人々には神の救いと神の愛が見られる。そうした人々は神を証しすることができる。彼らは真理に生き、自らが証しするものもやはり真理、神の存在そのもの、そして神の性質である。彼らは神の愛に包まれて生き、神の愛を知っている。もし人々が神を愛したいと願うなら、神の愛すべき素晴らしさを経験し、神の愛すべき素晴らしさを知らなければならない。そうしてはじめて、神を愛する心、神のために忠実に我が身を捧げようという思いが生じる。神は言葉や表現、あるいは人々の想像力に訴えて人々が神を愛するように仕向けることはなく、自身を愛することを人に強いることもない。むしろ、人々に自ら進んで神を愛するようにさせ、自分の働きと言葉の内にその愛すべき素晴らしさを見るようにさせる。その後、人々の内には神への愛が生まれるのだ。この方法によってのみ、人々は真に神を証しできるのである。人々は、他人から駆り立てられて神を愛するのではなく、一時の感情的衝動に駆られて愛するのでもない。人々が神を愛するのは、神の愛す

べき素晴らしさを見たためである。彼らは、神には人々の愛に値するものが非常に多くあることを見た。神の救いと知恵、驚くべき業を見たからである。そしてその結果、彼らは心から神を讃え、心から神を慕い、神無くしては生き抜けないほどの情熱が自分の中に呼び起こされるのだ。真に神を証しする人々は、神に対する真の認識と、心から神を慕う気持ちという基盤の上に自らの証しがあるからこそ、鳴り響くような証しをできるのである。そのような証しは、感情に突き動かされて行われるのではなく、神とその性質に関する自らの認識によって行われる。そのような人は神を知るようになったため、自分は必ずや神を証しし、神を切望するすべての人々に神のことを知らせるとともに、神の愛すべき素晴らしさと神の現実性を気付かせなければならないと感じるのである。人々の神への愛と同様に、彼らの証しは自発的である。それは真実であり、本物の意義と価値がある。これは受動的なものでも、虚しく無意味なものでもない。真に神を愛する者だけが最も価値ある意義深い人生を送ることができる理由、彼らだけが真に神を信じている理由は、彼らが神の光の中に生きることができ、神の働きと経営のために生きることができるということにある。闇の中に生きるのではなく、光の中に生き、無意味な生を生きるのではなく、神の祝福を受けた生を生きているためである。神を愛する者だけが神を証しでき、彼らだけが神の証人であり、彼らだけが神に祝福され、彼らだけが神の約束を受ける。神を愛する者は神の知己であり、神に愛され、神と共に幸福を享受できる。このような人々だけが永遠に生き続け、このような人々だけが永遠に神の配慮と加護の下に生きるのである。神は人々が愛すべき存在であり、万人に愛されるにふさわしい存在だが、すべての人々が神を愛せるわけではなく、すべての人々が神を証しして神と共に力をもつわけでもない。真に神を愛する者は、神を証しできるため、そしてすべての努力を神の働きに捧げることができるため、彼らに敢えて敵対しようとする者はおらず、彼らは天の下のあらゆる場所を歩くことができ、地において力を振るい、神の民を一人残らず支配することができる。こうした人々は世界中から集まってくる。話す言葉は違い、肌の色も異なっているが、その存在は同じ意味をもっている。彼らには神を愛する心があり、みな同じ証しをし、同じ決意をもち、同じことを願っている。神を愛する者は世界中を自由に歩くことができ、神を証しする者は全宇宙を旅することができる。こうした人々が神に愛され、神の祝福を受け、永遠に神の光の中に生きるのである。

実践に集中する者だけが完全にされることができる

神は行うべき働きを行い、言葉による職分を果たすために終わりの日に受肉した。神

の心に適う人を完全にすることを目的として、人間のもとで働くために神は自らやって来た。創造の時から現在まで、神がこのような働きを行うのは終わりの日のみである。そのような大規模な働きを行うために神が受肉したのは、終わりの日のみである。神は人間にとっては耐え難いであろう苦難に耐え、偉大な神でありながら凡人となるほどに謙っているが、神の働きのうち遅れている側面はなく、その計画はほんの少しも混乱に陥ったことはない。神は元来の計画どおりに働きを行っている。この受肉の目的のひとつが、人間を征服することであり、もうひとつが神が愛する人を完全にすることである。神は自らが完全にする人をその目で見ること望んでおり、また完全にする人がどのように神を証しするかを自ら見ることを望んでいる。完全にされるのは一人や二人ではない。それは極めて少人数の集団である。この集団にいる人たちは世界各地の様々な国の出身であり、様々な民族である。これだけの働きを行う目的は、その集団を得ること、その集団が神のために立てる証しを得ること、そしてその集団から神が得られる栄光を得ることである。神は意義のない働きも、無価値な働きも行わない。それほど大量の働きを行う神の目的は、神が完全にすることを望む人全てを完全にすることであると言える。その働きの余暇に、神は邪惡な者を捨てる。神がそうした大いなる働きを行うのは邪惡な者のためではないことを知りなさい。それどころか、神に完全にされる少数の人たちのために、神は自らの全てを捧げるのである。神が行う働き、述べる言葉、明らかにする奥義、神の裁きと刑罰は全てそれらの少数の人たちのためである。邪惡な者のために神は受肉したのではなく、邪惡な者が神に大いなる怒りをかき立てるということもなおさらない。神が真理といのちに入ることについて語るのは完全にされるべき者のためである。神が受肉したのも彼らのためであり、約束と祝福を受けるのも彼らのためである。神が述べる真理、入ること、そして人間としての生活は、邪惡な者のために行われるのではない。神は邪惡な者に話をするのを避けることを望み、その代わりに完全にされるべき者に全ての真理を授けることを願う。しかし、神の働きにおいては、邪惡な者が一時的に神の富の一部を享受することが必要とされる。真理を実行しない者、神を満足させない者、神の働きを混乱させる者は皆邪惡である。そうした者は完全にされることができず、神に忌み嫌われ、拒まれる。一方、真理を実践する者、神を満足させることができる者、自らの全てを神の働きのために費やす者は、神に完全にされる者である。神が完成させることを望む者は他ならぬその集団であり、神が行う働きはそうした者のためである。神が述べる真理は、進んでその真理を実践する者に向けられている。神は真理を実行しない者には語らない。神が述べる識見の増加と識別力の成長は、真理を実践できる者を対象とする。完全にされるべき者について神が語る時、神はこれらの

人について話している。聖霊の働きは、進んで真理を実践する者に向けられている。知恵や人間性を自分のものにすることなどは、進んで真理を実行に移す人に向けられている。真理を実行しない者は真理の言葉を数多く聞くかもしれないが、彼らの本性は極めて邪悪であり、真理に関心がないので、彼らが理解しているのは教義と言葉と空虚な理論でしかなく、彼らのいのちへの入りにはほんの少しも価値がない。彼らのうちには神に忠実な者はいない。彼らは皆、神を見るが神を得られず、神に断罪される。

聖霊は各人において歩むべき道をもち、各人に完全にされる機会を与える。あなたは自らの消極性をとおして自らの墮落を知らしめられ、その後消極性から脱け出すことにより実践の道を見いだす。それはどれもあなたが完全にされる方法である。さらに、あなたの中にある肯定的なものの幾つかに継続的に導き照らされて、あなたは積極的に自らの役割を果たし、識見を増やして識別力を身に付ける。状態が良好な時、あなたは神の言葉を読むことや神に祈ることを殊更に望み、聞く説教を自らの状態と関連づけることができる。このような時、神は内側からあなたを啓き照らし、あなたに肯定的側面の幾つかについて理解させる。あなたはこのように肯定的側面において完全にされる。消極的な状態において、あなたは弱く消極的である。自分の心には神がいなく感じるが、神はあなたを照らし、あなたが実践の道を見いだすのを助ける。ここから出ることが、消極的側面における完全化の達成である。神は肯定的側面と消極的側面の両面で人間を完全にすることができる。それはあなたが経験することができるか、神に完全にされることを追求するか否かにより異なる。神に完全にされることを真に求めるならば、消極的側面は損失ではなく、現実的なものをもたらす。また、自分に欠如しているものを知ること、自分の真の状態をさらに把握すること、人間は何も持っておらず何でもないことを知ることがさらにできるようになる。試練を経験しないならば、知らないままであり、常に自分が他人よりも上で、優れていると感じる。これらすべてをとおして、あなたはこれまで遭遇したことは全て神が行ったことであり、神により保護されていたことを知る。試練に入ることにより、愛も信仰もなく、祈りが欠如し、讃美歌を歌うことができない状態に陥る。そして気付かぬうちに、この真最中に自分自身を知る。神には人間を完全にする手段が多数ある。神はありとあらゆる環境を用いて人間の墮落した性質を取り扱い、様々な物事を用いて人間を暴き出す。神は、ある点に関しては人間を取り扱い、別の点に関しては人間を暴き、また別の点に関しては人間を明らかにし、人間の心の奥にある「奥義」を掘り出して明示し、人間にその数々の状態を明らかにすることにより本性を示す。神が実践的であることを人間が知ることができるよう、神は暴

露、取り扱い、精錬、刑罰など、様々な手段を通して人間を完全にする。

あなたがたが現在追求しているのは何か。それは神に完全にされること、神を知ること、神を得ることである。あるいは、90年代のペテロの風格を身につけることや、ヨブに勝る信仰を持つことを求めているかもしれない。または、神に義なる者と呼ばれて神の玉座の前に到達することや、神を地上に表して神のために力強く響き渡るような証しをすることを求めているかもしれない。求めるものが何であれ、あなたがたは全体として、神に救われるために求めている。義なる者となることを求めるか、ペテロの風格を求めるか、ヨブの信仰を求めるか、神に完全にされることを求めるかにかかわらず、それはどれも神が人において行う働きである。換言すると、何を求めようと、それは全て神に完全にされるため、神の言葉を経験するため、神の心を満足させるためである。何を求めようと、それは全て神の美しさを見出すためであり、現実の経験において実践する道を求めるためであり、その目的は反抗的性質を払拭し、自身の中で正常な状態を実現し、神の心に完全に一致できるようになることであり、それで正しい人間となり、あらゆる行いにおいて正しい動機をもつようになる。あなたがこうしたことを全て経験する理由は、神を知り、いのちの成長を達成するためである。あなたが経験するのは神の言葉であり、実際の出来事であり、また周囲にある人や物事であるが、最終的にあなたは神を知り、神に完全にされることができる。義なる者の道を歩むことや、神の言葉を実践することを求めるのであれば、それが走路であり、神を知り、神に完全にされることが終着点である。現在、あなたが求めているのが神による完全化であろうと、神のために証しすることであろうと、全体的に見ると、それは全て最終的に神を知るためである。それはあなたの中で神が行う働きが無駄にならないようにするため、あなたが最終的に神の現実性を知り、神の偉大さを知り、そしてさらに、神の謙りと隠秘性を知り、神があなたにおいて行う多くの働きを知るためである。神は、これほどまで自らを低くしたので、汚れて墮落した人において働きを行い、この集団を完全にするのである。神は人間のもとで生活し、食べ、人々を牧し、人々に必要なものを与えるためだけに受肉したのではない。さらに重要なのは、耐えがたいほど墮落した人を救い征服する大規模な働きを行うことである。あらゆる人が変えられ一新されるように、最も墮落した人を救うために赤い大きな竜の核心に神が来たことである。神が耐える大いなる苦難は、受肉した神が受ける苦難だけでなく、それは何よりも神の霊が受ける極度の屈辱である。神は大いに自分を低くし隠れるために凡人となる。神が正常な人間の生活を送り、正常な人間と同じものを必要としていることを人々が理解できるように、神は受肉して肉

の姿となった。神がかなりの程度まで自ら謙ったことは、これで十分証明される。神の霊が肉の姿で現れている。神の霊は極めて高貴かつ偉大であるが、霊の働きを行うため、神は取るに足りない凡人の姿となっている。あなたがた各人の素質、識見、理知、人間性、生活は、あなたがたがこのような神の働きを受ける価値が本当はないことを示している。あなたがたのためにこのような苦難を神に受けさせるだけの価値は、あなたがたにはない。神は極めて偉大である。神は至高の存在であり、人は極めて卑しく下等であるが、それでも神は人に働きを行う。神は受肉して人間に必要なものを与え、人間と話すだけでなく、人間と一緒に生活している。神は極めて謙遜で、愛しむべき存在である。神の愛の話になるとすぐに、また神の恵みの話になるとすぐに涙を流しながら大いなる讃美を口にするならば、この状態に達するならば、あなたは神を真に認識している。

昨今では、人間の追求が逸脱している。神を愛し、神を満足させることだけを追求し、神を認識しておらず、自らの内部における聖霊の啓きと照らしをおろそかにしている。そうした者は神についての真の認識という基礎を備えていない。そのような状態であるので、彼らは経験が進行してゆくにつれて、熱意を失う。神に関する真の認識を求める者は皆、以前は状態が良くはなく、消極的になったり弱くなったりする傾向にあり、頻繁に涙を流したり、意欲喪失に陥ったり、希望を失ったりしていたが、経験を重ねる中で、彼らの状態は改善している。取り扱いを受けて打ち砕かれ、試練と精錬を一通り経た後、彼らは大いに進歩を遂げた。その否定的な状態は減少し、彼らのいのちの性質に多少の変化が生じた。さらなる試練を経るにつれ、彼らの心は神を愛するようになる。神による人間の完全化には法則があり、それは、あなたの望ましい部分を用いて神はあなたを啓くということである。これは、あなたが実践の道を得てあらゆる消極的な状態と訣別できるようにするためであり、あなたの霊が解放され、あなたが神をさらに愛すことができるようにである。こうすることにより、あなたはサタンの墮落した性質を払拭できる。あなたは純朴で素直であり、自分を知って真理を実践することを望んでいる。神は必ずやあなたを祝福するので、あなたが弱く消極的な時、神はあなたを二倍啓き、あなたがさらに自分を知り、自分のために悔い改めることをさらに望むようになり、実践すべきことを実践できるようになるように助ける。あなたの心が落ち着き安らかになるには、この方法によるほかない。神を知ること、自らを知ること、自らの実践に普段より注意する人は、神の働き、また神による導きや啓きを頻繁に授かることができる。そのような人は消極的な状態にあっても、良心の働きか、あるいは神の言葉による

啓きにより、すぐに状況を好転させることができる。人の性質の変化は、人が自らの実際の状態と神の性質と働きを知ると必ず実現する。自らを知ること、そして自ら心を開くことを望む人は真理を實踐できる。そうした人は神に忠実であり、神に忠実な人は、その理解が深かったり浅かったり、少なかったり豊富であったりするが、神を理解している。これが神の義であり、人間が得るものである。これは人間自らにとっての収穫である。神に関する認識のある人は、基盤とビジョンがある。こうした人は神の肉、言葉、働きに関して確信している。神が働きを行う方法や話す方法、そして他人がどのように混乱を引き起こすかに関わらず、その人は自分の立場を強く守り、神の証しに立つことができる。人がこのようであればあるほど、理解した真理をさらに実行できる。常に神の言葉を実践しているので、神をさらに認識し、永遠に神の証しに立つ決意がある。

識別力を身に付け、服従し、物事を見抜く力を身に付けて靈的に鋭敏であるということとは、何かに直面するとすぐに、神の言葉が内側から照らし啓くということである。これが靈的に鋭敏であるということである。神が行うことは全て人間の霊を復活させるためである。なぜ神は人間は麻痺しており愚鈍であると常に言うのか。それは人間の霊が死んでおり、人間は靈的な物事を全く意識できない状態にまで麻痺してしまっているからである。神の働きは、人間が靈的な物事を見抜き、心の中で常に神を愛して神を満足させることができるように、人々のいのちを成長させ、人々の霊が蘇生するのを助けるためである。この段階への到達は、人の霊が復活していることを示すものであり、その人が次に何かに遭遇しても即座に対応できる。このような人は説教に敏感に反応し、状況に迅速に対応する。これが靈的に鋭敏になるということである。外面的な出来事に対して迅速に反応する者が多数いるが、現実性に入ることや靈的な物事の詳細に関する話になると、彼らは直ちに愚鈍になる。物事が目前に迫り明白でなければ理解しない。これはすべて靈的に麻痺して愚鈍であることや、靈的な物事の経験がほとんどないことのしるしである。靈的に鋭敏で識別力を身に付けている者もいる。彼らは自分の状態を指摘する言葉を聞くと即座に書き留める。実践の原則に関する言葉を聞くと、彼らはそれを受け入れ、その後の経験に適用することができ、その結果自分を変える。それが靈的に鋭敏な者である。なぜ彼らは即座に反応できるのか。それは、日常生活においてそうした物事に集中しているからである。彼らは神の言葉を読むと、それに照らして自分の状態を確かめ、自己反省することができる。交わりや説教を聞いたり、自分に啓きと照らしをもたらす言葉を聞いたりすると、それを即座に受け取ることができる。それは空腹の者に食べ物を与えるのと同様で、すぐに食べることができるのである。空腹でない

者に食べ物を与えても、それほど迅速には反応しない。神に頻繁に祈ると、何かに直面した際に、神がそれにより何を求めているか、自分がどう行動すべきかについて即座に反応できる。神はそのことに関して前回あなたを導いたのであり、今日になって類似のことに遭遇した際、神の心を満足させるにはどう実践すればよいかをあなたは自然と知っている。常にそのように実践し、常にそのように経験するならば、ある時点でこれは簡単にできるようになる。神の言葉を読んでいる時に、神がどのような者のことを指しているか、どのような霊の状態について語っているかをあなたは知っており、要点を把握して実践することができる。これは、あなたに経験する能力があることを示している。なぜこの側面に欠けている者がいるのか。それは、実践の側面にあまり努力しないからである。彼らは真理を実践することをいとわないものの、奉仕の詳細や生活における真理の詳細についての真の識見を備えていない。何かが発生すると混乱する。そのため、にせ預言者やにせの使徒が現れると、道を見失う可能性がある。神の言葉と働きについて頻繁に交わらなければならない。そうすることでのみ、真理を理解して識別力を育むことができるのである。真理を理解していなければ、識別力は得られない。例えば、神が述べること、神がどのように働くのか、神が人間に要求することは何か、どのような人に接触すべきか、どのような人を避けるべきかといったことについて、頻繁に交わる必要がある。常にそのようにして神の言葉を経験するならば、真理を理解し、数多くの物事を完全に理解するとともに、識別力も身に付く。聖霊の懲らしめとは何か、人間の意志から生じる非難とは何か、聖霊による導きとは何か、環境の用意とは何か、内面的啓きをもたらす神の言葉とは何か。このような事柄を明瞭に理解していないならば、識別力を得られない。聖霊から来るものは何か、反抗的な性質とは何か、神の言葉にいかに従うべきか、自分の反逆性をいかに払拭するべきかを知るべきである。これらのことを経験から理解すれば、基礎が得られる。何かが起こっても、それを測る適切な真理とふさわしいビジョンを基礎としてもつ。何をするにも原則をもち、真理に従って行動できるようになる。そうなれば、あなたの生活は神の啓きと祝福で満たされる。神を真摯に求める者や神を生き、神を証しする者を神は決して不適切に扱わず、また真理を真摯に渴望することのできる者を決して呪わない。神の言葉を飲み食いしている際に、自らの真の状態を知ることや自らの実践、自らの認識に注意を払うことができるならば、問題に直面した時、啓きを授かり、実践的認識を得る。その後、あらゆることにおいて実践の道を得て、万事に関して識別力を得る。真理を身に付けた者は、惑わされたり、妨害行為をしたり、途方もない行動をとったりすることがほとんどない。真理のおかげでそうした者は守られ、またさらなる認識を得る。真理のおかげで実践へのさらなる道

を得て、聖霊が自分の中で働く機会と、完全にされる機会をさらに多く得る。

聖霊の働きとサタンの働き

人は霊に関する細かなことをどう理解するようになるのか。聖霊はどのように人間の中で働くのか。サタンはどのように人間の中で働くのか。悪霊はどのように人間の中で働くのか。その表われはどういったものか。何かがあなたに起こるとき、それは聖霊に由来するものなのか。あなたはそれに従うべきか、あるいは拒否すべきか。人々の実際の行ないにおいては、多くのことが人間の意志から生じるが、人々は決まってそれが聖霊に由来すると信じている。悪霊に由来する物事があっても、人々はやはりそれが聖霊から来たものだと考える。時に聖霊は人々を内側から導くが、人々はそういった導きがサタンに由来するものだと恐れ、実はその導きが聖霊の啓きであるにもかかわらず、あえて従おうとしない。よって、識別をしない限り、実際の経験においてそれを経験することはできない。そして識別しなければ、いのちを得ることはできない。聖霊はどのようにして働きを行なうのか。悪霊はどのようにして働きを行なうのか。人の意志に由来するものは何か。聖霊の導きと啓きから生まれるものは何か。聖霊が人の中で行なう働きのパターンを把握すれば、あなたは日々の生活の中で、そして実際の経験のさなかに知識を育み、識別することができるようになる。あなたは神を知るようになり、サタンを理解して識別できるようになり、服従したり追求したりする際に混乱せず、思考がはっきりとした、聖霊の働きに従う者となるだろう。

聖霊の働きは積極的な導きと肯定的な啓きの一種である。それは人々が受け身でいることを許さず、彼らに慰めをもたらし、信仰と決意を与え、彼らが神によって完全にされることを追求できるようにする。聖霊が働きを行なえば、人々は積極的に入ることができる。受け身でもなく、強制されることもなく、自分が主導権を握って行動するのである。聖霊が働きを行なうとき、人々は進んで従い、喜んで謙虚になる。内なる痛みや脆さがあっても、協力しようと決意し、喜んで苦しみ、従うことができる。そして人間の意志や人の考えによって汚されておらず、人間的な欲望や動機に汚されていないのは間違いない。人々が聖霊の働きを経験するとき、彼らの内面は特に聖い。聖霊の働きを有する人たちは神への愛、兄弟姉妹への愛を生きており、神を喜ばせることを喜びとし、神の嫌うことを嫌う。聖霊の働きに触れた人は正常な人間性を持ち、常に真理を追い求め、人間性を自分のものになっている。聖霊が人々の中で働くとき、彼らの状態はますますよくなり、その人間性はより正常になる。そしてこうした人たちによる協力の中に

は愚かなものもあるかもしれないが、彼らの動機は正しいものであり、彼らの入りは肯定的で、邪魔しようとは試みたりせず、彼らの中に悪意は一切存在しない。聖霊の働きは正常かつ現実的であり、聖霊は人の通常生活の規則にしたがってその人の中で働きを行ない、正常な人々の実際の追求に応じて彼らを啓き、そして導く。聖霊は人の中で働きを行なうとき、正常な人々の必要に応じて彼らを導き、そして啓く。聖霊は人々の必要に応じて彼らに糧を施し、彼らに欠けているものに応じて、また彼らの欠点に応じて肯定的に導いて啓く。聖霊の働きは人々を現実の生活において啓き、導くことである。実生活の中で神の言葉を経験して初めて、人は聖霊の働きを見ることができる。日常生活において前向きな状態であり、正常な霊的生活を送っていれば、その人には聖霊の働きがある。そうした状態の中では、神の言葉を飲み食いすると信仰を得、祈ると鼓舞され、何かに突き当たっても受け身にならず、何かが起きるとその中から、神が彼らに学ぶよう求めている教訓を理解できる。彼らは受け身でもなければ弱ってもおらず、たとえ現実の困難を抱えていても、神のすべての采配に自ら従おうとする。

聖霊の働きによって成し遂げられる効果とは何か。あなたは愚かかもしれないし、識別力がないかもしれないが、聖霊が働きを行なえば、あなたの中に信仰が生まれ、どれほど神を愛しても愛しきれないといつも感じるようになる。前途にどれほど大きな困難があろうと、あなたは進んで協力するようになる。自分に何かが起こり、それが神に由来することなのか、それともサタンに由来することなのかははっきりわからないことがあっても、あなたは待つことができ、受け身にも怠惰にもならない。これが聖霊の正常な働きである。聖霊があなたの中で働きを行なう際、あなたはそれでも現実の困難にぶつかり、時には涙し、時には乗り越えられない問題が生じることもあるが、これらはすべて聖霊による普通の働きの一段階に過ぎない。たとえあなたがそうした困難を乗り越えられなくても、またその際に弱くなって不満で一杯だったとしても、後になれば絶対的な信仰をもって神を愛することができた。あなたが受け身だとしても、そのせいで正常に経験できないということはありません、他の人が何と言おうと、あるいはどう攻撃しようとも、あなたは神を愛することができる。祈りの中では常に、自分はかつて神に借りがあったと感じ、そうしたことに再び出会うたび、神を満足させて肉を捨てようと決意する。この力は、聖霊の働きがあなたの中にあることを示している。それが聖霊の働きの正常な状態なのである。

サタンに由来する働きとは何か。サタンに由来する働きの中で、人々の内なるビジョンは漠然としており、彼らは正常な人間性をもたず、彼らの行動の背後にある動機は間

違っている。そして神を愛したいと願いはしても、心の中で絶えず咎められ、そうした咎めや思いが自分の中で常に干渉し、いのちの成長を制約するとともに、正常な状態で神の前に出られないようにする。つまり、人々の中にサタンの働きが存在するやいなや、その人の心は神の前で安らげないのである。そのような人は自分でもどうしたら良いかわからず、人々が集まっているのを見ると逃げたくなり、他の人が祈るときに目を閉じることができない。悪霊の働きは人と神との正常な関係を壊し、人々がそれまでもっていたビジョンや、以前のいのちの入りへの道を混乱させる。心の中で神に近くことが決してできず、妨害を引き起こし、足かせとなるようなことがいつも起こる。心は安らぎを見つけられず、神を愛する力が残らずなくなり、霊が沈んでいく。これらがサタンの働きの表われである。サタンの働きの表われは次のようなことである。堅く立って証しをすることができず、それがあなたを神の前で落ち度がある者、神への忠実さをまったくもたない者とさせる。サタンが干渉するとき、あなたは自分の中にある神への愛と忠実さを失い、神との正常な関係を奪われ、真理や自分を改善することを追い求めず、後戻りして受け身になり、自分を甘やかし、罪が広がるままにし、罪を憎まなくなる。さらに、サタンからの干渉はあなたをふしだらにし、神があなたの中で触れたものは消えてしまう。そしてあなたは、神への不満を漏らして神に反抗し、神を疑うようになる。さらに、あなたが神を捨てる危険すらある。そのすべてがサタンに由来するのである。

日常生活で自分に何かが起きる際、それが聖霊の働きに由来するものなのか、サタンの働きに由来するものなのか、どのように識別すべきだろうか。状態が正常であれば、その人の霊的生活と肉における生活は正常であり、理知も正常で秩序がある。このような状態にあるとき、彼らが経験し、自分の中で知ようになる物事は、一般的には、聖霊に触れられたことに由来するものだと言える（神の言葉を飲み食いする際に洞察力があったり、多少の単純な認識を有していたりすること、あるいは何らかの物事において忠実であること、そして神を愛する力があることは、いずれも聖霊に由来するものである）。聖霊が人の中で行なう働きは特に正常である。人はそれを感じられないし、実際には聖霊の働きであるにもかかわらず、人自身から生じたもののように思われる。日常生活において、聖霊はすべての人の中で大小いずれの働きも行なうが、異なっているのはその働きの程度だけである。中には優れた素質をもつ人がおり、そのような人は物事を素早く理解し、聖霊による啓きは彼らの中で特に大きい。その一方で素質に乏しい人もおり、物事を理解するのにより時間がかかるものの、聖霊は彼らの内側にも触れ、彼

らもまた神への忠実を遂げることができる。聖霊は神を追い求めるすべての人の中で働きを行なうのである。日常生活において人々が神に反対したり、反抗したりすることがなく、神の経営に反することを行なわず、神の働きに干渉しなければ、神の霊が一人ひとりの中で大なり小なり働きを行なう。神の霊は彼らに触れ、彼らを啓き、信仰と力を与え、彼らを感じさせて積極的に入るようにし、怠惰になったり肉の楽しみをむさぼったりしないようにする。そして彼らが進んで真理を実践し、神の言葉を切望するようにさせる。そのすべてが聖霊に由来する働きである。

状態が正常でないとき、その人は聖霊に見捨てられ、心の中に不満を抱きがちで、動機は間違っており、怠惰で、肉の欲にふけり、心は真理に敵対する。そのすべてがサタンに由来している。状態が正常でなく、内面が闇で覆われ、正常な理知を失い、聖霊に見捨てられ、自分の中に神を感じられないとき、それはその人の中でサタンが働きを行なっているときである。一般的に言えば、内面に絶えず力があり、常に神を愛するなら、何かが起きたとき、その出来事は聖霊に由来しており、またその人が誰に会おうと、その出会いは神の采配の結果である。つまり、あなたが正常な状態にあるとき、また聖霊の偉大な働きの中にいるとき、サタンがあなたを揺るがすことは不可能なのである。それを基に、すべてのものは聖霊に由来しており、たとえ誤った考えをもっていても、あなたはそれを捨てることができ、それに従うことはないと言える。これはすべて聖霊の働きに由来している。どのような状況においてサタンは干渉するのか。あなたの状態が正常でなく、神に触れられておらず、自分に神の働きがなく、内面が乾いて荒れ果て、神に祈っても何も掴めず、神の言葉を飲み食いしても啓きや照らしを得られないとき、サタンがあなたの中で働きを行なうのは簡単である。言い換えれば、あなたが聖霊に見捨てられて神を感じられないとき、サタンの試みに由来する物事が数多く起きるのである。聖霊が働きを行なう間、サタンもずっと働いている。聖霊が人の内側に触れると同時に、サタンは人に干渉する。しかし、聖霊の働きが主導権を握り、正常な状態の人々は勝利することができる。これはサタンの働きに対する聖霊の働きの勝利である。聖霊が働きを行なう間、人々の中には依然として墮落した性質が存在する。しかし聖霊による働きのさなか、人々が自分の反抗心、動機、不純を見つけて認識するのは簡単である。そのとき初めて、人々は後悔を感じてますます悔い改めようと思う。このようにして、彼らの反抗的で墮落した性質は、神の働きの中で徐々に一掃される。聖霊の働きは特に普通のものであり、聖霊が人々の中で働きを行なっているときも、彼らは依然として問題を抱え、涙を流し、苦しみ、弱り、はっきり理解できないことが数多くあるのだ

が、それでもこの状態にあるとき、彼らは自分が後退するのを押しとどめ、神を愛することができる。そして涙を流したり、苦悩に苛まれたりしてもなお、神を賛美することができる。聖霊の働きは特に普通であり、超自然的なことは一切ない。大半の人は、聖霊が働きを始めるやいなや、人の状態に変化が生じ、その人の本質的なものが取り除かれると信じている。そうした考え方は誤りである。聖霊が人の中で働きを行なうとき、人に関する受動的な物事が依然として存在し、その人の霊的背丈は変わっていないのだが、聖霊の照らしと啓きを得るので、その人はより前向きになり、内なる状態は正常で、その人は急速に変化する。人は現実の経験の中で、おもに聖霊かサタンいずれかの働きを経験する。そしてこの二つの状態を把握できず、その違いを識別できないなら、現実の経験へと入ることなど問題外であり、性質の変化が不可能なのは言うまでもない。よって、神の働きを経験する上で鍵となるのは、そうした物事を見抜けるようになることであり、そのようにして、それを実際に経験することが容易になる。

聖霊の働きは積極的な進歩だが、一方でサタンの働きは後退、消極、反逆、神への反抗、神に対する信仰の喪失、そして賛美歌を歌うことさえ望まず、本分を尽くせなくなるほど弱ることである。聖霊の啓きから生じるものはどれも極めて自然であり、あなたに強制されるものではない。それに従えば安息を得るし、従わなければ後に非難される。聖霊の啓きがあれば、あなたが行なう一切のことは干渉や拘束を受けず、あなたは自由にされ、行動における実践の道があり、何の制約も受けることなく、神の旨にそって行動できるようになる。サタンの働きは多くの事柄においてあなたに干渉し、あなたが祈りたくないようにさせ、神の言葉を飲み食いできないほど怠惰にさせるとともに、教会生活を送る気をなくさせ、あなたを霊的生活から引き離す。聖霊の働きはあなたの日常生活に干渉せず、正常な霊的生活にも干渉しない。多くの事柄について、あなたはそれが生じたまさにその瞬間には識別することができないものの、数日後には心がより明るく、頭脳がより鮮明になる。霊的な物事に関する感覚を多少もつようになり、ある考えが神に由来するものか、あるいはサタンに由来するものかを徐々に識別する。物事の中には、あなたを明らかに神に反抗させ、背かせ、神の言葉を実践させないようにするものもあるが、そうしたことはどれもサタンに由来する。明白でなく、その瞬間にはそれが何であるかわからない物事もあるが、後になれば、それらの表われを見て識別力を働かせることができる。どれがサタンに由来するもので、どれが聖霊によって導かれているものかをはっきり識別できるようになったなら、あなたは自分の経験の中で簡単に惑わされないようになる。自分の状態が良くないときに、自分を受け身の状態から引き

出すような思いをもつことがある。そのことは、あなたの状態が好ましくないときでさえ、あなたの思いの一部はやはり聖霊に由来することを示している。あなたが受け身になっているとき、すべての思いはサタンから来ているというのは当てはまらない。もしもそれが真実なら、いつあなたは積極的な状態に移れるのか。一定期間ずっと消極的であると、聖霊は完全にされる機会をあなたに与え、あなたに触れ、消極的な状態からあなたを連れ出すのである。

聖霊の働きとは何か、サタンの働きとは何かを知ること、あなたはこれらを、何かを経験している際の自分自身の状態と、また自分の経験と比べることができる。そのようにして、あなたの経験の中で、原則に関する真理がより多く生じる。原則に関するこれらの真理を理解したなら、あなたは自分の実際の状態を支配し、人々や出来事を識別することができ、聖霊の働きを獲得するためにそれほど大きな努力をしなくてもよくなる。もちろんそれは、あなたの動機が正しいかどうか、あなたに求めて実践する気があるかどうか次第である。このような言葉、すなわち原則に関わる言葉が、あなたの経験の中になければならない。それがなければ、あなたの経験はサタンの干渉と愚かな認識で満ちている。聖霊がどのように働きを行なうのか理解していなければ、どのように入るべきかも理解できないし、サタンがどのように働きを行なうのか理解していなければ、自分の一步一步にどう注意すれば良いのかも理解できない。聖霊はどのように働きを行なうのか、サタンはどのように働きを行なうのかについて、人々はその両方を理解すべきである。いずれも人々の経験において不可欠な部分なのだから。

真理を実践しない人への警告

兄弟姉妹のうち消極性をいつも発散している人は、サタンの僕であり、教会を乱す。そのような人は、いつか追放され、淘汰されなければならない。神への信仰において、人間に神を敬い畏れる心と神に従順な心がなければ、神のために働くことができないだけでなく、反対に神の働きを阻害し、神に反抗する者となる。神を信じながら、神に従うことも神を敬い畏れることもせず、代わりに神に反抗することは、信者にとって最大の恥辱である。信者の言動が常に未信者と同じく粗略で節操がなければ、そのような信者は未信者にも増して邪悪であり、典型的な悪魔である。教会内で毒々しい邪悪な言葉を放ち、兄弟姉妹の間で噂を広め、不和を助長し、派閥を組む者たちは、教会から追放されるべきであった。しかし、現在は神の働きの別の時代であるため、そのような人は制限を受ける。なぜなら、彼らは確実に淘汰されるからである。サタンにより墮落させ

られた者はみな性質が墮落している。性質が墮落しているだけの人がいる一方で、そうではない人もいる。そのような人は墮落した性質をもっているだけでなく、本性もまた悪意を極めているのである。彼らの言動が墮落したサタンの性質を示すのみならず、彼ら自身が真の悪魔サタンである。彼らのふるまいは神の働きを妨害し、混乱させ、兄弟姉妹のいのちへの入りを阻害し、正常な教会生活を破壊する。彼らのような羊の皮を被った狼は、遅かれ早かれ一掃されなければならない。こうしたサタンの僕に対しては、手厳しい態度、拒絶の態度で臨む必要がある。そのようにすることだけが神に味方することであり、そのようにできない人は、サタンとともに泥の中で転げ回っているのである。神を真に信じる人の心には常に神がいて、内には神を敬い畏れる心、神を愛する心が常にある。神を信じる人は注意深く慎重に物事を行い、すべての行動が神の要求に従い、神の心を満たせるものでなくてはならない。強情であってはならず、自分が望むままに行動してはならない。そのようなことは聖徒としての作法に不適である。人間は神の旗印を誇示してあちらこちらを暴れ回ったり、いたるところで虚勢を張ったり、詐欺を働いたりしてはならない。これは最も反逆的な行為である。家族には決まりがあり、国家には法律があるのだから、神の家ではなおさらのことではないか。その基準はさらに厳格ではないのか。さらなる行政命令があるのではないか。人間には好きなことを行う自由があるものの、神の行政命令を思いのままに変えることはできない。神は人間による背きを許さず、人間を死に至らしめる神である。人はこのことをまだ知らないのか。

どの教会にも、教会に迷惑をかけ、神の働きの邪魔をする人がいる。こうした人はみな変装して神の家に潜入したサタンである。彼らは演技に優れている。目的を果たすために、畏敬の念をもってわたしの前に来て、うやうやしく頭を下げ、みすばらしい犬のように振る舞い、自分の「すべて」を捧げる。しかし、兄弟姉妹の前では醜惡な素性を露わにする。真理を実践している人を見ると攻撃して排除し、自分たちよりも手ごわい人にはお世辞を言って機嫌を取り、教会では大胆に振る舞う。この種の「土地の顔役」や「愛玩犬」は、殆どどの教会にいても言える。彼らは一緒にこそこそと歩き回り、目配せや秘密の合図を送り合う。彼らの中に真理を実践する者はいない。毒を一番多く持つ者が「悪魔の頭」であり、最も威信のある者が他を従え、一味の旗を高く掲げる。彼らは教会内を荒らし回り、消極性を広め、死をもたらし、好き放題行ない、好き勝手にものを言う。誰にも彼らを止める勇氣はない。彼らはサタンの性質に満ちあふれている。彼らが妨害し始めるとすぐに、教会に死の空気が入る。教会内で真理を実践する人は見

捨てられ、すべてを捧げられなくなるが、教会を妨害し死を広める者は教会内で放縱に行動する。さらに、殆どの人が彼らに従う。こうした教会は明らかにサタンの支配下であり、そこでは悪魔が王である。教会の会衆が立ち上がって悪魔の頭を追放しなければ、会衆もまた遅かれ早かれ破滅する。今後は、こうした教会への対策を実施する必要がある。多少の真理を実践できる者がそうしようとしていないならば、その教会は追放される。ある教会に真理を実践することをいとわない人や神に証しを立てられる人がいないなら、その教会は完全に切り離されるべきで、他の教会との関係は断絶されなければならない。これは死を葬ると呼ばれ、これがサタンを追いつくということである。ある教会に土地の顔役が数名いて、彼らが識見にまったく欠けた「小ばえ」に従っており、その教会の会衆が真理を理解してなお、それら顔役の呪縛と操作を拒否できないならば、そうした愚か者はみな最終的に淘汰される。小ばえは何ら劣悪な事をしていないかもしれないが、ことさら狡猾で賢く捉え難いので、みな淘汰されるのである。ひとり残らず消し去られる。サタンに属す者はサタンへと戻されるが、神に属す人は確実に真理を探し求める。これは人の本性によって決められることである。サタンに従う人はみな滅べ。彼らに憐れみがかけられることはない。真理を探し求める人には施しを得させ、心ゆくまで神の言葉を堪能させよ。神は義であり、誰もひいきすることなどない。あなたが悪魔であれば、真理を実践できない。真理を探し求める人であれば、サタンの虜にならないことは確実である。それについて疑いの余地はない。

進歩のために努力しない人は、他の人も自分同様に消極的で怠惰であることを常に望む。真理を実践しない人は、真理を実践する人に嫉妬しており、頭が混乱している人や分別がない人をいつも惑わそうとする。彼らが放つものはあなたを墮落させ、引きずり落とし、異常な状態を引き起こし、闇で満たすことができる。彼らはあなたを神から遠ざけ、あなたに肉を愛させ、自らの欲望を満たさせる。真理を愛さず、常にうわべだけで神に接する人は己を知らず、彼らの性質に他の人は誘惑されて、罪を犯し神に反抗する。彼らは真理を実践せず、また他人にも真理を実践させない。彼らは罪を愛し、自分自身を忌み嫌うことはない。己を知らず、また他人が己を知ることや真理を求めることを阻む。彼らが惑わす人は光が見えない。闇に落ちて己を知らず、真理を明瞭に理解しておらず、神から遠ざかってゆく。彼らは真理を実践せず、また他人が真理を実践することを阻み、愚かな人を自らの前に来させる。神を信じるというよりも、彼らは自らの祖先を信じているか、信じているのは自らの心の中の偶像であると言った方が良い。神に付き従っていると言う彼らにとっては、目を開き、自分が誰を信じているのかをじっ

くり見るのが最善であろう。あなたが信じているのは本当に神なのか、それともサタンなのか。自分が信じているのが神ではなく、自分の偶像であることを知っているならば、自分は信者であると言わない方が良く、自分が誰を信じているのか本当に知らないならば、やはり自分は信者であると言わないのが最善であろう。信者であると言うのは冒涇である。誰もあなたに神を信じることを無理強いしていない。わたしを信じていると言うな。そのような言葉は聞き飽きており、二度と聞きたくない。なぜなら、あなたが信じているのは心の中の偶像であり、あなたがたのそばにいる土地の顔役だからである。真理を聞いたら首を横に振り、死の言葉を聞いたら笑みを浮かべる者はみなサタンの子孫であり、みな排除される。教会には識見のない者が多数いる。何か惑わすようなことがあると、彼らは不意にサタンに味方をする。彼らは自分がサタンの僕と呼ばれ、憤慨すらする。彼らには識見がないと言う人もいるが、彼らは真理のない側にいつも味方し、重要な時期に真理の側に立ったことや、真理のために立ち上がって議論をしたことは一度もない。彼らには本当に識見がないのか。なぜ彼らは不意にサタンの味方をするのか。なぜ彼らは真理のために公平で合理的な言葉を一言たりとも述べないのか。この状況は本当に彼らの一時的な混乱から生じたのか。人の識見が少なければ少ないほど、真理の側に立つ能力も低くなる。このことは何を示しているのか。それは識見のない人は邪悪を愛することを示しているのではないのか。彼らはサタンの忠実な子孫であることを示しているのではないのか。なぜ彼らは常にサタンの味方をするのができ、サタンの言語を話すことができるのか。彼らのあらゆる言動と表情はすべて、彼らが決して真理を愛する者ではなく、むしろ真理を忌み嫌う者であることを十分に証明している。彼らがサタンに味方できることは、サタンのために戦って生涯をすごすこれらの小悪魔をサタンが真に愛していることを十分に示している。こうした事実はすべて十分に明白ではないであろうか。あなたが本当に真理を愛する人ならば、なぜ真理を実践する人を軽視し、真理を実践しない人に少し見られただけで、なぜ彼らにすぐさまついて行くのか。これはどのような問題なのか。わたしは、あなたに識見があるかどうかは気にしない。あなたがどれほど甚大な代償を払ったかも気にしない。あなたの勢力がどれほど強いのか、あなたが土地の顔役なのか、あるいは旗を掲げる主導者なのかも気にしない。あなたの勢力が強いのであれば、それはサタンの支援があつてのことであり、あなたの威信が高ければ、それは単にあなたの周囲に真理を実践しない人が多すぎるということである。あなたがまだ追放されていないのであれば、それは今が追放の働きの時ではなく、むしろ排除の働きの時だからである。今あなたを急いで追放する必要はない。あなたが排除された後にあなたを懲罰する日を、わたしはただ待っているのである。

真理を実践しない人は誰であれ排除されるのである。

神を真に信じる人は、進んで神の言葉を実践し、進んで真理を実践する人である。本当に神への証しを立てられる人はまた、進んで神の言葉を実践し、本当に真理の味方となれる人でもある。はかりごとや不正を行う人はみな真理を欠いており、神に恥辱をもたらす。教会内で紛争を起こす人はサタンの僕であり、サタンの化身である。このような人はあまりにも悪意に満ちている。識見がなく、真理に味方できない人はみな邪惡な意図を抱き、真理を汚す。さらに、彼らは典型的なサタンの代表者である。彼らに贖いは及ばず、当然ながら淘汰される。神の家は、真理を実践しない人や、意図的に教会を崩壊させる人が残ることを許さない。しかし、今は追放の働きを行う時ではない。こうした人たちは最終的には暴かれ、淘汰されるのみである。彼らにこれ以上無意味な働きが行われることはない。サタンに属する者は真理に味方できないが、真理を探し求める人にはそれができる。真理を実践しない人は、真理の道を聞く価値も、真理の証しに立つ価値もない。真理は彼らが聞くものでは決してなく、むしろ真理を実践する者に向けられている。各人の結末が明かされるのに先立ち、教会を混乱させ、神の働きを妨害する者がまず脇によけられ、後に取り扱われる。ひとたび働きが完了すると、彼らはそれぞれ暴かれてから淘汰される。真理が施されている間、彼らはしばらく無視される。人間にすべての真理が明かされる時、彼らは必ずや淘汰される。それはあらゆる人が種類により分別される時である。識見のない者は自身の卑劣なたくらみのせいで、邪惡な者の手により滅ぼされ、惑わされて二度と戻ることがない。彼らにそのような扱いが相応しいのは、彼らが真理を愛さず、真理の味方になることができず、邪惡な者に付き従い、邪惡な者の味方となり、結託して神に反抗するからである。彼らは、邪惡な者が放つのは邪惡さであると完全に熟知しているが、心を頑なにして真理に背を向け、邪惡な者に付き従う。真理を実践せずに破壊的で忌まわしいことをするこのような人はみな邪惡な行為を行っているのではないか。彼らの中には自らを「王」のように装う者と、それに追随する者がいるが、両者の神に反逆する性質は同じではないのか。神は自分たちを救わないという彼らの主張をどのように弁明できるというのか。神は義でないという彼らの主張をどのように弁明できるというのか。彼らを滅ぼすのは彼ら自身の邪惡さではないのか。彼らを地獄へ引きずり落とすのは、彼ら自身の反逆ではないのか。真理を実践する人は、最後に真理のために救われ完全にされる。真理を実践しない人は、最後に真理のために滅びを自分自身にもたらす。これらが、真理を実践する人としらない人を待ち受ける最後である。真理を実践するつもりがない人は、それ以上罪を重ねないようにで

できるだけ早く教会を去るよう勧告する。時が来れば、後悔しても手遅れである。特に徒党を組む者や分裂を招く者、教会内にいる地元の顔役は、直ちに教会を去らなければならない。邪悪な狼のような本性をもつこれらの者は変わることができない。兄弟姉妹の正常な生活を二度と妨害せず、そうすることで神の懲罰を避けるため、できるだけ早く教会を去った方がよい。こうした者と親しくしてきた人は、この機会を活用して自省するのがよいであろう。あなたがたは、邪悪な者とともに教会から去るであろうか。それとも教会に残り、従順に従うであろうか。このことを十分検討する必要がある。あなたがたにもう一度選択の機会を与えよう。あなたがたの答えを待っている。

あなたは神への忠誠を保たなければならない

現在、聖霊は教会の中でどのように働きを行なっているのか。あなたはこの問いをしっかりと把握しているだろうか。兄弟姉妹が抱える最大の困難は何か。何が最も欠けているのか。現在、試練を経る中で消極的な人がおり、中には不満を口にする人さえいる。他にも、神は語り終わったといって、前進するのを止めた人もいる。人々はいまだ神への信仰の正しい軌道に入っていない。人は独立して生きられず、自身の霊的生活を維持できない。中には神が語ると付き従って精力的に追求し、進んで実践しようとする人もいる。しかし神が語らなければ、前進するのを止めてしまう。人々はいまだ心の中で神の旨を理解しておらず、神に対する自発的な愛をもっていない。過去、彼らが神に従っていたのは、強制されたためである。そして今、神の働きに辟易している人もいる。このような人は危機に瀕しているのではないか。多くの人は、単に協力する状態にある。彼らは神の言葉を飲み食いし、神に祈るものの、心がこもっておらず、かつての意欲はもはやない。大半の人は神による精錬と完全化の働きに関心がなく、実際のところ、内なる意欲が常にないかのようである。そのような人は過ちに負けても神への恩義を感じず、自責の念を抱くこともない。真理を追求することも、教会から立ち去ることもなく、それどころか束の間の快樂しか追い求めない。このような人は間抜けであり、まったく愚かである。そのときになれば、彼らは全員見捨てられ、誰一人救われない。一度救われればいつも救われると、あなたは考えているのか。そのような考えはまったくの欺瞞である。いのちへの入りを求めない者はみな罰せられる。大半の人は、いのちへの入り、ビジョン、真理の実践にまったく関心がない。そのような人は入ることを追い求めず、さらに深く入ることなど絶対に追い求めない。彼らは自分を滅ぼそうとしているのではないか。現在、状態が絶えず改善している一部の人がいる。聖霊が働きを行なえば行なうほど、彼らは確信を得る。また経験すればするほど、神の働きのより深遠な奥義

を感じるようになり、深く入れば入るほど、より多くのことを理解する。神の愛は実に偉大だと感じ、自分の中で安定と照らしを感じる。彼らには神の働きに関する認識がある。聖霊はこのような人たちの中で働きを行なっているのである。中にはこのように言う人がいる。「神は新たな言葉を発していないが、それでもわたしは真理をより深く掘り下げることが求め、実際の経験の中で何事にも真剣になり、神の言葉の現実に入らなければならない」。このような人には聖霊の働きがある。神は自身の顔を見せず、あらゆる人から隠れ、言葉を発することなく、人々が内なる精錬を経験することもあるが、神はそれでも人々のもとから完全に去ったわけではない。自分が実践すべき真理を保てないなら、その人に聖霊の働きはない。精錬の間、および神が姿を見せない間、あなたに確信がなく、その代わりに立ちすくみ、神の言葉を経験することに集中していなければ、あなたは神の働きから逃げている。その後、あなたは見捨てられる者の一人になる。神の言葉に入ることを求めない者は、神への証しに立つことなど到底できない。神への証しを行ない、神の旨を満たせる人はみな、神の言葉を追い求める自分の意欲にひたすら頼っている。神が人々の中で行なう働きはおもに、彼らが真理を得られるようにすることである。あなたに真理を追求させるのは、あなたを完全にするためであり、それはひとえに神によって用いられるのにふさわしくするためである。あなたが今追い求めているのは奥義を聞くこと、神の言葉に耳を傾けること、自分の目を楽しませること、そして何か目新しいことや動向があるかと周囲を見回し、そうして自分の好奇心を満足させることだけである。それがあなたの心にある意図であれば、あなたに神の要求を満たす術はない。真理を追い求めない者は最後まで付き従うことができない。現在、神が何もしていないというのではなく、むしろ人々が神の働きに飽きてしまい、そのため神に協力していないのである。そのような人は、神が祝福を授けるために語る言葉を聞くことしか望まず、神の裁きと刑罰の言葉を聞こうとはしない。その理由は何か。祝福を得たいという人々の願望が満たされておらず、それゆえ消極的になって弱っている、というのが理由である。人々が神に付き従うのを神がわざと許さないというのではなく、神が人類に対して意図的に打撃をもたらしているというのでもない。人々が消極的になって弱っているのは、ひとえに彼らの意図が正しくないからである。神は人にいのちを与える神であり、人を死に追いやることはできない。人々の消極性、弱さ、そして後退はどれも、彼ら自身の行ないによって引き起こされるのである。

神による現在の働きは人々に精錬をもたらし、その精錬を受けつつ揺るぎなく立てる者だけが神に認められる。語らないことによって、あるいは働きを行なわないことによ

って、神がいかに自分の姿を隠そうとも、あなたは依然として精力的に追い求めることができる。たとえ神があなたを拒むと言ったとしても、あなたはやはり神に従うだろう。それが神への証しに立つということである。神があなたから姿を隠し、あなたが神に従うのを止めるなら、それは神への証しに立つことだろうか。実際に入っていないならば、その人には実際の霊的背丈がなく、大きな試練に本当に直面すると躓くだろう。神が言葉を語らなかったり、あなたの観念にそぐわないことをしていたりすると、あなたは倒れる。神がいま、あなたの観念に沿って行動していたり、あなたの意思を満たしていたりして、あなたが精力的に立ち上がって追求できるなら、あなたは何を基礎として生きているだろうか。言っておくが、人間の好奇心に頼り切って生きている人は数多い。そのよう人は、追い求めることを決して心から切望していない。真理への入りを追求めず、自分の好奇心に頼って生きる者はみな卑しむべき人であり、彼らは危険な状態にある。神の様々な働きはどれも人類を完全にするためになされる。しかし、人々はいつも好奇心に満ち、噂を訪ね回るのが好きで、外国で現在起きていることを気にかけている。たとえば、イスラエルで今何が起きているのか、あるいはエジプトで地震があったのか、などということを知りたがり、新奇な物事を絶えず探して自分勝手な願望を満足させようとしている。そのような人はいのちを追求めず、完全にされることを追求めない。神の日が一刻も早く訪れ、自分の美しい夢が現実になり、大それた願望が成就することだけを求めているのだ。このような人は現実的でなく、正しくない観点をもつ人である。真理の追求だけが人による神への信仰の基礎であり、いのちへの入りを追求めなければ、あるいは神を満足させることを求めなければ、その人は懲罰の対象にされる。懲罰される者は、神が働きを行なうときに聖霊の働きをもたなかった者である。

神の働きのこの段階において、人はどのように神に協力すべきか。現在、神は人々を試している。神は言葉を発しておらず、姿を隠し、人々と直接接触していない。外側からは神が何の働きも行なっていないように見えるが、実際には依然として人間の中で働きを行なっている。いのちの成長を追求している者はみな、いのちを追求するビジョンがあり、たとえ神の働きを完全に理解していなくても疑念を抱かない。試練を経ている間、神がどのような働きを行なおうと望んでいるか、どのような働きを完遂しようと望んでいるかを知らなくても、人間に対する神の意向は常に善であることを知るべきである。あなたが誠心誠意神を追求めれば、神があなたのもとから去ることはなく、最後はきっとあなたを完全にし、人々を適切な終着点に連れて行く。現在、神が人々をどのように試しているかを問わず、神が人々に対し、その行ないに基づき、適切な結末と

報いを与える日がいつか来る。神が人々を特定の地点まで導き、その後見捨てて無視することはない。なぜなら、神は信頼に足るからである。現段階において、聖霊は精錬の働きを行っており、あらゆる人間を精錬している。死の試練と刑罰の試練から成る働きの段階において、精錬は言葉を通じて実行される。人々が神の働きを経験するには、まず神による現在の働きと、人がどのように協力すべきかを理解する必要がある。まさしく、これはすべての人が理解すべき事柄なのである。神が何を行なおうと、つまりそれが精錬であろうと、あるいは神が黙してさえいても、神の働きの諸段階のうち、人の観念に沿うものは一つもない。神の働きの各段階は、人間の観念をばらばらに打ち壊す。それが神の働きである。しかし、神の働きが一定の段階に達したのだから、神は何があらうと全人類を死に追いやらないのだと信じる必要がある。神は人類に約束と祝福の両方を与え、神を追い求める者はみな神の祝福を得られるが、そうしない者は神に捨て去られる。それはあなたの追求次第である。他に何があらうと、神の働きが終わりを迎えるとき、すべての人が適切な終着点を得るのだと信じなければならない。神は人類に美しい抱負を与えてきたが、追い求めずしてそれらは成就できない。あなたがいま知るべきなのは、神による人々の精錬と刑罰は神の働きであるが、人のほうも常に性質の変化を求めねばならない、ということである。あなたは自分の実際の経験において、まず神の言葉を飲み食いする方法を知り、神の言葉の中から自分が入るべき事柄と自分の欠点を見つけ、自分の実際の経験において入りを求め、神の言葉の中で実践すべき部分を挙げ、そうするように努めなければならない。神の言葉を飲み食いすることは一つの側面である。それに加えて、教会生活も維持する必要がある、あなたは正常な霊的生活を送り、自分の現状のすべてを神に委ねることができなければならない。神の働きがどのように変化するかを問わず、あなたの霊的生活は正常なままでなければならない。霊的生活は、あなたの正常な入りを維持することができる。神が何を行なおうと、あなたは妨害されることなく霊的生活を続け、自分の本分を尽くすべきである。これが人の行なうべきことである。それはすべて聖霊の働きだが、正常な状態にある者にとって、それは完全にされることである一方、正常な状態でない者にとって、それは試練である。聖霊による精錬の働きの現段階において、次のように言う人がいる。つまり、神の働きは極めて優れており、人々は絶対に精錬を必要としている、さもないとすればその人の霊的背丈はあまりに小さく、神の旨を成就させる術がない、というのである。しかし、状態が好ましくない者にとって、それは神を追い求めない理由、あるいは集会に参加しなかったり、神の言葉を飲み食いしなかったりする理由になる。神の働きにおいては、神が何を行なうか、どのような変化を生じさせるかを問わず、人々は最低限の正常な霊的生活

を維持する必要がある。おそらくあなたは、現段階の霊的生活において気が緩んだことはないかもしれないが、それほど多くを得ることも、大きな収穫を得ることもなかった。こうした状況下でも、あなたはやはり規則に従わなければならない。自分のいのちを損なわないために、また神の旨を満たすために、それらの規則を守らなければならないのである。あなたの霊的生活が異常であれば、神による現在の働きを理解できず、それどころか、そうした働きは自分の観念にまったくそぐわないと常に感じ、神に進んで付き従っていても、内なる原動力に欠けている。したがって、神が現在何を行なっている、人は協力しなければならない。人が協力しなければ、聖霊はその働きを行なうことができない。また人に協力する心がなければ、聖霊の働きはほとんど得られない。自分の内部で聖霊の働きを得たいと望むなら、そして神に認められたいのであれば、神の目の前で自分の本来の忠誠心を保つ必要がある。現在、あなたがより深い理解や高度な理論といったことをもつ必要はなく、必要とされるのは、本来の基礎の上で神の言葉を保つことだけである。人が神に協力せず、より深い入りを求めなければ、人が本来もっていたものを神は残らず奪うだろう。人は内面において、絶えず快適さを貪欲に求め、すでに用意されているものを享受することを好む。人間は代価を一切払うことなく、神の約束を得たいと望む。こうしたことは、人類が抱く途方もない考えである。代価を払わずいのちを得るなどと言うが、それほど容易なことがかつてあっただろうか。神を信じ、いのちへの入りと性質の変化を求めるとき、その人は代価を払い、神が何をしようといつも神に付き従う状態に達する必要がある。それが人の行なうべきことである。たとえ規則としてそのすべてに従っていたとしても、絶えずそれを守らなければならず、いかに試練が大きくても、神との正常な関係を手放してはならない。あなたは祈りを捧げ、教会生活を維持し、兄弟姉妹のもとを決して離れないでいられる必要がある。神があなたを試すとき、あなたはそれでも真理を求める必要がある。これが霊的生活における最低限の必要事項である。求める願望を常にもち、協力することに努め、自分の全力を捧げることは、果たして可能だろうか。これを基礎とするならば、その人は識別力を持ち、現実への入りを成し遂げることができる。あなたの状態が正常であれば、神の言葉を受け入れるのは容易である。このような状況において、真理の実践は難しいと感じられず、神の働きは素晴らしいと感じる。しかし、あなたの状態が劣っていれば、神の働きがいかに素晴らしくても、誰かがいかに美しく語ったとしても、あなたは気に留めないだろう。状態が異常であれば、神はその人の中で働きを行なうことができず、その人は自分の性質を変えることができない。

確信がなければ、その道を歩み続けるのは容易でない。現在、神の働きが人間の観念とまったく一致していないことを、誰もが知っている。神は数多くの働きを行ない、数多くの言葉を語ってきたが、それらは人間の観念にまったくそぐわないのである。したがって、人は確信と意志の力をもち、自分がすでに見たもの、経験から得たものを固持できるようにならなければならない。神が人の中で何を行なおうと、人は自分が有するものを守り、神の前で真摯になり、最後まで神に対して忠実でいなければならない。これが人間の本分である。人は自分のすべきことを守らなければならない。神への信仰には、神への服従と、神の働きを経験することが必要とされる。神はすでに多数の働きを行っており、人にとって、それはどれも完全化、精錬、さらには刑罰だと言えるだろう。神の働きの各段階のうち、人間の観念と一致するものはいまだかつてなく、人々が享受してきたのは神の厳格な言葉である。神が来るとき、人は神の威厳と怒りを享受することになる。しかし、神の言葉がいかに厳格だとしても、神は人類を救い、完全にするために来る。被造物として、人は尽くすべき本分を尽くし、精錬のさなかに神の証しに立たねばならない。あらゆる試練において、人はなすべき証しを固く守り、神のために鳴り響くような証しを行なう必要がある。そうする人が勝利者である。神があなたをいかに精錬しようと、あなたは確信に満ちたままでいなければならず、神への確信を決して失ってはならない。人間が行なうべきことをしなさい。それが、神が人間に求めることであり、人の心はいかなるときも完全に神へと立ち返り、神のほうへ向かわねばならない。それが勝利者である。神が「勝利者」と呼ぶ者は、サタンの支配下に置かれ、サタンに包囲されたときでさえ、つまり闇の軍勢のただ中にいるときでさえ、神の証しに立ち、神への確信と忠誠を維持できる者である。何があろうと依然として神の前で純真な心を保ち、神に対する真の愛を維持できるのであれば、あなたは神の前で証しに立ち、それが神の言うところの「勝利者」になることである。神から祝福されているときの追求が優れていても、神の祝福がなければ逃げ出すのであれば、それは純粋さだろうか。あなたは、その道が正しいと確信しているのだから、最後までその道に従い、神への忠誠を保たなければならない。あなたは、神自身があなたを完全にすべく地上に来たのを見てきたのだから、自分の心をすべて神に捧げるべきである。神が何を行なおうと、たとえ最後にあなたにとって好ましくない結末に決めたとしても、それでもあなたが神に従えるのであれば、それが神の前で純粋さを保つということである。聖なる霊体と純粋な乙女を神に捧げることは、神の前で真摯な心を保つことを意味する。人類にとって、真摯さとは純粋さであり、神に対して真摯になれるというのは、純粋さを維持するということである。これがあなたの実践すべきことである。祈るべきときは祈り

なさい。集まって交わりをもつべきときはそうしなさい。賛美歌を歌うべきときは歌いなさい。肉に背くべきときは背きなさい。自分の本分を尽くすとき、どうにか切り抜けようとしてはならず、試練に直面したときは堅く立ちなさい。それが神への忠誠である。人が行なうべきことを守れなければ、あなたの以前の苦難と決意はすべて徒労に終わったのである。

神の働きの各段階には、人が協力すべき道がある。人が精錬を経ながら確信をもてるように、神はその人を精錬する。人が神によって完全にされることを確信し、進んで神の精錬を受け入れ、神によって取り扱われ、刈り込まれるように、神は人間を完全にする。神の霊は人の中で働きを行ない、その人に啓きと照らしをもたらし、神に協力して実践するようにさせる。神は精錬のさなかに言葉を述べない。神が声を発することはないが、それでも人がなすべき働きは存在する。あなたはすでにもっているものを守らなければならない。神に祈り、神のそばから離れず、神の前で証しに立つことができなければならない。そうすれば、あなたは自分の本分を尽くせるだろう。人の確信と愛に対する神の試練においては、その人が神により多く祈り、神の前で神の言葉をより頻繁に味わうことが求められる。あなたがたはみなそのことを神の働きから理解しなければならない。神があなたを啓き、あなたに神の旨を理解させているにもかかわらず、あなたがそれを何一つ実践しなければ、あなたは何も得ない。神の言葉を実践する際は、やはり神に祈ることができなければならない。神の言葉を味わう際は、落胆や冷たさを一切感じることなく、神の前に出て求め、神への確信に満ちていなければならない。神の言葉を実践しない者は、集会の際には活力に溢れているが、帰宅すると闇に陥る。中には集会に加わることを望まない者さえいる。そうしたわけで、人が尽くすべき本分をあなたははっきり理解する必要がある。神の旨が本当は何であるか、あなたは知らないかもしれないが、それでも自分の本分を尽くし、祈るべきときに祈り、真理を実践すべきときに実践し、人がなすべきことを行なうことができる。あなたは本来のビジョンを保つことができるのである。そのようにして、あなたは神の働きの次なる段階をより受け入れられるようになる。神が隠れたやり方で働きを行なう際、あなたが求めないというのは問題である。神が語り、集会で説教するとき、あなたは熱心に耳を傾けるが、神が黙しているとき、あなたには活力がなく、引き下がってしまう。こういった人がこのように行動するのか。それは、ひたすら群れに従う人である。そのような人には心構えも証しもビジョンもない。ほとんどの人がこのようなものである。あなたがこうした状態であり続けるなら、ある日、大きな試練に遭遇したとき、懲罰に陥るだろう。心構えをもつこ

とは、神が人間を完全にする過程で極めて重要である。あなたが神による働きのどの段階も疑わず、人間の本分を尽くし、神が自分に実践させている物事を真摯に保つのであれば、つまり、神の忠告を心に留め、神が今日どのような働きを行なっても神の忠告を忘れず、神の働きに疑念を抱かず、自分の心構えを維持し、自分の証しを守り、その道のあらゆる段階で勝利するなら、最終的にあなたは神によって完全にされ、勝利者にされるだろう。神による試練の各段階で揺るぎなく立ち、最後になっても堅く立てるなら、あなたは勝利者であり、神によって完全にされた者である。現在の試練の中で揺るぎなく立つことができないのであれば、今後はいっそう難しくなるだろう。ほんのわずかな苦難を経験するだけで、真理を追い求めないのであれば、あなたは最終的に何も得ない。あなたは手ぶらのままである。神が黙していることを知ったときに追求をあきらめ、心が散漫になる人がいる。こうした人は愚か者ではないか。このような人に現実はない。神が語っているとき、彼らは常に走り回り、表向きは多忙かつ熱心なように見えるが、今や神が黙しているので探求を止めている。こうした者に未来はない。精錬の際、あなたは肯定的な見地から入り、学ぶべき教訓を学ばねばならない。神に祈って神の言葉を読むとき、それと自分自身の状態を比較し、自分の欠点を見つけ、学ぶべき教訓がいまだ多いことを知らねばならない。精錬を経ながら真摯に求めれば求めるほど、自分が不十分であることにいっそう気づく。精錬を経験しているとき、あなたは数多くの問題に直面し、それらをはっきり理解できず、不平を言い、自分の肉を露わにするが、そうすることでのみ、自分の中にあまりに多くの墮落した性質があることを突き止められるのである。

人は素質に欠けており、神の基準に遠くおよばず、将来この道を進むために、さらに多くの確信を必要とするかもしれない。終わりの日における神の働きでは、ヨブの確信さえも超える、途方もなく強い確信が必要とされる。確信がなければ、人は経験を得続けることも、神によって完全にされることもできない。大いなる試練の日が来るとき、教会を去る人がそこかしこにいるだろう。それまでの追求が極めて順調で、なぜ信仰を止めるのかよくわからない人もいるだろう。あなたに理解できない様々なことが起こり、神はしるしや不思議を表わさず、超自然的なことを一切行なわない。こうしたことは、あなたが揺るぎなく立てるかどうかなどを確かめるのが目的であり、神は事実を使って人を精錬するのである。あなたはまだそれほど苦しんでいない。将来、大いなる試練が訪れるとき、ある場所ではあらゆる者が教会から去り、あなたと良好な関係にあった者たちが信仰を捨てて立ち去るだろう。そのとき、あなたは堅く立っていられるだろうか。

現在に至るまで、あなたが経験してきた試練は軽いものだが、あなたはおそらく、やっとの思いでそれらを耐えてきたのだろう。この段階に含まれるのは、言葉による精錬と完全化だけである。次の段階では、事実があなたに降りかかってあなたを精錬し、そのときあなたは厄災のさなかに陥るだろう。ひとたびそれが深刻になれば、神はあなたに急いで去るよう勧告し、宗教関係者があなたを誘惑し、自分たちと一緒に行かせようとするだろう。それは、あなたがその道を歩み続けられるかどうかを確かめることが目的であり、こうしたことのすべては試練なのである。現在の試練は軽いものだが、いつの日か、両親が信仰を止めた家、子どもたちが信仰を止めた家も出てくるだろう。それでもあなたは信仰を続けられるだろうか。あなたが前進すればするほど、あなたの試練も大きくなる。神は人の必要と霊的背丈に応じて、人を精錬する働きを行なう。神が人を完全にする段階において、人の数が増え続けるということはない。ひたすら減少するだけである。この精錬を通じてでなければ、人は完全にされ得ない。取り扱い、懲らしめ、試練、刑罰、呪いなど、あなたはすべての耐えることができるのか。兄弟姉妹がみな極めて精力的に探求している、とりわけ良好な状況の教会を見ると、あなた自身も励まされる。しかしいつの日か、ある者は信仰を止め、ある者は仕事や結婚のために立ち去り、ある者は宗教に参加するなどして、それら兄弟姉妹が全員立ち去ったとき、あなたは揺るぎなく立てるだろうか。自分の中で影響を受けずにいられるだろうか。神が人間を完全にするのは、それほど単純なことではない。神は様々な物事を活用して人間を精錬する。人はそれらを手段として認識するが、神の本来の意図によれば、それらは決して手段ではなく、むしろ事実である。最終的に、神が人を一定の段階まで精錬し、人に不平が一切なくなったとき、神の働きのその段階は完了する。聖霊の大いなる働きはあなたを完全にすることだが、聖霊が働きを行なわずに姿を隠すとき、その働きは、それにも増してあなたを完全にすることを目的とするものであり、とりわけそうすることで、人々に神への愛があるかどうか、神に対する真の確信があるかどうか分かる。神が明白に語るとき、あなたが探し求める必要はない。あなたが探し求め、手探りで歩む必要があるのは、神が隠れたときだけである。あなたは被造物としての本分を尽くし、将来の結果や終着点がどのようなものであっても、生きているあいだに神に関する認識と神への愛を求め、そして神があなたをどう扱うかを問わず、不平を言わずにすることができなければならない。聖霊が人の中で働きを行なうにあたっては、一つだけ条件がある。人は渴望して求め、神の行ないに対して気持ち半分になることも、疑念を抱くこともなく、いかなるときも自分の本分を守れなければならない。そうすることでのみ、人は聖霊の働きを得ることができる。神の働きの各段階において、人間に要求

されているのは、途方もなく大きな確信と、神の前に出て求めることであり、経験を通じてでなければ、神がいかに愛すべき存在であるか、聖霊が人においていかに働きを行なうかを理解することはできない。あなたが経験せず、模索せず、求めることもなかったとしたら、あなたが得るものはないだろう。あなたは経験を通じて模索する必要がある、自分の経験によってでなければ、神の業を理解し、神の不思議と計り知れなさを認識することはできないのである。

あなたは生き返った人か

自分の墮落した性質を捨て去り、正常な人間性を生きることを成し遂げて初めて、あなたは完全にされる。たとえ預言をしたり奥義について話したりすることができなくても、人間の姿を生き、表しているのである。神は人を造ったが、その後、人はサタンによって墮落させられ、この墮落が人々を「死人」にしてしまった。したがってあなたが変わった後、あなたは死人とは違うものになる。人々の霊にいのちを与え、人々を再生させるのは神の言葉であり、霊が再生した時、人々は生かされる。死人についての言及は、霊を持たない死体のこと、霊が死んでいる人々のことを指している。霊にいのちが与えられると、人々は生かされる。以前語られた聖者とは、生かされた人々、サタンの支配下にあったがサタンを打ち負かした人々のことを指す。中国の選ばれた人々は、赤い大きな竜による悲惨かつ非人道的な迫害や策略に耐えてきたため、精神はひどく荒廃させられ、生きる勇気を少しも持たなくなった。したがって彼らの霊の目覚めは、本質から始まらなければならない。彼らの本質において、少しずつ霊を目覚めさせなければならない。ある日、彼らが生かされた時、もはや障害物は何もなくなり、すべては順調に進む。今のところ、これは相変わらず達成不可能である。ほとんどの人の生き様は死の雰囲気はかなり含んでおり、死の気配に包まれており、欠けているものがあまりにも多い。言葉に死を帯びている人々もおり、彼らの行動も死を帯びており、彼らが生き抜くもののほとんどすべてが死である。もし今日、人々が公に神について証ししても、この働きは失敗する。なぜなら彼らはまだ完全には生かされていないし、あなたがたのあいだにはあまりにも多くの死人がいるからである。今日、なぜ神はしるしや不思議を示さないのか、そうすれば異邦人たちのあいだに神の働きをすばやく広めることができるのに、と言う人々がいる。死人は神について証しをすることはできない。生きている者だけが証しできるが、今日ほとんどの人は死んでおり、あまりにも多くの人が死に囚われて生きており、サタンの影響下にあり、勝利を得ることができない。それなのに彼らが神について証しをすることなどできるだろうか。福音の働きを広げることなどできる

だろうか。

暗黒の影響を受けて生きている人々は死の中に生きているのであり、サタンにとりつかれている。神に救われなければ、そして神の裁きを受け、刑罰を受けなければ、人々は死の権勢から逃れることはできず、生きている人にはなれない。こうした死人たちは神について証しをすることはできないし、神に用いられることもできない。いわんや神の国に入ることはできない。神は死人ではなく、生きている人々の証しを望んでおり、死人ではなく生きている人々が神のために働くことを求める。「死人」とは神に反対し、神に逆らう人々であり、霊が麻痺し、神の言葉を理解しない人々であり、真理を实践せず、神への忠誠心など微塵もない人々、サタンの支配下に住み、サタンに利用されている人々のことである。死人は真理に反対し、神に逆らい、卑しく、卑劣で、悪意があり、野卑で、悪賢く、陰険であることで自らを表す。そのような人々はたとえ神の言葉を飲み食いしても、神の言葉を生きることはできない。彼らは生きているが、歩く死体、呼吸する屍である。死人は神を満足させることは全くできないし、いわんや神に完全に従うことなどできない。神をだまし、冒瀆し、裏切ることしかできない。死人の生き方はすべてサタンの本性を明らかにする。もし、人々が生きている存在になり、神への証しを立て、神に認められることを望むならば、神の救いを受け入れ、神の裁きと刑罰に喜んで服従し、神による刈り込みや取り扱いを喜んで受け入れなければならない。そうして初めて神が要求する真理のすべてを实践することができ、そうして初めて神の救いを得て、本当に生きた存在になることができる。生きている人々は神によって救われ、神から裁きと刑罰を受けており、進んで神に身を捧げ、喜んで神に命を投げ出し、全人生を神に捧げる。生きている人々が神への証しをたてる時のみ、サタンを辱めることができ、生きている人々だけが神の福音の働きを広めることができ、生きている人々だけが神の心にかない、生きている人々だけが本当の人である。神により造られた人は元々は生きていたが、サタンに墮落させられたために死の只中で暮らし、サタンの影響下で暮らすようになり、そこで人々は霊のない死人となり、神に反対する敵となり、サタンの道具になり、サタンの囚われ人になってしまった。神が造った生きている人々はすべて死人となり、そこで神は証しを失い、神が造り、神の息を吹き込まれた唯一の存在である人類を失ってしまった。もし神が証しを奪い返し、神の手で造られたがサタンに奪われた人々を奪い返すならば、神は彼らが生きている人々になるようによみがえらせなければならないし、神の光の中で生きるように彼らを奪い返さなければならない。死人とは霊を持たず、極端に無感覚で、神に反対する人々のことである。そのうえ、彼ら

は神を知らない人々である。彼らは神に従う意思など微塵も持たず、神に反抗し、反対するだけであり、忠誠心はまったくない。生きている人々は霊が再生しており、神に従うことを知っており、神に忠実な人々である。彼らは真理と証しを備えており、彼らだけが神の家で神に喜ばれる。生かされることが出来る人々、神の救いを見ることが出来る人々、神に忠実になることができ、進んで神を探し求める人々、神の受肉を信じる人々、神の出現を信じる人々を神は救う。生かされることが出来る人もいれば、そうでない人もいるが、それはその人の本性が救われるか否かによる。神の言葉を数多く聞いているにもかかわらず、神の心を理解しない人が大勢いる。彼らは神の言葉を数多く聞いているが、それを実践することができず、いかなる真理を生きることもできず、さらに神の働きを故意に妨げる。彼らは神のためにいかなる働きを行なうこともできず、神に何も捧げることができず、そのうえこっそり教会の資金を使ったり、ただで神の家で食べたりする。これらの人々は死人であり、救われない。神は自身の働きの中にいるすべての人々を救うが、一部の人は神の救いを得られない。神の救いを得られるのはほんの少数だけである。なぜなら、ほとんどの人はあまりに深く墮落して死人となり、救うことができないからである。そのような人は完全にサタンに利用され、本性の中にあまりにも悪意があるからである。先の少数の人々も完全に神に従うことができたわけではなかった。彼らは最初から完全に神に忠実であった人々、あるいは最初から神に最大限の愛をもっていった人々ではなかった。それどころか、彼らは神の征服の働きゆえに神に従うようになったのであり、神の究極の愛ゆえに神を見ているのであり、神の義である性質ゆえに彼らの性質に変化が見られるのであり、实际的で正常である神の働きゆえに彼らは神を知るようになる。神のこの働きがなければ、彼らがどれほど善良であろうと、まだサタンに属しており、まだ死に属しており、まだ死んでいることだろう。今日これらの人々が神の救いを得られるのは、彼らが神と協力する覚悟があるということに尽きる。

生きている人々は、神に忠実であるために神に得られ、神の約束の只中で暮らす。死人は、神に反対するために神から嫌われ、拒絶され、神の懲罰と呪いの只中で暮らす。これが神の義の性質であり、いかなる人もそれを変えることはできない。自ら探し求めることにより、人々は神の承認を得て、光の中に暮らす。ずるい企みのために、人々は神に呪われ、懲罰の真中に身を落とす。悪行のために、人々は神に懲罰される。神に対する切望と忠実により、人々は神の祝福を受ける。神は義である。神は生きている人々を祝福し、死人を呪うので、死人は永遠に死の中にとどまり、決して神の光の中では暮

らさない。神は生きている人々を神の国へ連れていき、永遠に神とともに留まるべく生きている人々を神の祝福へと連れて行く。神は死人を永遠の死に陥れる。死人は神による破壊の対象であり、永遠にサタンに属する。神は誰も不当に扱わない。真に神を探し求める人はすべて必ず神の家に留まり、神に逆らい、神と相容れない人々は必ず神の懲罰を受けながら生きる。おそらくあなたは受肉した神の働きについて確信がないだろうが、いつか神の肉は人の終末を直接に定めることはなく、その代わりに神の霊が人の終着点を定め、その時人々は神の肉と霊は一つであること、神の肉は間違いを犯すことはなく、神の霊はさらに間違いを犯すことなどないことを知る。最終的には、神は必ず一人の余分も一人も欠けもなく、生かされる人々を神の国に連れて行き、生かされなかった死人はサタンの洞窟に投げ捨てられるのである。

性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである

数千年にわたる墮落の後、人は麻痺し、物分かりが悪くなり、神に反対する悪魔になり、神への人の反抗の歴史は「史記」に記録されるほどになり、人自身でさえその反抗的行いに完全な説明ができなくなっている。人はサタンにより深く墮落させられ、惑わされてしまったので、どちらに向いたらよいかわからなくなっているのである。今日でさえ、人はまだ神を裏切っている。人は神を見ると裏切り、神が見えないときもやはり神を裏切る。神の呪いや怒りを目の当たりにしても、それでも神を裏切る人々さえいる。そこでわたしは、人の理知はその本来の機能を失い、人の良心も本来の機能を失ったと言う。わたしが目にする人は人の装いをした獣、毒のある蛇であり、わたしの目の前でどんなに哀れっぽく見せようとしても、わたしは人に対して決して寛大にはならない。人は白と黒の違い、真理と非真理の違いを把握していないからである。人の理知は大いに麻痺しているにもかかわらず、まだ祝福を得ようと願い、人間性はひどく下劣であるにもかかわらず、まだ王としての統治を保有することを願う。そのような理知の持ち主がいったい誰の王になれるというのか。そのような人間性の者がどうして玉座に着くことができようか。実に人は恥を知らない。身の程知らずな卑劣漢である。祝福を得たいと願うあなたがたに対し、わたしはまず鏡を見つけて、そこに映る自分自身の醜い姿を見ることを勧める。あなたは王になるために必要なものを持っているだろうか。あなたは祝福を得ることのできる者の顔をしているだろうか。性質にわずかな変化もなく、真理は何一つ実践していないにもかかわらず、あなたはまだ素晴らしい明日を願っている。あなたは自分自身を欺いている。ひどく汚れた地に生まれ合わせて、人は社会に駄目にされ、封建的倫理の影響を受け、「高等教育機関」で教えを受けてきた。

時代遅れの考え方、墮落した倫理観、さもない人生観、卑劣な人生哲学、全く価値のない存在、下劣な生活様式と風俗、これらはすべて人の心をひどく侵害し、その良心をひどくむしばみ、攻撃してきた。その結果、人はますます神から離れ、ますます反対するようになった。人の性質は日ごとに悪質になり、神のために進んで何かを投げ出そうという者は一人としておらず、進んで神に従う者は一人としておらず、さらには神の出現を進んで探し求める者も一人としていない。それどころか、サタンの支配下で快楽を追求しているだけで、泥の地で肉体の墮落にふけっている。真理を耳にしたときでさえ、暗闇に生きる人々はそれを実行に移そうとは考えず、たとえ神の出現を見たとしても、神を探し求める気持ちにはならない。こんなにも墮落した人類にどうして救いの可能性があり得ようか。どうしてこんなにも退廃した人類が光の中に生きることができようか。

人の性質は、その本質を知ることから始まり、考え方、本性、精神状態を変えることを通じて、つまり根本的变化を通じて変わるべきである。このようにしてのみ、人の性質に本当の変化が達成される。人の墮落した性質は、サタンによって毒を盛られ、踏みにじられていることと、サタンが人の考え方、倫理観、見識、理知に与えたひどい被害を根源としている。まさに人のこうした根本的事柄がサタンによって墮落させられ、神がもともと造ったものとは完全に違ってしまったため、人は神に反対し、真理を理解しないのである。したがって、人の性質を変えるには、まず人の考え方、見識、理知を変え、それによって神に関する認識や真理に関する認識も変えることから始まるべきである。あらゆる土地の中でもっともひどく墮落している国に生まれた人々は、神とは何か、あるいは神を信じることは何かについてさらに無知である。墮落していればいるほど、人々は神の存在を知らず、理知や見識は貧しくなる。人が神に反対し、反抗する根源はサタンによる墮落である。サタンによって墮落させられたので、人の良心は麻痺してしまい、不道徳になり、考え方は低下し、逆行する精神状態を持ってしまった。サタンによって墮落させられる前は、人はもちろん神に従い、神の言葉を聞いた後それらに従っていた。人は健全な理知と良心を生来持っており、人間性も正常であった。サタンによって墮落させられた後、人が本来持っていた理知、良心、人間性は鈍くなり、サタンによって損なわれ、したがって人は神に対する服従や愛を失った。人の理知は異常になり、性質は動物の性質と同じになり、神に対する反抗はますます頻繁になり、深刻になっている。しかし、人はまだこのことに気づかず、認識せず、単に盲目的に反対し、反抗している。人の性質の暴露は人の理知、見識、良心の表出であり、人の理知や見識

は不健全で、良心は極めて鈍くなっているのです、したがって人の性質は神に対して反抗的である。人の理知と見識に変化がなければ、その性質を変えることも、神の心になうことも不可能である。理知が不健全だと、人は神に仕えることができず、神に使われるには適さない。正常な理知とは神に従い、忠実であること、神を切望し、神に対して絶対で、神に対して良心を持っていることを意味する。神に対して心と考えにおいてゆるぎなく、わざと神に反対するようなことはしないことを意味する。理知が異常な人々はそうではない。サタンによって墮落させられて以来、人は神についての観念を作りだし、神への忠誠心や渴望は持っておらず、言うまでもなく神に対する良心も持っていない。わざと神に反対し、批判する。さらには陰で神に悪口雑言を投げつける。人は明らかにその方が神であることを知っているにもかかわらず、陰で批判し、神に従うつもりはなく、神に盲目的要求や依頼を行うだけである。そのような人々、つまり理知が異常な人々は自分自身の卑劣な行動を知ることや反抗心を後悔することができない。自分自身を知ることができれば、人々は自己の理知を少し取り戻す。神にますます反対し、自分自身を知らなければ、その理知はますます不健全になる。

人の墮落した性質が発覚する源はその人の鈍くなった良心、悪意のある本性、不健全な理知でしかない。良心や理知が正常に戻ることができれば、人は神の前で神に用いられるのに相応しい人になるだろう。人がますます神に反抗的になるのは、単に良心がつねに麻痺しており、その理知が決して健全ではなく、ますます鈍くなっているからであり、そのためイエスを十字架に釘でうちつけさえしたし、終わりの日に受肉した神の肉体が自分の家に入るのを拒絶し、神の肉体を罪に定め、神の肉体を卑しいものとみなすのである。少しでも人間性を持っていれば、受肉した神の肉体をそんなにひどく扱わないだろう。少しでも理知があれば、受肉した神にこのような卑劣な扱い方はしないだろう。少しでも良心を持っていれば、受肉した神にこのような方法で「感謝する」ことはないだろう。人は神が受肉した時代に生きているにもかかわらず、神がそのような良い機会を与えたことに感謝することができず、それどころか、神の到来を呪うか、あるいは神が肉となった事実を完全に無視し、一見したところそれに反対し、うんざりしている。神の到来を人がどのように扱うかにかかわらず、要するに、神は辛抱強く常に自らの働きを行ってきた。たとえ人が神を全く歓迎していなくても、盲目的に神に要求を突き付けてもである。人の性質はこの上なくひどくなり、理知はこの上なく鈍くなり、良心は悪い者によって完全に踏みにじられ、もともとの良心はずっと以前に途絶えてしまった。人は人類に多くのいのちと恵みを授けてくれた受肉の神に感謝しないばかりか

、真理を与えたことで神をひどく嫌悪さえしている。真理に全く関心を持たないので、人は神をひどく嫌悪している。人は肉となった神のために命を捨てることができないだけでなく、神から利益を引き出そうとし、自分が神に預けたものの何十倍もの利息を神に要求する。そのような良心と理知を持つ人々はこれを大したことではないと思い、自分は神のためにずいぶん費やしたとか、神はあまりにも少ししか与えてくれないなどと依然信じている。わたしに一杯の水を与えたのに、両手を伸ばしてミルク二杯分の代金を要求したり、わたしに一夜の宿を提供しても、宿泊費として何倍もの額を要求しようとした人々がいる。そのような人間性や良心で、どうしてあなたがたはいのちを得ることを望めようか。あなたがたはなんと卑劣な悪党なのだろう。人のこのような人間性と良心のために、肉となった神は地上をさまよい、身を寄せる場所もない。本当に良心と人間性を所有している人々は、神がどれほどの働きをしたからではなく、たとえ全く何の働きもしなくても、肉となった神を礼拝し、心から仕えるはずである。これが健全な理知を持つ人々のなすべきことであり、人の本分である。ほとんどの人は神に対する奉仕の条件さえ口にする。そのような人は相手が神なのか、それとも人なのかを気にせず、自分の条件だけを話し、自分の欲望を満たすことだけを追い求める。わたしのために料理するとき、あなたがたはサービス料を要求し、わたしのために走るときは走る料金を要求し、わたしのために働くときは労賃を要求し、わたしの服を洗うときは洗濯代を要求し、教会に与えるときは休養費を要求し、話をするときは講演料を要求し、本を配布するときは配布料金を要求し、何か書いたときは執筆料を要求する。わたしが取り扱った人々はわたしから補償金さえ要求し、そのうえ、帰宅させられた人々は自分の名前が損なわれたことに対して補償を要求する。結婚していない人々は持参金、または失われた青春時代の補償を要求し、鶏を殺す人々は食肉処理料を要求し、揚げものをする人々は揚げ賃を要求し、スープを作る人々もそれに対する支払いを要求する、等々。これがあなたがたの高尚で偉大な人間性であり、あなたがたの温かい良心に指図されたことである。あなたがたの理知はどこにあるのか。人間性はどこにあるのか。一言言わせてもらう。あなたがたがこのまま続けるのなら、わたしはあなたがたの中で働くのをやめる。わたしは人間の皮を被った獣の集団の中では働かない。わたしはあなたがたのような、人間の顔をしているが心は野獣である人々の集団のために苦しんだりしない。わたしは救いの可能性が全くないこのような獣の集団のために耐えたりはしない。わたしがあなたがたに背を向ける日はあなたがたが死ぬ日であり、暗闇があなたがたを襲う日であり、あなたがたが光に見捨てられる日である。一言言わせてもらう。わたしはあなたがたのような獣以下の集団には決して慈悲深くはならない。わたしの言葉や行動には限

度があり、あなたがたの現在の人間性や良心に対しては、わたしはもはやなんの働きもしない。なぜなら、あなたがたはあまりにも良心に欠け、わたしにあまりにも多くの苦しみを与え、あなたがたの卑劣なふるまいはあまりにもわたしに嫌悪感を起こさせるからである。こんなにも人間性や良心に欠けている人々に救いの機会は決して訪れない。わたしはそのような冷酷で、感謝の念を持たない人々は決して救わない。わたしの日が来たら、わたしは燃える炎を、かつてわたしを強烈に激怒させた不従順な者たちの上に永遠に雨あられとふりかけ、かつてわたしに悪口雑言を投げつけ、わたしを見捨てたあの獣たちに永続的懲罰を課し、かつてわたしと共に食べ、暮らしたがわたしを信じず、わたしを侮辱し、裏切った不従順な息子たちを怒りの火でいつまでも焼く。わたしは我が怒りを引き起こしたすべての人々に懲罰を与え、その怒りのすべてを、かつてわたしと対等の地位に立とうと望んだにもかかわらず、わたしを礼拝せず、従わなかった獣どもに雨あられと降り注ぐ。わたしが人を打つ鞭は、かつてわたしの顧みや、わたしが話した奥義を楽しみ、わたしから物質的楽しみを引き出そうとしたあの獣たちを攻撃する。わたしはわたしの地位を取ろうとする者は誰も許さない。わたしから食べものや衣服を奪おうとする者は誰も容赦しない。今のところ、あなたがたは損害を免れており、相変わらず背伸びしてわたしに無理な要求をしようとしている。怒りの日が来たら、あなたがたはわたしにこれ以上要求はしないだろう。その時、わたしはあなたがたを心ゆくまで「楽しませ」、あなたがたの顔を地中に押し込む。そうすれば二度と起き上がることができない。遅かれ早かれ、わたしはこの負債をあなたがたに「返す」――そしてあなたがたが辛抱強くこの日の来るのを待つことを望む。

もし、これらの卑劣な人間が途方もない欲望を打ち捨て、神のもとに戻る如果能够ならば、彼らにはまだ救いの機会はある。もし、人が本当に神を渴望する心を持つならば、神に見捨てられることはない。人が神を得ることができないのは、神が感情を持っているからでも、神が人に得られたくないからでもなく、人が神を得たくないからであり、人が切迫して神を探し求めないからである。本当に神を探し求める人がどうして神に呪われることがあり得ようか。健全な理知と繊細な良心を持つ人がどうして神に呪われることがあり得ようか。本当に神を礼拝し、仕える人がどうして神の怒りの火によって破壊されることがあり得ようか。喜んで神に従う人がどうして神の家から追放されることがあり得ようか。神をどれほど愛しても愛しきれない人がどうして神の懲罰の中で生きることになり得ようか。喜んですべてを神のために断念する人がどうして無一文な状態になることがあり得ようか。人は神を追求したがらず、自分の所有物を神のため

に使いたがらず、生涯を通しての努力を神に捧げたがらず、それどころか、神はやり過ぎたとか、神には人の観念と対立する部分がありすぎるなどと言う。人間性がこのようでは、たとえあなたがたが努力を惜しまないとしても、神の承認を得ることはやはりできないだろうし、あなたがたが神を探し求めているという事実は言うまでもない。あなたがたは自分が人類の不良品だということを知らないのか。あなたがたの人間性ほど卑しい人間性はないということを知らないのか。あなたがたの「称号」は何か知らないのか。本当に神を愛する人々はあなたがたをオオカミの父、オオカミの母、オオカミの息子、オオカミの孫息子と呼ぶ。あなたがたはオオカミの子孫、オオカミの民族である。あなたがたは自己の身分を知るべきであり、それを決して忘れてはならない。自分がなにか優れた人物だと考えてはならない。あなたがたは人類のなかで最も悪意がある非人間的なものの群である。あなたがたはこのことを全く知らないのか。あなたがたの中で働くことにより、わたしがどれほどの危険を冒しているか知っているだろうか。あなたがたの理知が正常に戻ることができず、あなたがたの良心が正常に働くことができないければ、あなたがたから「オオカミ」の名称が外されることは決してなく、呪いの日を免れることも決してなく、懲罰を受ける日を免れることも決してない。あなたがたは劣った生まれで、何の価値もない。本質的に飢えたオオカミの群、山積みのがらくたとごみである。あなたがたと違って、わたしがあなたがたに働きかけるのは甘い汁を吸いたいかからではなく、その必要があるからである。あなたがたがこのように反抗的態度を続けるなら、わたしは働くのをやめ、二度と再びあなたがたに働き掛けることはない。それどころかわたしを喜ばせてくれる別の集団に働きを移し、このようにして永遠にあなたがたから離れる。なぜならわたしに敵対する人々を見たくないからである。では、あなたがたはわたしに味方することを望むか、それとも反目していたいのか。

神を知らない人はすべて神に反対する人である

神の働きの目的、神の働きが人にもたらす効果、そして神の人への心意とは厳密に何であるのかを把握することは、神に従うすべての人が到達すべきことである。今日、すべての人に欠けているのは、神の働きを知ることには他ならない。天地創造から現在にいたるまで神が人に行なった業、神の働きの全体、そして神の心意とは人にとって厳密に何であるのかを人は知りも理解もしていない。この不十分さは宗教界全体だけでなく、神を信じるすべての人にも見られる。あなたが本当に神を見る日が来るとき、神の知恵を真に認識するとき、神が行なったすべての業を見るとき、神の存在そのものと神が所有するものを認識するとき、つまりあなたが神の豊かさ、知恵、不思議、そして神が人

に為したすべてのことを見たとき、あなたは神の信仰において成功を収めたことになる。神はすべてを包み込み、極めて豊かであると言われるとき、厳密にどのようにすべてを包み込み、どのように極めて豊かなのだろうか。これがわからなければ、あなたは神を信じているとみなされることはできない。わたしが宗教界の人々は神を信じるのではなく、悪魔と同類の悪行者であると言うのはなぜか。わたしが彼らが悪行者であると言うとき、それは彼らには神の心意がわからず、神の知恵が見えないからである。神は決して彼らに働きを明かさない。彼らは盲目である。彼らには神の業が見えず、彼らは神に見捨てられている。そして、彼らには聖霊の働きは言うまでもなく、神の気遣いや守りは一切ない。神の働きのない人はすべて悪行者であり、神への反対者である。わたしが言う神への反対とは、神を知らない人、口先では神を認めながらも神を知らない人、神の後ろをついては来るが神に従わない人、そして神の恵みを享受するが神への証しを立てることができない人のことである。そのような人は、神の働きの目的や神が人において為す働きを理解せず、神の心意と一致することも、神への証しを立てることもできない。人が神に反対する理由は、一方ではその墮落した性質から、他方では神を知らないことと神が働く原理と人への神の心意を理解していないことに由来する。これら二つの側面を一つにすると、人が神に抵抗してきた歴史を構成する。信仰の初心者は神に反対する。なぜなら、そのような反対は彼らの本性の中にあるからである。一方、長年信仰してきた人々が神に反対するのは、彼らの墮落した性質に加え、神を知らないことが原因である。神が肉となる前は、ある人が神に反対しているか否かは、その人が天国にいる神が定めた命令を守っているか否かに基づいていた。たとえば、律法の時代では、ヤーウェの律法を守らない人は誰であれ、神に反対している人とみなされた。ヤーウェへの捧げ物を盗んだ人やヤーウェに好まれている人に敵対した人は誰であれ、神に反対している人とみなされ、石打刑で殺されることになっていた。父母を敬わない人や他人を殴ったり罵ったりした人は誰であれ、律法を守らない人とみなされた。そして、ヤーウェの律法を守らない人はみな、神に敵対しているとみなされた。恵みの時代においては、こうしたことはもはやなく、イエスに敵対する人は誰であれ神に敵対する人とみなされ、イエスの言葉に従わない人は誰であれ神に敵対する人と見なされた。このとき、神への反対の定義の仕方が、これまでより正確で実際的になった。神がまだ肉になっていなかったころ、人が神に反対しているか否かの尺度は、人が天国にいる目に見えない神を崇拜し、尊敬しているか否かに基づいていた。そのころ、神への反対の定義の仕方はそれほど現実的ではなかった。なぜなら、人には神が見えず、神の姿がどのようなものか、神がどのように働き、語るのかを知らなかったからである。人には神についての

観念が一切なく、神はまだ人のところに現れていなかったのも、神を漠然と信じていた。したがって、人がいかに想像で神を信じていたとしても、人には神が全く見えなかったのも、神は人を断罪したり、過大な要求を突きつけたりすることはなかった。神が肉になり、人の間で働くようになると、すべての人が神を見、神の言葉を聞き、神がその肉体の内側から為す業を見る。そのとき、人の観念はすべて泡となる。神が肉に現われるのを見た人は、喜んで神に従うならば断罪されることはないが、意図的に神に敵対する人は神の反対者とみなされる。そのような人は反キリストであり、故意に神に対抗する敵である。神についての観念を抱いていながらも神に従うことをいとわない人は断罪されない。神は人の意図や行動に基づいて人を断罪するのであり、決して人の思いや考えのためではない。もし神が人の思いや考えに基づいて断罪するなら、一人として神の怒りの手から逃れることはできない。受肉した神に故意に対抗する人は、その不従順ゆえに罰せられる。神に故意に対抗するそのような人が神に反対するのは、神についての観念を抱いていることに由来し、それが神の働きを妨害する行動をその人にとらせるのである。この人は意図的に神の働きに抵抗し、破壊する。単に神についての観念があるだけでなく、神の働きを妨害する活動にも携わり、この理由ゆえにこのような人は断罪されるのである。神の働きを故意に妨害しない人々は、罪人として断罪されることはない。喜んで従うことができ、妨害や混乱を引き起こす活動に従事することができないからである。このような人は断罪されない。神の働きを長年にわたって経験してきたのに、神についての観念を抱き続け、受肉した神の働きを知ることができないままであるならば、そして何年ものあいだ神の働きを経験しながらも、神についての観念に満たされたままで神を知ることができないならば、たとえ混乱を引き起こすような活動に従事していなくても、そのような人の心は神についての多くの観念で満たされているのであり、たとえこれらの観念が明らかにならないとしても、このような人は神の働きには何ら一切の役に立たない。そのような人は神のために福音を広めることも、神への証しを立てることもできない。それは何の役にも立たない愚か者である。神を知らず、さらに神についての観念を捨てることがどうしてもできないため、そのような人は断罪される。つまり、次のように言うことができる。信仰の初心者が神についての観念を抱いたり、神を全く知らないのは普通のことであるが、長年にわたって神を信じ、神の働きをかなり経験した人が観念をもち続けることは普通ではなく、このような人が神を知らないのはさらに普通ではない。この普通ではない状態ゆえに、その人は断罪されるのである。こうした異常な人はみなごみである。そのような人は神へ最大の反対を見せ、神の恵みも最大に享受しながら、それに対して何も報いない。そのような人はみな最後には排除

される。

神の働きの目的を理解していない人は誰であれ、神に反対しているのであり、神の働きの目的を理解するようになっても神を満足させようとはしない人は、なおさら神の反対者とみなされる。荘厳な教会で聖書を読み、一日中聖句を唱える人がいるが、そうした人は誰一人として神の働きの目的を理解していない。そうした人は誰一人として神を知ることができず、ましてや神の心意と一致することなど到底できない。そのような人はみな、価値のない下劣な人であり、高い位置から神を説く。神を旗印に使いながらも、故意に神に反対する。神を信じていると断言しながらも、人の肉を食べ、人の血を飲む。そのような人はみな、人の魂を食い尽くす悪魔であり、正しい道を歩もうとする人をわざと邪魔する悪霊の頭であり、神を求める人を妨害するつまずきの石である。彼らは「健全な体質」をしているように見えるかもしれないが、神に対抗するように人々を導く反キリストに他ならないことを彼らの追従者がどうして知り得るというのだろうか。彼らが人間の魂をむさぼり食うことを専門とする生きた悪魔であることを彼らの追従者がどうして知り得るというのだろうか。神の臨在において自分を高く評価する人は人間の中でも最も卑しいが、謙遜する人は最高の栄誉に浴する。そして、自分は神の働きを知っていると思っており、さらに、神を目の前に見ながらも神の働きを人々に大げさに宣言することができる人は、人間の中でも最も無知な人である。そのような人には神の証しがなく、傲慢でうぬぼれに満ちている。神について実際の経験と実際の認識があるにもかかわらず、自分は神についてほとんど知らないと信じている人が、神に最も愛されるのである。そのような人だけに真の証しがあり、真に神によって完全にされることができる。神の心意を理解していない人は、神の反対者である。神の心意を理解しているが、真理を実践していない人は神の反対者である。神の言葉を飲み食いしても神の言葉の本質に反する人は神の反対者である。肉となった神についての観念を持ち、さらに反乱に関与する心を持つ人は神の反対者である。神を批判する人は神の反対者である。そして、神を知ることができない人、神に証しをすることができない人は誰であろうと神の反対者である。だからわたしはあなたたちに求める。もしあなたたちが本当にこの道を歩けると信じているなら、道に従い続けなさい。しかし、もしあなたたちが神への対抗をやめられないのなら、手遅れになる前に立ち去るがよい。そうでなければ、物事の展開があなたたちにとってひどくなる可能性が非常に高い。それは、あなたたちの本性があまりに墮落しきっているからである。あなたたちには忠誠心や従順、義と真理を渴望する心、神への愛などみじんもない。神の前のあなたたちの状況は完全な修羅場

であると言える。従うべきことに従うことができず、言うべきことを言うこともできない。実践すべきことを実践することに失敗し、果たすべき役割を果たすことができていない。持つべき忠誠心、良心、従順、決意を持たない。耐えるにふさわしい苦しみに耐えておらず、もつべき信仰もない。簡単に言うと、あなたたちには真価がまったくない。このまま生きていて恥ずかしくないのか。神があなたたちのせいで心配したり、あなたたちのために苦しんだりしなくていいように、あなたたちは永遠の眠りについたほうがいいと説得させてほしい。あなたたちは神を信じていても神の心意を知らない。神の言葉を飲み食いしても、神が人に要求することを守ることができない。神を信じてても神を知らず、努力する目標もなく、一切の価値も意味もないまま生きている。人間として生きていても、良心、品位、信頼性は少しもない。それでもあなたたちはまだ自分を人間と呼ぶことができるのか。神を信じていても神を欺く。さらに、神の金を取り、神への捧げ物を食い尽くす。それでも、結局のところ、神の気持ちを少しでも考えたり、神にわずかな良心を見せることもない。神のごく些細な要求さえも満たすことはできない。それでもまだ、あなたたちは自分を人間と呼ぶことができるのか。神が提供する食物を食べ、神が与える酸素を吸い、神の恵みを受けても、結局のところ、あなたたちは神を少しも知らない。それどころか、あなたたちは神に反対する無益者になった。それではあなたたちは犬よりも劣る獣になるのではないのか。あなたたちよりも悪意のある動物が他にあるだろうか。

高い説教壇に立って人々に教えを説く牧師や長老は、神の反対者でありサタンの仲間である。高い説教壇に立って人に教えていないあなたたちは、さらに大きな反対者ではないのか。牧師や長老以上にサタンと共謀していないのか。神の働きの目的を理解していない人は、神の心意と一致する方法を知らない。確かに、神の働きの目的を理解している人が、神の心意と一致する方法を知らないことはありえない。神の働きは決して誤ることがなく、むしろ、欠陥があるのは人の追求である。神に故意に反対する墮落者は、牧師や長老よりも腹黒く邪悪ではないのか。神に反対する人は多いが、神に反対する方法はさまざまである。ありとあらゆる種類の信者がいるように、神に反対する人たちもさまざまで、互いに異なる。神の働きの目的を明確に認識できない人は一人も救われない。過去に人がどのように神に反対したかに関わらず、人が神の働きの目的を理解し、神を満足させることに努力を捧げると、神は以前の罪をすべて水に流す。人が真理を求め、真理を実践するのならば、神は人がしたことを心に留めない。さらに、神が人を正しいとするのは、人による真理の実践に基づく。これが神の義である。神を見たり神

の働きを体験したりする前は、人が神に対してどのように行動するかに関係なく、神はそれを心に留めない。しかし、ひとたび人が神を見、その働きを体験すると、人のあらゆる業や行動は、神によって「年譜」に記録される。人が神を見、神の働きのもとに生きたからである。

神が所有するものと神が何であるかを人が本当に見たとき、神の優越性を目にしたとき、そして神の働きを本当に知るようになり、さらに人の古い性質が変わったとき、人は神に反対する反抗的な性質を完全に捨て去ったことになる。誰もが一度は神に反対し、一度は神に反抗したことがあると言える。しかし、肉となった神に喜んで従い、この時点から忠誠心で神の心を満たし、実践すべき真理を実践し、尽くすべき本分を尽くし、守るべき規則を守れば、あなたは反抗心を捨てて神を満足させるのをいとわない人であり、神が完全にすることのできる人である。頑なに自分の誤りを見ようとせず、自身を悔い改めるつもりがないならば、また、神と協力し、神を満足させる意図が少しもなく反抗的な行動に固執するなら、あなたのような頑固で矯正のしようがない人は必ず罰せられ、神に完全にされることは決してない。このように、今日あなたは神の敵であり、明日も神の敵であり、その次の日も神の敵のままである。永遠に神の反対者であり、神の敵である。その場合、神がどうしてもあなたを放免することができるだろうか。神に反対するのは人の本性であるが、人の本性を変えることは克服できない課題であるという理由だけで、意図的に神に反対する「秘訣」を求め探ってはならない。もしそうなら、将来の刑罰がさらに厳しくならないように、最後には神があなたの肉体を終わらせるところまで、あなたの凶暴な本性が爆発して制御できなくならないように、手遅れになる前に立ち去ったほうがいい。あなたは、祝福を受けるために神を信じているが、最終的に不幸しか降りかからないのであれば、それは残念なことではないのか。あなたたちに強く勧める。別の計画を立てたほうがよいだろう。できることであれば何でも、神を信じるよりもましだろう。確かに、この道だけしかないはずがない。真理を求めなくても、生き残れるのではないのか。なぜこのように神と対立する必要があるのだろうか。

諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅱ）

（1992年11月から1993年6月まで）

働きと入ること（1）

人々が神への信仰の正しい道を歩み始めて以来、不明瞭なままになっている事柄が多

くある。人々は神の働きについて、また自分たちがなすべき働きの多くについて、いまだ完全な混乱状態にある。それは、一方では人々の経験における逸脱と理解力の限界によるものであり、他方では、神の働きがまだ人間をその段階に至らせていないからである。したがって、誰もが霊的な問題の大部分について曖昧なままである。あなたがたは、自分が何に入るべきかについて不明瞭であるだけでなく、神の働きに関してはそれ以上に無知である。これは単に、あなたがたの中にある欠点の問題ではなく、宗教界の全員に共通する大きな欠陥である。ここに人間が神を知らない理由の鍵があり、したがってこの欠陥は、神を追い求める全員に共通する欠点である。神を知るに至った者や神の素顔を見た者は、今まで一人もいない。そのため神の働きは、山を動かしたり、海を干上がらせたりするのと同じくらい困難になったのである。多くの人間が神の働きのために自らの命を犠牲にし、神の働きのために捨て去られ、神の働きのために責め苦を受けて死に、神への愛のために目に涙を溜め、不当な死を迎え、残酷で無慈悲な迫害を受けてきた……。そのような悲劇が発生するのは、ひとえに神に関する認識が人間に欠如していることに起因するのではないか。神を知らない者に、どうして神の前に来る面目があらうか。神を信じながら神を迫害する者に、どうして神の前に来る面目があらうか。こうした事柄は、宗教界に属する者だけの欠点ではなく、むしろあなたがたと彼らに共通するものである。人々は神を知らないまま神を信じる。心の中で神を崇めず、また恐れもしないのは、それだけが理由である。この流れの中で、自ら思い描く働きを公然と図々しく行ない、自分の要求や途方もない欲望に従って神から託された働きを行なう者さえいる。多くの者が向こう見ずに行動し、神をまったく尊ばず、自らの意志に従っている。これらの例は、人々の自分勝手な心を完全に示すものではないのか。人々の中にある、有り余るほどの欺瞞の要素を示すものではないのか。確かに、人はこの上なく聡明かもしれないが、その才能がどうして神の働きに取って代われようか。人は神の重荷に配慮するかもしれないが、あまりにも身勝手に行動してはならない。人々の行動は、本当に神のようなものだろうか。百パーセント確信できる者が存在し得るだろうか。神の証しを行ない、神の栄光を受け継ぐことは、神が例外を設けて人々を持ち上げているのである。どうして人々にそんな価値があるというのか。神の働きは始まったばかりであり、神の言葉は語られ始めたばかりである。現時点において、人々は自分のことを大丈夫だと思っているが、それは単に、自ら恥辱を招いているのではないか。人間はごくわずかししか理解していない。最も才能ある理論家でさえ、最も雄弁な演説者でさえも、神の豊かさを残らず説明することはできないのだから、あなたがたが説明できるのは、それと比べてどの程度少ないだろうか。あなたがたは、自分の価値を天より高く見積も

らず、むしろ神を愛することを求める理知的な人々よりも低い者とみなすべきである。これが、あなたがたが入るべき道である。つまり、自分のことを他の誰よりはるかに低い者だと考えなさい。あなたがたが自分のことをそれほど高い存在だとするのはなぜなのか。あなたがたが自分をそれほど高く評価するのはなぜなのか。いのちの長い道中において、あなたがたはまだ最初の数歩を進んだにすぎない。あなたがたに見えるのは神の腕だけであり、神の全体像ではない。あなたがたはまだほとんど変化していないのだから、神の働きをさらに見て、自分が入るべきものをさらに発見することが必要である。

神が人間を完全にし、その人の性質を変える中で、神の働きは決して止まらない。なぜなら、人間には欠けている部分が多すぎ、神が定めた基準にまったく達していないからである。したがって、神の目から見れば、あなたがたは永遠に生まれたての赤子であり、神を満足させる要素をほとんど備えていないと言える。なぜなら、あなたがたは神の手中にある創造物に過ぎないからである。自己満足に陥った人は、神に忌み嫌われるのではなかろうか。あなたがたがいま神を満足させられると言うのは、あなたがたの肉体の限られた観点から話すことであり、もしあなたがたがほんとうに神と比較されるならば、永遠に闘技場で打ち負かされるだろう。人間の肉は、いまだかつて勝利を味わったことがない。人間が短所を補う長所を得るには、聖霊の働きによるほかない。事実、神による無数の創造物の中で、人間は最も賤しい。人間は万物の長でありながら、サタンの策略にはまるのも、サタンの墮落へと至る無限の道に陥るのも、万物の中で人間だけである。人間は自身を支配したことがない。大半の人がサタンの汚れた地で生活し、サタンの笑い物にされている。サタンはあの手この手で人間を悩ませ、やがて人間は死にかけの状態となり、ありとあらゆる人生の浮き沈みや人の世の苦難を経験する。人間を弄んだ後、サタンは人間の運命に終止符を打つ。したがって、人間は朦朧とした混乱状態で一生を過ごし、神が人間のために用意した良き物事を一度も享受できず、それどころかサタンに傷めつけられ、ずたずたにされる。現在、人間は無気力になって熱意を失い、神の働きに留意する気がまったくない。神の働きに留意する気がないのであれば、その人の経験は永遠に断片的かつ不完全なままであり、人々の入りは永遠に空虚である。神が世に来てから数千年の間、高尚な理想を抱く人間が何人も、そして何年もの間、神により用いられ、神のために働いてきた。しかし、神の働きを知る者は極めて少なく、ほぼ皆無である。そのため、無数の人間が神のために働きを行なうと同時に、神に反抗する役割を担っている。なぜなら、人間は神から授けられた地位において、神の働

きを行なうよりも、むしろ実際には人間の働きを行なっているからである。これが働きと言えるだろうか。そのような人がどうしていのちに入れるのか。人間は神の恵みを受け取り、それを葬り去った。そのため何世代にもわたり、神の働きを行なう者には入りがほとんどない。彼らは神の知恵をあまりに理解していないので、神の働きを知ることについてまったく語らない。神に仕える者は多数いるが、そうした者は、神がいかに称揚されているかを知らないと言える。そのため、誰もが自分を神に仕立て、他人に礼拝させるようにしたのである。

神は長年にわたり創造物の中に隠れたままで、霧に包まれながら何度も春と秋を迎え、第三の天から見下ろしながら無数の昼夜を過ごし、無数の年月にわたって人間の中を歩んできた。神はすべての人の上に座し、無数の冬の間、静かに待ち続けてきた。神は誰かの前に公然と現われたことも、物音一つ立てたこともなく、何の痕跡も残さずに去り、同じく静かに戻ってくる。誰が神の素顔を認識できようか。神は人間に話しかけたことも、姿を見せたこともない。人間が神から託された働きを行なうのは、どれほど容易なことか。あらゆる物事のうち、神を知ることが最も困難であることを人々は知らない。現在、神は人間に対して語っているが、人間が神を知ったことはない。なぜなら、人間のいのちへの入りがあまりに狭く浅いからである。神の目から見ると、人間は神の前に出るのにまったく不適である。神に関する人間の理解はあまりに乏しく、神から離れすぎている。さらに、人間が神を信じる心はあまりに複雑であり、心の奥底に神の姿をまったく抱いていない。その結果、神の苦心や働きは、砂に埋もれた金のように、光を放つことができない。神にとって、そのような人たちの素質や動機、考え方は極めて忌み嫌うべきものである。人間は理解力に乏しく、鈍感になり、劣化し、退化し、極度に卑屈で、弱く、意志の力がなくなるほど何も感じないので、牛や馬と同じように導かれる必要がある。霊への入り、あるいは神の働きへの入りについて言えば、人間はそれらをまったく気に留めず、真理のために苦しむ決意がこれっぽっちもない。こうした人間が神によって完全にされるのは簡単なことではない。したがって、あなたがたがこの角度から入っていくことが、そして働きといのちへの入りを通じて神の働きを知るようになることが不可欠なのである。

働きと入ること（２）

あなたがたの働きと入りは極めて貧弱である。人間は働き方に重きを置かず、またいのちの入りについてはそれ以上にでたらめである。人間はこれらを、自分が入るべき学

びとして捉えない。ゆえに、人が経験の中で見ているのは、ほぼ空中の楼閣だけである。働きに関する限り、あなたがたはそれほど多くを要求されていないが、神により完全にされる者として、あなたがたは神の旨にいますぐ適うことができるよう、神のために働くことについての教訓を学ばなければならない。各時代を通じ、働きを行なった者は働き手ないし使徒と呼ばれ、それは神により用いられた少数の人間を指す。しかし、わたしが今日語る働きは、働き手や使徒だけを指すのではなく、むしろ神によって完全にされる者全員を指す。おそらく、多くの人間がこれにほとんど関心をもたないだろうが、入りのためには、この問題に関する真理について話をするのが最善だろう。

働きと言うと、それは神のために走り回り、あらゆる場所で説教を行ない、神のために費やすことだと人間は信じている。その考えは正しいが、あまりに一面的である。神が人間に求めているのは、自身のために走り回ることだけではない。それ以上に、この働きは霊の中において務め、与えることである。多くの兄弟姉妹は、長年経験を重ねた後でさえも、神のために働くことについて考えたことがない。なぜなら、人間が考える働きは、神が求めることと矛盾するからである。したがって、人間は働きの問題について一切関心をもたないのだが、それがまさに、人間の入りが極めて一面的であることの原因でもある。あなたがたはみな、あらゆる面でよりよく経験できるよう、神のために働くことから自身の入りを始めるべきである。これが、あなたがたが入るべきことである。働きとは、神のために走り回るのではなく、人間のいのちと生きる事柄が、神に喜びをもたらせることを指す。働きとは、人々が神への献身と神に関する認識を用いることで、神について証しを行ない、また人間を牧することを指す。これが人間の責任であり、すべての人が認識すべきことである。あなたがたの入りがあなたがたの働きであり、あなたがたは神のために働く過程で入ることを求めていると言えるだろう。神の働きを経験することは、単に神の言葉をどう飲み食いするかを知っているという意味ではなく、より重要なこととして、どうすれば神についての証しを行ない、神に仕え、人間を牧し、人間に施せられるかを知らなければならない。これが働きであり、あなたがたの入りでもある。これはすべての人が成し遂げるべきことである。神のために走り回り、あらゆる場所で説教することにだけ集中しつつ、自分の個人的経験を軽視し、霊的生活への入りを無視する者が多数いる。神に仕える者が神に反抗する者になってしまったのは、これが原因である。長年にわたり神に仕え、人間を牧してきたこれらの者たちは、単に働きや説教を行なうことを入りと考えており、自分個人の霊的经验を重要な入りと捉える者はいなかった。それどころか、彼らは聖霊の働きから引き出した啓きを、他

人に説教する資本と見なしてきた。彼らは説教するとき、重荷を背負って聖霊の働きを授かり、それによって聖霊の声を伝えている。この時、働きを行なう者は、あたかも聖霊の働きが自分個人の霊的経験となったかのように、自己満足で一杯になる。つまり、自分の述べている言葉がすべて自分自身のものであるかのように感じているのだが、その反面、自分の経験が自分で述べたほど明瞭でないかのように感じる。さらに、彼らは話をする前は、自分が何を話すのかまったく気づいていないが、彼らの中で聖霊が働くと、果てしない流れのように言葉が流れ出す。ひとたびこのようにして説教を行なうと、あなたは自分の実際の霊的背丈が考えているほど小さくないと感じる。そして聖霊があなたの中で何度か働いた時と同じように、自分はすでに霊的背丈を有していると判断し、聖霊の働きを自分自身の入り、自分そのものだ と誤解する。絶えずこのようにして経験するなら、あなたは自分の入りについて注意が緩み、気づかぬうちに怠惰になり、自分個人の入りをまったく重視しなくなる。そのため、他人を牧する時は、自分の霊的背丈と聖霊の働きを明確に区別しなければならない。そうすることで、あなたの入りはより簡単になり、あなたの経験にさらなる益がもたらされる。聖霊の働きを自分の個人的経験と捉える時、それが堕落の根源になる。そのため、自分の尽くす本分が何であろうと、自分の入りを欠かすことのできない学びと考えるべきだと、わたしは言うのである。

人が働くのは、神の旨を満足させ、神の心にかなう人々を残らず神の前に導き、人間を神のもとへ連れ出し、聖霊の働きと神の導きを人間にもたらし、よって神の働きの成果を完全なものにするためである。したがって、働きの本質を徹底的に理解することが必須なのである。神に用いられる者として、すべての人が神のために働く価値をもつ。つまり、誰もが聖霊に用いられる機会を有しているのである。しかし、認識すべき点がひとつある。すなわち、神から託された働きを行う時、人間には神に用いられる機会が与えられてきたが、人間の言うことや知っていることが、人間の霊的背丈とは限らない、ということである。あなたがたにできるのは、働きの過程で自分の欠点をよりよく知り、聖霊からのより偉大な啓きを自分のものにするだけである。そうすることで、自分の働きの過程において、よりよい入りを得られるのである。神から来る導きを自分の入りと考えるなら、そして自分にもともと備わっている何かと考えるなら、人間の霊的背丈が成長する可能性はない。聖霊が人の中で働かせる啓きは、その人が正常な状態の時に生じる。そのような時、人々は自分の受け取る啓きを、しばしば自分の実際の霊的背丈だと勘違いする。なぜなら、聖霊が啓く方法は並外れて普通のものであり、人間

にもともと備わっているものを活用するからである。人々が働きを行ない、話をする時、あるいは祈りを捧げて霊のデボーションを行なっている時、突如として真理が明瞭になることがある。しかし実際には、人間が理解したことは聖霊による啓きに過ぎず（当然、その啓きは人間の協力に結びついている）、人間の真の霊的背丈を表わすものではない。一定期間にわたる経験の中でいくつかの困難や試練に遭遇した後、人間の真の霊的背丈はこのような状況において明らかになる。その時初めて、人は自分の霊的背丈がそれほど大きくないことを知り、人間の利己心、個人的な考え、そして強欲さが一斉に現われる。こうした経験を何度か繰り返して初めて、霊の中で目覚めている人の多くが、自分が過去に経験したものは自分個人の現実でなく、聖霊による一時的な照らしであり、人間はその光を受けただけなのだと気づく。聖霊が人間を啓いて真理を理解させる時、それはしばしば明瞭かつ顕著な形で行なわれ、物事がどう生じるかと、どこに向かうかなどを説明することはない。つまり、聖霊は人間の困難をその啓示に組み入れるのではなく、むしろ直接的に真理を啓示する。人間が入りの過程で困難に遭遇し、聖霊の啓きを組み入れる時、それは人間の実験の経験となる。たとえば、ある未婚の姉妹が交わりの中で「わたしたちは栄華や富を求めず、夫婦愛の幸福も欲しいとは思わない。純粋で一途な心を神に捧げることを求めている」と述べたとしよう。その姉妹は続けて「人間は結婚すると悩み事が増え、神に対する愛の心が純粋でなくなる。心は常に家族や配偶者のことで一杯であり、その人の内なる世界ははるかに複雑になる……」と言った。彼女が語っていた時、その口から出るものは、まるで彼女が心の中で考えていることのようなだった。また、彼女の言葉は鳴り響くような力強いものであり、あたかも彼女の言うすべてのことが心の奥底から発せられ、そしてその言葉が、自分のすべてを神に捧げるという激しい願望、自分のような兄弟姉妹も同じ決意をともにしてほしいという希望であるかのようなだった。この瞬間におけるあなたの決意と感銘を受ける気持ちは、すべて聖霊の働きに由来すると言える。神の働きの方法が変化する時、あなたもまた何歳か歳を重ねている。自分の同級生や同い年の友人の全員に夫がいることを知ったり、あるいは誰々が結婚し、夫とともに都会暮らしを始め、そこで仕事を見つけたという話を聞いたりする。その友人に会うと羨望を感じ始め、彼女の全身が魅力と落ち着きに溢れていること、そして自分に話しかける時の雰囲気が国際的で、田舎者の野暮ったさがもはやまったくないことに気づく。これを見て、あなたの感情がかき乱される。あなたは長いこと神のために自分を費やし、家族も職歴もなく、多くの取り扱いに耐えてきた。しばらく前に中年になり、あたかも夢の中にいたかのように、若さはずっと以前に音もなく消え去ってしまった。現在に至ったいま、あなたはどこに落ち着くべきかを知

らない。その瞬間、あなたは理性を失ったかのように、様々な考えに囚われる。一人きりで、落ち着いて眠ることができず、一晩中目が覚めたまま横たわり、知らぬ間に、神への決意と厳かな誓いについて考えだす。そうだとすると、あなたはなぜこのような惨めな状態に陥ったのか。気づかぬうちに沈黙の涙をこぼし、心が締めつけられるような痛みを覚える。神の前に出て祈ると、神と共にいた日々、自分がいかに神と親密で、分かちがたいほど近くにいたかを思い出す。様々な光景が目の前に浮かび、あの日の誓いが耳の中で再び響き渡る。「神だけがわたしと親密な存在ではないのか」。この時点で、あなたはすでに苦しくなるほどすすり泣いている。「神よ、愛しい神よ。わたしはもう自分の心を残らずあなたに捧げました。わたしは永遠にあなたから約束を受けたいと願い、生涯揺らぐことなくあなたを愛します」。こうした激しい苦しみに苛まれて初めて、あなたは神がどれほど愛しい存在かを真に感じ取り、自分がはるか昔に自分のすべてを神に捧げたことをはっきり認識する。こうした打撃に耐えて初めて、これらの事柄に関する限り、あなたはずっと成熟し、当時の聖霊の働きが人間にはないものだったことを知る。それ以降の経験において、あなたは入りのこの側面の中で、もはや制限を受けなくなる。それはあたかも、あなたの古傷が入りにとって大いに有益だったかのようである。そうした状況に遭遇するたび、あなたはあの日流した涙をすぐに思い出す。それはあたかも、それまで離れていた神と再び結ばれたものの、神との関係が再び断ち切られ、自分と神との情緒的な愛着（正常な関係）が損なわれることを常に恐れているかのようである。これがあなたの働きであり、またあなたの入りである。したがって、あなたがたは聖霊の働きを受け取ると同時に、自分の入りをよりいっそう重視し、聖霊の働きとは何か、自分の入りとは何かを正確に見極めつつ、聖霊の働きを自分の入りに組み入れなければならない。そうすることで、あなたはより多くの点で聖霊によって完全にされ、聖霊の働きの実質があなたの中で形作られる。聖霊の働きを経験する過程において、あなたがたは聖霊と自分自身を知るようになり、そしてさらに、激しい苦しみが無数に繰り返される中で神との正常な関係を育み、あなたがたと神との関係は日を追うごとに近くなる。無数の刈り込みと精錬を経た後、あなたがたは神に対する真の愛を育む。それゆえ、苦しみ、打撃、そして苦難を恐れるべきではないと気づく必要がある。恐れるべきなのは、自分に聖霊の働きがあるだけで、入りがないことである。神の働きが終わりを迎える日、あなたがたの苦労は無に帰している。神の働きを経験したにもかかわらず、聖霊を知ることも、自分の入りを得ることもなかったのである。聖霊が人間の中で働かせる啓きは、人間の情熱を維持するためのものではなく、人間の入りのために道を開き、人間が聖霊を認識できるようにするとともに、それ以降、神を畏れて敬愛

する気持ちを育めるようにするためのものである。

働きと入ること（3）

神は人間に多くを託し、無数の方法で人間の入りについて述べてきた。しかし、人々の素質が極めて乏しいため、神の言葉の多くは根づかなかった。人間の素質が乏しいことには様々な理由がある。たとえば、人間の思考や道徳の墮落、適切な養育の欠如、人の心を強く支配する封建的迷信、人間の心の奥底に多くの不徳を宿らせている、墮落と頹廢に満ちた生活様式、そして文化的教養の習得が表面的なことなどである。国民のほぼ九十八パーセントが文化的教養に関する教育を受けておらず、またそれ以上に、より高度な文化的教育を受けた者はほとんどいない。それゆえ人々は、神や霊が何を意味するのかを基本的に知らず、封建的迷信から得た漠然として不明瞭な神のイメージしかもたない。また、数千年にわたる「民族主義の高尚な精神」が人間の心の奥に残した有害な影響、そして人々を縛って拘束する封建的思考により、人々には自由がまったくなく、大志、根気、向上意欲も完全に欠けており、消極的かつ衰退的なまま、奴隷の精神状態に囚われるなどしている。これらの客観的要素により、人類の観念的態度、理想、倫理、そして性質に、消えることのない不浄かつ醜惡な色調が加えられてきた。人間はテロリズムによる暗黒の世界で生活しているように思われるが、それを超越することを求める者や、理想の世界に移ろうと考える者は人類の中にいない。人間はむしろ自分の境遇に満足し、子供を産み育て、日常の雑事に奔走して励み、汗をかき、快適で幸せな家庭、夫婦の愛情、親孝行な子供たち、そして平和な人生を送って晩年を迎える喜びを夢見ている……。現在まで数十年、数千年、数万年にわたり、人々はそのようにして時間を浪費し、誰も完全な生活を創造することなく、全員がこの暗黒の世界で互いに殺し合うこと、名声や富を巡って競い合うこと、互いに陰謀を巡らすことだけに没頭している。今まで誰が神の旨を求めたというのか。神の働きに注意した者がいまだかつていたというのか。人間のあらゆる部分が闇の影響に占められており、それが人間の本性となつて久しい。そのため、神の働きを行なうのは極めて困難であり、人々は神から今日託されたことに対し、ますます配慮しなくなっている。いずれにせよ、わたしがこれらの言葉を発しても、人々は気にしないとわたしは考える。なぜなら、わたしが話していることは、数千年にわたる歴史だからである。歴史について語ることは、万人にとって明らかな事実、そしてそれ以上に不祥事を意味する。それならば、事実を反することを述べることに何の意味があるというのか。しかしまた、理知的な人たちはそれらの言葉を目にすると、目覚めて進歩しようと努めるだろうとも、わたしは信じている。人間が平和

に、そして満足して暮らし、働きを行なうと同時に、神を愛せるようになることを、わたしは願っている。神の旨はすべての人間が安らぎに入ることであり、またそれ以上に、地上全体を神の栄光で満たすことが神の大いなる願いである。人間が忘れ去られて目覚めていないこと、そしてサタンによりひどく墮落させられたため、人間らしさをもはやもたないことは、ただただ残念である。このように、人間の思考、倫理、および教育は重要な繋がりを形成しており、文化的教養の訓練と合わせてもう一つの繋がりを形成している。それは人間の文化的素質を向上させ、精神的姿勢を変化させるものである。

実のところ、人間に対する神の要求はそれほど高くないが、人々の素質と神が要求する基準の差が極めて大きく、大半の人は顔を上げて神の要求を仰ぎ見るだけで、それを満たす能力がない。人間の生来の資質と、生まれてから身につけるようになった物事は、神の要求を満たすには到底不十分である。しかし、単にこの点を認識だけでは、確実な解決策にはならない。遠方に水があっても、その水で当面の喉の渴きは癒やせないのである。自分が塵にも劣ることを知っていたとしても、神の心を満たそうという決意がなく、ましてや進んだ道によって神の要求を満たそうとすることもなければ、そのような認識に何の価値があるというのか。それは、竹の籠で水を汲むような、まったく無駄なことではないのか。わたしが話していることの要点は入りに関するものであり、これが主題である。

人間による入りの過程において、生活は常に退屈であり、祈りや神の言葉の飲み食い、あるいは集会の開催など、霊的生活の単調な要素で満たされている。そのため、人々は神への信仰が何も楽しみをもたらしと絶えず感じる。そうした霊的活動は常に人間本来の性質に基づいて行なわれるが、その性質はサタンにより墮落させられている。人間は聖霊の啓きを時折授かることができるものの、人間本来の考え、性質、生活様式、慣習が依然として内部に根づいているので、人間の本性は変わらないままである。人々が行なう迷信的な行為は、神が最も忌み嫌うものである。しかし多くの人は、そうした迷信的行為が神によって定められたものだと考え、それを捨て去ることができず、今日に至っても完全に捨てられずにいる。若者が手配する婚礼の宴、嫁入り道具、祝儀、およびご馳走や、それと同様に祝われる慶事、継承されてきた古代の風習、死者のために行なわれる無意味な迷信的行為や葬式などは、それにも増して神が忌み嫌うものである。礼拝日（宗教界が守っている安息日を含む）でさえ、神にとって忌み嫌うべきものである。それにも増して、神は人間同士の社交関係や世俗的な付き合いを嫌悪し拒絶する。誰もが知っている春節やクリスマスは、神が定めたものではなく、ましてや二行連

句、爆竹、灯籠、聖餐、クリスマスのプレゼントや催しなど、これらの祝日で用いられる玩具や装飾は、人間の心にある偶像ではないのか。安息日にパンを割くことや、ぶどう酒、亜麻布の衣服などは、それにも増して偶像である。龍擡頭、龍舟節、中秋節、臘八節、新年などといった、中国で一般的な伝統的祭日、そして復活祭、洗礼日、クリスマスなどの宗教的祭日は、どれも正当化しようのない祭日だが、昔から現在に至るまで、大勢の人によって制定され、受け継がれてきている。これらの祭日が現在まで受け継がれてきたのは、人間の豊かな想像力と巧妙な観念の賜物である。そうした祭日に欠点などないように思われるが、実際には人間に対するサタンの策略である。その地にサタンがはびこっていればいるほど、またその地が廃れて後進的であればあるほど、そこには封建的風習が一層深く根ざしている。そうした物事は人間を堅く縛り、そのために身動きする余地がまったくない。宗教界の祭祀の多くが、高い独創性を示し、神の働きへの架け橋を築いているように思われるが、それらは実のところサタンが人々を拘束し、神を知るようになることを妨げる、目に見えない紐であり、いずれもサタンの狡猾な策謀である。事実、神の働きのある段階が完了すると、神はすでにその時代の道具や様式を跡形もなく破壊し終えている。しかし「敬虔な信者」は、そうした有形の物体を崇拜し続ける。その一方で、彼らは神のもつものを心の奥へしまい込み、それ以上学ばず、神への愛で満ち溢れているかのような様子でいるが、実際にははるか以前に神を家から追い出し、卓上にサタンを据えて崇めている。人々はイエスの肖像、十字架、マリア、イエスの洗礼、最後の晩餐などを天の主として尊びつつ、「主よ、天なる父よ」と繰り返し呼び続ける。これはすべて冗談ではないのか。現在に至るまで、人類のあいだで受け継がれてきた同様の文言や実践は、神にとって憎むべきものである。それらは神の前途を大いに阻み、そしてさらに、人間の入りに巨大な障害をもたらす。サタンが人間を墮落させた程度を脇に置いても、人々の内面はウィットネス・リー（李常受）の掟やローレンスの経験、ウォッチマン・ニー（倪柝聲）の調査、そしてパウロの働きのような物事で満たされている。神が人間に働きを行なう術は一切ない。なぜなら、人々の内面には個人主義、掟、規則、規制、制度などが多過ぎるからである。人々がもつ封建的迷信の傾向に加え、そうした物事は人間を捕らえて食い尽くしてきた。それはあたかも、人々の考えが、とある寓話を極彩色で物語る、興味深い映画であるかのようなものである。想像上の生き物が雲に乗っているその寓話は極めて独創的であるために、人々は驚き、茫然として言葉を失う。実のところ、神が来て今日行なう働きは、主として人間の迷信的な特質を取り扱い、一掃し、その心構えを完全に变化させることである。神の働きが今日まで続いたのは、人間が何世代にもわたって受け継いできた遺産のためではない。そ

の働きは、靈的偉人の遺産を継承する必要も、他の時代に神が行なった代表的な働きを受け継ぐ必要もなく、神が自ら開始し、完了させるものである。人間はそうした物事に一切関わる必要がない。現在の神は別の方法で語り、働きを行なう。それならば、なぜ人間が自ら苦勞しなければならないのか。人間が自分たちの「祖先」の遺産を受け継ぎながら、この流れの中で今日の道を歩んだ場合、終着点にたどり着くことはないだろう。神は人間界の年月や日々を憎悪するのと同じく、人間が有するこの独自の行動形態を大いに忌み嫌っている。

人間の性質を変化させる最善の策は、人々の心の奥深くにある、酷く毒された部分を回復させ、人々が考え方や倫理の変化を始められるようにすることである。まず何より、神がそうした宗教的な儀式や活動、そして年月や祭祀を憎んでいることを、人々は明瞭に知る必要がある。人々はそうした封建的思考の束縛から解放され、自分に深く根ざした迷信的傾向を跡形もなく一掃する必要がある。これらのことはすべて人間の入りに含まれるものである。あなたがたは、神が俗世から人間を導き出すのはなぜか、規則や規制から遠ざけるのはなぜかを理解する必要がある。これが、あなたがたが入る門である。これらの事柄はあなたがたの靈的経験と無関係でありながら、あなたがたの入りを妨げ、神を知ることを阻む最大の障害である。それらは人々を捕らえる網になる。多くの者が聖書を読み過ぎており、無数の聖句を暗唱することさえできる。今日の入りの中で、人々は無意識のうちに、あたかも神の働きの現段階の基礎が聖書であり、その根源が聖書であるかのように、聖書を用いて神の働きを測ろうとする。神の働きが聖書と一致していれば、人々はその働きを強く支持し、新たに神を尊ぶ。神の働きが聖書と一致していなければ、人々は不安のあまり汗が噴き出し、必死で神の働きの根拠を聖書から探し出そうとする。神の働きについて聖書に記載がなければ、人々は神を無視する。今日における神の働きに関する限り、大半の人がそれを注意深く慎重に受け入れ、選択した上で服従し、知ることには無関心だと言える。従来のものである物事について言えば、人々はその半分を固持し、もう半分を捨てる。これが入りと言えるのか。人々は他人の書物を宝とし、神の国の門を開ける黄金の鍵として扱いながら、神が今日要求していることに一切関心を示さない。その上、多数の「見識ある専門家」が、神の言葉を左手に、他人の「名著」を右手にもっているが、それはまるで、神による今日の言葉が正しいことを完全に証明すべく、その根拠をそれらの名著の中に見出そうとしているかのようなものである。彼らはまた、あたかもそれが仕事であるかのように、名著と組み合わせることで神の言葉を他人に解説しさえする。実のところ、現在における最先端かつ前例のない科学的業

績（すなわち神の働き、神の言葉、いのちに入る道）を高く評価したことがない「科学研究者」が、人類の中に多数存在する。そのため、人々はみな「独立独歩」し、自分の雄弁さに頼って至るところで「説教」をして、「神の評判」を誇示している。その一方で、彼ら自身の入りは危うくなり、創世から現時点までがかけ離れているのと同じく、神の要求からかけ離れた所にいる。神の働きを行なうのは、どれほど容易なことか。人々はすでに自分の半分を過去に残し、残りの半分を現在に持ち込むとともに、半分をサタンに託し、現在に持ち込まれた半分を神に捧げようと決意したかのようである。それはあたかも、そうすることが自分の良心を癒やし、ある種の快適さを感じさせる術であるかのようである。人々の内面世界は極めて陰険であり、明日だけでなく過去をも失うことを恐れ、サタンに背くこと、そして存在するかどうかともわからない今日の神に背くことを強く恐れている。人々は自分自身の思考と倫理を正しく発達させることに失敗したので、並外れて識別力に欠けており、現在の働きが神のものであるかどうかを見極めることがまったくできない。それはおそらく、人々の封建的かつ迷信的な考えが極めて深く、そのために迷信と真理、神と偶像を長い間同類として扱い、区別する気にならなかったことが原因であり、どれほど頭を悩ませても明確に区別できないようである。人間が道を歩むのを止め、それ以上前進しなくなったのはこのためである。こうした問題はどれも、人々に正しい観念的教育が欠如していることに起因しており、それは人間の入りを大いに難しくする。その結果、人々は真の神の働きにまったく興味を抱かず、人間（たとえば人間が偉人とみなす者など）の働きには、あたかもそれに烙印を押されたかのようにあくまで固執する^[1]。これらは人間が入るべき最新の問題ではないのか。

脚注

1. 「あくまで固執する」は嘲笑する意味で用いられている。この語は、人が頑固で手に負えず、時代遅れの物事にしがみつき、それを手放そうとしないことを指している。

働きと入ること（4）

人が聖霊の働きに従って本当に真理へ入れるなら、その人のいのちは春の雨後のタケノコのごとく急速に成長する。大半の人が現在有する霊的背丈から判断すると、人は誰もいのちを重要視しておらず、それどころか一見取るに足らない事柄に重点を置いている。さもないと、彼らはあちこちへ突進し、どの方向に行くべきか知らないまま、ましてや誰のためかもわからないまま、目的もなく、焦点を絞らず無作為に働いている。彼らはただ「謙虚に身を潜めている」だけである。実のところ、終わりの日に対する神

の意図について何かを知っている人は、あなたがたの中にほとんどいない。あなたがたのうち、神の足跡を知る者はほぼ皆無だが、なお悪いことに、神の最終的な偉業が何になるかを知る者はいない。しかし誰もが、あたかも勝ち誇る時を期待して筋肉に力を含め、戦いに備える^[1]かのごとく、堅忍不拔の精神を通じて他人の懲らしめと取り扱いを受けている。人々のあいだで見られるこうした「奇妙な光景」について、わたしは何の説明もするつもりはないが、あなたがた全員が理解しなければならない点がある。現在、ほとんどの人は異常な状態^[2]に向かって進んでおり、入りへの歩みの中で袋小路^{3]}へと行進している。それが人の待ち焦がれる、人間界の外にある理想郷だと考え、自由の領域だと信じる者が数多くいるかもしれない。しかし実際は、そうではない。あるいは、人々はすでに道に迷ったとすることができるだろう。しかし、人々が何をしているかに関わらず、わたしはやはり、人が入るべきものは何かについて話したい。大衆の長所と欠点がこの話の主題ではない。あなたがた兄弟姉妹の全員がわたしの言葉を正しく受け取ることができ、わたしの意図を誤解しないことをわたしは望む。

神は中国本土、つまり香港や台湾の同胞が言うところの「内地」において受肉した。神が天から地上に来た時、天地の誰もそれに気づかなかった。これが、神が隠れて戻る本当の意味だからである。神は長い間、肉において働き、生活してきたが、誰もそれに気づかなかった。今日に至ってさえ、誰もそのことに気づいていない。おそらく、これは永遠に謎のままだろう。神が今回肉において来たことは、誰一人気づけることではない。聖霊の働きの影響がいかに大規模で強力だとしても、神はいつも平然としており、決して何もさらけ出さない。神の働きのこの段階は、天の領域で行なわれているも同然だと言うことができる。そのことは、目が見える全員にとって明白なのだが、誰もそれに気づかない。神がこの段階の働きを終える時、全人類がそれまでの態度を捨て去り^[4]、長い夢から目覚める。かつて神が、「今回肉において来たのは、虎のねぐらに落ちるようなものだ」と言ったことをわたしは覚えている。これが意味するのは、今回の神の働きにおいて神は肉となり、そしてさらに、赤い大きな竜の住み家で生まれるので、今回地上へ来たことで、神は以前にも増して非常な危険に直面するということである。神が直面するのはナイフと銃、そしてこん棒である。神が直面するのは試みである。神が直面するのは殺意に満ちた顔つきをしている群衆である。神は今すぐにも殺される危険を冒している。神は怒りを携えてきた。しかし、神は完全化の働きを行なうために来た。つまり、贖いの働きの後続く自身の働きの第二部を行なうために来たのである。この段階の働きのために、神は精一杯考え、配慮し、考え得るすべての手段を用いて試み

の攻撃を避けており、謙虚に身を潜め、決して自身の身分を誇示しない。イエスは人間を十字架から救うにあたり、ただ贖いの働きを完成させていただきで、完全化の働きはしていなかった。ゆえに、神の働きは半分しか行なわれておらず、贖いの働きを終えることは神の計画全体の半分でしかなかった。まもなく新しい時代が始まり、古い時代が遠ざかろうとする中、父なる神は働きの第二部を検討し始め、そのための準備を開始した。過去において、この終わりの日の受肉は明確に預言されず、そのため今回神が肉において来たことについて、その隠匿性が増す土台となった。夜が明けるころ、神は大衆に知られることなく地上に来て、肉における生活を始めた。人々はこの到来の瞬間に気づかなかった。みなぐっすり眠っていたかもしれないし、注意深く目を覚ましていた多くの人が待っていたかもしれない。そして多くの人が天の神に無言で祈っていたかもしれない。しかし、これら多くの人の中に、神がすでに地上へ到着していることを知る者は一人としていなかった。神は自身の働きをより円滑に実行し、よりよい結果を達成するために、このようにして働きを行なったのであり、それはさらなる試みの機先を制するためでもあった。人が春の眠りから覚める時、神の働きはそのずっと前に終わっており、神は地上を歩き回って逗留する生活に終止符を打ち、旅立つだろう。神の働きは、神が自ら行動し、語ることを必要としており、人に邪魔する術はないので、神は地上に来て自分で働きを行なうために、極度の苦難に耐えてきた。人が神に代わってその働きを行なうことはできない。そのため、神は恵みの時代よりも数千倍大きな危険をものともせず、自分の働きを行なうために赤い大きな竜が住むところに降りてきて、貧困に陥ったこの人々の一団、糞土にまみれたこの人々の一団を贖うべく、思考と配慮のすべてを費やす。たとえ誰も神の存在について知らなくても、神は悩まない。そのほうが大いに働きのためになるからである。誰もが極度に凶悪かつ邪悪であることを考えると、そのような人がどうして神の存在に耐えられるだろうか。そのため、神は常に無言で地上に来るのである。人が最悪なほど残酷になったとしても、神はそれをまったく苦にせず、天なる父から託されたより大きな使命を果たすべく、なすべき働きを続けるだけである。あなたがたの誰が神の素晴らしさに気づいているのか。父なる神の重荷に対し、誰が父の子以上に配慮を示しているのか。父なる神の旨を誰が理解できるというのか。天にいます父なる神の霊はしばしば悩まされ、地上の神の子は心が裂けるほど心配しつつ、父なる神の旨のために絶えず祈りを捧げる。子に対する父なる神の愛を知る者がいるというのか。最愛の子が父なる神を恋しく思う心を知る者がいるというのか。両者は天地の間に引き裂かれ、絶えず遠くから互いの姿を見つめており、霊において互いに付き従っている。ああ、人類よ。あなたがたはいつ神の心を思いやるのか。いつ神の意図を

理解するのか。父と子は絶えず互いを頼ってきた。それならば、なぜ彼らは別れていて、一人は天に、一人は地上にいるのだろうか。子が父を愛するように、父は子を愛している。それではなぜ、父はそのように深く苦しく子を切望しながら待たねばならないのか。彼らは長い間離れていたわけではないかもしれないが、父が苦しく切望しながら何昼夜にわたって待ち焦がれてきたか、愛しい子がすぐに戻ってくることをどのくらいのあいだ切望してきたか、知る者はいない。父は注視し、静かに座り、そして待つ。父が行なうことはどれも、愛する我が子がすぐに戻ってくるためのものである。息子は地の果てまでさまよい歩いた。いつになったら二人は再会するのか。ひとたび再会すれば二人は永遠に一緒にいるはずだが、どうして父は何千昼夜もの別離、すなわち一人は天に、もう一人は地上にいることに耐えることができるのか。地上における数十年は、天における数千年に感じられる。どうして父なる神が心配しないでいられよう。神は地上に来る時、人と同じく人間世界の浮き沈みを無数に経験する。神には罪がないのに、なぜ人間と同じ苦しみを味わわなければならないのか。父なる神が子を熱心に切望するのも驚くには当たらない。神の心を誰が理解できようか。神は人に多くを与えすぎる。どうしたら人は神の心に十分報いることができるだろう。しかし、人が神に与えるものは少なすぎる。したがって、神はどうして心配しないでいられようか。

人間の中で、神の差し迫った心理を理解している者はほとんどいない。人間の素質があまりに劣り、霊が極めて鈍感なので、誰一人として神が何をしているかに気をつけることも、注意を払うこともしていないからである。そのため、人の野蛮な性質が今にも突出するとでもいうように、神は人について絶えず不安を覚えている。そのことから、神の地上への到来は極めて大きな試みを伴っていることが、よりいっそう明確にわかる。しかし、神は人々の一団を完全にすべく、栄光に満ち溢れ、人に何も隠すことなく、すべての意図を告げた。神はこの一団を完全にしようと強く決心してきた。従って、いかなる困難や試みが来ようと、神は目をそらしてそのすべてを無視する。神は、いつか自分が栄光を得るようになった時、人は神を知ると強く信じて、また、人が自分によって完全にされた時、神の心をすべて理解するだろうと信じて、静かに自分の働きを行なう。目下のところ、神を試みたり、誤解したり、責めたりする人々がいるだろう。神はそうしたものを何一つ気にしない。神が栄光の中に降り立つ時、人々はみな、神が行なうすべてのことは人類の幸福のためだと理解し、また誰もが、神が行なうすべてのことは、人類がよりよく生存できるようにするためだと理解するだろう。神は試みにとともに到来し、また威厳と怒りも伴って来る。人のもとを去る時、神はずっと以前に栄光を

自分のものにしており、栄光と戻る喜びに満ち溢れて去っていくだろう。地上で働きを行なう神は、人々がどれほど神を拒絶しても物事を気にかけない。ひたすら自分の働きを行なうだけである。神の天地創造は何千年も前のことである。神は地上に来て計り知れない量の働きを行ない、人間世界の拒絶や中傷を完全に経験した。誰も神の到着を歓迎しない。神は冷たく迎えられるのである。この数千年にわたる苦難の過程で、人の行動はかなり前から骨の髄まで神を傷つけてきた。神はもはや人々の反逆には注意を払わず、その代わりに人を変えて清めるもう一つの計画を立てた。愚弄、中傷、迫害、苦難、磔刑の苦しみ、人による排斥などは、神が受肉してから経験したことだが、神はこれらを十分に味わった。また人間世界の苦難について言えば、受肉した神はそれらのすべてに徹底的に苦しんだ。天にいます父なる神の霊は、ずっと以前からこのような光景は耐えがたいと思い、顔をそらして目を閉じながら、愛する子の戻りを待った。神が望むのは、人類が耳を傾けて従い、神の肉体の前でこの上ない恥ずかしさを感じ、神に逆らうのをやめることだけである。神が望むのは、人類が神の存在を信じられるようになることだけである。神があまりに大きな代価を支払ってきたのに、人は呑気に構えており^[5]、神の働きをこれっぽっちも心に留めていないので、神はかなり前から人により大きな要求をするのをやめたのである。

わたしが今日神の働きについて述べていることには、「根拠のない馬鹿馬鹿しさ」^[6]が大量に含まれているかもしれないが、それにもかかわらず、人の入りと深く関係している。わたしは働きについて話し、それから入りについて話しているが、どちらの側面も等しく不可欠なものであり、結びつけることでさらに人のいのちのためになる。これら二つの側面は互いに補完し合い^[7]、大いに有益であり、人々が神の旨をよりよく理解できるようにするとともに、人々と神との意思疎通を可能にする。働きに関する今日の話を通じ、人類の神との関係はさらに改善され、相互理解は深まり、人は神の重荷をよりいっそう考慮し、それを気遣えるようになる。人は神の感じていることを感じるようになり、神によって変えられるとさらに確信し、神の再来を待望する。今日、人に対する神の唯一の要求は、神を愛する人の姿を生きることであり、それによって神の英知の結晶体の光が闇の時代に閃きわたり、人の生が神の働きに光り輝く一ページを残し、世界の東方で永久に輝き、世界から注目を集め、すべての人の称賛を受けるようにすることである。これは間違いなく、神を愛する現代の人々にとってよりよい入りである。

脚注

1. 「筋肉に力を込め、戦いに備える」は嘲笑する意味で用いられている。

2. 「異常な状態」は、人々の入りが常軌を逸しており、その経験が一方的であることを示している。

3. 「袋小路」は、人々の歩む道が神の旨と正反対であることを示している。

4. 「それまでの態度を捨て去る」は、ひとたび神を知るようになった人々の、神についての観念や考えがどのように変化するかを指している。

5. 「呑気に構えており」は、人々が神の働きに無関心で、重要視していないことを示している。

6. 「根拠のない馬鹿馬鹿しさ」は、人々が神の語る言葉の根拠を把握できず、神が何について話しているのかわからないことを意味している。この語句は皮肉交じりに使われている。

7. 「互いに補完し合い」は、交わりにおいて「働き」と「入り」が結合すれば、神に関するわたしたちの認識にとって非常に有益となることを示している。

働きと入ること（5）

現在、あなたがたはみな、誰もがそれぞれ自由な世界で生きていけるように、神が人間を人生の正しい道へと導いていること、もう一つの時代への次なる一步を踏み出すよう人間を導いていること、この暗く古い時代を超えるように人間を肉の外へ導き、闇の勢力の抑圧とサタンの影響から遠ざけていることを知っている。美しい明日のため、また人々が明日にはより大胆に歩めるように、神の霊は人間のためにあらゆることを計画している。また、人間がさらなる喜びを得られるよう、神は肉における自身の努力のすべてを、人間の前途を整えることに費やし、人間が待ち望む日の訪れを早めようとしている。あなたがたがみな、この美しい瞬間を大切にしよう願う。神と共にあるのは容易なことではない。あなたがたは神を認識したことがないものの、すでに長いこと神と共にある。誰もがこの美しく、それでいて束の間の日々を永遠に覚えていられ、その日々を地上における大切な財産にできるよう願う。神の働きはずっと以前から人間に明かされてきたが、人々の心は複雑すぎるので、あるいはそれに一切関心を抱かないので、神の働きは、依然としてその元来の基盤で停止したままである。人間の考え、観念、そして心構えは、旧態依然としているように思われ、多くの人の心構えは古代の原始人のものと類似しており、ほんの少しも変化していない。その結果、人々はいまだに困惑し、神が行なう働きについて明瞭に理解していない。また自分たちが何をしているのか、

何に入るべきかについては、それにも増して明瞭に理解していない。こうしたことは神の働きに甚大な困難を招き、人々のいのちが前進することを阻む。自身の本質と劣った素質のために、人間は基本的に神の働きを把握できず、それらのことを決して重要なものとして扱わない。あなたがたが自分のいのちの前進を望むのであれば、自分の生活の隅々に至るまで留意することから始め、いのちへの入りを管理できるように、その一つひとつを把握しなければならない。また、あなたがたの一人ひとりが心を完全に変化させ、心の空虚さ、そして単調で退屈な生活という、あなたがたを悩ませる問題を解決しなければならない。このようにして、あなたがたはそれぞれ徹底的に一新され、高みに達して超越した自由な生活を真に享受するのである。その狙いは、あなたがた一人ひとりがいのちを得て、霊において蘇り、生物らしさを備えるようになることである。あなたがたが接する兄弟姉妹全員の中で、生き生きとして爽快な者はほとんどいない。彼らはみな、古代の猿人のようであり、単純かつ愚かであり、明らかに発達の見込がない。さらに酷いことに、わたしが接してきた兄弟姉妹は、山に住む野人のようにがさつで野蛮である。彼らは礼節を一切知らず、ましてや基本的な行儀作法など知らない。聡明かつ上品な外見をして、花のように美しく成長したのに、それでも「一風変わった」装いをする若い姉妹が数多くいる。ある姉妹の^[a]頭髪は顔面全体を覆い、その目を見ることができない。顔立ちはすっきりしていて上品だが、髪型は不気味で奇妙な感じを与え、まるで少年院の最も凶悪な収容者のようである。水中のエメラルドのように澄んで明るい彼女の眼は、服装と髪型のせいで台無しにされ、漆黒の夜に突然現われた一組の灯籠が、目も眩むような明るさで明滅しているようであり、それを見た人は恐怖に囚われる。それでいながら、その女性はわざと誰かから身を隠しているようにも思われる。わたしがその女性に会う時、彼女は誰かを殺したばかりの殺人犯のように、「現場」から逃れる方法を常に考え、見つかるのを深く恐れ、絶えず逃げ回っている。彼女はまた、何世代にもわたって奴隷にされ、他人の前で顔を上げられないアフリカの黒人^[1]のようでもある。このような一連の振る舞い、およびこうした人々の服装や身だしなみを改善するには、数ヵ月間の働きを要するだろう。

数千年にわたり、中国人は奴隷生活を送ってきたため、考え方や観念、生活、言語、振る舞い、行動が大いに制限され、少しも自由がなかった。数千年にわたる歴史は、霊を備えた活気ある人々を捕らえて疲弊させ、霊のない屍も同然にした。多くの人がサタンの肉切り包丁の下で暮らし、獣の巣のような家に住み、牛や馬と同じものを食べ、「冥界」で感覚を失い、混乱した状態で横たわっている。人々の見た目は原始人と変わら

ず、彼らの安らぐ場所は地獄のようであり、ありとあらゆるけがれた悪魔や悪霊に囲まれている。人間は外見こそ高等「動物」のように見えるが、実際にはけがれた悪魔と共に暮らしている。そうした人間を世話する者はおらず、人々はサタンが待ち伏せする中で暮らし、その網にかかり、そこから逃げ出す術をもたない。そのような人たちは、居心地のよい家で愛する者と共に暮らし、幸福で満たされた生活を送っていると言うよりも、陰府に住み、悪魔と取引し、悪霊と付き合っていると言うべきだろう。事実、人々は依然としてサタンに拘束されており、けがれた悪魔が集うところで生活し、それらけがれた悪魔に操られ、人々の寝床は屍が惰眠を貪る場所、居心地のよい巣のようである。家の中に入ると、中庭は寒く閑散とし、枯れ枝のあいだを吹き抜ける冷たい風の音が鳴っている。「居間」の戸を開ければ、その部屋は漆黒の闇であり、手を伸ばせば指が見えないほどである。扉の割れ目から微光が差し込み、そのため部屋はいっそう陰鬱になる。ねずみが時折楽しんでいるような奇妙な鳴き声を上げる。部屋の中の何もかもが、あたかも棺桶に入れられたばかりの人がかつて暮らしていた家のように、気味が悪く恐怖感を与える。部屋にある寝床や掛け布団、特徴のない小さな棚はどれも埃をかぶり、床に置いてある小さな椅子が牙を剥き、爪を立てている。そして壁には蜘蛛が巣を張っている。机の上に鏡があり、その横に木製の櫛がある。鏡に歩み寄って蠟燭を手に取り、火を点ける。そして鏡が埃で覆われていることに気づき、鏡に映った姿^[4]にある種の「化粧」が施され、墓から出て来たばかりのように見える。櫛は頭髮だらけである。それらはどれも古く質素で、死んだばかりの人が使っていたように見える。櫛を見ると、その傍らに死体が横たわっているように感じる。櫛にひっかかった髪には血が通っていないものの、死人の臭いが漂っている。戸の割れ目から冷たい風が吹き込み、それはあたかも、そこから幽霊が忍び込み、その部屋に戻って再び暮らそうとしているかのようである。その部屋には重苦しい寒さがあり、腐った屍の異臭が突然漂う。その瞬間、壁の至るところに様々な物がぶら下がり、寝床は乱れ、汚れて悪臭を放ち、隅には穀粒があり、棚は埃をかぶり、床は小枝や埃などで覆われていることに気づく。それはあたかも、歯をむき出しにして虚空を掴み、よろめきながら向かってくる死人が使っていたかのようだ。これだけでもぞっとする。その部屋には生命の形跡が一切なく、すべてが陰湿で、神の言う陰府や地獄のようである。部屋はまさに墓のようであり、塗装の施されていない棚や椅子、窓枠や戸が喪服を着て死者に黙祷を捧げているようである。人間は、この冥界で数十年、数世紀、あるいは数千年にわたって暮らし、朝早くに出かけて夜遅くに戻ってきた。鶏が鳴き声を上げるころ、その人は曙光とともに「墓」を出て、空を見上げて地面を見下ろしながら、その日の活動を始める。山に日が落ちると、疲れ

果てた身体を引きずって「墓」へ戻る。そして空腹を満たすころには、すでに日が暮れている。翌日に再び「墓」を出るための支度を終えると、燐光を放っているかのような明かりを消す。その時、月明かりの下で見えるのは、小さな塚のように随所へ広がる墳墓だけである。立ち並ぶ「墓」からは、大きくなったり小さくなったりするいびきの音が時おり聞こえてくる。誰もが横になって熟睡し、けがれた悪魔や幽霊もまた、みな安らかに眠っているようである。時おり、遠くでからすが鳴くのが聞こえる。このような夜の静寂の中、その侘しい鳴き声は、背筋を震わせ、身の毛をよだたせるのに十分である……。人々が何年にわたってそのような状況で過ごし、生まれては蘇ってきたかを誰が知ろうか。人々と幽霊が交わる人間の世界に、人がどれほど長く留まってきたかを誰が知ろうか。さらに、そうした者が何度この世に別れを告げてきたかを誰が知ろうか。この地上の地獄で、人々はあたかも何一つ不平がないかのように、幸福な生活を送っている。なぜなら、陰府での生活に長いこと慣れ親しんできたからである。それゆえ、けがれた悪魔が自分の友にして仲間であるかのように、そして人間界が悪党^[2]であるかのように、人々はけがれた悪魔が棲むこの場所に魅了される。と言うのも、人間元来の本質ははるか以前に音もなく、跡形もなく消え去っているからである。人々の外観は、どこかしらけがれた悪魔のようなところがある。またそれ以上に、人々の行動はけがれた悪魔に操作されている。現在、人間の外観はけがれた悪魔と何ら変わらない。それはあたかも、人間がけがれた悪魔から生まれたかのようなようである。さらに、人々は自分の祖先に対して極めて愛情深く、彼らのことを支持している。人間がずっと以前からサタンに酷く踏みつけられ、山に棲むゴリラのようになってしまったことを知る者はいない。彼らの血走った眼は嘆願するかのようで、その眼差しから放たれるかすかな光には、けがれた悪魔の忌まわしき悪意がある。顔は皺で覆われ、松の樹皮のようにひび割れ、口が突き出していて、あたかもサタンによって形作られたかのようなようであり、耳は中も外も垢で覆われ、背中は丸くなり、両脚は胴体を支えるのがやっとで、やせ細った腕は拍子を取るように前後に揺れる。彼らは骨と皮だけのようだが、同時に山に棲む熊のように太っている。全身が古代の猿人のような身なりと服装であり、それはまるで、これらの猿人が現代人の形態へといまだ完全に進化^[3]していないかのようなようであり、彼らは極めて遅れている。

人間は動物と隣り合って暮らし、動物と協調し、論争や口論になることはない。人間は動物の手入れや世話にうるさく、また動物は人間の生存のため、とりわけ人間の利益のために存在するのであって、動物自身に有利なことは一切なく、人間に対して完全に

、かつ徹底的に服従している。人間と動物の関係は、あらゆる面から見て緊密^[4]であり協調的^[5]である。そしてけがれた悪魔は、人間と動物の完璧な組み合わせであるかのようと思われる。したがって、地上にいる人間とけがれた悪魔はそれにも増して緊密であり引き離すことができない。たとえけがれた悪魔から離れていても、人間はそれと繋がったままにいる。その一方、けがれた悪魔は何も出し惜しみせず、持てるすべてを人間に「捧げる」。人々は日々「地獄の王宮」ではしゃぎ、「地獄の王」（人間の祖先）と浮かれ騒ぎ、それに操られているので、現在では垢を塗りたくられたようになり、また陰府で長いこと過ごしたために、「生きる者の世界」へ戻ることを望まなくなって久しい。ゆえに、人々は光を目にし、神の要求、神の特徴、そして神の働きを見たたん、取り乱して不安になり、冥界へ戻って幽霊と過ごすことをなおも切望する。人々はるか以前に神を忘れたので、それ以来常に墓場を彷徨っている。ある人と出会った時、わたしはその人に話しかけようとしたが、そこで初めて、わたしの前に立っているのがまったく人間ではないことに気づいた。その女性の髪は手入れされておらず、顔は汚れていて、歯を見せて微笑むと、どこかしら狼に似ている部分がある。この女性にも、墓から出て来たばかりで、生者の世界の人に出会った幽霊のような不自然さがあるように見受けられる。この女性は常に唇で笑顔を作ろうとしており、それは陰湿かつ邪悪に感じられる。彼女がわたしに微笑みかける時、あたかも何か言いたいことがあるものの、それを上手く言葉にできず、愚か者のように茫然とした表情をしながら、傍らに立ちつくすしかないかのようである。後ろから見ると、その女性は「中国の労働者の頼もしい姿」を代表しているようであるが、そうした時、彼女はますます忌まわしく見え、人々が話題にする伝説の古代の炎帝や黄帝^[6]、あるいは閻魔大王の末裔の像を彷彿とさせる。わたしが質問すると、その女性は黙って俯く。返事をするのに長くかかり、内気そのものの様子で答える。自分の両手を動かさずにいることができず、猫のように二本の指をしゃぶる。その時初めて、人間の手があたかもゴミの中を漁ったばかりのようであることに、わたしは気づく。ぎざぎざになった爪は変色して、本来白いものであることを忘れるほどであり、「細長い」爪は汚れで厚く覆われている。さらに嫌悪すべきは、人間の手の甲が、毛をむしられたばかりの鶏の肌を思わせることである。手のしわのほぼすべてに人間の労働の血と汗の代償が浸透し、その一本一本に塵のようなものが入り込み、「土の香り」を発しているようである。それによって、人間の苦難の精神が貴いこと、そして称賛に値することがいっそう顕著に示されているため、その苦難の精神が手のしわの一本一本に深く埋め込まれている。頭のとっぺんから爪先まで、人間が着用する衣類のうち、動物の皮らしきものは一切ない。しかし、人々がどれほど「立派」であっ

ても、その価値は実のところ狐の毛皮以下であり、クジャクの羽一本にも満たない。人々の衣料がずいぶん前から彼らを醜くしており、その外見たるや豚や犬よりも酷いからである。その女性の上半身の着衣は露出度が高く、背中が半分露出しており、鶏の腸のようなズボンをはいた両脚は、彼女の醜悪さを白日の下に曝している。ズボンは短くて細く、纏足を解かれて久しいことを誇示するためのようである。女性の足は大きく、もはや過去の社会で見られた「三寸金蓮」ではない。その女性の服は過度に西欧風であり、あまりに下品でみだらである。わたしがその女性と会う時、彼女は常にはにかみ、顔が紅潮して顔をまったく上げられない。それはあたかも、けがれた悪魔に踏みつけられ、他人の顔をそれ以上直視できないかのようである。人間の顔は塵に覆われている。この塵は空から降って不公平にも残らず人間の顔面に降りかかり、スズメの羽根のごとく醜くするようである。人間の眼もまたスズメの眼のように小さく乾いていて、輝きがない。人々が話す時、その言葉はつまりがちでとらえどころがなく、他人にとっては不快で嫌悪感を与える。それにもかかわらず、多くの人がそうした者を「国民の代表」として称賛する。これは冗談ではないのか。神は人間を変え、救い、死の墓から救出すること、そして人間が陰府や地獄で送る生活から脱出できることを望んでいる。

脚注

1. 「アフリカの黒人」とは、神に呪われ、何世代にもわたり奴隷となっている黒人を指す。
2. 「悪党」は人類の墮落を指しており、人類の中に聖い人間がいないことを意味している。
3. 「進化する」は、古代の猿人が現代人の形態へと「進化」することを指す。これは風刺的表現であり、実際には、古代の類人猿が直立歩行する人類へと移行する理論などというものは存在しない。
4. 「緊密」は嘲笑する意味で用いられている。
5. 「協調的」は嘲笑する意味で用いられている。
 - a. 原文では「彼女の」となっている。
 - b. 原文では「人間の顔」となっている。
 - c. 「炎帝」と「黄帝」は中国の最初期に教養文化を確立した神話上の皇帝。また「閻魔大王」は「地獄の王」の中国語の名称。中国語（官話）では、「炎帝と黄帝」と「

閻魔大王」はほぼ同音で発音される異義語である。

働きと入ること（6）

働きと入りは本来実地的なものであり、神の働きと人の入りを指している。人は神の本当の顔と神の働きをまったく見抜けないので、入りにこの上ない困難がもたらされてきた。終わりの日に神がどのような働きを成し遂げるのか、また肉において降臨し、人と禍福を共にするため、神が極度の恥辱に耐えてきたのはなぜか、今日に至るまで多くの人が知らずにいる。神の働きの目標から、終わりの日に対する神の計画の目的に至るまで、人間はこれらのことについて完全に闇に包まれている。さまざまな理由から、神が人に求める入りについて、人々はいつもなまぬるく曖昧^[1]であり、そのため、肉における神の働きにこの上ない困難がもたらされた。誰もが障害物になり、今日に至るまでいまだに理解していないかのように思われる。そのため、まずは神が人に行なう働きと、神の差し迫った意図について話し合うべきだと思う。その目的は、あなたがた全員を神の忠実なしもべとし、ヨブにならって、神を拒絶するくらいならむしろ死を選んであらゆる恥辱に耐える者、またペテロのように自分の存在のすべてを神に捧げ、終わりの日に神が得る、神と心を通わせる者にすることである。父なる神の心がすぐに安息を享受できるよう、兄弟姉妹たちがみな、神の天なる旨に全力を注ぎ、自分の一切を捧げ、神の家における聖なるしもべとなり、神から授けられる無限の約束を享受するように。「父なる神の旨を成就する」が、神を愛するすべての人のモットーとなるべきである。これらの言葉は人の入りの指針、人の行動を導く羅針盤として役立つべきである。これが、人がもつべき決意である。地上における神の働きを余すところなく終わらせ、肉における神の働きに協力すること、これこそが人間の本分であり、いつの日か神の働きが完了し、受肉した神が天なる父のもとへ早々と戻る中、人は喜んで別れを告げるようになるだろう。これが人の果たすべき責任ではないのか。

恵みの時代、神が第三の天に戻った時、全人類の罪を贖う神の働きは、実のところもう最後の部分に移っていた。地上に残っていたのは、イエスが担いだ十字架、イエスを包んでいた上質の亜麻布、いばらの冠、そしてイエスが着ていた緋色のローブだけだった（これらはユダヤ人がイエスを嘲笑するために使ったものである）。すなわち、イエスの磔刑の働きが大きなセンセーションを引き起こした後、物事は落ち着きを取り戻したのである。それ以降、イエスの弟子たちはイエスの働きを行ない始め、各地の教会で人々を牧養して潤した。彼らの働きの内容はすべての人に対し、悔い改め、自分の罪を

告白し、洗礼を受けるよう求めることだった。そして使徒全員がイエスの磔刑の内情、つまりそのありのままの記録を広めたので、誰もがイエスの前にひれ伏して自分の罪を告白せざるを得なかった。さらに、使徒たちは至る所に行ってイエスの話した言葉を伝えた。その時から恵みの時代の教会建設が始まったのである。その時代にイエスが行なったのは、人間の生活や天なる父の旨について語ることであったのだが、それらの語られたことや実践の多くが今日のものとかなり違っていたのは、ひとえに時代の違いのためである。しかし、本質的に両者は同じであり、どちらも神の霊の肉における働きに他ならない。この種の働きと発言は今日に至るまでずっと続いており、そのため、その類のことがいまだに今日の宗教団体で共有されており、それはまったく変わっていない。イエスの働きが完結し、諸教会がすでにイエス・キリストの正しい軌道へ乗っていた時、神はそれにもかかわらず働きの別の段階、つまり終わりの日の受肉という事柄に関する計画を始めた。人の見るところ、神の磔刑はすでに神の受肉の働きを完結させ、全人類を贖い、神がハデスへの鍵を握るようにした。誰もが神の働きは完全に成し遂げられたと考えている。だが実際のところ、神の視点から見れば、働きのほんの一部が成し遂げられたにすぎない。神が行なったのは人類を贖うことだけで、人類を征服してはおらず、ましてや人のサタンのような顔つきを変えてなどいない。そのため神は「受肉したわたしの肉は死の苦しみを経験したが、それだけがわたしの受肉の目標ではなかった。イエスはわたしの愛する子で、わたしのために十字架に釘で打ち付けられたが、わたしの働きを徹底的に完了させたわけではない。その一部を行なったに過ぎないのである」と言う。したがって、神は計画の第二弾を開始し、受肉の働きを続けたのである。神の最終的な意図は、サタンの手中から救われた人々を残らず完全にし、自分のものとすることであり、そのため、神は肉において到来するという危険を再び冒す準備をした。「受肉」という言葉の意味が指しているのは、栄光を伴わず（神の働きがまだ完了していないからである）、愛する子の身分で現われ、神が十分満足しているキリストである者、である。そのため、これは「危険をものとししない」ことだと言える。受肉した肉体にはわずかな力しかなく、極めて慎重にそれを行使しなければならない^[2]。そしてその力は天なる父の権威と正反対である。ゆえに、彼は肉の職分だけを成就し、他の働きに関わることなく、父なる神の働きとその使命を完了させるだけであって、働きの一部を完了させるに過ぎないのである。そのため、神は地上に来るや否や「キリスト」と名付けられたのであり、これがその名前に内包されている意味である。到来には試みが伴うと言われる理由は、働きの一部分だけが完了するからである。さらに、父なる神が彼を「キリスト」、また「愛する子」と呼ぶだけで、栄光のすべてを与えなかった他なら

ぬ理由は、受肉した肉体は働き的一部分を行なうために地上に来るのであって、天なる父を代表するためではなく、むしろ神に愛される子としての職分を遂行するためだからである。神の愛する子が肩に担ったすべての使命を完了させる時、父は彼に父の身分とともに、完全なる栄光を与えるだろう。これは「天の掟」だと言っていることができる。肉となった者と天なる父は異なる領域にいるので、両者は霊において互いを見つめ合うだけで、父は愛する子から目を離さないが、子は父を遠くから見ることができない。肉が行なえる機能は小さすぎ、彼は今すぐにも殺される可能性があるので、この到来は最大級の危険をはらんでいると言える。そのことは、神が愛する子を再び手放し、虎の口に押し込むのと同じである。そこで彼の命は危険に晒され、サタンがもっとも集中している場所に置かれる。そのような恐ろしい状況にあっても、神は愛する子を、穢れと不道徳に満ちた場所にいる人々の手に渡し、彼らに「成人まで育て」させる。そうすることが神の働きを適切かつ自然なものに見せる唯一の方法、父なる神の願望を残らず成就し、人類のあいだで神の働きの最終部分を完成させる唯一の方法だからである。イエスは父なる神の働きの一段階を成し遂げたに過ぎなかった。受肉した肉体によって課せられた障壁と、完成させるべき働きにおける違いのために、イエス自身は二度目となる肉への帰還があることを知らなかった。それゆえ、聖書解説者や預言者の中に、神は終わりの日に再び受肉する、つまり神は再び肉において到来し、肉における働きの第二の部分を行なうとあえてはっきり預言した者はいなかった。したがって、神がずっと前から肉の中に隠れていたことに誰も気づけなかったのである。それも無理はない。と言うのも、イエスがこの使命を受け入れたのは、彼が復活して天に昇った後のことであり、それゆえ神の二回目の受肉に関する明確な預言は存在せず、それを人間の頭脳で推し測ることはできないからである。聖書にある数多くの預言書のどこにも、このことにはっきり言及している言葉はない。しかしイエスが来て働きを行った際、乙女が子どもとともにあり、息子をもうけるという預言、つまり聖霊を通じてその子を受胎するという明確な預言がすでに存在していた。だとしても、そこには死の危険が伴うと神は言った。ならば、今日においてはそれにも増してそうではないのか。今回の受肉は恵みの時代に引き起こされた危険より何千倍も大きな危険に晒されている、と神が言うのも無理はない。神は多くの場所において、秦の地で勝利者の一団を得るだろうと預言してきた。勝利者が得られるのは世界の東方なので、神が二度目の受肉で降り立つ場所は間違いなく秦の地であり、それはまさに赤い大きな竜がとぐろを巻いているところである。その地において、神は赤い大きな竜の子孫たちを自分のものにし、それによって竜は完全に敗れ、辱められる。神は重い苦しみを背負ったこれらの人々を目覚めさせ、完全に目が覚めるま

で立ち上がらせて、彼らが霧の外へと歩み出て、赤い大きな竜を拒むようにさせるつもりである。彼らは夢から目覚め、赤い大きな竜の正体を認識するとともに、自分の心を残らず神に捧げ、闇の勢力の圧迫から身を起こし、世界の東方で立ち上がり、神の勝利の証しになれるだろう。そうすることでのみ、神は栄光を得る。ひとえにこの理由のため、神はイスラエルで終わった働きを、赤い大きな竜がとぐろを巻いている地にもたらし、地上を去ってからほぼ二千年後、恵みの時代の働きを続けるために再び肉となって来たのである。人間の肉眼で見れば、神は肉において新しい働きを開始しているように見える。しかし神の視点から見れば、恵みの時代の働きを続けているのであり、ただ数千年の時間が空き、働き場所と計画が変わっただけのことである。今日の働きにおいてその肉体が取った姿はイエスとまったく異なるように見えるが、両者は同じ本質と根源から生じたものであり、同じ源から来ている。おそらく、両者は表面上数多くの点で異なっているが、彼らの働きの内なる真実とは完全に同一である。結局、時代の違いは昼と夜のようなものである。それならば、どうして神の働きが不変のパターンを辿るだろうか。あるいは、神の働きの各段階がどうして互いを妨げられるだろうか。

イエスはユダヤ人の外見を取り、ユダヤ人に即した衣服を身に着け、ユダヤ人の食べ物食べて育った。これがイエスの普通の人としての側面である。しかし今日、受肉した肉体はアジアの民の形を取り、赤い大きな竜の国で育つ。これらのことは神の受肉の目標とまったく矛盾しない。むしろ、両者は互いを補い、神の受肉の真の意義をよりいっそう完全なものにする。受肉した肉体は「人の子」あるいは「キリスト」と呼ばれるので、今日のキリストの外見はイエス・キリストと同列には論じられない。結局、その肉は「人の子」と呼ばれ、肉体の姿である。神の働きの各段階にはかなり深い意味が含まれている。イエスが聖霊によって受胎された理由は、イエスが罪人を贖うことになっていたからである。イエスは罪があってはならなかった。しかし、最終的に罪深い肉と同じ姿にさせられ、罪人の罪を引き受けた時、イエスは初めて、神が人を罰する呪われた十字架から罪人を救った（十字架は神が人を呪い、罰するための道具である。呪いや罰と言う時、それは常に罪人を特に指している）。その目標はすべての罪人が悔い改めるようにすること、および磔刑という手段を通じ、彼らに罪を告白させることだった。つまり、神は全人類を贖うために、聖霊によって受胎される肉体として受肉し、全人類の罪を自ら引き受けたのである。これを日常の言語で言い表わすなら、彼はすべての罪人と引き替えに聖なる肉体を捧げたということになるが、そのことは、イエスが「罪の捧げ物」としてサタンの前に置かれ、それによってサタンが踏みにじった罪なき人類を

残らず神のもとに返すよう、サタンに「懇願」するのに等しいことである。そのため、この段階の贖いの働きを完成するには、聖霊による受胎が必要とされたのである。これは一つの必要条件、父なる神とサタンとの闘いにおける「平和協定」だった。そういうわけで、イエスがサタンに引き渡されて初めて、この段階の働きが完結したのである。しかし、神による贖いの働きは今日すでに比類なきものになっており、サタンには要求を行なう理由がそれ以上ないので、神は受肉するために聖霊による受胎をもはや必要としない。神は本質的に聖く、罪がないので、今回受肉した神はもはや恵みの時代のイエスではない。しかし、彼は父なる神の旨のため、父なる神の望みを成就させるため、依然として受肉している。当然ながら、そのように説明しても不合理ではないはずだ。神の受肉はある一連の規則に従わなければならないもののなか。

多くの人は聖書の中に証拠を求め、神の受肉に関する預言を見つけようと望んでいる。神がずっと以前に聖書の中で「働く」のをやめ、聖書の外に「飛び出し」、長きにわたって計画しながら人には決して話したことの無い働きを熱心かつ意欲的に行なおうとしていることを、混乱してばらばらの思考をもつ人間がどうして知ることができようか。人々はあまりにも理知が欠けている。神の性質をほんの少しだけ味わった後、完全な無頓着さで演台に登って高級な「車いす」に座り、神の働きを検証するのみならず、果てはこの世のありとあらゆることに関する仰々しいとりとめの無い話をして、神を教育し始める。多くの「老人」が老眼鏡をかけ、あご髭を撫でながら、生涯読んでいる「古い年鑑」（聖書）の黄ばんだページを開く。言葉をぼそぼそつぶやき、一見生き生きと目を輝かせながら、老人はヨハネの黙示録を開いてみたり、ダニエル書を開いてみたり、誰もがよく知っているイザヤ書を開いてみたりする。小さな文字がぎっしり詰まったページを次々とめくって見つめながら黙読し、頭脳を絶え間なく回転させている。すると突然、髭を撫でている手が止まり、それを引っ張り始める。ときどき髭のちぎれる音が聞こえる。こうした異常な行動は人を面食らわせる。「なぜそんなに力いっぱい引っ張るのか。いったい何にそれほど怒っているのか」。老人に目を戻すと、その眉は今や逆立っている。その老人の目が、カビの生えたようなページに釘付けになっている中、白くなった眉毛があたかも偶然のようだが完璧に、ガチョウの羽のごとくまぶたからきっかり二センチのところに舞い降りていた。老人は同じページに何度も戻った後、どうしようもなくさっと立ち上がり、あたかも誰かと世間話^[3]をするかのようにおしゃべりを始めるのだが、その目は年鑑に釘付けになったまま光を放っている。突然、今開いているページを覆い隠し、「別の世界」の方を向く。その動きはとても慌ただしく^[4]、

恐ろしいものなので、人々を啞然とさせそうなほどである。やがて、老人が沈黙する中、穴から出てきたネズミが、自由に動けるほど緊張がほぐれだしていたのに、老人の思わぬ動きにびっくりしてすぐさま穴に駆け戻り、煙のように消えて二度と姿を現わさない。そして今、老人の左手は一瞬止まっていた髭を撫でる上下運動を再開する。彼は本を机の上に置いて席を離れる。扉の割れ目と開いている窓から風が吹き込み、容赦なくその本を閉じたり開いたりする。この光景には言い表せない寂寥感があり、本のページが風でカサカサいう音を除いて、一切のものが沈黙に陥ったように思える。老人は両手を背に回して握り締め、部屋を行きつ戻りつしているが、立ち止まったかと思うとまた歩き出し、時々頭を振って、「おお、神よ。あなたは本当にそれをなさるのですか」と繰り返し口ごもっているように見える。また時々頷いて「おお、神よ。誰があなたの働きを押し測れるでしょう。あなたの足跡を捜すのは難しくありませんか。あなたが何の理由もなく、面倒を引き起こすようなことはなさらないと、わたしは信じています」と言う。やがて老人は眉をひそめ、じっと目をつぶり、あたかもゆっくり計算するかのようになり、恥ずかしげな顔つきになり、かなり苦しそうな表情も見せる。気の毒な老人。このように生涯を送り、これほど遅くになって「不運にも」この問題に出くわした。それについて何ができるだろう。わたしはあまりに当惑し、無力なので、何もできない。誰が彼の古い年鑑を年月とともに黄ばませたのか。誰が非情にも、彼の顔のあちらこちらを、白雪のようなあご髭と眉で覆わせたのか。それはあたかも、あご髭が彼の老いを表わしているかのようである。しかし、古い年鑑の中に神の存在を求めるほど人間が愚かになるなど、誰が知っていただろうか。古い年鑑はいったい何ページあるのか。本当に神の業のすべてがその中で正確に記録されているのか。誰があえてそれを保証するのか。しかし、人は実際、神の出現を探し求め、言葉を解剖してばらばらにする^[5]ことで神の旨を成就させようと考え、このようにしていのちに入ることを望んでいる。そうした形でいのちに入るのは、言うほど容易なことなのか。これは最も馬鹿げた、誤った理論ではないのか。あなたはこれを滑稽だと思わないのか。

脚注

- 1.「曖昧」は、人々が神の働きについて明確な識見をもっていないことを示す。
- 2.「わずかな力しかなく、極めて慎重にそれを行行使しなければならない」は、肉の困難があまりに多く、行われる働きがあまりに限られていることを示す。
- 3.「世間話」は、人々が神の働きを研究する時に見せる醜い顔の隠喩である。

4. 「慌ただしく」は、「老人」が聖書を参照する際の熱心でせっちな動きを指している。

5. 「言葉を解剖してばらばらにする」は、誤謬の中であって、言葉を子細に解剖するものの、真理を求めず、あるいは聖霊の働きを知らない専門家を揶揄するために使われている。

働きと入ること（7）

人間は、自らに欠落しているものが霊的いのちの供与と神を知る経験だけでなく、それ以上に重要な事として、自らの性質の変化であることを現在になってようやく認識した。人類の歴史や古代の文化について完全に無知であるために、人間は神の働きについても認識がない。人間は皆、心の奥深くで神を慕いうることを望む。しかし、人間の肉は過度に墮落しており、また無感覚で愚鈍なため、そのせいで神について何も認識できずにいる。今日、神が人間の元に来る目的は、人間の思想や精神、そして人間が心の中に数百万年にわたり抱いてきた神の像を変化させるために他ならない。神はこの機会を利用して、人間を完全にする。つまり、神についての人間の認識を用いて、神を知るようになる方法と神への態度を変化させ、神を知ることによって人間に輝かしい再出発を図らせ、人間の心と霊が一新され、変化されるようにする。取り扱いと鍛錬は手段であり、目的は征服と革新である。漠然とした神について人間が抱いてきた迷信的思想を払拭することが神の永遠の心意であり、それは最近になって神の喫緊の課題となった。この状況を考えるにあたり、あらゆる人が長期的な視点をもつことが望まれる。この神の喫緊した心意が早急に実現し、地上における神の働きの最終段階があますところなく完成するように、各人は経験の方法を変えなければならない。あなたがたが示すべき忠義を神に示し、最後にもう一度神の心に安らぎをもたらしなさい。この責任を回避したり、その身振りだけをしたりする兄弟姉妹が誰もいないことを願う。今回、神が受肉して来るのは、招かれてのことであり、人間の状態に的確に答えてのことである。つまり、神は人間が必要とするものを人間に授けるために来るのである。神は要するに、素質や育ちを問わず、人間が神の言葉を理解できるようにし、神の言葉から神の存在と顕現を理解し、神による人間の完全化を受け入れられるようにする。それにより、人間の思想と観念が変化し、神の本来の素顔が人間の心に深く根付くようになる。神の地上における望みはこれだけである。人間の持って生まれた本性がどれほど偉大であろうと、人間の本質がどれほど貧しかろうと、人間の過去におけるふるまいがどのようなものであろうと、

神はそうした事を考慮しない。神はただ、人間が自らの心に抱く神の印象を一新し、人類の本質を知るようになり、よって人間の思想的な観点を変化させ、神を心から待ち望むことができるようになり、神に永遠の愛慕を寄せることを願っているだけである。これが神の人間への唯一の要求である。

数千年に及ぶ古代文化や歴史の知識のせいで、人間の思考や観念、精神的視点は極めて固く閉ざされ、何も浸透させない分解不可能なものになった^[1]。人間は、あたかも神により地下牢に追放されたかのように、二度と光を見ることがない十八層地獄で生きている。封建的思想に抑圧されてきた人間はほとんど呼吸できず、息が詰まっている。反抗する力がまったくなく、ひたすら黙して耐え続けている……。義と公平のために敢えて戦ったり、立ち上がったたりする者は今まで一人もいなかった。封建的倫理による打撃と迫害の下、動物以下の生活を日々送って年を重ねるだけである。人間は神を求めて人間世界で幸福を享受しようと考えたことがない。ひからびて色あせた枯れ葉のようになるまで、人間は打ち倒されたかのである。人間は遙か昔に記憶を失い、人間の世界という陰府で絶望的に暮らし、陰府もろとも自分が滅びる最後の日の到来を待っている。待ちかねている最後の日は、あたかも人間が安らかな平和を享受する日であるかのである。封建的倫理は人間の生活を「ハデス」へと陥れ、人の抵抗力をさらに弱めている。様々な抑圧により、人間はハデスのさらに奥深いところ、神からさらに遠いところへと一歩ずつ押しやられる。それゆえ現在、人間は神にはまったく知られない存在となり、神と会うと急いで避けようとする。人間は神を心に留めず、あたかもそれまで神を知ることはなく、神に会ったこともなかったかのように、神を一人きりにして去っていく。しかし、人生の長い旅路のあいだ、神はずっと人間を待ち続けており、抑え難い怒りを人間に投げつけたことは一度もなく、人間が悔い改めて再出発するのを無言で静かに待つだけである。神は遠い昔に人間の世界へ来て、人間世界の苦難を人と分かち合った。神が人間とともに生活した年月、その存在を見出した者はいなかった。神は人間世界における卑しき惨めさに黙して耐えつつ、自らもたらした働きを行っている。父なる神の旨と人類の必要のため、神は耐え続け、人間がかつて経験したことのない苦痛を受けている。父なる神の旨と人間の必要のために、神は人間の前で黙して人間に尽くし、人間の目前で謙遜した。古代文化の知識は、神の前からこっそりと人間を連れ去り、魔王とその末裔に引き渡した。四書五経^[a]は、人間の思想と観念をもうひとつの反逆の時代へと導き、四書五経の編纂者を人間にさらに称賛させ、その結果、神について人間の持つ観念がさらに悪化した。人間の知らぬ間に、魔王は無情にも人間の心から神を排

除し、勝利の歓喜とともに自ら人間の心を占領した。その時以来、人間は醜く邪悪な魂と魔王の顔にとりつかれた。神への憎しみが人間の胸を満たし、魔王の凶悪さが日に日に人間の中に広がってゆき、ついに人間は完全に食い尽くされた。人間にはもはやほんの少しの自由もなく、魔王の呪縛から逃れる術もなくなった。その場で囚われの身となり、魔王の前で降伏し、服従するしか手がなかった。はるか昔、人の心と霊がまだ幼かったとき、魔王はそこに無神論という腫瘍の種を植え、「科学技術を学び、四つの現代化を実現せよ。この世に神などいない」といった偽りを人間に教えた。それだけでなく、魔王は「わたしたちの勤勉な労働により素晴らしい国家を建てよう」と機会あるごとに叫び、あらゆる人に、幼少時代から国のために忠実に仕える訓練をするよう要求した。人間は無意識のうちに魔王の前へと導かれ、魔王は(人類全体を掌握している神のものである功績を)躊躇なくすべて自分のものと偽った。魔王には恥の感覚が一切なかった。さらに、魔王は厚かましくも神の選民を捕らえ自分の家に引きずり戻すと、ねずみのように卓上に飛び乗り、人間に自分を神として崇拝させた。何というならず者であろうか。魔王は、「この世に神はいない。風は自然の法則に沿った変化が原因である。雨は蒸気が低温で凝結して水滴となって地表に落ちる水分である。地震は地質学的変化に起因する地表の振動である。干ばつは太陽表面の原子核工学的障害により起こる大気の乾燥のせいである。これらは自然現象である。これらのどこに神の業があるというのか」などという衝撃的なことを叫ぶ。さらには、「人間は古代の類人猿から進化したもので、現在の世界は、はるか昔に始まった一連の原始社会から進化したものである。ある国家の栄枯盛衰は、その国民の手により決まる」などという、声にすべきではないことを叫ぶ者さえいる。魔王はその背後で、人間に自分を壁に掲げさせたり、机上に置かせたりして、敬意を払って捧げ物をするようにさせている。魔王は「神はいない」と唱えると同時に、自らを神とみなす。真の神を粗野に地の果ての外へと追いやりながら、神の地位に立ち、魔王として君臨する。何と途方もなく馬鹿げたことであろうか。魔王には骨の髄まで憎悪が起こる。神と魔王は宿敵であるようで、共存は不可能である。魔王は神の駆逐を謀り、法の及ばないところを自由にうろつく^[2]。まさしく魔王である。どうして魔王の存在を容赦できようか。魔王は神の働きを阻止し、打ち砕いて台無しにする^[3]まで休むことがなく、それはあたかも最後に魚が死ぬか網が破けるかするまで、神に反抗し続けたいかのようである。魔王は故意に神に反抗し、神に迫り続ける。魔王の忌まわしい顔は完全に仮面を剥がされて久しく、今や打ちのめされてあざが^[4]、窮状にあるが、それでも神への憎悪が衰えることはなく、あたかも神を一口に呑み込むまでは自分の心に鬱積した憎しみを解放することができないかのようである。こんな神の

敵をどうして容赦できようか。魔王の根絶と完全な駆除をしなければ、人間の生涯の望みは実現できない。どうして魔王を意のままにさせておけるであろうか。人間が天日を知らず、行き詰まって愚鈍になるところまで魔王は人間を墮落させた。人間は正常な人間の理知を失った。わたしたちの存在のすべてを捧げて魔王を滅ぼし、焼き払い、将来への不安を残らず解消し、神の働きがこれまでになかった輝きにすぐに達せるようにしようではないか。この悪党どもは人間の世界に来て、それを大混乱に陥れた。悪党どもは全人類を断崖の縁へと追い詰め、そこから突き落とすことを密かに企んでいる。粉碎した死体をむさぼるつもりなのである。悪党どもは、愚かしくも大博打を打って^[5]神の計画を阻止し、神と争うことを望んでいる。それは決して容易ではない。十字架が用意されたのは、結局のところ、最も憎むべき罪に咎められている魔王のためである。神はその十字架には属さない。神はすでに悪魔にくれてやるために十字架を脇へ投げている。神は早くから勝利しており、人類の罪のためにもはや悲しみを感ぜない。しかし神は全人類に救いを授ける。

上から下まで、最初から最後まで、サタンは神の働きを乱し、神に敵対する行動を取ってきた。「古代文化遺産」や貴重な「古代文化の知識」、「道教と儒教の教え」、儒教の五経と封建的儀式に関する話が、人間を陰府に連れて行った。現代的な先進科学技術も、高度先端産業、農業、商業もどこにも見当たらない。むしろ魔王は故意に神の働きを阻害し、それに反対し破壊するために、古代の「類人猿」が広めた封建時代の儀式をひたすら強調するだけである。魔王は現在に至るまで人間を苦しめ続けるだけでなく、人間を丸ごと飲み込む^[6]ことさえ望んでいる。封建主義的な道德倫理の教えや古代文化の知識の継承が、長年にわたって人類を蝕み、大小の悪魔へと変貌させた。神を喜んで受け入れ、神の降臨を歓迎するであろう者はほとんどいない。あらゆる人間の表情は殺気に満ち、至る所で殺気が感じられる。悪魔は神をこの地から排除しようとする。神を「抹消する」ために、刀剣を持って陣を組んでいる。悪魔のものであるこの地のあらゆるところで、「神はいない」と人間は絶えず教えられ、偶像が広まり、地上の空気には吐き気を催すような紙と香を燃やす臭いが漂い、あまりに強くて窒息するほどである。それは毒蛇がとぐろを巻く時に放つ汚泥の臭いのようであり、嘔吐せずにはいられない。それに加えて、悪魔の読経の声、陰府の遠い所から来るような声がかすかに聞こえ、震えずにはいられない。虹色の偶像がこの地のあらゆる所に置かれ、この地を官能の世界へと変える。一方、魔王はその卑劣な企みが成功したかのように、邪悪に笑い続ける。この間、人間はまったく何にも気付かず、感覚がなくなり、打ち倒されて頭を垂れ

るほどまでに自分がすでに悪魔に墮落させられていることに気付かない。悪魔は神に関する一切のものを一掃し、再び神を冒瀆し暗殺したがつている。悪魔は神の働きを打ち壊し、妨害しようと決意した。どうして悪魔は神が同等の地位にあることを甘受できようか。どうして悪魔は、人間のあいだで行う地上での働きをもって、神が「邪魔する」のを許すことができようか。どうして悪魔は自分の醜惡な顔を神が暴くのを許すことができようか。どうして悪魔は自分の働きを神が妨害することを許せようか。どうして激しい怒りに包まれた悪魔が自分の地上の朝廷を神が支配することを甘受できようか。どうして悪魔が自ら敗北を認めることができようか。悪魔の醜惡な表情はそのまま露呈しており、それゆえ人間は笑うべきか泣くべきか分からなくなり、悪魔について語ることは極めて困難である。それが悪魔の本質ではなかろうか。醜い魂をもつ悪魔は、それでも自分が驚異的に美しいと信じている。この犯罪者集団が^[7]！悪魔は人間界に来て享樂にふけり、騒動を引き起こし、物事をかき乱す。そのせいで世界は移ろいやすく不安定な場所になり、人の心はろうばいと不安で一杯になっている。悪魔は人間をもてあそび、そのひどさたるや、人間の外見は非人間的な野獣のようになり、本来の聖者らしさの最後の名残りも失われた。さらに悪魔は、地上の支配権を握ることさえ望んでいる。悪魔が神の働きを妨害しているため、わずかな前進もままならない。また悪魔は銅と鋼の壁のように、人間を封じ込めている。極めて多くの罪を犯し、災難を引き起こしてきておきながら、悪魔はいまだに刑罰以外の何かを期待しているのか。悪魔と悪霊は地上を暴れ回り、神の心と丹精を込めた努力を封じ込めてきたため、浸透不可能になっている。何という大罪であろうか。どうして神が不安にならずにいられようか。どうして神が怒らずにいられようか。悪魔は神の働きに重篤な妨害や反対を引き起こしている。何と反逆的なことか。そのような大小の悪魔さえも、獅子の足元にいる野生犬のようにふるまい、邪惡な潮流に従い波乱を引き起こす。悪魔は真理を認識しつつ、故意に真理に逆らう。まさに反逆の子である。それはまるで、地獄の王が玉座に就いたので、悪魔たちは自惚れて他人を皆、侮辱するようになったかのようなのである。そのうちの何人が真理を求め、義に付き従っているのか。彼らは皆、糞の中の臭い蠅の一群の先頭に立つ豚や犬のような畜生であり、満足そうに頭を振って、あらゆる災難を起こして^[8]いる。悪魔は自分たちの地獄の王がすべての王の中で最も偉大だと信じ、自分たちが臭い蠅に過ぎないことなど知らない。それでいながら、自分が親としている豚や犬の権力を利用して神の存在を中傷する。自分たちが小蠅であるため、悪魔は自分の親がハクジラ^[9]のように大きいと信じている。彼らは極めて小さい存在であるが、自分の親が何億倍も大きな不浄な豚や犬であることに気付かない。自分の卑しさに気付かず、豚や犬の腐った臭いを

頼りにして暴れ回り、恥じることもなく、将来の世代を生み出す妄想にとらわれている。背中に緑色の羽根を付けて(これは彼らの神を信仰しているという主張を指す)、自惚れて自分の美しさと魅力を至るところで自慢するが、同時に自分の不純物を密かに人間になすりつける。さらに、あたかも虹色の羽根を使って自分の不純物を隠すことができるかのように、彼らは自分に極めて満足している。また、その手段を用いて真の神の存在を圧迫する(これは宗教界の舞台裏で起きていることを指す)。蠅の羽根がどれほど美しく魅力的であろうと、蠅そのものはつまるところ腹の中は不浄に満ち、身体は細菌に覆われた小さな生き物に過ぎないことが、どうして人間にわかるであろうか。親である豚や犬の力を借り、彼らはその野蛮さを抑えることなく地上で暴れ回る(これは神を迫害する宗教関係者が国家政府の強い支援を頼りに真の神と真理に反抗する様子を指す)。あたかもユダヤのパリサイ人の幽霊が神とともに、古巣である赤い大きな竜の国家に戻って来たかのようなのである。彼らは新たな迫害を行ない、数千年前の仕事を再開したのである。この墮落者の集団が最後には地上で滅びることは確実である。数千年が経過した後、汚れた霊はさらに狡猾で悪賢くなったようである。彼らは神の働きを密かに台無しにする術を常に考えている。狡猾で悪賢く、数千年前の悲劇を自国で再現したがつている。そのため神をあおり、神は大声で叫ぶ寸前の状態である。神は第三の天に戻って彼らを滅ぼさずにいられない。神を愛するためには、人間は神の心意、神の喜びと悲しみを把握し、神が何を嫌悪するかを理解しなくてはならない。そうすることにより、人間はさらに入っていくことができる。人間の入りが早ければ早いほど、神の心意も早く満たされる。人間が魔王を明瞭に識別すればするほど、人間はそれだけ神と近付き、それにより神の望みは実現する。

脚注

- 1.「分解不可能」は、ここでは皮肉であり、人が自分の知識、文化、精神的観点において凝り固まっていることを意味する。
- 2.「法の及ばないところを自由にうろつく」とは、悪魔が狂ったように暴れ回ることを指す。
- 3.「台無しにする」とは、悪魔の凶暴なふるまいがいかに見るに耐えがたいことであるかを指す。
- 4.「打ちのめされてあざができ」は魔王の醜い顔について述べている。
- 5.「大博打を打って」は、最後に勝つことを期待して一つのことに全財産を賭けるこ

とで、悪魔の陰険で邪悪な謀りの喩えとして、嘲笑的に用いられている。

6.「飲み込む」とは、人間のすべてを奪い尽くす魔王の凶暴な行動を指す。

7.「犯罪者集団」は「ごろつきの群れ」の同義語である。

8.「あらゆる災難を起こして」とは、悪魔的性質の者が暴動を起こし、神の働きを阻害し、反対することを指す。

9.「ハクジラ」は嘲笑的に用いられている。蠅があまりに小さくために、蠅には豚や犬でさえクジラのように大きく見える様子を比喩的に表現している。

a. 四書五経は中国における儒教の権威的な書籍である。

働きと入ること（8）

終わりの日における神の働きが行われるのは、これまでわたしが何度も述べてきたように、大いなる傷を受けた人間の心が一新されるように各人の霊を変化させ、魂を変化させるためであり、それより邪悪に深く傷ついた人間の霊を救うためである。それは人間の魂を目覚めさせ、凍えた心を温め、それらが活力を取り戻せるようにするためである。これが神の偉大な心意である。人間のいのちと経験がどれほど高尚で深淵かといった話はさておき、人間の心が目覚め、夢から醒めて、赤い大きな竜が与えた傷を十分に理解した時、神の職分の働きは完了している。神の働きが完了する日は、神を信じる正しい道へと、人間が正式に足を踏み出す日でもある。その時、神の職分は終わりを迎えている。肉にある神の働きはあますところなく完了し、人間は正式に尽くすべき本分にとりかかる。つまり、人間としての務めを行うのである。これが神の働きの諸過程である。ゆえに、このような事の認識を基礎として、あなたがたは自分が入っていく道を模索すべきである。これらはすべて、あなたがたが理解すべきことである。人間の入りは、心の深部で変化がない限り向上しない。なぜなら、神の働きは、贖われた人間、いまだ闇の力の下で生き、目覚めていない人間を、この悪魔の集会場から完全に救うことだからである。それにより、人間が数千年の罪から解放されて神に愛され、赤い大きな竜を完全に打ち倒して神の国を建て、早く神の心を安らげるようにである。また、あなたがたの胸を満たしている憎しみを遠慮することなくぶちまけ、かび臭い菌を根絶し、牛や馬同然の生活から脱出し、もはや奴隷ではなく、赤い大きな竜に意のままに踏みつけられたり支配されたりすることがなくなるためである。もはやあなたがたは、この失敗した民族のものではなく、凶悪な赤い大きな竜に属さず、赤い大きな竜に奴隷とされ

ることではない。この悪魔の巣窟は確実に神により粉碎され、あなたがたは神の傍らに立つ。あなたがたは神に属するのであり、この奴隷の帝国には属さない。神はこの暗黒社会を久しく骨の髄から忌み嫌っている。神は歯ざしりし、この邪惡な憎惡すべき老いたへびが再び立ち上がって人間を虐待しないように、へびを踏みつけたがっている。神はへびの過去の行いを許さず、へびが人間を騙すことを容赦せず、へびの遠い昔からの罪のひとつひとつに報復する。神がその諸惡の首謀者^[1]を取り逃がすことは決してなく、へびを完全に破滅させる。

数千年にわたり、この地は不浄の地であった。耐えがたいほど汚れ、悲慘に溢れている。至る所に幽霊がはびこり、欺し偽り、根拠のない言いがかりをつけ^[2]、冷酷かつ残忍であり、この幽霊の街を踏みつけて屍だらけにした。腐った屍の惡臭が地を覆い空気に充満し、そこは嚴重に守られている^[3]。誰が空の彼方の世界を見ることができようか。悪魔は人間の身体全体をがんじがらめにし、両眼を見えなくし、両唇を堅く封じる。魔王は数千年前から現在にいたるまで猛威を振るい、幽霊の街を堅固に警備しており、それはあたかも難攻不落の悪魔の城のようである。一方、警護に当たる番犬の群れが睨んでいる。番犬は神による不意打ちで完全に滅ぼされるのを深く怖れるあまり、平和と幸福の余地はない。このような幽霊の街の住民が神を見たなどということが、どうしてありえるだろうか。住民は神の優しさや愛しさを享受したことがあるのか。人間世界の物事をどのように認識しているのか。そのうちの誰が神の切なる望みを理解できるのか。肉にある神が完全に隠れたままであっても、不思議ではない。悪魔が残忍非道をはたらく暗黒社会において、眉一つ動かさずに人々を殺す魔王が、愛しく優しく聖い神の存在をどうして容認できようか。どうして魔王が神の到来に喜び喝采を送ることができようか。卑屈な者ども。彼らは恩を仇で返し、神を侮って久しく、神を虐待し、残忍を極め、神を少しも敬うことなく、強奪や略奪を行い、良心を完全に失い、良心にすっかり逆らい、純真な人々を誘惑し無分別な状態に陥れる。遠い昔の祖先とは何なのか。愛すべき指導者とは。彼らは皆、神に反抗している。その干渉により、地にある者すべてが闇と混沌に陥れられている。宗教の自由だと。市民の正当な権利と利益だと。そのようなものはどれも罪を隠蔽する手口である。誰が神の働きを受け入れたというのか。誰が神の働きのために命を捧げ、血を流したというのか。親から子へ、何世代にもわたって、奴隷とされた人間はごく平然として神を奴隷にした。これがどうして怒りを買わずにいられようか。数千年におよぶ憎しみが心に凝縮し、数千年におよぶ罪深さが心に刻み込まれている。これがどうして憎惡感を喚起せずにいられようか。神の仇を討ち、神の

敵を掃討せよ。敵が二度と蔓延ることを許してはならない。敵が意のままに災難を起こすことを許してはならない。今がその時である。人は随分前からあるだけの力を蓄え、努力の限りを尽くし、あらゆる犠牲を払ってきた。それは、この悪魔の忌まわしい顔をはぎ取り、盲目にされた人々、あらゆる苦しみと困難に耐えてきた人々が痛みから立ち上がり、この邪悪な古い悪魔に背を向けることができるようにするためである。なぜ、神の働きに対してそのような難攻不落の障害を建てるのか。なぜ神の民を欺くために様々な謀りを用いるのか。真の自由と正当な権利と利益はどこにあるのか。公平さはどこにあるのか。安らぎはどこにあるのか。温もりはどこにあるのか。なぜ偽りに満ちた謀りを用いて神の民を欺すのか。なぜ力づくで神が来るのを抑制するのか。なぜ神が創った地の上を神に自由に移動させないのか。なぜ神が枕するところもなくなるまで神を追うのか。人間の温もりはどこにあるのか。人間の歓迎はどこにあるのか。なぜそれほどまで絶望的な思慕を神に引き起こすのか。なぜ神に何度も叫ばせるのか。なぜ神にその愛する子について憂わせるのか。この暗黒社会において、なぜ哀れな番犬は神自らが創った世界を神に自由に行き来させないのか。なぜ痛みと苦しみの中に生きる人間は理解しないのか。あなたがたのために、神は大いなる苦痛を受け、大いなる苦しみをもって神の愛する子、その骨肉をあなたがたに与えた。それならば、なぜあなたがたは依然として盲目を向けるのか。皆が見守る中、神の到来を拒絶し、神の友好を拒否している。なぜそれほどまでに非良心的なのか。このような暗黒社会の不正を進んで受けるつもりなのか。自分の腹を数千年におよぶ敵意で満たす代わりに、なぜ魔王の「糞」で自分自身を満たすのか。

神の働きに対する障害は、どれほど大きいのか。誰か知っているのか。深く根ざした迷信的偏見に囚われている人々の中で、誰が神の素顔を知ることができようか。これほどまでに浅薄かつ愚かな時代遅れの文化的知識で、どうして神の語る言葉を完全に理解できようか。直接顔を合わせて語られ、口移しに糧を与えられたとしても、どうして理解できようか。時には、神の言葉はまったく聞き入れられないかのようである。人は少しも反応せず、首を縦に振るが何も理解しない。これがどうして懸念されないでいられようか。この「かけ離れた^[4]古代の文化の歴史と知識」により、このように無価値な人の集団が形成された。この古代文化は、貴重な遺産とされているが、屑の山である。それは遠い昔に永遠の恥辱となり、語る価値はない。そのために人は神に反抗する手口や技術を覚え、国家教育の「秩序だった穏やかな指導」^[5]により、人はさらに神に反抗的になった。神の働きは各部分が極めて困難であり、地上における神の働きの各過程は神

にとって苦悩の多いものであった。地上での神の働きは、どれほど困難なことか。地上における神の働きの各過程には大きな困難が伴う。人間の弱さ、欠点、幼稚さ、無知、そして人間のすべてのために、神は入念な計画を立て、慎重に考慮する。人間は、誰も敢えて餌をやったり挑発したりしない張り子の虎のようである。少しでも触れると噛み付くか、あるいは倒れて道を失う。それはまた、少しでも集中力を失うと以前の病気が再発し、そうでなければ神を無視したり、親である豚や犬の元へ逃げ戻り、身体の不浄な物事に耽溺したりするようである。何と大きな障害であろうか。神の働きのほぼ全過程において、神は試みを受け、ほぼ全過程において大きな危険を冒す。神の言葉は誠実かつ正直であり、悪意がないが、誰がそれを進んで受け入れるというのか。誰が進んで完全に従おうというのか。そのことが神の心を傷つける。神は人間のために日夜精力的に努力し、人間のいのちについて懸念に苛まれ、人間の弱さに同情している。働きの各過程において、また述べる言葉のそれぞれについて、神は数多くの紆余曲折に見舞われてきた。神は常に苦境の中にあり、人間の弱さ、不従順さ、幼稚さ、脆さを常に幾度となく考えている。誰がそのことを知っていたのか。神は誰に打ち明けることができるのか。誰が理解できるのか。神は人間の罪や、気骨のなさ、意気地のなさを常に忌み嫌い、人間の脆弱さを常に懸念し、人間の前途を熟考している。神は人間の言動を監督していながら、常に憐れみと怒りで満たされ、そのようなことが少しでもあると神の心は必ず痛む。無邪気な人々は、結局のところ麻痺してしまった。なぜ神は必ず人間に困難を与えなければならないのか。弱い人間は忍耐力が完全に欠如している。なぜ神は常に人間に対して衰えることのない怒りを抱いていなければならないのか。弱く無力な人間には活力がまったくない。なぜ神は人間の不従順さを常に叱らなければならないのか。誰が天の神の脅威に耐えられるのか。結局、人間は脆く、絶望的苦境にあり、人間がゆっくりと反省するように、神は自らの怒りを心の奥深くへと押し込んだ。しかし、深刻な困難にある人間は、神の心意を少しも正しく認識しない。人間は老魔王に踏みつけられているが、それにまったく気付かず、常に神に対抗するか、神に対して熱くなることも冷めることもない。神は無数の言葉を述べたが、誰がそれを真剣に受け止めたであろうか。人間は神の言葉を理解しないが、それでも狼狽することなく、また切望することもなく、老悪魔の実質を本当に知るには至っていない。人間は陰府、地獄で生きているが、海底の宮で生きていると考えている。赤い大きな竜に迫害されているが、自分はその国から「恩恵を受けている」^[6]と考えている。悪魔に嘲笑されているが、自分が肉の至高の技巧を享受していると考えている。何と汚れた卑しい恥知らずの一団であることか。人間は不幸に遭遇しているが、それに気付かず、この暗黒社会において、次々と災

難に見舞われる^[7]が、それに目覚めることがない。いつになったら人間は自分へのいたわりと奴隷的性質を捨て去るのか。なぜ人間は神の心に対してそれほどまで冷淡なのか。黙ってこの弾圧と苦難を容認するのか。闇を光に変えることができる日を望まないのか。義と真理への不正を再び取り除きたいとは思わないのか。人々が真理を捨て、事実を歪めるのを見て何もしないつもりなのか。この不当な処遇に耐え続けることに満足しているのか。奴隷になるつもりなのか。この亡国の奴隷とともに、神の手により滅ぼされるつもりなのか。あなたの決意はどこにあるのか。あなたの野望はどこにあるのか。尊厳はどこにあるのか。高潔はどこにあるのか。自由はどこにあるのか。あなたは自分の生涯のすべてを^[8]、魔王である赤い大きな竜のために進んで捨てるつもりなのか。あなたは赤い大きな竜に自分を死ぬまで折檻させて満足なのか。淵のおもては混沌として暗く、庶民は苦悩のため天に向かって叫び、地に向かって苦痛を訴えている。いつになったら人間は堂々としていられるのか。人間はやせ細り、衰えている。どうしてこの残忍な暴君のような悪魔に対抗できようか。なぜできるだけ早く自らのいのちを神に捧げないのか。なぜいまだに躊躇しているのか。いつになったら人間は神の働きを完了できるのか。何の目的もなくそのようにいじめられ抑圧され、人間の生涯は結局無駄となる。なぜそれほど急いでやって来て、急いで去ってゆくのか。なぜ何か貴重な物を残しておいて神に捧げないのか。数千年におよぶ憎しみを忘れてしまったのか。

おそらく多くの人は神の言葉の一部を忌み嫌い、あるいは神の言葉を忌み嫌いもせず、関心もないのかもしれない。いずれにせよ、事実は不合理な推論となりえない。誰も事実と反する言葉を述べることはできない。神が今回肉となったのは、そうした働きを行ない、神がまだ完成していない働きを完了させ、この時代を終わらせ、この時代を裁き、苦難の海である世界から罪深い者たちを救い、完全に变化させるためである。ユダヤ人は神を十字架に釘付けにし、よってユダヤの地における神の旅を終結させた。その後間もなくして、神自らが人間のもとに再来し、赤い大きな竜の国に静かに到着した。実際は、ユダヤ人国家の宗教界は以前から長いあいだイエスの像を壁にかけ、人々は「主イエス・キリスト」と口にして呼びかけている。人々は、人間のもとに戻って未完の働きの第二段階を完了せよという父からの命令を、イエスがとうの昔に受け入れていたことなど知らなかった。その結果、人々はその人を見た時に驚愕した。その人は、いくつもの時代が過ぎ去った後の世界に生まれ、至って普通の姿をして人間のもとに現れた。事実、いくつもの時代が過ぎていたので、その人の衣服と全体的容姿もまた、神が生まれ変わったように変化した。どうして人々に、その人が十字架から降りて復活した主

イエス・キリストと同じ人であるとわかることができようか。その人には傷跡が一切なく、それはちょうどイエスがヤーウェにまったく似ていなかったのと同じである。現在のイエスは過ぎ去った時代と随分以前から無関係になっている。人々がどうしてイエスであることを知りえるのか。疑い深い「トマス」はそれが復活したイエスであることをいつも疑い、イエスの手に釘あとがあることをいつも見たがり、それまでは安心することができない。トマスは、釘あとを見なければ、疑念の雲の上に立ったままで、地に足を着けてイエスに従うことができない。哀れなトマス。イエスは父なる神に委託された働きを行なうために来たことを、どうしてトマスが知ることができようか。なぜイエスは磔刑の傷を負っていなければならないのか。磔刑の傷はイエスの印なのか。イエスは父なる神の旨のために働きを行なうために来た。なぜ数千年前のユダヤ人の装いと出で立ちで来るであろうか。神が取る肉の形態が神の働きを阻害しうるであろうか。それは誰の理論なのか。神が働きを行なうとき、なぜそれが人間の想像に従わなければならないのか。神が働きを行なう上で唯一重視するのは、その働きが効果を生み出すことである。神は律法に従わず、神の働きに規則はない。どうしてそれを人間が理解できようか。どうして人間が自分の観念と想像に頼ることで、神の働きをすっかり理解することなどありえるだろうか。だから、あなたがたは落ち着かなければならない。些細な事を気にせず、自分にとって新たな物事を問題視しすぎてはならない。これで、自分を笑いものにすることはなくなり、他人からも嘲笑されずにすむ。長年にわたって神を信じてきても、いまだに神を知らない。最終的には、あなたは刑罰に陥り、「優等生」^[9]のあなたは、降格して刑罰を受ける者たちのひとりとなる。利口な方法を用いて小細工を披露しない方が一番良い。あなたの近視眼で神が、永遠から永遠を見通す神が本当に見えるであろうか。あなたの浅薄な経験で神の心意を完全に見通せるであろうか。自惚れてはならない。結局のところ、神はこの世に属さない。それならば、どうして神の働きがあなたの期待通りになることがありえようか。

脚注

1. 「諸悪の首謀者」とは、年老いた悪魔を指す。この句は強烈な嫌悪を表現している。
2. 「根拠のない言いがかりをつけ」とは、悪魔が人間を害する方法を指す。
3. 「厳重に守られている」とは、悪魔が人間を害する方法が特に残忍であり、人間を強く支配するので、人間には動き回る余地がないことを指す。

4. 「かけ離れた」は嘲笑的に用いられている。
5. 「秩序だった穏やかな指導」は嘲笑的に用いられている。
6. 「恩恵を受けている」は、無表情で自己認識がない人を嘲笑するために用いられている。
7. 「次々と災難に見舞われる」とは、赤い大きな竜の地に生まれた人は頭を高く揚げていられないことを指す。
8. 「自分の生涯のすべてを……捨てる」は軽蔑的な意味である。
9. 「優等生」は熱烈に神を追い求める人を嘲笑するために用いられている。

働きと入ること（9）

凝り固まった民族的伝統と精神的姿勢が、純粹で子供のような人間の心に影を落として久しい。あたかも感情や自我の意識がまったく欠如しているかのように、それらは人間性のかけらもなく人の魂を攻撃してきた。これら悪魔のそうしたやり方は極めて残忍であり、まるで「教育」と「育成」が、魔王が人間を殺す伝統的方法になったかのである。魔王は自らの「深遠な教え」を用いてその醜惡な魂を隠し、羊の皮を被って人間の信頼を得てから、人間がぼんやり居眠りしている機会を捉え、その人を完全にむさぼり食う。哀れな人類。自分の育った地が悪魔の地であることや、自分を育てた者が実は自分を傷つける敵であることを、どうして彼らが知り得ようか。しかし、人間はまったく目覚めない。飢えと渴きを十分に満たした今、自分を育ててくれた「両親」の「厚情」に報いる準備をする。人間とはそうしたものである。現在、自分を育てた王が自分の敵であることを、人間はいまだに知らない。地には死者の骨が散らばり、悪魔が絶え間なく浮かれ騒ぎ、「冥府」でひたすら人間の肉をむさぼり食い、人間の骸骨と墓共にし、いたみ切った人間の身体が残されていればそれを食べようと無駄な努力をしている。しかし、人間は今も昔も無知であり、悪魔を敵として扱ったことがなく、それどころか心から悪魔に仕えている。このような墮落した民族に、神を知ることなど到底できない。神が受肉して彼らのあいだに到来し、救いの働きを残らず行なうのは、簡単なことだろうか。すでにハデスへ陥った人間が、どうして神の要求を満たせようか。神は人類の働きのために幾度も眠れぬ夜を過ごした。神は遥かな高みから深淵へと、人間が生活する生き地獄まで降り、人間と共に日々を過ごし、人間の卑しさに不平を漏らしたり、人間の不従順を咎めたりしたことがなく、自ら働きを行ないながら最大の屈辱に耐えて

いる。どうして神が地獄に属していられようか。どうして神が地獄で生活できようか。しかし、全人類のため、また全人類が一刻も早く安らぎを得られるようにするため、神は屈辱に耐え、不義に苦しんでまで地上に来て、人間を救うべく自ら「地獄」と「ハデス」、すなわち虎穴に入った。どうして神に反抗する資格が人間にあるのか。神について不平を述べるどんな理由が人間にあるというのか。どうして人間は厚かましくも神を見上げられるのか。天なる神は最も汚れたこの悪徳の地に来て、決して不満を漏らさず、人間について不平を言ったことがなく、人間の略奪^[1]や抑圧を黙って受け入れる。人間の不合理な要求に反撃したことも、人間に対して過度の要求や不合理な要求をしたこともない。教えること、啓くこと、叱責、言葉による精錬、注意の喚起、勧告、慰めること、裁くこと、暴くことなど、人間が必要とするすべての働きを、神は不平を言わずに行なうだけである。神の諸段階のうち、どれが人のいのちのためではなかったというのか。神は人間の前途や運命を取り去ったが、神によって行なわれた段階のうち、どれが人間の運命のためではなかったというのか。その段階のうち、どれが人間の生存のためではなかったというのか。それらのうちどれが人間をこの苦難から、夜のように黒い闇の勢力の抑圧から解放するためではなかったというのか。どれが人間のためではなかったというのか。愛情溢れる母のような神の心を、誰が理解できるというのか。神の真剣な心を、誰が理解できるというのか。神の情熱的な心と熱心な期待は、人間の冷酷な心、冷淡かつ無関心な眼差し、そして非難と侮辱の繰り返しによって報われてきた。つまり、辛辣な言葉と皮肉、蔑み、嘲笑、蹂躪と拒否、誤解と愚痴、疎外と忌避、そして他ならぬ欺瞞、攻撃、および苦しみで報いられてきたのである。温かい言葉に対しては、敵意の表情と、冷淡な反抗の意味をこめて振られる千本の人差し指が向けられた。神は我慢して頭を下げ、おとなしく従う牛のごとく人々に仕えるしかない^[2]。神は幾度となく太陽と月と星を見上げてきた。神は幾度となく日の出と共に発ち、日の入りと共に戻って来て、父のもとを去った時より千倍大きな苦痛、人間の攻撃と打撃、そして取り扱いと刈り込みを耐え忍びながら、悶々として眠れぬ夜を過ごしてきた。神の謙虚さと慎ましさは、人間の偏見^[3]、不当な意見、不公平な扱いで応じられ、また神が世に知られず静かに働きを行なう様、神の忍耐強さ、そして寛容さは、人間の強欲な眼差しで報いられ、人間は何のためらいもなく神を踏みにじり、足蹴にして殺そうとする。神に接する人間の態度は、「類い希なる聡明さ」の一つであり、人間に虐待され、侮蔑された神が幾万もの人の足で踏みつぶされる一方、人間は意気揚々として立っている。それはあたかも丘陵に住む王のようであり、絶対的権力の掌握^[4]を望み、陰で宮廷を支配し、神を誠実で規則に従い、逆らったり問題を起こしたりすることを許されない、裏方の主

事にしようとしているかのようである。神は『末代皇帝』の役を演じ、何の自由もない操り人形^[5]にならなければならない。人間の所行は筆舌に尽くしがたい。それならば、どうして神にあれこれ要求する資格が人間にあらうか。どうして神に提案する資格が人間にあらうか。どうして人間の弱点に同情するよう神に求める資格が人間にあらうか。どうして人間が神の憐れみを授かるのにふさわしいのか。どうして人間が神の寛大さを何度も得るのにふさわしいのか。どうして人間が神の赦しを何度も得るのにふさわしいのか。人間の良心はどこにあるのか。人間ははるか昔に神の心を傷つけ、それを砕け散ったままにして久しい。神は、たとえわずかな温厚さしか伴わなくても、人間が神に思いやりをもつことを期待して、生き生きと眼を輝かせ、澆刺として人間の中に来た。しかし、神の心が人間によって慰められることは一向になく、神が受けてきたのは、激しさを増す一方の^[6]攻撃と責め苦のみである。人間の心は過度に貪欲であり、人間の欲望は大きすぎ、人間は決して飽き足りることを知らず、常に問題を起こし、無鉄砲であり、神に自由や発言の権利を決して与えず、神は恥辱に屈じ、人間によって好きなように操られることを余儀なくされている。

創世から現在に至るまで、神は極めて大きな痛みを耐え、無数の攻撃を受けてきた。しかし、人間は今なお神への要求を緩めず、神を吟味し、神に対して容赦せず、神に勧告し、神を批判し、そして咎めるだけであって、それはあたかも神が誤った道を歩むこと、あるいは地上の神が残忍で不合理であったり、奔放に振る舞ったり、結局無意味になったりすることを深く恐れているかのようである。人間は神に対して常にこうした態度をとってきた。それがどうして神を悲しませないだろう。神は受肉する中で甚大な苦痛と恥辱に耐えてきたが、その上、神に人間の教えを受け入れさせるなど、どれほど酷いことだろうか。神は人間のあいだに来たせいですべての自由を奪われたが、それはあたかも神がハデスで囚われの身となり、人間によって分析されるのを一切抵抗せずに受け入れたかのようである。それは恥辱ではないのか。普通の人の家庭に来たことで、「イエス」は最大の不正義に苦しんできた。それ以上に恥辱的なこととして、イエスは、この汚れた世に来て、深みの底までへりくだり、至って普通の肉をまとった。劣った人間となるにあたり、至高の神は苦難を受けるのではないか。そして至高の神がそのようにするのは人間のためではないのか。神が自分のことを考えたことがあったというのか。ユダヤ人に拒否されて死刑に処され、人々に愚弄され、嘲笑されても、神が天に不平を言ったり地に反抗したりすることはなかった。現在、この数千年前の悲劇が、ユダヤ人のような人々のあいだで再発している。そうした者は、かつてと同じ罪を犯している

のではないか。神の約束を授かる資格が、どうして人間にあるというのか。人間は神に反抗し、その後神の恵みを授かるのではないか。人間が正義と向き合うことも、真理を探し求めることも決してないのはなぜなのか。人間が神の行なうことに決して関心を抱かないのはなぜなのか。人間の義はどこにあるのか。人間の公正さはどこにあるのか。人間は厚かましくも神を代表するつもりなのか。人間の正義感はどこにあるのか。人間が愛するもののうち、どれほど多くが神に愛されているのか。人間はチョコとチーズを見分けることができず^[7]、常に白黒を混同し^[8]、義と真理を抑圧し、不公平と不義を空高く掲げる。人間は光を追い払い、闇の中ではしゃぎ回る。真理と正義を求める者は、それに反して光を退け、神を求める者は神を踏みつけて自分自身を空高く掲げる。人間は盗賊^[9]同然である。人間の理知はどこにあるのか。誰が善悪を区別できるのか。誰が正義を守れるのか。誰が真理のために進んで苦しむのか。人々は悪徳かつ邪悪である。神を十字架にかけた彼らは拍手喝采して歓声を上げ、その熱狂的な叫びは止むことがない。彼らは鶏や犬のようであり、結託して共謀し、自分たちの王国を建て、彼らの干渉によってあらゆる場所が乱され、全員が目を閉じて狂ったように吠え続け、みな一緒に閉じ込められて濁った雰囲気は充滿し、騒々しく活気があり、また盲目的に他人に追従する者たちが絶えず現われては、祖先の「輝かしい」名声を掲げている。こうした犬や鶏どもは、はるか昔に神を心の奥へ押しやり、神の心境に注意を払ったことが一度もない。人間は犬や鶏のようであり、他の百匹の犬をも遠吠えさせる、吠え立てる犬のようである、と神が言ったのも不思議ではない。そのようにして、神の働きがどのようなものか、正義があるかどうか、神に足がかりとなる場所があるかどうか、明日はどうか、そして自分の卑しさや汚れなどにはおかまいなしに、人間は仰々しい謳い文句で神の働きを現代にもたらした。人間は物事をそれほど深く考えたことも、明日に不安を覚えたことも無く、有益で貴い物事を残らず集めて自分のものとし、神には屑と残飯^[10]しか残さなかった。人間は何と残忍なことか。神に対して思いやりを一切かけず、神のすべてを密かにむさぼった後、神を後ろに放り投げ、神の存在にそれ以上留意しない。人間は神を享受しながら神に背き、神を踏みつける一方、口では神に感謝し、神を賛美する。人間は神に祈り、神をよりどころとしつつ、同時に神を欺く。人間は神の名を「称揚」して神の顔を見上げるが、同時に厚かましく恥知らずにも神の玉座に座り、神の「不義」を裁く。口では神に恩義があると言って神の言葉を眺めるが、心の中では神を罵倒する。人間は神に対して「寛容」だが、神を抑圧しつつ、口ではそれが神のためだと言う。人間は神のものを手に握り、口では神から与えられた食べ物を噛むが、その眼はあたかも神をむさぼり尽くそうと望んでいるかのように、冷酷で無情に神を見つめて

いる。人間は真理を見ても、それはサタンの策略だと言うことにこだわる。人間は正義を見ても、それを無理やり自己犠牲に変えてしまう。人間は人の行ないを見て、それが神というものだと言い張る。人間は人に与えられた天賦の才を見て、それが真理だと言い張る。人間は神の業を見て、それが傲慢さであり、自惚れであり、虚勢であり、独善だと言い張る。人間は神を見ると、神に人間のレッテルを貼るよう主張し、サタンと共謀する被造物の座に神を納めようと懸命になる。人間は、神の発する言葉だと十分承知しながら、それらは人間による記述以外の何物でもないと言う。人間は、神の霊が肉において現われていること、神が肉となったことを十分承知しながら、その肉はサタンの末裔だと言うだけである。人間は、神が謙虚に隠れていることを十分承知しながら、サタンが辱められ、神が勝利したと言うだけである。なんと役立たずな者たちか。人間には番犬として仕える価値さえない。人間は白黒を見分けることができず、黒を白だと故意に曲解さえしている。人間の勢力と人間による包囲が、神の解放の日に耐えられるだろうか。人間は故意に神に反抗したあと、まったく気にもせず、神が姿を現わす隙さえ与えずに、神を死に追いやりさえする。義はどこにあるのか。愛はどこにあるのか。人間は神の傍らに座りつつ、跪いて赦しを請うよう神に強要し、人間の采配に残らず従い、人間の策略に黙って服従するよう迫り、また神が行なうすべてのことにおいて自分たちの例にならわせており、さもなければ激昂して^[11]怒り狂う。黒を白にねじ曲げるような闇の影響下にあって、どうして神が悲しみにうちひしがれないでいられようか。どうして神が懸念せずにいられようか。神が最新の働きを始めた時、それは天地創造の働きのようなのだと言われるのはなぜか。人間の行ないは極めて「豊潤」であり、「枯れることのない生ける水の泉」が人間の心の野原を間断なく「潤す」。その一方、人間の「生ける水の泉」はぬけぬけと神と競い合う^[12]。両者は折り合いがつかず、その泉は何ら咎められることなく神に代わって人間に施す一方、人間はそれに伴う危険を考慮することなく、その泉に加担する。そこにどのような効果があるのか。人間は、神が自分たちの注意を引くことをひどく恐れ、また神の生ける水の泉が人間を引き寄せ、獲得することを深く懸念して、神を冷淡に隅へ追いやり、人々が神をまったく気に留めない所まで遠ざける。こうして、この世の懸念を長年にわたり経験した後、人間は共謀して神に対して謀略を企て、さらには神を厳しい批判の対象とする。それはあたかも神が人間の目の中の丸太になったかのようにあり、人間は必死に神を掴んで火にくべ、精錬して清めようとしている。神の苦難を見て、人間は腹を抱えて笑い、喜んで踊り、神もまた精錬されるに至ったと言い、あたかもそれだけが理知的で分別のあること、天の公平かつ公正なやり方だと言わんばかりに、神の穢れた不純物をすっかり焼き尽くして清めてやると口

にする。人間のこうした暴力的行為は、意図的かつ無意識のように思われる。人間は自らの醜い顔、忌まわしく汚れた魂、そして哀れな乞食の姿を共に現わす。あらゆる場所で猛り狂った後、哀れこの上ない子犬のように、惨めな顔つきをして天の赦しを乞う。人間は常に予想外の行動をとり、「虎の威を借りて他人を脅し」^[a]、いつも役を演じ、神の心に少しも配慮せず、自分の地位と比較することもない。人間は黙って神に反抗するばかりで、それはあたかも神が人間を虐待しており、人間をそのように扱うべきではない、また天には見る目がなく、故意に人間に対して面倒を引き起こしていると言わなければならない。かくして人間は邪悪な陰謀を密かに実行し、神への要求をほんの少しも緩めず、どう猛な眼差しで神の一挙一動を睨みつけ、自分が神の敵だとは決して考えず、神が霧を晴らして物事を明瞭にし、「虎の口」から自分を救い、自分のために報復してくれる日が来るのを願っている。現在に至っても、時代を通して多くの者たちによって演じられてきた、神に敵対するという役割を自分が演じているなどと、人々は依然として考えていない。自分が行なうすべてのことにおいて、ずっと前から道に迷い、かつて理解していたことが海に飲み込まれてしまったことを、そのような人たちがどうして認識できるだろうか。

今まで誰が真理を受け入れたというのか。今まで誰が両手を広げて神を歓迎したというのか。今まで誰が神の出現を喜んで願ってきたというのか。人間の行動は長きにわたって腐敗しており、人間の汚れが神の宮を識別不能にして久しい。その一方、人間は自らの働きを依然として続け、神を蔑み続ける。それはあたかも、神に対する反抗が石のように固まり、変えることができず、その結果、自分の言動が不当な扱いを受けるよりも呪われたほうがましだと思っているかのようである。こうした人間にどうして神を知ることができようか。神と共に安息を見つめることがどうしてできようか。どうして神の前に出る資格があろうか。神の経営（救いの）計画に身を捧げるのは、疑いの余地なく問題ないことである。しかしなぜ人々は、神の働きと神の全存在を常に心の奥へと追いやりつつ、自らの血と涙を無私に捧げるのか。人々の無私なる献身の精神が貴重なのは間違いないが、自分が紡いでいる「絹」により、神そのものを表わすことがまったく不可能であることを、どうして人間が認識できようか。人々の善意が貴重で希なのは間違いない。とは言え、どうして彼らに「計り知れない価値のある宝」^[13]を呑み込むことができようか。あなたがた一人ひとりが自分の過去を振り返るべきである。あなたがたが無情な刑罰と呪いからいまだに逃れられないのはなぜか。人々が威厳ある言葉や義なる裁きと常にそうした「親しい間柄」にあるのはなぜか。神は本当に人々を試している

のか。神は故意に人々を精錬しているのか。そして人々はいかにして精錬の中で入りを得るのか。本当に神の働きを知っているのか。神の働きと自分自身の入りからどのような教訓を学んできたのか。どうか人々が神の勧告を忘れず、神の働きに関する識見を得て、それをはっきり識別し、自分の入りを正しく管理するように。

脚注

- 1.「略奪」は人類の不従順さを暴くために用いられている。
- 2.「敵意の表情と、冷淡な反抗の意味をこめて振られる千本の人差し指が向けられた。神は我慢して頭を下げ、おとなしく従う牛のごとく人々に仕えるしかない」は、原文では一文であるが、意味をより明確にするために、ここでは二文に分けてある。最初の文は人間の行為を指し、次の文は神が受けた苦難と、神が謙虚に隠れていることを示している。
- 3.「偏見」は人々の不従順な振る舞いを指す。
- 4.「絶対的権力の掌握」は人々の従順でない振る舞いを指す。人間は自らを高く掲げ、他者を束縛し、自分に従わせ、自分のために苦しませる。そうした者が神に敵対する勢力である。
- 5.「操り人形」は、神を知らない者を揶揄するために用いられている。
- 6.「激しさを増す一方の」は、人々の卑しい行動を強調するために用いられている。
- 7.「チョークとチーズを見分けることができない」は、人々が神の旨を歪めてサタンの的なものにする場合を差し、広義には神を拒む人々の振る舞いを指す。
- 8.「白黒を混同する」は、真理を妄想と混同すること、また義を悪と混同することを指す。
- 9.「盗賊」は、人々が非常識で識見に欠けていることを示すために用いられている。
- 10.「屑と残飯」は、人々が神を弾圧する行動を示すために用いられている。
- 11.「激昂して」は、激怒し、憤慨した醜悪な人間の顔を指す。
- 12.「ぬけぬけと」は、人々が無謀になり、神に対する畏敬の念が一切なくなった状態を指す。
- 13.「計り知れない価値のある宝」とは、神の全存在を指す。

a.これは原文にある中国の慣用句「虎の威を借る狐」を基に翻訳された。その慣用句は、狐が虎と一緒に歩くことで他の動物を怖がらせるという寓話に由来しており、虎による恐怖と威光を狐が「借りた」のである。これは比喩であり、ここでは他人の威光を「借りて」他人を怖がらせたり圧迫したりする人のことを指している。

働きと入ること (10)

人類がここまで発展してきたことは、前例のない状況である。神の働きと人の入りは肩を並べて進むのだから、神の働きもまた比類なき壮観な出来事である。人による今日までの入りは、人間がかつて想像し得なかった不思議である。神の働きはその絶頂に達し、それに続いて人間の「入り」^[1]もまた頂点に達した。神は可能な限り自分を卑しくしており、人間に反抗したこともなければ、宇宙と万物に反抗したこともない。一方、人間は神の頭上に立ち、人間による神の抑圧はその頂点に達した。万事が絶頂を迎え、義の現われる時が来ている。なぜ地を暗い影に覆わせ、すべての人を暗闇に包ませ続けるのか。神は数千年、ことによると数万年にわたって見守り続け、神の寛容さが限界に達して久しい。神は人類のあらゆる挙動を見守り、人間の不義がどれほど長くはびこるかを観察してきたが、人間はずっと前から鈍感になっているので何も感じない。いったい誰が神の業を見たことがあるのか。いったい誰が目を上げて彼方を見据えてきたのか。いったい誰が注意深く耳を傾けてきたのか。いったい誰が全能者の掌中にいたことがあるのか。人間はみな、架空の恐怖に苛まれている^[2]。草や藁の山が何の役に立つというのか。人々にできるのは、受肉した神を拷問して死に至らしめることだけである。人間は草や藁の山でしかないが、彼らが「最も得意とする」^[3]ことがある。それは、神を拷問して死に至らしめ、「それが人々の心を喜ばせる」と叫ぶことである。何とも役立たずの雑魚どもではないか。特に、止むことのない人の流れの中で、彼らは神に注目し、破ることのできない障壁で神を包囲する。人々は熱狂してゆく一方であり^[4]、大群となって神を取り囲み、少しも身動きを取れなくする。彼らはありとあらゆる武器を手にとり、あたかも敵を睨むかのように、怒りに満ちた眼差しで神を見上げる。「神をばらばらに引き裂き」たくてたまらないのである。何とも困ったことだ。人間と神がそうした仇敵となったのはなぜなのか。最も愛しい神と人間との間に遺恨があるということなのか。神の業が人間にとってまったく無益ということなのか。神の業は人間に有害なのか。人間は、神が人間による封鎖を突破し、第三の天に戻り、人間を再び地下牢に放り込むことを深く恐れ、神をひたすら睨む。人間は神を警戒してやきもきし、人間のもとにいる神に「機関銃」の狙いをつけながら、遠くの地面を這っている。それはあたかも

、神が少しでも身動きすれば、人間は神の全身や着衣など、すべてを残らず一掃するかのようである。神と人間の関係はもはや修復不可能である。神が人間にとって理解不可能である一方、人間は故意に目を閉ざしてふざけまわり、わたしの存在を見ることをまったく望まず、わたしの裁きを容赦しない。ゆえに、人間が予期せぬ時、わたしは静かに漂いながら去り、もはや人間とわたしのどちらが上でどちらが下かを比べはしないだろう。人間はあらゆる「動物」のうち最も卑しく、わたしはこれ以上人間を気にかけようとは思わない。わたしが自分の恵みのすべてを、平穏に住む所へと取り戻して久しい。極めて不従順な人間が、どのような理由でわたしの貴い恵みをそれ以上享受するといふのか。わたしに敵対する勢力に対し、わたしの恵みを無駄に与えることを望まない。熱意に溢れ、わたしの再来を熱烈に歓迎するカナンの農民に対してならば、わたしの貴い果実を与えよう。わたしは天が永遠であることだけを願い、またそれ以上に、人間が年老いないこと、天と人間に永遠の安息が訪れること、そして共に理想の時代へ入るにあたり、常緑の「松と糸杉」が永遠に神と共に、天と共にあることを願う。

わたしは多くの日夜を人間と共に過ごし、人間と一緒にこの世に住んできたが、人間への要求を追加したことは一度もない。わたしはただ前進するよう人間を導くだけであり、人間を導く以外には何もせず、人間の運命のために絶え間なく采配の働きを行なう。これまでに誰が天なる父の旨を理解したといふのか。誰が天地を巡ったといふのか。わたしは人間の「晩年」を彼らと共に過ごすことを、もはや望まない。なぜなら、人間はひどく老いぼれていて何も理解せず、わたしが催してきた祝宴で他のすべてから離れ、ひたすら暴食することしか知らず、それ以外のことを考えないからである。人間は極度にけちであり、人間の騒がしさ、陰鬱さ、そして危険が大きすぎるので、わたしは終わりの日に得られる勝利の貴い果実を分かち合おうとは思わない。人間には、自ら作り出した豊かな祝福を享受させるがよい。なぜなら、人間はわたしを歓迎しないからである。どうして人類を無理矢理微笑ませる必要があるといふのか。世界のどこにも温もりはなく、世界各地の風景には春の兆しがまったくない。人間は水生生物のようにまったく温もりがなく、死体のようであり、血管を通う血でさえも心を冷やす凍てついた氷のようだからである。温もりはどこにあるのか。人間は何の理由もなく神を十字架にかけ、その後まったく不安を感じなかった。後悔する者はおらず、こうした残忍な暴君どもは、人の子を再び「生け捕り」^[5]にして銃殺隊の前に立たせ、自分の心の憎しみに終止符を打とうといまだに謀っている。わたしがこのような危険な地に留まることが、何の役に立つといふのか。わたしが留まるとすれば、わたしが人間にもたらすのは対立と暴

力、そして終わりなき問題だけだろう。なぜなら、わたしが人間に平和をもたらしたことはなく、わたしがもたらしたのは戦乱だけだからである。人類の終わりの日は戦乱に満ち、人間の終着点は暴力と対立の中で崩れ去るに違いない。わたしは戦乱の「喜び」を分かち合いたいとは思わず、人間の流血や犠牲に立ち会うつもりもない。人間による拒絶のせいで「落胆」し、人間の戦いを見守る気などないからである。人間は思う存分戦えばよい。わたしは休み、眠ることを望む。人間の終わりの日は、悪魔に立ち会わせればよい。誰がわたしの旨を知るというのか。わたしは人間に歓迎されず、人間がわたしを待ち望んだことは一度もないので、わたしは人間に別れを告げるしかない。そして人類の終着点を彼らに与え、わたしの富をすべて人間に遺し、人間のあいだにわたしのいのちを蒔き、人間の心の畑にわたしのいのちの種を植え、人間に永遠の記憶とわたしのすべての愛を遺す。そしてわたしと人間が互いを思い焦がれる愛の贈り物として、人間がわたしにおいて大事だと思ふものを残らず彼らに与える。わたしは、自分と人間が永遠に愛し合うこと、自分と人間の過去が、互いに与え合う素晴らしいものであることを望む。なぜなら、わたしはすでに自分のすべてを人類に与えたからである。人間はどのような不平を言えるというのか。わたしはすでに、自分のいのちのすべてを人間に遺し、何も言わずに苦労して、人類のために美しい愛の大地を耕した。わたしは人間に対してそれにふさわしい見返りを求めたことがなく、ひたすら人間の采配に従い、人類のためにより美しい明日を創るだけである。

神の働きは潤沢で豊富だが、人間の入りは極めて乏しい。人間と神が合同で行なう「事業」のうち、そのほぼすべてが神の働きであり、人間の入りの程度については、見るべきところがほとんどない。人間は極めて貧しく盲目であり、「古代の武器」を手にとって今日の神に対する自分の力を測るほどである。こうした「類人猿ども」は直立歩行すらままならず、自分の「裸」の身体をまったく恥じない。そうした者に神の働きを評価する資格がどうしてあろうか。四肢をもつそれら多くの猿人の眼は怒りに満ち、石で作った武器を手にして神と争い、この世がまだ見たことのない猿人の競技、すなわち終わりの日における猿人と神の格闘を始めようとしており、それは地に遍く知られるだろう。さらに、半ば直立歩行しているこれら古代の猿人の多くが自己満足であふれている。彼らの顔を覆う毛はもつれて殺意に満ちており、そして彼らは前脚を上げる。現代人へと完全に進化したわけではないので、直立する時もあれば這う時もあり、額は汗のしずくで覆われて露のようであり、やる気がありありと見て取れる。自分たちの仲間である原始の古代猿人が太くのろまな四肢で立ち、辛うじて攻撃をかわせるものの、反撃す

る力がないのを見て、彼らは自分を抑えるので精一杯である。瞬く間に、何が起きたか悟る間もなく、リング上の「英雄」が四肢を空に向けて地に倒れる。長年にわたり地面の上で間違った姿勢をとっていた四肢は、突然逆さまに投げ出され、猿人はもはや抵抗する気がない。それ以降、最古の猿人は地上から一掃される。それは極めて「悲惨」である。この古代の猿人は、このような突然の終焉を迎えた。なぜ素晴らしい人間の世界からそんなに急いで去る必要があったのか。なぜ仲間と次の段階の戦略を話し合わなかったのか。神との力比べの秘訣をあとに遺すことなくこの世に別れを告げるとは、何と哀れなことだろうか。それほどまでに年老いた猿人が「古代の文化と芸術」を子孫に伝えることなく、一言もささやかずに死んでこの世を去るとは、何と迂闊なことだろうか。近親者をそばに呼び集めて自分の愛を伝える暇もなく、石版に言葉を残さず、天日を見分けず、筆舌に尽くしがたい自分の苦難をひと言も話さなかった。息を引き取ろうとする中、瀕死の我が身のそばに子孫を呼び寄せて、「リングに上がって神に挑んではならない」と告げることもなく、固くなった四肢を、空に向かって永遠に伸びる木の枝のように伸ばしつつ、それは目を閉じた。これは悲劇の臨終を迎えたように見えるだろう……。突然、リングの下からうなるような笑い声がして、なかば直立している猿人のひとりが逆上している。その者は、レイヨウなどの野性の動物を狩るための、古い猿人がもっているものよりも進化した「石の棍棒」を手に、周到な計画を胸に秘め^[6]、怒りに満ちてリングに飛び乗る。あたかもその者が何か手柄を立てたかのようなのである。石の棍棒の「威力」を用い、「三分間」にわたって何とか直立する。この第三の「脚」の「威力」は、何と強いことか。その大柄で愚鈍で不器用な半直立猿人は、棍棒に支えられて三分間直立した。その尊敬すべき^[7]老いた猿人が至って傲慢なのももっともである。確かに、その古代の石器は「評判どおり」である。柄も刃も切っ先もあるが、刃に艶のないことが唯一の欠点である。なんと嘆かわしいことか。再びその古代の「小さな英雄」を見ると、リングの上に立って、リングの下にいる者どもが無能で劣っていて、一方の自分は勇敢な英雄であるかのように、侮蔑するような目つきで見ている。その英雄は、リングの前にいる者どもを、心の中で密かに忌み嫌っている。「この国は問題を抱えており、それはわたしたち一人ひとりのせいだ。あなたがたはなぜ逃げ出そうとするのか。この国が崩壊に瀕していると知りつつ、血みどろの戦いには参加しないというのか。この国は崩壊の瀬戸際にある。あなたがたが、自分の楽しみは後回しにして、まず最初に憂慮しないのはなぜか。この国が崩壊し、国民が退廃してゆくのをどうして傍観できるのか。国が征服されるという恥辱を進んで受けるというのか。何と役立たずな群れなのか」。そう考えていると、リングの前で騒動が起こり、その者の眼はますます激昂し

、今にも火を放ちそう^[8]である。神が戦いの前に失敗するのを待ちかねており、神を死に追いやって人々を喜ばせたくてたまらない。その者は、石器は名声を得るに値するかもしれないが、決して神に対抗できないことを知らない。自分を防御し、倒れて再び立ち上がる間もなく、その者は両眼の視力を失って前後によろめく。自分の祖先の上に倒れて二度と立ち上がらない。そして古代の猿人にしがみつき、それ以上泣き叫ぶのをやめ、自分が劣っていることを認め、反抗する意志をもはやもたない。これら二匹の哀れな猿人は、どちらもリングの前で死ぬ。今日まで生きながらえた人類の祖先が、義の太陽が昇る日に何も知らないまま死んだというのは、何と不幸なことか。それほど大いなる恵みを逃すとは、なんと馬鹿げたことか。猿人たちは数千年にわたり待ち続けてきたのに、その祝福をハデスへ持ち込み、魔王とともに「享受する」のだ。その祝福は生者の世界に残し、自分の息子や娘と共に享受するために取っておいたらどうか。まさに自業自得である。わずかな地位や名声、そして虚栄のために、殺されるという不幸に遭い、我先に地獄の門を開いてその息子となろうとするとは、何という無駄なことか。そうした代償はまったくの無駄である。それほど「国民的精神に満ちて」いる年老いた祖先が、そこまで「自分に厳しく、他人に寛容」となって、自らを地獄に閉じ込め、無能で劣った者を地獄の外に閉め出すとは、何と哀れなことか。このような「民衆の代表者」がどこにいるのか。「子孫の幸福」と「未来の世代の平和な生活」のため、彼らは神の介入を許さず、それゆえ自分の命にまったく配慮しない。自分を無制限に「国の大義」に捧げ、黙ってハデスへ入る。そのような愛国心がどこにあるのか。神と戦い、死も流血も怖れず、ましてや明日を憂うことなどない。そうした者は戦地へ向かうのみである。自身の「献身の精神」と引き換えに得るのが、永遠の後悔と、永遠に燃え続ける地獄の炎に焼き尽くされることだけだとは、何と哀れなことか。

何と興味深いことか。神の受肉がいつも人間に拒否され、中傷されてきたのはなぜか。人々が神の受肉をまったく理解しないのはなぜか。神が誤った時期に来たということなのか。神が誤った場所に来たということなのか。そうなるのは、人間による「承認の署名」なしに、神が独自に行動したためなのか。人間の許可なく神が決意したためなのか。事実の記録には、神が事前に通達したとある。神は肉となるにあたって何の問題も起こしていないが、それでも人間の同意を得る必要があるというのか。さらに、神はずっと以前に人間に思い起こさせていたが、人々のほうが忘れていたのだろう。人間を責めることはできない。なぜなら、人間ははるか前からサタンによって大いに墮落させられ、天下の出来事を何も理解できず、霊的世界の出来事に至っては言うまでもないから

である。人間の祖先である猿人がリングで死んだのは何とも恥すべきことだが、驚くには及ばない。天地が相容れることは決してなかったから、石でできた頭脳をもつ猿人が、神が再び受肉し得ることをどうして理解できようか。そうした「六十歳」の「老人」が神の出現の日に死んだというのは、何と悲しいことか。そうした大いなる祝福が出現する日に、祝福されることなく他界したというのは、何と不思議なことか。神の受肉はあらゆる宗教や各界に衝撃波を送り、宗教界の本来の秩序を「混乱に陥れ」、神の出現を待ち望むすべての人の心を揺るがした。慕わない者がいるだろうか。神に会うのを待ち焦がれない者がいるだろうか。神は長年にわたり自ら人間のもとにいるが、人間はまだそれに気づかない。現在、神自身が現われ、大衆に自らの身分を示した。それが人間の心に喜びをもたらさないことが、どうしてあり得ようか。神はかつて喜びや悲しみを人間と共にし、現在は人間と再会して、過ぎ去った日々話を人間と分かち合っている。神がユダヤから去った後、人々は神の消息をまったく掴めなくなった。彼らは神との再会を待ち望んでいるが、今日すでに神と再会し、再び神と共にあることをほとんど知らない。このことが過去の思いを呼び起こさないことがどうしてあり得ようか。二千年前の今日、ユダヤ人の末裔シモン・バルヨナは救い主イエスを目の当たりにし、同じ食卓で食事を取り、長年にわたって付き従った後、主に対していっそう深い愛慕を抱いた。シモンは心の底から深く主イエスを愛した。冷たい飼葉桶に生まれた金髪の赤ん坊がどういうわけで神の受肉の最初の姿であるのか、ユダヤの人々はまったく知らなかった。彼らはみな、イエスは自分たちと同じだと考え、違うと考える者はいなかった。この平凡でありふれたイエスに、人々がどうして気づけるだろうか。ユダヤの人々は彼のことを、当時のユダヤ人の息子と考えた。イエスを愛しむべき神として見上げる者はいなかったのである。そして人々は彼に対して、豊かで溢れんばかりの恵みと平和と喜びを授けてほしいなど、やみくもに要求するだけだった。そうした者は、イエスは億万長者のように人が望むすべてのものをもっているとしか認識せず、彼を愛されている存在として扱うことはなかった。当時の人々は彼を愛さず、彼に反抗し、不合理な要求を彼に突きつけるだけだった。彼は決して抵抗せず、それどころか、人間が彼を知らなかったにもかかわらず、人間に絶えず恵みを与えた。彼は人間に温もり、愛、そして慈しみを黙々と与えるだけで、またそれ以上に、人間に新たな実践方法を与え、人間を律法の束縛から導き出した。人間は彼を愛さず、ただ彼を羨み、彼の並外れた才能を認めるだけだった。愛しむべき救い主イエスが人類のもとに来た時、いかに大きな屈辱を受けたかなど、目が見えない人類にどうしてわかるだろうか。彼の苦痛を考えた者、父なる神に対する彼の愛を知る者、彼の孤独を知り得る者は、一人としていなかった。たとえマ

リアが彼の産みの母親だったとしても、憐み深い主イエスの心にある考えを、どうして彼女が知り得ただろうか。人の子が耐えた筆舌に尽くしがたい苦難を、誰が知っていたというのか。当時の人々は彼に要求を突きつけた後、冷淡にも彼を心の奥へと追いやり、外へ追い出した。それゆえ、彼は来る日も来る日も、毎年毎年、長年にわたって往来を彷徨いながら、苦難に満ちた三十三年間の生涯を過ごしたが、その期間は長くもあり短くもあった。人々は彼を必要とする時、笑顔で彼を自宅に招き、彼に要求しようとした。そして彼が施しを行なった後、彼らは直ちに彼を家から追い出した。人々は彼の口から授けられた物を食べ、彼の血を飲み、彼が授けた恵みを享受する一方、彼に反抗した。なぜなら、自分にいのちを与えたのが誰かを知らなかったからである。最終的に、人々は彼を十字架にかけたが、それでも彼は黙していた。現在も彼は黙したままである。人々は彼の肉を食べ、彼の血を飲み、彼が人々のために作る食べ物を口にし、彼が人々のために拓いた道を歩んでいるが、なおも彼を拒もうとしており、自分にいのちを授けた神をなんと敵とみなし、自分と同様の奴隷を天なる父として扱う。そうすることで、人々は故意に神に反抗しているのではないか。イエスが十字架で死ぬに至ったのは、どういうことだったのか。あなたがたは知っているのか。彼は、自分に最も親しく、かつ彼を食べ、彼を享受したユダに裏切られたのではないか。ユダがイエスを裏切ったのは、イエスが取るに足りない普通の教師に過ぎなかったからなのか。仮に人々が、イエスが非凡であり、天に由来する者であることを本当に理解していたのなら、どうして彼の身体が息絶えるまで、二十四時間にわたり十字架にかけられたのだろうか。誰が神を知り得ようか。人間は飽くことのない貪欲さで神を享受するばかりで、いまだに神を知らない。人々はひさしを借りると母屋を取ろうとし、「イエス」を自分の指令や命令にすっかり服従させる。これまでに誰が、枕する所もないこの人の子のために、憐れみといえるものを示したのか。これまでに誰が、彼と力を合わせて父なる神の使命を成し遂げようと考えたのか。これまでに誰が、彼のことを少しでも考えたのか。これまでに誰が、彼の困難に配慮したのか。人間には微塵の愛もなく、彼を押しつけたり引っぱったりする。人間は自分の光といのちがどこから来たかを知らず、人間のあいだで苦難を経験した二千年前の「イエス」をいかにして再び十字架にかけようかと、密かに企てるだけである。「イエス」は本当にそうした憎しみをかき立てるのか。彼が行なったことは、遠い昔にすべて忘れ去られたのか。数千年にわたって募った憎しみは、最後に爆発するだろう。あなたがたはユダヤ人と同類である。あなたがたがそこまで強く憎むほど、「イエス」がいつあなたがたに敵意を抱いたというのか。彼はかくも多くのことを行ない、かくも多くのことを語った。そのどれもが、あなたがたにとって有益ではないのか

。彼は何の見返りも求めることなく、自分のいのちをあなたがたに授け、自分のすべてをあなたがたに与えた。それでもなお、あなたがたは本当に彼を生きたまま食べたいというのか。彼は自分のすべてをあなたがたに与え、何一つ出し惜しみせず、この世の栄光や人間の温もり、人間の愛、あるいは人間の祝福を享受することもなかった。人々は彼に対して極めてさもしいのに、彼は地上の富を一切享受せず、誠実さと情熱に溢れた心を残らず人間に捧げ、また自身のすべてを人類に捧げた。では、彼に温もりを与えた者がかつていただろうか。誰がいまだかつて彼に慰めを与えたというのか。人間は彼にあらゆる圧力をかけ、すべての不幸をもたらし、人間の中で最も不幸な経験を押しつけ、あらゆる不義を彼のせいにし、そして彼はそれを無言で受け入れてきた。彼がいまだかつて誰かに反抗したことがあるのか。わずかな報いを誰かに求めたことがあるのか。彼に同情を示した者がかつていたのか。普通の人間であるあなたがたのうち、ロマンに満ちた幼年期を過ごさなかった者がいるだろうか。色鮮やかな青春を過ごさなかった者がいるだろうか。愛する者の温もりを知らない者がいるだろうか。誰が親類や友人の愛を知らないというのか。誰が他人に尊敬されていないというのか。誰が暖かい家庭をもたないというのか。誰が心を通わせる者の慰めを知らないというのか。しかるに、神はそのどれかをかつて享受しただろうか。誰が彼に少しでも温もりを与えたというのか。誰が彼に少しでも慰めを与えたというのか。誰が彼に少しでも人間の倫理を示したというのか。誰が彼に対して寛容だったというのか。誰が困難な時に彼と共にいたというのか。誰が彼と共に困難な生活を送ったというのか。人間は彼に対する要求を緩めたことがない。人間は何の良心の呵責もなく、彼に対して要求を突きつけるだけであり、それはあたかも、人間の世界に来た彼は、人間の牛馬や囚人となって、自分のすべてを人間に与える必要があると言わんばかりである。さもないれば、人間は決して彼を許さず、彼に対して手を緩めず、彼を神と呼ばず、決して彼を高く評価しないだろう。人間は、神に対してあまりに厳しい態度をとり、それはあたかも人間が神を苦しめて殺そうと躍起になり、その後初めて神に対する要求を緩め、さもないれば神に対する要求の基準を決して下げないかのようである。そのような人間が神に忌み嫌われないことが、どうしてあり得ようか。それが現在の悲劇ではないのか。人間の良心はどこにも見られない。人間は神の愛に報いると言い続けるが、神を切り裂き、苦しめて死に至らしめる。これぞまさに、人間が祖先から受け継いだ、神への信仰の「秘訣」ではないのか。「ユダヤ人」が見つからない場所はなく、彼らは今なお同様の働きを行ない、神に反抗する働きを続けているが、自分たちは神を高く掲げていると信じている。人間がどうして自らの眼で神を認識できようか。霊に由来する受肉した神を、肉において生きる人間がどうし

て神として扱えようか。人間のうち、誰が神を知ることができるというのか。真理は人間の中のどこにあるのか。真の義はどこにあるのか。誰が神の性質を知り得ようか。誰が天の神と争えようか。神が人間のもとに来た時、誰も神を知らなかったので、神が拒まれたのも無理はない。人間がどうして神の存在を容認できようか。光がこの世の闇を追い払うことを、どうして人間が許せようか。これらはどれも人による貴ぶべき献身ではないのか。人間の正しい入りではないのか。そして、神の働きは人の入りを中心にしているのではないのか。あなたがたが神の働きと人の入りを融合し、人間と神の良好な関係を築き、人間が行なうべき本分を全力で尽くすことを、わたしは望む。このように、神が栄光を受けることを結びとして、神の働きは完了するだろう。

脚注

- 1.ここでの「人間の『入り』」は、人間の不従順な振る舞いを指す。人々が真にいのちに入ること（これは良いことである）を指すのではなく、彼らの悪い振る舞いと行動を指すのである。この語句は神に反抗する人間の行動を包括的に指している。
- 2.「架空の恐怖に苛まれている」は、人が過ごす見当違いな人間生活を揶揄するために用いられている。それは悪魔と共生している醜悪な人類の生活を指す。
- 3.「最も得意とする」は揶揄する意味で言われている。
- 4.「熱狂していく一方であり」は揶揄する意味で言われており、人間の醜悪な状態を指す。
- 5.「生け捕り」とは、人間の暴力的で卑劣な行為を指す。人間は神に対して残忍で、少しも容赦せず、法外な要求を行う。
- 6.「周到な計画を胸に秘め」は揶揄する意味で言われており、人間がどれほど自分を知らないか、自分の本当の霊的背丈にどれほど無知であるかを意味している。
- 7.「尊敬すべき」は揶揄する意味で言われている。
- 8.「放ちそう」とは、神に打ち負かされ、怒りで湯気が立っている醜悪な人間の状態を指す。それは神に対する人間の反抗の度合いを示す。

神の働きのビジョン（1）

洗礼者ヨハネはイエスのために七年間働き、イエスが来たときにはすでに道を整えていた。それまでにヨハネが説いた天の国の福音は全土で聞かれたので、ユダヤの全地方

に広まり、誰もがヨハネのことを預言者と呼んだ。当時、ヘロデ王はヨハネを殺したがついていたが、あえてそうしなかった。民衆はヨハネを大いに尊敬していたので、ヨハネを殺せば民衆の反発を招くであろうとヘロデは恐れたからである。ヨハネが行なった働きは普通の人々のあいだに根を下ろし、ユダヤ人に信じさせた。ヨハネは七年間、イエスが自身の職分を開始するまさにそのときまでイエスのために道を整えた。それゆえ、ヨハネはあらゆる預言者の中で最も偉大であった。ヨハネが投獄されて初めてイエスは自身の公の働きを開始したのである。ヨハネの前に、神のために道を整えた預言者はひとりとして存在しなかった。なぜならば、イエスより以前に神が肉となったことはなかったからである。だからヨハネに至るすべての預言者の中で、彼だけが受肉した神のために道を整える唯一の預言者だったのであり、このためヨハネは旧約聖書と新約聖書に記された預言者の中で最も偉大な者となったのである。ヨハネはイエスがバプテスマを受ける七年前に天の国の福音を広め始めた。彼の働きは、それに続くイエスの働き以上のように人々には思われたが、それでもヨハネは一人の預言者でしかなかった。ヨハネは神殿の中でなく、町や村で働き、語った。当然ながら、ヨハネはユダヤの人々、特に貧しい人々のあいだでそのようにした。ヨハネが社会の上層部の人々と接触することはめったになく、ユダヤの庶民のあいだでだけ福音を広めた。主イエスのために適した人々を用意し、イエスが働くのにふさわしい場所を準備するためである。ヨハネのような預言者がその道を整えたので、主イエスは到着するや否やそのまま十字架の道を歩み始めることができた。神がその働きをするために肉となったとき、神は人々を選ぶ働きをしたり、自分で人々を探したり、働く場を探したりする必要はなかった。来たときにそのような働きをせずとも、それにふさわしい人物がイエスの到来に先立ち、そうしたものをすでに用意していたのである。イエスが自身の働きを始める前にヨハネがこの作業をすでに完了していたので、受肉した神は働きを行なうために現れると、長らく神を待ち望んでいた人々への働きにすぐさま取りかかった。イエスが来たのは、人間による修正の働きをするためではなかった。イエスが来たのはひとえに自身が果たすべき職分を果たすためであり、それ以外の何事もイエスには無関係であった。ヨハネが来て行なったのは、天の国の福音を受け入れる人々の集団を神殿から、またユダヤ人のあいだから導き出し、主イエスの働きの対象となるようにすることだけであった。ヨハネは七年間働いた。つまり、彼は七年にわたって福音を宣べ伝えたのである。その間、ヨハネは多くの奇跡を行なわなかった。彼の仕事は道を整え、準備することだったからである。そのほかのすべての働き、イエスが行なおうとしていた働きは、ヨハネとは関係がなかった。ヨハネはただ人々が救われるように、自分の罪を告白して悔い改めるよう促し、人

々にバプテスマを授けただけであった。ヨハネは新しい働きを行ない、人がそれまでに歩いたことのなかった道を開いたが、やはりヨハネはイエスのために道を整えただけであった。ヨハネは準備の働きをした預言者に過ぎず、イエスの働きをすることはできなかった。イエスは天の国の福音を説いた最初の人ではなく、ヨハネが進んだ道に沿って続いたが、それでもイエスの働きを行なえる人はほかに誰もいなかった。そしてそれはヨハネの働きを超えていた。イエスは自分の道を整えることはできなかった。イエスの働きは神に代わって直接行なわれたものなのである。そのため、ヨハネは何年働いたとしても、やはり預言者で、道を整える人でしかなかった。イエスによってなされた三年間の働きはヨハネによる七年間の働きに優っていた。イエスの働きの本質は同じではなかったからである。イエスがその職分を開始したのは、ヨハネの働きが終了したときでもあるが、その際ヨハネは、主イエスが用いるのに十分なだけの人々と場所をすでに準備していた。これらは、主イエスが三年間の働きを開始するのに十分であった。それゆえヨハネの働きが終了すると、主イエスはすぐさま公に働きを始め、ヨハネが語った言葉は退けられた。これは、ヨハネが行なった働きは移行のためだけであり、その言葉は人間を新たな成長へと導くいのちの言葉ではなかったからである。最終的に、ヨハネの言葉は一時的に役立っただけであった。

イエスの行なった働きは超自然的なものではなかった。そこにはひとつの過程があり、すべては物事の正常な法則に従って進行した。生涯の最後の六ヵ月に入る頃には、イエスは自分がこの働きを行なうために来たことを確信しており、また自分が十字架にくぎづけにされるために来たことを知っていた。十字架にかけられるのに先立ち、イエスはちょうどゲツセマネの園で三度にわたり祈ったように、父なる神に祈り続けた。イエスは洗礼を受けたあと、三年半のあいだその職分を果たし、公の働きは二年半のあいだ続いた。最初の年、イエスは悪魔に責められ、人間に当惑させられ、人間としての誘惑にさらされた。イエスは働きを行ないながら、同時に多くの誘惑を乗り越えた。最後の六ヵ月、イエスが近いうちに十字架にかけられるというときに、ペテロの口からイエスは生ける神の子である、キリストであるという言葉が発せられた。このとき初めてイエスの働きがすべての人に知られ、その身分が民衆に明かされることとなった。その後、イエスは弟子たちに対し、自分が人間のために十字架にかけられようとしていること、三日後に復活すること、贖いの働きを行なうために来たこと、そして自分が救い主であることを告げた。最後の六ヵ月間になって初めて、イエスは自分の身分と自分が行なおうとしている働きを明らかにしたのである。このときは神の時間でもあったので、働き

はこのようにして行なわれなければならなかった。その際、イエスの働きの一部は旧約聖書と一致しており、律法の時代におけるモーセの律法とヤーウェの言葉とも一致していた。これらのすべてを、イエスは自身の働きの一部を行なうために使ったのである。イエスは会堂で人々に説教し、教えを伝えた。そして自身に敵対していたパリサイ人を叱責するために旧約聖書の預言者たちの預言を用い、また彼らの不従順さをあばいて非難するために聖書の言葉を用いた。というのも、彼らはイエスがしたことを軽蔑し、特に、イエスの働きの多くが聖書の律法に沿っていなかったこと、そしてさらに、イエスの教えが自分たちの言葉より高尚であり、聖書の預言者たちが預言したことよりもさらに高尚だったことを忌み嫌ったからである。イエスの働きは人類の贖いと十字架のためだけにあった。そのため、イエスは人を征服するために、それ以上の言葉を語る必要はなかった。イエスが人に教えたことの多くは聖書の言葉から来ており、たとえイエスの働きが聖書を越えなかったとしても、イエスはやはり十字架の働きを達成することができた。イエスの働きは言葉の働きでも、人類を征服するためになされた働きでもなく、人類を贖う働きであった。イエスは人類のために罪のいけにえとして行動しただけで、人類のための言葉の源泉として行動したのではなかった。イエスは異邦人の働き、つまり人間を征服する働きはしなかったが、十字架の働き、つまり神の存在を信じた人々のあいだでなされた働きをした。たとえイエスの働きが聖書に基づいて実行され、またパリサイ人たちを非難するために、昔の預言者によって言われたことを用いたとしても、これは十字架の働きを完成するのに十分であった。もし今日の働きが依然として聖書にある昔の預言者たちの預言に基づいて実行されるなら、あなたがたを征服するのは不可能であろう。というのも、旧約聖書にあなたがた中国人の不従順さと罪の記録はなく、またあなたがたの罪の履歴もないからである。ゆえに、この働きがまだ聖書に残っているなら、あなたがたは決して屈しないであろう。聖書に記録されているのはイスラエル人の歴史の一部だけであり、あなたがたが善か悪かを判断したり、あなたがたを裁いたりすることができるものではない。わたしがイスラエル人の歴史に従ってあなたがたを裁くと想像してみなさい。今日のように、あなたがたはわたしに従っているだろうか。あなたがたは自分たちがどれほど難しい人間かわかっているのか。この段階で言葉がまったく話されなかったら、征服の働きを完成することは不可能であろう。わたしは十字架にかけられるために来たのではないので、あなたがたが征服されるよう、聖書とは別の言葉を話さなければならない。イエスが行なった働きは、旧約聖書より高位にある一段階に過ぎなかった。それはひとつの時代を始めるため、その時代を先導するために使われたのである。なぜイエスは「わたしは律法を廃するためではなく、成就するために

来たのである」と言ったのであろうか。しかしイエスの働きには、旧約聖書のイスラエル人が実践した律法、および彼らが従った戒めと一致しないことがかなりあった。それは、イエスが来たのは律法を守るためではなく、成就するためだったからである。律法を成就する過程には、多くの現実的な事柄が含まれていた。イエスの働きはもっと実際的かつ現実的であり、さらにそれはより一層生きたものであり、規則への盲従ではなかった。イスラエル人は安息日を守っていたのではないか。イエスは来たときに安息日を守らなかった。なぜなら、人の子は安息日の主であるとイエスが言ったように、安息日の主が来たときには、自由に振舞うものだからである。イエスが来たのは旧約聖書の律法を成就し、それを変えるためだった。今日なされるすべてのことは現在を基にしているが、やはり律法の時代におけるヤーウェの働きが基盤になっており、この範囲を超えることはない。たとえば、言葉に気をつけること、姦淫を犯さないことなどは、旧約聖書の律法ではないだろうか。今日、あなたがたに要求されていることは十戒だけに限らず、以前にもたらされたものより高次の戒めや律法から成り立っているが、これは以前のもものが廃止されたという意味ではない。というのも、神の働きの各段階は以前の段階を基盤にして実行されるからである。ヤーウェがイスラエルに伝えたこと、たとえば犠牲を捧げ、父と母を敬い、偶像崇拜をせず、他人に暴行を加えたり呪ったりせず、姦淫を犯さず、喫煙や飲酒をせず、死肉を食べず、血を飲まないよう人々に求めたことなどについて言えば、それは現在でもあなたがたの実践の基盤を形作っているのではないか。過去の基盤の上に、働きは今日に至るまで行なわれてきたのである。もはや過去の律法が語られることはなく、新しい要求が課せられるようになったからといって、過去の律法は廃止されたところか、より高い状態に引き上げられたのである。過去の律法が廃止されたということは、前の時代が期限切れになったことを意味する一方、戒めには未来永劫守らなければならないものがある。過去の戒めはすでに実践されてきており、すでに人間の在り方となっているので、喫煙をしてはならないとか、飲酒をしてはならないといった戒めをことさら強調する必要はないのである。この基盤の上に、あなたがたの今日の必要性にしたがって、あなたがたの霊的背丈にそって、現在の働きに合わせて、新しい戒めが定められるのである。新時代の戒めを制定することは、旧時代の戒めを廃止することではなく、この基盤の上でさらに高く持ち上げ、人間の行動をさらに完全なもの、現実とより調和したものとするものである。今日、あなたがたがイスラエル人と同じように、戒めに従い、旧約聖書の律法を守ることしか要求されず、ヤーウェによって制定された律法を暗記することさえ求められていたら、あなたがたが変われる可能性はないだろう。これらの限られた戒めを守ったり、数えきれないほどの律法を暗記し

たりするだけならば、あなたがたの古い本性は深く根ざしたままで、それを引き抜く方法はないであろう。そのため、あなたがたはますます墮落し、あなたがたのうち誰ひとりとして従順にならないであろう。つまり、少数の簡単な戒めや数知れない律法は、あなたがたがヤーウェの業を知る上で助けにはならないということである。あなたがたはイスラエル人と同じではない。律法に従い、戒めを暗記することによって、彼らはヤーウェの業を目の当たりにし、ヤーウェだけに献身を捧げることができた。しかし、あなたがたがそれを成し遂げることはできない。そして、旧約聖書時代の僅かな戒めは、あなたがたに心を捧げさせることも、あなたがたを守ることもできないだけでなく、それどころかあなたがたをだらしなくさせ、ハデスに落とすだろう。わたしの働きは征服の働きで、あなたがたの不従順さや古い本性に向けられているからである。ヤーウェとイエスの優しい言葉は、今日の厳しい裁きの言葉に比べてはるかに劣っている。そのような厳しい言葉がなければ、何千年ものあいだ服従してこなかった、不従順の「専門家」であるあなたがたを征服するのは不可能であろう。旧約聖書の律法はずいぶん前にあなたがたへの力を失い、今日の裁きは古い律法よりはるかに手ごわい。あなたがたに最もふさわしいのは裁きであって、律法という取るに足らない制限ではない。なぜなら、あなたがたはごく最初の人間ではなく、何千年ものあいだ墮落してきた人間だからである。人間が今成し遂げなければならないことは、今日の人間の現状に即しており、現代人の素質と実際の霊的背丈にそったものであり、規則に従うことは要求されない。それはあなたの古い本性に変化を生じさせ、あなたが自分の観念を捨てるようにするためである。あなたは戒めのことを規則だと思っているのか。戒めとは、人間に課せられる正常な要求事項だということができる。戒めは従うべき規則ではない。たとえば、喫煙の禁止を考えてみたまえ。これは規則であろうか。規則ではない。これは正常な人間性が要求することである。これは規則ではなく、人類全体に求められていることである。これまでに定められた十数ヵ条の戒めもまた、今日では規則ではなく、正常な人間性を獲得するための必要事項である。過去、人々はこのようなことを身につけておらず、知ってもいなかったのだが、今日これらを達成するように求められているのであり、これは規則には入らない。律法は規則と同じではない。わたしが言う規則とは、儀式、形式的な行為、人間の逸脱した、あるいは間違った実践のことである。これらは人間にとって助けにも恩恵にもならない規則と規制であり、何の意義もない手順である。これこそが規則の典型であり、このような規則は排除しなければならない。人間に恩恵をもたらさないからである。実践しなければならないのは、人間にとって恩恵となるものである。

神の働きのビジョン (2)

悔い改めの福音は恵みの時代に宣べ伝えられ、人は信じる限り救われると説いた。現在では、救いの代わりに征服と完全にすることだけが語られる。誰かが信じればその人の家族全体が祝福されるとか、いったん救われればいつまでも救われるなどといったことは決して言われない。今日では誰もこのような言葉を語らず、そうしたことは時代遅れになっている。当時、イエスの働きは全人類を贖う働きだった。イエスを信じるすべての人の罪は赦され、あなたがイエスを信じる限り、イエスはあなたを贖っただろう。イエスを信じるなら、もはや罪人ではなく、罪から解放されたのである。これが救われるということ、信仰によって義とされるということである。しかし、信じている人たちの中には反抗的で、神に逆らうものが残っており、それはやはり徐々に取り除く必要があった。救いとは、人が完全にイエスのものとなったことを意味したのではなく、その人がもう罪の中におらず、罪を赦されたことを意味した。信じるならば、もう罪の中にはいないのである。当時、イエスは弟子たちにとって不可解な働きを多数行ない、人々には理解できないことを数多く言った。これは当時イエスが何一つ説明しなかったからである。そのため、イエスが去ってから数年後、マタイがイエスの系図を作り、他の者も人間の意志による働きを数多く行なった。イエスは人を完全にして自分のものとするために来たのではなく、働きの一段階を行なうために来たのである。それは天の国の福音をもたらし、磔刑の働きを完成させることであり、イエスが十字架にかけられた時点でその働きは完了している。しかし、現在の段階、つまり征服の働きにおいては、より多くの言葉が語られ、より多くの働きがなされ、そして多くの過程を踏まなければならない。イエスとヤーウェの働きの奥義も明らかにされ、それによってすべての人が信仰において理解と明瞭さを得られるようにしなければならない。なぜなら、それは終わりの日の働きで、終わりの日は神の働きの終わりであり、働きが完了するときだからである。働きのこの段階はあなたに対し、ヤーウェの律法とイエスの贖いを明確にするだろう。この働きはおもに、あなたが神の六千年にわたる経営（救いの）計画の全体像を理解し、六千年の経営計画の意義と本質をすべて理解し、イエスによってなされたすべての働きとイエスが語った言葉の目的、そして聖書に対するあなたの盲目的な信頼と崇拜さえも理解するためである。それにより、あなたはそのすべてを完全に理解できるだろう。イエスによってなされた働きと今日の神の働きの両方を理解するようになるだろう。すべての真理、いのち、そして道を理解し、目の当たりにするだろう。イエスによってなされた働きの段階で、イエスはなぜ締めくくりの働きを行わずに去ったのだろう

か。それは、イエスによる働きの段階が完了の働きではなかったからである。イエスが十字架に釘付けにされたとき、イエスの言葉もまた終わりを迎えた。磔刑の後、イエスの働きは完全に終わったのである。現段階は違う。言葉が最後まで語られ、神の働きの全体が完了したあと、そこでようやく神の働きは終わる。イエスによる働きの段階の期間、多くの言葉が語られないままだったか、あるいは明確に述べられなかった。しかしイエスの職分は言葉による職分ではなかったため、イエスは自分が何を語って何を語らなかったかは気にかけず、そのため、十字架にかけられた後に去って行った。その段階の働きはおもに磔刑のためであり、現段階とは異なる。この現段階の働きは、基本的には完了すること、片づけること、そしてすべての働きを終結させるためのものである。もし言葉が最後の最後まで語られないなら、この働きを終える術はないだろう。この段階の働きにおいて、すべての働きは言葉を用いて終わり、達成されるからである。当時、イエスは人に理解できない数多くの働きを行なった。イエスは静かに去り、今日依然としてイエスの言葉を理解できない人が多数いる。彼らの理解は間違っているが、それでも彼らは正しいと信じており、間違っていることを知らない。最終的に、この現段階は神の働きを完全に終わらせ、その終結をもたらすだろう。すべての人が神の経営計画を理解し、知るようになるだろう。人の中にある観念、意図、間違った理解、ヤーウェとイエスの働きに関する観念、異邦人についての見方、そしてその他の逸脱と間違いは正されるだろう。そして人は人生の正しい道、神によってなされた働き、および真理をすべて理解するだろう。そうなったとき、この段階の働きは終わりを迎える。ヤーウェの働きは世界の創造であり、始まりだった。この段階の働きは働きの終わりであり、終結である。最初に、神の働きはイスラエルの選民のあいだで実行され、最も聖なる地における新しい時代の夜明けだった。最後の段階の働きは、世界を裁き、時代を終わらせるために最も汚れた国で実行される。最初の段階において、神の働きは最も明るい地で行なわれたが、最後の段階は最も暗い地で実行され、この暗闇は一掃され、光がもたらされ、すべての人が征服される。この最も汚れた、最も暗い場所にいる人々が征服され、すべての人が神の存在と誰が真の神であることを認め、あらゆる人がすっかり確信したとき、この事実は征服の働きを全宇宙で行なうのに用いられるだろう。この段階の働きは象徴的である。ひとたびこの時代の働きが終わると、六千年にわたる経営の働きは完全に終わりを迎える。ひとたび最も暗いこの場所にいる人々が征服されると、他のあらゆる場所でもそうなることは言うまでもない。そのように、中国における征服の働きだけが、象徴としての意味をもつ。中国は闇のすべての勢力を具現化しており、中国の人々は肉なる者、サタンの者、そして血肉による者を表わしている。赤い大きな竜によっ

て最も墮落させられ、神に最も反抗し、人間性が最も卑しく汚れているのは中国人である。だから彼らは墮落した全人類の典型なのである。これは、他の国々にはまったく問題がないということではない。人間の観念はどれも同じである。他国の人々は優れた素質をもっているかもしれないが、神を知らなければ、彼らは神に逆らっているはずである。なぜユダヤ人も神に逆らい、神を拒んだのか。なぜパリサイ人も神に逆らったのか。なぜユダはイエスを裏切ったのか。当時、弟子の多くはイエスのことを知らなかった。なぜ人々は、イエスが十字架にかけられ、そして復活した後でさえもイエスを信じなかったのか。人間の不服従はどれも同じではないのか。中国の人々は単にひとつの例にされたというだけである。征服されたとき、彼らは模範、見本となり、他の人々の参考として役立つだろう。あなたがたはわたしの経営計画の付属物であると、わたしが常に言ってきたのはなぜか。墮落、汚れ、不義、敵対、そして反抗が最も完全に現われ、あらゆる形で示されているのは、中国の人々においてである。中国人は素質に乏しい一方、中国人の生活と考え方は遅れており、習慣、社会環境、そして生まれ育った家族など、すべてが劣っており、最も遅れている。地位もまた低い。この場所での働きは象徴的で、この試験的な働きがすべて実行された後、神の次の働きはもっと順調に進むだろう。もしこの段階の働きが完了し得るなら、次の働きもそうなるのは言うまでもない。この段階の働きが達成されたなら、大いなる成功がおさめられ、全宇宙におよぶ征服の働きは完全に終わりを迎えるだろう。実際、あなたがたのあいだで働きが成功したなら、これは全宇宙で成功したのと同じことである。これが、わたしがあなたがたを模範、および見本として行動させる意義である。反抗、敵対、汚れ、不義など、そのすべてがこの人たちに見られ、彼らの中には人類の反抗心がすべて表わされている。まったく大した人たちである。このように、彼らは征服の縮図として掲げられ、ひとたび征服されると、自然と他の人たちの見本および模範になるだろう。イスラエルで実行された最初の段階ほど象徴的なものはない。イスラエルの人々は諸国民の中で最も聖く、最も墮落していない人たちであり、この地の新しい時代の夜明けは最大の意義をもっていた。人類の祖先はイスラエルから来て、イスラエルは神の働きの発祥の地だったとすることができる。はじめのころ、この人たちは最も聖く、みなヤーウェを礼拝し、彼らにおける神の働きは偉大な成果をもたらすことができた。聖書の全体は二つの時代の働きを記録している。ひとつは律法の時代の働きであり、もうひとつは恵みの時代の働きである。旧約聖書はイスラエルの人々に対するヤーウェの言葉と、イスラエルにおけるヤーウェの働きを記録している。新約聖書はユダヤの地におけるイエスの働きを記録している。では、なぜ聖書には中国人の名前が記されていないのか。それは、神の働きにおける最初

の二つの部分がイスラエルで行なわれたからであり、イスラエルの人々は選民だったからである。つまり、彼らはヤーウェの働きを最初に受け入れた民族だったのである。彼らは全人類の中で最も墮落しておらず、はじめのころ、神を見上げて崇敬する心構えをもっていた。彼らはヤーウェの言葉に従い、常に神殿で奉仕をし、祭司の衣や冠をつけた。彼らは神を礼拝した最初の民族で、神の働きの最初の対象だった。人類すべての見本であり模範だった。聖と義の見本であり模範だった。ヨブ、アブラハム、ロト、ペテロ、テモテのような人たちはみなイスラエル人で、最も聖なる見本であり、模範だった。イスラエルは人類の中で神を礼拝した最初の国であって、他のどこよりも義なる人々が出た。神は将来地の至るところで人類をより良く経営できるよう、イスラエル人の中で働いた。彼らが成就したことと、ヤーウェへの崇拝の義は記録され、その結果、彼らは恵みの時代にイスラエルを越えて人々の見本、模範となることができた。そして彼らの行動は今日に至るまで、数千年の働きを支えたのである。

創世後、神の働きの最初の段階はイスラエルで行なわれた。したがって、イスラエルは地上における神の働きの発祥地であり、また拠点だった。イエスの働きの範囲はユダヤの地全体に及んだ。イエスの働きのあいだ、ユダヤの地の外側にいた人々でそれを知っていた人はほとんどいなかった。イエスはユダヤの地を越えて働きを行なわなかったからである。今日、神の働きは中国にもたらされ、純粹にこの範囲内で行なわれている。この段階において、中国の外側で働きが着手されることはない。中国の外に広まるのは、もっとあとに来る働きである。この働きの段階はイエスによる働きの段階に続くものである。イエスは贖いの働きを行なったが、この段階ではそれに続く働きが行なわれる。贖いの働きは完了したので、この段階で聖霊による受胎の必要はない。なぜなら、この働きの段階は前の段階と違うものであり、さらに中国はイスラエルと違うからである。イエスによる働きの段階は贖いの働きだった。人間はイエスを目の当たりにし、それから程なくしてイエスの働きは異邦人へと広まりだした。現在、神を信じる人々がアメリカ、英国、そしてロシアに大勢いる。では、なぜ中国には信じる人が少ないのだろうか。それは中国が最も閉ざされた国だからである。そのため中国は神の道を受け入れた最後の国であり、そのときから現在まで、まだ百年も経っていない。アメリカや英国よりずっと遅れているのだ。神の働きの最終段階が中国の地で行なわれるのは、その働きを完結させるため、そのすべてが達成されるようにするためである。イスラエルの人々はみなヤーウェを主と呼んだ。当時、イスラエルの人々はヤーウェを家長とみなし、イスラエル全体がひとつの大きな家族となり、家族全員が自分たちの主であるヤーウェ

を崇拜した。ヤーウェの霊はしばしば彼らの前に現われ、声を発して語りかけ、雲の柱と音をもって彼らの生活を導いた。当時、霊はイスラエルで直接導きを与え、声を発して人々に語りかけた。そして人々は雲を見、雷が鳴り響くのを聞いた。何千年ものあいだ、神はこのようにしてイスラエルの人々の生活を導いた。そのため、イスラエルの人々だけが常にヤーウェを崇拜してきた。彼らは、ヤーウェは自分たちの神であり、異邦人の神ではないと信じている。これは驚くべきことではない。何と云っても、ヤーウェはほぼ四千年にわたってイスラエルの人々の中で働いたのだから。中国の地においては、墮落した者たちが何千年間も惰眠を貪った後、天地と万物が自然に形成されたのではなく、創造主によって創られたことを知るようになった。この福音が国外から来たために、封建的かつ反動的な思考をもつ人は、その福音を受け入れる者はみな裏切り者で、先祖である仏陀を裏切ったろくでなしだと信じている。さらに、そうした封建的思考の持ち主の多くは、「どうして中国人が外国人の神を信じられるのか。先祖を裏切っているのではないか。悪事を犯しているのではないか」と問い質す。今日、ヤーウェが自分たちの神であることを、人々はずいぶん前から忘れてしまっている。ずっと以前に創造主のことを頭の奥に押し込み、その代わりに進化論を信じ、人類はサルから進化し、自然界は当然のように生じたとしている。人類が享受する良き食べ物はどれも自然が与えるもので、人間の生死には秩序があり、そのすべてをつかさどる神など存在しないというのである。そのうえ、神が万物を支配しているというのは迷信で、科学的でないと感じる無神論者が多くいる。しかし、科学が神の働きに取って代われるだろうか。科学が人類を支配できるだろうか。無神論に支配されている国で福音を説くのは容易な仕事ではなく、そこには大変な障害が伴う。今日、そのような形で神に逆らう人が大勢いるのではないか。

イエスが来て働きを行なったとき、多くの人がイエスの働きとヤーウェの働きを比べて矛盾点を見つけ、イエスを十字架にかけた。なぜ両者の働きに一致している点が見つからなかったのか。それは、一つにはイエスが新しい働きを行なったからであり、もう一つはイエスが働きを開始する前に誰もイエスの系図を書かなかったからである。もしも誰かがそうしていれば、悩む必要はなかったはずであり、誰がイエスを十字架にかけただろうか。もしもマタイが数十年早くイエスの系図を書いていたならば、イエスはあのような激しい迫害を受けていなかっただろう。そうではないか。人々がイエスの系図を読み、イエスがアブラハムの子でありダビデの子孫であることを知ったならば、イエスへの迫害を直ちに止めていただろう。イエスの系図があまりに遅く書かれたのは、何

とも残念なことではないか。また、聖書が神の働きの二段階、すなわち律法の時代の働きの段階と恵みの時代の働きの段階、そしてヤーウェの働きの段階とイエスの働きの段階しか記録していないとは、何と残念なことだろうか。偉大な預言者が今日の働きを預言していたら、どれほど良かったことか。聖書に「終わりの日の働き」という題名の追加箇所があったならば、ずっと良かったのではないだろうか。なぜ人間は今日これほどの苦勞に耐えなければならないのか。あなたがたは極めて困難な時期を経験してきた。もしも憎まれるに足る人がいるとすれば、それは終わりの日の働きを預言しなかったイザヤとダニエルである。そして責められるべき人がいるとすれば、それは神の二度目の受肉までの系図を書いておかなかった新約聖書の頃の使徒たちである。何とも困ったことだ。あなたがたは証拠を求めて至るところを探し回らなければならない。たとえ小さな言葉の断片をいくつか見つけたとしても、それが本当に証拠なのかは依然としてわからない。なんと恥ずかしいことか。神は自身の働きにおいてなぜそれほど秘密を貫くのか。今日、多くの人々がいまだに決定的な証拠を見つけておらず、それでいながら否定することもできずにいる。彼らはどうするべきか。断固として神に従うことができないし、そのような疑いを抱えたままで前進することもできない。そのため多くの「才能に恵まれた賢い学者たち」は、神に従うにしても「様子を見ながら試す」という態度をとる。これはあまりにも面倒である。もしもマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネが未来を預言できていたなら、物事はもっと容易だったのではなかろうか。ヨハネが神の国における生活の内なる真実を見ていれば良かったのだが、幻を見ただけで地上における現実的かつ物理的な働きを見なかったのは、何と残念なことだろうか。実に困ったことである。神は一体どうなっているのか。イスラエルでの働きがあれほど順調に運んだ後、神はなぜ今、中国に来たのだろうか。そしてなぜ神は肉となり、人々のあいだで自ら働きを行ない、そこで暮らさなければならないのか。神は人間に対して配慮がなさすぎる。神は人々に前もって告げなかっただけでなく、刑罰と裁きを突然もたらした。本当に訳がわからない。初めて神が肉となったとき、内なる真実のすべてを前もって人間に告げなかったために、イエスは大変な苦勞をした。まさか神がそのことを忘れたはずはないだろうに。それなのになぜ、神は今回も人間に告げないのか。現在、聖書に六十六の書しかないのはなんと不運なことか。終わりの日の働きを預言する、あともう一つの書さえあればいいのだが。そう思わないか。ヤーウェ、イザヤ、ダビデでさえ今日の働きに言及しなかった。彼らは現在からさらに大きく引き離されており、四千年以上の隔たりがある。イエスも今日の働きを十分には預言せず、それについて少し話しただけだった。そして人間は依然として不十分な証拠しか見つけられない。現在の働きと以前の働きを比

較して、どうして両者が互いに一致することがあり得るのか。ヤーウェによる働きの段階はイスラエルに向けられていたので、これと現在の働きを比べても不一致はさらに大きくなるだろう。この二つを比べることは決してできない。あなたはイスラエルの人間でも、ユダヤ人でもない。素質もなければ、あらゆることが欠けている。どうして彼らと自分を比べられるのか。そんなことが可能なのか。現在は神の国の時代であることを知りなさい。律法の時代とも恵みの時代とも異なるのである。とにかく、型通りのことを試したり、当てはめたりするのをやめなさい。そのようなものに神を見つけることはできないのである。

イエスは生まれてからの二十九年間をどのように過ごしたのか。聖書はイエスの子供時代と青年時代について何も記録していない。それらがどのようなものだったか、あなたは知っているか。イエスには子供時代も青年時代もなく、生まれたときにはすでに三十歳だったということなのか。あなたはあまりに知らないのだから、そう不注意に自分の意見を広めてはいけない。そんなことはあなたのためにならない。聖書に記録されているのは、イエスが三十歳の誕生日の前に洗礼を受け、聖霊に導かれて荒野に行き、悪魔の試みを受けたことだけである。また四福音書は三年半にわたるイエスの働きを記録している。子供時代と青年時代の記録は存在しないが、だからと言ってイエスには子供時代も青年時代もなかったという証拠にはならない。これはただ、イエスは当初働きを行わず、普通の人だったということである。では、イエスは青年時代も子供時代もなしに三十三年間生きたと言えるだろうか。突然三十三歳半になれただろうか。人間がイエスについて考えることは、どれも超自然的かつ非現実的である。受肉した神が普通の正常な人間性を備えていることに疑いの余地はない。しかし神が自身の働きを行なうとき、それはまさに神の不完全な人間性と完全な神性をもって行なわれる。そのため、人々は今日の働きについて、そしてイエスの働きについてさえも疑っているのである。神は二度肉となり、それぞれにおける働きは異なっているが、神の本質は変わらない。もちろん、四福音書の記録を読めば、違いは大きい。どうすれば、あなたはイエスの子供時代と青年時代の生活に戻ることができるのか。いかにしてイエスの正常な人間性を理解することができるのか。あなたは、今日の神の人間性については確固とした理解を得ているかもしれないが、イエスの人間性については何も把握していないし、ましてや理解してもいない。マタイが記録していなければ、イエスの人間性についてかすかに知ることもしなかつただろう。わたしがイエスの生涯における逸話を語り、イエスの子供時代と青年時代の内なる真実を告げてしまえば、おそらくあなたは首を横に振ってこう言う

だろう。「違う。イエスがそんなだったはずはない。弱さなどあり得ないし、ましてや人間性など一切もちあわせているはずがない」。あなたは叫んで悲鳴をあげさえするだろう。あなたはイエスを理解していないからこそ、わたしについて観念を抱いている。あなたはイエスのことをあまりに神聖だと考え、肉体的なものは一切もっていないと信じている。しかし、事実はやはり事実である。事実の中にある真実を大胆に無視して話そうとする人はいない。なぜなら、わたしが話すとき、それは真実に関することだからである。憶測でも予測でもない。神は大いなる高みに達することができ、またそれ以上に、最も低いところに隠れられることを知りなさい。神はあなたの知性による想像を絶している。神はすべての被造物の神であり、ある特定の人が思い描く個人的な神ではない。

神の働きのビジョン（３）

神が初めて肉となったのは聖霊による受胎を通じてであり、それは神が行なおうとする働きに関係していた。恵みの時代はイエスの名と共に始まった。イエスが自身の職分を始めたとき、聖霊はイエスの名に対する証しを始め、ヤーウェの名はもはや語られなかった。その代わり、聖霊はおもにイエスの名のもとに新しい働きに着手した。神を信じる人たちの証しはイエス・キリストのためになされ、彼らが行なった働きもまたイエス・キリストのためだった。旧約聖書における律法の時代の終わりは、おもにヤーウェの名のもとで行なわれた働きが完結したことを意味していた。その後、神の名はもはやヤーウェではなくなった。神は代わりにイエスと呼ばれ、それ以降、聖霊はおもにイエスの名のもとで働きを始めることになった。人々は今日もなおヤーウェの言葉を飲み食いし、いまだに律法の時代の働きにしたがってあらゆることを行なっているが、あなたは盲目的に規則に従っているのではないか。過去から抜け出せずにいるのではないか。現在、あなたがたは終わりの日が来たことを知っている。イエスが来るとき、彼はやはりイエスと呼ばれるということなのか。ヤーウェはイスラエルの人々にメシアが来つつあると言ったが、メシアが本当に来たとき、それはメシアでなくイエスと呼ばれた。イエスは、自分は再び来る、去ったときと同じように現われると言った。これらはイエスの言葉だが、あなたはイエスの去り方を見たのか。イエスは白い雲に乗って去ったが、白い雲に乗って自ら人々のもとに戻ってくるということなのか。そうであれば、やはりイエスとは呼ばれないのだろうか。イエスが再び来るとき、時代はすでに変わっているが、それでもやはりイエスと呼ばれることがあり得るのか。神はイエスという名でしか知られないということなのか。神が新しい時代に新しい名で呼ばれることはないのか。

ひとりの人の姿とある特定の名前が神の全体を表わすことができるのか。それぞれの時代、神は新しい働きを行ない、新しい名で呼ばれる。どうして神が異なる時代に同じ働きを行なえるのか。どうして神が古いものにしがみつけないのか。イエスの名は贖いの働きのために使われたが、それならば終わりの日にイエスが再臨するとき、依然として同じ名前と呼ばれるのだろうか。イエスはまた贖いの働きを行なっているのだろうか。ヤーウェとイエスは一つでありながら、異なる時代に異なる名前と呼ばれるのはなぜか。それは働きの時代が違うからではないのか。一つの名前で神の全体を表わすことができるのだろうか。そのようなわけで、神は異なる時代に異なる名前と呼ばれなければならない。なぜなら、一つの名前だけで神を完全に表わすことはできず、それぞれの名前はある時代における神の性質の一時的な側面しか表わせないからである。必要なのは、神の働きを表わすことだけである。よって、神は時代全体を表わすために、どんな名前であれ自身の性質に合う名前を選ぶことができる。ヤーウェの時代であれ、イエスの時代であれ、それぞれの時代は名前によって表わされている。恵みの時代の終わりに最後の時代が来て、イエスはすでに到来した。それなのに、神はどうしていまだにイエスと呼ばれ得るのか。どうして人々のあいだでイエスの姿をとれるのだろうか。イエスはナザレ人の姿に過ぎなかったことを忘れたのか。イエスは人類の贖い主でしかなかったことを忘れたのか。どうしてイエスが終わりの日に人を征服し、完全にする働きに取り組めるというのか。イエスは白い雲に乗って去って行った。それは事実である。しかし、イエスが白い雲に乗って人間のもとに帰ってきて、依然イエスと呼ばれることなどどうしてあり得ようか。イエスが本当に雲に乗って来たなら、人間が認識できないのはどういうことだろうか。世界中の人々がイエスを認識するのではないだろうか。その場合、イエスだけが神だということになるのではないか。その場合、神の姿はユダヤ人の外見であり、またそれ以上に、永遠に同じということになるはずだ。イエスは、自分は去ったときと同じように来ると言ったが、その言葉の本当の意味をあなたは知っているのか。あなたがたの集団に告げたということがあり得るのか。あなたが知っているのは、イエスは去ったときと同じく、雲に乗って来るということだけである。しかし、神自身がいかに関心を持って働きの行なうのか、あなたは正確に知っているのか。あなたが本当にわかっているのなら、イエスが語った言葉はいかに説明されるのか。イエスは、「人の子が終わりの日に来るとき、人の子自身それを知らず、天使たちも知らず、天の御使たちも知らず、すべての人も知らない。ただ父だけが知っている。つまり、霊だけが知っている」と言った。人の子自身でさえ知らないというのに、あなたは知り、見ることができるのか。あなたが自分の

目で見て知ることができるのであれば、これらの言葉は無駄に語られたことにならないだろうか。そしてその際、イエスは何と言ったのか。「その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。……だから、あなたがたも用意をしておきなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。」その日がいつ来るのかは、人の子自身も知らない。人の子とは神の受肉した肉体のことであり、普通で平凡な人である。人の子自身でさえ知らないのに、どうしてあなたが知り得るのか。イエスは、去った時と同じように来ると言った。いつ来るのかは、イエス自身も知らないのである。ならば、イエスがあなたに前もって知らせることができるだろうか。あなたは彼の到来を見ることができるのか。それは冗談ではないのか。神は地上に来るたび、自身の名前、性別、姿、働きを変えるものの、自身の働きを繰り返すことはない。神は常に新しく、決して古くない神である。以前に来たとき、神はイエスと呼ばれた。再び到来した今回、神はやはりイエスと呼ばれ得るのか。以前に来たとき、神は男性だった。今回も男性であり得るのか。神が恵みの時代に来たとき、その働きは十字架にかけられることだった。神が再び来るとき、依然として人類を罪から贖い得るのか。再び十字架にかけられ得るのか。それは自身の働きを繰り返すことではなかろうか。神は常に新しく、決して古くないことを知らないのか。神は不変だという人たちがいる。それは正しいが、そのことは神の性質と本質が変わらないことを指している。神の名前と働きの変化は、神の本質が変わったことを証明しているのではない。言い換えるなら、神は常に神であり、これは決して変わらない。神の働きは決して変わらないと言うのなら、神が六千年にわたる自身の経営（救いの）計画を終えることはできるだろうか。あなたは神が永遠に不変であることしか知らないが、神は常に新しく決して古くないことを知っているのか。神の働きが決して変わらないなら、神は人類を現代までずっと導くことができただろうか。神が不変なら、すでに二つの時代の働きを行なったのはなぜか。神の働きは止まることなく前進している。つまり、神の性質が徐々に人間に明かされており、そして明かされているのは神の本来の性質である。最初のころ、神の性質は人から隠されていて、神は決して自身の性質を人に公然と明かさず、人は神についての認識がまったくなかった。そのため、神は働きを用いて自身の性質を徐々に人に明かした。しかし、そのように働くことは、神の性質が時代ごとに変化するという意味ではない。神の旨が常に変わるために、神の性質が絶えず変化しているということではない。むしろ、神の働きの時代が異なるため、神は自身の本来の性質全体を一つひとつ人に明かし、それによって人は神を知ることができるのである。しかしそれは、神がもともと特有の性質をもたないこ

との証明でも、神の性質が時代と共に徐々に変わっていったことの証明でもない。そのような理解は間違いだと言えよう。時代の移り変わりに応じて、神は人に対し、自身だけがもつ固有の性質、すなわち神そのものを明らかにする。一つの時代の働きで神の性質全体を表現することはできない。だから「神は常に新しく、決して古くない」という言葉は神の働きを指しているのであり、また「神は不変である」という言葉は、神が本来所有するものと神そのものを指しているのである。いずれにせよ、六千年の働きを一点に絞ることはできないし、死んだ言葉で限定することもできない。そのようなことは人間の愚かさである。神は人が想像するほど単純ではないし、神の働きが一つの時代に留まることもあり得ない。たとえば、ヤーウェは常に神の名前を表わすわけではない。神はイエスの名のもとでも働くことができる。そのことは、神の働きが常に前へと進んでいることのしるしである。

神は常に神であり、決してサタンになることはない。サタンは常にサタンであり、決して神になることはない。神の知恵、神の素晴らしさ、神の義、そして神の威厳は決して変わることがない。神の本質、神が所有するものと神そのものは決して変わることがない。しかし、神の働きについて言えば、それは常に前へと進んでおり、絶えず深化している。神は常に新しく、決して古くないからである。神は時代ごとに新しい名前を名乗り、時代ごとに新しい働きを行ない、また時代ごとに、被造物に対して自身の新しい旨と新しい性質を見せる。新しい時代において、もし人々が神の新しい性質の表われを見られなければ、彼らは永遠に神を十字架にかけるとはならないだろうか。またそうすることで、神を定義するのではないだろうか。もしも神が男性としてのみ受肉したならば、人々は神を男性として、男たちの神として定義し、女たちの神だとは決して信じないはずだ。すると男たちは、神は自分たちと同じ性別であり、男たちの長であるとするだろう。しかし、女たちにとっては何になるのか。これは不公平であるし、えこひいきではないか。そうであれば、神が救ったすべての人は神と同じ男ということになり、女は一人も救われないということになる。神は人類を創造したとき、アダムを創り、そしてエバを創った。神はアダムだけを創造したのではなく、自分にかたどって男と女の両方を創ったのである。神は男たちだけの神ではなく、女たちの神でもある。神は終わりの日における新たな働きの段階に入っている。神は自身の性質をより一層明らかにするが、それはイエスの時代の憐れみと愛ではない。神の手には新たな働きがあるので、それは新たな性質を伴う。ゆえに、もしもこの働きが霊により行なわれたならば、つまり神が受肉せず、代わりに霊が雷鳴を通じて直接語り、人間には神と直接接触する術がない

ようにしたならば、人間は神の性質を知ることができるだろうか。もしもこの働きを行なうのが霊だけであれば、人間に神の性質を知る術はないだろう。人々が神の性質を自らの目で見ることができるのは、神が肉となると、言葉が肉において現われるとき、そして神が自身の性質全体を肉によって表現するときだけである。神は本当に、真に人間のあいだで暮らしている。神は触れることができ、人間は神の性質、および神が所有するものと神そのものと実際に関わりをもつことができる。そうすることでのみ、人間は真に神を知るようになるのである。また同時に、神は「男たちの神であり、女たちの神である」という状態での働きを完了させ、肉における自身の働きを残らず成し遂げた。どの時代においても、神は自身の働きを繰り返さない。終わりの日が到来したので、神は終わりの日に行なう働きを行ない、終わりの日における自身の性質を余すところなく現わす。終わりの日と言うとき、それは別の時代を指しており、その際イエスは、あなたがたは必ずや災害に見舞われ、地震、飢饉、疫病に遭遇すると言ったが、そのことは、それが新しい時代であり、もはや古くなった恵みの時代ではないことを示す。人々が言うように、神が永久に不変で、その性質は常に憐れみ深く慈愛に満ち、人間を自身のように愛し、すべての人に救いを提供し、決して人を憎むことがないのなら、神の働きが終わりを迎えることは果たしてあるだろうか。到来して十字架にかけられ、すべての罪人のために自分を犠牲にし、自身を祭壇に捧げたとき、イエスはすでに贖いの働きを完了させ、恵みの時代に終止符を打っていた。ならば、終わりの日にその時代の働きを繰り返す意味は何だろうか。同じことをするのは、イエスの働きを否定することではないだろうか。もしも神がこの段階に来た際に磔刑の働きを行なわず、慈愛に満ちて憐れみ深いままならば、時代を終わらせることができるだろうか。慈愛に満ちて憐れみ深い神は、その時代に終止符を打つことができるだろうか。時代を終わらせる神の最後の働きにおいて、神の性質は刑罰と裁きであり、神はその中で不義なるすべてのものを暴き、それによってすべての人を公然と裁き、真摯な心で神を愛する人たちを完全にする。このような性質だけが時代を終わらせることができる。終わりの日はすでに来ている。すべての被造物は種類ごとに選り分けられ、その本性を基にして異なる種類に分けられる。その瞬間、神は人の結末と終着点を明らかにする。もし人が刑罰と裁きを受けなければ、その人の不従順と不義を暴く術はない。刑罰と裁きを通じてでなければ、すべての被造物の結末を明らかにすることはできない。罰せられ、裁かれて初めて、人は本当の姿を示す。悪は悪と共に、善は善と共に置かれ、すべての人は種類ごとに選り分けられる。刑罰と裁きを通じ、すべての被造物の結末が明らかにされ、それによって悪人は罰せられ、善人は報いられる。そして、すべての人が神の支配に従属することになる。

。この働きのすべては義なる刑罰と裁きを通じて達成されなければならない。人の墮落は頂点に達し、人の不従順は極度に深刻になってしまったので、おもに刑罰と裁きから成り、終わりの日に明らかにされる神の義なる性質だけが、人をすっかり変えて完全な者としてすることができる。この性質だけが悪を暴き、よってすべての不義なる者を厳しく懲罰することができる。したがって、このような性質には時代の意義が吹き込まれており、神の性質はそれぞれの新しい時代における働きのために顕示され、表出される。そのことは、神が自身の性質を気まぐれに意味もなく明らかにするということではない。終わりの日に人の結末を明らかにする中で、神が依然として人に無限の憐れみと愛を授け、相変わらず人に愛情深く、人を義なる裁きにさらさず、むしろ寛容、忍耐、赦しを示し、人がどんなに深刻な罪を犯してもそれを赦し、義なる裁きが少しもないのであれば、神の経営のすべてはいったいいつ終わりを迎えるだろうか。このような性質がいつ人々を導き、人類の正しい終着点へと連れ出せるだろうか。いつも愛情に満ちている裁判官、優しい表情と柔和な心をもつ裁判官を例に取ってみよう。この裁判官は犯した罪に関係なく人々を愛し、また相手が誰であっても、愛情深く寛容である。そうであれば、いったいいつ正しい判決にたどり着けるのか。終わりの日には、義なる裁きだけが人を種類ごとに選り分け、新しい領域に連れて行くことができる。このように、裁きと刑罰から成る神の義なる性質を通じ、時代全体に終わりがもたらされるのである。

神の経営のすべてにおよぶ神の働きは完全に明白である。恵みの時代は恵みの時代であり、終わりの日は終わりの日である。それぞれの時代には明確な違いがある。と言うのも、神はそれぞれの時代にその時代を表わす働きを行なうからである。終わりの日の働きがなされるには、その時代を終わらせる燃焼、裁き、刑罰、怒り、破壊がなければならない。終わりの日は最後の時代を指している。最後の時代において、神は時代を終わらせないのか。時代を終わらせるため、神は自ら刑罰と裁きをもたらさなければならない。このようにしてのみ、神は時代を終わらせることができる。イエスの目的は、人が生存して生き続けられるようにすること、そしてより良い方法で存在できるようにすることだった。人が墮落に陥るのをやめ、それ以上ハデスと地獄の中で生きることがないよう、イエスは人間を罪から救い、また人間をハデスと地獄から救い出すことで、その人が生き続けられるようにした。今や終わりの日は来ている。神は人を絶滅させ、人類を完全に滅ぼすだろう。つまり、神は人類の反逆心を変えるのである。そのため、神が憐れみ深く愛に満ちたかつての性質をもって時代を終わらせるのは不可能であり、六千年にわたる経営計画を結実させることもできないだろう。すべての時代は神の性質の

特別な表われを特徴とし、すべての時代は神によってなされるべき働きを含んでいる。したがって、それぞれの時代で神自身によってなされる働きは神の真の性質の表現を含んでおり、神の名前と神の行なう働きはいずれも時代とともに変わり、それらはすべて新しい。律法の時代、人類を導く働きはヤーウェの名のもとになされた。そして第一段階の働きは地上で始められた。この段階において、働きは神殿と祭壇を建てること、および律法を用いてイスラエルの人々を導き、彼らのさなかで働くことから成っていた。イスラエルの人々を導くことで、神は地上における働きの拠点を築いた。この拠点から、神は自身の働きをイスラエルの外に拡張させた。すなわち、イスラエルを皮切りに、自身の働きを外に向けて拡張したのである。それにより、後の世代は徐々に、ヤーウェが神であること、天地と万物を造ったのがヤーウェであること、そしてすべての被造物を造ったのもヤーウェであることを知るようになった。神はイスラエルの人々を通じ、自身の働きを外に向けて広めた。イスラエルの地は地上におけるヤーウェの働きの最初の聖なる地であり、神が地上で働きを行なうべく最初に来たのもイスラエルの地だった。それが律法の時代の働きだった。恵みの時代、イエスは人を救う神だった。イエスが所有するものとイエスそのものは恵み、愛、憐れみ、慎み、忍耐、謙遜、思いやり、寛容であり、イエスが行なった働きの多くは人の贖いのためだった。イエスの性質は憐れみと愛であり、イエスは憐れみと慈愛に満ちていたので、人間のために十字架にかけられる必要があった。そうすることで、神は自身のすべてを捧げるほど、人類を自分のように愛していることを示したのである。恵みの時代、神の名はイエスであり、それはつまり、神は人類を救う神であり、憐れみと慈愛に満ちていたということである。神は人と共にいた。神の愛、神の憐れみ、そして神の救いは一人ひとりに伴っていた。イエスの名前と存在を受け入れることでのみ、人は平安と喜びを得ることができ、神の祝福、無数の大いなる恵み、そして救いを受け取ることができたのである。イエスの磔刑を通じ、イエスに従うすべての人が救いを受け、その罪が赦された。恵みの時代、イエスは神の名だった。つまり、恵みの時代の働きはおもにイエスの名のもとでなされたのである。恵みの時代において、神はイエスと呼ばれた。イエスは旧約聖書を越えて新しい働きの段階に着手し、その働きは磔刑で終わった。それがイエスの働きのすべてだった。したがって、律法の時代においてはヤーウェが神の名であり、恵みの時代においてはイエスの名が神を表わした。終わりの日、神の名は全能神、すなわち全能者であり、自身の力で人を導き、人を征服し、人を自分のものとし、最終的にはその時代を終わらせる。どの時代でも、また神の働きのどの段階でも、神の性質は明らかである。

最初、旧約聖書の律法の時代に人間を導くのは、子どもの生活を導くようなものだった。原初的人类はヤーウェから生まれたばかりで、彼らこそイスラエル人だった。彼らはいかに神を崇めるべきかも、いかに地上で生きるべきかも分からなかった。言うなれば、ヤーウェは人類を創造したが、つまりアダムとエバを造ったが、ヤーウェをいかに崇めるべきかや、地上におけるヤーウェの掟をいかに守るべきかを理解する能力を人類に与えなかったのである。ヤーウェによる直接の導きがなければ、誰もそれらを直接知ることではできなかった。最初のうち、人間はそのような能力をもっていなかったからである。人間はヤーウェが神であるということだけを知っており、いかに神を崇めるべきか、どのような行為が神を崇めることだと言えるのか、どのような心で神を崇めるべきか、あるいは神への畏敬のしるしとして何を捧げるべきかについて、何一つまったく知らなかった。人間は、ヤーウェが創造した万物のなかで享受できるものをいかに享受するかしか知らなかった。地上におけるどういった生活が神の被造物にふさわしいかということについて、人間は少しも知らなかった。彼らに指導する者、彼らを直接導く者がいなければ、このような人間たちは人類にふさわしい生活を送ることなく、密かにサタンの虜にされていただけだろう。ヤーウェは人類を創造したが、つまり人類の祖先であるエバとアダムを造ったが、それ以上に知性や知恵を与えなかった。彼らはすでに地上で暮らしていたが、ほとんど何も理解していなかった。そのため、人類の創造におけるヤーウェの働きは半分しか完了しておらず、完成にはほど遠かった。ヤーウェは土で人間の雛形を造り、それに息を吹き入れてだけで、人間に神を崇めようという十分な意欲を授けることはなかった。最初、人間は神を崇めたり恐れたりする心をもたなかった。神の言葉に耳を傾けることを知っていただけで、地上の生活についての基本的知識や人間生活の正しい規則に関しては無知だった。このようなわけで、ヤーウェは男と女を造り、七日間の計画を終えたものの、人間の創造を完成させることは決してなかった。人間は殻でしかなく、人であることの現実を欠いていたからである。人は、人類を創造したのがヤーウェであることしか知らず、ヤーウェの言葉や律法にどう従うべきかについては何も知らなかった。だから人類が存在するようになった後も、ヤーウェの働きは完成からほど遠かった。それでもヤーウェは、人々が地上で共に暮らし、ヤーウェを崇めることができるよう、またヤーウェの導きのもと、人々が地上における正常な人間生活の正しい軌道に入れるよう、人間をしっかりと導き、自身の面前に来させる必要があった。そうすることでのみ、おもにヤーウェの名のもとで行なわれた働きはすっかり完成された。つまり、そのようにして初めて、ヤーウェの創世の働きが完全に完了したのである。このように、人類を創造したヤーウェは、人類がヤーウェの命令と律法に

従い、地上における正常な人間生活のあらゆる活動に携われるよう、地上における人類の生活を何千年間も導かねばならなかった。そのとき初めてヤーウェの働きは完全に完成したのである。ヤーウェは人類を創造した後でこの働きに着手し、ヤコブの時代まで、つまりヤコブの十二人の息子たちをイスラエルの十二部族にするまで続けた。それ以降、イスラエルのすべての人が地上で正式にヤーウェによって導かれる人種となり、イスラエルはヤーウェが自身の働きを行なう、地上における特別な場所となった。ヤーウェはこれらの人々を、自身が地上において正式に働きかける最初の集団とし、イスラエルの全土を自身の働きの発祥の地としたうえで、彼らをさらに偉大な働きの先駆けとして用いた。そうすることで、ヤーウェから生まれた地上のすべての人が、いかにヤーウェを崇めるべきか、いかに地上で生きるべきかを知るようにしたのである。このように、イスラエル人の行ないは、異邦の民族の人々が後に続くべき模範となり、またイスラエルの人々のあいだで語られたことは、異邦の民族の人々が耳を傾けるべき言葉となった。なぜなら、イスラエルの人々はヤーウェの律法と掟を受け取った最初の民であり、ヤーウェのさまざまな道をいかに崇めるべきかを最初に知った民だったからである。イスラエルの人々はヤーウェの道を知る人種の祖先であり、ヤーウェに選ばれた人種の代表でもあった。恵みの時代が到来したとき、ヤーウェはもはや人間をこのようには導かなかった。人間は罪を犯し、自らを罪にゆだねてしまっていたので、神は人間を罪から救い始めた。このように、人間が罪から徹底的に救い出されるまで、神は人間をとがめた。終わりの日、人間はそこまで墮落してしまったので、この段階の働きは裁きと刑罰を通じてでなければ行なうことができない。この方法によってのみ、働きは達成される。これは複数の時代の働きだった。つまり、神は自らの名前、働き、そして異なる神の姿を使って各時代を区切るとともに、それらを移り変わらせるのである。神の名前と働きは、神の時代と各時代における神の働きを表わすのである。どの段階においても神の働きが常に同じで、神がいつも同じ名前と呼ばれるなら、人はどのように神を知るのだろうか。神はヤーウェと呼ばれなければならない、ヤーウェと呼ばれる神以外に、他の名前と呼ばれるものは神ではない。あるいは、神はイエスとだけ呼ばれ、イエスという名前を除き、他の名で呼ばれることはない。イエスを別にすれば、ヤーウェは神でなく、全能神も神ではない。神は全能だと人は信じているが、神は人とともにいる神である。そして神は人とともにいるのだから、イエスと呼ばれなければならない。そうすることは教義に従い、神を一定の範囲に束縛することである。ゆえに、それぞれの時代で神が行なう働き、神が呼ばれる名前、神がとる姿、すなわち今日に至るまでの各段階で神が行なう働きは、一つの規律に従うものではないし、いかなる制限を受けることもない

。神はヤーウェであり、しかしイエスでもあり、メシヤ、全能神でもある。神の働きは徐々に変わることができ、それにあわせて神の名も変化する。どの一つの名も神を完全に表わすことはできないが、神が呼ばれるすべての名は神を表わすことができ、神が各時代に行なう働きは神の性質を表わしている。終わりの日が訪れるとき、あなたの目にする神が依然としてイエスであり、またそれ以上に、神が白い雲に乗って来て、依然としてイエスの姿をしており、その話す言葉はイエスの言葉のままで、次のように言ったとしよう。「あなたがたは自分のように隣人を愛し、断食して祈り、自分のいのちを大事にするように敵を愛し、他の人に寛容であり、忍耐強く、謙虚であるべきだ。わたしの弟子になる前に、これらのことをすべて実行しなければならない。そうすることで、あなたがたはわたしの国に入ることができる」。これは恵みの時代の働きに属するものではないだろうか。神が述べているのは恵みの時代の道ではないだろうか。これらの言葉を聞くことになれば、あなたがたはどう感じるだろうか。これはやはりイエスの働きだと思わないだろうか。それはイエスの働きを繰り返しているのではないだろうか。人はそこに喜びを見出せるだろうか。あなたがたは、神の働きは今のままで留まり、これ以上進歩しないと感じているかもしれない。神にはそれほどの力しかなく、行なうべき新しい働きはこれ以上ないのであって、神は力を使い果たした、と。今から二千年前は恵みの時代であり、それから二千年後、神は依然として恵みの時代の道を説き、依然として人々に悔い改めさせている。人々は「神よ、あなたにはそれほどの力しかありません。あなたはとても知恵のあるお方だと、わたしは信じていました。でもあなたは寛容しかご存知でなく、忍耐ばかり気にしておられます。また敵を愛す方法しかご存知でなく、他には何もありません」と言うかもしれない。人の心の中で、神は永遠に恵みの時代の神のままであり、神は慈愛に満ちて憐れみ深いと、人はいつまでも信じている。あなたは、神の働きは常に同じ古い場所で足踏みしていると思っているのか。ゆえに神の働きのこの段階において、神が十字架にかけられることはなく、あなたがたが見て触れるすべてのものは、想像したり聞かされたりしてきたこととまったく異なるだろう。今日、神はパリサイ人とは関わらず、世界が知ることを許してもいない。そして神を知るのは、神に従うあなたがただけである。なぜなら、神が再び十字架にかけられることはないからである。恵みの時代、イエスは自身の福音の働きのために全土で公に教えを説いた。イエスは磔刑の働きのためにパリサイ人と関わった。もしもイエスがパリサイ人と関わり合いにならず、権力者たちがイエスのことを知らなかったならば、どうしてイエスが断罪され、そして裏切られて十字架にかけられるということがあり得ただろうか。したがって、イエスは十字架にかけられるためにパリサイ人と関わったのである。今

日、神は試みを避けるべく秘密裏に働きを行なう。二度にわたる神の受肉において、その働きと意義は異なっており、設定も異なっているのだから、どうして神の行なう働きがまったく同じであり得るだろうか。

「神はわたしたちと共におられる」というイエスの名は、神の性質の全体を表わせるだろうか。神を完全に表現できるだろうか。もしも、神は自身の性質を変えることができないので、イエスと呼ばれることしかできず、他の名をもつことはないと言えら、それらの言葉はまさに冒涇である。あなたは、「神は共におられる」というイエスの名前だけで神の全体を表せると信じているのか。神は多くの名で呼ばれ得るが、それらの多くの名前の中に、神のすべてを要約できるものは一つとしてなく、神を完全に表わせるものもない。それゆえ、神は多くの名前をもっているが、これらの多くの名が神の性質を余すところなく明確に表現することはできない。なぜなら、神の性質はあまりにも豊かで、神に関する人の認識能力を完全に越えているからである。人が人間の言語を使うことで、神を完全な形で要約することはできない。神の性質について自分たちが知っているすべてのことを要約するにあたり、人間には限られた語彙しかない。偉大な、りっぱな、驚くべき、計り知れない、至高の、聖なる、義なる、知恵に満ちたなど、何と多くの言葉があることか。この限られた語彙では、人間が神の性質に関して目の当たりにしたことを、ほんの少しでも記述することは不可能である。やがて、自分の心の中の熱情をもっと上手に記述できるはずだと、他の多くの人々がさらに言葉を追加した。神はとても偉大だ。神はとても神聖だ。神はとても美しい。今日、人間がこのように言うことはその頂点に達しているが、それでも自分自身を明確に表現できずにいる。だから、人間にとって神には多くの名前があるものの、神がもつのは一つの名前ではない。なぜなら、神の存在はあまりに豊富で、人間の言語はあまりに乏しいからである。ある一つの特定の言葉や名前では、神の全体を表わすことができない。そうであれば、神の名は固定され得るとあなたは考えているのか。神は極めて偉大で聖いのに、神がそれぞれの新しい時代に名前を変えるのを許さないつもりなのか。したがって、神は自ら働きを行なうそれぞれの時代に、自身が行なおうとしている働きを要約するため、その時代に合った名前を用いるのである。神はその時代における自身の性質を表わすために、一時的な意義を有する特定の名前を用いる。これは、神が自身の性質を表現するために人間の言語を用いるということである。たとえそうでも、霊的な体験をして神をじかに見たことがある多くの人々は、この特定の名前が神の全体を表わすことはできないと感じている。ああ、何と救いがたいことか。そのせいで、人間はもはや神を名前で呼ぶことは

なく、ただ「神」と呼ぶのである。それはあたかも、人間の心が愛であふれていながら、同時に矛盾に悩まされているかのようである。人間は神をいかに説明すればよいかわからないからである。神そのものは極めて豊かなので、それを表現する術はまったくない。神の性質を要約できる一つの名前はなく、神が所有するものと神そのものを余すところなく表現できる一つの名前もないのである。もしも誰かがわたしに「あなたはいたい何という名前を使うのですか」と尋ねるならば、こう答えるだろう。「神は神である」と。これこそが神にとって最良の名前ではないのか。神の性質の最高の要約ではないのか。そうであれば、神の名を求めてなぜそんなに苦労するのか。どうして名前のことで寝食を忘れ、頭脳を振り絞るのか。神がヤーウェ、イエス、あるいはメシアと呼ばれない日がやって来るだろう。神はただ創造主と呼ばれるのである。その時、神が地上で名乗ったすべての名前は終わりを迎える。なぜなら、地上における神の働きが終わり、その後神の名はなくなるからである。万物が創造主の支配下に入るとき、神がどうして適切ではあるが不完全な名前をもつ必要があるのか。あなたは今なお神の名を求めているのか。神はヤーウェとしか呼ばれないとあえていまだに言うつもりか。神はイエスとしか呼ばれないとあえていまだに言うつもりか。神を冒瀆する罪を背負えるのか。神は本来どんな名前ももたなかったということを知るべきである。神には行なうべき働きがあり、人類を経営しなければならなかったのだから、一つや二つの、あるいは多くの名前を名乗っただけのことである。どのような名で呼ばれるにしても、神はそれを自ら自由に選んだのではないか。神がそれを決めるのに、被造物の一つであるあなたを必要とするだろうか。神が呼ばれる名前は、人が理解できること、および人の言語に沿うものだが、その名前は人が考え出せるものではない。天には神がいて、それは神と呼ばれ、偉大な力をもつ神自身であり、大いに知恵があり、大いに高められ、大いに素晴らしく、大いに神秘的で、大いに全能であるとしかあなたは言えず、それ以上は言うことができない。あなたが知り得るのはこのわずかなことだけである。そうであれば、たかだかイエスの名だけで神自身を表わすことができるだろうか。終わりの日が来るとき、神の働きは依然として神が行なうものの、時代が異なるので神の名は変わらなければならないのである。

全宇宙、そしてその上の世界において最も偉大である神は、肉体の姿を用いて自分自身を完全に説明することができるだろうか。神がその肉体をまとうのは、自身の働きの一段階を行なうためである。その肉体の姿には特に何の重要性もなければ、時代の推移とも無関係であり、神の性質とも関係がない。なぜイエスは自分の姿が残るようにしな

かったのか。なぜ自分の姿を人に描かせ、それが後の世代に伝えられるようにしなかったのか。イエスの姿は神の姿であると、なぜ人々に認めさせなかったのか。人の姿は神のかたちに創造されたが、人間の外見が神の崇高なる姿を表現するということは果たして可能なのか。神は肉となるとき、天からある特定の肉体へと降臨するだけである。肉体に降臨するのは神の霊であり、神はそれを通じて霊の働きを行なう。肉において表わされるのは神の霊であり、肉において働きを行なうのも神の霊である。肉において行なわれる働きは霊を余すところなく表わしており、その肉体は働きのためにある。しかしそれは、その肉の姿が神自身の真の姿の代わりになれるという意味ではない。それは、神が肉となる目的でも意義でもないのである。神が肉となるのは、ただ霊が自分の働きに適した住みかを見つけ、肉における働きをよりよく成し遂げるためである。そうすることで、人々は神の業を見、神の性質を理解し、神の言葉を聞き、神の働きの不思議を知るのである。神の名前は神の性質を表わし、神の働きは神の身分を表わすが、受肉した神の外見が神の姿を表わすと神が言ったことはない。それは単に人間の観念である。だから、神の受肉にまつわる重要な側面は神の名前、働き、性質、そして性別である。これらは、この時代における神の経営を表わすために用いられる。受肉した神の外見は神の経営とは無関係であり、そのときの神の働きのために過ぎない。しかし、受肉した神が特定の外見をもたないということは不可能なので、神は適切な家族を選んで自身の外見を決める。もしも神の外見に何か表現的な意義があるのなら、神と同じような顔立ちをしている人も全員神を表わしていることになる。これはあまりにひどい間違いではないだろうか。人が礼拝するようにと、イエスの肖像画は人間によって描かれた。そのとき、聖霊は特別な指示を与えなかったので、人は想像によるその肖像画を今日まで伝えた。実を言うと、神の本来の意図によれば、人間はこうするべきではなかった。イエスの肖像画が今日まで残るようになったのは、ひとえに人間の熱意のせいである。神は霊であり、神の姿がどのようなものであるかを、人間が最終的に要約することは決してできない。神の姿は神の性質によってしか表現できないのである。神の鼻、口、目、頭髪の外見について、それらを要約するのはあなたの能力を超えることである。ヨハネは啓示を受けたとき、人の子の姿を見た。その口からは鋭いもろ刃のつるぎが突き出ており、その目は燃える炎のようであり、その頭と髪の毛は羊毛のように白く、その足は光り輝く銅のようで、その胸には金の帯をしめていた。ヨハネの言葉は極めて鮮明だが、彼が描写した神の姿は、何らかの被造物の姿ではなかった。ヨハネが見たのは幻に過ぎず、物質世界の人の姿ではなかった。ヨハネは幻を見たが、神の本当の外見を目にすることはなかった。受肉した神の肉体の姿は、一つの被造物の姿であり、神の性質全体を

表わすことはできない。ヤーウェは人類を創造したとき、自分自身のかたちにかたどって人を創り、男と女を創ったと言った。そのとき、ヤーウェは神のかたちに男と女を創造したと言った。人間の姿は神の姿に似ているが、人間の外見が神の姿であるという意味に解釈することはできない。また、人類の言語を使って神の姿を完全に要約することもできない。なぜなら、神はかくも崇高で、かくも偉大で、かくも不思議に満ち、かくも計り知れないからである。

イエスが自身の働きを行なうために来たとき、それは聖霊の指示によるものだった。イエスは聖霊の望み通りに行ない、それは旧約聖書の律法の時代にしたがうものでも、ヤーウェの働きにしたがうものでもなかった。イエスが来て行なった働きは、ヤーウェの律法やヤーウェの戒めを遵守することではなかったが、それらの源泉は同じ一つのものであった。イエスが行なった働きはイエスの名を表わし、恵みの時代を代表した。ヤーウェによってなされた働きについて言えば、それはヤーウェを表わし、律法の時代を代表した。それらの働きは二つの異なる時代における一つの霊の働きだった。イエスが行なった働きは恵みの時代しか代表できず、ヤーウェが行なった働きは旧約聖書の律法の時代しか代表できなかった。ヤーウェはイスラエルの民とエジプトの民を導き、そしてイスラエル以外のあらゆる国の民を導いただけだった。新約聖書の恵みの時代におけるイエスの働きは、神がその時代を導く中で、イエスの名のもとで行なう働きだった。イエスの働きはヤーウェの働きに基づいていて、新しい働きに一切着手せず、イエスが行なったのはヤーウェの言葉にしたがい、ヤーウェの働きとイザヤの預言にしたがうことだけだったと言うのなら、イエスは肉となった神ではなかったはずだ。仮にイエスがそのような形で自身の働きを行なっていたなら、イエスは律法の時代の使徒もしくは働き手だったはずである。もしもあなたの言う通りなら、イエスは一つの時代を始めることも、他の働きを行なうこともできなかっただろう。同じように、聖霊はおもにヤーウェを通じてその働きを行なわなければならず、またヤーウェを通じてでなければ、いかなる新しい働きもできなかっただろう。人がイエスの働きをこのように理解するのは間違っている。イエスによる働きがヤーウェの言葉とイザヤの預言にしたがってなされたと信じるなら、イエスは受肉した神だったのか、それとも預言者の一人だったのか。この見方によれば、恵みの時代などというものはなく、イエスは神の受肉ではなかったということになる。と言うのも、イエスが行なった働きは恵みの時代を表わすことができず、旧約聖書の律法の時代しか表わせなかったからである。あり得るのは新しい時代だけであり、そのときイエスが来て新しい働きを行ない、新しい時代を始め、イスラエルで

以前に行なわれた働きを打ち破り、イスラエルでヤーウェが行なった働き、ヤーウェの古い規則、あるいは何らかの規制にしたがって自身の働きを行なうのではなく、むしろなすべき新しい働きを行なったのである。神自身が時代を始めるために来て、神自身が時代を終えるために来るのである。人は時代を始めたり、時代を終えたりする働きをすることができない。到来したイエスがヤーウェの働きを終わらせなかったら、そのことは、イエスはただの人であり、神を表わすことができなかったという証明になるだろう。イエスが来てヤーウェの働きを終わらせ、ヤーウェの働きを引き継ぎ、またそれ以上に自分自身の働き、つまり新しい働きを行なったからこそ、それは新しい時代で、イエスは神自身だったことが証明される。両者ははっきり異なる二つの段階の働きを行なったのである。一つの段階は神殿の中でなされ、もう一つは神殿の外でなされた。一つの段階は律法にしたがって人の生活を導くことであり、もう一つは罪の捧げ物を供えることだった。これら二つの段階の働きは明確に異なっていた。それは新しい時代と古い時代を分け、それらは二つの異なる時代だと言うのは絶対に正しい。両者の働きの場所は異なり、働きの内容も異なり、働きの目的も異なっていた。そのため、それらは二つの時代に区分することができる。つまり新約聖書と旧約聖書であり、すなわち新しい時代と古い時代である。到来したイエスは神殿に入らなかった。そのことは、ヤーウェの時代がすでに終わっていたことを証明する。イエスが神殿に入らなかったのは、神殿におけるヤーウェの働きが終わっており、再度行なわれる必要がなく、再度行なうことは繰り返しになるからである。神殿を離れ、新しい働きを開始し、神殿の外で新しい道を切り開くことでのみ、イエスは神の働きを絶頂に至らせることができたのである。イエスが神殿の外に出て自身の働きを行なっていなければ、神の働きは神殿の基礎に停滞し、なんら新しい変化は起きなかつただろう。だから到来したイエスは神殿に入らず、神殿の中で働きを行なうこともなかつたのである。イエスは神殿の外で自身の働きを行ない、弟子を率いて自由に働きに取り組んだ。神が神殿を離れて働きを行なったことは、神に新しい計画があることを意味していた。神の働きは神殿の外で行なわれることになっており、それは実行する方法に拘束されない新しい働きのはずだった。イエスは到来するやいなや、旧約聖書の時代におけるヤーウェの働きを終了させたのである。両者は二つの異なる名前と呼ばれたが、二つの段階の働きを成し遂げたのは同じ霊であり、なされた働きは継続的なものだった。名前が違い、働きの内容も違っていたように、時代も違っていたのである。ヤーウェが来たとき、それはヤーウェの時代で、イエスが来たとき、それはイエスの時代だった。したがって、神は来るたびに一つの名で呼ばれ、一つの時代を表わし、新しい道を切り開く。それぞれの新しい道において神は新しい名を名

乗り、またそのことは、神が常に新しく決して古くないことと、神の働きが絶えず前方に進んでいることを示すのである。歴史は常に前進しており、神の働きは常に前進している。六千年にわたる神の経営計画が終わりを迎えるには、前方へと進み続けなければならない。毎日、神は新しい働きを行なわなければならない、毎年、神は新しい働きを行なわなければならない。神は新しい道を切り開き、新しい時代を始め、新しくさらに偉大な働きを開始し、それらとともに新しい名前と新しい働きをもたらさなければならない。神の霊は刻一刻と新しい働きを行なっており、古いやり方や規則に固執することは決してない。また、神の霊の働きが止まったことは一度もなく、どの瞬間にも生じている。聖霊の働きは不変であると言うなら、ヤーウェが祭司に対し、神殿の中で自分に仕えるよう求めたのに、イエスが来たときには、彼は大祭司だとか、ダビデの家系で大祭司でもあり、偉大な王であると人々が言ったにもかかわらず、どうしてイエスは神殿に入らなかったのか。そしてなぜイエスはいけにえを捧げなかったのか。神殿に入ろうが入るまいが、これはすべて神自身の働きではないのか。もしも人が想像するように、イエスが再び到来し、終わりの日にいまだイエスと呼ばれ、依然として白い雲に乗り、イエスの姿のままで人のもとに降臨するなら、それはイエスの働きの反復ではないだろうか。聖霊が古いものにしがみつくなどあり得るのか。人が信じているものはすべて観念であって、人が理解しているものはすべて文字通りの意味、または人の想像力に沿ったものである。それらは聖霊の働きの原則と一致しておらず、神の意図に沿っていない。神はそのような形で働きを行なわないはずだ。神はそれほどばかでも愚かでもなく、神の働きはあなたが想像するほど簡単ではない。人が想像するあらゆることを基にすると、イエスは雲に乗って現われ、あなたがたの中に降りることになっている。あなたがたは、雲に乗りながら「自分はイエスだ」と告げる彼を見る。また、イエスの手にある釘の跡を見て、その人がイエスであることを知る。いのか。すべての人間はサタンによって墮落させられたのではないか。もしも神が人の観念に沿って自身の働きを行なったのなら、神はサタンということになるのではないか。神は自身の被造物と同じようなものだということにはならないか。神の被造物がサタンによって墮落させられるあまり、人はサタンの化身になったので、もしも神がサタンの物事に沿って働いたなら、神はサタンの仲間だということになるのではないか。どうして人が神の働きを理解できるのか。したがって、神が人の観念に沿って働きを行なうことは決してなく、あなたが想像するように働きを行なうこともない。自分は雲に乗って来ると神自身が述べたと言う人たちがいる。神自身がそう言ったのは確かだが、神の奥義を推し測れる人は誰もいないことを、あなたは知らないのか。神の言葉を説明できる人間は一人もいないことを、あなた

は知らないのか。自分は聖霊に啓かれ、照らされていると、あなたはみじんの疑いもなく確信しているのか。当然それは、聖霊がそうした直接的な形であなたに示したわけではない。聖霊があなたに指示したのか、それともあなた自身の観念によってそう考えるようになったのか。あなたは「これは神自身によって述べられた」と言った。しかしわたしたちは、神の言葉を測るにあたって自分たちの観念や思考を用いることはできない。イザヤが語った言葉について言えば、あなたは絶対の確信をもって彼の言葉を説明することができるのか。あえてイザヤの言葉を説明するつもりなのか。イザヤの言葉をあえて説明するつもりがないのに、どうしてイエスの言葉をあえて説明しようとするのか。イエスとイザヤのどちらがより崇められているのか。答えはイエスであるのに、なぜイエスの語った言葉を説明するのか。神は自身の働きを前もってあなたに告げるだろうか。被造物の誰も、天の御使たちさえも、人の子でさえも知らないのに、どうしてあなたにわかるのか。人はあまりに多くのものを欠いている。あなたがたにとって今最も重要なのは、三段階の働きを知ることである。ヤーウェの働きからイエスの働きに至るまで、イエスの働きからこの現段階の働きに至るまで、これら三段階は神の経営全体を隙間なく覆うものであり、またそのすべてが一つの霊による働きである。創世以来、神は常に人類の経営にいそしんできた。神は初めにして終わりであり、最初にして最後であり、時代を始める存在にして時代を終わらせる存在である。異なる時代、異なる場所における三段階の働きは、間違いなく一つの霊の働きである。これら三段階を切り離す者はみな神に敵対している。今、第一段階から今日に至るまでの働きが、すべて一つの神の働きであり、一つの霊の働きであることを、あなたは理解しなければならない。そのことに疑いの余地はあり得ない。

聖書について（1）

神への信仰において、どう聖書に接するべきか。これは原則の問題である。なぜわたしたちはこの問いについて話し合っているのか。それは、将来あなたが福音を広め、神の国の時代の働きを広げるからであり、単に今日の神の働きについて話せるだけでは不十分なのである。神の働きを広げるには、人々の古い宗教的観念や信仰の方法を解消し、人々を完全に確信させることがますます重要である。そしてそこに至るには、聖書が関わってくる。長年にわたり、人々の伝統的な信仰の方法は（世界の三大宗教の一つであるキリスト教においては）聖書を読むことだった。聖書から離れることは主への信仰ではなく、邪教、異端であり、他の本を読んでいても、そうした本の基礎は聖書の解説でなければならない。つまり、主を信じているなら聖書を読まなければならない、聖書の

外では、聖書と関わりのない本を崇めてはいけない。そうするならば、神を裏切っていることになる。聖書が存在するようになって以来、人々の主への信仰は聖書への信仰であり続けた。人々は主を信じていると言うよりは、聖書を信じていると言ったほうがいい。聖書を読み始めたと言うよりは、聖書を信じ始めたと言ったほうがいい。そして、主の前に帰ったと言うよりは、聖書の前に帰ったと言ったほうがいいたろう。このように、人々はまるで聖書が神であるかのように、まるでそれが自分たちのいのちの源であって、それを失うのはいのちを失うことと同じであるかのように、聖書を崇める。人々は聖書を神と同じくらい高いものと見なしており、神より高いと思う人さえいる。たとえ聖霊の働きがなくても、また神を感じられなくても、人々は生きていける。しかし、聖書を失くしたり、あるいは聖書の有名な章句を失ったりしたとたん、まるでいのちを失ったかのようになる。そこで、人々は主を信じるとすぐに聖書を読んで暗記し始め、聖書を暗記すればするほど、自分が主を愛し、信仰が深いことの証拠になる。聖書を読み、それについて他の人々に話すことのできる人はみな、よき兄弟姉妹なのである。長年にわたり、主に対する人々の信仰と忠誠は、聖書をどれほど理解しているかで測られてきた。たいていの人は、なぜ神を信じなければならないのかも、どう神を信じるべきかもまったく理解しておらず、聖書の章句を解説しようと闇雲に手がかりを探すだけである。人々は聖霊の働きの方を追求したことがない。これまでずっと、懸命に聖書を研究し、調べる以外のことをしておらず、聖書の外で聖霊のより新たな働きを見出した者はいなかった。誰一人、聖書から離れたことがなく、あえてそうしようとしなかったのである。人々は長年にわたって聖書を研究し、まことに多くの解釈を編み出し、非常に多くの労力を費やしてきた。彼らはまた、聖書について数多くの異なる意見を持ち、それについて果てしなく議論しており、現在では二千以上の教派が形成されている。彼らはみな、特別な解釈、あるいはより深遠な奥義を聖書の中に見つけ出そうと願っており、聖書を探索し、その中にイスラエルにおけるヤーウェの働きの背景、ユダヤにおけるイエスの働きの背景、あるいは他の誰も知らないさらなる奥義を見つけたいと思っている。聖書に対する人々の態度は執着と信仰であり、聖書の内部事情や本質を完全に理解している人は誰もいない。だから、人々は今なお聖書に対して説明しがたい不思議さを感じ、ますます聖書に執着し、よりいっそう聖書を信じている。今日、誰もが終わりの日の働きについての預言を聖書に見出し、終わりの日に神がどのような働きを行なうのか、終わりの日についてどんな前兆があるのかを突き止めようとしている。このように、聖書に対する人々の崇拜はますます熱を帯び、終わりの日に近づくほど、よりいっそう聖書の預言、とりわけ終わりの日についての預言に盲目的な信頼をおく。そうし

た聖書への盲信、そうした聖書への信頼があるために、その人たちは聖霊の働きを探し求める欲求をもたない。人々は自分の観念の中で、聖書だけが聖霊の働きをもたらせると考えている。つまり、神の足跡は聖書の中でしか見出せず、神の働きの奥義が隠されているのも聖書の中だけであり、神のすべてと神の働きの全体を明確にできるのも聖書だけであって、他の書物や人々にはそれができないというわけだ。聖書は天の働きを地にもたらすことができ、また時代の始まりと終わりをもたらすことができる。こうした観念があるので、人々には聖霊の働きを探し求めようとしなない。そのため、聖書が過去どれほど人々の役に立とうとも、それは神の最新の働きの妨げになっている。聖書がなくても、人々は別の場所で神の足跡を探せる。しかし今日、神の足跡は聖書によって封じ込められている。だから、神の最新の働きを広げることは二倍難しくなり、かつ困難なことになっている。これはみな、聖書の有名な章句のせいであり、また聖書のさまざまな預言のせいである。聖書は人々の心の中で偶像となり、人々の頭脳の中の謎となった。人々は、神が聖書の外で働けることをどうしても信じられず、聖書の外で神を見つけられることも信じられずにいる。まして、神が最後の働きのさなかに聖書を離れ、新しく始められるなどとは到底信じられない。それは人々にとって考えられないことであり、彼らには信じられないし、想像することもできない。聖書は人々が神の新たな働きを受け入れる上で大きな障害になり、神がこの新たな働きを広めるのを困難にしまった。だから、聖書の内部事情を理解していなければ、福音を成功裏に広めることはできないし、新たな働きの証しをすることもできないはずだ。今日、あなたがたは聖書を読んでいないが、それでも聖書に対し極めて好意的だ。つまり、その手に聖書がなくても、あなたがたの観念の多くが聖書から生じているのである。あなたがたは聖書の由来や、以前の二段階における神の働きの内部事情を理解していない。たとえ頻繁に聖書を読まなくても、あなたがたは聖書を理解しなければならず、聖書について正しい認識をもたなければならない。そうすることでのみ、六千年にわたる神の経営（救いの）計画がどういうものなのかがわかるのだ。あなたがたはこうしたことを用いて人々を勝ち取り、この流れが真の道であり、今日歩む道が真理の道であり、それが聖霊に導かれ、人間が切り開いたものではないということを彼らに認めさせるのである。

神が律法の時代の働きを行なった後に旧約聖書は作られたのだが、人々が聖書を読み始めたのはそのときだった。イエスは到来後に恵みの時代の働きを行ない、彼の使徒たちが新約聖書を記した。このようにして旧約聖書と新約聖書は作られ、今日に至るまで、神を信じるすべての人が聖書を読んできた。聖書は歴史書である。もちろん、そこに

は預言者の預言もいくつか載っている。そして、そうした預言は歴史などではまったくない。聖書はいくつかの部分から成っており、預言だけではなく、ヤーウェの働きだけでもなく、パウロの手紙だけでもない。聖書には幾つの部分があるかを知っていなければいけない。旧約聖書には創世記や出エジプト記などが含まれ、預言者たちが書いた預言書もある。最後に、旧約はマラキ書で終わる。旧約は、ヤーウェによって導かれた律法の時代の働きを記録している。創世記からマラキ書まで、それは律法の時代の働き全体の総合的な記録である。つまり、旧約は律法の時代にヤーウェによって導かれた人々が経験したことを残らず記録しているのである。旧約の律法の時代、ヤーウェによって起こされた大勢の預言者が神の預言をした。彼らはさまざまな部族や民族に指示を与え、ヤーウェが行なうであろう働きを預言した。これら起こされた人はみな、ヤーウェから預言の霊を与えられていた。彼らはヤーウェからのビジョンを見、その声を聞くことができたので、ヤーウェに啓示を受けて預言を書いた。彼らの行なった働きはヤーウェの声の代弁、ヤーウェの預言の代弁であり、当時のヤーウェの働きは、単に霊を用いて人々を導くことだった。ヤーウェは受肉せず、人々は神の顔をまったく見なかった。そこで、ヤーウェは大勢の預言者を起こして、自分の働きを行なわせ、預言者たちに神託を与え、彼らはそれをイスラエルのすべての部族や氏族に伝えた。彼らの働きは預言を語ることであり、彼らの一部はヤーウェからの指示を記述して他の人々に見せた。ヤーウェはこれらの人々を起こして預言を語らせ、将来の働きや、当時まだなされていなかった働きについて預言させた。それにより、人々はヤーウェの知恵と素晴らしさを目の当たりにすることができた。これらの預言書は、聖書の他の書とは大きく異なっていた。それらは預言の霊を与えられた人、ヤーウェからビジョンや声を得た人によって語られ、あるいは記された言葉である。預言書を除き、旧約の他のすべては、ヤーウェが自身の働きを終えた後に人々が作成した記録から成っている。これらの書は、創世記や出エジプト記がイザヤ書やダニエル書と比較できないのと同様、ヤーウェの起こした預言者による預言の代わりにはなれない。それらの預言は働きが実行される以前に語られたものであり、一方、他の書は働きが完了してから書かれたものであって、それが人々にできることだった。当時の預言者はヤーウェの啓示を受けて預言を伝えた。彼らは多くの言葉を語り、恵みの時代の物事や、終わりの日における世界の滅亡を預言した。それはつまり、ヤーウェが行なおうと計画していた働きである。残りの書はどれも、ヤーウェがイスラエルで行なった働きについての記録である。だから、聖書を読む際には、ヤーウェがイスラエルで行なったことについておもに読んでいくことになる。旧約聖書はおもに、イスラエル人を導くヤーウェの働きの記録であり、モーセを用いてイスラエル

人をパロの虜囚から解放し、エジプトから脱出させ、荒野に連れていき、その後、カナンに入った。それ以降の記述はみな、彼らのカナンでの生活である。これ以外はどれも、イスラエル全土におけるヤーウェの働きの記録から成っている。旧約に記録されていることはみな、イスラエルにおけるヤーウェの働きであり、それはヤーウェがアダムとエバを創造した場所で行なった働きである。ノアの後、神が正式に地上の人々を導き始めた時から、旧約に記録されていることはすべてイスラエルでの働きである。では、なぜイスラエルの外では何の働きも記録されていないのだろうか。なぜなら、イスラエルの地が人類の生まれた地だったからである。最初のころ、イスラエルの他に国はなく、ヤーウェが他の場所で働くことはなかった。このように、旧約聖書に記されていることは純粹に、当時のイスラエルにおける神の働きなのである。預言者たち、イザヤ、ダニエル、エレミヤ、エゼキエルの話した言葉……彼らの言葉は、地上における神の他の働きを預言するもので、ヤーウェ神自身の働きを預言していた。これはみな神から出たもので、聖霊の働きであり、これらの預言書を除いて、他のすべてはヤーウェによる当時の働きに関する、人々の経験の記録である。

創造の働きは、人類が存在する以前に行なわれた。しかし、創世記は人間が存在するようになってから書かれたものであり、モーセが律法の時代に著した書である。そのことは、あなたがたのあいだで今日起きている事柄に似ている。そういったことが起きたあと、あなたがたは将来人々に見せるために、そして将来の人々のために書き記すが、記録したものは過去に起きたことで、歴史以上のものではない。旧約に記録されている事柄はイスラエルにおけるヤーウェの働きであり、新約に記録されているのは恵みの時代におけるイエスの働きである。これらの文書は神が二つの異なる時代に行なった働きを記録している。旧約は律法の時代における神の働きを記録しており、ゆえに歴史的な書物であり、一方の新約は恵みの時代の働きの産物である。新しい働きが始まると、新約も時代遅れになった。そういうわけで、新約もまた歴史的な書物である。もちろん、新約は旧約ほど系統だったものではないし、それほど多くを記録していない。ヤーウェが語った多くの言葉は旧約聖書に残らず記録されているが、イエスの言葉はその一部しか四福音書に記録されていない。もちろん、イエスもまた多くの働きを行なったが、それは詳細に記録されなかった。新約に記録されたものが少ないのは、イエスが行なった働きの量による。イエスが地上における三年半のあいだに行なった働き、そして使徒たちの働きは、ヤーウェのそれよりはるかに少ない。だから、新約は旧約より書が少ないのである。

聖書とはどのような書物なのか。旧約は律法の時代における神の働きである。旧約聖書は律法の時代におけるヤーウェの働きと、創造の働きを残らず記録している。そのすべてがヤーウェの行なった働きを記録しており、最後はマラキ書のヤーウェによる働きの記述で終わっている。旧約は神の行なった二つの働きを記録している。一つは創造の働き、もう一つは律法の布告である。どちらもヤーウェが行なった働きである。律法の時代はヤーウェ神の名のもとで行なわれた働きを表わしており、おもにヤーウェの名のもとで行なわれた働きの総体である。したがって、旧約はヤーウェの働きを記録しており、新約はイエスの働き、おもにイエスの名のもとで行なわれた働きを記録している。イエスの名の意義と彼が行なった働きは、その大半が新約に記録されている。旧約の律法の時代、ヤーウェはイスラエルに神殿と祭壇を築き、地上におけるイスラエル人の生活を導いたのだが、そのことは、彼らがヤーウェの選民、つまり神が地上で最初に選んだ集団で、神の心になう者であり、神が自ら導いた最初の集団であることを証明した。イスラエルの十二部族がヤーウェの最初の選民であり、ゆえにヤーウェは律法の時代における自身の働きが終わるまで、絶えず彼らの中で働いた。第二段階の働きは新約の恵みの時代の働きで、イスラエルの十二部族の一つ、ユダヤの民の間で行なわれた。その働きの範囲が狭かったのは、イエスが受肉した神だったからである。イエスはユダヤの全土でしか働かず、三年半の間だけ働いた。ゆえに、新約に記録されたものは、旧約に記録された働きの量を到底超えられないのである。恵みの時代のイエスの働きは、おもに四福音書に記録されている。恵みの時代の人々が歩んだ道は、いのちの性質の最も表面的な変化の道であり、そのほとんどは手紙の中に記録されている。それらの手紙は、聖霊が当時どのように働いたかを示している（もちろん、パウロが罰せられたか、あるいは不幸に襲われたかどうかはともかく、彼は働きを行なう中で聖霊に導かれており、当時聖霊に用いられた人である。ペテロもまた聖霊に用いられたが、パウロほどの働きをしていない。パウロの働きには人間の不純さが含まれていたが、彼が書いた手紙から、聖霊が当時どのように働いたかがわかる。パウロの導いた道は正しい道であり、聖霊の道だった）。

律法の時代の働きを見たければ、また、イスラエル人がどのようにヤーウェの道に従ったかを見たければ、旧約聖書を読まなければならない。恵みの時代の働きを理解したいのなら、新約聖書を読まなければならない。しかし、終わりの日の働きはどうすればわかるのか。それには今日の神の導きを受け入れ、今日の働きに入らなければならない。なぜなら、それが新たな働きであり、過去に誰も聖書に記録していないからである。

今日、神は肉となり、中国で別の選民を選んだ。神はこれらの人々の間で働き、地上における働きから、また恵みの時代の働きから継続して働きを行なう。今日の働きは人間がかつて歩んだことの無い道であり、誰も見たことの無いものである。それはかつて行なわれたことがない働きであり、地上における神の最新の働きである。したがって、かつて行なわれたことの無い働きは歴史ではない。今は今であり、まだ過去になっていないからである。人々は、神が地上で、そしてイスラエルの外で、より偉大で新しい働きを行なってきたこと、それがすでにイスラエルの範囲を超え、預言者たちの預言を超えたこと、それが預言を超えた驚異的な新しい働きであり、イスラエルの外で行なわれる新たな働きであり、人々には認識することも想像することもできない働きであることを知らない。どうして聖書にこのような働きの具体的な記録が含まれ得るだろう。今日の働きを細部に至るまで漏らすことなく、事前に記録することが誰にできよう。一切の慣習を拒む、より大きく賢いこの働きを、あのカビ臭い古い本に誰が記録できようか。今日の働きは歴史ではない。だから、今日の新たな道を歩みたいのなら、聖書から離れなければならない。聖書の預言書や歴史書を越えなければならない。そうしてはじめて、新たな道を正しく歩むことができ、そうしてはじめて、新たな領域、新たな働きに入ることができる。なぜ今日、聖書を読まないように言われるのか、なぜ聖書とは別の働きがあるのか、なぜ神はより新たな、より詳細な実践を聖書に求めないのか、なぜより偉大な働きが聖書の外にあるのかを、あなたは理解しなければいけない。これらはみな、あなたがたが理解すべき事柄である。新旧の働きの違いを知らなければならない。また、たとえ聖書を読まなくても、聖書を分析できなければならない。そうでなければ、依然として聖書を崇めていて、新たな働きに入ること、新たな変化を経ることが難しくなるだろう。より高い道があるのに、なぜ低く時代遅れな道を学ぶのか。より新しい発言、より新しい働きがあるのに、なぜ古い歴史的記録の中で生きるのか。新たな発言はあなたに施すことができる。そのことは、それが新しい働きであることを証明している。古い記録は十分な満足を与えることも、現在の必要を満たすこともできない。そのことは、それが歴史であり、今現在の働きではないことを証明している。最も高い道は最も新しい働きである。そして新しい働きがあれば、過去の道がいかに高くとも、それはやはり人々の回顧の歴史であり、参考としての価値がどれほどであっても、依然として古い道である。たとえそれが「聖なる書」に記されていても、古い道は歴史である。たとえ「聖なる書」に記録されていなくても、新たな道が今現在のものである。この道はあなたを救い、あなたを変える。それが聖霊の働きだからである。

あなたがたは聖書を理解しなければならない。この働きは何より必要なものである。今日、聖書を読む必要はない。そこには新しいものが何もなく、みな古いからである。聖書は歴史的な書物であり、もしも恵みの時代に旧約を飲み食いしていれば、あるいは恵みの時代に旧約の時代の要求を実践していたなら、イエスはあなたを拒み、断罪していただろう。もしも旧約をイエスの働きに適用していたら、あなたはパリサイ人だったはずだ。今日もし、旧約と新約をともに飲み食いし、実践したなら、今日の神はあなたを断罪し、あなたは今日の聖霊の働きから取り残されるだろう。もし旧約と新約を飲み食いするなら、あなたは聖霊の流れの外にいる。イエスの時代において、イエスは当時、ユダヤ人と自分に従う全員を、自身における聖霊の働きにしたがって導いた。イエスは聖書を自身の行為の基礎とせず、自分の働きにしたがって語った。イエスは聖書の記述を気に留めることも、自分に付き従う人々を導く道を聖書に求めることもしなかった。イエスは働きを始めた当初から悔い改めの道を広めたが、その言葉は旧約の預言の中で一切触れられていないものだった。イエスは聖書にしたがって行動しなかっただけでなく、新たな道を導き、新たな働きを行なった。イエスは教えを説く際に、一度も聖書を参照していない。律法の時代、イエスのように奇跡を行ない、病を癒し、悪霊を祓える者は一人もいなかった。イエスの働き、教え、そしてイエスの言葉の権威と力も、律法の時代の誰よりも勝っていた。イエスはひたすら自分の新たな働きを行ない、多くの人が聖書を用いてイエスを断罪しても、さらには旧約を用いてイエスを十字架にかけても、イエスの働きは旧約を超えていた。そうでなければ、なぜ人々はイエスを十字架にかけたのか。それは、イエスの教え、あるいは病を癒して悪霊を祓うイエスの能力について、旧約に何の記述もなかったからではないのか。イエスの働きは新たな道を導くためになされたのであり、わざと聖書に戦いを挑んだり、意図的に旧約を放棄したりするものではなかった。イエスはただ自分の職分を果たすため、また自分を切望して探し求める人々に新たな働きをもたらすために来たのであって、旧約を説明したり、その働きを支えたりするために来たのではない。イエスの働きは、律法の時代が発展し続けるようにするためのものではなかった。なぜならイエスの働きは、それが聖書に基づくものかどうかを問題にしなかったからである。イエスは単に、なすべき働きを行なうために来たのである。ゆえに、イエスは旧約の預言を説明せず、旧約の律法の時代の言葉にしたがって働きを行なうこともしなかった。イエスは旧約の記述を無視し、それが自分の働きに合致しているかどうかを気にしなかった。また、他の人々が自分の働きを理解しているかどうか、彼らがそれをどう断罪しているかも気にしなかった。多くの人が旧約の預言者の預言を使ってイエスを断罪したが、イエスはひたすら自分のなすべき働きを

続けたのである。人々にとって、イエスの働きには根拠がなく、旧約の記述に反することが数多くあるかのように思われた。これは人の過ちではなかったか。神の働きに教義を当てはめる必要があるのか。また、神の働きは預言者たちの預言に合致しなければならないのか。結局のところ、神と聖書のどちらが偉大なのか。なぜ神が聖書にしたがって働きを行なわなければならないのか。神には聖書を超える権利がないということか。神は聖書から離れて別の働きを行なうことができないのか。なぜイエスと弟子たちは安息日を守らなかったのか。仮にイエスが安息日を守り、旧約の戒めにしたがって実践するつもりだったなら、なぜ到来後に安息日を守らず、その代わりに足を洗い、頭を覆い、パンを裂き、ぶどう酒を飲んだのか。これらはみな、旧約の戒めにないのではないか。イエスが旧約を尊重していたのなら、なぜそれらの教義を破ったのか。神と聖書のどちらが先に来たか、あなたは知るべきだ。彼は安息日の主であると同時に、聖書の主でもあるのではないか。

新約の時代にイエスが行なった働きは、新たな働きを始めることだった。つまり、旧約の働きに沿った働きは行なわなかったのである。また、旧約のヤーウェが語った言葉を適用することもなかった。イエスは自分の働きを行ない、より新たな働きを行ない、律法よりも上位の働きを行なった。そのため、イエスはこう言った。「わたしが律法や預言者を廃するためにはきた、と思ってはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである」。よって、イエスが成就したことにしたがう形で、多くの教義は廃棄された。安息日にイエスが弟子たちを連れて麦畑を通ったとき、彼らは麦の穂を摘んで食べた。イエスは安息日を守らず、「人の子は安息日の主である」と言った。イスラエル人の規則によると、当時、安息日を守らなかった者は誰であっても石で打ち殺された。しかしイエスは、神殿に入ることも安息日を守ることもしなかったし、彼の働きは旧約の時代にヤーウェが行なわなかったものだった。だから、イエスが行なった働きは旧約の律法を超えており、それよりも高いものであり、それに沿うものではなかったのである。恵みの時代、イエスは旧約の律法にしたがう形で働きを行なわず、そうした教義をすでに破っていた。しかし、イスラエル人はあくまで聖書に固執し、イエスを断罪した。それはイエスの働きを拒むことではなかったか。今日、宗教界もまたあくまで聖書に固執し、中には「聖書は聖なる書物で、読まなければいけない」という人がいる。また「神の働きは永遠に守らなければならない、旧約は神とイスラエルの民との契約であるから、破棄することはできない。また、安息日は常に守らなければいけない」という人もいる。そのような人は愚かではないか。なぜイエスは安息日を守らなかったのか。イ

エスは罪を犯していたのか。誰がそうしたことを完全に理解できるのか。どのように聖書を読んでも、人間の理解力で神の働きを知ることは不可能である。そうした人は神について純粋な認識を得ることができないばかりか、その人のもつ観念がますますとんでもないものになり、神に敵対するまでになる。もしも今日の神の受肉がなければ、人々は自分たちの観念によって滅ぼされ、神の刑罰の中で死ぬだろう。

聖書について（２）

聖書は旧約・新約聖書とも呼ばれる。あなたがたは「約」の意味を知っているだろうか。「旧約」の「約」は、ヤーウェがエジプト人を殺し、イスラエル人をパロから救ったときの、ヤーウェとイスラエルの民との契約に由来する。もちろん、この契約の証しは鴨居につけた子羊の血であり、神はそれをもって人間との契約を立てた。この契約は、戸枠のてっぺんと両側に子羊の血がついた家の者はみなイスラエル人で、彼らは神の選民であり、ヤーウェは彼らを見逃す（このとき、ヤーウェはエジプト人の初子および羊と牛の初子をみな殺そうとしていた）という内容だった。この契約には二重の意味がある。まず、ヤーウェはエジプトの民や家畜を一切救わず、男の初子および羊と牛の初子を残らず殺す。そのため多くの預言書の中で、エジプト人はヤーウェの契約のために厳しく罰せられると預言された。これが契約の第一層の意味である。ヤーウェはエジプト人の初子と家畜の初子をみな殺したが、イスラエルの民はすべて見逃した。つまり、イスラエルの地に住む民はみなヤーウェの慈しむ者であり、みな見逃されるということである。ヤーウェは彼らの中で長期にわたって働こうと思い、子羊の血で彼らと契約を立てた。それ以降、ヤーウェはイスラエル人を殺すことなく、彼らは永遠に我が選民であると告げた。つまり、イスラエルの十二部族の間で、律法の時代全体にわたる働きに乗り出し、イスラエル人に自身の律法をすべて明かし、彼らの中から預言者と士師を選び、彼らを自身の働きの中心に置くのである。ヤーウェは彼らと契約を立てた。時代が変わらない限り、ヤーウェは選民の間でだけ働く。ヤーウェの契約は変えられないものだった。なぜなら、それは血で作られ、自身の選民との間で立てられたからである。さらに重要なこととして、ヤーウェは時代全体を通じて働きに乗り出す適切な範囲と対象を選んだ。そのため、人々は契約をとりわけ重要なものと見た。これが契約の第二層の意味である。契約が立てられる前の創世記を例外として、旧約の他の書はみな、契約を立てた後のイスラエル人の間における神の働きを記録している。もちろん、異邦人のことを述べている箇所もあるが、総体的に言えば、旧約はイスラエルにおける神の働きを記録したものである。ヤーウェのイスラエル人との契約のため、律法の時代に書かれた

書は旧約と呼ばれている。これはヤーウェのイスラエル人との契約に因んで名付けられた。

新約は、イエスが十字架の上で流した血と、イエスを信じるすべての人との契約に因んで名付けられた。イエスの契約はこうである。ただイエスを信じれば、人々はイエスの流した血のおかげで罪を赦され、ゆえに救われ、イエスを通じて生まれ変わり、もはや罪人でなくなる。イエスの恵みを受けるには彼を信じさえすればよい。そうすれば、死後に地獄で苦しまずに済む。恵みの時代に記された書はみな、この契約の後のものである。そのどれもが、そこに含まれる働きと発言を記録している。これらの書は主イエスの磔刑による救い、あるいは契約から先には進まない。これらはどれも、経験を有する、主における兄弟たちが記した書である。したがって、これらの書も契約に因んで名付けられ、新約と呼ばれる。これら二つの契約には、恵みの時代と律法の時代だけが含まれていて、最後の時代とは何のつながりもない。ゆえに、聖書は終わりの日の今日の人々にとってそれほど役に立たない。せいぜい、時おり参照する価値があるくらいで、基本的にはほとんど無価値である。しかし、宗教関係者は、依然としてそれを最も貴重なものとしている。彼らは聖書を知らず、聖書を説明する方法を知っているだけで、そのなりたちを根本的に知らない。聖書に対する彼らの態度は、聖書に書かれていることはすべて正しく、そこに不正確なことや誤りは一切ない、というものである。聖書は正しく、誤りはないと最初から決めてかかっているので、大いに興味をもって学び調べる。今日の働きの段階は、聖書で預言されていなかった。最も暗い場所における征服の働きについて、一切言及されることはなかった。それは最新の働きだからである。働きの時代が異なるので、イエス自身でさえ、この段階の働きが終わりの日に行なわれるとは知らなかった。ならば、終わりの日の人々がこの段階の働きを、聖書を調べることでその中に見つけることなどできるだろうか。

聖書を解説する人のほとんどは論理的推測を用いており、実際の背景を知らない。彼らは単に、論理によって多くのことを推測しているに過ぎない。何年ものあいだ、あえて聖書を細かく調べたり、聖書に「否」と言ったりする人は誰もいなかった。この本は「聖なる書」であり、人々はそれを神のように崇めているからである。これが数千年も続いている。神は気にしたことがないし、誰一人として聖書の内部事情を突き止めていない。わたしたちは、聖書を大事にするのは偶像崇拜だと言うが、そうした敬虔な信者たちは誰もそのように見ようとしない。その人たちは「兄弟、そんなことを言うのではありません。それは恐ろしいことだ。どうして神を冒瀆できるのです」と言うだろう。

次いで辛そうな顔をして、「ああ、慈悲深いイエス、救いの主よ、この人の罪をお赦してください。あなたは人間を愛する主で、わたしたちはみな罪を犯しました。どうか、わたしたちを憐れんでください。アーメン」と言う。彼らの「敬虔」とはこのようなものである。彼らが容易に真理を受け入れるなど、どうしてあり得ようか。あなたがそう言えば、彼らはひどく怯えるだろう。聖書が人間の考えや観念によって汚されているかもしれないとは、誰も考えようとしない。また、誰にもこの欠陥が見えない。聖書の記述のある部分は個人の経験や認識であり、別の一部は聖霊の啓示であって、人間の知性や思考が混じってもいる。神がこうしたことに介入したことはないのだが、物事には限界がある。これらの事柄は普通の人々の考えを超えられない。もしそうなれば、神の働きに介入し、邪魔していることになる。普通の人々の考えを超えるものはサタンの働きである。と言うのも、それは人の本分を奪うからである。それはサタンの働きであり、サタンの指示によるものであって、その瞬間、聖霊はあなたがそのように行動することを許さない。時おり、兄弟姉妹が「これこれのやり方で働いていいのですか」と尋ねる。わたしは彼らの霊的背丈を見て、「よろしい」と言う。また、「もしわたしがこれこれの働き方をしたら、わたしの状態は正常でしょうか」と尋ねる人もいる。そこでわたしは「さよう。それは正常である。ごく正常だ」と言う。さらに別の人は「こういうふうに働いていいのですか」と言う。そこでわたしが「よくない」と言うと、「なぜあの人はいくて、わたしはよくないのですか」と尋ねてくる。それにわたしは「あなたがしていることはサタンに由来しており、妨害であり、あなたの動機の源が間違っているからだ」と答える。また、働きが十分進んでおらず、兄弟姉妹がそれに気づいていないときがある。そこでわたしに、ある特定のやり方で働いていいかと尋ねる人たちもいる。それを見て、その人たちの行動が将来の働きを妨げないのであれば、わたしはそれでよいと言う。聖霊の働きは人々に一つの範囲を与える。人々は聖霊の願うことに一言一句従う必要はない。なぜなら、人々には普通の考え方と弱点があるし、身体的な必要もあり、現実的な問題を抱えており、また頭の中には、抑制することが根本的に不可能な考えもあるからである。わたしが人々に求めることにはみな、一定の限度がある。わたしの言葉が曖昧で、わたしがみなに、適当に行動するよう指示していると信じる人がいる。それは、わたしの要求には適切な範囲があることを理解していないからである。もしもあなたが想像する通りなら、つまり、わたしがすべての人に例外なく同じ要求をし、みな同じ霊的背丈に達するよう求めるなら、それではうまくいかないだろう。これはできない相談というものだ。それに、これは人間の働きの原則であって、神の働きの原則ではない。神の働きは人々の実際の状況に応じて行なわれるのであって、人々の生まれなが

らの素質に基づいている。これはまた、福音を広める原則でもある。あなたは自然に任せてゆっくり進まなければならない。あなたが真理を明瞭に話して初めて相手は理解するのであって、そのときようやくその人は聖書を脇にのけることができる。神がこの段階の働きを行なわなければ、誰が因習を打ち破れるのか。誰が新しい働きを行なえるのか。誰が聖書の外に新たな道を見出せるのか。人々の伝統的な観念や封建的倫理が甚だしいので、人々は自分でこれらを捨て去る能力をもたず、そうする勇気もない。今日の人々が聖書にある死んだ言葉のいくつかに囚われ、その言葉に心を奪われているのは言うまでもない。そのような人がどうして聖書を捨てようと思うだろうか。どうして聖書の外にある道を容易に受け入れられるだろうか。つまり、あなたが聖書の内部事情と聖霊の働きの原則を明瞭に話し、すべての人を完全に納得させることができなければ、である。これが最も必要なことだ。なぜなら、宗教の中にいる人はみな聖書を尊重し、神として崇拝しているからであり、また同時に神を聖書の中に閉じ込めようとしているから、さらには、再び神を十字架にかけなければ、自分の目的を達成することができないからである。

聖書について（3）

聖書にあることがみな、神が自ら語った言葉の記録というわけではない。聖書はただ、神の働きのうち以前の二段階を記載しているに過ぎない。その一部は預言者たちによる預言の記録で、別の一部は各時代で神に用いられた人々の経験と認識である。人間の経験には人間の意見や認識が紛れ込んでいるが、それは避けられないことである。聖書の多くの書には、人間の観念、人間の偏見、人間の愚かしい理解が含まれている。もちろん、ほとんどの言葉は聖霊による啓きと照らしの結果であり、それらは正しい理解である。それでも、真理をまったく正確に表現しているとは言えない。ある物事に対するそれらの見方は、個人的な経験から得た認識に過ぎないか、あるいは聖霊による啓示である。預言者たちの預言は神が直接指示したものである。つまり、イザヤ、ダニエル、エズラ、エレミヤ、そしてエゼキエルのような者たちによる預言は、聖霊による直接の指示から生じたのである。これらの人たちは預言者で、預言の霊を受けており、みな旧約の預言者だった。律法の時代、ヤーウェの靈感を受けていたこれらの人たちは多くの預言を語ったが、それらはヤーウェが直接指示したものだった。それでは、なぜヤーウェは彼らの中で働いたのか。イスラエルの人々が神の選民であり、預言者の働きは彼らの間でなされる必要があったからである。それゆえ、それらの預言者はそうした啓示を受けることができたのだが、実際のところ、彼ら自身は自分に対する神の啓示を理解し

ていなかった。聖霊が彼らの口を通じてそれらの言葉を述べたのは、未来の人々がそれらのことを理解し、それらが本当に神の霊、聖霊の働きであって、人間から出たものではないとわかるようにさせるため、また彼らに聖霊の働きの確証を与えるためだった。恵みの時代には、イエス自身が彼らに代わってこの働きをすべて行なった。そのため、人々はもはや預言を語らなくなった。では、イエスは預言者だったのか。もちろん、イエスは預言者だった。しかし、イエスは使徒の働きもできた。預言を告げ、各地で人々に説教し、教えを述べることもできたのである。しかし、イエスが行なった働きと彼の身分は同じものではない。イエスは全人類を贖うために、人間の罪を贖うために来た。イエスは預言者にして使徒だったが、それ以上にキリストだった。預言者は預言を告げるかもしれないが、だからといって、そうした預言者がキリストだとは言えない。当時、イエスは多くの預言を告げたので、預言者だったと言うことはできるが、預言者だからキリストではなかったとは言えない。なぜなら、イエスは一つの段階の働きを行なう中で神を代表していたのであり、その身分はイザヤのそれと異なっていたからである。イエスは贖いの働きを完了させるために到来し、また人間のいのちを施した。そして、神の霊がイエスに直接訪れたのである。イエスが行なった働きに、神の霊の靈感やヤウェからの指示はなかった。その代わり、霊が直接働いたのであり、そのことはイエスが預言者と同じでなかったことを証明するのに十分である。イエスが行なった働きは贖いの働きで、それに次ぐのが預言を告げることだった。イエスは預言者であり、使徒であり、またそれ以上に贖い主だった。一方、預言者たちは預言を告げることができるだけで、他の働きを行なう中で神の霊を代表することはできなかった。イエスは、かつて人間が行なったことのない多くの働きを行ない、人類を贖う働きを行なったので、イザヤのような人々とは違っていた。現在の流れを受け入れない人々がいるのは、これがその人たちの妨げになったからである。その人たちは言う。「旧約では多くの預言者もまた多数の言葉を語っています。では、なぜあの人たちは受肉した神ではなかったのですか。今日の神は言葉を語りますが、そのことは、受肉した神であることを証明するのに十分なのですか。あなたは聖書を称揚せず、聖書の勉強もしていません。ならば、何を根拠にあの人が受肉した神だと言うのですか。あなたは、彼らは聖霊に導かれていると言い、この段階の働きは神が自ら行なう働きだと信じています。しかし、その根拠は何ですか。あなたは今日の神の言葉に注意を集中させ、まるで聖書を否定し、脇に置いてしまったかのようです」。そうして人々は、あなたが異端や邪教を信じていると言うのである。

終わりの日における神の働きを証ししたいのなら、聖書の内部事情、聖書の構成、そして聖書の本質を理解しなければならない。今日、聖書は神であり、神は聖書であると人々は信じている。また、聖書のすべての言葉は神が語った唯一の言葉であって、それらはどれも神によって述べられたと信じている。神を信じる人々は、旧約と新約の六十六書はすべて人間が書いたものだが、みな神から靈感を受けており、聖霊の発言を記録しているとさえ考えている。これは人の誤った理解であって、事実とまったく一致していない。実際、預言書を別にして、旧約の大半は歴史的記録である。新約の書簡の中には、人々の経験に由来するものもあれば、聖霊の啓きに由来するものもある。たとえば、パウロの手紙は一人の人間の働きから生まれたもので、どれも聖霊による啓きの結果だった。また、それらの手紙は諸教会のために書かれたもので、諸教会の兄弟姉妹への勧告と激励の言葉だった。聖霊の語る言葉ではなかったのであり、パウロが聖霊の代わりに語ることはできなかったのである。また、彼は預言者でもなかったし、ましてヨハネが目の当たりにした幻を見てもいない。パウロの手紙はエペソ、フィラデルフィア、ガラテヤ、およびその他の教会に向けて書かれた。したがって、新約のパウロの手紙は彼が諸教会に向けて書いた手紙であって、聖霊からの靈感ではないし、聖霊が直接発した言葉でもない。それらは単に、パウロが働きのさなかに諸教会に向けて書いた勧告と慰めと励ましの言葉であり、また同時に、パウロによる当時の活動の大部分を記録するものでもある。それらは主の兄弟姉妹全員のために書かれたもので、当時の諸教会の兄弟姉妹がパウロの助言に従い、主イエスの悔い改めの道を守るようにするためのものだった。パウロは、当時の教会であれ、未来の教会であれ、自分の書いたものを全員が飲み食いしなければならないとは絶対に言わなかったし、自分の言葉はすべて神に由来するものだとも言わなかった。パウロは単に、当時の教会の状況に応じて兄弟姉妹と交わり、彼らを励まし、彼らの信仰を深めようとしていたのであって、ただ教えを説いたり、人々の注意を促して勧告したりしていたに過ぎない。彼の言葉は彼自身の重荷に基づいており、それらの言葉を通じて人々を支えた。彼は当時の諸教会の使徒の働きを行ない、主イエスに用いられる働き手だった。したがって、教会の責任を背負い、教会の働きを引き受け、兄弟姉妹の状況を知らなければならなかった。そのため、主における兄弟姉妹全員に手紙を書いたのである。彼が述べたことはどれも人々にとって啓発的であり、肯定的であって、いずれも正しかったが、それは聖霊の発する言葉を代弁していたのではないし、神を表わすこともできなかった。一人の人間による経験の記録や手紙を、聖霊が諸教会に向けて語った言葉として扱うのは、言語道断な解釈であり、ひどい冒瀆である。パウロが諸教会に向けて書いた手紙については、特にそうである。なぜなら

、彼の手紙は当時の各教会の事情と状況に基づき、兄弟姉妹に向けて書かれたものであり、主における兄弟姉妹を励まし、彼らが主イエスの恵みを受けられるようにするためのものだったからである。彼の手紙は、当時の兄弟姉妹を奮起させるためのものだった。それは彼自身の重荷であり、また聖霊が彼に背負わせた重荷でもあったと言える。結局のところ、彼は当時の諸教会を導き、諸教会に手紙を書いて励ました使徒である。それが彼の責任だった。彼の身分は単に働きを行なう使徒であって、神に遣わされた使徒に過ぎない。彼は預言者でも予知する者でもなかった。彼にとっては自分の働きと兄弟姉妹のいのちが最も重要だったのである。それゆえ、彼は聖霊の代わりに語ることができなかった。彼の言葉は聖霊の言葉ではなかったし、ましてや神の言葉だったとは到底言えない。パウロは神の被造物に過ぎず、決して神の受肉ではなかったからである。彼の身分はイエスの身分と同じではなかった。イエスの言葉は聖霊の言葉であり、神の言葉だった。イエスの身分はキリスト、すなわち神の子の身分だったからである。どうしてパウロがイエスと対等になれるのか。もし人々が、パウロが書いたような手紙や言葉を見て、それらを聖霊の発した言葉と見なし、神として崇めるなら、それはあまりにも分別がないとしか言えない。もっと厳しい言い方をすれば、それは単に冒瀆ではないのか。どうして人間が神に代わって話せるのか。また、人間の手紙や語った言葉の記録がまるで聖なる書か天の書であるかのように、どうしてその前に額ずけるというのか。神の言葉は人間が何気なく口にできるものなのか。どうして人間が神に代わって話せるのか。それで、あなたは何と言うのか。パウロが諸教会に向けて書いた手紙には、彼自身の考えが混じっているのではないのか。どうして人間の考えで汚れていないことがあり得ようか。彼は自分の個人的経験と認識に基づいて教会に手紙を書いた。たとえば、パウロはガラテヤの教会に向けて手紙を書いているが、そこにはある意見が含まれている。またペテロも別の手紙を書いているが、そこには別の意見が記されている。どちらが聖霊に由来するものなのか。誰一人断言することはできない。ゆえに、彼らは二人とも教会のために重荷を背負っていたが、彼らの書簡はそれぞれの霊的背丈を表わし、また兄弟姉妹に対する彼らの施しと支え、そして教会に対する責任を表わすものであって、人間の働きを表わしているに過ぎない。それらがすべて聖霊のものというわけではないのである。パウロの手紙は聖霊の言葉だと言うのなら、あなたは愚かで、冒瀆を犯している。パウロの手紙や新約のその他の書簡は、より最近の霊的人物による回顧録のようなものだ。それらはウォッチマン・ニーの著書やローレンスの経験などと同じようなものである。つまり、最近の霊的人物の著作は新約の中に収められていないが、そうした人物の本質は同じだということである。彼らは一定期間にわたり聖霊に用いられた人々だ

ったが、直接神を表わすことはできなかったのである。

新約のマタイの福音書にはイエスの系図が記載されている。冒頭で、イエスはアブラハムおよびダビデの子孫、ヨセフの子だったと述べられている。次に、イエスは聖霊によって受胎され、処女から生まれたとある。すると、イエスはヨセフの子でもなければ、アブラハムおよびダビデの子孫でもないことになる。しかし、系図はイエスとヨセフのつながりを主張している。次に、系図はイエスが誕生した過程を記し始める。それによると、イエスは聖霊に受胎され、処女から生まれたのであり、ヨセフの子ではない。しかし系図には、イエスはヨセフの子であるとはっきり書かれており、また系図はイエスのために書かれているため、その記録は四十二世代に及ぶ。ヨセフの代になると、ヨセフはマリヤの夫であると手短に述べている。これらの記述は、イエスがアブラハムの子孫であることを証明するためになされたものである。これは矛盾ではないか。系図はヨセフの祖先を明確に列挙しており、それは確かにヨセフの系図なのだが、マタイは、それがイエスの系図だと主張している。そのことは、イエスが聖霊によって受胎された事実を否定するものではないのか。ゆえに、マタイによる系図は人間の考えではないのか。それは馬鹿げている。このようにして、この書がすべて聖霊に由来するわけではないことがわかる。おそらく、神には地上での系図が必要だと考えた人々がいて、その結果、イエスをアブラハムの四十二代目の子孫としたのではないか。これはまことに愚かなことだ。地上に到着した後、どうして神に系図があり得るのか。神に系図があると言うのなら、それは神を被造物と同列に置いているのではないか。神は地上の存在ではなく、創造の主であり、肉の体をもってはいても、本質において人間とは違うのだ。どうして神を被造物の同類として位置づけられるのか。アブラハムに神を表わすことはできない。彼はヤーウェによる当時の働きの対象であり、単にヤーウェの認める忠実なしもべでしかなく、イスラエルの民の一人だった。どうして彼がイエスの祖先であり得ようか。

誰がイエスの系図を書いたのか。イエス自身が書いたのか。イエスが自ら「わたしの系図を書きなさい」と言ったのか。これはイエスが十字架にかけられた後、マタイが記録したものである。当時、イエスは弟子たちには理解できない働きを数多く行なったが、何も説明していなかった。イエスが去った後、弟子たちは至るところで説教と働きを始め、その段階の働きのために、手紙と福音書を記し始めた。新約の福音書は、イエスが十字架にかけられてから二十年ないし三十年後に書かれたものである。それ以前、イスラエルの人々は旧約だけを読んでいた。つまり、恵みの時代の当初、人々は旧約を読

んでいたのである。新約は恵みの時代によく現われる。イエスが働きを行なっていたとき、新約は存在しなかった。イエスが復活し、昇天した後になって、人々はイエスの働きを記録したのである。そこで初めて四福音書が生まれ、それに加えてパウロとペテロの手紙、そして黙示録が生まれた。イエスの昇天から三百年以上が過ぎたころ、後の世代がそれらの文書を選んで編纂し、そのとき初めて新約聖書が生まれた。この働きが完了してようやく新約が生まれたのであり、それ以前には存在しなかったのである。神がすべての働きを行ない、パウロとその他の使徒たちは各地の教会に宛てて数多くの手紙を記した。その後の人々が彼らの手紙を集め、神による終わりの日の働きを預言する、ヨハネがパトモス島で記録した最大の幻をそこに加えた。人々はこの順番にしたのだが、それは今日発せられる言葉と異なっている。今日記録されていることは、神の働きの諸段階に沿ったものである。人々が今日関わっているのは、神が自ら行なう働きであり、神が自ら発する言葉である。あなたがた人間が干渉する必要はない。霊から直接出るそれらの言葉は順を追って並べられており、人間の記録の配列とは異なっている。彼らが記録したものは、彼らの教養と人間としての素質の程度にしたがっていたと言えよう。彼らが記録したのは人間の経験だった。記録し、また認識するにあたって、人には自分なりの手段があり、一つひとつの記録は異なっていた。だから、聖書を神と崇めるなら、あなたは極めて無知で愚かだということになる。なぜ今日の神の働きを求めないのか。神の働きだけが人間を救える。聖書は人間を救えず、人々は数千年にわたって聖書を読んだかもしれないが、それでもなお彼らの中には少しの変化も見られない。そして聖書を崇めるなら、聖霊の働きを得ることは決してないだろう。イスラエルで神が行なった二段階の働きは、いずれも聖書に記録されている。ゆえに、これらの記録にある名前はみなイスラエルのもので、出来事もすべてイスラエルでのものである。「イエス」という名前さえ、イスラエル人の名である。今日も聖書を読み続けていれば、因習に従っていることになるのではないか。新約聖書に記録されていることは、ユダヤの物事である。原文はギリシャ語とヘブライ語で書かれており、イエスの呼び名と当時の言葉はすべて人間の言語のものである。イエスは十字架にかけられた時、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言った。これはヘブライ語ではないのか。それは、単にイエスがユダヤで受肉したからであり、神がユダヤ人であることの証明ではない。今日、神は中国で受肉した。したがって、その語ることはみな、間違いなく中国語である。しかし、それらの言葉は起源が違ふのだから、中国語訳の聖書とは比較できない。一方は人間が記録したヘブライ語を原典とし、他方は霊が直接発した言葉に由来する。ほんのわずかな違いもないことが、どうしてあり得ようか。

聖書について（４）

聖書を理解して解釈できることは、真の道を見つけるのと同じことだと多くの人が信じている。しかし、物事は本当にそれほど単純だろうか。聖書の実情を知る人はいない。つまり、聖書は神の働きに関する歴史的記録に過ぎず、神による以前の二段階の働きについての証しであること、また聖書は神の働きの目的について何も教えていないことを、誰も知らないのである。聖書を読んだことがある人はみな、そこには律法の時代と恵みの時代における二段階の神の働きが記録されていることを知っている。旧約はイスラエルの歴史と、創造から律法の時代の終わりに至るヤーウェの働きを記録している。また新約では、地上におけるイエスの働きが四福音書に記されており、それとともにパウロの働きも記録されている。これらは歴史的記録ではないのか。過去の物事を今日に持ち込めば、それは歴史となり、いかに真実かつ現実であろうとも、やはり歴史である。そして、歴史は現在を記述することができない。神は歴史を振り返らないからである。ゆえに、聖書を理解するだけで、神が今日行なおうとしている働きについて何も理解しないのなら、また、神を信じていながら聖霊の働きを求めないのなら、あなたは神を求めることが何を意味しているのかわかっていない。イスラエルの歴史を学ぶために、神の天地創造の歴史を研究するために聖書を読むのなら、あなたは神を信じていない。しかし今日、あなたは神を信じていのちを追い求めているのだから、また神の認識を追い求め、死んだ文字や教義、あるいは歴史の理解を追い求めているのではないのだから、今日の神の旨を求め、聖霊の働きの方向を探さなければならない。もしもあなたが考古学者なら、聖書を読んでもよいだろう。しかし、あなたは考古学者ではなく、神を信じる者の一人なのだから、今日の神の旨を探し求めるのが最善である。聖書を読んでも、せいぜいイスラエルの歴史がわずかにわかるだけであり、アブラハム、ダビデ、モーセの生涯を学び、彼らがどのようにヤーウェを崇めたか、ヤーウェが自分に敵対する人々をどのように火で罰したか、その時代の人々にどう語ったかが見出せるだけである。過去における神の働きについてしか見出せないのである。聖書の記録は、初期のイスラエルの人々がいかに神を崇め、ヤーウェの導きのもとで生きたかということに関連している。イスラエル人は神の選民だったので、イスラエルのすべての人々のヤーウェに対する忠誠や、ヤーウェに従う人々がヤーウェからどのように慈しまれ、祝福を受けたかが旧約の中でわかる。また、イスラエルで働きを行っていたとき、神は慈悲と愛に満ちていたが、同時に激しい炎ももっていたこと、そしてイスラエル人は卑しい者から強い者まで誰もがヤーウェを崇め、そのためイスラエルの全土が神に祝福されたことを知

ることができる。これが旧約に記録されているイスラエルの歴史である。

聖書はイスラエルにおける神の働きの歴史記録であり、古代の預言者たちによる預言の多くと、ヤーウェが当時働きを行なう中で発した言葉の一部が記載されている。それゆえ、人々はこの本を神聖なものとして尊ぶ（神は聖く、偉大であるから）。もちろん、これはみな、ヤーウェに対する人々の畏敬と、神に対する彼らの敬慕の結果である。人々がこの本をこのように扱うのは、ひとえに神の被造物が自分たちの創造主を深く畏敬し、敬慕しているからであって、この本を天の書と呼ぶ者さえいる。だが実際のところ、これは人間の記録でしかない。ヤーウェが直接名付けたものではないし、ヤーウェが直接その作成を導いたのでもない。つまり、この本の著者は神でなく人間なのだ。聖書は、人間が敬ってつけた書名に過ぎない。この書名は、ヤーウェやイエスが話し合っ
て決めたものではなく、人間の考えでしかないのである。この本はヤーウェの著書ではないし、ましてイエスの著したものでもない。そうではなく、多くの古代の預言者、使徒、そして予知する者による記録を後の世代が一冊の古代書に編集したものであって、それは人々にとってとりわけ聖いものと映っている。またこの書は、未来の世代によって解読されるのを待っている、数多くの計り知れない深遠な奥義を含んでいると、その人たちは信じている。したがって、よけいに人々はこの本を天の書だと考えがちである。四福音書と黙示録の追加によって、この本に対する人々の態度は、他のどの本ともひととき異なっていて、誰一人、この「天の書」をあえて解明しようとしない。なぜならあまりに「神聖」だからである。

なぜ、聖書を読むとすぐ、人々は実践の正しい道を聖書の中に見つけることができるのか。なぜ自分にとって不可解だった多くのことを自分のものにできるのか。今日、わたしはこのようにして聖書を分析しているが、それはわたしが聖書を憎んでいるという意味でも、参考としての価値を否定しているという意味でもない。わたしが聖書の本来の価値とそのなりたちを説明し、明確にしているのは、あなたが闇の中に閉じ込められないようにするためである。人々は聖書について実に多くの見方をもち、その多くは誤っている。聖書をこのように読むのは、得るべきものを得ることを妨げるだけでなく、さらに重要なこととして、わたしが行なおうとしている働きの妨げとなる。これは未来の働きをひどく妨げ、利点でなく欠点ばかりをもたらす。したがって、わたしがあなたに教えているのは、聖書の本質とその内部事情だけである。わたしは聖書を読むなと言っているのではないし、聖書に価値はないと言いふらすよう求めているわけでもない。聖書について正しい知識と見方をもつよう言っているだけなのだ。あまりに偏った

見方をしてはならない。聖書は人間によって記された歴史書だが、古代の聖人や預言者が神に仕えた原則、およびより近い時代の使徒たちが神に仕えた経験を記した文書でもある。これらはみな、そうした人々が実際に見て知った事柄であり、この時代の人々が真の道を求める上で参考になる。したがって、人々は聖書を読む中で、他の書物には見出せない数多くのいのちの道を自分のものにすることができる。これらの道は、過去の時代の預言者や使徒たちが経験した、聖霊の働きのいのちの道であり、その言葉の多くは貴く、人々が必要とするものを施せる。そのため、人々はみな聖書を読むことを好むのである。聖書にはまことに多くのことが隠されているので、聖書に対する人々の見方は、偉大な霊的人物の著作に対するものとは異なっている。聖書は新旧の時代においてヤーウェやイエスに仕えた人々の経験と認識を集めた記録であり、後の世代はそこから多くの啓き、照らし、そして実践への道を自分のものにすることができた。聖書がどの偉大な霊的人物の著作よりも高位にあるのは、彼らの記述がどれも聖書から引き出したものであり、彼らの経験はみな聖書から来ている、いずれも聖書を解説しているからである。そこで、人々は偉大な霊的人物の著書から糧を得られても、依然として聖書を崇める。聖書がじつに偉大で深遠に思われるからだ。聖書はパウロの手紙やペテロの手紙といった、いのちの言葉の書の一部を収めているし、人々はこれらの書から施しや支えを得られるものの、これらの書はやはり時代遅れで、過去の時代に属するものである。どれほど優れていても、一つの時代にだけ通用するもので、永遠のものではない。神の働きは常に進展しており、単にパウロやペテロの時代で止まったり、イエスが十字架にかけられた恵みの時代にいつまでもとどまったりすることはできない。したがって、これらの書は恵みの時代にのみふさわしいものであって、終わりの日の神の国の時代にはふさわしくない。これらは恵みの時代の信者にのみ施せるのであって、神の国の時代の聖徒に施すことはできない。いかに優れていても、それらはやはり過去のものである。ヤーウェによる創造の働きやイスラエルでの働きも同じである。その働きがいかに偉大でも、それはやはり時代遅れになり、廃れる時がきっと来る。神の働きもまた同じであり、それは偉大だが、終わる時が来る。いつまでも創造の働きにとどまることはできないし、磔刑の働きにとどまっていることもできない。磔刑の働きがいかに説得力をもち、サタンを打ち負かすにあたって効果的でも、結局、働きはやはり働きであり、時代もまた時代なのである。働きがいつまでも同じ基礎の上にとどまることはできないし、時代が決して変わらないということもあり得ない。なぜなら創造があり、また必ず終わりの日があるからである。これは決して避けられない。ゆえに、今日、新約のいのちの言葉、つまり使徒たちの手紙や四福音書は歴史的な書となり、古い年鑑となった。古い年

鑑がどうして人々を新たな時代に導けるだろうか。それらの年鑑がどれほど人々にいのちを施すことができたとしても、あるいは人々を十字架に導くことができたとしても、それらは時代遅れではないのか。価値がないのではないか。それゆえ、盲目的にそれらの年鑑を信じるべきではないと言うのだ。それらはあまりに古く、あなたを新たな働きに至らせることができず、重荷にしかならない。新たな働き、新たな入りに至らせることができないばかりか、古い宗教的な教会へと至らせる。そうなれば、神への信仰において退歩していることにならないか。

聖書に記されているのはイスラエルにおける神の働きであり、そこにはイスラエルの選民によって行なわれたことも幾つか含まれている。一部の箇所が含まれたり省略されたりしており、聖霊が認めることはなかったが、さりとて非難することもなかった。聖書は純粹にイスラエルの歴史であり、それはまた神の働きの歴史でもある。そこに記録されている人、出来事、および物事はすべて事実であり、象徴的な意味はまったくなかった。もちろん、イザヤやダニエルをはじめとする預言者たちの預言、あるいはヨハネが見た幻を記した書は別である。イスラエルの初期の人々は知識が豊富で教養があり、古代に関する彼らの知識や文化はきわめて進んだものであり、彼らの書いたものは今日の人々が書くものより高度だった。ゆえに、彼らがこれらの書を著わせたのは驚くにあたらない。なぜなら、ヤーウェが彼らのあいだで実に多くの働きを行ない、彼らはかくも多くを見たからである。ダビデはヤーウェの業を目の当たりにし、自らそれを経験し、多くのしるしと不思議を見た。そこで、ヤーウェの業を讃えるべく、あの多くの詩篇を書いたのである。彼らがある種の状況下でそれらの書を著わすことができたのは、彼らに並外れた才能があったためではない。彼らがヤーウェを讃えたのは、ヤーウェを見たからである。もしあなたがたがヤーウェをまったく見たことがなく、神の存在を知らなければ、どうして神を讃えられるだろうか。ヤーウェを見たことがなければ、神を讃えることも、崇めることも知らないままだろうし、ましてや神を讃える歌など書けるわけがない。そして、たとえヤーウェの業を何かでっち上げてくれと言われても、そうすることはできないはずだ。今日、あなたがたが神を讃えて愛せるのは、あなたがたが神を見て、神の働きを経験したからでもある。そして、もしもあなたがたの素質が向上したなら、あなたがたもダビデのように、神を讃える詩を書けるようになるのではないか。

聖書を理解し、歴史を理解するが、聖霊が今日何をしているかを理解しないのは間違っている。あなたはとても見事に歴史を学んできたし、実にすばらしい成果を挙げた。

しかし、聖霊が今日行なっている働きについては何も理解していない。これは愚かなことではないか。他の人たちがあなたに「神は今、何をしていますのですか。今日、何に入るべきなのですか。あなたのいのちの追求はどうですか。あなたは神の御心を理解しているのですか」と尋ねても、あなたは答えることができないだろう。では、あなたは何を知っているのか。あなたは、「わたしは肉に背を向け、自分を認識しなければならぬことを知っているだけです」と言う。そして、もし相手が「他には何を知っているのですか」と尋ねたなら、あなたは、神の采配のすべてに従うことを知っている、そして、聖書の歴史について少しばかり知っている、それで全部だと答える。それが、長年神を信じる中で得たもののすべてなのか。それがあなたの理解しているすべてであれば、あなたには実に多くのことが欠けている。したがって、あなたがたの現在の霊的背丈では、わたしがあなたがたに求めることは基本的に達成できないし、あなたがたが理解している真理、およびあなたがたの識別力はあまりにわずかである。つまり、あなたがたの信仰はあまりに表面的なのだ。あなたがたは、もっと真理を身につけなければいけない。あなたがたにはさらなる認識が必要であり、もっと多くを見なければいけない。そうして初めて福音を広められる。それがあなたがたの成し遂げるべきことなのだから。

実践（１）

以前、人々が経験する方法には逸脱が多くあり、馬鹿げたことさえあった。彼らは神が要求する基準をまったく理解していなかったので、人々の経験が歪む分野がたくさんあった。神が人に要求するのは、普通の人間性を生きられるようになることである。例えば、人々が食べものや衣服について現代の慣習に従い、スーツとネクタイを身につけ、現代美術について多少学び、余暇に芸術や文化や娯楽を楽しむのはまったく問題ない。思い出に残る写真をいくつか撮り、本を読んで何らかの有益な知識を得て、比較的良好な生活環境をもつことができる。これらはどれも普通の人間性の生活にふさわしい事柄だが、人々はそれらを神にひどく忌み嫌われることだと考え、そうすることを控えている。彼らの実践はいくつかの規則に従うことでしかなく、そのせいで水たまりのようによどんだ、まったく意義のない生活を送っている。実のところ、人々がそのように物事を行なうよう、神が要求したことは一度もない。人々はみな自分の性質を抑制することを望み、霊の中で絶えず祈って神により近づこうとしており、心は絶えず神の意図を熟考し、目は絶えず周囲を見回してあれこれ観察し、神とのつながりが何らかの形で断ち切られることを強く恐れている。これらはどれも人が自分で至った結論である。つまり、それらは人々が自分のために設けた規則なのである。あなたが自分の本性と本質を

知らず、自分の実践がどの程度に達することができるかを理解していなければ、神が人に要求する基準を正確に判断する術はないし、実践の正確な道をもつこともない。人に対する神の要求がいったい何かをあなたは理解できないのだから、あなたの心は常に揺れ動き、あなたは頭脳を振り絞って神の意図を分析し、聖霊によって動かされ、啓かれる方法を手探りで探し求める。結果として、自分がふさわしいと信じる実践の方法を発展させるのだ。神が人にいったい何を要求するのか、あなたにはまったくわからない。あなたはただ自分自身の一連の実践を脳天気に行ない、その結末を考慮することはほとんどなく、まして自分の実践に逸脱や過ちがあるかなどは気にしない。このようにして、あなたの実践は自然と正確さを欠き、原則のないものになる。とりわけ欠けているのは正常な人間の理知と良心、そして神による賞賛と聖霊による確証である。ひたすら自分の道を進むのがまったく簡単になってしまうのである。このような実践は単に規則に従うこと、あるいは自分を控えて制御しようとさらなる負担をわざと背負うことである。それでもあなたは自分の実践が完全に正確だと考えており、自分の実践の大半が不要な過程や儀式から成っていることを知らない。自分の性質が基本的に変化せず、新たな認識がなく、新たな入りもないまま、長年にわたってこのように実践する人は数多い。そのような人は同じ古い過ちを知らぬ間に再び犯し、自分の野蛮な本性を自由に活動させた上で、理不尽かつ無慈悲な行為を何度も行ない、人々が頭を抱えて困惑するような振る舞いをするまでになる。そのような人が性質の変化を遂げたと言えるだろうか。

現在、神への信仰は神の言葉の時代に入った。相対的に言って、人々は以前ほど祈っていない。神の言葉が真理のすべての側面と実践の道を明確に伝えたので、人々が求めて模索する必要はもはやないのである。神の国の時代の生活においては神の言葉が人々を前へと導くが、それはすべてが明らかにされ、人々がそれを見られる生活である。なぜなら、神がすべてを明確に示し、人はもはや人生において模索する必要がないからである。結婚、この世の営み、生活、衣食住、人と人との関係、そして人はどうすれば神の旨を満たす形で神に仕えることができるのか、また人はどのようにして肉を捨て去るべきかなどについて言えば、これらの事柄のうち、神があなたがたにまだ説明していないものはどれか。あなたがたはいまだに祈って求めに行く必要があるのだろうか。その必要はまったくない。あなたがたがまだこれらのことをするなら、単に余計な行動をとっているだけではないか。それは無知で馬鹿げたことであり、まったく必要ない。あまりに素質がなく、神の言葉を理解できない者だけが、馬鹿げた祈りを絶え間なく唱えるのである。真理を実践する上で鍵となるのは、あなたに決意があるか否かである。中には、

それが真理にそぐわないと知りながら、あくまで肉の好みに従って行動する人がいる。それは彼らのいのちにおける前進を阻み、祈って求めた後でさえ、なおも肉に従う形で行動したがる。そうすることで、彼らは故意に罪を犯しているのではないか。肉の快樂を無闇に欲しがり、金銭に固執しながら、こう神に祈る者のように。「神よ。わたしが肉の快樂を無闇に欲しがり、富に固執することをあなたはお許しになるのでしょうか。わたしがこのように金を稼ぐというのが、あなたの御心なののでしょうか」。これが適切な祈り方だろうか。そうする人たちは、神がこのようなことにまったく喜びを覚えず、自分はそれらを捨て去るべきだと完全に熟知しているが、心に抱く物事はすでに決まっており、祈って求めるとき、自分たちがそのように振る舞うことを許すよう、神に強制しようとしているのである。彼らは心の中で、神が何かを言ってそれを保証することさえ求めるだろう。それが反抗と呼ばれるものである。また、教会の兄弟姉妹たちを自分の味方にして、自分の独立王国を築く者もいる。あなたは、これらの行動が神に敵対することだとよくわかっているが、こうしたことをしようと決心すると、それでもわざわざ探求して神に祈り、冷静でひるまない。あなたはなんと恥知らずで厚かましいのか。世俗の物事を捨て去ることについては、ずっと以前に語られてきた。神が世俗の物事を忌み嫌っていることを知りながら、このように祈る者がいる。「おお、神よ。わたしが世俗の物事に従うのをあなたがお許しにならないことを、わたしは理解しております。ただわたしは、あなたの御名に恥をもたらないようにすべくそうするのです。わたしがそうするのは、世俗の人々がわたしの中にあなたの栄光を見るようにするためです」。これはどのような祈りなのか。あなたがたにわかるだろうか。これは神を威圧し、神に圧力をかけることを目的とした祈りである。あなたはこのように祈って恥ずかしくないのか。このように祈る人はわざと神に反抗しているのであって、こうした祈りはひとえに疑わしい動機の問題である。つまり、まさにサタンの性質の表われなのである。神の言葉は水晶のごとく明白であり、とりわけ神の旨、神の性質、そして神による様々な人の扱い方に関して発せられた言葉はそうである。真理を理解していないのであれば、神の言葉をもっと読まなければならない。そうしたほうが無闇に祈って求めるよりもはるかに良い結果をもたらす。求めて祈る代わりに、神の言葉をもっと読んで真理について交わるべき場合は数多い。普段の祈りにおいては、神の言葉からもっと自分を反省し、自己認識を試みるべきである。そうしたほうがあなたのいのちにおける前進にとってより有益である。現在、あなたがいまだ天に目を向けることで求めているなら、それはあなたが今なお漠然とした神を信じていることを示してはいないか。以前、あなたは自分の探求と祈りの成果を見て、今は恵みの時代だからというので、聖霊によって霊がいく

らか感動した。あなたは神を見ることができなかったので、そのように手探りで進み、求めるしか選択肢がなかった。今や神が人のあいだに降臨し、言葉が肉において現われ、あなたは神を目の当たりにした。ゆえに、聖霊はもはや以前のように働いていない。時代が変わったのだから、聖霊の働き方も変わったのである。人々は以前のように祈っていないかもしれないが、神が地上にいるので、人には今神を愛する機会がある。人類は神を愛する時代に入り、自分の中で正常に神へ近づくことができる。「ああ、神よ。あなたはまさに善であり、わたしはあなたを愛したいと思います」。わずかな数語の明瞭かつ単純な言葉が、人々の心の中にある神への愛に声を与え、この祈りはひとえに人と神との愛を深めるために語られる。時には自分が多少の墮落を示していることに気づき、このように言うこともあるだろう。「ああ、神よ。わたしはなぜこれほど墮落しているのでしょうか」。あなたは自分を何度か殴りたいという強い欲求に駆られ、目に涙が湧き上がる。このようなとき、あなたは心の中で後悔と苦痛を感じるが、そうした感情を表わす術がない。これが聖霊による現在の働きなのだが、いのちを追い求める人だけがそれを成し遂げられる。神は自分に大きな愛を抱いているとあなたは感じ、特殊な感情を抱く。たとえ明瞭に祈る言葉をもたなくても、神の愛は大洋と同じくらい深いとあなたは常に感じる。こうした状態を表わすのにふさわしい言葉は存在せず、これが霊の中でしばしば生じる状態なのである。心の中で神に近づくことを目的とするこうした祈りと交わりは正常なものである。

人々が模索して探し求める時代は今や過ぎ去ったが、それはこれ以上祈って求める必要がないという意味ではない。また、働きを続ける前に神の旨が明かされるのを待つ必要はないということでもない。それらは人の思い違いにすぎない。神は人と共に暮らし、人の光、人のいのち、人の道となるべく、人のあいだに来たのであり、これは事実である。もちろん、神は地上に来る際、人の霊的背丈に合う現実の道といのちを必ずや人にもたらし、彼らがそれを享受できるようにするのであって、人の実践方法を残らず破壊するために来たのではない。人はもはや手探りで探し求めることによって生きているのではない。なぜなら、働きを行ない、言葉を語るために神が地上に来たことが、それらにとって代わったからである。神が来たのは、闇に包まれ朦朧としたそれまでの生活から人を解き放ち、光に満ちた人生を送れるようにするためである。現在の働きは物事を明確に指摘し、明確に語り、直接教え、物事をはっきりと規定することであり、ちょうどヤーウェ神がイスラエルの民を導き、生贄の捧げ方や神殿の建て方を教えたように、人々はそれによってこれらのことを実践することができる。それゆえ、あなたがたは

もはや、主イエスが地上を去った後のように、熱心に探し求める生活を送る必要はない。将来、福音を広める働きを模索する必要はあるだろうか。正しい生き方を見つけるために模索する必要はあるだろうか。自分の本分をいかに尽くすべきかを見分けるために模索する必要はあるだろうか。いかに証しすべきか知るために、地面にひれ伏して探し求める必要はあるだろうか。どのような服装をし、どのように暮らすかを知るために、断食して祈る必要はあるだろうか。神による征服をどう受け入れるべきかを知るために、天の神に絶え間なく祈る必要はあるだろうか。神にどう従うべきかを知るために、日夜常に祈る必要はあるだろうか。あなたがたの中には、自分は理解していないからそれを実践することができないと言う人が大勢いる。人々は今日における神の働きにまったく注意を払っていない。わたしはずっと前から多くの言葉を語ってきたが、あなたがたはそれを読むことに一切注意を払わなかったので、どう実践すべきかを知らないのも無理はない。もちろん今の時代でも、聖霊はいまだ人々を感動させて喜びを感じられるようにし、また人ともに生きている。これはあなたの生活でしばしば起こる、あの^[a]特別で快い感情である。時折、神が本当に愛しく思われて、神にこう祈らずにはいられない日がある。「おお、神よ。あなたの愛はとても美しく、あなたの姿は本当に偉大です。わたしはもっと深くあなたを愛したいと望みます。自分のすべてをあなたに捧げて一生を費やしたいのです。わたしはすべてをあなたに捧げます。それがあなたのためである限り、そうすることでわたしがあなたを愛せる限り……」。これが聖霊からあなたに与えられる喜びの感情である。啓きでも照らしでもなく、感動するという経験なのである。これに似た経験は時折生じる。仕事に向かうとき、あなたは時たま神に祈って近づくのだが、涙が顔を濡らして自制をすっかり失い、心の熱情を残らず表わすのにふさわしい場所を見つけようと、いても立ってもいられなくなるほど感動するだろう……。公共の場にいるとき、自分は神の愛をこれほどまでに享受し、自分の運命は非凡だと感じた上に、自分は他の誰よりも有意義な人生を送っているとさえ感じるときもあるだろう。神が自分を称揚し、それが自分に対する神の偉大な愛であると、あなたは深く認識する。あなたは心の奥底で、人間には表現することも推し測ることもできない愛が神の中にあると感じる。知ってはいるが表現する術がなく、いつも立ち止まって考えるものの、まったく表現できないというような愛である。そのようなとき、あなたは自分がどこにいるかすら忘れ、こう呼びかける。「ああ、神よ。あなたはかくも計り知れず、実に愛すべきお方です」。人々はそれに困惑するものの、こうしたことはどれも頻繁に起こる。あなたがたはこうしたことを何度も経験している。これが聖霊からあなたに今日与えられる生活であり、あなたが今生きるべき生活である。それはあなたの生活を止めさせ

るためではなく、むしろあなたの生き方を変えるためである。それは描写することも表現することもできない感情であり、人間の真の感情でもある上に、聖霊の働きでもある。あなたはそれを心の中で理解しているかもしれないが、誰かにはっきり表現する術はまったくない。それはあなたの話し方が遅いとか、舌がもつれているとかではなく、言葉では言い表わせない感情だからである。今日、あなたはこうしたことを享受するのを許されており、それがあなたの生きるべき生活なのである。もちろん、あなたの生活のその他の側面が空虚なのではなく、感動するというこの経験があなたの生活において一種の喜びとなり、そのため聖霊からのこうした経験をいつも喜んで享受する、ということに過ぎない。しかし、このように感動することは、あなたが肉を超越して第三の天に行くためでも、世界中を旅するためでもないということは知るべきである。むしろ、あなたが今日享受している神の愛を感じて味わい、神による今日の働きの意義を経験し、神の気遣いと加護を再び知るようになるためなのだ。それらはすべて、神が今日行なう働きをあなたがより深く認識するようになるためのものであり、これがこの働きを行なう神の目標なのである。

探し求めて模索することは、神の受肉に先立つ生活様式である。当時、人々は神を見ることができなかったのも、探し求めて模索するしか選択肢がなかった。今日、あなたはすでに神を見ており、神は直接あなたにどう実践するべきかを告げている。ゆえに、あなたが模索したり探し求めたりする必要はもはやない。神が人を導く道は真理の道であり、神が人に語ること、人が受け取るものはいのちと真理である。あなたには道といのちと真理がある。ならば、何の必要があってあちこち探し求めに行くのか。聖霊は二段階の働きを同時に行なわない。わたしが言葉を語り終えた時、人々が神の言葉を慎重に飲み食いすることも、真理を正しく追い求めることもせず、依然として恵みの時代と同じように振る舞い、目が見えないかのように模索し、絶えず祈って探し求めるなら、わたしの働きのこの段階、つまり言葉の働きが無駄に行なわれているということではないか。わたしが言葉を語り終えたというのに、人々はいまだ完全には理解していない。これは彼らに素質が欠けているからである。この問題は教会生活を送り、互いに交わることで解決できる。以前の恵みの時代、神は受肉したものの言葉の働きを行なわなかったのも、その働きを維持すべく、聖霊が当時そのように働いた。その頃、働きを行なうのはおもに聖霊だったが、今は受肉した神が働きを行ない、聖霊の働きに取って代わっている。以前は頻繁に祈りさえすれば、人々は平安と喜びを経験し、そこには叱責と懲らしめもあった。これらはすべて聖霊の働きだった。今、こうした状態は極めて希であ

る。聖霊は各時代に一種類の働きしか行なうことができない。肉において一種類の働きを行ない、人々の中でもう一種類の働きを行なうというように、聖霊が二種類の働きを同時に行なったとすれば、またその肉の言うことが重要でなく、霊の行なうことだけが重要だったとすれば、キリストには語るべき真理も道もいのちもまったくないことになってしまう。これは自家撞着というものである。聖霊がこのように働きを行なうなどあり得るだろうか。神は全能で賢いことこの上なく、聖く義であり、過ちを犯すことは決してない。

人々による過去の経験には逸脱や過ちがあまりに多くあった。普通の人間性を備える人がもつべきもの、あるいは行なうべきことがあったり、人間生活で避けることの難しい過ちがあったりしたのである。そしてこうした物事の処理に問題があれば、人々はその責任を神に押しつけた。客を自宅に招いた姉妹がいた。蒸し饅頭がうまく蒸せなかったので、彼女は考えた。「これはたぶん神の懲らしめだろう。神はわたしの虚栄心を再び取り扱っておられるのだ。わたしのうぬぼれが本当に強すぎるから」。実際、人の常識で考えれば、客がやってきたら、あなたは興奮して慌てふためき、何を行なうにしても混乱する。だから飯が焦げてしまったり、料理があまりに塩辛くなったりするのも当然のことに過ぎない。これはあまりに興奮していることが原因なのだが、人は結局それを「神の懲らしめ」のせいにする。実際のところ、それはどれも人間生活の中で生じた過ちに過ぎない。あなたが神を信じていなくても、やはりこのようなことにしょっちゅう出くわさないだろうか。問題が発生するとき、それはしばしば人の過ちの結果なのであり、そうした過ちが聖霊の行ないだというのでは決してない。そうした過ちは神と何ら関係ないのである。ものを食べる際に舌を噛んだとき、神の懲らしめということがあり得るだろうか。神の懲らしめには原則があり、たいていの場合、あなたがそうと知りながら過ちを犯した際にそれは見られる。あなたが神の名に関すること、あるいは神の証しや働きに関することを行なうときに限り、神はあなたを懲らしめる。今、人々は真理を十分理解しており、自分が行なうことを自覚できる。例えば、教会の資金を着服したり見境なく使ったりしても、あなたは平気でいられるだろうか。そうするとき、あなたはきっと何かを感じるはずだ。ひとたび行為がなされたとき、何かを感じるだけということとはあり得ない。自分の良心に反する行ないについて、あなたは心の中ではっきりわかっている。人にはそれぞれの好みや嗜好があるので、真理をどう実践すべきかをはっきり知っていたとしても、ひたすら自分を甘やかす。このように、何かをした後も、その人ははっきりとした良心の呵責を感じることも、明白な懲らしめを受けることもな

いのである。なぜなら、その人はそうと知りながら過ちを犯したからであって、ゆえに神がその人を懲らしめることはない。義なる裁きが下される時になると、それぞれの行動に応じて神の報いが各々に下される。現在、教会で資金を着服する人もいれば、男女の境界がはっきりしない人、神の働きを密かに裁き、拒み、破壊しようと企む人もいる。そうした者たちが依然として無事なのはなぜか。そのようなことをするとき、彼らには自覚があり、心の中で咎めを感じている。そのため刑罰と精錬を時折受けるのだが、彼らはあまりに恥知らずである。淫行を犯したときのように、彼らはその際自分が何を行なっているのか気づいているのだが、欲望があまりに大きく、自分を抑えることができない。聖霊が彼らを懲らしめても無駄なので、聖霊は懲らしめを下さない。聖霊にそのとき懲らしめられることがなく、咎めを感じず、自分の肉に何も起こらなければ、その後どのような咎めがあり得るだろうか。行為がなされたとなれば、どのような懲らしめがあり得るだろうか。そのことは、彼らがあまりに恥知らずで人間性に欠けており、呪いと懲罰を受けるに値することを証明しているに過ぎない。聖霊が必要もないのに働きを行なうことはない。真理をよく知りながら実践に移さず、どんな悪でも犯すことができるなら、あなたを待つのは悪人とともに懲罰される日の到来だけである。それがあなたに最もふさわしい結末なのだ。今、わたしは良心について繰り返し説教したが、それは最低限の基準である。良心がなければ、その人は聖霊による懲らしめをすでに失っており、自分が望むことを何でも行なうことができ、神は彼らを一切気に留めない。本当に良心と理知をもつ者は、誤ったことをしたときそれに気づく。ひとたび良心の咎めを多少感じると、彼らは不安を覚える。そして内なる葛藤を経て、最後は肉を捨てる。そのような人が、あまりにひどく神に敵対することを行なうところに至ることはない。聖霊が彼らを懲らしめ罰するかどうかにかかわらず、間違ったことをしたとき、人は誰しも何らかの感情を抱く。したがって、人々は今やありとあらゆる真理を理解しているが、それらを実践することがなければ、それは人間の問題である。わたしはこのように人に一切反応せず、彼らに希望を抱くこともない。あなたは自分の好きなことを行なえばよい。

寄り集まった際に神の言葉を脇にのけ、いつもこの人はどうだ、あの人はどうだなどと話している人がいる。もちろん、どこに行っても簡単に惑わされず、容易にたぶらかされることがないよう、多少洞察力があるのはよいことである。それもまた人が自分のものにすべき一つの側面なのだ。しかし、その側面にだけ集中してはならない。これは物事の消極的な側面に関連するものであり、いつも他人に目を光らせることはできない

。聖霊がどう働きを行なうのかに関する今のあなたの認識は少なすぎるし、あなたの神への信仰はあまりにも表面的すぎ、あなたが自分のものになっている積極的な事柄は少なすぎる。あなたが信じるのは神であり、あなたが理解する必要があるのは神であって、サタンではない。サタンが働きを行なう方法と、悪霊が働きを行なうあらゆる方法を認識していながら、神に関する認識が一切なければ、そこに何の意味があるというのか。あなたが今日信じるのは神ではないのか。あなたの認識にそうした積極的な事柄が含まれていないのはなぜか。あなたは入りの積極的な側面にまったく注意を払わず、それを把握してもいない。そうであれば、あなたは自分の信仰の中でいったい何を獲得したいのか。いかに追い求めるべきか知らないのではないか。あなたは否定的な側面については多くのことを知っているが、入りの積極的な側面については何も知らないのか。あなたの霊的背丈がどうして成長できるだろうか。あなたのような人がサタンとの戦いについてしか話さないなら、将来の発展にどのような見込みがあるだろうか。あなたの入りはあまりに時代遅れではないだろうか。そうすることで、現在の働きから何を得られるだろうか。今重要なことは、神は現在何を行ないたいのか、人はどのように協力すべきか、どのように神を愛すべきか、聖霊の働きをどう理解すべきか、神が今日語るすべての言葉にどう入るべきか、それらをどう飲み食いし、経験し、理解すべきか、神の旨をどのように満たし、神によってどう完全に征服され、神の前でいかに服従すべきかなどを、あなたが理解することである。これらが、あなたが集中すべきこと、現在入るべきことである。わかるだろうか。他人を識別することにしか集中しないのであれば、それが何の役に立つのか。ここでサタンを識別し、あそこで悪霊を識別するというように、悪霊のことを完全に理解していたとしても、神の働きについて何も言えないなら、そうした識別が神を理解することの代わりになり得るだろうか。わたしは以前、悪霊の働きの表われについて交わったことがあるものの、それはわずかな部分に過ぎなかった。もちろん、人々は多少の識別力を有するべきであり、それは馬鹿げたことを行なったり、神の働きを妨げたりすることを避けるため、神に仕える者たちが自分のものにすべき側面である。しかし、最も重要なのは依然として、神の働きを認識し、神の旨を理解することなのである。神の働きのこの段階について、あなたの中にどのような認識があるのか。神が何を行なうか、神の旨は何か、自分の欠点は何か、自分は何を備えるべきかについて、あなたは話すことができるのか。自分の最新の入りが何か、あなたは言うことができるのか。あなたは新たな入りの中で収穫し、認識を得られるようになるべきである。混乱した振りをしてはならない。新たな入りの中でいっそう努力し、自分の経験と認識を深め、またそれ以上に、現在の最も新しい入りと最も正しい経験の仕方を把握

しなければならない。さらに、新たな働きと新たな入りを通じ、時代後れで逸脱した自分のそれまでの実践に関する識別力を身につけ、また新たな経験に入るべく、それらを捨て去る方法を求めるべきである。これらのことが、あなたが今急いで理解し、入る必要のあることである。新旧の入りの違いと関係性を、あなたは理解しなければならない。そうしたことを把握していなければ、あなたに前進する術はない。聖霊の働きと歩調を合わせることができないからである。普通に神の言葉を飲み食いし、普通に交わった上で、それによって以前の時代遅れな実践法と伝統的な古い観念を変え、新たな実践に入り、神の新たな働きへと入らなければならない。これらがあなたの成し遂げるべきことである。現在、わたしは単に、自分をどう測るかを正確に突き止めるよう、あなたに求めているわけではない。それが目標ではないのである。むしろ、真理の実践といのちへの入りの認識を真剣に捉えるよう、わたしはあなたに求めている。あなたの自己認識の能力が、あなたの真の霊的背丈を表わしているわけではない。神の働きを経験し、神の言葉にある真理を経験して認識することができ、自分のそれまでの個人的な観念や誤りを識別できるなら、それがあなたの真の霊的背丈であり、あなたがた一人ひとりが成し遂げなければならないことである。

どう実践すればよいのか見当もつかず、まして聖霊がいかに働きを行なうかなどまったく知らないという状況は数多い。聖霊に対して明らかに従順でないことをするときがある。神の言葉を飲み食いすることで、あなたはその件に関する原則をすでに把握しており、心の中で咎めと不安を感じている。もちろんそれは、多少の真理を認識しているという条件の下でしか感じるこのできない感情である。協力したり、今日における神の言葉にしたがって実践したりすることがないなら、その人は聖霊の働きを妨害しており、必ずや心の中で不安を覚える。ある種の側面の原則を理解していながら、それにしたがって実践することがなければ、あなたは心の中で咎めの感情に苦しむ。原則を理解せず、真理のこの側面をまったく知らなければ、この件に関して咎めを感じるとは限らない。聖霊による咎めが常に背景にある。自分は祈っておらず、聖霊の働きに協力することもなかったのだから、その働きを遅らせてしまったとあなたは考えている。実際のところ、それが遅れることはあり得ない。聖霊は別の誰かを感動させるのであり、聖霊の働きが誰かに抑制されることはない。自分は神を失望させたとあなたは感じているが、それはあなたが良心に抱くべき感情である。あなたが真理を得られるかどうかはあなたの問題であり、神とは関係ない。時として自分の良心が非難されているように感じることもあるが、それは聖霊による啓きや照らしでもなければ、聖霊の咎めでもない。む

しろそれは、人の良心の中にある感情なのである。神の名、神の証し、あるいは神の働きに関わる事柄について好き勝手に振る舞うなら、神はあなたを逃さない。しかしそこには限度があり、神が普通の小さなことであなたに煩わされることはない。神はあなたを無視するだろう。あなたが原則に反し、神の働きを乱して妨げるなら、神はあなたに怒りを解き放ち、あなたを逃すことは絶対にない。あなたが犯す過ちの一部は、人間生活を送る上で避けられないものである。たとえば、饅頭を正しく蒸せなかったとき、あなたはそれを神の懲らしめだと言う。これはまったく理不尽な言葉である。神を信じるようになる前にも、そうしたことは頻繁に起きていたのではないか。あなたはそれを聖霊の懲らしめのようなだと感じるが、実際にはそうではない（例外的ないくつかの状況を除く）。と言うのも、その働きのすべてが聖霊から来ているわけではなく、むしろ人間の感情に由来しているからである。しかし、信仰をもつ人々がそのような考え方をするのは普通のことである。神を信じていなければ、そのように考えるはずはない。ひとたび神を信じるようになると、あなたはこれらの事柄を考えることにより多くの時間を割き始め、ゆえに自然とそうした考え方をするようになった。それは人の正常な考えから生じるのであり、その人の心構えと関係している。しかし言わせてほしいのだが、そうした考えは聖霊の働きの範囲に含まれない。これは聖霊が人々に対し、彼らの思考を通じて普通の反応を与えている実例なのである。しかし、そうした反応が聖霊の働きでないことは理解する必要がある。このような「認識」をもっているからといって、あなたに聖霊の働きがあることの証明にはならない。あなたの認識は聖霊の啓きから生じるものではなく、ましてや聖霊の働きなどではない。それは単に、普通の人間的思考の産物に過ぎず、聖霊の啓きや照らしとは絶対に何のつながりもない。それらは明確に異なる現象なのである。このような普通の人間的思考は、聖霊から生じるものではまったくない。たいていの場合、聖霊は働きを行なって人を啓くとき、その人に神の働きに関する認識、およびその人の真の入りと状態に関する認識を授ける。またその人に対し、今日における神の切実な意図と人に対する要求を理解させ、その人がすべてを犠牲にして神を満足させ、たとえ迫害や逆境に遭っても神を愛し、またたとえそれが血を流すこと、あるいは自分のいのちを捧げることを意味しても、後悔することなく神への証しに立つ決意をするようにさせる。あなたにそうした決意があれば、それはあなたに聖霊の鼓舞と働きがあることを意味する。しかしどの瞬間にもそうした鼓舞があるわけではないことを知っておきなさい。集会の際に祈り、神の言葉を飲み食いするとき、この上なく感動して鼓舞されることがある。他の人が神の言葉に関する経験や認識を交わると、それをととても新鮮だと感じ、心が完全に澄んで明るくなる。それはすべて聖霊の働きである

。あなたが指導者で、教会に赴いて働きを行なうとき、聖霊があなたに並外れた啓きと照らしを与え、教会内の問題に対する洞察力を授け、真理に関する交わりをしてそれを解決する方法を知らしめ、また働きにおいてとてつもなく熱心で、責任感が強く、真剣にさせることがあれば、それはどれも聖霊の働きなのである。

脚注

a. 原文は「何らかの」。

実践（２）

過去において人は神と共にあり、一瞬一瞬を霊の中で生きるために自分を訓練した。それは今日の実践に比べると単純な形態の霊的訓練である。それは人がいのちの正しい軌道に乗る前に行われる最も浅く単純な実践方法であり、人の神への信仰における実践の第一段階を成す。人が常にこのような実践に頼るならば、多くの感情を持ち、間違いを犯しがちで、真のいのちの経験に入ることができなくなる。単に霊を訓練し、心の中で正常に神に近づけるようになり、神と共にあることにこの上ない喜びを常に見出すだけである。神との小規模な一体感に自己を限定し、さらに深遠なものに近づくことはできない。このような境界の内に暮らす人は、大きく進歩することができない。いつも「ああ！主イエス。アーメン！」と叫びがちである。ほとんど毎日このような調子である。これは過去の実践であり、いつも霊の中に生きる実践である。これは低俗ではないのか。今日、神の言葉を熟考する時は、ただ言葉を熟考することに集中しなさい。真理を実行する時には、ただ真理を実行することに集中しなさい。本分を遂行する時には、ただ本分を遂行しなさい。このような実践は実は人をとても自由にし、解放する。昔の宗教家が祈祷し、食前の感謝の祈りを唱えるのとは異なる。もちろん、以前はこれが信仰者の実践であった。しかし、今ではこのように実践することはあまりにも遅れている。神の働きは今では以前より高い水準にある。「神を現実の生活にもたらす」という今日語られていることは、実践の最も重要な側面である。これが、現実の生活において人がもつことを期待されている正常な人間性であり、人が正常な人間性においてもつべきものは、神が今日語るあらゆる言葉である。「神を現実の生活にもたらすこと」の実践的な意味は、神の言葉を現実の生活にもたらすことである。今日、人はおもに次のことを身につけるべきである。ある一面においては、能力を向上させ、教育を受け、読書と理解の技能を改善しなければならない。別の面においては、普通の人の生活を送らなければならない。あなたは世俗から神の前に来たばかりであり、まず自らの心が神の前で安

らかにできるように訓練しなければならない。これは実践のまさに始まりであり、いのちの性質における変化を達成するための第一歩でもある。比較的に実践に順応性のある人もいる。彼らは作業をしながら、真理に思いを巡らし、現実において理解すべき真理と実践の原則を解明していく。一つの側面では普通の人間生活を送らなければならない、別の側面では真理に入り込まなければならないのである。このようなことすべてが現実の生活における最善の実践を形成する。

神を現実の生活にもたらすためには、おもに人は普通の人間性において神を崇拝し、神を知ろうと追い求め、神の被造物としての本分を尽くさなければならない。人が何かをするたびに絶対に祈らなければならないということはなく、祈らないのは良くないわけでも、祈らなければ神に負い目を感じなければならないわけでもない。今日の実践はそのようなものではなく、本当にゆったりしていて簡単なのである。人は教義に従うことを要求されない。それどころか、各人がそれぞれの霊的背丈に合わせて行動すべきである。もし家族の誰かが神を信じないならば、未信者として扱い、信じるならば信心者として扱いなさい。愛と忍耐ではなく知恵を実践しなさい。野菜を買うために外出し、歩きながら次のようにつぶやく人がいる。「おお、神よ。あなたは今日わたしにどの野菜を買わせたいのでしょうか。あなたの助けを求めます。あらゆることにおいて神の名を称え、わたしたちすべてが証しをすることを神は求めている。だから、たとえ商人がわたしに腐ったものを渡しても、わたしはそれでも神に感謝し、忍耐します。神を信じるわたしたちは、野菜をあれこれ選んだりできません」。このような人はこうすることが証しだと考え、その結果、腐った野菜を買うのに金を使い、それでも祈って言う。「ああ、神よ。あなたがそれ良しとされる限り、わたしはこの腐った野菜でも食べます」。このような実践は馬鹿げていないのか。これは教義に従うことではないのか。以前、人は一瞬一瞬を霊の中で生きるために訓練したが、これは恵みの時代になされた働きに関連している。信心深さ、謙遜、愛、忍耐、すべてのものに感謝すること、これらは恵みの時代にすべての信者に求められたことである。当時、人はあらゆることにおいて神に祈った。衣服を買う時に祈り、集会の知らせを受けた時も祈り、次のように言うのだった。「おお、神よ。あなたはわたしを集会に行かせたいですか、行かせたくないですか。行かせたいのなら、わたしに平坦な道を用意してください。行かせたくないなら、わたしを転ばせ倒してください」。人は祈りながら神に懇願し、祈った後は不安になり、行こうとしなかった。中には、集会から帰宅すると信仰をもたない夫に殴られるのを恐れ、祈る時に不安になり、それゆえ集会に行かない姉妹もいた。彼女たちはこれが

神の心だと信じたが、実際には、たとえ行ったとしても何事も起こらなかったはずである。結果として、彼女たちは集会を一回逃した。これはすべて人の無知のせいである。このように実践する人は皆、自分の感情で暮らしているのである。このような実践方法はあまりに間違っていて、馬鹿げており、曖昧さに染まっている。個人的感情や考えがありすぎる。集会があることを告げられたら、行きなさい。それ以上神に祈る必要はない。これは単純なことではないのか。もし今日、衣類を買う必要があれば、すぐ出かけて買えばよい。神に祈って、次のように言うのはやめなさい。「おお、神よ。わたしを行かせたいですか、それともだめですか。わたしが留守の時、兄弟姉妹の一人がたまたまやってきたらどうなるでしょう」。兄弟か姉妹がやって来るかもしれないので、あなたは出かけない。しかし結局、夕方になっても誰一人来なかった。恵みの時代でさえ、このような実践方法は逸脱しており誤りであった。従って、人が過去のように実践すれば、いのちには何の変化も生じない。人は単に何が起ころうと、無知にもそれに自らを委ねるだけで、分別には何の注意も払わず、ただやみくもに従って、耐えるだけである。当時、人は神に栄光を帰することを重視していた。しかし、神は人から何の栄光も受けなかった。人は何ら実際的なことを生き方に現わさなかったからである。ただ自分の観念に従って自制し、自己を制限しただけで、長年にわたる実践でさえ、いのちには何の変化ももたらさなかった。人が知っているのは忍耐し、謙虚にし、愛し、許すことだけで、ほんのわずかの聖霊による啓きさえ欠けていた。このようにして、いかに神を知ることなどできようか。そしていかにして神に栄光を帰することができるというのか。

人は、神を自分の現実の生活、普通の人間生活にもたらして初めて神への信仰の正しい軌道に入ることができる。今日は、神の言葉があなたがたを導く。過ぎ去った時代のように探し求めたり、模索したりする必要はない。神の言葉に従って実践でき、わたしが明らかにした人間の状態に照らし合わせて内省し、自分を評価することができれば、変ることができる。これは教義ではなく、神が人に要求することである。今日、わたしはあなたにものごとがどうなっているかを告げる。わたしの言葉に従って行動することだけに関心を持ちなさい。わたしがあなたに要求することは、普通の人が必要とすることに基づいている。わたしはすでに言葉をあなたに語った。言葉を実践することに集中する限り、あなたは神の意図と一致するようになる。今こそ神の言葉の中で生きる時代である。神の言葉はすべてを説明しており、すべては明らかにされている。神の言葉に従って生きる限り、あなたは完全に自由で、解放された生活を送る。過去において、人が神を自分の現実の生活にもたらした時、人は過度の教義と儀式を実践し経験した。ほ

んの些細なことにおいてでさえ祈り、求め、神が明瞭に述べた言葉を脇にのけて読もうとしなかった。それどころか、すべての努力を探求に捧げた。その結果、何の成果もなかった。食べ物や衣服を例に挙げると、あなたは祈り、このようなことを神の手に委ね、何もかもあなたに代わって神が解決することを願う。神がそのような言葉を聞くと、こう言う。「わたしはそのようなつまらない些細なことに携わらなければならないのか。わたしがあなたのために創造した普通の人間性や理知はどこへ行ってしまったのか」。時々、誤った行動をする人がいる。すると、神を怒らせたと考えて萎縮してしまう。状態がとてもよい人もいるが、何か些細なことを間違っていると、神に厳しく罰せられると考える。実のところ、これは神のすることではなく、人の心の影響である。時には、あなたの経験の仕方は何も間違っていないのに、他の人があなたは正しい経験をしていないと言い、あなたはそれに陥り、消極的で内心が暗くなる。多くの場合、人がこのように消極的な時、神に罰せられていると考えるが、神は言う。「わたしはあなたにおいて一切の刑罰の働きをしていないのに、どうしてそのように責めるのか」。人はあまりに簡単に消極的になる。また、敏感になりすぎ、神について不平を言うことがよくある。神はあなたがこのように苦しむことを要求しないのに、あなたは自分からそのような状態に陥る。このように苦しむことには何の価値もない。人は神のする働きを知らず、多くのことについて無知であり、はっきり見ることができない。そのため自分の観念と想像に捕らわれ、いっそう深く巻き込まれていく。すべての物事は神の手の中にあると言う人がいる。それでは、人が消極的になっているとき、神がそれを知らないことがありえようか。もちろん、神は知っている。あなたが人間的観念に陥っている時、聖霊はあなたの中で働くべきがない。何回も消極的な状態に陥る人もいるが、それでもわたしは働きを続行する。あなたが消極的であろうと、積極的であろうと、わたしはあなたに制約されることはない。むしろ、わたしが話す言葉の多くとわたしが行う膨大な働きは、人の状態に従って、互いに密接に繋がっていることを知るべきである。あなたが消極的な時でも、それが聖霊の働きを邪魔することはない。刑罰の時や死の試練の間、人は皆消極的な状態に陥っていたが、このことはわたしの働きを妨害しなかった。あなたが消極的だった時、聖霊は他の人において必要な働きを続行した。あなたは一カ月間にわたって追求を止めるかもしれないが、わたしは働き続ける。あなたが現在あるいは将来に何をしようと、それは聖霊の働きを止めることはできない。人間の弱さから生じる消極的な状態もある。人が自分には本当に神の要求を満たしたり把握したりすることができないと思うと、消極的になる。例えば、刑罰の時、神の言葉は刑罰の只中において、ある程度まで神を愛することを述べたが、人は自分にはできないと信じた。人は自

分の肉体がサタンに深く墮落させられ、自分の素質がとても乏しいために特に悲嘆にくれ、嘆かわしい気分になった。自分がこのような環境に生まれたことはなんと残念なことかと感じた。神を信じ、神を知るには遅すぎて、完全にしてもらう価値はないと感じる人もいた。これはすべて正常な人間的な状態である。

人の肉はサタンに属しており、反抗的な性質に満ちており、嘆かわしいほど汚れて不純である。人は肉の喜びを過度に切望し、肉の現れは過多にある。そのため神は肉をある程度嫌っている。汚れて、墮落したサタンのものを人が捨て去れば、神の救いを得る。しかし、汚れや墮落から抜け出さないままにいるなら、相変わらずサタンの支配下に生きることになる。人の狡猾さ、不正直さ、ねじれた心はすべてサタンに属するものである。神があなたを救うのは、こうしたサタンのものからあなたを解放するためである。神の働きが間違っていることはなく、すべては人を闇から救うために行われる。ある程度まで信じ、肉体の墮落を脱ぎ捨てることができ、もはやこの墮落の束縛を受けないならば、救われるのではないのか。サタンの支配下で生きるなら、神を現わすことはできず、あなたは汚れており、神の嗣業を受け取ることはできない。いったん清められ完全にされると、あなたは聖くなり、正常な人になり、神の祝福を受け、神に喜ばれる。今日神が行う働きは救いであり、さらに、裁き、刑罰、呪いでもある。そこには多くの側面がある。神の発する言葉は裁きと刑罰、そして呪いも含むことを、あなたがたはみな知っている。わたしが話すのはある成果を上げるため、人に己を知らしめるためであり、人を死に至らせるためではない。わたしの心はあなたがたのためにある。話すことはわたしが働く方法の一つである。言葉を通して、わたしは神の性質を表し、あなたに神の心意を理解させる。あなたの肉体は死ぬだろうが、あなたには霊と魂がある。人に肉体しかなかったら、その信仰には何の意味もなく、わたしが行ってきたこのすべての働きにも意味がない。今日、わたしはひとつの話し方をし、また別の話し方をする。ある時は人への憎しみを極端に示し、別の時には極めて愛情深い。わたしがこうするのはすべてあなたの性質を変え、神の働きについてのあなたの観念を転換させるためである。

終わりの日が来て、世界中の国々は混乱状態である。政治的無秩序、飢饉、疫病、洪水、干ばつが至る所で出現している。人間界には大惨事があり、天も災害を地上にもたらした。これらは終わりの日の兆候である。しかし、人々にとっては世界は陽気ですばらしく、ますますそうなっていくように見える。人々の心は世界に惹きつけられ、多くの人はそこに陥り抜け出すことができない。数多くの人が策略や妖術を行う者に騙され

る。進歩しようと努力せず、理想もなく、真の道に自らの根をおろしていなければ、あなたは罪のうねる波に押し流されてしまう。中国はすべての国のなかで最も後進的で、赤い大きな竜がとぐろを巻いている国であり、偶像を崇拜し妖術に携わる人が最も多く、寺院も最も多く、不潔な悪霊が住む場所である。あなたはそこから生まれ、それに教育され、その影響にすっかり染まっている。それに墮落させられ、苦しめられてきたが、目覚めてからは、それに背を向け、完全に神のものとされる。これは神の栄光であり、そのためにこの段階の働きには偉大な意義がある。神はそれほどの大規模な働きをなし、多くの言葉を語り、最終的にはあなたがたを完全に自分のものとする。これは神の経営の働きの一部であり、あなたがたは神のサタンとの戦いにおける「戦利品」である。あなたがたが真理を理解すればするほど、そして教会生活がよくなるにつれて、赤い大きな竜はいっそう屈従させられる。これはみな霊的世界のことであり、霊的世界の戦いであり、神が勝利する時、サタンは辱められ、倒れる。この段階の神の働きは非常に重要性を持つ。神がこのように大規模な働きを行い、完全にこの集団の人たちを救うのは、あなたがサタンの影響から逃れ、聖なる土地に暮らし、神の光の中で生き、その光に導かれ助けられるようにである。そこで生きることには意義がある。あなたがたが食し、着るものは未信者とは異なり、あなたがたは神の言葉を享受し、意味のある生活を送る。では未信者は何を享受するのか。彼らは「祖先の遺産」と「国民精神」だけしか享受しない。彼らはほんのわずかな人間性の痕跡さえ持ち合わせない。あなたがたの衣服、言葉、行動はすべて彼らのものとは異なる。最終的に、あなたがたは完全に汚れから逃れ、もはやサタンの誘惑に陥ることはなくなり、神から日々の施しを得る。あなたがたはいつも注意深くしていなければならない。あなたがたは汚れた場所に暮らしているが、汚れに染まってはおらず、神のそばで暮らし、神の偉大な保護を受けることができる。神はあなたがたをこの黄色い大地にいるあらゆるものの中から選んだ。あなたがたは最も祝福された人ではないのか。あなたは被造物であり、もちろん神を崇拜し、意味のある人生を送るべきである。神を崇拜せず、汚れた肉体のうちに生きるならば、人間の衣装を身に着けた獣にすぎないのではないか。あなたは人間であるから、神のために費やし、すべての苦しみに耐えるべきである。喜んで、確実に、今日直面している小さな苦しみを受け入れ、ヨブやペテロのように意味のある人生を送るべきである。この世で人は悪魔の服をまとい、悪魔が与える食べ物を食べ、悪魔の言いなりになって働き、仕え、汚濁の中ですっかり踏みにじられる。あなたが人生の意味を把握せず、また真の道を自分のものにしないならば、このように生きることには何の意義があるのか。あなたがたは正しい道を追求する人、向上を求める人である。あなたがたは赤い大きな竜の

いる国で立ち上がり、神が義なる者と呼ぶ人である。これは最も意味のある人生ではないのか。

受肉の奥義（１）

恵みの時代、ヨハネはイエスのために道を整えた。ヨハネに神自身の働きをすることはできず、ただ人の本分を尽くしただけである。ヨハネは主の先駆者だったが、神を表わすことはできなかった。聖霊に用いられる人に過ぎなかったのである。イエスがバプテスマを受けたあと聖霊が鳩の如くイエスの上に降り立った。それからイエスは自分の働きを始めた。つまり、キリストの職分を始めたのである。それが、イエスが神の身分をとった理由である。イエスは神から来たからである。これ以前のイエスの信仰がどのようなものであったとしても——時には弱く、時には強かっただろうが——それはすべてイエスが職分を始める前に過ごした、普通の人生活に属するものだった。イエスがバプテスマを受けた（油を注がれた）後、神の力と栄光がただちに備わり、それにより職分を始めた。イエスはしるしと不思議、奇跡を行なうことができ、力と権威を備えていた。神自身の代わりに自ら働きを行なったからである。イエスは霊に代わって霊の働きを行ない、霊の声を表現した。よって、イエスは神自身だった。そのことに反論の余地はない。ヨハネは聖霊に用いられた人間である。彼に神を表わすことはできず、また神を表わすことは彼にとって不可能だった。たとえそうしたいと望んでも、聖霊はそれを許さなかつたろう。と言うのも、神自身が成し遂げようとした働きを、ヨハネが行なうことはできなかったからである。おそらく、彼には人間としての意思、あるいは逸脱したものが数多くあったのだろう。どのような状況下においても、ヨハネは神を直接表わすことができなかった。彼の過ちや間違いは自分自身だけを表わしていたが、彼の働きは聖霊を象徴するものだった。それでもなお、彼のすべてが神を表わしていたと言うことはできない。彼の逸脱や間違いも神を表わしていただろうか。人を表わす中で間違いを犯すのは普通のことだが、神を表わしながら逸脱しているなら、それは神の名誉を汚すことではないだろうか。聖霊に対する冒瀆ではないだろうか。たとえ他人に称揚されても、人が神に取って代わることを聖霊は軽々しく許さない。神でない人が最後に固く立つことはできないだろう。人が気の向くままに神を表わすことを、聖霊は許さない。たとえば、聖霊はヨハネに証しをし、彼がイエスのために道を整える者であることを明らかにしたが、聖霊によって彼になされた働きは実に均衡のとれたものだった。ヨハネに求められたのはイエスのために道を整える者になること、イエスのために道を備えることだけだった。つまり、聖霊は道を整える彼の働きだけを支え、そのような働き

をすることだけを彼に許した。他の働きをすることは許されなかったのである。ヨハネは道を整えた預言者エリヤを表わしていた。そのことにおいて聖霊はヨハネを支えた。彼の働きが道を整えることである限り、聖霊はヨハネを支えたのである。しかし、もしヨハネが、自分は神だと主張し、贖いの働きを完成させるために来たのだと言ったなら、聖霊は彼を懲らしめる必要があっただろう。ヨハネの働きがどれほど偉大でも、またそれが聖霊に支えられていたとしても、その働きに境界がなかったわけではない。確かに、聖霊はヨハネの働きを支えていたが、当時彼に与えられていた力は道を整えることに限られていた。その他の働きを行なうことはまったくできなかったのである。と言うのも、彼はイエスではなく、道を整えるヨハネに過ぎなかったからである。よって、聖霊の証しが鍵になるのだが、聖霊が人に許す働きはそれにも増して重要である。当時、ヨハネは鳴り響くような証しを受け取っていたのではないか。ヨハネの働きも偉大ではなかったのか。しかし、ヨハネの働きがイエスの働きを超えることはできなかった。なぜなら、ヨハネは聖霊によって用いられた人間に過ぎず、直接神を表わすことはできなかったからである。そのため、ヨハネが行なった働きは限られていた。ヨハネが道を整える働きを終えた後、聖霊はもはや彼の証しを支えず、新たな働きが続くこともなく、神自身の働きが始まったときに、ヨハネは去った。

悪霊に取りつかれ、「わたしが神だ！」と声高に叫ぶ人がいる。しかし最後に、彼らは暴かれる。と言うのも、自分が表わすものについて、彼らは間違っているからである。彼らはサタンを表わし、聖霊は彼らに何の注意も払わない。どれほど高く自分を称揚しても、どれほど力強く叫んでも、あなたは依然として被造物であり、サタンに属する者である。わたしは決して、「わたしは神である、神の愛するひとり子である」と叫ばない。しかし、わたしが行なう働きは神の働きである。わたしに叫ぶ必要があるだろうか。称揚の必要はない。神は自身の働きを自ら行なうのであり、人に地位や敬称を与えてもらう必要はない。神の働きは神の身分と地位を表わすのである。バプテスマに先立ち、イエスは神自身ではなかったのか。受肉した神の肉体ではなかったのか。イエスは証しをされて初めて神のひとり子になった、などと言うことは到底できない。その働きを始めるずっと以前、イエスという名の人間がすでにいたのではないか。あなたは新しい道を生み出すことも、霊を表わすこともできない。霊の働きや、霊が語る言葉を表現することもできない。神自身の働きや霊の働きを行なうこともできない。神の知恵、不思議、計り難さ、そして人間を罰する神の性質全体を表現することは、どれもあなたの能力を超えている。ゆえに、自分は神だと主張しようとしても無駄である。あなたには

名前があるだけで、実質がまったくないのである。神自身はすでに来た。しかし、誰も神を認識せず、それでいて神は働きを続け、霊を代表して働く。あなたが彼を人と呼ぼうと神と呼ぼうと、主と呼ぼうとキリストと呼ぼうと、あるいは姉妹と呼ぼうと、それは構わない。しかし、彼が行なう働きは霊の働きで、神自身の働きを表わしている。人にどのような名前と呼ばれるか、彼には関心がない。その名前が彼の働きを決定できるのか。あなたが彼を何と呼ぼうと、神に関する限り、彼は神の霊の受肉した肉体である。彼は霊を表わし、霊によって承認されている。あなたが新しい時代への道を切り開けないなら、あるいは古い時代を終わらせたり、新しい時代の到来を告げたり、新しい働きをしたりすることができないのであれば、あなたが神と呼ばれることはできない。

聖霊に用いられる人でさえ、神自身を表わすことはできない。そのような人は神を表わすことができないというだけでなく、その人が行なう働きも直接神を表わせないのである。言い換えると、人の経験が神の経営（救い）の内部に直接置かれることはできないし、神の経営を表わすこともできない。神自身が行なう働きはひとえに、神の経営計画の中で神が行なおうとする働きであり、それは偉大な経営に関係している。人によってなされる働きは、その人の個人的経験を提供することから成っている。以前の人たちが歩いた道を超える新しい経験の道を見つけ、聖霊の指導の下、兄弟姉妹を導くことから成っているのである。この人たちが提供するのは、自分個人の経験や、霊的な人たちの霊的書物である。このような人たちは聖霊によって用いられているが、彼らが行なう働きは、六千年にわたる計画の中の偉大な経営の働きとは無関係である。彼らはただ自分たちが果たしている役目が終わるか、自分たちの生涯が終わるまでの間、聖霊の流れの中で人々を導くために、様々な時代に聖霊によって生み出されてきた人たちに過ぎない。彼らが行なう働きは、神のために適切な道を整えるか、あるいは地上における神自身の経営の、ある特定の側面を続けていくことだけである。そのような人たちは基本的に、神の経営のより偉大な働きをすることができず、新しい道を切り開くこともできず、ましてや前の時代から続く神の働きをすべて終わらせることなどできない。よって、彼らが行なう働きは、被造物が己の役目を果たすことを表わしているだけで、神自身が己の職分を果たすことは表わせない。これは、彼らの行なう働きが神自身の行なう働きと違うからである。新しい時代を導入する働きは、人が神の代わりに行なえるものではない。他ならぬ神自身にしかできないことなのである。人によって行なわれるすべての働きは、被造物としての本分を尽くすことから成っており、その人が聖霊によって動かされたり、啓かれたりしたときに行なわれる。そのような人たちがもたらす指導はひと

えに、日常生活における実践の道を人に示すこと、神の旨と一致する形で行動するにはどうすればよいかを示すことから成っている。人の働きは神の経営に関わることも、霊の働きを表わすこともない。たとえば、ウィットネス・リー（李常受）やウオッチマン・ニー（倪柝聲）の働きは道を先導することだった。その道が新しかろうと古かろうと、その働きの前提は、聖書の中に留まるという原則の上に築かれていた。地方教会の再建であれ設立であれ、彼らの働きは教会を築くことに関係していた。彼らが行なった働きは、イエスと弟子たちが恵みの時代にやり残した働き、あるいはそれ以上に展開しなかった働きを引き継ぐものだった。彼らがその働きにおいて行なったのは、頭を覆うこと、バプテスマを受けること、パンをさくこと、ぶどう酒を飲むことなど、イエスがその初期の働きにおいて自分の後に来る世代の人々に求めたことを復活させることだった。彼らの働きは聖書を固く守り、聖書の中に道を求めることだったとすることができるだろう。彼らは新しい進歩を一切遂げなかった。したがって、人は彼らの働きの中に、聖書内における新しい道の発見と、以前よりはましで現実的な実践しか見ることができない。しかし彼らの働きの中に、神の現在の旨を見出すことはできず、ましてや神が終わりの日に行なおうと計画している新しい働きを見つけることなどできない。これは、彼らの歩んだ道が依然古い道であり、刷新や進歩がなかったからである。彼らはイエスの磔刑の事実にとだわり、人々に悔い改めて罪を告白させるという実践や、最後まで耐える者が救われるとか、男は女の頭であるとか、妻は夫に従えなどといった言い回し、そしてさらに、女性信者は説教できず、従うことしかできないという伝統的な観念を遵守し続けた。もしもこのような形の指導が遵守され続けていたら、聖霊が新しい働きを行ない、人々を教義から解放し、自由と美の領域へと導くことはできなかつただろう。そういうわけで、時代を変えるこの段階の働きは、神自身によって行なわれ、語られなければならないのである。そうしなければ、神の代わりにそれを行なえる人はいないからである。これまでのところ、この流れの外側における聖霊の働きはすべて行き詰まり、聖霊に用いられる人々は方向を失った。よって、聖霊に用いられる人々の働きは神自身による働きと同じではないので、彼らの身分、および彼らが誰に代わって行動しているかもまた異なっている。これは、聖霊の行なおうとする働きが異なるからであり、そのため同じように働きを行なうすべての人に異なる身分や地位が与えられる。聖霊に用いられる人たちもまた新しい働きをするかもしれないし、以前の時代になされた働きを消去するかもしれないが、彼らが行なうことは新しい時代における神の性質や旨を表現できない。彼らが働きを行なうのは、以前の時代の働きを取り除くためだけであり、神自身の性質を直接表わす目的で新しい働きを行なうためではない。このように、彼らが

時代遅れの実践をいかに多く廃止しようとも、あるいはどれほど多くの新しい実践を導入しようとも、彼らは依然として人と被造物を代表しているのである。しかし、神自身は働きを行なうとき、古い時代の実践の撤廃を公然と宣言したり、新しい時代の始まりを直接宣言したりすることはない。神はその働きにおいて直接的かつ率直である。神は行なおうと意図する働きを実行する上で率直である。つまり、神は自身がもたらしてきた働きを直接表現し、自身の働きを本来意図したように直接行ない、神そのものと神の性質を表現する。人の見るところ、神の性質、そして神の働きもまた、かつての時代と異なっている。しかし、神自身の見地からすれば、これは神の働きの継続であり、さらなる展開に過ぎない。神は働きを行なうとき、自身の言葉を表現し、新しい働きを直接もたらす。それとは対照的に、人が働きを行なうとき、それは熟慮と研究によってなされるか、または他人の働きの上に築かれた認識の発展、および実践の体系化なのである。すなわち、人によってなされる働きの本質は、確立された秩序に従い「新しい靴で古い道を歩く」ことである。このことは、聖霊に用いられる人が歩く道でさえ、神自身によって始められたものに基づいているということを意味している。ゆえに、つまるところ、人は依然として人であり、神はやはり神なのである。

イサクがアブラハムのもとに生まれたように、ヨハネは約束によって生まれた。ヨハネはイエスのために道を整え、多くの働きを行なったが、神ではなかった。むしろ、ヨハネは預言者の一人だった。イエスのために道を整えたからである。ヨハネの働きも偉大であり、ヨハネが道を整えて初めて、イエスは正式に自分の働きを始めた。実質的に、ヨハネは単にイエスのために骨を折っただけであり、ヨハネが行なった働きはイエスの働きに奉仕するものだった。ヨハネが道を整え終わった後、イエスは自分の働きを始めた。それはより新しく、より具体的で、より詳細にわたる働きだった。ヨハネが行なったのはその働きの最初の一部だけであり、新たな働きのより大部分は、イエスによって行なわれたのである。ヨハネも新たな働きを行なったが、新たな時代を始める人ではなかった。ヨハネは約束によって生まれ、その名前は天使から与えられた。当時、彼の父ザカリヤの名をつけたかった人たちもいたが、ヨハネの母が口を開いてこう言った。

「この子をその名前で呼ぶことはできません。ヨハネという名にしなければなりません」。これはすべて聖霊によって命じられたことである。イエスもまた聖霊の命令で名付けられ、聖霊から生まれ、聖霊からの約束を受けた。イエスは神であり、キリストであり、人の子だった。しかし、ヨハネの働きも偉大だったのに、なぜ彼は神と呼ばれなかったのか。イエスによってなされた働きと、ヨハネによってなされた働きの違いはいっ

たい何だったのか。ヨハネはイエスのために道を整える人だったというのが唯一の理由なのか。あるいは、神によってあらかじめ定められたからなのか。ヨハネは「悔い改めよ、天国は近づいた」と言って、天国の福音も宣べ伝えたが、彼の働きがさらに展開されることはなく、始まりを構成したに過ぎなかった。それとは対照的に、イエスは新しい時代を始めて古い時代を終わらせたが、旧約聖書の律法を成就させることもした。イエスが行なった働きはヨハネの働きより偉大であり、さらにイエスは全人類を贖うために来たのであって、その段階の働きを達成したのである。ヨハネのほうはただ道を整えたに過ぎない。彼の働きは偉大で、数多くの言葉を語り、彼に従う弟子たちも数多かったが、ヨハネの働きは人に新たな始まりをもたらしたに過ぎないのである。人は彼からのちも、道も、より深い真理も受け取っておらず、彼を通して神の旨を理解することもなかった。ヨハネはイエスの働きのために新たな土台を切り開き、選ばれた人を準備した偉大な預言者（エリヤ）だった。つまり、恵みの時代の先駆者だったのである。そのような事柄は、彼らがつ普通の人間の外見だけでは見分けられない。特にヨハネは、極めて多くの働きを行ない、その上聖霊に約束され、聖霊によって支えられた働きをしていたので、それがますます当てはまる。そうであれば、人のそれぞれの身分は、その人が行なう働きを通じてのみ区別することができる。と言うのも、人の外見からその人の本質を知る術はなく、聖霊の証しとは何かを人が確認することはできないからである。ヨハネによってなされた働きとイエスの働きは異なっており、違う性質を有している。そのことから、ヨハネが神かどうかを決めることができる。イエスの働きとは、始めること、続けること、終わらせること、そして結実させることだった。これらの各段階をイエスは実行したが、一方ヨハネの働きは、始まりをもたらす以上のものではなかった。イエスは最初に福音を広め、悔い改めの道を説き、それから人々にバプテスマを授け、病を癒し、悪霊を追い出した。最後に人類を罪から贖い、その時代全体の働きを完成させた。イエスはあらゆる場所に赴いて人々に説教し、天国の福音を宣べ伝えた。この点においてイエスとヨハネは似通っていたが、イエスは新しい時代を始め、人間に恵みの時代をもたらしたという違いがあった。人が恵みの時代に実践すべきこと、および従うべき道に関する言葉がイエスの口から発せられた。そして最後に、イエスは贖いの働きを終えた。ヨハネがその働きを実行できたはずはない。ゆえに、神自身の働きを行なったのはイエスであり、イエスが神自身であり、神を直接表わすのもイエスなのである。人の観念では、約束によって生まれた者、霊から生まれた者、聖霊によって支えられている者、新たな道を開く者はみな神である。このような論法によれば、ヨハネも神であり、モーセもアブラハムもダビデも全員神である、ということになる……。これ

はよくできた冗談ではないか。

イエスも自身の職分を果たす前は、聖霊が行なうことに従って行動する普通の人間に過ぎなかった。当時、自身の身分を意識していたかどうかはともかく、イエスは神から生じるすべてのことに従っていた。イエスが自身の職分を始める前、聖霊は彼の身分を決して明かさなかった。イエスがあれらの律法や掟を廃止したのは自身の職分を始めた後であり、イエスが正式に自身の職分を果たし始めた後、ようやく彼の言葉に権威や力が吹き込まれた。また新たな時代をもたらす働きが始まったのも、彼が自身の職分を開始した後である。それ以前の二十九年間、聖霊はイエスの中に隠れたままであり、その間イエスは人を表わしていただけで、神の身分はなかった。神の働きは、イエスの働きそして職分とともに始まったのであり、イエスは、自分がどれほど人に知られているかにかかわらず、自身の内なる計画通りに働きを行なったが、彼が行なった働きは、神自身を直接表わすものだった。そのとき、イエスは周囲の人たちに「あなたがたはわたしをだれと言うか」と尋ねた。すると彼らは答えた。「あなたは最も偉大な預言者であり、わたしたちのよき医者です」。また「あなたは大祭司です」と答える者もいた。ありとあらゆる答えが出て、イエスはヨハネであるとか、エリヤであるなどと言う者もいた。イエスはそれからシモン・ペテロの方を向いて「あなたはわたしをだれと言うか」と尋ねると、ペテロは「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と答えた。その時から、それらの人々はイエスが神であると認識するようになった。イエスの身分が知られたとき、最初にそれを認識したのがペテロであり、それを口に出したのもペテロだった。そしてイエスは言った。「あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である」。イエスがバプテスマを受けた後、他の人たちが認識していたかどうかはさておき、イエスの働きは神に代わって行なう働きだった。イエスが来たのは自身の働きを行なうためであって、自身の身分を明らかにするためではない。ペテロがそれについて語って初めて、イエスの身分は公に知られるようになったのである。イエスが神自身であることを人が認識していたかどうかにかかわらず、イエスは時が来ると自分の働きを始めた。そして、人が知っていたかどうかにかかわらず、イエスは以前のように自分の働きを続けた。たとえ人が否定したとしても、イエスはやはり自分の働きを行ない、そうすべき時にそれを遂行する。イエスが来たのは働きを行ない、職分を果たすためであり、人間が神の肉を知るようにするためではなく、人間が神の働きを受けようようにするためである。現段階の働きが神自身の働きであることを認識できないのであれば、それはあなたにビジョンが欠けているからである。それでも、この段階の働き

を否定することはできない。あなたがそれを認識できないからと言って、聖霊が働きを行っていないとか、聖霊の働きが間違っているなどといったことの証明にはならない。中には、聖書におけるイエスの働きに照らし合わせて現在の働きを調べ、矛盾している点を用いてこの段階の働きを否定しようとする者さえいる。これは盲人の行ないではないのか。聖書に記録されていることは限られており、神の働き全体を表わすことはできない。四福音書をすべて合わせても百章以下であり、その中に書かれている出来事は限られている。たとえば、イエスがイチジクの木を呪ったこと、ペテロが主を三回否定したこと、イエスが磔刑と復活の後、弟子たちの前に現われたこと、断食についての教え、祈りについての教え、離婚についての教え、イエスの誕生と系図、イエスの弟子たちの任命などである。しかし、人々はそれらと現在の働きとを比べることさえして、それらを宝として大切にすること。そのような人は、神にはこの程度のことしかできないとも言えるように、イエスが生涯に行なった働きはその程度にしかないと言っている。それは馬鹿げたことではないか。

イエスが地上にいた期間は三十三年半だった。つまり、イエスは地上で三十三年半暮らしたのである。そのうち、イエスが職分を果たすのに費やされた期間は三年半だけだった。そして残りの年月は、単に普通の人間生活を送っていた。はじめのうち、イエスは会堂の礼拝に出席し、そこで祭司による聖書の解説や他の人たちの説教を聞き、聖書について多くの知識を得た。イエスはそのような知識をもって生まれたわけではなく、読んだり聞いたりすることでそれを得たのである。イエスが十二歳のときに会堂で教師に質問したことは、聖書にはっきり記録されている。昔の預言者の預言はどのようなものだったか。モーセの律法はどのようなものか。旧約聖書とは。そして、神殿で祭司の服を着て神に仕えるとはどういうことかなど、イエスはたくさんの質問をした。そのような知識も理解もなかったからである。イエスは聖霊により母胎に宿ったが、まったく普通の人として生まれた。ある種の特別な性格はあったものの、やはり普通の人だった。背丈や年齢とともに知恵が増え続け、イエスは普通の人と同じ人生の過程を通過した。イエスは幼児期や青春期を経験していないと人々は想像する。イエスは生まれるなり三十歳の人として生涯を始め、働きを終えてすぐ十字架にかけられたというのである。おそらく普通の人と同じ人生を送ることはなく、食べもせず、他の人と交際もせず、人が簡単にその姿を見ることもなかっただろうと、人々は信じている。イエスは神なのだから、見る者を恐れさせる奇人だろうと信じている。肉となった神は絶対に普通の人と同じように生活しないと人々は信じている。彼らは、その人は聖なる人なので、齒を磨

いたり顔を洗ったりしなくてもきれいであると信じている。これらは純粹に人の觀念ではないだろうか。聖書にはイエスの人間生活に関する記録がなく、イエスの働きについての記録しかないが、このことでイエスが普通の人間性をもっていなかったとか、三十歳になるまで普通の人間の生活をしなかったという証明にはならない。イエスは二十九歳で正式に働きを始めたが、それ以前に彼が送った人としての生活全体を打ち消すことはできない。聖書はただその時期のことを記録から省略しているだけである。それは普通の人としての生活であり、神性の働きの時期ではなかったので、書き記す必要がなかったのである。イエスのバプテスマに先立ち、聖霊が直接働きを行なうことはなく、職分を始めるべき日までイエスを普通の人としての生活に留めただけのことである。イエスは受肉した神だったが、普通の人として成長する過程を経た。この成長過程は聖書から省かれている。と言うのも、人のいのちの成長にとって大きな助けにならないからである。イエスのバプテスマ以前は隠された時期で、イエスはしるしも不思議も行なわなかった。イエスはバプテスマを受けて初めて、恵み、真理、愛、そして憐みに満ち溢れた人類の贖いの働きのすべてを始めたのである。この働きの始まりはまさに恵みの時代の始まりでもあった。それが理由で書き留められ、現在に至るまで受け継がれてきたのである。それは、恵みの時代の人々がその時代の道を歩み、十字架の道を歩むために、道を開き、すべてを結実させるためだった。それは人が書いた記録に由来するものだが、すべて事実であり、ところどころに小さな誤りがあるだけである。たとえそうでも、これらの記録を誤りとすることはできない。記録された出来事はすべて事実であり、人が書き留める中で間違いを犯しただけである。中には、イエスが普通で平凡な人間性をもつ者だったなら、しるしや不思議を行なえたのはどういうことか、と言う人もいるだろう。イエスが経験した四十日間の試みは奇跡のしるしであり、普通の人には達成できないものである。試みを受けたイエスの四十日間は、聖霊の働きの本質だった。そうであれば、イエスの中に超自然的なものがまっただけでなく超自然的な人であることの証明にはならない。それは単に、聖霊が彼のような普通の人の中で働き、それにより、イエスは奇跡を起こしてよりいっそう偉大な働きを行なえた、というだけのことである。イエスがその職分を果たす前、あるいは聖書に記されているように聖霊がイエスに降りる前、イエスは普通の人に過ぎず、超自然的なところは少しもなかった。聖霊がイエスに降臨したとき、つまりイエスが自身の職分を果たし始めたとき、イエスは超自然的なもので満たされた。人はそのようにして、神の受肉した肉体には普通の人間性がないと信じるようになる。そのうえ、受肉した神には神性だけがあり、人間性はないと誤解

する。確かに、神が地上に来て働きを行なうとき、人が見るのはどれも超自然的な出来事である。人が自分の目で見えるもの、耳で聞くことはすべて超自然的である。なぜなら、神の働きと言葉は人にとって理解できず、達成不可能なことだからである。天の何か地上にもたらされるなら、超自然的以外のものであり得ようか。天国の奥義が地上にもたらされるとき、それは人が理解したり推測したりすることのできない奥義であり、あまりに不思議で知恵に満ちているが、それらはすべて超自然的ではないのか。しかし、たとえどんなに超自然的でも、すべては神の普通の人間性において行なわれるということを知らなければならない。神の受肉した肉体には人間性が吹き込まれている。そうでなければ、それは神の受肉した肉体ではないだろう。イエスは生きている間に非常に多くの奇跡を行なった。当時のイスラエル人が見たものは、超自然的なものに満ちていた。彼らは天使や使いを見、ヤーウェの声を聞いた。これらはすべて超自然的なことではなかったか。確かに、現在では超自然的なもので人を騙す悪霊がいる。これは、聖霊が現在行なっていない働きを通して人間を騙そうとする、悪霊による模倣に過ぎない。多くの人が奇跡を行ない、病人を癒やして悪魔を祓う。これらは悪霊の働き以外の何物でもない。現在、聖霊はもはやこのような働きをしないからであり、それ以降、聖霊の働きを模倣してきたのはすべて悪霊である。当時イスラエルで行なわれた働きはすべて超自然的な本質を有していたが、聖霊はいまやそのようなやり方では働かず、現在のそうした働きはどれもサタンによる模倣と扮装、そして妨害である。しかし、超自然的なものがすべて悪霊に由来するとは言えない。それは、神が働きを行なう時代に左右される。現在の受肉した神による働きを考えてみよ。そのうちの側面が超自然的でないというのか。彼の言葉は、あなたにとって理解することも成し遂げることもできないものである。そして、彼の働きを行なえる者は誰一人いない。彼が理解することを人が理解することはできず、彼の知識についても、それがどこから来るのかを人は知らない。中には「わたしもあなたと同じように普通なのに、あなたの知っていることをわたしが知らないのはどういうことか。わたしのほうが年上で経験も豊富なのに、どうしてわたしの知らないことをあなたが知っているのだろうか」と言う人がいる。人間に関する限り、これはすべて人間にはできないことなのだ。また、「イスラエルで行なわれた働きを知る人はおらず、聖書解説者ですら説明できないのに、あなたはどのように知っているのか」と言う人もいる。これらはすべて超自然なものの問題ではないのか。今日の受肉した神はいかなる不思議も経験していないが、あらゆることを知っており、いともたやすく真理を語って表わす。これは超自然的なことではないか。彼の働きは、肉体が到達可能な範囲を超えている。そのような働きは、肉体をもつ人の考えが及ぶものではなく、

人の知力や理屈にとってまったく不可解なものである。今日の受肉した神は聖書を読んだことがないものの、イスラエルにおける神の働きを理解している。そして、地に立ちながら語っているにもかかわらず、第三の天の奥義について話す。人がそれらの言葉を読むと、「これは第三の天の言語ではないか」という思いに圧倒される。これらはすべて、普通の人になし得ることを超えた事柄ではないのか。また、当時イエスが四十日間断食したのは、超自然的なことではなかったか。どんな場合でも四十日間の断食は超自然的で、悪霊の行為だと言うなら、あなたはイエスを断罪したことにならないか。自身の職分を始める前、イエスはまったく普通の人ようだった。イエスも学校で勉強した。そうでなければどうして読み書きを習得できたというのか。神が肉となったとき、霊は肉の中に隠れていた。しかし、普通の人間である彼は、成長と成熟の過程を経る必要があった。認知能力が成熟し、物事を識別できるようになって初めて、彼は普通の人と見なされた。そして彼の人間性が成熟して初めて、自身の職分を果たすことができた。彼の普通の人間性がまだ成熟しておらず、分別もついてないときに、どうして職分を果たすことができたのだろうか。彼が六歳か七歳で職分を果たすなど考えられないはずである。神はなぜ、初めて受肉したときに自身を明らかにしなかったのか。それは、神の肉の人間性がまだ成熟していなかったからである。神の肉の認知過程、またその肉の普通の人間性が、いまだ完全に神のものになっていなかったのである。そのため、彼が働きを始められるようになるには、普通の人間性と普通の人間の常識を、肉における働きを手がけるのに十分なほど身につけることがどうしても必要だったのである。彼がその務めに適していなければ、成長と成熟を続けることが必要だったはずである。イエスが七歳か八歳で自分の働きを始めたとしたら、人は彼を天才児として扱わなかっただろうか。誰もがイエスを子供だと考えたのではないだろうか。イエスに説得力があると誰が思っただろうか。演壇ほどの身長もない七、八歳の子供に説教などできただろうか。普通の人間性が成熟するまで、イエスはその働きに適していなかった。人間性がまだ未熟である限り、その働きの大部分は到底成し遂げられなかったのである。肉体における神の霊の働きもまたそれ自体の原理に支配されている。普通の人間性を備えて初めて、イエスは父なる神の働きを手がけ、その義務を引き受けることができたのであり、そうして初めて自身の働きを始めることができたのである。幼年時代、イエスは古代に起こった大半のことをまったく理解できず、会堂の教師に訊いて初めて理解することができた。もしも言葉を話すようになってすぐ働きを始めていたら、どうして誤りを犯さないでいられただろうか。神が間違えることなどどうしてあり得ようか。ゆえに、イエスは働きを行なえるようになって初めて働きを始めたのであり、働きを手がけることが完全に可

能になるまでいかなる働きも行なわなかったのである。イエスは二十九歳ですでにかなり成熟しており、その人間性はこれから行なう働きを手がけるのに十分だった。神の霊がイエスにおいて正式に働きを始めたのはその時が最初である。当時ヨハネはイエスのために道を切り開くべく七年間準備していた。そして自身の仕事を終えると、ヨハネは投獄された。こうして重荷はすべてイエスにのしかかった。人間性がいまだ足りず、青年になったばかりの二十一、二歳でイエスがこの働きを手がけ、依然として多くのことを理解していなければ、イエスは掌握することができなかつたろう。当時、イエスが中年になって働きを始めたとき、ヨハネが働きを実行してからすでにかなりの時が経っていた。その年齢であれば、イエスの普通の人間性はなすべき働きを手がけるのに十分だった。現在、受肉した神も正常な人間性を有しており、あなたがたの中の年長者と比べて成熟してはいないが、その人間性は自身の働きを手がけるのにもう十分である。今日の働きを取り巻く状況は、イエスの時代とまったく同じというわけではない。イエスはなぜ十二人の使徒を選んだのか。それはひとえに、イエスの働きを支え、それと協調するためだった。ひとつには、当時におけるイエスの働きの基礎作りをするためであり、他方では、その後におけるイエスの働きの基礎作りをするためだった。当時の働きに合わせて十二人の使徒を選ぶことは、イエスの旨であり、また同時に神自身の旨でもあった。自分は十二人の使徒を選び、彼らを率いてあらゆる場所で説教する必要があると、イエスは信じていた。だが今日、あなたがたの間でそうする必要はない。受肉した神が肉において働きを行なう際、そこには多くの原則があり、人間にはどうしても理解できない多数の事柄がある。人間は絶えず自分の観念を用いて神を推し量ったり、神に過度の要求をしたりする。それでいながら今日に至るまで、自分の認識が自分の観念だけで成り立っていることにまったく気づいていない人たちが多数いる。神がどの時代にどこで受肉しようと、肉における神の働きの原則は変わらない。神は肉となりながら、働きにおいて肉体を超越することができず、ましてや肉となりながら、肉体の普通の人間性の中で働かないことは不可能である。そうでなければ、神の受肉の意義は消えてなくなり、肉となったことばもまったく無意味になってしまう。さらに、天の父（霊）だけが神の受肉を知っており、他の誰も、肉となった神自身さえも、あるいは天の使いさえもそれを知らない。このように、神の肉における働きはますます普通のことであり、ことばがまさに肉となったことを申し分なく証明することができる。そして肉とは、平凡で普通の人を意味する。

「なぜ時代の到来は神自身によって告げられなければならないのか。被造物が神の代

わりになることはできないのか」と不思議に思う人がいるかもしれない。新しい時代の到来を告げるという明白な目的のために神が肉となることを、あなたがたはみな知っている。そしてもちろん、神が新しい時代の到来を告げるとき、同時に前の時代を終わらせることもあなたがたは知っている。神は初めであり終わりである。神の働きを始動させるのは神自身なのだから、前の時代を終わらせるのも神自身でなければならない。それは、神がサタンを打ち負かし、世界を征服する証拠である。神自身が人々のもとで働くたび、それは新しい戦いの始まりとなる。新しい働きの始まりがなければ、当然古い働きの終わりもない。そして古い働きの終わりがなければ、サタンとの戦いがまだ終結していないことを証明している。神自身が来て人のあいだで新しい働きを実行して初めて、人は完全にサタンの支配から自由になり、新しい生活、新しい始まりを得ることができる。そうでなければ、人は永遠に古い時代に生き、永遠にサタンの古い影響下で生きることになる。それぞれの時代が神によって導かれることで、人間の一部は自由になり、それによって人間は新しい時代に向けて神の働きとともに前進する。神の勝利とは、神に従うすべての人の勝利である。もし被造物である人類が時代を終えることを任されたなら、人間の視点からだろうと、サタンの視点からだろうと、それは神に反抗する行ない、あるいは神を裏切る行ないに過ぎず、神に対する従順さの行ないではないのであって、そのような人間の働きはサタンの道具にされてしまうだろう。神自身によって始められた時代の中、人が神に服従し、付き従うのでなければ、サタンを完全に納得させることはできない。それが被造物の本分だからである。ゆえに言うておくが、あなたがたに必要なのは付き従って服従することだけで、それ以上のことは求められていない。これが、各自が自分の本分を守り、それぞれの役目を果たすことの意味である。神は自身の働きを行ない、人が神に代わってそうすることを必要としておらず、被造物の働きに神が参加することもない。人は自分自身の本分を尽くするのであり、神の働きに参加することはない。これだけが本当の服従であり、サタンが敗北した証拠である。新しい時代の到来を告げたあと、神自身が自ら人類のあいだで働くために到来することはない。そうして初めて、人は自分の本分を尽くし、被造物としての使命を果たすべく、新しい時代へと正式に足を踏み入れるのである。これが、神が働きを行なう原則であって、誰も背くことはできない。このように働くことだけが賢明で道理にかなっている。神の働きは神自身によってなされる。神の働きを始動させるのは神であり、それを終わらせるのも神である。働きを計画し、経営するのも神であり、それ以上に、働きを結実させるのも神である。聖書に、「わたしは初めであり、終わりである。蒔く者であり、刈る者である」と書かれている通りである。神の経営の働きに関連することはすべて神自

身によって行なわれる。神は六千年にわたる経営計画の支配者で、誰も神の代わりにその働きを行なうことはできず、神の働きを終わらせられる者もない。なぜなら、すべてをその手に掌握しているのは神だからである。世界を創造した神は、全世界が神の光の中に生きるよう導き、全時代を終わらせ、それにより自身の計画をすべて成就させるだろう。

受肉の奥義（２）

ユダヤで働きを行っていた当時、イエスは公然とそうしたが、今、わたしはあなたがたのあいだで秘かに働きを行ない、そして語る。未信者はまったくこれに気づいていない。あなたがたのあいだにおけるわたしの働きは、部外者には閉ざされている。これらの言葉、刑罰、そして裁きはあなたがただけに知らされており、他は誰も知らない。この働きはすべてあなたがたのあいだで実行され、あなたがたにしか明かされていない。未信者の誰もこれを知らない。まだ時が来ていないからである。ここにいるこの人たちは刑罰に耐えた後、完全にされつつあるが、部外者はこのことを何一つ知らない。この働きはあまりにも隠されている。彼らに対し、受肉した神は隠されているが、この流れにある人たちには、神は明らかにされたと言うことができる。神においてはすべてが明らかで、何もかもが明かされており、すべてが解放されているが、これは神を信じる人にだけ当てはまり、その他の者、未信者に関する限り、何も知らされていない。現在、あなたがたのあいだで、中国において行なわれている働きは、彼らが知ることのないよう厳しく封じられている。その働きに気づくようなことがあっても、彼らはそれを断罪し、迫害の対象とするだけで、信じることはないだろう。最も進歩の遅れたこの場所、すなわち赤い大きな竜の国で働くのは決して簡単なことではない。もしこの働きが知られたら、続けるのは不可能だろう。この段階の働きをこの場所で実行するなどとうていできない。もしこの働きが公然と実行されたなら、どうして前進することが許されるだろうか。それはこの働きをもっと大きな危険に晒すことにならないだろうか。この働きが隠されておらず、イエスが見事に病人を癒やし、悪霊を追い出したときのように行なわれたなら、とうの昔に悪魔の「虜にされて」いたのではないだろうか。悪魔は神の存在を我慢できるだろうか。今、わたしが人に説教をし、教えるために会堂へ入って行こうとしたら、とっくの昔に粉々に砕かれていたのではないだろうか。だとしたら、わたしの働きをどうして続けられようか。しるしや不思議が公然と明かされない理由は、隠すためである。だから、わたしの働きは未信者に見られることも、知られることも、発見されることもない。この段階の働きが恵みの時代におけるイエスの働きと同じよう

に行なわれたなら、それは今ほど安定したものではなかっただろう。だから、このようにして密かに働きを行なうのは、あなたがたにとっても、働き全体にとっても有益なのである。地上における神の働きが終わるとき、つまりこの密かな働きが終わるとき、この段階の働きは一気に公にされる。中国に勝利者の集団がいることを、すべての人が知るだろう。肉となった神が中国にいて、その働きが終わったことを知るだろう。その時初めて、人は理解し始める。なぜ中国はいまだ衰退や崩壊の兆しを見せていないのか。実のところ、神が中国でその働きを自ら実行し、人々の集団を完全にして勝利者にしたのである。

肉となった神は、その働きを自ら実行する間、自分に付き従う人にだけ自身を示すのであり、すべての被造物に示すのではない。神は働きの一段階を完成させるためにだけ肉となったのであり、人に自身の姿を見せるためではない。しかし、神の働きは神自身によって実行されなければならない、よって神が肉においてそうすることが必要なのである。この働きが終わると、神は人間の世界から去る。来たるべき働きの妨げにならないよう、人類のあいだに長期間留まることはできないのである。神が大衆に示すのは、神の義なる性質と神のすべての業だけで、二度肉となったときの姿ではない。なぜなら、神の姿は神の性質を通じてのみ示すことができ、受肉した肉体の姿がそれに取って代わることはできないからである。神の肉体の姿は限られた数の人たちにだけ、つまり神が肉において働く際、神に付き従う人たちにだけ示される。これこそ今、働きが秘かに行われている理由である。また同じように、イエスは働きを行なっていたとき、ユダヤ人にだけ自分自身を示し、他の民族に公然と自身を示すことは決してなかったのである。したがって、ひとたび働きを完成させると、イエスはすぐさま人間の世界から離れ、そこに留まらなかった。それ以降、人間に自らを見せたのは、この人の姿をしたイエスではなく、働きを直接行なう聖霊だった。肉となった神の働きが完全に終わると、彼は人間の世界を離れ、肉となったときと同じような働きは二度としない。その後、働きはすべて聖霊によって直接なされる。この期間中、人は彼の肉の姿をほとんど見ることはできない。彼は自身を人にまったく見せず、永遠に隠れたままである。肉となった神の働きの時間は限られており、それは特定の時代、期間、国、そして特定の人々のあいだで行なわれる。その働きは、神が受肉した期間中に行なわれる働きだけを表わしており、その時代に特有のものであり、ある特定の時代における神の霊の働きを表わすものであって、神の働き全体を表わすわけではない。よって、肉となった神の姿がすべての人に示されることはない。大衆に示されるのは、神が二度肉になった際の姿ではなく、むしろ

ろ神の義と神の性質全体である。人に示されるのはただ一つの姿でも、二つの姿を合わせたものでもない。よって、神の行なうべき働きが完成されたあと、神の受肉した肉体がすぐに地上から離れることが必須なのである。と言うのも、肉となった神はすべき働きをするためだけに来るのであり、自身の姿を人々に見せるために来るのではないからである。受肉の意義は神が二度肉となったことですので既に果たされているが、それでもなお、かつて神を一度も見たことのない民族に対して公然と自身を示すことはない。イエスが義の太陽としてユダヤ人に再び自分の姿を見せることは決してなく、オリーブ山に登って万民の前に現われることも決してない。ユダヤ人が見たのは、ユダヤの地にいた時代のイエスの肖像だけである。肉となったイエスの働きは二千年前に終わったからである。イエスがユダヤ人の姿でユダヤの地に戻ることはないし、ましてやユダヤ人の姿で異邦の民族に姿を見せることもない。なぜならば、肉となったイエスの姿はひとりのユダヤ人の姿でしかなく、ヨハネが見た人の子の姿ではないからである。イエスは自身に付き従う人たちに再来を約束したが、異邦の民の全員に対し、ひとりのユダヤ人の姿で自身を示すことは決してない。肉となった神の働きは時代を開くことであると、あなたたがたは知らなければならない。この働きは数年に限られており、神の霊の働きをすべて完了させることはできない。同じように、ユダヤ人としてのイエスの姿が表わせるのは、ユダヤで働く神の姿だけであり、そのときの神は磔刑の働きしかできなかった。肉にあった間、イエスは時代を終わらせる働きも、人類を滅ぼす働きもできなかった。よって、十字架にかけられ働きを終えたイエスは高く昇り、人間の前から永遠に隠れた。それ以降、異邦の民族の忠実な信者たちが目にできたのは、主イエスの顕現ではなく、壁に貼られたイエスの肖像だけだった。この肖像は人が描いたものに過ぎず、神自身が人に見せた姿ではない。二度肉となった際の姿を、神が公然と大衆に示すことはないのである。人類のあいだで神が行なう働きは、神の性質を人々に理解させることである。そのすべてが様々な時代の働きを通して人に示されるのである。それはイエスの顕現を通してというより、むしろ神が知らせた性質や、神が行なった働きを通して達成される。すなわち、神の姿は受肉した姿を通して人に知らされるのではなく、むしろ、姿と形をもつ受肉した神によって行なわれる働きを通して知らされ、彼の働きを通して神の姿が示され、神の性質が知らされる。これが、神が肉において行なおうと望む働きの意義である。

二度にわたる神の受肉の働きがひとたび終わると、神は異邦の民族のあいだに義なる性質を示し始め、大衆が神の姿を見えるようにする。神は自身の性質を示し、これを通

して、様々な種類の人たちの最後を明らかにし、それによって古い時代を完全に終わらせる。肉における神の働きが広範囲に及ぶものでない（ちょうどイエスがユダヤだけで働いたように、そして今日わたしがあなたがたのあいだだけで働いているように）のは、肉における神の働きには範囲と限界があるからである。神は普通の平凡な肉の姿で短期間の働きを行なうだけで、受肉した肉体を用いて永遠の働きをしたり、異邦の民の前に現われる働きをしたりするわけではない。肉における働きは範囲が限られている（ユダヤでしか働かないとか、あなたがたのあいだでしか働かないというように）だけであり、その後、それらの境界内でなされた働きを通して範囲を拡大することができる。もちろん、拡大の働きは霊によって直接行なわれ、もはや神の受肉した肉体の働きではなくなる。肉における働きには境界があり、宇宙の隅々にまで拡張されないからであって、それを達成することはできない。肉における働きを通して、神の霊はそれに続く働きを行なう。したがって、肉においてなされた働きは、ある特定の境界の中で行なわれる始まりの働きなのである。その後、神の霊はこの働きを、さらに拡張された範囲で続ける。

神がこの地上に来て行なう働きは、時代を導き、新たな時代を切り開き、古い時代を終わらせるためだけのものである。神は地上における人間の人生を生き、人の世の喜びと悲しみを自ら体験するため、もしくは自身の手である特定の人を完全にしたり、ある特定の人が成熟するのを自ら見守ったりするために来たのではない。それは神の働きではない。神の働きとはただ新たな時代を始め、古い時代を終わらせることである。つまり、神が一つの時代を自ら始め、別の時代を自ら終わらせ、自身の働きを自ら行なうことでサタンを打ち負かすのである。神が自ら働きを行なうたび、それは戦場に足を踏み入れるようなものである。まず、神は肉において世界を征服し、そしてサタンに勝利する。地上のあらゆる人々が自分たちの歩むべき正しい道を持ち、平和と喜びに満ちた人生を送れるよう、神はすべての栄光を獲得し、二千年の働き全体の幕を開ける。しかし、神は長きにわたって地上で人間と暮らすことはできない。なぜなら、神は神であり、結局人間とは違うからである。神は普通の人の子供を送ることができない。つまり、平凡そのものの人として地上に住むことはできないのである。と言うのも、自身の人間生活を維持するにあたり、神は普通の人の子供の人間性を最小限しかもっていないからである。言い換えれば、神がどのようにして地上で家族を持ち、職業を得て、子どもを育てられるというのか。これは神にとって不名誉なことではないだろうか。神が普通の人間性を授けられているのは、普通の方法で働きを行なうという目的のためだけであって

、普通の人のように家族や職業をもてるようにするためではない。神の普通の理知、普通の知性、普通の食事や肉体の衣服は、神が普通の人間性をもっていることを証明するのに十分である。神が普通の人間性を備えていることを証明するために家族や職業をもつ必要はない。まったく不必要である。神が地上に来るというのは、言葉が肉となるということである。神はただ、人が神の言葉を理解し、それを見ること、つまり、肉によってなされる働きを人が見ることを可能にしているだけである。神の意図は、人々が神の肉体をある特定の方法で取り扱うことではなく、人が最後まで忠実であること、すなわち、神の口から発せられるすべての言葉に従い、神が行なうすべての働きに服従することだけである。神は肉において働きを行なっているに過ぎず、神の肉の偉大さと聖さを人が称揚するよう意図的に求めているのではない。むしろ、神の働きの知恵と、神が行行使するすべての権威を示しているのである。よって、神は並外れた人間性を有しながら、一切の宣言を行なわず、自分がなすべき働きだけに集中しているのである。神が肉となりながら、自身の普通の人間性を公表することも証しすることもせず、その代わりに行なおうと望む働きをただ実行するのはなぜなのか、あなたがたは知らなければならない。したがって、受肉した神からあなたがたが目に見えるのは、神の神性とは何かということだけである。それは、人が真似るべき神の人間性とは何かを、神が宣言することはないからである。人間が人々を導く場合にのみ、その人は自分の人間性を語る。そうすることで、他の人たちをよりよく感銘させたり服従させたりして、指導力を発揮することができる。これとは対照的に、神はその働きだけで（つまり、人には達成不可能な働きで）人を征服する。神は人の尊敬を集めたり、人に自身を崇拜させたりはしない。神が行なうことはすべて、神に対する畏敬の念や、神の深遠さの感覚を人に植え付けることである。神は人を感銘させる必要がない。神に必要なのは、ひとたび神の性質を目の当たりにしたあなたが、神を畏れるようになることだけである。神が行なう働きは神のものである。人間が神に代わって行なえるものではなく、人間が達成できるものでもない。神自身だけがその働きを行ない、新しい時代を始めて、人間を新しい生活へと導けるのである。神が行なう働きは、人間が新しい生活を自分のものにし、新しい時代に入れるようにすることである。それ以外の働きは、正常な人間性をもち、他者から尊敬される人々に委ねられる。ゆえに、恵みの時代、神は受肉していた三十三年間のうち、わずか三年半で二千年分の働きを完了させたのである。自身の働きを行なうために地上へ来るとき、神は常に二千年分の働き、あるいは一つの時代全体の働きをわずか数年間で完了させる。神は遅れることも立ち止まることもない。長年にわたる働きをひたすら凝縮し、わずか数年で完了できるようにする。神が自ら行なう働きは、ひとえに新し

い道を開き、新しい時代を導くことだからである。

受肉の奥義（3）

神は自身の働きを行なうとき、何らかの構築や運動にとりかかるためでなく、自身の職分を全うするためにやって来る。毎回神が肉となるのは、働きの一段階を遂行し、新しい時代を始めるためだけである。今や神の国の時代が到来し、同じく神の国への訓練が始まった。この段階の働きは人間の働きでも、人間にある程度まで働きかけるものでもなく、神の働きの一部分を完了させるためだけのものである。神が行なうのは人間の働きではなく、また地上を去る前に、人間への働きの中である程度の成果を挙げるためでもない。それは自身の職分を全うし、なすべき働きを終えるため、つまり地上における自身の働きを適切に采配し、それによって栄光を得るためである。受肉した神の働きは、聖霊によって用いられる人々の働きとは異なる。地上に来て働きを行なうとき、神は自身の職分を全うすることにしか関心がない。自身の職分に関連していない他のあらゆることに関しては、見て見ぬふりをするほど何の関与もしないのである。神はただ行なうべき働きを実行し、人がすべき働きにはまったく関心をもたない。神の行なう働きは自身が存在する時代と、全うしなければならない職分に関するものだけであり、他のあらゆることは自分の視野にないかのようである。神は人類の一人として生きる上での、より基本的な知識を自身に備えることはせず、社交術を学んだり、人が理解できる他の物事を習得したりすることもない。人が自分のものにすべき物事にはまったく関心を示さず、ただ自身の本分である働きを行なうだけである。だからこそ、人が見るところ、受肉した神にはあまりに多くの点で不足があり、人がもつべき多くのものを無視するほどで、そうした事柄を一切理解していないように思われる。生活に関する一般的知識といった事柄、および自身の行動や他人との付き合いを律する原則などは、神と関係ないように見えるのである。しかし、受肉した神からほんの少しでも異常さを感じ取ることとはとうていできない。つまり神の人間性は、正常な人としての生活と、自身の頭脳による正常な論理的思考を維持しつつ、善悪の識別力を与えているだけなのである。しかし、神には他の何も備わっておらず、それらはすべて人（被造物）だけがもつべきものである。神が肉となるのは自身の職分を全うするためだけである。神の働きは時代全体に向けられており、特定の人や場所に向けられているのではなく、全宇宙に向けられている。これが神の働きの方向性であり、神が働きを行なう原則である。誰もこれを変えすることはできず、人がそれに関わる術もない。神は肉となるたび、その時代の働きを伴うのであって、人間がよりよく神を理解するために、あるいは神についての洞察を得ら

れるようにするために、20年、30年、40年、さらには70年、80年にわたり、人間のそばで暮らそうという意図をもっているのではない。そのような必要はないのである。そのようなことをしても、神の本来の性質について人間がもつ認識を深めることにはまったくならない。かえって人間の観念が増えるだけで、その観念や思想を旧弊なものにしてしまう。したがって、あなたがた全員が理解しなければならないのは、受肉した神の働きとはいったい何かである。「わたしが来たのは、正常な人間の生活を経験するためではない」というわたしの言葉を、あなたがたは理解しているはずではないか。「神が地上に来るのは、正常な人間の生活を送るためではない」という言葉を忘れてしまったのか。あなたがたは神が肉となることの目的を理解せず、「被造物の生活を経験する目的で神が地上に来るなど、どうしてあり得ようか」という言葉の意味を知らないのではないか。神は自身の働きを完成させるためだけに地上へ来るのであり、ゆえに地上での働きは束の間のものである。神が地上に来る目的は、自身の霊がその肉体を養育し、教会を導く優秀な人間にすることではない。神が地上に来るとき、それはことばが肉になるということである。とは言え、人は神の働きを知らないので、さまざまなことを神に押しつける。しかし、あなたがたはみな、神は「肉となったことば」であって、一時的に神の役割を果たすよう、自身の霊に養育された肉体ではないことを認識しなければならない。神自身は養育された産物ではなく、肉となったことばであり、今日、神はあなたがた全員のあいだで正式に自身の働きを行なっている。あなたがたはみな、神の受肉が本当の事実であることを知っており、また認めているが、それを理解しているかのようには振る舞っている。受肉した神の働きから、神の受肉の意義と本質に至るまで、あなたがたはそれらをほんの少しも理解することができず、ただ他人に従って、記憶した言葉をいい加減に暗唱しているだけである。受肉した神は自分の想像通りだと、あなたは信じているのか。

神が肉となるのは、ひとえに時代を導き、新しい働きを始動させるためである。あなたがたはこの点を理解しなければならない。これは人の役割と大きく異なり、この二つを同じように語ることはできない。人は長期にわたって養育され、完全にされる必要があり、それからようやく働きを行なうために用いられることができる。そして必要とされる人間性は、ひととき高次のものである。人間は普通の人間性の理知を維持できなければならないだけでなく、他人との関係における行動を司る数多くの原則や規則をさらに理解し、その上、人の知恵や道徳についてさらに多くを学ばなければならない。これが、人が備えるべきものである。しかし、受肉した神にそれは当てはまらない。と言う

のも、神の働きは人を表わさず、人の働きでもないからである。むしろ、それは神自身の直接的表現であり、神がなすべき働きを直接的に遂行することである（当然、神の働きはしかるべき時に行なわれ、気軽に、あるいは無作為に行なわれるのではなく、神の職分を全うするべき時に始められる）。神は人の生活や人の働きに関与しない。つまり、神の人間性はこれらのどれも備えていない（しかし、それが神の働きに影響することはない）。神はそうすべき時に自身の職分を全うするだけである。自身の地位が何であっても、神はすべき働きをただ進めるだけである。人が神について何を知っていようと、あるいは神についての意見が何であろうと、神の働きはまったく影響されない。例えば、イエスが働きを行なったとき、彼が何者かを知る人はおらず、イエスはただ自身の働きを進めるだけだった。それはどれも、イエスがなすべき働きを行なう際に彼を妨げなかった。よって、当初イエスは自身の身分を告白することも、宣言することもなく、ただ人を従わせた。当然、これは神の謙虚さだけではなく、神が肉において働く方法でもあった。神はこの方法でしか働きを行なうことができなかった。と言うのも、人には裸眼で神を認識する術がなかったからである。また、たとえ神を認識していたとしても、人には神の働きを助けることなどできなかつたろう。さらに、神が肉になったのは、人が神の肉体を知るようになるためではなかった。それは働きを行ない、職分を全うするためである。この理由で、神は自身の身分を公にすることに重点を置かなかったのである。神がなすべき働きをすべて完成させたとき、神の身分と地位はどれも自然と人に対して明らかになった。受肉した神は沈黙を守り、決して何も宣言しない。神は人のことや、人が神に従う中でどのように対処しているかなどは気にも留めず、ひたすら前進して自分の職分を果たし、なすべき働きを実行するだけである。誰も神の働きに立ちあがることはできない。神が働きを終える時になると、それは必ずや終結し、終わりになる。それに反する指示を出せる者はいない。神の働きが完成されてすぐ、神が人のもとを去ってはじめて、まだ完全に明確ではないにしても、神が行なう働きを人は理解するのである。そして、神が最初に働きを行なった際の意図を人が完全に理解するには、長い時間がかかる。言い換えると、受肉した神の時代の働きは二つの部分に分けられる。一つは受肉した神自身の肉体が行なう働きと、受肉した神自身の肉体が語る言葉から成っている。ひとたび神の肉体の職分が完全に成就されると、働きの別の部分は、聖霊に用いられる人によって実行されるのを待つ。それが、人が自分の役目を果たすべき時である。なぜなら、神はすでに道を開いており、人間自身がそれを歩まなければならないからである。つまり、肉となった神は働きの一部を行ない、次いで聖霊と、聖霊によって用いられる人たちがその働きを引き継ぐのである。ゆえに人は、肉となった神が

この段階でおもに行なう働きについて、それに必要なことを知らねばならない。また、肉となった神の意義とは何か、神がなすべき働きは何かを理解しなければならず、人への要求に合わせて神に要求してはならない。ここに人の過ち、観念、またそれ以上に不従順があるのである。

神は人に神の肉体を知らしめたり、受肉した神の肉体と人の肉体の違いを区別させたりする目的で受肉するのではない。また、人の識別力を鍛えるために受肉するのでもない。また、ましてや人が受肉した神の肉体を礼拝し、そこから神が偉大な栄光を受けるようにする目的で受肉するのでもない。それらはどれも、神が肉となる本来の意図ではない。また、神は人を断罪するため、意図的に人を暴くため、あるいは人に困難をもたらすために肉となるのでもない。それらはどれも神の本来の意図ではない。神が肉となるたび、それは避けることのできない働きの形なのである。神がそのように振る舞うのは、さらに偉大な神の働きと経営（救い）のためであり、人が想像するような理由のためではない。神は自身の働きが求める時だけ、必要な時だけ地上に来る。神はただ見回す目的で地上に来るのではなく、自身がすべき働きを実行するために来る。そうでなければ、どうしてこの働きを行なうほどの重荷を背負い、それほど大きな危険を冒すだろうか。神はそうしなければならない時にだけ、また常に独自の意義をもって肉となる。もしそれが人々に神を見させ、彼らの視野を広げるためだけだったなら、神は絶対にそれほど軽々しく人々の間には来ないだろう。神が地上に来るのは、自身の経営とより偉大な働きのためであり、さらに多くの人類を得るためである。神は時代を表わし、サタンを打ち負かすために来るのであり、サタンを敗北させるために肉をまとう。さらに、神は全人類の生活を導くために来る。これらはすべて神の経営に関係しており、全宇宙の働きにも関係している。もし神が、人に神の肉体を知らしめ、人々の目を開かせるためだけに受肉したのなら、なぜ神は各国を旅しないのだろうか。それは極めてたやすいことではないだろうか。しかし、神はそのようなことをせず代わりに自分が暮らし、すべき働きを始めるのに適した場所を選んだ。この肉体だけでも大いに意義がある。それは一時代の全体を表わし、同時に一時代全体の働きを行なう。それは前の時代を終わらせ、新しい時代を始める。これらはすべて神の経営に関する重要な事柄であり、神が地上に来て実行する働きの一段階の意義である。イエスは地上に来たときにいくつかの言葉を語り、いくらかの働きを行なったただけだった。イエスは人のいのちを案じることなく、自身の働きを完了させてすぐに去って行った。今日、わたしが語り、わたしの言葉をあなたがたに伝え終わり、そしてあなたがたがすべて理解した後、あなたがたのいのち

がどのようになろうとも、わたしの働きのこの段階は終了したことになる。そして将来的には、わたしの働きのこの段階を続け、これらの言葉にしたがって地上で働き続ける者がいなければならない。そのとき、人間の働きと構築が始まるのである。しかし現在、神は自身の職分を果たし、自身の働きの一段階を完成させるためだけに働きを行なう。神の働き方は人間のそれと異なる。人間は集会や討論会を好み、儀式を重んじる。一方、神がもっとも嫌うのは、まさに人間の集会や会合である。神は形式ばらずに人間と話し、語る。これが神の働きであり、並外れて解放されたものであって、あなたがたをも自由にする。しかし、わたしが何より嫌うのはあなたがたと集まることであり、あなたがたのように厳しく管理された生活に慣れることはできない。わたしは規則を最も嫌う。規則が人間をがんじがらめにするあまり、人間は動いたり、話したり、歌ったりすることを恐れ、その目でじっとあなたを睨みつけるまでになる。わたしはあなたがたの集まり方や大きな集会を非常に嫌悪する。このような方法であなたがたと集うのはとにかく拒否する。なぜなら、このような生き方をすると人は拘束されたように感じ、あなたがたは儀式や規則を過剰に守っているからである。あなたがたに主導権をもたせると、すべての人を規則の領域へと導いてしまい、彼らはあなたがたの指導のもとで規則を捨て去る術をもたないだろう。その代わり、宗教的な雰囲気ますます濃くなり、人間が行なう実践の数はさらに増えていくだろう。集まるたびに疲れることなくひたすら説教や話を続ける者もいれば、十日以上も休まずに説教し続けることができる者もいる。これらはみな、大きな集会であり人間の会合だと考えられる。これらは飲み食いや楽しみ、霊が自由にされた生活とは無関係である。これらはどれも会合である。あなたがたの同労者の会合や大小の集会はどれも、わたしにとって忌まわしいものであり、一切関心をもったことがない。わたしが働きを行なう原則は次のようなものである。つまり、集会で説教するつもりはないし、大規模な大衆集会で何かを宣言したくもないし、ましてやあなたがた全員を数日間にわたる特別会議に呼び集めたいとも思わない。あなたがた全員が集まりの際に行儀良く座っているのを、わたしは好ましいと思わない。あなたがたがある特定の儀式の枠組みの中で生きているのを、わたしは見るのが嫌である。さらに、わたしはあなたがたのそのような儀式に参加するのを拒否する。あなたがたがそのようにすればするほど、わたしはそれを忌み嫌う。あなたがたの儀式や規則にわたしはほんの少しも関心がない。あなたがたがどれほど立派にそれらを行なおうとも、わたしにとってはどれもおぞましいだけである。これは、あなたがたの采配が不適切であるとか、あなたがたが下劣過ぎるというのではない。わたしはあなたがたの生き方を嫌うのであって、そしてそれ以上に、慣れることができないのである。あなたがたはわたし

が行なおうと望む働きをまったく理解していない。当時、自身の働きを行なったとき、イエスはある場所で説教を終えると、弟子たちを率いてその町を去り、彼らが理解すべき道について語った。イエスはしばしばこのように働きを行なったのである。イエスが大衆のあいだで行なった働きは、数も少なく稀だった。あなたがたが神に求めることによると、肉となった神は正常な人間の生活を送るべきではないのである。座っていようと、立っていようと、歩いていようと、神は自身の働きを行なわなければならない、語らなければならない。常に働かなければならず、決して「作動」をやめることはできない。さもなければ、神は自身の本分を尽くしていないことになる。このような人間の要求は、人間の理知にふさわしいものだろうか。あなたがたの人格はどこにあるのか。あなたがたは要求しすぎではないのか。わたしが働きを行なうところをあなたに調べられるべきだろうか。職分を全うするところをあなたに監督される必要があるだろうか。自分がどのような働きを行なうべきか、またいつ行なうべきかをわたしは熟知しており、他人に干渉される必要はない。おそらくあなたには、わたしが大したことをしてこなかったように見えるかもしれないが、その時までにはわたしの働きは終わるのである。四福音書におけるイエスの言葉を例に取ろう。これらの言葉も限られていたのではないか。当時、イエスが会堂に入って説教をしたとき、長くても数分以内には終えていた。話し終えると、イエスは弟子たちを連れて舟に乗り、何の説明もせずに出発した。せいぜい、会堂にいた人々が互いに議論するだけで、イエスには関係のないことだった。神はなすべき働きだけを行ない、それ以上のことは何もしない。現代では、多くの人がわたしにもっと話したり語ったりすることを要求し、少なくとも一日に数時間はそうするよう求める。あなたがたの見るところ、神は語らない限り神でなくなり、語るものだけが神である。あなたがたは誰も目が見えていない。あなたがたはみな野蛮人であり、理知など持ち合わせない無知どもだ。あなたがたは観念をもちすぎている。あなたがたの要求は行き過ぎである。あなたがたは冷酷である。あなたがたは神が何であるかまったく理解していない。あなたがたは、語る者、演説する者はすべて神だと信じており、また言葉を与えてくれる者を自分の父だと信じている。教えてほしい。「整った」顔立ちと「非凡な」外見をしたあなたがたはみな、ほんの少しでも理知というものをもっているのか。天日を知っているのか。あなたがたは、一人ひとりが墮落した強欲な役人のようである。そうであれば、どうして分別がつくのか。どうして正誤の区別ができるのか。わたしはあなたがたに多くのものを授けてきたが、あなたがたのうち何名がそれに価値を置いたのか。誰がそれを完全に自分のものになっているのか。あなたがたは、自分たちが今日歩んでいる道を誰が切り開いたのかを知らない。そのため、わたしに対して要求を、

このような馬鹿げた不合理な要求を続けている。あなたがたは恥ずかしさのあまり赤面していないのか。わたしはまだ十分話していないのか。十分行なっていないのか。あなたがたのうち、誰がわたしの言葉を宝として真に大切にできるのか。あなたがたは、わたしの前ではわたしをほめそやすが、背後では嘘をついて騙す。あなたがたの行ないはあまりに卑しく、わたしを不快にさせる。わたしが語り、働きを行なうことをあなたがたは要求するが、その理由は自分の目を楽しませ、視野を広げるために他ならず、あなたがたの生活を変えるためではない。わたしはあなたがたに極めて多くのことを語ってきた。あなたがたの生活はとうの昔に変わっているはずだ。それなのに、今なお以前の状況に逆戻りし続けているのはなぜなのか。もしや、わたしの言葉が奪われて、あなたがたが受け取っていないということなのか。実のところ、わたしはあなたがたのような墮落した人間に対してこれ以上何も言いたくない。そのようなことは無駄だろう。これほど空しい働きなどしたくない。あなたがたはいのちを得ることではなく、自分の目を楽しませたり視野を広げたりすることだけを望んでいる。あなたがたはみな、自分を欺いている。わたしがあなたがたに面と向かって話したことのうち、どれほど実践したのか教えてもらいたい。あなたがたは計略を巡らせて他人を騙しているだけである。あなたがたのうち、傍観者として喜んで見学している者を、わたしは忌み嫌う。あなたがたの好奇心は非常におぞましい。ここにいるのが真の道を求めるためでも、真理を渴望しているためでもないなら、あなたがたはわたしの憎悪の対象である。わたしは知っているが、あなたがたがわたしの言葉に耳を傾けるのは、ひとえに好奇心を満たすため、あるいはあれやこれやの貪欲な欲望を満たすためである。真理の存在を求める考えや、いのちに入る正しい軌道を探ろうという考えなど、あなたがたは一切持ち合わせていない。このような要求はあなたがたのあいだに全然存在していない。あなたがたは神のことを、研究して賞賛するための玩具とみなしているに過ぎない。いのちを求めるあなたがたの情熱はあまりに少なく、それでいて好奇心に満ちた欲望は多い。このような人々にいのちの道を説明するのは、空気に話しかけるのと同じである。話さないほうがましである。ここで言わせてもらおう。あなたがたが自分の心の隙間を満たすことしか望んでいないなら、わたしのもとへ来ないほうがよい。それよりは、いのちを得ることに重点を置くべきである。自分自身をもてあそぶのはやめなさい。自分の好奇心をいのちの追求の基盤にしたり、自分に語りかけてほしいとわたしに頼む言い訳にしたりするべきではない。これらはすべて計略であり、あなたがたはそれに長けている。もう一度、あなたがたに尋ねる。わたしがあなたに入っていくよう求めることのうち、どの程度実際に入ったのか。わたしがあなたに話したことをすべて理解したのか。わたしが話したすべてのこ

とを、あなたはなんとか実践してきたのか。

あらゆる時代の働きは神自身によって開始されるが、神の働き方が何であれ、神は運動を始めたり、あなたがたのために特別な会議を催したり、何らかの組織を設立するために来るのではないことを、あなたは知るべきである。神はなすべき働きを行なうために来るのである。神の働きが誰かの制限を受けることはない。神は望み通りに自身の働きを行ない、人が何を思っても、どんなことを知っていても、その働きを実行することにしか関心がない。世界の創造から現在に至るまで、すでに三段階の働きが存在した。ヤーウェからイエスに至るまで、律法の時代から恵みの時代に至るまで、神は人のために特別会議を召集したり、全人類を一堂に集めて世界規模の特別な作業会議を開催したりして、それにより自身の働きの領域を広げようとしたことはない。神は適切な時に適切な場所で、一つの時代全体の最初の働きを行なうだけで、それを通して時代を始め、人間の生活の送り方を導く。特別会議は人の集会である。休日を祝うために人々を集めるのは人の働きである。神が休日を祝うことはなく、それ以上に、休日を強く嫌う。神は特別会議を召集せず、またそれ以上に、特別会議を忌み嫌う。受肉した神が行なう働きとはいったい何であるか、あなたはいま理解すべきである。

受肉の奥義（４）

あなたがたは聖書の内情と形成について知らなければならない。神の新しい働きをまだ受け入れていない人は、この知識をもっていない。彼らは知らないのである。これらの本質的な事柄についてわかりやすく話せば、彼らは聖書についてあなたにあれこれ言うことがなくなるだろう。彼らは、この記述は成就したか、あの記述は成就したかなどと、預言されたことを絶えず念入りに掘り下げている。彼らは聖書に従って福音を受け入れ、聖書に従って福音を説く。神に対する彼らの信仰は聖書の言葉をよりどころにしているので、聖書がなければ神を信じようとしなない。このように、聖書を細かく吟味するのが彼らの生き方である。彼らが再び聖書を掘り下げ、あなたに説明を要求してきたら、次のように言いなさい。「まず、聖句を一つひとつ検証するのはやめよう。代わりに、聖霊がいかに働くのかを見よう。わたしたちが歩む道を取り上げ、それを真理と比較し、この道が本当に聖霊の働きと一致しているかどうかを見極め、聖霊の働きをもって、そのような道が正しいかどうかを確かめよう。あれこれの記述が成就したかどうかについて、わたしたち人間は首を突っ込むべきではない。それよりは、聖霊の働きや、神が行なってきた最新の働きについて話すほうがよい」。聖書の預言は、預言者が当時

伝えた神の言葉と、神に用いられて靈感を得た人々が書いた言葉であり、これらの言葉を説明できるのは神自身だけ、これらの言葉の意味を知らしめることができるのは聖霊だけであって、神自身だけが七つの封印を解き、巻物を開くことができる。あなたはこう言いなさい。「あなたは神ではないし、わたしも違う。では、誰があえて神の言葉を軽々しく説明しようというのか。あなたはあえてこれらの言葉を説明しようというのか。エレミア、ヨハネ、エリヤといった預言者たちが来たとしても、彼らは小羊ではないのだから、あえて聖書の言葉を説明しようなどとはしないだろう。小羊だけが七つの封印を解き、巻物を開けることができるのであり、他の誰も神の言葉を説明することはできない。わたしは神の御名を奪おうとは思わないし、ましてや神の言葉を説明しようなどとは思わない。わたしにできるのは、神に従う者でいることだけだ。あなたは神なのか。神の被造物の中に、あえて巻物を開けたり、それらの言葉を説明したりする者などいない。だからわたしもあえて説明しない。あなたも説明しようなどと試みないほうがよい。誰もそれらを説明しようとするべきではない。聖霊の働きについて話し合おう。これは人間にもできることだ。わたしはヤーウェとイエスの働きについて少々知っているが、そのような働きを直接経験したわけではないので、限られた範囲でしか語れない。イザヤやイエスが当時語った言葉の意味について、わたしは一切説明しない。わたしは聖書を研究しておらず、むしろ神の現在の働きに従っている。実際、あなたは聖書を小さな巻物とみなしているが、それは小羊だけが開けられるものではないのか。小羊以外に、他の誰がそれを開けられるのか。あなたは小羊ではないし、ましてやわたしも、自分は神だなどと主張はしない。だから、聖書を分析したり細かく調べたりするのはやめよう。それよりは聖霊によってなされる働き、つまり神自身によってなされる現在の働きについて話し合うほうがはるかによい。神が働きを行なう原則は何か、神の働きの本質は何かを確かめ、それらを使って、わたしたちが今日歩んでいる道が正しいかどうかを確認し、このようにしてそれを確信しよう」。福音を説きたいのであれば、特に宗教界の人々に対して説きたいのであれば、聖書を理解し、その内情を熟知しなければならない。そうしなければ、あなたに福音を説く術はない。ひとたび全体像を熟知し、聖書の死んだ言葉を細かく詮索するのを止め、神の働きといのちの真理だけを語るようになれば、真の心で探求している人々を得ることができるだろう。

ヤーウェの働き、ヤーウェが定めた律法、ヤーウェが人間の生活を導く原則、律法の時代にヤーウェが行なった働きの内容、ヤーウェが律法を定めた意義、ヤーウェの働きがもつ恵みの時代にとっての意義、そしてこの最終段階において神が行なうこと。これ

らが、あなたがたが理解しなければならない事柄である。第一段階は律法の時代の働き、第二段階は恵みの時代の働き、第三段階は終わりの日の働きである。あなたがたは、神による働きのこれらの段階を理解しなければならない。初めから終わりまで、あわせて三段階ある。働きの各段階の本質は何か。六千年にわたる経営（救いの）計画において何段階が実行されるのか。各段階はいかにして実行されるのか、そして各段階が特定の方法で実行されるのはなぜか。これらはどれも極めて重要な問題である。各時代の働きには象徴的な価値がある。ヤーウェはどのような働きを行なったのか。なぜその特定の方法で行なったのか。なぜヤーウェと呼ばれたのか。また、イエスは恵みの時代にどのような働きを行なったのか。いかに行なったのか。働きの各段階とそれぞれの時代によって、神の性質のどの側面が表わされているのか。神の性質のどの側面が律法の時代に表わされたのか。恵みの時代においてはどうか。さらに最後の時代ではどうか。これらの本質的な問題を、あなたがたは理解しなければならない。神の性質のすべては六千年にわたる経営計画を通じて表わされてきた。それは恵みの時代、もしくは律法の時代においてのみ表わされたのではなく、ましてや終わりの日のこの時期にだけ表わされるのでもない。終わりの日になされる働きは、裁き、怒り、刑罰を表わす。終わりの日になされる働きが、律法の時代の働きや、恵みの時代の働きに取って代わることはできない。しかし、これら三段階は互いに繋がって一つの実体を成し、いずれも一つの神の働きである。当然、この働きの遂行は別々の時代に分割されている。終わりの日になされる働きはすべてに終わりをもたらし、律法の時代になされた働きは始まりの働きであり、恵みの時代になされた働きは贖いの働きだった。この六千年にわたる経営計画全体の働きのビジョンについては、誰も識見や理解を得ることはできない。それらのビジョンは神秘的なままである。終わりの日においては、神の国の時代を始めるべく言葉の働きだけがなされるものの、それはすべての時代を表わすものではない。終わりの日は終わりの日以上のものである。神の国の時代以上のものである。また恵みの時代や律法の時代を表わすものでもない。終わりの日には六千年にわたる経営計画のすべての働きがあなたがたに表わされる、というだけのことである。それは奥義のヴェールを取り除くことである。このような奥義について、人がそのヴェールを取り除くことはできない。人が聖書についていかに深く理解していても、その理解が言葉以上のものになることはない。人は聖書の本質を理解していないからである。人は聖書を読むとき、何らかの真理を理解したり、いくつかの言葉を説明したり、有名な聖句や章を細かく調べ上げたりするかもしれないが、それらの言葉に含まれている意味を取り出すことはできないだろう。なぜなら、人が見ているのはどれも死んだ言葉であり、ヤーウェやイエスの働き

の場面ではなく、人にはそのような働きの奥義を解明する術がないからである。よって、六千年にわたる経営計画の奥義は最も偉大な奥義であり、最も深く隠されていて、人にはまったく理解できないものである。神自身が人に説明して明かさない限り、誰も神の旨を直接把握することはできない。さもないと、それらは永遠に人間にとって謎のまま、封印された奥義であり続けるだろう。宗教界の人たちはさておき、あなたがたも今日まだ伝えられていなかったなら、把握することはできなかつただろう。この六千年の働きは、預言者たちによるすべての預言よりも神秘的に満ちている。これは天地創造から現在に至る中で最大の奥義であり、歴代の預言者の誰も理解できたことがない。なぜなら、この奥義は最後の時代においてのみ解明され、それまでに明らかにされたことがないからである。あなたがたがこの奥義を把握し、完全に受け取ることができるならば、宗教の人々も残らずこの奥義によって征服されるだろう。この奥義だけが最も偉大なビジョンであり、人間はそれを理解したいと強く渴望するが、それはまた人間にとって極めて不明瞭なものである。恵みの時代、イエスの行なった働きは何か、ヤーウェの行なった働きは何かをあなたがたは知らなかった。人々は、ヤーウェが律法を定めたのはなぜか、律法を守るよう大衆に命じたのはなぜか、神殿を建てなければならないのはなぜかを理解せず、ましてやイスラエル人がエジプトから荒れ野に連れ出され、その後カナンへと導かれたのはなぜかも理解しなかった。この日に至るまで、これらのことが明らかにされることはなかったのである。

終わりの日における働きは三段階のうち最後の段階である。それはもう一つの新しい時代の働きであり、経営の働き全体を表わすものではない。六千年にわたる経営計画は三段階の働きに分けられる。どの一段階も、それだけで三つの時代の働きを表わすことはできず、全体の一部しか表わせない。ヤーウェの名が神の性質全体を表わすことはできないのである。ヤーウェが律法の時代に働きを行なったという事実は、神が律法の下でしか神でいられないことを証明しているのではない。ヤーウェは人間のために律法を定め、戒めを言い渡し、神殿と祭壇を築くように求めた。ヤーウェが行なった働きは律法の時代だけを表わす。ヤーウェが行なったこの働きは、神は人間に律法を守るよう求める神でしかないとか、神殿にいる神だとか、祭壇の前にいる神だなどと証明するものではない。そのように言うのは誤りだろう。律法の下でなされた働きは一つの時代しか表わせない。よって、もしも神が律法の時代の働きだけを行なったのであれば、人は神を次の定義の中に閉じ込めるだろう。つまり、「神は神殿の中の神である。神に仕えるには、祭司の衣をまとして神殿に入らなければならない」という定義である。恵みの時

代の働きが実行されず、律法の時代が現在まで続いていたら、神が慈悲と愛にも溢れていたことを人間は知らなかっただろう。律法の時代の働きが行なわれず、恵みの時代の働きしかなされなかったなら、神は人を贖い、人の罪を赦すことしかできないのだと、すべての人が認識しただろう。神は聖く汚れのない存在であり、人間のために自分を犠牲にし、十字架にかけられることができるとしか、人間は認識しなかったはずである。人はそれらのことしか知らず、他の何も理解しなかっただろう。したがって、それぞれの時代は神の性質の一部だけを表わすのである。律法の時代、恵みの時代、そして今の時代のそれぞれにおいて、神の性質のどの側面が表わされているかに関して言えば、これら三つの時代を一つの全体として統合して初めて、神の性質の全体を表わすことができる。これら三段階をすべて知って初めて、人はそれを完全に理解することができるのである。この三段階のどれも省略することはできない。これら三段階の働きを知るようになると、神の性質全体を見ることができる。神が律法の時代における働きを完成させた事実は、神が律法の下で神でしかないことを証明するものではなく、また神が贖いの働きを完成させた事実は、神が永遠に人類を贖うことを意味するものではない。これらはすべて人間によって引き出された結論である。恵みの時代はすでに終わりを迎えたが、神は十字架のものでしかなく、十字架だけが神の救いを表わすと言うことはできない。そのように言うのであれば、神を定義していることになる。現在の段階において、神はおもに言葉の働きを行なっているが、神は人に対して憐れみ深かったことなどなく、神がもたらしたのは刑罰と裁きだけだなどと言うことはできない。終わりの日の働きはヤーウェの働きとイエスの働き、そして人には理解されていないすべての奥義を明らかにする。これは人類の終着点と終わりを示し、人類のあいだにおける救いの働きを残らず終わらせるためである。終わりの日におけるこの段階の働きはすべてを終わらせる。人に理解されていなかったすべての奥義が解明され、人がその奥義を徹底的に解き明かし、心の中で完全にはっきり理解できるようにしなければならない。その時初めて、人類を種類に応じて分類することができるのである。六千年にわたる経営計画が完成されて初めて、人は神の性質全体を理解できるようになる。なぜなら、神の経営はその時すでに終わっているからである。いま、最後の時代における神の働きをあなたがたはすでに経験したわけだが、神の性質とは何か。神は言葉を語る神に過ぎないと、あなたはあえて言うつもりか。こんな結論を出そうなどとは思わないはずだ。中には、神は奥義を解明する神であるとか、神は小羊であり、七つの封印を解くものであると言う人々がいる。とは言え、あえてこのような結論を出す者など一人もいない。また、神は受肉した肉体だと言う人がいるかもしれないが、これもまだ正しくないだろう。さらに、受肉し

た神は言葉を語るだけで、しるしや不思議は行なわないという人がいる。まさか、あなたはあえてこのようには言わないだろう。なぜなら、イエスは肉となってしるしや不思議を行なったからであり、ゆえにあなたは軽々しく神を定義することなどしないはずだ。六千年にわたる経営計画を通じて行なわれたすべての働きは、今やっと終わりに近づいてきた。その働きのすべてが人に明かされ、人類のあいだで実行されて初めて、人は神の性質、そして神が所有するものと神そのものを残らず知る。この段階の働きが完全に終わったとき、人に理解されていなかったすべての奥義が明らかにされ、これまで理解されなかったすべての真理が明確になり、人類は未来の道と終着点を告げられているだろう。これこそが、現段階でなされるべき働きの全体である。人間が今日歩く道は十字架の道であり、苦難の道でもあるが、人間が実践すること、および今日飲み食いして享受することは、律法の下にいる人間、また恵みの時代の人間に降りかかったこととは大きく異なる。今日人に求められることは、過去に求められたこととは異なり、律法の時代に求められたこととはさらに異なる。さて、神がイスラエルで働きを行なっていたとき、律法の下で人に求められたことは何だったか。それは、人は安息日とヤーウエの律法を守らなければならない、ということだけだった。安息日には誰も働くことが許されず、ヤーウエの律法を犯すことも許されなかった。しかし、今はそうではない。安息日でも、人はいつものように働き、集まり、祈り、何の制限も課せられていない。恵みの時代の人たちはバプテスマを受けなければならず、それに加えて断食をし、パンを裂き、ぶどう酒を飲み、頭を覆い、他人の足を洗うことを求められていた。そのような規律は今や廃止されたが、人はもっと大きなことを要求されている。と言うのも、神の働きがますます深まり、人の入りがさらに高いところに到達するからである。かつてイエスは按手して祈ったが、すべてのことが述べられた現在、按手に何の意味があるのか。言葉だけで成果を挙げることができるのだ。かつてイエスが人の上に手を置いたとき、それは人を祝福し、病を癒すためだった。当時、聖霊はそのようにして働きを行なったが、今は違う。現在、聖霊は働きを行なって成果を上げるために言葉を用いる。その言葉はあなたがたに明らかにされたのであり、あなたがたは言われたとおりにそれを実践しなければならない。神の言葉は神の旨であり、神が行なおうと望む働きである。あなたは神の言葉を通じて、神の旨と、神があなたに達成するよう求めていることを理解できる。そして、あなたは按手を必要とせず、ただ神の言葉を直接実践できる。中には「わたしの上に手を置いてください。あなたの祝福を受け取り、あなたにあずかることができるように、わたしの上に手を置いてください」と言う人もいるだろう。これらはどれも、現在は廃れて時代遅れになった過去の慣習である。聖霊は時代に応じて働きを行

なうのであり、無作為に、あるいは一定の規則に応じて働くのではない。時代が変わり、新しい時代はそれとともに必ずや新しい働きをもたらす。これはどの段階の働きにも言えることであり、ゆえに神の働きは決して繰り返されない。恵みの時代、イエスは病を癒したり、悪霊を追い出したり、人の上に手を置いて祈ったり、祝福したりするといった働きを数多く行なった。しかし、現在再びそのようなことをするのは無意味だろう。聖霊は当時そのように働きを行なった。それは恵みの時代だったからであり、人が享受する恵みは十分にあった。人はいかなる支払いも求められず、信仰がある限り恵みを受け取ることができた。誰もが非常に寛大に扱われた。今、時代は変わり、神の働きはさらに前進した。そして刑罰と裁きを通じ、人の反抗的態度や、人の中の汚れたものは取り除かれる。当時は贖いの段階だったので、神はそのように働きを行ない、人が享受するのに十分な恵みを示して、人が罪から贖われ、また恵みによって罪が赦されるようにすることを求められたのである。現在の段階は、刑罰、裁き、言葉の打撃、そして言葉による懲らしめと暴露を通じて人の中の不義を暴き、それによって人が後に救われるためのものである。これは贖いよりもさらに深い働きである。恵みの時代の恵みは、人が享受するのに十分だった。この恵みをすでに経験した今、人がそれを享受することはもはやない。そのような働きは時代遅れであり、もはやなされることはない。今、人は言葉の裁きを通じて救われる。裁かれ、罰せられ、精錬されたあと、人の性質は変わる。これはすべて、わたしが語った言葉のゆえではないのか。各段階の働きは、人類全体の進歩と時代に合わせて行なわれる。すべての働きに意義があり、どれも最後の救いのためになされる。それは、人類が将来良い終着点を得られるようにするためであり、人類が最終的に種類に応じて分類されるようにするためである。

終わりの日の働きは言葉を語ることである。言葉により、大きな変化が人の中で生じ得る。現在、それらの言葉を受け入れた人たちに生じる変化は、恵みの時代にしるしや不思議を受け入れた人たちに生じた変化よりもはるかに大きい。と言うのも、恵みの時代において、悪霊は按手と祈りによって人から追い出されたが、人の中の墮落した性質が依然残っていたからである。人は病を癒され、罪を赦されたが、人の中にある墮落したサタンの性質がいかに清められるかについて言えば、その働きはまだなされていなかったのである。人は信仰のゆえに救われ、罪を赦されただけで、人の罪深い本性は根絶されず、依然としてその内面に残っていた。人の罪は神の受肉を通じて赦されたが、それはその人の中にもはや罪がないという意味ではない。人の罪は、罪の捧げ物を通じて赦されることができたものの、どうすれば人がこれ以上罪を犯さないようになり、その

罪深い本性が完全に根絶され、変化するかということについて言えば、人にはその問題を解決する術がないのである。人の罪は神による磔刑の働きゆえに赦されたが、人は以前の墮落したサタンの性質の中で生き続けた。そのため、人は墮落したサタンの性質から完全に救われなければならない。そうすることで、その人の罪深い本性が完全に根絶され、二度と芽生えなくなり、かくして人の性質が変わるのである。そのためにも、人はいのちの成長の筋道、いのちの道、そして性質を変える道を把握しなければならない。さらに、人はこの道に沿って行動することが求められる。その結果、人の性質は次第に変わり、その人は光の輝きの下で生き、何事も神の旨に沿って行ない、墮落したサタンの性質を捨て去り、サタンの闇の影響から自由になることができ、それにより罪から完全に抜け出せるのである。このとき初めて人は完全なる救いを受けることになる。イエスが働きを行っていたとき、イエスに関する人の認識はいまだ漠然として不明瞭だった。人はずっとイエスをダビデの子と信じ、イエスは偉大な預言者で、人の罪を贖う慈悲深い主であると宣言した。信仰のおかげで、イエスの衣の端を触っただけで癒された人もいたし、盲人たちは見えるようになり、死人さえ生き返った。しかし、人は墮落したサタンの性質が自分自身に深く根づいているのを見出すことができず、それを捨て去る方法も知らなかった。人は肉の平安や幸福、一人の信仰による家族全体の祝福、そして病人の癒しなど、多くの恵みを受けた。残りは人の善行や外見上の信心深さだった。そのようなものを基に生きることができるなら、その人はまずまずの信者だと思われた。そのような信者だけが死後、天国に入ることができるとされたのだが、それは彼らが救われたという意味だった。しかし、このような人たちはその生涯において、いのちの道をまったく理解していなかった。ひたすら罪を犯しては告白することを繰り返すばかりで、自身の性質を変える道はもたなかったのである。これが恵みの時代における人間の状態だった。人は完全な救いを得たのか。いや、得てはいない。したがって、その段階の働きが終わったあとも、依然として裁きと刑罰の働きが残っているのである。この段階は言葉によって人を清めるものであり、それによって人に従う道を与える。悪霊を追い出すことを続けるなら、この段階は有益でも意義深くもないだろう。と言うのも、人の罪深い本性が根絶されることはないだろうし、人は罪の赦しで行き詰まるはずだからである。罪の捧げ物を通じ、人は罪を赦されてきた。なぜなら、十字架の働きがすでに終わり、神はサタンに勝利したからである。しかし、人の墮落した性質は依然として人の中に残っており、人は依然として罪を犯し、神に抵抗することができ、よって神はまだ人類を得ていない。そのため、神はこの段階の働きにおいて、言葉を用いて人の墮落した性質を暴き、人に正しい道に沿って実践させるのである。この段階は前の段

階よりもさらに有意義であり、いっそう有益である。と言うのも、今、人に直接いのちを施し、人の性質を完全に一新させられるのは言葉だからである。それははるかに徹底的な働きの段階である。ゆえに、終わりの日における受肉は神の受肉の意義を完成させ、人を救う神の経営計画を完全に終わらせたのである。

神による人の救いは、霊の手段や身分を直接用いて行なわれるのではない。と言うのも、神の霊は人が触れることも見ることもできないものであり、人が近づくこともできないからである。もしも神が霊のやり方で直接人を救おうとするなら、人は神の救いを受け取ることができないだろう。そして、もしも神が被造物である人の容姿をまとうなら、人はこの救いを受け取ることができないだろう。なぜなら、ヤーウェの雲に近づける者が誰もいなかったように、人には神に近づく術がないからである。被造物たる人間になることでのみ、つまり自身がなろうとしている肉の身体にその言葉を入れることでのみ、神は自身に付き従うすべての人に直接言葉を働かせることができる。その時初めて、人は神の言葉を自ら見聞きし、そしてさらに、神の言葉を自分のものにすることができ、それによって完全に救われるようになるのである。もしも神が肉とならなければ、血と肉からできた人は誰もそうした偉大な救いを受けることができないし、誰一人救われることもないだろう。神の霊が人類のあいだで直接働いたなら、人類は残らず打ち倒されてしまうか、神と接する術がないまま、完全にサタンの虜とされるだろう。最初の受肉は人を罪から贖うもの、つまりイエスの肉体によって人を罪から贖うものだった。言い換えると、イエスは十字架から人を救ったが、墮落したサタンの性質が依然として人の中に残っていたのである。二度目の受肉はもはや罪の捧げ物として仕えるためのものでなく、罪から贖われた人たちを完全に救うものである。そうすることで、赦された人は罪から解放され、完全に清められる。そして変化した性質を獲得することでサタンの闇の影響から自由になり、神の玉座の前に戻るのである。この方法でしか、人は完全に清められない。律法の時代が終わりを迎えて恵みの時代に入った際、神は救いの働きを始めた。それは、神が人間の不従順を裁いて罰し、人類を完全に清める終わりの日まで続く。その時初めて、神は救いの働きを完結させ、安息に入る。よって、三段階の働きのうち、神が受肉して自ら人のあいだで働きを行なったのは二回だけである。それは、働きの三段階のうち一段階だけが人の生活を導く働きであり、他の二段階は救いの働きだからである。神は肉となることでのみ、人と共に生き、世の苦しみを経験し、普通の肉体で生きることができるのである。神はそうすることでのみ、人が被造物として必要とする実践の道を施すことができる。人が神から完全な救いを受けるのは、神

の受肉を通じてであり、祈りへの回答として天から直接受けるのではない。なぜなら、人は肉の存在であり、神の霊を見ることができず、ましてや神の霊に近づく術などないからである。人が接触できるのは神の受肉した肉体だけであり、この手段を通じてでなければ、人はすべての道と真理を理解し、完全なる救いを受けることができない。第二の受肉は人の罪を一掃し、人を完全に清めるのに十分である。よって、第二の受肉とともに、肉における神の働き全体が終わりを迎え、神の受肉の意義が完成される。その後、肉における神の働きは完全に終了する。第二の受肉の後、神は自身の働きのために三度肉となることはない。神の経営全体がすでに終わっているからである。終わりの日の受肉は、神の選ばれた人を完全に自身のものとし、終わりの日の人類は残らず種類に応じて分類されている。神はもはや救いの働きを行わず、またいかなる働きであっても、それを実行すべく肉に戻ることもない。終わりの日の働きにおいて、言葉はしるしや不思議の顕示よりも力強く、言葉の権威はしるしや不思議の権威を超越する。言葉は人の心に深く埋もれた堕落した性質を残らず暴く。あなたには自分でそれらを認識する術がない。それらが言葉を通じて暴かれるとき、あなたは当然それを見つけるが、否定することはできず、完全に納得するだろう。これが言葉の権威ではないのか。これが現在の言葉の働きによって得られる成果である。したがって、病を癒したり悪霊を追い出したりすることで、人が罪から完全に救われることはなく、またしるしや不思議を示すことで人がすっかり完全にされることもないのである。病を癒したり悪霊を追い出したりする権威は人に恵みを与えるだけで、人の肉は依然としてサタンに属し、堕落したサタンの性質は依然として人の中に残っている。言い換えると、まだ清められていないものは依然として罪と汚れに属しているのである。人は言葉によって清められて初めて、神のものとされ、聖いものとなる。悪霊が人から追い出されたとき、あるいは人が贖われたとき、それはサタンの手から人をもぎ取り、神のもとに戻したという意味でしかなかった。神によって清められておらず、変えられてもいないなら、人は堕落したままである。人の中には汚れ、敵対心、そして反抗心が依然として存在する。人は神による贖いを通じて神のもとに立ち返っただけで、神についての認識が一切なく、依然として神に抵抗し、神を裏切ることができる。人が贖われる前、サタンの害毒の多くがすでに人の中に植え付けられていた。そしてサタンによって何千年も堕落させられてきた人間には、神に抵抗する本性がすでに定着していた。だからこそ、人が贖われたとき、それは人が高い代価で買い取られるという贖い以上のものではなく、人の中の害毒に満ちた本性は取り除かれていなかった。ここまで汚れた人は、神に仕えるのにふさわしくなる前に変化を経なければならない。この裁きと刑罰の働きによって、人は自分の中の汚れて墮

落した本質を完全に知るようになる。そして完全に変わり、清くなることができる。この方法でしか、人は神の玉座の前へと戻るのにふさわしくなることができない。今日なされるすべての働きは、人が清められて変わるためのものである。言葉による裁きと刑罰、そして精錬を通じ、人は自分の墮落を一掃して清められることが可能になる。この段階の働きを救いの働きと考えるよりは、むしろ清めの働きと言ったほうが適切だろう。事実、この段階は救いの働きの第二段階であるとともに征服の段階でもある。人は言葉による裁きと刑罰を通じて神のものとされる。また言葉を用いて精錬し、裁き、露わにすることで、人の心にある汚れ、観念、動機、そして個人的な願望がすべて完全に暴かれる。人は贖われ、罪を赦されたが、それによって見なし得るのは、神は人の過ちを記憶せず、その過ちに応じて人を取り扱わないということだけである。しかし、肉体において生きる人間が罪から解放されていないと、人は罪を犯し続けることしかできず、墮落したサタンの性質をどこまでも示し続ける。これが人の送る生活であり、罪を犯しては赦されるという終わりのないサイクルなのである。人類の大多数は昼間に罪を犯し、夜になると告白するだけである。このように、たとえ罪の捧げ物が人のために永久に有効だとしても、それで人を罪から救うことはできない。救いの働きは半分しか完成していない。人にはいまだ墮落した性質があるからである。たとえば、自分たちがモアブの子孫であることに気づいた人々は、不満の言葉を述べ、いのちを追い求めることをやめ、すっかり否定的になってしまった。これは、人々がいまだ神の支配に完全に服従できないでいることを示しているのではないか。これがまさに、人々の墮落したサタンの性質ではないのか。あなたが刑罰を受けていなかったとき、あなたの手は他の誰よりも高く、イエスの手よりも高く上げられていた。そしてあなたは大声で叫んだ。「神の愛する子になりたまえ。神と心を通わす者になりたまえ。サタンにひれ伏すくらいなら死ぬほうがましだ。あのいまいましい悪魔に対抗したまえ。赤い大きな竜に対抗したまえ。どうか赤い大きな竜が惨めにも完全に権力の座から落ちるように。どうか神がわたしたちを完全にするように」。あなたの叫び声は他の誰よりも大きかった。しかし、刑罰の 때가訪れ、人間の墮落した性質が再び明らかになった。やがて人々の叫びは途絶え、彼らの決意は失われた。これが人間の墮落である。それは罪より根深く、サタンによって植えつけられ、人の奥深くに根ざしたものである。人が自分の罪に気づくのは容易なことではない。人には自分に深く根ざした本性を認識する術がなく、そうするには言葉による裁きに頼らなければならない。そうして初めて、人はその時点から次第に変わってゆくのである。人が過去にそう叫んだのは、自分本来の墮落した性質を認識していなかったからである。これが人間の中に存在する不純なものである。これほど長期間にわ

たる裁きと刑罰の中、人間はずっと緊張状態の中で生きた。これはすべて言葉によって成し遂げられたのではなかったか。効力者の試練に先立ち、あなたも大声で叫んだのではないか。「神の国に入れ。この名を受け入れる者はみな、神の国に入るだろう。誰もが神にあずかるだろう」と。効力者の試練が訪れたとき、あなたはもはや叫ばなかった。初めは誰もが、「ああ、神よ。あなたがわたしをいかなる場所に置かれようと、わたしはあなたの導かれるままに従います」と叫んだ。「誰がわたしのパウロになるのか」という神の言葉を読んだ人々は、「わたしがなります」と言った。次いで「ヨブの信仰についてはどうか」という言葉を目にして、「ヨブの信仰を身につけようと思います。神よ、どうかわたしを試してください」と言った。効力者の試練が訪れたとき、人々はすぐさま崩れ落ち、再び立ち上がることもままならなかった。その後、彼らの心の中の不純なものは少しずつ減っていった。これは言葉を通じて成し遂げられたのではないか。したがって、あなたがたが今日経験してきたことは、言葉によって達成された成果であり、イエスによるしるしや不思議の働きを通じて達成された成果よりもさらに大きなものである。あなたが目にする神の栄光と神自身の権威は、磔刑を通じて、あるいは病を癒して悪霊を追い払うことによって見えるだけでなく、神の言葉の裁きを通じてさらにはっきり見えるのである。そのことは、神の権威と力がしるしの働きだけ、あるいは病を癒して悪霊を追い払うことだけから成っているのではなく、神の言葉の裁きが神の権威をよりよく表わし、神の全能をよりよく明らかにできることを示している。

人が今まで成し遂げてきたこと、つまり現在の人々の霊的身丈、認識、愛、忠誠、従順、そして識見は、言葉の裁きによって得られた成果である。あなたが忠誠心を持ち、今日まで立ち続けていられるのは、言葉によって成し遂げられたことである。受肉した神の働きが途方もなく素晴らしいことを、人は今や理解しており、そしてそこには、人には達成できず、奥義や不思議であることがたくさんある。ゆえに、多くの人々が服従してきたのである。生まれてこのかた誰にも従ったことがない人たちも、今日、神の言葉を目にすると、そうと気づかないまま完全に従い、あえて吟味しようとも、他に何か言おうともしない。人類は言葉の下で倒れ、言葉の裁きの下にひれ伏している。もしも神の霊が直接人に話しかけたら、ダマスコへ向かうパウロが光の中で地にひれ伏したように、人類はみなその声に従順し、暴きの言葉がなくても倒れるだろう。神がこのように働きを続けたなら、人は言葉の裁きを通じて自分の墮落を知ることができず、ゆえに救いも得られないはずだ。神は肉となることでのみ、自身の言葉を自らすべての人の耳元に届けることができ、それによって聞く耳のある人がすべて言葉を聞き、言葉による裁き

の働きを受けられるようにする。これだけが神の言葉による成果であり、霊が出現して人を脅かし、服従させるのではない。この実践的でありながら並はずれた働きを通じてのみ、長きにわたって奥深くに潜んでいた人の古い性質が完全に暴かれ、人はそれを認識して変えられるようになる。これらはすべて受肉した神の実践的働きである。この働きにおいて、彼は実践的に語り、裁きを下すことで、言葉による人への裁きという成果を挙げる。これが受肉した神の権威であり、神の受肉の意義である。それは受肉した神の権威と、言葉の働きが挙げた成果を知らしめるため、また霊が肉において降臨し、言葉による人間の裁きを通じてその権威を実証することを知らしめるためになされる。受肉した神の肉体は平凡かつ普通の人間性の外形だが、受肉した神が権威に満ちており、神自身であり、その言葉が神自身の表現であることを人に示すのは、彼の言葉が挙げる成果である。この手段により、受肉した神が神自身であること、肉となった神自身であること、誰にも犯されないこと、そして誰も言葉による彼の裁きを超えることはできず、いかなる闇の勢力も彼の権威に打ち勝てないことが、全人類に示される。人間が受肉した神に完全に服従するのは、ひとえに彼が肉となったことばであるため、彼の権威のため、そして言葉による彼の裁きのためである。受肉した神の肉体がもたらす働きは、彼のもつ権威である。神が肉になるのは、肉もまた権威をもつことができ、また受肉した神が現実的な方法で、つまり人が見たり触れたりできるような方法で、人類の間で働きを行なうことができるからである。その働きは、すべての権威を所有する神の霊によって直接なされる働きよりもはるかに現実的で、その成果も明らかである。これは、受肉した神の肉体が実践的な方法で語り、働きを行なえるからである。受肉した神の肉の外形は権威をもたず、人が近づけるものである。一方、受肉した神の本質は権威を伴うが、その権威は誰にも見えない。受肉した神が語り、働きを行なうとき、人は彼の権威の存在を感じ取れない。それにより、受肉した神は実際的な性質をもつ働きを容易に行なえる。その実際的な働きはすべて成果を挙げることができる。受肉した神が権威をもつことに誰も気づかなかったとしても、あるいは彼が誰にも犯されないことや、彼の怒りを誰一人知らなかったとしても、ヴェールに包まれた自身の権威、隠された怒り、そして自身が公然と語る言葉を通じ、彼は意図していた自身の言葉の成果を挙げる。言い換えると、受肉した神の口調、言葉の厳しさ、そして彼の言葉のあらゆる知恵を通じて、人は完全に納得するのである。このようにして、人は一見何の権威もないかのような受肉した神の言葉に服従し、それによって人の救いという神の目的を成就させるのである。これが受肉の意義のもう一つの側面である。つまり、より現実的に語り、自身の言葉の現実が人に効果を発揮するようにして、その結果、人は神の言葉の力を目の当たり

にできる。したがって、この働きが受肉によってなされなければ、それはほんの少しも成果を挙げることができず、罪人たちを完全に救うことができない。もしも肉にならなければ、神は人には見ることも触れることもできない霊のままだろう。人は肉の被造物であり、人と神は二つの異なる世界に属し、違う性質を有している。神の霊は肉でできた人と相容れることができず、両者の間に関係を築く術はなく、また言うまでもなく、人が霊になることはできない。そうであれば、自身本来の働きを行なうべく、神の霊は被造物の一つにならなければならない。神は最も高い場所に昇ることもできれば、へりくだって人間という被造物になり、人類のあいだで働きを行ない、その中で暮らすこともできる。しかし、人は高みに昇って霊になることができず、ましてや最も低い場所に降りることなどできない。神が肉となって自身の働きを実行しなければならないのは、それが理由である。同じように、最初の受肉の際、受肉した神の肉体だけが磔刑を通じて人類を贖えたのであり、その一方、神の霊が人のための捧げ物として十字架にかけられることは不可能だったに違いない。神は直接肉になり、人のための捧げ物となることができたが、人が直接天に昇り、神が人のために用意した罪の捧げ物を受け取ることはできなかった。そういうわけで、可能なのは天地を何度か行き来するよう神に求めることだけで、人間を天に昇らせ、その救いを受け取らせるのは不可能だろう。と言うのも、人はすでに転落しており、またそれ以上に、人が天に昇ることは到底できず、まして罪の捧げ物を得るなど不可能だからである。よって、イエスが人類のあいだに来て、人には到底成し遂げられない働きを自ら行なうことが必要だった。神が肉となるたび、絶対にそうする必要がある。もしもいずれかの段階が神の霊によって直接行なわれることができたなら、神が受肉という屈辱に耐えることはなかっただろう。

この最後の段階の働きにおいて、成果は言葉によって達成される。人は言葉を通じ、多くの奥義や、過去の世代を通じて神が行なってきた働きを理解するようになる。人は言葉を通じて聖霊に啓かれ、過去の世代が解明し得なかった奥義、昔の預言者たちや使徒たちの働き、そして彼らの働きの原則を理解するようになる。人は言葉を通じて神自身の性質を理解するようになると同時に、人の不従順や反抗心を理解し、自分の本質を認識するようになる。これらの働きの段階と、語られたすべての言葉を通じ、人は霊の働き、神の受肉した肉体の働きを知り、さらにはその性質全体を知るようになる。六千年以上にわたる神の経営の働きについても、あなたはそれに関する認識を言葉によって得た。自分の以前の観念を知ったのも、それを脇にのけることができたのも、言葉を通じてではなかったのか。前の段階で、イエスはしるしや不思議の働きを行なったが、こ

の段階にしるしや不思議はない。なぜ神がしるしや不思議を示さないのかという理解も、言葉を通じて得られたのではないのか。よって、この段階で語られる言葉はかつての世代の使徒たちや預言者たちによってなされた働きを越えている。預言者たちによる預言でさえも、このような成果を挙げることはできなかった。預言者たちは預言だけ、つまり将来何が起こるかを語っただけで、当時神が行なおうと望んでいた働きについては語っていない。彼らは人類の生活を導くため、人類に真理を授けるため、あるいは彼らに奥義を明かすために語ったのではなく、ましてやいのちを授けるために語ったのではない。この段階で語られる言葉には預言と真理があるものの、それらはおもに人にいのちを授けるためのものである。現在の言葉は預言者たちの預言と異なる。これは預言を語るためでなく、人のいのちのため、人のいのちの性質を変えるための働きの段階である。最初の段階はヤーウェの働きであり、人が地上で神を礼拝するよう、その道を整える働きだった。それは地上において働きの源となる場所を見つけるという、始まりの働きだったのである。当時、ヤーウェはイスラエルの民に対し、安息日を守り、両親を敬い、互いに平和に暮らすよう教えた。なぜなら当時の人々は、人間とは何であるかも、地上でどのように生きるべきかも理解していなかったからである。神はその最初の働きの段階において、人類の生活を導く必要があった。ヤーウェが彼らに語ったことは、人類がそれまで認識しておらず、所有もしていないものばかりだった。当時、神は多くの預言者を立ち上がらせて預言を語らせたが、彼らはみなヤーウェの導きの下でそうしたのである。これは単に神の働きの一つだった。最初の段階で神が肉となることはなく、よって神は預言者たちを通じてあらゆる部族や国々に指示を与えた。イエスは自身の生涯において働きを行なったとき、今日のように多くは語らなかった。終わりの日におけるこの言葉の働きの段階が、かつての時代や世代において行なわれたことはない。イザヤ、ダニエル、そしてヨハネは多くの預言を語ったが、彼らの預言は今語られている言葉とまったく異なっていた。彼らが語ったことは預言でしかなかったが、今語られている言葉は違う。わたしが今話していることをすべて預言にしたなら、あなたがたは理解できるだろうか。わたしが語ったのが、わたしが去ったあとのことについてだったとしたら、あなたはどのようにそれを理解できただろうか。言葉の働きはイエスの時代にも律法の時代にも決してなされなかった。中には「ヤーウェも自身の働きを行なった際に言葉を語りませんでしたか。イエスも病を癒したり、悪霊を追い出したり、しるしや不思議の働きを行なったりするのに加えて、その時言葉を語りませんでしたか」と言う人がおそらくいるかもしれない。言葉がどのように語られるかには違いがある。ヤーウェが発した言葉の本質は何だったか。ヤーウェは地上における人類の生活を導いただけで、

それはいのちにおける霊的な事柄とは無関係だった。ヤーウェが語ったとき、それはすべての地で人々に指示を与えるためだったと言われているのはなぜか。「指示を与える」という言葉は、明白に語り、直接命じることを意味する。ヤーウェは人にいのちを施したのではなく、むしろただ人の手を取って、どのようにヤーウェを崇めるべきかを教えたのであり、たとえ話で教えることはあまりなかった。イスラエルにおいてヤーウェが行なった働きは、人を取り扱ったり鍛練したりするものでも、裁きや刑罰を与えるものでもなく、人を導くものだった。ヤーウェはモーセに対し、神の民に荒野でマナを集めさせるよう命じた。毎朝日の出前に、彼らはその日に食べる分だけマナを集めなければならなかった。マナは翌日まで保存することができなかった。次の日になるとカビが生えたからである。ヤーウェは人々に説教したり、人間の本性を暴いたりすることはせず、人の発想や思考を暴露することもしなかった。ヤーウェは人々を変えなかったが、彼らの生活を導いた。当時、人は子どもと同じで何も理解せず、いくつかの基本的な機械的動作しかできなかった。よって、ヤーウェは大衆を導くために律法を制定しただけなのである。

福音を広め、それによって真の心で探求するすべての人たちが、今日なされている働きを認識し、完全に確信できるようにするためには、それぞれの段階でなされた働きの内情、本質、意義をはっきりと理解しなければならない。あなたの交わりを聞くことで、人々がヤーウェの働きとイエスの働きを理解し、またそれ以上に、今日の神によるすべての働き、そして三段階の働きの関係と違いも理解できるようにしなさい。三段階のどれも他の段階を妨害しないが、それらはすべて同じ霊による働きであることを、話を聞き終えた人々が理解できるようにしなさい。それらは異なる時代に働きを行ない、その内容も異なり、それらが語る言葉も異なるが、働きを行なう原則は一つのもの、同じものである。これらのことは神に従うすべての人が理解すべき最も偉大なビジョンである。

二度の受肉が、受肉の意義を完成させる

神による各段階の働きには実際的な意義がある。当時、イエスは男性として来たが、今回来る際、神は女性である。このことから、神は自身の働きのために男性と女性の両方を造ったが、神には性の区別がないことがわかる。神の霊が来るとき、それはいかなる肉体でも意のままにまとうことができ、その肉体は神を表すことができる。男性であろうと女性であろうと、それが神の受肉した肉体である限り、どちらも神を表せるので

ある。イエスが来たときに女性として現れたとしても、つまり、男の子ではなく女性の赤子が聖霊によって受胎されたとしても、その段階の働きはまったく同じように完成されたことであろう。そうだったならば、現段階の働きは女性ではなく男性によって完成されなければならないはずだが、それでも結局、働きはまったく同じように完成されることになる。いずれの段階でなされる働きにも等しく意義があり、どちらの段階の働きも繰り返されることはなく、互いに矛盾することもない。当時、イエスは働きを行う中で神のひとり息子と呼ばれたが、それは男性であることを示している。それでは、なぜ今の段階でひとり息子のことは言及されていないのか。それは、働きの必要性から、イエスの性とは異なる性へと変更せざるを得なかったためである。神に性の区別はない。神は思い通りに自身の働きを行い、また働きを行う中でいかなる制限も受けず、非常に自由であるが、働きの各段階にはそれぞれの実際的な意義がある。神は二度肉となったが、終わりの日における受肉が最後であることは言うまでもない。神は自身のすべての業を知らしめるために来た。人が目撃できるように自ら働きを行うべく、今の段階で神が受肉していなければ、人は永遠に、神は男性でしかなく、女性ではないという観念に固執するだろう。これまで、神は男性にしかなり得ず、女性が神と呼ばれることはあり得ないと、すべての人が信じていた。男は女に対して権威をもつと、誰もがみなしていたからである。そのような人は、権威をもてるのは男だけで、女は誰ももつことができないと信じており、そのうえ、男は女のかしらであり、女は男に従わねばならず、男を超えることはできないとさえ言った。男は女のかしらであると過去に言われた時、それは蛇にだまされたアダムとエバを指していたのであって、初めにヤーウェによって造られた男と女を指していたのではない。もちろん、女は夫に従い、夫を愛さなければならず、また男は家族を養って支えられるようにならなければならない。これらはヤーウェが定めた律法と命令であり、人類は地上の生活においてこれらを順守しなければならない。ヤーウェは女に「あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう」と言った。ヤーウェがこう言ったのはひとえに、人類が（すなわち男も女も）ヤーウェの支配下で正常に暮らし、人類の生活が構造をもち、秩序を失わないようにするためである。従って、男と女がどう行動するべきかについて、ヤーウェは適切な規則を作ったが、この規則は地上で暮らすすべての被造物にのみ関係するもので、受肉した神に関するものではなかった。どうして神が自分の被造物と同じであり得ようか。神の言葉は自身の被造物である人類にのみ向けられた。ヤーウェが男女の規則を定めたのは、人類が正常に暮らすようにするためだった。最初に人類を創造したとき、ヤーウェは二種類の人間、すなわち男性と女性の両方を造った。従って、受肉した神の肉体にも男女の区別があった。神

はアダムとエバに語った言葉に基づいて働きを決めたのではなかった。神が二度にわたり受肉したのはひとえに、神が最初に人類を造った時の考えに沿って決定された。つまり、神は墮落する以前の男性と女性に基づき、二度にわたる受肉の働きを完成させたのである。蛇にだまされたアダムとエバにヤーウェが語った言葉を人が取り上げ、神の受肉の働きに適用したら、イエスもなすべきこととして妻を愛する必要があるのではないだろうか。それでもやはり神は神なのだろうか。もしそうなら、神は依然として働きを完成させることができるだろうか。受肉した神が女性であることが間違いならば、神が女を造ったのも最大級の間違ったのではないだろうか。神が女性として受肉するのは間違いだと人がいまだに信じているなら、結婚をせず、それゆえ妻を愛することができなかったイエスもまた、現在の受肉と同じくらい間違っているのではないだろうか。ヤーウェがエバに語った言葉を使って今日における神の受肉の事実を判定するのなら、恵みの時代に受肉した主イエスを評価するには、ヤーウェがアダムに語った言葉を使わなければならない。これらは同じ一つのものではないのか。蛇にだまされなかった男に基づいて主イエスを評価するのなら、今日の受肉の事実を蛇にだまされた女に基づいて判断することはできない。それは公正さに欠ける。このようにして神を評価するのは、あなたに理知がないことを証明している。ヤーウェが二度受肉した時、その肉体の性は蛇にだまされなかった男性と女性に関連していた。つまり神が二度受肉したことは、蛇にだまされなかったその男性と女性に従っていたのである。イエスが男性であるのは、蛇にだまされたアダムが男性であるのと同じだと考えてはいけない。両者はまったく関係がなく、性質の異なる二人の男性である。確かに、イエスが男性であるからといって、イエスはすべての女のかしらであり、すべての男のかしらではないと証明することにはならないのではないか。イエスは全ユダヤ人（男も女も含む）の王ではないのか。イエスは神自身であり、女のかしらだけでなく、男のかしらでもある。イエスはすべての被造物の主であり、すべての被造物のかしらである。どうしてイエスが男であることをもって、それが女のかしらであることの象徴だと決めつけられるのか。これは冒涇ではないだろうか。イエスは墮落したことのない男性である。イエスは神であり、キリストであり、主である。どうして墮落したアダムのような男性でありえようか。イエスはもっとも聖なる神の霊が身に着けた肉体である。どうしてイエスはアダムの男性らしさを有する神であるなどと言えようか。そうであれば、神の働きはすべて間違っていたことになるのではないか。ヤーウェは蛇にだまされたアダムの男性らしさをイエスの中に組みこむことができたのだろうか。現在の受肉は、性別こそイエスと異なっている、本質的にはイエスと同じ受肉した神によるもう一つの働きではないか。それでもあなたは

、受肉した神は女性ではありえない、なぜなら蛇に最初にだまされたのは女だからだとあえて言うのか。女は最も不浄で、人類の墮落の根源なのだから、神が女性として受肉するなど到底ありえないなどとまだあえて言うのか。「女はいつも男に従うべきで、神を明らかにしたり、直接象徴したりすることは決してできない」などと、まだあえてしつこく言うのか。あなたは過去に理解しなかったが、今も神の働きを、とりわけ受肉した神を冒瀆し続けられるのか。このことをはっきり理解できないならば、自分の愚かさや無知が明らかにされ、醜さが暴露されないよう、発言にはせいぜい気をつけなさい。自分がすべてを理解していると考えてはいけない。言うておくが、あなたがこれまで目にし、経験してきたことはすべて、わたしの経営計画の千分の一を理解するのにさえ十分ではない。ならば、あなたはなぜそんなに傲慢なのか。あなたがもつほんのわずかな才能と最小限の認識では、イエスの働きの一秒に使用するのにさえ不十分である。あなたは実際どれほどの経験を有しているのか。あなたが生涯で見てきたもの、耳にしてきたすべてのもの、そして想像してきたことは、わたしが一瞬で行う働きより少ない。あら探しをしたり、欠点をみつけたりしないほうがよい。どんなに傲慢でも、あなたはアリ以下の被造物なのだ。あなたが腹の中に抱えているすべてのものは、アリの腹の中にあるものよりも少ない。自分がいくらか経験を積み、歳を重ねたからといって、乱暴に振る舞ったり、自慢げに話したりする資格を得たと考えてはならない。あなたの経験と年功は、わたしが発した言葉の産物ではないのか。自分の労働や苦勞と引き換えにそれらを獲得したと信じているのか。今日、あなたはわたしの受肉を見ており、ただそのために、あなたの中には有り余るほどの考えがあり、そこから果てしない観念が生じる。わたしの受肉がなかったら、たとえ並外れた才能があっても、あなたがこれほどの考えをもつことはないだろう。あなたの観念が生まれるのはそこからではないのか。その最初の時にイエスが受肉していなければ、あなたは受肉について何を知っているだろうか。二度目の受肉を批判しようとする厚かましさがあるのは、一度目の受肉があなたに認識を与えたからではないのか。従順な追随者にならず、それを研究対象にしているのはなぜなのか。この流れに入って受肉した神の前に来たあなたに対し、どうして神が自身の研究を許すだろうか。あなたが自分の家族史を研究するのは結構なことだが、神の「家族史」を研究しようと試みるなら、今日の神はあなたに対し、そのような研究を許すだろうか。あなたは盲目ではないのか。あなたは自ら屈辱を受けようとしているのではないのか。

イエスの働きだけが行われ、終わりの日のこの段階における働きがそれを補完してい

なければ、人は永久に、イエスだけが神の独り子である、すなわち、神は一人の息子しかもたず、その後別の名前で出て来る者は誰も神の独り子ではなく、ましてや神自身でもないという観念に固執するだろう。罪の捧げものとして仕える者、あるいは神に代わって権力を担い、全人類を贖う者は神の独り子であるという観念を人はもっている。現れる者が男性である限り、その人は神の独り子、神の代理と見なせると信じている人もいる。イエスはヤーウェの息子、独り子であるという人さえいる。このような観念は誇張ではないか。今の段階の働きが最後の時代になされていなければ、全人類は神について暗い陰に包まれてしまうだろう。もしそうなら、男は自分を女より高い地位にあるものと考え、女は堂々としていることが決してできないだろう。そうなれば、女は誰一人として救われないだろう。人々はいつも、神は男であり、そのうえ女を常に嫌悪し、救いを与えないと信じている。もしそうなら、ヤーウェによって造られ、また墮落したすべての女には救われる機会がないというのは、本当のことなのではないか。それなら、ヤーウェが女を造ったこと、つまりエバを造ったことは無意味だったのではないだろうか。そして女は永久に消滅するのではないだろうか。ゆえに、終わりの日におけるこの段階の働きは、女だけでなく全人類を救うためになされるのである。神が女性として受肉したなら、それはひとえに女性を救うためだろうと考える者は、まさに愚か者である。

今日の働きは恵みの時代の働きを推し進めてきた。すなわち、六千年にわたる経営（救いの）計画全体における働きが前進したのである。恵みの時代は終わったが、神の働きはさらに前進している。今の段階の働きは恵みの時代と律法の時代を基礎にしていると、わたしが繰り返し言うのはなぜか。これは、今日の働きが恵みの時代に行われた働きの延長であり、律法の時代に行われた働きを向上させたものだからである。これら三つの段階は密接に結びついており、それぞれがその次の段階に繋がっている。また、今の段階の働きはイエスによってなされた働きの上に築かれていると、わたしが言うのはなぜか。この段階がイエスによってなされた働きの上に築かれたのでなければ、この段階でもう一つの磔刑が起きていなければならない、過去の段階における贖いの働きも一からやり直す必要があるはずだ。これは無意味なことだろう。従って、働きは完全に終わったのではなく、時代が前進し、働きの水準が以前に比べていっそう高まったということである。今の段階の働きは律法の時代を基礎とし、イエスの働きという岩盤の上に築かれるとすることができるだろう。神の働きは段階ごとに築かれ、今の段階は新しい始まりではない。三段階の働きが結合して初めて六千年にわたる経営（救いの）計画とみ

なすことができる。今の段階は恵みの時代の働きを基礎として行われる。これら二段階の働きに関連がなければ、なぜ今の段階で磔刑が繰り返されないのか。なぜわたしは人の罪を背負わず、人を直接裁いて罰しに来るのか。人を裁いて罰するわたしの働き、および聖霊の受胎によらないわたしの現在の到来が磔刑に続くものでなかったら、わたしには人を裁いて罰する資格がないだろう。わたしが直接来て人を罰し、裁くのはまさに、わたしがイエスと一つだからである。今の段階の働きはすべて過去の段階の働きの上に築かれている。だからこそ、そのような働きだけが人を一步一步救いに導くことができるのである。イエスとわたしは一つの霊から来ている。わたしたちの肉体には何のつながりもないが、わたしたちの霊は一つである。わたしたちが行う内容、わたしたちが担う働きは同じではないが、わたしたちは本質的に同じである。わたしたちの肉体の形は異なるが、これは時代の変化のため、およびわたしたちの働きが異なることを求めているためである。わたしたちの職分は同じではないので、わたしたちが生み出す働きや、わたしたちが人に明かす性質も異なっている。そのようなわけで、人が今日見るものや理解するものは、過去のものと同じではない。それは時代の変化のためである。彼らの肉体の性や形は異なっており、彼らは同じ家族から生まれたのではなく、ましてや同じ時期に生まれたのでもないが、彼らの霊はやはり一つである。彼らの肉体に血縁関係はなく、いかなる物理的関係もないが、彼らが二つの異なる時期に受肉した神であることは否定できない。彼らは同じ血統ではなく、共通する人間の言語をもっていないが（一方はユダヤ人の言語を話す男性であったし、他方は中国語しか話さない女性である）、彼らが受肉した神の肉体であることは否定できない真実である。これらの理由から、彼らは異なる国に暮らし、また異なる期間に、それぞれがなすべき働きを行う。彼らが同じ霊で、同じ本質を有しているという事実にも関わらず、彼らの肉体の外見には絶対的な類似性がまったくない。彼らは同じ人間性を共有しているだけで、肉体的な外見と誕生の状況に関する限り、両者は似ていない。これらのことはそれぞれの働きや、人が彼らに関してもつ認識に何の影響も与えない。なぜなら、最終的に分析すれば、彼らは同じ霊であり、誰も彼らを分けることができないからである。彼らに血縁関係はないが、その霊が彼らの存在全体を担い、異なる時期に異なる働きを割り当て、また彼らの肉体を異なる血統に割り当てる。ヤーウェの霊はイエスの霊の父ではなく、イエスの霊もヤーウェの霊の子ではない。彼らは一つの同じ霊である。同様に、今日の受肉した神とイエスとの間に血縁関係はないが、彼らは一つである。なぜなら、彼らの霊が一つだからである。神は慈悲と慈愛の働きを行うことができ、同様に義なる裁きの働きや人を罰する働き、人にのろいをもたらす働きも行うことができる。そして最終的に、神は世界

を滅ぼし、悪しき人々を懲罰する働きを行うことができる。神はこのすべてを自ら行うのではないか。これが神の全能性ではないのか。神は人に律法を布告することも、戒めを発することもでき、また初期のイスラエル人の地上における生活を導くとともに、彼らが神殿や祭壇を建造して、すべてのイスラエル人を統治するよう指導することができた。その権威のため、神は二千年にわたり地上でイスラエル人とともに生きた。イスラエル人はあえて神に反抗しなかった。すべての人がヤーウェを崇拝し、戒めを守ったのである。これが神の権威と全能性によって行われた働きである。恵みの時代、イエスは墮落した全人類（イスラエル人だけではない）を贖うために来た。イエスは人に慈悲と慈愛を示した。恵みの時代に人が見たイエスは慈愛に満ちており、いつも人への愛情にあふれていた。と言うのも、イエスは人を罪から救うために来たからである。イエスは磔刑によって人類を完全に罪から救うまで、人の罪を赦すことができた。その間、神は慈悲と慈愛をもって人の前に現れた。つまり、人が永遠に赦されるよう、イエスは人のために罪の捧げものとなり、人の罪を背負って磔刑に処されたのである。イエスは慈悲深く、憐れみ深く、我慢強く、愛情があった。恵みの時代にイエスに従ったすべての人も、あらゆることにおいて我慢強く、愛情深くあろうとした。彼らは長らく苦しみ、たとえ叩かれても、罵られても、石を投げつけられても、決して反撃しなかった。しかし、この最終段階において、そうなることはもはやあり得ない。イエスとヤーウェの霊は一つだったにもかかわらず、両者の働きはまったく同じというわけではなかった。ヤーウェの働きは時代を終わらせたのではなく、時代を導き、地上における人類の生活を先導したのであり、また今日の働きは、深く墮落させられてきた異邦の民を征服し、中国に暮らす神の選民だけでなく全宇宙と全人類を導くことである。今あなたには、この働きが中国だけで行われているように見えるかもしれないが、実はすでに海外へと広まり始めている。中国の外で暮らす人々が幾度も真の道を探し求めるのはなぜか。それは、霊がすでに働きを開始しており、今日語られる言葉が全宇宙の人々に向けられているからである。これにより、働きの半分がすでに行われている。創世から現在に至るまで、神の霊はこの偉大な働きを推進してきたのであり、またそれ以上に、異なる時代、異なる国々において、異なる働きを行なってきたのである。各時代の人々は、それぞれ異なる神の性質を見ているが、それは神が行う異なる働きを通して自然と明らかにされる。それは神であり、慈悲と慈愛に満ちている。神は人の罪の捧げものであり、人の羊飼いであるが、同時に人の裁き、刑罰、そしてのろいでもある。神は二千年にわたって地上における人間の生活を導くことができ、墮落した人類を罪から贖うこともできた。そして今日、すべての人が神に完全に服従するよう、神は自分のことを知らない人類を征服

し、彼らを自身の支配下に置くこともできる。最後に、神は全宇宙の人々の中にある不浄なもの、不義なものをすべて焼き払い、自分が慈悲と慈愛に満ちた神、英知と不思議の神、および聖い神というだけでなく、さらには人を裁く神でもあることを示す。人類の中の悪人にとって、神は燃えさかる炎、裁き、懲罰である。また完全にされるべき人々にとって、神は苦難、精錬、試練であり、同時に慰め、支え、言葉の施し、取り扱い、そして刈り込みである。また淘汰される人々にとって、神は懲罰であり、報いである。教えてほしい。神は全能ではないのか。あなたの想像とは違い、神は磔刑に限らずすべての働きができる。あなたは神のことをあまりに見くびっている。神にできるのは磔刑を通じて人類を贖うことだけで、それで終わりだと信じているのか。そしてその後、あなたは神に従って天に行き、いのちの木から果実を食べ、いのちの川から水を飲むというのか……。果たしてそんなに単純なことだろうか。教えてほしい。あなたは何を成し遂げたのか。あなたにイエスのいのちがあるのか。あなたは確かにイエスによって贖われたが、磔刑はイエス自身の働きだった。あなたは人として何の本分を尽くしたのか。あなたは表面的に敬虔なだけで、神の道を理解していない。それが神を明らかにするあなたの方法なのか。神のいのちを得ていなければ、あるいは神の義なる性質のすべてを見ていなければ、自分はいのちをもつ者だと主張することはできず、天国の門をくぐる価値もない。

神は霊であるだけでなく、肉になることもできる。そのうえ、神は栄光のからだである。あなたがたは見えていないが、イエスはイスラエル人によって、つまり当時のユダヤ人によって目撃された。最初、彼は肉体だったが、磔刑に処された後、栄光のからだになった。神はすべてを包みこむ霊であり、あらゆる場所で働きを行うことができる。神はヤーウェ、イエス、メシアになることができ、最後は全能の神になることもできる。神は義、裁き、刑罰であり、またのろい、怒りであるが、慈悲と慈愛でもある。神がなした働きはどれも神を表すことができる。神とはどのようなものかと言うのか。あなたは説明することができない。本当に説明できないのであれば、神に関して結論を下すべきではない。ある段階で神が贖いの働きをしたというだけで、神は永遠に慈悲と慈愛の神であると結論づけてはいけない。神は慈悲と慈愛に満ちた神でしかないと、あなたは確信できるのか。神が慈悲と慈愛に満ちた神でしかないならば、なぜ終わりの日に時代を終わらせるのか。なぜこれほど多くの災難をもたらすのか。人々の観念と考えによれば、人類が最後の一人まで残らず救われるよう、神は最後まで慈悲と慈愛に満ちていなければならぬ。しかし終わりの日、神が地震や疫病や飢饉といった大災害をもたらした

、神を敵と見なすこの悪しき人類を滅ぼすのはなぜなのか。人がこれらの災害に苦しむのを、神はなぜ許すのか。神がどのようなものであるかについて、あなたがたは誰も言おうとしないし、説明もできない。神は本当に霊だとあえて言うのか。イエスの肉体に他ならないとあえて言うのか。人のためにいつまでも磔刑に処される神だとあえて言うのか。

三位一体は存在するのか

イエスの受肉という真実が明るみに出た後、人は、天の父がいるだけではなく、子とさらには霊がいるということを信じた。これが、天には父と子と聖霊のすべてを一つにした三位一体の神がいるという、人の抱いている従来の観念である。すべての人間が次のような観念を持っている。神は一人だが、三つの部分からなっている。従来の考えに深くはまり込んだ人々は、それが父、子、聖霊と考える。それら三つの部分を一つにしたものだけが神のすべてなのである。聖なる父がいなければ、神は完全ではない。同様に、子、または聖霊がいなければ、やはり神は完全ではない。人々の観念においては、父だけでも、子だけでも神と見なすことはできないと考えられている。父と子と聖霊が合わさって初めて神そのものと見なすことができる。今、すべての宗教信者は、あなたがたの中のあらゆる追随者も、この信念を抱いている。だが、この信念が正しいかどうかに関しては、誰も説明できない。なぜならあなたがたは神そのものに関する事柄についてはいつも意識が曖昧だからである。これらは観念であるが、あなたがたはそれが正しいか、間違っているかわからない。それはあなたがたが宗教的観念にあまりにも強い影響を受けてしまっているからである。あなたがたはこれらの従来からの宗教的観念をあまりにも深く受け入れており、この毒はあなたがたの内部にあまりにも深く浸透している。従って、この件に関してもあなたがたはこの有害な影響に屈している。なぜなら、三位一体は絶対に存在しないからである。すなわち、父と子と聖霊の三位一体など絶対に存在しない。これらはすべて人の従来からの見解、人の誤った信念である。人は何世紀にもわたりずっと、その心の中の観念が生み出し、人によってねつ造され、人がこれまで見たことのない三位一体の存在を信じてきた。長年にわたり、たくさんの聖書解説者が三位一体の「真の意味」を説明してきたが、三位一体の神は三つのはっきり区別できる同質の位格であるというような説明は曖昧模糊としたもので、人々はみな神の「構成」のせいで混乱している。これまで完全な説明ができた偉人は一人もいない。ほとんどの説明は論法の見地からすれば、また理論上では合格レベルに達しているが、その意味を十分明確に理解している人は一人としていない。これは、人が心の中で抱いてい

る偉大な三位一体など存在しないからである。誰も神の本当の風貌を見たことがないし、幸運にも天に昇って神のすみかを訪問し、神がいる場所にどのようなものがあるのか調べたり、「神の家」には何万世代、あるいは何億万世代あるのかを正確に決めたり、あるいは神の本来の構成はいくつの部分から成り立つのかを調査したりした人はいないからである。主に調べる必要があるのは、父と子、ならびに聖霊の年齢、各位格の外見、正確にどういうわけで分かれたのか、どういうわけで一つになるのか、である。残念ながら、これまでの多くの年月のなかで、一人としてこれらの事柄の真実を決定できた人はいない。みな推測しているにすぎない。三位一体に関心のあるすべての熱心で敬虔な宗教信者に事柄の真実について報告するため、天まで昇って見学し、全人類のために「調査報告書」を携えて戻ってきた者は一人としていないからである。もちろん、そのような観念を形成した責めを人に負わせることはできない。それなら、なぜ父なるヤーウェは人類を創造した時、子のイエスを同行させなかったのだろうか。最初にすべてがヤーウェの名で通っていたら、もっとよかっただろう。責めを負わせなければならないとしたら、天地創造のときに子や聖霊を呼び寄せず、単独で働きを実行したヤーウェ神の一時的過失のせいにしよう。もし彼らが皆で同時に働いていたら、彼らは一つになっていたのではなかっただろうか。最初から最後までヤーウェの名だけしかなく、恵みの時代からはイエスの名がなかったら、または、イエスがその時もまだヤーウェと呼ばれていたら、神は人類によってこのように分割される苦しみをせずにすんだのではないだろうか。確かに、このすべてに対してヤーウェを責めることはできない。責めを負わせなければならないとしたら、聖霊に負わせよう。聖霊は何千年もの間、その働きをヤーウェ、イエス、さらには聖霊の名で続行し、一体誰が神なのかわからなくなってしまうほどに人を当惑させ、混乱させてしまった。聖霊そのものが形や姿なしに、さらにはイエスのような名前なしに働いていたら、そして人が聖霊に触れることも、見ることもできず、ただ雷鳴の音だけを聞いていたら、この種の働きは人類にもっと多くの恩恵をもたらさなかっただろうか。では今何ができるだろう。人の観念は山のように高く、海のように広く蓄積したので、今日の神はもはやそれらに耐えることができず、まったく途方に暮れている。昔、ヤーウェとイエス、その間にいる聖霊だけであった時でも、人はすでにどのように対処すべきか途方にくれていたが、今は全能者が加わり、やはり神の一部だと言われてさえいる。彼がだれであるのか、どのくらいの年月の間、三位一体のどの位格と混じり合っていたのか、あるいはその中に隠れていたのかなど、誰が知っているのか。どうして人がこんなことに耐えられるだろうか。三位一体だけで人が一生かけて説明するのに十分であったが、今では「四位格の一つの神」がいる。これはどう説明

ができるであろうか。あなたは説明できるのか。兄弟姉妹よ。どうしてあなたがたは今日までこのような神の存在を信じてきたのか。わたしはあなたがたに脱帽する。三位一体ですら担うのにもう十分であったのに、どうすればあなたがたは四位格からなるこの一つの神に揺るぎない信仰を抱き続けられるのか。あなたがたは立ち去るよう促されたのに拒絶している。とてもありえないことだ。あなたがたは本当に素晴らしい。実際四つの神の存在を信じることでさえできて、それをなんとも思わない。あなたがたはこれを奇跡だと思わないのだろうか。わたしは、あなたがたがこのような偉大な奇跡を引き起こせるとは知り得なかった。実のところ、三位一体はこの宇宙のどこにも存在しないことを話しておこう。神には父も子もおらず、ましてや父と子が道具として共同で使う聖霊の概念などない。このすべては最大の誤った考えであり、この世には断じて存在しない。だが、そのような誤った考えにさえ発端があり、全く根拠がないわけではない。なぜならあなたがたの心はそれほど単純ではないし、あなたがたの考えには理性がないわけではないからである。むしろ、それらの考えはかなり適切で、独創的であるので、どのサタンに対してでも動じない。残念なのは、これらの考えがすべて誤った考えであり、断じて存在しないことである。あなたがたは本当の真実をまったく見たことがない。あなたがたは単に推測し、観念を作り、次に、欺いて他の人々の信用を得るため、また機知や理性のない極めて愚かな人々を支配するため、そのすべてを物語に作り上げ、人々にあなたがたの偉大で、名高い「専門家の教え」を信じさせようとしている。これは真理だろうか。これは人が受けるべきいのちの道なのだろうか。すべては馬鹿げている。一語も適切ではない。この長い年月を通してずっと、神はこのようにあなたがたによって分けられてきて、各世代とともにますます細かく分けられ、一つの神が公然と三つの神に分けられるまでに至った。そして今、人が神を一つに再結合するのはまったく不可能である。神をあまりにも細かく分けすぎたからである。手遅れにならないうちにわたしの迅速な働きがなければ、あなたがたがどのくらい長く厚かましくもこのようなことを続けるかはわからない。このように神を分け続けるなら、どうして神はあなたがたの神でいられようか。あなたがたはまだ神を認識できるであろうか。あなたがたはまだ神を父として受け入れ、神のもとに戻るつもりなのか。もしわたしが少しでも遅く到着していたら、あなたがたは「父と子」、ヤーウェとイエスをイスラエルに送り返し、あなたがた自身が神の一部であると主張していたことだろう。幸いにも、今は終わりの日である。とうとう、わたしが長いこと待っていたこの日が来て、この段階の働きを自分の手で実行してはじめて、あなたがたによる神そのものの分割が停止した。これがなかったら、あなたがたはエスカレートして、あなたがたの中のサタンをすべて祭壇上に載

せて崇拝さえしていただろう。これがあなたがたの策略である。あなたがたが神を分ける手段である。あなたがたは今そのようにし続けるつもりなのか。あなたがたに尋ねたい。神は幾つあるのか。どの神があなたがたに救済をもたらすのか。あなたがたがいつも祈る対象は最初の神か、二番目なのか、それとも三番目なのか。そのなかでどの神を常に信じているのか。父だろうか。それとも子だろうか。あるいは霊だろうか。あなたが信じるのはいずれなのか、わたしに教えて欲しい。あなたはあらゆる言葉をもって神を信じていると言うが、あなたがたが実のところ信じているのはあなたがた自身の知力である。あなたがたは断じて心の中に神を持っていない。しかし頭の中にはそのような「三位一体」がいくつかあるのだ。あなたがたはそう思わないだろうか。

三つの段階の働きがこの三位一体の概念に従って評価されるならば、それぞれが行う働きは同じではないので、三つの神がいなければならない。あなたがたの中の誰かが三位一体は実際存在すると言うならば、この三位格で一つの神とは一体何か説明してみたまえ。聖なる父とは何か。子とは何か。聖霊とは何か。ヤーウェは聖なる父なのだろうか。イエスは子なのだろうか。それでは聖霊についてはどうか。父は霊ではないのだろうか。子の本質も霊ではないのだろうか。イエスの働きは聖霊の働きではなかったのだろうか。当時のヤーウェの働きはイエスの働きと同じ霊によって行われたのではなかったのだろうか。神はいくつの霊を持つことができるのだろうか。あなたの説明によると、父、子、聖霊の三位格は一つである。もしそうなら、三つの霊がいることになるが、霊が三ついるということは神が三ついることを意味する。となると唯一の真の神はいないことになる。こんな神がどうして神の本来備え持つ本質を持つことができるだろう。神は一つであることを受け入れるならば、神はどうして子を持ち、父であることができるのか。これらはすべて観念にすぎないのではないか。神は唯一で、この神の中には唯一の位格しかなく、神の霊は唯一である。聖書に「唯一の聖霊、唯一の神のみがいる」と書かれている通りである。あなたの言う父と子が存在するかどうかにかかわらず、結局は唯一の神のみがあり、あなたがたが信じる父、子、聖霊の本質は聖霊の本質である。言い換えれば、神は一つの霊であるが、すべての上に立つことができるのはもちろん、肉体になり、人々の中で暮らすこともできる。神の霊はすべてを含んでおり、どこにでも存在する。神は同時に肉体の形になり、全宇宙に、そしてその上に存在することができる。すべての人々が神は唯一の真の神であると言うので、神は一つだけで、誰も意のままに分けることはできない。神は唯一の霊で、唯一の位格である。そしてそれが神の霊である。あなたが言うように、それが父、子、聖霊であるならば、三つの神ではな

いのか。聖霊は一つの事柄であり、子は別の事柄、さらに父も別の事柄である。彼らの位格が異なり、彼らの本質が異なるのだから、どうしてそれぞれが唯一神の一部分でありえようか。聖霊は霊である。これは人にとって理解しやすい。もしそうなら、父はさらにいっそう霊である。父は地上に降臨したことも、肉体になったこともない。父は人の心の中でヤーウェ神であり、確かに霊でもある。では父と聖霊の関係は何か。それは父と子の関係なのだろうか。それとも聖霊と父の霊の関係なのだろうか。各霊の本質は同じなのだろうか。それとも聖霊は父の道具なのだろうか。これはどうしたら説明できるのだろうか。それなら子と聖霊の関係は何なのだろうか。それは二つの霊の関係なのだろうか。それとも人と霊の関係なのだろうか。これらはすべて説明のできない事柄である。彼らがみな一つの霊ならば、三位格の話はありえない。彼らはただ一つの霊を所有しているからである。彼らがはっきり異なる位格であるならば、霊の力も異なるものになり、断じてただ一つの霊になることはできないだろう。父、子、聖霊のこの概念は非常に不合理である。これは神を分割し、それぞれが地位と霊を持つ三つの位格に分けてしまう。それではどうして神は一つの霊、一つの神でいられようか。教えて欲しい。天と地、そしてその中のすべてのものは父、子、あるいは聖霊が造ったのだろうか。彼らは一緒になって天地を創造したのだと言う人がいる。それでは誰が人類を救ったのだろうか。聖霊か、子か、それとも父なる神か。人類を救ったのは子であると言う人もいる。それでは実質上、子とは誰か。彼は神の霊の受肉ではないのか。受肉した神は被造物の人という観点から、天の神を父の名で呼ぶ。イエスが聖霊による受胎から生まれたことを知らないのか。彼の中には聖霊がいる。あなたが何と言おうとも、彼はやはり天の神と一つなのである。彼は神の霊の受肉だからである。子というこの考えは断じて真実ではない。すべての働きを実行するのは一つの霊である。神だけが、すなわち、神の霊が働きを実行する。神の霊とは誰か。聖霊ではないのか。イエスの中で働くのは聖霊ではないのか。働きが聖霊（すなわち神の霊）によって実行されなかったのなら、彼の働きが神自身を表すことができたのだろうか。イエスが祈る間、父の名で天の神を呼んだ時、これは被造物の人の観点だけから行われたのであり、それはただ神の霊が普通の正常な肉を着て、被造物の人の外見をしていたためであった。彼の中には神の霊があつたとしても、外観は普通の人であった。言い換えれば彼は、イエス自身を含め、すべての人が言うところの「人の子」になった。彼が人の子と呼ばれるならば、彼は普通の人々の通常の家庭に生まれた人（男でも女でも、とにかく、人間の外見を持つ者）である。従って、父の名で天の神を呼ぶことは、あなたがたが最初天の神を父と呼んだ時と同じであった。彼は創造された人の観点からそうした。イエスが覚えるようにとあなたがた

に教えた主の祈りをまだ覚えているか。「天にいますわれらの父よ……」イエスはすべての人に天の神を父の名で呼ぶよう求めた。そして彼も天の神を父と呼んだので、彼はあなたがたすべてと対等の立場に立つ者の観点からそうしていた。あなたがたは天の神を父の名で呼んだので、このことはイエスが彼自身をあなたがたと対等の立場にあり、神によって選ばれた地上の人（すなわち神の子）と見なしていることを示している。もしあなたがたが神を「父」と呼ぶならば、これはあなたがたが被造物だからではないのか。地上におけるイエスの権威がどんなに偉大でも、磔刑以前はイエスは単に人の子であり、聖霊（すなわち神）に支配され、地上にいる被造物の一人にすぎなかった。まだ自分の働きを完成させていなかったからである。従って、彼が天の神を父と呼ぶのはもっぱら彼の謙虚と従順さからであった。しかし、彼がそのように神（すなわち天の霊）に呼びかけることで、彼が天の神の霊の子であることの証明にはならない。むしろ、それは単に彼の視点が異なっていることであり、彼が別の位格であるということではない。別個の位格の存在というのは間違った考えである。磔刑以前、イエスは肉体の限界に縛られた人の子であり、霊の権威を十分には所有していなかった。そのため、彼は被造物の視点からのみ父なる神の意志を求めることができた。ゲッセマネで「わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」と三度祈ったときのように。十字架刑に処せられる前、彼はユダヤ人の王にすぎなかった。彼はキリストであり、人の子であり、栄光の体ではなかった。そのため、彼は被造物の観点から神を父と呼んだのである。さて、あなたは神を父と呼ぶ者はすべて子であると言うことはできない。もしそうなら、ひとたびイエスがあなたがたに主の祈りを教えたら、あなたがたは皆「子」になっていたのではないだろうか。まだ納得しないなら、教えて欲しい。あなたがたが父と呼ぶのはだれなのか。イエスに言及しているなら、あなたがたにとってイエスの父は誰なのか。イエスが去ったあと、父と子というこの考えもなくなった。この考えはイエスが肉体になった年月にのみ適切であった。それ以外のすべての状況下では、その関係は、あなたがたが神を父と呼ぶときの創造主と被造物の関係である。父と子と聖霊という三位一体のこの考えが有効である時はない。それは諸時代を通じてめったに見られない誤った考えであり、存在しない。

これでほとんどの人は「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り……」という創世記の神の言葉を思い起こすであろう。神が「われわれの」形に合わせて……ということから考えると、「われわれ」は二人以上を示す。神が「われわれ」と述べたので、神は一つだけではない。このようにして人は理論上ははっきりと異なる位格につい

て考え始め、これらの言葉から父、子、聖霊という考えが生じた。では、父とはどういうものか。子とはどういうものか。そして聖霊とはどういうものか。ひょっとして今日の人類は三つを合わせて一つの姿に造られたのだろうか。それでは人の姿は父、子、あるいは聖霊の姿に似ているのだろうか。人は神のどの位格の姿をしているのだろうか。人の抱くこの考えはまったく間違っており、ばかげている。これは一つの神をいくつかの神に分けることしかできない。モーセが創世記を記述した時は、世界の創造に続いて人類が造られた後のことであった。そもそも最初、世界が始まった時、モーセは存在していなかった。モーセが聖書を記述したのはそれからずいぶん後のことだったので、天の神が語ったのは何であったのかをモーセはどうして知ることができたのだろうか。彼は神がどのように世界を創造したかについて少しも知らなかった。旧約聖書には、父、子、聖霊についての言及はなく、唯一の真の神、ヤーウェがイスラエルで働きを実行することにしか触れていない。神は時代が変わるにつれて異なった名前と呼ばれているが、これは名前ごとに異なる神格を指していることを証明できない。もしそうなら、神には無数の位格がいるのではないだろうか。旧約聖書に書かれていることは、ヤーウェの働き、つまり、律法の時代に開始するための神そのものの働きの段階である。それは、神が語るとそのようになり、神が命じると従うといった神の働きであった。ヤーウェは自分が働きを実行するために来た父であるとは決して言わなかったし、子が人類を贖うために来ると預言もしなかった。イエスの時代になった時、神はすべての人類を贖うために受肉したと言われただけで、来たのは子であるとは言われなかった。各時代は同様ではないし、神自身がする働きも異なるので、神は異なる領域内で働きを実行する必要がある。このようにして神の表す身分も異なる。ヤーウェはイエスの父であると人は信じているが、このことは実はイエスによって認められておらず、イエスは次のように語った。「わたしたちは決して父と子として区別されなかった。わたしと天の父は一つである。父はわたしの中にあり、わたしは父の中にある。人が子を見るとき、天の父を見ているのである」。すべてが語られた時、父であろうと子であろうと、彼らは一つの霊であり、別々の位格には分けられない。ひとたび人が説明しようとする、はっきりと異なる位格や、父、子、霊の関係で問題は複雑になる。人が別々の位格について話す時、これは神を物質化することではないだろうか。人は位格を第一、第二、第三とランク付けさえしている。これらはすべて人の概念にすぎず、言及する価値はなく、まったく非現実的である。あなたが誰かに「神は幾つあるのか」と尋ねたら、神は父、子、聖霊の三位一体で、唯一の真の神であると言うだろう。「父とは誰か」と尋ねると、「父は天の神の霊である。父はすべてを司り、天の主である」と言うだろう。「では、ヤーウェ

は霊なのか」と尋ねれば、「そうだ」と言うだろう。次に「子とは誰なのか」と尋ねたら、もちろんイエスが子であると言うだろう。「ではイエスの経歴はどうなっているのか。どこからイエスは来たのか」と尋ねれば、「イエスは聖霊による受胎を通してマリアの子として生まれた」と言うだろう。では、イエスの本質も霊ではないのか。イエスの働きも聖霊を表しているのではないのか。ヤーウェは霊でイエスの本質も霊である。終わりの日の今、言うまでもなく、やはり働いているのは霊なのである。どうして彼らが異なる位格でありえようか。神の霊が異なる観点から霊の働きを実行しているだけなのではないか。それ自体として、位格の間に区別はない。イエスは聖霊によって宿り、間違いなく彼の働きはまさしく聖霊の働きであった。ヤーウェによって実行された第一段階の働きにおいて、神は肉体にならなかったし、人の前に現れもしなかった。そこで、人は彼の姿を決して見なかった。彼がいかに大きくとも、いかに背が高くとも、やはり霊であり、初めて人を造った神自身であった。すなわち、それは神の霊であった。彼が雲の合間から人に話しかけた時、彼は単に霊にすぎなかった。誰も彼の姿を目撃しなかった。神の霊が肉となり、ユダヤで受肉した恵みの時代になって初めて、人はユダヤ人として受肉した姿を見た。ヤーウェの感触は感知できなかった。しかし、彼は聖霊によって、すなわち、ヤーウェ自身の霊によって受胎されたので、イエスはやはり神の霊の具現化として生まれた。人が初めて見たものは、イエスの上に鳩のように降りてくる聖霊であった。それはイエスだけに限定された霊ではなく、むしろ聖霊であった。ではイエスの霊は聖霊と区別することができるのか。イエスが神の子イエスであり、聖霊は聖霊であるなら、どうしてこの二つは一つになることができようか。もしそうなら、働きは実行できなかったであろう。イエスの中の霊、天にある霊、ヤーウェの霊はすべて一つである。それは聖霊、神の霊、7倍に強化された霊、すべてを包みこむ霊と呼ぶことができる。神の霊は多くの働きを実行することができる。それは世界を創造することができ、地球を洪水にして世界を破壊することもできる。それは全人類を贖うことができ、そのうえ、全人類を征服し、破滅させることもできる。この働きはすべて神自身によって実行され、神のほかのどの位格が神の代わりに行なったということはいえない。神の霊はヤーウェ、イエス、ならびに全能者という名で呼ぶことができる。それは主であり、キリストである。また人の子になることもできる。天にも地にもいる。天上の高みにも、群衆の中にもいる。天と地の唯一の主人である。天地創造から今に至るまで、この働きは神自身の霊によって実行されてきた。天における働きであろうと、肉体での働きであろうと、すべては神の霊によって実行される。すべての被造物は、天であろうと、地上であろうと、神の全能の手のひらの中にある。このすべては神自身の働きで

あり、神に代わって誰も行うことはできない。天において、神は霊であるが、神自身でもある。人々のもとでは、神は肉体であるが神のままである。神は何十万もの名前と呼ばれるかもしれないが、それでも神は神であり、すべての働きは神の霊の直接表現である。神の磔刑による全人類の贖いは神の霊の直接的働きであったし、終わりの日の間にすべての民、すべての地に向けた宣言もそうである。いつも神は全能で唯一の真の神、すべてを含む神自身としか呼ぶことはできない。はっきりと異なる位格は存在しないし、ましてや父、子、聖霊というこの考えも存在しない。天にも地にも神はただひとつである。

神の経営（救いの）計画は六千年に及び、働きの違いに基づいて三つの時代に分けられる。第一の時代は旧約の律法の時代である。第二は恵みの時代で、第三は終わりの日に属する時代、神の国の時代である。各時代で異なる身分が表されている。これは単に働きの違い、すなわち、働きの必須要件によるものである。律法の時代の第一段階の働きはイスラエルで実行され、贖いの働きを完結する第二段階はユダヤで実行された。贖いの働きのため、イエスは聖霊による受胎から、ひとり子として生まれた。このすべては働きの必須要件のためであった。終わりの日には、神は働きを異邦人の国々まで広げてそこの人々を征服し、神の名が彼らの間でも偉大になることを望んでいる。神は人を導いて、すべての真理を理解してそれに入れるようにすることを望んでいる。この働きはすべて一つの霊によって実行される。神はさまざまな観点から働きを行うかもしれないが、働きの本質と原則は変わらない。実行された働きの原則と本質をよく見れば、すべては一つの霊によって為されたことがわかるであろう。それでもまだ「父は父であり、子は子であり、聖霊は聖霊であり、そして最後には一つにされるだろう」と言う人もいるであろう。では一体どのようにしてそれらを一つにするべきであろうか。どうして父と聖霊を一つにすることができるのか。もしそれらがもともと二つなら、どのように結合しても、二つのままではないだろうか。それらを一つにすると言うとき、それは単に二つの別々の部分を結合して全体で一つにすることではないだろうか。しかし、それらは一つにされる前は二つの部分ではなかっただろうか。一つの霊はそのはっきりとした本質があり、二つの霊を一つにすることはできない。霊は物質ではなく、物質界のほかの何ものとも異なっている。人々の理解するところでは、父は一つの霊であり、子は別の霊で、聖霊もさらに別の霊であるので、それなら三つの霊はコップ三杯に入っている水のように混ざりあって一つの全体になる。そうすれば三つは一つにまとめられるのではないか。これは全く間違った説明である。これは神を分割しているのではないだろう

か。どうして父、子、聖霊のすべてを一つにできるのだろうか。これらはそれぞれ異なる性質をもつ三つの部分ではないのか。それでも、「イエスは自分の愛する子と神ははっきり述べなかったか」と言う人たちがいる。イエスは神の愛する子、神の心にかなう者である——これは確かに神自身によって語られた。神は自身の証しをしていたのだが、それは異なる観点から、すなわち天の霊の観点から自身の受肉の証しをしていたのである。イエスは神の受肉であって、天にいる神の子ではない。わかるか。「わたしが父におり、父がわたしにおられる」というイエスの言葉は、二者が一つの霊であることを示しているのではないだろうか。そして、彼らが天と地に分けられたのは受肉のためではないだろうか。実際には彼らはやはり一つである。たとえ何であれ、神が自身の証しをしているに過ぎない。時代の変化、働きの必須要件、神の経営計画のさまざまな段階のために、人が神を呼ぶ名前も違って来る。第一段階の働きを実行するために来た時、神はヤーウェ、イスラエル人の羊飼いとしか呼ばれなかった。第二段階では、受肉した神は主およびキリストとしか呼ばれなかった。しかし、その時、天の霊は、イエスは神の愛する子であるとだけ述べ、彼が神のひとり子だとは言及しなかった。そのようなことは断じて起こらなかった。どうして神がひとり子を持つことができようか。それでは神は人にならなかったのか。神は受肉したので愛する神の子と呼ばれ、このことから父と子の関係が生じた。それは単に天と地に別れていたためであった。イエスは肉体の観点から祈った。イエスは普通の人間の肉体の姿をしていたので、肉体の観点から「わたしの外観は被造物のものである。わたしは肉体となってこの世に来たので、今や天からは遠く、遠く離れている」と言ったのである。このため、イエスは肉体の観点からしか父なる神に祈ることができなかった。これがイエスの本分であり、受肉した神の霊が備えていなければならないものであった。イエスが肉体の観点から父に祈るということだけで彼が神でないと言うことはできない。イエスは神の愛する子と呼ばれるが、それでも神自身である。霊が受肉しただけで、本質はやはり霊だからである。人が理解するところでは、イエスが神自身ならばなぜ祈るのだろうかと疑問に思う。これは、イエスが受肉した神であり、肉体の中に生きる神であり、天の霊でないからである。人が理解するところでは、父、子、聖霊はすべて神である。三つすべてを合わせて一つにしたものだけが唯一の真の神と見なすことができ、このようにして神の力は並外れて大きくなる。このようにしてのみ神は7倍に強化された霊なのだという人々がまだいる。子がこの世に現れた後祈る時、祈りはその霊に向かってなされた。実は、彼は被造物の観点から祈っていた。肉体は完全なものではないからであり、イエスは完全ではなかったし、肉体になったとき、数多くの弱点を持っていた。また彼は肉体において働きを実行した時

、大いに難儀した。そのため、彼は磔刑になる前に三度父なる神に祈り、それ以前にも何回も祈ったのである。彼は弟子たちの間で祈った。彼は山上で一人で祈った。彼は釣り船の上で祈った。彼は大勢の群衆の中で祈った。彼はパンを割きながら祈った。彼は人々を祝福するとき祈った。彼はなぜそうしたのか。彼が祈ったのは霊に向かってであった。彼は肉体の観点から霊に向かって、天の神に向かって祈っていた。したがって、人の見地からは、イエスはその働きの段階で神の子になった。しかし、現在の段階では神は祈らない。これはなぜか。なぜなら神がもたらすものは言葉の働きであり、言葉による裁きと刑罰だからである。祈りの必要はない。神の職分は話すことだ。十字架にかけられないし、人によって権力者たちに引き渡されない。神はただその働きを実行するだけで、すべては整っている。イエスが当時祈った時、天国が来るようにと、父なる神の旨が行われるようにと、今後の働きのために父なる神に祈っていた。現在の段階では、天国はすでに来たのだが、神はそれでも祈る必要があるだろうか。神の働きは、時代を終らせることであり、新しい時代はこれ以上ないので、次の段階のために祈る必要があるだろうか。わたしは必要ないと思う。

人の説明にはたくさんの矛盾がある。実際、これらはすべて人のもつ観念である。さらなる精査がなければ、あなたがたは皆、それらは正しいと信じるだろう。あなたがたは、三位一体の神の考えは人の見解にすぎないことを知らないのか。人の認識に十分で完全なものはない。いつも不純物があり、人の考えはあまりにも多すぎる。これは、被造物が神の働きを説明することはどうしてもできないことを立証している。人の心の中にはあまりにも多くのものがあり、すべて論理と思考から来ており、真理と矛盾している。あなたの論理は完全に神の働きを分析できるだろうか。ヤーウェのすべての働きについて識見を得ることができだろうか。すべてを見通せることができるのは人であるあなたなのか、それともとこしえからとこしえまで見ることができる神自身なのだろうか。とこしえの昔からとこしえの未来まで見ることができるのはあなたなのか、それともそれができるのは神なのだろうか。どう思うか。どうしてあなたが神を説明するのに値するのか。あなたの説明の基礎は何か。あなたは神なのか。天と地、およびその中のすべてのものは神によって造られた。これをしたのはあなたではなかったのだから、なぜあなたは正しくない説明をしているのか。さて、あなたは三位一体の存在を信じ続けるのか。それはあまりにも厄介だとは思わないのだろうか。三つではなく一つの神を信じるほうがよいであろう。軽いのがもっともよい。主の荷は軽いからである。

実践（３）

あなたがたは、独立して生きる能力を備え、自分だけで神の言葉を飲み食いし、経験し、他者に導かれることなく正常な霊的生活を送ることができなければならない。神が今日語る言葉に依存して生き、真の経験に入り、真の識見を得ることができなければならない。そうしてはじめて、揺るぎなく立つことができる。現在、多くの人が将来の患難や試練について十分に理解していない。将来、患難を受ける人や懲罰を体験する人がいる。この懲罰はさらに厳しいものとなる。それは事実の到来である。今日、あなたが経験、実践、表現することはすべて将来の試練の基礎となる。あなたは少なくとも独立して生きることができなければならない。今日、教会にいる多くの人は大体次のような状況にある。仕事をする指導者と働き手がいれば、幸せだが、いなければ幸せではない。教会の仕事にも自分の霊的生活にも何の関心もなく、ほんの僅かの負担も抱えておらず、寒號鳥^[a]のようにぼんやりとしている。率直に言うと、多くの人においてわたしが行った働きは、征服の働きでしかない。なぜなら、多くの人には根本的に完全にされるに値しないからである。ごく一部の人だけが完全にされ得る。この言葉を聞いて、「神による働きが人間を征服するためだけのものならば、わたしはいい加減に従おう」と考えるのであれば、そのような態度がどうして受け入れられようか。真に良心があれば、負担を抱えて責任感をもたなければならない。「自分が征服されるか完全にされるかに関係なく、この段階の証しはしっかりと担わなければならない」と言うべきである。神の創造物として、人は神に完全に征服されることができ、最終的には、神を満足させることができるようになり、神を愛する心で、自らを余すところなく神に捧げるにより神の愛に報いることができる。これが人間の責任であり、人間が果たすべき本分であり、人間が抱えるべき負担であり、人間はこの任務を完遂しなければならない。そうしてはじめて、人間は神を真に信仰していることになる。現在あなたが教会で行うことは、自分の責任を果たすことなのか。それは、負担を抱えているかどうかと、またあなたの認識による。この働きを体験することにおいて、人間が征服され、真の認識を得たならば、将来の展望や運命とは無関係に従うことができるようになる。このように、神の大いなる働きの全部が実現される。なぜなら、あなたがたはこれ以上のことは何もできず、それより高度な要求は何も満たせないからである。しかし、未来においては、完全にされる人たちがいる。彼らの素質は向上し、その霊においてさらに深い認識を得て、いのちは成長する……。しかし、これをまるで達成できない人もいて、このような人は救われない。救われないとわたしが言うのには理由がある。未来において、征服される者、淘汰される者、完全にされる者、用いられる者がいる。ゆえに、ある者は患難を体験し、ある者は懲罰（天災と人災の両方）を体験し、ある者は淘汰され、ある者は生

き残る。この過程において、それぞれの集団が人間の一つの型を代表するように、各人が種類ごとに分類される。あらゆる人が淘汰されるというわけでも、完全にされるというわけでもない。中国人の素質は極めて乏しく、パウロのような自己認識をもつ者はごく少数しかいないからである。あなたがたのうちに、ペテロと同様に神を愛する決意をもつ者や、ヨブと同様の信仰をもつ者は殆どいない。あなたがたのうちに、ダビデのようにヤーウェを畏れ仕えた者やダビデと同程度の忠実心をもつ者は皆無に等しい。あなたがたは何とあわれなことか。

現在、完全にされることについて話すことは、一側面に過ぎない。何があろうと、あなたがたはこの証しの過程をしっかりと担わなければならない。もし神殿で神に仕えるよう求められたとしたら、どのようにそうするのか。祭司ではなく、長子や神の子としての地位もなかったとしたら、それでも忠実でいられるであろうか。それでも神の国を広める働きにおいて最大限の努力をすることができるであろうか。神に託された働きをしっかりと行うことができるであろうか。あなたのいのちがどの程度成長していようが、今日の働きによりあなたは心の中で完全に確信するようになり、あらゆる観念を捨て去る。あなたがいのちを追求するために必要なものを備えていようといまいと、神の働きにより、あなたは完全に確信するようになる。「わたしは神を信じているだけで、いのちを追求するとはどういう意味なのか分からない」と言う人がいる。また、「神への信仰についてはわたしはすっかり混乱してしまっている。わたしは自分が完全にされることは不可能だとわかっているので、刑罰を受ける心構えはある」と言う人もいる。このような、刑罰を受けたり滅ぼされたりする心構えがある人であっても、今日の働きは神が行っていることを認めさせなければならない。また、「わたしは完全にされることは求めないが、現在、わたしは進んで神の訓練をすべて受け入れ、正常な人間性を実際に生き、自分の素質を改善し、神の采配のすべてに服従する覚悟がある……」と言う人もいる。このように、彼らもまた征服され、証しを立てており、それは彼らに神の働きについて何らかの認識があることを証明する。この段階の働きは極めて迅速に行われており、今後は海外でさらに迅速に遂行される。現在、海外の人々は待ちきれずに中国に殺到している。だから、あなたがたが完全にされることができないのであれば、海外の人々を待たせることになる。その時、あなたがたがどれほどよく入ったかや、あなたがたの状態にかかわらず、時が来ればわたしの働きは終結し完成する。わたしの働きはあなたがたのせいで遅れることはない。わたしは全人類の働きを行っているのであり、あなたがたにこれ以上の時間を割く必要はない。あなたがたはやる気に欠け過ぎ、自覚に

欠け過ぎている。あなたがたには完全にされるだけの価値がない。ほとんど潜在力がないのである。将来、たとえ人がいつまでもだらしなく、いい加減で、素質を改善できないままであったとしても、それが全宇宙の働きを妨げることはない。神の働きが完了する時が来れば、それは終結し、人が淘汰される時が来れば、人は淘汰される。当然ながら、完全にされるべきで、完全にされるに値する人は完全にされる。しかし、あなたがたに本当に望みがなければ、神の働きはあなたがたを待たない。最終的に、あなたが征服されているのであれば、それを証しとみなすこともできる。神があなたがたに要求することには限りがある。人が達することのできる霊的背丈の高さがどれほどであれ、それがその人に要求される証しの高さである。このような証しが極限の高みに達し、鳴り響かんばかりに圧倒的なものとなると人間が想像するところではない。これがあなたがた中国人において達成されることは決してあり得ない。わたしは今までずっとあなたがたに参与してきて、あなたがた自身も見てきたことがある。すなわち、わたしはあなたがたに、わたしに背かないように、反抗的にならないように、中断や妨害を引き起こすようなことをわたしの背後でしないようにと告げてきた。このことについては幾度となく直接に忠告してきたが、それでさえ充分ではなかった。そうした者は振り返った途端に態度を変え、良心の呵責を一切感じることなく、密かに抵抗する者もいる。わたしがこれについて何一つ知らないとも思っているのか。わたしを困らせて、何も起こらないとも思っているのか。あなたがわたしに隠れてわたしの働きを取り壊そうとしている時、わたしがそれを知らないとも思っているのか。あなたの卑小なごまかしが自分の人格に取って代わることができるとも思っているのか。あなたはいつも見かけは従順であるが、密かに裏切りを企んでいる。心の中に邪悪な考えを秘めている。あなたのような者には、死でさえも罰として不十分である。あなたの中における聖霊の小さな働きが、あなたのわたしへの畏敬の代わりになるとも思っているのか。天に呼び求めることであなたは啓きを得たとでも思っているのか。恥知らず者が。ほんとうに無価値である。あなたは自分の「善行」が天に届き、それと交換に天が例外としてあなたにわずかな才能を授け、あなたを雄弁にし、他人を騙し、わたしをも騙せるようにしたとも思っているのか。何と理性を欠いているのか。あなたは啓きがどこから来るのか知っているのか。自分が誰の食物を食べて成長したのか知っているのか。何と良心が欠如していることか。あなたがたの中には、四、五年にわたる取り扱いの後でさえ変わっていない人もいる。あなたがたは、これらのことについて明瞭に理解しているというのに、である。あなたがたは自分の本性についても明瞭に理解しているべきである。いつの日か自分が見捨てられた時には、反論してはならない。奉仕において目上の者も目下の者も

騙す者は、多くの取り扱いを受けてきた。金銭に貪欲であるために少なからぬ取り扱いを受けてきた者もいる。また男女間に明確な境界を維持しないために、たびたび取り扱いを受けてきた者もいる。怠惰で肉のことばかり考え、教会を訪れても原則に従って振る舞わないので多くの取り扱いを受けてきた者もいる。どこに行っても証しを立てることができず、わがままかつ向こう見ずに振る舞い、故意に罪を犯しさえするために、それについて何度も警告されてきた者もいる。集会の際に字義や教義しか話さず、他の誰よりも自分がすぐれているかのように振る舞い、真理の現実が少しもなく、兄弟姉妹に陰謀を巡らせ、互いに張り合う者もいる。彼らはそのために度々暴露されてきた。わたしは何度もあなたがたにこのような言葉を告げてきた。だから今日、わたしはもうこれについては話さない。あなたがたの好きなようにするがよい。自分で決めなさい。多くの人がこのように取り扱いを一、二年にわたって受けただけではなく、三、四年におよぶ人もいる。さらには、信者になったときに取り扱いを受けたので、十年以上この経験をしている人もいる。しかし、現在まで、このような人たちにはほとんど変化が見られない。どうであろうか。あなたは豚のようなものではないのか。神はあなたに不当だとでも言うのか。自分が一定の水準に達せなければ、神の働きは終わらないなどと考えてはならない。あなたがたが神の要求を満たせないなら、神はなおもあなたがたのことを待つであろうか。はっきり言う。そのようなことはない。物事をそのように楽観視してはならない。今日の働きには時間制限があり、神はあなたとただ戯れているのではない。以前、効力者の試練を体験することについて、人は自分が確固として神の証しに立ち、神に征服されるには、ある点に達しなければならないと考えていた。自ら進んで喜んで効力者となり、日々神を讃美しなければならず、ほんの僅かでもだらしなかったり、いい加減であってはならなかった。そうして初めて真に効力者となると人は考えていた。しかしそれはほんとうにそうであろうか。当時、様々な種類の人が明らかにされた。彼らはあらゆる種類の振る舞いを示した。不満を述べる者もいれば、観念を広める者、集会に出るのをやめる者、果ては教会の資金を分配する者さえいた。兄弟姉妹は互いに陰謀を巡らせていた。それはまさに大解放であったが、ひとつだけ良いことがあった。それは、誰も退かったことである。それがこのことにおける最良のことであった。それゆえ彼らはサタンの前で証しをし、その後神の民としての身分を得て、今日に至っている。神の働きはあなたの想像通りには行われぬ。それどころか、時間切れとなったら、あなたがどの点に達したかとは無関係に働きは終了する。「あなたのそのような行動は、人間を救うことも愛することもない。あなたは義なる神ではない」と言う人がいるかもしれない。率直に伝える。今日のわたしの働きの核心は、あなたを征服して証しさせるこ

とである。あなたを救うことは付随事項に過ぎない。あなたが救われるかどうかは、あなたの追求により決まるのであり、わたしとは無関係である。しかし、わたしはあなたを征服しなければならない。わたしをいつも引き摺り回そうとしてはならない。現在、わたしが働きあなたを救うのであり、あなたが働きわたしを救うのではないのである。

現在、あなたがたが理解するようになったことは、歴史上の完全にされなかった他の誰よりも高度である。それが試練についての認識であろうと神への信仰であろうと、どれも神を信じる他の誰のものよりも高度である。あなたがたが理解しているのは、環境の試練を受ける前に知るようになったことであるが、あなたがたの実際の霊的背丈は、そのことと全く相容れない。あなたがたが知っていることは、あなたがたが実践することよりも高度である。あなたがたは、神を信じる人は神を愛すべきであり、祝福のためでなく、神の旨を満たすためだけに努力すべきであると言うが、あなたがたの生活に現れているものはそれとは程遠く、ひどく汚れている。ほとんどの人は、平穩やその他の利益のために神を信じる。自分の利益にならなければ神を信じず、神の恵みを受けられないのであれば不機嫌になる。あなたが言ったことが、どうしてあなたのほんとうの霊的背丈でありえようか。家庭において避けられない出来事、たとえば子どもの病気、家族の入院、農作物の不作、家族からの迫害等については、このようなよく起こる日常的なことさえもあなたには過剰である。このようなことが起きると、あなたは当惑してどうして良いかわからなくなる。そして大抵、神について不満の言葉をこぼす。神の言葉に騙されたとか、神の働きに振り回されたと不平を言う。あなたがたはこのような思いを抱いていないのか。このようなことは自分にはまれにしか起こらないと思っているのか。あなたがたは毎日こうした出来事のただ中に生きている。あなたがたは神への信仰を成功させることや、いかに神の旨を満たすかについては少しも考えない。あなたがたの真の霊的背丈は低すぎて、ひよこの背丈よりも低い。自分の家族の事業が損失を出すと神について不平を言い、神の守りが無い環境に置かれると、やはり神について不平を言い、ひよこが一羽死んだり、囲いの中の年老いた牛が病を煩っただけでも不平を言う。息子が結婚する時になったものの家族に十分な資金がないときも、不平を言い、もてなしの本分を尽くしたいのにその余裕がないときも不平を言う。あなたは不満であふれており、そのために時折集会へ行かなかったり、神の言葉を飲み食いしなかつたり、長期間にわたって否定的になったりする。今日あなたに起こる出来事は一つとしてあなたの将来の展望や運命と関係がない。このようなことは神を信じていなくても起こることだが、今日あなたはその責任を神に負わせ、神が自分を淘汰したと主張する。神への信

仰はどうなったのか。あなたは本当に自らのいのちを神に捧げたのか。あなたがたがヨブと同様の試練を受けたなら、今日、神に付き従うあなたがたのうち、揺るぎなく立つことができる者は一人もおらず、みな倒れるであろう。あなたがたとヨブの間には雲泥の差がある。今日自分の資産の半分でも差し押さえられたなら、あなたがたは神の存在さえ否定するであろう。自分の息子や娘が自分から奪い去られれば、不当だと叫びながら町中を走り回るであろう。生活に行き詰まったならば、神に挑んで文句をぶつけようとするであろう。わたしが最初になぜ多くの言葉を語って脅したのかと疑問に思うことであろう。このようなとき、あなたがたはどんなことでもする。このことは、あなたがたがまだ真の識見も真の霊的背丈も得ていないことを示している。したがって、あなたがたの試練は大きすぎる。なぜなら、あなたがたは多過ぎるぐらいに知識はあるが、真に認識しているのは、気づいていることの数千分の一にも満たないからである。単に理解や知識を得ることに留まってはならない。どの程度を本当に実践でき、自分の労苦の汗がどれほどの聖霊からの啓きと照らしに結実し、自分の実践のうち幾つにおいて決意を実現したかを、検討してみるべきである。自分の霊的背丈と実践を真剣にとらえるべきである。神への信仰においては、誰かのために単に上辺だけの身振りをしようとしてはならない。最終的に真理といのちが獲得できるか否かは、あなた自身の追求により決まるのである。

脚注

a. 寒號鳥の話はイソップのアリとキリギリスの寓話によく似ている。寒號鳥は温暖な時は巣を作らずに眠っていることを好む。そのため、隣に住むカササギが繰り返し警告していたにも関わらず、冬が来ると寒號鳥は凍死してしまう。

実践（４）

今日わたしが語る平安と喜びは、あなたが信じ理解しているものと同じではない。あなたはかつて、平安と喜びとは一日中嬉しい気持ちでいること、家族に病気や不幸がないこと、常に心が満足していて悲しい気持ちが一切ないこと、そして自分のいのちの成長がどの程度であるかを問わず、説明しがたい喜びがあることだと考えていた。そしてさらに昇給や息子の大学進学もそれに加わっていた。あなたはそうしたことを思いながら神に祈り、神の恵みが極めて大きいことを知って、満面の笑みで大喜びし、神への感謝の気持ちが止まらなかった。そうした平安と喜びは、聖霊の臨在を得ることに伴う真の平安と喜びではない。それは肉の満足によって生じる平安と喜びである。現在は何の

ような時代かを理解しなければならない。今は恵みの時代ではなく、もはやパンで腹を満たすことを求める時代ではない。あなたは家庭のことがすべて順調なので喜びに溢れているかもしれないが、あなたのいのちはまさに息絶えようとして喘いでいる。そのため喜びがいかに大きかろうと、聖霊はあなたと共にいない。聖霊の臨在を得ることは簡単だ。ただ自分がなすべきことを適切に行ない、人間の本分を尽くして立派に役割を果たし、自分の欠点を補うのに必要な物事を備えることができればそれでよい。自分のいのちの重荷を常に負い、真理を把握できたことや神の現在の働きを理解できたことで喜びを感じているなら、それが真に聖霊の臨在を得ているということだ。時にどう切り抜けなければよいかわからない問題に遭遇したり、交わりで話し合われた真理を理解できなかったりして、不安に囚われたなら、それは聖霊があなたと共にあることの証明である。それはいのちの経験における一般的な状態なのだ。聖霊の臨在があることとないことの違いは理解しておく必要があり、その見方があまりに短絡的であってはならない。

従来、聖霊の臨在を得ることと聖霊の働きを得ることは別だと言われていた。聖霊の臨在を得ている場合の正常な状態は、正常な考え、正常な理知、そして正常な人間性を有していることに表われる。その人の性格は従来のもまだが、心には平安があり、外面的には聖徒の礼節を備えるようになる。それが、聖霊が共にあるときの人の状態である。聖霊の臨在を得ているとき、人の考え方は正常であり、空腹になれば食べたいと思い、喉が渴けば水を飲みたいと思う。……そのような普通の人間性の表われは聖霊の啓きではなく、人間の正常な考え方であり、聖霊の臨在を得ているときの正常な状態である。中には、聖霊の臨在を得た者は空腹を覚えず、疲労を感じず、家族のことも一切考えず、ほぼ完全に肉と離別しているように見える、と勘違いしている人もいる。実際は聖霊が人と共にあればあるほど、その人はより正常になる。そうした人は神のために苦しんで物事を手放し、神のために自らを費やし、神に忠実になるということを知っており、さらに衣食についても考慮している。言い換えれば、そうした人は人が備えるべき正常な人間性を一切失っておらず、代わりに特別な理知を備えているのだ。彼らは時折、神の言葉を読んだり、神の働きについて深く考えたりし、心の中には信仰があり、進んで真理を追い求める。当然ながら、聖霊の働きはこうした基盤の上に立脚している。正常な思考がなければ、その人には理知がなく、それは正常な状態ではない。正常な思考をもち、聖霊がその人と共にあれば、その人は間違いなく正常な人間の理知を有しており、ゆえに正常な状態にある。神の働きを経験する中で、聖霊の働きを得ることは時折あるが、一方で聖霊の臨在はほぼ常にそこにある。人の理知と思考が正常である限り、

そしてその人の状態が正常である限り、聖霊は間違いなく彼らと共にいる。理知と思考が正常でなければ、その人の人間性も正常ではない。もしも今、聖霊の働きがあなたの中にあれば、聖霊も間違いなくあなたと共にある。しかし聖霊があなたと共にあるからといって、必ずしも聖霊があなたの中で働きを行なっているとは限らない。なぜなら聖霊は特別な時に働きを行なうからである。聖霊の臨在を得たとしても、人々は正常な生活を維持できるだけであり、聖霊は特定の時にしか働きを行なわない。たとえばあなたが指導者または働き手であるなら、教会のために水と滋養を施しているとき、聖霊があなたを啓いて特定の言葉を与え、その言葉が他の人たちを啓発し、兄弟姉妹の実際的な問題のいくつかを解決できることがある。そのようなとき、聖霊は働きを行なっている。場合によってはあなたが神の言葉を飲み食いしているとき、聖霊があなた自身の経験にとりわけ関連する特定の言葉であなたを啓き、それによって自分の状態をよりよく認識できるようにしてくれることもある。それもまた聖霊の働きである。あなたがたは時折、わたしの話を聞いてその言葉を自分の状態と比較したり、感動したり奮い立ったりすることもあるが、それもすべて聖霊の働きである。中には聖霊が常に自分の中で働きを行なっていると言う者もいるが、それはあり得ない。聖霊が常に自分と共にあると言うのなら、それは現実的だろう。自分の思考や理知は常に正常だと言うのなら、それもまた現実的であり、聖霊がその者と共にあることを示すだろう。しかし、聖霊は常に自分の中で働きを行なっており、自分はどの瞬間にも神により啓かれ、聖霊によって感動し、常に新たな認識を得ていると言うのなら、それは決して正常ではなく、極めて超自然的なことである。そうした人々は、疑いの余地なく悪霊である！ 神の霊が受肉した時でさえ、時には休息し、食事もある必要があるのだから、人間については言うまでもない。悪霊に取り憑かれた者は、肉の弱さがないように見える。そうした者はあらゆる物事を断念して捨て去ることが可能で、感情をもたず、苦しみに耐えることができ、肉体を超越しているかのようにまったく疲労を感じない。これは極めて超自然的なことではないか。悪霊の働きは超自然的であり、人間にそのようなことはできない。判断力のない者たちは、そうした人を見ると羨ましがり、神に対する彼らの信仰は極めて強く優れていて、彼らにはひとかけらの弱点も見えないと言う。実のところ、それはすべて悪霊の働きの表われなのだ。なぜなら正常な人間には必然的に人間の弱さというものがあり、それが聖霊の臨在を得ている者の正常な状態だからである。

揺るぎなく証しするということは何を意味するのか。中には今のように付き従っていただくだけで、いのちを得られるかどうかは考えていないと言う者もいる。彼らはいのちを

追い求めていないが、後戻りすることもなく、この段階の働きが神によって行なわれていることだけを認めている。これは証しに失敗したということではないだろうか。こうした人々は征服されたことすら証ししない。征服された者は、他人がどうするかとは無関係に付き従い、いのちを追求することができる。そうした人は実際の神を信じているだけでなく、神による采配のすべてに従うことも知っている。それが証しをする人というものだ。証しをしない者はまったくいのちを追求したことがなく、いまだでたらめに付き従っている。あなたは付き従っているかもしれないが、それは征服されたことを意味しない。神の現在の働きについて何も理解していないからである。征服されるには一定の条件を満たす必要があり、付き従うすべての者が征服されるわけではない。なぜならあなたは心の中で、なぜ現在の神に付き従わねばならないのかをまったく理解しておらず、また自分が現在までどのようにやってきたのか、現在まで自分を支えてきたのは誰なのかも知らないからだ。中には神への信仰の実践において、常にでたらめで混乱している人がいる。ゆえに、付き従うことは必ずしも証しができるという意味ではない。真の証しとはいったい何か。ここで言う証しには二つの部分があり、一つは征服されたことの証しで、もう一つは完全にされたことの証し(それは必然的に、将来のより大きな試練と苦難の後に行なわれる証しとなる)である。つまり苦難や試練の時に揺るぎなく立つことができれば、それで第二段階の証しをしたことになるのだ。現在重要なのは証しの第一段階であり、すなわち刑罰と裁きの試練の一つひとつにおいて揺るぎなく立てるということだ。それが、征服されたことの証しである。なぜなら今は征服の時だからだ(今は神の地上における働きの時であることを知らねばならない。受肉した神の地上におけるおもな働きは、裁きと刑罰を通じて、神に付き従う地上のこの集団を征服することなのだ)。征服されたことを証しできるかどうかは、あなたが最後まで付き従えるかどうかだけでなく、より重要な条件として、神の働きの各段階を経験する中で神の刑罰と裁きを真に理解できるかどうか、そしてこの働きのすべてを真に把握しているかどうかにかかっている。ただ最後まで付き従えば、すり抜けてしまえるというわけではない。あらゆる刑罰と裁きに自ら進んで身を委ね、経験した働きの各段階を真に理解し、神の性質に関する認識を得て、それに服従することができなければならないのだ。それが征服されたことの究極の証しであり、あなたに要求されていることである。征服されたことの証しというのは、おもに神の受肉に関する認識を意味する。重要なのは、証しのこの段階は神の受肉に対するものだということである。あなたがこの世の人々や権力者の前で何をするか、何を言うかは問題ではない。何よりも問題なのは、神の口から出た言葉と神の働きのすべてに従うことができるかどうかである。したがって証しのこ

の段階は、サタンと神の敵すべてを対象としている。つまり、神が二度目の受肉を行なって一層偉大な働きを行なうために到来することを信じず、さらに神の再受肉という事実を信じない、すべての悪魔と敵たちのことである。言い換えれば、それはすべての反キリスト、すなわち神の受肉を信じないすべての敵を対象としているのだ。

神を思い待ち望んでいるということが、神に征服されたことの証明にはならない。征服されたかどうかは、神が肉となった言葉であることを信じるかどうか、言葉が受肉したことを信じるかどうか、そして霊が言葉となり、言葉が肉において現われたことを信じるかどうかによって決まる。これがもっとも重要な証しである。どのように付き従うか、どのように自分を費やすかは問題ではない。不可欠なのは、言葉が受肉したこと、真理の御霊が肉において具現化したこと、すなわちすべての真理と道といのちが肉において到来し、神の霊が真に地上に現われ、霊が肉において到来したことを、この普通の人間性から見出せるかどうかである。表面的に見れば、それは聖霊による受胎とは異なるように思われるが、この働きから、霊がすでに肉において具現化したこと、さらに言葉が受肉し、言葉が肉において現われたことをより明確に見てとれる。ここから、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」という言葉の真意を理解できる。さらにあなたは、今日の言葉が神であることを理解し、言葉が受肉するのを目の当たりにしなければならない。それがあなたになし得る最高の証しである。それは受肉した神についてあなたが真の認識を有していることの証明であり、あなたは神を知ることができるだけでなく、今日自分が歩んでいる道がいのちの道であり、真理の道であることを認識しているのだ。イエスが行なった働きの段階は、「言は神と共にあった」という言葉の内容を満たしたに過ぎない。神の真理は神と共にあり、そして神の霊は肉と共にあって、その肉と不可分だった。つまり受肉した神の肉は神の霊と共にあったのであり、それは受肉したイエスが神による最初の受肉だったことのより大きな証拠である。この段階の働きはまさに「言葉が受肉した」という表現の内なる意味を実現し、「言は神と共にあった。言は神であった」という表現に一層深い意味を添えたのであり、「初めに言があった」という言葉を堅く信じさせるものである。つまり、神は創造の時に言葉をもっており、神の言葉は神と共にあり、神と不可分だった。そして最後の時代、神は自身の言葉の力と権威を一層明らかにし、人が神のすべての道を目にできるようにする。すなわち、神のすべての言葉を聞けるようにするのだ。それが最後の時代の働きである。あなたはこうした事柄を完全に知り尽くす必要がある。それは肉を知るという問題ではなく、肉と言葉をいかに理解するかという問題なのだ。これがあなたの行なわね

ばならない証しであり、すべての人が知らなければいけないことである。それは二度目の受肉の働きであり、そして神の最後の受肉であるため、この働きは受肉の意義を完全なものとし、神の肉におけるすべての働きを完全に遂行して明らかにし、神が肉にある時代の幕を閉じることになるのだ。それゆえ、あなたは受肉の意味を理解しなくてはならない。問題はあなたがどのくらい奔走するか、他の外的な物事をどのくらい行うかではなく、受肉した神に真に服従して自分の存在のすべてを神に捧げ、神の口から発せられる言葉のすべてに従うことができるかどうかである。これがあなたのすべきことであり、守るべきことなのだ。

証しの最終段階は、あなたが完全にされることができかどうかの証しである。つまり、受肉した神が語った言葉をすべて理解したうえで、神に関する認識を備えて神について確信をもち、神が語ったすべての言葉を生き、神が要求する条件を満たすことだ。その条件とはペテロの生き方とヨブの信仰を身につけることであり、死に至るまで神に従い、自分のすべてを神に捧げ、最終的には基準を満たす人間像、つまり神の刑罰と裁きを経験した後、征服され完全にされた者の人間像に到達するということなのだ。これが最終的な証しであり、最終的に完全にされた人間が行なうべき証しである。これらはあなたが行なうべき証しの二つの段階であり、この二つの段階は相互に関連していて、いずれも不可欠なものだ。しかし知っておかなければならないことが一つある。それは、現在わたしがあなたに要求している証しは、この世の人々や特定の個人に向けられるのではなく、わたしがあなたに求めるものに向けられるということだ。それはあなたがわたしを満足させられるかどうか、わたしがあなたがた各人に要求する基準を完全に満たせるかどうかによって測られる。このことを、あなたがたは理解しなければならない。

実践（５）

恵みの時代、イエスはいくつかの言葉を語り、一段階の働きを行った。そうした言葉と働きには、すべて前後関係があり、当時の人々の状態に適したものであった。イエスは当時の状況に合わせて言葉を述べ、働きを行った。またいくつかの預言も行い、終わりの日には真理の御霊がやって来て、一段階の働きを行うと預言した。それはつまり、イエス自身が、その時代に行った働き以外については理解していなかったことを意味しており、言い換えれば、受肉した神による働きは限定的なものだった。そのためイエスはその時代の働きのみを行い、自身と無関係な働きは行わなかった。当時、イエスは感

覚や幻に従ってではなく、ただ時代と状況に即して働きを行った。イエスを導いたり、指示したりした者はいなかった。イエスの働き全体がイエスの存在そのものであり、それは受肉した神の霊が遂行しなければならない働きで、また受肉によってもたらされた働きのすべてであった。イエスは単に、自身が見聞きした物事に従って働きを行った。言い換えれば、霊が直接働きを行ったということであり、使いがイエスの前に現れて夢を見させたり、大いなる光がイエスを照らして何かを見せたりする必要はなかったのである。イエスは自由に制約なく働きを行った。イエスの働きは、感覚に基づくものではなかったからである。すなわちイエスが働きを行うとき、手探りで模索したり推測したりすることはなく、イエスは容易に物事を成し遂げ、自分の考えや自分の目で見た物事に従って働き語り、そしてそれがただちにイエスに付き従っていた使徒たちの糧となった。これが神の働きと人間の働きの違いである。人間が働きを行うときは、探求と模索をくり返し、常に他人が築いた基盤の上で模倣し熟慮しながら、より深い入りを達成しようとする。神の働きは神の存在そのものを与えるものであり、神は自身がなすべき働きを行う。神は人間の働きに由来する認識を用いて教会に糧を与えるのではなく、人々の状態に基づいてその時の働きを行う。そのため神がこのように働きを行うことは、人間が働きを行うよりも数千倍自由である。人間にとっては、神が自身の本分を守らず、望むままに働きを行っているようにさえ見えるかもしれないが、神が行う働きはすべて新しいものである。しかし知っておかなければならないのは、受肉した神の働きは決して感覚に基づかないということだ。当時、イエスが磔刑に処される働きを終えた後、イエスに付き従っていた使徒たちは、ある程度の経験を積んだ時点で、神の日が近づいており、まもなく主と会うことになると感じていた。それは彼らの抱いた感覚であり、使徒たちにとってはその感覚が何よりも重要なものだった。しかし実際には、人間の感覚は信頼できるものではない。使徒たちは自分の旅路が終わりに近づいているように感じたり、自分たちが行った働きや経験した苦難がすべて神に定められたものだと感じたりした。そしてパウロも、自分は走るべき行程を走りつくし、戦いを立派に戦いぬき、義の冠が自分を待っているだけだと語った。それはパウロが抱いた感覚であり、パウロはそれを手紙に記して諸教会に送った。そうした行動は、パウロが教会のために負った重荷によるものだったため、聖霊はそれに留意しなかった。そうした言葉を述べたとき、パウロは何の不安もなく、咎めを感じることもなかったため、その感覚を至って正常で正しいものと考え、それが聖霊から来たものだと思っていた。しかし今になってみれば、それはまったく聖霊から来たものではなく、人間が抱いた幻想でしかなかったことがわかる。人間は多くの幻想を抱いているが、神はそうした幻想に注意を払うこともなけ

れば、それが発生したときに意見を言うこともない。聖霊の働きの大部分は人間の感覚を通して行われるものではなく、聖霊が人間の感覚の中で働きを行うのは、神が受肉する前の暗く困難な時代や、使徒も働きを行う者もない時代だけである。その段階においては、聖霊の働きが人々にある種の特別な感覚を抱かせる。たとえば人々は神の言葉の導きを得ていないとき、祈りの中で言い尽くせない幸福を感じ、心の中には喜びを得て、安らかな落ち着いた気持ちになる。そして言葉の導きを得ると、霊が明るくなるのを感じ、行動には実践の道が与えられ、同時に自然に平安を感じて心が安らぐ。危険にさらされたり、特定の行為が神によって止められたりすると、人々は心の中で胸騒ぎを感じて落ち着かなくなる。それは完全に、聖霊が人間に与える感覚である。しかし過酷な環境によって恐怖の雰囲気が発生し、人々が極度に不安を感じ怯えるようになった場合、それは通常の人間性の現れであり、聖霊の働きとは関係がない。

人間はいつも自分の感覚の中で生活しており、長年にわたってそのように生きてきた。人は心の中が落ち着いていると行動し（自分の意欲を平安の感覚だととらえるため）、心の中が落ち着いていないときは行動しない（気の進まなさや嫌気を不安の感覚だととらえるため）。物事が円滑に進めば、人はそれを神の旨だと考える。（実際には、そうした物事は円滑に進んで然るべきものであり、それが自然な物事の法則なのである。）物事が円滑に進まないと、人はそれが神の旨でないと考え、そうした物事に出くわすと人は行動をやめる。そのような感覚は正確ではなく、それに従って行動すると、多くの遅れが生じる。たとえば真理を実践に移すことは確かに困難をとまなうし、神の旨を実践することはさらに困難である。多くの場合、良いことは実現が困難なものであり、「良いことが実現する前には通常苦難があるものだ」と言われるとおりだ。人々は生活の中で多くの感覚を持ちすぎており、そのためさまざまな事柄について、いつも途方に暮れ不安を抱えている。真理を理解できない限り、人間には何一つ明らかにならない。しかし通常、人間が感覚に従って行動したり話したりしていても、それが大原則に反するものでない限り、聖霊は一切反応しない。それはパウロが感じた「義の冠」のようなものである。長年の間、誰一人パウロの感覚が誤りだったと考える者はおらず、パウロ自身も自分の感覚が誤っていると感じることはなかった。人間の感覚はどこから来るのだろうか。もちろん、それは人間の脳から生じる反応である。さまざまな環境や事柄によって、さまざまな感覚が生み出される。ほとんどの場合、人は人間の論理を用いて推論し、そこから一連の公式を得た結果として、人間のさまざまな感覚が形成される。人間は無意識のうちに独自の論理的推論を行っており、その結果として、生活の中でこう

した感覚に依存するようになる。それはパウロの「義の冠」や、ウィットネス・リーの「空中で主と出会うこと」などのように、人生における心の支えとなるのだ。神はこうした人間の感覚を仲裁する術をほとんど持たず、それらが生まれるままにしておかねばならない。今日わたしは、あなたに真理のさまざまな側面について明白に語った。あなたが自分の感覚に従い続けるのなら、あなたは曖昧さの中に生き続けているのではないか。あなたは自分に対して明らかに述べられた言葉を受け容れず、常に自分の個人的な感覚に依存している。その点で、あなたは象を語る盲人に似ていないか。そして最終的に、あなたは何をを得るだろうか。

今日、受肉した神が行われた働きはすべて現実である。それはあなたが感じたり想像したりできるものではなく、ましてや推測などできるものではない。それはただ、自分に物事が発生したときに理解できるだけである。場合によっては、物事が発生しても明確に理解できない人もいる。人々は神が自ら行動し、起こっていることの真実を完全に明らかにして、初めて理解するようになる。当時、イエスの使徒たちの間には数多くの幻想があった。使徒たちは神の日が間近に迫っており、自分たちはまもなく主のために死んで、主イエスと会えるのだと信じていた。ペテロはこの感覚のため、まる7年間も待ち続けたが、それでもその時は到来しなかった。使徒たちは自分たちのいのちが成熟していると感じており、心の中の感覚は増大しますます鋭敏になったが、それでも彼らは数多くの失敗を経験し、成功することはできなかった。使徒たち自身、何が起きているのかわかっていなかったのだ。真に聖霊に由来する物事が、成就されないことがあるだろうか。人間の感覚は信頼できるものではない。人間には独自の考え方や概念があるため、人はその時の状況や状態に基づいていくらかでも関連付けを行う。特に、健全な考え方を持つ人々に何らかの出来事が発生すると、そうした人々は興奮し、さまざまな関連付けを生み出さずにいられなくなる。これは特に、高尚な知識や理論を備えた「専門家」に当てはまることで、彼らの関連付けは長年にわたる人生経験の結果としてますます豊富になる。そうした関連付けは、その専門家たちが気付かぬうちに彼らの心を支配し、非常に強い感覚となり、彼らはそれで満足することになる。人は何かをしようと思うと、心の中に感覚と想像が生まれ、そしてそれらを正しいと考える。しかし後になって、そうした感覚や想像が成就していないことに気づいても、何がいけなかったのかを理解できない。おそらくは、神が計画を変更したのだと思い込むだろう。

人間が感覚を抱くことは不可避である。律法の時代にも、多くの人々が特定の感覚を抱いていたが、彼らの感覚の誤りは現在の人々よりも少なかった。なぜなら以前は、人

間がヤーウェの出現を目の当たりにすることができ、使者と会うことも可能であり、また夢も見ていたからである。今日の人々は幻や使者を見ることができず、そのために感覚の誤りが増えている。現在の人々が何かを特に正しいと感じ、それを実践するとき、聖霊がそれを咎めることはなく、そうした人々の内面はまったく安らかである。そうした人々はただ事後に、交わりによるかまたは神の言葉を読むことによってのみ、自分が誤っていたことを知るのである。このことの一側面として、人間の前には使者が現れず、夢は非常に希であり、人々は空の幻をまったく目にしていない。また別の側面として、聖霊は人間の中での咎めと懲らしめを増やしておらず、すなわち人間の中に聖霊の働きはほとんどない。そのため、人間が神の言葉を飲み食いせず、真理を実践的に追求せず、実践の道を理解しないならば、人間は何も刈り入れることがないだろう。聖霊の働きの原則は、自身の働きに関与しない物事には一切留意しないということである。何か神の管轄外であれば、神は決して干渉や介入を行わず、人間に好きなように問題を起こさせておく。あなたはしたいように行動することができるが、いずれ慌てふためき、途方に暮れる日が来るだろう。神はただ自身の肉にあってひたすら働きを行うのみで、人間の働きには介入しない。その代わり、神は人間の世界に十分な余地を与えつつ、自身がなすべき働きを行う。あなたは今日何か誤ったことをしても咎められず、また明日何か良いことをしても見返りを受けることはない。それは人間の問題であり、聖霊の働きとは一切無関係である。それはまったくわたしの働きの範囲外なのだ。

ペテロが働いていた当時、彼は多くの言葉を述べ、多くの働きを行った。そうした言葉や働きが、一切人間の観念から出たものではなかったということがありうるだろうか。それらがすべて聖霊に由来するということはあるまい。ペテロは神の被造物に過ぎず、神に付き従う者であり、イエスではなくペテロであって、イエスとペテロの本質は同じではない。ペテロは聖霊に遣わされたとはいえ、ペテロの行ったことすべてが聖霊に由来するということはない。なぜならペテロは結局のところ、ひとりの人間だからである。パウロもまた多くの言葉を述べ、教会に宛てて少なからぬ手紙を書き、そのうちいくつかは聖書に収められている。聖霊が一切意見を述べなかったのは、パウロがそのとき聖霊に用いられていたからである。パウロはいくらかの経験と認識を得て、それを書き留め、主のもとにある兄弟姉妹へと送った。イエスは一切反応しなかった。聖霊は当時、なぜパウロを止めなかったのだろうか。それは人々の普通の考え方からは一種の不純さが生じるもので、それが不可避だからである。そしてまた、パウロの行動は、障害や障害の域に達することはなかった。こうした類の人間性の働きがあると、人間はそ

れを受け容れやすい。人間の普通の考え方に含まれる不純さが何物も阻害しないのであれば、それは普通とみなされる。言い換えれば、普通の考え方を持つ人間は皆、そのように考えることができる。人間は肉にあるとき、独自の考え方を持っているが、それを排除する術はない。しかし神の働きをしばらく経験し、一定の真理を理解すると、こうした考え方は減少していく。そしてさらに多くを経験すると、物事を明確に理解できるようになり、それによって物事を阻害することが少なくなる。つまり、人間の想像や論理的推測が否定されると、人間の異常な感覚は減ることになる。肉にあって生きるすべての者には独自の考えがあるが、最終的には神の働きにより、人間は考え方によって阻害されなくなり、生活の中で感覚に依存することがなくなり、人間の実際の霊的背丈が成熟し、現実の中で神の言葉によって生きられるようになり、曖昧で空虚なことを行わなくなって、その結果、人間は妨害を起こすような行動を取らなくなる。こうして人間は幻想を見なくなり、それ以降は行動がその人間の真の霊的背丈となるであろう。

征服の働きの内幕（１）

サタンに深く墮落させられた人類は、神なるものが存在することを知らず、神を礼拝することをやめてしまった。初めに、アダムとエバが創造された時、ヤーウェの栄光と証しは常に存在していた。しかし、人間は墮落させられた後、その栄光と証しを失った。なぜなら、誰もが神に反抗し、神を畏れ敬うことをすっかりやめてしまったからである。今日の征服の働きは、その証しと栄光のすべてを取り戻し、あらゆる人間に神を崇めさせ、被造物の間に証しを生み出すためである。これが、この段階の働きにおいて達成されなければならないことである。厳密に言って人類はどのように征服されるのか。それは、この段階の言葉の働きを用いて、人間を十分に確信させることによって行われる。また、暴露、裁き、刑罰、情け容赦ない呪いを用いて人間を完全に服従させることによっても行われる。人間の反抗的性質を明らかにし、その抵抗を裁くことで人間に人類の不義と汚れを知らしめ、それらを神の義なる性質の引き立て役として使うことによっても行われる。このように言葉をおもに用いて人間を征服し、完全に確信させる。言葉は人類を征服するための究極的手段であり、神の征服を受け入れる者はみな、神の言葉による鞭と裁きを受け入れなければならない。現在の言葉を語る過程は、征服そのものの過程である。では具体的に、人はどのように協力すべきなのか。これらの言葉をどのように飲食するかを知り、言葉を理解することで協力するのである。人がどのように征服されるかについては、それは人が自分でできることではない。あなたにできるのは、これらの言葉を飲み食いすることによって自分の墮落と汚れ、反抗心と不義とを知

り、神の前にひれ伏すことだけである。神の心意を把握した後に、それを実行に移すことができ、そしてビジョンを持ち、これらの言葉に完全に従うことができ、自分勝手な選択をしないならば、あなたは征服されている。そして、それは言葉による成果である。なぜ人類は証しを失ったのか。それは誰も神を信じず、もはや人の心には神の居場所がなくなったからである。人類の征服とは、人類にこの信仰を回復させることである。人は常にこの世に向こう見ずに突き進み、あまりにも多くの望みを胸に抱き、将来にあまりにも多くの期待をかけ、あまりにも多くの途方もない要求をする。人はいつも自分の肉のことを考え、肉のために計画しているが、神を信じる道を求めることにはまったく興味がない。人の心はサタンの虜となり、神を畏れ敬う心を失い、サタンに執着している。しかし、人間は神に創られた。こうして、人間は証しを失ってしまった。つまり、神の栄光を失ったということである。人類を征服する目的は、人間の神への畏敬による栄光を取り戻すことである。それは次のようにも言える。いのちを追い求めない人が大勢いて、たとえいのちを求める人がいたとしても、それは極少数である。人はもっぱら自分の将来のことに気をとられており、いのちのことにはまったく注意を払わない。神に逆らい、抵抗し、背後で神を裁き、真理を実践しない人もいる。今は、このような人は無視され、当分はこのような反逆の子たちについて何も行われぬ。しかし将来は、あなたは闇の中に住み、泣き叫んで歯ざしりすることになる。光の中に生きているうちは、その貴重さを感じないだろうが、いったん暗夜の中に住めばそれに気づき、そのとき後悔する。今はいいかもしれないが、後悔する日が訪れる。その日が到来し、暗闇が地を覆い、もはや光がなくなった時、後悔しても遅すぎる。今の時を大切にしないのは、現代における働きを理解していないからである。いちど全宇宙の働きが始まれば、すなわち、わたしが今日言っていることのすべてが現実となる時、多くの人が頭を抱えて悔し涙を流すことになる。これこそ、暗闇の中に落ち、泣き叫び、歯ざしりすることではないのか。心からいのちを追い求め、完全にされる人は役に立つことができる。一方、役に立たない反逆の子らは暗闇の中に落ちる。聖霊の働きを失い、何もかも意味がわからなくなる。彼らはこのように懲罰の中に陥り、呻いては泣き叫ぶのである。もしあなたがこの段階の働きにおいて十分に用意が整い、いのちにおいて成長しているなら、あなたは用いられるに相応しい。少しも用意が整っていないなら、たとえ次の段階の働きのために呼ばれたとしても、役に立つには不適格である。この時点でいくら自分を整えたくとも、次の機会はない。神はもう去ってしまっている。そうなれば、今あなたの目の前にあるような機会をいったいどこに行きつけて見つけるのか。今、神自身が提供している訓練をいったいどこに行きつけて受けようというのか。その時には、神が自ら語

り声を発することはない。あなたにできるのは、今日語られていることを読むことだけである。どうして容易に理解できるであろうか。どうして後の生活が今より良いことがありえようか。その時点で、泣き叫び、歯ぎしりし、生き地獄そのものを苦しむことにならないのか。祝福は今あなたに授けられているというのに、それをどのように享受すべきなのかがわかっていない。祝福の中で生きているのに、気付いていない。あなたが破滅し苦しむように運命付けられている証拠である。現代は抵抗する人もいれば、反逆する人もいるし、あれをしたりこれをしたりという人もいる。わたしはあなたをただ無視するが、わたしがあなたがたが何をしているか気付いていないと思ってはならない。わたしはあなたがたの本質を理解していないのか。なぜわたしに逆らい続けるのか。あなたは自分のために、いのちと祝福を追い求めるために、神を信じているのではないのか。あなたに信仰があるのは、自分のためではないのか。現在、わたしは言葉を語ることでのみ征服の働きを行っている。この征服の働きが完了すれば、あなたの最後は明らかになる。はっきりと説明しなければならないであろうか。

現在の征服の働きは、人間の結末がどのようなになるかを明らかにすることを意図する。なぜわたしは今日の刑罰と裁きは、終わりの日における大いなる白い玉座の前での裁きだと言うのか。あなたにはこれがわからないのか。なぜ征服の働きは最終段階なのか。これはまさしく、それぞれの種類の人間が最後にどうなるかを明らかにすることではないのか。それは、刑罰と裁きとによる征服の働きの過程において、あらゆる人が自分のありのままの姿をあらわし、その後それぞれの種類に分類されるようにするためではないのか。人類の征服というよりも、これはむしろ各種の人間がどのような最後を迎えるのかを示すことだと言った方が良くらいである。つまり、これは人の罪を裁き、それから人の様々な種類を明らかにし、それにより、人が悪であるか義であるかを判定することである。征服の働きの後に、善に報い悪を罰する働きが続く。完全に従う人々、つまり、完全に征服された人々は、神の働きを全宇宙に広める次の段階に配置される。征服されなかった者は闇の中に置かれ、災厄に遭う。このように人間はその種類によって分類され、悪を行う者は悪として分類され、二度と陽の光を浴びることがない。義人は善として分類され、光を受け、永遠に光の中で生きる。あらゆるものの終わりは近く、人間の終わりは目の前にはっきりと示され、あらゆるものはその種類によって分けられる。それなら、どうして人間が種類別に分類されるという苦悩から逃れられようか。それぞれの種類の人間の異なる結末は、あらゆるものの終わりが近づいた時に明らかにされる。それは全宇宙の征服の働き（現在の働きに始まるすべての征服の働きを含む）

の間に行われる。この全人類の終わりの明示は、裁きの座の前で、刑罰と終わりの日の征服の働きの過程で行われる。種類に従って人々を分類することは、人々を元の部類に戻すことではない。なぜなら、天地創造の際、人間が創られた時には一種類の人間しかなく、唯一の区別は男と女しか存在しなかったからである。人間には多数の種類など存在しなかった。さまざまな種類の人間が現れたのは、何千年にも及ぶ墮落の後になってからである。ある者は汚らわしい悪魔の領域に、またある者は邪惡な悪霊の領域に、また、いのちの道を追い求める者は、全能者の統治に属する。ただこのようにしてのみ、人々の間に種類が徐々に形成され、それによってのみ人々は人間という大家族の中でさまざまな部類に分かれるのである。人々はみな異なる「父」を持つようになる。人間は極めて反抗的なので、すべての者が完全に全能者の統治のもとにあるわけではない。義なる裁きは、各種類の人間の本来の姿を表に曝け出し、隠れたままになるものは何もない。あらゆる者が光の中でほんとうの顔を現す。この時点では、人はもはや本来のあり方ではなくっており、先祖の元の面影はとうの昔に消え去っている。なぜなら、アダムとエバの無数の子孫たちが、長らくサタンの虜となり、もう二度と天日を知ることはないからである。また、人々があらゆる種類のサタンの毒に満たされてきたからである。こうして人々にはそれぞれに相応しい終着点がある。さらに、人はその様々な毒を基準にして、種類ごとに分類される。すなわち、今日征服されている度合いに応じて人は分類されるのである。人間の終わりは天地創造以来、予め定められてきたものではない。なぜなら、初めにはまとめて「人類」と呼ばれる一種類の人間しか存在せず、また人間は最初はサタンに墮落させられてはおらず、神の光の中に生き、闇は降りていなかったからである。しかし、人間がサタンに墮落させられた後、あらゆる類型と種類の人々が地の至るところに広がった。まとめて「人類」と呼ばれ、男と女から成る家族から出たあらゆる類型と種類の人々である。彼らはみな祖先に導かれ、最も古い祖先である男と女から成る人類（つまり、始祖であるアダムとエバ、最古の祖先）のもとから迷い出てしまった。その当時、地上での生活をヤーウェに導かれていたのは唯一イスラエル人であった。全イスラエル（つまり、最初の部族）から出た様々な種類の人々は、その後ヤーウェの導きを失った。これらの初期の人々は、人間世界のことはまったく無知で、祖先とともに自分たちのものとした土地で暮らし、それが今日まで続いた。彼らはまだ自分たちがどのようにヤーウェのもとから離れ、今日に至るまで、どのようにあらゆる種類の汚れた悪魔や邪霊に墮落させられたかについては無知なままである。これまで深く墮落させられ、毒されてきた者たち、つまり、最終的に救いようのない者たちは、その祖先、彼らを墮落させた汚れた悪魔である祖先と共に行くしかない。最終的に救われ

ることのできる者たちは、人類の相応しい終着点に行く。つまり、救われ、征服された者たちのために用意された最後にたどり着くのである。救うことのできる人をみな救うために、あらゆることが為される。しかし、鈍感で救いようのない人は、先祖の後を追って刑罰の底なしの穴へ落ちるしかない。あなたの終わりは最初から予め定められていて、それが今になってやっと明らかにされたと考えてはいけない。そのように考えているのなら、最初に人類が創造された時にはそれとは別にサタンという種類は創られなかったことを忘れたのか。アダムとエバから成る一種類の人間だけが（つまり、男と女だけが）創造されたことを忘れてしまったのか。あなたが始めからサタンの子孫であったなら、人間を創造した時ヤーウェはサタンの集団もいっしょに創造したことにならないか。神がそのようなことをしたであろうか。神は自分の証しのために人間を創造した。神は自分の栄光のために人間を創った。なぜ神は意図的にサタンの子孫という種族を自分に抵抗させるためにわざわざ創造したりするであろうか。どうしてヤーウェがそんなことをすることがありえようか。もしそんなことをしていたなら、誰が神を義なる神だと言えるであろうか。わたしが今、あなたがたのうちには終いにはサタンと共に行く者がいると言っても、それはあなたが初めからサタンと共にあったという意味ではない。そうではなく、あまりにも低い所まで墮落したので、たとえ神が救おうとしたとしても、あなたは救いをのがしてしまったという意味である。あなたをサタンといっしょに分類する他ない。それはただ、あなたは救いようがないからであり、神があなたに対して不義で、意図的にあなたの運命をサタンの具現化と定め、サタンと共に分類し、わざとあなたを苦しませようとしているからではない。それは征服の働きの内なる真実ではない。あなたがそのように信じているのなら、あなたの認識はひどく偏っている。征服の最終段階は、人を救い、また、人の結末を明らかにするためである。裁きを通して人の墮落を暴露し、それにより人を悔い改めさせ、立ち上がらせ、いのちと人として生きる正しい道を追い求めさせるためである。鈍く頑な人の心を目覚めさせ、裁きによって人の内にある反抗的性質を示すためである。しかしながら、人がまだ悔い改めることができず、なおも人として生きる正しい道を追い求めることができず、これらの墮落を捨て去ることができなければ、人は救われることはなく、サタンにのみ込まれる。これが征服の意味である。つまり、人を救い、また人の結末を見せることである。良い結末と悪い結末があり、すべては征服の働きにより明らかにされる。人が救われるか呪われるかは、みな征服の働きの間に明らかにされる。

終わりの日とは、すべてのものが征服を通して、その種類に分類される時のことであ

る。征服は終わりの日の働きである。つまり、一人ひとりの罪を裁くことが終わりの日の働きである。そうでなければ、どうして人を分類できるというのか。あなたがたの間で行われる分類の働きは、全宇宙におけるそうした働きの始まりである。この後、すべての地のあらゆる民も征服の働きの対象となる。つまり、被造物であるすべての人が種類別に分類され、裁きの座の前に進み出て裁かれるということである。誰一人、何ものもこの刑罰と裁きの苦しみから逃れることはできない。また、誰も何ものも種類別に分類されることを避けることはできない。あらゆる人が種類ごとに分けられる。それは、万物の終わりが近く、天と地にあるすべてが終結に至ったからである。どうして人間が己の存在の終結の日を逃れられようか。したがって、あとどれほどあなたがたは不服従の行いを続けられるのか。あなたがたの終わりの日がそこまで迫っているのが見えないのか。どうして神を畏れ敬い、神の現れを待ち焦がれている者たちが、神の義が出現する日を見られないのか。彼らがその善ゆえの最後の報酬を受けられないということが、どうしてあるのか。あなたは善を行う人なのか。それとも悪を行う人なのか。あなたは義なる裁きを受け入れて従う人なのか。それとも義なる裁きを受け入れて呪われる人なのか。光の中にある裁きの座の前で生きているのか。それとも闇に覆われたハデスで生きているのか。自分の終りが報酬を受けることになるのか、それとも罰を受けることになるのかを一番はっきり知っているのは、あなた自身ではないのか。神が義であることを一番はっきり知り、最も深く理解しているのは、あなたではないのか。それでは、あなたの行いと心は一体、どのようなものであるのか。今日、わたしがあなたを征服するに及んで、あなたのふるまいが悪であるか、それとも善であるかをわたしがいちいち説明する必要があるのか。あなたは、わたしのためにどれほどの犠牲を払ったのか。どれほど深くわたしを礼拝するのか。わたしに対して自分がどのようにふるまっているかをあなた自身が一番よく知っているのではないのか。自分が最終的にどのような結末を迎えるのかを、あなたは他の誰よりも良く知っているはずである。わたしは、まことにあなたに告げる。わたしは人類を創造し、あなたを創造しただけである。わたしはあなたがたをサタンに手渡さなかった。あなたがたを意図的にわたしに逆らわせ反抗させて、そのためにわたしに罰されるように仕向けもしなかった。これらの災難や苦しみを招いたのは、あなたがたの心があまりにも頑なで、あなたがたの行いが極めて下劣であるからではないのか。だから、あなたがたが迎える結末は、自分自身が決定するものではないのか。自分がどのような最後を迎えるのかを、あなたがたは内心、他の誰よりもよく知っているのではないのか。わたしが人を征服する理由は、人を暴露するためである。またそれは、あなたの救いを確かなものにするためでもある。それは、あなたに悪を行わせる

ためでもなく、あなたを意図的に破滅の地獄に向かって歩ませるためでもない。その時が来れば、あなたの大きいな痛み、泣き叫び、歯ぎしりはすべて、あなたの罪ゆえではないのか。したがって、あなた自身の善あるいは悪が、あなたを最も正しく裁いてくれるのではないのか。それがあなたの終りがどうなるのかを示す最良の証拠ではないのか。

現在、わたしは中国における神の選民の中で働きを行ない、彼らの反抗的性質をすべて明らかにし、彼らの醜さのすべてを暴く。これが、わたしが言うべきことすべての背景となる。後にわたしが全宇宙を征服する次の段階の働きを行うとき、あなたがたへの裁きを用いて全宇宙のあらゆる人の不義を裁く。なぜなら、あなたがたは人類の中の反抗的な者たちの代表だからである。向上できなければ、単なる引き立て役、仕える者となるが、一方、向上できるならば用いられる。なぜわたしは向上できなければ引き立て役にしかねれないと言うのか。それは、わたしの現在の言葉と働きはみな、あなたがたの背景を標的にしており、また、あなたがたが全人類の反抗的な者たちの代表、典型となったからである。後にわたしは、あなたがたを征服するこれらの言葉を外国に伝え、その人を征服するために用いる。しかしその時、あなたはそれらを獲得していないであろう。それではあなたは引き立て役になるのではないのか。全人類の堕落した性質、人間の反抗的行為、人間の醜い姿と顔はみな、あなたがたを征服するために用いられる言葉の中に記録されている。わたしは、これらの言葉を用いて、あらゆる国と教派の人々を征服する。なぜならあなたがたは原型であり先例だからである。しかし、わたしは意図的にあなたがたを最初から捨てようとして始めたのではない。もしあなたがたの追求がうまく行かず、したがって、あなたがたが救いようのない者であることを証明するならば、あなたがたはただの道具、引き立て役になるのではないのか。かつてわたしは、わたしの知恵はサタンの計略に基づいて実行されると言った。なぜそう言ったのか。それは、わたしが今言っていること、行っていることの背後にある真実ではないのか。もしあなたが向上することができず、完全にされるのではなく、むしろ罰されるのなら、引き立て役になるのではないのか。あなたは時に応じて十分に苦しんだかもしれない。しかし今なお、あなたは何も解かっていない。あなたはいのちに関連するあらゆることについて無知である。罰せられ裁かれたにもかかわらず、まったく変わらず、あなたの奥底ではまだいのちを獲得していない。あなたの働きを試す時が来ると、あなたは火のように激しい試練と、さらに大きな患難を体験する。この火はあなたの全存在を灰にする。いのちを持たない者として、内に一かけらの純金も持たない者として、いまだに古

い墮落した性質から抜け出せない者として、引き立て役としてでさえ良い仕事ができない者として、どうしてあなたが取り除かれないことなどありえようか。一文の価値もなく、いのちを持たない者のために、征服の働きが何の役に立つのか。その時が来ると、あなたがたの日々はノアやソドムよりも困難になる。その時あなたの祈りは何の役にもたたない。救いの働きがすでに終わっているのに、どうして後で戻ってきて最初から悔い改めることができるというのか。一度すべての救いの働きが完了すれば、それで終わりである。その時には、邪悪な者たちを罰する働きが開始される。あなたは抵抗し、逆らい、自分で悪だと分かっていることをする。あなたは厳しい罰の対象ではないのか。わたしは、あなたのためにこのことを今日、一字一句説明している。あなたが耳を傾けないのなら、後に患難があなたに臨む時にやっと後悔し、信じ始めたところで、それはもう遅過ぎるのではないのか。わたしは今日、あなたに悔い改める機会を与えているが、あなたはそのつもりはない。あとどれほど待つつもりなのか。刑罰の日までか。わたしは今日、あなたの過去の背きを憶えてはいない。わたしはあなたを幾度も幾度も赦し、あなたの消極的な面から目をそらし、あなたの積極的な面だけに目を留める。なぜなら、わたしの現在の言葉と働きはすべて、あなたを救うためであり、わたしはあなたに対して何の悪意もないからである。それでもあなたは入ることを拒む。あなたは善悪を区別することができず、優しさの価値を認識できない。このような人は懲罰と義なる報復をただ待っているのではないのか。

モーセが岩を打ったとき、ヤーウェが授けた水がほとばしり出たのは、モーセの信仰のためだった。ダビデがわたしヤーウェを賛美して琴を奏でたとき、ダビデの心は喜びに満ちており、それは彼の信仰のためだった。ヨブが山々を埋め尽くすほど多くの家畜や膨大な量の財産を失い、その体が腫物で覆われたのは、彼の信仰のためだった。彼がわたしヤーウェの声を聞き、わたしヤーウェの栄光を見ることができたのは、彼の信仰のためだった。ペテロがイエス・キリストに付き従うことができたのは、ペテロの信仰によるものだった。彼がわたしのために十字架に釘づけにされ、栄光ある証しとなることができたのも、彼の信仰によるものだった。ヨハネが人の子の輝かしい姿を見たのは、彼の信仰によるものだった。そして彼が終わりの日の幻を見たのも、なおさら彼の信仰のためであった。数多くのいわゆる異邦の民がわたしの啓示を受け、わたしが人々のもとで働くために肉となって再来したことを知るようになったのも、また彼らの信仰のためだ。わたしの厳しい言葉に打ちのめされつつも、それによって慰められ、そして救われたすべての者たちは、みな信仰のゆえにそうなったのではないか。人は信仰ゆえに

多くのものを受けた。受けるのはいつも祝福だとは限らない。ダビデが感じたような幸せと喜びを受け取らないかもしれない、モーセのようにヤーウェから水を授からないかもしれない。例えば、ヨブは信仰ゆえにヤーウェによって祝福されただけでなく、災いも受けた。祝福されようが、災いを受けようが、どちらも祝福された出来事である。信仰なくして、この征服の働きを受けることはできず、ましてやヤーウェの業が今日、目の前で展開するのを見ることなどできない。見えないであろうし、ましてや受けることなどできはしない。これらの懲罰、災難、すべての裁き、もしこれらがあなたに起こらなければ、あなたは今日ヤーウェの業を見ることができようか。今日、あなたが征服されることができるのは信仰のゆえであり、征服されるからこそ、ヤーウェのあらゆる業を信じることができる。ただ信仰のゆえに、あなたはこのような刑罰と裁きを受ける。この刑罰と裁きを通して、あなたは征服され、完全にされる。今日受けているような刑罰と裁きなしには、あなたの信仰は虚しい。なぜなら、それなしにはあなたは神を知ることがないからである。どれほど神を信じていても、あなたの信仰は現実に基づかない、むなしい表現の一つである。あなたを完全に従順にする、この征服の働きを受けてはじめて、あなたの信仰は真実で確固としたものになり、あなたの心は神の方へ向く。たとえこの「信仰」という言葉のために大いに裁かれ呪われるとしても、あなたは真の信仰をもち、最も真実で、最も現実的で、最も貴重なものを得る。なぜなら、裁きの過程においてでなければ、あなたには神の創造物の終着点が見えないからである。この裁きの中で、あなたは創造主が愛すべき方であることを知る。こうした征服の働きの中に、あなたは神の腕を見る。この征服の中であなたは人として生きることを完全に理解するようになる。この征服の中で、あなたは人として生きる正しい道を獲得し、「人間」の真の意味を知るようになる。この征服の中でのみ、あなたは全能者の義の性質と美しい栄光に満ちた顔を見る。この征服の働きの中で、あなたは人間の起源と全人類の「不滅の歴史」を理解する。この征服の中で、あなたは人類の祖先と人類の墮落の起源を理解するようになる。この征服の中で、あなたは喜びと慰め、また、絶え間ない懲らしめと訓練、創造主が自ら創造した人類に送る叱責の言葉を受ける。この征服の働きの中で、あなたは祝福と、人間の受けるべき災難を受ける……。これはすべて、あなたのわずかばかりの信仰ゆえではないのか。これらのものを得た後、あなたの信仰は成長しなかったのか。あなたは膨大なものを得たのではないのか。あなたは神の言葉を聞き神の知恵を見ただけではなく、神の働きの各過程を自ら体験した。信仰がなければ、このような刑罰や裁きを受けて苦しまなかったのではないか、と言うかもしれない。しかし、信仰がなければ、こうした刑罰も、全能者からのこのような配慮も受けることができ

ないだけでなく、創造主に会う機会も永遠に失うであろう。人間の起源を知ることは決してないだろうし、人生の意義を知ることも決してないであろう。たとえ体が死んで魂が離れても、あなたはまだ創造主の業のすべてを理解していないであろう。ましてや、創造主が人類を創造した後、このような偉大な働きを地上で行なったことを知りもしないであろう。神が創造したこの人類の一員として、あなたは不可解にも自ら進んでこのように闇の中に落ちて永遠の罰を受けようというのか。もし今日の刑罰と裁きから離れたなら、あなたにはいったい何が起こるであろうか。ひとたび今の裁きから離れてしまえば、この困難な生活から逃れられるとでも思っているのか。もし「この場所」を去ったなら、悲痛な苦悶と悪魔が加える残酷な傷害に遭遇するのではないのか。耐え難い苦しみを日夜受けることになるのではないのか。今日この裁きを逃れたからといって、将来の責め苦を永久に避けられるとでも思っているのか。あなたには何が起こるであろうか。それはほんとうに望みどおりの理想郷であろうか。今しているようにただ現実から逃げることで、その後の永遠の刑罰を逃れられるとでも思っているのか。今日より後、このような機会や祝福を再び見出せるであろうか。災厄が襲ってきた時、それを見出せるであろうか。全人類が安息に入るとき、それを見出すことができるであろうか。あなたの現在の幸福な生活と調和あるささやかな家庭が、永遠の終着点にとって代われるであろうか。もしあなたに真の信仰があるならば、そして信仰ゆえに多くのものを得るのなら、それはすべて、あなたというひとつの被造物が獲得すべきものであり、元来もっていたはずのものである。あなたの信仰といのちにとって、このような征服よりも有益なものは他にない。

今日、あなたは征服された者たちに神が何を求めているのか、完全にされた者たちへの神の態度はどのようなものか、現在あなたが何に入らなければならないかを理解しなければならない。いくつかのことについては、少し理解するだけでよい。神の奥義についての説を詳細に吟味する必要はない。それらは余りいのちの助けにはならず、目を留めるだけでよい。アダムとエバについての奥義などは読んでもよい。当時、アダムとエバはいったいどのようなようであり、神は今日どのような働きを行いたいのか、といったことについてである。人を征服し完全にする中で、神は人間をアダムとエバのような状態に戻すことを願っていることを理解する必要がある。神の基準を満たすために、人が完全にされるべき程度について心ではっきりと理解し、それを目指して尽力すべきである。これはあなたの実践に関連しており、あなたが理解すべきことである。ただ、これらのことに関する神の言葉に従って、入っていきこうと追い求めるだけで十分である。「人類

発展の歴史は数万年に及ぶ」ということを読むと、あなたは好奇心を抱き、兄弟姉妹といっしょになって、「神は人類の発展は六千年までさかのぼると言った。では、この数万年というのは何のことなのだ」と、答えを見つけようとする。このようなことを解き明かして何の役に立つというのか。神自身が働いてきたのが数万年間であろうが、数億年間であろうが、あなたがそれを知ることが本当に神にとって必要であろうか。これは、被造物としてあなたが知るべきことではない。このような発言は少しの間なら考慮してもよいが、それがビジョンでもあるかのように理解しようとしてはならない。あなたが今日何に入っていく、何を理解するべきか気付いていなければならない。このことをはっきりと把握しなければならない。その時初めてあなたは征服される。以上を読めば、あなたの中に普通の反応が起こるはずである。つまり、「神は燃えるように切望している。神はわたしたちを征服し、栄光と証しを獲得したがっている。では、わたしたちはどのように神に協力すべきなのか。神に完全に征服され、神の証となるために、わたしたちは何をしなければならないのか。神が栄光を得られるためには、わたしたちは何をしなければならないのか。サタンではなく神の統治のもとで生きられるようになるためには、何をしなければならないのか」のように人は考えるべきである。あなたが一人ひとりが、征服の意義について明確に理解するべきであり、それはあなたがたの責任である。このことを明瞭に認識して初めて入ることができ、この段階の働きを知り、完全に従順になる。そうでなければ、あなたがたは真の服従に達することはない。

なぜ進んで引き立て役になろうとしないのか

征服された者は引き立て役であり、完全にされて初めて、人は終わりの日の働きの模範や見本となる。完全にされる前、彼らは引き立て役であり、道具であり、奉仕のための存在である。神によって徹底的に征服された者は神の経営（救いの）の働きの結晶であるとともに、その模範にして見本である。わたしがこのような人々を描写するのに用いたこれらの言葉は平凡なものかもしれないが、そこから数多くの興味深い物語が見えてくる。信仰が少ないあなたがたは、平凡な肩書きを巡って顔が赤らむまで常に言い争い、結果として関係が損なわれることさえある。単なる肩書きであっても、あなたがたの思考や意識の中では、それは取るに足らない肩書き以上のものであるだけでなく、自分の運命に関する重要事項である。そのため、分別のない者は往々にして、こうした些細な事柄を巡って強い喪失感に苦しむ。これでは一文惜しみの百知らずである。あなたがたは単なる肩書きのために逃げ去り、戻って来ないのだ。なぜなら、いのちは取るに足らないものだと考え、自分の呼び名を重要視し過ぎるからである。そのため、あなた

がたは自分の霊的生活や実生活においてさえも、地位に関する観念のせいで、複雑怪奇な物語をしばしば展開させることになる。おそらくあなたがたは認めないだろうが、あなたがたが個別に暴かれていなくても、そうした者は実生活に本当に存在するとわたしは言う。こうしたことはあなたがた一人ひとりの生活においてすでに発生している。信じないのであれば、ある姉妹(あるいは兄弟)の生活風景を次に挙げるので読むとよい。この人物が実はあなた自身であったり、あなたの生活の中で親しい人物であったりするかもしれない。わたしが勘違いしていなければ、この風景はあなたがすでに経験したことを表現している。この描写に不足は一切なく、欠けている思いや考えも一つとしてなく、この話に残らず記録されている。信じないというのであれば、まずはとにかく読みなさい。

これは、ある「霊的な人」の短い経験談である。

教会の兄弟姉妹たちが行なう多くのことが神の旨と一致していないのを見て、彼女は不安を感じ、そこで彼らを叱り始めた。「あなたがたはひどいことをしました。良心がこれっぽっちもないのですか。どうして良心に逆らうことを実際にやっているのですか。なぜ真理を求めず、好き勝手なことばかりしているのですか。……わたしはあなたがたにこう言っているけれど、同時に自分自身も憎んでいます。神が燃えるように苛立っておられるのが見えるし、自分の中で炎を感じる。わたしは神から託された働きを徹底的に行ないたいと心から願っているし、あなたがたの役に立ちたいと本当に思っている。ただ、わたしは今とても弱い。神はわたしたちのために多くの時間を割き、とても多くの御言葉をおっしゃってきたけれど、わたしたちは同じまま。神にとっても大きな借りがあると、常に心の中で感じるわ……」(ここで泣き始め、話を続けられない)。そして彼女は祈り始めた。「ああ、神よ。どうかわたしに力を与え、わたしの心をこれまで以上に動かして下さい。あなたの御霊がわたしの中で御業を行ないますように。わたしは喜んであなたに協力いたします。あなたが最後に栄光を得られる限り、たとえそれが命を差し出さなければならないことを意味しても、わたしは今すぐ自分のすべてをあなたに喜んで捧げます。兄弟姉妹が喜びながら歌い踊り、あなたの聖なる御名を讃美し、あなたを讃え、あなたを表わし、あなたの御業が本当であることを証明し、あなたの重荷に思いを馳せることができるよう、わたしたちは大きな讃美を捧げたいと思います……」。彼女が熱心にそう祈ると、聖霊は本当に重荷を与えた。その期間、彼女は並外れた重荷を負い、一日中読み、書き、耳を傾け、多忙を極めた。霊的状态は極めて良好で、心の中はいつも活力に満ち、重荷を負っていた。時折弱くなり、壁にぶち当たったが、

すぐに正常な状態に戻った。そのようにしてしばらく過ごした後、彼女は急速に進歩し、神の言葉の多くに関してある程度理解できるようになり、讃美歌を憶えるのも早かった。総じて言えば、彼女の霊的状态は極めて良好だった。教会内の多くの物事が神の旨に則していないことに気づくと、彼女は不安になって兄弟姉妹を叱責した。「これが自分の本分に対する献身ですか。なぜあなたがたはこれほどわずかな代価さえ払えないのですか。あなたがたがそうしたくなくても、わたしはします……」。

彼女は重荷を負いつつも、聖霊がますます働きを行なうにつれて信仰がより強くなるのを感じた。時折何らかの困難に遭遇して消極的になることもあったが、それを克服することができた。つまり、彼女が聖霊の働きを経験した際、状態が極めて良好だったとしても、ある種の困難や多少の弱さを経験することは避けられなかったのである。そうした物事は避けられないが、彼女はそうした状態からすぐに回復できた。弱さを経験したとき、彼女は祈り、自分の霊的背丈は本当に不十分だと感じるものの、それでも進んで神と協力しようとした。神が何をしようと、彼女は進んで神の旨を満たし、神の采配のすべてに従う覚悟だった。彼女について何らかの意見や先入観をもつ人もいたが、彼女は自分のことを脇へ置き、そうした人たちとも積極的に交わることができた。これが、聖霊が正常な働きを行なっている際の人々の状態である。一定期間を経ると、神の働きが変化し始め、人はみな働きの別の段階、すなわち神が人間に対して異なる要求をする段階へと入っていった。したがって、人々に新たな要求を行なう新たな言葉があった。「……わたしはあなたがたに対して、祝福ではなく憎しみしかない。あなたがたを祝福しようとも、完全にしようとも考えたことは一度もない。と言うのも、あなたがたは反抗的過ぎるからである。あなたがたは心が歪んでおり、不正直であり、素質に欠け、地位が低いので、あなたがたがわたしの視野や心にあったことはこれまで一度もない。わたしの働きは、ひとえにあなたがたを断罪することを意図して行なわれる。わたしの手と刑罰があなたがたから遠く離れたことは決してない。わたしはあなたがたを裁き、呪い続けてきた。あなたがたにはわたしに関する認識が一切ないので、わたしの怒りが絶えずあなたがたに降りかかってきたのである。わたしは常にあなたがたのもとで働きを行なってきたが、あなたがたは自分に対するわたしの態度を知るべきである。それは嫌悪以外の何物でもなく、それ以外の態度や意見はない。わたしが望んでいるのは、あなたがたがわたしの知恵と大いなる力の引き立て役として行動することだけである。あなたがたはわたしの引き立て役以外の何物でもない。なぜなら、わたしの義はあなたがたの反抗を通して明らかにされるからである。わたしはあなたがたをわたしの働きの引

き立て役として行動させ、わたしの働きの付属物としてきたのだ……」「付属物」そして「引き立て役」という言葉を見た途端、彼女は考え始めた。「これらの言葉を考えると、わたしはどのように従うべきなのか。あれほど代価を支払ってきたのに、わたしはいまだに引き立て役だ。引き立て役とは単なる効力者ではないのか。以前は、わたしたちが効力者であることはなく、神の民となるだろうと言われていた。それなのに、わたしたちは今なおここで効力者の役割を果たしているのではないか。効力者にはいのちが欠けているのではないか。わたしがどれほど苦難に耐えても、神はそれを讃えてくださらない。わたしが引き立て役を果たし終えたら、それで終わるのではないか……」。このことを考えれば考えるほど彼女は落胆し、教会に行き兄弟姉妹の状態を見ると、気持ちますます落ち込んだ。「あなたがたは駄目、わたしも駄目。わたしは消極的になってしまいました。ああ。いったい何ができるでしょうか。神は依然としてわたしたちを求めておられない。神がこのような御業をなさるとき、わたしたちを消極的にしないはずはない。自分のどこがおかしいのか、わたしにはわかりません。祈ることさえしたくない。とにかく、わたしはいま大丈夫じゃないし、内なる気力を振り絞ることができません。これまで何度も祈ってきたのに、それでもできない。続けていく覚悟もないのです。これがわたしの考えです。わたしたちは引き立て役だと神はおっしゃいますが、引き立て役とはただの効力者ではないでしょうか。わたしたちは引き立て役であり、神の御子でも神の民でもない、神はおっしゃるのです。わたしたちは神の子らではなく、ましてや神の長子でもない。単なる引き立て役でしかないのです。わたしたちがそうであれば、いったいどうして好ましい結末を得られるでしょうか。引き立て役にはいのちがないのだから、望みなどありません。仮にわたしたちが神の御子、神の民であれば、そこには望みがあるでしょう。わたしたちは完全にさせていただけるのです。引き立て役が神のいのちをもてるでしょうか。神に奉仕する者に対し、神はいのちを吹き込んでくださるでしょうか。神が愛されるのは神のいのちをもつ者であり、神のいのちをもつ者だけが神の御子であり、神の民です。わたしは消極的で弱いですが、それでもあなたがたが誰も消極的にならないことを願っています。このように及び腰になって消極的になると、神の御旨を満たせないというのはわかっていますが、わたしは引き立て役になりたくありません。引き立て役になるのが怖いのです。いずれにせよ、わたしの活力には限度があり、今はこのまま進むことができません。あなたがたが誰もわたしのようにならず、むしろわたしから幾ばくかの鼓舞を得られるよう願っています。わたしは死んだほうがよいでしょう。死を迎える前に、あなたがたに最後の言葉を残します。あなたがたが最後まで引き立て役として行動できることを願います。もしかしたら、神が最後に引

き立て役を称賛なさるかもしれません……」。兄弟姉妹はこれを知ると不思議に思った。「この人は、なぜこれほどまでに消極的なのか。この二日間、まったく問題なかったではないか。なぜ突然元気をすっかり失ったのか。なぜ正常でなくなってしまったのか」。すると彼女はこう言った。「わたしが正常ではないと言わないでください。実のところ、わたしは心の中であらゆる物事を明瞭に理解しています。自分が神の御旨を満たしていないことはわかっています。しかし、それは単に、神の引き立て役として行動する気がわたしにないからではないでしょうか。わたしは何も悪いことをしていません。おそらく、神はいつか『引き立て役』という肩書きを「被造物」に変え、またそれだけでなく、神に重用される神の被造物へと変更されるかもしれません。そのことに何らかの希望はないでしょうか。あなたがたが消極的になったり挫けたりせず、引き続き神に付き従い、全力で引き立て役として奉仕できることを願います。いずれにせよ、わたしは続けられません。わたしの行動に縛られてはいけません」。他の者たちはこれを聞いて、「あなたが神に付き従うのをやめても、わたしたちは従い続けます。神はわたしたちを不公平に扱われたことがないからです。あなたが消極的だからといって、わたしたちがそれに縛られることはありません」と言った。

しばらくこのような経験をした後、彼女は引き立て役であることについて依然として消極的だったので、わたしは彼女にこう言った。「あなたはわたしの働きを何も理解していません。わたしの言葉の内なる真実や本質、目指す成果を一切理解していないのです。あなたはわたしの働きの目的やその知恵を知りません。わたしの旨をまったく理解していません。退散することしか知らないのは、あなたが引き立て役だからです。あなたは地位に心を占められ過ぎています。何という愚か者でしょう。過去、わたしはあなたに多くを語り、あなたを完全にすると言いました。忘れたのですか。引き立て役のことを話す前に、完全にされることを話さなかったでしょうか」「待ってください。考えさせてください。そう、そのとおりです。引き立て役についてお話しになる前に、確かにそうしたことをおっしゃいました」「完全にされることについて話したとき、人間は征服されて初めて完全にされるだろうとわたしは話しませんでしたか」「その通りです」「わたしの言葉は誠意あるものではなかったですか。誠実に話さなかったでしょうか」「そんなことはありません。あなたは偽りをお話しになったことがない神でいらっしゃる、それをあえて否定できる者はおりません。でも、お話の仕方が多すぎます」「わたしの話し方は働きの段階に応じて変わるのではありませんか。わたしが言うことはあなたの必要に基づいて行なわれ、述べられるのではないのですか」「あなたは人間の必

要に合わせて御業を行ない、人間が必要とするものをお与えになります。それは間違いありません」「それでは、わたしがあなたに話したことは有益でなかったのですか。わたしの刑罰はあなたのためになされたのではないですか」「どうしてわたしのためだといまだにおっしゃれるのですか。あなたは死にそうになるまでわたしを罰しました。わたしはこれ以上生きていたくありません。あなたは今日と明日で違うことをおっしゃいます。あなたがわたしを完全にしてくださるのは、わたしのためだということは知っていますが、いまだわたしを完全にしてくださっていません。あなたはわたしを引き立て役にして、いまだに罰せられます。わたしを憎んでいらっしゃるのでしょうか。御言葉をあえて信じる者はおらず、あなたの刑罰はただ御心の憎しみを解消するためで、わたしを救うためではないことが今ようやくはっきりわかりました。以前、あなたは本当のことをわたしからお隠しになって、わたしを完全にするとおっしゃり、また刑罰はわたしを完全にするためのものだとおっしゃいました。だから、わたしはいつもあなたの刑罰に従ってきたのです。今になって引き立て役の肩書きを得るだろうとは想像すらしませんでした。神よ、わたしに別の役割を与えたほうが良いのではないのでしょうか。わたしに引き立て役の肩書きを与えなければならないのですか。わたしは神の国の門番になることでも受け入れます。わたしは方々へ出向いて自分を費やしてきましたが、わたしの手は結局空っぽで、まったく一文無しです。それなのに、あなたは今でも、わたしをご自身の引き立て役にするとおっしゃいます。どうしてわたしが顔向けできるのでしょうか」「あなたはいったい何を話しているのですか。わたしは過去に極めて多くの裁きの働きを行ないましたが、あなたは認識していないのですか。あなたには自分自身に関する本当の認識がないのですか。『引き立て役』の肩書きもまた、言葉の裁きではないのですか。引き立て役に関するわたしの話はどれもあなたを裁く手段や方法でもあると考えているのですか。そうであれば、あなたはどうやってわたしに付き従うというのですか」「あなたにどう付き従うか、わたしはまだ計画を立てていません。まずはこれを知る必要があります。わたしは引き立て役なののでしょうか。それとも違うのですか。引き立て役も完全にしていただけののですか。『引き立て役』という呼び名が変わることはあり得るのでしょうか。引き立て役であることを通じて鳴り響くような証しを行ない、その後完全にされる者となり、神を愛する者の模範となり、神の知己となることができるのでしょうか。わたしは完全にしていただけののでしょうか。真実をお教えてください」「物事は常に進化し、絶えず変化しているということに、あなたは気づいていないのですか。現在、引き立て役としての役割において従順になる意志がある限り、あなたは変わることができます。引き立て役であるかないかは、あなたの運命とは無関係です。重要な

は、自分のいのちの性質が変わる者になれるかどうかです」「教えてください。わたしを完全にしていただけるのでしょうか、それともしていただけないのでしょうか」「最後まで付き従い、服従する限り、わたしはあなたを完全にできると保証します」「それでは、わたしはどのような苦難を経験しなければならないのでしょうか」「逆境、そして言葉による裁きと刑罰、とりわけ言葉の刑罰、つまり引き立て役になることと同じ刑罰です」「引き立て役と同じ刑罰もですか。まあ、逆境を経験することであなたに完全にしていただけるのであれば、そして希望があるのなら、それで構いません。たとえほんのわずかな望みだとしても、引き立て役であるよりはましです。『引き立て役』という肩書きの響きは酷すぎます。わたしは引き立て役になりたくありません」「引き立て役の何がそんなに嫌なのですか。引き立て役も本来完全に良いものではないですか。引き立て役には祝福を享受する価値がないのですか。引き立て役が祝福を享受できるとわたしが言え、あなたは祝福を享受できます。人の肩書きがわたしの働きのために変わるというのは本当のことではないのですか。それなのに、ただの肩書きがそこまであなたを悩ませているのですか。あなたがこの種の引き立て役になるのは実に相応しいことです。付き従う意志があるのですか。それともないのですか」「それでは、あなたはわたしを完全にすることがおできになるのですか。それともおできにならないのですか。わたしがあなたの祝福を享受できるようにしてくださるのですか」「あなたに最後まで付き従う意志はありますか。それともありませんか。自分のすべてを捧げる意志はありますか」「もう一度考えさせてください。引き立て役もあなたの祝福を享受し、完全にしていただくことができます。完全にしていただいた後、わたしはあなたの知己となり、あなたの御旨をすべて理解し、あなたがもつものをわたしももつことになります。あなたが享受なさるものをわたしも享受し、あなたがご存知のことをわたしも知ることができるのです。……逆境を経験して完全にしていただいた後、わたしは祝福を享受することができます。それでは、わたしは実際にどのような祝福を享受するのでしょうか」「どんな祝福を享受するかは心配しなくてよろしい。わたしがあなたに教えたとしても、それらはあなたの想像を超えています。良き引き立て役になった後、あなたは征服され、引き立て役として成功するでしょう。これが征服された者の模範であり見本ですが、もちろん征服された後でなければ、模範や見本にはなれません」「模範や見本とは何ですか」「すべての異邦人、すなわち征服されていない人々のための模範と見本です」「何人ぐらいの人々ですか」「極めて多数で、四千人、五千人程度ではありません。世界全体でこの名前を受け入れる人はみな征服されなければなりません」「それでは、五つや十の都市程度ではないのですね」「今はそれについて心配しなくてよろしい。あ

まり気にしてはならない。今はいかに入りを得るかだけに集中するように。あなたが完全にされ得ることをわたしは保証します」「どの程度まででしょうか。また、わたしはどのような祝福を享受できますか」「なぜそんなに心配しているのですか。あなたが完全にされ得ることは保証します。わたしが信頼に値する者であることを忘れたのですか」「確かにあなたは信頼できる方ですが、話し方の一部が常に変化しています。今日はわたしが完全にされ得ると保証していただきますが、明日はよくわからないとおっしゃるかもしれません。また、一部の人に『あなたのような者が完全にされることは不可能だと確約する』とおっしゃいます。御言葉がどうなっているのか、わたしにはわかりません。どうしても御言葉を信じることができないのです」「それでは、あなたは自分自身をすべて捧げることができるのですか。それともできないのですか」「何を捧げるのですか」「あなたの将来と希望です」「それを捨て去るのは簡単です。一番問題なのは『引き立て役』という肩書きです。これは本当に欲しくありません。わたしからその肩書きを取り除いてくださるなら、わたしは何でも受け入れますし、何でもできるでしょう。これは些細なことではないでしょうか。その呼び名を取り除いていただけませんか」「それは簡単なことです。違いますか。わたしがあなたに肩書きを与えられるならば、それを取り除くことも間違いなくできます。しかし、今はその時ではありません。あなたはまず働きのこの段階の経験を終えなければなりません。そうして初めて新しい肩書きを得られるのです。あなたのような人ほど引き立て役になる必要があります。引き立て役になることを恐れれば恐れるほど、わたしはあなたに引き立て役の呼び名を貼ります。あなたのような人は厳しく鍛錬され、取り扱われなければなりません。反抗的であればあるほどその人は効力者になり、最終的には何も得ないでしょう」「これほど熱心に求めても、なぜ『引き立て役』の名を払拭することができないのでしょうか。わたしたちは長年にわたってあなたに付き従い、少なからず苦しんできました。わたしたちはあなたのために多くのことを行ない、風雨に耐えてきました。わたしたちはもう若くありません。結婚もしておらず、家庭も持っていません。結婚して家庭をもった者もありますが、やはり家を出て行きました。わたしは高校まで学校に通いましたが、あなたが来られたと知って大学進学を断念しました。しかしあなたは、わたしたちは引き立て役だとおっしゃいます。わたしたちは多くのものを失ったのですよ。色々としてきたのに、結局あなたの引き立て役です。このために、わたしの以前のクラスメートや同世代の人たちはわたしのことをどう思うのでしょうか。わたしを見て地位や身分を尋ねても、どうしてわたしが恥ずかしがらずに答えられるのでしょうか。当初、わたしはあなたへの信仰のためにいかなる代価も払いましたが、他人はわたしが愚かであると嘲笑しました。

それでもわたしは付き従い、わたしの日、つまり信仰のない人々に自分を示せる日が来るのを待ち望みました。ところが今日、わたしは引き立て役だとあなたはおっしゃいます。あなたがわたしに最も低い肩書きをお与えになり、わたしが神の国の民の一人になることをお許しになるのであれば、それで結構です。たとえあなたの弟子や知己になれなかったとしても、あなたに付き従う者であるだけで十分です。わたしたちは長年にわたってあなたに付き従い、自分の家族を捨てました。そして現在まで求め続けるのは極めて困難でした。しかし、それに対して『引き立て役』の肩書きしかないとは。わたしはあなたのためにすべてを捨てました。あなたのために俗世の富を残らず捨て去ったのです。以前ある人が、わたしにお見合い相手を紹介しました。その男性は容姿も身なりも良く、政府高官の息子でした。当時のわたしはこの男性に関心をもちました。けれど、神が到来して働きを実行し、あなたがわたしたちを御国へと導き、完全にしてくださいと聞いて、また一刻も早くすべてを捨て去る決意をするようわたしたちにお求めになっていると聞いて、わたしは自分に決意がまったく欠けていることをすぐに知りました。それからわたしは決心を固め、縁談を断りました。その後、男性は何度かわたしの家族に贈り物をしましたが、わたしはそれに見向きもしませんでした。その時わたしが狼狽していたと、あなたはお思いですか。とても素晴らしいことだったのに、無に帰してしまったのです。どうして狼狽せずにいられましょうか。数日間、夜眠れないほど狼狽しましたが、それでも最終的には諦めました。祈るたび、わたしは聖霊に心を動かされました。聖霊は『あなたはわたしのために進んですべてを犠牲にするつもりなのか。わたしのために進んで自分を費やすつもりなのか』とおっしゃいました。あなたのこの御言葉を考えるたびに、わたしは泣いていました。感動し、悲しくて泣きだすことが何度あったでしょう。一年後、男性は結婚したと聞きました。言うまでもなく、わたしは悲しみに暮れましたが、あなたのためにそれも振りきりました。わたしの食生活や衣服がみすばらしいことは言うまでもありませんが、あなたがわたしを引き立て役にしないよう、わたしはその結婚を諦め、そのすべてを捨て去ったのです。わたしは結婚という人生で一番大事な出来事を諦めました。それはひとえに自分のすべてをあなたに捧げるためです。人の生涯は、良い結婚相手を見つけて幸せな家庭を築くことに過ぎません。わたしはこの最も素晴らしいことを諦めたのに、今やわたしには何もなく、完全に独りきりです。あなたはわたしをどこへ向かわせようとなさるのでしょうか。あなたに付き従い始めて以来、わたしはずっと苦しんでいます。良い生活を送ったことはありません。自分の家族や職業、肉の悦楽を残らず捨て去ってきましたが、わたしたち全員が払ってきたこの犠牲は、あなたの祝福を享受するにはまだ不十分なのではないでしょうか。そして今

やこの『引き立て役』です。神よ、あなたはあんまりです。わたしたちを見てください。わたしたちにはこの世で頼るものが何もありません。わたしたちの中には子を諦めた者、仕事を捨てた者、配偶者^[a]を捨て去った者などがいます。わたしたちは肉の享樂をすべて捨て去ったのです。それ以外に何の希望があるでしょうか。わたしたちはどうすればこの世で生き残り続けることができるでしょうか。わたしたちが払った犠牲は一銭の価値もないのでしょうか。このことがおわかりにならないのですか。わたしたちの地位が低く、素質に乏しいのは仕方ありません。とは言え、あなたがわたしたちにさせたいことについて、わたしたちが気を留めなかったことがいつあったというのでしょうか。今、あなたは無情にもわたしたちを捨て去り、引き立て役という肩書きでわたしたちに『報いられ』ました。わたしたちの犠牲はそれしかもたらさなかったのでしょうか。最終的に、神への信仰から得たものは何かと人から訊かれたとして、『引き立て役』という言葉を示せるでしょうか。いったいどうすれば、わたしは引き立て役ですと口をひらいて言えるでしょうか。自分の両親にも、前のお見合い相手にも説明できません。これほど大きな代価を払ってきたのに、その代わりに得るのが引き立て役になることなんて。ああ。とても悲しく感じます」(ももを叩いて泣きだす)。「もし、あなたに引き立て役の肩書きを与えず、代わりにあなたをわたしの民の一人とし、福音を広めるため遣わすと言い、働きを行なわせるための地位を与えたならば、あなたはその働きを行なえるでしょうか。この働きの各段階において、あなたは実際に何を得たでしょうか。それなのに、あなたはここで自分の身の上話までしました。まったく恥知らずです。代価を払ったのに何も得なかったとあなたは言います。もしや、わたしが人間を得るための条件をあなたにまだ述べていなかったというのですか。わたしの働きは誰のためのものでしょうか。知っているのですか。あなたは昔の不満を蒸し返しています。あなたは人間の一人として数えられるでしょうか。あなたは自分の意志で、自分が経験してきた苦難を引き受けたのではないですか。それに、あなたの苦難は祝福を得るためではなかったのですか。あなたはわたしの要求を満たしましたか。あなたが望むのは祝福を得ることだけです。まったくの恥知らずです。あなたに対するわたしの要求が義務だったことがいつあったのですか。あなたが進んでわたしに付き従うつもりなら、何事においてもわたしに従わなくてはなりません。条件交渉しようと試みてはなりません。確かにわたしは、この道は苦難の道であると前もってあなたに言いました。この道は恐ろしい可能性をはらんでおり、幸福はほとんどありません。忘れたのですか。わたしは何度もそう言いました。進んで苦しむつもりなら、わたしに付き従いなさい。苦しむつもりがないのであれば、止めなさい。わたしは強制しません。来るのも去るのもあなたの自由です。

しかし、これがわたしの働きの行ない方であり、あなたの個人的な反逆のためにわたしの働き全体を遅らせることはできません。あなたには進んで服従する気がないかもしれませんが、他の者たちにはその気があります。あなたがたはみな必死です。何も恐れていない。あなたはわたしと条件交渉していますが、生き続けたいのですか、生き続けたくないのですか。あなたは自分のために計画を立て、自分の名声や利益のために這い回っています。わたしの働きはどれもあなたがたのためではないのですか。あなたは目が見えないのですか。わたしが受肉する前、あなたはわたしを見ることができなかったの、あなたが述べたそれらの言葉は許せたでしょうが、現在わたしは受肉し、あなたがたのもとで働きを行なっているにもかかわらず、あなたは依然見えないままなのですか。何が理解できないのですか。あなたは損失を被ったと言います。そこでわたしはあなたがたのように必死な人々を救うために受肉して、多くの働きを行なってきました。それでも今なお、あなたは依然として不満を言っています。わたしが損失を被ったと言うつもりはないのですか。わたしが行なってきたことは、すべてあなたがたのためではなかったのですか。わたしは人々の現在の霊的背丈に基づいて、この肩書きを与えています。わたしがあなたを『引き立て役』と呼べば、あなたは即座に引き立て役になります。同様に、わたしがあなたを『神の民の一人』と呼べば、即座にそうなります。わたしがあなたをどう呼ぼうと、それがあなたです。それはどれも、わたしの口から出るいくつかの言葉で実現されるのではないのですか。それに、そうしたわたしの数語が、あなたにとってそこまで腹立たしいのですか。そうならば失礼しました。あなたが今従わないのであれば、最後に呪われるでしょう。そのときあなたは幸せでしょうか。あなたはいのちの道に注意を払わず、自分の地位や肩書きにしか集中しません。あなたのいのちとはどのようなものですか。あなたが大きな代価を払ったことは否定しませんが、自分の霊的背丈と実践を御覧なさい。そしていまだに条件交渉しようとしている。これがあなたの決意を通じて得られた霊的背丈ですか。あなたにはまだ高潔さがあるのですか。良心があるのですか。何か悪いことをしたのはわたしでしょうか。あなたに対するわたしの要求が誤っていたのでしょうか。それは何ですか。わたしはあなたを数日間引き立て役として働かせようと思うものの、あなたにはその意志がありません。これは一体どんな決意でしょう。あなたがたはみな、意志の弱い臆病者です。あなたのような人々を今懲罰するのは当然のことです」わたしがこう述べると、彼女はもう何も言わなかった。

現在このような働きを経験しているのであれば、神の働きの段階と神が人々を変化させる方法について、あなたがたはある程度把握していなければならない。そうすること

が変化において成果を得る唯一の方法である。あなたがたは追求において、個人的な観念や願望や未来をあまりに多く抱きすぎる。現在の働きは、あなたがたの地位に対する欲望や途方もない欲望を取り扱うためのものである。願望、地位、そして観念はどれも典型的なサタンの性質の表われである。これらが人々の心に存在するのは、ひとえにサタンの毒が常に人の考えを腐敗させており、人々がサタンの誘惑を決して払いのけられないというのが理由である。このような人たちは罪のただ中で生活しているが、それを罪と思わず、「わたしたちは神を信じているので、神はわたしたちに祝福を与え、わたしたちのために万事を適切に手配してくださるに違いない。わたしたちは神を信じているので、他人よりも優れており、他の誰よりも地位と将来性が高いはずだ。わたしたちは神を信じているので、神はわたしたちに無限の祝福を与えてくださるに違いない。そうでなければ、神への信仰とは呼ばれないだろう」と考える。長年にわたり、人々が生き延びる上で頼ってきた思考がその人の心を腐敗させ、不誠実で臆病で卑劣になるに至った。そのような人は意志の力や決意が欠けているだけでなく、貪欲で傲慢で強情になった。人間には自我を超越する決意が完全に欠けている上、これら闇の勢力による呪縛を払いのける勇気が少しもない。考えと生活があまりに腐敗しているので、神への信仰に対するその人の見方は依然として耐えがたいほどに醜悪であり、人々が神への信仰に対する自分の見方について語るときでさえ、それはただ聞くに堪えない。人はみな臆病で、無能で、卑劣で、傷つきやすい。闇の勢力に対して嫌悪感を覚えず、光と真理への愛を感じず、それらを排除しようと全力を尽くす。あなたがたの現在における考え方や見方は、このようなものではないだろうか。「わたしは神を信じているのだから、ひたすら祝福を浴び、地位は決して下がらず、不信者の地位よりも高いと保証されているはずだ」。このような見方があなたがたの中にあるのは、一、二年間のことではなく、長年にわたってである。あなたがたは取引しようという考え方をあまりに発達させている。あなたがたは現在のこの段階まで達したが、依然として地位を捨て去っておらず、いつか地位がなくなり、名前が汚されるのではないかと深く恐れ、地位について尋ね回り、観察しようと日々奮闘している。人々は安楽への欲求を決して捨て去らなかった。ゆえに、わたしは現在あなたがたをこのように裁いているが、あなたがたは最終的にどの程度の理解を得るだろうか。あなたがたは、自分の地位は高くないが、それでも神の称揚を享受したと述べるだろう。あなたがたに地位がないのは卑しい者として生まれたからで、地位を得たのは神によって称揚されたためである。すなわちそれは、神があなたがたに授けたものである。現在、あなたがたは神の訓練、刑罰、そして裁きを直に受けることができる。それ以上に、これは神の称揚である。あなたがたは神の清めと炎を直

に受けることができる。これが神の大いなる愛である。各時代を通じ、神の清めと炎を受けた者は一人もおらず、神の言葉によって完全にされることができた者も一人としていなかった。現在、神は面と向かってあなたがたと話し、あなたがたを清め、あなたがたの内なる反逆を暴いている。これはまさに神による称揚である。人々には何の能力があるというのか。ダビデの子であれ、モアブの子孫であれ、人は概して何も誇るべきことがない被造物である。あなたがたは神の被造物なのだから、被造物の本分を尽くさなければならない。あなたがたに要求されていることはそれ以外にない。あなたはこうに祈るべきである。「神よ、わたしに地位があろうとなかろうと、わたしは今や自分を理解しています。わたしの地位が高いのであれば、それはあなたの称揚のためであり、わたしの地位が低いのであれば、それはあなたがそのように定められたからです。すべてはあなたの御手の中にあります。わたしには選択肢も不満も一切ありません。わたしがこの国で、この民のもとに生まれること、そしてわたしが行なうべきことは、ただあなたの支配に完全に服従することであると、あなたは定められました。なぜなら万事はあなたの定めの中にあるからです。わたしは地位を考えません。つまるところ、わたしは一つの被造物でしかないからです。あなたがわたしを底なし穴や、火と硫黄の池に落とされたとしても、わたしは被造物に過ぎません。あなたがわたしを用いられるとしても、わたしは被造物です。あなたがわたしを完全になさっても、わたしはやはり被造物です。あなたがわたしを完全にされなかったとしても、それでもわたしはあなたを愛します。なぜなら、わたしは被造物でしかないからです。わたしは創造主によって造られた極めて小さな被造物、造られたすべての人間の一人でしかありません。わたしを造られたのはあなたであり、そして今、あなたはわたしを再度ご自身の御手に取られ、あなたの御心のままになさってきました。わたしはあなたの道具となり、引き立て役となることをいといません。なぜなら、万事はあなたが定められたことだからです。それは誰にも変えられません。すべてのものと出来事は、あなたの御手の中にあります」。その時になると、あなたはもはや地位を考えず、そこから自由になるだろう。そのとき初めて、あなたは確信をもって堂々と求めることができ、そうして初めてあなたの心はあらゆる束縛から自由になれる。ひとたびそれらの物事から解放されると、その人は懸念を抱かなくなる。目下のところ、あなたがたの大部分が懸念していることは何か。あなたがたはいつも地位に束縛され、自分の将来の見込みを絶えず心配している。あなたがたはいつも神の発する言葉の書籍を手にしてページをめくり、人間の終着点に関する発言を読みたがり、自分の将来の見込みがどのようなもので、自分の終着点がどのようなになるかを知ろうと望んでいる。あなたはこう不思議に思う。「自分には本当に将来の見

込みがあるのか。神がそれらを取り去られたのか。神はただ、わたしは引き立て役だとおっしゃるだけだ。それならば、わたしの将来の見込みはどのようなものだろうか」あなたがたにとって、自分の将来の見込みや終着点を脇にのけるのは難しい。あなたがたは今や信者であり、働きのこの段階に関する認識が多少ある。しかし依然として地位への欲望を脇にのけていない。自分の地位が高ければしっかり追求するが、地位が低いと追求しなくなる。地位の祝福のことが常に心の中にあるのだ。大半の人が自分から消極性を取り除けないのはなぜか。その答えは常に、将来の見込みが厳しいせいではないか。神の言葉が発せられるやいなや、あなたがたは急いで自分の地位と身分がいったいどのようなものであるかを知ろうとする。あなたがたは地位と身分を最優先し、ビジョンを第二とする。第三は自分が入るべきことであり、神の現在の旨が第四である。あなたがたは、神から与えられた「引き立て役」の肩書きが変わったかどうかをまず調べる。あなたがたはひたすら読み、「引き立て役」の肩書きが取り除かれたのを見ると、満足して神にひたすら感謝し、神の大いなる力を讃える。しかし、自分が依然として「引き立て役」だと知ると取り乱し、心の中のやる気が即座に消滅する。あなたがたがこのように求めれば求めるほど、刈り入れる物は少なくなる。地位に対する欲望が強ければ強いほど、その人は深刻に取り扱われ、重大な精錬を受けなければならない。この種の人は無価値である。このような人はこれらの物事を完全に捨て去るため、取り扱いと裁きを十分受ける必要がある。あなたがたが最後までこのように追求するなら、収穫は何もない。いのちを追求しない者が変わることはできず、真理を渴望しない者は真理を得られない。あなたは自分の変化と入りの追求に重点を置かず、その代わりに度を越した欲望や、神への愛を縛り、神に近づくことを阻む物事にいつも重点を置く。そのような物事があなたを変えられるのか。あなたを神の国へと導けるのか。あなたの追求の目的が真理を求めることでないならば、これを機に俗世へ戻ってそこでの成功を目指せばよいだろう。このようにして時間を無駄にするのはまったく価値のないことである。なぜ自分を苦しめるのか。美しい世界であらゆる物事を享受できないことがあろうか。金銭、美女、地位、虚飾、家庭、子供など、このような俗世の産物はどれもあなたが享受できる最高のものではないのか。幸せになれる場所を探して、ここをさまようことが何の役に立つというのか。人の子に枕する所がないのであれば、どうしてあなたが安住の地を得られようか。どうして人の子があなたのために美しい安住の地を造れようか。それは可能なのか。わたしの裁きを除けば、あなたは今真理に関する説教を受けることしかできない。あなたはわたしから安楽を得ることも、日夜思い焦がれている安楽の寝床を得ることもできない。わたしはあなたにこの世の富を与えない。あなたが真に追求するな

らば、わたしは喜んであなたにいのちの道を残らず与え、あなたを水を得た魚のようにする。あなたが真に追求しないのであれば、わたしはそれをすべて取り上げる。安楽に食欲で、豚や犬のような者たちにわたしの口から言葉を与えるつもりはない。

脚注

a. 原文では「妻」となっている。

征服の働きの第二段階の効果はいかにして成し遂げられるのか

効力者の働きは征服の働きの第一段階であり、現在は征服の働きの第二段階である。征服の働きにおいても、完全にされることが語られるのはなぜか。それは将来への基盤を築くためである。現在は征服の働きの最終段階だが、その次に来るのは大いなる患難を経験する時であり、それは人類の完全化が正式に始まったことを示す。現在の主要な問題は征服であるものの、今はまた完全化の過程における第一段階の時でもある。この第一段階は人の認識と服従を完全にすることを伴い、当然のことながら、それは征服の働きの基礎を形作る。完全にされるには、将来の患難の只中において揺るぎなく立ち、次なる段階の働きを広めるべく、自分のすべてを捧げることができなければならない。これが完全にされることの意味であり、その時はまた、人が完全に神のものとされる時でもある。現在、わたしたちは征服されることについて話し合っているが、それは完全にされることについて話し合うのと同じことである。しかし今日行われる働きは、将来完全にされるための基礎であり、人が完全にされるには逆境を経験しなければならず、その逆境の経験は征服されることを土台にしていなければならない。現在の基礎がなければ、つまり完全に征服されていなければ、次なる段階の働きのあいだ揺るぎなく立っているのは難しい。単に征服されることは最終的な目標ではなく、それはサタンの面前で神への証しを立てる一步に過ぎない。完全にされることが最終的な目標であり、完全にされなければ抹消されたも同然である。将来逆境に直面して初めて、真の霊的背丈が見える。つまりその時にならなければ、神へのあなたの愛の純度は明らかにならないということである。現在、人はこのように言う。「神が何をしようと、神に服従しなければならない。だから、神の偉大なる力と神の性質を証明する引き立て役になることを辞さない。神がわたしたちに優しくろうと、わたしたちを呪おうと裁こうと、それでも神に感謝する」。このように言うのは、わずかな認識があることを示すだけで、そのような認識を現実に応用できるかどうかは、その認識が本物か否かによる。現在、人にそう

した識見と認識があるのは、征服の働きによる効果である。完全にされ得るかどうかは逆境に直面しなければわからず、その時になって、あなたが心から真に神を愛しているかどうか分かる。あなたの愛が本当に純粹であれば、あなたは「わたしたちは引き立て役で、神の手中にある被造物だ」と言う。また異邦人の諸国に福音を広めるとき、あなたはこのように言う。「わたしは奉仕しているに過ぎない。神はわたしたちの中にある墮落した性質を用いて、これらのことをすべて語り、神の義なる性質をわたしたちに示した。神がそうしたことを言わなければ、わたしたちには神を見ることも、神の知恵を理解することもできず、かくも偉大な救いと祝福を受けることもできないはずである」。経験に基づくこうした認識が本当にあれば、それで十分である。しかし、あなたが今日言うことの多くには認識が含まれておらず、どれも空虚な掛け声の寄せ集めに過ぎない。「わたしたちは引き立て役にして効力者である。征服され、神への鳴り響くような証しをしたい……」。ただ叫んだところで、現実があるということではなく、霊的背丈があることの証明にもならない。真の認識をもたねばならず、認識は試されなければならない。

神がこの時期に表した言葉をもっと読み、それと比較して自分の行動を見つめるべきである。あなたが完全に引き立て役なのは絶対的な事実である。今日、あなたの認識はどの程度なのか。考え、思い、振る舞い、言動など、あなたが表わすことはどれも、神の義と聖さの引き立て役になっているのではないのか。あなたがたが表わすことは、神の言葉が明らかにする墮落した性質を示しているのではないのか。あなたの思いや考え、動機、あなたにおいて明らかになった墮落は、神の義なる性質と神の聖さを示している。神もまた不浄の地に生まれたが、汚れに染まってはいない。神はあなたと同じ汚れた世界で生きているが、理知と見識を有しており、汚れを嫌悪する。あなたは自分の言動に汚れたものを何も見つけることさえできないかもしれないが、神にはそれが可能であり、それをあなたに指摘する。あなたの以前からの古いもの、つまり教養や見識や理知の欠如と遅れた生活様式は、今や暴き出されて白日の下に晒された。神が地上に来てこのように働きを行なうことでのみ、人は神の聖さと義なる性質を目の当たりにする。神はあなたを裁いて罰し、あなたに認識を得させる。時にはあなたの悪魔的な本性が露わになり、神はそれを指摘する。神は人の本質をすっかり知りつくしている。神はあなたがたのあいだで暮らしており、同じものを食べ、同じ環境の中で生きている。だが、それでも、神は人より多くのことを知っており、あなたを暴いて人の墮落した本質を見抜くことができる。人の処世哲学、不実、欺瞞ほど神が忌み嫌うものはない。人の肉体

的な交流を神はとりわけ嫌悪する。神は人の処世哲学をそれほどよく知らないかもしれないが、人が表わす堕落した性質をはっきり見て暴くことができる。神はこうしたことを通じて人に語りかけ教えるために働き、こうしたことを用いて人を裁き、神の義にして聖い性質を明らかにする。このようにして、人は神の働きの引き立て役になるのである。受肉した神だけが、人間の堕落した性質とサタンのあらゆる醜い顔を明らかにできる。神はあなたを罰せず、自身の義と聖さの引き立て役として用いるにすぎないが、あなたは恥じ入り、隠れる場所がない。あなたがあまりにも汚れているからである。神は人において暴かれたこれらのことを使って語り、それが白日の下に晒されて初めて、人は神の聖さに気づく。神は人のほんのわずかな不純さ、心の中の汚れた思いさえ見逃さない。人の言動が神の旨と一致しなければ、神は人を容赦しない。神の言葉の中に人間やそれ以外の何かの汚れが存在する余地はなく、それはすべて白日の下に晒されなければならない。そのとき初めて、神が本当に人間と違うことがわかる。人の中にほんの少しでも汚れがあれば、神はその人を完全に忌み嫌う。時には人は理解できず、「神よ、なぜそんなに怒るのですか。どうして人の弱さに配慮しないのですか。人に少し寛大になれないのですか。なぜ人に対してこれほどまでに思いやりがないのですか。人がどれほど堕落させられてきたかを明らかに知っているのに、なぜいまだに人をこのように扱うのですか」と尋ねることもある。神は罪を憎み、嫌悪しているが、あなたに不従順の痕跡が少しでもあれば、とりわけ嫌悪を感じる。あなたが反抗的な性質を表わすとき、神はそれを見て強く嫌悪する。この上なく嫌悪するのである。このようなことを通じて神の性質と神そのものが明らかにされる。それと人を比べると、神は人と同じものを食べ、同じ服を着、同じことを享受し、人と共に生きて暮らしているものの、それでも人と違うことがわかる。それが引き立て役の意義ではないのか。このような人間的なことを通じて神の力が示される。光の貴い存在を際立たせるのは闇なのである。

当然、神があなたがたを引き立て役にするのはそれ自体が目的ではない。むしろ、その働きが結実して初めて、人の反抗心が神の義なる性質の引き立て役であることが明らかになる。また、あなたがたが神の義なる性質の自然な表出を認識する機会に恵まれるのは、ひとえにあなたがたが引き立て役だからである。あなたがたは自分の反抗心ゆえに裁かれ罰せられるが、あなたがたを引き立て役にするのもまたその反抗心であり、神が授ける大いなる恵みを受け取るのも反抗心ゆえなのである。あなたがたの反抗心は神の全能性と知恵の引き立て役であり、あなたがたがこれほど偉大な救いと祝福を得られたのも反抗心のためである。あなたがたは何度もわたしに裁かれてきたが、人がかつて

受けたことのない偉大な救いを受け取った。この働きはあなたがたにとってこの上ない意義をもつ。「引き立て役」になることは、あなたがたにとって極めて価値あることでもある。つまり、あなたがたは引き立て役であるがゆえに救われ、偉大な恵みを得てきたのである。そうであれば、そのような引き立て役にはこの上ない価値があるのではないか。この上ない意義があるのではないか。あなたがたが引き立て役になって最大の救いを受けるのは、神と同じ領域、神と同じ汚れた地で生きているからである。神が肉となっていなければ、誰があなたがたに慈悲深く接し、誰が卑しいあなたがたの面倒を見ただろうか。誰があなたがたのことを気遣っただろうか。神が肉となってあなたがたのあいだで働きを行なっていなければ、それまで誰も受けたことのないこの救いを、あなたがたはいつ受けていただろうか。わたしが肉となってあなたがたのことを気遣い、あなたがたの罪を裁いていなければ、あなたがたはずっと以前にハデスへ落ちていたのではないのか。わたしが肉となり、あなたがたのもとでへりくだっていなければ、どうしてあなたがたが神の義なる性質の引き立て役になる資格を得られただろうか。あなたがたが引き立て役なのは、わたしが人の姿をとってあなたがたのあいだに到来し、あなたがたが最大の救いを得られるようにしたからではないのか。あなたがたがその救いを受けるのは、わたしが肉になったからではないのか。神が肉となってあなたがたと共に暮らしていなければ、それでもあなたがたは自分が人間地獄において犬や豚よりも卑しい生活を送っていることに気づいていただろうか。あなたがたが罰せられ、裁かれたのは、わたしの肉における働きの引き立て役だからではないのか。引き立て役の働き以上に、あなたがたにふさわしい働きはない。引き立て役だからこそ、裁きのさなかに救われるからである。引き立て役として務める資格を得ることは、人生の祝福だと思わないのか。引き立て役の働きをしているだけなのに、それまで得たことも想像すらしたこともない救いを受ける。今日、あなたがたの本分は引き立て役になることであり、その正当な報酬は永遠の祝福を将来享受することである。あなたがたが得る救いは、今だけのはかない識見でも、束の間の認識でもなく、さらに偉大な祝福、つまり永遠に続くいのちである。わたしは「引き立て役」を用いてあなたがたを征服したが、その救いと祝福はあなたがたを得るために与えられることを知るべきである。それは征服のためだが、わたしの救いをさらによくするためでもある。「引き立て役」は事実だが、あなたがたが引き立て役なのはあなたがたの反抗心のためであり、それゆえ誰も得たことのない祝福を受けたのである。今日、あなたがたは見え聞こえるようにされている。明日は受け取り、またそれ以上に、大いに祝福される。そうであれば、引き立て役にはこの上ない価値があるのではないのか。今日における征服の働きの効果は、あなたがたの反抗的な性

質が引き立て役として働くことで達成される。つまり、二度目の刑罰と裁きの頂点においては、あなたがたの汚れと反抗心を引き立て役として用い、あなたがたに神の義なる性質が見えるようになる。二度目の裁きと刑罰においてあなたがたが再び従順になると、神の義なる性質のすべてがあなたがたに公然と示される。つまり、あなたがたが征服の働きを受け入れ、これが完了するのは、あなたがたが引き立て役の本分遂行が終了する時でもある。あなたがたに呼び名をつけるのがわたしの意図ではない。むしろ、あなたがたの効力者としての役割を用いて一度目の征服の働きを行ない、背きを許さない神の義なる性質を示しているのである。あなたがたを対比させ、あなたがたの反抗心を引き立て役として働かせることで、二度目の征服の働きの効果が得られ、一度目には完全に明かされなかった神の義なる性質があなたがたに完全に明かされる。また、神の義なる性質のすべてと、神の働きの知恵、不思議、汚れのない聖さから成る、神そのもののすべてもあなたがたに示される。そうした働きの効果は、様々な期間における征服を通じて、また様々な度合いの裁きを通じて達成される。裁きが頂点に近づけば近づくほど、それは人の反抗的な性質を明らかにし、それだけ征服がさらに効果的になる。神の義なる性質の全体は、この征服の働きのあいだに明らかになる。征服の働きは二段階に分かれ、異なる段階と程度があるので、当然ながら達成される効果も異なる。つまり、人の服従の度合いがますます深まるのである。その後初めて、人は完全にされるための正しい軌道に全面的に乗ることができる。また征服の働きがすべて終わって（二度目の裁きが最後の効果を挙げて）初めて、人はもはや裁かれることはなくなり、いのちを経験する正しい軌道に入ることを許される。裁きは征服の表われであり、征服は裁きと刑罰の形をとるからである。

神は最も遅れた不浄の地で肉となったが、そうすることでのみ、神はその聖く義なる性質のすべてをはっきり示すことができる。では、神の義なる性質は何を通じて示されるのか。それは神が人の罪を裁くとき、サタンを裁くとき、罪を忌み嫌うとき、神に反対、反抗する敵を憎むときに示される。わたしが今日語る言葉は、人の罪を裁き、人の不義を裁き、人の不従順を呪うためである。人の狡猾さや不実さ、人の言葉や行ないなど、神の旨にそぐわないものはどれも裁きの対象にされなければならない。人の不従順は罪として非難されなければならない。神の言葉は裁きの原則を中心としており、神は人の不義を裁き、人の反抗心を呪い、人の醜い顔を暴くことで神自身の義なる性質を明らかにする。聖さは神の義なる性質の表われの一つであり、神の聖さとは実のところ神の義なる性質なのである。あなたがたの墮落した性質が今日の言葉の背景であり、わたし

はそれを用いて語り、裁き、征服の働きを実行する。それだけが実際の働きであり、それだけが神の聖さを完全に光り輝かせる。あなたの中に墮落した性質の痕跡が一切なければ、神はあなたを裁かず、あなたに神の義なる性質を示すこともない。あなたには墮落した性質があるのだから、神はあなたを逃さず、これを通じて神の聖さが示される。もしも神が人の汚れと反抗心があまりに大きいことを知りながら、語ることもあなたを裁くこともせず、あなたの不義を罰することもないならば、それは神ではないことを証明する。罪に対する憎しみがなく、人と同じくらい汚れているからである。今日、わたしがあなたを裁くのはあなたの汚れのためであり、わたしがあなたを罰するのはあなたの墮落と反抗心のためである。わたしはあなたがたに力を見せびらかしているのでも、わざとあなたがたを抑圧しているのでもない。わたしがそうしたことを行なうのは、この不浄の地に生まれたあなたがたが、かくも深く汚れに染まっているからである。あなたがたは高潔さと人間性をすっかり失い、この世の最も不潔な場所で生まれた豚のようになってしまった。そのためあなたがたは裁かれ、わたしはあなたがたに怒りを解き放つのである。まさにこの裁きのために、神が義なる神であること、神が聖い神であることをあなたがたは理解できたのである。まさに神の聖さと義のために、神はあなたがたを裁き、あなたがたに怒りを解き放つのである。神は人の反抗心を見ると義なる性質を表わすことができ、人の汚れを見ると聖さを表わすことができるので、これは神が神自身であり、聖く汚れがない存在でありながら、不浄の地で暮らしていることを示すのに十分である。人が誰かと悪事にふけり、聖いところも義なる性質もなければ、その人に人間の不義を裁く資格はなく、人間の裁きを実行するのにもふさわしくない。人が別の人を裁くなら、それは自分の顔面を平手打ちするようなものではないだろうか。互いに同じくらい汚れている人たちに、どうして自分と似た者を裁く資格があるだろうか。聖い神自身だけが汚れた人類全体を裁けるのである。人がどうして人の罪を裁けようか。人の罪を見てその罪を非難する資格がどうして人にあり得ようか。神に人の罪を裁く資格がないのであれば、どうしてそれが義なる神自身でありえようか。人の墮落した性質が明かされるとき、神は人を裁くために語る。そのとき初めて、神が聖いことを人は目の当たりにする。神が人の罪を暴きつつ、その罪を裁き罰するとき、その裁きから逃れられる人や物はない。汚れているものはすべて神に裁かれるが、そうすることでのみ神の性質は義だと言えるのである。さもなければ、あなたがたが名実ともに引き立て役だとして言えるだろうか。

イスラエルで行なわれた働きと今日の働きには大きな違いがある。ヤーウェはイスラ

エル人の生活を導き、刑罰や裁きはさほどなかった。当時、人はこの世のことをあまりに理解しておらず、墮落した性質がほとんどなかったからである。その時代、イスラエル人は言わず語らずヤーウェに従った。ヤーウェが祭壇を建てるように言えばすぐに建てたし、祭司の衣服をまとうように言えばそれに従った。当時、ヤーウェは羊の群れを牧する羊飼いのようであり、羊は羊飼いの導きに従って草場の草を食べた。ヤーウェは彼らの生活を導き、衣食住や旅の仕方を指導した。当時は神の性質を明らかにする時ではなかった。当時の人類は生まれたばかりであり、反抗的かつ敵対的な者はほとんどおらず、人類のあいだに汚れもさほどなかったのも、人は神の性質の引き立て役を務めることができなかったからである。神の聖さが示されるのは、不浄の地から来る人を通じてである。今日、神は不浄の地の人々が示す汚れを用いて裁きを行なうが、そのようにして裁きのさなかに神であるものが表わされる。神はなぜ裁くのか。神は罪を憎むので裁きの言葉を語ることができる。人類の反抗心を忌み嫌っていなければ、どうしてそこまで怒ることができるというのか。神に嫌悪や不快が一切なく、人の反抗心を気に留めなかったならば、それは神が人と同じくらい汚れていることを証明するであろう。神が人を裁き罰することができるのは汚れを忌み嫌うからであり、神が忌み嫌うものは神の中に存在しない。神の中にも抵抗や反抗心があれば、神が敵対的で反抗的な者を憎まないであろう。終わりの日の働きがイスラエルで行なわれたなら、それには何の意味もないであろう。中国というどこよりも暗く遅れた地で終わりの日の働きが行われているのはなぜか。それは神の聖さと義を示すためである。要するに、その地が暗ければ暗いほど、神の聖さがさらに明瞭に示されるのである。事実、このことはすべて神の働きのためである。今日あなたがたは初めて、神が天から降臨して自分たちのあいだに立ち、自分たちの汚れと反抗が際立たせていることに気づいた。そして今初めて、あなたがたは神を知る。これは最も偉大な高揚ではないか。実のところ、あなたがたは中国における選ばれた民の一団である。あなたがたが選ばれて神の恵みを享受したが、偉大な恵みを享受するのにふさわしくないのだから、これはすべてあなたがたが最大限に高く掲げられていることを証明する。神はあなたがたの前に姿を現わし、その聖い性質を残らずあなたがたに示し、そのすべてをあなたがたに授け、享受し得るすべての祝福をあなたがたに享受させた。あなたがたは神の義なる性質を味わっただけでなく、それ以上に、神の救い、神の贖い、無限の神の愛を味わった。他の何より汚れた存在であるあなたがたが、そのような偉大な恵みを享受したのである。あなたがたは祝福されていないのか。これは神による高揚ではないのか。あなたがたは最も地位が低く、こうした偉大な祝福を享受するのに本質的にふさわしくない。それでも神はあなたがたを高揚して例外を設け

たのである。あなたは恥ずかしくないのか。自分の本分を尽くせなければ、最後は自分を恥じて罰することになる。今日、あなたは鍛錬されておらず、懲罰されてもいない。あなたの肉は安全かつ健全だが、最終的にこの言葉があなたに恥をかかせる。今のところ、わたしは誰一人として公然と罰していない。わたしの言葉は厳しいかもしれないが、わたしは人にどのように振る舞うのか。わたしは人を慰め、訓戒を与え、記憶を呼び起こす。わたしがそうするのはあなたがたを救うために他ならない。あなたがたは本当にわたしの旨を理解していないのか。あなたがたはわたしの言うことを理解し、それに鼓舞されなければならない。今ようやく、理解する人が数多くいる。これが引き立て役であることの祝福ではないのか。引き立て役であるのは最も祝福されたことではないのか。最終的に、福音を広めに行くとき、あなたがたは「わたしたちは典型的な引き立て役です」と言う。すると相手が「典型的な引き立て役だというのはどういうことか」と訊くので、「わたしたちは神の働き、そして神の偉大な力の引き立て役です。わたしたちの反抗心が神の義なる性質全体を明らかにするのです。わたしたちは終わりの日における神の働きに奉仕する存在であり、神の働きの付属物、またその道具なのです」と答える。それを聞くと相手は興味をそそられる。次にあなたはこう言う。「神が全宇宙の働きを完了させ、全人類を征服するにあたり、わたしたちはその見本にして模範なのです。要するに、聖かろうと汚れていようと、わたしたちはやはりあなたがたよりも祝福されています。わたしたちはすでに神を見ており、また神がわたしたちを征服するという機会を通じて、神の偉大な力が示されるからです。神の義なる性質が強調されたのは、ひとえにわたしたちが汚れて墮落しているからです。あなたがたは終わりの日における神の働きをこのように証しすることができますか。あなたがたにその資格はありません。これはわたしたちを神が高揚していることに他ならないのです。たとえ傲慢でなくても、わたしたちは誇りをもって神を讃えることができます。かくも偉大な約束を受け継げる人は誰もおらず、かくも偉大な祝福を享受できる人もいないからです。神による経営において、かくも汚れている自分たちが引き立て役として働けることに、わたしたちは深く感謝しています」。そして「見本と模範とは何ですか」と訊かれたら、あなたはこう答える。「わたしたちは人類の中で最も反抗的かつ汚れた存在です。サタンに最も深く墮落させられ、最も遅れて卑しい肉の存在なのです。わたしたちはサタンに利用された者の典型的な実例です。今日、わたしたちは人類の中で最初に征服される者として神に選ばれ、神の義なる性質を目の当たりにし、神の約束を受け継いできました。さらに多くの人を征服するのに用いられるので、わたしたちは人類の中で征服される者の見本にして模範なのです」。この言葉以上に優れた証しはなく、これはあなたの最上の

経験である。

征服の働きの内幕（２）

あなたがたはかつて王として君臨しようとしていたが、今日になってもまだ完全に諦めていない。いまだに王として君臨し、天を持ち上げ、地を支えたいと願っている。それでは、ひとつ質問しよう。あなたがたにそのような資格があるのか。あなたがたにはすっかり理知が欠けているのではないのか。あなたがたが求め、専念しているものは現実的なことか。あなたがたには正常な人間性さえない。これは惨めなことではないのか。だから今わたしは、征服されること、証しすること、素質を向上させること、完全にされるための道に入ることについてだけ話し、他のことは何も話さない。ありのままの真理にうんざりしている人がいる。そういう人は正常な人間性や人間の素質を向上させることについての話を聞いても、気乗りしない。真理を愛さない人を完全にするのは易しいことではない。あなたがたが今日、入って行き、神の心意にしたがって一步ごとに行動するなら、取り除かれることなどあるだろうか。中国本土で実に多くの働き、きわめて大規模な働きを行なった後、あれほど多くの言葉を語った後に、神が中途であきらめることなどあるだろうか。神が人を奈落の底に導くことなどありえようか。現在肝心かなめなことは、人間の本質を知らなければいけないということ、何に入っていくべきかを知らなければならないということである。いのちに入ることについて、性質の変化について、実際にどのように征服されるのか、どのように完全に神に従い、どのように神に最後の証しを立てるのか、死に至るまでの従順をどのように達成するのかについて話さなければならない。これらのことに集中し、現実的でも重要でもないことは、まずわきにやり、無視するべきである。今日、気づいているべきことは、どのように征服されるのか、征服された後、人はどのように振る舞うのかである。あなたは自分はすでに征服されていると言うかもしれないが、死に至るまで服従できるのか。自分の前途があるかどうかにかかわらず、最後まで従うことができないといけない。また、まわりの状況に関わらず、神への信仰を失ってはならない。最終的に、証しの二側面を達成しなければならない。ヨブの証し、すなわち死に至るまでの従順、そしてペテロの証し、すなわち神への至上の愛である。一側面では、ヨブのようではなければならない。ヨブは物質的な財産をすべて失い、肉の痛みに苦しめられたが、それでもヤーウェの名を捨てなかった。これがヨブの証しである。ペテロは死に至るまで神を愛することができた。ペテロは十字架につけられ死に直面してもなお神を愛していた。彼は自分の前途のことを思わず、輝かしい願いや途方もない思いを追い求めなかった。ひたすら神を愛し、神の

はからいのすべてに従うことだけを求めたのである。証しを立てたと見なされることが
できるまでには、また、征服された後で完全にされた人となるまでには、このような水
準に達しなければならない。今日、もし人がほんとうに自分の本質や地位を知っていた
なら、なおも自分の前途や願いを求めるだろうか。あなたが知っているべきことは、こ
うである。神がわたしを完全にするかどうかにかかわらず、わたしは神に従わなければ
ならない。神が今していることはみな良く、それはわたしのために行われている。それ
は、わたしたちの性質が変わり、わたしたちが自分からサタンの影響を取り除くことが
できるようになり、汚れの地で生まれたものの、自分自身から不純物を取り除き、汚れ
とサタンの影響を振り払い、サタンの影響を捨て去ることができるようにするためであ
る。もちろん、これはあなたに要求されることだが、神にとっては、人が従う決意をし
て神の采配のすべてに従うようになるように行う征服にすぎない。このようにして、も
のごとは成し遂げられる。今日、ほとんどの人はすでに征服されているが、その内面
にはいまだに反抗的で不服従なものが沢山ある。人の真の霊的背丈はまだあまりに小さい
が、希望と前途があるなら、活力に満たされることが可能である。希望と前途がなけれ
ば、人は消極的になり、神から離れることさえ考える。さらに、人には正常な人間性を
生きようとする強い願望がない。これは容認できない。だから、わたしは征服について
まだ話さなければならないのである。実のところ、完全にされることは征服と同時であ
る。征服されるにつれ、完全にされることによる最初の成果も得られる。征服されるこ
とと完全にされることに違いが見られるのは、人における変化の度合いによるものであ
る。征服されることは、完全にされることの最初の一步であって、その人がすでに完全
に完成されたというわけではなく、また、完全に神のものにされたことを証明してもい
ない。人が征服されると、その性質にはいくつかの変化が起こる。しかし、そのような
変化は完全に神のものとなった人に見られる変化には遥かに及ばない。今日、完了して
いるのは人間を完全にする最初の働き、つまり征服である。そして、もし征服されるこ
とができないのなら、完全にされるすべはなく、完全に神のものとされることもない。
ただわずかばかりの刑罰と裁きの言葉を受けるだけだが、それはあなたの心を完全に変
えることはできない。したがって、あなたは取り除かれる者の一人となる。それは、豪
華な食卓をただ目にするだけで、食べないのと同じである。これはあなたにとって悲劇
的な筋書きではないだろうか。だから変化を求めなければならない。征服されることで
あれ、完全にされることであれ、いずれもあなたの内に変化があるか、従順であるかど
うかに関係があり、これがあなたが神のものとなり得るかどうかを決定する。「征服さ
れること」と「完全にされること」は、ただ変化と従順さの度合い、また人の神への愛

がどれほど純粋であるかに基づいていることを心に留めなさい。今日求められているのは、あなたがすっかり完全にされることができることだが、まず初めに、征服されなければならない。つまり、あなたは神の刑罰と裁きについて十分に認識していなければならない、従うための信仰を持っていなければならない、また変化を求め、神を知ろうとしないなければならない。その時初めて、あなたは完全にされることが求める人となる。完全にされる過程において征服され、征服される過程において完全にされるということを理解すべきである。今日、完全にされることが、外側の人間性における変化と素質の向上を求めることができる。しかし、最も重要なことは、神が今日行うことにはみな意味があり有益であるということを理解できることである。それにより、汚れに満ちた地で生まれたあなたは汚れを逃れ、払い落とすことができる。それにより、あなたはサタンの影響を克服し、サタンの闇の影響から離れることができる。そして、これらに集中することによって、あなたはこの汚れの地において守られる。最終的にどのような証しを立てることをあなたは求められるのか。あなたは汚れの地で生まれたが、聖になることができ、二度と汚れることがなく、またサタンの支配下に生きているが、サタンの影響から脱け出すことができ、もはやサタンにとりつかれたり悩まされたりすることもなく、全能者の手の中で生きることができる。これが証しであり、サタンとの戦いに勝利した証拠である。あなたはサタンを捨てることができ、自分の生においてサタンの性質を表わすことはもはやなく、その代わり、神が人間を創造したとき、人間に達成するように求めたことを生きる。それはすなわち、正常な人間性、正常な理知、正常な見識、神を愛そうという正常な決意、神への忠実である。これこそが神の創造物が立てる証しである。あなたは言う。「わたしたちは汚れの地で生まれたが、神の守りのおかげで、神の導きのおかげで、また、神がわたしたちを征服したおかげで、わたしたちは自分からサタンの影響を取り除いた。わたしたちが今日従えるのもまた神による征服の成果であり、わたしたちが良いからでも、わたしたちが自然に神を愛したからでもない。神がわたしたちを選び、予め定めたからこそ、わたしたちは今日征服されており、神に証しを立てることができる、神に仕えることができるのである。また、神がわたしたちを選び、守ったから、わたしたちは救われ、サタンの支配から助け出され、赤い大きな竜の国にあっても汚れを捨てて清められることができる」。さらに、あなたが生きて外部に表明するものが、あなたには正常な人間性があり、言うことには理知があり、正常な人間の姿を生きていることを表明する。あなたを見た人に、「これは赤い大きな竜の姿ではないのか」と言わせてはならない。姉妹の振る舞いが姉妹にふさわしくなく、兄弟の振る舞いが兄弟にふさわしくなく、あなたには聖徒らしい礼儀正しさがまったくないとする。そ

れでは人が「あの人たちはモアブの子孫だと神が言ったのは当然だ。神はまったく正しい」と言うであろう。もし人があなたがたを見て、「あなたがたはモアブの子孫だと神が言ったが、あなたがたの生き方は、あなたがたがサタンの影響から離れたことを証明している。そのようなものはあなたがたの内にまだあるが、あなたがたはそれに背を向けることができる。あなたがたが完全に征服されたことを示している」と言うなら、征服され救われたあなたがたは、こう答える。「わたしたちがモアブの子孫であるというのはほんとうだが、わたしたちは神に救われた。過去におけるモアブの子孫は捨てられ、呪われ、イスラエル人が異邦人の只中に追放したが、現代では神はわたしたちを救った。わたしたちが誰よりも墮落しているのは本当で、このことは神の掟、事実であり、誰も否定できない。しかし、今日、わたしたちはその影響を逃れた。わたしたちは祖先を忌み嫌っている。わたしたちは自ら進んで祖先に背を向け、完全に放棄して、神のあらゆる采配に従い、神の意志に沿って行動し、神がわたしたちに要求することを満たし、神の心を満足させる。モアブは神を裏切った。彼は神の意志に沿って行動せず、神に憎まれた。しかし、わたしたちは神の心を思い、今日、神の心意を理解しているのだから、神を裏切ることはできない。わたしたちは古来の祖先を捨てなければならない」。以前、わたしは赤い大きな竜を捨てることについて話した。そして今日は、人が古来の祖先を放棄することについておもに語る。これは人の征服についての証しである。あなたが今日どのように入ろうと、この側面の証しを欠いてはならない。

人の素質はあまりに貧しく、正常な人間性があまりに欠けている。人の反応は極めて遅く、鈍い。サタンによる墮落のせいで、人は麻痺して鈍重になった。一年や二年では完全に変わることはできないものの、人は協力する決意を持たなくてはならない。これもまたサタンの前での証しだと言える。今日の証しは、現在の征服の働きによって達成された成果であり、また未来の追随者のための見本であり模範である。将来、それはあらゆる国に広まる。中国で行われる働きはすべての国に広まる。モアブの子孫は世界の民族の中で最も卑しい。「ハムの子孫が最も卑しいのではないのか」と尋ねる人がいる。赤い大きな竜の末裔とハムの子孫はそれぞれ異なる意義を表しており、ハムの子孫のことは別の話である。彼らがどのように呪われていようと、彼らはそれでもノアの子孫である。一方、モアブの血筋は純粋ではない。彼は姦淫によって生まれた。そこに違いがある。いずれの民も呪われたが、その地位は同じではない。それゆえモアブの子孫はすべての民の中で最も卑しい。そして、最も卑しい民の征服以上に説得力のある事実はない。終わりの日の働きはあらゆる規則を打ち破る。そして、あなたが呪われているか

罰せられているかに関わらず、わたしの働きを助け、今日の征服の働きの役に立つ限り、また、モアブの子孫であろうと赤い大きな竜の末裔であろうと、この段階の働きで神の創造物としての本分を果たし、出来る限りの努力をするのなら、必要な成果は得られる。あなたは赤い大きな竜の末裔であり、モアブの子孫である。要するに、肉と血から成る者はみな神の被造物であり、創造主に創られた。あなたは神の創造物であり、他に選択の道はないはずである。これはあなたの本分である。もちろん、今日、創造主の働きは全宇宙に向けられている。誰の子孫であるかにかかわらず、何よりもあなたは神の創造物のひとつである。あなたがたモアブの子孫は神の創造物の一部であり、唯一の違いは、あなたがたは地位が低いというだけである。今日、神の働きはすべての創造物のもとで、全宇宙に向けて行われているので、創造主は働きを行なうためにどの人や物事を選ぼうと自由である。神は、あなたが誰の子孫であったかなど気には留めない。あなたが神の創造物のひとつである限り、また、神の働き、すなわち征服と証しの働きに有益である限り、神はあなたの中でためらうことなく働く。これは人の伝統的な観念を打ち砕く。すなわち、神はけっして異邦人のもとでは、とりわけ呪われた卑しい者のもとでは働かず、それは呪われた者は後世も永遠に呪われており、けっして救われる機会がないからだとか、神は聖いので、けっして異邦人の国に下り働くことも汚れた国に足を踏み入れることもないとかいうものである。このような観念はすべて終わりの日の神の働きによって粉碎されている。神はあらゆる創造物の神であり、天と地と万物を支配しており、イスラエル人だけの神ではないことを知りなさい。したがって、中国でのこの働きには極めて大きな意義がある。そして、それはあらゆる国に広まるのではないのか。未来の大いなる証しは、中国だけに限られない。もし神があなたがただけを征服したなら、悪魔は説き伏せられるだろうか。悪魔には征服されることや、神の偉大な力は理解できない。全宇宙の神の選民が、この働きの究極的成果を目にして初めて、すべての創造物が征服されるのである。モアブの子孫ほど後進的で墮落した者はいない。もしこのような人たちが征服されたなら、つまり最も墮落して、神を認めず、神が存在することを信じていなかった人たちが征服されようものなら、そして、その口で神を認め、神を讃え、神を愛せるのなら、それこそが征服の証しである。あなたがたはペテロではないが、ペテロの姿で生きており、ペテロの証しを自分のものとすることができる。ヨブに関してても然りであり、それは最も偉大な証しである。最終的にあなたはこうに言う。「わたしたちはイスラエル人ではなく、見捨てられたモアブの子孫だ。またペテロでもなく、彼の素質にわたしたちは及ばない。またヨブでもない。神のために苦しみ、神に自らを捧げ尽くしたパウロの決意には匹敵することさえできない。そして、わた

したちはひどく遅れている。だから、わたしたちは神の祝福を享受する資格がない。それにもかかわらず、今日、神はわたしたちを引き上げた。だからわたしたちは神を満足させなければいけない。また、素質や資格が不十分であっても、わたしたちには神を満足させたいという思いがある。わたしたちにはその決意がある。わたしたちはモアブの子孫で、呪いを受けた。これは神の定めたことで、わたしたちには変えることはできない。しかし、わたしたちの生きざま、わたしたちの認識は変えられる。そしてわたしたちは神を満足させようと固く心に決めている」。このような決意があったなら、それはあなたが征服されることへの証しを立てた証拠となる。

征服の働きの内幕（３）

征服の働きで達成される成果は、まず何よりも人間の肉がもはや反抗しないことである。つまり、人間の知性が神についての新たな認識を得、人間の心が完全に神に従うようになり、人間が神のために存在することを望むようになることである。人の性格や肉体が変わっても、その人が征服されたとは言えない。人の考え、意識、理知が変化すれば、つまり、精神的な態度全体が変われば、神に征服されたのである。従うことを決意し、新たな心的態度を自分のものとし、もはや神の言葉や働きに独自の観念や意図を持ち込まず、頭脳が普通に考えることができるならば、つまり、神のために心を尽くして努力できるなら、このような人は完全に征服された人である。宗教において、多くの人は肉体を抑制し、十字架を負い、生涯にわたって大いに苦しむ。最期の息を引き取るまで苦しみ忍耐し続けることさえある。死ぬ日の朝まで断食を続けている人もいる。このような人はよい食物やよい衣服を生涯自ら拒否し、苦しみだけを重視する。肉体を抑制し、自らの肉を捨てられる。苦しみに耐える精神は賞賛に値する。しかし、このような人の考え方、観念、精神的態度、そしてまさに古い本性はほんの少しも取り扱いを受けたことがない。彼らには真の自己認識が欠けている。彼らが心に抱いている神の姿は、伝統的な抽象的で漠然としたものである。彼らの神のために苦しもうという決意は、熱意と積極的な性格から来ている。神を信じてはいるが、神を理解していないし、神の心意も知らないのである。彼らは神のためにただ盲目的に働き、苦しむだけである。識別をもって行動することを一切重視せず、自分の奉仕が実際に神の心意を満たすようにするにはどうすべきかなどは、ほとんど考慮しない。また、神を知るに至るためにはどうするかということもほとんど気づいていない。彼らの仕える神は本来の姿のものではなく、伝説に包まれた神、自分たちの想像の産物である神、人から聞いたか書物にある神である。彼らは豊かな想像力と敬虔な心をもって神のために苦しみ、神が行なおうと

する働きに取り組む。彼らの奉仕は不正確なあまり、実際には神の旨に沿ってほんとうに奉仕を行なえる人は誰もいない。彼らが嬉々としてどれほど苦しもうと、彼らが持つ奉仕についての元来の考え方と神の姿は変わらないままである。なぜなら、彼らは神の裁きと刑罰、精錬と完成を経験していないからであり、真理に導かれたことがないからである。たとえ救い主イエスを信じていても、彼らの誰一人として救い主を見たことがない。ただ伝説と噂から救い主のことを知っているだけである。その結果、彼らの奉仕は盲人が父親に仕えるように、目を閉じて行き当たりばったり仕えるにすぎない。このような奉仕で最終的に何を達成できるであろうか。そして、誰がそれを認めるのであろうか。最初から終わりまで、彼らの奉仕はまったく変わらないままである。彼らは人間の作り出した教えしか受けず、自分たちの本性と好みだけに基づいた奉仕をする。それがどんな褒美をもたらすというのか。イエスを見たペテロでさえ神の心意にあわせて仕えるにはどうすべきかを知らなかった。ペテロにこれがわかったのは最後、老年になってからである。このことから、取り扱いも刈り込みもまったく経験したことがなく、導いてくれる人もいなかった盲人について何が言えるであろうか。現在あなたがたのうちの多くの人の奉仕は、そうした盲人の奉仕のようではないのか。裁きを受けていない人、刈り込みと取り扱いを受けず変わらずにいる人、こうした人はみな、不完全にしか征服されていないのではないのか。そうした人が何の役に立つのか。考え方、人生の理解、神についての理解が何の変化もなく、本当には何も得たものがないのなら、けっして奉仕によって顕著な成果を得られない。ビジョンと神の働きについての新しい認識なしでは、征服されることはできない。そうであるなら、あなたの神に従う方法は、苦しみ断食する人たちと同じである。つまり、ほとんど無価値なのである。彼らのすることには証しがないからこそ、その奉仕が無駄だとわたしは言うのである。彼らは生涯をとおして苦しみ、監獄で過ごし、いつまでも忍耐を示し、愛にあふれ、永遠に十字架を背負い、世の中からけなされ、拒まれ、あらゆる苦難を経験する。彼らは最後まで従うが、それでも征服されておらず、征服されたことについて何の証しもできない。彼らは少なからぬ苦しみを経ているが、心の中ではまったく神を知らずにいる。彼らの古い考え方、古い観念、宗教的実践、人間がつくった知識、人間の考えは取り扱いを受けていない。そこには新しい認識がまるでない。彼らが神について理解していることは、少しも真実でも正確でもない。彼らは神の心意を誤解している。それが神に仕えるということであろうか。過去にどのように神を理解していたとしても、今日もそれが同じままで、神が何をしようと、自分なりの観念や考えに基づいて神を理解し続けているならば、つまり、神について新しい真実の認識が一切なく、神の真の姿や性質を知ることができな

いならば、そして神をまだ封建的な迷信的な考え方に基づいて、人間の想像や観念に導かれて理解しているならば、あなたはまだ征服されていないのである。わたしがこうしたことを今述べているのは、あなたに理解させ、それがあなたを正しく新たな理解へと導くようにである。このように述べるのは、あなたの古い観念や古い理解の仕方を一掃して、新たな認識を得られるようにするためでもある。もしほんとうにわたしの言葉を飲み食いするなら、理解は大きく変わる。従順な心で神の言葉を飲み食いするなら、視点は逆転する。繰り返し刑罰を受け入れられる限り、古い考え方は徐々に変化する。新たな考え方が古いものに完全に取って代わるなら、実践もまたそれに伴って変わっていく。このようにして、奉仕はますます適切なもの、ますます神の心意にかなうものになっていく。もし自分の生活、人生についての認識、神についての多くの観念を変えられるなら、持って生まれた性質は徐々に減じる。これが、そしてこれこそが、神が人間を征服したときの成果であり、これが人間に見られる変化である。神への信仰において、自分の体を抑制し、耐え、苦しむことしか知らず、それが正しいことなのか悪いことなのか、まして、それが誰のために行われるのかわからないなら、どうしてそのような実践が変化につながるであろうか。

わたしがあなたがたに要求しているのは、あなたがたが自分の体を縛り付けることや、あなたがたの脳が勝手気ままに考えることを止めることではないということを理解しなさい。これは働きの目標でもなければ、現在行わなければいけない働きでもない。現在、あなたがたは自分自身を変えられるように肯定的な角度から理解しなければならぬ。一番必要な行動は、神の言葉を身につけることである。つまり、今、目の前にある真理とビジョンを完全に身に付け、前進し実践することである。これはあなたがたの責任である。わたしはさらに大きな照らしを求め獲得することをあなたがたに求めているのではない。現在、あなたがたにはそれだけの霊的背丈がまったくない。あなたがたに求められているのは、できるだけのことを行い、神の言葉を飲み食いすることである。あなたがたは神の働きを理解し、自分の本性、本質、古い生活を理解しなければいけない。とりわけ、過去の誤った実践と以前かかわっていた人間の行いを理解しなければいけない。変わるためには、自分の考え方を変えることから始めなければいけない。まず、古い考えを新しいものに変え、新しい考えにあなたがたの言葉と行動、生活を支配させなさい。これが、今あなたがた一人ひとりに求められていることである。盲目的に実践し、盲目的に従うのはやめなさい。根拠と目標をもたなければならない。自分を騙してはならない。神への信仰が何のためなのか、それから何が得られるべきなのか、今何

に入っていかなければならないのかがわかっていなければならない。これらすべてを知っていなければならない。

あなたがたが現在入るべきことは、生活と力量の向上である。さらに、過去の古い見方を変え、思考を変え、観念を変えなければならない。あなたがたの生活全般に再生が必要である。神の業についての理解が変わり、神の語ることすべての真理について新たに認識し、内面の認識が向上すれば、生活はより良い方向に変化する。今、人のすること、言うことはみな实际的である。これらは教義ではなく、人間のいのちに必要なことであり、人が自分のものとすべきことである。これは征服の働きの間に人間に起こる変化、人間が経験すべき変化であり、これが人間が征服されたときの成果である。あなたが考え方を変え、新しい精神的態度を身につけ、自分の観念や意図、過去の論法を捨て、あなたの内に深く根ざした諸々のことを捨て、神への信仰を新たに認識したとき、あなたの立てる証しは向上し、あなたの人となり全体が真に変わっている。こうしたことはみな、最も実践的で、最も現実的で、最も基本的な事柄、つまり、過去には人にとって把握し難く、かかわることができなかった事柄である。これらが霊の真の働きである。あなたは過去に聖書をどれくらい正確に理解していたか。今日、手短かに比べてみるとわかる。過去にあなたはモーセ、ペテロ、パウロ、あるいはあらゆる聖句と聖書的見解を頭の中で持ち上げて、仰ぎ見ていた。聖書を最高のものとみなすよう今求められたら、あなたはそうするであろうか。聖書には人が書いた記録があまりに多く収められており、聖書はただ神の働きの二段階について人が説明しているものであることが分かるであろう。聖書は歴史の本である。これは聖書についてのあなたの理解が変わったという意味ではないのか。マタイの福音書に記されているイエスの系譜を見れば、あなたは「イエスの系譜だと。無意味だ。これはヨセフの系譜であり、イエスのものではない。イエスとヨセフは無関係だ」と言うであろう。今聖書を見るあなたの理解は違っているのである。つまり、あなたの視点は変わり、聖書に関して古い宗教学者よりも高度の認識をもたらす。誰かがこの系譜に何かがあると言えば、「それは何ですか。説明してください。イエスとヨセフは無関係です。知らないのですか。イエスに家系図がありえますか。どうしてイエスに祖先がありえるのですか。どうしてイエスが人の子孫になれるのですか。イエスの肉はマリアから生まれました。イエスの霊は神の霊であり、人間の霊ではありません。イエスは神の愛する子です。ではどうしてイエスに家系図がありえるのですか。地上でイエスは人類の一員ではありませんでした。では、どうしてイエスに系譜がありえますか」のように答えるであろう。家系図を分析し、真実を明確に説明し、

あなたが理解したことを分かち合うと、説明をした相手は言葉を失う。聖書を参照し、あなたに「イエスには家系図がありました。あなたの今日の神には家系図がありますか」と尋ねる人もいることであろう。そこであなたは知っていることを話す。それは最も現実的なことである。このように、あなたの認識は成果を生むことになる。実際、イエスはヨセフとまったく関係がなく、アブラハムとの関係はさらに少ない。イエスはイスラエルで生まれたというだけである。しかし、神はイスラエル人でもイスラエル人の子孫でもない。イエスがイスラエルで生まれたからといって、神がイスラエル人だけの神であるということではない。神が受肉の働きを行なったのは、神の働きのためでしかなかった。神は宇宙全体の創造の神である。神はイスラエルでまず働きの一段階を行なっただけで、その後、異邦人の諸国で働き始めた。しかし、人々はイエスをイスラエル人の神であると考え、さらにイスラエル人とダビデの子孫の一人として位置づけた。世界の終わりにはヤーウェの名前は異邦人の諸国で大いなるものとなると聖書にはある。これは終わりの日には、神は異邦人の諸国で働くということである。神がユダヤで受肉したのは、神がユダヤ人だけを愛していることを示しているのではない。ただ、働きが必要としたので、そこで生まれただけである。（イスラエル人が神の選民であったために）神はイスラエルでなければ受肉できなかったということではない。神の選民は異邦人の諸国にもいるのではないのか。イエスの働きが異邦人の諸国に広まったのは、イエスがユダヤでの働きを終えた後である。（イスラエル人はイスラエル以外のあらゆる民族を「異邦人」と呼んだ。）実のところ、それらの異邦人の諸国にも神の選民が住んでいた。当時はそこではまだ働きが行われていなかったというだけである。働きの最初の二段階がイスラエルで起き、異邦人の諸国では何も行われなかったため、人々はイスラエルをとて重視している。異邦人の諸国での働きは今日始まったばかりであり、そのため人々がなかなか受け入れられないのである。このようなことをすべてはっきりと理解でき、正確に捉えて正しく見ることができれば、今日および過去の神を正確に認識したことになり、その認識は歴代の聖徒が有していた神についての理解よりも崇高である。あなたが今日の働きを経験し、神自らの発言を今日聞いても、神の全体を認識してはいない。あなたが過去と同様に追い求め続け、新しいものが取って代わらず、そして特にあなたがこの征服の働きをすべて経験しながらも、最終的にあなたに何の変化も見られなければ、あなたの信仰は飢えを満たすためだけにパンを求める人のような信仰ではないのか。その場合、征服の働きはあなたにどんな成果ももたらさなかったことになる。そうであれば、あなたは排除される人にならないだろうか。

征服の働きがすべて終わるとき、あなたがたの誰もが神はイスラエル人だけの神ではなく、むしろあらゆる被造物の神であることを理解していなければならない。神はイスラエル人だけではなく人類すべてを創造した。神はイスラエル人だけの神だとか、イスラエル以外の国で神が受肉することなどありえないと言うのなら、征服の働きの過程において、あなたはいまだに何も認識しておらず、神は自分の神であるということを少しも認めていないことになる。あなたはただ神がイスラエルから中国に移り、無理やりあなたの神にさせられていると認めるだけである。まだこのような見方をしているのなら、わたしの働きはあなたにおいて無益で、あなたはわたしの言ったことを何一つ理解していないことになる。もし、マタイがしたように最終的にあなたもわたしの系図を書き、わたしに適切な祖先をみつけ、わたしの「正しい」系統をみつけ、そのゆえに二度の受肉に二つの系図があるということになれば、これは世界最大の冗談にならないであろうか。わたしの系図をみつけた「善意の人」であるあなたは、神を分割した人になってしまったのではないのか。そんな罪の重荷をあなたは負えるのか。これだけの征服の働きの後でも、神はあらゆる被造物の神であるとあなたがいまだに信じず、神はイスラエル人だけの神だといまだに信じているのなら、あなたは公然と神に抵抗していることになるのではないか。あなたを今日征服する目的は、神があなたの神であり、また他の人々の神でもあり、最も重要なことに、神を愛するすべての人の神であり、すべての被造物の神であることをあなたに認めさせることである。神はイスラエル人の神であり、エジプト人の神である。神は英国人の神であり、アメリカ人の神である。神はアダムとエバだけの神ではなく、アダムとエバの子孫すべての神でもある。神は天のすべてのものと地上のすべてのものの神である。あらゆる種族は、イスラエル人であろうと異邦人であろうとみな、唯一神の手の中にいる。神はイスラエルで数千年働き、かつてユダヤに生まれただけでなく、今日は中国に、赤い大きな竜の国がとぐろを巻いているこの場所に降り立った。もしユダヤに生まれることで神がユダヤ人の王になるのなら、あなたがたみなのもとに降り立つことで、神はあなたがたの神となるのではないのか。神はイスラエルの民を導きユダヤに生まれたが、また、異邦人の国にも生まれた。神の働きはみな、神が創造した人類全体のためではないのか。神はイスラエルの民を百倍愛し、異邦人を千倍憎んでいるのか。それはあなたがたの観念ではないのか。神があなたがたの神ではなかったということではなく、どちらかということ、あなたがたが神を認めないのである。神があなたがたの神でありたくないということではなく、どちらかということ、神を拒んでいるのはあなたがたである。被造物のうち誰が全能者の手の中にいないのか。今日あなたがたを征服することにおける目的は、神はあなたがたの神にほかならないとあな

たがたに認めさせることではないのか。もしあなたがたが神はイスラエル人だけの神であるといまだに言い張り、イスラエルのダビデ家が神の誕生の起源であり、イスラエル以外の民族にはどれも神を「生む」資格がないどころか、異邦人の種族はヤーウェの働きを直接受けることはできないと主張するのなら、もしまだこのように考えているのなら、頑固に抵抗していることにならないであろうか。いつまでもイスラエルにこだわるのではない。神は現在ここに、あなたがたとともにいる。また、天を仰ぎ見てばかりいるのではない。天の神を慕い求めるのはやめなさい。神はあなたがたのもとに来たのだから、どうして天にいたることになるのか。神を信じるようになって長くはないのに、あなたには神についての観念が多くあり、そのせいでイスラエル人の神がもったいなくも自分たちに現れてくださるなどとはほんの一瞬も考えようとしないほどである。まして自分たちが耐え難いほど汚れていることを思い、どうして神自身の出現を自分たちが見ることができるのかを考えようとしない。あなたがたはまた、神がどうして異邦人の国に直接出現しえるということを考えてみたこともない。神はシナイ山かオリーブ山に下り、イスラエル人に現れるはずである。異邦人（つまり、イスラエル以外の人）はみな、神の嫌悪の対象ではないのか。どうして神が自らそのような人たちのもとで働くことなどあるのか。こうしたことはみな、あなたがたが長年にわたって築き上げた根深い観念である。今日あなたがたを征服する目的は、あなたがたのそうした観念を打ち砕くことである。だから、シナイ山やオリーブ山ではなく、あなたがた、過去に神が導いたことのない民族のもとに神が自ら現れるのをあなたがたは見ているのである。神がイスラエルで二段階の働きを行なった後、イスラエル人とすべての異邦人は等しくある観念を抱くようになった。神は確かに万物を創造したが、神はイスラエルの民だけの神であり、異邦人の神になるつもりはない、という観念である。イスラエル人は次のように信じている。神は自分たちだけの神であり、あなたがた異邦人の神ではなく、また、あなたがたはヤーウェを崇めないで、わたしたちの神であるヤーウェはあなたがたを憎んでいる。こうしたユダヤ人はさらにこうも信じている。主イエスはわたしたちユダヤ人の姿をとり、ユダヤ民族のしるしをつけた神である。神はわたしたちのもとで働く。神の姿とわたしたちの姿は同じである。わたしたちの姿は神に近い。主イエスはわたしたちユダヤ人の王である。異邦人には、このような偉大な救いを受ける資格がない。主イエスはわたしたちユダヤ人の罪のための捧げ物である。イスラエル人とユダヤ民族がこのような観念をもつようになったのは、あの二段階の働きに基づいているにすぎない。彼らは神を自分たちだけのものであると傲慢に主張して、神が異邦人の神でもあることを認めない。このように異邦人の心の中で神は中身のない空間になった。神は異邦人の神

になることを望まず、イスラエル人、つまり神の選民、そしてユダヤ民族、とりわけ神に従った弟子たちだけを好むのだと誰もが信じるようになったためである。ヤーウェとイエスの働きは全人類の存続のためであると知らないのか。あなたは今、神はイスラエルの外に生まれたあなたがたみな神であると認めるのか。神は今日ここに、あなたがたのもとにいるのではないのか。これは夢ではありえない。そうではないのか。この現実を受け入れないのか。あなたがたはこれを信じようともこれについて考えようともしない。あなたがたがどのように見ようと、神はここ、あなたがたとともにいるのではないのか。あなたがたはこれらの言葉を信じることをまだ恐れているのか。今日のこの日からは、征服された人と神に従いたいと願う人はみな神の選民ではないのか。あなたがたは今日従っているが、みなイスラエルの外にいる選ばれた民ではないのか。あなたがたの身分はイスラエル人と同じではないのか。これはみなあなたがたが認めなければいけないことではないのか。これはあなたがたを征服する働き目標ではないのか。あなたがたには神が見えるのだから、神は永遠に、始まりから未来まで、あなたがたの神である。あなたがたみな神に従い、忠実に従順な被造物でいたいと願う限り、神はあなたがたを見捨てない。

神を愛したいとどれほど願うかに関わらず、神に今日まで従ってきた人間は概して従順であった。この働きが終わる最後にならなければ、人は十分に悔い改めない。そのとき人は本当に征服される。現在、人は征服される過程にあるに過ぎない。働きが終わる瞬間、人は完全に征服されるが、今はそうではない。誰もが確信をもっている、それは人が完全に征服されたことを意味しない。これは、現在のところ、人は言葉だけで実際の出来事を見ておらず、どれほど深く信じていようとも、まだ不確かなままだからである。このため、最後の実際の出来事が起こり、言葉が現実になって初めて人は完全に征服されるのである。現在、こうした人たちが征服されているのは、これまで聞いたことのない奥義を多く聞いているからである。しかし、この人たち一人ひとり内面では、神の言葉の一つひとつが現実化するのを確認できる実際の出来事を依然探し続け、待ち続けている。その時になって初めて彼らはすっかり確信する。結局のところ、こうした現実化した実際の出来事を人がみな見て、その現実が人を確信させるに至って初めて、人は心と言葉と目に信念を示し、心の底から完全に確信するのである。人間の本性とはこのようなものである。言葉がすべて実現するのを、実際の出来事が起きているのを、災難が誰かにふりかかっているのを見なければならないのである。そうすれば、あなたがたは心の底で完全に信じる。ユダヤ人のように、あなたがたはしるしや奇跡

を見ることにこだわっている。それなのに、しるしや奇跡があり、あなたがたの目を大きく開かせるはずの現実の出来事が起こっていることがいつまでも見えないままである。空から降りてくる誰かであるにせよ、あなたがたに話しかける雲の柱にせよ、わたしがあなたがたのひとりに行く悪魔払いにせよ、あなたがたのあいだで雷鳴のように響くわたしの声にせよ、あなたがたはこうした出来事を見たいとこれまでいつも思っていたし、これからもそう思い続ける。神を信じることにおけるあなたがたの最大の願いは、神が来てあなたがたに直接しるしを示すのを見ることであると言える。そうなれば、あなたがたは満足するのである。あなたがたを征服するために、わたしは世界創造に似た働きを行い、それに加えて、何らかのしるしを見せなければならない。そうして、あなたがたの心は完全に征服されるのである。

征服の働きの内幕（４）

サタンに深く墮落させられた人類は、神なるものが存在することを知らず、神を礼拝することをやめてしまった。初めに、アダムとエバが創造された時、ヤーウェの栄光と証しは常に存在していた。しかし、人間は墮落させられた後、その栄光と証しを失った。なぜなら、誰もが神に反抗し、神を畏れ敬うことをすっかりやめてしまったからである。今日の征服の働きは、その証しと栄光のすべてを取り戻し、あらゆる人間に神を崇めさせ、被造物の間に証しを生み出すためである。これが、この段階の働きにおいて達成されなければならないことである。厳密に言って人類はどのように征服されるのか。それは、この段階の言葉の働きを用いて、人間を十分に確信させることによって行われる。また、暴露、裁き、刑罰、情け容赦ない呪いを用いて人間を完全に服従させることによって行われる。人間の反抗的性質を明らかにし、その抵抗を裁くことで人間に人類の不義と汚れを知らしめ、それらを神の義なる性質の引き立て役として使うことによって行われる。このように言葉をおもに用いて人間を征服し、完全に確信させる。言葉は人類を征服するための究極的手段であり、神の征服を受け入れる者はみな、神の言葉による鞭と裁きを受け入れなければならない。現在の言葉を語る過程は、征服そのものの過程である。では具体的に、人はどのように協力すべきなのか。これらの言葉をどのように飲食するかを知り、言葉を理解することで協力するのである。人がどのように征服されるかについては、それは人が自分でできることではない。あなたにできるのは、これらの言葉を飲み食いすることによって自分の墮落と汚れ、反抗心と不義とを知り、神の前にひれ伏すことだけである。神の心意を把握した後に、それを実行に移すことができ、そしてビジョンを持ち、これらの言葉に完全に従うことができ、自分勝手な

選択をしないならば、あなたは征服されている。そして、それは言葉による成果である。なぜ人類は証しを失ったのか。それは誰も神を信じず、もはや人の心には神の居場所がなくなったからである。人類の征服とは、人類にこの信仰を回復させることである。人は常にこの世に向こう見ずに突き進み、あまりにも多くの望みを胸に抱き、将来にあまりにも多くの期待をかけ、あまりにも多くの途方もない要求をする。人はいつも自分の肉のことを考え、肉のために計画しているが、神を信じる道を求めることにはまったく興味がない。人の心はサタンの虜となり、神を畏れ敬う心を失い、サタンに執着している。しかし、人間は神に創られた。こうして、人間は証しを失ってしまった。つまり、神の栄光を失ったということである。人類を征服する目的は、人間の神への畏敬による栄光を取り戻すことである。それは次のようにも言える。いのちを追い求めない人が大勢いて、たとえいのちを求める人がいたとしても、それは極少数である。人はもっぱら自分の将来のことに気をとられており、いのちのことにはまったく注意を払わない。神に逆らい、抵抗し、背後で神を裁き、真理を実践しない人もいる。今は、このような人は無視され、当分はこのような反逆の子たちについて何も行われぬ。しかし将来は、あなたは闇の中に住み、泣き叫んで歯ぎしりすることになる。光の中に生きているうちは、その貴重さを感じないだろうが、いったん暗夜の中に住めばそれに気づき、そのとき後悔する。今はいいかもしれないが、後悔する日が訪れる。その日が到来し、暗闇が地を覆い、もはや光がなくなった時、後悔しても遅すぎる。今の時を大切にしないのは、現代における働きを理解していないからである。いちど全宇宙の働きが始まれば、すなわち、わたしが今日言っていることのすべてが現実となる時、多くの人が頭を抱えて悔し涙を流すことになる。これこそ、暗闇の中に落ち、泣き叫び、歯ぎしりすることではないのか。心からいのちを追い求め、完全にされる人は役に立つことができる。一方、役に立たない反逆の子らは暗闇の中に落ちる。聖霊の働きを失い、何もかも意味がわからなくなる。彼らはこのように懲罰の中に陥り、呻いては泣き叫ぶのである。もしあなたがこの段階の働きにおいて十分に用意が整い、いのちにおいて成長しているなら、あなたは用いられるに相応しい。少しも用意が整っていないなら、たとえ次の段階の働きのために呼ばれたとしても、役に立つには不適格である。この時点でいくら自分を整えたくとも、次の機会はもうない。神はもう去ってしまっている。そうなれば、今あなたの目の前にあるような機会をいったいどこに行きつけて見つけるのか。今、神自身が提供している訓練をいったいどこに行きつけて受けようというのか。その時には、神が自ら語り声を発することはない。あなたにできるのは、今日語られていることを読むことだけである。どうして容易に理解できるであろうか。どうして後の生活が今より良いことが

ありえようか。その時点で、泣き叫び、歯ぎしりし、生き地獄そのものを苦しむことにならないのか。祝福は今あなたに授けられているというのに、それをどのように享受すべきなのかがわかっていない。祝福の中で生きているのに、気付いていない。あなたが破滅し苦しむように運命付けられている証拠である。現代は抵抗する人もいれば、反逆する人もいるし、あれをしたりこれをしたりという人もいる。わたしはあなたをただ無視するが、わたしがあなたがたが何をしているか気付いていないと思っはならない。わたしはあなたがたの本質を理解していないのか。なぜわたしに逆らい続けるのか。あなたは自分のために、いのちと祝福を追い求めるために、神を信じているのではないのか。あなたに信仰があるのは、自分のためではないのか。現在、わたしは言葉を語ることでのみ征服の働きを行っている。この征服の働きが完了すれば、あなたの最後は明らかになる。はっきりと説明しなければならないであろうか。

現在の征服の働きは、人間の結末がどのようなになるかを明らかにすることを意図する。なぜわたしは今日の刑罰と裁きは、終わりの日における大いなる白い玉座の前での裁きだと言うのか。あなたにはこれがわからないのか。なぜ征服の働きは最終段階なのか。これはまさしく、それぞれの種類の人間が最後にどうなるかを明らかにすることではないのか。それは、刑罰と裁きとによる征服の働きの過程において、あらゆる人が自分のありのままの姿をあらわし、その後それぞれの種類に分類されるようにするためではないのか。人類の征服というよりも、これはむしろ各種の人間がどのような最後を迎えるのかを示すことだと言った方が良くらいである。つまり、これは人の罪を裁き、それから人の様々な種類を明らかにし、それにより、人が悪であるか義であるかを判定することである。征服の働きの後に、善に報い悪を罰する働きが続く。完全に従う人々、つまり、完全に征服された人々は、神の働きを全宇宙に広める次の段階に配置される。征服されなかった者は闇の中に置かれ、災厄に遭う。このように人間はその種類によって分類され、悪を行う者は悪として分類され、二度と陽の光を浴びることがない。義人は善として分類され、光を受け、永遠に光の中で生きる。あらゆるものの終わりは近く、人間の終わりは目の前にはっきりと示され、あらゆるものはその種類によって分けられる。それなら、どうして人間が種類別に分類されるという苦悩から逃れられようか。それぞれの種類の人間の異なる結末は、あらゆるものの終わりが近づいた時に明らかにされる。それは全宇宙の征服の働き（現在の働きに始まるすべての征服の働きを含む）の間に行われる。この全人類の終わりの明示は、裁きの座の前で、刑罰と終わりの日の征服の働きの過程で行われる。種類に従って人々を分類することは、人々を元の部類に

戻すことではない。なぜなら、天地創造の際、人間が創られた時には一種類の人間しかなく、唯一の区別は男と女しか存在しなかったからである。人間には多数の種類など存在しなかった。さまざまな種類の人間が現れたのは、何千年にも及ぶ墮落の後になってからである。ある者は汚らしい悪魔の領域に、またある者は邪悪な悪霊の領域に、また、いのちの道を追い求める者は、全能者の統治に属する。ただこのようにしてのみ、人々の間に種類が徐々に形成され、それによってのみ人々は人間という大家族の中でさまざまな部類に分かれるのである。人々はみな異なる「父」を持つようになる。人間は極めて反抗的なので、すべての者が完全に全能者の統治のもとにあるわけではない。義なる裁きは、各種類の人間の本来の姿を表に曝け出し、隠れたままになるものは何もない。あらゆる者が光の中でほんとうの顔を現す。この時点では、人はもはや本来のあり方ではなくっており、先祖の元の面影はとうの昔に消え去っている。なぜなら、アダムとエバの無数の子孫たちが、長らくサタンの虜となり、もう二度と天日を知ることはないからである。また、人々があらゆる種類のサタンの毒に満たされてきたからである。こうして人々にはそれぞれに相応しい終着点がある。さらに、人はその様々な毒を基準にして、種類ごとに分類される。すなわち、今日征服されている度合いに応じて人は分類されるのである。人間の終わりは天地創造以来、予め定められてきたものではない。なぜなら、初めにはまとめて「人類」と呼ばれる一種類の人間しか存在せず、また人間は最初はサタンに墮落させられてはおらず、神の光の中に生き、闇は降りていなかったからである。しかし、人間がサタンに墮落させられた後、あらゆる類型と種類の人々が地の至るところに広がった。まとめて「人類」と呼ばれ、男と女から成る家族から出たあらゆる類型と種類の人々である。彼らはみな祖先に導かれ、最も古い祖先である男と女から成る人類（つまり、始祖であるアダムとエバ、最古の祖先）のもとから迷い出てしまった。その当時、地上での生活をヤーウェに導かれていたのは唯一イスラエル人であった。全イスラエル（つまり、最初の部族）から出た様々な種類の人々は、その後ヤーウェの導きを失った。これらの初期の人々は、人間世界のことにはまったく無知で、祖先とともに自分たちのものとした土地で暮らし、それが今日まで続いた。彼らはまだ自分たちがどのようにヤーウェのもとから離れ、今日に至るまで、どのようにあらゆる種類の汚れた悪魔や悪霊に墮落させられたかについては無知なままである。これまで深く墮落させられ、毒されてきた者たち、つまり、最終的に救いようのない者たちは、その祖先、彼らを墮落させた汚れた悪魔である祖先と共に行くしかない。最終的に救われることのできる者たちは、人類の相応しい終着点に行く。つまり、救われ、征服された者たちのために用意された最後にたどり着くのである。救うことのできる人をみな救う

ために、あらゆることが為される。しかし、鈍感で救いようのない人は、先祖の後を追って刑罰の底なしの穴へ落ちるしかない。あなたの終わりは最初から予め定められていて、それが今になってやっと明らかにされたと考えてはいけない。そのように考えているのなら、最初に人類が創造された時にはそれとは別にサタンという種類は創られなかったことを忘れたのか。アダムとエバから成る一種類の人間だけが（つまり、男と女だけが）創造されたことを忘れてしまったのか。あなたが始めからサタンの子孫であったなら、人間を創造した時ヤーウェはサタンの集団もいっしょに創造したことにならないか。神がそのようなことをしたであろうか。神は自分の証しのために人間を創造した。神は自分の栄光のために人間を創った。なぜ神は意図的にサタンの子孫という種族を自分に抵抗させるためにわざわざ創造したりするのであるか。どうしてヤーウェがそんなことをすることがありえようか。もしそんなことをしていたなら、誰が神を義なる神だと言えるであろうか。わたしが今、あなたがたのうちには終いにはサタンと共に行く者がいると言っても、それはあなたが初めからサタンと共にあったという意味ではない。そうではなく、あまりにも低い所まで墮落したので、たとえ神が救おうとしたとしても、あなたは救いをのがしてしまったという意味である。あなたをサタンといっしょに分類する他ない。それはただ、あなたは救いようがないからであり、神があなたに対して不義で、意図的にあなたの運命をサタンの具現化と定め、サタンと共に分類し、わざとあなたを苦しませようとしているからではない。それは征服の働きの内なる真実ではない。あなたがそのように信じているのなら、あなたの認識はひどく偏っている。征服の最終段階は、人を救い、また、人の結末を明らかにするためである。裁きを通して人の墮落を暴露し、それにより人を悔い改めさせ、立ち上がらせ、いのちと人として生きる正しい道を追い求めさせるためである。鈍く頑な人の心を目覚めさせ、裁きによって人の内にある反抗的性質を示すためである。しかしながら、人がまだ悔い改めることができず、なおも人として生きる正しい道を追い求めることができず、これらの墮落を捨て去ることができなければ、人は救われることはなく、サタンにのみ込まれる。これが征服の意味である。つまり、人を救い、また人の結末を見せることである。良い結末と悪い結末があり、すべては征服の働きにより明らかにされる。人が救われるか呪われるかは、みな征服の働きの間に明らかにされる。

終わりの日とは、すべてのものが征服を通して、その種類に分類される時のことである。征服は終わりの日の働きである。つまり、一人ひとりの罪を裁くことが終わりの日の働きである。そうでなければ、どうして人を分類できるというのか。あなたがたの間

で行われる分類の働きは、全宇宙におけるそうした働きの始まりである。この後、すべての地のあらゆる民も征服の働きの対象となる。つまり、被造物であるすべての人が種類別に分類され、裁きの座の前に進み出て裁かれるということである。誰一人、何ものもこの刑罰と裁きの苦しみから逃れることはできない。また、誰も何ものも種類別に分類されることを避けることはできない。あらゆる人が種類ごとに分けられる。それは、万物の終わりが近く、天と地にあるすべてが終結に至ったからである。どうして人間が己の存在の終結の日を逃れられようか。したがって、あとどれほどあなたがたは不服従の行いを続けられるのか。あなたがたの終わりの日がそこまで迫っているのが見えないのか。どうして神を畏れ敬い、神の現れを待ち焦がれている者たちが、神の義が出現する日を見られないのか。彼らがその善ゆえの最後の報酬を受けられないということが、どうしてあるのか。あなたは善を行う人なのか。それとも悪を行う人なのか。あなたは義なる裁きを受け入れて従う人なのか。それとも義なる裁きを受け入れて呪われる人なのか。光の中にある裁きの座の前で生きているのか。それとも闇に覆われたハデスで生きているのか。自分の終りが報酬を受けることになるのか、それとも罰を受けることになるのかを一番はっきり知っているのは、あなた自身ではないのか。神が義であることを一番はっきり知り、最も深く理解しているのは、あなたではないのか。それでは、あなたの行いと心は一体、どのようなものであるのか。今日、わたしがあなたを征服するに及んで、あなたのふるまいが悪であるか、それとも善であるかをわたしがいちいち説明する必要があるのか。あなたは、わたしのためにどれほどの犠牲を払ったのか。どれほど深くわたしを礼拝するのか。わたしに対して自分がどのようにふるまっているかをあなた自身が一番よく知っているのではないのか。自分が最終的にどのような結末を迎えるのかを、あなたは他の誰よりも良く知っているはずである。わたしは、まことにあなたに告げる。わたしは人類を創造し、あなたを創造しただけである。わたしはあなたがたをサタンに手渡さなかった。あなたがたを意図的にわたしに逆らわせ反抗させて、そのためにわたしに罰されるように仕向けもしなかった。これらの災難や苦しみを招いたのは、あなたがたの心があまりにも頑なで、あなたがたの行いが極めて下劣であるからではないのか。だから、あなたがたが迎える結末は、自分自身が決定するものではないのか。自分がどのような最後を迎えるのかを、あなたがたは内心、他の誰よりもよく知っているのではないのか。わたしが人を征服する理由は、人を暴露するためである。またそれは、あなたの救いを確かなものにするためでもある。それは、あなたに悪を行わせるためでもなく、あなたを意図的に破滅の地獄に向かって歩ませるためでもない。その時が来れば、あなたの大きいな苦しみ、泣き叫び、歯ざしりはすべて、あなたの罪ゆえで

はないのか。したがって、あなた自身の善あるいは悪が、あなたを最も正しく裁いてくれるのではないのか。それがあなたの終りがどうなるのかを示す最良の証拠ではないのか。

現在、わたしは中国における神の選民の中で働きを行ない、彼らの反抗的性質をすべて明らかにし、彼らの醜さのすべてを暴く。これが、わたしが言うべきことすべての背景となる。後にわたしが全宇宙を征服する次の段階の働きを行うとき、あなたがたへの裁きを用いて全宇宙のあらゆる人の不義を裁く。なぜなら、あなたがたは人類の中の反抗的な者たちの代表だからである。向上できなければ、単なる引き立て役、仕える者となるが、一方、向上できるならば用いられる。なぜわたしは向上できなければ引き立て役にしかねれないと言うのか。それは、わたしの現在の言葉と働きはみな、あなたがたの背景を標的にしており、また、あなたがたが全人類の反抗的な者たちの代表、典型となったからである。後にわたしは、あなたがたを征服するこれらの言葉を外国に伝え、その人を征服するために用いる。しかしその時、あなたはそれらを獲得していないであろう。それではあなたは引き立て役になるのではないか。全人類の墮落した性質、人間の反抗的行為、人間の醜い姿と顔はみな、あなたがたを征服するために用いられる言葉の中に記録されている。わたしは、これらの言葉を用いて、あらゆる国と教派の人々を征服する。なぜならあなたがたは原型であり先例だからである。しかし、わたしは意図的にあなたがたを最初から捨てようとして始めたのではない。もしあなたがたの追求がうまく行かず、したがって、あなたがたが救いようのない者であることを証明するならば、あなたがたはただの道具、引き立て役になるのではないのか。かつてわたしは、わたしの知恵はサタンの計略に基づいて実行されると言った。なぜそう言ったのか。それは、わたしが今言っていること、行っていることの背後にある真実ではないのか。もしあなたが向上することができず、完全にされるのではなく、むしろ罰されるのなら、引き立て役になるのではないのか。あなたは時に応じて十分に苦しんだかもしれない。しかし今なお、あなたは何も解かっていない。あなたはいのちに関連するあらゆることについて無知である。罰せられ裁かれたにもかかわらず、まったく変わらず、あなたの奥底ではまだいのちを獲得していない。あなたの働きを試す時が来ると、あなたは火のように激しい試練と、さらに大きな患難を体験する。この火はあなたの全存在を灰にする。いのちを持たない者として、内に一かけらの純金も持たない者として、いまだに古い墮落した性質から抜け出せない者として、引き立て役としてでさえ良い仕事ができない者として、どうしてあなたが取り除かれないことなどありえようか。一文の価値もな

く、いのちを持たない者が、征服の働きに役立てようか。その時が来ると、あなたがたの日々はノアやソドムよりも困難になる。その時あなたの祈りは何の役にも立たない。救いの働きがすでに終わっているのに、どうして後で戻ってきて最初から悔い改めることができるというのか。一度すべての救いの働きが完了すれば、それで終わりである。その時には、邪悪な者たちを罰する働きが開始される。あなたは抵抗し、逆らい、自分で悪だと分かっていることをする。あなたは厳しい罰の対象ではないのか。わたしは、あなたのためにこのことを今日、一字一句説明している。あなたが耳を傾けないのなら、後に患難があなたに臨む時にやっと後悔し、信じ始めたところで、それはもう遅過ぎるのではないのか。わたしは今日、あなたに悔い改める機会を与えているが、あなたはそのつもりはない。あとどれほど待つつもりなのか。刑罰の日までか。わたしは今日、あなたの過去の背きを憶えてはいない。わたしはあなたを幾度も幾度も赦し、あなたの消極的な面から目をそらし、あなたの積極的な面だけに目を留める。なぜなら、わたしの現在の言葉と働きはすべて、あなたを救うためであり、わたしはあなたに対して何の悪意もないからである。それでもあなたは入ることを拒む。あなたは善悪を区別することができず、優しさの価値を認識できない。このような人は懲罰と義なる報復をただ待っているのではないのか。

モーセが岩を打ったとき、ヤーウェが授けた水がほとばしり出たのは、モーセの信仰のためだった。ダビデがわたしヤーウェを賛美して琴を奏でたとき、ダビデの心は喜びに満ちており、それは彼の信仰のためだった。ヨブが山々を埋め尽くすほど多くの家畜や膨大な量の財産を失い、その体が腫物で覆われたのは、彼の信仰のためだった。彼がわたしヤーウェの声を聞き、わたしヤーウェの栄光を見ることができたのは、彼の信仰のためだった。ペテロがイエス・キリストに付き従うことができたのは、ペテロの信仰によるものだった。彼がわたしのために十字架に釘づけにされ、栄光ある証しとなることができたのも、彼の信仰によるものだった。ヨハネが人の子の輝かしい姿を見たのは、彼の信仰によるものだった。そして彼が終わりの日の幻を見たのも、なおさら彼の信仰のためであった。数多くのいわゆる異邦の民がわたしの啓示を受け、わたしが人々のもとで働くために肉となって再来したことを知るようになったのも、また彼らの信仰のためだ。わたしの厳しい言葉に打ちのめされつつも、それによって慰められ、そして救われたすべての者たちは、みな信仰のゆえにそうなったのではないか。人は信仰ゆえに多くのものを受けた。受けるのはいつも祝福だとは限らない。ダビデが感じたような幸せと喜びを受け取らないかもしれず、モーセのようにヤーウェから水を授からないかも

しれない。例えば、ヨブは信仰ゆえにヤーウェによって祝福されただけでなく、災いも受けた。祝福されようが、災いを受けようが、どちらも祝福された出来事である。信仰なくして、この征服の働きを受けることはできず、ましてやヤーウェの業が今日、目の前で展開するのを見ることなどできない。見えないであろうし、ましてや受けることなどできはしない。これらの懲罰、災難、すべての裁き、もしこれらがあなたに起こらなければ、あなたは今日ヤーウェの業を見ることができであろうか。今日、あなたが征服されることができるのは信仰のゆえであり、征服されるからこそ、ヤーウェのあらゆる業を信じることができ。ただ信仰のゆえに、あなたはこのような刑罰と裁きを受ける。この刑罰と裁きを通して、あなたは征服され、完全にされる。今日受けているような刑罰と裁きなしには、あなたの信仰は虚しい。なぜなら、それなしにはあなたは神を知ることがないからである。どれほど神を信じていても、あなたの信仰は現実に基づかない、むなしい表現の一つである。あなたを完全に従順にする、この征服の働きを受けてはじめて、あなたの信仰は真実で確固としたものになり、あなたの心は神の方へ向く。たとえこの「信仰」という言葉のために大いに裁かれ呪われるとしても、あなたは真の信仰をもち、最も真実で、最も現実的で、最も貴重なものを得る。なぜなら、裁きの過程においてでなければ、あなたには神の創造物の終着点が見えないからである。この裁きの中で、あなたは創造主が愛すべき方であることを知る。こうした征服の働きの中に、あなたは神の腕を見る。この征服の中であなたは人として生きることを完全に理解するようになる。この征服の中で、あなたは人として生きる正しい道を獲得し、「人間」の真の意味を知るようになる。この征服の中でのみ、あなたは全能者の義の性質と美しい栄光に満ちた顔を見る。この征服の働きの中で、あなたは人間の起源と全人類の「不滅の歴史」を理解する。この征服の中で、あなたは人類の祖先と人類の墮落の起源を理解するようになる。この征服の中で、あなたは喜びと慰め、また、絶え間ない懲らしめと訓練、創造主が自ら創造した人類に送る叱責の言葉を受ける。この征服の働きの中で、あなたは祝福と、人間の受けるべき災難を受ける……。これはすべて、あなたのわずかばかりの信仰ゆえではないのか。これらのものを得た後、あなたの信仰は成長しなかったのか。あなたは膨大なものを得たのではないのか。あなたは神の言葉を聞き神の知恵を見ただけではなく、神の働きの各過程を自ら体験した。信仰がなければ、このような刑罰や裁きを受けて苦しまなかったのではないか、と言うかもしれない。しかし、信仰がなければ、こうした刑罰も、全能者からのこのような配慮も受けることができないだけでなく、創造主に会う機会も永遠に失うであろう。人間の起源を知ることが決してないだろうし、人生の意義を知ることが決してないであろう。たとえ体が死んで魂

が離れても、あなたはまだ創造主の業のすべてを理解していないであろう。ましてや、創造主が人類を創造した後、このような偉大な働きを地上で行なったことを知りはないであろう。神が創造したこの人類の一員として、あなたは不可解にも自ら進んでこのように闇の中に落ちて永遠の罰を受けようというのか。もし今日の刑罰と裁きから離れたなら、あなたにはいったい何が起こるであろうか。ひとたび今の裁きから離れてしまえば、この困難な生活から逃れられるとでも思っているのか。もし「この場所」を去ったなら、悲痛な苦悶と悪魔が加える残酷な傷害に遭遇するのではないのか。耐え難い苦しみを日夜受けることになるのではないのか。今日この裁きを逃れたからといって、将来の責め苦を永久に避けられるとでも思っているのか。あなたには何が起こるであろうか。それはほんとうに望みどおりの理想郷であろうか。今しているようにただ現実から逃げることで、その後の永遠の刑罰を逃れられるとでも思っているのか。今日より後、このような機会や祝福を再び見出せるであろうか。災厄が襲ってきた時、それを見出せるであろうか。全人類が安息に入るとき、それを見出すことができるであろうか。あなたの現在の幸福な生活と調和あるささやかな家庭が、永遠の終着点にとって代わられるであろうか。もしあなたに真の信仰があるならば、そして信仰ゆえに多くのものを得るのなら、それはすべて、あなたというひとつの被造物が獲得すべきものであり、元来もっていたはずのものである。あなたの信仰といのちにとって、このような征服よりも有益なものは他にない。

今日、あなたは征服された者たちに神が何を求めているのか、完全にされた者たちへの神の態度はどのようなものか、現在あなたが何に入らなければならないかを理解しなければならない。いくつかのことについては、少し理解するだけでよい。神の奥義についての説を詳細に吟味する必要はない。それらは余りいのちの助けにはならず、目を留めるだけでよい。アダムとエバについての奥義などは読んでもよい。当時、アダムとエバはいったいどのようなようであり、神は今日どのような働きを行いたいのか、といったことについてである。人を征服し完全にする中で、神は人間をアダムとエバのような状態に戻すことを願っていることを理解する必要がある。神の基準を満たすために、人が完全にされるべき程度について心ではっきりと理解し、それを目指して尽力すべきである。これはあなたの実践に関連しており、あなたが理解すべきことである。ただ、これらのことに関する神の言葉に従って、入っていきこうと追い求めるだけで十分である。「人類発展の歴史は数万年に及ぶ」ということを読むと、あなたは好奇心を抱き、兄弟姉妹といっしょになって、「神は人類の発展は六千年までさかのぼると言った。では、この数

万年というのは何のことなのだ」と、答えを見つけようとする。このようなことを解き明かして何の役に立つというのか。神自身が働いてきたのが数万年間であろうが、数億年間であろうが、あなたがそれを知ることが本当に神にとって必要であろうか。これは、被造物としてあなたが知るべきことではない。このような発言は少しの間なら考慮してもよいが、それがビジョンでもあるかのように理解しようとしてはならない。あなたが今日何に入っていく、何を理解するべきか気付いていなければならない。このことをはっきりと把握しなければならない。その時初めてあなたは征服される。以上を読めば、あなたの中に普通の反応が起こるはずである。つまり、「神は燃えるように切望している。神はわたしたちを征服し、栄光と証しを獲得したがっている。では、わたしたちはどのように神に協力すべきなのか。神に完全に征服され、神の証となるために、わたしたちは何をしなければならないのか。神が栄光を得られるためには、わたしたちは何をしなければならないのか。サタンではなく神の統治のもとで生きられるようになるためには、何をしなければならないのか」のように人は考えるべきである。あなたが一人ひとりが、征服の意義について明確に理解するべきであり、それはあなたがたの責任である。このことを明瞭に認識して初めて入ることができ、この段階の働きを知り、完全に従順になる。そうでなければ、あなたがたは真の服従に達することはない。

実践（6）

今日では多くの人々が、ペテロの備えていた理知を得るところか、パウロの備えていた理知さえ得ることができず、パウロのような自己認識すら持っていない。パウロは主イエスを迫害したため、主によって打ち倒されたものの、後には主のために働き苦難を受けることを決意した。イエスはパウロに病を与えたので、パウロは働きを開始してからも、その病に苦しみ続けた。パウロはなぜ自分の肉にとげがあると言ったのか。そのとげとは実際には病のことであり、パウロにとってそれは致命的な弱点だった。どれだけの働きを行なっても、苦難を受けるという決意がどれだけ強くても、パウロはそのとげを取り除けなかった。それでもパウロは現在のあなたがたよりもはるかに優れた素質を持っており、さらには自己認識があり、あなたがたよりも多くの理知を備えていた。パウロはイエスに打ち倒された後、イエスの弟子たちを迫害するのをやめ、イエスのために説教し苦難を受けるようになった。パウロは何に鼓舞されて、苦難に耐える気になったのだろうか。パウロは自分が偉大な光を目にしたのだから、主イエスに証しをしなければならず、イエスの弟子を迫害するのをやめねばならず、神の働きに逆らうのをやめねばならないと考えた。パウロは宗教において高位の存在だった。知識豊富で才能に

あふれ、平均的な人々を見下しており、ほとんどの人よりも強い個性を持っていた。しかし「偉大な光」に照らされた後、パウロは主イエスのために働き、神のために苦難を受けて身を捧げようと決意することができた。それはパウロに理知があったことの証明である。パウロがイエスの弟子たちを迫害し捕えていたとき、イエスが現れて言った。「パウロ、なぜわたしを迫害するのか」。パウロは即座に倒れて言った。「主よ、あなたはどなたですか」。すると天から声が聞こえた。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」。パウロは突然目覚め、そして初めてイエスがキリストであり神であることを知った。「わたしは従わねばならない。神はわたしにこの恵みを授けてくださった。わたしは神をこのように迫害したが、それでも神はわたしを打ち倒したり、呪ったりしなかった。わたしは神のために苦難を受けなければならない」。パウロは自分が主イエス・キリストを迫害したこと、その弟子たちを今、殺していること、そして神が自分を呪わず、自分を光で照らしたことに気づいた。パウロはこれに鼓舞されて、次のように言った。「わたしは神の御顔を見はしなかったが、神の声を聞き、神の偉大な光を目にした。そして今やっと、神が本当にわたしを愛してくださっていること、そして主イエス・キリストがまさしく、人を憐れみ人の罪を永遠に赦す神であることがわかった。自分が罪人であることがよくわかった」。神は後にパウロの才能を用いて働きを行なったのだが、今はそのことは置いておこう。その時のパウロの決意、正常な人間の理知、そして自己認識は、あなたがたには獲得できないものだ。現在、あなたがたは多くの光を授かっていないか。多くの人々が、神の性質とは威厳、怒り、裁き、そして刑罰であることを目にしたのではないか。呪い、試練、そして精錬は幾度となく人間に降りかかってきたが、人間は何を学んだのか。あなたは懲らしめと取り扱いを受けて、何を得たのか。辛辣な言葉と強打、そして裁きが何度もあなたに降りかかったが、あなたは一切留意しようとしない。あなたにはパウロが備えていたわずかな理知さえない。あなたはあまりにも遅れていないか。パウロにも明確に理解できないことは数多くあった。彼はただ光が自分を照らしたことを知っただけで、自分が打ち倒されたことには気付いていなかった。パウロはただ個人的に、その光に照らされた後、神のために身を費やし、神のために苦難を受け、あらゆることをして主イエス・キリストのために道を整え、主に贖ってもらえるようもっと多くの罪人を得なければならないと考えたのだ。それがパウロの決意であり、パウロの働きの唯一の目的だった。しかし働いていたときも、病はまだパウロの身を去らず、彼が死に至るまで治ることはなかった。パウロは20年以上にわたって働きを行い、大いに苦難を受け、数多くの迫害と艱難を経験したが、それはもちろんペテロの試練よりもはるかに少なかった。あなたがたがパウロの理知すら

持っていないなら、何と哀れなことだろうか。そのような状態で、どうやって神があなたがたの中で一層大いなる働きに乗り出せるだろうか。

パウロは福音を広めたとき、大いなる苦痛を受けた。当時パウロが行なった働き、パウロの決意、その信仰、忠義、愛、忍耐、慎みや、その他パウロが生きた数多くの外面的な性質は、現在のあなたがたよりも高度なものだった。より厳しく言えば、あなたがたの中には正常な理知がまったくなく、良心や人間性さえ皆無である。あなたがたには欠けているものが非常に多い。そのため大抵の場合、あなたがたが生きている姿には正常な理知も、自己認識の兆しもまったく見当たらない。当時パウロは身体の病を患っていたが、変わらず祈り、求め続けた。「この病は一体何なのか。わたしは主のためにこれだけの働きをしたが、なぜこの苦しみはわたしから去らないのだろうか。もしかして、主イエスがわたしを試されているのだろうか。主はわたしを打ち倒されたのだろうか。主がわたしを打ち倒されたのなら、わたしはそのときに死んでいて、主のためにこの働きを行うことも、これほど多くの光を授かることもできなかったはずだ。主はわたしの決意も実現させてくださったのだ」。パウロは常に、その病は神が自分を試しているのであり、自分の信仰と意志の力を鍛えているのだと感じていた。それがパウロの考え方だったが、実際にはパウロの病は、主イエスがパウロを打ち倒した時の後遺症だった。その病によってパウロには精神的な重圧が加えられ、彼の反抗的な性質が抑えられることになった。もしあなたがたがパウロの状況にあったとしたらどうだろうか。あなたがたの決意と苦難に耐える力は、パウロに匹敵するだろうか。今日、あなたがたが何らかの病を煩ったり、大きな試練に襲われたりして、苦難に耐えることになったら、あなたがたは一体どうなってしまっただろうか。あなたがたは鳥かごに閉じ込められていつも養われていれば、問題なくやっつけられる。しかしそうでなければ、何の人間性も持たない狼のようになるだろう。だから多少の制約や苦難を受けることは、あなたがたのためになるのだ。気楽な生活を与えられるとあなたがたはだめになる。それでどうやって、守られることができようか。今日あなたがたは、刑罰を受け、裁かれ、呪われているからこそ、守られている。あなたがたは多くの苦難を受けてきたからこそ守られているのだ。そうでなければ、とっくの昔に墮落していただろう。わたしはわざと物事を難しくしようとしているのではなく、人間の本性は変え難いものなので、人間の性質を変化させるため、こうしなければならないのだ。現在あなたがたにはパウロのような良心や理知すらなく、彼のような自己認識さえ持っていない。あなたがたは霊を目覚めさせるために、常に圧力をかけられ、常に刑罰と裁きを受けなければならないのだ。刑罰と裁

きはあなたがたのいのちにとって最良のものだ。そして必要に応じて、事実の到来による刑罰も受けなければならず、そうして初めてあなたがたは完全に従えるようになる。あなたがたはその本性からして、刑罰と呪いがなければ、頭を下げることも従うことも望まない。事実を突きつけられない限り効果はない。あなたがたの人格はあまりに卑しく無価値なのだ。刑罰と裁きがなければ、あなたがたが征服されることは難しく、その不義と不従順を克服することも困難だろう。あなたがたには古い本性が極めて深く根付いている。もしあなたがたが王座に就いたなら、天の高さや地の深さを知る由もなく、ましてや自分がどこへ向かっているかなど見当もつかないだろう。自分がどこから来たかさえわからないのに、どうして創造主を知ることができようか。現在の時宜を得た刑罰と呪いがなければ、あなたがたの終わりの日はとっくの昔に訪れていただろう。そしてあなたがたの運命については言うまでもなく、一層危機に瀕するのではないだろうか。この時宜を得た刑罰と裁きがなければ、あなたがたは一体どれほど傲慢になり、墮落するだろうか。この刑罰と裁きがあなたがたを今日へと導き、その存在を維持してきたのだ。もしあなたがたが自分の「父」と同じ方法で「教育」されていたなら、一体どんな領域に入ることになるだろうか。あなたがたには自らを制し、反省する能力がまったくない。このような人々は、ただ干渉も妨害もせずに従い服従しさえすれば、それでわたしの目的は達成される。あなたがたは今日の刑罰と裁きをもっとしっかり受け入れるべきではないか。その他にどのような選択肢があるのか。パウロは主イエスが語り働きを行うのを見ても、まだ信じようとしなかった。後に主イエスが十字架にかけられてから復活した後、パウロはその事実を知っていながら、まだ迫害と反抗を続けた。それが故意に罪を犯すということであり、パウロはそれゆえに打ち倒された。当初パウロは、ユダヤ人の中にイエスという王がいることを、すでに聞いて知っていた。しかしその後、聖殿で説教を行い至るところで伝道しながら、イエスに反抗し、いかなる人間に従うことも高慢に拒絶した。そうしたことは当時の働きに対する大きな障害になった。イエスが働きを行っていたとき、パウロは人々を直接迫害したり捕らえたりはしなかったものの、説教と言葉でイエスの働きを打ち砕こうとした。そして主イエス・キリストが磔刑になった後、パウロは弟子たちを捕らえ始め、各地を奔走して全力で彼らを虐げた。パウロは「光」に照らされて初めて目覚め、大いなる後悔を覚えた。打ち倒された後、パウロの病は決して治らなかった。時には病の悪化を感じ、寝床から出られないこともあった。そして彼は「一体どうなっているのだろうか。自分は本当に打ち倒されてしまったのだろうか」と考えた。その病は決して治ることがなく、そしてまさにその病のために、パウロは多くの働きを行なったのだ。イエスはパウロの傲慢さと強情さのため、

彼にその病を授けられたと言えるだろう。それはパウロに対する懲罰だったが、同時にパウロの才能を神の働きに役立たせ、神の働きを拡大するためになされたことでもあったのだ。実際のところ、神の意図はパウロを救うことではなく、パウロを用いることだった。しかしパウロの性質はあまりに横柄で強情だったので、「とげ」が与えられたのだ。最終的にパウロが自らの働きを終えたとき、病はそれほど苦痛なものではなくなっており、働きを終える頃になるとパウロは次のように語ることができた。「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである」。パウロがこう言ったのは、神の働きを知らなかったからだ。あなたがたの中にはパウロのような者が大勢いるが、最後まで付き従う決意を真に固めているなら、不当に扱われることはない。パウロがどのように不従順で反抗的だったか、ここではその詳細は語らず、彼の肯定的で称賛すべき面の話を続けよう。パウロには良心があり、一度「光」を受けた後は、神に身を捧げ、神のために苦難を受けることができた。それはパウロの長所だった。しかし彼に長所があったからといって彼が祝福された者だったと考えたり、必ずしも刑罰を受けたわけではないと思うなら、それは理知のない人々の言葉というものだ。

祈りを捧げて神の言葉を読むとき、多くの人は神に従う意志があると言うが、人目のないところでは自堕落になり、そのことを何とも思っていない。神の言葉は幾度となく語られて、人間の一つ一つの層を暴いており、そして最も深い層が明らかにされると、初めて人々は「安らぎを見出し」、横柄さと強情さが抑えられて、我慢ならないほどの傲慢さも弱められる。あなたがたは現状からして、まだ容赦なく打たれ暴露され、あらゆる詳細について裁かれなくてはならないので、息つく暇もない。あなたがたにとっては、厳しい刑罰と裁きがその身を去らず、糾弾や呪いもその身から離れないほうがよいのだ。それによって、神の行政命令の手が決して自分から離れないことがわかる。それはアロンが律法の時代に、ヤーウェが決して自らを離れないことを見たのと同様であり（アロンが見たのはヤーウェの不断の導きと守りだが、今日あなたがたが目にする神の導きは刑罰と呪いと裁きである）、現在もまたヤーウェの行政命令の手はあなたがたから離れない。しかし一つだけ安心できることがある。それはあなたがたがどれほど反抗し、反逆し、批判しても、あなたがたの肉には何の害もないということだ。しかし、反抗の度が過ぎて働きを阻害する者がいれば、それは容認されない。限度というものがあるのだ。教会生活を妨害したり混乱させたりしてはならず、聖霊の働きも妨害してはならない。それ以外は、したいようにして構わない。もしいのちを追求せず世間に戻りた

いというなら、急いで戻るがよい。あなたがたは神の働きを阻害しない限り、何でも好きなことができる。ただし、もう一つ知っておかねばならない。それは最終的に、そのような自分勝手な罪人はすべて排除されるということだ。現在あなたは咎められていないかもしれないが、最終的に証しを行えるのはごく一部のみに過ぎず、それ以外の人々はみな危機に瀕することになる。この流れに入りたくないというならそれでよい。今日の人々は寛大に扱われており、わたしがあなたを制限することはない――あなたが明日の刑罰を恐れないならば。しかしこの流れの中にいるなら、証しをしなければならず、刑罰を受けなければならない。それを拒み、世間に戻りたいと言うならそれでよい。誰もあなたを止めはしない。しかしあなたが何か有害な、神の働きを混乱させることをすれば、それについては決して許されない。どんな人が刑罰を受け、誰の家族が呪われるかについて、あなたが自分の目や耳で見たり聞いたりすることには常に限度や限界がある。聖霊は軽率に物事を行わない。あなたがたが犯してきた罪を踏まえれば、もしあなたがたがその不義に基づいて扱われ深刻に受け止められたなら、生き残れる者などいるだろうか。あなたがたはみな災難に見舞われることになり、誰一人よい結末は得られないだろう。しかし現在は、多くの人々が寛容に扱われている。あなたがたが論断し、反逆し、反抗しても、妨害しない限りわたしは微笑みをもって接するだろう。もし真にいのちを求めているのなら、いくらかの刑罰を受けねばならず、愛する物事と訣別して手術台に上がり手術を受ける痛みを耐えねばならない。ペテロが試練と苦難を受け入れたように、痛みを耐えなければならないのだ。今日、あなたがたは裁きの席の前にいる。そして将来は「斬首」を受ける必要があり、それによって自らを「いけにえ」にするのだ。

終わりの日における働きのこの最終段階で、あなたは神が自分の肉を滅ぼすことはないと思っているかもしれない。確かに神に逆らい神を批判しても何の病気にも罹らないだろうとは言える。だがそれでも神の厳しい言葉が降りかかり、あなたの反逆と抵抗と醜い素顔がすべて暴かれると、あなたは隠れることができず、慌てふためいて途方に暮れることになる。今日、あなたがたは少し良心を備えなければならない。神に逆らい反逆する悪人の役割を果たすのをやめ、自分の古い祖先に背を向けなさい。それがあなたの持つべき霊的背丈であり、備えるべき人間性なのだ。あなたはいつも独自の将来の見通しや、現在の享樂を捨て去ることができない。神は言う、「あなたがたが全力でわたしに付き従い、真理を追求する限り、わたしはあなたがたを必ず完全にする。完全にされれば、あなたがたは美しい終着点を得ることになる。わたしの国へと導かれ、わたし

と共に祝福を楽しむことになるのだ」。あなたがたには美しい終着点が約束されているが、あなたがたへの要求は一切減らせない。また、条件もある。それは征服されるか完全にされるかを問わず、現在いくらかの刑罰といくらかの苦難を受けなければならず、打たれて鍛えられなければならず、わたしの言葉を聞き、わたしの道に従い、神の旨を行わねばならないということだ。それが人間のなすべきことである。どのように追求するにせよ、この道をはっきりと聞く必要があるのだ。本物の見識を本当に持っていれば、付き従い続けられる。ここには何の見通しも希望もないと思うなら去ればよい。こうした言葉はあなたにはっきりと語られているのに、本当に去りたいと思うのなら、それはただあなたが良心をひとかけらも持っていないことを示している。その行動はあなたが悪魔だと証明するのに十分だ。あなたはすべてを神の指揮に委ねると言うが、その肉とあなたが生きているものに基づいて判断すれば、いまだにサタンの領域で生活している。サタンも神の手中にあるものの、あなた自身はいまだサタンに属しており、まだ神によって真に救われていない。なぜならいまだにサタンの影響下で生活しているからだ。救われるためには、どのように追求しなければいけないのか。選択はあなた次第であり、自分の行くべき道は自分で選択しなければならない。最終的に、次のように言えるだろうか。「これ以上のものはない。わたしは自分の良心で神の愛に報いる。そして少し人間性を備えなければならない。それ以上のことは成し遂げられず、わたしの素質はそれほど高くない。わたしは神の働きのビジョンも意味も理解していない。ただ神の愛に報い、神が求めることを何でも行い、自分にできることは何でもする。わたしは神の被造物として、正しく自分の本分を尽くす」。あなたがこう言えたなら、わたしは満足するだろう。それはあなたにできる最高の証しである。この、神の被造物の本分を尽くすということが、一部の人々に要求されている最高の基準なのだ。ただ自分にできる限りのことをしなさい。あなたに対する要求はそれほど高度なものではない。あなたができるだけのことをしている限り、それがあなたの証しとなる。

実践（7）

あなたがたの人間性はあまりに不十分で、生活様式はあまりにも下劣で低級である。人間性がなく、また識見も欠いている。そのため、正常な人間性にまつわるものを身につけなければならない。良心、理知、識見を持ち、ものの言い方や見方を知り、清潔さに注意を払い、正常な人間らしく行動すること。これはすべて、正常な人間性に関する知識である。こうしたことにおいて正しく行動すれば、容認できる程度の人間性を備えているとみなされる。また、霊的生活において自らを整えなければならない。地上にお

ける神の働きの全体を知り、神の言葉を経験しなければならない。神の采配に従い、被造物としての本分を尽くす方法を知る必要がある。これら、つまり人間性のある生活を得るために自らを整え、霊的な生活を実践することが、あなたが今日入らねばならないことの二つの側面であり、いずれも不可欠である。

一部の馬鹿げた人は、人間性を身につける方法しか知らない。彼らの外見に欠点はなく、言うことも話し方も適切で、身なりも非常に立派で品がある。しかし彼らの中身は空っぽであり、ただ表面的に正常な人間性を備えているように見えるだけである。また食べるものや着るもの、言うことにだけ集中している人もいる。さらには床を拭いたり寝床を整えたりといった、全般的な清潔さだけに集中している人さえいる。彼らはそうしたことすべてに熟達しているかもしれないが、終わりの日の神の働きや、刑罰と裁き、試練と精錬について知っていることを話すように頼むと、おそらく何の経験も示せないことだろう。たとえば彼らに、「神の地上における主要な働きについて理解しているか。今日の受肉した神の働きは、イエスの働きとどう違うのか。ヤーウェの働きとはどう違うのか。彼らは同一の神なのか。神はこの時代に終わりをもたらすために来たのか。それとも人類を救うためなのか」などと尋ねても、そうしたことについて何も答えられない。中には身なりの美しい人もいるが、それは表面だけである。姉妹は花のように美しく身を飾り、兄弟は王子や裕福な若い洒落者のように着飾っている。彼らは食べるものや着るものといった外面的なことにしか注意を払っておらず、内面はまったく貧困で、神についての認識など一切ない。これは一体何を意味するのか。また他には貧しい乞食のような身なりの人もいて、まったく東アジアの奴隷のようである。わたしがあなたがたに求めていることが本当にわからないのか。お互いに交わって、自分たちが実際に何を得たのか話し合ってみなさい。あなたがたは長年神を信じていながら、収穫したものがこれだけだとは、情けないと思わないのか。恥ずかしくはないのか。長年真の道において追求していながら、今日あなたがたの霊的背丈はまだ雀にも及ばない。あなたがたのうちの若い女性を見てみなさい。服や化粧で絵のように美しく、お互いを比べ合っているが、一体何を比べているのか。自分の楽しみか、自分の求めるものか。わたしがモデルを雇いに来たとでも思っているのか。あなたがたは恥を知らない。いのちはどこにあるのか。あなたがたが追求しているのは、ただ自分の度を越した望みだけではないか。あなたは自分をとてとても美しいと思い、あらゆる装飾品で着飾ってはいても、実際には糞の山の中に生まれたうじ虫ではないのか。今日あなたが運良くそうした天国の祝福を楽しんでいるのは、あなたの可愛らしい顔のおかげではなく、神があなたを例外的

に高く上げているからである。自分がどこから来たか、まだはっきりとわからないのか。いのちの話になると、口を閉ざして何も言わず、像のように黙り込んでしまうが、それでいて厚かましく着飾りはする。顔に紅やおしろいで化粧をしたがる。そしてあなたがたのうちの洒落者を見てみなさい。わがまま男で一日中ぶらつき回り、粗暴で、顔には無関心な表情を浮かべている。これが人のあるべき様子か。あなたがたは一人一人、男も女も、一日中何に専念しているのか。自分が食べていくのに誰に頼っているか知っているのか。自分の衣服を、その手に刈り入れたものを見て、自分の腹をなでてみなさい。長年の信仰の中で支払った血と汗という代価から何を得たのか。まだ観光に出かけたり、その悪臭を放つ肉を飾り立てたりするという、無価値なことを追求している。正常な人間であることを求められているのに、異常であるだけでなく、完全に常軌を逸している。そのような人物が、どうして図々しくもわたしの前に来れるのか。このような人間性で、自分の魅力を見せびらかし肉を見せつけて、常に肉の欲望の中に生きている。汚れた霊や悪霊の子孫ではないのか。わたしはそのような汚れた霊をいつまでも存在させてはおかない。あなたが心の中で考えていることを、わたしが知らないなどと思わないことだ。欲望や自分の肉をしっかりと抑制しているかもしれないが、その心の中に抱えている思いをわたしが見抜けないことがあるだろうか。あなたの目が望むものすべてを、わたしが知らないことがあるだろうか。あなたがた若い女性が自分をそれほどきれいにみせているのは、肉を見せびらかすためではないのか。男性はあなたがたにとって何の益があるのか。男性があなたがたを苦痛の海から本当に救ってくれるのか。あなたがたのうちの洒落男は、みな紳士らしく立派に見えるよう着飾っているが、それは颯爽とした外見に注意を惹くための策略ではないのか。誰のためにそうしているのか。女性はあなたがたにとって何の益があるのか。女性はあなたがたの罪の根源ではないのか。あなたがた男性にも女性にも、わたしは多くの言葉を語ったが、あなたがたはそのごく一部にしか従っていない。あなたがたの耳はよく聞こえず、目は衰えてかすみ、心は頑ななためもはや体の中には欲望しかなく、体という罫にとらわれて逃げることができずにいる。誰があなたがたのような汚物と垢の中をうごめくうじ虫に近寄りたいと思うのか。あなたがたはわたしが糞の山から引き上げた者以上のものではなく、生来正常な人間性を備えていなかったことを忘れてはならない。わたしがあなたがたに求めるのは、あなたがたが生来備えていなかった正常な人間性であり、欲望を見せびらかすことでも、長年にわたって悪魔の訓練をうけた悪臭を放つ肉を野放しにすることでもない。そのように着飾って、さらに深い罫に陥ることが怖くないのか。自分が本来、罪に属していたことを知らないのか。自分の体が欲望に満たされ切っていて、服の上からもそれが

滲み出し、耐え難く醜悪で汚れた霊である状態を露わにしていることを知らないのか。あなたがたはこのことを誰よりもよく知っているのではないのか。あなたがたの心、目、唇は、すべて汚れた霊に汚されているのではないのか。それらの部分は汚れていないのか。行動しない限り、自分をもっとも聖いと思っているのか。美しい衣服で身を飾れば、下劣な魂を覆い隠せると思っているのか。そんなことは不可能である。あなたがたにはもっと現実的になるよう忠告する。欺瞞に満ちた偽物になることをやめ、自分自身を見せびらかすこともやめなさい。あなたがたは互いに自分の欲望をひけらかしているが、その見返りに得るものは、とめどない苦しみと無慈悲な懲らしめだけである。なぜ互いに目を瞬かせて恋愛にふける必要があるのか。それがあなたがたの品位の尺度、公正さの度合いなのか。あなたがたのうちで邪悪な医術や魔術に手を染めている者をわたしは嫌悪する。あなたがたのうちで自身の肉を愛する若い男女を嫌悪する。自分を抑えたほうがよい。なぜならあなたがたは今や正常な人間性を持つことを求められており、欲望を見せびらかすことは認められないからである。なのにあなたがたはあらゆる機会を利用する。あなたがたの肉があまり余って、欲望が大きすぎるからである。

表面的には、人間性によるあなたの生活はとてもよく整理されているが、それでもあなたはいのちについて知っていることを話すよう求められると何も言えず、このことに関しては困窮している。真理を身につけなさい。人間性による生活が好転したのだから、内的ないのちもそうなるべきである。考えを変え、神への信仰の見方を変え、内面の認識と思考を変え、観念の中にある神についての認識を変えなさい。取り扱いを受け、暴露と滋養を受けて、自己、人生、神への信仰に関する認識を徐々に変えなさい。認識を純粋なものにきなさい。そのようにして、人の中にある考えが変わり、ものの見方が変わり、心構えが変わっていく。それだけが、いのちの性質の変化と呼べる。一日のすべての時間を神の言葉を読むことや、洗濯や掃除に費やせと求められているのではない。正常な人間性の生活は当然、最低限として耐えられるものでなければならない。さらに、外的な物事に対応するときにはやはり識見や理知を用いる必要がある。しかし、もっとも重要なのは、いのちの真理を身につけることである。いのちのために備えるときは、神の言葉を飲み食いすることに集中しなければならず、神についての認識と人生に関する自分の見識、そして特に神が終わりの日に行く働きについて知っていることを話すことができなければならない。あなたはいのちを追求しているのだから、こうしたものを身につけなければならないのである。神の言葉を飲み食いするときは、自分自身の状態の現実を言葉に照らして判断しなければならない。つまり、実体験を通して自分の

欠点に気づいたときは、実践の道を見つけ出し、自分の誤った動機や観念に背を向けることができなければならない。常にそうしたことを目指して努力し、それを達成することに精魂を傾けていれば、辿るべき道を得て、虚しさを感じなくなり、それによって正常な状態を保てるようになる。そのとき初めて、あなたは自分のいのちに重荷を抱えた、信仰を持つ人となる。なぜ神の言葉を読んでもそれを実践に移せない人がいるのか。それは、もっとも重大なことを把握できないからではないのか。いのちを真剣に考えていないからではないのか。重大なことを把握できず、実践の道を得られないのは、神の言葉を読んでもそれと自分自身の状態を結びつけることができず、また自分の状態を掌握できないからである。中にはこのように言う人もいる。「神の言葉を読んで、自分の状態をそれと結びつけている。自分が墮落していて素質が低いこともわかっている。けれど神の旨を満たすことができない」。あなたは非常に表面的なことしか見ていない。しかし、あなたの知らない現実的なことがたくさんある。たとえば肉の楽しみを捨て去る方法、独善を捨て去る方法、自分を変える方法、こうしたことに入る方法、自分の素質を高める方法、どの面から始めるべきかといったことである。あなたは数少ないことを表面的に把握しているだけで、ただ自分が本当に墮落しているということしか知らない。兄弟姉妹に会えば、自分がどれほど墮落しているかを語り、自分自身を知り、いのちの大きな重荷を負っているように見えはする。しかし実際には、その墮落した性質は変わっておらず、それはあなたが実践の道を見出していないことを証明している。もしあなたが教会を率いているなら、兄弟姉妹の状態を把握し、それを指摘することができなければならない。ただ単に、「あなたがたは不従順で遅れている」と言えばよいものだろうか。いや、兄弟姉妹の不従順と遅滞がどのように現れているのかを具体的に語らねばならない。彼らの不従順な状態、不従順な態度、サタンの性質について語り、その場合には、あなたの言葉にある真理を彼らが完全に確信するように語らねばならない。事実や例を上げて説明し、どうすれば反抗的な振る舞いから脱却できるのかを具体的に語り、実践の道を指し示しなさい。これが人を納得させるやり方というものである。そのようにする人だけが、他の人たちを導くことができ、真理の現実を備えているのである。

あなたがたには今では交わりを通して多くの真理が与えられているので、それらを見定めなければならない。あなたは全体でいくつの真理があるかという結論を出すことができない。人が備えるべき正常な人間性のさまざまな側面と、いのちの性質の変化のおもな側面、ビジョンの深まり、人が時代をとおして使ってきた知るためや

経験するための誤った手段を知り、それらを自分で区別できるようになると、そのとき初めてあなたは正しい軌道に乗っていることになる。宗教にいる人たちは聖書を神のごとく崇拝しており、特に新約聖書の四福音書をイエスの四つの異なる顔であるかのよう
にみなし、また父と子と聖霊の三位一体について語る。これはすべてこれ以上もなく愚かなことであり、あなたがたは皆それを見抜かなければならない。そしてそれ以上に、受肉した神の本質と終わりの日の働きについて認識を得なければならない。また、古い実践の方法や実践に関する誤謬と逸脱、すなわち霊の中に生き、聖霊に満たされ、ただ来るものを受け入れ、権威に服従する、といったことについても知らねばならない。かつて人がどのように実践してきたか、そして現在どのように実践すべきかを知らねばならない。指導者と働き手が教会においてどのように協力すべきか、独善と人を見下す態度をどのように捨て去るべきか、兄弟姉妹がどのようにともに生きるべきか、他の人たちおよび神との正常な関係をどのように構築すべきか、人間生活においてどのように正常性を獲得すべきか、霊的生活において何を自分のものにするべきか、どのように神の言葉を飲み食いするべきか、神の言葉のうちどれが認識に関連し、どれがビジョンに関わり、どれが実践の道に関連するのか。こうしたことはすべて、これまでに語られてきたのではないか。こうした言葉は真理を追求する者に開かれており、優遇されている人は誰もいない。今日あなたがたは、依存的な気質を持たず、独立して生きる能力を養わなければならない。将来あなたがたを導く者がいなくなったとき、あなたがたはわたしのこの言葉を思い出すことになる。患難の時、教会生活を送ることが不可能な時、兄弟姉妹が会うことができず、ほとんどの者が一人で生活しており、せいぜい同じ地域の人としか交われない時、まさにそうした時、あなたがたの現在の霊的背丈では、しっかりと立っていることができなくなる。患難の中では多くの者がしっかりと立っていられなくなる。いのちの道を知っており、十分な真理を身につけている者だけが進歩を続け、徐々に清めと変化を成し遂げることができる。患難を経験するのは容易いことではない。もし数日程度で患難を切り抜けたと思っているなら、それはあなたの考えがいかに短絡的かを証明している。教義を十分理解すればしっかりと立つことができると思っているが、それは違う。神の言葉における実質的なものを認識できず、真理の重大な側面を把握できず、実践の道を持っていないなら、時が来て何かが起こると、あなたは混乱に陥る。サタンの誘惑に抗うことができず、精錬の始まりにも耐えられない。あなたの中に真理がなく、ビジョンも欠けているなら、時が来るとあなたは倒れざるを得なくなる。そしてすべての希望を失って言う。「もういずれにしても死ぬのなら、最後の最後まで刑罰を受けようじゃないか。刑罰であれ、炎の湖に投げ込まれるのであれ、なるよ

うになればいい。来るものをそのまま受け取ろう」。これは効力者の時と同じである。一部の人は何があろうと自分は効力者だと信じたので、もういのちを求めなかった。彼らは煙草を吸い酒を飲み、肉に耽って好きなことをした。単に世俗の仕事に戻った人もいた。荒れ果てた環境というのもこういうもので、乗り越えることができれば、わずかでも自分に対する抑制を緩めたとたんに、すべての希望を捨てることになる。サタンの影響を克服できなければ、知らぬ間にサタンに捕われて、再び破滅へと引き渡されることになる。だから今日、真理を身につけ、独立して生きられるようにならないといけない。神の言葉を読むときには、実践の道を求めることができないといけない。潤し牧してくれる指導者や働き手がいなくても、辿るべき道を見つけ、自分の欠点を見出し、身につけて実践すべき真理を見つけられなければならない。神は地上に来たあと、常に人に付き添っていられるだろうか。一部の人は観念の中で、「神よ、ある時点までわたしたちに働きかけないのならば、あなたの働きは完成したことになりません。サタンがあなたを告発しているからです」と信じている。言っておくが、わたしが言葉を語り終えたら、それで働きは成功裏に完成したのである。それ以上言うことがなくなれば、それでわたしの働きは完成する。わたしの働きの終わりはサタンの敗北の証拠であり、それはサタンの告発など一切受けることなく、うまく成し遂げられたとすることができる。しかしわたしの働きが終わったとき、まだあなたがたの中に何の変化もなければ、そのような人は救いに値せず、排除される。わたしは必要以上の働きは一切行わない。わたしは地上での働きを、あなたがある程度征服され、皆が真理のすべての側面について明確な認識を持ち、素質が向上して内面的にも外面的にも証しを立てるまで続けない。そんなことは不可能である。今日わたしがあなたがたにおいて行う働きは、あなたがたを正常な人間性の生活へと導き入れるためであり、新たな時代の到来を告げ、人類を新たな時代の生活へと導き入れる働きである。この働きは一步步行われ、あなたがたのもとで直接発展していく。わたしはあなたがたに面と向かって教え、あなたがたの手を引く。あなたがたが理解していないことを何でも教え、欠けているものを何でも授ける。あなたがたにとっては、この働きはすべていのちの施しであり、同時にあなたがたを正常な人間性の生活へと導き入れるものだと言える。そして特に、この働きは終わりの日々にこの集団の人たちのいのちのために糧を与えることを目的としている。わたしにとっては、この働きは古い時代を終わらせ、新たな時代の到来を告げるためのものである。サタンについては、わたしが受肉したのはまさにサタンを倒すためである。今わたしがあなたがたの間で行っている働きは、あなたがたの今日のための糧であり、あなたがたの時宜を得た救いだが、このわずか数年の間に、わたしはあなたがたにすべ

ての真理、いのちの道のすべて、そして将来の働きについてさえも語る。これは将来あなたあなたが物を正しく経験できるようになるのに十分である。わたしの言葉のすべてが、わたしがあなたがたに委ねた唯一のものである。それ以外に勧告は行わない。今日わたしがあなたがたに語る言葉のすべてが、あなたがたへの勧告である。なぜならわたしが語る言葉のうちの多くについては、今日あなたがたは経験がなく、その内面的な意味を理解できないからである。いつか、あなたがたの経験は今日わたしが語ったとおりに実を結ぶ。これらの言葉はあなたがたの今日のビジョンであり、将来あなたがたが依存するものである。それは今日のいのちにとっての糧であり、将来のための勧告であり、これに勝る勧告はない。なぜならわたしが地上で働く時間は、あなたがたがわたしの言葉を経験する時間ほど長くないからである。わたしはただ働きを完了するだけだが、あなたがたはいのちを追求しているのであり、それは生涯を通じた長い旅からなる過程である。多くのことを経験して初めて、いのちの道を完全に手に入れることができる。そのとき初めて、わたしが今日語る言葉の内にある意味を見抜けるようになる。あなたがたがわたしの言葉を手に入れ、一人一人がわたしの委託をすべて受け、わたしがあなたがたに委託すべきものをすべて委託し、言葉の働きが終わりを迎えると、どれほど大きな効果があったかに関わらず、それで神の旨の実現も成し遂げられたことになる。それはあなたが想像しているように、あなたがたがある程度変えられなければならないということではない。神はあなたの観念どおりには行動しない。

人のいのちにおける成長は、数日で成し遂げられるものではない。神の言葉を毎日飲み食いしていようと、十分ではない。一定期間のいのちにおける成長を経なければならない。これは必要な過程である。人の現在の素質では、何を成し遂げることができるのか。神は人の必要に従って働き、人の生まれながらの素質に基づいて適した要求を行う。たとえばこの働きが高い素質を備えた人の集団のもとで行われたなら、発される言葉はあなたがたに向けられるものよりも高尚になり、ビジョンも高尚になり、真理ははるかに高尚なものになるだろう。言葉の一部は厳しさを増すであろうが、人のいのちの施しは向上し、奥義をさらに際立って明らかにすることができる。そのような人の間で語るとき、神は彼らの必要性に応じて与える。今日あなたがたに向けられている要求は、もっとも厳格なものと言えるかもしれないが、この働きが素質のさらに高い人に行われたなら、要求はさらに大きくなることだろう。神の働きはすべて、人の生まれながらの素質に従って行われる。人が今日までに変えられ征服された度合いは、可能な最大限度に達している。この働きの段階がどれほど効果的であったかを、自分の観念を使って計

ってはない。あなたがたは自分が生まれながらに有しているものをはっきりと知っているべきであり、自分自身を買いかぶってはならない。あなたがたの誰一人として、当初からいのちを追求してはおらず、路頭をぶらつく乞食であった。神があなたが想像するほどの度合いまであなたがたに働きかけ、皆を地にひれ伏させて、偉大なビジョンを見たかのように完全に納得させるということは不可能である。なぜなら神の奇跡を見たことがないものは、わたしが言うことをすべて完全に信じることはできないからである。あなたがたがわたしの言葉を綿密に検証してさえ、完全に信じることはないだろう。それが人間の本性というものである。真理を追求する者はいくらかの変化を経験するが、真理を追求しない者がかつて持っていた信仰は弱まり、さらには消えてしまうかもしれない。あなたがたにとって最大の困難は、神の言葉の成就を目にしなければ完全に信じられず、神の奇跡を目にしなければ納得できないということである。そのようなものを目にすることなく、誰が完全に神に忠実になれるというのか。だからわたしは、あなたがたが信じているものは神ではなく奇跡だと言うのである。わたしはもう真理のさまざまな側面についてははっきりと語った。それは一つ一つが完全であり、すべてが密接に関連し合っている。あなたがたはそれを目にしたのだから、今やそれを実践に移さねばならない。今日わたしはあなたに道を示すが、将来はあなたが自分でそれを実践しなければならない。今わたしが語る言葉は人の実際の状況に基づいて人に要求をするが、わたしは人の必要と人の内面にあるものに従って働きを行う。実践の神は実践的な働きを行い、人の実際の状況や必要性に応じて働くために地上にやって来た。神は理不尽ではない。神が働くとき、人に強要しない。たとえばあなたが結婚するかどうかは、あなたの状況の現実に基づくべきである。真理はあなたにはっきりと語られており、わたしはあなたを抑えない。家族に抑圧されているため、結婚しない限り神を信じることができない人がいる。この場合、逆に、結婚が人の役に立つ。他の人にとっては、結婚には何の利益もなく、ただ以前持っていたものを失うだけである。あなた自身の場合がどうであるかは、あなたの実際の状況と決意によって決めなければならない。わたしはあなたがたに要求を行う際の規則を考案するためにここにいるのではない。多くの人が絶え間なく、「神は実践的だ。神の働きは現実を基盤とし、わたしたちの状況の現実に基づいている」と叫んでいるが、しかし実際のところ、それは何ゆえに「現実」となるのかを知っているのか。空虚な言葉にはもううんざりである。神の働きは实际的で、現実に基づいており、そこには何の教義もなく、完全に自由で、すべてが開かれあからさまになっている。こうしたいくつかの原理の具体的な詳細はどういったものか。神の働きのどの部分がそのようであると言えることができるか。あなたは神の働きのこの側面につい

て、詳細に語り、さまざまな類の経験的な証しを持ち、非常にはっきりと理解していなければならない。それを知って初めて、こうした言葉を語る資格がある。もし誰かが、「受肉した神は世の終わりに、地上でどんな働きをしたのか。なぜ実践の神と呼ぶのか。ここでいう「実践」とは、何を意味するのか。神の実践的働きや、それに具体的に何が含まれるかについて話せるか。イエスが受肉した神で、今日の神も受肉した神なら、その違いは何なのか。類似点はどうか。この二人はそれぞれどんな働きをしたのか」と尋ねたら、答えることができるであろうか。こうした内容はすべて証しを立てることに関係する。これらのことについて、混乱してはならない。また他に、「今日の神の働きは現実だ。奇跡や不思議の顕示などではない」などという人もいる。神は本当に奇跡や不思議を行わないのか。確信があるのか。わたしの働きが真にどんなものであるかを知っているのか。神は奇跡や不思議を行わないと言う者もいるかもしれないが、神の行う働きと語る言葉はすべて奇跡ではないのか。神は奇跡や不思議を行わないと言う者もいるかもしれないが、それは説明の仕方や誰が対象かによる。神は教会に行くことなく、人々の状態を暴き、語る以外の働きを一切行うことなく、人々を駆り立てて前進させた。これは奇跡ではないのか。神は言葉だけで人々を征服したのであり、人々は見通しも希望もないまま喜んで従っている。これもまた奇跡ではないのか。神が語ると、その言葉は人々の中にある気分を引き起こす。喜びを感じないならば、憂鬱になり、精練の対象でない人は刑罰の対象となる。痛烈な言葉二、三語で神は人に刑罰をもたらす。これは超自然的ではないのか。人間にそんなことができるだろうか。あなたは長年聖書を読んできたが、何一つ理解しておらず、何の識見も得ていない。時代遅れの伝統的な信仰の在り方から自分自身を切り離せていないのである。あなたには聖書を理解する方法がない。しかし神は聖書を完全に理解することができる。これは超自然的ではないか。神が地上にやって来たとき、神に超自然的なところがなかったとしたら、あなたがたを征服できるだろうか。神の並外れた神的な働きがなければ、あなたがたの誰が確信しているだろうか。あなたの目には、ただ普通の人働きあなたがたとともに生活しているかのように見える。表面的には普通の平凡な人に見える。あなたに見えるのは普通の人間性の見せかけだが、実は神性が働きを行なっているのである。それは普通の人間性ではなく神性であり、神自身が働いているのであり、神が普通の人間性を用いて行う働きである。そのため神の働きは普通でもあり、超自然的でもある。神が行う働きは人が行えるものではなく、普通の人には行えないため、並外れた存在が行なっている。しかし並外れているのは神性であり、人間性ではない。神性は人間性とは異なる。聖霊に用いられる人も、平凡な普通の人間性を持った人で、この働きを行うことはできない。そこに

違いがある。「神は超自然的な神ではない。神は超自然的なことなどしない。わたしたちの神は実践的で現実的な言葉を語る。神は現実的で実践的な働きをするために教会へ来る。毎日神は面と向かってわたしたちに語り、面と向かってわたしたちの状態を指摘する。わたしたちの神は現実である。神はわたしたちと共に生活しており、何一つ変わったところはない。外見上、その人を神と見分けられるものは何もない。ときには神が憤ることもあり、わたしたちはそこに神の怒りの威厳を見る。また神が微笑むこともあり、わたしたちはそこに神のにこにことした物腰を見る。神は姿形を備えた生身の神自身で、現実であり、実際に存在する」と言う人もいるかもしれない。このように証しをするなら、それは不完全な証しである。それが他の人にとって何の役に立つのか。神自身の働きの内部事情や実質について証しすることができないなら、そんな「証し」はその名にふさわしくない。

神の証しをするということは、おもに神の働きについて自分が認識していること、神がどのように人を征服するか、どのように人を救うか、どのように人を変えるかを語ることである。それは神がどのように人を導いて真理の現実に入らせ、どのように人を神に征服され、完全にされ、救われるようにするのかを語ることである。証しをするということは、神の働きと自分が経験したすべてについて語るということである。神の働きのみが神を表現することができ、神の働きのみが神を公に、その全体において明らかにすることができる。神の働きは神への証しを立てる。神の働きと発言は霊を直接表現する。神の働きは霊に行われ、神の言葉は霊に語られる。こうしたことはただ受肉した神の肉を通して表されるが、実際にはそれは霊の表現である。神が行うすべての働きと神が語るすべての言葉は、神の本質を表している。もしも神が肉をまとして人のもとに来た後、語りも働きもせず、ただあなたがたに神の現実性、正常性、全能性を知るよう求めたなら、そんなことができるだろうか。それで霊の実質とは何かを知ることができるだろうか。神の肉の属性とは何かを知ることができるだろうか。神があなたがたに神への証しをするように求めるのは、ただあなたがたが神の働きの各段階を経験しているからである。そのような経験がなかったなら、神はあなたがたに証しをするよう要求はしないであろう。そのため神の証しをするときは、神の普通の人間性の外見について証しするだけでなく、神が行う働きと神が導く道についても証しをすることになる。そして自分がどのように神に征服され、どのような側面で完全にされたかを証しする。このような証しを行うべきである。もしあなたが行く先々で、「わたしたちの神が働きにやって来た。神の働きは本当に実践的だ。神は超自然的な行いなしに、何の奇跡も不思議も

なしに、わたしたちを得た」と叫んだなら、人々は、「神が奇跡も不思議も行わないとはどういう意味なのか。奇跡も不思議も見せずに、どうしてあなたを征服できたのか」と尋ねるであろう。そこであなたは、「神は語り、そして何の不思議も奇跡も見せることなく、わたしたちを征服した。神の働きがわたしたちを征服した」と答える。最終的には、何も実質的なことを言えず、何も具体的なことを語れないなら、それが真の証しなのか。受肉した神が人を征服するとき、それを行うのは神の神性の言葉である。それは人間性には成し遂げられない。死すべき人間には達成できないことであり、普通の人の中の最高の素質を備えた人にさえ不可能である。神の神性はあらゆる被造物を超えるからである。これは人にとっては並外れたことであり、創造主は結局のところ、あらゆる被造物を超える。被造物が創造主を超えることはできない。あなたが神を超えているなら、神はあなたを征服できない。神があなたを征服できるのは、ただ神があなたを超えているからである。全人類を征服できるのが創造主であり、この働きを行えるものは神をおいて他にない。こうした言葉が「証し」であり、このような証しを行うべきである。あなたは刑罰、裁き、精錬、試練、逆境、苦難を一つずつ経験し、征服された。あなたは肉の将来の展望や個人的な動機、肉の個人的な利益を捨て去った。言い換えれば、神の言葉はあなたの心を完全に征服した。あなたはいのちにおいて神が要求するほどには成長してはいないが、こうしたことをすべて知り、神の行いによって完全な確信を得ている。そのためこれを証し、実際的かつ真の証しと呼ぶことができる。神が行うために来た働き、すなわち裁きと刑罰の働きは、人を征服するためのものだが、同時に神は働きを完結させ、時代を終わらせ、完結の働きを行なっている。神は時代全体を終わらせて、全人類を救い、人類を罪から永遠に解放しようとしている。そして自らが創造した人類を完全に得ようとしている。あなたはこのすべてを証ししなければならない。あなたはこれほど多くの神の働きを経験し、それを自分の目で見て、直接体験した。最後の最後に到達したとき、自らに課せられた役割を果たせないようであってはいけない。そうであればなんと残念なことか。将来福音が広められるとき、あなたは自分の認識を語り、心の中で得たことすべてを証しできなければならず、努力を惜しんではならない。これは被造物として成し遂げなければならないことである。神の働きのこの段階の実際の意義は何か。その成果は何か。そしてそのうちのどれだけが人において行われるのか。人は何をすべきか。受肉した神が地上にやって来てから行なったすべての働きについてははっきりと語れるなら、証しは完全である。神の働きの意義、その内容、その実質、それが表す性質、その原理という五項目について明確に語れるなら、それは神を証しできることと、真に認識を得ていることの証明である。あなたがたへのわたしの要

求はさほど大きいものではなく、真の探求を行なっている者なら誰でも達成できる。神の証人となることを決意しているなら、神が何を嫌悪し、何を愛しているかを理解していなければならない。あなたは神の働きを多く経験してきた。その働きを通して、神の性質を知り、神の旨と人類への神の要求を理解し、その知識をもって神を証しし、自分の本分を尽くさねばならない。あなたはただこのように言うかもしれない。「わたしたちは神を知っている。神の裁きと刑罰はとても厳しい。その言葉は非常に厳格で、正しく威厳があり、人には犯すことができない」。しかしこうした言葉は、究極的に人を養うのか。それは人に対してどのような効果を持つのか。あなたはこの裁きと刑罰の働きが、自分にとってもっとも有益であることを本当に知っているのか。神の裁きと刑罰は、あなたの反逆性と墮落を明らかにしているのではないのか。そしてあなたの中にある汚らわしく墮落したものを清め駆逐してくれるのではないのか。裁きと刑罰がなかったなら、あなたは一体どうなるだろうか。あなたは実際にサタンが自分を奥深くまで完全に墮落させたという事実を認識しているのか。今日、あなたがたはこうしたことを身につけ、よく知っておかなければならないのである。

今日の神への信仰は、あなたがたが想像するような信仰、つまりただ神の言葉を読み、祈り、歌い、踊り、本分を尽くし、正常な人間性の生活を送れば十分であるという信仰ではない。信仰が本当にそれほど単純でありえるだろうか。鍵となるのは成果である。重要なのは何かをするのに幾つの方法を持っているかではなく、具体的にどのように最良の結果を成し遂げられるかである。あなたは神の言葉を取りあげて自分の認識の一部を詳しく語るができるかもしれないが、神の言葉を脇へ置けば、何も言うことがなくなる。これはあなたが字義や教義しか語ることができず、経験による認識を欠いていることを示している。今日では、決定的なことを把握できなければ何にもならない。これは現実に入るために極めて重大なことである。自分自身の鍛錬を次のように始めなさい。まず神の言葉を読み、その中にある霊的な用語をよく学ぶ。その中にある重要なビジョンを見つけ出し、実践に関連する部分を特定する。これらの要素をすべて一つ一つ結び付け、経験においてそれらに入っていく。これらは把握すべき重要な事柄である。神の言葉を飲み食いするときに最大の鍵となる実践は、神の言葉を一章読んだら、ビジョンに関する主要部分を見つけ出し、かつ実践に関連する主要部分も見つけ出せねばならないということである。ビジョンを基盤とし、実践を生活の指針としなさい。それらはあなたがたに何よりも欠けているものであり、あなたがたにとってもっとも難しいことでもある。あなたがたは心の中で、それらにほとんど注意を払わない。あなたが

たの誰もが通常、個人的な犠牲を払う意欲もやる気もない怠惰な状態にある。またはただ受け身に待っており、人によっては不平を言うこともある。そうした人は神の働きの目的や重要性を理解しておらず、真理を追求することが困難である。そのような人は真理を嫌悪しており、最終的には排除される。彼らの誰も完全にされることはできず、誰も生き残ることはできない。サタンの力に抗うというわずかな決意もないなら、彼らに希望はない。

あなたがたの追求が効果的だったかどうかは、現在何を持っているかでわかる。そしてそれによりあなたがたの結末が判断される。つまり、結末は払ってきた犠牲と行なってきた物事に明らかにされるのである。結末は、追求、信仰、何をしてきたかによってわかる。あなたがたの間には、すでに救いようのない者が多くいる。現在は人の結末を明らかにする日であり、わたしがぼんやりと働きを行うことはないからである。わたしは完全に救いようのない者を、次の時代に導き入れることはない。やがてわたしの働きが終わる時が来るが、まったく救うことのできない、霊のない腐臭のする屍に働きかけることはない。今は人の救いにおける終わりの日であり、わたしは役に立たない働きは行わない。天と地を罵るのはやめなさい。世界の終わりは近づいている。それは避けることができない。事ここに至り、人間にそれを止める方法はない。あなたが物事を好きなように変えることはできないのである。昨日あなたは真理を追求するための代価を払わず、忠実ではなかった。そして時が至った今日、あなたは救いようがない。そして明日、あなたは排除される。あなたを救う余地などない。わたしの心は柔和で、わたしはあなたを救うためにできるだけのことをしているが、あなたが自分のために努力し、考えないなら、それはわたしに何の関係があるというのか。自分の肉のことしか考えず安楽を喜ぶ者、信じているように見えても本当は信じていない者、邪悪な医術や魔術に手を染めている者、淫らでぼろぼろでみすばらしい者、ヤーウェへの生贄や神が所有するものを盗む者、賄賂を愛する者、何もせずただ天国へ昇ることを夢見る者、傲慢でうぬぼれて個人的な名声や富のためにしか努力しない者、尊大な言葉を広める者、神自身を冒瀆する者、神自身を批判し中傷してばかりいる者、党派を組んで独立しようとする者、自分を神以上に崇める者、放蕩に耽る軽薄な若者や中年や高齢の男女、人のもとで個人的な富や名声を楽しみ個人的な地位を求める男女、罪に囚われて悔い改めない者、これらはすべて救いようのない者ではないのか。放蕩、罪深さ、邪悪な医術、魔術、冒瀆、尊大な言葉はすべて、あなたがたの間にはびこっている。真理といのちの言葉はあなたがたの只中で踏みにじられ、聖なる言葉はあなたがたの間で汚されている。汚れと不

従順で膨れ上がった異邦人たちよ！ あなたがたの最終的な結末はどうなるのか。肉を愛し、肉の魔術にふけり、放蕩の罪に陥っている者が、どうして図々しくも生き続けようというのか。あなたがたのような人は救いようのないうじ虫だということを知らないのか。一体何の資格があって、あれやこれやと要求するのか。今日に至るまで、真理を愛さず肉だけを愛する者にはほんのわずかな変化も起こっていない。そのような者がどうして救われようか。いのちの道を愛さず、神を崇めて証しせず、自分自身の地位のために策略を巡らせ、自分を褒めそやす者は現在も同じままではないのか。彼らを救うことに何の価値があるというのか。救われるかどうかは、どれほど年長であるかや、何年間働いてきたかによって決まるものではなく、ましてやどれほどの経歴を積み重ねてきたかによって決まるものでもない。そうではなく、追求が実を結んだかどうかによるのである。救われる者は実を結ぶ「木」であり、葉が青々と茂り花を豊かに咲かせてはいいても、実をつけない木ではない、ということを知りなさい。何年も街中をぶらついてきたからといって、何の意味があろうか。あなたの証しはどこにあるのか。あなたの神への畏敬の念は、自己愛や好色な欲望よりもはるかに小さい。このような人は墮落者ではないのか。そのような人が、どうして救いの見本、模範となれるというのか。あなたの本性は矯正のしようがなく、あなたはあまりに反逆的で救いようがない。そのような人は排除されるのではないのか。わたしの働きが終わるのは、あなたの終わりの日が到来するときではないのか。わたしはあなたがたのもとで多くの働きを行い、多くの言葉を語ってきたが、そのうちのどれほどが本当にあなたがたの耳に入ったのか。そのうちのどれほどに従ってきたのか。わたしの働きが終わるときは、あなたがわたしに対抗しなくなる時であり、わたしに立ち向かわなくなる時である。わたしが働いていても、あなたがたは常にわたしに逆らい、決してわたしの言葉に従わない。わたしはわたしの働きを行うが、あなたはあなたの「働き」をして、自分の小さな国を作り上げている。あなたがたは狐や犬の群れでしかなく、すべてをわたしに反抗して行なっている。そしていつも、自分を一心に愛してくれる者を自分の腕の中に引き入れようとしている。あなたがたの畏敬の念はどこにあるのか。あなたがたのすることはすべてが欺瞞である。従順も畏敬もなく、することはみな欺瞞と冒涇に満ちている。そのような人が救われることができるのか。性的にふしだらで好色な男はいつも、自分の楽しみのためにいやらしい淫らな女を惹きつけたがっている。わたしは絶対にそのような性的にふしだらな霊を救わない。わたしはあなたがたのような汚れた霊を憎み、あなたがたはその好色さといやらしさのため地獄に落ちる。何か言うことがあるか。あなたがたのような汚れた霊や悪霊は本当に不快で、気分が悪くなる。このようなくだらない者が、どうして救われ

ることができようか。いまだに罪に陥っている者が、まだ救われることができるのか。今日、この真理、この道、このいのちはあなたがたを惹きつけない。その反面、あなたがたは罪深さや金や地位や名声や利益に、肉の楽しみに、男の格好良さや女の魅惑に惹きつけられている。あなたがたはどんな資格があって、わたしの国に入れるというのか。あなたがたの姿は神の姿より偉大で、地位は神の地位よりも高く、人々の間での威信は言うに及ばず、あなたがたは人に崇められる偶像となっている。大天使になったのではないのか。人の結末が明らかにされるときは、救いの働きが終わりに近づくときでもあり、あなたがたの多くは救いのない屍となっており、排除されなければならない。救いの働きのあいだ、わたしはすべての人に対して優しく善である。その働きが終わると、さまざまな種類の人の結末が明らかにされ、その時わたしはもはや優しくはない。人の結末が明らかになり、人はそれぞれ種類別に分類され、それ以上は救いの働きを行う意味がなくなるからである。なぜならそれで救いの時代は終わったことになり、終わった以上、戻ることはないからである。

実践(8)

あなたがたは真理の様々な側面をいまだ理解しておらず、実践においても依然多数の過ちや逸脱がある。多くの分野で自分の観念と想像によって生きており、実践の原則をまったく把握できていない。したがって、人々を導いて正しい道に進ませることが依然として必要である。つまり、人々が自分の人間生活と霊的生活を調節し、両方の側面を実践できるようにして、頻繁に支援と指導を受ける必要をなくさなければならない。そのとき初めて、人は真の霊的背丈を備える。また、将来あなたを導く人が誰もいなかったとしても、あなたはやはり自分自身で経験することができる。今日、真理のどの側面が重要で、どの側面が重要でないかを把握しているのであれば、将来、あなたは現実へと入ることができる。現在、あなたがたは正しい道へと導かれており、それにより多くの真理を理解することができている。そして将来、さらなる深みへと進むことができるだろう。人々がいま理解させられているのは、最も純粋な道であると言える。現在、あなたは正しい道へと導かれている。そしてある日、あなたを導く人がいなくても、すべての道のうち最も純粋なこの道に従って実践し、さらなる深みへと進むだろう。今日、人々はどのような実践が正しく、どのような実践が逸脱であるかを理解させられている。これらの物事を理解すれば、将来的に人々の経験はさらに深くなるだろう。現在、あなたがたの観念、想像、そして実践における逸脱が逆転され、実践と入りの道があなたがたに示されており、その後、働きのこの段階が終わり、あなたがたは自分たち人間が

歩むべき道を歩み始める。そのとき、わたしの働きは完了し、それ以降、あなたがたがわたしに会うことはない。現在、あなたがたの霊的背丈は依然として貧弱である。人間の本性と本質から生じる困難が多数あり、また深く根ざして掘り出す必要のある物事も多少存在する。あなたがたは、人の本性と本質の詳細を理解していないので、依然わたしがそれらを指摘する必要がある。さもなければ、あなたがたはそれらを認識することができないだろう。ある時点であなたがたの骨と血の中にある物事が暴かれるとき、それはいわゆる刑罰と裁きである。わたしの働きが徹底的に、かつ完全に実行されて初めて、わたしはそれを完結させる。あなたがたの墮落した実質が大いに暴露されればされるほど、あなたがたはより多くの認識を備える。そしてそれは、あなたがたの今後の証しと完全化に大きな意味をもつ。刑罰と裁きの働きが徹底的に行なわれて初めて、わたしの働きは完了し、あなたがたはわたしの刑罰と裁きからわたしを知ることになる。わたしの性質と義を知るだけでなく、より重要なこととして、わたしの刑罰と裁きを知るのである。あなたがたのうち多くの者が、わたしの働きの斬新さときめ細かさについて強い観念を抱いている。それでもなお、あなたがたはわたしの働きが新しくきめ細かいこと、そしてわたしが面と向かって、手に手を取って、あなたがたに実践を教えるということを理解しなければならない。それだけが、今後のあなたがたの実践と、あなたがたが揺るぎなく立てる能力にとって有益なのである。さもなければ、あなたがたは秋の木の葉のようにしおれ、黄色くひからび、何の価値もないだろう。あなたがたは、わたしがあなたがたの心と霊にあるすべてのものを知っていること、またわたしが行なう働きとわたしが述べる言葉が極めて精緻であることを知るべきである。あなたがたの性質と素質に基づけば、あなたがたはそのように扱われるべきなのだ。そうすることでのみ、わたしの刑罰と裁きに関するあなたがたの認識がますます明瞭になり、たとえ今日はわからなくても、明日はわかるようになるだろう。あらゆる被造物はわたしの刑罰と裁きの言葉に陥る。なぜなら、わたしは、いかなる者もわたしに反抗することを赦さないからである。

あなたがたはみな、自分の生活を合理的に調節できなければならない。一日一日を自分の思い通りに計画してもよいし、自分が好きなことをするのも自由である。神の言葉を読んだり、讃美歌や説教に耳を傾けたり、デボーションの筆記をしたりしてもよいし、興味があれば讃美歌を作ってもよい。そのすべてが適切な生活を構成しているのではないか。それらはすべて、人間生活を成立させるべき物事である。人は自然に生きべきであり、正常な人間性と霊的生活の両方から実を刈り取って初めて、正常な生活に入

ったとみなされる。今日、あなたが洞察と理知に欠けているのは、人間性に関してだけではない。人が備えるべきだと知らなくてはならないビジョンも多数ある。そして、あなたがいかなる教訓に遭遇しようとも、それがあなたの学ぶべき教訓である。あなたは環境に適応できるようにならなければならない。あなたの教育水準の向上は、それが実り豊かなものになるよう、長期的に実施する必要がある。また正常な人間生活を送るために、あなたが備えるべき物事もあり、自分のいのちへの入りも理解しなければならない。今日、あなたは神の言葉を数多く読み直し、当時は理解していなかった言葉を理解するようになり、心がますます安定した。それらもまた、あなたが得た成果なのである。神の言葉を飲み食いして自分の中にいくばくかの認識が生じた日、あなたは自由に兄弟姉妹と交流できる。これがあなたの送るべき生活ではないのか。時折、質問がなされたり、ある主題について思いを巡らせたりするが、そうすることであなたの識別力は向上し、より多くの識見と知恵がもたらされ、いくらかの真理を理解できるようになる。それが今日語られる霊的生活に含まれているものではないのか。霊的生活の一側面だけを実践することは認められない。神の言葉を飲み食いし、祈りを捧げ、讃美歌を歌うことのすべてが霊的生活を構成しており、霊的生活を送るときには正常な人間性の生活も送らなければならない。今日述べられていることの多くは、人に理知と識見を与え、彼らが正常な人間性の生活を送れるようにするためのものである。識見を有するとはどういう意味か、正常な対人関係を持つとはどういう意味か、人々とどのように交流すべきかといったことを、あなたは神の言葉を飲み食いすることで身につけるべきであり、あなたに求められている事柄は、正常な人間性を通じて達成することができる。自分が身につけるべき事柄を身につけ、適切な水準を超えてはならない。ありとあらゆる言葉や語彙を用い、それによって自分の魅力を見せつける人もいる。またあらゆる種類の書籍を読み、それによって肉の欲求を満足させる人もいる。そうした人はいわゆる世界の偉人たちの伝記や発言を研究して模倣したり、ポルノ書籍を読んだりすることさえあるが、それはますます滑稽なことである。このような人はいのちへの入りの道を知らず、ましてや現在における神の働きなど知らない。彼らは日々の過ごし方さえ知らないのだ。なんと空虚な生活か。自分が何に入るべきか、彼らはまったく知らない。彼らにできるのは、あたかも話をするのが自分の入りの代わりになるかのように、他人とおしゃべりして意思疎通を図ることだけである。彼らには恥というものがいないのか。彼らは生き方を知らず、人間生活を理解していない人たちである。むさぼり食い、無駄なことをするのに一日を費やしている。そんな生活に何の意味があるのか。働き、ものを食べ、服を着る以外に、多くの人が高貴な時間を無意味なことに費やし、浮かれてふざけ回った

り、噂話をしたり、一日中寝たりしているのをわたしは見てきた。これが聖徒の生活なのか。正常な人間の生活なのか。卑しく、退廃的で、無頓着なそうした生活が、あなたを完全にすることがあり得るのか。あなたは何も得られぬまま、そんなにも自分をサタンに引き渡したいのか。人の生活が安楽なとき、その人の環境に苦しみはなく、彼らは経験することができない。快適な状況において、人はたやすく墮落する。しかし不利な環境に置かれれば、あなたはより差し迫った心持ちで祈り、あえて神から離れないようになる。生活が安楽かつ退屈であればあるほど、その人は人生に何の意義も見出せず、死んだほうがましだとさえ感じる。これが墮落した人々の肉の有様であり、そうした人たちは試練に晒されなければ益を得られない。

イエスによる働きのその段階は、ユダヤとガリラヤの地で行なわれ、異邦人はそれに気づかなかった。イエスが行なった働きは極めて秘密にされ、イスラエル以外の国はそれに気づかなかった。イエスが働きを完了させ、それが原因で騒動が起きて初めて、人々はそれに気づき、そのときイエスは去った。イエスは働きの一段階を行なうために来て、一部の人々を得て、働きの一段階を完了させた。神がどの段階の働きを行なっていると、神に付き従う者が数多くいる。その段階の働きが神自身だけによって行なわれたとしたら、それは意味を失うだろう。神がその段階の働きを完遂させるまでは、神に付き従う人々がいなければならない。神自身の働きが完了して初めて、人々は神から託された働きを実行し始め、そのときようやく神の働きが広がりだす。神は新しい時代を導入する働きだけを行ない、人々の働きはその時代を続けることである。ゆえに、今日の働きは長くは続かない。つまりわたしの人間との生活は、それほど長く続かないのである。わたしは自分の働きを完了させ、あなたがたに自分の尽くすべき本分を尽くさせるだけであり、そうすることでこの働きと福音が異邦人と他の諸国にできるだけ早く広まるようにする。そのとき初めて、あなたがたは人間としての本分を完了させることができる。現在の時代は、すべての時代の中で最も貴い。それを無視するならば、あなたは愚か者である。この環境の中であって、あなたがこれらの言葉を飲み食いし、この働きを経験してなお、真理を追求する決意に欠け、重荷をまったく感じないのであれば、あなたの将来はどうなるだろうか。あなたのような人間は淘汰の対象ではないのか。

イスラエルの民のように神に仕える

今日、多くの人々は、他の人々と協調していくにあたり学ぶべき教訓は何であるかということに注意を払っていない。わたしはあなたがたの多くが、他の人々と協調していく

上で何の教訓も学ぶことができず、大半の人は自分の意見に固執していることに気づいた。教会で働くとき、あなたは自分の意見を言い、他の人はその人の意見を言い、それぞれが他人と何の関わりも持たず、実際には何の協力も行われていない。あなたがたは皆、ただ自分の見識を伝えたり、自分の内に抱えている「負担」を解消したりすることにあまりにも夢中で、いのちを追求することは少しも行っていない。ただおざなりに仕事をし、他の誰が何を言おうと何をしようと、自分は自分の道を歩まねばならないと常に信じているようだ。他の人々の状況がどうであろうと、自分はただ聖霊の導かれるままに人と交わるべきだと考えている。他の人々の長所を見つけることはできず、自分自身をよく観察することもできない。あなたがたは物事を受け容れるということにおいて、実に常軌を逸しており、誤っている。あなたがたはいまだに多くの独善性を示していると言える。まるで、あの昔の病に逆戻りしたかのよう。あなたがたは完全に心を開けるようなやり方で互いに話し合わない。たとえば特定の教会での仕事においてどのような成果が得られたかや、自分の最近の内的状態、その他諸々の事柄について、とにかく一切話し合おうとしない。自分自身の観念を手放したり、自分自身を放棄したりといった行為に、あなたがたがいそしむことは一切ない。リーダーや働き手たちは、如何にして兄弟姉妹たちが消極的にならないようにするか、如何にして彼らを積極的に従わせるかということしか考えていない。しかし、あなたがたは皆、ただ積極的に従うだけで十分だと考えており、自分自身を知り、自分自身を捨てるということが何を意味しているのかを根本的に理解しておらず、ましてや他人と協調して奉仕することの意味など知るよしもない。ただ自分自身が神の愛に報いる意志を持ち、自分自身がペテロのように生きる意志を持つことだけを考えている。それら以外には何も考えていない。あなたは、他の人々が何をしようとも自分は盲目的にそれに従うことはしないし、他の人々がどのようなであろうとも自分自身は神によって完全にされることを求める、そしてそれで十分だ、とさえ言う。しかし実際には、あなたの意志が現実において、どのような形であれ具体的に表されたことはない。あなたがたが現在示している態度は、こういったものではないか。あなたがたはそれぞれ自分自身の見識に固守しており、皆が完全にされることを望んでいる。あなたがたはこれほどの長い間、大した進歩もなく神に仕えてきている。特に、この調和してともに働くという学びについては、何一つ成し遂げていない！教会に入ると、あなたは自分のやり方で他者と交わり、他の人々は彼らのやり方で交わっている。調和のとれた協調はめったに行われず、目下の信者に至ってはさらにその傾向が顕著である。これはつまり、あなたがたの中で、神に仕えるということはどういうことか、あるいはどのように神に仕えるべきなのかを、理解している者は非常に

まれだということだ。あなたがたは混乱しており、この類の学びをつまらないものと考えている。真理をこういう角度から実践していないばかりでなく、分かっているが間違っていることをしている者さえ多い。長年神に仕えている者たちでさえ、喧嘩し、互いに陰謀をめぐらし、嫉妬し、競争している。皆一様に自分自身のためであり、協力ということは一切していない。こうしたことすべてが、あなたがたの実際の霊的背丈を表しているのではなかろうか。日々ともに奉仕するあなたがたは、神殿で毎日神自身に直接仕えていたイスラエル人に似ている。神に奉仕するあなたがたが、如何にして協調していくか、如何にして神に奉仕するかを知らないとはどうしたことか。

当時、イスラエル人は神殿で直接ヤーウェに仕えており、祭司という身分を持っていた（もちろんすべての人が祭司だったわけではなく、神殿でヤーウェに仕える者のみがその身分を有していた）。彼らはヤーウェより授けられた冠をかぶった（つまり、彼らがその冠をヤーウェの要求に従って作ったということであり、ヤーウェが直接彼らにその冠を与えたわけではない）。またヤーウェより授けられた祭司の職服も身に着けており、神殿で直接、裸足で朝から晩まで神に仕えていた。彼らのヤーウェに対する奉仕に無計画なところは一切なく、盲目的に没頭して堂々巡りをすることもなく、むしろ、すべてが規則に従って行われ、神に直接仕える者は誰もその規則を破ることができなかった。彼らは全員がこうした規則に従わねばならず、そうでなければ神殿に入ることを許されなかった。誰かが神殿の規則を破った場合、すなわち、誰かがヤーウェの戒めに背いた場合、その人物は神が定めた律法に従って処遇を受けねばならず、誰もそれに異議を唱えたり、違反者をかばったりすることは許されなかった。神に何年奉仕しているかに関わらず、全員が規則に従うことを命じられた。こうした理由から数多くの祭司が、祭司の職服を身に着けて、一年中このようにヤーウェに仕え続けた。神は彼らを一切特別扱いしなかったにもかかわらず、である。彼らは祭壇の前で、そして神殿の中で、一生を過ごしさえしたのである。これは彼らの忠誠と従順との表れであった。そのため、ヤーウェが彼らにあのような祝福を与えたのは自然なことであり、ただ彼らの忠誠がゆえに、彼らは優遇されヤーウェのすべての行いを目にしたのである。当時、ヤーウェがイスラエルにおいて、その選民の間で働きを行ったとき、ヤーウェは彼らに非常に厳しい要求をつきつけた。彼らは皆非常に従順で、律法による制約を受けた。こうした律法は、彼らがヤーウェを敬い畏れる能力を保つために役立った。これらはすべてヤーウェの行政命令であった。こうした祭司の誰かが安息日を守らなかったり、ヤーウェの戒めを破ったりした場合、そしてそれが民衆に見つかった場合、その人物はただちに祭壇の

前に引き出され、石打ちによる死刑に処された。その屍を神殿の中や周囲に置くことは禁じられていた。ヤーウェがそれを許さなかったのだ。そのような行為を行った者は誰もが、「俗の生贄」を捧げる者として処遇され、大きな穴に投げ込まれて処刑された。当然ながら、そのような人々は一人残らず命を失うことになり、助命される者は一人もいなかった。中には「俗の炎」を捧げたものもいた。すなわちヤーウェが定めた日に生贄を捧げなかった人々は、捧げ物とともに神の炎によって焼かれたのである。そうした捧げ物は、祭壇に残すことも許されなかった。祭司に対する要求とは次のようなものであった。彼らはまず足を洗ってからでないと、神殿に立ち入ることはおろか、神殿の外の中庭にも立ち入ることも許されなかった。祭司の職服を身に着けなければ神殿に入ることはできず、また祭司の冠をかぶらなければ神殿に入ることができなかった。死体によって汚れている場合は神殿に入ることができず、罪深い人物の手に触れた後は、まず手を洗ってからでないと神殿に入ることができなかった。さらに女性によって自分の身を汚した後は、神殿に入ることもできなければ（3ヶ月間、永遠にではない）、ヤーウェの顔を見ることも許されなかった。その期間が過ぎると一すなわち3ヶ月が経過して初めて、彼らは清潔な祭司の職服を身に着けることを許されたのだが一まず7日間は外の中庭で奉仕してから、その後神殿に入り、ヤーウェの顔を見ることができた。こうした祭司の衣装はいずれも、神殿の中でのみ身に着けることが許され、ヤーウェの神殿を汚すことがないよう、神殿の外では一切着用できなかった。祭司である者は皆、ヤーウェの律法に違反した罪人を神の祭壇の前に引き出す義務があり、罪人はそこで民衆の手によって死刑に処せられた。そうしないと、その悪行を目撃した祭司に火の粉が降りかかるのである。このため彼らはいかなるときもヤーウェに忠実であった。神の律法は非常に厳しいものであり、あえて神の行政命令に平然と違反する気など彼らには一切なかったからである。イスラエル人がヤーウェに忠実だったのは、彼らが神の炎を目の当たりにし、神が人々を罰するその手を目にしたからであり、また彼らが当初神に対してそのような畏敬の念を抱いていたからでもあった。そのため、彼らが得たものはヤーウェの炎のみでなく、神の世話と保護、そして祝福であった。彼らの忠誠とは、すべての行いにおいてヤーウェの言葉に従うということであり、誰もそれに背く者はなかった。誰かが背くことがあったとしても、他の者たちは依然としてヤーウェの言葉を守り続け、ヤーウェに逆らった者を誰であろうとも死刑に処し、神に対してその人物を隠すことは一切なかった。安息日を守らなかった者、乱交の罪を犯した者、そしてヤーウェへの捧げ物を盗んだ者は、特に厳しく罰せられた。安息日を破った者は例外なく、彼ら（民衆）によって石打ちの刑に処刑されるか、むち打ちによって処刑された。姦淫の罪を犯し

たもの ― 単に魅力的な女性に劣情を抱いた者、悪女に対してみだらな考えを起こした者、若い女性を目にして淫欲を抱いた者も ― は、すべて死刑に処せられた。若い女性が身を覆うものやベールを身に着けておらず、男性を不義の行為に誘い込んだ場合は、その女性が死刑に処せられた。こうした類の律法に違反した者が祭司（神殿で神に仕える者）であった場合は、十字架に張り付けられるか、絞首刑に処された。このような者は生きることを許されず、誰一人としてヤーウェの御前で引き立てを受けることはなかった。このような男の親類は、彼の死後3年間はヤーウェの祭壇に生贄を捧げることを許されず、ヤーウェから民衆に与えられた生贄の分け前を得ることも認められなかった。この期間が終了して初めて、彼らは最高級の牛や羊をヤーウェの祭壇に供えることができた。それ以外の過ちを犯した場合は、ヤーウェの御前で3日間断食を行い、神の恵みを請わねばならなかった。彼らがヤーウェを崇拝したのは、神の律法がそれほどまでに厳しく厳格だったからだけではなく、神の恵みと、神に対する彼らの忠誠の結果でもあった。そのため彼らは今日に至るまで、ずっと同じように忠誠を尽して神に奉仕してきており、ヤーウェの前での嘆願を撤回したことは一度もない。現在、イスラエルの人々はいまだに神の世話と保護を受けており、神は今もなお彼らの恵みとして、常に彼らとともにある。彼らは皆どのようにヤーウェを敬い畏れ、どのように神に仕えるべきかを知っており、神の世話と保護を受けるにはどのように行動しなければならないかを知っている。それは彼らが皆、心の中で神を敬い畏れているからである。彼らの奉仕がすべて成功していることの秘訣は、この畏敬の念以外の何物でもない。では、今日のあなたがたはどうか。このイスラエルの民に少しでも似ているだろうか。現在の神への奉仕は、優れた霊的指導者の導きに従うことに相通じるところがあると思うか。あなたがたはとにかく、何の忠誠も畏敬の念も持ち合わせていない。あなたがたは大いに恵みを受けており、皆が直接神に仕えているという意味でイスラエル人の祭司と同等である。あなたがたは神殿に入ることはないが、あなたがたが受け取るもの、そして、あなたがたが目にするものは、神殿でヤーウェに仕えた祭司が受け取ったものよりもはるかに多い。しかしあなたがたは、彼らよりもはるかに頻繁に反逆し反抗している。あなたがたの畏敬の念は微々たるものであり、その結果として、ごくわずかの恵みを受け取っているのだ。あなたがたは献身的になることがほとんどないが、あのイスラエル人たちが受け取ったものよりもはるかに多くを受け取っている。このすべてにおいて、あなたがたは慈悲深く扱われていないか。イスラエルで働きが行われていたとき、人々が大胆にも意のままにヤーウェを裁こうとするようなことはなかった。しかしあなたがたはどうか。わたしがあなたがたの間で行う働きがあなたがたを征服するためのものでないとしたら

、わたしの名を汚すあなたがたの怪しからん行為にどうして耐えることができようか。もしあなたがたの生きている時代が律法の時代であったなら、あなたがたのような行動をし、あなたがたのような言葉を吐けば、あなたがたのうち誰一人として生き残りはしなかっただろう。あなたがたの畏敬の念はほんのわずかだ！あなたがたはわたしが多くの恵みを与えないとして常にわたしを非難し、さらには、わたしが十分な祝福の言葉を与えず、わたしからは呪いの言葉しか出ないとさえ言い張っている。わたしに対してそのようにわずかな畏敬の念をもってしては、わたしの祝福を受け取ることなど不可能だと知らないのか。あなたがたの奉仕の状態がお粗末なために、わたしが常にあなたがたに呪いと裁きを投げかけていることを知らないのか。あなたがたは皆、自分が不当な扱いを受けたと思っているのか。反抗的で素直に従わない人々に、どうやってわたしの祝福を与えろというのか。わたしの名を汚す人々に、どうしてわたしの恵みを気軽に与えられようか。あなたがたはこれまで、すでにこの上なく優しく扱われてきた。もしイスラエル人が今日のあなたがたのように反抗的だったなら、わたしはとっくに彼らを滅ぼしていたであろう。しかし、わたしはあなたがたをただただ寛容に扱っている。これは慈愛ではないのか。これ以上の祝福を望むのか。ヤーウェは自分を敬い畏れる者だけを祝福する。自分に反逆する人々は罰し、誰一人として許すことはない。神に仕える方法を知らない現代人であるあなたがたは、心を完全に入れ替えるために、刑罰と裁きをより一層必要としていないか。そのような刑罰と裁きこそが、あなたがたに与えられる最良の祝福であり、あなたがたに対する最高の保護ではないか。それらなくして、あなたがたのうち一人でも、ヤーウェの燃え盛る炎に耐えうる者がいるであろうか。あなたがたが真にイスラエル人と同じくらい忠実に神に仕えることができるなら、同時に自分自身の忠実な友として、優しさを持つのではないだろうか。しばしば喜びを感じ、十分な親切心を持つのではないだろうか。あなたがたは皆、どのように神に仕えるべきかを知っているのか。

今日のあなたがたに対する要求 ― 協調してともに働くこと ― は、ヤーウェがイスラエル人に求めた奉仕に似ている。それをしないなら、奉仕などやめることである。あなたがたは神に直接仕える身であるがゆえに、最低限としてその奉仕においては忠誠と従順を保たねばならず、同時に実践的な方法で教訓を学ぶこともできなければならない。特に教会で働いている人々に問うが、あなたがた目下の兄弟姉妹の誰かが、あえてあなたがたを取り扱おうとするだろうか。誰かがあなたがたの間違いを、面と向かって指摘してくるだろうか。あなたがたは他のすべての人々の上に立ち、王のように君臨してい

る。このような類の実践的な教訓を学んだり始めたりすることさえしないにもかかわらず、なおも神への奉仕について語っているのだ！現在、あなたは多くの教会を指導するよう求められているが、自分自身の身を完全に捧げていないどころか、独自の観念や意見に執着し、「これはこのように行うべきだと思う、神は他者に抑えつけられるべきではないと言っているし、今日では盲従すべきではないからだ」などと言ったりする。そのため皆がそれぞれ自分の意見に固執し、誰も互いに従おうとはしない。自分の奉仕が行き詰まっていることは明らかに知っていながら、やはりこのように言うのだ。「わたしの見るところでは、わたしのやり方はそれほど的外れていない。いずれにしても、皆にそれぞれの立場というものがある。あなたはあなたの立場で、わたしはわたしの立場で話す。あなたは自分の視点について説教し、わたしは自分のいのちの入りについて語るのだ」。取り扱わなければならない多くのことについては一切責任を持たず、あるいは、ただ間に合わせで対処し、一人ひとりが自分の意見をぶちまけ、用心深く自分自身の地位、評判、体面を守っている。誰も謙虚になろうとはせず、いずれの側も、いのちをより迅速に進歩させられるよう率先して自分の身を捧げ互いの不足を補い合おうとすることがない。あなたがたがともに調和して働くとき、あなたがたは真理を探し求めることを学ぶべきである。あなたがたは、このように言うこともできる。「真理のこの側面について、自分は明確に理解していない。それについて、あなたはどのような経験を持っているだろうか。」あるいは、このようにも言えるだろう。「これについてはあなたのほうが経験豊富だから、少し手ほどきをしてもらえないだろうか。」それが良いやり方というものではないか。あなたがたはこれまでに多くの説教を聞いてきて、奉仕においてもいくらかの経験がある。あなたがたが教会で働くとき、互いに学び合い、助け合い、欠点を補い合うことなくして、どうして教訓を学ぶことができようか。あなたがたは何かに遭遇するたびに、あなたがたのいのちに利益を与えられるように互いと交わらなければならない。そればかりでなく、どのような事柄についてであれ、なんらかの決断を下す前には、慎重に交わり合うべきである。そうして初めて、ただおざなりに形ばかりの行動をするのではなく、教会に対して責任を持つことになるのである。すべての教会を訪ね終えたら、皆で集まって、見出したすべての事柄や仕事の中で直面したあらゆる問題について説教を行い、そしてあなたがたが得た啓きと照らしについて話し合いなさい。これは奉仕において絶対に欠くことのできない実践である。あなたがたは神の働きのため、教会の利益のため、そして兄弟姉妹たちを激励して前進させるために、調和の取れた協力関係を作り上げなければならない。互いに協調し、それぞれが相手を正してより優れた成果を成し遂げることで、神の旨に配慮すべきである。それが真の協

力というものであり、それに取り組む者のみが、真のいのちの入りを遂げるのである。協力を行う中で話す言葉には不適切なものもあるかもしれないが、それは問題ではない。後でそれについて交わりを持ち、明確な理解を得るようにしなさい。その問題を放置してはいけない。そのような交わりを持った後で、兄弟や姉妹の不足を補うことができる。このように深く自分の仕事に携わって初めて、より優れた成果を成し遂げることができるのである。あなたがたは一人ひとりが神に仕える者として、自分自身の利益のみを考えるのではなく、そのあらゆる行いにおいて教会の利益を守ることができなければならない。常に互いを暗に批判しながら、一人だけで行動するということは認められない。そのように行動する人々は、神に仕える者としてふさわしくない！そのような人々はひどい性質を持っており、彼らの中にはわずかな人間性も残っていない。彼らは完全にサタンである！彼らは獣である！現在でさえ、いまだにこのようなことがあなたがたの間で起こっている。しまいにはあなたがたは、交わりの最中に互いを攻撃し合い、わざと口実を探しては顔を真っ赤にしてつまらないことで言い争い、どちらも自分が引き下がろうとはせず、それぞれが心の内を隠しつつ、一心に相手を警戒して常に身構えている。そのような性質が、神への奉仕にふさわしいと言えるだろうか。そのような仕事が、兄弟姉妹たちに何かを与えることになるだろうか。あなたは人々を正しいいのちの道に導くことができないばかりでなく、実際自分自身の墮落した性質を兄弟姉妹たちに刷り込んでいるのだ。あなたは他者を傷つけていないか。あなたの良心はひどいもので、芯まで腐っている。あなたは現実に入ることもなければ、真実を実践することもない。さらに、自分の極悪な本性を恥もなく他者にさらけ出している。あなたはとにかく恥というものを知らない。こうした兄弟姉妹たちはあなたに託されたものであるのに、あなたは彼らを地獄へと導いている。あなたは良心の腐りきった者ではなかろうか。完全な恥知らずである！

素質の向上は神の救いを授かるためである

人の素質を向上させるということは、神の言葉を理解でき、どのように神の言葉に従って行動するべきかを知ることができるように、理解力を伸ばすことをあなたがたに要求することである。これが何よりも最も基本的な必要条件である。わたしの言うことを理解せずにわたしに付き従っているならば、あなたの信仰は混乱しているのではないのか。わたしがどれだけ多くの言葉を語ろうと、あなたがたに達することができず、わたしが何を言おうと今一つ理解できないなら、あなたがたの素質が乏しいということである。理解力なしには、あなたがたはわたしの言うことを何も理解できない。これでは、

望むとおりの結果を達成するのは極めて困難である。わたしにはあなたがたに直接伝えられないことが多くあり、意図する効果が達成できず、そのため追加の働きが必要になる。あなたがたの理解力、物事を見る能力、生きる水準があまりにも不足しているため、「素質を向上させる」働きをあなたがたにおいて行わなければならない。これは不可避であり、代替手段もない。これを行なって初めて何らかの結果が達成できる。そうでなければ、わたしが述べる言葉は全て無に帰すであろうし、あなたがたは皆、罪人としての歴史に名を残すことになるのではなかろうか。あなたがたはこの世のくずにはなりたくないであろう。あなたがたにおいて何の働きが行われているのか、あなたがたに何が要求されているのかを知らないのか。あなたがたは自分の素質を知るべきである。それはわたしの要求にまったく達していない。このことはわたしの働きを遅らせないのか。現在のあなたがたの素質と品格の状態では、わたしに証しを立てるのに適した者は誰もおらず、わたしの今後の働きの重い責任を負う務めを担うに適した者もない。あなたがたは非常に恥ずかしく感じないのか。このようなまま続けて、どうしてわたしの心意をすべて満たせるというのか。あなたは自分の生活を最大限に生きるべきである。時間を無駄にしてはならない。そうすることは無価値である。自分が備えるべきことを知る必要がある。自分のことを何でも屋だと考えてはならない。先は長いのである。人間性からなる最低限の常識さえなかったなら、これ以上何を言うべきだというのか。すべて無駄ではないのか。そして、わたしが求める人間性と素質については、あなたがたの誰一人として完全に基準を満たしていない。用いるのに適した者を探し出すのは極めて困難である。あなたがたは自分が偉大な働きをわたしのために行ない、わたしから偉大な事柄を引き受ける能力があると考えている。しかし実際には、あなたがたの目の前にある課題の多くにどのように入っていくべきかさえ知らない。それなのに、さらに深い真理に一体どうして入っていくことができるというのか。あなたがたが入っていくには、幾つもの層からなる接近を段階的に行なわなければならない。無秩序であってはならない。それは好ましいことではない。始めは最も浅いところから入り、これらの言葉を明瞭に理解するまで一行一行丁寧に読むこと。神の言葉を読むときは、あたかも馬で疾駆しながら花を美しいと思い眺めるように、ただ軽く目を通してはならない。また読む振りをするだけではだめである。通常は、参考文献（文法や修辞関連書）を読んで知識を向上させるのもよい。恋愛小説や偉人の伝記、社会科学関係の本は読んでではない。このような本は有益ではなく、害をおよぼすだけである。自分が入るべき、理解すべきことをすべて習得しなければならない。人の素質を向上させる目的は、人に自分の本質、身分、地位、価値について気づかせることである。神を信じるにあたり、なぜ人は

真理を追求すべきなのか、また人が自分の素質を向上させないことは容認されることか否かを理解すべきである。教養を積み続けることは不可欠である。このことを放置してはいけない。あなたがたはなぜ人の素質を向上させる必要があるのか、いかに向上させるべきか、どの側面に入るべきかを理解しなければならない。正常な人間性を生きることの意義、なぜこの働きは行なわれなければならないのか、人が果たすべき役割を理解する必要がある。たとえば、教養を深めるにあたり、どの側面を学ぶべきか、それにいかに入っていくべきかを理解しなければならない。あなたがたは皆、教養を深める目的を知らなければならない。それは神の言葉を理解し真理に入るためではないのか。現在、何が教会中に広まっているのか。人に教養を身に付けさせると、人は神の言葉の享受について忘れ、一日中教養を身に付けること以外は何もしない。人に正常な人間性を生きよう要求すると、家を整頓することや、料理をすること、台所用具を買うことにしか専念しない。そうしたことに集中し、通常の教会生活を送る方法さえ知らないままである。現状にいるのは、実践において逸脱したからである。それでは、なぜ霊的生活に入るように求められているのか。そのようなことをただ学ぶだけでは、あなたは要求されていることを満たせないままである。最も重要なことは、依然として、いのちに入ることである。一方、この働きを行なう理由は、人が経験の中で遭遇する困難を解決することである。素質を向上させることで、人間の本性と本質を知ることができる。そのおもな目的は、人の霊的いのちの成長と性質の変化である。あなたは、外観を美しく着飾る方法を知っているかも知れないし、識見があり利口かも知れない。しかし最終的に働きに行くべき日が来ても、そうすることができない。したがって、素質を向上させながら、同時に何をすべきか知らなければならない。目標はあなたを変化させることであり、素質の向上は付随的なものである。素質が向上しなければ成功ではなく、性質が変化しなければさらなる失敗である。どちらも省略することはできない。正常な人間性をもつからといって、響き渡るような証しを立てたということではない。あなたに要求されていることは、それほど単純ではないのである。

正常な人間性をもつ人と同じ理知と生活様式を身に付け、いのちに入るところまで人の素質が向上して初めて、何らかの変化と証しを達成したことになる。証しを立てる日が来たとき、人間としての生活における変化と、自分の内にある神についての認識についても語らなければならない。これら両方の側面の組み合わせのみが、真の証であり、真の収穫である。人間性が外面で変化しただけであり、内面的理解がなければ不十分である。また、内面的認識と真理を備えても、正常な人間性を生きることが疎かにしたな

らば失敗である。現在あなたに行なわれている働きは、人に見せるためではなく、あなたを変化させるためのものである。すべきことは、自分を変化させることに集中することだけである。毎日の生活において何かを書いたり聴いたりするだけでは、うまく行かない。生活のあらゆる側面に入っていく行かなければならない。聖徒の正常な生活を送らなければならない。姉妹の多くが貴婦人のように着飾り、兄弟は貴族か大物のように着飾って、聖人の品位など完全に欠いている。素質の向上は一側面であり、付随的に達成される。神の言葉を飲み食いすることは別の側面であり、これが肝心なことである。素質が向上しても、神の言葉を飲み食いしなかったために、素質を利用しないのであれば、学ぶための努力を無駄にしたことになるのではないのか。両側面を組み合わせる必要がある。あなたに要求されていることを話すときに、なぜ神についての認識に触れるのか。それは来るべき働きの結果のためではないのか。あなたが征服された後、自分の経験から証しを立てられなければならない。外観が正常な人間性を示していても、自分の経験を言葉で表現できなければ失敗である。正常な霊的生活を過ごしながらか、正常な人間性も達成すべきであり、その多くの側面は付随的に学ぶことができる。床を掃くために特別な訓練が必要であると思うのか。食べるのに箸を持つために一時間かけて練習するなどというのはさらに酷いことである。正常な人間性にはどのような側面が含まれているのか。識見、理知、良心、品格である。これらの側面それぞれについて正常性を達成できるならば、人間性は基準に達する。あなたは正常な人間の姿を備え、神を信仰する者らしく見えるべきである。過度な達成をしなくてもよく、外交に関わる必要はなく、ただ正常な人間の理知を備え、物事を見通すことのできる正常な人間であるべきであり、少なくとも正常な人間のように見えなければならない。それで十分である。現在あなたに要求されていることはすべてあなたの能力の範囲内である。これはアヒルを止まり木に登らせようとしているのではない。あなたに無駄な言葉や働きが述べられ、行われることはない。あなたの生活において表され明らかにされる醜悪さはすべて排除しなければならない。あなたがたはサタンに墮落させられ、サタンの毒に満ちている。あなたに求められているのは、その墮落したサタンの性質を捨て去ることだけである。高地位にある人物や有名人や偉人になることは求められていない。それは役に立たない。あなたがたに行われる働きは、あなたがたが生来備えているものを考慮している。わたしが人に要求することには限度がある。現在の人全員、政府の官僚のように振る舞うことを要求され、政府の官僚のような口調で語る練習をしたり、政府高官のような話し方をする訓練をしたり、随筆家や小説家のような口調や身振りで自己表現する訓練をしたりするように要求されたとしたら、それもまたうまくは行かない。それは不可能であ

る。あなたがたの素質を考慮すれば、少なくとも知恵を用い、機転を利かせて話し、物事を明瞭にわかりやすく説明できるべきである。要件を満たすにはそれだけで十分である。少なくとも、識見と理知を身に付ける必要がある。現時点で特に重要なことは、墮落したサタンのような性質を捨て去ることである。あなたは自分に表れる醜悪さを捨て去らなければならない。それを捨てずに、どうして至高の理知や至高の識見について語れるというのか。多くの人は時代が変わったことを知って、慎ましさや忍耐を実践しない。また、愛や聖徒のような品位を備えていないこともありえる。このような人はなんと愚かなことか。彼らには正常な人間性がほんの少しでもあるのか。語るべき証しがあるのか。彼らには識見や理知が一切ない。もちろん、人の実践のうち逸脱していたり誤っている側面は修正する必要がある。たとえば、彼らの過去における硬直した霊的生活や、麻痺した愚かな様相はすべて変わらなくてはならない。変えるということは、あなたを自墮落にさせたり、肉に耽溺したり、言いたいことを何でも言うことではない。だらしなく話してはならない。正常な人間として話し行動するということは、筋の通った話し方をし、「是」なら「是」とだけ、「否」なら「否」とだけ言うことである。事実によって適切に話しなさい。ズルをしたり、嘘をついてはならない。性質の変化に関し普通の人が達することのできる限界を理解しなければならない。そうしないで現実性に入っていくことはできない。

モアブの子孫を救うことの意義

この二、三年にわたる働きにおいて、あなたがたに対する裁きの働きで達成されるべきであったことは、基本的に成し遂げられた。ほとんどの人が自分の将来の展望と運命をある程度は捨て去っている。しかしながら、あなたがたがモアブの末裔であるという話になると、あなたがたの多くがそのことを我慢できない。顔を歪め、唇を曲げ、にらみつける。あなたがたは、自分がモアブの子孫であることをどうしても信じられないのである。モアブは呪われた後、この地に追放された。モアブの子孫はその血筋を現在まで引き継いでおり、あなたがたは皆その子孫である。それについてわたしはどうすることもできない。誰があなたにモアブの家に生まれるように命じたのか。あなたを憐れみ、あなたにそのような境遇がなければいいと思うが、この事実は誰にも変えられない。あなたはモアブの子孫であり、わたしにはあなたはダビデの子孫であると言うことはできない。誰の子孫であったとしても、あなたはやはり被造物である。たとえ地位の低い存在で、生まれの賤しい被造物であってもである。あらゆる被造物は、神の働きを全て体験しなければならない。被造物は全て神の征服の対象であり、神の義なる性質を見、

神の知恵と全能性を体験しなければならない。今日、あなたはモアブの子孫であり、この裁きと刑罰を受け入れなければならない。モアブの子孫でなかったとしても、この裁きと刑罰を受け入れなければならないのではないのか。このことを認識しなさい。事実、今日モアブの子孫に働きを行なうことは、最も価値があり最も意義のあることである。働きがあなたがたに行われるので、極めて大きな意義がある。もし働きがハムの子孫に行われたとしたら、それには意義がないであろう。なぜなら、モアブと違ってハムの子孫は生まれが賤しくないからである。ノアの次男であるハムの子孫は呪われているだけで、姦淫から生まれたのではない。ノアがハムの子孫がしもべのしもべになるように呪ったために、地位が低いというだけのことである。地位は低くとも、元来の価値は低くはなかった。モアブについて言えば、姦淫から生まれたので、元来の地位が低かったことを人は知っている。ロトの地位は極めて高かったが、モアブはロトとその娘から生まれた。ロトは義なる者と呼ばれたが、モアブは呪われていた。モアブは価値が低く、身分も低かった。呪われていなくても、やはり穢れていたもので、ハムとは違った。モアブはヤーウェを認めずに反抗し、反逆したので、最も暗い所へ落ちた。今モアブの子孫に働きを行なうことは、最も暗い所へ落ちた者を救うことである。モアブの子孫は呪われたが、神は彼らから栄光を得ることをいとわなかった。なぜならモアブの子孫は皆、当初は心に神のいない者だったからである。心に神のいない者を神に従い神を愛する者にすることだけが真の征服であり、そのような働きの成果が最も価値があり、最も説得力がある。それだけが栄光を得ることであり、それが終わりの日に神が獲得したい栄光である。地位が低いものの、その人たちが今そのような偉大な救いを得られることは、まさに神に高く揚げられることである。この働きは極めて意義深く、神は裁きを通してこの人たちを獲得する。神の意図は彼らを罰することではなく、救うことである。もしも終わりの日に、神が依然としてイスラエルで征服の働きを行っていたならば、それは無価値である。たとえその働きに成果があったとしても、少しの価値も大きな意義もなく、神は全ての栄光を得られないであろう。神は、あなたがた最も暗い所に落ち、最も遅れている人たちに働きを行なっているのである。この人たちは神が存在することを認めず、神が存在することを未だに知らずにいる。このような被造物は、神のことを忘れてしまうほどサタンに墮落させられている。彼らはサタンに盲目にされ、天に神が存在することを全く知らない。あなたがたは皆、心の中で偶像とサタンを崇拝している。あなたがたは最も賤しく、最も遅れた人間ではないのか。あなたがたは最も賤しい肉であり、個人的な自由などなく、また苦難している。また、あなたがたはこの社会において最低の地位にあり、信仰の自由さえない。ここにあなたがたに働きを行なう意義があ

る。今日モアブの子孫であるあなたがたに働きを行なうことは、故意にあなたがたを辱めるためではなく、働きの意義を明らかにするためである。それはあなたがたにとっては、大いに高く揚げられることである。理知と識見を備えている者ならば、次のように言うだろう。「わたしはモアブの子孫の一人で、今このように神に大いに高められたり、このような大きな祝福を受けたりするに値しない。わたしのあらゆる言動において、またわたしの地位と価値に基づけば、わたしは絶対そのような大きな祝福を神から受けるに値しない。イスラエル人には神への大きな愛があり、彼らが享受する恵みは神が授けるものだが、彼らの地位はわたしたちよりも遥かに高い。アブラハムはヤーウェにとっても献身的であり、ペテロはイエスにとっても献身的であった。彼らの献身は、わたしたちの献身の百倍であった。わたしたちの行動に基づけば、わたしたちは神の恵みを享受するに全く値しない」。中国のこの人たちの奉仕は、神の前にさし出すことなど到底できない。それは全く混乱している。今それほど神の恵みを享受しているのは、まさしく神に高く揚げられているのである。いつあなたがたが神の働きを求めたのか。いつ神のために命を犠牲にしたのか。いつ家族や両親、子をためらうことなく捨てたのか。大きな代価を払った者は一人もいない。聖霊に連れ出されていなかったならば、あなたがたのうち何人が全てを犠牲にできていたであろうか。あなたがたが今日まで従ってきたのは、ただ強制され、強要されたからである。あなたがたの献身はどこにあるのか。服従はどこにあるのか。あなたがたの行動に基づくと、あなたがたは遥か以前に滅ぼされ、一人残らず一掃されていたはずである。どのような資格があって、これほど大きな祝福を享受できるというのか。あなたがたにはほんの少しもそんな価値はない。あなたがたのうち誰が自分の道を作り出したのか。あなたがたのうち誰が自力で真理の道を見つけたのか。あなたがたは皆、怠惰で貪欲で、楽をしたがる恥知らずである。あなたがたは自分が偉大だと考えているのか。何か自慢すべきことがあるのか。たとえモアブの子孫であることを無視しても、あなたがたの本性や出生地は最高のものなのか。モアブの子孫であることを無視しても、あなたがたは皆、あらゆる点でモアブの子孫なのではないのか。事実の真相を変えることができるのか。今あなたがたの本性を暴露することは、事実の真相を不正確に伝えることになるのか。自分の卑屈さと生活と人格を見てみなさい。あなたがたは自分が人類の最低層で最も賤しいことを知らないのか。何か自慢すべきことがあるのか。社会におけるあなたがたの地位を見てみなさい。最低の地位にいるのではないのか。あなたがたは、わたしが失言したとでも思っているのか。アブラハムはイサクを捧げた。あなたがたは何を捧げたのか。ヨブは全てを捧げた。あなたがたは何を捧げたのか。幾人もの人が、真の道を追求するために生命を捧げ、首を差し出し、

血を流してきた。あなたがたはそのような代価を払ったのか。比べると、あなたがたにはそのような大きな恵みを享受する資格は全くない。あなたがたがモアブの子孫であると今日言うことは、あなたがたを中傷することになるのか。自分を過大評価してはならない。あなたが自慢できることは何もないのである。このような大きな救いと豊かな恵みが、無償であなたがたに与えられている。あなたがたは何も犠牲にしていなのに、恵みをただで享受する。恥ずかしくないのか。この真の道は、あなたがたが自分で求めて見つけたものなのか。あなたがたがこの道を受け入れるようにしたのは聖霊ではないのか。あなたがたに追い求める心があったことはなく、ましてや真理を追求し思慕する心があったこともない。あなたがたはただ座ってくつろぎながら楽しんでいるだけである。何の努力もせずに真理を得た。何の権利があって不平を言うのか。自分には最大の価値があるとでも思っているのか。命を犠牲にした者や、血を流した者に比べて、あなたがたは何に不満があるというのか。あなたがたを今滅ぼすのは、正しく当然のことである。あなたがたには服従し従うこと以外に選択の余地はない。あなたがたは全く何にも値しない。あなたがたのうちのほとんどが呼び出されたが、状況に強いられていなかったならば、あるいは呼ばれていなかったならば、あなたがたには出てくる気など毛頭なかったはずである。誰が自分からそのように物事を断念するのか。誰が自分から肉の快樂を捨て去るのか。あなたがたは皆、貪欲に安逸をむさぼり、贅沢な暮らしを求める人である。あなたがたは、これほど大きな祝福を受けたが、その上何か言うことがあるのか。どんな不満があるというのか。あなたがたは天の最大の祝福と恵みを享受することを許され、地上でこれまでに行われたことのない働きが今あなたがたに明らかにされている。これは祝福ではないのか。あなたがたは神に抵抗し反逆したので、今はこのように刑罰を受けている。この刑罰のおかげで、あなたがたは神の憐れみと愛を知り、そして何よりも神の義と聖さを知った。この刑罰と人類の穢れゆえに、あなたがたは神の大いなる力を見て、神の聖さと偉大さを知った。これは最も希有な真理ではないのか。意義ある人生ではないのか。神が行なう働きは意味で満ち溢れている。したがって、あなたがたの地位が低ければ低いほど、あなたがたが神に高められていることと、神が今日あなたがたに行なう働きには大いなる価値があることがそれだけ一層明らかに証明される。それはまさしく、ほかでは得られない計り知れない価値のある宝である。全時代を通してこれほど大きな救いを享受した者は一人もいない。あなたがたの地位の低さが、神の救いの偉大さを示しており、神が人間に忠実であること、すなわち、神は救うのであり、滅ぼすのではないということを示している。

中国人はこれまで神を信じたことがない。ヤーウェに仕えたことも、イエスに仕えたこともない。中国人は叩頭し、香を焚き、紙銭を燃やし、仏陀を拝むだけである。彼らは偶像を崇拜するだけであり、皆極度に反逆的である。だから、人の地位が低ければ低いほど、神があなたがたから得るのは栄光であることを一層示すことになる。人によっては自分の観点から次のように言うかもしれない。「神よ、あなたが行なう働きとは何なのですか。あなたほどいと高き、聖い神が穢れた土地に来ますか。自分のことを少しも気にかけないのですか。わたしたちは汚れきっていますが、あなたはわたしたちと共にいることをいとわないのですか。わたしたちのもとで暮らすことをいとわないのですか。わたしたちは地位が低いのに、わたしたちを完全にすることをいとわないのですか。そして、わたしたちを模範や見本として用いたいのですか」。わたしは言う。あなたはわたしの意志を理解していない。わたしが行いたい働きやわたしの性質を理解していない。わたしが行なうつもりの働きの意義は、あなたの能力では到達できない。わたしの働きが人間の観念に迎合できるのか。人間の観念によると、地位が高いこと、大きな価値があること、高貴さ、聖さ、偉大さを示すために、わたしはどこか立派な国に生まれてなければならない。わたしの存在が認められる所で特権階級の家庭に生まれていたら、そして地位や身分が高かったとしたら、わたしはとても良い待遇を受けていたであろう。しかしそれではわたしの働きのためにはならないし、これほど大きな救いが明らかにされることなどありえようか。わたしを見る者は全てわたしに従い、汚辱に穢されることはないであろう。わたしはそのような場所に生まれるべきであった。あなたがたはそう信じている。しかし考えてみなさい。神が地上に来たのは楽しむためなのか、それとも働くためなのか。わたしがそのような気楽で快適な場所で働いたならば、栄光を余すところなく得られるであろうか。創造物を全て征服できるであろうか。地上に来た時、神はこの世のものではなく、この世を楽しむために肉となったのではない。働きが神の性質を明らかにし、最も意義のあるものとなるのは、神が生まれた場所である。それが聖なる地であれ穢れた地であれ、神がどこで働こうと神は聖い。この世界のあらゆるものは神に創られた。ただ全てがサタンに墮落させられてしまったのである。しかしながら、万物は依然として神のものであり、全ては神の掌中にある。神が穢れた土地に来てそこで働くのは、神の聖さを現すためである。神は自分の働きのためにそうする。つまり、この穢れた地の民を救うために神はひどい辱めを耐え忍び、このような働きを行なうのである。それは証しを立てるためであり、全人類のためである。このような働きが人に示すのは神の義であり、それは神の至高性をさらによく示すことができる。神の偉大さと正義は、他者が蔑むような賤しい人の集団を救うことにおいて表明され

る。穢れた土地に生まれることは、決して神が賤しいことを証明するのではない。それは専ら神の偉大さと人類への真の愛が万物に見えるようにするのである。神がこのように行えば行なうほど、それは神の人間への純粋な愛、完璧な愛をさらに現わす。神は聖く義である。ちょうどイエスが恵みの時代に罪人たちと暮らしたのと同様に、神は穢れた土地に生まれ、汚れにまみれた人たちと暮らしているが、神の働きは隅々まで全人類の生存のために行われるのではないのか。それは全て、人類が大いなる救いを得られるようにそうなっているのではないのか。二千年前、神は何年間も罪人たちと暮らした。それは贖いのためであった。今日、神は穢れて賤しい人たちの集団と暮らしている。それは救いのためである。神の働きは全てあなたがた人間のためではないのか。もし人間を救うためでなかったとしたら、何ゆえに神は飼葉おけで生まれた後、罪人たちと何年間も暮らし、共に苦しんだのか。そして、人間を救うためでなかったとしたら、なぜ神は再び肉に戻り、悪魔が集まるこの地に生まれ、サタンに深く墮落させられている人たちと暮らすのか。神は忠実ではないのか。神の働きのどの部分が人類のためでないというのか。どの部分があなたがたの運命のためでないのか。神は聖い。これは変わることがない。神は穢れた地に来たが、穢れに汚されることはない。このこと全てが意味するのは、神の人類への愛は極端なほど無私であり、神が耐える苦難と屈辱は極めて大きいということに尽きる。あなたがた全員のため、そしてあなたがたの運命のために、神が受ける辱めがどれほど大きいかをあなたがたは知らないのか。偉人や裕福な権力者の息子を救うのではなく、神は賤しく他者から見下されている人たちを救うことを重視している。このことは全て神の聖さではないのか。このことは全て神の義ではないのか。全人類の生存のために、神は穢れた地に生まれ、あらゆる屈辱を受けることを選ぶ。神はとても現実的であり、虚偽の働きを一切行わない。各段階の働きは、このように実際に行われるのではないのか。人は皆、神を中傷して神は罪人と共に食卓に着くと言ったり、神を嘲笑して神は穢れた息子たちと暮らすと言ったり、最も賤しい人たちと暮らすと言ったりするが、神はなおも無私無欲に自らを捧げ、依然として人類から拒まれる。神が耐え忍ぶ苦難は、あなたがたの苦難よりも大きくはないのか。神の行なう働きは、あなたがたが払った代価を上回らないのか。あなたがたは穢れた地に生まれたが、神の聖さを得た。あなたがたは悪魔が集う地に生まれたが、大いなる守りを受けた。あなたがたにどのような選択肢があるというのか。何の不満があるというのか。神が耐え忍んだ苦難は、あなたがたが耐えた苦難よりも大きくないのか。神は地上に来たが、人間の世の楽しみを享受したことはない。神はそのようなものを忌み嫌う。神が地上に来たのは人間から物質的なもてなしを受けるためでもなければ、人間の食べ物や衣類や装身具

を楽しむためでもない。神はそのようなことには全く関心がない。神が地上に来たのは人間のために苦しむためであり、この世の幸運を楽しむためではない。神は苦難を受け、働き、神の経営（救いの）計画を完了するために来たのである。神は好ましい場所を選ぶことも、大使館や豪華なホテルに住むことも選択せず、仕えてくれる召使いも抱えていない。あなたがたが見たことから、神が来たのは働きを行なうためか、楽しむためかが分からないのか。あなたがたは目が見えないのか。神はあなたがたにどれほど与えてきたのか。もし神が快適な場所に生まれていたならば、神は栄光を得ることができるだろうか。神は働きを行えるだろうか。神がそうすることに何か意義があるだろうか。人類を完全に征服することができるだろうか。人を穢れた地から救うことができるだろうか。人間の観念にしたがって、人は尋ねる。「神が聖なる方なら、なぜわたしたちのこの穢れた場所に生まれたのですか。あなたはわたしたち穢れた人間を憎み忌み嫌っています。あなたはわたしたちの抵抗と反逆を忌み嫌います。それならなぜわたしたちと暮らすのですか。あなたは至高の神です。どこでも生まれることができたはずなのに、なぜこの穢れた地に生まれなければならなかったのですか。あなたは日々わたしたちを罰し、裁き、わたしたちがモアブの子孫であることを確かに知っています。ではなぜそれでもわたしたちのもとで暮らすのですか。なぜモアブの子孫の家庭に生まれたのですか。なぜそうしたのですか」。あなたがたのこのような考えにはすっかり理知が欠けている。このような働きでなければ人に神の偉大さや謙遜、隠秘性を知らしめることができない。神は働きのために何であろうと犠牲にすることをいとわず、働きのためにあらゆる苦難を耐え忍んできた。神は人類のために行動し、それだけでなく、あらゆる創造物が神の支配に服従するように、サタンを征服するために行動する。これのみが有意義で価値のある働きである。ヤコブの子孫が中国に、この土地に生まれていて、それがあなたがた全員であったとしたら、あなたがたに行われる働きの意義は何であろうか。サタンは何と言うであろうか。サタンはこう言うであろう。「彼らはかつて神を畏れ、始めから神に従い、神を裏切った歴史がない。彼らは人類の中で最も暗く、最も賤しく、最も遅れた民ではない」。働きが本当にこのように行われたならば、誰が確信するだろうか。全宇宙で、中国人は最も遅れた民である。賤しい生まれで、品性が乏しく、愚鈍で麻痺したようで、俗悪で退廃的である。中国人にはサタンの性質が浸透しており、穢れきって放縦である。あなたがたはこのような性質をすべて持っている。この働きがひとたび完了すると、人はその墮落した性質を投げ捨て、完全に従うことができるようになり、完全にされる。唯一このような働きの成果だけが、創造物における証しである。証しとは何か理解しているのか。実際に、いかに証しを立てるべきか。このような働き

により、あなたがたは引き立て役となり、また奉仕を提供する対象となり、さらには救いの対象となった。今日、あなたがたは神の民であり、後には模範や見本になる。この働きにおいて、あなたがたは様々な役割を担い、最終的には救いの対象となる。多くの人がこのために否定的である。彼らは完全に盲目ではないのか。何もはっきりと見えていない。このような呼び名だけで圧倒されてしまうのか。あなたは、神の義なる性質とは何か解かっているのか。神の救いとは何か理解しているのか。神の愛とは何か理解しているのか。あなたには品性が全くない。自分が好意的に呼ばれると喜ぶが、悪く言われると、意欲を失い後ずさりする。あなたは何者なのか。真の道を追い求めている。今すぐ追求するのを止めなさい。恥ずかしいにもほどがある。これほど些細なことに圧倒されるというのは、恥の印ではないのか。

あなたは少し自己を知ろうとした方が良い。自分を過大評価してはならず、天国に行くことを夢見てはならない。ひたすら忠実に地上で征服されることを求めなさい。実在しない非現実的な夢を見てはならない。もし誰かが次のように言うならば、それは強い決意と気骨のある者の言葉である。「わたしはモアブの子孫だが、神のために努めることをいとわない。わたしは古い祖先に背を向ける。祖先はわたしを産み、またわたしを踏みにじった。そして今までわたしは闇の中で生きてきた。今日、神はわたしを解き放ち、わたしはやっと天日を見た。神に暴露されることで、わたしはやっと自分がモアブの子孫であることを知った。以前のわたしは見えなくなっていて、神がこれほどの働きを行なったことを知らなかった。それはわたしが例のサタンに盲目にされていたからである。わたしはサタンに背を向け、サタンに徹底的に屈辱を与えるつもりだ」。さて、あなたがたにはこのような決意があるのか。あなたがたは一人ひとりが人間のように見えるにも関わらず、誰よりも早く落ち、あなたがたはこのことに極めて繊細である。あなたがたは自分がモアブの子孫であると言われると、すぐに膨れ面をする。これは豚の性質ではないのか。あなたがたは無価値である。あなたがたは名声と富のためなら喜んで自らの命を犠牲にする。モアブの子孫でないことを望むのは自由だが、それが正体ではないのか。わたしは今、あなたはモアブの子孫であると言っているのであり、あなたはそれを認めなければならない。わたしは事実には反することは言わない。このために否定的な人もいるが、否定的になるべき何があるというのか。あなたは赤い大きな竜の子でもないのか。あなたがモアブの子孫であると言うのは不当なのか。あなたが内面的にも外面的にも生きて示していることを見なさい。頭のとっぺんから足の先まで、称賛に値するものは何もない。放蕩、穢れ、盲目、反抗、反逆、これらは全てあなたの性質の

部分ではないのか。常に放縦の地で生き、行わない悪事の一つもない。あなたは自分のことを驚くほど聖いと考えている。これまでにしたことを見てみなさい。あなたはそれでも自己満足している。称賛に値する何をしたというのか。あなたは獣のようであり、人間性がない。獣と交わり、邪悪で淫らな思いの中に生きている。あなたがたの欠如はどれほどなのか。あなたがたは自分が赤い大きな竜の子であることに同意し、進んで奉仕するつもりだが、しばらくしてモアブの子孫であると言われると、否定的になる。それが真実ではないのか。あなたが自分の父と母から生まれたことと同じである。父母がどんなに酷くても、彼らから生まれたということは変わらない。たとえ養母を見つけて家を出たとしても、やはり産みの親の子ではないのか。その事実を変えられるのか。わたしはあなたをモアブの子孫だと、わけなく命名したのか。人によっては、「どうか違う呼び名をくれませんか」と言う。わたしは「それでは、引き立て役と呼んではどうか」と答える。彼らは引き立て役にもなる気はない。それでは何になりたいのか。引き立て役や効力者が、あなたがたの正体ではないのか。他に何を選ぶというのか。あなたは赤い大きな竜の国で生まれた者ではないのか。あなたがどんなに自分はダビデの子であると言っても、それは事実にはそぐわない。こういうことは自分で選択することなのか。自分の好きな聞こえの良い名を何であれ選んで自分と呼ぶことができるのか。話に出た赤い大きな竜の子とは、あなたがた墮落した人のことではないのか。効力者はといえば、それもまた墮落した人であるあなたがたのことではないのか。話に出た征服されたことの模範や見本もまた、あなたがたのことではないのか。完全にされる道について、あなたがたは話しをきいていないのか。刑罰と裁きを受けるのはあなたがたである。後に完全にされるのも、あなたがたのうちの幾人かではないのか。この呼び名にいまだに問題があるのか。あなたがたは無分別過ぎる。そのような些細な事でさえはっきりと見ずにいられないのか。あなたは誰が誰の子孫であるか知らないが、わたしにはそれは明瞭である。あなたがたに言う。今日それを認められるなら、それでよい。いつも自分をそんなに卑下するのは止めなさい。否定的になって退けば退くほど、あなたがサタンの末裔であることがさらに証明されるだけである。賛美歌を聴かせると、「モアブの子孫が賛美歌を聴けるのか。わたしは聴かない。わたしには資格がない」という人がいる。賛美歌を歌わせようとする、と、「モアブの子孫が歌を歌っても、神は聴きたがるだろうか。神はわたしを忌み嫌っている。わたしは恥ずかし過ぎて、神の前に出られず、神のために証しできない。どうしても歌わない。神がわたしの歌を聴いて不愉快にならないためだ」と言う。これは否定的な対処方法ではないのか。被造物として、あなたは穢れた土地に生まれ、赤い大きな竜の子孫であり、モアブの子孫である。あなたは古い

祖先に背を向け、古いサタンに背を向けなければならない。そうする者のみが、神を真に求めるのである。

当初、わたしがあなたがたに神の民の地位を与えた時、あなたがたは飛び跳ねて誰よりも喜んだ。しかし、あなたがたはモアブの子孫であるとわたしが言った直後は、あなたがたはどうであったか。あなたがたは皆取り乱した。あなたがたの靈的背丈はどこにあるのか。あなたがたの地位についての観念は強過ぎる。ほとんどの人が立ち上がることができない。事業を行なう人もいれば、仕事に行く人もいる。あなたがたはモアブの子孫だとわたしが言った途端、あなたがたは逃げ出したくなる。これが、あなたがたが一日中叫び続ける、神のために立てる証しなのか。サタンがこのように確信させられるのか。これは恥辱の印ではないのか。あなたがたがいても何の役に立つというのか。あなたがたは皆屑である。不当に扱われているとそれほど感じるくらいに、どのような苦難を耐え忍んできたというのか。神はあなたがたを断罪するために来たかのように、ある程度まであなたがたを苦しめたら神は満足し、あなたがたを断罪し滅ぼせば、神の働きが完了すると思っているのか。そんなことをわたしは言ったか。あなたがたの盲目さゆえに、そう思っているのではないのか。それは、あなたがた自身がよく努力しないということなのか、それともわたしが故意にあなたがたを断罪するということなのか。わたしはそのようなことをしたことはなく、それはあなたがたが勝手に考え出したことである。わたしはそのように働いたことは一度もなく、そうしようという意図もない。わたしが本当にあなたがたを滅ぼしたいならば、それほど苦しむ必要があるだろうか。わたしが本当にあなたがたを滅ぼしたいならば、こんなに熱心になんか話をする必要があるだろうか。わたしの心意はこうである。わたしがあなたがたを救った時が、わたしが休むことのできる時である。ある人が賤しければ賤しいほど、その人はそれだけさらにわたしの救いの対象となる。あなたがたが積極的に入ることができればできるほど、わたしは喜ぶ。あなたがたが取り乱せば取り乱すほど、わたしは不愉快になる。あなたがたはいつも気取って王座に就きたがる。言うておくが、それはあなたがたを穢れから救う道ではない。王座に就くことを妄想しても、あなたがたは完全にされることはありえない。それは非現実的である。あなたはモアブの子孫であるとわたしが言うと、あなたは悲しくなる。あなたは、「わたしを底なしの穴に落とすなら、わたしはあなたのために証しすることも、苦しむつもりもない」と言う。あなたがそうすることは、わたしに反抗していることになるのではないのか。そうするのは、あなたにとって有益なのか。わたしがあんなに多くの恵みを与えたことを、あなたは忘れてしまったのか。愛

情深い母のような神の心を、あなたは鼻であしらい恥をかかせた。これがあなたにどのような結果をもたらすのか。あなたがわたしのために証しを立てないのならば、わたしはあなたに強制しないが、あなたは最終には滅びの対象となることを知っておくべきである。わたしがあなたから証しを得られないならば、わたしは他の人から得る。それはわたしにとって問題ではない。しかし、あなたは最後には後悔することになる。その時はすでに長い間あなたが闇に陥った後になる。それでは誰があなたを救えるのか。あなたなしでは働きを完了することができないと考えてはならない。あなたがいても大した足しではなく、あなたがいなくても大した欠如でもない。自尊心を持ち過ぎてはならない。わたしに従う意欲がないならば、それはあなたが反抗的であり、あなたには望ましいものが何もないことを示すことになる。あなたが話し上手であるならば、それは、わたしが働きによりもたらした言葉をあなたが身に付けたからというだけではないのか。あなたについて、何が称賛に値するというのか。想像と暴走してはならない。モアブの子孫であるあなたがたから栄光を得られないのであれば、栄光を得るまで、わたしの働きのために二番目、三番目のモアブの子孫の集団を選ぶことになる。あなたにわたしのために証しする意欲がないならば、出て行くがよい。わたしは強制しない。あなたがたなしではわたしは一步も動けないなどと考えてはならない。この中国の地でわたしの働きに適した対象を見つけるのはたやすいことである。この地では他に何も見出すことができない。穢れた墮落した人はそこら中にいるので、わたしの働きはどこでもできる。そんなに誇ってはならない。どんなに誇ろうが、あなたは依然として姦淫から生まれた子ではないのか。自分の価値を見てみなさい。あなたに他にどんな選択肢があるのか。あなたがたを生かしておくことだけでも、あなたがたを大いに高めていることになる。それでは、何ゆえにいまだに傲慢なのか。この時代を終わらせるわたしの働きがなければ、あなたは天災や人災に見舞われてずっと以前に落ちていたのではないのか。まだそんなに快適に暮らせているであろうか。あなたはこの問題についていつまでも議論している。あなたはモアブの子孫だとわたしが言って以来、あなたはいつも膨れ面をしている。学ぶことも神の言葉を読むこともせず、あの人やこの人が目に入ることに我慢がならない。他の人が教養を身につけているのを見ると、彼らを妨げ、やる気を失わせるようなことを言う。実に厚かましい。あなたは「モアブの子孫が何の教養を身につけられるというのだ。わたしはわざわざそのようなことなどしない」と言う。これは獣が言うようなことではないのか。あなたは人間だと言えるだろうか。わたしは多くのことを語ったが、あなたには何の成果もなかった。わたしが行なった働きは全て無駄だったというのか。わたしが語った言葉は全て無駄だったのか。犬でさえ尻尾を振る。そのような

人間は犬にも及ばない。あなたに人間と呼ばれる価値はあるのか。わたしがモアブの子孫の話をする、わざと自分を落とす人がいる。彼らは前とは異なる身なりをして、人間には見えないほどだらしなくなり、「わたしはモアブの子孫で善人ではない。恵みを得ようとするなど、白昼夢を見ることだ。モアブの子孫が完全にしてもらえるものか」と呟く。わたしがモアブの子孫の話をした途端に、ほとんどの人が希望を失い、「神はわたしたちがモアブの子孫だと言うが、どういう意味だろうか。神の口調を聞いたか。これは決定的なことだ。神の言葉には愛がない。わたしたちは滅びの標的ではないのか」と言う。以前に語られたことを忘れてしまったのか。今日覚えているのは「モアブの子孫」という語句だけなのか。事実、多くの言葉は何らかの効果を達成するためであるが、それはまた、事実の真相も明らかにする。ほとんどの人がそれを信じない。あなたはわたしのためにそのように苦しむつもりはない。あなたは死を怖れており、常に逃げ出したがっている。去りたいのであれば、わたしは留まるよう強制しないが、このことをはっきりあなたに伝えなければならない。すなわち、全生涯を無駄に生きてはならない。そして、過去にわたしが言ったことを忘れてはならない。被造物として、あなたは被造物の使命を果たすべきである。良心に反して行動してはならない。あなたがすべきことは、創造主に自らを捧げることである。モアブの子孫もまた被造物であり、彼らはただ引き立て役であり呪われているのである。いずれにせよ、あなたはなおも被造物であり、次のように言うならば、あなたはそれほど逸脱していない。「たとえわたしがモアブの子孫であっても、神の恵みをたくさん享受したのだから、ある程度の良心を持つべきである。わたしはただ真相を認識するが、そのことでよくよ思い悩まない。たとえこの流れの中で苦しむとしても、最後まで苦しもう。わたしがモアブの子孫であるならば、それでよい。それでもわたしは最後まで従おう」。あなたは、最後まで従わなければならない。逃げ出すならば、将来の展望はなく、滅びへの道を歩み始めたことになる。

あなたがたに自分の由来を理解させることは良いことであり、あなたがたに事実の真相を理解させることは、働きに有益である。これをしなければ、望み通りの成果は得られないであろう。これは征服の働きの一環であり、働きにおいて必要な一過程である。これは事実である。この働きは、人間の霊を目覚めさせ、良心の感覚を目覚めさせ、この大いなる救いを人に得させるためである。もし人に良心があるならば、自分の地位が低いことを理解した時、なおさら神に感謝すべきである。人は神の言葉を両手に掲げ、神が授けた恵みをしっかりと掴み、涙さえ流しながら、こう言わなければならない。「

わたしたちは地位が低く、この世では何も得ていない。賤しい民であるわたしたちを敬う者は誰もいない。わたしたちは家庭環境においては迫害され、夫からは拒否され、妻からは罵られ、子に見下され、年老いると義理の娘に虐げられる。わたしたちは本当に少なからず苦しんできた。そして今、神の大いなる愛を享受することは、幸運そのものである。もし神に救われていなかったならば、どうしてわたしたちに人間の苦難を明瞭に理解することができるだろうか。わたしたちは依然としてこの罪の中で墮落しているのではないのか。これは、神がわたしたちを引き上げていることではないか。わたしは最も賤しい人々のひとりであるが、神はわたしをこんなにも高く引き上げてくれた。たとえ滅ぼされても、わたしはやはり神の愛に報いなければならない。神はこれほど賤しい民であるわたしたちのことを大切に思い、わたしたちに面と向かって話してくださる。神はわたしの手を取って教えてくださる。神は自らの口でわたしに糧を与えてくださる。神はわたしと共に生き、わたしと共に苦しんでくださる。たとえ神がわたしを罰しても、わたしに何が言えようか。刑罰を受けることも神によって引き上げられることではないのか。わたしは刑罰を受けているが、神の義が見える。わたしに良心がないはずはない。神の愛に報いなければならない。これ以上神に反抗することはできない」。神の地位と身分は、人間の地位や身分とは異なる。神の苦難は同じで、神の食べ物や衣服は同じだが、全ての人が神を敬い、それが唯一の違いである。神が享受するその他のものはみな、人間と同じではないのか。それなら、あなたがたにどのような資格があって、自分をこのように扱えと神に求めることができるのか。神はこのような大きな苦難を耐え忍び、こんなにも偉大な働きを行なったが、蟻よりも卑しく虫よりも賤しいあなたがたは、今日このように高くに引き上げられた。神の愛に報いられないのであれば、あなたの良心はどこにあるというのか。心からこう言う人がいる。「神から離れることを思う度、わたしの目は涙で一杯になり、良心が痛む。わたしは神に負い目がある。わたしはそんなことはできない。わたしは神をそのように扱えない。わたしが死ななければならず、死ぬことで神の働きに栄光を帰すことになるのであれば、わたしはこの上なく満足である。さもないと、生きていても平安を感じない」。このような言葉に耳を傾けなさい。この言葉は、被造物が尽くすべき本分を表現している。人の内面にいつもこのビジョンがあるならば、その人の内面は明瞭で安らかである。人はこのようなことを確信する。あなたは言う。「神はわたしを傷つけたり、故意にわたしのことを笑いものにしたり辱めたりしていない。神はいささか厳しい口調で話し、それは心を突き通すが、それはわたし自身のためである。神は辛辣に語るが、依然としてわたしを救おうとしているのであり、わたしの弱さを思い遣る。神は事実を用いてわたしを罰しているので

はない。わたしは神が救いであると信じる」。本当にこのようなビジョンがあるならば、あなたが逃げ出すことは考えられない。あなたの良心があなたを逃さず、良心による断罪が、神をそのように扱ってはならないとあなたに告げる。あなたは自分が得た恵みの全てを思う。あなたはわたしの言葉を多く聞いた。無駄に聞いたことにできるのか。誰が逃げ出したとしても、あなたは逃げ出せない。他の人は信じないが、あなたは信じなければならない。他の人は神を見捨てるが、あなたは神を掲げ証しなければならない。他の人は神を罵るが、あなたは罵れない。神がどれほどあなたに厳しかったとしても、あなたはなおも神と正しく接しなければならない。あなたは神の愛に報い、良心を持たなければならない。なぜなら神には罪がないからである。人類のもとで働くために天から地に來たことで、神はすでに大いなる屈辱に苦しんだ。神は何の穢れもない聖なる存在である。穢れた地に來ることで、神はどれほどの屈辱に耐えたのか。神はあなたがたのために、あなたがたに働きかけている。良心なしに神を扱うのならば、早死にした方がましなくらいである。

現在、ほとんどの人がビジョンのこの側面を欠いており、この働きを全く把握することができず、この働きにより神が最終的に何を達成するつもりなのかを知らない。特に、思考が混乱している人たちにとっては、あたかも迷路に入ってしまった右往左往した後、方向を見失ったようなものである。神の経営（救いの）計画の目的をそのような人たちにすっかり説明すれば、彼らは混乱しなくなる。多くの人は把握することができず、神の働きは人間を苦しめ苛むことだと思っている。神の働きの知恵と奇しさを理解せず、また神の働きが神の大いなる力を明らかにし、さらに何よりも人類を救うためであることを理解しないのである。彼らにはこれらが全て見えず、ただ自分に将来の展望があるか否か、天国に入ることができるか否かだけを見ている。彼らは言う。「神の働きはいつもとてもまわりくどい。神であるあなたが直接、わたしたちに神の知恵を見せてくれたら良いのだが。わたしたちをこのように苦しめ悩ますべきではない。わたしたちは素質が乏しすぎて、神の心意を理解できない。あなたが直接語り行動するならば、素晴らしいのだが。あなたはわたしたちに推測させるが、わたしたちにはできない。あなたがとり急ぎあなたの栄光をわたしたちに見せてくれたなら、素晴らしいのだが。このようにまわりくどいやり方をする必要はあるのか」。今あなたがたに最も欠けているのは良心である。良心をもっと持ちなさい。目を大きく開いて、この働きの各過程を本当は誰が行なっているのかを見なさい。早合点してはならない。今あなたはせいぜい、自分が体験すべきいのちの道の表面的な側面における何かを理解したにすぎない。しかし

、体験すべき真理がまだ多くあり、それを十分に理解できる日が来た時、あなたはもはやそのような話し方をせず、不平も言わなくなる。また、軽率に物事を定義することもなくなる。あなたは言う。「神はまさに賢明でまさに聖い。まことに神には力がある」。

ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識

ペテロが神により罰せられた時、ペテロは祈って言った。「神よ、わたしの肉は不従順で、あなたはわたしを罰し、裁かれます。わたしはあなたの刑罰と裁きの中で喜び、たとえあなたがわたしを求められなくとも、わたしはあなたの裁きの中に、あなたの聖なる義のご性質を目の当たりにします。あなたの裁きの中に他の人たちがあなたの義なるご性質を目にすることができるよう、あなたがわたしを裁かれる時、わたしは満足です。あなたのご性質が示され、あらゆる創造物があなたの義なるご性質を見ることができるようになり、わたしがもっと純粋にあなたを愛することができるようになり、義なる者の姿に達することができたなら、あなたの裁きは良いものであり、あなたの恵み深い御心によるものです。自分には未だに反抗的な部分が多く、わたしはあなたの御前に出るに相応しくないことを知っています。過酷な環境や大いなる患難を通して、あなたがわたしを一層裁かれることを望みます。あなたが何をなさろうとも、わたしにとってそれは貴いものです。あなたの愛は非常に深遠なので、わたしは一切不平を言わずに進んで自らをあなたの憐れみに委ねます」。これは、神の働きを経験した後のペテロの認識であり、神に対するペテロの愛の証しでもある。現在、あなたがたは既に征服されているが、この征服は、あなたがたの中でどのようにして表されているであろうか。ある人たちは言う。「わたしが征服されたことは、神からの至高の恵みであり、引き上げである。人生は空虚であり、何の意味もないものであることが、今になってやっと分かった。人間は人生を多忙にして過ごし、何世代にもわたって子どもを産み育てるが、結局人間には何も残らない。現在、神により征服されて初めて、わたしはこのように生きることが無価値であることを知った。それは本当に無意味な人生だ。そのような人生を死んで終わらせた方がよい」。神により征服されたこのような人々は、神のものとされるだろうか。彼らは型となり模範となれるだろうか。このような人々は否定的な実例であり、全く熱意を持たず、向上しようと努力しない。彼らは征服された者の中に含まれるが、このように消極的な人間は完全にされることが不可能である。晩年ペテロは、完全にされた後、「神よ、もしわたしの余命があと数年であるならば、あなたへの一層清く深い愛を達成することを望みます」と述べた。ペテロは、十字架に釘付けにされる直

前に、心の中でこう祈った。「神よ、ついにあなたの時が来ました。あなたがわたしのために用意された時が来ました。わたしはあなたのために十字架に架けられ、この証しをしなければなりません。わたしの愛があなたの要求を満たし、一層清くなることを願います。今日あなたのために死ぬること、あなたのために十字架に架けられることは、わたしにとって慰めとなり、励みとなります。なぜなら、あなたのために十字架に釘付けにされ、あなたの望みを満たし、自らをあなたに捧げ、わたしの命をあなたに捧げることができることはこの上ない喜びだからです。神よ、あなたはほんとうに愛しいお方です。もしわたしが生きることをあなたが許されるならば、わたしは一層あなたを愛することを望むでしょう。生きている限り、わたしはあなたを愛するでしょう。わたしは、あなたを一層深く愛することを望みます。あなたはわたしを裁かれ、刑罰を与えられ、わたしを試されます。なぜならわたしが不義であり、罪を犯したからです。そして、あなたの義なるご性質がわたしには一層明らかになります。それはわたしにとって祝福です。なぜなら、わたしはあなたを一層深く愛することができ、あなたがわたしを愛されなかったとしても、わたしはあなたをこうして愛することを望むからです。わたしはあなたの義なるご性質を見ることを望みます。なぜなら、そうすることにより、わたしは有意義な人生を実際に生きることができるようになるからです。わたしの人生は今より有意義であると感じます。なぜなら、わたしがあなたのために十字架に架けられ、あなたのために死ぬことは意味のあることだからです。しかしながら、わたしはまだ満足していません。なぜなら、わたしはあなたのことをほとんどほんの少ししか知らず、わたしはあなたの望みを完全に満たせず、あなたにほとんどほんの僅かしか報いなかったからです。わたしは人生においてわたしのすべてをあなたに報いることができずにおり、それには遠く及びません。今、振り返ってみると、わたしはあなたに大きな負債があり、自分のすべての過ちと、わたしがあなたに報いなかった全ての愛を償うために、わたしにはこの瞬間しかありません」。

人間は意味のある人生を実際に生きることを追い求めるべきであり、現状に満足してはならない。ペテロの模範を実際に生きるためには、人間はペテロの認識と経験を備えていなければならない。人間は、より高く、より深淵なことを追求しなければならない。人間は、神に対する一層深く純粋な愛と、価値と意義のある人生を追い求めなければならない。唯一これが人生であり、そうしてはじめて、人はペテロと同じようになれるのだ。あなたは、肯定的側面へ入ることに対して積極的になることに重点を置くべきであり、また一時的快樂のために、さらに深淵で、具体的で、実践的な真理を無視し

つつ、追従的に後退することを許してはならない。あなたの愛は実践的でなければならず、あなたは、獣同然の墮落した気楽な生活から抜け出す方法を見出すべきである。あなたは意味のある人生、価値のある人生を実際に生きるべきであり、自分をごまかしたり、自分の人生を玩具のように弄んだりしてはならない。神を愛することを目指す全ての者にとって、獲得することのできない真理はなく、揺るぎなく立つことができない正義はない。あなたは、どのようにして自分の人生を生きるべきだろうか。あなたは、どのように神を愛し、その愛を用いて神の願いを満足させるべきであろうか。あなたの人生において、これより重要なことはない。あなたは、何よりもそうした大志と根気を持っていなければならない、骨抜きの弱虫のようであってはならない。あなたは有意義な人生を経験する方法を知り、有意義な真理を経験しなければならない、自分自身をそのようにいいかげんに扱ってはならない。あなたの人生は、気付かぬうちに過ぎてゆく。その後、あなたには神を愛する機会がもう一度あるだろうか。人は、死後に神を愛することができるだろうか。あなたは、ペテロと同様の熱意と良心を持っていなければならない。あなたの人生は有意義であるべきで、あなたは自分を弄んではならない。人間として、また神を追い求める者として、あなたは自分の人生をどのように扱うか、どのようにして自らを神に捧げるべきか、どのようにしてもっと有意義な神への信仰を持つべきか、そして、あなたは神を愛しているので、どのようにして一層清く、一層美しく、一層好ましく神を愛するべきかを慎重に考慮することができなければならない。現在、あなたは自分がどのようにして征服されたかにだけ満足してはならず、将来歩んで行く道についても考慮しなければならない。あなたは完全にされることへの熱意と勇気を持たなければならない、自分は無能だと常に思うべきではない。真理は人を選び好みするだろうか。真理は故意に人間に反対できるだろうか。あなたが真理を追求するなら、真理はあなたを圧倒できるだろうか。あなたが正義のために固く立つなら、正義はあなたを打ち倒すであろうか。いのちを追求することが本当にあなたの願望であれば、いのちはあなたから逃れることができるだろうか。あなたに真理がないのであれば、それは真理があなたを無視するからではなく、あなたが真理から遠ざかるからである。あなたが正義のために揺るぎなく立つことができないのであれば、それは正義に問題があるからではなく、あなたが正義は事実と一致しないと思っているからである。あなたが何年いのちを追求しても、いのちを得られずにいるのは、いのちがあなたに対して良心を持っていないからではなく、あなたがいのちに対して良心を持っておらず、いのちを追い払ったからである。あなたが光の中で生活しつつも、光を得ることができないのであれば、それは光があなたを照らせないからではなく、あなたが光の存在に注意を払わなかった

ので、光が静かにあなたから去ったからである。あなたが追求しないのであれば、あなたは価値の無い屑であり、自分の人生において全く勇気がなく、暗闇の勢力に対抗する霊がないと言う他ない。あなたは弱過ぎるのである。あなたは、自分を包囲するサタンの勢力から逃れられず、このような安全で平穏な生活を送り、無知のまま死ぬことのみを望んでいる。あなたが追求すべき事は、征服されることであり、それがあなたに課された本分である。自分が征服されたことに満足しているなら、あなたは光の存在を追い払うことになる。あなたは真理のために苦難を受け、真理に自分を捧げ、真理のために恥辱を忍ばねばならず、より多くの真理を得るためには、より多くの苦難を受けなければならない。これこそがあなたの為すべきことである。あなたは平穏な家庭生活のために真理を投げ捨ててはならず、一時的な享樂のために、あなたの一生の尊厳や品位を失ってはならない。あなたは、すべての美しく良いこと、また一層有意義な人生の道を追求すべきである。あなたがこのような俗悪な生活を送り、何の目的も追求しなかったならば、あなたは人生を無駄にすることになるのではないか。そのような人生から何が得られるであろうか。あなたは、真理のために肉の享樂をすべて捨て去るべきであり、僅かばかりの享樂のために全ての真理を投げ捨ててはならない。このような人々には、品位も尊厳もなく、彼らの存在には何の意味もない。

神が人間を罰して裁くのは、そうすることが神の働きには必要であり、またさらに人間にとって必要だからである。人間は刑罰と裁きを受ける必要があり、人間はその時初めて神への愛に達することができる。現在、あなたがたは完全に確信しているが、小さな挫折に直面するだけで、あなたがたは窮地に陥ってしまう。あなたがたの霊的背丈はまだ小さすぎるので、一層深い認識を得るために、そうした刑罰と裁きをもっと経験しなければならない。現在、あなたがたはある程度神を敬い、神を畏れており、神が真の神であることを知っているが、神に対する大きな愛はなく、まして純粋な愛に達することなどない。あなたがたの認識は浅過ぎて、あなたがたの霊的背丈はまだ不十分である。ある環境にほんとうに直面する時、あなたがたはいまだに証しに立つことがなく、あなたがたの積極的な成長は極めて少なく、実践する方法を全く知らない。ほとんどの人々が消極的かつ不活発である。彼らは心の中で密かに神を愛するだけで、実践する術がなく、自分達の目標が何であることを明瞭に理解していない。完全にされた者は正常な人間性だけではなく、良心の尺度を超え、良心的基準よりも高い真理も備えている。彼は自分の良心で神の愛に報いるのみならず、なにより、神を知り、神が愛しいこと、神は人間の愛を受けるに相応しいこと、また神には愛すべきことが非常に沢山あるので、人

は神を愛さずにはいられないことを知っている。完全にされた者の神への愛は、自分の個人的願望を満たすためのものである。彼の愛は自発的な愛であり、見返りを求めない愛であり、それは取引ではない。彼が神を愛する理由は、神に関する彼の認識の他にない。このような人は神が自分に恵みを与えるかどうかを気にすることはなく、神を満足させること以外に彼を満足させることはない。彼は神と取引することがなく、「あなたに与えられたから、それに応じてあなたを愛する。あなたが与えないのであれば、わたしはそれに応じて与えるものが何もない」というように、神への愛を自分の良心で測ることもない。完全にされた者は常に信じている。「神は創造主であり、わたしたちに対して働きを行なっている。わたしには完全にされる機会と状況、そして資格があるのだから、意味のある人生を送ることを追求し、神を満足させるべきである」と。それはまさにペテロが経験したことと同様である。つまり、ペテロは、自分が最も弱かった時、神に祈って言った。「神よ、時間や場所に関わらず、わたしが常にあなたのことを覚えていることを、あなたは知っておられます。時間や場所に関わらず、わたしがあなたを愛したいことを、あなたは知っておられます。しかし、わたしの霊的背丈は小さすぎて、わたしは弱く無力過ぎるので、わたしの愛は余りにも限られていて、あなたに対するわたしの誠実さは乏し過ぎます。あなたの愛に比べると、わたしはまったく生きることにも不適です。わたしがただ望むのは、わたしの人生が無駄にならないこと、そしてあなたの愛に報いるだけでなく、さらには、自分にあるものをすべてあなたに捧げられることです。わたしがあなたを満足させることができるなら、創造物としてわたしは心安らぎ、それ以上何も求めないでしょう。今のわたしは弱く無力ですが、あなたの訓戒と愛を忘れることはないでしょう。今、わたしはただあなたの愛に報いること以外に何もしていません。おお、神よ、わたしは惨めに感じます。どうすれば、わたしの心にある、あなたへの愛をあなたに報い、自分のできる限りを尽くし、あなたの望みを満たし、自分が持っている全てをあなたに捧げることができるでしょうか。あなたは人間の弱さを知っておられます。どうすれば、わたしはあなたの愛を受けるに相応しい者となれるでしょうか。神よ、あなたは、わたしの霊的背丈が小さいこと、わたしの愛が乏し過ぎる事をご存じです。わたしはこのような環境の中で、どうすれば最善を尽くせるでしょうか。わたしは、自分があなたの愛に報いるべきであること、自分の持っている全てをあなたに捧げるべきことは知っていますが、現在のわたしの霊的背丈は小さ過ぎます。わたしがあなたに捧げるための清い愛を一層備えることができ、自分の持っている全てをもっとあなたに捧げられるように、あなたがわたしに強さと確信を与えられるようお願いします。そうすれば、わたしはあなたの愛に報いることができるだけでなく、あなたの刑

罰、裁き、試練、そして一層厳しい呪いをもっと経験することができるでしょう。あなたは、わたしがあなたの愛を見ることを許されたので、わたしはあなたを愛さずにはいられません。また現在、わたしは弱く無力ですが、どうしてあなたのことを忘れることができますでしょうか。あなたの愛、刑罰、そして裁き、これらのすべてによって、わたしはあなたのことを知るようになりましたが、それでもなおわたしはあなたの愛に応えることができないと感じています。なぜなら、あなたは極めて偉大であられるからです。わたしは、どうすれば自分の持てる全てを創造主に捧げられるでしょうか」。それがペテロの願いであったが、それでもペテロの霊的背丈は不十分すぎた。この時、ペテロは、あたかも自分の心がナイフでえぐられているかのような苦痛を感じた。そうした状態では、ペテロはどうすればよいか分からなかった。しかし、ペテロは祈り続けて言った。「神よ、人間は霊的背丈が幼く、人間の良心は弱く、わたしが達成できるのは、あなたの愛に報いることだけです。現在、どのようにしてあなたの心を満足させればよいのかわたしには分かりません。だからわたしが唯一願うのは、自分のできる限りを行い、自分の持てる全てをあなたに捧げ、自分の持てる全てをあなたのために費やすことです。あなたの裁きや刑罰に関わらず、あなたがわたしに授けられること、わたしから奪われることに関わらず、あなたに対する不平がわたしに一切ありませんように。あなたがわたしを罰し、裁かれた時、わたしは愚痴をこぼし、清さを実現することも、あなたの願いを果たすこともできないことが、何度もありました。あなたの愛にわたしが報いようとしたのは、強制によって生まれたものであり、その時、わたしは自分を一層憎みました」。ペテロがこのように祈ったのは、彼が神への一層純粋な愛を求めていたからである。ペテロは求め、懇願し、更には自らを非難し、自らの罪を神に告白した。ペテロは神に対して負債があると感じ、自己嫌悪を覚えつつ、幾分悲しみも感じ、消極的であった。彼は常にこのように神の心に対して自分が不十分であり、最善を尽くせないと感じていた。そうした状況において、ペテロはまだヨブの信仰を追い求めていた。彼はヨブの信仰がどれほど偉大であったかを見た。なぜなら、ヨブは自分の物は全て神から授けられたものであり、神がその全てを自分から奪うのは当然であること、また神は、誰であれ神が望む者に対して与えること――それが神の義なる性質であることを理解していたからである。ヨブは一言も不満を言わず、なおも神を讃美することができた。ペテロもまた自分を知っていたので、心の中でこう祈った。「今日、わたしは、自分の良心であなたの愛に報いること、また、わたしがあなたにお返しする愛の多さに満足するべきではありません。なぜなら、わたしの思いは墮落し過ぎており、あなたを創造主として見ることができないからです。わたしはいまだにあなたを愛するに不適であるため、わ

わたしは自分の持っている全てを、自ら進んであなたに捧げる能力を実現しなければなりません。あなたがわたしを通して大いなる栄光を得られるように、わたしは、あなたが行なった全てのことを知るべきであり、わたしには選択の余地はなく、またあなたの愛を見て、あなたを讃美することを話し、あなたの聖なる御名を讃えることができるようにならなければなりません。わたしはあなたのために、喜んでこの証しに堅く立ちます。神よ、あなたの愛は極めて貴く、美しいものです。どうしてわたしが悪い者の手の中で生きることを望むことが出来ましょうか。わたしはあなたに造られたのではありませんか。どうしてわたしがサタンの領域下で生きられるのでしょうか。わたしは、自分の全存在があなたの刑罰の中で生きる方がよいと思います。わたしは悪い者の領域下で生きることを望みません。わたしが清くされて、自らの全てをあなたに捧げることが可能であるならば、わたしは進んで自分の身体と心を、全てあなたの裁きと刑罰に捧げます。なぜなら、わたしはサタンを忌み嫌い、サタンの領域下で生きることを望まないからです。わたしに対する裁きを通して、あなたはご自身の義なる性質を示されます。わたしは幸せであり、不満は一切ありません。わたしが創造物としての本分を尽くせるのであれば、わたしの全人生にあなたの裁きが伴うことを喜びます。それを通して、わたしはあなたの義なるご性質を知り、悪い者の影響から脱することができるでしょう」。ペテロは常にこのように祈り、そのように求め、比較的高い領域へと達した。彼は神の愛に報いることができたばかりでなく、もっと重要な事として、創造物としての自分の本分も尽くしたのである。彼は自分の良心の呵責に苛まれなかっただけでなく、良心の基準を超越することができた。彼の祈りは神の前に立ち昇り続き、彼の志しはさらに高くなり、彼の神への愛はさらに大きくなった。彼は激しい苦痛を受けつつも、神を愛することを忘れず、神の心を理解する能力を獲得することを求め続けた。彼の祈りの中に次のような言葉が述べられている。「わたしは、あなたの愛に報いること以外に何も成し遂げていません。わたしはサタンの前であなたを証ししておらず、自らをサタンの影響下から解放しておらず、依然として肉の中で生きています。わたしは自らの愛でサタンを打ち破り、辱め、それによってあなたの心を満足させることを望みます。わたしは自らの全てをあなたに捧げ、自分のうちのほんの僅かでもサタンに捧げないことを望みます。なぜなら、サタンはあなたの敵だからです」。ペテロがこのように追求すればするほど、彼は一層感動し、そうしたことに関する認識が一層高まっていった。彼は、自分をサタンの影響から解放し、完全に神に戻すべきであることを、無意識のうちに知ることになった。それこそが彼が到達した領域であった。彼はサタンの影響を超越し、肉の快楽と悦楽から脱し、進んで神の刑罰と裁きの両方を一層深く経験した。ペテロは言った

。「わたしはあなたの刑罰と裁きのただ中で生きていますが、それに伴う苦難に関わらず、わたしはサタンの領域下で生き、サタンの策略に陥ることを望みません。わたしはあなたの呪いの中で生きることを喜び、サタンの祝福の中で生きることに痛みを感じます。わたしは、あなたの裁きの中で生きている時、あなたを愛し、それが自分に大いなる喜びをもたらします。あなたの刑罰と裁きは義であり、聖なるものです。それらはわたしを清め、またそれ以上に、わたしを救うためのものです。わたしは生涯をあなたの裁きの中で過ごし、あなたに見守られた方が良いと思います。わたしは一瞬たりともサタンの支配の下で生きることを望みません。わたしはあなたによって清められることを望み、たとえ苦難を受けるとしても、サタンに利用され、欺かれることは望みません。被造物であるわたしは、あなたにより用いられ、所有され、裁かれ、刑罰を与えられるべきです。わたしは、あなたにより呪われるべきでさえあります。あなたがわたしを祝福することを望むとき、わたしの心は喜びます。なぜなら、わたしはあなたの愛を見たからです。あなたは創造主であられ、わたしは被造物です。わたしはあなたを裏切ってサタンの領域で生きるべきでも、サタンに利用されるべきでもありません。わたしは、サタンのために生きるよりも、あなたの馬となり、牛となるべきです。わたしはむしろ物質的な悦楽なしに、あなたの刑罰の中で生きることの方が良く、たとえあなたからの恵みを失ったとしても、そうして生きることがわたしに喜びをもたらすでしょう。たとえあなたの恵みがなくても、わたしはあなたの刑罰と裁きを受けることを喜びます。それは、あなたの最高の祝福であり、最大の恵みです。あなたはわたしに対して常に威厳があり、怒りに満ちておられますが、それでもなおわたしはあなたから去ることができず、あなたをどれほど愛しても愛しきることができません。わたしはあなたの家に住み、あなたに呪われ、刑罰を受け、打たれることを望み、サタンの領域下で暮らすことも、ただ肉のために忙しく奔走することも望まず、ましてや肉のために生きることなど望みません」。ペテロの愛は純粋な愛であった。これこそが完全にされる経験であり、完全にされることの最高の領域であり、これ以上に有意義な人生はない。ペテロは神の刑罰と裁きを受け入れ、神の義なる性質を大切にし、ペテロに関することで、それ以上貴いことはなかった。彼は言った。「サタンはわたしに物質的な享楽を与えるが、わたしはそれを貴ばない。神の刑罰と裁きがわたしの上に臨むこと――わたしはそこから恵みを受け、喜びを見出し、祝福される。神の裁きがなかったとしたら、わたしは決して神を愛さず、依然としてサタンの領域で暮らし、サタンに支配され、命令されていることだろう。そうした場合、わたしは決して真の人間とはなれないだろう。なぜなら、わたしは神を満足させることができず、わたしの全てを神に捧げることもなかったはずであ

るからだ。たとえ神がわたしを祝福されず、あたかもわたしの中で火が燃えているように、心に慰めがないままになって、平安も喜びもなく、また神の刑罰と訓練が決してわたしから離れなくとも、神の刑罰と裁きの中から、わたしは神の義なるご性質を見ることができる。わたしはそれに喜びを感じる。人生において、それ以上に貴いことも有意義なこともない。神の守りと慈しみが容赦のない刑罰と裁き、呪いと打ちのめしとなったが、わたしはそれでもなおこれらの事を嬉しく思う。なぜなら、そうしたことはわたしを一層清め変化させることができ、わたしを神に近づかせ、わたしが一層神を愛し、神へのわたしの愛を一層清くすることができるからである。これにより、わたしは創造物としての自分の本分を尽くすことができるようになり、わたしは神の御前へと導かれ、サタンの影響から遠ざけられるので、もはやわたしはサタンに仕えない。わたしがサタンの領域で生活しておらず、何も躊躇せずに自分の持てる全てと、できることの全てを神に捧げることができる時、それはわたしが完全に満足する時であろう。わたしを救ったのは神の刑罰と裁きであり、わたしの一生は神の刑罰と裁きとは不可分である。地におけるわたしの生活はサタンの支配下にあるので、神の刑罰と裁きによる慈しみと守りがなかったとしたら、わたしは常にサタンの領域下で生活していたであろうし、なにより、有意義な人生を実際に生きる機会も術もなかっただろう。神の刑罰と裁きが決してわたしから去らない場合にのみ、わたしが神により清くされることが可能となるであろう。神の厳しい御言葉と義なるご性質、そして神の威厳ある裁きによってのみ、わたしは最高の守りを得て、光の中で生き、神の祝福を得たのだ。清くされ、自らをサタンから解放し、神の支配下で生きることができること——それこそが現在におけるわたしの人生の最大の祝福である」。これがペテロが経験した最高の領域である。

完全にされた後に人間が到達すべき状態は、そのようである。そこまで達することができないならば、有意義な人生を送ることはできない。人は肉の中に生きるが、それは人間地獄の中で生きることであり、神の裁きと刑罰なくしては、人間はサタンと同様にけがれている。どうして人間が聖くなれようか。ペテロは、神の刑罰と裁きは人間のための最高の守りであり、最も素晴らしい恵みであると信じていた。人間が目を覚まし、肉を憎み、サタンを憎むことができるのは、神の刑罰と裁きによる他ない。神の厳しい鍛錬は、人間をサタンの影響から解放し、自分の狭い世界から解放し、神の顔の光の中で生きることができるようにする。刑罰と裁きよりも優れた救いはない。ペテロはこう祈った。「神よ、あなたがわたしを罰し、裁かれる限り、わたしはあなたがわたしを見捨てていないことを知るでしょう。たとえあなたがわたしに喜びや平安を与えられず、

わたしを苦しみの中で生活させ、わたしに無数の懲らしめを科せられたとしても、あなたがわたしを見捨てない限り、わたしの心は安らぐでしょう。現在、あなたの刑罰と裁きはわたしにとって最高の守りであり、最も素晴らしい祝福となっています。あなたがわたしに与えられる恵みがわたしを守っています。現在あなたがわたしに授けられる恵みは、あなたの義なるご性質の表れであり、刑罰と裁きです。さらに、それは試練であり、なによりもそれは、苦難の生活です」。彼は肉の喜びを脇へ置き、一層深い愛と一層大きな守りを求めることができた。なぜなら、彼は神の刑罰と裁きから、極めて大きな恵みを得たからである。人生において、人が清められ、性質の変化を実現することを望み、有意義な人生を生き抜き、被造物としての自分の本分を尽くすことを望むのであれば、その人は神の刑罰と裁きを受け入れるべきであり、神の鍛錬と打ちのめしが自分から離れないようにし、そうすることで、サタンによる操りと影響から逃れて神の光の中で生きられるようにしなければならない。神の刑罰と裁きは光であり、人間の救いの光であり、人間にとって、それ以上の祝福と恵みと守りはないということを知らなければならない。人間はサタンの影響下で生活し、肉の中に存在する。人間が清められず、神の守りを受けないのであれば、人間は一層墮落するであろう。人間が神を愛することを望むのであれば、人間は清められ、救われなければならない。彼は祈って言った。「神よ、あなたがわたしを優しく扱われる時、わたしは喜び、安らぎを感じます。あなたがわたしに刑罰を与えられる時、わたしはそれにも増して喜びと安らぎを感じます。わたしは弱く、予期せぬ苦しみを受け、多くの涙と悲しみがありますが、この悲しみは、わたしの不従順さと弱さの故であることを、あなたは知っておられます。わたしが泣くのは、自分があなたの望みを満足させられないからであり、わたしが悲しみと後悔を感じるのは、自分があなたの要求に満たないからです。しかしわたしは進んでその領域に到達しようとし、あなたを満足させるためにできること全てを喜んで行います。あなたの刑罰はわたしに守りをもたらし、わたしに最高の救いを与えてくれました。あなたの裁きはあなたの寛容さと忍耐にまさります。あなたの刑罰と裁きがなければ、わたしはあなたの憐れみと慈愛を享受することはできないでしょう。現在、わたしはあなたの愛が天を超越し、あらゆるものを凌いだことを、一層理解しています。あなたの愛は憐れみと慈愛だけではなく、それ以上に、刑罰と裁きです。あなたの刑罰と裁きにより、わたしは多くのことを与えられました。あなたの刑罰と裁きなくしては誰一人として、清められることも、創造主の愛を経験できることもないでしょう。わたしは数百回の試練と患難を受け、死に瀕したことさえありましたが、それらによってあなたを真に知り、最高の救いを得ることができました。もしあなたの刑罰と裁き、そして鍛錬がわたしか

らなくなったら、わたしは闇の中、サタンの領域で生きることになるでしょう。人間の肉にどんな益があるのでしょうか。あなたの刑罰と裁きがわたしからなくなるなら、それはあなたの御霊がわたしを見捨て、もはやあなたがわたしと共におられないようなものでしょう。そうであるとしたら、どうやってわたしは生きてゆけましょうか。あなたがわたしに病を与えられ、わたしの自由を奪われても、わたしは生き続けることが出来ませんが、あなたの刑罰や裁きがなくなったならば、わたしは決して生きてゆくことはできないでしょう。わたしにあなたの刑罰と裁きがなかったとしたら、わたしには言葉にできないほど深いあなたの愛を、わたしは失うでしょう。あなたの愛がなければ、わたしはサタンの領域下で生活することになり、あなたの栄光の御顔を見ることはできないでしょう。わたしはどうして生き続けられるのでしょうか。そのような闇や生活は、わたしには耐えられないでしょう。わたしがあなたと共におられることは、あなたにお目にかかることと同様ですから、どうしてわたしがあなたから去ることができましょうか。わたしはあなたに対し、たとえそれが短い励ましの御言葉であったとしても、わたしの最大の慰めを奪わないよう懇願し、願います。わたしは従前あなたの愛を享受し、今はあなたから離れることができません。どうしてわたしがあなたを愛せないのでしょうか。わたしは、あなたの愛のために、多くの悲しみの涙を流しましたが、そうした生活は一層有意義であり、もっとわたしを豊かにし、さらにわたしを変化させ、被造物が持つべき真理をわたしが一層得られるようにすることができると、常に感じて来ました」。

人間はサタンの支配下において全生涯を過ごし、自分でサタンの影響から逃れられる者は一人もいない。人間はみなけがれた世界で、墮落と空虚の中、少しの意味も価値もないままに生きている。彼らは、肉や欲望のため、そしてサタンのために、そうした気楽な生活を送る。彼らの存在には何の価値もない。人間は自分をサタンの影響から解放する真理を見出すことができない。人間は神を信じ、聖書を読むにもかかわらず、サタンの影響による支配からどうやって自分を解放すればよいのか分からない。何時の時代も、この秘密を発見してそれを理解した者は稀である。それ故人間はサタンを憎み、肉を忌み嫌っているが、罫のようなサタンの影響から逃れる方法を知らない。現在、あなたがたは依然としてサタンの支配下にいるのではなかろうか。あなたがたは自分の不従順な行為を後悔せず、まして自分がけがれており、反抗的であると感じることなどはない。神に反抗した後、あなたがたは安心し、大いに落ち着くことさえある。あなたの落ち着きは、自分が墮落していることが原因ではなかろうか。こうした安心は、あなたの不従順から来るのではなかろうか。人は、人間地獄の中で生き、サタンの闇の影響下で

生きている。全地で幽霊が人間と共に住み、人間の肉を侵害している。地上では、あなたは美しいパラダイスに住んでいるのではない。あなたが住む場所は悪魔の領域であり、人間地獄であり、冥府である。清められなければ、人はけがれた者である。人が神によって守られておらず、神に顧みられていないのであれば、その人は依然としてサタンの虜である。その人がもし裁きや刑罰を受けていないのであれば、その人にはサタンによる闇の影響の弾圧から逃れる術はないであろう。あなたが依然としてサタンの領域下で生活していることを証明するには、あなたが露わにする墮落した性質と、あなたが生きる不従順な振る舞いだけで十分である。あなたの心や思いが清められておらず、あなたの性質が裁きと刑罰を受けていないのであれば、あなたの全存在がいまだにサタンの領域に支配されており、あなたの心はサタンに支配され、思いはサタンに操られ、あなたの存在全てがサタンの手により支配されているのだ。あなたは、自分がペテロの基準から一体どれほどかけ離れているか知っているであろうか。あなたにはそのような素質があるだろうか。あなたは、現在の刑罰と裁きについて、どの程度知っているだろうか。あなたは、ペテロが知ったことをどの程度自分のものになっているだろうか。現在において、あなたが知ることができないのであれば、将来その認識を獲得することができるであろうか。あなたのように怠惰で臆病な者が刑罰と裁きを知ることは、まったく不可能である。あなたが肉の平安と享楽を追求するのであれば、あなたには清められる術が全くなく、あなたは最後にはサタンのところへ戻されるであろう。なぜなら、あなたが実際に生きているのは、サタンと肉だからである。物事の現状として、多くの人々がいのちを追求していないが、それは、彼らが清められることにも、一層深いいのちの経験の中に入ることに注意していないことを意味する。そんなことでは、どうして彼らが完全にされることがあろうか。いのちを追求しない者には、完全にされる機会が全くなく、神に関する認識や自分の性質の変化を追求しない者は、サタンの闇の影響から逃れられない。宗教のみを信じるものや、儀式に従い定期的な礼拝に参加するだけの者と同様に、彼らは、神に関する自分の認識や、自分の性質の変化への成長に関して真剣に考えていない。これは、時間の無駄ではないだろうか。人が、神への信仰の中で、いのちに関する問題を真剣に考えず、真理に入ることを求めず、自分の性質の変化を追求せず、ましてや神の働きに関する認識など追求しない、というのであれば、その人は完全にされることがない。あなたは、自分が完全とされたいことを望むのであれば、神の働きを理解しなければならない。特に、神の刑罰と裁きの意義と、この働きが人間に対して行われる理由を理解しなければならない。あなたは、これを受け入れることができるであろうか。この種の刑罰において、あなたはペテロと同等の経験と認識に達することがで

きるだろうか。あなたが、神の認識と聖霊の働きに関する認識を追求し、自分の性質の変化を追求するのであれば、あなたには完全にされる機会がある。

完全にされる者については、征服される働きのこの段階は不可欠である。人間は、征服されて初めて、完全にされる働きを経験できる。征服される役割をただ演じることに大きな価値はなく、それによって、あなたが神に使われるに相応しいとみなされることはないであろう。あなたには、福音を宣べ伝える役割を果たす手段はないであろう。なぜなら、あなたはいのちを追い求めることがなく、自分を変えることや一新することを追求しておらず、そのため、あなたにはいのちの実経験がないからである。この段階的な働きにおいて、あなたは効力者や引き立て役としての役割を果たしたことがあるが、最終的にペテロのようになることを追求せず、あなたの追求が、ペテロが完全にされた道によって追求しないのであれば、当然、あなたは自分の性質の変化を経験しないであろう。あなたが完全にされることを追求する者であるならば、あなたは証ししてこう言うであろう。「この神による段階ごとの御働きにおいて、わたしは神の刑罰と裁きの御働きを受け入れた。またわたしは大いなる苦しみに耐えてきたが、神がどのようにして人間を完全にされるのかを知り、神が行われた御働きと神の義に関する認識を得て、神の刑罰により救われた。彼の義なるご性質がわたしの上に臨み、祝福と恵みをもたらした。わたしを守り、わたしを清めたのは神の裁きと刑罰である。もしわたしが神による刑罰と裁きを受けておらず、神の厳しい御言葉がわたしの上に臨んでいなかったとしたら、わたしは神を知らず、救われることがなかったであろう。現在、わたしは被造物として、創造主が造った万物を享受するだけでなく、それ以上に重要なことには、神のご性質は人間が享受するに値するので、あらゆる被造物は神の義なる性質を享受し、神の義なる裁きを享受しなければならない、ということを理解している。サタンに堕落させられた被造物として、神の義なるご性質を享受すべきである。神の義なるご性質には、刑罰と裁きがある他、それ以上に、大いなる愛がある。現在、わたしは神の愛を完全に得ることはできないが、それを見る幸運に恵まれており、そのことにおいて、わたしは祝福されている」。これこそが、完全にされた者の歩んだ道であり、彼らが語る認識である。そうした者はペテロと同じであり、ペテロと同様の経験がある。このような人々は、いのちを得た者でもあり、また真理を持っている者である。彼らが、最後まで経験する時、神の裁きの時に、必ずサタンの影響を自分から取り除き、神のものとされるであろう。

彼らには征服された後も、鳴り響くような証しがない。彼らは、単にサタンを辱めた

だけであり、神の言葉の現実を実際に生きていない。あなたは未だに第二の救いを得ていない。あなたは、単に罪のための捧げものを得たにすぎず、まだ完全にはされてはいない——これは大きな損失である。あなたがたは、自分が入るべき事、実際に生きる事を理解し、それらの中に入らなければならない。最終的に、あなたが完全にされることを達成せず、真の人間ではないなら、あなたは後悔の念に満たされるであろう。最初に神により造られたアダムとエバは、聖なる人間であった。すなわちエデンの園にいた間、彼らは聖く、けがれがなかった。また彼らはヤーウェに忠実であって、ヤーウェを裏切ることなど一切知らなかった。なぜなら、彼らはサタンの影響による妨害を全く受けず、サタンに毒されておらず、全人類の中で最も純粋だったからである。彼らはエデンの園に住み、一切けがれにけがされることなく、肉に囚われることなく、ヤーウェを畏れ敬っていた。その後、彼らがサタンに誘惑された時、彼らはへびの毒に見舞われ、ヤーウェを裏切ることを望み、サタンの影響の下で生きた。最初、彼らは聖なるものであり、ヤーウェを敬っていた。そうすることだけが、彼らを人間としていた。その後、彼らがサタンに誘惑された後、彼らは、善悪を知る木の実を食べて、サタンの影響の下で生きた。彼らは、サタンにより次第に墮落させられ、本来の人間の姿を失っていった。最初、人間にはヤーウェの息吹があり、不従順であることは一切なく、心には悪が一切なかった。この時、人間は本当の意味で人間であった。人間は、サタンにより墮落させられた後、獣となった。人間の考えは悪とけがれで満たされ、善や聖さはなかった。それはサタンではなかろうか。あなたは神の働きの多くを経験したが、変化しておらず、清められてもいない。あなたは依然としてサタンの領域で暮らし、いまだに神に服従しない。これは既に征服されてはいるが、まだ完全にされていない者である。それでは、こういう人が、まだ完全にされていない者であると言われるのは何故だろうか。それは、その人がいのちも、神の働きに関する認識も求めず、肉の快楽や束の間の慰めをむやみに欲するからである。その結果、彼らのいのちの性質は全く変化せず、神に造られた時の、人間の本来の姿を取り戻していない。このような人々は生ける屍であり、霊のない死人である。霊の事柄に関する認識を追求しない者、聖さを追求しない者、真理を実際に生きることを追求しない者、否定的な側面で征服されることにのみ満足している者、そして神の言葉によって生き、聖なる人になることができない者——このような者たちは皆救われていない人々である。なぜなら、人間に真理がない場合、人間は神の試練の時に揺るぎなく立つことができないからである。神の試練の中で揺るぎなく立つことができる者のみが、救われた者である。わたしが望むのは、完全にされることを求めるペテロのような人々である。現在の真理は、真理を切望し、求める者たちに与えられて

いる。この救いは、神により救われることを切望する者たちに授けられており、あなたがたが得るためだけのものではなく、あなたがたが神によって得られるためでもある。神によって得られるために、あなたがたは神を得るのだ。今日、わたしはあなたがたにこの話をし、あなたがたはそれを聞いたので、あなたがたはこの言葉に従って実践すべきである。最終的に、あなたがたがこれらの言葉を実践する時こそ、わたしがこの言葉によりあなたがたを得る時である。それと同時に、あなたがたはこれらの言葉を得る、すなわち、あなたがたはこの至高の救いを得るであろう。あなたがたが清められる時こそ、あなたがたは真の人間となるであろう。もし、あなたが真理を実際に生きること、あるいは完全にされた者の姿を実際に生きることができないなら、あなたは人間ではなく、生ける屍であり、獣であると言えるであろう。なぜなら、あなたには真理がなく、言ってみれば、あなたにはヤーウェの息吹がなく、したがってあなたは霊のない死人だからである。征服された後に証しすることは可能であるが、あなたが得るのは多少の救いだけであり、あなたは霊を持った生けるものとはなっていない。あなたは刑罰と裁きを経験したが、その結果自分の性質が一新されることも変化することもない。あなたは依然として古い人のままであり、いまだにサタンに属しており、あなたは清められた者ではない。完全にされた者のみに価値があり、このような人々だけが真の人生を得たのである。いつの日か、誰かがあなたにこう言うであろう。「あなたは神の御働きを経験したのだから、神の御働きがどのようなものか、少し話してくれないか。ダビデは神の御働きを経験し、ヤーウェの御業を目の当たりにし、モーセもまたヤーウェの御業を目の当たりにしたので、両者ともヤーウェの御業を説明し、その奇しさについて話すことができた。終わりの日に、あなたがたは受肉の神の御働きを目の当たりにした。あなたは神の知恵について話せるだろうか。神の御働きの奇しさについて話せるだろうか。神はあなたがたに何を要求され、あなたがたはそれをどのように経験しただろうか。あなたがたは終わりの日に神の御働きを経験した。あなたがたの最も大いなるビジョンは何であろうか。そのことについて話せるであろうか。神の義なるご性質について話せるであろうか」。あなたは、このように質問された時、どう答えるであろうか。あなたが、「神は義であり、人間に刑罰と裁きを与えられ、わたしたちを容赦なく暴露される。神のご性質は、人間による侵害を決して容赦しない。神の御働きを経験した後、わたしは自分の獣のような側面を知り、神の義なるご性質を真に目の当たりにした」と言うなら、その人は続けて、「その他にあなたは神について何を知っているのだろうか。人はどのようにしていのちの中へ入るだろうか。あなたには、個人的な熱意があるだろうか」と尋ねるであろう。あなたは、「サタンに墮落させられた後、神の被造物は獣となっ

て、ロバ同然であった。現在、わたしは神の御手の中で生活しているので、創造主の願いを満足させ、創造主の教えることには何でも従わなければならない。わたしには、そうするほか選択がない」と答えるであろう。あなたがこのように一般的な話をするだけならば、その人はあなたが言っていることを理解しないであろう。彼らが、あなたには神の働きに関してどのような認識があるのか、と尋ねる時、彼らはあなた自身の経験のことを指して言っているのだ。彼らは、あなたが神の刑罰や裁きを経験した後、その刑罰や裁きについてどのような認識があるか、と尋ねているのであり、それはあなた自身の経験のことを言っているのであり、真理に関するあなたの認識について話をするよう彼らは求めているのだ。あなたが、そうしたことについて話せなかったならば、それはあなたが現在の働きについて何も知らない証拠である。あなたはいつも、もっともらしい言葉、あるいは一般に知られている言葉を語る。あなたには具体的な経験がなく、いわんやあなたの認識には内容がなく、真の証しも全くないので、他の者たちはあなたによって説得されない。受動的に神に従う者となってはならず、自分の好奇心をそそることを追求してはならない。あなたは冷たくも熱くもないので、あなたは自分を滅ぼし、いのちの成長を遅れさせるだろう。あなたは、真理を得て、それを実際に生きることができるよう、このような消極性と不活発を取り除き、肯定的なことの追求と自分の弱さを克服することに熟達しなければならない。あなたの弱みについて、恐れることは一切なく、あなたの欠点はあなたの最大の問題ではない。あなたの最大の問題であり、最大の欠点であるのは、あなたが冷たくも熱くもなく、真理を追求する願望に欠けていることである。あなたがたすべての最大の問題は、臆病な精神によりことの現状に満足し、受動的に待っていることである。それがあなたがたにとって最大の障害であり、あなたがたが真理を追求することにおける最強の敵である。ただわたしの話す言葉が極めて深遠である故に、あなたが従うのであれば、あなたは真に認識を持っておらず、真理を大切にしてもいない。あなたにあるような従順さは、証しではないので、わたしはそうした従順さを認めない。誰かがあなたに、「あなたの神は、正確に言うところから来るのだろうか。あなたの神の本質は何であろうか」と尋ねるかも知れない。あなたは、「神の本質は、刑罰と裁きである」と答えるであろう。するとその人は「神は人間に対して思いやりがあり、愛情があるのではなかろうか。あなたは、それについて知っているであろうか」と続けて言うだろう。あなたは、「それは他の者たちの神である。それは宗教心のある人々が信じている神であって、わたしたちの神ではない」と言うであろう。あなたのような人々が福音を広める時、真の道はあなたによって歪められる。それでは、あなたは何の役にたつというのか。どうして他の人たちがあなたから真の道を得る

ことができようか。あなたに真理はなく、真理について何も話すことができず、まして真理を実際に生きることなどできない。どうしてあなたに神の前で生きる資格があろうか。あなたが他の人に福音を広め、真理について交わり、神を証しする時あなたが他の人を説得できなければ、彼らはあなたの言葉を論破するであろう。あなたは場所を取っているだけではないか。あなたは神の働きを非常にたくさん経験してきたが、真理について話をすると、意味不明である。あなたは全くの役立たずではなかろうか。あなたは何の役に立つというのか。あなたがたは、神の働きの多くを経験しながら、よくもまだ神に関して少しも認識がないままでいられるものだ。神に関してあなたがどんな真の認識を持っているのか他の人が尋ねると、あなたは言葉を失うか、あるいは——神には大いなる力があり、あなたが授かった大きな祝福は、真に神により高められることであり、その目で神を見ることができること以上の特権はない——などに関係のないことを答える。こんなことを言って、何の価値があるであろうか。それは役に立たない空虚な言葉である。神の働きを非常にたくさん経験してきたにもかかわらず、あなたが知っているのは、神に高められることが真理であるということだけなのか。あなたは、神の働きを知るべきであり、そうして初めて本当に神を証しするようになるであろう。真理を得ていない者が、どうして神を証しできようか。

これほど多くの働きや言葉が、あなたには全く効果がないのであれば、神の働きを広める時が来ると、あなたは自分の本分を尽くすことができずに辱められ、屈辱を感じるであろう。この時、あなたは神に対して多大な負い目があり、神に関する自分の認識が極めて表面的であると感じるであろう。神が働きを行なっている間に、現在あなたが神に関する認識を求めないのであれば、後では手遅れとなるであろう。最終的に、あなたには話すべき認識がなくなるだろう——あなたには何もなく、空虚なままとなるであろう。あなたは何を用いて神に申し開きをするであろうか。あなたは厚かましくも神を見上げるであろうか。あなたは最終的に自分がペテロのように、神の刑罰と裁きがいかに有益であるかを知り、神の刑罰と裁きがなければ、人間は救われることがなく、けがれた地の汚泥の中に一層深く沈むしかないということを知るために、今この時に懸命に追求しなければならない。人間はサタンにより墮落させられ、互いに陰謀を企て合い、互いを踏みつけ、神に対する畏れを失っており、彼らの不従順はひど過ぎ、人間の観念は多過ぎ、皆サタンに属している。神の刑罰と裁きなくしては、人間の墮落した性質を清めることはできず、人間は救われることがない。受肉の神の働きにより肉の中に表されたことは、まさに霊により表されたことであり、神が行う働きは霊により行われたこと

に従って行われる。現在、この働きに関する認識が、あなたにないのであれば、あなたは極めて愚かであり、たいへん多くを失ったのである。あなたが神の救いを得ていないのであれば、あなたの信仰は宗教的信仰であり、あなたは宗教によるクリスチャンである。あなたは死んだ教義に固執しているので、聖霊の新たな働きを失った。神への愛を追求する他の者たちは、真理といのちを得ることができるが、一方あなたの信仰は神の承認を得ることができない。その代わりに、あなたは悪を行う者となり、破滅的で忌むべき行動を取る者となり、サタンの悪戯の標的となり、サタンの虜となってしまった。神は、人間が信じるべき存在ではなく、人間が愛し、求め、礼拝すべき存在である。今日、あなたが追い求めないならば、いつかあなたがこう言う日が来るであろう。「わたしはあの時どうして神に適切に従い、ちゃんと神を満足させなかったのだろう。自分のいのちの性質の変化を追求しなかったのだろう。あの時、神に服従することができなかった事、神の御言葉に関する認識を追求しなかった事を、わたしはどれほど後悔していることか。あの時、神は多くの事を言われた。わたしはなぜ追求できなかったのだろうか。わたしはほんとうに愚かだった」。あなたは、ある程度自己嫌悪に陥るであろう。現在、あなたはわたしが語る言葉を信じず、わたしの言葉を全く気にかけない。この働きが広まる日が来て、あなたがその全てを目にする時、あなたは後悔し、啞然とするであろう。祝福はあるが、あなたはそれを享受することを知らない。また真理はあるが、あなたはそれを追い求めない。あなたは、自分自身を侮辱しているのではなかろうか。現在、神の働きの次の段階はまだ始まっていないが、あなたに対する要求や、あなたが実際に生きるよう求められている事には、何も例外的な事はない。極めて多くの働きと多くの真理があるのだが、それらには、あなたに知られる価値があるのではなかろうか。神の刑罰と裁きは、あなたの霊を目覚めさせることができないのであろうか。神の刑罰と裁きは、あなたに自分を憎ませることができないのであろうか。あなたは、サタンの影響の下で、平安と悦楽と、少しばかりの肉の享楽と共に暮らすことに満足しているのであろうか。あなたは全ての人々のうちで最も卑しい者ではなかろうか。救いをその目で見たことがあるが、それを得るよう追求しない者よりも愚かな者はいない。そのような者は、肉を貪り食い、サタンを堪能する人々である。あなたは、神への自分の信仰が、どんな困難や患難も、あるいは僅かの苦難も招かないことを望む。あなたは、常にそれらの価値の無いものを追い求め、いのちの価値を全く認めず、自分の途方もない考えを真理よりも優先している。あなたには何の価値も無い。あなたは豚のように生きている――あなたと、豚と犬の間には、何か相違があるだろうか。真理を追求せずに肉を愛する者たちは皆、獣ではなかろうか。霊のない死んだ者たちは皆、生ける屍ではなか

ろうか。あなたがたの間で語られた言葉は、一体いくつあるであろうか。あなたがたの間で行われた働きは、ほんの少しだろうか。わたしは、あなたがたの間で、どれくらい与えたであろうか。それなのに、あなたがそれを得ていないのは何故だろうか。あなたが不平を言うべきことは、何かあるだろうか。あなたが肉を愛しすぎているので、何も得られなかったということではなかろうか。また、その原因は、あなたの考えが突飛すぎるからではなかろうか。また、それはあなたが愚か過ぎるからではないか。あなたは、これらの祝福を得られない場合、自分が救われなかったことを、神のせいにするのか。あなたが追い求めているのは、神を信じた後に平和を得ることができるようになること——つまり、自分の子が病気にかからないこと、自分の夫が良い職に就くこと、自分の息子が良い妻を見つけること、自分の娘がしっかりした夫を見つけること、自分の牛や馬がうまく土地を耕すこと、一年間、作物に適した気候となることなどである。これが、あなたの求めることである。あなたの追求は、ただ快適に暮らすためであり、自分の家族に事故が起こらないこと、風が自分に当たらないこと、顔に砂がかからないこと、家族の作物が洪水に遭わないこと、自分が災害を受けないこと、神に抱かれて生きること、居心地の良い住処で生活することである。常に肉を求める、あなたのような臆病者には、心や霊があるだろうか。あなたは獣ではなかろうか。わたしは何も見返りを求めずに、真の道を与えるが、あなたは追い求めない。あなたは神を信じる者たちのひとりであろうか。わたしは真の人生をあなたに授けるが、あなたは追い求めない。あなたは豚や犬と変わらないのではないか。豚は人生も清められることも追求せず、人生とは何かを理解しない。毎日、食べただけ食べた後、ただ寝るだけである。わたしは、あなたに真の道を与えたが、あなたは未だにそれを得ていない。あなたは手ぶらである。あなたは、このような生活、つまり豚の生活続けることを望んでいるのであろうか。このような人々が生きていることの意味は何であろうか。あなたの生活は軽蔑すべきものであり、恥ずべきものであり、あなたはけがれと放蕩の中で暮らし、何も目指す目標がない。あなたの人生は、最も下劣ではなかろうか。あなたは、厚かましくも神を見上げるのであろうか。あなたは、このような経験を続けるならば、得る物は何もないのではないか。真の道はあなたに与えられているが、最終的にあなたがそれを得られるかどうかは、あなた個人の追求によって決まる。人々は、神は義なる神であり、人間が最後まで神に従う限り、神は最も正しいから、人間に対して不公平なことは決してしないと言う。人間が最後まで神に従ったならば、神は人間を見捨てられるのであろうか。わたしは全ての人間に対して公平であり、全ての人間をわたしの義なる性質によって裁くが、人間に対する要求には適切な条件があるので、全ての人間は、わたしの要求することを達

成しなければならない。わたしは、あなたの資格がどれほど幅広いのか、立派であるかということには気を留めず、あなたがわたしの道を歩んでいるか、真理を愛し渴望しているかどうかだけを考慮する。あなたに真理が欠けており、あなたがわたしの名を辱め、わたしの道に従って行動せず、注意や配慮なく、ただついて来るだけであれば、わたしはその時あなたの悪のためにあなたを打ち倒し、罰するであろう。その時、あなたは何と言うであろうか。あなたは、神は義ではないと言えるであろうか。現在、あなたがわたしが語った言葉に従うならば、あなたはわたしが認めるような人である。あなたは、神に従う最中常に苦しみ、どんなに道が陰しくとも神に従い、良い時も悪い時も神とともにしてきたと言うが、あなたは神によって語られた言葉を実際に生きておらず、毎日神のために奔走し回ることだけを望み、有意義な人生を生きることについて考えたことがない。またあなたはこう言う。「とにかくわたしは神が義であると信じている。わたしは神のために苦しみ、神のために奔走し、自分を神に捧げ、承認を受けないにもかかわらず懸命に労してきたのだ。――神は必ずわたしのことを覚えているはずだ」。神は義であるというのはほんとうだが、その義はいかなる不純物にもけがされていない。その義には人間の意志が一切含まれておらず、肉や人間の取引にもけがされてはいない。反抗的で敵対し、神の道を遵守しない者は皆、罰され、誰も赦されず、誰も容赦されないであろう。「今日、わたしはあなたのために走り回っていますが、終わりが来たとき、あなたはわたしに少しばかりの祝福を与えて下さるでしょうか」と言う人たちもいる。そこで、わたしはあなたに尋ねる。「あなたはわたしの言葉に従ったであろうか」。あなたの言う義は、取引に基づいている。あなたは、わたしが義であり、全ての者に公平であり、最後までわたしに従う者は、確実に救われてわたしの祝福を得るとただ考えている。「最後までわたしに従う者は、確実に救われる」というわたしの言葉には内なる意味がある。つまり、最後までわたしに従う者は、完全にわたしのものとなる人たちであり、わたしに征服された後に真理を求め、完全にされた者である。あなたが満たした条件とは何であろうか。あなたが満たしたのは、最後までわたしに従うことのみであるが、その他に何があるだろうか。あなたはわたしの言葉に従っただろうか。あなたは、五つあるわたしの要求のうち、一つを満たしたが、残り四つを満たすつもりは全くない。あなたは、単に最も簡単で容易な道を見だし、それを追求しつつ、自分が幸運だと思っている。あなたのような者に対するわたしの義なる性質は、刑罰と裁きであり、それは義なる報いであり、悪を行う者全員への義なる罰である。わたしの道を歩まない者は、たとえ最後まで従ったとしても、みな必ず懲罰を受けるであろう。これこそが神の義である。この義なる性質が人間の罰において表される時、人間は啞然とし、神に従い

つつも神の道を歩まなかったことを悔いるだろう。「その時、わたしは神に従いつつ少しだけ苦しんだが、神の道を歩まなかった。そこでどのような言い訳ができるだろうか。刑罰を受ける以外選択はない」。しかし、その人は心の中でこう考えるだろう。「いずれにせよわたしは最後まで従ったのだから、あなたがわたしに刑罰を与えられたとしても、それは厳しすぎる刑罰ではあり得ないでしょう。そしてその刑罰を与えた後も、あなたはわたしを欲されるでしょう。わたしは、あなたが義であられ、わたしを永遠にそのようには扱われないことは知っています。結局、わたしは一掃されるような者ではありません。一掃される者は厳罰を受けますが、わたしの刑罰はそれよりも軽いでしょう」。神の義なる性質は、あなたの言うようなものではない。自分の罪を告白することが上手な者が寛容に取り扱われるということはない。義とは聖さであり、人間の侵害を容赦しない性質であり、したがってけがれたことや変化していないことはすべて、神の嫌悪の対象となる。神の義なる性質は、法ではなく、行政命令である。それは神の国の中の行政命令であり、その行政命令は、真理を持っておらず、変化していない全ての者への義なる罰であり、そこには救いの余地はない。人間がひとりずつ種類ごとに分類される時、善良な者は報酬を受け、邪悪な者は罰を受ける。この時、人間の終着点が明確にされ、救いの働きが終わり、人間を救う働きはそれ以後行われず、悪を行なった者全てに報復がもたらされる。ある人たちは言う。「神は、自身の傍らにいつもいる者を皆覚えている。神はわたしたちをひとりとして忘れることはない。わたしたちは神により完全にされることを保証されている。下にいる者達のことを、神は覚えておらず、彼らのうちで完全にされる者の数は、いつも神と顔を合わせているわたしたちよりも少ないことが保証されている。わたしたちのうち、神が忘れられた者は一人もおらず、全員が神に認められており、神により完全にされると保証されている」。あなたがたには皆そのような観念がある。これは義であろうか。あなたは、真理を実行に移したであろうか、それともしなかったであろうか。実のところ、あなたはそのような噂を広め、何も恥じることがない。

現在、神に用いられることを追求する人々もいるが、彼らは、征服された後に直接用いられることはない。現在において語られている言葉については、神が人々を用いる時、あなたがそうした言葉をいまだに達成することができなければ、あなたは完全にされていないのだ。言い換えると、人間が神に排除されるか、用いられるかは、人間が完全にされる期間の終わる時に決められる。征服された者たちは消極性と否定性の事例に過ぎない。彼らは見本であり模範であるが、一つの対比に過ぎない。人のいのちの性質が

変化し、その人が内面にも外面にも変化を達成した時に初めて、その人は完全に完成されたことになる。現在、あなたは、征服されることと、完全にされることのうち、どちらを求めるであろうか。どちらを達成したいのでであろうか。あなたは完全にされるための条件を満たしたのか。あなたにまだ欠けているのは、どれであろうか。あなたは、どのように自分を装備し、不足を補うべきであろうか。あなたは、完全にされる道に、どのように入るべきであろうか。あなたは、どのようにして完全に服従すべきであろうか。あなたは完全にされることを求めているが、それなら、あなたは聖さを追求しているであろうか。あなたは、神に清めてもらうために、刑罰と裁きを経験することを求めている人であろうか。あなたが清められることを追求しているならば、あなたは刑罰と裁きを喜んで受け入れるであろうか。あなたは神を知ることが求めているが、あなたには神の刑罰と裁きに関する認識があるだろうか。現在、神があなたに対して行う働きのほとんどは刑罰と裁きである。あなたに対して行われたこの働きに関するあなたの認識はどのようなであろうか。あなたが経験した刑罰と裁きにより、あなたは清められたであろうか。あなたは、それにより変化したであろうか。それにより何か効果があったであろうか。あなたは、呪い、裁き、暴露などの、現在の多くの働きに疲れはてているであろうか。それとも、そうした働きはあなたにとって大きな恩恵であると感じているであろうか。あなたは神を愛しているが、その理由は何だろうか。あなたが神を愛しているのは、自分が多少の恵みを受けたからであろうか。それとも平安と喜びを得た後に、神を愛しているであろうか。あるいは、神の刑罰と裁きによって清められた後に、神を愛しているのであるか。あなたが神を愛する正確な理由は何であろうか。ペテロが完全にされるために満たした条件とは、何であろうか。ペテロが完全にされた後、そのことが表現された要となる状態は、何であっただろうか。ペテロが主イエスを愛していたのは、ペテロが主を切望したからであろうか。それとも彼が主に会えなかったからであろうか、あるいはペテロが責められたからであろうか。それとも、ペテロは、患難の苦しみを受け入れ、自分のけがれと不服従を知り、主の聖さを知るようになったから、主イエスを一層愛したのであるか。神に対するペテロの愛が一層清くなったのは、神の刑罰と裁きの故であろうか、それとも別の理由のためであろうか。それはどちらであろうか。あなたが神を愛するのは、神の恵みの故であり、現在あなたに神が僅かばかりの祝福を与えたからである。これが真の愛であろうか。あなたは、どのように神を愛するべきか。神の刑罰と裁きを受け入れ、神の義なる性質を目の当たりにした後、完全に確信して神についての認識を有するようになるほど、真に神を愛せるようになるべきか。ペテロのように、神をどれほど愛しても十分ではないと言えるだろうか。あなたが追求するの

は、刑罰と裁きの後に征服されることであろうか、それとも、刑罰と裁きの後に清められ、守られ、世話されることであろうか。あなたが追求しているのは、どちらであろうか。あなたの人生は有意義なものでしょうか、それとも意味も価値もないものでしょうか。あなたが欲するのは、肉であろうか、それとも真理であろうか。あなたが望むのは、裁きであろうか、快楽であろうか。神の働きを非常にたくさん経験し、神の聖さと義を目の当たりにしてきたあなたは、どのように追求すべきでしょうか。あなたは、どのようにしてこの道を歩むべきでしょうか。神への愛を、どのように実践すべきでしょうか。神の刑罰と裁きは、あなたの中で何らかの効果を達成したでしょうか。あなたに神の刑罰や裁きに関する認識があるかどうかは、あなたが何を実際に生き、どの程度神を愛しているかに拠る。あなたの唇は、神を愛していると言うが、実際に生きていることは、古い墮落した性質である。あなたには神への恐れがなく、いわんや良心などない。そのような人々は、神を愛しているでしょうか。そのような人々は、神に対して忠実でしょうか。彼らは、神の刑罰や裁きを受け入れる者でしょうか。あなたは神を愛し、信じていると言うが、自分の観念を捨てない。あなたの働き、成長、あなたが述べる言葉や生活において、神へのあなたの愛は全く表されておらず、神への畏敬が全くない。これが刑罰と裁きを得た者でしょうか。このような者がペテロのようになれるでしょうか。ペテロのような者たちが、認識を持っているだけで、それを実際に生きないということがあろうか。現在、人間が真の人生を生きるために要求される条件は何でしょうか。ペテロの祈りは、単にペテロの口から出ただけのものであったでしょうか。それは、ペテロの心の奥底から出た言葉ではなかったでしょうか。ペテロは祈るだけで、真理を実践しなかったでしょうか。あなたの追求は、誰のためでしょうか。神の刑罰と裁きの期間に、あなたはどのようにして守りを得て、清められるべきでしょうか。神の刑罰と裁きは、人間にとって全く無益なものでしょうか。全ての裁きは懲罰でしょうか。人間のいのちに有益なのは、平安と喜び、物質的な祝福、一時的な快楽だけでしょうか。人間が快適で楽な環境で、裁きの生活なしに生きるのであれば、その人は清められるでしょうか。変化することと清められることを望むなら、人は、完全にされることを、どのように受け入れるべきでしょうか。現在、あなたはどちらの道を選ぶべきでしょうか。

働きを理解しなさい——混乱したまま付き従ってはならない

現在、混乱した状態で神を信じている人々が多くいる。あなたがたは好奇心が過剰で、祝福を求める願望が強すぎ、いのちを求める熱意は少なすぎる。昨今の人々は、熱狂的にイエスを信じている。イエスはそうした人々を天の家に連れ戻してくれるのだから

、信じられない者がいるだろうか。中には一生を通じて信者であり続け、40年も50年も信仰していながら、飽くことなく聖書を読んでいる者もいる。なぜなら彼らは、何があっても信仰を持ち続けている限り、天国に入れると考えている^[a]からだ。あなたがたはまだ神に従ってこの道を歩み始めてから数年しか経っていないが、すでに決意が揺らいでおり、忍耐力を失っている。それは祝福を得たいという願望が強すぎるからだ。あなたがたは祝福を得たいという願望と好奇心に支配されて、この真の道を歩んでいるが、働きのこの段階についてはろくに理解していない。現在わたしが語っていることの多くは、イエスを信じる者に向けて言っているのではなく、彼らの観念に反論するためだけに言っているのでもない。実際こうして顕わにされた観念こそ、まさにあなたがたの中にある観念なのだ。なぜならあなたがたは、なぜ聖書が脇へ置かれているのか、なぜわたしがヤーウェの働きは古くなったと言うのか、なぜイエスの働きは古くなったと言うのかを理解できていない。事実、あなたがたは口に出さない観念を数多く抱いており、さらに多くの見解を心の奥に秘めて、ただ群衆に従っている。本当に自分は多くの観念を抱いていないと思っているのか。いや、ただそれらを口に出していないだけだ。事実、あなたがたはうわべだけ神に従っていて、まったく真の道を求めに来ず、いのちを得るという目的でここへ来ていない。あなたがたの姿勢は単に、事の成り行きを見たいというものだ。あなたがたは従来^[a]の観念の多くを払拭できずにいるため、誰一人として完全に身を捧げることはできていない。この段階になっても、まだ自分自身の運命を心配し、日夜思い悩んで、決してそれを忘れることができない。わたしがパリサイ人について話すとき、宗教の「古い人々」の話をしていると思っているのか。あなたがた自身、現代の最も進歩的なパリサイ人の代表ではないか。わたしが聖書に照らしてわたしを測る者の話をするとき、それが宗教界の聖書専門家だけを指していると思うのか。神を再び十字架にかけるときの話をするとき、それを宗教界の指導者たちのことだと考えているのか。あなたがた自身が、そうした役を演じるのにもっともふさわしい役者ではないか。わたしが人々の観念に反論するために語る言葉はすべて、ただ宗教界の牧師や長老を揶揄していると思っているのか。あなたがた自身、そうしたことすべてに関与していたのではないか。自分たちはほとんど観念を抱いていないという確信があるのか。あなたがたはただ皆、学んで利口になっただけのことだ。そして理解していないことについては話さず、それについての感情も露わにしないが、あなたがたの中には畏敬や服従の心がまったく存在しない。あなたがたにとっては、研究し、観察し、そして待つことが、今日の最善の実践方法なのだ。あなたがたは学んだ結果、過度に利口になっているが、それが一種の心理的な狡猾さであることを知っているのか。自分のつかの間の利口さ

が、永遠の刑罰を逃れるために役立つと思っているのか。あなたがたは学んだ結果、過度に「賢く」なっているのだ。さらに中には、わたしに次のような質問をする者もいる。「いつか宗教関係者に、『あなたがたの神はなぜ一つも奇跡を行わないのか』と尋ねられたら、どう説明すればよいでしょうか」と。最近では宗教関係者がそうしたことを尋ねるだけでなく、同時にあなたも現在の働きを理解しておらず、多くの観念を抱えすぎている。わたしが宗教関係者と言うとき、誰を指しているかまだわからないのか。わたしが誰に対して聖書を説明しているかわからないのか。神の働きの三段階を説明しているとき、誰に語っているかわからないのか。わたしがそうしたことを語らなかつたら、あなたがたは簡単に確信を得るだろうか。簡単に頭を垂れるだろうか。従来の観念を簡単に捨て去るだろうか。特に、誰に従ったこともないいわゆる「男の中の男」たちは、それほど簡単に従うだろうか。あなたがたは人間性が低水準であり、素質が非常に低く、脳の発達度も低く、神を信仰した経験も浅いが、実際非常に多くの観念を抱いており、生来の本性として誰にも簡単に従わないことは承知している。しかし今日、あなたがたは無力であり従わざるを得ないので、従うことができる。あなたがたは鋼の檻に入れられた虎であり、能力を自由に発揮できないからだ。仮に羽があったとしても、飛ぶのは難しいだろう。あなたがたは祝福を約束されてはいないものの、それでも付き従う意志を持っている。しかしそれはあなたがたの「善人」としての気概を表しているのではなく、ただ完全に打ち倒され、もう為す術がないということなのだ。それはこの働きのすべてが、あなたがたを打ち倒したということだ。もし何かしらできることがあったとすれば、あなたがたは今日ほど従順ではないだろう。なぜならあなたがたは従来、みな荒れ野の野生口バだったからだ。それゆえ現在語られていることは、さまざまな宗教や教派の人々だけに向けられたものではなく、そうした人々の観念に反論するためだけのものでもない。そうではなく、あなたがたの観念に反論するためのものなのだ。

義の裁きはすでに始まっている。神はまだ人間の罪のいけにえの役割を果たすのだろうか。再び人間のために、名医の役を演じるのだろうか。神にはそれ以上の権威がないのだろうか。一群の人々はすでに完全にされ、玉座の前に召し上げられている。神はまだ悪霊を追い払い、病人を癒やすのだろうか。それはあまりに時代遅れではないか。この状態が続くとしたら、証しは可能になるのだろうか。神は一度十字架にかけられたことで、永遠に磔にされているのだろうか。一度悪霊を追い払ったことで、永遠に彼らを追い払い続けることになるのだろうか。それは屈辱と言えるのではないだろうか。この働きの段階が前の段階よりも高度である場合のみ、時代は先へと進み、そして終わりの

日が到来して、この時代が完結する時が来るのだ。そのため真理を追求する者は、ビジョンを見抜くことに留意しなければならない。それが基盤である。ビジョンについてあなたがたと交わるたび、わたしはいつも一部の者が話を聞こうとせず、まばたきして居眠りを始めるのを見かける。他の者が「なぜ話を聞かないのか」と尋ねると、その者たちは「この話はわたしのいのちや現実への入りに役立たない。わたしたちに必要なのは実践の道だ」と答える。そうした者は、わたしが実践の道ではなく働きの話をするといつも、「あなたが働き話を始めるとすぐに眠くなってしまう」と言う。そこでわたしが実践の道について話し出すと、その者はメモを取り始めるが、働きの説明に戻ると、また話を聞かなくなる。あなたがたは自分が今身に付けるべきことを知っているのか。その一面は働きについてのビジョンに関わっており、もう一つの面が実践だ。あなたがたはこの両方の側面を把握する必要がある。いのちの進歩を追求する際にビジョンを持っていなければ、あなたには基盤がないことになる。ただ実践の道だけを身に付けても、ビジョンが皆無で、全体的な経営（救いの）計画の働きを何も理解していなかったら、あなたは何の役にも立たない。ビジョンに関する真理を理解しなければならず、実践に関連する真理については、理解した後に適切な実践の道を見いだす必要がある。言葉に従って実践し、自分の状況に従って入らなければならないのだ。ビジョンは基盤であり、その事実に関心しないなら最後まで付き従うことはできないだろう。経験をそのようなやり方で得ているなら、道に迷うか、躓いて失敗することになるだろう。成功できる可能性はない。大いなるビジョンを基盤として身に付けていない者には失敗しかなく、成功することはできない。あなたは揺るぎなく立つことができないのだ。神を信じるとはどういうことかを知っているのか。神に付き従うとはどういうことかを知っているのか。ビジョンなくして、どのような道を歩もうというのか。現在の働きにおいては、ビジョンを持っていなければ完全にされることはあり得ない。あなたは誰を信じているのか。なぜ神を信じているのか。なぜ神に付き従っているのか。自分の信仰を、一種のゲームのようなものだと思っているのか。自分の命を何かの玩具のように扱っているのか。今日の神は最も偉大なビジョンである。あなたはその神についてどの程度知っているのか。その神をどの程度見たことがあるのか。今日の神を見たことで、信仰の基盤は確かなものになっているのか。そのように、混乱しながらでも付き従っている限り、救いを得られると思っているのか。泥水の中で魚を捕まえることができると思うのか。それはそんなに簡単なことか。今日神が発している言葉について、あなたはいくつの観念を捨て去ったのか。あなたは今日の神のビジョンを持っているのか。今日の神に関するあなたの理解はどこにあるのか。あなたはいつも、ただ神に付き従っていれば、あるい

はただ神を見さえすれば、神を¹⁰⁷得ることができ、誰も自分を排除はできないと考えている。しかし、神に付き従うことがそれほど容易だと考えてはいけない。重要なのは神を知り、神の働きを知ることであり、神のために苦難に耐え、自らの命を捧げ、神に完全にされる意志を持たねばならないのだ。これが、あなたが備えねばならないビジョンである。いつも恵みを得ることばかり考えていても何にもならない。神がただ人間を楽しませ、人間に恵みを与えるためにいると考えてはならない。それは間違いなのだ。自らの命を賭けて神に従い、この世で所有するものすべてを捨てて付き従うことができないなら、その者は絶対に最後まで付き従うことはできない。ビジョンを自分の基盤とする必要があるのだ。いつかその身に不幸が降りかかったら、あなたはどうすべきか。それでも神に付き従うことができるだろうか。最後まで付き従えるかどうかを、軽い気持ちで答えてはならない。まず目を見開いて、今がいつなのか見てみなさい。今あなたがたは神殿の柱のようであるかもしれないが、そのような柱がみな虫に食われて神殿が倒れる時が来る。なぜなら現在、あなたがたには非常に多くのビジョンが欠けているからだ。あなたがたは自分の小さな世界だけに気を配っていて、最も信頼性が高く適切な探求の方法とは何かを知らない。そして現在の働きのビジョンに注意しておらず、それを心に留めてもいない。あなたがたは自分の神が、いつか自分を最も見知らぬ地へ送るということを考えたことがあるだろうか。わたしがいつかあなたがたのすべてを奪い去ったら、自分がどうなるかを想像できるだろうか。その日、あなたがたの活力は今と同じだろうか。あなたがたの信仰は再び現れるだろうか。神に付き従う上で、あなたがたはこの「神」という最大のビジョンを知らねばならない。それが最重要事項なのだ。また、この世の人間たちと縁を切って聖別されることで、自分が必ずしも神の家族になると考えてはならない。現在、被造物の間で働きを行っているのは神自身であり、神が人々の中に現れて自らの働きを行っているのだ。何かの組織運動を展開しているのではない。あなたがたの中で、現在の働きが受肉した天の神の働きであることを理解できる者は一握りにも満たない。その働きの趣旨は、あなたがたを傑出した才能の持ち主にするのではなく、あなたがたが人生の意義を知り、人間の終着点を知り、神と神の全体像を知れるようにすることなのだ。あなたは自分が創造主の掌中にある被造物であることを知らねばならない。何を理解すべきか、何を行うべきか、そしてどのように神に付き従うべきか——こういったことが、あなたの理解すべき真理であり、あなたが見るべきビジョンではないか。

人々はビジョンを備えれば、基盤を持つことになる。それを基盤として実践を行えば

、入りははるかに容易になるだろう。そのように、一度入りのための基盤を持てば、もう疑念を持つことはなくなり、非常に容易に入れるようになる。ビジョンを理解し神の働きを知ることの、この側面は重大であり、必ず身に備えておかねばならない。真理のこの側面を身に備えることなく、実践の道についての語り方だけを知っているとすれば、それは重大な欠陥となる。わたしはあなたがたの多くが、真理のこの側面を強調していないことに気づいた。その話を聞くとともに、ただ言葉や教義だけに耳を傾けているようだ。いつの日か、あなたは大損することになるだろう。現在の言葉のいくつかを、あなたはよく理解しておらず、受け入れてもいない。その場合は忍耐強く探求することで、いつか理解できる日が来るだろう。少しずつ、より多くのビジョンを身に付けていきなさい。霊的な教義を少ししか理解していなかったとしても、ビジョンにまったく注意を払わないよりはましであり、何一つ理解していないよりはよい。そのすべてがあなたの入りに役立ち、あなたの抱えている疑念を払拭することになるだろう。そうした状態は、観念に満たされている状態よりもましだ。そうしたビジョンを基盤としているほうがはるかによい。疑念などは一切なくなり、堂々と自信を持って入ることができるようになるだろう。なぜいつもそんなに戸惑い疑いながら神に付き従う必要があるのか。それは現実から目をそむけているのと同じではないか。堂々と闊歩して神の国に入るのは、どれほど気分がよいことだろう。なぜそれほど疑念に満ちていなければならないのか。あなたはあえて修羅場を潜っているだけではないのか。ヤーウェの働き、イエスの働き、そして現在の働きの段階について一度理解できれば、あなたは基盤を得ることになる。現時点では、それは非常に単純なことに思えるかもしれない。中には次のように言う人もいる。「時が来て聖霊が大いなる働きを始めたら、わたしはこれらのことすべてについて語れるようになる。今わたしがよく理解していないのは、聖霊がまだわたしをそれほど啓いていないからだ」。だがそれはそんなに簡単なことではない。今真理^[c]を受け入れる気があるなら、時が来ればそれを自在に用いられるようになる、などということではないのだ。必ずしもそうなるとは限らない。あなたは今自分が必要なものを十分に備えていて、宗教関係者や偉大な理論家にも問題なく対応できるし、彼らを論破すらできていると思っている。しかし本当にそうできるのだろうか。そんな表面的な経験だけで、どんな認識を語ることができるのか。真理を身に備え、真理の戦いを行い、神の名を証しするということは、あなたが考えているように、神が働いてさえいればすべて成し遂げられるというようなことではないのだ。あなたはそのときまでに何かの質問に詰まるかもしれず、それで言葉を失ってしまうだろう。重要なのは、この働きの段階を明瞭に理解しているかどうか、そしてそれをどの程度実際に知っているかということなの

だ。敵の勢力に勝利することも、宗教の勢力を倒すこともできないなら、あなたは役立たずだということにならないだろうか。あなたは現在の働きを経験し、それを自分の目で見て、自分の耳で聞きはしたものの、それでも最終的に証しに立つことができなかったとしたら、それでもまだ生き続ける度胸があるだろうか。誰に対して顔向けできるのか。今そのことをそんなに簡単だと思っていってはならない。今後の働きは、あなたが想像しているほど単純ではない。真理の戦いはそれほど簡単でも単純でもないのだ。今あなたは備えておく必要があり、真理を身に備えていなければ、時が来て、聖霊が超自然的な働きを行わなかったとき、あなたは途方に暮れることになるだろう。

脚注

- a. 原文に「と考えている」の語句は含まれていない。
- b. 原文に「神を」の語句は含まれていない。
- c. 原文に「真理」の語句は含まれていない。

あなたは道の最終行程をいかに歩むべきか

あなたがたは今、道の最終行程にあり、これは道の中でも極めて重要な部分である。おそらくあなたはかなりの苦難に耐え、多くの働きを行い、多くの道を歩み、多くの説教を聞いてきたであろう。おそらく、今いるところにたどり着くのは容易ではなかったであろう。もしも現在直面している苦難に耐えられず、これまでと同様に継続するならば、完全にされることはできない。この言葉はあなたを怖がらせようとしているのではなく、事実である。ペテロが神の働きを多く経験した後、いくつかの事柄について識見を得、またかなりの分別も得た。ペテロは奉仕の原則について多くのことを理解し、イエスがペテロに託したことに後になって完全に自分を捧げることができた。ペテロが受けた大いなる精錬は、そのほとんどが、ペテロ自身が行なったことに関して、神への借りが大きすぎて決して神に返すことができないであろうと感じたからである。ペテロはまた人間が極めて墮落していることを認識し、そのために良心の呵責を感じた。イエスはペテロに多くのことを語ったが、語られたその時、ペテロはほんの僅かしか理解できず、時には依然として抵抗感や反抗心を抱いた。イエスが十字架に架けられた後、ペテロはついに目覚めのようなものを経験し、強い自責の念を心の内に感じた。最終的には、間違った考えを抱くことを受け入れがたいと感じる点にまで達した。ペテロは自らの状態をよく知っており、また主の聖さもよく知っていた。その結果、主を愛する心がペ

テロの中で一層膨らみ、ペテロは自らのいのちに一層集中するようになった。それが原因でペテロは大いなる苦難を受け、ときにはあたかも重病を患い、まるで死んでしまったかのように見えることもあったが、このような精錬を何度も受けた後、自らをさらに認識するようになり、主への真の愛を育んだ。ペテロはその全生涯を精錬の中で、そしてそれ以上に刑罰の中で過ごしたと言えるであろう。ペテロの経験は他の誰の経験とも異なり、ペテロの愛は、完全にされなかったあらゆる者の愛を超越していた。ペテロが規範に選ばれたのは、ペテロが人生において最大の苦痛を経験し、その経験が最も成功したからである。あなたがたもペテロがしたように道の最終行程を歩むことが本当にできるならば、あなたがたの恵みを奪うことができる被造物は一つとしてない。

ペテロは良心のある人間だったが、ペテロのような人間性があったとしても、最初にイエスに付き従い始めた頃には、反抗的かつ反逆的な考えを多く抱くのは避けられなかった。しかしイエスに付き従っている間に、そうしたことをペテロは真剣に受け止めず、人間とはそういうものだと思っていた。だから、当初ペテロは非難を感じることもなく、取り扱われることもなかった。イエスはペテロの反応を深刻に受け止めることも、気にかけることもなかった。イエスはただ自らが行うべき働きを続けた。イエスはペテロや他の者について決して小言を言うことはなかった。「イエスはペテロたちが抱いた考えを知らなかったのではないだろうか」とあなたは言うかも知れない。そのようなことは一切ない。それはイエスがペテロをよく理解し、実のところイエスはペテロを深く認識していたと言えるほどであるからこそ、ペテロに対して何らの手段も講じなかったと言える。イエスは人類を嫌っていたが、同時に人類を憐れんだ。現在あなたがたのうちにパウロのように抵抗し、また主イエスに対してペテロが当時そうであったように観念を多く抱いている者が多数いないだろうか。言うておくが、あなたは自分の第三感、知覚力を過信しないほうが良い。それは信頼できず、ずっと以前にサタンの墮落にすっかり台無しにされている。自分の知覚力は完璧で欠陥がないと考えているのか。パウロは主イエスを何度も拒んだが、イエスはまったく反応しなかった。イエスは病人を癒やし、悪霊を追い払うことができたが、パウロの中の「悪霊」は追い払えなかったということがあり得ようか。イエスが復活して昇天した後になって初めて、パウロがまだ好き勝手にイエスの弟子たちを捕らえ続けていたとき、イエスがダマスコに向かう道中のパウロの前に現れパウロを打ち倒したのはなぜなのか。主イエスの対応が遅すぎたのであろうか。あるいは、肉にあるあいだは主には権威がなかったからであらうか。あなたがわたしの背後で密かに破壊的で反抗的になっている時、わたしがそれを知らないと思っ

ているのか。あなたが聖霊から得る啓きの断片を用いてわたしに抵抗できると思っているのか。未熟だった頃のペテロは、イエスについて考えを多く抱いたが、それなのになぜペテロは咎められなかったのか。現在、多数の者が咎められることなく様々なことをしており、していることが正しくないと明白に言われてもやはり耳を傾けない。それはひとえに人間の反逆心のせいではないのか。わたしは多くを語ってきたが、あなたは依然として僅かばかりの良心の知覚さえ欠いている。そんなことでどうして道の最終行程を歩き、道が終わるまで歩き続けることができるのか。これが甚大な問題であると感じないのか。

人間は征服された後に、神の指揮に従うことができる。人には自らの信仰と意志があり、それにより神を愛し、神に付き従う。では、道の最終行程をどのようにして歩むことができるのか。苦難を経験する日々には、あらゆる困難に耐えなければならず、苦しむ覚悟がなければならない。このようにしてのみ、道の最終行程を歩むことができる。この行程を歩むのはそれほど容易だと思っているのか。自分が果たすべき役割を知り、自分の素質を向上させ、しかるべき真理を備えなければならない。これは一日、二日の働きではなく、あなたが考えるほど単純ではない。道の最終行程を歩むことは、あなたがどのような信仰と意志を本当にもっているのかにかかっている。あなたの中で聖霊が働いているのがわからなかったり、教会で聖霊の働きを見出せなかったりして、悲観的になり落胆し、前途について絶望に満ちているかもしれない。特に、偉大な過去の闘志は皆、倒れている。これはすべてあなたにとって大打撃ではないのか。こうしたことをどのように受け止めるべきなのか。あなたには信仰があるのか、ないのか。現在の働きを完全に理解しているのか、していないのか。こういうことが、道の最終行程を歩むことに成功できるかどうかを左右することがある。

今あなたがたは道の最終行程にいると言われるのはなぜか。それは、あなたがたは理解すべきことをすべて理解し、人が達成すべきことについてわたしはすべて語ったからである。あなたがたに託されたことについても、わたしはあなたがたにすべて伝えた。したがって、現在あなたがたが歩んでいるのは、わたしが人を導く道の最終区間なのである。わたしはあなたがたが独立して生きる能力を獲得すること、何時でも必ず歩むべき道をもつこと、以前のように自らの素質を向上させ、神の言葉を正しく読み、正しい人間生活を送ることを要求するだけである。わたしは現在このように生活するようにあなたを導いているが、将来わたしが導かなくなっても、あなたはやはりこのように生活できるのか。続けることができるのか。これはペテロの経験である。イエスがペテロを

導いていた時、ペテロには認識がなく、常に子供のようにのんきで、自分の行動に関して真剣ではなかった。イエスが去って初めてペテロは正しい人間生活を開始した。ペテロの有意義な人生は、イエスが去って初めて始まったのである。ペテロは正常な人間性の理知や正常な人間が備えるべきことを幾分かは備えていたが、ペテロの真の経験と追求はイエスが去るまで新たに始まらなかった。あなたがたの現状はどういうものか。現在、このようにわたしはあなたを導いており、あなたはこれを素晴らしいと思っている。あなたに降りかかる環境や試練はないが、これでは実際にあなたの霊的背丈がどのようなものか、あなたが本当に真理を追求する者かどうかを確認することはできない。あなたは自らの本質を理解していると口では言うものの、それは空虚な言葉である。将来、事実があなたに示されて初めて、あなたの認識が確認される。現在、あなたの認識はこのようなものである。「わたしの肉は極めて墮落していること、人間の肉の本質は神に反逆し、反抗することであることを理解している。神の裁きと刑罰を受けることができるのは、神が人を引き上げでいるのである。わたしはこれを今になって理解し、神の愛に報いたい」。しかし、そう言うのは簡単である。後に困難や試練、苦難が起きると、それを経験するのは簡単ではない。あなたがたは毎日このように付き従っているが、未だに自らの経験を続けられない。わたしがあなたがたを見捨て、あなたがたに配慮しなくなったとしたら、事態は悪化するであろう。ほとんどの人が倒れ、恥の象徴である塩の柱となる。このような不測の事態は確かに有り得る。あなたはこのことを懸念し、不安に思っていないのか。ペテロはそうした環境を経験し、そうした苦難を経験したが、依然として揺るぎなく立っていた。もしもあなたがそのような環境にさらされたとしたら、揺るぎなく立っていられるであろうか。イエスが地上にいる間に言ったことや行なった働きがペテロの基礎となり、ペテロはその基礎を起点としてその後の道を歩んだ。あなたがたはこの程度に達することができるのか。これまでに歩んだ道と、理解した真理は、今後あなたが揺るぎなく立つ基礎となり得るのか。それは今後揺るぎなく立つためのビジョンとなり得るのか。あなたがたに真実を伝える。人間が現在理解していることは、すべて教義であると言える。なぜなら、人間には理解していることすべての経験がないからである。現在まで継続できたのは、すべて新たな光に導かれたおかげである。あなたの霊的背丈が一定水準に達したのではなく、わたしの言葉がこの日まであなたを導いてきたからである。あなたに大いなる信仰があるのではなく、わたしの言葉の知恵のために、あなたは今日までずっと付き従う以外には何もできなかったのである。今、わたしが語らず、声を出さなかったとしたら、あなたは継続できず、直ちに前進を止めるであろう。それがあなたがたの実際の霊的背丈ではないのか。あなたがたは自分

がどの側面から入っていくべきなのか、自分に欠落していることをどの側面において埋め合わせるべきかを知らない。あなたがたはいかに有意義な人間の生活を生きるべきか、いかに神の愛に報いるべきか、いかに力強く響き渡るような証しを立てるべきかを理解していない。あなたがたはこのようなことを達成することが全然できない。あなたがたは怠け者で愚かである。あなたがたは何か依存することしかできず、あなたがたが依存しているのは新たな光であり、あなたがたの正面で先導している存在である。あなたが現在まで続けてこられたのは、新たな光と最新の言葉に完全に依存してきたからである。あなたがたは、真理の道の追求に熟達していたペテロや、ヤーウェを敬虔に礼拝し、ヤーウェからどのように試されても、ヤーウェが恵みを授けようと授けまいとヤーウェを神と信じることができたヨブに遠く及ばない。あなたにはそのようにできるのか。あなたがたはどのように征服されたのか。一側面は裁き、刑罰、呪いであり、もう一側面はあなたがたを征服する奥義である。あなたがたは皆口バのようである。わたしが述べることがあなたにとって十分に高尚でなく、奥義がなかったとしたら、あなたがたは征服され得ない。ある人が説教しており、ある期間中、常に同じことを説教したとしたら、あなたがたは皆二年以内に去って、あちこちに拡散するであろう。それ以上続けられないのである。あなたがたには深化の方法がわからず、また真理やいのちの道の追求の仕方も理解していない。あなたがたは何か新しいことを受け取ること、たとえば奥義やビジョンについて聞くことや、神がこれまでどのように働いたか、ペテロの経験、イエスの磔刑の背景などしか理解していない。あなたがたはこのようなことだけ聴くことを望み、聴けば聴くほど活力を得る。あなたがたがそうした話を聴いているのは、単に悲しみや退屈さを追い払うためである。あなたがたの生活はまるごとそうした新奇な物事で維持されている。今日いるところにたどり着いたのは自分の信仰のおかげだと思っているのか。それがあなたがたのわずかな、情けない霊的背丈ではないのか。あなたがたの人格はどこにあるのか。人間性はどこにあるのか。あなたがたには人生をもっているのか。あなたがたは完全にされるための要素をいくつ備えているのか。わたしが述べていることは事実ではないのか。わたしはこのように語り、働くが、あなたがたは依然としてまったく気にかけない。あなたがたは付き従いながら観察している。あなたがたは常に無関心なそぶりをし、鼻づらを取って引き回されている。あなたがたは皆、そのようにして進んできた。あなたがたを現在いるところまで導いてきたのは、刑罰と精錬、懲らしめのみである。いのちに入ることについて説教が幾つかでもあったなら、それだけであなたがたは皆とっくの昔に脱落していたのではないだろうか。あなたがたは一人ひとりが誰よりも気取り屋だが、実際にはあなたがたの中身は腐った水でいっぱい

である。あなたがたが今までもちこたえたのは、奥義を幾つか、人間がこれまで理解していなかったことを幾つか理解するようになったからでしかない。あなたがたには従わない理由がないので、何とか決心して群衆に付いて来ただけである。それはまさにわたしの言葉により実現した結果であって、あなたがたが独自に成し遂げた手柄ではないのは確かである。あなたがたが自慢できることは一つもない。ゆえに、この働きの段階において、あなたがたはおもに言葉を通して現在まで導かれて来た。そうでなかったとしたら、あなたがたのうちの誰が従うことができたであろうか。誰が現在まで持ちこたえられたであろうか。初期の段階から、あなたがたは最初の機会に去って行きたかったが、そうしようとはしなかった。勇気がなかったのである。今日まで、あなたがたは中途半端な気持ちで付き従って来た。

イエスが磔刑となり去って初めて、ペテロは独自の行程を進み、歩むべき道を歩み始めた。ペテロは自分の欠点や弱点を自覚して初めて、準備を開始した。ペテロは自分には神への愛が少なすぎることに、苦難を受ける意志が不足していることに、識見がないことに、理知が不足していることを確認した。ペテロは自分の中にはイエスの旨に則していないものが多くあり、反逆的で反抗的で人間の意志に汚れているものも多くあることを確認した。その後になって初めて、ペテロはあらゆる側面に入っていくことができたのである。ペテロを導いている時、イエスはペテロの状態を暴き、ペテロはそれを認めイエスの言ったことに同意したが、ペテロはそれでも後になるまで真の認識を欠いていた。なぜならその時ペテロには経験も自らの霊的背丈についての認識もなかったからである。つまり、現在、わたしはただ言葉を用いてあなたがたを導いており、あなたがたを短期間で完全にすることは不可能である。また、あなたがたは真理を理解して知ることに制限される。なぜなら人を征服し心の中で確信させることが現在の働きであり、人が征服されて初めて、そのうちの一部の人が完全にされるからである。現在あなたが理解しているビジョンや真理は、あなたの今後における経験の基礎を形成している。今後の苦難において、あなたがたは皆、これらの言葉を実際に経験する。後に試練が訪れ苦難を受ける時、現在あなたが述べる言葉、すなわち、「いかなる苦難、試練、大いなる災いに遭っても、わたしは神を満足させなければならない」という言葉を思うことになる。ペテロの経験を、そしてヨブの経験を考えなさい。現在の言葉はあなたを活気づかせる。このようにしなければあなたの信仰が奮起され得ることはない。当時、ペテロは自分は神の裁きと刑罰を受けるに値しないと云ったが、時が来ればあなたもまた、自分を通して神の義なる性質をあらゆる人に見せる覚悟をすることができる。あなたはすぐに神

の裁きと刑罰を受け入れ、神の裁きと刑罰、呪いはあなたにとっての安楽となる。現在、あなたが真理を備えていないことはまったく受け入れられない。それなしには、今後揺るぎなく立てないだけでなく、現在の働きを経験することもできないかもしれない。もしそうであれば、あなたは淘汰され懲罰の対象となる者の一人となるのではないか。現在あなたに直面している事実はなく、あなたの欠如がどの側面であろうと、わたしはあなたに施してきた。わたしはあらゆる側面から語る。あなたがたはそれほど多くの苦難を受けていない。あなたがたはただ手に入るものを一切の代償を払うことなく手に入れるだけである。また、それだけでなく、あなたがた自身に真の経験や識見がない。ゆえに、あなたがたが理解していることは、真の霊的背丈ではない。あなたがたは理解、知識、見ることに限定されており、収穫といえるほどのものを刈り入れていない。わたしがあなたがたのことに気を留めず、それぞれの自宅で経験させていたならば、あなたがたは遥か昔に大いなる世俗へ急いで戻っていたであろう。あなたがたが今後歩む道は苦難の道であり、その道の現在の行程をよく歩んだならば、後に大きな苦難を経験する時に証しを得ることになる。もし人生の意義を理解し、人生の正しい道を歩み、将来において神があなたをいかに扱おうと、不平を言ったりえり好みしたりせずに神の計画に服従し、神に何も要求しないならば、このようにしてあなたは価値のある人間になる。現在、あなたは苦難に遭遇していないので、あらゆることに区別なく従うことができる。神がどのように導いてもそれでよく、神の計画全てに従うとあなたは言う。神があなたを罰そうと呪おうと、あなたは神を満足させる覚悟である。そう言ったものの、現在あなたが言うことは必ずしもあなたの霊的背丈に相当するとは限らない。現在あなたが行う覚悟のあることが、あなたが最後まで従えると示すことはできない。あなたに大いなる苦難が降りかかる時、あるいは迫害や弾圧、大いなる試練を受ける時、そのような言葉を述べることはできない。その時にそのような理解を得られて、揺るぎなく立つならば、それがあなたの霊的背丈となる。その時、ペテロはどのような様子であったか。ペテロは言った。「主よ、わたしのいのちをあなたのために犠牲にします。あなたがわたしを死なせるならば、わたしは死にます」。これは当時のペテロの祈り方であった。またペテロはこうも言った。「他人があなたを愛さなくとも、わたしは最後まであなたを愛さなければなりません。わたしは常にあなたに付き従います」。当時のペテロはこう述べたが、試練が降りかかった途端にペテロは崩れ落ちて泣いた。あなたがたは皆ペテロが主を三度知らぬと言ったことを知っている。試練が降りかかると、泣いて人間の弱さを見せる者は多い。あなたは自分自身の主人ではない。それにおいて自分を制御できないのである。現在あなたは極めて好調かも知れないが、それは適切な環境があるか

らである。もしそれが明日変わったならば、あなたは臆病さと無能さを晒し、卑しさと無価値さを表す。あなたの「男らしさ」は遥か以前に無に帰し、あなたは自分の仕事を脇へやり退散する時もあるかもしれない。これは、当時理解していたことがあなたの実際の霊的背丈ではなかったことを示す。誰かが真に神を愛しているか、本当に神の計画に服従できるか、神の要求に全力を注ぐことができるか、たとえ自らの生命を犠牲にすることになっても神に忠実なままで、神に最善の献身ができるか否かを見極めるには、その人の実際の霊的背丈を見なければならない。

今この言葉が語られたことをあなたは覚えておかなければならない。後に、あなたはさらに大きな困難と苦難を経験するからである。完全にされることは単純なことでも簡単なことでもない。少なくともヨブのような信仰、あるいはそれ以上の信仰をもっていなければならない。将来の試練はヨブの試練よりも大いなるものであり、その上に長期的な刑罰を受けなければならないことを知るべきである。それは簡明なことであろうか。自分の素質を向上させることができず、理解力が不足し、あまりに何も知らなければ、その時あなたには証しはなく、その代わりにサタンの冗談や玩具となる。現在、ビジョンを持ち続けることができないならば、あなたにはまったく基礎がなく、将来あなたは捨て去られる。道はどの行程も歩み難いので、これを軽くとらえてはならない。今このことを入念に斟酌して準備し、道の最終行程を適切に歩めるようにしなさい。それが将来歩むべき道であり、あらゆる人が歩むべき道である。この認識に注目しないで放置してはならない。わたしがあなたに話すことはすべて息の無駄使いだと考えてはならない。あなたがこれをすべて役立たせる日が来る。わたしの言葉が無駄に語られることはありえない。今は備える時、将来のために道を整える時である。後に歩むべき道を準備し、将来いかに揺るぎなく立つことができるかを心配し、憂慮し、将来の道に向けて周到に準備すべきである。貪欲で怠惰になってはならない。できる限りを尽くして時間を最大限に活用し、必要なことをすべて得られるようにしなければならない。わたしはあなたが理解できるようにあなたにすべてを与えている。あなたがたはわたしがこの三年弱のうちに多くを語り、多くの働きを行なったのを自らの目で見してきた。このように働いてきた理由の一つは人間にはあまりにも欠けていることが多いからであり、もう一つの理由は時間が極めて限られていて、これ以上の遅れは許されないからである。人が証しを立てることができ、用いられるようになる前に、先ず完全な内面の明瞭さを得なければならないとあなたは想像している。しかしそれでは遅すぎるのではないのか。それでは、わたしはどのくらいの間あなたに付き添わなければならないのか。わたしが年老

いるまであなたに付き添わせたいならば、それは不可能であろう。さらに大いなる苦難を経験して、あらゆる人において真の認識が達成される。それが働きの過程である。今日伝えられたビジョンを完全に理解して、真の霊的背丈を得たならば、今後どのような苦難を受けようとも、あなたはそれに圧倒されることはなく、それを耐えしのぐことができる。わたしが働きのこの最終段階を完了し、最後の言葉を述べ終えた時、将来において人は自らの道を歩まなければならない。これは前に述べられた言葉を成就することになる。すなわち聖霊には一人ひとりのための任務と、一人ひとりの中で行なうべき働きがある。今後、各人は聖霊に導かれて歩むべき道を歩む。苦難を受ける時に、誰が他の人たちを世話することができるのか。各個人にはそれぞれの苦難があり、それぞれの霊的背丈がある。ある人の背丈は他の誰の背丈とも異なる。夫は妻の世話をすることはできず、親も子の世話をするとはできない。他人の世話ができる者は誰もいない。互いに世話し支え合うことがまだ可能である現在とは状況は異なる。それはあらゆる種類の人間が暴かれる時となる。すなわち、神が羊飼いを打つと、羊の群れは散らされ、その時あなたがたには真の指導者はいなくなる。人々は分割され、あなたがたが会衆として集うことのできる現在とは異なる。将来には、聖霊の働きがない者は自分の真の姿を現す。夫は妻を裏切り、妻は夫を裏切り、子は親を裏切り、親は子を迫害する。人間の心は到底理解できない。できることは自分のもつものに頼り、道の最終行程をよく歩むことだけである。あなたがたには現在このことが良く見えない。皆、目先の事しか見えないのである。この働きの段階の経験に成功するのは、容易いことではない。

苦難の時は、過度に長引くことはない。確かに一年以上続くことはない。一年続くなれば、働きの次の段階が遅れ、人間の霊的背丈は不十分となるであろう。長すぎるならば、人間には耐えられないであろう。結局のところ、人間の霊的背丈には限界がある。わたしの働きが完了した後、次の段階は人間が歩むべき道を歩むことである。各人が自分の歩むべき道を理解しなければならない。それが苦難の道であり、苦難の過程であり、あなたの神を愛する意志を鍛錬する道でもある。どの真理に入っていくべきか、どの真理を補充すべきか、どのように経験すべきか、どの側面から入っていくべきか、これらのことをすべて理解しなければならない。あなたは今自分の準備を整えなければならない。苦難が降りかかってからでは遅すぎる。各人が自らのいのちのために重荷を背負わなければならない。他人の警告や、他人がいつも耳を引っ張って連れて行ってくれるのを待っていてはならない。わたしは多くを語ったが、あなたは自分がどの真理に入っていくべきか、どの真理を備えるべきかを依然として知らない。それはあなたが神の言葉

を読むことに努力を一切注いでいないことを示している。あなたは自分のいのちのために一切の重荷を負っていないが、どうしてこれが受け入れられようか。あなたは自分が入っていくべきことについて明瞭でなく、理解すべきことを理解しておらず、進むべき将来の道についていまだに途方に暮れている。あなたはまったく無価値ではないのか。あなたは何の役に立つというのか。あなたがたが現在しているのは、自分の道を作り上げ舗装することである。人間が何を達成すべきかを知り、神が人類に示す要求の基準を知らなければならない。すなわち以下のように認識しなければならないのである。「何があっても、わたしはこれほど墮落しているが、神の前でそうした欠点を埋め合わせなければならない。神がわたしに語る前はわからなかったが、今や神がわたしに語ったのでわたしは理解し、わたしは急いで欠陥を正し、正常な人間性を生き、神の心を満たせる姿を生きなければならない。ペテロがしたことと違わぬ行動まではできないにせよ、少なくとも正常な人間性を生きなければならない。そうすることでわたしは神の心を満たすことができる」。

道の最終行程は現在を始点として、今後の苦難が完了するまで続く。この行程は人間の真の霊的背丈が明らかにされる時であり、また人に真の信仰があるか否かが示される時でもある。この行程は過去に人が導かれたいづれの行程よりも困難で険しいため、「道の最終行程」と呼ばれる。実は、これは道の本当の最後の行程ではない。なぜなら、苦難を経験した後にあなたは福音を広める働きを行い、一部の人は用いられる働きを経験するからである。ゆえに、「道の最終行程」は、人間を精錬する苦難と過酷な環境を指してそう呼ばれるだけである。過去に歩まれた道のその区間では、わたしが自らあなたをあの楽しい旅路にそって導き、手を引いてあなたに教え、口移しにあなたに食べ物を与えていた。あなたは刑罰と裁きを何度も受けたが、あなたに関しては数回続けて軽く打たれたに過ぎなかった。もちろん、そのために神への信仰についてのあなたの視点は著しく変化した。あなたの性質も著しく安定し、あなたはわたしについて多少の認識を得ることができた。しかし、わたしが言っているのは、人が道の最終行程を歩んでいたとき払った苦勞の代償はかなり少なかったということである。あなたを現在いるところまで導いてきたのはわたしである。なぜならわたしはあなたに何かをするように要求しないからである。わたしがあなたに要求することは全然高くない。わたしはあなたに手に入るものを取り入れさせるだけである。この期間に、わたしはあなたがたが必要とするものを間断なく与え、不当な要求は一切しなかった。あなたがたは刑罰を繰り返し受けたが、元来のわたしの要求を満たしていない。あなたがたは退散し落胆するが、わ

たしはそれを問題にすることはない。なぜなら、現在はわたしが直接行なう働きの時であり、あなたのわたしへの献身をそれほど深刻にとらえないからである。しかし、道において今からは、わたしは働くことも語ることもなく、その時が来れば、わたしはあなたがたを引き続きそんな怠惰なやり方で継続させることはなくなる。わたしはあなたがたに豊富に教訓を習得させるが、手に入るものをあなたがたに取り入れさせることはなくなる。今日あなたがたがもつ真の霊的背丈を暴かなければならない。あなたがたの長年にわたる努力が最終的に有益であったか否かは、あなたがたが道の最終行程をどのように歩むかに見られることになる。過去にはあなたがたは神を信じることはとても単純なことだと考えていたが、それは神があなたを厳しく扱っていなかったからである。では現在はどうか。あなたがたは神を信じることは単純だと考えているのか。神を信じることは街路で遊んでいる子供達のように幸せで何の懸念もないことだと依然として感じているのであろうか。あなたがたが羊であることは本当であるが、神の恵みに報い、信じる神を完全に得るためには、あなたがたは歩むべき道を歩むことができなければならない。自分を笑いものにしたり、自分をごまかしたりしてはならない。道のこの行程で粘ることができるならば、わたしの福音の働きが全宇宙に広まるかつてない壮大な光景を見ることができる。また、幸運にもわたしと親しい者となって、わたしの働きを宇宙全体に広めるために役割を担うことができる。その時、あなたは大いに歓喜しながら歩むべき道を歩み続ける。未来は限りなく明るいが、現在の主眼は道のこの最終行程をよく歩むことである。あなたは追い求め、これをいかに行うかを準備しなければならない。これが現在あなたが行うべきことである。これは今や緊急事項である。

諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅲ）

（1993年7月から1993年12月まで）

将来の使命にどのように取り組むべきか

神が各時代に表わす性質を、あなたは具体的に、その時代の意義を適切に伝える言葉で示せるだろうか。神による終わりの日の働きを経験しているあなたは、神の義なる性質を詳しく述べられるだろうか。あなたは神の性質について、明瞭かつ正確に証しできるだろうか。あなたの見たこと、経験したことを、義に飢え渴き、あなたが牧してくれるのを待っている哀れで貧しい、宗教熱心な信者たちにどのようにして伝えるだろうか。どのような人物があなたに牧してもらおうと待っているのだろうか。想像できるだろ

うか。あなたは自分の肩にある荷の重さ、委託、責任などを認識しているだろうか。あなたには歴史における自分の使命感がどこかにあるだろうか。あなたは次の時代の良き主人としてどのように奉仕するだろうか。あなたには主人としての強い意識があるだろうか。全ての物の主人についてどのように説明するだろうか。それはまことに世界の全ての生き物と全ての物質の主人であるのだろうか。次の段階の働きの進展のために、あなたはどのような計画を持っているのだろうか。何人の人たちがあなたに羊飼いとってもらいたいと待っているのだろうか。あなたの任務は重い任務か。彼らは貧しく、哀れで、盲目で、途方に暮れており、暗闇の中で泣き叫んでいる。「道はどこにあるのか」と。彼らは、光が流星のように突然降りて来て、長年人々を圧迫してきた暗闇の勢力を追い払ってくれることにどれほど待ちこがれていることか。彼らがどんなに切に望み、日夜どんなに思いこがれているかを、誰が知ることができるだろうか。深く苦しんでいるそれらの人たちは暗闇の地下牢に閉じ込められたまま、光が輝く日でさえも解放される望みはない。彼らが泣かない日はいつ来るだろうか。全く安息を与えられたことのない、これらのもろい霊たちは、まことにそのような不運に苦しんでいる。彼らは長い間非情な縄と凍ったままの歴史によって封印されてきた。誰が彼らの泣き叫ぶ声を聞いたことがあるだろうか。誰がそのみじめな表情を見たことがあるだろうか。神は心でどれほど深く悲しみ、心配しているかを、あなたは考えたことがあるだろうか。神は自身の手で造った罪のない人類がこのような苦しみにあっているのを見ていられるだろうか。結局、人類は毒された不運な者たちである。彼らは今日まで生きながらえたけれども、悪い者によって長い間毒されてきたといったい誰が思っただろうか。あなたは自分もその犠牲者の一人であることを忘れてしまったのか。神へのあなたの愛で、生き残った人々を救うために喜んで尽力しようと思わないのか。自分の血肉のように人類を愛する神に報いるべく、自分の力を残らず捧げようと思わないのか。神に用いられて並外れた人生を生きること、あなたはどのように理解しているのだろうか。あなたには「敬虔で神に仕える人」の意義深い人生を送るための決意と自信を本当に持っているだろうか。

人類の経営の目的

人々が本当に、人生の正しい道と神による人類の経営（救い）の目的とを明確に理解できるなら、個人的な将来や運命を宝として心に抱くことはないだろう。そして豚や犬よりも劣る両親に仕えたいとはもう思わなくなるだろう。人の将来や運命はまさに、ペテロのいわゆる「親」の現代版ではないか。それはまさに人の身内のようなものだ。肉

の終着点や将来とは、一体どんなものなのか。生きながら神を見ることなのか、あるいは死後に魂が神と出会うことなのか。肉は明日患難の巨大な炉に落ちるのか、あるいは大火で尽きることになるのか。人の肉が不幸や苦しみを被るのかどうかに関するこのような問いは、この流れの中であって、頭脳と分別をもつ人がもっとも関心を寄せているものではないのか。（ここで、苦しみを被るとは祝福を受け取ることであり、将来の試練が人の終着点にとって有益であることを意味している。不幸とは堅く立てないことや惑わされること、あるいは不運な状況に見舞われて災害のさなかで命を落とし、その魂に適切な終着点がないことを意味する）。人は健全な理知を持っているが、おそらく人の考えることは、彼らの理知に備わっているべきものと完全には一致していないのだ。それは、人が皆相当混乱していて、物事に盲目に従っているからである。人はみな自分が何に入るべきかを完全に把握していなければならないし、特に患難の時（つまり炉における精錬の間）何に入るべきなのか、そして火の試練の際に何を備えているべきなのか整理しておかねばならない。豚や犬のような、蟻や虫よりも劣る両親（すなわち肉）に、いつも仕えることはやめなさい。それについてくよくよと悩み、必死に考え、頭を悩ませることに何の意味があるのか。肉はあなたに属しておらず、神の手の中にある。神はあなたを管理するだけでなく、サタンをも支配している。（これは肉がもともとサタンに属しているということだ。サタンも神の手中にあるのだから、このようにしか表現できない。そのほうが説得力があるからだ。それは人が完全にサタンの支配下にあるわけではなく、神の手の中にあることを示唆している。）あなたは肉の苦しみの下で生きているが、肉はあなたに属しているだろうか。あなたの支配下にあるだろうか。なぜそのようなことに頭を悩ませるのか。とうの昔に断罪されて呪われ、汚れた霊によって汚された、悪臭を放つ肉のために、執拗に神に嘆願するのはなぜなのか。何の必要があっていつもサタンの仲間をそんなにも大事にするのか。肉があなたの実際の未来や素晴らしい希望、そして人生の真の終着点を、台無しにする可能性があることは心配しないのだろうか。

今日の道はたやすく歩めるものではない。通るのが非常に難しい道だと言えるし、時代を通じてきわめて稀なものだった。しかし、人がその肉のみによって十分に滅ぼさるなどとは誰が考えただろう。今日の働きは確かに、春の雨のごとく尊く、人への神の優しさのごとく価値あるものだ。しかし、人が神の現在の働きの目的を知らず、あるいは人間の本質を理解していなければ、その尊さや価値の高さについてどうして語ることができようか。肉は人間自身には属していないので、その終着点が実際にどこにある

のか、誰もはっきりと見ることはできない。それでも創造主が被造物である人類を元の地位へと戻し、創造時の元の姿を回復させるということをよく知っておく必要がある。神は自らが人に吹き込んだ息を完全に取り戻し、人の骨も肉も取り戻して、すべてを創造主に返すのである。神は人類をすっかり造り変えて新たにし、人ではなく神の所有物である嗣業のすべてを人から取り戻して、二度とそれを人類に引き渡さない。それらはどれ一つとして、もともと人類に属していたものではないからだ。神はそのすべてを取り戻すが、それは不当な強奪ではなく、むしろ天と地を元の状態に戻し、さらに人を造り変え新たにするために行うのだ。これは人にとって理にかなった終着点だが、おそらく人々が想像するような、刑罰の後に肉が再び取り戻されるということではない。神が求めるものは滅んだ後の肉の残骸ではなく、当初神に属していた、人の元来の要素である。それゆえ神は人類を絶滅させたり、人の肉を根絶したりはしない。人の肉はその人の私有財産ではないからだ。それはむしろ、人類を経営する神に付属するものである。どうして神が、自らの「楽しみ」のために人の肉を絶滅させたりできようか。あなたはもう1銭の価値もない自分の肉をすべて真に放棄したのか。もし終わりの日の働きの30%でも理解することができたなら（このたった30%が、今日の聖霊の働きと、終わりの日における神の言葉の働きを理解することを意味する）、あなたは自分の肉、すなわち長年にわたって墮落した肉に、今日のように「仕え」、「孝行」し続けはしないだろう。人類は今やかつてないほど発展しており、今後はもう歴史の車輪のように前進し続けることはないということを、はっきりと理解すべきだ。あなたのカビ臭い肉にはもう長いことハエがたかっているのに、神が今日まで継続させてきた歴史の車輪を逆回転させる力が、どうしてあなたにあるというのか。沈黙したような終わりの日の時計の針を再び動かし、時を刻ませることがどうしてできるというのか。そんなことで、深い霧に覆われたような世界をどうして再び変えられるというのか。あなたの肉は山や川を蘇らせることができるのか。わずかな機能しか持たないあなたの肉が、あなたが憧れてきたような人間の世界を本当に回復できるのか。あなたは本当に、自分の子孫が「人間」になれるよう教育できるのか。これでわかっただろうか。あなたの肉がいったい何に属しているのか。人を救い、完全にし、造り変えようという神の元来の意図は、あなたに美しい故郷を与えたり、人の肉に安息をもたらしたりすることではなく、神の栄光と神の証しのため、将来における人のよりよい楽しみのためであり、そしてすぐに安らぎを得られるようにするためだった。ただしそれはあなたの肉のためではない。人は神の経営の元手であり、人の肉は単なる付属物にすぎないからだ。（人は霊と体の両方を持つものだが、肉はただ腐敗する物体にすぎない。それは肉が経営計画に用いられる一つの道

具であることを意味している。) 神が人を完全にし、完成させ、獲得することは、肉に対して剣と強打の他は何ももたらさず、さらに終わりのない苦しみ、大火、無情な裁き、刑罰、呪い、そして果てしない試練をもたらすのだということを知らねばならない。これが人類を経営する働きの内幕であり真実である。しかし、これらはすべて人の肉に向けられたものであり、敵意の鋒先はすべて容赦なく人の肉に向けられている(人には罪がないからである)。そのすべては神の栄光と証し、そして神の経営のためである。それは神の働きが人類だけのためではなく、計画全体のためでもあり、さらに神が人類を創造した時の元来の旨を実現するためでもあるからだ。そのため、人々が経験することのおそらく90%は苦しみと火の試練を伴い、人の肉が憧れてきた甘く幸せな日々は極めて少ないか皆無である。ましてや神と素晴らしい時を過ごす幸せな瞬間を、肉において楽しめることなどない。肉は汚れており、それゆえ人の肉が見たり味わったりするものは神の刑罰以外の何ものでもなく、人にとっては好ましくないものであり、それはまるで正常な理知を欠いているかのようである。なぜなら神は、人に好まれず、人の背きを許さず、敵を忌み嫌う自らの義なる性質を表わすからである。神は必要なあらゆる手段を用いて自身の性質全体を公然と明らかにし、それによって六千年にわたるサタンとの戦いの働き、すなわち全人類の救いの働きと古きサタンの打倒とを終わらせるのだ。

人の本質と地位

実のところ、イスラエル人は落胆しておらず、過去六千年間、神によって働きが為されるのを見守っていた。それは、わたしが彼らを見捨てなかったからである。むしろ、彼らの先祖が、悪魔の差し出した善悪の知識の木の実を食べて罪を犯したために、わたしを捨てたのだ。善は常にわたしに属し、悪は罪ゆえにわたしを騙す悪人に属す。わたしは人を責めたり、情け容赦なく全滅したり、無慈悲に罰したりすることはしない。悪は元々、人間に属してはいないからだ。従って、イスラエルの民はわたしを公に十字架にかけたけれども、メシアとヤーウェを待ち望み、救い主イエスを切望した彼らは、わたしの約束を忘れてはいない。わたしが彼らを見捨ててはいないからだ。結局のところ、わたしは自らの血をもって人との契約の証としたのだから。この事実は、若者や純粋な人たちの心の中に焼き印のように押された血の契約となった。それは天と地の永遠の共存のようである。わたしは、わたしが贖い、獲得し、わたしによって運命付けられ、選ばれた後は、悪よりわたしを愛するようになった悲しみに満ちた魂を、一度も騙したことはない。従って、彼らはわたしの再臨を切望しており、わたしに会うことを心待ち

にしているのだ。わたしが彼らと結んだ血の契約を取り消したことはないのです、彼らが待ち望んでいるのは驚くことではない。長年道に迷ってきたこの小羊たちを、再びわたしは捕える。わたしはいつでも人間たちを愛してきたからだ。ただ悪の要素が人々の善に混ざり込んでしまっただけである。わたしを愛している哀れな魂、それはわたしも愛した魂なのだが、それらの魂をわたしは獲得するが、わたしを愛したこともなく、敵のように振舞った邪惡な者を、どうしてわたしの家に呼び入れることなどできようか。わたしは人と血の契約を結んだが、わたしを憎み、わたしに敵対し、抵抗し、攻撃し、罵る悪魔とヘビの子孫を、神の国に呼び入れることはしない。わたしがなぜ、そして誰のために働きをしたかを知るべきである。あなたの愛にあるものは善なのか、それとも悪なのか。ダビデやモーセがわたしを知っていたように、あなたもわたしを知っているか。アブラハムがわたしに仕えたように、あなたもわたしに仕えるか。あなたは確かにわたしによって完全なものとされた。しかしあなたは、誰を表わしているか、誰と同じ結果を得るのかを知っておくべきだ。そしてわたしの働きを経験することにより、喜びに満ち、収穫の多い人生を送るのか。それは豊かで実り多いものか。あなたは自らを検証すべきである。あなたは長年わたしのために骨折って働いたが、果たして何か得たものはあるだろうか。変化したことや得たものはあるだろうか。困難の代償として、磔になったペテロや、打たれて倒れた時に光を受けたパウロのようになるだろうか。そのようなことを知るべきである。からし種より小さく、砂粒ほどしかないあなたの命のことを常に話し、考えているわけではない。正直に言うと、わたしが管理するのは人間なのだ。しかし、以前は憎み、後に拾い上げた人の命を、わたしは自分の管理する最も重要な部分とは考えていない。あなたは、自分の以前の地位や、奴隸として誰に仕えていたかをはっきり知るべきである。それだから、わたしは人間の顔をサタンの顔のように原材料として使って人間を管理することはない。人は価値ある物ではないからだ。あなたがたは、わたしのあなたがたに対する当初の態度を思い起こし、当時現実的な意味のなかったわけではないわたしの言葉を思い起こすべきだ。あなたの頭の上の「帽子」は根拠がないわけではないことを知るべきである。あなたがたはみな元々神に属さず、遥か昔に悪魔に捕らえられて悪魔の忠実なしもべとして仕えていたことを知っているだろう。あなたがたは久しくわたしを忘れていた。あなたがたは長い間わたしの家から遠ざかっており、悪魔の手の中にいたからだ。わたしが救うのは、わたしが遥か昔にそのように運命づけた者たちであり、わたしによって贖われた者たちである。しかしあなたがたは、例外として人間の中に置かれた貧しい魂の者たちである。あなたがたはダビデやヤコブの家ではなく異邦人の部族であるモアブに属する者だということを知るべきだ。わた

しはあなたがたと契約は結ばず、あなたがたの中で業を行い、語り、導いたのだ。わたしの血はあなたがたのためには流されなかった。わたしの証のためだけに、わたしは自分の業を行っただ。あなたがたはそれを知らなかったのか。わたしの働きは、あなたがたのために血を流して死んだイエスと本当に同じだろうか。あなたがたのためにそれほどの屈辱に耐える価値は無かった。全く罪の無い神は、これ以上ないほど忌まわしく不快な場所、人が住むのに適さない豚と犬の世界に公然とやって来た。しかし、わたしの父の栄光と永遠の証のために、わたしはこれらのむごい屈辱に耐えたのだ。あなたがたは自分の振る舞いを自覚し、自分が「裕福で権力のある家庭」に生まれた子供ではなく、非常に貧しいサタンの子孫でしかないことを知るべきだ。あなたがたは人間の中にあって創始者ではなく、あなたがたには人間の権利や自由はない。元来、あなたがたは人類からも神の国からも一切の祝福を受けていなかった。なぜなら、あなたがたは人類の底辺におり、わたしはあなたがたの将来について一切考えたことがなかったからだ。だから、今日あなたがたを完全にする信念を持ち合わせることはわたしの元々の計画の一部ではあるものの、これは前例のない業である。なぜなら、あなたがたの地位はあまりにも低く、あなたがたは元々人間として取り分がないからだ。これは人には祝福ではないのか。

わたしが救う魂は、遠い昔にわたしが煉獄から解放し、訪問して選んだ者たちの魂である。なぜなら、彼らはわたしが彼らの間に現れるのを待ち望んだからである。彼らはわたしを愛しており、わたしは血によって打ち立てた契約を彼らの心に刻み込んだ。彼らを愛していたからである。彼らは迷える羊のように何年もわたしを探し続けた。彼らは善良で、それゆえにわたしは彼らを善きイスラエルの民と呼び、愛すべき小さな天使とも呼ぶ。もしわたしがかれらの中にいたならば、そのような屈辱に耐えることはないだろう。それは彼らがわたしを自分の命以上に愛したからであり、万物の中で最も美しい彼らを、わたしが愛したからである。それは、彼らはわたしによって造られ、わたしに属しており、わたしを忘れたことがないからだ。彼らの愛はあなたがたの愛に優っており、あなたがたが自分の命を愛する以上に、彼らは偉大な献身をもってわたしを愛している。小さな白い鳩が空に服従するように彼らはわたしに服従し、しかもその献身の思いはあなたがたのそれ以上である。それは彼らがヤコブの子孫であり、アダムから出た者であり、わたしの選んだ者に属しているからであり、わたしは遥か昔に彼らを愛し、あなたがたを愛した以上に愛したからである。そしてあなたがたはあまりに反抗的だからであり、あなたがたの抵抗はあまりに強く、わたしをあまりに見下し、わたしに対

してあまりに冷たく、わたしに対する愛はあまりに少なく、あまりにわたしを憎んだからである。あなたがたはわたしの働きと行いをひどく軽蔑した。彼らのように、あなたがたがわたしの行いを宝と感じたことは一度もない。むしろあなたがたは、あたかもサタンのように、わたしの行いを充血した不安げな視線とともに軽蔑する。あなたがたの服従の心はどこにあるのか。あなたがたの人格はどこにあるのか。あなたがたの愛はどこにあるのか。あなたがたはいつ自分の愛の要素を示したか。あなたがたはいつわたしの働きを真剣に受け止めたか。わたしを心待ちにし、わたしを待ちわびる間に多くの苦しみを受けた愛らしい天使達を哀れみなさい。わたしは彼らを心から愛したからだ。だが、わたしが今日見るものは、人間らしくない世界で、そのような天使たちとは無関係である。あなたがたの良心はとっくに無感覚になり、無感情になったとは思わないか。あなたがたは自分がわたしと愛らしい天使の再会を阻む屑だとは思わないか。彼らがわたしの再臨を待っていない時があっただろうか。彼らが再びわたしと一緒にいることを待っていない時があっただろうか。わたしと美しい日々を過ごし、共に食事をするのを彼らが待ちわびない時があっただろうか。あなたがたが今日何を行っているのか自覚したことがあるだろうか。世界中で暴れ回り、互いに陰謀を企て、騙し合い、こっそりと、恥じ入ることもなく不誠実に振舞い、真理も知らず、ひねくれて、人を欺き、お世辞を言い、自分は常に正しく他人よりも優れていると思い、自惚れ、山の野生動物のようにどう猛な振る舞いをし、獣の王のように荒っぽい。――これが人間の姿だと言えるのか。あなたがたは無礼で理不尽だ。あなたがたはわたしの言葉を宝としたことはなく、軽蔑的な態度をとった。このようなことで、何かを達成することや、真の人生と美しい希望はどこからくるのか。あなたの過剰な想像力が、本当にあなたを虎の口から救うのか。本当にあなたを燃える炎から救うのか。わたしの働きを真に価値ある宝と見なしにしたら、あなたはここまで墮落していただろうか。あなたの運命はほんとうに変えられないということだろうか。そのような後悔を抱いたまま死にたいと思うのか。

人に固有の身分と人の価値とはいったい何なのか

あなたがたは泥から取り出され、何であれ、くだらない汚物から選ばれたものでできしており、それは不潔で神に嫌われている。あなたがたはサタンに属しており、かつてはサタンに踏みにじられ汚された。だから、あなたがたは泥から取り出されたと言われるのである。また、あなたがたは聖くあるどころか、長い間サタンの策略の対象であった人間ではない物である。これがあなたがたについての最適な評価である。魚や海老のように好ましい捕獲物とは対照的に、あなたがたは自分がもともとよどんだ水や泥の中に

ある不純物であることを知らなければならない。喜びをもたらすようなものは一切あなたがたから出ないからである。単刀直入に言えば、あなたがたは低層社会における最も低劣な獣であり、豚や犬にも劣っている。率直に言えば、このようにあなたがたを呼ぶのは言い過ぎでも誇張でもなく、それは問題を単純に表現する。このように呼ぶのは、あなたがたに敬意を表する方法であるとさえ言うことができる。あなたがたの人としての見識、話し方、振る舞い、生活におけるあらゆる側面——泥の中におけるあなたがたの地位も含め——は、あなたがたの身分が「並外れている」ことを証明するのに十分である。

学習せず、無知なままにいる者たち。彼らは獣ではなかろうか

今日の道を歩む中で、どのような追求が最適だろうか。追求するという行為において、あなたは自身をどのような人間とみなすべきか。それが試練であれ、苦難であれ、あるいは無慈悲な刑罰と呪いであれ、あなたは自分に現在降りかかるすべてのことに対し、どう対処すべきかを知るようにならなければならない。そうしたことに直面したとき、どんな場合もそれらを熟慮すべきである。なぜわたしはこのように言うのか。それは、現在あなたに降りかかっていることが、詰まるところ、幾度となく生じる短期間の試練だからである。おそらくあなたに関する限り、それらはさほど精神的に負担の大きいものではなく、それゆえあなたは物事を自然の成り行きに任せており、こうした試練を自身の進歩を追求するための貴重な財産とみなしていない。あなたは何と軽率なのか。あなたはこの貴重な財産を、あたかも目の前に漂う雲であるかのように捉えるほどであり、幾度となく降り注ぐこれらの苛酷な打撃、あなたにとっては軽く思える束の間の打撃を大事にせず、むしろ冷然と傍観するだけで、深く心に刻んでおらず、単なる偶然の打撃としてしか扱わない。あなたはあまりにも傲慢である。幾度となく襲いかかる、嵐にも似たこれらの荒々しい攻撃に対し、あなたはそれを平然と無視するだけで、時には冷笑を浮かべてまったく無関心な表情を見せることさえある。と言うのも、自分がなぜこのような「不運」に何度も苦しむのかについて、胸の内で一度も考えたことがないからである。わたしが人間に対してひどく不公平だということなのか。わたしはあなたのあら探しを自分の仕事にしているのか。あなたの心構えに関する問題は、わたしが言い表したほど深刻ではないかもしれないが、あなたは表面的な平静さを通じて、随分前から自分の内なる世界の完全な像を描いてきた。言うまでもなく、あなたの心の奥

底に隠されているのは無分別な悪口雑言と、他人がかろうじて気づくほどのかすかな悲哀の痕跡だけである。なぜなら、あなたはそのような試練を受けてきたのがあまりにも不当なことだと感じており、悪態をつくからである。またそうした試練によってこの世の惨めさを感じ、憂鬱な気持ちでいっぱいになっているからである。これらの繰り返される打撃や懲らしめの行為を最善の加護とみなすのではなく、天からもたらされる無意味な厄介事、あるいは自分にふさわしい天罰とみなしている。あなたはあまりにも無知である。あなたは素晴らしい時間を無情にも暗闇に閉じ込め、素晴らしい試練と懲らしめの行為を敵からの攻撃とみなすことが度々ある。自分の環境にどう適応すべきか知らず、ましてや進んで知ろうともしない。と言うのも、あなたは繰り返されるこの刑罰、あなたにとって残酷なこの刑罰から何も得ようとしなないからである。探そうとも探ろうともせず、ただ自分の運命を甘受しつつ流れに身を任せている。あなたにとって野蛮な懲らしめと思える行為によって、あなたの心が変わることもなければ、心を奪われたこともない。それどころか、あなたの心は傷ついた。あなたはこの「残酷な刑罰」をこの人生における敵とみなすだけなので、何も得ていない。あなたはあまりにも独り善がりである。自分の卑劣さのためにこのような試練を経験しているとはほとんど考えない。むしろ、自分は不運だと考えており、さらには、わたしがいつも自分のあら探しをしていると言う。物事がこの段階に至った今、あなたはわたしの言動について実際にどれほど知っているのか。自分は生まれながらの天才で、天より少し低いものの、地よりは無限に高いなどと考えないことだ。あなたは他の人ほど賢くないどころか、理知ある地上の誰にも増して、ほれぼれするほど愚かだとさえ言えるだろう。なぜなら、あなたは自分を過大評価しており、わたしの行動の些細な点まで見抜けるとでもいうように、いまだかつて劣等感をもったことなどないからだ。しかし実際には、あなたは根本的に理知を欠いた人である。なぜなら、わたしが何を行なうつもりなのかをまったく知らず、ましてやわたしが現在していることに気づいていないからだ。だからこそわたしは言う。あなたは懸命に働く年老いた農夫にも匹敵しない。人生というものを一切自覚していないにもかかわらず、天の祝福に頼り切って土地を耕している、そのような農夫にも匹敵しないのだ。自分自身の人生について再考することがなく、誉れとは何であるか一切知らず、ましてや自己認識など持ち合わせていない。あなたはあまりに「立派」である。わたしが本当に心配しているのは、あなたのような紳士気取りのめかし屋や上品なお嬢様のことである。あなたはさらに大きな嵐の猛攻撃にどう耐えられるのか。これらのめかし屋は自分の置かれている苦境にまったく無関心である。些細なことに思えるので、そのようなことは眼中になく、否定的に感じることもなければ、自分自身を卑しい存在

とみなしてもいい。それどころか、以前のように扇をあおぎながら、街路をあてもなくぶらぶらと歩いている。何も学ばず無知なままでいるこれらの「注目すべき人々」は、なぜわたしがこのようなことを彼らに言うのか見当もつかない。彼らの顔はいかにも迷惑げで、さっと自分を調べるだけであり、その後も悪しきやり方を改めない。彼らは一旦わたしのもとを去ると、この世界で再び狂ったように振る舞い始め、またもや威張って人を騙す。あなたの表情たるや、なんと目まぐるしく変化することか。そうしてあなたは、またしてもわたしを欺こうとしている。なんと厚かましいことか。あの上品な若いお嬢様方はさらに滑稽だ。彼女たちはわたしの発する切迫した言葉を聞き、自分の置かれた苦境に気づいて不意に涙を流し、前後に身もだえし、注目を集めようとしているように見える。なんとおぞましいことか。彼女たちは自分の霊的背丈に気づいてベッドに倒れ込み、泣き止むことなくベッドに横たわり、まるでほとんど息絶えそうだ。これらの言葉を通じ、自分自身の子供っぽさと卑しさを突きつけられた彼女たちは、その後、否定的な考えに押しつぶされ、その瞳から光が消え、わたしに不満を抱くことも、わたしを嫌うこともなく、消極性の中でまったく動かなくなり、やはり学ぶことをせずに無知なままでいる。わたしのもとを去った後、彼女たちは浮かれ騒ぎ、遊び戯れ、その轟くような笑い声はまさしく「プリンセス・シルバーベル」だ。なんとはかなく、自己愛に欠けていることか。あなたがたは全員、人間の欠陥品だ。なんと人間性に欠けた人たちなのか。自分の愛し方も知らなければ、自分の守り方も知らず、理知もなく、真の道を探し求めることもなく、真の光を愛することもなく、さらには、自分自身を大事にする方法さえ知らない。わたしがあなたがたに何度も与えた教えについて言えば、あなたがたは随分前にそれらを心の奥底に押しやり、暇つぶしの玩具として扱ってさえいる。そのすべてを、自分だけの「お守り」とみなしているのだ。サタンに非難されると祈り、否定的になると深い眠りに落ち、幸せな時は無闇に走り回る。わたしに叱責されると馬鹿丁寧にお辞儀を繰り返し、わたしのもとを離れるや否や意地悪く高笑いする。自分は他の誰より優れているとあなたは思っているが、自分が最も傲慢だと思ったことなど一度もなく、言葉では言い表せないほど高慢で、独り善がり、傲慢なだけである。何も学ばず無知なままでいる、そうした「若い紳士」や「若い淑女」、「旦那さま」や「奥さま」が、どうしてわたしの言葉を大切な宝物とみなせようか。再びあなたに問う。これほど長期間にわたり、あなたはわたしの言葉とわたしの働きから一体何を学んできたのか。ますます立派な騙しの技能を身につけたということなのか。それとも、あなたの肉はもっと洗練されたのか。わたしに対するあなたの態度からさらに敬意が失われたのか。あなたに率直に言う。かつてはネズミの勇気しかなかったあなたがますます

大胆になったのは、わたしが行なってきたこのすべての働きのためである。わたしに対して感じるあなたの畏怖は日に日に薄れていく。なぜなら、わたしがあまりに慈悲深く、暴力に頼ってあなたの肉を制裁したことなど一度もないからである。あなたの見るところ、わたしはおそらく厳しい言葉を語っているだけで、むしろあなたに笑顔を向けることのほうが多く、面と向かってあなたを咎めることはほとんどない。さらに、わたしは常にあなたの弱さを許しており、まるで蛇が優しい農夫を扱うかのごとく、あなたがわたしを扱っているのはひとえにそのためである。人間の観察力という技能もしくは眼識の甚だしさに、わたしはどれだけ感服していることか。一つの真実を言わせてもらおう。今日、あなたが畏敬の念を抱いているかどうかは重要ではないのだ。それについて、わたしは不安でもなければ心配もしていない。しかし、あなたにこのことも伝えなければならない。何一つ学ばず無知なままでいるこの「才人」は、己の自己讃美とくだらない巧妙さのせいで、最後は打ちのめされる。苦しみ、罰せられるのはあなたである。わたしは、地獄で苦しみ続けるあなたに付き添うほど愚かではない。なぜなら、わたしはあなたと同類ではないからだ。あなたはわたしに呪われてきた被造物でありながら、わたしから教わり、わたしに救われる。そしてあなたの中に、わたしが手放したくないであろうものは何もない。わたしがいつ自分の働きを行なおうとも、わたしが人や出来事や物に縛られることは決してない。人類に対するわたしの態度や見方はいつも同じだった。わたしはあなたのことを特によく思っているわけではない。なぜなら、あなたはわたしの経営の添え物であり、他のもの以上に特別なわけでは決してないからだ。これはわたしからあなたへの忠告である。あなたは神の創造物でしかないということを、如何なる時も覚えておきなさい。わたしと共に存在してもよいが、身の程を知るべきであり、自分をあまり高く評価しないことである。たとえわたしがあなたを叱責せず、あるいは、わたしがあなたを取り扱わず、笑顔であなたに挨拶していようとも、あなたがわたしと同類だと証明されるわけではない。自分は真理を追い求める者であって、真理そのものではないということを、あなたは心得ておくべきである。あなたはわたしの言葉に応じて、いつ何時でも変わる準備をしていなければならない。あなたはこのことから逃れることができない。この素晴らしい時間、この貴重な機会に何かを学ぶよう、あなたに忠告する。わたしを騙そうとしてはいけない。わたしを欺こうとするあなたのお世辞は要らない。あなたは、わたしのためでは決してなく、常に自分自身のためにわたしを求めているのだ。

中国の選民はイスラエルのどの部族も代表できない

ダビデの家はもともとヤーウェの約束と遺産を受け取った一家である。ダビデの家は本来イスラエルの部族の一つで、選民に属していた。当時、ヤーウェはイスラエル人のために律法を定め、ダビデの家に属するすべてのユダヤ人、すなわちその家に生まれた者はみな神からの遺産を受け取ると定めた。彼らは百倍を受け取り、長子の地位を得る者たちとなったのである。当時、彼らはすべてのイスラエル人の中で最上層に属し、イスラエルのどの家族よりも高い地位についており、祭司の衣と冠を身に着け、神殿で直接ヤーウェに仕えていた。やがて、神は彼らを忠実な聖なるしもべと呼び、イスラエルの全部族からも尊敬されていた。そのため当時、彼らはみな主と尊称されていた。このすべてが、律法の時代におけるヤーウェの働きだった。今日でも、彼らは神殿でヤーウェにこのような奉仕を行っており、したがって永遠に、ヤーウェが玉座につけた王なのである。彼らから冠を奪える者はおらず、彼らの奉仕を変えられる者もない。彼らは初めからダビデの家に属するからである。これこそヤーウェが彼らに授けたものである。あなたがたが初めからダビデの家に属していないのは、あなたがたがイスラエルの民でなく、イスラエルの外にある異邦の家族に属しているからである。そしてさらに、あなたがたの本性はヤーウェを崇拝するものでなく、ヤーウェに抵抗するものであり、ゆえにあなたがたの地位は、そもそもダビデの家の人の地位と違うのであって、あなたがたはわたしの遺産を受け継ぐ者ではなく、ましてや百倍を受け取る者などではないのである。

当時、イスラエルは様々な家族や部族に分かれていたが、みな選民だった。しかし、イスラエルが他の国と異なるのは、人々が部族ごとに区別され、ヤーウェの前での地位、および各人に属する土地も同様だという点にある。イスラエル以外の諸国で、自分はダビデの家、ヤコブの家、あるいはモーセの家に属するなど、軽々しく主張することは誰にもできない。そのような発言は事実と反する。イスラエルの部族と他の国々を安易に取り違えてはならない。人々はよくダビデ、アブラハム、エサウなどの名を誤って使用したり、「我々は今や神を受け入れたのだから、ヤコブの家の者である」などと言ったりする。このような発言は、人間による根拠のない推論でしかなく、ヤーウェから直接出たものでも、わたし自身の考えに由来するものでもない。人間のたわ言以外の何物でもないのだ。話をでっち上げる演説家のように、人々は何の根拠もないまま、自分たちのことをダビデの子孫やヤコブの家の一員だと考え、そうなるだけの価値が自分にはあると信じている。ダビデの家の者は遥か昔ヤーウェによって定められ、ダビデが自ら王位に就いたのではないことを、人々は知らないのか。とは言え、自分はダビデの家

の子孫だと恥知らずにも主張する者は数多い。人は何と無知なことか。イスラエルに関する事柄は、異邦人とは無関係だというのが真実である。両者はまったく異なる、完全に無関係な事柄なのだ。イスラエルに関する事柄はイスラエルの人々に対してだけ語れるのであって、異邦人とは関係ない。また異邦人のあいだで現在なされている働きも、同じくイスラエルの人々とは無関係である。わたしが今述べていることによって、異邦人に関して言われることが決定されるのであって、イスラエルでなされた働きを、異邦人のあいだにおける働きの「予表」と捉えることはできない。それでは神があまりに守旧的だということにならないか。その働きが異邦人のあいだに広まりだして初めて、異邦人について述べられること、あるいは彼らの結末が明らかになる。したがって、人々が以前のように、「我々はダビデの末裔だ」とか、「イエスはダビデの子だ」などと言うのは、なおさら荒唐無稽なことなのである。わたしの働きは区分化されている。わたしは「鹿を馬と呼ぶ」ようなことはせず、むしろわたしの働きはその順序に沿って分けられているのである。

祝福をあなたがたはいかに理解しているか

この時代に生まれた人はサタンや汚らしい悪霊に墮落させられているが、その墮落はまた人に最高の救済をもたらした。その救済はヨブの家畜の山々や平野や莫大な富よりも大きく、ヨブが試練の後に受けたヤーウェを仰ぎ見るという祝福よりも大きい。ヨブは死の試練を受けて初めてつむじ風の中でヤーウェが話すのを聞き、ヤーウェの声を聞いた。しかし、ヨブはヤーウェの顔を見ず、ヤーウェの性質を知らなかった。ヨブが得たものは、肉体的な喜びをもたらす物質的な富と周辺のすべての町にいる誰よりも美しい子供たちであり、また天上の天使の庇護であった。ヨブはついにヤーウェを見ることはなかった。義なる者と呼ばれたものの、ヤーウェの性質を知ることもなかった。現代人の物質的な喜びは、言うならば一時的に乏しく、或いは外界の環境は敵対的であるが、わたしはわたしの性質を示す。それはわたしが太古から人間に明らかにしたことがなく、つねに秘密であったものである。わたしはまた、すべての人々の中でももっとも卑しいが、わたしが最大の救済を与えた人々に何代にもわたる奥義を示す。しかも、わたしがこれらを明らかにするのは、これが初めてである。わたしはこのような働きをこれまでにしたことがない。あなたがたはヨブよりはるかに劣っているが、あなたがたが得たものや見たものはヨブをはるかにしのぐ。あなたがたはありとあらゆる苦しみを受け、ありとあらゆる苦痛を経験したが、その苦しみはヨブの試練とは似ても似つかない。それは人がその反抗、抵抗のせいで、そしてわたしの義なる性質ゆえに受ける審判で

あり懲罰である。それは義なる裁きであり刑罰であり呪いである。ヨブは、ヤーウェの大いなる愛とやさしさを受けたイスラエル人の中の義なる人であった。彼は何ら邪惡な行為をせず、ヤーウェに抵抗しなかった。むしろ彼は誠実にヤーウェに献身した。ヨブはその義ゆえに試練を受けたのであり、燃えさかる試練にかけられたのは、彼がヤーウェの誠実なしもべであったからである。現代人はその汚れと不義ゆえにわたしの裁きと呪いに委ねられる。ヨブが家畜や財産や召使いや子どもたちや彼にとって大切なものすべてを失ったときに味わったことに比べれば、現代人の苦しみなど何でもないとは言え、彼らが苦しんでいるのは激烈な精錬であり、灼熱である。そして、それがヨブが経験したことよりも深刻なのは、そのような試練は人が弱いからといって軽減されたり取り除かれたりしないことである。その代わりに試練は長く続き、人の生涯最期の日まで続く。これが罰であり、裁きであり、呪いである。それは、情け容赦のない灼熱であり、さらには人類の当然の「遺産」である。それは人々が受けるに足るものであり、そこでわたしの義なる性質が表現される場所である。これは知られた事実である。にもかかわらず、人々が獲得したものは彼らが今日堪えている苦しみを大きく凌駕する。あなたがたが堪えている苦しみは、あなたがたの愚かさゆえに生じた挫折に過ぎず、あなたがたが獲得したものは苦しみよりも百倍も大きい。旧約聖書のイスラエルの律法によれば、わたしに抵抗した者、公けにわたしを裁いた者、わたしの道に従わずに堂々とわたしに冒瀆的な犠牲を捧げた者はすべて必ずや神殿の火によって破壊されたり、選ばれた者に石打の刑にされ、その一族の子孫や直属の血縁者でさえもわたしの呪いに苦しむ。来世においても彼らは自由になることはなく、わたしの奴隷の奴隷になる。わたしは彼らを異邦人の間に追放し、彼らは母国に帰ることはできない。行動や振る舞いにもとづいて現代人が堪える苦しみは、イスラエル人が苦しんだ罰ほど深刻ではない。あなたがたが現在苦しんでいるものが報いであると言うことは、正当な理由がないわけではない。なぜならあなたがたは実際一線を越えたからである。もしいにしえのイスラエルにいたとしたら、あなたがたは永遠の罪人になっていただろうし、はるか昔にイスラエル人により切り刻まれ、ヤーウェの神殿にて天からに火に焼かれていたであろう。あなたがたが今獲得したものは何か。あなたがたは何を受け取り、何を享受したのか。わたしはあなたがたの中にわたしの義なる性質を明らかにしたが、さらに重要なことは、わたしが人類をあがなうためのわたしの忍耐力を明らかにしたということである。わたしがあなたがたのうちで行なった働きは、忍耐力のわざであると言えるかもしれない。それはわたしの経営（救い）のためになされたのであり、さらに人類が享受するようになされたのである。

ヤーウェの試練を経験したものの、ヨブはヤーウェを崇拜した義なる人にすぎなかった。あのような試練を受けたにもかかわらず、ヨブはヤーウェについて不満を言わず、神との出会いをいつくしんだ。現代人はヤーウェの臨在を大切にしないだけでなく、ヤーウェの出現を拒否し、嫌悪し、不平を言い、あざける。あなたがたは多少は何かを得たのではなかったのか。あなたがたの苦しみは本当にそれほど大きかったのか。あなたがたはマリアやヤコブよりも幸運ではなかったのか。そして、あなたがたの抵抗は本当にそれほど些末であったのか。わたしがあなたがたに要求したことや依頼したことが、あまりに偉大で過多であったとでもいうのか。わたしの怒りはわたしに抵抗したイスラエル人に対して放たれただけであり、あなたがたに直接向けられてはいなかった。あなたがたが獲得したのは単にわたしの情け容赦のない試練と暴露であるとともに、執拗で熱烈な精錬でしかなかった。それにもかかわらず、人はわたしに抵抗し、わたしを否定し続け、そこには僅かの服従もない。わたしから離れ、わたしを否定する人までいる。そのような人はモーセに対立したコラとダタンの群れに劣る。人々の心はあまりに頑なで、彼らの性質はあまりに強情である。彼らは決してこれまでのやり方を変えない。言っておくが、彼らは白昼の中、娼婦のようにさらけだされ、わたしの言葉は「彼らにとって耳障り」になるほど厳しいものであり、人々の本性を日の光にさらす。それでいながら、彼らはうなだれて涙を少し流し、悲しい気持ちを無理にしぼり出すだけである。いったんこれが過ぎれば、彼らは山中の野獣の王のように獰猛で、ほんのわずかな自覚もない。このような性質の人が自分たちがヨブよりも百倍も幸運であったとどうして知ることができようか。自分たちが享受しているのは祝福であり、それは時代を通じてかつて見られなかったようなものであり、誰もかつて享受したことがないものであることにどうして気づくことができようか。人の良心がどうしてこのような祝福を、罰を含む祝福を感じ取ることができようか。率直に言うならば、わたしがあなたがたに要求していることは、あなたがたがわたしの働きの模範、わたしの全性質とわたしの行為のすべての証人になれるようにするため、あなたがたがサタンの苦悩から解放されるようにするためでしかない。しかし人はいつもわたしの働きを不快に感じ、意図的にわたしの働きに敵対する。そのような人がどうしてわたしにイスラエルの律法を復活させ、わたしがイスラエルにもたらした怒りを彼らにもたらすようにあおらずにいられようか。あなたがたの中にはわたしに「従順で服従的」な人が多くいるが、コラの群れの同類はさらに多い。ひとたび栄光を完全に獲得すれば、わたしは天の火を用いて彼らを燃やして灰にする。心得ておきなさい。わたしはもはや言葉で人を懲らしめず、むしろ、イスラエルの働きを行う前に、わたしに抵抗しわたしがはるか昔に抹殺した「コラの群れ」を完

全に焼却する。人類にはもはやわたしを享受する機会はない。それどころか、人類にはわたしの激怒と天からの炎しか見えなくなる。わたしはあらゆる人のさまざまな結末を明らかにし、人をみな範疇に分ける。わたしは人、彼らのあらゆる反抗的な行為を書き留めてからわたしの働きを終える。人の結末が地上におけるわたしの評決とともに、人のわたしへの態度により決定されるようにである。そのときが来ると結末を変えることのできるものは何もない。人に自分の結末を自ら明らかにさせよう。そしてわたしは人々の結末を父なる神に手渡すのである。

神に対するあなたの認識はどのようなものか

人々は長いこと神の存在を信じてきたが、ほとんどの人は「神」という言葉を理解していない。単にぼんやりと後について行くだけである。彼らは一体なぜ神を信じるべきなのか、あるいは一体神とは何かについてまったくわかっていない。人々が神を信じ、従うことだけは知っていても、神が何かを知らなければ、そしてまた神を理解していなければ、これは世界最大の笑い話ではないだろうか。たとえ人々が今までに多くの天の奥義を目撃しており、これまで決して把握していなかったたくさんの深遠な知識について聞いていたとしても、最も初歩的だが、いまだ熟慮されていない多くの真理に関しては何も知らない。「わたしたちは何年にもわたり神を信じてきた。神が何かわからないわけがない。わたしたちを見くびっているのではないか」と一部の人は言うだろう。しかし実際には、今日誰もがわたしに従っているものの、誰もこの現在の働きを何も理解していない。もっとも明白で簡単な問題ですら理解できず、まして神に関する問題のような極めて複雑な問題は言うまでもない。自分が払いのけて、見つけたすことのできないこれらの問題こそが、もっとも理解すべき問題であることを知るべきである。なぜならあなたは群衆に従うことしか知らず、自分が身に着けておくべきものに注意を払わず、配慮しないからである。なぜ神を信仰すべきか、本当にわかっているのか。神が何であるか、本当にわかっているのか。人が何であるか、本当にわかっているのか。神を信仰している人としてこれらのことを理解できなければ、神の信者としての尊厳を失わないだろうか。今日のわたしの働きは以下の通りである。人々に自分自身の本質を理解させること、わたしの行うすべてを理解させること、および神の本当の顔を知らせること。これはわたしの経営（救いの）計画の最終行動、わたしの働きの最後の段階である。だからわたしは前もって人生の奥義のすべてをあなたがたに語り、あなたがたのすべてがそれらをわたしから受け入れることができるようにしているのである。これは最後の時代の働きなので、わたしはあなたがたがこれまで決して会得することのなかった

のちの真理のすべてを語らなければならない。あなたがたはあまりにも不完全で、あまりにも準備不足なので、それらを吸収することやそれらに耐えることができなくても、わたしは語らなければならない。わたしはわたしの働きを完了し、わたしのすべての必要な働きを終わらせ、わたしがあなたがたに行くよう任せていることを十分に知らせて、暗闇が降りてきたとき、あなたがたがふたたび迷って、邪悪な者の策略にだまされないようにしたい。あなたがたの理解力の及ばない道、あなたがたが理解しない事柄がたくさんある。あなたがたはそれほど無知なのだ。わたしはあなたがたの霊的背丈と欠点をよく知っている。従って、たとえあなたがたが吸収できないであろう言葉がたくさんあっても、わたしはあなたがたがこれまで決して会得しなかったこれらの真理のすべてをあなたがたに話したい。あなたがたの現在の霊的背丈では、わたしの証人になれるかどうか心配し続けているからである。あなたがたをみくびっているわけではない。あなたがたは皆、わたしの正式な訓練を受けていない獣であり、あなたがたの中にどのくらい栄光があるかは実に疑わしい。あなたがたに働きかけるためにわたしは多くの精力を注ぎ込んできたが、あなたがたに積極的な要素は事実上存在せず、消極的な要素は指折り数えることができ、サタンに恥をかかせる証しとしてしか役立たない。それ以外にあなたがたのなかにあるもののほとんどすべてはサタンの毒である。わたしにはあなたがたが救いようもないように見える。目下のところ、わたしはあなたがたのさまざまな表現や態度を見て、ようやくあなたがたの本当の霊的背丈を知った。だからわたしはあなたがたのことを心配し続けている。思うままに暮らすよう放置されたら、人は本当に最終的には今日よりも良い、あるいは今日と同じくらいの状態でいられるだろうか。あなたがたは自分の子供じみた霊的背丈が心配ではないのか。あなたがたは本当にイスラエルの選民のようになり、どのようなときでもわたしに、わたしだけに忠実になることができるのか。あなたがたが今見せているのは、親の目の届かないところにいる子供のいたずら好きな特質ではなく、主人のむちの届かないところで動物に沸き起こる獣性である。あなたがたは自分の本性を知るべきで、それはあなたがたすべてが共有している弱点、共通の病気でもある。したがって、今日わたしからあなたがたへの唯一の忠告は、わたしの証人になることである。いかなる事情があろうとも、古い病気を再発させてはいけない。もっとも重要なのは、証しをすることである。それがわたしの働きの核心である。あなたがたは、マリアが夢に現れたヤーウェの告知を受け入れ、信じて、従ったように、わたしの言葉を受け入れるべきである。これだけが精神的に純潔であるとみなされる。なぜならあなたがたはわたしの言葉を一番多く聞く人々であり、わたしによってもっとも祝福される人々だからである。わたしはあなたがたにわたしの貴重な所有物

すべてを与え、すっかり何もかもあなたがたに授けよう。しかしながら、あなたがたの地位とイスラエルの人々の地位は非常に異なり、完全に天と地ほどもかけ離れている。それにもかかわらず、彼らに比べると、あなたがたはずっと多くのものを受け取っている。彼らが必死にわたしの出現を待っている一方、あなたがたはわたしと共に愉快的日々を過ごし、わたしの富を共有している。比較すると、何があなたがたに、不平を言い、わたしと口喧嘩し、わたしの所有物の分け前を要求する権利を与えているのか。あなたがたは十分受け取っていないのか。わたしは多くを与えているが、あなたがたがお返しにわたしにくれるものは悲痛な悲しみと不安、それに手に負えない恨みと不満である。あなたがたはあまりにも不快だが、同時に哀れでもある。よってわたしは憤りをすっかり呑み込んで、あなたがたに繰り返し反対の声を上げるしかない。この数千年にわたる働きにおいて、これまでわたしが人類にまったく異論を唱えなかったのは、人類の発展の歴史上で、あなたがたの間の偽りだけがもっとも有名であることに気づいたからである。偽りは、古代の有名な先祖によってあなたがたに残された貴重な継承物のようなものである。わたしはそれらの人間以下の豚と犬をどれだけ憎むことか。あなたがたはあまりにも良心に欠けている。あなたがたの性格はあまりにも卑劣である。あなたがたの心はあまりにも無情である。もしわたしがこれらのわたしの言葉、わたしのこの働きをイスラエル人にもたらしたら、わたしはずっと以前に栄光を獲得していただろう。しかし、あなたがたの間ではそうはいかない。あなたがたの間には、残酷な無視、あなたがたの冷たい態度、あなたがたの言い訳しかない。あなたがたはあまりにも感情がなく、あまりにも価値がない。

あなたがたはわたしの働きに対してあなたがたのすべてを提供するべきである。あなたがたはわたしのためになる働きをするべきである。わたしはあなたがたにとって曖昧なことすべてについてあなたがたに話し、あなたがたに欠けているすべてをわたしから獲得できるようにしたい。たとえあなたがたの欠点が数えきれないほど多いとしても、わたしはあなたがたに対してすべき働きを行い続けることをいとわず、あなたがたにわたしの最後の慈悲を与え、あなたがたがわたしから利益を得て、あなたがたには欠けていて、世界がこれまでに見たことのない栄光を獲得できるようにしたい。わたしは長年にわたり働いてきたが、人々のうちでわたしを知るにいたったものは誰もいない。わたしはほかの誰にも話したことのない秘密をあなたがたに話したい。

人々の間で、わたしは見ることのできない霊、決して接触することのできない霊であった。地上におけるわたしの三段階の働き（天地創造、贖い、破壊）のために、わたし

は異なる時代に人々の真ただ中に現れ（決して公然とではない）、彼らの間でわたしの働きを行う。わたしが最初に彼らの中に出現したのは贖いの時代であった。もちろんわたしはユダヤ民族の中に出現した。従って神が地上に来るのを初めて見たのはユダヤ人であった。わたしがこの働きを直接行なった理由は、わたしの贖いの働きの中で罪の捧げものとして、人となったわたしの肉体を使いたかったからである。そこでわたしを最初に見たのは恵みの時代のユダヤ人たちであった。わたしが肉体で働きを行なったのはそれが初めてであった。神の国の時代では、わたしの働きは征服し、完全なものにすることであるので、わたしはふたたび肉体の形で羊飼いとしての働きを行う。これはわたしが肉体の形で行う二回目の働きである。働きの最後の二段階では、人々が接触するものは、もはや目に見えない、触れることのできない霊ではなく、霊が肉体として実現化された人である。従って、人の目には、わたしはふたたび人になり、神の容貌も雰囲気も持たない。そのうえ、人々が見る神は男性だけでなく女性でもあるので、彼らには非常に驚異的で不可解である。再三再四、わたしの途方もない働きは、長年にわたり抱かれていた古い信念を粉碎し、人々は動転している。神は、聖霊、霊、7倍に強化された霊、すべてを包み込む霊であるだけでなく、人、普通の人、ことのほか平凡な人でもある。神は男性だけでなく、女性でもある。彼らはどちらも人間に生まれたという点で同じであるが、一人は聖霊によって受胎され、もう一人は生まれながらに人間であるが、霊から直接生じているという点で異なっている。彼らはどちらも神の肉体化した形で、父なる神の働きを実行するという点で同じであるが、一人は贖いの働きを行い、もう一人は征服の働きを行うという点で異なっている。どちらも父なる神を表すが、一人は親愛の情と慈悲に満たされた贖い主であり、もう一人は怒りと裁きに満たされた義の神である。一人は贖いの働きを開始するための最高司令官であり、もう一人は征服の働きを完了させる義の神である。一人は始まりであり、もう一人は終りである。一人は罪のない肉体であり、もう一人は贖いを完成させ、働きを続行し、罪によらない肉体である。彼らはどちらも同じ霊であるが、異なる肉体に宿り、異なる場所で誕生する。また、彼らは数千年も隔てられている。しかし、彼らの働きはすべて相互に補完し合っており、決して対立せず、同じ次元で語られる。どちらも人であるが、一人は男の赤子であり、もう一人は女の幼児である。長い年月のあいだ、人々が見てきたものは霊だけでなく、また人間、男性だけでなく、人間の観念と合致しない多くのことでもあり、従って、人々は決して十分にわたしを理解することはできない。彼らは、あたかもわたしは確かに存在するが、幻想的な夢でもあるかのように、半ば信じ、半ば疑い続ける。そういうわけで今日まで、人々は神が何であるかをまだ知らない。あなたは単純な一文でわたし

を要約することが本当にできるのか。本当に「イエスは他ならぬ神であり、神は他ならぬイエスである」とあえて言うのか。本当に大胆にも「神は他ならぬ霊であり、霊は他ならぬ神である」と言うのか。「神は肉を着ている人にすぎない」と抵抗なく言えるのか。「イエスの姿はまさに神の偉大な姿である」と断言する勇気が本当にあるのか。あなたの言葉の能力を頼りにして神の性質と姿を完全に説明することができるのか。本当に「神は自分の姿に合わせて男性だけを造り、女性は造らなかった」とあえて言うのか。もしそう言うなら、女性は誰もわたしが選んだ者の中に入らず、いわんや女性は人類の一種ではなくなるであろう。さて、あなたは本当に神が何であるか知っているのか。神は人間だろうか。神は霊だろうか。神は本当に男性だろうか。イエスだけがわたしのしたい働きを完成させることができるのか。わたしの本質を要約するために上記のうちひとつしか選ばないとしたら、あなたは非常に無知で忠実な信者であろう。わたしが一度、しかもたった一度だけしか受肉して働かないなら、あなたがたはわたしの境界を定められるだろうか。あなたは本当に一目見て、わたしを完全に理解することができるのか。生きている間に経験したものだけに基づいてわたしを本当に完全に要約できるのか。そして二回の受肉でわたしが同じ働きをすれば、あなたがたはわたしをどのように認識するのだろうか。永久にわたしを十字架に釘で打ち付けたままにしておくのだろうか。神はあなたが言うほど単純なものなのだろうか。

あなたがたの信仰はとても誠実だが、あなたがたの中のだれもわたしを完全に説明することはできないし、あなたがたの中のだれもあなたがたが見る現実のすべてを十分に立証することはできない。考えてもみなさい。現時点ではあなたがたのほとんどは自分の義務を怠っており、その代わりに肉のことを追い求め、肉を満足させ、貪欲に肉を楽しんでいる。あなたがたは真理をほとんど所有していない。ではどうやってあなたがたはこれまで見てきたものすべてを証言することができるのか。あなたがたは本当にわたしの証人になれる自信があるのか。今日見てきたすべてのことをいつの日か証言できないならば、そのときまでには創造された人間として機能を失っているだろう。あなたの存在には何の意味もなくなってしまうだろう。人間である価値がなくなる。人間ではないとさえ言うことができる。わたしはあなたがたに膨大な量の働きを行なってきた。しかし、現在あなたは何も学んでおらず、何も知らず、無駄に働いているので、わたしが働きを拡大する必要があるとき、あなたはぽかんと見つめているだけで、口もきけず、まったく役に立たないだろう。それではあなたは稀代の罪人になってしまわないだろうか。その時が来たら、あなたはとてつもなく深い後悔を感じないだろうか。意気消沈し

てしまわないだろうか。わたしがこの働きのすべてを行なっているのは暇つぶしや退屈しのぎからではなく、わたしの将来の働きの基礎を築くためである。わたしは行き詰っていないし、何か新しいことを考え出さなければならないわけでもない。わたしが行く働きを、あなたは理解するべきである。それは路上で遊ぶ子供が行うものではなく、わたしの父の表象が行う働きであることを理解するべきである。あなたがたはこのすべてを行なっているのはただわたしではないことを知るべきである。それどころかわたしは父の代理を務めているのである。その一方で、あなたがたの役割はひたすら後に続き、服従し、変化を遂げ、証しをすることである。あなたがたが理解するべきことは、なぜわたしを信じなければならないかである。これはあなたがた一人ひとりが理解するべきもっとも重要な問題である。わたしの父は、その栄光のために、世界を創造した瞬間からわたしのためにあなたがたすべてを運命づけた。わたしの父があなたがたに運命づけたのは、他ならぬわたしの働きのためとわたしの父の栄光のためであった。あなたがたがわたしを信じるのはわたしの父によるのである。あなたがたがわたしに従うのはわたしの父が運命づけたことによる。このどれもあなたがたが自分で選んだものではない。さらに重要なことに、あなたがたはわたしの証しをするためにわたしの父がわたしに授けた者たちであることを理解しなければならない。わたしの父があなたがたをわたしに授けたので、あなたがたはわたしがあなたがたに授ける道、わたしがあなたがたに教える道や言葉に従うべきである。わたしの道に従うことがあなたがたの本分だからである。これが、あなたがたがわたしを信じる最初の目的である。そこで、わたしはあなたがたに言う、あなたがたはわたしの道に従うためにわたしの父がわたしに授けた人々にすぎない。しかし、あなたがたはわたしを信じるだけである。あなたがたはわたしに属していない。あなたがたはイスラエルの一族に属しておらず、その代わりに古代の蛇の種族に属しているからである。わたしがあなたがたにしよう要求することは、わたしの証人になることだけであるが、今日あなたがたはわたしの道を歩かなければならない。このすべては将来の証しのためである。あなたがたがわたしの道に耳を傾ける人々としてのみ機能するならば、あなたがたには何の価値もなく、わたしの父がわたしにあなたがたを授けたことの意義は失われるだろう。わたしがあなたがたに強く言いたいのは次のことである。「あなたがたはわたしの道を歩かなければならない」。

本物の人とは何を意味するのか

人を経営する（救う）ことは常にわたしの本分であった。さらに、人の征服はわたしが世界を創造したときに定めたことだった。終わりの日にわたしが人々を完全に征服す

ることや、反抗的な人間を征服することがサタン打倒の証拠だということを、人々は知らないかもしれない。しかし敵がわたしとの戦いを始めたとき、わたしはすでに、サタンに捕われてその子となり、サタンの家を見守る忠僕となった者たちを征服すると告げた。征服という言葉の本来の意味は、打ち負かし、辱しめることである。イスラエル人の言葉では、それは完全に打ち負かし、破壊し、それ以上わたしに抵抗できないようにすることを意味する。しかし今日、あなたがたの間で用いられるこの言葉の意味は、単に征服するということだ。わたしの意図は常に、人類のうち邪悪なものを完全に根絶し完敗させ、それによってもうわたしに反逆することも、ましてやわたしの働きを妨害したりかき乱したりする生命力を持つこともないようにすることだった。したがって人間に関して言えば、この言葉は単に征服を意味するものとなった。この言葉の含意が何であれ、わたしの働きは人類を打ち負かすことである。なぜなら人類はわたしの経営に付属していることは確かだが、より正確に言えば、わたしの敵以外の何ものでもない。人類はわたしに対抗し、反逆する邪悪な者である。人類はわたしに呪われた邪悪な者の子孫以外の何ものでもなく、わたしを裏切った大天使の末裔以外の何ものでもない。人類ははるか昔にわたしに拒絶され、以来和解し難い敵となった悪魔の遺産以外の何ものでもない。全人類の上にかかる空は暗くよどみ、清澄さは微塵もなく、人間の世界は漆黒の闇に包まれたため、そこで生きる者は顔の前で伸ばした自分の手も見えないし、頭を上げて太陽を見ることはできない。足の下はぬかるみ、窪みだらけで曲がりくねり、全土に死骸が散乱している。暗がりの隅々に遺骸が溢れ、冷え冷えとした暗がりには大勢の悪霊たちが居を定めている。人の世の至る所に悪霊の群れが行き交い、汚れにまみれた無数のけだものの子孫が膠着状態で闘いを繰り広げており、その音の人々を恐怖に震え上がらせる。このような時代、このような世界、このような「地上の楽園」で、人はどこに人生の至福を探しに行くのか。どこに行けば人生の終着点が見出せるのか。遠い昔からサタンに踏みつけられてきた人類は、当初からサタンの似姿を演じ続けてきた。それどころか、人類はサタンの化身でさえあり、大声で高らかにサタンに証しをする証人の役割を果たしている。このような人類が、このような屑が、この墮落した人間家族の子孫が、どうして神の証しをすることができようか。わたしの栄光はどこから現れるのか。わたしの証しをどこから語り始められるのか。人類を墮落させた敵はわたしに敵対し、すでに人類を奪ってしまい、わたしがはるか昔に創造しわたしの栄光とわたしの生で満ちていた人類を汚してしまった。敵はわたしの栄光を奪い去り、ただサタンの醜悪さを強く帯びた毒と、善悪の知識の木の果実による汁だけを人間に染み込ませた。初めにわたしは人類を創造し、すなわち人類の祖先であるアダムを造った。彼は形

態と姿を与えられ、活力に溢れ、生命力に満ちて、その上わたしの栄光とともにあった。それはわたしが人を創造した輝かしい日であった。続いてエバがアダムの体から生み出され、彼女も人の祖先となった。こうしてわたしが生み出した人々は、わたしの息吹で満たされ、わたしの栄光に溢れていた。アダムはもともとわたしの手から生まれ、わたしの姿を表現したものであった。したがって「アダム」の元来の意味は、わたしによって造られ、わたしの生命力を吹き込まれ、わたしの栄光を吹き込まれた、形態と姿を持ち、霊と息とを持つ者ということである。アダムは被造物の中で唯一霊を持つものであり、わたしを表し、わたしの姿を持ち、わたしの息吹を受け取れることができた。当初エバは、息を吹き込まれた二番目の人であり、わたしがその創造を定めていたため、「エバ」の元来の意味は、わたしの栄光を持続する被造物であり、わたしの生命力で満たされ、さらにわたしの栄光が賦与された者、というものだった。エバはアダムから生まれたため、彼女もまたわたしの似姿をとっていた。彼女はわたしをかたどった二番目の人だったからである。「エバ」の元来の意味は、霊と肉と骨を持つ生きた人であり、わたしの二番目の証しであると同時に、人類におけるわたしの二番目の似姿、というものである。彼らは人類の祖先であり、人の純粋で貴重な宝であり、そして当初から霊を授けられている生き物であった。しかし、邪悪なる存在が人類の祖先の子孫を踏みつけ、捕らえ、人間の世界を完全な暗闇にしたため、子孫たちはもはやわたしの存在を信じていない。さらに忌々しいのは、この邪悪なるものは人々を墮落させ踏みにじりながら、わたしの栄光、わたしの証しとなるもの、わたしが人々に授けた生命力、わたしが彼らに吹き込んだ息吹といのち、人間世界におけるわたしのすべての栄光、さらにわたしが人類に注ぎ込んだ心血のすべてを、残酷にも力づくで奪い去ろうとしていることである。人類はもはや光の中にはおらず、わたしが授けたすべてのものを失い、わたしが与えた栄光を捨ててしまった。どうやって彼らが、わたしをすべての被造物の主として認めることができようか。どうやって天上のわたしの存在を信じ続けることができようか。どうやって地上にわたしの栄光が現れるのを見出せようか。どうやってこの孫息子や孫娘たちは、彼らの先祖たちが崇めた神を、自身の創造主として受け入れることができようか。この哀れな孫息子や孫娘たちは、わたしがアダムとエバに授けた栄光も姿も証しも、さらにわたしが人類に授け彼らが存在の頼みとしているいのちをも、邪悪なるものに気前よく「差し出して」しまい、そしてその邪悪なものの存在にほんの少しも気づくことなく、わたしの栄光をすべてその邪悪な者に与えてしまった。これこそがまさに「屑」という言葉の理由ではないだろうか。このような人類、このような邪悪な悪魔、このような生きる屍、このようなサタンの似姿、このようなわたしの敵が、どうやって

わたしの栄光を得ることができようか。わたしはわたしの栄光を取り戻し、人々の間にあるわたしの証しを取り戻し、かつてわたしに属しておりわたしが昔人類に与えたすべてのものを取り戻し、人類を完全に征服する。しかしあなたは、わたしが造った人間がわたしの姿と栄光を備えた聖なる人であったことを知らねばならない。彼らはもともとサタンのものではなく、サタンに踏みつけられるものでもなく、純粋なわたしの現れであり、サタンの毒の痕跡すらなかった。そのためわたしは人類に告げる、わたしはただわたしの手によって造られた、わたしの愛する聖い者、他の何者にも属さないものだけを欲していると。さらに、わたしは彼らに喜びを感じ、彼らをわたしの栄光とみなすだろう。しかしわたしが欲しているのは、サタンによって墮落させられた、現在サタンに属している、もはやわたしの元来の創造物ではなくなった人類ではない。わたしは人の世界にあるわたしの栄光を取り戻すつもりなので、サタンを打倒したわたしの栄光の証拠として、人類の生き残りを完全に征服する。わたしは自らの証しだけをわたしの結晶として、わたしの喜びの対象として受け止める。これがわたしの旨である。

人類は今日まで、何万年もの歴史を通して発展してきた。しかしわたしが当初創造した人類は、はるか昔に墮落へと落ち込んでしまった。人間はすでにわたしが望んだ人間ではなく、そのためわたしの目にはすでに、人類という名前に相応しいものではない。むしろ彼らはサタンによって捕われた屑であり、サタンに取り憑かれサタンを内に宿した生きる屍である。人々はわたしの存在を信じておらず、わたしの到来を歓迎もしない。ただ渋々わたしの要求に応え、一時的にそれに応じるだけで、人生の喜びや悲しみを心からわたしと共有したりもしない。人々はわたしを不可解な存在とみなしているため、渋々笑顔を見せ、権力者に擦り寄るような態度をしている。それはわたしの働きについて何も知らず、ましてや現在のわたしの旨も一切知らないからだ。正直に言うが、その日が来たとき、わたしを崇める人の苦しみは、あなたがたの苦しみよりも軽くなる。あなたがたの信仰の程度は実際、ヨブのそれを超えておらず、ユダヤのパリサイ人の信仰ですらあなたがたの信仰を上回る。したがって、火で焼かれる日が訪れると、あなたがたの苦しみはイエスに非難されたときのパリサイ人よりも大きく、モーセに反抗した250人の指導者たちよりも、滅びの炎に焼かれたソドムよりも重くなるだろう。モーセが岩を打ったとき、ヤーウェが授けた水がほとばしり出たのは、モーセの信仰のためだった。ダビデがわたしヤーウェを賛美して琴を奏でたとき、ダビデの心は喜びに満ちており、それは彼の信仰のためだった。ヨブが山々を埋め尽くすほど多くの家畜や膨大な量の財産を失い、その体が腫物で覆われたのは、彼の信仰のためだった。彼

がわたしヤーウェの声を聞き、わたしヤーウェの栄光を見ることができたのは、彼の信仰のためだった。ペテロがイエス・キリストに付き従うことができたのは、ペテロの信仰によるものだった。彼がわたしのために十字架に釘づけにされ、栄光ある証しとなることができたのも、彼の信仰によるものだった。ヨハネが人の子の輝かしい姿を見たのは、彼の信仰によるものだった。そして彼が終わりの日の幻を見たのも、なおさら彼の信仰のためであった。数多くのいわゆる異邦の民がわたしの啓示を受け、わたしが人々のもとで働くために肉となって再来したことを知るようになったのも、また彼らの信仰のためだ。わたしの厳しい言葉に打ちのめされつつも、それによって慰められ、そして救われたすべての者たちは、みな信仰のゆえにそうなったのではないか。わたしを信じつつ苦難に耐えている人々も、世界から拒絶されたのではないか。わたしの言葉の外で生き、試練の辛さから逃げている人々は、みな世界を漂っているのではないか。彼らはあちらこちらへひらひらと揺れる秋の葉のようで、休む場所もなく、ましてやわたしの慰めの言葉など得ていない。わたしの刑罰や精錬が彼らを追うことはないにせよ、彼らは天国の外の街路をあてもなくさまよう乞食ではないか。世界は本当にあなたの安息の場所だろうか。あなたはわたしの刑罰を避けることで、本当にこの世から満足の微笑みをわずかでも得ることができるのだろうか。つかの間の楽しみで、心の隠し切れない空しさを真に覆うことができるのだろうか。自分の家族なら騙せるかもしれないが、わたしを騙すことは到底できない。あなたは信仰が貧弱すぎるので、いのちが与える喜びを今日まで見出すことができずにいるのだ。わたしはあなたに呼びかける、人生の半分を真心からわたしのために生きるほうが、人生のすべてを肉のため平凡に忙しく過ごし、耐え難い苦しみに耐えていくよりもましなのだと。自分自身をそれほど大事にして、わたしの刑罰から逃げて何になるのか。わたしの一時的な刑罰から隠れて、かわりに永遠の恥と永遠の刑罰を受けて何になるのか。わたしは実際、誰も強制的にわたしの旨に従わせはしない。誰かが真にわたしのすべての計画に従おうとするなら、その人を粗末には扱わない。しかしわたしはすべての人が、ヨブがわたしヤーウェを信じたように、わたしを信じることを要求する。あなたがたの信仰がトマスのそれを超えているなら、その信仰はわたしの称賛を得ることになり、あなたがたはその忠誠の中にわたしの至福を見出し、必ずや日々わたしにわたしの栄光を見出すだろう。しかしこの世を信じ、悪魔を信じる人々は、ソドムの町の人々のように心が頑なになっており、その目には砂粒が吹き込み、口には悪魔からの施し物を含んでいる。彼らの曇った心ははるか昔に、世界を強奪した邪悪なものに取り憑かれ、その考えはほぼすべてが古代の悪魔に捕われている。そのため人類の信仰は風に吹き飛ばされてしまい、人々はわたしの働きに気づくこともで

きずにいる。彼らははるか昔からサタンの毒に取り憑かれているため、ただわたしの働きにおざなりに対応したり、それを適当に分析したりすることを、わずかばかり試みるだけなのだ。

わたしは人類を征服する。彼らはわたしに創造され、さらにわたしの豊かな被造物を享受してきたからだ。しかし同時に彼らはわたしを拒絶しており、彼らの心にわたしはいない。彼らはわたしを人生への重荷とみなし、はっきりとわたしを見たにもかかわらずわたしを拒絶しており、頭を絞ってわたしを打ち負かすためのあらゆる方法を考えている。人々はわたしが彼らを真剣に扱ったり、厳格な要求を課したりすることを許さず、彼らの不義に対する裁きや刑罰を行うことも許さない。彼らはそのようなことに一切興味を持たず、むしろ苛立ちを抱く。そのためわたしの仕事は、わたしを食べ、飲み、満喫はするものの、わたしを知りはしない人類を打ち倒すことである。わたしは彼らの武器を取り上げてから、わたしの天使たちとわたしの栄光を伴って、わたしの住む場所へと帰る。人々の行動ははるか昔にわたしの心を打ち砕き、わたしの働きを粉々にしてしまったからだ。わたしは邪悪なものに奪い去られた栄光を取り戻してから、喜んで歩き去るつもりだ。そして人類にはそのまま生活を受けさせ、「平和で満足な生活と仕事」を受けさせ、「自分たちの畑を耕し」受けさせ、もう彼らの生活には干渉しない。だが今やわたしは、わたしの栄光を邪悪なものの手から完全に取り戻し、世界の創造のときに人間に付与した栄光をすべて取り返すつもりだ。そして二度と、それを地上の人間には授けない。人々はわたしの栄光を保ち損ねただけでなく、それをサタンの姿と引き換えにしたからだ。人々はわたしの到来を喜ばず、わたしの栄光の日々を尊びもしない。わたしの刑罰を喜んで受け入れることもなく、ましてやわたしの栄光をわたしに返す気などなく、邪悪なものの毒を捨て去る気もない。人間は常に昔ながらのやり方でわたしを騙し、昔ながらのやり方でいつも明るい微笑と幸せそうな表情を装っている。彼らはわたしの栄光が去った後に直面することになる暗闇の深さに気づいていないのだ。そしてとりわけ、わたしの日が全人類に訪れたとき、彼らの日々がノアの時代の人々のそれよりも一層厳しくなることに気づいていない。なぜなら彼らはわたしの栄光がイスラエルを去ったときの暗さがどれほどだったかを知らず、人は夜明けが訪れると、夜の暗闇をくぐり抜けることがいかに厳しかったかを忘れるからだ。そして太陽が再び隠れ、人の上に夜の帳が降りると、再び暗闇の中で悲嘆にくれ歯ざしりする。あなたがたはわたしの栄光がイスラエルから去ったとき、イスラエル人たちがどれほどの苦難に耐えることになったかを忘れたのか。今はあなたがたがわたしの栄光を見るときであり、わた

しとともに栄光の日を過ごすときでもある。わたしの栄光が汚れた地を去るとき、人は暗闇の中で嘆き悲しむだろう。今はわたしがわたしの働きを行う栄光の日であり、わたしが人類の苦しみを免除する日でもある。わたしが苦痛と辛苦のときを人類とともにすることはないからだ。わたしはただ人類を完全に征服し、人類の中の邪悪なものを根こそぎにすることを望んでいるのだ。

あなたは信仰について何を知っているか

人は信仰という不確かな言葉だけは知っているが、人は何が信仰を構成しているかを知らないし、ましてやなぜ信仰を持っているのかも知らない。人はあまりにも少ししか理解していないし、あまりにも欠乏している。人はあまり考えず認識もないままわたしを信仰しているに過ぎない。人は信仰とは何かもなぜわたしを信仰しているのかも知らないけれど、執拗にわたしを信仰し続けている。わたしが人に求めることは、ただ単に人がこのように執拗にわたしを求めたりすることだけでもなく、気まぐれにわたしを信じたりすることだけでもない。なぜなら、わたしのする働きは人がわたしを見たり、わたしを知ったりするようになるためであり、人がわたしの働きの故に刮目し、新しい光の中でわたしを見るためではない。わたしは以前には多くのしるしと不思議を顕し、多くの奇跡を行なった。当時のイスラエル人たちはわたしに大いなる賞賛を示し、病人を癒し悪魔を追い出すことのできるわたしの並はずれた能力を大いにあがめた。当時、ユダヤ人たちはわたしの癒しの力は見事で並はずれていると思った。わたしのそのような多くの行いのために、彼らはわたしを尊敬の念をもって眺め、わたしの力のすべてに対し大いに賞賛した。よって、わたしが奇跡を行うのを見た人たちはわたしにしっかり従った。その結果わたしが病人を癒すのを見るため何千人もの人たちがわたしを取り巻いた。わたしは非常に多くのしるしと不思議を示したが、人は単にわたしを熟練した医師と見なしただけだった。わたしはまた当時の人たちに多くの教えを語ったが、彼らは単にわたしを弟子よりまさっている教師としてしか見なさなかった。今日でさえ、人々はわたしの働きの歴史的な記録を見てきたのに、わたしは病人を癒す偉大な医師であり、無知な人のための教師であると彼らは引き続き解釈している。そして、彼らはわたしが憐れみ深い主イエス・キリストであると決断した。聖書を解釈する人たちはわたしの医術よりまさっていたかもしれないし、今や彼らの教師を乗り越えた弟子たちでさえあるかもしれないが、世界中に名が知られているそのような有名な人たちは、わたしのことをただの医師と同程度に低く考えている。わたしの行いは海岸の砂の粒子より数が多く、わたしの知恵はソロモンの全ての子孫の知恵より偉大であるのに、人はわたしのこと

をただの医師や人の名もない教師としてしか思っていない。何人もの人たちが、わたしが彼らを癒やすということだけを信じている。何人もの人たちが、わたしが自身の力で彼らの体から汚れた霊を追い出すということだけを信じている。そして何人もの人たちが、わたしから平安と喜びを受け取るということを単に信じている。何人もの人たちが、より多くの物質的富をわたしから要求するために、わたしを信じている。何人もの人たちが、平和にこの人生を生き、またこれから来る世で安全で穏やかに過ごすために、わたしを信じている。何人もの人たちが地獄の苦しみを避け、天国の祝福を受け取るためにわたしを信じている。何人もの人たちが一時的慰めのためだけにわたしを信じ、来世で何かを得ることなど求めずにいる。わたしが激しい怒りを人にもたらし、人が本来持っていたすべての喜びと平安を押収したとき、人は疑い深くなった。わたしが人に地獄の苦しみを与え、天国の祝福を取り戻したとき、人の恥辱は怒りに変わった。人がわたしに癒してくれるように頼んだとき、わたしは彼を気にかけることもせず嫌悪を感じた。人は代わりに邪悪な医術や魔術という方法を求めてわたしから離れた。人がわたしに要求したもののすべてを取り除いたとき、人は形跡も残さず消えた。だから、わたしがあまりにも多くの恵みを与え、わたしから得るものがあまりにも多くあるので、人はわたしに信仰を持っていると言おう。ユダヤ人たちはわたしの恵みの故にわたしを信じ、わたしが行く所はどこへでもついて来た。限られた知識と経験しかない無知なこの人たちは、わたしが顕したしるしと不思議な業を見ることだけを求めた。彼らはわたしを偉大な奇跡を行うことができるユダヤ人たちの家長として見なした。だから、わたしが人から悪魔を追い出したとき、彼らは、わたしはエリヤであるとか、モーセであるとか、すべての預言者たちの中で最も老齢な預言者であるとか、すべての医師の中で最も偉大な医師であるとか、自分たちのあいだで語り合った。わたしがいのちであり、道であり、真理であるというわたしの言葉は別として、だれもわたしという存在そのものあるいは、わたしの身分を知り得なかった。わたしの父が住むところは天であるというわたしの言葉は別として、誰もわたしが神のひとり子であり、神自身であることが分からなかった。わたしがすべての人類に贖いをもたらし、人類を贖い戻すというわたしの言葉は別として、だれもわたしが人類の贖い主であることが分からなかった。人は、情け深く哀れみ深い人としてわたしを知っていただけだった。わたしがわたし自身のすべてを説明できることは別として、誰もわたしを知らず、わたしが生ける神のひとり子であると信じなかった。人はわたしに対してそのような信仰を持ち、このようにわたしを欺くだけである。人はわたしのことをそんな風に見ているのに、どうしてわたしの証人となることができるだろうか。

人はわたしに信仰を持っているが、わたしの証人にはなることができない、そして、わたしがわたし自身のことを知らせる前には、人はわたしの証人となることはできない。人はわたしが被造物やすべての聖人たちより優れているということしか見ず、わたしが人にはできない働きをするということしか見ない。だから、ユダヤ人から現代の人たちに至るまで、わたしの栄光ある働きを見て来た人たちは、わたしに対して好奇心で一杯になるだけで、たった一人の口もわたしのために証しすることはできない。わたしの父だけがわたしの証人であり、すべての被造物の中でわたしのための道を作った。そうでなければ、わたしがどんなに働いても、人はわたしが創造物の主であることを決して知らなかったはずだ。というのは、人はわたしから取ることしか知らず、わたしの働きの故にわたしに信仰を持っているのではない。人はわたしには汚れがなく罪がひとつもないので、またわたしが数多くの奥義を説明できるので、またわたしが群衆よりまさっており、あるいは人はわたしから利益を受けたので、わたしを知っているだけである。しかし、わたしが創造物の主であることを信じている人たちは数少ない。これこそ人がなぜわたしに信仰を持っているか知らないとながたが言う理由である。人はわたしに信仰を持つ目的や意義を知らないのである。人の現実は欠けており、だから人は、わたしの証人になるのにほとんどふさわしくない。あなたがたはほんの少しの真の信仰しか持っておらず、あまりにも少ししか手に入れておらず、だからあなたがたはほとんど証しを持っていないのである。その上、あなたがたは少ししか理解しておらず、あまりにも多くを欠けており、だからあなたがたはわたしの行いに対し証しをするにはあまりふさわしくない。あなたがたの決意は確かにすばらしいが、あなたがたは神の本質をうまく証言できる確信があるだろうか。あなたがたが体験したり見たりしたことはあらゆる時代の聖徒や預言者たちのそれにまさっているが、あなたがたはかつての聖徒や預言者たちの言葉以上の証しができるだろうか。わたしが今あなたがたに授けるものはモーセを超え、ダビデをしのぐ。だから同じようにわたしはあなたがたの証しがモーセの証しよりまさっており、あなたがたの言葉がダビデの言葉より偉大であるよう求める。わたしはあなたがたに100倍与えるから、わたしは同じようにあなたがたが同じ分だけ返済してくれるよう求める。あなたがたはわたしが人類にいのちを授ける者であり、わたしからいのちを受け取るのはあなたがたで、あなたがたはわたしの証人とならなければならないことを知らなくてはならない。これはわたしがあなたがたに送り、わたしのためにしなければならないあなたがたの本分である。わたしはあなたがたにわたしの栄光をすべて授けてきたし、選ばれた人たちであるイスラエル人が決して受け取らなかったいのちをあなたがたに授けた。だから当然、あなたがたはわたしの証人となり、あなたがた

の若さをわたしに捧げ、あなたがたのいのちを差し出さなくてはならない。わたしの栄光を受ける者は誰でもわたしの証人となり、わたしにいのちを捧げるのである。これはずいぶん前にわたしによって運命づけられていた。わたしの栄光をあなたがたに授けるのはあなたがたにとって幸せなことであり、あなたがたの本分はわたしの栄光を証言することである。幸せを得るためにだけわたしを信じているとしたら、わたしの働きはほとんど意味を持たないだろうし、あなたがたは自分の本分を果たしてはいないだろう。イスラエル人たちはわたしの憐れみ、愛、偉大さだけを見、ユダヤ人たちはわたしの忍耐と贖いだけを証言したのである。彼らはわたしの霊の働きのほんの少ししか見なかった。彼らの理解の程度でさえ、あなたがたが見たり聞いたりしたことのわずか10,000分の1に過ぎないかもしれない。あなたがたが見たことは彼らの中の祭司長たちが見たことさえ上回る。今日、あなたがたが理解している真理は彼らの理解した真理よりまさっており、今日あなたがたが見てきたことは律法の時代に見られたことを超え、恵みの時代に見られたことを超えている。そしてあなたがたが体験したことはモーセやエリヤの体験さえ上回っている。というのは、イスラエル人たちが理解したことはヤーウェの律法だけで、彼らが見たものはヤーウェの背中だけだった。ユダヤ人たちが理解したことはイエスの贖いだけであり、彼らが受けたものはイエスによって授けられた恵みだけであり、彼らが見たものはユダヤ人の家の中のイエスのイメージだけであった。今日あなたがたが見るものはヤーウェの栄光、イエスの贖い、そして今日のわたしの働きのすべてである。あなたがたはわたしの霊の言葉も聞き、わたしの知恵に感謝し、わたしの不思議を知るようになり、そしてわたしの性質について学んだ。わたしはまたあなたがたにわたしの経営（救いの）計画をすべて話した。あなたがたが見たものは単に愛すべき慈悲深い神だけではなく、義に満ちた神でもある。あなたがたはわたしの素晴らしい働きを見てきたし、わたしが激しい怒りと威厳で満ちていることも知った。さらに、わたしはかつて荒れ狂う激しい怒りをイスラエルの家にもたらし、今日その怒りがあなたがたに及んでいることも知っている。あなたがたはイザヤやヨハネより、天のわたしの奥義をもっと理解して来た。あなたがたは先代のあらゆる聖徒たちより、わたしの愛と尊敬に値する特性をもっと知っている。あなたがたが受け取ったものはわたしの真理、道、いのちだけではなく、ヨハネのそれよりも大きいビジョンと啓示である。あなたがたはもっと多くの奥義を理解し、わたしの真の顔も拝した。あなたがたはわたしの裁きをもっと受け入れ、わたしの義なる性質をもっと知った。だから、あなたがたは終わりの日に生まれたけれども、あなたがたの理解は以前のものであり、過去のものである。また今日あることも体験したが、それはわたしによって成し遂げられた。わたしがあな

たがたに求めることは理不尽ではない。というのは、わたしはあなたがたにあまりにもたくさん与え、あなたがたはわたしから多くを見たからである。だから、わたしはあなたがたに、あらゆる時代の聖徒たちに向けて、わたしの証人となってくれるよう願う。そしてこれだけがわたしの心の願いである。

最初にわたしの証しをしたのはわたしの父だったが、わたしはより大きな栄光と、被造物の口から出る証しの言葉を受けることを望む。だから、あなたがたが自分の本分を尽くし、人間のあいだにおけるわたしの働きを終わらせるために、わたしのすべてをあなたがたに与える。あなたがたはなぜわたしを信じているのか理解すべきである。もしあなたがたが、わたしの徒弟か患者になりたい、あるいは天のわたしの聖徒たちのひとりになりたいとしか思っていないなら、わたしに従っても無意味である。そのような方法でわたしに従うのは単に努力の無駄だろう。そのような信仰をわたしに持つのは、単にあなたがたの日々を無駄に過ごしているだけで、あなたがたの青春を浪費しているだけだろう。そして最後には、あなたがたは何も受けとるものはないだろう。これは無駄な労力ではないだろうか。わたしはユダヤ人たちの中からずいぶん前に離れ、わたしはもはや人の医師でも、人のための薬でもない。わたしはもはや、人が意のままに動かしたり、殺したりする牛や馬ではない。むしろ、わたしは人を裁き、罰するために、そして人がわたしを知るように、人々の間にやって来た。あなたは知るべきである、わたしはかつて贖いの働きをした、わたしはかつてイエスであったが、永遠にイエスのままでいることはできない、わたしがかつてヤーウェであったが、後にイエスになったように。わたしは人類の神、創造物の主であるが、わたしはいつまでもイエスのままでいることはできない、あるいはいつまでもヤーウェのままでいることはできない。わたしは人が医師と考えた者だったが、神は単に人類の医師であるということとはできない。だから、もしあなたがわたしの信仰において古い見方を持つなら、あなたは何も達成しないだろう。あなたが今日「神はなんと愛おしいお方か、神はわたしを癒してくださり、祝福、平安、喜びを与えてくださる。神はなんと人に対して良きお方か。もしわたしたちが神に信仰を持っているなら、お金や富のことを心配する必要はない……」と言って、どんなにわたしを賛美しても、わたしはやはりわたしの本来の働きを中断することはできない。今日あなたがわたしを信じているなら、あなたはわたしの栄光だけを受けとり、わたしの証人になる価値があり、他のことはすべて二の次となる。これこそあなたがはっきり知らなければならないことである。

さて、あなたは、なぜあなたがわたしを信じるか本当に知っているだろうか。あなた

はわたしの働きの目的と意義を本当に知っているだろうか。あなたは自分の本分を本当に知っているだろうか。あなたはわたしの証しを本当に知っているだろうか。もしあなたが単にわたしを信じ、わたしの栄光もわたしの証しもあなたの中に見ることができないなら、わたしはとうの昔にあなたを排除していた。そのことをすべて知っている者たちに関して言えば、彼らはわたしの目にはイバラでさえあり、わたしの家では、彼らは単に躓きの石でしかない。彼らは少しも役に立たず、重要でないので、わたしの働きにおいて完全に選り分けなければならない毒麦である。わたしはずいぶん前に彼らを忌み嫌ってきた。証しをしないこれらの者たちに関して、わたしの怒りは永遠にあり、わたしのむちが彼らから離れることは決してない。わたしはずいぶん前に彼らを悪者の手に渡し、彼らはわたしの祝福を少しも持っていない。その日、彼らの刑罰は愚かな女たちの罰よりはるかに痛みを伴う。今、わたしはわたしの義務である仕事だけしている。わたしはすべての麦を毒麦と共に束に縛る。これが今のわたしの仕事である。それらの毒麦はわたしが選り出している時にすべて選別され、麦粒は倉庫に集められ、選り分けられた毒麦は火の中で燃やされ灰となる。わたしの今の仕事はあらゆる人たちをただ束に縛ることで、つまり完全に彼らを征服することだけである。それから、すべての人たちの最後を明らかにするために選別を始めよう。だから、あなたは今どのようにわたしを満足させ、どのように正しい信仰の道を整えるかを知るべきである。わたしが求めるものは、今このときのあなたの忠誠心と服従、今この時のあなたの愛と証しである。たとえばあなたが証しをするとは何か、愛とは何かをこの瞬間知らなくても、あなたのすべてをわたしに持ってくるべきで、あなたが持っている唯一の宝物、つまりあなたの忠誠心と服従心をわたしに差し出すべきである。わたしがサタンを打ち負かしたことに対する証しは人の忠誠心と従順に見ることができ、わたしが人を完全征服したことに対する証しもそうであることを、あなたは知るべきである。わたしへのあなたの信仰の義務はわたしの証人となること、わたしに忠実無二であること、最後まで従順であることである。わたしの働きの次のステップを始める前に、あなたはどのようにわたしの証人となるのか。あなたはいかにしてわたしに忠実であり、服従するのか。あなたの役目のためにすべての忠誠心を捧げるか、それとも単にあきらめるのか。あなたはむしろわたしのすべての取り決め（たとえそれが死であっても、あるいは滅びることであっても）に服従するか、それとも、わたしの刑罰を避けるために途中で逃げ出すか。わたしがあなたを罰するのはあなたがわたしの証人となり、忠誠を尽くしわたしに服従するためである。また、現在の刑罰はわたしの働きの次のステップが明らかにされ、仕事の進展が妨げられないためである。よって、わたしはあなたが賢くなり、あなたのいのちや存在の意義

を価値のない砂のように取り扱わないよう勧告する。あなたはわたしのこれからの働きがどんなものになるか正確に分かるだろうか。あなたはこれからわたしがどのように働き、わたしの働きがどのように展開していくか知っているだろうか。あなたはわたしの働きに関するあなたの体験の意義、さらにわたしへのあなたの信仰の意義を知るべきである。わたしは多くの事を行なってきた。あなたが想像するように、わたしは途中であきらめることなどできようか。わたしはそのように幅広い働きをなしてきた。どうしてそれを台無しにすることなどできようか。確かに、わたしはこの時代を終わりにするために来た。これは本当だが、それ以上にわたしは新しい時代を始め、仕事を始め、そして何よりも、神の国の福音を広めようとしていることをあなたは知らなければならない。だからあなたは、現在の働きは時代を始めることと、来たるべき時に福音を広め、将来のどこかで時代を終わらせるための基盤を築くことだけであると知らなければならない。わたしの働きはあなたが思うほど単純ではないし、あなたが信じているほど価値がなく意味のないものではない。だから、わたしは依然としてあなたに言わなければならない。あなたはわたしの働きのために自分を捧げ、それ以上にわたしの栄光のためにあなた自身を捧げるべきである。あなたがわたしの証しをすることをわたしは長い間待ち望み、それ以上に長く、あなたがわたしの福音を宣べ伝えるのを待ち望んでいた。あなたはわたしの心にあるものを理解すべきである。

落ち葉が土に還る時、あなたは自分の行なったあらゆる悪事を後悔する

あなたがたはみな、わたしがあなたがたの間で行なった働きを自らの目で見、わたしが語った言葉に自ら耳を傾け、あなたがたに対するわたしの態度も知っている。ならば、わたしがこの働きをあなたがたにおいて行なっている理由も知っているはずである。あなたがたに正直に話す。あなたがたは、終わりの日におけるわたしの征服の働きの道具、異邦の諸国にわたしの働きを広げるための手段に過ぎない。わたしの働きをさらに発展させ、わたしの名が異邦の諸国、つまりイスラエル以外のすべての諸国へさらに広まるように、わたしはあなたがたの不義、汚れ、抵抗、反抗を通じて語るのである。それは、わたしの名、わたしの行ない、わたしの声が異邦の諸国にくまなく広まり、それによりイスラエルではないそれらの諸国がすべてわたしに征服され、わたしを崇拜し、イスラエルとエジプトの地の外にあるわたしの聖地となるためである。わたしの働きを広げるのは、実際にはわたしの征服の働きを広げ、わたしの聖地を広げることである。

わたしの地上における足場を広げることである。あなたがたは、自分たちがわたしによって征服される異邦の諸国の被造物に過ぎないことを明確に知っておくべきである。本来、あなたがたには何の身分も利用価値もなく、まったく無用の存在だった。あなたがたが幸運にもわたしと接し、今わたしと集っているのは、わたしが糞の山から蛆虫を引き上げ、わたしの全地征服の見本、わたしの全地征服に関する唯一の「参考資料」としたからに他ならない。あなたがたの身分の低さゆえに、わたしはあなたがたを選び、わたしの征服の働きの見本、およびそのひな形とした。わたしがあなたがたの間にあって働きを行ない、語り、あなたがたと暮らして留まっているのは、ひとえにそのためである。わたしがあなたがたの間にあって語っているのは、ただわたしの経営のため、また糞の山の蛆虫に対するわたしの嫌悪のためであることを、あなたがたは知るべきである。この嫌悪は憤りを感じるころまで達している。わたしがあなたがたの間にあって働いているのは、ヤーウェがイスラエルで働いたのとはまったく違い、また特に、イエスがユダヤで行なった働きとは違っている。わたしは非常な忍耐をもって語り、働き、怒りとともに裁きをもってこれらの墮落した者たちを征服する。それはヤーウェが自身の民をイスラエルで導いたのとはまったく違う。イスラエルにおけるヤーウェの働きは、食べ物と生ける水を授けることであり、民に施している間、ヤーウェは民への憐れみと愛に満ちていた。今日の働きは、選民ではない呪われた民族のもとで行なわれる。食べ物は豊富になく、渴きを鎮める生ける水の糧もなく、十分な物質の供給はなおさらない。裁き、呪い、刑罰の供給が十分にあるだけである。糞の山に生きるこれらの蛆虫には、わたしがイスラエルに与えたような、山を埋め尽くす牛や羊、巨大な富、そして地上で最も美しい子供らを得られるだけの価値は絶対がない。当時のイスラエルは、わたしがその民を養う牛や羊、金銀の品を祭壇に捧げており、その数は律法の下でヤーウェによって定められた十分の一よりも多い。そこでわたしは彼らにさらに多く、律法の下でイスラエルが得るはずの百倍以上を与えた。わたしがイスラエルを養うものは、アブラハムが得たものすべてと、イサクが得たものすべてを超える。わたしはイスラエルの家族を多産にして増やし、わたしのイスラエルの民を地のあらゆるところに広める。わたしが祝福し労るのは、やはりイスラエルの選民、つまり、わたしにすべてを捧げ、わたしからすべてを得た民である。彼らはわたしを心に留めているので、わたしの聖なる祭壇に生まれたての子牛と子羊を生贄として捧げ、わたしの前に持てるすべてを捧げた上に、わたしの再臨を心待ちにして生まれたての長男をも捧げるのである。さて、あなたがたはどうか。あなたがたはわたしの怒りを呼び起こし、わたしに要求し、わたしに捧げものをする人の生贄を盗むが、わたしに背いていることを知らない。ゆえに、あなた

がたが得るのは暗黒の中での嘆きと懲罰だけである。あなたがたは何度もわたしの怒りを呼び起こし、わたしは燃え盛る火を降らせ、それは多くの者が悲劇的な結末を迎え、幸福な家庭が荒れ果てた墓となるほどだった。そうした蛆虫に対し、わたしには終わりのない怒りしかなく、彼らを祝福する気はまったくない。わたしが例外としてあなたがたを引き上げ、大いなる屈辱に耐えてあなたがたの間で働いてきたのは、ひとえにわたしの働きのためである。わたしの父の旨のためでなければ、どうして糞の山の中で転がまわる蛆虫と同じ家で暮らせようか。わたしはあなたがたのあらゆる行ないや言葉に極めて嫌悪を感じるが、いずれにせよあなたがたの汚れと反抗に多少の「関心」があるため、それはわたしの言葉の偉大な集大成となった。さもないと、わたしは決してあなたがたの間にかくも長い間留まらなかっただろう。したがって、あなたがたに対するわたしの態度は同情と憐れみでしかないことをあなたがたは知るべきである。つまり、わたしはあなたがたに対してわずかな愛も抱いていない。あなたがたに対して抱くのは忍耐だけである。なぜなら、わたしはただ自分の働きのためにそうするからである。そして、あなたがたにわたしの業が見えたのは、わたしが汚れと反抗を「原材料」として選んだからに過ぎない。さもないと、こうした蛆虫どもにわたしの業を見せることは決してない。わたしは嫌々ながらあなたがたにおいて働いているだけであり、進んでイスラエルで働きを行なったのとはまったく違う。わたしは怒りを抱きつつ、あなたがたの間で語ることを自分に強いているのである。さらに偉大なわたしの働きのためでなければ、そうした蛆虫を見続けることにどうして耐えられようか。わたしの名のためでなければ、とうの昔に最高の高みに昇り、それらの蛆虫を糞の山とともに完全に焼き尽くしていただろう。わたしの栄光のためでなければ、邪悪な悪魔がわたしの目前で頭を揺らしながらわたしに公然と反抗するのを、どうして許せるだろうか。わたしの働きが一切妨害されることなく円滑に実行されるためでなかったら、蛆虫のようなこれらの者たちが気の向くままにわたしを虐待するのを、どうして許せるだろうか。もしイスラエルの村で百人の民がそのように立ち上がり、わたしに反抗したなら、たとえ彼らがわたしに生贄を捧げたとしても、彼らを跡形もなく地の割れ目へ投げ捨て、他の町の住民が二度と抵抗しないようにするだろう。わたしはすべてを焼き尽くす火であり、背きを許さない。人間はすべてわたしが造ったのだから、わたしが何を言い何を行なおうと、人間は従わなければならない、抵抗してはならない。人はわたしの働きに干渉する権利をもたず、ましてやわたしの働きや言葉の何が正しく何が間違っているかを分析する資格などない。わたしは創造主であり、被造物はわたしへの畏敬の念をもって、わたしが求めるすべてのことを成し遂げるべきである。また、わたしに理を説こうとしてはならず、抵抗

などなおさらするべきではない。わたしは権威をもって我が民を統べるのであり、わたしの創造の一部を成す者はすべてわたしの権威に従うべきである。今日、あなたがたはわたしの前にあって大胆で厚かましく、わたしがあなたがたを教えるのに用いる言葉に従わず、恐れを知らない。それなのに、わたしはあなたがたの反抗にただ耐えているだけである。取るに足らない小さな蛆虫が糞の山で汚物を掘り返しているからといって、わたしは腹を立てて働きに影響を及ぼすようなことはしない。わたしは父の旨のために、忌み嫌うすべてのものが存在し続けるのに耐える。わたしの発言が完了するまで、わたしの最後の瞬間までそうするのである。心配することはない。わたしは名もない蛆虫と同じ程度に成り下がることはできず、わたしの技量をあなたと比べることはない。わたしはあなたを心から嫌うが、耐えることができる。あなたはわたしに従わないが、わたしがあなたに刑罰を与える日から逃れることはできない。それはわたしの父がわたしに約束した日なのである。創造された蛆虫が、創造主に匹敵することなどあり得るのか。秋になれば、落ち葉は土に還る。あなたは「父」の家に帰り、わたしは父の傍らに戻る。わたしは父の優しい愛に伴われ、あなたは自分の父に踏みにじられる。わたしは父の栄光を手にし、あなたは自分の父の辱めを受ける。わたしは長らく控えてきた刑罰を用いてあなたに伴い、あなたは何万年間も腐敗したままの悪臭を放つ肉体をもってわたしの刑罰を受ける。わたしは忍耐を伴った言葉の働きをあなたにおいて終え、あなたはわたしの言葉による災いに苦しむ役割を果たし始める。わたしはイスラエルで大いに喜び、働くが、あなたは悲嘆にくれて歯噛みをし、泥の中に生きて死ぬ。わたしは元の姿に戻り、もはやあなたと共に汚れの中に留まることはない。しかし、あなたは元の醜い姿に戻り、糞の山の中でうごめき続ける。わたしの働きと言葉が完了する時は、わたしにとっての喜びの日となる。あなたの抵抗と反抗が終わる時は、あなたにとっての悲嘆の日となる。わたしはあなたに同情せず、あなたは二度とわたしを見ない。わたしはそれ以上あなたと対話せず、あなたは二度とわたしに出会わない。わたしはあなたの反抗を憎み、あなたはわたしの愛らしさを恋しく思う。わたしはあなたを打ち、あなたはわたしのことを思い焦がれる。わたしは喜んであなたから離れ、あなたはわたしへの負い目に気づく。わたしはあなたに二度と会わないが、あなたは常にわたしを待ち望む。あなたが今わたしに抵抗するので、わたしはあなたを憎むが、わたしが今あなたに刑罰を与えるので、あなたはわたしを恋しく思う。わたしは進んであなたと共に生きようとは思わないが、あなたは自分がわたしにしたすべてのことを悔やむがゆえに、わたしと共に生きることを激しく切望し、永遠に悲嘆にくれる。あなたは自分の抵抗と反抗を後悔し、悔悟のあまり顔を地に伏せ、わたしの前に倒れ、二度とわたしに逆らわないと誓う

。しかし、あなたは心の中でわたしを愛するだけで、わたしの声を聞くことは二度とできない。わたしはあなたを恥じ入らせる。

わたしは今、わたしを騙そうとするあなたの放縱な肉体を見つめており、刑罰をもってあなたに「奉仕する」ことはないが、小さな警告だけしておく。あなたはわたしの働きにおける自分の役割が何であるかを知るべきである。そうすれば、わたしは満足する。これ以外の事柄に関しては、あなたがわたしに抵抗したり、わたしの金銭を費やしたり、わたしヤーウェへの捧げものを食べたりしても、あるいはあなたがた蛆虫が互いに噛みつき合ったり、犬のような被造物であるあなたがたの間に対立や暴行が起こったりしても、わたしには一切無関係である。あなたがたはただ自分がどのようなものであるかを知ればよく、それでわたしは満足する。こうしたことを除けば、あなたがたが互いに武器を向け合ったり、言葉で争い合ったりしても、それは構わない。わたしはそうしたことに一切干渉したくないし、人間の問題に一切関わらない。あなたがたの間の紛争を気に掛けないわけではないが、わたしはあなたがたのうちの一人ではなく、そのためあなたがたの問題には加わらないのである。わたし自身は被造物ではなく、この世に属さない。だからわたしは人の騒々しい生活や、乱雑で不適切な人間関係を心から嫌うのである。わたしは騒々しい群衆を特に忌み嫌う。しかし、わたしはそれぞれの被造物の心にある不純を深く知っており、あなたがたを創造する前から、人間の心の奥深くに存在する不義をすでに知っており、人間の心にある偽りと不正もすべて知っていた。そのため、人が不義を行なう時にその痕跡が一切なくとも、あなたがたの心に潜んでいる不義が、わたしが創造したすべてのものの豊かさを超えることもやはり知っているのである。あなたがた一人ひとは、群衆の頂点に昇りつめた。あなたがたは昇りつめて群衆の祖先となった。あなたがたは極めて身勝手であり、蛆虫の間で暴れまわりながら、安らぎの場所を求め、自分よりも小さい蛆虫を食ろうとしている。あなたがたの心は悪意に満ちて邪悪で、それは海底に沈んだ幽霊さえも超えるほどである。あなたがたは糞の底に住み、蛆虫を上から下まで邪魔して落ち着かせておかないほどで、争い合っているかと思えば静かになっている。あなたがたは自分の地位を知らないが、それでも糞の中で争い合う。そのような争いから何が得られるのか。あなたがたにわたしを真に畏敬する心があるならば、わたしの陰でどうして争い合うことができようか。身分がどれほど高くても、あなたはやはり糞の中にいる小さな臭い虫ではないのか。羽を生やして空を翔ける鳩になることができようか。小さな臭い虫であるあなたがたは、わたし、ヤーウェの祭壇から捧げものを盗む。そうすることで、ぼろぼろになって衰えた自分の評

判を回復させ、イスラエルの選民になることができるのか。あなたがたは恥知らずの哀れな存在である。祭壇の捧げものは人々がわたしに献上したのであり、わたしを畏敬する人々のやさしい感情を表わしている。それはわたしが支配するため、わたしが用いるためであるのに、人々がわたしに捧げた小さなキジバトをどうしてわたしから奪うことができるのか。あなたはユダになることを恐れないのか。あなたの地が血に染まった荒野となることを恐れないのか。恥知らずな者よ。人々が捧げたキジバトが蛆虫であるあなたの腹を養うためのものだと思っているのか。わたしがあなたに与えたものは、わたしが喜んで、かつ進んで与えたものである。わたしがあなたに与えなかったものは、わたしが好きにできる。あなたはわたしへの捧げものを決して盗んではならない。働く者はわたし、ヤーウェ、すなわち創造主であり、人々が生贄を捧げるのはわたしのためである。それをあなたは、あくせく動き回る自分への報酬だと思っているのか。本当に恥知らずである。あなたが動き回るのは、誰のためなのか。自分のためではないか。なぜわたしへの捧げものを盗むのか。なぜわたしの金袋から金を盗むのか。あなたはイスカリオテのユダの息子ではないのか。わたし、ヤーウェへの捧げものは、祭司が享受すべきものである。あなたは祭司なのか。あなたは厚かましくもわたしへの捧げものを食べ、卓上に並べさえする。あなたには何の価値もない。何の価値もない、哀れな存在である。わたしの火、ヤーウェの火はあなたを燃え尽くして灰にする。

肉なる者は誰も怒りの日から逃れられない

今日、わたしは、あなたがた自身が生き残るために、あなたがたに警告する。それは、わたしの働きが順調に進み、全宇宙でわたしの幕開けの働きがより適切に、また完全に遂行されるためであり、そうして、すべての国の人々にわたしの言葉、権威、威厳、裁きを現すためである。あなたがたの間でわたしが行う働きは、全宇宙に渡るわたしの働きの始まりである。今はすでに終わりの日であるが、「終わりの日」とは一つの時代の名称に過ぎない。それは律法の時代や恵みの時代とまったく同じように、一つの時代を指し、最後の数年間や数カ月ではなく、むしろその時代全体を示しているということを知りなさい。ただし、終わりの日は、恵みの時代や律法の時代とはまったく異なる。終わりの日の働きは、イスラエルで実行されるのではなく、異邦人の間で実行される。それは、わたしの玉座の前での、イスラエル以外の全ての国々と民族の征服であり、これにより全宇宙にわたるわたしの栄光が宇宙と天空に満ちるのである。それは、わたしがさらに大きな栄光を得、地のすべての被造物が、とこしえに世代を超えて、すべての国々にわたしの栄光を伝え、天と地のすべての被造物が、わたしが地上で得たすべての

栄光を見ることができるようになるためである。終わりの日に実行される働きは、征服の働きである。これは地上のすべての人々の生活を導くことではなく、地上での人類の絶えることのない、数千年にわたる苦難の生活の終結である。そのため、終わりの日の働きは、イスラエルでの数千年にわたる働きや、ユダヤでのわずか数年間の働きでありながら神の第二の受肉まで二千年続いた働きのようでもない。終わりの日の人々が出会うのは、肉となった贖い主の再現だけであり、彼らは神から自ら行うための働きと言葉を受ける。終わりの日が終結するまでに二千年はかからない。イエスがユダヤで恵みの時代の働きを実行したときと同様、終わりの日は短い。これは、終わりの日がその時代全体の終結だからである。それは六千年にわたる神の経営（救いの）計画の完了と終結であって、これによって人類の苦しみ的人生の旅路が終わる。終わりの日は、人類のすべてを新時代に連れて行なったり、人類の生活を継続させたりするわけではない。それは、わたしの経営計画や人間の生存にとって何の意味もない。人類がこのようなあり続けるなら、遅かれ早かれ悪魔によって完全に食い尽くされ、わたしに属する魂は最終的に悪魔の手によって滅ぼされるだろう。わたしの働きは六千年しか続かない。そしてわたしは、悪い者による全人類の支配もまた六千年より長くは続かないと約束した。それゆえもうその時は来ている。わたしはこれ以上続けたり遅らせたりはしない。終わりの日に、わたしはサタンを打ち負かし、わたしの栄光をすべて取り戻し、わたしに属する地上のすべての魂を取り戻して、これらの苦悩する魂が苦しみ的大海から逃れられるようにする。これにより地上におけるわたしの働きがすべて完了するのである。これより後、わたしは地上で再び受肉することは決してなく、すべてを支配するわたしの霊が地上で働くことは二度とない。わたしが地上で行うのはただひとつ、わたしは人類を、聖なる人類に造り直す。それは地上におけるわたしの忠実な都である。しかし、わたしは世界全体を滅ぼしたり、人類すべてを滅ぼしたりはしないことを知るべきである。わたしはその人類の残りの三分の一、わたしを愛し、完全にわたしに征服された人類の三分の一を保ち、イスラエル人が律法の下でそうであったように、この三分の一を、多くの羊と家畜、そして地のすべての豊かさにより育み、繁栄させる。この人類はわたしのもとに永遠にとどまるであろう。ただし、それは現在のどうしようもなく汚れた人類ではなく、わたしに得られたすべての人々の群としての人類である。このような人類はサタンにより破壊され、混乱させられ、包囲攻撃されることはなく、わたしがサタンに勝利した後も地上に存在する唯一の人類となる。それは今日わたしに征服され、わたしの約束を得た人類である。それゆえ、終わりの日に征服された人類は、残され永遠に続くわたしの恵みを受ける人類でもある。これはサタンに対するわたしの勝利の唯一の証拠であ

り、サタンとの戦いの唯一の戦利品である。これらの戦利品はサタンの支配下からわたしにより救われたのであり、わたしの六千年にわたる経営計画の唯一の結晶であり実りである。彼らはあらゆる国家と教派から、また全宇宙のあらゆる場所と国から来る。彼らはさまざまな民族、さまざまな言語、風習、肌の色の者であり、地球のあらゆる国家と教派、そして世界の隅々にまで広がっている。最終的に、彼らは完全な人類、サタンの勢力が及ばない人間の集団を形成するために集まって来る。人類の内、わたしに救われず、征服されなかった者は、海の深みに音もなく沈み、わたしの焼き尽くす火によって永遠に焼かれるであろう。わたしは、エジプトの長子たちと牛、羊の初子を滅ぼして、子羊の肉を食べ、子羊の血を飲み、かもいに子羊の血を塗ったイスラエル人だけを残した時とまったく同じように、この古い、きわめてけがれた人類を滅ぼす。わたしに征服され、わたしの家族である人々もまた、子羊であるわたしの肉を食べ、子羊であるわたしの血を飲み、わたしによって贖われ、わたしを礼拝する人々であるのではないか。このような人々には常にわたしの栄光が伴ったのではないのか。子羊であるわたしの肉がない者はすでに、海の深みに音もなく沈んだのではないか。今日、あなたがたはわたしに逆らっている。そして今日、わたしの言葉はちょうどヤーウェがイスラエルの子や孫たちに語った言葉のようである。しかしながら、あなたがたの心の深みにある頑なさにより、わたしの怒りが蓄積され、あなたがたの肉体にさらなる苦しみをもたらし、あなたがたの罪に対してさらなる裁きをもたらし、不義に対してさらなる怒りをもたらしている。今日あなたがたが、わたしをこのように扱うなら、誰がわたしの怒りの日に容赦されるだろうか。わたしの刑罰の目を誰の不義が逃れられるだろうか。誰の罪が全能者であるわたしの手を避けられるだろうか。誰の反逆が全能者であるわたしの裁きから逃れられるだろうか。わたしヤーウェが異邦人の家族の子孫であるあなたがたにこのように話す。わたしがあなたがたに語る言葉は、律法の時代と恵みの時代のすべての言葉を超越するものである。しかしあなたがたは、エジプトのすべての人々よりもさらに頑なである。わたしが穏やかに働いている間に、あなたがたはわたしの怒りを蓄えているのではないか。どうやってあなたがたは、全能者であるわたしの日から無事に逃れられるというのか。

わたしはこのようにあなたがたの間で働き、語った。わたしは多くの力と努力をつぎ込んだが、あなたがたは、わたしがはっきりと語った言葉にいつ耳を傾けただろうか。あなたがたは全能者であるわたしにどこでひれ伏したのか。あなたがたはなぜわたしをこのように扱うのか。なぜあなたがたが話すこと、することのすべてがわたしの怒りを

呼び起こすのか。なぜあなたがたの心はそれほど頑ななのか。わたしはあなたがたを打ち倒したことがあるか。なぜあなたがたはわたしを悲しませ、心配させることしかしないのか。あなたがたは、わたしヤーウェの怒りの日があなたがたに臨むのを待っているのか。あなたがたの不服従により呼び起こされた怒りをわたしが注ぐのを待っているのか。わたしがするすべてのことは、あなたがたのためではないのか。それなのに、あなたがたはいつもわたしヤーウェをこのように扱ってきた。わたしの捧げ物を盗み、わたしの祭壇のいけにえをオオカミのねぐらに持ち帰り、オオカミの子や孫を養っている。

「人々」は互いに戦い、怒りに満ちたまなざしで、剣と槍を持って向かい合い、全能者であるわたしの言葉を便所に投げ込み、排泄物のようにけがれたものになっている。あなたがたの人格はどこにあるのか。あなたがたの人間性は獣性になってしまった。あなたがたの「心」はずっと前に石になってしまっている。あなたがたは、わたしの怒りの日が来るときこそ、今日あなたがたが全能者であるわたしに対して行う悪をわたしが裁くときであることを知らないのか。このようにわたしをだまし、わたしの言葉を沼地に投げ込んで耳を傾けず、わたしの背後でこのようにふるまって、わたしの怒りの目を逃れられると思うのか。あなたがたがわたしのいけにえを盗み、わたしの財産をむやみに欲しがったとき、あなたがたはわたしヤーウェの目に既に見られていたことを知らないのか。あなたがたがわたしのいけにえを盗んだとき、それはいけにえが捧げられる祭壇の前であったことを知らないのか。このようにわたしをだませるほど自分たちが賢いなどとどうして思えるのか。あなたがたの憎むべき罪から、どうしてわたしの怒りが去るであろうか。どうしてわたしの燃える怒りが、あなたがたの悪行を行き過ぎるだろうか。あなたがたが今日行う悪は、あなたがたに逃げ道を開くことはなく、あなたがたの明日に刑罰を積み上げる。それは、あなたがたに対して、全能者であるわたしの刑罰を引き起こす。あなたがたの悪行と悪しき言葉が、どうしてわたしの刑罰から逃れられるだろうか。どうしてあなたがたの祈りがわたしの耳に届くだろうか。どうしてあなたがたの不義に、わたしが逃げ道を用意するだろうか。どうしてわたしに逆らって行うあなたがたの悪行をそのままにしておけるだろうか。蛇の舌のように毒に満ちたあなたがたの舌を切らずにいられようか。あなたがたは自分の義のためにわたしに依り頼まず、自分の不義の結果として、わたしの怒りを積み上げている。どうしてわたしがあなたがたを赦せようか。全能者であるわたしの目には、あなたがたの言葉と行いはけがれている。全能者であるわたしの目は、あなたがたの不義を無限の刑罰と見なす。どうしてわたしの義なる刑罰と裁きがあなたがたから離れるだろうか。あなたがたがわたしにこんなことをして、わたしを悲しませ怒らせるのに、どうしてあなたがたをわたしの手から逃れさ

せ、わたしヤーウェがあなたがたを罰して呪う日から離れさせることなどできようか。あなたがたのすべての悪しき言葉が、すでにわたしの耳に届いていることを知らないのか。あなたがたの不義がすでにわたしの聖なる義の衣を汚したことを知らないのか。あなたがたの不服従がすでにわたしの激しい怒りを呼び起こしたことを知らないのか。あなたがたがわたしを長い間怒りに煮えくり返るまま放置し、わたしの忍耐をずっと試してきたことを知らないのか。既にあなたがたがわたしの肉体をぼろぼろに傷つけたことを知らないのか。わたしはこれまで我慢してきたが、わたしはわたしの怒りを放ち、あなたがたをもう容赦しない。あなたがたの悪行がすでにわたしの目に届き、わたしの叫びがすでにわたしの父の耳に届いていることを知らないのか。どうして彼が、あなたがたがわたしをこのように扱うことを許すだろうか。わたしがあなたがたに行うすべての働きは、あなたがたのためではないか。それなのに、あなたがたのうち誰が、わたしヤーウェの働きをさらに愛するようになっただろうか。わたしが弱いからといって、わたしが苦しみを受けたからといって、わたしがわたしの父の旨に忠実でないことなどあり得ようか。あなたがたにはわたしの心が分からないのか。わたしはヤーウェがしたようにあなたがたに語る。あなたがたのためにわたしは多くを捧げたではないか。わたしは父の働きのためにこのすべての苦しみに喜んで耐えるけれども、わたしの苦しみの結果としてあなたがたの上にもたらす刑罰を、あなたがたがどうして免れようか。あなたがたはわたしの多くを享受したではないか。今日、わたしは、わたしの父によってあなたがたに授けられたのだ。あなたがたは、わたしの豊富な言葉よりも、はるかに多くのものを享受していることを知らないのか。わたしの命が、あなたがたの命、及びあなたがたが享受するものと引き換えられたことを知らないのか。わたしの父がサタンと戦うためにわたしの命を使ったこと、またわたしの命をあなたがたに与えて、あなたがたが百倍を受けるようにし、多くの誘惑を避けられるようにしたことを知らないのか。あなたがたが多くの誘惑と、また多くの火の刑罰を免れたのは、ただわたしの働きによってであることを知らないのか。あなたがたがこれまで楽しむことをわたしの父が許しているのは、ただわたしの故であることを知らないのか。どうしてあなたがたは今日、心を鈍らせてしまったかのように、それほどまでに頑なで揺るぎないままなのか。あなたがたが今日犯す悪は、わたしが地上から去った後に来る怒りの日から、どうして逃れられるだろうか。これほど頑なで揺るぎない者たちを、わたしはどうしてヤーウェの怒りから逃れさせることができようか。

過去のことを思い出してみなさい。あなたがたに対して、いつわたしの目が怒りに満

ちており、わたしの声が厳しかったか。いつわたしがあなたがたに些細なことを言い立てたか。いつわたしがあなたがたを理不尽に叱責したか。いつわたしがあなたがたを面と向かって叱責したか。わたしの働きのために、わたしが父にあなたがたをすべての誘惑から守ってくれるように頼むのではないか。なぜあなたがたは、わたしをこのように扱うのか。わたしが、あなたがたの肉体を撃つためにわたしの権威を使ったことがあるだろうか。なぜあなたがたはそのようにわたしに報いるのか。わたしに対する態度をころころ変えた後、あなたがたは熱くも冷たくもない。そしてあなたがたはわたしを騙し、わたしから物事を隠そうとする。あなたがたの口は不義の唾液で満ちている。あなたがたは自分の舌でわたしの霊をだませると思うのか。あなたがたの舌がわたしの怒りを逃れられると思うのか。あなたがたは、あなたがたの舌が思いのままに、わたしヤーウェの業を裁いてもよいと思うのか。わたしは人によって裁きを下される神であろうか。小さな蛆虫がこのようにわたしを冒瀆するのを、わたしがどうして許せようか。どうしてこのような不従順の子たちをわたしの永遠の祝福の中に置けるだろうか。あなたがたの言葉と行いは、ずっと前にあなたがたを暴露し、罪に定めた。わたしが天を拡げ、万物を創造したとき、わたしはどの被造物にも思いのままに介入することを許さず、ましてや、どんなに望もうと、何もののにもわたしの働きとわたしの経営を妨げさせたりなどしなかった。わたしは人間にも物にも容赦しなかった。わたしに対して残虐で非人道的な者をどうして見逃せるだろうか。どうしてわたしの言葉に逆らう者を赦せるだろうか。どうしてわたしに対して不従順な者を見逃せるだろうか。人間の運命は全能者であるわたしの手の中にあるのではないか。わたしがどうしてあなたの不義と不服従を聖であると見なせるだろうか。どうしてあなたの罪がわたしの聖さをけがせるだろうか。わたしは不義の汚れによってけがされることはなく、不義の者の捧げものを喜ぶこともない。あなたがわたしヤーウェに忠実であるのなら、わたしの祭壇のいけにえを取って自分のものとするなどできるだろうか。あなたは毒のある舌を使って、わたしの聖なる名を冒瀆できるだろうか。このようにわたしの言葉に反逆できるだろうか。わたしの栄光と聖なる名を悪い者であるサタンに仕える道具として扱えるのだろうか。わたしのいのちは聖なる者たちの喜びのために与えられた。あなたの思いのままにわたしのいのちをもてあそび、それをあなたがた同士の争いの道具として使うのを、どうしてわたしが許せようか。どうして善を行うこととわたしに対する態度がそのように無慈悲で欠けが多いのか。わたしがすでにこれらのいのちの言葉にあなたがたの悪行を書き付けたことを知らないのか。あなたがたは、わたしがエジプトを罰する怒りの日から、どうして逃れることができようか。あなたがたがこのように何度もわたしに敵対して反逆すること、

どうしてわたしが許せるだろう。はっきり言うが、その日が来ると、あなたがたへの刑罰は、エジプトのそれよりも耐えがたいものになるだろう。わたしの怒りの日をどうして逃れられようか。まことにわたしは言う。わたしの忍耐はあなたがたの悪行のために用意されたのであり、その日のあなたがたの刑罰のために存在するのである。いったんわたしが忍耐の限界に達したら、怒りの裁きに苦しむことになるのはあなたがたではないのか。すべてのことは全能であるわたしの手の中にあるのではないのか。天の下であなたがたがこのようにわたしに逆らうのを、どうして許すことができようか。あなたがたは、来ると言われていながら来なかったメシアに出会ったので、あなたがたの人生は非常に困難なものになるだろう。あなたがたは彼の敵ではないのか。イエスはあなたがたの友だったが、あなたがたはメシアの敵である。あなたがたがイエスの友であっても、あなたがたの悪行は忌み嫌われる者の器を満たしたことを知らないのか。あなたがたがヤーウェと非常に親しくても、あなたがたの悪しき言葉がヤーウェの耳に届き、ヤーウェの怒りを招いたことを知らないのか。どうしてヤーウェがあなたと親しくなれようか。悪行で満たされたあなたの器を、どうしてヤーウェが焼かずにいられようか。どうしてヤーウェはあなたの敵とならずにいられようか。

救い主はすでに「白い雲」に乗って戻って来た

数千年もの間、人は救い主の到来に立ち会えることを熱望してきた。何千年も救い主イエスを切望し、渴望してきた人々のもとにイエスが白い雲に乗って直接降りてくるのを見ることを望んできた。救い主が戻って来て人々と再会すること、すなわち、救い主イエスが何千年もの間離れていた人々のもとに戻ってくることを望んできた。そしてイエスがユダヤ人の間で行なった贖いの働きをもう一度実行すること、人に対して憐れみ深く愛情にあふれていること、人の罪を赦し、人の罪を負い、人のすべての過ちさえ引き受け、人を罪から救うことを望んでいる。人々は救い主イエスが以前と同じであること、つまり愛すべき、心優しい、尊敬すべき救い主、人に対して決して激怒せず、決して人を非難しない救い主であることを望んでいる。この救い主は人の罪のすべてを赦し、引き受け、人のためにもう一度十字架上で死にさえする。イエスが旅立って以来、彼に従った使徒たちや、彼の名前のおかげで救われたすべての聖徒はイエスを切望し待っている。恵みの時代にイエス・キリストの恵みによって救われた人々はすべて、終わりの日の喜びに満ちたある日、救い主イエスが白い雲に乗って到着し、人々のもとに現れる日をずっと待ち焦がれている。もちろん、これは今日救い主イエスの名前を受け入れるすべての人々が共有する望みでもある。全世界のあらゆる場所で、救い主イエスの救

済について知っている人々はすべて、イエス・キリストが突然到来し、「わたしは旅立った時とまったく同じようにやって来る」と地上で言った言葉を実現させることを心底切望している。磔刑と復活の後、イエスは白い雲に乗って天に戻り、いと高き者の右側に座したと人は信じている。イエスは同様に再び白い雲に乗って（この雲はイエスが天に戻るとき乗った雲を指している）何千年もの間イエスを待ち焦がれている人々のもとに降りて来るであろうこと、イエスはユダヤ人の姿をし、ユダヤ人の衣服を身に着けているであろうことを人は心に描いている。人の前に現れた後、イエスは食物を彼らに授け、生ける水を人々に向けてほとばしり出るように流し、恵みと愛に満ち、人々のあいだで生き生きと現実暮らしだろ、等々。しかし、救い主イエスはそうはしなかった。彼は人が心に抱いたこととは反対のことをした。イエスはその再来を切望していた人々のもとには到来せず、白い雲に乗ってすべての人の前に現れもしなかった。彼はすでに来ていたが、人は彼を知らず、彼に気づかないままである。人は虚しく彼を待つだけで、彼がすでに白い雲（彼の霊、言葉、全性質、そして彼のすべてである雲）に乗って降臨し、今や終わりの日に彼が作る勝利者の一団のもとにいることに気づいていない。人はこのことを知らない。聖なる救い主イエスは人に対して慈しみと愛に満ちているが、どうして彼が腐敗と不純な霊が宿っている「神殿」で働くことができようか。人はイエスの到来をずっと待っているが、不義の者の肉を食べ、不義の者の血を飲み、不義の者の衣服を着る人々、イエスを信じるが彼を知らない人々、絶えず彼からだまし取る人々の前にどうしてイエスが現れることができようか。人は救い主イエスが愛と憐れみに満ちており、贖いに満ちた罪の捧げものであることしか知らない。しかし、イエスは同時に神自身であり、義、威厳、怒り、および裁きにあふれており、権威を所有し、尊厳に満ちていることはまったくわかっていない。そこで、たとえ人が贖い主の再来をしきりに切望し、天が人の祈りによって動かされたとしても、救い主イエスは、彼の存在は信じて、彼のことを知らない人々の前には現れない。

「ヤーウェ」はわたしがイスラエルで働きを行なっている間に用いた名前であり、人を憐れみ、人を呪い、人の生活を導くことのできる、イスラエル人（神に選ばれた人々）の神という意味である。それは偉大な力を所有し、英知に満ちた神という意味である。「イエス」はインマヌエルであり、愛に満ち、慈悲心に満ち、人の罪を贖う捧げものを意味する。イエスは恵みの時代の働きを行ない、恵みの時代を表すので、経営（救いの）計画の一部分しか表すことはできない。すなわち、ヤーウェだけがイスラエルの選ばれた人々の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、モーセの神、イスラエル

のすべての人々の神である。そこで現代、すべてのイスラエル人は、ユダヤの民は別として、ヤーウェを崇拝している。彼らは祭壇でヤーウェに捧げものをし、神殿で祭司の祭服を着て神に仕える。彼らが望むのは、ヤーウェの再現である。イエスだけが人類の贖い主である。イエスは罪から人類を救った捧げものである。つまり、イエスの名前は恵みの時代から来ており、恵みの時代の贖いの働きのために存在した。イエスの名前は恵みの時代の人々が生き返り、救われるために存在したのであり、全人類の贖いのための特別な名前である。そこで、イエスという名前は贖いの働きを表し、恵みの時代を意味する。ヤーウェの名前は律法の下に生きたイスラエルの人々のための特別な名前である。各時代、各段階の働きにおいて、わたしの名前は根拠のないものではなく、代表的意味を持っている。それぞれの名前は一つの時代を表す。「ヤーウェ」は律法の時代を表し、イスラエルの人々が崇拝した神の敬称である。「イエス」は恵みの時代を表し、恵みの時代に贖われたすべての人々の神の名前である。人が終わりの日に救い主イエスが到来することをまだ望み、ユダヤの地にいたときの姿で到来することをまだ期待するのなら、六千年の経営計画全体は贖いの時代に停止し、それ以上進展することはできないだろう。そのうえ、終わりの日は決して来ることはなく、時代にピリオドが打たれることはないだろう。救い主イエスは人類の贖いと救いのためだけにあるからである。わたしは恵みの時代のすべての罪人のためにイエスの名を名乗ったのであり、わたしが人類全体を終らせるのはこの名においてではない。ヤーウェ、イエス、メシアはすべてわたしの霊を表すが、これらの名前は単にわたしの経営計画の異なる時代を示すものであり、わたしの全体を表すものではない。地上の人々がわたしを呼ぶ名前のどれも、わたしの性質全体、わたしであるすべてを明確に示すことはできない。それらは単に異なる時代にわたしが呼ばれる異なる名前にすぎない。だから最後の時代――終わりの日の時代――が来た時、わたしの名前はまた変わるのである。わたしはヤーウェやイエスとは呼ばれないし、ましてやメシアとは呼ばれないが、力ある全能の神自身と呼ばれ、この名前の下でわたしは時代全体を終らせるだろう。わたしはかつてヤーウェとして知られていた。わたしはメシアとも呼ばれ、また、人々はかつてわたしを救い主イエスとも呼んだ。わたしを愛し、尊敬したからである。しかし、今日わたしは人々が過去に知っていたヤーウェでもイエスでもない。わたしは終わりの日に戻ってきた神、時代を終らせる神である。わたしは、わたしの全性質を余すところなく顕し、権威、名誉、栄光に満ちて地の果てから立ち上がる神自身である。人々は一度もわたしと関わったことがなく、わたしを知ったことがなく、ずっとわたしの性質に無知であった。天地創造から今日に至るまで、わたしを見たことがある者はひとりとしていなかった。これは終わりの日に

人の前に現れるが、人々の間に隠れている神なのである。神は真実で現実的に、照りつける太陽や燃え立つ火のように、力に満たされ、権威にあふれて人々のあいだに存在する。わたしの言葉によって裁きを受けない人や物は一人として、一つとしてない。燃える火によって浄化されない人や物は一人として、一つとしてない。最終的には、あらゆる諸国はわたしの言葉のために祝福され、わたしの言葉のために粉々に砕かれもする。このようにして、終わりの日にすべての人は、わたしが戻ってきた救い主であり、人類のすべてを征服する全能神であり、かつては人のための罪の捧げものであったが、終わりの日にはすべてを焼き尽くす太陽の炎にもなり、またすべてのものを露わにする義の太陽でもあることを理解するだろう。それが終わりの日のわたしの働きである。わたしはこの名前を名乗り、この性質を持ち、すべての人がわたしが義の神であり、照りつける太陽、燃え立つ火であることが理解できるようにする。そうするのはすべての人が唯一の真の神であるわたしを崇め、わたしの本当の顔を見ることができるようになるのである。わたしはイスラエル人たちの神であるだけでなく、贖い主であるだけでなく、天、地、海の至る所にあるすべての創造物の神である。

終わりの日に救い主が到来する時、まだイエスと呼ばれていたら、そしてもう一度ユダヤで生まれ、そこで働きを行なったら、これはわたしがイスラエルの人々だけを造り、イスラエルの人々だけを贖い、異邦人とは関係がないことの証明になるだろう。これは「わたしは天と地、すべてのものを造った主である」というわたしの言葉と矛盾しないだろうか。わたしはユダヤを離れ、異邦人のもとで働きを行なう。なぜならわたしはイスラエルの人々の神というだけでなく、すべての創造物の神だからである。わたしは終わりの日には異邦人のもとに現れる。なぜならわたしはヤーウェ、つまりイスラエルの人々の神であるだけでなく、さらに、異邦人の中でわたしが選んだ者すべての創造主だからである。わたしはイスラエル、エジプト、レバノンを造っただけでなく、イスラエルの域を超えてすべての異邦人の国々も造った。そしてこのために、わたしはすべての創造物の主なのである。わたしは働きのための出発点としてイスラエルを使い、ユダヤとガリラヤを贖いの働きの拠点として用い、異邦人の国々を時代全体を終らせる起点として使うだけである。わたしはイスラエルで二段階の働き（律法の時代と恵みの時代の二段階の働き）を行ない、イスラエルの域を超えた国々の至る所でさらに二段階の働き（恵みの時代と神の国の時代）を行なってきた。異邦人の国々でわたしは征服の働きを行ない、時代を終らせる。もし人がいつまでもわたしをイエス・キリストと呼び、わたしが終わりの日に新しい時代を始め、新しい働きに着手していることを知らず、いつ

までも取りつかれたように救い主イエスの到来を待つならば、わたしはこのような人々をわたしの存在を信じない人々と呼ぶだろう。彼らはわたしを知らない人々で、わたしへの信仰は偽りである。このような人々が救い主イエスの天からの再来に立ち会うことができるだろうか。彼らが待っているのはわたしの到来ではなくユダヤ人の王の到来である。彼らはこの不純な古い世界をわたしが絶滅させることを切望しているのではなく、その代わりにイエスの再来を望み、それにより罪から贖われることを願っている。彼らはイエスがこの汚れた、よこしまな地から全人類をもう一度贖うことを切望している。どうしてこのような人々が終わりの日にわたしの働きを完成させる人々になれるだろう。人の願望はわたしの望みを達成することも、わたしの働きを完成させることもできない。人はわたしが以前になした働きを賞賛し、大切にすることで、わたしがいつも新しく、決して古くならない神自身であることにまったく気づかないからである。人はわたしがヤーウェでイエスであることを知っているだけで、わたしが最後に来る人類を終らせるものであることに少しも感づいていない。人が熱望し知っているすべては、自分の観念に関するものや、自分の目で見ることができないものに過ぎない。それはわたしの働きと一致しておらず、調和していない。わたしの働きが人の考えに従って行なわれるとしたら、いつ終わるだろう。いつ人類は安息に入るだろう。そしてわたしはどうしたら7日目の安息日に入ることができるだろう。わたしは、わたしの計画に従って、わたしの目的に従って働くのであり、人の意図に従っては働かない。

福音を広める働きはまた人間を救う働きでもある

すべての人々は地上におけるわたしの働きの目的、つまり、わたしが最終的に何をどのように望んでいるかと、この働きが完成するまでに、その中でどの程度達成しなければならないかを理解する必要がある。今日までわたしとともに歩みながら、わたしの働きが一体何であるのかを理解していないならば、人々はむだにわたしと歩んできたのではないのか。わたしに従う人々は、わたしの旨を知るべきである。わたしは地上において何千年も働いてきたのであり、今日に至るまでこのように働き続けている。わたしの働きには多くの項目が含まれているものの、その目的は変わらないままである。例えば、わたしが人間に対する裁きと刑罰で満ちていても、わたしの行なうことはやはり人間を救うためであり、また人が完全にされたあと、わたしの福音をよりよく広め、あらゆる異邦人の国においてわたしの働きをさらに展開するためである。ゆえに、多くの人はずっと以前から失望に沈んでいる今日でも、わたしはいまだに働きを続けており、人を裁いて罰するために行なうべき働きを続けているのである。人はわたしの言うことにうん

ざりしており、わたしの働きに関わりたくないと思っているが、それにもかかわらず、わたしはいまだに自分の務めを果たしている。なぜなら、わたしの働きの目的は変わらないままであり、わたしの本来の計画は打ち破られることがないからである。わたしの裁きが果たす役割は、人間がわたしによりよく従えるようにすることであり、わたしの刑罰が果たす役割は、人間がより効果的に変化できるようにすることである。わたしが行なうことはわたしの経営（救い）のためであるものの、わたしはこれまでに人間に有益でないことを行なったことはない。それは、イスラエルの外にわたしが足場をもてるよう、イスラエルの外のあらゆる民族をイスラエル人と同じくらい従順にし、彼らを真の人間にしたいからである。これがわたしの経営であり、わたしが異邦人の諸国のあいだで成し遂げている働きである。今でさえ、多くの人が依然わたしの経営を理解していない。そのようなことに関心がなく、自分自身の将来と終着点だけを気にかけているからである。わたしが何を言おうと、人々はわたしの行なう働きに無関心なままで、その代わりに将来における自分の終着点だけに集中している。このままであれば、どうしてわたしの働きが拡大できるだろうか。どうしてわたしの福音が世界中に広まるだろうか。わたしの働きが広まるとき、わたしはあなたがたを散り散りにし、ちょうどヤーウェがイスラエルの諸部族の一つひとつを撃ったようにあなたがたを撃つことを、あなたがたは知るべきである。これはすべて、地球のいたるところにわたしの福音が広まり、異邦人の諸国のもとに届き、わたしの名が大人にも子供にも賛美され、わたしの聖なる名があらゆる国々、あらゆる民族の人々の口から褒め称えられるようにするためである。それは、この最後の時代において、わたしの名が異邦人の民族のあいだで賛美され、わたしの業が異邦人たちに見られ、わたしの業ゆえに彼らがわたしを全能者と呼び、わたしの言葉がまもなく実現されるようにするためである。わたしはイスラエル人の神であるだけでなく、わたしが呪った民族をも含むあらゆる異邦人の民族の神であることを、わたしはすべての人々に知らしめる。わたしがすべての被造物の神であることを、わたしはあらゆる人々に知らしめる。これがわたしの最も大きな働き、終わりの日に向けた働きの計画の目的、そして終わりの日に成就される唯一の働きである。

わたしが何千年にもわたり経営してきた働きは、終わりの日においてのみ人間に完全に明らかにされる。今初めて、わたしは自分の経営の奥義の全貌を人間に明かし、人間はわたしの働きの目的を知り、そのうえわたしの奥義のすべてを理解したのである。わたしはすでに、人間が関心をもつ終着点についてすべてのことを人間に告げた。五千九百年以上隠されていたわたしの奥義のすべてを、すでに人間のために明らかにしたので

ある。ヤーウェとは誰か。メシアとは誰か。イエスとは誰か。あなたがたはこれらのことをすべて知っているはずである。わたしの働きはこれらの名によって定まる。そのことを理解したのか。わたしの聖なる名はいかに宣言されるべきか。わたしのことをわたしの名のいずれかで呼んできた諸民族のいずれかに、わたしの名はいかに広められるべきか。わたしの働きはすでに拡大しており、わたしはその拡充をあらゆる民族に広める。わたしの働きはあなたがたにおいて行なわれてきたのだから、ちょうどヤーウェがイスラエルのダビデの家の羊飼いたちを撃ったように、わたしはあなたがたを撃って、あらゆる民族のあいだに分散させる。終わりの日、わたしはすべての国々を粉々に打ち碎き、その民を新たに分配するからである。わたしが再来するとき、国々はわたしの燃えさかる炎がつくった境界線に沿ってすでに分断されているであろう。そのときわたしは焼けつく太陽として、人類の前に新たに現われ、人間がかつて見たことのない聖なるものの姿で公然と彼らに自分自身を示し、ちょうどわたし、ヤーウェがかつてユダヤの諸部族のあいだを歩いたように、無数の諸民族のあいだを歩く。それ以降、わたしは地上における人類の生活を導く。そこで人々は必ずやわたしの栄光を見、また空中に雲の柱が一本、彼らを生活において導くためにあるのを見る。わたしは聖なる場所に出現するからである。人間はわたしの義なる日を、またわたしの栄えある出現を見る。わたしが地球全体を統治し、わたしの多くの息子たちを栄光に至らせるとき、それは起こる。地上のいたるところで人々はひれ伏し、わたしの幕屋は人類のただ中に、わたしが今日行なう働きの岩の上に堅固に打ち立てられる。人は神殿においてもわたしに仕える。祭壇は汚らしくおぞましいもので覆われており、わたしはそれを粉々に打ち碎き、新たに建てる。生まれたばかりの子羊と子牛が聖なる祭壇の上に積み上げられる。わたしは今日の神殿を打ち倒し、新しい神殿を建てる。今日ある神殿は嫌悪すべき人々で溢れており、それは崩れ落ちる。わたしが建てる新しい神殿は、わたしに忠実なしもべで溢れる。彼らはわたしの神殿の栄光のために再び立ち上がり、わたしに仕える。あなたがたは、わたしが大いなる栄光を受ける日を、またわたしが神殿を倒して新しい神殿を建てる日を必ずや見るであろう。さらに、わたしの幕屋が人間の世界に到来する日を必ずや見るであろう。わたしは神殿を壊すと同時に、あたかも人間がわたしの降臨を見るかのよう、わたしの幕屋を人間の世界にもたらす。あらゆる国々を打ち碎いた後、わたしはそれらを新たに集め、その時からわたしの神殿を建て、わたしの祭壇を築くことで、あらゆる者がわたしに生贄を捧げ、神殿でわたしに仕え、異邦人の諸国におけるわたしの働きに忠実に献身できるようにする。彼らは現代におけるイスラエルの民のようになり、祭司の式服と冠をまとう。わたし、ヤーウェの栄光が彼らのただ中にあり、わたしの威

敵が彼らの頭上において彼らとともに留まっている。異邦人の諸国におけるわたしの働きもまた、同じ方法で実行される。異邦人の諸国におけるわたしの働きは、イスラエルにおけるわたしの働きと同様である。なぜなら、わたしはイスラエルでの働きを拡大させ、それを異邦人の諸国に広めるからである。

現在はわたしの霊が大いなる働きを行い、わたしが異邦人の諸国で働きを開始するときである。それ以上に、わたしがあらゆる被造物を分類し、一つひとつを種類ごとに仕分けし、わたしの働きがさらに早く効果的に進行するようにするときである。だから、わたしがあなたがたに求めるのはやはり、自己の存在の一切をわたしのすべての働きに捧げ、そしてさらに、わたしがあなたにおいて行なったすべての働きを明確に認識、確信し、わたしの働きがより効果的になるよう、自分の全力をそれに注ぎ込むことである。これが理解しなければならないことである。自分たちのあいだで争ったり、後戻りする道を探したり、肉体の快適さを求めたりするのをやめなさい。これらはわたしの働きと、あなたのすばらしい将来を遅らせる。そのようにするのはあなたを守るところか、破壊をもたらす。それは愚かなことではないだろうか。今日あなたが貪欲に享受しているものが、まさにあなたの将来を台無しにするものであり、一方、今日あなたが苦しんでいる痛みが、まさにあなたを守っているものである。抜け出すのに大変苦勞する誘惑に陥るのを避け、濃霧にはまり込み、太陽を見つけられなくなることから逃れるために、これらのことをはっきり認識しなければならない。濃霧が晴れると、あなたは大きな日の裁きのさなかにいる自分を見つける。その時点で、わたしの日は人類に近づきつつある。どうしてわたしの裁きから逃れるのか。どうして焼けつくような太陽の熱に耐えられるのか。わたしが自らの豊かさを人間に与えるとき、人間はそれを懷で大切にせず、代わりに誰も気づかない場所に投げ捨てる。わたしの日が人間の上に降りるとき、人間はもはやわたしの豊かさを見つけることも、はるか前にわたしが人間に語った苦い真実の言葉を見つけることもできない。光の明るさを失い、暗闇に陥ったので、人間は泣き叫ぶ。あなたがたが今日見ているのは、わたしの口の鋭利な剣に過ぎず、わたしの手にある鞭も、わたしが人間を燃やす炎も見ておらず、そのため、あなたがたはいまだにわたしの面前でも不遜で不節制なのである。そのため、あなたがたはいまだにわたしの家でわたしと争い、わたしが自らの口で語ったことに人間の言葉で反論するのである。人間はわたしを恐れず、今日までわたしと敵対し続けながら、それでもまったく恐れていない。あなたがたの口には不義なる者の舌と歯がある。あなたがたの言動はエバを罪へと誘惑した蛇のもののようで、互いに目には目を、歯には歯を要求しあい、わたし

の前で地位、名声、利益を自分のものにしようと奮闘するものの、わたしが密かにあなたがたの言動を見張っていることを知らない。あなたがたがわたしの前に来る以前でさえ、わたしはあなたがたの心の奥底を調べていた。人間はいつもわたしの手中から逃れ、わたしの目の観察を避けようと望んでいるが、わたしは人間の言動から離れたことがない。代わりに、それらの言動をわざとわたしの目に触れさせ、わたしが人間の不義さを罰し、人間の反抗に裁きを下せるようにする。このように、人間の密かな言動は絶えずわたしの裁きの座の前にあり、わたしの裁きは人間から離れたことがない。なぜなら人間の反抗は過度だからである。わたしの働きは、わたしの霊の面前で発せられ行なわれる人間のあらゆる言動を燃やして清めることである。こうすることで^[a]、わたしが地上を去るとき、人々は依然としてわたしへの忠誠を保ち、わたしの聖なるしもべがわたしの働きにおいてするようにわたしに仕え、それによりわたしの地上での働きはその完成の日まで続くのである。

脚注

a. 原文に「こうすることで」の語句は含まれていない。

あなたがたは人格が卑しすぎる

あなたがたはみな優雅の座に着き、自分とよく似た若い世代に訓戒し、その全員を自分の横に座らせている。あなたがたの「子孫」がはるか以前に息切れしてわたしの働きを失ったことなど、あなたがたは知らない。わたしの栄光は東の地から西の地まで輝き渡る。しかし、わたしの栄光が大地の果てまで広がり、昇って光を放ち始める時、わたしは東から栄光を取り、西にもたらず。わたしを東で見捨てた闇の民がそれ以降照らしを奪われるようにするためである。これが起こるとき、あなたがたは影の谷で生きることになる。今日の人間は以前よりも百倍は良くなっているが、依然としてわたしの要求を満たすことができず、いまだにわたしの栄光の証しではない。あなたがたが以前より百倍も良くなったのは、ひとえにわたしの働きの成果である。地上でのわたしの働きから生まれた実なのである。しかし、わたしはあなたがたの言動や人格にまだ嫌悪を感じ、わたしの前でのあなたがたの振舞い方に激しい憤りを感じる。あなたがたはわたしをまったく理解していないからである。そのようなことでわたしの栄光を生きることがどうしてできようか。わたしがこれから行なう働きにまったく忠実でいることなどどうしてできようか。あなたがたの信仰はとても美しい。あなたがたは喜んで自分の一生をわたしの働きのために費やし、自分の生命をそのために捧げると言う。しかし、あなた

がたの性質はあまり変わっていない。実際の振る舞いは惨めそのものなのに、あなたがたはただ傲慢に語る。まるで、人の舌と唇は天国にあるが、足は遥か下の地上にあるかのように、それゆえ、人の言動と評判は依然ずたずたになったままである。あなたがたの評判は崩れ、行儀はひどく、話し方は卑しく、生活は嘆かわしい。あなたがたの人間性全体が卑しい低劣さに沈み込んでいる。他人に対して心が狭く、些細なことの一つひとつにうるさいほどこだわる。自分の評判や地位のことで口喧嘩し、そのためには地獄や火の湖に落ちることすら辞さない。あなたがたの現在の言動だけで、わたしがあなたがたを罪深いと断定するのに十分である。わたしの働きに対するあなたがたの態度は、あなたがたを不義な人と判断するのに十分で、あなたがたのすべての性質は、あなたがたが忌まわしいものに満ちた穢れた魂であると指摘するのに十分である。あなたがたが示すものや表わすものは、あなたがたが穢れた霊の血をたっぷり飲んだと判断するのに十分である。神の国に入ることの話になると、あなたがたは感情を露わにしない。今の自分のあり方が、天にあるわたしの国への門を通るに相応しいと信じているのか。自分の言動がまずわたしに試されなくても、自分はわたしの働きと言葉の聖なる地に入れると信じているのか。誰がわたしの目をうまく欺けるというのか。あなたがたの卑劣で下賤な行動や会話が、どうしてわたしの目から逃れられようか。わたしはあなたがたの生活を、穢れた霊の血を飲み肉を喰らう生活だと判断した。なぜなら、あなたがたは毎日わたしの前で穢れた霊を模倣するからである。わたしの前で、あなたがたの振る舞いはとりわけひどかった。どうしてそれに嫌悪を抱かずにいることができようか。あなたがたの言葉には穢れた霊の不純さが含まれている。魔術を行なう者、または不義な者の血を飲む不実な者のように、あなたがたは騙し、隠し、お世辞を言う。人間の表わすものはどれも極めて不義である。それならば、義なる人のいる聖なる地にどうしてあらゆる人が置かれ得るのか。あなたの卑劣な振る舞いが、不義な人に比べてあなたが聖なる人であると区別できるとでも思うのか。あなたの蛇のような舌は、破滅と嫌悪を引き起こすあなたのその肉体をやがて滅ぼす。穢れた霊の血で覆われたあなたのその手もまた、あなたの魂をやがて地獄へと引きずり込む。それなのになぜ、穢れに覆われた自分の両手を清めるこの機会に飛びつかないのか。なぜこの機会を利用して、不義の言葉を語るその舌を切り取らないのか。自分の手、舌、唇のために地獄の炎で苦しむ覚悟があるということなのか。わたしは両目であらゆる人の心を見守り続ける。人類を創造する遥か以前、わたしは自らの手中に人の心を掴んでいたからである。わたしは遥か昔に人間の心を見通していた。どうして人の思いがわたしの目から逃れられようか。わたしの霊に焼かれることから逃れるには遅すぎないということがどうしてあり得ようか。

あなたの唇は鳩より優しいが、あなたの心は古い蛇より悪意がある。あなたの唇はレバノンの女性のように愛らしいが、あなたの心は彼女らに比べて優しくはなく、カナン人の美しさと比較にならないことは言うまでもない。あなたの心はあまりに不誠実である。わたしが忌み嫌うのは、不義な人の唇とその心だけである。わたしの人への要求は、わたしが聖人に期待するものよりも高くはない。わたしは不義な人の邪惡な行ないに嫌惡を覚える。わたしが望むのは、彼らが不義な人と一線を描き、義なる者たちと共に生き、共に聖なる者となれるよう、自分の穢れを捨て去り、現在の窮地から脱出できるようになることである。あなたがたはわたしと同じ状況にいるが、あなたがたは穢れで覆われている。創造当初の人間と少しも似ていない。さらに、あなたがたは毎日穢れた靈に倣い、穢れた靈と同じ行動をとり、同じことを言っているので、あなたがたのあらゆる部分、舌や唇までもが穢れた靈の汚水に浸っていて、そのような染みですっかり覆われており、わたしの働きに用いることのできる部分が一つもないほどである。これは実に悲しいことである。馬や牛のそうした世界に住んでいながら、あなたがたは平気である。しかも喜びに満ち溢れ、自由かつ気楽に生きている。その汚水の中で泳ぎ回っているが、自分がそのような窮地に陥ってしまったことに実際に気づいていない。毎日穢れた靈と付き合い、「糞便」と交流する。あなたの生活は実に下品だが、自分が人間の世界には絶対に存在していないこと、自分自身を制御していないことに実際に気づいていない。あなたの人生はとうの昔にそれらの穢れた靈に踏みにじられ、人格はとっくに汚水で汚れてしまっていることを知らないのか。自分が地上の樂園に生き、幸福のただ中にとでも思っているのか。穢れた靈と人生を共にし、穢れた靈があなたに用意したあらゆるものと共存してきたことを知らないのか。あなたの生き方に意味などあるうか。あなたの人生に価値などあるうか。穢れた靈である両親のために今まで忙しく走り回って来たが、あなたを陥れたのがあなたを生み、育てた穢れた靈である両親だとは知らないでいる。さらには、自分のあらゆる穢れが実際には彼らから与えられたものだと気づかず、彼らは「楽しみ」をもたらせるものの、自分を罰することも裁くこともなく、呪うことなど特にしないということしか、あなたは知らない。彼らがあなたに怒りを爆発させたことはなく、あなたを愛想良く、親切に扱う。彼らの言葉はあなたの心を養い、あなたを虜にし、そのためあなたは迷い、知らず知らずのうちに引き込まれ、進んで彼らに尽くすようになり、彼らのはけ口、しもべとなる。あなたは不平一つ言わず、犬や馬のごとく彼らのために喜んで働こうとする。あなたは彼らに惑わされている。それゆえ、わたしが行なう働きにあなたは決して反応しない。いつも密かにわたしの手からすり抜けたがるのも、またわたしの好意を騙し取るためにいつも甘い言葉を使いた

がるのも、不思議ではない。結局のところ、あなたにはすでに別の計画、別のはかりごとがあったのだ。あなたは全能者としてのわたしの行ないをわずかに見ることができるものの、わたしの裁きと刑罰については微塵も知らない。わたしの刑罰がいつ始まったのかを知らず、知っているのはいかにしてわたしを騙すかだけであり、わたしが人間の違背を一切容赦しないことは知らない。あなたはもうわたしに仕える決意を固めているので、わたしはあなたを手放さない。わたしは悪を嫌う神であり、人類に嫉妬する神である。あなたはすでに祭壇で誓ったのだから、あなたがわたしの目の前で逃げ出すことも、二人の主人に仕えることも許しはしない。わたしの祭壇で、わたしの目の前で誓った後に、二番目の愛する対象をもてると思ったのか。人がそのようにわたしを笑いものにすることを、わたしが許すことなどあろうか。あなたは自分の舌でわたしに軽々しく誓いを立てられるとでも思ったのか。いと高き者であるわたしの玉座に誓いを立てることなどどうしてできたのか。誓いなどすでに消え去ったとでも思ったのか。あなたがたに言うておくが、たとえあなたがたの肉体が消え去ろうとも、あなたがたの誓いが消えることはあり得ない。最後にわたしは、あなたがたの誓いに基づいてあなたがたを断罪する。しかし、あなたがたは言葉をわたしの前に置くことでわたしに対処できると信じ、自分の心は穢れた霊と邪惡な霊に仕えることができると考える。わたしを騙すこうした犬や豚同然の人間を、どうしてわたしの怒りが容赦できようか。わたしは行政命令を執行し、わたしを信じるこれらの堅苦しく「敬虔な」者たちを穢れた霊どもの手から奪い返さなければならない。そうすることで、彼らは規律正しくわたしに「仕え」、わたしの役牛となり、馬となり、わたしのなすがままに殺される。わたしはあなたに以前の決意を取り戻させ、もう一度わたしに仕えさせる。わたしを騙すどのような被造物も許さない。あなたはわたしにただ気まぐれに要求し、わたしの前で嘘をつくことができると思ったのか。あなたの言動をわたしが見聞きしていないとでも思ったのか。あなたの言動がわたしの目に触れないことなどあるはずがない。人がそのようにしてわたしを騙すことを、どうしてわたしが許せようか。

わたしはずっとあなたがたの間にいて、いくつかの春と秋をあなたがたと付き合いながら過ごしてきた。わたしは久しくあなたがたのもとで暮らし、共に生きてきた。あなたがたの卑劣な振る舞いのどのくらいが、わたしの目の前をすり抜けただろうか。あなたがたの心からの言葉は常にわたしの耳に響いている。わたしの祭壇の上に、あなたがたは何百万もの望みを並べた。多すぎて数えられないくらいである。にもかかわらず、あなたがたの献身、費やしたものといえは皆無である。あなたがたはひとしずくの誠意

すらわたしの祭壇に捧げていない。わたしへの信仰の実りはどこにあるのか。あなたがたは無限の恵みをわたしから受け、果てしなく続く天の奥義を見た。わたしは天の炎さえもあなたがたに見せたが、あなたがたを焼き尽くす心をもったことはない。それなのに、あなたがたは代わりにどれほどわたしに与えたというのか。どれほどのものを進んでわたしにくれるのか。わたしが与えた食物を手を、振り返ってそれをわたしに捧げる。しかも、それは自分が汗水たらして得たもので、自分がつすすべてのものを捧げているのだと言わんばかりである。あなたからわたしへの「寄付」はどれもわたしの祭壇から盗まれたものだ、あなたはどのようにして知らないのか。さらに、今そのようなものをわたしに捧げて、わたしを騙しているのではないか。今日わたしが享受するものは、すべてわたしの祭壇に捧げられたものであり、あなたが苦労した見返りとして手に入れ、わたしに差し出したものではないのだと、どうしてわからないのか。あなたがたは実際に厚かましくもわたしをこのように騙しているのだから、どうしてわたしがあなたがたを許せようか。こうしたことにわたしがさらに耐え続けられると、どうしてあなたがたは思えるのか。わたしはあなたがたにすべてを与えた。わたしはあなたがたにすべてを開放し、必要を満たし、あなたがたの目を開いた。にもかかわらず、あなたがたは自分の良心を無視してわたしをこのように騙す。わたしは無欲になってあなたがたにすべてを与えた。たとえあなたがたが苦しんでも、わたしが天からもたらしたすべてのものを得られるようにするためである。それなのに、あなたがたには献身が一切なく、ほんの少し寄付したとしても、後になってわたしと「精算」しようとする。あなたが捧げたものなど無に等しいのではないのか。自分は砂粒ひとつだけを差し出しておいて、わたしに一トンの金を要求してきた。あなたは理不尽そのものではないか。わたしはあなたがたの間に働きを行なう。わたしの受けるべき一割はその形跡すら絶対になく、追加の犠牲などももちろんない。さらには、信心深い者たちの捧げた一割は悪い者が取り上げている。あなたがたはみなわたしから離れているのではないか。みなわたしに敵対しているのではないか。みなわたしの祭壇を破壊しているのではないか。そのような者たちがわたしの目に宝と映ることなどあり得ようか。彼らはわたしの嫌う豚や犬ではないのか。あなたがたの邪惡な行ないを宝物と呼ぶことなどどうしてできようか。わたしの働きは実際のところ誰のために行なわれるのか。もしかして、その目的はただあなたがた全員を打ち倒し、わたしの権威を現わすことなのか。あなたがたの生命はすべて、わたしの発する一言にかかっているのではないか。わたしが言葉を用いてあなたがたを指導するだけで、言葉を事実に変えてあなたがたをできるだけ早く打ち倒さなかったのはなぜなのか。わたしの言葉と働きは、人類を打ちのめすためだけのものなのか。わたしは罪なき

者を無差別に殺す神なのか。まさに今、あなたがたのうち何人が全身全霊でわたしの前に来て、人生の正しい道を求めているのか。わたしの前にいるのはあなたがたの身体だけである。心は野放しのままで、わたしから遥か遠くにある。わたしの働きが実際にどのようなものかを知らないのも、あなたがたの多くはわたしから離れて遠くにいたり、その代わり刑罰も裁きもない楽園で生きることを望む。これが人の心の願いではないのか。わたしは決してあなたに強制しているのではない。どのような道を進むかはあなた自身の選択である。今日の道には裁きと呪いが伴う。だがあなたがた全員が知るべきなのは、裁きであれ刑罰であれ、わたしがあなたがたに授けたものはどれもわたしが提供し得る最上の贈り物であり、あなたがたが今すぐ必要としているものだということである。

律法の時代における働き

ヤーウェがイスラエル人に行なった働きは、地上における神の起源の場所を人類の間で確立させたが、それは神が臨在した聖なる場所でもあった。神はその働きをイスラエルの人々に限定した。当初、神はイスラエルの外では働かず、むしろ働きの範囲を限定するため、神が適切とみなした民を選んだ。イスラエルは神がアダムとエバを創った場所であり、ヤーウェはその場所の塵から人間を創造した。この場所は地上におけるヤーウェの働きの拠点となった。イスラエル人はノアの子孫であり、またアダムの子孫でもあるが、地上におけるヤーウェの働きの基盤となる人間だった。

その当時、イスラエルにおけるヤーウェの働きの意義、目的、段階は、全地球上で働きを始めることであり、それはイスラエルを中心としながら徐々に異邦人の国々に広まった。これが全宇宙にわたる神の働きの原則である。つまり、ある模範を確立したあと、宇宙のすべての人が神の福音を受け取るまでそれを広げるのである。最初のイスラエル人はノアの子孫だった。これらの人々はヤーウェの息だけを授けられ、生活する上で必要となる基本的なことに対処できるだけのことを理解したが、ヤーウェがどのような神であるかや、人間に対するヤーウェの旨は知らず、ましてや万物創造の主をどのように崇めるべきかなど知らなかった。従うべき^[a]規則や掟があったかどうか、また被造物が創造主のために尽くすべき本分があったかどうかについても、アダムの子孫たちは一切知らなかった。彼らが知っていたのは、夫は家族を養うために汗を流して労働しなければならず、妻は夫に従い、ヤーウェが創造した人類を永続させなければならないことだけだった。言い換えるなら、このような人々は、ヤーウェの息といのちだけをもって

おり、どのように神の律法に従うべきか、どのように万物創造の主を満足させるべきかについては何も知らなかった。あまりに何も理解していなかったのである。そのため、心の中によこしまなものや不実なものが一切なく、自分たちの間で嫉妬や争いが生じることも滅多になかったが、ヤーウェ、すなわち万物創造の主についてはなんら認識も理解もしていなかった。これら人間の祖先はヤーウェのものを食べ、ヤーウェのものを享受することは知っていたが、ヤーウェを畏れることは知らなかった。ヤーウェはひざまずいて礼拝すべき唯一の方であることを知らなかったのである。ならば、どうして彼らを神の被造物と呼べようか。そうであれば、「ヤーウェは万物創造の主である」そして「人間が神を明らかにし、神の栄光を表し、神を体現するようにすべく、神は人間を創造した」という言葉は、無駄に語られたのではないだろうか。ヤーウェに畏敬の念をもたない人が、どうしてヤーウェの栄光を証しできようか。どうしてヤーウェの栄光を明らかにすることができようか。ならば、「わたしはわたしに似せて人を創った」というヤーウェの言葉は、サタンという邪悪な存在が掌中に収める武器にならないだろうか。そしてこれらの言葉は、ヤーウェによる人の創造にとって不名誉の印とならないだろうか。ヤーウェは働きのその段階を完了すべく、人類創造の後、アダムからノアに至るまで、人類を教えたり導いたりすることはなかった。むしろ、洪水が世界を滅ぼして初めて、ノアの子孫であり、またアダムの子孫でもあるイスラエル人を、ヤーウェは正式に導き始めたのである。イスラエルにおけるヤーウェの働きと発した言葉は、イスラエルのすべての人々がイスラエルの全土で生活するにあたって導きを与えた。そのことは、ヤーウェは人間に息を吹き込み、それによって人間がヤーウェからいのちを与えられ、塵から起き上がって被造物となるようにすることができるだけでなく、人類を焼き尽くしたり、呪ったり、またその杖を使って人類を支配できることをも人に示した。それで人間もまた、ヤーウェが地上における人の生活を導き、昼と夜の時刻に従って人類の間で言葉を語り、働きを行なえることを知った。ヤーウェが行なった働きはひとえに、人がヤーウェによってつまみ上げられた塵に由来すること、そしてさらに、人がヤーウェによって創造されたことを被造物が知るようにするためである。これだけではなく、ヤーウェが最初にイスラエルで働きを行なったのは、他の民族と国々（実際のところ、それらはイスラエルと無関係ではなく、イスラエル人から枝分かれしたものの、依然としてアダムとエバの子孫である）が、イスラエルからヤーウェの福音を受け取るようにするため、そして宇宙のすべての被造物がヤーウェを畏れ、ヤーウェを偉大なものとして掲げられるようにするためである。ヤーウェがイスラエルで働きを開始せず、その代わりに人類を創造した後、彼らを地上でのんきに生活させていたら、その場合、人間は自

分の肉体の本性（本性とは、人間は自分に見えないものを決して認識できないことを意味する。つまり人間は、人類を創造したのがヤーウェであることを決して知り得ず、ましてヤーウェがなぜそうしたかなどまったく知ることがないのである）のせいで、人類を創造したのがヤーウェであることも、ヤーウェが万物の主であることも知るはずがなかった。ヤーウェが人間を創造して地上に置いた後、人類の間に一定期間留まって彼らを導かず、ただ手の塵を払って立ち去っていたら、全人類は無に帰していただろう。ヤーウェが創造した天地と無数の万物、そして全人類さえも無に帰し、それ以上に、サタンによって踏みつけられていただろう。そうなれば、「地上において、つまり天地創造の中心において、ヤーウェは立つべき場所、聖なる場所をもたなければならない」というヤーウェの望みは打ち砕かれていただろう。だから、人類創造の後、ヤーウェが人間のもとにとどまって人の生活を導き、彼らの間で話しかけることができたのは、すべてヤーウェの望みをかなえ、その計画を達成するためだった。イスラエルにおいてヤーウェが行なった働きは、万物の創造に先だって定めた計画を実行することだけが目的であり、それゆえイスラエル人の間におけるヤーウェの最初の働きと、ヤーウェによる万物の創造は、互いに相容れないものではなく、いずれもヤーウェの経営（救い）、働き、栄光のためになされたのであり、また人類創造の意義を深めるためになされたものでもあった。ノアの後、ヤーウェは二千年にわたって地上における人類の生活を導いた。その間、ヤーウェは人類に対し、どのようにヤーウェ、すなわち万物の主を畏れるべきか、どのように生活を送るべきか、どのように生き続けるべきか、そして何より、どのようにヤーウェの証人として行動し、ヤーウェに従い、ヤーウェを崇めるべきかを教え、そのため人類は、ダビデとその祭司が行なったように、音楽でヤーウェを讃美することさえした。

ヤーウェが働きを行なった二千年間の前、人間は何も知らず、ほぼすべての人が墮落し、洪水によって世界が滅ぼされるころには乱交と墮落の深みに陥り、その心にヤーウェは姿も形もなく、ヤーウェの道もさらになかった。人々はヤーウェが行なおうとしていた働きを理解しなかった。彼らには理知がなく、見識などさらになく、まるで息をする機械のように、人間、神、世界、いのちなどについてまったく無知だった。地上において、人々はヘビのように多くの誘惑をなし、ヤーウェを侮辱することを数多く言った。しかし、人々は無知だったので、ヤーウェは彼らを罰することも、懲らしめることもなかった。洪水の後、ノアが六百一歳のときに初めて、ヤーウェは正式にノアのもとに姿を見せ、ノアとその家族を導く一方、ノアとその子孫とともに洪水を生き延びた鳥や

野獣を、律法の時代が終わるまで合計二千五百年間にわたって導いた。ヤーウェは二千年のあいだ、イスラエルにおいて、つまり正式な形で働きを行ない、そしてイスラエルの中と外で同時に五百年間働き、合計で二千五百年間働いた。この期間、ヤーウェはイスラエル人に対し、ヤーウェに仕えるためには神殿を建て、祭司の衣服をまとい、履物が神殿を汚してその頂上から火が降り、自分たちが焼き殺されることのないよう、夜明けに裸足で神殿に入ることを命じた。イスラエル人は自分たちの本分を尽くし、ヤーウェの計画に従った。彼らは神殿でヤーウェに祈り、ヤーウェの啓示を受けた後、つまり、ヤーウェが語った後は、多くの人々を導き、彼らの神であるヤーウェを崇めなくてはならないと教えた。そしてヤーウェは彼らに対し、神殿と祭壇を作り、ヤーウェが定めた時間、つまり過越の祭の日には、ヤーウェへの生贄として生まれたばかりの子牛と子羊を用意して、祭壇に供えなければならないと教えた。それは彼らを抑制させるため、ヤーウェへの畏敬の念を心に抱かせるためである。この律法に従ったか否かが彼らのヤーウェへの忠誠を測る尺度となった。またヤーウェはイスラエル人の安息日、つまり天地創造の七日目を定めた。安息日の翌日にヤーウェは最初の日、つまりイスラエル人がヤーウェを讃え、ヤーウェに生け贄を捧げ、ヤーウェのために音楽を奏でる日を定めた。この日、ヤーウェはすべての祭司を呼び集め、祭壇の上の生け贄を分け、人々が食べるように命じた。これは、人々がヤーウェの祭壇の生け贄を享受できるようにするためである。さらにヤーウェは、イスラエル人は祝福されており、ヤーウェと分かち合っており、ヤーウェの選民であると言った（それはヤーウェによるイスラエル人との契約だった）。これが、ヤーウェは自分たちだけの神であって異邦人の神ではないと、イスラエルの人々が今日に至るまで言う理由である。

律法の時代、ヤーウェは多くの戒めを定め、モーセがそれを、自分に従ってエジプトを脱出したイスラエル人に伝えるようにした。それらの戒めはヤーウェによってイスラエル人に与えられたものであり、エジプト人にはなんら関係のないものだった。それらはイスラエル人を抑制するためのものであり、ヤーウェは戒めによってイスラエル人に要求した。安息日を守っているか、両親を敬っているか、偶像を崇拝しているかなどが、彼らが罪深いか義であるかを判断する原則だった。イスラエル人の中には、ヤーウェの火で打ち倒された者、石打ちの刑に処された者、ヤーウェの祝福を受けた者がおり、これはそうした戒めを守ったか否かによって決められた。安息日を守らなかった者は石打ちの刑に処された。安息日を守らなかった祭司はヤーウェの火で打ち倒された。両親を敬わなかった者もまた石打ちの刑に処された。これはすべてヤーウェに称賛されるこ

とだった。ヤーウェは戒めと律法を定め、そうすることで人々の生活を導きながら、彼らがヤーウェの言葉を聞いてそれに従い、ヤーウェに反抗することのないようにした。ヤーウェはこれらの律法を用いて生まれたばかりの人類を支配したが、それはヤーウェによる将来の働きの基礎を築く上で有益だった。そのため、ヤーウェが行なった働きにもとづき、最初の時代は律法の時代と呼ばれた。ヤーウェは多くの発言をし、かなりの働きをしたものの、人々を前向きに導き、それら無知な人々に対して、どのように人間になるべきか、どのように生きるべきか、どのようにヤーウェの道を理解するべきかを教えるだけだった。ヤーウェが行なった働きの大半は、人々がヤーウェの道を守り、ヤーウェの律法に従うようにするためだった。その働きは軽く墮落した人々になされたのであって、人々の性質を変化させることや、いのちの進歩までには至らなかった。ヤーウェは律法を用いて人々を抑制、支配することにしか関心がなかったのである。当時のイスラエル人にとって、ヤーウェは神殿にいる神、天にいる神でしかなかった。ヤーウェは雲の柱、火の柱だったのである。ヤーウェが人々に求めたのは、今日の人々にヤーウェの律法、およびヤーウェの戒めとして知られているもの、つまり規則と呼んでも差し支えないものに従うことだけだった。なぜなら、ヤーウェがしたことによって人々を変えようとする意図はなく、人々がもつべきものをさらに与え、自らの口で教え導くことが目的だったからである。と言うのも、人間は創造された後、もつべきものを何ももっていなかったからである。それゆえヤーウェは、人々が地上で生活するにあたってもつべきものを与え、自ら導いてきた人々がその先祖であるアダムとエバを超えるようにした。なぜなら、ヤーウェが彼らに与えたものは、最初にアダムとエバに与えたものを超えていたからである。それにもかかわらず、ヤーウェがイスラエルで行なった働きは、人類を導き、人類にその創造主を認識させることだけだった。ヤーウェは人々を征服することも変えることもせず、ただ導いたにすぎない。これが、律法の時代におけるヤーウェの働きの概要である。これがイスラエルの全土におけるヤーウェの働きの背景、内幕、そして本質であり、人類をヤーウェの手中で支配するという、神の六千年にわたる働きの始まりだった。ここから神の六千年にわたる経営計画におけるさらなる働きが生まれたのである。

脚注

- a. 原文に「従うべき」の語句は含まれていない。

贖いの時代における働きの内幕

わたしの全経営（救いの）計画、六千年にわたる経営計画は三段階、あるいは三時代から成る。それは始まりの律法の時代、次に恵みの時代（贖いの時代でもある）、そして終わりの日の神の国の時代である。これら三時代におけるわたしの働きは、各時代の性質によって異なるが、それぞれの段階においてこの働きは人間の必要性に対応している。正確には、わたしがサタンに対して行なう戦いでサタンが用いる策略に応じて働きは行われる。わたしの働きの目的は、サタンを打ち負かし、わたしの知恵と全能を明らかにし、サタンの策略をすべてあばくことであり、それによりサタンの支配下に生きる人類全体を救うことである。それはわたしの知恵と全能を示し、サタンの耐え難いおぞましさを明らかにするものである。それに加えて、被造物が善悪を区別し、わたしこそが万物を治める者であることを認識し、サタンが人類の敵であり、下の下、悪い者であることをはっきりと見極められるようにし、善と悪、真理と偽り、聖さと汚れ、偉大さと卑劣の違いを絶対的な明白さをもって区別できるようにすることである。それにより無知な人類は、人類を堕落させるのはわたしではなく、創造主であるわたしだけが人類を救うことができ、人々が享受できるものを彼らに授けることができることをわたしに証しし、わたしこそがすべてを治める者であり、サタンは後にわたしに背いたわたしの被造物の一つにすぎないと人類は知ることができる。わたしの六千年の経営計画は三段階に分けられており、わたしがそのように働くのは被造物がわたしの証人となり、わたしの心を知り、わたしこそが真理であることを知らしめるという成果を達成するためである。したがって、わたしの六千年にわたる経営計画における最初の働きのあいだ、わたしは人々を導いたヤーウェの働きである律法の働きを行なった。第二段階では、ユダヤの村々において恵みの時代の働きが始まった。イエスは恵みの時代におけるすべての働きを表した。イエスは受肉し、十字架につけられ、恵みの時代を開始した。イエスは贖いの働きを完成させ、律法の時代を終了させ、恵みの時代を開始するために十字架にかけられ、そのため「最高司令官」「罪のいけにえ」「贖い主」と呼ばれた。したがって、イエスの働きはヤーウェの働きと中身は異なっていたけれども、原則においては同じである。ヤーウェは律法の時代を開始し、地上における神の働きの拠点、発祥地を定め、律法と戒めを発した。これらがヤーウェが行なった二つの働きであり、それは律法の時代を代表する。イエスが恵みの時代に行なった働きは律法を発することではなく、それらを成就し、それによって恵みの時代が到来したことを告げ、二千年続いた律法の時代を終結させることであった。イエスは恵みの時代をもたらすために来た先駆者であったが、その働きの中心は贖いであった。よってイエスの働きもまた二つの部分から成る。それらは新しい時代を切り開くこと、そして十字架刑を通して贖いの働きを完成さ

せることである。その後、イエスは去った。これで律法の時代は終わり、恵みの時代が始まった。

イエスの働きは、その時代における人の必要性に応じて行われた。その務めは人間を贖い、その罪を赦すことであるがゆえに、イエスの性質は全体が謙遜、忍耐、愛、敬虔、寛容、憐れみ、慈しみであった。イエスは人間に豊かな祝福と恵みをもたらし、平和、喜び、イエスの寛容と愛、その憐れみと慈しみといった人々が享受することのできるあらゆるものをもたらした。その当時、人が受け取ったあふれんばかりの楽しむことから、すなわち心の平安と安心、霊の慰め、救い主イエスによる支え、これらのものは、人の生きた時代ゆえにもたらされたのである。恵みの時代、人はすでにサタンにより墮落させられていたので、すべての人を贖う働きを完遂するためには、満ちあふれる恵み、限りない寛容と忍耐、そしてさらに、効果を及ぼすためには、人間の罪を贖うのに十分な捧げ物が必要であった。恵みの時代に人々が見たのは、人間の罪のためのわたしの捧げ物であるイエスに過ぎなかった。人々は神は憐れみ深く寛容であり得ることだけしか知らず、イエスの慈しみと憐れみしか見なかった。それは彼らが恵みの時代に生きていたからである。そのようなわけで、贖われる前に人々はイエスが彼らに授けるさまざまな恵みを楽しみ、その恩恵を受けなければならなかった。それにより、彼らは恵みを享受することでその罪を赦されることができ、イエスの寛容と忍耐を享受することで贖われる機会を得ることができた。イエスの寛容と忍耐を通してのみ、人々は赦しを受け、イエスが授けるあふれる恵みを楽しむ権利を手にすることができた。それはイエスが、「わたしは義人ではなく罪人を贖い、罪人がその罪を赦されるようにするためにきたのである」と言ったとおりであった。もしイエスが裁きと呪い、人間の過ちに対する不寛容の性質を持って受肉していたなら、人には決して贖われる機会はなく、永遠に罪深いままでいたことであろう。もしそうになっていたなら、六千年の経営計画は律法の時代で止まり、律法の時代は六千年間続いていたであろう。人の罪は数が増し、よりひどいものとなり、人間の創造は無価値なものとなっていたであろう。人は律法のもとでのみヤーウェに仕えることができたではあるが、彼らの罪は最初に創造された人間の罪をも上回るものとなっていたであろう。イエスが人類を愛し、その罪を赦し、十分な慈しみと憐れみを与えれば与えるほど、人類はイエスにより救われ、イエスが大きな代価で買い戻した迷える子羊と呼ばれる資格があった。イエスは自分の追随者をあたかも母親が我が子を腕のなかであやすように取り扱ったので、サタンはこの働きに干渉することができなかった。イエスは人々に対して腹を立てたり嫌ったりせず、慰めに満ちていた

。人々とともにいても激怒するようなことは決してなく、「七の七十倍までも相手を赦しなさい」と言うほどまでに罪に寛容で、人々の愚かさや無知を見逃した。そのようにしてイエスの心は他者の心を変容させ、それゆえに人々はイエスの寛容を通して赦しを受けた。

受肉したイエスには全く感情がなかったが、常にその弟子たちを慰め、施し、助け、支えた。どれほどの働きをしても、どれほどの苦しみを耐えても、決して人々に過大な要求を課すことなく、常に忍耐強く、彼らの罪を耐え忍んだ。そのため恵みの時代の人々はイエスを「愛すべき救い主イエス」と愛情を込めて呼んだ。当時の人々、すべての人々にとって、イエスが持っているものとイエスであるものは、慈しみと憐れみであった。イエスは決して人々の過ちを心に留めず、人々への接し方がその過ちをもとにするようなことは決してなかった。それは異なる時代だったため、イエスはよく食べ物をたっぷり人々に与え、彼らが十分食べられるようにした。イエスは追随者すべてに優しく接し、病人をいやし、悪霊を追い出し、死人をよみがえらせた。人々がイエスを信じ、その行いすべてが真剣かつ真心からのものであることが分かるように、腐った死体をよみがえらせることさえして、その手の中では死人さえも生き返ることを彼らに示した。このようにしてイエスは人々のあいだで静かに耐え忍び、その贖いの働きを行なった。十字架につけられる前でさえ、イエスはすでに人間の罪を負い、人類のための罪の捧げ物となっていた。十字架につけられる前から、イエスは人類を贖うために十字架への道をすでに開いていた。ついに十字架で釘づけにされ、十字架のために自分自身を犠牲として捧げ、そのすべての慈しみ、憐れみ、そして聖さを人類に授けた。人々にはイエスは常に寛容であり、決して復讐を求めず、人々の罪を赦し、人々に悔い改めるよう勧め、忍耐、寛容、愛を持ち、自らの足跡に従い、十字架のゆえに自分自身を捧げるよう教えた。イエスの兄弟姉妹への愛は、マリアへの愛に勝るものだった。イエスの働きの原則は、病人をいやし、悪霊を追い出すことであり、それらはすべてその贖いのためであった。どこへ行っても、イエスは従ってくる人すべてに思いやりを持って接した。貧しい者を豊かにし、足の不自由な人を歩けるようにし、目の見えない人に見えるようにし、耳の聞こえない人を聞こえるようにした。身分が一番低かった人々や乏しい人々、罪人さえ招いて共に食卓につき、彼らを遠ざけることなく常に忍耐強く、「羊飼いが羊を百匹持っていて、その一匹が迷ったとすれば、九十九匹を残しておいて、迷った一匹を捜しに行く。そしてそれを見つけたら、大いに喜ぶだろう」とさえ言った。イエスは雌羊がその子羊を愛するように、その追随者を愛した。彼らは愚かしく無知で、イエスの

目には罪人であり、さらには社会において最も身分の低い者であったにもかかわらず、イエスは他の人々からさげすまれていたこれらの罪人を自分のひとみのように大切なものとして見た。彼らへの好意ゆえに、イエスは祭壇に捧げられる子羊のように、彼らのためにその命を捨てた。彼らのもとではしもべのようにふるまい、利用され、なぶり殺されるままにし、無条件に彼らに服従した。追隨者にとってはイエスは愛すべき救い主であったが、上座から人々に説教したパリサイ人に対しては、イエスは慈しみや憐れみではなく、嫌悪と怒りを示した。イエスはパリサイ人のあいだではあまり働くことはなく、ごくまれに彼らに教えを説き叱責したが、彼らのもとで贖いの働きを行なうことはなく、しるしや奇跡を行うこともなかった。イエスはその慈しみと憐れみを追隨者に与え、これら罪人たちのために十字架に釘づけられた最後の最後まで耐え忍び、ありとあらゆる屈辱に耐え、ついにすべての人間を完全に贖った。これがイエスの働きの全体である。

イエスの贖いがなければ、人類は永遠に罪の中に生き、罪の子、悪魔の子孫となっていたはずである。この状態が続けば、地上全体がサタンの住む地、その住まいとなっていたであろう。しかしこの贖いの働きは人類への慈しみと憐れみを示すことを必要とした。そのような手段によってのみ、人類は赦しを受け、ついに全き者とされ、神に完全に得られる資格を得ることができた。この働きの段階がなければ、六千年の経営計画は前に進むことはできなかつただろう。もしイエスが十字架にかけられることなく、ただ病人をいやし、悪霊を追い出ただけだったなら、人々はその罪を完全に赦されることはなかったであろう。イエスが地上で働きをなした三年半のあいだ、イエスはその贖いの働きを半分完成させただけであり、十字架に釘づけにされ、罪深い肉の姿となり、悪しき者に引き渡されることによってのみ、イエスは十字架での働きを完成させ、人間の運命を掌握した。サタンの手に引き渡されて初めて、イエスは人類を贖った。三十三年半のあいだイエスは地上で苦しみ、あざけられ、中傷され、見捨てられ、まくらする場所や休む場所さえないほどにまで放置され、その後十字架につけられ、聖なる罪のない体であるイエスの存在全体が十字架で釘づけにされた。イエスはあらゆる苦しみに耐えた。権力者たちはイエスをあざ笑い、むち打ち、兵士たちはその顔に唾を吐きさえした。それでもイエスは黙ったまま最後まで耐え忍び、死にいたるまで無条件に従い、そこですべての人間を贖った。そのとき初めてイエスは安息することができた。イエスが行なった働きは、恵みの時代のみを表すものであり、律法の時代を表すものではなく、また終わりの日々の働きに代わるものでもない。これが人類にとっての第二の時代である

贖いの時代という、恵みの時代におけるイエスの働きの本質である。

若者と老人に向けた言葉

わたしは地上で多くの働きを行ない、人類の間を長年にわたって歩んできた。しかし人々はわたしの姿と性質とについてほとんど認識を持たず、ほとんどの人はわたしが行なう働きについて十分に説明できない。人には欠けるものがとても多く、わたしが行なうことについての理解も常に欠けている。わたしが人を別の状況に置き、人のことなど考えもしなくなるのではないかと深く恐れているかのように、人の心は警戒している。よって人々のわたしへの態度はいつも生ぬるく、そこには強い用心がある。それは人々がわたしの働きを理解することなく今日まできたからであり、特にわたしが人に語る言葉に困惑している。人々はわたしの言葉を手にしながら、信じることを固く決意すべきか、あるいは優柔不断のままに忘れ去るべきかわからないでいる。人々はわたしの言葉を実践すべきなのか、待って様子を見るべきなのかかわからず、すべてを捨てて勇敢に従うべきなのか、今までどおりこの世の友であり続けるべきなのかかわからないでいる。人々の内側の世界は非常に複雑で、そして非常に狡猾である。わたしの言葉ははっきりとも、完全にも見えないので、多くの人はそれを実践するのに苦労し、わたしの前に心を差し出すのに困難を覚える。わたしはあなたがたの抱える難しさを深く理解している。肉なる体に生きている間は多くの弱さは避けられないし、様々な客観的要因があなたがたに困難をもたらす。あなたがたは家族を養い、日々懸命に働き、そして時間は困難の中に過ぎてゆく。肉に生きることは多くの困難を伴い、わたしはそれを否定しない。そして当然ながら、わたしがあなたがたに課す要求は、あなたがたの抱える困難に即している。わたしの働きに伴う要求は皆、あなたがたの実際の霊的背丈に基づいている。おそらく過去に他人があなたがたに課した仕事上の要求には、過剰な要素が混ざっていたであろうが、わたしは自らの言動において、あなたがたに過剰に要求したことなどないということを知るべきである。わたしの要求はすべて、人の本性、肉、人が必要とするものに基づく。わたしはこれをはっきりとあなたがたに伝えることができるが、人の何らかの理に適う考え方や、人類に固有の本性にわたしは反対しないことを知るべきである。わたしが人に課す基準が実際のところ何であるか理解せず、またわたしの言葉の本来の意味を理解していないゆえに、今に至るまで人はわたしの言葉に疑念を抱き、半分以下の人しかわたしの言葉を信じていないのである。残りは不信者であり、さらに多くはわたしが「物語を語る」のを聞くのが好きな人である。しかも、その光景を楽しむ人が多くいる。わたしはあなたがたに忠告する。わたしの言葉の多くはわたしを信じる人

にすでに開かれており、神の国の美しい景色を楽しみながらもその門の中に入れない人は、わたしがすでに除外している。あなたがたはわたしに嫌われ拒まれる毒麦にすぎないのではないか。わたしを送り出しておきながら、どうしてわたしの帰りを喜んで迎えることなどできるというのか。わたしはあなたがたに言う。ニネベの住民はヤーウェの怒りの声を聞いた後、すぐに荒布をまとい灰の中で悔い改めた。それは、彼らは神の言葉を信じたからであり、ゆえに恐れおののいて荒布と灰の中で悔い改めたのである。今日の人と言え、わたしの言葉を信じながらも、そしてそれだけでなく、ヤーウェが今日ふたたびあなたがたのもとに來たことを信じながらも、あなたがたの態度は不遜以外の何ものでもない。まるでユダヤに何千年も昔に生まれ、現在あなたがたの只中に降りてきたイエスをただ観察しているだけかのようなのである。あなたがたの心の中にある欺瞞をわたしは深く理解している。あなたがたのほとんどは好奇心からわたしに従い、空虚からわたしを求めるようになった。あなたがたの第三の希望、平和で幸せな人生への願いが叶わなかった時、あなたがたの好奇心もまた消散する。一人ひとりの心の内にある欺瞞は、あなたがたの言動を通して明るみになる。率直に話すならば、あなたがたはただわたしに好奇心を持っているだけで、恐れてはいない。言葉に気をつけず、行動を抑えることはさらにはない。ならば、あなたがたには一体どのような信仰があるのか。それは純粋なものなのか。あなたがたは心配をなくし、退屈を軽減するために、生活において余った空虚な時間を埋めるためにわたしの言葉をただ利用しているにすぎない。あなたがたのうちの誰がわたしの言葉を実践したのか。誰が純粋な信仰を持っているのか。あなたがたは、神は人の心を深く見通す神であると叫び続けているが、あなたがたが心で叫び続ける神はわたしといかに融和性があるのか。このように叫んでいるなら、なぜそんな風に行動するのか。もしかして、それがわたしに報う愛だということなのか。あなたがたの唇は非常に大きな献身を語るが、あなたがたの実際の捧げ物は、善行はどこにあるのか。わたしの耳に届くあなたがたの言葉のせいでなければ、わたしはどうしてあなたがたをこれほど憎むことができるのか。あなたがたがわたしを真に信じるのならば、どうしてそのような苦境に陥ることが可能なのか。あなたがたはまるで地獄で裁判を受けているかのような、落ち込んだ表情を浮かべている。まったく活力がなく、内なる声について弱々しく語り、そのうえ文句と呪いの言葉で満ちている。あなたがたはとうの昔にわたしの行なうことを信じなくなっており、元來持っていた信仰も消え去った。それでどのように最後まで従うことができるのか。そのような現状で、どのように救われることができるのか。

わたしの働きはあなたがたにとってとても助けとなるものだが、わたしの言葉はいつもあなたがたには浸透せず、あなたがたの内には何も残らない。わたしが完全なものとする対象を見つけることは難しく、今日わたしはあなたがたへの希望を失いかけている。何年もかけてわたしはあなたがたのもとで探してきたが、腹心を見つけることは難しい。あたかも、わたしにはもうあなたがたと共に働き続ける自信がないかのような、あなたがたを愛し続ける愛がないかのような気持ちができる。それはわたしが随分前にあなたがたの小さく哀れな「業績」にうんざりしたからである。まるでわたしがあなたがたに語りかけたことがなく、あなたがたの間で働いたこともないかのようなのである。あなたがたの業績には吐き気がする。あなたがたは常に自分自身に破滅と恥をもたらし、あなたがたには価値はほぼない。あなたがたには人間らしさや人間としての残り香が見つけられない。あなたがたの新鮮な香りはどこにあるのか。あなたがたが何年もかけて支払ってきた代価はどこへ行ったのか。その成果はどこにあるのか。何も見つからなかったのか。わたしの働きは今、新たな始まりを迎え、新たに出発する。壮大な計画を執行し、さらに偉大な働きを展開したい。しかしあなたがたは未だ依然のように泥の中でもがき、過去の汚れた水のなかで生き、元来の苦境から自らを解放するのに失敗したも同然である。よって、あなたがたは未だにわたしの言葉から何も獲得していない。もといいた泥と汚水の場所から抜け出しておらず、わたしの言葉を知っているだけで、実際にわたしの言葉の自由の領域には入っていない。だからわたしの言葉はあなたがたに開かれたことがなく、何千年も封印された預言書のようなのである。わたしはあなたがたの生活の中に現れるが、あなたがたはそれに気づかない。わたしを認識することさえない。わたしの語る言葉のほぼ半分はあなたがたに対する裁きであり、それは発揮すべき効果の半分、すなわちあなたがたに深い恐怖を植え付けることしか達成しない。残りの半分の言葉は生き方と、どのように振る舞うべきかをあなたがたに教えている。しかし、あなたがたにはそのような言葉は存在しないか、遊んでいる子どもの言葉を聞いているだけのようである。その言葉に、あなたがたはいつも不明瞭な笑みを浮かべるが、それを行動に移すことはない。こういったことについてあなたがたは心を砕いたこともない。あなたがたはわたしの行動を第一に好奇心からいつも眺めてきたので、今やあなたがたは暗闇に落ち、光を見ることができず、そのため暗闇で哀れっぽく泣くのである。わたしが欲するのはあなたがたの従順、無条件の従順であり、さらに、あなたがたがわたしが語ることをすべてに確信を持つことを要求する。あなたがたは粗略な態度を取るべきではなく、特にわたしの言葉に向き合うのに選り好みすべきでも、ましてやわたしの言動に、あなたがたがいつもするように、無関心でいるべきではない。わたしの働きはあなたがた

の只中で行われ、わたしは非常に多くの言葉をあなたがたに与えてきた。しかし、もしあなたがたがわたしをこのように扱うのであれば、あなたがたが獲得もせず実行にも移していないものをわたしは異邦人の家族に渡してしまえばよいだけである。被造物の中でわたしの手にないものなどあるだろうか。あなたがたのほとんどは「高齢」であり、わたしのこのような働きを受け入れる精力はない。あなたがたはハンハオ鳥^[a]のように、なんとかやり過ごしているだけであり、わたしの言葉を真剣に扱ったことはない。若者は極めて虚栄心が強くひどく甘やかされており、わたしの働きにはさらに注意を払わない。彼らはわたしの宴でのもてなしを楽しむことに関心がない。まるで鳥かごから出て、遠くへ飛び立っていった小さな鳥のようである。このような若者や老人がどのようにわたしに役立つことができるというのか。老人たちは、死んだ後に魂は天国に行けるようにとわたしの言葉を墓に入るまで年金として利用するつもりである。彼らにとっては、それで十分なのである。今や彼らには「大志」と「ゆるぎない自信」がある。彼らはわたしの働きに非常に忍耐深く、また高齢者の持つ高潔で頑固で、誰にも何事にも引きずられず、打ち負かされない特徴をもち、確かに難攻不落の要塞のようだが、このような人の信仰は死体のような迷信的な病的状態のとばりに包まれているのではないのか。彼らの道はどこにあるのか。彼らにとってその道は長すぎ、遠すぎるのではないのか。彼らにどうしてわたしの心を知ることができるというのか。その自信が賞賛に値するものであったとしても、老人のうちの何人が混乱したまま追随しているのではなく、実際にいのちを求めているのか。何人がわたしの働きの真の意味を本当に理解しているのか。今日この世でわたしに従っているのが、近い将来ハデスに落ちることなく、わたしに別の領域に連れて行ってもらうためでない人がいるのか。あなたがたは自分の終着点がそんなに単純なことだと思っているのか。あなたがた若者は皆、若いライオンのようにだが、心に真の道を持っていることなどほとんどない。若いからといって、あなたがたはわたしの働きをさらに得ることはできない。それどころか、いつもわたしをうんざりさせる。あなたがたは若いが、活力がないか、野心に欠けている。自分の将来についてもいつも優柔不断である。まるで関心がなく、思い悩んでいるかのようである。若者に見られるべき活力や理想、確固とした態度があなたがたにはまったく見つからないとも言える。あなたがたのような若者には姿勢といったものがなく、正邪、善悪、美醜を見分ける能力がない。あなたがたに何か新鮮なものを見出すことはできない。あなたがたはほぼ完全に旧式であり、そのような若者は群衆に追随し、分別を欠くようになっている。あなたがたは決して正誤をはっきり区別することができず、真偽を見分けることができず、卓越するために努力せず、善悪の区別を理解できず、何が真理で何が偽善かもわ

からない。あなたがたのまわりには、老人にあるよりも深く強烈な宗教の悪臭が漂っている。あなたがたは加えて高慢で無分別で、競争心が強く、攻撃性がとても強い。このような若者がどうして真理を持ちうるだろうか。姿勢を保てないものがどのように証しを立てることができようか。善悪を見分ける能力がない者がどうして若者と呼ばれることができようか。若者らしい活力や気力、新鮮さ、冷静さや堅実さがいない者がどうしてわたしの従者と呼ばれうるのか。真理や正義感がなく、むしろ戯れや争いを好む者がどうしてわたしの証人となるに値するのか。若者は他者への欺瞞や偏見に満ちた目を持つべきではなく、破壊的で忌まわしい行動をとるべきではない。理想や大志、自己を改善したいと望む熱心さに欠けてはならない。前途について落胆したり、生活に希望を失ったり、将来への自信を失ったりすべきではない。人生のすべてをわたしのために費やしたいという願いを実現させるべく、自らが選んだ真理の道を進み続ける忍耐力を持つべきである。真理を持たないでいることなく、偽善や不義を隠し持つことなく、ふさわしい姿勢に硬く立つべきである。ただ流れに身をまかせるのではなく、正義と真理のために身を捧げ戦う強い精神を持つべきである。若者は暗闇の力の圧迫に屈服することなく、自らの存在の意味を変える勇気を持つべきである。逆境の中で諦めるのではなく、赦しの精神をもって兄弟姉妹に対して開放的かつ率直でなくてはならない。もちろんこれは、わたしから皆への助言、また要求である。さらには、これらはすべての若者へのわたしからの慰めの言葉である。わたしの言葉に従って実践せよ。特に、若い人は問題にあたり分別を発揮し、正義と真理とを求める決意がなくてはならない。あなたがたはすべての美しいものと善なるものを追い求めるべきであり、前向きなものの現実性を自分のものにすべきである。自分の人生に責任を持ち、軽んじてはならない。人は地上に来て、わたしと出会うことは稀であるが、真理を追い求めて得る機会を持つこともまた稀である。なぜこの人生で追い求めるべき正しい道として、この美しい時を尊ばないのか。なぜいつも真理と正義をはねつけるのか。なぜいつも人を弄ぶ不義と汚れのために自らを踏みにじり、破滅させているのか。そしてなぜ不義の者がすることに関わる老人のように行動するのか。なぜ古いものの古いやり方を真似するのか。あなたがたの生活は正義と真理と聖さに満ちているべきである。人生はそんな若年のうちに墮落し、人をハデスに落とすべきではない。それはあまりにも不幸だとは思わないのか。あまりにも不公平だと思わないのか。

あなたがたは皆、非の打ち所がない完璧な働きをし、それをあなたがたからわたしへの最善かつ唯一の捧げ物としてわたしの祭壇に捧げるべきである。姿勢を硬く保ち、空

の雲のように風が吹くたびに揺れることがあってはならない。半生を懸命に働くのだから、なぜ得るべき終着点を求めないのか。半生を骨折って過ごすのに、豚や犬のような両親が真理と個人の存在意義とを墓まで引きずっていくままにしている。これはあなたへの大いなる不正であると感じないのか。そのように生きることはまったく意味がないと思わないか。このような方法で真理と正しい道とを求める結果、問題を起こし、隣人は不快に思い、家族みんなが不幸になり、致命的な災難を引き起こす。このように生きれば、最も意味のない人生にならないだろうか。あなたの人生よりも幸運なのは誰の人生か。あなたの人生よりも馬鹿げているのは誰の人生か。わたしを求めるのは、わたしの喜びと、あなたを慰める言葉を得るためではないのか。しかし半生を走ったところで、わたしが怒りに満ちて、あなたへの注目も賞賛もなくなるまでわたしを怒らせるのなら、それはあなたの人生すべてが虚しかったということにならないか。それでどうして煉獄から解放された歴代の聖者の魂にぬけぬけと会いに行くことなどできようか。あなたはわたしに無関心で、最後には致命的な災難を引き起こす。この機会を生かし、広い海を喜んで渡る旅をし、わたしの「任命」に従うほうが良いであろう。わたしはずっと前にあなたがたに伝えた。無関心で、しかし去ろうともしない今日のあなたは最後には、わたしが起こす波に囲まれ、飲み込まれるであろうということ。あなたがたは本当に自分を守れるのか。あなたは自分の現在の追求の仕方が、あなたが完全にされることを確証してくれるという自信が本当にあるのか。あなたの心は頑なではないのか。このような従い方、このような追い求め方、このような生き方、このような人格で、どのようにわたしの賞賛を得られるというのか。

脚注

a.ハンハオ鳥の物語はイソップ寓話のアリとキリギリスの話によく似ている。ハンハオ鳥は天気が暖かな時に巣を作ることをせずに、隣人のカササギの忠告にも関わらず、眠ることを選ぶ。冬が来ると、ハンハオ鳥は凍え死んでしまう。

あなたは全人類がこれまでどのように発展してきたかを知らねばならない

六千年にわたって行われてきた働きは、その全体が時代とともに徐々に変化してきた。この働きに見られる変化は、世界全体の情勢と、人類の全体的な発展の傾向に基づいて起こったものであり、経営の働きはただそれらに従って徐々に移り変わってきたのである。創世の当初からすべてが計画されていたわけではなかった。世界の創造の前やそ

の直後、ヤーウェはまだ働きの最初の段階である律法の時代、第2の段階である恵みの時代、第3の段階である征服の時代を計画していなかった。第3の段階である征服の時代には、神が最初にモアブの子孫の一部に対して働きを行い、それを通して宇宙全体を征服することになる。神は世界の創造の後、そうした言葉を一切語らず、モアブの後にもそれを語ることはなかった。実際、ロトの前にはそれらを一切語らなかったのだ。神の働きはすべて自然発生的に行われる。六千年にわたる神の経営の働きは、まさにこのようにして進められてきたのであり、世界の創造の前に神が「人類の発展の概略図」のような形で計画を書き出すことは一切なかった。神はその働きにおいて、神の存在そのものを直接的に表現するのであり、知恵を絞って計画を練り上げるのではない。もちろん数多くの預言者たちが無数の預言を語ってきたが、それでも神の働きが常に綿密な計画に基づいているとは言えない。そうした預言は、当時の神の働きに従って行われたのだ。神の働きはすべて、最も現実的な働きである。神はそれぞれの時代の進展に従って自身の働きを遂行し、物事の変化をその働きの基盤とする。神にとって働きを行うことは、薬を用いて病気を治療することに似ている。神は自身の働きを行う際、観察をし、その観察に従って働きを続行する。神は自らの働きのどの段階においても、その豊かな英知と能力を表現できる。神はどの時代においても、その時代の働きに合わせて自らの豊富な知恵と権威を露わにし、その時代に神によって連れ戻された者すべてが、神の性質の全体を目にできるようにする。神はそれぞれの時代に実行されるべき働きに基づいて人々の必要を満たし、自身のなすべき働きを実行する。神は人々がサタンに墮落させられた程度に応じて、人々の必要を満たす。それはちょうど、ヤーウェが最初にアダムとエバを創造したとき、彼らに地上で神を体現させ、被造物の中で神の証しをさせることを目的としていたのに似ている。しかしエバは蛇に誘惑されて罪を犯し、アダムも罪を犯した。彼らは園とともに善悪の知識の木の果実を食べた。そのためヤーウェは、彼らに対してさらなる働きを行なった。神は彼らが裸なのを見て、動物の皮から作った衣服で彼らの体を覆った。その後神はアダムに言った。「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ……。ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る」。そして女にはこう言った。「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。それでもなお、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう」。それ以降、神は彼らをエデンの園から追放し、彼らを現代人が地上で生きているのと同じように、園の外に住ませた。神は人を創造した当初、創造の後に人を蛇に誘惑させて、それから人と蛇を呪うということは計画していなかった。神は実際そのよ

うなことを計画してはおらず、ただ状況の推移によって、万物の間で新たな働きが必要になったのだ。ヤーウェが地上でアダムとエバにその働きを行なった後、人間は数千年にわたって発達し続け、そしてついに、次のような状況に至った。「ヤーウェは人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。ヤーウェは地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、……しかし、ノアはヤーウェの前に恵みを得た」。このときヤーウェはさらに新しい働きを行うことになったが、それは神が創造した人間が、蛇による誘惑の後、あまりに罪深くなってしまっていたからだ。そのような状況で、ヤーウェは人類の中からノアの家族を選んで生き残らせ、洪水で世界を滅ぼすという神の働きを実行した。人間は今日までこのように墮落を増しながら発達し続けており、そして人類の発達がその頂点に達すると、それは人間の終わりを意味することになる。神の働きの内なる真実は、当初からまさに世界の終わりに至るまで常にこのようなものであり、今後もそうあり続ける。そして人々がその性質に従って分類されることになるのも同じで、一人一人が初めから特定の分類に属するよう定められているわけではまったくなく、みな発達の過程を辿った後に初めて、徐々に分類される。最終的に完全な救いにたどり着けない人々はみな、その人の「祖先」に戻されることとなる。人間の間での神の働きは一つとして、世界の創造時には準備されていなかった。むしろ神は状況の推移によって、人間に対する働きを一つ一つ、より現実的かつ実際的に行えるようになったのだ。たとえばヤーウェ神は、女を誘惑するために蛇を創造したわけではなかった。それは神の特別な計画でも、意図的に定めたことでもなく、思いがけない出来事だったと言える。ヤーウェがアダムとエバをエデンの園から追放し、二度と人を創造しないと誓ったのは、まさにそのためである。しかしこの根拠によってこそ、人は神の知恵を見出すことができる。それはわたしが以前、「わたしはサタンの策略に基づいてわたしの知恵を発揮する」と言った通りだ。人間の墮落がどれだけ進んでも、蛇がいかに人間を誘惑しても、ヤーウェは依然として神の知恵を備えている。それゆえ、神は世界の創造以来ずっと新しい働きに携わっており、その働きの各段階はこれまで一度も繰り返されたことはない。サタンは継続的に策略を実行しており、人間はサタンに墮落させられ続けていて、ヤーウェ神は休むことなくその賢明な働きを遂行している。神は一度も失敗したことがなく、世界の創造以来一度も働きをやめたこともない。人間がサタンによって墮落させられた後、神は人間の墮落の根源であるその敵を打ち負かすため、人々の間で働き続けてきた。その激しい戦いは創世のときから行われており、世界の終わりまで続くだろう。こうしたすべての働きを行う中で、ヤーウェ神はサタンに墮落させられた人間が自らの素晴らしい救いを得られるようにして

くれただけでなく、自らの知恵、全能性、そして権威も目のあたりにさせてくれた。そして最終的には、自らの義なる性質も明らかにし、邪悪な者を罰して正しい者に報いることになる。神は今日までサタンと戦ってきて、一度も負かされたことはない。それは神が知恵に満ちており、サタンの策略に基づいてその知恵を発揮しているからだ。それゆえ神は天のあらゆるものを自らの権威に従わせるだけでなく、地上のすべてのものを自身の足台の下に置き、そしてなによりも人間を侵害し悩ませる邪悪な者に神の刑罰を受けさせる。こうしたすべての働きの結果は、神の知恵によってもたらされる。神は人間が存在する前に自らの知恵を露わにしたことは一度もない。それは天にも地にも全宇宙のどこにも神に敵がおらず、自然界の何物をも侵害する闇の力は存在しなかったからである。大天使が神を裏切った後、神は地上に人間を創造し、そして人間のために、何千年にも及ぶ大天使サタンとの戦いを正式に開始したのだ。その戦いは段階が進むごとにますます過熱しており、神の全能性と知恵はそうした段階の一つ一つに示される。そのとき初めて、天地のすべてのものが神の知恵、全能性、そして特に神の实在を目撃したことになる。神は今日に至るまでこの同じ現実的な方法で自らの働きを実行し続けており、さらに自らの働きを実行する中で、自身の知恵と全能性を露わにしている。神はあなたがたに働きの各段階の背後にある真実を見せ、神の全能性を具体的にどう説明すればよいかを理解させ、さらに神の实在の決定的な説明を目のあたりにさせてくれるのだ。

ユダによるイエスの裏切りについては、創世に先だって運命づけられていたのではないかと疑問に思う人がいる。実際、聖霊は当時の実情に基づいてこうしたことを計画したのだ。たまたまいつも資金を横領しているユダという名の人物がいたため、彼がその役割を演じ、その形で役立つように選ばれた。これはまさに現地の人材活用の例である。イエスは当初それに気づいておらず、後にユダのことが明らかにされて初めて知ることになった。もし他の誰かがその役割を演じることができたなら、その人物がユダの代わりにその役割を演じていただろう。運命づけられたことというのは、実際には聖霊がその瞬間に行なったことなのだ。聖霊の働きは常に自然発生的になされるものであり、聖霊はその働きをいつでも計画しいつでも実行できる。わたしがいつも、聖霊の働きは現実的で常に新しく、決して古くならず、常に最高度に新鮮だと言うのはなぜか。聖霊の働きは世界が創造されたときにすでに計画されていたわけではない——決してそうではないのだ。働きのすべての段階は、それぞれの時期に相応の結果を得ることになり、各段階が互いに干渉し合うことはない。多くの場合、あなたが自分で考えている計

画は、聖霊の最新の働きにまったく匹敵しない。神の働きは人の論理のように単純ではなく、人の想像のように複雑でもない。それはいつでもどこでも、人々の現在の必要に応じて施すことからなる。神は人の本質について誰よりもよく知っており、だからこそ神の働きは何よりも人々の現実的な必要性に沿っているのだ。そのため人間の視点から言えば、神の働きは何千年も前に計画されていたように見える。神は今あなたがたの間で働きを行なっているが、いつもあなたがたの状態を見ながら働き語っており、一つ一つの状態に合わせて正しい言葉を発し、人々がまさに必要とする言葉を語っている。まず神の働きの最初の段階である、刑罰の時期を考えてみるとよい。この時期の後、人々はあらゆる類の振る舞いを示し、一定の反抗的な行動をとり、さまざまな肯定的な状態が生まれ、一定の否定的状態も生まれた。そして否定的状態がある水準に達すると、落ちうる最低の限界が示された。神はこうしたすべての事柄に基づいて自身の働きを行い、それを利用してはるかによい成果を上げた。つまり神はあらゆる時点で、人々の現状に基づいて維持のための働きを行い、働きの各段階を人々の実際の状態に従って実行するのだ。すべての被造物は神の手の中にあるのだから、神がそれらを把握していないはずがあろうか。神はなされるべき働きの次の段階を、いつでもどこでも人々の状態に応じて実行する。この働きが何千年も前に、前もって計画されていたものであるはずがなく、それは人間の観念にすぎない。神は自らの働きの効果を観察しながら働きを行っており、その働きは継続的に深まり発展している。そして働きの結果を観察した後、神は次の段階の働きを実行し、多くのものを用いて徐々に推移を行い、時間とともに人々がその新しい働きを目にできるようにする。そのような働き方によって、人々の必要に合わせた施しが可能になるのだ。神はすべての人々を非常によく知っているからだ。このようにして、神は天国から自らの働きを実行する。そして肉となった神も同様に自らの働きを行っており、実際の状況に従って方策を立てながら、人々の間で働いている。神の働きはいずれも世界の創造前に計画されたものではなく、前もって慎重に計画されたものでもなかった。世界が創造されてから二千年後、人間がとても墮落してしまったのを見たヤーウェは、預言者イザヤの口を用いて、律法の時代が終わった後の恵みの時代に、神が人類を罪から贖う働きをすることを預言させた。それはもちろんヤーウェの計画であったが、この計画もまた、神が当時観察した状況に応じて作られたものだった。決して神がアダムの創造後すぐにそれを考えていたわけではなかった。イザヤは単に預言を声に出しただけだが、ヤーウェは律法の時代にその働きの準備を前もって行なっていたわけではなかった。そうではなく、恵みの時代の初めにそれを実行に移し、そのときヨセフの夢の中に使者が現れて啓示を行い、神が受肉することを告げた。そのと

き初めて、神の受肉の働きが始まったのだ。神は人々が想像するように、世界の創造の直後に自身の受肉の働きを準備していたのではない。それはただ人類の発達の程度と、サタンに対する神の戦いの状況に基づいて決められたのだ。

神が受肉するときは、神の霊が人に降る。言い換えれば、神の霊が物理的な肉体をまとうのだ。神は地上で自らの働きを行うために到来するが、それは特定の限られた段階の働きをもたらすためではなく、神の働きはまったく無制限である。聖霊が肉で行う働きも、神の働きの結果によって決まり、神はそうした結果を用いて自らが肉で働きを行う期間を決定する。聖霊は神の働きのそれぞれの段階を直接露わにし、自らの働きを検証しながら進めていく。その働きは人間の想像力の限界を超えるほど超自然的なものはまったくない。それは天地と万物の創造時におけるヤーウェの働きと同様で、神はその計画と働きとを同時に行なった。神は光を闇から隔て、そして昼と夜が生まれた。それには1日を要した。2日目に空を造ったが、それにも1日を要し、それから陸と海、そしてそこに生きるすべてのものを造り、それにも1日を要した。神はこれを6日間続け、そして6日目に人間を創造し、人間にこの世のすべてのものを管理させた。そして7日目に万物の創造を完了し、休息をとった。神はこの7日目を祝福し、その日を聖なる日とした。神はこの聖なる日を定めることを、万物を創造する前ではなく、創造した後決めたのである。この働きもまた、自然発生的に行われた。万物を創造する前、神は6日間で世界を創造し、7日目に休息するなどと決めてはいなかった。事実は決してそうではなく、神はそんなことを口にもせず、計画もしなかった。万物の創造が6日間で完了し、7日目に休息するなどとは一切言っていない。神はただそのときによいと思われた通りに創造を行なったのだ。万物の創造が完了すると、すでに6日の時が経っていた。神が万物の創造を完了したのが5日目だったなら、神は6日目を聖なる日としただろう。しかし実際に神は6日目に万物の創造が完了したため、7日目が聖日となり、それが今日に至るまで続いている。そのため神の現在の働きも、それと同じ方法で実行されている。神はあなたがたの状況に応じて必要なことを語り、与えるのだ。つまり、霊は人々の状況に応じて働き語っており、常にすべてを見守り、いつでもどこでも働きを行う。わたしが行うこと、語ること、あなたがたにもたらすもの、そしてあなたがたに授けるものは、例外なくあなたがたが必要としているものである。ゆえに、わたしの働きは一つとして現実から離れてはおらず、すべてが現実である。あなたがたは皆、「神の霊はいつもすべてを見ている」ことを知っているはずだ。すべてが前もって決められていたなら、あまりにも新鮮味がないではないか。あなたはまるで、神が六千年分すべ

ての計画を立て、人間を反抗的で不従順で、陰険かつ狡猾な、肉の墮落とサタンの性質、目の欲望、個々の耽溺といった性質を持つものとして運命づけたと考えているようだ。それらはいずれも神によって運命づけられたものではなく、すべてサタンの墮落の結果として起こったのである。中には次のように言う者もいるかもしれない。「神はサタンのことも把握していたのではないのか。サタンがこのように人を墮落させることは神が運命づけたことであり、その後神は人の間でその働きを行われたのだろう」と。実際に神が、サタンに人間を墮落させるよう運命づけるだろうか。神はただひたすら人類が普通に暮らせるようにと望んでいるのに、その生活を妨げたりするだろうか。そうであれば、サタンを倒して人間を救うなど無駄な努力ではないか。人間の反逆が運命づけられていたことなどありえようか。それはサタンの介入によって起こったことなのに、神によって運命づけられていたはずなどあろうか。あなたがたが理解している神の手中にあるサタンと、わたしが語っている神の手中にあるサタンとはまったく別物である。「神は全能で、サタンは神の手の中にある」というあなたがたの言葉に従えば、サタンが神を裏切ることはいえぬ。あなたは神は全能だと言ったのではないか。あなたがたの認識はあまりに抽象的で現実味がない。人間は決して神の考えを見抜くことはできず、神の知恵を理解することもできないのだ。神は全能であり、そのことには何の偽りもない。大天使は当初、神から一部の権威を与えられたため、神を裏切った。もちろんそれは、蛇の誘惑に負けたエバのように、予期されない出来事だった。しかしどれほどサタンがその裏切りを行おうとも、それは神のように全能ではない。あなたがたが言ったように、サタンは強大なだけで、何を行なっても常に神の権威によって打ち負かされる。それが、「神は全能であり、サタンは神の手の中にある」という言葉の真意である。そのためサタンとの戦いは、一段階ずつ実行されなければならない。さらに神は、サタンの策略に対応して自身の働きを計画する。つまり神はその時々時代に合わせて、人類に救いをもたらし、自らの全能性と知恵をあらわすのだ。また同様に、終わりの日における神の働きも、恵みの時代以前の早期には運命づけられておらず、次のような秩序立った運命づけはなかった。つまり第一に、人の外的性質を変える。第二に、人に神の刑罰と試練を受けさせる。第三に、人に死の試練を経験させる。第四に、人に神を愛する時代を経験させるとともに、被造物としての決意を表明させる。第五に、人に神の旨を見せて完全に神を知らしめ、そして最後に、人を完全にする、というものである。このようなことすべてを、神が恵みの時代に計画していたわけではなく、これらは現在の時代に計画され始めたのだ。サタンは神と同じように働きを行なっている。サタンはその墮落した性質を表しており、一方神は率直に語っていくらかの実質的なものを露わにし

ている。これが今日行われている働きであり、それと同じ働きの原理がはるか昔、世界が創造された後にも用いられていたのだ。

はじめに神はアダムとエバを創造し、また蛇も創造した。すべての被造物の中で、この蛇は最も有毒なものであった。その体は毒を含んでおり、サタンはその毒を利用した。エバを誘惑し罪に落とし入れたのは蛇だった。アダムはエバの後に罪を犯し、二人はそれから善と悪の区別ができるようになった。もしヤーウェが、蛇がエバを誘惑し、エバがアダムを誘惑することを知っていたなら、なぜ彼ら全員を園の中に置いたのだろうか。それらの事柄を予測できたなら、ヤーウェはなぜ蛇を創造し、それをエデンの園の中に置いたのだろうか。なぜエデンの園には善悪の知識の木の果実があったのだろうか。ヤーウェは彼らに果実を食べさせようとしていたのだろうか。ヤーウェがやって来たとき、アダムもエバもヤーウェに会おうとしなかった。ヤーウェはそのときに初めて、彼らが善悪の知識の木の果実を食べ、蛇の策略に陥ったことを知った。最終的にヤーウェは蛇を呪い、アダムとエバも呪った。この二人が木の果実を食べたとき、ヤーウェはそれにまったく気づいていなかった。人間は墮落し、邪悪で性的に乱れたものとなり、しまいにはその心に抱くものはすべて邪悪で不正な汚れたものとなった。そのためヤーウェは、人間を創造したことを悔いた。その後、世界を洪水で破壊するという自らの働きを実行し、ノアとその息子たちが生き残った。一部の物事は実際、人々が想像するほど高度でも超自然的でもない。中には次のように尋ねる人もいる、「神は大天使が裏切ると知っていながら、なぜ大天使を創造したのか」と。事実は次のとおりである。地がまだ存在していなかったとき、大天使は天国の天使たちの中で最も偉大な存在であり、天国のすべての天使に対する権限を握っていた。それは神から大天使に与えられた権威だった。神を除いて、大天使は天国の天使たちの中で最も偉大な存在だった。後に神が人間を創造したとき、大天使は地上において、神へのさらなる背信を行なった。わたしに言わせれば、大天使が神を裏切ったのは、人間を支配し、神の権威を超越したかったからだ。エバを誘惑して罪に陥れたのは大天使であり、それは地上に自分の王国を建設し、人間を神に背かせて、代わりに自分に従わせたかったからだ。大天使は非常に多くのものを自分に服従させられることに気づいた。天使たちも、そして地上の人々も大天使に従っていた。鳥と獣、木々、森、山、川、そして地上のあらゆるものは、人であるアダムとエバの管理下にあり、アダムとエバは大天使に従っていた。そのため大天使は神の権威を超越し、神を裏切ろうと考えたのだ。後に大天使は多くの天使たちを率いて神に反逆させ、それらがさまざまな類の悪霊となった。今日までの人間の発達、大天使

の墮落によるものではないか。人間が今日のような状態なのは、大天使が神を裏切り、人間を墮落させたからである。その段階的な働きは、人々が想像するような抽象的で単純なものではまったくない。サタンが神を裏切ったのには理由があるが、人々はそのような単純な事実を理解できない。天と地と万物を創造した神が、なぜサタンも創造したのか。神はサタンをとて嫌悪しており、サタンは神の敵であるのに、神はなぜサタンを創造したのか。サタンを創造することで、神は敵を創造したのではないのか。神は実際には、敵を創造したのではなかった。神は天使を創造し、そしてその天使が後に神を裏切ったのだ。天使はその地位が非常に偉大になったため、神を裏切ろうと望んだ。それは偶然だったとも言えるが、同時に避けられないことでもあった。それは人がある程度まで成熟した後に、死を避けられないのと似ている。単に状況がその段階まで進展したのだ。中には次のように言う不屈きな愚か者もいる。「サタンはあなたの敵なのに、なぜあなたはそれを創造したのですか。大天使があなたを裏切るようになることを知らなかったのですか。あなたは永遠から永遠まで見通せるのではないのですか。その大天使の本性を知らなかったのですか。自分を裏切るとはっきり知っていたのに、なぜ大天使にしたのですか。その天使はあなたを裏切っただけでなく、数多くの天使を率いて人間の世界へ降り、人間を墮落させたというのに、あなたは今日に至るまで、六千年にわたる自らの経営（救いの）計画を完成させることができずにいる」と。このような言葉は正しいだろうか。そのように考えるとき、あなたは必要以上の問題を抱えているのではないか。また、次のように言う者もいる。「サタンが現在に至るまで人間を墮落させていなかったら、神がこのように人間に救いをもたらすことはなかった。そうであれば、神の知恵と全能性は目に見えなかった。どこに神の知恵があらわされることがあっただろうか。そのため神は、サタンのために人類を創造したのだ、その後に神自らの全能性を示すために。そうでなければ、人はどのようにして神の知恵を見出せるだろうか。人が神に抵抗したり反逆したりしていなければ、神の業をあらわすことも不要になる。すべての被造物が神を崇拜し、神に従っていたら、神は行うべき働きが何もなかっただろう」。これはさらに現実からかけ離れている。なぜなら神には汚れた部分はなく、すなわち神は汚れたものを創造しえないからである。神が今その業をあらわしているのは、ただ自らの敵を倒し、自らが創造した人間を救い、当初は神の支配下にあり神に属していたにもかかわらず神を憎み、裏切り、拒絶した悪魔たちとサタンを打ち倒すためなのだ。神はそれらの悪魔を倒し、そうすることで万物に自らの全能性を示したいと思っている。この世の人間と万物は今やサタンの支配下にあり、邪悪な者に支配されている。神は自らの行為を万物にあらわし、そうすることで人々がみな神を知るようになるこ

とを望んでおり、それによってサタンを打ち倒し、神の敵を徹底的に滅ぼしたいと考えている。この働きのすべては、神の行為をあらわすことで成し遂げられる。神の被造物はすべてサタンの支配下にあるため、神は彼らに対して自身の全能性をあらわし、それによってサタンを倒すことを望んでいる。もしサタンがいなかったなら、神は自らの業をあらわす必要がなかっただろう。もしサタンの妨害がなかったなら、神は人間を創造してエデンの園で生活するよう導いていただろう。神はサタンの裏切りの前に、なぜ天使や大天使に自らの業を一切あらわさなかったのか。もしも当初からすべての天使や大天使が神を知っており、神に従っていたなら、神はこうした無意味な働きを行なっていたいなかっただろう。サタンと悪魔の存在のために、人々も神を拒絶し、反抗的な性質に満ちあふれている。そのため神は自らの行為をあらわすことを望んでいるのだ。神はサタンと戦うことを望んでいるため、自らの権威とそのあらゆる業を用いてサタンを倒さなければならない。そうやって神が人間の間で遂行する救いの働きにより、人々は神の知恵と全能性を知るようになる。神が今日行なっている働きは意義深く、一部の人々が次のように語るものとはまったく異なっている。「あなたのなさる働きは矛盾していませんか。この一連の働きは、あなたご自身を困らせているだけではないですか。あなたはサタンを創られ、そのサタンに自らを裏切らせ、反抗させた。あなたは人間を創造し、その人間をサタンに引き渡し、アダムとエバを誘惑することを許された。こうしたことすべてを意図的に行われたのに、あなたはなぜ人間を嫌悪するのですか。なぜサタンを嫌うのですか。すべてあなたがご自身で創られたのではないのですか。何を憎むことがあるのですか」。非常に多くの馬鹿げた人々がこのようなことを言う。彼らは神を愛することを望みながら、心の奥では神に不満を述べている。何という矛盾だろうか。あなたは真実を理解せず、あまりに多くの超自然的な思考を持ち、そして神が間違いを犯すとさえ主張している。何と愚かなことか。真実をもてあそんでいるのはあなただ。神が間違いを犯したのではない。中には何度も何度も次のような不満を言う者さえいる。「サタンを創造したのはあなたで、サタンを人間の世界に放り込み、人間を引き渡したのもあなたです。そして人間がサタンの性質を備えると、あなたはその人間を赦さず、逆に相応に憎んだ。当初あなたは人間をある程度愛されたが、今は人間を嫌悪している。人間を憎んだのはあなたですが、同時に人間を愛したのもあなたです。一体どうなっているんですか。これは矛盾していませんか」。あなたがたがどう解釈するかに関わらず、これが天で起こったことであり、大天使がこのように神を裏切り、人間がこのように墮落し、そして今日までこのようであり続けているのだ。あなたがたがそれをどう表現しようと、これが事のてんまつである。しかしあなたがたは、神が今日行なっている

働きはすべて、あなたがたを救うためであり、サタンを倒すためであることを理解しなければいけない。

天使は特に脆弱でこれといった能力を持っていなかったため、権威を与えられるとすぐ傲慢になった。他の天使たちより地位が高い大天使は特にそうだった。大天使はすべての天使の王であり、何百万もの天使を率い、ヤーウェの下でその権威は他のすべての天使に勝っていた。大天使はさまざまなことに手を出したが、天使たちを率いて人の世界に降り、世界を統治することを望んだ。神は自らが全宇宙の統治者だと言ったが、大天使は自分が全宇宙を統治すると主張し、それ以来神を裏切ることになった。神は天にもう一つの世界を創造していたが、大天使はその世界を統治したうえで人類の領域にも降りることを望んだ。神がそのような行いを認めることができただろうか。そのため神は大天使を打ちのめし、空中に投げ落とした。大天使が人間を墮落させてからずっと、神は人間を救うため戦いを続けており、大天使を倒すためにこれまで六千年を費やしている。全能の神に関するあなたがたの概念は、神が現在行なっている働きと相容れるものではなく、まったく非現実的で、非常に誤っている。実際に神は、神は大天使が裏切った後に初めて、大天使を自らの敵だと宣言したのだ。大天使が人の世界にたどり着いてから人間を踏みにじったのは、ただ裏切りによるものでしかなく、そしてそれこそが、人間がこの段階まで進んでしまった理由なのだ。その後、神はサタンに誓約した。

「わたしはお前を倒し、わたしが創造したすべての人間を救う」。サタンはすぐには納得せずこう言った。「あなたが一体わたしをどうできるというのか。本当にわたしを空中へと打ち倒せるのか。本当にわたしを倒せるのか」。神は大天使を空中に投げ落とすと、それ以上大天使に注意を払うことはなく、その後に人間の救いと自らの働きを始めたが、サタンの妨害はまだ続いていた。サタンにはさまざまな能力があったが、すべては当初神がサタンに与えた力のおかげだった。サタンはそれらの能力を携えて空中へと落ち、今日までそれらを保ち続けている。大天使を空中へと打ち倒したとき、神は大天使の権威を取り上げなかったため、大天使は人間を墮落させ続けた。他方神は、創造されてまもなくサタンに墮落させられた人間を救い始めた。神は天にいる間、自らの行為をあらわさなかったが、地の創造に先立って、自らが天に創造した世界の人々に自らの行為を見せ、それによって天上でその人々を導いていた。神は人々に知恵と知性を与え、その世界で生きるように導いた。もちろんこのことはあなたがたの誰も聞いたことがないだろう。後に神が人間を創造すると、大天使は人間を墮落させ始め、地上ではすべての人間が大混乱に陥った。神はこのとき初めてサタンに対して戦いを開始し、人々は

そのとき初めて神の業を目にするようになったのだ。当初、神の行為は人間から隠されていた。サタンは空中に投げ落とされた後、自分の好きなことをし続け、そして神は自らの働きを続行し、サタンに対する戦いを世の終わりまで続けている。今こそサタンが粉碎されるべき時である。神は最初サタンに権威を与え、後にサタンを空中に投げ落としたが、サタンは挑戦的なままだった。その後サタンは地上で人間を墮落させたが、神はそこで人間の経営を行っていた。神は人々の経営を用いてサタンを打ち倒す。サタンは人々を墮落させることで、人々の運命を終わらせ、神の働きを阻害する。一方、神の働きは人間の救いである。神が行う働きの段階の中で、人間を救うためでないものがあるだろうか。人々を清め、義を行わせ、愛すべきものの姿を生きるようにさせるためのものでない段階があるだろうか。けれどもサタンのすることはそうではない。サタンは人間を墮落させるのであり、全宇宙で人間を墮落させるという働きを続けている。もちろん神も自らの働きを行っており、サタンになど構ってはいない。サタンがどれほどの権威を持っていようと、その権威は神によって与えられたものだ。神は実際には、サタンに自らの権威のすべてを与えてはいないため、サタンが何をしようとも神を超えることはなく、サタンは常に神の手の中にある。神は天にいる間、自らの行為を少しもあらわさなかった。ただサタンに権威のほんの一部を与え、他の天使たちを支配できるようにしただけだった。そのためサタンが何をしようとも、神の権威を超えることはできない。神がサタンに与えた権威がもともと限られたものだったからである。神が働きを行うと、サタンはそれを妨害する。終わりの日には、サタンの妨害は終わり、同様に神の働きも終わりを迎え、そして神が完全にしようと思ふ人間は完全にされることになる。神は人々を前向きに導く。神のいのちは生ける水であり、計り知れず、無限である。サタンはある程度まで人間を墮落させた。最終的に、いのちの生ける水が人を完全にし、サタンは邪魔したりその働きを実行したりすることができなくなる。それによって神はそれらの人々を完全に自らのものとできるようになるのだ。サタンは今もそれを受け入れることを拒んでおり、神に対抗し続けているが、神はサタンを気に留めない。神は言った、「わたしはサタンのあらゆる闇の力と、あらゆる闇の影響に勝利するであろう」と。これは今肉においてなされなければいけない働きであり、それが受肉の意義でもある。つまり、終わりの日にサタンを倒すという働きの段階を完成させ、サタンに属するすべてのものを滅ぼすということだ。神のサタンに対する勝利は避けられない流れなのだ。実際、サタンははるか昔に敗北している。福音が赤い大きな竜の国全体に広がり始めたとき、つまり受肉した神が働きを始め、その働きが動き出したとき、サタンは完全に倒されたのだ。なぜならその受肉の目的こそ、サタンを倒すことだったからであ

る。サタンは神が再び肉となって神の働きを遂行し始め、どんな力もその働きを止められないことを目にとると、愕然とし、あえてそれ以上の悪事を行わなかった。当初サタンは自らも多くの知恵を授かっていると思い、神の働きを妨害し邪魔をした。けれどもサタンは、神が再び肉となることや、その働きの中でサタンの反逆を人間への暴露と裁きのために利用し、それによって人間を征服しサタンを打ち負かすということは予想していなかった。神はサタンより賢明であり、神の働きはサタンをはるかに凌ぐ。だからわたしは以前こう述べたのだ、「わたしの働きはサタンの策略に応じて行われ、最終的にわたしは自らの全能性とサタンの無力さを示す」と。神は最前線で自らの働きを行い、サタンはその後ろをついてゆき、最終的に粉碎されることになる。サタンは何が自分を討ったのかすら知ることはないだろう。ただ粉々に打ち破られた後になって初めて真実に気づき、そのときにはすでに火の池で焼かれてしまっているのだ。サタンはそのとき完全に理解するのではないだろうか。そのときにはもう打つ手がなくなっているからだ。

この段階的かつ現実的な働きの中で、神の心はしばしば人間のための悲しみで重くなるため、サタンに対する神の戦いは六千年間続いており、神はこう語っている。「わたしは二度と再び人間を創造しないし、天使に権威を授けることもない」。それ以来、天使が働きを行うために地上に来るときは、ただ神に従って一定の働きを行うだけになり、神が天使に権威を与えることは二度となかった。イスラエルの人々が見た天使は、その働きをどのように遂行していたか。彼らは夢の中に現れ、ヤーウェの言葉を伝えた。イエスが十字架に張り付けにされてから3日後に復活したとき、大きな石を傍らに押したのは天使であり、神の霊が自らその働きを行なったのではなかった。天使はそのような働きを行うだけで、ただ補助的な役割を果たしていたのであり、権威は持っていなかった。神は二度と彼らに権威を授けるつもりがないからだ。神が地上で用いた人々は、一定期間働きを行なった後、神の地位に立つようになり、そして言った。「わたしは全世界を超越したい。第三の天に立ちたい。我々が主権を握って統治したい」。彼らは数日間の働きの後に傲慢となり、地上での主権を握ることを求め、新しい国の建国を求め、自分の足元にすべてをひれ伏させることを求め、第三の天に立つことを求めた。あなたは自分が神に使われている人に過ぎないことを知らないのか。あなたがどうやって第三の天に昇れるというのか。神は働きを行うため、声を上げることもなく静かにこの世にやって来て、ひそかに自らの働きを完遂してから去ってゆく。神は人間のように声を上げることはなく、むしろ現実的に自らの働きを遂行する。また神が教会へ入って行き

、大声で「わたしはあなたがた全員を消し去る。あなたがたを呪い、罰する」と叫んだりすることも決してない。ただ自らの働きを続行し、それが終われば去ってゆくだけだ。病を癒し、悪霊を追い払い、講壇から他人に説教し、長く大げさな演説を行い、非現実的な事柄を討議している宗教の牧師たちは、みな芯まで傲慢だ。彼らは大天使の子孫でしかないのだ。

現在までの六千年にわたる働きを遂行したことで、神はすでに自らの行為の多くを示してきたが、そのおもな目的は、サタンを倒し、すべての人間に救いをもたらすことだった。神はこの機会を利用して、天のすべてのもの、地上のすべてのもの、海中のすべてのもの、そして神が創造した地上のあらゆるものに、神の全能性を知らしめ、神のすべての行為を目撃させる。神はサタンを倒した機会を捕らえて、人間に自らのすべての業を示し、神を褒めたたえさせ、サタンを倒した神の知恵を賛美させる。地に、天に、そして海中にあるすべてのものが神に栄光をもたらし、神の全能性を褒めたたえ、神のすべての業を褒めたたえ、神の聖なる名前を叫ぶ。それは神がサタンを倒した証であり、サタンを征服した証であり、さらに重要なこととして、神が人間を救った証でもある。神の被造物すべてが、神に栄光をもたらし、敵の打倒と勝利の凱旋を褒めたたえ、偉大な勝利の王として神を褒めたたえる。神の目的はサタンの打倒だけではないため、神の働きは六千年間も続いている。神はサタンの打倒を通して人間を救い、サタンの打倒を通して自らのすべての業とすべての栄光を露わにする。神は栄光を手にし、すべての天使たちは神のあらゆる栄光を見るだろう。天の使者たち、地上の人間たち、そして地上のすべての被造物は、創造主の栄光を見るだろう。これが神の行う働きである。天と地における被造物はすべて神の栄光を目の当たりにし、神はサタンを完全に打ち倒した後、意気揚々と凱旋し、人間に自らを褒めたたえさせることで、自らの働きにおける二重の勝利を成し遂げる。最終的にすべての人間は神によって征服され、抵抗したり反抗したりする者は神に一掃される。つまり、サタンに属する者すべてが一掃されるのだ。あなたは今神の多くの業を目撃しているが、依然として抵抗し、反抗的で、服従していない。心の中に多くの考えを抱き、自分のしたいことをして、自分の欲望と好みに従っている。それはすべて反抗であり、抵抗である。肉のため、自分の欲望のため、さらに自分自身の好みのため、世間のため、そしてサタンのために神を信仰することは、不浄である。それは本質的に抵抗であり、反抗である。現在、さまざまな種類の信仰があり、ある者は災害からの避難所を求め、ある者は祝福を得ることを求め、ある者は奥義を理解することを望み、またある者はお金を得ようとしている。これらはみなさまざまな

形での抵抗であり、すべて神への冒とくである。人が抵抗したり反抗したりするというのは、こうした態度を言うのではないか。現在、多くの人々が不平を言い、不満を並べ、裁く。そうしたことはすべて、邪悪な者がすることであり、人間の抵抗と反抗の一例である。そのような者たちはサタンに取り憑かれ支配されている。神のものとされる人々は、完全に神に従う人々であり、一度はサタンに墮落させられたものの、神の現在の働きによって救われ征服され、試練に耐えた人々であり、そして最終的に完全に神のものとされて、もはやサタンの領域で生きることなく、不義から解き放たれた結果、聖く生きることを望んでいる人々である。彼らは最も高潔な人々であり、実際に聖なる者たちなのだ。もしあなたの現在の行為が神の要求の一部にでも沿っていない場合、あなたは排除されるだろう。そのことに議論の余地はない。すべては今起こっていることにかかっており、あなたがあらかじめ運命づけられ選ばれていたとしても、あなたの結末は今日のあなたの行為によって決まるのだ。もし今あなたが遅れずについて来れないなら、あなたは排除されるだろう。今ついて来れないのなら、どうして今後ついて来られるようになるだろうか。このようなすばらしい奇跡が眼前に現れているのに、あなたはまだ信じようとしなない。それならば、将来神が自らの働きを終え、もうそのような働きをしなくなったときに、どうして神を信じられるだろうか。その時になれば、あなたが神に従うのはさらに不可能になるだけだ。後に神は、受肉した神の働きに関するあなたの態度と認識、そしてあなたの経験に基づいて、あなたが罪深いのか正しいのか、または完全にされるか排除されるかを判断することになるだろう。あなたは今明確に理解しなければならない。聖霊の働き方とは、今日のあなたの振る舞いに従って、あなたの結末を判断するというものなのだ。誰が今日の言葉を語るのか。誰が今日の働きを行うのか。誰が今日あなたが排除される存在だと決めるのか。誰があなたを完全にすると決めるのか。それはわたしが自ら行うことではないか。わたしがそれらの言葉を語るのであり、わたしがその働きを実行するのだ。人々を呪い、罰し、裁くことは、すべてわたしの働きの一部である。最終的には、あなたを排除することもわたしの決断となる。すべてはわたしが行うことなのだ。あなたを完全にすることはわたしが行うことであり、あなたが祝福を享受できるようにするのもわたしが行うことである。それらはすべてわたしが行う働きなのだ。あなたの結末はヤーウェによって運命づけられているのではない。それは今日の神によって決定されるのだ。それはまさに今決められているのであり、はるか昔の創世以前に決められたことではない。不屈きな者たちはこのように言う、「あなたの目は何かおかしくなっていて、わたしを正しく見ていないのでしょう。最終的には霊が暴くことをご覧になるはずです」と。イエスは当初、ユダを自分の弟子として選んだ

。人々はこう尋ねる、「イエスはなぜ自分を裏切ることになる弟子を選んだりしたのか」と。当初、ユダにはイエスを裏切る意図はなく、裏切りはただ後になって起こったことだった。当時イエスはユダをかなり好意的に見ており、ユダを自身に従わせ、彼に金銭面の事柄を任せた。ユダがお金を使い込むと知っていれば、そのようなことをユダに任せはしなかっただろう。イエスは当初、ユダが不正直で嘘つきなことや、兄弟姉妹を騙すことを知らなかったと言えるだろう。後にユダがイエスに一定期間付き従った後、イエスはユダが兄弟姉妹を甘言で騙し、神を騙すのを見た。人々もユダが金袋のお金を取るくせがあることに気づき、それをイエスに告げた。イエスはそのとき初めて、そうしたことをすべてに気づいたのだ。イエスは十字架による張り付けの働きを行うことになっており、自分を裏切る者が必要だったため、そしてユダがその役割にちょうどぴったりの人だったため、このように言った。「この中にわたしを裏切る者がいる。人の子はこの裏切りを用いて張り付けにされ、3日後に甦ることになる」と。当時、イエスは実際には自らを裏切らせるためにユダを選んだわけではなかった。逆に、イエスはユダが忠実な弟子となることを望んでいた。ユダは意外にも主を裏切る強欲な堕落した人物だったため、イエスはその状況を利用して、ユダをその役割に選んだのだ。もしイエスの12人の弟子すべてが忠実であり、ユダのような者が一人もいなかったら、イエスを裏切る者は結局弟子以外の者となっていただろう。けれどもちょうどそのとき弟子たちの中に賄賂を喜んで受け取る者、すなわちユダがいた。そのためイエスはユダを用いて、自らの働きを完成させたのだ。何と単純なことか。イエスは働きを始めたときに、あらかじめそれを決めてはおらず、物事がある段階に差し掛かったときにそれを決断しただけだった。それはイエスの決断であり、すなわち神の霊自身の判断であった。当初、ユダを選んだのはイエスだった。ユダは後にイエスを裏切ったが、それはイエス自身の最後をもたらすために聖霊が行なったことだった。それはその時点で行われた聖霊の働きだったのだ。イエスはユダを選んだとき、ユダが自らを裏切るとはまったく考えていなかった。イエスが知っていたのは、彼がイスカリオテのユダであるということだけだ。あなたがたの結末もまた、今日のあなたがたの従順の程度に従って、そしてあなたがたのいのちの成長の度合いに従って判断されるのであり、世界の創造時に運命づけられていたというような人間の観念に従って判断されるのではない。こうしたことは明確に理解しておかなければならない。この働きはいずれも、あなたが想像するように実行されるものではないのだ。

呼び名と身分について

神に用いられるに相応しい者になりたいのであれば、神の働きを理解しなければならない。神が過去に行なった（新約聖書と旧約聖書に記されている）働きを知り、さらに、神の今日の働きを知らなければならない。つまり、六千年に渡る神の三段階の働きを知らなくてはならない。もしあなたが福音を広めるよう求められたら、神の働きを知らずに広めることは不可能である。ある者は、あなたがたの神が聖書、旧約聖書、そして当時のイエスの働きと言葉について何を語ったのか、あなたに質問するかもしれない。もしあなたが聖書に秘められていることを説明できないなら、彼らは納得しないだろう。はじめイエスは、弟子たちに旧約聖書のことを多く語った。彼らが読んだのは、全て旧約聖書からのものである。新約聖書はイエスが十字架に付けられてから数十年後になって書かれたからだ。あなたがたは、福音を広めるには、主に聖書の内情と、イスラエルでの神の働き、つまりヤーウェが行なった働きを把握しなければならない。また、イエスの行なった働きも理解しなくてはならない。すべての人々が最も関心を持っているのはこのような問題であるが、二つの段階の働きについての秘められた話は彼らはまだ聞いていない。福音を広めるときには、今日の聖霊の働きについての話はひとまず脇に置いておくことだ。この段階の働きは彼らの理解を超えている。なぜなら、あなたがたが追い求めているものは最も高尚なもの――神についての認識、聖霊の働きに関する認識――であり、この二つ以上に高尚なものはないからだ。あなたが最初に高尚なことを話してしまったならば、彼らの手に負えないだろう。というのは、聖霊によるそのような働きを経験した者などいないからだ。それは前例がなく、人には受け入れ難いものなのだ。彼らの経験は古びた過去のものに過ぎず、たまに聖霊の働きが幾分含まれているだけである。彼らの経験するものは、今日の聖霊の働きでも、今日の神の旨でもない。未だに古い慣習に従って行動し、彼らには新たな光も、新しいものもない。

イエスの時代には、聖霊は主にイエスを通してその働きを為し、一方ヤーウェに仕えた者たちは祭司の服を着て揺るぎない忠誠心を持って神殿で仕えた。彼らには聖霊の働きもあったが、当時、神の旨を把握できず、新しい導きがないまま、単に古い慣習に従ってヤーウェに忠誠を尽くしていただけであった。そしてイエスが来て新しい働きをもたらした。神殿で仕えたそれらの人達には、新しい導きも新しい働きもなかった。神殿で仕える彼らは単に古い慣習を維持するだけであった。神殿を去らなければ彼らに霊の成長は一切あり得なかった。新しい働きはイエスによってもたらされたが、イエスは働きを行うために神殿に入ることはなかった。神の働きの範囲が随分前から変化していたため、イエスは常に神殿の外だけで働きを行なった。神は神殿の中では働かず、人が神

殿で神に仕えるときは古いやり方が維持されるだけであったから、それは新しい働きをもたらすことができなかった。それと同様に、現在の宗教心のある人々は未だに聖書を崇拝している。あなたが福音を宣べ伝えようとする、彼らは聖書の言葉に関する些細なことをあなたに投げつけ、多くの証拠を見つけてあなたを啞然とさせるだろう。そしてあなたにレッテルを貼り、あなたがたの信仰は愚かしいと思うだろう。彼らは、「あなたは神の言葉である聖書も知らずに、どうして神を信じているなどと言えるだろうか」と言うだろう。そうして彼らはあなたを見下げて、こうも言うだろう。「あなたがたが信じているのが神なら、なぜその神はあなたがたに旧約聖書と新約聖書のことのすべてを話さないのか。あなたがたの神は、その栄光をイスラエルから東洋にもたらしたのに、なぜイスラエルで行なわれた働きを知らないのか。なぜイエスの働きを知らないのか。もしあなたがたが知らないのであれば、あなたがたが教えられていない証拠だ。彼は二度目に受肉したイエスであるのに、どうしてこれらの事を知らないのか。イエスはヤーウェの行なった働きを知っていたのに、あなたがたの神が知らないのはなぜか」。その時が来れば、この人達はみなあなたにこのような質問をするだろう。彼らは頭がそのような考えで一杯なのだから、どうして尋ねずにおれようか。この流れの中にいる者は、聖書に焦点を当てない。なぜなら、あなたがたは、現在神によって段階ごとに行われてきた働きにしっかりと着いて来たとし、その段階ごとに行われてきた働きをその目で目撃し、明確に三つの段階の働きを見てきたので、聖書は脇へ置いて、それを研究するのはもう止めなければならなかったからである。しかし彼らは、この段階ごとの働きを知らない、聖書を研究せずにはいられない。こう尋ねる人たちもいるだろう。「受肉した神によってなされる働きと、昔の預言者たちや使徒たちの働きとでは、何が違うのか。ダビデも主と呼ばれていたし、イエスもそう呼ばれていた。二人が行なった働きは違ったが、呼ばれ方は同じだった。あなたはなぜ二人の身分が同じではなかったと言うのだろうか。ヨハネが目撃したのは一つのビジョンであり、それは聖霊から出たものでもあり、ヨハネは聖霊が伝えようとする言葉を話すことができた。それでは、なぜヨハネの身分はイエスの身分と違うのか」。イエスによって話された言葉は、完全に神を現すことができ、神の働きを完全に現すことができた。ヨハネが見たものは一つのビジョンであって、神の働きを完全に現すことはできなかった。ヨハネ、ペテロ、そしてパウロは、イエスと同様多くの言葉を語ったが、彼らがイエスと同じ身分を持っていなかったのはなぜか。それは主に、彼らの働きが違ったからである。イエスは神の霊を現し、彼には神の霊が直接働いていたのである。イエスは、新しい時代の働き、それまで誰も行なったことのない働きをしたのである。イエスは新たな道を切り開き、ヤーウェを

現し、神自身を現したのである。一方、ペテロやパウロやダビデは、彼らが何と呼ばれていたかに関係なく、被造物としての身分を現しただけ、また、イエスカヤーウェによって遣わされただけであった。だから、いかに多くの働きをしようとも、どれほど大きな奇跡を行おうとも、彼らはやはり神の被造物にすぎず、神の霊を現すことはできなかったのである。彼らは神の名によって、もしくは神に遣わされて働いたのである。更に、彼らはイエスあるいはヤーウェによって始められた時代の中で働いたのであり、彼らが行なった働きはその時代と切り離されるものではなかった。結局のところ、彼らは神の被造物にすぎなかった。旧約では、多くの預言者が預言を語ったり、預言書を書いたりした。誰一人として彼らが神だとは言わなかったが、イエスが働き始めるやいなや、神の霊がイエスを神であると証ししたのである。それはなぜか。あなたは、この時点で既に知っているはずだ。以前、使徒たちや預言者たちは様々な書簡を書き、また多くの預言をした。後に人々はそのうちの幾つかを選んで聖書に収めたが、紛失した書もあった。彼らによって語られた言葉は全て聖霊から出たものだという人たちがいるが、それらの内、良いとみなされているものと悪いとみなされているものがあるのはなぜか。また、選ばれたものとそうでないものがあるのはなぜか。それらが本当に聖霊によって話された言葉ならば、人が選抜する必要があったのか。なぜイエスによって話された言葉とイエスの行なった働きの記述が四つの福音書でそれぞれ異なるのか。これは、福音書を記録した人間によるミスではないのか。「パウロや新約聖書の他の著者によって書かれた書簡と、彼らが行なった働きは、部分的には人間の意志に由来するものであり、人間の観念が混ざっているのだから、あなた（神）が今日話す言葉の中には人間による不純なものがないのだろうか。それらは本当に人間の観念をまったく含んでいないのか」と尋ねる人たちもいるだろう。神によって為されるこの段階の働きは、パウロや多くの使徒と預言者たちが行なった働きとは全く異なっている。身分に違いがあるだけでなく、基本的に、実行された働きに違いがあるのだ。パウロが打たれて主の前に倒れた後、彼は聖霊に導かれて働き、遣わされる者となった。だからパウロは諸教会に書簡を書き送ったが、その書簡は全てイエスの教えを手本とするものであった。パウロは、主イエスの名によって働くために主によって遣わされたが、神自身が来たときは、誰の名によっても働くことはなく、その働きにおいて神の霊のみを現した。神は、直接自身の働きをするために来た。神は人によって完全にされることはなく、その働きは人間の教えに基づいて実行されることがなかった。この段階の働きにおいては、神は自らの経験を語ることによって導くのではなく、自身が持つものに従って直接働きを実行する。例えば、効力者の試練、刑罰の時、死の試練、神を愛する時などである……。これらは全てこ

れまでなされたことがない働きであり、人間の経験というより、むしろこの時代の働きである。わたしが語った言葉のうちのどれが人間の経験であるのか。それは全て霊から直接出るものであり、また、霊によって発せられるものではないのか。それは、あなたの素質が乏しいために真理を見極めることができないだけである。わたしが言う実践的なこの道のとは、進むべき道を示すものであり、今まで誰もそれを語ったことがなく、誰もこの道を経験したことがなく、この現実を知った者もない。わたしがこれらの言葉を話すまでは、それを語った者は一人もいないのだ。このような経験を語った者は一人もおらず、そのような詳細を語った者もなく、さらには、その様な状況を指摘してこれらのことを明らかにする者もいなかったのである。わたしが今日示す道は誰によっても示されたことの無いものであり、もし人によって示されるならば、それは新たな道とはいえないだろう。パウロとペテロを例に取ってみよう。イエスが道を導く前、彼らには自分自身の経験がなかった。彼らは、イエスが道を示したとき初めてイエスの話す言葉や彼が示す道を経験したのである。そこから彼らは多くの経験を得てそれらの書簡を書いたのである。よって、人間の経験は神の働きと同じではなく、神の働きは人間の観念や経験によって記述された認識と同じものではない。何度も繰り返し言ってきたが、現在わたしは新たな道を示し、また新しい働きを行なっているが、わたしの働きとわたしの言葉はヨハネと他のすべての預言者たちのものとは異なるのである。わたしは経験を得てからあなたがたに話すようなことは決してしない——そのようなことは絶対にならない。もしそうだとしたら、それはずっと前にあなたがたを遅らせたのではないだろうか。過去には、多くの者たちが語った認識も高尚とされていたが、その人達の言葉はみな、いわゆる霊的な人物と呼ばれる人たちの言葉に基づいて語られたにすぎない。そのような言葉は道を示したわけではなく、彼らの経験や彼らが見たもの、そして彼らの認識から来たのである。そのいくつかは、彼らの観念であり、いくつかは彼らの経験をまとめたものであった。今日、わたしの働きは、そういう人たちの働きとは全く性質を異にする。わたしは他者によって導かれた経験もなければ、他者から完全にされることを受け入れたこともない。さらに、わたしが語り交わりを通して伝えたものはみな他の人のものとは異なり、また他の誰かによって語られたことの無いものである。今日、あなたがたが誰であるかに関わらず、あなたがたの働きは、わたしが語る言葉に基づいて行われる。これらの言葉と働きなくして、誰がこのような事（効力者の試練、刑罰の時……）を経験し、そのような認識について語ることができようか。あなたは本当にこの事を見極められないのだろうか。どの段階の働きであろうと、ひとたびわたしが言葉を発すれば、あなたがたは直ちにわたしの言葉に従って交わり始め、それらの言葉に従って働

くのであり、それは、あなたがたの誰一人として考えたことのない道なのである。ここまで歩んできたあなたが、これほど単純明快な問題を理解することができないのか。それは誰かが考え出した道でも、靈的と言われている誰かの道に基づくものでもない。それは新たな道であり、かつてイエスが語った多くの言葉でさえもはや廃れている。わたしが語るのは、新しい時代を切り開く働きのことであり、その働きとは他から完全に独立したものであって、わたしの行う働きとわたしが語る言葉は全て新しいもののなのである。これこそ今日の新しい働きではなからうか。イエスの働きもそのようであった。イエスの働きも神殿の人々の働きとは違い、パリサイ人の働きとも異なり、また、イスラエルの民全体の働きともまったく似ていなかった。人々は、イエスの働きを見た後、「それは本当に神の行なった働きなのか」と決断できなかった。イエスはヤーウェの律法に固執しなかった。人を教えに来た時、彼が語ったことは全て新しく、昔の聖徒たちや旧約の預言者たちが語ったこととは違っていたので、人々は確信が得られないままだった。人間にとって最も対処し難いのはこの点である。この新しい段階の働きを受け入れる前に、あなたがたのほとんどが歩んできた道は、靈的な人達の道に基づいて実践し靈的に成長するためのものであった。しかし今日、わたしが行う働きはそれとは大きく異なっているので、あなたがたは、それが正しいかどうかを判断できない。わたしは、あなたが前にどんな道を歩んで来たか気にかけないし、誰がもたらした「食べもの」を食べたか、誰を「父」とみなしてきたかには興味がない。わたしは既に来ており、人を導くために新しい働きをしたのだから、わたしについて来る者はみな、わたしが言うことに従って行動しなければならない。あなたの「家柄」にどれほど権力があろうとも、あなたはわたしに従わなければならない。これまでの習慣に従って行動してはならず、あなたの「育ての父」はその役目を終えるべきで、あなたは、あなたの神の前に出て、自らの正当な分け前を求めるべきなのである。あなたの全てはわたしの手中にあるので、あなたは育ての父にあまりにも盲目的な信仰を捧げるべきではない。育ての父はあなたを完全に支配することができない。今日の働きは独立したものである。わたしが今日語る全てのことは、明らかに過去のいしずえに基づいてはいない。これは新しい始まりであるので、もしあなたが、それは人の手によって作られたものだ、と言うなら、あなたは救いがたいほど盲目な人である。

イザヤ、エゼキエル、モーセ、ダビデ、アブラハム、そしてダニエルは、イスラエルの選ばれし民の指導者または預言者であった。なぜ彼らは神と呼ばれなかったのか。なぜ聖霊は彼らを証ししなかったのか。聖霊はなぜイエスが働きを始め、語り始めるやい

なやイエスを証ししたのか。なぜ他の者たちは証されなかったのか。肉の人間であった彼らはみな「主」と呼ばれた。その呼び名に関係なく、彼らの働きがその存在と本質を表し、彼らの存在と本質は彼らの身分を表していた。彼らの本質は、彼らの呼び名とは関係がない。それは、彼らの表現したこと、そして彼らが生きたものによって現されるのである。旧約聖書の中では、誰かが「主」と呼ばれることは別に不思議なことではなく、どのような呼び方をしてもよかったが、その人の本質と本来の身分は不変であった。偽キリストや偽預言者、あるいは人を惑わす者の中にも「神」と呼ばれる人がいるではないか。ではなぜ彼らは神ではないのか。それは、神の働きを行うのは彼らには不可能だからだ。彼らは、根本的に人間であり、人々を惑わす者たちであり、神ではないので、神の身分は持っていない。ダビデも十二部族の中で主と呼ばれていたではないか。イエスも主と呼ばれていたが、なぜイエスだけが受肉の神と呼ばれたのか。エレミヤもまた「人の子」として知られていたではないか。またイエスも「人の子」として知られていたではないか。なぜイエスは神の身代わりとして十字架につけられたのか。それは、イエスの本質が違っていただけではないのか。イエスの行なった働きが違っていただけではないのか。呼び名は関係あるのだろうか。イエスも人の子と呼ばれたが、イエスは神の最初の受肉であり、権力を担うために、そして贖いの働きを達成するために来たのである。これは、イエスの身分と本質がいわゆる「人の子」と呼ばれた他の人たちとは異なっていたことを証明している。聖霊に用いられた者たちの言葉は全て聖霊から出た言葉である、とあえて言う人が今日あなたがたの中にいるだろうか。そんなことをあえて言う人がいるだろうか。もしあなたがそのようなことを言うなら、いったいなぜエズラの預言書は除外され、昔の聖徒や預言者たちが書いた書物も同じように扱われたのか。それらの全てが聖霊から出たものであるなら、どうしてあなたがたはあえてそのような気まぐれな選択をするのか。あなたに聖霊の働きを選ぶ資格があるのか。また、イスラエルの史実の多くが除外された。このような過去の記述が全て聖霊から出たものであると信じるなら、一部の書が排除されたのはなぜか。それらがみな聖霊から出たものであれば、全て保管されて、諸教会の兄弟姉妹が読めるよう送られるべきである。それを人間の意図によって選抜したり処分したりすべきではない。そのようなことは間違っている。パウロとヨハネの経験には個人的に見たことが含まれていると言っても、それは彼らの経験と認識がサタンから出たものということではなく、彼らが個人的に経験したり見たりしたものがあったというだけのことである。彼らの認識は当時の実際の経験を背景にして生まれたものであり、それが全て聖霊から出たものだと言えようか。もし四つの福音書が全て聖霊から出たものなら、マタイ、マルコ、ル

カ、そしてヨハネが、イエスの働きについてそれぞれ違うことを言っているのはなぜか。そのことを信じないというなら、聖書の中の、ペテロが主を三度否定する話を読んでみなさい。四つの書すべてが違い、それぞれ特徴を持っている。多くの無知な人達は言う。「受肉の神もまた人間であるのなら、その方の語る言葉は全く聖霊から出るものと言えるだろうか。もしパウロとヨハネの言葉に人の意志が混じっているのなら、神が語る言葉には本当に人の意図が混ざっていないのだろうか」。そんなことを言う人たちは盲目で無知なのだ。四つの福音書を注意して読みなさい。イエスが行なった事、イエスが語った事に関して記述されていることを読んでみなさい。それぞれの記述が全く異なっており、違う視点を持っている。これらの福音書の作者によって書かれたものが全て聖霊から出たものならば、全てが同じであり一貫しているはずだ。それでは、どうして相違があるのだろうか。そんなことも見抜けないのなら、人間はあまりに愚かではないだろうか。もしあなたが神を証しするよう求められたならば、どのような証しをすることができるだろうか。そのような認識で神を証しできるだろうか。もし他の人が、「ヨハネとルカによる記録に人間の意図が混ざっていると言うなら、あなたがたの神が話した言葉にも人間の意図が混ざってはいないのか」と尋ねたら、あなたは明確に答えられるだろうか。ルカとマタイは、イエスの言葉を聞き、イエスの働きを見た後、自らの認識を、イエスが行なったことに関する幾つかの事実を詳しく述べていく回想という形で語ったのである。あなたは、彼らの認識が全く聖霊によって明らかにされたものと言えるか。聖書以外にも、彼らより認識のある霊的な人々が大勢存在したのだから、なぜそういう人たちの言葉は後世の人によって取り上げられなかったのか。彼らも聖霊に用いられた者ではなかったのか。今日の働きにおいて、わたしはイエスの働きの土台に立ってわたし自身が見たものを話しているのでもなく、イエスの働きの背景に立ってわたしの認識を伝えているのでもないことを知っておきなさい。イエスは当時どんな働きをしたのか。そしてわたしは今日どんな働きをしているか。わたしが為すこと、話すことには前例がない。わたしが今日歩んでいる道は誰も歩んだことのない道であり、過去の時代と世代の人々が一度も歩んだことのない道である。今日、この道が開かれたわけだが、これが霊の働きでないことなどあろうか。過去の指導者たちは皆、たとえそれが聖霊の働きであっても、他の人達の作った基礎の上に自らの働きを行なってきたのである。しかし、神自身の働きは違う。イエスの働きの段階は同じであった。イエスは新たな道を切り開いた。イエスはこの世に来て、天国の福音を語り、人は悔い改めて罪を告白すべきだと説いた。イエスがその働きを終えた後、ペテロやパウロ、そして他の人々がイエスの働きを引き継いでやり始めたのである。彼らは、イエスが十字架にかけられ天に

昇った後、十字架の道を宣べ伝えるために霊によって遣わされたのである。パウロの語った言葉は深遠だったが、それもまたイエスが語ったことによって築かれた土台、すなわち忍耐、愛、苦難、かぶり物を着けること、バプテスマを受けることなど、その他の守るべき教義の上にに基づいているのである。これらすべてがイエスの言葉という土台に基づいていたのである。彼らには新たな道を切り開くことはできなかった。それは彼らが神に用いられた人間に過ぎなかったからである。

当時、イエスの言葉や働きは教理に固執したものではなかった。また、旧約聖書の律法に従って働きを実行することもなかった。それは、恵みの時代に行われるべき働きに従っていたのである。イエスは自らもたらした働きと、自らの計画と、自らの職分に従って尽力したが、旧約聖書の律法に従っては働かなかった。イエスの働きで旧約の律法に基づいたものはひとつもなかった。また、イエスは預言者たちの言葉を実現させるためにこの世に来て働いたのでもなかった。どの段階の神の働きも、とりわけ昔の預言者たちの預言を成就させるためのものではなく、教理に従うため、あるいは意図的に預言者たちの預言を実現させるために来たのでもなかった。だが、彼の行なったことが昔の預言者たちの言葉を混乱させることはなく、彼が過去に行なった働きの妨げとなることもなかった。神の働きの顕著な点は、いかなる教理にも縛られずに、彼自身が為すべき働きを行うことであった。彼は預言者でも先見者でもなく、自らが行うべき働きをするために実際に来て、自身の新しい時代を切り開き、新たな働きを実行するために来た行動の人であった。もちろん、イエスが自身の働きを為すために来たとき、旧約聖書の昔の預言者たちが語った多くの言葉を成就させてもいる。今日の働きもまた旧約聖書の昔の預言者たちの預言を成就させている。ただ単にわたしはその「黄ばんだ古い暦」を掲げることがないというだけのことだ。というのは、わたしには他にももっと為すべき働きがあり、あなたがたに語るべきことももっとあるからだ。そして、その働きと言葉は聖書の聖句を説明するより遥かに重要な事である。なぜなら、そのような働きは、あなたがたにはさほど意義も価値もなく、あなたがたの助けになることも、あなたがたに変化をもたらすこともないからだ。わたしは聖書に書かれたことを成就するために新しい働きをする訳ではない。もし神が聖書の中の昔の預言者の言葉を成就するためだけに、この地上に来たのなら、受肉の神と昔の預言者たちのどちらが偉大なのだろう。結局のところ、預言者たちが神を支配しているのか、それとも神が預言者たちを支配しているのか。あなたは、これらの言葉をどのように説明するつもりなのか。

はじめイエスがまだ正式にその職分に取り掛かっていない頃、イエスに従った弟子達

のように、イエスもまた神殿で、集会に参加し、讃美の歌を歌い、神を誉め讃え、旧約聖書を読んだ。イエスがバプテスマを受け水から上がった時に、霊が正式にイエスの上に降臨し働きを始め、イエスの身分と果たすべき職分を明らかにした。それまでは誰も彼の身分を知らず、知っていたのはマリアだけで、ヨハネでさえ知らなかった。イエスがバプテスマを受けたのは二十九歳の時であった。バプテスマを受けると天が開け、次のような声が聞こえた。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。イエスがバプテスマを受けた後、聖霊がこのようにイエスを証しし始めた。二十九歳でバプテスマを受ける前のイエスは、普通の人としての生活を送り、食べる時に食べ、ごく普通に寝起きし、服を着、他の人達と違う点は何もなかった。だがもちろん、そのことは、人間の肉眼にはそのように見えたということである。イエスも時には弱くなることもあれば、物事を見極められないこともあった。聖書に、成長するにつれてその知恵も増したと書かれている通りである。この言葉は、単に彼が平凡かつ普通の人間性を持っていて、他の普通の人々と特に違うところはなかったことを示している。イエスも、普通の人として成長し、何も特別な事はなかった。しかし、イエスは神の配慮と守りの中にあった。彼はバプテスマを受けた後に試みを受けはじめ、その後、自らの職分と働きを行い始め、力、知恵、そして権威を持つようになった。これは、バプテスマの前には聖霊がイエスの中で働かなかった、もしくは、イエスの中に聖霊がなかったという意味でもない。バプテスマの前にも、聖霊はイエスの中に宿っていたが、その働きを正式に始めてはいなかった。と言うのは、神が働く「時」には制限があり、普通の人には普通の成長過程があるからである。聖霊は常にイエスの内に宿っていた。イエスが誕生した時、彼は他の人間とは違っており、明けの明星が現れた。またイエス誕生の前には、ヨセフの夢の中に天使が現れ、マリアが男の子を産むこと、そしてその子を聖霊によって身ごもることを告げた。イエスがバプテスマを受けた後、聖霊は働きを始めた。しかしそのことは、聖霊がちょうどイエスの上に降臨したばかりだという意味ではなかった。聖霊がイエスの上に鳩のように下ったという言葉は、イエスの職分が公に始まったことを指している。神の霊は以前からイエスの中に宿っていたが、まだその時が来ていなかったのでイエスは働きを始めてはおらず、また霊も軽率に働きを始めることはなかった。霊はバプテスマを通してイエスを証ししたのである。イエスが水から上がったとき、霊がイエスの中で正式にその働きを始めた。それは神の受肉の体がその職分を開始したこと、そして贖いの働きを始めたことを意味する。すなわち、こうして恵みの時代が正式に始まったのである。だからどのようなものであっても神の働きには時があるのだ。バプテスマの後、イエスには特に変化は見られず、元の肉体のままであった。ただ彼

は自身の働きを開始し、自分の身分を明らかにし、権威と力に満ちていたということである。その意味では、イエスは以前と違っていた。イエスの身分は異なり、地位において相当な変化があったと言ってよい。これは聖霊の証しであり、人間によって行われた働きではなかった。最初人々にはそのことが分からず、聖霊がイエスを証しするようになってから少しずつ分かるようになった。仮にイエスが聖霊によって証しされる前に大いなる働きを行なったとしても、神自身による証しを伴っていないのなら、どんなにイエスの働きが大いなるものであっても、人々がイエスの身分を知ることは決してなかっただろう。なぜなら、それを人間の目で見るとは不可能であるからだ。聖霊の証しという段階がなければ、イエスを見て受肉の神だと気づく者は一人としていなかっただろう。もしイエスが、聖霊の証しを受けた後に、何の変化のないまま以前と同じように働いていたなら、その働きの効果は発揮されていなかっただろう。そして、このことにおいても聖霊の働きが主に表現されている。聖霊は、証しした後、自身を現さなければならなかった。そうすることで、イエスが神であり、彼のうちには神の霊が宿っていたことを、あなたがはっきり見られるようにするためである。神の証しは間違っていなかった。そして、それは彼の証しが正しいことを証明することができた。もし聖霊の証しを受ける前と後の働きが同じであったならば、受肉の神の職分も、聖霊の働きも際立つことはなく、特に違いが認められないため、人間が聖霊の働きを認識するのは不可能だっただろう。証しした後、聖霊はその証しを維持しなければならなかったので、過去のものとは異なる知恵と権威をイエスの中に示さなければならなかった。もちろん、これはバプテスマによる効果ではなかった。バプテスマは単なる儀式であって、それはイエスがその職分を果たす時を示す手段にすぎなかった。そのような働きは、神の偉大なる力を明らかにし、聖霊の証しを明らかにするためのもので、聖霊は最後までこの証しに対して責任を負う。自身の職分を果たす前は、イエスもまた様々な場所で説教を聞き、自ら教えを説き、様々な場所に福音を広めた。彼はひとつも偉大な働きをしなかった。それは、まだ自身の職分を果たす時が来ていなかったからであり、また、神自らがへりくだって肉の体の中に隠れ、その時が来るまでは何の働きもしなかったからである。イエスがバプテスマの前に働きを行わなかった理由は二つある。一つは、聖霊がまだ正式にイエスの上に降臨して働いていなかったためで、（つまり、聖霊がそのような働きをする力と権威をイエスに授けていなかったということである。）たとえイエスが自身の身分を知っていたとしても、後に行うべき働きをする能力はなかったから、バプテスマの時まで待たなければならなかっただろう。これは神の時であり、何人たりとも、たとえイエス自身であっても、それに反することはできず、イエスが自身の働きを妨げるこ

となどあり得なかった。もちろんこれは、神のへりくだりを示しており、また神の働きの法則でもあった。神の霊が働かなければ、誰にも神の働きを為すことはできない。二つ目は、イエスは、バプテスマを受ける前はいたって平凡な普通の人間であり、その他の正常で普通の人達と何ら変わるところがなかったということである。これは受肉の神が超自然的ではなかったことの一面である。受肉の神は、神の霊の采配に背くことなく、秩序正しくごく普通に働いた。イエスの働きに権威と力が備わったのは、バプテスマを受けた後のことだ。つまり、イエスは受肉の神でありながら、特に超自然的なことをすることもなく、他の普通の人達と同じように成長したのである。もしイエスが最初から自分の身分を知っており、バプテスマを受ける前に各地で大いなる働きを行い、普通の人たちとは異なり、自身が非凡であると示していたなら、ヨハネが自分の働きをすることが不可能であっただけでなく、神が次の段階の働きを開始することもなかったはずである。となれば、神の行なったことに過ちが生じた証明になってしまい、神の霊と神の受肉の体は同じ源から出ていないと人の目には映ただろう。だから聖書に記されているイエスの働きは、全てイエスがバプテスマを受けた後の三年間の働きである。イエスがバプテスマの前にはこの働きをしなかったため、聖書にはバプテスマ以前にイエスが行なったことの記録がない。彼はただの普通の人で、一人の普通の人間を表していた。イエスが自身の職分を遂行する前は、普通の人々と何ら変わらず、人々もイエスに違いを見ることはなかった。イエスは、二十九歳になった時初めて、自分が神の働きの一段階を完了するために来たということを知った。それまでは、神の行なった働きが超自然的でなかったため、イエス自身もそのことを知らなかったのである。十二歳の時、イエスが会堂での集会に参加していると、マリアが彼を探しに来た。そのときイエスは、他の子供とまったく同じ口調で、母親のマリアに向かってただ一言こう言った。「わたしが父のみ旨を何よりも最優先にしなければならないことを知らないのですか」。もちろんイエスは聖霊によって生まれたのだから、イエスには何か特別なものがあつたのではないか。特別だったと言っても、それはイエスが超自然的だということではなく、イエスが他の幼い子供達よりもいっそう神を愛したというだけのことである。外から見れば彼は人間であつたけれども、彼の本質はやはり特別であり、他の人々とは違っていた。だが聖霊が自身の中で働いていること、自分自身が神であることをイエスが実感したのはバプテスマの後になってからのことである。三十三歳のとき初めて、イエスは聖霊がイエスを通して十字架の業を実行しようとしていることを本当に悟った。イエスは三十二歳のときに多少の内情を知るようになった。それはマタイによる福音書に、「シモン・ペテロが答えて言った、『あなたこそ、生ける神の子キリストです』。……この時

から、イエス・キリストは、自分が必ずエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえるべきことを、弟子たちに示しはじめられた」と書かれてある通りである。イエスは自分が為すべき働きをあらかじめ知っていたわけではなく、それを知ったのは特定の時であった。イエスは生まれて間もなく全てを知っていたわけではない。聖霊がイエスの中で徐々に働いたのであり、そこには働きの過程があった。自らが神であり、キリストであり、受肉した人の子であること、また、十字架の業を全うしなければならないことをイエスが最初から知っていたなら、どうしてその前に働かなかったのだろうか。なぜイエスは、弟子たちに自分の職分のことを語った後に初めて悲しみ、そのために熱心に祈ったのか。なぜヨハネは、イエスが知らなかった多くのことを理解するようになる前に、イエスのために道を整え、イエスにバプテスマを授けたのか。このことが証明しているのは、これらは全て受肉の神の働きであり、イエスがそれを理解して達成するには、ある過程が必要だったということである。なぜなら、イエスは神の受肉の体であり、彼の働きは聖霊によって直接行われる働きとは異なっていたからである。

神の働きの各段階は一つの同じ流れに沿っているので、神の六千年に渡る経営（救いの）計画においては、この世の始まりから今日にいたるまで、各段階が次の段階と密接に繋がっている。もし道を整えるものが誰もいなければ、後に来る者もいないだろう。後に来る者がいるからこそ、その道を整える者がいるのである。このようにして、一步一步働きが引き継がれてきたのである。一つの段階が次の段階へと繋がる。そして、道を切り開く者がいなければ、働きを始めることは不可能であり、神がその働きを進展させることもないであろう。どの段階も他の段階と矛盾することがなく、全ての段階が順に続いて、一つの流れを作っているのである。この全てが同じ霊によって為されるのである。但し、道を切り開く者であれ、他の者の働きを引き継ぐ者であれ、それによって身分が決定されることはない。そうではないのか。ヨハネが道を開き、イエスがその働きを引き継いだが、これはイエスの身分がヨハネの身分より低いという証拠だろうか。イエスの前はヤーウェが働きを遂行したが、だからといって、あなたはヤーウェの方がイエスよりも偉大であると言えるだろうか。彼らが道を整えた者であったか働きを継続した者であったかは重要ではない。最も重要なのは彼らの働きの実質であり、その働きが代表する身分である。そうではないのか。人々の間で働きを行おうとした神は、道を整える働きができる者たちを起こす必要があったのだ。教えを説き始めたばかりのとき、ヨハネはこう言った。「主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ」。「悔い改め

よ、天国は近づいた」。ヨハネは最初からこのように語っているが、なぜ彼はこれらの言葉を言うことができたのか。この言葉が語られた順序を見ると、最初に天国の福音を宣べ伝えたのはヨハネであり、その後でイエスが語っている。人間の観念からすると、ヨハネが新たな道を切り開いたのだから、当然ヨハネがイエスよりも偉大であったことになる。だがヨハネは、自分がキリストだとは言っていない。そして神も、ヨハネを愛する神の子としては証しすることがなく、ただ道を開いて主のために道を整えるために彼を用いただけである。ヨハネはイエスのために道を整えたが、イエスの代わりに働くことはできなかった。人間による全ての働きもまた、聖霊によって維持されていたのである。

旧約の時代には、ヤーウェが道を示した。そしてヤーウェの働きは、旧約の時代全体とイスラエルで為された働きの全てを表していた。モーセは、単に地上における働きを維持していただけで、彼の働きは人間による協力とみなすことができる。当時はヤーウェが語り、モーセに呼びかけ、彼をイスラエルの民の中に立たせ、彼がイスラエルの民を荒野へと、そしてカナンの地へと導くようにしたのである。これはモーセ自身の働きではなく、ヤーウェ自らによって導かれたものであるから、モーセを神と呼ぶことはできない。またモーセは律法を定めたが、この律法はヤーウェ自らによって定められた。ヤーウェはモーセにそれを語らせたに過ぎない。イエスも戒めを定め、旧約の律法を廃止して新しい時代の戒めを定めた。イエスはなぜ神自身であるのか。それは、この二つは同じことではないからである。当時、モーセが行なった働きは時代を代表するものではなく、新たな道を切り開くものでもなかった。モーセは、ヤーウェによって前もって指示されており、神に用いられた者にすぎなかったのである。イエスが来た時、ヨハネは既に道を整える段階の働きを始めており、天国の福音を宣べ伝え始めていた（聖霊がそれを開始した）。イエスが来たとき、彼は自身の働きを直接行なったが、彼の働きとモーセの働きには大きな違いがあった。イザヤも多くの預言を語ったが、それならなぜイザヤも神自身ではなかったのか。イエスはそれほど多くの預言を語らなかったが、なぜイエスは神自身であったのか。当時のイエスの働きは全て聖霊によるものだとか、全て人の思いから出たものだとか、全ては神自身の働きであるなどと敢えて言う者はいなかった。それは、人間にはそのようなことを分析する手段がなかったからである。イザヤがこのような働きを行い、このような預言を語り、その全ては聖霊から出たものだ、と言うことはできる。それらはイザヤから直接出たものではなく、ヤーウェによる啓示だったのだ。イエスはあまり多くの働きをすることも、多くの言葉を語ることも、多く

の預言を語ることもなかった。イエスの教えは人には特に高尚なものとは思えなかったが、それでもイエスは神自身であり、このことは人には到底説明のつかないことである。いまだかつて、ヨハネやイザヤやダビデを信仰し、彼らを神と呼んだり、ダビデ神、ヨハネ神などと呼んだりする者はいなかった。そのように話す人はおらず、イエスだけがキリストと呼ばれたのである。これは、神の証し、イエスの担った働き、そしてイエスが果たした職分によって区別された。聖書の中の偉大な人たち――アブラハム、ダビデ、ヨシュア、ダニエル、イザヤ、ヨハネそしてイエス――をその働きを通して見ると、誰が神自身であり、どのような人たちが預言者で、誰が使徒であるかを見分けることができる。誰が神に用いられた者で、誰が神自身であるかは、その人の働きの実質と種類で区別され判断される。もしあなたが違いを見分けられないのであれば、それはあなたが神を信じるとはどういうことかを知らないという証拠である。イエスが神であるのは、イエスが多くの言葉を語り、多くの働きを為し、特に多くの奇跡を現したからだ。同じ様にヨハネも多くの事を語り、多くの働きを為し、モーセも同様であった。それではなぜ彼らは神とは呼ばれなかったのだろうか。アダムは直接神によって造られたが、なぜ神と呼ばれず、被造物とだけ呼ばれたのか。もし誰かがあなたに、「今日、神は多くの働きをされ、多くの言葉を語られた。このお方は神ご自身である。それなら、モーセも同じように多くの言葉を語ったのだから、モーセも神ご自身にちがいない」と言うならば、あなたは、次のように聞き返すべきだ。「当時、神はなぜヨハネではなく、イエスを神ご自身であると証しされたのか。ヨハネはイエスよりも前に現れたではないか。ヨハネとイエスと、どちらの働きの方がより大きかったのか。人の目にはイエスの働きよりもヨハネの働きの方が偉大に映るが、なぜ聖霊はイエスのことを証しし、ヨハネのことは証ししなかったのか」。これと同じことが現在でも起きている。はじめにモーセがイスラエルの民を導き出した時、ヤーウェは雲の間からモーセに語りかけた。モーセは直接話すことはなかったが、ヤーウェによって直接指示を受けていた。これが旧約聖書に記されたイスラエルでの働きである。モーセの内には、霊も神の存在もなかった。モーセはそのような働きをすることができなかったので、モーセによって為された働きとイエスによって為された働きには大きな違いがある。それは、モーセの働きとイエスの働きが異なっていたからである。人が、神に用いられる者か、預言者か、使徒か、あるいは神自身かは、その働きの性質によって区別できるもので、それが分かればあなたの疑問は解消されるはずだ。聖書には、小羊だけが七つの封印を解くことができると書いてある。幾時代にも渡って、それらの偉大な人物たちの間には、聖句を説き明かす者がたくさんいたが、彼らがみな小羊だとあなたは言えるのか。彼らの説き明かしが

すべて神から出たものだと言えるのか。彼らは説き明かす者に過ぎず、小羊の身分を持っているわけではない。彼らが七つの封印を解くに値することなど、どうしてあり得よう。「小羊だけが封印を解くことができる」ということは確かであるが、彼は七つの封印を解くためだけに来るのではない。この働きは必要ではなく、付随的に起こるのである。神の働きに関しては、神自身が知り尽くしている。彼が多くの時間を費やして聖書の解釈をする必要があるだろうか。六千年の働きに、「聖書を解釈する小羊の時代」を加えなければならないのか。彼は新しい働きを行うために来るが、六千年の働きの真実を人々に理解させるために過去の働きを明らかにもする。それほど多くの聖句を説明する必要はない。重要な鍵となるのは今日の働きである。神は特に七つの封印を解くために来るのではなく、救いの働きをするために来るということをあなたは知っておくべきである。

あなたは終わりの日にイエスが降臨することだけは知っているが、正確にはどのように降臨するのだろうか。あなたがたのように贖われたばかりで、まだ変えられておらず、神に完全にされてもいない罪人が、神の心に適うだろうか。古い自我を持ったままのあなたは、イエスによって救われたのは事実であり、神の救いのおかげで罪人とは見なされなくなったが、これは、あなたには罪や汚れがないという証拠ではない。変えられないままであれば、あなたはどのようにして聖いものとなれるのか。内側では、あなたは汚れに満ち、自分勝手に卑劣であるにもかかわらず、イエスと共に降臨することを望む——あなたはそこまで幸運ではない。あなたは神を信じる上での段階を一つ見落としている——あなたは単に罪から贖われただけで、変えられてはいないのである。あなたが神の心に適うためには、神が自らあなたを変えて清める働きをしなければならない。もしあなたが罪から贖われただけなら、聖さを得ることはできない。このように、あなたは、神が人を経営する働きの一段階、つまり変えられて完全にされるという重要な段階を逸したために、神の良き祝福を共有する資格はないであろう。よって、贖われたばかりの罪人であるあなたは、直接神の嗣業を受け継ぐことはできないのである。

働きの新しい段階が始まらないなら、あなたがたのような伝道者、説教者、聖書を説き明かす者、あるいは、いわゆる霊的偉人はどこまで行なってしまうだろうか。働きの新しい段階が始まらないなら、あなたがたが語ることは、古くて役に立たない。それは、玉座に登ること、あるいは王になるために霊的背丈を備えることであり、自己を棄てること、あるいは自分の肉体を制することであり、忍耐すること、または全ての事から学ぶことであり、へりくだること、または愛することなのである。これはお決まりの古

い曲を歌っているだけではないのか。同じことを名前を変えて呼んでいるだけではないか。かぶり物をすることやパンを裂くことであれ、手を置いて祈ることや病気の者を癒して悪霊を追い出すことであれ。何か新しい働きがあるだろうか。発展する見込みはあるだろうか。あなたがこのように進んで行くのであれば、あなたは教理に盲目的に従うか、慣習に縛られることになるだろう。あなたがたは、自分の働きがとても高尚であると思っているが、それは全て大昔の「老人たち」が残し教えたものであることを知らないのか。あなたがたの言動は、その老人たちの遺言ではないのか。それは老人たちの生前の命令ではないのか。あなたは自分たちの行為が、歴代の使徒や預言者の行為を凌ぎ、さらには万物を超越するとでも思っているのか。この段階の働きが始まったことによって、王になって玉座へと引き上げられることを追求したウィットネス・リーの働きへのあなたがたのあこがれに終止符を打ち、あなたがたがこの段階の働きに介入できないように、あなたがたの傲慢さと大言壮語も阻止したのである。この段階の働きがなければ、あなたがたは救うことが不可能な状態へとさらに深く沈んでいくだろう。あなたがたの中には古い物がたくさんあり過ぎる。幸いなことに、今日の働きがあなたがたを立ち返らせた。そうでなければ、あなたがたの行く末は知れたものではない。神は常に新しく、決して古くならない神であるのに、あなたはなぜ新しいものを求めないのか。なぜ古いものにいつも執着するのか。要するに、現在の聖霊の働きを知ることこそが最も重要であるということだ。

完全にされた者だけが意義ある人生を生きられる

実のところ、現在なされている働きは、人々に古い祖先であるサタンを捨て去らせるためのものだ。言葉による裁きはすべて、人間の墮落した性質を明らかにし、人々に人生の本質を理解させることを目的としている。繰り返されるこれらの裁きはすべて、人々の心を貫き通す。一つ一つの裁きは人々の運命に直接関連しており、人々の心を傷つけるためのものだ。その結果、彼らはそれらすべてを手離し、それによって人生を知り、この汚れた世界を知り、神の知恵と全能性を知り、そしてサタンに墮落させられた人類を知ることができるからだ。この種の刑罰や裁きを受ければ受けるほど、人の心は傷つき、霊は目覚めることができる。こうした極端に墮落し、最も深く騙されている人々の霊を目覚めさせることが、この種の裁きの目標である。人には霊がなく、すなわち人の霊はとうの昔に死んでしまっていて、人は天が存在することも神が存在することも知らず、自分が死の淵で葛藤していることなど知るよしもない。自分がこの邪惡な地上の地獄に生きていることなど、どうして知ることができようか。自分のこの腐った屍が、

サタンによる墮落のため黄泉の国に落ちたのだと、どうして知ることができようか。地上のすべてはもうずっと前から、人類によって修復不能なほどに破壊されてしまっていることを、どうして知ることができようか。そして今日、創造主が地上に到来し、救うことができる墮落した人々を探していることを、どうして知ることができようか。ありとあらゆる精錬と裁きを体験した後でさえ、人の鈍った良心はほとんど奮い立つこともなく、事実上まったく反応しない。人間はいかに墮落していることか！ この種の裁きは空から降って来る残酷な雹のようなものだが、人にとっては甚大な利益がある。人々がこのように裁かれなければ、何の成果も得ることはできず、人々を苦悩の淵から救い出すのはまったく不可能だろう。この働きがなければ、人々が黄泉の国から這い上がることは非常に難しいだろう。彼らの心ははるか昔に死んでおり、彼らの霊ははるか昔にサタンに踏みにじられてしまったからだ。墮落の底に沈み込んでしまったあなたがたを救うには、熱心にあなたがたに呼びかけ、熱心に裁くことが必要であり、そうして初めてあなたがたの凍りついた心と呼び覚ますことができるのだ。

あなたがたの肉体とその途方もない欲望、貪欲、そして肉欲は、あなたがたの中に深く根づいており、絶えずその心を支配しているので、あなたがたにはこうした封建的で墮落した考えのくびきを捨て去る力がない。あなたがたは現状を変えたいと思わず、暗闇の影響から逃れたいとも思わず、ただそうしたものに縛られている。皆この人生は非常に苦しく、この人の世は非常に暗いとわかっていても、誰一人として人生を変える勇氣は持っていない。そしてただこの生の現実から逃れ、魂の超越を成し遂げ、平和で幸せな天国のような環境で生きることには憧れている。現在の生を変えるため進んで困難に耐えようとはしないし、入るべき人生のためにこの裁きや刑罰の中で進んで探し求めようもしない。かわりに肉を超えた美しい世界について、まったく非現実的な夢を抱いている。あなたがたが憧れている人生とは、何の痛みも被ることなく、努力もせずただ得ることができる人生だ。それはまったく非現実的だ！ なぜならあなたがたが望んでいるのは、肉において意義深い生涯を生きることや、人生の歩みの中で真理を得ること、すなわち真理のために生き、正義のために立ち上がることではないからだ。それはあなたがたが考える光り輝く人生ではない。あなたがたにとっては、そのような人生は魅力的で意義深い人生とは感じられない。あなたがたから見れば、そのような生を生きすることは不公平に感じられるだろう！ たとえ今日この刑罰を受け入れたとしても、あなたがたが追求しているのは真理を得ることでも、真理を生きることでもなく、ただ後で肉を超えた幸せな生活に入ることなのだ。あなたがたは真理を求めてもいないし、真

理のために立ち上がってもおらず、真理のために存在しているわけでも一切ない。あなたがたは今日入ることを求めておらず、かわりに未来のことや、いつか起こるかもしれないことで頭を一杯にしている。青い空を見上げて悲しみの涙を流し、いつか天国へと導かれることを期待している。そのような考え方自体、すでに現実離れしていることを知らないのだろうか。あなたがたはいつか必ず限りなく優しく憐れみ深い救い主がやって来て、この世の困難や試練に耐えた自分たちを救い出し、そして踏みにじられ抑圧されてきた自分たちに代わって報復してくれるのだと信じ続けている。あなたは罪に満ちてはいないのか。この世で苦しんだのはあなただけなのか。あなたは自分でサタンの領域に落ちて苦しんだのに、神があなたのあだ討ちをする必要があるだろうか。神の要求を満たすことができない人々は、すべて神の敵ではないのか。受肉した神を信じない人々は、反キリストではないのか。あなたの良い行いには何の意味があるのか。それが神を崇拝する心の代わりになるのか。ただ少し良い行いをしたからといって神の祝福を受けることはできないし、踏みにじられ抑圧されたからといって神があなたに対する不正の仇討ちをすることもないだろう。神を信じてはいても神を知らず、それでも良い行いはしているような人たちもまた、すべて罰されるのではないか。あなたはただ神を信じており、ただ神があなたに対する不正を正し復讐してくれることを望んでおり、そしてついに堂々と頭を上げられる日を与えてくれることを望んでいるだけだ。しかしあなたは真理に注意を払おうとはせず、真理を生きることを渴望もせず、ましてやこの辛くむなしい人生から逃れることなどできていない。それどころかその肉の生、罪の生を生きていながら、神が自分の不満を正し、自分の存在の霧を晴らしてくれるよう期待して神を見上げている。そんなことが可能だろうか。もしあなたに真理があるのなら、あなたは神に従うことができる。神の言葉に生きているなら、神の言葉の顕れとなることができる。いのちを持っているなら、神の祝福を楽しむことができる。真理を持っている人々は、神の祝福を楽しむことができる。神は自らを心から愛し、困難や苦しみに耐えている人々には必ず救済を与えるが、自分自身のことしか愛さず、サタンの欺きの餌食となってしまった人々は救済しない。真理を愛さない人々に善がありえようか。肉しか愛さない人々に義がありえようか。義と善とはいずれも、ただ真理に関連して語られるものではないのか。それらは神を心から愛する人々だけのものではないだろうか。真理を愛さない人々や腐った屍でしかない人々――そうした人々はすべて、悪を心に抱いているのではないか。真理を生きることができない人々は、すべて真理の敵ではないだろうか。そして、あなたがたはどうだろうか。

もしあなたがこうした暗闇の影響から逃れ、そのような汚れたものから離れて、聖く
なることができるなら、あなたは真理を得ることになる。それはあなたの本性が変わっ
たということではなく、ただあなたが真理を实践でき、肉を捨て去れるということだ。
それが、清められた人に備わる資質というものだ。征服の働きの主な目標は、人間を清
め、真理を持てるようにすることである。なぜなら人は真理をほとんど理解していない
からだ。そのような人々に対する征服の働きには、とても深い意義がある。あなたがた
はみな暗闇の影響下に落ち、深く傷つけられた。そのためこの働きの目標は、あなたが
たが人間の本性を知り、それによって真理を生きられるようにすることだ。完全にされ
ることは、すべての被造物が受け入れるべきことである。この段階の働きの内容が人々
を完全にすることだけならば、イギリス、アメリカ、イスラエルなどどこでもできるだ
ろうし、どの国の人々に対しても行うことができる。しかし征服の働きは選択的だ。征
服の働きの第一段階は短期間で行われ、さらにそれはサタンを辱しめ全宇宙を征服する
ために用いられる。これが当初の征服の働きである。神を信じる被造物なら誰でも完全
にされることができる、と言えるのは、完全にされるということは長期間の変化の後で
しか成就できないからだ。しかし、征服されることは別である。征服される者の見本と
なるのは、最も後れをとり、最も深い闇の中に生き、最も墮落した、最も神を受け入れ
る気がなく、最も神に不従順な者でなければならない。そのような者こそ、征服された
ことを証しできるのだ。征服の働きの主な目標はサタンを打ち負かすことであり、一方
人々を完全にすることの主な目標は人々を神のものとする事だ。この征服の働きがこ
こで、あなたがたのような人々に対してなされたのは、人々が征服された後に証しでき
るようにするためだ。その目的は征服された後に、人々にその証しをさせることなのだ
。この征服された人々は、サタンを辱しめるという目的を達成するために用いられる。
それでは、征服の主な方法とはどういったものか。それは刑罰であり、裁きであり、呪
いであり、暴露である。義なる性質を用いて人々を征服し、神の義なる性質によって人
々を完全に確信させるのだ。言葉の現実性と権威を用いて人々を征服し、彼らを完全に
確信させること——それが征服するということの意味である。完全にされた者たちは、
征服された後に服従できるようになるだけでなく、裁きの働きに関する認識を持ち、自
身の性質を変え、神を知ることができるようになる。彼らは神を愛する道を体験し、真
理で満たされる。彼らは神の働きを体験する方法を学び、神のための苦難に耐えて自ら
の意思を持つことができるようになる。完全にされた者とは、神の言葉を体験したおかげ
で、真理を実際に理解している人々のことである。征服された者とは、真理を知って
はいるが、まだ真理の本当の意味を受け入れてはいない人々のことである。征服された

後、彼らは服従するようになるが、その服従はすべて受けた裁きの結果である。彼らは多くの真理について、本当の意味をまったく理解していない。彼らは口では真理を認めるが、真理に入っているわけではなく、真理を理解はできるが、真理を体験したわけではない。完全にされる者たちに対して行われている働きには、刑罰と裁きとともに、いのちの供給が含まれている。真理に入ることに価値を認める人は、完全にされる人である。完全にされる人と征服される人の違いは、彼らが真理に入るかどうかにある。完全にされた者は、真理を理解し、真理に入っており、真理を生きている。完全にされることができない者は、真理を理解せず、真理に入らず、すなわち真理を生きていない。もしそのような人たちが、完全に服従することができるようになれば、彼らは征服される。征服された人々が真理を求めず、付き従ってはいても真理を生きることはなく、真理を垣間見たり聞いたりしてもそれを生きることを重視しないなら、完全にされることはできない。完全にされる人々は、神の要求に従って真理を実践しながら、完全にされる道を進むのだ。それを通して彼らは神の旨を成就し、そして完全にされる。征服の働きが終わる前に、最後まで付き従う者は、征服された者ではあるが、完全にされた者とは言えない。「完全にされた者」とは、征服の働きが終わった後に、真理を追求し神のものとされることが出来る人々のことだ。それは征服の働きが終わった後に、患難にしっかりと立ち向かい、真理を生きる人たちのことだ。征服されることと完全にされることの違いは、働きの段階の違いと、人々が真理を理解しそれに入る度合いの違いである。完全への道にまだ歩みだしていない者たち、つまり真理を持っていない者はみな、最終的にはやはり排除される。真理を持ち真理を生きる者だけが、完全に神のものとされることが出来るのだ。すなわち、ペテロの似姿を生きる人々は完全にされる者であり、その他の人々たちは征服される者である。征服される者すべてに対して行われている働きは、呪い、刑罰、そして怒りの顕示で構成され、彼らに訪れるものは義と呪いである。そのような人に働きを行うということは、遠慮も礼儀もなしに示すことであり、彼らの内にある墮落した性質を明らかにして、彼ら自身にそれを認めさせ完全に確信させることである。人が完全に従順になると、征服の働きは終わる。たとえまだ大半の人々が真理を理解しようと努めてはいなくても、征服の働きはそれで終わったことになる。

完全にされる者になるには、満たさねばならない基準がある。あなたは自分の決意、忍耐、良心を通して、そして自分の追求を通して、いのちを体験し神の旨を成就することができる。それがあなたの入りであり、それらが完全にされるための道で要求されることだ。完全にする働きはすべての人に対して行うことができる。神を追い求める人は

誰でも、完全にされることができ、完全にされるための機会と資格が備わっている。そこに一定の規則はなく、人が完全にされるかどうかは主に、その人が何を追い求めているかによる。真理を愛し、真理を生きることができる人々は、間違いなく完全にされることができる。真理を愛さない人々は神に褒められず、神が要求するいのちを持っておらず、完全にされることができない。完全化の働きは人々を得るためだけのものであり、サタンとの戦いの一部ではない。征服の働きはサタンと戦うためだけのもので、つまり人の征服を用いてサタンを打ち破るのである。この征服の働きこそ主な働きであり、最新の働きであり、どの時代にも成されなかった働きである。この段階の働きの目標は主に、すべての人々を征服してサタンを打ち倒すことだといえる。人々を完全にする働きは、新しい働きではない。神が肉において行うすべての働きは、人々の征服をその目標の真髄としている。これは恵みの時代と同様で、当時の主な働きは十字架上の死による全人類の贖いであった。「人々を神のものとする」とは、肉における働きに追加されたもので、十字架による磔刑の後に初めてなされた。イエスが到来してその働きをしたとき、イエスの目標は主に磔刑によって死のくびきと黄泉の国に勝利し、サタンの影響に勝利すること、すなわちサタンを打ち負かすことだった。ペテロが一步步完全にされる道へと乗り出したのは、イエスが十字架にかけられた後のことだった。もちろんペテロはイエスが働いている間、イエスに付き従う使徒の一人だったが、その当時はまだ完全にされてはいなかった。ペテロはイエスが働きを終えた後になって、次第に真理を理解し、そして完全にされたのだ。受肉した神が地上にやって来るのは、ただ短期間で重要かつ不可欠な働きの段階を完了するためであり、地上の人々の間に長い間住んで彼らを完全にするためではない。神はそのような働きは行わず、人が完全にされるまで待ってから自らの働きを終えるのではない。それは神の受肉の目標でも意義でもない。彼は人間を救う短期間の働きをするためにやって来るのであり、人間を完全にする非常に長期的な働きのためにやって来るのではない。人間を救う働きは代表的なものであり、新しい時代を開くことができ、短期間で終えることができる。しかし人間を完全にするには、人がある程度のレベルまで引き上げる必要があり、それには長い時間がかかる。それは神の霊によって行われなければならない働きだが、その働きは神が肉における働きの間に語った真理を基盤として行われる。また同時に、神は長期間人々を指導させるための使徒を起こし、人間を完全にするという目標を達成する。受肉した神はこの働きを行わない。神はただいのちの道について語って人々に理解させ、真理を与えるだけであり、常に人に付き添って真理を実践させるわけではない。それは神の職分の範疇ではないからだ。そのため神は、人が真理を完全に理解し完全に手に入れるまで人に付き

添うことはない。肉における神の働きは、人が正式に神への信仰の正しい道に入り、完全にされるための正しい道に踏み出したときに終了する。そしてもちろんそれは神が完全にサタンを打ち負かし、世界に勝利する時でもある。神はそのとき人が最終的に真理に入ったかどうかを気にかけることはなく、人のいのちが大きい小さいかを気にかけることもない。そうしたことはいずれも、肉となった神が管理すべきことではなく、受肉した神の職分の範疇ではない。神は意図した働きを終えると、肉としての働きを終了する。このため受肉した神が行う働きは、神の霊が直接行えない働きのみである。さらにそれは短期間の救いの働きであり、長期的に地上で行う働きではないのだ。

あなたがたの素質を向上させることは、わたしの働きの範疇ではない。わたしがあなたがたにそうするよう頼むのは、ただあなたがたの素質があまりにも劣っているからだ。実際、これは人を完全にする働きの一部ではなく、あなたがたに対して成される余分な働きなのだ。今日あなたがたに対して完了されている働きは、あなたがたの必要に応じて行われている。それは個人の特性に合わせたものであり、完全にされるすべての人が入るべき道ではない。あなたがたの素質はかつて完全にされた誰よりも劣っているため、この働きをあなたがたに行うことには非常に多くの障害がある。わたしがあなたがたの間でこの余分な働きを行なっているのは、完全化の対象が異なるからだ。本質的に、神が地上に到来するときは、自らの適切な権限の範囲内に留まって働きを行い、他の無関係な事柄には関わらない。家族の問題に関わることはなく、人々の生活に参加することもない。神はそのような些細なことにはまったく関心を払わない。それらは神の職分の一部ではないからだ。しかし、あなたがたの素質はわたしが要求したものとはまったく比較にならないほど劣っているため、わたしの働きに極度の難題をもたらしている。さらにこの働きは、この中国に住む人々の間で成されねばならない。あなたがたはあまりにも教養が低いので、わたしは声を上げ、あなたがたが自らを教育するよう要求せざるを得ない。わたしはこれが余分な仕事だと言ったが、それはあなたがたが得なければならないものでもあり、あなたがたが完全になるために役立つ。実のところ、教育、振る舞いに関する基本的知識、そして人生に関する基本的知識といったものは、すべて自然に身に備えているべきものであり、こうしたことをあえて話す必要はないはずだ。しかしあなたがたはそれらを身に備えていないので、わたしはあなたがたがこの世に生まれ出た後に、それらを教え込むという働きをするほかない。あなたがたがわたしについて多くの観念を抱いているにせよ、わたしはやはりこのことを要求する――あなたがたが自分の素質を向上させるということ。ここに来てこの働きをすることはわたしの

意図ではない。わたしの働きはただあなたがたを征服し、裁いて、あなたがたの完全な確信を得ることであり、それによってあなたがたが入るべきいのちの道を示すことだからだ。言い換えれば、あなたがたにどれほど教養があるかや、人生について知識があるかどうかなどということは、わたしとは何の関係もないのだ――あなたがたをわたしの言葉で征服する必要があるものでなければ。これはすべて、征服の働きの成果を必ず得られるようにするため、そしてその後あなたがたが完全にされるようにするために付け加えられているのであり、征服の働きの一部ではない。あなたがたは素質に乏しく、怠け者でいい加減で、愚かで飲み込みが遅く、活気がなく間抜けなので、つまり極度に異常なので、わたしはまずあなたがたに素質を向上させるよう要求する。完全にされたいと思う者は、必ずある基準を満たさなければならない。完全にされるには、人は明瞭で冷静な心を備え、意義深い人生を生きる意志を持たねばならない。むなしい人生を生きることを望まず、真理を求め、すべてのことに真剣で、ひととき正常な人間性を持っているなら、あなたは完全にされる条件を満たすことになる。

あなたがたの間で行われているこの働きは、どんな働きが必要かに従って行われている。この人々が征服された後、一群の人々が完全にされることになる。そのため現在の働きの多くは、あなたがたを完全にするという目標のための準備でもある。真理に飢えており、完全にされることが出来る人々は大勢いるからだ。もしあなたがたに対して征服の働きが行われた後、それ以上の働きが行われなかったら、真理を待ち焦がれる一部の人々がそれを得られないということにならないだろうか。現在の働きは、後で人々を完全にするために道を開くことを目的としている。わたしの働きは征服の働きだけだが、わたしが語るいのちの道は後で人々を完全にするための準備である。征服の後に来る働きは、人々を完全にすることを中心としたものになり、征服は完全化の働きの基盤を敷くためになされる。人は征服された後に初めて完全にされることが出来る。現在の主要な仕事は征服することであり、その後、真理を求め切望している人々が完全にされる。完全にされるためには、いのちの入りに関する人々の積極的な面が必要になる。あなたは神を愛する心を持っているだろうか。この道を歩く中で、あなたの体験の深みはどれほどのものだっただろうか。あなたの神への愛はどれほど純粋だろうか。あなたの真理の実践はどれほど厳格だろうか。人が完全にされるためには、人間性のすべての側面について基本的知識を持っていなければならない。それが基本要件である。征服された後に完全にされることが出来ない人々は、みな奉仕する「物」となり、最終的にはやはり火と硫黄の池に投げ込まれ、底なしの穴に落ちるだろう。なぜならあなたの性質は

変わっておらず、依然としてサタンに属しているからだ。完全になるための条件を備えていなければ、その人は役立たずで、屑であり、単なる道具であり、火の試練に耐えることができないものでしかない。今、神へのあなたの愛はどれくらい大きိだろうか。あなたは自分自身をどのくらい嫌っているだろうか。サタンのことをどのくらい深く知っているだろうか。決心は強まっただろうか。人間としての生活は規律正しいものだろうか。人生は変わっただろうか。新しい人生を生きているだろうか。人生の見方は変わっただろうか。こうしたことが変わっていないなら、あなたはたとえ退かなかったとしても完全にされることはなく、ただ征服されただけである。試練が訪れるとき、あなたには真理が欠けており、その人間性は異常で、荷役用の家畜並みに下等なのだ。成し遂げたのはただ征服されたということだけで、あなたは単にわたしが征服したものでしかない。それはちょうどロバが主人のむちを経験した後、主人を見るたびに恐れのため行動できなくなるのと同じで、あなたも単なる征服されたロバなのだ。人がそうした積極的局面を持たず、消極的で恐れを抱き、あらゆることに臆病で煮えきらず、何ごともしっかり識別できず、真理を受け入れることもできず、依然として実践の道を持たず、その上さらに神を愛する心さえ持たないなら――神をどのように愛すべきか知らず、どのように意義深い人生を生きるべきか、どのように本当の人間になるべきかを理解しないなら――そのような人がどうして神の証しをすることができようか。それはあなたの人生にほとんど価値がなく、あなたがただ征服されたロバでしかないことを示している。征服されたとしても、それはただ赤い大きな竜を捨て、その支配への服従を拒否したことを意味するだけだ。それはあなたが神の存在を信じ、神のすべての計画に従うことを望み、不満は持っていないことを意味するが、積極的な側面については、神の言葉を生き、神を顕すことができるだろうか。そうした側面を一つも持っていないなら、あなたは神のものとされていないのであり、ただの征服されたロバでしかないのだ。あなたに望ましい点は何もなく、聖霊はあなたの中で働いていない。あなたはあまりに人間性を欠いており、神があなたを用いることはできない。あなたは神に承認され、不信仰な獣や生きる屍よりも100倍良い存在にならなくてははいけない。そのレベルに達する者だけが、完全にされる資格があるのだ。人間性があり良心がある者だけが、神に用いられるにふさわしいのだ。あなたがたは完全にされて初めて、人間と見なされることができ。完全にされた人々だけが、意義深い人生を生きることができるのだ。そのような人々だけが、より一層力強く神の証しをすることができるのだ。

地位の祝福は脇に置き、人に救いをもたらす神の心意を理解

すべきである

人の視点からは、モアブの子孫たちが完全にされるのは不可能であり、彼らには完全にされる資格はない。一方、ダビデの子孫たちには確かに希望があり、完全にされるのは確かに可能である。誰かがモアブの末裔であるならば、完全にされることはできない。今日になってもまだあなたがたは、自分たちのもとで行われている働きの意義を知らない。この段階に及んでも、まだ自分の将来の展望を心に抱いており、それを断念することをひどく嫌悪している。今日、一体なぜ神があなたがたのように最も無価値な集団を選んで働きかけるのか、誰も気にも留めない。それでは、この働きにおいて神は間違ったということなのか。この働きはうっかりした見落としなのか。神はなぜ、あなたがたがモアブの子孫だということをずっと知っていたのに、他でもないあなたがたのただ中で働くために地上に降りて来たのだろうか。あなたがたはこのことをまったく考えないのか。神は働きを行う時、このことをまったく考慮しないのか。神は軽率に振る舞うだろうか。そもそも最初から神はあなたがたがモアブの子孫であることを知らなかったのか。あなたがたはこのようなことを考慮することを知らないのか。あなたがたの観念はどこへ行ってしまったのか。あなたがたのあの健全な思考力は適応がうまくできていないのか。あなたがたの賢さと英知はどこへ行ってしまったのか。あなたがたの度量はとても寛大なので、そのような些細なことには留意しないということなのだろうか。あなたがたの知性は、自分の将来の展望や運命などには非常に敏感だが、そのほかのことについては無感覚で、鈍感で、まったく無知である。信じているのは一体何なのか。自分の将来の展望か。それとも神か。信じているのは自分の美しい終着点だけではないのか。自分の将来の展望ではないのか。あなたは今の道の道についてどのくらい理解しているのか。どれほどのことを達成したのか。今モアブの子孫になされている働きはあなたがたに恥をかかせるためだと思っているのか。それはあなたがたの醜さをさらけ出すために意図的に行われているのか。あなたがたに刑罰を受け入れさせ、次に火の池に投げ込むために意図的になされているのか。あなたがたに将来の展望はないなどとわたしは決して言わなかったし、ましてやあなたがたは滅ぼされなければならない、あるいは永劫の罰を受けなければならないなどとは言わなかった。わたしはそのようなことを公表したのか。自分には希望がないとあなたは言うが、それは自分で引き出した結論ではないのか。自分の考え方の影響ではないのか。あなたの結論が重要なのか。あなたは祝福されていないとわたしが言ったら、あなたは確かに破滅の対象になる。またわたしがあなたは祝福されていると言ったら、あなたは確かに滅ぼされない。わたしはいまあ

あなたがモアブの子孫だと言っているだけである。あなたは滅ぼされるとは言わなかった。ただモアブの子孫は呪われてきて、墮落した人類の一種なだけである。罪については以前に言及されている。あなたがたはみな罪深いのではないか。罪人はみなサタンに墮落させられたのではないのか。罪人はみな神に逆らい、反抗するのではないのか。神に逆らう者は呪われないのか。罪人はみな滅ぼされなければならないのではないのか。その場合、肉と血を持つ人間のうちで誰が救われることができるのか。どうしてあなたがたは今日まで生き延びることができたのか。あなたがたはモアブの子孫なので消極的になってしまったが、同時に人間、すなわち罪人ではないのか。どうしてあなたがたは今日まで存続してきたのか。完全になることの話になると、あなたがたは嬉しそうにする。大きな患難を経験しなければならないことを聞くと、あなたがたは、これによりいっそう祝福されることになると感じる。あなたがたは患難から抜け出した後は勝利者になることができ、さらにこれは神のあなたがたへの偉大なる祝福であり、あなたがた称賛であると考え。モアブが言及されると、あなたがたのあいだに動揺が生じる。大人も子供も同様に言葉では表せない悲しみを感じ、あなたがたの心には全く喜びがなく、あなたがたはみな生まれてきたことを後悔する。あなたがたはこの段階の働きがモアブの子孫になされることの意義を理解しない。あなたがたは高い地位を求めることしか知らず、何の希望もないと思うたびに、後戻りする。完成と将来の終着点の話になると、あなたがたは幸せを感じる。あなたがたが神を信じるのは祝福を得るためであり、良い終着点を得るためである。自分の地位のせいで今不安を感じている人もいる。彼らの価値や地位は低いので、彼らは完全にされることを願い求めない。まず初めに完全にされることが語られ、その後モアブの子孫が言及されたので、人は前に言及された完全への道を否定した。これは初めから最後まで、あなたがたがこの働きの意義を知らず、その意義について関心がないからである。あなたがたの霊的背丈は小さすぎて、ごく些細な動揺にさえ耐えることができない。自分の地位があまりにも低いとわかると、あなたがたは消極的になり、求め続ける自信を失くす。人はただ恵みの獲得と平安の享受を信仰の象徴と見なし、祝福を求めることが自分の神への信仰の基礎であると考えている。神を知ることが求め、自分の性質の変化を求める人はごく僅かである。信仰において人が求めるのは、自分に適切な終着点と、自分に必要なあらゆる恵みを神が与えるようにさせ、神を召使にし、神に自分との平和で友好的な関係を維持させ、いかなるときも両者の間に決して対立がないようにさせることである。すなわち、聖書で読んだ「わたしはあなたがたのすべての祈りに耳をかたむける」という言葉通りに、人の神への信仰は、神が人のすべての要求を満たすことを約束し、祈り求めるものは何でも人に与えることを

要求するのである。人は神が誰も裁かず、誰も取り扱わないことを期待する。神とはいつも憐れみ深い救い主イエスであり、いつでもどこでも人と良い関係を保つ方だからである。人は次のように神を信じている。いつも臆面もなく神に要求するばかりで、自分が反抗的であろうと従順であろうと、神はなんでも見境なく自分に授けてくれると信じている。絶えず神から「負債を回収」し、神はまったく抵抗せずに「返済」しなければならない。そのうえ二倍の額を払わなければならない。人から何かを得ていようといまいと、神はただ人に操られるだけで、思いのままに人を指揮することはできず、ましてや人の許可なく神が望む時に、長年隠されてきた神の英知や義なる性質を人に現すことはできない。人はただ自分の罪を神に告白し、神はただそれを赦すだけで、そうすることによってうんざりもせず、これが永久に続くと思っている。人は神に命令するばかりで、神は自分にただ従うと思っている。なぜなら、神は人間に仕えられるためではなく、仕えるために来たとか、神がここにいるのは人間の召使になるためだなどと聖書に記されているからである。あなたがたはいつもこのように信じてきたのではないのか。神から何か得られないと、あなたがたは必ず逃げたがる。何か理解できないことがあると、ひどく憤慨し、あらゆる種類の悪態を神に浴びせかけさえする。あなたがたは神自身が知恵と不思議を十分に表現することをどうしても許そうとせず、その代わりにただ一時的な気楽さと心地よさを楽しむことを望む。今まで、自分の神への信仰におけるあなたがたの態度は相変わらずの古い見解からなるだけである。神があなたがたにほんの少しでも威厳を見せれば、あなたがたは不機嫌になる。あなたがたにはいま自分の霊的背丈がどれほど低いのか正確にわかっているのか。あなたがたの古い見解は実のところ変化していないのに、自分たちは皆神に忠実だなどと思い込んではいけない。何も自分に降りかからなければ、あなたはすべてが順調に進んでいると考え、神への愛は高まる。しかし、些細なことが起こると黄泉の国にまで落ちる。これは神に忠実であることだろうか。

もし征服の働きの最終段階がイスラエルで始まることになっていたら、そのような働きには何の意味もないだろう。中国で行われる時、またあなたがたに行われる時、その働きは最も意義深いのである。あなたがたは最も卑しい人、地位も最低である。あなたがたはこの社会の底辺にあり、最初は神を誰よりも否定していた。あなたがたは神から最も遠く離れてしまった人で、最もひどい害をこうむった。この段階の働きは征服のためだけなので、将来の証しをするのにあなたがたが選ばれるのは最適ではないだろうか。征服の働きの第一段階があなたがたに行われなければ、来るべき征服の働きを進めることは困難になるだろう。後続く征服の働きは、今日行われるこの働きの事実に基づ

づいて成果を達成するからである。現在の征服の働きは、征服の働き全体の始まりにすぎない。あなたがたは征服される最初の集団である。あなたがたは征服される全人類の代表である。本当の認識力がある人には、神が今日為す働きは全て偉大であり、神は人にその反抗的な態度をわからせるだけでなく、人の身分も明らかにするということがわかる。神の言葉の目的と意味は人を消極的にすることでも、倒すことでもない。それは人が神の言葉を通じて啓示と救いを得られるようにすることである。神の言葉で人の霊を覚醒させることである。世界の創造の時以来、人はいつもサタンの支配下に生き、神がいることを知らず、信じていなかった。このような人が神の偉大な救いの中に含まれることができ、神に大いに引き上げられることは正に神の愛を示している。真の認識をもつ人は、みなこれを信じる。そのような認識のない人はどうなるのか。彼らは言う。「ああ、神はわたしたちがモアブの子孫だと言う。神が自らの言葉でそう語った。わたしたちはそれでも良い結末を得られるだろうか。誰がわたしたちをモアブの子孫にしたのだろうか。誰が過去わたしたちにそれほど神に抵抗させたのだろうか。神はわたしたちを罪に定めるために来た。神がいつも、始めからどのようにわたしたちを裁いてきたか知らないのか。わたしたちは神に抵抗してきたので、わたしたちはこのように罰せられるべきである」。この言葉は正しいだろうか。今日、神はあなたがたを裁き、あなたがたを罰し、あなたがたを罪に定めるが、罪に定めることの要点はあなたが自分を知るためであることを知らなければならない。神は罪に定め、のろい、裁き、刑罰を与えるが、これはあなたが自分を知るため、あなたの性質が変わるためである。そしてさらに、あなたが自分の価値を知り、神の行動はすべて義であり、それは神の性質と神の働きが要求することに適っていること、神は人を救う計画に従って働くこと、神は人を愛し、救い、裁き、罰する義なる神であることを理解するためである。もしあなたが、自分は地位が低く、墮落して、不従順であることだけを知り、神が今日あなたに行う裁きや刑罰を通して救いを明らかにしようと望んでいることを知らないならば、あなたは経験を得るすべがなく、ましてや前に進み続けることはできない。神は人を殺したり、滅ぼしたりするためにではなく、裁き、のろい、罰し、救うために来た。神の六千年の経営（救いの）計画が終了するまで、つまり神が範疇ごとの人間の結末を明らかにするまでは、地上における神の働きは人の救いのためであり、その目的は神を愛する人を純粹にすっかり完全にし、神の統治の下に服従させることである。神がどのように人を救おうとも、そのすべては人を古いサタンの性質から脱却させることによってなされる。すなわち、神は人にいのちを求めさせることで救うのである。人がそうしなければ、神の救いを受け入れることはできない。救いは神自身の働きであり、いのちを求めることは救い

を受け入れるために人が負わなければならないものである。人の目から見れば、救いは神の愛であり、神の愛は刑罰、裁き、呪いであるはずがない。救いは愛、憐れみ、さらには、慰めの言葉を含んでいなければならず、神から授けられる無限の祝福も含んでいなければならない。神が人を救う時は、神は人を祝福と恵みで動かし、人が心を神に捧げることによって救うのだと人は信じている。すなわち、神が人を動かすのは神が人を救うことなのである。このような救いは取引によって行われる救いである。神が人に百倍のものを授けて初めて、人は神の名の前に服従し、神のために尽くして栄光をもたらそうと努力する。これは人類のための神が意図することではない。神は墮落した人類を救うために地上で働きに来た。このことに嘘はない。もしあれば、神が働きを行うために自ら来ることは絶対になかっただろう。過去において、神の救いは最大限の慈愛と憐れみを見せることで、神は全人類と交換するために自らのすべてをサタンに与えたほどであった。現在は過去とはまったく違っている。今日、あなたがたに与えられる救いは終わりの日に、各人を種類ごとに分類するときに起こる。あなたがたの救いの手段は愛や憐れみではなく、人が徹底的に救われるための刑罰と裁きである。従って、あなたがたが受けるのは刑罰、裁き、容赦のない鞭だけである。知りなさい。この無情な鞭打ちの中に罰はほんの少しもない。わたしの言葉がどんなに辛辣であったとしても、あなたがたに降りかかるのは、あなたがたにはまったく無情だと思われるかもしれないほんの数語だけであり、わたしがどれほど怒っていようとも、あなたがたに注がれるのは教える言葉であり、わたしはあなたがたに危害を加えるつもりはないし、あなたがたを殺すつもりもない。これはすべて事実ではないのか。今日、義の裁きであろうと、無情な精錬や刑罰であろうと、すべては救いのためであることを知りなさい。今日各人が種類に応じて分類されようと、人の範疇が露わにされようと、神の発する言葉と働きのすべての目的は本当に神を愛する人を救うことである。義の裁きは人を清めるためにもたらされ、無情な精錬は人を浄化するために行われる。厳しい言葉、あるいは懲らしめはどちらも純化のためであり、救いのためである。従って、今日の救いの方法は過去のものとは違う。今日、義の裁きを通してあなたがたに救いはもたらされ、これは種類に応じてあなたがたを分類するためのよい道具である。さらに、無情な刑罰はあなたがたに最高の救いとして機能する。このような刑罰と裁きに直面して、あなたがたは何と言うのか。あなたがたはいつも、初めから終わりまで救いを享受してきたのではなかったのか。あなたがたは受肉の神を見たし、神の全能と知恵も悟った。そのうえ、あなたがたは繰り返し鞭打たれ、訓練も経験した。しかし、あなたがたは最高の恵みも受けたのではないのか。あなたがたの祝福は他の誰のものより大きくないのか。あなたがたの恵みはソ

ロモンが享受した栄光や富よりも遥かに豊富である。考えてもみなさい。もしわたしが来た意図があなたがたを救うことではなく、罪に定め、罰することであったなら、あなたがたはこのように長く生き続けていただろうか。肉と血から成る罪深い存在であるあなたがたは今日まで生き残れていただろうか。もしわたしの目的がただあなたがたを罰するためであったなら、なぜわたしは肉となり、そのような大きな事業に着手していたのか。ただの人間にすぎないあなたがたを罰するには、わずか一言発するだけで済んだのではないのか。わたしはあなたがたをわざわざ罪に定めた後でもなお滅ぼす必要があるのだろうか。あなたがたはわたしのこの言葉をまだ信じないのか。わたしには愛と憐れみだけで人を救うことができるだろうか。それともわたしは人を救うために十字架しか使えないのだろうか。わたしの義なる性質は人を完全に従順にさせるのをさらに促進しないだろうか。それは人を完全に救うことがさらにできるのではないのか。

わたしの言葉は厳しいかもしれないが、それはすべて人を救うために語られる。わたしは言葉を語っているだけで、人の肉を罰しているのではない。この言葉により、人は光の中で生きようになり、光が存在すること、その光は貴重であること、またこの言葉が人にとっていかに有益であるか、そして神は救いであることを知る。わたしは刑罰と裁きの言葉を数多く語ったが、それが表現することは実際にあなたがたに行われてはいない。わたしは働きを行うために、言葉を話すために来たのであり、わたしの言葉は厳しいかもしれないが、あなたがたの墮落と反抗を裁くために語られる。わたしがこれを行う目的は依然として人をサタンの支配下から救うことである。人を救うためにわたしは言葉を使う。わたしの目的は言葉で人を傷つけることではない。わたしの言葉が厳しいのは、働きから成果を達成するためである。このような働きを通してのみ、人は自分自身を知ることができ、反抗的性質を断つことができる。言葉の働きで一番大きな意義は、真理を理解した人に真理を実践させ、人の性質において変化を達成させ、自分自身および神の働きについての認識を獲得させることである。言葉を話すことで働くことのみが神と人の意思疎通を可能にし、言葉のみが真理を説明できる。このような方法で働くことは、人を征服する最善の手段である。言葉を発すること以外では、真理や神の働きを明確に人に理解させることのできる手段は他にない。そこで神の働きの最終段階において、神は人に話しかけ、人がまだ理解していないすべての真理や奥義を明らかにして、それにより人が神から真理の道といのちを得て、神の心を満足させることができるようにする。神が人に働きかける目的は、人が神の心を満足させることができるようにするためであり、それは人に救いをもたらすために行われる。従って、神による人の

救いの期間においては、神は人を罰する働きはしない。人に救いをもたらしつつ、神は悪を罰したり、善人に報いたりせず、さまざまな種類の人の終着点を明らかにすることもない。その代わり、神の働きの最終段階が完了して初めて、神は悪を罰し、善に報いる業を行い、そこで初めてさまざまな種類の人々の最後を明らかにする。罰せられるのは実際に救いようのない人である。一方、救われる人は神が人を救う間に神の救いを獲得した人である。神による救いの働きが行われている間、救われることが出来る人はすべて、最大限まで救われ、誰ひとりとして見捨てられることはない。神の働きの目的は人を救うことだからである。神による人の救いの期間に、自分たちの性質の変化を達成できない者、また、完全に神に従うことのできない者はみな懲罰の対象となる。この段階の働き、すなわち言葉の働きは、人が理解していないあらゆる道と奥義を人に明らかにし、人が神の心意と神が人に要求することを理解できるようにし、神の言葉を実行に移すための前提条件を人が備えられるようにし、性質の変化を達成できるようにする。神は働きを行うためにだけ言葉を使い、人が少し反抗的だからといって罰したりすることはない。今は救いの働きの時だからである。もし反抗的に振舞えば誰でも罰せられるとしたら、誰にも救われる機会がないだろう。誰もが罰せられ黄泉の国に落ちるだろう。人を裁く言葉の目的は、人が自分自身を知り、神に従うようになることである。それはそのような裁きによって人を罰することではない。言葉の働きの期間、多くの人がその反抗性と反逆性を、また受肉の神への不服従を露わにする。しかし、神はこのためにこれらの人をすべて罰したりはしない。そうではなく神は心の芯まで墮落して、救いようのない人を取り除くだけである。神はそのような人の肉をサタンに与え、数は少なくとも場合によっては肉を始末する。残っている者は従い続け、取り扱いと刈り込みを経験する。従っている間もなお取り扱いと刈り込みを受け入れることができず、ますます墮落していくならば、そのような人は救いの機会を失っている。言葉による征服を受け入れた一人ひとりには救いの機会が豊富にある。これら一人ひとりの神による救いは、彼らへの神の最大限の情け深さを示している。つまり、彼らには最大限の寛容さが示されるのである。人が間違った道から引き返し、悔い改めることができる限り、神は人に神の救いを受ける機会を与える。人が初めて神に反抗した時、神には人を殺そうなどという願望はない。それよりは、神は人を救うためにできる限りのことをする。本当に救う余地がない人であれば、神は取り除く。神がある種の人をすぐには罰しないのは、救われることができる人をすべてを救いたいからである。神はただ言葉によって人を裁き、啓き、導くのであって、杖で人を殺さない。人に救いをもたらすために言葉を使うことは、神の働きの最終段階の目的と意義である。

自己の観念で神を規定する人がどうして神の啓示を受けられるのか

神の働きは前進を続けており、その目的が変わることはないが、神の働きの実行手段はたえず変化しており、それによって神に従う人々も変化していく。神の働きが増えれば増えるほど、人はさらに徹底的に神を知るようになり、それに応じて人の性質も神の働きとともに変化する。しかし、神の働きがたえず変化しているため、聖霊の働きを知らない人々や真理を知らない愚かな人々は神の敵対者になる。神の働きは人が抱く観念とは決して一致しない。神の働きはいつも新しく、決して古くないからである。神は古い働きを決して繰り返さず、むしろこれまでなされたことのない仕事をたゆみなく行う。神はその働きを繰り返すことはなく、人は例外なく神の過去の働きに基づいて神の今日の働きを判断するので、神が新しい時代の働きの各段階を実行するのは困難を極める。人はあまりにも多くの妨げとなる物を突きつける。人の考えは偏狭すぎる。誰も神の働きを知らないのに、誰もがその働きを定義する。神から離れたら、人はいのちも真理も神の祝福も失ってしまうのに、人はいのちも真理も受け入れず、ましてや神が人類に与えるさらに大きな祝福も受け入れない。すべての人は神を得たいと願っているのに、神の働きのいかなる変化も許容することができない。神の新しい働きを受け入れない人々は、神の働きは不変であり、永久に停滞したままであると信じている。彼らの信条によれば、神から永遠の救いを得るためには律法を守ってさえいれば十分であり、悔い改め、罪を告白しさえすれば、神の心は永遠に満たされる。彼らは、律法の下で神、人間のために十字架につけられた神だけが神のはずであると考えている。また、神は聖書を超えるべきではないし、超えることはできないとも考えている。まさにこうした考えが彼らを古い律法に堅く縛りつけ、厳しい規定に束縛し続けてきた。さらに多くの人々が、神の新しい働きがどのようなものでも、預言による裏付けがなければならず、その働きの各段階で、本心で神に従うすべての者には啓示が示されなければならない、そうでなければそれは神の働きではありえないと信じている。人が神を知るようになるのはただでさえ決して容易なことではない。さらに、人の愚かな心、ならびにうぬぼれという反抗的な本性を考慮すると、人が神の新しい働きを受け入れるのはなおさらむずかしい。人は神の新しい働きを入念に調べることも、謙遜して受け入れることもない。むしろ、軽蔑的な態度をとり、神の啓示と導きを待つ。これは神に反抗し、敵対する人の行動ではないだろうか。そのような人たちがどうして神の承認を得ることができようか。

今日、わたしがイエスの働きは後れをとったと言うように、当時イエスは、恵みの時代においてヤーウェの働きは後れをとったと述べた。律法の時代だけで、恵みの時代がなかったら、イエスは十字架にかけられることはなく、全人類を贖うことはできなかった。律法の時代だけだったならば、人類は果たして今日まで発展することができただろうか。歴史は前へ進む。歴史は神の働きによる自然法ではないだろうか。これは宇宙全体における神による人の経営の一つの表現ではないだろうか。歴史は前進し、神の働きも前進し、神の心はたえず変化する。神にとってただ一つの段階の働きを六千年にもわたり維持するのは実行不可能である。なぜなら、すべての人は、神はつねに新しく、決して古くないことを知っているからである。神は、はりつけ、そして一度、二度、三度……と十字架につけられることに似た働きを続けることはできないだろう。このような考えを持つのは愚かな人の認識である。神が同じ働きを維持することはなく、神の働きはたえず変化し、いつも新しい。わたしがあなたがたに毎日新しい言葉を語り、新しい働きを行なっているのとまったく同様である。これはわたしの行う仕事であり、「新しい」と「驚くべき」という言葉の中にその鍵が存在する。「神は不変であり、神はいつになっても神である」という言葉は実に真実である。神の本質は変化しない、神はいつでも神であり、決してサタンにはなりえないが、だからといってそれが神の働きが神の本質と同様に一定不変であることの証明にはならない。あなたは、神は不変だと断言するが、では、神はいつも新しく、けっして古くならないことをどのように説明できるのか。神の働きは広がり続け、たえず変化し、神の心はたえず明らかにされ、人に知られる。神の働きを経験するにつれて、人の性質は絶え間なく変化し、その認識も絶え間なく変化する。では、この変化はどこから生じているのか。変わり続ける神の働きからではないのか。人の性質が変われるのなら、なぜわたしの働きやわたしの言葉も変化し続けるのを人は許すことができないのか。わたしは人の制約に従わなければならないのか。あなたはただ詭弁に訴えているだけなのではないか。

復活したのち、イエスは弟子たちの前に現れ、「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」と語った。これらの言葉がどのように解釈されるか、あなたはわかるだろうか。今あなたには神の力が授けられているだろうか。あなたは力と呼ばれるものが何か理解しただろうか。真理の御霊は終わりの日に人に授けられるとイエスは宣言した。終わりの日は今である。あなたは真理の御霊がどのようにして言葉を発するのか理解しているだろうか。真理の御霊はどこに現われ、どこで働くのか。預言者イザヤの預

言書には、イエスという名の子供が新約聖書の時代に生まれるという記述はまったくなく、インマヌエルという名の男の子が生まれるとしか書かれていない。なぜ「イエス」の名は言及されなかったのか。旧約聖書のどこにもこの名前は出てこないにもかかわらず、なぜあなたはいまだにイエスを信じるのか。まさかあなたはイエスをその目で見ただけでイエスを信じ始めたのか。それとも啓示を受けて信じ始めたのか。神は本当にそのような恵みをあなたに示すだろうか。そしてあなたにそのような偉大な祝福を授けるだろうか。何を根拠にあなたはイエスを信じたのか。ではなぜあなたは神が今日肉となったことを信じないのか。神からあなたへの啓示がないのは神が肉となっていないことの証明だとなぜ言うのか。神は働きを始める前に人に告げなければならないのか。まず人の承認を受けなければならないのか。イザヤは飼葉桶の中で男の子が生まれると宣言しただけで、マリアがイエスを産むとは預言しなかった。ではなぜあなたはマリアが産んだイエスを信じたのか。確かにあなたの信仰は不確実で混乱した信仰ではないか。神の名は変わらないという人たちがいる。ではなぜヤーウェという名前がイエスになったのか。メシアの到来についての預言はあるが、ではなぜイエスという名の人 came のか。なぜ神の名は変わったのか。そのような働きはずっと以前に実行されなかったか。神は今日新しい働きをすることはできないのか。昨日の働きは変えることができ、イエスの働きはヤーウェの働きから続いて起こることができる。ではイエスの働きを別の働きが継承することはできないのか。ヤーウェの名前をイエスに変えることができるなら、イエスの名前も変えることはできないのか。これは特異なことではなく、人々がそう考えるのは^[a]ひとえに彼らの短絡思考のせいである。神はつねに神であり、神の働きや名前が変化しようとも、その性質や知恵は永遠に変わらない。神はイエスという名前では呼ぶことはできないと信じているならば、あなたはあまりに無知である。イエスが永遠に神の名前であり、神は永遠に、そしてつねにイエスという名前でも知られており、これは決して変わることはないとあえて断言するのか。律法の時代を終わらせたのはイエスの名前であり、最後の時代を終わらせるのもそうであると確信をもって断言するのか。イエスの恵みがその時代を終わらせられると誰が言えるだろうか。今これらの真理をはっきりと知ることができないならば、あなたは福音を伝えることはできないであろうし、そればかりかあなた自身がしっかりと立っていることもできない。あなたが宗教的な人々のすべての困難を解決し、彼らの誤った考えすべてに反論する日が来たら、それがあなたがこの段階の働きを完全に確信し、少しの疑いも持っていないことの証明となるだろう。彼らの誤った考えに反論できなければ、彼らはあなたを陥れ、中傷する。それは恥ずべきことではないか。

当時のユダヤ人はみな旧約聖書を読んでいて、男の子が飼葉桶の中で生まれるというイザヤの預言を知っていた。それではなぜ、これを知っていたにもかかわらず、彼らはイエスを迫害したのか。彼らの反抗的本性と聖霊の働きについての無知のためではないだろうか。当時、パリサイ人は、イエスの働きは預言された幼児について彼らが知っていることとは違っていると信じていた。今日の人々が神を受け入れないのは、肉となった神の働きが聖書と一致しないからである。彼らの神に対する反抗の本質はまったく同じものではないだろうか。あなたは聖霊のすべての働きを疑いなく受け入れることができるか。もしそれが聖霊の働きなら、それは正しい流れである。あなたは何を受け入れるべきか選別するよりも、むしろそれをほんのわずかな疑念も抱かずに受け入れるべきである。神からさらなる洞察を得て、神に対してさらに用心するのであれば、それは無用な行為ではないだろうか。あなたがすべきなのは、聖書からさらに実証を求めたりせず、聖霊の働きである限り、いかなるものも受け入れることである。あなたが神を信じるのは神に従うためであり、神を調べるためではないからである。わたしがあなたの神であることを示すためにわたしに関するさらなる証を探し出すべきではなく、むしろわたしがあなたのためになるかどうかを見定めるべきである。それが鍵である。たとえ聖書の中に疑うべくもない証拠を見つけたとしても、それによってあなたが完全にわたしの前に来られることにはならない。あなたはわたしの前ではなく、聖書の制約の中で生きているのである。聖書はあなたがわたしを知る助けにはならないし、わたしへのあなたの愛を深めることもできない。聖書は男の子が生まれると預言したが、人は神の働きを知らなかったため、その預言が誰に実現するかは誰にも分からなかった。そのため、パリサイ人はイエスに逆らうことになった。わたしの働きは人にとって有益であることを知っている者もいるが、それでも彼らはイエスとわたしがお互い両立しない二つのまったく別の存在であると信じ続けている。当時、イエスは恵みの時代において弟子たちに一連の説教しか語らなかった。たとえば実践のしかた、集い方、祈る際の求め方、他の人々の扱い方などである。イエスが実行した働きは恵みの時代の働きであり、弟子たちやイエスに従う人々がどのように実践すべきかについてしか釈義しなかった。恵みの時代の働きをただで、終わりの日の働きは何もしなかった。ヤーウェが律法の時代に旧約の律法を定めたとき、なぜその時恵みの時代の働きを行わなかったのか。なぜ恵みの時代の働きを前もって明らかにしなかったのか。そうすれば人が受け入れるための役に立ったのではないだろうか。ヤーウェは男の子が生まれて、指導者になると預言しただけで、恵みの時代の働きを前もって実行はしなかった。各時代の神の働きには明確な境界がある。神は現在の時代の働きだけを行い、次の段階の働きを前もって行うこ

とは決してない。このようにしてのみ、神の各時代の代表的な働きは前面に引き出される。イエスは終わりの日のしるし、いかに忍耐するか、いかにして救われるか、いかに悔い改め、告白するか、また、いかに十字架を負い、苦しみに耐えるかについてしか語らず、終わりの日に人はどのように進入すべきか、どのように追求すれば神の心を満足させるかについては語らなかった。したがって、終わりの日の神の働きを聖書の中に捜し求めるのは誤った考えに基づく行為ではないだろうか。手に聖書を携えているだけでなにを見分けることができるのか。聖書の解釈者であれ説教者であれ、誰が今日の働きを予知することができようか。

「耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい」。あなたがたには今聖霊の言葉が聞こえたか。神の言葉があなたがたに届いた。それが聞こえるか。神は終わりの日に言葉による働きを行うが、そのような言葉は聖霊の言葉である。神は聖霊であり、また肉になることもできるからである。したがって、過去に語られた聖霊の言葉は今日肉となった神の言葉である。聖霊の言葉は天から降りてきて人の耳に届くはずだと信じている多くの愚かな人がいる。このように考える人は誰も神の働きを知らない。実際、聖霊が語る言葉は肉となった神が語る言葉なのである。聖霊は人に直接語りかけることはできないし、ヤーウェは律法の時代でさえ人々に直接語りかけることはなかった。ましてや、今日、この時代に神が直接語りかけるなどとはまず考えられないのではないか。神が言葉を発して働きを実行するためには、肉とならなければならない。そうでなければ神の働きは目的を達成させることはできない。肉となった神を否定する人々は、霊、あるいは神が働きを行なう原則を知らない人である。今は聖霊の時代だと信じているのに、聖霊の新しい働きを受け入れない人々は、曖昧な信仰の中に生きている人である。こうした人々は聖霊の働きを決して受けとらない。聖霊が直接語りかけ、働きを実行することだけを望み、肉となった神の言葉や働きを受け入れない人々は、新しい時代に足を踏み入れることも、神からの全き救いを受けることも決してできない。

脚注

a. 原文では「人々がそう考えるのは」が省略されている。

神とその働きを知る者だけが神の心になう

受肉した神の働きは二つの部分から成る。最初に神が肉となった時、人々はそのこと知りも信じもせず、イエスを十字架につけた。二度目も、人々は神を信じないで、まして、知りもせず、またしてもキリストを十字架につけた。人間は神の敵ではないだろう

か。もし人間が神を知らないのなら、どうして神の知己となれようか。また、どうして神を証しする資格を得られよう。神を愛し、神に仕え、神に栄光を捧げているという主張は全部人を欺く嘘ではないのか。もしそのような非現実的で実際の役に立たないことに自分の人生を捧げるなら、それは虚しい努力ではないか。誰が神であるか知らないで、どうして神の知己となれようか。そういう努力は漠然とした抽象的なものではないか。それは人を欺くものではないのか。どうして神の知己となれようか。神の知己となることの実際の意義とは何であろう。あなたは、神の霊の知己となることができるだろうか。あなたは、霊がどれほど偉大で崇高であるか、わかっているだろうか。目に見えず、触れることもできない神を深く知ること——それは漠然とした抽象的なものではないか。そのようなことを追求することに実際的な意義があるか。それはみな嘘偽りではないのか。あなたは神の知己となることを追い求めながら、実際はサタンの言いなりになる子犬である。何故ならあなたは神を知らず、目に見ることも触れることもできない、自分の観念で作りに出した、実在しない「あらゆるものの神」を追い求めているのだから。曖昧に言って、そのような「神」はサタンであり、実を言えば、あなた自身なのだ。あなたは自分自身の知己となることを求めているに過ぎないが、それでも神の知己になりたいと言う——それは神への冒瀆ではないのか。そんな努力にどんな価値があるのか。もし神の霊が肉にならないなら、神の実体は目に見えず、触れることもできないいのちの霊に過ぎない。形がなく不定形で、非物質的な存在であり、人間には近づくことも理解することもできない。そのような非物質的で不可思議で、はかり知れない霊の知己になどどうしてなれようか。それは冗談ではないのか。こんなばかげた理屈は根拠がなく非現実的だ。創造された人間は本質的に神の霊とは異なっている。そうならば、どうして両者が知己となることができようか。もし神の霊が肉として具現化されなければ、もし神が肉となって、へりくだり被造物にならなければ、被造物である人間には神の知己となる資格もなければその能力もない。また、魂が天国に入った後で、神の知己となる機会をもつかもしれない敬虔な信者を除いては、大方の人は、神の霊の知己となることはできないだろう。それに、もし受肉した神の導きにより天にいる神の知己になりたいと願っているのなら、その人は驚くほど愚かな異生物ではないのか？ 人間は目に見えない神に「誠実」であろうとするだけで、目に見える神にはほんの少しも注意を払わない。目に見えない神を追い求めるのは実に簡単なのだから——人間は自分の好きなようにやるだろう。しかし、目に見える神を求めるのは、それほど容易なことではない。漠然とした神を求める人間は神を得ることが絶対にできない。何故なら漠然とした抽象的な物事は、すべて人間の想像の産物であって、人間には得ることができないものだ

からだ。もしあなたがたのところに來た神が手の届かない崇高な神であり、近寄りがたい神であったなら、あなたがたはどうしてその意志を把握できようか。また、どうして神を知り、神を理解できるのか。もし神が自分の働きをするだけで、人間と通常の接触を持たなかったら、あるいは、普通の人間性をもたず、普通の人間には近づき難いのなら、また、たとえあなたがたのために多くの働きをしたとしても、まったく接触がなくあなたがたには見ることもできないのなら、どうして神を知ることができるのか。もしこの普通の人間性を持った肉が存在しなければ、人間には神を知るすべは何もない。神の受肉があることによってのみ、人間はこの肉にある神の知己となる資格を与えられる。人間が神の知己になれるのは、人間が神と接することができるからであり、人間が神と共に暮らし、共に交わり、徐々に神を知るようになるからだ。もしそうでなければ、人間の努力は無駄なのではないか。つまり、人間が神と親しくなることができるのは、神の働きだけによるのではなく、受肉した神の現実性と正常性のためである。神が肉になることによってのみ、人間はその本分を尽くす機会を得、真の神を礼拝する機会を得る。これこそ、最も現実的かつ實際的真理ではないか。さて、あなたはまだ天なる神の知己になりたいと思っているのだろうか。神がある程度まで自分を謙らせることによって、つまり、神が肉となる時、初めて人間は神の知己、神の心を知る者となれるのだ。神は靈的存在だ。それほど崇高で測り知れない靈と、どうして人間が知己として相応しくなれよう。神の靈が肉の中に下り、人間と同じ外観をした被造物になってはじめて、人間は神の意志を理解でき、本当に神のものとなれる。神は肉として語り、働く。喜びや悲しみ、人間の患難を共にし、人間と同じ世界に生き、人間を守り、人間を導く。神はそうして人間を清め、人間が救いと祝福を得られるようにする。これらのものを得て、人間は真に神の意志を理解し、そうなってはじめて、神の知己となれる。これだけが實際的なことだ。もし神が人間の目に見えず、触れることもできないのなら、どうして人間が神の知己になれよう。これは空虚な教義ではないか。

今まで神を信じてきた多くの人は、漠然とした抽象的なものをいまだに追い求めている。そうした人々は、現在神が為している働きの現実を知らず、まだ文字や教義の世界で生きている。そのうえ、ほとんどの者は、まだ「神を愛する新世代の人々」、「神の知己」、「神の愛の模範と型」、「ペテロの例」といった、新たな語句の表す現実に触れていない。それどころか、いまだに漠然とした抽象的なものを追い求め、教義をやみくもに探り回し、これらの言葉の現実性をまったく理解していない。神の靈が肉になる時、あなたはその働きを実際にその目で見、手で触れることができる。しかし、それで

もまだ神の知己になることができず、神の心を知る者になることができないのなら、どうして神の霊の心を知る者になれるだろう。もし現在の神を知らないのなら、どうして神を愛する新世代の一員になれるだろう。それは空文であり虚しい教理ではないだろうか。あなたは霊を見、その意志を把握できるだろうか。それは空虚な言葉ではないのか。ただこうした語句や用語を口にするだけでは不十分だし、決意だけでは神の心にかなうことはできない。あなたは、こうした言葉をただ口にすることだけで満足しており、自分の欲求と、自分の非現実的な理想を満たし、自分なりの観念や考え方を満足させようとしているだけだ。今日の神を知らないのなら、あなたが何をしようと、神の心からの願望を満たすことはできないだろう。神の心を知る者であるということは、どういう意味だろうか。まだこのことが理解できないのか。神の知己は人間だから、神もまた人でなければならない。即ち、神が肉となり、人となったのだ。同類の者だけが互いのことを、自分の心を知る者と呼ぶことができ、そのとき初めて両者は知己だと見なされる。もし神が霊的存在なら、どうして被造物である人間が神の知己になれるのか。

あなたの神への信仰、そして真理の追求はおろか、あなたの振る舞い方さえも、みな現実に基づいたものでなければならない。あなたのすることはすべて実践的でなければならない。幻想や空想的な物事を求めてはいけない。そうした行動には何の価値もないし、さらに、そのような生き方には何の意味もない。なぜなら、あなたの追い求めるものや人生は、ほかならぬ偽りと欺きでしかないものの中で費やされ、価値や意義のあることを探求しないので、得るものはばかげた理屈や、真理ではない教理だけだからだ。そうしたことは、あなたの存在の意義や価値には何の関わりもなく、空しい状態に陥るだけだ。そうして、あなたの全生涯は何の価値も意義もないものになる――そして、もし有意義な人生を求めないのなら、たとえ百年生きたとしても、全てが虚しいだろう。どうしてそれを人生と言えるのか。それは、実際の所動物の一生ではないのか。同様に、あなたがたが神への信仰の道をたどろうとしても、目に見える神を求めることを何もしないで、目に見えず、触れることもできない神を拝んでいるのでは、そうした努力はいっそう虚しいものではないか。結局、その努力は瓦礫の山となるだろう。そうした追求に何の益があるのか。人間の最大の問題は、見ることも触れることもできないもの、途方もなく神秘的で驚異的なもの、人間の想像を超えた、普通の人間には手の届かないものだけを愛する点だ。それが非現実的であればあるほど、人間はそれを分析し、他のものには目もくれずそれを追い求め、それを手に入れようとする。それらが非現実的であればあるほど、ますます綿密に調べ、分析し、それらについて、自分なりのこと細か

な考えを紡ぎだす。それに対して、物事が現実的であればあるほど、人間はそれらを素っ気なく扱う。ただそれらを見下し、蔑みさえする。これはまさに、あなたがたがわたしのしている現実的な働きに対してとっている態度ではないのか。物事が現実的であればあるほど、あなたがたは、ますます偏見を持つ。あなたがたは、そういうものを調べる手間もかけず、ただ無視する。そうした現実的かつ低い基準の要求を見下して、最も現実的である神について数多くの観念をもち、神の現実性と正常を受け入れることができない。そのようにして漠然としたものの中で信じているのではないか。あなたがたは、過去の漠然とした神については揺るぎない信念を持っているが、今日の実際の神には何の興味も示さない。それは、過去の神と現在の神とが二つの別の時代に属するからではないのか。それはまた、過去の神が天の崇高なる神であるのに対して、現在の神は地上のちっぽけな人間であるからではないのか。そのうえ、人間の崇める神は人間が頭で作り出した神であるのに対して、今日の神は地上で生まれた現実の肉だからではないか。結局のところ、人間が神を追い求めないのは、今日の神は余りにも現実的であるからではないのか。何故なら、今日の神が人間に求めているのは、まさに、人間が最もしたくないこと、最も恥と思うことだからである。これは、人間にとって困難なことではないか。これは、人間の古傷をさらすことではないのか。このように、現実を追い求めない者は、受肉した神の敵、反キリストとなる。これが明白な事実ではないのか。神がまだ肉となっていない過去においてなら、あなたは宗教家、あるいは敬虔な信者であったかもしれない。神が肉となった後、そうした敬虔な信者の多くは、自ら知らずして、反キリストになった。それがどういうことか、あなたに解るだろうか。あなたの神への信仰においては、あなたは現実に関心を合わせることをせず、真理を求めることもなく、偽りにとらわれているではないか――それが、受肉の神に敵意をもつ最も明白な原因なのではないか。受肉の神はキリストと呼ばれる。だから受肉の神を信じていない者たちはみな反キリストなのではないか。それで、あなたが信じ愛しているのは、ほんとうに、この肉なる神だろうか。それは確かに実在し極めて正常で、生き呼吸している神であるのか。厳密に何を、あなたは求めているのだろうか。それは天か、それとも地か。それは観念か、それとも真理か。それは神なのか、それとも超自然の存在なのか。実際、真理とは、人生の格言の中でも最も現実に則しており、人類の全ての格言に勝るものなのだ。それは神が人間に要求すること、神が自ら為した働きである。だから、人生の格言と呼ばれる。これは何かから要約された格言ではなく、また、偉人の有名な引用でもない。そのようなものではなく、これは天と地と万物の主から人間に告げたものであり、人間によって要約された言葉ではなく、神本来のいのちなのである。だからそれは、至

高の人生の格言と呼ばれるのだ。人間が真理を実践しようとする努力とは、自分の本分を尽くすこと、つまり、神の要求を満たすために努力することなのだ。この要求の本質は、最も現実的な真理であり、誰にも達成できない空虚な教理などではない。あなたの追求するものが何の現実性もない教理だけであるのなら、真理に反抗していることになるのではないか。あなたは真理を攻撃する者ではないのか。そのような人間がどうして神を愛することを追求できようか。現実性のない人々とは、真理に背く人々であり、みな生まれながらに反抗的なのだ。

どのように追求しようと、何よりもまず、神が今日行なっている働きを理解し、この働きの意味を知っていなければいけない。あなたは、終わりの日に神が来る時、神がどんな働きをもたらすのか、どういう性質で来るのか、そして、人間の中に何が完成されるのかを理解し、知らなければならない。神が到来して行なう肉における働きを知り、理解していなければ、どうして神の意志を把握し、神の知己になれるのか。実際、神の知己になることは難しいことではないが、簡単なことでもない。人々が徹底的に理解して実践に移せば、それは単純なものになる。人々が理解できなければ、それははるかに難しいものとなり、さらに言えば、彼らは自身の追求によって漠然としたものへと至りがちになる。もし人間が神を求める時、自分のよって立つところがなく、自分が固持すべき真理を知らなければ、それは土台がないということであり、そのため、堅固に立つのは容易なことではない。今日、真理を理解しない者、善と悪の区別ができない者、何を愛し何を憎めばよいのか分からない者たちが大勢いる。そうした人々が、堅固に立つことなどありえない。神を信じる鍵は、真理を実行に移すこと、神の心を思いやり、神が受肉して来た時、神が人間に行なう働きと、神の語る言葉の原則を知ることだ。大衆に従ってはならない。自分が何をなすべきかについて信条がなければいけない。そして、それを堅持することだ。神によって明示された、あなたの内にあるものを堅持することが、あなたの助けとなる。もしそうしなければ、あなたは今日は道を逸れて、明日は別の方向に逸脱し、本当のものは何も得られないだろう。これでは、あなたのいのちに何の益もない。真理を理解しない者はいつでも他人に従う。もし人が、これは聖霊の働きだと言うと、あなたもまた、これは聖霊の働きだと言う。もし人がこれは悪霊の仕業だと言うと、あなたもまた、疑惑を持つか、あるいは、それは悪霊の仕業だと言う。あなたはいつでも他人の言葉を物真似して繰り返すだけで、自分では何も識別できないし、自分の頭で考えることができない。それは、自分でものごとを区別できない、立脚点を持たない者である。このような人は価値のない惨めな人間だ。あなたは、いつでも

他人の言葉を繰り返す。今日、これは聖霊の働きだと言われていても、いつの日にか、誰かがこれは聖霊の働きではなくて、人間の仕業に過ぎないと言う。しかし、あなたはそれを判別することができず、他人がそう言うのを聞くと、同じことを繰り返して言う。実際は聖霊の働きであるものを、人間の働きだと言う。あなたは、聖霊の働きを冒瀆する者たちの一人となったのではないか。これは、物事の判断がつけられなくて神に敵対しているのではないか。いつの日か、どこかの愚か者がやって来て、「これは悪霊の仕業だ」と言うと、それを聞いたあなたは途方にくれて、またもや他人の言うことに縛られてしまうかもしれない。誰かが混乱を引き起こすようなことを言うたびに、あなたは自分の立脚点に固く立つことができなくなる。それは、真理を把握していないからだ。神を信じ、神に関する認識を追求するのは、容易なことではない。それは、ただ寄り集まって説教を聞くだけでは達成されないし、熱情だけでは完全になれない。あなたは、経験し、知り、原則に基づいて行動し、聖霊の働きを獲得しなければいけない。経験を積み、多くのことを判別できるようになる――善悪、正邪、何が血肉によるもので何が真理によるものであるかを区別できるようになるだろう。あなたは、こうしたことの区別ができなければいけない。そうすれば、どういう状況にあっても、迷うことはないだろう。これのみが、あなたの真の霊的背丈なのだ。

神の働きを知ることは単純なことではない。あなたは、基準と目標をもって探究しなければいけない。あなたは、どのようにして真の道を求めるか、何を基準にしてそれが真の道かどうかを推し量るか、そして、それが神の働きであるかどうか、ということを知らなければならない。真の道を探求する上での最も基本的な原則は何だろう。あなたは、この道に聖霊の働きがあるかどうか、それらの言葉が真理を述べているかどうか、誰について証しされているのか、それが何をもたらすか、といったことを調べなければならない。真の道と偽りの道とを判別するには、いくつかの基本的な知識が必要だ。最も基本的なことは、そこに聖霊の働きがあるかどうか、ということである。人間の神への信仰の真髄は神の霊を信じることであるからだ。そして、受肉した神への信仰でさえ、その肉が神の霊の体現であることに基づいている。だから、そうした信仰はなおも聖霊への信仰であるということになる。霊と肉の間には違いがある。しかし、この肉体は霊から来たものであり、肉となった言葉であるのだから、人間が信じるのは、なおも神に内在する実質なのだ。そこで、それが真の道であるかどうかを区別するには、何よりもまず、そこに聖霊の働きがあるかどうかを見て、その後で、その道に真理があるかどうかを見るのだ。この真理は正常な人間性のいのちの性質である。つまり、神がはじめ

に人間を創造した時に人間に要求したこと、すなわち、（人間の理知、見識、知恵そして、人間であることの基本的な知識を含む）正常な人間性すべてである。即ち、この道が人間を正常な人間性の生活に導けるのかどうかを見極めなければならない。述べられている真理が正常な人間性の現実において必要なものかどうか、この真理が実用的で現実的であるかどうか、また、それは最も時宜にかなったものであるかどうか、といったことを見極めなければならない。もし真理があるのなら、それは人間を普通の現実的経験へと導くことができるはずだ。更に、人間はいっそう正常になり、人間としての理知はより完全になる。人間の肉体における生活と霊的生活とはさらに秩序あるものとなり、喜怒哀楽はより正常なものとなる。これが第二の原則である。もうひとつの原則がある。それは、人間は神についてより多くの認識をもっているかどうか、そのような働きと真理を経験することは神への愛を呼び起こすかどうか、その人をより親密に神のもとへ近づけるかどうかということだ。このことによって、その道が真の道であるかどうか見定めることができる。最も基本的なことは、この道が超自然的なものではなく、現実的なものであるかどうか、また、それが人間にいのちを与えるものであるかどうかということだ。もしそうした原則にかなうものであれば、この道が真の道であると結論づけられる。わたしがこれらのことを述べるのは、あなたがたの将来の経験において別の道を受け入れさせるためではなく、また、もうひとつ別の新時代の働きが将来現れると預言するためでもない。わたしがこれらのことを述べるのは、あなたがたが、今ある道が真の道であると確信でき、今日の働きをただ半信半疑で信じ、その働きについて不確かで見通すことができないようなことのないようにするためである。自分では確信を持てはいても、まだ惑いの道を辿っている人々さえいる。そのような確信は原則に基づいたものではないから、彼らは遅かれ早かれ、除かれなければならない。とりわけ熱心に従っている者たちでさえ三割は確かだが、五割は不確かである。このことは、その人たちには基礎がないことを示している。あなたがたの素質はあまりに貧弱であなたがたの基礎が浅すぎるために、区別することがわかっていないのだ。神は同じ働きを繰り返しはしない。現実的でない働きは行なわない。神は人間に過大な要求をしない。また、神は人間の理知の外にある働きは行なわない。神が為す働きはみな、人間の正常な理知の範囲内で行われ、本来の人間の理知の外には及ばない。また、神の働きは人間の正常な必要に沿ったものである。もしそれが聖霊による働きであるなら、人間はずっと正常になり、その人間性はさらに正常になる。人々は墮落した自分のサタンの性質、および人間の本質についての認識を増し、また真理への渴望も更に大きくなる。これはつまり、人間のいのちがどんどん成長し、人間の墮落した性質においては、より一層の変化が可

能となる。これら全てが神が人間のいのちになるということの意味である。もし、ある道が、人間の本質であるこれらのものを明らかにすることができないのなら、また人間の性質を変えることができないのなら、さらにまた、人間を神の前へ導き、神についての真の理解を与えることができないのなら、あるいは、人間性をさらに卑しめ、その理知をますます異常なものにするのなら、その道は真の道ではあり得ず、悪霊の仕業、あるいは、古い道なのだ。要するに、それは聖霊が現在為している働きではないということだ。あなたがたは長年神を信じてきたが、それでも真の道と偽りの道との違いを判別し、真の道を探求するための原則についてほんの僅かの知識さえない。ほとんどの人々は、こうした事がらに興味を持ちさえしない。そういう人々は、ただ大多数が行く方へ行き、多数派の言うことを繰り返しているだけだ。どうしてこれが真の道を探している者だと言えようか。どうして、そうした人々が真の道を見いだせよう。もし、こうしたいくつかの重要な原則を把握したなら、何が起ころうと、あなたは欺かれることはないだろう。今日、人間が識別できることが肝要である。これは普通の人間が備えているべきもの、人間がその経験の中でも持っているべきものである。今日になっても自分が追い求めるものについて何も判別できず、人間的な理知がまだ成長していないのでは、人間はあまりに愚かで、その追求の努力は誤った、道を外れたものである。今日、あなたの追求にはわずかばかりの判別力もない。たしかに、あなたは、あなたが言う通り真の道を見出したのかもしれないが、それを本当に自分のものになっているのだろうか。あなたは、何かを識別できているのだろうか。真の道の本質とは何であるか。実のところ、あなたは真の道を獲得してはいない。あなたは、何の真理も得ていない。つまり、神があなたに要求することを何も成し遂げていない。だから、あなたの墮落した状態に何の変化もない。そのような方法で追求し続けるなら、あなたは最終的には淘汰されるだろう。今日まで従ってきたならば、あなたは、自分がたどってきた道が正しいものであると確信しているべきで、もう疑問はないはずだ。多くの人は常に些細なことが原因で不確かで、真理を追求することをやめてしまう。このような人々は、神の働きについて何の認識も持っておらず、困惑しながら神に従っている者たちだ。神の働きを知らない人々は、神の知己であることができず、また、神について証しすることもできない。祝福だけを求め、漠然とした抽象的なものだけを追い求めている者たちにわたしは忠告する。あなたの人生が意義あるものとなるように、できるだけ早く真理を追い求めなさい。もう自分を欺くのはやめなさい。

受肉した神の職分と人間の本分の違い

あなたがたは神の働きのビジョンを知り、神の働きの一般的方向を把握しなければいけない。これが前向きにいのちに入ることである。ひとたびビジョンの真理を正確に理解したなら、あなたの入りは確かである。神の働きがどのように変化しようと、あなたの心は堅固で、ビジョンについて明確であり、入りと追求の目標を持つことになる。そのようにして、あなたの内の経験と認識のすべてがより深くなり、さらに練られる。ひとたびこの全体像を完全に把握すれば、あなたは、いのちにおいて何も失わず、途方に暮れることがない。こうした働きの歩みを知らないでいれば、あなたはその一つひとつにおいて損失を被る。あなたはほんの数日だけで方向転換することはできない。数週間のうちに正しい軌道に乗ることはできない。それは遅れを生じさせないか。あなたがたが身につけるべき、肯定的な入りやそのような実践はたくさんある。だから、神の働きのビジョンについて次のような幾つかの点を把握していなければならない。即ち、神の征服の働きの意義、将来完全にされるための道、試練や患難を経験することによって達成されるべきこと、裁きと刑罰の意義、聖霊の働きの原則、完全になることと征服の原則などである。こうしたことはみな、ビジョンの真理である。その他のことは、律法の時代、恵みの時代、神の国の時代の働きの三段階であり、将来の証しである。これらもまた、ビジョンに関する真理であり、最も基本的であるとともに、最も大事なことである。現在のところ、あなたがたが入るべきことと実践すべきことはあまりに多い。そしてそれらは今さらに重層的で詳細になっている。もしこれらの真理について何の認識ももっていなければ、それは、あなたがまだ入っていない証拠である。たいていの場合、人間の真理についての認識はあまりに浅く、ある基本的な真理を実践することができず、ほんの些細なことでさえどう対処すればよいのか分からない。人間が真理を実践できないのは、その反抗的な性質のためであり、また、今日の働きについての認識があまりに表面的で一面的だからである。これでは人間が完全にされるのは、容易なことではない。あなたの反抗心は強すぎて、古い自己をあまりにも多くもち続けている。あなたは真理の側に立つことができず、最も明らかな真理でさえ実践できない。このような人間は救われることはできず、まだ征服されていない人々である。もしあなたの入りに詳細も目標も欠けているなら、成長があなたに訪れるのは遅々とするだろう。もしあなたの入りにほんのわずかの現実性もなければ、あなたの追求は虚しく終わるだろう。もしあなたに真理の本質が分かっていないのなら、何も変わらないままだろう。人間のいのちの成長と人間の性質の変化はみな、現実に入ることにより、さらに、詳細な経験に入ることを通して達成される。もしあなたが入りの過程に多くの詳細な経験をし、実際の認識と入りを豊かにもつなら、あなたの性質は速やかに変化する。たとえあなたが、今の

ところ実践においてそれほど目が啓かれていなくとも、少なくとも、働きのビジョンについて明察を得ていなければならない。もしそうでなければ、あなたは入ることができず、まず初めに真理についての認識がなければ、入ることはできない。聖霊があなたの経験の中で導き示してはじめて、あなたは真理についてより深い理解を得て、より深く入れることができる。あなたがたは神の働きを知らなければならない。

はじめに人類が創られた後、働きの土台となったのはイスラエル人で、全イスラエルが地上におけるヤーウェの働きの基盤であった。ヤーウェの働きは、人間が地上で正しい生活をし、ヤーウェを正しく礼拝できるように、律法を定めることを通して人間を直接導き牧養することであった。律法の時代の神は人間が目で見ることにも触れることもできない方であった。神はただ最初にサタンが堕落させた人間を導いたのだが、神は人間を教え牧養するためにそこにいた。だから神の話した言葉は人間として生きるための掟や規則、常識に関するものだけであり、人間にいのちを与える真理ではなかった。ヤーウェの導いたイスラエル人は、サタンが深く堕落させた者たちではなかった。神の律法の働きは、救いの働きの最初の段階、救いの働きの出発点であり、人間のいのちの性質を変えることとは実際には何の関わりもなかった。だから、救いの働きの始めにおいて、イスラエルでの働きのために神が肉の姿をとる必要はなかった。神が仲介者、つまり、人間と接触するための器を必要としたのはそのためである。そこで、被造物の中からヤーウェに代わって語り働く者たちが現れた。こうして人の子らや預言者たちが人間たちの間で働くようになった。人の子らはヤーウェに代わって人間たちの間で働いた。神にそのように呼ばれるのは、このような人々がヤーウェに代わって律法を發布し、彼らはまたイスラエルの人々の間で祭司でもあったことを意味する。そうした人々は祭司としてヤーウェに見守られ、ヤーウェの保護を受け、ヤーウェの霊による働きを受けた。彼らは人々の指導者であり、直接ヤーウェに仕えていた。一方、預言者たちはヤーウェに代わってあらゆる地域とあらゆる部族に話すことを専門とした。彼らはまた、ヤーウェの働きを預言した。人の子たちであれ預言者たちであれ、彼らは皆ヤーウェ自身の霊によって起こされ、内にヤーウェの働きをもっていた。人々の間にあって彼らは、直接ヤーウェの代理をした。彼らはヤーウェに起こされたからこそ働いたのであって、聖霊自身の受肉した肉だったからではない。だから、彼らは同じように神に代わって語り、働いたが、律法の時代のこれらの人の子らと預言者たちは、受肉した神の肉ではなかった。これは恵みの時代や最後の段階とは正反対であった。人間の救いと裁きの働きはいずれも受肉した神自身が行なったので、神の代わりに働く預言者たちや人の子らを起こ

す必要がない。人間の目には、彼らの働きの本質と手段の間にさほど大きな違いがあるようには見えない。また、このため、人間はいつも受肉の神の働きを預言者たちや人の子らの働きと混同する。受肉した神の外見は基本的に預言者たちや人の子らの外観と同じであった。また、受肉した神は預言者たちよりずっと普通で現実的であった。それ故、人間はまったく両者を区別できない。人間は外見ばかりに着目するので、両者は同じように働き、語るが、そこに実質的な違いがあることにはまったく気付かない。人間の識別力はあまりに低いため、人間には基本的な問題も見極めることができないが、これほど複雑なこととなるとなおさらである。預言者たちや、聖霊に用いられる者たちの言葉と働きはみな、人間としての本分を尽くしていたのであり、被造物として自分の役割を果たし、人間がやるべきことを為していたのであった。しかしながら、受肉の神の言葉と働きとは、神の職分を実行することであった。受肉の神の外形は被造物と同じだが、その働きは、その役割を果たすことではなく、神の職分を遂行することであった。「本分」とは、被造物に関して用いられ、一方「職分」とは受肉の神の「肉」に関して用いられる。両者には本質的な違いがあり、この二つを置き換えることはできない。人間の働きはその本分を尽くすことだけであるが、神の働きとは、経営する（救う）ことと、神の職分を行うことである。だから、多くの使徒が聖霊に用いられ、多くの預言者たちが聖霊に満たされたが、その働きと言葉は単に被造物としての本分を尽くすことであった。彼らの預言は受肉した神の語ったいのちの道よりも偉大であっただろうし、彼らの人間性さえも受肉した神より非凡なものであったが、彼らは本分を尽くしていたのであって、職分を果たしたのではない。人間の本分とは、人間の役割のことをいい、人間が達成できるものである。しかしながら、受肉した神に行われる職分は、神の経営に関連しており、これは人間には達成できない。語ることであれ、働きを為すことであれ、ふしぎを現すことであれ、受肉の神はその経営の中で偉大な働きを行なっているのであり、このような働きは、人間が受肉の神に代わってすることはできない。人間の働きは、神の経営の働きのある段階において被造物としてただその本分を尽くすことである。神の経営なしに、つまり、受肉の神の職分が失われるならば、被造物の本分もまたそうなるであろう。自分の職分を遂行する受肉の神の働きは人間を経営することであり、他方、本分を尽くしている人間は、創造主の要求に応えるために自分の義務を実行しているのであって、職分を果たしているとはいわれることは決してない。神の元来の本質、つまり、神の霊にとって、神の働きとはその経営のことであるが、創られたものと同じ外形をまとう受肉の神にとって、その働きとは、職分を果たすことである。どのような働きを受肉の神が行なおうと、それは自分の職分を果たすことであり、人間にできるの

は、神の経営の範囲内で神に導かれて最善を尽くすだけである。

人間が本分を尽くすということは、実際のところ、人間に本来備わっているもの、即ち、人間に可能なことをすべて成し遂げることである。そうすると、人間の本分は尽くされる。奉仕する最中の人間の欠点は、徐々に経験を積むことと裁きを体験する過程を通して少しずつ減少する。それらは人間の本分を妨げることも影響することもない。奉仕の中にあるかもしれない欠点を恐れて、奉仕をやめたり妥協したり退いたりする者たちは、すべての人々の中で最も臆病である。もし人間が奉仕する中で表明すべきことを表明できず、人間として本来可能なことを成し遂げず、その代わりにのらくらし、形だけ奉仕しているふりをするならば、その人は被造物が本来備えているはずの役割を失ったのである。こうした人間は凡庸なくだらない者で、無用の長物であるとみなされる。どうしてこんな者が被造物という呼び名に値するのか。彼らは、外見は立派でも中身は腐った墮落した存在ではないのか。人間が自分を神と称しながらも、神性を示し、神自身の働きをし、あるいは神を表すことができないなら、それは間違いなく神ではない。というのは、その人には神の本質がなく、神が本来成し遂げ得ることがその人の内にはないからである。もし人間が人間として本来達成可能なことを失うなら、その人はもはや人間とはみなされない。その人は被造物として存在し、神の前に来て神に仕える資格はない。さらに、そんな者は神の恵みを受け、神に見守られ、保護され、神によって完全にされる資格はない。神の信頼を失った多くの者は、いずれ神の恵みを失う。そうした人々は、自分たちの悪行を恥じないどころか、ずうずうしくも神の道が間違っているという考えを言い広める。そして、そのような反抗的な者たちは、神の存在を否定さえする。どうしてそのような反抗的な人間が神の恵みを享受する特権をもてようか。自分の本分を果たすことのできなかった人間は、神に対して極めて反抗的で、多くを神に負っている。それにもかかわらず、彼らは反対に、神が間違っていると激しく非難する。そうした人間がどうして完全にされるに値するのか。これは、神に取り除かれ、罰される先触れではないのか。神の前で自らの本分を果たさない者は、すでに最も憎むべき罪を犯している。その罪に対しては、死さえも十分な罰ではない。しかし、人間はずうずうしくも神に反論し、自らを神に比べる。そんな人間を完全にする値打ちがどこにあるだろうか。もし人間が自分の本分を果たさないなら、その人間は罪悪感と負い目を感じるべきである。自らの弱さ、無用さ、反抗心、墮落を恥じ、神のために自らの命と血を犠牲にするべきである。そうしてはじめて、人間は真に神を愛する被造物となり、そうした人間だけが神の祝福と約束を享受し、神によって完全にされる資格がある。では、

あなたがたの大多数はどうであろうか。あなたがたの間に生きている神を、どう扱っているのか。神の前でどのように本分を尽くしてきたのか。あなたがたは、するように命じられたすべてのことを、命がけでさえ為し遂げたことがあるのか。あなたがたは何を犠牲にしたのか。わたしから多くを受けているのではないのか。あなたがたは区別ができるのか。あなたがたは、どれほどわたしに忠実なのか。あなたがたは、どのようにわたしに仕えてきたのか。また、わたしがあなたがたに授け、あなたがたのためにしたあらゆることは、どうなのか。あなたがたは、その大きさを測ったことがあるのか。それを、あなたがたは皆、ささやかながら内にもつ良心のすべてに照らして判断したのか。あなたがたの言動はいったい誰に相応しいのか。そんなにもちっぽけなあなたがたの犠牲が、わたしがあなたがたに授けたものすべてに相応しいとでもいうのか。わたしはそうするしかないので、心からあなたがたに献身してきたが、あなたがたは邪悪な意図をもち、わたしに対していい加減な気持ちでいる。あなたがたの本分はこの程度で、それがあなたがたの唯一の役割である。そうではないのか。あなたがたは自分が被造物としての本分を全く果たしていないことが分からないのか。どうしてあなたがたが被造物とみなされることができるのか。あなたがたは、自分たちがいったい何を表明し、何を生かし出しているのかが、はっきりわかっていないのか。あなたがたは自分の本分を果たすことを怠ったにもかかわらず、神の憐れみと豊かな恵みを得ることを求めている。このような恵みはあなたがたのように無価値で卑劣な者たちのためではなく、何も求めず喜んで自らを犠牲にする人々のために用意されている。あなたがたのような人々、これほどに凡庸で取るに足りない人々は、天の恵みを享受するにまったく値しない。苦難と絶え間ない罰だけがあなたがたの生涯につきまとうだろう。わたしに忠実であることができないのなら、あなたがたの運命は苦しみに満ちたものになる。わたしの言葉とわたしの働きに対して責任を持てないなら、あなたがたの分け前は罰だけである。どんな恵みも祝福も、神の国でのすばらしい生活も、あなたがたには無縁である。これがあなたがたに相応しい結末であり、それは自ら招いた結果である。そうした愚かで傲慢な人々は最善を尽くしもせず、自分の本分を果たしもせず、そのかわりにただ恵みを求めて手を差し出し、それはまるで、自分たちにはそれを求める資格があるかのようである。そして、もし求めるものが得られなければ、さらに不信仰になる。どうしてこんな者たちが理性的だとみなされようか。あなたがたは能力に乏しく、理知に欠け、経営の働きの間に成し遂げるべき本分を果たすことがまったくできない。あなたがたの価値はすでに大幅に降下している。わたしの示したあれだけの好意への返礼をあなたがたが欠いていることは、すでに極度の反抗の行為であり、あなたがたを罪に定め、あなたがたの臆病

さ、無能さ、卑しさ、無価値さを実証するに充分である。どうしてあなたがたに、まだ手を差し出し続ける資格があるのか。あなたがたがわたしの働きのほんの僅かな助けにもなることができず、誠実であることも、わたしのために証しすることもできないということが、あなたがたの悪行と欠点であるが、あなたがたは、かえってわたしを攻撃し、わたしについて偽りを語り、わたしが不義だと不平を言う。これが、あなたがたの忠実というものか。これが、あなたがたの愛というものか。これ以外に、どんな働きができるのか。すでに行われたすべての働きの、あなたがたはいかに貢献したのか。どれほどの労力を費やしたのか。わたしはあなたがたを非難しないことで、すでに大きな寛容を示した。しかしあなたがたは依然として、恥知らずにもわたしに言い訳をして、人のいないところでわたしについて不満を言っている。あなたがたにはほんのわずかな人間性もないのか。人間の本分は人間の頭脳とその観念に汚染されているが、あなたは本分を尽くして忠誠を示さなければならない。人間の働きの中にある不純物は、その人間の素質の問題だが、もし人間が本分を尽くさないと、反抗心を現す。人の本分とその人が祝福を受けるか厄災に見舞われるかの間には、何の相互関係もない。本分は人間が全うすべきことで、それは人間が果たすべき必須の使命であって、報酬や条件、理由に左右されるべきではない。そうしてはじめて、本分を尽くしているといえる。祝福された人は裁きの後で完全にされた時に、幸いを享受する。厄災に見舞われた者は、刑罰と裁きの後もその性質が変わらないのなら、即ち完全にされていないなら、罰を受ける。被造物として、祝福されるか厄災に見舞われるかに関わらず、人間はその本分を果たし、自分のすべきことをし、できることをしなければいけない。これが神を求める者として、人間の最も基本的な条件である。あなたは幸いを受けるためだけに本分を果たそうとしてはいけない。また、厄災に見舞われることへの恐れから、行動することを拒んではいけない。一つだけ言うておこう。自分の本分を尽くすことがその人のなすべきことであり、本分を尽くすことができないとすれば、それはその人の反抗心である。人間が徐々に変えられるのは、いつも人が自分の本分を尽くす過程を通してである。また、その過程で、その人は自らの忠実を実証する。だから、本分を尽くすことができればできるほど、あなたはより多くの真理を受け、あなたの表現はもっと実地的なものになる。ただ形の上だけで本分を尽くしているふりをして、真理を求めない者は、最後には淘汰される。何故ならそのような者たちは真理の実践において自分の本分を果たさず、その本分を果たすことにおいて真理を実行しないからである。そうした人は変わらない人で、厄災に見舞われる。彼らの表すものは不純であるだけでなく、邪悪なものばかりである。

恵みの時代、イエスもまた多くを語り、多くの働きを為した。イエスはイザヤとはどう違っていたか。イエスはダニエルとどう違っていたのか。イエスは預言者だったのか？ 何故彼はキリストだと言われるのか。彼らの間の違いとは何であろうか。彼らは皆言葉を語ったが、彼らの言葉は、人間にはだいたい同じもののように思われた。彼らは皆語り、働きを行った。旧約聖書の預言者は預言し、同様にイエスもそれができた。なぜそうなのか。ここでの違いは、働きの性質による。このことを識別するには、肉の性質を考慮することはできない。また、語られた言葉の深さ浅さを考察すべきではない。イエスの働きと、その働きが人間の内にもたらした成果をいつも第一に考えなければいけない。当時預言者たちによって告げられた預言は、人間にいのちを与えなかった。また、イザヤやダニエルのような人々の受け取った言葉は単なる預言であって、いのちの道ではなかった。ヤーウェの直接の啓示がなければ、誰一人その仕事ができなかっただろう。それはただの人間には不可能である。イエスもまた、多くを語ったが、その言葉はいのちの道で、そこから人間は実践の道を見出すことができた。つまり、第一に、イエスは人間にいのちを与えることができた。何故ならイエスはいのちだからである。第二に、イエスは人間の逸脱を正常に戻すことができた。第三に、イエスの働きはヤーウェの働きを引き継ぎ、その時代を進めるものだった。第四に、イエスは人間の内なる必要を把握し、何が人間に欠けているのかを理解できた。第五に、イエスは古い時代を終わらせて、新しい時代を招き入れることができた。だから、彼は神、そしてキリストと呼ばれたのである。イエスはイザヤだけではなく、他のすべての預言者とも異なっていた。比較のため、イザヤを例に預言者たちの働きをみてみよう。第一に、イザヤは人間にいのちを与えることができなかった。第二に、彼には新たな時代の先駆けとなることができなかった。イザヤはヤーウェに導かれて働いたのであって、新たな時代の到来を告げるためではなかった。第三に、彼の語ったことは、彼自身にも理解できないことだった。彼は神の霊から直接啓示を受けていたのだが、他の人々はそれを聞いても理解できなかった。これらの点だけでも、イザヤの言葉は預言にすぎなかったこと、ヤーウェの代わりに行った働きの一面でしかなかったことが十分に証明される。しかしながら、イザヤは完全にヤーウェの代理となることはできなかった。彼はヤーウェのしもべで、ヤーウェの働きの道具であった。イザヤはただ律法の時代にヤーウェの働きの範囲内で働いていただけである。イザヤは律法の時代を超えて働かなかった。それに対して、イエスの働きは異なっていた。イエスはヤーウェの働きの範囲を超えていた。イエスは受肉した神として働き、全人類を贖うために十字架につけられた。つまり、イエスはヤーウェの行った働きの範囲外で新たな働きを行った。それが新たな時代を招き入れたとい

うことである。もう一つの点は、イエスは人間には達成することが不可能なことについて語ることができた。イエスの働きは神の経営のうちにあり、全人類に関わるものだった。イエスはほんの数人に働きかけたのではないし、その働きは限られた数の人間を導くものでもなかった。神がどのように受肉して人間になったか、聖霊が当時どのように啓示を与え、聖霊が働きを為すためにどのように人間の上に降臨したのかということに関しては、こうしたことは人間には見ることも触れることもできないことである。これらの真実が、イエスが受肉した神であるという証拠になることは、まったくありえない。だから、人間に触知できる神の言葉と働きにおいてのみ、区別できるのである。これだけが現実的である。何故なら、霊のことはあなたの目には見えず、神自身にだけはっきり知られているものだからであり、受肉した神でさえ、すべてを知っているわけではないからである。その働きによって確かめられるだけである。その働きを見ると、まず、イエスは新たな時代を開くことができたことがわかる。第二に、イエスは人間にいのちを与え、行くべき道を示すことができた。イエスが神そのものであることを証拠立てるにはこれで充分である。少なくとも、イエスの行う働きは神の霊を完全に表すことができ、そうした働きから、神の霊がイエスの内にいることがわかる。受肉した神の行った働きは、おもに新たな時代の到来を告げ、新たな働きを先導し、新たな領域を切り開くことであったが、これらだけでも、イエスが神そのものであることを実証するのに充分である。つまり、これがイエスがイザヤやダニエル、他の偉大な預言者たちとの違いである。イザヤ、ダニエル、そして他の預言者はみな、高度な教育を受けた教養ある部類の人間で、彼らはヤーウェの導きの下にあった非凡な人々であった。受肉した神の肉もまた、豊かな見識をもち、理知に欠けることもなかったが、イエスの人間性はきわだって普通であった。彼は普通の人間で、人間の目には特殊な人間性は見当たらず、その人間性に他人と異なる点は何もなかった。まったく超越的でも特異でもなく、また、高度な教養や知識、理論は備えていなかった。イエスの語ったいのちと、イエスの導いた道は理論や知識、人生経験、あるいは家庭内の教育を通して獲得されたものではなかった。そうではなく、それらは霊による直接の働きであり、それは受肉した肉体の働きである。人の目から見て、人間の弱さをもち、しるしや不思議を行うことのできない普通の神がとうてい神と思えないのは、人間が神に関する強い観念を持ち、とりわけそうした観念が漠然とした超自然的な要素をあまりに多く含んでいるからである。これらは人間の誤った考えではないのか。もし受肉した神の肉体が普通の人間のものでなければ、どうして肉になったと言えるだろうか。肉の体をもつということは、普通の正常な人間であるということである。もしそれが超越的な存在であったなら、それは肉による存在

ではなかったであろう。自分が肉による存在であることを証明するために、受肉した神は普通の人間の体をもつ必要があった。これは単に受肉の意義を完全なものにするためであった。しかしながら、これは預言者や人の子では違っていた。彼らは賜物を与えられ、聖霊に用いられた人々であった。人の目には、彼らの人間性はとりわけ偉大で、彼らは普通の人間性を超えたことを多く行った。そのために、人は彼らを神とみなした。さて、あなたがたはみな、この点をはっきり理解しなければならない。と言うのは、この問題は過去の時代のすべての人々によって、たやすく誤解されてきたことだからである。さらに言えば、受肉は最も神秘的な奥義であり、受肉した神は人間にとって最も受け入れ難いものである。わたしの述べていることは、あなたがたが自分の役割を果たし、受肉の奥義を理解する助けとなる。これはみな、神の経営、ビジョンに関連している。あなたがたがこれを理解することは、ビジョン、つまり経営の働きについての認識を得るためにいっそう役に立つだろう。このようにして、あなたがたはまた、さまざまな人々が果たすべき本分についての大きい理解を得る。これらの言葉は、あなたがたに直接道を示さないが、それでもあなたがたの入りの大きな助けとなる。というのは、あなたがたの現在の生活にはビジョンがひどく欠けており、これがあなたがたのいのちへ入ることへの大きな妨げとなるからである。もしあなたがたがこれらの事柄を理解できないままであれば、いのちへ入ることを促す動機は何もない。また、そうした追求がどうしてあなたがたが本分を果たすことを可能にすることができるだろうか。

神はすべての被造物の主である

前の二つの時代の働きのうち、一つの段階はイスラエルで、もう一つの段階はユダヤで行われた。一般的に言って、この働きのどちらの段階もイスラエルを出ることはなく、これらはいずれも最初の選民に対して行われた。この結果、イスラエル人はヤーウェ神をイスラエル人だけの神だと考えている。イエスはユダヤで活動し、磔の働きを行ったため、ユダヤ人はイエスをユダヤの民の贖い主とみなしている。ユダヤ人は彼をユダヤ人だけの王であり、他のどの民の王でもないと考えている。イギリス人の罪を贖う主ではなく、アメリカ人の罪を贖う主でもなく、イスラエル人を贖う主であり、イエスがイスラエルで贖ったのはユダヤ人だと考えている。実際には、神は万物の主であり、すべての被造物の神である。イスラエル人だけの神ではなく、ユダヤ人だけの神でもなく、すべての被造物の神である。神の働きのうち前の二つの段階はイスラエルで起き、人々の間にある種の観念を生み出した。人々は、ヤーウェがイスラエルで働きを行い、イエス自らもユダヤで働きを行い、さらに彼は肉となって働きを行ったが、いずれにせよ

この働きはイスラエルの外には広がらなかったと考えている。彼はエジプト人の中で働くことはなく、インド人の中で働くこともなく、イスラエル人の中でのみ働きを行った。そのため人々は様々な観念を形成し、神の働きを一定の範囲内で思い描いている。神が働きを行う時は、選民の間で、イスラエルにおいて行われ、イスラエル人以外に神の働きの対象者はなく、神の働きにそれ以上の範囲もないというのである。彼らは特に受肉した神を抑えつけることに厳格で、神がイスラエルの外に出ることを認めない。これらはすべて、単なる人間の観念ではないのか。神は天と地のすべてを、そして万物を造り出し、被造物のすべてを造り出したのに、なぜその働きをイスラエルのみに限定することができるのか。そうであるなら、神がすべての被造物を生み出したことに何の意味があるのか。神は世界全体を生み出し、神の六千年の経営（救いの）計画を、イスラエルだけではなく、全宇宙の一人ひとりを対象に行った。人々は中国、米国、英国あるいはロシアに住んでいても、みなアダムの子孫であり、みな神により創られたのである。誰一人として神の創造の範囲から離脱することはできず、誰一人として「アダムの子孫」という呼称から逃れることはできない。人々はみな神の被造物であり、アダムの子孫である。そして、アダムとエバの墮落した子孫でもある。神の被造物はイスラエル人だけではなくすべての人々であり、ただ呪われた者もいれば祝福された者もいるだけである。イスラエル人には望ましい点がたくさんあり、神は当初、イスラエル人が最も墮落していない民だったため、イスラエル人に対して働きを行った。中国人はイスラエル人に匹敵するものではなく、はるかに劣っている。そのため神はまずイスラエルの人々の間で働きを行い、神の働きの第二段階はユダヤでのみ行われた。その結果、人間に多くの観念や規則が生じた。実際、神が人の観念に従って行動するのだとしたら、神はイスラエル人の神でしかなく、神の働きを異邦人の諸国に拡大することはできないだろう。被造物すべての神ではなく、イスラエル人だけの神だからである。預言書によれば、ヤーウェの名は異邦人の諸国で讃えられ、異邦人の諸国に広まるとされている。このように預言されているのはなぜか。神がイスラエル人だけの神ならば、イスラエルでしか働きを行わないだろうし、その働きを拡大することもなく、こうした預言も行わないだろう。神がこの預言を行ったからには、神の働きは必ず異邦人の諸国、あらゆる国や土地に拡大されるのである。彼がこのように述べたからには、必ずその通りにされなければならない。これが神の計画である。神は天と地および万物を造り出した主であり、被造物すべての神だからである。神がイスラエル人の間で働きを行おうと、ユダヤ全体で行おうと、神が行う働きは全宇宙の働きであり、全人類の働きである。神が今日、赤い大きな竜の国——異邦人の国——で行う働きも、やはり全人類の働きである。イスラエルは

地上における神の働きの基点だったかもしれず、同様に中国も、異邦人の諸国における神の働きの基点であるかもしれない。これで神は、「ヤーウェの名は異邦人の諸国で讃えられるであろう」という預言を成就させているのではないか。異邦人の諸国における神の働きの最初の段階は、神が赤い大きな竜の国で行うこの働きである。受肉した神がこの土地で、これら呪われた人々のあいだで働きを行うことは、人の観念とひとときを相反する。これらの人々は最も卑しく何の価値もなく、当初ヤーウェに見捨てられた人々である。人が他の人々に見捨てられることはあるにせよ、神に見捨てられたならば、それ以上地位のない人はなく、それ以上価値の低い人もない。神の被造物として、サタンに取り憑かれることや人々に見捨てられることはどちらも悲惨なことであるが、被造物が創造主に見捨てられたなら、それはもっと低い地位になりようがないことを意味する。モアブの子孫は呪われて、この遅れた国に生を受けた。モアブの子孫は間違いなく、闇の影響を受けた人々の中でも最低の地位にある。この人々はこれまで最低の地位にあったからこそ、彼らに対して行われる働きは人間の観念を最も効果的に打ち砕くことができるのであり、また同時に神の六千年の経営計画全体にとって最も有益な働きとなる。この人々の間でこうした働きを行なうことは、人の観念を打ち砕くための最良の方法であり、神はこの働きによってひとつの時代を開始する。これにより神は人の観念をすべて打ち砕き、恵みの時代全体の働きを終える。神の最初の働きはユダヤで、イスラエルの境界の中で行われた。異邦人の諸国においては、神は新しい時代を始める働きを全く行わなかった。神の働きの最終段階は、異邦人の間で行われるだけでなく、呪われた人々の間で行われることがさらに重要である。この点はサタンに最も屈辱を与え得る証拠であり、それによって神は、全宇宙の被造物すべての神、万物の主、命あるすべてのものにとっての崇拜の対象になるのである。

現在、神がどのような新しい働きを始めたのか、まだ理解していない人々がいる。異邦人の諸国では、神が新たな始まりの到来を告げ、新しい時代を開始し、新しい働きを始め、この働きをモアブの子孫に対して行なっている。これは神の最新の働きではないか。歴史上の誰も何者もこの働きを過去に経験したことはなく、聞いたこともなく、ましてや正しく認識したことはなかった。神の知恵、驚異、深遠さ、偉大さ、そして聖さはすべて、世の終わりの働きのこの段階を通して明らかになる。これは人間の観念を打ち砕く新しい働きではないか。そのため人々の中には、次のように考える者がいる。「神はモアブを呪い、モアブの子孫を見捨てると語ったのに、今になってモアブの子孫を救えるのか」と。こうした人々は神に呪われてイスラエルから追放された異邦人であり

、イスラエル人は彼らを「異邦の犬」と呼んだ。誰の目から見ても、彼らは異邦の犬であるだけでなく、さらにそれ以下の滅びの子であり、すなわち彼らは神の選民ではない。彼らは元々イスラエルの地で生まれたが、イスラエルの民に属しておらず、異邦人の諸国に追放された。彼らはあらゆる人々の中で最も卑しい者たちである。そして彼らが人類の中で最も卑しい者であるからこそ、神は新しい時代を始める働きを彼らの間で実行する。彼らは墮落した人類の代表だからである。神の働きは選択を伴う的を絞ったものであり、神が今日これらの人々の中で行う働きは、被造物に対して行われる働きでもある。ノアは神の被造物であったし、彼の子孫もそうである。血と肉を持つ世界中の誰もが神の被造物である。神の働きはすべての被造物に向けられており、創造された後に呪われたか否かによって変わることはない。神の経営（救い）の働きはすべての被造物に向けられており、呪われていない選民にのみ向けられるものではない。神は自分の被造物の間にその働きを行うことを望んでいるため、この働きは間違いなく、見事に完了するまで行われるであろう。そして神は、自身の働きにとって有益な人々のあいだで働きを行う。このため、神が人々の間で働くときには、すべての因習が打ち碎かれる。神にとっては、「呪われた」「罰せられた」「祝福された」という言葉には意味がないのだ。イスラエルの選民同様、ユダヤ人は善良であり、優れた素質と人間性をもった人々である。当初、ヤーウェは彼らの間で働きを開始し、最も初期の働きを行ったが、今日神が彼らに対して征服の働きを行うことに意味はないだろう。彼らも被造物の一部であり、多くの肯定的側面を持っているかもしれないが、この段階の働きを彼らの間で行うことに意味はないだろう。その場合、神は人々を征服できず、すべての被造物に確信を与えることもできないだろう。それこそが、赤い大きな竜の国のこうした人々に、神の働きを移すことの意味なのである。ここでの深い意味は、神がひとつの時代を始めること、すべての規則とすべての人間の観念を打ち碎くこと、そして恵みの時代全体における働きを終えることである。もし神の現在の働きがイスラエル人の間で行われたならば、神の六千年の経営計画が終わる時にはすべての人が、神はイスラエル人だけの神であり、イスラエル人だけが神の選民であり、イスラエル人だけが神の祝福と約束を受け継ぐに値するのだと信じることになるだろう。神は赤い大きな竜の国の異邦人の中で終わりの日に受肉することで、すべての被造物の神としての働きを成し遂げる。神は経営（救い）の働き全体を完成させ、赤い大きな竜の国で、神の働きの中心となる部分を完了する。三つの段階の働きの中心は人間の救いであり、すなわちすべての被造物に創造主を崇めさせることである。そのため、働きのどの段階にも大きな意味がある。神は意味や価値のないことは行わない。働きのこの段階は、一方では新しい時代の到来を告げ、

前の二つの時代を終わらせる。他方では、人間のすべての観念と、人間の古い信仰や認識方法すべて打ち砕く。前の二つの時代の働きは、異なる人間の観念に従って行われた。しかし今回の段階は、人間の観念を完全に排除し、それによって完全に人々を征服する。モアブの子孫を征服することと、モアブの子孫の間で行う働きを通して、神は全宇宙の人々をすべて征服することになる。これが神の働きのこの段階の最も深い意味であり、神の働きのこの段階の最も尊い側面である。あなたが今、自らの地位が低く、自分にあまり価値がないことを知っているにしても、あなたは最も大きな喜びに出会ったとを感じるようになるだろう。あなたは大いなる祝福を受け継ぎ、大いなる約束を手に入れたのであり、そして神のこの偉大な働きの完成を助けることができるのである。神の本当の顔を見ることができ、神の本来の性質を知っており、神の旨を行なっている。神の働きのうち前の二つの段階は、イスラエルで行われた。もし、終わりの日における神の働きのこの段階がやはりイスラエル人の間で行なわれるなら、イスラエル人だけが神の選民なのだと全ての被造物が信じてしまうだけでなく、神の経営計画全体も望ましい効果を上げることはできないだろう。神の働きの二つの段階がイスラエルで行われていた時期、異邦人の諸国では新しい働きは全く行われず、新しい時代を始める働きも行われなかった。現在の、新しい時代を開始する働きの段階は、まず異邦人の諸国で行われるだけでなく、まずモアブの子孫の間で行われ、それによってその時代全体が開始される。神は人の観念にこめられていた認識をすっかり打ち砕き、ひとかけらも残ることを許さなかった。神はその征服の働きにおいて、人間の観念、その古い従来の認識方法を打ち砕いた。神は人々に、神に規則はなく、神について古いものは何もなく、神が行う働きは完全に解放されていて自由であり、そして神はその行う事すべてにおいて正しい、ということを理解させる。あなたは神が被造物の間で行うすべての働きに完全に従わなければならない。神が行うすべての働きには意味があり、それらは人間の選択や観念ではなく、彼自身の意志と知恵に従って行われる。彼は自身の働きにとって有益なことがあればそれを行い、自身の働きにとって有益でないことは、どんなに良いことであっても行わない。彼は働きを行い、その働きの対象者と場所とを、その働きの意味と目的に従って選択する。働きにおいて彼は、過去の規則には固着せず、古い常套手段にも従わない。そうではなく、働きの意義に従ってその働きを計画する。最終的には、働きの真の効果と予期された目的とを達成する。もしあなたが今日これらのことを理解しないなら、この働きはあなたに対していかなる効果ももたらさないだろう。

十三通の手紙をいかにとらえるか

新約聖書にはパウロによる十三通の手紙が収められている。パウロは働いていたあいだ、イエス・キリストを信じる諸教会に宛てて十三通の手紙を記した。つまり、イエスが昇天した後にパウロは引き立てられ、手紙を書いたのである。パウロの手紙は、主イエスが死後復活して昇天したことの証しであり、悔い改めて十字架を背負う道も広めている。もちろん、それらの道や証しはどれも、当時ユダヤの各地にいた兄弟姉妹に教えを与えるためであった。そのころ、パウロは主イエスのしもべであり、主イエスの証しをするために引き立てられていたからである。聖霊による働きの各時期においては、その様々な働きを行なうべく多様な人が引き立てられる。つまり、神自身が完成させる働きを続けるために使徒の働きを行なうのである。もしも人が誰も引き立てられず、聖霊が直接行なったならば、その働きの実行は非常に難しくなる。このように、パウロはダマスカスへの途上で打ち倒され、そして引き立てられ、主イエスの証人となった。パウロはイエスの十二人の弟子とは別の使徒であった。福音を広めたことに加え、各地の諸教会を牧養するという働きも担い、それには諸教会の兄弟姉妹の世話をすることも含まれていた。つまり、主における兄弟姉妹を導くことである。パウロの証しは、主イエスの復活と昇天の事実を知らしめ、悔い改めて告白し、十字架の道を歩むよう人々に教えるものだった。パウロは当時におけるイエス・キリストの証人の一人だったのである。

パウロの十三通の手紙は聖書に収めるために選ばれた。パウロは、十三通をすべて各地の人の様々な状態に対処するために書いた。聖霊に動かされて手紙を書き、使徒の立場から（主イエスのしもべとしての見地から）あらゆる場所の兄弟姉妹に教えを与えたのである。したがって、パウロの手紙は預言に由来するものでも、ビジョンから直接生じたものでもなく、彼が担った働きに由来していた。手紙には奇妙なところはなく、預言のように理解しがたいものでもない。単に手紙として書かれており、預言も奥義もなく、教えとしての普通の言葉しか含んでいない。その言葉の多くは人々にとって把握や理解が難しいかもしれないが、ひとえにパウロ自身の解釈と聖霊による啓きから生じたものである。パウロは単なる使徒であり、主イエスに用いられたしもべであって、預言者ではなかった。各地を歩きつつ、諸教会の兄弟姉妹に宛てて手紙を書いた。また病気の際は、ひときわ心にありながら自ら赴くことのできない教会に宛てて手紙を記した。結果として、パウロの手紙は保管され、後の世代の人に収集、整理され、聖書の四福音書の後に収められた。当然のことながら、パウロの記した最良の手紙をすべて選び、編集した。これらの手紙は諸教会の兄弟姉妹のいのちにとって有益であり、当時はとりわけ著名であった。パウロが手紙を記した目的は、兄弟姉妹が実践の道を見つける手助け

になるような霊的文書や自分の経験を表す霊的伝記を書くことではなかった。つまり作家になろうとして書籍を記すつもりはなかったのである。単に、主イエス・キリストの教会における兄弟姉妹に手紙を書いたに過ぎない。パウロはしもべとしての立場から兄弟姉妹に教えを与え、自分の重荷について、主イエスの旨について、将来に向けてイエスが人々にどのような任務を託したかについて伝えた。それがパウロの行なった働きである。その言葉は、後の兄弟姉妹の経験をかなり向上させた。パウロがその多数の手紙で伝えた真理は、恵みの時代の人々が実践すべきことであり、そのため後世の人はパウロの手紙を新約聖書に収載したのである。パウロの結末が最後にはどのようなものであったにせよ、彼はその時代において用いられた人、諸教会の兄弟姉妹を支えた人であった。パウロの結末を決めたのは彼の本質と、当初打ち倒されたことによって定められた。彼には聖霊の働きがあったので、当時そのような言葉を語ることができ、また諸教会のために重荷を負ったのも聖霊の働きのゆえであった。そのため、パウロは兄弟姉妹に糧を施すことができたのである。とは言え、特別な状況のせいで、自ら教会に出向いて働きを行なうことができなかったのも、教会に宛てて手紙を書くことで主における兄弟姉妹に訓戒を与えた。当初、パウロは主イエスの弟子を迫害していたが、イエスの昇天後、つまりパウロが「光を見」てからは、主イエスの弟子への迫害も、主の道のために福音を宣べ伝えていた聖徒たちへの迫害も止めた。イエスが明るい光として自分の前に現われるのを見た後、パウロは主の使命を受け入れ、かくして聖霊に用いられて福音を広める者になったのである。

当時におけるパウロの働きは、兄弟姉妹を支え、彼らに糧を施すことに過ぎなかった。立身出世したり、書物を著したり、他の道を探したり、教会の人々がみな新たな入りを得られるように聖書から離れた道を見つけて、それに沿って導いたりすることを望む人ではなかったのである。パウロは用いられている人であり、物事を行なうことで本分を尽くしていたに過ぎない。諸教会のために重荷を負っていなければ、本分を無視したと思われるはずである。妨げとなることが生じたり、裏切り行為があったりして、教会内で人々が異常な状態になっていたなら、パウロは働きを正しく行なわなかったと思われるであろう。働き手が教会の負担を背負い、全力で働くなら、それはその人に働き手の資格があること、すなわち用いられる資格があることを証明している。働き手が教会への負担を感じず、その働きにおいて何の成果も挙げず、導いている人たちの大半が弱く、つまづくことさえあるなら、そのような働き手は本分を尽くしていない。同様にパウロも例外ではなく、そのため諸教会の世話をし、兄弟姉妹にたびたび手紙を

書く必要があった。このようにして、彼は諸教会に糧を施し、兄弟姉妹の世話をすることができた。そうしなければ、諸教会は彼からの施しも牧養も受けることができなかったのである。パウロが記した手紙の言葉は非常に深遠だが、聖霊の啓きを得るという条件下で兄弟姉妹に記され、パウロ自身の個人的な経験や感じていた重荷も文面に織り込まれた。パウロは聖霊によって用いられた人に過ぎず、手紙の文面には彼の個人的な経験が随所にちりばめられている。彼が行なった働きは、聖霊によって直接なされた働きではなく、使徒の働きを表しており、キリストの働きとも異なる。パウロは本分を尽くしてただけであり、そのため主における兄弟姉妹に負担をもって、また個人的な経験と識見をもって施したのである。パウロは個人的な識見や認識を提供することで神から託された働きを行なっていたに過ぎず、それは神自身が直接行なう働きではないことは確かである。こういうわけで、パウロの働きには人間の経験および教会の働きに関する人間の見方や認識が混じっていた。しかし、こうした人間の見方や認識は、悪霊の働きとも、血と肉の働きとも言えない。聖霊に啓かれた人の認識と経験としか言えないのである。つまり、わたしが言わんとするのは、パウロの手紙は天からの書ではないということである。それは聖くなく、聖霊が発したり表わしたりしたものでは決してない。パウロが教会のために背負った負担の表現に過ぎないのである。こうしたことをわたしが言うのは、神の働きと人間の働きとの違いをあなたがたに認識させるのが目的である。つまり、神の働きは神自身を表わす一方、人間の働きは人間の本来の本分と経験を表わしている。神の正常な働きを人間の意志と見なしてはならず、神の超自然的な働きを神の旨と見なしてはならない。さらに、人間の高尚な説教を神の発言や天からの書と見なしてはならない。このような見方はどれも倫理に反する。わたしがパウロの十三通の手紙を分析するのを聞くと、パウロの手紙を読んではならず、パウロは恐るべき罪人だったと考える人が多くいる。わたしの言葉は冷酷で、パウロの手紙に関するわたしの評価は不正確で、パウロの手紙を人間の経験や負担の表現と見なすことはできないとさえ考える人も多くいる。そのような人は、パウロの手紙はそうではなく神の言葉と見なすべきであり、ヨハネの黙示録と同じくらいに重要で、省略したり付け加えたりしてはならず、そのうえ軽々しい解説はできないと信じている。そうした人間の主張はどれも間違っていないのか。それはひとえに人に理知がないからではないのか。パウロの手紙は確かに人々にとって大いに有益であり、すでに二千年以上の歴史がある。しかし今日に至っても依然としてパウロが当時述べたことを理解できない人が多くいる。人はパウロの手紙をキリスト教における最大級の傑作だとみなし、解明したり完全に理解したりすることは誰にもできないと考えている。実際のところ、パウロの手紙は霊的人物の伝記のような

もので、イエスの言葉やヨハネが見た偉大な幻と比較することはできない。対照的に、ヨハネが見たのは天からの偉大なる幻、つまり神自身による働きの預言で、人間には成し遂げられなかったことである。その一方でパウロの手紙は、一人の人間が見て経験したことの描写に過ぎない。それは人間に可能なことではあるものの、預言でも幻でもなく、様々な場所に送られた手紙に過ぎないのである。とは言え、当時の人々にとってパウロは働き手であり、それゆえ彼の言葉には価値があった。なぜなら、パウロは自分に託されたものを受け入れた人だったからである。したがって、パウロの手紙はキリストを求めるすべての人にとって有益だった。それはイエスが自ら語った言葉ではなかったものの、最終的にはその時代に欠かせないものであった。かくして、パウロの後に続いた人は彼の手紙を聖書に収め、今日まで伝わるようにした。わたしの言わんとすることがわかるだろうか。わたしはパウロの手紙を正確に説明し、人々への有益性や参考としての価値を否定せずに分析しているだけである。わたしの言葉を読んで、あなたがたがパウロの手紙を否定するだけでなく、異端あるいは無価値だと判断するなら、あなたがたの理解力は識見や判断力と同様にあまりに乏しいとしか言いようがない。わたしの言葉が過度に一面的だとは決して言えない。これでわかっただろうか。あなたがたが理解すべき重要なことは、当時におけるパウロの働きの実情と、彼の手紙が記された背景である。そのような状況について正しい見方をすれば、パウロの手紙についても正しい見方をするようになる。同時に、ひとたびパウロの手紙の本質を理解したなら、聖書についての評価も正しくなり、パウロの手紙がなぜ長きにわたって後世の人々に崇拜されてきたのか、そしてなぜパウロを神のように扱う人さえ多くいるのかがわかる。あなたがたも、理解していなければ、そのように考えていたのではないのか。

神自身でない者が神自身を表わすことはできない。パウロの働きは人間の見方の一部、聖霊による啓きの一部としか言えない。パウロは人間の観点から、聖霊による啓きを受けてそれらの言葉を記した。それは珍しいことではない。ゆえに、彼の言葉に人間の経験がちりばめられることは避けられず、彼は後に自分の個人的経験を使って当時の兄弟姉妹に糧を施し、彼らを支えた。パウロが記した手紙をライフスタディとして分類することはできず、伝記やメッセージとして分類することもできない。さらに、パウロの手紙は教会が実践した真理でも教会の行政命令でもなかった。それは負担を引き受けた人、つまり聖霊から働きを割り当てられた人としてどうしても行なわなければならないことなのである。聖霊に引き立てられ負担を与えられたのに、人が教会の働きを担わず、教会の業務をうまく処理できなかつたり、教会の問題をすべて満足のいく解決に導け

なかったりすれば、その人が本分を適切に尽くしていないことの証明である。ゆえに、使徒が働きの過程で手紙を書けることは、さほど不思議なことではない。それは使徒の仕事の一部であり、そうする義務があった。手紙を記す目的は、ライフスタディや霊的な伝記を著わすことではなく、また聖徒のために別の道を切り開くことでは決してなかった。むしろ、神から託された任務を完了させて神に申し開きができるように、自分の役割を果たして神の忠実なしもべとなるためにそうしたのである。働きにおいて、自分のため、そして兄弟姉妹のために責任を負わねばならず、また立派に仕事をこなして教会の業務を心に留めなければならなかった。そのどれもが仕事の一部に過ぎなかったのである。

パウロの手紙を理解したなら、ペテロとヨハネそれぞれの手紙についても正しく認識して評価できるようになる。その手紙を聖く犯すことのできない天からの書と見なすことは二度となくなり、ましてやパウロを神とみなすこともなくなる。結局、神の働きは人間の働きと違うのであり、またそれ以上に、神の表現が人間の表現と同じであるなどどうしてあり得ようか。神には神自身に特有の性質があり、人には尽くすべき本分がある。神の性質は神の働きに表われ、人の本分は人の経験において具現化し、人が追求することに表われる。したがって、なされる働きを通じて、あることが神の表現なのか人間の表現なのかが明らかになる。それを神自身が説明する必要はなく、人間が努力して証しする必要もない。そのうえ、神自身が人を押さえつける必要もない。それはどれも自然に明らかになるのであり、強制されるものでも、人間が干渉できるものでもない。人の本分はその経験を通じて知ることができ、人が追加の実験的な働きを行なう必要はない。人の本質はすべて、人が本分を尽くしていると明らかになることがある。一方、神はその働きを行ないつつ、神に固有の性質を表わすことができる。人の働きであれば、覆い隠すことはできない。神の働きであれば、神の性質を人が覆い隠すのはさらに不可能であり、ましてや人が操ることなどできない。神だと言える人は誰もおらず、人の働きや言葉を聖いものや不変のものとみなすこともできない。神は肉をまとったので人間だと言うことはできるものの、神の働きを人間の働きや人間の本分と考えることはできない。さらに、神の発した言葉とパウロの手紙を同等に扱うことはできず、神の裁きや刑罰と人間による教えの言葉を同列に語ることはできない。したがって、神の働きと人間の働きを区別する原則がある。両者は、働きの範囲や一時的な効率によってではなく、それぞれの本質に応じて区別される。この問題について、大半の人が原則を取り違えている。なぜなら、人は自分が成し遂げることのできる外面を見るが、神は人類の肉

眼では観察できない本質を見るからである。神の言葉と働きを平均的な人の本分と見なし、人間による大規模な働きを人が尽くす本分でなく、肉をまとった神の働きと捉えるなら、原則を誤解しているのではないのか。人の手紙や伝記は簡単に書けるが、聖霊の働きを土台としなければならない。しかし、神の言葉と働きは、人間が容易に成し遂げられるものでも、人間の知恵や思考で実現できるものでもない。また、人が探求したところで徹底的に説明することもできない。このような原則に関することで、あなたがたに何の反応も起きないのであれば、あなたがたの信仰は真実でも、洗練されたものでもないことは明らかである。それは曖昧さに満ち、混乱して原則がないとしか言えない。神と人に関する最も基本的かつ本質的な問題さえも理解していなければ、そのような信仰には知覚が完全に欠けているのではないのか。歴史を通じて、パウロが用いられた唯一の人間だということが、いったいどうしてあり得ようか。教会のためにこれまでに働いたのは彼だけだということが、いったいどうしてあり得ようか。諸教会に手紙を書いて支えたのは彼だけだということが、いったいどうしてあり得ようか。働きの規模や影響にかかわらず、さらには働きの成果にかかわらず、人々による働きの原則や本質はどれも同じようなものではないのか。その点について、神の働きと完全に異なるものはないのか。神による働きの各段階には明確な違いがあり、神の働きの方法の多くは完全に同じではないが、その本質と源はどれも同一ではないのか。したがって、このようなことについて今なお理解していない人は、理知がなさ過ぎる。この言葉を読んでもなお、パウロの手紙は聖くて犯すことができず、いかなる霊的人物の伝記とも違うと言う人は、理知があまりに異常で、良識を完全に欠いた教義の専門家であることは間違いない。たとえパウロを崇めても、彼への温情ゆえに事実の真相をねじ曲げたり、真理の存在に反論したりはできない。さらに、わたしが述べてきたことは、パウロの働きや手紙を燃やし尽くすものでも、参考資料としての価値を完全に否定するものでもない。とにかく、わたしがこの言葉を語る意図は、あなたがたがあらゆる物事や人について正しい認識を得て、理知的な評価ができるようにすることである。それだけが正常な理知であり、真理を有する義なる人が備えるべきものである。

成功するかどうかはその人の歩む道にかかっている

多くの人は、自分がいずれ辿りつく終着点のため、あるいは一時的に楽しみにあずかるために神を信じている。神による取り扱いを経験したことの無い者にとって、神を信じることは、天国に行くためであり、また見返りを得るためなのであって、完全にされるためでも、被造物としての本分を尽くすためでもない。つまり、ほとんどの人は、そ

の責任を果たしたり本分を完了したりするために神を信じているのではないのである。意味ある人生を送るために神を信じている人はほんのわずかで、「人は生きている以上、神を愛すべきである。なぜなら、そうすることがごく当然で正しいことであり、またそれが人の天職である」と信じる人もめったにない。このように、人はそれぞれ追い求める目標が違うが、その追求の目的と裏に在る動機はどれも似通っており、しかも、それらの人々は崇拜の対象が大体同じなのである。過去数千年に渡り、多くの信徒が死に、そして多くの信徒が死んで甦った。神を追い求めているのは一人二人というものではなく、千人二千人でさえ足りないが、そのような人々のほとんどは、個人の前途や未来の輝かしい希望のために神を求めているのであり、キリストに身を捧げている者はごく少数である。熱心な信徒でさえ、そのほとんどが自らの罠に陥って死に至っており、そのうえ、勝利を収めた者の数はほんのわずかである。そして、今日に至るまで、人が失敗してきた原因、あるいは勝利の秘訣を彼らは依然知らない。キリストを熱心に追い求める人たちでさえ、未だに突然の識見を得たわけでもなく、これらの奥義の真相を突き止めたわけでもない。彼らはただ本当に知らないのである。彼らは、涙ぐましい努力をして求めるが、その歩む道は、成功へのそれではなく、既に先駆者が失敗した道なのである。そう考えると、どのように求めたにせよ、それは闇へ向かう道を歩いているということではないだろうか。結局彼らが得るのは苦い果実だけではないのか。過去に成功した者をまねる人が結果的に幸運を得るのかそれとも不運に見舞われるのかということすら予想困難であるのに、過去に失敗してきた人の跡をたどる人の勝算がどれほどあるだろう。失敗する可能性は更に大きいのではないか。彼らの歩む道に何の価値があるというのか。時間の無駄ではないのか。人がその追求に成功しても失敗しても、要するにいずれの結果でもその原因があるのだ。そして成功するか失敗するか、それは思うままに自由に追い求めることでは決まらないのである。

人が神を信じるために最も基本的なことは、その人が誠実な心を持ち、完全に自分を捧げ、また本当に従うことである。人にとって最も困難なことは、真実なる信仰を得ることと引き換えに、自らの全人生を捧げることだが、それができれば、人は完全なる真理を得ることができ、被造物としての本分を尽くすことができるのである。これは、失敗した人たちは会得できないものであり、キリストに出会うことができない人にとっては更に到達できないことなのである。人は、神にそのすべてを捧げることが得意でなく、創造主に対する本分を進んで尽くそうともせず、真理を知ったにも関わらずその道を避けて自分の道を行き、これまで失敗した人の道に沿って追い求め、常に天に背くこと

で常に失敗し、サタンの誘惑に負け、自らしかけた罠に落ちてしまうのである。人はキリストを知らず、真理を理解し経験することに長けておらず、パウロを過剰に崇拜し、天国に入る欲求だけ強く、キリストが人に従うことを常に要求し、そしてひたすら神に対してもあれこれ指示をする。それだから、偉人と言われる人たちやこの世の苦難を経験した人たちでさえも死を免れず、神の刑罰により死ぬのである。このような人たちについては、非業の死を遂げると言うしかないが、彼らの結末、つまりその死は正当化するだけの理由があるのだ。そういう人たちの失敗は、天の法則にとってさらに耐えがたい事ではないだろうか。真理とは、人の世から出るが、人の世の真理は、キリストによって伝えられるのである。真理とはキリスト、すなわち神自身から来るものであって、それは人には不可能なことである。しかし、キリストは真理を提供するだけであって、人が真理を追い求めるのに成功するかどうかを決めるために来るのではない。よって、真理を追い求めるのに成功するか失敗するかは、すべて人の追求にかかっている。これは元々キリストとは一切関係がないものであり、人の追求によって決まるものなのだ。人の終着点やその成功と失敗の責任を神に押し付け、その責任を負わせてはならない。なぜなら、それは神自身には関係がなく、被造物が尽くすべき本分に直結していることだからである。多くの人、パウロやペテロが追い求めたこと、そして二人の終着点くらいは知っていても、二人の結末以上には何も知らず、ペテロの成功の裏にある秘訣あるいはパウロの失敗を招いた欠点については何も知らない。だから、彼らの追求の本質を見極めることが全くできないのであれば、あなたがたの追求のほとんどは失敗に終わるだろうし、あなたがたの内、僅かな者が成功したとしても、ペテロの成功の比ではない。あなたの追求の道が正しいものであれば、成功への希望がもてるだろうが、あなたの真理を追求する道が間違っただけのものであるならば、永遠に成功することはできず、パウロと同じ結末を迎えることになる。

ペテロは、完全にされた人だった。彼は、神の刑罰と裁きを経験し、神への純粹なる愛を得て初めて、完全にされたのである。彼の歩んだ道は、完全にされるための道だったのである。要するに、最初から、ペテロの歩んだ道は正しく、彼が神を信じる動機もまた正しいものであったから、彼は完全にされる人となり、以前に人が歩んだことのない新しい道を歩いたのである。しかし、パウロが最初から歩んだ道はキリストに逆らうものであり、ただ聖霊がパウロを用い、彼の賜物、彼のあらゆる長所を利用して業を行おうというだけで、彼はキリストのために何十年も働いたのである。パウロは聖霊に用いらただけで、キリストがパウロの人間性を好意的に見たから用いたのではなく、た

だその賜物ゆえだったのである。パウロがキリストのために働くことが出来たのも、喜んでそうしたかったからではなく、聖霊に打たれてそうしたのである。彼がそのような働きができたのも、聖霊による導きと啓きによるもので、彼の働きが彼の追求や人間性を表しているのでは決してない。パウロの働きは、しもべのそれ、つまり一人の使徒の働きを表しているのである。しかしペテロはそうではなかった。彼も何かしらの働きをなしたが、パウロの働き程のものではなく、自分の霊的な成長を追い求める中で働き、そして彼の働きはパウロのそれとは異なるものだった。ペテロの働きは、被造物の本分を尽くしたものである。彼は使徒としての立場で働いたのではなく、神への愛を追い求めながら働いたのである。パウロもまた、働きの過程で個人的な追求が含まれていたが、彼の追求は、彼の将来への希望と良き終着点への願い以外にはなかったのである。パウロは、働きを行う間、精錬を受け入れなかったし、神による刈り込みや取り扱いも認めなかった。彼は自分の働きが神の望みを満たしてさえいれば、そして神に喜ばれることだけをしてさえいれば、最終的に見返りが与えられると信じていた。パウロの働きには個人的な経験は一切なく、働きそのもののためにあり、変化を追い求める中で働いたのではなかった。その働きの全ては取引きであって、被造物としての本分や神への服従は含まれていなかった。その働きの過程において、パウロの古い性質には何ら変化はなかった。彼の働きは単に他者への奉仕であり、自らの性質を変えることはできなかったのである。パウロは完全にされることも神による取り扱いを受けることもなく、自分の働きを直接行い、見返りを動機として働いたのである。その点ペテロは違った。彼は、刈り込みを受け、取り扱われ、精錬された。ペテロの働きの目的と動機は、パウロのそれとは根本的に違っていた。ペテロはそれほどたくさんの働きをなしたわけではないが、彼の性質は多くの変化を経験し、彼が追い求めたものは真理であり、真の変化であった。彼の働きは単に働きそのもののために行われたのではなかった。一方でパウロは多くの働きをなしたが、それらは全て聖霊の働きであって、パウロは協力していたものの、彼自らが経験することはなかったのである。ペテロの働きが少ないのは、聖霊が彼を通してそれほど働きを行わなかったからに過ぎない。その働きの量では、彼らが完全にされたかどうかは決まらない。彼ら二人の内、一人は見返りを得るために追い求めたのに対し、もう一人は、神への究極の愛に到達し、被造物としての本分を尽くすことを追い求め、神に満足してもらうために愛に満ちた姿を実現することを求めた。彼らは、外見も違えば中身も違った。二人の内のいずれが完全とされたのかを、それぞれの働きの量から決めることはできない。ペテロは、神を愛する人の姿を生きること、神に従い、神による刈り込みや取り扱いを受け入れ、そして被造物としてのその本分を尽くす者に

なることを追求した。彼は自らを神に捧げ、全てを神の手に委ね、そして死ぬまで神に従った。ペテロはこのように決意し、実際その通り成し遂げた。これが、ペテロの最後がパウロのそれと異なる根本的な理由だ。聖霊がペテロに対して行った働きは、彼を完全にするものであり、一方で聖霊がパウロに対して行った働きは彼を利用するためであった。それは、この二人の本性、そして追求に対する考え方が同じではなかったからである。両者とも聖霊の働きを受けたが、ペテロはそれを自分自身に実際に用い、そして他者にも与えた一方で、パウロは、聖霊の働きの全てを他者に与え、自らは一切何かを得ることはなかった。このように、聖霊の働きを長年経験した後、パウロ自身の変化はほとんど無きに等しかった。彼は、自身の自然体を維持し、以前のパウロのままであった。それは単に長年の働きにおける困難を乗り越えた後に、働く方法と忍耐力を学んだだけであり、彼の本来の性分、つまり非常に負けず嫌いで、貪欲な本性は、相変わらずそのままであった。そうして長年働いた後、パウロは、自分の墮落した性質も自覚していなければ、以前の古い性質も捨てていなかったため、それらの古い性質が彼の働きにおいても明らかに見て取れた。彼の働きの経験量そのものは多かったが、それでもその経験量では僅かすぎて、彼自身そして彼の追求の存在価値や意義に対する考え方をを変えることはできなかったのである。彼は長年キリストのために働き、二度とキリストを迫害することはなかったが、彼の心の中では神に対する認識が変わることはなかった。このことは、彼が神に献身するために働いていたというより、彼の将来の終着点のためにやむなく働いていたことを意味する。パウロは最初キリストを迫害し、キリストに従わなかった。つまり、本来彼は意図的にキリストに逆らった人間で、聖霊の働きについての認識を何も持っていなかった。パウロはその働きを終えようとしていたときでさえ、まだ聖霊の働きを知らなかったし、聖霊の意思に僅かな注意も払うことなく、元来の自分の性格に沿って自分の意思で行動していただけである。従って、彼の本性は、キリストに敵対するものであり、真理には従わないものである。このように聖霊の働きに見捨てられた者、聖霊の働きを知らなかった者、そしてキリストに敵対した者、そんな人間がどうして救われるというのか。人が救われるか否かというのは、働きの量や献身の度合いによるのではなく、聖霊の働きを知っているかどうか、真理を実践できるかどうか、そしてその追求に対する考え方が真理と一致しているかどうかで決まるのである。

確かにペテロもキリストに従い始めてから、天然の表現があったが、本性から言えば、最初から彼は喜んで聖霊に従い、キリストを追い求めた人であった。彼の聖霊への服従は純粋なものであり、彼は富や名声を追い求めず、真理に従うことが動機だった。ペ

ペテロは三度キリストを否定し、主イエスを試したが、そのような僅かな人間の弱さは、彼の本性には関係しないし、彼の将来の追求に影響を及ぼさない。さらに彼の試みが反キリスト的であったということを十分に証明するものでもない。普通人間の弱さというものは、この世の万人に共通するものであるが、ペテロも同じではないだろうか。人がペテロに対して偏見を持っているのは、ペテロが幾つか愚かな間違いを犯したからではないか。人は、パウロが行った多くの働きや彼が書いた多くの書簡から、パウロを賞賛しているのではないか。一体どうやって人が人の本質を見極めることができるというのか。真に、本当の理知を持つ人であれば、こんな取るに足らないことは見極められるのではないか。ペテロの長年にわたる苦難は聖書に記されていないが、それでペテロが実際それらを経験しなかった、あるいはペテロは完全にされていなかったとは証明できない。人がどうやって神の働きを完全に理解できるというのか。聖書の中の記録は、キリストが個人的に選び取ったわけではなく、後世の人によって編集されたものなのである。であれば、聖書の中の記録は全て人の考えによって選ばれたということにならないだろうか。さらに、ペテロとパウロの最後は、使徒書簡の中には明確に書かれていないため、人はペテロとパウロを自分の見方や好みで判断する。そして特にパウロの働きが多く、そのすばらしい「功績」のために、彼は万人の信頼を得たのである。人は表面的な事だけを重んじてはいないだろうか。一体どうやって人が人の本質を見極めることができるというのか。しかも、パウロは何千年にもわたって崇拝の対象だったことを見れば、誰が敢えて彼の偉業を安易に否定するだろう。ペテロは単なる漁師だったのだから、その貢献度がパウロと同じであるはずがない。貢献の度合いを基準にすれば、ペテロよりも先にパウロが見返りを与えられ、神に認められるのに相応しい者なのである。それなのに、神がパウロに対しては、単純に彼の賜物を利用して働きを行わせ、一方でペテロは完全にされるということを誰が想像できただろう。これは、主イエスが最初からペテロとパウロのために計画を立てたということでは決してなく、彼らは、その本来持っている性質に応じて、完全にされた若しくは働きを与えられたのである。よって、人々の目に見えるものは、単に人の表面上の貢献なのであり、一方で神が見るのは人の本質であり、人が最初から追い求める道であり、そしてその人の追求の動機なのである。人は、他人を自分の観念と受け止め方で測るが、一人の人間の結末は、その人のうわべで決まるわけではない。それだから、あなたに言いたいのは、あなたが最初から選ぶ道が成功の道であり、あなたの追求に対する見方が最初から正しいものであれば、あなたはペテロのようである。そして、あなたが歩む道が失敗の道であるならば、いかなる代価を払おうが、あなたの最後は、パウロのそれと同じである。いずれの場合であっても、

あなたの終着点、そしてあなたが成功するか失敗するかは、あなたが追求する道が正しいかどうかで決まるのであって、あなたの献身の度合いやどれくらいの代価を支払ったかで決まるのではない。ペテロとパウロの本質、そして彼らが追い求めた目標はそれぞれ異なるものだった。人がこれらのことを発見することは不可能であり、神のみがそれらを全て知っているのである。というのは、神は人の本質を観ているが、人は自らの本質が一体何なのか全く知らないからである。人は、人の内側の本質あるいは自分の実際の霊的背丈を見ることはできないから、パウロの失敗とペテロの成功の理由を見つけることができないのである。多くの人がペテロではなくパウロを崇拝する理由は、パウロが公の働きのために使われ、人がその働きを実際に見られるため、パウロの「功績」を認めることが可能だからである。一方でペテロの経験は、人には見えないものであり、また彼が追い求めたものは人には達成できないことのため、人はペテロに興味を持たないのである。

ペテロは、神の取り扱いと精錬を経験することで完全にされた。彼はこう言った。「わたしは、いつでも神様の望むことを叶えるべきで、わたしのすることの全てが神様の心を満足させることだけを望む。たとえ罰せられても裁かれても、喜んでそうする」と。ペテロは自分の全てを神に差し出し、その働きや言葉そして彼の人生そのものも全て神を愛することのためにあった。ペテロは聖さを追求した人であり、経験を重ねるごとに、彼の心の奥深くにある神への愛はより大きくなったのである。しかしパウロの方は、表面的な働きをした。実際パウロもよく働いたが、彼の労働は、自分の働きを適切に行うことで見返りを得るためのものであった。パウロは、最終的に見返りを得られない事を知っていたなら、その働きを放り出していたに違いない。ペテロが大切にしていたのは、彼の心の中の本当の愛であり、現実的で達成できるものであった。ペテロは、見返りを貰うことではなく、自分の性質が変わるかどうかに関心を置いた。一方でパウロは、より一層努力をして働くこと、表面上の働きや献身、そして普通の人たちが経験することのない教理を大事にした。パウロは、自分自身の心の奥深くの変化にも、神への真の愛にも一切興味がなかった。ペテロの経験は、真の愛そして神についての真の認識を得るためであり、神とより近い関係を築くためであり、それらを生活で実践することであった。パウロが働いたのは、イエスによって委任されたからであり、また彼が待ち望んでいるもののためであったが、これらのことは、彼自身に対する認識や神に対する認識とは全く関係がなかった。彼の働きは、単に刑罰と裁きを避けるためのものであった。ペテロが追い求めたものは純粋な愛であったが、パウロが追い求めたものは義の栄

冠であった。ペテロは聖霊の働きを長年経験し、キリストについて実質的な認識を持ち、同時に自分自身に対する認識も深かったから、ペテロの神への愛は純粋なものであった。ペテロは長年の精錬を経て、イエスの認識、そしていのちの認識を深めた。彼の愛は無条件で能動的であり、また彼は見返りを求めず何の利益も望まなかった。パウロの方は、非常に長い間働きを行ったにもかかわらず、キリストについては良く認識しておらず、自分自身についての認識もごくわずかであった。パウロは、キリストに対する愛を単に持っていなかったのである。そしてパウロが働き、その道を走り続けたのは、最後に栄冠を得るためであった。彼が追い求めたのは最も美しい冠であって、最も純粋な愛ではなかった。またパウロの追求は、能動的ではなく、受動的だった。パウロはその本分を尽くしていたのではなく、聖霊の働きによって捕えられた後、やむを得ず追求したのである。だから彼の追求は、被造物として相応しいという証明にはならない。被造物の資質を持って本分を尽くしたのはペテロである。人は、神に捧げる人は全て見返りを受けるべきだと考え、また奉仕が大きい人ほど、神に喜ばれるべきということが当然だと思っている。人の観点の本質は取引きという考え方であり、被造物としての本分を尽くすことに対しては積極的に追い求めないのである。神にとっては、人が神への真の愛と完全なる服従を追い求めれば追い求めるほど、つまり神の被造物として本分を尽くすことを追い求めれば追い求めるほど、神に認められるということになる。神の観点は、人が元々の本分と地位に立ち返ることを要求することである。人は被造物なのだから、自らの立場を乗り越えて神に何らかの要求をするというようなことはすべきでなく、ただ被造物としての本分を尽くすべきなのである。パウロとペテロの終着点は、彼らの貢献度ではなく、被造物としての本分を尽くせたかどうかに基づいて判断された。つまり、彼らの終着点は、どれほどの働きを行ったかあるいは世の人が彼らに対してどのような評価を下したかによってではなく、彼らが最初から何を追い求めていたかに基づいて決められたのである。よって、積極的に被造物としての本分を尽くすために探し求めることが成功の道であり、さらに神に対する真の愛を追い求めることが最も正しい道であり、自らの古い性質の変化と神への純粋な愛を追い求めることが、成功への道である。そのような成功への道こそ、被造物としての本来の姿、そして元々の本分を回復する道なのである。それは回復の道であると同時に、神の初めから終わりまでの全ての働きの目的でもある。人の追求が個人的な贅沢な要求と不合理な望みで汚れているのなら、人の性質を変化させる効果は達成できない。これは回復の働きと食い違うことになる。よって間違いなく聖霊による働きではなく、このような追求が神に認められることがないのは確かだ。神に認められないのであれば、追い求めることに何の意味があるだろう

か。

パウロによる働きは人々に公然と示されてきたが、彼の神への愛は、実際どれほど純粹で、また彼の心の中でどれほど深く根付いていたのだろうか——それは人が見て確認できるものではない。人は、パウロが行なった働きのみを見ることができ、その働きから彼が確かに聖霊に使われたのだということを知る。そのため人はパウロがペテロよりも優れていたと考え、またパウロが諸教会に施す働きをしていたために、彼の働きの方が優れていたと考えるのである。一方ペテロは、個人の経験のみに集中し、彼の時折の働きの際にわずかな人を獲得しただけであった。さほど知られていない書簡を2〜3書いただけであったが、彼の心の奥深くの神への愛がどれほどすばらしかったかを知っているとと言えるだろうか。パウロは、明けても暮れても神のために働いた。しなければならない仕事がある限り、パウロは実行した。彼は、そのようにして栄冠を手に入れ、神に満足してもらえようと考えたのだ。しかしパウロは、働きを通して自分が変わる道を追求しなかった。一方で、ペテロは、生活の中で神の望むことを叶えられなかったときは、それが何であろうが彼を不安にさせた。ペテロは、神の望みを叶えられない時には悔い、神の心を満たすために適切な方法を探そうと努力した。彼は、その生活のどんなに些細なことにおいても、神の望みを叶えるよう自分に要求した。自分の古い性質のことにも厳しく、そしてより深い真理の探究を進めることに対しては常に厳しく自分に要求した。一方で、パウロは表面上の名声や地位を追い求めた。彼は、人前で披露して自慢するために追い求め、自らのいのちの成長をより深く追い求めることはしなかった。彼が重視したのは、教義であり現実的なことではなかった。人によっては、「パウロは神のために非常に良く働いたのに、なぜ神に覚えてもらえないのか。ペテロが神のために働いたのはほんのわずかであり、諸教会に対して大きく貢献したわけでもないのに、なぜ彼は完全にされたのであろうか」と言うかもしれない。ペテロは、神が要求する程度まで十分神を愛した。このような人のみが、証しとなる人なのである。ではパウロはどうか。パウロがどの程度まで神を愛したかをあなたは知っているだろうか。またパウロが働いた理由はなんだったのか。同時にペテロの働いた理由はなんだったのか。ペテロには、さほどの働きはなかったが、あなたはペテロの心の奥深くにあったものを知っているだろうか。パウロの働きは、諸教会に必要なことを提供し、そして彼らを支えることであった。ペテロが経験したものは自身のいのちの性質の変化であって、彼は神への愛を経験したのである。これであなたは彼らの本質がどう異なるかを理解したのだから、最終的にどちらが真に神を信じていたのか、そしてどちらが実は神を真に信じ

ていなかったかが解るはずだ。一人は神を真に愛し、もう一人は神を本当には愛していなかった。一人は自らの性質の変化を経験し、もう一人は経験しなかった。一人は謙虚に仕え、人からは容易に気づかれず、もう一人は人々から崇拜され、素晴らしい印象を残した。一人は聖さを追い求め、もう一人はそうではなく、不純ではなかったが純粋な愛も持ち合わせてはいなかった。一人は本当の人間性を持ち合わせていたが、もう一人はそうではなかった。一人は被造物の理知を持っていたが、もう一人はそうではなかった。これらがパウロとペテロの本質の違いである。ペテロが歩んだ道は成功の道であり、それは同時に人の正常の人間性と被造物の本分を回復する道でもある。よってペテロは成功する全ての人の代表である。一方でパウロが歩んだ道は失敗の道であり、表面上は服従し労力を費やしているが本当に神を愛してはいない人の代表である。彼は真理を持たない全ての人を代表しているのである。ペテロは、神を信じる中で、全てにおいて神を満足させること、そして神から来るもの全てに従うことを追い求めた。そしてペテロは不平一つ言わず、刑罰や裁きと同様に、精錬、苦難と生活上の欠乏も受け入れ、そのいずれも彼の神への愛を変えることはなかった。これこそ神への究極の愛ではなかっただろうか。これこそ被造物の本分を尽くすということではないだろうか。刑罰、裁き、試練――これらの中にあっても、死に至るまで従順であることができ、そしてこれこそが、被造物が達成すべきことであり、神への純粋な愛である。仮に人がここまで達成できたのなら、その人は被造物として相応しいということであり、これ以上創造主の満足を得られることはないであろう。神のために働くことができるのに、神に従わず、また神を真に愛することができないということを想像してみしてほしい。このような場合、あなたは、真理を持たず、神に従うことができず、神に反抗しているがために、被造物の本分を尽くすことがないばかりか、神に非難されるのである。あなたは、神のために働くことしか考えず、真理を実践することあるいは自分自身を知ることに関心である。あなたは、創造主を理解できず、また知ることもしない、創造主に対して従うことも愛することもしない。あなたは生まれつき神に背いている人間なのだから、そのような者は、創造主に愛されないのである。

一部の人は次のように言っている。「パウロは、本当に多くの仕事をし、諸教会に対して非常に重荷を感じ、多大な貢献をした。パウロの十三の書簡は、恵みの時代を二千年間支え、それは四福音書の次に大きな功績だ。そのパウロを誰と比較できると言うのか。ヨハネの黙示録は誰も読み解けないが、パウロの書いた手紙は人にいのちを与え、その働きは全て教会のためになった。パウロでなければ達成できなかったことではない

だろうか。それに比べて、ペテロが何の働きをしたのか」と。人は、他人を評価するとき、その人のなした功績によって判断する。神が人を評価するときには、その者の本性を見る。いのちを追い求めている人の中で、パウロは自分の本質を知らない人であった。彼は謙虚でも従順でもなかったし、自分の神に反している本質さえも知らなかった。それゆえ、パウロは、細部にわたる経験を持たず、真理を実践した人ではなかった。だがペテロは違った。彼は自分の不完全さ、弱さ、そして被造物としての墮落した性質を知っていたから、自分の性質を変化させるための実践の道があった。彼は教義だけで現実性を伴わないという人間ではなかった。変わることができた人は救われて新たにされた人であり、真理を追求するに相応しい。それに比べて、変わらない人はありのままだが旧式のタイプの人々である。彼らは救われなかった人、つまり神に嫌われ拒否された人々なのである。いかにその働きが素晴らしくても、神に覚えてもらえることはない。あなたがこのことを自らの追求と比べるとき、究極のところペテロとパウロのいずれの方と同じなのかということが、おのずと分かってくるはずである。あなたが追い求めるものの中にやはり真理がなく、今日においても未だパウロのように尊大で、自画自賛してばかりいるなら、あなたは間違いなく失敗するくずである。あなたがペテロと同じものを追い求め、つまり実践と真の変化を求めて、同時に放漫でも強情でもなく本分を尽くすことを求めるならば、被造物として勝利を達成できる。パウロは自分自身の本質も墮落も知らず、またどれほど反抗的かについてはほとんど知らなかった。パウロは一度も自分のした卑劣なキリストへの公然たる抵抗には言及せず、十分に悔やむこともなかった。パウロはそれに関して簡単な説明をただけで、心の奥底では神に対して完全に服従していなかった。パウロはダマスコへ行く道で倒れたが、彼は本当に心の深い部分では自分を反省しておらず、単に絶えず働くことに満足し、自分を知ってその古い性質を変えることが肝心なことだとは考えなかったのである。彼は真理を話すこと、自分自身の良心を慰めるために他者に施し、二度とイエスの弟子を迫害しないことで自らを慰め、過去の罪を赦すことで満足していたのである。パウロが目指したのは、単に未来の栄冠と儚い働きでしかなく、また彼の求めた目標は、豊かで溢れんばかりの恵みだった。パウロは、十分に真理を追求せず、また過去に理解できていなかった真理をより深く追求しようとしなかった。だからパウロは、自分自身に対する認識が間違っていたともいえるし、彼は刑罰も裁きも受け入れなかった。パウロが働くことができたからといって、彼が自分の本性あるいは本質について認識があったことを意味するわけではない。パウロは表面上の実践だけに集中し、何より認識を求めて努力したのであり、変化を求めていたわけではなかった。パウロの働きは、完全にダマスコへの道でキリストと出会

った結果だけによるものであり、それは彼が最初から持っていた志ではなく、また自分の古い性質に神の刈り込みを受け入れた後の働きでもなかった。いくら働いても、パウロの古い性質が変わることはなく、よって彼の働きは、彼の過去の罪を償うことはなく、ただ当時の諸教会の間で一定の役割を果たしたに過ぎなかった。このように古い性質が変わらない人、つまり、救いを得ることがなく、さらには真理を知らない者は、主イエスに認められる人には絶対になれない。パウロは、イエス・キリストに対する愛と畏敬に溢れていたわけではなく、真理を探求することに長けていたわけでもなく、ましてや受肉の奥義を探し求めた人ではなかった。彼は単に詭弁に長けた人、そして自分より優れている人あるいは真理を備えた人に対して従わない人だった。パウロは、自分とは著しく違うあるいは敵対する人や真理を妬み、賜物があって印象深く、豊かな知識を備えた人を好んだ。真理を追い求め真理だけを重んじる貧しい人々と交流するのが好まず、代わりに、教理についてばかり語り、知識が豊富な宗教組織の長老格とばかり交流した。パウロは聖霊の新しい働きに対しては愛情がなく、聖霊の新しい働きの動きにも興味がなかった。代わりに彼は、一般的な真理より高い教義や教理を好んだ。パウロの生まれつきの本質と彼が追い求めたことの全てを見ても、彼は、真理を追求したキリスト者と呼ばれるに相応しくなく、ましてや神の家の忠実なしもべと呼ばれる資格などない。パウロはあまりに偽善的で、あまりに反抗的だったからだ。パウロは主イエスのしもべとして良く知られているが、最初から最後まで彼の行いは義とすることができないことから、彼は、天の国に入る資格を持っているとは全く言えない。よってパウロは、単に偽善の人、そして不義を行う人だが、キリストのために働いたこともある人として見るができる。パウロを悪とすることはできないが、不義を行う人と呼ぶのが適当なのだ。パウロは多くの働きをなしたが、その働きの量ではなく、その働きの質と本質に基づいて判断されるべきである。そうしてこそ、この問題の真相を究明できる。パウロは常にこう信じていた。「わたしには神のために働く能力があって、普通の人より優れている。他の人以上に神の負担を思いやることができるし、わたしほど深く悔い改める人もいない。わたしには大いなる光が注ぎ、自分の目でも大いなる光を見たのだから、わたしの悔い改めは誰よりも深いはずだ」。これが、当時パウロが心の内で考えたことであった。パウロの働きが終わるとき、パウロは言った。「わたしは勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終えました。今からは、義の栄冠がわたしのために用意されているだけです」。と。パウロの言う戦い、働き、そして道のりは全て、義の栄冠を受けるためのものであって、彼は積極的に向上しようとしていたわけではなかった。彼の働きにおいて、いい加減ではなかったが、その働きは単に自らの過ちを補うため、そして良心の

呵責に悩まされないためのものだったと言える。パウロが望んだのは、与えられた仕事を完了させ、走るべき道を完走し、そして戦いをなるべく早く終えて、自分の待ち望む義の栄冠を一日でも早く得ることだけであった。彼が望んだのは、自らが経験と真の認識を備えることで、主イエスに会うことではなく、自らの働きを早く終わらせることで、主イエスに会ったときに、彼の働きに見合った見返りを受け取るためであった。つまりパウロは、その働きによって自らを慰め、またその働きを以て未来の栄冠に換える取引きをしたのである。パウロが追い求めたものは、真理でも神でもなく、ただ栄冠だけであった。どうして、このような追求が条件に適うといえようか。パウロの動機、働き、支払った代償、そして費やした労力全てに、彼のすばらしく途方もない空想が浸透していて、彼は完全に自分の願望に従って仕事をしたのである。パウロは、彼の働き全体において、心から喜んで代価を払ったことが少しもなく、単に取引きをしていたのである。パウロは本分を尽くすためには喜んで努力せず、取引きの目的を達成させるためには喜んで努力した。そんな努力に何の価値があるのか。一体誰が彼の不純な努力を良しとするだろうか。だれがそのような努力に興味を持つだろうか。彼の働きは将来の夢と素晴らしい計画とに溢れていたが、人の性質を変えるような道は含まれていなかった。彼の慈愛のほとんどが見せかけであり、彼の働きはいのちを与えるどころか、偽りの礼儀正しさを装っていただけであった。それは単なる取引きだったのである。このような働きが、どうして人を本来の本分を回復する道へと導き入れることができるというのか。

ペテロが追い求めた唯一のもの、それは神の心であった。彼は神の心を満たすことを追い求め、苦難や逆境に遭っても、喜んで神の望みを叶えようとした。神を信じる者として、これ以上の追及の形はない。だがパウロが追い求めたものは、彼自身の肉的なもの、観念、自分の計画と企みによって汚れていた。パウロは決して被造物として相応しいとはいえず、また彼は神の心を満たすことを追求する人でもなかった。一方でペテロは神の指揮に従い、その働きはそれ程大きくなかったものの、彼の追求の裏にある動機、そして歩んだ道は正しいものであった。ペテロは、それほど多くの人を獲得したわけではなかったが、ペテロは真理の道を追い求めることができたのである。このために、ペテロは被造物として相応しいといえるだろう。今日、たとえあなたが働く者ではなくても、あなたは被造物の本分を尽くせなければならず、神の指揮すること全てに対する従順を追い求めることができなくてはならない。あなたは神の言うことは何であろうと全てに従えなくてはならず、どんな試練や精錬でも経験し、たとえ自分が弱くても心の

中で神を愛せるはずである。自分のいのちに責任を持つ人は、喜んで被造物の本分を尽くす人であり、そういう人の追求への見解が正しいのである。神はこのような人を必要とされるのである。仮にあなたが多くの働きを行なって、人々がその教えから学んだが、あなた自身は変わらず、しかも何の証しも真の経験も持たず、死の直前になってもあなたのしたことに何の証しもないままだとしたら、あなたは変えられた人だと言えるだろうか。また真理を追い求める人であったと言えるだろうか。聖霊があなたを用いる時、単にあなたのうち働きに使える部分を用いるのであって、そうでない部分は用いない。あなたが変わることを追い求めるのであれば、用いられる過程で徐々に完全にされるはずである。それでも聖霊は、あなたが最終的に神のものとされるかどうかに関心を負うことはなく、それはあなたがどう追い求めるか次第なのである。もし個人的な性質に変化がなければ、あなたの追求に対する観点が間違っていることになる。また何の見返りも受けられなければ、それはあなたの問題であり、あなたが真理を实践せず神の心を満足させることができないことが原因である。要するに、個人的に経験すること以上に重要なことはなく、個人の霊的な成長こそ最も肝心だということである。人によっては最後にこう言うだろう。「わたしはあなたのために大いに働きました。確かにそれほど大きな功績があるわけではないかもしれませんが、真面目に努力してきました。だからどうぞ、わたしを天国に入れていのちの果実をいただけませんか」と。あなたはわたしがどのような人間を求めているかを知らなければならない。不純な人間は神の国に入ることを許されないし、また不純な人間が聖地を汚すことも許されない。あなたがたとえどれほど長くまたどれほど多くの働きを行ってきたとしても、最後のときになって未だ甚だしく汚れていれば、わたしの国に入ることは天の律法が許さないのである。世の初めから今日まで、人がいかに取り入ろうとも、人がわたしの国に入るのにわたしが便宜を図ったことはない。これは天の掟であり、誰にも破ることは許されない。あなたはいのちを追い求めるべきである。今日、神に完全にされるであろう人間はペテロのような人であり、自分の性質の変化を追い求める人であり、そして喜んで神を証しし、被造物の本分を尽くそうとする人である。そのような人だけが神によって完全にされるのである。もしあなたが見返りだけを求め、自分のいのちの性質を変えることを追求めないのであれば、あなたの努力の一切は徒労に終わる。そしてこれは、不変の真理である。

あなたは、ペテロとパウロの本質の違いから、いのちを追い求めない人の努力は全て徒労に終わるということを知るべきである。あなたは神を信じ、神に付き従っているの

だから、心で神を愛さなければならない。自分自身の墮落した性質は脱ぎ捨て、神の望みを叶えることを追い求め、被造物としての本分を尽くさなければならない。あなたは、神を信じ付き従う以上、あなたの持つすべてを神に捧げ、自分の個人的な選択や要求は持たず、神の望みを満たすことを成し遂げるべきである。造られた者として自分を造った主に従うべきである。これは、あなたが元々自分を支配することができず、自分の運命を決める能力も持ち合わせていないからである。あなたは神を信じる者である以上、聖さと変化を追い求めるべきなのである。あなたは被造物であるから、本分を守り、自らの立場を守り、その本分を超えてはならない。これはあなたを束縛したり、教義によって抑えつけたりするものではなく、ひたすらあなたが本分を尽くすための道であり、義を尽くす人には必ず到達できる、また到達されるべき道である。ペテロとパウロの本質を比べてみれば、どのような方法で追い求めるべきかがわかる。ペテロとパウロが歩んだ道は、一つは完全に至る道であり、もう一つは淘汰に至る道であった。つまり両者は二つの異なる道を代表しているのである。いずれも聖霊の働きを受け、聖霊の啓きと照らしを受け、また両者とも主イエスから委されたものを引き受けたが、それぞれがもたらした実は違っていた。一方は実際に実を实らせ、もう一方は実を实らせなかった。あなたは両者の本質、働き、彼らが表面上で示してきたこと、そして彼らの結末から、どちらの道を選んで歩むべきなのかを知ることができなければならない。彼らは明らかに異なる二本の道を歩いた。パウロとペテロは、それぞれの道の典型的な例であり、初めからその二通りの道の特徴を示していた。パウロの経験では何が重要だったのか。そしてパウロはなぜ、神のものとされなかったのか。同時にペテロの経験では何が重要だったのか。彼はどのようにして完全にされることを経験したのか。彼ら二人が重要視した点を比べて見れば、神の求める人物像がどのようなものであり、神の心、神の性質が何であり、どのような人が最終的に完全にされるのか、どのような人が完全にされないのか、また、完全にされる人の性質、そして完全にされない人の性質はどのようなものかを知ることができる。これらの本質に関する問題点がペテロとパウロの経験の中に見て取れる。神が万物を造ったのだから、全ての被造物が神の支配の下に帰し、神の権威の下に従うようにする。また神は万物を采配し、万事が神の手の中にある。動物、植物、人類、山や川、湖を含む、あらゆる被造物が神の権威の下に帰さなくてはならない。天の万物と地上の万物が神の権威の下に帰さねばならない。他に選択肢はなく、皆が神の指揮に従わなければならない。これは神によって定められたことであり、神の権威でもある。神はすべてをつかさどっていて、万物を整えて秩序立て、神の心に沿って、万物をその種類に従ってそれぞれの場所に配置した。どのような大きなものでも、神に

勝るものは存在せず、万物は神の造った人類に仕え、あえて神に逆らったり神に何か要求したりするものは一つもない。よって人も、被造物としてその本分を尽くさなければならない。人が万物の主人であろうが管理者であろうが、また万物の中で人の地位がどれほど高かろうが、所詮は神の支配下における小さな一人の人間であり、小さな人間または被造物以上ではなく、決して神を超えることはできない。人は、被造物としてその本分を尽くすこと、そして他の選択肢を持たないで神を愛することを追い求めるべきなのである。それだけ神は人に愛される価値があるのである。神を愛することを追い求めるのであれば、それ以外の個人的な利益あるいは望みを追い求めてはならない。そしてこれが追求の最も正しい形である。あなたが追い求めるものが真理であり、実践することが真理であり、それによってあなたが得るものが自分の性質の変化であるなら、あなたが歩む道は正しいのである。もしあなたが追い求めるものが肉的な祝福であり、実践するものが自分の観念の中にある真理であり、自分の性質に変化がなく、また肉において神に全く従わず、未だ曖昧さの中に生きているのであれば、あなたの追い求めるものはあなたを確実に地獄へと導くであろう。なぜなら、あなたの歩む道は失敗の道だからだ。あなたが完全にされるか排除されるかは、あなた自身の追求にかかっている。つまり、成功するかどうかはその人の歩む道にかかっていると言える。

神の働きと人の働き

人の働きのうちどのくらいを聖霊の働きが、どのくらいを人の経験が占めているのか。今でさえ、人はこれらの問題を理解していないと言えるかもしれないが、その理由は人が聖霊の働きの原則を理解していないからである。わたしが「人の働き」と言うとき、聖霊の働きを持つ人の働き、あるいは聖霊に用いられている人の働きのことをもちろん指している。人の意志から生じる働きのことではなく、聖霊の働きの範囲内にある使徒、働き手、あるいは普通の兄弟姉妹の働きのことを指しているのである。ここで言う「人の働き」とは、肉となった神の働きではなく、聖霊が人に行う働きの範囲と原則のことである。この原則は聖霊の働きの原則と範囲であるが、肉となった神の働きの原則と範囲とは異なる。人の働きには人の本質と原則があり、神の働きには神の本質と原則がある。

聖霊の流れにおける働きは、それが神自身の働きであろうと、用いられている人の働きであろうと、聖霊の働きである。神自身の本質は霊であり、聖霊あるいは七倍に強化された霊と呼ぶことができる。とにかく、それは神の霊であり、時代によって神の霊は

異なる名前で呼ばれてきた。それでもその本質は一つである。したがって、神自身の働きが聖霊の働きである一方、肉となった神の働きは働いている聖霊に他ならない。用いられている人の働きも聖霊の働きである。しかし、神の働きは聖霊の完全な表現であり、絶対に真実である一方、用いられている人の働きには多くの人間的なものが混ざっており、聖霊の直接的表現ではなく、ましてや完全な表現ではない。聖霊の働きはさまざま、いかなる条件にも制限されない。聖霊の働きは人によって変化し、異なる本質を示すとともに、時代により異なり、国によっても異なる。もちろん、聖霊は多くの異なった方法で多くの原則に従って働くにもかかわらず、働きがどのように、どのような人に行われようと、その本質は常に異なる。異なる人に行われる働きにはすべて原則があり、すべては働きの対象の本質を表すことができる。これは聖霊の働きの範囲がはっきり限定されており、かなり慎重だからである。受肉した肉において行われる働きは、人を対象とする働きと同じではなく、その働きも対象の人の素質に従って変化する。受肉した肉でなされる働きは人には行われず、人間の姿をした肉では、人への働きとは同じではない。簡潔に言えば、どのように行われようとも、異なる対象に対してなされる働きは決して同じではなく、働きの原則も働きの対象であるさまざまな人の状態や本性に応じて異なってくる。聖霊は人の本来からある本質に基づいてさまざまな人に働きかけ、その本質を越える要求はせず、その人に本来備わっている素質を越える働きかけもしない。そこで、聖霊の人への働きによって、人はその働きの対象の本質を知ることができる。人に本来備わっている本質は変化しないし、人に本来備わっている素質は限られている。聖霊は人の素質の限界に応じて人を用いるか、あるいは人に対して働き、人が働きから恩恵を受けられるようにする。用いられる人に聖霊が働きかけるとき、その人の才能も生まれながらの素質も解き放たれ、保留されることはない。その人の生まれながらの素質は働きに役立たせるために引き出される。聖霊は働きにおいて成果を達成するために人の利用できる部分を使って働くと言ってもいいかもしれない。対照的に、受肉した肉において行われる働きは聖霊の働きを直接表し、人間の心や考えが混じり込んでいることはない。また、人の賜物や経験、あるいは生来の条件はそれに到達できない。聖霊の無数の働きはすべて、人に恩恵を与え、啓発することを目指している。しかしながら、完全にされる人もいれば、完全にされるための条件を持っていない人もいる。つまり、後者は完全にされることはなく、救われることなど到底なく、聖霊の働きを持っていたかもしれないが、最終的には取り除かれることになる。すなわち、聖霊の働きは人を啓発することだが、聖霊の働きを持った人すべてが余すところなく完全にされるということとはできない。なぜなら、多くの人が追求する道は完全にされることを目指す

道ではないからである。彼らは聖霊からの一方的な働きを持っているだけで、主観的な人間の協力も正しい人間の追求ももたない。そのため、このような人への聖霊の働きは完全にされる人の役に立つことになる。聖霊の働きは人には直接見えず、直接触れることもできない。それは働きの賜物を持つ人にだけ表現することができる。つまり、聖霊の働きは人が行う表現を通して追隨者に与えられるのである。

聖霊の働きはさまざまな種類の人や多くの異なる条件によって達成され、完成される。肉となった神の働きは一つの時代全体の働きを表わすことができ、一つの時代全体に人が入っていくことを表すことができるが、人の入りに関する詳細に作用する働きはやはり、肉となった神ではなく、聖霊に用いられている人が行う必要がある。つまり、神の働き、あるいは神自身の職分は肉となった神の働きであって、神の代わりに人が行うことはできない。聖霊の働きは多くの異なる種類の人を通して完成される。ただ一人の人が全体を達成したり、完全に表したりすることはできない。教会を導く人たちも完全に聖霊の働きを表すことはできない。彼ら是指導的働きがいくらかできるだけである。このように、聖霊の働きは三つの部分、すなわち、神自身の働き、用いられている人たちの働き、聖霊の流れの中にいるすべての人に作用する働きに分けることができる。神自身の働きは時代全体を導くことである。用いられている人たちの働きは、神が働きを行った後に送り出されたり、任務を受けたりすることによって神の追隨者全員を導くことであり、彼らは神の働きに協力する人である。流れの中にいる人たちに作用する聖霊の働きは、その働きをすべて維持すること、すなわち、経営全体と証しを維持し、それと同時に完全にされることのできる人たちを完全にすることである。これら三部分が一緒になって聖霊の完全な働きとなるが、神自身の働きがなければ、経営の働きはすべて停滞してしまうであろう。神自身の働きは全人類の働きを含み、時代全体の働きも表す。すなわち、神自身の働きは聖霊の働きにおけるあらゆる動態と傾向を表す一方で、使徒の働きは神自身の働きの後に来てそれに続き、時代を導くことも一つの時代全体における聖霊の働きの傾向を表すこともない。彼らは人がなすべき働きをするだけで、それは経営の働きとは何の関係もない。神自身の働きは、経営の働き内の事業である。人の働きは用いられている人たちの本分でしかなく、経営の働きとは何の関係もない。正体と働きの表すものが異なるため、どちらも聖霊の働きであるという事実にもかかわらず、神自身の働きと人の働きの間には明確で実質的な違いがある。さらに、異なる正体をもつ対象への聖霊の働きの程度もさまざまである。これらが聖霊の働きの原則と範囲である。

人の働きは人の経験と人間性を意味する。人が提供するものと人が行う働きは人を表す。人の見識、論法、論理、豊かな想像力はすべて人の働きに含まれる。人の経験は特に人の働きを意味することがあり、ある人の経験はその働きの構成要素になる。人の働きはその人の経験を表すことがある。人が消極的な経験をする、その人の交わりにおける言語のほとんどは消極的要素で構成される。その人の経験がしばらくのあいだ積極的で、とりわけ積極的な側面に道を獲得していれば、その人の交わりは極めて励みになり、他の人たちはその人から積極的な施しを得られる。働き手がしばらくのあいだ消極的になれば、その人の分かち合いはいつも消極的要素を含む。このような交わりは重苦しいもので、他の人たちはその人の話の後は無意識のうちに気が滅入ってしまう。追随者の状態は導き手の状態によって変化する。働き手が内面はどのような人であれ、それがその人の表現するものであり、聖霊の働きは人の状態とともに変化するが多い。聖霊は人の経験に従って働き、人を強要せず、人の通常の経験過程に応じて要求を出す。すなわち、人の分かち合いは神の言葉とは違うのである。人の分かち合うものはその人の個人的見識や経験を伝え、神の働きに基づいたその人の見識や経験を表す。人の責任は、神の働きや談話の後で、そのうちの何を実践し何に入っていくべきかを見つけ、それを追随者に伝えることである。したがって、人の働きは人の入りと実践を表している。もちろん、そのような働きには人の教訓と経験、あるいは人間的考えもいくらか混入している。聖霊がどのように働こうとも、聖霊が人に働き掛けようとも、肉となった神において働こうとも、働き手は必ず自分が何であることを表わすことになる。働くのは聖霊であるが、働きは人の本質を基盤としている。なぜなら聖霊は基盤なしには働かないからである。言い換えれば、働きが無から生じることはなく、いつも実際の状況や現実の条件に応じて行われる。このようにしてのみ、人の性質は変化することができ、人の古い観念や思考も変えることができる。人が表すものは人が見、経験し、想像できるものであり、それが教義あるいは観念であっても、人の思考により到達可能である。人の働きは大きさに関係なく、人の経験、見るもの、想像あるいは構想の範囲を越えることはできない。神が表すものはすべて神自身そのものであり、これは人には達成できない。つまり、人の考えの及ばないものである。神は全人類を導くという働きを表し、これは人の経験の詳細とは関係なく、むしろ神自身の経営に関係している。人が表現することは人の経験であり、神が表現することは神の存在そのものである。それは神に固有の性質であり、人には届かないものである。人の経験は、神が表した神の存在に基づいて獲得した人の見識や認識である。このような見識や認識は人の存在と呼ばれる。人の表現の基盤は人に本来備わっている性質や素質である。そのため、それも人の存在と呼

ばれるのである。人は自分が経験するものや見るものを分かち合うことができる。経験したことも、見たこともないもの、あるいは思考が到達できないもの、自分の心の中にないものについて話せる人は誰もいない。人が表すものが経験に由来していなければ、それは想像あるいは教義である。簡単に言うと、その言葉には現実性がない。社会の物事と接触がなかったなら、社会の複雑な関係について明確に話すことはできないであろう。家族がないのに、他の人たちが家族問題について話していたら、その話の大半を理解できないであろう。だから、人が話すことや行う働きは、その人の内面存在を表すのである。誰かがその人が刑罰や裁きをどのように理解しているかを話しているのに、あなたにその経験がないならば、あなたはその人の認識を厚かましくも否定しないであろうし、ましてや100%それについて確信することもない。それは、その人が交わることはあなたが一度も経験したことのないもの、あなたが知らないもので、あなたの思考では想像できないものだからである。その人の認識からあなたが得られることは、将来において刑罰や裁きを経験するための道だけである。しかし、この道は教義的な理解になりえるだけで、あなた自身の認識に取って代わることはできないし、ましてや経験に取って代わることは到底できない。その人の言うことをまったく正しいとあなたは思うが、自分で経験すれば、多くの点でそれが実行不可能であるとわかるかもしれない。耳にすることの一部は完全に実行不可能だと感じるかもしれない。話を聞いた時点では、それについて観念を抱き、受け入れはするが、しぶしぶ受け入れるだけであるが、自分が経験してみると、観念の源となった認識があなたの実践方法になり、実践すればするほど、聞いた言葉の本当の価値と意味をあなたは理解するようになる。自分で経験をした後は、経験したことから得ているはずの認識について話すことができる。さらに、認識が現実的で実際的な人と、認識が教義に基づいていて価値がない人を区別できるようにもなる。そこで、表明する認識が真理と一致するかどうかは、その実際的経験があるかどうか大いに左右される。経験に真理があるならば、その認識は実際的で価値がある。経験を通して識別力や洞察をも得ることができ、認識を深め、いかに行動すべきかということに関して知恵と常識を増すことができる。真理を所有していない人が表す認識は、どれほど高尚であろうと、教義である。この種の人には肉体の問題に関して言えば非常に賢明かもしれないが、霊的問題になると区別することができない。そのような人は霊的な事柄の経験がまったくないからである。その人は霊的問題においては啓かれておらず、霊的な事柄を理解していない。どのような認識を表していようと、それがあなたの存在そのものである限り、それはあなたの個人的経験であり、本当の認識である。教義しか話さない人、つまり真理も現実も所有していない人が話すことも、その人の存

在そのものと呼ぶことができる。なぜならその人の教義は深い熟考を通してのみたどりついたもので、深い思考の結果だからである。とは言え、それはただの教義であり、想像以外のなにものでもない。様々な人の経験は、その人の内部にあるものを表している。霊的経験のない人は誰も真理の認識について話すことはできず、さまざまな種類の霊的な事柄についての正しい認識についても話すことはできない。人が表すものは、その人の内なるものであり、それは確かである。霊的な事柄や真理の認識を得たいと願うなら、本当の経験を持たなければならない。人間の生活における常識について明確に話すことができなければ、霊的な事柄について話すことなどどうしてできようか。教会を導くことができ、人々にいのちを与えることができ、人々の使徒になることができる人には実際の経験がなくてはならない。また、霊的な事柄を正しく理解し、真理の正しい認識と経験もなくってはならない。そのような人だけが教会を導く働き手、あるいは使徒となる資格を有する。さもなければ、最も小さき者として後に従うことができるだけで、導くことはできず、ましてや人々にいのちを与える使徒になることはできない。使徒の役割は走りまわったり、戦ったりすることではなく、いのちの世話をする働きをし、性質の変化において他の人たちを導くことだからである。この役割を果たす人は重い責任を背負う任務を与えられていて、これは誰もが背負えるわけではない。この種の働きはいのちを持つ人、すなわち真理の経験を持つ人のみが請け負うことができる。ただ何かを諦めることのできる人、走りまわれる人、自分自身を喜んで費やすことができる人ならばできるということはない。真理の経験のない人、刈り込まれたり裁きを受けたりしたことのない人はこの種の働きを行うことはできない。経験のない人は現実性がないが、現実をはっきり見ることはできないのは、彼ら自身にこのような本質がないからである。つまり、この種の人是指導的な働きができないだけでなく、長期間にわたり真理を得ないままであれば、排除の対象になる。あなたが表す見識は、あなたが人生で経験してきた困難、どのようなことで刑罰を受けたか、どのような問題で裁きを受けたかの証拠になりえる。これは試練にもあてはまる。人がどこを精錬されるか、どこが弱いかが、人が経験をする場所、道を得る場所である。たとえば、結婚で挫折に苦しむ人は、「神に感謝。神を称えよ。わたしは神の心の願望を満足させ、わたしの人生の全てを捧げ、結婚をすっかり神の手に委ねなければならない。わたしは喜んで全人生を神に差し出します」のようによく言う。人の中にあるすべてのものは、交わりを通してその人そのものを表すことができる。話す速さ、大声で話すか、静かに話すかなど、このようなことは経験に関係なく、その人の持つものやその人そのものを表すことはできない。その人の性格の良し悪し、あるいは本性の良し悪しを表すだけで、その人に経験があるかどうか

かと同一視することはできない。話すとき自分自身を表現する能力、または話す技量や速度は練習の問題であって、経験と置き換えることはできない。個人的経験について話すとき、あなたは自分が重要と思うことや自分の内なるすべてについて話す。わたしの話はわたしの存在を表すが、わたしの言うことは人の力の及ぶものではない。わたしの言うことは人が経験することではなく、人に見えるものではない。それはまた、人が触れることができるものでもなく、わたしそのものである。わたしが話すことはわたしが経験したものであることだけは認めるが、それが聖霊の直接的表現であることを認識しない人がある。もちろん、わたしの言うことはわたしが経験したことである。六千年にわたり経営の働きをしてきたのはわたしである。人類創造の初めから今に至るまで、わたしはあらゆることを経験してきた。わたしがそのことについて語れないわけがあるろうか。人の本性といえば、わたしははっきり見たし、長いあいだ観察した。それについて明確に語れないわけがあるろうか。人の本質を明確に見てきたので、わたしには人を罰したり裁いたりする資格がある。人はすべてわたしから来たのに、サタンに墮落させられたからである。もちろん、わたしはこれまでわたしが行ってきた働きを評価する資格もある。この働きはわたしの肉が行うことではないが、霊の直接的表現であり、これはわたしが持っているもの、わたしそのものである。したがって、それを表し行うべき働きを行う資格がわたしにはある。人が言うことは自分が経験してきたこと、見てきたもの、人の精神が到達できるもの、人の感覚で探知できるものである。これが人が語ることができるものである。神の受肉にした肉が語る言葉は霊の直接的表現であり、それらは霊によってなされた働きを表す。肉はそれを経験しても見てもいないが、それでも神はその存在を表す。その肉の本質は霊であり、神は霊の働きを示すからである。肉では到達できなくても、それは霊によってすでに行われた働きである。受肉のあと、肉の表現を通して神は人に神の存在を知らしめ、人に神の性質、ならびに神がした働きが見えるようにする。人の働きによって、人は自分が何に入っていく、何を理解するべきかをさらに明確にすることができる。それには、真理を理解し経験する方向に人々を導くことが含まれる。人の働きは人々を支えることである。神の働きは人類のために新しい道と新しい時代を開き、普通の人間には知られていないことを人々に明らかにし、神の性質をわからせることである。神の働きは全人類を導くことである。

聖霊の働きはすべて、人に恩恵を与えるためになされる。すべて人を啓発することである。人に恩恵をもたらさない働きはない。真理が深かろうと浅かろうと、また、真理を受け入れる人の素質がどうであろうと、聖霊が何をしようと、それは人に有益である

。しかし、聖霊の働きは直接行うことはできず、聖霊と協力する人を通して表現されなければならない。このようにしてのみ、聖霊の働きの成果が得られる。もちろん、聖霊が直接働きを行うのであれば、そこに混ぜ物は一切入っていない。しかし、聖霊が人を通して働きを行なうと、非常に汚れてしまい、聖霊本来の働きではなくなる。そのため、真理はさまざまな程度に変化する。追随者は聖霊の本来の意図ではなく、聖霊の働きと人の経験および認識の結合したものを受け取る。追随者が受け取るもののうち、聖霊の働きである部分は正しい。一方、彼らが受け取る人の経験と認識は、働き手により異なる。聖霊に啓かれ導かれる働き手は、この啓きと導きに基づいて経験をする。この経験において、人の精神と経験、さらには人間性の本質が結合し、その後、人は持つべき認識と見識を獲得する。このように、人は真理を経験した後に実践する。人により経験は異なり、経験する事柄も同じではないので、この実践方法はいつも同じとは限らない。こうして、聖霊に同じように啓かれても、認識や実践が異なる結果になるのは、啓きを受ける人が異なるからである。実践中にあまり間違いを犯さない人もいれば、大きな間違いを犯す人もいるし、なかには間違いしか犯さない人もいる。これは人の理解力の差であり、またその人に本来備わっている素質も異なるからである。ある言葉を聞いて、ある意味に理解する人もいれば、真理を聞いて別の意味に理解する人もいる。少し逸れる人もいれば、真理の本当の意味をまったく理解しない人もいる。したがって、人が他の人たちをどのように導くかは、その人の理解によって決まる。これがまさしく本当であるのは、人の働きはその存在を表すからである。真理を正しく理解している人に導かれた人たちは、やはり真理を正しく理解する。理解に誤りがある人もいるが、それはごくわずかであり、すべての人が誤った理解をするわけではない。真理の理解に誤りがあれば、その人に従う人たちにも疑いなく誤りがあり、このような人たちはあらゆる意味において誤っている。追随者がどの程度真理を理解するかは、おもに働き手によって決まる。もちろん、神からの真理は正しく、間違いはなく、それは絶対的に確かである。しかし、働き手は完全に正しいわけではなく、完全に信頼できるとは言えない。働き手が非常に実際的な真理の実践方法を持っていれば、追随者も実践方法を持つ。働き手が真理の実践方法を持たず、教義しか持ち合わせていなければ、追随者には現実性がまったくなくことになる。追随者の素質と本性は生まれながらに決まっていて、働き手との関連性はない。しかし、追随者がどの程度真理を理解し、神を知るかは働き手次第である（これは一部の人だけに当てはまる）。働き手がどのような人であるかによって、その人の導く追随者がどのような人であるかも決まる。働き手が表すことはその人自身の存在であり、余すところなく表す。働き手が追随者に出す要求は、その人自身が達成した

いこと、達成できることである。追隨者にはまったく達成できないことが多々あるにもかかわらず、そして達成できないことが入りへの障害になるにもかかわらず、働き手のほとんどが自分がすることに基づいて追隨者に要求を出す。

刈り込み、取り扱い、裁き、そして刑罰を経験した人の働きには逸脱がずっと少なく、その働きの表現はずっと正確である。働きにおいて自分のありのままの特質に依存している人はかなり重大な間違いを犯す。まだ完全にされていない人の働きには、その人自身のありのままの特質が過剰に表され、それが聖霊の働きへの大きな障害となる。素質がいかに優れていようと、人が神に託された働きを行なえるようになるには、刈り込みと取り扱いと裁きを経験しなければならない。そのような裁きを受けていない人の働きは、どれほど立派に行われても、真理の原則と一致することはできず、常にその人自身がもつ本来の自然さの産物であり、また人間的な善良さである。刈り込み、取り扱い、そして裁きを受けた人の働きは、刈り込みや取り扱いや裁きを受けたことのない人の働きよりもはるかに正確である。裁きを受けなかった人は、人間の肉と考えしか表現せず、それには人間的知力と生まれながらの才能がかなり混ざっている。これは人が神の働きを正確に表現したものではない。このような人に従う人たちは、その人の生まれながらの素質ゆえにその人のところに来る。その人は人間の見識や経験を過剰に表し、しかもそれは神の本来の意図とはほとんど切り離され、あまりにも逸脱しているので、この種の人の働きでは人々を神の前に連れてくることはできず、むしろ人間の前に連れてきてしまう。そのため、裁きや刑罰を受けていない人には神に託された働きを実行する資格がないのである。資格のある働き手の働きは人々を正しい道に連れてくることができ、真理へのさらなる入りを与える。このような人の行う働きは人々を神の前に連れて行くことができる。そのうえ、その働きは一人ずつ異なることがあり、規則にとらわれず、人に解放と自由、いのちにおいて徐々に成長する能力を与え、真理へさらに深く入って行くことを可能にする。資格のない働き手の働きははるかに不十分である。その働きはばかげている。そのような働き手は人を規則にはめ込むだけで、人に要求することは個別に変化しない。その働きは人の実際の必要性に沿わない。この種の働きには規則や教義があまりにも多く、人を現実性に連れて行くことも、いのちにおける成長の正常な実践に至らせることもできない。人にわずかな価値のない規則を守らせることができるだけである。この種の指導は人を迷わせるだけである。このような働き手はあなたが自分に似たものになるように導く。その人が持っているものや彼そのもののものにあなたを引き込むこともある。指導者に資格があるかどうかを追隨者が見定める秘訣は、導く

道と指導者の働きの結果に目を向けること、および追随者が真理に従った原則を受け取るかどうか、変化をとげるのにふさわしい実践方法を受け取るかどうかを見ることである。あなたはさまざまな人によるさまざまな働きを識別しなければならない。愚かな追随者になってはならない。これは人の入りに関係することである。どの人の指導には道があり、どの人の指導にはないかを見極めることができなければ、簡単に惑わされることになる。このことはすべてあなた自身のいのちに直接関連している。完全にされていない人の働きには本来の性格が多すぎる。あまりにも多くの人間の意志が混ざっている。彼らの存在は本来の性格、持って生まれたものである。取り扱いを経験した後のいのちでも、変えられたあとの現実でもない。どうしてこのような人がいのちを追求している人々を支えることができるであろうか。人の本来のいのちはその人の持って生まれた知性あるいは才能である。この種の知性あるいは才能は、神が人に的確に要求するものとはほど遠い。人がまだ完全にされておらず、その墮落した性質が刈り込まれても取り扱われてもいなければ、その人が表すものと真理の間には大きな隔たりがある。人が表すものは人の想像や一方的経験など、あいまいな事柄と混ざり合っている。そのうえ、その人がどのように働くかに関係なく、人々は全体的目的やすべての人が入っていくべき真理などはないと感じている。人への要求の大半は、その能力を超える。これは止まり木に追い立てられるアヒルを思わせる。これは人間の意志の働きである。人の墮落した性質、人の考えや観念は人体のあらゆる箇所に浸透している。人は真理を実践する本能を生まれながらに持っておらず、真理を直接理解する本能もない。それに人の墮落した性質を合わせれば、この種の自然のままの人が働くと、妨害を生じさせないであろうか。しかし、完全にされた人は、人が理解すべき真理を経験しており、人の墮落した性質を知っている。そのため、その人の働きにおける漠然として非現実的な事柄は次第に減少し、人間的なものによる汚れは少なくなり、その人の働きと奉仕は神が求める基準に近づいていく。こうして、その人の働きは真理の現実に入っており、また現実的になっている。特に人の思考にある考えは聖霊の働きを妨害する。人には豊かな想像力と合理的論理があり、また物事を取り扱ってきた長い経験がある。人間のこのような側面が刈り込みと修正を受けなければ、それはすべて働きの障害である。したがって、人の働き、特にまだ完全にされていない人の働きは、正確さについては最高規準に到達することはできないのである。

人の働きはある範囲内にとどまり、限界がある。一人の人ではある一段階の働きしかできず、時代全体の働きをすることはできない。さもないと、その人は他の人たちを

規則の中へと導くであろう。人の働きはある特定の時間または段階にしか適用できない。人の経験には範囲があるからである。人の働きを神の働きと比較することはできない。人の実践方法と真理の認識はすべて特定の範囲に当てはまる。人が歩む道は完全に聖霊の意志であると言うことはできない。人は聖霊に啓かれることができるだけで、聖霊で完全に満たされることはできないからである。人が経験できることはすべて通常の人間性の範囲内にあり、通常の人間の心にある考えの範囲を越えることはできない。真理の現実を生きられる人はみなこの範囲内で経験する。人が真理を経験するとき、それはいつも聖霊に啓かれた通常の人間生活の経験であり、通常の人間生活から逸脱した方法による経験ではない。人は人間生活を生きている基盤の上で聖霊に啓かれた真理を経験する。そのうえ、この真理は人によって異なり、その深さは人の状態に関連している。人が歩む道は真理を追求する人の通常の人間生活であり、その道は聖霊に啓かれた通常の人間が歩む道と呼んで差し支えないと言えるだけである。人が歩む道は聖霊が歩む道であるは言えない。通常の人間の経験では、追求する人は一人ひとり異なるので、聖霊の働きも異なっている。さらに、人が経験する環境や経験の範囲は同じではなく、人の精神や考えが混ざり合うため、その経験もさまざまな程度に混ざり合っている。各人は個々の異なる条件に従って真理を理解する。真理の本当の意味を完全に理解することはなく、真理の側面のうち一つだけ、あるいはいくつかを理解するにすぎない。人が経験する真理の範囲は各人の条件に沿って一人ひとり異なる。こうして、同じ真理についての認識でも、異なる人が表せば同じにはならない。つまり、人の経験にはいつも限界があり、聖霊の意志を完全に表すことはできず、たとえ人の表すものが神の心意にかなり一致していても、たとえ人の経験が聖霊による人を完全にする働きに非常に近くても、人の働きを神の働きとみなすこともできない。人は神の僕にすぎず、神に任せられた働きしかできない。人は聖霊に啓かれた認識や自分の個人的経験から得た真理しか表すことはできない。人は無資格で、聖霊の窓口となる条件を満たさない。人の働きは神の働きであると人が言う資格はない。人には人の働く原則があり、すべての人には異なる経験があり、さまざまな条件がある。人の働きには聖霊に啓かれたその人の経験のすべてが含まれる。この経験は人の存在を表すだけで、神の存在あるいは聖霊の意志は表さない。したがって、人が歩む道は聖霊が歩む道と言うことはできない。なぜなら人の働きは神の働きを表すことはできず、人の働きと人の経験は聖霊の完全な意志ではないからである。人の働きは規則に陥りがちであり、その方法は限られた範囲に限定されてしまいがちで、人を自由な道に導くことはできない。ほとんどの追随者は限られた範囲内に住んでいて、彼らの経験する道も範囲が限られている。人の経験はいつも限られている

。人の働く方法も何通りかに限られており、聖霊の働きや神自身の働きと比較することはできない。人の経験が結局は限られているからである。神がどのように働きを行おうと、それは規則に縛られない。どのようになされようと、神の働きは唯一の方法に限られない。神の働きに規則はまったくなく、働きはすべて解放されており自由である。どれほど長い時間をかけて神に従おうとも、人は神が働く方法を司るいかなる規律も抽出することはできない。神の働きは原則に基づいているが、いつも新しい方法で行われ、いつも新しい進展があり、人の手の届く範囲を越える。一期間に神はいくつかの異なる種類の働き、人の異なる導き方を示すことがあり、人が常に新しい入りや新たな変化を達成できるようにする。神の働きの規律を見つけ出すことはできないのは、神がいつも新しい方法で働いているからである。このようにしてのみ、神の追随者は規則に縛られないで済む。神自身の働きはいつも人の観念を避け、無効にする。真の心で神に従い、神を追い求める人だけが性質を変えることができ、いかなる規則にもさらされず、いかなる宗教的観念にも束縛されず、自由に生きることができる。人の働きはその人自身の経験およびその人自身が達成できることに基づいて他の人に要求する。この要求の基準は一定の範囲内に限られており、実践方法も非常に限られている。したがって追随者は無意識のうちにこの限られた範囲内で生きることになる。時が経つにつれてそれは規則と儀式になる。一期間の働きを、神に直接に完全にされることを経験しておらず、裁きを受けていない人が導くと、その追随者はみな宗教家、神に抵抗する専門家になる。したがって、資格のある導き手は裁きを経験しており、完全にされることを受け入れた人でなくてはならない。裁きを経験していない人は、聖霊の働きを持っているとしても、曖昧で非現実的なことしか表せない。時が経つにつれて、このような人は他の人たちを曖昧で超自然的規則に導く。神が行う働きは人の肉と一致しない。人の考えとも一致せず、人の観念に反する。それは曖昧な宗教色で汚されていない。神の働きの成果は、神に完全にされていない人には達成不可能であり、人の考えの及ばないものである。

人の頭脳内の働きは人にはあまりにも容易に達成できる。たとえば、宗教界の牧師や指導者は自分の才能や立場に依存して働く。長い間彼らに従う人は、その才能に感化され、その存在の一部に影響を受ける。彼らは人の才能、能力、知識に重点を置き、超自然的なものや多くの深遠で非現実的な教義に注目する（もちろん、これらの深遠な教義は達成不可能である）。彼らは人の性質の変化に注目せず、むしろ人が説教し働くようになるような訓練に注目し、人の知識を向上させ豊富な宗教的教義を充実させようとする。人の性質がどのくらい変化するかや、人がどのくらい真理を理解しているかには注

目しない。彼らは人の本質には関心を持たず、ましてや人の通常の状態、異常な状態を知ろうとはしない。彼らは人の観念に反論せず、観念を明らかにもしないし、ましてや人の欠点や墮落を刈り込んだりはしない。彼らに従う人のほとんどは自分の才能をもって奉仕し、彼らが放つのは宗教的な観念と神学的な理論だけであり、それは現実とは離れており、人にいのちを与えることはまったくできない。実際、彼らの働きの本質は才能を育むこと、何もない人を、後に働いて他者を導くことになる有能な神学校卒業生に育てることである。六千年に及ぶ神の働において、あなたは何か規律を見つけ出すことができるのか。人が行う働きの中にはたくさんの規則や制限があり、人間の脳はあまりに教条主義的である。ゆえに、人が表すことはその人の経験の範囲内にある理解と認識であり、これから離れては人は何も表すことができない。人の経験あるいは認識は、生まれながらの才能や本能から生じるものではなく、神の導きと神の直接的牧養により生じる。人はこの牧養を受け入れる能力を持っているだけで、神性とは何であるかを直接表すことのできる能力は持っていない。人は源になることはできず、源から水を受ける器になれるだけである。これが人間の本能、人間として持つべき能力である。神の言葉を受け入れる能力を失い、人間の本能を失った人はもっとも貴重なものも失い、被造物である人としての本分を失う。神の言葉または神の働きについての認識や経験がない人は、その本分、つまり、被造物として行うべき本分を失い、被造物としての尊厳を失う。肉において表されようと、霊に直接表されようと、神性が何であるかを表すのは神の本能であり、これが神の職分である。人は自分自身の経験や認識（つまり自分は何であるかということ）を神の働きの間かその後に表す。これは人の本能であり本分であり、人が達成すべきことである。人の表現は神が表すものに遠く及ばないし、人の表すものは多くの規則に縛られているが、人は果たすべき本分を果たすべきであり、しなければならないことをしなければならない。自己の本分を果たすために人間的に可能なすべてを人はしなければならず、このことをほんの少しでさえもためらってはならない。

何年も働いた後、人は働いた年月の経験、ならびに蓄積してきた知恵と規則を総括する。長期間働いてきた人は、聖霊の働きの動向を感じとることができ、聖霊がいつ働き、いつ働いていないかを知っている。重荷を背負いつつ交わる方法を知っており、聖霊の働きの通常の状態、および人がいのちにおいて成長する通常の状態がわかっている。これが何年も働いてきて、聖霊の働きを知っている人である。長い間働いてきた人は確信をもって、急がずに話す。何も言うことがない時でさえ、落ち着いている。彼らは聖霊の働きを求めるために心の中で祈り続けることができる。彼らは働くことに熟練して

いる。長い間働き、多くの経験を積み、多くの教訓を学んできた人は、聖霊の働きを妨害するものを内面に多く持っている。これは長期間働いてきたことの欠点である。働き始めたばかりの人は人間的教訓や経験に汚染されておらず、とりわけ、聖霊がどのように働くかわからず当惑する。しかし、働いているうちに次第に聖霊の働き方を感じるようになり、聖霊の働きを得るためには何をすべきか、他の人たちの弱点を正確に指摘するには何をすべきか、また、働く人がもっているべき一般的知識にも気づくようになる。時間が経つと、働きに関するそのような知恵と一般的な知識を熟知するようになり、働くとき簡単に使うようである。しかし、聖霊が働き方を変えても、この人はまだ働きに関する古い知識と規則に固執し、働きの新しい動きについてはほとんど知らない。何年にもわたり働き、聖霊の臨在と導きが十分であれば、働きに関する教訓と経験がますます増え、この人はうぬぼれではなく自信に満たされる。言い換えれば、この人は自分の働きがすっかり気に入り、聖霊の働きについて得た一般的知識に非常に満足している。特に、他の人たちにはないことを自分は獲得していたり認識していたりするもので、この人はさらに自信を増す。この人の中の聖霊の働きは決して消し去ることはできない一方、他の人たちはこの特別な取り扱いを受ける資格がないように思われる。何年も働き、かなりの使用価値があるこのような人だけがそれを享受できるというわけである。このようなことは聖霊の新しい働きを受け入れることへの大きな障害になる。新しい働きを受け入れることができて、それは一夜にしてできることではない。受け入れる前にはいくつかの紆余曲折を必ず経験する。古い観念が取り扱いを受け、古い性質が裁きを受けなければ、この状況が徐々に逆転することはない。これらの段階を経由しなければ、この人がこだわりを失くし、古い観念とは一致しない新しい教えや働きを容易に受け入れることはない。これは人の取り扱いにおいてもっとも困難なことで、変えるのは容易ではない。働き手として聖霊の働きをただちに理解し、その動きを総括することができ、同時に自分の働きの経験にとらわれることなく、古い働きに照らして新しい働きを受け入れることができれば、その人は賢い人であり、働き手としての資格がある。人はしばしば、自分の働きの経験を要約できないまま数年間働くか、あるいは働きに関する自分の経験や知恵を総括した後、新しい働きを受け入れるのを妨げられ、新旧の働きを適切に理解することも、正しく取り扱うこともできないといった状態になる。人は実に扱いづらい。あなたがたのほとんどはこのようなものである。聖霊の働きを長年にわたり経験してきた人は新しい働きを受け入れるのが困難で、手放すことのできない観念に常に満ちている。一方、働き始めたばかりの人は働きに関する一般的知識に欠けており、もっとも単純な事柄をどのように処理すべきかさえわからない。あなたがたは本

当に扱いつらい。多少の年功がある人はとても誇り高く、うぬぼれが強いので自分の出自を忘れてしまう。そのような人はいつも若者を見下しているが、新しい働きを受け入れることができず、自分が何年にもわたり集め保持してきた観念を手放すことができない。若い無知な人は聖霊の新しい働きを少し受け入れることができ、非常に情熱的であるが、問題が起こると、うろたえてしまい、どうしたらいいかわからなくなる。熱心ではあるが無知なのである。聖霊の働きを少し知っているだけで、生活の中で使うことはできないので、それはまったく役に立たない教義でしかない。あなたがたのような人が多すぎる。何名くらいの人が用いられるのに適しているのか。聖霊の啓きと照らしに服従し、神の意志になんとか一致しようとするこのことができる人が何名いるのか。あなたがたのうち現在まで追随者だった人は非常に従順であったように思われるが、実際には自分たちの観念を諦めておらず、いまだに聖書の中を探し求め、曖昧なまま信じ、観念の中をさまよっている。今日の実際の働きを注意深く調べたり、奥深く探ろうとしたりする人は誰もいない。あなたがたは古い観念とともに今日の道を受け入れている。そのような信仰で何が得られるのか。あなたがたの中には明らかにされていない観念が数多く隠されていて、あなたがたはそれを隠そうとひたすらさまざまいい努力をしており、簡単にはそれを明らかにしないと言うことができるであろう。あなたがたは新しい働きを誠実に受け入れず、古い観念を諦めるつもりはない。あなたがたはあまりにも多くの処世哲学を持っていて、それはかなりの量である。古い観念を諦めず、いやいやながら新しい働きに取り組んでいる。あなたがたの心はあまりにも邪悪で、新しい働きの一步一步をまったく心に留めない。あなたがたのような放蕩者に福音を広める働きができるのか。あなたがたは全宇宙に福音を広める働きを引き受けることができるのか。あなたがたのこうした実践は、あなたがたが性質を変え、神を知るようになることを妨げている。このまま続ければ、あなたがたは必ず取り除かれることになる。

あなたがたは神の働きと人の働きを区別できなければならない。人の働きに何を見ることが出来るか。人の働きには人の経験による要素がたくさんある。人が表すものはその人の存在そのものである。神自身の働きも神の存在そのものを表すが、神の存在そのものは人の存在そのものとは異なる。人の存在そのものは人の経験や生涯を表し（生涯においてその人が経験し遭遇するもの、あるいはその人の処世哲学）、住む環境が異なれば、異なる存在そのものを表す。あなたに社会的経験があるか否か、家族の中で実際どのように生活し経験しているかは、あなたが表すものの中に見ることができるが、肉となった神の働きにおいて神に社会的経験があるか否かを見ることはできない。神は人

の本質を十分承知しており、あらゆる種類の人に関連するあらゆる種類の実践を明らかにすることができる。神は人間の墮落した性質や反抗的行動を明らかにするのはなおさら得意である。神は世俗的な人のそばには住まわないが、人間の本性や世俗的な人の墮落のすべてを承知している。これこそが神という存在である。神は世間を取り扱わないが、世間を取り扱う規則は知っている。なぜなら人間の本性を十分に理解しているからである。神は人の目には見えず、人の耳には聞こえない聖霊の働きについて、現在のものも過去のものも知っている。これには処世哲学ではない知恵や、人には到底理解できないふしぎも含まれている。これが人に開かれており、また隠されてもいる神という存在である。神が表すものは特別な人の存在そのものではなく、霊に本来備わっている特質と存在そのものである。神は世界中を巡回しないが、世界のすべてを知っている。神は知識も識見もない「類人猿」と接触するが、知識よりも高く、偉人を超える言葉を語る。人間性がなく、人間の慣習や生活を理解しない鈍感で頭の鈍い人の集団の中で神は暮らすが、人類に通常の人間性を生きるよう要求し、同時に人類の卑劣で粗野な人間性を明らかにすることができる。このすべてが、いかなる生身の人間の存在よりも高い、神という存在である。行うべき働きを行い、墮落した人類の本質を余すところなくに明らかにするために、複雑でめんどろで浅ましい社会生活を経験することは神にとって不必要である。浅ましい社会生活は、神の肉を啓発しない。神の働きと言葉は人の不従順を明らかにするだけで、人に世界と取り組むための経験や教訓を与えはしない。神が人にいのちを与えると、社会や人の家族を調べる必要はない。人を暴き裁くことは、神の肉の経験を表現することではない。それは神が人の不従順を長いこと知り、人類の墮落を忌み嫌った果てに、人の不義を明らかにすることである。神が行う働きはすべて、神の性質を人に明らかにし、神であることを表すことである。この働きができるのは神のみであり、生身の人ができることではない。神の働きから、人は神がどのような存在であるかはわからない。神の働きに基づいて被造物の人として神を分類することも不可能である。神という存在もまた、被造物の人として神を分類できないようにしている。人は神を人間でない存在と考えるしかなく、どの範疇に神を入れるべきかわからない。そのため人は神を神の範疇に入れざるをえない。こうすることは人にとって不合理なことではない。なぜなら、神は人には行うことのできない多くの働きをしてきたからである。

神が行う働きは、神の肉の経験を表すのではない。人が行う働きは人の経験を表す。誰もが自分の個人的経験について話す。神は直接真理を表すことができる一方、人は真

理を経験したことに対応する経験を表せるだけである。神の働きに規則はなく、時間や地理的制約に支配されない。神はいつでも、どこでも自分の存在そのものを表すことができる。神は好きなように働く。人の働きには条件と状況がある。これなしには人は働くことはできず、神に関する認識や真理の経験を表すことができない。何かが神自身の働きであるか、人の働きであるかを見極めるためには、両方の違いを比較するしかない。神自身による働きがなく、あるのは人の働きのみであれば、人の教えは高度で、誰の能力も及ばないことがわかるだけである。人の話す調子、物事を扱う際の原則、経験豊かで落ち着いた働きの態度は、他の人たちには及ばないことがわかる。あなたがたはみな優れた素質と高尚な知識を持つこのような人を称賛するが、神の働きと言葉から神の人間性がどれほど高いか知ることはできない。それどころか、神は平凡であり、働くときは普通で現実的だが、人間には計り知れず、そのため、人はある種の畏敬の念を神に抱く。ある人は働きの経験が特に高度で、想像力や論理的思考も特に高度で、人間性が特に良いかもしれない。このような属性は人の称賛は得られても、畏敬の念や畏れを喚起することはできない。よく働くことができ、特に深い経験があり、真理を実践できる人は誰もが称賛するが、そのような人は畏敬の念を呼び起こすことは決してできず、称賛と羨望がせいぜいである。しかし神の働きを経験した人は神を称賛せず、その代わりに神の働きは人間には及ばず、人間には計り知れず、新鮮で素晴らしいと感じる。人が神の働きを経験すると、神について最初に得る認識は、神は計り知れず、知恵に満ちて素晴らしいということであり、人は無意識のうちに神を敬い、神の働きの奥義を感じる。それは人の理解の及ばないものである。人は神の要求に応じられること、神の願望を満たせることだけを望み、神を超えたいとは思わない。なぜなら、神の働きは人の考えや想像のおよばないものであり、人が神に代わって行うことなどできないからである。人自身も自分の欠点を知らないのに、神は新しい道を開拓して、人をさらに新しくさらに美しい世界へと伴い、それにより人類は新たに進歩し、新たに出発した。神に向かって人が感じるのは称賛ではなく、と言うよりは、称賛だけではない。人がもつもっとも深い経験は畏敬の念と愛であり、人の抱く感情は、神は実に素晴らしいということである。神は人にはできない働きを行い、人には言えないことを言う。神の働きを経験した人はいつも言葉では言い表せない感情を抱く。十分に深い経験をした人は神の愛を認識できる。このような人は神の素晴らしさを感じ、神の働きは知恵に満ち、極めて素晴らしいと感じることができ、それによって彼らの間に限りない力が生み出される。それは恐れでも偶発的な愛や尊敬ではなく、神の人への憐れみと寛容を深く感じることであり、しかし、神の刑罰と裁きを経験した人は神の威厳を感じ取り、神は一切の背きを許さな

いと感じる。神の働きを多く経験してきた人でさえ、神を完全に理解することはできない。本当に神をあがめる人はすべて、神の働きは人の観念とは一致せず、必ず人の観念に反することを知っている。人が神を全面的に称賛したり、神に服従しているように見せたりすることを神は必要とせず、むしろ人は真の畏敬の念を抱き、本当に服従すべきである。神の働きの大部分において、本当の経験を持つ人は誰でも神への畏敬の念を感じるが、それは称賛よりも高い。人は神の刑罰と裁きの働きによって神の性質を見た。したがって心の中で神を畏れる。神があがめられ、従われるのは、神の存在そのものと性質が被造物のものとは同じでなく、それを上回っているからである。神は独立的に存在しており、永遠であり、創造されていない存在であり、神のみが畏敬の念と従順を受けるに値する。人にはその資格がない。そのため、神の働きを経験し、本当に神を知る人はすべて神への畏敬の念を感じる。しかし、神についての観念を捨てない人、つまり断じて神を神とみなさない人は、神への畏敬の念をまったく抱かず、神につき従っていても征服されていない。彼らは生まれつき不従順である。神がこのように働くことで達成しようとしているのは、すべての被造物が創造主への恐れを持ち、創造主を崇拜し、無条件に神の支配に服従するようになることである。これが神のすべての働きが達成すべき最終的結果である。もしそのような働きを経験した人が、たとえ少しでも神を畏れず、もしその人の過去の不服従がまったく変わらなければ、その人は必ず取り除かれる。人の神に対する態度が遠くから称賛したり、尊敬の念を示したりするだけで、少しも神を愛さないならば、これは神を愛する心のない人の達する結果であり、その人は完全にされるための条件に欠けている。それだけの働きがあっても、ある人の真の愛を得られないならば、それはその人が神を獲得しておらず、心から真理を追求していないのである。神を愛さない人は真理を愛さず、したがって神を獲得することはできず、ましてや神の承認を得ることはできない。そのような人は、どのように聖霊の働きを経験しようとも、どのように裁きを経験しようとも、神を畏れることはできない。これは本性を変えることができない人、極めて邪悪な性質の人である。神をあがめない人はすべて取り除かれ、懲罰の対象になり、悪事を働く者と同様に罰せられ、不正なことをした人よりもはるかに苦しまなければならない。

神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である

人類を経営する働きは三つの段階に分けられるが、それは人類を救う働きが三つの段

階に分けられることを意味している。これら三つの段階には、天地創造の働きは含まれず、むしろ、律法の時代、恵みの時代、そして神の国の時代の三つの段階の働きのことである。天地創造の働きは、人類全体を創り出す働きであった。それは人類を救う働きではなく、人類を救う仕事には関係がなかった。なぜなら、天地創造の時、人類はサタンによって墮落させられておらず、人類を救う働きを実行する必要がなかったからである。人類を救う働きは、人類がサタンに墮落させられた後によりやく始まり、そこで人類を経営する働きも人類が墮落させられた後によりやく始まったのである。言い換えれば、人を経営する神の働きは、人類を救う働きの結果として始まったもので、天地創造の働きから生じたものではない。人類が墮落した性質を持つようになったあと初めて、経営の働きが存在するようになった。だから人類を経営する働きは、四つの段階もしくは四つの時代というよりも三つの部分を含むのである。これこそが人類を経営する神の働きへの正しい言及の仕方である。最後の時代が終わるとき、人類を経営する働きは完全に終わっている。経営の働きの終結は、人類すべてを救う働きが完全に終了し、人類がその旅路の終わりに到達したことを意味する。人類全てを救う働きがなければ、人類を経営する働きも存在しないし、三つの段階の働きもないだろう。それは正に人類の墮落ゆえに、また人類がそれほど性急に救いを必要としていたがために、ヤーウェは天地創造を終わらせ、律法の時代の働きを始めたのである。そうして初めて、人類を経営する働きが始まったのだが、それはつまり、人類を救う働きもそこで初めて始まったことを意味する。「人類を経営する」とは、新たに造られた地上の人類（つまり、まだ墮落させられていない人類）の生活を導くという意味ではない。むしろそれは、サタンによって墮落させられた人類の救いであり、つまりは、この墮落した人類を変化させることである。これが人類を経営することの真意である。人類を救う働きが天地創造の働きを含まないのだから、人類を経営する働きも天地創造の働きを含まず、ただ天地創造とは別の三つの段階の働きだけが含まれる。人類を経営する働きを理解するには、三つの段階の働きの歴史を知ることが必要であるが、これは、救われるために、すべての人が知っていなければならないことである。被造物としてあなたがたは、人は神によって造られたということを認識しなければならないし、人類の墮落の源、さらには人の救いの過程を認識しなければならない。あなたがたがもし、神に喜ばれるために教理に従って行動することだけは知っているが、神がいかにして人類を救うかに関して、あるいは人類の墮落の源を少しも知らないのであれば、あなたがたには被造物としてこの部分が欠けているのである。あなたは、神の経営する働きのより幅広い範囲を知らないままでいるのに、それらの実践できる真理を理解するだけで満足してはならないし、もしそうなら

、あなたは教条的すぎるということになる。三つの段階の働きは、神による人の経営の内部事情であり、全宇宙の福音の到来であり、全人類における最大の奥義であり、また福音を述べ伝えることの基盤でもあるのだ。もしあなたが自分のいのちに関係する単純な真理を理解することだけに集中し、この最大の奥義とビジョンに関しては一切知らないとするば、あなたのいのちは、ただ眺めること以外に役に立たない不良品と言えるのではないか。

もし人が実践することだけに集中し、神の働きと人の認識を二次的なものとするならば、大したことの無い詳細にこだわりすぎて重要なことを見過ごすことと同じではないのか。あなたは、認識すべきことは認識すべきであり、実践すべきことは実践しなければならない。そうして初めてあなたは真理をどのように追及すべきか知る人になるのだ。あなたが福音を述べ伝える日が来た時、「神は偉大な正義の神であり、神は最も優れた神であって、いかなる偉大な人も比較できる者がおらず、それ以上に高い者もない……」ということしか言えず、これらの見当違いで上辺だけの言葉しか言えず、非常に重要で中身のある言葉を全く話すことができず、神を認識すること、あるいは神の働きについて何も言うことができず、そしてさらには真理を説明すること、あるいは人間に欠けているものを提供することができないのであれば、あなたのような人は、立派にその本分を尽くすことはできない。神を証しし神の国の福音を述べ伝えることは、決して簡単な仕事ではない。あなたは、まず真理を身に付け、理解すべきビジョンを身に付けなければならない。神の働きの様々な側面のビジョンと真理について明確に知っているとき、あなたは心の中で神の働きを認識することになり、神が何をするかに関わらず、例えばそれが正義の裁きでも人を精練することでも、あなたは自らの基盤として最大のビジョンを備え、実践すべき正しい真理を備えることになり、結果として、最後まで神に付き従うことができるようになるのである。あなたは、神の働きが何であれ、その働きの目的は変化せず、神の働きの核心は変化せず、そして神の人に対する心も変わらないことを知らなければならない。神の言葉がどれほど厳しいものであっても、環境がどれほど不利であっても、神の働きの原則は変わらないし、人を救うという神の意図も変わらないのである。それが人の終わり、あるいは人の終着点の啓示ではなく、最終段階の働き、あるいは神の経営（救いの）計画全体を終わりにする働きでもないならば、また神が人に対して働いている最中のことであるならば、神の働きの核心は変わらない。つまりそれは常に人類の救いなのである。これこそがあなたがたの神への信仰の基盤であるべきだ。三つの段階の働きの目的は全人類の救いであり、すなわちそれは人をサ

タンの領域から完全に救い出すことを意味する。三つの段階の働きには、それぞれ異なる目標と意味があるが、そのいずれもが人類を救う働きの一部であり、人類が必要とするものに応じて実行される異なる救いの働きなのだ。いったんこの三つの段階の働きの目的を知れば、各段階の働きの意味をどのように正しく認識すれば良いかが分かるし、神の心を満たすためにはどのように行動すれば良いかが理解できる。この点に到達することができれば、最終的にこの最大のビジョンが神へのあなたの信仰の基盤になるだろう。あなたは実践のためのたやすい方法、あるいは奥深い真理を追い求めるだけでなく、実践とビジョンを組み合わせるべきだ。そうすれば、実践できる真理とビジョンに基づく知識の両方が在ることになる。そうして初めて、あなたは完全に真理を追求する者になれるのである。

三つの段階の働きは、神の経営全体の核心にあるもので、その三つの段階の中に、神の性質、そして神であるものが表されているのである。神の三段階の働きを知らない者は、神がどのようにしてその性質を表現するかを理解できないだけでなく、神の働きの英知も知らず、そして神が人類を救う様々なやり方や、人類全体に対する神の心を知らないままにいる。三つの段階の働きは、人類を救う働きの完全な表明といえる。三つの段階の働きを知らない人々は、聖霊の働きの様々な手段や原則を知らないままにいる。つまり、一つの段階の働きからそのまま残っている教義に厳格にこだわる人々は、神を教義に限定する人たちであり、神に対する彼らの信仰は曖昧で不確かである。そのような人たちは、決して神の救いを得ることがないだろう。神の三段階の働きだけが神の性質の全てを余すところなく表せるのであり、人類全体を救う神の意図、そして人類の救いの全過程を完全に示すことができるのである。これは、神がサタンを打ち負かし人類を取り戻したということの証拠であり、神の勝利の証拠であり、そして神の性質全体の表明でもある。神の働きの三段階の内一つの段階だけを理解する者は、神の性質の一部しか知らない。人の観念においては、このたった一つの段階の働きは教義になりやすく、人は神に関する規則を定めるようになり、神の性質のこの一部分だけを神の性質全体の代表として使うようになる。その上、人の想像が少なからずこの中に混入するので、神の働きの原則に加えて、神の性質、存在、英知を限られた範囲内に厳格に制限し、神がかつてこのようであれば永遠にこのようであり、絶対に変わることはないと思うようになる。三つの段階の働きを知り、正しく認識できる者だけが、完全にまた正確に神を知ることができる。少なくともその人たちは神をイスラエル人の神、あるいはユダヤ人の神とは定義しないし、人のために永久に十字架にくぎ付けにされる神とは見ないだろう。

う。もし神の働きの一段階だけから神を認識するようになるのならば、その認識はあまりにも少なすぎ、大海原の一滴に過ぎない。そうでなければ、なぜ多くの古い宗教家達が神を生きたまま十字架に磔にしたのか。それは人は神を限られた範囲に制限するからではないのか。多くの人が神に反抗し、聖霊の働きを邪魔するのは、彼らが様々な、多岐にわたる神の働きを認識しないからであり、さらに、彼らがごく僅かな知識と教義しか持ち合わせておらず、それで聖霊の働きを判断するためではないのか。そのような人たちは、経験は上辺だけのものなのに、本性が放漫かつ甘やかされており、聖霊の働きを軽視し、聖霊の懲らしめを無視し、さらには自分の取るに足らない古い論拠を用いて聖霊の働きを「確認」する。また彼らはもったいぶって、自分たちの知識と博識を全面的に確信し、世界中を駆け回ることができると思い込んでいる。そのような人たちは聖霊に軽蔑されて拒絶されるのではないのか、そして新しい時代には排除されるのではないか。神の前に来て公然と神に反抗する人々は、無知で物事をよく知らない偏狭な人々で、単に自分たちがいかに立派かを見せびらかそうとしているだけではないのか。彼らは、聖書についての僅かな知識だけで天下の「学界」にまたがり、人に教える上辺だけの教義でもって、聖霊の働きを覆し、自分たちの思考過程を中心に転回させようと試み、目先のことしか見えないのに、一目で六千年に及ぶ神の働きを見極めようとするのである。この人たちは理性と呼べるようなものをもちあわせていない。実際、神についてよく知っている人ほど、神の働きを評価するのに時間をかける。さらに、彼らは今日の神の働きについて知っていることを僅かしか語らないが、判断することは急がない。神に対して認識がない人ほど、傲慢で自信過剰で、気まぐれに神の存在そのものを言いふらすが、彼らは理論を語っているだけで、実際の証拠は提供しない。このような人は少しも価値のない人である。聖霊の働きを冗談事と捉える人たちは浅はかである。聖霊の新たな働きに出会うとき、慎重にせずベラベラ言いふらして、早まった判断を下し、本能にまかせて聖霊の働きの正しさを否定し、さらには聖霊の働きを侮辱し冒涇する人たち、つまりそんな無礼な人たちは聖霊の働きに対して無知であると言えるのではないか。さらに、そのような人たちは、傲慢で、生まれつき高慢で、そして手に負えない人間ではなかろうか。このような人はいつか聖霊の新しい働きを受け入れる日が来ても、神は彼らを寛容には扱わないだろう。そういう人たちは、神のために働く人たちを見下すだけでなく、神自身をも冒涇しているのである。そのような無謀な人たちは、この世でも後の世でも赦されることがないし、永久に地獄で滅びるだろう。このように無礼でいい加減な人たちは、神を信じているふりをしているだけで、そうすればするほど、行政命令に触れやすくなる。生まれつき放逸で、一度も誰かに従ったことがない、傲慢な人

間はすべて、このような道を歩いているのではないか。彼らは、常に新しくて古くならない神に来る日も来る日も反抗しているのではないか。今日あなたがたは、なぜ神の三つの段階の働きの重要性を知らなければならないのか理解すべきである。わたしが言う言葉はあなたがたの有益になるものであり、無意味な言葉ではない。あなたがたが、あたかも馬に乗って疾走しながら花を見物するかのようにただそれらを読むなら、わたしの大変な努力は全て水の泡になるのではないか。あなたがた一人ひとりが自らの本性を知るべきである。あなたがたのほとんどが議論は得意であり、理論的な質問に対する答えはすらすらと出てくるが、実質的な問題になると何も言うことがないのである。今日でさえ、あなたがたは未だに浅はかな会話に身をゆだね、自分の古い本性を変えることができずにいるし、あなたがたのほとんどは、より高い真理を達成するために追求する方法を変えるつもりがなく、いいかげんに自分の人生を生きているだけである。このような人たちがどうして最後まで神に従うことができるだろうか。たとえ道の最後まで辿り着けたとしても、あなたがたにとってそれが何の得になるだろう。手遅れになる前に、真剣に追求するか、あるいは早く撤退して、考え方を改めた方が良い。時間がたつにつれ、あなたがたは人にたかる寄生虫になる。そんな低くて卑しい役をあなたがたは演じるつもりなのか。

三つの段階の働きは、神の働きすべての記録であり、神の人類の救いの記録であり、そしてそれは架空のものではない。もしあなたがたが、神の性質全体を認識することを真剣に追い求めるのであれば、神によって為された働きの三段階を知らなければならず、しかもどの段階も欠けてはならない。これは神を知ろうと努力する人たちが達成しなければならない最低限のことである。人は思いつきのように独自で本当に神を知ることにはできない。それは人が自分で想像できるものでもなければ、聖霊が特定の人に特別に恩恵を授けた結果でもない。むしろそれは、人が神の働きを経験した後に得る認識であり、神の働きの事実を経験した後にだけ訪れる神に対する認識なのである。そのような認識は、ふと思いついて得ることはできないし、教えられるものでもない。それは完全に個人的な体験に関係することなのだ。これらの三つの段階の働きの核心には、神の人に対する救いが在るが、この救いの働きの中には幾つかの働き方と、神の性質を表す手段が含まれている。これは、人がもっとも識別し難いことであり、また理解するのが難しいことである。時代の区分、神の働きの変化、働きの変化、この働きの受益者の変化等、これら全てが三つの段階の働きに含まれている。特に、聖霊の働き方の違い、神の性質、姿、名前、身分、その他の変化など、これら全てが三つの段階の働きの一

部である。一つの働きの段階は、一部しか表すことはできず、特定の範囲に限られている。それは時代の区分や神の働きの変化には関連がなく、他の側面にはさらに関連性がない。これは完全に明らかな事実である。三つの段階の働きが人類を救う神の働きの全てなのだ。人は、人類を救う働きの中で、神の働き、そして神の性質を認識しなければならず、この事実なしには、あなたの神に対する認識は、ただ無意味な言葉でしかなく、机上の空論にすぎない。そのような認識では、人を納得させることも征服することもできず、そのような認識は実情にそぐわないし、また真理でもない。その認識がたとえ十分で、聞こえの良いものであっても、神の元来の性質と合致しないのであれば、神はあなたを容認しない。神はあなたの認識を称賛しないだけでなく、神を冒涇した罪人としてあなたに天罰を下す。神を認識する言葉は軽々しく語られるものではない。たとえあなたが流暢で弁が立ち、あなたの言葉が優れているために黒いものを白いと、白いものを黒いと議論して説得できるとしても、神に対する認識を語ることに関しては素人同然である。神は、あなたが急いで判断を下したり、気軽に褒めたり、また無頓着に中傷したりできる対象ではない。あなたは誰でもどんな人でも褒めるが、それでもなお神の大徳と恩恵を描写する適切な言葉に悪戦苦闘し、これは全ての失敗者が体験することなのである。神を描写することのできる言語の専門家は大量にいるが、その描写の正確さは、神に属し、限られた語彙しか持たずとも豊かな経験を身に付けている人々によって語られる真理の百分の一にすぎない。よって神への認識は、巧みに言葉を使うことや豊富な語彙によるものではなく、正確さと現実性にかかっていること、また人の知識と神への認識は、全く関係がないことが見て取れる。神を認識するという学びは、人類のどの自然科学よりも高尚である。それは、神を認識することを探し求める非常に少数の人間によってのみ達成できる学びであって、才能があれば誰でも達成できるわけではない。よってあなたがたは、神を認識することと真理を追求することを、ほんの子供でも達成できる、という見方をしてはならない。あなたは、家庭生活、仕事の経歴あるいは結婚生活においては完全に成功を収めているかもしれないが、真理および神を認識する学びに関しては、自分では見せられるものは何も持たないし、また何の成果も上げていない。真理を実践するとはあなたがたにとって非常に難しいことであり、神を認識することは更に困難な問題であると言ってよい。これはあなたがたにとって困難なことであり、同時に人類全体が直面している難事である。神を認識するために何らかの達成した人たちの中で、標準レベルに達する人はほとんどいない。人間は、神を認識することが何を意味するのか、あるいはどうして神を認識する必要があるのか、またはどの程度で神を認識していると見なせるのかを知らないのである。これは人類を非常に困惑させるもの

であり、ごく簡単に言うと人類が直面する最大の謎であり、誰もこの質問に答えることができないし、誰も進んで答えようとはしないのだが、その理由は、今日まで人類のうち誰一人としてこの働きの研究に成功したことがないからだ。おそらく、三つの段階の働きの謎が人類に明らかにされる時は、神を認識する才能集団を成す人たちが次々と現れるだろう。もちろん、そうなることをわたしは望むし、さらにわたしはこの仕事を実践中であり、近い将来そのような人材がもっとたくさん現われることを願う。彼らは、三つの段階の働きの事実を証しする者となり、そしてもちろん、三つの段階の働きの証しする最初の者となるだろう。神の働きが終わる日になって、もしそのような才能ある者がいなかったならば、あるいは一人か二人しかいなかったならば、そしてこの一人か二人は受肉した神によって完全にされることを自ら受け入れていたとしたら、これ以上悲しく、また悔やまれることはない。もちろんこれは最悪のシナリオにすぎないが。いずれの場合も、真剣に追及する者がこの祝福を得られることを願う。世の始まりの時から、このような働きはかつて一度も存在しなかったし、人類の発展の歴史の中で、かつてなかった仕事である。もしあなたがたが本当に最初に神を認識する者達の一人になることができるならば、被造物全ての中で、最も名誉なことではないだろうか。人類のなかで神によってこれ以上に称賛される人がいるだろうか。このような仕事は簡単に達成できるものではないが、それでも最終的には成果を収める。性別や国籍に関わらず、神を認識することのできる人々は皆、最後に神から最高の名誉を受けられるだろうし、また神の権威を備える唯一の者たちとなる。これが今日の仕事であり、未来の仕事でもあるが、要はこれが最終の、また過去六千年の働きの中で達成される最高の仕事ということであり、それによって人間の各区分を明らかにする仕事の一手段である。人に神を認識させるための働きを通して、人の異なるランクが明らかにされる。つまり、神を知る者は神の祝福を受け、神の約束を受け取る資格があるが、一方で、神に対する認識を持たない者は神の祝福を受ける資格、神の約束を受け取る資格がないことになる。神を知る者は、神の知己であり、神に対して認識を持たない者は神の知己とは呼ばれない。すなわち、神の知己は、神のあらゆる祝福を受けることができるが、神の知己でない者は、神の働きのどれにも値しない。苦難であれ、精錬あるいは裁きであれ、全ては人が最終的に神に対する認識を得られるようにするためであり、人が神に服従するようになるためである。これが最終的に達成される唯一の成果である。三つの段階の働きはどれも秘密ではなく、これは人が神を認識するのに役に立つことで、人が神についてもっと完全に徹底的な認識を得る手助けとなる。この働きは全て人のためである。

神自身の働きは、人が知らなければならないビジョンである。神の働きは人には達成できないし、人には備わっていないものだからである。三つの段階の働きが神の経営の全てであり、人が認識すべき最大のビジョンである。もし人がこの偉大なビジョンを知らないとすれば、神を認識することも神の心を理解するのも容易ではないし、さらに人が歩む道もますます困難になる。ビジョンがなければ、人はここまで来ることはできなかったろう。人を今日まで守ってきたのはビジョンであり、人に最大の保護を提供してきたのはビジョンである。将来、あなたがたの認識はより深くなるべきであり、あなたがたは神の心の全て、そして三つの段階の働きにおける神の賢明な働きの本質を認識するようにならなければならない。これこそがあなたがたの真の霊的背丈なのだ。働きの最終段階は、独立した段階ではなく、それ以前の二つの段階と一緒に形成された全体の一部であるから、三つの段階の働きのうち一つだけを行うことで救いの働き全体を完成させることは不可能である。たとえ働きの最終段階が人を完全に救うことができたとしても、必要なのはこの単独の段階を実践することだけという意味にはならないし、人をサタンの影響力から救うために、その前の二つの段階の働きは必要ないということにはならない。救いの働き全体が三つの段階の働きであって、その中の一つの段階ではないため、三つの段階の働きのうちどの段階も単独に取り上げて全人類の唯一の認識すべきビジョンとすることはできない。救いの働きが完成されていない限り、神の経営も完全に終わることはできない。神の存在、性質、そして英知が救いの働き全体の中に表現されており、初めは人に対して明らかにされていなかったが、救いの働きの中で徐々に表されるようになった。救いの働きの各段階それぞれが神の性質と神の存在を部分的に表しているが、働きの各段階が直接かつ完全に神の存在全体を表すことはできない。つまり、救いの働きは三つの段階の働きが完成した後全部終わるのだから、神のすべてに関する人の認識は三つの段階の働きから切り離すことはできない。人が一つの段階から得るものは、単に神の働きの一部で表される神の性質にすぎず、それは前後の段階で表される性質と存在を代表することはできない。なぜなら、人類を救う働きは一時期または一箇所ですぐ終わるものではなく、異なった時期、異なった場所で人類の発展の状況によって次第に深くなっていくものだからである。それはいくつかの段階で行われる働きであって、一つの段階で終わるものではない。だから神の英知の全ては、一つの個別の段階よりはむしろ、三つの段階において具体化されるのである。神の存在の全て、神の全ての英知が、これらの三つの段階の中に配置されていて、どの段階の働きの中にも神の存在があり、神の働きの英知が記されている。人は、これらの三つの段階の中に表現されている神の性質の全体を認識しなければならない。この神の存在の全てが人類全

てにとって非常に重要であり、神を礼拝するときに、人がもしこの認識を持たないのであれば、彼らはブッダを崇拝する人々と何ら変わらないことになる。人の間で行う神の働きは人に隠されておらず、神を崇拝するすべての人に認識されるべきである。神は、人の間で人を救う三つの段階の働きを行ったのだから、人は、これらの三つの段階の働きの中で表現されている神が持つもの、また神であるものを認識すべきである。これは人がすべきことである。神が人から隠すことは、人が達成できないこと、また人が知るべきでないことであり、一方、神が人に見せることは、人が知るべきこと、そして人が身に付けるべきことなのである。三つの段階の働きの各段階は、それぞれの前の段階を基礎として実行されるもので、単独には働きは行われず、また救いの働きから切り離しては行われない。実行された働きの時代と種類には大きな違いがあるが、その核心はやはり人類の救いであり、救いの働きの各段階は、その前の段階のものより深くなる。各段階の働きは、そのひとつ前の段階を基礎として続くものであり、それは無効にならない。このようにして、神の働きは古くならず、常に新しく、その中で神は、今まで見せたことのない自らの性質の側面を人に対して絶えず表現し、そして常に神の新しい働きと存在を明らかにし、たとえ古くからの宗教家たちが最大限反抗し公然と反対するとしても、神は常に意図している新しい働きを実行する。神の働きは常に変化しているため、常に人の反対にあう。そこで、神の働きの時代とその対象と同様に、神の性質も常に変化している。その上、神は常にこれまでしたことのない働きを行い、人から見れば以前と矛盾あるいは相反する働きさえする。人は、一種類の働き、あるいは一つの実践方法だけしか受け入れることができない。人にとって、自分たちと相反する、あるいは自分たちよりも高尚な働きや実践方法は受け入れがたい。しかし聖霊は常に新しい働きを行なっていて、そのために神の新しい働きに反対する宗教専門家の団体が次から次へと出現する。こういう人たちが専門家になったのは、どうして神が常に新しくて古くならないのかを人が認識しておらず、また神の働きの原則についての認識も持たず、そしてさらに神が人を救う様々な方法についての認識も持っていないがためである。というわけで、人はその働きが聖霊から出たものであるかどうか、あるいは神自身の働きかどうかの区別がつかない。多くの人は、前に発せられた言葉と合致すれば受け入れるが、以前の働きと違う点があれば反対して拒絶するという態度にしがみついている。今でも、あなたがたはみなそのような原則に縛られているのではないだろうか。救いの三つの段階の働きは、あなたがたにはあまり効果を上げておらず、また前の二つの段階の働きは負担になるものだからまったく認識する必要がないとさえ信じる者もいる。彼らは、これらの段階は、大衆には発表すべきでなく、早々に撤回されるべきだと考えている。三

つの段階の働きのうちの前の二段階によって人々が混乱しないようにである。多くの人は、前の二段階の働きを示すのは余計なことであり、神を認識するのに全然役に立たないと思っている—これがあなたがたの考えである。今日、あなたがたは皆、そのように行動することは正しいと考えているが、いつかわたしの働きの重大さに気づく時が必ず来る。わたしは意義のない働きは行わないことを知らなければならない。わたしがあなたがたに三つの段階の働きを示している以上、それらはきっとあなたがたのためになる。これら三つの段階の働きは神の経営全体の核心であるのだから、きっと全宇宙で全ての人の注目の的となる。いつかあなたがたは皆この働きの重要性に気づくだろう。あなたがたが神の働きに逆らう、あるいは自分の観念により今日の働きを判断するのは、あなたがたが神の働く原則を知らないからであり、またあなたがたが聖霊の働きを真剣に受け止めないからだということを認識しなさい。あなたがたが神に反抗し、聖霊の働きを邪魔するのは、あなたがた自身の観念と生まれつきの尊大さのせいである。それは神の働きが間違っているからではなく、あなたがたが元々あまりにも反抗的だからである。人によっては、神への信仰を持った後に、人がどこから来たのかということさえ確信をもって言えないのに、あえて聖霊の働きが正しいかそうでないかについて演説を行ったりする。彼らは、聖霊の新しい働きを持つ使徒たちに説教したり、意見したり、立場をわきまえないで余計な口を挟んだりさえする。彼らは人間性が非常に低俗で、思慮分別のかけらも持っていないのである。このような人が聖霊の働きによって拒絶され、地獄の火に焼かれる日が来るのではないか。彼らは、神の働きを認識しない代わりに、神の働きを批判し、しかも神に対して働き方の指図までする。このように理不尽な人たちがどうして神を知ることができるだろう。人は、神を求め、経験する過程で、神に対する認識を得るようになる。つまり、気まぐれに神を批判する中で聖霊の啓発を受けて神を認識するのではない。神に対する認識が正しいほど、人は神に反発しなくなる。逆に、神への認識が少ないほど、人は神に逆らう。あなたの観念、古くからの本性、人間性、性格や道德観は、あなたが神に逆らう「資本」であり、あなたが墮落して下劣で低俗であるほど、あなたはますます神の敵対者になる。欲深い観念の持ち主や独りよがりな性質の者は、さらに受肉した神の憎しみを買い、そのような人たちは反キリストである。もしあなたの観念が正されなければ、常に神に敵対することになり、永久に神と融和することができず、そしていつも神から離れていることになる。

自分の古い観念を捨ててこそ、新しい認識を得ることが可能であるが、古い認識は古い観念であるとは限らない。「観念」とは、人が想像したことで、現実と反するものの

ことを言う。もし古い認識が古い時代にもう時代遅れとなり、それが新しい働きの中に入るのを阻んでいたなら、そのような認識も観念である。もし人がそのような認識に対して正しく対処することができ、神をいくつか違った側面から認識し、古いものと新しいものを合わせることができれば、古い認識でも人の助けとなり、人が新しい時代に入る基盤となることができる。神を認識するという学びにおいては、例えば、どのようにして神を認識するための道へ入るのか、神を認識するためにはどの真理を理解すべきなのか、またいかにして自分の観念と古い性質を取り除き、神の新しい働きの計画すべてに従うようになるのか等、多くの原則を習得する必要がある。神を知るという学びに入るための基盤としてこれらの原則を用いれば、あなたの認識はますます深くなる。もしあなたが三つの段階の働き、つまり神の経営の全計画に対してはっきりした認識を持ち、前の二つの段階の働きと現在の働きとを完全に関連づけ、それが一つの神によってなされた働きであると捉えることができれば、あなたはこれ以上ないほど強固な基盤を持つことになる。三つの段階の働きは一人の神によってなされ、そしてこれは最も偉大なビジョンであり、神を認識するための唯一の道である。三つの段階の働きは、神自身にしかできなかったことであり、誰も神の代わりにできることではなく、要するに、初めから今日まで神自身の働きは神にしかできないのである。神の三つの段階の働きは、異なる時期に異なる場所で行われており、またその内容もそれぞれ異なるが、それらは全て唯一の神によってなされたものである。すべてのビジョンの中でも、これが人の認識すべき最も偉大なビジョンであり、もし人がこれを完全に理解するなら、自分の立場を貫くことができる。現在、様々な宗教や宗派が直面している最大の問題は、彼らが聖霊の働きを認識していないということであり、聖霊の働きと聖霊のものでない働きを区別できず、そのために彼らは、先の二つの段階の働きと同様に、この段階の働きが神ヤエウエによるものかどうか解らないのである。神に従ってはいても、ほとんどの人がそれが正しい道なのかどうかを区別できない。人は、この道が神が自ら導いているものかどうか、神の受肉が事実であるのかどうかを気に病んでいるが、ほとんどの人は、このことに関し、どのように見分ければ良いのか一切手掛かりがないのである。神に従っている人たちは、取る道を決断できず、よって、発せられる言葉はこのような人たちの間では部分的な効果しか持っておらず、また完全な効果を発揮できないために、そのような人々がいのちに入ることに影響を及ぼしている。三つの段階の働きにおいて、それらが違う時期に、違う場所で、そして違う人々に対して神が為したことであると人が見きわめることができ、またたとえ働きが違っていても、それらは全て唯一の神によって為され、それは唯一の神によって為される働きである以上、正しく、間違いがあるはずは

なく、またそれが人の観念とは合致せずとも、唯一の神の業であることは否定できないということ——もし人がそれは唯一の神の働きであると確信をもって言えるならば、人の観念はほんの些細な事となり果て、言及する価値もなくなるであろう。人のビジョンが明確でない上に、人はヤーウェが神でありイエスが主であることしか知らず、現在の受肉した神について決めかねているために、多くの人はヤーウェとイエスの働きに専念することに留まり、今日の働きについての観念に悩まされ、ほとんどの人は常に疑いを抱き、今日の働きを真剣に受け止めていないのである。人は、見るができなかった先の二つの段階の働きに関しては、何の観念も持っていない。それは、人が先の二つの段階の働きの実情を理解せず、またそれらを自ら目撃しなかったからである。見えないからこそ、人は好きなように想像するが、どんなに想像しても証拠となる事実はないし、またその誤りを正す者もない。人は、本能のままに警戒心を捨てて想像力を逞くさせているのだが、立証する事実がないので、証拠があるかどうかに関わらず、人の想像したことが「事実」となっている。従って、人は自分で想像した神を心の中で信じているわけで、実際の神を求めないのである。一人の人間が一種類の信仰を持つとすると、100人の人が居れば100通りの信仰があることになる。人は、神の働きを実際に見たことがないため、また耳で聞いたことがあるだけで、自分で目にすることがないために、そのような信仰に取りつかれている。人は伝説や物語を聞いたことがあっても、神の働きという事実の認識についてはほとんど聞いたことがない。したがって、信者になってたった一年の人も、自らの観念を通して神を信じているし、生涯信者である人も同様である。事実を見ることができない者は、神に対する観念がある信仰から抜け出すことはできない。人は自らの古い観念の束縛から解放され、新しい境地に入ったと信じている。神の真の顔を見ることができない者の認識は、観念や言い伝え以外の何物でもないことを人は知らないのだろうか。人はみな自分の観念が正確で間違いないのだと思い、自分の観念は神から来るものだと思っている。今日、人は神の働きを目の当たりにすると、長年にわたって蓄積した観念を放つのである。だが、過去の想像と考え方がこの段階の働きの障害になったため、人がそのような観念を手放し、またそのような考え方に反論するのが困難になっている。今日まで神に従ってきた多くの人たちの持つ、この段階的な働きに対する観念は以前にも増して危機的なものになっており、これらの人たちは、徐々に受肉した神に対する頑固な敵意を形成しているが、この憎しみは人の観念と想像から出ているのである。事実は人に想像する自由を与えず、さらに人によって簡単に反論されることはない一方、人の観念と想像は事実の存在を許さず、その上に人は事実の正確さと信憑性には考慮せず、ただひたすら自分の観念を自由に働かせ、自分自身

の想像力をたくましくするために、人の観念と想像は、人の観念とは相いれない今日の働きの敵となったのである。これは、もっぱら人の観念の誤りと言えるもので、神の働きの誤りではない。人が何を想像しようが自由だが、神の働きの事実は人が侵すことができないものだから、神の働きのどの段階でも、あるいは働きのごく一部でも、それについて軽々しく異議を唱えるべきではない。あなたは自由に想像しても構わないし、ヤーウェとイエスの働きについて、すばらしい話をまとめても構わないが、ヤーウェとイエスの働きの各段階の事実について反論してはならない。これは原則であって、行政命令でもあるが、あなたがたはこれらの問題の重大さを理解しなければならない。人はこの段階の働きは人の観念と合致しないが、先の二つの段階の働きはその限りではないと信じている。人はその想像の中で、先の二つの段階の働きは今日の働きと同じでないことを確信しているが、神の働きの原則は全て同じであり、神の働きは常に実践的であること、時代に関係なく、いつも神の働きの事実に逆らい反対する人が大量に現れることを考えたことがあるだろうか。今、この働きの段階に逆らい、反対する人たちは、過去の時代においても間違いなく反対していただろう。そのような人々は常に神の敵だからだ。神の働きの事実を理解している人たちは、三つの段階の働きを、唯一の神の働きとして捉え、自分の観念は捨てるのである。このような人々が神を知る人々であり、真に神に従う人々である。神の経営の一切が終わりに近づくとき、神は万物を種類に応じて分類する。人は創造主の手で造られたのだから、最後には神が人を神の支配のもとに戻さなければならないのである。これが三つの段階の働きの終結である。終わりの日の働きの段階と、イスラエルとユダヤにおける前の二つの段階は、全宇宙における神の経営計画である。これは誰にも否定できないし、そしてこれが神の働きの事実である。人々はまだこの働きのほとんどを経験もしなければ見てもいないが、事実は事実であり、人はだれもこれを否定できない。神を信じる全宇宙各地の人々はみなこの三つの段階の働きを受け入れるであろう。もしあなたが一つの特定の段階の働きだけを認識して、他の二段階の働きを理解せず過去の神の働きも理解しないならば、あなたは神の全経営計画の真相を語ることはできないし、あなたの神の認識は偏ったものである。神への信仰においては、あなたは神を知らず、理解していないために、あなたには神を証しする資格がないのである。あなたの現時点でのこれらの事柄に関する認識が深かろうと浅かろうと、最後には、あなたがたは認識を持ち完全に納得するようになるはずであり、あらゆる人が神のすべての働きを目にして、神の支配の下に服従するようになるのである。この働きの終わりには、全ての宗教が一つにまとまり、全ての神の被造物が創造主の支配の下に戻り、唯一の真の神を礼拝して、全ての邪悪な宗教は無に帰して、二度と現

れることはない。

なぜこのように連続して三つの段階の働きに言及するのか。時代の移り変わり、社会の発展、自然の変貌はみなこの三段階の働きが変化するにつれて変わるのである。人類は神の働きに合わせて変化するのであって、人類が単独で発展しているのではない。神の三つの段階の働きに触れるのは、全ての被造物と、あらゆる宗教、あらゆる宗派の人々全てを、唯一の神の支配の下に集めるためである。あなたがどの宗教に属していようと、最終的にあなたは皆神の支配の下に従うのである。神自身だけがこの働きを実行できるのであって、それはどの宗教の代表にも不可能である。世界には主要な宗教がいくつか存在し、各宗教がそれぞれ代表あるいは指導者を持っているが、その信徒も世界中の様々な国や地域に広がっている。大国であろうと小国であろうと、どの国にもいくつかの異なる宗教が存在する。しかしながら、世界中にどれほどの数の宗教が存在しているとも、宇宙の中の人々はみな、究極のところ唯一の神の導きの下に生存しているのであって、人々の存在は宗教の代表あるいは指導者に導かれているわけではない。要するに、人類は特定の宗教の代表や指導者ではなく、人類全体が、天地を造り、万物を造り、そして人類を造った創造主に導かれているということであり、またこれは事実である。世界にはいくつかの主要な宗教があるが、その大きさに関係なく、それらの全てが創造主の支配の下に存在しているのであって、いかなる宗教もこの支配の範囲を超えることはできない。人類の発展、社会の進化、そして自然科学の発達、これらはそれぞれ創造主の計画から切り離すことはできないし、この働きは特定の宗教の代表にできるものではない。宗教を代表する人というのは、特定の宗教組織の指導者というだけで、神、つまり天地と万物の創造主の代理を務めることはできない。宗教の代表は、その宗教全体の内において人々を率いることはできても、天下のあらゆる被造物を統率することはできないし、これは世界中で認められている事実である。宗教の代表は単なる指導者であり、神（創造主）と対等の立場にはなれない。万物は創造主の支配下にあり、最後には創造主の手中に戻る。人類は元々神に造られ、宗教に関係なく、全ての人が神の支配下に帰するものであり、これは必然である。神だけが万物の中で最も高い地位に在り、すべての被造物の中の最高の支配者でも神の支配の下に帰らなければならない。人の地位がいくら高くても、人類を適切な終着点へと導くことはできないし、誰も万物をその種類に応じて分類することはできない。ヤーウェ自身が人類を造り、人々をそれぞれその種類に分類したのだから、終わりの時にもやはり神は自身でその働きを行い、万物をその種類に従い分類するが、これは全て神以外にはできないことである。初め

のときから今まで、三つの段階の働きは全て神自身が行ったのであり、それは唯一の神がしたことである。三つの段階の働きの事実は、人類全体に対する神の統率力の事実であり、誰も否定できない事実である。三つの段階の働きの終わりには、万物が種類に応じて分別されて神の支配の下に帰り、そしてそこには全宇宙を通してただ唯一の神だけが存在し、その他の宗教は存在しなくなる。世界を造ることができない者は、世界を終わらせることもできないが、世界を創造した神は、必ず終わらせることもできる。だから、もし誰かが一つの時代を終わらせることができず、単に人がその心を養うのを手助けできるだけなら、その人は断じて神ではないし、断じて人類の主でもない。そのような者にこのような偉大な働きは可能でなく、このような偉大な働きは唯一の存在によってのみ可能である。そしてこのような働きができない者はみなきっと神以外の敵である。全ての邪悪な宗教は神とは相容れない。そして、神と相容れないなら、それらは神の敵である。すべての働きはこの唯一の真の神が為すものであり、全宇宙がこの真の神の支配下にあるのだ。神の働く場所がイスラエルでも中国でも、またその働きが聖霊によるものでも肉体によるものでも、全ては神自らによって行われるもので、他の誰にもできないことである。神が全人類の神だからこそ、神はどんな条件にも制限されず自由に働き、これはすべてのビジョンの中で最大のものである。もしあなたが、神の被造物の一人として被造物の本分を尽くし、神の心を理解したいのであれば、神の働きを理解し、神の被造物に対する心を理解しなければならず、また神の経営計画、そして神の為す仕事の意義の全てを理解しなければならない。これらの事が理解できない者は、神の被造物としての資格がない。もしあなたが、神の被造物として、自分がどこから来たのか、が分かっておらず、人類の歴史や神が行った働きの全てを知らず、さらには人類がいかにしてここまで発展してきたか、また全人類を支配するのは誰なのかを理解していないのであれば、あなたには、その本分を尽くすことはできない。神は今日まで人類を導いてきた。そして神が人類をこの地上に造ってからこれまで、神は一度も人の傍を離れたことがない。聖霊は休むことなく働き続け、人類を導き続けて、一度も人から離れたことがない。それなのに、人は神の存在に気づかず、ましてや神を知らないが、神の全ての被造物にとって、これほど屈辱的なことがあろうか。神は自ら人を導いているのに、人は神の働きを理解していない。あなたは神の被造物であるのにも関わらず、自分たちの歴史も知らず、これまで自分の旅路の中で誰が自分を導いてくれたのかも分からず、いて、神による働きに気付かないから、神を認識できないのだ。あなたがもし今だに知らないとすれば、神を証しする資格はずっとないであろう。今日、創造主は、もう一度あらゆる人々を自ら導き、そしてあらゆる人々に神の英知、全能性、救い、そしてすば

らしさを見せている。それでもあなたはまだ気付かず、あるいは理解できずにいるから、それであなたは救いを得られない者になっているのではないか。サタンに属する者たちは神の言葉を理解できず、神に属する者たちには神の声を聴くことができる。わたしの話す言葉に気付いて理解する全ての人々は、救われる者たちであり、また神を証しする者たちなのだ。わたしが言った言葉を理解しない全ての人々は神を証しすることができず、排除される者たちなのだ。神の心を理解できず、また神の働きに気付かない人々は、神の認識を達成することができず、そのような人々は神を証しすることはない。もしあなたが神を証ししたいと願うなら、あなたは神を知らなければならないし、その神の認識は、神の働きを通して達成される。結局のところ、神を知りたいと望むならば、神の働きを知らなければならない。つまり、神の働きを知ることが最重要なのである。三つの段階の働きが終わるとき、神を証しする者たちの一集団、つまり神を知る者たちの一団が作られる。この人たちはみな神に対する認識があり、真理を実行することができる人たちである。彼らには人間性と理知があり、皆三つの段階の救いの仕事を認識している。これが最後になし遂げられる働きであり、この人たちは六千年にわたる経営の働きの結晶であり、最終的にサタンを打ち負かした最も有力な証しである。神を証しすることができる者は、神の約束と祝福を受けることができる上に、最後の時に残り、神の権威を持ち、神を証しする一団になるだろう。もしかすると、あなたがたの全ての人がこの一団の一員になれるかもしれず、あるいは半分か数人だけがそうなれるかもしれないが、それはあなたがたの意思と追求にかかっている。

墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である

神が受肉したのは、その働きの対象がサタンの霊や肉体を持たない何かではなく、人間、つまり肉体をもち、サタンに墮落させられた存在だからである。人間の肉体が墮落しているからこそ、神は肉体をもつ人間を働きの対象とした。さらに、人間は墮落の対象であるため、神は救いの働きの全段階で、人間をその働きの唯一の対象としている。人間は死すべき存在で、生身の体をもっているが、人間を救える唯一の存在は神なのである。そこで、その働きでよりよい成果が得られるよう、神は働きを行うために人間と同じ属性をもつ肉体をもたなければならない。神がその働きを行うために受肉しなければならないのは、人間が肉体をもっていて、罪を克服することも、肉体を捨て去ることもできないためだ。受肉した神の本質と存在は人間の本質や存在とは全く異なるものなのだが、神の外見は人間と変わらず、通常の人間と同じように見える。神は普通の人間のように生活し、神を見る者は、普通の人間との違いを見いだせない。この普通の外見

と普通の人間性とは、普通の人間として神がその神性の働きをするには十分である。神の受肉は普通の人間として働くことを可能にし、人々の間での働きを容易にし、さらに、その普通の人間性は人々の間で救いの働きを進めることの役に立つ。神の普通の人間性は人間の中に多くの混乱を招いたが、そうした混乱は神の働きの成果に影響を与えていない。つまり、神の普通の肉体の働きは人間に素晴らしく有益なのである。たいていの人は神が普通の人間であることを受け入れないが、それでも神の働きは効果的であることができ、そうした効果は神が普通の人間であることで達成される。この点に疑問の余地はない。神の肉体における働きから、人間は、神の普通の人間性について人間の中に存在する観念から受けるよりも十倍、数十倍のものを得る。そして、そうした観念はいずれ、すべて神の働きに飲み込まれることだろう。また、神の働きが達成した成果、つまり、人間がもつ神についての認識は、人間が神についてもっている観念をはるかに超える。神の肉体における働きは想像もできないし、測りようもない。神の体はどの人間の肉体とも異なっているからだ。外見は同じでも、本質は異なっている。神の肉体は、神について、人間の中に多くの観念を生み出す。しかし、神の肉体はまた、人間が多くの認識を得ることを可能にする。そして、似たような外見をもつどの人間をも征服できる。神は単なる人間ではなく、人間の外見をもつ神であり、誰も神を完全に理解することはできないからである。目に見えず、触れることもできない神を誰もが愛し、歓迎する。もし神が人間の目には見えない、ただの霊であるならば、人間が神を信じることは容易である。人間は自分の想像力を自由に働かせることができる。神の姿として、どんな姿でも好きなものを選び、それで喜んで満足していられる。このように、人間は自分の神が最も好むこと、この神が人に望むとおりのことなら何でも、何のとがめもなく行うことができる。さらに、人間は、自分よりも神に忠実で信心深い者は誰もいない、他の人はみな異邦の犬で、神に背いていると信じている。これが、神について漠然と教義に基づいた信仰をもつ人々が求めているものであると言える。彼らの求めているのは、どれも同じようなもので、ほとんど違いがない。これは単に、人々の想像している神の姿が異なっているというだけで、その本質は、実際のところ、同じなのだ。

人間は自分の信仰がいいかげんなものであっても気にとめない。そして、好きなように神を信じている。これは誰も妨げることのできない「人間の権利と自由」の一つなのだ。なぜなら人間は他の誰のものでもない、自分の独自の神を信じているからである。これは私有財産であって、ほとんど誰でも、こうした私有財産をもっている。人間はこれを自分の貴い宝だとみなしているが、神にとっては、これ以上卑しく無価値なものは

ない。この人間の私有財産以上にはっきりと神に敵対するものはないからである。なぜなら、神が受肉してその働きを行うため、神は触れることのできる形を持ち、人が見、触れることのできる肉体になるからである。神は形のない霊ではなく、人間がさわり、見ることのできる肉体である。しかしながら、人々の信じる神々のほとんどは、生身の体をもたず、形がなく、不定形である。このように、受肉した神は、神を信じる者ほとんどの敵となり、同様に、受肉した神という事実を受け入れることのできない人々も、神の敵となった。人間は考え方や反抗心からではなく、この私有財産のために観念にとらわれているのだ。この私有財産のせいで、たいていの人は死に、この漠然とした、触れることができず、目にも見えない、実際に存在しない神のために、人間のいのちは損なわれている。人間のいのちが失われるのは、受肉した神のためではなく、まして、天の神のせいでもなく、人間が思い描いている神のせいなのである。神が受肉した唯一の理由は、墮落した人間が必要としているからである。人間が必要としているのであって、神が必要としているのではない。神のすべての犠牲と苦しみは人間のためであって、神自身のためではない。神には賛否も報奨もない。神はもともと自分のものであるもの以外、将来何らかの収穫を得るわけではない。神が人間のためにすること、犠牲とすることはすべて、何か大きな報酬を得るためではなく、純粹に人間のためである。受肉した神の働きには想像を超える困難が数多く伴うのだが、それが最終的に達成するものは、霊による直接の働きの成果をはるかに超える。肉の体の働きは多くの困難を伴う。肉体は霊のような偉大な身分をもたないし、霊のような超自然的な業は行えない。まして、霊と同じ権威をもたない。しかし、この平凡な肉の行う働きの本質は、霊が直接行う働きの本質をはるかに上回る。そしてこの肉自体が、全人類の必要に応えるものなのだ。救われるべき者たちにとって、霊の使用価値は、肉にはるかに劣る。霊の働きは、全宇宙、すべての山々、川、湖、大海に及ぶ。しかし、肉の働きで神は、触れるすべての人と効果的に交流できる。そのうえ、触れることのできる形をもつ神の体は、人間には理解しやすく、信頼しやすく、神についての人間の認識を深めることができ、神の実際の業の深い印象を植え付けられる。霊の働きは神秘に包まれていて、死すべき人間には理解し難く、見ることはそれ以上に難しい。だから、無意味な想像に頼るしかない。しかしながら、肉の働きは正常で、現実に基づいており、豊かな知恵を含み、人間の肉眼で見ることのできる事実である。人間はその身で神の働きの知恵を経験できるから、豊かな想像力を働かせる必要もない。これが受肉した神の働きの正確さ、本物の価値である。霊には、人間の目に見えず、想像しにくいことしかできない。たとえば、霊による啓示、霊による感動、それに霊の導きなど。しかし、知性のある人間には、こうした

ものは何ら明瞭な意味をもたない。こうしたものは感動あるいは漠然とした意味しか提供せず、言葉による指示を与えられない。しかしながら、受肉した神の働きは、大いに異なる。言葉を用いて正確な導きができるし、明確な意図、そして、目指すべきははっきりとした目標がある。だから、人間は手探りして歩きまわる必要がないし、想像力を働かせる必要も、まして、推測する必要もない。これが肉における働きの明瞭さであって、霊の働きとの大きな違いである。霊の働きは限られた範囲においてのみ適しており、肉の働きと置き換えることができない。肉の働きは、霊の働きよりはるかに正確で、必要な目標とずっと現実的で価値ある認識とを人間に与える。墮落した人間にとって最も価値ある働きは、正確な言葉と目指すべき明確な目標を与え、そして見て触ることのできるものである。実際の働きと時宜にかなった導きだけが人間の嗜好に合う。そして、現実の働きだけが人間をその墮落した邪悪な性質から救える。これを成し遂げられるのは受肉した神だけである。受肉した神だけが、人間をかつて墮落した邪悪な性質から救えるのだ。霊は神に備わった本質であるが、こうした働きは受肉した神にしかできない。もし霊だけで働いたなら、神の働きは効果的なものではないだろう——これは明確な事実である。大方の人は、肉のために神の敵になっているが、神がその働きを完了するとき、神に敵対する者たちは敵であることをやめるだけではなく、それどころか神の証人になるだろう。そうした人たちは神に征服された証人、神の心にかない、神と分かちがたい証人になる。神はその肉体における働きの重要性を人間に知らせる。そして人間は、人間の存在の意味にとってこの肉体がどれほど重要であるかを知り、人間のいのちの成長に対するその本当の価値を知り、そのうえ、この肉体が、離れることが到底できない、生きるいのちの泉となることを知るだろう。受肉した神は、本来の神の身分と地位には遠く及ばないし、人間からすると神の本来の地位と相容れないものと思われるだろうが、この肉体、すなわち神の真の姿や身分をもたないこの存在は、神の霊には直接できない働きができるのである。それが神の受肉の真の意味と価値であり、そしてこの意味と価値を人間は理解し、受け入れることができない。すべての人間は神の霊を仰ぎ、受肉した神を見下すが、彼らがどう判断し、どう考えるかに関わりなく、この肉体の真の意味と価値とは霊にはるかに優る。もちろん、これは墮落した人間との関連においてのみ言えることだ。真理を求め、神の現れを待ち望む者すべてにとって、霊の働きは感動と啓示、理解不能で想像もできない不思議な感覚、偉大で超越的で崇めるべきものであるが誰にも達成できず手に入れることのできないものという感覚だけを与える。人間と神の霊とは、遠くから互いを見ることしかできない。まるで両者の間に遠い隔たりがあるように。そして、けっして似ることがない。まるで、人間と神は目に見えない境

界で隔てられているかのように。実は、これは霊が人間に与えた幻影である。なぜならば、霊と人間とは種類を異にするものであり、霊と人間はけっして同じ世界で共存できず、霊には人間的な要素は何もないからである。だから、人間には霊は必要ではない。霊には、人間に最も必要な働きを直接することができないからである。肉の働きは求めるべき真の目標、明確な言葉、そして、神が現実的かつ正常で謙虚で普通であるという感覚を人間に与える。人間は神を恐れはするだろうが、たいていの人には神と心安く付き合える。人間は神の顔を見、神の声を聞くことができるし、遠くから見る必要はない。この肉体は人間にとって近づきやすいように思われる。遠くの不可思議な存在ではなく、目に見え、触れられるのだ。この肉体は人間と同じ世界にあるのだから。

肉体において生きるすべての者にとって、性質を変えるには目指すべき目標が必要だ。そして、神を知るには、神の本当の業を見、神の本当の顔を見る必要がある。この二つは神の受肉した体でのみ可能なことだ。そして、いずれも普通の現実の体でのみ成し遂げられる。だから受肉が必要なのであり、すべての墮落した人間はこれを必要としているのだ。人々は神を知る必要があるので、漠然とした超自然的な神の表象を心から消し去らなければならない。そして、墮落した性質を捨て去る必要があるのだから、まずその墮落した性質を知らなければならない。人間の力だけで漠然とした神の表象を心から消し去ろうとしても、望ましい成果は得られないだろう。人々の心にある漠然とした神の表象は、言葉だけではさらけ出したり、消し去ったり、完全に除いたりすることはできない。そうしてみても、人間の中に深く根付いているものを消し去るのは不可能だろう。実践の神と神の真の姿を、そうした漠然とした超自然的なものと入れ替え、人々にそれらを徐々に知らしめることによってのみ、目指すべき結果が得られるのだ。人間は、過去に求めていた神が漠然とした超自然なものであったことに気づく。これを成し遂げるのは、霊による直接の導きではなく、まして、特定の個人の教えでもなく、受肉した神なのである。受肉した神が本格的にその働きを行うとき、人間の固定観念が露わになる。なぜなら、受肉した神の正常さと現実性は、人間の想像の中にある漠然とした超自然な神とは正反対なものだからだ。人間の元来からの固定観念は、受肉した神との対照によってのみ明らかになる。受肉した神と比較することなしには、人間の固定観念は明らかにならない。言い換えれば、現にそこにあるものと比較しなければ、漠然とした物事は明らかにならない。言葉によってこの働きのできる者は誰もいない。また、言葉によってこの働きを明確に表現できる者は誰もいない。ただ神自身がその働きができるのであって、ほかの誰も神に代わってその働きをすることはできない。人間の言語が

どんなに豊かであろうと、神の現実性と正常性を言い表すことはできない。神が人間のもとで自ら働き、自分の姿と実在とをすっかり示してはじめて、人間はもっと实际的に神を知ることができ、もっとはっきり神を見られるのだ。肉体をもつ人間には、この成果を成し遂げられない。もちろん、神の霊もまた、これを成し遂げることはできない。神は墮落した人間をサタンの影響から救うことができるが、この働きは、神の霊には直接できないことだ。そうではなく、神の霊のまとう人間の体だけが、受肉した神の肉体だけができることだ。この生身の体は人間であると同時に神であり、正常な人間性を備えている一人の人間であるが、また、完全な神性を備えた神でもあるのだ。だから、この肉体は神の霊でなく、霊とは大きく異なっているのだが、それでも、人間を救う受肉した神自身であって、霊であると同時に肉体でもある。どのような名で呼ばれようと、つまるところ、それは人間を救う神そのものだ。神の霊は肉体から切り離すことはできず、肉の働きはまた、神の霊の働きでもあるからだ。これはただ、この働きが霊として行われるのではなく、人間として行われるということである。霊が直接行う必要のある働きは、受肉を必要としない。また、生身の体を必要とする働きは霊には直接できないもので、受肉した神だけが可能なのだ。これがこの働きに必要なものであり、また、墮落した人間に必要なものなのだ。神の働きの三つの段階では、一つの段階だけが霊によって直接行われた。そして残りの二つの段階は受肉した神が実行し、霊が直接働くことはない。霊が行った律法の時代の働きは、墮落した人間の性質を変えることを伴わず、神について人間が知ることと何の関わりもないものだった。しかしながら、恵みの時代と神の国の時代の受肉した神の働きは、人間の墮落した性質と神についての認識に関わるもので、救いの働きにおける重要かつ不可欠な部分である。だから、墮落した人間には受肉した神による救いの方が、受肉した神の直接的な働きの方がさらに必要である。人間には、受肉した神が導き、支え、水をやり、養い、裁き、罰する必要がある。そして、受肉した神からのさらなる恵みと贖いが必要だ。受肉した神だけが人間の親友となり、牧者となり、現実存在する助けとなることができる。これらすべてが現在と過去において受肉が必要とされる所以である。

人間はサタンのせいで墮落したが、神の被造物のうちで最高のものだ。そこで、人間には神による救いが必要だ。神の救いの対象はサタンではなく人間であり、救われるべきものは人間の肉、人間の魂であり、悪魔ではない。サタンは神が滅ぼす対象であり、人間は神に救われる者である。人間の肉はサタンによって墮落させられた。だから、まず人間の肉が救われなければならない。人間の肉は極めて深く墮落しており、神に敵対

するものになっている。そして、公然と神に敵対し、神の存在を否定しさえする。この墮落した肉は、まったく手に負えない。墮落した肉の性質以上に扱いにくく、変えにくいものはない。サタンは人間の体に入って混乱させ、人間の体を使って神の働きを妨害し、神の計画を妨げる。それゆえ人間はサタンとなり、神の敵になった。人間が救われるには、まず征服されなければならない。このため、神は挑戦に立ち上がり受肉した。働きを行い、サタンと戦うためである。神の目的は墮落した人類の救いと、自分に抵抗するサタンを打ち破り、滅ぼすことである。神は人間を征服する働きによってサタンを破り、同時に墮落した人間を救う。したがって、それは二つの目的を一度に果たす働きである。神は肉において働き、肉において語り、すべての働きを肉において行う。人間とよりよく交わり、よりよく征服するためである。この神の最後の受肉において、世の終わりの神の働きは肉において完了する。神は受肉したままですべての人間を種類によって分け、すべての経営（救い）の働きを終え、また、肉における働きをもみな終える。地上での働きがすべて終わると、神は完全な勝利者となる。受肉して働いた神は完全に人間を征服し、人間をすべて自分のものとしている。これは、神による救いの計画がすべて終わるということではないか。神が肉における働きを終えるとき、サタンを完全に打ち破り、勝利するので、サタンには、もはや人間を墮落させる機会がない。神が最初に受肉したときの働きは、人間の罪の贖いと赦しであった。次の働きでは、人間を征服し、完全に自分のものとし、サタンがもはや働けないようになって完全に敗れ、神が完全な勝利者となる。これが肉の働きであり、神自身が行う働きなのだ。神の三段階の働きの最初のもは、霊が直接行ったもので、肉によるものではなかった。しかしながら、神による働きの三段階のうち、最後の働きは受肉した神が行うもので、霊が直接行うものではない。中間段階の贖いの働きもまた、神が受肉して行った。全経営計画を通して、最も重要な働きは人間をサタンの影響から救う働きである。重要な働きは墮落した人間を完全に征服することで、それによって、征服された人間の心に本来あった神への畏敬の念を回復し、正常な生き方ができるようにする。つまり、神の被造物として正常な生き方ができるようにするのだ。この働きは最も重要なもので、経営の働きの核心である。救いの三段階の働きのうち、最初の段階の律法の時代の働きは、救いの働きの核心から遠いものだった。ただ救いの働きをわずかに現したにすぎないし、人間をサタンの領域から救う働きの始まりではなかった。最初の段階の働きは、霊が直接行ったが、それは、律法の下で人間は律法を守るだけしか知らず、それ以上の真理を知らなかったからであり、律法の時代の働きは、人間の性質の変化はほとんど伴っておらず、どのようにして人間をサタンの領域から救うかという働きとは、さらに関わりがなかつ

たからだ。そのため、神の霊は極めて単純な、人間の墮落した性質とは関与しない段階の働きを終えた。この段階の働きは、経営の核心にほとんど関係がなく、人間の救いという正式の働きとはあまり関係がなかった。だから、神が自ら受肉して働く必要がなかった。霊の働きはさりげなく行われ、測り難いものであり、人間には非常に恐ろしくて近寄りがたいものである。霊は直接救いの働きをするには適していないし、直接人間にいのちを与えるにも適していない。人間に最も適しているのは、霊の働きを人間に近い形に変えることで、それはつまり、最も人間に適しているのは、神が普通の正常な人間になって働きをするということである。これには、神が受肉して霊の代わりに働くことが必要であり、人間のために神が働くのに、これ以上ふさわしい方法はない。こうした三段階の働きの中で、二つの段階は、肉体によって行われたが、その二つの段階は経営計画の中の肝要な部分である。二回の受肉はそれぞれ補い合うもので、補完的である。神が最初に受肉した段階は、第二の段階の基礎を敷いたのだが、これは、神の二回の受肉が一つの全体をなし、互いに相容れないものではないと言える。この二つの段階は全経営の計画の中で最も重要なものであるため、神が受肉してこの二つの段階を実行する。こう言ってもいいだろう――神の二回の受肉の働きがなければ、経営の計画全体は停止し、人類の救いの働きは空虚な言葉でしかなかっただろう。この働きが重要であるかどうかは、人間の必要、人間の墮落の現実の状態、サタンの甚だしい不服従、それが働きを妨げている程度による。この任務にふさわしい者は、それが行う働きの性質とその働きの重要性によって決まる。この働きの重要性という点では、どんな方法を用いるか、すなわち神の霊が直接働きを行うか、それとも神が受肉して働くのか、あるいは人間を通じて行うかという意味においては、選択肢から最初に除かれるべきは、人間を通じて行う方法である。働きの性質という点では、霊による働きの性質と肉の働きの性質を比べたとき、最終的に、肉によって行う働きが、霊が直接行うより人間にとって有益で、効果的であるということになった。霊と肉のどちらによって働きを行うか決める際、神はこのように考えたのである。各段階の働きには意味と根拠がある。それらは根拠のない想像ではなく、また、恣意的に行われたことでもない。そこにはある種の知恵が働いている。それが神の働きの背後にある真実である。とりわけ、神自らが受肉して人間の間で働くような偉大な働きにおいては、さらなる神の計画がある。そこで、神の知恵と神の存在すべてがあらゆる行為、考え、働きの構想に反映されている。これは神のより確固として体系的なありかたである。こうした緻密な考えや構想は人間には想像しにくく、信じ難いし、そのうえ、知ることも困難だ。人間の行う働きは一般的な原則によるもので、それは人間には極めて満足のいくものだ。しかし、神の働きと比べると

、あまりに大きな隔たりがある。神の業は偉大で、神の働きは規模が壮大であるが、その陰には人間には想像もできないような多くの綿密な計画や工夫がある。神の働きの各段階までもが原則に則っているだけではなく、人間の言語では表現できないようなことが数多く含まれている。そして、そうしたものは、人間には見えないものなのだ。霊の働きであろうと、受肉した神の働きであろうと、いずれも神の働きの計画を含んでいる。神は無意味に働きをせず、取るに足りない働きもしない。霊が直接働く時、神の目的を伴っている。神が働きのために人間になるとき（つまり外形を変える時）は、それ以上に目的があつてのことである。そうでなければ、どうして進んで身分を変えるだろう。そうでなくて、どうして進んで卑しくみなされ迫害される人になるのか。

受肉した神の働きは最も意義深い。それは働きについての語りであり、最終的に働きを終えるのは受肉した神であつて、霊ではない。神はいつか地上に来て、人間に姿を見せ、誰一人も逃さず人を一人一人試みつつ、全人類を自ら裁くと信じている人々がいる。このように考える者は、この受肉の働きの段階を知らない。神は人間を一人一人裁きはしないし、一人ずつ試みもしない。それは裁きの働きではない。墮落はすべての人間に共通しているのではないか。人間の本質は、みな同じなのではないか。裁かれるのは人間の墮落した本質、サタンのせいで墮落した人間の本質、そして人間の罪全部である。神は人間の些細で無意味な過ちを裁かない。裁きの働きは代表によるもので、特に誰かのために行うものではない。そうではなくて、この働きでは、一群の人々が人類を代表して裁きを受けるのである。受肉した神が自ら一群の人々に働きかけ、全人類に施す働きを代理的に行うと、その後、それが徐々に広まる。裁きの働きも、そのように行われる。神は特定の人や特定の人を裁くのではなく、全人類の不義を裁く――例えば、神への敵対、神に対する不遜、神の働きの妨害等。裁かれるのは人間の神への敵対の本質であつて、この働きは終わりの日の征服の働きである。人間が目撃する受肉した神の働きと言葉は、終わりの日に大きな白い玉座の前での裁きの働きであり、これは過去に人間が考えたものである。今、受肉した神が行っている働きは、まさに、大きな白い玉座の前での裁きである。今日の受肉した神は、終わりの日にすべての人間を裁く神である。この肉体と神の働き、言葉、そしてすべての性質が神の総体である。神の肉の働きの規模は限られているし、直接全宇宙に関わるものではないが、裁きの働きの本質は、全人類への直接の裁きであつて、中国の選民のためだけでも、少数の人のためでもない。受肉した神の働きの間、この働きの範囲は全宇宙に及びはしないが、全宇宙への働きを代表し、受肉した体の作業範囲の働きを終えた後、神は直ちにこの働きを全宇宙

に広める。イエスの福音がそのよみがえりと昇天の後で全宇宙に広まったように。それが霊の働きであろうと、肉の働きであろうと、限られた範囲だけにおいて実行される働きであるが、全宇宙への働きを代表するものなのである。終わりの日、神は受肉した体で働くために出現する。そして、受肉した神は、大きな白い玉座の前で人間を裁く神なのである。霊でも肉体でも、裁きの働きを行うのは、終わりの日に人間を裁く神である。これは、神の働きによって規定されたものであって、神の外見やその他の要素によって決まるものではない。人間はこうした言葉についての観念をもっているが、受肉した神がすべての人間を裁き、征服することは誰も否定できない。人間がそれをどう評価するかに関わらず、事実は、結局のところ、事実である。誰ひとり、「働きは神によるが、その肉体は神ではない」とは言えない。これは戯言だ。この働きは、受肉した神以外にはできないものだからだ。この業はすでに完了しているのだから、この働きの後で神が再び人間を裁く働きをすることはあり得ない。二度目に受肉した神はその経営計画全体のすべての働きをすでに完成したのだから、神の働きの第四段階というものはない。裁かれるのは人間、肉の体をもち墮落した人間であり、直接裁かれるのはサタンの霊ではなく、裁きの働きは霊的世界ではなく、人間の間で行われる。人間の肉体の墮落を裁くのに、受肉した神以上に相応しいものはおらず、受肉した神以上に資格のあるものもない。もし神の霊が直接裁いたならば、それはすべてを含むものではないであろう。そのうえ、そうした働きは人間には受け入れがたいものだったろう。なぜなら、霊は人間と直接会うことができず、そのため効果は即座に見られるものでもない。まして、人間が神の侵しがたい性質をより明確に目にはできないであろう。もし受肉した神が人間の墮落を裁くなら、はじめてサタンを完全に打ち負かせる。受肉して普通の人間性をもった神は、直接人間の不義を裁くことができる。これが神本来の聖さ、すばらしさである。神だけが人間を裁く資格があり、その地位にいる。神には真理と義があるから、人間を裁くことができる。真理と義のない者には他人を裁くことができない。この働きが神の霊によって行われたなら、それはサタンに勝利したことにはならないだろう。霊は本来、死すべき者たちよりも高い地位にあり、神の霊は本質的に聖く、肉に優る。もしこの働きを霊が直接行ったならば、神は人間の不服従のすべてを裁くことができず、人間の不義をすべて露わにすることもできないだろう。裁きの働きもまた人間の神についての観念を通して行われるからである。人間は霊について何の観念も抱いたことがない。そのため霊には、人間の不義をよりよく露わにすることができないし、まして、そうした不義を完全に明らかにすることもできない。受肉した神は、神を知らない者すべての敵である。人間の観念と神への敵対を裁くことで、神は人間のあらゆる不

服従を明らかにする。受肉した神の働きの成果は、霊の働きよりも明らかである。そのため、すべての人間の裁きは霊が直接するのではなく、受肉した神の働きなのである。人間の体をもつ神は、人間が目で見、触れることができる。また、受肉した神は完全に人間を征服できる。この受肉した神と人間との関係において、人間は敵対から従順、迫害から受容、観念から認識、そして、拒否から愛へと変わっていく。これが受肉した神の働きの成果である。人間は神の裁きを受け入れることによってのみ救われ、神の口から出る言葉によって徐々に神を知るようになり、神に敵対している間に神に征服され、神の刑罰を受けている間にいのちの糧を受ける。この働きはみな受肉した神の働きであって、霊としての神の働きではない。受肉した神の働きは最も偉大で、最も深い働きであり、神の働きの三段階のうちの最も大事な部分は、受肉による働きの二つの段階である。人間の甚だしい堕落は、受肉した神にとって大きな障害である。とりわけ、世の終わりの人々に対する働きは極めて困難で、敵意に満ちた環境で、どの種類の人々の素質もまことに乏しい。しかし、この働きの終わりには、滞りなく望ましい結果を得る。これが肉の働きの成果であり、この成果は霊の働きの成果よりも説得力がある。神の働きの三つの段階は、肉において終結するだろう。そしてそれは受肉した神によって完結しなければならないのだ。最も重要かつ肝要な働きは肉において為され、人間の救いは神が受肉して自ら行わなければならない。人間はみな、受肉した神が人間と関わりがないと感じるだろうが、実際は、この肉体が、全人類の運命と存在に関わっているのだ。

神の働きのどの段階も、人間のために行われるもので、それはすべての人間のためなのだ。それは受肉した神の働きであるが、それでもすべての人間を対象とする。神はすべての人間の神であり、すべての被造物とそうでないものの神である。受肉した神の働きは限られた範囲のものであるし、この働きの目的もまた限られているが、神が働きのために受肉するたびに、神は、その働きの対象として究極的な代表を選ぶ。神は単純で平凡な集団を働きの対象とはせず、肉の働きのために代表となることのできる人の集団を選ぶ。この集団が選ばれるのは、神が受肉して行う働きの範囲が限られているためで、受肉した神のために特に用意され、受肉した神の働きのために特に選ばれるのである。神が働きの対象を選ぶのは、根拠のないことではなく、原則による。働きの対象は、受肉した神の働きに有益なものでなければならず、また、すべての人間を代表する者でなければならない。たとえば、ユダヤ人はイエス自らによる贖罪を受け容れることで全人類を代表することができた。また、中国人は受肉した神自身による征服を受け容れることで全人類を代表できる。ユダヤ人が全人類を代表したことには根拠がある。また中

国人が、神自らによる征服を受け容れることで全人類を代表することにも根拠がある。ユダヤ人の間で行われた贖いの働き以上に贖いの意義を示すものはない。また、中国人の間での征服以上に征服の働きの完全性と成功を明らかにするものもない。受肉した神の働きと言葉は、少数の集団にだけ向けられているもののように見えるが、実際は、この小集団のもとでの神の働きは全宇宙の働きであって、その言葉は全人類に向けられたものなのだ。受肉しての神の働きが終わった後、神に従う人々は、自分たちの間で神が行った働きを広めることとなる。受肉した神の働きで最もよい点は、神に従う人々に正確な言葉と勧告、人類へのな旨を残せるため、受肉した神の働きと全人類に向けられた心とを、後に信者たちがこの道を受け入れる人々により正確に、具体的に伝えられる点にある。受肉した神の人間の間での働きだけが、神が人間と共に存在し、生きている事実を真に確立できる。この働きだけが、神の顔を見たい、神の働きに立会い、神の直接的な言葉を聞きたいという人間の欲求を満たす。受肉した神は、ヤーウェの後ろ姿だけが人間に示された時代を終わらせ、また、漠然とした神への人間の信仰の時代を終わらせる。とりわけ、最後に受肉した神の働きは、すべての人間により現実的で実践的な快い時代をもたらす。神は律法と教義の時代を終わらせるだけではなく、もっと重要なことに、現実的で正常で、義であり聖なる神、経営計画を明らかにし奥義と人類の運命を示す神、人間を創り、救いの働きを完了し、数千年にわたって隠されていた神を人類に明らかにするのだ。神は漠然の時代を完全に終わらせ、全人類が神の顔を求めても見つけられなかった時代を終わらせる。神は、すべての人間がサタンに仕えた時代を終わらせ、すべての人間をまったく新たな時代へと完全に導く。これはみな神の霊ではなく、受肉した神の働きの結果なのだ。神が受肉して働くと、神に従う者たちは、もはや存在するようでいて存在しないようでもあるものを手探りで求める事をせず、漠然の神の心を推測することをやめる。神が肉における働きを広めると、神に従う人々は、神が受肉して行った働きをすべての宗教、すべての宗派に伝え、その言葉全部をすべての人間の耳に伝えるだろう。神の福音を受ける者が聞くことはみな、神の働きの事実で、人間が自分で見たり聞いたりしたこと、事実であって、噂ではない。こうした事実は神がその働きを広める証拠であり、また、その働きを広めるために用いる道具である。事実がなければ、神の福音はすべての国々、あらゆる場所に伝わらない。事実なしで人間の想像だけであれば、神はけっして全宇宙を征服する働きを行うことはできない。霊は人間には触れることのできないもので、人間には不可視で、霊の働きは神の働きのそれ以上の証拠も事実も人間に残せない。人間はけっして神の本当の顔を見ないだろうし、存在しない漠然とした神をいつまでも信じているだろう。人間はけっして神の顔を見ないし、

また、直接神が語る言葉を聞くこともない。人間の想像するものは、結局のところ、むなしく、神の真の顔に取って代われない。神の本来の性質、神自身の働きは、人間がまねる事ができない。目に見えない天の神とその働きは、受肉した神が自ら人間の間で働いて、はじめて地上にもたらされる。これが、神が人間に姿を現す最も理想的な方法であり、この方法により人間は神を見て、神の真の顔を知る。そして、これは受肉しない神では不可能なことだ。神はこの段階まで働きを実行しているので、その働きはすでに最高の結果を生み出しており、完全な成功である。神が受肉して直接行った働きは、すでに彼の経営全体の働きの九十パーセントを完了している。この肉体は神の働きすべての良き始まりと神の働き全部のまとめを提供してきたのであり、神の働きすべてを広め、この働き全体に最終的かつ周到な付け足しをした。だから、もう神の働きには、また神が受肉して行う第四の段階はなく、三度目に受肉した神が驚くべき働きを行うこともない。

肉となった神の働きの各段階は、その時代全体の働きを代表するもので、人間の働きのように特定の期間を代表するものではない。だから、神の最後の受肉の働きの終わりは、神の働きが完了したということではない。受肉しての神の働きは、時代全体を代表するもので、神が人間として働いた期間だけを代表するものではないからだ。これは、神は受肉している期間に、その時代のすべての働きを終えるというだけで、そのあとは、その働きはあらゆるところに広まる。受肉した神はその任務を終えた後、将来の働きを神に従う人々に託す。このようにして、その時代全体の神の働きが途絶えることなく続けられる。受肉した時代全体の働きは、それが全宇宙に広まってはじめて完了したとみなされる。受肉した神の働きは新たな時代を開き、神の働きを続ける人々は、神に用いられる者たちだ。人間による働きはみな、受肉した神の職分の範囲内で、その範囲を出るものではない。もし受肉した神が働きを行うために来なければ、人間は古い時代を終わらせることができず、新たな時代を開くこともできない。人間による働きは、単に人間に可能な範囲の任務であり、神の働きの代わりにはならない。受肉した神だけが、なすべき働きを完了しに来ることができるのであり、神をおいては誰一人代わってその働きをすることができない。もちろん、わたしの言っているのは、受肉しての働きのことである。この受肉した神は、人間の観念に合致しない段階の働きを行い、その後、神はさらに別の、人間の観念に合致しない働きをする。働きの目的は人間を征服することである。ある意味で、神の受肉は人間の観念に合致しない。さらに、神は人間の観念に合致しない働きをするので、人間は神についてますます批判的な意見をもつようになる

。神はただ、神についてさまざまな観念を持っている人間の間で、人間を征服する仕事をする。人間がどのように神を扱おうと、神はその務めを果たし、人間はみな、神の支配下に入っていることだろう。この働きの事実は、中国人の間に反映されるだけではなく、すべての人間がいかに征服されるかをも表している。こうした人々になされた成果は、すべての人間になされる働きの成果を予め告げるものであり、神が将来行う働きの成果は、こうした人々に対する成果を上回るだろう。受肉した神の働きは鳴り物入りで宣伝されるようなものではないし、不明瞭なものに取り巻かれているものでもない。それは具体的な事実であって、一足す一は二といったような働きなのである。それはすべての人から隠されているものではなく、また、誰をも欺くものではない。人々が見るのは事実であり、現実的なものであって、人間が得るものは、本当の真理と認識である。働きが終わると、人間は神について新たな認識を得、真に神を求める者は、もはや神に関して何の観念ももたない。これは、神の働きの中国人に対する影響だけではなくて、人類全体を征服する神の働きの効果を表すものだ。人類全体を征服する働きにとって、この肉体、この肉体の働き、肉体のすべて以上役立つものはない。それらは今日の神の働きに有益で、将来の神の働きにも役立つ。この肉体はすべての人々を征服し、すべての人々を自分のものとする。人類全体が神を見、神に従い、神を知るためにこれより優れた働きはない。人間のする働きは単に限られた範囲のものであるが、神がその働きを行うときは、特定の人にだけ語りかけるのではなく、全人類、神の言葉を受け入れる者すべてに語りかけるのである。神の告げる終わりはすべての人間の終わりであって、特定の人だけの終わりではない。神は誰かを特別扱いしないし、誰かを不当に罰することもない。そして、神は人類全体のために働き、話しかける。だから、この受肉した神は、すでに全人類をその種類によって分け、すでにすべての人々を裁き、全人類に相応の終着点を定めている。神はその働きを中国でだけ行っているが、実際は、すでに全宇宙の働きを定めている。神は、言葉を発して計画を一步一步進める前に、自分の働きがすべての人間に広まるのを待つわけにはいかない。それでは遅すぎるのではないか。今、神は将来の働きを予め終えることが完全に可能だ。働いているのは受肉した神なのだから、無限の働きを限られた範囲で行い、その後で、人間が尽くすべき本分を尽くすようにさせる。これが、神の働きの原則である。神は一時的に人間とともに生活できるだけで、時代全部の働きが完了するまで人間と共にいることはできない。それは、神が予め自分の働きを预言する神だからである。後に、神は言葉によってすべての人類をその種類にしたがって分け、人類は言葉にしたがって、神の順を追った働きに入る。誰一人免れない。誰もがその通りに行わなければいけない。だから、将来、時代は言葉によって

導かれるのであって、霊によって導かれるのではない。

受肉した神の働きは、肉において行われなければいけない。もし霊が直接行ったとしても、それは何の成果も得られないだろう。たとえ霊が行ったとしても、その働きはこれといった意味をもたず、結局は説得力を欠くであろう。被造物はみな、創造主の働きが有意義なものであるかどうか、それは何を示すのか、それは何が目的なのか、神の働きは権威と知恵に満ちたものなのかどうか、また、それが最高の価値と意義のあるものなのかを知りたいと願う。神が行う働きはすべての人間の救いのためであり、サタンを打ち破るためであり、そして万物のもとで自身の証をするためである。だから、神の行う働きにはまことに重要な意味があるはずだ。人間の肉はサタンによって墮落し、最も深く盲い、まことに深く損なわれた。神自らが受肉して働く最も根本的な理由は、救いの対象が肉の体をもつ人間であり、サタンもまた人間の肉を用いて神の働きを妨げているためである。サタンとの戦いは、実は人間を征服する働きであり、同時に、人間はまた、神による救いの対象でもある。このように、受肉した神の働きは不可欠なのだ。サタンは人間の肉を墮落させ、人間はサタンの体現者となり、神に打ち負かされるべき存在となった。このように、サタンと戦って人類を救う働きは地上で行われ、神はサタンと戦うために人間にならなければいけない。この働きは極めて実際的なものだ。神が受肉して働いている時、神は実際はサタンと肉において戦っている。神が肉において働くとき、神は霊的領域の働きをしており、霊的領域での働きのすべてを地上で現実的なものにする。征服される者は神に逆らう人間であり、打ち負かされる者はサタンの体現者（もちろん、これもまた人間）、神に敵対する者であり、最終的に救われる者もまた人間である。このように、神が被造物の外形をもつ人間になることがますます必要なのは、神がサタンと真の戦いを行えるようにであり、それにより神に対して不服従で神と同じ姿をもつ人間を征服し、神と同じ姿をもちサタンによって損なわれた人間を救うためである。神の敵は人間、その征服の対象は人間、救いの対象も神の被造物である人間だ。そこで、神は人間とならなければいけない。そのほうが、ずっと働きをしやすくなるのだ。神はサタンに勝利し、人間を征服し、そのうえ、人間を救うことができる。この肉は普通で現実のものであるが、神はありふれた肉体ではない。神は単に人間である肉体なのではなく、人間と神の両方ある肉体なのだ。これは神と人間との違いであり、これが神の身分のしるしなのだ。このような肉体にだけ、神の意図する働きができ、肉における神の務めを果たし、人間たちの間での働きを完了できる。そうでなければ、神の人間たちの間での働きは、いつも空虚で不完全なものとなる。神がサタンの霊と戦って

勝利者となることができても、それでは墮落した人間の古い本性はけっして直せないし、神に不服従で敵対する者たちは、けっして真に神の支配に服従することもできない。つまり、神はけっして人類を征服することができず、けっして人類全体を得られないということだ。神の地上での働きが完了しなければ、神の経営はけっして終わらず、全人類は安息に入ることができない。もし神がすべての被造物と共に安息に入れなければ、このような経営の成果はなく、神の栄光はその結果消える。神の肉体には何の権威もないが、神の行う働きは成果を達成していることだろう。これが神の働きの明確な方向である。神の肉体に権威があるかどうかにかかわらず、神としての働きを遂行できるならば、それは神そのものだ。この肉体がどれほど普通で平凡なものであっても、神がすべき働きができるのは、この肉が単なる人間ではなく、神だからだ。この肉が人間にはできない働きができるのは、その内なる性質が人間のそれと異なっているため、それが人間を救えるのは、その身分が人間とは異なるからだ。この肉の体が人類にとって極めて重要なのは、それは人間である、かつそれ以上に神であるからだ。それは通常の間には不可能な働きが可能だからであり、神には地上で共に暮らす墮落した人間を救うことが可能なためである。神は人間と同じ外見をもつが、受肉した神はどんな重要人物よりも人間にとって重要である。それは神の霊には不可能な働きが可能だからであり、神自身について霊よりも優れた証しができ、神の霊よりも完全に人間を得ることができ、その結果、この肉は普通で平凡であっても、その人類への貢献と人類存在にとっての意義により、この肉体は極めて尊いものとなる。そしてこの肉の真の価値と意味は誰にとってもはかりしれないものがある。この肉は直接サタンを滅ぼすことはできないが、神はその働きによって、人間を征服し、サタンを打ち負かせる。サタンを完全に支配下に下せる。これは、神が受肉したから、サタンに勝利して人類を救うことができるのだ。神は直接サタンを滅ぼしはしないが、サタンによって墮落させられた人類を征服する働きをするため受肉する。このようにして、神は被造物のもとで自分を証しでき、墮落した人間をよりよく救える。受肉した神がサタンを打ち負かすことは、神の霊が直接サタンを滅ぼすよりも偉大な証しであり、より説得力がある。受肉した神は、人間が創造主を知る手助けをよりよく行うことができ、被造物のもとでよりよく神自身を証しできる。

神の宿る肉の本質

最初に受肉した神は地上で三十三年と半年にわたって生き、三年半の間だけ自らの職分を果たした。働きをしていた時も、働きを始める前も、イエスは普通の人間性をもっ

ていた。普通の人間性を三十三年と半年の間宿したのである。最後の三年半の間に、イエスは自分が受肉した神であることを明らかにし果たし始める前は、普通の正常な人間性を示し、その神性の兆候は何も示さなかった。公に職分を果たし始めた後になってはじめて、神性が示された。最初の二十九年間の生活と働きは、イエスが本物の人間、人の子、肉体をもつ人であることを証明していた。イエスの職分は二十九歳以降に本格的に始まったからである。受肉というのは、神が肉の体で現れることで、神が自分の創った人間のもとで働くために人間の姿で来るのである。さて、神が受肉するというのは、まず肉の体、普通の人間性を備えた肉体でなくてはならず、それが最も基本的な前提条件である。実際、神が受肉するということは、神が肉体において生き働くということ、その本質において肉となり、ひとりの人になるということを意味する。神の受肉した生活と働きは二つの段階に分けられる。第一は職分を始める前の生活。神は普通の人間の家族として暮らし、ごく普通の人間性をもち、人間生活の通常の道徳や法に従い、普通の人間の必要（食物、衣服、住まい、睡眠）をもち、普通の人間の弱さ、普通の人間の感情をもって暮らす。つまり、この最初の段階で、神は神ではなく完全に普通の人間として、あらゆる普通の人間的な活動を行いながら生きる。第二の段階は、職分を果たし始めた後の生活である。神はまだ普通の人間の外形で通常の人間性において暮らし、表向きには超自然的なしるしは何も現さない。しかし、神は純粹にその職分のために生き、この期間の普通の人間性は、ひたすら神として普通の働きのために存在する。そのころには、普通の人間性は職分を果たせるほどに成熟していたのだから。そこで、第二の段階では普通の人間性において職分を果たすこととなり、それは通常の人間性と完全な神性を兼ね合わせる生活である。前半生で神がまったく普通の人間的な生活をする理由は、まだその人間性が神性の働きの全体と同等でないから、まだ成熟していないからである。人間性が成熟して、その職分を背負えるようになってはじめて、職分を果たし始めることができるのである。肉体をもつ者として神は成長し、成熟する必要があるので、その生涯の最初の段階は普通の人間のものである。第二段階に入ると、その人間性が働きに着手し、職分を果たせるようになっていたので、職分を果たす間の受肉した神の生活は、人間性と完全な神性の二つを併せもつものである。もし受肉した神が生まれた瞬間から本格的に職分を果たし、超自然のしるしや不思議を示し始めたなら、その肉体の本質は何もないであろう。だから、受肉した神の人間性は、肉体的な本質のために存在するのである。人間性なくして肉は存在しない。また、人間性のない人は人間ではない。このように、神の肉の人間性は、受肉した肉のなくてはならない性質である。「神が肉となっても、神は完全に神であり、まったく人間ではない」と言うのは瀆神行為であ

る。なぜなら、このような発言はまったく存在せず、受肉の原理に反しているからである。神はその職分を始めた後も、働きを行なうときは人間の外皮をまといつつ、依然として神性のうちに宿っている。ただその時、神の人間性は神性が通常の肉の体で働きを行えるようにするという目的だけを果たすのである。だから、働きをする者は、人間性に宿る神性である。働いているのは神の人間性ではなく神性だが、それは人間性の中に隠れた神性である。神の働きは、つまるところ、完全な神性が行うのであって、人間性によるのではない。しかし、働きを実践するのは神の肉である。このような神は、人間でありかつ神であると言えるだろう。神は肉の体で生きる神となり、人間の姿と人間の本质をもつが、また神の本质をも備えているからである。神の本质を備えた人間だから、被造物であるどの人間、神の働きを行うことのできるどの人間よりも上位に位置する。そこで、このような人間の姿をした者たちの中で、人間性をもつすべての者の中で、神だけが受肉した神そのものである。他はみな、被造物である人間である。受肉した神と人間の双方に人間性があるが、被造物である人間には人間性以外には何もない。ところが、受肉した神は違う。受肉した神は、その肉体において人間性だけではなく、さらに重要なことに神性をも備えている。神の人間性は肉の体の外見や毎日の生活に見られる。しかしその神性は感知しにくい。神の神性は人間性があってはじめて現れるのだから、また、人々が想像するほど超自然なものではないから、人々がそれを見るのは極めて難しい。今日でも受肉した神の本质を理解するのは極めて難しい。わたしがこれほど長い間話したあとですら、あなたがたの大半にとってはいまだに謎であることであろう。実を言うと、これはとても単純なことなのである。神が人間になると、その本质は人間性と神性の合わさったものである。この組み合わせが神そのものと呼ばれる、地上における神そのものなのである。

イエスが地上で生きた生活は、肉体をもつ人間の通常の生活であった。イエスはその肉体の正常な人間性において生きた。イエスの権威――彼の働きをし、彼の言葉を話し、病者を癒やし、悪霊を祓うといった、驚くべきことを行うためのもの――は、大方、職分を果たし始めるまでは示されなかった。二十九歳までの生活、教えを説く前は、イエスがただ普通の肉体をもった人間であったことの十分な証拠であった。そのため、そして、イエスがまだ職分を果たし始めていなかったため、人々はイエスに何の神性も見出さなかった。普通の人間、平凡な人間しか見なかった――ちょうど当時の人々がイエスはヨセフの息子だと信じていたように。人々は、イエスは普通の人間の息子だと思い、神の受肉したものであるとは知りようもなかった。職分を果たしながら、多くの奇跡

を行なったときでさえも、たいていの人々はあれはヨセフの息子だと言った。イエスは普通の人間の外形をしたキリストだったからである。イエスの普通の人間性とその働きは、神が完全に受肉し、全く普通の人間になるという、最初の受肉の意味を満たすために存在した。働きを始める前のイエスが普通の人間性をもっていたことは、イエスが普通の肉体をもつ人間であった証拠である。そして、その後、イエスが働きをしたことも、通常の間であることを示していた。イエスは普通の人間性をもつ肉体において、しるしや不思議を行い、病者を癒やし、悪霊を祓ったのだから。イエスが奇跡を行うことができたのは、その肉に神の権威を帯びており、神の霊が人間の姿をしていたものだからである。イエスにこの権威があったのは、神の霊のためであり、イエスが人間ではなかったということではない。病者を癒やし、悪霊を祓うことは、イエスはその職分において行う必要のある働きであり、人間性に隠された神性の表明であった。どのようなしるしを示そうと、どのようにその権威を示そうと、イエスはやはり普通の人間性において生き、普通の肉体をもつ人間であった。十字架上で死んで蘇るまで、イエスは普通の肉の中に宿っていた。恵みを与え、病人を癒し、悪霊を祓うことは、その働きの一部であり、すべて普通の人間の体で行われた働きである。イエスは十字架に行く前には、何をしているときであっても、けっして普通の人間の体を離れなかった。イエスは神そのものであり、神の働きをしたが、受肉した神であったため、食物を食べ、衣服を着、普通の人間と同じものを必要とし、普通の人間の理性と普通の人間の心をもっていた。これはみな、イエスが普通の人間であったことの証拠であり、受肉した神の体は普通の人間性をもつ肉体であって、超自然のものではないということを示している。イエスの務めは神の最初の受肉の働きを完了すること、最初の受肉の職分を果たすことであった。受肉の意義は、平凡な普通の人間が神そのものの働きをするということであり、つまり、神が人間性の内に神としての働きを行い、それによってサタンを打ち破るということである。受肉とは、神の霊が肉となる、つまり、神が肉となるということである。神が肉において行う働きは、肉において実現し、肉において表される霊の働きである。神の肉体以外には誰も、受肉した神の働きを成就できない。つまり、他の誰でもなく、受肉した神の肉だけが、つまりこの普通の人間性だけが、神の働きを示せるのだ。もし最初の顕現で、神が二十九歳になる前に普通の人間性をもっていなければ――もし生まれてすぐに奇跡を行うことができたなら、もし、話せるようになってすぐに天の言葉を話せたなら、地上に初めて着いたときにすべての世俗的な物事を理解し、すべての人の考えや意図を知ることができたなら――そのような人は普通の人間とは呼ばれなかったであろうし、そのような肉は人間の肉とは呼ばれなかっただろう。もしキリストがそういう

ものなら、神の受肉の意味と本質は失われるであろう。キリストが普通の人間性をもっていることは、キリストが肉の体をもつ受肉した神であることを示している。キリストが普通の人間としての成長過程を過ごすことは、キリストが普通の人間であることをさらに証明するものだ。そのうえ、キリストの働きは、キリストが神の言葉であり、神の霊であり、それが肉となったことの十分な証拠である。神が人間になるのは、働きに必要なためである。つまり、その段階の働きには肉の体で、普通の人間性において行う必要があるからである。これが「言葉は肉となる」、「言葉は肉において現れる」ための前提条件であり、これが神の二度の受肉の背後にある実話だからである。人々はイエスの全生涯は不思議に満ちていたと思っているであろう。地上での働きの終わりまで、普通の人間性を示さず、普通の人間のような必要や弱さ、人間的な感情もなく、また、人間生活の基本的な必要もなく、普通の人間のような考えもなかった、と思っているであろう。そういう人々は、イエスが超人的な頭脳、超越的な人格だけをもつと想像している。人々は、イエスは神なのだから、普通の人間のするように考え、生きることはないはずだ、普通の人、本物の人間だけが、普通の人間のように考え、普通の人間のように生きるのだと考えている。これらはみな人間の発想、人間の考えであって、神の働きの本来の意図に反するものである。普通の人間の考えは、普通の人間の理知と普通の人間性を支える。普通の人間性は普通の肉の機能を支える。そして、普通の肉の機能は普通の人間の生活すべてを可能にする。そうした肉において働いてはじめて、神はその受肉の目的を達することができる。受肉した神が肉の外形だけはもつが、普通の人間のようには思考しないとしたら、この肉は人間の理性をもたず、まして、本物の人間性ももたないであろう。そうした人間性を欠いた肉が、どうして受肉した神が果たすべき職分を成就できたであろう。普通の心は人間生活のあらゆる面を支える。普通の心がなければ、それは人間ではないであろう。つまり、普通の考え方をしない人は、精神を病んでいるのである。そして、人間性をもたず神性だけをもつキリストは、神の受肉した体であるとはいえない。それで、神の受肉した体に普通の人間性がないということがなぜあり得るのか。キリストに人間性がないというのは、冒瀆ではないのか。普通の人間が行う活動は、普通の人間の心の働きに依存している。それがなければ、人間は異常な振る舞いをする。黒と白の違い、善悪を区別することさえもできないであろう。また、人間的な倫理観や道德律もないだろう。同様に、もし受肉した神が普通の人間のようには考えないのなら、それは本物の肉、普通の人間ではない。そうした思考しない肉が神性の働きを担うことはできないであろう。それでは肉の普通の活動をすることができず、まして、地上で人間と共に生きることはできないであろう。そのため、神の受肉の意義、神が肉

として顕現することの本質は失っていたであろう。受肉した神の人間性は、肉において普通の神性の働きを維持するためにある。神の普通の人間としての考え方が、その普通の人間性とあらゆる普通の身体的活動を維持する。神が普通の人間的思考をするのは、神が肉においてする働きをすべて支えるためなのだと言えるだろう。この肉が普通の人間の心をもたないのなら、神は肉における働きができず、肉においてすべきことを成就できない。受肉した神は普通の人間の心をもつが、その働きは人間の思考によって劣化しない。神は普通の心をもつ人間として働きを行うが、心をもった人間性はその前提条件であり、通常の人間の考えを行使することによりその働きを行うのではない。神の肉の体がどれほど崇高な考えをもとうと、神の働きは論理や思考の産物ではない。つまり、神の働きは肉の体から生まれるのではなく、人間性の内における神性の働きの直接的な現れなのである。その働きはみな、成就すべき職分であり、そのどれも人間の頭脳の産物ではない。たとえば、病人の癒し、悪霊祓い、磔刑はイエスの人間としての心の産物ではなく、人間の心をもった人間がなし得ることはなかったであろう。同様に、今日の征服の働きも受肉した神が行うべき務めであるが、人間の意図による働きではない。これは、キリストの神性が行うべき働きであって、肉の体をもつ人間に可能な働きではない。だから、受肉した神は普通の人間の心をもたなければいけない。普通の人間性をもたなければいけない。なぜなら、普通の心をもった人間性の内にあって働かなければいけないからである。これが受肉した神の働きの本質、受肉した神の本質そのものである。

イエスがその働きをする以前、イエスはただ普通の人間として生きた。誰一人、イエスが神であるとはわからなかったし、誰一人、イエスが受肉した神であることを気付かなかった。人々はただ、どこから見ても普通の人間としてイエスを知っていた。イエスのまったく平凡な普通の人間性は、神が受肉して人間の肉の形になっていたことと、恵みの時代は受肉した神の働きの時代であり、霊の働きの時代ではないことの証拠であった。これは、神の霊が完全に肉において現れたこと、神が受肉した時代には、肉の体が霊の働きをすべて行うことの証拠であった。普通の人間性をもつキリストは、霊が顕現した肉体であり、普通の人間性、普通の理知、人間的思考をもっている。「顕現」とは神が人間となること、霊が肉となることである。わかりやすく言えば、神自身が普通の人間性をもつ肉に宿るということで、それによって神性の働きを表す――これが顕現、または受肉の意味である。最初の受肉の間、神が病人を癒し、悪霊を祓うことが必要だったのは、神の働きが、贖うことだったからである。全人類を贖うためには、神は憐れ

みをもって赦す必要があった。イエスが十字架につけられる前にした働きは、病者を癒やし、悪霊を祓うことだったが、これは、人間を罪と穢れから救うことを予め告げるものであった。これは恵みの時代だったため、イエスが病者を癒やし、しるしや不思議を示す必要があった。これがその時代の恵みを表すものであった。恵みの時代が、人々のイエスへの信仰の象徴である平和と喜び、物質的幸いに象徴される恵みを施すことを中心としていたためである。これはつまり、病者を癒し、悪霊を祓い、恵みを与えることが、恵みの時代のイエスの肉に生まれながらに備わった能力だったということで、それが肉において霊が実現した働きであったのだ。しかし、イエスはそうした働きをしている間、肉の体で生きており、肉を超越してはいなかった。どのような癒やしの業を行なっても、イエスは普通の人間性を備え、まだ普通の人間として生きた。神の受肉した時代、肉が霊の働きのすべてを行なったとわたしが言うのは、イエスがどのような働きをしようと、それは肉の内で行なったということである。しかし、その働きのため、人々はイエスの人間の体が完全に肉体的な本質をもつとは考えなかった。それは、この肉の体は奇跡を行うことができ、特別な場合には、肉を超越することができたからである。もちろん、こうしたこと、例えば四十日間試されたことや、山上の聖変容はみな、イエスがその職分を始めた後に起こったことだ。だから、イエスにおいては神の受肉の意義は完了しておらず、部分的に成就されただけであった。働きを始める前、イエスが肉において送った生活は、どの点から見ても、まったく普通のものであった。働きを始めた後、イエスは人間の外形だけを保った。イエスの働きは神性の現れだったので、通常の肉の機能を超えていた。結局のところ、神の受肉した肉は生身の人間とは違ったのである。もちろん、日々の生活では、他のみなと同じように食物や衣服、睡眠、住まいを必要とし、あらゆる普通の必需品を必要とし、普通の人間のように思考し、判断した。人々はそれでも、イエスの行なった働きが超自然的であったということ以外では、イエスを普通の人間と見た。実際、イエスは何を doing していても、普通の正常な人間性において生きており、働きをするときもその理知はごく正常なもので、その思考は他の通常の人間以上に明瞭であった。受肉した神は、このように考え判断する必要があった。きわめて通常の理性を備え、思考が明瞭な人が神の働きを表す必要があったからである。そうしてはじめて、神の肉は神性の働きを表すことができたのである。この世に生きた三十三年半の期間を通じて、イエスは普通の人間性を保っていたが、三年半の職分の間に行なった働きのせいで、人々はイエスがきわめて超越的で、それ以前よりはるかに超常的であったと思った。実際は、イエスの人間性は働きを始める前も後も変わらなかった。イエスの人間性はずっと同じであった。しかし、働きを始めた前と後の相違のために、イ

イエスの肉について二つの異なった見方が生じた。人々が何を考えようと、受肉した神はずっと元々の普通の人間性を保っていた。神は受肉して以来、肉において生きたが、その肉は普通の人間性をもっていたのだから。イエスがその働きをしようとしまいと、その肉の人間性は除くことができなかった。人間性は肉の基本的な本質だからである。イエスが職分を果たし始める前、イエスの肉は完全に普通のままで、あらゆる普通の人間的活動をした。イエスは少しも超常的な様子を示さず、奇跡的なしるしを何も見せなかった。当時、イエスはただ神を崇めごく普通の人間であった。その信仰は他の誰よりも正直で、真摯なものであったが。イエスのまったく普通の人間性はこのように現れていた。イエスは職分を果たし始める前はまったく働きをしなかったから、誰一人、イエスの身分に気付かなかった。誰もイエスの肉が他の人々のそれと違うとはわからなかった。イエスは、たった一つの奇跡も起こさず、神自身の働きを少しもしなかったからである。しかしながら、職分を果たし始めたとき、イエスは普通の人間の外形を保ち、まだ、普通の人間の理知をもって生活していた。しかし、神自身の働きを始め、キリストとしての務めを果たし、死すべき存在である生身の人間にはできない働きをしたため、人々はイエスには普通の人間性がなく、体は完全に普通の人間のものではなく、不完全な肉体なのだと思いますのである。イエスの行なった働きのため、人々はイエスが人間の体をもつ神であり、普通の人間性をもたないのだと言った。これは誤った考えだ。人々は神の受肉の意味を理解していなかったのだから。この誤解は、神が受肉して行なった働きの、普通の人間性をもつ肉の体において表された神性の働きだったからである。神は肉をまとい、肉の内に生きた。その神の人間性の中での働きの、その普通の人間性を曖昧にした。そのため、人々は神には人間性がなく、神性しかなかったのだと信じたのである。

最初に受肉した神は、受肉の働きを完了しなかった。神が肉においてすべき働きの最初の段階を完了しただけである。だから、受肉の働きを完了するために、神は再び肉の体に戻り、肉体のもつすべての正常性と現実を生きている。つまり、神のことが完全に普通の平凡な肉の体として現れ、それにより、肉においてやり残した働きを完了しようというのである。二度目に受肉をした体は、本質的には最初と変わらないが、もっと現実的で、最初よりもさらに普通なものだ。その結果、第二の受肉の苦しみは最初のそれよりも重いのだが、この苦しみは肉における働きの結果であって、墮落した人間の苦しみとは異なる。これはまた、神の肉の体の普通さと現実から生じている。神が完全に普通かつ現実の肉体で職分を行うため、肉の体は多くの困難に耐えなければいけない

。この肉の体が普通で現実のものであればあるほど、神はその職分を果たすために苦しむ。神の働きはごく普通の体、まったく超自然的でない体において表される。神の肉は普通で、人間を救う働きをも担わなければいけないので、その苦しみは超自然の肉よりもはるかに大きい――この苦しみはみな、神の体の現実と正常さから来ている。受肉した二つの体が職分を果たしていたときに受けた苦しみから、受肉した肉の本質がわかる。肉体が普通であればあるほど、働きを行う間、それだけ大きな苦難を神は耐えなければならない。働きをする肉体が現実的であればあるほど、人々の見方は厳しくなり、それだけ多くの危険が神にふりかかることになりがちである。それでも、肉が現実的であればあるほど、肉が普通の人間の必要と完全な理知をもっているほど、肉における働きを神はみごとに取り組むことができる。十字架につけられたのはイエスの肉、罪のための捧げ物としてイエスが捧げた肉体である。普通の人間性をもつ肉体という手段によってイエスはサタンに勝利し、人間を完全に十字架から救った。そして、二度目に受肉した神が征服の働きを行い、サタンを打ち負かすのは、完全な肉の体としてである。完全に普通で現実的な肉だけが征服の働きをその全体におよんで行き、力強い証しを示すことができる。つまり、人間の征服は、受肉した神の現実性と正常さによって効果的になるのであって、超常的な奇跡や啓示によるのではない。この受肉した神の職分は、話すことであり、それによって人間を征服し、完全にすることにある。つまり、肉として現れた霊の働き、肉の務めは、話すことで、それによって人間を征服し、顕示し、完全にし、淘汰することである。だから、肉における神の働きが完全に達成されるのは、征服する働きにおいてである。最初の贖いの働きは、受肉の働きの始まりに過ぎなかった。征服の働きをする肉は、受肉しての働きを完了させるであろう。性別では、一度目は男、二度目は女であり、これにより神の受肉の意義が完了し、神に関する人間の観念を一掃する。神は男にも女にもなれる。本質的に、受肉した神には性別がない。彼は男と女を創ったが、神にとって性の区別はない。この段階の働きでは、言葉という手段によって働きの成果があらわれるように、神はしるしや不思議を行わない。さらに、その理由は、受肉した神の今回の働きは病人を癒し、悪霊を祓うためではなく、話すことによって人間を征服するためであり、これは、受肉した神の肉体が本来備えている能力が、言葉を話して人間を征服するというものであって、病人を癒やし、悪霊を祓うためのものではないということである。普通の人間性における神の働きは奇跡を行うことなく、病人を癒し、悪霊を祓うことはなく、話すことである。だから、第二の受肉をした体は、最初の時よりずっと普通のものに見える。人々は神の受肉が嘘ではないとわかっているが、この受肉した神はイエスの受肉とは異なっている。どちらも神の受肉ではある

が、完全に同じではない。イエスは普通の人間性、平凡な人間性をもっていたが、多くのしるしや不思議を伴っていた。この受肉した神においては、人間の目には、しるしや不思議は何も見えず、病者を癒すことも、悪霊を祓うことも、海の上を歩くことも、四十日間の断食もない。神はイエスがしたのと同じ働きは行わない。それは神の肉が本質的にイエスのものとどこか異なるからではなく、病者を癒したり悪霊を祓うことは、神の職分ではないからである。神は自分の働きを取り壊すこともなければ、自分の働きを妨げたりはしない。神はその実際の言葉で人間を征服するのだから、奇跡で屈服させる必要はない。そして、この段階は受肉の働きを完了するためにある。あなたが今日見る受肉した神は完全な肉の体であって、超自然的な要素は何もない。神は完全に肉の体なのだから、他の人々同様、病気になるし、他の人々同様、食物や衣服を必要とする。今回、受肉した神が超自然のしるしや不思議を見せたなら、病者を癒し、悪霊を祓ったなら、あるいは一言で殺すことができたなら、どうして征服の働きを行えるであろうか。どうして異邦人の国々で働きを広められるであろうか。病人を癒やし、悪霊を祓うのは、恵みの時代の働き、贖いの働きの第一歩であったが、神が人間を十字架から救った今となっては、もはやその働きを神は行わない。もし終わりの日に病人を癒やし、悪霊を祓い、人間のために十字架につけられたイエスと同じ「神」が現れたなら、その「神」は聖書の神の記述と同じで、人間には受け入れ易いであろうが、本質的に、それは神の霊が人間の肉をまとったものではなく、悪霊によるものであろう。すでに成就した働きは二度と繰り返さないのが神の原則だからである。したがって、神の二度目の受肉による働きは、最初の働きとは異なっている。終わりの日には、神は普通の正常な肉体で征服の働きを実現する。神は病人を癒やさず、人間のために十字架につけられることもなく、ただ肉の体で言葉を話し、肉において人間を征服する。このような肉のみが神の受肉された体である。こうした肉の体だけが、神の肉における働きを完了できる。

この段階で受肉した神が困難を経験していようが、職分を果たしていようが、神は受肉の意味を完了するためにそうしているのである。これが神の最後の受肉だからである。神は二回だけ受肉することができる。三度目はありえない。最初の受肉は男性で、二度目は女性であり、そこで神の受肉した姿は人間の心の中で完全になる。さらに、二回の受肉により、すでに肉における神の働きは終わっている。一度目、受肉した神は、受肉の意味を完了するために普通の人間性を備えていた。今回も神は普通の人間性を備えているが、この受肉の意味は異なっている。もっと深く、その働きにはより深い意義がある。神が再び受肉した理由は、受肉の意味を完了するためである。神がこの段階の働

きを完全に終えると、受肉の意味のすべて、つまり、肉における神の働きは完了し、もはや肉において行う働きはない。つまり、これ以後は、神が働きをするために受肉することは二度とないのである。人間を救って完全にするためにだけ、神は受肉の働きをする。つまり、神が受肉して来るのは、働きのため以外では普通のことではないのである。働きのために受肉することで、神はサタンに自分が肉体になっていること、正常な普通の人間であることを示し、それでも勝利を誇りつつ世界に君臨し、サタンを打ち破り、人間を贖い、人間を征服できることを示すのである。サタンの働きの目的は人間を墮落させることだが、神の目的は人間を救うことである。サタンは人間を底なしの淵に捕らえるが、神はそこから人間を救う。サタンはすべての人間に自分を崇めさせるが、神は人間を自分の支配下に置く。神は創造の主であるからである。この働きはみな、神の二度の受肉で達成される。神の肉は本質的に人間性と神性の一体化したもので、普通の人間性を備えている。だから、神の受肉した肉なしでは人間を救う際にこれらの成果を達成することはできず、肉の普通の人間性なしでは肉における神の働きは成果を挙げることができない。神の受肉の本質は、神が普通の人間性をもたなければいけないということである。そうでなければ、受肉する本来の意図に反することになる。

なぜわたしは、受肉の意味がイエスの働きで完了しなかったと言うのであろうか。それは、ことばが完全に肉の体にならなかったからである。イエスがしたことは、神の肉の体での働きの一部分だけであった。イエスは贖いの働きだけを行い、完全に人間を得る働きはしなかった。そのため、神は終わりの日に再度受肉したのである。この段階の働きはまた、普通の人間の体で、すっかり通常の人によって、その人間性が少しも超越的でない存在によって行われる。つまり、神は完全な人間になったのであり、身分は神である人、完全な人間、完全な肉の体が働きをする。人間の目には、神はまったく超越的ではない、ただの人間に見える。ごく普通の人物で天の言葉を話すことができ、奇跡的なしるしは何も見せず、何の奇跡も行わず、まして、大きな集会場で宗教についての内的な真理を明らかにしたりはしない。第二の受肉の働きは、人々には最初のものとはまるで違って見える。あまりに違うので、二つには何の共通点もないように見える。最初の働きのようなことは、今回は何も見られない。第二の受肉の働きは最初のものとは異なっているが、それは両者の源が同一ではないということではない。同じかどうかは、肉の体で行われる働きの性質によるのであって、外形によるのではない。三段階の働きの間に神は二度受肉し、いずれのときも受肉した神は新たな時代を開き、新しい働きをもたらした。二度の受肉は相補うのである。人間の目では、二つの肉の体が同じ源

から来ていると見極めることは不可能である。言うまでもなく、これは人間の目や心の能力を超えている。しかし、両者の本質は同じである。二人の働きは同じ霊に発しているからである。受肉した二つの体が同じ源から発しているかどうかを判断できるのは、二人の生まれた時代と場所やそのような他の要素によるのではなく、二人の表す神性の働きによるのである。第二の受肉による体はイエスの行なった働きは何も行わない。神の働きに慣習的な決まりはなく、それぞれが新たな道を開くからである。第二の受肉は最初の肉に関する人々の心にある印象を深めも固めもしないが、それを補い、完成させ、神についての人間の認識を深め、人々の心にある、あらゆる規則を破り、人々の心にある神についての誤った姿を消し去る。神自身の働きのどの段階も個別には、人間に神についての完全な認識を与えることはできないと言える。各段階は、全部ではなく、一部分だけを与えるのである。神はその性質を完全に示したが、人間の理解力が限られているため、神についての認識はまだ不完全なままである。人間の言語で神の性質を完全に言い表すのは不可能である。まして、神の働きの一段階だけで、どれほど完全に神を表せるだろうか。神は普通の人間性の陰に隠れて肉において働く。そして、その神性が現れてはじめて、人間は神を知ることができるのであり、その外見を見てのことではない。神はさまざまな働きを通して人間が神を知ることができるように受肉するのだが、働きの二段階は同じではない。このようにしてはじめて、人間は肉における神の働きについて、一つの面だけでなく、完全な認識をもてる。受肉しての二度の働きは別々のものだが、肉の本質とその働きの源は同一である。ただ、どちらも二つの異なった段階の働きをするために存在し、二つの別の時代に来るということである。いずれにしろ、受肉した神の肉は同じ本質と由来をもつ。これは誰も否定できない真理である。

神の働きと人間の実践

人間の間で為される神の働きは、人間から切り離すことができない。なぜなら、人間はこの働きの対象であり、神によって造られたもののうち、神を証しすることができる唯一の創造物だからである。人間の生活と人間のあらゆる活動は、神から切り離すことができず、すべて神の手によって支配されており、神から独立して存在できる人間は一人もいないとさえ言えるであろう。これは事実であるので、誰にも否定できない。神が行う全ての働きは、人類の益のためであり、サタンの策略に対するものである。人間が必要とする全てのものは神から来るのであり、神は人間のいのちの源である。したがって、人間は決して神から離れられない。さらに、神には人間から離れる意図など一度も無かった。神が行う働きは、全人類のためであり、神の考えは常に親切である。したが

って、人間にとって、神の働きと考へ（すなわち神の心）は、ともに人間が知るべき「ビジョン」である。このようなビジョンは、神による経営（救い）でもあり、また人間には為すことのできない働きでもある。一方、神の働きにおいて神が人間に要求することは、人間の「実践」と呼ばれている。ビジョンとは神自身の働きであり、あるいは人類に対する神の旨、また神の働きの目標であり、意義でもある。また、ビジョンは経営の一部であるとも言える。なぜなら、この経営は神の働きであり、人間を対象とするものであり、つまり神が人間の間で行う働きだからである。この働きは、人間が神を知るようになるための証拠、また道であり、それは人間にとって極めて重要なものである。もし人々が、神の働きに関する認識に注意を払う代わりに、神への信仰に関する教義や、取るに足らない詳細にのみ留意するならば、人間は絶対神を知ることは無いであろう。そしてさらには、神の心には適わないであろう。神の働きは、人間が神を知ることに非常に役立ち、それはビジョンと呼ばれている。これらのビジョンは神の働きであり、旨であり、神の働きの目的と意義でもある。これらは全て人間にとって恩恵である。実践とは、人間が実行すべき事、神に従う創造物が実行すべき事を指す。それはまた人間の本分である。人間が為すべき事は、最初から人間が理解している事では無く、神が働きの中で人間に要求することである。これらの要求は、神が働きを行うに従って、次第に深く、かつ高度になってゆく。たとえば、律法の時代には、人間は律法に従わなければならない、恵みの時代には、十字架を背負わなければならなかった。神の国の時代はそれと異なる。つまり、人間に対する要求は、律法の時代や恵みの時代よりも高度である。ビジョンがより高くなるにつれ、人間に対する要求もさらに高くなり、また明瞭かつ現実的なものになってゆく。同様に、ビジョンもまたますます現実的になってゆく。これら多数の現実的ビジョンは、人間の神への服従を促進するだけでなく、何よりも神に関する人間の認識も促進する。

前の時代に比べると、神の国の時代における神の働きはより実践的であり、もっと人間の実質や人間の性質の変化に向けられており、神に従う者全員のために、一層神自身を証しすることができるのである。言い換えれば、神の国の時代においては、神は働きを行う際、自身に関することを以前よりももっと多く示しており、それは人間が知るべきビジョンがそれ以前のどの時代よりも高度になっていることを意味する。神が人間の間で為す働きは、嘗て無い領域に入ったので、神の国の時代に人間によって知られていたビジョンは、すべての経営の働きの中で最高のものである。神の働きは嘗て無い領域に入ったので、人間が知るべきビジョンは、すべてビジョンの中でも最高のものとなり

、その結果人間の実践もまた、前の時代よりもさらに高度である。なぜなら、人間の
実践は、ビジョンと共に段階的に変化し、ビジョンの完成とは、人間に対する要求の完成
のしるしでもあるからである。神のすべての経営が止まるとすぐに、人間の実践も止ま
る。そして神の働き無くしては、人間は過去の教義に維持する他なく、それ以外に頼る
べきものは無い。新たなビジョンが無ければ、人間には新たな実践は無く、完全なビジ
ョンが無ければ、人間による完全な実践も無い。更に高いビジョンが無ければ、人間に
よる一層高度な実践も無い。人間の実践は、神の足取りと共に変化し、同様に人間の認
識と経験もまた神の働きと共に変化する。人間がどの程度有能であるかに関わらず、人
間は依然として神から離れることはできず、もし神が一瞬たりとも働きを止めたなら、
人間は神の怒りによってすぐさま死ぬであろう。人間には何も誇るべき事が無い。なぜ
なら、現在人間の認識がいかに高度であっても、また人間の経験がいかに深くても、人
間を神の働きから切り離すことはできないからである。つまり、人間の実践と、人間が
神への信仰において求めるべき事は、そのビジョンから切り離すことができないからで
ある。神の働きの一つひとつには、人間が知るべきビジョンがあり、それらに続いて、
人間に対する適切な要求がなされるのである。これらの基礎となるビジョンなくして、
人間はまったく実践することが不可能となり、揺るぐことなく神に従うこともできない
であろう。人間が神を知らない場合、あるいは神の心を理解しない場合、人間の為す全
てのことは虚しく、神によって認められることができない。人間の賜物がいかに豊富で
あっても、人間はなおも神の働きと導きと不可分である。人間の行為がいかに優れてい
るか、また多いかに関わらず、それらの行為はなおも神の働きに取って代わることはで
きない。ゆえに、いかなる状況においても、人間の実践をビジョンから切り離すことは
できないのだ。新たなビジョンを受け入れない者には、新たな実践が無い。彼らの実践
は真理と全く無関係である。なぜなら、彼らは教義を守り、死んだ律法を固持している
からである。彼らには新たなビジョンがまったく無く、その結果新たな時代に何も実践
しない。彼らはビジョンを失っており、そのせいで聖霊の働きも失い、また真理も失っ
てしまった。真理の無い者たちは愚かさの子孫であり、サタンの化身である。どのよう
な人間であれ、神の働きのビジョン無しでいられることも、聖霊の臨在無しでいられる
こともない。つまりビジョンを失うと、人は即座にハデスへと落ちて闇の中で暮らす。
ビジョンのない人々は、愚かにも神に従う者であり、聖霊の働きを欠いている者であり
、彼らは地獄で生きている。このような人々は真理を追い求めず、神の名を看板のよう
に掲げる。聖霊の働きを知らず、受肉の神を知らず、神の経営全体における三段階の働
きを知らない者たちは、ビジョンを知らないのです、彼らには真理が欠けている。そして

、真理を持っていない者たちはみな、悪を行う者ではなかろうか。真理を進んで実行に移し、神についての認識を求め、神と真に協力する者は、ビジョンがその基礎として機能している人々である。彼らは神によって認められる。なぜなら、彼らは神と協力するからであり、この協力こそが人間が実行に移すべきことなのである。

ビジョンの中には、実践への道が多数含まれている。ビジョンには、人間が知るべき神の働きと同じように、人間への実践的な要求も含まれている。過去には、各地で開かれた特別集会や大規模な集会において、実践の道の一側面についてしか語られなかった。そうした実践は、恵みの時代に実践されるべきものであり、神についての認識とはほとんど無関係であった。というのは、恵みの時代のビジョンは、ただイエスの十字架のビジョンであり、それ以上のビジョンが無かったからである。人間が知るべき事は、イエスの十字架による人間の贖いの働きだけであったので、恵みの時代においては、人間が知るべきビジョンは、それ以外には無かった。このように、人間は神について乏しい認識しか無く、イエスの愛と慈しみに関する認識を別にすれば、人間が実践すべき事としては、僅かばかりの単純で哀れな事、今日とは全くかけ離れている事しかなかったのだ。過去、集いがどのような形をとったかに関わらず、人間は神の働きの実践的認識について話すことができず、ましてや人間が入るに最も適した実践の道がどれであることを明言することなど誰にもできなかった。人間は、ただ寛容や忍耐の基礎に幾つかの簡単な詳細を加えただけであった。人間の本質においては全く何の変化もなかった。なぜなら、同じ時代において、神はそれよりも新しい働きを何も行わず、神が人間に要求したのは、寛容と忍耐、または十字架を負うことのみだったからである。このような実践を除けば、イエスの十字架よりも高いビジョンは無かった。過去には、その他のビジョンについて全く述べられていなかった。なぜなら、神はそれほど多くの働きを行っておらず、人間に対して限られた要求しかしなかったからである。このように、人間が何をしたかに関わらず、人間はこれらの境界、つまり、人間は実践すべき幾つかの単純で事浅いものという境界を越えることはできなかった。今日わたしは他のビジョンについて話す。なぜなら、現在は一層多くの働き、律法の時代や恵みの時代の数倍も上まわる働きが行われているからである。人間に対する要求もまた、以前の時代の数倍多い。もし人間がこのような働きを十分理解できなければ、その働きは大きな意義を持たないであろう。人間は、自分の生涯にわたる努力をその働きに捧げなければ、そのような働きを十分に知るのは困難であろうと言える。征服の働きにおいて、実践の道について話すだけでは、人間の征服は不可能であろう。また人間に対する要求を欠いて、ビジョンについて

話すだけでは、人間の征服は不可能になるであろう。実践の道以外に何も語られないなら、人間のアキレス腱を打つことも、人間の観念を一掃することも、人間を完全に征服することも不可能であろう。ビジョンは人間を征服するための主要な道具であるが、ビジョン以外に実践の道が無ければ、人間には進むべき道が無く、ましてや入る手段など無いであろう。これこそが最初から最後まで神の働きの原則である。ビジョンには実行に移すことができるものがあるが、それとは他に実践に付加えられるビジョンもある。人間のいのちと性質の変化の度合いは、ビジョンの変化にも伴う。人間が自らの努力のみに拠り頼むのであれば、どんな大きな変化を実現することも不可能だろう。ビジョンは、神自身の働きや神による経営について述べている。実践とは、人間の実践の道、人間の在り方を指す。神のすべての経営において、ビジョンと実践の関係は、神と人間の関係と同じである。ビジョンが除去される場合、あるいは実践に言及しないでビジョンについて述べられる場合、また、ビジョンのみが存在し、人間の実践が除去されている場合、このような事を神の経営と見なすことはできず、ましてや神の働きが人類のためであるとは言えないであろう。これでは、人間の本分が除去されるだけでなく、神の働きの目的を否定することになるであろう。もし人間が、始めから終りまで、神の働きに関与させることなく、実践することのみを要求され、そのうえ、人間が神の働きを知ることが要求されないとしたら、そうした働きを神の経営と呼ぶことは尚更できないであろう。人間が神を知らず、神の旨について無知であり、曖昧かつ抽象的な仕方で盲目に実践するなら、人間が十分に資格のある創造物となることは決して無いであろう。ゆえに、これら二つの事は、双方不可欠である。もし神の働き、すなわち神のビジョンのみが存在し、人間の協力や実践が存在しないなら、そうした事を神の経営と呼ぶことはできないであろう。もし人間の実践と霊的成長しかないならば、人間がどれほど成長しようが、それは受け入れられないことである。人間の霊的成長は、働きとビジョンと共に、段階によって次第に変化しなければならず、気まぐれに変えることはできない。人間の実践の原則は、自由でも無制限でもなく、一定の範囲内にあるものである。このような原則は働きのビジョンと共に段階によって変化する。それゆえ神の経営は、最終的に、神の働きと人間の実践にかかっている。

経営の働きは、ただ人類のため故に生じたのであり、それは人間の存在によってのみ生み出されたことを意味している。人類が存在する以前、あるいは天と地と万物が造られた時には、経営はなかった。もし神のすべての働きにおいて人間に有益な実践が無かったならば、すなわち神が墮落した人間に適切な要求をしなかったならば（神によって行

われた働きの中に人間の実践に適した道が無かったならば）、その働きは神の経営とは呼べないであろう。神の働き全体に含まれるのが、墮落した人間に実践の取り組み方を教えることだけで、神が自身の事業を行わず、神の全能性や知恵をほんの少しも示さなかったとしたら、神の人間への要求がどれほど高度であったとしても、また神が人間の間でどれほど長く生活したとしても、人間は神の性質について何も知ることがないであろう。そうした場合、この種の働きは尚更、神の経営と呼ばれる価値が無いであろう。簡単に言えば、神の経営の働きは、神によって行われる働きであり、神のものとされた者たちが神の導きの下で行う全ての働きである。そうした働きは、経営として要約することが可能である。言い換えると、人間に対する神の働き、及び神に従うすべての者たちによる神への協力が、経営と総称されるのである。ここでは、神の働きをビジョンと呼び、人間の協力を実践と呼んでいる。神の働きが高度であればあるほど（つまりビジョンが高度であればあるほど）、神の性質が人間にとって一層明白となる。そして、それが人間の観念と相入れなければ相入れないほど、人間の実践と協力は一層高度になる。人間に対する要求が高度であればあるほど、神の働きは人間の観念とは一層相入れないものとなり、その結果、人間の試練と、人間が満たすよう要求される基準もまたより高度なものとなる。この働きが完了する時には、全てのビジョンが完成され、人間が実践することを要求される事は、完全の極みに達するであろう。この時は、各人が種類によって分類される時でもある。なぜなら、人間が知ることを求められている事は、この時既に人間に示されているからである。したがって、ビジョンが絶頂に達する時、働きもそれに従って終わりを迎え、人間の実践もまた頂点に達するであろう。人間の実践は、神の働きに基づき、神の経営は、人間の実践と協力があって初めて、完全に表されるのだ。人間は神の働きの傑作であり、神による経営の働き全体の目的であり、また神の経営全体の産物でもある。もし神が単独で、人間の協力無くして働くなら、神の働き全体の結晶として機能するものは無く、それでは神の経営にほんの少しの意義も無いであろう。神の働きを除くと、適切な対象を選んで自身の働きを表し、その全能と知恵を証明することでのみ、神は自身の経営の目的を達成し、この働きの全てを用いてサタンを完全に打倒するという目的を達成することが可能となる。したがって、人間は、神の経営の働きにおいて不可欠な部分であり、神の経営を結実させ、その最終目的を達成することができる唯一の存在である。人間以外には、そうした役割を担える生物は無い。人間が真に経営の働きの結晶となるには、墮落した人類の不従順を完全に一掃しなければならない。それには、人間が様々な場合に適した実践を与えられ、また、それに対応する働きを神が人間の間で行うことが要求される。このようにしてのみ、最終的に、経営

の働きの結晶となるべき人々の群を得ることができる。人間の間で為される神の働きは、それだけでは、神自身を証しすることができない。そうした証を実現するためには、神の働きを達成するに適した生きた人間が必要である。神は、まずこれらの人々に対して働きを行う。すると彼らを通じて神の働きが表現され、そのようにして、神のこのような証しが創造物の中で為されるのだ。そして、この点において、神は働きの目的を達成することになる。神は独りで働いてサタンを打ち負かすことはしない。なぜなら、神はあらゆる創造物の中で、直接的に自らを証しすることはできないからである。もし神がそうするならば、人間を完全に確信させることは不可能である。したがって神は、人間を征服するためには、人間に働きかけなければならず、そうして初めて神は全ての創造物の中で証しを得ることができるようになる。もし神が単独で働き、人間の協力が無く、また人間の協力が要求されないなら、人間は決して神の性質を知ることができず、神の旨に永遠に気付かないであろう。このような場合、それを神の経営の働きと呼ぶことはできないであろう。もし人間だけが懸命に努力して、求め、労するだけで、神の働きを理解しないのなら、人間はいたずらをしているようなものである。聖霊の働きが無ければ、人間の為すことはサタンのものであり、人間は反抗的であり、悪を行う者である。墮落した人間によって行われるすべての事の中にサタンが示され、神と一致する事は一切無く、全てはサタンの表れとなる。述べられた全ての事のうち、ビジョンと実践以外の事は一切無い。人間は、自らの観念を捨てて従来備えていなかった事を得ることができるよう、ビジョンの基礎の上に実践と、服従への道を見つけるのだ。神は、人間が神に協力すること、人間が神の要求に完全に服従することを求める。そして人間は神自身が行う働きを目の当たりにすること、神の全能の力を経験し、神の性質を知ることが求める。要約すると、これらが神の経営である。神が人間と一体となることが経営であり、それは最大の経営である。

ビジョンに関連する事は、おもに神自身の働きを指しており、実践に関連する事は人間がなすべき事であり、神とは無関係である。神の働きは神自身により完成され、人間の実践は、人間自身によって達成される。神自身によって行われるべき事を人間が行う必要はなく、人間が実践すべき事に神は無関係である。神の働きは神自身の職分であり、人間とは無関係である。この働きを人間が行う必要はなく、また人間は神によって行われる働きを為すことはできない。人間が実践するよう要求されている事は、それが自分のいのちを犠牲にすることであれ、サタンの所へ行き証しすることであれ、全ては人間によって成し遂げられなければならない。神自身は、神がなすべき全ての働きを完成

し、人間が行うべき事は人間に対して示され、それ以外の働きは、人間に委ねられる。神は、余分な働きを行わない。神は、神の職分の中に含まれた働きのみを行い、人間に道を示し、道を開く働きのみを行うのであり、道を整える働きは行わない。人間はこの点を理解すべきである。真理を実践するということは、神の言葉を実行に移すことを意味し、それは全て人間の本分であり、人間がなすべき事であり、神とは無関係である。人間と同様に神も真理の中で苦痛と精錬を受けることをもし人間が要求するならば、人間は不従順である。神の働きは、神の職分を行うことであり、人間の本分は反抗することなく神の導きの全てに従うことである。人間は、神が働いたり生きていたりする有様に関わらず、当然成し遂げるべき事を達成しなければならない。人間に対して要求することができるのは、神自身だけである。つまり、ただ神自身が人間に要求するに相応しいのである。人間は一切自分で選択してはならず、完全に服従して実践する事以外に何もすべきではない。これが人間が備えるべき理知である。神自身が行うべき働きが完了した後、人間はそれを段階的に経験する必要がある。最終的に神の経営全てが完了した時、もし人間が、神によって要求された事をまだ成し遂げていないなら、人間は罰されるべきである。もし人間が神の要求を満たさないなら、それは人間の不服従に起因している。それは神が働きを十分徹底していないことを意味するのではない。神の言葉を実行に移せない者、神の要求を満たせない者、自分の忠誠を捧げ、自分の本分を尽くせない者たちは、全員罰せられるであろう。現在、あなたがたが達成するよう要求されている事は、追加の要求では無く、人間の本分であり、すべての人々が行うべき事である。あなたがたが自分の本分を尽くすこと、それを十分に行うことさえもできないのであれば、それは自らに問題を招くことではなかろうか。あなたがたは死を招いているのではなかろうか。あなたがたは、どうして未来や将来の展望を期待することなどできようか。神の働きは人類のためのものであり、人間の協力は、神の経営のためのものである。神が為すべき働きを全て行われた後、人間は惜しむことなく実践し、神と協力することを要求されている。神の働きにおいて、人間は努力を惜しまずに、自分の忠誠を捧げ尽くすべきであり、数多くの観念に耽ったり、受動的にただ座って死を待っているのではない。神は人間のために自らを犠牲にできる。それでは何故、人間は自分の忠誠を神に捧げられないのであろうか。神が人間に対して心と意思をひとつにしているのであれば、何故人間は少しか協力できないのであろうか。神が人間のために働きを行うのであれば、何故人間が神の経営のために、本分の幾つかを実行できないのであろうか。神の働きは現在まで長期にわたり続いているが、あなたがたは見るだけで行動せず、聞くだけで動こうとしない。このような人々は滅びの対象ではなかろうか。神は既に自

身の全てを人間のために捧げたが、それではなぜ人間は今日、熱心に自分の本分を尽くすことができないのだろうか。神にとって、その働きは第一優先であり、神による経営の働きは極めて重要なことである。人間にとっては、神の言葉を実践し、神の要求を満たすことが第一優先である。あなたがたは皆、それを理解すべきである。あなたがたに述べられた言葉は、あなたがたの本質の核心にまで達し、神の働きは嘗て無い領域に突入した。多くの人々が未だにこの道が真実であるのか虚偽であるのかを理解していない。彼らは未だに待って見ているだけで、自分の本分を尽くしていない。むしろ彼らは、神の言葉と働きを逐一検証し、神の食べる物や着る物に重点を置き、彼らの観念はさらに深刻なものとなっている。このような人々は無用な事について騒ぎ立てているのではなかろうか。このような人々が、どうして神を求める者であり得ようか。またどうして彼らが、神に服従する意欲のある者であり得ようか。彼らは自分の忠誠と本分を心の奥へと押しやり、代わりに神の居場所にばかり注意を集中する。彼らは、とんでもない者である。人間が自分の理解すべき事を全部理解し、実践すべき事を全て実践しているならば、神は必ず人間に祝福を授けるであろう。なぜなら、神が人間に要求する事は、人間の本分であり、人間がなすべき事だからである。もし人間が自分の理解すべき事を理解することも、実践すべき事を実践することもできないならば、人間は罰されるであろう。神に協力しない者は神に敵対しており、たとえこのような人々が新たな働きに対して明らかに敵対していなくても、それを受け入れない人たちはそれに反対する者たちである。神が要求する真理を実践しない者たちは皆、たとえ聖霊の働きに「特別な注意」を払っていたとしても、神の言葉に対して故意に反抗し、服従しない人々である。神の言葉に従わず、神に服従しない人々は反抗的な者であり、神に敵対する者である。自分の本分を尽くさない人々は、神に協力しない者であり、神に協力しない者は聖霊の業を受け容れない者である。

神の働きがある時点に達し、神の経営がある段階に達する時、神の心に適った者たちは皆、神の要求を満たすことができる。神は自身の基準と、人間が達成可能な事に従って、人間に対する要求を行う。神は、自身の経営について話をしている時、それと同時に人間のために道を示し、人間に生存への道を与える。神の経営と人間の実践は、双方ともに働きの同一段階であり、同時に実施される。神の経営に関する話は、人間の性質の変化について言及し、人間がなすべき事と人間の性質の変化に関する話しは神の働きに言及する。両者が分割されることは一切無い。人間の実践は段階的に変化している。それは、神の人間に対する要求もまた変化しており、また神の働きは常に変化し、前進

しているからである。もし人間の実践が教義に束縛されているままであれば、それは人間が神の働きと導きを失っていることを証明している。人間の実践が一切変わることも深まることもないのであれば、それは人間の実践が人間の意志にしたがって実行されており、真理の実践ではないことを証明している。もし人間に歩むべき道が無いならば、人間は既にサタンの手に陥り、サタンにより支配されており、それは、人間が悪霊に支配されていることを意味する。人間の実践が深まらないのであれば、神の働きは発展しないであろう。また神の働きに変化が無ければ、人間の霊的成長は止まってしまうであろう。それは不可避である。神の働き全体を通して、人間が常にヤーウェの律法を守っていたなら、神の働きは前進できなかったであろうし、ましてや全ての時代を終結させることなど不可能であろう。人間が常に十字架に固執し、忍耐と謙遜を実践していたならば、神の働きが前進を続けることは不可能であろう。律法を守るだけの人々、十字架に固執し、忍耐と謙遜を実践しているだけの人々において、六千年におよぶ経営を終わらせることはできない。その一方、神を知り、サタンの手から取り戻され、サタンの影響から完全に脱した、終わりの日の人々の間では、神による経営の働き全体が完結する。これが神の働きの避けることのできない進路である。宗教的な教会にいる者の実践が旧態化していると言われているのは何故だろうか。それは、彼らが実践している事が、今日の働きから切り離されているからである。恵みの時代においては、彼らが実践していた事は正しかったが、その時代が過ぎ去り、神の働きが変化するにつれて、彼らの実践は次第に旧態化していった。それは新たな働きと光に置き去りにされてしまったのだ。聖霊の働きは、元来の基礎の上で、さらに何段階か深化している。しかし、それらの人々は神の働きの元来の段階のまま滞り、旧来の実践と古い光を未だに固守している。神の働きは3年ないし5年で大きな変化を遂げることがある。それならば、二千年の間に更に大きな変化が起こるはずではないだろうか。人間に新たな光も実践も無いならば、それは人間が聖霊の働きに追いつけないことを意味している。これは人間の失敗である。神の新たな働きの存在は否定できない。なぜなら、現在において、以前に聖霊の働きがあった者たちは、依然として旧式の実践を守っているからである。聖霊の働きは常に前進しており、聖霊の流れの中にいる全ての者たちもまた一步一步、さらに深く前進し変化すべきである。彼らは、ある段階で止まるべきではない。聖霊の働きを知らない者たちだけが、神の元来の働きの中に留まり、聖霊の新たな働きを受け入れない。不従順な者たちだけが聖霊の働きを得ることができないであろう。人間の実践が聖霊の新たな働きに追いつかないならば、人間の実践もまた今日の働きから分離していること、そして今日の働きと相容れないことは確実である。このような旧態化した人々は、まった

く神の旨を成し遂げることができず、まして最後に神の証しに立つ人々となることなどとうていできないであろう。さらに、経営の働き全体は、これらの人々の一群の間では完結できない。嘗てヤーウェの律法を遵守していた者と、十字架のために苦難を受けた者たちにとって、終わりの日の働きの段階を受け入れられないなら、彼らが行った事は全て無に帰し、無駄になるであろう。聖霊の働きの最も明瞭な表出は、現状を受け入れることであり、過去にしがみ付くことではない。現在の働きに追いつくことができず、今日の実践から切り離されてしまった人々は、聖霊の働きに反抗し、それを受け入れない者たちである。このような人々は、現在の神の働きに背いている。彼らは過去の光にしがみ付くけれども、それは、聖霊の働きを知らないことを否定できることは意味しない。人間の実践の変化に関する話と、過去と現在の実践の違いの話と、前の時代にどのように実践が行われていたかに関する話と、今日それがどのように行われているかに関する話を、これまで延々としてきたのは何故だろうか。人間の実践におけるそうした分割は、常に語られてきたが、それは聖霊の働きが常に前進しており、したがって人間の実践もまた常に変化することを必要とされているからである。人間が一つの段階に留まるならば、それは人間が神の新たな働きや新たな光に追いつくことができないことを証明している。それは神の経営計画が変化しなかったことを証明するものではない。聖霊の流れの外にいる者は、常に自分が正しいと考えるが、実際は、彼らの中の神の働きは遠い昔に停止しており、彼らには聖霊の働きが存在しない。神の働きはずっと前に、それとは別の人々の群、すなわち神が新たな働きを完成させるための群へと移された。なぜなら、宗教の中にいる者たちは神の新たな働きを受け入れることができず、過去の働きに固守するだけであり、したがって神はこれらの人々を見捨てて、神の新たな働きを受け入れる人々に対して、その働きを行うからである。彼らは神の新たな働きにおいて協力する者であり、このようにしてのみ、神の経営計画を成し遂げることができる。神の経営は常に前進しており、人間の実践は常に高度化し続けている。神は常に働いており、常に人間が必要とされているので、神と人間の両者が頂点に達し、完全に一体となるのだ。これこそが神の働きの達成の表れであり、神の経営全体の最終結果である。

神の働きの各段階において、それに対応する人間への要求がある。聖霊の流れの中にいる者たちは皆、聖霊の臨在と鍛錬を備えており、聖霊の流れの中にいない者たちはサタンの支配下にあり、そうした者には聖霊の働きがまったくない。聖霊の流れの中にいる人々は、神の新たな働きを受け入れ、神の新たな働きの中で協力する者である。現在において、その流れの中にいる者たちが協力できず、神に要求された通りに真理を実践

できないとすれば、そうした者は鍛錬を受け、最悪の場合は聖霊に見捨てられるであろう。聖霊の新たな働きを受け入れる者は聖霊の流れの中で生き、聖霊の配慮と守りを授かるであろう。真理を実践することを望む者は、聖霊により啓かれ、真理を実践することを望まない者は、聖霊から鍛錬を受け、罰を受けることさえあるだろう。そうした者がどのような人間であれ、そうした者が聖霊の流れの中にいる限り、新たな働きを神の名において受け入れる者全てについて、神は責任を負うであろう。神の名を讃美し、神の言葉を実践することを望む者は、神の祝福を得るであろう。神に反抗し、神の言葉を実践しない者は、神の罰を受けるであろう。聖霊の流れの中にいる人々は、新たな働きを受け入れる者であり、新たな働きを受け入れたのであれば、神との適切な協力を行うべきであり、自らの本分を尽くさない反逆者となってはならない。神の人間に対する要求は、これだけである。しかし、新たな働きを受け入れない人々には、この限りでは無い。そうした者は聖霊の流れの外にいたので、聖霊の鍛錬や咎めは、そうした者に適用されない。そうした者は終日肉の中で生活し、自分の心の中で生活し、そうした者の行動は、全て自分の脳による分析と研究により生み出された教義に従っている。それは聖霊の新たな働きにおける要求ではなく、ましてや神との協力などではない。神の新たな働きを受け入れない者には神の臨在がなく、その上、神の祝福と守りが欠如している。そうした者の言動は、殆どが聖霊の働きの過去における要求に固執している。それらは教義であり、真理ではない。そうした教義や規則は、それらの人々の集まりが宗教以外の何物でもないことを十分に示している。そうした者は選ばれた者たちでも神の働きの対象でもない。そうした者の会合は、宗教の総会としか言いようがなく、教会とは呼べない。これは変えようのない事実である。そうした者には聖霊の新たな働きが無い。そうした者の為すことには宗教の匂いがあり、そうした者が行動で示している事は、宗教で満ちている。そうした者には聖霊の臨在と働きが無く、ましてや聖霊から鍛錬や啓きを受ける資格など無い。これらの人々は、全員いのちの無い屍であり、霊の無い蛆虫のようなものである。そうした者には人間の反逆性や反抗性、人間による様々な邪悪な行いに関する認識が全く無く、ましてやそうした者は神の働きや神の現在における心など知らない。彼らはみな無知で下劣な人間であり、信者と呼ばれるに相応しくない人間のくずである。彼らの為すことには神の経営に関連する事は一切なく、ましてや神の計画を損なうことはできない。彼らの言動は過度に不快であり、たいへん惨めであり、まったく語るにも値しない。聖霊の流れの中にいない者の為すことは、一切が聖霊の新たな働きと無関係である。そのため、そうした者がどう行動するかを問わず、彼らは聖霊の懲らしめを欠いている上、聖霊の啓きにも欠けている。何故なら、彼らはみな真理への

愛を持たない人々であり、聖霊から忌み嫌われ、見捨てられたからである。彼らは悪を行う者と呼ばれる。何故なら、彼らは肉にあって歩み、神の看板の下に、自分が満足するあらゆる物事を行うからである。神が働きを行う間、そうした者は神に対して故意に敵意を抱き、神と反対方向に向かって走る。人間が神と協力しないことは、それ自体が最も反逆的であるので、故意に神に逆らうそうした人々は特に然るべき罰を受けるのではないだろうか。こういう人々の邪悪な行いについて言及するなら、彼らを呪いたくてたまらない人々もいるが、神はそうした人々を無視する。人間にとって、彼らの行為は神の名に関わるもののように思われるが、実際には、神にとってはそれらの行為は神の名や証しとは何の関係も無い。これらの人々が何をしたとしても、それは神と無関係である。それは神の名とも、神の今日における働きとも無関係である。このような人々は自分自身を辱め、サタンを表している。彼らは怒りの日のために貯えている悪を行う者たちである。今日、そうした者の行動を問わず、そうした者は、神の経営を阻害せず、神の新たな働きと無関係である限り、相応の罰の対象とはならない。なぜなら、怒りの日はまだ到来していないからである。神が既に取り扱うべきであると人々が思っている事はたくさんあり、人々はそれらの悪を行う者は、できるだけ早く罰を受けるべきだと考えている。しかし、神の経営の働きはまだ終結しておらず、また怒りの日がまだ到来していないので、不義な者は不義な行動を行い続ける。「宗教の中にいる人々には、聖霊の臨在や聖霊の働きがなく、彼らは神の名に恥辱をもたらす。それでは、何故神は彼らを滅ぼさず、彼らの奔放な振る舞いをまだ許容しているのであろうか」という者もいる。サタンの表れであり、肉を表す人々は、無知で卑劣な人間であり、愚かな人間である。彼らは、神が人間の間でどのように働きを行うかを理解するようになる前に、神の怒りの到来を目の当たりにすることはなく、一旦彼らが完全に征服されたら、それらの悪を行う者たちは、全員罰を受け、一人として怒りの日を逃れることができないであろう。現在は、人間の罰の時ではなく、征服の働きを行う時であるが、神の経営を阻害する者が居る時はこの限りでなく、その場合、そうした人々は、行動のひどさにより罰を受けるであろう。神が人類を経営している期間、聖霊の流れの中にいる者たちはみな神と関係している。聖霊に忌み嫌われ、見捨てられた者たちは、サタンの影響の下で生活し、彼らが実践する事は、神とはまったく関係ない。神の新たな働きを受け入れ、神と協力する者だけが、神との関連性を持つ。というのは、神の働きは、人間がそれを受け入れるかどうかに関わらず、全ての人々ではなく、それを受け入れる者たちだけを対象とするからである。神が行う働きには常に目的があり、働きは気まぐれで行われるものではない。サタンと関係している者たちは、神を証しする者として不適であり、まして

や神と協力するに相応しくなどない。

聖霊の働きの各段階には、それと同時に人間の証しが必要とされる。働きの各段階は、神とサタンとの戦いであり、戦いの相手はサタンである一方、その働きより完全にされるのは人間である。神の働きが実を結ぶかどうかは、人間による神への証しの仕方により決まる。この証しとは、神に従う者に神が要求する事である。それはサタンの前で行われる証しであり、また神の働きの成果を証明するものでもある。神の経営全体は、三段階に分割され、各段階において、人間に対して適切な要求が為される。さらに、様々な時代が経過し進行してゆくにつれ、全人類に対する神の要求はより高くなる。このようにして、この神の経営の働きは、人間が「言葉は肉として現れる」という事実を目の当たりにするまで、段階ごとに進んで絶頂に達する。また、そのようにして人間に対する要求と、人間が証しすることへの要求はさらに高度化する。真に神と協力することが可能であればあるほど、一層人間は神に栄光を帰す。人間の協力とは、人間が行うよう要求される証しであり、人間が行う証しは、人間による実践である。ゆえに、神の働きが然るべき成果を得られるかどうか、真の証が存在し得るかどうかは、人間による協力と証と密接に結びついている。働きが終わる時、つまり神の経営が全て終わりに達する時、人間はより高い証しをするよう要求されるであろう。そして神の働きが終局に達する時、人間の実践と霊的成長は頂点に達するだろう。過去において、人間は律法と戒めに従うことを要求され、忍耐強く謙遜であることを要求された。現在、人間は神の采配の全てに従い、神への至高の愛を備えることを要求されており、最終的には患難のただ中でも神を愛することが要求されている。これら三つの段階こそが、神が自身の経営全体にわたって、段階ごとに人間に要求することである。神の働きの各段階は、その前の段階よりも一層深くなり、各段階における人間に対する要求は、その前の段階よりも一層深遠であり、神の経営全体はそのようにして次第に形成される。人間の性質が神によって要求される基準に常に近づいてゆく理由は、正確に言うと、人間に対する要求がさらに高くなってゆくからであり、その時初めて、神の働きが完了し、全人類がサタンの影響から救われるまで、人類は次第にサタンの影響から離れてゆく。その時になると、神の働きは終局に達し、人間の性質の変化を達成するための神への人間の協力が終わり、全人類が神の光の中で生活し、それ以後は神への反抗や反逆は無くなる。また、神は人間に対して何も要求しなくなり、人間と神との間には、一層調和の取れた協力、つまり人間と神が共にある生活、神の経営が完了し、人間がサタンの手から神によって完全に救われた後に到来する生活がある。神の歩調に送れずについて来れない者は、そう

した生活を得ることができない。彼らは自ら闇へと沈み、そこで泣いて歯ぎしりするであろう。彼らは神を信じているが神に従わず、神を信じているが神の働きの全てに従わない者である。神を信じているのであれば、人間は神の歩調に遅れることなく、一步一步ついて行かなければならない。人間は「子羊が行く所はどこへでもついて行く」べきである。彼らだけが真の道を求める人々であり、聖霊の働きを知っている者である。奴隷のように文字や教義に従う人々は聖霊の働きによって既に排除された者である。各期間において、神は新たな働きを開始し、各期間において、人間には新たな始まりがあるであろう。人間が「ヤーウェは神である」または「イエスはキリストである」というような一つの時代のみに該当する真理に従うだけであれば、人間は聖霊の働きに遅れずついて行くことは決してできず、聖霊の働きを得ることは永遠にできないであろう。神がどのように働くかに関わらず、人間はほんの僅かも疑うことなく、遅れずについて行く。このようにすれば、どうして人間が聖霊により排除されることなどであろうか。神が何を為すかに関わらず、それが聖霊の働きであることを人間が確信し、何も疑わずに聖霊の働きに協力し、神の要求を満たそうとする限り、どうして人間が罰されることなどであろうか。神の働きは一度も停止したことがなく、神の歩みは止まったことがない。また神の経営の働きが完成する前、神は常に忙しく、休んだことがない。しかし、人間は異なる。人間は、ほんの少し聖霊の働きを得ただけで、あたかもそれが決して変わらないかのように扱う。人間は、わずかに知識を得ただけで、より新しい神の働きの足取りに進んでついて行こうとしない。人間は、わずかに神の働きを見ただけで、すぐに神を一種の木の人形のように決めつけ、神は常に人間の見る形のままであり、過去も未来も常にそのような形であると信じる。人間は、表面的な知識だけを得て、誇らしくなって我を忘れ、全く存在しない神の性質や在り方をみだりに主張する。そして聖霊の働きの一つの段階について確信するあまり、神の新たな働きを宣べ伝えるのがどのような人であれ、人間はそれを受け入れない。彼らは聖霊の新たな働きを受け入れることができない人々である。彼らは保守的過ぎて、新しい事を受け入れられない。これらの人々は神を信じてはいるが、神を拒んでいる者たちである。人間は、イスラエルの民が「ヤーウェのみを信じてイエスを信じなかった」のは誤っていると信じるが、大多数の人々が「ヤーウェのみを信じてイエスを拒絶する」という役、そして「メシアの再来を切望するがイエスというメシアには反対する」という役を演じている。それならば、人間が、聖霊の働きの一つの段階を受け入れた後も、依然としてサタンの支配の下で生活し、依然として神の祝福を受けていないことに何の不思議も無い。これは、人間の反抗心の結果ではなかろうか。現在の新たな働きに追いつくことができない世界各地のクリスチャンた

ちは皆、自分達が幸運な者である、神は自分の一つひとつの願いをかなえるであろうという信仰にしがみ付いている。しかし、彼らは神がなぜ自分達を第三の天へと引き上げるのかを明確に述べることができず、イエスがどのようにして白い雲に乗って自分達を引き上げに来るかについても確信しておらず、ましてや自分達が想像している日に、本当にイエスが白い雲に乗って到来するかどうかを絶対の確信を持って言うことなどできない。彼らは皆不安であり、途方にくれている。彼らは、各教派から来る一握りの様々な人々を神が一人ひとり引き上げられるかどうかさえ知らない。神が現在行っている働き、今日人間が存在しているこの時代、神の旨―彼らはそれらを全く把握しておらず、その日を指折り数える事しかできない。最後まで子羊の足跡を追う者のみが、最終的な祝福を得ることができるのだが、最後までついて行けないにもかかわらず、自分が全てを得たと信じている「賢い人々」は神の出現を証しすることができない。彼らはみな自分が地上で最も賢い人間だと信じており、何の理由もなく神の働きの継続的な発展を中断させ、「神に至高の忠誠を示し、神に従い、神の言葉を守る」自分たちこそを神は天に引き上ると、絶対の確信を持っているようである。彼らは、神が語った言葉に対して「至高の忠誠」があるにもかかわらず、彼らの言動は極めて忌まわしい。なぜなら、彼らは聖霊の働きに逆らい、欺瞞や悪を犯すからである。最後まで従わない者、聖霊の働きに追いつけない者、旧来の働きにしがみつく者は、神への忠誠を果たせなかったどころか神に逆らう者となり、新たな時代から拒否され、罰を受ける者となっている。これ以上哀れなことがあるだろうか。多くの者たちが、古い律法を拒否して新たな働きを受け入れる者は皆、良心が無いとさえ信じている。「良心」に関して話をするだけで、聖霊の働きを知らない人々は、最終的には自らの良心によって将来性を中断される。神の働きは教義に従うことがなく、またそれは神自身の働きであるが、神はそれに固執することがない。否定されるべき事が否定され、排除されるべき事が排除される。しかし人間は神の経営の働きのほんの一部に固執し、自ら神に敵対している。それは人間の愚かしさではなかろうか。それは人間の無知ではなかろうか。人間が神の祝福を得られないことを恐れて臆病になり、用心し過ぎればし過ぎるほど、より大きな祝福と、最後の祝福を得ることがますます不可能となる。奴隷のように律法を守っている人々は皆、律法に対して至高の忠誠を示している。そして律法に対してこのような忠誠を示せば示すほど、彼らは一層神に逆らう反逆者となる。というのは、今は律法の時代ではなく、神の国の時代であり、現在の働きと過去の働きを同じ言葉で語ることはできず、過去の働きを現在の働きと比較することもできないからである。神の働きは既に変化したので、人間の実践もまた変化した。それは、律法を守ることでも、十字架を負うことでもない。

だから律法や十字架への人間の忠誠は、神の承認を得ないであろう。

神の国の時代において、人間は完全に全き者とされる。征服の働きの後、人間は精錬と患難を受ける。この患難の期間に勝利し、証に立つことができる者たちは、最終的に完全にされる者である。彼らは勝利者である。この患難の間、人間はこの精錬を受け入れる必要があり、その精錬は神の働きの最後の実例である。それは、神の経営の働きが全て完結する前に人間が精錬される最後の時である。そして神に従う者は皆、この最後の試練を受け入れなければならない、この最後の精錬を受け入れなければならない。患難に煩わされる者には、聖霊の働きと神の導きがないが、真に征服され、神を真に追い求める者たちは、最終的に揺るぎなく立つであろう。彼らは、人間性を備え、神を真に愛する者たちである。神がどのように働こうが、これらの勝利者はビジョンを失うことがなく、証しを怠ることなく、なおも真理を実践するであろう。彼らは大いなる患難から最終的に脱け出す者たちである。荒海で漁をする者たちがいまだに居候することができるとしても、最後の患難を逃れられる者はひとりもおらず、誰も最後の試練を逃れられることはできない。勝利する者にとって、そうした患難は過酷な精錬である。しかし、荒海で漁をする者にとっては、それは完全排除の働きである。彼らがどのようにして試されるとしても、心の中に神が存在する者の忠誠は変わることがない。しかし、心の中に神が存在しない者たちは、神の働きが自分の肉に有利でないならば、神に対する見解を変え、神から去ることさえある。最後に確固として立つことができない者、神の祝福を求めるだけで、神のために尽くし、神に自らを捧げる意欲が一切無い者はこのようである。このような下劣な人々は、神の働きが終わりを迎える時に全員追放され、同情に値しない者たちである。人間性が欠如している者は、神を真に愛することができない。状況が安全で平穏な時、あるいは彼らが利益を得られる時は、彼らは神に対して完全に従順であるが、一旦自分の望みが損なわれたり、最終的に否定されたりすると、彼らは直ちに反乱を起こす。ほんのひと晩のうちに、彼らは、にこやかで「心優しい」人間から、醜く残忍な死刑執行人となり、何の根拠も無く、昨日までの恩人を生かしておけない敵として扱う。瞬きもせずに殺しを行うこれらの悪魔らが追放されていないなら、それらは隠れた危険になるのではなかろうか。人間を救う働きは、征服の働きが完成した後には実現しない。征服の働きが終わったとしても、人間を清める働きは終わっていない。そうした働きは、人間が完全に清められ、真に神に服従する者が完全にされ、自分の心に神がいない見せかけだけの者たちが取り除かれたとき初めて完了する。神の働きの最終段階において神を満足させない者たちは完全に排除されるのであり、排除される

者たちは悪魔のものである。彼らは神を満足させることができず、神に対して反抗するので、たとえこれらの人々が現在神に従っても、それは彼らが最後に残る者であることを証明することはない。「神に最後まで従う者は救われる」という言葉の中の「従う」の意味とは、苦難の中でもしっかり立つことである。現在、多くの者たちが、神に付き従うのは容易であると思っているが、神の働きが今にも終わろうとしている時こそ、あなたは「従う」という言葉の真意を知るであろう。征服された後の現在も依然として神に従うことができるということだけでは、あなたが完全にされる者たちの一人であることは証明されない。試練に耐えることも、患難のただ中で勝利することもできない者たちは、最終的に、揺るぎなく立つことができず、最後まで神に従うことができないであろう。本当に神に従う者たちは、自分の働きへの試みに耐えることができるが、真に神に従っていない者は、神のいかなる試練にも耐えることができない。遅かれ早かれ、彼らは追放されるが、勝利者は神の国に留まるであろう。人間が神を真に求めているかどうかは、その人の働きに対する試み、すなわち神の試練により判断されるのであり、それはその人自身の判断とは無関係である。神は誰かを気まぐれに拒むことはない。神が行う全てのことは人間を完全に確信させることができる。神は、人間に見えない事や、人間を確信させることができない働きを一つも行わない。人間の信仰が真実であるかどうかは、事実により証明されるのであり、人間が決めることはできない。「麦を毒麦に変える事はできず、毒麦を麦に変える事もできない」ということは疑いの余地が無い。神を真に愛する者たちはみな最終的に神の国に留まり、神は神を真に愛する者を不公平に扱うことはないであろう。神の国の中の勝利者たちは、彼らの様々な役割と証しに基づいて祭司として、あるいは信者として仕えるであろう。また患難のただ中で勝利した者たちは、みな神の国で祭司の集団となるであろう。祭司の集団は全宇宙における福音の働きが終わった時に形成されるであろう。その時が到来すると、人間がなすべき事は、神の国において自分の本分を尽くし、神と共に神の国で生活することとなるであろう。祭司の集団の中には、祭司長と、祭司がいて、それ以外の者は神の子、神の民となるであろう。これは全て患難の間の神への証しにより決定される。それらは気まぐれで与えられた称号ではない。一旦人間の地位が確立すれば、神の働きは停止する。なぜなら、各人が種類に従って分類され、彼らの本来の地位に戻され、それは神の働きの成果のしるしであり、神の働きと人間の実践の最終結果であり、また神の働きのビジョンと人間の協力との結晶だからである。最後に人間は神の国で安息を得て、神もまた自らの住まいに戻って休息を得るであろう。これが神と人間の六千年におよぶ協力の最終結果である。

キリストの本質は父なる神の心への従順

受肉した神をキリストと呼ぶ。キリストは神の霊が肉をまとった姿である。この肉はいかなる肉ある人間とも異なる。キリストは肉と血でできているのではなく、神の霊が受肉したものだからである。キリストは普通の人間性と完全なる神性の両方を持っている。キリストの神性はいかなる人も持っていないものである。キリストの普通の人間性は肉的な活動のすべてを支え、キリストの神性は神自身の働きを遂行する。キリストの人間性も、神性も父なる神の心に従うものである。キリストの本質は霊、すなわち神性である。ゆえに、その本質は神自身のものである。この本質は神自身の働きを妨げることはなく、キリストが神自身の働きを破壊するようなことは決してありえず、神の心に逆らう言葉を語ることも決してない。ゆえに、受肉した神は神自身の経営（救い）を妨げるような働きは絶対に行わない。このことをすべての人が理解すべきである。聖霊の働きの本質は人を救うことであり、また神自身の経営のためである。同様に、キリストの働きは人を救い、神の心を行うためのものである。神が肉となったため、キリストは自身の肉において神の本質を実現し、よってキリストの肉は神の働きを引き受けるに充分になる。神の霊の働きはすべて受肉の期間にキリストがなす働きに取って代わられる。受肉の期間を通してすべての働きの核心となるのがキリストの働きである。そこにほかのどの時代の働きが混ざり合うこともない。そして神が肉となるのであるから、神は肉としての働きをする。神は肉の形をとって来るので、自身のなすべき働きを肉となった姿で成し遂げる。神の霊も、キリストも神自身であり、神はしかるべき働きをし、しかるべき職分を果たす。

神の本質そのものが権威を行使するが、キリストは神から来る権威に完全に服従することができる。霊の働きも、肉の働きも、互いに相反することはない。すべての被造物におよぶ権威となるのは神の霊である。神の本質のある肉も権威を有するが、肉となった神は父なる神の心に沿った働きをすべて行える。こうしたことは人には実現も想像もできない。神自身が権威であるが、神の肉は神の権威に服従することができる。これが「キリストは父なる神の心に服従する」という言葉に秘められた意味である。神は霊であり、救いの働きができるように、受肉した神も救いの働きをなすことができる。いずれにしても、神自身が神自身の働きをする。神は阻止することも、干渉することもせず、まして互いに対立する働きをすることはない。霊と肉は働きの本質が似ているからである。霊も肉も一つの心を行い、同じ働きを管理するために働くからである。両者は性質が異なるが、本質は同じである。どちらも神自身の本質と、神自身の身分を持っている

る。神自身は不従順の要素を持たない。神の本質は良きものである。神はあらゆる美と善と、すべての愛の現れである。肉の姿であっても、神は父なる神に逆らうようなことは行わない。自身の命を犠牲にしても、神は心底から父なる神に従い、他の選択はしない。神には独善や尊大さといった要素も、うぬぼれや横柄さといった要素もない。神は不正な要素を持たない。神に逆らうものはすべてサタンから発生する。サタンはすべての醜悪さと邪惡の根源である。人がサタンと同様の性質を持っている理由は、サタンに墮落させられ手を加えられたからである。キリストはサタンによって墮落させられていないため、神の特性のみを持っており、サタンの性質は全く持たない。どんなに働きが困難で、肉が弱くても、キリストは肉のうちに生きながら、神自身の働きを阻止するようなことは決してせず、ましてや不従順な行いで父なる神の心を見捨てるようなことはしない。キリストは父なる神の心に逆らうくらいなら肉の痛みを受けることを選ぶだろう。イエスが「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」と祈ったようにである。人は選択をするが、キリストはそうしない。彼は神自身の身分を持っているが、肉ある神として、なお父なる神の心を求め、父なる神から委ねられた任務を果たす。これは人には不可能なことである。サタンから発生するものが持ち得る本質は神に逆らい、抵抗するものでしかなく、神の本質ではない。その本質は完全に神に服従することができず、ましてや神の心に進んで従うことなどできない。キリスト以外の人間はみな神に反する行いをすることができ、神に委ねられた働きを直接引き受けられる者はひとりもおらず、神の経営を自分自身がなすべき本分と考えられる者もひとりもない。父なる神の心に服従することはキリストの本質である。そして神への不従順はサタンの特性である。この二つの性質は相容れないものであり、サタンの特質を持つ者はキリストと呼ばれ得ない。人がキリストに代わって神の働きを行えないのは、神の本質がまったく備わっていないからである。人は自己の利益と将来の前途のために神に尽くすが、キリストは父なる神の心を行うために働く。

キリストの人間性はキリストの神性によって支配されている。キリストは肉の姿をしているが、その人間性は肉を持った人間とまったく同じものではない。キリストは特有の性格を持っており、これもキリストの神性によって支配されている。キリストの神性は弱さを持たない。キリストの弱さはキリストの人間性に起因する。この弱さはある程度キリストの神性を制限するが、そのような制限は一定の範囲と時間内のものであり、無限大ではない。キリストが神性による働きをする時が来ると、それはキリストの人間

性とは関係なく行われる。キリストの人間性は完全にその神性の指示を受ける。キリストの人間性による普通の生活の他に、人間性によるほかの行動もすべて、キリストの神性の影響、働きかけ、指示を受ける。キリストは人間性を持っているが、それは神性による働きを邪魔するものではない。キリストの人間性がキリストの神性の指示を受けているからこそである。キリストの人間性は、ほかの人々の前ではその行いにおいて成熟していないが、それはキリストの神性のなす普通の働きに影響を与えることはない。キリストの人間性は堕落していないとわたしが言うのは、キリストの人間性はその神性に直接指示され、普通の人のそれよりも理知が高度であるということである。彼の人間性は働きにおいて神性によって指示されることに最も適している。キリストの人間性は神性による働きを現し、神性による働きに服従する能力が何よりも高い。神が肉の姿で働きをなす時、神は肉を持つ人が果たすべき本分を決して見失わない。彼は天にいる神を真心で礼拝することができる。彼は神の本質を持ち、その身分は神自身のそれと同じである。それは、彼がこの地上に来て、人の外観を持つ被造物となり、かつては持っていなかった人間性を持つようになったことにほかならない。天にいる神を崇拝することができるということだ。これはキリストが神自身であるということ、人にはまねのできないことである。彼の身分は神自身である。彼が神を崇拝するのは、肉の観点からである。ゆえに、「キリストは天にある神を崇拝する」という言葉は間違いではない。彼が人に要求するものはまさに神自身の存在である。彼が人間に要求する事柄は、自身も既に成し遂げている。彼は人間に要求しておきながら自らはそれらから免れるようなことはしない。そのことがすべて彼の存在を成しているからである。彼はどのように働いても、神に敵対するような行為はしない。人に何を要求しても、人がなしえる以上の要求はしない。彼のすることはひたすら神の心を行うことであり、神の経営のためである。キリストの神性はすべての人を超越するもので、ゆえに彼はあらゆる被造物の最高の権威である。この権威はキリストの神性、すなわち神自身の性質と存在そのものであり、それは彼の身分を決定する。よって彼の人間性がいかに普通であっても、神自身の身分を持っていることは否定できない。彼がどのような観点から語り、どのように神の心に従っても、神自身ではないと言うことはできない。愚かで無知な者はしばしばキリストの普通の人間性を欠陥と見なす。人はどれほど自身の神性を現して明らかにしたキリストをも、キリストと認めることができない。そしてキリストが服従と謙遜を示せば示すほど、愚かな人間は益々キリストを軽くあしらう。キリストに対して排他的、侮蔑的な態度を取り、一方で尊大な姿の「偉人たち」を高い地位に置いて崇拝する者たちさえいる。人の神に対する抵抗と不従順は、肉となった神の本質が神の心に従うという事実と

、キリストの普通の人間性とから来る。ここに人の神に対する抵抗と不従順の根源がある。もしキリストが人間としての外観を持たず、被造物としての観点から父なる神の心を求めることもせず、超人間性を持っていたならば、不従順になる人間はおそらくいないだろう。人が常に天にいる目に見えない神の存在を信じようとする理由は、天にいる神は人間性を持たず、被造物としての性質を一つも持たないからである。そのため人は常に天にいる神には最大の畏敬を抱き、キリストには侮蔑的な態度をとる。

キリストは地上で神自身の代わりに働くが、肉となった姿を人々に見せようとするのではない。すべての人が彼を見るために来るのではない。自身の手によって人が導かれ、新たな時代へ入ることができるように来るのである。キリストの肉の役割は、神自身、つまり肉における神の働きを果たすことであり、人にキリストの肉の本質を十分理解させることではない。キリストがいかに働いても、それは肉に実現可能なことを超えるものではない。キリストがいかに働いても、普通の人間性を持つ肉において働くのであり、神の真の姿を人に全て明らかにしてはいない。それに加えて、キリストの働きは、人間が思うような超自然的なものでも、計り知れないものでもない。キリストは肉において神自身を現わし、神自身のすべき働きを自ら遂行するけれども、天の神の存在を否定したり、自身の業を大々的に公表したりしない。むしろ、謙虚に自身の肉のうちに隠れたままである。キリスト自身以外でキリストを偽って名乗る者はみな、キリストの性質を持ってはいない。そのような偽キリストの高慢で自画自賛的な性質をキリストの性質と比べたならば、キリストの肉がどのようなものであるかは明白である。偽りの多い偽キリストであればあるほど自分自身を誇示し、人を欺くしるしや不思議を多く行うことができる。偽キリストたちは神の属性を持っていない。キリストは偽キリストの要素で汚されてはいない。神は肉の働きを全うするためだけに肉となるのであり、単に人間が神を見ることができるようになるのではない。むしろ、彼は働きを通して彼の身分を明確にし、彼の現すものによって彼の本質を証明する。彼の本質は根拠のないものではない。彼の身分は自身の手によって握られてはいなかった。それは彼の働きと本質によって決定される。彼は神自身の本質を持っており、神自身の働きをすることができるが、やはり彼は霊とは違って、肉である。キリストは霊の属性を持つ神ではない。肉の外殻を持った神である。したがって、いかに普通で弱くとも、どのように父なる神の心を求めても、彼の神性は否定できない。肉となった神のうちにあるものは、普通の人間性とその弱さだけではない。そこにはキリストの肉における行いととも、その神性の素晴らしさと不可思議性も存在する。ゆえに人間性と神性の両方が実際に、具体的

にキリストのうちに存在する。これは無意味でも超自然的でも全くない。彼は働きを遂行するという第一の目的を持って地上に来る。地上での働きを遂行するためには普通の人間性を持っていることは必須である。そうでなければ、いかにキリストの神性の力が大きくても、その本来の機能を有効に使うことができない。キリストの人間性は非常に重要であるが、それは彼の本質ではない。キリストの本質は神性である。ゆえに、彼が地上で職分を始める瞬間は彼がその神性の存在を現し始める瞬間である。彼の人間性はその肉の普通の生活を維持するためだけにあり、それにより、キリストの神性が肉において普通に働きを行うことができるのである。キリストの働き全体を指示するのはキリストの神性なのである。彼が働きを完了する時は、彼の職分の働きを全うした時である。人が知るべきことは彼の働き全体であり、キリストはその働きを通して人が彼を知ることが可能にする。働きを行う過程で、彼は自身の神性の存在を十分に現す。それは人間性によって汚された性質でもなければ、人間の考えや振る舞いで汚された存在でもない。彼の職分が終わりを迎えるまでには、彼は現すべきその性質を全て現すであろう。彼の働きは人によって指示されない。彼の性質の現れもいたって自由であり、知性で支配されることも、思考で処理されることもなく、自然に明らかになる。これは人には成し遂げることができない。環境が厳しかったり、条件が合わなかったりしても、彼は適切な時にその性質を現すことができる。キリストである者がキリストの存在を現し、一方キリストでない者たちはキリストの性質を持たない。ゆえに、たとえすべての人たちが彼に抵抗したり、彼に対する観念を持ったりしたとしても、キリストによって現わされた性質が神の性質であるということを、人間の観念に基づいて否定できる者はいない。真心でキリストを求め、意志を持って神を求めるすべての者は、キリストの神性の現れに基づいて彼はキリストであると認めるであろう。キリストに人の観念と一致しない側面があっても、彼らがそれに基づいてキリストを否定することはない。人はとても愚かであるが、すべての人は、何が人の意志によるもので、何が神から出たものかをはっきりと知っている。多くの人々は自分の目的に基づいて、意図的にキリストに反抗しているだけなのである。そうでなければ、キリストの存在を否定する理由など誰にもない。というのはキリストによって現わされた神性は確かに存在し、彼の働きはすべての人が肉眼で確認できるものだからである。

キリストの働きと現れはキリストの本質を決定する。キリストは託された働きを真心を持って完成することができる。キリストは天の神を心から崇拝し、真心を持って父なる神の心を求めることができる。これはすべてキリストの本質によって決定されている

。そしてキリストの自然な現れもキリストの本質によって決定されている。キリストの「自然な現れ」と呼ばれるのは、キリストの現れが模倣でも、人による教育の結果でも、人による長年の育成の結果でもないからである。キリストはそれを学んだのでも、それでわが身を飾ったのでもない。むしろ、それはキリストのうちに本来備わっているものである。人はキリストの働き、現れ、人間性、そして普通の人間性を持った生活を否定するかもしれないが、キリストが真心で天の神を崇拝することを否定できるものは一人もいない。キリストが父なる神の心を果たすために来たことを否定できる者はおらず、キリストが父なる神を求める心の切実さを否定できる者もない。キリストの姿は感覚にとって快いわけでも、その話に特別な重みがあるわけでもなく、その働きに人が想像するような地を揺るがし、天を揺さぶるものでもないが、彼は確かにキリストであり、真心で天の父の心を全うし、天の父に完全に服従し、死ぬまで従う者である。これは彼の本質がキリストの本質だからである。この事実は人には信じがたいものだが、確かに存在する。キリストの職分が全うされた時、キリストの働きを通して、キリストの性質と存在は天の神の性質と存在を現すことを、人は知るであろう。その時、キリストの全ての働きの総和から、この者はまことにことばが肉となった者であり、血と肉による人間とは異なることが分かるであろう。キリストの地上での働きの各段階はそれぞれ代表的な意味を持つが、それぞれの段階における実際の働きを経験する人間は、彼の働きの意味を把握することができない。二度目に受肉した神による数段階の働きに関してはとりわけそうである。キリストの言葉を見聞きしただけで、キリストに出会ったことのない者たちのほとんどは、キリストの働きについていかなる観念も持っていない。キリストに出会い、言葉を聞き、働きを経験した者たちにとっては、働きを受け入れることが難しい。これはキリストの外見と普通の人間性が人の好みに合わないせいではないのか。キリストが去ってからその働きを受け入れる者たちはそのような困難に出遭うことはないだろう。彼らはキリストの働きを単に受け入れ、キリストの普通の人間性に接することがないからだ。人は神に対する己の観念を捨てることができず、キリストをあれこれと入念に調べる。これは人がキリストの外見だけに注目し、キリストの働きと言葉に基づいた本質を認識できないことが原因だ。もし人がキリストの外見に目を向けず、キリストの人間性を論じるのを避け、その神性、——人には成しえない働きと言葉の主である神性——についてのみ語るのなら、人の観念は半分に減り、人の困難がすべて解決することさえあり得るだろう。肉となった神が働きをする間、人はキリストを許容できず、キリストについてさまざまな観念を抱き、しばしば抵抗し、不従順になる。人は神の存在を許容できず、キリストの謙遜と隠れた性質に寛容を示すことができず、父な

る神に従うキリストの本質を赦すことができない。したがって、キリストは働きを終えた後、永遠に人と共に留まることができない。人はキリストが人と共に暮らすことを許そうとしないからである。キリストが働きをする間、人が寛容を示すことができれば、キリストが職分を全うした後、彼らと共に暮らし続け、彼らがキリストの言葉を徐々に経験していくのを見るなど、許容できるだろうか。そうなれば、多くの者がキリストのために躓くのではないだろうか。人はキリストが地上で働くことだけを許す。これが人の寛容の限界である。キリストの働きがなければ、人はとっくにキリストを地上から追放しているだろう。ということは、働きが終わればどれだけ人は寛容を示さなくなるだろうか。人はキリストを処刑し、死に至るまで拷問するのではないだろうか。もし彼はキリストと呼ばれなければ、人間の中で働きをすることは出来なかった。もしキリストが神自身の身分を持って働きをせず、普通の人間としてのみ働いたなら、人はキリストが発する文章をひとつも許容せず、ましてや働きなど少しも許容しなかっただろう。そのため、キリストは働きにおいてはこの身分しか持てない。このようにして、キリストの働きは、そうしなかった場合よりも強力である。それは、人はみな立派な身分や地位のある者に従おうとするからである。キリストが神自身の身分を持って働かず、神自身として現れなかったなら、キリストが働く機会は全くなかったであろう。キリストが神の本質とキリストの存在を持っているのにもかかわらず、人は態度を和らげてキリストが人間の中で容易に働けるようにはしない。キリストは神自身の身分を持って働く。そのような働きは、身分を持たずになされる働きよりも何十倍も強力だが、それでも人はキリストに完全に従順ではない。人はキリストの地位にのみ従い、キリストの本質には従わないからである。そうであれば、キリストがその地位から身を引く時がくれば、人は一日たりともキリストが生き長らえることを許せるだろうか。神は人と共に地上に生き、自身の手による働きが後年もたらす効果を見たいと考える。しかしながら、人はキリストがたった一日でも留まることが許容できないため、キリストは諦めるしかなかった。神が人間の中ですべき働きをなし、職分を全うすることを許すのが人の寛容と寛大さの限界である。キリストに直接征服された者たちはそのような寛大さを示すが、彼らでもキリストが働きを終えるまで留まることが許すだけで、その後はたった一瞬でも留まることが許さない。そうであれば、キリストに征服されていない者たちはどうだろう。人が肉となった神をこのように扱うのは、彼が普通の人間性の外殻を持ったキリストであるからなのではないのだろうか。もし彼が神性だけを持ち、普通の人間性を持たなかったならば、人にとっての困難はいとも容易に解決されるのではないのだろうか。彼の本質はまさに天の父の心に従うキリストの本質であるにもかかわらず、人

は彼の神性をしぶしぶ認めるだけで、普通の人としての彼の外殻には興味を示さない。そのようなわけで、キリストは人間の中で喜びも悲しみも分かち合うために人の間に住まうという働きを取り消すしかなかった。人はもはやキリストの存在を許容できなかったからである。

人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く

人は現在の働きと将来の働きを少しは理解しているが、人類が入る終着点については理解していない。被造物として、人はその本分を果たすべきである。つまり、人は神のなすことが何であれ彼に従うべきである。わたしがあなたがたにどんな道を示そうが、その道を歩むべきである。あなたには自分のために采配を下す術はなく、自分自身に対する支配力も持っていない。すべては神の采配に委ねられなければならない。また、すべてのことは神の手中に握られている。もし神の働きによって人に結末、すなわち素晴らしい終着点が前もって与えられ、神がこれを用いて人を引きつけて、従わせるなら、——つまり、神が人と取引をするなら——これは征服ではなく、人のいのちに働きかけることでもない。神が人を支配し、人の心を獲得するために結末を用いるなら、それは神が人を完全にすることにも、人を獲得することにもならず、ただ終着点を使って人を支配しようとしているだけである。人が気に掛けることといえば、将来の行く末、終着点、そして自分が何か良いことを望めるかどうかだけである。もし征服の働きの間、人に素晴らしい望みが与えられ、人の征服に先立って人が追い求めるに適した終着点を与えられるとしたら、人の征服はその効果を達成しないばかりか、征服の働きに影響を及ぼすだろう。すなわち、征服の働きは、人から運命や前途を奪い取り、人の反抗的な性質を裁き、罰することによってその効果を達成するのである。それは、人との取引、つまり人に祝福や恵みを与えることによって達成されるものではなく、人の「自由」を剥奪し、人の前途を絶つことにより、人の忠誠心を明らかにすることで達成される。これが征服の働きの本質である。もし最初から素晴らしい望みが与えられ、刑罰や裁きがそのあとで行われるなら、人は自分の前途が開けることを基にしてこの刑罰や裁きを受け入れるだろう。そして、最終的には、すべての被造物による造り主への無条件の服従と崇拜が達成されることはないだろう。そこには盲目的で無知な従順さしかないか、さもないか人が神に盲目的に何かを要求するだけで、人の心を完全に征服することはあり得ないだろう。その結果、このような征服の働きによって人を獲得するのは不可能であり、神を証しすることなどなおさらできない。そのような被造物はその本分を果たすことができず、ただ神と取引するだけである。これでは征服ではなく、憐れみと祝福であ

る。人の最も大きな問題は、人が自分の運命と前途のことしか考えず、それらを偶像と
していることである。人は自分の運命と前途のために神を追い求めるだけで、神への愛
から神を礼拝することはない。そのため、人を征服するには、人の身勝手さや貪欲、そ
して神を崇拝する妨げとなるものは、すべて取り扱われて排除されなければならない。
そうすることによって、人の征服の効果が達成されるだろう。その結果、人を征服する
最初の段階で、人の野心や最も致命的な弱点を一掃し、これを通して人の神への愛を現
わし、人生についての認識を変え、また神に対する見方、自身の生存の意味などを変え
る必要がある。このようにして人の神への愛は清められる。つまり、人の心が征服され
るのだ。しかし、全ての被造物に対する神の姿勢は、征服することだけを目的として征
服するというものではない。そうではなく、彼は、人を獲得するため、自らの栄光のため、
そして人の一番最初の本来の姿を回復するために、人を征服するのである。彼が征服
することだけを目的として征服するなら、征服の働きの意義が失われてしまうだろう。
つまり、もし人を征服した後、神が人に見切りをつけ、人の生死に気を留めないなら、
これは人類に対する経営（救い）にも、人の救いのための征服にもならないであ
ろう。人が神により征服されたあとに神のものとされることと、素晴らしい終着点へ到
達することのみが全ての救いの働きの中核であり、これによってのみ人の救いの目的が
達成されるのである。すなわち、人が素晴らしい終着点に到着し、安息に入ることのみ
が、全ての被造物が持つべき前途であり、造り主によってなされるべき働きである。も
し人がこの働きをしようものなら、それはあまりにも制限されたものになるだろう。人
はある所までは行くことができても、永遠の終着点まで行くことはできないであろう。
人は自分の運命を決めることはできないし、自分の前途や未来の終着点を保証すること
など、尚更できない。しかし神によってなされる働きは異なる。彼は人を造ったからに
は、人を導く。彼は人を救ったからには、完全に救い、完全に人を獲得する。彼は人を
導くからには、人を適切な終着点に連れて行く。そして、神は人を創造し、経営するか
らには、人の運命と前途のために責任を負わなければならない。これこそが造り主によ
ってなされる働きである。征服の働きは人の前途を絶つことでなされるが、人は最終的
に神によって用意された適切な終着点に連れて行かれなければならない。人が終着点
を持ち、人の運命が確かにされるのは正に、神が人に働きかけるからである。ここで言及
されている適切な終着点とは、過去に取り除かれた人の望みとか前途のことではない。
この二つは異なったものである。人が望んだり追い求めたりするものは、人にふさわし
い終着点というより、肉の途方もない欲求の追求である。一方、神が人のために用意し
たものは、人が清くされた後に与えられる祝福と約束であり、それは神が世界を創造し

た後に人のために用意したもので、人の選択、観念、想像、あるいは肉などによって汚されていない。この終着点はある特定の人に用意されたものではなく、全人類の安息の地である。したがって、この終着点は人類にとって最適な終着点である。

造り主はすべての被造物を指揮することを欲している。あなたは神が為すことが何であれ、放棄したり背いたりしてはならないし、神に反抗すべきではない。神が為す働きが最終的には彼の目的を達成したとき、それによって彼は栄光を受ける。なぜ現在は、あなたがモアブの子孫であるとか、赤い大きな竜の子孫であるとか言われないのか。なぜ選民については何も語られず、被造物についてのみ語られるのか。被造物——これが人の本来の呼び名であり、人が本来持っている身分である。呼び名が異なるのは、働きの時代や期間が異なるからに過ぎない。実際、人はごく普通の被造物である。すべての被造物は、最も墮落したものであれ、最も聖いものであれ、被造物としての本分を尽くさなければならない。征服の働きを実行するとき、神はあなたの前途や、運命や、終着点を利用してあなたを支配することはない。実際そのように働く必要はない。征服の働きの目的とは、人に被造物としての本分を尽くさせ、造り主を礼拝させることである。その後初めて人は素晴らしい終着点に入ることができるのだ。人の運命は神の手によって掌握されている。あなたは自分自身を掌握することはできない。いつも自分自身のことであくせく動き回っているのにもかかわらず、人は自分自身を掌握することができないままにいる。あなたがもし自分の前途を知ることができ、自分の運命を掌握できるなら、それでもあなたは被造物だろうか。端的に言うと、神がどのように働いたとしても、彼の働きはすべて人間のためである。たとえば、人に仕えるために神が造った天、地、そして万物——神が人のために造った月、太陽、星など、また動物や植物、春、夏、秋、冬など——はすべて人が生存するために造られたのである。したがって、神がどのように人を罰し、裁くにしても、それはすべて人の救いのためである。神が人から肉적인望みを剥奪したとしても、それは人を清めるためであり、人の清めは人の生存のためである。人の終着点は造り主の手の中にあるのだから、人はどうして自分自身を掌握できるだろうか。

一旦、征服の働きが完了すると、人類は美しい世界に連れて行かれる。もちろん、この生活はまだ地上にあるが、現在の人間の生活とは全く違う。それは全人類が征服された後の生活であり、それは地上の人間にとって新しい始まりとなり、人類がそのような生活を送ることは、彼らが新しく美しい領域に入ったという証拠となるであろう。それは地上における人と神の生活の始まりとなる。そのような美しい生活の前提として、人

は清められ征服されたあと、造り主の前に服従する。それゆえ、征服の働きとは、人類が素晴らしい終着点に入る前の、神の働きの最終段階である。そのような生活は地上における人類の未来の生活であり、それは地上で最も美しい生活、つまり人が待ち焦がれていたような生活であり、世界史上、人が決して達成したことのないような生活である。それは六千年の経営の働きの最終的結果であり、人類が最も待ち望んでいたものであり、それはまた、神が人間に約束していたものでもある。しかし、この約束はすぐには実現されない。終わりの日の働きが完成され、人が完全に征服され、すなわちサタンが完全に打ち負かされて、初めて人類は未来の終着点に入るのである。人は精錬された後、罪の性質がなくなる。なぜなら、神はサタンを打ち負かしたので、敵対勢力による侵略はなく、人の肉を攻撃する敵対勢力がなくなるからである。そのようにして、人は自由になり、聖くなり、永遠の中に入るだろう。暗闇の敵対勢力が縛られて初めて、人はどこに行っても自由で、反抗や抵抗もなくなるであろう。サタンは縛られなければならない、そうして人は無事でいられる。現在の状況になっているのは、サタンが地上のあちこちで問題を引き起こし、神の経営の働き全体がまだ終わっていないからである。一旦サタンが打ち負かされると、人は完全に解放される。人が神を得てサタンの領域から抜け出すと、義の太陽を見ることになる。正常な人にふさわしい生活が取り戻される。正常な人が持っているべきもの――善悪を見分ける能力、衣食のあり方への理解、正常に生活する能力など――これらすべてが取り戻される。もしエバが蛇に誘惑されていなかったら、人は最初に創造された後、普通の生活を送っていたはずである。人は食べ、服を着て、地上の普通の人の生活を送ったはずである。しかし人が墮落してから、このような生活は夢物語となり、現在も、人はそのようなものを敢えて想像することもない。実際のところ、人が待ち望むこの美しい生活は不可欠である。もし人がそのような終着点を持っていないなら、地上での墮落した生活は決して終わることがないだろう。そして、もしそのような美しい生活がないなら、サタンの運命やサタンが地上を支配する時代に終結はないだろう。人は暗闇の勢力が及ばない領域に達しなければならない。そうするとき、サタンが打ち負かされたことが証明されるのである。このようにして、一旦サタンの妨害がなくなると、神は自ら人類を掌握し、人間生活の全てを指揮し、支配する。これによって初めてサタンが敗北したことになる。現在、人の生活は大方汚れの生活であり、やはり苦しみと患難の生活である。これをサタンの敗北と呼ぶことはできない。人はまだ苦難の海から脱しておらず、人生の苦痛、あるいはサタンの影響から抜け出しておらず、依然として神に関しては、未だに微々たる認識しか持っていない。人のすべての困難はサタンによって造り出され、人の人生に苦難をもたらしたのはサタンで

あるので、サタンが縛られて初めて、人は苦難の海から完全に逃れることができるのである。しかし、サタンを束縛することは、人の心を征服し獲得することを通して、また、人をサタンとの闘いの戦利品にすることによって達成される。

現在、人が勝利者になること、完全にされることを追い求めるのは、地上で正常な人の生活を送る以前に追求すべきことであり、サタンが束縛される以前に人が求めるべき目標である。勝利者になること、そして完全にされること、あるいは大いに用いられることを人が追い求めることは、実質的には、サタンの影響から逃れることである。人が追求しているのは、勝利者になることだが、最終的な結果はサタンの影響から逃れることである。サタンの影響から逃れることによってのみ、人は地上で正常な人間の生活、神を礼拝する生活を送ることができる。現在、人は勝利者になり、完全にされることを追い求めているが、それは地上での正常な人間の生活を送る以前に求めるべきことである。それらのことは、おもに清められ真理を実行に移すために追求され、また造り主の礼拝を達成するために追い求められる。もし人が地上で正常な人間の生活、困難や苦悩のない生活を送っているなら、人は勝利者になることを敢えて追い求めはしないだろう。「勝利者になること」と「完全にされること」とは、神が人に追求するように与えた目標であり、これらの目標を通して、神は人が真理を実践し、意義深い人生を送るようにするのである。その目的とは、人を完全にし、人を獲得することであり、勝利者になることと完全にされることを追求することは、単なる手段に過ぎない。もし将来、人が素晴らしい終着点に入ることになるなら、勝利者になることと完全にされることについて言及されることはなく、被造物がそれぞれの本分を尽くすだけである。現在は、単に人間の範囲を定義するために、人にこれらの事を求めさせているだけで、それによって人の追求がより目標を得て、さらに実践的になるためである。さもなければ、人はぼんやりと上の空の状態で生き、永遠のいのちに入ることを追求するだろうし、もしそうなれば、人はもっと哀れではないだろうか。目標や原則なしに、このように追い求めるのは――自己欺瞞ではないだろうか。最終的には、このような追求は当然実を結ぶことがなく、その後も人は依然としてサタンの領域の下に生きることになり、そこから脱け出すのは不可能だろう。なぜ自分自身をそのような目的のない追求に従事させるのか。永遠の終着点に入るとき、人は造り主を礼拝する。そして、人は救いを得て、永遠の中に入ったので、人は何の目的も追求しないし、その上、サタンによって包囲される心配もない。この時、人は自分の立場を知り、本分を尽くす。そして、罰せられたり裁かれたりしなくとも、人はそれぞれ自分の本分を尽くすだろう。その時、人は身分においても

、地位においても被造物となる。高低の差別はもはやない。人はそれぞれの異なる役割を果たすだけである。但し、人は依然として人類の秩序ある適切な終着点の中で生きており、造り主を礼拝するために本分を尽くす。そして、このような人類は永遠の人類となるであろう。その時、人は神に照らされた生活、神の配慮と守りの下にある生活、そして神と共に生きる生活を獲得することになる。人類は地上で正常な生活を送り、全人類が正しい軌道に乗ることになる。六千年の経営計画は徹底的にサタンを打ち負かすことになるだろう。つまり、神は創造直後の人間の本来の姿を回復させ、そうして、神の本来の意図が成就される。最初、人類がサタンによって墮落させられる前、人間は地上で正常な生活を送っていた。その後、サタンに墮落させられた時、人はこの正常な生活を失った。そこで、神の経営の働きと、人の正常な生活を取り戻すためのサタンとの闘いが始まった。六千年にわたる神の経営の働きが終わって初めて、全人類の生活が地上で正式に始まり、そうして初めて人は素晴らしい生活をすることができ、神は最初に人を創造したときの目的と人の本来の姿を回復するだろう。したがって、一旦地上で人類の正常な生活を始めると、人は勝利者になることや完全にされるということを追求しなくなるだろう。というのは、人は聖くなるからである。人が語るところの「勝利者」や「完全にされる」というのは、神とサタンとの戦いの間に、人が追い求めるために与えられた目標である。そして、それらの目標は、人が墮落したので存在しているだけである。あなたに目標を与え、あなたにこの目標を追求させることによって、サタンは打ち負かされるのである。勝利者になったり、完全にされたり、用いられたりすることをあなたに求めることは、サタンを辱めるために証しすることをあなたに要求することである。最後には、人は地上で正常な人間の生活を送り、聖くなるだろう。そして、このことが起こるとき、それでも彼らは勝利者になることを求めるだろうか。彼らはみな被造物ではないか。勝利者になることと、完全なものにされることについて言えば、それらの言葉はサタンと人の汚れを指している。この「勝利者」とはサタンや敵対する勢力に勝利することを指しているのではないだろうか。あなたが自分は完全にされていたと言ったとき、あなたの中のどこが完全にされたのだろうか。それは、あなたが神への崇高な愛に達することができるよう、墮落したサタンの性質を自分から取り除いたということではないだろうか。そのようなことは、人の中にある汚れたもの、そして、サタンと関連して語られる。それらは神と関連して語られるのではない。

現在、あなたが勝利者になり完全にされることを求めないなら、将来、人類が地上で正常な生活を送るとき、そのような追求の機会はないであろう。その時、あらゆる部類

の人間の最後が明らかにされるだろう。その時、あなたがどのような種類のものか明らかにされ、もしあなたが勝利者になることや、完全にされることを願っても、それは不可能であろう。人はその反抗心ゆえに、明らかにされてから、懲罰を受けるだけである。その時、人間が追求するものは、他の人達より高い地位ではない。勝利者となることを追求する人があれば、完全にされることを追求する人もあり、また神の長子となることを追求するものや神の子になることを追求する人もいるが、彼らはこれらのことを追求しない。すべての人たちは神の被造物となり、すべての人たちは地上で生活し、すべての人たちは神と共に地上で生活するだろう。今こそ、神とサタンとの戦いの時である。この戦いはまだ終わっておらず、人はまだ完全に神のものとされていないので、これは移り変わりの期間である。それゆえ、人には勝利者になるか、神の民の一員になるかを追求することが要求される。現在、地位に区別があるが、時が来ればそのような区別はなくなるのである。勝利を得たすべての人たちの地位は同じで、彼らはすべて資格のある人間となり、地上で平等に生きるであろう。つまりそれは、彼らはみな資格のある被造物となり、彼らに与えられる物はすべて同じという意味である。神の働きの時代は異なり、神の働きの対象も違うので、もしこの働きがあなたがたになされるなら、あなたがたは完全にされ、勝利者になる資格を持つ。もしそれが国外でなされたとしたら、彼らは征服されるための最初の群、また完全にされるための最初の群になる資格を持つ。現在、この働きは国外ではなされていない。だから、彼らには完全にされ、勝利者になる資格はなく、彼らが最初の群になるのは不可能である。神の働きの対象、神の働きの時代、そして神の働きの範囲が異なっているので、最初の群、つまり、勝利者たちがいて、完全にされる者たちからなる第二の群もいるだろう。完全にされた者たちからなる最初の群ができれば、模範とひな型も存在するだろう。だから将来は完全にされた人達の第二、第三の群が存在するだろうが、永遠においてはみな同じであり、地位においても分類はないであろう。彼らはただ異なった時に完全にされるのであって、地位の違いは全くない。すべての人たちが完全にされ、全宇宙におよぶ働きの終わりが来ると、地位に区別はなく、すべての者が平等になるであろう。現在、この働きがあなたがたの間でなされているのは、あなたがたは勝利者になるためである。もしこれが英国でなされたら、英国に、あなたがたが最初の群になるのと同じように、最初の群ができるであろう。あなたがたの中で現在の働きが実行され、あなたがたに特に恵み深くされているだけのことである。そして、もしこの働きがあなたがたの間でなされなかったら、あなたがたも同じように、二番目の群、もしくは三番目、四番目、五番目の群となるだろう。これは単に働きの順序の違いによるものである。一番目と二番目の群があることは、

一方の地位が高く、もう一方の地位が低いという意味ではない。それは単にこの人たちが完全にされる順番を意味しているだけである。現在、これらの言葉があなたがたに伝えられているが、なぜあなたがたはもっと早く知らされていなかったのだろうか。なぜなら、過程がなければ、人々は極端に走る傾向があるからである。たとえば、イエスは当時、わたしは去ったときと同じように、再び来ると言った。現在、多くの人たちはこの言葉に夢中になり、白い衣を着て天に携挙されるのを待つことだけを望んでいる。したがって、早急に語らない方が良い言葉が沢山ある。もし早急に語ってしまうと、人は極端に走るからである。人の霊的背丈はあまりに低く、これらの言葉の真理を見抜くことができない。

人類が地上で真の人間生活を達成し、サタンの全勢力が縛られると、人は地上で楽に生きることになるだろう。物事は現在ほど複雑ではなくなるだろう。人間関係、社会関係、複雑な家族関係など……。それらは厄介で、本当に苦痛である。地上の人間生活はとてもみじめである。一旦征服されると、人の心と思いは変わるだろう。人は神を畏敬する心と、神を愛する心を持つだろう。全宇宙で神を愛することを求めるすべての人たちが征服され、つまりサタンが打ち負かされ、サタン——暗闇の全勢力——が縛られると、地上での人の生活は困難でなくなり、地上で自由に生きることができるようだろう。もし人の生活に肉の関係がなく、肉の複雑さがなければ、どれほど楽なことだろう。人の肉体的な関係はあまりにも複雑で、人にとってそのようなものを持つことは、その人がまだサタンの影響から解放されていない証拠である。もしあなたが兄弟姉妹とそれぞれ同じ関係を持ち、家族とそれぞれ同じ関係を持っていたら、あなたは何の心配もしないだろうし、誰かを心配する必要もないだろう。これ以上良いことはないだろうし、これなら人は苦しみ的一半から解放されるだろう。地上で正常な人間の生活をする、人は天使のようになる。依然として肉体を持っているけれども、人は天使のようになるだろう。これは最後の約束、人に授けられる最後の約束である。現在、人は刑罰や裁きを受けるが、あなたは、人間がそのような体験をすることを無意味だと思うのか。刑罰の働きや裁きの働きが何の理由もなく行われるだろうか。以前、人を罰し、裁くことは人を底なしの穴に落とすことだと言われてきた。それはつまり、人の運命や前途を奪い取ることの意味する。これはただ一つのこと、つまり人を清めるためである。神は人を故意に底なしの穴に落しておいて、人間に見切りをつけるのではない。むしろ、人の中にある反抗心を取り扱い、最終的に人の中にあるものが清められ、神に対して真の認識を持ち、人が聖なる者のようになるためである。もしこのことがなされるなら、すべてのこと

が成就されるだろう。実際、人の中にある取り扱われるべきこれらのものが取り扱われ、人が響きわたるような証しをするなら、サタンは打ち負かされ、たとえ人の中に生来あるものがまだ完全に清められず、少しは残っていても、一旦サタンが敗北すると、もはやサタンが困難をもたらすことはなく、その時こそ人は完全に清められるであろう。人はそのような生活は体験したことがないが、サタンが打ち負かされると、すべてに決着がつき、人の中にある些細なことはすべて解決される。主な問題が解決されると、他の全ての問題も解決する。神が今回地上で受肉している期間、彼が人の間で自ら働きをなす時、彼がなす全てのことは、サタンを打ち負かすためである。そして、彼は人を征服し、あなたがたを完全にすることによって、サタンを敗北させるのである。あなたがたが響きわたるような証しをするとき、これもまた、サタンの敗北のしるしとなるであろう。人は、サタンを打ち負かすために、最初に征服され、最終的に完全にされるのだ。けれども、実質的に、これはサタンの敗北であると同時に、全人類がこのむなしい苦悩の海から救われることでもある。この働きが全宇宙で実行されるのか、中国で実行されるのかに関わらず、そのすべてはサタンを打ち負かすためであり、人が安息の地に入ることができるよう全人類に救いをもたらすためである。受肉した神、即ちこの普通の肉体は、正にサタンを打ち負かすためである。肉なる神の働きは、神を愛する天の下にいる全ての人たちに救いをもたらすために用いられ、それは全人類を征服するためであり、さらには、サタンを打ち負かすためである。神の経営の全ての働きの中核は、全人類に救いをもたらすためのサタンの敗北と切り離せない。この働きの多くにおいて、あなたがたに証しをするように常に言うのはなぜだろうか。そしてその証しは誰に向けられるのか。それはサタンに向けられているのではないか。この証しは神のためになされ、神の働きがその効果を達成したことを証しするためのものである。証しすることはサタンを打ち負かす働きと関係している。もしサタンとの戦いがなかったら、人は証しをするよう要求されないだろう。サタンは敗北しなければならないので、神は人を救うと同時に、サタンの前で人が神に証しすることを要求する。人を救い、サタンと戦うために神はそれを用いるのだ。したがって、人は救いの対象であり、またサタンを打ち負かすための道具でもある。そのため、人は神の経営全体の働きの核心に置かれており、サタンは滅ぼす対象、つまり敵にしかすぎない。あなたは自分は何もしていないと感ずるかもしれないが、あなたの性質が変わることで、証しとなっている。そしてこの証しは人に対してではなく、サタンに向けられている。人はそのような証しを享受するに適していない。神によってなされた働きが、どうして人に理解できようか。神の戦いの対象はサタンであり、一方、人は救いの対象に過ぎない。人は墮落したサタンの性質を持っ

ているので、この働きを理解することはできない。これはサタンによる墮落だからであり、人の中に生まれつきあるものではないが、サタンによって仕向けられるのである。現在、神の主な働きはサタンを打ち負かすことである。つまり、人を完全に征服し、その結果、人がサタンの前で、神に最後の証しをするためである。このようにして、全てのことが成就されるだろう。多くの場合、あなたの肉眼では、何もしなされなかったように見えるが、実際、働きはすでに完成されているのである。人は完成したすべての働きが目に見えることを要求するが、それがあなたに見えなくても、わたしは働きを完成させたのである。というのは、サタンが服従したからであり、それは、サタンが完全に打ち負かされ、神の知恵、力、権威のすべてがサタンに勝利したという意味である。これこそが立てられるべき証しであって、人に明白な表現はなく肉眼には見えなくても、サタンはすでに打ち負かされたのである。この働きのすべてがサタンに向けられており、サタンとの戦いの故に実行される。したがって、人には成功したように見えない多くの事があるが、神の目にはずいぶん前に成功しているのである。これは神のすべての働きの秘められた真理の一つである。

一旦サタンが打ち負かされると、すなわち、人が完全に征服されると、人はこのすべての働きが救いのためであり、この救いの手段はサタンの手から取り戻すということであると理解するだろう。神の経営の六千年の働きは、律法の時代、恵みの時代、神の国の時代というように三段階に分かれている。これら三段階の働きはすべて人類の救いのためである。すなわち、それらはサタンによってひどく墮落させられてきた人類の救いのためである。けれども、それは同時に、神がサタンと戦うためでもある。したがって、ちょうど救いの働きが三段階に分かれているように、サタンとの戦いも三段階に分かれおり、この二つの側面の神の働きが同時に行われる。サタンとの戦いは実際、人類の救いのためであり、また、人類の救いの働きは一つの段階ではうまく完成できるものではないから、サタンとの戦いもまた段階と期間に分けられている。そして戦いは、人間の必要とサタンによる人間の墮落の程度に応じて、サタンに対して遂行される。おそらく人は、二つの軍勢が戦うように、神がサタンに向かって武器を取って戦うのだろうと想像の中で考えているだろう。人の知恵はこれくらいしか想像することができない。それはこの上なく曖昧で、非現実的な考えであるが、それが人の信じることである。そして、人の救いの手段はサタンとの戦いを通してである、とわたしがこうして言うので、人はそのような戦いの様子を想像する。人の救いの働きは三段階で実行された。すなわち、サタンとの戦いは、サタンが完全に打ち負かされる前に三段階に分割されたという

ことである。しかし、サタンとの戦いにおける全ての働きに秘められた真理は、人に恵みを施し、人の罪祭となり、人の罪を赦し、人を征服し、人を完全にするといういくつかの段階を通してその効果が達成されるということである。実際、サタンとの戦いは、サタンに武器を持って立ち向かうものではなく、人の救い、人のいのちへの働き、人の性質を変えることであり、それにより人が神を証しすることである。サタンはこうにして打ち負かされるのである。人の墮落した性質を変えることを通してサタンは打ち負かされる。サタンが敗北すると、つまり、人が完全に救われると、そのとき辱めを受けたサタンは完全に縛られ、こうして人は完全に救われることになる。ゆえに、人の救いの実質はサタンとの戦いであり、サタンとの戦いはおもに人の救いに反映される。人が征服される終わりの日の段階は、サタンとの戦いの最終段階であり、また、人をサタンの領域から完全に救う働きでもある。人の征服の秘められた意味は、サタンの化身、つまりサタンに墮落させられた人間が征服に引き続いて造り主に戻ることであり、これにより人はサタンを見捨て、完全に神に戻る。このようにして、人は完全に救われるだろう。したがって、征服の働きはサタンとの戦いにおける最後の働きであり、サタンを打ち負かすための、神の経営における最終段階である。この働きがなくては、人の完全な救いは最終的には不可能で、サタンの完全敗北もまた不可能になるであろう。そして、人類は決して素晴らしい終着点に入ることができず、サタンの影響から自由になることもできないだろう。従って、人の救いの働きを、サタンとの戦いが終結する前に完了することはできない。というのは神の経営の働きの核心は人類の救いであるからである。最初的人类は神の手の中にあったが、サタンによる誘惑と墮落によって、人はサタンに縛られ、悪しき者の手中に落ちてしまった。こうしてサタンは、神の経営の働きにおいて、打ち負かす対象となった。サタンは人間を自分の所有物としたが、人は神の全経営の資本であるので、人が救われるには、サタンの手から取り戻されなければならない。すなわち、人間はサタンの虜となった後に連れ戻されなければならないのである。かくして、サタンは、人間の古い性質の変化、人間の本来の理知を回復する変化によって打ち負かされなければならない。こうして、虜となっていた人間をサタンの手から取り戻すことができる。もし人がサタンの影響や束縛から自由になると、サタンは辱められ、人は最終的に取り戻され、サタンは打ち負かされるであろう。そして人はサタンの暗闇の影響から解放されたので、人はこのすべての戦いの戦利品となり、この戦いが終わるとサタンは懲罰の対象となるそのとき、人類を救う働きのすべてが完了するのである。

神は被造物に対して悪意はなく、サタンを打ち負かすことだけを願っている。神の働

きのすべては――それが刑罰であろうと裁きであろうと――サタンに向けられている。それは人類の救いのために実行され、すべてサタンを打ち負かすためであり、目的はひとつである。それはサタンと最後まで戦うことである。そして神はサタンに勝利するまで、決して休むことはない。神はサタンを打ち負かして初めて休息する。神によってなされるすべての働きはサタンに向けられており、また、サタンに墮落させられた人たちはすべてサタンの領域で支配され、みなサタンの領域で生きているので、サタンと戦ってそれを断ち切ることがなければ、サタンはその人たちへの掌握をゆるめないだろうし、彼らが神のものとされることもないだろう。もし彼らが神のものとされなかったら、それはサタンが打ち負かされておらず、征服されていないことの証明となるだろう。したがって、神の六千年の経営計画の最初の段階で、神は律法の働きをなし、第二段階で恵みの時代の働き、すなわち、十字架の業をなし、第三段階では、人類征服の働きをなした。このすべての働きは、サタンが人類を墮落させた度合いに応じており、それはすべてサタンを打ち負かすためであり、サタンを打ち負かすためではない段階は一つもない。神の経営の六千年の働きの実質は、赤い大きな竜に対する戦いであり、人類を経営する働きもまたサタンを打ち負かす働き、サタンと戦いを交える働きである。神は六千年も戦い、このようにして、人を最終的に新しい領域に連れて行くため六千年も働いてきた。サタンが打ち負かされるとき、人は完全に自由になる。これこそ現在の神の働きの方向ではないだろうか。これこそ正に現在の働きの方向である。つまり、人を完全に解放し自由にすることである。その結果、人はどんな規則にも支配されず、あらゆる束縛や抑制にも制限されなくなる。この働きのすべてはあなたがたの霊的背丈とあなたがたの必要に応じてなされる。つまりそれは、あなたがたが達成できるものは何であれ与えられるという意味である。それは、「アヒルを追いやって木に止まらせる」というような、あなたがたに何かを課すものではない。そうではなく、このすべての働きは、あなたがたの実際の必要に応じて実行されるのである。それぞれの段階の働きは、人の実際の必要や人への要求とに応じてなされる。働きのそれぞれの段階はサタンを打ち負かすためなのである。実際、初めは造り主と彼の創造物との間に壁はなかった。それらはすべてサタンが引き起こしたのである。人はサタンによる妨害と墮落によって何も見えなくなり、何も触ることができなくなった。人は犠牲者であり、欺かれた者である。サタンが敗北すると、被造物は造り主を見上げ、造り主は被造物に目を注ぎ、自ら彼らを導くことができる。唯一これのみが、人が地上で送るべき生活である。したがって、神の主な働きはサタンを打ち負かすことであり、サタンが敗北すると、すべてが解決される。現在、あなたは、神が人々の間に来たことが特別なことであることを知っただろう

。神はあなたがたの欠点を毎日見つけてあれこれ指摘するために来たのではなく、単に自らの容貌、話し方、生き方を見せるために来たのでもない。神が肉となったのは、単にあなたがたが神を見上げるようになるためでも、あなたがたの目を開くためでもなく、また、自らが語る奥義と自らが開いた七つの封印に関して聞かせるためでもない。むしろ、神はサタンを打ち負かすために肉となったのである。神は人を救うために、またサタンと戦うために、肉となって自ら人の所に来た。そしてこれこそが彼の受肉の意義である。もしそれがサタンを打ち負かすためでなかったなら、彼は自らこのような働きをしないだろう。神は人々の間で自らの働きをなすため、人に自らを現すため、また、人が神を見上げるようになるために地上に来た。これは些細なことだろうか。これは実に驚くべきことである。人の想像とは違い、神が来たのは、人が彼を見上げるようになり、神は実在し、漠然として空しい存在ではなく、いと高き方であるが謙っていることを人が理解するためである。これはそれほど単純なことだろうか。神が肉の姿をとってサタンと戦い、自ら人を牧さなければならないのは、正確に言えば、サタンが人の肉体を墮落させたからであり、人間こそが神の救おうとするものだからである。神の働きに有益なのはこれのみである。神の二度の受肉はサタンを打ち負かすために存在し、また、より効果的に人を救うために存在した。なぜなら、サタンと戦いを交える方は、それが神の霊であれ、神の受肉であれ、神においては他にいないからである。要するに、サタンと戦いを交える者は天使のはずがなく、ましてやサタンに墮落させられた人間であるはずもない。天使にそのような力はなく、人間はもっと無力である。そのように、もし神が人のいのちに働くことと、人を救うために自ら地上に来ることを望むなら、神は自ら肉となり、つまり、自ら肉をまとい、神の本来の身分と神がしなければならない働きをもって、人を救うために人々の間に来なければならない。もしそうでなく、この働きをしたのが神の霊か、人間であったなら、この戦いは永遠にその効果を達成することではなく、決して終わることもないだろう。神が肉となり、人々の間で自らサタンに戦いを挑むとき初めて、人に救いの機会があるのだ。さらに、その時初めてサタンは辱められ、利用する機会も、企てる計画もまったくないままの状態になるだろう。受肉した神によってなされる働きを、神の霊によって成し遂げることは不可能であり、神の代わりに肉なる人間によって成し遂げることはなおさら不可能である。というのは、神がなす働きは人のいのちのためであり、人の墮落した性質を変えるためであるからだ。人がこの戦いに加わるとしたら、惨めにも混乱してただ逃げるだけで、彼らには人間の墮落した性質を変えることはまったくできないであろう。人には十字架から人間を救ったり、反抗的な人類すべてを征服したりすることは不可能であり、原則を超えない古い働きを

少しするか、サタンの敗北とは関係のない他の働きをすることしかできないだろう。それならなぜ思い煩う必要があるのか。人間を獲得することも、ましてサタンを打ち負かすこともできない働きに何の意味があるのか。したがって、サタンとの戦いは神自らによってのみ遂行されるのであって、人にはまったく不可能である。人の本分は服従して従うことである。というのは、人は天地創造に類する働きも、そのうえサタンと戦う働きを遂行することもできないからである。人はただ神自らの指導の下で、造り主を満足させることができるだけで、サタンは、それを通して打ち負かされるのである。これは人ができる唯一のことである。それゆえ、新しい戦いが始まるたびに、すなわち、新しい時代の働きが始まるたびに、この働きは神自らによってなされ、それを通して、神はその時代全体を導き、全人類のために新しい道を切り開く。それぞれの新しい時代の幕開けは、サタンとの戦いの新しい始まりであり、それを通して、人は神自らが導くより新しく、もっと美しい領域と新しい時代に入る。人は万物の主人だが、神のものとされた人たちはサタンとのすべての戦いの実となるであろう。サタンはすべての物を墮落させる者であり、すべての戦いの終わりには敗北者となり、また、これらの戦いに続いて懲罰される者である。神、人、サタンのうち、サタンだけが忌み嫌われ、拒絶される者である。その一方で、サタンのものにされ、神によって取り戻されない人たちは、サタンに代わって懲罰を受ける者たちである。これら三者の中で、神だけが万物に礼拝されるべきである。一方、サタンに墮落させられたが、神によって連れ戻され、神の道に従うようになった人たちは、神の約束を受け、神のために邪悪な者たちを裁く者となるだろう。神は必ず勝利し、サタンは必ず敗北するが、人々の中には、勝利する者と敗北する者がいる。勝利する者たちは勝利者と共に属し、敗北する者たちは敗北者と共に属する。これはそれぞれの者を種類によって分類することであり、それは神のすべての働きの最後の終わりであり、神のすべての働きの目的でもあり、それは決して変わることはない。神の経営計画の主な働きの核心とは、人の救いに焦点を置くことである。そして、神は主にこの核心と、この働きのために、またサタンを打ち負かすために、肉となるのである。神が初めて肉となったのも、サタンを打ち負かすためであった。神は最初の戦いの働き、すなわち人類の贖いの働きを完了させるために、自ら肉となり、自ら十字架に釘付けにされた。同じように、この段階の働きも、人の間で働き、自ら言葉を語り、人が神を見ることができるようにするために肉となった神自らによってなされるのだ。もちろん、神がその働きの途中で他の働きもすることは避けられないが、彼が自らその働きを遂行する主な理由は、サタンを打ち負かすためであり、全人類を征服するためであり、また、これらの人たちを自らのものとするためである。したがって、神の受肉

による働きは本当に重要である。もし彼の目的が、神はへりくだっていて隠れた存在であり、神が実在することを人に示すことだけで、もしこの働きをするだけのことであったら、神が肉となる必要はなかつただろう。たとえ神が肉とならなかつたとしても、神は自らがへりくだり、隠れた存在であること、そして自らの偉大さと聖さを人間に直接現すことができただろう。しかし、そのようなことは人類を経営する働きとは何の関係もない。それらによって人を救ったり、人を完全にしたりすることは不可能で、ましてやサタンを打ち負かすことなどではしない。もしサタンを打ち負かすことにおいて、聖霊が霊と戦うだけなら、そのような働きの実践的価値はさらに低いだろう。それなら、人を神のものとすることは不可能となり、人の運命と前途を台無しにしてしまうだろう。そのように、現在の神の働きには深遠な意味がある。それは人が神を見ることができたり、人の目が開かれたり、人に多少の感動と励ましを与えたりするためではない。そのような働きは意味がない。もしあなたがこの種の認識についてしか語ることができないなら、それはあなたが神の受肉の真の意義を分かっていない証拠である。

神の経営計画の働きの全ては神自身によって直接行われた。第一段階、即ち世界創造のあとの律法の時代の働きは、神自身によって直接行われた。神はモーセをもちいて律法を公布した。全人類を贖うという第二段階もまた受肉した神によって直接行われた。肉となった神以外には、それを行なう資格のある者は誰もいない。第三段階は言うまでもない――神のすべての働きを終わらせるためには、なおさら神自身が働くことが必要となる。全人類を贖い、征服し、獲得し、完全にする働きは、すべて神自身が直接遂行する。もし彼がこの働きを自ら行わないなら、彼の身分を人によって表すことはできないし、彼の働きが人によってなされることもないだろう。サタンを打ち負かし、人類を獲得するために、また、地上で正常な生活を人に与えるために、神は自ら人を導き、人の間で働く。神のすべての経営計画とすべての働きのために、神は自らこの働きをしなければならない。もし人が、神が来たのは人に見られるため、また人を嬉しがらせるためであると思わないなら、そのような認識には何の価値もなく、また何の意味もないだろう。人の認識はあまりにも浅い。神が自ら遂行して初めて、この働きは余すところ無く完全に行われるのである。人が神に代わってそれをすることはできない。人は神の身分も本質も持っていないので、神の働きをすることは不可能である。たとえ人がそれをしたとしても、何ら効果はないだろう。最初に神が肉となったのは贖いのためであり、それはすべての人間の罪を贖い、人間が清められること、その罪が赦されることを可能にするためであった。征服の働きも神自らによって人の中でなされる。もし、この

段階の間、神が預言しか語らないのであれば、預言者か、誰か賜物のある者を見つけて、その人が神に代わることもできよう。もし預言のみが語られるなら、人は神の代役を務めることができよう。しかし、もし神自身の働きを人が自らなし、人が人間のいのちに働くなれば、この働きをなすのは不可能であろう。それは神自らによって直接されなければならない。神はこの働きをなすために自ら肉とならなければならない。ことばの時代に、もし預言しか語られないのであれば、この働きをするために預言者イザヤかエリヤを見つけてくれればよいし、神自身が直接それをする必要はないだろう。この段階においてなされる働きは、預言を語るだけでなく、人を征服し、サタンを打ち負かすために用いられる言葉の働きの方が更に重要なので、この働きは人間には不可能であり、神自身によって直接なされなければならない。律法の時代にヤーウェは神の働きの一部を行い、その後、預言者を通していくつかの言葉を語り、働きをなした。それは人がヤーウェの働きの代役を務めることができ、預言者は物事を預言し、神に代わって夢を解き明かすことができたからである。初めになされた働きは、人間の性質を直接変える働きではなく、人間の罪とも関係がなく、人は律法を守ることを要求されていた。それゆえ、ヤーウェが肉となって自らを人に現すことはなかった。そして、ヤーウェはモーセや他の人たちに直接語り、ヤーウェの代わりに彼らに語らせ、働かせ、人々の間で彼らが直接働くようにしたのである。神の働きの第一段階は人を指導することであった。それがサタンとの戦いの始まりだったが、この戦いはまだ正式には始まっていなかった。サタンとの正式な戦いは神の最初の受肉とともに始まったが、それは現在に至るまでずっと続いてきた。この戦いの最初の実例は、受肉した神が十字架に釘付けされた事である。受肉した神が十字架に付けられたことによってサタンは打ち負かされたが、それはこの戦いでの最初の成功段階であった。受肉した神が人のいのちに直接働き始めたときこそが、人を取り戻す働きの正式な始まりであり、これは人間の古い性質を変える働きなので、サタンと戦いを交える働きだった。初めにヤーウェによってなされた働きの段階とは、地上での人間生活の指導に過ぎなかった。それは神の働きの始まりであって、まだいかなる戦いも、いかなる大きな働きも関与していなかったが、それはこれから来る戦いの働きの基盤を築いた。その後、恵みの時代の働きの第二段階には、人間の古い性質を変えることが含まれたが、それは神自らが人のいのちに働いたことを意味している。これは神自らが行わなければならなかった。それは神が自ら肉となることを必要とした。そして、もし彼が肉とならなかったなら、他の誰ひとりとしてこの段階の働きにおいて神に代わることはできなかつただろう。というのは、それはサタンと直接戦う働きを表していたからである。もし、人間が神に代わってこの働きをしたとしたら

、人がサタンに立ち向かって、サタンは服従することはなかっただろうし、サタンを打ち負かすことは不可能だったろう。サタンを打ち倒すのは、受肉した神でなければならなかった。なぜなら、受肉した神の本質は依然として神性であり、神がまとう肉は人間の命を持っており、これこそが造り主の現れであるからだ。何が起ころうとも、神の身分と本質は変わらないのである。したがって、神は肉の形をとって、サタンの完全服従をもたらす働きをなした。終わりの日の働きの段階で、もし人がこの働きをなし、言葉を直接語らなければならないとしたら、人はそれらを語ることはできないだろう。そして、もし預言が語られるなら、人間を征服することは不可能であろう。神は、肉の形をとって、サタンを打ち負かして完全服従させるために来る。彼が完全にサタンを敗北させ、完全に人を征服し、完全に人を神のものとすると、この段階の働きが完了し、働きが成功する。神の経営において、人は神の代役を務めることはできない。特に、時代を導き、新しい働きを始めることは、神自身によって直接なされる必要がある。人に啓示を与えたり、預言を与えたりすることは、人間によってなされることが可能だが、もしそれが、神自らがなすべき働き、また神自身とサタンとの戦いの働きであるなら、人間がこれをなすことは不可能である。働きの第一段階で、サタンとの戦いがないときは、ヤーウェは預言者たちによって語られた預言を用いて、自らイスラエルの民を導いた。その後、第二段階はサタンとの戦いとなり、神自らが肉の中に入り、肉となり、この働きを行った。サタンとの戦いが必要とされることは、何であれ神の受肉も必要とする。つまりそれは、この戦いは人間には行うことができないということである。もし人間が戦うことになれば、サタンを打ち負かすことは不可能であろう。サタンの支配下にある人間に、どうしてサタンと戦う力を持つことができようか。人は真ん中にいる。もしあなたがサタンの方に傾くなら、あなたはサタンに属し、あなたが神を満足させるなら、あなたは神に属す。この戦いの働きを神に代わって人がなすなら、人はそれを成し遂げることができるだろうか。もしそうしていたら、人はとうの昔に滅びていたのではなかろうか。人は黄泉の国にとうの昔に入っていたのではなかろうか。このように、人は神に代わってその働きをなすことはできない。すなわち、人は神の本質を持っておらず、もしあなたがサタンと戦いを交えたなら、サタンを打ち負かすことは不可能であろう。人にはある程度の働きしかできない。人は幾人かを勝ち取ることはできるだろうが、神自身の働きにおいて神の代役を務めることはできない。どうして人間がサタンと戦うことなどできようか。サタンは、あなたが戦い始めるやさきに、すでにあなたを虜にするだろう。神自身がサタンと戦い、このことに基づいて人間が神に従い服従するとき初めて、人は神のものとされ、サタンの束縛から逃れることができる。人が自分自身の知

恵、能力で達成できることは、あまりにも限られている。人には人間を完全にしたり、導いたり、さらには、サタンを打ち負かしたりすることは不可能である。人の知能と知恵では、サタンの計略を阻止することなど不可能である。どうして人がサタンと戦うことなどできようか。

進んで完全にされたいと思う者たちは皆、完全にされる機会がある。だから皆落ち着いていなければならない。将来、あなたがたはみな終着点に入るだろう。しかし、もしあなたが進んで完全にされようとせず、素晴らしい領域に入る意欲がないなら、それはあなた自身の問題である。進んで完全にされようとし、神に忠誠を尽くす者たち、服従する者たち、そして自分の役割を忠実に果たす者たち、——そのような人たちは皆、完全にされることが可能である。現在、自分の本分を忠実に尽くさない者たち、神に忠誠を尽くさない者たち、神に服従しない者たち、とりわけ、聖霊の啓示と照らしを受けたが、それを実践しなかった者たち、——そのような人たちはみな完全にされることが不可能である。神に進んで忠誠を尽くし、従う者は、たとえ多少無知であっても、皆完全にされることが可能である。進んで追求する者たちは皆完全にされることが可能である。この点で心配する必要はまったくない。あなたが進んでこの方向を追求している限り、あなたが完全にされることが可能である。わたしは、あなたがたの中の誰をも、見捨てたり、排除したりすることを願わないが、もし人が一生懸命努力しないなら、あなたは自分自身に破滅をもたらしているだけである。あなたを排除するのは、わたしではなく、あなた自身である。もしあなたが一生懸命努力しないなら——もしあなたが怠慢で、自分の本分を尽くすことも、忠誠を尽くすこともなく、真理を追求せず、いつも自分の好き勝手なことをし、無謀にふるまい、自分の名声と富のために争い、異性に対して不道德な接し方をするなら、あなたは自分の罪の結果を自分で負わなければならない。誰の同情にも値しない。わたしの目的は、あなたがたがみな完全にされることであり、少なくとも、あなたがたが征服され、その結果、この段階の働きが成功をもって完了することである。神の願いは、一人ひとりが完全にされ、最終的に神のものとされ、神によって完全に清められ、神に愛される者となることである。あなたがたは進歩が遅いとか、素質が乏しいとか、わたしが言おうと、気にすることはない——これはすべて事実である。わたしがこう言っても、それは、わたしがあなたがたを見捨てるつもりであり、あなたがたに望みを失ってしまったという証拠ではなく、ましてや、あなたがたを救う意欲が無い証拠などではない。現在、わたしはあなたがたの救いのための働きをなすために来ており、すなわちそれは、わたしがなす働きは、救いの働きの続きだとい

うことだ。完全にされる機会は各人に与えられている。あなたが進んで受け入れるなら、また、あなたが追求するなら、最後には、その成果を挙げることができ、あなたがたの誰一人として見捨てられることはないだろう。もしあなたの素質が乏しければ、わたしはその乏しい素質に合ったことをあなたに要求する。もしあなたの素質が優れているなら、わたしはその優れた素質に合ったことをあなたに要求する。もしあなたが無知で無学なら、わたしはあなたの無学に合ったことを要求する。もしあなたに教養があるなら、わたしはあなたに教養があるという事実に応じたことを要求する。もしあなたが高齢なら、わたしはあなたの年齢に応じたことを要求する。もしあなたに人をもてなすことができるなら、わたしはそれに合ったことを要求する。もしあなたが人をもてなすことはできず、特定の役割しか果たせないと言うのなら、それが福音を伝えることであれ、教会の管理であれ、その他の一般的なことに対応することであれ、あなたが果たす役割に応じて、わたしはあなたを完全にするのであろう。忠誠を尽くすこと、最後の最後まで従うこと、神への崇高な愛を求めること——これこそあなたが達成しなければならないことであり、この三つよりすぐれた実践はない。最終的に、人はこれら三つの事を達成することを要求されている。そして、もしそれらを達成できるなら、その人は完全にされるだろう。しかし何にもまして、あなたは真剣に追い求め、消極的になるのではなく、積極的に前に進み、上を目指さなければならない。すべての人に完全にされる機会があり、完全にされることは可能である、とわたしは既に言った。これは事実だが、だがあなたが、自分の追求において向上しようとしなければ別である。また、もしこれら三つの必要条件を満たすことができないなら、あなたは最後には排除されなければならない。わたしはすべての人が追い付いて、すべての人が聖霊の働きと啓きを得て、最後まで従うことができることを望んでいる。なぜなら、これは、あなたがた一人ひとりが尽くすべき本分であるからだ。あなたがたがみな本分を尽くし終えたとき、あなたがたはみな完全にされ、響きわたるような証しを持つだろう。証しを持っている者たちは皆サタンに勝利し、神の約束を手に入れた人たちである。そして彼らこそ、素晴らしい終着点で生き続ける人たちである。

神と人は共に安息に入る

はじめ、神は安息の中にいた。その時、地上には人類も他の何物もなく、神は何も働きをしなかった。人類が存在するようになり、さらに人類が墮落してしまった後、神ははじめて経営（救い）の働きに取りかかった。その時から神はもう安息せず、人類の間で忙しく働き始めた。人類が墮落したため神は安息を失い、また大天使が裏切ったため

神は安息を失った。もしサタンを打ち負かさず、墮落した人類を救わなければ、神は二度と再び安息に入ることができない。人に安息がないので、神にも安息がない。神がもう一度安息の中に入る時、人も安息の中に入る。安息の中の生活とは、戦いも汚れも、継続する不義もない生活である。言い換えれば、そのような生活には、神に敵対するいかなる勢力の侵入もないだけでなく、サタン（サタンとは敵対する勢力を指す）による妨害もサタンの墮落も存在しない。万物がおのおのその種類のものに従い、造物主を礼拝する。天上も地上も平穏になる。これが、人類が安息に入った生活である。神が安息の中に入った時、地上にはもうどんな不義も継続せず、もういかなる敵対勢力の侵入もなくなる。人類も新しい領域の中に入る。すなわち、彼らはもはやサタンに墮落させられた人類ではなく、サタンに墮落させられた後救われた人類である。人類の安息の日々は、神にとっての安息の日々でもある。神は人類が安息の中に入ることができないため、安息を失ったのである。つまり、神は本来、安息に入ることができなかったのではない。安息の中に入るとは、あらゆる事物の活動が止まることを意味するのでもなければ、あらゆる事物の発展が止まることを意味しているのでもない。また、神がもう働くことをやめる、あるいは人がもう生活することをやめることを意味しているのでもない。安息に入ったことのしるしは、以下のようなものである――サタンが滅ぼされている、サタンに同調する悪人たちがみな懲罰を受けて一掃されている、そして神に敵対するすべての勢力が存在しない。神が安息の中に入るとは、神がもう人類を救うという働きをしないことを意味している。人類が安息の中に入るとは、全人類がみな神の光の中と神の祝福の下に生きることを意味する。もはやサタンの墮落がなく、不義な事も起こらない。人類はみな地上で正常に生活し、神の加護のもとで生きようになるだろう。神と人が共に安息に入るということは、人類が救われたこと、サタンは滅ぼされたこと、人における神の働きが全部終わったことを意味する。神はもはや人の中で働き続けず、人ももうサタンの支配下に生きることはなくなる。それゆえに、神はもう忙しく働かず、人はもう忙しく駆け回らない。神と人は同時に安息の中に入るようになる。神はもとの場所に戻り、人も各人それぞれの場所に帰る。これは神の経営が終わった後に、神と人それぞれが身を置く目的地である。神には神の目的地があり、人には人の目的地がある。神は安息の中にあっても続けて全人類が地上で生きるのを導く。神の光の中にあって、人は天の唯一の真の神を礼拝する。神はもはや人の間には住まず、人も神と一緒に神の目的地で住むことはできない。神と人は同じ領域の中で生活することができない。むしろ、それぞれ自分の生き方がある。神が全人類を導くのであり、全人類は神の経営の働きの結晶である。導かれるのは人類である。人間は、本質的には、神と異なる

。安息することとは、神と人がそれぞれの本来の場所に帰ることを意味する。それゆえ神が安息に入るとき、それは神がもとの場所に復帰することを意味する。神はもう地上で生活しないか、あるいは人の間にあっても、人と苦楽を共にしない。人が安息に入るとは、人が真の被造物になったことを意味する。人は地上から神を礼拝し、正常な人間の生活を送る。人々はもう神に背かず、逆らわない。彼らは原初のアダムとエバの生活に復する。これが、神と人が安息に入った後の、それぞれの生活と目的地である。サタンが打ち負かされることは、神とサタンとの戦いが必然的に向かう方向である。こうして、神が経営の働きを終えた後に安息に入ることと人が完全に救われ安息に入るとは、同様に不可避免的に向かう方向になる。人の安息の場所は地上にあり、神の安息の場所は天にある。人は安息の中で神を礼拝し、地上で生きる。神は安息の中で残りの人類を導くが、地上から導くのではなくて天から導く。神は依然として霊であり、一方、人は、依然として肉である。神と人にはおのおの異なる安息の仕方がある。神は安息するが、人の間に来て人に現れる。人は安息するが、神に導かれて天を訪ね、天上で人生を楽しむこともある。神と人が安息に入った後、サタンはもはや存在せず、サタン同様、邪悪な者も、もはや存在しない。神と人が安息に入る前に、かつて地上で神を迫害したことのある邪悪な者たち、地上で神に不従順だった敵たちはすでに滅ぼされている。彼らは終わりの日の大きな災難によって滅ぼされている。そのような邪悪な者たちが徹底的に滅ぼされた後、地上でサタンの妨害を見ることはなくなる。人は完全な救いを与えられ、そうして初めて、神の働きが完全に終わる。これは神と人が安息に入る前提である。

万物の終わりが近づいたということは、神の働きが終わったことを示し、人類の発展が終わったことを示す。このことは、サタンによって墮落させられた人間が発展の最終段階を迎えたこと、アダムとエバの子孫たちが繁殖を完了させたことを意味する。それはまた、サタンに墮落させられたこのような人類が引き続き発展していくことがいずれ不可能になることを意味する。初めアダムとエバは、墮落させられてはいなかった。しかし、エデンの園から追放されたアダムとエバはサタンに墮落させられた。神と人が共に安息に入る時、エデンの園から追放されたアダムとエバ及び彼らの子孫は最終的に終焉を迎える。未来の人類は依然としてアダムとエバの後裔から成るが、サタンの支配下に生きている人々ではない。彼らはむしろ、救われ、清められた人々である。このような人類はすでに裁かれ、罰せられており、聖なる人である。そのような人々は最初の人類とは異なっている。最初のアダムとエバとは全く異なる種類の人だと言うことができ

る。このような人々はサタンに墮落させられたあらゆる人の中から選び出された人々であり、神の裁きや刑罰にゆるがず耐え抜いた人々である。彼らは墮落した人類の中で生き残った最後の一団の人々である。この一団の人々だけが神と共に最後の安息の中に入ることができる。終わりの日の神の裁き、刑罰の働き、すなわち、最後の清めの働きの中でゆるがず耐え抜ける人たちが、神と共に最後の安息の中に入る人たちである。したがって、安息に入る人はみな、神の最後の清めの働きを経て初めて、サタンの支配から振りほどかれ、神によって得られるだろう。最終的に神によって得られたこのような人々が最終的な安息へと入るのである。刑罰や裁きという神の働きの実質は、人類を清めることであり、それは、最終的な安息の日のためである。さもないと、全人類は、それぞれ自身と同類のものに属することができないか、あるいは安息の中に入ることができない。この働きは、人類が安息の中に入るための唯一の道なのである。清めの働きこそが人類の不義を清め、刑罰と裁きの働きこそが人類の中のそれらの不従順なものを全部さらけ出すのである。それによって、救うことのできる人と救うことのできない人とが識別され、生き残ることのできる人と生き残ることのできない人とが区別されるようになる。この働きが終わる時、生き残ることを許された人は、みな清められ、人類のより高い境地に入って、地上でのさらにすばらしい第2の人生を享受する。すなわち、彼らは人類の安息の日に入って神と共に生活する。生き残ることのできない人が刑罰や裁きを受けた後、彼らの正体が全て露呈される。それから彼らはみな滅ぼされ、サタンと同じように、もう地上で生きることができなくなる。未来の人類はもうこのような人々を含まない。このような人々は究極の安息の地に入る資格がなく、神と人が共有する安息の日に入る資格もない。なぜなら、彼らは懲らしめの対象であり、邪悪で、義なる人ではないからである。彼らはかつて贖われたことがあり、また裁かれもし、懲らしめも受け罰せられたことがある。彼らはまた神への奉仕をしたこともあるが、終わりの日がきたら、彼らはやはり、自身の悪さ、自身の不従順さ、贖う術もないような有様が原因で、排除され、滅ぼされる。彼らは未来の世界では存在しないし、未来の人類の間で生きることもない。死んだ人の魂であれ、肉としてまだ生きている人であれ、すべての悪を働く者、すべての救われなかった者は、人類の中の聖なるものたちが安息の中に入る時、滅ぼされる。これらの、悪を働く魂と悪を働く人々、或いは義人の魂と義を行う人々が、どんな時代に属していたとしても、悪を行う者はみな滅ぼされ、義なる人はみな生き残る。人あるいは魂が救いを受けるかどうかは、終わりの時代の働きによってのみ決まるのではなく、むしろ、彼らが神に逆らってきたかどうかあるいは神に背いてきたかどうかによって確定されるのである。もし前の時代の人が悪を働き、救われなかったな

ら、彼らは間違いなく罰を受ける対象になる。もし今の時代の人が悪を働き、救われな
いなら、彼らもまた、確実に罰の対象になる。人々は、善と悪にもとづいて分離され
るのであって、時代にもとづいて分離されるのではない。ひとたび、善と悪によって分離
されたら、人々は直ちに罰を受けたり報いを与えられたりするのではない。むしろ神は
、終わりの日における征服の働きを遂行した後はじめて、悪を行う者を罰し、善を行う
者に報いる働きを行う。実は、神が人類に対して働きをはじめた時からずっと、神は人
類を分けるために善と悪を用いている。神は自身の働きを終えて初めて、義なる人を報
い、悪である者を罰するのである。最後に働きを終えて悪者と義人を分けて、それから
すぐ悪を罰し、善に報いる働きに着手するのではない。悪を罰し、善に報いるという神
の最終的な働きは、全て全人類を完全に清めるために行われる。そうすることによって
、完全に清くなった人類を永遠の安息に導き入れることができる。神のこの段階の働き
は最も重要な働きであり、神の経営の働き全体の最後の段階である。もし神が悪者たち
を全て滅ぼさないで、彼らを残しておけば、全人類はやはり安息の中に入ることができ
ず、神も全人類をよりよい領域に導き入れることができない。このような働きでは完了
することはできない。神が自身の働きを終える時、全人類は完全に聖いものとなる。こ
のようになってはじめて、神は安らかに安息の中で生活することができる。

今日人々は肉のものを手放すことができない。肉の楽しみを放棄できず、この世、金
銭、墮落した性質をも捨てることができない。大多数の人は思うままに追求している。
実際、このような人々は、心の中に全く神を持っていない。まして、彼らは神を恐れな
い。彼らは心の中に神を持たないので、神が行うすべてを理解できず、彼の口から出た
言葉を信じることはなおさらできない。このような人々はあまりにも肉的である。彼ら
は、あまりにも深く墮落させられ、いかなる真理をも欠いている。その上、神が受肉で
きることを信じない。肉となった神を信じない人、すなわち、目に見える神の働きと言
葉を信じない人、目に見える神を信じないで目に見えない天の神を崇拝する人はみな、
心の中に神を持たない人である。彼らは、神に従わず、反抗する人たちである。このよ
うな人は真理を欠いているのは言うまでもなく、人間性と理知をも欠いている。このよ
うな人たちにとっては、目に見える神、触れることができる神はもっと信頼できず、目
に見えない神、触れることのできない神こそが、いちばん信頼でき、またいちばん彼ら
の心を喜ばせるのである。彼らが求めるものは現実的な真理ではなく、いのちの本質で
もなく、ましてや神の考えなどではない。むしろ彼らは、刺激を求めている。もっとも
彼らの欲望を満たすことができるものならどんなものであっても、間違いなくそれが、

彼らが信じ、追い求めるものである。彼らはただ自分の欲望を満たすためだけに神を信じるのであって、真理を求めるためではない。このような人たちはみな悪を行う人たちではないのか。彼らはひどく自信過剰で、天の神が彼らのような「善良な人々」を滅ぼすとは信じない。むしろ神は彼らを生き残らせ、しかも手厚く報いてくれると思っている。なぜなら、彼らは神のために多くの事をし、神のためにずいぶん「忠誠心」を尽くしたからである。もし彼らが目に見える神を追い求めることになった場合、彼らの欲望が満たされないとなれば、彼らは直ちに神に反撃するか、烈火のごとく怒るはずである。このような人たちはみな、自分の欲望を満たそうとする卑劣な人間である。彼らは、真理を追い求めることにおいて誠実な人々ではない。このような人々は、キリストに従ういわゆる悪者たちである。真理を求めないこのような人たちは真理を信じることはできない。彼らは、人類の未来の結末については、なおさら感じる事ができない。なぜなら、彼らは目に見える神の働きと言葉をひとつも信じず、人類の未来の終着点をも信じる事ができないからである。したがって、彼らは見える神につき従っていても、やはり悪を働いて真理を求めず、わたしの要求する真理を実践することもない。自分が滅ぼされることを信じない人たちは逆に、まさに滅ぼされる対象そのものである。彼らはみな、自分がとても賢明であると信じていて、自分が真理を実行する人であると信じている。彼らは自分の悪行を真理と考え、それを大事にする。このような悪者はみなひどく自信過剰である。彼らは真理は教義であるとし、自分の悪行を真理と見なす。最後に彼らは自分の蒔いた種から刈り取る。自信過剰で傲慢であればあるほど、真理を得ることができず、天の神を信じれば信じるほど、神に逆らう。このような人たちはみな罰せられる人々である。人類が安息の中に入る前に、各々の種類の人が罰せられるか、それとも報われるかどうかは、彼らが真理を求めるかどうか、神を知っているかどうか、目に見える神に従うことができるかどうかによって決まる。目に見える神に奉仕してきたが神を知らない人や従わない人はみな真理のない人である。このような人たちは悪を行う人であり、悪を行う人は間違いなく罰を受ける対象である。しかも彼らは、彼らの悪行に応じて罰せられる。神は人による信仰の対象であり、また人が従うに値する存在である。だが、漠然とした目に見えない神だけを信じる人たちはみな神を信じない人たちである。その上、彼らは神に従うことができない。もしこのような人たちが神の征服の働きが終わるときに、依然として、目に見える神を信じることができず、しかも目に見える肉の神に従わず、逆らい続けるなら、このような「漠然派」は疑いなく滅ぼされる。それは、あなたがたのうちにも見られる。つまり、あなたがたのうち、口先では肉となった神を認めるが肉となった神に従うという真理を行うことができない人は誰でも、

最後には排除され、滅ぼされる。また、口先では目に見える神を認め、しかも目に見える神が表現した真理を飲み食いするが、漠然とした見えない神を追い求める人はなおさら将来滅ぼされる。このような人々の誰も、神の働きが終わった後の安息の時まで生き残ることができない。このような人はだれも安息の時まで生き残ることができない。悪魔の類の人はみな真理を実行しない人である。彼らの本質は神に逆らい、不従順なものであって、彼らは神に従う意図が少しもない。この様な人々はみな滅ぼされる。あなたが真理をもっているかどうか、神に逆らっているかどうかは、あなたの本質によって決まるのであり、あなたの外貌あるいは時折の言行によって決まるのではない。人が滅ぼされるかどうかは、その人の本質によって決まる。すなわち、彼らが事を行い、真理を追い求める過程で外に現れる本質によって決まるのである。同様に働きをし、しかも同じ程度の量の働きをする人々のうち人間性の本質が善であり真理を持っている人々が生き残る人々であり、人間性の本質が悪であり、目に見える神に背く者は、滅ぼされる人々である。人類の終着点に向けられた神の働き及び言葉の何もかもが、人類を、各人の本質に従って適切に取り扱う。そこには何の偶然も無ければ、無論僅かな誤りもない。人が働きを行うときにのみ、人間の感情や意味が混じるのである。神が行う働きは最適である。神はいかなる被造物についても事実を歪曲して罪に陥れることは決してない。現在、未来の人類の終着点を理解することができず、しかもわたしが話す言葉を信じない多くの人々がいる。真理を行わない人々と同様に、信じない人々は皆、悪魔である。

追い求める人々と追い求めない人々は今や、2つの異なるタイプの人々であり、彼らは2つの異なる終着点をもつ2つのタイプの人々である。真理に関する認識を追求し、真理を実行する人々は神に救われる者である。真の道を知らない人々は、悪魔であり敵である。彼らは天使長の後裔であり、滅ぼされる。漠然とした神を信じる敬虔な信徒であっても、悪魔ではないだろうか。良心があるが真の道を受け入れないような人々は悪魔である。彼らの本質は神に逆らうものである。真の道を受け入れないような人々は、神に逆らう者である。このような人はたくさんの苦しみに耐えていたとしても、はやはり滅ぼされる。この世を捨てたがらず、父母を離れることに耐えられず、肉の喜びを捨てられないような人々はみな神に従順ではなく、みな滅ぼされる。肉となった神を信じない人はみな悪魔であり、彼らが滅ぼされるのはなおさらである。信じるが真理を行わない人々、肉となった神を信じない人々、神の存在を全く信じない人々はみな、滅ぼされる。生き残ることができる人はみな、精錬の苦しみを受けても堅く立って耐え抜いた人である。これは、本当に試練を経た人である。神を認めない人はみな敵である。すな

わち、受肉した神を認めない者はだれでも、この流れの中にあってもなくても、みな反キリストである。神を信じない反抗者でないならば、サタンや悪魔、神の敵となることなどないはずだ。彼らは神に背く者ではないのか。口先だけで信じると言うが真理を持っていない人たちではないのか。祝福を受けることだけは追い求めるが、神のために証しをすることができない人たちではないだろうか。今日あなたは依然としてこのような悪魔と付き合い、良心と愛を悪魔に向けている。そうであれば、あなたはサタンに善意を示しているのではないか。それは、悪魔に同調すると考えられないだろうか。依然として善悪を区別できず、神の旨を求めようとすることも、どんな形であれ神の意図を自分のものとして抱けるようになろうとすることもないまま、無闇に愛情深く、慈悲深くあり続けるなら、そのような人の結末はもっと悲惨だろう。受肉した神を信じないものはみな神の敵である。敵に対して良心と愛を抱けるなら、あなたは義の良識を欠いていないだろうか。わたしが憎み嫌い、反対するものと相容れて、その上敵に対する愛や個人的な感情を抱いているなら、あなたは不従順ではないのか。あなたは故意に神に逆らっているのではないか。このような人が真理をもっているだろうか。敵に対する良心、悪魔への愛、そしてサタンへの憐れみを抱いているなら、そのような人はみな、故意に神の働きを妨げているのではないか。イエスだけを信じて、終わりの日の肉なる神を信じない人たち、口先では肉となった神を信じると言うが悪を行う人たちはみな、反キリストである。神を信じない人たちが反キリストであるのは言うまでもない。このような人はみな滅ぼされる。人が人を判断する基準は人の振る舞いである。行いが善い者は義なる人であり、行いが悪い者は邪悪な者である。神が人を判断する基準は、その本質が神に従順であるかどうかである。つまり、その人の振る舞いが良いか悪いか、語る言葉が正しいかそうでないかに関わらず、神に従順な者は義であり、不従順な者は敵であり、悪者である。一部の人は善い行いによって未来のよい終着点を獲得しようと思い、一部の人はよい言葉によって未来のよい終着点を手に入れたと考え。人々はみな、神が人の行い、或いは人の言葉によって人の結末を定めると間違った信じ方をし、ゆえに多くの人は偽ってこれらを用いて恵みを獲得しようとする。後に安息の中で生き残る人々はみな苦難の日を経験し、しかも神のために証しをしてきた人である。彼らはみな自分の本分を果たしてきた人であり、神に従おうとする人である。仕える機会を利用して真理の実践を免れようと思う人たちはみな、生き残ることができないだろう。神がすべての人の結末を定めるのは、適切な基準に基づいている。神は人の言行だけに基づいてそれを決定するのではなく、一定の期間の行いに基づいて決定するのでもない。神は人がかつて神に仕えたからといって、そのすべての悪行に対して寛大に対処することは決

してなく、また、人が神のために一時費やしたからといって彼の死を免除することもない。だれ一人として自分の悪の報いから逃れられず、また、だれ一人として自分の悪行を隠して滅びの苦しみから逃れることもできない。もし人が本当に自分の本分を果たすことができるのであれば、祝福を受けるにしろ不運に苦しむにしろ、その人が神に永遠に忠実であり、報いを求めないという意味である。祝福が見えれば神に忠実であり、祝福が見えない時は忠実ではなくなり、結局神のために証しをすることができず、尽くすべきように本分を尽くすこともできないこのような人たちは、かつては神に忠実に仕えた人であっても、やはり滅ぼされる。要するに、邪悪な者は永遠に生きることはできず、安息の中に入ることもできない。義なる人のみが安息の主人である。人類が正しい軌道に乗った後、人は正常な人間の生活をするようになる。彼らはみな自身の本分を尽くし、神に全く忠実である。彼らは不従順と墮落した性質を完全に脱ぎ捨て、神のために生き、神ゆえに生きる。彼らはもう神に背かず、逆らわず、神に完全に従うことができる。これこそ神と人の生活であり、神の国の生活であり、安息の生活である。

全く信仰心のない子供や親戚を教会に連れて来る人たちは、あまりに自己中心であり、親切心を示している。このような人たちは、自分が連れてきた人たちが信じるかどうか、あるいはそれが神の旨であるかどうかを考慮せず、自分の愛情深さだけに集中する。一部の人たちは、彼らの妻や両親を神の前に連れて来る。聖霊が同意しているかどうかあるいは聖霊が働いているかどうかに関わらず、彼らは盲目的に神のために「才能ある人材を導入する」。信じていない人にそのように親切心を広げることから何の益が得られるのか。聖霊の臨在がないこれらの未信者がしぶしぶ神につき従っても、人が考えるように救われるものではない。救われる人を獲得するのはそれほど容易ではない。聖霊の働きと試練を経験せず、また肉となった神に完全にされていない人は、完全にされることなどない。それゆえ、このような人々は神に名目上つき従い始めた時から聖霊の臨在がない。彼らの状況と実際の状態では、完全にされることなどない。それだから、聖霊も彼らに対してそんなに多くの精力を費やすつもりがなく、またいかなる啓きあるいは導きをも、どんな形でも、与えない。ただ彼らにつき従わせるだけであり、最後になって彼らの結末を明らかにする――それだけで十分なのだ。人の熱意や意図はサタンから来るものであり、聖霊の働きを決して全うすることはない。どんな種類の人であっても、聖霊の働きを持たねばならない。人が人を完全にすることなどできるだろうか。夫はなぜ妻を愛するのか。また、妻はなぜ夫を愛するのか。子供たちはなぜ親に従うのか。また、なぜ親は子供たちをかわいがるのか。人々はどんな意図を心に抱いているの

だろうか。すべて自分の計画どおりにし、私欲を満足させるためではないだろうか。本当に神の経営計画のためだろうか。神の働きのためだろうか。被造物の本分を尽くすためだろうか。最初は神を信じたが聖霊の臨在を得ることができなかった人は、決して聖霊の働きを得ることができない。このような人たちはすでに滅ぼされるよう決められている。人が彼らに対してどれだけ多くの愛を持っていても、それは聖霊の働きに取って代わることはできない。人の熱意と愛は人の意図を表わすのであって、神の意図を表わすことも、神の働きに取って代わることもできない。名目上神を信じ神に従う振りをするが、神を信じるとは何かを知らないような人々に、最大限の愛や憐れみを与えたとしても、彼らはやはり神の同情を得ることも聖霊の働きを得ることもないのである。心から神に従う人は、たとえあまり素質がなく、多くの真理を理解することができなかったとしても、彼らはやはり、時折、聖霊の働きを得ることは可能である。しかし、素質がかなりあっても心から信じない人たちは、聖霊の臨在を得ることは決してできない。そのような人々が救われる余地は全くない。たとえ彼らが神の言葉を読んだり、時折説教を聞いたりしても、或いは神を賛美しても、結局は安息の中に残ることはできない。人が心から追い求めているかどうかは、他の人が彼らをどう評価するかによってあるいは、周りの人が彼らのことをどう見るかによって決まるのではなく、聖霊が彼らの上で働くかどうか、あるいは彼らに聖霊の臨在があるかどうかによって決められる。そして何より、彼らの性質が変化するかどうか、そして一定期間聖霊の働きを経験した後、神についての認識を持ったかどうかによって決められる。もし聖霊の働きが人の上であれば、その人の性質は次第に変化し、彼らの神を信じることへの見方も次第に純粹になっていく。人が神につき従った時間に関係なく、その人が変化を経験したならば、聖霊がその人の上で働いていることを意味する。もしその人が変化しなかったなら、それは聖霊がその人の上で働いていないことを意味する。そのような人たちが何らかの奉仕をしても、彼らは幸運を手に入れようという意図に唆されているのである。性質を変化させる代わりに時折仕えるということとはできない。最後には、彼らはやはり滅ぼされる。なぜなら、神の国では奉仕する者は不要で、性質が変えられていない人が完全にされかつ神に忠実な人たちに対して奉仕するといった需要もないからである。「ひとりの人が神を信じれば、その人の家族全員に幸運が訪れる」という昔からの言葉は、恵みの時代に適しているが、人の終着点とは関係がない。この言葉はただ恵みの時代の一段階だけに適していたのである。この言葉は、人が享受する平安と物質的な祝福に対して向けられていたのである。一人が主を信じれば家族全員が救われるということではなく、一人が幸運を手に入れると家族全員が安息の中に入れるということでもない。人が祝福を受ける

か、それとも災いを受けるかは、その人の本質によって決まるのであって、その人がほかの人と共有する本質によって決まるのではない。神の国にはそのような言い習わしも規則もない。人が最後に生き残ることができるのは、その人が神の要求を満たしたからである。そして、人が最終的に安息の時を生き残ることができないのは、その人自身が神に背き、神の要求を満足させていないからである。どの人にもふさわしい終着点がある。この終着点は各人の本質によって決まるのであり、ほかの人とは全く関係がない。子供の悪行が親になすりつけられることはなく、子供の義も親と共有することはできない。親の悪行は子供になすりつけられることはなく、親の義も子供と共有することはできない。誰もが自分の罪を担い、誰もが自分の幸運を享受する。だれもほかの人の代わりをすることができない。これが義である。人間の考えは、親が幸運を手に入れば子供も幸運を得ることができ、子供が悪を行えば親がその罪を償わなければならないというものである。これは人の見方であり、やり方である。神の見方ではない。どの人の結末もその人の行動からくる本質によって定められるのであり、それは常に適切に定められるのである。誰も他人の罪を担うことができず、他人の代わりに罰を受けることはなおさらできない。これは絶対的なことである。親は子供をかわいがるが、それは親が子供の代わりに義を行うことができるということではなく、また、子供が親に孝行しても、親の代わりに義を行うことができるということではない。これは「ふたりの者が畑にいと、ひとりを取り去られ、ひとりに残されるであろう。ふたりの女がうすをひいていると、ひとりを取り去られ、ひとりに残されるであろう」という言葉の背後にある真の意味である。子供をとて愛するがゆえに、悪を行う子供を安息の中に連れていくことができる者は一人もおらず、自ら義を行うがゆえに自分の妻（或いは夫）を安息の中に連れていくことができる者も一人もいない。これは神の行政上の規則であり、一人として例外はいない。義を行う者はつまるところ義を行う者であり、悪を行う者はつまるところ悪を行う者である。義を行う者は生き残ることができ、悪を行う者は滅される。聖なる者は聖なる者である。彼らは汚れた者ではない。汚れた者は汚れた者であって、聖なる要素が少しもない。悪を行う人の子供が義を行なっても、義人の親が悪を行なっても、邪悪な者はすべて滅ぼされ、義人はすべて生き残る。信仰深い夫と不信仰な妻はもともと関係がなく、信仰深い子供と不信仰な親はもともと関係がない。彼らは相容れない二種類の人である。安息の中に入る前に人には肉親があるが、ひとたび安息の中に入ると、もはや語るべき肉親はなくなる。本分を尽くす者と、本分を尽くさない者は敵であり、神を愛する者と、神を憎む者は敵対する。安息の中に入る者と、滅ぼされた者は相容れることのできない二種類の被造物である。本分を尽くす被造物は生き残る

ことができ、本分を尽くさない被造物は滅ぼされる。さらに、これは永遠に続く。あなたが夫を愛するのは被造物の本分を尽くすためだろうか。あなたが妻を愛するのは被造物の本分を尽くすためだろうか。あなたが自分の未婚者の親に孝行するのは被造物の本分を尽くすためだろうか。神を信じることにに関して人の観点は正しいだろうか、間違えているだろうか。なぜあなたは神を信じるのだろうか。あなたは何を得たいのだろうか。あなたはどのように神を愛しているのだろうか。被造物の本分を果たすことができず、全力を尽くすことができない者は滅ぼされる。今日の人々は、血の繋がりだけでなく肉体の関係があるが、今後これは完全に打ち破られる。信じる者と信じない者は相容れないのであり、敵対する。安息の中の人々はみな神の存在を信じる者であり、神に従順な者である。神に従順な人々は完全に滅ぼされてしまう。地上にはもう家族がなくなる。それでは、どうして父母があるだろうか、どうして子供があるだろうか、どうして夫婦関係があるだろうか。信仰と不信仰という不一致が、このような肉の関係を切断してしまうのである。

人類の中には、もともと家族がなく、男と女という二つの異なる種類の人間がただけであった。家族は言うまでもなく、国もなかったが、人の墮落のゆえに、あらゆる種類の人々が個々の一族へと組織化し、後になって、それは国と民族に発展した。これらの国と民族はまた個々の小さな家族から成り、こうして、あらゆる種類の人々は異なった言語と地境に従って、種々な人種の間に分布するようになった。実は、世界の中の人種がどれほど多くても、人類はたった一人の祖先をもつ。最初、二つの種類の人間しかおらず、この二つの種類は男と女であった。だが神の働き of 進展、歴史の移り変わり、地形の変遷のゆえに、この二つの種類の人間は、程度の差はあっても、次第にもっと多くの種類の人に発展した。要するに、人類の中にはどれだけの人種があっても、全人類はやはり神の創造物である。人々がどの人種に属していても、彼らは神の被造物である。彼らは、アダムとエバの後裔である。たとえ彼らが、神の手によって造られたのではないとしても、彼らは神が自ら造ったアダムとエバの後裔である。人々がどのタイプに属していても、彼らは神の創造物である。彼らは神によって作られた人類に属するため、彼らの終着点は人類がもつべき終着点である。そして彼らは人類を体系化する規則に従って分けられる。つまり、悪を行う人と、義を行う人はみな、結局のところ被造物である。悪を行う被造物は最後には滅ぼされ、義を行う被造物は生き残る。これは二つの種類の被造物に対するいちばん適切な取り決めである。悪を行なう者は、これまで不従順であったから、彼らが神の創造物であってもサタンによって略奪されてしまい、かく

して救われることが不可能になったことを否定できない。義を行う被造物は生き残るが、彼らが神に造られながらもサタンに墮落させられた後に救いを受けたという事実は否定することができない。悪を行う者は神に背く被造物である。彼らは救われることがなく、しかもすでにサタンに徹底的に略奪された被造物である。悪を行う人もまた人である。彼らは極めて深く墮落させられた人であり、救われることのない人である。同じく被造物であり、義を行う者も墮落させられた人であるが、彼らは進んで墮落した性質を脱ぎ捨てようとする人であり、神に従うことができる人である。義を行う人は義で満ちた人ではない。彼らは救いを受け取り、墮落した性質を脱ぎ捨てて神に従う人である。彼らは最後にしっかりと立つことができるが、それは彼らがサタンに墮落させられなかったということではない。神の働きが終わった後、すべての被造物の中には、滅びる者もいれば、生き残る者もいる。これは神の経営の働きの必然的流れである。これはだれも否認できないことである。悪を行う者はみな生き残ることができず、最後まで神に従順でつき従う者は、確実に生き残る。これは、人類を経営する働きであるから、生き残る者もいれば排除される者もいる。これは異なる種類の人々の異なる結末であり、被造物に対するいちばんふさわしい取り決めである。人類に対する神の究極の取り決めは、家族、民族、国境を打ち破ることによって人類を区分することである。それによって、家族の区別がなくなり、国境による区別もなくなる。なぜなら、人は、つまるところ、一人の祖先であり、人は神の創造物だからである。要するに、悪を行う被造物は滅ぼされ、神に従順な被造物は生き残る。このようにして、未来の安息の中には家族も、国も、特に民族もない。このような人類が、もっとも聖なる人類である。最初、人が地上で万物を管理することができるように、アダムとエバは造られた。人はもともと万物の主人であった。ヤーウェが人を造る目的は、人が地上で生き、しかも地上の万物を管理することであった。なぜなら、最初人は墮落させられておらず、しかも人は悪を行うこともできなかったからである。しかし、人は墮落させられた後、もう万物の管理者でなくなった。そして、神の救いの目的は、人のこの機能を回復し、人の最初の理性、最初の従順さを回復することである。安息の中的人类はまさに神の救いの働きが達成することを望む結果の描写そのものである。それはもはやエデンの園のような生活ではないだろうが、その本質は同一である。人類は単に墮落させられる前の初期の人類ではなく、墮落させられた後、救われた人類なのである。救いを受け取ったこのような人々は最終的に（すなわち神の働きが終わった後）安息に入る。同様に、罰せられた人々の結末も最後に徹底的に明らかにされ、神の働きが終わった後、彼らは滅ぼされるだけである。つまり、彼の働きが終わった後、このような悪を行う者と救われた者は全てに明らかにさ

れる。なぜなら、あらゆる種類の人々（悪を行う者であれ、救われた者であれ）を明らかにする働きは、すべての人の身に同時に行われるからである。悪を行う人が排除されると同時に、生き残ることができる人たちも明らかにされる。したがって、あらゆる種類の人々の結末は同時に明らかにされる。神はまず、悪を行なった者を取り置き、彼らを少しずつ裁き罰する前に、救済された一団の人々が安息の中へ入ることを許さない。事実は決してそうではない。悪人が滅ぼされ、生き残ることができる人が安息の中に入った時、全宇宙における神の働きは終わる。祝福を受ける者と苦しみを受ける者の間に優先順位はない。祝福を受ける者は永遠に生き、災いを受ける者は永遠に滅びる。これらの2段階の働きは同時に完成されるのである。それらの従順な人の義が明らかにされるのは、まさしく不従順なものがいるからであり、悪を行うそれらの人が自分の悪行のゆえに受けた災いが明らかにされるのは、まさしく祝福を受ける者がいるからこそである。もし神が悪を行う人を明らかにしなかったならば、心から神に従うそれらの人は永遠に太陽を見ることができない。もし神に従う人を神がふさわしい終着点に導き入れなければ、神に背くそれらの人は当然の報いを受けることができない。これは神の働きの手順である。もし神が、悪を行う者を罰し、善を行う者を報いる働きをしなければ、彼の創造物は永遠に各自の終着点の中に入ることができない。ひとたび人類が安息に入ったなら、悪を行う人たちはみな滅ぼされ、全人類は正しい軌道に乗り、各種類の人は自分の果たすべき機能によっておのおのその種類に従う。これのみが人類の安息の日であり、人類の発展の必然的な方向である。そして人類が安息に入る時こそ、神の偉大で、そして究極の成果が完成する。これが神の働きの終結である。この働きは全人類の退廃した肉体の生活を終わらせ、墮落した人類の生活を終わらせる。そこから人類は新しい領域の中に入る。人は肉体的存在であるが、その生活の実質は墮落した人類の生活のそれと大いに異なる。その存在の意味も墮落した人類の存在の意味とは異なる。これは新しい種類の人々の生活ではないが、救いを受け取った人類の生活、回復された人間性と理性を伴う生活であると言える。このような人たちはかつて神に背いた人であり、かつて神に征服されて、それから救われた人たちである。この人たちはまた、神を辱めたことがあるが後で神のために証しをした人である。神の試練を受け、生き残った彼らの存在は、最も意義のある存在である。彼らはサタンの前で神のために証しした人である。彼らは生きるに相応しい人である。滅ぼされる人たちは、神の証しのために立つことができなくて、生きるに相応しくない人である。彼らの滅びは自らの悪行ゆえであり、滅びが彼らにとって最良の終着点である。人がその後よい領域の中に入ったら、人がきっとあると想像するような、夫と妻、父と娘、あるいは母と息子のような関係は全くないので

ある。その時、人はみな各々の種類に従い、家族はすでに打ち碎かれている。サタンは完全に失敗していて、もう人類をかき乱すことはなく、人にはもう墮落したサタンの性質がなくなっている。そのような不従順な人たちはすでに滅ぼされていて、従順な人だけが生き残る。それゆえに、ほとんどの家族が元のまま生き残ることができない。どうして肉の関係が依然、存続することができるだろうか。人の過去の肉の生活は完全に廃止される。人と人の間に肉の関係がどのして存続することなどできようか。墮落したサタンの性質がなければ、人の生活はもう以前の古い生活ではなくて、新しい生活である。親は子供を失い、子供は親を失う。夫は妻を失い、妻は夫を失うであろう。人々の間には現在肉の関係がある。彼らが完全に安息に入った時は、もう肉の関係がなくなる。このような人類こそが義と聖さを持ち、そのような人類だけが、神を礼拝する人類である。

神は人類を創造し、人類を地上に置き、今日まで導いてきた。その後、人類を救い、人類のための罪のいけにえとなった。終わりの時に、彼は人類を征服して、人類を完全に救い出し、人に本来の姿を回復させなければならない。これが、彼が始めから終わりまで従事してきた働きである。つまり、人を元のイメージへ回復し元の姿へ回復させるのである。神は自身の国を打ち立て、人に本来の姿を回復させる。つまり神は地上における自身の権威を回復し、あらゆる被造物の間における自身の権威を回復する。人はサタンに墮落させられた後、神を畏れる心を失い、被造物として持つべき機能を失って、神に背く敵になった。人はみなサタンの権威の下に生きようになり、サタンの命令に従った。それゆえ、神は被造物の間で働くことができず、被造物からの畏れ敬いを得ることはさらにできなかった。人は神に造られており、神を礼拝すべきであるが、人は神に背いてサタンを崇拜した。サタンは人の心の中の偶像になった。こうして、神は人の心における立場を失い、つまり人を造った意義を失った。だから、神が人を造った意義を回復しようとするなら、人に本来の姿を回復させ、人に墮落した性質を脱ぎ捨てさせなければならない。人をサタンの手から奪い返すには、人を罪の中から救い出さなければならない。このようなやり方によってのみ、神は次第に人に本来の姿を回復させ、本来の機能を回復させる。そして遂には、神の国を回復する。最終的にそれらの不従順の子を徹底的に滅ぼすのも、人がよりよく神を礼拝し、よりよく地上で生存することができるためである。神は人類を造ったので、人に自身を礼拝させる。神は人に本来の機能を回復させたいので、徹底的に、しかも混じりけが少しもないように、回復させる。神が自身の権威を回復することは、人に自身を礼拝させることであり、自身に従わせるこ

とである。それは、人を神ゆえに生きるようにすることであり、神の権威ゆえに神の敵を滅ぼすことであり、神のあらゆる部分全てが人の間で、全く拒否されることなく存続するようにすることである。神が打ち立てようとする国は神自身の国である。神が求める人間は自身を礼拝する人間であり、完全に従う人間であり、神の栄光を持つ人間である。もし神が墮落した人間を救い出さなければ、神が人を造った意義は無となる。神は人の間で権威を持たなくなり、地上に神の国が現れることもない。もし神に背く敵を滅ぼさなければ、神は完全な栄光を得ることができず、地上で神の国を打ち立てることもできない。人類の不従順な者たちを徹底的に滅ぼし、完全にされた者たちを安息の中に連れていく——これは彼の働きが終わったことのしるしであり、神が偉業を達成したしるしである。人類がみな本来の姿を回復し、それぞれ自分の本分を尽くし、自分の立場を守り、神のすべての定めに従うことができたなら、神が地上で一団の、自身を礼拝する人たちを得、自身を礼拝する国を打ち立てたことになる。神は地上で永遠の勝利を得、自身に敵対する者たちは永遠に滅びる。これは神が最初に人を造った時の意図を回復し、神が万物を造った意図を回復し、地上での神の権威、万物の中での神の権威、敵の間での神の権威をも回復したことになる。これらは神が完全に勝利を得たことのしるしである。その後人類は安息に入り、正しい軌道に乗った生活に入る。神も人との永遠の安息に入り、神と人が共有する永遠の生活に入る。地上の汚れと不従順は消え、地上の嘆き悲しみも消える。神に敵対する地上のあらゆるものも存在しなくなる。神と神に救われた人たちだけが残し、神の創造物だけが残る。

諸教会を歩くキリストの言葉（Ⅳ）

（1996年から1997年まで、2003年から2005年まで）

あなたがイエスの霊体を見る時、神はすでに天地を新しくしている

あなたはイエスに会いたいと思うか。イエスと共に生きたいと思うか。イエスの語る言葉を聞きたいか。もしそうであれば、イエスの再臨をどのように歓迎するのか。あなたは完全に備えができているか。どのようにしてイエスの再臨を歓迎するのか。イエスに付き従う兄弟姉妹は皆イエスをよく歓迎したいだろう。しかしあなたがたは考えてみたことがあるだろうか——イエスが再び来る時、あなたにイエスが本当に分かるのか。あなたがたはイエスの語る全てを本当に理解するだろうか。イエスの働きの全てを本当

に、無条件に受け入れるだろうか。聖書を読んだことのある者は皆、イエスの再臨について知っており、聖書を読んだことのある者は皆、一心にイエスの再臨を待ち望む。あなたがたは皆、その瞬間の訪れにひたすら執着しており、その誠意は賞賛すべきものであり、あなたがたの信仰は本当に羨望に値する。しかし、あなたがたは自分が重大な間違いを起こしていることに気づいているか。イエスはどのように戻って来るのか。あなたがたはイエスが白い雲に乗って再臨すると信じているが、わたしはあなたがたに問う。この白い雲とは何を意味しているのか。イエスの再臨を待つ多くの信者がいる中、どの人々のところにイエスは降臨するのか。もしイエスが最初にあなたがたのところへ再臨するとしたら、他の人々はこのことをあまりに不公平だと考えないだろうか。わたしは、あなたがたが非常に誠意のある、イエスに忠実な人であることを知っているが、あなたがたはイエスに会ったことがあるのか。あなたがたはイエスの性質を知っているのか。あなたがたはイエスと共に生活したことがあるのか。あなたがたはどれだけ本当にイエスのことを理解しているのか。このような言葉のせいで気まずい状態になると言う人もあるだろう。彼らはこう言う。「わたしは聖書を隅から隅まで何回も読んだ。イエスを理解できないことなどあるだろうか。イエスの性質は言うまでもなく、わたしはイエスが何色の服を好むかさえ知っている。あなたはわたしがイエスを理解しないと言うが、わたしを見くびっているのではないか」。このような問題については、争わないようあなたに提案する。落ち着いて、次のような問題について話し合う方が良い。一つ目は、何が実際に何が理論かを、あなたは知っているのか、ということ。二つ目は、何が観念で何が真理かを知っているのか、ということ。そして三つ目は、何が想像で、何が現実かを知っているか、ということである。

自分がイエスを理解していないという事実を認めない人たちもいる。それでも尚わたしは、あなたがたがイエスを少しも理解しておらず、イエスの言葉をひとつも理解していないと言う。それは、あなたがたはそれぞれ聖書に書いてあることのために、他の誰かが言ったことのためにイエスに付き従っているからである。あなたがたはイエスに会ったことがないし、ましてや一緒に住んだこともなければ、わずかな時間を彼と共に過ごしたことさえない。そうであれば、イエスに関するあなたがたの理解は理論だけではないか。現実性が欠けているのではないか。イエスの肖像画を見たことのある人もいるだろうし、イエスが住まった家を訪れたことのある人もいるだろう。イエスの着た服を触ったことがある人もいるかもしれない。たとえあなたがイエスの食したものと同じものを食べたとしても、あなたのイエスに対する理解は実際的なものではなく理論上のもの

のでしかない。いずれにせよ、あなたはイエスに会ったこともなく、肉となったイエスとともに過ごしたことは一度もないのだから、あなたのイエスに関する理解はどこまでも現実味の欠けた空論でしかない。おそらくわたしの言葉はあなたにとってほとんど興味の無いものだろう。だがあなたに聞く。例えば、あなたが自分の大好きな作家の作品を何冊も読んだとする。あなたはその作者と一度も一緒に時間を過ごしたことがなくても、その作者を完全に理解できるだろうか。その人の性格がどのようなものか分かるだろうか。その作家がどのような人生を送っているか、あなたに分かるだろうか。その作家の感情が理解できるだろうか。あなたは自分が尊敬する人すら完全に理解することができないのに、どうしてイエス・キリストを理解できるだろうか。イエスに関するあなたの理解は想像と観念に満ちており、真理と現実性の欠片もない。どうしようもなく粗末で、肉的なもので満ちている。そのような理解しかないのに、どうしてイエスの再臨を歓迎するに相応しい者となり得ようか。肉的な空想と観念に満ちた人を、イエスは受け入れない。イエスを理解しない人たちがどうしてイエスを信じる者となり得ようか。

あなたがたはパリサイ人がイエスに逆らったことの根源を知りたいか。あなたがたはパリサイ人の本質を知りたいか。彼らはメシアに関する空想に満ちていた。さらに、彼らはメシアが来ると信じていただけで、いのちの真理を求めなかった。だから今日になっても未だに彼らはメシアを待ち続けている。いのちの道に関して何の認識もなく、真理の道がどのようなものかも知らないからである。これほど愚かで頑固で無知な人々が、神の祝福を得ることなどあり得ようか。彼らがメシアを見ることなどできるだろうか。彼らは聖霊の働きの方向を知らなかったために、イエスの語った真理の道を知らなかったために、さらにはメシアを理解しなかったためにイエスに敵対した。彼らはメシアに会ったことがなく、メシアとともに過ごしたこともないために、彼らはみなメシアの名前にむなしく固執しながら、できる限りのことをしてメシアの本質に逆らうという過ちを犯した。これらのパリサイ人は本質的に頑固で、傲慢で、真理に従わなかった。彼らの神への信仰の原則は、「どれほど説教が奥深く、どれほど権威が高かろうとも、あなたがメシアと呼ばれない限り、あなたはキリストではない」というものである。これらの見方は不合理でばかばかしくないであろうか。あなたがたにもう一度問う。あなたがたが全くイエスを理解してこなかったことを考えれば、最初のパリサイ人たちと同じ誤りを簡単に起こしてしまうのではないか。あなたは真理の道を識別することはできるのか。あなたがキリストに逆らわないとあなたは本当に請け合えるか。あなたは聖霊の働きに従うことができるのか。自分がキリストに逆らうかどうかがわからないのなら、

あなたは既に死ぬぎりぎりのところに生きているとわたしは言う。メシアを理解しなかった人々は皆、イエスに逆らい、イエスを拒絶し、イエスを中傷することができた。イエスを理解しない人々は皆、イエスを否定し、イエスをののしることができる。そればかりか、彼らはイエスの再臨をサタンの惑わしとして見ることができ、さらに多くの人々が受肉し再来したイエスを非難するであろう。これらのことのせいで、あなたがたは恐ろしくならないのか。あなたがたが直面することは聖霊に対する冒涇であり、諸教会に向けた聖霊の言葉を台無しにし、イエスが表した全てをはねつけることとなる。それほど混乱しているのなら、イエスから何を得られるというのか。あなたがたが頑なに自分の間違いに気づくのを拒絶しているのならば、イエスが白い雲に乗って肉に戻ってくる時にイエスの働きをどのようにしてあなたがたが理解できるというのか。わたしは言う。真理を受け入れず白い雲に乗ったイエスの再臨を盲目的に待つ人々は、確実に聖霊を冒涇することになり、彼らは滅ぼされる種類である。あなたがたは単にイエスの恵みを望んでおり、この上なく幸せな天国を楽しみたいだけであるが、イエスの語る言葉に従ったことはなく、肉に戻ったイエスが表した真理を受け入れてこなかった。あなたがたはイエスが白い雲に乗って戻るという事実と引き替えに何を差し出すのか。あなたがたが繰り返し罪を犯しては何度もその罪を告白するという誠意か。白い雲に乗って戻ってくるイエスへの捧げ物としてあなたがたは何を差し出すのか。自らを称賛する長年の仕事という資本だろうか。あなたがたは戻ってきたイエスに信用してもらうために何を差し出すのだろうか。それはあなたがたの、いかなる真理にも従わない傲慢な本性だろうか。

あなたがたの忠誠心は言葉の中のみにあり、あなたがたの認識は単に知的で観念的であり、あなたがたの労働は天国の祝福を受けるためのものであるが、それではあなたがたの信仰はどのようなものでなければならないのか。今日なお、あなたがたは真理の言葉の一つ一つに対し、耳を貸そうとしない。あなたがたは神が何かを知らない。キリストが何かを知らない。あなたがたはヤーウェを畏れる方法を知らない。どのように聖霊の働きに入っていくのかを知らない。あなたがたは神自身の働きと人の惑わしの区別の仕方を知らない。ただ、自分の考えに沿わない、神が表した真理の言葉を非難することだけを知っている。あなたの謙虚さはどこにあるのか。あなたの従順はどこにあるのか。あなたの忠誠心はどこにあるのか。真理を求める気持ちはどこにあるのか。あなたの神への畏敬はどこにあるのか。わたしはあなたがたに言う。しるし故に神を信じる者は、滅ぼされる部類であることは確かである。肉に戻ったイエスの言葉を受け入れること

ができない者は、地獄の子孫であり、天使長の末裔であり、永遠の破滅を逃れることのできない部類である。多くの者はわたしの言うことに耳を傾けないかもしれない。だがそれでも、天からイエスが白い雲に乗って降臨するのをあなたがたが自分の目で見ると、これは義の太陽が公に現れることであると、わたしはイエスに付き従ういわゆる聖徒全員に伝えたい。おそらく、その時あなたにとって大いなる興奮の時となるであろう。だが、あなたがイエスが天から降臨するのを見る時は、あなたが地獄へ落ち、懲罰を受ける時でもあることを知るべきである。それは神の経営（救いの）計画の終わりの時であり、神が善良な人々を報い、邪悪な者たちを罰する時である。神の裁きは人間がしるしを見る前に、真理の現れだけがある時には終わっている。真理を受け入れてしるしを求めることがなく、故に清められている人々は、神の玉座の前に戻り、造物主の胸に抱かれる。「白い雲に乗らないイエスは偽キリストだ」という信念に執着する者たちだけは、永久に続く懲罰を受けなければならない。彼らはただしるしを示すイエスしか信じず、厳しい裁きを宣言し真のいのちの道を解き放つイエスを認めないからである。そのような者たちは、イエスが白い雲に乗って公に戻ってくる時に扱うしかない。彼らはあまりに頑なで、自信過剰で、傲慢である。どうしてこのような墮落した者たちがイエスに報いてもらえるだろうか。イエスの再臨は、真理を受け入れることのできる者には大いなる救いであるが、真理を受け入れることのできない者にとっては、罪に定められるしるしである。あなたがたは自分自身の道を選ぶべきで、聖霊を冒瀆したり真理を拒んだりするべきではない。あなたがたは無知で傲慢な者でなく、聖霊の導きに従い真理を慕い求める者にならなければならない。そうすることでのみ、あなたがたの益となる。わたしは、注意深く神への信仰の道を歩むようにあなたがたに助言する。結論を急いではない。さらに、あなたがたは神への信仰において、無頓着であったり、軽率であってはならない。少なくとも、神を信じる者は謙虚で畏敬の念に満ちているべきだということを知らなければならない。真理を聞いたことがありながら鼻であしらうものは愚かで無知である。真理を聞いたことがありながら不注意に結論を急いだり非難したりする者は、おごりで包まれている。イエスを信じる者は誰も、他人をののしったり非難したりする権利はない。あなたがたは皆、理知があり、真理を受け入れる者でなければならない。真理の道を聞き、いのちの言葉を読んだのち、自分の信念と聖書に沿っている言葉は一万語にひとつだと信じているかもしれない。そうであれば、その一万分の一の言葉の中で求め続けなければならない。それでもわたしはあなたに謙虚であり、自信過剰にならず、思い上がらないようにと助言する。あなたの心が抱いている神へのわずかな畏敬の念から、より大きな光を得ることになる。もしあなたがこれらの言葉をよ

く吟味し、繰り返し思い巡らすならば、それらが真理かどうか、それらがいのちかどうか分かるであろう。ほんの数行読んだだけで、「これは聖霊によるちょっとした照らしでしかない」とか、「これは人々を惑わすために来た偽キリストだ」と盲目的に非難する人たちもいるであろう。そのようなことを言う人たちは、無知ゆえに目が見えなくなっている。あなたは神の働きや知恵をほとんど理解していない。わたしはあなたに助言する。最初からやり直しなさい。終わりの日における偽キリストの出現のせいで、神の言葉を盲目的に非難してはならない。惑わされることを恐れる為に、聖霊を冒瀆する者となってはならない。それはとても残念なことではないであろうか。もし良く調べた後で、これらの言葉が真理ではない、道ではない、神が表したことではないと未だに信じるならば、あなたは最後に懲罰を受けなければならず、祝福されない。もしこれほどわかりやすく明確に話された真理を受け入れられないなら、あなたは神の救いにそぐわないのではないのか。あなたは神の玉座の前に戻るほど幸運ではない人ではないのか。このことを考えなさい。軽はずみで衝動的になってはいけない。神への信仰をまるでゲームのように考えてはいけない。あなたの終着点のために、前途のために、そしてあなたのいのちのために、考えなさい。自らをいい加減に扱ってはならない。あなたはこれらの言葉を受け入れることができるであろうか。

キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である

すべての人はイエスの真の顔を見たい、イエスと共にいたいと思っている。イエスを見たいとも、イエスと共にいたいとも思わない兄弟姉妹がいるとはわたしは思わない。イエスを見る前には、つまり、受肉した神を見る前には、たとえばイエスの外観、話し方、生き方などについて、あなたがたはあらゆる考えを抱くことであろう。しかし、ひとたび本当にイエスを見たら、あなたがたの考えはすぐに変わる。なぜか。その理由を知りたいか。人間の考えを見過ごすことはできないというのは本当である。しかしそれ以上に、キリストの本質は人間が変えることを許さない。あなたがたはキリストのことを仙人、あるいは賢人だと考えているが、誰一人としてキリストを神性の本質をもつ普通の人と見なしていない。したがって、昼も夜も神に会うことを切望している人の多くが実は神の敵であり、神と相容れないのである。これは人間側の間違いではないだろうか。今でさえ、あなたがたは自分の信心と忠実は十分なので自分はキリストの顔を見るのに相応しいと考えている。しかし、わたしはあなたがたに実際的なものをさらに多く備えるように強く勧告する。これは、過去、現在、未来において、キリストと触れ合う人の多くが失敗したから、また失敗するからである。彼らは皆パリサイ人の役割を演じ

る。あなたがたの失敗の理由は何か。それはまさに、あなたがたの観念の中に立派で称賛に値する神がいることである。しかし実際は人間が望むとおりではない。キリストは立派でないだけでなく、特に小柄である。キリストは人間であるというだけでなく、ごく普通の人間である。キリストは天に上がることができないだけでなく、地上を自由に動き回ることさえできない。そのため、人々はキリストを普通の人間として扱う。人々はキリストと共にいるときにキリストを気軽に扱い、不注意に話しかけ、そのあいだじゅう「真のキリスト」の到来をいまだに待っている。あなたがたは既に到来したキリストを普通の人間とみなし、その言葉を普通の人間の言葉とみなしている。このため、あなたがたはキリストから何も受け取っておらず、代わりに自らの醜さを完全に光にさらけ出しているのである。

キリストと触れ合う前に、あなたは自分の性質が完全に变化したと、自分はキリストの忠実な追随者であり、キリストの祝福を受けるに自分ほど値する人は他にいないと、多くの道を旅し、かなりの働きを行ない、多くの成果をもたらしてきたので、あなたは最後に栄冠を受ける人の一人になるに違いないと信じているかもしれない。しかし、あなたが知らないかもしれない真実が一つある。すなわち、人間の墮落した性質と反抗心と抵抗は、人間がキリストを見るときに暴露され、そのときに暴露される反抗心や抵抗は他のどの時よりも絶対的に完全に暴露される。それは、キリストは人の子、すなわち普通の人間性をもつ人の子であるため、人間はキリストに栄誉を与えることも尊敬することもないからである。神が肉において生きているために、人間の反抗心は徹底的に、詳細まで鮮明に光にさらけ出される。それで、キリストの到来は人類の反抗心をすべて明るみに出し、人類の本性を際立たせた、とわたしは言うのである。これは「山から虎をおびき出す」、「洞窟から狼をおびき出す」と呼ばれる。あなたは自分は神に忠実であるとあつかましくも言うのか。自分は神に絶対的な服従を示しているとあつかましくも言うのか。自分は反抗的ではないとあつかましくも言うのか。「神がわたしを新しい環境に配置するたびに、わたしはいつも不平を言わずに服従し、さらに、神についての観念も一切抱かない」と言う人がいる。また、「神がわたしに何を課しても、わたしは力の限りを尽くし、決して怠けない」と言う人もいる。ならば、わたしはあなたがたに問う。キリストと共に生きるとき、あなたがたはキリストと相容れることができるのか。そして、どれだけの時間のあいだ、キリストと相容れるのか。一日か。二日か。一時間か。二時間か。あなたがたの信仰は確かに称賛すべきものかもしれないが、粘り強さという点では、あなたがたは大したことはない。ひとたび本当にキリストと共に生きる

ようになると、あなたの独善性とうぬぼれは言葉と行動をとおして少しずつさらけ出され、あなたの行き過ぎた欲望、不服従な考え方、不満もまた自然に明らかになる。最終的には、あなたの傲慢はさらに大きくなり、水と油のように、あなたとキリストは相容れなくなり、そうなるあなたの本性は完全に露わになる。そのとき、あなたの観念はそれ以上隠すことはできなくなり、あなたの不満も自然に表れ、あなたのいやしい人間性は完全にさらけ出される。しかし、そのときでさえ、あなたは自分の反抗心を認めることを否定し続け、代わりに、このようなキリストは人間には受け入れ難く、人間に対して厳し過ぎ、もしキリストがもっと優しくれば完全に服従するだろうと考える。あなたがたは自分の反抗心には正当な理由があり、キリストが自分に何かを強要しすぎるときだけキリストに反抗するのだと考える。あなたがたは自分がキリストを神として見ておらず、キリストに従う意志がないことを一度たりとも考慮したことがない。むしろ、キリストがあなたの望みどおりに働きを行なうことを執拗なまでに主張し、キリストがあなたの考え方と一致しないことを一つでもすれば、直ちにキリストは神ではなく、一人の人間だと考える。あなたがたの中には、このようにキリストと争ったことがある人が多くいるのではないのか。あなたがたが信じているのは結局のところ誰なのか。そして、あなたがたはどのように追い求めているのか。

あなたがたはキリストを見たいと常に思っているが、自分をそのように高く評価しないことをわたしは勧める。誰でもキリストを見ることができが、誰もそうするに相応しくない、とわたしは言う。人間の本性は邪悪、傲慢、反抗心に満ちているため、キリストを見た瞬間にあなたの本性はあなたを破壊し、あなたを死に至らせる。あなたの兄弟（あるいは姉妹）との関わりは、あなたについて特に何も示さないが、あなたがキリストと関わる時には、事はそのように単純ではない。何時でも、観念が根を張り、傲慢が芽を出し、反抗心はイチジクの実をつけるかもしれない。そのような人間性をもって、どうしてあなたがキリストと関わるに相応しくなれるのだろうか。あなたは毎日、その一瞬一瞬に本当にキリストを神として扱うことができるのか。あなたは本当に神への服従という現実をもっているのか。あなたがたは心の中で立派な神をヤーウェとして礼拝しつつ、目に見えるキリストを人間とみなしている。あなたがたの理知はあまりに劣っており、あなたがたの人間性はあまりに卑しい。あなたがたはキリストを神として常に見ることができない。ときどき、そのような気分になったときだけ、あなたがたはキリストをひつつかまえて、神として礼拝する。このため、あなたがたは神の信者ではなく、キリストと戦う共犯者の集団である、とわたしは言うのである。他人に親切

にする人でさえ報われるのに、キリストはあなたがたのあいだでそのような働きをしたものの、人間からは愛も報いも従順も受け取っていない。これは胸が張り裂けるようなことではないのか。

あなたの長年の神への信仰の日々において、あなたは誰ものろったことはなく、何も悪いことをしたことがないかもしれない。しかし、あなたのキリストとの関わりにおいて、あなたは真実を語れず、誠実に振る舞えず、キリストの言葉に従えない。そのため、あなたは世界で一番腹黒く邪悪な人である、とわたしは言う。あなたは親戚、友人、妻（あるいは夫）、息子や娘、両親には極めて親切で献身的で、決して他人を利用したりはしないかもしれない。しかし、キリストと相容れることができないのなら、キリストと調和して交流することができないのなら、たとえあなたが隣人を助けるためにすべてを捧げたり、父や母、その他の家族を細やかに世話したりしても、あなたはそれでも悪意があり、さらにずるがしこい策略に満ちている、とわたしは言う。他人と仲良くしているから、あるいは少しの善行を行なうからというだけで、自分のことをキリストと相容れる人だと思ってはならない。あなたは自分の親切な意図が天の恵みをだまし取れると思っているのか。少しの善行をすることが、従順になることの代わりになると思っているのか。あなたがたのうち誰も取り扱われ、刈り込まれることを受け入れることができず、皆がキリストの普通の人間性を受け入れることに困難を感じる。それにもかかわらず、自分の神への従順をいつも自慢している。あなたがたのこんな信仰はそれに相応しい報いを引き起こす。気まぐれな幻想にふけり、キリストを見たいと望むのはやめなさい。あなたがたの霊的背丈はあまりに小さく、それゆえキリストを見る資格さえないからである。反抗心を完全に拭い去り、キリストと調和できるようになったときに、神は自然にあなたに現れる。もしあなたが刈り込みや裁きを経験せずに神を見に行くのであれば、あなたは疑いなく神の敵になり、破滅することになる。人間の本性は元来神に敵対している。すべての人間はサタンの深遠なる墮落にさらされたからである。もし人間がその墮落の只中から神と関わろうとしても、そこから何一つ良いものが生まれなことは確実である。人間の言動は、事あるごとに人間の墮落を確実にさらけ出し、神との関わりにおいて、人間の反抗心はあらゆる面で明らかにされる。知らず知らずに、人間はキリストに反対し、キリストを欺き、キリストを拒絶するようになる。これが起こると、人間はますます危険な状態に陥り、これが続けば、人間は懲罰の対象になるであろう。

神との関わりがそれほど危険ならば、神から遠ざかっている方が賢明ではないかと考

える人がいるかもしれない。このような人は一体何を得られるのか。彼らは神に忠実でいることができるのか。確かに、神との関わりは極めて難しい。しかし、それは人間が墮落しているからであり、神が人間と関わりをもてないからではない。あなたがたにとっては、自己を知るという真理にさらなる努力を捧げるのが最善であろう。なぜあなたがたは神に気に入られていないのか。なぜあなたがたの性質は神に嫌われるのか。なぜあなたがたの話す言葉は神にとっていまわしいのか。少々の忠実を示したとたんに、あなたがたは自分を称賛し、わずかな犠牲に対する褒美を要求する。ほんの少しの従順を示しただけで、他者を見下し、ささいな業を達成しただけで、神を軽蔑する。神を迎えもてなす代償として、金、贈り物、称賛を要求する。硬貨を一、二枚与えると、心が痛む。硬貨を十枚与えると、祝福と特別扱いを望む。あなたがたのそのような人間性は、話すのも聞くのも正に不快である。あなたがたの言動に何か称賛に価するものはあるのか。本分を尽くす人と尽くさない人、指導者と追随者、神を迎えもてなす人とししない人、寄付する人とししない人、言葉を説く人と受ける人など、このような人々は皆、自分を称賛する。これを可笑しいとは思わないのか。自分は神を信じていると十分に知りつつ、あなたがたはそれでも神と相容れることができない。自分には全然とてりがないことを十分に知りつつ、それでも自慢することにこだわる。あなたがたはもはや自制心を持たないところまで自分の理知が劣化してしまったとは思わないのか。そのような理知しなくて、どうして神と関わる資格があるのか。あなたがたはこの重大事に自分のことが心配ではないのか。あなたがたの性質は既に、神と相容れることができないところまで劣化している。このような状態で、あなたがたの信仰は滑稽ではないか。あなたがたの信仰はばかげていないだろうか。あなたは自分の未来にどのように向かって行くつもりなのか。歩くべき道をどのように選ぶつもりなのか。

招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない

わたしは地上において、わたしの追随者となる多くの者を求めてきた。これらの追随者の中には、祭司として仕える人々、先導する人々、神の子、神の民、奉仕をする者たちがいる。彼らがわたしに示す忠誠に基づき、わたしは彼らを分類する。すべての者が種類に準じて分類されたとき、つまり、人間のそれぞれの種類の本性が明らかにされたとき、人類に対するわたしの救いの目的を達成するために、わたしは彼らの一人ひとりをそれぞれしかるべき区分の中に含め、種類ごとに相応しい場所につかせる。わたしが救いたい者をそれぞれの集団ごとにわたしの家に招き、これらの人々すべてが終わりの日のわたしの働きを受け取れるようにする。同時に、わたしは彼らを種類に従って分類

し、一人ひとりをその行いに基づいて報いるか、あるいは懲罰する。これがわたしの働きを成す歩みである。

今、わたしは地上に暮らし、人間のもとで生活している。人々は皆、わたしの働きを経験し、わたしの発言に注目している。そうした中で、わたしの追従者たちがわたしからのちを受け、それゆえに彼らがたどることのできる道を得られるように、彼ら一人ひとりにあらゆる真理を授ける。わたしは神、いのちを与えるものだからである。わたしの何年もの働きのあいだ、人間は多くを得て、多くを捨ててきたが、それでもやはり人間は真にわたしを信じていないとわたしは言う。なぜなら、人間はわたしが神であることを口先では認めるものの、わたしが話す真理には異議を唱え、さらには、わたしが彼らに要求する真理を実践することなどないからである。つまり、人間は神の存在だけを認め、真理の存在は認めない。神の存在だけを認め、いのちの存在は認めない。神の名だけを認め、神の本質は認めない。その熱心さゆえに、わたしは人間を軽蔑している。人間はわたしを欺くために、耳に心地よい言葉を使うだけで、誰一人としてわたしを真に崇拝する者はいないからである。あなたがたの言葉には、蛇の誘惑がある。さらに、それは極端なまでに不遜で、まさに大天使の宣言そのものである。その上、あなたがたの行いは不名誉なまでにぼろぼろに裂けてちぎれている。あなたがたの過度の欲望や貪欲なもくろみは聞くに堪えない。あなたがたは皆、わたしの家の蛾、強い嫌悪をもって捨て去られる対象になった。なぜなら、あなたがたの誰一人として真理を愛さず、それどころか、祝福されることを欲し、天に昇ることを欲し、キリストが地上でその力を振るう荘厳な光景を見ることを欲するからである。しかし、そこまで深く墮落し、神が何であるかを全く知らないあなたがたのような人が、どうして神に従うに値することがあり得ようか。それについて考えたことがあるのか。どうしてあなたがたが天に昇れようか。そのように荘厳な光景、その壮麗さにおいて前例のない光景を見るに値する存在に、どうしてあなたがたが成り得ようか。あなたがたの口は偽りと汚れ、裏切りと傲慢の言葉に満ちている。誠実な言葉をわたしに語ったこともなければ、聖なる言葉もなく、わたしの言葉を経験するにあたり、わたしへの服従の言葉を語ったこともない。最後には、あなたがたの信仰はどのようになるのだろうか。あなたがたの心の中には欲望と富しかなく、あなたがたの頭の中には物質的なことしかない。日々、あなたがたはわたしから如何にして何かを得ようかと計算している。日々、わたしからどれほどの富と幾つの物質的なものを得たかを数えている。日々、さらに多くの、もっと高水準のものを享受できるようにと、あなたがたにさらなる祝福が施されるのを待ちわびている。あな

たがたの思考の中にいつ何時も存在するのはわたしではなく、わたしからもたらされる真理でもなく、むしろあなたがたの夫や妻、息子、娘、あるいは食べるものや着るものなのだ。あなたがたは自分が如何にして、より多くの、より良い享樂を得られるかという事を考えている。たとえ胃がはち切れんばかりに満腹したところで、あなたがたはやはり屍ではないのか。たとえ外見を豪華に着飾ったところで、あなたがたはやはり、いのちのない歩く屍ではないのか。あなたがたは食べ物のために、髪に白髪が交じるまで懸命に働くが、誰もわたしの働きのために毛一本として犠牲にすることはない。あなたがたは常に、体を酷使し頭を悩ませて、自分自身の肉体のため、息子や娘のために働き詰めだが、あなたがたのうちの誰一人として、わたしの意に憂慮することも気遣いを見せることもない。あなたがたがわたしから、なおも得ることを望んでいるものは何なのか。

働きを行うにおいて、わたしは決して急き立てられることはない。人間がわたしに対してどのように従うかに関係なく、わたしは一つひとつの歩みに沿って、わたしの計画通りに働きを行う。したがって、あなたがたがこれほどわたしに反抗しているにもかかわらず、わたしはなおも働きを止めず、語らねばならぬ言葉を語り続ける。わたしは予め決めていた人々を、わたしの言葉の聴衆となるようわたしの家に呼ぶ。わたしの言葉に従い、わたしの言葉を慕い求めるすべての人々を、わたしの玉座の前に置く。わたしの言葉に背を向ける人々、わたしに従わず服従しない人々、公然とわたしに挑む人々は一人残らず、最後の懲罰を待つべく脇へ追いやる。すべての人々は墮落の只中、邪悪な者の手の下に生きており、それゆえに、わたしに従う人々のうちで真理を慕い求めている者はそれほど多くない。つまり、ほとんどがわたしを真に崇拝していない。彼らは真理をもってわたしを崇拝しておらず、墮落や反抗、不正直な手段を通してわたしの信頼を獲得しようとしているのである。それゆえに、「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」とわたしは言うのである。招かれる人々は著しく墮落しており、皆が同じ時代に生きており、選ばれる人々はその中のほんの一部である。そうした人々は真理を信じ、認め、真理を実践する人々である。それらの人々は全体のごく一部に過ぎず、それらの人々のあいだから、わたしはさらなる栄光を受ける。これらの言葉に照らして評価した場合に、あなたがたは自分が選ばれる者の中にいるか否かわかるだろうか。あなたがたの最後はどのようなになるだろうか。

既に言ったように、わたしに従う人々は多いが、わたしを真に愛すものは少ない。おそらく、「もしわたしがあなたを愛していなかったなら、こんなに大きな代償を払って

いたでしょうか。あなたを愛していなかったなら、ここまで従ってきたでしょうか」と言う者がいるかもしれない。確かに、あなたには多くの理由があり、そして確かにあなたの愛はとても大きい。しかし、あなたのわたしへの愛の本質は何なのか。「愛」と呼ばれるものは、純粹で汚れのない感情を指し、心をもって愛し、感じ、思いやりをもつということである。愛においては条件、障壁、距離がない。愛においては疑念、偽り、悪賢さもない。愛においては取引も不純なものもない。愛するならば、偽ったり、不平を言ったり、裏切ったり、反抗したり、強要したり、何かを得ようとしたり、一定の量を得ようとしたりすることはない。もし愛するならば、喜んで自分の身を捧げ、苦難に耐え、わたしと融和するようになる。あなたは自分の持つすべてのものをわたしのために捨てるだろう。家族、将来、青春、結婚をあきらめるだろう。そうでなければ、あなたの愛は愛などではなく、偽りと裏切りである！ あなたの愛はどのような愛なのか。真の愛なのか。あるいは偽物なのか。あなたはどれほど捨ててきたのか。どれほど捧げてきたのか。わたしはあなたからどれほどの愛を受けてきたのか。あなたは分かっているのか。あなたがたの心は悪、裏切り、偽りに満ちている。そうであるなら、あなたがたの愛はどれほど汚れているのか。あなたがたは、自分はわたしのためにすでに十分あきらめてきたと思っている。自分のわたしへの愛はすでに十分だと考えている。しかし、それならば、あなたがたの言葉と行動はなぜいつも反抗的で不正直なのか。あなたがたはわたしに従うものの、わたしの言葉を認めない。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしを脇へ置く。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしを疑っている。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしの存在を受け容れられない。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしが誰であるかに相応しくわたしを扱わず、事あるごとに物事がわたしにとって困難になるようにしてしまう。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、あらゆる事柄においてわたしを騙し欺こうとする。これを愛とみなすのか。わたしに仕えるものの、わたしを恐れない。これを愛とみなすのか。あなたがたはあらゆる面で、あらゆる事柄においてわたしに反対する。こうしたすべてを愛とみなすのか。あなたがたが非常に多くを捧げてきたのは確かであるが、わたしがあなたがたに要求することをあなたがたは一度として実践したことがない。これを愛とみなすことができるだろうか。注意深く考えると、あなたがたの中にはわたしへのかすかな愛も感じられない。これほど長年働きを行い、あれだけ多くの言葉を与えてきた後に、あなたがたは実際にどれほどのことを得ているのか。このことは注意深く振り返るに値しないか。わたしはあなたがたに忠告する。わたしのもとにわたしが招く人々は、一度も墮落したことがない人々ではない。むしろ、わたしが選ぶ人々

は、わたしを真に愛する人々である。したがって、あなたがたは自分の言葉と行いに注意して、自分の意図や考えにおいて一線を超えないように検討しなければならない。終わりの日に際して、わたしの怒りがあなたがたから決して離れないということがないように、わたしの前にあなたがたの愛を捧げるべく最善を尽くしなさい！

キリストと融和する道を探せ

わたしは人々の間で多くの働きをしてきた。わたしがその間に発した言葉は数多くある。これらの言葉は人間の救済のためで、人間がわたしと融和するようにと発したものである。しかし、わたしと融和する者は、地上ではほんの数名しか得ていない。だから、人間はわたしの言葉を重んじないとわたしは言う。人間はわたしと融和しないのだから。このように、わたしのしている働きは単に人間がわたしを崇めるようにするためだけではなく、もっと重要なことには、人間がわたしと融和するようにである。墮落した人々は、みなサタンの罠に囚われている。彼らは肉に生き、利己的な欲求をもって生きていて、彼らの中には、わたしと融和する者は、ただの一人もいない。わたしと融和すると言う者もいるが、みな漠然とした偶像を拝んでいる。彼らはわたしの名を聖いものとしているが、わたしに反する道を歩んでいる。そして、彼らの言葉は傲慢とうぬぼれに満ちている。心の底では、みなわたしに敵対しており、わたしと融和していないからである。毎日、彼らは聖書にわたしの痕跡を探し、適当に「都合の良い」句をみつければ、いつまでも読み続け、それを聖句として唱える。彼らはわたしと融和する方法を知らず、わたしに敵対するということが何を意味するかを知らず、単に闇雲に聖句を読んでいるだけである。彼らは見たことがなく、見ることもできない漠然とした神を聖書の中に閉じ込めて、暇な時に取り出して眺めている。彼らはわたしの存在を聖書の範囲内においてのみ信じている。そういう人々にとって、わたしは聖書と同じである。聖書がなければ、わたしはいない。わたしがいなければ、聖書はない。彼らはわたしの存在や行為を無視し、その代わりに聖書の一字一句に極端かつ特別の注意を注ぐ。そして、その多くは、聖書で預言されていない限り、わたしは自分がしたいことは何もしてはいけなさとさえ信じている。彼らはあまりにも聖書の文章を重視し過ぎている。彼らは言葉と表現を大事にするあまり、聖書の語句を用いてわたしの発する一語一語を評価したり、わたしを批判するほどである、と言える。彼らの求めているのは、わたしとの融和の道ではなく、また、真理との融和の道でもなく、聖書にある言葉と融和する道なのである。また、彼らは、聖書に合致しないものは、例外なく、わたしの働きではないと信じている。そうした人々はパリサイ人の従順な子孫なのではないか。ユダヤのパリサイ人

は、モーセの律法に基づいてイエスを罪に定めた。彼らは当時のイエスとの融和を求めず、律法に文字通りに忠実に従うあまり、イエスが旧約の律法に従っておらず、またメシヤでもないという罪で、ついに無実のイエスを十字架につけたのである。彼らの本質は何であったのか。彼らは真理と融和する道を求めていなかったのではないか。彼らは聖書の一字一句にこだわり、わたしの心とわたしの働きの手順や方法には無関心でいた。彼らは真理を求めた人々ではなく、あくまで言葉に固執した人々であった。彼らは神を信じたのではなく、聖書を信じていた。つまるところ、彼らは聖書の番犬であった。聖書の影響力を擁護するため、聖書の権威を維持するため、聖書の評判を守るため、彼らは慈悲深いイエスを十字架につけることまでした。彼らは、ただ単に聖書を守るため、人々の心の中にある聖書の一字一句の地位を維持するために、そうしたのである。だから、彼らは未来と罪のための捧げ物を見捨て、聖書の教義に従わなかったイエスを罪に定めて殺したのである。彼らは聖書の一字一句に隷属していたのではないか。

では、今日の人々はどうだろう。キリストは真理を解き放つために来た。しかし、人々は天に入って恵みを受けるために、キリストを人間の間から追い出したいくらいなのである。彼らは聖書の権益を守るために真理の訪れを完全に否定し、聖書の永続を確実にするため、再び肉となったキリストをもう一度十字架に釘付けにしたいくらいなのである。あれほど悪意に満ちた心もち、わたしに対してあれほど敵意のある本性をもつ人間が、どうしてわたしの救済を受けられるのか。わたしは人間の中に生きているが、人間はわたしの存在を知らない。わたしが人間に光を照らしても、人間はわたしの存在を知らずにいる。わたしが怒りを人間の上に放つと、人間はますます強くわたしの存在を否定する。人間は言葉、聖書との融和は求めるが、真理と融和しようとわたしの前に来る者はただの一人もいない。人間は天のわたしを見上げ、天にいるわたしについて、とりわけの関心を向けるが、肉におけるわたしを心にかける者は誰一人いない。人間の間で生きるわたしがあまりに平凡だからである。聖書の言葉に合致するものだけを求める人々、漠然とした神に合致することだけを求める人々は、わたしには哀れに見える。それは、その人たちが崇めているのは死んだ言葉と、計り知れない宝を与えられる神だからである。その人々が崇めているのは、人間の思いのままになる神なのだが、それは存在しない。では、そうした人々はわたしから何を得られるのか。人間はただ言いようもなく低劣である。わたしに敵対する人々、わたしに限りない要求をする人々、真理を愛さない人々、わたしに反抗心をもつ人々――どうしてそんな人々がわたしと融和できるのか。

わたしに敵対する人々は、わたしと融和しない。真理を愛さない人々も同じである。また、わたしに反抗する人々は、いっそうわたしに敵対し、わたしとは融和不可能である。わたしと融和しない人々をみな、わたしは邪悪な者の手に引き渡す。そうした人々を邪悪な者による墮落に任せ、自分たちの有害さを自由にあらわにさせ、最後には、邪悪な者に手渡し、食い尽くされるに任す。どれだけの人がわたしを崇めるかは気にしない。つまり、どれだけの人がわたしを信じているかは気にしないということである。わたしが問題にするのは、どれだけの人がわたしと融和するかということである。それは、わたしと融和しない人々はみな、わたしを裏切る邪悪な者だからだ。彼らはわたしの敵であり、わたしは自分の敵を自分の家に「納め」はしない。わたしの味方である人々は永遠にわたしの家でわたしに仕える。そして、わたしに敵対する者たちは、永遠にわたしの罰を受けて苦しむ。聖書の言葉だけを大事にする人々、真理やわたしの足跡を求めることに関心のない人々、そうした人々はわたしに敵対する。なぜなら、聖書に従ってわたしを限定し、聖書の中にわたしを閉じ込め、わたしに対して、この上ない冒瀆行為をするからである。そうした人々がどうしてわたしの前に来ることができるであろうか。その人たちはわたしの行い、わたしの心、真理に耳を傾けず、言葉、殺す言葉に執着している。どうして、そうした人たちがわたしと融和できるであろうか。

わたしは実に多くの言葉を発した。また、わたしの心と性質を明らかにしてきた。それなのに、人々はまだわたしを知り、わたしを信じることができずにいる。あるいは、人々はまだわたしに従えずにいると言える。聖書の中に生きる人々、律法に囲まれて生きる人々、十字架上で生きる人々、教義に従って生きる人々、わたしが今日している働きの中で生きている人々——この中の誰がわたしと融和しているであろうか。あなたがたは、祝福とねぎらいを受け取ることだけを考え、どうしたらわたしと融和できるか、どうしたらわたしの敵になることがないかということを少しも考えようとしたことがない。わたしは、ほんとうにあなたがたに失望した。わたしは実に多くをあなたがたに与えてきたのに、ほとんど何もあなたがたから受けていないのだから。あなたがたの欺き、あなたがたの傲慢、あなたがたの貪欲、あなたがたの途方もない欲求、あなたがたの裏切り、あなたがたの不服従——このどれにわたしが気づかずにいるのか。あなたがたはわたしに関していい加減で、わたしをからかい、わたしを侮辱し、わたしを騙し、わたしに要求し、わたしに犠牲を強要する——そうした悪行がどうしてわたしの罰を免れることができようか。あなたがたの邪悪な行為は、わたしへの敵意の証拠、あなたがたがわたしと融和しない証拠である。あなたがたの一人一人が、自分はわたしの心にかな

うと信じているが、もしそうなら、誰にその反論できない証拠が適用されるのか。あなたがたは、自分はわたしにこのうえなく誠実で忠実だと信じている。あなたがたは、自分はまことに親切で、思いやりがあり、わたしに多くを捧げてきたと思っている。あなたがたは、自分はわたしに十分奉仕したと思っている。しかし、そうした考えを自身の行いに引き比べてみたことがあるだろうか。わたしに言わせれば、あなたがたはひどく傲慢で、ひどく貪欲でひどくいい加減だ。あなたがたがわたしをばかにする手口は、とても狡猾で、愚かな意図や愚かしい手段をいろいろもっている。あなたがたの忠誠はごくわずかでしかなく、あなたがたの誠意はあまりに薄く、あなたがたの良心は、さらに乏しい。あなたがたの心にはあまりに多くの悪意があって、誰もあなたがたの悪意から逃れられない。わたしでさえ。あなたがたは、自分の子ども、夫、あるいは自己保存のためにわたしを締め出す。わたしのことを気にする代わりに、あなたがたは自分の家族、子供、地位、将来、自分の欲求充足を気にかけている。あなたがたは、話し行動しながらわたしのことを考えたことがいつあったであろうか。寒いとき、あなたがたは自分の子供、夫、妻、あるいは親のことを思う。暑いときもまた、わたしはあなたがたの思いの内に入っていない。務めを果たしている時、あなたは、自分の利益、自分の身の安全、自分の家族のことを考えている。あなたがたのために何をしたことがあるというのか。あなたは、いつ、わたしのことを考えたのか。あなたは、わたしとわたしの働きのために惜しむことなく身を捧げたことがいつあったであろうか。あなたがたの味方である証拠はどこにあるのか。あなたのわたしへの忠誠はどこに実在しているのか。あなたのわたしへの従順さはどこに実在しているのか。あなたの意図が、わたしから祝福を受けるためではなかったことがいつあったであろうか。あなたがたはわたしをだまし、欺き、真理を弄び、真理の存在を隠し、真理の本質を裏切る。あなたがたはわたしに敵対している。それでは、あなたがたの未来には何が待っているのか。あなたがたはただ、漠然とした神の心になおおうとして、単に漠然とした信仰を追究しているが、あなたがたはキリストと融和しない。あなたがたの悪事は、邪悪な者たちが当然受けるものと同じ報復を受けるのではないか。その時、あなたがたは、キリストと融和しない者で、怒りの日を免れることのできる者はいないことに気づくであろう。あなたがたはまた、キリストに敵対する者にどのような報復が行われるかを知ることになるであろう。その日が来れば、神への信仰によって祝福され、天に入るというあなたがたの夢は、すべて碎かれるであろう。しかしながら、キリストと融和する者は別である。その人たちは、まことに多くを失い、多くの苦難を経てきたが、わたしが人間に与える嗣業をみな受けるであろう。あなたがたは最後には、わたしだけが義なる神であり、わたしだけ

が人間を美しい終着点に導けるということを理解するであろう。

あなたは本当に神を信じる人なのか

もしかすると神を信仰するあなたの旅路は現在すでに一年、あるいは二年以上経っているかもしれないし、人生のここ数年において、あなたは多くの苦難に耐えてきたかもしれない。あるいは、あなたはおそらく大した苦難に遭っておらず、その代わりに多くの恵みを受け取ってきたかもしれない。あなたは苦難も恵みも経験しておらず、いささか普通の人生を送ってきたかもしれない。それでもなお、あなたはやはり神に付き従う者であるので、神に付き従うという主題について語ることにしよう。しかしながら、わたしはこれらの言葉を読む人たちすべてに、神の言葉は、神を認め、神に付き従う者に向けられており、神を認める者も認めない者もすべて含め、各個人には向けられていないということを断っておかなければならない。もし神は大衆に語っていると、世界中のすべての人々に向かって話していると信じるなら、神の言葉はあなたに何の影響も及ぼさないだろう。だから、あなたはこれらの言葉のすべてを心のそばに留めているべきであり、神の言葉の範囲の外側に身を置いてはならない。いずれにしても、いまはわたしたちの家で起こっていることについて話そう。

あなたがたはみな今、神を信じることの本当の意味を理解すべきである。わたしが以前に話した神を信じることの意味は、あなたがたの肯定的な入りに関連している。今日はそうではない。今日わたしは、あなたがたの神への信仰の本質について分析したい。もちろん、これはあなたがたを否定的な面から導いている。もしわたしがそうしなかったら、あなたがたは自らの本当の顔つきを決して知ることはなく、永遠に自らの敬虔さと忠実さを誇り続ける。つまり、もしわたしがあなたがたの心の奥底にある醜さを暴かないなら、あなたがたの一人ひとりが自らの頭に冠をかぶらせ、自分自身に栄光のすべてをもたらす。あなたがたの横柄で傲慢な本性が、あなたがたに良心を裏切らせ、キリストに反逆し、反抗させ、あなたがたの醜さを露呈させ、それによってあなたがたの意図、観念、度を過ぎた欲望、欲に満ちた目を光にさらす。それでもなおあなたがたは自分の人生をキリストの働きに捧げると宣言し続け、キリストによってずっと以前に語られた真理を何度も何度も繰り返す。これがあなたがたの「信仰」である。これがあなたがたの「不純なもののない信仰」なのである。わたしはずっと人にとてつと厳しい規範を守らせてきた。己の考えによってわたしを欺き、条件をもってわたしに強要する者がわたしは大嫌いなので、もしあなたの忠実が意図や条件を伴うものであるなら、あなたの

忠実と呼ばれるものなどむしろない方がよい。わたしが人に望むのは、わたしに絶対的に忠実であり、すべてのことをある一語のために、その一語を証明するために行なうことだけである。その一語とは「信仰」である。あなたがたがわたしを喜ばせようとして甘い言葉を使うのをわたしは軽蔑する。わたしはいつも、完全な誠実さをもってあなたがたに接しているので、わたしはあなたがたにも、わたしに対して本当の信仰をもってふるまってほしいと願う。信仰に関して言えば、信仰があるので神に付き従うのであり、もしそうでなければ、そのような苦しみに耐えることはない多くの者は考えるかもしれない。それではわたしは尋ねる。あなたは神の存在を信じているのに、決して神を畏れないのはなぜなのか。もしあなたが神の存在を信じているなら、それではなぜ、心に神に対する恐れをいだかないのだろうか。キリストは神の受肉であるということを受け入れるなら、それではなぜ、あなたはそれほどに彼を侮り、それほど不敬な態度で振る舞うのだろうか。なぜあなたはあからさまに彼を批判するのだろうか。なぜいつも彼の行動を探るのだろうか。なぜあなたは彼の采配に従わないのだろうか。なぜ彼の言葉に従って行動しないのだろうか。なぜあなたは彼をゆすり、捧げ物を奪い取ろうとするのだろうか。なぜあなたはキリストに成り代わって話すのだろうか。なぜあなたは、彼の働きと言葉が正しいかどうかを判断するのだろうか。なぜ彼のいないところでずうずうしくも彼を冒涇するのだろうか。このようなこと、さらにほかのことがあなたがたの信仰を形成しているのだろうか。

あなたがたの話すことと行ないのあらゆる部分が、あなたがたが内面に抱くキリストへの不信仰の要素を露呈する。あなたがたの行ないの動機と目的には、不信仰が浸み込んでおり、あなたがたのまなざしから発するその意図さえそのような要素で汚れている。つまり、あなたがた一人ひとりが、一瞬一瞬、不信仰の要素を抱いているのである。そうであれば、あなたがたの体の中を巡る血には、この肉となった神に対する不信仰が浸み込んでいるので、あなたがたはどの瞬間にもキリストを裏切る危険性があるということである。したがって、あなたがたが神への信仰の道に残す足跡には深さがないとわたしは言う。この神への信仰の道を行く旅路において、あなたがたはしっかりと地に足をつけておらず、単に動作を行なっているに過ぎない。あなたがたはいつもキリストの言葉を完全に信じず、すぐに実践に移せないのである。これが、あなたがたにキリストへの信仰がない理由である。いつもキリストについて観念を持っていることが、あなたがたがキリストを信じないもうひとつの理由である。キリストの働きに対していつも懐疑心を持つこと、キリストの言葉に耳を傾けようとしないこと、キリストが行なう働き

が何であれ、それにいつも意見を持ち、それを適切に理解できないこと、どんな説明を受けても、観念を手放すことに苦労することなど、これらはすべて、あなたがたの心の中に混入している不信仰の要素なのである。あなたがたはキリストの働きに付き従い、決して遅れをとらないが、あなたがたの心の中にはあまりにも反逆が入り混じっている。この反逆は、あなたがたの神への信仰における不純物なのである。おそらくあなたがたは同意しないであろうが、もしあなたがその不純物から来る自らの意図を認識できないなら、あなたは間違いなく滅びる者の一人となる。なぜなら、神は、彼を本当に信じる者だけを完全にするのであり、彼に懐疑的な者、ましてや彼に渋々従ってはいても決して彼が神であるとは信じない者を完全にしないからである。

一部の人々は真理を喜ばず、裁きとなればもっと喜ばない。むしろ、人々は権力と富に喜びを見出すのであり、そのような人々は権力の亡者と呼ばれる。彼らはもっぱら、影響力を持つ世界中の宗派や、神学校出身の牧師や教師を探し求める。真理の道を受け入れたにもかかわらず、彼らはどこまでも懐疑的で、自分自身を完全に献げることができない。彼らは神のために犠牲を捧げることについて話しはするものの、その目は偉大な牧師や教師に注がれ、キリストは無視されている。彼らの心は名声、富、栄誉にばかり向けられている。彼らは、そのような取るに足りない人がそれほど多くの者を征服することができ、そのような平凡な人が人を完全にすることができるなどと全く信じない。塵と糞の中にいるこれらのとるに足りない人々が神に選ばれているとは信じないのである。もしそのような人々が神の救いの対象であれば、天と地がひっくり返し、すべての人間が大笑いするだろうと彼らは信じている。彼らは、もし神がそのような取るに足りない人々を完全にするために選んだのであれば、先に挙げたような偉大な人たちは神そのものになると信じている。彼らの考え方は不信仰によって汚れている。実際のところ、不信仰どころか、彼らは、ばかげた獣である。なぜなら、彼らは地位、名声、権力だけに価値を置き、重要視するものは大組織や宗派であるからである。彼らはキリストに導かれる者のことを全く考慮しない。キリストに、真理に、そしていのちに背をむけた裏切り者でしかないのである。

あなたが敬慕するのはキリストのへりくだりではなく、目立った地位にある偽の牧者たちである。あなたはキリストの素晴らしさや知恵を愛さないが、邪悪な世と交わりを持つ奔放な者たちを愛している。あなたは、枕するところもないキリストの苦しみを笑うが、捧げものを奪い取り放蕩な生活を送る屍たちを賞賛するのである。あなたはキリストのそばで苦しむ覚悟はないが、あなたに肉、言葉、支配しか与えない無謀な反キリ

スト者たちの腕の中に喜んで飛び込む。今でもあなたの心は、彼らに、彼らの評判に、彼らの地位に、そして彼らの影響力に向いている。それなのに、あなたはキリストの働きを飲み込みがたいものにする態度をとり続け、進んでそれを受け入れようとしない。だから、あなたにはキリストを認める信仰がないとわたしは言うのである。あなたが今日に至るまでキリストに従ってきたのは、他に選択肢がなかったからに過ぎない。一連の気高いイメージが、あなたの心にいつまでもそびえている。彼らの言葉や行ないのひとつひとつが忘れられず、影響力がある彼らの言葉や手腕も忘れられない。あなたがたの心の中では、彼らは永遠に至高で、永遠に英雄なのである。しかし、これは今日のキリストにはあてはまらない。彼はあなたの心の中で永遠に取るに足らない存在であり、永遠に畏敬に値しない。なぜなら、彼はあまりにも普通すぎ、あまりにも影響力がなさ過ぎ、高遠さからははるかにかけ離れているからである。

いずれにしても、真理を重んじない者はすべて、不信者であり真理を裏切る者であるとわたしは言う。そのような人は決してキリストの承認を得ることはない。あなたのうちにどれほど多くの不信仰があるのか、どれほど多くのキリストへの裏切りがあるのか、あなたは今分かったのか。わたしはあなたに以下のことを熱心に勧める。あなたが真理の道を選んだのだから、誠心誠意献身すべきである。あいまいであったり、気のりのしない態度であったりしてはならない。神は世界にも、一人の人間にも属さず、本当に神を信じ、礼拝し、献身的で忠実なすべての人々に属することを知るべきである。

今なお、あなたがたのうちに大いに不信仰がある。あなたがた自身の内側をよく見てみよ。そうすれば、必ず答えが見つかる。あなたが真の答えを見つけるとき、あなたは自分が神を信じる人ではなく、むしろ神を欺き、冒瀆し、裏切る者であり、神に忠実でない者であることを認める。そのときあなたは、キリストは人ではなく、神であると悟る。その日が訪れると、あなたはキリストを畏敬し、恐れ、真に愛する。今、信仰はあなたがたの心の30パーセントしか占めておらず、残りの70パーセントは疑いが占めている。キリストによってなされたいかなる行ないも、話されたいかなる言葉も、あなたがたにキリストについての観念や意見を形づくらせる。このような観念や意見は、キリストに対するあなたがたの完全な不信仰から生じるのである。あなたがたは天にいる目に見えない神だけを敬慕し恐れ、地上の生けるキリストを全く重んじないのである。これもあなたがたの不信仰ではないだろうか。あなたがたは、過去に働いた神だけを慕い、今日のキリストを直視しようとしない。このすべてが、あなたがたの心にいつまでも混ざり合い、今日のキリストへの信仰を欠いた「信仰」なのである。わたしは決してあ

あなたがたを過小評価しない。あなたがたの内にはあまりにも多くの不信仰があり、あなたがたには不純で、詳細に吟味されねばならないところが多すぎるからである。このような不純物は、あなたがたが全く信仰を持たないことのしるしである。このような不純物はあなたがたがキリストを放棄したことの目印であり、あなたがたにキリストの裏切り者の烙印を押す。このような不純物は、キリストについてのあなたがたの認識を覆い隠すベールであり、あなたがたがキリストのものとされることに対する障壁であり、あなたがたがキリストと相容れるのを妨げる障害物であり、そしてキリストがあなたがたを承認しないという証拠なのである。今こそあなたがたの人生のすべての部分を吟味するときなのである。そうすることは、想像し得るあらゆるかたちで、あなたがたに益をもたらす。

キリストは真理をもって裁きの働きを行う

終わりの日の働きとは、すべての人をその性質に応じて区分し、神の経営（救いの）計画を締めくくることである。時が近づき、神の日が来たからである。神の国に入る人すべて、すなわち神に最後の最後まで忠実な人すべてを、神は神自身の時代に連れて行く。しかし、神自身の時代が来る前は、神の働きは人間の行いを観察したり、人間の生活について調べたりすることではなく、人間の不服従を裁くことである。神の玉座の前に来る人すべてを、神は清めなければならないからである。今日まで神の足跡に従ってきた人はすべて神の玉座の前に来る人であり、これゆえに、最終段階の神の働きを受け入れる人の一人ひとは神の清めの対象である。言い換えれば、最終段階における神の働きを受け入れる人は誰もが、神の裁きの対象なのである。

過去に語られた神の家から始まる裁きにおいて、その言葉における「裁き」は、終わりの日に神の玉座の前に来る人々に神が今日下す裁きのことを指す。終わりの日が来ると、神は天に大きな卓を据え、その上には白い布が広げられ、すべての人が地にひざまずいているところに神が大きな玉座につき、一人ひとりの人間の罪を明らかにし、それにより人々が天国に昇るか火と硫黄の湖に落とされるかを決める、というような超自然的な想像の表象を信じている人もおそらくいるであろう。人が何を想像しようと、それが神の働きの本質を変えることはできない。人の想像は人の思考の産物以外の何物でもない。それは人の脳に由来し、人が見たり聞いたりしてきたものからまとめられ組み合わせられたものである。したがって、その生み出された表象がいかに輝かしくとも、それは線描でしかなく、神の働きの計画にとって代わることはできない、とわたしは言うの

である。結局のところ、人間はサタンにより墮落させられてきている。それならば、どうして人間に神の考えを推し量ることができるのか。神による裁きの働きを何かとてつもないものであると人間は考える。神自身が裁きの働きを行うのだから、その働きは最大規模のもので、人間には到底理解できず、それは天のいたるところに鳴り響き、地を揺らすはずである、と人間は考える。そうでなければどうしてそれが神による裁きの働きでありえようか。それは裁きの働きであるので、神が働くときは特に堂々と威厳があるはずで、裁かれている人々は涙を流して叫び、ひざまずいて憐れみを請うているはずであると人間は考える。そのよう情景は確かに荘厳で、深く感情を揺さぶるであろう……誰もが、神の裁きの働きを奇跡的なものであると想像する。しかし、あなたは知っているのか。神はずいぶん前より人間のあいだでの裁きの働きを開始したというのに、あなたは惰眠を貪っていることを。神の裁きの働きが正式に始まったとあなたが思うときには、神はすでに天と地を新しくしていることを。その時、おそらくあなたは人生の意味をちょうど理解しだしたばかりかもしれないが、神の容赦ない懲罰の働きが、まだ深く眠りにについているあなたを地獄に落とす。その時になって初めて、神の裁きの働きがすでに終わったことにあなたは突然気づくのである。

わたしたちの貴重な時間を無駄使いして、このような忌まわしく嫌な話題についてこれ以上話すのをやめよう。代わりに、裁きを構成するものについて話そう。「裁き」という言葉を出せば、ヤーウェがあらゆる場所に向けて語った言葉、イエスがパリサイ人に語った非難の言葉をあなたはたぶん思い浮かべるであろう。それらの言葉の厳しさにもかかわらず、それらは神の人への裁きの言葉ではなく、様々な環境において、つまり異なる脈絡において、神が語った言葉にすぎなかった。それらの言葉は、終わりの日にキリストが人間を裁きつつ語る言葉とは違う。終わりの日には、キリストはさまざまな真理を用いて人間を教え、人間の本質を明らかにし、人間の言動を解剖する。そのような言葉は、人の本分や、人はいかに神に従うべきか、人はいかに神に忠実であるべきか、いかに正常な人間性を生きるべきかや、また神の知恵と性質など、さまざまな真理を含んでいる。これらの言葉はすべて人間の本質とその墮落した性質に向けられている。とくに、人間がいかに神をはねつけるかを明らかにする言葉は、人間がいかにサタンの化身であり、神に敵対する力であるかに関して語られる。神は裁きの働きを行うにあたって、少ない言葉で人間の本性を明らかにすることはない。むしろ長い期間にわたり、それをさらけ出し、取り扱い、刈り込む。このような方法のさらけ出し、取り扱い、刈り込みは通常の言葉が取って代わることはできず、人間が一切持ち合わせていない真理

でなければ取って代われない。このような方法のみが裁きと呼ばれることができる。このような裁きを通してのみ人間は屈服し、徹底的に納得して神への服従に向かうようになり、さらに神についての真の認識を得ることができる。裁きの働きがもたらすのは、神の真の顔と人間自らの反抗的性質についての真相を人が認識することである。裁きの働きにより、人は神の心、神の働きの目的、人には理解することのできない奥義についてかなり理解できるようになる。また、それにより人は自分の墮落した本質と墮落の根源を認識し知るようになり、人間の醜さを発見する。これらの効果はすべて、裁きの働きによりもたらされる。それは、実際に、この働きの本質は神を信じる人すべてに神の真理、道、いのちを開く働きだからである。この働きが神による裁きの働きである。もしこれらの真理を重要視せず、いかにこれらを避けるかや、いかにこれらとは関わりのない新しい逃げ道を見つけるかしか考えないのならば、あなたは恐ろしい罪人である、とわたしは言う。もしあなたに神への信仰があるのに、神の真理や心を追い求めず、またあなたを神に近づける道を愛さないなら、あなたは裁きを逃れようとしている人であり、偉大な白い玉座から逃げる操り人形であり裏切り者である、とわたしは言う。神の目から逃げる反抗的な者を神は誰一人として容赦しない。そのような人はさらに重い懲罰を受ける。裁かれるために神の前に来る人で、その上、清められた人は、永遠に神の国に住むであろう。もちろん、これは未来に属することである。

裁きの働きは神自身の働きであり、そのため当然ながら神が自ら行わなければならない。それは神の代わりに人が行うことはできない。裁きとは真理を用いて人類を征服することなので、この働きを人のあいだで行うために神が受肉した姿で再び現れることは疑いもないことである。つまり、終わりの日においてキリストは真理を用いて世界各地の人々を教え、彼らにあらゆる真理を知らしめる。これが神の裁きの働きである。多くの人が神の二度目の受肉について悪い感情をもっている。神が肉になって裁きの働きを行うということが、人には信じがたいからである。それでも、しばしば神の働きは人間の期待を大幅に超え、それは人間の知性には受け入れがたいことである、とわたしは言わなければならない。人は地上の蛆虫にすぎないが、一方、神は宇宙を満たす至高の存在であるからである。人の知性は蛆虫だけを生み出す汚水のたまった穴に似ており、一方、神の考えが指揮する働きの各段階は神の知恵の結晶である。人は常に神に敵対しようとしているが、これに関しては、最後に誰が負けるかは自明であると、わたしは言う。自分のことを黄金より価値があるとみなさないように、わたしはあなたがたに強く勧める。もし他人が神の裁きを受け入れられるなら、なぜあなたにはできないのか。他人

に比べてあなたはどれくらい高位に立っているのか。もし他人が真理の前に頭を垂れるなら、なぜあなたもそうできないのか。神の働きには止めることのできない勢いがある。あなたのした「貢献」のためだけに神は裁きの働きを繰り返すことはなく、このような好機を逃すと、あなたは無限の後悔に苛まれることになる。もしわたしの言葉を信じないなら、天空にある偉大な白い玉座があなたに裁きを下すのを待っていないさい。すべてのイスラエル人がイエスを拒絶し否定したが、それでもイエスによる人類の贖罪の事実は全宇宙に、そして地の果てまで広がったことを知らなければならない。これは神がはるか昔に成し遂げた一つの現実ではないのか。もしイエスがあなたを天に引き上げるのをいまだに待っているのなら、あなたは頑固な一片の枯れ木^[a]であるとわたしは言う。あなたのような真理に不忠実で、祝福だけを求める偽信者をイエスは認めることはない。それどころか、何万年も焼かれるように火の湖にあなたを投げ入れるのに憐れみを一切見せないであろう。

裁きとは何か、真理とは何かをいま理解しているか。もししているならば、裁かれることに従順に従うよう強く勧める。さもなければ、神に称賛され、神の国に連れて行かれる機会を得ることは決してないであろう。裁きを受け入れるだけで清められることのできない人、つまり裁きの働きの只中において逃げる人は、永遠に神に嫌われ拒絶される。彼らの罪は、パリサイ人の罪よりもさらに多く、深刻である。彼らは神を裏切り、神の反逆者だからである。奉仕することさえ相応しくないそのような人は、さらに過酷で、加えていつまでも終わることのない懲罰を受ける。言葉では一度は忠誠を誓いながらその後、神を裏切った反逆者を神は容赦することはない。このような人は霊、魂、体の懲罰を通して報復を受けることになる。これこそ、神の義なる性質の明示ではないのか。これが人を裁き、明らかにする神の目的ではないのか。神は裁きのあいだにあらゆる邪惡な行いをする人々すべてを邪惡な霊がはびこる場所に引き渡し、邪惡な霊に彼らの肉体を好きなように破壊させる。彼らの肉体は死臭を放つ。これは彼らにふさわしい報復である。神は、それら不忠実な偽信者、偽使徒、偽働き人の罪を一つひとつその記録書に書き留める。そして、その時が来ると、神は彼らを不浄な霊の真中に投げ入れ、不浄な霊が彼らの全身を思うままに汚すようにし、そのため彼らは決して生まれ変わることはなく、二度と光を見ることはない。一時期は神に仕えるが最後まで忠実であり続けることのできない偽善者は、神が邪惡なものに含めて数え、そのため彼らは悪人の言いなりとなり、烏合の衆の一部となる。最後には神は彼らを滅ぼす。キリストに忠実であったことがない人、自らの強みをもって何らの貢献をしたことのない人を神は脇へや

り、省みることはなく、時代が変わるときに彼らをすべて滅ぼす。彼らはもはや地上には存在せず、神の国へ入ることなどなおさらありえない。神に誠実であったことはないが、状況のせいで強制的に神を表面的に取り扱うことになった人は、神の民のために奉仕する人に含めて数えられる。これらの人々のうちほんの一部だけが生き残るが、大半は奉仕をする規準にさえ達しない人々とともに滅ぶ。最後に、神と同じ考えをもつ人すべて、神の民と子ら、そして神に祭司となるよう予め定められた人々を、神は神の国に連れて行く。彼らは神の働きの結晶となる。神が制定した範疇のどれにも当てはめることのできない人は、未信者に含めて数えられる。彼らの結末がどうなるか、あなたがたは確実に想像できることであろう。わたしは既に言うべきことをすべてあなたがたに語った。あなたがたが選ぶ道は、あなたがただけの選択である。あなたがたが理解すべきことはこれである。神の働きは神と足並みをそろえることのできない人を誰も待たず、神の義なる性質はどんな人にも憐れみを示さない。

脚注

a. 「一片の枯れ木」とは、中国語の慣用句で、「救いがたい」という意味である。

あなたは知っていたか。神が人々の間で偉大な業を成し遂げたことを

古い時代は過ぎ去り、新しい時代が到来した。年々歳々、来る日も来る日も神は多くの働きを行なってきた。神はこの世にやって来て、またこの世から去っていった。そのような周期が幾世代にもわたって続いてきた。今日も、神は以前と同じように、神は為さねばならぬ働き、まだ完了していない働きを続行している。何故なら今日まで神はまだ安息に入っていないからである。天地創造の時から今日まで、神は多くの働きを成し遂げてきたが、あなたは、神が今日行う働きは以前よりずっと多く、その規模もずっと壮大であることを知っていたか。だからわたしは、神は人々の間で偉大な業を成し遂げたと言うのである。神の働きは人にとっても、神にとっても、すべてが非常に重要である。神の働きの一つひとつは人に関連するものだからである。

神の働きは見ることも感じることもできず、ましてや世間の人が見ることもなどできないのに、いったいどうしてそれが偉大なものだと言えるのだろうか。どのようなことが偉大だとみなされるのだろうか。確かに神の働きはすべて偉大であるということは誰にも否定できない。それでは、何故今日神が行う働きが偉大だとわたしは言うのだろうか

。神は偉大なる業を成し遂げたと言う時、そこには人間がまだ理解していない多くの奥義が関わっているということに疑いの余地はない。今からそれらのことについて話そう。

イエスは、イエスの存在を受け入れられない時代に飼葉おけの中に生まれたが、それでもこの世はイエスの行く手を遮ることができず、イエスは神の配慮の下で三十三年間人々の間で暮らした。その数十年の生涯において、イエスはこの世の辛酸を嘗め、地上でみじめな生活を味わった。イエスは全人類を贖うために十字架につくという重い任務を引き受けた。イエスはサタンの支配のもとで生きていたすべての罪人たちを贖い戻し、最終的には、イエスの復活した体は安息の場に戻った。今や、神の新しい働きが始まったが、それはまた新しい時代の始まりでもある。神は、新しい救いの働きを始めるために、贖われた人々を神の家に連れて来る。今回、救いの働きは過去の時代よりも徹底している。人の中で働き、自ら人を変化させる聖霊によってではなく、人々の間に現れるイエスの肉体によってでもなく、ましてや、その他のやり方で行われることなどありえない。むしろ、その働きは受肉した神自身によって為され、導かれる。これは人を新しい働きに導き入れるために行われる。これは偉大なことではないか。神はこの働きを一部の人々や預言を通してではなく、神自身によって行う。一部の人々は、これは偉大なことではなく、人に大いなる喜びをもたらすことはできないと言うかもしれない。しかしながら、わたしはあなたに告げる。神の働きはただこれだけのものではなく、何かもっと偉大で、もっと多くのものであると。

今回は、神は霊体ではなく、まったく普通の体で働きを行うために来る。それは神の二度目の受肉の体というだけではなく、神がそれをまとして戻ってくる体でもある。それはごく普通の肉体である。この体の中に、他の人々と異なるものは何も見受けられないが、あなたは、今までに聞いたこともない真理をこの人から受け取ることができる。この取るに足らない肉体は、神から来る真理の言葉のすべてを具現化したものであり、終わりの日の神の働きを引き受けるもの、また人が知ようになる神の全性質の表現である。あなたは天の神を見ることを大いに望んでいるではないか。あなたは天の神を理解することを切に願っているではないか。あなたは人類の終着点を見ることを大いに欲しているではないか。この人は、今まで誰ひとりとしてあなたに語ることはできなかった秘密の全てをあなたに語るだろう。また、あなたが理解していない真理についても語るだろう。この人は、あなたにとっての神の国への入り口の門であり、新しい時代への導き手である。このような普通の肉が多くの計り知れない奥義を握っているのである。

この人の行いはあなたには測り知れないかもしれないが、その人が行うすべての働きの目標は、この人が人々が思うような単なる肉ではないことを理解するのに充分である。なぜならこの人は、終わりの日に人類に神が示す配慮及び神の意志を表しているからである。あなたは天地を揺るがすような彼の言葉を聞くことはできず、燃え上がる炎のようなその目を見ることもできず、また、鉄の杖のような神の懲らしめを感じることもできないが、その言葉から神の怒りを聞き、神が人類に示す憐れみを知ることができる。あなたは神の義なる性質と神の知恵を見ることができ、更に神が全人類に対して持つ配慮をはっきり理解することができる。終わりの日の神の働きは、天の神が地上で人々の間で生きていることを人に見せることであり、また人が神を知り、神に従い、神を畏敬し、神を愛することができるようにすることである。これが神が再び肉に戻った理由である。今日人が見るものは人と同じ姿の神、一つの鼻と二つの目を持つ神、目立たない神であるが、最終的には神はあなたがたに次のことを示すだろう。この人の存在がなければ、天と地は膨大な変化にさらされ、この人の存在がなければ、天は薄暗くなり、地上は混沌に陥り、全人類は飢饉と疫病の中で暮らすことになるということを。終わりの日における受肉の神による救いがなければ、神はずっと前に全人類を地獄で滅ぼし尽くしていたはずであるということを、神はあなたがたに示すであろう。またこの肉の存在がなければ、あなたがたは永遠にずっと罪人のかしらと死体のままであろうということを神は示すであろう。この肉の存在がなければ全人類は避けることのできない災難に直面し、終わりの日の神の人類への一層厳しい懲罰から逃れることはできないことをあなたがたは知るべきである。この普通の肉の誕生がなければ、どのように求めようとも、あなたがたにはみな生も死も到来しない状態に陥るだろう。この肉の存在がなければ、今日、あなたがたは真理を受け取り神の玉座の前に来ることもできないだろう。それどころか、あなたがたの深い罪ゆえに罰せられるだろう。あなたがたは知っているか。神の肉への再来がなければ、誰にも救いの機会はないのである。また、この肉が来なければ、神はずっと以前に古い時代を終わらせていたはずである。それでも、あなたがたは神の二度目の受肉をなおも拒むことができるのか。あなたがたは、この普通の人から大いに利益を得ることができるのに、なぜすぐにこの人を受け入れないのか。

神の働きはあなたには理解できないことである。あなたの決定が正しいかどうか理解することも、神の働きが成功するかどうか知ることもできないのなら、この普通の人があなただけにとって大いに助けとなるかどうか、また、神が偉大な働きを行なったかどうかを運をためしてでもいいから見てみようとししないのか。しかし、わたしはあなたに告げ

なければならない。ノアの時代、人々は神が見るに堪えないほど飲んだり、食べたり、勝手気ままに結婚したり結婚させたりしていたので、神は大洪水を引き起こして人類を滅ぼし、ただノアの家族八人とあらゆる種類の鳥と獣だけを残した。しかしながら、終わりの日に神に守られるのは、最後まで神に忠誠を尽くしたすべての人々である。どちらも神が見るに耐えないほどのひどい墮落の時代であり、どちらの時代の人類も主である神を否定するほどひどく墮落していたが、ノアの時代の人々はすべて神に滅ぼされた。どちらの時代の人類も神をひどく悲しませたが、神は終わりの日の人々には今日に至るまで忍耐深い。それは何故なのか。あなたがたはこのことを一度も考えたことがなかったのか。本当にそれを知らないなら、わたしがあなたがたに話そう。終わりの日に神が人々を恵み深く取り扱うことができる理由は、彼らがノアの時代の人々ほど墮落していないからでも、彼らが神に悔い改めを示したからでもない。まして、テクノロジーが進歩した終わりの日に人間を滅ぼすことに神が耐えられないからでもない。むしろ、神には終わりの日に一群の人々に対して行う働きがあり、これは受肉の神自身によってなされるからである。その上、神はこの一群の一部を救いの対象、神の経営（救いの）計画の実として選び、そのような人々とともに次の時代へと連れてゆくのである。従って、何がなんでも、神によって支払われたこの全ての代価は、終わりの日における神の受肉の働きのための準備であったのだ。あなたがたが今日に至ったという事実は、この肉のおかげである。神が肉の中で生きている故に、あなたがたにも生きる機会がある。このすべての恩恵はこの普通の人の故に獲得されたのである。それだけではない。最後にはすべての国々はこの普通の人を礼拝し、この取るに足りない人に感謝し、従うだろう。全ての人類を救い、人と神の対立を和らげ、両者の距離を縮め、神と人の考えをつなげたのは、この人がもたらした真理、いのち、道だからである。一層大きな栄光を神にもたらしたのもこの人である。このような普通の人は、あなたの信頼や敬愛を受けるに値しないだろうか。このような普通の肉はキリストと呼ばれるに相応しくはないだろうか。このような普通の人が人々の間で神の表出となれないことなどだろうか。人類が災難を免れる手助けをするこのような人は、あなたがたに愛され、あなたがたが抱きしめる価値がないなどということがあろうか。あなたがたがこの人の口から発せられる真理を拒み、あなたがたの間に彼が存在することを忌み嫌うならば、あなたがたの運命はどのようなであろうか。

終わりの日の神の働きのすべてはこの普通の人を通して行われる。この人はすべてのものをあなたに授け、その上、あなたに関わるすべてのことを決定することができる。

このような人が、あなたがたが思っているように、言及する価値もないほど取るに足りないということがあろうか。この人の真理はあなたがたを完全に納得させるのに十分ではないのか。その行いによる証しは、あなたがたを完全に確信させるには充分でないというのか。あるいは、この人があなたがたを導き入れる道は、あなたがたがついて行く価値がないということか。あなたがたがこの人に反感を抱き、見捨て、避ける理由は何であろうか。真理を表すのはこの人であり、真理を供給するのはこの人であり、あなたがたに進むべき道があるようにするのもこの人である。あなたがたはまだ、これらの真理の内に神の働きの足跡を見つけることができないなどということがあり得ようか。イエスの働きがなければ、人類は十字架から降りることはできなかったであろうが、今日の受肉がなければ、十字架から降りる人々は神に称賛されることは決してないし、新しい時代に入ることもできない。この普通の人の到来がなければ、あなたがたには神のほんとうの顔を見る機会も資格も全くない。何故ならあなたがたは皆ずっと前に滅ぼされているはずの人々だからである。神の二度目の受肉の到来の故に、神はあなたがたを赦し、あなたがたに憐れみを示した。いずれにしても、最後にわたしがあなたがたに言い残さなければならない言葉はやはりこうである。神の受肉であるこの普通の人は、あなたがたにとって極めて重要である。これこそが、神が人々の間で成し遂げた偉大なることである。

終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる

いのちの道は誰でも持てるものではなく、また誰にとっても簡単に得られるものではない。いのちは神からしか生じ得ないからである。つまり、神自身のみがいのちの本質を有しており、神自身のみがいのちの道をもっている。ゆえに、神のみがいのちの源であり、永遠に流れつづけるいのちの生ける泉なのである。世界を創造してからずっと、神はいのちの活力に関する多くの働きを行ない、人はいのちをもたらし多くの働きを行ない、人がいのちを得られるよう多大な代価を払ってきた。神自身が永遠のいのちであり、そして神自身が、人が復活する道だからである。神が人の心にはいないことは決してなく、常に人の中に生きている。神は人の生活の原動力であり、人の存在の根幹であり、誕生後の人の存在にとっての豊かな鉱床である。神は人を生まれ変わらせ、人が自分のすべての役割をしっかりと生きられるようにする。神の力と、消えることのない神のいのちの力のおかげで、人は何世代も生きてきた。その間ずっと、神のいのちの力は人の

存在の支えであり、神は普通の人間が誰も払ったことのない代価を払ってきた。神のいのちの力は、いかなる力にも勝る。そのうえ、いかなる力をも超越する。神のいのちは永遠であり、神の力は非凡であり、神のいのちの力はいかなる被造物や敵の力によっても圧倒されない。時や場所に関係なく、神のいのちの力は存在し、明るい輝きを放つ。天地は激変するかもしれないが、神のいのちは永遠に不変である。万物は過ぎ去るかもしれないが、神のいのちは依然として残る。神は万物の存在の源であり、それらの存在の根幹だからである。人のいのちは神に由来し、天の存在は神に拠り、地の存在は神のいのちの力から生じる。活力を有するいかなる物体も神の主権を越えることはできず、生氣を有する何物も神の権威の及ぶ範囲から逃れることはできない。このようにして、誰もが神の支配下で服従し、神の命令の下で生きなければならず、誰も神の手から逃れられない。

おそらく、あなたの今の望みはいのちを得ること、あるいは真理を得ることである。いずれにせよ、あなたは神を見つけないかと願っている。つまり、頼ることができて自分に永遠のいのちを施せる神を見つけないのである。永遠のいのちを得たいと望むなら、まずは永遠のいのちの源を理解し、神がどこにいるのかを知らねばならない。わたしはすでに、神のみが永久不変のいのちで、神のみがいのちの道をもっていると言った。神のいのちは永久不変なので、それは永遠のいのちである。神のみがいのちの道なので、神自身が永遠のいのちの道である。ゆえに、まずは神がどこにいるのか、そしてその永遠のいのちの道を得るにはどうしたらよいかを理解しなければならない。では、この二つの点について、それぞれ交わりを行なおう。

あなたが本当に永遠のいのちの道を得たいと望み、飽くことなく探し続けているなら、まずこの質問に答えてほしい。今日、神はどこにいるのか？ おそらくあなたは、「当然、神は天に住んでいる。あなたの家には住んでいないはずだ」と答えるだろう。あるいは、神は明らかに万物の間にいると言うかもしれない。もしくは、神は各々の心の中にいると言うかもしれないし、神は霊界にいると言うかもしれない。これらのどれも否定はしないが、問題を明確にしなければならない。神が人の心の中に住んでいるというのはまったく正しいわけではないが、かと言って完全に間違っているわけでもない。と言うのも、神を信じる者の中には、その信仰が本物である者と偽物である者、神が認める者と認めない者、神を喜ばせる者と神が嫌う者、そして神が完全にする者と神が排除する者がいるからである。だからわたしは、神は一握りの人の心にのみ住んでいると言うのであり、この人たちは疑いなく真に神を信じ、神に認められ、神を喜ばせ、神は

この人たちを完全にする。神はこのような人たちを導く。彼らは神に導かれているのだから、神の永遠のいのちの道をすでに見聞きした人である。神への信仰が偽物であり、神に認められず、神に嫌われ、排除される者たちは、必ずや神に拒絶され、いのちの道を得られず、神がどこにいるのかを知らずにいる。対照的に、心に神を住まわせている者は、神がどこにいるかを知っている。彼らは、神が永遠のいのちの道を授ける者たちであり、神に従う者たちである。あなたは今、神がどこにいるかを知っているか。神は、人の心の中と、人の傍らの両方にいる。神は霊界に、そして万物の上にいるだけでなく、それ以上に、人が存在する地上にいる。ゆえに、終わりの日の到来により、神の働きの段階は新たな領域へとすすんだのである。神は宇宙の万物に対する支配権を握っており、人の心の支えであり、さらに神は人の間に存在している。このようにしてのみ、神はいのちの道を人類にもたらし、人をいのちの道へと導くことができる。人がいのちの道を得て生存できるよう、神は地上に来て人の間で生きる。同時に、神は宇宙の万物を指揮し、人の間における自らの経営に協力させる。したがって、神は天と人の心にいるという教義を認めるだけで、人の間における神の存在の真理を認めないなら、あなたがいのちを得ることは決してないし、真理の道を得ることもない。

神自身がいのちであり、真理であり、神のいのちと真理は共存している。真理を得られない者がいのちを得ることは決してない。真理による導き、支え、施しがなければ、あなたは文字と教義、そして何より死しか得られない。神のいのちは常に存在し、神の真理といのちは共存する。真理の源を見つけられなければ、いのちの糧は得られない。いのちの施しを得られないなら、真理を一切得られないことは間違いなく、ゆえに想像と観念を除けば、あなたの全身はただの肉、臭い肉でしかない。書物の言葉がいのちに数えられることはなく、歴史の記録が真理として敬われることはなく、過去の規則が神によって今語られている言葉の記録になることはないと知りなさい。神が地上に来て、人の間で生きているときに表わすものだけが真理であり、いのちであり、神の旨であり、神が現在働く方法である。神が過去の時代に語った言葉の記録を現代に適用するのなら、あなたは考古学者であり、あなたに最もふさわしい表現は歴史的遺産の専門家ということになる。なぜなら、あなたは常に神が過去の時代に行なった働きの痕跡を信じており、神がかつて人の間で働いた際に残した神の影しか信じておらず、神がかつての信者に与えた道しか信じていないからである。あなたは、神による今日の働きの方角を信じておらず、今ある神の栄光に満ちた顔を信じておらず、現在神が表わしている真理の道を信じていない。ゆえに、あなたが完全に浮世離れした空想家なのは間違いのない。今

、人にいのちをもたらすことのできない言葉になおも固執するなら、あなたは望みのない一片の枯れ木^[a]である。あなたは保守的に過ぎ、あまりに強情で、理知に無頓着だからである。

受肉した神はキリストと呼ばれるので、人に真理を与えられるキリストは神と呼ばれる。ここには何の誇張もない。なぜなら、そのキリストは神の本質を有し、神の性質を有し、その働きには知恵があり、これらはどれも人間の手の届かないものだからである。キリストを自称しながら神の働きを行なえない者は、詐欺師である。キリストは、単なる地上における神の顕現ではなく、人の間で働きを行ない、それを完成させるにあたって神が宿った特有の肉体でもある。この肉体は誰でも取って代わられるものではなく、地上における神の働きを適切に引き受け、神の性質を表わし、神を十分に象徴し、人にいのちを与えられる肉体である。遅かれ早かれ、キリストになりすましている者たちはみな倒れる。彼らはキリストを自称しながら、キリストの本質を何ひとつ有していないからである。ゆえにわたしは、キリストの真偽は人が定められるものではなく、神自身が答えて決めるものだと言う。このようにして、あなたが真にいのちの道を求めるなら、神は地上に来ることで、人にいのちの道を授ける働きをしているということをまず認め、そして神が地上に来て人にいのちの道を与えるのは終わりの日であることを認めなくてはならない。それは過去のことではなく、今起きていることなのだ。

終わりの日のキリストはいのちをもたらし、変わることなく永遠に続く真理の道をもたらす。人はこの真理を通していのちを得ることができ、この真理を通してのみ、神を知り、神に良しと認められる。終わりの日のキリストが与えるいのちの道を求めないなら、あなたは決してイエスに良しと認められず、天国の門をくぐる資格も得られない。なぜなら、あなたは歴史の操り人形であり、歴史に囚われた人だからである。規則や文字に支配され、歴史に束縛される者は、決していのちを得ることができず、永遠のいのちの道も得られない。と言うのも、彼らがもっているのはどれも、玉座から流れるいのちの水ではなく、何千年も執着してきた汚水だからである。いのちの水を施されない者は永遠に死体であり、サタンの玩具であり、地獄の子である。そのような者がどうして神を目にできようか。ひたすら過去にしがみつき、足踏みしながら現状を維持しようとし、現状を変えて歴史を棄てようとししないなら、あなたは絶えず神に反することになるのではないか。神の働きの歩みは、押し寄せる波や轟く雷鳴のごとく広大で力強い。それでも、あなたは自分の愚かさに固執して何もしないまま、座して滅びを待っている。このままで、あなたは小羊の足跡に従う者だと見なされようか。あなたが神として固執

するものが、常にあたらしく古びない神だと正当化できようか。あなたの黄ばんだ本の言葉があなたを新しい時代に運んでくれることがあろうか。神の働きの歩みをたどれるよう導いてくれようか。そして、それらがあなたを天国に引き上げられるだろうか。あなたがその手でつかんでいる物は、つかの間の慰めを与えられる文字でしかなく、いのちを与えられる真理ではない。あなたが読む聖句は、あなたの舌を肥やせるだけで、あなたが人生を知るうえで助けとなる知恵の言葉ではなく、ましてやあなたを完全にしよう導く道などではない。この食い違いを見て、あなたはよく考えてみようとは思わないのか。そこに含まれる奥義をあなたに理解させることはないのか。あなたは、自分で自分を天に引き上げ、神に会わせることができるのか。神が来なくても、あなたは自らを天に引き上げ、神と共に家族の幸福を楽しむことができるのか。あなたはいまだに夢を見ているのか。それなら、わたしは勧める。夢を見るのを止めよ。今働いているのが誰かを見よ。今、終わりの日に人を救う働きをしているのが誰かを見よ。そうしなければ、あなたが真理を得ることは決してなく、いのちを得ることも決してない。

キリストが語る真理に頼ることなくいのちを得たいと望む者は、地上で最も愚かな者であり、キリストがもたらすいのちの道を受け入れない者は、幻想の世界で迷子になった者である。ゆえにわたしは、終わりの日のキリストを受け入れない者は神から永遠に嫌われると言う。キリストは、人が終わりの日に神の国へと入る門であり、それを迂回できる者は誰一人いない。キリストを通してでなければ、誰も神によって完全にされることはない。あなたは神を信じているのだから、神の言葉を受け入れ、神の道に従わなければならない。真理を受け取ることも、いのちの施しを受け入れることもできないのに、祝福を得ることだけを考えることはできない。キリストは、自身を真に信じる者にいのちを施せるよう、終わりの日に来る。その働きは、古い時代を終わらせ新しい時代に入るためのもので、新しい時代に入る人が必ず進まなければならない道である。キリストを認められず、非難したり、冒涇したり、さらには迫害したりするなら、あなたは永遠に火で焼かれなければならない、神の国には決して入れない。このキリストこそが聖霊の顕現であり、神の顕現であり、神が地上での働きを託した者だからである。したがって、終わりの日のキリストによってなされる一切のことを受け入れられないなら、あなたは聖霊を冒涇しているとわたしは言う。聖霊を冒涇する者が受ける報いは、誰の目にも自明である。これもあなたに言うが、あなたが終わりの日のキリストに抵抗し、終わりの日のキリストを足蹴にするなら、その結末をあなたに代わって引き受ける人は誰もいない。さらに、これから先、あなたが神に認めてもらう機会はない。たとえ

自らの罪を贖おうとしても、あなたが神の顔を拝することは二度とない。なぜなら、あなたが抵抗したのは人ではなく、あなたが足蹴にしたのは卑小な存在ではなく、他でもないキリストだからである。あなたはその結末がどのようなものか知っているのか。あなたが犯すのは小さな過ちではなく、重罪である。だから、わたしはすべての人に忠告する。真理の前に牙をむき出したり、軽率に批判したりしてはいけない。あなたにいのちをもたらせるのは真理以外になく、あなたが生まれ変わり、再び神の顔を仰げるようにするものは、真理以外にはないからである。

脚注

a. 「一片の枯れ木」とは、中国語の慣用句で、「救いがたい」という意味である。

終着点のために十分な善行を積みなさい

わたしはあなたがたのもとで多くの働きを行い、また当然ながら相当数の言葉を発してきた。しかし、わたしの言葉や働きは、終わりの日の働きの目的を完全に達成していないと感じないではいられない。終わりの日には、わたしの働きは特定の人のためではなく、わたしの本来の性質を明示するためだからである。しかし、無数の理由から、おそらく時間が足りないとか仕事に忙殺されているなどの理由で、人はわたしの性質からわたしについて何か知るようにはならなかった。ゆえに、わたしは新しい計画、最後の働きに着手し、働きにおける新しいページを開く。それにより、わたしを見る人はみな、わたしの存在ゆえに胸をたたいて、とめどなく泣くことになる。それは、わたしがこの世に人類の最後をもたらし、その時から、わたしの性質をすべて人類の前にあらわにするからである。そうして、わたしを知る人みな、そしてわたしを知らない人もみな、その目を喜ばせ、確かにわたしが人間の世界に、全てのものが増える地上に来たことを知るのである。これがわたしの計画であり、人類の創造以来の唯一のわたしの「告白」である。あなたがたは、わたしの一挙一動を集中して見守るように。わたしの杖が再び人類に向けて、わたしに敵対する者すべてに向けて迫りつつあるからである。

天と共に、わたしはすべき働きを始める。そのため、わたしは人々の流れの中を縫うように進み、天と地の間を行き来する。だれもわたしの動きを察知せず、わたしの言葉に気づかない。ゆえに、わたしの計画は依然として順調に進んでいる。あなたがたの感覚があまりにも麻痺してしまったため、わたしの働きの段取りにあなたがたは少しも気づかないだけである。しかし、いつの日か必ず、あなたがたはわたしの意図を理解する。今日、わたしはあなたがたと共に生き、共に苦しみ、随分前から人間のわたしに対

する態度を理解するようになっている。このことについてはこれ以上話すことは望まず、ましてやこの辛い話題の事例をさらに挙げてあなたがたを辱めたくない。わたしの唯一の願いは、あなたがたが行なったことすべてを心の内に留め、再会した日にはそのひとつひとつを数え上げることができるようにすることである。わたしはあなたがたの誰にも濡れ衣を着せたくない。わたしは常に正しく、公正に、りっぱに行動してきたからである。もちろん、あなたがたも誠実であり、天と地、また良心に逆らうようなことを何一つしないこともわたしは願っている。これがわたしがあなたがたに求める唯一のことである。多くの人は自分が甚だしい過ちを犯したので心が落ち着かず、またたった一つの善行すらしてこなかったので自分を恥じている。しかし、自分の罪を恥ずかしいとは全く思わず、ますます悪くなる者も多く、まだ完全に暴露されていない自分の醜い顔の覆いを完全に引き剥がし、わたしの性質を試そうとする。わたしは誰かの行動を気にすることも注意深く見ることもない。むしろ、情報収集であれ、地上を動き回ることであれ、関心のあることを行なうことであれ、わたしはすべき働きをする。大切な時には、一秒も遅れることも早まることもなく、落ち着いて迅速に当初の計画通りに人間のもとで働きを進める。しかし、わたしの働きの各過程で、捨て去られる人もいる。わたしは彼らがへつらうようなやり方や、見せかけの卑屈さを嫌悪するからである。わたしが忌み嫌う者は、意図的であろうがなかろうが確実に捨てられる。つまり、わたしが嫌悪する全ての者がわたしのもとから遠く離れていることを望んでいる。言うまでもなく、わたしの家に留まっている邪悪な者を見逃すことはない。人が懲罰を受ける日が近いので、卑劣な魂を全てわたしの家から急いで追い出そうとは思わない。なぜなら、わたしにはわたしの計画があるからである。

今こそ、わたしが一人一人の終わりを決めるときであり、人間への働きを開始する段階ではない。一人一人の言動、わたしに従うためにたどった道、生来の属性や最終的にどのようにふるまったかをわたしは記録帳に一つずつ書き留める。こうすることで、どのような人であってもわたしの手から逃れることはなく、みながわたしが定めるように同類の人と共にいることになる。わたしは、一人一人の終着点を、年齢や年功、苦しみの量、とりわけ憐れみを誘う度合いではなく、真理を自分のものになっているかどうかに基づいて決める。これ以外の選択肢はない。神の旨に従わない人はみな懲罰されることをあなたがたは悟らなければならない。これは不変の事実である。よって、懲罰される者はみな神の義ゆえに、その数々の邪悪な行為への報いとして懲罰されるのである。計画を立てた当初から、わたしは計画を一切変更していない。人間に関する限り、わたし

が言葉を伝える対象は、わたしが本当に認める人と同様に、その数が減っているように見えるだけである。しかし、わたしの計画は決して変わっていないことを主張する。むしろ、常に変わったり、弱ったりしているのは人間の信仰と愛であり、そのため人はわたしにへつらっていたかと思うと、わたしに対して冷たくなったり、あげくにはわたしを捨てたりすることさえできてしまうほどである。あなたがたに対するわたしの態度は、うんざりして嫌悪感を抱くまでは熱くも冷たくもなく、最終的には懲罰を与えることとなる。しかし、懲罰の日、わたしは依然としてあなたがたを見るが、あなたがたはもはやわたしを見ることはできない。あなたがたと一緒に生活はわたしにとってすでに退屈でつまらないものとなっているため、言うまでもなく、違った生活の環境を選んだ。それはよりあなたがたの悪意に満ちた言葉による痛みを避け、あなたがたの耐え難く卑劣なふるまいを避け、あなたがたがもはやわたしを騙したりいい加減に扱ったりすることがないようにするためである。あなたがたから去る前に、わたしは真理に沿わないことをしないようにと依然として熱心に勧めなければならない。むしろ、あなたがたはすべての人が喜ぶようなこと、すべての人に益をもたらすこと、自分自身の終着点に益をもたらすことをするべきである。さもないと、災いの只中で苦しむのは、他ならぬあなた自身となる。

わたしの憐れみは、わたしを愛し、自分を否定する人に向けて現わされる。そして、邪悪な者にもたらされる懲罰はわたしの義なる性質の証明そのものであり、それ以上にわたしの怒りの証である。災いがやって来ると、わたしに反抗する者はみな飢饉や疫病に苛まれ、涙を流す。あらゆる悪事を犯してきたが、長年わたしに従って来た者でも罪の償いを免れることはできない。何百万年の時を通して誰も目にしたことの無いような災いに陥り、絶えず恐怖と不安の中に生きることになる。そして、わたしだけに忠誠を示して従ってきた人は喜び、わたしの力に拍手喝采する。彼らは言葉に表せないほどの満足感を体験し、わたしが人類にいまだかつて与えたことの無いような喜びの中に生きる。わたしは人の善行を宝とし、悪行を忌み嫌うからである。わたしが初めて人類を導き始めたときから、わたしと心を同じとする人の集まりを獲得することを熱望してきた。わたしと同じ心を持たない人については、わたしは決して忘れない。彼らに報いを与え、その様子を楽しみながら眺める機会を待ち望みながら、彼らに心の中で憎み続ける。今日、遂にその日を迎え、もはや待つ必要はない。

わたしの最後の仕事は人を懲罰するためだけではなく、人の終着点を決めるためでもある。さらに、わたしのすべての業と行ないをあらゆる人が認識するためである。わた

しは一人一人にわたしが行なってきたことは全て正しく、わたしの行なってきたことは全てわたしの性質の表現であることを知って欲しいと思っている。人類を生み出したのは人の行いではなく、とりわけ大自然の行いではなく、創造世界のあらゆる生けるものを育むのはわたしである。わたしの存在なしには、人類は滅びる他なく、酷い災難を経験するだけである。人間はだれであろうとも麗しい太陽や月、緑にあふれる世界を再び見ることはない。人類は極寒の夜や、避けられない死の影の谷に遭遇するだけである。わたしは人類の唯一の救いである。わたしは人類の唯一の望みであり、さらに、わたしは全人類がその存在を託すその者である。わたしがいなくては、人類はすぐに停滞してしまう。わたしがいなくては、たとえだれもわたしに注意していなくても、人類は壊滅的被害を受け、あらゆる亡霊に踏みつけられる。わたしは誰にもできない働きを行ない、人間が何らかの善行によりわたしに報いることを望むだけである。わたしに報いることができた人は僅かだが、それでもわたしは人間界での旅を終え、わたしの展開を続ける働きの次の段階を始める。なぜなら、わたしが長年人間のもとを行き来してきたことは実を結び、わたしは極めて喜ばしく思っているからである。わたしが気にするのは人の数ではなく、むしろ彼らの善行である。いずれにしても、わたしはあなたがたが自分の終着点のために十分な善行を積むよう望む。そうすれば、わたしはどれほど満足することか。さもなければ、あなたがたの誰も自分に降りかかる災いを免れることはできない。災いはわたしを起源とし、もちろんわたしが采配を振る。もしあなたがたがわたしの目に良いと映ることができなければ、災いの苦しみから免れることはない。患難の中にあっては、あなたがたのふるまいも行いも完全には適切とはされなかった。あなたがたの信仰と愛はうわべだけで、あなたがたは自分たちの臆病さか屈強さしか示さなかったからである。これに関しては、わたしは良いか悪いかの評価のみをする。わたしの関心は引き続きあなたがた一人一人の行動と自己表現の仕方であり、それに基づいてわたしはあなたがたの終着点を決定する。しかし、わたしには明白にしなければならないことがある。すなわち、患難の時にわたしに全く忠誠を示さなかった者にわたしはもはや憐れみは与えない。わたしの憐れみはそこまでしか届かないからである。さらに、わたしは、かつてわたしを裏切った者は誰も好まず、ましてや友の利害を裏切る者と係ることを望まない。それが誰であれ、これがわたしの性質である。あなたがたに伝えなければならないことがある。つまり、わたしを悲しませる者は誰であれ、再びわたしから寛容な扱いを受けることはなく、これまでわたしに忠実であった者はとこしえにわたしの心に留まるのである。

あなたは誰に忠実なのか

現在、あなたがたが過ごしている日々は決定的である。それはあなたがたの終着点と運命にとってこの上なく重要である。そのため、今日もっているものすべてを大切に、過ぎゆく一瞬一瞬を大切にしなければならない。この生涯を無駄に生きたことにならないように、可能な限りの時間を作り出し、最大の成果を獲得できるようにしなければならない。なぜわたしがこのようなことを言うのか、あなたがたは困惑しているかもしれない。率直に言うと、わたしはあなたがたのうちの誰の振る舞いにも全然喜んでいない。わたしがあなたがたについて抱いた望みは、現在のあなたがたの有り様ではなかったからである。そのため、こう言うことができる。あなたがた一人ひとりは危機に瀕しており、あなたがたの助けを求めたかつての叫び、真理を追求し光を求めた以前の強い願望は終わりに近づいている。これはあなたがたが最後に表す報いであり、わたしがまったく期待していなかったものである。わたしは事実とは異なることを話したくない。というのは、あなたがたがわたしを大いに落胆させたからである。おそらく、あなたがたはこれをそのまま黙って受け入れたくないし、現実と向かい合いたくもないのであろう。しかしわたしは真剣にあなたがたに尋ねなければならない。この数年間、あなたがたの心は一体何で満たされていたのか。あなたがたの心は誰に忠実なのか。これらを唐突な質問と言ってはならない。なぜこのようなことを尋ねるのか、とわたしに聞いてはならない。心得なさい。あなたがたをよく知り過ぎ、あなたがたのことを思い過ぎ、あなたがたの振る舞いと行動に心を砕き過ぎたために、わたしはあなたがたに申し開きをするように止むことなく求め、苦い困難に耐えたのである。しかし、あなたがたはわたしに無関心と耐えがたいあきらめでしか報いない。あなたがたはわたしに対してこんなに怠惰である。わたしがこれを一切知らないことなどありえるだろうか。そう信じているなら、それはあなたがたがわたしに心からやさしく接しないという事実のさらなる証拠である。だからわたしは、あなたがたは自己欺瞞に陥っている、と言うのである。あなたがたは皆とても賢いので自分がしていることさえ知らない。それでは、あなたがたは何を用いてわたしに申し開きをするつもりなのか。

わたしが最も関心を寄せている問題は、あなたがたの心は一体誰に忠実なのかということである。あなたがた一人ひとりが自分の考えを整理して、自分は誰に忠実なのか、誰のために生きているのか、と自問することもわたしは望んでいる。おそらく、あなたがたはこの問題を熟考したことはないであろうから、わたしが答えをあなたがたに明らかにしてはどうだろうか。

記憶がある人なら誰でも、人間は自分のために生き、自分自身に忠実であるという事実を認める。あなたがたの答えが完全に正しいとはわたしは思わない。あなたがたは一人ひとりがそれぞれの生活において存在し、それぞれの苦しみと格闘しているからである。それで、あなたがたは自分が愛する人々や自分の気に入るものに忠実なのである。あなたがたは自分自身に全面的に忠実ではない。一人ひとりが周囲の人や出来事や物に影響されるので、あなたがたは自分自身に真に忠実ではないのである。わたしがこのように言うのは自分に忠実であることを是認するためではなく、あなたがたの何か一つのことへの忠実をさらけだすためである。長年にわたり、わたしはあなたがたのうちの誰からも忠実を受けたことがない。あなたがたは何年もの間わたしに従ってきたものの、忠実の片鱗さえわたしに示したことはない。そのかわりに、自分が愛する人々や自分の気に入るものの周りを回ってきただけである。そうするあまりに、いつでも、どこへ行こうとも、あなたがたはこれらを心に留め、見捨てたことはない。あなたがたが自分の愛する何か一つのことに関心になったり情熱的になったりするのには、必ずわたしに従っているときや、さらにはわたしの言葉に耳を傾けているときである。それゆえ、わたしがあなたがたに求める忠実を、あなたがたは「愛玩物」に忠実であり、それを可愛がるために代わりに使っている、とわたしは言うのである。あなたがたはわたしのために犠牲の一つや二つ払うかもしれないが、それはあなたがたのすべてを表しておらず、あなたがたが本当に忠実なのはわたしであると示してもいない。あなたがたは自分が情熱を感じる活動に関わる。息子や娘に忠実な人もいれば、夫や妻、富や仕事、上司、地位、女性に忠実な人もいる。自分が忠実なことについては、うんざり感じたり悩まされたりすることは決してない。それどころか、そういうものをさらに大量に、さらに高品質のものを所有することにますます熱心になり、決してあきらめない。わたしとわたしの言葉は、あなたがたの情熱の対象の後ろに押しやられる。それらは最下位に置かれるより他にない。この最下位をこれから発見し、忠実になるもののために空けておく人さえいる。そのような人の心の中にわたしの形跡がわずかでもあったことはない。わたしがあなたがたに求め過ぎるとか、あなたがたを不当に非難しているとか、あなたがたは思うかもしれない。しかし、あなたがたが家族と幸せなひと時を過ごしているあいだに、わたしに忠実であったことは一度としてなかったという事実を少しでも考えたことがあるだろうか。そのような時にあなたがたは痛みを感じないのか。心が喜びで満たされるとき、労働の報いを受けるとき、あなたがたは自分には十分な真理が備わっていないことに失望しないのか。わたしの承認を受けられなかったためにあなたがたはいつ泣いたのか。あなたがたは自分の息子や娘のために知恵を絞り苦心するが、それでも満足しない

。彼らのためにはまだ十分に勤勉ではない、彼らのためにできる限りのことをしていないと信じる。しかし、わたしに対しては、あなたがたはいつも怠惰で不注意であった。わたしはあなたがたの記憶の中にいるだけで、心の中に長く留まることはない。わたしの献身と努力をあなたがたが感じることは永遠になく、その価値を深く感じたことはない。少しのあいだ考えるだけで、それで十分だと信じる。このような「忠実」はわたしが長いあいだ切望してきたものではなく、長いあいだ嫌悪してきたものである。それにもかかわらず、わたしが何を言おうと、あなたがたは相変わらず一つ二つのことを認めるだけで、全面的に受け入れることはできない。あなたがたは皆とても「自信」があり、わたしが語った言葉から何を受け入れるかを常に関心するからである。もしあなたがたが現在もこのままであるならば、わたしにはあなたがたの自信を取り扱う方法が幾つかある。さらに、わたしの言葉はすべて真実であり、どれも事実を歪曲していないことをあなたがたに認めさせる。

もし今わたしがあなたがたの前に現金を置いて選択の自由を与えたならば、そしてその選択を理由にあなたがたを非難しないならば、あなたがたのほとんどが現金を選び、真理を放棄するであろう。あなたがたのうち優秀な人は現金をあきらめ、しぶしぶ真理を選ぶ。一方、中間の人は片手に現金をつかみ、もう片手に真理をつかむ。あなたがたの真の姿がこのように明らかになるのではないだろうか。真理と自分の忠実の対象のどちらかを選ぶとき、あなたがたは皆このような選択をするが、あなたがたの態度に変化はない。そうではないだろうか。あなたがたのうちには正誤のあいだを揺れ動いた人が多くいるのではないのか。是と非、黒と白の対立において、家族か神か、子どもか神か、平和か分裂か、富か貧困か、地位か平凡か、支持されるか捨てられるかなどについて、あなたがたは自分がした選択を知っているはずである。平和な家族と崩壊した家族では、あなたがたは前者を選び、躊躇することなくそのように選択した。富と本分でも、岸辺に戻る^[a]覚悟さえないまま再び前者を選んだ。贅沢と貧困でも前者を選んだ。息子、娘、妻、夫とわたしでも前者を選び、観念と真理でも再び前者を選んだ。あなたがたのありとあらゆる邪悪な行いに直面して、わたしはあなたがたへの信頼を完全に失った。あなたがたの心が柔和にされることにここまで抵抗するとは、わたしはただただ驚く。長年の献身と努力は明らかにあなたがたの放棄と絶望しかわたしにもたらさなかった。しかし、あなたがたへのわたしの希望は日ごとに大きくなる。わたしの日はすべての人の面前に完全にさらけ出されているからである。それなのに、あなたがたは暗く邪悪なものを求めることに固執し、それを手離すことを拒否する。それでは、あなたがたの

行く末はどうなるのか。あなたがたはこのことを注意深く考えたことがあるのか。もし再び選択するように言われたならば、あなたがたはどういう立場を取るのか。やはり前者を選ぶのか。やはりあなたがたは失望と痛ましい悲しみをわたしにもたらすのであろうか。やはりあなたがたの心には温かさはわずかしかなないのであろうか。やはりあなたがたはわたしの心を慰めるために何をするべきか気づかないのであろうか。この時点であなたがたは何を選ぶのか。わたしの言葉に従うのか、あるいはうんざりするのか。わたしの日はあなたがたのまさに目の前にさらけ出されており、あなたがたが直面しているのは新しい生活と新しい出発点である。しかし、この出発点は過ぎ去った新しい働きの始まりではなく、古いものの終結であることをあなたがたに告げなければならない。すなわち、これは最後的一幕なのである。この出発点について、何が尋常でないかをあなたがたは皆理解できるとわたしは考える。しかし、そう遠くないある日には、あなたがたはこの出発点の真の意味を理解する。だから一緒にそこを通過して進み、最終幕を迎え入れよう。しかし、あなたがたに関してわたしが懸念を抱き続けるのは、不正義と正義に直面するとあなたがたは必ず前者を選ぶことである。しかし、それはすべて過去のことである。わたしも、あなたがたの過去についてはすべて忘れることを望んでいるが、それはとても困難である。それでも、そうするのにとてもよい方法がある。未来と過去を入れ替え、あなたがたの過去の影を一掃させ、現在の真のあなたがた自身と取り替えるのである。そのためには、わたしはあなたがたを煩わせて再度選択を迫らなければならない。あなたがたはいったい誰に忠実なのか。

脚注

a. 「岸边に戻る」とは中国語の慣用句で、「悪の道から離れる」という意味。

終着点について

終着点の話になると、いつもあなたがたは話をとりわけ真剣に受け止める。さらに、それはあなたがた全員が特に敏感になるのである。好ましい終着点を得るために、地面に頭を打ち付けて神にひれ伏さずにはいられない人たちもいる。あなたがたが切望する気持ちはわたしにも理解でき、それを言葉で表すことは不要である。あなたがたは自分の肉が災いに陥ることは望まないということではしかないが、それでも永遠に続く罰を将来受けたくはないということである。あなたがたはもう少し自由に、もう少し気楽に生きただけである。それゆえ、終着点の話になると、あなたがたはことさら動揺し、十分注意しないと神の怒りを買ひ、ゆえに然るべき報いを受けるかもしれないと深く恐れる

。あなたがたは自分の終着点のためであれば、躊躇なく妥協してきた。また、あなたがたのうちかつて不従順で軽薄であった多くの人が突然極めて優しく素直になり、その素直さは他の人たちに寒気を起こさせる程である。しかし、あなたがたには皆「素直な」心があり、不満であれ虚偽であれ、忠実心であれ、何ら隠しだてすることなく心のうちにある秘密をわたしに絶えず打ち明けてきた。要するに、あなたがたは本質的な本性の奥にあるそのような事柄を極めて腹藏なくわたしに「告白」してきた。もちろん、わたしはそうした事を回避したことはない。なぜなら、それはわたしにはとても普通の事となったからである。あなたがたは毛髪を一束失うほどの心労の末に神の承認を得るよりも、むしろ終着点のために火の海に飛び込むほうが良いと考えているであろう。わたしがあなたがたに対して教条主義的すぎるということではなく、あなたがたの忠実心はわたしの行うあらゆることに正面から対峙するにはあまりに乏しいということである。わたしがたった今言ったことを理解できないかも知れないので、簡単に説明する。あなたがたが必要としているのは真理といのちではなく、行動原理でもなく、いわんやわたしが骨折って行う働きでもない。あなたがたが必要としているのは、富や地位、家族、結婚など、すべて肉において持っている物事である。あなたがたはわたしの言葉や働きを完全に軽視しているので、あなたがたの信仰をひとことで概括できる。それは「おざなり」である。あなたがたは自分が絶対的に専心しているものを達成するためなら何もいとうことはない。しかし、神への信仰に関する事のために同様にはしないであろうことをわたしは知った。むしろ、あなたがたは比較的に忠実で比較的に真剣なだけである。最大限に誠実な心のない者は神への信仰における失敗であるとわたしが言うのはこのためである。よく考えなさい。あなたがたのうちに失敗は多くあるのか。

神への信仰における成功は人の独自の行動の結果として達成されるということを知らなければならない。人が成功せずに失敗するのもまた、本人の行動が原因であり、他の要素には一切の影響はない。神を信じるよりも困難で苦勞を伴う事柄を成し遂げるためなら、あなたがたは何でもするであろうし、それを極めて真剣に扱うであろうと思う。それゆえに過ちを許容することさえも嫌うであろう。これがあなたがた全員が自分の人生に注ぎ込んできた絶え間ない努力である。あなたがたは自分の家族であれば欺いたりしないであろう状況において、肉にあるわたしを欺くことすらできる。これがあなたがたの一貫した振る舞いであり、あなたがたが生きる原則である。あなたがたはわたしを騙し、完璧に美しく望み通りの終着点を得るために、依然として偽りの姿を表出しているのではないのか。あなたがたの忠実心は、あなたがたの誠実さと同様に、一時的なも

のでしかないことにわたしは気付いている。あなたがたの志とあなたがたが支払う代償は現在のためだけであり、将来のためではないのではないのか。あなたがたは美しい終着点を確保するために、最後に一つの努力をしたいだけである。あなたがたの唯一の目的は取り引きをすることである。真理に対する負債を抱えないようにするためにこの努力をするのではなく、わたしが支払った代償を償還するためなどであるはずがない。つまり、自分の欲しいものを得るために利口な戦略を用いる用意があるだけで、そのために戦う覚悟はない。それがあなたがたの心からの願いではなかろうか。あなたがたは自分自身を隠してはならず、自分の終着点についてのために食事や睡眠ができなくなるほど頭脳を苦しめてはならない。最後にはあなたがたの結末は既に決まっているというのが本当ではないのか。あなたがたは開かれた正直な心でもってできる限り自分の本分を尽くし、必要な代償であれば何でも払う覚悟をしなければならない。あなたがたが述べた通り、その日が来た時、神のために苦難を受けて代償を払った者を神がいい加減に扱うようなことは決してない。このような信念は保つ価値のあるものであり、決して忘れないことは正しい。このような方法でなければ、あなたがたに関してわたしの気が安まることはない。さもないと、あなたがたは永遠にわたしの気が安まることのない人たちとなり、あなたがたは永遠にわたしの嫌悪の対象となる。あなたがた全員が自らの良心に従い、わたしのために自己のすべてを与え、わたしの働きのために努力をいとわず、わたしの福音の働きに一生涯分の精力を捧げるならば、わたしの心はあなたがたのためにいつも歓喜して飛び跳ねるのではないのか。そのように、あなたがたに関してわたしは心をすっかり安らげることができるのではないのか。あなたがたにできるのは、わたしが期待する事のうちごくごく僅かでしかないことは残念である。それならば、あなたがたはどうして厚かましくも自分が望むことをわたしに求めることができるのか。

あなたがたの終着点と運命は、あなたがたにとって極めて重要であり、由々しき懸念である。十分注意して物事を行わなければ、終着点がなくなり、自分で自分の運命を破滅させたことになる。あなたがたは考えている。しかし、自分の終着点のためだけに努力する人は空しい努力をしていることに気が付いたことがあるのか。そのような努力は本物ではなく、虚偽である。その場合、自分の終着点のためだけに努力する人は、今にも最終的な失敗をする極みにいる。なぜならば、神への信仰における失敗は偽りに起因するからである。わたしは媚びへつらわれたり、熱狂的に扱われるのを好まないと前に述べた。わたしの真理や期待と向き合う正直な人をわたしは好む。それ以上に、わたしの心に最大の思いやりと配慮を示し、わたしのために人が何もかも捨て去ることができる

ることを好む。わたしの心が慰められるのは、この方法のみによる。今、あなたがたに関してわたしが嫌いなことはいくつあるのか。今、あなたがたに関してわたしが好むことはいくつあるのか。あなたがたが自分の終着点のために表明したあらゆる醜悪さに、あなたがたの誰も気付いていないということがありえるのか。

わたしの心の中では、肯定的かつ上向きの大志をもつ心に苦痛を与えることを望まず、またとりわけ忠実に自分の本分を尽くしている者の勢力を減衰させることを望まない。しかし、それでもなお、あなたがたの不足や心の一番奥にある汚れた魂をあなたがた一人ひとりに思い起こさせなければならない。そうするのは、あなたがたがわたしの言葉に対峙するときに真の心を捧げられることを望むゆえである。なぜなら、人間のわたしに対する欺きをわたしは最も嫌悪するからである。働きの最終段階において、わたしが望む唯一のことは、あなたがたが最高の成果を披露でき、自己を完全に献身し、もはや半信半疑ではなくなることである。もちろん、あなたがた全員が好ましい終着点を得ることもわたしは望んでいる。それでもなお、わたしには要求がある。それは、あなたがたがわたしにあなたがたの唯一で最終的な献身をすることで最善の決断を下すことである。もし誰かにその唯一の献身がないならば、その人がサタンの大切な所有物であることは確実であり、わたしがその人を用いるために確保することはもはやなく、その人を家に帰し、その両親に世話をさせる。わたしの働きはあなたがたにとって大いなる助けである。わたしがあなたがたから得ることを望むのは、正直で上昇志向の心であるが、いまのところわたしの手は空のままである。考えてみなさい。もし将来、わたしが依然として言い尽くせないほどの悲痛な思いをしているとしたら、あなたがたに対するわたしの態度はどのようなものとなるであろうか。今と同じくらいあなたがたに愛想よくするであろうか。わたしの心は現在と同様に安らかであろうか。骨折って畑を耕したが一粒も収穫を得なかった者の気持ちがあなたがたにわかるだろうか。強い衝撃を受けた者の心がどれほどひどく傷ついているかわかるだろうか。かつてはあれほど希望に満ちていたのに誰かと仲たがいで訣別せねばならない者の苦渋を感じることができるだろうか。挑発された者から放たれる怒りを目にしたことがあるだろうか。敵意と欺きをもって扱われた者の復讐を切望する気持ちを理解することができるのか。そうした者の心性がわかるならば、神の報復の時の態度を想像するのは困難ではないはずである。最後に、あなたがた全員が自分の終着点のため真剣に努力することを望むが、努力には虚偽的な方法を用いるべきではない。さもなければ、あなたがたにわたしの心は落胆し続けることになる。そして、そのような落胆は何につながるか。あなたがたは自分をごまか

しているのではないのか。自分の終着点のことを心配しつつそれを破滅させるのは、最も救いがたい人間である。たとえそのような者が憤慨し怒ったとしても、誰が同情するであろうか。とにかく、わたしは依然としてあなたがたが適切かつ良好な終着点を得ることを願っており、それにもまして、あなたがたのうち誰一人として災いに陥らないことを願っている。

三つの訓戒

神を信仰する者は、万事において他ならぬ神に忠実でなければならず、万事において神の意図に従えなければならない。誰しもがこの教えを理解している。しかし、無知、愚かさ、墮落といった人間のさまざまな問題ゆえに、これらの真理は何よりも明白であり基本的なものであるにもかかわらず、完全には実行されていない。そのため、あなたがたの結末が確定する前に、まずはあなたがたにとって最も重要なことをいくつか伝えなければならない。話を続ける前に、あなたがたはまず次のことを理解しておかなければならない。わたしが話すことは全人類に向けた真理である。それは特定の人物やある種の人物だけに向けたものではない。だからこそ、あなたがたはわたしの言葉を真理の視点から理解することに専念し、真摯に集中して耳を傾けなければならない。わたしの話す言葉や真理はどれ一つとして無視してはならず、わたしの言葉はどれも軽く扱ってはならない。あなたがたが生活において、真理に無関係なことを数多く行なってきたことをわたしは知っている。そこでわたしはあなたがたに特に求めたい。それは、真理のしもべとなり、邪悪さや醜さの奴隷になることなく、真理を蹂躪したり、神の家のどの一角をも汚したりしないということである。これは、わたしからあなたがたへの戒めである。それでは、話を始めよう。

一つ目に、あなたがたは自らの運命のために神の承認を求めなければならない。つまり、自らが神の家の一員であることを認識している以上、あなたがたは神に心の平安をもたらさなければならず、万事において神を満足させなければならない。言い換えると、あなたがたは行いにおいて原則にかなっており、かつ真理と一致しなければならないということである。それを実行できなければ、あなたは神に嫌い捨てられ、あらゆる人々から拒絶される。ひとたびそのような窮状に陥れば、あなたは神の家の一員ではなくなる。それはまさしく、神に承認されていないことを意味する。

二つ目に、あなたがたは神が誠実な人を好むことを知らなければならない。実質的に神は誠実であり、神の言葉は常に信頼できる。それだけでなく、神の行動は完璧で疑う

余地がない。だからこそ神は、神に対して絶対的に誠実な人を好むのである。誠実であるということは、自らの心を神に捧げること、万事において神に真実であること、万事において神に隠し立てしないこと、事実を隠さないこと、立場の上および下の人を欺こうとしないこと、神にこびへつらうためだけに行動しないことを意味する。要するに、言動において純粹であり、神も人も欺かないということである。極めて単純な話だが、あなたがたにとっては多大な努力を要することだろう。多くの人々は誠実な言動を保つよりもむしろ地獄へ落ちるのを好む。不誠実な人のためにわたしが別の扱いを用意しているのも不思議ではない。もちろん、あなたがたにとって誠実であることがどれだけ難しいかは十分に分かっている。あなたがたは皆、とても賢く、自身のつまらない物差しで人々を測ることに非常に長けているので、わたしの働きは、ごく単純なものとなる。あなたがたはそれぞれに秘密を胸に抱えている。だからこそわたしはあなたがたを一人ずつ惨事に遭わせ、火をもって「教え」を受けさせる。そうすると、その後あなたがたはわたしの言葉を完全に信じられるようになる。そして最後には、あなたがたに「神は誠実だ」と言わせ、そのときあなたがたは「人間の心はよこしまだ」と感情を爆発させ、嘆き悲しむことになる。そうなれば、あなたがたはどんな精神状態になっているだろうか。おそらく、今のように勝ち誇っていないだろう。ましてや今のように「深遠かつ難解」でもない。神の面前ではとりすまして真面目にする者もいて、何とか「行儀よく」しようとするが、霊の面前では牙をむき、爪を振りかざしている。そういった人を誠実とみなすだろうか。あなたが偽善者で、「対人関係」を心得ているなら、あなたは間違いなく神をぞんざいに扱おうとしている人であるとわたしは言う。あなたの言葉が言い訳や取るに足らない弁明ばかりなら、あなたは真理を実践したとらない人であるとわたしは言う。共有するのを躊躇するような秘密を数多く持っているなら、自分の秘密、つまり自分自身の困難を光の道を求めるために他者の前に明かすのがどうしても嫌だというなら、あなたは簡単には救いを得られない人であり、暗闇から簡単には脱せない人であるとわたしは言う。真理の道を求めることで喜びを感じるのであれば、あなたは常に光の中で暮らす人である。神の家において効力者であることに心から満足し、誰に知られずとも熱心かつ誠実に働き、常に与え、何も得ようとしないのであれば、あなたは誠実な聖徒であるとわたしは言う。なぜなら、見返りを求めずに、ただ誠実であるからである。あなたが正直であろうとするなら、自らをすべて費やそうとするなら、神のために命を捧げて固い証しを立てられるなら、自身のことばかりを考えたり顧みたりせずに、神を満足させることしか知らないほどに誠実であるなら、このような人は光の中で育まれ、神の国で永遠に暮らすことができるとわたしは言う。真の信仰と真の忠誠心が

あなたの中にあるかどうか、神のために苦しんだ経験があるかどうか、そして神に完全に従ってきたかどうかを、あなたは知っているはずである。それらに欠けるのであれば、あなたの中には従順ではない心、偽り、欲、不満が残っている。心が誠実とはかけ離れているために、神から肯定的に認められたことがなく、光の中で暮らしたこともない。人の運命の結末は、誠実で血の通った心を持っているかどうか、純粋な魂を持っているかどうかにかかっている。極めて不誠実で、邪悪な心を持ち、汚れた魂を持っている人は、その人の運命に刻まれているとおりに、罰せられるところに最後は必ずたどり着く。自分はとても誠実であると主張しながらも、真理に従った行動をとれず、真実の言葉を口にできないのに、あなたはまだ神からの見返りを待っているのか。神にひとみのように大切な存在だと見なされることを、まだ望んでいるのか。そのような考えは本末転倒ではないか。あなたは万事において神を欺いている。では、そのような汚れた手を持つ人を神の家がどうして受け入れることができるのか。

あなたがたに伝えたい三番目のことは次のとおりである。神を信仰しつつ生きていく過程で、誰もが神に抵抗し欺く行為をしたことがある。背きとして記録する必要のない悪事もあるが、許されないものもある。行政命令を破る行いが多くあり、それらは神の性質に背くものだからである。自身の運命を心配する人の多くは、そのような行為は何であるか尋ねるかもしれない。あなたがたは自身の本性が尊大かつ傲慢で、事実に従いたがらないことを知らなければならない。この理由から、あなたがたがよく自省した後に、わたしはあなたがたに少しずつ伝えていく。あなたがたには、行政命令の内容をより良く理解し、神の性質を知る努力をすることを強く勧める。そうしなければ、あなたがたは口を閉じていられずに、はばかりことなく大げさな言葉を使って好き勝手な話をする。そして無意識のうちに神の性質に背いて暗闇に落ち、聖霊と光の存在を失ってしまう。行動が原則にかなっていないために、すべきでないことをして言うべきでないことを言うために、あなたは相応の報いを受ける。あなたの言動が原則にかなっていても、神の言動は極めて原則にかなっていることを知らなければならない。あなたが報いを受ける理由は、あなたが人ではなく神に背いたからである。生涯のうちに神の性質に何度も背くなら、あなたは地獄の子になる運命にある。人から見れば、数回しか真理に反する行動を取っておらず、ただそれだけのことのように思えるかもしれない。しかし神から見れば、あなたはすでにそのために捧げる燔祭さえ、もはやない人であることに気づいているのか。神の行政命令を数回破ったうえに、後悔の兆候を一切見せないのだから、神が人を懲罰する地獄に落ちる以外にあなたに手段はないのである。一握りの

人が、神に従いながらも原則を破る行いをいくつか犯したものの、取り扱われて導かれた後、次第に自身の墮落に気づいた。そしてその後は現実の正しい道に入り、今日もしっかりと地に足をつけている。そのような人が最後に残る人である。それでもなお、わたしが求めるのは正直な人である。あなたが正直な人で、原則に沿った行いをするなら、あなたは神に全幅の信頼を寄せられる人になれる。行動において神の性質に背かず、神の心意を求め、神に畏敬の念を持つ心があるなら、あなたの信仰は基準に達している。神を畏れず、畏敬の念から震える心がない人は皆、神の行政命令をほぼ確実に破る。多くの人が自身の情熱の力で神に仕えているが、神の行政命令を理解していないばかりか、神の言葉がほのめかしている意味を少しも感じていない。そのため、しばしば善意から神の経営を妨害するような行いをしてしまう。深刻な場合、このような人は追い出され、神に従うさらなる機会を奪われ、地獄に落とされ、神の家とのあらゆる関係を絶たれてしまう。そのような人は自らの無知な善意に任せて神の家で働くが、神の性質を怒らせて終わる。同じやり方がここでも容易に応用できるだろうという無駄な考えから、神の家でも役人や権力者に仕える方法を実践する。神は子羊ではなくライオンの性質を持っているということを全く想像していない。そのため、人が神と初めてかかわっても、神の心は人の心とは異なるために交流することができない。多くの真理を理解して初めて、あなたは次々に神のことを知るようになる。この認識は言葉や原理では構成されていないが、あなたが神との緊密な信頼関係を持つための手段となる宝として、神があなたを好む証拠として用いることができる。認識の現実性に欠け、真理を備えていないなら、あなたの情熱的な奉仕は神の憎しみと嫌悪しかもたらさない。神への信仰は単なる神学の勉強ではないことを今ではあなたも理解しているはずである。

わたしの戒めの言葉は簡潔だが、述べたことはすべてあなたがたに最も欠けているものである。わたしが今話すことは、人間のもとでのわたしの最後の働きのためであり、人の結末を決定するためであることを、あなたがたは知らなければならない。何の目的も達さない働きをすること、腐食した木材のように見込みのない人を導き続けること、ましてや、ひそかに悪意を抱く人を先導することなど、わたしは望まない。わたしの言葉の背景にある真剣な意図と、人類へのわたしの貢献を、おそらくいつの日かあなたがたは理解するであろう。おそらくいつの日か、あなたがたは自身の結末を決めることを可能にするこの言葉が伝えていることを理解するであろう。

過ちは人間を地獄へ導く

わたしはあなたがたに何度も警告し、あなたがたを征服するための真理を数多く与えてきた。現在、あなたがたはみな、以前よりもはるかに豊かであると感じ、人間のあるべき姿の原則を多数理解し、誠実な人がもつべき常識を多数備えるようになってきた。そのすべてが、あなたがたが長年かけて得てきた収穫である。あなたがたの成果は否定しないが、その長い年月において、あなたがたがわたしに対して犯してきた数々の反抗や反逆もまた否定しないと、率直に述べる必要がある。なぜなら、あなたがたのなかに聖人は一人もいないからである。あなたがたは例外なくサタンによって墮落させられた人間であり、キリストの敵である。現在に至るまで、あなたがたは数え切れないほどの過ちと反抗を犯してきたので、わたしが自分の言ったことを絶えず繰り返しているのは、少しも奇妙なことではない。わたしはあなたがたとそのように共存したくないが、あなたがたの将来と終着点のため、ここでもう一度、すでに述べたことを繰り返す。あなたがたがわたしを満足させてくれること、そしてそれ以上に、わたしの発する一言一句を信じ、わたしの言葉の深い含意を推し量れるようになることを、わたしは願っている。わたしの話を疑ってはならず、ましてやわたしの言葉を好きなように取り上げ、勝手に放り投げてはならない。それは容赦できないことである。わたしの言葉を批判してはならず、ましてやそれらを軽々しく扱ったり、神は常に自分たちを試みているとか、さらには、神が語ったことは正しくないなどと言ってはならない。わたしはそれらも容赦できない。あなたがたがそのような疑念をもってわたしとわたしの話を扱い、わたしの言葉を一切認めず、わたしを無視するので、わたしはあなたがた一人ひとりに対して真剣に言う。わたしの話を哲学と関連づけたり、わたしの言葉をほら吹きや嘘と一緒にしたりしてはならない。ましてや、わたしの言葉に侮蔑をもって反応してはならない。おそらく、わたしがいま述べていることをあなたがたに伝えたり、かくも慈悲深く語ったりすることができる者は今後おらず、ましてやそれらの要点を辛抱強く説明できる者などいないだろう。あなたがたは良き時代を回想したり、むせび泣いたり、悲痛にうめいたりしつつ、今後の日々を過ごすだろう。あるいは、ひとかけらの真理やいのちの施しもないまま暗い夜を過ごしていたり、単に絶望して待っていたり、すべての理知を失うほど深く後悔しながら生きていたりするだろう……。こうした可能性から逃れられる者は、あなたがたの中に事実上存在しない。あなたがたのうち誰一人として神を真に崇拜する立場におらず、放縦と邪悪の世界に耽溺するとともに、いのちや真理と関係なく、実際にはそれらに反する無数の物事を、自分の信仰、霊、魂、そして肉体に採り入れるからである。そうしたわけで、わたしがあなたがたに望むのは、光の道へ導かれるようになることである。わたしの唯一の望みは、あなたがたが自分を思いやり、自分の面

倒を見られるようになること、そして自分の終着点に重点を置きすぎず、その一方で自分の行動や過ちに無関心でないことである。

長年にわたり神を信じている者はみな美しい終着点を心から望んでおり、神を信じるすべての者は幸運が突然自分に訪れることを望んでいる。また知らないうちに、天国のどこかで安らかに落ち着いていたいと誰もが願う。しかし、こうした美しい考えをもつ人々は、自分が天から舞い降りるそのような幸運を得たり、果ては天国で居場所を得たりする資格があるかどうかを一切知らない、わたしは言うておく。現在、あなたがたは自分のことをよく知っているが、それでも終わりの日の災いと、邪悪な者たちを懲罰する全能者の手から逃れることを願っている。美しい夢を抱き、物事が自分の望み通りになるよう願うことは、誰かの思いつきではなく、サタンが墮落させてきたすべての人々の共通点であるかのように思われる。たとえそうでも、わたしは依然として、あなたがたの途方もない欲望と、祝福を得ることへの熱望に終止符を打ちたいと思う。あなたがたの過ちが多数あり、反抗した事実が増え続ける一方であることを考えると、どうしてそうした事柄があなたがたの美しい未来像にふさわしいだろうか。好きなように生き続けることを望み、自分を抑えるものがないまま間違った状態に留まり、それでもなお夢を叶えたいというのであれば、朦朧としたまま目を覚まさないよう勧める。なぜなら、あなたの夢は空虚であり、義なる神の前において、神はあなたを例外にはしないからである。ただ夢を叶えたいのであれば、決して夢見ず、むしろ永遠に真理と事実を直視しなさい。これが、あなたが救われる唯一の方法である。具体的に言って、この方法にはどのような段階があるだろうか。

まずは自分の過ちに残らず目を向け、真理と一致しない行動、および考えをすべて検討しなさい。

これは容易に実行できることであり、知力のある者ならば可能なはずだ。しかし、過ちと真理の意味をまったく知らない者は例外である。基本的な知力がない者だからである。わたしは、神に認められ、正直であり、行政命令の重大な違反を犯したことがなく、自分の過ちを容易に識別できる人々に話をしている。これはあなたがたに求めることのうち、容易に達成できるものであるが、あなたがたに求める唯一のことではない。いかなる場合も、あなたがたがこの要求を密かに笑い飛ばさないこと、また何より、それを見下したり軽視したりしないことを願う。あなたがたはそれを真剣に扱わねばならず、無視してはならない。

二番目に、自分の過ちと反抗の一つひとつについて、それに相当する真理を探し、そ

の真理でそれらの事例を解決しなければならない。それから自らの過った行ない、および反抗的な思想や行為を、真理の実践と置き換えなさい。

三番目に、常にずる賢く狡猾な者ではなく、正直者にならねばならない。(ここで再び、あなたがたに正直者となるようわたしは求める。)

この三つをすべて成し遂げられるなら、あなたは幸運な者であり、夢が叶う者であり、幸運を手にする者である。あなたがたは魅力に乏しいこの三つの要求を真剣に捉えるかもしれないし、あるいは無責任に扱うかもしれない。いずれにせよ、わたしの目的は、あなたがたの夢を叶え、あなたがたの理想を実現させることであり、あなたがたをからかったり馬鹿にしたりすることではない。

わたしの要求は単純かもしれないが、わたしがあなたがたに伝えている事柄は、一足す一は二といった単純なものではない。あなたがた全員がそれについて適当に話したり、空虚で大げさな話をだだら続けたりするだけであれば、あなたがたの青写真と望みは永遠に白紙のままだろう。長年にわたって苦しみ、大いに努力しているが、その結果を示せない者に対し、わたしは憐憫の情をまったく抱かないだろう。それとは逆に、わたしの要求を満たしていない者に対し、わたしは報いでも、ましてや同情でもなく、懲罰をもって扱う。おそらくあなたがたは、長年にわたって付き従ってきた者として、自分は何であれ大いに努力してきたので、単に効力者として神の家で茶碗一杯の飯を得られるはずだと想像しているだろう。あなたがたの大半がこのように考えると言える。なぜなら、あなたがたは自分が利用されるのではなく、いかに利用するかを常に追求してきたからである。それゆえ、ここで真剣に伝えるが、わたしにとって、あなたの大いなる努力がどれほど賞讃に値するか、あなたの資格がどれほど素晴らしいか、あなたがどれほど忠実にわたしに従っているか、あなたがどれほど名高いか、あなたの姿勢がどれほど改善されたかなどはどうでもよい。わたしの要求を満たさない限り、あなたは決してわたしの賞讃を得ることができない。そうした考えや打算はできるだけ早くすべて捨て、わたしの要求を真剣に扱い始めなさい。さもなければ、わたしは自分の働きを終えるためにあらゆる者を灰にし、よくてもわたしの長年にわたる働きと苦難を無に帰するであろう。なぜなら、わたしは自分の敵と、邪悪の臭気を漂わせながらサタンの姿をしている者たちを、わたしの国に連れ込むことも、次の時代に導くこともできないからである。

わたしには多くの望みがある。あなたがたが適切かつ行儀良く振る舞い、忠実に自分の本分を尽くし、真理と人間性を備え、自分がつすべてのもの、および自分の命さえ

も神に捧げられる人になることなどを、わたしは望んでいる。これらの望みはどれも、あなたがたに欠けている物事、そしてあなたがたの墮落と反抗から生じたものである。あなたがたとの対話がどれも、あなたがたの注意を引きつけるのに十分でなかったならば、おそらくわたしは話を止めるしかないだろう。しかし、あなたがたはその結果がどうなるかを理解している。わたしは休むことがないので、話をしていなければ、人々が目を向ける何かをするだろう。わたしは誰かの舌を腐らせたり、身体をばらばらにして死なせたり、神経の異常を起こして多くの点で醜悪な姿にさせたりすることもできる。あるいは、それぞれの人のために用意した苦悶を味わわせることもできる。そのようにすれば、わたしは喜び、きわめてうれしく、大いに満足するであろう。これまで常に「善には善、悪には悪をもって報いよ」だったのだから、なぜ今もそうであってはならないのか。あなたがわたしに反対し、何らかの批判をしたいのであれば、わたしはあなたの舌を腐らせるであろうし、それにわたしは限りなく喜ぶ。なぜなら、あなたが行ってきたことは最終的に真理ではなく、ましてやいのちに何の関係もないのに対し、わたしが行なうことはすべて真理であり、わたしの業はどれも、わたしの働きの原則と、わたしが定めた行政命令に関係しているからである。したがって、わたしはあなたがた一人ひとりに対し、善行を積み重ね、かくも多くの悪事を止め、時間がある際にはわたしの要求に注意するよう強く勧める。そうであれば、わたしは喜びを感じるだろう。言うておくが、あなたがたが肉に傾ける努力のうち、そのわずか千分の一でも真理に捧げる(ないしは施す)のであれば、あなたは頻繁に過ちを犯さず、口が腐ることもないだろう。これは明白なことではないか。

あなたが過ちを犯せば犯すほど、あなたが良い終着点を得る機会は少なくなる。それとは逆に、あなたの過ちが少なければ少ないほど、あなたが神に賞讃される確率は高くなる。あなたの過ちが増えすぎて、わたしがあなたを許せないところまで来たら、あなたは自分が赦される機会を完全に台無しにしたことになるだろう。その場合、あなたの終着点は上でなく下となるだろう。あなたがわたしを信じないのであれば、大胆になって間違ったことを行ない、その結果を知るがよい。あなたが真理を実践する熱意ある者ならば、自らの過ちを赦される機会が確実にあり、反抗する回数もますます減ってゆくだろう。あなたが真理を実践することを望まない者ならば、神の前における過ちは確実に増えてゆき、反抗する回数もさらに増加を続け、最後は限界に達する。その時こそ、あなたが完全に滅ぼされる時である。そしてそれは、祝福を受けるというあなたの美しい夢が無に帰する時である。自分の過ちを、未熟で愚かな者の単なる間違いだと考えて

はならない。また真理を実践しなかった言い訳として、自分の素質が劣っているからそうできなかったと言ってはならない。それ以上に、自分が犯した過ちを、しつげがなっていない人間の振る舞いだと考えてはならない。自分を許すことに長けていて、自分に寛大になるのが得意であれば、あなたは決して真理を得ることがない臆病者であり、自分の過ちがいつまでもあなたにつきまとい、あなたはそのせいで真理の要求を永遠に満たせず、いつまでもサタンの忠実な仲間となるだろう、と言っておく。わたしの勧告は依然として同じである。すなわち、自分の隠れた過ちに気づかないまま、自分の終着点だけを気にしてはならない。過ちを真剣に受け止め、自分の終着点に関する懸念のために、その過ちを一切見過ごしてはならない。

神の性質を理解することは極めて重要である

あなたがたに成し遂げてもらいたいと願っていることは数多くあるが、あなたがたのすべての行いと生活における一切のことが、わたしの求める事柄を完全に成就することはできないため、わたしは単刀直入にわたしの心の思いを説明するしかない。あなたがたの判断力、および理解力が極めて乏しいことを考えると、あなたがたは、わたしの性質と本質に関してはほとんど無知であると言える。それゆえ、それらについて急遽、あなたがたに伝える必要がある。あなたがこの件について以前どれだけ理解していたか、あなたに理解しようとする気持ちがあるかどうかにかかわらず、わたしはこれらについて詳しく説明しなければならない。これはあなたがたにとって全く馴染みのないものではないが、あなたがたは、それに含まれる意味について理解しているようにも、熟知しているようにも見えない。この件について、あなたがたの多くは、おぼろげに理解しているのみであり、それは部分的で不十分な理解である。真理をよりよく実践する、つまりわたしの言葉をよりよく実践することができるようあなたがたを助けるには、あなたがたがまずこの件について理解することを優先しなければならないとわたしは考える。そうしなければ、あなたがたの信仰は曖昧で偽善的、かつ宗教的な虚飾で満たされたままとなるであろう。神の性質を理解しなければ、神のためにあなたが行うべき働きを為すことは不可能である。神の本質を知らなければ、神に対して尊敬と畏怖の念を持つことも不可能であり、いいかげんな形式主義と言い逃れだけで、さらには救い難い冒涇のみが残るであろう。神の性質を理解することは極めて重要であり、神の本質についての認識は疎かにできないものの、これらの問題を徹底的に調べ、掘り下げて考える者はいなかった。あなたがたが皆わたしの発布した行政命令をないがしろにしているのは明らかである。神の性質を理解しなければ、神の性質を簡単に侵害する恐れがある。神の性

質を侵害することは、神自身を激怒させることに等しく、このような場合、あなたの行動は最終的には行政命令に違反することになるだろう。ここであなたが認識すべきことは、神の本質を知るときに神の性質を理解できること、そして神の性質を理解するとき、行政命令を理解することにもなるということである。もちろん、行政命令に含まれている多くのことは神の性質に関わるものであるが、それらに神の性質の全てが表されているわけではないので、神の性質をもっとよく理解するために更に一步踏み出すことが必要となる。

わたしは今日、日常の会話のようにあなたがたに話しているのではない。したがって、わたしの言葉を真摯に受け止めるだけでなく、それらについて深く考えなければならない。すなわち、わたしは、あなたがたがわたしの語った言葉に注ぐ努力は少な過ぎると言っているのである。神の性質のこととなると、熟考する意欲は更に低下し、これに対して努力を費やす人もほとんどいない。このため、わたしは、あなたがたの信仰が大言壮語にしか過ぎないと言うのである。今でさえも、あなたがたの誰一人として自分の最も致命的な弱点に真の努力を注いではない。あなたがたのためにあれこれ苦心したにも関わらず、あなたがたはわたしを失望させた。誰もが神を無視し、真理を欠く生活を送っているのも当然である。このような人々が聖徒と見なされることがあろうか。天の戒律はそのようなことを許さない。このことについて、あなたがたの理解はあまりにも乏しいので、わたしはさらに語らざるを得ない。

神の性質というのは、人間の性格とは異なるため、誰にも極めて抽象的な問題に思われ、しかも、簡単には受け入れられないテーマである。神にもまた喜怒哀楽があるが、これら感情は人のものとは異なる。神には神そのものと神が持っているものがある。神が表し、明らかにするものは、全て神の本質と神の身分の表れである。神そのものと神が持っているもの、および神の本質と身分は、人が取って代わることができるものではない。神の性質には、人類への神の愛、人類への慰め、人類への憎しみが包含されており、しかも人類に対する完全な理解が包含されている。しかし、人の性格は楽観的、活氣的、または無感覚である。神の性質とは、万物と全ての生けるものの支配者、全ての創造物の主に属するものである。彼の性質は尊厳、権勢、崇高さ、偉大さ、そして何よりも至高性を表す。彼の性質は権威の象徴であり、あらゆる正義の象徴であり、また、あらゆる美と善の象徴である。しかもそれは、暗闇やいかなる敵の勢力にも圧倒されず、侵害されることのない者の象徴^[a]であり、同時に、いかなる被造物も背くことができない（そして背くことが許されない）者の象徴^[b]である。彼の性質は最高権力の象徴な

のである。一個人であれ複数であれ、いかなる人間も神の働きや性質を阻害できないし、阻害してはならない。しかし人間の性格は、動物よりもわずかに優位であることの象徴に過ぎない。人間は、自身の中にも自身においても、何の権威も自主性も、自分自身を超越する能力もないが、本質的に、様々な人々、出来事、または物に振り回されて怖じ気づく者である。神の喜びとは、正義と光の存在と現れに起因し、暗闇と邪惡の消滅の故である。彼は、人類に光と良い生活をもたらしたことを喜ぶ。彼の喜びは正義の喜びであり、あらゆる肯定的なものの存在の象徴、そして何よりも吉兆の象徴である。神の怒りは、不義の存在と、それによる妨害が自身の人類に害をもたらしていることに起因し、それは邪惡と暗闇の存在、また、真理を駆逐するものの存在の故であり、そしてそれ以上に、良いものと美しいものに反するものの存在の故である。彼の怒りは、全ての否定的な物事がもはや存在しないことの象徴であり、さらには、彼の聖さの象徴である。彼の悲しみは、彼が望みを持っているにも関わらず暗闇に落ちた人類に起因し、彼が人のためにする働きが彼の期待にかなわず、彼が愛する人類がみな光りの中で生活できるようになっていないからである。彼は罪のない人類、正直だが無知な人、そして善良だが自分の見解を持っていない人に対して悲しみを感じている。彼の悲しみは彼の善良さと憐れみの象徴であり、美しさと慈愛の象徴である。彼の幸せは、もちろん彼の敵を打ち負かすこと、そして人の真心を得ることからもたらされる。さらに、それは全ての敵の勢力の駆逐と消滅、そして人類が良き平和な生活を得ることから生じる。彼の幸せは人の喜びとは異なり、むしろそれは良い実を集めるときの気持ちであり、それは喜びにまざる感情である。彼の幸せとは、人類が今後苦しみから解放され、光の世界に入ることの象徴である。一方、人類の感情は全て己の利益の目的のために生じ、義、光、または美しいもののために生じるのではなく、ましてや天の恵みのために生じるものではない。人類の感情は利己的で暗闇の世界に属している。それは神の意志のために存在するものではなく、ましてや神の計画のために存在するものではないため、人と神のことを同等に語ることは決してできない。神は永遠に至高かつ尊厳ある方であり、一方人間は永遠に下劣で、価値もない。これは、神が永遠に犠牲を払い、人類のために自身を捧げているからである。しかし人は、いつも自分の為に得る努力しかない。神は人類の生存のために永遠に労苦しているが、人が光や義に寄与することは全くない。人が一時期働いたとしても、それは貧弱過ぎて、一回の打撃にも耐えることができない。人の働きは常に自分のためであって、他の人のためではないからである。人は常に利己的であるが、神は永遠に無私無欲である。神は公正なもの、良いもの、そして美しいもの全ての源であるが、人は醜いものと邪惡なもの全てを継承し、表現する者である。神が

自身の義と美しさの本質を変えることは決してないが、人はいかなる時や状況においても、義を裏切り、神から遠く離れてしまう可能性がある。

わたしが語った語句の全てには、神の性質が含まれている。わたしの言葉を慎重に熟考するとよい。必ずそれらから多くの利益を得るであろう。神の本質を把握することは非常に難しいが、わたしはあなたがた全員に神の性質について少なくともいくつかの認識があると信じている。ゆえに、わたしは、あなたがたが神の性質に背かないより多くの事柄をわたしに示し、行うことを望むのである。そうすればわたしは安心するだろう。例えば、いかなる時にも心の中で神を思いなさい。何かを行う時は、神の言葉に従って行いなさい。全てのことに於いて神の意図を探し求め、神を軽視したり神の栄誉を汚したりする事は行わないようにしなさい。さらに、神を心の奥に追いやって心の中の未来の空虚さを埋めないようにしなさい。もしそのようなことをするならば、あなたは神の性質を侵害することになるのである。また、生涯を通じて決して神を冒瀆する事を口にしたり、神に対して不平を言ったりせず、さらには、神があなたに委ねた全ての事を生涯、正しく行うことができ、神の言葉の全てに従うならば、行政命令に背くことを避けたことになる。例えば、「なぜわたしは彼が神であると思わないのか」、「これらの言葉は聖霊の啓示に過ぎないと思う」、「わたしに言わせれば、神がなす全ての事柄が正しいとは思わない」、「神の人間性が自分の人間性より優れているとは思わない」、「神の言葉はどうしても信憑性に欠ける」、または同様の批判的な事柄を言ったことがあるならば、罪を告白し、悔い改めることを勧める。あなたは、人間ではなく神自身を侵害したため、そうしなければ赦しの機会を得ることが決してないからである。あなたは、人を裁いているだけだと思っているかもしれないが、神の霊はそうには考えない。神の肉体を軽視することは、神を軽視することと同じである。もしそうであるならば、あなたは神の性質を侵害したことになるのではないだろうか。神の霊によってなされる事柄の全ては、神の肉体における働きを維持し、その働きを十分に行うためのものであることを覚えておかなければならない。これを怠るならば、あなたは神を信じることに於いて決して成功を収めることができない者であると言おう。あなたは神の怒りを買ったため、神はそれに見合う懲罰を使ってあなたに教訓を与えるであろう。

神の本質を知るようになることは、ささいな事ではないのである。あなたは、神の性質を理解しなければならない。そうすることによって、知らないうちに神の本質を少しずつ認識するようになるだろう。これを認識するとき、あなたはより高尚で、より美しい状態へと邁進するだろう。最後には、自分の醜悪な魂を恥だと感じるようになるであ

ろう。さらには、その恥から隠れられる場所がどこにもないと感じるだろう。その時、あなたの行為において神の性質を侵害することがますます減り、あなたの心はますます神の心に近づき、徐々に神への愛が心の中に育つであろう。これは、人類が美しい状態に入っているしるしである。しかし、あなたがたはまだこの状態に達していない。あなたがたは皆、自分の運命のためにあちこち奔走しているが、努めて神の本質をよりよく知ろうと思う者がいるだろうか。この状態が続くならば、神の性質をほんのわずかしかな分かっていないために、無意識のうちに行政命令に背くことになるだろう。今あなたがたが行なっていることは、神の性質を侵害する行為の礎を築くことではないだろうか。あなたがたに神の性質を理解するよう求めることは、わたしの働きに相反するものではない。と言うのは、頻繁に行政命令に背くならば、あなたがたのうち懲罰を逃れることができる者がいるであろうか。そうならば、わたしの働きの全てが無駄になるのではないか。このため、わたしは今もあなたがた自身の行いを入念に吟味することに加え、自らの歩みに注意を払うようにあなたがたに求めるのである。これは、あなたがたに対するより高度な要求であり、あなたがたが皆これについてよく考え、真剣に扱うことを願う。あなたがたの行いがわたしの激しい怒りを買う日が来るならば、その結果はあなたがただけが考慮するものであり、あなたがたの代わりに罪を負う人は他にいないのである。

脚注

- a. 原文では「されることがないことの象徴」。
- b. 原文では「背くことができない（そして背くことが許されない）ことの象徴」。

どのように地上の神を知るか

あなたがたはみな、神の前で報われ、神の寵愛を受けたいと願っている。神を信じ始めた者は誰でもそのようなことを望むものである。誰もが高尚な物事を追い求めることに夢中になり、誰ひとり他者に後れを取りたくないからである。これが人というものである。まさにそれゆえに、あなたがたの多くが絶えず天の神の機嫌を取ろうとしているのだが、実際には、あなたがたの神に対する忠実さと正直さは、自分自身に対する忠実さと正直さに比べてずっと劣っている。わたしはなぜそう言うのか。なぜならわたしは、神に対するあなたがたの忠実さを全く認めておらず、それどころか、あなたがたの心の中にいる神の存在を否定しているからである。言うなれば、あなたがたが崇拜する神、あなたがたが敬慕する漠然とした神は、そもそも存在していないのである。わたしが

これほどまでに断言できるのは、あなたがたが真の神からあまりにも遠ざかっているからである。あなたがたの忠実さの根拠は、あなたがたの心の中にある偶像である。一方、わたしについて言えば、あなたがたは偉大とも非力とも思っていない神を、言葉で認めているにすぎない。神から遠ざかっていると言うのは、つまりあなたがたが漠然とした神を身近に感じている一方で、真の神からは遠く離れているということである。「偉大ではない」と言うのは、今日あなたがたの信じている神が、大した能力のない人間、大して高貴ではない人間のようにしか見えていないことを指している。そして「非力ではない」と言うのは、その人が雲を呼び雨を降らせることはできないにしても、神の霊に呼びかけて天と地を揺るがすほどの働きをさせ、人々をすっかり困惑させることができるという意味である。表面上は、あなたがたはみな地上のキリストに非常に従順なようだが、実質はキリストを信仰してもいなければ愛してもいない。つまり、あなたがたが本当に信じているのは自分自身の感情の漠然とした神であり、あなたがたが本当に愛しているのは、日夜恋い慕うものの直接会ったことがない神なのである。キリストに対するあなたがたの信仰はわずかでしかなく、愛はない。信仰とは信じることと信頼することである。愛とは心の中で崇拜して敬慕し、決して離れないことである。しかし、今日のキリストに対するあなたがたの信仰と愛は、そこに遠く達していない。信仰について言えば、あなたがたはキリストをどのように信仰しているのか。愛について言えば、あなたがたは彼をどのように愛しているのか。あなたがたはただ彼の性質を全く理解しておらず、ましてや彼の実質などなおさら知らないのに、どのようにして彼を信仰するというのか。彼に対するあなたがたの信仰の実体はどこにあるのか。どのように彼を愛しているのか。彼に対するあなたがたの愛の実体はどこにあるのか。

今日まで多くの人々が躊躇なくわたしについてきた。またこの数年間、あなたがたは大変な疲労に苦しんできた。あなたがたひとりひとりの生来の気質や傾向を、わたしはすみずみまで明確に把握してきた。あなたがたのひとりひとりと関わり合うのはとても難しく難儀である。遺憾なのは、わたしがあなたがたのことを大いに把握しているというのに、あなたがたはわたしのことを全く理解していないということである。あなたがたは混乱している瞬間に誰かの策略に引っ掛かったのだと、人々が言うのも無理はない。事実、あなたがたはわたしの性質について何も理解せず、ましてやわたしが何を考えているのか洞察することなどなおさらできない。今日、あなたがたのわたしに関する誤解は雪だるま式に膨れ上がり、わたしに対する信仰は混乱した信仰のままである。あなたがたはわたしを信仰しているのではなく、わたしの機嫌をとり、わたしにへつらおう

としていると言うのがより適切だろう。あなたがたの動機は非常に単純である。誰であれ、報いてくれるなら従うし、大きな災難を免れさせてくれるなら信じる。神でもいいし他の何らかの神でもいい。そのどれも自分には関係ない、というのである。このような人はあなたがたの中に大勢おり、この事態は非常に深刻である。もしいつの日か、キリストの実質を理解しているがゆえに彼を信仰しているという人があなたがたのうちどれほどいるかを調べたとしたら、おそらくわたしが納得できる人は一人としていないだろう。したがってこの問いについてくらいは考えてもよかろう。あなたがたの信じる神はわたしと非常に異なっている。ならば、あなたがたの神への信仰の本質とは何か。あなたがたの神なるものを信じれば信じるほど、あなたがたはわたしからさらに逸れていく。ならば、この問題の本質とは何か。あなたがたのうち誰一人としてこのような問いについて考えたことがないのは明らかだが、そのことの重大さが頭に浮かんだことはあるのか。このような形で信じ続けた末の結果を考えたことはあるのか。

今日、あなたがたは多くの問題に直面しているが、あなたがたの中で問題解決に長けた人は一人もいない。このような状況が続けば、損するのはあなたがた自身に他ならない。この問題を突き止めるのをわたしは手伝おう。しかし、その解決はあなたがた次第である。

わたしは他者を疑わない者を好む。そして真理を快く受け入れる者を好む。この二種類の人々をわたしは大いに保護しよう。わたしから見ると彼らは正直な人々だからである。もしあなたが嘘つきなら、全ての人々や物事に対し慎重で疑い深くなるだろうから、わたしに対するあなたの信仰も疑念を基盤にして成り立つことになる。そのような信仰をわたしは決して認めない。真の信仰がないあなたには、真の愛はなおさらない。そして気の向くままに神を疑い、神への憶測を巡らせがちなら、あなたは間違いなくあらゆる人々の中で最も不正直である。あなたは神が人間のようにありうるかどうかが憶測する。許し難いほど罪深く、狭量な性質で公正さと分別に欠け、正義感がなく、邪悪な策略に溺れ、不誠実でずるく、悪事や闇を喜ぶ、といった具合である。人は神のことを少しも知らないがゆえに、このような考えをもつのではないか。このような信仰は罪以外の何物でもない。中には、わたしを喜ばせるのはまさに媚びへつらいごまをする者たちであり、そのような技量のない者は神の家では歓迎されずに居場所を失う、と信じている者すらいる。長年かけてあなたがたが得た認識はこれだけなのか。これがあなたがたの手に入れたものなのか。わたしに関するあなたがたの認識はこのような誤解にとどまらない。さらに悪しきは、あなたがたによる神の霊への冒涇と、天に対する悪口である

。あなたがたのような信仰のせいで、あなたがたはますますわたしから逸れていき、わたしとさらにひどく敵対するだけだとわたしが言うのは、それゆえである。長年にわたって働くあいだずっと、あなたがたは多くの真理を目の当たりにしてきた。しかしどのような事柄がわたしの耳に入ってきたか、あなたがたは知っているのか。あなたがたのうち喜んで真理を受け入れる人はどれほどいるのか。あなたがたはみな、自分たちは喜んで真理の代価を払うと信じているが、真理のために本当に苦しんだ者が、あなたがたの中にどれほどいるというのか。あなたがたの心の中には不義しかなく、そのため誰もが同じように不正直で心が曲がっていると思うのである。受肉した神が普通の人間のようによい心や慈愛を持ち合わせていないこともありうる、と信じるに至るほどに。さらに、あなたがたは高潔さや憐れみ深く慈愛に満ちた性質は天の神にのみ存在すると信じている。あなたがたは、そのような聖人は存在せず、ただ闇と悪が地上を支配するのみだと信じているが、その一方で神とは、人々が善きものや美しきものに対する自らの切望を託す先であり、人々によって作られた伝説上の人物なのである。あなたがたの頭の中では、天の神とは非常に立派で正しく偉大な、崇拜し敬慕する価値のあるものであり、一方、地上の神は天の神の単なる代役、単なる道具にすぎないということになっている。あなたがたは、この地上の神は天の神に等しいはずがない、まして天の神と比較するなど話にならないと信じている。神の偉大さと栄誉に関して言えば、これらは天の神の栄光に属するものだが、人間の本性や墮落となると、それらは地上の神もその一部を有している特質だというのである。天の神は永遠に高貴だが、地上の神は永遠に取るに足りず、弱く、無能である。天の神は感情的になることなく、ひたすら義であるが、地上の神には利己的な動機しかなく、公平さも分別もない。天の神は少しも曲った所がなく永遠に誠実だが、地上の神には常に不正直な面がある。天の神は人間を深く愛するが、地上の神が人間に示す配慮は不十分で、人間を全く顧みないことすらある。このような誤った認識がもう長い間あなたがたの心の中にあり、将来にわたり永続する可能性もある。あなたがたはキリストの全ての行いを不義な視点から見ており、キリストの働きの全ても、キリストの身分も実体も、悪人の視点から評価する。あなたがたは重大な過ちを犯し、先人の誰もがなさなかったことをなしてきた。つまり、あなたがたは頭に王冠を戴せた高貴な天の神だけに仕え、取るに足りないと思ふあまり自分の目には映らない地上の神のことは、決して留意しないのである。これはあなたがたの罪ではないか。神の性質に背くあなたがたの典型的な例ではないか。あなたがたは天の神を崇拜する。あなたがたは高貴な像を崇拜し、雄弁で名高い者たちを尊ぶ。あなたは、その手を富で満たしてくれる神の命令には喜んで従い、望みを全て叶えてくれる神を渴望する。

あなたが崇拝しない唯一のものは高貴でないその神であり、あなたが嫌う唯一のことは、誰からも高く評価されないその神と関わることである。あなたがやりたがらない唯一のことは、あなたに一銭ももたらさないその神に仕えることであり、あなたが恋い慕うよう仕向けることのできない唯一の者は、魅力のないその神である。この種の神はあなたの視野を広げられず、あたかも宝物を見つけたかのように感じさせることもできず、ましてやあなたの願いをかなえることもできない。ならば、なぜあなたは彼について行くのか。このような問いについて考えたことはあるのか。あなたのしていることはそのキリストに背くだけではない。より重大なのは、天の神に背くということである。これが神を信仰するあなたがたの目的ではあるまい。

あなたがたは神に喜んでもらうことを切望するが、神から遠く離れている。何が問題なのか。あなたがたは神の言葉こそ受け入れるものの、神の取り扱い、神の刈り込みは受け入れず、まして神の采配の一つ一つを受け入れること、神を完全に信仰することなどできない。ならば何が問題なのか。つまるところ、あなたがたの信仰とは、ひよこが生まれることのない空っぽの卵の殻なのである。あなたがたの信仰は真理をもたらすこともいのちも与えることもなく、代わりに支えと希望という錯覚を与えてきた。この支えと希望という錯覚こそが、あなたがたが神を信じる際の目標であり、真理やいのちが目的ではないのである。だからこそわたしは、あなたがたの神への信仰の流れが、盲従と無恥によって神の機嫌を取ろうとする行為以外の何物でもなく、決して真の信仰と見なすことはできない、と言うのである。このような信仰からどうしてひよこが生まれようか。言い換えれば、このような信仰が何を成しうるだろうか。あなたがたが神を信じる目的は、自分の目標を達成するために神を使うことである。これは神の性質に背いたことを表すさらなる事実ではないか。あなたがたは天の神の存在は信じ、地上の神の存在を否定するが、わたしはあなたがたの見方を認めない。わたしは地に足を着け地上の神に仕える人だけを賞賛し、地上のキリストを認めようとしない人は決して賞賛しない。そのような人は、どれほど天の神に忠実であろうとも、最後は悪人を罰するわたしの手から逃れられない。このような人は悪人である。彼らは神に敵対し、キリストに喜んで従ったことのない邪悪な者たちである。無論、キリストを知らない者、さらにはキリストを認めない者もみなこれに含まれる。あなたは天の神に忠実でありさえすれば、キリストに対して好きなように行動してもよいと思っているのか。それは誤りである。あなたがキリストを知らないのは、天の神を知らないということである。あなたがいかに天の神に忠実であろうとも、それは空論と見せかけにすぎない。と言うのも地上の神は

、人間が真理とより深遠な認識を受け取るだけでなく、それ以上に、人間を断罪し、そののちに事実を掴んで悪人を罰することに貢献するからである。これによる有益な結果と有害な結果をあなたは理解したのか。そのような結果をあなたは経験したのか。わたしは、あなたがたがこの真理を早晚理解できるよう願っている。すなわち、神を知るには、天の神だけでなく、より重要なこととして地上の神を知らなければならない、ということである。優先順位を取り違えたり、主要なものよりも二次的なものを優先させたりしてはならない。このようにすることでのみ、あなたは神と真により関係を築くことができ、より神に近づき、あなたの心をより神に近づけることができるのである。あなたがわたしを長年信仰し、わたしと長らく関わってきたにもかかわらず、わたしから遠く離れたままならば、あなたは度々神の性質に背いており、あなたの最後は実に測りがたいものになるはずだ、とわたしは言う。わたしと長年関わっても、それによってあなたが人間性と真理を有する人物へと変化せず、その上さらに、あなたの本性に悪の道が根付き、傲慢さが以前の倍になるだけでなく、わたしに関する誤解も増大し、わたしを単なる仲間と見なすまでになってしまったのならば、あなたの厄災はもはや皮膚の表面どころではなく、まさに骨まで貫いていることになる。あなたに残されたのは自分の葬儀の準備が整うのを待つことだけである。その時になって、あなたの神になるようわたしに懇願するには及ばない。あなたは死に値する罪を、許されざる罪を犯したからである。たとえわたしがあなたを哀れむことがあったとしても、天の神はあなたの命を取り上げると断言するだろう。あなたが神の性質に背いたことはありふれた問題などではなく、非常に重大な性質をはらむ問題だからである。その時が来ても、前もって教えてくれなかったとわたしを責めてはならない。話は全てここに戻ってくる。あなたがキリスト、すなわち地上の神を普通の人間と見なしに関わるならば、つまり、その神は一人の人間にすぎないと信じるならば、そのときあなたは滅びることになる。これが、あなたがた全員に対するわたしの唯一の警告である。

極めて深刻な問題——裏切り（１）

わたしの働きはまもなく完成する。あなたがたと共に過ごした長い年月は、耐えがたい記憶となっている。わたしは絶え間なく自分の言葉を繰り返し、新たな働きを展開し続けた。もちろん、わたしの忠告はわたしが行うそれぞれの働きに必要な要素である。わたしの助言がなければ、あなたがたはみな道を逸れ、完全に途方にくれることさえあるだろう。わたしの働きはまもなく完了し、終わりの時を迎えようとしているが、わたしはまだあなたがたに助言を与え、忠告の言葉を聞かせようと思っている。わたしはた

だ、あなたがたがわたしの苦心を無駄にせず、そしてそれ以上に、わたしの配慮と慰めやりを理解して、わたしの言葉を人としての振る舞いの基盤とすることを願うのみである。それがあなたがたの聞きたい言葉かどうか、喜んで受け入れられる内容か、または不快ながらも受け入れるしかないものかどうかによらず、あなたがたは必ず真剣に受け止めなければならない。さもなくば、あなたがたのいい加減で無神経な性質と態度はわたしをまったく不快にし、嫌悪さえ抱かせるであろう。わたしはあなたがた全員が、わたしの言葉を何度も何度も――何千回も――繰り返し読んで、心に刻み込むことさえできるようになることを切に願っている。そうすることによってのみ、あなたがたはわたしの期待を裏切らないようになれる。しかし現在のところ、そのように生きている者は皆無だ。逆に、あなたがたは欲しいだけ飲み食いする放縱な生活に浸り、わたしの言葉で心と霊を豊かにしている者は一人もいない。このためわたしは、人間の本当の顔についての結論に至ったのだ。人はいつでもわたしを裏切れるものであり、わたしの言葉に完全に忠実になれる者はいない、と。

「人間はあまりにもサタンによって墮落させられており、もはや人間の姿をしていない。」多くの人々は現在、この言葉のある程度認識している。わたしがこう言うのは、この「認識」というものが、真の認識とは逆の、単なる表面的な認知だからである。あなたがたの誰も、自分を正確に評価したり徹底的に分析したりできないため、常にわたしの言葉に対して半信半疑でいる。しかし今回は、事実を例にとって、あなたがたの抱える最も深刻な問題を説明しよう。その問題とは裏切りである。あなたがたは皆、「裏切り」という言葉を知っている。なぜならほとんどの者が、何かしらの形で他人を裏切ったことがあるからだ。たとえば夫が妻を裏切り、妻が夫を裏切る。息子が父を裏切り、娘が母を裏切る。奴隷が主人を裏切り、友達同士が互いに裏切り合う。親戚同士が裏切り合い、売り主が買い主を裏切る、などである。こうした例にはすべて裏切りの本質が含まれている。つまり裏切りとは、約束を破る、道徳の原則に反する、あるいは人間の倫理に反する行為の形態であり、人間性の喪失を示している。一般に、この世に生まれた一人の人間として、何らかの形で他人を裏切ったことを覚えているかどうか、あるいはすでに何度も他人を裏切ってきたかどうかに関わらず、何かしら真理への裏切りとなることをしたことはあるだろう。あなたは両親や友人を裏切ることができるのだから、他人も裏切ることができるし、さらにわたしを裏切り、わたしが忌み嫌う事を行うこともできる。言い換えれば、裏切りとは単なる表面的な不道徳行為ではなく、真理に対立するものでもある。これがまさに、人間のわたしに対する反抗と不従順の根源なのだ

。このためわたしは、このことを次のように要約した。すなわち裏切りは人間の本性であり、この本性が、各人とわたしの調和を妨げる天敵なのである。

わたしに完全に従うことができない行為は裏切りである。わたしに忠実であることができない行為は裏切りである。わたしをごまかし、嘘でわたしを騙すことは裏切りである。多くの観念を抱き、至る所でそれらを広めることは裏切りである。わたしの証しと利益を護れないことは裏切りである。心の中ではわたしから遠く離れていながら、作り笑いを浮かべるのは裏切りである。こうした行為はすべて裏切りであり、あなたがたはこれまでいつもこうした行為が可能だったし、これらはあなたがたの間で当たり前のこととなっている。あなたがたの誰一人として、これを問題だと考える者はいないが、わたしはそうは考えない。わたしは自分に対する誰かの裏切りを些細なこととして扱うことはできず、無視することもできない。今、わたしがあなたがたの間で働きを行っていると、あなたがたはこのように行動している。いつの日かあなたがたを見守る者がいなくなったら、あなたがたは皆、王様を名乗る山賊になるのではなからうか。そのときが到来し、あなたがたが大惨事を引き起こしたとき、誰がその後始末をするのだろうか。あなたがたは、一部の裏切り行為は単なる一時的なもので、いつもそうしているわけではなく、そんなに深刻に捉えて、自分の自尊心を傷つけるには値しないと考えている。ほんとうにそう思っているのなら、あなたがたは正気でない。そのように考えることは、反逆の見本であり典型である。人間の本性とはその者のいのちであり、人が生存のために依存する原則で、人がそれを変えることはできない。裏切りの本性も同じであり、あなたが親戚や友人を裏切ることができるなら、それは裏切りがあなたのいのちの一部であり、生来の本性であることを証明している。このことは誰も否定できない。たとえばある人が他人から盗むことを楽しむなら、この「盗みの楽しさ」は、その人のいのちの一部である。その人は盗みをするときもあれば、しないときもあるかもしれないが、盗みをしようとしまいと、それはその盗みが単なる一種の行為だという証明にはならない。むしろそれは盗みが彼らのいのちの一部であり、すなわち彼らの本性であることを証明している。それが彼らの本性なら、良い物を見ても盗まないことがあるのはなぜか、と問う人もいる。その答えは至って簡単である。彼らが盗まない理由はたくさんある。たとえば、人目を盗んでかすめ取るには大きすぎるとか、実行するのによいタイミングがないとか、高価すぎたり警備が固すぎたり、さらには特に関心がなかったり、自分にどう役立つかわからなかったりという場合もある。こうしたあらゆる理由が考えられるが、いずれにせよ、彼らがそれを盗むかどうかによらず、その考えが単なる一瞬

の思いつきだと証明することはできない。それどころか、それは彼らの本性の一部であり、改善することは困難なのだ。このような人は一度盗めば満足するものではなく、何か良い物を見つけたり適当な状況に置かれたりすればいつでも、他人のものを自分のものだと言おうとするという考えが湧く。だからわたしは、この考えの根源は単に時折意識されるものではなく、その人の本性の中にあると言うのだ。

誰でも自分の言葉や行動により、自分の本当の顔を表すことができる。この本当の顔とはもちろん、その者の本性である。もしあなたがひねくれた話し方をするなら、あなたはひねくれた本性をしている。あなたの本性が狡猾なら、あなたは狡猾く振る舞い、人々を容易に手玉にする。あなたの本性が陰険なら、あなたの言葉は聞こえが良いかもしれないが、あなたの行動はその陰険さを隠せない。あなたの本性が怠惰なら、あなたの言う事はすべて自分のいい加減さや怠惰さの責任を逃れるためのものであり、あなたの行動は遅くおざなりで、真実を隠すことに長けている。あなたの本性が同情的なら、あなたの言葉は合理的であり、行動もまた真理によく則したものになるだろう。あなたの本性が忠実なら、あなたの言葉は間違いなく誠実であり、あなたの行動のし方は堅実で、主人を不安にするようなことはない。あなたの本性が好色あるいは金銭に貪欲なら、あなたの心は大抵それらのことで一杯であり、人が簡単に忘れられず、かつ人に嫌悪感を与えるような、常軌を逸した不道德な行動を無意識のうちにとるだろう。そしてさきほど言ったように、裏切りの本性を持っているなら、その本性から抜け出すことはまず不可能であろう。自分が誰にも不正を行ったことがないからといって、自分に裏切りの本性がないと楽観してはならない。そのように考えるなら、あなたは本当に胸がむかつくような人間だ。わたしが語る言葉は、その都度すべての人々に向けて語ったものであり、一個人や特定の種類の人間にだけ向けたものではない。あなたが一つのことについてわたしを裏切ったことがないからといって、別のことでわたしを裏切れないという証明にはならない。真理の追求においては、結婚生活での挫折の中で自信を失う人々もいる。また、家族の崩壊によってわたしへの忠誠の義務を投げ捨ててしまう人もいる。またつかの間の喜びや興奮を求めて、わたしを見捨てる人もいる。光の中に生き、聖霊の働きの喜びを自分のものとするよりも、暗い谷底に落ちることを選ぶ人もいる。またある人々は、富への欲を満たすために友人の助言を無視し、現在もなお自分の過ちを認めて道を正すことができずにいる。さらに、わたしの保護を受けるため一時的にわたしの名のもとで生きる人々もいれば、命にしがみつき死を恐れるために、やむを得ず少しだけ献身する者もいる。これらをはじめとする、不道德かつ見苦しい行動は、まさに人

々が心の奥底で長い間わたしを裏切ってきた行為ではなかろうか。もちろん、人々が前もってわたしを裏切ることを計画していたわけではないことは知っている。彼らの裏切りは彼らの本性の自然な現れなのだ。わたしを裏切りたいと思う者は誰もおらず、わたしを裏切るようなことをして喜ぶ者もない。それどころか、彼らは恐怖に震えているではないか。ではあなたがたは、こうした裏切りをどうやって埋め合わせ、現在の状況をどうやって変えられるか、考えているだろうか。

極めて深刻な問題——裏切り（２）

人間の本性はわたしの本質とまったく異なる。人間の墮落した本性はすべてサタンに由来しており、人間の本性はサタンに操られ墮落させられているからである。つまり人間は、サタンの邪悪と醜悪さの影響下で生きながらえている。人間は真理の世界や聖なる環境で育つものではなく、ましてや光の中で生きてはいない。ゆえに、誰も生まれつきその本性の中に真理を備えていることはあり得ず、ましてや神を畏れ神に従う本性を持って生まれることはあり得ない。その逆に、人間は神を拒み、神に反抗する本性を備えており、真理への愛は抱いていない。わたしが話したいのはこの本性、すなわち裏切りという問題についてである。裏切りは各人の神への反抗の根源である。これは人間だけが有する問題であり、わたしにはない。人によっては、「すべての人間はキリストと同様この世界に生きているのに、なぜすべての人間は神を裏切る本性を備えており、キリストは備えていないのか」と問う者がいる。この問題について、あなたがたに明確に説明しなければならない。

人間の存在の基本は、魂が繰り返し生まれ変わることである。言い換えれば、各人は魂が生まれ変わると、肉としての人間の命を得る。人の身体が生まれると、その命は肉が最終的に限界に達するまで、すなわち最後の瞬間まで続き、そして魂はその殻を離れる。この過程は何度も繰り返され、人間の魂は幾度となく行っては戻り、人類の存在が維持される。肉の命は人間の魂の命でもあり、人間の魂はその肉の存在を支えている。つまり各人の命はその者の魂に由来し、本来肉に宿っているものではない。したがって、人間の本性は人間の肉ではなく魂に由来する。各人がサタンの誘惑や苦悩、墮落をどのように経験したかを知っているのは、各人の魂のみである。人間の肉がそれらを知る由はない。そのため人間は無意識のうちにますます汚れ、邪悪にかつ暗黒になってゆくと同時に、わたしと人間の間距離もますます広がり、人間の日々もますます暗黒になってゆく。人間の魂はサタンに掌握されており、そのため人間の肉もまたサタンに占領

されたのは言うまでもない。このような肉、このような人間が、どうやって神に反抗せずにいられようか。どうやって生来、神に適合する者であり得るだろうか。わたしがサタンを中空へと投げ落としたのは、サタンがわたしを裏切ったからだ。ならばどうして人間がその影響から逃れ得るだろうか。これが、人間の本性が裏切りである理由だ。あなたがたはこの理由を理解すれば、キリストの本質も信じることができるはずだ。神の霊が纏っている肉は神自身の肉である。神の霊は至高であり、全能で、聖く、義である。同様に、神の肉も至高であり、全能で、聖く、義である。このような肉は、人間にとって義であり有益なこと、聖いこと、栄光あること、そして力あることしか行えず、真理や道義に反することはできず、ましてや神の霊を裏切るようなことはできない。神の霊は聖なるものであるため、神の肉はサタンが墮落させることのできないものであり、人間の肉とは本質が異なる。サタンにより墮落させられているのは人間であって神ではないため、サタンが神の肉を墮落させることは一切できない。このため、人間とキリストは同じ空間にあるにもかかわらず、人間だけがサタンにより占有され、利用され、囚われている。それに対し、キリストはサタンによる墮落の影響を永久に受けることがない。なぜならサタンが最も高い場所に昇れることは決してなく、神に近づくことも決してできないからである。今日あなたがたは全員が、わたしを裏切るのはサタンにこのように墮落させられた人間だけであることを理解しなければならない。裏切りの問題がキリストに関わることは一切ないのである。

サタンにより墮落させられた魂はすべて、サタンの領域に囚われている。キリストを信じる者のみが分離され、サタンの軍勢から救われ、今日の神の国へと導かれた。これらの人々は、もはやサタンの影響下にはいない。それでもなお、人間の本性は人間の肉に根ざしている。つまり、あなたがたの魂は救われているが、あなたがたの本性は依然として昔のままであり、あなたがたがわたしを裏切る可能性はいまだに100パーセントである。このために、わたしの働きはこれほど長期に及んでいるのだ。あなたがたの本性が手に負えないからである。現在あなたがたは皆、自分の本分を尽くすため全力を尽くして苦難に耐えているが、それでも一人一人がわたしを裏切り、サタンの領域、サタンの陣営に戻り、昔の生活へと戻る可能性がある。これは否定できない事実である。そのときあなたがたは、現在のように人間性や人間としての姿をわずかでも示すことはできないであろう。深刻な場合は神により滅ぼされ、さらに永遠に罪に定められ、厳罰に処されて、生まれ変わることも二度とないであろう。これがあなたがたを待ち受ける問題である。わたしがこのように警告しているのは、第一に、わたしの働きが無駄になら

ないようにするためであり、第二に、あなたがた全員が光の日々を生きられるようにするためである。実のところ、わたしの働きが無駄かどうかは重大な問題ではない。重要なのは、あなたがたが幸せな生活と素晴らしい未来を得られることである。わたしの働きは人間の魂を救う働きである。あなたの魂がサタンの掌中に陥ったなら、あなたの身体も平安の中に生きることができない。わたしがあなたの身体を護っていれば、あなたの魂も確実にわたしの庇護を受ける。わたしがあなたを本気で忌み嫌ったなら、あなたの身体と魂は、即座にサタンの掌中に陥るであろう。そうなったときの自分の状況を想像できるか。もしいつの日か、わたしの言葉があなたがたにとって意味をなさなくなったら、わたしはあなたがたをすべてサタンに引き渡し、サタンはわたしの怒りが完全に消えるまであなたがたに激しい苦悶を与えるか、あるいはわたし自らが、救いようのないあなたがたに懲罰を与えることになる。あなたがたのわたしを裏切る心は変わりようがないからである。

今あなたがたは皆、できるだけ早く自分自身をふり返り、わたしに対する裏切りが自分の中にどの程度残っているかを確認しなければならない。わたしはあなたがたの答えを待ちきれない。わたしといい加減に向き合うのはやめなさい。わたしは人間に対してふざけることは一切なく、すると言ったことを必ず実行する。わたしはあなたがた全員が、わたしの言葉を真剣に捉え、それをSF小説のように考えなくなることを願っている。わたしが望むのはあなたがたの具体的な行動であり、想像ではない。そして、あなたがたはわたしの次の質問に答える必要がある。1. あなたが真に効力者であるならば、一切の怠慢や消極性を示すことなく、わたしに忠実に奉仕できるだろうか。2. あなたはわたしが一度もあなたを称賛したことがないと知っても、一生わたしのもとに留まり、奉仕を続けることができるだろうか。3. あなたが大いに努力したにもかかわらず、わたしがあなたに冷淡であったとしても、ひっそりとわたしのために働き続けることができるだろうか。4. 何かをわたしのために費やした後に、わたしがあなたの些細な要求に応えなかったとしたら、わたしに失望し、落胆したり、さらには激怒したり罵声を浴びせたりするだろうか。5. あなたがわたしに対して常に忠実で、わたしを非常に愛してきたにもかかわらず、病や貧窮の苦しみを受けたり、友人や親戚に見捨てられたり、その他の人生における不幸に見舞われたとしたら、それでもわたしに対する忠誠や愛が続くだろうか。6. あなたが心に思い描いてきた物事が、一つもわたしの行ったことと一致しないとしたら、あなたはどのように将来の道を歩むだろうか。7. あなたが望むものを一切受け取れなかったとしても、引き続きわたしに付き従うか。8. あなた

がわたしの働きの目的や意味をまったく理解できなかったとしても、勝手に判断したり結論を出したりしない、従順な者であることができるだろうか。9. わたしが人間と共にあった間に述べたすべての言葉と行ったすべての働きを、大事にすることができるか。10. あなたはわたしに忠実に付き従い、何も受け取れないとしても、生涯を通してわたしのために苦難に耐えることができるか。11. わたしのために、自分が将来生存するための道を考えたり、計画したり、用意せずにいることができるか。これらの質問は、あなたがたに対するわたしの最終的な要求であり、わたしはあなたがた全員からの返答を期待している。もしあなたがこれらの質問のうち1つか2つの要求を満たしているなら、引き続き努力する必要がある。これらの要求のうち1つも達成できるものがないなら、あなたは間違いなく地獄へ落とされる部類の人間だ。そのような人々に、わたしはこれ以上何も言う必要はない。そのような者は間違いなく、わたしと調和できる者ではないからである。どんな状況であろうとわたしを裏切る者を、どうしてわたしの家に留めておくことができようか。多くの場合にわたしを裏切る可能性がある者については、わたしはまず彼らの行動を観察してから、その他の処分を行う。しかしどのような状況下にせよ、わたしを裏切る可能性がある者すべてを、わたしは決して忘れることはなく、心の中に留め、その邪悪な行いに報いる機会を待つ。わたしが挙げた要求はすべて、あなたがたが自分で検証すべき問題である。あなたがた全員がこれらの問題を真剣に検討し、わたしといい加減に向き合わないことを願っている。わたしは近い将来、わたしの要求に対するあなたがたの答えを確認する。その時には、あなたがたにそれ以上の物事を要求することではなく、より熱心な忠告を与えることもないだろう。代わりにわたしは自分の権威を行使する。残すべき者は残され、報いられるべき者は報いられ、サタンに引き渡されるべき者はサタンに引き渡され、厳罰を受けるべき者は厳罰を受け、滅ぶべき者は滅ぼされるであろう。そのようにしてわたしの日には、わたしを侵害する者は誰もいなくなる。あなたはわたしの言葉を信じるだろうか。あなたは報いを信じるだろうか。わたしを騙し裏切る邪悪な者を、わたしがすべて罰することを信じるだろうか。あなたはその日が早く来ることを望むか、それとも遅く来ることを望むか。あなたは罰に怯える者であろうか、罰に耐えなければならないのにわたしに反抗する者であろうか。その日が来た時、あなたは自分が明るく笑っているか、それとも泣きながら歯ぎしりしているかを想像できるだろうか。あなたはどんな結末を得ることを望むか。あなたは自分がわたしを100パーセント信じているか、それともわたしを100パーセント疑っているかを、真剣に考えたことがあるか。自分の行動や態度が自分にどのような結末や最後をもたらすかを、よく考えたことがあるか。わたしの言葉が一つずつ実現されること

を真に望んでいるか、あるいはわたしの言葉が一つずつ実現されることを強く恐れているか。わたしが自らの言葉を実現するためにまもなく立ち去ることを望んでいるなら、あなたは自分の言葉や行動をどのように扱うべきか。わたしが立ち去ることを望まず、わたしの言葉がすべてただちに実現されることを望まないなら、そもそもなぜわたしを信じているのか。あなたは自分がなぜわたしに従っているかを本当に知っているのか。それが単に自分の視野を広げるためなら、そのような苦悩を受ける必要はない。それが祝福を受けて今後の災禍を避けるためなら、なぜあなたは自分の行動について懸念しないのか。なぜ、自分がわたしの要求を満たせるかどうかを自問しないのか。またなぜ、自分が今後やって来る祝福を受けるにふさわしいかどうかを自問しないのか。

神の国の時代に神に選ばれた人々が従わなければならない行 政命令十項目

1. 人は自分を大きく見せてはならないし、崇めてもいけない。人は神を崇め、賛美すべきである。

2. あなたは神の働きのためになることは何でもすべきであり、神の働きに有害なことは一切してはならない。神の名、神の証し、神の働きを守るべきである。

3. 金銭、物質、神の家のすべての財産は、人が提供すべき捧げものである。これらの捧げものを享受するのは祭司と神だけである。人からの捧げものは神が享受するためのものであり、神はこれらの捧げものを祭司とだけ分かち合い、ほかの誰も、捧げもののいかなる部分であれ、享受するに相応しくなく、またそうする資格はないからである。人からの捧げものはすべて（金銭や享受できる物質的なものを含め）神に捧げられ、人には与えられない。それゆえ、これらのものを人は享受すべきではない。捧げものを享受するなら、その人は捧げものを盗んでいるのである。誰でもこのようなことをする人はユダである。ユダは裏切り者であることに加えて、金袋に入っているものも勝手に使ったからである。

4. 人の性質は堕落している。その上、人はさまざまな感情を持っている。そこで、神に仕える際、男女が二人きりで一緒に働くことは絶対に禁止される。誰でもそうしていることが見つかった者は除名され、これに例外はなく、誰も免除されない。

5. あなたは神を批判してはならず、不用意に神に関連する事柄について話してはならない。人が行動すべき仕方で行動し、話すべき仕方話し、自分の限度を越えてはな

らず、自分の境界を逸脱してもならない。口を慎み、自分の歩みに気をつけなさい。これらはすべて、神の性質を犯すことを防ぐであろう。

6. 人が行うべきことを行い、自分の責務を実行し、責任を果たし、本分を忠実に守るべきである。あなたは神を信じているのだから、神の働きに貢献するべきである。そうしなければ、あなたは神の言葉を飲み食いする資格がなく、神の家で暮らす資格もない。

7. 教会の仕事や事柄に関し、神に従うことは別として、すべてのことについて聖霊に用いられている人の指示に従うべきである。ほんのわずかな違反も受け入れられない。絶対的に順守するべきであり、正誤を分析してはならない。何が正しいか、間違っているかはあなたには関係がない。あなたは全面的に服従することだけを気かけなければならない。

8. 神を信じる人は神に従い、神を礼拝すべきである。どんな人物をも、崇めたり、仰ぎ見たりするべきではない。神を第一位とし、仰ぎ見る人々を第二位とし、自分自身を第三位とすべきではない。誰もあなたの心の中に場所を占めるべきではなく、あなたは人々を、とりわけあなたが崇拝する人々を、神と劣らず、神と同等なものと考えてはならない。これは神にとって耐えられないことである。

9. あなたの思いは教会の仕事にあるべきで、自分の肉体の将来的展望は脇にやり、家庭問題については決然とし、心から神の働きに自己を捧げ、神の働きを第一にし、自分自身の生活は第二にするべきである。これが聖徒の礼儀正しさである。

10. 信仰のない家族（あなたの子供たち、夫または妻、姉妹、両親など）は強制的に教会に入会させられるべきではない。神の家はメンバーに不足しておらず、役に立たない人々で数を作り出す必要もない。喜んで信じない人は誰も、教会に導き入れてはならない。この命令はすべての人に向けられる。この件に関し、あなたがたはお互いに確認し、監視し、注意するべきである。だれでもこれを犯してはいけない。信仰のない家族が不本意に教会に入る時でさえ、彼らに書籍を与えたり、新しい名前を与えたりしてはならない。そのような人々は神の家には属しておらず、必要ないかなる手段を用いても彼らが教会に入ることは止めなければならない。もし悪魔が侵入したために教会に問題が持ち込まれたなら、あなた自身が除名されるか、またはいくつかの制約が課せられる。要するに、誰もがこの件に関して責任があり、無謀なことをしてはならず、個人的恨みを晴らすために使ってはならない。

あなたがたは自分の行いを考慮すべきである

あなたがたの生活における行いや行動はどれも、わたしの言葉の一節が毎日あなたがたに施され、あなたがたを補給しなければならないことを示している。と言うのも、あなたがたに欠けているものがあまりに多く、あなたがたの認識と受け取る能力があまりに乏しいからである。あなたがたは日常生活の中で、真理も優れた理知もない雰囲気と環境の中で生きている。あなたがたには生き延びるうえでの元手がなく、わたしや真理を知る基盤もない。あなたがたの信仰は、漠然とした抽象的な信念、あるいは極めて教条的な知識と宗教的儀式の上に築き上げられているに過ぎない。わたしはあなたがたの動きを日々見守り、あなたがたの意図や悪い果実を吟味しているが、わたしの不動の祭壇の上に心と霊を本当に捧げた人を、わたしは一人も見つけたことがない。だから、わたしがあらわしたいと思っている言葉のすべてをそのような人間に注ぐことで、時間を無駄にしたくはない。まだ完成していない働きと、人類のうちわたしがまだ救っていない人たちだけが、わたしの心にある計画の対象である。にもかかわらず、わたしに従う人たちがみな、わたしの救いと、わたしの言葉によって人に授けられる真理とを受けとることをわたしは望む。あなたがいつの日か目を閉じるとき、暗雲が空を漂い、泣きわめく声が決して止まることのない、荒れた冷たい世界ではなく、芳香が空気を満たし、生ける川の水が流れる領域を見るよう、わたしは望んでいる。

毎日、一人ひとりの行いと思いは唯一の方の目に留まっており、それらは同時に、彼ら自身の明日に向けて準備されている。これはすべての生ける者が歩かなければならない道であり、わたしがすべての者に予め定めた道であり、誰もこれを逃れられず、例外となる者もない。わたしが語った言葉は数えきれず、さらに、わたしが行なった働きは計り知れない。一人ひとりがその生来の本性、およびその本性がもたらす出来事に応じて、その人がなすべきあらゆることを自然に遂行する様子を、わたしは毎日見ている。多くの人には知らないうちに、「正しい軌道」にすでに乗っているが、それは様々な人を明らかにすべく、わたしが定めたものである。わたしはずっと以前からこれら様々な種類の人間を違った環境に置いており、一人ひとりがそれぞれの場所で、生まれ持った特性を表わしてきた。彼らを縛る者は誰もいないし、彼らを誘惑する者もない。彼らはひとえに自由であり、彼らが表わすものは自然に生じる。彼らを抑制するものはただ一つ、わたしの言葉である。だから、死を免れるためだけにわたしの言葉をしぶしぶ読み、決して実践しない者もいる。一方、わたしの言葉の導きと施しがなければ日々耐え難いことに気づき、自然とわたしの言葉をいつも手放さない者もいる。時が経つにつれ

、彼らは人生の奥義、人類の終着点、人間であることの価値を発見する。わたしの言葉の前で、人類はこのような有様でしかない。そしてわたしは、物事を自然の成り行きに任せているに過ぎない。わたしは人に無理強いして、わたしの言葉を自らの生存の基盤にさせることは一切しない。だから、良心をもたず、自分の存在に何の価値もない人たちは、静かに事の成り行きを観察したあと、大胆にもわたしの言葉を投げ捨て、自分の好きなようにする。彼らは真理や、わたしから生じるすべてのものにうんざりし始める。さらに、彼らはわたしの家にいることにもますますうんざりする。このような人たちは、自分の終着点のために、また懲罰を逃れるために、たとえ奉仕をしていても、わたしの家でしばらく暮らす。しかし、彼らの意図や行動は決して変わらない。このことは、祝福を求める彼らの願望を膨らませ、一度神の国に入ってその後永遠に留まり、果ては永遠の天国に入る願望をも膨らませる。わたしの日がすぐに来るのを切望すればするほど、彼らはますます、真理が障害になっている、自分の道をふさぐ躓きの石になっていると感じる。彼らは、真理を追求する必要も、裁きと刑罰を受け入れる必要もなく、それに何より、わたしの家で卑屈に振る舞い、わたしの命令どおりにする必要も一切ないまま、神の国に足を踏み入れて天国の祝福を享受することを待ち切れずにいる。これらの人々がわたしの家に入るのは、真理を求める心を満たすためでも、わたしの経営に協力するためでもない。彼らの目的は、来たる時代に滅ぼされない人の一人になることだけである。よって彼らの心は、真理とは何か、真理をどのように受け入れるかを知ったことがない。そのような人たちが真理を実践することも、自分の墮落の深さを認識することもないまま、「しもべ」としてわたしの家でずっと暮らしていたのはそれが理由である。彼らは「忍耐強く」わたしの日が来るのを待ち、わたしの働きの仕方に翻弄されても疲れを知らない。しかし、彼らがどんなに努力しようと、あるいはどんな代価を支払おうと、彼らが真理のために苦しんだり、わたしのために何かを与えたりしているのを見た人はいない。彼らは心の中で、わたしが古い時代を終わらせる日を見たくてたまらず、さらに、わたしの力と権威がいかに偉大であるかを見出すことを待ちきれずにいる。彼らが決して急いで行おうとしなかったこと、それは自らを変え、真理を追い求めることである。彼らは、わたしがうんざりしているものを愛し、わたしが愛しているものにうんざりしている。わたしが憎むものを慕いつつ、わたしが忌み嫌うものを失うことを恐れている。彼らはこの邪惡な世に生きながら、それを憎んだことは一度もなく、わたしが滅ぼすことを心底恐れている。彼らは矛盾した意図をもち、その中でわたしが忌み嫌うこの世を愛しているが、わたしが急いでこの世を滅ぼすこと、そして自分が真の道から逸れてしまう前に、破滅の苦しみを免れ、次の時代の主人へと変えられ

ることを切望している。これは、彼らが真理を愛さず、わたしから生じる一切のものにうんざりしているからである。祝福を失わないよう、しばらくは「従順なる人たち」になるだろうが、彼らの祝福を求める気持ちや、滅びて燃える火の池に入ることを恐れる気持ちは決して覆い隠せない。わたしの日が近づくにつれ、彼らの願望は着実に強くなる。そして災いが大きければ大きいほど、わたしを喜ばせ、長い間切望してきた祝福を失わないようにするには、まずどこから始めたらよいのかわからず、ますます無力になる。わたしの手がその働きを始めるやいなや、このような人たちは先駆者として仕えるべく行動を起こしたがる。自分がわたしの目に留まらないことを深く恐れ、群れの最前列に押し入ることだけを考える。彼らは自分が正しいと思うことを行い、それを口にするが、自分の行為や行動が真理にまったく沿っておらず、自分の所業がわたしの計画をただ妨害し、干渉するだけであることを知らない。彼らは大いに努力するかもしれないし、困難に耐えようとする意志や意図は真実かもしれないが、彼らがする一切のことはわたしとなんら関係ない。なぜなら、彼らの行いが善意から生じるのを一度も見たことはないし、ましてやわたしの祭壇に何か置くのも見たことがないからである。これが、彼らが長年わたしの前でしてきた行いである。

もともと、わたしはあなたがたにもっと真理を与えたいと望んだが、真理に対するあなたがたの態度があまりにも冷たく無関心なので、わたしはあきらめざるを得ない。自分の努力が無駄になることは望まないし、人々がわたしの言葉をもちながら、あらゆる点でわたしに逆らい、わたしを中傷し、わたしを冒涇することを行うのを見たくはない。あなたがたの態度と人間性の故に、わたしは自分の言葉のごく一部分、あなたがたにとって非常に大切な部分だけをあなたがたに与え、人類を試す働きとして役立てる。いま初めて、わたしの下した決断と計画があなたがたの必要とするものに合致していたこと、そしてそれ以上に、人類に対するわたしの態度が正しいものであることを、わたしは本当に確信した。あなたがたが長年にわたりわたしの前で見せてきた振る舞いは、前例のない解答をわたしにもたらした。その解答に対する問いは、「真理と真の神の前で、人の態度はどのようなものか」である。わたしが人間に捧げてきた努力は、人間を愛するわたしの本質を証明し、人がわたしの前で行なってきた一つひとつの行動は、真理を憎んでわたしに反抗する人間の本質を証明している。わたしはいつでも、わたしに従うすべての人を気にかけているが、わたしに従う人はいかなるときも、わたしの言葉を決して受け取ることができない。彼らはわたしの提案さえ受け入れることができない。これがわたしを何より悲しませることである。たとえわたしの態度が誠実で、わたしの

言葉がやさしくても、誰一人わたしを理解できたことがないし、そのうえ、誰一人わたしを受け入れられたこともない。誰もが、わたしにまかされた働きを、自分の考えにしたがって行おうとしている。わたしの旨を求めず、ましてやわたしが何を求めているかを尋ねることなどない。彼らはわたしに逆らいながら、依然としてわたしに忠実に仕えていると主張している。多くの人たちは、自分が受け入れられない真理、あるいは自分が実践できない真理は、真理ではないと信じている。そのような人たちの中で、わたしの真理は否定され、投げ捨てられるものになっている。それと同時に、人々は言葉でこそわたしを神として認めているが、わたしのことを真理でも、道でも、いのちでもない部外者だとも信じている。誰一人、次の真実を知る人はいない。わたしの言葉は永久不変の真理である。わたしは人間にいのちを施す者であり、人類の唯一の案内人である。わたしの言葉の価値と意味は、人間に認められているかどうか、受け入れられているかどうかではなく、言葉自体の本質によって決定される。たとえこの地上の誰一人としてわたしの言葉を受け入れられないとしても、わたしの言葉の価値と、それがどれだけ人類の助けになるかは、どんな人にも計り知れない。だから、わたしの言葉に逆らい、反論し、あるいはわたしの言葉をまったく軽蔑している人に直面するとき、わたしの立場はこうである。時と事実をわたしの証人とし、わたしの言葉が真理であり、道であり、いのちであることを示そう。そして、わたしが言ったことはすべて正しく、人はそれを備えるべきであり、さらに、人はそれを受け入れるべきであることを、時と事実を実証させよう。わたしに従うすべての者たちに次の事実を知らせる。わたしの言葉を完全に受け入れられない人たち、わたしの言葉を実践できない人たち、わたしの言葉に目的を見いだせない人たち、そしてわたしの言葉によって救いを受け入れられない人たちは、わたしの言葉によって罪に定められた人たちであり、さらには、わたしの救いを失った人たちである。そして、わたしのむちは決して彼らを外さない。

2003年4月16日

神は人間のいのちの源である

産声を上げてこの世に生まれてきた瞬間から、あなたは自分の責務を果たし始める。神の計画と定めの中で自分の役割を果たして、人生の旅を始める。背景が何であれ、また前途がどうであれ、天の指揮と采配から逃れられる者はいない。また自分の運命を支配できる者もない。なぜなら、万物を支配するその方しかそのような働きはできないからである。人類が誕生して以来、神は宇宙を経営し、万物の変化の法則とそれらの運

行の軌跡を指揮しながら、ずっとこのように働いてきた。万物と同様に、人間は秘かに、知らないうちに、神から来る蜜と雨露によって養われている。他のあらゆるものと同様に、人は知らないうちに神の手による指揮のもとに生存している。人の心と霊は神の手中に握られており、人の生活の一部始終が神の目に見られている。あなたがこのことを信じているかどうかにかかわらず、生きているものであれ死んでいるものであれ、万物は神の思いによって移ろい、変転し、新しくされ、消滅する。これこそが神が全てのものを統治する方法である。

夜が静かにしのび寄って来ても、人は気づかない。なぜなら、人の心は夜がどのようにして近づくのかも、それがどこから来るのかも感知できないからである。夜が静かに過ぎ去ると、人は日の光を歓迎するが、光がどこから来て、どのように夜の闇を追い払ったかについては、なおさら知るよしもなく、まして気づいてもいない。こうして繰り返される昼と夜の移り変わりによって、人は一つの時期から次の時期へ、一つの歴史的背景から次の歴史的背景へと導かれ、それと同時に、それぞれの時期における神の働きと、それぞれの時代における神の計画が確実に遂行される。人は神と共にこれらの時期を歩んできたが、神が万物と全ての生けるものの運命を支配することも、神がどのように万物を指揮し導くのかも知らない。これは太古の昔から現代まで、人には知るよしもないことであった。その理由は、神の業があまりにも隠され過ぎているからでも、神の計画がまだ実現されていないからでもない。それは、人の心と霊が神からあまりに遠く離れているため、神に従いながらもサタンに仕え続けるまでなり、しかも、まだそのことに気づいていないからである。神の足跡と顕現を積極的に探し求める者は一人もいない。また進んで神の配慮と加護の中で生存しようとする者もない。その代わりに、この世と邪悪な人類が従う生存の掟に適應するために、邪悪な者、サタンの腐敗に頼ることを人は望む。この時点で人の心と霊は、サタンへの貢物となり、その餌食となった。その上、人間の心と霊はサタンの住みかとなり、サタンの恰好の遊び場となった。こうして人間は、人間であることの原則について、また人間存在の価値と意義についての理解を気づかないうちに失うのである。神の律法、そして神と人の間で交わされた契約は、人の心の中で次第に薄れ、人は神を求めることも神に注意を払うことも止めてしまう。時間が経つにつれ、人は神が人間を創造した理由も、神の口から出る言葉や神から来る全てをもはや理解しなくなる。それから人は神の律法と掟に抵抗し始め、人の心と霊は麻痺してしまう……。神は自らが最初に創造した人間を失い、人間はその始まりの根源を失う。これが人類の悲哀である。実際のところ、全ての始まりから現在に至るまで

、神は人類のために悲劇を上演してきたのであり、その悲劇の中で人間は主人公でもあり被害者でもある。そして、この悲劇の監督が誰であるのか答えることのできる者はいない。

この広大な世界で、数え切れないほどの変化が起こっている。大海は変じて田園となり、田園は変じて大海となり、これが何度も繰り返されている。宇宙の万物を統治する方を除いては、この人類を導き案内できる者はいない。この人類のために労したり備えたりできる力ある者は存在せず、ましてや人類を光の終着点へと導き、この世の不正から解放できる者などいるはずもない。神は人類の未来を嘆き、人類の墮落を悲しみ、人類が一步一步、滅びと戻ることをできない道に向かって進んでいることに心を痛めている。神の心を引き裂き、神を棄てて邪悪な者を求めた人類、このような人類がどこに向かっているのかを考えたことのある者がいるだろうか。まさにこれこそが、誰も神の怒りを感知せず、誰も神を喜ばせる道を求めようともせず、神のもとへ近づこうとするともなく、さらには、誰も神の悲しみと痛みを理解しようとししない理由である。神の声を聞いた後でさえ、人は自分の道を歩み続け、頑なに神のもとから離れ去り、神の恵みと配慮を避け、神の真理を避けて、神の敵であるサタンに自身を売ることの方を好む。そして、人がこのまま頑なであり続けるなら、後ろを振り向くこともなく神を見捨てたこの人間に対して神がどのようにふるまうかについて、誰が考えたことがあるのか。神が繰り返し人に思い起こさせ、勧告する理由は、人間の肉体と魂にはとうてい耐えられないような、未だかつてない災難を神はその手に準備しているからだということを知る者はいない。この災難は単に肉体の懲罰だけではなく、魂の懲罰でもある。あなたは知らなければならない。神の計画が無駄になり、神の喚起と勧告に反応が無いなら、神はどのような怒りを注ぐであろうか。それは今までどんな被造物も経験したことも聞いたこともないようなものである。だからわたしは、この災難は前例がなく、二度と繰り返されることはないと言う。なぜなら、神の計画とは今回一度だけ人類を創造し、一度だけ人類を救うことだからである。これが最初であり、また最後である。それゆえ、今回人類を救おうとする神の苦心や切なる期待を理解できる者は一人もいない。

神はこの世界を創造し、神が命を授けた生きものである人間を世にもたらした。次に、人間は両親と親族を持つようになり、もはや孤独ではなくなった。人間は、最初にこの物質的世界に目を向けて以来、神の予定の中で存在するように定められてきた。神から出る命の息は、成人へと成長する間ずっとあらゆる生きものを維持する。この過程で、人は神の配慮のもとに成長していると感じる者はいない。むしろ、人は両親の愛情の

こもった世話のもとで成長し、人の成長を促すのは自身の生命本能だと思う。それは、人間は誰が自分に命を授けてくれたのか、どこからそれが来たのかを知らず、ましてや、生命本能がどのようにして奇跡を生み出すのかなど知るよしもないからである。人は食物が生命維持の基礎であり、根気が人間生存の源であり、頭の中にある信念が人間の生存を左右する資本であるということだけを知っている。神の恵みと施しにはまったく気づかないので、神によって授けられた命を人は浪費する……。神が日夜世話しているこの人類のうち、一人として自主的に神を礼拝しようとはしない。神は計画通りにひたすら人に働きかけ続けるだけで、人には何も期待しない。人がある日夢から覚めて、命の価値と意義、人に与えた全てのもののために神が支払った代価、そして人が神のもとへ戻ってくるのを待つ神の切なる心遣いを突然悟ることを願いつつ、神は働き続けている。人間の生命の起源と存続をつかさどる奥義を探究した者はいない。これら全てを理解している神だけが、神からあらゆるものを受け取ったにもかかわらず感謝することもない人間から受ける傷や打撃に黙って耐える。人間は命がもたらす全てのことを当然のことと考えている。そして同様に、神が人間によって裏切られ、忘れられ、ゆすり取られるのも「当然のこと」とする。神の計画が本当にこれほど重要であると言えるだろうか。人間、すなわち神の手から出たこの生きものが本当にそれほど重要だと言えるだろうか。神の計画は確かに重要である。しかし、神の手で創造されたこの生きものは、神の計画のために存在する。それゆえ、この人類に対する憎しみ故に神は自らの計画を台無しにすることはできない。神が全ての苦痛に耐えるのは、神の計画のためであり、また神が吐いた息のためであり、人間の肉のためではなく、人間のいのちのためである。神がそうするのは、人の肉ではなく、神が吐き出したいのちを取り戻すためである。これこそが神の計画である。

この世に生まれて来る人間は皆、生と死を通らなければならない。そして、その大多数は死と再生の周期を経てきた。生きている者はやがて死に、死者もやがて戻ってくる。これは全て生きものそれぞれのために神によって用意された命の過程である。けれども、この過程と周期こそが人が目を向けるようにと神が願っている真実である。それは、神が人に授けたいのちは無限であり、肉体、時間、空間により制限されないということである。これこそが神によって人に授けられたいのちの奥義であり、いのちが神から来た証拠である。多くの人はいのちが神から来たことを信じないかもしれないが、神の存在を信じるか否定するかにかかわらず、人間は神から出る全てのものを必然的に享受する。ある日突然、神が心変わりし、世界に存在する全てのものを取り返し、自らが与

えたいのちを取り戻すことを望むならば、万物は存在しなくなる。神は自らのいのちを用いて全てのもの、生きているもの生きていないものの両方に施し、神の力と権威により全てを秩序正しく整える。これは誰にも想像することも理解することもできない真実であり、これらの理解し難い真実は、まさに神のいのちの力の表れであり、証しである。今あなたに秘密をひとつ告げよう。神のいのちの偉大さとその力は、いかなる被造物にとっても計り知れないものである。過去と同様、現在もそうであり、来たるべき未来もそうである。わたしが伝える第二の秘密はこうである。形や構造がどのように異なっていようと、全ての被造物のいのちの源は神である。あなたがどのような生命体であっても、あなたは神によって定められたいのちの軌道に逆らうことはできない。いずれにせよ、わたしが唯一望むのは、人間が次のことを理解することである。神の配慮、加護、施しがなければ、人間はどれほど勤勉に努力しても、どれほど熱心に奮闘しても、人が受けるように定められている全てのものを受けすることはできない。神からのいのちの施しがなければ、人間は生きる価値や命の意義を失ってしまう。神のいのちの価値を勝手気ままに浪費する人が、これほど何も気につけないことをどうして神が許すだろうか。前にも言ったように、神があなたのいのちの源であることを忘れてはならない。神が授けた全てのものを人が大切にしないならば、神は始めに与えたものを取り返すだけでなく、人間からの代償として与えた全てのものの代価の二倍を要求する。

2003年5月26日

全能者のため息

あなたの心の中には非常に大きな秘密がある。あなたはそのことにまだ気がついていない。なぜなら光のない世界でずっと生きてきたからである。あなたの心と霊はあの悪い者に取上げられてしまった。あなたの目は暗闇のせいで見えなくなり、空の太陽も夜のきらめく星も見ることができない。あなたの耳は欺瞞的な言葉で塞がれ、ヤーウエのとどろきわたる声も玉座から流れる水の音も聞こえない。あなたは正當にあなたのものであるすべて、全能者があなたに与えたものすべてを失った。あなたは終わりのない苦しみの海に入った。救出する力もなく、生き残る希望もなく、ただもがき駆け回ることしかできず……。その瞬間から、あなたはあの悪い者に苦しめられるように運命づけられ、全能者の祝福から遠く離れ、全能者の施しの届かないところにおり、後戻りできない道を歩いている。百万回の呼び声もあなたの心と霊を奮い起こす見込みはない。あなたはあの悪い者の手の中で深い眠りにについている。悪い者は境界も、方向も、道しるべ

もない広大な領域へとあなたを誘惑した。それ以来、あなたは本来の純粋さと無邪気さを失い、全能者の気づかいを避けるようになった。あなたの心の中では、あの悪い者があらゆることにおいてあなたを操縦し、あなたのいのちになった。あなたはもはや悪い者を恐れることも、避けることも、疑うこともしない。代わりにあなたは悪い者を心の中で神として扱う。あなたは悪い者を祀り、礼拝するようになる。あなたと彼は物体とその影のように切り離せなくなり、生においても死においても互いに委ねあっている。あなたは自分がどこから来て、なぜ生まれ、なぜ死ぬのか全く知らない。あなたは全能者を見知らぬ人として見る。あなたは全能者の起源を知らず、ましてあなたのために全能者が行なった全てのことなど知るよしもない。全能者から来るあらゆることがあなたにとって憎むべきものになった。あなたはそれを大事にしないし、その価値も知らない。全能者からあなたが施しを受けた日から、あなたはあの悪い者とともに歩いている。あなたは悪い者とともに何千年もの風雨を耐え抜いてきて、悪い者とともにあなたのいのちの源であった神に立ち向かう。あなたは悔い改めを一切知らず、ましてや自分が滅亡の淵に達したことなど知りもしない。あなたは悪い者があなたを誘惑し苦しめてきたことを忘れてしまった。あなたは自分の起源を忘れてしまった。そのようにしてきょうこの日まで、一步一步悪い者はあなたに害を与えてきた。あなたの心と霊は麻痺し、腐敗してしまった。あなたはもはや人の世の苦悩について不満を言うこともなく、世の中が不公平であるとは信じない。まして、全能者が存在するかどうかなど気にかけることもない。このようになったのは、あなたが随分前に悪い者を真の父と思うようになり、もはや彼から離れることはできないからである。これがあなたの心の中の秘密である。

夜明けが到来すると、明けの明星が東に輝きだす。それは以前にはそこになかった星で、静寂な星空を照らし、人々の心の中で消された光を再び燃え立たせる。人々はこの光のおかげでもはや孤独ではない。この光はあなたも他人も同様に照らす。しかし、あなただけが暗夜に眠りについたままである。あなたには音も聞こえず光も見えない。あなたは新天新地、新しい時代の到来にも気付かない。なぜなら、あなたの父が、「我が子よ、起きなくてよい。まだ早い。外は寒い。外に出るな。剣や槍があなたの目を射抜かないように」とあなたに言うからである。あなたは自分の父の忠告だけを信じる。なぜなら父はあなたより年を取っており、あなたを心から愛しているので、父だけが正しいと信じているからである。そのような忠告と愛があるために、あなたはもはや世界には光があるという言い伝えを信じなくなり、世界にまだ真理があるかどうかを気にかけなくなる。あなたはもはや全能者からの救済を望むなどということはしない。あなたは

現状に満足していて、もはや光の到来を期待しないし、言い伝えられる全能者の出現に注意することもない。あなたに関する限り、あらゆる美しいものは復活させることができず、存在することもできない。あなたの目には、人類の明日、人類の未来は消滅し、跡形もなくなっている。あなたは父の衣に必死になってしがみつき、共に苦しむことに気にせず、あなたの旅の友、長旅の方角を失うことをひどく恐れている。広大でもやの掛かった人の世があなたがたの多くを作り上げ、この世の様々な役割を満たすことにひるまず屈せず立ち向かうようにさせた。それにより、死を全く恐れない多くの「戦士」が作り出された。さらには、自らの創造の目的さえ知らない無感覚で麻痺した人間の群れが次々に生まれた。全能者の目はこの苛酷な苦しみにある人類の一人ひとりを眺めている。全能者に聞こえるのは苦しむ人々の泣き叫ぶ声であり、全能者に見えるのは苦しめられた人々の恥知らずな有様であり、全能者が感じるのは救いの恩恵を失った人類の無力と不安である。人類は全能者の配慮を拒絶し、自らの道を歩くことを選び、全能者の目による詮索を避けようとする。彼らはむしろ深海の苦さを、最後の一滴まで、かの敵とともに味わう方を好む。全能者のため息は人類にはもはや聞こえない。全能者の手はもはやこの悲劇的な人類に進んで優しく触れることはない。全能者は何度も何度も奪還し、何度も何度も失う。このように全能者の働きは繰り返される。その瞬間から全能者は疲れ、うんざり感じ始め、その掌中にある働きを止め、人々の間をさまよい歩くのを止める……。人間はこのような変化の一切、このような全能者の行き来にも、全能者の悲しみと憂いにもまったく気づかない。

この世界にあるすべてが、全能者の思いによって、全能者の目の下で、急激に変化している。人類が一度も聞いたことのない事が、突然到来する一方、人類が常に所有してきたものが、知らないうちに消え去ってしまう。誰も全能者の所在を推し量ることはできないし、まして全能者の生命力の超越性や偉大さを感じる事など到底できない。人には知覚できない事を知覚できるゆえに全能者は超越的である。人類によって捨てられたにもかかわらず人類を救う方であるゆえに全能者は偉大である。彼は生と死の意義を知っている。それだけでなく、自身が創造した人類の存在を司るのに適した法則を知っている。彼は人類の存在の基礎であり、人類を再び復活させる贖い主である。彼は幸せな心に悲しみという重荷を負わせ、悲しむ心を幸福で引き上げる。これらは全て彼の働きのためであり、彼の計画のためである。

全能者のいのちの供給から離れた人類は、存在の目的を知らないが、それでも死を恐れている。支えもなく援助もないが、人類は依然として目を閉じようとせず、自らの魂

を感じることもない肉の塊として頑なにこの世における下劣な存在を引きずっている。あなたはどのように何の希望もなく生き、他人も何の目的もなく生きている。伝説のあの聖なる者だけが、苦しみにうめきながら彼の到来を待ち焦がれる人たちを救う。この信念は知覚のない人々においてはまだ実現していない。しかし人々はまだそれを切望している。全能者は深い苦しみの中にあつたこのような人々に慈しみを抱く。同時に、全能者は何の知覚もないこのような人々にうんざりしている。なぜなら、人間から答えを得るのに、あまりにも長く待たねばならなかったからである。全能者は探したい、あなたの心と霊を探し、あなたに水と食料を施したい、あなたを目覚めさせたいと思っている。それにより、もはやあなたが渇きと飢えを感じないようにである。あなたが疲れているとき、この世の荒廃のようなものを感じはじめるとき、途方に暮れてはならない、泣いてはならない。全能神という、見守る者がいつでもあなたが来るのを抱擁して迎えるからである。彼はあなたのそばで見守り、あなたが立ち返るのを待っている。あなたが記憶を突然回復する日を待っている。すなわち、あなたが神から来たのであり、いつであつたかは不明だが道に迷い、いつであつたかは不明だが路上で気を失い、いつであつたかは不明だが「父」ができたことに気づく日を。さらに、全能者がずっと見守ってきたということ、とても長い間あなたが帰ってくることを待っていたということに気づく日を。全能者は切実な思いで見守り、そして答えのない応答を待っている。全能者の見守りはきわめて貴重であり、それは人間の心と霊のためである。この見守りは無期限かもしれないし、それは終わりの段階にあるのかもしれない。しかし、あなたは自らの心と霊がたった今どこにあるのかを正確に知らなくてはならない。

2003年5月28日

神の現れによる新時代の到来

六千年間にわたる神の経営（救いの）計画が終わりを告げようとしている。そして、神の国の門は神の現れを求めるすべての人にすでに開かれている。兄弟姉妹たちよ、何を待っているのか。あなたがたが探し求めているものは何か。神の現れを待っているのか。神の足跡を探し求めているのか。神の現れがどれほど慕わしいものか。だが、神の足跡を見出すことはいかに難しいことか。今のような時代に、このような世界で、神の現れる日をこの目で見えるために何をすべきであろうか。神の足跡をたどるには何をすべきであろうか。神の現れを待つすべての人が、このような疑問を抱いている。あなたがたもこのような疑問を何度か抱いたが、その結果はどうであつたのか。神はどこに

現れるのか。神の足跡はどこにあるのか。答えは見つかったのか。多くの人は、「神は自分に従う人々に現れ、神の足跡はわたしたちのただ中にある。単純なことだ」と答える。決まり切った答えであればだれにでも言える。だがあなたがたは、神の現れとは何かを、神の足跡とは何かを本当に理解しているのか。神の現れとは、神がその働きを行うためにみずから地上に来ることである。神としての身分と性質をもち、また神に固有の方法で、一つの時代を始め、別の時代を終わらせる仕事を行うために、神は人類のもとに下ってくる。このような神の現れは儀式の一形式ではない。それはしるしでも、図画でも、奇跡でも、大いなる幻でもない。ましてや宗教的な過程でもない。それは、実際に手で触れ、目で見ることのできる現実的で実際的な事実である。このような現れはただ表面的な動作をするためでも、短期間の作業のためのものでもない。それは、神の経営計画の中にある一つの働きの段階のためである。神の現れは必ず何かの意味があり、必ず神の経営計画と関係している。ここで言う「現れ」は、神が人を案内し、導き、啓く「現れ」とは全く異なる。神は自身を現す度に、神の大いなる働きの一段階を実行する。この働きは他のどの時代の働きとも異なる。それは人には想像もできないもので、人が経験したことがないものである。その働きは、新しい時代を到来させ、古い時代を完結させるもので、人類を救う働きの新しく向上したかたちである。さらには、人類を新しい時代に導き入れる働きである。これが神の現れの意義である。

ひとたび神の現れが何であるかがわかれば、神の足跡をどのように探し求めるべきであろうか。この問いに答えるのは難しくはない。神の現れるところはどこであれ、そこに神の足跡も見つかる。このような説明は単純に聞こえるが、実際にはそれほど単純ではない。多くの人は、神がどこに現れるか、ましてや神がどこに現れるつもりか、あるいは現れるべきかを知らないからである。聖霊の働きがあるところには神が現れると、感情にかられて考える人がいる。または、霊的な指導者がいるところに神が現れると思っている。あるいは、名声が高い人のいるところであれば、どこであれ神が現れると思っている。そうした考えが正しいかどうかは、今のところは深く考えないでおこう。このような問題を解説するには、まず目的をはっきりさせる必要がある。わたしたちが探し求めているのは神の足跡である。霊的な指導者を求めているのでもなく、ましてや有名人でもない。わたしたちがたどっているのは神の足跡である。このため、神の足跡を探し求めているわたしたちは、神の心意、神の言葉、神の発する声を探り求めなければならない。神が語る新しい言葉があるところには神の声があり、神の足跡があるところには神の業があるからである。神による表現があるところに神が現れ、神が現れるとこ

ろには真理、道、いのちがある。神の足跡を探し求める中で、あなたがたは「神は真理であり、道であり、いのちである」という言葉を見捨てていた。そのため、真理を受け取っても神の足跡を見出したとは思わない人が多いのである。ましてや、神の現れを認めることなどない。なんと大きな過ちであることか。神の現れは人の観念と一致することはない。ましてや神は人の言うままに現れない。神は自らの判断で、自らの計画に従って働く。さらに、神にはその目的と方法がある。神がどのような働きをしようと、人と話し合ったり人の助言を求める必要はない。ましてや神が人間一人一人にその働きを知らせる必要などなおさらない。これが神の性質であり、さらにそれはすべての人が認識すべきことである。もし神の現れをその目で見、神の足跡をたどりたいと願うなら、自分自身の観念を捨て去らなければならない。神にこれをせよあれをせよと命じてはならない。ましてや神を自分の枠の中に閉じ込めたり、自分の観念の中に押し込めたりすべきでない。そうではなく、どのように神の足跡をたどるべきか、どのように神の現れを受け止めるべきか、どのように神の新しい働きに従うべきかと問うべきなのである。これが人のすべきことである。人は真理ではなく、真理を自分のものにしていないので、人は探し求め、受け入れ、従うべきである。

アメリカ人であれ、イギリス人であれ、国籍がどこであれ、自分の国籍の枠を乗り越え、自分自身を超越し、神の被造物として神の働きを見なくてはならない。そうすれば、神の足跡を枠にはめることはない。それは、現在は特定の国や民族に神が現れることは不可能だと多くの人が考えているからである。神の働きはなんと意義深く、神の現れはなんと重要なことか。どうして人の観念や考えで測ることができようか。そのため、神の現れを探し求めるためには、国籍や民族性という観念を突き抜けるべきである、とわたしは言うのである。そうして初めて、自分自身の観念に制約されることなく、神の現れを迎えるにふさわしくなる。そうでなければ、暗闇の中にいつまでもとどまり、神から認められることもない。

神は全人類の神である。神は自らを一つの国や民族の所有物とみなさない。神が自ら計画したとおりに働きを行い、形式や国、民族といった制限を受けることはない。これまであなたはこのような形式を想像したこともなかったかもしれないし、そのような形式を否定するかもしれない。神が現れる国や民族はたまたま誰からも差別されている地上で一番遅れている国や民族かもしれない。しかし、神には神の知恵がある。神はその偉大な力とその真理と性質により、神と心をつなぐ人々の一群を本当に得ている。それは神が完成させたいと願う人々の一群で、神に征服され、あらゆる試練と困難、あ

らゆる迫害に耐え、最後の最後まで神に従うことのできる一群である。神が形式や国の制約を受けずに現れる目的は、その計画どおりに働きを完成させることである。それはちょうど神がユダヤの地で肉となったときと同じである。神の目的は全人類をあがなうことで十字架の働きを完成させることであつた。しかし、ユダヤ人は神がそれを行うのは不可能だと考えた。神が肉となって、主イエスの姿をとるのは不可能だと考えたのである。この「不可能」が、ユダヤ人が神を罪に定め、神に敵対する根拠となった。そして、最終的にはイスラエルの破滅へとつながつた。今日、多くの人が同じような間違いを犯している。神は今すぐにでも現れると強く主張しながら、同時に神の現れを断罪している。その「不可能」が再び、神の現れを自分たちの想像できる範囲に押し込めているのである。神の言葉に出会うと、多くの人が騒々しく大笑いするのをわたしは見てきた。しかし、その笑いはユダヤ人による神への断罪と冒瀆とどこか違うであろうか。あなたがたは真理を目の前にしても敬虔さがなく、ましてや真理を慕い求める態度もない。ただ手あたり次第に研究し、気楽に待っているだけである。そのように研究し、待っていることで得られるものは何なのか。神から直に導きを受け取ることができると思っているのか。神の発言を聞き分けることができないなら、どうして神の現れをその目で見る資格があるというのか。神が現れるところでは、真理が表され神の声がある。真理を受け入れることができる人だけが神の声を聞くことができる。そしてそういう人だけが神の現れを見ることができる。観念を捨てなさい。落ち着いて、これらの言葉を注意深く読みなさい。真理を慕い求めるなら、神はあなたを照らし、あなたは神の心意と言葉を理解できるようになる。「不可能」だと思ふことについての意見を捨て去りなさい。人が何かを不可能だと思えば思うほど、それは実現しやすくなる。神の知恵は天より高く、神の思いは人の思いより高く、神の働きは人の考えや観念をはるかに超越するからである。何かが可能であればあるほど、そこには探し求めることのできる真理がある。人の観念と想像を超えるものであればあるほど、そこには神の心意がある。神がどこに現れようとも、神はやはり神であり、神の本質が現れる場所や方法で変わることはないからである。神の性質は、神の足跡がある場所によらず、いつも同じである。神の足跡がどこにあらうとも、神は全人類の神である。それはちょうど主イエスはイスラエル人の神というだけでなく、アジア、ヨーロッパ、アメリカの人々の神でもあり、さらに、全宇宙で唯一無二の神であるのと同じである。だから、神の言葉に神の心意を探し求め、神の現れを発見し、神の足跡に従おう。神は真理であり、道であり、いのちである。神の言葉とその現れは同時に存在する。また、神の性質と足跡はいつでも人類に対して開いている。兄弟姉妹たちよ。あなたがたがこれらの言葉に神の現れを見てとり、

新しい時代に向かって進みながら、神の足跡をたどり始め、神の現れを待ち望む人のために用意された美しく新しい天地に入れることを望む。

神は全人類の運命を支配する

人類の一員として、また敬虔なクリスチャンとして、神が委ねる任務を全うするために心と体を捧げるのはわたしたちすべての責任であり、義務である。なぜならわたしたちの全存在は神から来たものであり、神の統治のおかげで存在しているからである。わたしたちの心と体が神の委ねる任務のためでも、人類の義なる目的のためでもないなら、わたしたちの魂は神の任務のために殉教した人々に値せず、ましてやわたしたちにすべてを与えた神にはなおさら値しない。

神はこの世界を創造し、この人類を創造し、さらに神は古代ギリシア文化ならびに人類の文明の設計者でもあった。神のみがこの人類を慰め、神のみが日夜人類のことを思いやる。人類の発展と進歩は神の統治と切り離すことはできない。また、人類の歴史と未来は神の計画から切り離せない。あなたが真のクリスチャンならば、あらゆる国または民族の興亡は、神の意図に従って起こるということを必ず信じているであろう。神のみが国や民族の運命を知っており、神のみがこの人類の進むべき道を制御する。人類が良い運命を望むなら、また国が良い運命を願うなら、人類はひれ伏して神を礼拝し、神の前で悔い改め、罪を告白しなければならない。さもなければ人類の運命と終着点は避けることのできない災難となる。

ノアが箱舟を造った時代を振り返って見なさい。人類はひどく墮落し、人々は神の祝福から迷いはぐれ、もはや神の配慮は得られず、神の約束を失ってしまっていた。闇の中を神の光なしに生きていた。そして人の本性は放縦となり、おぞましい墮落に身を任せた。このような人々はもはや神の約束を受けることはできなかった。彼らは神の顔を見るにも、神の声を聞くにも相応しくなかった。なぜなら彼らは神を見捨て、神から与えられたものすべてを放棄し、神の教えを忘れてしまったからである。彼らの心は神から遠く離れて行くばかりで、それにつれてあらゆる理知と人間性を失い墮落し、邪悪さを増していった。そして彼らは死に歩み寄り、神の怒りと罰を受けた。ノアだけが神を礼拝し、悪を避けたので、神の声を聞くことができ、神の指示を聞くことができた。ノアは神の言葉の指示に従って箱舟を造り、あらゆる種類の生物をそこに集めた。こうしてひとたびすべての準備が整うと、神は世界に破滅をもたらした。ノアとその家族七人だけが破滅を逃れて生き残ったが、それはノアがヤーウェを礼拝し、悪を避けたからで

あった。

それでは現代に目を向けてみなさい。ノアのように神を礼拝し、悪を避けることのできる義人はいなくなってしまった。それでもなお、神はこの人類に恵み深く、この終末の時代においても人類の罪を赦す。神の現われを切望する人々を神は探し求める。神の言葉を聞くことができる人々、神の任務を忘れず、心と体を神に捧げる人々を神は探し求める。神の前で赤子のように従順で、神に抵抗しない人々を神は探し求める。あなたが何の勢力にも妨げられずに神に献身するならば、神はあなたを好意の眼差しを注ぎ、祝福を授ける。たとえあなたが地位が高く、名声があり、知識が豊富で、有り余るほどの資産の持ち主で、多くの人々の支持を得ていたとしても、それらのものが、あなたが神の前に出て神の召命と任務を受け、神の命じることを行う妨げにならないならば、あなたの為すことはすべて地上で最も意義深い行いであり、人類の最も義なる事業となる。もしあなたが地位や自分自身の目標のために神の召命を拒むならば、あなたの為すことはすべて神にのろわれ、さらには忌み嫌われるであろう。あなたは大統領かもしれない、あるいは科学者、牧師、長老かもしれないが、あなたの地位がどんなに高くても、自分の知識と能力を頼りにして事業に着手するならば、あなたは必ず失敗し、必ず神の祝福をのがすことになる。神はあなたの為すことは何も受け入れず、あなたの事業が義であるとは認めず、あなたが人類の益のために働いているとは見なさないからである。あなたの為すことはすべて、人類の知識と力を用いて人から神の保護を奪い、神の祝福を否定するために行われると神は言う。あなたは人類を暗闇の方向へ、死の方向へ、人が神と神の祝福を失ってしまった終わりなき存在の始まりへ導いていると神は言う。

人類が社会科学を考案して以来、人の精神は科学と知識に占領されてしまった。それから科学と知識は人類を支配する道具となり、もはや神を礼拝するための十分な余地は人にはなくなり、神を礼拝するための好ましい条件もなくなった。人の心の中で占める神の位置はどこまでも低められた。心の中に神が無いまま、人間の内面世界は暗く、希望も無く、空虚である。そのため、人類の心と精神を満たすために多くの社会学者や歴史家、政治家が登場し、社会科学の理論や人類進化の理論、神が人を創造したという真理に矛盾するその他の理論を発表した。こうして、神が万物を造ったという真理を信じる人はますます少なくなり、進化論を信じる人の数はさらに増加した。神の働きの記録と旧約聖書の時代の神の言葉を神話や伝説として取り扱う人々はますます多くなっている。人々の心は、神の威厳と偉大さに、神が存在し万物を支配しているという信条に対して無関心になっている。人類の生存、そして国家と民族の運命はもはや人にとって

重要ではなく、人は飲食と快楽の追求にしか関心のない虚しい世界に生きている。……神が今日どこで働きを行っているのか、あるいは神が人の終着点をいかに支配し、定めているのかを自らすすんで探し求める人はほとんどいない。こうして、人間の文明は、人間の知らないうちに、ますます人の望みどおりには行かなくなり、こんな世界に生きている自分達はすでに亡くなった人々に比べて不幸せだと感じている人さえ数多くいる。過去に高度の文明を築いた国々の人たちでさえそのような不満をあらわにしている。なぜなら、神の導きなしには、支配者や社会学者が人類の文明を維持するためにどんなに頭を悩ませても何の役にも立たないからである。誰も人の心の中の空洞を埋めることはできない。誰も人のいのちとなることはできず、どのような社会学的理論も人を悩ませる虚しさから人を解放することはできないからである。科学、知識、自由、民主主義、余暇、快適さなどは、人間につかの間の慰めしかもたらさない。これらのものがあったとしても、人は必然的に罪を犯し、社会の不正を嘆く。これらのものは、人の探求への渴望や欲求を抑えることはできない。人は神によって造られたからであり、人の無意味な犠牲や探索はさらなる苦悩につながるだけで、人類の将来にどのように向き合うべきか、目の前にある進路にどのように対峙すべきか分からないまま人を常に恐怖に怯えたままにさせるからである。人は科学や知識を恐れるまでになり、空虚感をそれ以上に恐れるようになる。この世であなたが自由な国に住んでいようと、人権のない国に住んでいようと、人類の運命から逃れることは決してできない。あなたが支配者であろうと、被支配者であろうと、人類の運命、奥義、そして終着点を探求したいという願望から逃れることは到底できない。ましてや、途方にくれるほどの空虚感から逃れることなどできない。全人類に共通するこの現象を社会学者は社会現象と呼んでいる。しかし、このような問題を解決できる偉人が現れることはない。人間は結局、人間に過ぎず、神の地位といのちにとって代われる人間はいない。誰もが食べる物があり、平等で自由で公平な社会だけが人類に必要なのではない。人類に必要なのは神の救いと神によるいのちの満たしである。神の救いといのちの満たしを受けて初めて、人間の必要、探究心、そして靈的空虚感が解決されるのである。一つの国や民族の人々が神の救いや配慮を得ることができなければ、その国や民族は暗黒に向かって、破滅への道を突き進み、神によって滅ぼされる。

あなたの国は今のところ繁栄しているかもしれない。しかし、国民が神から離れていくことを許すなら、その国はますます神の祝福から遠ざかることになる。あなたの国の文明はどんどん踏み躪られ、やがて人々は神に反対して立ち上がり、天を呪うことになる。

る。こうして一国の運命は人の知らないうちに破滅する。神は強大国々を興して神に呪われた国々を取り扱い、さらには、そうした国々を地球上から一掃することさえあり得る。一つの国や民族の興亡は、その支配者が神を崇拝しているかどうか、その国民が神に近づき、神を崇拝するように導いているかどうかにより決まる。しかし、この終末の時代に、真に神を求め神を崇拝する人はますます少なくなっている、神はキリスト教を国教とする国々に特別な恩恵を授ける。神はそれらの国々を結集させて世界において比較的義である陣営を形成する。一方、無神論の国々と真の神を崇拝しない国々は義なる陣営の敵になる。このようにして、神はその働きを行うための場所を人類の中に持つだけでなく、義なる権威を行使できる国々を獲得し、神に抵抗する国々に制裁と制限が課せられることを許可する。しかしそれにも関わらず、神を崇拝するために進み出でくる人がこれ以上いないのは、人間が神からあまりにも遠く離れてしまい、神をあまりにも長く忘れてしまっているからである。地上にはただ義を行使し、不義に抵抗する国々が残るだけである。しかし、これは神の願望とは程遠い。どの国の支配者も神が自国民を統括することを許さず、どの政党も神を崇拝するために人々を結集させないからである。神は各国、民族、政権政党の中心において、さらには各人の心の中においてさえ、本来の正当な位置を失った。確かにこの世界には義なる勢力が存在するが、神が人の心の中で何の地位も占めていない統治は脆弱である。神の祝福がなければ、政治の舞台は混乱に陥り、攻撃を受けやすくなってしまう。人類にとって神の祝福がないことは、太陽がないようなものである。どんなに熱心に支配者が国民のために働こうが、どれほど多くの義なる会議を人類が開催しようが、どれも事態を方向転換させることはなく、人類の運命を変えることはない。人々が衣食に困らない国、平和に共に暮らす国はよい国であり、良い指導者の国だと人は考える。しかし、神はそうは思わない。神は、神を崇拝する者のいない国は滅ぼすべき国であると考えている。人の考え方は、神の考え方とはあまりにも食い違っている。だから、もし国の長が神を崇拝しなければ、その国の運命は悲劇的なものとなり、その国に終着点はない。

神は人間の政治に参加しないが、国または民族の運命は神に支配されている。神はこの世界と全宇宙を支配している。人の運命と神の計画は密接に関連しており、誰もどの国も民族も神の統治から免れない。人間の運命を知りたいなら神の前に来なければならない。神に従い、神を崇拝する人々を神は繁栄させ、神に抵抗し、拒絶する人々に衰退と絶滅をもたらす。

神がソドムを滅ぼしたときの聖書の場面を思い出してみるがよい。また、ロトの妻が

どうして塩の柱になったかも考えてみるがよい。ニネベの人々が荒布をまとい、灰の中に座していかに罪を悔い改めたかを思い返し、二千年前にユダヤ人たちがイエスを十字架に釘づけにしたあと何が起きたかを思い起こしてみるがよい。ユダヤ人はイスラエルから追放され、世界中の国々に逃亡した。多くは殺され、全ユダヤ民族は前例を見ない破壊を受けた。彼らは神を十字架に釘付けにし――凶悪な罪を犯し――そして神の性質を侵害した。彼らは自分たちが為したことの代価を払い、その行動の責任の一切を取らなければならなかった。彼らは神を罪に定め、神を拒絶したので、たどる運命は一つしかなかった。すなわち、神の罰を受けたのである。これが彼らの支配者たちがその国と民族にもたらした苦い結果と災害であった。

今日、神は働きを行うために世界に戻ってきた。神が最初に留まった所は、独裁的支配者たちの大いなる集り、すなわち無神論の頑強な砦、中国である。神はその知恵と力によって一群の人々を獲得した。この間に、神は中国共産党にあらゆる手段をもって追跡され、塗炭の苦しみにさらされ、枕する場所もなく、避難場所を見つけることもできなかった。それにも関わらず、神は意図した働きを続行している。つまり神は声を発し、福音を広める。誰も神の全能性を推し量ることはできない。神を敵と見なす国、中国で、神は決してその働きをやめてはいない。それどころか、ますます多くの人々が神の働きと言葉を受け入れている。神は人類の一人一人を救うためにできる限りのことをしているからである。わたしたちは、いかなる国家も勢力も神が果たそうと願うものの前に立ち足はだかることはできないと信じている。神の働きを妨害し、神の言葉に抵抗し、神の計画をかき乱し阻害する者たちは最終的には神に罰せられる。神の働きに逆らう者は地獄に送られる。神の働きに反抗する国家は滅ぼされる。神の働きに反対するために立ち上がる民族は地上から一掃され、消滅する。すべての民族、国家、そしてあらゆる業種の人々が神の声に耳を傾け、神の働きに目を向け人類の運命に留意し、神を至聖、至尊、至高たる、人類唯一の崇拝の対象とし、アブラハムの子孫がヤーウェの約束の下に生きたように、最初に神が造ったアダムとエバがエデンの園で暮らしたように、人類全体が神の祝福の下に生きることができるようになることをわたしは強く勧める。

神の働きは強い波のように打ち寄せる。誰も神を引き留めることはできず、誰も神の前進を停止させることはできない。神の言葉に注意深く耳を傾け、神を探し求め渴望する人々だけが神の歩みをたどり、神の約束を受けることができる。そうしない者は圧倒的な災難を被り、当然受けるべき罰を受ける。

神の経営の中でのみ人は救われる

誰もが神による経営（救い）を未知のものだと感じる。なぜなら、神の経営は完全に人間と無関係だと人々は考えるからである。人々はこの経営は神だけの働き、神独自の用事だと考えるので、神の経営の働きに無関心である。こうして、人類の救いは漠然とした不明瞭なものとなり、今では空虚な言葉にすぎないものとなっている。人間は救われて美しい終着点に達するために神に付き従うのだが、神がどのように働きを行なうのかについて無関心である。人間は、神が何を行なおうとしているか、救われるために自分が果たすべき役割については考えていない。なんと悲しいことか。人間の救いは神の経営と不可分であり、まして、神の計画と切り離すことなどできない。それなのに、人間は神の経営について何も考えず、ますます神と離れて行く。そのため、救いの問題と密接に結びついている事柄、つまり創造とは何か、神を信じるとはどういうことか、神をどう礼拝するかといったことについてまったく認識していない数多くの人が、神に付き従う人の列に加わることとなった。したがって、ここでは神の経営について話し合い、神に付き従う一人一人が、神に付き従い、神を信じるとはどういうことかを明確に理解するようにしなければいけない。そうすれば、ただ祝福を得ようとして、あるいは災いを避けようとして、あるいは成功するために神に付き従うのではなく、歩むべき道をもっと正確に選べるようになる。

神の経営は人間には深遠に思えるだろうが、人間に理解不可能なものではない。神の働きはすべて神の経営に連結しており、人間の救いの働きに関係しており、人類のいのち、生活、終着点に関わっているからである。神が人間の間で、そして人間に対して行なう働きは、まことに实际的で意義深いものだと言える。それは人間が目で見、経験できるものであり、抽象的なものではまったくない。神のする働きすべてを人間が受け入れることができないなら、この働きにどんな意味があるというのか。また、どうしてそうした経営が人間の救いにつながり得るのか。神に付き従う者の多くは、ただ、どうして祝福を受けるかや、どうして災いを避けるかということだけに気をもんでいる。神の働きと神の経営と聞くと、彼らは口を閉ざし、興味を失う。彼らはそうした退屈な問題について知っていても、いのちに成長を与えるわけでも、これといった役に立つものでもないと思い込んでいるため、神の経営についての言葉を聞いてはいても、いい加減に扱うのである。そして、受け入れるべき大切なことだとは思わず、まして、自分たちのいのちの一部として受け取ることもない。そうした人々は、神に付き従うことにおいて、ただ一つの目的しかもっていない。その目的とは祝福を受けることである。このよう

な人は、その目的に直接関係しない他の一切のことにわざわざ注意を払うことができない。彼らにとって、神を信じるということは、祝福を受けることが最も正当な目的であって、それが信仰の価値にほかならない。その目的を果たすことができないことには、全く心を動かされない。今日神を信じている人のほとんどは、そういう状態である。その人たちの目的や動機は、もっともらしく見える。神を信じると同時に、神のために費やし、神に身を捧げ、本分も果たすからである。青春を犠牲にし、家族や職を捨て、故郷から遠く離れて何年も懸命に働くことさえある。最終的な目的のために関心のありどころを変え、人生観を変え、求めるものの方向を変えさえする。しかし、神を信仰する目的を変えることはできない。彼らは自分なりの理想を管理するために駆け回る。どんなに道が遠くとも、途中でどんな困難や障害に出会おうと、死をも恐れず目標達成に努力する。どんな力がそのような献身を続けさせるのだろうか。彼らの良心だろうか。偉大で高潔な人格だろうか。最後の最後まで悪の力と戦おうとする決意だろうか。報いを求めずに神を証しする信仰心だろうか。神の心を実現させるためにすべてを捨てようとする忠誠心だろうか。それとも、途方もない個人的な欲求を一貫して放棄する奉仕の精神だろうか。神の経営の働きを知らない人がそれほど多くを捧げるとするのは、ただ驚くべき奇跡である。ここでは、そうした人がどれほど多くを捧げているかは語らずにおこう。しかしながら、彼らの行動は分析するだけの価値が十分にある。彼らと密接に関わりのある恩恵とは別に、神を理解しない人がそれほどまでに神に捧げる理由が他に何かあるだろうか。このことの中に、これまで認識されていなかった問題を発見する。それは、人間の神との関係は単にむき出しの利己心によるものだということである。これは恵みの与え手と受け手との関係である。簡単に言うと、雇われ人と雇い主の関係のようなものである。雇われ人は雇い主から報酬をもらうためにだけ働く。この関係に愛情はない。ただの取引があるだけである。愛し愛される関係はなく、施しと憐れみとがあるだけである。理解はなく、抑圧された憤りと欺きだけがある。親しみはなく、越えられない溝があるだけである。物事がこういう状態に至ったとき、誰がこの傾向を元に戻せるだろうか。この関係がいかに絶望的なものになっているかを、どれほどの人がほんとうに理解できるだろうか。祝福を受ける喜びの中に浸っているとき、神とのそうした関係が、ばつの悪い、見苦しいものであるとは誰も想像できないはずである。

人類の神への信仰の最も悲しい点は、神の働きの只中に人間が自分なりの経営を行い、神の経営そのものには無関心なことである。人間の最大の失敗は、神に服従し神を礼拝することを求めると同時に、人間は自分なりの理想の終着点を打ち立て、どうしたら

最大の祝福を得て最高の終着点に行けるかを計算しているところにある。たとえ自分がいかに憐れむべき、憎しみに満ちた哀れな存在かを理解したとしても、自分の理想や希望を簡単に捨て去ることのできる人がどれだけいるだろうか。また、誰が途中で足を止め、自分の事だけを考えるのをやめられるだろうか。神と密接に協力して、その経営を完成する者を神は必要としている。神に服従するために、神の経営の働きに身も心も捧げる人を神は必要としている。神は毎日手を伸ばして神に物乞いする者は必要ではない。まして、わずかばかりを差し出して、その報酬を受けようと待っているような者は、無用である。わずかばかり貢献して自分の栄冠に満足するような者を神は嫌う。神の経営の働きを嫌がり、天国に行って祝福を得ることだけを話したがる心無い人を神は憎む。それにもまして、神が人類を救うために行なう働きがもたらす機会を通じて利を得ようとする人を、神は嫌う。そうした人は、神が経営の働きで成し遂げ、獲得しようとしていることにはまったく無関心だからである。そういう人々は、神の働きがもたらす機会を利用していかに祝福を受けるかということだけに気をもんでいる。彼らは、神の心には無関心で、自分たちの未来と運命のことだけに没頭している。神の経営の働きを嫌い、神がどのように人類を救うかとか、神の心についてはまるで関心がない人は皆、神の経営の働きと無関係に好き勝手をしている。彼らの行動は、神によって記憶されず、認められず、まして神に喜ばれることなどない。

広大な宇宙と天空において、数えきれない被造物が生き、再生し、生命の周期の法則に従い、一つの不変の規則を守っている。死ぬ者は生きる者の物語を抱えて行き、生きている者は死んだ者と同じ悲劇的な歴史を繰り返す。そこで、人類は自問せずにはいられない。なぜわたしたちは生きるのか。そして、なぜわたしたちは死ななければいけないのか。誰がこの世界を支配しているのか。そして、誰がこの人類を創ったのか。人類はほんとうに大自然の生み出したものなのか。人類はほんとうに自分の運命を支配しているのだろうか。……数千年にわたり、人類はこうした問を何度も何度も発している。残念ながら、人類がこうした問に頭を悩ませれば悩ませるほど、ますます科学への渴望が強くなった。科学は、ささやかな肉の欲求の充足と、つかの間の肉の楽しみを与えるが、人類を魂の奥底にある孤独や寂しさ、かろうじて隠している恐怖と無力感から解放することなど到底できない。人類はただ心を麻痺させるために、肉眼で見、脳で理解できる科学的知識を用いている。しかしそのような科学的知識は、人類が奥義を探ることを止めるのに十分ではない。人類は、宇宙と万物の支配者が誰であることをまったく知らないし、ましてや人類の始まりも未来も知らない。人類はこの法則の中で否応なしにた

だ生きている。誰一人、逃れることができないし、誰もこれを変えることはできない。あらゆる物事の間と天において、永遠から永遠にすべてを支配しているのは、ただお一方だけだからである。それは、かつて人間が見たことがないお方、人類が知ることもないお方、その存在を人類は信じたこともない。しかし、それは人類の祖先に息を吹き込み、人類にいのちを与えたお方である。人間の生存のために施し、養い、今日まで導いて来たお方である。さらに、人類が生き残るために依存する唯一のお方なのである。彼は万物を支配し、天の下のすべての生ける物を支配している。彼は四季を支配し、風と霜、雪、雨を呼ぶ。彼は人類に陽光を与え、夜の訪れをもたらす。天と地とを整え、人間に山々と湖、川、すべての生き物を与えたのは彼である。彼の業はあらゆるところにある。その力はいたるところにある。その知恵はいたるところにある。その権威はいたるところにある。その法則や規則の一つひとつは彼の業の具現であり、その一つひとつが彼の知恵と権威とを明らかにしている。誰が彼の支配を免れることができようか。また、誰が彼の采配から逃れることができようか。万物は彼の眼差しの下にあり、さらに、彼の支配の下で生きている。彼の業と力の前に人類は、彼が実際に存在し、万物を支配していると認めざるを得ない。神を除いては、他の何も宇宙を支配できず、まして、やむことなく人類に施すこともできない。神の業を認識できるかどうか、神の存在を信じているかどうかにかかわらず、あなたの運命は神の定めるところであって、神が永遠にあらゆるものの支配権を持ち続けることに疑いはない。神の存在と権威とは、人間に認められ理解され得るかどうかによって左右されるものではない。神だけが人間の過去・現在・未来を知り、神だけが人類の運命を定めることができる。この事実を受け入れられるかどうかに関りなく、人類は近い将来、これらのことすべてをその目で見ることになる。そして、これは神が間もなく実現する事実である。人類は神の目の下で生き、死ぬ。人類は神の経営のために生きているのであり、その目が最期に閉じる時もまた、神の経営のためなのである。人間は何度も何度も来ては去り、行き来を繰り返す。例外なく、これはすべて神の支配し、定めていることである。神の経営は常に前進しており、やむことがない。神は人類に自身の存在を知らせ、神の支配を信じさせ、神の業を見させ、神の国に戻らせる。これが神の計画であり、何千年にもわたって神が行なってきた働きなのである。

神の経営の働きは天地創造の時に始まり、人間はその働きの中心にいる。神が万物を創造したのは、人間のためであると言える。神の経営の働きは数千年に及ぶものであり、ほんの数分や数秒、瞬時に行われるものではなく、一、二年で行なわれるものでもな

いので、神は人間が生きて行くために必要なもの、すなわち太陽や月、あらゆる種類の生き物や食物、生きるための環境などを数多く創る必要があった。これが神の経営の始まりであった。

その後、神は人類をサタンに渡し、人類はサタンの領域で生きた。そして、これが徐々に神の最初の時代の働きへと至った。律法の時代の物語である……。数千年に及ぶ律法の時代、人類は律法の時代の導きに慣れ、軽く考えるようになり、徐々に神の保護から遠ざかった。そして、律法を守っていながら、同時に偶像をも拝み、邪悪なことを行なった。彼らはヤーウェの守りなしに、ただ神殿の祭壇の前で暮らしているだけだった。実際、神の働きはずっと以前に彼らのもとを去っていた。イスラエル人はまだ律法に従い、ヤーウェの名を唱え、自分たちだけがヤーウェの民、ヤーウェの選民だと誇っていたものの、神の栄光は静かに彼らを捨て去った……。

神がその働きをする時は、いつでも静かに一つの場所から去り、そのあいだに別の場所でそっと新たな働きをする。これは、鈍重な人間には信じられないことのように思われる。人々はいつも古いものを大事にし、新しい、馴染みのないものには敵意をもつか、厄介なものとみなす。そこで、神が行なう新しい働きは何であれ、最初から最後まで、人間はあらゆるものの中で最後にそれを知ることになる。

いつもそうであるように、律法の時代にヤーウェの働きをした後、神は新たな第二段階の働きを始めた。すなわち、人間として受肉し、十年、二十年間、信じる者たちの間で話し、働きを行なった。しかし、例外なく誰もそれを知らなかった。ただ、ごく少数の人だけが、イエスが十字架につけられ、よみがえった後、彼が受肉した神だと認めた。困ったことに、パウロという者が現れて、神に対して激しい敵意を抱いた。打ち倒され、使徒になった後でも、パウロの古い本性は変わらず、神に逆らう道を歩んだ。パウロは働きを為した間、多くの手紙を書いているが、不幸なことに、後の世代は彼の手紙を神の言葉として享受し、そのため新約聖書に収めてしまったほどで、神の話した言葉と混同された。これは聖書が登場して以来のまことに恥ずべきことである。そして、この誤りは人間の愚かさから起こったことではないのか。恵みの時代の神の働きの記録において、人間による手紙や霊的文書は、神の働きと言葉に取って代わるべきものでないということを知らなかったのだ。しかし、これは本題からずれているので、話しを戻そう。神の働きの第二段階が終わるとすぐ、つまり十字架にはりつけになった後、人間を罪から取り戻す（つまり、サタンの手から人間を取り戻す）神の働きは成就した。そこで、その時から、人類は主イエスを救い主として受け入れるだけで罪が赦されるように

なった。名目上は、人間の罪はもはや救いを得て神の前に出る妨げとはならず、サタンが人間を責める手立てではなくなったということである。それは、神自身が実際的な働きをし、罪深い肉の形を取り経験し、罪のための捧げ物となったからである。こうして、神の肉、罪深い肉の形をとった神のおかげで人間は贖われ、救われて、十字架から降りた。そこで、サタンに捕らわれた後、人間は神の前で救いを受けることに一步近づいた。もちろん、この段階の働きは律法の時代から一步進んだ神の経営であって、律法の時代よりもさらに深い段階のものであった。

これが神による経営である。人類をサタンに引き渡し――神が何であるか、創造主が何であるか、神をどう礼拝するか、なぜ神に服従することが必要なのかを知らない人類を――サタンが墮落させるままにしたのである。神はそれから一步一步、人間が完全に神を礼拝しサタンを拒むまで、人間をサタンの手から取り戻す。これが神の経営である。これはみな神話的な物語のようで、わけがわからないように思われる。人々が、これは神話的な物語のようだと感じるのは、過去数千年の間にどれほど多くのことが人間に起こったかを知らないからであり、まして、宇宙と天空においてどれほど多くの物語が生まれたか、思いも及ばないからである。そのうえ、物質界の外に存在する、さらに驚くべき、はるかに恐ろしい世界があるのを意識することができず、人間の目では見ることができないでいるからである。これは人間には理解し難いことに思われるが、それは人間には神による人類の救いや神の経営の働きの意義が理解できず、また、人間が最終的にどのようなことになることを神が望んでいるかを知らないからである。そのような人類は、サタンに墮落させられる前のアダムとエバのようなものだろうか。いや、そうではない。神の経営は、神を礼拝し、神に従う一群の人を得るためのものである。この人類はサタンにより墮落させられたが、もはやサタンを父とみなしておらず、サタンの醜い顔に気づいて拒み、神の裁きと刑罰を受けるため、神の前に来る。その人間は何が醜いか、それが聖いものとどう異なっているかを知っており、神の偉大さとサタンの邪悪さを認識している。このような人類は、もはやサタンのために働かず、サタンを崇めず、サタンを祭ることをしない。それは、その人たちが真に神のものとなった人たちだからである。これが神による人類経営の意義である。神の今回の経営の働きのあいだに、人類はサタンによる墮落の対象であり、同時に、神による救いの対象であり、そして神とサタンが獲得しようと戦う産物でもある。神はその働きをすると同時に、徐々に人間をサタンの手から取り戻してきたので、人間は神に近づきつつある……。

そして、神の国の時代が来た。これは、より実際的な働きの段階であるが、人間にと

っては最も受け入れ難い働きでもある。それは、人間が神に近づけば近づくほど、神の鞭が人間に近づき、神の顔が人間の前にさらに鮮明になってくるからである。人間の贖いの後、人間は正式に神の家に戻る。人間は、今は楽しむ時であると思ったのだが、誰も予測すらしなかった神による徹底的な攻撃にさらされている。すなわち、これは神の民が「楽しむ」べき洗礼なのである。そうした扱いを受けると、人々は立ち止まり、「わたしは長い間迷っていたのを神が大金を払って買い戻した羊だ。それなのに、なぜ神はこのような扱いをするのか」と考えざるを得ない。これは、わたしを笑い、さらし者にする神のやり方なのか。……長い年月の後、人間は、鍛錬と刑罰の試練を経験し、苦勞が風貌に現れるようになった。人間は過去の「栄光」も「ロマン」も失ったが、無意識のうちに人間の行ないの原理を理解し、人類を救う神の長年にわたる献身がわかるようになってきた。人間はゆっくりと、自分の野蛮さを厭うようになる。自分の野蛮さ、神への誤解のすべて、神に向けた不当な要求の数々を憎むようになる。時間は戻らない。過去の出来事は人間の嘆かわしい記憶となり、神の言葉と愛とが人間の新たな生活の原動力となる。人間の傷は日ごとに癒え、体力が回復し、立ち上がって全能者の顔を見る……と、神はずっと傍らにいたこと、そしてその笑顔と美しい顔が依然として心揺さぶるものであることに気づく。神の心はまだ被造物である人類を気遣い、神の手は始まりの時同様、まだ暖かく、力強い。まるで、人間がエデンの園に戻ったようだが、今回は人間はもはや蛇の誘惑に耳を傾けず、もはやヤーウェの顔から目をそむけない。人間は神の前にひざまずき、神の笑顔を見上げ、心から最高の捧げ物をする――ああ！ わが主、わが神！

神の愛と憐れみが経営の働きの隅々に行き渡り、人間が神のよき意図を理解できるか否かに関わらず、神はいまだに疲れを知らず成就しようとする働きを続けている。人々がどれほど神の経営を理解しているかに関わらず、神の働きの恩恵と助けはすべての人が理解することができる。おそらく、今日、あなたは神が与える愛やいのちを一切感じていない。しかし、あなたが神を捨てない限り、真理を追究しようという決意を諦めない限り、神の笑顔があなたに顕れる日は必ず来る。神の経営の働きの目的は、サタンの支配下にある人類を取り戻すことであり、サタンに墮落させられ、神に敵対する人類を見捨てることではないからである。

2005年9月23日

諸教会を歩くキリストの言葉（V）

(2013年10月17日から2014年8月18日まで)

神を知ることこそ、神を畏れ悪を避ける道である

あなたがたはみな、自分が生涯を通じてどのように神を信じてきたかを吟味し直す必要があります。神に付き従う中で、自分が神を真に理解し、真に認識し、真に知るようになったかどうか、そして神がさまざまな種類の人間に対しどんな姿勢で臨むのかを真に知っているかどうか、さらに神が自分にどのような働きを行なっているかと、自分の一つ一つの行為をどのように定義しているかを、真に理解しているかどうか確かめる必要があるのです。この神はあなたの隣におり、あなたの進む方向を導き、あなたの運命を定め、あなたの必要を満たしてくれる神です。結局のところ、あなたはこの神をどの程度理解しているのでしょうか。この神について、どの程度本当に知っているのでしょうか。神が毎日あなたにどんな働きを行なっているかを知っていますか？ 神のあらゆる働きの基盤となっている原則や目的を知っていますか？ 神があなたをどのように導くかを知っていますか？ 神がどんな方法であなたを養うかを知っていますか？ どんな方法であなたを導くかを知っていますか？ あなたから何を徳たいと思っているか、あなたの中で何を成し遂げたいと思っているかを知っていますか？ あなたが取るさまざまなふるまいに対し、神がどのような態度で臨むかを知っていますか？ 自分が神に愛される人間かどうかを知っていますか？ 神の喜び、怒り、悲しみ、歓喜の根源と、その背後にある思いや考え、そして神の本質を知っていますか？ 究極的に、自分が信じている神がどのような神であるかを知っていますか？ こうした質問やその他類似の疑問は、あなたがこれまで一度も理解せず、考えたこともないものでしょうか。神への信仰を追求する中で、神の言葉を真に味わい経験することを通して、神に関する誤解が解けたことはあるのでしょうか。神の鍛錬と懲らしめを受けた後に、真に神への服従と思いやりを得たことがあるのでしょうか。神の刑罰と裁きのただ中で、人間の反抗心とサタンのような本性を知り、神の聖さをほんの少しでも理解するようになったことがあるのでしょうか。神の言葉による導きと啓示によって、新たな人生観を持つようになったのでしょうか。神から送られた試練のただ中で、人間の背きに対する神の不寛容だけでなく、神があなたに何を要求しているかや、いかにしてあなたを救おうとしているか、感じ取ったことがあるのでしょうか。神を誤解するということがどういうことかや、その誤解を解く方法を知らないなら、あなたは神との真の交わりに入ったことが一度もなく、神を理解したこともないか、または少なくとも、一度も神を理解したいと望んだことがないのだ

と言えます。神の鍛錬と懲らしめとは何かを知らないなら、神への服従と思いやりとは何かを知っているはずもなく、少なくとも真に神に服従したり神を思ったりしたことは一度もないのです。神の刑罰と裁きを受けたことがないなら、神の聖さとは何であるかがわかるはずもなく、ましてや人間の反抗についての理解はさらに曖昧になるでしょう。正しい人生観や正しい人生の目的を持ったことが一度もなく、いまだに人生における将来の道について戸惑いと迷いの中にあり、前に進むことさえ躊躇しているのなら、あなたは間違いなく神の啓きと導きを受けたことがないのであり、さらに神の言葉によって真に与えられたことも満たされたこともないのだと言えます。まだ神の試練を受けていないのなら、人間の背きに対する神の不寛容とは何かを知る由もなく、究極的に神があなたに何を求めるのかも理解できず、ましてや人間を経営し救う神の働きとは究極的に何なのかなどわかるはずありません。何年神を信じていようとも、神の言葉から何も経験せず認識もしていないのなら、その人は間違いなく救いへの道を歩んでおらず、その人の神への信仰には内容がなく、神に関する認識も間違いなく皆無であり、神を畏れるとはどういうことか見当もつかないのは言うまでもありません。

神が所有するもの、神の存在そのもの、神の本質、神の性質——これらはすべて、神の言葉の中で人間に知らしめられています。神の言葉を体験するとき、人間はその言葉を実践に移す過程で、神が語る言葉の背後にある目的と、その言葉の根源や背景を理解するようになり、そしてその意図された効果を理解し認識するようになります。こうしたことはすべて、真理といのちを得て、神の意図を把握し、性質を変えられ、神の支配と采配に服従できるようになるために、人間が経験し、把握し、獲得しなければならないことなのです。こうしたことを経験し、把握し、獲得すると同時に、人間は徐々に神を理解するようになり、そしてそのときには神に関する認識もさまざまな程度で獲得しています。この理解と認識は、人間が想像したり作り上げたりした物事からではなく、心の中で理解し、経験し、感じ、確認した物事から生まれます。そうした物事を理解し、経験し、感じ、確認して初めて、人間の神に関する認識は中身のあるものとなります。このときに人間が得る認識だけが、実際的で現実的かつ正確であり、そしてこの神の言葉を理解し、経験し、感じ、確認することで神に関する真の理解と認識を得るという過程こそが、まさしく人間と神との真の交わりなのです。こうした交わりの中で、人は神の意図を真に理解し把握し、神の所有するものと神の存在そのものを真に理解し知るようになり、神の本質を真に理解し知るようになるとともに、神の性質を徐々に理解し知るようになって、神があらゆる創造物を支配しているという事実についての確信と正

しい定義に到達し、神の身分と地位についての確かな姿勢と認識を得ることになります。こうした交わりの中で、人の神に関する考えは徐々に変化し、人は根拠もなく神について想像したり、神への疑念を勝手に膨らませたりすることをやめ、神を誤解したり、罪に定めたり、神を裁いたり、疑ったりもしなくなります。その結果、神と議論することや対立することが減り、神に反抗する機会も減ります。そして逆に神への思いやりと服従が強くなり、神への畏敬の念がより現実的で深遠なものとなっていきます。こうした交わりの中で、人間は真理の供与といのちの洗礼を受けるだけでなく、同時に神に関する真の認識を得ることになります。こうした交わりの中で、人間はその性質を変えられて救いを得るだけでなく、同時に被造物としての神に対する真の畏敬と崇拝を獲得することになります。こうした交わりを経ることで、神への信仰はもはや白紙の状態でも、言葉だけの約束でも、一種の盲目的な追求や偶像化でもなくなります。こうした交わりによってのみ、人間のいのちは成熟に向かって日々成長することになり、そのとき初めてその性質が徐々に変えられて、神への信仰は漠然とした不確実なものから、少しずつ本物の服従と思いやりへ、本物の畏敬へと変化していきます。そして神に付き従う過程で、人は次第に消極的な態度から積極的な態度へ、否定的な者から肯定的な者へと進歩していきます。このような交わりによってのみ、人間は神に関する真の理解と把握、そして真の認識に到達するのです。大半の人々は神との真の交わりに入ったことがないため、神に関する彼らの認識は理論のレベル、文字と教義のレベルに留まります。つまり大多数の人が、何年神を信じてきたかに関わらず、神を知ることに関してはいまだに信仰を始めた当初と変わらず、封建的迷信と空想的色合いを伴う伝統的な形の敬意という土台の上で身動きできずにいるのです。神に関する認識が当初の段階に留まっているということは、その認識がほとんど存在しないことを意味します。人間が神の地位と身分を肯定したことを別にすれば、人の神に対する信仰は未だに漠然とした不確かな状態にあるのです。このような状態で、人は神に対する真の畏敬の念をどれほど持ち得るでしょうか。

神の存在をどれほど固く信じていようとも、それが神に関する認識や神への畏敬の代わりになることはありません。神の祝福や恵みをどれほど享受してきたとしても、それが神に関する認識の代わりになることはありません。神のために自らのすべてを捧げ、身を費やす意欲がどれだけあろうとも、それが神に関する認識の代わりになることはありません。神が語った言葉に非常に精通しており、諳んじてすらすらと暗証さえできるとしても、それが神に関する認識の代わりになることはありません。神に従う意欲がい

かに強くても、神との本物の交わりや神の言葉の本物の経験を持ったことがないなら、神に関する認識は空虚な無に根ざしたものか、終わりのない幻想に過ぎなくなります。たとどこかで神とすれ違ったとしても、あるいは神と直接対面したとしても、神に関するあなたの認識は皆無であり、その神に対する畏敬は空しい標語や理想的な概念に過ぎないのです。

多くの人々が神の言葉を日々読み返しており、場合によってはその中の代表的な言葉を貴重な財産としてすべて注意深く暗記したり、さらには随所で神の言葉を説教して、他の人々を神の言葉によって養い援助したりもしています。彼らはそうすることが神について証しをし、神の言葉について証しをすることであり、神の道に従うことだと考えています。さらに、それが神の言葉に従って生きることであり、神の言葉を実生活に活かすことであり、そうすることで神の称賛を得て、救われ完全にされるとも考えています。しかし彼らは神の言葉を説教する一方で、実践では神の言葉に従うことも、神の言葉にあらわされているものに自らを一致させようとすることも一切ありません。むしろ神の言葉を利用することで、策略によって他人からの敬服や信頼を得たり、自らの経営の中に入ったり、神の栄光をかすめ取ったりしています。そして神の言葉を広めることで得られる機会を利用して、神の働きと称賛を得ようといたずらに願っているのです。どれだけの年月が経とうとも、こうした人々は神の言葉を説教する中で神の称賛を得られていないだけでなく、神の言葉を証しする中で従うべき道を見いだすこともできず、神の言葉によって他の人々を養ったり助けたりする中で自分自身を養うことも助けることもなく、そうしたすべてのことを行う中で神を知ること、自らの中に純粹に神を畏れる心と呼び覚ますこともできずにいます。逆に彼らの神に関する誤解は深まるばかりで、神への不信感も深刻になる一方であり、神に関する想像は大げさになるばかりです。彼らは神の言葉に関する理論に満たされ導かれて、完全に自らの本領を発揮し、苦もなく自分の能力を活かしているかのようであり、あたかも自分の人生の目的や使命を見出し、新しいいのちを得て救われたかのようであり、朗読のように神の言葉を饒舌に語りながら、真理を得て神の意図を把握し神を知る道を見出したかのようであり、また神の言葉を説教する中でしばしば神と直接顔を合わせているかのように見えます。さらに彼らはしばしば「感極まって」涙を流し、しばしば神の言葉の中の「神」に導かれて、神の真摯な配慮と優しい思いやりを絶えず掴んでいるように見えると同時に、人間に対する神の救いと経営を理解し、神の本質を知るに至り、神の義なる性質を理解しているかのようにも見えます。そうした土台に基づいて、彼らはより固く神の存在を信じ、よ

り強く神の高貴な地位を認識し、より深く神の荘厳さと超越性を感じているように見えます。彼らは神の言葉に関する表面的な認識に耽溺しており、その信仰は成長し、苦難に耐える決意は強まり、神に関する認識が深まっているかのように見えます。しかし実際に神の言葉を体験するまでは、神に関する認識や神についての考えが、すべて自らの勝手な想像と推測から生まれていることにはほとんど気が付きません。彼らの信仰は神のいかなる試練にも耐えることができず、彼らの言うところの霊性と背丈は神の試練にも検証にも一切耐えられません。彼らの決意は砂上の楼閣以外の何物でもなく、いわゆる神に関する認識もまた、自分の空想による虚構にすぎません。事実こうした、いうなれば神の言葉に多くの努力を費やした人々は、真の信仰、真の服従、真の思いやり、あるいは神に関する真の認識というものを、悟ったことが一切ありません。彼らは理論、想像、知識、賜物、伝統、迷信、さらに人類の道徳的価値観さえも、神を信じ従うための「元手」や「武器」に変え、さらには神を信じ従うための基盤とさえしています。また同時に、彼らはそうした元手や武器を魔法の護符に作り変え、それを通して神を知り、神による検証、試練、刑罰、裁きに対処しようとしています。そして最終的に彼らが得るものは、宗教的含みや封建的迷信、そしてあらゆる空想的で異様で謎めいたものに染まった、神についての結論に過ぎません。彼らが神を知り定義する方法は、ただ「天」や「天の親方」を信じている人々と同じ型に嵌まっており、一方で神の現実性、本質、性質、その所有するもの、神の存在そのものといった、真の神自身に関するものすべては、彼らの認識では把握できず、彼らの認識とはまったく無関係で、北極と南極ほどにかけ離れています。このように、彼らは神の言葉による施しや栄養によって生きているにもかかわらず、神を畏れ悪を避ける道を、本当の意味で辿ることができずにいるのです。その真の原因は、彼らが神と親しんだことがなく、本当に神と接したことも交わったこともないからで、そのため彼らが神との相互理解に達することは不可能であり、神を純粹に信仰し、神に付き従い、崇める心を自らのうちに呼び起こすこともできないのです。神の言葉をこのように見なし、神をこのように見なしているというその見方と態度のため、彼らは努力の末に手ぶらで帰ることになり、神を畏れ悪を避ける道を進むことは永遠にできないよう運命付けられているのです。彼らが目指す目標と彼らが進んでいる方向は、彼らが永遠に神の敵であり、永遠に救いを得られないことを示しているのです。

ある人が長年にわたって神に従い、神の言葉による糧を長年享受していながら、その人が抱いている神の定義が、偶像に敬意を払いひれ伏す者の定義と本質的に同じである

なら、それはその人が神の言葉の現実を得ていないことを意味します。それはただその人が神の言葉の現実に入ったことがなく、そのために現実、真理、意図、そして人類に対する要求など、神の言葉に含まれるものすべてが、その人にとってはまったく無関係なものだからです。すなわち、こうした人が神の言葉の表面的な意味についてどれほど熱心に取り組んでも、すべては無益です。なぜならその人が追求しているのは単なる言葉であり、したがってその人が得るものも必然的に単なる言葉であるからです。神が語る言葉は、外見上平易であるか深遠であるかに関わらず、すべて人がいのちに入るために欠くことのできない真理であり、人間が霊と肉の両方において生き延びることを可能にする、生ける水の泉なのです。神の言葉は、人間が生き続けるために必要なもの、日常生活を送るための原則と信条、救いを得るために進むべき道と目標と方向性、神の前に被造物として持つべきすべての真理、そしていかに神に服従し神を崇めるべきかについてのすべての真理を与えてくれます。神の言葉は人間の生存を保証するものであり、人間の日々のパンであり、人間が強くなり立ち上がることを可能にする頑強な支えでもあります。神の言葉には、被造物である人類が生きるべき正常な人間性の真理の現実が豊かに含まれており、人間が墮落から解き放たれサタンの罠を避けるための真理も豊かに含まれており、さらに創造主が被造物である人間に与えるたゆみない教え、訓戒、励まし、慰めも豊富に含まれています。神の言葉は、肯定的なものすべてを理解できるよう人間を導き啓発する灯台であり、人間がすべての義なる良いことを実際に生きて所有するための保証であり、人々と出来事や物事が測られる基準であり、人間を救いや光の道へと導く道標でもあります。人間は神の言葉の実体験の中でのみ、真理といのちを施され、その中でのみ、正常な人間性とは何か、有意義な生涯とは何か、本物の被造物とは何か、神への真の服従とは何かを理解できるようになります。そしてその中でのみ、人間がいかに神を思いやるべきか、被造物としての本分をいかに尽くすべきか、真の人間らしさをいかに身につけるべきかを理解できるようになり、さらにその中でのみ、本物の信仰や本物の崇拜とは何を意味するのか、天地と万物の支配者が誰であることを理解できるようになり、またその中でのみ、全ての被造物の主である方がどのような手段で万物を支配し、導き、養うかを理解できるようになり、さらにすべての被造物の主である方がいかに存在し、現れ、働きを行うかを理解し把握できるようになるのです。神の言葉の実体験から離れれば、人が神の言葉と真理に関する真の認識と洞察を持つことはありません。そうした者はまさしく生きる屍であり、完全な抜け殻であり、創造主に関する認識はその者とは一切無関係です。神の目から見れば、そうした者は決して神を信じたことも神に従ったこともなく、そのため神はその人を信者とも従う者とも認めず、

ましてや本物の被造物と認めることもないのです。

本物の被造物というものは、創造主が誰であるか、人間はなぜ創造されたのか、被造物としての責任をどう果たすべきか、すべての被造物の主をどう崇拝すべきかを知り、創造主の意図と願いと要求を理解し、把握し、知り、思いやらなければなりません。そして創造主の道、すなわち神を畏れ悪を避ける道に沿って行動しなければならないのです。

神を畏れるとはどういうことでしょうか。そして、どうすれば悪を避けられるのでしょうか。

「神を畏れる」ということは、得体の知れない恐れや恐怖心を持つことではなく、回避することでも距離をおくことでもなく、偶像化や迷信でもありません。それは敬慕、尊敬、信賴、理解、思いやり、従順、献身、愛であり、無条件で不平のない崇拝、報い、そして帰服です。神に関する本物の認識がなければ、人間に本物の敬慕、本物の信賴、本物の理解、本物の思いやりや従順は存在せず、ただ恐怖と不安、懷疑、誤解、回避、逃避があるばかりです。神に関する本物の認識なくして、人間に本物の献身や報いはあり得ません。神に関する本物の認識なくして、人間に本物の崇拝や帰服はあり得ず、ただ盲目的な偶像化と迷信があるのみです。神に関する本物の認識がなければ、人類は神の道に沿って行動することも、神を畏れることも、悪を避けることも到底できません。逆に、人間が関与するあらゆる活動や行為は、反抗と反逆、神についての中傷的な非難や悪意的な裁き、そして真理や神の言葉の真意に反した悪行に満ちることになるでしょう。

ひとたび神を本当に信賴すると、人は本当に神に従い、神を頼るようになります。本当に神を信賴し頼って初めて、人は本物の理解と認識を得ることができます。神に対する真の理解にともなって、神への真の思いやりが生じます。神に対する本物の思いやりがあって初めて、人間は本当に服従できるようになり、神に対する本物の服従があって初めて、人は本当に献身することができます。神への本物の献身があって初めて、人は無条件に不満なく報いることができます。本物の信賴と依存、本物の理解と思いやり、本物の服従、本物の献身と報いがある初めて、人は真に神の性質と本質とを知り、創造主の身分を知ることができます。創造主を真に知って初めて、自らのうちに本物の崇拝と帰服とを目覚めさせることができます。創造主に対する真の崇拝と帰服がある初めて、人は真にその悪の道を捨てること、つまり悪を避けることができるようになるのです。

これが「神を畏れ、悪を避ける」ことの過程であり、また神を畏れ、悪を避けるということの全容でもあります。これは神を畏れ悪を避けることを成し遂げるために、越えなければならない道なのです。

「神を畏れ、悪を避ける」と神を知ることは、無数の線で不可分に繋がっており、その関連性は自明です。悪を避けたいと望むなら、まず神を真に畏れなければなりません。神を真に畏れることを望むなら、まず神に関する真の認識を得なければなりません。神に関する真の認識を得たければ、まず神の言葉を体験し、神の言葉の現実に入り、神の懲らしめと鍛錬、刑罰と裁きを経験しなければなりません。神の言葉を経験したいと望むなら、まず神の言葉と向き合い、神と顔を合わせて、人や出来事や物事に関わるあらゆる環境の中で神の言葉を体験する機会を与えてくれるよう、神に求めなければなりません。神や神の言葉と向き合うことを望むなら、まず単純で正直な心を持ち、いつでも真理を受け入れる準備をし、苦難に耐える意志、悪を避ける決意と勇気、そして本物の被造物になるという志を持たなければなりません……。このようにして一步步前進すれば、あなたはますます神に近づき、あなたの心はますます純粋になり、あなたの人生と生きる価値は神に関する認識とともに一層有意義で豊かになり、より輝かしいものとなってゆくでしょう。そしていつの日か、創造主はもはや不可解なものではなくなり、一度も自分から隠されてはいなかったと感じられるようになり、創造主があなたから顔を隠したことは一度もなく、決して遠く離れてはおらず、絶えず頭の中で追い求めても感じ取ることができないようなものではなく、実際にあなたの左右に立って真にあなたを見守り、あなたのいのちを満たし、運命を支配しているのだと感じられるようになります。神は遠く離れた地平の彼方に存在するのではなく、雲の上に隠れているのでもありません。神はあなたのすぐ側で、あなたのすべてを支配しており、あなたが持つすべてのものであると同時に、あなたが持っている唯一のものなのです。こうした神は、あなたが心から神を愛し、神にすがりつき、寄り添い、敬愛し、神を失うことを恐れるようにしてくれるとともに、もう神を放棄したり背いたりせず、神から逃げたり遠ざかったりもしたがらないようにしてくれます。あなたはただ神を思いやり、神に服従し、神が与えるすべてに報い、神の支配に従うことだけを望むようになるのです。そしてもはや神に導かれ、養われ、見守られ、保護されることを拒まなくなり、神があなたに命じることや定めることを拒まなくなります。ただ神に従い、神の横で共に歩むことを望み、そして神を自分にとって唯一のいのちとして受け入れ、唯一の主、唯一の神として受け入れることを望むようになるのです。

神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか

それではまず讃美歌を歌いましょう。神の国の賛歌（Ⅰ）神の国がこの世に降臨する

伴奏：あまたの民がわたしに喝采を送り、わたしを賛美する。万民が唯一の真なる神の名を呼ぶ。神の国がこの世に降臨する。

1. あまたの民がわたしに喝采を送り、わたしを賛美する。万民が唯一の真なる神の名を呼び、わたしの業を仰ぎ見る。神の国が人の世に降臨し、わたしの本体は豊かで充実している。誰がこれを喜ばないのか。誰が歓喜のあまり踊らないのか。ああ、シオンよ。勝利の旗を掲げてわたしを祝え。勝利の歌を歌いあげ、わたしの聖なる名を広めよ。

2. 地の果てまでも存在するすべての被造物よ。直ちに自らを清めてわたしへの捧げ物となれ。大空の星よ。直ちにもとの位置に戻り、わたしの全能なる力を天空に示せ。わたしは地上の民の声に耳を傾ける。わたしへの無限の愛と畏れを歌に注ぐ民の声に。すべての被造物が蘇るこの日、わたしは人の世に降臨する。この瞬間、まさにこの節目、すべての花が一斉に咲き乱れ、すべての鳥が声を揃えて歌い、すべてのものが喜びに打ち震える。神の国の礼砲が鳴り響くと、サタンの国はよろめき倒れ、神の国の賛歌がとどろく中で滅び、二度と立ち上がることはない。

3. 地上の誰があえて立ち上がり抵抗するというのか。地に降り立つわたしは焼き尽くす火をもたらし、怒りをもたらし、ありとあらゆる災難をもたらし。地上の国々はいまやわたしの国である。空の雲は激しく動いて渦を巻き、地の湖と川はうねりをあげ、感動的な旋律を喜んで奏でる。休んでいた動物はねぐらから現われ、万民はわたしにより眠りから呼び覚まされる。万民の待ち望んでいた日がついに来た。彼らは最も美しい歌をわたしに捧げるのだ。

この歌を歌うとき、あなたがたは何を考えますか。（とても興奮して、うれしくなります。神の国の美しさがどれほど壮麗か、人類と神様が永遠に一緒にいることを考えます。）神と共にあるために、人間がとらなければならない形について考えたことがある人はいますか。あなたがたの想像では、神と共にあり、神の国で栄光ある生活を送るためには、人間はどのようにあるべきですか。（人間の性質が変化していなければなりません。）人間の性質が変化していなければなりません、どの程度ですか。性質が変化

した後の人間はどのようになりますか。（聖なる人間になります。）聖さの基準は何ですか。（人のすべての思いや考えがキリストと一致していなければなりません。）そのような一致は、どのように表出しますか。（人間は神様を拒まず、裏切らず、神様に絶対的に服従し、神様を心から畏れて崇めます。）あなたがたの答えには正しいものも幾つかあります。心を開いて、言いたいことを声にしなさい。（神様と共に神の国で暮らす人間は、人や物事に少しも邪魔されることなく真理を追求することで、忠実に本分を尽くすことができるようになるべきです。そうすると闇の影響から抜けだし、神様の心と調和して、神様を恐れ、悪を避けられるようになります。）（物事の見方を神様と調和させ、闇の影響から抜け出すことができます。少なくとも、サタンに搾取されず、墮落した性質を捨て去り、神様に従順になれるところにたどり着くことができます。闇の影響から人間が抜け出すことが重要だと思います。闇の影響から抜け出せず、サタンの呪縛から抜け出せない人は、神様の救いを得ていません。）（神様に完全にされるための基準を満たすためには、人は神様の心と思いとひとつになり、神様を拒まなくなり、自分を知り、真理を実践し、神様についての認識を得て、神様を愛し、神様と協調しなければなりません。これが必要なことのすべてです。）

人間の結末がいかに心に重くのしかかるか

あなたがたは自分が歩むべき道について何らかの考えがあるようで、それについてある程度の理解と認識を得たようです。しかし、あなたがたが言った言葉が空虚なものとなるか、現実的なものとなるかは、日々の実践において、何に注意しているかにより決まります。あなたがたはみな、長年にわたり教義と真理の実際の内容の両方について真理のあらゆる側面から収穫を得てきました。これは、現在の人間は真理の追求に重点を置いていることを証明しています。その結果、真理の各側面と事項が、一部の人の心に確かに根ざしています。それでは、わたしは何を最も恐れているのでしょうか。それは、これらの真理に関する題目と理論が心に根ざしているにもかかわらず、その実際の内容が、あなたがたの心においてそれほど実体がないことです。あなたがたが問題に遭遇し、試練に直面し、選択に迫られたとき、そうした真理の現実性をどの程度実際に活用できますか。その現実性は、あなたがたが困難を乗り越え、神の心意を満たして試練から立ち上がるのに役立つことができますか。あなたがたは試練の只中においてもしっかりと立ち、はっきりと響き渡るような神への証しをしますか。このような問題に関心を持ったことがありますか。あなたがたに尋ねます。心の中で、日々の考えや思いにおいて、何が一番重要ですか。このことについて結論に達していますか。何が最も重要であ

ると思いますか。「それはもちろん真理を実践することだ」と言う人もいれば、「当然ながら、神の言葉を毎日読むことが最も重要だ」と言う人もいます。「当然、毎日神の前に出て、神に祈ることだ」と言う人や、「やはり、毎日きちんと自分の本分を尽くすことだ」と言う人もいます。さらに、神に満足させる方法、あらゆる物事において神に従う方法、神の心に沿って行動する方法についてひたすら考えることだと言う人さえいます。それで正しいですか。それですべてですか。たとえば、「常に神に服従したいが、問題に遭遇すると、いつもできなくなる」という人がいます。「ただ神を満足させたい。神にただ一度だけでも満足してもらえればよい。でも、神に満足してもらうことは決してできない」と言う人もいます。また、「神に服従したいとだけ思っている。試練のさなかには何も不満を言わず要求もせずに、神の采配にゆだね、神の統治と計画に従いたい。それなのに、ほぼ毎回、そうできない」と言う人がいます。「決断に迫られると、どうしても真理を実践することを選べない。肉を満たし、自分勝手な願望を満たしたいといつも思う」と言う人もいます。この原因は何ですか。神の試練が起こる前に、あなたがたは何度も自分自身に挑んだり、試したり、試練を課したりしているでしょうか。本当に神に従い、神を満足させられるか、絶対に神を裏切らないと保証できるか、試してみなさい。自分自身や自分勝手な願望を満足させずに、個人的な選択をせずに、ただ神を満足させられるか、試してみなさい。誰かこれをする人はいます。実際、あなたがたの目の前に置かれた真実はただひとつです。それはあなたがた全員が一番関心があり、最も知りたいこと、つまり各人の結末と終着点に関することです。あなたがたは気づいていないかも知れませんが、それは誰も否定できないことです。人間の結末、神の人間への約束、神が人間を連れて行こうとする終着点の真理については、関連する神の言葉をすでに何度か研究した人がいることをわたしは知っています。また、心の中で何度も答えを探し考えるが、何の結果も得られなかったり、曖昧な結論に達したりしている人もいます。結局、彼らはどのような結末が自分を待ち受けているのか確信がないままです。自分の本分を尽くすとき、ほとんどの人が、「自分の結末はどうなるだろうか」「最後まで道を歩き続けられるだろうか」「人間に対する神の態度はどのようなものだろうか」といった疑問へのはっきりした答えを知りたいと思いがちです。「過去に何かをして、何かを言った。神に不従順だった。神を裏切る行為をしたし、ときには神に満足してもらえなかったし、神の気持ちを傷つけ、神を落胆させ、神に忌み嫌われることをした。だから、おそらく自分の結末は不明だ」と懸念する人さえいます。大部分の人間が自分の結末に不安を感じていると言えるでしょう。「自分は生き残ると100%確信している。神の心意を満足できると100%確信している。自分は神の心に叶う者で

あって、神の賞讃を受ける者である」などと、厚かましくも言う人はいません。神の道に従うのはことさらに困難であり、真理を実践するのは何よりも難しいと考える人がいます。そのため、こうした人は自分が救いようがないと思い込み、あえて良い結末に到達できると期待することはありません。あるいは、神の心意を満たせないで、生き残ることはできないと考えます。そのため、自分に結末はなく、好ましい終着点に到達できないと言い張ります。人が正確にはどのように考えようと、皆自分の結末について何度も思い悩んでいます。自分の将来、そして神がひとたびその働きを終えたときに自分は何を得られるかについて、常に計算し、計画を立てています。普通の倍の犠牲を払う人や、家族や職業を捨てる人、結婚を諦める人、神のために自分を費やすことに甘んじる人、本分を尽くすために家を去る人、困難を選び、最も過酷で骨の折れる務めに取り組む人、富や持っているもののすべてを捧げることを選ぶ人、真理を追求し神を知ろうと努力する人もいます。実践することをどのように選択しようと、実践の仕方は重要ですか。（重要ではありません。）それでは、重要でない理由をどのように説明しますか。実践の仕方が重要でないとしたら、何が重要ですか。（表面上の良いふるまひは、真理の実践を表しません。）（各人の考えは重要ではありません。ここで重要なのは真理を実践しているかどうか、神様を愛しているかどうかです。）（反キリストと偽の指導者が倒れたことで、表向きのふるまいが最も重要ではないことがわかります。彼らは表面的には多くを捨て去り、代償を払うことをいとわないように見えますが、詳しく検討すると、まったく神様を崇めず、反対にあらゆる面で神様に反抗していることがわかります。肝心なときに彼らはいつもサタンの味方をして、神様の働きを阻害します。したがって、ここでおもに検討すべきことは、その時が来たときに自分がどちら側に立つか、そして自分の観点がどのようなものであるかです。）あなたがたは皆よい発言をし、また、真理の実践、神の心意、神の人類への要求事項に関する基本的な認識をすでに備え、その基準に達しているようです。あなたがたがこのように語れることは、とても感動的です。発言には、不正確なものもありますが、真理を正しく説明できるところにすでに接近しています。それは、あなたがたが周囲の人々や物事、神が定めた環境、自分に見えるものすべてについての実際の認識を得たことの証拠です。それは真理に近い認識です。あなたがたの言ったことは完全に包括的ではなく、あまり妥当とは言えない言葉も少しありましたが、あなたがたの認識は、真理の現実性にすでに近づいています。あなたがたがこのように発言するのを聞いて、わたしは気持ち良く感じます。

人の考えることは真理を代替できない

苦難に耐え、代償を払い、表面上の行動も極めて良好であり、尊敬されて他人に賞讃されている人がいます。こうした表面上の行動は、真理の実践とみなせるとあなたがたは言うのでしょうか。このような人は神の心意を満たしていると言えますか。このような人を見ると、神を満足させている、真理を実践する道を歩んでいる、神の道を歩んでいると人がいつも考えるのはなぜですか。このように考える人がいるのはなぜですか。これを説明する方法はひとつしかありません。それはどのような説明ですか。それは、多くの人にとって、真理の実践とは何か、神を満足させるとはどのようなことか、真理の現実性を真に自分のものにするとは何を意味するのか、といった疑問があまり明瞭でないということです。そうしたわけで、表面上は靈的で高貴で高尚で偉大に見える人によく惑わされる人がいるのです。惑わされる人は、字句や教義について雄弁に語ることができる人や言動が賞讃に値するように見える人の行動の本質や背後にある原則や、彼らの目的が何なのかを検討したことがありません。また、彼らが真に神に服従しているかを検討したことも、彼らが真に神を畏れ、悪を避けるかも不明なままです。惑わされる人は、彼らの人間性の本質を見極めていないのです。むしろ、最初の出会ってから、徐々に彼らを賞讃、崇敬するようになり、最終的には、惑わされる人にとっての偶像になります。さらに、一部の人は、自分が崇拝する偶像は、家族や職業を捨て、表面的に代償を支払うことができる人で、真に神を満足させており、好ましい結末と終着点に到達できる人であると信じているのです。こうした人の考えでは、これらの偶像こそが神が賞讃する人なのです。人がこのように考える原因は何ですか。この問題の本質は何ですか。この問題はどのような結末を引き起こす可能性がありますか。まず、この問題の本質について話し合しましょう。

基本的に、人の観点、実践の方法、人がどのような実践の原則を選択するかという問題、何を強調する傾向にあるかという問題は、神の人類への要求とは無関係です。人が重要視する問題が浅薄であるか深遠であるか、字句や教義であるか現実であるかにかかわらず、人は最も遵守すべきことを遵守せず、最も知るべきことを知りません。その理由は、人が真理をまったく好まないからです。したがって、神の言葉にある実践の原則を探して実践するために人は時間や労力を費やすことを望みません。むしろ、近道をし、理解し、知っていることをまとめて、良い実践やふるまいとすることを望みます。この「まとめ」が人の目標となり、実践すべき真理となります。このことの直接的な成り行きは、真理を実践する代替として良いふるまいを用いることであり、それは神の機嫌を取りたいという人の欲望も満たします。これにより、人は真理に対抗し、神を説得し

神と競争するのに用いる資本を得ます。それと同時に、人は無節操に神を脇へやり、自分が崇拝する偶像を代わりに据え付けます。人がこうした無知な行動や見方を取り、一面的な意見と実践を採用する根本原因はひとつしかありません。今日は、あなたがたにこのことについて話します。その理由は、神に付き従い、日々神に祈り、神の言葉を読んでも、実際には人は神の心意を理解していないからです。このことが問題の根源です。もし人が神の心を理解し、神が何を好み何を嫌悪するか、神が何を欲し何を拒むか、神がどのような人間を愛し嫌うか、人間への要求をするときに神がどのような基準を適用するか、神が人間を完全にするのにどのような方法を取るかを知っていたならば、それでもなお人は自分の個人的な考えを持つことができますか。ただ別の誰かを崇拝できますか。普通の人間が人の偶像となり得ますか。神の心意を理解している人は、それよりはもう少し理にかなった観点をもっています。墮落した人間を自分の判断で偶像化することはなく、また真理を実践する道を進みながら、僅かな簡単な規則や原則を盲目的に遵守することが真理を実践することであるとは考えません。

神が人間の結末を決定する基準については、多数の意見がある

では、この主題に戻り、結末についての話し合いを続けましょう。

人間の誰もが関心があるのが自分の結末ですが、あなたがたは神がどのように結末を決めるのか知っていますか。神はどのように人間の結末を決めるのですか。また、神はどのような基準を適用して人間の結末を決めるのですか。人間の結末がまだ決まっていないとき、神は何をしてそれを明らかにしますか。誰か知っていますか。先に述べた通り、神の言葉をすでに長年にわたり研究して、人々の結末や、結末が分類される種別、人々の種類別に待ち受ける様々な結末に関する手がかりを見つけようとしている人たちがいます。彼らは、神の言葉がどのように人間の結末を決めるのか、神はどのような基準を適用するのか、神はどのようなやり方で人間の結末を決めるのかも知りたいと考えています。しかし、彼らは結局何の答えも見つけられません。事実、神の言葉には、そのようなことを論じているものはほとんどありません。それはなぜですか。人間の結末が明らかにされていない限り、神は最後に何が起こるかを誰かに伝えることも、誰かにその終着点を事前に知らせることも望まないのです。そのようなことをしても、人間にとって何ら恩恵がないからです。今ここでは、神がどのように人間の結末を決定するか、人間の結末を決定し明らかにする働きにおいて神が適用する原則、誰かが生き残れるか否かを決定するために神が適用する基準についてだけ話したいと思います。これらは、あなたがたが最も懸念している問題ではありませんか。それでは、どのように神が人

間の結末を決定すると信じていますか。これについては、つい先ほどあなたがたは少し述べていました。自分の本分を誠実に尽くして神のために努力することに関係があると言った人がいました。神に服従し、神に満足してもらうことであると言った人もいました。神の意のままになることが関係すると言った人も、目立たなくしていることが肝心であると言った人もいました……。あなたがたがそうした真理を実践するとき、自分が正しいと信じる原則に従って実践するとき、神がどう思うかをあなたがたは知っていますか。そのように続けることで、神の心意が満足されるかどうか、それは神の基準に應じるかどうか、神の要求に應じるかどうかを考えたことがありますか。大部分の人はそのようなことを真剣に考えないと思います。大抵は神の言葉の一部か説教の一部、あるいは自分が偶像化する霊的人物の基準を機械的に適用し、あれこれと自分自身を強制するだけです。それが正しいやり方であると考え、結局どうなるかにかかわらず、そのように実践し続けるだけです。「長年信じてきて、常にそのように実践してきた。自分は神を本当に満足させ、また自分も得るところが多かったと感じる。なぜなら、このあいだに、多くの真理や前にはわからなかった多くのことが分かるようになったから。特に、自分の考えや観点の多くが変わり、人生の価値観も大きく変わり、今ではこの世についてかなりよく理解している」と考える人がいます。こういう人は、それが収穫であり、それが人類に対する神の働きの最終結果であると考えます。あなたがたは、そうした基準と自分の実践すべてを一緒にして、神の心意を満たしていると考えますか。確信を持って「もちろん。私たちは神の言葉に従って実践し、上層部が説教し、伝えた通りに実践している。常に自分の本分を尽くし、神に付き従い、神から離れたことは一度もない。だから、完全なる確信を持って神を満足させていると言える。神の心意をどの程度理解し、神の言葉をどの程度理解しているかにかかわらず、神と融和することを求める道を常に歩んで来た。正しく行動し、正しく実践していれば、正しい結果が得られるのは確実だ」という人もいるでしょう。こうした観点についてどう思いますか。これは正しいですか。「そのようなことはこれまで考えたことがない。ひたすら自分の本分を尽くし、神の言葉にある要求に従って行動していれば、自分は生き残るとだけ考えている。神の心を満足させられるかといった問題や、神が設定した基準に達しているかどうかについては今まで考えたことがない。神から何か言われたり、明確な指示を与えられたりしたことがないので、私が働き続けて止まらない限り、神は満足し、私にそれ以上のことを求めないはずだ」と言う人もいるかもしれません。こうした考えは正しいですか。わたしに関する限り、こうした実践方法や思考方法、観点はすべて空想的であり、多少盲目的です。わたしがこう述べると、多少落胆して「盲目的とは、どういうことか

。これが『盲目的』ならば、私たちの救いや生き残りへの望みは少なく、不確実になるのではないか。そのような言い方をして、私たちに冷水を浴びせているのではないかと考える人もいるでしょう。あなたがたが何を信じようと、わたしは自分の言動であなたがたに冷水を浴びせるような意図はありません。むしろ、神の心意に関するあなたがたの理解を向上させ、神が何を考え、何を達成したいのか、神はどのような人間を好み、何を憎み、何を嫌悪し、どのような人間を自身のものとしたいと思っているのか、どのような人間を拒否するかを、あなたがたがよりよく認識できるようにすることを意図しています。それは、あなたがたの心を明瞭にして、各人の行動や思いが神が要求する基準からどれほど離れてしまっているかを、あなたがたにはっきり理解させることを意図しています。こうした事柄について話す必要がありますか。なぜなら、あなたがたは長いあいだ信仰してきて、多くの説教を聴いてきたことをわたしは知っていますが、あなたがたにはこのようなことが最も不足しているからです。あなたがたは、あらゆる真理をノートに書き記し、各自が重要であると思ったことの幾つかを記憶し心に刻み付けてきました。また、実践中に神を満足させるためや、必要なとき、将来の困難な時期を乗り切るためにそれを使うつもりであり、あるいは単に、そうした事柄を人生の道連れにするつもりでしょう。しかしわたしに言わせれば、あなたがたがどのように実践しようと、ただ実践するのであれば、それはあまり重要ではないのです。では、何が重要ですか。それは、実践しているときにしていること、行ないのひとつひとつが神の望むことであるかどうか、行動や思いのすべて、達成したい成果と目標が実際に神の心意を満足させ、神の要求に応じ、また神に認められるものであるかどうかについて、心の奥深くで絶対的に確信を持つことです。重要なのは、こういうことです。

神の道を歩め——神を畏れ、悪を避けよ

心に留めるべき格言があります。この格言はとても重要だと思います。なぜなら、この格言を毎日何度も思い出すからです。なぜですか。それは、誰かと面と向かうたびに、誰かの話を聞くたびに、誰かの経験談や神への信仰の証しを聞くたびに、わたしはいつもこの格言を用いて、その人が神が求め、好むような人であるか否かを心の中で決めるからです。では、その格言とは何でしょうか。今、あなたがたはみな身を乗り出しています。わたしが格言が何であることを明かすと、あなたがたはおそらく落胆するでしょう。なぜなら、何年間もこの格言を口先だけで言う人がいたからです。しかし、わたしは口先だけでこの格言を言ったことなど決してありません。この格言はわたしの心の中にあります。では、その格言とは何でしょうか。それは「神の道を歩め——神を畏れ、

悪を避けよ」です。これはあまりにも簡潔な言葉ではありませんか。簡潔でありながらも、この格言を深く理解する人は、それには非常に重みがあり、実践にとって価値が高く、真理の現実性があるいのちの言葉であり、神を満足させることを追い求める人にとっての生涯の目標であり、神の心意を配慮する人が従うべき生涯の道である、と感じます。あなたがたはどう思いますか。この格言は真理ではないのですか。それほど的重要性がありますか。ありませんか。おそらく、この格言について考えて理解しようとしている人と、疑念さえ抱く人がいるでしょう。この格言はとても重要ですか。重要ですか。それほど強調する必要がありますか。神の道をこの格言一つに集約するというのは簡略化しすぎであると考えるため、この格言がそれほど好きではない人もあなたがたの中にいるかもしれません。神の言葉すべてを一言に凝縮するのは、神を軽視しすぎではないでしょうか。これは、そういう話ですか。あなたがたのほとんどがこの言葉の深い意義を完全に理解していないかも知れません。あなたがたはみな、この格言を書き留めましたが、心に留めるつもりはないのです。単にノートに書き留めて、時間があるときに読み返すつもりなだけです。記憶しようなどと思わない人さえいて、活用しようと努める人などなおさらいません。ではなぜわたしはこの格言について話しているのですか。あなたがたの観点や、あなたがた考えることが何であれ、わたしにはこの格言に触れる必要があります。なぜなら、この格言は神がどのように人間の結末を決定するかに極めて密接に関係しているからです。あなたがたが現在この格言をどのように理解し、扱おうと、あなたがたにこれを伝えます。この格言を実践して経験し、神を畏れ悪を避ける基準を満たすことができれば、その人は確実に生き残り、好ましい結末にたどり着きます。一方、この格言が定める基準を満たせなければ、結末は不明であると言うことができます。したがって、あなたがたの心の準備として、また神があなたがたを評価する基準がわかるように、この格言について話します。たった今述べた通り、この格言は神による人類の救いと、また神が人間の結末をどのように決定するかに極めて深く関連しています。どのように関連性しているのか、それをあなたがたは心から知りたいでしょうから、今日はそれについて話します。

神は様々な試練を使い、人間が神を畏れ悪を避けているか否かを試す

どの時代においても、神は人間のもとで働くときには、人間に言葉を伝え、なんらかの真理を知らせます。こうした真理は、人間が守るべき道、歩くべき道、神を畏れ悪を避けられるようにする道、生活や人生の旅路において実践し遵守すべき道として機能します。これが神が言葉を与える理由です。神に由来する言葉を人間は守るべきであり、

それを守ることはいのちを授かることです。神の言葉を守らず、実行せず、生活において神の言葉を生きなければ、その人は真理を実行していません。そして、真理を実行していなければ、人間は神を恐れ悪を避けておらず、神を満足させることもできません。神を満足させることのできない人は、神の賞賛を得られず、そのような人には良い結末がありません。それでは、神はその働きにおいて、どのように人間の結末を決めるのですか。人間の結末を決めるのに神はどのような方法を使いますか。おそらくあなたがたは、今この問題について明確に理解していないでしょうが、その過程についてわたしが話すと、かなりはっきりします。それは、あなたがたのうち多くの人が既にそれを自ら経験しているからです。

始まりから現在に至るまでの神の働きの過程を通して、神は各人（つまり、神に付き従う一人ひとりと言うことができますが）に試練を定めており、それらの試練の大きさは様々です。自分の家族から拒否される試練を経験した人もいれば、逆境の試練を経験した人、逮捕されて拷問される試練を経験した人、選択を迫られる試練を経験した人、金銭や地位の試練を直面した人もいます。概して、あなたがたそれぞれが、様々な試練を受けたことがあります。神はなぜこのように働くのですか。神はなぜ各人をこのように扱うのですか。神はどのような結果を望んでいるのですか。わたしの話の要点はこれです。すなわち、神はある人が神を恐れ、悪を避けるような人間であるか否かを知りたいのです。これは、神があなたに試練を与え、ある状況にあなたを直面させているとき、神の意図はあなたが神を恐れ、悪を避ける人間であるか否かを試すことだということを意味します。もし誰かが捧げ物を守るという本分を与えられ、そのため神への捧げ物に接することになった場合、あなたはこれは神の采配であると思いますか。疑いなく、その通りです。あなたが直面するあらゆる物事は神の采配です。あなたがこのようなことに直面しているとき、神はあなたを隠れて観察し、あなたがどのような選択をするか、どのように実践するか、あなたにどのような思いがあるかを見ています。神が最も関心を持つのは、最終的な結果です。なぜなら、その結果により、神はあなたがその試練において神の基準に達したかどうかを評価できるからです。しかし、何かの問題に直面しても、人はなぜその問題に直面しているのか、神は人にどのような基準に達することを求めているのか、人の何を評価したいのか、人から何を得たいのかを考えません。人はただ、「これが現在直面していることだ。不注意にならず、注意しなければ。とにかく、これは神への捧げ物だから、触れてはならない」と考えるだけです。そうした安易な考えで、自分の責任を果たしたと考えているのです。この試練の結果に神は満足する

でしょうか。しないででしょうか。意見を述べなさい。（人が神様を心から畏れているなら、神様への捧げ物に触れることのできる本分に直面したとき、神様の性質を侵害するのがどれほど簡単かを考えるので、それで間違いなく注意して取り組むことになります。）その発言は正しい方向にありますが、正解には達していません。神の道を歩むことは、表面的な規則に従うことではありません。それは、問題に直面したとき、何よりもまず先に、それを神の采配による状況、神から与えられた責任、あるいは神から委ねられた任務であるとみなすことです。問題に直面したときは、それを神があなたに下した試練であるとすら捉える必要があります。問題に遭遇したとき、あなたの心には基準がなくはならず、それが神から与えられたものであると考えなくてはなりません。神に忠実でありながら、自分の責任を果たせる形でその問題をどう扱うか、また神の怒りを買ったり神の性質を侵害したりせずにそうする方法を考慮する必要があります。つい先ほど、捧げ物を守ることにについて話しました。この問題には捧げ物が関係しており、また本分と責任が関係します。あなたには、その責任について任務が課せられています。しかし、この問題に直面したとき、何らかの誘惑がありますか。あります。その誘惑は何に起因しますか。それはサタンに起因しますが、人間の邪悪で墮落した性質にも起因します。誘惑があるので、このことは人が立てるべき証しに立つことが関与します。このこともまた、あなたの責任であり、本分です。「それは些細なことだ。それほど深刻に捉える必要が本当にあるのだろうか」と言う人がいますが、その必要はあります。というのは、神の道を歩むためには、自分の身に起こることや周囲で起こることは、小さいことでもすべてないがしろにはできないからです。何かに注意するべきであると考えるか否かにかかわらず、問題に直面している限り、それを無視するべきではありません。起こることはすべて神から私たちに与えられた試練とみなすべきです。こうしたものの見方をどう思いますか。このような態度をとっているなら、それである事実が確認できます。すなわち、心の奥ではあなたは神を畏れていて、悪を避けることを望んでいるということです。あなたに神を満足させたいという願望があるなら、あなたが実行することは神を畏れ、悪を避ける基準からかけ離れていることはありません。

人がそれほど気につけないこと、通常は話題とならないことは取るに足らない些細なことで、真理を実践することとは無関係であると考えの人がよくいます。そうした人がこのような問題に直面すると、あまり考えず放置します。しかし、実際にはそれは学ぶべき教訓、どのように神を畏れ、悪を避けるかに関する教訓なのです。さらに、それ以上に懸念すべきことは、その問題が発生して自分が直面しているとき、神は何をしている

るかを知ることです。神はあなたのすぐ側にいて、あなたの言動のひとつひとつを観察し、あなたのすることすべて、あなたの思いにどのような変化が起きるかを観察しています。これが神の働きです。「それが本当なら、私がそれを感じないのはなぜだろうか」と言う人がいます。あなたが感じたことがないのは、神を恐れ悪を避ける道をあなたにとって第一の道として守っていないからです。そのため、人の様々な思いや行動に従って現れる、神の人間における微妙な働きを感じることはできないのです。あなたは注意力散漫です。大きな問題とは何ですか。小さな問題とは何ですか。神の道を歩むことに関与する問題には、大小の区別はありませんが、このことを受け入れられますか。（受け入れられます。）日常の問題に関しては、人間が重大であると捉えることと、些細であるとみなすことがあります。人間はこうした大きな問題を極めて重要と考え、それが神に与えられたと考えます。しかし、こうした大問題が発生するにつれて、未熟な霊的背丈と貧弱な力量のせいで、人はしばしば神の心意に従うことができず、神の啓示や、価値のある実質的な認識がまったく得られないことが往々にしてあります。些細な問題については、人間に無視され、放置されて徐々に意識からなくなります。そのようにして、人間は神の前で神に検証され、試される数多くの機会を逃しています。神があなたのために采配したこのような人、出来事、物や状況にいつも気づかないとしたら、それは何を意味しますか。それは、毎日、それどころか瞬間瞬間に、神により完全にされることと神の指揮を放棄していることを意味します。神があなたのために一つの状況を手配するたびに、神はあなたの心、思いや考え、どのように考えるかを密かに観察し、あなたがどのように行動するかを見届けようとしています。あなたが不注意な人、すなわち神の道、神の言葉、真理に真剣に取り組んだことがない人であれば、その状況をあなたのために手配したときに神が完全にしたいこと、あなたに要求していることに注意することも、配慮することはありません。また、あなたが遭遇する人、出来事、物が真理や神の心意にどのように関連するかを知ることありません。このように繰り返し起こる状況や試練に遭遇しても、あなたが何かを達成するのを神が見ることがなければ、神は次にどうしますか。何度試練に遭遇しても、あなたの心は神を崇めず、神があなたのために采配した状況を、神からの試練であり試験としてそのまま受け入れていません。その代わり、神があなたに与えた機会を次々と拒否し、何度も逃がしています。それは人間の極端なまでの反抗ではありませんか。（その通りです。）神はこれで傷つきませんか。（お傷つきになります。）神は傷つきません。わたしがこう言うのを聞いて、あなたがたは再び驚きました。あなたがたは「神はいつも傷ついていると前に言われたのではなかったか。だから、神は傷つくのではないのか。それでは神はいつ傷つくのか

」と考えているかもしれません。いずれにせよ、神はこの状況で傷つくことはありません。それでは、上記のようなふるまいに対して神はどのような態度を取りますか。神が人間に与える試練や試験を人間が拒否するときや、人間がそれらを回避するとき、神が彼らに見せる態度はただ一つです。それは何ですか。神は彼らを心の底から拒絶します。ここでは「拒絶」という言葉には二層の意味があります。わたしの観点から、それをどのように説明するべきでしょうか。この言葉の深層には、嫌悪と憎しみの含意があります。もう一つの層についてはどうでしょうか。もう一つには、何かを諦めることがほのめかされています。あなたがたはみな「諦める」の意味を知っていますね。つまり、「拒絶」とは、そのようなふるまいをする人間に対する神の最終的な反応と態度を意味する言葉です。それは、彼らへの極端な憎しみと嫌悪であり、それゆえに彼らを見捨てるという決断へとつながります。これが、神の道を歩んだことがなく、神を恐れ悪を避けたことがない人に対する神の最終的な判断です。これで、先にわたしが説明した格言の重要性が理解できますか。

これで、人間の結末を決めるのに神が用いる方法を理解できましたか。（神様は毎日、様々な状況を手配なさいます。）「毎日、様々な状況を手配する」というのは、人が感じ、触れることです。では、そのようなことをする神の動機は何ですか。それは、各人にそれぞれ異なる時間と場所で様々な試練を与えることです。試練では、人間のどの側面が試されますか。試練は、遭遇し、聞き、見、個人的に経験するあらゆる問題において、あなたが神を恐れ悪を避けるような人であるかどうかを決めます。誰もがこうした試練を経験します。なぜなら、神は万人に対して平等だからです。「私は長年にわたって神を信仰しているが、なぜ試練に一度も遭遇していないのだろうか」と言う人がいます。あなたが試練に遭遇したことがないと感じるのは、あなたのために神が状況を手配するたびに、あなたはそれを真剣に捉えず、神の道を歩きたくなかったからです。そうしたわけで、あなたが神の試練に気付かなかっただけです。また、「数回の試練に遭遇したが、どのように適切に実践するべきかわからない。実践しても、自分が試練の中で固く立っていたかどうか、いまだにわからない」と言う人もいます。こうした状況にある人は少なくありません。それでは、神が人間を評価する基準は何ですか。それは先ほど述べた通りです。すなわち、すること、考えること、表現することすべてにおいて、神を恐れ悪を避けるか否かです。これが、あなたが神を恐れ悪を避ける人間であるか否かを判断する方法です。この概念は簡素ですか。簡素ではありませんか。言うのは簡単ですが、実践するのは簡単ですか。（あまり簡単ではありません。）それはなぜです

か。（人間は神様を知らず、神様が人間を完全にしてくださる方法を知らないので、物事に対処するとき、問題解決のために真理を求める方法を知らないからです。人間が神様を畏れることの現実性を自分のものにできるまでには、様々な試練、精錬、刑罰、裁きを経験しなければなりません。）あなたがたはそういう言い方をするかもしれませんが、あなたがたに関する限り、神を恐れ悪を避けることはとても簡単で今すぐできそうです。わたしはなぜこう言うのですか。それは、あなたがたは多くの説教を聞き、真理の現実性からの水やりをかなり受け取っているからです。これにより、あなたがたは、神を恐れ悪を避ける方法を理論的、知的には理解することができているからです。神を恐れ、悪を避けることを実践することに関しては、この知識は極めて効果的であり、このようなことは容易に実行可能だとあなたがたに感じさせます。それでは、なぜ人は実際にはできないのですか。それは、人間の本質が神を恐れず、悪を好むからです。それが本当の理由です。

神を恐れず悪を避けないことは、神への反逆

まず、「神を恐れ、悪を避ける」という格言の由来をあなたがたに尋ねます。（ヨブ記です。）ヨブが言及されたので、ヨブについて話しましょう。ヨブの時代に、神は人間を救い征服するために働いていましたか。働いていませんでした。違いますか。さらに、ヨブは当時、神のことをどの程度認識していましたか。（あまり認識していませんでした。）それでは、ヨブの神についての認識と今のあなたがたの認識と比較すると、どうですか。なぜ答えるのをはばかりのですか。ヨブの認識は今のあなたがたより多かったですか、少なかったですか。（少なかったです。）これは答えるのが簡単な質問です。少なかったのです。それは確かです。現在、あなたがたは神と神の言葉と面と向かっています。あなたがたの方が神については、ヨブよりも遥かによく認識しています。なぜわたしはこのことを取り上げるのですか。わたしがこのようなことを言う目的は何ですか。わたしはあなたがたにある事実を説明したいのですが、その前に質問があります。ヨブは神のことをほとんど知りませんでした。それでも神を恐れ悪を避けることができました。それでは、現在の人にそれができないのはなぜですか。（深く墮落しているからです。）「深く墮落している」のは、問題を起こしている表面的な現象ですが、わたしはそのことを決してそのようには見ません。あなたがたは、「深い墮落」や「神への反逆」「神に対する不誠実」「不従順」「真理を愛していない」など、一般によく言われる教義や字句をしばしば取り上げて、それらの決まり文句を使ってすべての問題の本質を説明しようとしています。これは誤った実践の仕方です。性質が異なる様々な

問題を説明するのに同じ語句を用いるというのは、必然的に真理や神への冒瀆の疑いを生じさせます。わたしは、そのような回答を聞きたくありません。このことをじっくり考えなさい。あなたがたのうち誰もこの問題を考えたことはありませんが、わたしにはそれが毎日見え、感じられます。あなたがたが行動するあいだ、わたしは見ているのです。何かをしているとき、あなたがたにはその本質を感じることはできません。しかし、わたしが見ると、わたしには本質が見え、感じるができます。その本質とは何ですか。なぜ現在の人々は、神を恐れ悪を避けることができないのですか。あなたがたの回答では、この質問の本質を説明することは到底できず、問題の本質を解決することもできません。なぜなら、問題にはあなたがたが知らない根源があるからです。その根源とは何ですか。あなたがたがそれについて聞きたいことはわかっていますので、この問題の根源について話します。

神が働きを開始して以来、神は人間をどのように見なしてきましたか。神は人間を救済しました。つまり、神は人間を神の家族の一員、神の働きの対象、征服し救いたい存在、完全にしたい対象と見なしました。神が働きを始めた当時の神の人間への態度は、このようなものでした。しかし、当時の人間の神への態度はどうでしたか。神は人間にとって疎遠で、人間は神を見知らぬものとみなしました。人間の神に対する態度は正しい成果を得られず、人間は神への接し方を明確に知らなかったとすることができます。そこで、人間は神を自分の好きなように扱い、好きなことを行ないました。人間には神について意見がありましたか。当初は、ありませんでした。人間が意見と呼んでいたものは、単に神に関する観念や思い込みでした。人間は自分の観念に当てはまるものを受け入れ、観念に該当しないものについては、表面上は従ったものの、心の奥では強く反感を抱き、反対しました。これが当初の人間と神の関係でした。つまり、神は人間を家族とみなしましたが、人間は神を見知らぬ存在として扱ったのです。しかし、一定期間にわたる神の働きの後、人間は神が何を実現しようとしているのかを理解するようになり、神が真の神であることを知りました。また、神から何を得ることができるかも、人間にはわかるようになりました。当時、人間は神をどのようにみなしていましたか。人間は神を命綱とみなし、神の恵みと祝福、約束を得ることを願っていました。その頃、神は人間をどのようにみなしていましたか。神は人間を征服対象と見なしていました。神は言葉により人間を裁き、試し、試練を与えることを望みました。しかし、この時点の人間にとっては、神は自分の目標を達成するために利用できるものでした。人間は、神が告知した真理は人間を征服し救えること、そして人間には神から自分が受け取った

いもの、自分が欲する終着点を得る機会があることを知りました。そのため、人間の心には僅かな誠意が生まれ、この神に付き従ってもよいと思うようになりました。しばらくして、神に関する表面的な教義上の知識を得たため、人間は次第に神と、神の語る言葉、神の教え、神が与えた真理、神の業に徐々に「馴染んで」いったと言えます。したがって、神が見知らぬ存在ではなくなり、神と融和するようになる道を人間はすでに歩み始めた、と誤解するようになりました。現在まで、人間は真理に関する説教を数多く聴き、神の働きを数多く体験してきました。しかし、様々な要素や状況による干渉や妨害を受け、大部分の人はうまく真理を実践することも、神を満足させることもできません。人間は益々怠惰になり、自信を喪失しています。自分の結末が不明であるという感覚が強まるのを感じています。人間は敢えて遠大な理念を持つことなく、進歩しようとしません。不本意ながら付き従い、一步ずつ前進するだけです。現在の人間の状態について、神の人間に対する態度はどのようなものですか。神はただそうした真理を人間に与え、人間に神の道を浸透させ、様々な方法で人間を試すために様々な状況を用意したいただけなのです。神の目標は、そうした言葉、真理、業により、人間が神を畏れ悪を避けることができるような結末をもたらすことです。わたしが見てきた大部分の人は、神の言葉を単に教義、字句、従うべき規則とみなしているだけです。言動において、あるいは試練に直面しているとき、このような人は神の道を遵守すべき唯一の道とみなしません。人間が大きな試練に直面したときは、特にそうです。そのようなときに神を畏れ、悪を避ける方向で実践している人をわたしは見たことがありません。そのため、神の人間に対する態度は、激しい嫌悪と反感に満ちているのです。神が人間に繰り返し、時には数百回にわたって試練を与えても、「私は神を畏れ、悪を避けたい」という決意を証明する明らかな姿勢が人間には見られません。人間にはこの決意が欠けており、またそのような意思表示をしないので、神の人間に対する現在の態度は、神が憐れみや寛容、忍耐や我慢を示していた過去の姿勢と同じではありません。むしろ、神は人間に極めて深く落胆しています。こうした落胆の原因となるのは、誰ですか。神の人間への態度を左右するのは誰ですか。それは、神に付き従う一人ひとりの人間です。長年におよぶ働きのなかで、神は人間に数多くのことを要求し、人間のために様々な状況を手配してきました。しかし、人間が何をし、神にどのような態度を取るにせよ、神を畏れ悪を避けるという目標に明白に従って実践できていません。したがって、あるまとめの文章を挙げて、その文章を用いて、これまで話した、なぜ人間は神を畏れ悪を避けるという神の道を歩むことができないのか、ということについてすべて説明します。その文章はどのようなものですか。それは、これです。「神は人間を神の救いの対象、神の働きの対

象とみなす。人間は神を自分の敵、正反対のものとみなす」。今では、これについて明確に理解していますか。人間の態度とは、神の態度とは、人間と神の関係とは何かは、極めて明瞭です。どれほど数多くの説教を聴いたとしても、あなたがたが自分で結論付けたこと、すなわち神に忠実であること、神に従うこと、神と融和する道を求めること、生涯を神のために捧げようとする、神のために生きることなどは、わたしにとっては、意識的に神の道を歩むこと、つまり神を畏れ悪を避けることの具体例ではなく、あなたがたが特定の目的を達成することができる道筋にすぎません。目的を達成するために、あなたがたは不本意ながら規則に従うのです。そして、まさにこのような規則こそが、神を畏れ悪を避ける道から人間を遠く引き離し、神を人類に反対する立場に再び置くのです。

今日の話題は、多少重いですが、どのようなものであれ、今後の経験において、わたしがたった今述べたことをあなたがたが実行できることを願っています。神を空気のように、自分に都合の良いときだけ存在し、それ以外のときは存在しないもののようになしてはなりません。ひとたび意識下にそのような思いを持つと、すでに神を激怒させているのです。おそらく「神を空気とみなしたことはないし、常に神に祈り、神を満足させようとしている。自分の行動はすべて神の要求する範囲、基準、原則に該当する。独自の考えで実践していないのは絶対だ」と言う人がいるかも知れません。確かに、この実践方法は正しいです。しかし、何らかの問題に直面したとき、どう思いますか。問題に直面したら、どのように実行しますか。神に祈り、願い事をしているときには神の存在を感じるけれど、問題に直面するたびに、自分の考えを持ち、それに固執したがる人がいます。これは、神を空気のような存在とみなすことで、こうした状況では神は人の考えでは存在しなくなります。人間は、神は自分が必要なときに存在すべきで、不要なときは存在すべきでないと、自分の考えに従って実践すれば、それで十分であると考えます。自分の好きなように何でもできると考えているのです。神の道を求める必要があるとは、どうしても考えないのです。現在こうした状況になり、こうした状態から出られなくなっている人は、危険を自ら招いているのではありませんか。「危険を自ら招いていようといまいと、自分は長年にわたり信仰を続けてきたし、神に見捨てられることはないと思う。なぜなら、私を見捨てることなど神には耐えられないので」と言う人がいます。また、「自分が母親の胎内にいたときから、通算四十から五十年間、主を信じてきた。時間に関して言えば、神に救われ、生き残る資格が最もある。この四、五十年間に、家族も仕事も捨てた。金銭や地位、楽しみや家族で過ごす時間など、持ってい

たものすべてを捨てた。贅沢な食事をしたこともなく、楽しみに興じたこともない。あちこちおもしろい場所を訪ねたこともない。しかも、普通の人には耐えきれないような苦悩も経験してきた。それでも神が私を救えないとしたら、私は不当に扱われていることになり、そのような神は信じられない」と言う人もいます。このような考え方の人は多くいますか。（はい。）それでは、今日、あなたがたがある事実を理解できるようにしてあげます。こうした考え方の人はみな、自分の首を絞めるようなことをしているのです。なぜなら、想像で自分の目を覆っているからです。まさに人間の想像、人間による勝手な結論が、神が人間に満たすことを要求する基準に取って代わり、神の真の心意を受け入れるのを阻害しています。それにより、人間は神の真の存在を感じられないようになり、神に完全にされる機会を喪失し、神の約束にあずかることも関与することもできなくなるのです。

神が人間の結末を決定する方法とその基準

なんらかの意見をまとめたり結論を出したりする前に、まず神のあなたへの態度と神が何を考えているのかを理解するべきです。その後に自分自身の考えが正しいか否かを判断すればよいのです。誰かの結末を決定するのに、神は時間を評価の単位として用いたり、その人がどれほど苦しんだかに基づいて決めたりしたことはありません。それでは、人間の結末を決めるのに、神は何を基準として用いますか。時間に基づいて決めるというのが、人間の観念に最も合うのでしょうか。また、ある時点で大いに献身し、多くを費やし、多くの代償を払い、多くの苦難を経験した人をあなたがたはよく目にします。あなたがたから見れば、彼らは神に救われることのできる人です。彼らの示すものや生き方のすべては、人間の観念において神が人間の結末を決定するのに用いる基準そのものです。あなたがたが何を信じようと、わたしはこうした例をひとつひとつ挙げません。要するに、神自身の考え方による基準でないものは、人間の想像に由来し、それはすべて人間の観念です。自分自身の観念や想像に盲目的に固執すると、結果はどうなります。その結果、あなたが神に拒まれることは明白です。その理由は、あなたは常に自分の資格を神に誇示し、神と競い、神と論争するばかりで、神の考え方を真に理解しようとせず、神の心意や人類への態度も真に理解しようとしなからずです。このように続けることは、神を尊重せず、自分を何よりも尊重することです。あなたは自分自身を信じ、神を信じていません。神はそのような人間を望まず、そのような人を救うこともありません。もしも、こうした観点を捨てることができ、さらに、過去にもっていた誤った観点を改めることができ、神の要求に従って進むことができたならば、そしてその時

点から神を畏れ悪を避ける道を実践し、神を万物の中で最も大いなるものとして崇め、自分自身や神を定義するのに自分の個人的想像や観点、考えを用いることなく、その代わりに、あらゆる面において神の心意を探求し、神の人類への態度に気づき、理解し、神の基準を満たすことで神を満足させられるならば、それは素晴らしいことです。それは、あなたが神を畏れ悪を避ける道を歩み出したことを意味します。

人間の結末を決定するのに、人間の様々な思いや考え、観点を基準として神が用いないとすれば、どのような基準を用いるのですか。神は試練を使って人間の結末を決定します。試練により人間の結末を決定するのに、基準は二つあります。第一の基準は人間が経験する試練の数であり、第二はその試練により人間に現れる成果です。これら二基準が、人間の結末を決める指標です。では、この二基準を詳しく述べましょう。

まず、人が神からの試練に直面するとき（注：あなたから見れば、この試練は小さく、述べる価値もないかもしれません）、神はその人に、神の手がその人に置かれていること、その状況をその人のために手配したのが神であることを、明白に認識させます。あなたの霊的背丈がまだ未熟なら、神はあなたを試すために試練を手配し、その試練はあなたの背丈に応じたもので、あなたが理解でき、耐えられるものです。あなたのどの部分が試されますか。それは、神へのあなたの態度です。この姿勢はとても重要です。当然ながら重要です。極めて重要です。この人間の態度が神の望む成果ですから、神に関する限り、最も重要なものです。さもないと、神がこのような働きのために人間に努力を費やさないでしょう。試練により、神に対するあなたの態度を神は見たいのです。あなたが正しい道を歩んでいるか否か、あなたが神を畏れ悪を避けているか否かを見たいのです。したがって、ある時点に真理をどれほど理解していようと、あなたはそれでも神の試練に直面し、あなたの真理への理解が増えるのに合わせて、神はあなたのために引き続き試練を手配します。あなたが再び試練に直面したとき、神はあなたの観点や考え、神に対する態度が前回から成長したかを見たいのです。「なぜ神は常に人間の態度を見たいのか。人間が真理をどのように実践するかを、神はすでに見たのではないのか。それでもなお、神はなぜ人間の態度を見たいのか」と思う人がいます。これは無思慮な戯言です。神がこのように働くということは、そこには神の心意があるのです。神は常に人間をそばから観察し、人間の言動のひとつひとつ、一挙手一投足を見ています。人間の思いや考えさえもすべて見ています。人間の善行や誤り、過ち、そして反逆や裏切りさえも、人間に起こるあらゆることに注目し、人間の結末を決めるための証拠とします。一歩ずつ、神の働きが高まるにつれ、あなたはさらに多くの真理を聞き、

肯定的なものや情報をさらに受け入れ、真理の現実性をさらに得ます。この過程において、神の人間に対する要求もまた増加しますが、それと同時に、神はあなたのためにさらに深刻な試練を手配します。神の目的は、あなたの神への態度がその間に進歩したかどうかを調べることです。もちろん、これが起こるとき、神があなたに要求する観点は、あなたの真理の現実性の理解に符合します。

あなたの霊的背丈が徐々に伸びるにつれ、神があなたに要求する基準も高くなります。あなたが未熟なうちは、神はあなたにとっても低い基準を満たすように設定し、背丈が少し伸びると、神は基準を少し高くします。では、あなたがあらゆる真理を理解したとき、神はどうするでしょうか。神はあなたをさらに大きな試練に直面させます。これらの試練で神があなたから得たいもの、あなたにおいて見たいものは、あなたの神についての認識が深化していることと、神への真の畏れです。このとき、神のあなたに対する要求は、背丈が未熟だった頃よりも高く、「厳しく」なります（注：人間はそれを厳しいと捉えますが、神はそれを妥当とみなします）。人間を試しているとき、神はどのような現実を造りたいのですか。神は人間が心を神に捧げることを常に求めています。「どのようにして心を捧げるのか。わたしは本分を尽くした。家も生活も捨て、神のため費やしている。これはどれも心を神に与えたことの具体例ではないか。ほかに、どのようにして心を神に捧げられるのか。そうしたことは実は心を神に捧げることはなかったというのか。神の具体的な要求とは何なのか」と言う人がいます。その要求はいたって簡潔です。事実、試練の様々な段階において、程度は違えど、すでに神に心を捧げた人がいます。しかし、大部分の人は決して神に心を捧げません。神があなたを試すとき、神はあなたの心が神と共にあるか、肉と共にあるか、サタンと共にあるかを見ています。神があなたに試練を与えると、神はあなたが神に敵対しているか否か、神と融和しているか否か、あなたの心が神と同じ側にあるか否かを見ています。あなたが未熟で試練を受けるとき、あなたは自信がなく、神の心意を満足させるために何をするべきであるかが正確に把握できません。あなたの真理の認識が不十分だからです。それでもなお、心から誠実に神に祈り、率先して神に心を渡し、神をあなたの主とし、最も貴重だと思ふものをすべて神に捧げることができれば、あなたはすでに心を神に捧げています。あなたが一層多くの説教を聴き、真理をさらに理解するようになるにつれて、あなたの霊的背丈は次第に伸びます。このとき、神の要求する基準は、あなたが未熟だったときとは異なり、神はそれよりも高い基準をあなたに要求します。人間の心が神に次第に捧げられるについて、その心は次第に神へと近づいていきます。人間が真に神のもとへ

近づくにつれて、人間の心はさらに神を畏れます。神が欲しいのは、このような心です。

誰かの心を手に入れたいとき、神はその人に無数の試練を経験させます。試練の最中に、神がこの人の心を手に入れず、その人が何らかの態度があることを確認できない、すなわち、その人が神への畏れを示すように実践し、ふるまうのを見ることがなく、またその人に悪を避ける態度や決意を見なかったならば、幾つもの試練の後、神のこの人への忍耐はなくなり、その人をこれ以上容赦しなくなります。神はその人をこれ以上試すことはなくなり、その人に働きを行ないません。では、それはこの人の結末について何を意味しますか。その人には結末がないことを意味します。この人は悪業を働いたことがないかもしれません。破壊的なことをしたり何かを妨害したりしたことがないかもしれません。公然と神に反抗したこともないかもしれません。しかし、この人の心は神から隠されたままです。神に対して明確な態度や観点を持ったことがなく、その人の心が神に捧げられたことや、その人が神を畏れ悪を避けるようとしていることが神に明確に見えません。神はこのような人への忍耐を失くし、その人のために代償を払わなくなり、その人に余計に憐れみをかけることがなくなり、その人に働かなくなります。このような人の神への信仰生活はすでに終わっています。なぜなら、神がその人に与えた数々の試練から神は望み通りの結果を得なかったからです。このように、聖霊に啓かれ、照らされていることがわたしには確認できなかった人が多数います。どうすればそれが確認できるのですか。このような人は長年にわたって神を信仰してきており、表面的には活発であったかもしれません。多くの書物を読み、多くの事柄に対処し、十冊以上のノートに書き込み、大量の字句や教義を習得してきたかもしれません。しかし、その人にはまったく成長が見られず、神への観点も態度も不明瞭なままです。つまり、心が見えないのです。心は常に包み隠され、封じ込められています。神に対して閉じられているのです。そのため、神はその人の真の心を見たことがなく、その人における神への真の畏れ、さらには、その人がどのように神の道を歩むかも見たことがありません。神がそうした人を今までに得られなかったとしたら、将来に得られますか。得られません。神は得られないものを得ようとひたすら努力しますか。しません。それでは、そうした人に神は現在どのような態度を取っていますか。（神様はその人を拒絶し、無視なさいます。）神はその人を無視します。神はそのような人を気に留めず、拒絶します。あなたがたはこの言葉を迅速かつ正確に記憶しました。聞いたことを理解したようです。

神に付き従い始めたときに未熟で無知であり、神の心意を理解しておらず、神を信仰

するということが何かを知らない人がいます。このような人は、神を信仰し神に付き従う方法として、人間が考案した誤った方法を採用します。試練に遭遇しても、それに気付かず、神による導きと啓きに鈍感なままです。自分の心を神に捧げることや、試練にしっかり耐えるということが何を意味するのかを知りません。神はこのような人に限られた時間を与え、そのあいだに、神の試練とは何か、また神の意図は何かを理解させます。その後、その人は自分の考え方を表明しなければなりません。この段階にある人を、神は待っているのです。では、何らかの観点をもちながらいまだにためらい、神に心を捧げたいが十分納得していないためにそうすることができず、基本的な真理を実践してきたものの、大きな試練に遭遇すると、隠れて諦めようとする人について、神の態度はどのようなものですか。神は、このような人に依然として一抹の期待をかけていて、結果はその人の態度と行動に左右されます。もし人が精力的に進歩していなければ、神はどうしますか。神はその人のことを諦めます。なぜなら、神がその人を諦める前に、すでにその人が自分のことを諦めているからです。したがって、神がこうすることを咎めることはできません。これは公平ではありませんか。（公平です。）

ある実質的な質問が人に様々な困惑をきたす

最も悲慘な結末を迎える別の種類の人があります。こういう人について話をするのは、わたしは一番気が進みません。この種の人悲慘なのは、神の罰を受けているからでも、神のその人への要求が過酷で、それゆえ悲慘な結末を迎えるからでもあります。むしろ、悲慘なのは、自業自得だからです、いわゆる、自分の墓穴を掘っているのです。これはどのような種類の人ですか。このような人は正しい道を歩まず、その結末は事前に明示されています。神にとっては、彼らは嫌悪の最大の対象です。人間としては、彼らは最も悲慘です。彼らが神に付き従い始めたときは、極めて熱心で、多くの代償を払い、神の働きの見通しについて好ましい意見を持ち、自分の将来については想像に満ちあふれています。また、ことさらに神について確信し、神は人間を完全にして、栄光の終着点を人間にもたらしことができると信じています。しかし、どういう訳か、彼らは神の働きの最中に逃げ出してしまうのです。ここでの「逃げ出す」とはどういう意味ですか。それは、その人が別れの挨拶もせず、音もたてずに消え失せてしまうことです。一言も言わずに立ち去るのです。彼らは自分が神を信仰しているとは言いますが、信仰の道に根を張ることはありません。したがって、何年間信仰してきたとしても、神から離れていくことができてしまいます。事業を始めるために去る人もいれば、自分の人生を送るために去る人や、富を得るために去る人、結婚して子をもうけるために去る人も

います……。こうした去った人の中には、後に良心の呵責にさいなまれて戻りたいと思う人や、上手くいかずに世の中を何年も流浪する人がいます。流浪者は多くの苦難を経験し、この世に存在することは耐えがたい苦痛であり、神から離れられないと考えます。流浪者は神の家に戻って安らぎと平和、喜びを得たいと、災いを避けるため、または救いと美しい終着点を得るために、神を信仰し続けたいと願います。なぜなら、彼らは神の愛が無制限であり、神の恵みは尽きることがないものだと考えているからです。誰かが何をしようとも、神はその人を赦し、その過去について寛容であるはずだと考えています。彼らは、戻って本分を尽くしたいと何度も言います。そうすることで神の家に戻れば、と願って、自分の所持品の一部を教会に渡す人もいます。彼らに神はどのような態度を取りますか。神は彼らの結末をどのように決めるべきですか。自由に発言しなさい。（神様はそのような人でも受け入れられると考えていましたが、今の話を聞いて、神様はそうはなさらないかもしれないと思います。）その理由は何ですか。（そのような人は、死が結末にならないように神様の前に行きます。心からの誠意で信じるようになるわけではありません。神様の働きが間もなく終わることを知っているのです、神様の前に出て祝福を受けられるという妄想を抱いています。）彼らは神を誠実に信仰していないので、神は彼らを受け入れることができない、と言っているのですか。（はい。）（わたしの理解では、そういうのはただの日和見主義者であり、真に神様を信じていません。）彼らは神を信仰するために来たのではなく、日和見主義者である。よい発言です。このような日和見主義者は誰もが嫌う種類の人間です。日和見主義者は風が吹くならどの方向にでも行く船であり、見返りがなければ何もしようとしません。当然、見下すべき者です。他の兄弟姉妹も意見がありますか。（神様はそうした人をお受け入れにはなりません。なぜなら、神様の働きは終わろうとしており、人の結末が決定されるのは今だからです。こういう時こそ、そういう人は戻ってきたいのです。実際に真理を追求したいからではなく、災いが降るのを見たから、あるいは外的要因に影響されたからです。彼らに真理を追い求めるつもりが本当にあったら、神様の働きの途中で逃げ出したりしなかったはずですよ。）他に意見はありますか。（彼らは受け入れられません。神様は実際に彼らに機会を与えられましたが、彼らは神様に不注意な態度を取り続けました。彼らの意図が何であれ、また本当に悔い改めたとしても、神様はやはり彼らが戻るのをお許しになりません。なぜなら、神様は彼らに多くの機会を与えられたにもかかわらず、彼らはすでに自分の態度を表明しているからです。つまり、神様のもとを去りたかったのです。したがって、彼らが今になって戻ってきても、神様はお受け入れになりません。）（私も神様はそうした人をお受け入れにしないと思います。なぜなら、

人が真の道を見、長期間にわたって神様の働きを経験してなお、俗世界とサタンの懷に戻れるならば、それは神様に対する大いなる裏切りです。神様の本質は憐れみと愛であるものの、そのような本質がどのような人に向けられているかによります。安らぎと望みをかけられる何かを求めて神様の前に来た人であれば、神を誠実に信仰しておらず、その人への神様の憐れみも、それに相応するものとなります。) 神の本質が憐れみであるのなら、なぜ神はそのような人に少し憐れみを与えないのですか。少し憐れみが与えられれば、その人は機会を得ることになりませんか。以前は、神はあらゆる人を救うことを望み、誰ひとりとして永遠に滅ぶことを望まない、と言われていました。百匹の羊のうち、一匹が迷えば、神は九十九匹の羊を残し、迷った羊を捜しに出かける、と。現在、こうした人について、その真の信仰のために、神はその人を受け入れ、もう一度機会を与えるべきですか。これは実は難しい問題ではなく、極めて簡単です。あなたがたが神を真に理解し、神に関する真の認識があるならば、大した説明も、推量も不要です。あなたがたの答えは正しい軌道にあります、やはり神の姿勢には達していません。

たった今、あなたがたのなかに、神はそうした人を受け入れるはずがないという確信を表明した人がいました。その他の人はそれほど確信がなく、神は受け入れるかもしれないし、受け入れないかもしれないと考えています。この態度は比較的中庸です。また、神が彼らを受け入れることを願う、という観点の人もありました。この姿勢は曖昧です。自分の考えに確信のある人は、神は現在まで長く働いてきて、その働きは完了したので、神はそうした人に対して寛容である必要がなくなったので、彼らは戻ることを許されない、と考えています。中庸な考えの人は、一人ひとりの状況にしたがって対処すべきであると考えています。彼らの心が神から離すことができず、彼らがいまだ神を真に信仰し、真理を追い求めているならば、神は彼らの過去の弱さ、過ちを忘れ、彼らを赦し、もう一度機会を与え、神の家に帰り、神の救いを受けることを許可するはずだと考えています。しかし、彼らが後に再び逃げ去るならば、神は彼らをもはや欲せず、彼らを捨てても、それは不正とはみなせない、と考えています。それ以外に、神が彼らを受け入れることを願う人たちもいます。この人たちは、神が実際にどうするのかはよく知りません。もしこの人たちが神は彼らを受け入れるべきであると考え、神が実際にそうしなければ、この意見は神の観点に完全に準拠していないことになります。また、この人たちが神が彼らを受け入れるべきでないと考えるのに、神が人間への神の愛は無限であり、彼らにもう一度機会を与えてもよいと言ったとしたら、それは人間の無知が白日の下に晒されたことになりませんか。いずれにせよ、あなたがたには、それぞれ自分の

意見があります。そうした意見はあなたがたの思想内にある認識であり、真理や神の心意をあなたがたがどれほど深く理解しているかの反映でもあります。このように言うのが正しいです。違いますか。この件についてあなたがたが意見を持っているのは、素晴らしいことです。しかし、あなたがたの意見が正しいか否かという疑問が残ります。あなたがたはみな、多少心配しています。違いますか。「それでは何が正しいのか。よくわからないし、神が何を考えているのか正確にはわからない。神は私に何も言ってくれない。どうすれば神が何を考えているのか知ることができるのか。人間に対する神の態度は愛だ。今までの神の態度によれば、神はこのような人を受け入れるに違いない。しかし、現在の神の態度についてはよくわからない。神はその人を受け入れるかもしれないし、受け入れないかもしれない、としか言えない」。これは笑えます。違いますか。あなたがたは、この問題のせいで本当に困惑しています。この問題について適切な意見がなければ、教会がこのような人と実際に直面したら、どうするのですか。この状況を適切に対処しなければ、神の怒りを買うかもしれません。これは危険なことではないですか。

わたしがたった今話したことについて、わたしがあなたがたの意見を聞きたかったのはなぜですか。わたしはあなたがたの観点を試し、あなたがたの神についての認識がどれほどのもので、神の心意や態度をどれほど理解しているかを試したかったのです。その答えは何と出たでしょうか。答えは、あなたがたの観点そのものです。あなたがたの中には、とても保守的な人も、想像で推測している人もいます。「推測」とは、何ですか。それは、神がどう考えるかを識別することができないので、神が何を考えているかについて根拠のないことを思いつくことです。自分の推測が正しいか誤りかを実際には知らないで、曖昧な意見を述べるのです。この事実から、何がわかりますか。神に付き従うとき、人間はめったに神の心意や、神の思いや神の人間に対する態度に留意しないということです。人間は神の思いを理解していないので、神の意図や性質について質問をされると、混乱します。深い不信に陥り、推測したり予想したりするのです。これはどういう姿勢ですか。それは、神を信仰する大部分の人は、神を中身のない空気のようなもの、ある瞬間には存在しているが、次の瞬間には存在していないようなものとみなしているという事実を証明しています。なぜわたしはこのように表現するのですか。それは、問題に遭遇するたびに、あなたがたは神の心意を知らないからです。なぜ神の心意を知らないのです。現在知らないだけでなく、最初から最後まで、この問題に対する神の態度を知りません。神の姿勢が見えず、わからないのですが、それについてしっ

かり考えたことがあるのですか。知ろうとしたことがあるのですか。それについて話し合ったことがあるのですか。ありません。これにより、あなたが信仰する神と、現実の神とは無関係であるという事実が裏付けられます。神への信仰において、あなたがたは自分や自分の主導者の意図しか考えず、神の言葉の表面的かつ教義的な意味しか考えず、神の心を真剣に知ろうとしたり、求めたりすることはありません。これが現状ではありませんか。この問題の本質はかなり酷いです。長年にわたり、わたしは神を信じる大勢の人と会ってきました。彼らはその信仰ゆえに、頭の中で神をどのように変えてしまいましたか。神を中身のない空気のような存在として信仰する人がいます。彼らは、神の存在に関する疑問に答えられません。なぜなら、神の存在も不在も感じることも意識することもできず、ましてやはっきりと見ることも理解することもできないからです。意識下では、神は存在しないと考えているのです。一方で、神が人間であるかのように、神を信仰する人もいます。彼らは、自分たちにできないことは神にもできず、神は自分たちと同様に考えているに違いない、と信じています。彼らによる神の定義は「目に見えず、触れることのできない人」です。操り人形であるかのように神を信仰する人もいます。彼らは、神には感情がなく、神は粘土の彫像であり、問題に直面しても、神にはどのような態度も、観点も思想もなく、人間の思うままであると信じています。人間は単に自分の好き勝手に信仰しているだけです。人が神を偉大にすれば、神は偉大であり、小さくすれば、神は小さくなります。人間が罪を犯して神の憐れみや寛容、愛が必要なとき、神は慈しみを与えなくてはなりません。人は自分の頭の中に「神」を作り、その神に自分の要求や願望をすべて満たさせます。時や場所、人が何をしているかを問わず、自分の妄想を、神の扱いや神への信仰にあてはめます。自分で神の性質を侵害しておきながらも、神は自分を救うことができるとそれでも信じている人さえいます。その人が、神の愛は無限であり、神の性質が義であり、人間がどれほど神の怒りを買ったとしても、神はそれを一切覚えていないと思い込んでいるからです。人間の欠点や過ち、不従順は、人の性質の一時的な表面化で、神は人に機会を与え、寛容で辛抱強いと信じているのです。神は今まで同様、人を愛すると信じています。したがって、救いへの希望は大いにもっています。事実、人が神をどのように信じようと、真理を追い求めている限り、神はその人に否定的態度を取ります。それは、神への信仰において、神の言葉が記された本を手に取り、それを宝とみなし、毎日読んで勉強しても、真の神を無視しているからです。神をただの空気や普通の人間とみなし、人によっては操り人形のようにみなしているからです。なぜわたしはこのように表現するのですか。それは、わたしの見る限り、あなたがたが問題に遭遇しようと、難しい状況に直面しようと、あな

たがたの意識下にあり、内部に形成されるものは、神の言葉や真理の追求と一切関係がないからです。あなたが知っているのは、自分が何を考えているか、自分の観点は何かであり、自分の考えや観点を神に強制しているのです。人の考えでは、それが神の観点となり、そうした観点を自分が絶対に守る基準とするのです。このまま行くと、時間と共に、あなたは神からどんどん遠ざかって行きます。

神の態度を理解し、神に関する誤解をすべて取り除け

あなたがたが現在信仰している神は、どのような神ですか。このことを考えたことがありますか。神が邪悪な人が邪悪なことをしているのを見ると、神はそれを嫌悪しますか。（はい。嫌悪されます。）無知な人が過ちを犯すのを見たときの神の態度はどのようなものですか。（悲しみです。）人が神への捧げ物を盗むのを見たときの神の態度はどうですか。（その人を嫌悪されます。）これはみな、とても明白です。そうですね。神への信仰において混乱していて、真理をまったく追求していない人を見たときの神の態度はどうですか。これについては明確ではないのではありませんか。態度としての「混乱」は罪ではなく、また神の怒りを買うものでもありません。人間はそれが重大な過失ではないと考えています。それでは、この場合の神の態度はどのようなものですか。

（神様はそのような人の存在を認めるのを不本意とされます。）「存在を認めるのを不本意とする」とは、どのような態度ですか。それは、神はそうした人を見下し、さげすむということです。神はそうした人を冷遇します。神のやり方は、こうした人を放置し、その人には働きを行なわないことです。それには啓き照らす働き、懲らしめ、鍛錬の働きも含まれています。この種の人、神の働きからすっかり除外されています。神の性質の怒りに触れ、神の行政命令を破る人に対し、神はどのような姿勢を取りますか。極度の嫌悪です。神の性質の怒りに触れたことを悔い改めない人に、神は極度に怒ります。「怒り」は単なる感情や気分でしかないのが、明白な態度に符合しません。しかし、この感情、この気分はその人にある結末をもたらします。それは神を極度の嫌悪で満たします。この極度の嫌悪の結末とは何ですか。それは、神はそのような人を脇に置いて、しばらくは応じなくなるということです。神は秋の収穫期の後にそのような人の処分をするのを待つのです。これは何を暗示しますか。その人にはまだ結末がありますか。神は、そのような人に結末を与えようとしたことはありません。したがって、現在、神がそのような人に応じないのは完全に普通のことではありませんか。（はい。普通のことです。）このような人は何をやる準備をしているべきですか。自分のふるまいと邪悪な行ないの好ましくない成り行きを受ける準備をしなければなりません。それが、こ

うした人への神の応対です。そうしたわけで、わたしはそのような人にはっきりと言います。妄想にこれ以上しがみつかず、希望的観測をこれ以上続けてはなりません。神は人間に無限に寛容ではなく、また人間の過ちや不服従を永遠に堪え忍ぶことはありません。「そのような人を二、三人見た。彼らは祈るとき、ことさらに神に感激し、大いに涙を流す。彼らは通常とても幸せで、神がそばにいて導かれているように見える」と言う人がいます。このような戯言を言っではなりません。大いに涙を流すのは、必ずしも神に感激することでも、神の臨在や、ましてや神の導きを受けることでもありません。もし人が神を怒らせれば、それでも神は人を導きますか。要するに、神が誰かを排除し、見捨てると決定すれば、その人にはすでに結末がありません。その人が祈るときにどれほど好ましい感情があろうと、心にどれほど神への信仰があろうと、それはもはや無関係です。重要なのは、神にはそのような信仰は無用だということです。神はすでにその人を拒絶しています。その人を将来どのように取り扱うかも、重要ではありません。重要なのは、この人が神の怒りを買ったその瞬間に、その人の結末が決定された、ということです。神がこの人を救わないと決定すれば、その人は置き去りにされ、罰せられます。これが神の態度です。

愛は神の本質の一部であり、また神はあらゆる人間に憐れみをかけますが、神の本質が威厳でもあることを人間は軽視し、忘れてしまいました。神に愛があることは、人が神に触犯しても神になんらかの感情や反応を起こさせることがない、ということではありません。神に憐れみがあることは、神による人間の取り扱いに原則がない、ということではありません。神は生きており、現実中存在します。神は想像上の操り人形でも、他の物体でもありません。神が存在するのですから、人間は神の心の声を常に注意して聴き、神の態度に注意し、神の感情を理解しなければなりません。人間自身の想像により神を定義したり、人間が神に関して思うことや望むことを神に強制したり、神に人間の想像に基づく人間的な流儀で人間を取り扱わせたりしてはなりません。そのようなことをするのは、神の怒りを買ひ、神の怒りを試し、神の尊厳を挑発しているのです。したがって、あなたがたがこの問題の深刻さをひとたび理解したなら、一人ひとりが自分の行動に注意し、用心することを強く勧めます。自分の発言にも注意し、用心しなさい。神をどのように扱うかについて、注意し、用心すればするほど良いのです。神の態度がどういうものかがわからないときは、不注意に発言したり、行動したりせず、また軽々しくレッテルを貼ってはなりません。さらに重要なこととして、みだりに結論を出さずに、待ち、求めなくてはなりません。これらもまた、神を恐れ悪を避けることを表

しています。そして何よりも、これを成し遂げ、こうした姿勢を取ることができれば、神はあなたの愚かさ、無知、このようにする理由を理解していないことを咎めることはありません。むしろ、あなたの神の怒りを買うことを恐れる態度、神の心意への敬意、喜んで神に服従しようとする意志ゆえに、神はあなたに留意し、あなたを導き、啓き、あなたの未熟さと無知に寛容になります。それに対し、あなたの神に対する態度に畏れがなく、すなわち好き勝手に神を裁いたり、神の考えを推測したり定義したりした場合、神はあなたを断罪し、鍛錬し、懲罰さえも与えます。あるいはあなたに解説するかもしれない。おそらく、そこには、あなたの結末が含まれています。したがって、今一度強調したいのです。あなたがたは一人ひとりが神に由来することすべてについて、注意し、用心しなさい。不注意な言動をしてはいけません。発言する前に、止まって考えなさい。この行動は神の怒りを買うだろうか、これをする、神を畏れていることになるだろうか、と考えなさい。たとえ単純な事柄でも、このように自問し、時間をかけて考慮しなさい。あらゆることのあらゆる面において常にこのような原則に沿って本当に実践し、特に何か理解していないときにこのような態度を取れば、神は常にあなたを導き、進むべき道を示します。人間がどのように見せかけようと、神はそれらを明確にそのまま見通し、表現されたものを正確かつ適切に評価します。あなたが最後の試練を経験した後、神はあなたのふるまいのすべてを完全に検討、概括し、あなたの結末を決定します。この結果は、あらゆる人にとって何の疑いもなく納得できるものになります。わたしが述べたいのは、あなたがたのあらゆる行動、あらゆる所作、あらゆる考えが、あなたがたの運命を決める、ということです。

人間の結末を決定するのは誰か

話し合うべき最重要の問題がもう一つあります。それは、あなたがたの神への態度です。この態度は極めて重要です。これにより、あなたがたが最終的に滅びへ向かうか、神があなたがたのために用意した美しい終着点へ向かうかが決定します。神の国の時代において、神はすでに二十年以上にわたり働き、この二十年間において、おそらくあなたがたは自分がどのようにやってきたかについて、心の奥で少し不確かを感じているはずです。一方、神は心の中で、あなたがた各人について現実的で真実に満ちた記録を取ってきました。各人が神に付き従い、神の説教を聴き始めてから、徐々に少しずつ真理を理解するようになり、自らの本分を果たすようになるまで、神は各人のあらゆるふるまいを記録してきました。自分の本分を尽くしているとき、あるいは様々な状況や試練に直面しているとき、人の態度はどのようなものですか。どう行動しますか。心の中で

、神に対してどう感じますか。……神は、そうしたことをすべてを記録しています。あなたがたの立場から見ると、これらの問題は混乱を生じるかもしれません。しかし、神の立場からは、すべて明瞭であり、いいかげんな部分は少しもありません。これは、各人の結末や運命、将来の見通しが関係する問題であり、さらに、これは神が骨の折れる努力のすべてを注ぐ問題です。したがって、神は少しも怠ることはなく、ほんの僅かな不注意も許しません。神はこの人類の調書を記録し、人間の神に従う全過程を最初から終わりまで記録しています。この期間における神への態度により、人の運命が決定されています。そうではありませんか。現在、あなたがたは神が義であると信じていますか。神の業は適切ですか。あなたがたは今でも神について頭の中で想像していますか。（していません。）それでは、人間の結末は神が決めるものだと思いますか。それとも人間が自分自身で決めるのですか。（神様がお決めになります。）誰が決めますか。（神様です。）あなたがたは確信していないのですか。香港の兄弟姉妹、発言しなさい。誰が決めますか。（人間自身が決めます。）人間が自分自身で決めるのですか。それでは、人間の結末は神と無関係ということになりませんか。韓国の兄弟姉妹、発言しなさい。（人間の結末は、人間の行動や所作のすべて、人間のいる道に基づいて神様がお決めになります。）それは非常に客観的な答えです。ここで、あなたがた全員に伝えなければならない事実が一つあります。神の救いの働きの過程において、神は人間に基準を設定しました。それは、人間は神の言葉に従い、神の道を歩まなければならないというものです。人間の結末を計るにはこの基準が使われます。この神の基準に従って実践すると、良い結末が得られ、そうしないと、良い結末は得られません。それでは、この結末を決めるのは誰ですか。神が単独で決めるのではなく、神と人間が共に決めます。これで正しいですか。（はい。）それはなぜですか。それは、人類の救済の働きにかかわり、美しい終着点を人類のために用意したいと積極的に希望しているのは神であり、人間は神の働きの対象であり、その結末、終着点は神が人間のために用意するものだからです。神が働く対象が存在しなかったならば、神はこの働きを行う必要がありません。神がこの働きを行わなかったならば、人間には救いを得る機会がありません。救われるのは人間です。救われるのはその過程における受動的役割ですが、この役割を果たす人の態度が、神が人類を救う働きにおいて成功するか否かを決定します。神があなたに与える導きがなければ、あなたは神の基準を知ることがなく、目標を持つこともありません。あなたにこの基準と目的があるのに、協力せず、実践せず、代償を払わないならば、やはり結末を得られません。これが、人の結末が神と不可分であり、人とも不可分であるとわたしが言う理由です。これで、あなたがたは人間の結末は誰が決めるかを知ってい

ます。

人間には経験に基づいて神を定義する傾向がある

神を知ることについて話しているとき、何かに気づきましたか。現在における神の態度が変化したことに気づきましたか。神の人間への態度は変化しないものですか。神は常にそのように耐え、神の愛と憐れみのすべてを無制限に人間に与えますか。この問題もまた神の本質に関係しています。先ほど話した、いわゆる放蕩息子の質問をもう一度検討しましょう。質問をした後のあなたがたの回答はあまり明確ではありませんでした。つまり、あなたがたは神の意図についてあまりしっかりと理解していないということです。神が人類を愛していると知ると、人間は神を愛の象徴として定義します。人間の行動、ふるまい、神の扱いがどうであろうと、人間がどれほど不従順であろうと、神には愛があり、神の愛は無限で計り知れないので、そうしたことは問題にならないと人間は考えます。神には愛があるので、人間に対して寛容でいられ、神には愛があるので、人に対して、人の未熟さに、無知に、不従順に対して憐れみ深くあることができる、と考えます。本当にその通りですか。一部の人々は、神の寛容を一回あるいは二、三回経験すると、神に関する独自の認識においてその経験を重要視し、神は永遠に忍耐強く憐れみ深いと考え、その寛容が神が人間を取り扱う基準であると生涯を通して考えます。また、神の寛容をひとたび経験すると、神は寛容であり、その寛容さは無限で無条件でありしかも無原則であると恒久的に定義する人もいます。こうした考えは正しいですか。神の本質や神の性質に関する事項を話し合うと、あなたがたは毎回当惑しているようです。そのような様子を見ると、わたしはとても不安になります。あなたがたは神の本質について多くの真理を聞き、神の性質に関しても多くの話を聞いてきました。しかし、あなたがたの思考では、こうした諸問題や、それらの側面に関する真理は、理論と文字に基づく記憶でしかありません。あなたがたのうち、神の性質をそのまま日常生活で体験したり、見たりできる人は誰もいません。あなたがたはみな、信仰において思考が混乱し、盲目に信仰しており、神を畏れぬ態度を取り、神を払いのけるまでになりました。神へのこのような態度は、どのような結果につながりますか。神について常に結論付けるようになります。ひとたび多少の知識を得ると、神のすべてを得たかのように満足した気分になります。その後は、神はそのような存在であると決めつけ、神が自由に動けないようにします。さらに、神が何か新しいことをするたびに、それが神であることを決して認めません。やがて、神が「わたしはもはや人類を愛していない。今後人間にはこれ以上憐れみをかけない。人間にはこれ以上寛容も忍耐もない。わたしは人間に

対する極度の嫌悪と反感に満たされている」と言うのと、このような言葉は人間の心の奥に葛藤を生じさせます。このように言う人さえいます。「あなたはもはや私の神ではなく、私が付き従いたい神ではない。そのようなことを言うのであれば、私の神でいる資格はなく、私はあなたに付き従う必要はない。憐れみや愛、寛容をくれないのなら、あなたに付き従うのをやめる。私に対して制限なく寛容で、いつも忍耐深く、あなたが愛であり、寛容であり、忍耐であることを私に見せてくれるなら、私はあなたに付き従うことができ、その場合のみ、あなたに最後まで付き従う自信がある。あなたの寛容と憐れみを与えられているので、私の不従順や過ちは無制限に赦され、見逃され、私はいつでもどこでも罪を犯し、いつでもどこでも罪を告白して赦され、いつでもどこでもあなたを怒らせることができる。あなたは私について意見をもったり結論に達したりしてはならない」。このような問題について、そこまで主観的かつ意識的に考える人は一人もいないかもしれませんが、神を罪を赦してもらうための道具や、美しい終着点を得るための対象物とみなすたびに、あなたはいつのまにか生きる神をあなたに対抗する敵にしています。これがわたしに見えることです。あなたは引き続き、「私は神を信じる」「私は真理を追い求める」「性質を変えたい」「闇の影響から解放されたい」「神を満足させたい」「神に服従したい」「神に忠実であり、本分をしっかりと尽くしたい」などと言うかもしれませんが、しかし、あなたの言葉がどれほど甘美に聞こえたとしても、あなたがどれほど理論に通じていたとしても、その理論がどれほど堂々として威厳があったとしても、実際には、自分が身に付けた規則、教義、理論を使って神に関する結論を導き出す方法をすでに身につけ、それにより自然に神を自分に反対させてしまっている人が多くいるのです。字句や教義を身に付けていたとしても、そのような人は本当に真理の現実性に入っていないので、神に近付き、神を知り、認識することが極めて困難なのです。これはあまりに哀れです。

わたしはビデオで、ある場面を見ました。数名の姉妹が『言葉は肉において現れる』の書籍を高く掲げています。書籍を自分たちの中央に、頭よりも高く掲げています。これは単なる映像でしたが、その映像がわたしの中に喚起したのは、映像ではなく、わたしが考えたことは、人が心の中で高く掲げているのは神の言葉ではなく、神の言葉が記された書籍だということです。それは極めて悲しいことです。そのような行為は、神を高く掲げることと全然違います。あなたがたが神を理解していないあまり、極めて明瞭な些細な質問にさえも、自分の観念で答えるからです。わたしがあなたがたに何かを質問し、わたしは真剣なのに、あなたがたは自分の予想や想像で答え、疑念のある口調で

質問に質問で答える人さえいます。これにより、あなたがたが信じる神が真の神ではないことが一層はっきりとします。神の言葉を長年にわたり読んできて、あなたがたは神の言葉、神の働き、そしてさらに多くの教義を用いて、再び神に関する結論を導き出します。さらに、あなたがたは神を理解しようとしたことはありません。神の心意を理解しようとしたことも、神の人間への態度や、神がどのように考えるか、なぜ神は悲しいのか、なぜ神は怒るのか、なぜ神は人間を拒絶するのかなどの疑問を理解しようとしたことはありません。また、もっと多くの人、神は人類のさまざまな行動を観察していて、それらについていかなる態度も意見もないので、神は常に沈黙していると信じています。それとは別の種類の人、神は音もたてず黙認しているので何も発言しないと信じています。それは、神は待っているから、あるいは態度がないからだと考えています。こういう人は、神の態度はすでに書物で完全に説明され、全体にわたって人類に示されているので、何度も繰り返し人間に伝えられる必要はないと信じているのです。神は黙しているものの、依然として神には態度があり、観点があり、人間が満たすことを要求する基準を持っています。人間は神を理解し、神を求めようとしないものの、神の態度は極めて明瞭です。かつて熱狂的に神に付き従っていたのに、ある時点で神を捨てて去って行った人を考えてみなさい。今その人が戻りたいと仮定すると、驚いたことに、あなたがたには神がどのような見方をするのか、どのような態度を取るのかがわかりません。これは極めて悲しいことではありませんか。実際には、これは極めて表面的なことです。あなたがたが神の心を真に理解していれば、そのような人への神の態度がわかり、曖昧な回答をすることはありません。あなたがたは知らないのです、わたしがあなたがたに教えてあげます。

神の働きの最中に逃げ出す人に対する神の態度

いたる所で見受けられる、ある種の人があります。神の道について確信した後、様々な理由から黙って挨拶もせず立ち去り、心が望むように行動します。立ち去る理由については、今は話をしません。まず、このような人への神の態度について話します。それは極めて明瞭です。神の観点からすると、立ち去った瞬間に、その人の信仰の全期間は終わります。それを終わらせたのは、その人ではなく神です。立ち去ったということは、その人がすでに神を拒否し、それ以上神を求めず、もはや神の救いを受け入れないということを意味します。その人が神を求めているのであれば、神が依然としてその人を求めることができますか。さらに、そうした態度、観点があり、神から去ると決めたときに、この人はすでに神の性質を侵害しています。たとえ怒りを爆発させて神に悪態

をつくこともなく、また下劣で行き過ぎたふるまいをすることもなく、「外で十分楽しんで満足したと思う日が来たら、あるいは何らかの理由で再び神が必要になったら、戻って来よう。あるいは、神に呼ばれたら戻って来よう」などと考えていても、「外で傷付いて、外界が暗過ぎて邪悪過ぎて、流れについて行きたくないと思ったら、神のもとへ戻ろう」などと言っているのも同じです。正確にいつ戻るかを頭で計算し、戻ってこられるように扉を開いたままにしてきたとしても、どのように考え、計画したとしても、それが希望的憶測に過ぎないことにその人は気付かないのです。この人の最大の過ちは、自分の去りたいという願望を神がどう感じるかがわかっていないことです。神のもとを去ろうと決めたその瞬間に、神は完全にその人を捨てます。そのときには神は心の中ですでにその人の結末を決めています。それはどのような結末ですか。それは、その人がネズミの一匹となり、他のネズミと共に滅びるということです。そして、人はよくこのような状況を見ます。それは、神を見捨てても罰を受けない状況です。神は神自身の原則に従って対処します。目に見えるものもありますが、神の心の中で結論付けられるだけのものもあり、人間にはその結果は見えません。人間に見える部分が必ずしも物事の真の側面であるとは限らず、反対側、つまり人間には見えない側面にこそ、神の本当の心からの思いと結論であるのです。

神の働きの最中に逃げ出す人は、真の道を捨てる人である

それでは、なぜ神はそのような人にそこまで深刻な罰を与えることができるのですか。なぜ神はその人に対してそこまで激怒しているのですか。まず、神の性質が威厳であり怒りであることは、私たちの誰もが知っています。神は誰かに殺される羊ではなく、ましてや人間の思い通りになる操り人形などではありません。神は人間にあごで使われる中身のない空気でもありません。神の存在を本当に信じているならば、あなたは神を畏れる心を持ち、神の本質を怒らせてはならないことを知らなくてはなりません。この怒りを引き起こすものは言葉かもしれないし、思いやあるいは下劣なふるまい、あるいは穏やかなふるまい、人間の目と倫理から見て容認できるようなふるまいかもしれず、あるいは学説や理論かもしれません。しかし、ひとたび神を怒らせると、あなたの機会は失われ、終わりの時が訪れます。これは恐ろしいことです。神を怒らせることが許されないということを理解していないのであれば、あなたは神を畏れず、常に神を怒らせているかもしれません。どのように神を畏れるべきかがわからなければ、神を畏れることはできず、どのように神の道、つまり神を恐れ悪を避ける道筋に足を踏み入れるかもわかりません。ひとたび神を怒らせてはならないことに気づき意識したなら、神を畏れ

悪を避けるとは何かがわかります。

神を畏れ、悪を避ける道を歩むことは、必ずしも真理をどれほど知り、試練を幾つ経験し、どれほど鍛錬してきたか、ということではありません。むしろそれは、あなたが心の中で神に対してどのような態度を抱いているか、あなたがどのような本質を表しているかに左右されます。人間の本質と主観的態度は、極めて重要です。神を捨て去った人に関しては、その神への卑劣な態度と真理を忌み嫌う心はすでに神の性質を侵害しています。そのため、神に関する限り、そのような人が神に赦されることはありません。この人は神の存在を知り、神がすでに来たという知らせを受け、神の新たな働きを経験さえしています。その人が立ち去ったのは、迷いや混乱のせいでも、ましてや、追い出されたせいでもありません。むしろ、意識的に、明瞭な精神状態で、神から去ることを選んだのです。立ち去ったのは、道を見失ったからでも、捨てられたからでもありません。したがって、神の目から見ると、その人は群れから迷い出た羊ではなく、ましてや道を見失った放蕩息子でもありません。それは好き勝手にふるまって何らはばからず立ち去った人であり、そうした状態や状況は神の性質を侵害し、それゆえ神はその人に絶望的な結末を与えるのです。このような結末は恐ろしくありませんか。したがって、神を知らない人は神を侵害する恐れがあります。これは決して些細なことではありません。神の姿勢を真剣に受け止めないのに、自分は神の迷える子羊なので神は自分が戻ってくるのを心待ちにしてくれて、自分の改心を待っていると考えているとしたら、その人が罰を受ける日はそれほど遠くありません。神はその人をただ拒むだけではありません。その人が神の性質を挑発するのは二度目であることから、さらに酷い問題です。その人の不敬な態度は、すでに神の行政命令を犯しています。神はその人を受け入れますか。神の心では、このような問題に関する原則では、誰かが真の道とは何かについてすでに確信しながらも、意識的かつ明瞭な精神状態で神を拒否し、神のもとから離れることができるなら、神はその人の救いの道を遮断し、神の国の門はそれ以降その人に対して閉ざされます。その人が再び現れて門戸を叩いても、神は扉を開けず、その人は永遠に閉め出されます。あなたがたのうちには、聖書にあるモーセの物語を読んだことがある人がいるでしょう。神がモーセに油を注いだ後、二百五十人の指導者は、モーセの行動などを理由として、モーセに不服従を示しました。指導者たちが従うことを拒んだのは誰ですか。モーセではありません。指導者たちは神の計画に従うのを拒み、それに関する神の働きに従うのを拒んだのです。指導者たちは言いました。「あなたがたは、分を越えています。全会衆は、ことごとく聖なるものであって、ヤーウェがそのうち

におられるのに……」。人間から見て、この言葉は深刻ですか。深刻ではありません。少なくとも、言葉の文字通りの意味は深刻ではありません。法的にも、違法ではありません。表面的には敵対的な表現や語句はなく、ましてや冒瀆的な含意もないからです。一般的な言葉でしかありません。それでは、なぜこの言葉が神の怒りにこれほど触れるのですか。なぜなら、この言葉は人間でなく神に向けられているからです。ここに表された態度と性質は、まさしく神の性質の怒りに触れるものであり、また侵害してはならない神の性質を侵害するものだからです。私たちはみな、指導者たちの結末が最後はどうであったかを知っています。神を捨てた人の観点はどのようなものですか。態度はどのようなものですか。その観点や態度のせいで、神がその人をそのように扱う結果になるのはなぜですか。それは、神が神であることを明らかに知っていながら、その人は神を裏切ることを選ぶからです。だから、救いの機会を完全に剥奪されたのです。それは聖書にある通りです。「もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない」。この問題について、あなたがたは今では明確に理解しましたか。

人間の運命は、神への人間の姿勢で決まる

神は生きている神であり、人間が様々な状況において様々なふるまうように、様々なふるまいに対する神の態度も異なります。なぜなら神は操り人形でも、中身のない空気でもないからです。神の態度を知るようになることは、人類にとって意義があることです。神の態度を知ることにより、人間はいかにして神の性質を少しずつ知り、神の心を理解できるようになるかを学ぶべきです。神の心を少しずつ理解するようになると、神を恐れ悪を避けることは、成し遂げるのが困難なことだとは感じなくなります。さらに、本当に神を理解するなら、神について結論を導くようなことはしなくなります。ひとたび神について結論を出さなくなれば、めったに神に背くことはなく、無意識のうちに神に導かれ、神に関する認識を得て、心は神への畏れで満たされます。そうすると、自分が習得した教義や字句、理論で神を定義しなくなります。そのかわりに、万事において神の心意を常に求めることで、無意識のうちに神の心に従う人となるのです。

神の働きは、人間が目で見ることにも触れることもできませんが、神に関しては、各人のあらゆる行動と神への態度は、神には感知できるだけでなく、見ることもできます。これはすべての人が認識し、はっきり理解しなければならないことです。「神は私がここで何をしているか知っているだろうか。神は私が今何を考えているか知っているのだろうか。知っているかもしれないし、知らないかもしれない」などといつも自問してい

る人がいるかもしれません。あなたがこのような観点で、神に付き従い、神を信仰しながらも、神の働きや存在を疑っているのであれば、遅かれ早かれ神の怒りに触れる日が訪れます。なぜなら、あなたはすでに危険な崖の縁をよろめき歩いているからです。長年にわたり神を信仰してきたものの、真理の現実性を得ておらず、神の心も理解していない人をわたしは見てきました。このような人はいのちと霊的背丈においてまったく進歩せず、極めて浅薄な教義に従うだけです。これは、神の言葉をいのちとして捉えず、神の存在を直視して受け入れたことがないからです。こうした人を見て、神が喜びに満たされると思いますか。そんな人が神に慰めを与えますか。ですから、人間の運命を決めるのは人間がどのように神を信仰するかです。人がどのように神を求め、どのように神と関わり合っていくかに関しては、最も重要なのは人の姿勢です。神を頭の後ろにただよっている空気のように無視してはなりません。あなたが信仰する神を常に生きている神、実在する神と考えなさい。神は何もせず第三の天にいるのではなく、常に人間一人ひとりの心や、各人が何をしているか、些細な発言や行動のひとつひとつ、神に対して人がどのようにふるまい、どのような姿勢を取るかを見ています。あなたが自らを神に捧げるつもりであろうとなかろうと、あなたのあらゆるふるまい、心の奥深くにある考えや思いのすべてが神の前にさらされ、神に見られています。あなたのふるまい、行動、神への態度ゆえに、神があなたについて持つ意見と神のあなたへの態度は、常に変化しています。一部の人に助言します。あたかも神があなたを溺愛しなければならず、神があなたのそばを決して離れられず、神のあなたへの態度は固定していて永遠に変わらないかのように、神の手の中にいる乳児のようになってはいけません。そして、空想はやめなさい。人間一人ひとりの扱いにおいて、神は義であり、人間の征服と救いの働きへの神の取り組みは真摯です。これが神による経営です。神は人間一人ひとりを、愛玩動物のようにではなく、真剣に扱います。神の人間への愛は過保護や甘やかしではなく、人間への神の憐れみと寛容は、大目にみたり無頓着であったりすることでもありません。むしろ、神の人間への愛は、大切にし、憐れみ、いのちを敬うことです。神の憐れみと寛容は、神の人間への期待を伝えており、人類が生き残るために必要なものです。神は生きており、実在します。神の人間に対する態度には原則があり、それは教条的な規則ではなく、変化することがあります。人類への心意は、時間や状況が変わるにつれ、また各人の態度に従って、徐々に変化しています。したがって、あなたは心の中で絶対的な明瞭さをもって、神の本質は変化せず、神の性質は様々な時に様々な状況で表出することを理解すべきです。あなたはこれが深刻な問題であると考えず、自分の観念を用いて、神がどのように物事を行うべきかを想像するかもしれません。しかし、あな

たの観点とは正反対のものが真実である場合もあり、自分の観念で神を押し量ろうとすることで、あなたはすでに神の怒りを買っています。これは、神はあなたが考えるように動くのではなく、またこの問題も神はあなたが言うようには扱わないからです。ゆえに、あなたは身の回りのあらゆることへの取り組みにおいて注意深く慎重であり、すべてにおいて、神を畏れ悪を避ける神の道をいかに歩むべきかを学ぶことを忘れてはなりません。神の心と態度に関する事柄を確実に理解するように努め、このような事柄についてあなたに伝えることのできる啓かれた人を見つけて、熱心に求めなければなりません。自分が信じる神を操り人形のようなものと捉えて、任意に判断を下したり、神について勝手に結論を導き出したりせず、相応しい敬いの念をもって神を扱わないことのないようにしなさい。あなたに救いをもたらし、あなたの結末を決めているあいだに、神はあなたに憐れみか、寛容か、裁きと刑罰を授けるかもしれません。いずれにせよ、あなたへの神の態度は一定ではありません。神の態度は、あなたの神への態度や、あなたの神に関する認識により決まります。あなたが神について理解、認識していることのつかの間の側面で神を永久的に定義してはいけません。死んだ神でなく、生きている神を信じなさい。このことを忘れてはなりません。わたしはここで、あなたがたの現在の状態と背丈に応じて、あなたがたが知るべき真実をいくつか話しましたが、あなたがたの情熱を奪わないように、いまはこれ以上の要求をしません。そうしなければ、あなたがたの心は過度に荒涼として、神に対して過度に落胆するかもしれないからです。そうならずに、心にある神への愛と神を敬う態度で、あなたがたが今後の道を歩くことを望みます。神をいかに信じるべきかに関する問題で混乱してはいけません。それを現存する最重要の問題のひとつとして扱いなさい。その問題を心に留め、実行に移し、実生活と関連させなさい。口先だけで聞こえのいいことを言うてはなりません。なぜなら、これは生死にかかわる問題であり、あなたの運命を決める問題だからです。冗談や子どもの遊びとして扱ってはなりません。今日これらのことを話し合って、あなたがたの心の収穫はどれくらいありますか。今日の話について、何か質問はありますか。

今日の話題はやや新しく、あなたがたの観点や、普段追求し、注目していることから離れたものですが、ある期間あなたがたで話し合えば、今日わたしがここで話した内容をすべて一様に理解できるようになります。これらの話題はどれもとても新しく、これまであなたがたが考えたことのなかったことですから、あなたがたの負担とならないことを望んでいます。今日、わたしがこのような話をしているのは、あなたがたを怖がらせるためでも、あなたがたを取り扱うためでもなく、事実の真相をあなたがたが認識す

るのを助けることがわたしの目的です。神と人間の間には隔たりがあるため、人間は神を信じているものの、神を理解することも神の態度を知ることありませんでした。人間はまた、神の態度についてあまり熱心な関心を寄せたことありません。むしろ、人間は盲目的に信仰し、進んできたのであり、神を知り理解することについては不注意でした。したがって、あなたがたのためにこれらの問題を明らかにし、あなたがたが信仰するこの神が、どのような神で、何を考えていて、様々な人を取り扱うときにどのような態度を取るのか、あなたがたは神の要求を満たすことからどれくらい離れていて、あなたがたの行動と神が要求する基準にはどの程度の差があるかを理解するのを助けずにはいられないと感じるのです。これらのことをあなたがたに知らせる目的は、自己評価のための指標を与えることと、歩んでいる道がどのような収穫に繋がっていて、その道では何が得られていないか、まったく関わっていない領域は何かをあなたがたに理解させることです。あなたがたが互いに話し合うとき、通常は一般的な二、三の事項について話をしますが、その範囲は狭く、内容は浅薄です。神の心意とあなたがたが話し合うことの間、さらにはあなたがたの議論と神の要求の範囲や基準の間には、隔たりがあります。そのようなまま進んでも、時間とともに、神の道から益々外れて行きます。あなたがたは現在の神の言葉を取り上げて、それを崇拜の対象に変えたり、儀式や規則とみなしたりしています。していることはそれだけです。事実、あなたがたの心には神の場所がなく、神はあなたがたの心を得ていません。神を知ることが極めて困難だ、という人がいますが、それは事実です。確かに困難です。人が自分の本分を尽くして外面的に物をやり遂げるようにできていて、まじめに働くなら、神を信じるのは簡単だと人は思います。なぜなら、それらはすべて人間の能力の範囲内だからです。しかし、神の心意や人間への神の態度の話になると、誰にとっても物事は遥かに困難になります。それは、人間が真理を理解していることと、現実に入ることが関与するからです。ですから、ある程度困難なのは当然です。しかし、ひとたび最初の扉を通過して入り始めたなら、次第に容易になります。

神を畏れることの出発点は神を神として扱うこと

少し前に、ある人から質問がありました。私たちはヨブよりも神について認識が多いにもかかわらず、人間が神を畏れられないのはなぜか、という質問です。この問題には以前少しだけ触れました。実のところ、この問題の本質についても以前に話し合いました。すなわちヨブは当時、神を知らなかったが、神を神として扱い、神を天と地と万物の主とみなしたということです。ヨブは神を敵とはみなさなかったのです。むしろ、ヨ

ブは神を万物の創造主として崇めました。なぜ現在の人間は神をこれほどまでに拒否するのですか。なぜ現在の人間は神を畏れられないのですか。その理由のひとつとして、現在の人間がサタンに深く墮落させられていることがあります。サタンのような本性が深く浸透しているため、現代の人は神の敵になりました。したがって、神を信仰し、認めているものの、いまだに神を拒み、自らを神と敵対させることができってしまうのです。これは人間の本性により決まります。もうひとつの理由は、人は神を信じる一方で、神を神として扱わないことです。その代わりに、神を人間に反対する存在、敵と見なし、神と和解することができないと感じます。それほど単純なことです。この問題はこれまでに取り上げませんでしたか。考えてみなさい。それが理由ではありませんか。あなたには神に関して多少の認識があるかもしれませんが、その認識は一体何を引き起こしますか。それは皆が話題にしていることではありませんか。それは神があなたに伝えたことではありませんか。あなたはその理論上、教義上の側面しか知りませんが、神の真の顔を体験したことがありますか。主観的な認識がありますか。実践的な認識と経験がありますか。神が伝えていなかったなら、知ることができていたでしょうか。理論上の認識は、本当の認識ではありません。つまり、どれほど認識があり、その認識をどのようにして得たにせよ、神についての真の認識を得るまでは、神はあなたの敵であり、実際に神を神として扱うまでは、神はあなたに敵対しています。なぜなら、あなたはサタンの化身だからです。

キリストと共にいれば、あなたはおそらくキリストに毎日三度の食事をふるまい、お茶も出し、生活の世話をし、キリストを神として扱ったように見えるでしょう。何か起きると、人間の観点はいつも神の観点と相反します。人間はいつも神の観点を理解し、受け入れることができません。人間は表面上では神とうまくやっていますが、それは神との融和を意味しません。何かが起こるとすぐに、人間の不服従の真実が現れ、人間と神の間にある敵対心が確認されます。この敵対心は神が人間に反対しているのでも、神が人間に敵対したがつているのでも、神が人間を神に敵対するように位置付け、そのように扱っているのでもありません。むしろ、それは人間の主観的意志と意識下に潜む、神に敵対する本質の問題です。神に由来するものすべてを研究対象とみなす人がいて、神に由来するものや神に関わるものへのこのような人の反応は、何よりも推測し、疑い、神と衝突し神に反する態度をすばやく取ることです。その後、そのような人は神との対立、争いに否定的な気分を持ち込み、そのような神は従うに値するかどうかと疑念さえ抱くようになります。理性は、そのように進むべきではないと言うものの、思わず

そうしてしまい、そのため躊躇せずに最後まで続行します。たとえば、神についての噂や悪口を人が聞くと、最初にどのように反応しますか。最初の反応は、その噂が嘘か本当か、噂が実在するかどうかを思いめぐらし、様子を見よう、という態度を取ります。その後、「確かめる方法がないが、本当に起こったのか。その噂は本当だろうか」と考え始めます。このような人はこれを表には出ませんが、心にはすでに疑念が生じ、神をすでに否定し始めます。このような態度と観点の本質は何ですか。裏切りではありませんか。こうした問題に遭遇するまでは、その人の観点がどういうものかを知ることはいけません。その人は神と衝突しているようにも、神を敵とみなしているようにも見えません。しかし、問題に直面するとすぐに、人間はサタンの味方をして、神と敵対します。このことは何を示唆していますか。それは、人間と神が敵対していることを示しています。神が人間を敵とみなしているのではなく、人間の本質自体が神に敵対しているのです。どれほど長期間にわたり神に付き従ってきたにせよ、どれほど大きな代償を支払ってきたにせよ、どのように神を称え、どのように神を拒否せずにいて、神を愛すようにどれほど強く自己に言い聞かせているにせよ、人間は決して神を神として扱うことができません。これは人間の本質が決めているものではありませんか。神を神として扱い、神が神であることを心から信じていれば、それでも神に疑念を抱くことができますか。心の中に神への疑問があり得ますか。あり得ません。そうではありませんか。この世の傾向は極めて邪悪で、人類も極めて邪悪です。では、どうして人間について何の観念も持たずにいることができるのですか。あなた自身、極めて邪悪なのに、あなたにはそのことに関して観念がないのはどういうことですか。それなのに、たった二、三の噂や悪口が、神について極めて大きな観念を生み出し、あなたに多くのことを想像させ、それがあなたの霊的背丈の未熟さを露呈するのです。何匹かの蚊や煩わしい蠅の「羽音」だけで、あなたを欺くには十分なのですか。これはどのような人ですか。神がこのような人をどう思っているかを知っていますか。その人に関しては、神の態度は実は極めて明瞭です。神は単に冷遇するだけです。注意を向けず、そうした無知な人を本気で相手にしないだけです。なぜですか。それは、神の心では、最後まで神に反抗すると誓いを立て、神と融和する方法を求めるつもりが一切ないその人を得ようと計画したことはないからです。わたしが言った言葉に傷つく人が二、三人いるかもしれません。あなたがたはいつもこのようにわたしに傷つけられていいのですか。あなたがたがどう思おうと、わたしの言ったことはすべて真実です。わたしが常にあなたがたを傷つけ、あなたがたの傷を露わにするようであれば、それはあなたがたの心の中にある高尚な神の姿に影響しますか。（しません。）わたしもしないと思います。なぜなら、単にあなたがたの

心には神が存在しないからです。あなたがたの心の中にいる高尚な神、あなたがたが頑固に守り擁護するものは、神ではありません。それは人間の想像の産物です。その神は存在しません。したがって、この問題の答えをわたしが明らかにする方が良いわけです。これで真相がすべて暴かれたのではありませんか。真の神は、人間が想像する神とは異なります。あなたがたがみな、この現実を受け止めることができることを願います。それは、あなたがたが神を認識する助けとなります。

神に認められない人

神の心において、信仰が認められたことのない人がいます。換言すると、神がこのような人を追隨者であると認めないのです。神が彼らの信仰を称賛しないためです。彼らは何年にわたり神に付き従ってこようが、考えや観点がまったく変わりません。まるで信仰を持たない人のように、未信者の原則や作法、未信者の生存の法則や信念を遵守しています。神の言葉を自分自身のいのちとして受け入れたことがなく、神の言葉が真理であると決して信じず、神の救いを受ける意志が一切なく、神を自らの神として認めたことがありません。彼らは神への信仰を余暇活動のように捉え、神を単なる精神的な支えとして扱っています。そのため、神の性質や本質を理解しようとするのが有意義だとは考えません。真の神に該当することすべてが、彼らには無関係であると言えます。彼らは無関心であり、わざわざ注意を払うこともないのです。これは、彼らの心の奥深くに強い声があり、「神は見え、触れることもできず、したがって存在しない」と常に言っているからです。そのような神を理解しようとするのは、努力に値せず、そうしようとするのは自分自身を騙すことになると考えています。言葉で神を認めるのみで、本当に立場を表明したり、実際に行動をとったりしないことで、自分はかなり利口だと考えています。神はこのような人をどう思いますか。神は彼らを未信者とみなします。「未信者が神の言葉を読めるだろうか。自分の本分を尽くせるだろうか。『私は神のために生きる』と言えるだろうか」と尋ねる人がいます。人間に見るのは、大抵、人が表面的に見せるものであり、本質で見えません。しかし、神は表面的なものを見ず、内面的な本質のみを見ます。したがって神は彼らにこのような態度をとり、このように定義するのです。彼らは、「神はなぜこのようなことをするのか。神はなぜあのようなことをするのか。これは理解できない。あれは理解不可能だ。人間の考えと一致しない。私に説明してくれなければ」など言います。わたしの答えはこうです。「そのようなことについて、ほんとうにわたしが説明する必要がありますか。これらの問題はあなたに関係がありますか。あなたは自分が何者だと考えているのですか。あなたはどこから

来たのですか。あなたに神に助言する資格が本当にありますか。あなたは神を信じていますか。神はあなたの信仰を認めていますか。あなたの信仰は神と無関係ですから、神のすることがあなたにどう関係するといえるのですか。あなたは自分が神の心においてどのような位置にいるかを知らないのに、どうして神と対話する資格があるのですか」。

勧告

この話を聞いて、あなたがたは不快ではありませんか。そのような話を聞きたくない、あるいは受け入れたくないと思っているかもしれませんが、これはすべて事実です。この段階の働きは神が行うものなので、神の心意や神の態度に無関心で、神の本質と性質を理解しなかったならば、最終的に損をするのはあなたです。わたしの話が聞くに堪えないからといってわたしを責めたり、話のせいで情熱が冷めたからといって、話を責めてはいけません。わたしは真実を述べているのであり、あなたがたを落胆させるつもりはありません。わたしがあなたがたに何を求めようと、あなたがたがそれをどのように行うように要求されていようと、わたしはあなたがたが正しい道を歩み、神の道に従い、そこから外れないことを望みます。神の言葉に従って進まなければ、神の道に従わなければ、あなたが神に反抗しており、正しい道から外れてしまったことは疑念の余地がありません。したがって、あなたがたのために明確にし、あなたがたにはっきりと明瞭に、一抹の疑念もなく信じさせなければならぬ事柄があると感じています。そうすることで、神の態度と心意、神がどのように人間を完全にするか、神がどのように人間の結末を決定するかを、あなたがたがはっきりと理解する助けをします。この道に踏み出すことができない日が来ても、わたしには一切の責任がありません。なぜなら、わたしは今日の話をとて明瞭に伝えたからです。あなたが自分の結末をどのように扱うかについては、完全にあなた次第です。様々な人の結末について、神はそれぞれ異なる態度を取ります。神にはその人たちを測る独自の方法、さらには彼らに求める独自の基準があります。神が人間の結末を測る基準は、万人に公平なもので、このことに疑いはありません。そうしたわけで、一部の人の恐れは不要です。安心しましたか。今日の話はこれで終わりです。ごきげんよう。

2013年10月17日

神の働き、神の性質、そして神自身 1

本日の交わりのテーマは重要なものです。このテーマは神の働きが始まってからずっと議論されてきたものであり、すべての人にとって極めて重要な意味を持ちます。言い

換えれば、これは信仰の道を歩むすべての人が直面する問題であり、同時に皆が直面しなければならない問題なのです。これは人間である以上逃れることのできない、重大かつ不可避な問題です。ところで重要なことといえば、神を信じるすべての者にとって最も重要なことは何でしょうか。これについては、神の旨を理解することが最も重要だと思う人もいれば、神の言葉をより多く飲み食いすることが最も重要だと信じる人もいます。また自分自身を知ることこそ一番重要だと感じる人もいれば、神の救いをいかに見出し、いかに神に従い、いかに神の旨を達成するかこそ大切だという意見を持つ人もいます。しかし今日は、こうしたことについては一旦おいておきましょう。では何について話すのかというと、それは「神について」です。これは皆にとって最も重要なテーマでしょうか？ 具体的にはどんな内容なのでしょうか。もちろん、このテーマを神の性質、神の本質、神の働きから切り離して語ることはできません。したがって今日は、「神の働き、神の性質、そして神自身」について語り合しましょう。

人は神を信じ始めたときから、この「神の働き、神の性質、そして神自身」というようなテーマに直面してきました。神の働きについては、こんなふうに考える人もいます。「神の働きはわたしたちの上に行われており、それは我々が毎日経験するもので、見知らぬことではない」と。また神の性質については、次のように言う人もいます。「神の性質はわたしたちが生涯をかけて学び、探求し、重視しているテーマなのだから、我々はそれについてよく知っているはずだ」と。また神自身に関しては、こんなふうに言う人がいます。「神自身はわたしたちが従い、信仰を置き、追い求めるその方なのだから、わたしたちが神について無知だということもないはずだ」と。神は世界の創造以来、ずっと働きを続けており、その働きを通してその性質を現し続け、さまざまな方法で神の言葉を表してきました。また同時に、神は自らとその本質を人間に示し続け、人間に対する旨と人間への要求を表しています。そのため文字通りにいえば、これらのテーマについては誰もがよく知っているはずですが、しかし神に従う今日の人々は、神の働き、神の性質、そして神自身を、まったくというほど理解していません。これはなぜなのでしょう。人は神の働きを経験する中で、神との交わりも経験するため、神の性質を理解しているとか、それがどんなものか多少は知っているとか思いこんでいます。そのため、自分が神の働きや神の性質について無知だとは考えていないのです。むしろ自分は神と非常に親しい存在であり、神をよく知っていると思っています。しかし現在の状況を見ると、多くの人が理解している神というものは、彼らが読んだ本の内容や個人的経験、想像といったものの域を出ることはなく、何よりも彼らが自分の目で見ることの

できる事実の範囲に限られており、それらはすべて真の神自身から遠くかけ離れています。この「遠く」とは、一体どれほど遠いのでしょうか。おそらく皆自分でもよくわかっていないか、うすうす感じているだけなのでしょうが、特に神自身の話になると、人の理解は真の神の本質から気が遠くなるほどかけ離れています。だからこそ、わたしたちはこの「神の働き、神の性質、そして神自身」というテーマについて、系統的にかつ具体的に交わりを持つ必要があるのです。

実際、神の性質というのは隠されているものではなく、誰に対しても明らかになっています。神は何人をも意識的に避けたことはなく、知られたり理解されたりしないようにあえて自らを隠したことは一度もないからです。神の性質とは常に開かれており、一人一人に率直に向き合うというものでした。神の経営（救い）において、神はすべての人と向き合って働き、その働きは一人一人に対して行われます。その働きを行う中で、神は絶えず自らの性質を現し、その本質、神であるもの、神が持っているものを用いて、一人一人を導き、一人一人を養います。どのような時代や段階にあっても、状況の善し悪しにかかわらず、神の性質はいつでも一人一人に明らかにされており、神の所有するものとその存在とは一人一人に対して開かれています。それは神のいのちが絶えることなく人類を養い、支え続けているのと同様です。それにも関わらず、一部の人々にとって神の性質は隠されたままです。それはなぜでしょうか。それはそうした人たちが、神の働きの中で生き神に従ってはいるものの、神を理解しようと努めたり、知りたいと思ったりしたことがなく、ましてや神に近づいたことなどないからです。そうした人たちにとって、神の性質を理解するということは、彼らの終わりの時が近いという前触れであり、まもなく彼らは神の性質によって裁かれ罪に定められるということを意味します。そのため彼らは神やその性質を知りたいと願ったことがなく、神の旨についてのより深い理解や認識を追い求めたこともありません。彼らは意識的に協力して神の旨を理解しようとは思わず、ただ永遠に楽しみを求め、飽くこともなく自分がしたいことだけをしています。彼らが信じているのは自分にとって都合のいい神、自分の想像や観念の中にだけ存在する神であり、日々の生活の中で自分から切り離すことのできない神なのです。しかし真の神自身となると、彼らは完全に拒絶し、理解しようという気もなく、目を向けることもなく、神に近づこうなどとは思いません。彼らは神が語った言葉を、ただ自分自身を飾りつけ包み隠すために利用しているのです。彼らにとっては、それで自分はすでに立派な信者なのであり、心から神への信仰を持っていると信じています。しかし実際には、彼らを導いているのは自分自身の想像や観念、さらに自分自身の

定義による神なのです。一方、真の神自身は彼らと何の関わりもありません。というのも、もし彼らが真の神とその真の性質とを理解し、神の持てるものとその実質とを理解したら、それは彼らの行動や信仰、そしてその欲求が、罪に定められることを意味するからです。そのため彼らは神の本質を理解しようとせず、神とその旨、その性質をよりよく知るために、自ら積極的に求めたり祈ったりしようとはしないのです。彼らにとっては、むしろ神は作り上げられた存在、中身のない漠然とした存在であるほうがよいのです。彼らが望んでいるのは、神が自分の想像どおりの存在で、自分の思いどおりになり、限りなく与え、いてほしいときにはいつでもそこにいてくれることなのです。彼らは神の恵みを享受したいときには、神にその恵みになるよう求め、神の祝福が必要なときには、神にその祝福になるよう求めます。逆境に直面すると、神が自分たちを励まし、背後の盾となってくれることを求めます。このような人々による神の認識は、恵みと祝福の範囲を出ることがありません。また神の働き、神の性質、そして神自身に関する彼らの理解も、自分の想像や字句と教義上のものでしかありません。しかし中には、神の性質を熱心に追求し、心から神自身を知りたいと願い、神の性質と神の持てるもの、そしてその実質を真に理解しようと努めている人たちもいます。そのような人たちは、真理の現実、神の救いを追い求め、神が自分を征服し、救い、完全にしてくれることを望んでいます。そのような人たちは心から神の言葉を読み、神が自分に与えたすべての人や状況、出来事、そして物事に心から感謝し、誠実に祈り、求めます。彼らは何よりも欲するのは神の旨を知ることであり、神が所有するものと神そのものを理解することです。そうすれば、もう二度と神に背くことなく、経験を通してさらに神の素晴らしさやその真実の側面を知ることができるようになるからです。そしてまさに正真正銘の神が彼らの心に宿り、神が心の中に居場所を確保するため、もはや想像や観念や不明瞭さの中に生きる必要がなくなるからです。こうした人々が神の性質と本質を理解したいとそれほど切実に願うのは、人間の経験の中で神の性質と本質はいつも必要なものであり、一生を通していのちを与えてくれるものだからです。一度神の性質を理解すれば、神をより畏れ、その計画に協力することがより適切に行えるようになり、神の旨にますます配慮し、持てるすべての力を尽くして自分の本分を果たすことができるようになります。これが、神の性質に対する2種類の人々の態度です。一方の人々は神の性質を理解したがらず、口では神の性質を理解し、神自身を知り、神の持てるものとその実質とを目にし、心から神の旨を把握したいと言うものの、心の奥底では神が存在しなければよいと思っています。なぜならこの種の人々は一貫して神に不従順であり、神に反抗しているからです。自分自身の心の中の居場所を神と奪い合い、しばしば神の存在を疑い、

それを否定さえしています。彼らは神の性質や真の神自身が自分の心を支配することを望みません。彼らの望みは、自分の欲望や想像、野心が満たされることだけです。つまり彼らは神を信じ、神に従い、さらに家庭や仕事を神に捧げているかもしれませんが、それでも悪の道を進むことはやめていないのです。ひどい場合には献金を盗んだり浪費したり、ひそかに神を罵ったりする者もあれば、自分の地位を利用して繰り返し自分に有利な証言をし、自分の立場を強化し、人々や地位を神と争うような者もいます。彼らはあらゆる手段を用いて人々に自分を崇拜させ、常に人々を魅了し、支配しようとしています。場合によっては、意図的に人々を欺いて自分自身が神であるかのように思わせ、神のように扱われようとする者さえいます。彼らは自分が墮落しているとは決して言いません。自分も墮落した高慢な存在であり、崇拜の対象にはなりえず、どれだけ立派にやっても、すべては神に高められたためであり、ただすべきことをしているだけだ、とは決して言いません。なぜそう言わないかといえば、人々が自分に見向きもしなくなることを深く恐れているからです。だからそのような者は決して神を称賛せず、神に証しすることもあります。彼らは一度も神を理解しようとしたことがないからです。神を理解せずに、神を知ることができるでしょうか。不可能です。そのため、この「神の働き、神の性質、そして神自身」というテーマはシンプルなようですが、人によってその意味するところは異ってくるのです。しばしば神に逆らい、反抗し、神に敵対する者にとっては、この言葉は断罪を意味しますが、真理の現実を追い求め、しばしば神の前に出て神の旨を知ろうと努める者は、水を得た魚のようにこの言葉を受け止めます。あなたがたの中には、神の性質と神の働きについての話を聞くと頭が痛くなり、心が抵抗感で満たされ、非常に不愉快に感じる人もいます。しかしまた、次のように思う人もいます。「このテーマはまさにわたしが必要としているものだ、わたしにとって非常に有益だから。これはわたしのいのちの経験に欠かすことのできない、何物にもまさる最重要課題で、神への信仰の基盤であり、人間が捨て去ることのできないものだ」と。このテーマはみなさん全員にとって、近くもあり、遠くもある、そして知らないようで知っている、そんな風に思われるかもしれません。しかしいずれにしても、これはすべての人が聞き、知り、そして理解しなければならないものです。このテーマをどのように扱うにせよ、どのような視点で捉えるにせよ、またどのように理解するにせよ、その重要性は無視することができません。

神はその働きを人間の創造の時からずっと行っています。当初、それはかなり単純な働きでしたが、その単純さにもかかわらず、そこには神の本質や性質が内包されていま

した。現在、神の仕事は高められ、神は自分に付き従うすべての者に対して膨大な量の具体的な働きを行い、大いなる言葉を語っています。しかし神の本体というものは、常に人間から隠されてきました。神は二度受肉しましたが、聖書の記述から現代に至るまで、神の実体を見たという人はいるでしょうか。あなたがたの理解に基づいて、神の実体を見たことがあるという人はいますか？ いませんね。神の実体を見た人がいないということは、誰も真の神自身を見たことがないということです。この点については誰もが同意するでしょう。つまり、神の実体あるいは神の霊というものは、神が創造したアダムとエバや、神が受け入れた義人ヨブも含め、すべての人に対して隠されているということです。彼らですら、神の実体を見てはいません。しかしなぜ、神は意識的にその実体を隠すのでしょうか。これについては、「神は人々を怖がらせたくないのだ」と言う人もいれば、「神がその実体を隠しているのは、人間が小さすぎて、神は偉大すぎるからだ。人間が神を見ることはできない。見れば人間は死んでしまう」と言う人もいます。また別の人は、「神は日々働きを行うのに忙しすぎて、人々の前に現れる時間がないのかもしれない」と言っています。あなたがたがどう信じているにせよ、わたしには1つの結論があります。それは、神は単に人々にその実体を見せたがっていない、ということです。神は故意に、人の目から姿を隠しているのです。言い換えれば、人に神の実体が見えないのは、神の意図によるところなのです。このことはもう皆がはっきり知っていなければなりません。神がその本体を誰にも見せたことがないなら、神の本体は存在すると思いますか？（存在します。）もちろん神の本体は存在します。神の本体が存在することについて、議論の余地はありません。しかし神の本体がいかに偉大なものか、あるいはどのような姿なのか、ということは人間が研究すべき問題でしょうか。いいえ、そうではありません。神の本体というものがわたしたちの探究すべきテーマでないとすれば、わたしたちが学ぶべき問題は何なのでしょう。（神の性質。）（神の働き。）では正式なテーマについて交わりを持つ前に、先ほど話したことをもう一度おさらいしましょう。神はなぜ、その本体を人に現したことがないのでしょうか。なぜ神はあえてその本体を人間から隠しているのでしょうか。その理由はただ一つ。つまり、神に創造された人類は何千年ものあいだ、神の働きを経験してきましたが、誰一人として神の働き、神の性質、神の本質を知る者はいないからです。そのような人間は神の目から見れば、自らに敵対する存在であり、自分に敵対する者に神がその姿を現すことはありません。これが、神が人間に対してその本体を現さず、意図的に人間からその本体を隠している唯一の理由です。これで、神の性質を知ることの重要性がはっきりしたでしょうか。

神の経営が開始されてから今まで、神は常に全力でその働きを遂行してきました。神はその本体を人間から隠していても、いつでも人間の味方であり、人間に対して働きをなし、自身の性質を現し、自身の本質によってすべての人間を導き、その力、知恵、権威を通して一人一人の人間に働きを行っています。こうして神は、律法の時代、恵みの時代、そして現在の神の国の時代を現実のものにしたのです。神は人間から自分の本体を隠してはいますが、その性質、その存在と所有しているもの、そして人間に対する旨は、人間が目にし経験することができるよう、無条件に露わにされています。言い換えれば、人類は神を見たり神に触れたりすることはできなくても、人類が経験する神の性質や本質は、間違いなく神自身の現れであるということです。それが真実ではないでしょうか。神はどのような方法あるいは見地からその働きを行うにせよ、常にその正体を通じて人間を扱い、自身がすべきことを行い、語るべきことを語ります。どの位置から語るにしても――神は第三の天にいたことも、肉を持って存在することも、さらに普通の人として存在することもあります――神は常に心と思いを尽くして、欺きも隠しもせず人に語りかけてきます。働きを行うとき、神は自身の言葉とその性質、そして神が所有するものと神そのものを余すところなく現します。そして自身のいのちと神であるもの、神が所有するものを用いて人間を導くのです。こうして人は、人類の揺籃期である律法の時代を、「見ることも触れることもできない」神の導きによって生き抜いてきたのです。

神は律法の時代のあと、初めて受肉し、受肉した人間の姿を三十三年半続けました。人間にとって、三十三年半は長い期間でしょうか。（長くはありません。）通常、人間の寿命は三十数年よりもずっと長いので、三十三年半は長い期間とはいえません。しかし受肉した神にとって、この三十三年半はじつに長い期間でした。神は人間となり、神の働きと委託を行う普通の人となったのです。それは、普通の人では負いきれない仕事を引き受け、普通の人には耐え切れない苦痛にも耐えねばならないことを意味していました。主イエスの働きの始めから十字架にかけられるまでの間、恵みの時代に主イエスがどれほどの苦しみを受けたかは、今日の人間が直接目の当たりにすることはできないにせよ、少なくとも聖書の物語を通して多少は理解できるのではないのでしょうか。記録された出来事にどれだけの詳細が含まれているかによらず、全体としてこの期間の神の働きは、困難と苦痛に満ちていました。墮落した人間にとって、三十三年半という期間は長いものではなく、多少の苦しみは大した問題ではありません。しかし聖く汚れなき神が、人間のすべての罪に耐え、罪人とともに食べ、眠り、生きなければならなかった

その苦しみは計り知れません。神は創造主であり、万物の主、万物の支配者でありながら、この世にやってきたときは、墮落した人類による抑圧と残忍な行いに耐えねばなりませんでした。自身の働きを完成させ、人間を悲惨な状況から救い出すには、人間によって糾弾され、全人類の罪を背負わねばならなかったのです。イエスが経験した苦みがどれほどのものだったかは、普通の人間が想像したり、理解したりできるものではありません。この苦しみは何を意味するのでしょうか。それは人類に対する神の献身です。これは人類の救いのため、その罪を贖うため、そしてこの段階の神の働きを完了させるために、イエスが被った屈辱と払った代価の象徴なのです。そしてまた、人類が神によって十字架から贖われることも意味しています。これは血潮、すなわち命によって払われた代価であり、被造物には決して払うことができないものです。イエスは神の本質を持っており、神の持っているもの、神であるものを有していたため、このような苦みに耐え、この種の働きを行うことができました。これは神の被造物である者が代わって行える働きではなかったのです。これが恵みの時代における神の働きであり、神の性質の現れです。これで、神の持てるものとその実質について何かが明らかになるでしょうか。それは人間が知ろうとする価値のあるものなのでしょうか。

この時代、人間は神の本体を見ることはありませんでしたが、神から罪のためのいけにえを受け取り、神によって十字架から贖われました。人類は神が恵みの時代に行った働きのことを知っているかもしれませんが、この時代に神が現した性質や旨をよく知っている人は果たしているのでしょうか。人間は単に、それぞれの時代にさまざまな手段で行われた神の働きの詳細と、神がその働きを行っていたときにどんなことがあったかという、神に関連する物語を知っているだけです。こうした詳細や物語はせいぜい神に関する若干の情報あるいは伝説であり、神の性質や本質とは関係がありません。人間がどれだけたくさん神の物語を知っていても、それで神の性質や本質について深い理解や認識を持っているということにはなりません。恵みの時代の人々は受肉した神と間近で親密な交わりを経験したものの、律法の時代と同様、彼らの神の性質や本質に関する認識はないに等しかったのです。

神の国の時代、神は再び、一度目と同じように受肉しました。この働きの期間中も、神ははばかりことなく言葉を表し、なすべき働きを行い、神が所有するものと神そのものを現しています。そして同時に、人の不従順と無知にも寛容をもって耐え続けます。神はこの働きの期間にも、自身の性質と旨とを現し続けているではありませんか。つまり、人間が神に創造されてから今日まで、神の性質、神であるものと神が持って

いるもの、そして神の旨は、常にすべての人に開かれてきたのです。神が自らの本質、性質、その旨を意図的に隠したことは一度もありません。ただ単に人間が、神が行っていることやその旨に無関心なだけで、そのため人間は情けないほど神を理解できていないのです。別の言い方をすれば、神はその本体を隠しつつも、常に人間のそばにいて、その旨、性質、本質を絶え間なく明らかに示しているのです。ある意味では神の本体も人々に対して開かれているものの、人間は無知と不従順のため、神の現れを一切見ることができないのです。それならば、神の性質と神自身を理解することは誰にとっても易しいはずではないでしょうか。これはとても難しい質問ですよ。簡単だ、と言うこともできるでしょうが、神を知ろうと努めている人々も、神を本当の意味で知ったり明確な理解を得たりすることはできず、ぼんやりと曖昧な認識のままになっています。しかし「簡単ではない」、と言ってしまうのもまた正しくありません。人々はこれほど長い間神の働きの対象となってきたのだから、すべての人はその経験を通して、神と純粋に交わってきているはず。少なくともある程度は、心の中で神を感じたり、神との霊的な触れ合いを経験したりしたことがあるはずで、少なくとも神の性質について何らかの知覚的な目覚めを経験しているか、神について何らかの理解を得ているはず。人間は神に従い始めてから今日まで、じつに多くのものを神から受け取ってきましたが、人間の能力の限界、無知、反抗心、さまざまな意図などというあらゆる理由で、その多くを失ってもいるのです。神は人間にすでに充分与えたのではないのでしょうか。その本体を人間から隠してはいるものの、神は人間に神が所有するものと神そのものを与え、自らのいのちすらも与えています。神についての人間の認識は、もっと豊かであるべきなのです。そのためわたしはこの「神の働き、神の性質、そして神自身」というテーマについて、より深く交わりを持つ必要があると思うのです。その目的は、神が何千年もの間ずっと人間に対して注いできた思いが無駄に終わらないようにすることと、人間が自分への神の旨を真に理解し、それに感謝できるようになることです。それによって人は神の認識の新しい段階へと進むことができ、また神は人々の心の中の本来あるべき場所に戻るようになります。それが、人間が神に対してなすべき義なのです。

神の性質と神自身を理解するには、まず小さなことから始めなければなりません。しかしどの「小さなこと」から始めればいいのでしょうか。手始めとして、わたしは聖書のいくつかの章を選び出しました。以下の内容には聖書の節が含まれており、すべて「神の働き、神の性質、そして神自身」というテーマに関係しています。これらの抜粋は、あなたがたが神の働き、神の性質、そして神自身について知るための参考として特に

役立つはずで、これらを見ていくことで、神が過去の働きを通してどんな性質を現わされたか、そして人々が神の本質のどんな側面を知らずにいるかを理解できるでしょう。これらの章は古いかもしれませんが、わたしたちが今扱っているテーマは新しく、人々が知ったことも聞いたこともないものです。そんなことはありえないと思う人もいるかもしれません。アダムとエバを取り上げ、またノアを扱うのは、同じ道程を後戻りすることではないのか、と。しかしどう思われるにせよ、これらの章はこのテーマを扱う上で非常に有益であり、今日のテーマについての教科書、あるいは直接的な資料として利用できます。このテーマについてわたしが話し終わる頃には、わたしがなぜこれらの章を選んだのかがわかるはずです。聖書を読んだことがある人なら、これらの節を読んだことはあるかもしれませんが、本当には理解できていないかもしれません。ではまず一度ざっと目を通してから、それぞれを細かく見ていくことにしましょう。

アダムとエバは人類の祖先です。聖書に登場する人物を挙げるなら、まず出てくるのがこの二人です。次にノアが、人類の第二の祖先です。では第三の人物は？（アブラハム。）アブラハムの物語は、皆さん知っているでしょうか。知っている人もいるでしょうが、よく知らない人もいるかもしれません。では第四の人物は？ ソドムの滅びの話の中で出てくる人物です。（ロト。）でもロトは、この話の中には出てきません。出てくるのは誰でしょうか？（アブラハム。）アブラハムの物語でおもに示されているのは、ヤーウェ神が何を言ったかということです。わかるでしょうか。では五人目の人物は？（ヨブ。）神は現段階の働きの中で、ヨブの物語を多く示していないでしょうか。ではあなたがたは、この物語をとて重要だと思っているでしょうか。もし重要と思うなら、聖書のヨブの物語を注意深く読んだことはありますか？ ヨブが何を言い、何をしたか知っていますか？ この中で一番ヨブの物語を読んでいる人は、何回読んだでしょうか。頻繁に読んでいるでしょうか。香港の姉妹たち、教えてください。（以前、恵みの時代の話をしたときに、二回ほど読みました。）それ以後は読んでいませんか？ それは残念なことです。ここで言いたいのは、神がこの段階の働きの中でヨブに何回も言及しており、それが神の意図を反映しているということです。神がヨブにこれほど頻繁に言及していながら、あなたがたがそれに注意を向けなかったのは、あなたがたが良い人間になることや、神を恐れ悪を避けることに、関心を持っていないということの証明です。なぜなら皆さんは、ただ神が語ったヨブの物語をおおまかに理解しただけで満足しているからです。ただ物語自体を理解しただけで満足し、ヨブという人物の詳細や、神が何度もヨブに言及することの理由については、気にもせず理解しようとしてい

ません。神に称賛されたこのような人物に関心を持たないなら、皆さんは一体何に注意を払っているのでしょうか。このように神が言及する重要な人物を、気にもせず理解しようとししないのなら、それは神の言葉に対する皆さんの態度について、どんなことを示しているのでしょうか。それは嘆かわしいことではないでしょうか。それは皆さんの多くが、実践的なことを行っておらず、真理を追求してもいないということの証明ではないでしょうか。もし真理を追求しているなら、神が認めた人々と、その人物について神が語った物語に、相応の興味を抱くはずです。自分がその通りに生きられるかどうか、それらの物語を明らかなと感じるかどうかによらず、とにかくすぐにそれを読んで理解しようとし、その例にならう方法を見つけ、自分にできることを精一杯するはずです。それが、心から真理を求める者の態度というものです。しかし実際には、ここにいるほとんどの人はヨブの話の一度も読んだことがありません。このことが意味するところは大きいものです。

それでは話を元に戻すことにします。この旧約の律法の時代に関連する箇所では、聖書を読んだことがある人ならたいてい誰でもよく知っている、代表的な人物の物語に焦点を当てることにしました。これらの人物の物語を読めば、神が彼らに行った働きや語った言葉は、今日の人々にも等しく通じるものだとして誰でも感じるができるでしょう。これらの物語や聖書の記録を見ると、当時神がその働きをどのように行い、どのように人々を取り扱ったかについて、よりよく理解することができます。しかし今日わたしがこれらの章を取り上げることにしたのは、物語自体やその登場人物に集中してもらうためではありません。これらの人物の物語を通して、神の行いや神の性質の真価を感じてもらうためです。それによって神を理解しやすくなり、神の真の側面が見えるようになって、神についての憶測や観念が払拭され、あいまいな信仰に終止符を打てるようになります。確固たる基盤がないまま、神の性質を理解し、神自身を知ろうとしていると、しばしば無力感に途方に暮れることになり、どこから手を付ければよいかさえわからなくなります。このためわたしは、皆さんが神をよりよく理解し、神の旨をより確かに認識し、神の性質と神自身について知り、真に神の存在を感じて、人間に対する神の旨を理解するために役立つ、ある方法とアプローチを作り出そうと考えました。これは皆さんにとって有益なのではないでしょうか。では今、これらの物語と聖書の節を改めて読んでみて、心の中でどんなことを感じるでしょうか。わたしが取り上げた箇所は不適切だと思いますか？ 先ほど言ったことをもう一度強調しなければなりませんが、これらの人物の物語を見ていく目的は、神が人々に対してどのように働きを行うのか、そし

て神の人間に対する姿勢がどんなものであるかを、皆さんに理解してもらうことです。こうしたことを理解するには、何が助けになるでしょうか。それは神が過去に行った働きを理解し、それを現在の神の働きと結びつけることです。それが、神の多様な側面を理解する助けとなります。そうした多様な側面は現実存在するものであり、神を知りたいと願うすべての者に知られ、理解されなければならないものなのです。

では、アダムとエバの物語から始めることにします。まず聖書を読んでいきましょう。

1. アダムとエバ

1) アダムへの神の命令

創世記2:15-17 ヤーウェ神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。ヤーウェ神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。

この節からどんなことがわかるでしょうか。この箇所を読んでどのように感じますか？ なぜわたしが「アダムへの神の命令」を取り上げたのだと思いますか？ 皆さん一人一人が、神とアダムの姿を心に描けたでしょうか。想像してみてください……もし自分がこのシーンの中にいるとしたら、内心、神はどんなふうだと思いますか？ それを考えると、どんな気持ちになりますか？ これは感動的な、心温まるシーンです。そこには神と人間しかいませんが、その関係の親密さを見ると、感嘆の念に満たされます。神のあふれんばかりの愛は惜しみなく人間に注がれ、人間を包み込んでいます。人間は無邪気で純粋で、重荷もなく気ままに、神に見守られながら幸せに暮らしています。神は人間を気遣い、人間は神の保護と祝福の中で生きています。人間の行動と言動は一つひとつすべてが神と密接につながっており、神と切り離すことはできませんでした。

この命令は神が人間を創造した後、最初に与えた命令だったといえます。この命令は何を表しているのでしょうか。それは神の旨ですが、同時に神の人類に対する懸念も表しています。これは神の最初の命令であり、そしてこのとき初めて神は、人間に対する懸念を表しました。すなわち、神は人間を創った瞬間から、人間に対して責任を感じていたということです。神の責任とは何でしょうか。それは人間を守り、世話をするという責任です。神は人間が神の言葉を信頼し、従うことを望みました。それは神が人間に抱いた最初の期待でもあります。神はこの期待をもって、次のように言いました。「あ

なたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。この単純な言葉には神の旨が表されています。そしてまた、神が心の中で人間に対する懸念を抱き始めていたことも示されています。万物のうちで、アダムだけが神の姿に似せて造られ、アダムだけが神の息を吹き込まれた生き物であり、神とともに歩み、神と対話できる存在でした。そのため神はこの命令を人間に与えたのです。神はこの命令の中で、人間が何をしてよいか、そして何をしてはいけないのかを、非常にわかりやすく伝えました。

この単純な言葉から、神の心をうかがい知ることができます。それはどのような心でしょうか。神の心に愛はあるでしょうか。また、懸念はあるでしょうか。これらの節では神の愛と懸念とが認められるだけでなく、それらを強く感じ取ることができます。そういませんか？ わたしがこう言っても、まだこれらを単なる言葉だと思うでしょうか。結局のところ、この言葉はそれほど単純ではないのではないのでしょうか。これまでそのことに気づいていましたか？ もし神があなたに直接これらのことを語ったとしたら、どう感じるでしょうか。もしあなたが人間味のない人で、心が冷え切っているなら、何も感じないでしょうし、神の愛も理解できず、神の心を理解しようとしません。しかし良心と人間味のある人なら、見方は違ったものになります。温かみを感じ、愛され守られていると感じ、また幸せを感じるでしょう。そうではありませんか。そうしたことを感じたら、神に対してどのように行動するでしょうか。神とのつながりを感じるでしょうか。心の底から神を愛し、敬うでしょうか。心は神に近づくでしょうか。このことから、神の愛が人間にとってどれだけ重要かが見て取れるでしょう。しかしさらに重要なのは、人間が神の愛を認識し、それを理解することです。実際、神は働きのこの段階において、似たようなことを多く語ってはいないのでしょうか。今日、神の心を理解している人々はいるのでしょうか。皆さんは、今わたしが述べた神の旨を把握できたでしょうか。これほど具体的で明らかに現実に示されている神の心さえ、皆さんははっきりと認識できずにいます。だからわたしは、皆さんが神についての本当の認識と理解を得ていないと言うのです。そうではないのでしょうか。しかし今はとりあえず、ここまでにしておきましょう。

2) エバの創造

創世記 2:18-20 またヤーウェ神は言われた、「人がひとりではいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」。そしてヤーウェ神は野のすべての獣と、空の

すべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。

創世記 2:22-23 ヤーウェ神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものですから、これを女と名づけよう」。

この箇所には、鍵となる一文があります。「人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった」。ここで、すべての生き物に名前をつけたのは誰でしたか？ それは神ではなく、アダムでした。この一文はある事実を人類に示しています。神は人間を創造したとき、人間に知性を与えました。つまり、人間の知性は神に由来するものだという事です。それは間違いありません。しかし、なぜでしょうか。アダムは神に創造された後、学校へ行ったのでしょうか。アダムは字を読むことができたのでしょうか。神がさまざまな生き物を造った後、アダムはそれらの被造物をすべて認識することができたのでしょうか。神はアダムにそれらの生き物の名前を教えたのでしょうか。もちろん神は、アダムにそれらの生き物の名前をどうつけたらよいかも教えていません。それは事実です。ではアダムは、どうやってそれらの動物に名前をつけ、またどんな名前をつればよいか、どのように知ったのでしょうか。これは神が創造の際に、アダムに何を与えたかという問題に関わっています。神が人間を創造したとき、人間に知性を与えたということは、事実によって証明されています。これは鍵となるポイントなので、よく聞いてください。またもう一つ、理解しておかなければならない重要な点は、アダムが生き物に名前を与えた後、神はそれらの動物を、アダムがつけた名前と呼ぶようになったということです。なぜこれを言うかということ、そのこともまた神の性質に関わっているからです。この点について、さらに詳しく説明したいと思います。

神は人間を創造し、人に息を吹き込み、自らの知恵と能力の一部、そして神が所有するものと神そのものとを人間に与えました。神が人間にこれらのものをすべて与えた後、人間はいくらかのことを自分で行えるようになり、自分で考えられるようになりました。人間が思いつき行うことが、神の目から見て良いものであれば、神はそれを受け入れ、干渉することはありません。人間の行うことが正しければ、神は人間の思うようにさせておくのです。では、「人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった」という言葉は、何を意味しているのでしょうか。それは、神はさまざまな動物に与え

られた名前を変えるべきだとは思わなかったということです。アダムが生き物をどんな名前でも、神はその名前を認め、それをその生き物の名前としたのです。神はここで何か意見を言ったでしょうか？ 一切言いませんでした。このことから何が読み取れるでしょうか。神は人間に知性を与え、人間はその知性を用いて物事を行いました。人間のすることが神の目から見て良いものであれば、神は一切評価や批判をすることなくそれを支持し、認め、受け入れます。これはどんな人間にも、悪霊、すなわちサタンにも絶対にできないことです。ここに、神の性質の現れを見てとることができるでしょうか。人間、墮落した人、あるいはサタンに、誰かが自分の目の前で行ったことを自分の行動として認めることができるでしょうか。もちろんできません。きっとその自分とは別の人物または勢力と、その立場を争って戦うのではないのでしょうか。もちろんそうでしょう。もしあのときアダムと一緒にいたのが墮落した人間かサタンだったなら、彼らは間違いなくアダムのしたことを否定したでしょう。自分が独自に考えられること、独特の見解を持っていることを証明するために、アダムのしたことをすべて否定したはずです。「その名前にしたいと？ いや、わたしならその名前にはしない。わたしはこの名前にする。君はトムと名付けたが、わたしはハリーと呼ぶことにする。わたしは自分がどれだけ利口かを示してみせる」といったふうにです。これはどのような本性でしょうか。恐ろしく傲慢ではありませんか。そして神はどうでしょうか。神にそのような性質はあるでしょうか。神はアダムがしたことに、何かおかしい反対をしたでしょうか。そんなことは一切ありません。神が示す性質には、論争、傲慢、独善などは一切見られないのです。それは明らかです。これは些細なことに見えるかもしれませんが、神の本質を理解せず、神がどのように働きどんな態度を持つかを心から知ろうとしていなければ、神の性質を知ることはできませんし、神の性質の表現や明示を見出すこともできません。そうではありませんか。今説明したことに同意されるでしょうか。神はアダムがしたことに對して、「よくやった、お前は正しいことをした、お前に同意しよう」と壮大に宣言したりはしませんでした。ただ心の中でアダムのしたことを認め、受け入れ、褒め称えたのです。これは人間が創造されてから、神の指示によって行った最初のことでした。人間が神の代理として、神の代わりに行ったのです。神の目から見れば、それは自分が人間に与えた知性によって行われたことでした。神はそれを良いこととして、肯定的に捉えました。このときアダムが行ったことは、神の知性が人間を通して現れた最初の出来事であり、それは神の視点から見て優れた現れだったのです。ここであなたがたに伝えたいのは、神がその所有するものと神そのもの、そしてその知性の一部を人間に授けたのは、人間を神の現れとなる生き物にするためだったということです。こ

のような生きる被造物が神の代理として物事を行うことこそ、まさしく神がずっと見たがっていたことだったのです。

3) 神がアダムとエバのために皮の着物を作られる

創世記 3:20-21 さて、人はその妻の名をエバと名づけた。彼女がすべて生きた者の母だからである。ヤーウェ神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた。

ではこの三番目の節を見ていきましょう。ここではアダムがエバに与えた名前に、実際に意味があるということが語られています。これはアダムが、創造された後に自分の考えを持ち、多くのことを理解していたことを意味します。ただここでは、彼が何をどのくらい理解していたかということについては掘り下げません。それはこの第三の節で取り上げたい点ではありません。ではここで取り上げるポイントとして、次の箇所を見てみましょう。「ヤーウェ神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた」というところです。今日、この聖句の意味するところを掘り下げなければ、あなたたがたはもしかすると一生、この聖句の深い意味合いに気づかないかもしれません。まず、いくつかのヒントを出します。想像を膨らませて、アダムとエバが住んでいるエデンの園をイメージしてみてください。そこへ神がやって来ましたが、彼らは裸だったので隠れます。彼らの姿が見えないため、神が呼びかけると、「お目にかかることができません、わたしたちは裸ですから」という答えが返ってきました。彼らは裸だったため、神に会おうとしなかったのです。このときヤーウェ神は彼らに何をしたでしょう。原文にはこう書いてあります。「ヤーウェ神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた」。ここから、神が何の素材で人間の服を作ったかわかるでしょうか。神は動物の皮を使って人間の服を作りました。つまり神は毛皮のコートを作り、人間に服として着せたのです。これが、神が人間のために最初に作った服です。毛皮のコートというのは今日では高級品で、誰でも着られるものではありません。もし誰かに、「人間の祖先が最初に身に着けた衣類は何だったか」と聞かれたら、「毛皮のコート」と答えればよいでしょう。「誰がその毛皮のコートを作ったのか」と聞かれたら、「神が作られた」と答えればよいのです。これがここでの重要なポイントです。この服は神によって作られたものでした。これは注目に値することではないでしょうか。説明を聞いて、心にイメージが浮かんだでしょうか。少なくとも大まかには想像できたと思います。今日このことをお話しするのは、人間の最初の衣類が何だったかを伝えるためではありません。では要点は何でしょうか。それは毛皮のコートではなく、神がここでの行いに

よって表されたような、神の性質、神が所有するもの、神そのものを、人がどうやって知るかということなのです。

「ヤーウェ神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた」。ここで、アダムとエバと共にいる神は、どんな役割を果たしているのでしょうか。人間が二人しかいないこの世界で、神は自らをどのように現しているのでしょうか。それは神という役割でしょうか。香港の兄弟姉妹よ、答えてくれませんか。（親としての役割。）では韓国の兄弟姉妹よ、神はどのような役割で現れていると思いますか。（家族の長。）台湾の兄弟姉妹は、どう思いますか。（アダムとエバの家族の一人、つまり家族の一員としての役割。）すると、神がアダムとエバの家族の一員として現れていると思う人もいれば、家族の長として現れているという人も、また親として現れていると思う人もいるわけですね。そうした答えはいずれも適切です。しかし、わたしが言わんとしていることは何だかわかるでしょうか。神はこの二人の人間を創り、二人を自身の友として扱いました。二人の唯一の家族として、神は彼らの生活を見守り、食物や衣類、住居の世話をしたのです。ここでは神は、アダムとエバの親として現れています。このとき、人は神がどれだけ高尚であるかを目にせず、神の至高、その神秘、そして特にその怒りや威厳を見ることはありませんでした。人が見たのは、神の謙遜、慈しみ、人間への思い、そして人間に対する責任感と配慮です。神の態度やアダムとエバの扱い方は、親が自分の子供を気遣うのに似ています。また親が自分の息子や娘を愛し、世話をし、面倒を見るのにも似ており、その情は本物で目に見える具体的なものです。神は自らを高尚な威厳ある者として位置付けるのではなく、自分で動物の皮を使って人間のために衣服を作ったのです。その毛皮のコートが、裸の身体を覆うためであったか、寒さから守るためであったかは問題ではありません。重要なのは、人間の体を覆うこの衣服を、神が自らの手で作ったということです。神は人間が想像するように、ただ思考だけで衣服を生み出したり、その他の奇跡的な方法で作ったりしたのではなく、むしろ人が神にはできない、するべきないと考えるような方法で作ったのです。これは些細なことに見えるかもしれませんが、あえて語る必要もないと思う人もいるかもしれません。しかし神に従いながらも、神について曖昧なイメージしか持てずにいた人たちは、この箇所を見ることで、神の純粋さや魅力を知り、その誠実さと謙遜を見てとることができます。そして自分が偉く力のある存在だと考えているどうしようもなく高慢な人たちは、神の純粋さと謙遜の前に恥じ入り、自惚れていたその頭を下げることになります。さらにここで現されている神の純粋さや謙遜を通して、人は神の魅力を知るようになるのです。それに比べると

、人が心に抱いている「強大な」、「愛すべき」、「全能の」神は、矮小で醜い、吹けば飛び散る塵のようなものになってしまいます。この節を読み、この物語を聞いて、皆さんはこんなことをした神を見下すでしょうか。そういう人もいるかもしれませんが、その他の人々にとってはまったく逆で、神が真実で愛すべきものに思えることでしょう。人々の心を動かすのは、まさに神の純粋さと愛すべき性質なのです。人は神の真実の側面を知れば知るほど、神の愛の实在、心の中に存在する神の重要性、そして神がどんなときも自分に寄り添ってくれることを、強く認識できるようになるのです。

ではここで、話を現在とつなげてみましょう。神がこのような初期に、自らが創造した人間に対し、このようにさまざまな小さなこと、人間がまったく考えも予想もしなかったようなことまでしてくれるのなら、今日の人々に対しても、神はそんなことができるのでしょうか。「もちろんだ!」と言う人もいるでしょう。それはなぜでしょうか。それは神の本質が偽物ではなく、神の魅力も偽物ではないからです。神の本質は真に存在しており、他者によって付け足されるものではなく、時間や場所、時代によって変わるものでも決してないからです。神の純粋さや魅力は、人間が注目に値するとも重要だとも思わない行為によってのみ、真に表されるのです。それは非常に些細なことで、神がするとはとても思えないようなことです。神は偉ぶってはいません。神の性質や本質の中には、誇張、偽装、高慢、傲慢などというものは存在しません。神は決して自慢することなく、自身が創造した人間を愛し、配慮し、世話をし、忠実に誠意をもって導きます。人々がどれほどこのことを認識し、感じ、理解していなかろうとも、神は間違いなくそうしています。神がそんな本質を持っていると知ること、人々の神への愛に影響があるでしょうか。神への畏れに影響があるでしょうか。わたしはあなたが神の本当の側面を理解することで、神にますます近づき、神の人間への愛と配慮をより深く理解できるようになるとともに、神に心を捧げ、神に対する疑いもいぶかりも持たなくなることを願っています。神は人間のためにすべてのことを静かに行っており、すべてを誠意と忠実と愛を通して無言で行っています。しかし自らの行うことについて、不安を持ったり後悔したりすることは一切なく、また人間から何らの見返りを必要とすることもなく、人間から何かを得ようとする意図も一切ありません。神がこれまでに行ったすべてのことの唯一の目的は、人間の真の信仰と愛を受け取ることです。これで、1つ目のテーマを終わりにしたいと思います。

これらの話は役に立ったでしょうか。どのように役立ちましたか? (神の愛についてより深く知り、理解することができました。)(このような交わり方は、将来わたした

ちが神の御言葉をよりよく認識し、神の持っておられた感情と、神が語られた言葉の背後にあった意味を深く理解し、そのとき神がどんなふう感じていたのかを感じ取るのに役立つと思います。) こうした言葉を読んで、神の実際の存在がさらに強く感じられるようになった人はいますか？ 神の存在がもう虚ろでも曖昧でもなくなったと感じますか？ そう感じるようになったなら、神があなたの傍らにいてることを感じられるでしょうか。もしかすると、今はまだその感覚がはっきりしなかったり、まだ感じる事ができなかったりするかもしれません。しかしいつの日か、心に神の性質と本質についての深い理解と本物の認識を持てるようになると、神が自分の傍らにいてることを感じられるようになります。単にこれまでは一度も、心の中に神を真に受け入れてこなかっただけです。それが真実なのです。

このような交わり方をどのように思うでしょうか。ついて来れていますか？ 神の働きとその性質というテーマでのこのような交わりは、とても重いと思われるでしょうか。どのように感じますか。(とてもよいです。わくわくします。) 何がよいと感じたのでしょうか。なぜわくわくするのでしょうか。(エデンの園に戻って、神の側にいるようでした。)[神の性質]というのは実際、皆にとってあまり馴染みのないテーマです。普段あなたが想像したり、本で読んだり、交わりの中で聞いたりすることは、盲人が象を触るような気分させることが多いからです。つまり手探りするだけで、実際あなたの目では何も見ていないということです。闇雲に手探りするだけでは、神について大まかに理解することもできず、ましてやはっきりした概念を持つことなどできません。ただますます想像をかき立てられ、神の性質や本質を正確に定義することはできなくなります。そして想像から生まれる不安は、必ず心を疑いで満たします。何かについて確信が持てず、それでもそのことを理解しようとするとき、心にはいつも矛盾と葛藤が生まれ、時には混乱すら生じ、困惑して途方にくれることになります。神を追い求め、神を知り、神をはっきり見たいと願いつつも、永遠に答えが見つからないように感じるのは苦痛なことではないでしょうか。もちろんこうした言葉は、畏れつつ神を崇め、神を満足させることを願う人々だけに向けたものです。そうしたことにまったく関心のない人たちには、実際これは問題ではありません。彼らにとっては、神の現実性と存在とは単なる伝説や幻想であることが最も望ましいからです。そうであれば自分のしたいことが何でもできるし、自分が最も偉大で重要な存在となれるだけでなく、結果を気にせず悪事を行うことができるし、懲罰を受けたり責任をとったりする必要もなく、神が悪を行う者について言うことさえ自分たちには当てはまらなくなるからです。そのような人

々は、神の性質を理解する気はありません。彼らは神を知ろうとすることや神に関するすべてにうんざりしており、神が存在しないほうがよいと思っています。このような人々は神に敵対しており、淘汰される者たちなのです。

では次は、ノアの物語と、それがこの「神の働き、神の性質、そして神自身」とどのように関係するかを見ていきましょう。

この聖書の箇所では、神はノアに何をしていますでしょうか。おそらくここにいる全員が、少しはそれを読んだことがあるでしょう。神はノアに箱舟を作らせ、その後洪水によって世界を滅ぼしました。神はノアに箱舟を作らせてノアの八人の家族を救ったため、彼らが生き残り、次世代の人類の祖先となったのです。では聖書を読んでいきましょう。

2. ノア

1) 神が世界を洪水で滅ぼそうと考え、ノアに箱舟を作るように命じる

創世記 6:9-14 ノアの系図は次のとおりである。ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。ノアはセム、ハム、ヤペテの三人の子を生んだ。時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた。神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからである。そこで神はノアに言われた、「わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。彼らは地を暴虐で満たしたから、わたしは彼らを地とともに滅ぼそう。あなたは、いとすぎの木で箱舟を造り、箱舟の中にへやを設け、アスファルトでそのうちそとを塗りなさい」。

創世記 6:18-22 「ただし、わたしはあなたと契約を結ぼう。あなたは子らと、妻と、子らの妻たちと共に箱舟にはいりなさい。またすべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二つずつを箱舟に入れて、あなたと共にその命を保たせなさい。それらは雄と雌とでなければならぬ。すなわち、鳥はその種類にしたがい獣はその種類にしたがい、また地のすべての這うものも、その種類にしたがって、それぞれ二つずつ、あなたのところに入れて、命を保たせなさい。また、すべての食物となるものをとって、あなたのところにたくわえ、あなたとこれらのものとの食物としなさい」。ノアはすべて神の命じられたようにした。

このくだりを読んで、ノアという人物についてはほぼ理解できたでしょうか。ノアはどのような人物でしたか？ 聖書にはこう書かれています。「ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった」。現代の人々の理解からして、当時の「正しい人」

とはどんな人だったのでしょうか。正しい人とは、完全な人であるはずです。その完全な人というのは、人間の目から見て完全なののでしょうか、それとも神の目から見て完全なののでしょうか。ここでいう完全な人とは間違いなく、神の目から見て完全な人であり、人の目から見て完全な人ではありません。それは確かなことです。なぜなら人間は盲目で見ることができず、神だけが全地を見渡し人間一人一人を見ているのであり、神だけがノアが完全な人だと知っていたのです。したがって、洪水で世界を滅ぼすという神の計画は、神がノアを召し出したときから始まっていたのです。

その時代、神はノアにとっても重要な仕事をさせようと考えました。なぜそうしなければならなかったのでしょうか。それはそのとき、神の心の中に計画があったからです。その計画とは洪水で世界を滅ぼすことでした。なぜ世界を滅ぼすのでしょうか。聖書にはこう書かれています。「時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた」。この「暴虐が地に満ちた」という部分から、何が見て取れるのでしょうか。それは世界とそこに住む人々がこれ以上ないほど墮落していたという事実であり、それが「暴虐が地に満ちた」という当時の状況です。今日の言葉で言えば、「暴虐が地に満ちた」とはすべてのことがおかしくなっているということです。人間にとっては生活のあらゆる側面で、秩序らしきものがすべて失われており、すべてが混沌として手がつけられなくなっていたのです。そして神の目から見れば、それは世の人間が墮落しすぎていたということです。どれほどの墮落だったのでしょうか。それは神がもはや目も当てられないほど、忍耐の限界を超えるほどの墮落であり、神が滅ぼそうと決めたほどの墮落です。神は世界を滅ぼすと決めたとき、誰かに箱舟を作らせることを計画しました。そしてその人物としてノアを選び、ノアに箱舟を作らせました。なぜ神はノアを選んだのでしょうか。神の目にはノアは正しい人であり、神がどんな指示を出してもそれに従いました。つまりノアは、神の言うことなら何でも進んで行ったのです。神はそのような人を見つけて、自分と共に働かせ、委ねた仕事を完了させて、地上での自らの働きを完成させたいと思っていました。当時、ノア以外にこのような仕事を成し遂げられる者がいたのでしょうか？ まったくいませんでした。ノアが唯一の候補者であり、神が委ねた仕事を完成させることのできる唯一の人間だったため、神はノアを選んだのです。しかし今日、人々を救うにあたっての神の制限や基準は、当時のものと同じでしょうか。その答えとしては、間違いなく違いはあります。なぜこの質問をするのかというと、当時ノアは神の目から見て、「唯一の」正しい人間でした。それはつまり、彼の妻も息子たちも息子の妻たちも、誰一人正しい者ではなかったことを意味しますが、それでも神はノアのために彼らを生

かしました。神は今日の人々に対するような要求を彼らにつきつけることはせず、ノアの八人の家族全員を生かしたのです。ノアの家族は、ノアの義のために神の祝福を受けました。ノアがいなかったら、誰も神が委ねた仕事を全うすることはできなかったでしょう。したがって、本来はノアだけが世界の破滅を逃れられる者だったのであり、他の者は単にそのおこぼれに与ったのです。このことから、神が正式に経営の働きを開始する前の時代には、神が人間を扱った原則と基準、そして人間に求めた原則と基準が、相対的に緩いものだったことがわかります。今日の人々からすれば、ノアの家族に対する神の扱いは公平さに欠けるように見えます。しかし神が今日の人々に対して行っている膨大な働きと、現在伝えている膨大な量の言葉に比べれば、ノアの八人家族に対する扱いは、単に当時の神の働きを背景とする働きの原理に従ったものでした。ノアの八人の家族と今日の人々を比較した場合、どちらがより多くを神から受けとっているのでしょうか。

ノアが召し出されたことは単純な事実ですが、わたしたちの話の要点、すなわちこの聖書のくだりに現れている神の性質、神の旨、神の本質は、それほど単純なものではありません。これらの神の側面を理解するためには、まず神が召し出したいと思うのはどんな人物なのかを理解してから、それを通して神の性質、旨、そして本質を理解しなければなりません。このことは非常に重要です。では神の目から見て、召し出される人物とはどんな人物だったのでしょうか。それは神の言葉を聞くことができ、指示に従うことができる人物に違いありません。また同時に、責任感があり、神の言葉を自分の果たすべき責任かつ義務とみなして遂行できる人物であるはずです。ではその人物は、神を知っている必要があるのでしょうか。そうではありません。当時ノアは、神の教えをあまり聞いておらず、神の働きも経験していませんでした。そのためノアは神のことをほとんど知らなかったのです。この聖書のくだりには、ノアが神と共に歩んだとありますが、ノアは神の本体を見たのでしょうか。まったく見ていません。なぜならこの時代には、神の使いだけが人々の中にやって来たからです。使いたちは言葉や行いの中で神を表すことはできましたが、ただ神の旨とその意図を伝えているに過ぎませんでした。神の本体が人間に対して直接明らかにされることはなかったのです。この聖書のくだりに見ることはできるのは、基本的にこのノアという人物に与えられた仕事は何だったのか、そして神のノアに対する指示はどんなものだったのかということだけです。では、ここで現された神の本質とはどんなものだったのでしょうか。神のすることはすべて緻密に計画されています。神が物事や状況を見るとき、神の目にはそれを測る基準があり、その

基準によって神は、その物事や状況に対応するための計画を開始するか、またはどのようなやり方でそれを扱うかを決定します。神はあらゆる物事に対して、無関心だったり無感情だったりすることはなく、実際まったくその逆です。この聖書のくだりでは、神はノアにこう言っています。「わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。彼らは地を暴虐で満たしたから、わたしは彼らを地とともに滅ぼそう」。ここで神は、人間だけを滅ぼすと言っているのでしょうか。そうは言っていない。神は肉なるものをすべて滅ぼすと言っているのです。なぜ神は滅ぼそうとしたのでしょうか。ここに、神の性質の現れをもう1つ見て取ることができます。神にとっては、人間の墮落とすべての肉なるものの汚れ、暴力、不従順に対して、忍耐できる限界があります。その限界とは何でしょうか。神はこう言っています。「神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからである」。この「すべての人が地の上でその道を乱したからである」という部分は何を意味するのでしょうか。それは、神に従った者、神の名を呼んだ者、かつて神に全焼のいけにえを捧げた者、言葉で神の存在を認め賛美さえした者も含め、生きとし生けるすべての者は、その態度が墮落に満ちそれが神の目に触れれば、神によって滅ぼされずにいられないということです。それが神の忍耐の限界でした。ではどの程度まで神は人間に耐え、すべての肉なるものの墮落に耐えたのでしょうか。それは神に従った者もそうでない者も、すべての者が正しい道を歩まなくなるまでです。人間が単に道徳的に墮落し悪に満ちるだけでなく、誰一人として神の存在を信じなくなり、ましてや神が世界を支配していることや人々に光を与え正しい道へと導けることを、信じるものが一切いなくなるまでです。そして人間が神の存在を憎み、神の存在を認めなくなるまでです。人間の墮落がここまで来ると、神はもう忍耐できませんでした。ではその状態は何に取って代わられたのでしょうか。それは神の怒りと懲罰の到来です。それもまた、神の性質の部分的な現れではなかったのでしょうか。現在この時代に、神の目から見て正しい者はいないのでしょくか。神の目から見て完全な者はいないのでしょくか。今の時代は、地上の肉なる者すべての振る舞いが、神の目に墮落と映る時代なのでしょくか。現代では、神が完全にしたいと望む者、神に従い神の救いを受け入れられる者を除けば、すべての肉なる人々が神の忍耐の限界に達しているのではないでしょくか。あなたがたの身の回りで起こること、目で見ても耳で聞くこと、この世で日々体験することは、すべて暴虐に満ちてはいないのでしょくか。神の目には、このような世界、このような時代は、もう滅ぼされるべきものなのではないでしょくか。今の時代背景はノアの時代背景とまったく違いますが、人間の墮落に対する神の感情と怒りはまったく同じです。神はその働きのために忍耐を持つことができますが、状況や条件を

鑑みれば、神の目にはこの世界はとうの昔に滅ぼされているべきものなのです。今の世界の状況は、洪水で滅ぼされる前の世界よりもはるかにひどいものです。では、当時と今の違いは何でしょうか。それもまた、神の心を最も悲しませていることであり、おそらくあなたがたの誰も理解できないことなのです。

神が洪水で世界を滅ぼしたとき、神はノアを召し出し、箱舟を作らせ、備えをさせることができました。神はノアという一人の人間を召し出し、自らのためにこのような働きをさせることができました。しかし今の時代には、神が召し出せる者は誰もいません。なぜでしょうか。ここにいる人たちは皆、その理由をよくわかっていることと思います。説明が必要でしょうか。あえて言葉にすれば、あなたがたの顔をつぶし、悲しませてしまうかもしれません。人によってはこのように言うかもしれません。「わたしたちは神の目にあって正しい者ではなく、完璧な者でもないが、それでも神がわたしたちに何かを命じるなら、その命令を実行する力はある。以前、神が大災害が来ると言われたとき、わたしたちはその時に備えて、食料など必要なものを準備し始めた。これはすべて、神の要求に応えたことではないのか。わたしたちは本当に神の働きに協力していなかったのか。わたしたちがしたことは、ノアのしたこととは比べられないのか。わたしたちが行ったことは真の従順ではないのか、神の命令に従ったのではないのか。わたしたちは神の言葉を信じているからこそ、神の言うとおりにしたのではないか。だとすればなぜ、神はまだ悲しんでいるのか。なぜ神は、召し出せる者がいないと言われるのか」と。では、あなたがたが行ったこととノアが行ったことに違いはあるのでしょうか。どのような違いがあるのでしょうか。（来る災害に備えて食べ物を準備したのは、自分自身の意思でした。）（ノアは神の目から見て正しい人でしたが、わたしたちの行いは「正しさ」には届きません。）あなたがたの言ったことは、さほど外れてはいません。ノアが行ったことは、今日の人々がしていることとは実質的に異なります。ノアが神に指示されたことを実行したとき、ノアは神の意図を知りませんでした。神が何を成し遂げようとしているのかを知らなかったのです。神はただノアに命令を与え、すべきことを伝えただけで、ノアは大した説明も受けず、ただ言われたとおりに実行しました。ノアは神の意図を自分なりに理解しようとしたりせず、神に抗ったり、不誠実になったりもしませんでした。ただ純粹で無垢な心で、神の指示に従ったのです。神がノアにしよう告げたことを、ノアはすべて行いました。神の言葉を聞きそれに従順に従うことは、ノアがその行いに信念を持っていることを証明していました。ノアはそのようにまっすぐにかつ単純に、神に委ねられたことを行いました。彼の本質、すなわち彼の行動の本質

は従順であり、先読みしたり、拒否したりせず、自分の個人的な利益や損得を考えることもありませんでした。そしてさらに、神が洪水で世界を滅ぼすと言ったとき、ノアはそれがいつかと聞いたり、物事がどうなるのかと尋ねたりせず、もちろん神がどのように世界を滅ぼすのかも聞きませんでした。ノアはただ、神が命じたことをそのとおりに行ったのです。箱舟を何でどのように造るかについても、ただ神の指示通りにし、しかも即座にとりかかりました。ノアはただ神を満足させたい一心で、神の指示に従ったのです。自分が災害から逃れるためにそうしたのでしょうか？ いいえ。あとどのくらいで世界が滅ぼされるのかと神に尋ねたのでしょうか？ いいえ、そんなこともしませんでした。箱舟を作るのにどれくらい時間がかかるかと神に尋ねたのでしょうか、またはそれを知っていたのでしょうか？ ノアはそれも知りませんでした。彼はただ従い、耳を傾け、言われた通りにしたのです。今日の人々はそうではありません。神の言葉から少しでも情報が漏れたり、風の中で木の葉の擦れる音が聞こえたりしただけで、彼らは即座に行動を起こします。何があろうと、どんな代価を払おうと、災害後に必要な食べ物や飲み物その他を準備し、災害が来たときの避難経路さえ計画します。さらに興味深いのは、このような重大なとき、人間の脳は非常にうまく「仕事を成し遂げる」ものなのです。神が何の指示も与えていない状況では、人間はすべてを非常に的確に計画できます。そのような計画については「完璧」という言葉も大げさではないほどです。しかし神の言うことや神の意図が何であるか、神が何を望むかについては、誰も気にかけず、知ろうともしません。これこそがノアと、今日の人々の最大の違いではないのでしょうか。

このノアの物語から、神の性質の一部を見て取ることができるのでしょうか。人間の墮落、汚れ、そして暴虐に対する神の忍耐には限界があります。その限界に達すると、神はもう耐えることはせず、新しい経営と新しい計画を開始し、しなければならないことをし始め、神の偉業とその性質のもう一つの面を現すのです。神のこの行いは、人が神を決して怒らせてはいけないとか、神が権威と怒りに満ちているということを示すためではなく、神が人間を滅せると示すためでもありません。ただこのような人間が自らの前で、自らの支配の下で生きていることを、神の性質とその聖い本質がそれ以上許せず、それ以上耐えることもできないのです。つまり、すべての人間が神に敵対したとき、地上で神が救うことができる人間がいなくなったとき、神はそのような人間に対し忍耐することをやめ、一切の躊躇なく、そのような人間を滅ぼす計画を実行するのです。こうした神の行動は神の性質によるところなのです。それは必然の結果であり、神の支配の下にあるすべての被造物がこれに耐えなければなりません。このことから、神はこの

現代において、自らの計画を全うし救いたい人々を救うのを待ちきれずにいるとわかるのではないのでしょうか。このような状況で、神が最も気にしていることは何でしょうか。それは神にまったく従わない者たちやいずれにせよ反抗する者たちが、どのように自身を扱い抵抗するかということでもなければ、人間がどのように神を中傷しているかということでもありません。神が気にかけているのはただ、自身に従う者たち、すなわち神の経営計画において救いの対象となる人々が完成されているかどうか、満足できる者になっているかどうかということなのです。神に付き従う者以外に対しては、ただ時々多少の懲罰を与えてその怒りを示すだけです。これがたとえば津波、地震、火山噴火などです。そして同時に、神は自分に従う者たちと、まもなく救われる者たちを強く保護し見守っています。神の性質とは、自分が完全にしようとしている人々には桁違いの忍耐と寛容さを示し、可能な限り待ち続けることができる一方で、自分に付き従わず敵対するサタンの輩は激しく忌み嫌うというものです。神はそうしたサタンの輩が自分に従ったり崇拜したりするかどうか気にはしませんが、それでも彼らを忌み嫌っており、同時に心の中では彼らに対する忍耐を持っています。そしてこうしたサタンの輩の最後を決定しつつ、自らの経営計画の新たな段階が到来するのを待っているのです。

では次の箇所を見ていきましょう。

2) 神が洪水後にノアに与えた祝福

創世記 9:1-6 神はノアとその子らとを祝福して彼らに言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ。地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。さきに青草をあなたがたに与えたように、わたしはこれらのものを皆あなたがたに与える。しかし肉を、その命である血のままで、食べてはならない。あなたがたの命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであろう。いかなる獣にも報復する。兄弟である人にも、わたしは人の命のために、報復するであろう。人の血を流すものは、人に血を流される、神が自分のかたちに人を造られたゆえに」。

この箇所からどんなことがわかるのでしょうか。なぜわたしがこの箇所を選んだのだと思いますか？ なぜ、ノアとその家族の箱舟での生活の様子を抜粋しなかったのでしょうか。それは今日のテーマが、箱舟の生活の様子とはあまり関係がないからです。今わたしたちは神の性質に注目しています。箱舟での生活についての詳細を知りたいければ、自分で聖書を読んでみてください。ここではその話はしません。今日ここで扱うおもな点は、神の行いをどのように知るか、ということなのです。

ノアが神の指示を受けて箱舟を作り、神の洪水による世界の滅びを生き抜いた後、ノアの八人家族は全員生き延びました。ノアの家族八人を除いては、すべての人間が滅ぼされ、地上のすべての生き物も滅ぼされました。神はノアに祝福を与え、ノアとその息子たちにいくつかのことを語りました。その言葉は神がノアに授けたものであり、ノアへの祝福でもありました。それは神の言葉に耳を傾け、その指示を受け入れることができる者に与えられる祝福と約束であり、また神が人々に報いる方法でもあります。つまり、ノアが神の目から見て完全な人だったか、または正しい人だったかに関わらず、そしてノアが神についてどれだけ知っていたかにも関わらず、端的に言えばノアと三人の息子たちは皆ただ神の言葉を聞き、神の働きに協力し、神の指示に従ってすべきことをしたのです。その結果として彼らは、世界が洪水によって滅ぼされた後、人間とさまざまな生き物を神のために生き長らえさせ、それによって神の経営計画の次の段階に大きく貢献したのです。神はノアが行ったすべてのことのために、彼を祝福しました。今日の人々にとって、ノアがしたことは語るにも価しないかもしれません。人によっては、ノアは何もしなかった、神はノアを生き残らせるよう決めていたのであって、彼はいずれにせよ助かることになっていたのだ、とさえ思うかもしれません。ノアが生き延びたのは彼自身の貢献によるものではない、人間は受動的なのだから、ただ神がそうしようと思っただけのことだ、と。しかしそれは、神が考えていたこととは違います。神からすれば、その人が偉大な者であってもなくても、神の声を聞き、神の指示と委ねられる任務に従い、神の働きと旨と計画に協力し、神の旨と計画が円滑に達成されるようにできるなら、その行いは神に記憶され、神の祝福を受けるに値するのです。神はそのような人々を大切にし、彼らの行動や神への愛と思いを慈しみます。それが神の姿勢です。なぜ神はノアを祝福したのでしょうか。それは神が、人のこのような行動と従順をそのように扱うからです。

ノアに対する神の祝福については、次のように言う人もいますでしょう。「人が神に従い、神を満足させるなら、神は人を祝福するだろう。それは当たり前のことではないか」と。そのように言えるでしょうか。「そうは言えない」と言う人もいます。なぜでしょうか。「人間は神の祝福を享受するに値しないからだ」と言われることがあります。それは完全には正しくありません。なぜなら神が委ねるものを人が受け入れたとき、神はその人の行動の良し悪しと、その人が従ったかどうか、神の旨を満足させたかどうかを判断する基準を持っており、そして彼らの行いがその基準を満たすかどうかを判断するのです。神が問題とするのはその人の心であり、表面的な行動ではありません。

人が何かをしさえすれば、どのようなやり方をしようと祝福されるべきだということはありません。それが人々の神に対する誤解です。神は物事の最終結果だけを見ているのではなく、むしろ物事の経過の中で人の心がどうであるか、その態度がどうであるかということに重きを置き、彼らの心に従順、配慮、そして神を満足させたいという願いがあるかどうかを見ているのです。当時、ノアは神についてどれほど知っていたのでしょうか。今皆さんが知っているのと同じくらい、多くの教義を知っていたのでしょうか。神の概念や認識などという真理の側面についていえば、ノアはあなたがたほど潤され、導かれていたのでしょうか。そうではありませんでした。しかし否定できない事実がひとつあります。今日の人々の意識や精神、さらに心の奥底にある神の概念や神への態度というものは、ぼんやりとした曖昧なものです。一部の人々は神の存在についてさえ消極的な態度をとっています。しかしノアの心との意識の中では、神の存在は絶対的であり、疑う余地のないものでした。そのためノアの神への従順は混じりけがなく、試みに耐えるものだったのです。ノアの心は純粹で、神に対して開かれていました。ノアは大した教義の知識も求めることなく、神の一つひとつの言葉にただ納得して従い、また神の存在を証明する多くの事実も必要とせずに、ただ神が委ねた任務を受け入れ、神が与える仕事は何でも行いました。これがノアと今日の人々の根本的な違いです。そしてまた、これこそが神の目から見て完全な人とはどんな人かの真の定義なのです。神が欲するのはノアのような人々です。ノアは神が称賛する類の人であり、まさしく神が祝福する類の人なのです。このことから何らかの啓きを受けられたのでしょうか。人はうわべで人を判断しますが、神は人の心と本質とを見えています。神は人が自らに対していい加減な心や疑いを持つことを許さず、いかなる方法で自らを疑うことも試みることも許しません。そのため今日の人々は、神の言葉と直接向き合っており、神と直接向き合っているとさえ言えるかもしれませんが、その心の奥底にあるものとその墮落した本質の存在、そしてその神に敵対する態度のため、神への真の信仰を持つことが妨げられており、神に従順になれずにいるのです。そのために、ノアに授けられた祝福と同じ祝福を得ることは非常に難しいのです。

3) 神が人間との契約のしるしとして虹を見せる

創世記 9:11-13 「わたしがあなたがたと立てるこの契約により、すべて肉なる者は、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅ぼす洪水は、再び起らないであろう」。さらに神は言われた、「これはわたしと、あなたがた及びあなたがたと共にいるすべての生き物との間に代々かぎりなく、わたしが立てる契約のしるしである。す

なわち、わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる」。

次に、神が人間との契約のしるしとして虹を見せたというくだりを見ていきましょう。

ほとんどの人は虹が何かを知っていますし、虹に関係する物語をいくつか聞いたことがあります。聖書の虹についての物語は、信じる人もいれば伝説として捉える人もあり、まったく信じていない人々もいます。いずれにしても、虹に関係して起こったすべての出来事は神の働きであり、神による人の経営の過程で起こったことです。これらの出来事は聖書に明確に記述されています。そうした記述には、当時神がどんな気持ちだったのかや、それらの言葉の背後にある神の意図については説明されていません。そしてさらに、神がそれらの言葉を言ったとき何を感じていたかは誰にもわかりません。しかしこの出来事全体に関する神の心境は、行間に現れています。まるで神の当時の考えが、その一つひとつの言葉や言い回しを通してページから飛び出てくるようです。

人々は神の考えを心に留めるべきであり、最優先に知ろうと努めるべきです。なぜなら神の考えは人間による神の理解と密接に関係しており、人間による神の理解は、人間によるいのちの入りと切り離すことができないからです。それではこれらの出来事が起こったとき、神は何を考えていたのでしょうか。

当初、神は人間を、神の目から見て非常に良く、自らと親密なものとして創造しました。しかし人類は神に反抗し、洪水によって滅ぼされました。そのような人間がこのように一瞬で消えてしまうことは、神を悲しませたのでしょうか。もちろんです。では神によるこの苦痛の表現はどんなものだったのでしょうか。聖書の記述にはどうあるのでしょうか。聖書には次のようにあります。「わたしがあなたがたと立てるこの契約により、すべて肉なる者は、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅ぼす洪水は、再び起らないであろう」。このシンプルな文章が、神の思いを表現しています。この世界の破壊は神に大きな苦痛を与えました。人間の言葉で言えば、神はとても悲しかったのです。想像してみてください。かつて生命で満ち溢れていた地上は、洪水によって滅ぼされた後どんな姿だったのでしょうか。かつて人で満ちていた地上は、当時どんな姿になったのでしょうか。人の住居もなく、生物もなく、地は水で満ち、水面はひどい惨状です。そんな光景が、世界を創造した当初、神が思い描いたものだったのでしょうか。もちろん違います。神の当初の考えは、地の至るところに生命が溢れ、自らが創造した人間が自分を崇拝する世界を見ることでした。ノアだけが自分を崇拝し、ノアだけが自分の

召し出しに応えて委ねられた任務を全うできるような世界ではありませんでした。人類が一掃されたとき、神が見たものは自らが当初意図したものではなく、それと真逆のものでした。これで神の心が痛まないことがあるでしょうか。そのため神は、自身の性質を現し自身の感情を表したとき、ある決断をしました。それはどんな決断だったのでしょうか。人間との契約として、雲の中に弧（つまりわたしたちが見る虹）をかけたのです。それは神が二度と洪水によって人類を滅ぼさないという約束でした。そして同時に、神が一度世界を洪水によって滅ぼしたことを人間に伝え、なぜそんなことをしたのかを永遠に思い出させるためでもありました。

当時の世界の滅びは、神が望んだことだったのでしょうか。それは決して神が望んだことではありませんでした。わたしたちは世界が滅んだ後の地上の痛ましい光景をわずかに想像できるかもしれませんが、当時それが神の目にどのように映ったかは、想像の及ぶところではありません。当時の人にも今日の人にも、神がその光景、すなわち洪水で滅んだ後の世界を見たときの感情を、想像したり理解したりできる者は誰もいないでしょう。神は人間の不従順のためにそうせざるを得なかったのですが、この洪水による世界の滅びによって引き起こされた神の心の痛みは、人間には計り知れないものです。そのため神は人間と契約を結び、神が一度このようなことをしたことを思い出させるとともに、二度とこのような方法で世界を滅ぼすことはしないと彼らに誓ったのです。この契約から、神の心を見てとることができます。神が人類を滅ぼしたとき、その心が痛んでいたということを。人間的な言い方をすれば、神が人類を滅ぼして地上から人間が消えるのを見たとき、神の心は嘆き、血を流したのです。これが最適な表現ではないでしょうか。こうした言葉は人が人の感情を表すために用いるものですが、人間の言葉は不十分すぎるため、それを用いて神の感情を説明してもさほど悪くはなく、行き過ぎでもないと思います。少なくとも当時の神の心境がどんなものだったかについて、非常に生き生きとした適切な理解を得ることができるでしょう。今後また虹を見たとき、皆さんは何を思うでしょうか。少なくとも、神が洪水で世界を滅ぼしたときにどれほど悲しんだかを思い出すことでしょう。神がこの世界を憎み、人間を忌み嫌いはしたものの、自らの手で創造した人間を滅ぼしたときどれほど心が痛み、滅ぼすことを惜しみ、ためらい、耐え難く感じたかを思い出すことでしょう。神の唯一の慰めはノアの八大家族でした。ノアの協力があったからこそ、神の丹精込めた万物の創造は無駄にならずにすんだのです。その事実は、神が苦しんでいたとき、その痛みを和らげることのできる唯一のものでした。それ以降、神は人間へのすべての期待をノアの家族に託し、彼らが神の呪

いではなく祝福の下で生きるように、二度と世界が洪水で滅ぼされるのを見ないように、そして彼ら自身も滅ぼされないようにと望んだのです。

ここからわたしたちは、神の性質のどんな面を知るべきでしょうか。神は人間が自らに敵意を抱いたため、人間を忌み嫌いましたが、その心の中にある人間への思い、配慮、憐れみは変わることがありませんでした。人間を滅ぼしたときでさえ、神の心は変わらなかったのです。人間が墮落に満ち、嘆かわしいほど神に不従順だったとき、神は自らの性質と本質のため、そして自らの原則を守るために、その人間を滅ぼさなければなりませんでしたが。しかしその本質のため、神はそれでも人間を憐れんでおり、人間が生き続けられるよう、さまざまな方法で人間を救いたいとすら願っていました。しかし人間は神に反逆し、神に背き続け、神の救いを受け入れることを拒みました。つまり、神の善意を受け入れることを拒んだのです。神がどれほど人間に呼びかけ、言い聞かせ、与え、助け、寛容に接しても、人間はそのことを理解も感謝もせず、注意を払いもしませんでした。神は苦しみつつも、最大限の寛容さを与えることを忘れず、人間が心を改めるのを待ちました。そして限界に達したとき、神は自らが行わねばならないことを迷いなく行ったのです。言い換えれば、神が人間を滅ぼすことを計画したときから、実際に人間を滅ぼす働きを始めるまでには、一定の期間と過程があったということです。この過程は人間に心を改める機会を与えるためにあったもので、神が人間に与えた最後のチャンスでした。では神は、実際に人間を滅ぼすまでの期間、何をしていたのでしょうか。神は人間に言い聞かせ忠告するために、非常に多くの働きをしていたのです。心にどれほどの痛みと悲しみを抱えていようとも、神は人間を配慮し、気遣い、溢れるほどの憐れみを注ぎ続けたのです。このことから何がわかるのでしょうか。疑いもなく、神の人間に対する愛が本物であり、口先だけのものでないことが見て取れます。その愛は実在し、明らかに感じ取ることができるもので、偽物ではなく、混じりけもなく、欺きも飾り気もないものです。神は騙したりイメージを繕ったりして、自らを愛すべき者のように見せることは決してありません。偽証によってその魅力の人々に見せることも、その魅力や聖さを誇示することもないのです。このような神の性質は、人間の愛に値しないのでしょうか。崇拝に値しないのでしょうか。大切にするに値しないのでしょうか。ここでわたしは皆さんに尋ねたいのです。こうしたことを聞いて、皆さんは神の偉大さというもの、単に紙に書かれた空虚な言葉だと思うのでしょうか。神の魅力はただの虚しい言葉でしょうか。いいえ違います。絶対に違います。至高、偉大さ、聖さ、寛大さ、愛など、神の性質と本質のさまざまな側面における一つひとつの詳細は、神が働きを行うた

び実際に現れ、神の人間に対する旨の中に具現化されており、さらにすべての人間の中に実現され反映されてもいるのです。これまでにあなたがそう感じたことがあるかどうかに関わらず、神はあらゆる方法ですべての人に思いをはせ、その誠実な心と知恵とさまざまな方法を用いて、一人ひとりの心を温め、一人ひとりの霊を呼び覚ましているのです。これは議論の余地のない事実です。ここに何人の方がいるにしても、一人ひとりがそれぞれ神の寛大さ、忍耐、愛らしさを経験し、それぞれの感情を持っています。こうした神の経験と、神に対する感情や認識といったもの、すなわちそうした肯定的なものはすべて、神に由来しています。そのような神に関する皆の経験と認識を統合し、それらを今日読んだ聖書のくだりと結びつけることで、神についてのより現実的で正しい理解を得ることができたでしょうか。

この物語を読み、この出来事を通して現された神の性質の一部を理解したところで、神についてどんな新しい認識が得られたでしょうか。神とその心について、より深い理解を得られたでしょうか。今改めてノアの物語を読むと、以前とは違った思いを抱くでしょうか。皆さんの意見では、これらの聖書の節について交わりを持つことは不要だったでしょうか？ この交わりを持ってみて、これは必要なかったと思うでしょうか。いえ、間違いなくこれは必要なことでした。わたしたちが読んでいるのは一つの物語ですが、それは神が行った働きの真の記録です。わたしの目的は、こうした物語や登場人物の詳細を皆さんに理解してもらうことでも、登場人物について学んでももらうことでもなく、もちろん聖書を改めて勉強してもらうことでもありませんでした。わかるでしょうか。これらの物語は、神について知るための助けになりましたか？ この物語によって、神の理解がどのように深まりましたか？ 香港の兄弟姉妹よ、教えてくださいませんか。

（神の愛は、わたしたち墮落した人間が誰も持っていないようなものだわかりました。）韓国の兄弟姉妹たち、教えてくださいませんか。（神の人間への愛は本物だとわかりました。神の人間への愛は、神の性質を現すものであり、神の偉大さ、聖さ、至高、寛大さを現していることがわかりました。このことは、より深く理解しようと努めるだけの価値があります。）（先ほどの交わりを通して、神の正しく聖い性質を見ることができただけでなく、人間への懸念や憐れみが感じられたうえ、神の行いとその考えや思いにはすべて人間への愛と配慮が現われているということがわかりました。）（わたしは以前、神は人間が嘆かわしいほど邪悪になったため洪水によって世界を滅ぼし、人間を嫌悪していたため人類を滅ぼしたかのように思っていました。今日、神がノアの物語について語り、神の心が苦しみに満ちていたことを知って初めて、神は実際には人間を滅ぼ

すことをためらっていたと知りました。ただ人間が不従順すぎたために、人間を滅ぼすしかなかったのです。事実、神の心は当時、悲しみに満ちていました。このことから、神の性質の中に人間への思いと配慮を見て取ることができます。これはわたしが今まで知らなかったことです。）素晴らしいです。次の方もどうぞ。（わたしは今日の話聞いてとても感動しました。これまで聖書を読んだことはありましたが、今日のように、わたしたちがもっと神を知れるよう、神がこれらのことを直接掘り下げてくださるという経験は初めてです。神がこのようにわたしたちを導き、聖書を理解させてくださったことで、人間が墮落する以前の神の本質は人類への愛と配慮であったことがわかりました。人間が墮落してから現代の世の終わりに至るまで、神の性質は義でありつつも、人間への愛の思いは変わっていません。このことから、神の愛の本質が、世の創造から現在に至るまで、人間の墮落ぶりにも関わらず、決して変わらないことがわかります。）（今日わたしは、神の本質がその働きの時や場所によって変わらないことを理解しました。そしてまた、神が世界を創造するにせよ、あるいは人間の墮落の後に滅ぼすにせよ、神のすることにはすべて意味があり、そこには神の性質が内包されているということも理解できました。そのため神の愛が無限で計り知れないことがわかり、他の兄弟姉妹たちが言ったように、神が世界を滅ぼしたときの人間に対する配慮と憐れみについても知りました。）（わたしは今までこんなことを知りませんでした。今日話を聞いて、神は本当に確かな信頼できるお方で、信仰するに値し、実際に存在されるのだと感じました。神の性質と神の愛は、これほどまでに揺るぎないものなのだとは心から感じます。今日話を聞いてそう感じました。）素晴らしいです。皆さん、今日話をしっかりと心に受けとめてくれたようですね。

皆さん、今日話した節を含む聖書のすべての節から、ある事実気づかれたでしょうか。神は自分の考えを表現したり、人間への愛と配慮を説明したりするために、独自の言葉を用いたことがあるでしょうか？ 神がどれだけ人間を思い愛しているかを、平易な言葉を使って表した記録があるでしょうか。一切ありません。違いますか？ 皆さんの多くが、聖書や聖書以外の本を読んだことがあります。そのような言葉を見たことのある人はいるでしょうか。まったくいませんよね。つまり、神の言葉や神の働きの記録を含む聖書の記述の中で、神はどの時代にもどの期間にも、独自の方法でその感情を説明したり、人間への愛や思いを表現したりしたことはなく、言葉や行動を用いて自らの気持ちや感情を伝えたこともない――これが事実ではないでしょうか。なぜここでこれを言わなければならないかというと、それはこの事実もまた、神の魅力と神の性質を

具体的に表しているからなのです。

神は人間を創造しました。そして人間が墮落していようとまいと、自らに従おうと従うまいと、神は人間を自分のもっとも大事な愛する者として、人間的な言い方をすれば「最愛の存在」として接しており、玩具のように扱うことはありません。神は自らが創造主で人間はその被造物だと言っており、そこにはやや格の違いがあるように聞こえるかもしれませんが、実際には神が人間のために行ったすべてのことは、そのような関係をはるかに超えるものです。神は人間を愛し、思いやり、配慮してくれるだけでなく、常に絶えることなく人間を養ってくれています。そして心の中でそれを余分な仕事と感じたり、多くの称賛に値すると思ったりもしません。また人間を救い、与え、すべてを授けることを、人類への大きな貢献だとも思っていません。神はただ静かに独自のやり方で、自らの本質と所有するもの、そして神そのものを通じて、人間を養ってくれるのです。人間が神からどれだけの備えと支援を受けようとも、神はそれを手柄と考えたり、手柄をたてようと思ったりもしません。これは神の本質によるものであり、同時にまさしく神の性質の真なる表現でもあります。そのためわたしたちは、聖書にせよその他の本にせよ、神が自らの考えを表わすのを目にすることもなければ、神が人間に感謝させたり自らを称賛させたりする目的で、なぜそんなことをするのかやなぜそれほど人間を思いやっているのかを説明したり表明したりするのを、見かけることは一切ないのです。神は傷ついているときや心がひどく痛んでいるときでさえ、一人静かにその傷や痛みに耐えながら、人間に対する責任と思いを決して忘れずにいます。そしてこれまでいつもしてきたとおり、人間を養い続けるのです。人間は神をしばしば賛美したり証しをしたりしますが、そうした行為はどれも神に要求されたものではありません。なぜなら神は、人間に感謝されたり見返りを得たりするために、人間によいことをしているのではないからです。他方、神を恐れ悪を避けることができる人々、誠をもって神に従い、神の言葉を聞き、忠実に服従できる人々は、神の祝福をしばしば受けることになり、神はそのような祝福を惜しみなく与えます。そしてさらに、人が神から受ける祝福はしばしば人間の想像を超えるものであり、人間が自らの行いや払った犠牲に対する代価として受け取れるものをはるかに超えています。神の祝福を享受しているとき、神の行っていることを気にかける人はいるでしょうか。神がどのように感じているかを気遣う人はいるでしょうか。神の痛みを理解しようとする人はいるでしょうか。まったくいません！ ノアを含む全人類の中に、当時神が感じた痛みを理解できる者が一人でもいるでしょうか。神がなぜあのような契約を打ち立てたのかを理解できる人はいるでしょうか。

。それは人間には理解できません。人間が神の痛みを理解しないのは、神の痛みを理解できないからではなく、また神と人間の差のせいでも、立場の違いのせいでもありません。ただ単に、人間が神の感情を一切気にかけていないからです。人間は神が独立した存在だと思っているため、人が神を気遣ったり、理解したり、配慮したりする必要はないと考えています。神は神であって、痛みも感じなければ感情もなく、悲しむこともないし、嘆くこともなく、泣くことすらない。神は神なので、感情の表現は一切必要なく、感情的な慰めも一切必要としない。もしも状況によってそんなものが必要なれば、そのときは神が自ら解決できるし、人間の助けなど必要としないだろう。逆に神の慰め、施し、励ましを必要としているのは「弱く未熟な」人間のほうであり、人間にはいつでもどこでも神の慰めが必要なのだ。このような考えが、人間の心の奥底に隠れています。弱いのは人間のほうなので、あらゆる面で神の世話が必要であり、人間は神のあらゆる配慮にふさわしく、自分のものにしなければならないと感じるあらゆるものを神に要求する必要がある。神は強く、すべてを持っているのだから、人間の守護者となり祝福を受ける存在でなければならない。神はすでに神なのだから、全能であり、人間からは何も必要としないのだ、と。

人間は神が明らかにすることのいずれにも注意を払わないため、神の悲しみも痛みも、喜びも感じたことはありません。しかし神は逆に、人間の感情表現をすべて自分のもののようによく知っています。神はどこにいても常に皆の必要を満たし、一人ひとりの考えの変化を見て、彼らを慰め、励まし、導き、光を灯します。神が人間に対して行ってきたすべてのことと、人間のために払ったすべての代価について、聖書のくだりやこれまでに神が語った言葉の中に、人間に何かを求めると明らかに述べたものはあるでしょうか。一切ありません。逆に、人々がどれだけ神の考えを無視しようと、神は人間を繰り返し導き、何度でも与え、助けてくれており、そうすることで人間が神の道に従い、神が用意した美しい終着点へとたどり着けるようにしてくれます。神について言えば、神が所有するものと神の存在そのもの、神の恵みと憐れみ、そしてそのすべての報いは、神を愛し従う人々に惜しみなく与えられます。しかし神は、自らが抱えた痛みやその心境を誰にも明かすことはなく、誰かが神に配慮せずその旨を知らないからといって、不満を言うことも一切ありません。ただすべてを静かに耐え、人間が理解できるようになる日を待っているのです。

なぜここでこのようなことを話したと思いますか？ わたしが話したことから、どんなことがわかったのでしょうか。神の本質と性質の中には、非常に見落とされやすく、そ

して神だけが持っているものがあります。それは人々に偉大だとか善人だとか思われている人想像した神のようだと思われている人も含め、どんな人間も持つことができないものです。それは何かといえば、神の無私の心です。無私について話すと、あなたは自分も非常に無私だと思うかもしれません。なぜなら自分の子供について言えば、子供とは一切交渉などせず気前良く与えているし、また自分の両親のことを考えても、自分は非常に無私だと思うかもしれません。どう思うにせよ、少なくともあなたは「無私」という言葉の意味を理解していて、それを肯定的な言葉と捉え、無私であることはとても立派なことだと思っていますよね。自分が無私であれば、あなたは自分自身を高く評価するでしょう。しかし、人々や出来事、物事、そして神の働きを含む万物に認められる、神の無私の心を見ることができる人は誰もいません。なぜでしょうか。それは、人間があまりに自己中心的だからです。なぜこう言うかということ、人間は物質的な世界に住んでいます。あなたは神に付き従っているかもしれませんが、神がいかにあなたを養い、愛し、気遣っているかを見たり理解したりすることはありません。では何を見ているのでしょうか。それはあなたを愛してくれる、可愛がってくれる肉親です。あなたは自分の肉にとって有益なものに目を留め、自分が愛している人々や物事に心を配っています。それが人間の言うところの無私です。ところがそのような「無私」な人々も、自分にいのちを与えてくれる神のことはまったく気にかけません。神の無私とは対照的に、人間の無私は自己中心的で卑劣なものになります。人間が信じる無私とは、空虚で非現実な、汚れた、神とは相容れないものであり、神とは関係がありません。人間の無私は自分自身のためであり、一方神の無私は、神の本質の真の現れです。人間が常に神によって養われているのは、まさに神が無私であるからです。皆さんはわたしが今日話しているこのテーマにそれほど深く感動せず、ただ頷いているだけかもしれませんが、心の中で神の心を理解しようとする、いつの間にか気づくことになります――この世で知覚できるすべての人々、出来事、そして物事の中で、ただ神の無私だけが真実で揺るぎないものなのだと。なぜなら神のあなたに対する愛だけが、無条件で汚れないからです。神以外には、誰のいわゆる無私もすべて見せかけの表面的なものであり、真実ではありません。それは目的や特定の意図を含み、交換条件付きで、試みに耐えることはできず、汚れた卑しむべきものとさえ言えます。皆さんはこうした言葉に同意されるでしょうか。

皆さんはこうしたテーマに馴染んでおらず、よく理解するには少し時間がかかることでしょう。こうした問題やテーマに馴染みがないほど、あなたがたの心の中にそのテ

マが存在していないということの証明になります。もしわたしがこれらのテーマについて話さなかったら、皆さんが少しでもそれを知ることはあるでしょうか。一切ないと思います。それは間違いありません。皆さんがどれだけ理解できるとしても、わたしが話したこれらの話は端的に言って、人々が最も知らず、そして最も知らなければならないことなのです。これらのテーマはすべての人にとって非常に重要で、尊く、いのちであり、これから先へ進むために知っていなければならないものです。これらの言葉の導きと、神の性質と本質の理解がなければ、神について常に疑問を抱えていくことになります。神を理解もせずに、どうやって神を正しく信じられるでしょうか。神の感情、その旨、心境、考えていること、悲しむこと、そして喜ぶことについて、あなたは何も知りません。それでどうやって、神の心に配慮することができるでしょうか。

神が悲しむ時はいつでも、自らにまったく気を留めない人間、つまり神に従い神を愛しているとは言えるものの、神の感情を完全に無視している人間と対峙します。神の心が傷つかないことがあるでしょうか。経営の働きの中で、神は一人一人に対して誠実に働きを行い、語りかけ、堂々と隠し事もせず皆と向き合います。しかし逆に、神に従うすべての人間は神に対して閉鎖的で、積極的に神に近づいたり、神の心を理解したり、その感情に気を留めたりする者はいません。神の知己になりたいと望む者でさえ、神に近づこうとは望まず、神の心に配慮しようとも、神を理解しようともしません。神が喜んでいるとき、その喜びを分かち合える者は誰もいません。神が人々に誤解されているとき、神の傷ついた心を慰める者は誰もいません。神の心が痛んでいるとき、神が打ち明ける思いに耳を傾けようとする者は誰一人いません。この数千年に及ぶ神の経営の働きの中で、神の気持ちを知る者や、深く理解し感じる者は一人もおらず、ましてや神に寄り添ってその喜びや悲しみを分かち合う者などいませんでした。神は孤独です。孤独なのです。それはただ墮落した人間が神に敵対するからだけではなく、それ以上に、靈的であろうと努め、神を知り理解しようと努力している者、さらに神に人生のすべてを捧げようと思っている者でさえ、神の考えを知らず、その性質や感情を理解しないからなのです。

ノアの物語の最後で、神が当時普通とは違った方法で自身の感情を表したことがわかります。その非常に特別な方法とは、人間と契約を結び、洪水による世界の破壊の終了を宣言することでした。一見、契約を結ぶというのは実に普通のことに思えます。それはただ言葉を用いて二者を拘束し、合意に違反することを戒めて、両者の利益を保護することではありません。形式上は非常に普通のことなのですが、この契約はそ

の背後にある動機と、神がそれを行った意図からして、神の性質と心境とを真に現しているのです。これらの言葉をただ軽んじ無視するなら、そしてわたしが物事の真実を伝えなければ、人間は決して神の考えを知ることはないでしょう。あなたの想像の中で、神はこの契約を結んだとき微笑んでいたかもしれず、また真剣な表情だったかもしれません。しかし神のもっとも普通の表現をどう想像するにせよ、神の心やその痛み、ましてやその孤独を知ることのできる人はいません。神に自分を信頼させられる人間や、神の信頼に値する人間などおらず、神が自らの考えを表したりその痛みを打ち明けたりできる人間もいません。そのため神は、このようなことをするしかなかったのです。表面上、神は簡単にかつての墮落した人間と決別し、過去の問題を終結させ、自らが起こした洪水による世界の破滅を完璧に決着させたように見えます。しかし神はこの瞬間から、自身の痛みを心の奥深くにうずめたのです。心を打ち明けられる者の一人もないまま、神は人間と契約を結び、二度と洪水で世界を滅ぼすことはしないと告げました。虹が出るのは、かつてこのようなことがあったと人々に思い起こさせ、悪を行わないように警告するためでした。そのような痛みの中でも、神は人間のことを忘れず、非常に多くの配慮を示し続けました。これが神の愛であり、無私無欲ではないでしょうか。しかし人間は、苦しんでいるとき何を考えるでしょうか。そのようなときが神を最も必要とするときではないでしょうか。そのようなとき、人はいつも神を引きずり出し、慰めてもらおうとします。どんなときでも、神は人々を落胆させることなく、いつも苦境から抜け出させ、光の中で生きられるようにしてくれます。神はそのように人間を養ってくれるにも関わらず、人間の心の中で神は単なる鎮静剤か気付け薬程度のものでしかありません。神が苦しんでいるとき、神の心が傷ついているとき、被造物や誰かがそばにいて慰めてくれるなどということは、神にとっては高望みでしかないのです。人間が神の感情に一切気を留めないのも、神は一切誰かに慰めを求めたり期待したりもしません。ただ独自の方法で、自らの気持ちを表現するだけです。人は神がちょっとした苦しみを経験することを、大した苦難だとは考えません。しかし神を真に理解しようと努め、神のすべての行いに内在するひたむきな意図を真に理解できるようになると、初めて神の偉大さと無私とを感じとれるようになります。神は虹を用いて人間と契約を結びましたが、なぜそうしたのか、なぜその契約を打ち立てたのかを誰にも言っておらず、つまり自らの本当の思いを誰にも話していません。それは、自ら創造した人間に対する神の愛の深さを真に理解できる者は誰もおらず、そして人間を滅ぼしたときにどれほど神の心が痛んだかを理解できる者もないからです。そのためもし神が自分の思いを人間に伝えようとしても、人間はその神の信頼に応えることができないのです。神は痛みを感じつ

つ、働きを次の段階へと進めています。神は常に自らの最善の側面と最善のものを人間に与えながら、自身はすべての苦しみを静かに背負っています。神がこうした苦しみを公然とさらすことは一切なく、神はただそれらに耐えながら、静かに待っています。神の忍耐は冷たく無感覚で無力なものではなく、弱さの顕れでもありません。むしろ、神の愛と本質は常に無私でした。これは神の本質と性質との自然な現れであり、真の創造主たる神の身分の確かな具現化でもあるのです。

このように言うと、わたしの意図を誤解する人がいるかもしれません。「神の感情をこのようにこと細かく、煽動的に説明するのは、神に対して心苦しく感じさせるつもりなのか」と。それがわたしの意図だと思うのでしょうか。（違います！）このような話をしたのは、ただ皆さんが神をよりよく知り、神の無数の側面を理解し、その感情を理解するようになってほしいからです。そして神の本質と性質が、人間の空虚な言葉、字句や教義、空想などによって描かれたものと逆に、確実に少しずつ、その働きを通して表されていることを知ってもらいたいからです。つまり、神とその本質というものは実際に存在するのです。それは絵画でも想像でもなく、人間が造り上げたものでも、もちろん人間が捏造したものでもありません。そのことが理解できたでしょうか。理解できたとすれば、今日のわたしの目標は達成されたことになります。

今日わたしたちは3つのテーマについて話し合いました。皆さんがこの3つのテーマに関する交わりを通して、多くを学んでくれたものと信じています。間違いなく言えることは、この3つのテーマを通して、わたしが説明した神の考えやその性質と本質が、神に関する人々の想像や理解を変え、神に対する信仰も変化させ、さらに皆が心の中で崇めていた神のイメージをも変化させたということです。いずれにせよ、今日この3つの節で神の性質について学んだことが皆さんの役に立ち、そして帰宅後、さらに考えを深めてもらえることを願っています。今日の集会はこれで終了します。さようなら。

2013年11月4日

神の働き、神の性質、そして神自身 2

前回の集会ではとても重要なテーマについて交わりました。どのような内容だったか憶えているでしょうか。もう一度繰り返しましょう。前回の交わりで扱ったテーマは、神の働き、神の性質、そして神自身でした。それはあなたがたにとって重要なテーマでしょうか。どの部分が最も重要でしょうか。神の働きでしょうか、神の性質でしょうか。それとも神自身でしょうか。どれが一番興味深いと感じますか。どれについて最も聞

きたいと思いますか。もちろん、その質問に簡単に答えることはできません。なぜなら、神の性質というのは神の働きのあらゆる側面において見出せるものであるし、神の性質は絶えずその働きの中で、およびあらゆる場所で明らかにされていて、実質的に神自身を現わしているからです。神の経営（救いの）計画全体の中で、神の働き、神の性質、そして神自身はどれも互いに切り離せないのです。

神の働きに関する前回の交わりは、遠い昔の出来事に関する聖書の記述がその内容でした。それらは神と人間にまつわる物語であり、人間に起こったことであると同時に、神の介入と表現を伴うものだったので、それらの物語は神を知る上で特別な価値と意味をもっています。神は人を創造した後、すぐに人と関わって人に話しかけ、そして神の性質が人間に表わされ始めました。つまり、神は最初に人と関わったときから、何ら妨げられることなく、自身を人間に対して明かし始め、神の本質、そして神が所有するものと神そのものを人に示したのです。初期の人々、あるいは今日の人々がそれを見たり理解したりできるかどうかに関係なく、神は人間に語りかけ、人間の間で働き、自身の性質を表わし、自身の本質を表現するのです。これは事実であり、誰も否定できません。このことは、神が働きを行なって人間と関わる際、神の性質と本質、そして神が所有するものと神そのものが常に発せられていることも意味しています。神は人間に何一つ隠したことがなく、むしろ自身の性質を惜しみなく公に示しています。つまり、神は人間が神を知り、神の性質と本質を理解できることを望んでいるのです。神は、人間が神の性質と本質を永遠の奥義として扱うことを望んではおらず、また人間が神のことを絶対に解決できない謎と見なすことも望んでいません。人間は神を認識して初めて前進する道を知り、神の導きを受け入れることができます。そしてそのような人間だけが、神の支配下で、また光の中、神の祝福の中で真に生きることができるのです。

神によって発せられ、明らかにされた言葉と性質は神の旨を表わし、また神の本質も表わしています。神が人間と関わる時、神が何を言い、何をしようと、あるいはどのような性質を表わそうと、また人間が神の本質、および神が所有するものと神そのものをどのように捉えようと、それらはすべて人間に対する神の旨を表わしています。人間がそれをどれだけ認識し、把握し、理解できるかに関わらず、それらはどれも神の旨、人間に対する神の旨を表わしているのです。これは間違いありません。人間に対する神の旨というのは、どのようになるよう人々に求めているか、何を行なうよう求めているか、どのように生きるよう求めているか、そして神の旨を満たすにあたり、どのように能力を発揮するよう求めているかということです。これらのことは神の本質から切り離

せないものでしょうか。つまり、神は人間に要求すると同時に、自身の性質と、自身が所有するものと自身そのものを示しているのです。そこには偽りも、見せかけも、隠匿も、粉飾ありません。それでも人間が神の性質を知ることができず、はっきりと認識することができないのはなぜでしょうか。そしてなぜ、神の旨を理解できないのでしょうか。神により示され、発せられているものは神が所有するものと神そのものであり、それは神の真の性質のあらゆる側面です。なのになぜ、人間には理解できないのでしょうか。人はなぜ詳細に知ることができないのでしょうか。そこには重要な理由があります。その理由とは何でしょうか。創造のときから、人間は神を神として扱っていませんでした。最も初期の時代、創造されたばかりの人間に対して神が何をしたかはさておき、人間は神のことを単に頼れる仲間としてしか扱わず、神に関する認識や理解はありませんでした。つまり人間は、仲間と見なして頼っていたこの存在によって示されるものが神の本質であったことを知らず、またこの存在が万物を治めていることを知らなかったのです。簡単に言って、当時の人々は神をまったく認識していなかったのです。天地と万物が神によって創造されたことを知らず、その神がどこから来たのかを知らず、そしてそれ以上に、その神が何者なのかをまったく知りませんでした。もちろん当時、人間が神を知り、認識し、神のしていることをすべて理解し、神の旨を知ることが、神は求めてはいませんでした。当時は人類の創造から間もない時期だったからです。神は律法の時代の働きに向けて準備を開始したとき、人間に対していくつかのことは行ない、人間にいくつかの要求をし始め、どのように捧げ物を捧げ、神を礼拝すべきかを教えました。そのとき初めて、人間は神に関する簡単な概念を少しばかりもつようになり、人と神の違い、そして神が人類を創造した存在であることを知ったのです。神は神であり、人間は人間であるということを人間が知ったとき、神と人間のあいだに一定の距離が生まれたわけですが、神は自身に関する多くの認識や深い理解を人間に求めることはしませんでした。つまり神は、自身の働きの段階と状況に応じ、人間に対して異なる要求をするのです。このことから何がわかりますか。神の性質のどのような側面が理解できるのでしょうか。神は真実ではないのでしょうか。神が人間に求めることは、人間の身の丈にあったものでしょうか。神が人間を造って間もないころ、人間を征服して完全にその働きをまだ行なっておらず、人間に対し多くを語ってもいないとき、神は人間に対してほとんど何も求めませんでした。人間が何を行ない、どのように振る舞おうとも、たとえ神に背くことをしていたとしても、神はそのすべてを許し、見逃しました。それは、自分が人間に与えたものと、人間の中にあるものを神は知っていて、そのため人間に対して行なうべき要求の基準もわかっていたからです。当時、神の要求の基準は非常に

低いものでしたが、だからと言って、神の性質が素晴らしくないとか、あるいは神の知恵や全能が単なる空しい言葉であるということではありません。人間にとって、神の性質と神自身を知る方法は一つしかありません。それは神による人類の経営と救いの歩みに従い、神が人類に語る言葉を受け入れることです。いったん神が所有するものと神そのものを知り、神の性質を知れば、人間はそれでも神の真の実体を見せてほしいと神に求めるでしょうか。いや、人間は求めないでしょうし、求めようとする可不ないはずでず。なぜなら、神の性質、そして神が所有するものと神そのものを理解していれば、人間はすでに真の神自身を目の当たりにし、神の真の実体を見ていることになるからでず。これは必然的な結果でず。

神の働きと計画が絶え間なく前進する中、洪水で世界を滅ぼすことは二度としないというしるしとして、人間との虹の契約を打ち立てたあと、神は自分と 생각이一致する者を得たいとますます強く願うようになりました。またそのため、自分の旨を地上で行なえる者、そしてさらに、闇の力から自由になることができ、サタンに縛られず、地上で神に証しできる人々の集団を得たいと、さらに強く切望するようになりました。そのような人々の集団を得ることは神の長きにわたる願いであり、創造のときから待ち望んでいたことでもあります。したがって、神が洪水で世界を滅ぼそうとも、あるいは人間との契約があろうとも、神の旨、思い、計画、そして望みはすべて同じままだったのでず。神がしたいと望んでいたこと、創造の前からずっと切望していたこと、それは人類のうち自身が得ようと望む者を得ること、つまり神の性質を知って理解し、神の旨を認識している人々の集団、神を礼拝することのできる人々の集団を得ることです。そのような人々の集団は神に証しをすることができるでしょうし、神の心を知る者だと言えるでしょう。

今日は神の足跡をさかのぼり、神の働きの歩みに従っていきましょう。そうすることで、長い間「密封」されていた神の考えや思い、また神に関するさまざまな詳細がすべて明らかになるでしょう。それらを通じて、わたしたちは神の性質を知り、神の本質を理解するようになり、また神を自分の心に受け入れるとともに、わたしたち一人ひとりが神と少しずつ親しくなり、神との距離も縮まるはずでず。

前回話したことの一部分は、神が人間と契約を結んだ理由に関するものでした。今回は、以下の聖句について交わります。まずは聖句を読んでみましょう。

A. アブラハム

1. 神がアブラハムに息子を与える約束をする

創世記 17:15-17 神はまたアブラハムに言われた、「あなたの妻サライは、もはや名をサライといわず、名をサラと言いなさい。わたしは彼女を祝福し、また彼女によって、あなたにひとりの男の子を授けよう。わたしは彼女を祝福し、彼女を国々の民の母としよう。彼女から、もろもろの民の王たちが出るであろう」。アブラハムはひれ伏して笑い、心の中で言った、「百歳の者にどうして子が生れよう。サラはまた九十歳にもなって、どうして産むことができようか」。

創世記 17:21-22 「しかしわたしは来年の今ごろサラがあなたに産むイサクと、わたしの契約を立てるであろう」。神はアブラハムと語り終え、彼を離れて、のぼられた。

2. アブラハムがイサクを捧げる

創世記 22:2-3 神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」。アブラハムは朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者と、その子イサクとを連れ、また燔祭のたきぎを割り、立って神が示された所に出かけた。

創世記 22:9-10 彼らが神の示された場所にきたとき、アブラハムはそこに祭壇を築き、たきぎを並べ、その子イサクを縛って祭壇のたきぎの上に載せた。そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとした。

神が行なうと決意した働きを止めることは誰にもできない

先ほど、みなさんはアブラハムの物語を読みました。世界が洪水で滅ぼされた後、彼は神に選ばれ、その名をアブラハムといい、彼が百歳でその妻サラが九十歳のとき、神の約束が彼のもとに届きました。神はアブラハムに何の約束をしたのでしょうか。神は聖書に書いてあるこのことを約束しました。すなわち「わたしは彼女を祝福し、また彼女によって、あなたにひとりの男の子を授けよう」という約束です。息子を与えるという神の約束の背景には何がありましたか。聖書ではこのような説明がなされています。

「アブラハムはひれ伏して笑い、心の中で言った、『百歳の者にどうして子が生れよう。サラはまた九十歳にもなって、どうして産むことができようか』」。つまり、この老夫婦は子どもをもうけるには年をとりすぎていたということです。そして神がこの約束をした後、アブラハムは何をしましたか。笑いながら地面にひれ伏し、「百歳の者にどうして子が生れよう」と心の中で言ったのです。そのようなことは不可能だとアブラハムは思いましたが、彼にとって、神の与えた約束は冗談でしかなかったということです。

。人間の視点から見れば、これは実現不可能なことであり、また同様に、神にとっても実現できない不可能なことです。おそらく、アブラハムにとってそれは笑い事であり、「神は人間を創造したのに、老いた人間が子どもをもうけられないことを知らないようだ。神はわたしに子どもを授けられると思っている。そんなことは間違いなく不可能だ！」と思ったことでしょう。そのため、アブラハムはひれ伏して笑い、こう考えたのです。「不可能だ。神は冗談を言っているに違いない。本当であるわけがない」。彼は神の言葉を真に受けませんでした。それでは、神の目にアブラハムはどのような人物に映っていたのでしょうか。（義なる人物です。）アブラハムは義なる人物だとどこで言われたのでしょうか。あなたがたは、神が呼びかけた人はみな義なる人で、完全で、神と歩む人だと思っています。あなたがたは教義に固執しています！ 神は誰かを定義するとき、気ままに定義するのではないのだとはっきり理解しなければいけません。ここで、神はアブラハムを義なる人だとは言っていない。神は心の中に、一人ひとりをはかる基準をもっています。神はここでアブラハムがどのような人物かを言っていないが、彼の行ないという点から見て、アブラハムはどのような信仰を神に対してもっていたのでしょうか。いささか抽象的なものだったのでしょうか。あるいは大きな信仰をもっていたのでしょうか。いや、違います。笑ったこと、そして考えたことが、彼がどのような人物だったかを示しています。したがって、アブラハムは義なる人だったとあなたがたが信じているのは、単なる想像上の虚構に過ぎず、教義を盲目的に当てはめているのであり、無責任な評価です。神はアブラハムの笑い小さな動作を見ていたのでしょうか。それを知っていたのでしょうか。神は知っていました。しかし、神は行なおうと決意していたことを変えたのでしょうか。いや、変えてはいません。神がこの男を選ぶと計画し、そう決意した時点で、それは達成されたのです。人間の考えも行ないも、神に影響を与えたり、干渉したりすることは一切ないのです。神は人間の行ない、無知かもしれない行ないのために計画を気まぐれに変更することもないければ、それを衝動的に変えたり、狂わせたりすることはありません。では、創世記17章21-22節には何と書いてあるのでしょうか。「『しかしわたしは来年の今ごろサラがあなたに産むイサクと、わたしの契約を立てるであろう』。神はアブラハムと語り終え、彼を離れて、のぼられた」とあります。神はアブラハムの思いや言葉に少しも注意を払わなかったのです。神が無視した理由は何ですか。当時、神は人間に対し、大きな信仰をもつことも、神を深く認識できるようになることも、神の言動を理解できるようになることも求めていなかったのがその理由です。ゆえに、神が行なおうと決意したこと、神が選ぶと決意した人、あるいは神の業の原則を人が完全に理解することを、神は求めていなかったのです。なぜなら、人間

の靈的背丈が単に不十分だったからです。当時、アブラハムが何をしようと、どのように自分を律しようと、神はそれらを普通のことだと見なしていました。神は彼を非難することも叱責することもなく、ただ「来年の今ごろサラはあなたにイサクを産む」と言うだけです。神がこれらの言葉を宣言した後、そうした事柄は一つひとつ現実となりました。神の目から見て、自身の計画により達成されるべきことはすでに達成されていました。そしてそのための采配を完了させた後、神は去って行ったのです。人間がすることや考えること、人間が理解すること、人間の計画はどれも、神にはまったく関係ありません。すべてのことは神の計画にのっとり、神が定めた時間と段階に従って進むのです。それが神の働きの原則です。人間が何を考えようと、あるいは何を認識しようと、神はそれらに干渉しませんが、人間が信じなかったり理解しなかったりしても、それが原因で神が自身の計画や働きを放棄することはありません。神の計画と意によって、事実はこのように実現されるのです。聖書から正確に分かるのは次のことです。つまり、神は自身の決めたときにイサクが生まれるようにしました。その事実、人の振る舞いや行ないが神の働きを妨げることの証明になるのでしょうか。いいえ、それらは神の働きを妨げてはいません。神に対する人間のささやかな信仰、および神に関する人間の観念と想像が、神の働きに影響したのでしょうか。影響してはいません。これっぽっちも影響しなかったのです。神の経営計画はどのような人にも、事柄にも、環境にも影響されません。神が行なうと決意したことはすべて、神の計画に沿って時間通りに完了し、実現され、神の働きが誰かに影響されることなどあり得ません。神は人間の愚かさや無知のある側面や、自分に対する人間の拒絶や観念のある側面さえも無視し、自分がすべき働きを構わず実行します。これが神の性質であり、神の全能性を反映するものです。

神の経営と人間の救いの業はアブラハムがイサクを捧げたことから始まる

アブラハムに息子が与えられ、神がアブラハムに語った言葉は成就しました。このことは、神の計画がここで止まったという意味ではありません。それとは逆に、人間を経営して救うという神の壮大な計画は始まったばかりであり、アブラハムに息子を授けた祝福は、神の経営計画全体からするとまだ序章に過ぎなかったのです。アブラハムがイサクを捧げたそのとき、神とサタンの戦いが静かに始まっていたことを、当時誰が知っていたでしょう。

神は、人間が愚かであるのは構わない——ただ誠実であることだけを求める

次に、神がアブラハムに何をしたのかを見てみましょう。創世記22章2節で、神は次の命令をアブラハムに与えました。「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連

れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」。神の旨は明確です。愛するひとり息子イサクを燔祭として捧げなさいと、神はアブラハムに言ったのです。今日の基準からしても、神のこの命令は人間の観念にそぐわないものではないでしょうか。その通りです。神が当時行なったすべてのことは、人間の観念とは正反対であり、人間に理解できるものではありません。人々は自身の観念の中で、次のように信じています。ある人間が信じておらず、それは不可能だと考えたとき、神はその人に息子を与えた。息子を与えた後、神はその息子を自分に捧げよと言う。まったく信じられない。神はいったい何をしようとしていたのか。実際の意図は何だったのか。神はアブラハムに無条件で息子を与え、そして今度は無条件で捧げ物をせよとアブラハムに命じる。これはやり過ぎなのか。第三者から見れば、単にやり過ぎだけでなく、「理由もなしにもめ事を起こす」ようなものでしょう。しかしアブラハム自身は、神があまりに多くを求めているとは考えませんでした。アブラハムはそれについてつまらない考えをいくつか抱き、多少神を疑ったものの、捧げ物をする覚悟はできていました。ここで、アブラハムが進んで息子を捧げようとしていたことを、何をもって証明できるかわかりますか。これらの文章で言われているのは何ですか。原文には次のような記載があります。「アブラハムは朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者と、その子イサクとを連れ、また燔祭のたきぎを割り、立って神が示された所に出かけた」（創世記 22:3）。「彼らが神の示された場所にきたとき、アブラハムはそこに祭壇を築き、たきぎを並べ、その子イサクを縛って祭壇のたきぎの上に載せた。そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとした」（創世記 22:9-10）。アブラハムが手を伸ばして刃物を取り、息子を殺そうとしたとき、神は彼の行動を見ていたでしょうか。もちろん見ていました。始めに神がアブラハムにイサクを捧げるよう命じたときから、アブラハムが実際に刃物を振り上げ、息子を殺そうとしたときに至るすべての過程により、アブラハムの心が神に示されたのです。そしてこのとき、かつての愚かさ、無知、および神に対する誤解にもかかわらず、神に対するアブラハムの心は誠実で正直であり、神から授かった息子イサクを本当に神に返そうとしていたのです。神はアブラハムの中に、自身がまさに望んでいた従順さを見たのです。

人間にとって、神が行なう多くのことは理解しがたいものであり、信じられないことすらあります。神が誰かの指揮をとろうとするとき、その指揮はしばしば人間の観念にそぐわず、理解不能なことがあるものの、その不協和音と理解不能なことこそまさに、人間に対する神の試練なのです。一方、アブラハムは自身の内にある神への従順を示す

ことができました。そしてそれが、彼が神の要求を満たせたことの最も基本的な条件だったのです。アブラハムが神の要求に従うことができ、イサクを捧げたときに初めて、神は人間に対して、すなわち自分が選んだアブラハムに対して真に安心し、彼を認める気になりました。このとき初めて、神は自身が選んだこの人が、自身の約束とその後の経営計画になくしてはならないリーダーであることを確信するのです。それは試練と試みでしたが、神は喜び、自身に対する人間の愛を感じ、人間からそれまでにない慰めを感じました。アブラハムがイサクを殺そうと刃物を振り上げた瞬間、神はアブラハムを止めたのでしょうか。神はアブラハムがイサクを捧げることを許しませんでした。イサクの命を奪うつもりはまったくなかったからです。そのため、神は直前でアブラハムを止めました。神にとって、アブラハムの従順さは試験に合格しており、アブラハムの行ないは十分なものであり、神は行なおうと意図していたことの結果をすでに見ていたのです。この結果に神は満足したのでしょうか。この結果は神にとって満足ゆくものであり、またそれは神の望んでいたこと、見たいと切望していたことだと言えるでしょう。本当にそうでしょうか。状況に応じて、神はそれぞれ異なる方法で一人ひとりを試しますが、アブラハムの中に自身の望むものを見、アブラハムの心が真実で、その従順が無条件であることを知りました。この「無条件」こそ、神の望むことでした。人々はしばしば、「わたしはこれを捧げたし、あれを捨てた。なぜ神はそれでもわたしに満足しないのか。なぜ神はわたしを試練に遭わせ続けるのか。どうしてわたしを試み続けるのか」と言います。これは一つの事実を示しています。つまり、神はあなたの心を見ておらず、あなたの心を得ていないということです。言い換えると、アブラハムが刃物を振り上げ自らの手で息子を殺し、神に捧げようとしたほどの誠意を、神はあなたの中に見出していないということです。神はあなたの無条件の従順さを見ておらず、あなたから慰めを得ていません。そうであれば、神があなたを試み続けるのは当然のことです。違いますか。このテーマについてはここまでにしておきましょう。次は、「アブラハムに対する神の約束」を読みます。

3. アブラハムに対する神の約束

創世記 22:16-18 ヤーウェは言われた、「わたしは自分をさして誓う。あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかったので、わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである」。

これはアブラハムに対する神の祝福の完全な記録です。短い箇所ですが、内容は濃いです。そこには、神がアブラハムに賜物を与えた理由と背景、そして神がアブラハムに何を与えたかが含まれています。また、神がこれらの言葉を発した際の喜びと感激、そして自身の言葉に耳を傾けられる者を一刻も早く自分のものにしたいという差し迫った切望もそこには込められています。わたしたちはこの中に、神の言葉に服従し、神の命令に従う人々に対する神の愛情と優しさを見ることができます。そして、神が人々を得るために払う代価と、そこに注ぐ慈しみと愛を見ることができます。さらに、この「わたしは自分をさして誓う」という言葉を含むこの一節は、自身の経営計画におけるこの働きの背後にある、神のみが背負う苦悩と痛みの強烈な感覚をわたしたちに与えます。この一節を通して考えることは多く、後から来る者たちにとって特別な意義をもち、非常に大きな影響を与えた一節なのです。

人間はその誠実さと従順さゆえに神の祝福を受け取る

ここから読み取ることができる、アブラハムに対する神の祝福は大きなものでしたか。それはどれほど大きなものでしたか。ここに鍵となる一文があります。「また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう」。この一文から、アブラハムは以前に来た者も、後から来た者も、誰一人与えられたことのない大きな祝福を受けたことがわかります。神に求められたとおり、アブラハムが自分の愛するひとり息子を神に返したとき（注：この場合、「捧げた」と言わずに、神に返したと言うべきです。）、神はアブラハムにイサクを捧げることを許さなただけでなく、アブラハムを祝福しました。どのような約束をもってアブラハムを祝福したのでしょうか。彼の子孫を繁栄させるという約束をもって、アブラハムを祝福したのです。また、どれほど多く繁栄させるといえるのでしょうか。聖書には次のように書かれています。「……天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう」。神が発したこの言葉にはどのような背景があったのでしょうか。つまり、アブラハムはどのようにして神の祝福を受け取ったのでしょうか。聖書で神が言うとおり、「あなたがわたしの言葉に従ったから」、アブラハムはそれを受け取ったのです。つまり、アブラハムは神の命令に従い、神が言ったこと、求めたこと、命じたことを、不平を言わずすべて行なったために、神はそのような約束をしたのです。この約束には当時の神の考えを示す重要な一文が含まれています。それに気づいたのでしょうか。「わたしは自分をさして誓う」という神の言葉に、あなたがたはそれほど注意を払わなかったかもしれません。それが意味するのは、神はこ

これらの言葉を発したとき、自分を指して誓っていたということです。人は誓いを立てるとき、何を指して誓うのでしょうか。天を指して誓う、つまり、神に対して誓いを立て、神を指して誓います。神が自身を指して誓うという状況を、人々はあまり理解してはいないかもしれませんが、わたしが正しく説明すればあなたがたも理解できるようになります。神の声は聞けるものの、その心を理解できない人間と向き合う際、神は再び孤独を感じ、途方に暮れました。そして切羽詰まって、あるいは無意識のうちにと行ってよいでしょうが、神は極めて自然なことをしました。つまり、アブラハムにこの約束を授けるとき、神は自身の胸に手を置いて自ら語りかけ、そこから人は、「わたしは自分をさして誓う」と神が言うのを聞いたのです。神の行動を通じて自分のことを考えるのもよいでしょう。あなたが自分の胸に手を置いて自身に語るとき、自分が言っていることをはっきり理解できるのでしょうか。あなたの態度は誠実でしょうか。心から、率直に語るのでしょうか。ゆえに、神はアブラハムに語りかける際、真摯で誠実だったことがここでわかります。神はアブラハムに語りかけ、彼を祝福すると同時に、自分自身にも語っていました。神は自身にこう語っていたのです。「わたしはアブラハムを祝福し、彼の子孫が天の星と同じくらい、海辺の砂と同じくらい増えるようにする。彼はわたしの言葉に従い、わたしが選んだ者だからだ」。「わたしは自分をさして誓う」と言ったとき、神はアブラハムを通じてイスラエルの選民を生み出し、その後は自身の働きによって彼らを速やかに導こうと決意したのです。つまり、アブラハムの子孫に自身の経営の働きを担わせ、自身の働きと、自分によって表わされたものがアブラハムから始まり、アブラハムの子孫に受け継がれ、そうすることで人を救うという自身の望みを叶えようとしたのです。これを祝福と言わずして何と言うのでしょうか。人間にとって、これ以上の祝福はありません。これが最大の祝福だと言えます。アブラハムが受け取った祝福は子孫が増えることではなく、アブラハムの子孫における神の経営、神の任務、そして神の働きです。つまりアブラハムが受け取った祝福は一時的なものではなく、神の経営計画が進む中で継続するものなのです。語り、自身を指して誓ったとき、神はすでに決意していました。この決意の過程は真実だったのでしょうか。現実だったのでしょうか。これ以降はアブラハムとその子孫のために苦労し、代価を払い、自身が所有するものと自身そのもの、自身のすべて、そしていのちまでも差し出すと、神は決意しました。また、まずはこの人々の集団に自身の業を表わし、人間が自身の知恵、権威、そして力を見るようにすることも決意したのです。

神を知り、神の証しとなる者を自身のものとするのが、神の変わらぬ願いである

神は自分に対して語ったのと同時にアブラハムに対しても語ったのですが、その際神が語ったすべての言葉から、アブラハムは神より与えられた祝福以外に、神の真の願いを理解することができたでしょうか。できませんでした。そのため、神が自身を指して誓ったその瞬間、神の心はいまだ孤独で悲しみに満ちていました。神の意図や計画を認識している人、あるいは理解している人は依然として一人もいなかったのです。この時点で、神と親密に話せる人はアブラハムを含めて誰もおらず、まして神が行なわなければならない働きに協力できる人などいませんでした。表面上、神はアブラハムという自分の言葉に従える人を得たかのように見えますが、実際には、神に関するこの人物の認識は無に等しいものでした。神はアブラハムを祝福したものの、神の心はいまだ満足していませんでした。神が満足していなかったとはどういうことでしょうか。それは、神の経営はまだ始まったばかりで、神が自分のものにしたいと望む人々、目の当たりにしたいと切望する人々、そして愛する人々がいまだ神から離れていたということです。さらに時間が必要で、待つ必要があり、忍耐する必要がありました。と言うのは、神が必要としているものを知る人は神自身以外におらず、神が何を得たいと望んでいるのか、何を切望しているのかを知る人もいなかったからです。そのため、神は非常に感激したと同時に、心の重さも感じました。それでも神は自身の歩みを止めず、行なわなければならない次なる段階を引き続き計画しました。

あなたがたはアブラハムに対する神の約束の中に何を見ますか。アブラハムが神の言葉に従ったというだけで、神はアブラハムに大いなる祝福を授けました。表面上、これはごく普通のこと、当然のことに思えますが、そこに神の心を見ることができます。神は自分に対する人の従順さをとりわけ大切にし、自身に対する理解と誠実さを尊びます。神はどれくらいこの誠実さを尊ぶのでしょうか。どれほど尊ぶかは、あなたがたには理解できないかもしれませんが、誰一人認識していない可能性も十分あります。神はアブラハムに息子を与えました。そしてその息子が成長したとき、神はアブラハムにその息子を自分に捧げるよう命じました。アブラハムは神の命令に一言一句従い、神の言葉に服従しましたが、その誠実さは神を感動させ、神はそれを尊びました。どれくらい尊んだのでしょうか。なぜ尊んだのでしょうか。神の言葉や心を誰も理解していなかった当時、アブラハムのしたことは天を揺るがし地を震えさせ、神にそれまで感じたことのない満足感を与え、自分の言葉に従える人を得たという喜びをもたらしました。この満足感と喜びは、神が自らの手で創った被造物から生じたものであり、人間が神に捧げた最初の「捧げ物」とすると同時に、人間が創造されて以来最も神に尊ばれました。神は

この捧げ物を待ち焦がれ、自分が創造した人間からの最も大事な贈り物として扱いました。それは神の努力と払った代価による初めての成果を示すものとなり、これによって神は人間に希望を見出しました。その後神は、このような人の集団が自分の道連れとなり、自分と誠実に接し、自分を誠実に慈しむことをさらに強く切望しました。神はアブラハムが生き続けることさえ望みました。自身の経営を続ける中で、アブラハムのような心をもつ人間を道連れにもち、ともにいたかったからです。しかし神が何を望もうと、それは単なる望み、思いでしかありませんでした。アブラハムは神に従うことのできる人間であったに過ぎず、神に関する理解や認識をまったく持ち合わせていなかったからです。神を知り、神に証しをすることができ、神と同じ思いになれるという神の要求の基準に対し、アブラハムは遠く及ばない人間でした。そのため、アブラハムは神と共に歩むことができませんでした。イサクを捧げるアブラハムに、神は誠実さと従順さを見、彼が神の試練に耐えたことを知り、アブラハムの誠実さと従順さを受け入れましたが、それでも神の心を知る者となり、神を知り、理解し、神の性質を知るのに相応しくはなかったのです。神と思いを同じくし、神の旨をなす者にはほど遠かったのです。そのため、神は心の中で依然寂しく不安でした。その寂しさと不安が増せば増すほど、神はできるだけ迅速に自身の経営を続け、また経営計画を全うして自身の旨を一刻も早く成就させるべく、人々の集団を選んで自身のものとする必要がありました。それは神の切実な願いであり、初めのときから今日まで変わりません。最初に人を創ったときから、神は勝利者の集団、つまり神とともに歩み、神の性質を認識し、知り、理解することのできる集団を切望してきたのです。神のこの願いは一度も変わったことはありません。どれほど待たなければならないとしても、その行く手がいかに困難でも、また神の切望する目標がどれほど遠くても、神は人間に対する期待を変えたり諦めたりしたことはありません。ここまでの話を聞いて、みなさんは神の望みについて何か理解できたでしょうか。おそらくまだそれほど深くは理解していないでしょうが、徐々に理解できるようになるでしょう。

アブラハムが生きていたのと同じ時代に、神は一つの町を滅ぼしています。その町の名はソドム。間違いなく、多くの人がソドムの町の物語を知っていますが、ソドムを滅ぼしたことの背景をなす神の思いを知る人はいません。

そこで今日は、以下の神とアブラハムのやり取りを通して、当時の神の考えを学ぶと同時に、神の性質についても学んでいくことにしましょう。では、次の聖書の箇所を読みましょう。

B. 神はソドムを滅ぼさなければならなかった

創世記 18:26 ヤーウェは言われた、「もしソドムで町の中に五十人の正しい者があったら、その人々のためにその所をすべてゆるそう」。

創世記 18:29 アブラハムはまた重ねて神に言った、「もしそこに四十人いたら」。神は言われた、「……これをしないであろう」。

創世記 18:30 アブラハムは言った、「……もしそこに三十人いたら」。神は言われた、「……これをしないであろう」。

創世記 18:31 アブラハムは言った、「……もしそこに二十人いたら」。神は言われた、「わたしは……滅ぼさないであろう」。

創世記 18:32 アブラハムは言った、「……もしそこに十人いたら」。神は言われた、「わたしは……滅ぼさないであろう」。

これらは聖書から抜粋したものです。抜粋であるため、原文とは異なります。もし原文を読みたいなら、自分で聖書を読んでください。時間を節約するため、原文の一部を省きました。ここでは鍵となるいくつかの節と文章に絞り、今日の交わりに関係のない文章は省略しています。これからお話しする聖句とその中身について、それぞれの物語の詳細や、その中における人の行動については省略し、当時の神の思いと考えに絞って話を進めます。神の思いと考えの中に、わたしたちは神の性質を見ることができ、そして神が行なったすべてのことから真の神自身を見ることができます。そうすることで、わたしたちの目標は達成されるのです。

神の言葉に従い、命令に従う者だけを神は慈しむ

上の各節には鍵となる単語がいくつか含まれていますが、それは数字です。まずヤーウェは、その町に五十人の正しい者があったら、その所をすべて許す、つまりその町を滅ぼさないと言いました。では、ソドムには五十人の正しい者が実際にいましたか。いませんでした。その後すぐ、アブラハムは神に何と言いましたか。「もしそこに四十人いたら」と言いました。すると神は、「これをしないであろう」と言いました。次にアブラハムが「もしそこに三十人いたら」と言うと、神は「これをしないであろう」と答えました。「もしそこに二十人いたら」、「わたしは……滅ぼさないであろう」。「もしそこに十人いたら」、「わたしは……滅ぼさないであろう」。本当に十人の正しい者がその町にいたでしょうか。十人はいません。いたのは一人だけです。それは誰ですか

。口トです。このとき、ソドムには正しい者が一人しかいなかったのですが、この数字について、神は厳しく、あるいは細かく追及しましたか。しませんでした。人間に「もしそこに四十人いたら」、「もしそこに三十人いたら」、そして最後に「もしそこに十人いたら」と訊かれた神は、「たとえ十人だとしても、その町を滅ぼすまい。それを許し、その十人以外の全員を許そう」と言いました。十人しかいないだけでも十分哀れですが、実際のところ、正しい者はソドムに十人もいなかったのです。ゆえに神の目から見て、この町の人々の罪と悪は、彼らを滅ぼすより他にないほどだったということがわかるでしょう。五十人の正しい者がいれば町を滅ぼさないと言ったとき、神は何を言わんとしていたのでしょうか。これらの数字は神にとって重要ではありませんでした。重要なのは、神の望む正しい者がその町にいるかどうかでした。正しい者が一人でもその町にいれば、町を滅ぼすことでその正しい者に危害が及ぶことを神は許さなかったでしょう。つまり、神がその町を滅ぼすつもりだったか否か、あるいは正しい者がそこに何人いたかに関係なく、神にとって、この罪深い町は呪われた忌まわしき存在であり、滅ぼされて自身の目の前から消えなければならず、その一方で正しい者は残るべきだったのです。時代、あるいは人類の発展段階がどうあれ、神の態度は変わりません。悪を憎み、自身の目から見て正しい者を慈しみます。この明確な神の態度は、神の本質の真の現われでもあります。ソドムの町には正しい者が一人しかいなかったので、神はもはやためらいませんでした。ソドムは必ずや滅ぼされるというのが、その最終的な結果でした。このことから何がわかりますか。その時代、ある町にいる正しい者が五十人でも十人でも、神はその町を滅ぼそうとしませんでした。つまり、神を畏れて崇拝することができる数名の人間のために、神は人類を赦して寛容であろうとした、あるいは導きの働きをしようとしたのです。神は人の正しい行ないを重視します。神を崇拝できる人、神の前でよき行ないをできる人を、神は重視するのです。

最初の時代から今日に至るまで、神が誰かに真理を伝えたり、神の道について語りしているのを、聖書で読んだことがありますか。いいえ、決してないはずです。わたしたちが読んでいる、人に対する神の言葉は、何をすべきか人々に伝えているだけです。その通りに行なった人もいれば、行なわなかった人もいます。信じた人もいれば信じなかった人もいます。それだけのことです。したがって、この時代の正しい人たち、つまり神の目から見て正しい人たちは、神の言葉を聞いて神の命令に従える人に過ぎなかったのです。そのような人は、人のあいだで神の言葉を実行するしもべでした。そのような人たちが、神を知る者だと言えるでしょうか。神によって完全にされた者だと言え

るでしょうか。いや、言えません。ならばその人数にかかわらず、神の目から見て、彼らは神の心を知る者と呼ばれるのに相応しかったのでしょうか。神の証人と呼ぶことができるでしょうか。決してそう呼ぶことはできません。神の心を知る者、神の証人などと呼ばれる価値など当然ありません。では、神はそのような人を何と呼びましたか。先ほど読んだ聖書の聖句の中で、神は彼らを何度も「わたしのしもべ」と呼んでいます。つまり当時、神の目から見て、このような正しい人たちは神のしもべであり、地上で自身に仕える人たちでした。神はこの呼び名をどう思っていましたか。なぜそう呼んだのですか。人々の呼び方について、神は心の中で基準をもっているのでしょうか。もちろんもっています。正しい人、完全な人、公正な人、しもべなど、神が人をどう呼ぶにせよ、神には基準があります。神がある人を「神のしもべ」と呼ぶとき、その人は神の使いを受け入れ、神の命令に従い、その使いに命じられたことを実行できると、神は確信しています。この人物は何を実行しますか。神が人に地上で実行するよう命じたことを、この人物は実行します。このとき、神が人に地上で実行するよう求めたことを、神の道と呼べるでしょうか。いや、呼べません。当時、神は人に対し、いくつかの簡単なことをせよとしか求めなかったからです。つまり、いくつかの単純な命令を発し、これをせよ、あれをせよと命じたただけだったのです。神は自身の計画に従って働きを行なっていました。当時は条件が整っておらず、機も熟しておらず、人間が神の道を背負うのは難しかったため、神の心から神の道がはまだ発せられていなかったからです。ここでわたしたちが見た、神が語った正しい人を、神は三十人であれ二十人であれ、自分のしもべと見なしました。神の使いが彼らに臨んだとき、彼らは使いを受け入れ、命令に従い、使いの言葉通りに行動することができました。これはまさに、神の目から見てしもべである者たちによってなされ、成し遂げられるべきことでした。神は人の呼び名に関して思慮深いのです。神が彼らをしもべと呼んだのは、彼らが今のあなたがたのような人だったからではありません。つまり、数多くの説教を聞き、神が行なおうとすることを知り、神の旨の多くを理解し、神の経営計画について深く知っていたからではないのです。むしろ、彼らの人間性が正直で、神の言葉に従えるからでした。神が彼らに命令すると、彼らは自分のしていることを脇にのけて、神が命令したことを実行できたのです。そのため、神にとって、しもべという肩書きに込めたもう一つの意味は、地上における自身の働きに協力する者ということでした。そして彼らは神の使いではないものの、地上で神の言葉を遂行し、実現させる者たちだったのです。したがって、これらのしもべ、あるいは正しい人たちは、神の心の中で大きな比重を占めていたことがわかります。神が地上で行なおうとしていた働きは、神に協力する人間なくして行なうことができず

、また神のしもべが引き受けた役割は、神の使いには果たせないものだったのです。神がこれらのしもべに命令した一つひとつのことは神にとって非常に重要だったので、神は彼らを失うわけにはいきませんでした。これらのしもべによる神への協力がなければ、神が人類のあいだで行なう働きは行き詰まり、その結果、神の経営計画と希望も無に帰していたことでしょう。

神は自身が慈しむ人々に溢れるほどの憐れみを与え、忌み嫌い拒絶する人々に深く怒る

聖書の記録では、ソドムに神のしもべが十人いたでしょうか。いや、いませんでした。この町は神に許されるに値したでしょうか。この町で唯一口トだけが、神の使いを受け入れました。これが意味するのは、この町に神のしもべが一人しかいなかったこと、また神はそのために口トを救い、ソドムの町を滅ぼすより他になかったということです。先ほど引用したアブラハムと神のやりとりは単純なものに見えますが、実はとても深い事柄を示しています。神の行動には原則があり、神は決断を下す前に長い時間をかけて観察し、熟考する、ということです。ふさわしいときにならないければ、決断を下すことも何らかの結論に飛びつくことも決してありません。アブラハムと神のやりとりは、ソドムを滅ぼすという神の決断に少しの間違いもなかったことを示しています。その町に正しい者が四十人、三十人、いや二十人もいないことをすでに知っていたからです。正しい者は十人すらおらず、町で正しい者は口トだけでした。ソドムで起こったすべてのこと、そしてその状況を神は見ており、手に取るようにわかっていたのです。したがって、神の決断が間違っていたはずはありません。対照的に、人間は神の全能性に比べてとても鈍く、愚かで無知であり、まったく近視眼的です。これがアブラハムと神とのやりとりからわかることです。神は初めのときから今日まで、自身の性質を現わし続けています。ここにもまた、わたしたちが見るべき神の性質があります。数字は単純なもので、それ自体は何も示しませんが、ここでは神の性質を示す非常に重要なことが表現されています。神は五十人の正しい者のために町を滅ぼしません。これは神の憐れみによるものですか。神の愛と寛容によるものですか。神の性質のこの側面をあなたがたは理解していましたか。たとえ正しい者が十人しかいなかったとしても、その十人がいるために、神は町を滅ぼさなかったはずです。これは神の寛大さと愛ですか、それとも違いますか。これらの正しい者たちに対する憐れみ、寛容、そして慈しみのために、神は町を滅ぼそうともしませんでした。これが神の寛容なのです。では、わたしたちは最後にどのような結果を見ますか。アブラハムが「もしそこに十人いたら」と言ったとき、神は「滅ぼさない」と答えました。その後、アブラハムはそれ以上何も言いませんでした。

。ソドムにはアブラハムの言う十人の正しい者がおらず、それ以上何も言えなかったからです。またそのとき、なぜ神がソドムを滅ぼすと決めたのか、アブラハムは理解したのです。ここで神のどのような性質がわかりますか。神はどのような決意をしましたか。つまり、この町に十人の正しい者がいなければ、町が存在することを許さず、必ずや滅ぼすと決意したのです。これは神の怒りではないでしょうか。この怒りは神の性質を表わすものでしょうか。この性質は神の聖い本質を示すものでしょうか。これは人間が犯してはならない神の義なる本質の現われでしょうか。ソドムに十人の正しい者がいないことを確認すると、神は必ずやソドムを滅ぼし、その町の人を厳しく懲罰しようとしていました。彼らが神に敵対し、非常に汚れて墮落していたからです。

これらの聖句をこのように分析してきたのはなぜですか。これらいくつかの単純な文章が、豊富な憐れみと深い怒りを兼ね備えた神の性質を完全に表現しているからです。神は正しい者を尊び、憐れみ、寛容を示し、慈しみますが、それと同時に、神の心の中には墮落したソドムの民全員への深い嫌悪がありました。これは豊富な憐れみと深い怒りですか、それとも違いますか。神はどのような方法でこの町を滅ぼしましたか。火によってです。では、なぜ火を使って滅ぼしたのですか。何かが火によって燃やされるのを見たり、自分が何かを燃やそうとしたりするとき、あなたはそれに対してどのような感情を抱きますか。なぜそれを燃やしたいのですか。それがもう必要ないからですか、あるいはもう見たくないからですか。それを捨てたいからですか。神が火を使うのは放棄と嫌悪を意味しており、ソドムをこれ以上見たくないということでした。それがソドムを焼き滅ぼした際の神の感情です。火を使ったことは、神がどれほど怒っていたかを表わしています。確かに、神の憐れみと寛容は存在しています。しかし、神が怒りを解き放つ際の聖さと義は、一切の背きを許さない神の側面を人に見せます。人間が神の命令に完全に従うことができ、神の要求に従って行動するとき、神は人に対する憐れみで満ちています。しかし、人間が墮落で満ちていたり、神への憎悪と敵意で一杯だったりするとき、神は深く怒ります。では、神の怒りはどれほど深いのでしょうか。神の怒りは、神が人間の抵抗と悪行を見なくなるまで、それらが神の目の前から消えてなくなるまで続きます。そのとき初めて、神の怒りは消えるのです。言い換えると、誰であれ心が神から遠くなり、離れ、神に立ち返ることがないならば、その人が外見上、あるいは主観的な願望において、いかに神を崇拜し、神に従っても、そして肉において、あるいは思考の中で神に服従しても、神の怒りは途切れることなく解き放たれます。そのため、人間に十分な機会を与えたうえで、いったん深い怒りが発せられるならば、神がそれ

を撤回することはなく、二度とそのような人に憐れみや寛容を示しません。これが一切の背きを許さない神の性質の一側面です。ここで、神がある町を滅ぼすのは当然のように人々には思えます。と言うのも、神の目から見て、罪に満ちた町が存続することはできず、神によって滅ぼされるのが理にかなっているからです。しかし、神がソドムの町を滅ぼす前後に起こったことの中に、神の性質の全体像が見てとれます。優しく、美しく、善いものに対し、神は寛大で憐れみに満ちています。邪悪で罪深く、悪意に満ちたものに対して神は深く怒り、その怒りは止まることがないほどです。溢れんばかりの憐れみと深い怒りが、神の性質における主要かつ最も顕著な二つの側面であり、またそれ以上に、最初から最後まで神によって示されてきたものです。あなたがたの大半は神の憐れみを何かしら経験していますが、神の怒りを味わった人はほとんどいません。神の憐れみや慈愛は誰の中にも見るすることができます。つまり、神はすべての人に対して憐れみ深いのです。しかし、神があなたがたの誰かに、あるいは人々の一団に、深い怒りを向けたことはほとんどありません。いや、一度もないと言っていいでしょう。落ち着きなさい。早かれ遅かれ、誰もが神の怒りを見て経験します。いまはまだそのときではないのです。それはなぜですか。神が常に誰かに対して怒っているとき、つまり神が深い怒りを彼らのうえに解き放つときというのは、神が長いあいだその者を嫌い、拒絶し、その存在を忌み嫌い、耐えられなくなったということです。神の怒りが下るや否や、その者たちは消え去ります。今日、神の働きはまだそこまで達していません。いったん神が深く怒ると、あなたがたの中に耐えられる人は一人もいません。そうであれば、神は現時点であなたがたに憐れみ深いだけで、あなたがたはまだ神の深い怒りを見ていないということがわかります。まだ納得していない人がいたら、神が自分に怒りを注ぐように頼んでみるとよいでしょう。そうすれば、神の怒りと、人による背きを許さない神の性質が、本当に存在するかどうかはわかるはずです。あえて試そうと思いますか。

終わりの日の人々は神の言葉の中に神の怒りを見るだけで、神の怒りを真に体験することはない

聖書のこれらの節に見られる神の性質の二つの側面は、交わる価値のあるものでしょうか。この物語を聞いて、神への理解が一新されたでしょうか。あなたがたはどのように理解していますか。創造のときから今日に至るまで、この最後の集団ほど神の恵み、あるいは神の憐れみと慈愛を享受した集団は他になかったと言えるでしょう。最後の段階において、神は裁きと刑罰の働きを行ない、威厳と怒りによって働きを行なってきましたが、ほとんどの場合、言葉だけを使って自身の働きを成し遂げます。言葉を用いて

教え、潤し、施し、養うのです。その間、神の怒りはずっと隠されており、その言葉の中で怒りに満ちた神の性質を経験する場合を除き、神の怒りを自ら経験したことがある人はほとんどいません。つまり、神の裁きと刑罰の働きが行なわれている間、その言葉の中で現わされている神の怒りによって、人々が神の威厳と、神が背きを許さないことを経験することはできますが、その怒りが言葉の枠からはみ出ることはありません。言い換えれば、神は言葉を用いて人を戒め、暴き、裁き、罰し、そして断罪することさえあります。しかし、人間に対してまだ深く怒ってはおらず、言葉を用いる以外に人への怒りを発したことはほとんどありません。したがって、この時代に人間が経験した神の憐れみと慈愛は神の真の性質の現われであり、一方、人間が経験した神の怒りは単に神の発言の口調と語感の影響に過ぎないのです。この影響をもって、神の怒りを真に経験した、あるいは真に認識したと、多くの人が誤解しています。その結果、ほとんどの人が神の言葉の中に神の憐れみと慈愛、そして神が人の背きを許さないことを見たと感じており、その大半が人間に対する神の憐れみと寛容を理解するようになったとさえ思っています。しかし、人間の行ないがどれだけ悪くても、人間の性質がどれだけ墮落していても、神はいつも耐えてきました。神が忍耐する目的は、自身の語った言葉、注いだ労力、および払った代価が、自分が得ようと望む人たちの中で効果を発揮するのを待つことです。このような結果を待つのは時間がかかることであり、人のために様々な環境を創る必要があります。それは、人が生まれてすぐには大人にならず、成熟した本当の大人なるまで十八年から十九年かかり、二十年から三十年かかる人さえいるのと同じことです。神はこの過程が完了するのを待っており、そのようなときが来るのを待っています。そしてその結果が訪れるを待っているのです。そして待つあいだ、神はずっと溢れんばかりの憐れみに満ちています。しかし、神の働きのこの期間に、極めて少数の人々が打ち倒され、また神への重大な反抗のために懲罰を受けた人もいます。そのような例は、人間の背きを許さない神の性質のより確かな証明でもあり、また選民に対する神の寛大さと寛容が実在することを完全に立証しています。もちろん、これらの典型的な例において、神の性質の一部がこれらの人々において表わされたことは、神の経営計画全体に影響を及ぼすものではありません。事実、神の働きにおけるこの最終段階で、神は待ち続けていた間ずっと耐えてきたのであり、自分の忍耐およびいのちと引き換えに、自身に従う人たちを救ってきたのです。あなたがたにそれがわかりますか。神は何の理由もなく計画を覆すことはしません。神は怒りを解き放つことも、憐れみで満ちていることもできるのです。これが神の性質における二つの主要な部分の現われです。はっきりわかりますか。あるいははっきりしていませんか。別の言葉で言えば、神に関して

言うなら、善悪、公正と不正、肯定的なものと否定的なものはすべて、人間に対してははっきり示されているのです。神が行なうこと、好むもの、嫌うものはどれも、神の性質の中に直接反映されることが出来ます。それらのことはまた、神の働きの中で極めてわかりやすく明確に見ることができ、漠然としていたり全般的であったりすることはありません。むしろそれらは、すべての人が神の性質、および神が所有するものと神そのものを、ひととき具体的に、真に、かつ現実的に見ることを可能にします。これが本当の神自身なのです。

神の性質が人間から隠されたことはない——人間の心が神から離れたのである

もしわたしがこれらの事柄について交わらなければ、あなたがたは一人として聖書の物語にある神の真の性質を見ることはできないでしょう。これは事実です。と言うのも、聖書にあるこれらの物語は神が行なったことの一部を記録しているものの、神はいくつかの言葉しか語っておらず、自身の性質を直接現わしたり、自身の旨を公然と人間に示したりはしていないからです。後の時代の人々は、これらの記録を単なる物語としてしか捉えておらず、それゆえ人々にとって、神は自ら人間から隠れており、また人間から隠されているのは神の実体ではなく、神の性質と旨であるかのように思われるのです。今日のわたしの交わりの後も、神が人から完全に隠れていると感じるでしょうか。あなたがたはそれでも、神の性質が人間から隠されていると思うでしょうか。

創世以来、神の性質はその働きと歩みをともにしてきました。それが人間に隠されていたことはなく、完全な形で公に、人間にもわかりやすく表わされてきました。それでも時間が経つとともに、人間の心はよりいっそう神から遠ざかり、人間の墮落がより深くなるにつれ、人間は神からますます離れていきました。ゆっくりと、しかし確実に、人間は神の視界から消えていったのです。人間は神を「見る」ことができなくなり、そのせいで神についての「知らせ」が届かなくなりました。かくして、人間は神が存在するかどうかはわからなくなり、神の存在を完全に否定するまでになったのです。結果として、神の性質、および神が所有するものと神そのものに対する人間の無知は、神が人間から隠れていることが原因ではなく、人間の心が神から離れたことが原因なのです。人間は神を信じているものの、その心に神はおらず、神をどう愛するかもわからず、神を愛したいとも思っていません。人間の心は神に近づいたことがなく、常に神を避けているからです。その結果、人間の心は神から離れているのです。では、人間の心はどこにあるのでしょうか。実際には、人間の心がどこかに行ってしまったわけではありません。自分の心を神に捧げたり、神に示して見てもらおうとしたりする代わりに、自分の

中に閉じ込めているのです。それにもかかわらず、中には「ああ神よ、わたしの心をご覧ください。わたしの考えるすべてのことをあなたはご存知です」としばしば祈る人もいれば、自分の心を神に見せると誓い、その誓いを破れば懲罰を受けても構わないと言う人さえいます。たとえ自分の心のうちを神に見えるようにしたとしても、それは人間が神の指揮と采配に従えるという意味でも、自分の運命や将来を手放し、自分のすべてを神の支配に委ねたという意味でもありません。したがって、あなたが神に立てる誓いや、あなたが神に宣言したことにかかわらず、神の目から見て、あなたの心は神に閉ざされたままです。なぜなら、あなたは神に自分の心を見せるばかりで、それを支配することは許していないからです。言い換えると、あなたは神に自分の心をまったく捧げておらず、神に対して聞こえのいい言葉を述べているに過ぎないのです。その一方、あなたは諸々の不誠実な意図に加え、陰謀、策略、計画を神から隠しており、また自分の将来と運命が神に取り上げられることを深く恐れ、それらを固く握りしめています。このように、神に対する人間の誠実さというものを、神は決して目にしません。神は人間の心の奥深くを観察し、人間が心の中で考えていることや願っていること、および人間が心にしまい込んでいるものを見ることができそうですが、それでも人間の心は神に属しておらず、神の支配に委ねられてもいません。つまり、神には観察する権利があっても、支配する権利はないのです。人間は主観的な意識の中で、自分を神の采配に委ねることを望んでもいなければ、そうしようとも思っていない。自分を神から閉ざしてきただけでなく、どうしたら自分の心を覆い隠せるかを考える人さえいます。そのような人は聞こえのよい言葉とお世辞を並べて偽りの印象を生み出し、神の信頼を得て、自分の素顔を神の目から隠そうとします。神に見させまいとする彼らの目的は、自分が本当はどのような存在であるかを、神に知られないようにするためです。そのような人は神に心を捧げようとは思わず、手放さずにいることを望んでいます。そのことは、人間が行なうことや望むことはすべて人間自身が計画し、計算し、そして決定するということを暗に意味しています。神による参加や介入は必要としておらず、ましてや神の指揮や采配など無用です。したがって、神の命令、神が与える使命、あるいは神が人間に行なう要求にかかわらず、人間の決定は自分の意図と利益、そのときの状態と状況に基づいているのです。人間は常に、自分に馴染みのある知識と見識、そして自分の知性を使い、自分が進むべき道を判断して選択し、神の介入や支配を許しません。これが神から見た人間の心です。

初めのときから今日に至るまで、神と対話できるのは人間だけでした。つまり、すべ

ての生き物と神の被造物の中で、人間以外に神と対話できるものはいなかったということです。人間には耳があって聞くことができ、目があって見ることができます。また人間は言葉、自分の考え、そして自由な意志をもっています。神が語るのを聞き、神の旨を理解し、神からの使命を受け入れるにあたり、人間はそのために必要なものをすべて持ち合わせており、それゆえ神は自身の一切の望みを人間に託すとともに、自身と同じ心を持ち、ともに歩める仲間になりたいと願っているのです。神は経営を始めて以来、人間が自分の心を神に捧げ、神によって清められてそれを備え、神を満足させて愛されるもの、神を恐れ悪を避けるものにしたいと願っています。神はその実現をずっと心待ちにしています。聖書にそのような人物の記録はありますか。つまり聖書の中に、自分の心を神に捧げられた人物はいるでしょうか。時代を遡って前例はあるでしょうか。今日は引き続き聖書の記録を読み、ヨブというこの人物によってなされたことが、今日お話ししている「心を神に捧げる」というテーマと何らかの関連があるかどうかを見ていきます。まず、ヨブは神に満足してもらうことができる人物であったかどうか、そして神に愛されていたかどうかを検討しましょう。

ヨブに対するあなたがたの印象はどのようなものですか。聖句の原文を引用し、ヨブは「神を恐れ、悪に遠ざかった」と言う人がいます。「神を恐れ、悪に遠ざかった」というのは聖書に書かれているヨブの本来の評価です。あなたがた自身の言葉を使うならば、ヨブをどう形容するでしょうか。ヨブは理知を備えた善人だったと言う人もいるでしょう。また、神に対する真の信仰をもつ人だったとか、正しく情け深い人だったと言う人もいるでしょう。あなたがたはヨブの信仰を見てきました。つまり、あなたがたは心の中でヨブの信仰をととても重要視しており、それをうらやましく思っているのです。そこで今日は、ヨブのもつ何が神をそこまで喜ばせたかを検討しましょう。それでは次の聖句を読んでみましょう。

C. ヨブ

1. 神と聖書によるヨブの評価

ヨブ記 1:1 ウズの地にヨブという名の人があった。そのひととなりは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった。

ヨブ記 1:5 そのふるまいの日がひとめぐり終るごとに、ヨブは彼らを呼び寄せて聖別し、朝早く起きて、彼らすべての数にしたがって燔祭をささげた。これはヨブが「わたしのむすこたちは、ことによったら罪を犯し、その心に神をのろったかもしれない」と

思ったからである。ヨブはいつも、このように行った。

ヨブ記 1:8 ヤーウェはサタンに言われた、「あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか」。

これらの聖句から読み取れる重要な点は何でしょうか。この三つの短い聖句はいずれもヨブに関連しており、文章は短くても、ヨブがどのような人物だったかを明確に示しています。聖句で描かれたヨブの日々の振る舞いや行動から、ヨブに対する神の評価は根拠のないものではなく、十分な根拠に基づいていたことが誰にでもわかります。またこれらの箇所から、ヨブに対する人間の評価（ヨブ記 1:1）も神の評価（ヨブ記 1:8）も、神と人の前におけるヨブの行ない（ヨブ記 1:5）の結果であることがわかります。

まずは一つ目の聖句を読みましょう。「ウズの地にヨブという名の人があった。そのひととなりは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった」。これは聖書における最初のヨブの評価であり、この一文は著者によるヨブの評価です。当然、それは人によるヨブの評価を表わすものでもあります。つまり、「そのひととなりは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった」という評価です。次に、神によるヨブの評価を読みましょう。「ヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にない」（ヨブ記 1:8）。この二つのうち、一つは人間によるもの、もう一つは神によるものであり、同じ内容に対する二つの評価です。こうして、ヨブの振る舞いと行動は人間に知られており、また神にも賞賛されていたことがわかります。つまり、ヨブの行ないは人の前でも神の前でも変わらなかったということです。神が自分の振る舞いと動機を観察できるよう、ヨブはそれらを絶えず神の前に晒しており、また彼は神を畏れて悪を避ける人でした。そのため、神の目から見て、ヨブは地上で唯一完全に正しく、神を畏れ悪を避ける人間だったのです。

ヨブが日常生活において神を畏れ悪を避けていたことを示す具体的な描写

次に、ヨブが神を畏れて悪を避けている具体的な例を検討しましょう。ヨブ記第1章5節を、その前後の句も含めて読んでみましょう。この一節は、ヨブが神を畏れて悪を避けた様子を具体的に描写しており、ヨブが日々の生活の中でどのように神を畏れて悪を避けたかに関連しています。特筆すべきは、ヨブは神を畏れて悪を避けるために自分のすべきことをしただけでなく、自分の息子たちのために定期的に燔祭の捧げ物をしたことです。それは、息子たちが「罪を犯し、その心に神をのろったかもしれない」ことを恐れたからです。その恐れはヨブにおいてどう現われたのでしょうか。聖書には次のよ

うに書かれています。「そのふるまいの日がひとめぐり終るごとに、ヨブは彼らを呼び寄せて聖別し、朝早く起きて、彼らすべての数にしたがって燔祭をささげた」。ヨブの行ないは、彼の神への畏れが表面的な振る舞いに現われているのではなく、心の内側から生じるものであり、日常生活のあらゆる側面において神への畏れが常に見出せたことを示しています。自分が悪を避けただけでなく、自分の息子たちのためにしばしば燔祭の捧げ物をしていたからです。言い換えれば、ヨブは神に対して罪を犯し、心の中で神を拒むことを深く恐れていただけでなく、息子たちが神に対して罪を犯し、心の中で神を拒むことをも心配していたのです。このことから、神に対するヨブの畏れは非の打ち所がない真実であり、誰にも疑う余地のないことがわかります。ヨブは時折こうしていたのでしょうか、それとも頻繁にでしょうか。聖句の最後の一文に、「ヨブはいつも、このように行った」とあります。これは、ヨブが時折、あるいは気が向いたときに息子たちの様子を見に行っていたのではなく、また祈りを通じて悔い改めていたのでもないということを意味しています。むしろ、ヨブは定期的に息子たちを送り出して聖別させ、息子たちのために燔祭の捧げ物をしました。ここで言う「いつも」は、ヨブが一日か二日、もしくはほんの一瞬そのようにしたということではありません。神に対するヨブの畏れは一時的な現われではなく、認識や口先の言葉に留まるものでもなく、むしろ神を畏れて悪を避ける道がヨブの心を導き、彼の振る舞いを決定していたのであって、それが心の中で自身の生存の根源となっていた、ということを言っているのです。ヨブがいつもそのようにしていたことは、自分が神に対して罪を犯すのではないか、また息子と娘たちも罪を犯すのではないかと恐れていたことを示しています。ここから、神を畏れて悪を避ける道がヨブの心の中でいかに多くの比重を占めていたかがわかります。ヨブは心の中で恐怖と不安を感じていたので、いつもそのようにしていました。つまり、悪事を行なって神に対して罪を犯し、神の道から外れて神に満足してもらえないことを恐れたために、いつもそのようにしていたのです。ヨブは同時に、息子と娘たちが神に背いたのではないかと心配しました。日常生活におけるヨブの普段の行ないはこのようなものでした。この普段の行ないこそが、ヨブの「神を畏れて悪を避ける」ことが空虚な言葉ではなく、実際にそうした現実を生きたことを証明しています。「ヨブはいつも、このようにした」。この言葉は、神の前におけるヨブの日常の行ないを示しています。ヨブがいつもこのように行動していたとき、彼の振る舞いと心は神のもとに届いたのでしょうか。つまり、神はヨブの心と行ないをしばしば喜んだのでしょうか。そうであれば、どのような状態で、どのような背景で、ヨブはそのようにし続けたのでしょうか。神が頻繁に目の前に現われたから、ヨブはそのように行動したのだと言う人がいます。また

、悪を避ける意志があったからいつもそうしたのだと言う人もいます。さらには、自分の富が簡単に手に入ったものではなく、神から授けられたものだと思っていたので、罪を犯した結果、あるいは神に背いた結果として、自分の富を失うことを深く恐れたのだと言う人もいます。この中に正解はあるでしょうか。どれも明らかに違います。なぜなら、神の目から見て、神がヨブに関して受け入れ、もっとも尊いと感じたのは、彼がいつもそのようにしていたということだけでなく、それ以上に、サタンの手に引き渡されて試みを受けた際、ヨブが神、人、そしてサタンの前でそのような振る舞いを見せたことです。以下に示す箇所はもっとも説得力のある証拠であり、神によるヨブの評価の真実が示されています。続いて以下の聖句を読んでいきましょう。

2. サタンがヨブを初めて試みる（ヨブの家畜が盗まれ、ヨブの子供たちに災いが降りかかる）

a. 神が語った言葉

ヨブ記 1:8 ヤーウェはサタンに言われた、「あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか」。

ヨブ記 1:12 ヤーウェはサタンに言われた、「見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない」。サタンはヤーウェの前から出て行った。

b. サタンの返答

ヨブ記 1:9-11 サタンはヤーウェに答えて言った、「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか。あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです。しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらん下さい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」。

ヨブの信仰が完全なものになるよう、神はサタンがヨブを試みることを許す

ヨブ記第1章8節は、聖書においてヤーウェ神とサタンのやりとりが記されている最初の箇所です。では、神は何と言いましたか。原文には次の記述があります。「ヤーウェはサタンに言われた、『あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか』」。これが、サタンの前でのヨブに対する神の評価です。ヨブは完全で正しい人、神を畏れて悪を避ける人だと神は言

いました。神とサタンのこのやりとりに先立ち、神はサタンを用いてヨブを試みよう、ヨブをサタンの手に渡そうと決意しました。そのことは、一面から見れば、ヨブに対する神の観察と評価が正確で何も間違えていないことを証明しており、ヨブの証しを通じてサタンを辱めることになるでしょう。また別の面から見れば、神に対するヨブの信仰と畏れを完全なものとするはずです。そのため神は、サタンが自身の前に現われたとき、曖昧な言葉を使わず、単刀直入にこう訊いたのです。「あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか」。この神の質問には次のような意味があります。つまり、サタンがあらゆるところを巡り、神のしもべであるヨブをしばしば偵察していたことを、神は知っていたのです。サタンは頻繁にヨブを試み、攻撃することで、神に対するヨブの信仰と畏れが堅固なものではないと証明すべく、彼を破滅させる方法を見つけようとしたのです。またサタンは、ヨブに神を捨てさせ、神の手からヨブを奪い取れるよう、ヨブを打ちのめす機会をただちに窺いました。しかし神はヨブの心の中を見て、ヨブが完全で正しく、神を畏れて悪を避けることがわかりました。神は質問をすることで、ヨブが神を畏れて悪を避ける完全で正しい人であり、神を捨ててサタンに従うことは決してないとサタンに伝えたのです。ヨブに対する神の評価を聞いたサタンは屈辱のあまり激怒し、その怒りは大きくなって、何としてもヨブを奪おうと思いました。完全で正しい人間、神を畏れて悪を避けることのできる人間などいないと、サタンは信じていたからです。それと同時に、サタンは人間の完全さと正しさを嫌い、神を畏れて悪を避ける人を憎んでもいました。ゆえに、ヨブ記第1章9-11節には以下のように書かれています。「サタンはヤーウェに答えて言った、『ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか。あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです。しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう』」。神はサタンの悪意に満ちた本性をよく知っており、ヨブに破滅をもたらそうとずっと企んでいたことも熟知していました。そのため神は、ヨブが完全で正しく、神を畏れて悪を避ける人間であると改めてサタンに伝えることで、サタンを自分に協力させ、サタンがその素顔を晒した上で、ヨブを攻撃して試みることを望んだのです。つまり神は、ヨブは完全で正しく、神を畏れて悪を避ける人だと意図的に強調し、そうすることで、完全で正しく、神を畏れて悪を避けるヨブに対する憎みと怒りのために、サタンがヨブを攻撃するようにさせたのです。結果として、ヨブが完全で正しく、神を畏れて悪を避ける人だという事実を通じて、神はサタンを恥じ入らせ、サタンは

完全に辱められ、打ち倒されることになるはずです。その後は、ヨブが完全で正しく、神を畏れて悪を避ける人であることを、サタンが疑ったり非難したりすることはなくなるでしょう。そのようなわけで、神の試練とサタンの試みはほぼ避けられないものになりました。神の試練とサタンの試みに耐えられる唯一の人はヨブでした。このやりとりの後、サタンはヨブを試みることを許され、かくしてサタンによる最初の攻撃が始まりました。このとき、攻撃の標的はヨブの財産でした。と言うのも、サタンはヨブを次のように非難していたからです。「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。……あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです」。その結果、神はサタンに対し、ヨブの持ち物をすべて取ることを許しています。これがまさに、神がサタンと話した目的でした。それにもかかわらず、神はサタンに一つのことを要求しました。「見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない」（ヨブ記 1:12）。これが、ヨブへの試みをサタンに許し、ヨブをサタンの手に渡した際に神が出した条件でした。そしてこれが、神がサタンに定めた制限でした。つまり神は、ヨブに危害を加えてはならないと命令したのです。ヨブが完全で正しいことを神は知っており、またヨブが自分の前で完全で正しいことに疑いの余地はなく、試練に耐えられると信じていたので、神はサタンにヨブへの試みを許すと同時に、制限を設けたのです。サタンはヨブの全財産を取ることを許されましたが、指一本触れることができませんでした。これは何を意味しますか。そのとき、神はヨブを完全にサタンに与えたわけではないということです。サタンは好きな手段を使ってヨブを試みることができたものの、ヨブ自身に危害を加えることはできず、髪の毛に触れることすらできませんでした。それは、人間に関する一切のことは神によって支配されており、人間が生きるか死ぬかは神によって決められることで、サタンにその資格はなかったからです。神がサタンにこれらの言葉を述べたあと、サタンは即座にヨブへの試みを開始しました。あらゆる方法でヨブを試み、間もなくヨブは山ほどの羊や牛に加え、神から与えられたすべての財産を失いました……。このようにして、神の試練がヨブに降りかかったのです。

聖書を読めば、ヨブに試みが降りかかった経緯がわかりますが、試みの対象となったヨブ自身は、何が起きていたかを理解していたでしょうか。ヨブはただの人に過ぎませんでした。もちろん、自分の周りで展開している物語など知るはずありません。しかし、神を畏れ、完全で正しいおかげで、神の試練が自分に降りかかっているのだと認識することができました。霊の領域で起きたことや、これらの試練の背後にある神の意図こそわからなかったものの、何が起ころうとも、完全で正しくあり続け、神を畏れて悪

を避ける道に従うべきだということを、ヨブは知っていました。そうした事柄に対するヨブの態度と反応を、神ははっきりと見ていました。神は何を見ていたのでしょうか。神を畏れるヨブの心を見ていたのです。なぜなら、最初るときから試練を受けるときまでずっと、ヨブの心は神に対して開かれ、神の前に晒されており、またヨブが自身の完全さと正しさを捨てることはなく、神を畏れて悪を避ける道を捨て去ったり、そこから背を向けたりすることもなかったからです。神にとってこれ以上に嬉しいことはなかったのです。次に、ヨブの受けた試みがどのようなものだったか、そしてそれらの試練にヨブがどう対処したのかを検討しましょう。それでは聖句を読みましょう。

c. ヨブの反応

ヨブ記 1:20-21 このときヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し、そして言った、「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」。

ヨブが自分の所有するすべてのものを進んで返したのは、神への畏れのためである

「見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない」と神がサタンに言ったあと、サタンはその場を去り、間もなく、ヨブは突然激しい攻撃を受けました。まず、ヨブの雄牛とロバが略奪され、何人かのしもべが殺されました。次に、ヨブの羊とさらに多くのしもべたちが焼き殺されました。その後はらくだが連れ去られ、ますます多くのしもべたちが殺され、ついには息子と娘たちの命も奪われました。この一連の攻撃が、最初の試みでヨブに降りかかった責め苦です。神に命じられた通り、サタンはこれらの攻撃の最中、ヨブの財産と子どもたちだけを攻撃し、ヨブ自身を傷つけることはありませんでした。それにもかかわらず、ヨブは巨大な富をもつ裕福な人間から、何ももたない人間へと即座に変わってしまったのです。この驚くべき打撃に耐えたり、正しく反応したりすることなど誰にもできませんが、ヨブは自身の並外れた側面を見せました。聖書には次の記述があります。「このときヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝した」。自分の子どもたちと全財産を失ったと聞き、ヨブが最初に見せた態度はこのようなものでした。何より、驚いた素振りをすることも、うろたえることもなく、ましてや怒りや憎しみを表わすことなどありませんでした。つまり、これらの災いは偶然でなく、人間の手によるものでもなく、ましてや報いや懲罰が訪れたのでもない、ヨブはすでに心の中で気づいていたのです。むしろ、ヤーウェの試練が我が身に降りかかったのであり、ヤーウェこそが自分の財産と子どもたちを取ろうとしていたのです。ヨブの心はいたって穏やかで、思考もはっきりし

ていました。完全で正しい人間性のおかげで、ヨブは降りかかった災いを理性的に、自然に、そして正確に判断して決断することができ、その結果、並外れた冷静さで振る舞うことができたのです。「このときヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝した」。「上着を裂き」というのは、ヨブが衣服を身につけておらず、何ももっていなかったことを意味します。「頭をそり」というのは、生まれたばかりの赤児として神のもとへ戻ったことを意味します。「地に伏して拝した」というのは、ヨブがこの世に裸で生まれ、今日も何一つもたず、赤児のように神のもとへ戻ったことを意味します。自身に降りかかったすべての出来事に対するヨブの態度は、いかなる被造物もとることができないものでした。ヤーウェに対するヨブの信仰は、信心の領域を越えるものでした。それは神への畏れであり、従順だったのです。ヨブは神が与えることに感謝したのみならず、取られることにも感謝しました。さらにヨブは、自分の命も含めて、自分がもつすべてのものを自ら進んで神に返すことができたのです。

神に対するヨブの畏れと従順は人類の模範となるものであり、彼の完全さと正しさは人間がもつべき人間性の頂点でした。彼は神を見ることこそありませんでしたが、神は実在すると認識しており、そのために神を畏れました。そして神への畏れのために、神に従うことができました。自分がもつすべてのものについて、ヨブはそれらを神の意のままにさせましたが、一言も不満を漏らさず、神の前にひれ伏し、たとえいまの瞬間に神が自分の肉体を取り上げても、不満など言わずに喜んで受け入れると言ったのです。ヨブのすべての行ないは、彼の完全で正しい人間性によるものでした。つまり、彼の純粹さ、正直さ、優しさの結果として、神の存在に対するヨブの認識と経験は揺らぐことがなかったのです。そしてこの土台の上に、神による導きと、万物において自分が目にした神の業に沿って、自分にすべきことを課し、神の前での考え方、振る舞い、行ない、そして行動の原則を標準化したのです。やがて時間とともに、ヨブの経験は、神に対する現実的かつ実質的な畏れをヨブの中に生じさせ、悪を避けるようにさせました。これが、ヨブが堅く保持する完全さの根源となっているものです。ヨブは正直で、汚れない、優しい人間性をもっており、神を畏れ、神に従い、悪を避けることを実際に経験しており、それと同時に「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ」という認識をもっていました。ひとえにこれらのことにより、ヨブはサタンによるかくもひどい攻撃を受けながらも、しっかり立って証しをすることができました。またひとえにそのおかげで、神の試練が降りかかった際も神を失望させず、神に満足ゆく答えを返すことができたのです。最初の試みにおけるヨブの行ないは非常に率直なものでしたが、後の世代の

人々は、一生努力を重ねてもヨブのような率直さを会得できるかどうか、あるいは先ほど述べたヨブの行ないを自分のものにできるかどうか、自信をもてませんでした。今日、ヨブの率直な行動を目の当たりにし、神を信じて従っていると自称する人々の「死に至るまでの完全な従順と忠誠」という叫びと決意をそれと比べると、あなたがたは深く恥じ入りますか、それとも恥じ入りませんか。

ヨブと彼の家族が受けた苦しみを聖書で読んで、みなさんはどのように受け取ったでしょうか。考え込んでしまうのでしょうか。驚くのでしょうか。ヨブに降りかかった試練は「恐ろしい」と言えるものでしょうか。つまり、聖書に書かれているヨブの試練を読むだけでも恐ろしく、それが実生活においていかに恐ろしいものだったかは言うまでもないということです。したがって、ヨブに降りかかったことは「演習」ではなく、実際の「銃」と「銃弾」を伴う「実戦」だったことがわかります。では、誰の手によってこれらの試練がヨブの身に起きたのでしょうか。もちろん、それらはサタンの仕業であり、サタンが自らの手で行なったことです。それにもかかわらず、それらは神に許可されていました。神はサタンに、どの手段を用いてヨブを試みよと言ったのでしょうか。神はそのようなことは言っていない。神はサタンが守るべき一つの条件を設けただけで、それからヨブに試みが降りかかりました。ヨブに試みが降りかかったとき、人々はそれによってサタンの邪悪さと醜さ、人間に対する悪意と嫌悪、そして神への敵意を感じ取りました。そのことから、この試みがいかに残酷なものだったか、言葉では表現できないことがわかります。この瞬間、サタンが人を虐げる際の悪意に満ちた本性とその醜い顔が完全に露呈したと言えます。サタンはこの機会、つまり神の許可によってもたらされた機会を用いて、ヨブを激しく、かつ冷酷に痛めつけ、その残酷さの手段と程度は、今日の人々には想像することも許容することも一切できないものでした。ヨブはサタンの試みに遭い、またその試みのさなかに固く立って証しをしたというよりも、むしろ神から与えられた試練の中、自身の完全さと正しさを守り、神を畏れて悪を避ける道を守るべく、サタンとの戦いに乗り出したと言うほうが適切でしょう。この戦いで、ヨブは山ほど多くの羊と牛、すべての財産、そして息子と娘たちを失いました。しかし、完全さと正しさ、神に対する畏れを捨てることはありませんでした。つまり、このサタンとの戦いにおいて、ヨブは完全さ、正しさ、そして神への畏れを失うより、財産と子どもを奪われるほうを選んだのです。人間であることの意味の根源を手放さないほうを選んだのです。聖書にはヨブが財産を失った過程全体が簡潔に記されており、ヨブの行ないや態度も記録されています。記述が短く簡潔なために、この試みに遭ったヨブはあたか

もゆったり構えていたかのような感じを与えますが、そのとき実際に起きたことを再現し、悪意に満ちたサタンの本性の事実も考慮すれば、物事はこれらの文章に書かれているほど単純なものでも簡単なものでもありません。実際にははるかに残酷だったのです。人類、および神が認めるすべての人に対するサタンの扱いは、それほどまでに破壊的で憎しみに満ちているのです。ヨブを傷つけてはならないと神がサタンに求めているならば、サタンは平気でヨブを殺していたでしょう。サタンは誰も神を崇拝しないことを望み、神の目から見て義なる者や、完全で正しい者が引き続き神を畏れ、悪を避けていられることを望みません。人々が神を畏れて悪を避けるというのは、サタンを避けて捨てるということです。ゆえに、サタンは神から許可されたのをいいことに、すべての怒りと憎しみを情け容赦なくヨブにぶつけたのです。したがって、ヨブが心身ともに、また内側も外側も、どれほど苦しんだかがわかるでしょう。そのときの様子がどのようなものだったかは、今日のわたしたちが知ることはできず、聖書の記録から、責め苦に見舞われたヨブの当時の感情をわずかに垣間見ることしかできません。

ヨブの揺るぎない高潔さはサタンを恥じ入らせ、慌てて退散させた

では、ヨブがこの責め苦に見舞われていたとき、神は何をしていましたか。神は観察し、見守り、その結果を待っていました。観察して見守りながら、神はどう感じたでしょうか。もちろん悲しみに打ちひしがれていました。しかし悲しみを感じたからというだけで、サタンがヨブを試みるのを許したことに對し、神は果たして後悔したでしょうか。答えはいいえです。神がそのような後悔を感じたはずはありません。ヨブが完全に正しく、神を畏れて悪を避けると、神は堅く信じていたからです。ヨブが神の前で義であることを証明し、サタン自身の邪悪さと卑劣さを暴く機会を、神はサタンに与えただけなのです。さらにそれはヨブにとって、自分が義なる人であり、神を畏れて悪を避けることを、世界の人々とサタン、さらには神に従うすべての人にまで証しする機会でもありました。そしてその最終的な結果は、ヨブに対する神の評価が正しく、何も間違っていないことを証明したでしょうか。ヨブは実際にサタンに勝利したでしょうか。ここでヨブがサタンに勝利したことを証明する、ヨブが語った典型的な言葉を読みましょう。「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう」とヨブは言いました。これが神に対するヨブの従順さの態度でした。次にヨブはこう言いました。「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」。ヨブが語ったこれらの言葉は、神が人の心の奥深くを観察していること、人の考えを見通せることを証明するものであり、ヨブに対する神の評価に誤りがなく、神に認められたこの人が正しい者

だったことを証明しています。「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」。これらの言葉は神に対するヨブの証しです。何の変哲もないこれらの言葉がサタンを脅かし、辱め、慌てて退散させ、さらにはサタンに足かせをはめ、どうしようもなくさせたのです。またこれらの言葉はサタンにヤーウェ神の業の偉大さと力を実感させ、神の道に心を支配されている人がもつ並外れた資質を思い知らせました。そしてさらに、取るに足りない普通の人間が神を畏れて悪を避ける道に従う中で見せる、強力な活力をサタンに対して見せつけたのです。こうしてサタンは最初の戦いに敗れました。「思い知った」にもかかわらず、サタンにヨブを諦めるつもりはなく、その邪悪な本性も何一つ変わりませんでした。引き続きヨブを攻撃しようと、サタンは再び神の前に来ました……。

次に、ヨブが二度目の試みに遭った際の聖句を読みましょう。

3. サタンがもう一度ヨブを攻撃する（腫れ物がヨブの全身を覆う）

a. 神が語った言葉

ヨブ記 2:3 ヤーウェはサタンに言われた、「あなたは、わたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか。あなたは、わたしを勧めて、ゆえなく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお堅く保って、おのれを全うした」。

ヨブ記 2:6 ヤーウェはサタンに言われた、「見よ、彼はあなたの手にある。ただ彼の命を助けよ」。

b. サタンの言葉

ヨブ記 2:4-5 サタンはヤーウェに答えて言った、「皮には皮をもってします。人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。しかしま、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」。

c. ヨブは試練にどう対処したか

ヨブ記 2:9-10 時にその妻は彼に言った、「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神をのろって死になさい」。しかしヨブは彼女に言った、「あなたの語ることは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」。すべてこの事においてヨブはそのくちびるをもって罪を犯さ

なかった。

ヨブ記 3:3 わたしの生れた日は滅びうせよ。「男の子が、胎にやどった」と言った夜もそのようになれ。

神の道に対するヨブの愛は他の全てを越える

聖書には神とサタンの述べた言葉が次のように書かれています。「ヤーウェはサタンに言われた、『あなたは、わたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか。あなたは、わたしを勧めて、ゆえなく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお堅く保って、おのれを全うした』」（ヨブ記 2:3）。この会話の中で、神はサタンに同じ質問を繰り返しています。この質問は、ヨブが最初の試練で見せたもの、および生きたものに対してヤーウェ神が良い評価を与えたこと、そしてその評価が、サタンによる試みを受ける前の評価と何ら変わっていないことをわたしたちに示しています。つまり、ヨブに試練が降りかかる以前、神の目から見てヨブは完全であり、そのため神はヨブとその家族を守り、祝福したのです。神の目から見て、ヨブは祝福されるにふさわしかったのです。試練の後、ヨブは財産と子どもたちを失ったからといって自らの舌で罪を犯すことはなく、ヤーウェの名を称え続けました。ヨブの実際の行ないのために神はヨブを称え、満点の評価を与えました。ヨブにとって、自分の子どもも財産も、神を捨てるほど価値あるものではなかったのです。言い換えれば、ヨブの心における神の居場所が、彼の子どもたちや財産によって置き換わることはあり得なかったということです。最初の試みの中、ヨブは神に対し、神に対する自分の愛、そして神を畏れて悪を避ける道に対する自分の愛が他のすべてを超えることを示しました。この試みは、ヤーウェ神から報いを受け、財産と子どもたちをヤーウェ神に取り上げられるという経験をヨブに与えたに過ぎなかったのです。

ヨブにとってこの試みは、自分の魂をきれいに洗い流す実体験になりました。それは彼の人生を充実させるいのちのバプテスマであり、またそれ以上に、神に対するヨブの従順と畏れを試す壮麗な祝宴でもありました。この試みはヨブの立場を富める者から無一文へと変え、サタンによる人間への虐待も経験させました。ヨブは貧窮したからといってサタンを憎みはしませんでした。それどころか、サタンの下劣な行ないの中にサタンの醜さと卑劣さ、神に対する敵意と反抗を見たのです。ヨブはそれに励まされ、神を畏れて悪を避ける道への決心をよりいっそう、永遠に固くしました。そして財産、子ども、あるいは家族といった外部の要因のために神を見捨てて神の道に背を向けることは決してせず、またサタン、財産、およびどのような人に対しても、その奴隷には決して

ならないと誓いました。ヤーウェ神を除き、誰かが自分の主、自分の神になるなどあり得なかったのです。それがヨブの強い思いでした。一方、ヨブがこの試みから得たものもありました。神から与えられた試練の中で、ヨブは巨大な富を得たのです。

それまでの数十年間の人生において、ヨブはヤーウェの業を目の当たりにし、ヤーウェ神からの祝福を受けてきました。それらはヨブを大いに不安にさせ、また恐縮させた祝福でした。と言うのも、自分は神のために何もしていないのに、これほど偉大な恵みを授けられ、これほど多くの恵みを享受したのだと信じていたからです。そのためヨブは心の中でしばしば祈り、神に報いられるようになること、神の業と偉大さを証しする機会を得ること、自分の従順さが試されること、そしてさらに、自分の従順と信仰が神から認められるまで、自分の信仰が清められることを願いました。かくして、試練が自分に降りかかった際、神は自分の祈りを聞いてくださったのだとヨブは信じました。そしてこの機会を他の何より大切にし、あえて軽々しく扱おうとはしませんでした。最も大きな長年の願いが叶えられるからです。この機会が訪れたのは、神に対する自身の従順と畏れが試され、純粋なものにされることを意味していました。そのうえそれは、神に認められ、近づく機会がもたらされたことも意味していました。試練の間、ヨブはそうした信仰と追求のおかげでより完全になり、神の旨に関する理解をさらに深めました。また、神の祝福と恵みにますます感謝し、心の中で神の業をよりいっそう称え、以前にも増して神を畏れ、崇め、神の愛、偉大さ、そして聖さを切望しました。この時点で、ヨブは神の目から見て、いまだ神を畏れて悪を避ける者でしたが、経験という点から言えば、ヨブの信仰と認識は飛躍的に成長していました。信仰が増し、従順さが足がかりを得て、神への畏れがより深まっていたのです。この試練はヨブの霊といのちを変えましたが、そのような変化はヨブを満足させず、彼の前進を遅らせることもありませんでした。この試練から得たものは何かと計算し、自分の欠点を考えるのと同時に、ヨブは静かに祈り、次なる試練が自分の身に降りかかるのを待ちました。と言うのも、神の次なる試練において、自分の信仰、従順、そして神への畏れが引き上げられることを切望していたからです。

神は人間の奥底にある思い、および人間のすべての言動を見ています。ヨブの思いはヤーウェ神の耳に届き、神はヨブの祈りを聞きました。このようにして、神の次なる試練が予想通りヨブに臨んだのです。

極限の苦しみの中、ヨブは人類に対する神の気遣いを実感する

自分に対するヤーウェ神の質問を聞き、サタンは密かに喜びました。神の目から見て

完全であるこの人間を攻撃することが再び許されるとわかったからです。サタンにとって、それはまたとないチャンスです。この機会を利用してヨブの信念を完全に崩し、神に対する彼の信仰を失わせ、彼が神を畏れることも、ヤーウェの名を称えることもなくなるようにさせようとしたのです。これはサタンに一つの機会を与えるものでした。つまり、いつでもどこでもヨブを思いのままもてあそべるのです。サタンはその悪意に満ちた意図を跡形もなく隠しましたが、邪悪な本性を抑えることはできませんでした。聖句に書かれているヤーウェ神の言葉に対するサタンの返答から、その事実がうかがえます。「サタンはヤーウェに答えて言った、『皮には皮をもってします。人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。しかしま、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃ってごらん下さい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう』」（ヨブ記 2:4-5）。この神とサタンのやりとりから、サタンの邪悪さを明確に理解し、感じることはできないはずはありません。サタンのこの詭弁を聞いて、真理を愛し悪を憎む人はみな間違いなくサタンの下劣さと無恥さをさらに憎み、ぞっとして嫌悪するでしょう。同時に、ヨブに対して心からの祈りと真摯な願いを捧げ、この正しい人が完全にされるよう祈り、神を畏れて悪を避けるこの人が永遠にサタンの試みに打ち勝ち、神の導きと祝福の中、光の中で生きることを願うでしょう。そしてこのような人は、ヨブの義なる行ないが、神を畏れて悪を避ける道を追い求めるすべての人々を永遠に駆り立て、励ますことを願うでしょう。この言葉の中にサタンの邪悪な意図が見て取れますが、神はサタンの「要求」を快諾しました。ただ、一つだけ条件をつけました。それは、「彼はあなたの手にある。ただ彼の命を助けよ」（ヨブ記 2:6）というものです。今回、サタンは手を伸ばしてヨブの肉と骨を傷つけることを求めたので、神は「ただ彼の命を助けよ」と言ったのです。この言葉の意味は、神はヨブの肉をサタンに与えたものの、彼の命は自ら守ったということです。サタンはヨブの命を奪うことこそできませんでした。それ以外のことであれば、ヨブに対してどんな方法や手段でも使うことができたのです。

神の許しを得たサタンはヨブのもとへ急ぎ、手を伸ばしてヨブの皮膚を痛めつけました。するとヨブの全身に腫れ物ができ、ヨブは皮膚に痛みを感じました。それでもヤーウェ神の素晴らしさと聖さを称えたため、サタンは厚かましくもより手荒になりました。人を傷つけることに喜びを感じていたサタンは、手を伸ばしてヨブの肉をかきむしり、腫物がただれるようにしました。ヨブはすぐに比類なき痛みと苦痛を感じ始め、この肉体の痛みが魂に与えた打撃を和らげるかのように、頭の先からつま先まで両手でかき

むしろにはいられなくなりました。また、神がそばにいて自分を見守っていることにヨブは気づいており、全力で覚悟を固めようと思いました。そして再び地にひざまずき、こう言いました。「あなたは人の心をご覧になり、その人の苦悩を見られます。あなたはなぜ人の弱さを心配されるのでしょうか。ヤーウェ神の御名はほむべきかな」。サタンはヨブの耐えがたい苦しみを目にしましたが、ヨブがヤーウェ神の名を捨てるのは見ませんでした。そこでサタンは急いで手を伸ばし、ヨブの骨を痛めつけて必死に彼の四肢を砕こうとしました。ヨブは瞬く間に経験したことのない苦痛を感じました。それはあたかも自分の肉が骨から剥がされ、骨を一つひとつ砕かれるかのようで、その痛さたるや死んだほうがましだと思うほどでした……。苦痛への我慢も限界に達していたのです……。ヨブは叫び声を上げ、少しでも傷みを和らげるために自分の皮膚をはがしたいと思うほどでした。それでもヨブは叫ぶのをこらえ、自分の皮膚をはがすこともしませんでした。自分の弱さをサタンに見せたくなかったからです。そこで再びひざまずいたのですが、今度はヤーウェ神の存在を感じませんでした。ヤーウェ神がしばしば自分の前後左右にいることをヨブは知っていましたが、この痛みの中、神はヨブを一顧だにせず、顔を覆って隠れていたのです。と言うのも、神が人間を創造したのは、人間に苦しみをもたらすためではなかったからです。このときヨブは涙を流しながら、必死に身体の痛みに耐えていましたが、もはや神に感謝せずにはいられなくなりました。「人は最初の一撃で倒れます。人は弱く無力で、若くて無知です。なぜあなたは人を労り、優しくしようと望まれるのですか。あなたはわたしを打ちますが、そうすることで痛みを感じておられます。人のいったい何が、あなたの労りとお気遣いにふさわしいのでしょうか」。ヨブの祈りは神の耳に届きました。そして神は無言のまま、黙って見ただけでした……。あらゆる策を試みながらそのどれも失敗に終わり、サタンは静かに去りました。しかし、ヨブに対する神の試練はまだ終わっていませんでした。ヨブにおいて明らかにされた神の力はまだ公にされていなかったのも、ヨブの物語がサタンの退散で終わることはなかったのです。別の人物が登場し、さらに壮大な場面が続きました。

ヨブが神を畏れ悪を避けたことは、万事において神の名を讃えたことにも示されている

サタンの暴虐に苦しんだヨブは、それでもヤーウェ神の名を捨てませんでした。最初に舞台に登場し、人の目に見える姿でサタンの役を演じてヨブを攻撃したのは彼の妻でした。原文はその様子を次のように描写しています。「時にその妻は彼に言った、『あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神をのろって死になさい』」（ヨブ記 2:9）。これは人の姿をしたサタンによる言葉です。この言葉は攻撃であり、断罪

であり、誘惑であり、試みであり、中傷です。ヨブの肉への攻撃に失敗したサタンは彼の高潔さを直接攻撃し、彼がその高潔さを捨て去り、神を捨て、これ以上生き続けたいことを望んだのです。そのためサタンは、次の言葉を用いてヨブを試みることもしました。つまり、ヤーウェの名を捨てればこのような苦しみに耐える必要はなく、肉体の責め苦から解放される、と。妻の忠告を聞いたヨブは彼女を叱ってこう言いました。「あなたの語ることは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」（ヨブ記 2:10）。ヨブはこれらの言葉をずっと以前から知っていましたが、このとき、これらの言葉に関するヨブの認識の真実が証明されたのです。

ヨブの妻は神を呪って死になさいとヨブに忠告しましたが、その意味はこうです。「あなたの神はあなたをこのように扱っています。それならなぜ神を呪わないのですか。それでもなお生きて何をしていますのですか。あなたの神はあなたに対してとても不公平なのに、それでもあなたは『ヤーウェのみ名はほむべきかな』などと言うのですか。あなたがヤーウェの御名を称えているというのに、災難をもたらすというのはどういうことですか。さっさと神の名を捨てて、従うのをやめなさい。そうすれば災難は終わるのです」。この瞬間、神がヨブにおいて見ることを望んでいた証しが生まれました。普通の人間にそのような証しはできず、また聖書のどの物語にもそのようなことは記されていません。しかしヨブがこのような言葉を発するずっと前から、神はそれを知っていたのです。神はこの機会を使うことで、ヨブがすべての人間に対し、神は正しいのだと証明させることを望んだに過ぎないのです。ヨブは妻の忠告を聞いても高潔さを失わず、また神を捨てることもしなかっただけでなく、妻にこう言いました。「われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」。これらの言葉に大きな重みがありますか。ここに唯一、この言葉の重みを証明できる事実があります。この言葉の重みは、それが神に認められ、神が望むもの、神が聞きたいものであり、また神が見ることを切望していた結果であるということです。また、これらの言葉はヨブの証しの本質でもあります。これにより、ヨブの完全さ、正しさ、そして神を畏れて悪を避けることが証明されたのです。ヨブが尊いのは、試みに遭い、全身が腫物に覆われ、極度の責め苦にさいなまれ、妻や身内に忠告されても、このような言葉を発することができた点にあります。言い換えれば、どのような試みに遭おうと、困難や責め苦がいかに深刻だろうと、ヨブはたとえ死に直面しても神への信仰を捨てず、神を畏れて悪を避ける道を一蹴することがなかったのです。こうして、ヨブの心の中で最も大切な位置を占めてい

たのは神であり、ヨブの心には神だけがいたということがわかります。そのようなわけで、ヨブに関する次のような描写が聖書にはあるのです。「すべてこの事においてヨブはそのくちびるをもって罪を犯さなかった」。ヨブはその唇で罪を犯さなかっただけでなく、心の中で神への不満を漏らすこともありませんでした。また神を傷つける言葉を発することも、神に対して罪を犯すこともありませんでした。ヨブは唇によって神の名を称えただけでなく、心の中でも神を称えたのです。ヨブの唇と心は一つでした。これが神の見た真のヨブであり、まさにこの理由で、神はヨブを大切にしましたのです。

人々がヨブについて抱く数多くの誤解

ヨブが受けた苦難は神の使いによる働きではなく、神自身の手によるものでもありませんでした。むしろそれは、神の敵であるサタンが直接引き起こしたものです。その結果、ヨブが受けた苦しみは大きなものになりました。それでもヨブはこの瞬間、心の中に抱く神に関する日々の認識、日々の行動の原則、そして神に対する姿勢を余すところなく表わしました。これは事実です。ヨブが試みを受けていなければ、また神がヨブに試練を与えなければ、「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」と述べたヨブは偽善者だとあなたは言うでしょう。神はヨブに多くの財産を与えたのだから、ヨブがヤーウェの名を称えたのは当然だと。もしヨブが試みを受ける前に、「われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」と言っていたなら、あなたは「ヨブは誇張しているだけだ。神の手で何度も祝福されてきたのだから、神の名を捨てるはずがない」と言うでしょう。また、「神がヨブに試練をもたらしていれば、ヨブは神の名を捨てたはずだ」とも言うでしょう。しかしヨブは、誰も望まない、あるいは誰も見たくない状況、そして誰もが恐れ、神ですら見るに堪えない状況に置かれた際、それでも高潔さを保ち、「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」と言うことができました。仰々しい言葉を語ることが大好きな人、文字や教義を語ることが大好きな人も、そのときのヨブの行ないを見れば言葉を失います。口先だけで神の名を称え、神の試練を受け入れたことがない人は、ヨブが固く抱いていた高潔さのために咎められ、また人間は神の道を固く守れると信じたことのない人は、ヨブの証しによって裁かれます。試練におけるヨブの行ない、およびヨブが語った言葉を目の当たりにして、困惑する人もいれば、羨む人、疑念を抱く人もいます。さらにはヨブの証しに関心を示さず、鼻であしらう人もいます。そのような人は、試練のさなかにヨブに降りかかった責め苦を目にしたとき、ヨブの言葉

を読むだけでなく、試練が降りかかった際にヨブが見せた「弱さ」も見ているからです。彼らはこの「弱さ」を、ヨブの完全さにおける不完全らしきもの、神の目から見て完全である人間の欠点だと信じています。つまり、完全な人は完璧であり、欠点も汚点もなく、弱さもなく、痛みを知らず、悲しんだり落ち込んだりせず、憎しみを感じることも、外面的に極端な振る舞いをするということもないと信じているのです。結果として大半の人が、ヨブは真に完全であると信じていません。ヨブが試練のさなかに見せた振る舞いの多くを、人々は認めません。例えば、ヨブは財産と子どもを失ったとき、人々が想像するように、泣き叫ぶようなことはしませんでした。ヨブが見せた「非礼」のせいで、人々はヨブのことを冷たい人間だと思いました。家族のために涙を流さず、家族への愛情もなかったからです。これが、人々がヨブに対して最初に抱く悪い印象です。その後のヨブの振る舞いはさらに彼らを困惑させます。「上着を裂いた」のは神に対する不敬と解釈され、「頭をそり」は神への冒瀆および反抗だと誤解されました。「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」というヨブの言葉を除き、人々は神に称えられたヨブの義を一つも識別せず、大多数の人がヨブに行なう評価は理解不能、誤解、疑い、断罪、そして理論上だけの承認という域を超えないのです。ヨブは完全で正しい人、神を畏れて悪を避ける人であるというヤーウェ神の言葉を真に理解し、認識できる人は一人もいません。

人々はヨブに対するこのような印象を基に、彼の義についてもさらなる疑いを抱きます。と言うのも、ヨブの行動と聖書に書かれているヨブの行ないは、人々が想像するように、地を揺るがすような感動的なものではないからです。ヨブは偉業を行なわなかっただけでなく、陶器の破片を手に取り、灰の中に座りながら自らの皮膚をかきむしりました。この行動は人々を驚かせただけでなく、ヨブの義について疑いを抱かせ、さらにはそれを否定させました。と言うのも、ヨブは自分の皮膚をかきむしりながら、神に祈ることも誓いを立てることもせず、それ以上に、苦痛の涙も見せなかったからです。人々がこのとき見たのはヨブの弱さだけであり、それゆえ「われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」とヨブが言うのを聞いてもまったく感動せず、さもないれば決心がつかず、ヨブの言葉から彼の義を識別することができません。試練による責め苦のさなか、ヨブが人々に与える基本的な印象は、彼が卑屈でも傲慢でもないというものです。人々はヨブの心の奥底で演じられていた、彼の振る舞いの裏にある物語を見ておらず、また心の中にある神への畏れも、悪を避ける道の原則を遵守することも見てはいません。人々はヨブの冷静さのために、彼の完全さと正しさは空虚な

言葉に過ぎず、神への畏れも単なるうわさだと考えています。その一方で、彼が外面的に示した「弱さ」は人々に強い印象を残し、神が完全で義であるとしたこの人間に関する「新たな視点」や、さらには「新たな認識」さえも与えるのです。そのような「新たな視点」や「新たな認識」は、ヨブが口を開いて自分の生まれた日を呪った際に証明されることになります。

ヨブが受けた苦しみの程度は、誰一人想像することも理解することもできないものでしたが、ヨブは神に背く発言をせず、自分にできる手段で身体の痛みを和らげるだけでした。聖書に記されているとおり、ヨブはこのように言いました。「わたしの生れた日は滅びうせよ。『男の子が、胎にやどった』と言った夜もそのようになれ」（ヨブ記 3:3）。この言葉を重視した人はおそらく一人もおらず、注意を払った人ならいるかもしれません。あなたがたの考えでは、それらの言葉はヨブが神に反抗したことを意味するものでしょうか。ヨブの言葉は神に対する不平でしょうか。わたしは知っていますが、あなたがたの多くはヨブの言葉について特定の考えをもち、ヨブが完全で正しかったのなら、弱さや悲痛を示すのではなく、サタンのどのような攻撃にも積極的に立ち向かい、サタンの試みを前に笑みすら浮かべるべきだったと信じています。サタンによって肉体にもたらされた責め苦に何の反応も示さず、心中の感情も表わすべきではなかったのです。そしてさらに、神がこれらの試練をより厳しいものにするよう求めるべきだったのです。これが、揺るぎない人間、神を畏れて悪を避ける人間が示し、自分のものにすべきことなのです。この極度の責め苦の中、ヨブは自分の生まれた日を呪う以外に何もしていませんでした。神について不平を言わず、ましてや神に背く意図などなかったのです。これを実行するのは言葉で言うほど簡単ではありません。と言うのも、はるか昔から今日に至るまで、ヨブに降りかかった試みと苦しみを経験した人はいないからです。では、ヨブと同じような試みに晒された人がいないのはなぜでしょうか。それは、神の目から見て、ヨブと同じくらい責任感や使命感をもち、ヨブのように物事を行ない、そしてさらに、このような責め苦が降りかかった際、自分の生まれた日を呪った以外に、神の名を捨てずにヤーウェ神の名を称え続けられた人がいなかったからです。そのようなことをできる人がいるのでしょうか。ヨブについてこのように話すとき、わたしたちは彼の振る舞いを称賛しているのでしょうか。ヨブは義なる人であり、神への証しをすることができ、またサタンが神の前に出て自分を責めることが二度とないよう、尻尾を巻いて退散させることができました。であれば、ヨブを称えることの何が間違っているのですか。あなたがたの基準は神の基準より高いとでも言うのですか。試練が自分に降りか

かるとき、ヨブより立派に行動できるとも言うのですか。ヨブは神に称賛されました。それに対して何の異議を唱えられますか。

ヨブが自分の生まれた日を呪ったのは、神に心を痛めてほしくなかったからである

神が人の心の中を見る一方、人間は人の外側を見るとわたしはよく言います。神は人の心の中を見るので、人の本質を理解しますが、人間は人の外見に基づいてその人の本質を判断します。ヨブが口を開いて自分の生まれた日を呪ったとき、ヨブの三人の友人を含むすべての霊的な人たちが驚きました。人は神から来ただけだから、神から授かった命と肉体、そして自分の生まれた日を感謝すべきであり、それらを呪うべきではないというのです。これは普通の人間なら理解して思いつけることです。神に従う誰にとっても、その理解は犯すことのできない神聖なものであり、決して変わることはない真理です。一方、ヨブはこれらの規則を破り、自分の生まれた日を呪いました。それは、大半の人が一線を越えたと見なす行ないでした。ヨブは人々の理解と慈悲に値しないだけでなく、神の赦しにも値しないのです。同時に、さらに多くの人々がヨブの義を疑うようになりました。なぜなら、ヨブは神に気に入られたことでわがままになり、これまでの人生で神から与えられてきた祝福と慈しみに感謝しないばかりか、自分の生まれた日を呪って滅ぼすほど大胆かつ無謀になったように見えたからです。これが神への反抗でないとすれば何でしょうか。このような表面的な見方は人々にとって、ヨブのこの行ないを断罪する証拠となりましたが、そのときヨブが本当は何を考えていたのか、いったい誰が理解できるのでしょうか。ヨブがそのように行動した理由を、いったい誰が知り得るのでしょうか。この出来事の真相と理由は、神とヨブ自身だけが知っています。

サタンが自らの手を伸ばしてヨブの骨を痛めつけようとしたとき、ヨブは逃げる手段も抵抗する力もないまま、サタンの手中に落ちました。ヨブの身体と魂は激痛に襲われ、その痛みのために、肉に生きる人間の卑小さ、もろさ、無力さを実感しました。同時に、神がなぜ人間を慈しみ、見守るのかに関する深い認識と理解も得ました。サタンの手中に落ちたヨブは、肉と血でできた人間が実に無力で弱いことを知ったのです。ヨブがひざまずいて神に祈ると、あたかも神が顔を覆って隠れているかのように感じられました。神はヨブを完全にサタンの手中へ預けてしまったからです。それと同時に、神もヨブのために涙を流し、またそれ以上に苦しみました。ヨブの痛みで神も痛みを感じ、ヨブが傷ついたことで神も傷ついたのです……。ヨブは神の痛みを感じ、神にとってそれがいかに耐え難いかも感じ取りました……。それ以上神を悲しませることも、神が自分のために涙を流すことも、ましてや自分のために痛みを感じることも、ヨブは望みま

せんでした。このとき、ヨブは自分の肉を取り除き、これ以上この肉からもたらされる傷みに苛まれないことだけを望みました。そうすれば、自分の痛みのために神が苦しまなくて済むからです。しかし、ヨブはそうすることができず、肉の痛みには耐えなければならないばかりか、神に心配をかけたくないという思いの責め苦にも耐えなくてはなりません。この二つの痛み、つまり肉の傷みと霊の痛みは、ヨブに胸が張り裂けるような、はらわたがちぎれるような痛みをもたらし、肉と血でできた人間の限界がもたらす失望と無力を痛感させました。そのような状況のもと、神を切望するヨブの思いはさらに強くなり、サタンに対する嫌悪がさらに増しました。ヨブはこのとき、人の世界に生まれて来なければよかったと思いました。神が自分のために涙を流したり、痛みを感じたりするくらいなら、自分が存在しないほうがよいと思ったのです。ヨブは自分の肉を深く忌み嫌い、自分自身、自分の生まれた日、そして自分に関係する一切のことさえつくづく嫌になり始めました。そして自分の生まれた日やそれに関するものをすべて忘れたいと思い、口を開いて自分の生まれた日を呪いました。「わたしの生れた日は滅びうせよ。『男の子が、胎にやどった』と言った夜もそのようになれ。その日は暗くなるように。神が上からこれを顧みられないように。光がこれを照さないように」（ヨブ記 3:3-4）。ヨブの言葉には「わたしの生れた日は滅びうせよ。『男の子が、胎にやどった』と言った夜もそのようになれ」という自分への憎しみと、「その日は暗くなるように。神が上からこれを顧みられないように。光がこれを照さないように」という自責の念、そして神に痛みをもたらしした罪悪感が込められています。この二つの聖句は当時のヨブの感情を表わす極限の言葉であり、彼の完全さと正しさをすべての人に余すところなく示すものです。それと同時に、ヨブが望んだ通り、彼の信仰と神への従順、そして神に対する畏れは真に高められたのです。もちろんこれは、神が予期した通りの効果でした。

ヨブはサタンを打ち負かし、神の目から見て真の人となる

最初に試練に遭った際、ヨブは財産と子どもを残らず失いましたが、それによって躓くことも、神への罪となる言葉を口にすることもありませんでした。ヨブはサタンの試みに勝利し、物質的財産と子孫に勝利し、世俗の財産をすべて失うという試練に勝利しました。つまり、自分から何かを取り上げる神に従い、また神がしたことに対し、神に感謝と讃美を捧げられたのです。それがサタンによる最初の試みにおけるヨブの振る舞いであり、それはまた、神の最初の試練におけるヨブの証しでもありました。二度目の試練において、サタンはその手を伸ばしてヨブを苦しめました。ヨブはかつて感じた

ことのない苦痛を経験しますが、それでもヨブの証しは人々を驚かせるのに十分でした。ヨブはその不屈の精神、信念、神への従順、そして神への畏れによって再びサタンに勝利し、彼の行ないと証しはまたしても神に認められ、喜ばれました。この試みの間、ヨブはサタンに対し、肉の苦痛は神への信仰と従順を変えることも、神に対する強い愛着と畏れを奪うこともできないと、実際の行ないによって宣言しています。死に直面したからといって、神を拒んだり、自身の完全さと正しさを捨てたりはしないのです。ヨブの決意はサタンを弱腰にし、ヨブの信仰はサタンを臆病にさせて震えさせ、サタンとの生死をかけた戦いの激しさは、サタンの中で強い憎しみと恨みを膨らませ、そしてヨブの完全さと正しさの前にサタンは為す術もなく、ヨブへの攻撃を止め、ヤーウェ神の前で行なったヨブへの非難を捨てました。これが意味するのは、ヨブが世に打ち勝ち、肉に打ち勝ち、サタンに打ち勝ち、そして死に打ち勝ったということです。ヨブはまさに、完全に神に属する人でした。この二度の試練の間、ヨブは固く立って証しを行ない、自身の完全さと正しさを生き通し、神を畏れて悪を避けるという生きる上での原則の範囲を広げました。二つの試練を経たことで、ヨブの中にさらなる経験が生まれ、この経験によってヨブはさらに成熟して鍛えられ、それまで以上に強くなり、さらに強い信念をもち、自身が固く保つ高潔さの正しさと価値をさらに確信しました。ヤーウェ神によるヨブへの試練は、神が人間に対して抱く配慮を彼に深く理解させ、また実感させ、神の愛の尊さを感じ取れるようにしました。そしてそこから、神への思いやりと愛が、神に対するヨブの畏れに加わりました。ヤーウェ神による試練は、ヨブをヤーウェ神から遠ざけなかったばかりか、ヨブの心を神に近づけました。自分の肉の苦痛が頂点に達したとき、ヨブはヤーウェ神から感じ取っていた懸念のために、自分の生まれた日を呪うしかありませんでした。このような行ないは前もって計画されていたものではなく、神への思いやりと愛の自然な表現、神への思いやりと愛から生じた自然な表現なのです。つまり、ヨブは自身を忌み嫌い、神を苦しめることを望まず、またそうすることに耐えられなかったので、ヨブの思いやりと愛は無私のレベルに達したのです。このとき、長年にわたる神への愛と切望、そして神に対する強い愛着が、思いやりと愛というレベルに引き上げられたのです。それと同時に、神に対するヨブの信仰と従順、そして神への畏れもまた、思いやりと愛というレベルに引き上げられました。神に痛みを与え得ること、神を傷つける行ない、そして神に悲しみや嘆き、さらには不幸をもたらすことを、ヨブは一切自分に許しませんでした。神の目から見て、ヨブは以前と同じヨブのままでしたが、ヨブの信仰、従順、神への畏れは神に完全なる満足と喜びをもたらしたのです。このとき、神がヨブに期待した完全さをヨブは獲得しており、神の目から見て「完

全で正しい」と呼ばれるに値する人となっていました。ヨブは自身の義なる行ないのおかげでサタンに勝利し、固く立って神への証しをすることができました。そしてまた、ヨブの義なる行ないは彼を完全にし、いのちの価値を引き上げさせ、これまでになく超越させるとともに、ヨブがサタンによる攻撃や試みを二度と受けない最初の人物となるようにしました。ヨブは義なる人だったので、サタンに責められ、試みられました。ヨブは義なる人だったので、サタンに引き渡されました。そしてヨブは義なる人だったので、サタンに勝利し、サタンを打ち倒し、固く立って証しをしました。そのようにして、ヨブは二度とサタンの手に渡されることのない最初の人となり、真に神の玉座の前に出て、神の祝福のもと、サタンによる監視も破滅もなく、光の中で生きたのです……。ヨブは神の目から見て真の人となり、解放されたのです……。

ヨブについて

ここまで、ヨブが試練を経験した過程を学んできたわけですが、あなたがたの大半はヨブ自身に関する詳しいこと、特にヨブが神の賞賛を受けた秘密に関することをもっと知りたくなっただしょう。では、ヨブについて話をしましょう。

ヨブの日常生活の中に、わたしたちは彼の完全さ、正しさ、神への畏れ、そして悪を避けることを見いだせる

ヨブについて語ろうとするなら、「ヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にない」という、神自身の口から発せられたヨブの評価から始めなければなりません。

まずはヨブの完全さと正しさについて学びましょう。

あなたがたは「完全」および「正しい」という言葉をどのように理解していますか。ヨブに非難すべき点はなく、高潔だったと思うのでしょうか。もちろん、これは「完全」および「正しい」という言葉の文字通りの解釈です。しかし、ヨブのことを真に理解するには実生活の背景が不可欠であり、言葉や書籍や理論が答えをもたらすことはありません。まずはヨブの家庭生活、つまり日々の生活における通常の行ないがどのようなものだったかを検討しましょう。そうすることで、人生における彼の原則と目的、そして彼の人間性や追い求めていたものが見えてくるからです。それではヨブ記第1章3節の最後の部分を読んでみましょう。「この人は東の人々のうちで最も大いなる者であった」。この言葉が意味するのは、ヨブの地位と立場が非常に高かったということであり、多くの財産を所有しているからといって、または完全に正しく、神を畏れて悪を避ける

人間だからといって、東方で最も偉大な人間だったかどうかはわからないにしても、ヨブの地位と立場は非常に尊ばれていたことがわかります。聖書に書かれているように、ヨブに対する人々の第一印象は、神を畏れて悪を避ける完全な人で、巨大な富と尊敬される地位を有していたということです。ヨブはそのような環境と条件のもとで暮らす普通の人間でしたが、その食生活や生活水準、および個人的生活の様々な側面は、ほとんどの人が注目するところでしょう。そこで、引き続き聖句を読む必要があります。「そのむすこたちは、めいめい自分の日に、自分の家でふるまいを設け、その三人の姉妹をも招いて一緒に食い飲みするのを常とした。そのふるまいの日がひとめぐり終るごとに、ヨブは彼らを呼び寄せて聖別し、朝早く起きて、彼らすべての数にしたがって燔祭をささげた。これはヨブが『わたしのむすこたちは、ことによったら罪を犯し、その心に神をのろったかもしれない』と思ったからである。ヨブはいつも、このように行った」（ヨブ記 1:4-5）。この聖句から二つのことが分かります。一つは、ヨブの息子や娘たちが定期的に宴を催し、たらふく飲み食いしていたこと。もう一つは、ヨブが息子や娘のことを心配し、子どもたちが罪を犯しているのではないか、心の中で神を捨てたのではないかと恐れ、たびたび燔祭の捧げ物をしていたということです。この聖句には異なる二種類の人間が描かれています。まずはヨブの息子と娘たち。彼らは裕福なおかげでたびたび宴を催し、贅沢な暮らしを送りつつ、心ゆくまで豪華な飲み物や食事を楽しみ、物質的な富がもたらす高水準の暮らしを享受していました。そのような生活をしていれば、しばしば罪を犯し、神に背くことは避けられません。それでも彼らは自らの身を清めたり、燔祭の捧げ物をすることはありませんでした。そこからわかるのは、彼らの心に神の居場所がなかったこと、彼らが神の恵みに思いを馳せることはなく、神に背くのを恐れなかったこと、ましてや神を捨てるのを恐れてなどいなかったことです。もちろん、わたしたちがいま問題にしているのはヨブの子どもたちではなく、そのようなことを目の当たりにしたヨブがどうしたかです。これが、この聖句に書かれているもう一つのことであり、ヨブの日常生活と彼の人間性の本質がそこに関わっています。ヨブの息子と娘たちによる宴を描いている一節に、ヨブに関する記述はありません。ヨブの息子と娘たちはしばしば一緒に飲み食いしていたとだけ書いてあります。言い換えれば、ヨブが宴を催したわけではなく、そこで息子や娘たちと一緒に贅沢に飲み食いしてもいいのです。ヨブは裕福であり、多くの財産としもべを所有していたが、その暮らしは贅沢なものではありませんでした。最高の生活環境を楽しむことなく、富のために肉の享楽にふけることもなく、燔祭の捧げ物を忘れるということもなく、ましてやそのために心の中で神を徐々に避けることなどありませんでした。明らかに、ヨブは自制した生

活を送っており、神の祝福の結果として貪欲になることも、快楽主義に陥ることもなく、生活水準にこだわることもなかったのです。むしろ、彼は謙虚で慎み深く、見栄を張らず、神の前で注意深く慎重でした。しばしば神の恵みと祝福に思いを馳せ、常に神を畏れました。日常生活において、ヨブはしばしば朝早く起き、息子と娘たちのために燔祭の捧げ物をしました。言い換えれば、ヨブは自ら神を畏れただけでなく、子どもたちも同様に神を畏れ、罪を犯さないことを願っていたのです。物質的な富がヨブの心を占めることはまったくなく、神が占める地位に取って代わることもありませんでした。自分自身のためであれ、子どもたちのためであれ、ヨブの日頃の行ないはすべて神を畏れて悪を避けることに結びついていました。ヤーウェ神に対するヨブの畏れは言葉だけにとどまらず、行動に移され、日常生活のあらゆる場面に反映されていました。このような実際の振る舞いから、ヨブは正直で、正義と肯定的な物事を愛する本質の持ち主だったことがわかります。ヨブがしばしば息子と娘たちを聖別しに送らせたということは、彼が子どもたちの振る舞いを良しとせず、認めもしなかったことを意味します。むしろ、心の中で子どもたちの振る舞いにうんざりしており、彼らを非難していました。息子と娘たちの振る舞いはヤーウェ神に喜ばれていないと結論づけていたのです。そのため、ヨブは頻繁に彼らを呼び、ヤーウェ神の前に赴かせて罪を告白させました。ヨブの行動から彼の人間性の別の面が見えます。それは、頻繁に罪を犯し、神に背く者と決して歩まず、遠ざかって避けたということです。そのような者が自分の息子や娘たちであっても、自分の親族だからという理由で自分の生き方の原則を曲げることはなく、感情に流されて罪を見逃すこともありませんでした。むしろ子どもたちに、罪を告白してヤーウェ神の赦しを得るよう熱心に勧めるとともに、貪欲な享樂のために神を捨ててはならないと警告しました。他の人に対するヨブの接し方の原則は、神を畏れて悪を避ける原則と切り離すことができません。ヨブは神に受け入れられる物事を愛し、神が嫌悪する物事を憎みました。心の中で神を畏れる人を愛し、神に対して悪事を行なったり罪を犯したりする人を憎みました。そのような愛と憎しみはヨブの日常生活において示されており、まさに神の目から見たヨブの正しさでした。また、それは当然ながら、日常生活における他の人との関わりの中でヨブが表わし、そして生きた真の人間性であり、わたしたちはこれについて学ばなければなりません。

試練の中で表わされたヨブの人間性（試練におけるヨブの完全さ、正しさ、そしてヨブが神を畏れ悪を避けたことを理解する）

ここまで、試みに先立つ日常生活の中で見られた、ヨブの人間性の様々な側面につい

て話してきました。こうした様々な表われにより、ヨブの正しさ、および神を畏れて悪を避けたことに関する初歩的な認識と理解を得て、自然と確認できるようになるのは間違いありません。「初歩的」と言ったのは、大半の人がまだヨブの人間性と、彼が神に従い神を畏れる道を求めた度合いとを真に理解していないからです。つまり、ヨブに関する大半の人の理解は、「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」、そして「われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」というヨブの言葉を含む聖書の二節がもたらす、いくぶんヨブに好意的な印象よりも深まっていはいないのです。したがって、ヨブが神の試練を受けた後、いかに自分の人間性を生きたかを理解する必要があるに大いにあります。そうすることで、ヨブの真の人間性がすべての人に残らず示されるのです。

財産が奪われ、息子と娘たちが命を落とし、しもべたちが殺されたと聞いた際のヨブの反応は、「このときヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し」（ヨブ記 1:20）というものでした。この言葉は一つの事実をわたしたちに示しています。知らせを聞いたヨブは動揺せず、泣くこともなく、知らせをもたらしたしもべを責めることもせず、ましてや犯行現場を調べて詳細を確かめ、いったい何が起きたのかを突き止めることなどしませんでした。また持ち物を失ったことに対して苦痛や遺憾を一切見せず、子どもたちや愛する家族を失ったことで泣き崩れることもありませんでした。それどころか、自分の衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏して拝しました。ヨブの行動は普通の人間の行動とは異なっていました。ヨブの行動に多くの人は混乱し、心の中でヨブの「冷血」を叱責しました。持ち物を突然失えば、普通の人間であれば悲しみや落胆を見せます。人によっては深い絶望に陥るでしょう。人の心の中で、財産は人生の苦労を表わしており、生きる術であり、生きる望みであるからです。財産を失うということは、それまでの努力が無駄になり、望みも失い、未来さえなくなったということです。これが普通の人の財産に対する考え方であり、それほど深く財産と関わっているのです。人の目から見て、財産とはそれほど重要なのです。そのようなわけで、財産を失っても無関心でいられるヨブに大半の人々は困惑するのです。今日はヨブの心の中で何が起きていたかを説明することで、これらの人々が残らず感じていた困惑を払拭していきましょう。

常識に照らせば、神からこれほど膨大な財産を与えられたヨブは、それを失ったことを神の前で恥じるべきでしょう。きちんと見張ることも、管理することもしなかったのですから。神から与えられた財産を、彼は守り抜けなかったのです。ゆえに、財産が奪

われたと聞いた際、ヨブはまず現場に赴いて失われたものをすべて記録し、次いで神に罪を告白し、もう一度神の祝福を得られるようにすべきでした。しかし、ヨブはそのようなことをしませんでした。当然ながらそうしない理由がありました。自分の所有物はすべて神から授けられたものであり、自分の労働の産物ではないと、心の中で深く信じていたのです。そのため、それらの祝福を資本とすべきものとは考えず、その代わり、何が何でも自分が守るべき道から離れないよう、自身の生存の原則に留まったのです。ヨブは神の祝福を大切にし、感謝しましたが、祝福に心を奪われることも、祝福をさらに求めることもしませんでした。それが財産に対するヨブの姿勢です。ヨブは祝福を得るために何かをするということもなく、神からの祝福がなかったり、それを失ったりしても心配せず、悲しむこともありませんでした。神から祝福を受けたからといって、我を忘れて有頂天になることもなく、また繰り返し享受する祝福のせいで神の道を見失ったり、神の恵みを忘れていたりすることはありませんでした。財産に対するヨブの姿勢は、彼の真の人間性を人々に示しています。まず、ヨブは貪欲な人間ではなく、物質的な生活において多くを求めませんでした。次に、自分の持ち物を神が残らず取り上げることを、ヨブは決して心配せず、不安に思うこともありませんでした。これは心の中における神への従順の姿勢です。つまり、神が自分の財産を取り上げるかどうか、そしていつ取り上げるのかについて、ヨブは注文をつけた文句を言ったりすることが一切なく、理由も訊かず、神の采配に従うことだけを求めたのです。そして三番目に、ヨブは自分の財産が自分の労働によるものだとは決して思わず、神から授けられたものだと信じていました。これが神に対するヨブの信仰であり、彼の信念の現われです。ヨブに関するこれら三つの要点から、ヨブの人間性と日々追いかけていたものがわかったでしょうか。財産を失った際の冷静な振る舞いには、ヨブの人間性と追いかけていたものが不可欠でした。神の試練のさなか、ヨブが霊的背丈と確信をもって「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」と言うことができたのはまさに、日常におけるヨブの追求のおかげでした。この言葉は一朝一夕で得られるものではなく、単なる思いつきでもありません。長年にわたる人生経験でヨブが見たもの、獲得したものだったのです。神の祝福ばかり求め、神に取り上げられることを恐れ、嫌い、不平を言う人たちに比べ、ヨブの従順さは現実そのものではないでしょうか。神の存在を信じながら、神が万物を支配することを決して信じない人たちに比べ、ヨブは大いなる正直さと正しさを自分のものに行っているのではないのでしょうか。

ヨブの理性

ヨブの実際の経験、そして正しく正直な人間性は、彼が財産と子どもたちを失ったときに最も理性的な判断と選択を行なうことにつながりました。そうした理性的な選択は、彼が日々追求めていたもの、および日常生活の中で知るようになった神の業と切り離すことができません。ヨブは自分の正直さのおかげで、ヤーウェ神の手が万物を支配しているのだと信じることができました。そしてその信仰のおかげでヤーウェ神による万物支配の事実を知ることができ、その知識のおかげでヤーウェ神の支配と采配に喜んで従うことができ、その従順さのおかげでヤーウェ神への畏れがますます本物になり、その畏れのおかげで悪を避けることがますます本物になり、そして最終的に、神を畏れて悪を避けたために完全になったのです。ヨブの完全さは彼を賢明にするとともに、最高の理性を彼に与えました。

この「理性的」という言葉を、わたしたちはどのように理解すべきでしょうか。文字通りの解釈は、素晴らしい理知をもち、思考において論理的で分別があり、健全な話し方、行動、判断ができ、健全かつ規則正しい道徳的基準を自分のものに行っているということです。しかし、ヨブの理性はそれほど簡単には説明できません。ヨブは最高の理性を自分のものに行っていたとここで言ったのは、彼の人間性、および神の前での行ないと繋がっています。ヨブは正直だったために、神の支配を信じて従うことができました。そしてそのおかげで、他の人々が得られない認識を与えられ、その認識によって、自分に降りかかった物事をより正確に見極め、判断し、定義づけることができました。そしてそのために、自分が何をすべきか、何を守るべきかについて、より正確かつ明敏に判断できたのです。つまり、ヨブの言葉、振る舞い、自身の行動の背後にある原則、および行動の規範は規則的で、明解で、具体的であり、盲目的でも衝動的でも感情的でもありませんでした。我が身に何が降りかかろうと、ヨブは対処の仕方を知っており、複雑な出来事の関係についてどうバランスをとり、どう扱うべきかを心得ていました。また、自分が固守すべき道をどう固守するか、さらにはヤーウェ神が与えた際、あるいは取り上げた際、それにどう対処すべきかを知っていました。まさにこれがヨブの理性です。このような理性を備えていたからこそ、ヨブは財産と息子と娘たちを失ったとき、「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」と言うことができたのです。

肉体の激痛、身内や友人からの忠告、そして死に直面したとき、ヨブは自らの行動により、自分の真の姿をすべての人に示すことになりました。

真実で、純粹で、偽りのないヨブの真の姿

ヨブ記第2章7-8節を読みましょう。「サタンはヤーウェの前から出て行って、ヨブを撃ち、その足の裏から頭の頂まで、いやな腫物をもって彼を悩ました。ヨブは陶器の破片を取り、それで自分の身をかき、灰の中にすわった」。この聖句は、身体に腫れ物ができた際のヨブの振る舞いを説明しています。そのとき、ヨブは灰の中に座りながら痛みに耐えました。誰も彼の治療をせず、痛みを和らげようと手を差し伸べる人もいませんでした。ヨブは陶器のかけらで腫物の表面をかきむしりましたが、表面的に見れば、これはヨブの苦しみの一段階に過ぎず、彼の人間性や神への畏れとは何の関係もありません。このときヨブは一言も発することなく、自分の心情や見方を示さなかったからです。それでもヨブの行動と行ないは彼の人間性を如実に表わしています。前の章の記述には、東に住むすべての人の中でヨブが最も大いなる者だったとあります。一方、第2章のこの一節は、東方のこの偉大な人物が、灰の中に座って実際に陶器のかけらを手に取り、自分の身体をかきむしる様子を描いています。この二つの描写は実に対照的ではないでしょうか。この好対照はヨブという人を真に表わしています。つまり、それまでの誉れ高い地位と身分にもかかわらず、ヨブはそれらのものを愛しておらず、まったく無関心だったのです。自分の地位が他の人にどう見られているかなど気にしておらず、自分の行動と行ないが地位や立場に悪影響を及ぼすかどうかなどと心配することはありませんでした。また、地位の祝福に浸ることも、地位と立場から生じる栄光を楽しむこともありませんでした。ヨブが気にかけていたのは、ヤーウェ神の目から見た自分の価値と人生の意義でした。ヨブの真の姿は彼の本質そのものでした。つまり、ヨブは名声も富も愛さず、名声や富のために生きることもなかったのです。ヨブは真実で、純粹で、偽りのない人間だったのです。

ヨブの愛と憎しみの分別

ヨブの人間性に関するもう一つの側面が、妻とのこの会話の中で表わされています。「時にその妻は彼に言った、『あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神をのろって死になさい』。しかしヨブは彼女に言った、『あなたの語ることは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか』」（ヨブ記 2:9-10）。ヨブが受けている責め苦を見た妻は、ヨブがその苦しみから解放されるよう、彼に助言を与えようとしてしました。しかしその「善意」はヨブに認められず、それどころか彼の怒りをかき立てました。と言うのも、彼女はヤーウェ神に対するヨブの信仰と従順を否定し、ヤーウェ神の存在も否定したからです。それはヨブにとって許し難いことでした。と言うのも、神に反抗したり神を傷つけたりすること

を、ヨブは決して自分に許さなかったからであり、他人については言うまでもありません。他の誰かが神を冒瀆したり中傷したりするような言葉を発するのを見て、どうして無関心でいられるのでしょうか。それゆえヨブは自分の妻を「愚かな女」と呼んだのです。妻に対するヨブの態度は怒りと憎しみ、非難と叱責のそれでした。これは愛と憎しみを区別するヨブの人間性の自然な現われであり、彼の正しい人間性を真に表わしています。ヨブには正義感がありました。その正義感のために悪の横行を憎み、ばかげた異端、愚かな論争、くだらない主張を忌み嫌い、非難し、拒絶するとともに、大衆に拒絶され、親しい人たちに見放されたときも、自身の正しい原則と立場を堅く守ることができたのです。

ヨブの優しさと誠実さ

ヨブの行ないから彼の人間性の様々な側面を見ることができるわけですが、ヨブが口をひらいて自分の生まれた日を呪った際、彼のどのような人間性を見ることができるのでしょうか。それが次に検討するテーマです。

ヨブが自分の生まれた日を呪った理由についてはたったいま説明しました。そこから何がわかるのでしょうか。ヨブの心が頑なで愛もなかったとしたら、またヨブが冷たい人間で感情に乏しく、人間性に欠けていたならば、神が心に抱く願望を思いやることのできたでしょうか。神の心を思いやり、そのために自分の生まれた日を呪うことなどあり得たでしょうか。言い換えれば、ヨブの心が頑なで人間性に欠けていたなら、果たして神の痛みを心苦しめたでしょうか。自分が神を悩ませたからといって、自分の生まれた日を呪ったでしょうか。決してそのようなことはありません。ヨブは心優しかったので、神の心を思いやりました。神の心を思いやったので、神の痛みを感じとりました。心優しかったので、神の痛みを感じとった結果、さらに大きい責め苦を経験しました。そして神の痛みを感じとったので、自分の生まれた日を憎み始め、ゆえに自分の生まれた日を呪いました。第三者にとって、試練におけるヨブの行ないはどれも模範的なものです。自分の生まれた日を呪うという行為だけが、彼の完全さと正しさに疑問符をつけ、違った評価をもたらすことになります。実はこれが、ヨブの人間性の本質に関する最も真実の表現なのです。ヨブの人間性の本質は、隠されていなければ梱包されてもおらず、他の誰かによって修正されたものでもありません。自分の生まれた日を呪ったとき、ヨブは心の奥深くにある優しさと誠実さを示したのです。ヨブは清い泉のようであり、その水は底が見えるほど澄んで透明なのです。

ここまでヨブについて学んできたわけですが、大半の人は間違いなく、ヨブの人間性

の本質を極めて正しく、客観的に評価するはずです。また、神が語るヨブの完全さと正しさについても、より深く実践的で、さらに高度な理解と認識ももつはずです。この理解と認識が、神を畏れて悪を避ける道に乗り出す手助けとなることを願います。

神がヨブをサタンに渡したことと、神の働きの目的との関係

ヨブが完全で正しく、神を畏れて悪を避けたことをほとんどの人は知っていますが、その認識によって神の意図をより深く理解できるわけではありません。人々はヨブの人間性と追求を羨むと同時に、神に次のような疑問を呈します。「ヨブが完全で正しく、人々にそれほど愛されたのなら、なぜ神はヨブをサタンの手に渡し、かくも大きな責め苦を経験させたのか」。大勢の人が心の中でそのような疑問を抱いているのも当然であり、そのような疑問をもつ人は多いのです。この点に悩む人は多いので、この疑問を改めて取り上げ、きちんと説明する必要があります。

神が行なうことはどれも必要であり、そこには並外れた意義があります。なぜなら、神が人において行なうすべてのことは、神の経営と人類の救いに関連するからです。神の目から見て、ヨブは完全で正しい人でしたが、当然、神がヨブにおいて行なった働きも同じです。言い換えれば、神が何を行なうか、その手段がどのようなものか、代価がどれほどのものか、および神の目標がどのようなものかにかかわらず、神の業の目的は変わらないのです。神の目的は自身の言葉を人の中に働かせること、そして人間に対する自身の要求と旨を人の中に働かせることです。つまり、肯定的だと信じるすべてのものを、自身の歩みに応じて人間に対して働かせ、人間が神の心を理解できるようにし、神の本質を把握できるようにするとともに、神の支配と采配に従えるようにすることで、神を畏れて悪を避けるようにするためです。これらが、神が行なう一切のことにおける、神の目的の一つの側面です。もう一つの側面は、サタンが引き立て役で神の働きに役立つものなので、人間がしばしばサタンに与えられるということです。これは、サタンによる試みと攻撃の中、人々がサタンの邪悪さ、醜さ、そして卑劣さを見るために神が用いる手段であり、それによって人々はサタンを憎み、否定的なものを知って理解するようになります。この過程により、人々はサタンの支配、断罪、妨害、攻撃から徐々に解放され、やがては神の言葉のおかげで、そして神に関する認識と神への従順、神に対する信仰と畏れのおかげで、サタンの攻撃と断罪に勝利します。そうして初めて、人々はサタンの支配から完全に解放されるのです。サタンからの解放とは、サタンが打ち負かされたという意味であり、人々がもはやサタンの餌食ではないということです。サタンは人々を飲み込む代わりに手放したのです。なぜなら、そのような人々は正しく、

信仰をもち、従順であり、神を畏れ、サタンと完全に決別したからです。彼らはサタンを辱め、怖じ気づかせ、完全に打ち負かします。神に付き従うという彼らの信念、そして神への従順と畏れがサタンを打ち負かし、自分たちへの攻撃を諦めさせるのです。このような人たちだけが真に神のものとされ、それが人間を救う神の最終目標です。救われることを願うのであれば、そして完全に神のものとされることを願うのであれば、神に従うすべての人はサタンによる大小の試みと攻撃に直面しなければなりません。このような試みや攻撃から抜け出てサタンを完全に打ち負かせる人こそ、神によって救われた人なのです。つまり、神により救われた人は神の試練を経た者、サタンの試みと攻撃を無数に受けた者なのです。神によって救われた人は神の旨と要求を理解し、神の支配と采配に従い、サタンの試みのさなかにあっても、神を畏れて悪を避ける道を捨てません。神によって救われる人は正直であり、心優しく、愛と憎しみを区別し、正義感と理性をもっており、神を気遣い神のすべてを大切にすることができます。そのような人たちはサタンに束縛されたり、監視されたり、断罪されたり、虐げられたりしておらず、完全に自由で解放されています。ヨブはまさにそうした自由な人であり、それこそが、神が彼をサタンに渡した理由の意義なのです。

ヨブはサタンに虐げられましたが、同時に永遠の自由と解放を獲得し、二度とサタンの墮落、虐待、および中傷の対象にならず、その代わり神の顔の光の中、束縛されず自由に生きる権利、神から与えられた祝福の中で生きる権利を得ました。誰もこの権利を剥奪したり、滅ぼしたり、取り上げたりすることはできません。それはヨブの信仰、決意、そして神への畏れと従順に対して与えられたものです。ヨブは自らの命という代価を払って地上での喜びと幸せを勝ち取り、また地上における神の真の被造物として、天によって定められ、地によって認められた通り、誰にも妨げられずに創造主を礼拝する権利と資格を勝ち取りました。これもまた、ヨブが耐え抜いた試みによる最も偉大な成果の一つです。

まだ救われていない人々の生活はしばしばサタンに干渉され、支配さえされています。言い換えれば、救われていない人々はサタンの虜であり、自由がなく、サタンに放棄されておらず、神を礼拝する権利も資格もなく、サタンにしっかり追跡され、激しく攻撃されます。そのような人には語るべき幸せがなく、普通の存在でいる権利もなく、さらには尊厳ありません。あなたが立ち上がり、神への信仰、従順、そして畏れを武器に命がけでサタンと戦い、サタンを完全に打ち負かし、そうしてサタンがあなたを見るたびに尻尾を巻いて怯えるようになり、あなたへの攻撃と非難を完全に放棄するなら、

そのとき初めてあなたは救われ、自由になるのです。サタンとの関係を完全に断ち切ろうと決意していても、サタンを打ち負かす武器を身につけていないのであれば、あなたはまだ危険な状態にあります。時間が経ち、サタンにひどく苦しめられ、一握りの力も自分の中に残っていないのに、それでもまだ証しをすることができず、サタンの断罪と攻撃から完全に解放されていないのであれば、救われる望みはほぼありません。最後に神の働きの完了が告げられるとき、あなたははまだサタンの手中にあり、自分を解放することができず、ゆえに救われる機会も望みもありません。これが意味するのは、そのような人々は完全にサタンの虜になってしまうということです。

神の試験を受け入れ、サタンの試みに勝利し、神があなたの存在全体を得られるようにせよ

人間に対する永続的な施しと支えの働きの間、神は自身の旨と要求を余すところなく人間に伝え、自身の業、性質、そして自身が所有するものと自身そのものを人間に示します。その目的は、人間が神に付き従う中、彼らに霊的背丈を身につけさせ、神から様々な真理を得られるようにすることです。その真理は、サタンと戦う武器として神から人間に与えられるものです。これらのものが備わったならば、人は神の試験に直面しなければなりません。神は人間を試す多くの手段や手法をもっていますが、どれも神の敵であるサタンの「協力」を必要とします。つまり、サタンと戦う武器を人に与えたあと、神は人をサタンの手に渡し、サタンが人の霊的背丈を「試す」ことを許すのです。人間がサタンの軍勢から脱出し、サタンの包囲網から逃れ、それでも生きていられるなら、試験に合格したということです。しかし、サタンの軍勢を離れるのに失敗し、サタンに服従するのであれば、その人は試験に合格しなかったということです。神が人間のどの側面を検証しようと、その基準は、サタンの攻撃を受けた人間がしっかり立って証しをできるかどうか、またサタンに誘惑された際に神を捨て、サタンに降伏して服従するかどうかです。人間が救われるかどうかは、サタンに勝利して打ち倒せるかにかかっており、また自由を獲得できるかどうかは、神から与えられた武器を自ら手にしてサタンの束縛に打ち勝ち、サタンが完全に希望を失って手出ししなくなるかにかかっていきます。サタンが希望を失って誰かを手放すとは、二度とその人を神から奪おうとはしない、二度とその人を断罪したり、干渉したり、気まぐれに苦しめたり攻撃したりしないという意味です。そのような人だけが、真に神のものとされるのです。これが、神が人々を自分のものにする過程です。

ヨブの証しによって後の世代に与えられた警告と啓示

神がある人を完全に自分のものとする過程を理解すると、神がヨブをサタンに渡した目的と意義も同時に理解できるようになります。ヨブの苦しみに心をかき乱されることがなくなり、その意義を新たに理解するのです。自分たちも同じ試みに遭うのだろうか心配することがなくなり、神の試練が来ても反対したり拒絶したりしなくなります。ヨブの信仰、従順、そしてサタンに勝利した証しは、人々にとって大きな助け、そして励ましであり続けてきました。人々はヨブの中に自分の救いの望みを見出し、また信仰を通じて、そして神への従順と畏れを通じて、サタンを打ち負かして勝利することが完全に可能であることを見出します。神の主権と采配に従い、すべてを失っても神を捨てないという決意と信仰がある限り、サタンを辱めて打ち勝つことができると知るのです。また、たとえそれが命を失うことを意味しても、固く立って証しをする決意と忍耐力さえあれば、サタンを怯えさせて退散させられることも知るのです。ヨブの証しは後の世代への警告であり、サタンを打ち負かさなければその断罪と干渉から逃れられず、サタンの虐待と攻撃から抜け出すのも不可能だと伝えています。ヨブの証しは後の世代に啓示を与えました。この啓示は人々に対し、完全で正しくありさえすれば、神を畏れて悪を避けることができると教えています。つまり、神を畏れて悪を避けさえすれば、神に対する鳴り響くような力強い証しをすることができる、そして神に対する鳴り響くような力強い証しをするだけで、その人は決してサタンに支配されず、神の導きと加護のもとで生きることができる、そうして初めて真に救われるということを教えているのです。救いを求める人はみな、ヨブの人格と、彼が人生において追い求めたものを見習うべきです。ヨブがその生涯をどう生きたか、試練の中でどう振る舞ったかは、神を畏れて悪を避ける道を追求するすべての人にとって、大切な宝であるのです。

ヨブの証しが神に慰めをもたらす

いまここで、ヨブは愛すべき人間だとわたしが言ったなら、あなたがたはその意味を理解することができず、なぜわたしがこうしたことを語ってきたのか、その背後にある感情も把握できないかもしれません。しかし、あなたがたがヨブとまったく同じ試練、あるいはそれに似た試練を経験し、逆境に直面し、神があなたがたのために自ら用意した試練を通り、その試みのただ中であって自分のすべてを捧げ、屈辱と困難に耐え、それによってサタンに勝利して神への証しをする日を待ちなさい。そうすれば、わたしが語るこれらの言葉の意味がよくわかるはずです。そのときあなたは、自分はヨブよりはるかに劣ると思い、ヨブは愛すべき人間であり、見習うべき人物だと感じるでしょう。そのときになれば、ヨブが語ったこれらの古典的な言葉がいまの時代に生きる墮落した

人間にとってどれほど重要か、またヨブの成し遂げたことが今日の人々にとってどれほど達成困難かがわかるでしょう。それが難しいと感じるなら、神がどれほど心配して不安になるか、そのような人々を獲得するために神がどれほどの代価を払ったか、そして人間のために神がしたこと、および費やしたものがいかに尊いかを理解するでしょう。ここまでの話を聞いて、ヨブに対する正確な理解と正しい評価が得られたでしょうか。あなたがたの目から見て、ヨブは真に完全で正しく、神を畏れて悪を避ける人だったでしょうか。ほとんどの人がはいと答えるに違いないと、わたしは信じています。ヨブが行なったこと、および示したことの事実は、人間にもサタンにも否定できないことだからです。それらのことは、サタンに対するヨブの勝利を最も力強く証明しています。その証明はヨブにおいて生み出され、神に受け入れられた最初の証しです。そのため、ヨブがサタンの試みに勝利して神に証しを行なったとき、神はヨブに希望を見出し、神の心はヨブによって慰められました。創造のときからヨブの時代に至るまで、神が慰めとは何かを実感し、人間によって慰められるとはどのようなことかを知ったのは、これが最初だったのです。このとき初めて、神は自分のためになされた真の証しを見て自分のものにしたのです。

ヨブの証し、そしてヨブに関する様々な側面の記録を聞きたいま、大半の人が目の前の道について計画をもてると信じています。そしてまた、不安と恐怖で満ちている大半の人が心身ともにゆっくりと穏やかになり、少しずつ心安らかになり始めると信じています……。

次の箇所もヨブに関する記録です。読み続けていきましょう。

4. ヨブは耳で神のことを聞く

ヨブ記 9:11 見よ、彼がわたしのかたわらを通られても、わたしは彼を見ない。彼は進み行かれるが、わたしは彼を認めない。

ヨブ記 23:8-9 見よ、わたしが進んでも、彼を見ない。退いても、彼を認めることができない。左の方に尋ねても、会うことができない。右の方に向かっても、見ることができない。

ヨブ記 42:2-6 わたしは知ります、あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはないことを。「無知をもって神の計りごとをおおうこの者はだれか」。それゆえ、わたしはみずから悟らない事を言い、みずから知らない、測り難い事を述べました。「聞け、わたしは語ろう、わたしはあなたに尋

ねる、わたしに答えよ」。わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなただを拝見いたします。それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います。

神がヨブに自身を現わさなくても、ヨブは神の主権を信じた

これらの言葉の趣旨は何でしょうか。ここにある事実が含まれていることに気づいた人はいるでしょうか。まず、ヨブはどのようにして神がいることを知ったのでしょうか。そして、天地と万物が神によって支配されていることをどのようにして知ったのでしょうか。これら二つの疑問に答える一節があります。「わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなただを拝見いたします。それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」（ヨブ記 42:5-6）。この言葉から、ヨブはその目で神を見たというよりも、言い伝えから神のことを知っていたということがわかります。こうした状況のもと、ヨブは神に従う道を歩み始め、その後、神が自分の生活の中に、そして万物の中に存在することを確認したのです。ここに否定できない一つの事実があります。その事実とは何でしょうか。神を畏れて悪を避ける道に従えたにもかかわらず、ヨブは神を見たことがなかったのです。この点において、ヨブも今日の人間と同じだったのではないのでしょうか。ヨブは神を見たことがありませんでしたが、その含意は、ヨブは神について聞いてはいても、神がどこにいるのか、どのような存在か、何をしているのかは知らなかったということです。これらはみな主観的要因であり、客観的に言えば、ヨブは神に従っていたものの、神はヨブの前に現われたことがなく、語ったこともないのです。これは事実ではないのでしょうか。神はヨブに語りかけたことも、何らかの命令を下したこともありませんが、ヨブは万物の中に、そして自分の耳で聞いた伝説の中に神の存在を見、神の主権を目の当たりにしており、それから神を畏れて悪を避ける生活を始めました。ヨブが神に従うようになった起源と過程はそのようなものです。しかし、ヨブがどれほど神を畏れて悪を避けても、どれほど自分の高潔さを守っても、神がヨブの前に現われることはありませんでした。次の箇所を読みましょう。ヨブは「見よ、彼がわたしのかたわらを通られても、わたしは彼を見ない。彼は進み行かれるが、わたしは彼を認めない」（ヨブ記 9:11）と言いました。この言葉が言わんとしているのは、ヨブは自分の周りに神がいるのを感じたかもしれないし、感じなかったかもしれないが、とにかく一度も神を見ていないということです。神が自分の前を通ったり、行動したり、人を導いたりするのを想像したことはあっても、それを知っていたわけでは決してありません。神は人間が予想しないときに来ます。神がいつ、どこで自分のもとに来るのか、人にはわかりません。人には神が見えないからです。そのようなわけで、人

間にとって、神は自分から隠れている存在なのです。

神が自分から隠れていても、神に対するヨブの信仰は揺るがない

次の聖句でヨブはこう言っています。「見よ、わたしが進んでも、彼を見ない。退いても、彼を認めることができない。左の方に尋ねても、会うことができない。右の方に向かって、見ることができない」（ヨブ記 23:8-9）。この記述から、ヨブの経験の中で、神がずっと隠れていたことがわかります。神が公然とヨブの前に現われることはなく、ヨブに言葉を語ることもなかったのですが、ヨブは心の中で神の存在を確信していました。神は自分の前を歩いている、あるいは自分のそばで行動している、そして自分に神は見えないけれども、自分の横にいて自分にまつわる一切のことを支配していると信じていました。ヨブは神を見たことがないものの、自分の信仰に忠実であり続けることができました。これは他の誰にもできなかったことです。なぜ他の人たちにはそれができなかったのでしょうか。それは、神がヨブに語ることも彼の前に現われることもなかったからであり、ヨブが本当に信じていたものでなければ、そうし続けることも、神を畏れて悪を避ける道を固く守ることもできなかったでしょう。そうではありませんか。ここに書かれているヨブの言葉を読んで、あなたはどう感じますか。ヨブの完全さと正しさ、そして神の前での義は真実で、神による過大評価ではないと思いますか。神はヨブを他の人たちと同じように扱い、ヨブの前に現われたり彼に語ったりすることはありませんでした。それでもヨブは自分の高潔さを固く守り、神の主権を信じ、さらには神に背いたかもしれないという恐れからしばしば燔祭の捧げ物をし、神の前で祈ったのです。神を見たことがないまま畏れることができたという事実の中に、ヨブが肯定的なものをどれほど愛したか、ヨブの信仰がいかに堅く本物であったかを見て取ることができます。神が自分から隠れているからといって、ヨブは神の存在を否定せず、また神を見たことがないからといって、神への信仰を失ったり神を捨てたりすることはありませんでした。それどころか、万物を支配する神の隠れた働きの中で神の存在を認識し、神の主権と力を感じたのです。神が隠れているからといって、ヨブは正しさを捨てず、また神が一度も自分の前に現われたことがないからといって、神を畏れて悪を避ける道を捨てることもありませんでした。ヨブは神が公然と自分の前に現われ、その存在を証明してほしいと願ったことはありませんでした。万物における神の主権をすでに見ており、他の人が得ていない祝福と恵みを自分は得たと信じていたからです。神はヨブの前から隠れたままでしたが、神に対するヨブの信仰は決して揺るぎませんでした。そのようなわけで、ヨブは他の人々にはないもの、つまり神からの承認と祝福を得たのです。

ヨブは神の名を称え、祝福や災いのことは考えない

ヨブに関する聖書の物語の中で、語られていない事実が一つあります。それが今日のテーマです。ヨブは神を見たこともなければ、自分の耳で神の言葉を聞いたこともありませんが、心の中に神の居場所がありました。神に対するヨブの態度はどのようなものだったのでしょうか。それは先ほど触れたように、「ヤーウェのみ名はほむべきかな」というものでした。ヨブは神の名を無条件に、状況に関係なく、理屈抜きに称えました。ヨブは自分の心を神に捧げ、それが神に支配されるようにしました。ヨブの思考、決定、そして心の中の計画はどれも神に明らかにされ、神から隠されることはありませんでした。ヨブが心の中で神に敵対することはありませんでした。また、神が自分のために何かをするよう、あるいは何かを与えてくれるよう願ったこともなく、自分は神を崇拜しているから何かを与えられるはずだという、途方もない願望を抱くこともありませんでした。神に取り引きを持ちかけることも、願い事や要求をすることもありませんでした。ヨブが神の名を称えたのは、万物を支配する神の偉大な力と権威のためであり、祝福を得たかどうか、災いに遭ったかどうかに関係なく、神の力と権威は不変であり、ゆえにその人の状況に関係なく神の名は称えられるべきだとヨブは信じていました。人が神に祝福されるのは神の主権のためであり、人に災いが降りかかるのもまた、神の主権のためなのです。神の力と権威は人間に関する一切のことを支配し采配します。人間の運命が流転するのは神の力と権威の現われであり、人がどう見るかにかかわらず、神の名は称えられなければなりません。それが、自らの人生においてヨブが経験し、悟ったことです。ヨブの考えと行ないはすべて神の耳に届き、明らかにされ、重要なものと見なされました。神はヨブのこの認識と、ヨブがそのような心をもつことを大切に思いました。ヨブの心は絶えず神の命令を待っており、そして時間や場所に関係なく、あらゆるところで自分に何が起ころうとも、そのすべてを歓迎しました。ヨブが神に何かを要求することはなく、神から来るすべての采配を待ち、受け入れ、それに向き合い、従うことを自分に課しました。ヨブはそれを自分の本分だと信じていましたが、それこそ神がヨブに望んでいたものです。ヨブは神を見たことがなく、神が言葉を語ったり、命令を発したり、教えを与えたり、何かについて指示したりするのを聞いたこともありません。今日の言葉で言えば、真理に関する啓き、導き、あるいは施しを一切与えられていなかったヨブがそのような認識をもち、そうした姿勢をとることができたのは、神にとって尊いことでした。そしてヨブがそうしたことを示しただけでも神に

としては十分であり、またヨブの証しは神の称賛を受けて大事にされました。ヨブは神を見たことがなく、神の教えを直接聞いたこともありませんが、神にとってヨブの心とヨブ自身は、神の前で難しい理論を説き、豪語し、いけにえを捧げることについて語れるだけで、神に関する真の認識を得たことがなく、心から神を畏れたことのない人々よりもはるかに尊かったのです。ヨブの心は純粹で神から隠されておらず、ヨブの人間性は正直で優しく、そしてヨブは正義と肯定的なものを愛したからです。そのような心と人間性を持ち合わせた人だけが神の道に従うことができ、神を畏れて悪を避けることができます。そのような人は神の主権、および神の権威と力を見ることができ、神の主権と采配に従うことができます。そのような人だけが神の名を真に称えることができるのです。なぜなら、その人は神が祝福を与えるか、それとも災いをもたらすかを見ておらず、すべては神の手で支配されていること、また人間が思い煩うのは愚かさ、無知、理不尽さ、神が万物に対する主権を握っていることへの疑い、そして神を畏れないことのしるしだと知っていたからです。ヨブの認識はまさに神が望むものでした。では、ヨブはあなたがたよりも神に関する素晴らしい理論的な認識をもっていたのでしょうか。当時における神の働きと発言はごくわずかなので、神に関する認識を獲得するのは容易なことではありませんでした。ヨブがそうしたことを成し遂げたのは決してただ事ではありません。彼は神の働きを経験しておらず、神が語るのを聞いておらず、神の顔も見えないのですから。ヨブが神に対してそうした態度をとれたのは、彼の人間性と個人的な追求の賜物であり、いずれも今日の人々にはないものです。ゆえに当時、神は「ヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にない」と言ったのです。その時代、神はすでにヨブをそのように評価しており、そうした結論に至りました。では今日、それはどのくらい真実味を増したのでしょうか。

神は人から隠れているが、万物における神の業から、人は十分神を知ることができる

ヨブは神の顔を見たこともなければ神の語る言葉を聞いたこともなく、ましてや神の働きを直接経験したこともありません。それでいながら、神に対するヨブの畏れと、試練の際の彼の証しは誰もが目にしており、神に愛され、喜ばれ、称えられました。人々はヨブをうらやみ、高く評価し、それ以上に讃美を捧げました。ヨブの人生は偉大なものでも非凡なものでもありません。普通の人と同じく平凡な生活を送り、日の出とともに仕事へ出かけ、日が落ちると帰宅して休息しました。他の人たちと違っていたのは、平凡だった数十年間の人生において、神の道に関する洞察を得て、神の偉大な力と主権を認識して知るようになったことであり、それは他の人にはなし得ないことでした。ヨ

ブは他のどの平凡な人よりも賢かったわけではなく、ひととき強いいのちを持っていたわけでもありません。ましてや目に見えない特殊な能力をもっていたということはないのです。しかし、ヨブには正直で、心優しく、正しく、公正と義、そして肯定的なものを愛するという性格がありました。これらはいずれも大多数の普通の人間にはないものです。ヨブは愛と憎しみを区別し、正義感をもち、断固とした不屈の精神があり、自分の考えの隅々まで細かな注意を払っていました。そのため、地上において平凡な日々を過ごしながらか、神がなした驚異的な物事をすべて目の当たりにし、神の偉大さ、聖さ、義を見、人間に対する神の気遣い、恵み深さ、加護を知り、至高の神の高貴さと主権を目にすることができたのです。普通の人がか誰もなし得なかつたこれらのことをヨブがなし得た第一の理由は、ヨブが純粋な心をかもち、ヨブの心がか神に属しており、創造主により導かれていたことです。第二の理由はヨブの追求です。つまりヨブは、非の打ち所のない完全な人になること、天の旨と一致し、神に愛され、悪を避ける人になることを追いか求めたのです。ヨブは神を見ることも神の言葉を聞くこともできませんでしたが、これらのものを獲得し、追いか求めました。また神を見たことがないものの、神がかどのような万物を支配するかがわかるようになっており、神がかそうする際の知恵を理解していました。そして神の語る言葉を聞いたことがないものの、人に報いたり人から取り上げたりするという業はすべて神に由来することを知っていました。ヨブの人生の年月は普通のか人のそれと何らか変わらなかつたのですが、自分の人生の平凡さのかせいで、万物に対する神の主権の認識や、神を畏れて悪を避ける道が影響を受けることは許しませんでした。ヨブの目から見て、万物の法則は神の業で満ちており、神の主権は人の生活のいたるところで見られるものでした。ヨブは神を見たことがないものの、神の業がか至るところにあることを認識でき、また地上で平凡な時間を過ごす間、自分の生活のあらゆるところか神の並外れた不思議な業を見てそれに気づくことができ、神の不思議な采配を知ることができました。神がか隠れていたこと、そして無言であったことは、ヨブがか神の業を認識する上で障害とはならず、万物に対する神の主権を知る上で影響を及ぼすこともありませんでした。ヨブの人生は、万物の中に隠されている神の主権と采配の認識を、日常生活の中で得てゆくというものでした。また、ヨブは日々の生活の中で、神の心の声と言葉を聞いて理解しましたが、神は万物のあいだで無言を貫きつつも、万物の法則を司ることで自身の心の声と言葉を表わします。それにより、人々がヨブと同じ人間性をかもち、ヨブと同じように追求すれば、ヨブと同じ認識と知識を得ることができ、また万物に対する神の主権についても、ヨブと同じ理解と認識を獲得できることがわかります。神はヨブの前に姿を見せず、彼に語りかけることもありませんでしたが、ヨブは完全

で正しい人になり、神を畏れて悪を避けることができました。つまり、神が目の前に現われたり語りかけたりすることがなくても、万物における神の業、そして万物に対する神の主権だけでも、人間が神の存在と力と権威に気づくのに十分であり、また神の力と権威は人間に対し、神を畏れて悪を避ける道に従わせるのに十分なのです。ヨブのような普通の人間が神を畏れて悪を避けられるのであれば、神に従う普通の人であれば誰でも同じことが可能なはずです。これは論理的推論に聞こえるかもしれませんが、物事の法則と矛盾しません。とは言え、事実が予想と一致したことはありません。神を畏れて悪を避けることは、ヨブだけが到達できる領域のように思えるでしょう。「神を畏れて悪を避ける」と聞けば、それはヨブだけに可能なことだと人は考えます。あたかも神を畏れて悪を避ける道にはヨブの名のラベルが貼られており、他の人には無関係であるかのようにです。その理由ははっきりしています。正直で心優しく、正しく、公平と義、そして肯定的なものを愛する性格をもっていたのはヨブだけであり、そのためヨブだけが神を畏れて悪を避ける道に従うことができたからです。この意味はみなさん理解したはずです。つまり、正直で心優しく、正しく、公平と義、そして肯定的なものを愛する人間性をもつ人がいないので、誰一人神を畏れて悪を避けることができず、ゆえに人々は神の喜びを得られず、試練の際に固く立つことができないのです。これはまた、ヨブという例外を除き、すべての人間がいまだサタンに束縛され、サタンの罠に陥ったままであり、みなサタンに断罪され、攻撃され、虐げられていることを意味しています。サタンはそのような人たちを呑み込もうとしており、彼らには自由がなく、サタンに囚われた虜なのです。

人の心が神に敵対していれば、どうして神を畏れ悪を避けることができようか

今日の人々がヨブと同じ人間性をもっていないのであれば、彼らの本性の実質と、神に対する姿勢はどのようなものでしょうか。神を畏れているのでしょうか。悪を避けているのでしょうか。神を畏れず悪を避けることもない人々は、次の三文字で表わすことができます。すなわち「神の敵」です。あなたがたは頻繁にこの言葉を口にしますが、本当の意味を理解していません。「神の敵」という言葉は実質を伴うものです。それは、神が人間を敵とみなすということ言っているのではなく、人間が神を敵と見なすという意味です。第一に、神を信じ始めるとき、目的も動機も野心もない人がいるのでしょうか。一部の人は神の存在を信じ、神が存在するのを見たかもしれませんが、神に対する彼らの信仰にはやはり動機があり、神を信じる究極の目的は祝福と自分の望むものを得ることです。人々は人生経験を重ねる中で、「自分は神のために家族も仕事も捨てた。神は

わたしに何を与えてくれたでしょうか。数え上げて確かめてみなければ。最近、自分は何か祝福を受け取ったでしょうか。この間ずっと多くを捧げ、走り回り、多くの苦しみを受けてきた。神はその報いとして何か約束して下さったでしょうか。神はわたしの善行を憶えているでしょうか。わたしの最後はどうなるだろう。神の祝福を受け取れるだろうか……」とたびたび考えます。誰もが心の中で常にそのような計算をし、自分の動機、野心、そして取引を好む心構えにかなう要求を神にします。つまり、人間は心の中で常に神を試み、神に関する計画を絶えず練り、自分個人の結末のために絶えず神に対して弁護を行ない、神からの弁明を引き出そうとし、自分のほしいものを神が与えられるかどうかを見ているのです。人間は神を追い求める一方で、神を神として扱いません。神と取引しようといつも試み、絶えず神に要求しつつ、一つ与えられればその次は十を取れるよう、事あるごとに神に強要さえします。人間は神と取引しようと試みながら、同時に神と口論もし、中には試練が降りかかったり、ある種の状況に置かれたりするとしばしば弱くなり、働きの際に消極的になって怠けるようになり、神に対する不満で一杯になる人さえいます。人は神を信じ始めた時から、神を豊穡の角や万能ナイフのように考え、自分は神に対する最大の債権者だと見なしてきました。それはあたかも、神から祝福と約束を得ようとするのが自分の当然の権利と義務であり、神には人を守って労り、施す責任があると言わんばかりです。神を信じるすべての人にとって、「神を信じる」ということの基本的な理解はそのようなものであり、それが神への信仰の概念に関する最も根深い認識なのです。人間の本性の本質からその主観的な追求に至るまで、神への畏れに関係することは一切ありません。人が神を信じる目的は、神を礼拝することとは何ら関係ないのです。つまり人は、神への信仰には神に対する畏れと神を礼拝することが必要だとは、考えもしないし理解もしないのです。このような状況を考えれば、人間の本質は明らかです。その本質とは何ですか。人間の心は邪悪で、不実と偽りを抱き、公正と義、および肯定的なものを愛さず、卑劣で貪欲だということです。人間はこれ以上神に心を近づけることができません。神に心を捧げてなどいないのです。神が人の本当の心を見たことはなく、人間に礼拝されたこともまったくありません。神がいかに大きな代価を払っても、どれほど働きを行なっても、どれほど人間に与えても、人間は盲目のままで、そのすべてに対してまったく無関心です。人間が自分の心を神に捧げたことはなく、自分の心だけを気遣い、自分で決断したいと思うばかりです。それが意味するのは、人間は神を畏れて悪を避ける道に従うことも、神の主権と采配に従うことも、神を神として礼拝することも望んでいないということです。それが今日における人間の状態です。ここで再度ヨブに目を向けましょう。まず何より、ヨブは神と取引をしたでし

ょうか。神を畏れて悪を避ける道を固く守ろうとしたことに、何か下心があったでしょうか。当時、神は誰かに来たるべき結末について話していたのでしょうか。当時、神は誰にも結末に関する約束をしたことがなく、ヨブはこれを背景として神を畏れて悪を避けたのです。今日の人々はヨブと比較になるのでしょうか。違いがあまりに大きく、ヨブと同じ土俵に上れる者はいません。ヨブには神に関する認識がさほどありませんでしたが、自分の心を神に明け渡し、その心は神のものとなっていました。ヨブは決して神と取り引きせず、神に対して途方もない要望や要求をすることはありませんでした。むしろ、「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ」と信じていました。ヨブはその長い人生で神を畏れて悪を避ける道を固く守りましたが、そこから理解し、獲得したのはそのようなものでした。同様に、「われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」という言葉に示されている成果もヨブは獲得しました。この二つの文章は、ヨブが人生経験を重ねる中で神に服従する態度をとった結果、目の当たりにしたこと、知るに至ったことであり、またサタンによる試みのさなか、ヨブが勝利を収めた最も強力な武器、固く立って神への証しをする土台でもありました。いまの時点で、あなたがたはヨブを愛すべき人間だと思っていますか。そのような人になりたいと思いますか。サタンの試みを経験しなければならないことに恐れを感じますか。ヨブと同じ試練を降らせてくださいと神に祈る決意がありますか。間違いなく、大半の人はそのようなことを求めて祈ることなどしないでしょう。そうであれば、あなたがたの信仰が惨めなまでに小さいことは明らかです。つまり、あなたがたの信仰はヨブのそれと比べて触れる価値すらありません。あなたがたは神の敵であり、神を畏れず、固く立って神に証しすることができず、サタンの攻撃、断罪、そして試みに勝利することもできません。それでどうして、神の約束を受け取る資格があるでしょう。ヨブの物語を聞き、人間を救う神の意図と、人間の救いの意味を理解したいま、ヨブと同じ試練を受け入れる信仰があなたがたにありますか。神を畏れて悪を避ける道に従う決意を、少しはすべきではありませんか。

神の試練に疑念を抱いてはならない

ヨブの試練が終わり、彼から証しを受けた神は、ヨブのような人々の一団、あるいは複数の集団を得ようと決心しましたが、サタンが神と賭けをし、ヨブを試み、攻撃し、そして虐待した手段を使って他の誰かを攻撃したり、虐待したりすることを二度と許すまいと決意しました。弱く愚かで無知な人間に対してそのようなことを繰り返すことを、神はサタンに許しませんでした。サタンがヨブを試みただけで十分だったのです。サ

タンが思いのままに人々を虐げることを許さなかったのは、神の憐れみでした。神にとって、ヨブがサタンの試みと虐待に苦しんだだけでもうたくさんだったのです。サタンがそのようなことをするのを神は二度と許しませんでした。神に従う人々の命、そして彼らのすべては神によって支配され、指揮されており、神の選民を思いのままに操る権利はサタンにないからです。この点をはっきりと理解しなければいけません。神は人の弱さを気遣い、人の愚かさや無知に理解を示します。人が完全に救われるために、神は人をサタンの手に渡さなければなりません。人がサタンにもてあそばれて虐げられるのを、神が喜んで見ることはありません。人が常に苦しむのを、神は見たいと思いません。人間は神によって創られたのであり、人間に関するすべてのことが神によって支配され、采配されるのは完全に正当化されることです。それは神の責任であり、神が万物を支配する権威なのです。神はサタンに対し、思いのままに人間を虐げたり、ひどい扱いをしたり、様々な手段で人間を迷わせたりすることを許さず、またそれ以上に、人間に対する神の主権を犯すこと、神が万物を支配する法則を踏みにじって壊すことを許さず、人類を経営して救う神の偉大な働きについては言うまでもありません。神が救いたいと望む人、神に証しをすることができる人は、六千年にわたる神の経営計画の中心であり、その結晶であると同時に、六千年にわたる働きで神が払った努力の代価でもあります。そのような人たちをどうしてたやすくサタンに渡せるでしょうか。

人々は神の試練をしばしば懸念し、恐れながら、常にサタンの罠の中で生き、サタンに攻撃され、虐げられる危険な領域で生活しています。それでも人々は恐れを知らず、動揺することはありません。これはどういうことでしょうか。神に対する人間の信仰は、その人が見える物事に限られます。人間に対する神の愛と気遣い、あるいは神の優しさや配慮に対してまったく感謝することがありません。神の試練、裁き、刑罰、威厳、怒りに対するわずかな不安と恐れを別にして、人間は神の善意をほんの少しも理解したことがないのです。人々は試練と聞いただけで、神にあたかも隠れた動機があると感じており、また神が自分たちに対して何をするかに気づかないまま、神は邪悪な意図を抱いていると信じる人さえいます。そのため、人々は神の主権と采配に従うと叫びながら、同時にあの手この手で人間に対する神の主権と采配に反対するのです。気をつけなければ神によって間違った方向へ導かれてしまう、自分の運命をしっかりと握っていなければ、自分がもつものをすべて神に取り上げられてしまい、人生すら終わってしまうかもしれないと信じているからです。人間はサタンの陣営にいますが、サタンに虐げられることを恐れず、またサタンに虐げられていながら、サタンに囚われることを恐れません。

。人間は神の救いを受け入れると言いつけながら神を信頼せず、神がサタンの爪から人間を真に救うことも信じません。人がヨブのように神の指揮と采配に従うことができ、自分の存在全体を神の手に委ねることができれば、ヨブと同じ結末を迎えられる、つまり神の祝福を受け取れるのではないのでしょうか。神の支配を受け入れ、それに従うことができれば、失うものなどあるのでしょうか。ゆえに忠告しますが、あなたがたは自分の行ないに注意し、自分に降りかかろうとしているすべてのことに気をつけるべきです。軽はずみに、あるいは衝動的になることなく、神、および神があなたに用意した人や物事を、自分の激情や天性によって、または自分の想像や観念に従って扱ってはなりません。自分の行ないに気をつけ、さらに祈って求め、神の怒りを招いてはいけません。それを憶えておきなさい。

次に、試練の後におけるヨブの様子を検討しましょう。

5. 試練の後のヨブ

ヨブ記 42:7-9 ヤーウェはこれらの言葉をヨブに語られた後、テマンびとエリパズに言われた、「わたしの怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かって燃える。あなたがたが、わたしのしもべヨブのように正しい事をわたしについて述べなかったからである。それで今、あなたがたは雄牛七頭、雄羊七頭を取って、わたしのしもべヨブの所へ行き、あなたがたのために燔祭をささげよ。わたしのしもべヨブはあなたがたのために祈るであろう。わたしは彼の祈を受け入れるによって、あなたがたの愚かを罰することをしない。あなたがたはわたしのしもべヨブのように正しい事をわたしについて述べなかったからである」。そこでテマンびとエリパズ、シュヒびとビルダデ、ナアマびとゾパルは行って、ヤーウェが彼らに命じられたようにしたので、ヤーウェはヨブの祈りを受け入れられた。

ヨブ記 42:10 ヨブがその友人たちのために祈ったとき、ヤーウェはヨブの繁栄をもとにかえし、そしてヤーウェはヨブのすべての財産を二倍に増された。

ヨブ記 42:12 ヤーウェはヨブの終りを初めよりも多く恵まれた。彼は羊一万四千頭、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭をもった。

ヨブ記 42:17 ヨブは年老い、日満ちて死んだ。

神を畏れて悪を避ける人は神に大切にされ、愚かな人は卑しく見られる

ヨブ記第42章7-9節において、神はヨブを「わたしのしもべ」と呼んでいます。「し

もべ」という言葉でヨブに触れたことの中に、神の心におけるヨブの重要性が表わされています。神がヨブをさらに立派な名前と呼ぶことはありませんでしたが、この呼び名は神の心におけるヨブの重要性と何の関係もありませんでした。ここで言う「しもべ」はヨブに対する神のあだ名であり、「わたしのしもべヨブ」と何度も述べたことは、ヨブにどれだけ喜んでいたかを示しています。また、「しもべ」という言葉の裏にある意味を神は語りませんでした。聖書のこの一節における神の言葉から、神による「しもべ」という言葉の定義がわかります。神はまず、テマン人エリパズに言いました。「わたしの怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かって燃える。あなたがたが、わたしのしもべヨブのように正しい事をわたしについて述べなかったからである」。神が人々に対し、自分は試練を受けた後のヨブの言動をすべて受け入れたと公に語り、ヨブの言動がどれも正確で正しいと公に確認したのは、この言葉が最初です。神はエリパズと他の人々に怒りを覚えました。なぜなら、彼らの話は間違っていて馬鹿げており、またヨブのように、自分たちの生活の中で神の出現を見ることも、神が語る言葉を聞くこともできず、それでいてヨブは神のことを正確に認識していた反面、彼らは盲目的に神のことを推理し、何をするにも神の旨に背き、神の忍耐を試したからです。結果として、神はヨブの言動をすべて受け入れると同時に、他の人々に対して怒りを募らせました。彼らの中に、神を畏れることの現実が見られないばかりか、彼らの言葉の中に神への畏れを聞くことが一切なかったからです。そのため、神は彼らに次の要求をしました。「それで今、あなたがたは雄牛七頭、雄羊七頭を取って、わたしのしもべヨブの所へ行き、あなたがたのために燔祭をささげよ。わたしのしもべヨブはあなたがたのために祈るであろう。わたしは彼の祈を受け入れるによって、あなたがたの愚かを罰することをしない」。この一節で、神はエリパズと他の人々に対し、罪を贖う何かをするよう言っています。彼らの愚行はヤーウェ神に対する罪であり、それゆえ自分の過ちを償うために燔祭の捧げ物をする必要があったのです。燔祭の捧げ物はしばしば神に対して行なわれましたが、ここでの燔祭の捧げ物は、ヨブに行なわれたという点で普通ではありません。ヨブは試練の中で神に証しをしたので、神に受け入れられました。一方ヨブの友人たちは、ヨブの試練の中で暴かれました。つまり、愚行のために神に断罪され、神の怒りを招き、またヨブの前に燔祭の捧げ物をする事で、神から懲罰を受けなければならなかったのです。その後ヨブは、彼らが自分たちに対する神の懲罰と怒りを一掃するよう祈りました。神の目的は彼らを恥じ入らせることでした。彼らが神を畏れて悪を避けることをしない人であり、ヨブの高潔さを断罪したためです。ある側面から見ると、神は彼らの行ないを受け入れないと言う一方、ヨブを大いに受け入れ、彼に喜びました。また別

の側面から見れば、神は彼らに対し、人は神に受け入れられることで神の前で引き上げられ、また愚行のせいで神に憎まれ、神に背くのであって、そのような人は神の目から見て低く卑しい者であると言っています。これが神による二種類の人間の定義であり、これら二種類の人間に対する神の姿勢であり、これら二種類の人間の価値や地位に関する神の明確な説明です。神はヨブを自分のしもべと呼びましたが、神の目から見てこのしもべは愛されており、他の人々のために祈り、彼らの過ちを赦す権威を与えられていました。このしもべは神と直接話すことができ、神の前に出ることができ、その地位は他の誰よりも高く栄誉あるものでした。これが神の言う「しもべ」の意味です。ヨブは神を畏れて悪を避けたためにこの特別な栄誉を与えられました。また他の人々が神にしもべと呼ばれなかったのは、神を畏れて悪を避けることをしなかったからです。はっきり異なる神の二つの態度は、二種類の人々に対する神の態度を示しています。つまり、神を畏れて悪を避ける者は神に受け入れられ、神の目から見て尊いものと見なされますが、愚かな者たちは神を畏れず、悪を避けることができず、神の好意を受け取れません。そのような人はしばしば神に憎まれ、断罪され、神の目から見て卑しい者なのです。

神はヨブに権威を授ける

ヨブは友人たちのために祈りましたが、その祈りのために、神は後でヨブの友人たちに対し、その愚かさに応じた扱いをしませんでした。つまり、彼らを懲罰することも報復することもしなかったのです。それはなぜでしょうか。神のしもべであるヨブの祈りが神の耳に届いていたからです。神はヨブの祈りを受け入れたので、彼らを赦したのです。ここから何がわかりますか。神は誰かを祝福するとき、多くの報いを与えますが、それは物質的なものに限定されません。その人に権威も与え、他の人のために祈る資格を与えるとともに、彼らの過ちを忘れて赦します。神はその人の祈りを聞くからです。これこそまさに、神がヨブに与えた権威です。彼らへの断罪をやめるようにというヨブの祈りを通じ、ヤーウェ神はこれら愚かな人たちを恥じ入らせました。これはもちろん、エリパズたちに対する神の特別な懲罰だったのです。

ヨブは再び神に祝福され、二度とサタンに責められることがなくなった

ヤーウェ神の発言の中に、「あなたがたが、わたしのしもべヨブのように正しい事をわたしについて述べなかった」という言葉があります。ヨブが述べたこととは何だったのでしょうか。これは以前に話し合った内容であり、またヨブ記の中でヨブが語ったとされる何ページにもわたる言葉でもあります。これらのページに記された言葉の中で、ヨブは神について一度も不平や疑念を述べていません。ただ結果を待っていたのです。

このように待っていたことがヨブの従順の態度であり、その結果、またヨブが神に述べた言葉の結果、ヨブは神に受け入れられました。ヨブが試練に耐え、困難に苦しんでいたとき、神はヨブの傍らにいて、たとえ彼の苦しみが神の存在によって軽くなることはなくても、神は見たいものを見、聞きたいことを聞きました。ヨブの言動の一つひとつが神の目と耳に届いたのです。神は聞き、そして見ました。これは事実です。当時、神に対するヨブの認識と、心の中の思いは、今日の人々がもつそれに比べて実のところ具体的ではありませんが、時代背景の中、神はヨブの言ったことをすべて認めました。なぜなら、ヨブの態度、心の中の思い、そしてヨブが表わしたものや示したものは神の要求を満たしていたからです。試練に晒されている間、ヨブが心の中で考えたこと、行なおうと決意したことは神に結果を示すものとなり、それは神にとって満足できるものでした。その後、神はヨブの試練を取り除き、ヨブは自身の困難から抜け出て、試練は終わり、二度とヨブに降りかかりませんでした。ヨブはすでに試練に晒され、その中で固く立ち、サタンを完全に打ち負かしたので、神は彼にふさわしい祝福を与えました。ヨブ記42章10節、および12節に記されているように、ヨブは再び祝福を受け、それは最初の祝福を上回るものでした。このとき、サタンはヨブのもとを去っており、再び何かを話したり、何かをしたりすることはありませんでした。このとき以降、ヨブはサタンに干渉されることも、攻撃されることも二度となくなり、また神によるヨブへの祝福をサタンが非難することはありませんでした。

ヨブは人生の後半を神の祝福の中で過ごす

当時における神の祝福は、羊、牛、らくだ、および物質的な資産などに限られてはいなかったものの、神がヨブに授けたいと心の中で思った祝福はそれらをはるかに越えるものでした。当時、神がヨブに与えたいと思っていた永遠の約束がどのようなものであるか、記録は残っているのでしょうか。神はヨブを祝福する中で、彼の最後に言及することではなく、また神の心に占めるヨブの重要性や立場が何であれ、要するに、神は慎重に考慮して祝福を与えたのです。神はヨブの最後を告げませんでした。これは何を意味するのでしょうか。当時、神の計画は人間の最後を宣言するところまでに達しておらず、またその計画は神の働きの最終段階に入っていなかったため、神が人間の最後に触れることはなく、人間に対して物質的な祝福を授けただけなのです。これが意味するのは、ヨブの後半生は神の祝福の中で過ぎゆき、そのためヨブは他の人と違う存在になったということです。しかし、ヨブも彼らと同じく年齢を重ね、普通の人と同じようにこの世に別れを告げる日を迎えました。「ヨブは年老い、日満ちて死んだ」（ヨブ記 42:17）と書かれ

ているとおりです。この「日満ちて死んだ」とはどのような意味でしょうか。神が人々の終わりを宣言する以前の時代に、神はヨブの寿命を決めました。そしてヨブがその年齢に達したとき、神はヨブをこの世から自然に去らせました。ヨブの二度目の祝福から彼の死に至るまでの間、神はさらなる苦難を加えることはしませんでした。ヨブの死は神にとって自然なものであり、また必要なものでもあり、極めて普通のことであって、裁きでも断罪でもありません。生前のヨブは神を崇拝して畏れました。つまり、ヨブが死後にどのような最後を迎えるかについて、神は何も言わず、何の言及もしなかったのです。神には自らの言動に関する強い平衡感覚があり、その言動の内容と原則は自身の働きの段階と、自身が働いている期間に沿うものです。ヨブのような人間について、神は心の中でどのような最後を思い描いていたのでしょうか。何らかの決定に達したのでしょうか。もちろん達しました。人間がそれを知らなかっただけのことです。神はそれを人間に知らせたいとも、知らせようとも思わなかったのです。このように、表面的に見れば、ヨブは寿命を迎えて死にました。それがヨブの生涯でした。

ヨブが一生を生きた価値

ヨブは価値ある人生を送ったのでしょうか。その価値はどこにあったのでしょうか。ヨブは価値ある人生を送ったと言われるのはなぜでしょうか。人間にとって、ヨブの価値とは何でしょうか。人間の観点から言うと、サタンと世の人々の前で鳴り響くような証しを神に行なったという点で、ヨブは神が救いたいと願う人間を代表していました。ヨブは被造物が尽くすべき本分を尽くし、神が救いたいと願うすべての人の見本となり、その模範として振る舞いました。そうすることで、神にすがってサタンに打ち勝つことは間違いなく可能だと、人々がわかるようにしたのです。神にとってのヨブの価値は何だったのでしょうか。神にとってヨブの人生の価値は、神を畏れ、崇拝し、神の業を証しし、神の業を称え、神に慰めと喜びをもたらせたことにありました。そして、死を迎える前に試練を経験してサタンに勝利し、サタンと世の人々の前で鳴り響くような証しを神に行ない、人類の中にあって神を称え、神の心に慰めをもたらし、熱意に満ちた神の心に一つの結末と希望を見せたこともまた、神にとってのヨブの人生の価値でした。ヨブの証しは、人類を経営する神の働きの中で、人が固く立って神の証しをできることの前列となり、また人が神に代わってサタンを辱められることの前列となりました。これがヨブの人生の価値ではないのでしょうか。ヨブは神の心に慰めをもたらし、称えられることの喜びを前もって味わわせるとともに、神の経営計画が素晴らしいスタートを切れるようにしました。このとき以降、ヨブの名は神を称える象徴となり、サタンに対する人

類の勝利の象徴となりました。ヨブがその生涯において生きた物事、そしてサタンに対する勝利は神によって永遠に尊ばれ、またヨブの完全さ、正しさ、神に対する畏れは後の時代に尊ばれ、模範となるでしょう。ヨブは傷のない輝く真珠のように、神に尊ばれるでしょう。そして人間にとっても、ヨブは尊ばれるに値する人なのです。

では次に、律法の時代における神の働きを検討しましょう。

D. 律法の時代における規則

十戒

祭壇を建てる際の原則

しもべの扱いに関する規則

盗みと賠償に関する規則

安息年と三つの祭日を守る

安息日に関する規則

捧げ物に関する規則

燔祭の捧げ物

穀物の捧げ物

和解の捧げ物

罪の捧げ物

罪過の捧げ物

祭司による捧げ物に関する規則（アロンと彼の息子たちが守るよう命じられたものの）

祭司による燔祭の捧げ物

祭司による穀物の捧げ物

祭司による罪の捧げ物

祭司による罪過の捧げ物

祭司による和解の捧げ物

祭司が捧げ物を食べることにに関する規則

清い動物と不浄の動物（食べてよい動物とそうでない動物）

産後の女性の清めに関する規則

らい病検査の基準

らい病から回復した人に関する規則

感染病にかかった家の清めに関する規則

長血を煩っている女性に関する規則

年に一度遵守すべき贖罪の日

牛と羊を殺す際の規則

異邦人による忌むべき習慣（近親相姦など）の禁止

民が従うべき規則（「あなたがたは聖くならなければならない。あなたがたの神、ヤーウェであるこのわたしが聖いからである」。）

モレクに子どもを捧げた者の処刑

姦淫の罪を犯した者への懲罰に関する規則

祭司が守るべき規則（日々の振る舞いに関する規則、聖なるものの消費に関する規則、捧げ物に関する規則など）

遵守すべき祭日（安息日、過越祭、聖霊降臨祭、贖罪の日など）

その他の規則（ともし火、聖年、土地の贖い、誓願、十分の一の捧げ物など）

律法の時代の規則は、神が全人類を導く本物の証拠である

律法の時代の規則と原則をみなさん読みましたね。これらの規則は広範囲にわたるものですか。まず十戒が記され、続いて祭壇の建て方などが記されています。その後、安息日を守って三つの祭日を遵守することが続き、そして捧げ物に関する規則と続きます。何種類の捧げ物があるかわかったでしょうか。燔祭の捧げ物、穀物の捧げ物、和解の捧げ物、罪の捧げ物などがあります。その後、祭司による捧げ物の規則が続き、その中には祭司による燔祭の捧げ物や穀物の捧げ物などが含まれます。八つめの規則は祭司が捧げ物を食べることにに関するものです。続いて人々が生活において守るべき規則が示されています。生活の多方面に関する規定がありますが、その中には食べてよいものと食べてはならないもの、出産後の女性の清め、らい病から回復した人に関する規定などが

含まれます。これらの規則の中で、神は病についても語っており、羊や牛を殺す規則さえあります。羊や牛は神によって創られたものであり、神の言う通りに殺さなければなりません。神の言葉には間違いなく根拠があり、神が命じた通りに行なうのが正しいことは確かで、人間にとって必ず益となるのです。安息日や過越の祭など、遵守すべき祝祭と規則もありますが、神はそれらのすべてについても語っています。最後に書かれている規則、その他の規則を検討しましょう。ともし火、聖年、土地の贖い、誓願、十分の一の捧げ物などです。これらの規則は広範囲にわたるものでしょうか。まずは人々の捧げ物について触れられており、それから盗みと賠償、そして安息日の遵守と続いており、生活の細部の一つひとつが含まれています。つまり、神は自身の経営計画の正式な働きを始めたとき、人間が従うべき数多くの規則を定めたのです。それらの規則は、人間が地上で普通の生活を送れるようにするためのものであり、人間の普通の生活は神および神の導きから切り離せないものです。神は最初に、どのように祭壇を作って建てるべきかを教えました。その後、人間に捧げ物をするよう指示し、人間はどのように生きるべきかを定めました。つまり、生活の中で何に注意を払い、何に従い、何をすべきで何をすべきでないかを定めたのです。神が人間のために定めたものは包括的で、それらの習慣、規則、原則により、神は人間の振る舞い方に基準を設け、人間の生活を導き、神の律法の手ほどきを行ない、そして人間が神の祭壇の前に出よう導き、神が人間のために造った、秩序と規則と節度を兼ね備えたすべてのものの中での生活において、人間を指導したのです。神はまずこれらの簡単な規則と原則を用い、人間に対して様々な制限を設けましたが、そうすることで、人間が地上において神を礼拝する正常な生活、正常な人間の生活を送れるようにしました。それが六千年にわたる神の経営計画の始まりの具体的な内容です。それらの規則や決まりは極めて多岐にわたり、律法の時代における神による人間の導きの具体例であって、律法の時代の前に来た人間が受け入れ、従うべきもの、律法の時代に神が行なった働きの記録、そして全人類に対する神の指導と導きの確かな証拠なのです。

人類は永遠に神の教えと施しから離れられない

これらの規則から、自身の働き、経営、そして人類に対する神の態度は真剣で、良心的で、厳格で、責任感に溢れていることがわかります。神は人類のあいだにおいて、自らの働きの段階に応じ、なすべき働きをまったく矛盾なく行ない、人類に語るべき言葉を少しの誤りも抜けもなく語り、人間が神の指導から離れられないことを理解させ、神のすべての言動が人類にとってどれほど重要であることを示します。次の時代の人間がど

のようであるかを問わず、最初るとき、すなわち律法の時代に、神はこれらの簡単な働きをしたのです。神にとって、人々がその時代にもっていた神、世界、そして人間に対する概念は抽象的かつ不明瞭なものであり、意識的な考えや意図がいくらかあったものの、それらはすべて不明確で間違っており、そのため人類には神の教えと施しが不可欠だったのです。初期の人類は何も知らなかったため、神は言葉によるこうした規制や規則を通じ、最も表面的かつ基本的な生存の原則と、生きる上で必要な規則から教え始め、それらの物事を人間の心に少しずつ吹き込むとともに、神のことを徐々に認識させ、神の指導、そして人間と神との関係についての基本的な概念を理解させる必要がありました。その効果が発揮されて初めて、神は後に行なう働きを少しずつ実行することができるのです。したがって、律法の時代におけるこれらの規則と神の働きは、人間を救う働きの基盤であり、神の経営計画における働きの第一段階なのです。律法の時代の働きに先立ち、神はアダム、エバ、そして彼らの子孫に語りかけましたが、その際の命令や教えは、人間一人ひとりに対して発せられるような系統的なものでも具体的なものでもなく、書き留められたものでもなく、規則になってもいませんでした。なぜなら、神の計画は当時そこまで進んではいなかったからです。神が人間をこの段階へ導いて初めて、神は律法の時代におけるこれらの規則を語り始めることができ、人間にそれを実行させ始めることができたのです。それは必要な過程であり、その結果は必然的なものでした。これらの簡潔な習慣と規則は、神の経営の働きの各段階と、神の経営計画において表わされた神の知恵を人間に示しています。自分に証しを行なう人々の集団、自分と同じ思いをもつ人々の集団を得るべく、どのような内容と手段を用いて始めるべきか、どのような手段を用いて継続すべきか、そしてどのような手段を用いて終わらせるべきかを、神は知っています。神は人間の内側にあるものを知っており、人間に何が欠けているかを知っています。神は自分が何を施さなければならないか、いかに人間を導くべきかを知っており、また同じく、人間が何をすべきで何をすべきでないのかも知っています。人間はあやつり人形のようなものです。たとえ神の旨をまったく理解していなくても、神の経営の働きによって一步一步導かれるしかなかったのです。自分が行なおうとすることについて、神は一点の曇りもなく理解していました。神の心は明瞭で、そこには鮮明な計画がありました。そして自身の段階と計画に従い、自ら行なおうと望む働きを実行し、表面的な働きから深遠な働きへと進めていきました。神は後にどのような働きを行なおうとしているかを示すことはありませんでしたが、その後の働きは自身の計画に厳密に従う形で続けられ、進行しました。それは神が所有するものと神そのものの明示であり、神の権威でもありました。神が自身の経営計画におけるどの段階の働きを行

なっているかにかかわらず、神の性質と本質は神自身を表わしています。それは絶対に真実です。時代や働きの段階を問わず、神がどのような人を愛するか、どのような人を憎むか、さらには神の性質、そして神が所有するものと神そのものは決して変わりません。律法の時代の働きで神が確立したこれらの規則と原則は、今日の人々にはとても簡素で表面的に思われるかもしれませんが、また理解しやすく簡単に達成できますが、そこにはやはり神の知恵があり、神の性質、そして神が所有するものと神そのものが存在します。というのも、見るからに簡素なそれらの規則の中に、人類に対する神の責任と配慮、および神の考えの素晴らしい本質が表現されており、それにより、神が万物を統治し、万物が神の手で支配されていることを、人は真に理解することができるからです。人間がどれほど知識を得ても、どれほど多くの理論や奥義を理解しても、神にとって、これらの事柄のうち、自身の施しと人類に対する指導に代わるものは一つもありません。人間が神の導きと直接の働きから離れることは永遠にできないのです。それが人間と神との切り離せない関係です。神があなたに戒めを与えるか、規則を与えるか、あるいは神の旨を理解するための真理を与えるかどうかを問わず、また神が何を行なうかにかかわらず、神の目的は人間を美しい明日へと導くことです。神が発する言葉と神が行なう働きは、神の本質の一側面、神の性質と知恵の一側面を示すものであり、神の経営計画における不可欠の一段階です。これを見落としてはいけません。神が行なうすべてのことの中に、神の旨があります。神は誤解を恐れることも、神に対する人間の観念や考えに不安を感じることもありません。どんな人や出来事や物事に縛られることもなく、自身の経営計画に沿って働きを行ない、自身の経営を続けるのです。

きょうはここまで。また次回お会いしましょう。

2013年11月9日

神の働き、神の性質、そして神自身 3

これまで数回の交わりは、あなたがた一人ひとりに大きな影響を与えてきました。いま、人々は神の真の存在と、実際には神が人と極めて近いことを、ようやく実感できるようになったのです。人々は長年にわたり神を信じてきたかもしれませんが、神の思いと考えを現在ほど深く理解したことはなく、また神の実践的な業を今日ほど真に経験したこともありませんでした。認識であれ、実際の行為であれ、ほとんどの人は新しい認識を得て、より深く理解し、自分自身のそれまでの追求における過ちや経験の浅さに気づき、また自分の経験において神の旨に即していない事柄が多すぎることを、そして最

も人間に不足しているのは、神の性質に関する認識であることに気づいたのです。人によるこのような認識は、一種の知覚的な認識に過ぎず、理性的な認識の水準に達するには、自分の経験を通じた段階的な深化と強化が必要となります。真に神を理解する前の人間は、客観的に見て、神の存在を心で信じていると言えますが、神は実際にどのような神か、神の旨は何か、神の性質とはどのようなものか、人類に対する神の本当の姿勢はどのようなものかといった、具体的な問題についてはまったく理解していません。このことが人々の神に対する信仰を大いに損ない、その信仰が純粋なものになること、および完全なものになることを妨げています。たとえ神の言葉と向き合ったとしても、あるいは自分の経験を通じて神に直面したと感じたとしても、それをもって神を完全に理解したとは依然言えません。あなたは神の考えを知らず、また神が何を愛して何を憎むか、何に怒って何に喜ぶかも知りません。それゆえ、あなたは神を真に理解していません。あなたの信仰は、曖昧さと想像の上に立脚し、主観的な願望を基盤としています。そうした信仰は真の信仰から依然かけ離れており、あなたは真の信者から依然ほど遠い存在なのです。ここで紹介する聖書の物語の例を説明することで、人間は神の心を知るとともに、働きの各段階における神の考え、神がその働きを行なった理由、その際に神がもっていた本来の意図と計画、神が自分の考えを実現させる方法、そして神が自身の計画をどう立案し、展開させたかを理解できるようになります。こうした物語により、六千年にわたる経営（救い）の働きにおける神の具体的な意図、および神の本当の考えの一つひとつについて、そして各時点、各時代における神の人間に対する姿勢について、詳細かつ具体的に理解することができるのです。それぞれの状況で神は何を考えていたか、神の姿勢はどのようなものだったか、そして神はどのような性質を示したかを理解できれば、一人ひとりが神の真の存在をより深く理解し、神の現実性と真正さをより深く感じる上で助けとなります。わたしがこれらの物語を話す目的は、聖書に記された歴史を人々に理解させることでも、聖書の聖句や登場人物になじませることでもなく、とりわけ律法の時代における神の業の背景を理解できるようにすることでもありません。むしろ、人々が神の旨、神の性質、神のあらゆる側面を理解し、神についてより真正かつ正確な理解と認識を得られるようにすることです。これにより、人々は神に対して徐々に心を開き、神に近づくことができるとともに、神、神の性質、神の本質をさらに深く理解し、神自身をより深く知ることができるようになるのです。

神の性質に関する認識、および神が所有するもの神そのものに関する認識は、人々に肯定的な影響を与えることができます。そうした認識は、人々が神をさらに信頼し、神

に対して真に服従し、神を崇敬する上で役立ちます。そうすると、人々はもはや盲目的に神に従うことも、無闇に神を崇めることもなくなります。神は愚か者や、盲目的に大衆に追随する人たちを望まず、むしろ神の性質を心の中ではっきり知って認識し、神を証しすることができる人、および神の愛、神が所有するものと神そのもの、そして神の義なる性質のゆえに、決して神を捨てない人の集団を望みます。神に付き従う者として、心がいまだ明瞭でなければ、あるいは神の真の存在、神の性質、神が所有するものと神そのもの、そして人類を救う神の計画に関して漠然とした点や混乱している点があれば、あなたの信仰が神に称賛されることはありません。神は、そのような人が自分に付き従うことを望んでおらず、そのような人が自分の前に来ることを好みません。この種の人には神を理解せず、心を神に捧げることができず、神に対して心が閉ざされているので、神に対する信仰は不純に満ちています。そのような人の神に対する信仰は、盲目としか言いようがありません。神に関する真の理解と認識は神への真の服従と畏敬を育みますが、人はそれらをもって初めて真の信仰を得て、真の信者になることができます。そのような形でのみ、人は神に心を捧げ、心を開くことができるのです。それが神の望むことです。なぜなら、そのような人の行動や思考はどれも神の試練に耐え、神を証しすることができるからです。神の性質、神が所有するもの神そのもの、あらゆる業における神の旨と考えについて、わたしがどのような観点から伝えようと、あるいはどのような角度から話そうと、それはどれも、あなたがたが神の真の存在についてより確信を抱き、人類に対する神の愛を真に認識して理解し、人々に対する神の懸念、そして人類を経営して救うという神の真摯な望みを真に理解するにあたり、その手助けをするものです。

本日は、神による人類創造以降の神の旨、考え、そして行動についてまとめ、創世から恵みの時代の開始時点までに神が行なった働きを検討します。すると、神の旨と考えのうち、人間に知られていないものがどれかを突き止めることができ、そこから神の経営計画の秩序をはっきりさせ、神が経営の働きを創った背景、起源、そして展開過程を完全に理解することができ、また神が経営の働きからどのような結果を望んでいるか、つまり神による経営の働きの核心と目的を完全に理解することができます。これらの事柄を理解するには、人間が存在しなかった、遠い過去の静寂の時代まで遡る必要があります……

目覚めた神が最初に考えたことは、生きている現実の人間、常に神とともに生き、神の道連れとなる人を創ることでした。この人間は神の言葉を聞き、神が信頼して話せる

人でした。次に、神はまずひと握りの土をすくい上げ、心の中で想像していた姿にしたがって最初の人間を創り、その生きた被造物をアダムと名づけました。息をして生きているこの人間を創った後、神はどのように感じましたか。愛すべき道連れをもつ喜びを初めて感じたのです。また、父としての責任と、それに伴う懸念も初めて感じました。息をして生きているこの人間は、神に幸福と喜びをもたらしました。神は初めて慰めを感じたのです。これが、神が自身の考え、さらには自身の言葉によってではなく、自身の手で行なった最初の業でした。いのちをもち、息をする人間、肉と血で創られた身体をもち、神と話せるこのような存在が目の前に立ったとき、神はかつてない喜びを感じました。神は自らの責任を実感し、この生き物に心惹かれるだけでなく、その一つひとつの行動に心が温まって感動しました。この生き物が神の前に立ったとき、神は初めて、このような人間をさらに得たいと考えました。これら一連の出来事は、神が当初に抱いたこの考えから始まったものです。神にとって、こうした出来事はどれも初めてのことでしたが、これら最初の出来事において、神が感じたのが喜びであれ、責任であれ、懸念であれ、それを分かち合う相手が神にはいなかったのです。この瞬間から、神はそれまで感じたことのなかった寂しさと悲しさを心から感じました。人間は自分の愛と懸念、そして人間に対する自身の旨を受け入れることも理解することもできないと思った神は、依然として悲しみと心の痛みを感じていました。人間のためにこれらのことを行なったにもかかわらず、人間はそれに気づかず、理解することもありませんでした。幸福に加え、人間が神にもたらした喜びと慰めは、ほどなくして最初の悲しみと寂しさをも神にもたらしたのです。以上が、この時点で神が考え、感じていたことです。そうしたことを行なっている間、神の心は喜びから悲しみに、悲しみから苦痛に変わり、その感情には懸念が入り交じっていました。神が望んだのはひとえに、自身の心にあるものをこの人間、この人類に急いで知らせ、一刻も早く自身の旨を理解させることでした。そうすれば、人間は神に付き従う者となって神の考えを分かち合い、神の旨に従えるようになるはずでした。ひたすら無言で神の言葉に耳を傾けることも、神の働きにどう加わるべきかを知らずにいることもなくなり、そして何より、神の求めに無関心でいることはなくなるでしょう。神が最初になしたこれらの事柄は、極めて有意義であり、神の経営計画と現在の人間にとって大いに価値あるものでした。

万物と人類を創った後、神が休むことはありませんでした。自身の経営を実行し、自身がこよなく愛する人間を得ようと待ちきれなかったのです。

その後、神が人間を創ってからほどなくして、世界中で大規模な洪水が起きたと聖書

には記されています。この洪水の記録はノアについて触れていますが、ノアは、神の務めを遂行すべく神とともに働くよう、神の命令を受けた最初の人間だと言えるでしょう。もちろん、神が地上の人間に対して、自身の命令に従って何かをするよう呼びかけたのもこれが最初でした。ノアが箱舟を完成させると、神は地球に最初の洪水を起こしました。洪水によって大地を滅ぼしたとき、神は人間を創ってから初めて、人間への嫌悪感に圧倒されました。それにより、神は洪水によって人類を滅ぼすという悲痛な決断を余儀なくされたのです。地球が洪水によって滅ぼされた後、神は人間との間で、二度と洪水によって世界を滅ぼさないという内容の最初の契約を交わしました。この契約のしるしは虹でした。これが神と人類との最初の契約であり、したがって虹は、神による契約の最初のしるしでした。虹は実体のある物理的な存在です。この虹こそが、洪水で失った以前の人類に対する神の悲しみをしばしば呼び起こし、それらの人々が見舞われた出来事を、絶えず神に思い出させるものなのです……神は歩を緩めることなく、ひたすら自身の経営を次の段階へと進めました。次に、イスラエル全土における自身の働きの中で、神は最初にアブラハムを選びました。これは、神がアブラハムのような者を選んだ最初の時でもありました。神はこの人物を通じて人類を救う働きを始め、それから彼の子孫を通じて自らの働きを継続することを決意しました。神がアブラハムに対してそのようにしたことは、聖書で確認することができます。その後、神はイスラエルを最初の地として選び、選民であるイスラエル人を通じて律法の時代の働きを始めました。この時も、神は初めて、人類が従うべき明確な規則と律法をイスラエル人にもたらし、それらを詳しく説明しました。どのように生贄を捧げるべきか、どのように暮らすべきか、何をすべきで何をすべきでないか、どのような祝祭や期日を守るべきか、そして万事においてどのような原則に従うべきかについて、神は初めて具体的かつ標準的な規則を人間にもたらしたのです。

ここで「初めて」というのは、神はそれ以前に同様の働きを行なったことがなかった、という意味です。そうした働きはそれまで存在しておらず、神は人類を創り、ありとあらゆる生き物を創ったにもかかわらず、こうした働きを行なうことは以前になかったのです。これらの働きはすべて、神による人類の経営に関係しています。どれも人々に、そして神による人々の救いと経営に関係していたのです。アブラハムの後、神は再び初めてのことをしました。つまりヨブを選び、彼を律法のもとで暮らし、サタンの試みに耐え、その一方で引き続き神を畏れ、悪を避け、神の証しに立つ人間としたのです。それはまた、サタンが人を試すのを神が許した最初の時であり、神がサタンと賭けをし

た最初の時でもありました。最終的に、サタンと対峙しながら神の証しに立ち、その証しをできる人、サタンを完全に辱められる人を、神は初めて得たのです。神による人類の創造以来、神が自身の証しをできる人を得たのはこれが最初でした。ヨブを得た神はより精力的に経営を続け、働きの次なる段階へと進み、それを行なう場所と人を選んで用意しました。

ここまでの交わりで、神の旨を真に理解しましたか。このように人間を経営して救うことを、神は何より重要だと考えます。神はこうした業を、自身の考えや言葉だけでそれらのことを行なうのではなく、ましてや軽々しい態度で行なうことなどあり得ません。計画、目的、基準、そして自身の旨にしたがってそれらのことを行なうのです。人類を救うその働きが、神と人間の両方にとって極めて大きな意義をもつことは明らかです。その働きがいかに困難だとしても、障害がいかに大きくても、人間がいかに弱くても、あるいは人類の反逆心がいかに強くても、そのいずれも神にとって困難とはなりません。神はひたすら血のにじむような努力を続け、自身が行なおうとしている働きを経営します。また、神はすべてを采配し、働きの対象となるすべての人間と、完了させたいと望むすべての働きを経営していますが、それらはどれも以前に行なわれたことがないものです。人類を経営して救うという一大事業のために、神がこれらの手段を使い、かくも大きな代価を支払ったのはこれが初めてなのです。神はこの働きを行なう一方、自身の血のにじむような努力、自身が所有するものと自身そのもの、自身の知恵と全能、そして自身の性質の各側面を、人類に対して少しずつ、かつ惜しみなく示して明らかにします。それまで明かしてこなかったこれらのことを明らかにして示すのです。ゆえに、神が経営して救おうとする人間を除き、神にこれほど近づき、親密な関係をもつ生物は全宇宙に存在しません。神の心の中では、自分が経営して救おうとしている人間が最も重要であり、神はこの人類を他の何より大切にしています。たとえ彼らのために大きな代価を支払ってきたとしても、また彼らに絶えず傷つけられ、反抗されたとしても、神は彼らを決して見捨てず、不満を言うことも後悔することもなく、自身の働きをひたすら続けます。と言うのも、人々が遅かれ早かれ自身の呼びかけで目覚め、自身の言葉によって動かされ、神が創造主であることを認めて神のもとへ戻ることを、神は知っているからです。

今日ここまでの話を聞いて、神が行なうことはすべてごく普通だと感じるかもしれませんが。人間は神の言葉と働きから、神の旨の一部を絶えず感じ取っているように思われますが、人々の感情や認識と、神が考えていることとの間には、常に一定の差がありま

す。そのためわたしは、神が人類を創った理由や、自ら望む人々を獲得したいという神の望みの背景について、すべての人に伝える必要があると思うのです。一人ひとりが心の中ではっきりするよう、これを全員に分ち合うことが不可欠なのです。神の一つひとつの考えや発想、そして神の働きの各段階と各期間は、いずれも神の経営の働き全体と結びつき、密接に関連しているので、働きの各段階における神の考え、発想、そして旨を理解することは、神の経営計画の働きがどのように生じるかを理解することと同じなのです。これを土台として、神に関するあなたの理解は深まります。先ほど述べた、神が世界を創った際に行なったすべてのことは、いまや「情報」に過ぎず、真理の追求と何ら関係ないように見えます。しかし、経験を積んでゆく過程で、それが単なる情報のように単純なものでもなければ、ある種の謎のように簡単なものでもないことに気づく日が来ます。今後の人生のなかで、心の中に少しでも神の居場所があれば、あるいは神の旨をより徹底的に、より深く理解すれば、わたしが本日話している内容の重要性と必要性を真に理解することができます。いまこれをどの程度受け入れるかに関係なく、こうした事柄を理解して知ることは、あなたがたにとって必要なことです。神が何かを行なったり働きを実行したりするとき、それが神の考えによるものか、あるいは神自身の手によるものかを問わず、また神がそれを行なうのが最初であるか最後であるかを問わず、最終的に、神には計画があり、神が行なうすべてのことには神の目的と考えが込められているのです。こうした目的と考えが神の性質を示し、神が所有するものと神そのものを表わしています。これら二つのこと、つまり神の性質、そして神が所有するものと神そのものは、すべての人が理解しなければならないことです。いったん神の性質や、神が所有するものと神そのものを理解すれば、その人は徐々に、神がなぜそれを行なうのか、なぜそれを言うのかを理解できるようになります。そこから神に従い、真理と性質の変化を追い求める信仰をさらに得られるのです。つまり、神に関する人間の理解と、神への信仰は不可分なのです。

人々が知って理解するようになったことが、神の性質や神が所有するものと神そのものだとしたら、それによって得られるのは神から生じるいのちです。ひとたびこのいのちが自分の中で形作られると、神への畏れが次第に大きくなります。それは極めて自然に生じる成果です。神の性質や本質について、それを理解しようと望まず、また知ろうともしないなら、あるいはそれらの事柄を考えたり重視したりすることさえ望まないなら、神への信仰を追求するにあたってあなたが現在行なっている方法では、神の旨を満足させることも、神の称賛を得ることも決してできないと断言できます。それ以上に、

神の救いも決して得られません。それが最終的な結果です。神を理解せず、神の性質を知らなければ、神に対して真に心を開くことはできません。いったん神を理解すれば、神の心中にあるものを、関心と信仰をもって理解し、味わうようになります。神の心中にあるものを理解して味わうとき、神に対して徐々に心が開かれていきます。神に対して心が開いたとき、自分がしてきた神とのやりとり、神に対する要求、そして自分自身の過度な欲望がどれほど恥ずかしく軽蔑に値するかを感じるようになります。神に対して真に心を開いた時、神の心が無限の世界であることや、自分が未体験の領域へと入ってゆくのがわかります。この領域には嘘や欺瞞、闇や邪悪がまったくありません。そこにあるのは誠実さと忠実さ、光と正しさ、義と優しさだけなのです。この領域は愛と思いやり、慈悲と寛容にあふれ、それを通じて生きていることの幸福と喜びを感じることができます。あなたが神に心を開いたとき、神はこれらのことをあなたに明かすのです。この無限の世界は神の知恵と全能、また神の愛と権威に満ちています。そこでは、神が所有するものと神そのもの、神に喜びをもたらす物事、神が懸念を抱く理由、神が悲しむ理由、神が怒りを抱く理由について、そのあらゆる側面がわかります。心を開いて神が入ってくるのを受け入れた人はみな、これらの事柄がわかるのです。神があなたの心に入れるのは、あなたが神に心を開くときだけです。神があなたの心に入ったときだけに、あなたは神が所有するものと神そのもの、そしてあなたに対する神の旨を理解できるのです。そのとき、神に関するすべての物事が尊いこと、神が所有するものと神そのものが大切にしている価値のあるものだとなります。それに比べると、あなたの周囲の人々、生活における物事や出来事、そしてあなたの家族や伴侶、あるいはあなたが愛する物事さえ、述べる価値すらありません。それらはとても小さく卑しいものであって、自分が何らかの物体に引きつけられることはない、あるいは何らかの物体が自分を誘惑し、その代価を払わせることは二度とできないとを感じるようになります。あなたは神の謙虚さの中に、神の偉大さと至高を目の当たりにします。そのうえ、あなたは神の業の中に、自分がそれまで、神の無限なる知恵と寛容はごく小さなものだと思っていたこと、そして自分に対する神の忍耐、寛容、および理解を目の当たりにします。こうした事柄により、あなたの中に神への愛が育まれます。あなたはその日、人類がとてつもなく汚れた世で生きていること、身近な人々や生活の中の出来事、自分が愛する人や、そうした人のあなたに対する愛、そしていわゆる保護や気遣いさえも、述べる価値すらないものと感じられ、自分が愛するのは神だけであり、自分にとって最も貴重なのは神だけであると感じます。この日が来たとき、次のように言う人々が現われることをわたしは信じています。「神の愛はかくも偉大であり、神の本質はかくも聖なるものだ。神には

欺瞞、邪悪、ねたみ、争いが皆無であり、正義と正当性しかなく、神が所有するものと神そのもののすべては、人間が望むべきものである。人間はそれを求めて努力し、熱望すべきだ」では、それを成し遂げる人類の能力は何を基盤としていますか。そうした能力は、神の性質と本質に関する自分自身の理解を基盤としています。したがって、神の性質、そして神が所有するものと神そのものを理解することは、各人が生涯をかけて学ぶことであり、また自分の性質を変え、神を知ろうと努力するすべての人が追い求める目標でもあるのです。

わたしたちはここまで、神が行なったすべての働き、そして神が実行した一連の前例なき働きについて話し合いました。それらはどれも神の経営計画と神の旨に関係しており、神自身の性質と本質にも関係しています。神が所有するものと神そのものについてもっと理解したいと望むなら、旧約聖書や律法の時代で立ち止まることはできず、神がその働きのなかで辿った段階にしたがい先へと進む必要があります。ゆえに、神は律法の時代を終えて恵みの時代を始めたのですから、わたしたちもそのあとを追い、恵みと贖いに満ちた時代、すなわち恵みの時代へと進みましょう。この時代、神は再び初めての重要なことを行ないました。神と人類の両者にとって新しいこの時代における働きは、新たな出発点となりました。この新たな出発点もまた、神がそれまで行なったことのない働きから成り立っています。この新たな働きは前例のないものであり、人間やあらゆる被造物の想像力を超えるものでした。それはいまや誰もが知っています。つまり、神は初めて人間となり、初めて人間の姿で、人間の身分において新たな働きを始めたのです。この新たな働きは、神が律法の時代の働きを終えたこと、そして律法に基づく言動をもはやしないことを示しました。また律法の形で、あるいは律法の原則や規則にしたがって、何かを述べたり行なったりすることもなかったのです。つまり、律法に基づく神の働きは永遠に止まり、継続することは二度とありませんでした。なぜなら、神は新たな働きを始め、新たな業を行なうことを望んだからです。神の計画は再び新たな出発点を迎え、ゆえに神は人類を新たな時代へと導く必要がありました。

それが人間にとって喜ぶべき知らせであるか、忌むべき知らせであるかは、各人の本質によって決まります。一部の人々にとって、それは嬉しい知らせでなく忌むべき知らせだったと言えるでしょう。と言うのも、神が新たな働きを始めた際、律法と規則に従うだけだった人、教義に従うばかりで神を畏れなかった人は、神による以前の働きを持ち出して、神の新たな働きを非難しようとする傾向にあったからです。こうした人たちにとって、それは悪い知らせでしたが、汚れがなく率直であり、神に対して誠実であり

、神の贖いを喜んで受けた人々にとって、神の最初の受肉は極めて喜ばしい知らせでした。なぜなら、人間が存在するようになってからというもの、神が霊ではない形で現われ、人間とともに生活したのはこれが初めてであり、神は今回人間として生まれ、人の子として人々の間で生活し、人々の中で働きを行なったからです。この「初めての出来事」は、人々の観念を打ち壊し、あらゆる想像を越えるものでした。さらに、神の信者は残らず目に見える益を得ました。神は古い時代を終わらせただけでなく、自身の働きにおけるそれまでの手段や方式をも終わらせたのです。つまり、神は使者に自身の旨を伝えさせることを止め、もはや雲間に隠れず、稲妻を通じて現われることも、人間に命令口調で語ることもなくなりました。それ以前とは異なり、人間にとって想像もつかず、理解することも受け入れることも極めて困難な方法、つまり肉になるという方法でその時代の働きを始めるべく、神は人の子となりました。神によるこの行動は、人間にとってまったくの不意打ちであり、また不快なものでした。なぜなら、神はまたしても、それまで行なったことのない新しい働きを始めたからです。本日は、この新たな時代に神が実現した新たな働きは何かを検討し、また神の性質、および神が所有するものと神そのものという観点の中で、わたしたちがこの新たな働きから何を学べるかを考えます。

次に挙げるのは新約聖書に記された言葉です。

1. マタイによる福音書 12:1 そのころ、ある安息日に、イエスは麦畑の中を通られた。すると弟子たちは、空腹であったので、穂を摘んで食べはじめた。

2. マタイによる福音書 12:6-8 あなたがたに言うておく。宮よりも大いなる者がここにいる。「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない」とはどういう意味か知っていたなら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったであろう。人の子は安息日の主である。

まずは「そのころ、ある安息日に、イエスは麦畑の中を通られた。すると弟子たちは、空腹であったので、穂を摘んで食べはじめた」という聖句を検討しましょう。

わたしがこの聖句を選んだのはなぜですか。この聖句と神の性質との間にはどのようなつながりがありますか。この聖句で最初にわかるのは、安息日であるにもかかわらず、主イエスは外出し、弟子たちを率いて麦畑を歩いたということです。さらに「けしからぬ」こととして、弟子たちは「穂を摘んで食べはじめた」のです。律法の時代、ヤエウエ神の律法には、安息日に何気なく外出したり、何らかの活動に参加したりしてはな

らないと明記されていました。安息日にはならないことが沢山あったのです。主イエスによるこの行動は、長らく律法の下で暮らしてきた人にとっては不可解であり、非難を招きさえしました。ここでは人々の困惑や、イエスの行動について人々がどのように語ったかは検討せず、まずは主イエスがすべての曜日の中でなぜ安息日にこうした行動をとったのか、またその行動により、律法の下で暮らしていた人々に何を伝えたかったかを検討します。それがこの聖句と、わたしがこれからお話しする神の性質とのつながりなのです。

来臨した主イエスは、神が律法の時代を離れて新たな働きを始めたこと、またその新たな働きが安息日の遵守を求めないことを、実際の行動によって人々に伝えました。神が安息日の拘束から抜け出たのは、神の新たな働きの前触れに過ぎず、実際の偉大な働きはいまだ行なわれていなかったのです。主イエスは働きを始めた際、律法の時代の「束縛」をすでに捨て去っており、その時代の規制や原則を打破していました。イエスには、律法に関連する部分がまったく見られませんでした。律法を完全に捨て去り、もはやそれを守らず、また律法の遵守を人に要求することもなかったのです。ゆえにここで、主イエスが安息日に麦畑を歩いていたこと、およびその日に休まなかったことがわかります。主イエスは外に働きに出て休まなかったのです。主イエスによるこの行動は人々の観念に衝撃をもたらし、イエスがもはや律法の下で暮らしていないこと、およびイエスが安息日の束縛を離れ、新たな姿で、新たな働き方を携えて人類の前に現われたことを人々に伝えました。またイエスによるこの行動は、彼が新たな働きを携えてきたことを人々に示しました。それはつまり、律法の支配と安息日を離れることから始まる働きです。新たな働きを行なう際、神はもはや過去に固執せず、律法の時代の規則を気にかけることもありませんでした。また過去の時代の働きに影響されることもなく、他の各曜日と同じく安息日であっても働きを行ない、かくして弟子たちは空腹となったとき、麦の穂を摘んで食べることができました。これはどれも、神の目にはごく普通のことでした。神にとって、自身が行なおうとしている新たな働きや、言おうとしている新たな言葉の大部分について、それらが新たに始まるのは許されることなのです。神は何か新しいことを始めるとき、以前の働きに触れることも、それを続けることもありません。神の働きには原則があるので、神が新たな働きを始めようとしたら、それは自身の働きの新たな段階に人類を連れ出すとき、自身の働きがより高次の段階に入るときなのです。人々が旧来の言い習わしや規則に従って行動し続けたり、それらに固執し続けたりした場合、神はそれを記憶することも讃えることもしません。なぜなら、神はすでに新

たな働きをもたらし、働きの新たな段階へと入ったからです。神は新たな働きを始めるとき、人々が神の性質や神が所有するものと神そのものの様々な側面を見て取れるよう、まったく新しい姿で、まったく新しい角度から、まったく新しい方法でもって、人類の前に現われます。これが神による新たな働きの目的の一つです。神は以前の物事にしがみつくことも、踏みならされた道を歩くこともありません。また働きを行なって言葉を語るときも、人間が想像するように何かを禁じたりはしません。神においてはすべてが自由であり、解放されており、禁止も束縛もありません。神が人類にもたらすのは自由と解放なのです。神は生きている神であり、本当に実在する神です。操り人形でも粘土の像でもなく、人間が崇め奉る偶像とはまったく違います。神は生きており、活気に満ち、神の言葉と働きが人類にもたらすのは、ひとえにいのちと光、自由と解放です。なぜなら、神には真理といのちと道があり、働きの中でいかなる物事にも制約されないからです。人々が何を言おうと、あるいは神の新たな働きをどのように見たり評価したりしようと、神は何のためらいもなく働きを行ないます。自身の働きや言葉に対する人間の観念と批判、さらには自身の働きに対する強い反感や反抗を、神が懸念することはないのです。人間の理知、あるいは人間の想像、知識、倫理によって、神の働きの評価や定義をしたり、それを貶め、混乱させ、妨害することができる者は、あらゆる被造物の中に一人もいません。神の働きや業の中に禁じられていることは一切なく、人や出来事や物事に制約されることも、敵対する勢力に妨害されることもありません。神の新たな働きに関する限り、神は永遠に勝利する王であり、いかなる敵対勢力も、あるいは人類による異端や詭弁も、すべて神の足台の下で踏みにじられます。神の働きのうち、どの新たな段階が現在なされているかを問わず、神の大いなる働きが完了するまで、それは必ずや人類の間で発展、拡大し、全宇宙において妨害されることなく実行されます。これが神の全能と知恵、そして権威と力なのです。そのため、主イエスは安息日に公然と外出して働くことができました。なぜなら主の心には、人間に由来する規則も、知識も、教義もなかったからです。イエスにあったのは神の新たな働きと道でした。その働きは、人間を自由にして解放し、人間が光の中に存在して生きられるようにする道でした。一方、偶像や偽の神を崇拝する人は、サタンに束縛され、ありとあらゆる規則や禁忌に制約されながら毎日を生きています。今日はあることが禁止され、明日はまた別の何かが禁止されるという具合に、彼らの生活に自由はないのです。彼らは足かせをはめられた囚人のようなもので、語るべき喜びをもたずに生きています。「禁止」とは何を表わしていますか。それは、制約、束縛、そして邪悪を表わしています。偶像を崇拝するや否や、その人は偽の神、悪霊を崇めていることになります。そうした行ないがなさ

れると、そこには禁止が伴います。あれやこれを食べてはいけない、今日は外出できない、明日は料理できない、その翌日は転居してはならない、婚礼や葬儀、さらにお産まで、特定の日を選ぶ必要がある、といった具合です。それは何と呼ばれますか。それを「禁止」というのです。それは人間の束縛、サタンと悪霊の足かせであり、人々を操ってその心身を拘束しているのです。これらの禁止事項は神に存在しますか。神の聖さについて語るとき、まずは神に禁止事項がないことを考えなければなりません。神の言葉と働きには原則があっても、禁止事項はありません。なぜなら、神こそが真理であり、道であり、いのちだからです。

次に、「あなたがたに言うておく。宮よりも大いなる者がここにいる。『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か知っていたなら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったであろう。人の子は安息日の主である」（マタイによる福音書 12:6-8）という聖書の一節を検討しましょう。ここでいう「宮」、つまり神殿は何を指していますか。簡単に言えば、それは高くて壮麗な建物を指しており、律法の時代においては、司祭が神を礼拝する場所でした。主イエスが「宮よりも大いなる者がここにいる」と言った際、「大いなる者」とは誰を指していましたか。それは明らかに、肉体をもつ主イエスを指しています。なぜなら、神殿よりも偉大なものは主イエスだけだったからです。この言葉は人々に何を伝えましたか。神殿から出るよう、人々に伝えたのです。神はすでに神殿から出ており、もはやそこでは何も行なっていなかったのです。人々は神殿の外で神の足跡を求め、新たな働きにおける神の歩みに従うべきなのです。主イエスがそう言ったとき、その言葉の背景には一つの前提がありました。つまり、人々は律法のもと、神殿を神自身よりも偉大なものとして見なすようになっていたことです。要するに、人々が神でなく神殿を礼拝したので、主イエスは人々に対して偶像を崇拝せず、至高の存在である神を崇拝するよう警告したのです。そうしたわけで、主は「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない」と述べました。主イエスから見て、ほとんどの人は律法のもと、もはやヤーウェを礼拝しておらず、単に生贄を捧げる動作を繰り返していたのは明白であり、主イエスはその動作を偶像崇拝だと判断しました。これらの偶像崇拝者は、神殿を神よりも偉大で崇高なものと考えていました。彼らの心には神殿しかなく、神は存在しなかったのです。神殿を失うとすみかを失うことになりました。神殿がなければ礼拝する場所がなく、生贄を捧げることができませんでした。ここでいう「すみか」とは、神殿に留まって自分の活動を行なうべく、ヤーウェ神を礼拝するふりをしていた場所のことです。また「生贄を捧げる」と

は、神殿で奉仕を行なうという口実のもと、自分個人の恥ずべき取引を行なうということでした。当時の人々が、神殿は神より偉大だと見なしていたのはこれが理由でした。こうした人たちは神殿を隠れ蓑として、生贄を人々と神を欺く口実として利用していたので、主イエスは人々への警告としてこれらの言葉を語ったのです。現在に当てはめても、これらの言葉は依然として正当であり、適切なものです。現在の人々は律法の時代の人々と異なる神の働きを経験していますが、人の本性は同じです。現在の働きに関しても、人々は「神殿は神よりも偉大である」という言葉に代表されるような物事を依然として行なっています。たとえば、自分の本分を尽くすことを仕事と考えており、神を証しすること、赤い大きな竜と戦うことを、人権保護、民主主義、そして自由のための政治活動だと考えています。また人々は、自分の技能を活用する本分を職務としていますが、神を畏れて悪を避けることを、遵守すべき単なる宗教的教義として扱っています。このような振る舞いは、「神殿は神よりも偉大である」というものと本質的に同じではないですか。二千年前、人々は形ある神殿で自分の個人的な仕事を行なっていたのに対し、現在において、人々は無形の神殿で自分の個人的な仕事を行なっているというだけの違いです。規則を重視する人は、規則を神よりも偉大なものと見なし、地位を好む人は、地位を神よりも偉大なものと見なし、職務を好む人は、職務を神よりも偉大なものとして見なしています。そうした人たちが表わしていることのために、わたしは次のように言うのです。「人々は、口では神を最も偉大だと褒め讃えるが、その人たちの目には、あらゆる物事が神よりも偉大なものとして映る」。その理由は、神に付き従う道において、自分自身の才能を示したり、あるいは自分自身の仕事や職務を行なったりする機会を見出すとすぐ、人は神から離れ、自分が愛する職務に没頭してしまうからです。神が彼らに託した物事や、神の旨は、はるか昔に捨て去られたのです。これらの人たちの状態と、二千年前に神殿の中で自分の仕事を行なっていた人たちの状態と、いったい何が違うのでしょうか。

次にこの一節の最後の一文、つまり「人の子は安息日の主である」という文章を検討しましょう。この文章に現実的な側面はありますか。現実的な側面が見て取れますか。神が述べるすべてのことは神の心から生じるものです。では、そのように述べたのはなぜですか。あなたがたはどのように理解していますか。あなたがたはいま、この文章の意味を理解しているかもしれませんが、それが語られた当時、理解している人は多くありませんでした。と言うのも、人類は律法の時代から抜け出したばかりだったからです。彼らにとって、安息日を離れるのはとても難しいことであり、本当の安息日とは何か

を理解していなかったのは言うまでもありません。

この「人の子は安息日の主である」という一文は、神に関する一切のものが非物質的であることを人々に伝えています。それでは、神はあなたが必要とする物質的な物事をすべて授けることができますが、物質的な必要性がすべて満たされた後、こうした物事による満足感で真理の追求を置き換えることはできますか。それは明らかに不可能です。ここまで交わってきた神の性質、および神が所有するものと神そのものは、どちらも真理です。その価値を物質的な物事で計るのは不可能であり、またそれがいかに貴重でも、その価値を金銭で数量化することもできません。なぜなら、それは物質的なものではなく、各人の心が必要とするものを満たすものだからです。すべての人々にとって、こうした無形の真理の価値は、あなたが大事にしているいかなる物体の価値よりも高いはずです。違いますか。この問題についてはじっくり考える必要があります。わたしが述べてきたことの要点は、神が所有するものと神そのもの、および神に関する一切のことは、あらゆる人にとって最も重要なことであり、どのような物体もその代わりにはなり得ないということです。一つ例を挙げましょう。空腹のときには食べ物が必要です。この食べ物は比較的良いものである場合と、そうでない場合があります。しかし腹一杯食べさえすれば、空腹の不快感は解消されてなくなります。落ち着いていられるようになり、身体も安らぎます。人間の空腹は食べ物で解消されますが、神に付き従っているのに、自分は何ら神を理解していないと感じるなら、その心の空虚さはどうすれば解消することができますか。食べ物で解消することができますか。また、神に付き従っているのに、神の旨を理解していなければ、そうした心の飢えは何を使えば満たせますか。神による救いを経験する過程において、性質の変化を追い求めながら、神の旨を理解することも、真理とは何かを知ることもなく、神の性質を知らなければ、あなたは極めて不安に感じませんか。心の飢えと渴きを強く感じませんか。そうした感覚によって心の安息が妨げられはしませんか。では、こうした心の飢えを解消するにはどうすればよいですか。それを解消する方法はありますか。ショッピングに出かける人もいれば、悩みを打ち明けられる友達を探す人、ひたすら眠る人、神の言葉をさらに読む人、より懸命に働き、本分を尽くすためにいっそう努力する人もいます。こうしたことで実際の問題を解決できますか。このような行動については、あなたがたの誰もが完全に理解しています。無力感を覚えたとき、あるいは真理や神の旨を実際に知ることができるよう、神の啓示を得たいと渴望するとき、あなたに一番必要なものは何ですか。大量の食事でも二、三の優しい言葉でもなく、ましてや束の間の慰めでも肉の満足でもありません。あ

なたに必要なのは、自分がすべきことは何か、それをどうすべきか、そして真理とは何かを、神から明瞭に直接伝えてもらうことです。ほんの少しでもそれを理解したら、良い食事を食べたときよりも心の中で満足感を覚えませんか。心が満たされたとき、心と自分の存在全体が真の安らぎを得られるのではないですか。この例と分析から、わたしが「人の子は安息日の主である」という文章をあなたがたと分かち合いたい理由が理解できたでしょうか。この文章が意味するのは、神から生じるもの、神が所有するものと神そのもの、および神に関する一切のことは、他の何より偉大だということです。そこには、あなたがそれまで最も貴重だと信じていた物事や人も含まれます。つまり、神の口から言葉を得られなかったり、神の旨を理解できなかったりすれば、その人は安らぎを得られないのです。あなたがたは今後の経験のなかで、わたしが今日あなたがたにこの聖句を考察してほしいと望んだ理由を理解するでしょう。これは非常に重要なことです。神が行なうことはどれも真理であり、いのちです。この真理は人間のいのちに不可欠なものであり、それなしで生きることは決してできません。また、それは最も偉大なものだとも言えるでしょう。真理は見ることも触れることもできませんが、あなたに対する重要性を無視することはできません。それはあなたの心に安らぎをもたらす唯一のものなのです。

真理に関するあなたがたの理解は、自分自身の状態と一体となっていますか。実生活では、どの真理が、自分が遭遇した人や出来事や物事に関連しているかをまず考えなければなりません。こうした真理の中に神の旨を見出し、自分が遭遇した物事と神の旨に関連づけることができるからです。自分が遭遇した物事について、真理のどの側面がそれと関連しているかを知ることなく、神の旨を直接求めにいったところで、そのような盲目的なやり方で成果を得ることはできません。真理を求めて神の旨を理解したければ、まずは自分にどのようなことが起きているのか、それが真理のどの側面と関連しているかを検討してから、神の言葉の中に、自分が経験したことに関連する特定の真理を探し出す必要があります。次に、その真理の中から自分にふさわしい実践の道を探します。そのようにすることで、神の旨に関する間接的な理解が得られます。真理を探して実践することは、機械的に教義を適用することでも、公式に従うことでもありません。真理は公式のようなものでも、法則でもないのです。真理は死んだものではなく、いのちそのものであり、生きているものであり、被造物が人生において従うべき法則、生きる上でもたなければならない法則です。それは、あなたが経験によって可能な限り深く理解する必要があるものなのです。自分の経験がどの段階に達していようと、あなたは神

の言葉や真理から離れることができず、神の性質についてあなたが理解していること、神が所有するものと神そのものについてあなたが知っていることはどれも、神の言葉の中に表わされています。それらには真理と切り離せないつながりがあるのです。神の性質、そして神が所有するものと神そのものは、それ自体真理です。真理は神の性質と、神が所有するものと神そのものを表わす真正なものです。それによって神が所有するものと神そのものは具体的なものになり、またはっきり述べられることになります。神が何を好むか、何を好まないか、あなたに何をしてほしいのか、あなたが何をすることを許すのか、どのような人を嫌ってどのような人に喜ぶかを、それはあなたにはっきり伝えるのです。神が表わす真理の背景から、人々は神の喜び、怒り、悲しみ、幸福、そして神の本質を理解することができます。これが神の性質の現われです。神の言葉から神が所有するものと神そのものを知り、神の性質を理解することを除いて最も重要なのは、実践的な経験を通じてこの理解に達する必要性です。神を知るために自分を実生活から切り離せば、その人は神を知ることができません。神の言葉から何らかの理解を得られる人がいたとしても、その理解は教義や言葉に限られ、本当の神自身と差異が生じることになります。

いま話し合っていることはどれも、聖書に記録された物語の範囲内にあるものです。これらの物語と、そこで起きたことの分析によって、人間は神が表わしてきた神の性質と、神が所有するものと神そのものを理解することができ、それによって神のあらゆる側面をより広く、深く、包括的に、そして徹底的に知ることができます。では、神のあらゆる側面を知るには、これらの物語を通して知るのが唯一の方法ですか。違います。それが唯一の方法ではありません。神の性質をより十分に知るには、神の国の時代における神の言葉と働きのほうが役立つからです。しかし、神の性質を知り、神が所有するものと神そのものを理解するには、人々が親しんでいる聖書の中の事例や物語を通して行なうほうがより簡単だと思います。裁きと刑罰の言葉、および神が現在表わしている真理を一語一語取り上げ、それによってあなたに神を理解させようとすれば、あなたはあまりに退屈で面倒だと感じ、中には神の言葉は型通りだと感じる人さえいるでしょう。しかし、こうした聖書の物語を例として取り上げ、神の性質を知る手助けとすれば、人々は退屈さを感じません。これらの例を説明する過程で、気分や感情、思いや考えといった、神の心にそのときあった事柄の詳細は人間の言葉で語られており、その目標はひとえに、神が所有するものと神そのものが型通りのものでないことを人々が理解し、感じ取るようにすることだと言えるでしょう。それは伝説でもなければ、人々が見たり

触ったりすることができないものでもありません。それは実在するもの、人々が感じ取って理解できるものなのです。これが最終的な目標です。この時代に生きる人々は祝福されていると言えるでしょう。聖書の物語を用いることで、神の以前の働きについて認識を広げ、神が行なった働きを通して神の性質を知ることができるからです。そして神が表わしてきた性質を通じて、人類に対する神の旨を理解し、神の聖さと人間への配慮の具体的な現われを理解することができます。このようにして、人々は神の性質をより詳細に、より深く知ることができるのです。これはあなたがたの誰もがいま感じられることだと思います。

主イエスが恵みの時代に完成させた働きの中に、神が所有するものと神そのものに関するもう一つの側面を見ることができます。それは神の肉によって表わされた側面であり、人々は神の人間性のおかげでそれを見て理解することができました。人々は人の子の中に、受肉した神がどのように人間性を生きたかを見、肉を通じて表わされた神の神性を理解したのです。これら二種類の表われにより、人間は極めて現実的な神を理解し、神に関する別の考えを形作ることができました。しかし、創世から律法の時代の終焉に至るまで、つまり恵みの時代の以前、人々が見聞きして経験した神の側面は、神の神性、無形の領域における神の言動、そして見たり触れたりすることのできない、神の真の実体から表わされた事柄だけでした。これらのことにより、神が圧倒的に偉大であり、自分は神に近づくことができないと、人々は往々にして感じました。神が人間に対して通常与える印象は、神は知覚できることもあればできないこともあるというものです。そして人々は、神の思いや考えはすべて神秘的であり、捉えどころがないので、それらに到達する術はなく、まして理解や認識を試みることもすら不可能だと感じました。人間にとっては神に関するすべての事柄が、自分たちには見ることも触れることもできないほどはるか遠くに離れていたのです。神は天高くにいて、まったく存在しないかのようでした。そのため人間にとって、神の心や思い、あるいは神のどんな考えも理解不可能であり、到達することさえ不可能でした。神は律法の時代にある程度の具体的な働きを行ない、また具体的な言葉を発したり、具体的な性質を表わしたりすることで、人間が神に関する真の理解と認識を得られるようにしましたが、結局のところ、神が所有するものと神そのものに関するそれらの表われは無形の領域から生じたものであり、人々が理解したこと、知ったことは依然として、神が所有するものと神そのものがもつ神性の側面でした。人間は、神が所有するものと神そのものにまつわるこうした表われから具体的な考えを得ることができず、彼らの神に対する印象は依然、「出現と消滅を繰り返

返す、近づきがたい霊体」という範疇に留まっていた。神は物質界に属する特定の物体や姿を用いて人々の前に出現することはなかったので、人々は人間の言葉で神を定義することができないままでした。そして心と頭の中では、たとえば神の身長、体重、外見、好み、そして性格などといったことについて、自分たちの言葉を使って神の基準を定め、神を有形化したい、人間化したいといつも望んでいました。事実、神は心の中で、人々がこのように考えていたことを知っていました。神は人々が必要としているものを極めて明確に理解しており、当然ながら、自分が何をすべきかも知っていたので、恵みの時代には違う方法で働きを行ないました。この新しい方法は神性と人間性の両方によるものでした。主イエスが働きを行なっている間、人々は、神には数多くの人間的な表われがあることを知りました。たとえば、神は踊ったり、婚礼に列席したり、人間と親交したり、人間と会話したり、様々な事柄を話し合ったりすることができました。さらに、主イエスはその神性を示す働きを数多く成し遂げましたが、当然ながらそうした働きはどれも神の性質を表わし、示すものでした。その間、神の神性が普通の肉において具体化され、人々が見たり触れたりできるようになったとき、彼らは神が出現と消滅を繰り返す存在、自分たちが近づけない存在だとは感じなくなりました。それとは逆に、人の子の一挙手一投足、言葉、そして働きを通じ、神の旨を把握したり、神の神性を理解したりすることを試みられるようになったのです。受肉した人の子は、その人間性を通じて神の神性を表わし、神の旨を人類に伝えました。また、神の旨と性質を表わすことで、霊的領域に暮らし、見ることも触れることもできない神を人間に表わしたのです。人々が見たのは、肉と骨から成る、姿形のある神自身でした。そうして受肉した人の子は、神の身分、地位、姿、性質、そして神が所有するものと神そのものを、具体的かつ人間的なものにしました。人の子の外見は、神の姿に関してある程度の制約があったものの、人の子の本質、および人の子が所有するものと人の子そのものは、神自身の身分と地位を完全に示すことができました。ただ表わし方に違いがあっただけなのです。人間性と神性の両方において、人の子が神自身の身分と地位を示していたことは否定できません。しかし、この時期、神は肉を通じて働きを行ない、肉の見地から語り、人の子の身分と地位をもって人間の前に姿を見せたのであり、人々はそれによって、人類の間における神の真の言葉と働きに遭遇し、それらを経験する機会が得られました。それはまた、謙虚さの中にある神の神性と偉大さについて、人間が見識を得ることを可能にするとともに、神の真正さと実在に関する予備的な認識と定義を得ることも可能にしました。主イエスが完成させた働き、イエスが働きを行なう方法、および言葉を述べる観点は、霊的領域にある神の真の実体とは異なるものでしたが、イエスにまつわる一

切のことは、人類がかつて見たことのない神自身を真に示しており、その事実は決して否定できません。つまり、神がどのような形で現われるか、どの観点から言葉を述べるか、どのような姿で人類と向き合うかにかかわらず、神は他ならぬ神自身を示すのです。神は誰か一人を示すことも、墮落した人類の誰かを示すこともできません。神は神自身であり、それを否定することはできないのです。

次に、主イエスが恵みの時代に述べた喩えについて検討します。

3. 迷える羊の喩え

マタイによる福音書18:12-14 あなたがたはどう思うか。ある人に百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい、迷わないでいる九十九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう。そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。

この一節は喩えですが、人々にどのような印象を与えますか。この喩えでは、人間の言語による修辭的な表現が用いられており、人間の知識の範囲内にあります。もし律法の時代に神がこのようにことを述べていたとしたら、そのような言葉は神のありようにそぐわないと人々は感じていたでしょう。しかし、恵みの時代に人の子がこの言葉を述べたとき、それは慰めとなり、人に暖かさと親密さを感じさせました。受肉して人の姿で現われた神は、自身の心の声を表わすべく、自身の人間性に由来する極めて適切な比喩を用いました。その声は神自身の声と、その時代に神が行なおうとした働きを示すものでした。それはまた、恵みの時代における神の人間に対する姿勢も示していました。神の人間に対する姿勢という観点から、神は一人ひとりを羊に喩えたのです。一匹の羊がいなくなれば、神はあらゆる手を尽くしてその羊を探すでしょう。このことは、当時、受肉した神が人類の間で行なった働きの原則を示しています。神はこの喩えを用いることで、その働きに対する自身の決意と態度を説明したのです。これが、神が受肉したことの特長でした。つまり、神は人間の知識を利用し、人間の言語を用いることで、人々に語りかけて自身の旨を表わすことができたのです。人々が人間の言語で理解しようと悪戦苦闘していた、神の深遠な神性の言語を、神は人に対して説明した、ないしは「翻訳」したのです。このことは、人々が神の旨を理解し、神が行なおうとしていたことを知る一助になりました。また、神は人間の立場から、人間の言語を使って人々と話をし、人々が理解できる方法で意思疎通を行なうことができました。その上、人々が神の

優しさと親密さを感じ、神の心を理解できるよう、神は人間の言語と知識を用いて言葉を述べ、働きを行なうことさえできたのです。このことから何がわかりますか。神の言葉や業には何かを禁じるものが存在しないということでしょうか。人の見るところ、神が人間の知識、言語、あるいは話し方を用いることで、自身の話したいことや行ないたい働きについて語ったり、自分の旨を表わしたりすることはとうてい不可能です。しかし、それは誤った考えです。人々が神の現実性と誠実さを感じ、この時期における神の人間に対する態度を理解できるよう、神はこうした喩えを用いました。この喩えにより、長年にわたり律法の下で生活してきた人間は夢から覚め、さらにこの喩えは、恵みの時代に生きた何世代にもわたる人々に励ましを与えました。人はこの喩えの一節を読むことにより、人間を救う神の誠実さや、神の心における人間の重みと重要性を知るのです。

次に、この一節の最終文「そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない」を検討しましょう。これは主イエス自身の言葉ですか、それとも天なる父の言葉ですか。表面的には、話しているのは主イエスであるように思われますが、イエスの旨は神自身の旨を示しています。そこで主は「そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない」と述べたのです。当時の人々は天なる父だけを神と認め、自分が目の当たりにしているこの人物は神から遣わされたに過ぎず、ゆえに天なる父を示すことはできないと信じていました。それゆえ、人間に対する神の旨を人々が実感し、その言葉の真正さと正確さを感じ取れるよう、主イエスは喩えの最後にこの一文を加える必要があったのです。この文章は単純なものですが、それは思いやりと愛をもって語られたのであり、主イエスの謙遜と慎ましやかさを示すものでした。受肉したか、あるいは霊的領域で働きを行なったかを問わず、神は人間の心を最もよく知っており、人々が必要とするものを最もよく理解し、人間が不安に感じること、人間を困惑させることは何かを知っていました。そのため、神はこの一文を付け加えたのです。この文章は人間に潜む問題を浮き彫りにしています。人々は人の子が述べることに懐疑的だったという問題です。つまり、主イエスは話をしているとき、「そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない」と付け加える必要があったのです。この前提があって初めて、イエスの言葉は実をつけることができ、その正確さを人々に信じさせるとともに、信憑性を増すことができました。このことは、神が普通の人の子となったとき、神と人間の間に極めて不自然な関係があったこと、人

の子を巡る状況が極めて情けないものだったことを示しています。また当時、人間の中で主イエスの地位がどれほど低かったかも示しています。イエスがこの言葉を述べたとき、それは実際のところ、「安心しなさい。この言葉はわたし自身の心にあるものを示しているのではなく、あなたがたの心にいる神の旨である」と人々に伝える言葉でした。人間にとって、これは皮肉なことではないですか。受肉して働きを行なう神には、神の実体にはない多くの利点がある一方で、神は人間の疑念と拒絶だけでなく、その愚鈍さに耐えなければなりませんでした。人の子の働きが辿った過程は、人間からの拒絶を経験する過程、および人間と自分自身の争いを経験する過程でもあったと言えるでしょう。それにもまして、この過程は、神が所有するものと神そのもの、そして神自身の本質により、人間の信頼を絶えず勝ち取り、人間を征服しようとする働きの過程でもありました。受肉した神が地上でサタンを相手に戦っていたというよりも、神は普通の人間になり、神に従う者たちとの戦いを始め、そしてその戦いの中で、人の子が、自身の謙虚さ、人の子が所有するものと人の子そのもの、そして自身の愛と知恵により、その働きを完成させたということなのです。神は自ら望む人々を獲得し、自身に相応しい身分と地位を勝ち取りし、神の玉座に「戻った」のです。

次に、以下の二つの聖句について検討しましょう。

4. 七の七十倍赦すこと

マタイによる福音書 18:21-22 そのとき、ペテロがイエスのもとにきて言った、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか」。イエスは彼に言われた、「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい」。

5. 主の愛

マタイによる福音書 22:37-39 イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』」。

これら二つの聖句のうち、一方では赦しについて、他方では愛について述べられています。この二つの主題はまさに、主イエスが恵みの時代に行なおうと望んでいた働きを浮き彫りにするものです。

神は受肉した際、働きの一段階、つまりこの時代に表わしたいと望んでいた性質と具

体的な働きの項目を携えてきました。この時期に人の子が行なった業はどれも、神がこの時代に行なうことを望んでいた業にまつわるものでした。それ以上でも以下でもなかったのです。人の子が述べた言葉と行なった業はどれも、この時代に関連するものでした。それを人間の言語、人間のやり方で表わしたかどうか、あるいは神性の言語で表わしたかどうかを問わず、またどの方法で、あるいはどの観点からそうしたのかを問わず、人の子の目的は、自分が何をしたいのか、自分の旨は何か、そして人々に対する自分の要求が何かを、人間が理解するのを助けることでした。様々な方法と観点をを用いることで、自身の旨と、人間を救う自身の働きを、人間が理解するように助けることもありました。そうしたわけで、主イエスは恵みの時代、人間に伝えようと望んでいた事柄を、ほとんどの場合人間の言語で表わしたのです。さらに、主イエスが普通の案内役としての観点から、人々と会話し、人々が必要としていた物事を施し、人々の要求に応じて彼らを助けたことがわかります。このような働き方は、恵みの時代に先立つ律法の時代には見られないものでした。主イエスは人間とより親密になり、かつ彼らに対して哀れみ深くなり、また形式と方法の両方において実践的な結果をさらに達成できることができました。「七の七十倍」人を赦すという比喻は、この点を実に明らかにしています。この比喻の数値によって実現される目的は、主イエスがそう述べた際の意図を人々に理解させることです。主の意図は、人は一回や二回ではなく、七回でもなく、七の七十倍まで他人を赦すべきである、ということでした。「七の七十倍」という言葉の中には、どのような考えが込められていますか。それは人々に対し、赦しを自分自身の責任、学ぶべき事柄、そして守るべき「道」とさせることです。これは単なる比喻に過ぎませんが、重要な点を浮き彫りにする役目を果たしました。人間がイエスの真意を深く理解し、正しい実践の道を見出し、実践における原則と基準を見出すにあたり、その手助けをしたのです。人々はこの比喻のおかげで明確に理解し、正しい考えを与えられました。つまり、人は赦しを学ぶべきであり、何度でも無条件で赦し、なおかつ寛容な姿勢と他人への理解をもって赦すべきだということです。主イエスがこう述べたとき、その心中はどのようなものでしたか。イエスは本気で七の七十倍と考えていたのですか。違います。神が人を赦す回数というものはありますか。ここで触れた「回数」に強い関心を抱き、その数字の根拠と意味を知りたいと強く願う人が大勢います。このような人たちは、主イエスがこの数字を口にした理由を理解しますが、それはこの数字に深い意味があると考えているからです。しかし実際には、神が人間の話し方をする中で出た数字に過ぎません。いかなる含意や意味であっても、それは主イエスの人間に対する要求に即したものでなければなりません。神がいまだ受肉していなかったとき

、人々は神が言うことのほとんどを理解していませんでした。神の言葉が完全な神性から発せられていたためです。神の言葉の観点と背景は、人間が見ることも触れることもできないものでした。それは、人には見えない霊の領域から発せられていたのです。肉において生きる人間にとって、霊の領域に立ち入ることは不可能でした。しかし神は受肉したあと、人間性の観点から人に対して語り、霊の領域から出てそれを超えました。神は自身の神性、旨、および姿勢を、人間が想像できる物事や、生活の中で見たり遭遇したりする物事を通じ、人間が受け入れられる方法を用い、人間が理解できる言葉で、また人間が把握できる知識で表わしました。そうすることで、人間が神を知って理解し、人間の能力の範囲内で、そして人間に可能な程度まで、神の意図と神が求める基準を理解できるようにしたのです。これが、神の人間性における働きの方法と原則でした。神が肉において行なった働きの方法と原則は、もっぱら人間性によって実現されましたが、それはまさに、神性において直接働いたのでは得られない成果を獲得したのです。神の人間性における働きはさらに具体的であり、真正であり、的を絞ったものであって、その方法は格段に柔軟であり、形式においても律法の時代になされた働きを超えるものでした。

次に、主を愛し、隣人を自分のように愛することについて話しましょう。これは神性において直接表わされたことですか。明らかに違います。これはひとえに、人の子が人間性において述べたことなのです。「隣人を自分のように愛せよ。自分のいのちを大切にするように他人を愛せよ」などと言うのは人間だけであり、このような言い方をするのは人間だけです。神はこのような話し方をしたことがありません。少なくとも、神性における神はこの種の言葉をもっていない。なぜなら、神は人間への愛を律する上で「隣人を自分のように愛せよ」などという信条をもつ必要がなく、人間に対する神の愛は、神が所有するものと神そのものの自然な現われだからです。神が「わたしは自分を愛するように人間を愛する」などと言っているのをいつ聞いたことがありますか。聞いたことなどないはず。なぜなら、愛は神の本質の中、神が所有するものと神そのものの中にあるからです。人間に対する神の愛と姿勢、そして神による人間の扱いは、神の性質を自然に表わし、かつ明らかにするものなのです。神は隣人を自身と同じように愛するために、そうしたことを意図的に特定の方法で行なったり、故意に特定の方法や倫理的な規範に従ったりする必要はありません。神にはこの種の本質がすでに備わっているからです。このことから何がわかりますか。神が人間性において働きを行なうとき、神の方法、言葉、真理の多くが人間的な方法で表わされるということです。しかし

同時に、神の性質、神が所有するものと神そのもの、そして神の旨も、人々が知って理解できるように表わされました。人々が知って理解したのはまさに神の本質であり、神が所有するものと神そのものなのであって、それらは神自身に固有の身分と地位を示しています。つまり、受肉した人の子は神自身に固有の性質と本質を、最大限度まで、かつ可能な限り正確に表わしたのです。人の子の人間性は、人間と天なる神との意思疎通や相互交流の障害および障壁にならなかったのみならず、実際には人間が創造主とつながる唯一の経路、架け橋でした。さて、あなたがたは現時点で、主イエスが恵みの時代に行なった働きの性質や方法と、現段階の働きとの間に多くの似ている点があると感じませんか。また現段階の働きでも、人間の言語が数多く使われて神の性質を表わすとともに、人間の日常生活における言語や方法、そして人間の知識が数多く用いられることで、神自身の旨が表わされています。いったん神が受肉すると、人間性の観点から話しているか神性の観点から話しているかを問わず、神の言語と表現方法の多くは、人間の言語と方法を媒介として生まれます。つまり、神が受肉したときは、あなたが神の全能と知恵を理解し、神にまつわる真の側面を残らず知る最高の機会なのです。受肉して成長している間、神は人間の知識、常識、言語、および人間性の表現方法の一部を理解し、学習し、把握しました。受肉した神は、自ら創った人間から生まれたこれらの物事を自分のものにしていました。それらは、受肉した神が自らの性質や神性を表わす道具となり、神が人間の中で、人間の観点から、人間の言語で働きを行なう際、その働きをより適切で、真正で、正確なものにするのを可能にしました。それによって神の働きは人々にとってより手の届きやすいもの、より理解が簡単なものになり、かくして神が望んだ結果を達成させたのです。神がこのように肉において働くほうが、より実践的ではありませんか。それが神の知恵ではありませんか。神が肉となり、その肉体によって自ら望む働きを実行できるようになったとき、神は自身の性質と働きを現実的に表わし、また人の子としての職分を正式に始めることができました。このことは、神と人間との間にもはや「世代の溝」が存在しないこと、神はもうすぐ使いによる意思疎通を行なわなくなること、そして神自身が肉において、表わそうと望む言葉と働きをすべて表わすことを意味していました。またこのことは、神が救う人々は神の近くにいること、神の経営の働きが新たな領域に入ったこと、そしてあらゆる人間が新時代を迎えようとしていることを意味するものでもありました。

聖書を読んだことのある人は誰でも、主イエスが生まれたときに多くの出来事があったことを知っています。これらのうち最も大きいものは、悪魔の王に追われたことです

。その出来事はあまりに苛酷で、その街に住む二歳以下の幼児が残らず虐殺されたほどです。神は人間の中で受肉することで、大きな危険を冒したのは明らかです。さらに、人間を救うという自らの経営を遂行すべく、神が大きな代価を払ったことも明白です。また、人の間で肉においてなされる働きに対し、神が大きな希望を抱いていたことも明らかです。神の肉体が人の間で働きを行なえたとき、神はどう感じましたか。人々は多少なりともそれを理解できなければなりません。違いますか。少なくとも、神は新たな働きを人の間で実行できたので幸せでした。主イエスが洗礼を受け、自身の職分を尽くすべく正式に働きを始めたとき、神の心は喜びで一杯でした。長年にわたり準備をして待ち続けた末、ようやく普通の人間の身体をまとい、血と肉を備え、人々が見て触ることのできる人の姿で新たな働きを始められたからです。神はついに、人間の身分で面と向かって、心と心で人々と話せるようになったのです。神はついに、人間の方法と言語を媒介として、人類と直接向かい合えたのです。神は人間に施し、彼らを啓き、人間の言語で助けられるようになりました。人間と同じ食卓で食事を取り、人間と同じ空間で生活できるようになりました。そして人間や物事を見るとともに、人間と同じ方法で、さらには人間の目を通して、あらゆるものを見ることができるようになりました。神にとって、これは肉における働きの最初の勝利でした。また、これは大いなる働きの成就だとも言えるでしょう。もちろん、それは神が最も喜んだことでした。このとき以来、人類の間における働きについて、神は初めて一種の慰めを感じました。これらの出来事はどれも実践的であり、自然であり、また神が感じた慰めは真実そのものでした。人間にとって、神の働きの新たな段階が成就したとき、そして神が満足したときというのは、いずれも人間が神に、そして救いに近づけることです。また神にとっては、自身の新たな働きの始まりであり、経営計画の前進であり、そしてそれ以上に、自身の旨が完全な成就に近づくときでもあります。人間にとって、そうした機会が訪れるのは幸運なことであり、とてもよいことです。神の救いを待つすべての人にとって、これは重大かつ喜ばしい知らせです。神が働きの新たな段階を実行し、新たな始まりを迎え、この新たな始まりと働きが人の間で出発を迎えて採り入れられたとき、働きのこの段階の結果はすでに決定し、成就しており、そして神はその最終的な効果と成果をすでに見ています。またこのとき、神はそれらの効果に満足し、そしてもちろん、神の心は幸福です。神は自ら探している人々をその目ですで見定めており、神の働きを成功に導き、神に満足をもたらすこの人々の集団をすでに得ているので、安心しています。こうして不安を脇にのけて幸せを感じているのです。言い換えると、神の肉体が人の間で新たな働きを始められ、すべき働きを妨げられることなく開始し、すべてが成し遂げられたと感

じるとき、神にとってその結末はもう視界に入っているのです。そのため、神は満足し、幸福な心でいます。神の幸福はどのように表わされますか。その答えがあなたがたに想像できますか。神は泣くでしょうか。泣くことができるでしょうか。神は拍手できるでしょうか。踊れるでしょうか。歌えるでしょうか。歌えるなら、どのような歌を歌うでしょうか。もちろん、神は美しく感動的な歌、自身の心の喜びと幸福を表わす歌を歌うことができるでしょう。神は人間のため、自分自身のため、そして万物のためにその歌を歌うことができるのです。神の幸福はあらゆる方法で表わされますが、それはどれも普通のことです。なぜなら、神には喜びと悲しみがあり、神の様々な感情は多様な方法で表わすことができるからです。これは神の権利であり、これ以上に普通で適切なことはありません。これについて考え違いをしてはいけません。また、神に対して「緊箍呪」[a]をかけることで、神はあれこれしてはならないとか、こんな風に振る舞ってはいけないなどと言って、神がもつ幸福や感情を抑えようとしてははいけません。人々の心の中では、神は幸福になることができず、涙を流してすすり泣くこともできず、いかなる感情も表わすことができません。過去二回の交わりで話し合ったことから、あなたがたはもう神のことをそのように見ておらず、神がいくばくかの自由と解放をもてるようにすると信じています。それは非常によいことです。今後、神が悲しんでいると聞いて神の悲しみを実感でき、神が幸せであると聞いて神の幸福を実感できれば、あなたがたは少なくとも、神を幸せにするのは何か、神を悲しませるのは何かをはっきり知ることができるようになります。神が悲しんでいるので自分も悲しむことができ、神が幸せなので自分も幸せを感じられるなら、神はあなたの心を完全に得たことになり、あなたと神との間にもはや障壁はありません。人間の想像や観念、知識によって神を制約しようとすることもなくなります。そのとき、神はあなたの心の中に生き、鮮明な存在となります。神はあなたのいのちの神となり、あなたにまつわるすべての主となるでしょう。あなたがたはこうしたことを熱望していますか。それを成し遂げる自信がありますか。

次に、以下の聖句について検討しましょう。

6. 山上での説教

八福の教え（マタイによる福音書 5:3-12）

塩と光（マタイによる福音書 5:13-16）

律法（マタイによる福音書 5:17-20）

怒り（マタイによる福音書 5:21-26）

姦淫（マタイによる福音書 5:27-30）

夫婦の離縁（マタイによる福音書 5:31-32）

誓い（マタイによる福音書 5:33-37）

目には目を（マタイによる福音書 5:38-42）

敵を愛す（マタイによる福音書 5:43-48）

施しに関する指示（マタイによる福音書 6:1-4）

祈り（マタイによる福音書 6:5-8）

7. 主イエスの喩え

種まきの喩え（マタイによる福音書 13:1-9）

毒麦の喩え（マタイによる福音書 13:24-30）

からし種の喩え（マタイによる福音書 13:31-32）

パン種（マタイによる福音書 13:33）

毒麦の喩えの説明（マタイによる福音書 13:36-43）

宝の喩え（マタイによる福音書 13:44）

真珠の喩え（マタイによる福音書 13:45-46）

網の喩え（マタイによる福音書 13:47-50）

8. 戒め

マタイによる福音書 22:37-39 イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』」。

まずは「山上での説教」の各部分について検討しましょう。これらの各部分は何に触れていますか。それらの内容はすべて、律法の時代の規律と比べて格段に向上し、より具体的になり、人間生活に近いものになったと確信をもって言うことができます。現代の言葉で言うと、これらは人々の実際の行動により関連しているのです。

以下の具体的な内容を見ていきましょう。八福の教えをどう理解すべきか。律法につ

いて知るべきことは何か。怒りはどのように定義すべきか。姦淫する者をどのように取り扱うべきか。離縁についてどう述べられているか、それに関してどのような規則があるか。離縁できる者、できない者はそれぞれ誰か。誓い、目には目を、敵を愛する、施しに関する指示についてはどうか、などです。これらはどれも、人間の神に対する信仰の実践、神に付き従うことにまつわる各側面に関連しています。これらの実践の中には、現時点で人々に求められているものより浅いものの、現在に適用できるものもあります。それらは人々が神への信仰において直面する、極めて基本的な真理なのです。主イエスが働きを始めたときから、神はすでに人間のいのちの性質に対する働きを開始していましたが、神の働きにおけるそれらの側面は律法に基づくものでした。そうした事柄についての規則や言葉は、真理と関連していましたか。もちろん、大いに関連していました。以前の規律や原則、恵みの時代の説教はどれも、神の性質と、神が所有するものと神そのもの、そして真理と関連していたのです。神が何を表わそうと、またどのような表わし方や言語を用いようと、神が表わすことの基礎、起源、そして出発点はいずれも、神の性質の原理、および神が所有するものと神そのものの原理の中にあります。これは絶対に真実です。したがって現在では、神の述べたことが多少浅薄に思えますが、依然としてそれが真理でないとは言えません。なぜなら、これらの事柄は、恵みの時代の人々が神の旨を満たし、いのちの性質を変化させる上で不可欠だったからです。それら説教の中に、真理と一致しないものが一つでもあると言えますか。いいえ、言えません。それらはどれも真理です。すべて人間に対する神の要求だったからです。それらはどれも神から与えられた原理と範囲であり、人が自分の行ないをどう律するべきかを示すとともに、神の性質を表わすものなのです。しかし、当時における人間のいのちの成長度合いに基づけば、彼らが受け入れて理解できるのはそれらの物事だけでした。人間の罪がいまだ解消されていなかったのも、主イエスが発することのできる言葉はそれしもなく、この範囲内に含まれる簡単な教えを用いることで、どう振る舞うべきか、何をすべきか、いかなる原理と範囲の中で物事を行なうべきか、どのように神を信じて神の要求を満たすべきかを、当時の人々に伝えたのです。それらはすべて、当時の人間の霊的背丈に基づいて決められました。律法の下で暮らしていた人々にとって、それらの教えは受け入れがたいものでした。ゆえに主イエスが教えたことは、その範囲内に留まらざるを得なかったのです。

次に、「主イエスの喩え」に含まれる様々な内容を検討しましょう。

一つ目は種まきの喩えです。これは極めて興味深い喩えです。種まきは人々の生活で

一般的に行なわれていることだからです。二つ目は毒麦の喩えです。穀物を栽培したことのある人、そしてもちろんすべての大人は、「毒麦」とは何かを知っているでしょう。三つ目はからし種の喩えです。からしとは何か、みなさん知っていますね。知らなければ聖書をご覧ください。四つ目はパン種の喩えです。いまではたいていの人が、パン種が発酵に用いられること、そして人間が日常生活で用いるものであることを知っています。六つ目の宝物の喩え、七つ目の真珠の喩え、八つ目の網の喩えなど、それ以降の喩えはすべて人間の実生活から採り上げられたものであり、それに由来しています。これらの喩えはどのような光景を描いていますか。それは、神が普通の人間となり、人間と共に生活し、人間の日常言語を使って人間と意思疎通し、人間に必要な物事を施す光景を描いています。神は受肉して人間の中で長期にわたって生活したとき、人間の様々な生活様式を経験し、目の当たりにしましたが、その後そうした経験は、神が自身の神性の言語を人間の言語へと変換する教材となりました。もちろん、神が生活の中で見聞きしたことはまた、人の子による人間としての経験を豊かにしました。そして、何らかの真理や神の旨を人々に理解させたいと望んだとき、人の子は上記と似た喩えを用いることで、神の旨や人間に対する要求について人々に伝えることができたのです。これらの喩えはどれも人々の生活と関連しており、人間生活に関係ない喩えは一切ありませんでした。人間とともに生活していた際、主イエスは畑を耕す農民を目の当たりにし、毒麦とは何か、パン種とは何かを知りました。また人間が宝物を好むことを知っていたので、宝物と真珠の喩えを使いました。さらに生活する中で、漁師が網を投げるのも頻繁に目にしました。主イエスは人間生活に関係するこれらの活動を見、またそうした生活を経験しました。普通の人間とまったく同じく、一日に三回食事するなど、人間の日常を経験したのです。イエスは一般的な人間の生活を自ら経験し、他者の生活を観察しました。こうした事柄を目の当たりにし、自ら経験したときにイエスが考えたのは、どうすればよい生活を送れるか、どうすれば一層自由に快適に暮らせるか、ということではありませんでした。むしろ本物の人間生活を経験したことから、主イエスは人々の生活における困難を見ました。サタンの支配下で暮らす人々、サタンの墮落による罪の生活を送っている人々の困難、悲惨さ、そして悲しさを目の当たりにしたのです。人間生活を自ら経験している間、イエスは墮落の中で生きる人々がいかに無力であるかも経験し、また罪の中で生き、サタンや悪による拷問の中ですべての方向性を失った人々の哀れな状況を見て経験しました。こうしたこと目の当たりにした主は、神性をもってそれらを見ましたか、それとも人間性をもって見ましたか。主イエスの人間性は実在し、極めて鮮明なものでした。イエスはそのすべてを経験して見ることはできたのです。しかし

ちろん、イエスは自らの本質、すなわち自身の神性においてもそれらを見ました。つまり、キリスト自身、人間であった主イエスがそれを見たのであり、見た事柄のすべてが、神が今回肉において行なう働きの重要性和必要性を自身に強く感じさせたのです。イエス自身、肉において引き受けるべき責任が極めて重いこと、自分が直面するであろう苦痛が極めて苛酷なものになることを知っていましたが、罪の中にある無力な人々を見て、彼らの悲惨な生活や、律法の支配下ではかない奮闘を見て、いっそう深い悲しみを感じるとともに、人間を罪から救おうとする切望がますます強くなりました。直面するであろう困難がどのようなものであれ、また受けるであろう痛みがどのようなものであれ、罪の中で生きる人間を贖おうという決意がいっそう強くなったのです。この過程において、主イエスは自身が行なう必要のある働きと、自身に託された物事をより明確に理解した、と言えるでしょう。またイエスは、自分が行なう働きを完遂させたいとますます強く望むようになりました。人間のあらゆる罪を負い、人間を贖い、そうすることで人間がこれ以上罪の中で生きることなく、それと同時に神が罪のいけにえによって人の罪を赦し、人間を救う働きをさらに進められるようにするのです。主イエスは心の中で、人間のために進んで自分自身を捧げ、自分を生贄にしようとした、と言えるでしょう。また、イエスは進んで罪の生贄となり、十字架にかけられ、この働きを完成させることを心から望んでいました。人間生活の悲惨な状態を見たイエスは、できるだけ早く、一分一秒たりとも遅れることなく自身の使命を果たしたいとますます強く願いました。イエスはこのような差し迫った思いをしながら、自身の受ける痛みがどれほど酷いものかを考慮することも、耐えるべき恥辱がどれほど大きいかと不安を抱くこともありませんでした。イエスが心に抱いていたのは一つの確信だけです。つまり、自分が我が身を捧げ、罪の生贄として十字架にかけられる限り、神の旨は実行され、神は新しい働きを始められるという確信、人間のいのちと、罪の中で生存している状態が完全に変わるという確信です。イエスの確信と決意は人を救うことに関係しており、イエスにはただ一つの目標、すなわち神が働きの次なる段階を首尾よく始められるよう、神の旨を行なうという目標しかありませんでした。これが、当時の主イエスの心中にあったものなのです。

受肉した神は肉において暮らしつつ、普通の人間性を有していました。普通の人間の感情と理性を有していたのです。幸せとは何か、痛みとは何かを知っており、このような生活を送る人類を見たとき、人々に何らかの教えを授けたり、何かを施したり、あるいは何かを教えたりするだけでは、彼らを罪から導き出すのに十分ではないと痛感しま

した。また人々を戒めに従わせるだけでは、彼らを罪から贖うこともできないでしょう。人類の罪を背負い、罪深い肉体に似た姿になって初めて、それと引き換えに人類の自由と、神による人類の赦しを勝ち取ることができるのです。そのため、罪に暮らす人々の生活を経験して目の当たりにした後、主イエスの心中には強い願望が生じました。罪の中で悪戦苦闘する生活から、人間を自由にさせるという願望です。イエスはその願望により、一刻も早く十字架にかけられて人類の罪を背負わなければならないと、ますます強く感じるようになりました。これが、人々と暮らし、罪における彼らの生活の惨めさを見聞きし、感じた後の、当時の主イエスの考えなのです。受肉した神は人類に対してこのような旨をもち、このような性質を表わして明らかにすることができたのですが、それは普通の人間にでき得たことでしょうか。この種の環境で暮らす普通の人は何を見るのでしょうか。何を考えるのでしょうか。普通の人間がこのようなことに直面したら、一段高い視点から問題を見つめるのでしょうか。絶対にそうはしません。受肉した神は外見こそ人間とまさに同じで、人間の知識を学んで人間の言語を話し、ときには人間自身の方法や話し方を通じて自身の考えを表わしますが、人間や物事の本質に対する見方は、墮落した人々のそれらに対する見方と絶対に同じではありません。受肉した神の視点と立っている高さは、墮落した人間には決して到達できないものなのです。と言うのも、神は真理であり、神がまとう肉もまた神の本質を有しており、神の考え、および神の人間性によって表わされるものも真理だからです。墮落した人々にとって、神が肉において表わすことは真理の施し、いのちの施しなのです。これらの施しは一人の人間だけでなく、全人類に対してなされます。墮落した人間の心の中には、自分と結びついている少数の人しかいません。彼らはその一握りの人たちだけを気遣い、配慮します。災害が迫るとき、彼らはまず自分の子どもたち、親族、あるいは両親のことを考えます。より思いやりのある人であれば、親戚や親友にいくらか思いを巡らせるでしょうが、そのような人の思いが、それ以上に広がることはあるのでしょうか。いいえ、決してありません。結局のところ人間は人間であり、人間としての高さや視点からしかすべてのものを見られないからです。しかし、受肉した神は墮落した人間とまったく違います。受肉した神の肉体がいかに平凡でも、いかに普通でも、いかに卑しくても、さらには人々がどのような軽蔑の眼で受肉した神を見下そうと、人類に対するその考えと姿勢は、人間には備えることも真似ることもできないものです。受肉した神は常に神性の視点から、そして創造主としての立場の高さから、人類を観察します。神の本質と心構えを通じて絶えず人類を見るのです。神が一般的な人間と同じ低さから、あるいは墮落した人間の視点から人類を見ることはあり得ません。人が人類を見ると、彼らは人間のビジョンを

もって見るのであり、人間の知識、規則、理論といったものを基準として使います。それは、人々が自分の目で見られるものの範囲内、墮落した人々が到達可能な範囲内にあります。神は人類を見るとき、神性のビジョンをもって見るのであり、神の本質と、神が所有するものと神そのものを基準として使います。人には見るできないものもその範囲に含まれており、そこが、受肉した神と墮落した人がまったく違う点なのです。この違いは、人間と神のそれぞれ異なる本質によって決まります。両者の身分と地位、そして物事を見る視点と高さは、これら異なる本質によって決まるのです。あなたがたは、神が主イエスにおいて表わしたこと、明らかにしたことが見えますか。主イエスの言動は自身の職分と神の経営の働きに関係しており、それはどれも神の本質を表わし、明らかにするものだと言えるでしょう。神は確かに人間の姿をとりましたが、その神性の本質と現われを否定することはできません。その人間の姿は、本当に人間性を表わしていたでしょうか。本質的に言えば、神がとった人間の姿は、墮落した人間がとる人の姿とまったく違っていました。主イエスは受肉した神でした。イエスが本当に普通の墮落した人々の一人だったなら、罪の中にある人類の生活を神性の観点から見ることはできたでしょうか。絶対にできません。これが人の子と普通の人との違いです。墮落した人々はみな罪の中で暮らし、罪を見ても特別な感情を抱きません。彼らはどれも同じであり、泥の中で暮らしながら、それを不快とも不潔とも感じない豚同然です。それとは逆に、よく食べてぐっすり眠っています。誰かが豚舎をきれいにしたら、その豚は気分が落ち着かず、きれいなままではいません。やがて泥の中で再び転がり回り、気分がすっかり落ち着きます。豚は不潔な生物だからです。人間は豚を汚いものと見なしますが、豚舎をきれいにしたところで豚の気分はよくなりません。自宅で豚を飼う人がいないのはそれが理由です。人間が豚をどのように見るかは、豚自身がどのように感じているかと常に異なっています。人間と豚は同類ではないからです。そして受肉した人の子は墮落した人類と同類ではないので、受肉した神だけが神の視点、神の高さに立てるのであって、そこから人類と万物を見ているのです。

神は肉となって人の間で暮らすとき、どのような苦しみを経験しますか。それは何の苦しみですか。本当に理解している人はいますか。中には、神は大いに苦しむとか、受肉した神は神自身であるにもかかわらず、人はその本質を理解せず、いつも人間のように扱い、神を悲しませ、不当に扱われていると感じさせる、などと言う人がいます。つまり、これらのせいで、神の苦しみは本当に大きいと言うのです。また、神には汚れも罪もなかったが、人間と同じように苦しみ、人間とともに迫害や中傷や侮蔑に苛まれ、

また自身に付き従う人の誤解や反抗にも苦しんだ、と言う人もいます。それゆえ、神の苦難はまことに計り知れないと言うのです。あなたがたはいま、神を真に理解していないと考えられます。実のところ、あなたがたの言う苦しみは、神にとって真の苦しみには数えられません。それよりも大きな苦しみがあるからです。では、神自身にとって真の苦しみとは何ですか。受肉した神にとって真の苦しみとは何ですか。神にとって、人間が自身を理解しないことは苦しみのうちに入らず、人々が神について何らかの誤解を抱いたり、神と考えなかったりすることも、苦しみのうちには入りません。しかし、人々は往々にして、神はひどく不当に扱われたに違いないとか、神は受肉している間、自身の実体を人類に見せることも、自身の偉大さを人が見られるようにすることもできないとか、神は平凡な肉体に身をやつしており、それは神にとって大きな責め苦に違いない、などと感じています。人々は、神の苦しみについて自分たちが理解できること、見て取れることを心に留め、ありとあらゆる形で神に同情し、神の苦しみを少しばかり賞賛することさえたびたびあります。実際には、神の苦しみに関する人々の認識と、神が本当に感じていることとの間には、違いと隔たりがあります。ここで本当のことをお話しします。神の霊であるか、受肉した神であるかを問わず、神にとって、以上の苦しみは真の苦しみではありません。では、神は実のところ何に苦しんでいますか。ここでは受肉した神の視点からのみ、神の苦しみについて話し合しましょう。

受肉して平均的な普通の人間になり、人間の中で人々と共に暮らすとき、神は人々の生存の方法、法則、哲学を見て感じることはできないのでしょうか。こうした生存の方法や法則は、神にとってどう感じられますか。心の中で嫌悪感を抱くのでしょうか。嫌悪感を抱くのはなぜでしょうか。人類の生存方法、生存法則とは何ですか。それらはどのような原則に基づいていますか。何を土台としていますか。人類の生き方に関係する方法や法則などはどれも、サタンの理論、知識、哲学を基に創られたものです。この種の法則にしたがって生きる人に人間性はなく、真理ありません。みな真理に逆らい、神に敵対しているのです。神の本質に目を向けると、それはサタンの理論、知識、哲学と正反対であることがわかります。神の本質は義と真理と聖さに満ち、その他の肯定的な物事の現実で溢れています。この本質をもちつつ、このような人の間で暮らす神は何を感じていますか。心の中で何を感じているのですか。苦痛に満ち溢れているのではないですか。神の心は苦痛の中にあります。誰一人理解することも経験することもできない苦痛です。神が直面し、見聞きし、経験することはどれも、全人類の墮落と邪悪、そして真理に対する反逆と反抗だからです。人間に由来する一切の物事が、神の苦しみの根

源なのです。つまり、神の本質は墮落した人間とは異なるため、人間の墮落が神の最も大きい苦しみの源になるのです。神は受肉するとき、自身と共通の言語をもつ人を見つけることができますか。人類の中に、そうした人を見つけることはできません。神と意思疎通することができたり、対話できたりする人を見つけることはできないのです。それについて、神はどのような感情を抱いているのでしょうか。人々が語り合い、愛し、追い求め、切望する物事はどれも、罪と悪しき傾向に関係しています。神がこうした物事に直面すれば、それは神の心にとって刃のようなものではありませんか。こうした物事に直面して、神は心の中で喜べるのでしょうか。慰めを見つけることができるのでしょうか。神と共に暮らしている人たちは、反逆と邪悪に満ちています。そうであれば、神の心が苦しまずにいられるのでしょうか。実際のところ、この痛みはどれほど大きいものですか。誰がそれを気にかけますか。誰が心を留めますか。誰がそれを理解できますか。人々には神の心を理解する術がありません。神の痛みは人々がとりわけ理解できないことであり、人間の冷たさと愚鈍により、神の痛みはいっそう深まるのです。

「きつねには穴があり、鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらする所がない」という聖書の聖句があるために、しばしばキリストの苦境に同情する人がいます。人々はこれを聞いて心に留め、それは神が堪え忍んだ最大の痛み、キリストが堪え忍んだ最大の痛みだと信じます。さて、事実という観点から見た場合、本当にそうでしょうか。違います。神はそうした困難を痛みとは考えません。肉の困難のせいで、神が不当な扱いに声をあげたことはなく、人間に何らかの報いや代価を求めたこともありません。しかし、人類に関する一切のことや、墮落した人間の墮落した生活と邪悪を目にしたり、人類がサタンの手中にあって囚われの身となり、そこから逃れられないのを目の当たりにしたり、罪の中で暮らす人々が真理とは何か知らないのを見たとき、神はそれらの罪を大目に見ることができません。人間に対する神の嫌悪は日ごとに増していきませんが、神はそれに耐えなければなりません。これが神の大いなる痛みです。神は自身に付き従う者に対し、心の声や感情を完全に表わすことさえできず、また神に付き従う人の中に、神の痛みを真に理解できる人はいません。誰一人として、毎日、毎年、そして幾度となくこの痛みを耐え忍んでいる神の心を理解し、慰めようとすらないのです。このことから何がわかりますか。神は自身が授けた物事について、その見返りを人間に求めることはありませんが、自身の本質のゆえに、人間の邪悪、墮落、罪を大目に見ることが絶対にできず、極度の嫌悪と憎悪を覚え、そのため心身ともに果てしない痛みを耐え忍んでいるのです。あなたがたにそれがわかりますか。あなたがたの中に

これがわかる人はいないでしょう。誰一人、神を真に理解することができないからです。あなたがたは時間をかけて、徐々にそれを経験しなければなりません。

次に、以下の聖句を検討しましょう。

9. イエスが奇跡を行なう

1) イエスが五千人に食事を与える

ヨハネによる福音書 6:8-13 弟子のひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った、「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」。イエスは「人々をすわらせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった。そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。人々がじゅうぶんに食べたのち、イエスは弟子たちに言われた、「少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」。そこで彼らが集めると、五つの大麦のパンを食べて残ったパンくずは、十二のかごにいっぱいになった。

2) ラザロの復活が神を讃える

ヨハネによる福音書 11:43-44 こう言いながら、大声で「ラザロよ、出てきなさい」と呼ばわれた。すると、死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた。イエスは人々に言われた、「彼をほどいてやって、帰らせなさい」。

主イエスが行なった奇跡のうち、この二つしか取り上げなかったのは、これからお話しすることを説明するにはそれで十分だからです。これら二つの奇跡はまさに驚くべきものであり、主イエスが恵みの時代に行なった奇跡を余すところなく示しています。

まずは最初の聖句「イエスが五千人に食事を与える」を検討します。

「五つのパンと二匹の魚」とは、どのような考えですか。通常、五つのパンと二匹の魚で何名の人を満腹させられますか。一般的な人の食欲を基に計算すると、二人しか満腹させられません。これが、五つのパンと二匹の魚に関する最も基本的な考えです。しかしこの聖句では、五つのパンと二匹の魚で何人が満腹になりましたか。聖書には、「その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった」と記されています。五つのパンと二匹の魚に対して、五千人というのは大きな数ですか。人数が極めて多いことは何を示していますか。人間の視点から見て、五つのパンと二匹の魚を五

千人で分け合うことは不可能です。なぜなら人数と食べ物の差が大きすぎるからです。各人がほんの一口しか食べなかったとしても、五千人に十分な量とは言えません。しかしここで、主イエスが奇跡を行ないました。五千人全員が腹一杯食べられるようにしただけでなく、残った食べ物さえあったのです。聖書には「人々がじゅうぶんに食べたのち、イエスは弟子たちに言われた、『少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい』。そこで彼らが集めると、五つの大麦のパンを食べて残ったパンくずは、十二のかごにいっぱいになった」とあります。この奇跡によって、人々は主イエスの身分と地位を目の当たりにし、神に不可能なことはないと知ることができました。このようにして、神の全能が真実であることを理解したのです。五つのパンと二匹の魚は五千人を満腹させるのに十分でしたが、食べ物がまったくなかったとしたら、神は五千人に食事を与えられたでしょうか。当然、与えられたでしょう。これは奇跡であり、理解不能で、驚異的で、謎であると人々が感じたのも無理はありませんが、神にとって、こうしたことを行なうのは何でもないことでした。神にとって普通のことであるなら、ここで採り上げて解釈すべきなのはなぜですか。この奇跡の裏には主イエスの旨があり、それは人類がかつて認識したことのないものだからです。

まず、この五千人がどのような人だったかを理解しましょう。彼らは主イエスに付き従う人でしたか。聖書によると、この人たちは主イエスに付き従う人ではありませんでした。彼らは主イエスが誰かを知っていましたか。間違いなく知りません。少なくとも、目の前に立つ人物がキリストであることを知らず、一部の人が名前を知っているか、イエスの行なったことを聞いたり知っていたりしていただけでしょう。主イエスに対する彼らの好奇心は、イエスにまつわる話を聞いて生じたものに過ぎませんが、だからと言ってその人たちがイエスに付き従っていたとは言えず、ましてイエスのことを理解していたとは絶対に言えません。主イエスがこの五千人を見たとき、彼らは空腹で腹一杯食べることにしか考えられませんでした。そこでこの状況のもと、主イエスは彼らの欲求を叶えたのです。この人たちの欲求を叶えた際、イエスの心中には何がありましたか。空腹を満たしたいだけの人々に対し、主はどのような態度をとりましたか。このとき、主イエスの考えと態度は、神の性質と本質に関連するものでした。空腹を抱えて腹一杯食べることにしか考えていない五千の人々、自分への好奇心と希望に満ちているこれらの人々を前に、主イエスはこの奇跡を使って彼らに恵みを授けることにしか考えていませんでした。しかし、この人たちが自分に付き従う人になるという希望を抱くことはありませんでした。彼らは楽しく腹一杯になるまで食事をしたいとしか考えていないことを知

っていたからであり、そのためそこにあったもの、つまり五つのパンと二匹の魚を最大限に活用して五千人に食事を与えたのです。彼らは素晴らしいものを見て自分の目を樂しませ、奇跡を見たいと望んでいたのですが、イエスによって目を開かれ、受肉した神が実現可能なことをその目で見たのです。主イエスは形あるものを使って彼らの好奇心を満足させたものの、この五千人がよい食事しか望んでいないことを心の中で知っていたので、説教することも、何かを言うことも一切ありませんでした。彼らにありのままの奇跡を見せただけなのです。心から自分に付き従う弟子たちと同じように、この人たちを扱うことは絶対にできませんでした。神の心の中では一切の被造物が自身の支配下にあり、また自身の視界にあるすべての被造物に対し、必要に応じて神の恵みを享受させます。これらの人々はパンと魚を食べた後でさえも、イエスが誰かを知らず、イエスのことを理解しておらず、イエスについて具体的な印象をもつことも、感謝の念を抱くこともありませんでしたが、それは神が取り上げるような問題ではありませんでした。神は彼らに対し、神の恵みを享受するという素晴らしい機会を与えたのです。中には、神は自らの業について原則に従っている、非信者を見守ることも保護することもなく、特に神の恵みを享受させることはなかった、と言う人がいます。それは事実ですか。神の目においては、自身が創った生物である限り、神はそれらの被造物を支配し、配慮します。神は様々な方法でそれら被造物に接し、計画し、支配します。これが万物に対する神の考えと態度です。

パンと魚を食べた五千人には、主イエスに付き従う意図はありませんでしたが、イエスが彼らに厳しい要求をすることはありませんでした。彼らが腹一杯食べたあと、主イエスがどうしたかをあなたがたは知っていますか。彼らに何か説教しましたか。その後、どこに行きましたか。聖書には、主イエスが彼らに何か言ったとは記されておらず、奇跡を行ってから静かに立ち去ったとしか書かれていません。では、イエスはこれらの人々に何か要求しましたか。憎しみを抱いていましたか。いいえ、要求も憎しみもありませんでした。イエスは単に、自分に付き従うことができないこれらの人々をそれ以上気遣うことを望まず、またそのとき、イエスの心は苦痛の中にありました。イエスは人間の墮落を目の当たりにし、人間による拒絶を感じたので、このような人々を見て共にあったとき、人間の愚鈍さと無知に悲しみ、心を痛め、これらの人々から一刻も早く離れることだけを望んだのです。主は心の中で、彼らに何かを要求することはなく、彼らを気遣うことを望まず、それ以上に、労力を費やすことを望みませんでした。また、これらの人々が自身に付き従えないことも知っていましたが、それにもかかわらず、彼

らに対するイエスの態度は極めて明確でした。イエスはただ、彼らに優しく接し、恵みを受けることを望んだのですが、これがまさに、自身の支配下にあるすべての被造物に対する神の姿勢だったのです。つまり、すべての被造物に優しく接し、それらに施し、糧を与えるという姿勢です。主イエスが受肉した神だったというまさにその理由のため、イエスはごく自然に神の本質を示し、これらの人々に優しく接しました。憐れみと寛容の心をもって彼らに接し、そのような心持ちで彼らに優しさを見せたのです。この人たちが主イエスをどのように考えていたかにかかわらず、また結果がどうなるかにかかわらず、イエスは万物の創造主としての立場に基づいて、あらゆる被造物に接しました。イエスが示した一切のものは例外なく神の性質であり、神が所有するものと神そのものでした。主イエスは静かにそれを行ない、静かに立ち去りましたが、これは神の性質のどのような側面ですか。神の慈愛だと言えますか。神の無私だと言えますか。普通の人間にできることですか。絶対に違います。本質的に言って、主イエスが五つのパンと二匹の魚で食事を授けた五千の人々は、どのような人たちでしたか。イエスと相容れられる人だと言えるでしょうか。全員神に敵対していたと言えるでしょうか。この人たちは絶対に主と相容れられず、その本質は間違いなく神に敵対するものだと言えます。しかし、神はこの人たちにどう接しましたか。ある手段を使うことで、神に対する人々の敵対心を取り除いたのです。その手段とは「優しさ」です。つまり、主イエスはこの人たちを罪深き者で見なしましたが、神の目からみれば依然として自身の被造物です。ゆえにイエスはこれらの罪深き者たちに優しく接したのです。これは神の寛容であり、この寛容は神自身の身分と本質によって決まります。したがって、神が創った人間にこのようなことはできず、それが可能なのは神だけなのです。

人類に対する神の考えと姿勢を真に理解し、一つひとつの被造物に対する神の気持ちと気遣いを真に認識できるとき、あなたがたは創造主によって創られた一人ひとりの人間に対する神の献身と愛情を理解することができます。そのとき、あなたは二つの言葉を使って神の愛を表わすでしょう。その二つの言葉とは何ですか。「無私」と言う人もいれば、「博愛」と言う人もいます。これら二つのうち、「博愛」は神の愛を表わす言葉として最も不適切なものです。この言葉は、寛大な人、あるいは心の広い人を表わすために人々が使う言葉です。わたしはこの言葉に強い嫌悪を感じます。と言うのも、原則に一切意を払わず、手当たり次第に、そして無差別に慈善を行なうことを指すからです。博愛というのは、愚かで混乱している人々に共通する、過度に感情的な性向です。この言葉を使って神の愛を表わす場合、そこには必然的に冒涇の意味があります。神の

愛を表わすより適切な二つの単語を、ここでお教えします。それは何ですか。最初の言葉は「計り知れない」です。この言葉は示唆に富むものではありませんか。二番目は「広大」です。わたしが神の愛を表わす際に用いるこれらの単語の裏には、真の意義があります。文字通りの意味にとると、「計り知れない」という言葉は物事の数量や能力を指しますが、その大きさにかかわらず、それは人間が見たり触れたりできる物事です。なぜなら、それは実在し、抽象的なものではなく、比較的正確に、かつ現実的な形で、人にその概念を与えられるからです。それを二次元の視点で見るか、三次元の視点で見るかにかかわらず、その存在を想像する必要はありません。なぜなら、それは現実存在するものだからです。「計り知れない」という言葉で神の愛を説明すると、神の愛を計量しているように感じられますが、それと同時に計量不可能であるという感覚も与えます。神の愛は計量可能だとわたしが言うのは、それが空虚なものでも、伝説の存在でもないからです。むしろ、神の支配下にある万物が共有しているものであり、様々な程度で、様々な視点から、すべての被造物が享受しているものです。人々は神の愛を見ることも触れることもできませんが、人生の中で少しずつ明らかにされるにつれ、その愛は万物に糧といのちをもたらし、その人たちは自分が絶えず享受している神の愛を数え上げ、その証しをするようになります。神の愛は計量不可能だとわたしが言うのは、神が万物に施し、糧を与えるという奥義は、万物に対する神の思い、特に人間に対する神の思いと同じく、人間には推し測るのが難しいものだからです。つまり、創造主が人類に注いできた血と涙を知る人は誰もいないのです。自らの手で創った人間に対する創造主の愛の深さや重さを、理解したり認識したりすることができる人はいません。神の愛を計り知れないと説明したのは、その広さと、それが存在するという真実を、人々が理解できるようにするためです。それはまた、「創造主」という言葉の実際の意味を人々がより深く理解し、「被造物」という呼び名がもつ真の意味をさらに深く理解できるようにするためです。「広大」という単語は通常何を表わしますか。一般的には海や宇宙などを表わすために用いられます。「広大な宇宙」「広大な海」といった具合です。宇宙の広さや静かなる深さは人間の理解を超えるものであり、人間の想像力を捉えたとともに、大きな驚異を感じさせます。その神秘と深遠さは、目に見えても手の届くものではありません。海のことを考えれば、その広さが頭に浮かびます。それは果てしないもののように見え、神秘と包容力を感じさせます。そのため、わたしは「広大」という単語を用いることで、神の愛を説明するとともに、人々がその尊さを感じ、神の愛の深遠なる美しさと、無限の広がりをもつ神の愛の力を実感できるようにしたのです。この単語を用いたのは、人々が神の愛の聖さ、そして神の愛を通じて示される神の威厳と不可

侵性を感じられるようにするためです。あなたがたはいま、神の愛を説明するにあたって「広大」がふさわしい単語だと思いますか。神の愛は、「計り知れない」と「広大」という二つの単語に集約することができますか。間違いなくできます。人間の言語の中で、この二語だけがいくぶん適切であり、神の愛の説明に比較的近いものです。そうは思いませんか。神の愛を説明するよう求められたとしたら、あなたがたはこの二語を使うでしょうか。きっと使わないでしょう。なぜなら、神の愛に関するあなたがたの理解は二次元の視点に限られており、高さをもつ三次元の空間に達していないからです。したがって、あなたがたに神の愛を説明するよう求めたとしたら、あなたがたは言葉を見つけられず、言葉を失いさえするでしょう。本日話し合ってきたこの二語は、あなたがたにとって難解だったり、まったく同意できないものだったりするかもしれません。そのことはひとえに、神の愛に対するあなたがたの認識と理解が表面的で、狭い範囲に限られていることを示しています。先ほど、神は無私だと言いましたが、この「無私」という単語を思い出してください。神の愛は無私としか説明できない、ということでしょうか。それではあまりに範囲が狭くはありませんか。あなたがたはこの問題をさらに深く考え、そこから何かを得るべきです。

以上が、最初の奇跡から見て取れる神の性質と本質です。この物語は人々が数千年にわたって読み続けてきたものであり、あらすじは簡単で、人々は単純な現象を見ることができます。しかし、わたしたちはこの簡単なあらすじから、より尊い物事、つまり神の性質と、神が所有するものと神そのものを読み取ることができます。神が所有し、神そのものであるそれらの物事は、神自身を表わすとともに、神自身の考えを表現しています。神が自身の考えを表わすとき、それは神の心の声を表わしているのです。神を理解することができ、神を知ってその旨を理解できる人、神の心の声を聞いて積極的に協力し、神の旨を満たせる人がいることを、神は望んでいます。主イエスが行なったことは、神の声なき表現だったのです。

次に、ラザロの復活が神を讃えるという一節を検討しましょう。

この一節を読んで、あなたがたはどのような感想をもちますか。主イエスが行なったこの奇跡の意義は、先ほど検討した奇跡よりもはるかに重大なものです。なぜなら、死人を墓から蘇らせること以上に驚異的な奇跡はないからです。この時代、主イエスが行なったことには極めて大きな意義がありました。神は受肉していたので、人々は神の物理的存在、実際の側面、取るに足りない要素しか見ることができませんでした。神の性格、あるいは神が持っていると思しき特別な能力を、見て理解してい

る人も中にはいましたが、主イエスがどこから来たか、本質的にどのような者か、他に何をできるかについては誰一人知りませんでした。それはどれも人類に知られていなかったのです。そのため、主イエスにまつわるこれらの疑問に答えるべく証拠を見つけ、真相を知ろうと望む人が数多くいました。神は何らかの業を行なうことで、自身の身分を証明することができましたか。神にとってそれは朝飯前、極めて容易なことでした。神はいつでもどこでも何かを行ない、自身の身分と本質を証明することができましたが、神には物事を行なう方法がありました。計画通りに、段階的に行なうのです。神が無闇に何かを行なうことはなく、最適な時期と機会が到来するのを待って、人間に見させる物事、本当に有意義な物事を行なうのです。そのようにして、神は自身の権威と身分を証明しました。では、ラザロの復活は主イエスの身分を証明できたでしょうか。次の聖句の一節を検討しましょう。「こう言いながら、大声で『ラザロよ、出てきなさい』と呼ばわれた。すると、死人は……出てきた」主イエスがこの業を行なったときに言ったのは、「ラザロよ、出てきなさい」というひと言だけでした。するとラザロは墓から出てきましたが、それは主の発したたったひと言で成し遂げられたものです。このとき、主イエスは祭壇を立てることも、それ以外の業を行なうこともありませんでした。そのひと言を述べただけなのです。これは奇跡と呼ぶべきでしょうか。それとも命令と呼ぶべきでしょうか。あるいは何らかの魔術だったのでしょうか。表面上はこれを奇跡と呼ぶことができ、現在の観点から見ても、当然奇跡だと言えるでしょう。しかし、魂を死から呼び戻す類の魔術とは決して考えられず、絶対にいかなる魔法でもありません。この奇跡は創造主の権威を実証する、最も普通かつ些細な証明である、というのが正しいのです。これが神の権威と力です。神には人を死なせたり、その魂を身体から離れさせて冥府へ還らせたり、その他の然るべき場所に戻らせたりする権威があります。人がいつ死ぬか、死後にどこへ向かうかは、いずれも神によって定められます。神はいつでもどこでもその決断を下すことができ、いかなる人間や出来事、物事、空間、および地理的条件の制約を受けません。神は望むことを何でも行なえます。なぜなら、万物とすべての生物は神の支配下にあり、あらゆる物が神の言葉と権威によって増え、存在し、消滅するからです。神は死者を復活させることができますが、これもまた、神がいつでもどこでも行なえることです。これが、創造主のみがもつ権威です。

主イエスがラザロを死から復活させるといった業を行なったのは、人に関する一切のこと、および人の生死は神によって定められること、またたとえ肉になったとしても、神は依然として目に見える物理的世界を支配するとともに、人には見えない霊的世界を

も支配し続けていることについて、人間とサタンに証拠を与えて知らしめるのが目的でした。これは、人に関する一切の事柄がサタンの支配下にあることを、人間とサタンに知らしめるためです。これはまた神の権威の現われ、顕現であり、人類の生死が神の手中にあることを万物に伝える手段でもあるのです。主イエスによるラザロの復活は、創造主が人類を教導く手段の一つでした。これは、神が自身の力と権威を使って人類を指導し、彼らに糧を施す具体的な行動だったのです。また、創造主が万物を支配しているという真理を、言葉を用いることなく、人類が理解できるようにするための手段でもありました。さらに、神による以外に救いは存在しないことを、実際の業を通じて人類に伝える手段でもありました。神が人類を教導くこの無言の手段は永続的なものであり、消えることがなく、決して色あせない衝撃と啓示を人間の心にもたらします。ラザロの復活は神を讃えるものであり、神に付き従うすべての人に大きな衝撃を与えます。それにより、この出来事を深く理解するすべての人に、神だけが人類の生死を支配できるという認識、そしてビジョンが固く定着します。神にはこの種の権威があり、ラザロの復活を通じて人類の生死に対する自身の権威を伝えましたが、これは神の主要な働きではありませんでした。神は決して無意味なことをしません。神が行なうすべてのことには大きな価値があり、どれも宝物庫に眠る比類なき宝石なのです。「人を墓から出させる」ことを、自身の働きの最優先事項、あるいは唯一の目的ないし項目にすることは決してないのです。神は無意味なことを一切行ないません。ラザロの復活は、それだけで神の権威を示し、主イエスの身分を証明するのに十分です。そのため、主イエスはこの種の奇跡を繰り返しませんでした。神は自身の原則にしたがって業を行ないます。人間の言語で言うならば、神は重要な物事にしか関心がないと言えるでしょう。つまり、神は業を行なうとき、自身の働きの目的から外れることがないのです。神はこの段階でどのような働きを行ないたいのか、何を成し遂げたいのかを知っており、自身の計画に厳密にしたがって働きを行ないます。墮落した人間にこうした能力があっても、その人は単に、自分がどれほど優れているかを他人に知らしめ、頭を下げさせ、その人たちを支配して呑み込もうと、自分の能力を誇示する手段を考えるだけでしょう。それはサタンに由来する邪悪であり、墮落と呼ばれます。神にそうした性質はなく、またそうした本質もありません。神が業を行なうのは自己顕示のためではなく、人類により多くの啓示と導きを施すためであって、そのため聖書には、この種の出来事がごくわずかしは見られないのです。そのことは、主イエスの力が限られていたという意味でも、そうしたことを行なえなかったという意味でもありません。それは単に、神が行なおうと思わなかっただけなのです。と言うのも、主イエスがラザロを復活させたことには極めて現実

的な意義があり、また受肉した神による主要な働きは、奇跡を行なうことでも、人間を死から復活させることでもなく、人類を贖う働きだったからです。そうしたわけで、主イエスが成し遂げた働きの大半は、人々に教え、糧を施し、助けるものであり、ラザロを復活させるといった出来事は、主イエスが果たした職分のほんの一部に過ぎませんでした。さらに、「自己顕示」は神の本質に含まれていない、とも言えるでしょう。そのため主イエスは、それ以上の奇跡を示さないことで自ら抑制を働かせていたのではなく、環境に制約されていたのでもありません。そしてもちろん、力が足りなかったからでは決してありません。

主イエスがラザロを死から復活させる際に使った言葉は、「ラザロよ、出てきなさい」というひと言だけでした。それ以外には何も言わなかったのですが、そのひと言は何を示していますか。神は語ることで、死者の復活を含むあらゆることを成し遂げられることを示しています。神は万物と世界を創造したとき、言葉でそれを行ないました。言葉で命じ、その言葉には権威がありました。万物はそうにして創られ、かくして創造が成し遂げられたのです。主イエスが述べたこのひと言は、天地と万物を創造した際に神が述べた言葉と同じであり、神の権威と創造主の力がありました。万物は神の口から発せられた言葉によって形づくられ、しっかり立つことができましたが、それと同じように、ラザロは主イエスの口から発せられた言葉によって墓から歩き出たのです。これは受肉した肉体において示され、実現された神の権威です。この種の権威と能力は創造主に属するものであり、また創造主が形あるものとなった人の子に属するものです。神はラザロを死から蘇らせることで、それを人類に教えて理解させたのです。これで、この主題に関する話は終わりにします。それでは聖書の聖句をさらに読んでいきましょう。

10. パリサイ人によるイエスへの非難

マルコによる福音書 3:21-22 身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。また、エルサレムから下ってきた律法学者たちも、「彼はベルゼブルにとりつかれている」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ」とも言った。

11. イエスによるパリサイ人への叱責

マタイによる福音書 12:31-32 だから、あなたがたに言う。人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされるこ

とはない。また人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない。

マタイによる福音書 23:13-15 偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらないし、はいろうとする人をはいらせもしない。〔偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは、やもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈をする。だから、もっときびしいさばきを受けるに違いない。〕偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたはひとりの改宗者をつくるために、海と陸とを巡り歩く。そして、つくったなら、彼を自分より倍もひどい地獄の子にする。

上の二節の内容はそれぞれ異なっています。まずは「パリサイ人によるイエスへの非難」の一節について検討しましょう。

聖書によると、イエスと、イエスの行なったことに対するパリサイ人の評価は「気が狂ったと思った……『彼はベルゼブルにとりつかれている』……『悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ』」（マルコによる福音書 3:21-22）というものでした。律法学者とパリサイ人による主イエスへの非難は単なる他人の言葉の受け売りでも、根拠のない憶測でもありませんでした。それは主イエスの行動を見聞きしたことから引き出された結論だったのです。その結論はあくまで正義の名のもとに下され、人々から見てしっかりした根拠があるように思われましたが、彼らが主イエスを非難した際の傲慢さは、彼ら自身にも抑えがたいものでした。主イエスに対する燃えるような憎しみの力は、彼ら自身の向こう見ずな野望と悪しきサタンのような顔つき、そして神に抵抗する悪意に満ちた本性を露わにしました。主イエスを非難するにあたって彼らが述べたこれらの言葉は、彼らの向こう見ずな野望、嫉妬、そして神と真理に敵対する悪意に満ちた醜い本性を原動力としていたのです。彼らは主イエスの行動が何によるものかを調べず、イエスの言動の本質を調べることもしませんでした。それどころか、興奮状態の中、意図的な悪意をもって、イエスが行なったことを無闇に攻撃して貶めたのです。そのひどさたるや、イエスの霊、すなわち神の霊である聖霊を故意に貶めるほどでした。律法学者とパリサイ人が「気が狂った」、「ベルゼブル」、「悪霊どものかしら」などと言ったのは、そのような意味だったのです。つまり、神の霊はベルゼブル、悪霊の頭だと言ったのであって、受肉した神の霊、すなわち肉をまとった神の働きに狂気という烙印を押したのです。彼らは聖霊をベルゼブル、悪霊の頭といって冒涇したのみ

ならず、神の働きを断罪し、主イエス・キリストをも断罪して冒涇しました。神に抵抗して冒涇する彼らの本質は、サタンや悪魔が神に抵抗して冒涇する本質とまったく同じです。彼らは墮落した人間を象徴していただけでなく、それ以上にサタンの権化でもありました。彼らは人類の間でサタンにつながる出口であり、サタンの一味にして手下でした。彼らが主イエス・キリストを冒涇、誹謗することの本質は、地位を巡る神との戦い、争い、そして終わることのない神への挑戦でした。神に抵抗する彼らの本質、神に敵対する彼らの姿勢、そして彼らの言葉と考えが、神の霊を直接冒涇してその怒りを招いたのです。そのため、神は彼らの言動をもとに妥当な裁きを下し、彼らの行ないを、聖霊を冒涇した罪だと判断しました。この罪はこの世でもきたるべき世でも赦されるものではありません。聖句に「聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない」、「聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」と記されている通りです。本日は「この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」という神の言葉がもつ真の意味について話し合しましょう。つまり「この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」という言葉を神がどのようにして実現するか、その謎を解き明かしていきます。

これまで話し合ってきたことはどれも、神の性質、および人々や出来事や物事に対する神の姿勢に関するものです。もちろん、先に述べた二節も例外ではありません。これら二つの聖句について、何か気づいたことはありますか。その中に神の怒りを見ると言う人もいれば、人間による背きを許さず、神を冒涇することを行なえば、その人は神の赦しを受けられないという、神の性質の側面を見ると言う人もいます。これら二節の中に、人は神の怒りと、神が人間の背きを許さないことを見たり感じ取ったりしますが、それでも神の姿勢を真に理解しているわけではありません。これら二節は、神を冒涇して怒らせた者に対する、神の本当の姿勢と処遇を暗に示しているのです。神の姿勢と処遇が「聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」という聖句がもつ本当の意味を表わしているのです。人が神を冒涇してその怒りを招いたとき、神は審判を下し、その審判が神の下した結末になります。それについて聖書にこう記されています。「だから、あなたがたに言う。人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない」（マタイによる福音書 12:31）。「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである」（マタイによる福音書 23:13）。しかし、主イエスがこのように述べたあと、律法学者とパリサイ人の結末、そして主は狂気に取り憑かれてい

と言った人たちの結末がどうなったか、聖書に記されていますか。何らかの懲罰を受けたと記されていますか。何も記されていないことは確かです。ここで何も記されていないというのは、そのような記録がないということではなく、人の目に見える結末がなかったということに過ぎません。「記録されなかった」ということによって、ある種の物事を取り扱う際の神の姿勢と原則にまつわる問題が解明されます。神を冒瀆したり、神に抵抗したり、果ては神を中傷さえしたりする人々、つまり、意図的に神を攻撃したり、中傷したり、呪ったりした人々に対し、神は見ないふりをすることも、聞こえないふりをすることもあります。むしろ、そのような人々に対する明確な姿勢があります。神はこうした人々を嫌悪し、心の中で断罪します。そして、神には自身を冒瀆した人に対する明確な姿勢があること、およびそのような人の結末を神がどう定めるかを人々に知らしめるべく、神は彼らの結末を公然と明らかにします。しかし人は、神が彼らを述べたあとも、神がこうした人々をどのように取り扱うかに関する事実をほとんど理解できず、神が彼らに下す結末や審判の裏にある原則を認識できません。つまり人々は、神が彼らを取り扱う際の具体的な姿勢や手段を理解することができないのです。そのことは、神が業を行なう際の原則と関係しています。神は事実を生じさせることで、一部の人の邪悪な行ないを取り扱います。つまり、神は彼らの罪を宣告するのでも、彼らの結末を定めるのでもなく、事実を生じさせることで懲罰と正当な報いを直接彼らに与えているのです。こうした事実が生じるとき、その懲罰を受けるのは人の肉体ですが、そのことは、その懲罰が人間の目に見えるものであることを意味しています。一部の人の邪悪な行動を取り扱うとき、神は言葉によって彼らを呪い、それと同時に神の怒りが彼らに及びますが、彼らが受ける懲罰は人の目には見えないものです。それにもかかわらず、この種の結末は、罰せられたり殺されたりといった目に見えるもの以上に深刻な場合があります。このような人を救わない、このような人にこれ以上慈悲や寛容さを示さず、機会を与えることもしないと神が判断したなら、彼らを見捨てるというのが神の姿勢です。ここで言う「見捨てる」とはどのような意味ですか。その言葉の基本的な意味は、「脇にのけてこれ以上注意を払わない」というものです。しかし、神が何かを「見捨てる」場合、その意味は二通りに説明することができます。一つ目の説明は、その人のいのちと、その人に関する一切のものを、神がサタンに与えて取り扱いを任せ、その人にそれ以上責任を負わず、管理することもないというものです。その人が狂気に取り憑かれていたり、愚かであったりしても、あるいは生きていても死んでいても、または地獄に落とされて懲罰を受けていても、そのどれも神には関係なくなるのです。つまり、そのような被造物は創造主と何ら関係がなくなるという意味です。二つ目の説

明は、神がその人に対し、自らの手で何かを行なうと決めた、というものです。その人の奉仕を利用したり、彼らを引き立て役として用いたりすることもあるでしょう。または、神にはこの種の人を取り扱う特別な方法があり、パウロに対してそうしたように、特別な方法でその人を扱うかもしれません。この種の人を取り扱うと判断した際、神の心の中には以上の原則と姿勢があります。したがって、人々が神に抵抗し、神を中傷、冒涇したとき、あるいは神の怒りを買ったり、我慢の限界を超えさせたりしたとき、その結末は想像を絶するものになります。神が彼らのいのち、彼らにまつわる一切のことを永遠にサタンに委ねるというのが、最も深刻な結末です。このような人は永遠に赦されません。そのことは、この人物がサタンの餌食になり、玩具になり、そして今後は神と無関係になることを意味します。サタンがヨブを試したとき、それがどれほど悲惨なものだったか、あなたがたは想像できますか。サタンはヨブのいのちに危害を加えることを許されませんでした。そのような条件であっても、ヨブは大いに苦しみました。それならば、完全にサタンの手に委ねられた人、完全にサタンの手中にある人、神の慈しみや憐れみを完全に失った人、もはや創造主の支配下にいない人、神を信仰する権利と、神の支配下に属する被造物である権利を奪われた人、そして創造主との関係を完全に絶たれた人に加えられるサタンの猛威は、それにも増して想像するのが難しくはないでしょうか。サタンによるヨブの迫害は、人間がその目で見られるものでしたが、神がある人のいのちをサタンに引き渡したなら、その結末は人の想像を絶するものになります。たとえば、牛やロバとして生まれ変わる人もいれば、不浄な悪霊に取り憑かれる人などもあります。これが、神からサタンに引き渡された人の結末です。表面上、主イエスを嘲笑し、中傷し、断罪し、冒涇した人たちは、そのような結末に苛まれていないように見えます。しかし、神にはあらゆる物事に対する取り組み方がある、というのが真実です。各種の人を取り扱うにあたってその結末がどうなるか、神は明確な言語でそれを人々に話すことはないかもしれません。直接話すのではなく、むしろそのまま行動することもあります。神がそれについて何も語らないということは、何の結末もないという意味ではなく、実際のところ、そのような場合にはより深刻な結末になる可能性もあります。表面上、神が一部の人々に対し、自身の姿勢を明確に語っていないかのように思われることがあります。しかし実際には、そのような人に注意を払うことをずっと以前から望んでいなかったのです。彼らに二度と会いたくないのです。その人の行動や振る舞い、本性や本質が原因となって、神はそうした人たちが自身の視界から姿を消すこと、彼らをサタンに直接引き渡すこと、彼らの靈魂と身体をサタンに与え、サタンの意のままにさせることだけを望んでいるのです。神がその人たちをどれほど憎んでいるか、

どれほど嫌悪しているかは明らかです。ある人が神を怒らせ、神が二度と会いたくないとさえ思ったり、完全に見捨てて心構えができたり、自分自身で取り扱いたくないと思ったりするようになれば、あるいは、その人をサタンに引き渡して好きなようにさせ、思うがままにその人を支配し、食い尽くし、取り扱うのを許すようになれば、その人は完全に終わりです。その人の人間たる権利は永久に無効となり、神の被造物たる権利も終焉を迎えます。それは最も過酷な懲罰ではありませんか。

以上が「この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」という言葉の完全な説明であり、この聖句に関する簡単な解説でもあります。これでみなさん理解できたと思います。

次に、以下の聖句を読みましょう。

12. 復活後のイエスによる弟子への言葉

ヨハネによる福音書 20:26-29 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。それからトマスに言われた、「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

ヨハネによる福音書 21:16-17 またもう一度彼に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。彼はイエスに言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊を養いなさい」と言われた。イエスは三度目に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。ペテロは「わたしを愛するか」とイエスが三度も言われたので、心をいためてイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい」。

これらの聖句が述べている事柄は、復活後の主イエスによる弟子への言動です。まず、復活の前後における主イエスの違いを検討しましょう。復活後の主イエスは、以前のイエスと同じでしたか。この聖句には、復活後のイエスを描写する「戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って『安かれ』と言われた」という一文が含まれています。当時の主イエスがもはや肉体に宿っておらず、霊体になっていたこと

は明らかです。なぜなら、扉が閉ざされていたにもかかわらず、人々の前に出て姿を見ることができたなど、肉の限界を超越していたからです。これが肉において生きていた復活前の主イエスと、復活後の主イエスの最も大きな違いです。その際の霊体の外見と、それ以前の主イエスの外見との間には何の違いもありませんでした。その瞬間の主イエスは、その人たちにとって見知らぬ人と感じられるような存在になっていました。と言うのも、主は死から復活した後に霊体となり、以前の肉体に比べると、人々にとって謎めいた存在、戸惑いを感じさせる存在となっていたからです。それはまた、主イエスと人々との距離をさらに広げ、人は心の中で、その時の主イエスがより不思議な存在になったと感じました。人々は自分が抱くこれらの認識と感覚により、見ることも触れることもできない神を信仰していた時代へと、突如として戻されたのです。そうしたわけで、復活した主イエスが最初に行なったのは、誰でも自分を見えるようにし、自分が存在すること、および復活した事実を確信させることでした。加えてこの業により、イエスと人々との関係は、イエスが受肉して働きを行ない、人々が見て触れることのできるキリストだったときの関係に戻りました。そこから生じた結果の一つに、十字架にかけられた主イエスが死から復活したことについて、人々が何の疑いも抱かず、同時に人類を贖う主イエスの働きについても疑問をもたなかったことがあります。またもう一つの結果として、主イエスが復活後に人々の前に現われ、彼らが主を見て触れられるようにしたことで、恵みの時代が人類の間に定着し、このとき以降、主イエスが「失跡」した、あるいは「無言で立ち去った」からという表向きの理由で、人々が以前の律法の時代に戻ることはなくなった、ということが挙げられます。イエスはこのようにして、人々が前進し続け、主イエスの教えと働きに従うようにしたのです。かくして、恵みの時代の新たな働きが正式に始まり、これ以降、律法の下で暮らしていた人々は正式に律法から脱し、新たな時代、新たな始まりへと入りました。以上が、復活後の主イエスが人々の前に現われたことの、多岐にわたる意義です。

主イエスがいまや霊体に宿っているなら、人々がイエスに触れたり、イエスを見たりすることができたのはなぜでしょうか。その問題は、主イエスが人間の前に現われたことの意義と関連しています。先ほど読んだ二つの聖句について、何か気づいたことはありますか。通常、霊体は見ることも触れることもできず、また復活後、主イエスがそれまでに着手していた働きはすでに完了していました。したがって理論的に言えば、イエスが元の姿で人々の前に戻り、彼らに会う必要はまったくなかったのです。しかし、主イエスの霊体がトマスのような人の前に現われたことで、その意義がより具体的なもの

となり、人々の心に一層深く刻み込まれました。トマスの前に現われたイエスは、疑いを抱くトマスに自身の手を触れさせ、「手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と言いました。この言葉と振る舞いは、主イエスが復活して初めて伝えたい、行ないたいと思ったことではなく、十字架にかけられる前から伝えたい、行ないたいと思っていたことです。十字架にかけられる前から、主イエスがトマスのような人たちのことを理解していたのは明らかです。このことから何がわかりますか。主イエスは復活後も依然として同じだったということです。イエスの本質は変わっていませんでした。トマスの疑いはこのときに始まったことではなく、主イエスに付き従っている間ずっと彼が抱いていたものでした。しかし、死から復活し、元の姿、元の性質、そして肉にあったときからの人間に対する認識をもって、主イエスが目の前に戻ってきたのです。そのため、主イエスは最初にトマスのところへ行って自身のわき腹に触れさせ、復活後の霊体を見せただけでなく、自身の霊体に触れさせてそれを感じさせ、彼の疑念を完全に払拭したのです。主イエスが十字架にかけられる前、トマスは常にイエスがキリストであることに疑念を抱き、信じることができないでいました。トマスの神に対する信仰は、自分の目で見えるもの、自分の手で触れられるものだけに基づいていたのです。この種の人の信仰について、主イエスはよく理解していました。このような人たちは天なる神だけを信じ、神に遣わされた者も受肉したキリストもまったく信じず、受け入れようとすることもありませんでした。自分が存在すること、および本当に受肉した神であることをトマスに認めさせ、信じさせるため、主イエスはトマスに対し、手を伸ばして自分のわき腹に触れるのを許しました。主イエスの復活前後で、トマスの疑いに異なる点はありませんでしたか。トマスは常に疑っており、主イエスの霊体がトマスの前に直接現われ、身体に残る釘のあとに触れさせる以外に、トマスの疑念を解消して払拭することは誰にもできませんでした。そうしたわけで、主イエスがトマスにわき腹に触れさせ、釘あとがあるのを実感させると、トマスの疑念は消え、主イエスが復活したことを真に知り、主イエスが真のキリストであり、受肉した神であることを認め、信じるようになりました。このとき、トマスはもはや疑っていませんでしたが、キリストに会う機会は永遠に失われていました。キリストと共にあり、キリストに付き従い、キリストを知る機会、キリストによって完全にされる機会を永遠に失ったのです。主イエスの出現と言葉により、疑いに満ちた人の信仰に対する結論、および審判が下されました。イエスは実際の言葉と業によって、疑念を抱く人、天なる神を信じるだけでキリストを疑う人に対し、神はそうした人の信仰も、疑念を抱きながら付き従うことも褒めないと伝えたのです。そのような人が神とキリストを完全

に信じる日こそ、神の大いなる働きが完了した日なのです。もちろんその日は、彼らの疑いに審判が下る日でもあります。キリストへの姿勢によって彼らの運命は決まったのであって、頑なに疑いを抱いているせいで信仰は実を結ばず、頑固なせいで希望は叶わなかったのです。そのような人の天なる神に対する信仰は幻想によって育まれており、またキリストを疑うというのが神に対する彼らの本当の態度だったので、たとえ主イエスの釘あとに触れたところで、その信仰は依然として無益なままで、その結末はざるで水を汲むようなもの、つまりすべて無駄だとしか言いようがありませんでした。主イエスがトマスに言ったことはまた、次のことを万人にはっきり述べるものでもありました。つまり、復活した主イエスは、三十三年と半年にわたって人類の間で働きを行なった主イエスだということです。イエスは十字架にかけられて死の陰の谷を歩み、その後復活したにもかかわらず、どの側面も変わることがありませんでした。イエスの身体には釘のあとがあり、復活して墓から出てきたにもかかわらず、その性質、人間に対する認識、人間に対する旨はまったく変わっていませんでした。また、イエスは人々に対し、自分は十字架から下ろされて罪に打ち勝ち、苦難を乗り越え、死に勝利したと伝えました。その釘あとはサタンに対する勝利の証しであり、罪のいけにえとなって全人類を見事に贖った証しだったのです。さらに、自分はすでに人類の罪を背負い、贖いの働きを成し遂げたとも伝えました。使徒たちの前に戻って来たイエスは、出現という手段によって次のことを彼らに伝えました。「わたしは依然として生きており、ここに存在している。今日、あなたがたがわたしを見て触れることができるよう、実際にあなたがたの前に立っている。わたしは常にあなたがたと共にいる」また、主イエスはトマスの例を挙げて、未来の人々への警告にしました。つまり、あなたは主イエスへの信仰において、イエスを見ることも、イエスに触れることもできませんが、真の信仰ゆえに祝福されており、真の信仰ゆえに主イエスを見ることができるのであって、このような人が祝福された人なのです。

主がトマスの前に現われたときに述べた、聖書に記されているこの言葉は、恵みの時代のあらゆる人にとって大いに役立つものです。主がトマスのもとに現われたことと、主が彼に語った言葉は、その後何世代にもわたる人々に極めて大きな影響を与え続け、そこには不朽の意義があります。トマスは神を信じながら神に疑念を抱く類の人間を代表しています。このような人は疑い深い性格であり、心に悪意があり、不忠であり、神が成し遂げられる業を信じません。神の全能と支配も、受肉した神も信じません。しかし主イエスの復活は、このような人に平手打ちをくらわせたようなものでした。つまり

、自分の疑いに気づいてそれを認識し、自分の不忠を認め、それによって主イエスの実在と復活を心から信じる機会を与えたのです。トマスの身に起きた出来事は後の世代の人々への警告であり、より多くの人々がトマスと同じ疑う人にならないよう自戒し、もし疑いで一杯になれば、必ずや闇に落ちると自分を戒めるようにするためのものでした。神に付き従いながら、トマスのように主のわき腹や釘あとに触れ、神が存在するかどうかを憶測し、確かめることをいつも望むのであれば、神はあなたを見捨てるでしょう。それゆえ、主イエスは人々に対し、自分の目で見ることのできる物だけを信じたトマスのようにならず、純粹で正直な人間となり、神に対して疑念を抱かず、神を信じて付き従うことを求めているのです。このような人は祝福されています。これは主イエスが人々に行なうごくささやかな要求であり、また自分に付き従う人に対する警告でもあるのです。

以上に述べたのが疑い深い人に対する主イエスの姿勢です。では、心から信じて付き従う人に対し、主はどのような言葉を述べ、どのような業を行ないましたか。主イエスとペテロとの対話を通じてそれを検討しましょう。

この対話のなかで、主イエスは繰り返し「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」と尋ねています。これは、真にキリストを信じ、主を愛そうと努めたペテロのような人に対し、復活した主イエスが求めたより高い基準です。この質問は一種の調査と尋問でしたが、それ以上に、ペテロのような人への要求と期待でした。イエスはこのように質問することで、人々が自分自身を省みてじっと見つめ、「主イエスが人々に求められているのは何か。わたしは主を愛しているか。神を愛する者か。わたしはどのように神を愛するべきか」と自問するようにしたのです。主イエスがこの質問を投げかけたのはペテロだけでしたが、実は心の中で、ペテロにこの質問をすることにより、神を愛することを求めるより多くの人に対し、同様の質問を投げかけることを望んでいたのです。ペテロはこの種の人々を代表して、主イエスの口からこの質問を受けるという祝福にあずかったに過ぎません。

復活した主イエスはトマスに「手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と告げましたが、ペテロに対しては「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」と三度繰り返して尋ねました。この質問によって、人は主イエスの厳格な姿勢と、質問した際の差し迫った気持ちをより感じ取ることができます。不正直な本性をもち、常に疑っていたトマスに対し、主イエスは手を伸ばして身体の釘あとに触れることを許し、それによって自分が復活した人の子であるこ

とを信じさせ、自身のキリストとしての身分を認めさせました。主イエスはトマスを厳しく咎めることも、明確な裁きを言葉で表わすこともしませんでした。それでも実際の行動を通じて、自分がトマスを理解していることを知らせつつ、この種の人に対する自身の姿勢と決意を示したのです。この種の人に対する主イエスの要求と期待は、主の言葉には見られません。と言うのも、トマスのような人には真の信仰がこれっぽっちもないからです。このような人に対する主イエスの要求はその程度ですが、ペテロのような人に表わした姿勢はまったく異なります。イエスはペテロに対し、手を伸ばして釘あとに触れるよう求めることも、「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と言うことありませんでした。その代わり、同じ質問を繰り返したのです。その質問は思考を刺激すると同時に有意義なものであり、キリストに付き従うすべての人が後悔と恐怖だけでなく、主イエスの不安で悲しい気持ちを感じずにはいられなくなるものです。そして、大きな苦痛や苦しみにあるとき、彼らは主イエスの懸念と気遣いをより理解できるようになり、純粹で誠実な人々に対するイエスの熱心な教えと厳格な要求を認識します。人は主イエスの問いかけを通じ、これらの簡単な言葉に示されている主イエスの人々に対する期待は、単にイエスを信じてイエスに付き従うことだけでなく、愛をもつこと、つまり自分の主と神を愛することだと感じられるようになります。この種の愛は慈しみと服従です。神のために生き、死に、神にすべてを捧げ、神のためにすべてを費やし、そして与えるということなのです。この種の愛はまた、神に慰めをもたらし、神が証しを享受して安息を得られるようにします。それは人類による神への報いであり、責任であり、義務であり、本分であり、人がその生涯を通じて従うべき道なのです。この三度の問いかけはペテロと、完全にされるであろうすべての人に対する主イエスの要求であり、訓戒でした。ペテロが最後まで人生の道を歩むよう導き、励ましたのは、この三度の問いかけでした。また、ペテロが完全にされる道を歩み始めるよう導き、そして主への愛ゆえに主の心を気遣い、主に服従し、主に慰めをもたらし、その愛ゆえに自分の一生と自分のすべてを捧げるよう導いたのも、主イエスが去り際に行なったこの問いかけだったのです。

恵みの時代、神の働きはおもに二種類の人を対象としていました。一つは神を信じて付き従い、神の戒めを守り、十字架を背負って恵みの時代の道を守ることでできる人でした。この種の人には神の祝福を得て、神の恵みを享受しました。もう一つはペテロのように、完全にされ得る人でした。そうしたわけで、復活した主イエスはまず、二つの極めて有意義な業を行なったのです。そのうちの一つはトマスに対してなされ、もう一つ

はペテロに対してなされたものです。その二つの業は何を表わすものですか。神が人類を救う真意を表わしているのでしょうか。人類に対する神の誠実さを表わしているのでしょうか。神がトマスに対して行なった働きは、疑う人にならず、ひたすら信じるよう、人々に警告するためのものでした。そしてペテロに対して行なった働きは、彼のような人の信仰を強め、この種の人への要求を明確なものにし、目指すべき目標を示すためのものでした。

復活した主イエスは、必要と思われる人々の前に現われ、彼らに語りかけ、彼らへの要求を伝えるとともに、人々に対する自身の旨と期待を残しました。つまり、受肉した神として、人類に対するイエスの懸念と、人々に対する要求は決して変わらなかったのです。イエスが肉にあったときも、十字架にかけられた後に復活して霊体にあったときも、それらは同じままでした。イエスは十字架にかけられる前からこれら弟子たちのことを懸念しており、各人の状態を心の中で明確に理解するとともに、各人の欠点を認識していました。そしてもちろん、死んで復活し、霊体になった後も、各人に関するイエスの理解は、肉にあったときと同じでした。イエスのキリストとしての身分について人々が完全に確信していなかったことを、イエスは知っていましたが、肉にあったとき、人々に対して厳格な要求をすることはありませんでした。しかし、復活したイエスは彼らの前に姿を見せ、主イエスが神のもとから来たこと、イエスが受肉した神であること、そして人類が生涯をかけて追求していくにあたり、自身の出現と復活をその最大のビジョン、最大の動機にしたことを、彼らに完全に確信させました。イエスの死からの復活は、イエスに付き従うすべての人々を強くただけでなく、恵みの時代における人類の中での働きを完全に成し遂げるものであり、かくして恵みの時代における主イエスの救いの福音が徐々に人類全体へと広まったのです。復活した主イエスが人々の前に現われたことに、何か意味があると言えるでしょうか。仮にあなたが当時のトマスやペテロであって、人生においてこのような極めて意義深い出来事に遭遇したとしたら、それはあなたにどのような影響を及ぼしたのでしょうか。神を信じる生涯において最も素晴らしい、至高のビジョンだと見なしたのでしょうか。一生神に付き従い、神を満足させようと努め、神への愛を追求する上での原動力だと見なしたのでしょうか。この至高のビジョンを広めるため、生涯をかけて努力しましたでしょうか。主イエスの救いを広めることを、神から託された使命として受け入れたのでしょうか。あなたがたはまだそれを経験していませんが、トマスとペテロの事例は、現代の人々が神の旨と神自身をはっきり理解するのに十分なものです。肉となり、人類の間で人間生活を自ら経験し、当時の人類の墮落や

人間生活の状況を目の当たりにした後、受肉した神は、人類がいかに無力で嘆かわしく、哀れであるかを深く感じました。肉において生活していた際、自身が有していた人間性、および自身の肉体的な直感のために、神は人間の状況により共感を覚え、その結果、自身に付き従う人への懸念をさらに強く感じました。あなたがたはおそらくこれらを理解できないでしょうが、自身に付き従うすべての人に対する受肉した神の不安と気遣いは、「強い懸念」という言葉で表わすことができます。その言葉は人間の言語に由来するものであり、極めて人間的な言葉ですが、自身に付き従う人に対する神の感情を真に表わし、描写するものです。あなたがたは人間に対する神の強い懸念を、経験を重ねる中で徐々に感じ取り、味わってゆくことでしょう。しかし、自分自身の性質の変化を追求することで、神の性質を徐々に理解しなければ、それは不可能です。主イエスが姿を見せたことで、人類のうちイエスに付き従う人に対する主の強い懸念が形をなし、イエスの霊体、あるいはイエスの神性に伝えられました。また主イエスの出現により、人々は神の懸念と気遣いを再び経験し、感じることができ、それと同時に時代の幕開け、展開、そして終焉をもたらすのは神であることが、力強く証明されたのです。自身の出現を通じ、イエスはすべての人々の信仰を強くし、自身が神であることを全世界に証明しました。それによって、主に付き従う人々は永遠に確信し、また主イエスは自身の出現を通じ、新しい時代における働きの一局面を始めたのです。

13. 復活後にパンを食べ、聖句を説明するイエス

ルカによる福音書 24:30-32 一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなくなった。彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。

14. イエスに焼き魚を差し出す使徒たち

ルカによる福音書 24:36-43 こう話していると、イエスが彼らの中にお立ちになった。〔そして「やすかれ」と言われた。〕彼らは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った。そこでイエスが言われた、「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。〔こう言って、手と足とをお見せになった。〕彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが「ここに何か食物があるか」と言われた。彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。

次に上記の聖句を検討します。前者は復活後の主イエスがパンを食べながら聖句について説教している場面、後者はイエスが焼いた魚を食べている場面です。神の性質を知る上で、これら二節はどのように役立ちますか。パンや焼いた魚を食べている主イエスの描写から、そのような場面を想像することができますか。主イエスが自分の前に立ってパンを食べているとしたら、自分がどのように感じるかを想像できますか。あるいは、イエスが自分と同じ食卓で人々と共に魚とパンを食べているとしたら、そのときどのような気持ちができるでしょうか。主は自分と非常に親密で、とても懇意してくださると感じるなら、その感情は正しいものです。それがまさに、人々の集団の前でパンと魚を食べることで、復活後の主イエスがもたらそうとした結果なのです。復活した主イエスが人々と話をするだけで、彼らがイエスの肉体を感じられず、手の届かない霊だと感じたなら、その人たちはどのように思ったのでしょうか。落胆したのではないのでしょうか。彼らは落胆しながら、見捨てられたように感じていたのではないのでしょうか。主イエス・キリストとの間に隔たりを感じていたのではないのでしょうか。こうした隔たりは、神と人々との関係にどのような悪影響を与えたのでしょうか。人は間違いなく恐怖を感じ、あえて近づこうとせず、敬遠する態度をとっていたでしょう。その後は主イエス・キリストとの親しい関係を絶ち、人間と天なる神という、恵みの時代以前の関係に戻っていたはずです。人が触れることも感じることもできない霊体が原因となり、神との親密な関係が解消されてしまい、主イエス・キリストが受肉していた際に築かれた、人間との密接な関係もまた消滅するでしょう。霊体が人間の中でかき立てる感情は恐怖と忌避だけであり、人は目を丸くして絶句します。あえて近づこうとも会話しようともせず、ましてや従ったり、信じたり、仰ぎ見たりはしないでしょう。人々が自身にこうした感覚を抱くことを、神は望みませんでした。人々が自分を避けたり、自分の前から立ち去ったりするのを望まなかったのです。神は、人々が自分を理解し、自分に近づき、自分の家族となることだけを望んでいました。あなたの家族や子どもたちが、あなたを見てもあなたであると気づかず、あなたに近寄ろうとせず、いつも避けてばかりいて、あなたが家族や子どもたちのためにしたことを一切理解してもらえなかったとしたら、あなたはどのように感じるのでしょうか。それはつらいことではないのでしょうか。心が痛むのではないのでしょうか。人々が神を避けたときに神が感じるのは、まさにそうした感覚です。そうしたわけで、復活した主イエスは血の通った肉体の姿で人々の前に現われ、彼らと飲食を共にしたのです。神は人を家族と考え、また人に対しても、神は最も近い存在だと考えることを望みます。そうして初めて、神は真に人々を得ることができ、人々は真に神を愛して崇拝できるのです。復活した主イエスがパンを食べながら聖句について

て説明している一節と、使徒がイエスに焼いた魚を差し出している一節をわたしが取り上げたことについて、その意図がこれでわかりましたか。

復活後の主イエスによる一連の言動には真剣な考えが込められていたと言えるでしょう。それらは神が人類に抱く優しさと愛情に満ち溢れ、また受肉していた際に人類との間で築いた親密な関係に対する、慈しみと周到な配慮にも満ち溢れていました。さらに、受肉していた際、自身に付き従う人たちと寝食を共にしたことへの懐古の念と切望にも満ち溢れていました。そうしたわけで、人間が神との間に距離を感じることも、人間が神と距離を置くことも、神は望まなかったのです。さらに、復活した主イエスはもはや人間と親密だったころの主ではない、また主は霊の世界、人間が決して見ることも触れることもできない父のもとへ戻ったので、もはや自分と共にはいない、とすることも望みませんでした。神の立場と自分たちの立場に違いが生まれたと人間が感じることを、神は望みませんでした。神に付き従いたいと望みながら神を敬遠している人間を見ると、神は心を痛めます。なぜなら、その人の心が神から遠く離れていること、神がその人の心を得るのは極めて難しいことを意味しているからです。そうしたわけで、イエスが見ることも触れることもできない霊体の姿で人々のもとに現われていたら、人は再び神と距離を置き、復活後のキリストが高尚な存在、人間とは違う存在となり、また罪深く、汚れており、決して神に近づけない人間と食卓を共にできない存在となった、などという人間の誤解を招いていたでしょう。こうした人間の誤解を払拭するため、主イエスは受肉した際に行なっていた数多くの業を行なったのであり、それは聖書に「パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられる」と記されている通りです。また、過去に行なっていたように、人々に聖句を説明することもしました。イエスが行なったこれらの業により、主イエスと会った人はみな、イエスは変わっておらず、依然として同じ主イエスであると感じました。イエスは十字架にかけられて死を経験しましたが、その後復活したのであって、人間のもとから去ったわけではありません。イエスは人々の間に戻り、何一つ変わることはありませんでした。人々の前に立つ人の子は、依然として同じ主イエスだったのです。イエスの物腰や人々との話し方は非常になじみ深いものでした。依然として慈愛、恵み、そして寛容に溢れていたのです。それは自分と同じように他の人を愛し、人を七の七十倍赦すことのできる主イエスでした。以前と同じように人々と食事を共にし、彼らと聖句について話し合い、またさらに重要なこととして、以前同様、見て触れることのできる血の通った肉体をもっていました。こうした人の子の姿のおかげで、人々は親密感を抱き、くつろぎを感じ、失ったものを取り戻した喜び

を覚えました。そして大きな安心感とともに、果敢に、かつ確信をもって、人類の罪を贖うことのできる人の子を頼り、仰ぎ見るようになったのです。また人々は、ためらうことなく主イエスの名において祈り始め、イエスの恵みと祝福、安らぎと喜び、そして気遣いと加護を得るようになり、イエスの名において病人を癒やし、悪霊を追い払い始めたのです。

主イエスが肉において働きを行っていた際、その身分や言葉を完全に認識できている人は、イエスに付き従う人の中にほとんどいませんでした。イエスが十字架に向かっていたとき、イエスに付き従っていた人たちは傍観の態度をとりました。イエスが十字架にかけられてから墓に入れられるまで、人々の主に対する態度は落胆でした。この間、イエスが受肉していた際の言葉について、人々の心は疑いから否定へとすでに変わり始めていたのです。そしてイエスが墓から出て一人ひとりの前に現われたとき、イエスを自らの目で見たり、イエスが復活したという知らせを聞いたりした人々のほとんどが、否定から懐疑へと徐々に態度を変えました。主イエスがトマスに手でわき腹を触れさせ、復活後に群衆の前でパンを裂いて食べ、続いて彼らの前で焼いた魚を食べて初めて、人々は主イエスが受肉したキリストであるという事実を真に受け入れたのです。それはあたかも、血の通った肉体をもち、これらの人々の前に立っているこの霊体が、彼らをひとり残らず夢から目覚めさせたようだった、とすることができるでしょう。人々の前に立つ人の子は、悠久の過去から存在していた者でした。人の子には形もあれば肉と骨もあり、長らく人間と共に生きて食事をしていたのです……人々はこのとき、イエスの存在がまったくの真実であり、実に素晴らしいと感じました。同時に大きな喜びと幸福を覚え、感動で満ち溢れました。イエスが再び現われたことにより、人々はイエスの謙虚さを目の当たりにし、人間に対する親密さと愛着を感じるとともに、自分たちのことをいかに思っているかを感じ取ったのです。この束の間の再会により、主イエスに会った人々は、あたかも一生が過ぎ去ったかのように感じました。迷い、困惑し、恐れ、不安になり、思慕をつのらせ、麻痺していた彼らの心は安らぎを得て、もはや疑っても落胆してもいませんでした。なぜなら、いまや希望があり、頼れるものがあったからです。人の子がそのとき人々の前に立ったことで、彼らはいかなるときも後ろ盾を得られることになりました。人の子は永遠なる堅固なやぐら、そしてよりどころとなったのです。

主イエスは復活しましたが、イエスの心と働きが人間のもとから離れたわけではありません。どのような形で存在しようと、自分は人々に付き添い、共に歩み、いつでもど

こでも一緒にいること、そしていつでもどこでも人類に糧を施し、牧養し、自分を見て触れられるようにするとともに、人類が二度と絶望を感じないようにするということを、イエスは自身の出現を通じて人々に伝えたのです。また、この世における生活が孤独なものではないと、人々が知ることも望みました。人には神の配慮があり、神は人と共にあります。人はいつでも神をよりどころにすることができ、神は自身に付き従うすべての人の家族です。よりどころとなる神がいれば、人間はもはや孤独になることも絶望することも一切なく、また神を罪の捧げ物として受け入れる人は罪に縛られることはありません。人間の目から見ると、復活後に主イエスが行なった働きは、極めて小さなものではありません。わたしから見ると、それらはどれも意味があり、貴重であり、重要であり、大きな意義が込められているのです。

主イエスが受肉して働きを行っていた時期は困難と苦しみに満ちていたものの、血の通った肉体をもつ霊体として現われたことで、イエスはその働きを徹底的に、かつ完全に成し遂げました。肉になることで自身の職分を始め、肉の姿で人の前に現われることでその職分を締めくくったのです。イエスは恵みの時代の到来を告げ、キリストの身分によって新しい時代を始めました。自身のキリストとしての身分によって恵みの時代の働きを行ない、恵みの時代に自身に付き従ったすべての人を強くし、そして導いたのです。神の働きについて、神は自身が始めたことを真に完成させると言えます。そこには段階と計画があり、その働きは神の知恵、全能、驚くべき業、そして愛と憐れみに満ち溢れています。もちろん、神の働きのすべてには、人類への気遣いが一貫しています。決して脇にのけることができない懸念が染みわたっているのです。聖書のこれらの聖句では、復活した主イエスが行なったあらゆることに、人類に対する神の変わらぬ希望と懸念、そして周到な配慮と慈愛が表わされています。現在に至るまで、それらはいずれも変わっていません。あなたがたにわかりますか。それがわかったとき、あなたがたの心は無意識のうちに神に近づくのではありませんか。あなたがたがその時代に生きていて、復活した主イエスが形ある姿であなたがたの前に現われ、あなたがたの前に座ってパンと魚を食べ、あなたがたに聖句を説明し、あなたがたと話し合ったとしたら、あなたがたはどう感じるでしょうか。幸せに感じるでしょうか。それとも罪悪感を覚えるでしょうか。神に対するそれまでの誤解と忌避、神との対立や疑いは、すべて残らず消えるのではありませんか。神と人との関係は、より正常かつ正しいものになるのではないのでしょうか。

これら聖書の限られた断片を解釈することで、神の性質に何か欠点を見つけましたか

。神の慈愛に何らかの不純なものが見つかりましたか。神の全能や知恵に、何らかの欺瞞や邪悪さが見つかりましたか。絶対に見つかりません。神は聖いと断言できますか。神の感情の一つひとつが神の本質と性質の現われであると断言できますか。これらの聖句を読んだ後、そこから理解したことが、性質の変化の追求すること、そして神を畏れることにおいて、あなたがたを助けて益をもたらすことをわたしは望んでいます。また、それらがあなたがたの中で実をつけ、その実が日を追うごとに大きくなり、その追求の過程においてあなたがたがより神に近づき、神が求める基準に近づくこともわたしは望んでいます。あなたがたは真理の追求に飽きることもなければ、真理の追求や性質の変化の追求は面倒だ、あるいは不要だなどと感じることもありません。むしろ、神の性質の真の表われと、神の聖い本質に突き動かされて光と正義を求め、真理の追求を渴望し、神の旨を満たすことを切望して、神に得られる人、真の人になるのです。

本日は、神が最初に受肉した恵みの時代における、神の業の一部について検討しました。それらのことから、神が肉において表わし、示した性質と、神が所有するものと神そのもののあらゆる側面を見てきました。神が所有するものと神そのものの側面はすべて非常に人間化されているように見えますが、実のところ、神が示し、表わした一切のこの本質は、神自身の性質と切り離せないものです。受肉した神が人間性においてその性質を表わしたことについて、その手段と側面はどれも、神自身の本質と不可分に結びついています。したがって、神が受肉という方法を使って人類のもとに来たのは非常に重要なことなのです。同じく重要なこととして、神が肉において行なった働きがありますが、肉において生きるすべての人、墮落の中で生きるすべての人にとってさらに重要なのは、神が示した性質と、神が表わした旨なのです。あなたがたにそれが理解できますか。神の性質、および神が所有するものと神そのものを理解した後、神にどう接すべきかについて、何らかの結論に達しましたか。最後にこの質問への回答として、三つのことをあなたがたに忠告します。第一に、神を試してはいけません。あなたが神のことをどれほど理解していようと、神の性質についてどれほど知っていようと、決して神を試してはいけません。第二に、地位を巡って神と争ってはいけません。神から授かった地位がどのようなものであれ、神から託された働きがどのようなものであれ、神から尽くすように任された本分がどのようなものであれ、そしてあなたが神のためにどれほど自分を費やし、我が身を捧げたかにかかわらず、絶対に地位を巡って神と争ってはいけません。第三に、神と競ってはいけません。神が自分に対して行なうこと、自分のために采配すること、そして神が自分にもたらすものについて、あなたがそれを理解し

ていようと、あるいはそれに服従することができようと、絶対に神と競ってはいけません。これら三つの忠告を守れるなら、あなたはまったく安全であり、神の怒りを招くこともありません。これで本日の交わりを終わります。

2013年11月23日

脚注

a.「緊箍呪」は中国の小説『西遊記』の中で三蔵法師が使った呪文である。三蔵法師はこの呪文を使い、孫悟空の頭にはめられた金属の輪を締め上げ、激しい頭痛を生じさせることで彼を操り支配下に置いた。そこからこの表現は、人を縛るものを表わす比喻になった。

唯一無二の神自身 1

神の権威（1）

過去数回の交わりは、神の働き、神の性質、そして神自身に関するものでした。これらの交わりを聞いて、神の性質についての理解と認識を得たと思いますか。どの程度の理解と認識を得ましたか。それを数え上げることはできますか。これらの交わりによって、神に関するより深い理解を得られましたか。その理解は、神に関する真の認識だと言えるでしょうか。神に関するその認識と理解は、神の本質全体、神が所有するものと神そのものの全体についての認識だと言えるでしょうか。いいえ、明らかに言えません。なぜなら、それらの交わりは神の性質の一部、神が所有するものと神そのものの一部に関する認識をもたらしただけで、全体に関する認識をもたらしたわけではないからです。それらの交わりによって、あなたがたは神が過去に行なった働きの一部を認識することができ、神の性質、神が所有するものと神そのもの、そして神が行なってきたすべての業の裏にある取り組み方と考えを目の当たりにしました。しかし、それは文字や言葉による神の理解に過ぎず、あなたがたは心の中で、そのうちどれくらいが現実かを確信できないでいます。それらの事柄に関する人々の理解に現実性があるかどうかは、おもに何によって決まりますか。それは、実体験の中で神の言葉と性質をどの程度経験したか、その実体験の中でどれほど多くのものを見て認識できたかによって決まります。「過去数回の交わりで、神が行なった業、神の考え、そしてさらに人類に対する神の姿勢、神の業の根底にあるもの、神の業の原則が理解できた。そのおかげで神の性質を理解し、神をすっかり知るようになった」などと言ったことがある人はいますか。そうした発言は正しいですか。明らかに間違っています。そうした発言は間違いだとわたしが言うのはなぜですか。神の性質、および神が所有するものと神そのものは、神が行なって

きた業、神が語ってきた言葉の中に表わされます。神が行なってきた業と語ってきた言葉を通じ、人は神が所有するものと神そのものを見ることができます。しかしそのことは、人はそうした働きと言葉により、神の性質の一部、神が所有するものと神そのものの一部しか理解できないということに過ぎません。神をより深く理解したいのであれば、神の言葉と働きをさらに経験しなければいけません。神の言葉や働きの一部を経験しても、人は神を部分的にしか理解できませんが、その部分的な理解は神の真の性質を表わすものでしょうか。神の本質を表わすものでしょうか。もちろん、それは神の真の性質、神の本質を表わすものであり、そこに疑いの余地はありません。時間や場所を問わず、また神がどのような方法で働きを行なうか、どのような姿で人の前に現われるか、どのような形で自身の旨を表わすかを問わず、神が明らかにする物事、表わす物事はすべて、神自身、神の本質、そして神が所有するものと神そのものを示すものです。神は、神が所有するものと神そのものを使い、神の真の身分において働きを行ないます。これは紛れもない事実です。しかし現在、人々は神の言葉を通じて、あるいは自分が説教で聞いたことを通じて、神を部分的に理解しているに過ぎません。そのため、そうした理解は単なる理論的な認識でしかないと、ある程度は言えるでしょう。あなたの現状を鑑みると、自分が見聞きした神、あるいは心の中で認識している神についての理解や認識を確かめられるのは、一人ひとりが実体験の中でそれらを経験し、少しずつ知るようになる場合に限られます。わたしがこうした言葉をあなたがたに伝えていなければ、自分の経験だけを通じて神を真に認識することができるのでしょうか。残念ながら、それは極めて難しいでしょう。と言うのも、どのように経験すべきかを知るには、まず神の言葉がなければならぬからです。神の言葉を飲み食いした分、人は実際に経験することができます。神の言葉は道しるべであり、人の経験の指針です。簡単に言えば、実際の経験をいくらか積んだ人にとって、過去数回の交わりは真理をより深く理解し、神をいっそう現実的に理解する手助けとなります。しかし、実際の経験がまったくない人、経験し始めたばかりの人、現実に触れ始めたばかりの人にとって、これは大きな試験なのです。

過去数回の交わりのおもな内容は、「神の性質、神の働き、そして神自身」に関するものでした。わたしが話したことの主要な部分、核心となる部分から、あなたがたは何を理解しましたか。これらの交わりを通じ、働きを行なった神、それらの性質を示した神が、万物を支配する唯一無二の神自身であることを認識できましたか。認識できたと言うなら、そのように結論づけた根拠は何ですか。そのように結論づける中で、いくつ

の側面を考慮に入れましたか。答えられる人はいますか。過去数回の交わりがあなたがたに深い感銘を与え、神を認識する心の新たな出発点になったことをわたしは知っていますが、それは素晴らしいことです。しかし、あなたがたは以前と比べ、神のことを飛躍的に理解するようになりましたが、神の身分に関するあなたがたの定義は、律法の時代のヤーウェ神、恵みの時代の主イエス、そして神の国の時代の全能神に留まっています。つまり、あなたがたは「神の性質、神の働き、そして神自身」に関する過去数回の交わりによって、かつて神が述べた言葉、神が行なった働き、そして神によって示された神が所有するものと神そのものについて、ある程度の認識を得られましたが、「神」という言葉を正しく定義することも、正確に位置づけることもできないのです。また、神自身の身分と地位、つまり万物と全宇宙の中での神の地位に関する、真実かつ正確な位置づけと認識ありません。なぜなら、神自身と神の性質に関する前回までの交わりの内容はすべて、聖書に記されている、神が以前に表わしたことや明らかにしたことを基にしているからです。しかし、神による人類の経営と救いにおいて、あるいはそれ以外において明らかにされ表わされる、神が所有するものと神そのものを、人が見つけ出すのは困難です。したがって、神が過去に行なった働きで明らかにされた、神が所有するものと神そのものを、たとえあなたがたが理解していたとしても、神の身分と地位に関するあなたがたの定義は、「唯一無二の神、万物を支配している神」から依然として程遠いものであり、「創造主」のそれとも異なっています。過去数回の交わりで、人間にどうして神の考えを知ることができるのかと、誰もが同じように感じたはずで、それを知っている人がいたとしたら、その人は間違いなく神です。と言うのも、神自身の考えを知り、神が行なう一切のことの根底にある基礎と取り組み方を知っているのは、他ならぬ神自身だけだからです。神の身分をこのようにして認識することは合理的かつ論理的なように思われますが、神の性質と働きから、それは本当に人間の働きではなく神自身の働きであり、神に代わって人間が行なうことのできない働きだと誰にわかるでしょうか。この働きが、神の本質と力をもつ者の支配下にあることを、誰が理解できるでしょうか。つまり、あなたがたはどのような特徴や本質を通じて、神が神自身であり、神の身分をもち、万物を支配する存在であることを認識するのですか。それについて考えたことはありますか。考えたことがなければ、それは一つの事実を証明しています。つまり、過去数回の交わりは、神が働きを行なった歴史の断章、その働きにおける神の取り組み方、その際に神が表したこと、そして明示したことについて、いくばくかの認識をあなたがたに与えただけである、ということです。そのような認識はあなたがた一人ひとりに対し、これら二段階の働きを行なったのは、あなたがたが信じて付

き従っている神自身、あなたがたが常に付き従わなければならない者だということを、疑問の余地なく認識させましたが、あなたがたは依然として、それが創世以来ずっと存在しており、永遠に存在する神であることを認識できず、また全人類を導き支配する神であることも認識できていません。あなたがたがこの問題について考えたことがないのは確かです。ヤーウェであれ、主イエスであれ、それが自分たちの付き従うべき神であるのみならず、人類を指揮し、人類の運命を支配し、天地万物を支配している唯一無二の神自身であることを、本質や明示のどの側面を通じて認識することができますか。自分たちが信じて付き従っている存在が、万物を支配している神自身であることを、あなたがたはどの経路を通じて認識しますか。自分たちが信じている神と、人類の運命を支配している神自身とを、あなたがたはどの経路を通じて結びつけますか。自分たちの信じている神が唯一無二の神自身であり、天地万物の中にいる神であることを、何によって認識することができますか。次節ではこの問題を説明します。

あなたがたが考えたことのない問題、あるいは考えもつかないような問題が、神を知る上で最も鍵を握る問題、人間にとって計り知れない真理を探求する問題である可能性が大いにあります。あなたがたにそのような問題が投げかけられ、向き合って選択することを求められた際、自分の愚かさや無知のため、あるいは自分の経験があまりに表面的で神に関する真の認識がないため、それを完全に解決することができなければ、その問題は神を信じる道において最も大きな障害、最も大きな妨げになります。そうしたわけで、わたしはこの件について、あなたがたと交わる必要が大いにあると感じています。いまの自分の問題が何か、あなたがたはわかっていますか。わたしが話している問題について、あなたがたははっきり理解していますか。それらはあなたがたが直面する問題ですか。あなたがたが理解していない問題ですか。いままで思いついたことのない問題ですか。自分にとって重要な問題ですか。それは本当に問題ですか。この件はあなたがたに大きな混乱をもたらす源であり、自分の信じる神についてあなたがたが真に認識していないこと、神を真剣に捉えていないことを示しています。中には「それが神であることを知っているのだから、わたしは付き従っている。なぜなら、その言葉は神を表わしているからだ。それだけで十分だ。その上どのような証明が必要なのか。もちろん、神を疑う必要はないし、神を試してはいけない。神の本質や神自身の身分を疑う必要などないはずだ」と言う人がいます。あなたがたがこのように考えるかどうかを問わず、わたしがあなたがたに以上の質問を投げかけたのは、神に関してあなたがたを混乱させるためでも、あなたがたに神を試させるためでもなく、ましてや神の身分と本質について

疑念を抱かせるためでもありません。わたしがそうしたのは、むしろ神の本質についてより深く理解すること、神の地位をより強く確信することをあなたがたに促し、神に付き従うすべての人が心の中で神を唯一の存在とし、また創造主として、万物を支配する存在として、唯一無二の神自身としての神の本来の地位が、あらゆる被造物の心に再び確立されるようにするためです。それはまた、これからお話しするテーマでもあります。

それでは聖書の以下の聖句を読みましょう。

1. 言葉を用いて万物を創造する神

創世記 1:3-5 神は「光あれ」と言われた。すると光があった。神はその光を見て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第一日である。

創世記 1:6-7 神はまた言われた、「水の間におおぞらがあって、水と水とを分けよ」。そのようになった。神はおおぞらを造って、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた。

創世記 1:9-11 神はまた言われた、「天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ」。そのようになった。神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神は見て、良しとされた。神はまた言われた、「地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ果樹とを地の上にはえさせよ」。そのようになった。

創世記 1:14-15 神はまた言われた、「天のおおぞらに光があって昼と夜とを分け、しるしのため、季節のため、日のため、年のためになり、天のおおぞらにあって地を照らす光となれ」。そのようになった。

創世記 1:20-21 神はまた言われた、「水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ」。神は海の大いなる獣と、水に群がるすべての動く生き物とを、種類にしたがって創造し、また翼のあるすべての鳥を、種類にしたがって創造された。神は見て、良しとされた。

創世記 1:24-25 神はまた言われた、「地は生き物を種類にしたがっていだせ。家畜と、這うものと、地の獣とを種類にしたがっていだせ」。そのようになった。神は地の獣を種類にしたがい、家畜を種類にしたがい、また地に這うすべての物を種類にしたが

って造られた。神は見て、良しとされた。

神の権威により、第一の日に人類の昼と夜が生まれ、確立した

では、最初の聖句を検討しましょう。「神は『光あれ』と言われた。すると光があった。神はその光を見て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第一日である」（創世記 1:3-5）。この聖句では、創世における神の最初の業、そして昼と夜がある、神の過ごした最初の日が描かれています。しかし、この日は特別でした。神は万物のために光を用意し始め、さらに光と闇を分けたのです。この日、神は言葉を語り始めましたが、神の言葉と権威は隣り合わせに存在していました。神の権威が万物の前に示され、言葉によって神の力が万物に及びました。この日以降、神の言葉、権威、そして力により、万物が創造されて確立し、また神の言葉、権威、そして力のおかげで、それらのものが機能し始めました。神が「光あれ」と言ったので、そこには光がありました。神は何らかの仕事に取りかかったのではなく、神の言葉によって光が現われたのです。それは、神が昼と呼ぶ光であり、現在も人間が生存するのに必要な光です。神が命じたために、その本質と価値は変わったことがなく、それらが消えたこともありません。光の存在は神の権威と力を示し、創造主の存在を宣言するとともに、その身分と地位を繰り返し確認するものです。その光は形なきものでも架空のものでもなく、人間が見ることのできる実際の光です。そのとき、「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり」という空虚な世界に、最初の形あるものが生み出されました。それは神の口から発せられた言葉によって生み出され、神の権威と発した言葉により、万物創造の最初のものとして現われました。その直後、神は光と闇が分かれるように命じました……。神の言葉によってすべてが変化し、完了したのです……。神はその光を「昼」と呼び、闇を「夜」と呼びました。そのとき、神が創造しようとしている世界に最初の夜と朝が創られ、神はそれを第一の日と言いました。この日は創造主による万物創造の初日であり、創造の始まりであり、自ら創ったこの世界に創造主の権威と力が示された最初のときでした。

これらの言葉により、人間は神の権威と神の言葉の権威、そして神の力を見ることができます。このような力をもつのは神だけであり、ゆえに神だけがこのような権威をもっています。そして神はこのような権威をもっているのです、神だけがこのような力をもっています。人間や物がこうした権威と力をもつことはできるでしょうか。何か思いつきますか。神以外に、被造物やそうでないものが、このような権威をもっているのでしょうか。書籍や出版物の中で、そうした物の例を見たことはありますか。誰かが天地と万

物を創ったという記録はありますか。そのようなことは他のどの書籍や記録にも書かれていません。それらは当然ながら、神の壮大な創世に関する、権威と力がある唯一の言葉であり、聖書の中に記されています。つまりそれらの言葉は、神だけがもつ権威と身分を語っているのです。こうした権威や力は、神独自の身分を象徴するものだと言えるでしょうか。それらは神だけがもつものと言えるでしょうか。神だけがこのような権威と力をもっていることに、疑いの余地はありません。被造物であれそうでないものであれ、この権威と力をもつことはできず、それにとって代わることもできません。それは唯一無二の神自身がもつ特性の一つですか。あなたがたはそれを目の当たりにしたことがありますか。人々はこれらの言葉のおかげで、神が独自の権威と力を持ち、至高の身分と地位にあることを、迅速かつ明瞭に理解することができます。以上の内容から、自分の信じている神が唯一無二の神自身であると言えますか。

第二の日、神は自身の権威によって水と大空を創り、最も基本的な人間の生存空間を創った

次に二番目の聖句を読みましょう。「神はまた言われた、『水の間におおぞらがあって、水と水とを分けよ』。そのようになった。神はおおぞらを造って、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた」（創世記 1:6-7）。神が「水の間におおぞらがあって、水と水とを分けよ」と述べた後、どのような変化が起きましたか。聖書には、「神はおおぞらを造って、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた」と記されています。神が言葉を語ってこの業を行なった結果は、どのようなものでしたか。その答えは、聖句の中の「そのようになった」という箇所にあります。

これら二つの短い一節には壮大な出来事が記録され、素晴らしい光景が描かれています。その光景とは、神が水を支配し、人間が存在できる空間を創造したという、途方もない業の様子です……。

この場面では、水と大空が一瞬にして神の眼前に現われ、神の言葉の権威によって互いに離れ、神が命じた通り「上」と「下」に分かれました。つまり、神が創った大空は下にある水を覆っただけでなく、その上にある水を支えていたのです……。ここで人間は、創造主が水を移動させ、水に命令し、大空を創るという神の権威の力と壮麗な光景を、息を呑み、茫然と見つめるより他ありません。神は自身の言葉と力、そして権威により、偉大な業を再度成し遂げたのです。これは創造主の権威の力ではありませんか。ここで神が行なった業を、聖句を使って説明しましょう。神は言葉を語り、その言葉のために、上下の水の間に天がありました。同時に、神によるこれらの言葉のために、こ

の空間で途方もない変化が生じましたが、それは普通の意味の変化ではなく、無が有になるという、一種の置き換えでした。それは創造主の考えから生まれ、創造主が語った言葉のために無から有になったのです。さらに、その後は創造主のためにしっかり存在し続け、創造主の考えに従って移動し、変化し、再び新しくなりました。この一節では、創世における創造主の二番目の業が描かれていますが、それもまた創造主の権威と力を表現するものであり、創造主による前例のない業なのです。この日は、創造主が世界を創造してから二日目であり、この日も創造主にとって素晴らしい日となりました。光の中を歩み、大空をもたらし、水を整え支配するとともに、自身の業、力、そして権威が、この新しい日に駆使されたのです……。

神が言葉を語る以前、水の中に大空はありましたか。もちろんありません。それでは、神が「水の間におおぞらがあって」と語った後はどうですか。神が意図したものが現われました。つまり、水の中に大空が生まれるとともに、神が「水と水を分けよ」と述べたために、水が二つに分かれたのです。このようにして、神がもつ権威と力の結果、神の言葉に従って二つの新しいもの、新たに創られた二つのものが万物の間に出現しました。これら二つの新しいものが出現したことについて、あなたがたはどう感じますか。創造主の力の偉大さを感じますか。創造主がもつ唯一無二のとてつもない力を感じますか。こうした力の偉大さは神の権威に由来するものであり、また神の権威は神自身を表わすものであって、神自身だけがもつ特性でもあります。

あなたがたはこの一節から、神が唯一無二であることを再度深く感じ取れましたか。しかし、それではまったく足りません。創造主の権威と力はそれをはるかに超えるものなのです。神が唯一無二であるのは、いかなる被造物にもない本質があるからだけではなく、神の権威と力が並外れており、無限であり、すべてに優り、すべての上に立つからです。そして何より、神の権威と、神が所有するものと神そのものはいのちを創り、奇跡を生み出し、壮大かつ並外れた一瞬一瞬を引き起こすからです。それと同時に、神は自ら創ったいのちを支配し、自ら創った奇跡と一瞬一瞬を統治することができるのです。

第三の日、神の言葉によって地と海が生まれ、神の権威によって世界がいのちで満たされた

次に、創世記1章9-11節の最初の文章を検討しましょう。「神はまた言われた、『天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ』」。神が「天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ」とひとこと述べた後、どのような変化が生じましたか。ま

た光と大空以外に、その空間には何がありましたか。聖書には「神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神は見て、良しとされた」と記されています。つまり、その空間にはいまや地と海があり、その地と海が分けられたのです。神が命令するとこれらの新しいものが出現し、「そのようになった」のです。聖書では、神がそうする中で多忙だったと述べられていますか。肉体労働をしている神が描かれていますか。では、神はそれをどのように行ないましたか。神はどのようにして、これらの新しいものが生み出されるようにしたのですか。明らかに、神は言葉を用いてそのすべてを成し遂げ、それら一切のものを創ったのです。

上記の三つの聖句から、三つの大きな出来事が発生したことがわかりました。その三つの大きな出来事は神の言葉によって生じたものであり、またそれらの出来事が神の眼前で次々と実現されたのも、神の言葉によるものです。したがって、「神が言葉を述べると、その言葉は現実となる。神が命令すると、それは確かなものとなる」というのは、無意味な言葉ではないことがわかります。神のこの本質は、神の考えが生まれた瞬間に確認されるのであり、神が口をひらいて語ったとき、神の本質は完全に反映されるのです。

次に、この一節の最後の文章を検討しましょう。「神はまた言われた、『地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ果樹とを地の上にはえさせよ』。そのようになった」。神が語っている間に、それらすべてのものが神の考えに従って存在するようになりました。そして一瞬のうちに、様々な繊細な生物が土からよろよろと芽生え、土を払う間もなく互いに身体を振って挨拶を交わし合い、この世界にうなずき微笑み合ったのです。これらの生物は自分たちにいのちを授けた創造主に感謝し、自分たちが万物の一部であること、そして互いにいのちを捧げて創造主の権威を示すことを世界に告げました。神の言葉が発せられる中、地は青々と緑豊かになり、人に用いられる様々な植物が地表から芽吹くとともに、山々と平野には木や森が生い茂りました……。いのちの痕跡すらなかったこの不毛の地が、豊富な草木で急速に覆われ、緑で一杯になったのです……。草と土の香りが空中に広がり、様々な植物が回りゆく風と一緒に呼吸し、成長の過程を始めました。同時に、神の言葉と神の考えに従い、すべての植物が永遠の生命周期を始め、成長し、花を咲かせ、実を結び、そして繁殖するようになりました。植物はそれぞれのいのちの過程に厳密に従い、万物の中でそれぞれの役割を果たし始めました……。すべての植物は創造主の言葉のために生まれ、生きていました。それらは創造主による施しと糧を絶え間なく受け取るとともに、創造主の権威と力

を示すため、地のあらゆる場所で粘り強く生き延び、創造主から授けられたいのちの力をいつまでも伝えるのです……。

創造主のいのち、考え、権威は並外れたものであり、ゆえにその言葉が発せられると、最終的な結果は「そのようになった」となります。明らかに、神は自らの手で働きを行なう必要がないのです。神は自らの考えと言葉だけを用いて命じ、このようにして物事が成し遂げます。この日、神は水を一ヵ所に集め、乾いた地を出現させた後、地から草木を芽生えさせました。すると種をもつ草が育ち、実を結ぶ樹木が生えました。そして神は植物を一つひとつ種類ごとに分け、それぞれが独自の種をもつようにさせました。これらはすべて神の考えと命令に従って実現されたことであり、その一つひとつが次々とこの新しい世界に出現したのです。

神は働きを始める以前から、成し遂げようと意図しているもののイメージを心にもち、神がそうしたイメージを実現しようとした時は、その内容について神が口をひらいて語り、神の権威と力によって万物が変化し始める時でもありました。神がどのようにそれを行なったか、どのように権威を行使したかにかかわらず、すべては神の計画に従い、神の言葉によって一歩ずつ実現され、また神の言葉と権威のために、天地の間で変化が一つひとつ生じます。こうした変化はどれも創造主の権威と、創造主のいのちの力の非凡さと偉大さを示すものでした。神の考えは単純な発想でも、空虚なイメージでもなく、生命力と並外れた活力をもつ権威であり、万物の変化、復活、再生、滅びを引き起こす力です。このため、万物は神の考えによって機能すると同時に、神の発する言葉によって実現されるのです……。

万物が出現するのに先立ち、神の心の中では完全な計画がはるか昔に形を成しており、新たな世界が実現されていました。第三の日、地にはありとあらゆる植物が出現したものの、神にはこの世界の創造をここで止める理由がありませんでした。つまり、神は言葉を発し続け、引き続き新しいものの創造を成し遂げるつもりだったのです。神は言葉と命令を発し、権威を行使し、力を示すとともに、これから創る万物と人類のために用意しようと計画していたすべてのものを用意したのです……。

第四の日、神は再び権威を振るい、人類の季節、日、年が生まれた

創造主は言葉を用いて自身の計画を実現させ、このようにして神の計画の最初の三日間が過ぎました。この三日間、神は忙しい様子も疲れている様子も見せず、逆に自身の計画における最初の三日間を満喫し、世界を劇的に変化させる偉業を成し遂げました。

神の眼前にはまったく新しい世界があり、神の心に秘められていた美しい光景が、ようやく神の言葉において一つひとつ明らかになったのです。新しいものが一つひとつ出現する様子は、まるで赤ん坊が誕生するかのようであり、それまで心にあった光景がいまや生を受けたことに、神は喜びを覚えました。この時、神は心の中でわずかに満足したものの、自身の計画は始まったばかりでした。一瞬のうちに新しい日が訪れましたが、創造主の計画の次なる一ページはどのようなものでしたか。神は何と言いましたか。どのように自身の権威を行使しましたか。一方、どのような新しいものがこの新たな世界に出現しましたか。創造主の導きに従い、ここで神による万物創造の第四の日を検討しますが、その日もまた新たな始まりの日でした。もちろん、創造主にとってはその日も間違いなく素晴らしい日であり、現代人にとって最も重要な日となりました。当然ながら、その日は計り知れない価値をもつ日でした。その日はどのように素晴らしく、どのように重要で、なぜ計り知れない価値があったのでしょうか。まずは創造主の発した言葉に耳を傾けましょう……。

「神はまた言われた、『天のおおぞらに光があって昼と夜とを分け、しるしのため、季節のため、日のため、年のためになり、天のおおぞらにあって地を照らす光となれ』」（創世記 1:14-15）。乾いた地とそこに生きる植物を創った後、神は再び自身の権威を行使し、それを被造物に示しました。神にとって、そのような業はすでに行なったことと同じくらい簡単なものでした。なぜなら、神にはそうした力があり、自身の言葉に忠実であって、その言葉は実現されるからです。神は天に光が現われるよう命じ、その光は空で輝き地を照らしただけでなく、昼と夜、季節、そして年月の目印にもなりました。このように、神が言葉を発すると、神が成し遂げようと望む業はすべて神の意思通りに、神の指定する方法で実現されたのです。

天の光は空にあって光を放つ物体であり、空と地と海を照らすことができます。光は神の命じる周期と頻度で回転し、様々な時間帯に地を照らしますが、このように、光が回転する周期によって地の東西に昼と夜が生み出されるのです。また、光は昼と夜の目印であるのみならず、祭日など人間にとって重要な日も、光の様々な周期によって示されます。また光は、神が定めた春夏秋冬の四季に付随し、それを補足するものとしても最適です。さらに、それと調和する形で、人類の節気と日と年についても、光はそれらを定期的かつ正確に示す目印として機能しました。神が創った光によって節気と日と年は分割され、人類は農業が始まって初めてそれを目にして理解し始めたわけですが、実のところ、今日の人間が理解している節気と日と年は、はるか昔、神による万物創造の

四日目に始まったものです。そして人間が経験する春夏秋冬の移り変わりも、はるか昔、神による万物創造の四日目に始まったものなのです。神が創った光によって、人間は定期的に、正確に、かつ明確に昼夜を区別し、日数を数え、歳月をはっきり辿ることができるようになりました。（満月の日が一ヵ月の終わりの日であり、人はそこから光が新たな周期に入ったことを知りました。また半月の日は一ヵ月の半分が経過したことを示し、人はそれによって新たな節気が始まりつつあることを知り、いくつの昼夜で一つの節気になるのか、いくつの節気で一つの季節になるのか、そしていくつの季節で一年になるのかを推測することができました。そのすべてが極めて定期的に生じたのです。）

）そうしたわけで、人間は光の周期により、節気と日と年を簡単に辿ることができたのです。それ以降、光の周期によって生み出される昼夜と季節の規則正しい移り変わりの中で、人類と万物は無意識のうちに生活しました。これが、第四の日に創造主が光を創ったことの意義です。同様に、創造主によるこの業の目的と意義は、依然として神の権威や力と切り離すことができませんでした。そうしたわけで、神によって創られた光と、それが程なくして人間にもたらした価値もまた、創造主が権威を行使した際の完璧な手腕を示すものだったのです。

人類が出現する以前のこの新たな世界において、創造主はまもなく創ることになる新しいのちのために、昼と夜、大空、陸と海、様々な草木、光、季節、日々、そして年をすでに用意していました。創造主の権威と力は、自ら創った新しいものの一つひとつに現われており、神の言葉とその実現は寸分違わず、時をおかず、同時に生じました。これら新しいものの出現と誕生は、いずれも創造主の権威と力を証明するものでした。神は自身の言葉に忠実であり、神の言葉は実現され、実現された物事は永続します。この事実が過去に変わったことはなく、現在においても変わらず、そして永遠に変わることはありません。これらの聖句を改めて読んで、新鮮に感じられますか。新しい内容や新発見はありましたか。あったとしたら、それは創造主の業があなたがたの心を動かし、その権威と力を知る上での方向性を示し、創造主に関する認識の扉を開くとともに、創造主の業と権威がそれらの言葉にいのちを授けたからです。そうしたわけで、人間はこれらの言葉の中に、創造主の権威が現実的かつ鮮明に表わされるのを目にし、創造主の至高の地位を真に目の当たりにし、創造主の権威と力の非凡さを見たのです。

創造主の権威と力は次々と奇跡を生み出します。創造主は人間の注意を引きつけ、また創造主による権威の行使から生まれた驚くべき業に対し、人間は目を見張らずにはいられません。その驚異的な力は次々と喜びをもたらし、人間は目がくらんだまま歓喜に

圧倒され、感嘆して息をのみ、畏敬の念を抱いて大喜びします。さらに、人間は目に見えるほど感動し、自身の中に尊敬の念、崇拜の念、そして愛慕の念が生じます。創造主の権威と業は人間の魂に大きな影響を及ぼし、それを清める効果がありますが、何よりも人間の魂を満たします。神の考え、発する言葉、そして権威の明示の一つひとつが、あらゆる物事の中でも傑出したものであり、被造物たる人類が深く理解し、認識する価値のある偉大な事業なのです。創造主の言葉から生まれた被造物を一つひとつ数え上げると、わたしたちの魂は神の力の不思議へと惹かれ、創造主の足跡に従って次の日、すなわち神による万物創造の五日目へと進むのです。

引き続き聖書を一節ずつ読んで、創造主の業をさらに検討しましょう。

第五の日、多種多様ないのちにより、創造主の権威が様々な形で示された

聖書には「神はまた言われた、『水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ』。神は海の大いなる獣と、水に群がるすべての動く生き物とを、種類にしたがって創造し、また翼のあるすべての鳥を、種類にしたがって創造された。神は見て、良しとされた」（創世記 1:20-21）とあります。神がこの日に水中の生物や空の鳥、つまり様々な魚や鳥を創造し、それらを種類ごとに分類したことを、聖書ははっきり伝えています。このようにして、大地、空、水が神の被造物で一杯になったのです……。

神の言葉が語られるに従い、それぞれ異なる形をした新たないのちが、創造主による言葉の中、瞬時に生まれました。これらの生物は歓喜に飛びはねながら、我先にこの世界へと出現しました……。様々な形や大きさの魚が水中を泳ぎ、様々な種類の貝が砂の中で育つとともに、うろこのある生物、殻をもつ生物、脊椎のない生物などが、大小や長短を問わず、様々な形をとりつつ急速に成長していきました。同じように、様々な海藻類も元気よく成長し始め、各種の水生生物の動作に合わせて揺れ動きつつ、淀んだ水にもそうするように促しました。それはあたかも「さあ踊ろう。友だちも連れておいでよ。もう一人ぼっちになることはないのだから」と言っているようでした。神の創造した様々な生物が水中に現われた瞬間から、それまでずっと静まりかえっていた水の中に、新たな生物の一つひとつが活気を与え、新たな時代をもたらしました……。以降、これらの生物と水は寄り添って共生し、互いに距離を置くことはありませんでした。水はその中の生物のために存在し、そこに棲む一つひとつのいのちを育みました。そしてすべてのいのちは自分たちを育ててくれる水のために存在しました。一つひとつの生物が互いにいのちを与え合うと同時に、創造主による創造の驚異と素晴らしさ、そして創造主の権威がもつ至高の力を同じように証ししたのです……。

海がもはや静かでなくなるにつれ、空にもいのちが溢れ始めました。大小様々な鳥たちが次々と地上から空へ飛び立ったのです。海の生物とは違い、鳥には翼と羽根があり、細長く優雅な身体を覆っていました。その翼を羽ばたかせ、華麗な羽根と、創造主から授けられた特別な機能と能力を誇らしげに披露したのです。鳥は自由に空を飛翔し、天と地の間、草原と森の間を巧みに行き交いました……。鳥は空に愛され、万物に愛されていたのです。鳥はやがて天地を結ぶ存在となり、万物に知らせを伝えるようになります……。鳥はさえずり、嬉しそうに飛び回り、それまで空虚だった世界に喜びと笑い、そして活気をもたらしました……。鳥は澄んだ声で歌うように鳴き、心の言葉を使って、自分たちにいのちを授けてくれた創造主を讃えました。鳥は陽気に踊り、創造主による創造の完璧さと驚異を示すとともに、創造主から授けられた特別ないのちを通じてその権威を証しすることに、自分たちの一生を捧げるのです……。

水中に暮らしているか、あるいは空中に暮らしているかを問わず、これら溢れんばかりの生物は創造主の命令により、異なる生命形態の中で存在していました。それらはまた、創造主の命令により、それぞれの種ごとに群れ集まりました。この法則と規則を変えることは、いかなる被造物であっても不可能でした。それらは創造主によって定められた範囲をあえて超えようとはせず、そうすることもできませんでした。創造主が命じた通りに暮らし、繁殖し、創造主が定めた生涯と法則に厳密に従うとともに、創造主が黙示した命令、創造主が与えた天の命令と訓告を、今日に至るまで意識的に守りました。生物は創造主と独自の方法で語り合い、創造主の意図を理解するようになり、その命令に従いました。創造主の権威から逸脱した生物は存在せず、生物に対する創造主の統治と支配は、その思考の中で行使されました。つまり、言葉が発せられることはなかったものの、創造主に特有の権威が、言語をもたない物言わぬ人類以外の万物を支配したのです。こうした特殊な形で神の権威が行使されたことにより、人間は創造主だけがもつ権威について新たな認識を得て、新たに解釈することを余儀なくされました。この日、創造主の権威が行使されたことで、その独自性が再び示されたことを、ここでみなさんに伝えなければなりません。

次にこの聖句の最後の一文、「神は見て、良しとされた」という文章を検討しましょう。これはどのような意味だと思いますか。この言葉には神の思いが込められています。自ら創った万物が出現し、自らの言葉によってしっかり立ち、徐々に変化し始めるのを神は見ていました。この時、自身の言葉によって創造した様々なものや、自身が成し遂げた様々な業について、神は満足していたでしょうか。その答えは、「神は見て、良

しとされた」です。ここから何がわかりますか。「神は見て、良しとされた」というのは、何を示し、何を象徴するものですか。その言葉は、自身が計画したことや命令したことを実現させ、自身が成し遂げようと決めた目的を達成する力と知恵が神にはある、ということの意味しています。一つひとつの作業を完了させた時、神は後悔していましたか。その答えも、「神は見て、良しとされた」です。つまり、神は後悔していなかっただけでなく、むしろ満足していた、ということです。神は後悔していなかったとは、どのような意味ですか。それは、神の計画、力、知恵が完璧であること、そしてこうした完璧さは、神の権威によってしか成し遂げられないことを意味しています。人間が作業を行なう時、その人は神と同じく、それを見て良しとすることができるでしょうか。人間の行なう一切のことが完璧になり得るでしょうか。何かを未来永劫完璧なものにすることはできるでしょうか。人間が言うように、「完璧は有り得ず、より優れているに過ぎない」のであって、人間の行なうことが完璧なものになることはあり得ません。自身が行ない、成し遂げたすべてのことについて、神が良いと判断した場合、神が創造した一切のものは神の言葉によって定められたことになります。つまり、「神は見て、良しとされた」とき、神が創ったすべてのものは永久的な形をもち、種類ごとに分類され、永久不変の位置、目的、機能を与えられたのです。さらに、万物の間におけるそれらの役割と、神による万物の経営の中でそれらが辿る旅路は、すでに神によって定められていたのであり、永遠に変わることがありません。これが、創造主によって万物に与えられた天の法則だったのです。

「神は見て、良しとされた」。簡潔であり、それほど重視されず、往々にして無視されてきたこの言葉は、神がすべての生物に授けた天の法則と天の命令であり、これもまた、創造主の権威をより実践的に、より深く具体化するものです。創造主は自身の言葉によって、得ようと決めたすべてのものを得て、成し遂げようと決めたすべてのことを成し遂げられただけでなく、自ら創造した一切のものをその手中に収め、自身の権威で創ったすべての物を支配することもできました。そしてさらに、すべては系統的かつ規則的でした。万物は神の言葉によって増え、存在し、そして消滅し、またそれ以上に、神の権威によって、神が定めた法則の中に存在していました。そこに例外はなかったのです。この法則は「神はこれを見て、良しとされた」瞬間に始まり、神の経営（救いの）計画のため、それが創造主によって廃止されるまで存続して機能します。創造主に特有の権威は、万物を創造し、万物が現われるように命令する自らの能力にだけ示されるのではなく、万物を支配、統治する能力、万物にいのちと活力を授ける能力、そしてさら

に、自身の計画の中で創造する万物が、完璧な形、完璧な生命構造、および完璧な役割で、自ら創った世界に現われ、永遠に存在するようにさせる能力においても示されました。それはまた、創造主の考えがいかなる制約にも縛られず、時間、空間、および地理的条件の制約を受けないことの中にも示されました。創造主に特有の身分も自身の権威と同じく、永遠に変わることがありません。創造主の権威は自身に特有の身分を絶えず表わし、象徴するのであって、創造主の権威と身分は隣り合って永遠に共存するのです。

第六の日、創造主が言葉を発すると、心にあったありとあらゆる生物が次々と現われた

創造主による万物創造の働きは知らぬ間に五日間続き、すぐさま六日目を迎えました。この日もまた新たな始まりの日であり、特別な日でした。それでは、この新しい日の前夜、創造主の計画はどのようなものでしたか。どのような新しい生物を創る予定だったのでしょうか。お聞き下さい、これが創造主の語った言葉です……。

「神はまた言われた、『地は生き物を種類にしたがっていだせ。家畜と、這うものと、地の獣とを種類にしたがっていだせ』。そのようになった。神は地の獣を種類にしたがい、家畜を種類にしたがい、また地に這うすべての物を種類にしたがって造られた。神は見て、良しとされた」（創世記 1:24-25）。ここにはどのような生物が含まれていますか。聖書には、「家畜と、這うものと、地の獣とを種類にしたがっていだせ」とあります。つまり、この日にありとあらゆる地上の生物が生み出されただけでなく、そのすべてが種類によって分類され、前日と同じく「神は見て、良しとされた」のです。

それまでの五日間のように、創造主は同じ調子で語り、自身の望む生物が誕生し、種類ごとに地上に現われるよう命じました。創造主が自身の権威を行使した時、その言葉に無駄な部分はまったくありませんでした。ゆえに六日目、神が創ろうとしていた生物はどれも指定した時間に出現したのです。創造主が「地は生き物を種類にしたがっていだせ」と言うと、大地はすぐにいのちで一杯になり、ありとあらゆる生物の息づかいが突如として地上に現われたのです……。草に覆われた原野には、頑強な牛が尾を左右に振りながら次々と現われ、鳴き声を上げる羊が群れをなし、馬がいななきながら早駆けを始めました……。静寂に包まれた広大な草原が、一瞬にして生物で溢れかえったのです……。こうした様々な家畜の出現は、静かな草原の美しい光景であり、限りない活気をもたらしました……。家畜は草原の仲間となり、その主となり、互いに依存し合うようになります。さらに家畜は草原を守る存在となり、その草原は家畜の恒久的な住みかとなって、それらが必要とするすべてのものを提供しました。草原は、家畜が生存する

のに必要な糧を永遠に与える源だったのです……。

創造主の言葉によって様々な家畜が生まれたのと同じ日、無数の昆虫も次々と出現しました。昆虫はすべての生物の中で最も小さかったものの、その生命力はやはり創造主による驚異的な創造であり、出現が遅すぎたわけでもありませんでした……。小さな翼をばたつかせるものもあれば、ゆっくりと地を這うもの、跳ね回るもの、よろめき歩くもの、高速で移動するもの、逃げ足の速いもの、横向きに歩むもの、高く跳ねるもの、低く跳ねるものもありました……。どの昆虫も自分の住みかを見つけようと走り回り、草の中に分け入るものもあれば、地面に穴を掘ろうとするもの、木に飛び上がるもの、森に潜むものもありました……。昆虫は小さいながらも空腹に耐えることを好まず、すみかを見つけるとすぐ、食物を求めて駆け回りました。草を登って柔らかい葉を食べるもの、泥を口いっぱいにはおぼって胃に詰め込み、おいしそうに、楽しそうに食べるもの（昆虫にとっては泥でさえもご馳走だったのです）もあれば、森に隠れているものもありましたが、決して休むことはありませんでした。濃い緑色をした艶のある葉が、昆虫の食料となる汁を提供したからです……。昆虫は満腹した後も活動を止めません。身体こそ小さいものの、大量のエネルギーと無限の活力を備え、すべての被造物の中で最も活発であり、勤勉でもあるのです。昆虫は怠けることも、ゆっくり休むこともありませんでした。空腹が満たされた後も将来のために骨折って働き、明日のため、そして生存のために忙しく駆けずり回ったのです……。昆虫は様々な旋律とリズムをもつバラードを口ずさみ、自分を励ましました。昆虫もまた、草木や土に喜びをもたらし、一日一日、一年一年を特別なものにする存在でした……。昆虫は独自の言語と方法によって、地上のすべての生物に情報を伝えました。そして昆虫独自の生涯を通じ、あらゆる物事に印をつけ、その痕跡を残したのです。昆虫は土や草や森と懇意にしており、それらに生命力と活力をもたらすとともに、あらゆる生物に創造主の訓戒と挨拶を伝えました……。…。

創造主の視線は自ら創った万物を見渡していましたが、この瞬間、森と山に目が止まって考えが変わりました。生い茂った森の中、そして山の上で創造主の言葉が発せられると、それまでに現われたのとは違う種類の生物が出現しました。これらの生物は野獣、つまり神が述べたところの「地の獣」でした。それらの野獣はかなり遅れて頭と尾を振りましたが、それぞれ違う顔つきをしていました。毛皮をまとったものもあれば、甲羅のあるもの、牙や歯をむき出しにしているもの、首の長いもの、尾の短いもの、獰猛な目つきのもの、臆病な眼差しのもの、身をかがめて草を食べるもの、口の周りに血がつ

いているもの、二本足で跳ねるもの、四つの蹄で駆け回るもの、木のとっぺんから遠くを見つめるもの、森で横たわりながら待ち続けるもの、休むためのほら穴を探すもの、草原で跳ね回るもの、森を徘徊するものもありました……。また野獣にはうなるもの、遠吠えするもの、吠えるもの、大声で鳴くものがありました……。鳴き声が高いもの、低いもの、大きいもの、そして明るく歌うように鳴くものもありました……。顔つきが厳めしいもの、可愛らしいもの、醜いもの、愛らしいもの、恐ろしいもの、そして愛らしいまでに純真なものもありました……。こうした野獣が次々と出現したのです。それらは威張っていたり、自由奔放であったり、互いに興味を示さなかったり、見向きさえしなかったりしています……。それぞれが創造主から授けられた独自のいのち、獰猛さ、および野蛮さをもちつつ、森や山に出没しました。野獣はあらゆるものを軽蔑し、横柄そのものです。いったい誰が、こうした野獣を山や森の主にしたのでしょうか。創造主によって出現するよう命じられた瞬間から、これらの野獣は山や森を「我が物」にしています。と言うのも、創造主はすでに野獣の棲息範囲を決め、その中に封じ込めていたからです。山や森の真の主は野獣だけであり、それが野蛮さと傲慢さの理由なのです。それらが「野獣」と呼ばれるのは、ひとえにあらゆる被造物のなかで最も獰猛であり、野蛮であり、飼い慣らすことができないためです。野獣を飼い慣らすことはできないので、飼育することはできず、人間と調和して暮らすことも、人間の代わりに働くこともできません。野獣が人間から離れて暮らさざるを得ず、また人間が野獣に近づけないのは、それが飼育不可能であり、人間のために働くこともできないからでした。その一方、人間から離れて暮らし、人間が近づけなかったので、野獣は創造主から与えられた責任、つまり山や森を守る責任を果たすことができたのです。野獣の獰猛さが山や森を守り、その生存と繁栄を最もよく保護したのです。それと同時に、野獣の獰猛さが万物の均衡を保ち、確実なものにしました。野獣の出現によって山や森に支えとよりどころがもたらされ、静寂で空虚だった山や森に無限の活力と活気がもたらされたのです。この時以降、山や森は野獣の恒久的な棲息地となり、野獣は住みかを失うことはありませんでした。なぜなら、山や森が出現して存在しているのは野獣のためであり、野獣はそれらを守るために自身の本分を尽くし、あらゆることを行なうからです。そうしたわけで、野獣もまた、創造主の訓戒を厳しく守って自分たちの領域に留まり、獣の本性を用いることで、創造主が確立した万物の均衡を維持し、創造主の権威と力を示し続けているのです。

創造主の権威の下では、万物が完璧である

鳥や魚、木や花など、神によって創られた万物は、動けるものも動けないものも含め、あるいは第六の日に創られた家畜、昆虫、野獣を含め、すべて神の目に良いものと映り、また神から見て、それらは自身の計画によると完璧の域に達しており、自身が望む基準を満たしていました。自身が行なおうとしていた働きを、創造主は一つひとつ、自身の計画に従って行ないました。すると自身で創ろうとしていたものが次々と現われましたが、その出現はどれも創造主の権威の反映であり、その結晶でした。こうした結晶化のために、あらゆる被造物は創造主の恵みと施しに感謝せずにはいられませんでした。神の奇跡の業が自ずと明らかになるにつれ、この世界は神が創ったもので少しずつ一杯になり、混沌と闇から明瞭で明るいものへ、死の静寂から生と無限の活力へ変化していきました。大きいものから小さいものに至るまで、そして小さいものから微小なものに至るまで、創造主の権威と力によって創られなかったものは一つもなく、それぞれの被造物の存在には独自かつ固有の必要性和価値がありました。形や構造の違いに関係なく、それらは創造主の権威の下で存在するよう、創造主によって創られたのです。時として、とても醜い昆虫を見て「ひどい虫だ。神がこのような醜いものを創ったなんてあり得ない。これほど醜いものを創るはずはない」などと言う人がいます。何という愚かな見方でしょう。むしろ、その人は次のように言うべきです。「この虫は極めて醜いが、神が創った虫なのだから、この虫にしかない目的があるはずだ」。神はその考えの中で、自ら創った様々な生物に対し、それぞれ固有の外見、そしてありとあらゆる機能と目的を与えるつもりでした。ゆえに、神の被造物は一つとして同じではないのです。外見から内部構造に至るまで、生活習慣から棲息地に至るまで、一つひとつ異なっているのです。牛には牛の、ロバにはロバの、鹿には鹿の、象には象の外見があります。最も外見が美しい生物はこれ、最も醜い生物はこれ、などと言えますか。最も役立つ生物はこれ、最も存在する必要がない生物はこれ、などと言えますか。象の見た目を好む人はいても、象を使って農地に植え付けを行なう人はいません。ライオンや虎の外見は万物の中で最も印象的なので、その見た目を好む人はいますが、それらをペットとして飼育することはできますか。要するに、無数の被造物について言えば、人間は創造主の権威に従わなければならない、つまり万物の創造主が定めた秩序に従わなければならないのです。これが最も賢明な姿勢です。創造主の本来の意図を探し求めてそれに従う姿勢だけが、創造主の権威を真に受け入れ、それを確信するということなのです。神はそれを見て良しとしているのですから、人間は何の理由があって欠点を見つけなければならないのですか。

かくして、創造主の権威の下にある万物は、創造主による支配の新たな交響曲を奏で、新しい日における神の働きの輝かしい前奏曲を演奏することになります。またこの時、創造主は自身の経営の働きにおける新たな一ページを開くことになるのです。春の芽吹き、夏の成熟、秋の刈り入れ、そして冬の蓄えという創造主が定めた法則に従い、万物は創造主による経営計画と共鳴し、それぞれの新たな日、新たな始まり、新たないのちの道のりを喜んで迎えます。そして、創造主の権威の支配下で新しい日々を迎えるべく、万物は生存と繁栄を無限に続けるのです……。

創造されたものも、それ以外のものも、創造主の身分に代わることはできない

万物の創造が始まった時から、神の力が表わされ、明らかになり始めました。なぜなら、神は言葉を用いて万物を創ったからです。神が万物をどのように創造したか、なぜ創造したかを問わず、万物は神の言葉のために出現し、しっかり立ち、存在しました。これが、創造主だけがもつ権威なのです。人類がこの世界に出現する前、創造主は自身の力と権威を用いて人類のために万物を創り、独自の方法を用いて人類に適した生存環境を整えました。神が行なったことはどれも人類のための準備であり、やがて人類は神の息を授かることになります。つまり、人類が創られるのに先立ち、天、光、海、地などの大きいもの、動物や鳥などの小さなもの、そして各種の昆虫や、肉眼では見えない様々なバクテリアを含めた微生物など、人間とは異なるすべての被造物の中に、神の権威が示されたのです。それらはどれも創造主の言葉によっていのちを与えられ、創造主の言葉のために繁殖し、創造主の支配の下で生きました。それらの被造物は創造主の息こそ受け取らなかったものの、創造主から授かっていたいのちの活力を自身の様々な形や構造を通じて示しました。またそれらは、創造主が人類に与えた話す能力を受け取りませんでした。創造主から授かっていたいのちを表現する方法を受け取っており、それは人間の言語とは異なるものでした。創造主の権威は、一見静止している物体にいのちの活力を与え、それらが決して消え去らないようにしますが、それと同時にあらゆる生物に生殖本能を与え、それらが決して絶滅せず、創造主から授けられた生存法則や生存の原則を、世代を超えて受け継ぐようにします。創造主が自身の権威を行使する際の様式は、巨視的視点や微視的視点に厳密に従うものではなく、またいかなる形態にも限定されていません。創造主は宇宙の活動を指揮し、万物の生死を支配し、そしてさらに、万物を操作して自身に仕えさせることができます。また、山や川や湖の活動を一つ残らず管理し、そこにあるすべてのものを支配することができるだけでなく、万物が必要とするものを施すこともできるのです。これが、人類以外の万物に対する、創造主だけがもつ権

威の現われです。こうした現われは生涯にわたって続くだけでなく、終わることも中断することもなく、いかなる人や物によっても変えられたり、損なわれたり、加減されたりすることはありません。と言うのも、創造主の身分に取って代われるものは存在せず、したがって創造主の権威に取って代われる被造物も存在しないからです。それはいかなる被造物にも不可能なことなのです。神の使いと天使を例にとりましょう。彼らは神の力を有しておらず、ましてや創造主の権威など持っていません。彼らに神の力と権威がないのは、創造主の本質がないからです。神の使いや天使をはじめとする被造物以外の存在は、神に代わってある程度のことを行なえるものの、神を代表することはできません。人間にはない力があっても、神の権威はありません。つまり、万物を創造し、万物に支配し、万物を統治する神の権威はないのです。したがって、被造物以外のどんな存在も神の独自性に取って代わることはできず、また同様に、神の権威と力に取って代わることもできません。神の使いが万物を創造したという話を、あなたは聖書で読んだことがありますか。神が使いや天使を遣わして万物を創らせなかったのはなぜですか。それは、神の権威が彼らにはなく、ゆえに神の権威を行使する能力がなかったからです。あらゆる被造物と同じく、彼らもまた創造主の支配と権威の下にあり、それと同様に、創造主は彼らにとっても神であり、主権者であるのです。高貴であるか卑しいか、力が強いかわいさを問わず、神の使いや天使の中に神の権威を超えられるものはおらず、したがって、創造主の身分に取って代われるものもいません。彼らが神と呼ばれることは決してなく、創造主になることもできません。これは変えることのできない真理であり、事実なのです。

ここまでの交わりを通じ、唯一の権威と力をもつ万物の創造主、万物の支配者だけが、唯一無二の神自身だと断言することはできるでしょうか。この時点で、このような質問はあまりに奥深いと感じるかもしれません。今のところ、あなたがたはこれを理解することも、その本質を把握することもできないので、答えるのは難しいと感じています。なので、交わりを続けることにしましょう。次に、神だけがもつ権威と力による、多方面にわたる実際の業を取り上げ、あなたがたがそれらを目の当たりにできるようにします。そうすることで、あなたがたは神の独自性とは何か、神だけがもつ権威とは何かを認識し、理解し、知ることができます。

2. 神は言葉を用いて人間との契約を立てる

創世記 9:11-13 「わたしがあなたがたと立てるこの契約により、すべて肉なる者は、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅ぼす洪水は、再び起らないで

あろう」。さらに神は言われた、「これはわたしと、あなたがた及びあなたがたと共にいるすべての生き物との間に代々かぎりなく、わたしが立てる契約のしるしである。すなわち、わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる」。

万物を創造した後、創造主の権威が「虹の契約」によって再び確認され、示される

創造主の権威は万物の中に絶えず示され、行使されています。また、創造主は万物の運命を支配するだけでなく、創造主自身の手で創られ、異なる生命構造をもち、異なる生命形態の中で存在している特別な被造物、すなわち人類をも支配しています。万物を創った後も、創造主は自身の権威と力を示し続けました。創造主にとって、万物を支配し、人類全体の運命を支配する権威が正式に始まったのは、自身の手から人間が実際に生まれた後でした。創造主が意図していたのは、人類を経営し、支配し、救うとともに、万物を統治できる人間を真に自分のものとし、そうした人間を自身の権威の下で生活させ、彼らに自身の権威を知らしめ、それに従わせることでした。そこで神は、言葉を使って自身の権威を人間に示し、権威を使って自身の言葉を実現させることを正式に始めました。当然ながら、この過程においても、神の権威はあらゆる場所で示されました。わたしは、あなたがたが神の独自性と、神だけがもつ権威とを認識して理解することができるよう、よく知られた具体的な例をいくつか選んだに過ぎません。

創世記9章11-13節と、神による創世の記録に関する上記の聖句との間には類似点があり、また相違点もあります。類似点は何ですか。神が言葉を用いて意図していたことを行なった、というのが類似点であり、ここで引用した聖句は神と人間の対話を示している、というのが相違点です。この対話の中で、神は人間との間に契約を立て、契約に含まれる内容を人間に伝えています。神と人間が対話する間、神の権威がこのようにして行使されたのですが、それはつまり、人類が創られる以前、神の言葉は、これから創ろうとしていた被造物に対する指示と命令だった、ということです。しかし、神の言葉を聞く人がいまや存在していたので、神の言葉は人間との対話であり、同時に人間に対する説諭と訓戒でもありました。さらに神の言葉は、神の権威を有する、万物への命令でもあったのです。

この一節には神のどのような業が記されていますか。そこでは、洪水で世界を滅ぼした神が人間と立てた契約について記されており、神が二度と同じように世界を破壊しないこと、そのために神がしるしを創ったことを人に伝えています。そのしるしとは何でしたか。聖書には「わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約の

しるしとなる」とあります。創造主は人類に対してこの通りの言葉を語りました。創造主がこのように語ったところ、人間の眼前に虹が現われ、それは今日に至るまで存在しています。そのような虹は誰でも見たことがあります。では、虹を見たとき、それがどのように現われるか知っていますか。虹がどのように現われるか、どこから現れるか、どこにあるのかは、科学では証明できません。なぜなら、虹は創造主と人間との契約のしるしだからです。虹は科学的根拠を必要とせず、人間によって創られたものではなく、人間が虹を変えることもできません。虹は、言葉を語った後も創造主の権威が続いていることを示すものです。創造主は独自の方法により、自身と人間との契約、および自身の約束を守ったので、自分が立てた契約のしるしとして虹を用いたことは天の法則、天の命令であり、それらは創造主にとっても、被造物である人間にとっても永遠に不変なのです。しかし、この不変の法則は、万物の創造に続く創造主の権威の現われであり、創造主の権威と力は無限であると言わなければなりません。神が虹をしるしとして用いたことは、創造主の権威が継続し、拡張されたことを示すものです。それは神が言葉を用いて行なったもう一つの業であり、神が言葉を用いて人間との間に立てた契約のしるしです。神は人間に対し、自分が何を引き起こすと決めたのか、それをどのような方法で実現するのかを人間に伝えました。このようにして、物事は神の口から出た言葉に従って実現されたのです。神だけがこのような力をもっており、神が言葉を述べてから数千年が経過した現在も、人は神の口から語られた虹を見ることができます。神が発したこの言葉により、虹は現在まで変わることがありませんでした。この虹を消すこと、その法則を変えることができる人はおらず、虹はひとえに神の言葉のために存在しています。これがまさに神の権威です。「神は自身の言葉に忠実であり、神の言葉は実現され、神が実現した物事は永遠に残る」。まさにこの言葉の通りであり、それは神の権威と力の明確なしるしであり、特徴でもあります。このようなしるしや特徴をもつ被造物は存在せず、被造物の中に、あるいはそうでないものの中に、それらが見られることもありません。それらは唯一無二の神だけに属するものであり、創造主だけがもつ身分と本質を、被造物がもつそれと区別するものです。同時に、神自身を除き、被造物であろうとそうでないものであらうと、そのしるしと特徴を超えられるものも存在しません。

神が人間との間に契約を立てたことは極めて重要な業であり、それはまた、人間に事実と自身の旨を伝えるべく、神が用いようとした業でもありました。神はそうするために独自の方法を用いたのであり、つまり特別なしるしを使って人間との間に契約を立て、人間との間に立てた契約の誓いとしたのです。この契約が立てられたのは大事件でし

たか。どの程度の大事件だったのですか。この契約がこれほどまでに特別なのは、人と人、組織と組織、国と国との間で立てられたものではなく、創造主と人類全体との間で立てられたものであり、創造主が万物を完全に破壊する日までずっと有効だからです。この契約を執行するのも守るのも創造主です。つまり、人間との間に立てた虹の契約はすべて創造主と人類との対話に基づいて履行され、それは現在も続いているのです。創造主の権威に服し、従い、それを信じ、それが何であることを認識し、目撃し、讃美する以外、被造物に何ができるでしょうか。このような契約を立てる力をもつものは、唯一の神以外に存在しません。幾度となく出現する虹は、創造主と人類との契約を人間に知らせ、注意を促すものです。創造主と人類との契約が継続的に現われる中で人類に示されるのは、虹でも契約自体でもなく、創造主がもつ不変の権威です。幾度となく出現する虹は、創造主が隠れた場所で行なう驚異的かつ奇跡的な業を示すと同時に、決して色あせず、変わることもない創造主の権威を力強く反映するものなのです。そのことは、創造主だけがもつ権威のもう一つの側面を示すものではないでしょうか。

3. 神の祝福

創世記 17:4-6 わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となるであろう。あなたの名は、もはやアブラムとは言われず、あなたの名はアブラハムと呼ばれるであろう。わたしはあなたを多くの国民の父とするからである。わたしはあなたに多くの子孫を得させ、国々の民をあなたから起そう。また、王たちもあなたから出るであろう。

創世記 18:18-19 アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるのではないか。わたしは彼が後の子らと家族とに命じてヤーウェの道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これはヤーウェがかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである。

創世記 22:16-18 ヤーウェは言われた、「わたしは自分をさして誓う。あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかったので、わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである」。

ヨブ記 42:12 ヤーウェはヨブの終りを初めよりも多く恵まれた。彼は羊一万四千頭、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭をもった。

創造主に特有の話し方と特徴は、創造主だけがもつ身分と権威の象徴である

多くの人が神の祝福を求め、得ることを望んでいますが、誰もがこうした祝福を得られるわけではありません。神には独自の原則があり、独自の方法で人間を祝福するからです。神による人間への約束や、神が人間に授ける祝福の量は、人間の思いと行動に基づいて配分されます。それでは、神の祝福によって示されるのは何ですか。人々はその中に何を見ることができますか。ここで、神はどのような人を祝福するかという議論や、人間に対する神の祝福の原則といったことは脇に置きましょう。その代わり、神の権威を知ることがを目的として、その観点から、人間に対する神の祝福を検討することにします。

先に述べた四つの聖句はどれも人間に対する神の祝福に関する記録です。これらの聖句では、アブラハムやヨブなど神の祝福を受けた人、神が祝福を授けた理由、そしてそれらの祝福の内容が詳細に説明されています。神の発言の語気や方式、そして神が言葉を述べた際の視点と立場から、恵みを授ける存在とそれを受ける存在とでは、身分、地位、そして本質に明らかな違いがあることを認識できます。そうした言葉の語気や方式、そしてそれらが述べられた際の立場は、創造主の身分を有する神に特有のものです。いかなる人も疑うことを許さない権威と力、そして創造主の栄誉と威厳が神にはあるのです。

まずは創世記17章4-6節を検討しましょう。「わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となるであろう。あなたの名は、もはやアブラムとは言われず、あなたの名はアブラハムと呼ばれるであろう。わたしはあなたを多くの国民の父とするからである。わたしはあなたに多くの子孫を得させ、国々の民をあなたから起そう。また、王たちもあなたから出るであろう」。これらの言葉は神がアブラハムとの間に立てた契約であり、神によるアブラハムへの祝福でもあります。神はアブラハムを諸国の父とし、彼が極めて多くの子孫を残すようにするとともに、彼から諸国を創り、王となる人が彼から出るようにしたのです。これらの言葉から神の権威を見てとることができますか。また、そうした権威をどのように見てとれますか。神の権威の本質のうち、どの側面を見てとれますか。これらの言葉をじっくり読めば、神の発言の言葉遣いの中に、神の権威と身分がはっきり示されていることを容易に見いだせます。たとえば、「わたしはあなたと契約を結ぶ……あなたを……とする……わたしはあなたに……をさせ……」と述べている場合、「あなたを……とする」や、「わたしはあなたに……をさせ」といった語句は、神の身分と権威を確信させる言葉遣いをしていますが、一方では創造主の忠

実さを示し、またもう一方では、創造主の身分をもつ神が用いる特別な言葉であり、従来の語彙の一部でもあります。ある人が誰かに対し、その人が極めて多くの子孫を残し、その子孫たちから諸国が生まれ、王となる者が出ることを望むと言った場合、それは紛れもなく一種の願望であり、約束や祝福などではありません。したがって、「あなたをこうしよう、あなたはこうなる……」などとあえて言う人はいないのです。なぜなら、自分にそのような力はなく、そうなるかどうかは自分次第ではないと知っているからです。そして、たとえそのようなことを言ったとしても、その言葉は欲望や野心に突き動かされた空虚な戯言です。自分の望みが叶わないと感じつつ、そのような尊大な口調で話そうとする人がいるのでしょうか。誰もが自分の子孫の幸運を祈り、子孫が優れた人物となり、大いに成功することを望みます。「もし子孫の誰かが皇帝になるとしたら、それは何と幸運なことだろう。もし子孫の誰かが知事になったとしたら、それも素晴らしいことだ。とにかく子孫が重要な人物になっていればいい」。こうしたことは誰もが望むことですが、人にできるのは子孫に祝福が授けられるのを望むことだけであって、自分の約束を果たすことも、それを実現させることもできません。誰もが心の中で、自分にはこうした事柄を実現させる力がないことをはっきり知っています。なぜなら、自分に関する一切のことを自分で管理するなど不可能だからです。それならば、どうして他人の運命を思い通りにできるでしょう。一方、神がこうした言葉を述べられるのは、神にはそうした権威があり、人間との約束をすべて叶え、実現させることができ、人間に授けるすべての祝福を実現させることができるからです。人間は神によって創られたのであり、誰かが極めて多くの子孫を残すようにすることなど、神にとっては児戯に等しいのです。誰かの子孫を繁栄させるには、神の言葉以外に必要なものはありません。神自身がこうしたことのために汗水を流して働いたり、心を砕いたり、あれこれ心配したりする必要はありません。それがまさに神の力であり、神の権威なのです。

創世記18章18節「アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるのではないか」を読んで、神の権威を感じとることができますか。創造主の非凡さを感じとることができますか。創造主が至高の存在であることを感じとることができますか。神の言葉に間違いはありません。神がそのような言葉を発するのは、そうなることを確信しているからではなく、そうなることを示しているのでもありません。むしろそれは、神が発する言葉の権威を証明するものであり、神の言葉を実現させる命令なのです。ここで注意すべき表現が二つあります。神が「アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるの

ではないか」と述べる時、これらの言葉に曖昧な要素はありますか。懸念の要素はありますか。恐怖の要素はありますか。神の発する言葉にある「必ず～となって」「みな～受ける」という語句のために、人間に特有のそうした要素、人間の中にしばしば現われるそうした要素は、創造主とまったく無縁のものです。誰かの幸運を願うときにこのような言葉を使う人はおらず、また強大な国を与えたり、地上の万国があなたにおいて祝福されると約束したりするほど、確信をもって別の誰かを祝福しようとする人もいないはずです。神の言葉が確かであればあるほど、それは何かを証明するものとなります。では、その何かとは何ですか。これらの言葉は、神にそうした権威があること、神の権威がそうした事柄を実現させられること、そしてその実現が不可避であることを証明しています。アブラハムを祝福するにあたって用いたすべての事柄について、神は心の中で何のためらいもなく確信していました。さらに、そのすべては神の言葉に従って実現されることとなり、いかなる力もその実現を変えたり、妨げたり、損なったりすることはできません。他に何が起きたところで、神の言葉が実現されないようにしたり、それに影響を与えたりすることは何であってもできないのです。これがまさに、創造主の口から発せられた言葉がもつ力であり、人間による否定を許さない創造主の権威なのです。これらの言葉を読んでも、いまだに疑いを抱いていますか。これらの言葉は神の口から語られたものであって、神の言葉には力、威厳、そして権威があります。被造物であれそうでないものであれ、このような力と権威を得ることや、事実が必ずや成し遂げられるようにすることは不可能であり、またそれらを超えることもできません。このような語気と口調で人類と対話できるのは創造主だけであり、その約束は空約束でもくだらない戯言でもなく、どのような人間や出来事や物であっても超越できない独自の権威の現われであることが、事実によって証明されているのです。

神が語る言葉と人間の言葉の違いは何ですか。神が語るこれらの言葉を読むと、あなたは神の言葉の力と神の権威を感じとります。人間がこのような言葉を発するのを聞いたら、あなたはどう感じますか。その人は極めて傲慢であり、自慢げであり、自己顕示していると考えますか。その人にはこのような力も権威もないので、そうしたことを実現するのはまったく不可能です。その人が自分の約束を強く確信しているのは、単に出任せを言っていることを示すに過ぎません。このような言葉を発する人は間違いなく傲慢であり、自信過剰であり、大天使の性質の典型的な例を自ら示していることとなります。これらの言葉は神の口から発せられたものですが、そこに傲慢さの要素を感じとりますか。神の言葉は単なる冗談だと思いませんか。神の言葉は権威であり、事実であり、

その言葉が神の口から発せられる前に、つまり神が何かをしようと決めている時点で、それはすでに実現されているのです。神がアブラハムに述べたすべてのことは、神がアブラハムとの間に立てた契約であり、神がアブラハムにした約束だったと言えるでしょう。この約束は確立された事実、実現された事実であって、それらの事実は神の計画に従い、神の考えの中で徐々に成就しました。そうしたわけで、神がこのような言葉を述べることは、傲慢な性質をもっていることを意味しているのではありません。神はそうしたことを実現させられるからです。神にはその力と権威があり、こうした業を完全に実現させることができ、またそれらを実現させることは完全に神の能力の範囲内にあります。このような言葉が神の口から発せられるとき、それは神の真の性質を示して表現するもの、神の本質と権威を完璧に示して表わすものであって、創造主の身分の証明としてそれ以上に適切なものではありません。こうした発言の方法、語調、そして言葉遣いはまさに創造主の身分のしるしであり、神自身の身分の表現と完璧に一致しており、そこに見せかけや不純さはないのです。こうした発言は、創造主の本質と権威を完璧に、徹底的に示すものです。被造物にはその権威も本質もなく、ましてや神から授けられた力もありません。人間がそのような振る舞いを見せるなら、それは間違いなくその人の墮落した性質が爆発したのであって、その根底では、人間の傲慢さや向こう見ずな野望が干渉して影響を与えており、人々を騙して惑わし、神を裏切らせようと望む、他ならぬ悪魔サタンの悪意が露呈しています。そのような言葉によって明らかになったことを、神はどのように見なしますか。あなたは神の地位を乗っ取ろうとしている、神を真似て神に取って代わろうとしていると、神は言うでしょう。神の発言の口調を真似るとき、その意図は人々の心における神の居場所を乗っ取り、神が正当に所有している人類を盗むことです。それはサタン以外の何物でもなく、天が決して許さない大天使の末裔の所業です。あなたがたの中に、人々を惑わし、欺くことを目的として、いくつかの言葉を語って何らかの形で神を模倣し、自分の言動には神の権威があり、自分の本質と身分は唯一のものであり、さらには自分の口調と神の口調が同じであるかのように感じさせた人はいますか。そのようなことをしたことはありますか。話す時に神の口調を模倣しつつ、神の性質を示すような身振りをし、自分に力と権威があるかのようなふりをしたことがありますか。あなたがたの多くはこのように振る舞ったり、そうしようと思ったりすることがよくあるのですか。創造主の権威を真に目の当たりにし、知覚し、理解したいま、自分がかつて行なったこと、露わにしたことを振り返って、あなたがたは嫌悪を感じますか。自分が下劣で恥知らずなことに気づきますか。そのような人の性質と本質を分析すると、彼らは呪われた地獄の子だと言えるでしょうか。こうしたことをする

人はみな、自分自身を辱めていると言えるでしょうか。あなたがたはこの問題の深刻さに気づいていますか。それはどの程度深刻ですか。このように振る舞う人の目的は神を模倣することです。彼らは神になろうとし、人々に自分を神として崇めさせることを望みます。彼らは人々の心における神の居場所をなくし、人の間で働きを行なう神を排除したいと望んでおり、人々を操り、食べ物にし、我が物にするという目的を達成すべくそうしています。誰もがこのような願望や野望を無意識のうちに抱いており、このような墮落したサタンの本質、そして神に敵対し、神を裏切り、神になろうと望むサタンの本性の中で生きています。神の権威というテーマに関するわたしの交わりを聞いても、あなたがたは依然として神になりすますこと、神を模倣することを望んだり目指したりしているのですか。依然として神であること、神になることを望んでいるのですか。人間が神の権威を模倣することはできず、神の身分や地位を真似することもできません。神の口調を真似ることはできても、神の本質を真似ることはできません。神の場所に立って神になりすますことはできても、神が意図する業を行なうことも、万物を支配して統治することも決してできません。神の目から見ると、あなたは永遠に小さな被造物であって、あなたの技能や能力がいかに優れていても、いかに多くの才能をもっていたとしても、あなたは完全に創造主の支配下にあります。傲慢な言葉を発することはできても、自分に創造主の本質があることを示したり、創造主の権威があることを表わしたりすることはできません。神の権威と力は神自身の本質です。それらは習得されたものでも、外部から加えられたものでもなく、神自身に固有の本質です。したがって、創造主と被造物の関係を変えることは決してできません。人間は被造物の一つとして、自身の立場を守り、誠実に行動しなければなりません。創造主から託されたものを忠実に守りなさい。適当でないことをしたり、自分の能力を超えることや、神に嫌悪されることをしたりしてはいけません。偉大になろうとしたり、超人になろうとしたり、他の人を超えようとしたり、神になろうとしたりしてはいけません。人はこうした存在になることを望んではいけないのです。偉大になること、超人になることを追い求めるのは馬鹿げています。ましてや神になろうとするのはさらに恥ずべきことであり、不快で卑劣です。称賛に値し、被造物が他の何より守るべきことは、真の被造物となることです。それが、すべての人が追求すべき唯一の目標なのです。

創造主の権威は、時間、空間、および地理的条件の制限を受けず、創造主の権威は計り知れない

創世記22章17-18節を検討しましょう。この一節もヤーウェ神が語ったものであり、

アブラハムに対してこう述べています。「わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである」。ヤーウェ神はアブラハムを何度も祝福し、子孫を増やすとありますが、どこまで増やすのでしょうか。それは聖書に述べられている通り、「天の星のように、浜べの砂のようにする」までです。つまり、神はアブラハムに対して、天の星や浜辺の砂と同じくらい多くの子孫を授けることを望んだのです。神は比喩的表現を使って語りましたが、その比喩から、アブラハムに対して一人や二人でもなければ千人でもなく、むしろ無数の子孫を授けることが容易にわかります。またその数は多数の国となるのに十分でしたが、アブラハムが多くの国の父となることを神は約束していたのです。では、その数を決めたのは人間ですか、それとも神ですか。人間がその子孫の数を操ることはできますか。それは人間次第なのですか。数名の子孫をもてるかどうかすら人間次第ではないのですから、ましてや「天の星のように、浜べの砂のようにする」ほど多くの子孫をもてるかどうかなど、人間に決められることではありません。子孫が星の数ほどになることを望まない人はいませんが、残念ながら、物事がいつも自分の望み通りになるとは限りません。いかに技能や能力に優れていても、それは人間が決めることではなく、誰一人神が定めた範囲から出ることはできないのです。神があなたに与えたぶん、あなたは得ることになります。神が少数を与えたのであれば、多数を得ることはなく、神が多数を与えたのであれば、自分の得た数に憤慨しても無駄です。そうではありませんか。それはすべて神次第であり、人間次第ではないのです。人間は神に支配されているのであって、誰一人例外ではありません。

神が「大いにあなたの子孫をふやして」と述べたとき、それは神がアブラハムとの間に立てた契約であり、「虹の契約」と同じく永遠に実現されます。それはまた、アブラハムに対する神の約束でもありました。この約束を実現させる資格があるのは神だけであり、実現させることが可能なのも神だけです。人間が信じるかどうか、受け入れるかどうか、どのように見て考えるかを問わず、それはすべて神の言葉に従い、一言一句違わずに実現します。神の言葉が人間の意志や観念の変化によって変わることはなく、人間や出来事や物事の変化のせいで変わることもありません。万物は消え去っても、神の言葉は永遠に存在します。事実、万物が消え去る日こそ、神の言葉が完全に実現されるときなのです。なぜなら、神は創造主であり、創造主の権威と力を持ち、万物とあらゆるいのちの力を支配しているからです。神は無から有を生じさせることも、有を無にす

ることも可能であり、また万物の生から死への変化も支配しています。神にとって、誰かの種を増やすことなど何より簡単だったのです。これは人間にとって、おとぎ話のような空想的なことに聞こえますが、神にとって、自身が行なうと決めたこと、および約束したことは、空想でもおとぎ話でもありません。むしろそれは、神がすでに見た事実であり、必ずや実現されるものなのです。これが理解できますか。アブラハムの子孫が多数いたことは、事実によって証明されていますか。またそれは、どれほど多数ですか。神が述べたように「天の星のように、浜べの砂のように」というほど多数だったのでしょうか。アブラハムの子孫たちは、あらゆる国と地域、世界のいたるところに広まったのでしょうか。また、この事実は何によって実現されたものですか。神の言葉の権威により実現されたものですか。神の言葉が語られてから数百年、あるいは数千年の間、それは実現され続け、絶えず事実となり続けました。これが神の言葉の力であり、神の権威の証しです。始めに万物を創造した時、神は「光あれ」と言葉を発し、そこに光がありました。これは極めて迅速に起こり、極めて短時間のうちに実現され、その実現はまったく遅れることがありませんでした。神の言葉の効果は即座に現われるのです。これらはいずれも神の権威を示すものですが、神はアブラハムを祝福した時、自身の権威の本質がもつもう一つの側面を人間が理解できるようにし、同時に創造主の権威が計り知れないことを理解させ、さらには創造主の権威のうち、より現実的かつ精緻な側面を理解させたのです。

いったん神の言葉が発せられると、神の権威がこの働きを支配し、神の言葉によって約束された事実が次第に現実となってゆきます。その結果、春の到来とともに草が緑色に変わり、花々が咲き、木から芽が出て、鳥たちが歌い始め、ガチョウが舞い戻り、野原に人々が集うといったように、万物に変化が生じ始めます……。春の到来とともに万物は活気を取り戻しますが、それは創造主による奇跡の業です。神が約束を果たす時、天地の万物は神の考えに従い、再び新しくなって変化しますが、そこに例外はありません。神の口から誓いや約束が発せられる時、万物はその実現に寄与し、その実現のために動かされます。そして創造主の支配の下、すべての被造物が指揮され、采配され、それぞれの役割を担い、それぞれの機能を果たすのです。これが創造主の権威の表われです。このことから何がわかりますか。神の権威をどのように知ることができますか。神の権威に範囲はありますか。時間的な制約はありますか。特定の高さや長さがあると言えますか。特定の大きさや強さがあると言えますか。人間の寸法で計測することができますか。神の権威は点いたり消えたりするものでも、行ったり来たりするものでもなく

、それがどの程度偉大かを計測できる人もいません。どの程度時間が経過したかを問わず、神がある人を祝福した場合、その祝福は継続し、その継続は神の権威が計り知れないことの証しとなり、創造主がもつ消えることのないいのちの力の再現を、人間が幾度となく目の当たりにすることを可能にします。神の権威が表わされるたび、神の口から発せられた言葉が、万物と人間に対して完全に立証されます。さらに、神の権威によって実現されたすべてのものは比べようもないほど精緻であり、まったく完璧です。神の考え、言葉、権威、そして神が実現させたあらゆる働きは、どれも比類なき美しい光景であり、被造物にとって、その意義と価値を人間の言語で表現することは不可能です。神がある人に約束を行なうとき、その人が暮らす場所、行なうこと、その約束を受け取る前後の背景、そしてその人の生存環境がどれほど変動したかなど、その人にまつわるすべてのことを、神は掌を指すかのごとく知っています。神が言葉を発してからどれほど時間が経過したかにかかわらず、神にとってその言葉はたったいま発せられたようなものです。つまり、神には力があるとともに、人間との約束を残らず追跡し、支配し、実現させる権威があるのです。そしてその約束が何であるか、完全に実現するまでにどの程度の時間を要するか、またその実現が、時間や地理や人種など、どれほどの範囲に影響を及ぼすかを問わず、その約束は実現され、成就するのであって、さらにその実現と成就において、神は努力する必要がありません。それは何を証明していますか。神の権威と力の幅広さは、宇宙全体と人類全体を支配するのに十分だということです。神は光を創りましたが、それは神が光を支配していることだけを意味するものではありません。また、神が水を支配しているのは単に水を創ったからだという意味でも、それ以外のことはすべて神と無関係だという意味でもありません。これは誤解ではないでしょうか。アブラハムに対する神の祝福は、数百年も経つころには次第に人間の記憶から消えていきましたが、神にとって、その約束は同じままでした。その約束は依然として実現される過程にあり、止まることはなかったのです。神が自身の権威をいかに行使するか、万物がいかに関与され、支配されるのか、そしてこの間、神に創造された万物の中でどれほど多くの素晴らしい物語が生み出されたか、人間は聞くことも知ることもありませんでした。しかし、神の権威と業が見事に表わされると、それはすべて万物に伝えられ、万物はそれを称え、万物は創造主の奇跡的な業を示して語り、そして創造主による万物の支配について何度も語られてきた物語の一つひとつが、万物によって永遠に語り継がれるのです。神が万物を支配する際の権威、そして神の力は、神がいつでもあらゆる場所にいることを万物に示しています。神の権威と力が遍く存在していることを目にしたとき、神がいつでもあらゆる場所に存在していることをあなたは理解します

。神の権威と力は、時間、地理、空間、人間、出来事、および物事に制約されません。神の権威と力の幅広さは人間の想像を超え、人間には計り知れず、想像を絶するものであり、人間が完全に知ることは決してできません。

中には推測や想像を好む人がいます。しかし、人間の想像はどこまで及びますか。この世界を超えることはできますか。人間は、神の権威の信憑性や正確さを推測したり想像したりすることができますか。自身の推測や想像によって、神の権威を認識できるようになりますか。神の権威を真に理解し、それに服従するようになりますか。人間の推測や想像は思考の産物でしかなく、神の権威を知るにあたって何の役にも立たないことが事実によって証明されています。SF小説を読んで、月や星がどのようなものかを想像できる人がいます。しかしそれは、人間が神の権威について何らかの認識をもっているという意味ではありません。人間の想像は、単に想像でしかないのです。こうした事柄の事実、つまりそれらと神の権威とのつながりにまつわる事実について、人間はまったく理解していません。たとえ月に行ったことがあるとしても、それが何だと言うのでしょうか。それは、神の権威を複数の次元から理解していることを示すものですか。神の権威と力の幅広さを想像できることを示すものですか。人間の推測や想像に頼ったところで神の権威を知ることはできないのなら、人間は何をすべきでしょうか。推測や想像を避けるのが最も賢明な選択肢です。つまり、神の権威を知ることに関して、人間は想像や推測に頼ってはいけないのです。ここでわたしが言わんとしていることは何ですか。神の権威と力、神自身の身分、および神の本質に関する認識は、人間の想像に頼ったところで得られません。神の権威を知る上で想像に頼れないのであれば、どうすれば神の権威に関する真の認識を得られますか。それは神の言葉を飲み食いすること、交わりを行なうこと、そして神の言葉を経験することです。そうすることで、あなたは徐々に神の権威を経験してそれを確かめ、神の権威に関する認識を次第に積んでゆくのです。神の権威を認識するにはこの方法しかなく、近道はありません。あなたがたに想像を行なわないよう求めたとしても、それは何もせずひたすら滅びを待つようにさせることでも、あらゆる行動を禁止することでもありません。自分の頭脳で考えたり想像したりするのを避けることは、論理を用いて推測したり、知識を用いて分析したり、科学を根拠としたりせず、その代わり、自分の信じる神に権威があること、神が自分の運命を支配していること、そして神は唯一の神自身であると、神の力が常に証明していることを、神の言葉を通じて、真理を通じて、そして生活の中で直面するすべてのことを通じて理解し、確かめ、納得するということです。これが神を認識する唯一の方法なのです。

中には、その目的を達成する簡単な方法を見つけたいという人もいますが、そのような方法を考えつくことはできますか。考えるまでもなく、それ以外の方法は存在しません。神が発する一つひとつの言葉、神が行なう一つひとつの業を通じ、神が所有するものと神そのものを誠実に、かつ着実に認識して確かめるのが唯一の方法です。神を知るにはこの方法しかありません。なぜなら、神が所有するものと神そのものは空虚なものではなく、現実のものだからです。

創造主が万物と生物を支配、統治している事実は、創造主の権威が真に存在することを物語る

同じように、ヨブ記には、ヨブに対するヤーウェの祝福が記されています。神はヨブに何を授けたのでしょうか。「ヤーウェはヨブの終りを初めよりも多く恵まれた。彼は羊一万四千頭、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭をもった」（ヨブ記 42:12）。人間の観点から見て、ヨブに与えられたこれらのものは何だったのでしょうか。人の財産だったのでしょうか。この財産を得たヨブは、その時代では非常に裕福ではなかったのでしょうか。またヨブは、どのようにしてこの財産を得たのでしょうか。彼の財産をもたらしたものは何でしょうか。ヨブがこの財産を得たのは、神の祝福のおかげだったことは言うまでもありません。ヨブがこれらの財産をどう見ていたか、神の祝福をどのように見なしていたかは、ここでは検討しません。神の祝福について言えば、神に祝福されることを誰もが昼も夜も切望していますが、自分が生涯でどのくらいの財産を得られるか、神から祝福を受けられるかどうかは、人間が意のままにできることではありません。それは反論の余地がない事実です。神には権威があり、あらゆる財産を人間に授ける力、人間があらゆる祝福を得られるようにする力があるものの、神の祝福には原則があります。神が祝福するのはどのような人ですか。もちろん、それは神が好む人たちです。アブラハムとヨブはともに神に祝福されましたが、二人が授かった祝福は同じではありませんでした。神は砂や星の数ほどの子孫でアブラハムを祝福しました。アブラハムを祝福した時、神は一人の人間の子孫、一つの種族を強くさせ、繁栄させました。その際、神の権威が支配したのは、万物とあらゆる生物の中でも、神の息を呼吸する人類でした。神の権威による支配下で、人類は神が定めた速度と範囲で繁殖し、存在しました。具体的には、この種族の生存能力、拡大率、平均寿命は、すべて神の采配の一部であり、それらの原則はどれもアブラハムに対する神の約束に基づいていました。つまり、状況がどうあれ、神の約束は妨害されることなく進行し、神の権威の摂理に基づき実現されてゆくのです。アブラハムに対する神の約束では、世界の大変動、時代、およ

び人間を苛む大惨事にかかわらず、アブラハムの子孫が消滅する恐れはなく、その種族が死滅することはありません。しかし、ヨブに対する神の祝福のおかげで、ヨブは極めて裕福になりました。神がヨブに授けたのは、呼吸する様々な生物であり、その数、繁殖速度、生存率、そして体脂肪率といった詳細もまた、神によって支配されていました。これらの生物に言葉を話す能力はありませんでしたが、これらもまた創造主の采配の一部であり、これらに対する神の采配の原則は、神がヨブに約束した祝福を基にしています。神がアブラハムとヨブに授けた祝福において、約束された物事は違っていました。創造主が万物とあらゆる生物を支配する権威は同じでした。神の権威と力の詳細はどれも、アブラハムとヨブに対するそれぞれ異なる約束と祝福の中で表わされており、神の権威は人間の想像を超えるものであることがここでも示されています。これらの詳細は人類に対し、神の権威について知りたいのであれば、神の言葉を通じて、そして神の働きを経験することを通じてそうするしかないということを伝えています。

神が万物を支配する権威によって、人間は一つの事実を見ることができます。つまり、神の権威は「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。神は言われた。『大空あれ。』こうして、大空があった。神は言われた。『地あれ。』こうして、地があった」という言葉に具現化されているだけでなく、それ以上に、神が光を継続させ、大空が消えないようにし、地を永遠に海と分けたこと、そして光、大空、地という被造物を支配し、管理したことにおいても具現化されているのです。それ以外に、神による人類の祝福から何がわかりますか。明らかに、アブラハムとヨブを祝福した後も、神の歩みは止まりませんでした。なぜなら、神は自身の権威を行使し始めたばかりで、自身の言葉の一つひとつを現実にし、自身が語った詳細の一つひとつを実現させる意向だったからです。それゆえ、その後の年月、神は意図したことを一つ残らず行ない続けました。神には権威があるので、人間にとってはおそらく、神に必要なのは語ることで、指一本上げずにすべてのことが成し遂げられるかのように思われるかもしれません。しかし、このような想像は極めて馬鹿げています。神が言葉を用いて人間との間に契約を立てたこと、言葉を用いてすべての業を成し遂げたことについて、あなたが一方的な見方しかせず、神の権威が万物の生存を支配している様々なしるしや事実を見てとることができないなら、神の権威に関するあなたの理解はあまりに空虚であり、馬鹿げています。神をそのようなものとして想像するなら、神に関する人の認識は絶望的であり、行き詰まりに達したと言わざるを得ません。なぜなら、人が想像する神は命令を下す機械でしかなく、権威のある神ではないからです。アブラハムとヨブの例から、あなたは何

を理解しましたか。神の権威と力の実際面を理解しましたか。アブラハムとヨブを祝福した後、神はその状態に留まらず、使いを働かせつつ結果がどうなるかを待つだけでもありませんでした。それとは逆に、神が言葉を発するやいなや、万物は神の権威による導きの下、神が意図している働きに従い始め、神が必要とする様々な人や物事が準備されました。つまり、神の口から言葉が発せられたとたん、神の権威がすべての地で行使され始め、神はアブラハムとヨブに対して行なった約束を実現させるべく、方向性を定める一方、実行に移そうとしていた手順や主な段階の一つひとつに必要とされる、適切な計画や準備をも行なったのです。この時、神は使いだけでなく、自身が創造した万物も動かしました。つまり、神の権威が行使された範囲には使いだけでなく万物も含まれており、自身が成し遂げようとしていた働きに従わせるべく、神はそれら万物を動かしたのです。これが、神の権威が行使された具体的な方法でした。あなたがたの中には、神の権威を想像の中でこのように理解している人がいるかもしれません。つまり、神には権威と力があるので、第三の天や一定の場所に留まっていればいいのであって、特定の働きをする必要はなく、神の働きはすべて神の考えの中で完了する、というものです。また、神はアブラハムを祝福したものの、何もする必要がなく、言葉を発するだけで十分だった、と信じる人もいるでしょう。それが現実起きたことですか。明らかに違います。神には権威と力があるものの、神の権威は真実であり、また現実であり、空虚なものではありません。神の権威と力の信憑性、および現実性は、神による万物の創造と支配、そして神が人間を導き、経営する過程の中で徐々に示され、具体化されるのです。神が人類と万物を支配する際の方法と観点と詳細、神が成し遂げたすべての働き、そして万物に関する神の理解はいずれも、神の権威と力が空虚な言葉ではないことを文字どおり証明しています。神の権威と力は絶えず万物に示され、明らかにされています。このように示され、明らかにされることは、神の権威が実在することを物語っています。なぜなら、神は絶えず自身の権威と力を用いて働きを継続し、万物に命令し、万物を支配しており、天使や神の使いが神の力と権威に取って代わることはできないからです。神はアブラハムとヨブにどのような祝福を与えるかを決めましたが、それは神の下す決定でした。神の使いは自らアブラハムとヨブを訪れましたが、彼らの行動は神の命令を基にしており、神の権威に従うものであって、その使いたちは神の支配下にあったのです。聖書の記録から、神の使いがアブラハムを訪れ、ヤーウェ神自身は何も行なわなかったことが見てとれます。しかし実際のところ、力と権威を本當に行使したのは神自身だけであり、人間がそれを疑うのは許されません。天使や使いには大きな力があり、奇跡を行ない、神から託された物事を実行してきたことをあなたは知っていますが、

彼らの行動は神の任務を遂行するためのものに過ぎず、決して神の権威が示されているわけではありません。なぜなら、万物を創造して支配する創造主の権威は、いかなる人や物ももっていないからです。ゆえにいかなる人や物であっても、創造主の権威を行使したり示したりすることはできないのです。

創造主の権威は不変であり、犯すことができない

聖書のこれら三ヵ所から何がわかりましたか。神が権威を行使するにあたり、そこに原則があることを理解しましたか。たとえば、神は虹を用いて人間との契約を立てましたが、雲間に虹を置くことで、自分が洪水で世界を滅ぼすことは二度とないと人間に伝えました。人々が現在目にする虹は、神の口から語られた虹といまだ同じものですか。その性質や意味は変わりましたか。当然、そのようなことはありません。神は自身の権威を用いてこの業を行ない、神が人間との間に立てた契約は現在に至るまで続いており、この契約が変更される時期は言うまでもなく神次第です。「雲の中に、にじを置く」と述べた後、神は常にその契約を遵守し、今日に至っています。このことから何がわかりますか。神には権威と力があるものの、自身の業に対して厳格であり、厳しい原則に従うとともに、いつも自身の言葉に忠実である、ということです。神の厳格さと神の業の原則は、創造主が犯すことのできない存在であること、そして創造主の権威が無敵であることを示しています。神には至高の権威があり、万物は神の支配下にあり、また神には万物を支配する力がありますが、神は自身の計画を害したことも乱したこともなく、権威を行使するたび、常に自身の原則を厳しく守り、自身の口から語られた言葉、および自身の計画の段階と目的に従っています。言うまでもなく、神に支配されている万物もまた、神が権威を行使する際の原則に従っており、いかなる人や物も神の権威による采配を免れず、神の権威が行使される際の原則を変えることもできません。神の目から見ると、祝福された人は神の権威がもたらす素晴らしい賜物を受け取り、呪われた人は神の権威のために懲罰を受けます。神の権威の支配下においては、いかなる人や物も神が行使する権威を免れず、神の権威が行使される際の原則を変えることもできません。創造主の権威はどの要素が変わったところで変化せず、同様に、神の権威が行使される際の原則は、いかなる理由であっても変わりません。天地が大変動に見舞われても創造主の権威は不変であり、万物が消え去っても創造主の権威は決して消滅しません。これが創造主の不変にして犯すことのできない権威であり、創造主が唯一無二たるゆえんなのです。

次の聖句は神の権威を知る上で不可欠であり、その意義を以下の交わりで説明します

。続けて聖書を読みましょう。

4. サタンに対する神の命令

ヨブ記 2:6 ヤーウェはサタンに言われた、「見よ、彼はあなたの手にある。ただ彼の命を助けよ」。

サタンは創造主の権威を決して超えようとしなかったのに、万物は秩序ある生活を送っている

これはヨブ記からの抜粋であり、「彼」はヨブを指しています。この一文は簡潔ながら、多くの問題を解明するものです。そこでは霊の世界における神とサタンの会話が具体的に述べられており、神の言葉の対象がサタンであることをわたしたちに伝えています。また、神が述べたことも具体的に記されています。神の言葉はサタンに対する命令でした。この命令の具体的な内容は、ヨブのいのちを奪わないことと、サタンによるヨブの扱いについて神がどこに一線を引いたかに関するものです。つまり、サタンはヨブのいのちを守らざるを得なかったのです。この一文から最初に学べるのは、それが神からサタンに語られた言葉だということです。ヨブ記の原典には、この言葉の背景が記されています。それによると、サタンはヨブを責めたいと望んでいましたが、ヨブを試みる前に神の同意を得る必要がありました。ヨブを試みたいというサタンの要求に同意した時、神は「ヨブはあなたの手にある。ただ彼の命を助けよ」という条件を示しました。この言葉はどのような性質のものですか。明らかに命令です。この言葉の性質を理解すると、この命令を発したのは神であり、それを受けて従ったのはサタンであることも当然理解できるはずです。言うまでもなく、この命令における神とサタンの関係は、これらの言葉を読めば誰でも明確に理解できます。もちろん、これは霊の世界における神とサタンの関係、身分と地位における神とサタンの違いでもあり、聖書に記された神とサタンとのやりとりによってそれが示されています。つまり現在、身分と地位における神とサタンの明確な違いについて、人は具体的な例と文書の記録で知ることができるのです。この点において、これらの言葉の記録は、人類が神の身分と地位を知る上で重要な文章であり、貴重な情報をもたらすものだと言わなければなりません。霊の世界における創造主とサタンとのこの会話により、人間は創造主の権威についてもう一つの側面を理解することができます。これらの言葉は、創造主だけがもつ権威のもう一つの証しなのです。

表面上、ヤーウェ神はサタンと会話しています。しかし本質的に言えば、ヤーウェ神

が言葉を述べる際の態度、そしてヤーウェ神が位置している立場は、サタンよりも高いものです。つまり、ヤーウェ神はサタンに命令口調で言いつけており、すべきことやすべきでないことを告げるとともに、ヨブがすでにサタンの手の中にあること、そしてサタンは思うがままにヨブを扱ってもよいが、ヨブのいのちを奪ってはならないということを伝えているのです。その言外の意味は、ヨブはサタンの手の中にあるものの、ヨブのいのちはサタンに与えられておらず、神が許可しない限り、ヨブのいのちを神の手中から奪える者はいない、ということです。神の態度はサタンに対するこの命令の中で明白に説明されており、またこの命令は、ヤーウェ神がサタンと会話する際の立場を示し、明らかにするものです。その際、ヤーウェ神のもつ地位というのは、光と空、万物とすべての生物を創り、万物とすべての生物を支配する神の地位だけでなく、人類と冥府を指揮し、すべての生物の生死を支配する神の地位です。霊の世界において、サタンに対してこのように命令する存在が、神以外にあるでしょうか。では、神がサタンに自ら命令を下したのはなぜですか。ヨブを含めた人間のいのちが神によって支配されているからです。神はサタンに対し、ヨブのいのちを傷つけたり奪ったりすることを禁じるとともに、サタンがヨブを試みることを許したときでさえ、その命令を強調することを忘れず、ヨブのいのちを奪ってはならないとサタンに再度命令したのです。サタンは神の権威に背こうとしたことが一切なく、さらには神の指示と具体的な命令を注意深く聞き、それに従い、あえて逆らおうとせず、当然ながら神の命令を自由に変えようとしませんでした。神がサタンに課した制限はそのようなものであり、ゆえにサタンはあえてその制限を超えようとしなかったのです。これは神の権威の力ではないですか。これは神の権威の証しではないですか。神に対してどのように振る舞うか、神をどのように見るかについて、サタンは人間よりもずっと明確に理解していたので、霊の世界で神の地位と権威をはっきり目の当たりにしており、神の権威の力と、神の権威が行使される際の原則についても深く理解しています。サタンはそれらを見過ごすことも、何らかの形でそれらに背こうとすることもなく、また神の権威に背く行動を取ることも、どのような形であれ神の怒りに対抗することも一切ありませんでした。サタンの本性は邪悪で傲慢ですが、神がサタンに対して定めた領域と限度を超えようとしたことはありません。数百万年の間、サタンはそうした限度を固く守り、神からの指示と命令にすべて従い、あえて一線を越えようとしたこともありません。サタンは悪意に満ちていますが、墮落した人間よりもはるかに賢く、創造主の身分を知っており、自分の限度も心得ています。サタンの「従順な」行動から、神の権威と力は、サタンが背くことのできない天の命令であることがわかります。また、神が唯一の存在であること、そして神の権威ゆえに

、万物は秩序正しく変化と増加を行ない、人類は神によって確立された過程の中で生活と繁殖を行なえるのであり、この秩序を乱したり、この法則を変えたりすることができない人や物が存在しないこともわかります。なぜなら、それらはすべて創造主の手から生み出され、創造主の命令と権威から現われたからです。

創造主の身分をもつ神だけが、唯一無二の権威を有している

サタンがもつ「特別」な身分のために、人々はサタンが表わす様々な側面に強い関心を示してきました。中には、サタンは奇跡を起こし、人間には不可能なことができるので、サタンにも神と同じく権威があると信じている愚かな人さえいます。そうしたわけで、人類は神を崇拝するだけでなく、心の中にサタンの居場所をとっておき、サタンを神として崇拝することさえします。こうした人は哀れであると同時に憎むべき存在です。彼らは無知のために哀れであり、その異端的な信条と、持って生まれた邪悪な本質のために憎むべき存在なのです。ここで、権威とは何か、権威が象徴するものは何か、権威が表わすものは何かを皆さんに教える必要があるでしょう。概して言えば、神自身が権威であり、その権威は神の至高と実質を象徴し、神自身の権威は神の地位と身分を表わします。そうであれば、サタンは自分こそ神であるなどとあえて言うのでしょうか。自分が万物を創り、万物を支配しているなどとあえて言うのでしょうか。当然ながら、そのようなことは言いません。なぜなら、サタンは万物を創造することができないからです。現在に至るまで、神が創ったものをサタンが創ったということは一度もなく、サタンがいのちあるものを創ったこともありません。サタンには神の権威がないので、神の地位と身分を有することはとても不可能であり、これはサタンの本質によって決まることです。サタンに神と同じ力がありますか。当然ながら、そのようなことはありません。サタンの行動や、サタンが起こした奇跡を、わたしたち何と呼びますか。力でしょうか、それとも権威でしょうか。もちろん違います。サタンは邪悪な潮流を率い、神の働きのあらゆる側面を乱し、損なわせ、妨害します。これまでの数千年間、人類を墮落させ乱暴に扱い、人間をそそのかして騙し、それによって人間が墮落して神を拒む状態にし、死の淵に向かわせた以外に、サタンは人間による記念、称賛、敬愛に少しでも値することを行なったでしょうか。サタンに権威と力があるなら、人類はサタンによって墮落させられていたでしょうか。サタンに権威と力があるなら、人間はサタンによって害を被ったでしょうか。サタンに権威と力があるなら、人類は神を捨てて死に向かっていたでしょうか。サタンに権威も力もないのなら、そのすべての行ないの本質についてどう結論づけるべきでしょうか。サタンによるすべての行ないを単なる策略と定義する人も

いますが、そのような定義はさほど適切ではないとわたしは考えます。人類を墮落させるという邪悪な行ないは、単なる策略でしょうか。サタンがヨブを虐げた邪悪な力と、ヨブを虐げて食い尽くそうとする激しい願望は、単なる策略ではとても成し遂げられないものです。振り返ると、丘や山の一面に群れていたヨブの動物たちは、一瞬にして消え去りました。ヨブの巨大な富も一瞬にして消え去りました。これは単なる策略でなし得たことでしょうか。サタンによる行ないの性質は、どれも損傷、妨害、破壊、危害、邪悪、悪意、闇などといった否定的な言葉に一致するものであり、不正で邪悪な出来事のすべてはサタンの行為と密接に繋がっていて、サタンの邪悪な本質と切り離すことができません。サタンがいかに「強力」か、その大胆さと野望がどれほどのものか、危害を加える能力がどれほどのものか、人間を墮落させ、誘惑する技能の幅広さがどれほどのものか、人間を脅かす策略や計略がどれほど狡猾か、そしてサタンの存在する形態がどれほど変化可能かを問わず、サタンは一つの生物も創れたことも、万物の存在に関する法則や規律を定められたこともなく、いのちあるものかどうかにかかわらず、何かの物体を支配して操れたこともありません。宇宙と大空の中に、サタンから生まれた人間や物、サタンのおかげで存在する人間や物、サタンに支配されたり操られたりしている人間や物はまったく存在しません。それとは逆に、サタンは神の支配下で暮らすしかなく、その上神の指示と命令にすべて従う必要があります。神の許しがなければ、サタンはひとしずくの水やひと握りの砂に触れることさえ困難です。また、地面の蟻を自由に動かすことさえできず、ましてや神の創った人類を動かすことなど不可能です。神から見ると、サタンは山に咲くユリの花よりも劣り、空を舞う鳥や海の魚にも劣り、地のウジ虫にも劣ります。万物の中におけるサタンの役割は、万物に仕え、人類のために働き、神の働きと経営計画に役立つことです。サタンの本性がどれほど悪意に満ちていようと、その本質がいかに邪悪であろうと、サタンにできるのは、神に仕え、神を際立たせるという、その役割に従順に従うことだけです。これがサタンの本質と立場です。サタンの本質はいのち、力、権威から切り離されており、サタンは神の手中にある玩具、神に役立つ道具に過ぎません。

サタンの本当の顔を理解しても、権威とは何かをいまだ理解していない人が大勢いるので、ここで言うておきます。神の権威はそれ自体が神の力だと説明できます。まず、権威と力はともに肯定的なものだと断言できます。それらは否定的なものとは何らつながりがなく、いかなる被造物やそれ以外のものとも関係がありません。神の力は、いのちと活力をもつ、あらゆる形のものを創ることが可能であり、それは神のいのちによって

決まっています。神はいのちであり、したがってあらゆる生物の源です。さらに神の権威は、あらゆる生物を神の一言一句に従わせることができます。つまり、あらゆる生物は神の口から発せられた言葉通りに現われ、神の命令によって生き、繁殖し、その後は神があらゆる生物を支配してそれらに命令し、そこからの逸脱は永遠にあり得ないので、人間や物体にはこれらのものはありません。こうした力は創造主だけが有しており、したがって権威と呼ばれます。これが、創造主が唯一無二たるゆえんなのです。ゆえに、「権威」という言葉自体であれ、権威の本質であれ、どちらも神としか関係していません。なぜなら、それは創造主に固有の身分と本質の象徴であり、また創造主の身分と地位を表わすものだからです。創造主を除き、「権威」という言葉と関連のある人間や物体は存在しません。これが、創造主だけがもつ権威の解釈です。

サタンは貪欲な目でヨブを見ていましたが、神の許しがなかったので、ヨブの体毛一本すら触れようとはしませんでした。サタンは生まれつき邪悪で残酷ですが、ひとたび神が命令すると、その命令に従うほかなかったのです。そうしたわけで、ヨブのところに来たサタンは羊の中の狼のように凶暴だったにもかかわらず、神が定めた限度をあえて忘れることも、神の命令に背こうとすることもなく、すべての行動において神の言葉の原則と限度から逸脱しようとはしませんでした。これが事実ではないですか。そのことから、サタンはヤーウェ神の言葉にあえて背かないことがわかります。サタンにとって、神の口から発せられた一言一句は命令であり、天の法則であり、神の権威を表わすものです。なぜなら、神の一言一句の背後には、神の命令に背いた者、天の法則に反抗した者に対する神の懲罰が暗示されているからです。神の命令に背いた場合、神の権威から逸脱し、天の法則に反抗した報いを受けなければならないことを、サタンははっきり知っています。では、その報いとはいったい何ですか。言うまでもなく、それは神による懲罰です。ヨブに対するサタンの行為は人間を墮落させたことの縮図に過ぎず、またサタンがそれらのことを行なっていた際、神がサタンに対して定めた限度と、サタンが発した命令は、サタンのあらゆる行動の背後にある原則の縮図に過ぎませんでした。さらに、この点におけるサタンの役割と立場は、神の経営の働きにおけるサタンの役割と立場の縮図に過ぎず、サタンがヨブを試みた際の神に対する完全な服従は、神の経営の働きに少しも反抗しようとしなかったことの縮図に過ぎません。これらの縮図はあなたに何を警告していますか。サタンを含めた万物の中に、創造主が定めた天の法則や命令に背ける人や物事は存在せず、こうした天の法則や命令にあえて違反しようとする人や物事も一切ありません。なぜなら、服従を拒んだ者に創造主が科す懲罰は、どん

な人や物にも変えられず、そこから逃れることもできないからです。天の法則や命令を確立できるのは創造主だけであり、それらを施行する力があるのも創造主だけであって、人間や物事が超えられないのは創造主の力だけなのです。これが創造主にしかない権威であり、この権威は万物の中で至高のものであるので、「神は最も偉大であり、サタンはその次に偉大である」と言うことはできません。唯一無二の権威をもつ創造主を除いて、他に神は存在しないのです。

神の権威について、あなたがたはいま新たな認識を得ましたか。まず、先ほど述べた神の権威と人間の力との間に違いはありますか。その違いは何ですか。両者を比べることはできないと言う人がいますが、そのとおりです。人は両者を比べることはできないと言いますが、人間の思考や観念においては、人間の力がしばしば権威と混同され、両者を並べて比較することがよくあります。これはどういうことですか。うかつにも両者を取り違えるという間違いを犯しているのではないのでしょうか。この二つに関連性はなく、両者を比較することもできませんが、人はそれでも比較せずにはいられないのです。これはどうすれば解決できるのでしょうか。解決策を見つけないと心から願うのであれば、神だけがもつ権威を理解し、それを知るよりほかにありません。創造主の権威を理解して知るようになれば、人間の力と神の権威を同じように語ることはなくなります。

人間の力とは何のことですか。簡潔に言うと、人間の墮落した性質、欲望、および野望を最大限に拡大し、それらを成し遂げることを可能にする能力、あるいは技能のことです。それを権威と見なせますか。人の野望と願望がどれほど大きいとしても、あるいはどれほど利益をもたらすとしても、その人に権威があるとは言えません。そうした自惚れや成功は、せいぜいサタンが人の間で行なう茶番に過ぎず、神になるという野望を果たすべく、自身の祖先を演じる喜劇に過ぎません。

あなたはいま、神の権威をどのように見えていますか。この交わりで伝えた言葉から、あなたは神の権威に関する新たな認識を得たはずですが、そこであなたがたに質問します。神の権威は何を象徴しますか。神自身の身分を象徴しますか。神自身の力を象徴しますか。神だけがもつ地位を象徴しますか。あらゆる物事のなかで、あなたが神の権威を目の当たりにした事柄は何ですか。どのようにしてそれを目の当たりにしましたか。人間が経験する四季について言えば、春夏秋冬が入れ替わる法則を人間が変えることはできますか。春になると、木々は芽吹いて花を咲かせ、夏には葉で覆われ、秋には実を結び、冬には葉を散らします。この法則を変えることができる人はいますか。これは神の権威の一側面を反映するものですか。神が「光あれ」と言うと、光がありました。その

光はいまも存在していますか。それが存在するのはなにゆえですか。もちろん、光が存在するのは神の言葉と権威のゆえです。神が創った空気はいまも存在していますか。人間が呼吸する空気は神に由来するものですか。神に由来するものを取り去ることができる人はいいますか。神に由来するものの本質と機能を変えることができる人はいいますか。神が割り当てた昼と夜、神が命じた昼夜の法則を覆せる人はいいますか。サタンにそのようなことができますか。あなたが夜に眠らず、夜と昼を取り違えていても、それは依然として夜です。日々の習慣を変えることはできても、昼夜の入れ替わりに関する法則を変えることはできません。この事実は誰にも変えることができないものです。違いますか。ライオンが牛のごとく地面を耕すようにすることはできますか。象をロバに変えることができますか。鶏が鷹のごとく空を飛ぶようにすることはできますか。狼が羊のごとく草を食べるようにすることはできますか。（できません。）魚が水のない地上で暮らすようにすることはできますか。人間にそのようなことはできません。なぜできないのですか。それは、神が魚に水中で暮らすよう命じたからであり、そのため魚は水中で暮らしているのです。魚は地上で生存できず、死んでしまうでしょう。神の決めた限度を魚が越えることはできないのです。万物には存在の法則と限界があり、それぞれ固有の本能があります。それらは創造主が定めたものであって、いかなる人も変えたり越えたりすることはできません。たとえば、ライオンは常に人間社会から離れた荒野で暮らします。ライオンが人間とともに生活し、人間のために働く牛のように従順で忠実になることはありません。象とロバはともに動物であり、四本の脚をもち、空気を呼吸しますが、両者は違う種に属しています。なぜなら、それらは神によって異なる種に分けられ、それぞれ固有の本能があり、したがって両者を入れ替えることはできないからです。鶏は鷹と同じく脚と翼をもっていますが、空を飛ぶことは決してできず、飛べたとしてもせいぜい木に留まる程度です。それは鶏の本能によって決まっていることです。また言うまでもなく、それはひとえに神の権威が命じたからです。

現在における人類の発展の中で、人間の科学は繁栄していると言えます。また、人間による科学的探求の成果は印象的のひと言で説明できます。人間の能力はかつてないほど高まったと言わなければなりません。人類がいまだ成し遂げられない科学的進歩が一つあります。人類は飛行機、航空母艦、原子爆弾などを作り、宇宙空間へと進出し、月面を歩き、インターネットを発明し、ハイテク技術による生活様式の中で暮らすようになりましたが、呼吸する生物を作ることはいまだにできません。あらゆる生物の本能、動物が生きる上での法則、そして生物の生死の循環はどれも人類の科学の力を超える

ものであり、それによって操ることはできません。ここで言わなければなりません、人間の科学がいかに高度なものへと進化しようと、創造主の考えとは比較にならず、創造主による創造の奇跡や、神の権威の力を解明することは不可能です。地球上には多数の海がありますが、限度を超えて地上へ自由に來ることはありません。なぜなら、神がそれぞれの海の境界を定めたからです。海は神が命じた場所に留まり、神の許しがなければ自由に動き回ることにはできません。神の許しがなければ、それぞれの海が侵害し合うことはできず、神がそう述べたときにだけ移動することができ、また海がどこへ移動して留まるかは、神の権威によって定められるのです。

端的に言えば、「神の権威」とは物事が神次第であることを意味します。神には物事をどのように行なうかを定める権利があり、それは神の望む方法で行なわれます。万物の法則は人間次第ではなく神次第であり、人間がそれを変えることはできません。万物の法則は人間の意志で動かせるものではなく、むしろ神の考え、知恵、そして命令によって変えられるものであり、これは誰も否定できない事実です。天と地、万物、宇宙、星空、そして四季など、人間に見えるものも見えないものも、すべては神の権威の下、神の命令と定め、および創造の初めの法則に従い、わずかな間違いもなく存在し、機能し、変化します。それらの法則、あるいはそれらが機能する固有の過程は、いかなる人や物であっても変えることができません。それらは神の権威ゆえに現われ、同じく神の権威ゆえに消滅します。これがまさしく神の権威なのです。ここまで語ったいま、神の権威は神の身分と地位の象徴だと感じることが出来ますか。被造物やそれ以外のものが神の権威をもつことは出来ますか。それを模倣したり、真似したり、それに取って代わったりすることができる人や物がありますか。

創造主の身分は唯一無二なので、多神論に従ってはならない

サタンの技能と能力は人間のそれに優っており、人間には不可能なことが可能であるものの、サタンの行為を羨んだり望んだりするかどうか、それを憎んだり忌み嫌ったりするかどうか、サタンの行動が理解できるかどうか、サタンがどの程度のことを達成できるのか、どれほど多くの人を騙して自分を崇拜させたり祀らせたりすることができるのか、そしてあなたがサタンをどのように定義するかを問わず、サタンに神の権威と力があるとは到底言えません。神は神であり、唯一の神しか存在せず、そしてそれ以上に、神だけが権威をもち、万物を支配する力があることを知らなければなりません。サタンには人間を欺く能力があり、神になりすまし、神のしるしと奇跡を模倣することができ、神と似たようなことをしているからといって、神は唯一無二ではなく多数の神が存

在する、またそれらの神には多かれ少なかれ技能があり、行使する力の幅広さに差があるなどといった誤解をあなたはしています。登場する順番や年齢でそれらの神の偉大さに順位をつけたり、神のほかにも神性を有するものが存在すると誤解したり、神の権威と力は唯一無二ではないと考えたりするのです。あなたにこうした考えがあり、神が唯一の存在であることを認めず、神だけが権威を有していることを信じず、ひたすら多神論に従っているなら、あなたは被造物のくずであり、サタンの真の化身であり、邪惡の権化であるとわたしは言います。このような言葉でわたしが何を教えようとしているか、あなたがたはわかっていますか。時間、場所、背景を問わず、神と人間、神と物事を混同してはいけません。神の権威や神自身の本質について、それらを知ったり、それらに近づいたりするのがどれほど難しく感じられようと、自分の観念と想像がサタンの言動とどれほど一致していようと、そしてそれらが自分をどれほど満足させようと、あなたは愚かであってはならず、それらの観念を混同してはならず、神の存在を否定してはならず、神の身分と地位を否定してはならず、神を追い出し、その代わりに心の中へサタンを招き入れ、あなたの神にしてはいけません。そのようなことをした結果がどうか、あなたがたは想像できるはずです。

人類は墮落させられてきたが、創造主の権威の支配下で生きている

これまで数千年にわたり、サタンは人類を墮落させてきました。無数の悪事を働き、何世代もの人々を欺き、世界中で凶惡な犯罪を犯してきました。人間を虐げ、欺き、誘惑して神に反抗させ、神の経営計画を何度も混乱させて害を与えるという悪事を重ねてきたのです。それでもなお、神の権威の下、万物とすべての生物は神が定めた規則と法則を遵守し続けています。神の権威に比べれば、サタンの邪惡な本性とその蔓延は極めて醜く、不快であり、卑劣であり、取るに足りず、脆弱です。サタンは神に創られた万物の中を歩んでいます、神に率いられる人間や物事をわずかでも変化させることはできません。数千年が経過した現在、人類は神から授かった光と空気を享受し、神自身から授かった息を呼吸し、神が創った花や鳥、魚や昆虫を楽しみ、神から授かったすべてのものを享受しています。昼と夜はいまも絶えず入れ替わり、四季はいつものように移り変わり、空を舞うガンは冬に去り、次の春に舞い戻るとともに、魚は住みかである川や湖から決して離れません。また夏の日中には地上のセミが心から高らかにうたい、秋には草の中にいる鈴虫が風に合わせて優しく口ずさみ、ガンが群れをなす一方、鷹は孤独なままです。ライオンは誇り高く狩りを行なうことで自分を支え、ヘラジカは草原の草花を離れません……。万物の中でも、すべての生物は行き来を繰り返しており、無数

の変化が一瞬にして生じます。しかし、その本能と生存法則が変わることはありません。それらは神の施しと糧によって生きており、その本能を変えたり、生存法則に害を及ぼしたりすることは誰にもできないのです。万物の中で生きる人類はサタンに墮落させられ、欺かれてきたものの、神が創った水、神が創った空気、そして神が創ったすべてのものを捨てることは依然できず、いまなお神が創ったこの空間で暮らし、繁殖しています。人間の本能は変わっていないのです。人間はいまなお目で見、耳で聞き、脳で考え、心で理解し、足で歩き、手で作業を行なうなどしています。神の施しを受け取れるよう、神が人間に授けた本能は変わらないままで、人間が神と協力する能力、被造物の本分を尽くす能力、人類が霊的に必要とするもの、自分の起源を知りたいという願望、そして創造主に救われることへの渴望は変わっていません。以上が、神の権威の下で暮らし、サタンによる血なまぐさい破壊を経験してきた人類の現状です。人類はサタンの圧迫を受け、もはや創造当初のアダムとエバではなく、知識、想像、観念といった神に敵対する物事や、墮落したサタンの性質でいっぱいですが、神の目から見て、人間は依然として神が造った時と同じ人間です。人間はいまなお神に支配され、指揮され、神が定めた過程の中で暮らしているので、神の目から見ると、サタンによって墮落させられた人類は埃をかぶり、空腹でお腹を鳴らし、反応がいささか遅くなり、以前ほどの記憶力がなく、少し年老いたに過ぎず、人間の機能と本能はまったく損なわれていません。これが、神が救おうとしている人類なのです。この人類は創造主の呼びかけを聞き、創造主の声に耳を傾けさえすれば、立ち上がってその声がどこから聞こえるのかをただちに突き止めようとするはずです。創造主の姿を見さえすれば、その他のことには注意を払わず、すべてを捨てて自分自身を神に捧げ、神のために命すら捧げます。創造主の偽りなき言葉を心の中で理解したとき、人間はサタンを拒絶し、創造主の側につきます。また身体の穢れを完全に洗い流し、創造主による施しと糧を再び授かった時、人間の記憶は蘇り、そこで人間は創造主の支配下へと本当に戻るのです。

2013年12月14日

唯一無二の神自身 2

神の義なる性質

神の権威に関する前回の話を聴いたので、あなたがたはこのことについて多くの言葉を得たものとわたしは確信しています。どれほどを受け入れ、把握し、理解できるかは、どれほどの努力を注ぐかにかかっています。あなたがたが熱心に取り組むことを願い

ます。決して中途半端な気持ちで取り組んではなりません。さて、神の権威を知ること
は、神のすべてを知ることと等しいですか。神の権威を知るとは、唯一無二の神自身
を知ることの始まりであると言えます。また、神の権威を知るとは、唯一
無二の神自身の本質を理解することの入り口に足を踏み入れたことである、とも言えま
す。この認識は神を知ることの一部です。では、他の部分は何ですか。それが今日あな
たがたに伝えたいこと、すなわち神の義なる性質です。

本日の主題について話すために、聖句を二箇所選択しました。最初の聖句は、創世記
19章1～11節と創世記19章24～25節で、神のソドム破壊についてです。二番目の聖句
は、ヨナ書1章1～2節、さらにヨナ書3章と4章で、神のニネベ救済についてです。これ
ら二箇所の聖句に関するわたしの話を、あなたがたは楽しみにしていることでしょう。
わたしの話は当然ながら神自身と神の本質を知るという主題を超えられませんが、今日
の話の焦点はいったい何ですか。あなたがたの中にわかる人はいますか。神の権威につ
いての話のどの部分があなたがたの注意をひきましたか。そのような権威と力があるの
は神自身だけである、とわたしが言ったのはなぜですか。そう言うことでわたしは何を
解明したかったのですか。わたしがあなたがたにそこから学んでほしかったことは何で
すか。神の権威と力は、神の本質が示される側面のひとつですか。それらは神の本質の
一部ですか。神の身分と地位を証明する一部分ですか。これらの質問から、わたしがこ
れから何を言おうとしているかわかります。あなたがたに何を理解してもらいたいので
すか。このことを注意深く考えなさい。

頑なに神に反対する人は、神の怒りが破壊する

まず、神のソドム破壊に関する聖句を検討しましょう。

創世記 19:1-11 そのふたりのみ使は夕暮にソドムに着いた。そのときロトはソドム
の門にすわっていた。ロトは彼らを見て、立って迎え、地に伏して、言った、「わが主
よ、どうぞしもべの家に立寄って足を洗い、お泊まりください。そして朝早く起きてお
立ちください」。彼らは言った、「いや、われわれは広場で夜を過ごします」。しかし
ロトがしいて勧めたので、彼らはついに彼の所に寄り、家にはいった。ロトは彼らのた
めにふるまいを設け、種入れぬパンを焼いて食べさせた。ところが彼らの寝ないうちに
、ソドムの町の人々は、若い者も老人も、民がみな四方からきて、その家を囲み、ロト
に叫んで言った、「今夜おまえの所にきた人々はどこにいるか。それをここに出しなさい。
われわれは彼らを知るであろう」。ロトは入口におる彼らの所に出て行き、うしろ

の戸を閉じて、言った、「兄弟たちよ、どうか悪い事はしないでください。わたしにまだ男を知らない娘がふたりあります。わたしはこれをあなたがたに、さし出しますから、好きなようにしてください。ただ、わたしの屋根の下にはいったこの人たちには、何もしないでください」。彼らは言った、「退け」。また言った、「この男は渡ってきたよそ者であるのに、いつも、さばきびとになろうとする。それで、われわれは彼らに加えるよりも、おまえに多くの害を加えよう」。彼らはロトの身に激しく迫り、進み寄って戸を破ろうとした。その時、かのふたりは手を伸べてロトを家の内に引き入れ、戸を閉じた。そして家の入口におる人々を、老若の別なく打って目をくらましたので、彼らは入口を捜すのに疲れた。

創世記 19:24-25 ヤーウェは硫黄と火とをヤーウェの所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせて、これらの町と、すべての低地と、その町々のすべての住民と、その地にはえている物を、ことごとく滅ぼされた。

これらの聖句から、ソドムの罪と墮落はすでに人間にとっても神にとっても憎むべき程度まで達していたこと、そのために神の観点から見るとソドムは破壊されて然るべきであったことは容易に読み取ることができます。けれど、破壊される前のソドムの町で何があったのですか。その出来事から人は何を学べますか。出来事に対する神の姿勢は、神の性質について人に何を示していますか。逸話を全体的に把握するため、聖句に記されていることを精読しましょう……

ソドムの墮落——人間を怒らせ、神を激怒させる

その夜、ロトは二人の神の使いを迎え、彼らのために食事を用意しました。食事の後、使いが休む前に、町中の人々がロトの家を取り囲み、ロトに叫びました。聖句では、人々が「今夜おまえの所にきた人々はどこにいるか。それをここに出しなさい。われわれは彼らを知るであろう」と言ったと記録しています。この言葉を言ったのは誰ですか。この言葉は誰に対するものですか。それはソドムの住民の言葉であり、ロトの家の外でロトに向けて叫ばれました。このような言葉を聞いたら、どのように感じますか。怒りますか。気分が悪くなりますか。激しい怒りがこみ上げてきますか。この言葉はサタンの匂いがしませんか。この言葉を通して、ソドムの邪悪と闇を感じられますか。言葉にソドムの住民の残忍さと野蛮さを感じることができますか。彼らの態度から、墮落の深刻さを感じることができますか。言葉の内容から、ソドムの住民の邪悪な本質と残忍な性質が本人たちが制御できない程度に達していたことを理解するのは困難ではありません。ロト以外のソドムの住民はみなサタンと何ら変わらず、誰かを見かけただけで、

その人を傷つけ食い物にしたい衝動に駆られるのです。こうしたことから、この町の恐ろしい本性をうかがい知ることができるだけでなく、この町にただよう死の雰囲気、邪悪さや血なまぐささをも感じ取ることができます。

人間の魂を食い物にする野蛮な欲望に満ちた非人間的な悪党と対面したロトは、どのように答えましたか。聖句には、「どうか悪い事はしないでください。わたしにまだ男を知らない娘がふたりあります。わたしはこれをあなたがたに、さし出しますから、好きなようにしてください。ただ、わたしの屋根の下にはいったこの人たちには、何もしないでください」とあります。こう言ったロトの本意は、使いを守るためなら、自分の娘二人を失うことも辞さない、ということでした。どのように筋道を立てて考えても、彼らはロトの提案を受け容れ、二人の使いを煩わせるべきではありませんでした。なぜなら、使いはソドムの住民にとってまったくの他人であり、何の関係もなく、彼らの不利益になるようなことをしたこともなかったからです。しかし、ソドムの住民は邪悪な本性のせいで、それで一件を落着かせるところか、よけいに態度が激しくなりました。彼らのやり取りの一つから、ソドムの住民の邪悪な本性を疑いなく察することができると同時に、神がなぜソドムを破壊することを望んだのかを理解し納得することができます。

それでは、ソドムの住民は次に何と言いましたか。聖書によると、こうです。「『退け』。また言った、『この男は渡ってきたよそ者であるのに、いつも、さばきびとになろうとする。それで、われわれは彼らに加えるよりも、おまえに多くの害を加えよう』。彼らはロトの身に激しく迫り、進み寄って戸を破ろうとした」。彼らはなぜロトの戸を破ろうとしたのですか。それは、ソドムの住民は二人の使いにどうしても危害を加えたかったからです。二人の使者はなぜソドムに来たのですか。この使いは、ロトとその家族を救うために来たのですが、住民は彼らが来たのは公務に就くためであると勘違いしていました。使いの目的を尋ねることもなく、憶測だけで二人を乱暴に攻撃しようとした。つまり、ソドムの住民は自分たちにまったく関係のない人を傷つけたかったのです。ソドムの住民が完全に人間性と理知を失っていたことは明らかです。彼らの狂気と凶暴さは、人間を傷つけ、食い尽くそうとするサタンの邪悪な本性と違いませんでした。

住民が使いを引き渡すようにロトに要求したとき、ロトはどうしましたか。聖句から、ロトは使いを引き渡さなかったことが分かります。ロトはこの二人の神の使いを知っていましたか。もちろん、知りませんでした。ではなぜ、ロトはこの二人を救うことが

できたのですか。ロトは二人が何をしに来たのか知っていましたか。ロトは二人が来た目的を知りませんでした。二人が神のしもべであることは知っていました。だから二人を自分の家に迎え入れたのです。ロトが二人の神のしもべを「わが主」と呼んでいたことは、ロトがソドムの住民とは違って、常日頃から神に従っていたことを示しています。したがって、神の使いがロトのところへ来たとき、ロトは自らの命を危険にさらして彼らを家に招き入れたのです。さらに、二人を守るために自分の娘二人を身代わりにしようとしていました。これはロトの義なる行為で、ロトの本性と本質の具体的な表れであり、また神がロトを救うためにしもべを送った理由でもありました。危機に遭遇しても、ロトは何を省みることもなく二人の神のしもべを守り、自分の娘二人を身代わりにしてしもべの安全を守ろうとさえしました。ロト以外に、このようなことをしたかもしれない人がソドムの町にいましたか。誰もいなかったというのが事実です。したがって、ロトを除き、ソドムの住民は全員滅びの対象とされたのは明らかで、そうなったのは当然の報いだったのです。

ソドムは神の怒りを引き起こしたために滅ぼされた

ソドムの住民が二人の神のしもべを見たとき、彼らは来訪の目的を尋ねることも、神の心意を広めるために来たのかどうかを尋ねることもしませんでした。それとは反対に、彼らは徒党を組み、あたかも野良犬か凶暴な狼であるかのように、物も言わずしもべを捉えようとしていました。神はこの出来事が起こっているのを見ていましたか。このような人間の振る舞い、このような出来事について神は心の中で何を考えていたのでしょうか。神はこの町を滅ぼすことを決定し、躊躇して待つことも、もう少し忍耐することもありませんでした。その日が訪れたので、神は望む通りに働きを行ないました。そのため、創世記19章24～25節には、「ヤーウェは硫黄と火とをヤーウェの所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせて、これらの町と、すべての低地と、その町々のすべての住民と、その地にはえている物を、ことごとく滅ぼされた」とあります。この聖句二節では、神がこの町を滅ぼした方法と、神が何を滅ぼしたかが記されています。聖書では、神がこの町を火で焼いたことが最初に述べられており、その火の威力はすべての人と地の草木をすべて滅ぼすに十分であったと記されています。つまり、天から降った火は、町を破壊しただけでなく、町中の人と生きとし生けるものすべてを跡形もなく滅ぼしました。町が滅ぼされた後、土地には生き物がまったく残っていませんでした。もはや生き物が存在せず、生き物の形跡もありません。町は不毛の地となり、そこは死の静寂が満ちていました。虐殺や流血騒ぎなど、神に反する邪悪な行いは、もはやこの地に

は起こらないのです。

なぜ神はこれほど徹底的にこの地を焼き尽くしたかったのですか。ここから何がわかりますか。神は自身が造った人類や万物がこのように破壊されるのを見ていることに本当に耐えられたのですか。天から降った火にヤーウェ神の怒りを識別することができれば、破壊の対象とソドムの町の破壊の程度から判断して、ヤーウェ神の怒りがどれほど大きかったかを理解するのはそれほど困難ではありません。神がある町を軽蔑すると、神はその町に罰を下します。神がある町を嫌悪すると、神は怒りをその町の住民に伝えるために繰り返し警告を発します。しかし、神がある町を滅ぼすと決めれば、つまり、神の怒りと威厳が侵されたならば、神はそれ以上の罰や警告を与えず、代わりにその町を直接に破壊します。神はその町を完全に消滅させます。これが神の義なる性質です。

ソドムによる神への敵対と抵抗の繰り返しの後、神はソドムを徹底的に根絶した

わたしたちは神の義なる性質を全般的に理解したのですから、今は神が罪の町とみなしたソドムに再び注意を向けます。ソドムの町の実質を理解することで、神がなぜこの町を破壊したかったのか、そしてなぜ神がそこまで完全に破壊したのかを理解することができます。それにより、神の義なる性質がわかるようになります。

人間の視点から見ると、ソドムは人間の欲望と邪悪さを完全に満足させることができた町でした。毎晩のように音楽と踊りがあり、魅力的で心をそそるソドムの栄華は、人を魅了し狂気に駆り立てます。ソドムの邪悪さが人間の心を蝕み、人間を誘惑して退廃させました。ソドムは、穢れた悪霊がたけり狂う町でした。罪と殺人があふれ、その空気は血なまぐさい死臭がしました。ソドムは、人々が恐怖で凍り付き、恐れて逃げ出すような町でした。ソドムでは、老若男女を問わず、誰ひとりとして真理の道を求めず、光を求めて罪から立ち去ることを願う者はいませんでした。人々はサタンの支配の下で、サタンの墮落と偽りの下で生活していました。人々は人間性を失い、思慮分別を失い、人間としての存在の元来の目的を見失っていました。人々は神に逆らう数え切れない悪行を犯し、神の導きを拒み、神の心に反発しました。ソドムの町、人々と生き物すべてを徐々に破壊へと追いやったのは、人々の邪悪な行動でした。

この二つの聖句には、二人の神のしもべがソドムに到着してからのソドムの住民の彼らへの行動が記録されており、ソドムの住民の墮落の程度については詳細に記録されていません。しかし、単純な事実によりどれほどソドムの住民が墮落し、邪悪で、神に反抗していたかが明らかです。それにより、ソドムの住民の素顔と実質も暴露されていま

す。彼らは神の警告を受け容れなかったのみならず、神の懲罰をも恐れませんでした。それどころか、神の怒りを侮蔑していました。盲目的に神を反抗していたのです。神が何をどのようにしたとしても、ソドムの住民の邪悪な本性は強くなるばかりで、神への敵対を繰り返しました。彼らは神の存在、神の訪れ、神の罰、そしてとりわけ神の警告に対して敵意を抱いていました。ソドムの住民は過度に傲慢で、自分たちが傷つけ、食い物にできる人すべてを傷つけ、食い物とし、神のしもべもそのように扱いました。彼らの邪悪な所行全てを考慮すると、神のしもべを傷つけたことは氷山の一角に過ぎず、それにより暴露された彼らの邪悪さは、大いなる海のひとしづくに過ぎません。したがって、神はソドムの住民を火で破壊することに決めたのです。神は洪水や嵐、地震、津波など他の方法は用いませんでした。神がソドムの破壊に火を用いたことは、何を意味しましたか。それは町の完全なる破壊を意味しました。それは、ソドムの町という存在が地球上から完全に消滅したことを意味しました。ここで言う「破壊」とは、町の形態や構造や外観が消滅しただけでなく、町の中にいた人々の魂も消え去り、根絶されたということを意味します。簡単に言えば、ソドムに関係するすべての人々、出来事、物が破壊されたということです。ソドムの住民には来世や再生はなく、神は自らが創造した人類から彼らを永久に根絶させました。火の使用は、その場所での罪の終わり、そこで罪が阻止されたことを意味します。その罪は消滅し、広まることはありません。それは、サタンの邪悪はその温床と、さらに滞在場所であった墓さえも奪われたことを意味しました。神とサタンの戦いにおいて、神が火を用いるということは、神の勝利の証をサタンに焼き付ける烙印です。ソドムの破壊は、人間を墮落させ、虜にすることで神に対抗するサタンの野望における大いなる失策であり、また同様に、人間の発達過程において人間が神の導きを拒み、悪に身を委ねた時期の屈辱的な印でもあります。さらにそれは神の義なる性質を真に明示する記録でもあるのです。

神が天から降らせた火がソドムを灰にしたのは、「ソドム」という名の町と、そこにあったなにもかもがその後消滅したことを意味します。ソドムは神の怒りにより破壊され、神の怒りと威厳のうちに消滅しました。神の義なる性質のため、ソドムは正当な罰を受け、当然の終焉を迎えたのです。ソドムの存在が消滅したのは、その邪悪が原因であり、またそれはその町やそこに住んでいた人、そこに育ったあらゆる生き物を二度と見たくないという神の望みでもありました。「ソドムの町を二度と見たくない」という神の望みは、神の怒りであり、神の威厳でもあります。神がソドムを焼き尽くしたのは、その邪悪と罪が神を怒らせ、いらだたせ、激しく嫌悪させたためであり、その町やそ

ここにいたあらゆる人、あらゆる生き物を二度と見たくないと思わせたためです。ソドムが焼け落ち、灰だけが残された後、ソドムは神の目に本当に存在しなくなり、神のソドムについての記憶すら消え去りました。このことは、天の火がソドムの町全体、罪に満ちた住民、町にあった罪に染められたあらゆるものを破壊しただけではなく、それらを超えて、人類の邪悪と神への反抗の記憶をも破壊したのです。これが神がソドムの町を焼いた目的でした。

この人類は墮落を極めていました。人は神とは誰か、自分はどこから来たのかを知らなかったのです。もし神のことを口にしようものなら、人々は攻撃し、中傷し、冒涇したでしょう。神の警告を伝えるために神の使いが来たときですら、墮落した人々は悔い改めの兆しを見せることも、自分たちの邪悪な行いを止めることもせず、それどころか、恐れ多くも神の使いを痛めつけたのです。彼らが明確に示したのは、神に対する極端な敵意からなる本性、本質でした。これらの墮落した人々の神への反抗は、ただ彼らの墮落した性質の現れではなく、また、真理を認識していないゆえの誹謗中傷やひやかしに過ぎなかったわけではないことがわかります。彼らの邪悪な行ないは愚かさや無知に起因するものではなく、また騙されたからでもなく、当然ながら誤った方向へと導かれたからでもありませんでした。彼らの行ないは、目に余るほど激しい神への敵意、反抗、大騒ぎと同じになっていました。当然ながら、人間のこうした行ないは神の怒りを買ひ、また犯してはならない神の性質を激怒させることになります。したがって、神は直接的かつ堂々と怒りと威厳を示しました。それは、神の義なる性質の真なる明示でした。罪に満ちた町を見た神は、最も迅速な方法でその町を滅ぼし、その町の住民とその罪のすべてを、最も完全な方法で根絶し、住民を抹殺し、そこから罪が繁殖するのを防ぎたかったのです。最も迅速で完全な方法とは、ソドムの町を火で焼きつくすことでした。ソドムの住民に対する神の姿勢は、見捨てることでも無視することでもなく、怒りと威厳、権威を用いてソドムの住民を罰し、打ちのめし、絶滅させるというものでした。彼らに対する神の姿勢は、身体的な破壊だけでなく、魂の破壊、永久の根絶でした。これが「消滅」という言葉に神が込める真意です。

神の怒りは人間には隠され未知であるが、犯すことを決して容赦しない

愚かで無知な全人類に対する神の処分は、おもに憐れみと寛容に基づいています。その一方、神の怒りは、大部分の出来事において、ほぼ常に人間には隠され、知られることはありません。その結果、人間には神が怒りを表しているのを見極めたり、神の怒りそのものを理解したりすることは困難です。したがって、人間は神の怒りを軽視します

。人間への忍耐と赦しからなる神の最終的な働きと段階に人間が直面したとき、すなわち、神の最後の憐れみと警告が人類に到達したとき、もし人間が以前と同じ方法で神に反抗したままで、悔い改めて自分自身のあり方を正し、神の憐れみを受け容れる努力を一切行なわなければ、神はもはや寛容と忍耐を人類に与えることはありません。逆に、このとき神は赦しを撤回します。その後、神は怒りしか放ちません。神が様々な方法で人間を罰し滅ぼすことができるように、神は様々な方法で怒りを表現することができます。

ソドムの町を滅ぼすために神が火を用いることは、人類や他の物を徹底的に滅ぼす神の最迅速の方法です。ソドムの住民を焼き尽くしたことで、彼らの身体だけでなく、その霊と魂と身体全体を滅ぼし、それにより物質的世界と人間には見えない世界の両方において、町にいた人々の存在の消滅が確実なものとされました。それは、神が怒りを明示し表現する方法の一つです。このような明示や表現は、神の怒りの本質の一面であり、当然ながら神の義なる性質の本質の明示でもあります。神が怒りを伝えるとき、神は憐れみと慈愛を明らかにするのを停止し、寛容と忍耐も一切見せません。神に引き続き忍耐強くあり、今一度憐れみと寛容を与えるように説得できる人間、物、理由は一切存在しません。それどころか神は一瞬の迷いもなく、神の怒りと威厳を伝え、望むことを行ないます。神は自らの望む通りに、これを迅速かつ円滑に行ないます。人間が犯してはならない神の怒りと威厳は、こうして伝えられ、それは神の義なる性質の一側面を表すものでもあります。神が人間への懸念と愛を示しているのを目撃すると、人間は神の怒りを感じることも、神の威厳を見ることも、反抗に対する神の不寛容を感じることもできません。そのため、神の義なる性質が単に憐れみと寛容さと愛のみであると人間は信じるようになりました。しかし、神が町を滅ぼし、人類を憎悪するのを目の当たりにし、人間を滅ぼす際の神の怒り、そして神の威厳を見ることで、人間は神の義なる性質の別の側面を見ることができるようになります。これが侮辱への神の不寛容です。反抗を一切甘受することのない神の性質は、あらゆる被造物の想像を超え、非被造物にもその性質を阻んだり干渉したりできるものは存在せず、その性質を模倣したり、偽ったりすることができないのは尚更です。したがって、神の性質のこの側面は、人類が一番よく知るべきものです。この種の性質は神自身のみが持ち、神自身のみがこのような性質を備えています。神がこのような義なる性質を持っている理由は、暗闇、反逆、人間を墮落させ、食いものにするサタンの悪意に満ちた行動を神が嫌悪しているからです。神に反逆するあらゆる罪の行ないを神が嫌悪しているからであり、神の聖なる清い本質の

ためです。それゆえ、被造物や非被造物が神に堂々と反対したり対抗したりすることを神は甘受しないのです。たとえ、神が一度憐れみを示した人や神が選んだ人でも、神の性質を挑発し、神の忍耐と寛容の原則を犯すだけで、いかなる反抗をも甘受しない義なる性質を神は一切の容赦なく、躊躇なく示すのです。

神の怒りは、あらゆる正義の力と肯定的な物事を守る

神の語ること、思い、行為のこれらの例を理解することで、人間が背くことのできない神の義なる性質を理解できますか。人間がどの程度理解できるかを問わず、結局のところ、これは神自身の性質の一側面であり、それは神に特有なのです。侮辱に対する神の不寛容は神のみが持つ本質であり、神の怒りは神特有の性質であり、神の威厳は神のみの本質です。神の怒りの背後にある原則は、神の身分と地位の証明であり、それは神のみが持つものです。この原則もまた唯一無二の神自身を象徴するものであることは、言うまでもありません。神の性質は神自身の固有の本質で、時間の経過とともに変化することも、地理的位置によって変化することはありません。神の固有の性質は、神のみにある本質です。神が誰に働きを行なおうと、神の本質も、神の義なる性質も不変です。誰かが神を怒らせたときに、神が怒りを放つのは、神固有の性質です。このとき、神の怒りの背後にある原則や、神の唯一無二の身分や地位は不変です。神の本質が変化したり、神の性質に異なる要素が生まれたりするために神は怒るのではなく、神が怒るのは、人間の神に対する反抗が神の性質に反するからです。人間の神への目に余る挑発は、神固有の身分と地位に対する深刻な挑戦です。神から見ると、人間が神に挑戦するということは、人間が神と争い、神の怒りを試しているということです。人間が神に反抗し、神と争い、神の怒りを試し続けるのは、罪がはびこるときであり、神の怒りは自然と出現します。したがって、神が怒りを示すのは、あらゆる邪惡な力が滅びること、あらゆる敵対勢力が破壊されるということの象徴です。これが神の義なる性質と、神の怒りの独自性です。神の威厳と聖さが試されたとき、正義の力が阻害され、人間に見えないとき、神は怒りを放ちます。神の本質ゆえに、神と争い、戦い、神に敵対する地上の様々な勢力はすべて邪惡であり、墮落しており不義です。それらはすべてサタンに由来し、サタンに属します。神は正義であり、光であり、完璧に聖であるので、邪惡で墮落しサタンに属するものはすべて神の怒りが発せられると消滅します。

神の怒りの噴出は神の義なる性質を示す側面の一つですが、神の怒りは、その対象について無差別であるとか、無原則であることは決してありません。それとは反対に、神は怒りやすくなく、軽率に怒りや威厳を示すことはありません。さらに、神の怒りはき

ちゃんと制御され、調整されています。人間が怒りを爆発させたり、発散させたりするのは比較になりません。聖書には、人間と神との対話が多く記録されています。対話に関わる人間の一部は、発言が浅薄で、無知で、稚拙ですが、神は彼らを打ち倒すことも、非難することもしませんでした。特に、ヨブの試練の間、ヤーウェ神はヨブの三人の友やその他の人がヨブに言ったことを聞いた後、彼らをどのように扱いましたか。神は彼らを非難しましたか。神は彼らに激怒しましたか。神はそのようなことは一切しませんでした。その代わり、神はヨブに彼らのために祈るよう命じ、神自身は彼らの誤りに気に留めることはありませんでした。これらの例はすべて、神が墮落した無知な人類を扱うおもな姿勢を示しています。したがって、神の怒りの発出は神の気分を示すものでも、神の感情のはけ口でもありません。神の怒りは、人間が考えるような感情の爆発ではありません。神は、気分を制しきれないから、怒りが我慢の限界を超えたので放出しなければならないから怒りを発出させるのではありません。逆に、神の怒りは神の義なる性質を示し、純粹に表現するもので、神の聖なる本質の象徴的な顕示です。神は怒りであり、侮辱されることを容赦しません。これは、神の怒りが原因に無関係ということでも、無原則であるということでもありません。原因に無関係に無原則に手当たり次第に怒りを爆発させるのは、墮落した人類が独占権をもっています。人間がひとたび地位を得ると、気分を制御するのが困難になり、事あるごとに不満を爆発させ、感情を露わにします。自分の力を示し、自分の地位や身分が一般人とは違うことを他人に知らしめるために、明確な理由なく人が激怒することさえ多々あります。もちろん、地位のない墮落した人間も、よく取り乱します。そのような人の怒りは、個人的利益が阻まれたせいで発生する場合があります。自分の地位と尊厳を守るために、墮落した人間はよく感情を発散させ、傲慢な本性を露わにします。人間は、罪の存在を正当化し是認するために突然激怒して感情を露わにします。そうした行動で、人は自分の不満を表すのです。このような行動は汚れや謀略に、人間の墮落と邪悪に、そして何よりも人間の向こう見ずな野心と欲望に満ちています。正義が邪悪と衝突しても、人間が正義を守り是認するために怒りを爆発させることはありません。それとは逆に、正義の勢力が脅威にさらされ、迫害され、攻撃されると、人間の態度は無視、回避、畏縮といったものになります。しかし、邪悪の勢力に対峙すると、人間は迎合し、ぺこぺこ頭を下げるといった態度を取るのです。したがって、人間の怒りの爆発は、邪悪な勢力にとって逃げ道であり、肉なる人間の猛烈で抑制できない邪悪な行動の表出なのです。しかし、神が怒りを示すときは、邪悪な勢力はすべて阻止され、人間を傷つける罪もすべて阻止され、神の働きを阻害する敵意のある勢力が明らかにされ、分離され、呪われます。そして、神に

反逆するサタンの僕は罰せられて根絶されます。それらがいなくなると、神の働きは何ものにも阻害されることなく進められ、神の経営（救いの）計画は、予定通り一步步展開し続けます。神の選民はサタンの妨害や策略から解放され、神に付き従う人は、静寂で平和な環境の中で神の導きと施しを楽しむのです。神の怒りは、あらゆる邪惡の勢力の増大と横行を阻止する防衛手段であり、また義なる肯定的な物事すべての存在を守り、広め、抑圧や破壊から永久に保護する防衛手段です。

神がソドムを破壊したことに、あなたがたは神の怒りの本質を見ることができますか。神の怒りの中に、別の何かが混ざっていますか。神の怒りは純粹ですか。人間の言葉で言うと、神の怒りは汚染されていませんか。神の怒りの背後に何か策略はありますか。陰謀はありますか。口にできない秘密がありますか。わたしは断固として厳粛に言えます。神の怒りには、人が疑いをもつような部分は含まれていません。神の怒りは純粹で混じり物のない怒りであり、他の意図や目的を含んでいません。神の怒りの背後にある理由は純粹であり、一点の非もなく、非難する余地也没有ありません。それは神の聖なる本質の自然な明示であり、いかなる被造物にもないものです。これは神の唯一無二で義なる性質の一部であり、創造主と被造物の本質における顕著な相違点の一つです。

他人の前で怒ろうと、陰で怒ろうと、人が怒るとき、そこには必ず様々な意図と目的があります。自分の威信を高めようとしている場合、自らの利益を守ろうとしている場合、自分の外聞や面目を保とうとしている場合などがあります。自分の怒りを抑えるようにとする人もいれば、まったく抑えようとせず、好きなときに心ゆくまで怒りを露わにする人もいます。つまり、人間の怒りは、その墮落した性質に由来するのです。目的が何であれ、怒りは人間の肉や本性から来るもので、義や不義とは無関係です。なぜなら、人間の本性や本質には真理に相当するものが皆無だからです。したがって、墮落した人類の不機嫌と神の怒りを、同じ次元で議論するべきではありません。サタンに墮落させられた人間の行動は、例外なく墮落を保護したいという願望から始まり、墮落に基づいています。だから、人間の怒りと神の怒りは、人間の怒りが理論上どれほど妥当であるように思われようと、同じ次元で議論すべきではありません。神が怒りを示すとき、邪惡な勢力が阻止され、邪惡な物事が破壊される一方、義であり肯定的な物事は、神の慈しみと保護を与えられ、存続することが許されます。神が怒りを伝えるのは、不義で否定的で邪惡な物事が、正義で肯定的な物事の通常の活動と発達を妨害し、攪乱し、破壊するからです。神の怒りの目的は神自身の地位や身分を守るためではなく、義であり、肯定的であり、美しく善なるもの、そして人類の正常な生存の掟と秩序を守るため

す。これが神の怒りの根本的な原因です。神の怒りは極めて適切で、自然であり、神の性質の真の明示です。神の怒りには、隠れた意図がなく、虚偽や策略もなく、欲望も狡猾さも悪意も暴力も邪悪も、その他の墮落した人類に共通する特徴も一切存在しません。怒りを伝える前に、神はすでにあらゆる物事の本質を極めて明瞭かつ完全に把握しており、また正確かつ明瞭な定義と結論を導き出しています。それゆえ、神のあらゆる業の目的は、神の姿勢と同様、極めて明確です。神の心に混乱はなく、神は盲目でも、衝動的でも、軽率でもなく、そしてなによりも無原則ではありません。これが神の怒りの実践的側面であり、この側面のため、人類は普通の存在を達成したのです。神の怒りがなければ、人類は異常な生活条件へと陥り、義であり、美しく善良なものはすべて破壊され、消滅するでしょう。神の怒りなくしては、被造物のための生存の掟と法則は破壊され、完全に転覆されることさえあるでしょう。人間が造られて以来、神は義の性質により人類の正常な生活を守り維持し続けています。神の義なる性質に怒りと威厳が含まれているため、邪悪な人や物事、人類の普通の生活を阻害し損なうあらゆるものが、神の怒りによる罰を受け、制限され、破壊されます。過去数千年間にわたり、神は義なる性質により、神の人類経営において神に反抗しサタンの僕や手先として行動するあらゆる不浄な悪霊を倒し、破壊し続けてきました。このように、人類を救う神の働きは、常に神の計画に従って進行してきました。つまり、神の怒りの存在のおかげで、人間による最も義なる営みは破壊されたことがないのです。

今やあなたがたは神の怒りの本質について認識を得たので、サタンの邪悪をいかに見分けるかをさらに理解したはずです。

人道的で正しく、道徳的に見えても、サタンの本質は残忍かつ邪悪である

サタンは人を騙すことで評判を確立します。サタンは正義の先導者的かつ模範的存在としての立場を確立することがよくあります。正義を守ると見せかけて、サタンは人間を傷つけ、その魂を食い物とし、人間を麻痺させ、騙し、扇動するためにあらゆる手段を講じます。サタンの目標は、サタンの邪悪な行いを人間に認めさせ、それに従わせること、サタンが神の権威と統治に反対するのに人間を参加させることです。しかし、人間がサタンの陰謀や策略、下劣な顔つきを見通し、サタンの踏み台にされ、騙され、奴隷として仕え、サタンと共に罰を受けて滅ぼされることを望まなくなると、サタンはそれまでの聖人づらを一変させ、仮面を破り捨て、真の邪悪で残忍で醜く野蛮な素顔を現します。サタンに従うことを拒み、その邪悪な勢力に反対する者すべてを皆殺しにすることほどサタンが好むことはありません。この段階で、サタンは信頼のおける紳士の姿

を装うことはできず、羊の皮の下の醜い悪魔のような正体があらわになります。ひとたびサタンの陰謀が明るみに出て、その真の特徴が暴露されると、サタンは激怒して野蛮さを現します。その後、人間を傷つけ、食べ物にするサタンの欲望は強くなるばかりです。これは、人間が真理に目覚めると、サタンは激怒し、捕らわれの身から解き放たれて自由と光を得ようとする人間に強い復讐の念をもつようになるからです。サタンの怒りはその邪悪さを正当化し保護するためであり、それはまたサタンの野蛮な性質を真に暴露しています。

万事においてサタンの振る舞いはその邪悪な本性をさらしています。サタンが人間を惑わせて自分に従わせようとする初期の取り組みから、邪悪な行ないに人間を引きずり込むサタンによる人間の搾取、サタンの真の姿が暴かれ、人間がそれに気づきサタンを見捨てた後のサタンの復讐の念まで、サタンが人間に行なうあらゆる邪悪な行ないのうち、サタンの邪悪な本質が露わにならないものも、サタンが肯定的な物事と無関係で、あらゆる邪悪なものの根源であることを証明しないものもあります。サタンの行動はすべてサタンの邪悪さを守り、サタンの邪悪な行ないを継続させ、正しく肯定的な物事に反し、人類の普通の存在の法則や秩序を破綻させます。サタンのこのような行ないは神への敵意であり、神の怒りに滅ぼされます。サタンにはサタンの怒りがあるものの、それはサタンの邪悪な本性を発散させる手段でしかありません。サタンが憤慨し、激怒する理由は、そのおぞましい陰謀が暴露され、策略がうまく行かず、神の代わりとして君臨するというサタンの向こう見ずな野心と欲望が打ち砕かれ、阻止され、全人類を支配するという目標が今や無となり、永遠に達成の見込みがなくなったからです。サタンの陰謀が結実することや、サタンの邪悪が拡散するのを阻止してきたのは、神が度々奮い起こしてきた怒りです。そのため、サタンは神の怒りを嫌うと同時に恐れています。神の怒りが下るたびに、サタンの下劣な真の姿が明らかになるだけでなく、サタンの邪悪な願望も明らかにされ、その過程で人類に対するサタンの怒りの理由が白日の下にさらされます。サタンの激昂は、その邪悪な本性と謀略が真に明示されたものです。もちろん、サタンが激怒するたびに、邪悪なものが破壊され、肯定的なものが保護され維持されることが告知されます。それは、神の怒りは犯すことが許されないという真理が告知されるのです。

神の義の性質を知るために経験や想像に依存してはならない

神の裁きと刑罰に直面したら、あなたは神の言葉は汚れていると言いますか。神の怒りの背後にはいわくがあり、神の怒りは汚れていると言いますか。神の性質は必ずしも

完全に義ではないと言って、神を中傷しますか。神の行ないの一つひとつに対処するとき、神の義なる性質にはその他の要素がなく、聖であり完璧であることを確信していなければなりません。そのような行ないには、神による攻撃、罰、人類の破壊などが含まれます。神の行ないの一つひとつは例外なく、神が本来持っている性質と神の計画に厳密に従って行なわれ、これには人類の知識や伝統、哲学は含まれません。神の行ないは、それぞれが神の性質と本質を表出するもので、墮落した人類に属する一切のものと無関係です。人類には、完璧で、純粹で、聖なるものは、神の人類への愛、憐れみ、寛容さだけだという観念があり、神の怒りと憤りも同様に純粹であることを知る人はいません。さらに、神が決して侮辱を甘受しないのはなぜか、神の怒りがそこまで甚大なのはなぜか、といった疑問について誰も考えません。それどころか、神の怒りを墮落した人類の態度である不機嫌と同一視し、墮落した人類の怒りと同じであると思い込みます。さらには神の怒りは墮落した人の性質の自然な表出と同じであり、神の怒りが発生するのは、気に入らない状況に直面したときの墮落した人類の怒りと同様であり、神の怒りが発生するのは神の気分の表出であると考えていることさえあります。この交わりの後には、あなたがたの一人ひとりが、神の義なる性質について誤解や想像や仮定をしていないこと、わたしの話を聴いた後、神の義なる性質である怒りを心の中で真に認識していること、神の怒りについてのこれまでの誤った考えを捨てること、神の怒りの本質に関する自分の誤った思い込みや見方を変えることができることを願います。さらに、あなたがたが神の性質の正確な定義を心に持ち、もはや神の義なる性質について疑念を抱かず、神の真の性質に人間的な論法や想像を押し付けないことを願います。神の義なる性質は、神自身の真の本質です。それは人間が書き綴ったり形作ったりしたものではありません。神の義なる性質は、神の義なる性質であり、被造物とは何の関係もつながりもありません。神自身は、神自身です。神が被造物の一部となることは決してなく、神が被造物の一員となったとしても、神が本来持っている性質と本質は不変です。したがって、神を知ること、物を知ることではないのです。神を知ることとは何かを分解することでも、人を理解することでもありません。神を知るために、物や人を知る概念や方法を用いるならば、神に関する認識を得ることは不可能です。神を知ること、経験や想像に依存することではなく、したがって神に自分の経験や想像を押し付けてはなりません。どれほど豊かな経験や想像があったとしても、それには限界があります。さらに、想像は事実に対応するものではなく、ましてや真理に対応するものではなく、神の真の性質と本質とは相容れないものです。神の本質を理解するために想像に依存したなら、成功することはありません。唯一の方法は、神から来るものすべてを受け容れ、徐々

に経験し、理解することです。あなたが協力し、真理への飢えや渇きがあれば、ある日、あなたが真に神を理解し、知ることができるように、神があなたを啓きます。これでわたしたちの話し合いのこの部分を終わりとしましょう。

人類は真摯な悔い改めにより神の憐れみと寛容を得る

次は聖書にある「神によるニネベの救い」の物語です。

ヨナ書 1:1-2 ヤーウェの言葉がアミッタイの子ヨナに臨んで言った、「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの前に上ってきたからである」。

ヨナ書3章 時にヤーウェの言葉は再びヨナに臨んで言った、「立って、あの大きな町ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ」。そこでヨナはヤーウェの言葉に従い、立って、ニネベに行った。ニネベは非常に大きな町であって、これを行きめぐするには、三日を要するほどであった。ヨナはその町にはいり、初め一日路を行きめぐって呼ばわり、「四十日を経たらニネベは滅びる」と言った。そこでニネベの人々は神を信じ、断食をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着た。このうわさがニネベの王に達すると、彼はその王座から立ち上がり、朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座した。また王とその大臣の布告をもって、ニネベ中にふれさせて言った、「人も獣も牛も羊もみな、何をも味わってはならない。物を食い、水を飲んではならない。人も獣も荒布をまとい、ひたすら神に呼ばわり、おのおのその悪い道およびその手にある強暴を離れよ。あるいは神はみ心をかえ、その激しい怒りをやめて、われわれを滅ぼされないかもしれない。だれがそれを知るだろう」。神は彼らのなすところ、その悪い道を離れたのを見られ、彼らの上に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめになった。

ヨナ書4章 ところがヨナはこれを非常に不快として、激しく怒り、ヤーウェに祈って言った、「ヤーウェよ、わたしがなお国におりました時、この事を申したではありませんか。それでこそわたしは、急いでタルシシにのがれようとしたのです。なぜなら、わたしはあなたが恵み深い神、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かで、災を思いかえされることを、知っていたからです。それでヤーウェよ、どうぞ今わたしの命をとってください。わたしにとっては、生きるよりも死ぬ方がましだからです」。ヤーウェは言われた、「あなたの怒るのは、よいことであろうか」。そこでヨナは町から出て、町の東の方に座し、そこに自分のために一つの小屋を造り、町のなりゆきを見きわめようと、その下の日陰にすわっていた。時にヤーウェ神は、ヨナを暑さの苦痛から救

うために、とうごまを備えて、それを育て、ヨナの頭の上に日陰を設けた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。ところが神は翌日の夜明けに虫を備えて、そのとうごまをかませられたので、それは枯れた。やがて太陽が出たとき、神が暑い東風を備え、また太陽がヨナの頭を照したので、ヨナは弱りはて、死ぬことを願って言った、「生きるよりも死ぬ方がわたしにはました」。しかし神はヨナに言われた、「とうごまのためにあなたの怒るのはよくない」。ヨナは言った、「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」。ヤーウェは言われた、「あなたは労せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」。

ニネベの物語の概要

「神によるニネベの救い」の物語は長くありませんが、ここから神の義なる性質の別の側面を垣間見ることができます。その側面とは具体的に何を指すかを理解するためには、この聖句に戻り、神がその働きにおいて行なった業の一つを確認しなければなりません。

まず最初に、この物語の冒頭部分、「ヤーウェの言葉がアミッタイの子ヨナに臨んで言った、『立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの前に上ってきたからである』」（ヨナ書 1:1-2）を検討しましょう。この部分では、ヤーウェ神がニネベの町へ向かうようヨナに命じたことがわかります。神がヨナにニネベへ向かうよう命じたのはなぜですか。それは聖書に明記されています。ニネベの町の人々の悪がヤーウェ神の目に留まり、そのため神はヨナを遣わし、ヤーウェ神が何を行なおうとしているかを人々に知らせようとしたのです。ヨナが誰なのかについては記述がありませんが、当然ながらそれは神を知ることとは無関係です。したがって、ヨナについて理解する必要はありません。必要なのは、神がヨナに何をするように命じたかと、命じた理由を理解することです。

ニネベに届いたヤーウェ神の警告

次の聖句、ヨナ書3章に進みましょう。「ヨナはその町にはいり、初め一日路を行きめぐって呼ばわり、『四十日を経たらニネベは滅びる』と言った」は、神がニネベの人々に伝えるために直接ヨナに託した言葉です。つまり、当然ながら、ヤーウェがニネベの人々に伝えたかった言葉です。この言葉は、ニネベの人々の悪が神の目に触れたため、神は彼らを嫌悪し憎むようになり、ニネベを滅ぼすことを望んでいると人々に伝えて

います。しかし、ニネベを滅ぼす前に、神はニネベの人々にその旨を通知すると同時に、彼らに悪を悔い改め、やりなおす機会を与えます。この機会は四十日間で、それ以上は続きません。つまり、彼らが四十日以内に悔い改めて罪を認め、ヤーウェ神の前にひれ伏さなかったなら、神はニネベの町をソドムと同様に滅ぼそうというのです。これがヤーウェ神がニネベの人々に伝えたかったことです。明らかに、これは単なる宣告ではありませんでした。これはヤーウェ神の怒りを伝えるのみならず、ニネベの人々へのヤーウェ神の姿勢も伝えており、同時にニネベの町で暮らす人々への厳粛な警告ともなっていました。この警告は、ニネベの町の人々の悪がヤーウェ神の嫌悪を買うに至り、その悪業ゆえに彼らは程なくして滅びの危機に見舞われることを伝えました。したがって、彼らは生命の危機に瀕していたのです。

ヤーウェ神の警告に対するニネベとソドムの反応の明らかな相違点

「滅びる」とはどういう意味ですか。日常的な言い方をすれば、「もういなくなる」ということです。しかし、どのようにしてですか。一体誰が一つの町全体を滅ぼすことができるのでしょうか。当然、そのようなことは人間には不可能でしょう。ニネベの人々は愚かではなかったので、この宣告を聞いてすぐにその旨を理解しました。彼らは宣告が神から来たこと、神が業を行なうつもりであること、自分たちの邪悪さがヤーウェ神の怒りに触れ、その怒りが自分たちに向けられ、それゆえ程なくして自分たちがニネベの町とともに滅ぼされるであろうことを理解しました。ヤーウェ神の警告を聞いた後、ニネベの人々はどのように行動しましたか。聖書では、王から一般人まで、ニネベの人々がどのように反応したかが詳細に記載されています。聖書にはこうあります。「そこでニネベの人々は神を信じ、断食をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着た。このうわさがニネベの王に達すると、彼はその王座から立ち上がり、朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座した。また王とその大臣の布告をもって、ニネベ中にふれさせて言った、『人も獣も牛も羊もみな、何をも味わってはならない。物を食い、水を飲んではならない。人も獣も荒布をまとい、ひたすら神に呼ばわり、おのおのその悪い道およびその手にある強暴を離れよ。……』」

ヤーウェ神の宣告を聞いた後、ニネベの人々はソドムの人々とは正反対の態度を取りました。ソドムの人々は堂々と神に反抗し、邪悪を重ねましたが、ニネベの人々は宣告を聞いた後、それを無視することも反抗することはありませんでした。それどころか、彼らは神を信じ、断食を宣言しました。ここで「信じた」とは何を意味しますか。この言葉自体は、信仰と服従を思わせます。ニネベの人々が実際に見せた振る舞いで説明す

れば、彼らは神は言葉通りのことを行うことができ、またそうするであろうと信じ、悔い改めることを望んだ、という意味です。彼らは喫緊の災いに瀕して恐れを感じましたか。彼らの心が恐れたのは、信仰のためです。彼らの信仰と恐れは、何によって証明することができますか。それは聖書にある通りです。すなわち、「断食をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着た」のです。つまり、ニネベの人々には真の信仰があり、その信仰から恐れが生まれ、それゆえに彼らは断食と荒布の着用を行ないました。こうして彼らは悔い改めの開始を示しました。ソドムの人々とは全く対照的に、ニネベの人々は神に反抗しなかっただけでなく、自分たちの振る舞いと行動により悔い改めを明示しました。もちろん、これはニネベの町中の住民が行なったことで、一般人だけでなく、王も例外ではなかったのです。

ニネベの王が悔い改めたので、ヤーウェ神は称賛した

ニネベの王が知らせを聞いたとき、王は王座から立ち上がって朝服から荒布に着替え、灰の中に座りました。そして王は、町の人々全員に、全員何をも味わってはならない、そして家畜、羊、牛も物を食い、水を飲んではならない、と宣言しました。人間も家畜も同様に荒布を身にまとい、人々は熱心に神に懇願しました。また王は、各人が悪の道を離れ、その手にある強暴を捨てよ、と宣言しました。このような一連の行動から判断すれば、ニネベの王は心から悔い改めていました。王座から立ち上がり、朝服から荒布に着替え、灰の中に座るといふ、王が取った一連の行動は、ニネベの王が王という身分を脇へやり、一般人と同様に荒布をまとったということです。これは、ヤーウェ神の宣告を聞いた後、ニネベの王は王位において邪悪な行いやその手で暴力を続けず、むしろ王の権威を脇へやり、ヤーウェ神の前で悔い改めた、ということです。このとき、ニネベの王は王として悔い改めたのではなく、神の普通の臣民として悔い改め罪を告白するために神の前に来たのです。その上、王は、自分と同じようにヤーウェ神の前で悔い改めて罪を告白するように町全体に命じました。さらに、聖書にある通り、どのように悔い改めるかについて、王は具体的に決めていました。それは、「人も獣も牛も羊もみな、何をも味わってはならない。物を食い、水を飲んではならない。……ひたすら神に呼ばわり、おのおのその悪い道およびその手にある強暴を離れよ」でした。町の支配者として、王には最高の地位と権力があり、何でも思う通りにできました。ヤーウェ神の宣言を聞いた王は、それを無視したり、自分だけが悔い改めて罪の告白をしたりすることもできたはずですが、町の人々が悔い改めるか否かについて、王は完全に無視することもできたはずですが、しかし、王はそのようなことを一切しませんでした。王は、王座か

ら立ち上がり、荒布を身にまとして灰の中に座ってヤーウェ神の前で悔い改め罪を告白しただけでなく、町の人々全員、家畜のすべてが王と同様にしよう命じました。王は人々に「ひたすら神に呼ばわり」とさえ命じました。これら一連の行動により、ニネベの王は支配者が真に達成すべきことを達成したのです。王が取った一連の行動は、人類史上においてどの王にとっても困難なことであり、他に同様のことを成し遂げた王はいませんでした。これらの行動は、人類史上で前例のないことであったと言え、称賛され、人類が倣う価値のあることです。人類の黎明以来、王は皆、臣民が神に抵抗し、反対するように導いていました。それまで、それぞれの悪に対して神に贖いを求めるよう臣民を祈らせ、ヤーウェ神の赦しを得て、喫緊の罰を免れるように導いた王はいませんでした。しかしニネベの王は、その臣民に、神に立ち返り、各人が悪の道を離れ、その手にある強暴を捨てるように導くことができました。加えて、ニネベの王は自らの王位を脇へやることができ、そのためヤーウェ神は思い直して後悔し、怒りを撤回し、ニネベの町の人々が滅びを免れ、生き残ることができるようにしました。ニネベの王の行動は、人類史上希にみる奇跡というほかに、また、墮落した人類が神の前で悔い改め罪の告白を行なった模範とさえ呼べます。

神はニネベの人々の心に真摯な悔い改めを認めた

神の宣告を聞いた後、ニネベの王と臣民たちは一連の行動を取りました。彼らの行動と振る舞いの特性は何でしたか。言い換えるなら、彼らの行動全体における真髄は何でしたか。彼らはなぜそのような行動を取ったのですか。神の目には、ニネベの人々は真摯に悔い改めたと映りました。それは彼らが神に心から誓願し罪を告白しただけでなく、自分たちの悪の行いも捨てたからです。彼らがこのような行動を取ったのは、神の言葉を聞いた後、大いに恐れ、神が言葉通りの業を行うものと信じたからです。断食して粗布をまとい、灰の中に座ることで、彼らは自分たちのあり方を改めて悪から離れる決意を示し、ヤーウェ神に怒りを静めるよう祈り、裁きと差し迫った災いの取消を求めました。ニネベの人々のすべての行動を検討すると、彼らのこれまでの邪悪な行動がヤーウェ神により嫌悪されていたことも、ヤーウェが自分たちを間もなく滅ぼす理由も彼らはすでに理解していたことがわかります。そのため、ニネベの人々全員が完全に悔い改め、悪の道を離れ、その手から強暴を捨てることを望んだのです。換言すると、ニネベの人々がひとたびヤーウェ神の宣言に気づくと、彼らの一人ひとりが心に恐怖を覚え、悪の道を離れて、ヤーウェ神が嫌悪する行動を続けることを止めました。さらに、彼らはこれまでの罪が赦されることと、これまでの行動に基づいて彼らを処分しないことを

ヤーウェ神に誓願しました。ニネベの人々は二度と悪に関わらず、ヤーウェ神の怒りを買わないようにすることが可能ならば、ヤーウェ神の指示に従って行動するのをいといませんでした。彼らの悔い改めは真摯で、徹底していました。それは彼らの心から出たものであり、偽りでも一時的なものでもなかったのです。

ひとたび王から臣民までニネベ人全員が、ヤーウェ神が自分たちに怒りを覚えていることを知ると、彼らのその後のあらゆる行動、あらゆる判断や選択は、神の目に明らかなものになりました。ニネベの人々の振る舞いに従い、神の心は変わりました。この時点で神の心情はどのようなものでしたか。その答えは聖書に記されています。聖書には、「神は彼らのなすところ、その悪い道を離れたのを見られ、彼らの上に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめになった」とあります。神は思い直したものの、神の心情に複雑なものは一切ありませんでした。神はただ怒りの伝達から怒りの鎮静へと移行し、ニネベに災いを下さないと決めただけです。神がニネベに災いを下しないと迅速に決断したのは、神がニネベの人々すべての心を観察したからです。神は彼らの心底にあったもの、すなわち真摯な悔い改めと罪の告白、ヤーウェ神への真摯な信仰、自分たちの悪行がいかに神の性質の怒りを買ったかということの深い意識、それゆえのヤーウェ神による間近に迫った罰への恐れを見ました。同時に、災いを免れることができるようにヤーウェ神に自分たちへの怒りを静めるよう誓願するニネベの人々の心底からの祈りをヤーウェ神は聞いたのです。これらの事実を観察したとき、神の怒りは徐々に静まりました。神の怒りがそれまでどれほど激しかったにせよ、人々の心底からの真摯な悔い改めに神の心は動かされ、彼らに災いをもたらすことに耐え兼ね、彼らへの怒りを静めました。その代わりに、神はニネベの人々に続けて憐れみと寛容さを示し、導き、施し続けました。

神への信仰が真実であれば、頻繁に神の労りを受けられる

ニネベの人々への神の意図の変化には、躊躇や曖昧さが一切含まれていません。むしろ、それは純粋な怒りから、純粋な寛容への変化でした。これは神の本質の真の明示です。神はその行ないにおいて、優柔不断であることや躊躇することが決してありません。神の行ないの背後にある原則と目的はすべて明白かつ透明、純粋で完璧であり、その中に策略や陰謀は一切潜んでいません。つまり、神の本質には闇や邪悪が一切含まれていないのです。ニネベの人々の悪の行いが目に留まったため、神は彼らに怒りを覚えしました。このとき、神の怒りは神の本質に由来していました。しかし、神の怒りが消え、ニネベの人々に再び寛容を見せたときに神が明示したのも、やはりすべて神の本質で

した。この変化は、すべて人間の神に対する姿勢の変化に起因しました。この間、侵害を許さない神の性質も、神の寛容な本質も、神の愛と憐れみに満ちた本質も変わりませんでした。人が邪悪な行動を取り、神を侵害すると、神はその人に神の怒りを下します。人が真に悔い改めれば、神の心は変化し、神の怒りは静まります。人が頑なに神に反抗し続けると、神の怒りは静まらず、神の激しい怒りは徐々にその人に迫り、最終的にその人は滅びます。これが神の性質の本質です。神が表しているのが怒りであれ、憐れみと慈愛であれ、人間の行動や振る舞い、そして心底にある神への態度が、神の性質の明示において何が表されるかを左右します。神がある人に怒り続けているならば、その人の心は間違いなく神に反抗しています。その人は真に悔い改めたことも、神の前で頭を下げたこともなく、神への真の信仰を持ったこともないため、神の憐れみと寛容を得たことはありません。ある人が神の労りや憐れみ、寛容を頻繁に受けているのなら、その人の心には間違いなく神への真の信仰があり、その心は神に反抗していません。その人はしばしば神の前で正直に悔い改めるので、その人にしばしば神の懲らしめが下ったとしても、神の怒りが下ることはありません。

この簡潔な記述により、人は神の心、神の本質の現実性を見て、神の怒りと神の心の変化には理由があるということを理解できるようになります。神が怒っていたときと心を変えたときに見せた際立った違いにより、神の怒りと寛容という神の本質の二側面には大きな隔たりや違いがあると人々は考えます。しかし、ニネベの人々の悔い改めへの神の姿勢に、神の真の性質の別の側面を人は見ることができます。神の心の変化により、人は神の憐れみと慈愛の真実を再び見、神の本質が真に明示されるのを見ることができます。人間は、神の憐れみと慈愛が単なる神話でも虚構でもないということを認めるほかありません。それは、その時点での神の感情、神の心の変化は真実であり、神はまさしく憐れみと寛容を再び人間に与えたからです。

ニネベの人々の心からの真の悔い改めが神の憐れみを得て、滅びの運命を変える

神の心の変化と怒りには何か矛盾がありましたか。もちろん、ありませんでした。それは、そのときの神の寛容には理由があったからです。どのような理由ですか。それは聖書に記されています。聖書には、「おのおのその悪い道およびその手にある強暴を離れよ」とあります。

この「悪い道」は、数件の悪業ではなく、人々の振る舞いの邪悪な起源を指します。「悪い道を離れる」とは、ニネベの人々が二度とそうした行為をしない、ということです。つまり、彼らは二度と邪悪な行動をせず、行動の方法、根源、目的、意図、原則を

すべて変え、自分たちの心に楽しみと幸福をもたらすために、そのような方法や原則を二度と使用しない、ということです。「その手にある強暴を離れよ」の「離れ」とは、過去を破棄し、捨て去り、完全に断ち切って、二度と戻らないことを意味します。ニネベの人々がその手から強暴を捨て去ったということは、彼らの真の悔い改めを証明し、表しています。神はニネベの人々の外観とともに、心も観察します。神がニネベの人々の心に異論の余地のない真の悔い改めを確認し、また彼らが悪の道を離れ、その手から強暴を捨て去ったことを観察したとき、神は心を変えました。つまり、彼らの行動、振る舞い、様々な行ないの方法、そして真の罪の告白と悔い改めが、神にその心、意図を変えさせ、決断を撤回させ、ニネベの人々を罰することも滅ぼすこともしなかったのです。したがって、ニネベの人々は違う結末を迎えることができました。彼らは自分たちの命を取り戻すと同時に、神の憐れみと寛容を獲得し、この時点で、神は自身の怒りを撤回したのです。

希なのは神の憐れみと寛容でなく、人間の真の悔い改めである

神のニネベの人々への怒りがどれほどであったかにかかわらず、彼らが断食を宣言して粗布と灰を身に付けるとすぐに、神の心は軟化し、変化し始めました。神が彼らにニネベを破壊すると宣言したとき、つまり彼らの罪の告白と悔い改めの前には、神は依然として怒っていました。ニネベの人々がひとたび一連の悔い改めの行動を取ると、神の彼らへの怒りは、憐れみと寛容へと次第に変化していきました。一件の出来事において、神の性質の二側面が同時に明らかになることには、何ら矛盾はありません。では、この矛盾の不在をどのように理解し、認識するべきですか。ニネベの人々が悔い改めるにつれ、神は極端に対照的な二つの本質を続けて表出、明示し、これにより神の本質の現実性と不可侵性を人は理解することができます。神はその姿勢を通して人に伝えていたことがあります。それは、神は人間に対して寛容でないのではなく、また人に憐れみを与えたくないのでもなく、人が神の前で真に悔い改め、悪の道を離れ、その手から強暴を捨てることは極めて希だ、ということです。つまり、人間に対して怒っているとき、神は人間が真に悔い改めること、人間の真の悔い改めを見ることを望んでおり、そうならば、神は憐れみや寛容を人間に引き続き寛大に与えるということです。すなわち、人間の邪悪な行動が神の怒りを招くのに対し、神の憐れみと寛容は、神の言葉を聞き、神の前で真に悔い改め、悪の道を離れ、強暴をその手から捨てることができる人に与えられるということです。ニネベの人々の扱い方には、神の姿勢が極めてはっきりと明示されていました。つまり、神の憐れみと寛容を得ることはまったく困難ではなく、神は人

に真の悔い改めを要求するということです。人々が悪の道を離れ、強暴をその手から捨ててかぎり、神は自身の心と人への態度を変えるのです。

創造主の義なる性質は現実的で生き生きとしている

神がニネベの人々に対して心を変えたとき、神の憐れみと寛容は見せかけでしたか。もちろん、見せかけではありません。それでは、神がこの一つの状況に対処しながら、その性質の二側面の一方から他方へと推移したことは何を示していますか。神の性質は完成した一つの統一体であり、一切分割されていません。神が人に表しているのが怒りであろうと、憐れみと寛容であろうと、それらはすべて神の義なる性質の表出です。神の性質は生氣にあふれており、生き生きとしていて、神は事態の展開に応じて、その思いと態度を変えます。ニネベの人々に対する神の態度が変わったことで、神には自身の思いと考えがあることが人間にわかります。神は機械でも粘土細工でもなく、生きている神自身なのです。神がニネベの人々に対して怒ることもあれば、彼らの態度ゆえに彼らの過去を赦すこともありえます。神はニネベ人に災いを起こすと決定することもできれば、ニネベ人の悔い改めゆえに、その決定を変更することもできました。人は規則を機械的に適用することを好み、そのような規則を用いて神を限定し、定義したがります。ちょうど、公式を当てはめて神の性質を理解したがるのと同じです。したがって、人間の考えの範囲内では、神は思考することがなく、実質的な考えを持っていません。しかし現実では、神の思いは、物事や環境の変化に伴い、常に変化しています。神の思いが推移しているとき、神の本質の様々な側面が現れます。この推移の過程において、心を変えた瞬間に神が人類に示すのは、神のいのちが実在していることと、神の義なる性質が活発な生命力にあふれていることです。同時に、神は自身の真の明示により、神の怒り、憐れみ、慈悲、寛容が存在する真実を人間に証明します。神の本質は、物事の展開にしたがっていつでも、どこでも明示されます。神には、獅子の怒りと母の憐れみと寛容があります。神の義なる性質は、誰かがそれを疑うこと、侵害すること、変更すること、ゆがめることを許しません。神の義なる性質、すなわち神の怒りと憐れみは、時間と場所を問わず、あらゆる物事において表出されることが出来ます。神はこうした側面をありとあらゆる場所で鮮明に表出し、あらゆる瞬間に、それを鮮明に実行します。神の義なる性質は、時間や場所に制限されません。つまり、神の義なる性質は、時間と場所の制約に支配されて機械的に表出されたり明示されたりするのではなく、いつでも、どこでも、自由に表出、明示されるのです。神が心を変えて怒りを表出しなくなり、ニネベの町を滅ぼさなかったのを見て、神は単に憐れみ深く、愛情があるのだ、と言え

ますか。神の怒りは空虚な言葉から成ると言えますか。神が激しい怒りを表わし、憐れみを撤回するとき、神は人類に真の愛を感じていないと言えますか。神は人々の邪悪な行いに対して激しい怒りを表したのであり、神の怒りには何ら欠陥はありません。神の心は人々の悔い改めに動かされます。神の心を変化させるのは、この悔い改めです。神が感動し、心を変化させ、人間への憐れみや寛容を見せるとき、これらにはまったく欠陥がありません。これらは清く、純粋で汚れのないものです。神の寛容はそれそのもの、寛容であり、神の憐れみは憐れみ以外の何物でもありません。神の性質は、人間の悔い改めと行動の変化に従って、怒り、憐れみ、寛容を示します。神が何を明らかにし、何を表現しようと、それはすべて純粋で直截です。その本質はいかなる被造物のそれとも違っていません。神がその行動の根底にある原則を表現するとき、そこには一切の欠陥も汚れもなく、それは神の思い、考え、神が下す判断の一つひとつ、取る行動の一つひとつも同じです。神がそのように判断し行動したのですから、神はそのように自身の業を全うします。その結果は正確かつ完璧です。なぜならその源には欠陥も汚れもないからです。神の怒りは、完璧です。同様に、いかなる被造物も持っていない神の憐れみや寛容は聖なるもので、完璧であり、いかなる議論にも経験にも耐えうるものです。

ニネベの物語について理解したところで、あなたがたには今、神の義なる性質の実質における別の側面が見えますか。神独自の義なる性質の別の側面が見えますか。人類の誰かがこうした性質を持っていますか。このような怒り、神の怒りを誰かが持っていますか。神のような憐れみや寛容を誰かが持っていますか。被造物のなかで、これほど大きな怒りを奮い起こし、人類を滅ぼしたり、災いをもたらしたりすることを決めることができるものがいますか。また、人間に憐れみ、寛容、赦しを与え、よって人間を滅ぼす決断を覆す資格を誰が持っていますか。創造主はその固有の方法と原則に従って義なる性質を示し、人、出来事、物による支配や制限を受けません。神の固有の性質のため、神の思いや考えを変えることは誰にもできず、また神を説得してその決断を変えさせることも誰にもできません。被造物のもつ行動や考えはすべて、神の義なる性質による判断のもとに存在するのです。神が怒るか、それとも憐れみをかけるかは、誰にも支配できません。それを決定できるのは、創造主の本質、つまり創造主の義なる性質のみです。これが創造主の義なる性質が有する唯一無二の特徴です。

ニネベの人々に対する神の態度の変化を分析すると、神の義なる性質に含まれる憐れみを、「唯一無二」という言葉で形容することができますか。神の怒りは神独特の義なる性質の本質における一側面であると先に述べました。ここで、神の怒りと憐れみとい

う二側面を義なる性質として定義します。神の義の性質は聖であり、侵害されることも、疑われることも容赦しません。被造物にも非被造物にも、その性質を持つ物は存在しません。それは神に固有で、限定されたものです。つまり、神の怒りは聖であり、侵害不可能だということです。同様に、神の義なる性質のもうひとつの側面である神の憐れみもまた聖であり、侵害不可能です。被造物や非被造物で、神の業において神の代理となれるものは皆無であり、ソドムの破壊やニネベの救済において神の代理となることができるものも皆無です。これが神の唯一無二で義なる性質の真の表出です。

創造主の人類への真摯な思い

人は神を知ることは簡単ではないとよく言いますが、わたしは、神を知ることは全然困難なことではないと言います。なぜなら神は人間にその業を頻繁に見せているからです。神は人類との対話を止めたことはなく、人間から隠れたことも、人間に知られないようにしようとしたこともありません。神の思い、考え、業はすべて人類に明かされています。したがって、人間が神を知りたいと望む限り、あらゆる方法で人間は神を知ることができます。神が人間を意図的に避け、人類から隠れてきた、神には人間が神を理解し知るようになることを許すつもりがない、などと人間が盲目に考える理由は、人間は神が誰なのかを知らず、神を知りたいとは思っていないからです。そして何よりも、人間は創造主の思い、言葉、業などに無関心だからです……。本当のところを述べると、もし誰かが余暇に創造主の言葉や業に注目して理解しようとし、創造主の思いと、その心の声にほんの少し注意を払ったならば、神の思い、言葉、業は見ることができ、明瞭なものであることに気付くのは困難ではありません。同様に、創造主は常に人間のそばにいて、人間や被造物すべてと会話し、新たな業を毎日行なっていることに気付くのに、努力はそれほど必要とされません。神の本質と性質は、神と人間との対話の中に表出され、神の思いと考えは、神の業に完全に明示されています。神は常に人類と共にあり、人類を見守っています。神は人間や被造物のすべてに、「わたしは天にあり、万物の中にある。わたしは見守り、待っている。わたしはあなたの傍らにある」と、静かに沈黙の言葉で語りかけています。神の手は温かく力強く、神の足取りは軽やかです。神の声は温和で優しく、神の姿は過ぎゆき、また振り返り、全人類を抱擁します。神の表情は優美で、神は立ち去ったことも、消えたこともありません。神は、昼も夜も、常に人間と共にいて、そばを離れません。神の人間への心からの労りと特別のやさしさ、真の思いやりと愛は、神がニネベの町を救ったときにも少しずつ示されていました。特に、ヤーウェ神とヨナの会話では、創造主自身が創造した人類への優しい思いがすっかり明

らかにされています。これらの言葉から、人類への神の真摯な思いを深く理解することができます……

次に挙げるのはヨナ書4章10～11節に記された言葉です。「ヤーウェは言われた、『あなたは労せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とにいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか』」。これは、ヤーウェ神とヨナとの会話における、ヤーウェ神自身の言葉です。この会話は短いものの、創造主の人類への思いやりと、人類を見捨てることへのためらいに溢れています。この言葉は、神の心にある被造物への真の態度と思いが表現されています。人間が滅多に聞くことがないほど明瞭で正確なこの言葉により、神は人類への真意を述べます。この対話は、神のニネベの人々への態度を示していますが、それはどのような態度ですか。それは、ニネベの人々が悔い改める前と後にニネベの人々に神が取った態度であり、それと同じ態度で神は人類を扱います。この言葉には神の思いと性質を見出すことができます。

この言葉には、神のどのような思いが示されていますか。詳細に注意して読めば、神が「惜しむ」という語を用いているのに気付くのは難しくありません。この語に、人類への神の真の態度が示されています。

表面的には、「惜しむ」という語は様々な解釈が可能です。第一に、「愛し、守り、何かへのやさしさを感じる」という意味があります。第二に、「心から愛する」という意味があり、最後に「何かを傷つけない、傷つけることに耐えられない」という意味があります。つまり、この語は親しみや愛、人や物をあきらめられない気持ち、また神の人間への憐れみと寛容をほのめかしています。神は人間が一般的に使う単語の一つであるこの語句を使いましたが、それは神の心の声と神の人類への態度を明らかにしています。

ニネベの町は、ソドムと同様に墮落し、邪悪で凶暴な人々で満ちていましたが、ニネベの人々の悔い改めにより神の心が変わり、ニネベの人々を滅ぼさないことに決めました。神の言葉と命令へのニネベの人々の反応は、ソドムの住民と比べると極めて対照的な姿勢でした。ニネベの人々真摯な神への服従と罪の悔い改め、そしてあらゆる面における真実で心からの振る舞いゆえに、神は再び心からの哀れみを示し、ニネベの人々に与えました。神が人類に与えたものと人類への憐れみは、誰にも真似をすることはできず、神の憐れみと寛容、神の人類への真摯な思いは誰にも持つことができません。あなたが偉人あるいは超人であるとみなす男女に、ある高い立場で、偉人あるいは超人とし

て最高位から人類や被造物に向かってこのような発言をする人が存在しますか。人類のうち誰が、人類の生存状況を自分の手のひらのように熟知できますか。誰が人類の存在に伴う負担と責任を負うことができますか。誰に一つの町の破壊を宣言する資格がありますか。そして、誰に一つの町を赦す資格がありますか。自分の創造したものを大切にしていると誰が言えますか。創造主だけです。創造主だけがこの人類にやさしさを感じています。創造主だけがこの人類に優しさと愛慕を示します。創造主だけに、人類への真の変わることをできない愛情があります。同様に、この人類に憐れみを与え、全被造物を愛慕することができるのは、創造主のみです。創造主の心は、人間の行動一つひとつに、ときめいたり、傷んだりします。創造主は、人間の邪悪と墮落に怒り、苦しみ、悲しみます。また創造主は、人間の悔い改めと信仰に満足し、喜び、赦し、歓喜します。創造主の思いと考える一つひとつは人類のために存在し、人類がその中心にあります。創造主の存在とその持つものは、すべて人類のために表れます。創造主の気持ちのすべては、人間の生存と密接に結びついています。創造主が旅をし、忙しく動き回り、そのいのちのすべてを沈黙のまま与え、いのちの一分一秒を捧げるのは、人類のためです……。創造主は自らの命を惜しんだこともないにもかかわらず、自身が創造した人類を常に慈しんできました……。持つもの全てを人類に捧げます……。無条件に見返りを期待することなく、憐れみと寛容を与えます。彼がこれを行うのは、ひとえに人類が彼の目の前で生き残り続け、いのちの施しを受けることができるようにするためです。ある日、人類が彼に服従し、彼こそが人間が存在するための糧を施し、すべてのもののいのちを与える存在であると認識できるようにするためです。

創造主は人類への真の思いを表す

このヤーウェ神とヨナの対話は、人類への創造主の真の思いを表していることに疑いはありません。この対話は一方では、神の統治下にある被造物全体を創造主が認識していることを人々に伝えるものです。それはヤーウェ神が、「ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」と言った通りです。つまり、ニネベについての神の認識は、決して粗略なものではなかったのです。神はニネベの町の生物（人間のほか家畜など）の数を知ってだけでなく、右も左もわきまえることができない者の人数、すなわち、子供や若者の人数も知っていました。これは、人類について神が包括的に理解していたことの具体的な証明です。その一方で、この対話は、人類への創造主の態度、すなわち創造主の心における人類の重要性を人々に伝えています。それはヤーウェ神の、「あな

たは勞せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。ましてわたしは……この大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」という言葉の通りです。これは、ヤーウェ神がヨナを非難して述べた言葉で、すべて真実です。

ヨナはニネベの人々にヤーウェ神の言葉を伝える任務を託されましたが、ヨナはヤーウェ神の意図も、ヤーウェ神のニネベの人々に対する懸念も期待も理解していませんでした。神は、この叱責により、人類が神自身の手により造られたものであり、一人ひとりの人間に神が甚大な努力をしたこと、一人ひとりが神の期待を負っていること、神のいのちの施しを受けていること、一人ひとりの人間のために神が大きな代償を払っていることを、ヨナに述べました。この叱責はまた、ヨナがこのとうごまを大切にすると同様に、神が自分の手で造った人類を愛慕していることをヨナに伝えました。神は人類を安易に、あるいは最後の最後まで見捨てるつもりは一切ありませんでしたが、それはニネベには子供や何も知らない家畜が多数いたからではありません。右も左も分からない子供や無知な神の被造物に対して、神が早急に子供や動物の生命を絶ち、その運命を決めようとするなど考えられないことでした。神は彼らが成長するのを見ることを望んでいました。子供が大人のような道へ進まないこと、ヤーウェ神の警告を二度と耳にしなくてもよいこと、ニネベの過去の証しをすることを望んでいました。それにもまして、神は悔い改めた後のニネベ、悔い改めた後の町の将来、そして何よりも、ニネベが再び神の憐れみのもとで生きるのを見ることを望んでいました。したがって、神の見地からすると、神の被造物で右も左も分からない子供たちこそがニネベの将来だったのです。子供たちは、ヤーウェ神の導きのもとでニネベの過去と未来の証しをするという重要な任務を背負うと同時に、ニネベの卑劣な過去も背負うことになるのです。このように真の思いを宣言することで、ヤーウェ神は、創造主から人類への憐れみをすっかり提示しました。これは、「創造主の憐れみ」は中身のない言葉でも、空虚な誓いでもなく、具体的な原則であり、方法であり、目的であることを人類に示しました。創造主は真実であり、實在し、嘘や偽りを行いません。そしてこのように、創造主の憐れみは、あらゆる時代において人類に無限に与えられるのです。しかし、現在に至るまで、この創造主とヨナとの対話は、神がなぜ人類に憐れみを示すのか、どのように憐れみを示すのか、神が人類にどの程度寛容であるのか、神の人類への真の思いは何なのかを神が言葉で表した唯一の場面です。この対話におけるヤーウェ神の簡潔な言葉は、人類への思いを完全な統一体として表しています。それは人類への神の心の姿勢を真に表現しており、また神が人類に豊かに憐れみを与えることの具体的な証明でもあります。神の憐れみ

は、常に世代から世代へと与えられてきたように、人類の先代にのみ与えられるのではなく、人類の若い世代にも与えられます。神の怒りは特定の地域、特定の時代に人類に下されることが多いものの、神の憐れみは決して止まったことはありません。神は憐れみにより導き、施し、養い、そしてそれを神の被造物の一世代から次の世代へと連綿と続けます。なぜなら、神の人間への真の思いは変わらないからです。「惜しまないでいられようか」というヤーウェ神の言葉が示す通り、神は常に被造物を愛慕してきました。これが創造主の義なる性質による憐れみであり、これもまた創造主の唯一無二の特質であふれています。

人間の五つの種類

ここで、神の義なる性質に関する交わりを一旦終了します。次に、あなたがたが現在いる段階と、現在の霊的背丈を把握できるように、神に付き従う人を、その神についての認識、神の義なる性質に関する認識と経験に基づいて数種類に分類します。神についての認識と神の義なる性質に関する認識や経験に関して、人の段階と背丈は、一般的に五種類に分類できます。この論題は、唯一無二の神と神の義なる性質を認識していることを前提としています。したがって、以下の内容を読み進めるに当たっては、神の独自性と神の義なる性質について、自分には正確にどの程度の理解と認識があるかを注意深く見極めるように努めなくてはなりません。そして、それに従って、自分が本当にどの段階にいて、どの程度の霊的背丈があり、どの種類の人間であるかを判断しなければなりません。

第一の種類——産着にくるまれた赤子の段階

「産着にくるまれた赤子」とは何を意味しますか。産着にくるまれた赤子は、この世に生を受けたばかりの子供、新生児です。それは、人間が一番未熟な時期です。

この段階の人間は、基本的に神への信仰についての認識や意識が皆無です。そのような人は、あらゆる物事について当惑し無知です。長期間にわたり神を信じてきた人も、そうではない人もいますが、その当惑し無知な状態と実際の霊的背丈のために、産着にくるまれた赤子の段階に分類されます。この段階の状況を正確に定義すると、次の通りになります。この段階の人間は、どれほど長く神を信仰してきたとしても、常に考えがぼんやりと混乱しており、愚かです。自分が神を信仰する理由も、神が誰であり、誰が神であるかも知りません。神に付き従いながらも、心には神とは何かという具体的な定義がなく、自分が付き従っているのが神であるか否かを判断できないどころか、神を信

仰し神に付き従うべきであるか否かもわかりません。これがこの種の人の実情です。その考えは不明瞭で、端的に言えば、その人の信仰も混乱しています。この種の人には常に当惑と空虚の状態にあります。ぼんやり、混乱、愚かさといった言葉がこの種の人々の状態を概して表現します。この種の人には神の存在を見たり感じたりしたことがないので、この人と神を知ることについて議論することは、象形文字で書かれた書籍を読ませるようなものです。すなわち、そうした議論を理解することも、受け入れることもありません。この人にとって、神を知することは、架空の物語を聞くことと同じです。その思想は不明瞭であるかもしれませんが、実のところ、その人は神を知することは時間と労力の無駄であると固く信じています。これが第一類型の人、産着にくるまれた赤子です。

第二の類型——乳飲み子の段階

産着にくるまれた赤子と比較すると、第二の類型の人は、ある程度の進歩をしています。しかし、残念なことに、この種の人には、神については一切の認識がありません。依然として神に関する明瞭な理解や識見が欠如し、なぜ神を信じるべきなのか、あまり明確ではないのです。しかし、心には独自の目的と明瞭な考えがあります。この種の人には、神を信じるのが正しいか否かについては関心がなく、神への信仰を通して求める目標や目的は、神の恵みに与り、喜びと平安を得て、快適な生活を送り、神の思いやりと保護を享受し、神の祝福の下で生きることです。この種の人には、自分がどの程度神を知っているかについては関心がなく、神を理解しようと求める衝動がなく、神が何をしているか、神が何をしたいと望んでいるかにも関心がありません。ただ盲目に神の恵みを享受し、神の祝福を多く得ることを求めているだけです。この種の人はこの時代に百倍を求め、次の時代には永遠のいのちを求めます。この人の思いや努力、献身、そして苦難でさえも、すべて神の恵みと祝福を得るという共通の目的のためになされます。それ以外のことには無関心なのです。この種の人々が確信しているのは、神が人の安全を守り、自分に恵みを与えるということだけです。この種の人には神が人類を救いたい理由や、神が言葉や業により達成したい結果には興味もなければ、はっきりした考えもないと言うことができます。神の本質や義なる性質を知るために努力したこともなく、そのために関心を奮い起こすこともできません。このようなことに注意を向ける傾向もなく、知りたいとも思わないのです。この種の人には神の働き、神の人間に対する要求、神の心、その他神に関する事柄について問いかけたいとは思わず、また問いかけるような傾向もありません。なぜなら、これらの問題が自分が神の恵みを享受することとは無関係だと考えており、自分の個人的利益と直接的に関連して存在し、人間に恵みを与えることがで

きる神にしか関心がないからです。こうした人はそれ以外のことに一切興味がないので、神を何年間信仰していようと、真理の現実性に入ることができません。頻繁に水を注いだり糧を授けたりしてくれる人がいなければ、この人が神への信仰の道を歩み続けることは困難になります。こうした人は、これまでどおりの喜びと平安や神の恵みを享受できなければ、去って行くことがよくあります。これが第二類型の人、乳飲み子の段階にある人です。

第三の類型——乳離れした子、あるいは幼子の段階

この類型の人には、ある程度の明瞭な意識があります。神の恵みを享受することは、自分自身に真実の体験があるということではないことを認識しています。この種の人には、喜びと平安、恵みを求めることに飽き足らなくても、また神の恵みを享受した体験を分かち合ったり、神から与えられた恵みゆえに神を讃えたりすることで証しすることができるとしても、それは自分にいのちや真理の現実があることを意味するものではない、ということを心得ています。その意識から始まって、このような人は神の恵みにのみ伴われるというとても希望を抱かなくなります。それどころか、神からの恵みを愉しみつつ、神のために何かをしたいと望むようになります。自分の本分を尽くし、少しの困苦と疲労に耐え、神とある程度協調することをいといません。しかし、この種の人による神への信仰の追求はあまりに不純で、心に抱く個人的な意図や望みも強過ぎ、その人の性質もやたらと傲慢であるため、その人が神の望むことを満足させたり、神に忠実でいたりすることは極めて困難です。したがって、この種の人には個人的な望みを実現することも、神との約束を守ることもできないことがよくあります。多くの場合、この種の人には自己矛盾に陥ります。すなわち、可能な限り神を満足させたいと願う一方で、持てる力の限りを以て神に反対し、また神に忠実を誓っても、すぐに誓いを破ることがあります。ほかの形の自己矛盾に陥ることも多くあります。すなわち、真摯に神を信じる一方で、神と神に由来するものすべてを否定します。神に啓かれ、導かれ、施され、助けられることを切望する一方で、自分の逃げ道を求めます。神を理解し知りたいと願う一方で、神に近づくことを避けようとします。その代わりに常に神を回避し、神に対して心を閉ざしています。神の言葉と真理の文字通りの意味について表面的な認識と経験があり、神と真理に関しても表面的な概念をわきまえている一方で、意識下では神が真理であることも、神が真に義なることも確信、断言することが依然としてできません。また、神の性質と本質が真実であることも、ましてや神の真の存在を確信することもできないのは当然です。この種の人には、常に疑念と誤解、想像と観念

が混ざっています。この種の人には神の恵みを享受しつつ、実行可能だと自分がみなす幾つかの真理をしぶしぶ経験したり実践したりします。これは、自分の信仰を豊かにし、信仰経験を増大させ、神への信仰についての自分の理解を確認し、自ら打ち立てた人生の行程を歩み、人類にとって義なる事業を達成させて虚栄心を満たすためです。同時に、祝福を得たいという自らの欲望を満たすためでもあります。これは人類のためにさらなる祝福を得ることを願ってする賭けの一部です。また、神を得るまでは休みたくないという大志と一生涯の願望を叶えるためでもあります。この種の人にはめったに神の啓示を得られません。なぜなら、神の祝福を得るという願望と目的の方がその人にとって重要過ぎるからです。こうした人は諦める気はなく、また諦めることに耐えられません。恵みを得る願望や、神を得るまで休みたくないという長年にわたり大事にしてきた願望がなければ、神を信仰する動機を喪失すると考えています。従って、現実と対峙することを望みません。神の言葉や働きに対峙することを望まないのです。神の性質や本質を認めることを望まず、ましてや神を知るという題目に言及することさえ望みません。それは、ひとたび自分の想像が神、神の本質、神の義なる性質に置き換えられたなら、自分の夢が煙のように消えてなくなり、自分が純粋な信仰と呼んでいるものや、何年もの間、苦勞して築き上げた「功績」が消滅し、無に帰してしまうからです。またそれは、自分が長年にわたって血と汗で獲得してきた「領土」が崩壊の危機に瀕するからです。これは、この種の人々の長年にわたる苦勞と努力が無駄であったこと、ゼロから再出発しなければならないことを意味します。この種の人にとって、これは最も耐えがたい心痛であり、一番恐れる結果です。したがって、この種の人には常にこのような行き詰まり状態にあり、後戻りすることを拒否しています。これが第三類型の人、乳離れした子供の段階にある人です。

以上の三種類の人、つまり三段階のそれぞれにある人は、神の身分や地位、神の義なる性質に関して、いかなる真の信仰もなく、これらの物事について、明確で正確な認識も確信もありません。したがって、この三種類の人にとって、真理の現実性に入ることは極めて困難であり、神の憐れみ、啓き、照らしを得ることも極めて困難です。なぜなら、このような人の神への信仰のあり方と神への誤った態度のせいで、神が彼らの心で働くことは不可能だからです。彼らの神に関する疑念、誤解、想像は、彼らの神への信仰や認識を凌駕しています。これら三種類の人には、危険に直面しており、極めて危険な段階にいます。ある人が神、神の本質、神の身分、神は真理であるかということ、神の存在の現実性に対して疑念ある態度を維持し、これらの事柄について確信できないとき

、神から来るものをすべてどうして受け入れることができますか。神が真理であり、道であり、いのちであるという事実をどうして受け入れることができますか。神の刑罰や裁きをどうして受け入れることができますか。神の救いをどうして受け入れることができますか。このような人がどうして神の真の導きと施しを得ることができますか。これら三段階にある人は、いつでも神に反抗し、神を裁き、冒瀆し、裏切ることができます。いつでも真理の道を離れ、神を捨てることができます。これら三段階にある人は、危機的時期にあると言うことができます。なぜなら、このような人は、神への信仰の正しい道に入っていないからです。

第四の類型——成長期の子段階、あるいは子供時代

子が離乳した後、つまり豊富な恵みを享受した後、その子は神への信仰とは何を意味するのかを探究するようになり、人間はなぜ生きているのか、人間はどのように生きるべきか、神はなぜ人間に働くのかなどの様々な疑問を理解したいと思うようになります。このようなあいまいな考えや混乱した思考形式が内に現れ、そのまま残ったときでも、人は水やりを受け続け、自分の本分を尽くすことができます。この時期になると、人は神の存在の真実についてはもはや一切の疑念がなくなり、神への信仰が何を意味するかを正確に把握しています。この基盤の上に、神についての認識を徐々に積み上げ、神の性質や本質についての自分のあいまいな考えや混乱した思考形式に何らかの回答を徐々に得ます。人間の性質の変化と神に関する認識については、この段階の人は正しい軌道に乗りだし、過渡期に入ります。人のいのちが真に始まるのは、この時期です。人がいのちを自分のものにしていることの明確な兆候として、神を知ることに関して心にある様々な疑問、すなわち、神に関する誤解、想像、観念、漠然とした定義が徐々に解決してゆくことがあります。さらに、神の存在の現実性を心から信じ認識するだけでなく、心の中に神の明瞭な定義と神のための正しい場所を持つようになり、漠然とした信仰に代わって、真に神に付き従うようになります。この段階において、人は神に関する自分の誤解や誤った信仰の追求とあり方を徐々に認識するようになります。真理を、また神の裁き、懲らしめ、鍛錬を体験することを、自らの性質の変化を渴望するようになります。この段階の人は、神に関するありとあらゆる観念と想像を徐々に捨て、同時に神についての自分の誤った認識を正し、正しく基本的な認識を得ます。この段階の人が持つ認識の一部は、それほど具体的でも正確でもありませんが、少なくとも神に関する自分の観念や誤った認識や誤解を徐々に捨てるようになり、もはや自分の観念や想像を持ち続けることはありません。人は捨て方を身に着けるのです。すなわち、自らの観念に

含まれているもの、知識から来るもの、サタンから得たものを捨てる方法です。正しく肯定的なもの、さらには神の言葉に由来し、真理に適合することに従うようになります。また、神の言葉を体験して、自ら神の言葉を知り、実行し、自らの行動原則と性質を変化するための基礎として神の言葉を受け入れようと努めるようになります。この時期の人は、神の裁きと刑罰を無意識のうちに受け入れ、神の言葉を自分のいのちとして無意識のうちに受け入れます。神の裁き、刑罰、神の言葉を受け入れながら、自分の心の中で信じる神が実在することをますます強く意識し、感じるができるようになってゆきます。神の言葉において、また経験と生活の中で、神が常に人間の運命を支配し、常に人間を導き、人間に施してきていることを次第に強く感じるようになるのです。自分と神との関係を通して、次第に神の存在を確認します。したがって、自分で気付く前に、無意識のうちに神の働きをすでに受け入れ、固く信じるようになっており、神の言葉も受け入れています。ひとたび神の言葉と働きを受け入れると、人は自分自身や、自分の観念、知識、想像を絶え間なく否定し、同時に、真理とは何か、神の心とは何かを絶え間なく追い求めるようになります。人が持つ神についての認識は、発達のこの時期では極めて表層的で、その認識を明確に言葉で説明したり、詳細にわたって表現したりできず、感覚的な認識しかありません。それでも、この段階と前の三段階を比較すると、この段階にいる人の未熟ないのちは、すでに水やりと神の言葉による施しを受けており、芽が出始めています。この段階の人のいのちは、地中の種のようなもので、水分と栄養素を得ると土を割って芽を出し、この萌芽は新たないのちの誕生を意味します。この誕生により、人はいのちの徴候を見て取ることができます。いのちを得ると人は成長します。したがって、この基礎の上で、つまり神への信仰の正しい軌道へと徐々に進み、自分の観念を捨て、神の導きを得ることで、人のいのちは必然的に一步步成長します。この成長は何を基準として計測されますか。人の神の言葉における経験と、神の義なる性質についての真の理解にしがって計測されます。この成長段階にいる人は、神と神の本質についての自分の認識を自分の言葉で正確に説明するのを極めて困難であると感じるものの、もはや神の恵みを享受することで自己中心的に悦楽を追求しようとも、神の恵みを得るという個人的な目的のために神を信仰することはありません。その代わりに、神の言葉に基づいて生き、神の救いの対象となることを追い求めます。さらに、自信を持って神の裁きと刑罰を受ける準備ができている。これが、この成長段階にある人の印です。

この段階にある人は、神の義なる性質についてある程度の認識を持っているものの、

その認識は極めて不明瞭です。この段階の人はこのようなことを明瞭に説明することができない一方、自分は内面的に何かをすでに得たと感じています。なぜなら、神の刑罰と裁きにより神の義なる性質についてのある程度の認識と理解を得たからです。しかし、それは極めて表面的であり、まだ初歩段階にあります。この段階の人には、神の恵みを取り扱うときの具体的な視点があります。それは、人が追求する目的とその目的の追求方法に起こる変化に表れます。人は神の言葉や働きに、神の人間へのあらゆる要求事項や人への明かしに、もし自分が神の言葉を体験しながら、いまだに真理を追求せず、現実性に入ろうとせず、神を満足させ、神を知ろうとしないままでいたならば、神を信仰することの意味がなくなるということをすでに理解しているのです。どれほど神の恵みを享受していようと、人は自分の性質を変えることができず、神を満足させ、神を知ることができないことを知っており、それでも神の恵みの中で生き続けるならば、人は成長することも、いのちを獲得し、救いを得ることもできないことがわかっています。要するに、神の言葉を真に体験することができず、神の言葉を通して神を知ることができないのなら、人は永遠に赤子の段階に留まり、いのちにおいて一步も成長することがないということです。永遠に赤子の段階のままで、神の言葉の現実性に入ることがなく、自分のいのちとして神の言葉を持つことがなく、神への真の信仰も神の認識も持たないのであれば、そんな人が神に完全にされる可能性がありますか。したがって、神の言葉の現実性に入る人、神の言葉を自分のいのちとして受け入れる人、神の刑罰と裁きを受け入れ始める人、墮落した性質が変化し始める人、真理を渴望する心と、神を知りたいという願望、神の救いを受けたいという願望がある人はみな、真のいのちを自分のものとする人です。これが第四類型の人、成長する子供の段階、子供時代にある人です。

第五の類型——成熟の段階、あるいは成年期

人が子供時代をよちよちと歩き、前進と後退を繰り返す成長期を経験した後、そのいのちは安定し、停滞することなく前進するようになり、誰もその前進を阻むことはできません。道は依然として険しいものの、人はもはや弱くも、恐れることもなく、手探りで前進することも、方向を見失うこともありません。人の基盤は神の言葉を実際に経験したことに深く根ざし、心は神の威厳と偉大さに引きつけられています。人は神の足跡に続き、神の本質を知り、神についてのすべてを知ることを切望します。

この段階の人は、自分が誰を信じているのかをすでに明確に知っており、なぜ神を信じるべきなのかも自分の生きる意味もはっきりと認識しており、また神が表することはすべて真理であることも明確に知っています。長年の経験から、神の裁きと刑罰なしで

は、人間は神を満足させることも、神を知ること、神の前に実際に出ることも決してできないことに気づいています。この段階の人の心には、神に試されたいという強い願望があります。それは、試されているあいだに神の義なる性質を知り、純粋な愛を得ると同時に、神を真に深く理解し知ることができるようにです。この段階の人は、幼児の段階と神の恵みを享受してパンを食べて満足する段階にすでに完全に別れを告げています。もはや神が寛容と憐れみを自分に見せてくれることに度を越した望みをかけることはなく、むしろ自分の墮落した性質を離れ、神を満足させるために、神による終わることのない刑罰と裁きを受けることを確信しつつ望みます。この段階の人の神に関する認識や追求、その追求における最終目標は、すべて心の中ではっきりしています。したがって、成年期の人は、漠然とした信仰の段階、救いを獲得するために恵みに依存する段階、試練に耐えられない未熟な段階、不明瞭な段階、手探りで進む段階、進むべき道がなくなることがよくある段階、突然の高熱と低温が交互に起こる不安定な段階、目を閉じたまま神に付き従う段階に完全に別れを告げています。この種の人、神の啓きと照らしを頻繁に受け、神との真の関係と交わりを頻繁にもちます。この段階に生きる人は、神の心の一部をすでに把握しており、自分のするあらゆることに真理の原則を見出すことができ、神の望みをいかに満足させるかを心得ている、と言えます。さらに、神を知る道を見出し、神についての認識を証し始めています。徐々に成長するなかで、この段階の人は、人類を創造した神の心と人類を経営する神の心など、神の心を徐々に理解し認識するようになります。さらに、実質的な意味で神の義なる性質も徐々に理解し認識します。これは、人間の観念や想像が取って代わることはできません。第五段階にいる人のいのちは完全に成熟しているだとか、その人は義人であり完全であるだとかは言えないものの、この人はすでに、いのちの成熟段階に向けて一歩踏み出しており、すでに神の前に来て、神の言葉と神自身と向かい合うことができます。この段階の人は神の言葉を多く経験し、また無数の試練、無数の神からの鍛錬、裁き、刑罰を経験しているため、神への服従は相対的ではなく、絶対的です。この人の神に関する認識は、無意識から明瞭かつ正確な認識へ、表面的なものから深いものへ、ぼんやりと不明瞭なものから詳細で具体的なものへと変化しています。手探りしながら苦労して前進し、受動的に追い求める状態から、苦労せずに認識に達し、積極的に証しする状態へと移行したのです。この段階の人は、神の言葉の真理の現実性を自分のものとし、ペテロが歩んだような完全への道を歩み始めたと言えます。これが第五類型の人、成熟した状態、成人の段階に生きる人です。

唯一無二の神自身 3

神の権威（2）

本日は、引き続き「唯一無二の神自身」について説教します。この主題について、これまで既に2回にわたって説教しました。1回目は神の権威に関するもの、2回目は神の義なる性質に関するものでしたね。これら2回話を聞いて、あなたがたは神の身分、地位、そして本質について新たな理解を得ましたか。これらの見識は、あなたがたが神の存在の真理についてより本質的に認識し、確かなものとする上で役立っていますか。本日は、「神の権威」の題目について、さらに詳しく話す予定です。

マクロ的観点とミクロ的観点から神の権威を理解すること

神の権威は、唯一無二です。それは神自身の身分を特徴的に表わすもの、およびその特定の本質であり、いかなる被造物であれ、あるいは非被造物であれ有していないものです。唯一創造主のみにこの種の権威があるのです。すなわち、創造主、つまり唯一無二の神のみが、そのように表現され、唯一の神のみに、そのような本質があるのです。なぜ神の権威について話すのでしょうか。神自身の権威は、人間の考える権威と、どのように異なるのでしょうか。その特殊な点とは、何でしょうか。なぜここで話すほど、とりわけ意義深いのでしょうか。この問題については、あなたがた一人ひとりが熟慮しなければなりません。大部分の人々にとって「神の権威」とは曖昧な概念であり、理解するのに多大な努力を要するものであり、神の権威に関する議論は、漠然としたものとなりがちです。したがって、人間が把握できる神の権威と、神の権威の本質の間には、常に隔たりがあるのです。この隔たりを埋めるためには、実生活において人間の手の届く範囲にあるとともに人間の理解の範疇にある人々、出来事、物事、様々な現象を通して、徐々に神の権威を知らなければならぬのです。「神の権威」という表現は深遠なものに感じるかもしれませんが、決して抽象的なものではありません。神は人間の生活の中で、片時も離れることなく人間とともにあり、人間を日々導いています。そのため、あらゆる人が実生活において、神の権威の最も具体的な様相を必然的に見て、経験しているのです。この具体的な様相は、神の権威が実際に存在することの何よりの証拠であり、神にそのような権威があるという事実を人に完全に認識させ、理解させるものです。

神は万物を造りました。そして、万物を造ってきた神は、そのすべてに対する主権を握っています。神は、万物に対する主権を握っているだけでなく、万物を支配します。「神は万物を支配する」という概念は、何を意味するのでしょうか。その概念をどのように説明できるのでしょうか。その概念は実生活とどのように結び付くのでしょうか。「万物を支配する」という事実を理解することが、どうして神の権威を理解することに繋がるのでしょうか。「神は万物を支配する」という、まさにその言葉を通して、神が支配する物事は惑星や創造物の一部ではなく、ましてや人類の一部でもなく、すべてのものであるということが分かります。それは巨大な物から微小な物、見えるものから見えないもの、宇宙の星から地球上の生き物、肉眼で見ることのできない微生物やその他の形態で存在する物に至るまで、すべてです。これが、神が「支配」している「万物」の正確な定義であり、神の統治と支配の及ぶところ、神の権威の全貌です。

宇宙、すなわち、天界のありとあらゆる惑星と星は、人間が出現する前に、既に存在していました。マクロレベルでは、こうした天体は、神の支配下で、誕生してからどれだけの年月が過ぎようと一度も変化することなく、軌道を規則的に回り続けてきました。どの惑星が、いつどこに移動するか、どの惑星がいつどのような役割を果たすか、どの惑星がどの軌道に乗るか、どの惑星がいつ消滅するか、あるいはいつ置換されるかなどといった事柄が、すべて寸分の狂いもなく進行しています。惑星の位置や惑星同士の距離は厳密な規則に従っており、正確なデータで表すことができます。惑星が移動する経路、軌道の一周における速度と規則性、特定の位置に到達する時刻、これらすべてを正確に数値化し、特定の法則で表すことができます。数十億年にわたり、惑星は、少しも逸脱することなく、これらの法則に従ってきました。どのような力をもってしても、惑星の軌道や、惑星が従う規則性を変えたり乱したりすることはできません。惑星の運動を律する特定の法則と、それを表す正確なデータは、創造主の権威により運命づけられており、惑星は創造主の統治と支配の下、そうした法則に自然と従います。マクロレベルでは、ある程度の規則性やデータ、そして奇異で説明できない法則や現象を見出すことは、人間にとってそれほど困難ではありません。人間は神が存在することを認めることもなければ、創造主が万物を造り、万物に対する主権を握っているという事実を受け入れることもなく、さらには創造主の権威の存在を認めることもありません。それにもかかわらず、人文科学者、天文学者、物理学者は、宇宙における万物の存在、そして万物の運動を律する原理と法則が、巨大で目に見えない暗黒のエネルギーにより統治され、支配されているという結論に達することが益々多くなってきています。この事実

より、人間は、こうした規則性の中心に並外れた者が存在し、すべてを指揮しているということに向き合い、認めざるを得なくなっているのです。彼の力は非凡であり、その素顔を見ることができる人はいないものの、彼は常に全てを統治し、支配しています。彼の主権を超えることができる人や力は存在しません。人間は、こうした事実と向き合う中で、万物の存在を統治する法則は人間が制御できないものであり、誰にも変えられないものであることに気付かねばならず、また、こうした法則は人間が完全に理解できないものであり、自然に発生するものではなく、統治者の命令によるものであることを認めなければなりません。こうした物事は、すべて人間がマクロレベルで認識できる神の権威の表現なのです。

ミクロレベルでは、人間が地上で見る山々、川、湖、海、大陸、人間が体験する季節、地球上に生息する植物、動物、微生物、人間などの万物は、すべて神の統治と支配の下にあります。神による統治と支配の下においては、万物は神の思いに従って出現し、消滅し、その存在を統治する法則が生まれ、その法則に沿って生長し、繁殖します。これらの法則を超える人間や物事は存在しません。それは何故でしょうか。唯一の答えは、神の権威にあります。言い換えると、それは神の思いと言葉によるものであり、神自らの成せる業によるものなのです。すなわち、こうした法則を生むのは神の権威と心であり、神の思いにより移行し、変化し、そうした移行と変化はすべて神の計画のために発生し、消滅します。例として、疫病を挙げます。疫病は何の前触れもなく突発します。その起源や正確な発生原因を知る人はおらず、疫病がある場所へと到達すると、運の尽きた人はその災難から逃れることができません。人間の科学では、疫病は悪性または有害な微生物の拡散により発生することが確認されていますが、その感染の速度、範囲、方式を人間の科学で予測したり制御したりすることはできません。人間はありとあらゆる手段を尽くして疫病に抵抗しますが、疫病が突発した時に、どの人間や動物が被害を受けざるを得ないかについて制御することはできません。人間ができることは、それを予防し、抵抗し、研究することのみです。しかし、いずれの疫病についても、その発生と終息の原因を知る人はおらず、また、その発生と終息を管理できる人もいません。疫病が発生して蔓延した時、人間が行う最初の対策はワクチンの開発ですが、ワクチンが用意される前に往々にして疫病が自然と消滅することがあります。疫病が消滅するのは何故でしょうか。病原菌を抑えることができるようになったためという人もいれば、季節の移り変わりにより消滅するという人もいます。こうした根拠のない憶測に弁護の余地があるかどうかに関しては、科学では説明することも正確に回答することもできま

せん。人間は、こうした憶測だけでなく、疫病に対する人間の理解の欠如と恐怖を考慮に入れなければなりません。結局のところ、なぜ疫病が発生して、なぜ終息するのか、誰にも分かりません。人間は科学のみを信じ、科学に全面的に依存し、創造主の権威を認めることも創造主の統治を受け入れることもないため、決して答えを得ることがないのである。

神の統治下において、万物は神の権威と経営ゆえに増え、存在し、消滅します。静かにやって来ては去っていく物事もあり、人間にはそれらがどこから来るのか分からず、それらが辿ってきた道筋を把握することもできず、ましてやその往来の理由を理解することなどできません。人間は万物のうちに起こる物事をすべて自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分のからだで経験することができ、それはすべて人間に関係があり、さらに人間は様々な現象の相対的な異常や規則性、あるいは異様ささえも無意識のうちに捉えるものの、その背景に何があるのか依然として知りません。そこには、創造主の旨と心があるのです。そうした現象の背景には様々な経緯と隠された事実があります。人間は創造主から遠く離れて彷徨い、創造主の権威が万物を統治しているという事実を受け容れないため、創造主の権威による統治の下に起こるあらゆる物事を決して知ることもなければ理解することもないのです。神の支配と統治は、概して、人間の想像、知識、理解、人間の科学が到達可能な範囲を超越しており、被造物である人間の知力の及ばないものです。「あなたは神の統治を自らの目で見たことがないにもかかわらず、万物が神の権威の支配下にあるとどうして信じられるのですか」と言う人もいます。見るのが、必ずしも信じること、認めること、理解することであるとは限りません。それでは、信仰はどこからもたらされるのでしょうか。わたしは確信をもって言えます。「信仰とは、物事の実態と根源に関する人の理解と経験の程度と深さからもたらされる」と。神は存在すると信じていても、万物を神が支配し統治している事実を認めることができず、ましてやそれを感知することもできなければ、神にこのような権威があり神の権威は唯一無二であるということを心の中で認めることは決してありません。創造主をあなたの主、あなたの神として真に受け入れることは決してありません。

人間の運命と万物の運命は創造主による統治と不可分である

あなたがたは皆、成人です。壮年の人もいれば、老年期に入った人もいます。あなたがたは、神を信仰していない状態から神を信仰するまでに至り、そして神を信仰し始めてから、神の言葉を受け入れ、神の働きを経験するまでに至りました。神の統治についてどの程度の認識がありますか。人間の運命について、どのような識見を得ましたか。

人間は、生涯の中で望むことをすべて達成できますか。あなたがたは、数十年間生きてきた中で、いくつかの物事を自分の望むとおりに達成することができましたか。全く予期していなかった出来事はいくつありますか。思いもよらなかった喜びはいくつありますか。無意識に好機を待ち、天の意を待ちながら、今もなお結実すると期待して待っている物事はいくつありますか。絶望的で挫折したと感じる事はいくつありますか。人は誰でも自分の運命には大きな希望を抱き、人生におけるすべてが思い通りになり、衣料や食料が不足せず、運勢が好転することを期待します。貧しく、虐げられ、困難でいっぱい、災難が付きまとう人生を望む人はいません。しかし人間は、こうした物事を予測することも、操作することもできません。おそらく一部の人々にとって、過去とは雑多な経験の寄せ集めに過ぎません。彼らは天の旨を知る事も、それが何であるかについて関心を向けることもありません。彼らは、動物のように、何も考えずに日々を過ごし、人間の運命や人間が生きている理由、人間はどのように生きるべきかなど考えることはありません。そのような人々は人間の運命について何も理解を得ることなく年老いてゆき、死ぬ瞬間まで人生の意味について何も知ることはありません。そのような人は死んでおり、霊のない生き物、獣です。人々は万物の中で生活し、この世で物質的な要求を満たす様々な手段により快樂を得て、この物質世界が常に進歩しているのを見ていますが、自分自身の経験、すなわち人間の心や霊が感じて経験する事柄は、物質的な事柄とは何ら関係がなく、また、物質的な事柄は経験に取って代わるものではありません。経験とは人間の心の奥深くにある認識であり、肉眼で見えないものです。この認識は、人生と人間の運命について、その人が理解し、それを感じ取ることの中にあります。そして多くの場合、その認識は、目に見えない支配者が人間のために万物を用意し、すべてを指揮していることへの理解へと繋がります。こうした物事の中にあって、人は運命の采配や指揮を受け入れざるを得ません。創造主が定めた道筋、創造主に統治された運命を受け入れざるを得ないのです。これは紛れもない事実です。人が運命についてどのような先見性と心構えを持っていようとも、誰もこの事実を変えることはできません。

あなたが毎日どこへ行き、何をして、誰、または何に出会い、何を言うか、あなたに何が起こるか、といった事柄を一つでも予測することができますか。人々はこれらの発生を一切予測することができず、ましてその状況がどのように展開してゆくかを予測することなどできません。人生においては、このような予期せぬ出来事が日常的に発生します。それらは毎日起こることなのです。こうした日常の変化、その変化の展開の仕方や辿る道筋を通して、人が常に思い起こすこととは、無作為に起こる物事はなく、それ

それぞれの物事が発生する過程やその必然性を人間の意志で変えることはできないということです。あらゆる出来事は、人間に創造主の訓戒を伝えるとともに、人間は自分自身の運命を支配できないということを告げています。自らの運命を掌握しようとする人間の大それた、無意味な野望や願望への反証として起こるのです。こうした出来事は、人の顔を何度も平手打ちするように続けざまに起こり、人間は、誰が最終的に人間の運命を統治し支配するかについて考え直すことを余儀なくされます。人間の野望や願望が繰り返し阻まれ、砕かれてゆくにつれ、人間は、待ち受ける運命や、現実、天の意、そして創造主の統治を、無意識のうちに自然と受け入れるようになります。こうした日常の変化から全人生の運命に至るまで、創造主の計画や統治を明らかにしないものはありません。すなわち、「創造主の権威は超越不可能である」ということを告げないもの、「創造主の権威は至高のものである」という恒久の真理を伝えないものは存在しないのです。

人間の運命と万物の運命は、創造主の統治と密接に絡み合い、創造主の指揮と不可分の繋がりがあり、最終的にそれらの運命を創造主の権威から引き離すことはできません。人間は、万物の法則を通して創造主の指揮と統治を理解するようになり、万物の生存の法則を通して創造主の統治を認識するようになるとともに、創造主が万物を統治し支配する方法を、万物の運命を通して察知します。また人間は、人間と万物のライフサイクルのうちにあって、万物やあらゆる生物への創造主による指揮と采配を真に経験し、そうした創造主の指揮や采配が、この世の法令や規則、制度その他の権力や勢力よりいかに優れていて掛け替えのないものであるかということを目の当たりにします。これに鑑みると、創造主の統治は、いかなる被造物にも侵害できないものであり、いかなる勢力も創造主によって予定された物事に干渉したり変更したりすることはできないことを、人間は認めざるを得ません。人間や万物の何世代にもわたる生活や繁殖は、こうした神性の法則や規則の下で行われます。これこそ、創造主の権威が真に具現化されたものではありませんか。人間は客観的な法則の中に、あらゆる出来事や万物に対する創造主の統治と定めを見出しますが、創造主による万物の統治の原理を把握できる人間はどのくらいいますか。自分自身の運命を創造主が統治し采配することを真に知り、認め、受け入れて、それに服従することができる人間はどのくらいいますか。創造主が万物を統治するという事実を信じてきた人の中で、創造主が人類の一生の運命も支配していることを真に信じ、認めることができる人はいますか。人間の運命は創造主の掌中にあるという事実を真に理解できる人はいますか。創造主が人間の運命を統治し、支配している

という事実直面した時、創造主の統治に対して人間はどのような姿勢で向き合うべきですか。それは、現在この事実直面しているすべての人間が自らのために判断しなければならぬことなのです。

人間の人生における六つの節目

一生のうちに、あらゆる人が一連の重要な節目を経験します。こうした節目は、その人の人生における運命を決定づける、最も基本的かつ最も重要な段階です。一生のうちに誰もが経験する、こうした重要な節目をこれから概説します。

出生：第一の節目

人が誕生する時、生まれた家庭環境、性別、容姿、出生時期が、その人生における第一の節目の内容です。

この節目に関して、誰も特定の内容を選択することはできません。それらはすべて、創造主により遥か以前に定められています。こうした内容は外的環境の影響を一切受けて、創造主により予め定められたこれらの事実が人的要因によって変えられることはありません。ある人の誕生は、創造主がその人について定めた運命の第一段階を既に成し遂げたことを意味します。創造主は遥か以前にこうした内容をすべて定めているため、それらを変える力を持つ人はいません。ある人の誕生後の運命とは関係なく、その誕生の条件は予め定められたものであり、定められた通りであり続けます。それらの条件は、その人の人生の運命から影響を受けることは一切なく、その人の人生の運命に対する創造主の統治に影響を及ぼすことも一切ありません。

1. 新たないのちは創造主の計画から生まれる

第一の節目の詳細、すなわち、ある者の出生地、家族、性別、容姿、出生期日のうち、人間が自分で決められるものはあるのでしょうか。言うまでもなく、人の出生とは受動的な出来事です。人は、自分の意志とは関係なく、ある時、ある場所で、ある家庭に、ある容姿で生まれ、ある家族の一員となり、ある家系に入ります。第一の節目において、人に選択の余地はなく、創造主の計画の下に決定された環境で、特定の家庭に、特定の性別と容姿で、特定の時期に生まれ、それは、その後の人生と密接な繋がりがあります。この重要な節目に、人は何ができるのでしょうか。先述の通り、そうした出生の詳細に関して、人間に選択の余地は一切ありません。創造主による予定と導きがなければ、この世に新しく生まれるいのちは、どこへ行き、どこに留まるかを知らず、身寄りもなく、どこにも属することなく、家と呼べるものも持ちません。しかし、創造主の周到な

采配があるからこそ、新たないのちは、留まる場所、両親、そのいのちの属する場所、親戚が揃った状態で、人生の旅路に就くのです。この過程全体を通して、創造主の計画に基づく決定により新たないのちが体现され、そのいのちは、あらゆる物事を創造主から与えられることになります。名もなき浮遊物体の状態から、次第に血と肉を持ち、目に見える、神の創造物である有形の人間になります。その人間は考え、呼吸し、寒暖を感じ、物質世界において被造物が行う日常活動に参加することができ、造られた人間が人生で体験すべきあらゆる物事を体験します。創造主が人の出生を予定するということは、創造主が人の生存に必要な物事を余すところなく人に与えることを意味します。同様に、人が生まれるという事実は、人は生存に必要な物事を余すところなく創造主から授かり、それ以降は、創造主の備えのもと、創造主の統治下に別の形態で生きるということの意味します。

2. 人間が個々に異なる状況下に生まれる理由

人々は、もし自分が生まれ変わったならば、名家に生まれる、女性の場合は白雪姫のような容姿で皆に愛される、男性の場合は白雪姫に登場する王子のように何ひとつ不自由なく全世界を意のままにする、などと想像することが往々にしてあります。自分の出生について多くの幻想を抱きながら、自分の家族や容姿、性別、さらには出生時期までも恨み、自分の出生について大いに不満を感じている人がよくいます。しかし人々は、自分が特定の家庭に生まれた理由や、なぜ自分がそのような容姿を持っているかを決して理解できません。そうした人々は、出生地や容姿の如何を問わず、創造主による経営のもとで、自分が様々な役割を担い、様々な使命を果たさねばならず、その趣旨は決して変わらないということを知りません。創造主の観点から見ると、人間の出生地、性別、肉体的な外観は、すべて一時的なものです。これらは、神が全人類を経営する各段階において一連のささいなもの、僅かな象徴でしかありません。そして、人の真の終着点と結末は、どの段階においても人の出生により決定されることはなく、それぞれの人生において全うする使命や、創造主の経営（救いの）計画が完了した時点で創造主から人に下される裁きにより決定されます。

あらゆる結果には原因がある、原因なくして結果はない、とされています。したがって、人の出生は、必然的に人の現世や前世と結びついています。人の死がその人生の終わりであるとすれば、人の出生は新たな周期の始まりです。従前の周期が人の前世であるとすれば、新たな周期は必然的に人の現世となります。人の出生は、その者の前世と現世と関連しているため、その者の出生に関連する場所、家庭、性別、容姿、その他

の要素は、当然そのすべてが人の前世と現世に関連しているということになります。つまり、人の出生の要素は、人の前世に影響されるだけでなく、現世における人の宿命によっても決定されるということであり、そこに、人々の生まれる環境が様々たる所以があります。貧しい家庭に生まれる人もいれば、裕福な家庭に生まれる人もいます。一般的な家柄に生まれる人もいれば、名家に生まれる人もいます。南部地域で生まれる人もいれば、北部地域で生まれる人もいます。砂漠で生まれる人もいれば、緑の生い茂る場所で生まれる人もいます。喝采、歓喜、祝賀のうちに生まれる人もいれば、悲嘆、災難、苦悩のうちに生まれる人もいます。生まれてから宝のように扱われる人もいれば、雑草のように見捨てられる人もいます。端正な容姿で生まれる人もいれば、奇形な容姿で生まれる人もいます。愛らしい外見で生まれる人もいれば、醜い外見で生まれる人もいます。深夜に生まれる人もいれば、真昼の陽光の中で生まれる人もいます。……あらゆる人々の出生は、創造主が人々のために準備している運命により決定されます。人の現世の運命、人が遂行する役割、果たす使命は、人の出生により決まります。こうした物事は、すべて創造主による統治の下、創造主により予め定められます。誰一人として、定められた運命から逃れたり、出生を変えたり、自分自身の運命を選択したりすることはできません。

成長：第二の節目

人々は、生まれた家庭により異なる様々な環境で育ち、自分の両親から様々な教えを受けます。こうした要因により、人が成長して大人になるまでの条件が決定され、成長は人の人生における第二の重要な節目となります。この節目においても人々には選択の余地がないことは言うまでもありません。この節目もやはり事前に定められた不変のものであります。

1. 各人の成長時における不変の条件は創造主により計画されている

人は成長する際、啓発や影響を受ける人物、出来事、および物事を選択できません。人は、どのような知識や技能を身に付けるか、何を習慣とするかを、選択できません。誰が自分の両親や親戚となるか、自分がどのような環境で成長するかについて発言権は一切なく、他の人々との関係、出来事、周囲の物事、またそうした物事が自分の発達にどのような影響を及ぼすかは、すべて自分で制御できる範囲を超越しています。それでは、こうした事柄は誰が決めるのでしょうか。こうした事柄を事前に用意するのは誰でしょう。こうした事柄は、人々が選択できるものではなく、自分で決められるものでもなく、また自然と具体化するものでもないことは明らかであるため、こうした人物や出

来事や物事の形成が創造主の掌中にあることは言うまでもありません。当然ながら、創造主は、各人の出生する特定の状況を予め定めるのと同様に、各人が成長する具体的な状況をも予め定めます。人の出生により、その周囲の人々や出来事、物事が変化する場合、人の成長や発達もまた必然的に、それらの人々や出来事、物事に影響を与えることになります。たとえば、貧しい家庭に生まれても裕福な環境で成長する人々がいる一方で、裕福な家庭に生まれてもその家庭の財産が減ってゆき、貧しい環境で育つ人々もいます。その出生が一定の法則により管理されている人はおらず、必然的な一定不変の状況下で成長する人もいません。こうした物事は人が想像したり制御したりできるものではなく、人の運命から生まれる結果であり、人の運命により決定されるものです。無論、根本的にこれらの物事は創造主が各人のために予定した運命により決定されているとともに、その運命に対する創造主の統治と計画により決定されています。

2. 人間の成長時の様々な条件により、様々な役割が生まれる

人の出生の状況により、人が成長する環境や基本的な水準と状況が確立されるのと同様に、人が成長する状況も、その出生の状況から生まれる結果です。この期間は、人が言語を学び始め、人の心が多くの新しい物事に遭遇してそれを吸収し始め、継続的に成長する過程です。人がその耳で聞く事柄、その目で見えるもの、その心で吸収する物事は、人の内部の世界を次第に豊かにし、活力を与えます。人が遭遇する人々、出来事、物事、人が学ぶ常識、知識、技能、人が影響され、植え付けられ、教えられる考え方のすべてが、その人生の運命を導くとともに人生の運命に影響を与えます。人が成長する時に学ぶ言語と人の考え方は、幼年期を過ごす環境と切り離せないものであり、その環境は両親や兄弟姉妹、その他の人々、出来事、そうした人々の周囲にある物事で構成されています。したがって、人が発達する過程は、人の成長時の環境により決定されるとともに、この時期に遭遇する人々、出来事、物事により左右されます。人の成育時の諸条件は遥か昔に定められているため、当然ながら、その過程における生活環境も定められています。それは、人が好みで選んで決めるものではなく、創造主の計画に従い、創造主の入念な采配と、人の人生の運命への創造主による統治の下に決定されます。それゆえに、あらゆる人が成育時に会う人々や遭遇する物事は、すべて必然的に創造主の指揮と采配に関連しています。人々はそうした複雑な相互関係を予測することも、制御することも、推測することもできません。その成育環境には様々な物事や様々な人々が関連し、そうした広大な網の目のように広がる結びつきを用意したり、指揮したりすることができる人間はいません。創造主を除き、いかなる人間や物事も、すべての人々、出

来事、物事の出現、存続、消滅を制御することはできません。広大な網の目のような結びつきにより、人の発達は創造主が定めた通りに形成され、人々の様々な成育環境が形成されるとともに、創造主の経営の働きに必要とされる様々な役割が造り出され、人々がその使命を完遂するための堅牢な基盤が築かれるのです。

独立：第三の節目

人が少年期と思春期を経て、徐々に不可避免的に成熟すると、次に成すべきは、青年期と完全に訣別し、両親に別れを告げ、独立した成人として将来の道へと向かうことです。この時点においては、成人が直面しなければならない人々、出来事、物事、そして程なく現われるあらゆる運命と向き合わなくてはなりません。これが、人が経験しなければならない第三の節目です。

1. 人は独立後に創造主の統治を経験するようになる

人の人生の旅路において、出生と成長が人の運命の基礎を築くための「準備期間」であるならば、人の独立は、その人生の運命における冒頭の独白です。人の出生と成長が人生の運命のために人が蓄えた富であるならば、人が独立するのは、その富を消費ないし追加し始める時です。人がその両親を離れて独立する時、人が直面する社会の状況、人が得られる職業や経歴の本質は共に運命により定められ、両親とは無関係です。大学で有利な学部を選択し、卒業後は満足できる職に就いて、意気揚々と人生の旅路の第一歩を踏み出す人もいます。様々な技能をたくさん学んで身に付けても、自分に適した職や役職を得られず、ましてや経歴を積むなどありえず、人生の旅路に就いてすぐに、何をしても挫折感を味わい、様々な問題に悩まされ、先行きが暗く、不確かな人生を送る人もいます。熱心に勉強に励んでも、高等教育を受ける機会をあと少しのところで逃してしまい、その後の成功運は尽きたように思われ、人生の旅路における初心の志が消沈してしまう人もいます。人々は、先行きが順調なのか困難なのか分からなくなって初めて、人間の運命がいかに移ろいやすいものであるかを実感し、人生に期待と恐れを抱きます。それほど優れた教育を受けていないにもかかわらず、著書を出版し、一定の名声を得る人や、ほぼ無学でありつつ事業で生活できるだけの金額を稼ぐ人もいます……。人々は、自分が選ぶ職業や生計を立てる手段について、その選択が正しいか間違っているかを制御することができますか。物事は、人間が望み、決定した通りになりますか。大半の人は、少ない労働時間でたくさん稼ぎたい、日照りや雨の中で骨折って働きたくない、身なりを良くしたい、どこでも眩く輝く人でありたい、他人よりも秀でた存在でありたい、家の名を上げたいと願っています。人間は完璧を望みますが、人生の旅路の

一步を踏み出した時、人間の宿命がどれほど不完全であるかを認識するようになり、また、自分の将来に大胆な計画を立て、大それた夢を抱くことはできても、それを叶える能力や権力を持つ人、自分の将来を制御する立場にある人は誰一人としていないという事実を、初めて真に理解します。自分の夢と、直面しなければならない現実には常に差があり、物事が自分の思い通りになることは決してなく、そうした現実直面した人々は決して満足感や充足感を味わうことがありません。自分の暮らし向きや将来のために、考えられ得る限りの手を尽くし、大いに努力し、大いに犠牲を払って自らの運命を変えようとする人々もいます。しかし、自らの多大な努力により自分の夢や願望を叶えられたとしても、結局のところ自分の運命は変えられず、いかに根気強く努力したとしても、宿命により決められたことは決して超越することができません。能力や知能指数、意志の力の差異に関係なく、運命を前にして人々は皆平等であり、偉大か取るに足りない人間か、背が高いか低いか、高貴か下賤かによる差別はありません。人が従事する職業、人の生業、人が生涯にわたって蓄える富は、両親や才能、努力、野望によって決まるのではなく、創造主により予め定められています。

2. 両親を離れ、人生の舞台で本格的に自分の役割を果たすこと

人は成熟すると、親元を離れて独立することができるようになり、この時点で、人は真に自分の役割を担い始めます。霧が晴れ、人生における使命が次第に明瞭になります。名目上、人は依然として両親と密接に繋がっていますが、人の人生における使命と果たす役割は、父母とは無関係であるため、実際には、この密接な繋がりは、人が独立してゆくに従って次第に解かれていきます。生物学的な面から見ると、人々は潜在意識下で両親に依存せずにはいられませんが、客観的に言うと、成人後、人は自分の両親とは完全に分離した生活に入り、独自に決めた役割を果たします。子供の生活に対する両親の責任は、出産と育児を除くと、ひたすら子供に慣習的な成育環境を与えることです。なぜなら、創造主の予定以外に、人間の運命と関係のある物事はないからです。人の将来がどのようになるかを制御できる人はいません。人の将来は遥か昔に予め定められており、両親でさえも変えることはできません。運命に関しては、人間は皆独立しており、各人には独自の運命があります。したがって、自分の子供の人生における運命を阻んだり、その子供が人生で担う役割に何らかの影響を与えたりすることができる両親はいません。人が生まれる運命にある家庭や、人の成育環境は、人の人生における使命を果たすための前提条件でしかないと言えるでしょう。それらの条件が、何らかの形で人の人生における運命を決めたり、どのような宿命の中で人が使命を果たすかを決めたり

することはありません。したがって、人の人生における使命の遂行を、その人の両親が助けることもできなければ、人が人生で担う役割を、その人の親類が助けることもできないのです。人がどのように使命を完遂するか、どのような生活環境で役割を遂行するかは、一つ残らずすべて人の人生の運命によって決定されます。言い換えれば、創造主により予め定められた人の使命に、その他の客観的条件が影響を与えることはないということです。すべての人々は、それぞれ特定の成育環境で成人に達し、段階的に自分自身の人生の道を歩み始め、創造主が各人のために計画した使命を果たします。人々は、自然と無意識のうちに、人類の大海原へと入り、その生涯における役割を担い、そこで創造主の定めのため、創造主の統治のために、被造物として自分の責任を遂行し始めます。

結婚：第四の節目

人が成長して成熟すると、自分の両親や自分が生まれ育った環境から離れて行き、自分の両親とは異なる、自分の人生の方向性と人生の目標を追究するようになります。この時期、人はもはや両親を必要としませんが、一緒に生活できる相手、すなわち、自分の運命と密接な関連性を持つ、配偶者を必要とします。このように、人が独立してから最初に遭遇する主要な出来事は結婚であり、それが、人間が経験すべき第四の節目です。

1. 人には結婚に関する個人的選択の余地がない

誰にとっても結婚は人生における重要な出来事であり、人が様々な務めを本当の意味で担い始める時であるとともに、次第に様々な使命を遂行し始める時です。人々は、自分が自ら結婚を経験するまで、結婚に関して様々な幻想を抱いており、それらの幻想はすべて実に美しいものです。女性は、白雪姫に登場する王子のような自分の夫を想像し、男性は自分が白雪姫のような人と結婚することを想像します。こうした空想は、あらゆる人が、それぞれ結婚に対して一定の条件、要望と基準の諸条件を持っていることをまさに証明しています。この邪悪な時世において、人々は結婚に関して歪んだ情報に常にさらされ、それにより必要条件がさらに増加し、人々にあらゆる種類の負担が課せられ、結婚に対する人々の姿勢は奇妙なものになっています。しかし、結婚を経験した人は、人が結婚をどう理解しているか、結婚に対してどのような姿勢であるかを問わず、結婚とは個人的選択の問題ではないことを知っています。

人間は、人生において多数の人々に出会いますが、誰が結婚相手となるかを知る人は

いません。誰もが結婚という問題に対して個人的な概念や心構えを持っているものの、最終的に誰が真の相手となるかを予測できる人はおらず、また、この問題に対する自分自身の概念はほとんど意味をなしません。自分が好きな人物と出会い、その後、その人物を追いかけることはできても、その人物が自分に関心を持っているか、自分の配偶者となり得るかは、自分自身で決められることではありません。自分が慕う人物は必ずしも自分が人生を共にする相手であるとは限りません。その一方で、全く意外な人物が自分の人生に静かに登場し、自分の運命において最も重要な要素であり、自分の運命が切り離せないほどに結びついている人物、すなわち配偶者となります。そのようなわけで、世界には数百万の結婚がありますが、ありとあらゆる結婚はそれぞれに異なります。不満な結婚、円満な結婚、東西にまたがる結婚、南北にまたがる結婚、完璧な相性の結婚、同じ階級同士の結婚、幸福で調和した結婚、辛く悲しい結婚、羨望される結婚、誤解され、疑問視される結婚、幸福に満ちた結婚、涙に溢れた絶望的な結婚、こうした結婚がそれぞれ非常にたくさんあります。そのように無数の類の結婚がある中で、人間は結婚生活への忠誠と一生の約束を示します。愛情、慕情、分かちがたい結びつき、あるいは断念、無理解、裏切り、さらには憎悪を示す人々もいます。結婚そのものがもたらすのが幸福であるか苦悶であるかを問わず、結婚における各人の使命は創造主により予め定められ、変わることがありません。この使命はあらゆる人が全うしなければならぬことなのです。それぞれの結婚の背景にある各人の運命は変わりません。なぜなら、それは創造主により遥か昔に定められているからです。

2. 結婚は二人の配偶者の運命から誕生する

結婚は人の人生における重要な節目です。結婚は人間の運命の産物であり、人の運命における極めて重要な接点です。結婚は人の個人的な意志や嗜好に基づくものでもなければ、何らかの外的要因に影響されるものでもなく、その一切は、当事者双方の運命、双方の運命への創造主による采配と定めにより決定されます。表面的には、結婚の目的は人類の存続ですが、実際は、結婚は人が使命を全うする過程で経験する儀式に他なりません。結婚において人々が果たす役割は、単に次の世代を養育するにとどまりません。人々には、結婚を継続する過程においてありとあらゆる役割と、その役割を完遂する使命があります。人の出生は、人々、出来事、その周囲の物事のうちに起こる変化に影響を与えるので、人の結婚もやはり、必然的にそうした人々、出来事、物事に影響を与え、さらには、それら一切を色々な方法で変化させるのです。

人が独立する時、人は自分自身の人生の旅路につき、自分の結婚に関連する人々、出

来事、物事へと、一步一步導かれていきます。それと同時に、その人と結婚する配偶者もまた、同じ人々、出来事、物事へと、一步一步近付いていきます。創造主の統治下において、繋がりのない二人の人間が繋がりのある運命を共有し、次第に結婚する方向へ進み、奇跡的に家族、すなわち「一本の縄に張り付く二匹のいなご」となります。したがって、人が結婚すると、その人の人生の旅路は配偶者に関与して影響を与え、同様に配偶者の人生の旅路はその人の人生の運命に関与して影響を与えます。言い換えれば、人間の運命は相互に関連しており、他人に全く依存せずに自分の人生における使命を全うし、役割を果たすことができる人はいないということです。人間の出生は、極めて幅広い一連の結びつきと関係があります。成育もやはり一連の複雑な結びつきに関係しています。同様に、結婚は必然的に極めて幅広く複雑な網の目のような人間関係の中に存在し、その範囲内に維持されて、その結びつきの中にいるあらゆる人の運命に影響します。結婚は、当事者双方の家族や、成育環境、容姿、年齢、資質、才能、その他あらゆる要素の産物ではなく、むしろ共通の使命と、繋がりのある運命から生じます。これが、創造主により指揮され、用意された、人間の運命の産物である結婚の起源です。

子孫：第五の節目

結婚後、人は次の世代の養育を開始します。どのような子供が何人生まれるかについて、人には発言権がなく、これもまた、創造主が予め定めた、人の運命により決定されます。これが、人が経験しなければならない第五の節目です。

人がある人の子としての役割を果たすために生まれるならば、人はある人の親としての役割を果たすために次の世代を養育するということになります。こうした役割の変化により、人は人生の様々な段階を、様々な立場で経験します。またそこから得られる様々な人生経験を通して、人は創造主の統治を知るようになります。創造主の統治は常に同じ方法で行われ、それを通して人は、誰一人として創造主の定めを逸脱したり変更したりすることはできないという事実と直面します。

1. 人間は自分の子供がどうなるかを制御できない

出生、成育、結婚はすべて、様々な種類と様々な程度の失望感を人々にもたらします。家族や容姿に不満がある人もいれば、両親が嫌いな人や、成育環境に対して憤慨したり、不服を持ったりする者もいます。そして大半の人々にとって、こうした失望感のなかでも、結婚が最も大きな不満となります。出生や成長、結婚にどれほど不服であるかを問わず、そうした節目を既に経験した人は、自分の出生地や出生期日、自分の容姿、

自分の両親、自分の配偶者を選ぶことはできず、天の意を受け容れるほかないことを知っています。しかし、人々が次の世代を養育する時になると、彼らは自分の半生で叶わなかった願望を子供に投影し、自分がその半生において経験した失望感が、子供により埋め合わせられることを願います。そうしたわけで、自分の娘は息を呑むような美女に育つ、自分の息子はさっそうとした紳士に育つ、自分の娘は教養が高く才能に溢れている、自分の息子は優等生になり、卓越したスポーツ選手になる、自分の娘は優しくて気立てが良く、感情が豊かになる、自分の息子は聡明で能力が高く、気配りのできる人になるなど、人々は自分の子供に関して様々な幻想にふけります。彼らは、娘であれ息子であれ、自分の子供が年長者を敬い、両親に気遣い、皆に愛され、称賛されることを願います。この時点では、人々は人生の新たな希望が膨らみ、心の中では新たな情熱に火がつきます。人々は、自分の人生においては自分が弱く、無力であること、何かに卓越する機会や希望は二度とないこと、自分の運命を受け容れるほかないことを知っています。それゆえに、人間は自分の希望や、叶わなかった願望や理想をすべて、次の世代に投影し、自分の子供が自分の夢を叶え、自分の願望を実現する手助けとなること、自分の娘や息子が家の名に栄誉をもたらし、重要人物や富豪、有名人となることを望んでいます。つまり、彼らは自分の子供が幸運に恵まれることを願っているのです。人々の計画や幻想は完璧です。自分の子供の数や自分の子供の容姿、能力などは自分で決められるものではなく、自分の子供の運命は僅かたりとも自分の掌中にはないということを彼らは知らないのでしょうか。人間は、自分が自分自身の運命の主ではないにもかかわらず、若い世代の運命を変えることを願い、自分自身の運命から逃れる力が全くないにもかかわらず、自分の娘や息子の運命を制御しようとしします。彼らは、自己を過信していないのでしょうか。これは人間の愚かさで無知さではないのでしょうか。人々は自分の子供のためなら一切努力を惜しみませんが、最終的には、自分が授かる子供の人数や、その子供がどのような子供であるかは、人の計画や願望通りにはならないのです。貧しいながら多くの子供を授かる人もいれば、裕福ながら子供を授からない人もいます。娘を欲しがっていてもその願いが叶わない人や、息子を欲しがっていても息子を授からない人もいます。自分にとって子供が祝福となっている人もいれば、自分にとって子供が災いとなっている人もいます。自分達は聡明でも、知能の発達が遅い子供を授かる夫婦や、自分達は勤勉で誠実でも、育てている子供が怠惰であるという両親もいます。自分達は親切で正義感があっても、悪賢く凶暴な子供を授かる両親もいます。自分達は心身共に健全であっても、障害を持つ子供を授かる両親もいます。自分達は平凡で出世できずとも、偉業を成し遂げる子供を授かる両親もいます。自分達は低い身分であっても、授か

った子供の身分が高くなる両親もいます。……

2. 人間は、次の世代を養育した後、運命に対して新たな認識を得る

結婚する人々の大半は、三十歳前後という、人生において人間の運命の何たるかをまだ何も心得ていない時期に結婚します。しかし、子育てを始めると、子供が育つにつれ、人々は、一つ前の世代の人生とあらゆる経験が新しい世代により繰り返されるのを目の当たりにし、そうした状況に自分の過去が反映されているのを見て、自分の道と同様に、若い世代が歩む道も、計画したり選択したりすることができないことに気付きます。人々は、この事実と直面すると、あらゆる人の運命は予め定められていると認めざるを得ず、それほど意識することなく自分の願望を徐々に捨て去り、心に秘めた情熱は冷めていきます……。こうしている間に、人々は、実際のところ人生におけるいくつかの重要な節目を通り越し、人生に対する新たな認識を得て、新たな姿勢を取るようになります。この年齢の人は、将来にどの程度期待することができ、どのような見込みを待ち望むべきでしょうか。王子が現れるのを夢見続けている五十歳の女性はいいますか。白雪姫を夢見続けている五十歳の男性はいいますか。醜いアヒルの子から白鳥へと生まれ変わることを願っている壮年の女性はいいますか。高齢男性は、若い男性と同じように出世に対する欲望を持っていますか。要するに、男性か女性かを問わず、この年齢に達した人は、結婚、家族、子供について比較的合理的かつ実践的な姿勢を取りがちです。そのような人には、基本的に選択肢がなく、運命への挑戦へと駆り立てられる事もあります。人間の経験に関する限り、人がこの年齢に達すると、自然と「運命を受け止める必要がある。子供には独自の運命があり、人間の運命は天により定められたものである」という姿勢を取るようになります。真理を理解しない人々の大半は、この世の栄枯盛衰や挫折、苦難を切り抜けてきた後、人生に関する識見を「それが運命である！」というひと言で表現します。このひと言は、人々の運命に対する理解と人々が行き着いた結論が世俗的な観点から要約されたものであり、また、人類の無力さを表現し、的を射た正しいものだと言えますが、それは創造主の統治に対する理解からは遠くかけ離れたものであり、創造主の権威に対する認識には到底代わるものではないのです。

3. 運命を信じることは、創造主の統治に対する認識に代わるものではない

運命について、長年にわたり神に付き従って来たあなたがたの認識と俗世人の認識には大きな違いがありますか。あなたがたは、創造主の定めを真に理解し、創造主の統治を真に知りつつありますか。「それが運命である」という言葉について心から深く共感している人もいますが、彼らが神の統治を一切信じず、人間の運命が神により定められ

、指揮されているということを信じず、神の統治に服従したがりません。そのような人々は、あたかも大海原に漂流し、波にもまれ、潮に流されるように、受け身で運命に身を委ねるほかありません。依然として、彼らは、人間の運命が神の統治下にあることを認めません。彼らは、神の統治について自ら自発的に気付くことで神の権威を知り、神の指揮と采配に従い、運命に逆らうのを止め、神の慈しみと保護、導きの下に生きることができません。言い換えれば、運命を受け容れることは、創造主の統治に従うこととは異なり、運命を信じる事は、神の統治を受け容れ、認め、知ることではなく、単にその事実と表面的な現象を認めることにすぎません。それは、創造主が人間の運命をどのように支配するかを知る事、創造主が万物の運命を支配する源であることを認める事とは異なるものであり、創造主による人の運命への采配と計画に服従する事とは明らかに異なるものがあります。人が運命のみを信じ、それについて深く共感していても、それにより人間の運命への創造主による統治を知り、認め、それに服従し、それを受け容れることができなければ、人の人生は悲惨で虚無のうちに生きる人生となり、創造主の支配に服従することも、造られた人間という言葉が真に意味するところの存在となることも、創造主の是認を享受することもできません。創造主の統治を本当に知り、経験する人は、受動的でも無力でもなく、能動的であるべきです。そのような人は、すべてが運命づけられていることを認めると同時に、いのちは創造主の統治下にあるという人生と運命の正確な定義を把握している必要があります。人が自分の歩んで来た道程を振り返り、旅路のそれぞれの段階を回想すると、その道の苦楽を問わず、人は、それぞれの段階で神が自分の進む道を導き、計画していたことを知ります。人が気付かぬうちに人を今日まで導いてきたのは、神の周到な采配と入念な計画です。創造主による統治を受け容れ、創造主の救いを得ることができるということは、何と幸運なことでしょう！ 人が自分の運命に対して消極的な姿勢でいる場合、それは、神が彼らのために用意したあらゆる物事をその人が拒否し、従順な姿勢ではないということを意味します。神による人間の運命の統治に対して、人が能動的な姿勢でいるならば、人が自分の旅路を回顧し、神の統治を真に把握するようになった時、人は神が用意した物事のすべてに従うことを一層真剣に望むようになるとともに、人の運命を神の指揮に委ね、神に反抗することを止めるということに一層強い決断と確信を得るでしょう。運命を把握することもなく、神の統治を理解することもなく、霧の中を敢えて苦労してよろめきながら手探りでさまよった時、旅路は困難で悲痛すぎるものになることが分かります。したがって、人の運命への神の統治を人々が認めた時、賢明な人は、それを知り、受け容れて、自らの手で良い人生を作り上げようとしていた悲痛な日々と訣別することを選び

、運命に逆らい、いわゆる「人生の目標」なるものを自らの方法で追い求めることを止めます。神の存在もなく、神を見ることもなく、神の統治をはっきりと認識することもなければ、毎日は無意味で、無価値で、惨めです。どこにしようが、どのような仕事をしようが、人の生き方と目標への追求は終わりのない悲しみと深刻な苦痛しかもたらさず、回想するに堪えないものになります。創造主の統治を受け容れて、その指揮と采配に従い、真の人生を求めて初めて、人は徐々にすべての悲しみや苦痛から解放され、人生の虚無感を払拭できるのです。

4. 創造主の統治に従う人々のみが真の自由を得ることができる

人々は神の指揮と統治を認識していないので、常に挑戦的かつ反抗的な態度で運命に立ち向かい、神の権威や統治、待ち受ける運命を捨て去ることを願い、現状を変え、運命を改変するという儚い望みを抱いています。しかし、人間は決してそれに成功することではなく、事あるごとに挫折します。こうした葛藤は、人の魂の奥底で生じ、骨身に沁み入るほどの並々ならぬ苦痛を伴うものであり、人はその間絶えず自分の命を浪費しています。この痛みの原因は何でしょうか。神の統治が原因でしょうか、それとも人が不運な境遇に生まれたことが原因でしょうか。明らかに、そのいずれでもありません。結局は人々が進む道、人々が選択する人生の過ごし方が原因となっています。こうした物事を認識していない人々もいるかもしれません。しかし、神が人間の運命を統治していることをあなたが真に知り、それを真に認め、自分のために神が計画し、決定したあらゆる物事が大きな利益であり、大いなる保護であるということを真に理解した場合、その痛みが次第に緩和され、心身共にくつろいだ気持ちになり、自由になり、解放されます。大半の人々の状態から判断すると、人々は、主観的には、従前のような生活を望まず、苦痛から解放されることを望んでいるにもかかわらず、客観的には、創造主が人間の運命を統治していることの実際の価値と意義を真に把握することができず、創造主の統治を認めて従うこともできず、ましてや創造主の指揮や采配を求め、受け容れる方法を知るよし也没有ありません。そうしたわけで、創造主が人間の運命と、人類のあらゆる物事を統治しているという事実を人々が真に認識できず、創造の統治に真に服従できない場合、その人々にとって、「人間の運命は自分の掌中にある」という観念に駆られて捕らわれることのないようにするのは困難でしょう。彼らにとって、運命や神の権威に対抗する激しい葛藤による痛みを払拭することは困難であり、また、言うまでもなく、彼らが真に解放されて自由になり、神を崇拝する人々となることもやはり困難でしょう。こうした状態から自由になるための非常に簡単な方法があります。それは、自分の以前の

生き方や人生の目標と訣別し、以前の生き方、人生観、追求、願望、理想を概括し、分析し、それを神の旨や人間への要求と比較し、それらのいずれかが、神の旨や要求と一致しているか、人生の正しい価値をもたらすか、一層深い真理の理解へと導くか、人間性と人間らしさを伴った生き方を可能にするかを確認することです。人々が追求する人生の様々な目標や多種多様な生き方を繰り返し調査し、注意深く分析すると、創造主が人類を創った時の創造主の本来の意図と一致するものがひとつもないことが分かります。それらはすべて、人間を創造主の統治と慈しみから引き離し、人々を墮落させて地獄へと導く罠です。このことを認識した後の課題は、以前の人生観を捨て、様々な罠から離れ、自分の人生を神に託して神の采配に委ねることです。それは、神の指揮と導きのみに従うよう心がけ、個人的な選択肢を持たず、神を崇拝する人になるということです。これは簡単に思えますが、行うのは困難です。苦痛に耐えられる人々もいれば、耐えられない人々もいます。喜んで従う人々もいれば、ためらう人々もいます。ためらう人々には、それを行うことを望む気持ちと決意が不足しています。つまり、彼らは、神の統治を明確に認識するとともに、人間の運命を計画し、采配を行うのは神であることを完全に知っているにもかかわらず、それでもなお反抗しようとあがき、自分の運命を神の掌中に委ねて神の統治に従うことを許さず、さらには、神の指揮と采配に憤慨しています。そのようにして、自らのために自分の能力を知りたいことを願う人々が常に存在するのです。彼らは自分の運命を自らの手で変えること、自分の力で幸福になること、神の権威の範囲を出て、神の統治を超えることができるかどうかを試すことを望みます。人間の悲劇は、人間が幸せな人生を望むことや、富や名声を望むこと、霧の中で自分の運命に立ち向かうことではなく、創造主の存在を知り、創造主が人間の運命を統治しているという事実を知ってなお、自分自身のあり方を正し、泥沼から抜けるということができず、心を頑なにしておの固い殻を押し通そうとすることです。人間は、すべてにおいて悔恨の欠片もなく、泥の中でのたうち回り、創造主の統治に対して頑固に対抗し続け、苦々しい結末を見るまで抗い続けます。うちひしがれ、重傷を負って倒れた時、やっと諦めて戦いを止めるのです。これが、人間の本当に悲しい性です。ですから、わたしは言います。服従することを選ぶ人々は賢者であり、苦闘して逃れることを選ぶ人々は実に愚か者です。

死：第六の節目

慌ただしい日々と、挫折と失望、歓喜と悲哀、幸運と不運、忘れられない年月など、無数の出来事を経験し、巡る季節のなかで、人生の重要な節目をそれと気づくことなく

瞬く間に過ぎた末、人間は衰退期に入ります。過ぎた年月の跡は身体全体に刻み込まれています。もはや真っ直ぐ立つことはできず、濃色の頭髮は白くなり、かつて明るく澄んでいた眼は暗く曇り、滑らかで柔らかい肌はシミとシワのある肌へと変化します。耳が遠くなり、歯が抜け落ち、反応が鈍くなり、動きが遅くなります……。この時点で、人は情熱溢れる若年期に最後の別れを告げ、人生の黄昏期に入ります。その次に、人間は人生最後の節目である死を迎えます。

1. 創造主のみが人間の生死に対する力を握っている

人の出生が人の前世により運命づけられているとすれば、人の死はその運命の終りとなります。人の出生がその人生における使命の始まりであるとすれば、人の死は、その使命の終りとなります。創造主は人の出生の諸条件を定めているので、創造主が人の死についても諸条件を定めていることは言うまでもありません。言い換えれば、偶然生まれる人はおらず、突然訪れる死はなく、出生と死は必然的に人の前世と現世に関連しています。人の出生の状況と死の状況は、両方とも創造主により予め定められたものであり、それらは人の宿命であり、人の運命です。出生について様々な真相がある以上、人の死も当然ながらそれぞれ特定の諸条件のもとに起こります。これこそが、人の寿命が様々であり、死の経緯や時刻が異なる理由です。強健でも早死にする人もいれば、虚弱でも長生きして安らかに永眠する人もいます。不自然な原因で死ぬ人もいれば、自然な原因で死ぬ人もいます。自宅から遠く離れて死ぬ人もいれば、最後に最愛の人々に看取られながら目を閉じる人もいます。空中で死ぬ人もいれば、地下で死ぬ人もいます。水中に沈む人もいれば、災害の犠牲者となる人もいます。朝死ぬ人もいれば、夜死ぬ人もいます。人は皆、華々しい出生、輝かしい人生、栄誉ある死を望みますが、自分の運命から脱したり、創造主の統治から逃れたりできる人はいません。これが人間の運命というものです。人は将来に向けて様々な計画を立てることはできますが、出生と他界の経緯や時期は誰にも計画できません。人々は死を回避し、阻止しようと最大限の努力をしますが、やはり、死は人知れず静かに近付いて来ます。自分がいつどのように死ぬかを知る人はおらず、ましてや何処で死ぬかなど知る人はいません。生死に対する力を握っているのは人間でもなければ自然界の生き物でもなく、唯一の権威を持つ創造主であることは明らかです。人類の生死は自然界の法則の産物ではなく、創造主の権威による統治の結果です。

2. 創造主の統治を知らない人間は、死の恐怖に苛まれる

人が老年になると、人が直面する課題は、家族を養うことでも、人生の大望を抱くこ

とでもなく、人生にどのように別れを告げるか、どのように臨終を迎えるか、自分という存在に、どのように終止符を打つかということです。表面的には、人間は死を少しも気にかけていないように思われますが、その問題を追及せずに済む人はいません。なぜなら、誰一人として、死の向こう側に別の世界が存在するかどうか、人間が知覚したり感じ取ったりできない世界、誰も知らない世界が存在するかどうかを知る人はいないからです。このため、人間は死と正面から向き合うこと、然るべき時に死と対峙することを恐れ、その問題を避けるよう最大限の努力をします。したがって、あらゆる人が死をひどく恐れ、人生において避けることのできない事実が謎に包まれ、あらゆる人の心に絶えず影を落としているのです。

自分の身体の変質を感じ、死が迫っていると感じる時、人は曖昧で表現し難い恐怖を覚えます。死に対する恐怖により、人は一層淋しさと無力感を感じ、この時点で人は、人間は何処から来て、何処へ向かっているのだろうか、こうして束の間の人生を終えて死ぬのだろうか、これが人の人生の終わりの時なのだろうか、最終的に人生の意味は何だったのだろうか、結局人生には何の価値があるのだろうか、それは富と名声なのだろうか、それは家族を養うことなのだろうか、などと自問します。こうした具体的な疑問について考えてみたことがあるか、死をどれほど恐れているか如何を問わず、すべての人の心の奥深くには、この謎を究明したいという欲求、自分は人生について無理解であるという感覚が常にあり、またこうした気持ちの中に、この世に対する感傷、この世を去ることへの不本意さが混在しています。人間が恐れているものが何か、探し求めるものは何か、人間は何に対して感傷的になるか、何を残して去るのが不本意なのかを明確に表現できる人は、おそらく誰一人としていないでしょう。

人々は死を恐れているので、多くの心配を抱えています。彼らは死を恐れているので、捨て去れない物事が多すぎるのです。臨終する時、あれやこれやと気を揉み、子どもや自分が愛する人々、財産など様々な事について、あたかも心配すれば死がもたらす苦悩や恐怖を解消できるかのように、あたかも生きている人々と何らかの親しい関係を維持すれば死に伴う無力感と淋しさから逃れられるかのように思う人々もいます。人間の心の奥底には、漠然とした恐怖、愛する人と離別する恐怖、青い空や物質世界を二度と見られないことへの恐怖があります。愛する人と共にいることに慣れきった、人を恋しがる魂は、握りしめたものを手放して未知の世界にたった一人で立ち去ることに抵抗を感じています。

3. 富と名声を追求して人生を過ごした人間は、臨終時に途方に暮れる

創造主の統治と定めにより誕生した名もなき孤独な魂は、両親と家族を得て、人類の一員となる機会、そして人間の生活を体験して世界を見る機会を得ます。この魂は、創造主の統治を経験する機会、創造主の創造の素晴らしさを知る機会、そして何よりも、神の権威を知り、神の権威に服従する機会を得ます。しかし大半の人が、こうした稀少で束の間の機会を実際に掴むことはありません。人は一生分のエネルギーを運命に立ち向かうことに使い果たし、家族を養おうとせわしなく働き、富と地位の間を行き来して、すべての時間を費やします。人々が大切にすることは、家族、金銭、名声であり、彼らはこれらを人生において最も価値の高いものとみなします。すべての人々が自分の運命に不満を言うものの、人間はなぜ生きているのか、人間はどう生きるべきか、人生の価値と意味は何であるか、といった、最も喫緊に検討して理解すべき問題を頭の隅に追いやって考えないようにしています。人々は、その生涯が何年であるかを問わず、若さを失い白髪とシワが現れるまで、ただせわしなく富と名声を追い求めて全生涯を生きます。富と名声で人間の老衰を止めることはできないこと、金銭で心の空虚感を埋められないこと、誰一人として出生、老化、疾病、死の法則から除外される人はいないこと、待ち受ける運命から逃れられる人はいないことを悟るまで、そのような生き方をします。人々は、人生最後の節目に直面せざるを得なくなった時に初めて、巨額の財産があったとしても、特権のある高い地位にあったとしても、やはり死を免れられる人はいないこと、人は一人残らず、元来の名もなき孤独な魂という境遇に還らなければならないことを理解します。両親のいる人々は両親がすべてであると考え、財産のある人々は金銭が自分の頼みの綱であり生きる上での手段であると考えます。立派な地位があれば、人々はそれにしがみついて、そのために命を賭けます。この世界を手放そうとする時になって初めて、人々は自分が生涯をかけて追求してきた物事が、空を過ぎゆく雲のようなものであり、いずれも掴み続けることもできなければ、自分とともに連れていくこともできないものであり、自分を死から免れさせることもなければ、この世を去る孤独な魂の帰路に仲間や慰めを与えることもないものであり、またとりわけそうした物事のなかに、人々を救って死を超越することを可能にするものなどないということに気付きます。人々は、この物質世界で富と名声を得ることで、一時的な満足感、束の間の悦楽、安楽の錯覚を覚え、その結果、道を踏み外します。人々はそのようにして、広大な人間の世界で、平和、慰め、心の平穏を求めて手足をばたつかせてもがくうちに、次々と襲ってくる波に吞まれます。人間は何処から来て、なぜ生きていて、どこへ行くのか、など、最も理解すべき重要な問題を見出せずにいる時、人々は富や名声により誘惑され、惑わされ、支配され、道を見失って取り返しがつきません。時の流れは速く、年

月は瞬く間に過ぎ去り、人は、気付かぬうちに、人生の壮年期に別れを告げます。人は、まもなくこの世を去ろうとする時、この世の物事はすべて流れ去って行き、それまで自分の持っていたものを手放さずに繋ぎ止めておくことはもはやできないという認識へと徐々に辿り着きます。そして、自分がまだ名もなき、この世に生まれたばかりの泣き叫ぶ赤ん坊のようだと実感します。この時点において人は、人生で何を成し遂げたか、生きていることの価値とその意味、自分がこの世に現れた理由をじっくり考えることを余儀なくされます。そして、来世というものは本当にあるのだろうか、天国は本当に存在するのだろうか、報いというものは本当にあるのだろうか、といったことを人が益々知りたくなるのは、この時点です。人は死に近付けば近づくほど、人生とは何かを知りたい気持ちが強くなります。死が近付けば近づくほど、人の心は益々空虚になり、無力感が強くなるので、死に対する恐れが日々強くなります。人々が死に近づく時にこのような感情が表れる理由は二つあります。一つ目には、自分の人生を依存してきた富と名声を失いつつあり、この世の目に見える物事すべてを置き去りにしようとしていることです。二つ目には、愛する人々や支援の手段が存在しない、足を踏み入れるのが不安になるような、馴染みのない世界、謎に包まれた未知の領域にただ独りで立ち向かおうとしていることです。この二つの理由のため、あらゆる人は死に直面すると、不安になり、それまで決して知ることのなかった混乱と無力感を覚えます。人々は、実際にこの時点になって初めて、人がこの地上に足を踏み入れた時にまず理解すべきことは、人間がどこから来るのか、なぜ人々は生きているのか、人間の運命を支配するのは誰か、人間の存在に糧を施し、それを統治するのは誰であるのかということだと知るのです。これらを理解していることは人が生きるための真の手段となり、人間の生存に不可欠な基盤となります。それは、自分の家族を養う方法や、富や名声を得る方法を知ることでもなければ、人々よりも卓越した存在となる方法や一層豊かに生活する方法を知ることでもなく、ましてや他人を超越し、競争に勝つ術を学ぶことなどでもありません。生涯をかけて習得する生存のための様々な技能により、人々は物質的な快樂を豊富に得ることができるものの、そうした技能は決して人の心に真の平和と慰みをもたらすことはなく、むしろ絶えず人間に道を踏み誤らせ、自分を掌握するのを難しくさせ、人生の意味を知る機会を一つ残らず失わせます。これら生存のための技能は、然るべく死を迎えるにはどうすれば良いかということに対して漠然とした不安を生み出します。こうして、人々は人生を台無しにするのです。創造主は、あらゆる人を平等に扱い、生涯にわたり創造主の統治を経験し、知る機会を与えるにもかかわらず、人は、死が近づき、自分に死の恐怖が差し迫って初めて光が見えるようになり、その時は、既に手遅れなのです。

人々は、金銭と名声を追い求めて人生を過ごします。それらがあれば、生き長らえて死を免れるとでもいうように、金銭と名声が唯一の支えだと考え、それらの藁にしがみつくのです。しかし、死が迫る時になって初めて、こうした物事がどれほど自分に無縁であるか、死に直面した自分がどれほど弱いか、どれほど脆いか、どれほど孤独で無力であり、進退窮まった状態にあるかを悟ります。人間は、いのちは金銭や名声で買うことができないこと、いかに裕福であっても、いかに高い地位であっても、死を前にした人間は皆同様に貧しく取るに足らない存在であることを悟ります。人間は、金銭でいのちを買えないこと、名声で死を消し去れないこと、金銭や名声では、一分一秒たりとも人間の寿命を延ばせないことを悟ります。それを強く感じれば感じるほど、人々は生きていたいと切に願う気持ちが強くなり、死が近付くのを一層恐れます。この時点で初めて、人々は、自分のいのちが自分自身のものではなく、自分で制御できるものではないこと、自分が生きるか死ぬかについて、自分自身は発言権がないこと、そうしたことが自分の制御できる範囲外にあることを、真に理解します。

4. 創造主の統治を受け、安らかに臨終を迎える

人が生まれる時、一つの孤独な魂は、創造主がその魂のために計画した、地上での生活、創造主の権威を経験し始めます。これが、その人物、すなわちその魂にとって、創造主の統治に対する認識を得て、創造主の権威を知るようになり、それを自ら経験するにあたり格好の機会となることは言うまでもありません。人々は、創造主が人々のために定めた運命の法則に基づいて生活します。道理をわきまえた良心のある人にとって、数十年にわたる人生の中で創造主の統治を受け容れるとともに創造主の権威を知ることとは、それほど困難なことではありません。したがって、数十年にわたる自分の人生経験の中で、万人の運命は予め定められていることを認め、生きることを意味を把握あるいは概括することは、誰にとっても極めて容易なはずです。こうした人生の教訓を取り入れるうちに、人は、いのちがどこから来るかを次第に理解するようになるとともに、心が本当に必要とするものは何か、人を真の人生の道へと導くものは何か、人生の使命や目標であるべきものは何かを次第に把握するようになります。人は、自分が創造主を拝まず、創造主の統治を受けない場合、死に直面する時が来たとき、すなわち、その魂が再び創造主に対面するとき、その心は無限の恐怖と動揺でいっぱいになるだろうということを次第に認識します。人がこの世に数十年存在してきたにもかかわらず、人間のいのちがどこから来るかを知らず、人間の運命が誰の掌中にあるかを認識せずにいるのであれば、安らかに臨終を迎えられないのは当然です。数十年の人生経験の中で創造主の

統治に対する認識を得た人は、人生の意味と価値を正しく理解している人です。そのような人は、創造主の統治を真に経験し理解する中で、人生の目的に対する深い認識を持ち、さらに創造主の権威に服従することができる人です。神による人類創造の意味や、人間は創造主を崇拝すべきであること、人間の持つあらゆるものが創造主からもたらされたものであり、近い将来に創造主へと還ることを理解しているのです。そういった人は、創造主が人間の出生を計画するとともに人間の死を支配する権利を持ち、生と死の両方は創造主の権威により予め定められているということを理解します。したがって、人は、こうした事柄を真に把握する時、自然と安らかに死を迎えることができ、この世におけるすべての所有物を穏やかに手放し、その後の物事を喜んで受け容れ、それに従うことができ、創造主が計画した人生最後の節目を、盲目的に恐れて避けようともがくのではなく、あるがままに歓迎することができるでしょう。人が、人生は創造主の統治を体験し、その権威を知る機会であると見なし、人生は創造された人間として本分を尽くし、使命を果たす希な機会であると考えるのであれば、必ずや正しい人生の見通しを得て、必ずや創造主により祝福され、導かれる人生を送り、必ずや創造主の光の中を歩み、必ずや創造主の統治を知り、必ずや創造主の支配に服従し、必ずや創造主の奇跡の業の証人、その権威の証人となるでしょう。言うまでもなく、そのような人は必ずや創造主に愛され、受け容れられ、そのような人だけが死に対して落ち着いた姿勢で臨み、人生の最後の節目を喜んで歓迎することができます。死に対して明らかにこのような姿勢で臨んだ人は、ヨブです。ヨブは人生最後の節目を喜んで受け容れる準備ができており、自分の人生の旅路を穏やかに終え、自分の人生における使命を全うして、創造主の許へと還りました。

5. ヨブは人生において追求と進歩を重ねることで、安らかな死を迎えることができた

聖句では、ヨブについて、次のように述べられています。「ヨブは年老い、日満ちて死んだ」（ヨブ記 42:17）。これは、ヨブが死んだ時、彼には何も後悔することがなく、苦しむこともなく、この世から自然と去ったことを意味しています。皆が知っている通り、ヨブは、生きている時分には神を畏れ、悪を避けた人間でした。ヨブの正しい行いは神より称賛され、人々の記憶に残りました。ヨブの人生は、他の誰の人生よりも価値があり、有意義であったと言えるかもしれません。ヨブは神の祝福を享受し、神はヨブを地にあって正しき者と呼び、また、ヨブは神からの試みに会い、サタンに試されました。ヨブは神を証し続け、正しき者と呼ばれるに相応しいとされました。ヨブが神の

試みに会った後の数十年間、ヨブは従前にも増して価値が高く、有意義で着実に、平和な人生を送りました。ヨブの正しい行いゆえに、神はヨブを試し、ヨブの正しい行いゆえに、神はヨブの前に現れ、直接言葉を伝えました。したがって、ヨブは試された後の年月において、人生の価値を一層具体的に理解し、認識し、創造主の統治を一層深く理解し、創造主がどのように祝福を与え、奪うかについて、一層正確かつ確実な認識を得ました。ヨブ記には、ヨブに対してヤーウェ神がそれ以前よりも大きな祝福を与えるとともに、ヨブが創造主の統治を知り、安らかに死と直面する上で更に有利な立場にヨブを立たせたことが記されています。したがって、ヨブが老いて死を迎えた時、自分の財産について懸念しなかったことは確実でしょう。ヨブには心配も後悔もなく、無論死に対する恐れありませんでした。なぜなら、ヨブは生涯を通して神を畏れ、悪を避けて生活したからです。彼には、自分の最期を懸念する理由がなかったのです。現在、死に直面した時のヨブのように行動できる人々がどれだけいるのでしょうか。なぜ、誰もこうした簡単な態度を示すことができないのでしょうか。その理由はただ一つです。すなわちヨブは、神の統治に対する信念、認識、服従を主観的に求めて人生を過ごし、ヨブはこうした信念と認識、服従をもって人生の重要な節目を経験し、晩年を過ごし、人生の最期の節目を迎えました。ヨブが経験した事柄を問わず、ヨブの人生における追求と目標は苦痛ではなく、幸福でした。ヨブが幸福であったのには、創造主がヨブに与えた祝福や称賛のみならず、より重要な理由がありました。それは、ヨブの追求と人生の目標、神を畏れ、悪を避けることで得た、創造主の統治に対する漸進的な認識と真の理解、そして更には、ヨブが人生において、創造主の統治の対象として個人的に体験した創造主の驚くべき業、そして人間と神の共存、面識、相互理解に関する、暖かくも忘れがたい経験と記憶です。創造主の旨を知ることでもたらされる慰めと幸福、そして、神の偉大さ、驚異性、愛すべき存在、忠実性を理解した後に生まれた崇敬の念があるからこそ、ヨブは幸福だったのです。ヨブが一切苦しむことなく死を迎えることができた理由は、ヨブは死ぬことで創造主の許に還ることを知っていたことにあります。そして、ヨブの人生における追求と進歩があったからこそ、ヨブは安らかに死を迎えることができ、創造主がヨブのいのちを取り戻そうとすることに冷静な気持ちで向き合うことができ、さらには汚れのないまま、懸念することなく神の前に立つことができたのです。現在の人々はヨブが手に入れたような幸福を掴むことができるのでしょうか。あなたがた自身は、そうした幸福を掴む条件を備えていますか。今日の人々は確かにそうした条件を備えています。それは、なぜヨブのように幸福に生きられないのでしょうか。なぜ彼らは死の恐怖の苦悩から抜け出せないのでしょうか。死に直面した時、失禁したり、震え

たり、気絶したり、天と人間を区別なく非難したり、中には号泣したり、むせび泣いたりする人々もいます。こうした反応は、決して死が近付いた時に突然現れるものではありません。人間がこうした気恥ずかしい行動を取る主な理由は、心の奥底で死を恐れていること、神の統治と采配に対する明瞭な認識や経験がなく、ましてやそれに心から服従することなどないことにあります。人々は、あらゆる物事を自ら計画して管理し、自分の運命や人生、死を自ら制御することしか望まないがゆえに、こうした反応をするのです。したがって、人々が決して死の恐怖から逃れることができないのは当然です。

6. 人間は、創造主の統治を受け容れることによってのみ、創造主の許に戻ることができる

人に、神の統治や采配に関する明瞭な認識や経験がない場合、その運命や死に関する認識はつじつまの合わないものにならざるを得ません。人々は、すべては神の掌中にあることを明確に見ることができず、すべては神の支配と統治の下にあることに気付くこともなければ、その統治から脱したり逃れたりできないことを理解することもあります。そのため、死を迎える時期になると、彼らの最期の言葉や懸念、後悔は尽きることがないのです。彼らは、過剰な重荷、過剰な嫌気、過剰な困惑に潰されそうになっています。彼らが死を恐れる原因はそこにあります。この世に生を受けたあらゆる人にとって、出生は必然であり死は不可避であり、誰一人としてその過程を超越することはできません。苦痛を感じることなくこの世から去りたい、抵抗や懸念なく人生最後の節目と直面したいと願うのであれば、その唯一の方法は、後悔を残さないようにすることです。そして、後悔せずに他界する唯一の方法は、創造主の統治を知り、その権威を知り、それらに服従することです。人は、この方法によってのみ、人間同士の不和、邪悪、サタンの拘束から離れることが可能となり、この方法によってのみ、ヨブのように創造主に導かれ、祝福される人生、自由で解放された人生、価値と意義のある人生、正直で率直な人生を送ることが可能となります。この方法によってのみ、ヨブのように創造主により試され、奪われるに従い、創造主の指揮と采配に服従することが可能となります。この方法によってのみ、ヨブのように生涯を通して創造主を崇拝し、創造主の称賛を得て、創造主の声を聞き、創造主が現れるのを目撃することが可能となります。この方法によってのみ、ヨブのように、苦痛や懸念、後悔なく幸福に生活して幸福に死ぬことが可能となります。この方法によってのみ、ヨブのように光の中に生き、光の中であって人生の一つひとつの節目を過ごし、光の中であって穏やかに人生の旅路を終え、造られた人間として創造主の統治を経験し、学び、知るという自らの使命を果たし、光の中に

死んで、造られた人間として、永遠に創造主の許にあり、創造主の称賛を受けることが可能となるのです。

創造主の統治を知る機会を逃してはならない

先述した六つの節目は、創造主により定められた非常に重要な時期であり、普通の人間の一人ひとりが人生において通過しなければなりません。人間の観点から見ると、これらの節目はそれぞれすべて現実であり、不可避であり、そのすべては創造主による定めと統治に関係しています。そのため、人間にとって、そうした節目のそれぞれが重要な関門であり、あなたがたは現在、それを如何に円滑に通過するかという重大な問題に直面しています。

人生を構成する数十年間は短くもあり長くもあります。出生から成人までの二十年余りは瞬く間に過ぎ去り、人生のこの時点で人は成人とみなされるものの、この年頃の人々は、人生や人間の運命に関して、ほぼ何も知りません。彼らは多くの経験を重ねながら、次第に壮年期へと移行します。三十代と四十代の人々は人生と運命に関する初期的な経験を得ますが、それらの物事に対する彼らの認識は依然として極めて曖昧です。四十歳になって初めて、一部の人は、神が造った人類や宇宙について理解し始めるとともに、人生とは何たるか、人間の運命とは何たるかについて把握し始めます。長年にわたり神に付き従い、現在、壮年に達している人の中には、神の統治に対する正確な認識や定義を持たず、ましてや真の服従については知る由もないという人々がいます。祝福を受けることを求めるのみで、それ以外のことには関心を向けようとしない人々もあり、そうした人々は長年生きてきたにもかかわらず、人間の運命を創造主が統治しているという事実に対する認識や理解を少しも持たず、神の指揮や采配に服従することについて実践経験を積もうとすることが少しもありません。そのような人々は完全に愚鈍であり、人生を無駄に過ごしています。

人生経験と人間の運命というものを人々がどの程度認識しているかに基づいて人間の生涯を区分すると、大まかに三つの段階に分けられます。第一段階は出生から壮年あるいは三十歳になるまでの青年期です。第二段階は壮年から老年あるいは三十歳から六十歳までの熟年期です。第三段階は、老年期あるいは六十代から他界するまでの晩年期です。言い換えれば、出生から壮年に至るまでは、運命や人生に対する大半の人々の認識は、他人の考えを踏襲するに留まるもので、その考えの中に現実的、実践的な部分は全くないに等しいです。この時期においては、人生観や、世の中で生きていくための方法に対する見通しは、総じて極めて表層的で、未熟です。これが人の青年期です。人生の

喜びや悲しみをすべて味わって初めて、人は運命を真に理解し、潜在意識で、そして心の奥底において、運命の不可逆性を徐々に認識し、人間の運命に対する創造主の統治が実際に存在することを少しずつ認識します。これが人間の熟成期です。運命に対抗して苦戦するのを止め、争いに巻き込まれるのを厭うようになり、むしろ、自らの人生における運命を知り、天の意に服従し、自分の人生における功績と失敗を概括し、人生に対する創造主の裁きを待つ時、人は完熟期に入ります。こうした三段階の期間において人間が得る様々な経験や進歩を考慮すると、通常の状態では、創造主の統治を知る機会はいくらもありません。人が六十歳まで生きる場合、人が神の統治を知るための期間は三十年ほどしかありません。人がそれよりも長い期間を望むのであれば、長生きして百年生きられる場合のみ、それは可能となります。それゆえ、人が創造主の統治を知るという問題に初めて直面する時から、創造主の統治という事実を認めることができるようになり、その後、それに服従することができるようになるまでの過程は、極めて長期的な過程です。しかしながら、人間の平均寿命に基づいて実際にその年月を数えてみると、人がこうした恩恵を受け取れる機会は、わずか三十年ないし四十年程度しかないと言えます。しかるに、人々は、祝福を得るという自らの願望や大望に夢中になるため、人生の本質が何処にあるかを見分けることができず、創造主の統治を知ることの重要性を把握できないということが往々にしてあります。そのような人々は、人間の世界で人間の生活を送って創造主の統治を経験するという貴重な機会を大切にせず、創造主より各個人に向けた導きを享受することが造られた人間にとってどれほど貴重であるかを認識することもあります。したがって、創造主の姿を直ちに直接見て、できるだけ早く祝福を得ることができるよう、神の働きが迅速に終わり、神が人間の終りの時をできるだけ早期に計画することを望む人々は、最も重い反逆の罪の裁きを受ける究極的に愚かな人々であると言えます。その一方、限られた時間に、創造主の統治を知るという唯一の機会を得ることを望む人々は、この上なく鋭敏な精神を備えた聡明な人々です。これら二通りの異なる願望により、二通りの全く異なる見解と追求が浮き彫りになっています。祝福を求める人々は自己中心であり、卑劣であり、神の旨に対する配慮を全く示さず、決して神の統治を知ろうとも、それに従おうともせず、単に自分の好きなように生きることを望みます。彼らは軽率な墮落者であり、滅ぼされるべき種類です。神を知ることを望む人々は、自分の欲望を捨てることが可能であり、神の統治と采配に進んで服従し、神の権威に従順であるとともに神の望みを満たす側の人になろうとします。そのような人々は光と神の祝福の真ただ中に生活し、確実に神の賞讃を享受します。いかなる場合であっても、人間による選択が役に立つことはなく、神の業がどのくらい

の期間を要するかについて人間が干渉することはできません。人間にとって、自らを神の采配に委ね、神の統治に服従する方が良いのです。あなたが自らを神の采配に委ねないとしたら、あなたに何ができますか。神に損害が及びますか。神の采配に自らを委ねずに、自らが担い手になろうとした場合、あなたの選択は愚かであり、最終的に損害を被るのはあなたです。人間ができる限り早く神に協力し、神の采配を受け容れ、神の権威を知り、人間に対する神の業のすべてを理解した場合に限り、人々には希望があります。この方法によってのみ、人間は人生を無駄に生きることなく、救いを得るでしょう。

神が人間の運命を統治しているという事実は、誰にも変えることができない

ここまでの話を聞いて、あなたがたの運命に対する考え方は変わりましたか。神による人間の運命の統治を、あなたがたはどのように理解していますか。簡潔に言うと、神の権威の下では、あらゆる人が能動的あるいは受動的に神の統治と計画を受け容れるので、人生においてどれほどものがいたとしても、どれほど歪んだ道を歩んだとしても、結局は創造主が彼らのために定めた運命の軌道に戻ります。これが創造主の権威の凌駕することが不可能であり、創造主の権威が万物を制御し支配する方法です。万物のいのちを支配する法則を担い、妨害されることなく人間が何度も生まれ変わることを可能とし、毎日、毎年、世の中を規則正しく変化させ、進歩させているのは、この凌駕不可能な性質と、この形態による制御と支配です。あなたがたは、こうした事柄のすべてを目のあたりにし、表面的に理解しているか、あるいは深く理解しています。理解の程度は、真理に関する自分の経験と認識、そして神に対する自分の認識により異なります。真理の現実性をどの程度知っているか、神の言葉をどの程度経験しているか、神の本質と性質をどの程度知っているか、これらすべてが、神の統治と采配に対するあなたの理解度を示しています。神の統治と采配の存在は、人類がそれらに服従しているかどうか依存していますか。神にこの権威があるという事実は、人間がそれに服従するかどうかにより決まるものですか。神の権威は、状況を問わず存在するのです。すべての状況において、神はあらゆる人間の運命と万物を、神の考えと望みに従って支配し、計画します。これは人間が変化することで変化するものではなく、人間の意志に依存しないものであり、時間、場所、地理のいかなる変化によっても変わることがありません。なぜなら、神の権威は、神の本質そのものだからです。人間が神の統治を知って受け容れられるかどうか、そしてそれに服従できるかどうか、神による人間の運命の統治という事実に一切影響しないものです。つまり、神の統治に対して人間がどのような姿勢を取るかに

よらず、神が人間の運命と万物を統治しているという事実は絶対に変わることがないのです。たとえあなたが神の統治に服従しなかったとしても、依然として神はあなたの運命を操り、また、たとえあなたが神の統治を知ることができなくても、神の権威は依然として存在します。神の権威、そして神が人間の運命を統治しているという事実は人間の意志から独立したものであり、人間の好みや選択に従って変わることのないものです。神の権威はあらゆる場所にあり、いつでも、どの瞬間にも存在します。天と地がなくなるとしても、神の権威は決してなくなりません。なぜなら、神は神自身であり、神には唯一無二の権威があり、神の権威は人間や出来事、物事、空間や地理による制限を受けないからです。神は、これまでと同様に、常に神の権威を行使し、神の力を示し、神の経営の働きを継続します。神は、これまでと同様に、常に万物を支配し、万物に必要なものを与え、万物を指揮します。誰もこれを変えることはできません。それは事実であり、太古の昔から不変の真理であり続けています！

神の権威に服従することを望む人の適切な姿勢と行動

神の権威と、神が人間の運命を統治しているという事実を、人間はどのような姿勢で自覚し、考えるべきでしょうか。これはあらゆる人の前に立ちはだかる真の問題です。現実の問題に対処する時、神の権威と神の統治をどのように知り、理解すべきでしょうか。あなたがこうした問題に直面した時、それらをどのように理解し、取り扱い、経験すべきかを知らない場合、神の統治と采配に服従するという意向、願望、服従しているという事実を、あなたはどのような姿勢で示すべきでしょうか。あなたは、まず待つこと、次に追い求めること、その後に従うことを覚える必要があります。「待つ」とは、神の時を待つことであり、あなたのために神が計画した人々、出来事、物事を待つことであり、また神の思いが徐々に明示されてゆくのを待つことです。「追い求める」とは、神が計画した人々、出来事、物事を通して、あなたに対する神の入念な旨を観察し、理解すること、それらの物事を通して真理を理解すること、人間が達成すべき物事や従うべき道を理解すること、神は人間の中にどのような結果を実現させようとしているか、人間の中に何を達成させようとしているかを理解することです。当然ながら、「従う」とは、神が周到に準備した人々、出来事、物事を受け容れ、神の統治を受け容れることであり、それらを受け容れることを通して、創造主が人間の運命をどのように支配しているか、神はどのようにして人間に神のいのちを与えるか、神はどのようにして人間に真理を備えさせようとしているかを知ることです。神の采配と統治の下にあるすべての物事は自然の法則に従っており、あなたが自らのすべてを神の采配と支配に委ねると

決心したのであれば、あなたは待つこと、追い求めること、従うことを学ぶべきです。これこそが、神の権威に服従することを望むあらゆる人が取るべき姿勢であり、神の統治と采配を受け容れることを望むあらゆる人に備わっているべき基本的な資質です。そのような姿勢を取り、そのような資質を備えるには、一層の努力が必要です。そうした努力をして初めて、あなたがたは真の現実に入ることができるのです。

自分の唯一の主として神を受け容れることが、救いを得る第一歩である

神の権威に関する真理とは、あらゆる人が真剣に取り扱い、心で経験して理解すべきです。なぜなら、こうした真理は、あらゆる人の人生、あらゆる人の過去、現在、そして未来と関係があると同時に、人生においてあらゆる人が通らなければならない非常に重要な節目、神の統治に対する人の認識、そして神の権威に対して人が取るべき姿勢と関係があり、当然ながら、あらゆる人の終着点と関係があるためです。したがって、それらを知り、理解するには、一生涯の努力が必要なのです。あなたが神の権威を真っ直ぐに見つめ、神の統治を受け容れる時、あなたは、神の権威が実在することに次第に気付く、理解するようになります。しかし、神の権威を認めず、神の統治を受け容れないならば、あなたが何年生きようとも、神の統治について少しも認識を得ることはないでしょう。神の権威を真に知って理解することがないのであれば、終着点に到達した時に、それまで何十年神を信じていようとも、人生において何も尽すものがなく、当然ながら、人間の運命への神の統治に対する認識は皆無となります。それは非常に悲しいことではないでしょうか。それゆえに、人生の道をどの程度歩んで来たか、現在何歳か、残りの旅路がどの程度あるかを問わず、まず神の権威を認め、それを真剣に捉え、神が自分の唯一の主であるという事実を受け容れなければなりません。人間の運命への神の統治に対する明瞭かつ正確な認識と理解を得ることは、あらゆる人にとって必須の経験であり、人生を知り真理を得るための鍵です。神を知る人生とは、生涯学習の基本であり、あらゆる人が日々直面し、避けることのできないことなのです。この目標を達成する近道を通りたいと思う人がいるなら、わたしはこう言います、それは不可能です！ 神の統治から逃れたいのであれば、それはなおさら不可能です！ 神は人間の唯一の主であり、神は人間の運命の唯一の主であり、それゆえに、人間にとって自分の運命を決定することは不可能であり、神の統治から抜け出すことは不可能です。人の能力が如何に優れていようとも、人は他人の運命に影響を与えられず、ましてや指揮したり、采配したり、制御したり、変更したりすることはできません。人間のすべてを支配するのは、唯一無二の神自身のみです。なぜなら、人間の運命に対する統治権を握る唯一の権威が

あるのは神のみであり、したがって創造主は人間の唯一の主だからです。神の権威は、創造物である人間だけでなく、人間には見えない非創造物、惑星、宇宙に対する統治権をも握っています。これは異論の余地のない事実、実在する事実であり、人や物が変えることのできない事実です。もし、現在の状態に不満であり、自分には何らかの特別な技能や能力があると考え、運が良ければ現状を変えたり現状から逃れられたりすると考えている人や、人間の力で自分の運命を変えようとしたり、他人よりも卓越し、名声と富を得ようとしている人がいるならば、わたしは言いましょう、あなたは自ら物事を困難にし、災難を招くようなことをして、墓穴を掘っていると。遅かれ早かれ、ある日、あなたは自分が選択を誤っていること、無駄な努力をしてきたことに気付くでしょう。運命に立ち向かうあなたの野心と欲望、大それた行動は、あなたを引き返せない道へと導き、そのために辛い代償を払うことになるでしょう。現在、あなたがその結果の重大性を理解しておらずとも、神が人間の運命の主であるという真理を一層深く経験し、正しく認識するにつれ、本日わたしが話したこととその真意を徐々に理解するでしょう。あなたに真の心と霊があるか、あなたが真理を愛する人であるかは、神の統治と真理に対して、あなたがどのような姿勢を取るかにより決まります。そして必然的に、その姿勢により、あなたが神の権威を真に知り、理解しているかが決まります。人生において神の統治と采配を感じたことがなく、ましてや神の権威を認め、受け容れたことなどないのであれば、あなたは全く無価値であり、あなたが選んだ道と選択肢のために、神に嫌悪され拒絶される対象となることは間違いありません。しかし、神の業により、神からの試練と神の統治を受け容れ、神の権威に服従し、徐々に神の言葉に関する真の体験を得る人々は、神の権威に対する真の認識と神の統治に対する真の理解を得て、真に創造主に従う人となるでしょう。真に救われるのは、そのような人々のみです。彼らは、神の統治を知り、それを受け容れたため、人間の運命への神の統治に対する彼らの認識と、その統治への彼らの服従は、真正かつ正確なのです。彼らが死に直面する時、ヨブのように死を恐れない精神を得て、個人的な選択や個人的な願望をもつことなく、すべての物事において神の指揮と采配に従うことができるでしょう。そのような人だけが、真の創造物である人間として、創造主の許へと還ることができるのです。

2013年12月17日

唯一無二の神自身 4

神の聖さ（1）

前回の集会では神の権威について追加の話をしましたが、今は神の義については話しません。きょうは、神の聖さという全く新しい題目について話します。神の聖さは、神特有の本質におけるもう一つの側面なので、この題目についてここで話す必要性が大いにあります。これから話す神の本質におけるこの側面は、わたしたちが前に話し合った二つの側面である神の義なる性質と神の権威と同様に、唯一のものでしょうか。（はい。）神の聖さもまた唯一のもので、きょうのわたしたちの話し合いの主題は、この唯一性の基礎と根幹を形作るものは何か、ということになります。今日は神の特有の本質、つまり神の聖さについて話をします。おそらく何らかの不安があり、「なぜ神の聖さについて話し合うのだろうか」と疑問に思っている人もあなたがたのうちにいるかもしれません。心配しなくてよろしい。ゆっくりとあなたがたに説明してゆきます。話を聞けばすぐ、わたしがこの題目について交わるのがなぜそれほど必要なかがわかります。

まず「聖なる」という言葉を定義しましょう。あなたがたの認識とあなたがたが得た知識を使うと、「聖なる」という言葉の定義はどのようになると考えますか。（「聖なる」とは、汚れがなく、人間の墮落や欠点も全くないことです。考えにおいてであれ、発言においてであれ、行動においてであれ、聖なるものが発するものは全て、完全に肯定的です。）よろしい。（「聖なる」ものは、神聖であり、汚されておらず、人間が背くことができません。それは唯一のものであり、神の特徴的な象徴です。）これがあなたがたの定義です。一人ひとりの心の中に、この「聖なる」という語の一つの範囲、定義、解釈があります。少なくとも、「聖なる」という言葉を見るとき、あなたがたの頭はからっぽではありません。あなたがたは、この単語に関する一定範囲の定義を持っており、一部の人々が言うことは、神の性質の本質を定義する言葉にいくぶん近く、それはとてもよいことです。大部分の人が、「聖なる」という言葉を好ましい言葉であると考えていて、それは断定できます。しかし、わたしが今日話したい神の聖さは、単に定義されたり説明されたりはしません。その代わりに、わたしが神は聖なる存在であると言う理由、わたしが神の本質を説明するために「聖なる」という言葉を用いる理由をあなたが理解できるよう、事実を挙げて検証します。話が終わる頃には、「聖なる」という語で神の本質を定義することや、この語を用いて神を指すことが、極めて相応しく、かつ適切であるとあなたは感じます。少なくとも、現在における人間の言語に関する限り、この語で神を指すことは、ことさらに適切です。この語は、人間の言語のなかで、神を指す語として最適な唯一の語です。この語が神を指すのに用いられるとき、それは

空虚な語句ではなく、またそれは理由のない称賛でも、空虚な賛辞でもありません。この話の目的は、あなたがたそれぞれが、神の本質のこの側面の真実を確認できるようにすることです。神は人々の理解を恐れず、人々の誤解だけを恐れます。神は、一人ひとりが神の本質、神であること、神がもつもののすべてを知ることが望んでいます。そうしたわけで、神の本質のある側面について述べる時は、毎回多くの事実を用いて、神の本質のこの側面が紛れもなく存在することを人々が理解できるようにするのです。

「聖なる」という語を定義したので、例を幾つか検討しましょう。人間の考えでは、多くの「聖なる」物や人物を想像します。たとえば、人類の辞書では、童貞や処女は聖なるものと定義されていますが、童貞や処女は実際に聖なるものですか。この、いわゆる聖なると、ここでわたしたちが話し合おうとする「聖なる」は、同一ですか。（いいえ。）人間の中でも品德に優れ、洗練された教養ある話し方をし、誰も傷つけず、語る言葉によって他人を快適で気分よくさせる人は、聖なる存在ですか。善行を頻繁に行ない、慈悲の気持ちに溢れ、他人に多くの援助を提供する人々、他人の生活に多くの楽しみをもたらす人々は、聖なる存在ですか。利己的な考えを一切もたず、誰に対しても厳しい要求をせず、誰に対しても寛容な人々は、聖なる存在ですか。誰とも争ったことがなく、誰も利用したことのない人々は聖なる存在ですか。他者のために尽くし、他者にあらゆる方法で益と教えをもたらす人々は、聖なる存在ですか。生涯にわたる蓄えを他者のために寄付し、質素な生活をし、自分に厳しく他人には心の広い扱いをする人々は、聖なる存在ですか。（いいえ。）あなたがたは、自分の母親があなたがたを思い、考えうるあらゆる方法で世話をしてくれたのを覚えています。あなたがたの母親は、聖なる存在ですか。有名人であれ、スターであれ、偉人であれ、あなたがたが好きな偶像的な人物は、聖なる存在ですか。（いいえ。）では、多くの人々には不知であった将来を予測することのできた聖書に登場する預言者を見てみましょう。この種の人々は聖なる存在でしたか。神の言葉や神の業の事実を聖書に記すことができた人々は、聖なる存在でしたか。モーセは聖なる人でしたか。アブラハムは聖なる人でしたか。（いいえ。）ヨブはどうですか。ヨブは聖なる人でしたか。（いいえ。）ヨブは、神に「義なる者」と呼ばれましたが、それでも彼さえ聖なる存在であるとは言えないのはなぜですか。神を畏れ、悪を避ける人々は、本当に聖なる存在ではないのですか。聖なる存在ですか。違いますか。（違います。）あなたがたは少し不安で、十分な確信がなく、敢えて否定しませんが、かといって肯定するわけでもないのです。結局は気乗りのしないまま「違います」と言います。もうひとつ質問します。神の使い、神が地上に送る使いは、聖なる存

在ですか。天使は聖なる存在ですか。（いいえ。）サタンに墮落させられていない人類は、聖なる存在ですか。（いいえ。）あなたがたは全ての質問に「いいえ」と答えます。何が根拠ですか。あなたがたは困惑していますね。では、なぜ天使までもが聖なる存在ではないと言うのですか。あなたがたはいま不安に感じています。違いますか。これまで挙げてきた人々や物や非被造物が聖なる存在ではない根拠は何であるか、あなたがたは思いつくことができますか。あなたがたにはできないとわたしは確信しています。それでは、あなたがたが「いいえ」というのは、多少無責任ではありませんか。あなたがたは無造作に答えているのではありませんか。「そのような聞き方をするのだから、聖なる存在ではないに違いない」と考えている人もいるでしょう。ただ無造作に答えないようにしなさい。答えが肯定なのか否定なのか注意深く考えなさい。次の題目について話し合えば、なぜ答えが「いいえ」なのかわかります。回答は後ほど与えます。まずは聖句を読みましょう。

ヤーウェ神の人間への命令

創世記 2:15-17 ヤーウェ神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。ヤーウェ神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。

女を惑わすへび

創世記 3:1-5 さてヤーウェ神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った、「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」。女はへびに言った、「わたしたちは園の木の实を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の实については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。そしてへびはその女に言った。「あなたがたは必ずしも死ぬわけではありません。いつかそれを食べる日、あなたがたの目が開かれ、あなたがたが神のように善悪を知ることを、神は知っているからです」。

これら二つの聖句は聖書の創世記からの抜粋です。あなたがたは皆、これらの聖句をよく知っていますか。これは、人類が最初に造られた時に起きたことです。実際にあった出来事です。まず、ヤーウェ神はアダムとエバにどのような命令を与えたのかを見ましょう。この命令の内容は今日の話題にとって極めて重要だからです。「ヤーウェ神は

その人に命じて言われた、『あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう』」。この聖句における神の人間への命令には、どのような内容が含まれていますか。まず、神は人間に何を食べてよいか、それは様々な木からの実であることを伝えます。危険も毒もなく、望むままにどれも好きなだけ食べることができます。これがひとつの箇所です。もうひとつの箇所は警告です。この警告の中で神は人間に対し、善悪の知識の木からその実を取って食べてはならないと告げています。それを取って食べると、どうなりますか。神は人間に「それを食べると、必ず死ぬ」と言いました。この言葉は分かりやすいですか。もし神があなたにこのように言うものの、なぜなのかわからなかったら、それを従うべき規則や命令とみなしますか。従わなければなりませんね。しかし、人間がそれに従うことができるか否かを問わず、神の言葉は明確なものです。神は人間に、食べてもよいものと、食べてはならないもの、そして食べてはならないものを食べるとどうなるかを極めて明瞭に述べました。神が述べたこの短い言葉に、神の性質の何かを認識しましたか。この神の言葉は真実ですか。何か欺瞞がありますか。何か虚偽がありますか。何か脅しがありますか。（いいえ。）神は人間に、正直に、誠実に、そして真摯に、食べてもよいものと食べてはならないものを、明瞭に分かりやすく伝えたのです。この言葉には、隠された意味がありますか。この言葉は分かりやすいですか。憶測する必要がありますか。（いいえ。）推測する必要はありません。言葉の意味は一見して明瞭であり、読んですぐに理解できます。極めて明解です。つまり、神が述べたいこと、神が表現したいことは、その心から出るのです。神が表現することは混じりけがなく、分かりやすく、明確です。隠れた動機や意味などありません。神は人間に直接語り、食べてもよいものと、食べてはならないものを伝えました。つまり、神のこの言葉から、神の心は透明で、真実であることが人間には理解できます。ここに偽りなど絶対にありません。食べられるものを食べてはならないと言ったり、食べられないものについて「食べて、どうなるか見てみなさい」などといったりはしていません。神はそのようなことを意味しないのです。神が心で何を考えようと、それは神が言うことです。神はこれらの言葉により、このように神自身を示し、表すのだから聖いとわたしが言えば、わたしは些細なことを大げさに述べているとか、わたしが行き過ぎた解釈をしていると多少感じるかもしれません。もしそうなら、心配しなくてよろしい。話はまだ終わっていません。

「女を惑わす蛇」について話しましょう。この蛇は誰ですか。（サタンです。）神の

六千年にわたる経営（救いの）計画において、サタンは引き立て役であり、それは神の聖さについて話すときに必ず述べなければならない役割です。わたしがこう述べるのはなぜですか。もしサタンの邪悪さや墮落あるいはサタンの本性を知らなければ、それを認識することも、聖さとは実際に何かを知ることも決してできません。人間は困惑し、サタンのすることが正しいと思い込みます。なぜなら、人間はそうした墮落した性質の中で生きているからです。引き立て役がなく、比較すべきものもなければ、聖さとは何かを知ることはできません。ここでサタンに触れる必要があるのはそのためです。それについて触れることは決して無駄話ではありません。わたしたちはサタンの言動から、サタンがどのように行動し、どのように人間を墮落させ、どのような本性を持ち、どのような表情であるかを見ることができます。では、女は蛇に何と言いましたか。女はヤーウェ神が女に言ったことを蛇に説明しました。女の言葉に従うなら、女は神が女に言ったことすべての有効性を確認していましたか。女はそれを確認できませんでした。そうですね。新たに造られたばかりの者として、女には善と悪を見分ける能力も、自分の周囲の何かを認識する能力もありませんでした。女が蛇に語った言葉から判断すると、女は心の中で神の言葉が正しいと認めていませんでした。それが女の態度でした。だから、神の言葉に対して女が確固たる態度がないことを見てとった蛇は、「あなたがたは必ずしも死ぬわけではありません。いつかそれを食べる日、あなたがたの目が開かれ、あなたがたが神のように善悪を知ること、神は知っているからです」と言いました。この言葉には、何か間違いがありますか。この一文を読み終わったとき、あなたがたは蛇の意図を感じ取りましたか。この蛇は、どのような意図をもっていますか。（人間を惑わして罪を犯させようとすることです。）蛇はこの女を惑わして神の言葉に耳を傾けるのをやめさせたいのですが、そのままを話しませんでした。ゆえに、蛇は極めて狡猾であると言えます。蛇は、人間に気付かれないよう心の中に秘めた意図する目的を果たすために、その旨をずるくて曖昧な方法で表現します。これが蛇の狡猾さです。サタンは常にこのように話し、行動してきました。蛇は「必ず～わけではない」のように言い、こうなるとも、ああなるとも断言しません。しかし、この話を聞いて、この無知な女の心は動かされました。言ったことが望みどおりの効果をもたらしたので、蛇は喜びました。これが蛇の狡猾な意図でした。さらに、「いつかそれを食べる日、あなたがたの目が開かれ」と述べ、人間が良いと考える効果を約束して女を惑わしました。そこで女は「わたしの目が開くのは良いことだ」と考えました。すると蛇は、さらに良いこと、人間が知らなかった、聞く者を強く誘惑する力のある言葉を話しました。すなわち「あなたがたが神のように善悪を知る」と語ったのです。この言葉は、人間にと

って極めて誘惑的ではありませんか。それはまるで誰かがあなたに、「あなたの顔の形はすばらしい。ただ鼻が僅かに低いが、それを直せばあなたは世界的な美人になるだろう」と言うようなものです。整形手術をしたいと思ったことのない人は、このような言葉を聞いて心が動くでしょうか。この言葉は誘惑的ですか。この誘惑は、あなたにとって魅力的ですか。拒み難いですか。（はい。）神はこのようなことを言いますか。たっ
たいま読んだ神の言葉に、このようなものが少しでもありますか。（ありません。）神は心で考えることをそのまま述べますか。人は神の言葉をとおして神の心が見えますか。（はい。）しかし、蛇が女に話した時、蛇の心が見えましたか。（いいえ。）人間はその無知のせいで、蛇の言葉にあっさり惑わされ、簡単に騙されました。では、あなたはサタンの意図を見ることができましたか。サタンの言葉の裏にある意図を見抜くことができましたか。サタンの策略と抜け目ない計画を見抜くことができましたか。（いいえ。）サタンの話し方はどのような性質を表していますか。その言葉をとおして、サタンのどのような本質を見定めましたか。狡猾ですか。おそらく表面的には、サタンはあなたに微笑みかけるか、一切何らの表情も見せません。しかし胸中では、いかにして自分の目的を果たすかを計画しており、あなたはその目的を知ることができません。そしてあなたは、サタンの与える様々な約束や、サタンが語る利点に惑わされます。あなたは、それらを良いものであると判断し、サタンの話すことが神が述べることよりも役立ち、重要であると感じます。このようなことが起きると、人間は服従する囚人となるのではありませんか。サタンが用いるこの手口は悪魔的ではありませんか。あなたは自分自身を深く沈めます。サタンは指一本動かすこともなく、サタンのふた言で、あなたは喜んでサタンに従い、言う通りにします。サタンの目的が達成されました。この意図は邪悪ではありませんか。これがサタンの元来の姿ではないでしょうか。サタンの言葉から、人間はその邪悪な動機と醜悪な姿とその本質を見ることができます。そうではありませんか。これらの文章を比較すると、詳しく分析することなしに、ヤーウェ神の言葉は退屈で平凡なありふれたものであり、神の誠実さを讃美するために大騒ぎするに値しないとおそらく感じるかもしれません。しかしながら、サタンの言葉と醜悪な姿を引き立て役として見立てると、この神の言葉には現在の人間にとって遙かに大きな重要性がありませんか。（その通りです。）この引き立て役をとおして、人間は神の純粹無垢さを感じることができます。サタンが述べる言葉のひとつひとつと、その動機、意図、そして話し方は、すべて汚れています。サタンの話し方の主な特徴は何ですか。サタンは曖昧な言葉で、人間に気付かれることなく、また目的が何かを判断させることなく、人間を惑わします。サタンは人間を餌に食いつかせ、サタンを称賛させ、その功績を礼賛

させます。これはサタンの常套手段ではありませんか。（その通りです。）次に、サタンの醜惡な姿を人間が知ることができるその他の言葉や表現を見てみましょう。引き続き、聖句をいくつか読みましょう。

サタンとヤーウェ神の対話

ヨブ記 1:6-11 ある日、神の子たちが来て、ヤーウェの前に立った。サタンも来てその中にいた。ヤーウェは言われた、「あなたはどこから来たか」。サタンはヤーウェに答えて言った、「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」。ヤーウェはサタンに言われた、「あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか」。サタンはヤーウェに答えて言った、「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか。あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです。しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」。

ヨブ記 2:1-5 ある日、また神の子たちが来て、ヤーウェの前に立った。サタンもまたその中に来て、ヤーウェの前に立った。ヤーウェはサタンに言われた、「あなたはどこから来たか」。サタンはヤーウェに答えて言った、「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」。ヤーウェはサタンに言われた、「あなたは、わたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか。あなたは、わたしを勧めて、ゆえなく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお堅く保って、おのれを全うした」。サタンはヤーウェに答えて言った、「皮には皮をもってします。人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。しかしいま、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」。

これらの聖句二節は、神とサタンの間の対話であり、神が述べたこととサタンが述べたことを記録しています。神は多くを語らず、しかも簡潔に話しました。神の簡潔な言葉に神の聖さを見ることができますか。それは簡単ではないという人がいるでしょう。それでは、サタンの返答にサタンの醜惡さを見ることができますか。（はい。）まず最初にヤーウェ神がサタンにどのような質問をしたかを見てみましょう。「あなたはどこから来たか」です。この質問は明解ですか。何か隠された意味はありますか。（いいえ。）これは純粹に単なる質問であり、他の目的はありません。もしわたしがあなたがた

に「あなたはどこから来たか」と質問したなら、あなたがたはどのように答えるでしょうか。この質問は回答するのが困難ですか。あなたがたは「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」などと答えますか。（いいえ。）そのようには答えないでしょう。それでは、サタンがこのように答えたのを見て、あなたがたはどのように感じますか。（サタンは愚かで狡猾だと感じます。）わたしが何を感じているかを言えますか。わたしはこの言葉を読むたびに嫌悪感を覚えます。それは、サタンが話すものの実際には何も言ってないからです。サタンは神の質問に答えましたか。サタンの言葉は答えではなく、何の結果もそこにはありません。サタンの言葉は神の質問に対する回答ではありませんでした。「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」。この言葉から何が理解できますか。サタンは一体どこから来たのですか。あなたがたは回答を得ましたか。（いいえ。）これがサタンの狡猾さの「輝き」であり、何を実際に言っているのかを誰にも突き止めさせません。この言葉を聞いても、サタンが言っていることがいまだにはっきりと理解できませんが、サタンは回答を終えています。サタンは完璧な回答だと思っています。あなたはどう感じますか。嫌悪を感じますか。（はい。）いま、あなたがたはサタンの言葉に嫌悪を感じ始めます。サタンは率直に話をせず、そのため、サタンの言葉がどこから来ているかを見抜くことができずに呆然とさせます。サタンは意図的に話すこともあれば、その本質と本性に支配されることもあります。これらの言葉はサタンの口から一直線に出てきたのです。長時間考えてから、自分を利巧だと思い込んでいるサタンが語ったものではありません。サタンはそれらの言葉を自然に表したのです。サタンは一体どこから来るのかとあなたが訊くや否や、サタンはそれらの言葉を使ってあなたに答えます。あなたは困惑し、サタンが一体どこから来たかを知ることは決してありません。あなたがたのうちに、このような話し方をする人はいますか。（はい。）このような話し方とは、どのような話し方ですか。（曖昧で明確な答えを述べません。）このような話し方を表現するには、どのような言葉を使うべきですか。逸脱と惑わしです。違いますか。前日にどこに行ったのかを他人に知られたくない人を想像してみなさい。その人に、「昨日あなたを見かけたが、どこへ向かっていたのか」と質問をすると、前日どこへ行ったのかを直接答えません。こういう人は「昨日は酷い一日だった。疲れ果てている」などと答えます。質問に答えましたか。答えてはいますが、求めている答えではありません。これが人間のずるさの「輝き」です。このような人が何を意味しているのかも、そのような言葉の根源も意図も、全く分かりません。あなたには、この人が何を避けようとしているのか分かりません。なぜなら、彼らには心の中に独自の事情があるからです。これは陰険なことです。あなたがたもこのような話し方をしば

しはしますか。（はい。）その目的は何ですか。それは時として自分の利益を守ること、あるいは自分の地位や体面を保つこと、私生活の秘密を守ること、自分の評判を守ることが目的ですか。目的が何であれ、自分の利益と不可分、利益と関係があります。それは人間の本性ではありませんか。このような本性を持った人はすべて、サタンと同類ではないのですか。そう言えますね。一般的に、こうした徴候は嫌悪される忌まわしいものです。今、あなたがたも嫌悪を感じていますね。（はい。）

最初の節をもう一度見ると、サタンは再びヤーウェの質問に答えて「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか」と述べています。サタンはヤーウェによるヨブの評価を攻撃し始めますが、この攻撃は敵意の色を帯びています。「あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか」。これが、ヨブに対するヤーウェの働きの、サタンによる理解であり評価です。サタンはこのように評価し、「あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです。しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」と言います。サタンは常に曖昧な話し方をしますが、ここでははっきりと述べています。しかし、この確信を伴う発言はヤーウェ神、神自身に対する攻撃であり、冒涇であり、敵対心です。これを聞いて、あなたがたはどう感じますか。反感を抱きますか。その意図が見えますか。第一に、神を畏れて悪を避けるヨブに関するヤーウェの評価を、サタンは否定しています。次に、ヨブの言動をすべて否定しています。つまり、ヤーウェに対するヨブの畏れを否定しているのです。これは非難ではありませんか。サタンは、ヤーウェの行なうこと、言うことをすべて非難し、否定し、疑っています。サタンは「そのようなことを言うならば、どうしてわたしがそれを目撃していないのか。あなたはヨブに多くの祝福を与えたのだから、どうしてヨブがあなたを畏れずにいられることがあろうか」と言って、信じません。これは神の業をすべて否定するものではありませんか。非難、否定、冒涇など、サタンの言葉は攻撃的ではありませんか。これはサタンが心で考えることを真に表していませんか。これらの言葉は、先に読んだ「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」という言葉とは確かに同じではありません。これらの言葉は、それらとは全く異なります。これらの言葉を通して、サタンは神に対する態度と、ヨブの神への畏れに対する嫌悪を完全に曝露しています。この時、サタンの悪意と邪悪な本性が完全にさらけ出されます。サタンは神を畏れる者、悪を避ける者、そしてそれ以上に人間に祝福を与えるヤーウェを嫌悪します。サタンは、神が手ずから育てたヨブをこの機会に打ち滅ぼしたいと考え、「

あなたはヨブがあなたを畏れ、悪を避けるというが、わたしはそう思わない」と言います。サタンは様々な方法でヤーウェを挑発して試すとともに、ヤーウェ神がヨブをサタンに引き渡し、サタンの意のままに翻弄させ、傷つけさせ、虐待させるように様々な策略を使います。サタンは、神の目から見て正しく完璧なヨブを、この機会を利用して滅ぼしたいのです。サタンがこのような心をもつのは、一時的な衝動ですか。いいえ、違います。これは以前から長く続いてきたものです。神は働き、人を慈しみ、見守りますが、サタンは神をどの段階でもつけ回します。神が大事にする人が誰であれ、サタンも見ていてつけ回します。神がその人を求めると、サタンは持てる限りの力でどんなことでもして神を阻もうとし、隠された目的を達成するため、様々な邪悪な方法で神の業を試し、邪魔し、挫折させようとします。サタンの目的は何ですか。サタンは神に人間を誰も得て欲しくないのです。サタンは神が求めるすべての人を求め、占有して支配し、掌握してサタンを崇拜させ、サタンと共に邪悪なことを行わせたいのです。これはサタンの悪意に満ちた動機ではないですか。よく普通、サタンは邪悪である、悪いと言いますが、あなたがたはそれを見たことがありますか。あなたがたが見ることができるのは、人間がいかに悪いかだけで、サタンが実際どの程度邪悪であるかを見たことはありません。しかし、このヨブに関する問題においてはそれを見ましたか。（はい。）この問題では、サタンの醜悪な姿と本質が極めて明瞭になっています。サタンは神と戦い、また神をつけ回しています。サタンの目的は神が行ないたい業をすべて粉碎し、神が求める人間を占有して支配し、完全に消滅させることです。もしこのような人々が消滅させられないならば、彼らはサタンのものとなってサタンに用いられます。これがサタンの目的です。それでは、神は何をするのですか。この聖句では、神は簡潔な言葉を言うだけです。それ以外に神が行なったことは記していませんが、サタンの言動は、それ以外にも多数の記録があることが分かります。続く聖句でヤーウェがサタンに「あなたはどこから来たか」と訊ねます。サタンは何と答えますか。（ここでも「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」と答えています。）ここでも同じ言葉です。どうしてこの言葉がサタンの標語あるいは規範となったのですか。サタンは憎しみに満ちていませんか。この嫌悪させる言葉は一度述べれば十分です。なぜサタンは必ずこの言葉に戻ってくるのですか。これはあることを証明しています。それは、サタンの本性が不変である、ということです。サタンは仮面を被ってその醜悪な顔を隠すことができません。神はサタンに質問し、サタンはそのような答え方をします。サタンが人々をどう扱うかなど言うまでもありません。サタンは神を怖がることも、畏れることもなく、神に服従することもあります。したがってサタンは、神の前でも遠慮なくふざけ、同じ言葉を使

って神の質問をはねつけ、それに同じ言葉で答え、その答えによって神を困惑させよう
とします。これがサタンの醜惡な顔です。サタンは神の全能性を信じず、神の權威を信
じず、神の支配權の下に従うことなど当然望みません。サタンは常に神に対抗し、常に
神の行なうことすべてを攻撃し、神の行なうことをすべて粉碎しようとしています。これが
サタンの邪惡な目的です。

神の六千年の經營計画において、ヨブ記でサタンが言うこれら二つの台詞とサタンの
行なうことは、神に対する反抗を代表するもので、これが正体を現したサタンです。実
際の生活においてサタンの言葉と行為を見たことがありますか。それらを本当に見ると
き、それがサタンによって語られているとは思わず、人間が語っていると思うことがあ
ります。そうした事柄を人間が語るとき、それは何を表していますか。それはサタンを
表しています。それを認識したとしても、サタンが実際にそれを語っているとわかりま
せん。しかし、今ここでサタン自身の語った言葉をはっきりと見ました。これで、あな
たはサタンの醜惡な姿と邪惡さをはっきりと、明確に理解しました。サタンが述べたこ
れら二つの台詞は、現在の人々がサタンの本性を知ることができるようになる上で価値
がありますか。これら二節は現在の人類がサタンの醜惡な顔とサタンの元來の眞の顔を
認識できるようになるために収集する価値のあるものですか。こう言うのは不適切に見
えるかもしれませんが、このように表現することがやはり正確だと言うことができます
。わたしはこのようにしか説明できませんし、もしあなたがたが理解できるならば、そ
れで十分です。サタンは何度もヤーウェのすることを攻撃し、ヤーウェ神に対するヨブ
の畏れを非難します。サタンは様々な方法でヤーウェを挑発し、自分がヨブを試すこ
とをヤーウェに認めさせようとしています。したがって、サタンの言葉は極めて挑発的
です。それならば、ひとたびサタンがこれらの言葉を述べたなら、神にはサタンのし
たいことを明瞭に見えますか。（はい。）神の心の中では、このヨブという神が見守
る男、神のしもべ、神が正しく全き人とみなすヨブはこの種の試みに耐えられます
か。（はい。）それについて、神がそれほど確信しているのはなぜですか。神は常に
人間の心を審査しているのですか。（はい。）サタンもまた、人間の心を審査する
ことができるのですか。サタンにはできません。たとえサタンに人間の心が見えても
、その邪惡な本性は聖さが聖さであると、また下劣さを下劣さであると決して信じる
ことができません。邪惡なサタンは、聖なるもの、義なるもの、光あるものを決し
て大切にすることができないのです。サタンはその本性、その邪惡さと、サタン
が用いるこれらの方法によって徹底的に行動せずにはいられません。たとえ自ら
が神から懲罰を受けたり滅ぼされたりする代

償を払ってでさえも、頑なに神に反抗することを辞さないのです。これが邪悪であり、サタンの本性です。そうしたわけで、この聖句では、サタンは「皮には皮をもってします。人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。しかし、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃ってごらんさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」と言います。サタンは神への人間の畏れは、人間が神から多くの利益を得ていることに起因すると考えます。人間は神から利益を得ているので、神は善良であると言います。しかしそれは神が善良であるからではなく、人間が神から多くの利益を得ているため、人間は神をこのように畏れることができるだけなのです。神がひとたび人間から利益を奪ったならば、人間は神を見捨てます。サタンは、その邪悪な本性において、人間の心が真に神を畏れることができるとは信じません。その邪悪な本性のため、サタンは聖さが何かを知らず、ましてや畏れ敬うことなど、知る由もありません。サタンは神に従うということが何かを知らず、神を畏れるということが何かも知りません。サタンはそれらを知らないので、人間にも神を畏れることはできないと考えるのです。どうですか。サタンは邪悪ではないですか。わたしたちの教会を除き、様々な宗教や教派、あるいは宗教団体や社会団体のうち、神の存在を信じているものではなく、ましてや神が肉となって裁きの働きを行なっているとは信じていないので、あなたが信じているのは神でないと考えます。淫乱な人は、すべて他人も皆自分と同様に淫乱であると考えます。いつも嘘をつく人は、正直な人間はおらず皆嘘をついていると考えます。邪悪な人は、すべての人を邪悪であると考え、出会う人すべてと戦おうとします。比較的誠実な人は、他人も皆誠実であると考えるので、いつも騙され、いつも裏切られ、このような人になす術はありません。これらの少数の例は、あなたがたの確信を強めるために挙げるのです。サタンの邪悪な本性は一時的な衝動でも、環境により発生するものでもなく、何らかの理由や状況がもたらす一時的な徴候でもありません。絶対に違います。サタンはそのようでしかいられないのです。サタンは善良なことが一切できません。たとえ聞いて心地よいことをサタンが言っても、それはただあなたを誘惑するだけです。心地よければ心地よいほど巧妙であり、言葉が優しければ優しいほど、言葉の背後に隠された腹黒い意図はさらに悪意に満ちたものになります。これら二つの聖句において、どのような顔や本性をサタンは見せていますか。（陰険で悪質で邪悪なものです。）サタンのおもな性質は邪悪であり、特に邪悪で悪質です。

サタンについての話しが終わったので、わたしたちの神について再び話し合ひましょう。神の六千年にわたる経営計画の間に、神の直接的な発言のうち、聖書に記録された

ものは極めて少なく、記録されているものは極めて簡明です。それでは始まりから始めましょう。神は人間を造り、それ以降、人類の生活を導いてきました。人類に祝福を与えるにしても、律法や神の戒めを与えるにしても、生活に様々な規則を定めるにしても、それらを行なうことにおける神の意図する目的が何であるかをあなたがたは知っていますか。まず、神のすることはすべて人類の益のためであると、確実に言うことができますか。この言い方は比較的大まかで内容がないとあなたがたは考えるかもしれませんが、具体的に言うと、神のすることはすべて人間が普通の生活を営むように導くためではないですか。それが人間が神の規則を守るようにするためであるか、神の律法を守るようにするためのものであるかにかかわらず、神の目的は人間がサタンを崇拝しないようにすること、サタンに害されないようにすることです。これは最も原則的なことで、一番最初に行われたことです。始めに、神の心を人間が理解していなかったときには、神は簡単な律法と規則を挙げ、考えられるあらゆる方面に関する規定を定めました。これらの規定は簡単なものですが、その中には神の心が含まれています。神は人類を大切にし、いつくしみ、心から愛しています。そうではありませんか。（その通りです。）では、神の心は聖なるものであると言うことができますか。神の心は清いであると言えますか。（はい。）神には隠された意図がありますか。（いいえ。）それでは、この神の目的は正しく、前向きですか。（はい。）神がどのような規定を定めたとしても、神の働きの過程において、それらはすべて人間にとって前向きな効果があり、それらが道を導きます。それでは、神の意思には利己的な考えがありますか。神には人間が関わる場所で何か追加的な目的があったり、神は人間を何らかの方法で利用したいのですか。（いいえ。）そういうことは一切ありません。神は言葉の通りに行ない、また心でもそのように考えます。目的が混入していることや、利己的考えはありません。神は自分自身のために何かをすることはなく、絶対的にすべてを人間のために行ない、自身の目的は一切ありません。たとえ神には人間のための計画や意図があるものの、神は自分自身のためには何も行ないません。神が行なうことはすべて純粋に人間のために、人類を守り、人類が誤った道へと迷い込まないようにするために行なわれます。この心は貴重ではありませんか。この貴重な心をほのめかすものが一抹でもサタンに見られますか。これをほのめかすものはサタンには一切見られません。神の行なうことは、すべて自然に明示されます。神の働き方を見ると、神はどのように働きますか。神はこれらの律法や言葉を、緊箍呪[a]のように一人ひとりの頭にきつく結び付けて、すべての人に強制しますか。神はそのように働きますか。（いいえ。）それでは、神はどのようにその働きを行ないますか。（神様はわたしたちを導かれます。神様はわたしたちに助言を与え

、励まされます。) 神は脅迫しますか。神はあなたがたに堂々回りの話し方をしますか。(いいえ。) あなたが真理を理解できないとき、神はどのように導きますか。(神様は光を照らされます。) 神はあなたに光を照らし、真理と一致しないことや、するべき事を明確に伝えます。神が働くこれらの方法から、あなたは神とどのような関係にあると感じますか。これらの方法は、神はあなたの把握する範囲を超えていると感じさせますか。(いいえ。) それでは、どう感じさせますか。神は特にあなたに近く、あなたとの距離はありません。神があなたを導くとき、あなたに施すとき、あなたを助け、支えるとき、あなたは神の優しさ、神の尊敬すべきことを感じ、神がどれほど美しく、どれほど温かいかを感じます。では、神があなたの墮落を咎めたり、神に背いたことについてあなたを裁いたり鍛錬するとき、どのような方法を用いますか。神は言葉で咎めますか。神はあなたの環境や人々、出来事、物事などを通して鍛錬しますか。(はい。) この鍛錬は、どの程度に達しますか。それは、サタンが人間を害するのと同程度に達しますか。(いいえ、人間が耐えられる程度に達します。) 神は、優しく、繊細で、愛に溢れ、思いやりのある方法で、また並外れて配慮された適切な方法で働きます。神の方法は、「神はわたしにこれをさせてくれるべきだ」とか、「神はわたしにそれをさせてくれるべきだ」のような強い感情をあなたに抱かせることはありません。神は物事が耐えがたくなるような強い考え方や強い感情をあなたに与えることは決してありません。そうではありませんか。たとえ神の裁きと刑罰の言葉を受け入れるときでさえ、あなたは どう感じますか。神の権威と力を感じるとき、あなたは どう感じますか。神は神聖で害することができないと感じますか。(はい。) そのようなときに、あなたは神から遠ざけられたと感じますか。神に対する恐怖を感じますか。感じません。そのかわりに、あなたは神に対する畏敬の念を感じます。人は神の働きのおかげで、これらすべてのことを感じるのではないですか。もしサタンが人間に働きかけたとしたら、人間はこうした感情を抱くでしょうか。(いいえ。) 神は神の言葉、神の真理、神のいのちを用いて、絶えず人間に施し、人間を支えます。人間が弱いとき、落ち込んでいるとき、神は決して厳しく「落ち込むな。なぜ落ち込んでいるのか。なぜ弱いのか。弱くなるどのような原因があるというのか。あなたは常にとっても弱く、いつも否定的だ。生きていて何の意味があるのか。死んでしまえ」などとは言いません。神はこのように働きますか。(いいえ。) 神にはこのように振る舞う権威がありますか。(はい。) しかし、神はそのように振る舞いません。神がそのように振る舞わないのは、神の本質、神の聖なる本質のためです。神の人間への愛、神が人間を大切にし、いつくしむことは、一、二行では明確に表現できません。それは人間の誇りによりもたらされるものではなく、神が実際の

実践において生み出すものであり、それは神の本質の明示です。神が働くこれらの方法すべてにより、人間は神の聖さを見ることができますか。神の善意、神が人間において達成したい効果、神が人間に対して働くために用いる様々な方法、神が行なう働きの種類、神が人間に理解させたいことを含め、神が働くこれらの方法すべてにおいて、神の善意に何らかの邪悪や悪賢さを見たことがありますか。（ありません。）それでは神が行なうことすべて、言うことすべて、神が心で思うことすべてにおいて、また神が明示する本質のすべてにおいて、神を聖なるものと呼ぶことができますか。（はい。）この聖さをこの世において、あるいは自分自身の中に見たことがある人間はいますか。神以外に、聖さを誰か人間かサタンの中に見たことがありますか。（ありません。）今まで話してきた内容から、神を唯一無二の聖なる神自身と呼ぶことができますか。（はい。）神の言葉、神が人間に対して働く様々な方法、神が人間に語ること、人間に思い起こさせること、助言し、励ますことを含め、神が人間に施すものはすべて一つの本質に由来します。すなわち、それらはすべて神の聖さに由来するのです。もしそのような聖なる神が不在であったなら、神に代わり、神の働きを行なうことのできる人間はいません。もし神がこれらの人々をすっかりサタンに引き渡したなら、あなたがた皆がきょう、どのような状況に置かれていたかを考えたことがありますか。あなたがたは、全員無傷でここに座っていたのでしょうか。あなたがたも「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」などと言うのでしょうか。あなたがたは神の前で自信たっぷりで、厚かましく、誇らしげで、恥じることもなく、そのような話し方をしつつ気取って歩き回るのでしょうか。（はい。）100パーセントそうします。絶対にするでしょう。サタンの人間に対する態度により、サタンの本性と本質は神のそれと全く異なることを人間は理解できます。サタンの何の本質が神の聖さとは正反対なのですか。（サタンの邪悪さです。）サタンの邪悪な本性は、神の聖さと正反対です。神のこの表出と神の聖さの本質を大部分の人々が認識しないのは、彼らがサタンの領域において、サタンの墮落の中で、サタンの住まいの囲いの中で生きているからです。彼らは聖さとは何かも、聖さをどう定義するかも知りません。たとえ神の聖さに気づいても、依然としてそれが神の聖さであるとは断言できません。これは、神の聖さについての人間の認識における相違です。

サタンの人間に対する業は、どのような代表的特徴を示していますか。あなたがたは、それがサタンの最も代表的特徴、最も頻繁に行なうこと、人間一人ひとりに行なおうとすることであると、自分自身の経験を通じて分かるはずですが、あなたがたにはおそらくこの特徴が見えないので、サタンが極めて恐ろしく、憎らしいとは感じません。この

特徴が何であるかを誰か知っていますか。（サタンのすることはすべて、人間に害を与えます。）サタンはどのようにして人間を害しますか。もっと具体的に詳しく回答できますか。（サタンは人間を惑わし、誘い、試します。）その通りです。それらは幾つかの側面を表しています。サタンはまた、人間をたぶらかし、攻撃し、非難します。それらのすべてをするのです。それ以外にも何かありますか。（サタンは嘘をつきます。）欺瞞と嘘はサタンが最も自然に行なうものです。サタンは頻繁に嘘をつくので、口から嘘が流れ出し、考える必要すらありません。他には。（サタンは不和の種を蒔きます。）それは、それほど重要ではありません。わたしはこれからあなたがたを震撼させる事を説明しますが、あなたがたを怖がらせるためにするものではありません。神は人間に働きかけ、人間は神の態度と心の両方において大切にされています。一方、サタンは人間を大切にしますか。サタンは人間を大切にしません。サタンが考えるのは人間を傷つけることだけです。そうではありませんか。サタンが人間を傷つけることを考えているとき、サタンは喫緊の精神状態でそうしますか。（はい。）人間に対するサタンの業に関しては、サタンの悪意のある邪悪な本性を十分に言い表し、あなたがたがサタンの憎らしさを知ることができる二つの語句があります。サタンが人間に接近する際に、サタンは常に強制的に一人ひとりの人間を占有し、一人ひとりの人間に取り憑き、害を及ぼすところまで到達し、サタンの目的を果たし、無謀な野望を実現させようとしています。「強制的に占有する」とはどういう意味ですか。それはあなたの同意の上で、それとも同意なしで起こりますか。あなたが知っていて、それとも知らないうち起こりますか。それはまったく知らないうちに起こります。あなたが意識していない状況において、おそらくサタンがまだ何も言っていないとき、おそらくまだ何も行なっておらず、何の前提も脈絡もないとき、サタンはあなたを取り囲んでそこにいるのです。サタンは利用する機会を探しており、次にあなたを強制的に占有し、あなたに取り憑き、あなたを完全に支配し危害を加えるという目的を果たします。これが、サタンの人類を手に入れるための神との戦いにおける典型的な意図と振る舞いです。これを聞いてどう感じますか。（心からぞっとして恐ろしいと感じます。）嫌悪を感じますか。（はい。）嫌悪を感じる時、サタンは恥知らずだと思いませんか。サタンは恥知らずだと思うとき、あなたがたの周囲にいて、あなたがたを常に支配しようとする人々、地位や利益のための野心をもつ人々に嫌悪を感じますか。（はい。）それでは、強制的に人間に取り憑き、占有するために、サタンはどのような方法を用いますか。あなたがたは、これについて明確に理解していますか。「強制的な占有」そして「取り憑く」という二つの用語を聞くと、嫌悪感を覚え、これらの言葉について邪悪さを感じるのではありませんか。あなたの同意な

しに、かつあなたが知らないうちに、サタンはあなたに取り憑き、強制的に占有して墮落させます。あなたは心でどう感じますか。憎悪と嫌悪を感じますか。（はい。）サタンのこの方法に対して憎悪や嫌悪を感じる時、神に対してどのような感情をもちますか。（感謝の気持ちです。）救われたことで、神に感謝するのです。それでは、今この瞬間に、あなたには神に自分自身のすべてをゆだね、支配させる希望なり意向がありますか。（はい。）どのような状況においてですか。あなたはサタンに強制的に占有され、取り憑かれるのを恐れて「はい」と言うのですか。（はい。）そのような考え方は正しくないのです、もってはいけません。恐れることはありません。神はここにいます。何も恐れることはありません。ひとたびサタンの邪悪な本質を理解したならば、人間への神の愛、善意、憐れみ、寛大さ、そして神の義なる性質についてもっと正確に理解したり、尊いと感じたりするはずです。サタンは憎しみに満ちていますが、もしそれがいまだに神への愛を呼び覚まし、神により頼み、委ねる気持ちと呼び覚まさないならば、あなたはどのような人間ですか。あなたはサタンに自分をそのように害させてもいいのですか。サタンの邪悪さと醜悪さを検討したので、次に視点を変えて神について検討します。あなたの神に関する認識は、何らかの変化を経ましたか。神を聖なる存在と言うことができますか。神は完璧であると言うことができますか。「神は唯一無二の聖さである」。神はこう称するに相応しいですか。（はい。）それではこの世で、万物のなかで、このような人間の認識に相応しいのは神のみですか。他に何かありますか。（ありません。）それでは、正確には神は人間に何を施しますか。神はあなたが気づかないうちに、配慮や思いやり、気遣いを少し施すだけですか。神は人間に何を与えてきましたか。神は無条件に、代償を要求せずに、隠された意図なく、人間にいのちを与え、すべてを与えてきました。神は、真理、言葉、いのちを用いて人間を導き、サタンの危害、試し、惑わしから人間を遠ざけ、人間がサタンの邪悪な本性と醜悪な顔を明瞭に見抜けるようにしてきました。神の人類への愛と配慮は真実ですか。それは、あなたがたの一人ひとりが経験できることですか。（はい。）

今までのあなたがたの人生をふりかえり、信仰生活の年月において神があなたに対して行なったことをふりかえってみなさい。深く感じるか否かにかかわらず、それは最も必要なものではありませんでしたか。それはあなたが最も手に入れる必要のあったものではありませんでしたか。（そうです。）それは真理ではありませんか。それはいのちではありませんか。（そうです。）神はかつて、あなたに啓示を授けた後、自分が授けたすべてのものの見返りとして何かを自分に与えるよう求めたことがありますか。（あ

りません。) それでは、神の目的は何ですか。なぜ神はこのようなことをするのですか。神にもあなたを占有するという目的があるのですか。(いいえ。) 神は人間の心の中における玉座に上りたいのですか。(はい。) それでは神が玉座に上ることとサタンの強制的占有の相違点は何ですか。神は人間の心を得ること、人間の心を占有することを望んでいます。これはどういう意味ですか。人間が神の操り人形や機械のようになることを神が望んでいるということですか。(いいえ。) それでは神の目的は何ですか。神が人間の心を占有したいことと、サタンが強制的に人間を占有し取り憑くことには、相違点がありますか。(はい。) その違いは何ですか。はっきり答えることができますか。(サタンが力によってそうする一方、神は人が自主的にそうするようにします。) それの違いですか。神にとってあなたの心は何の役に立ちますか。また、神にとってあなたを占有することは何の役に立ちますか。あなたがたは「神が人間の心を占有する」ことを、心でどのように理解していますか。ここでは、神に対して公平でなければなりません。そうしなければ、必ず人々は誤解して「神は常にわたしを占有したがつている。神がわたしを占有したい理由は何か。わたしはされたくない。わたしはただ自分でやりたい。サタンは人間を占有する、と言うが、神もまた人間を占有する。これら同じではないのか。わたしは誰にもわたしを占有させたくない。わたしはわたし自身だ」などと考えます。ここでの相違点は何ですか。しばらく考えなさい。あなたがたに尋ねますが、「神が人間を占有する」というのは、空虚な表現ですか。神による人間の占有とは、神が人間の心に住んで、あなたの一語一句、一挙一動を支配するという意味ですか。もし神があなたに座れと言え、あえて立とうとはしないのではありませんか。もし神が東へ行けと言え、あえて西には行かないのではありませんか。占有とは、そのような意味ですか。(違います。神様は、ご自身が所有されるものとご自身そのものを人間が生きるように望んでおられます。) 神が人間を経営してきた年月の中で、現在この最後の段階までの神の人間への働きにおいて、神が語ったすべての言葉の意図された人間への効果は何ですか。神がもっているものと神であるものを、人間が実践することですか。「神は人間の心を占有する」という言葉の文字通りの意味を検討すると、神は人間の心を取り、それを占有し、そこに住んで二度と出ないことのようにです。すなわち神は人間の心の主となり、人間の心を思いのままに支配し調節して、人間が神の命じることを行なわなければならないようにします。その意味では、すべての人間が神となり、神の本質と性質を自分のものにできるかのように考えられるでしょう。それでは、この場合、人間もまた神の業を実行することができるのでしょうか。「占有」をこのように説明できますか。(いいえ。) では、それは何ですか。あなたがたに尋ねます。神が人

間に与える言葉と真理はすべて神の本質、神がもっているものと神であるものの顕示ですか。（はい。）これは確かです。しかし、神が人間に与える言葉のすべては、神自身が実践し所有すべきものですか。よく考えなさい。神が人間を裁くとき、何ゆえに神はそうするのですか。その言葉はどこから来たのですか。神が人間を裁くときに言う言葉は、どのような内容ですか。それらは何に基づいていますか。人間の墮落した性質に基づいていますか。（はい。）では神の人間に対する裁きにより達成される効果は、神の本質に基づいていますか。（はい。）それでは、神による人間の占有は、空虚な語句ですか。そんなはずはありません。それでは、なぜ神はこのような言葉を人間に述べるのですか。これらの言葉を神が述べる目的は何ですか。神はこれらの言葉を使って人間のいのちにしたいのですか。（はい。）神はこれらの言葉で語ったこの真理のすべてを使い、人間のいのちとして機能させたいのです。人間がこの真理のすべてと神の言葉を受け取り、それを自分自身のいのちへと変化させるとき、人間は神に従うことができますか。そのとき人間は神を畏れることができますか。そのとき人間は悪を避けることができますか。人間がこの時点に達したとき、人間は神の主権と采配に従うことができますか。そのとき人間は神の権威に服従する位置にあるでしょうか。ヨブやペテロのような人がその道の最終地点に到達し、いのちが成熟に達したとみなすことができるとき、そして彼らが真に神を理解したとき、サタンはそれでも彼らを連れ去ることができますか。サタンは依然として彼らを占有できますか。サタンは依然として強制的に彼らに取り憑くことができますか。（できません。）それでは、それはどのような人間ですか。完全に神のものとされた人ですか。（はい。）この段階の意味において、このように完全に神のものとされた人をあなたがたはどのように見ますか。神にとっては、この状況下では神はこの人の心を既に占有しています。しかし、この人は何を感じますか。神の言葉、権威、神の道が人間の中でいのちとなり、そしてこのいのちが人間の存在全体を占有し、人間が実践することとその本質を、神を満足させるに適切なものにするということですか。神にとって、この瞬間の人類の心は、神に占有されていますか。（はい。）あなたがたはこの段階の意味を、今ではどのように理解していますか。あなたがたを占有するのは神の霊ですか。（いいえ、わたしたちを占有するのは神様の言葉です。）神の道、神の言葉があなたのいのちとなったのであり、真理があなたのいのちとなったのです。このとき、人間は神に由来するいのちをもっていますが、このいのちが神のいのちであるとは言えません。言い換えるならば、神の言葉から人間が得るべきいのちは、神のいのちであるとは言えないということです。したがって、人間がいかに長期間にわたり神に付き従っても、いかに多くの言葉を神から得ても、人間は決して神となることがで

きないということです。たとえ神がある日、「わたしはあなたの心を占有した。あなたは今やわたしのいのちをもっている」と言ったとしても、あなたは自分が神だと感じるのでしょうか。（感じません。）それでは、あなたはどうなるのでしょうか。神に絶対的に服従するのではないのでしょうか。あなたの心は、神があなたに与えたいのちで満たされるのではないのでしょうか。これは神が人間の心を占有するときに起こる極めて普通の徴候です。これは事実です。ではこの観点からみて、人間は神になることができますか。人間が神の言葉をすべて得たとき、神を畏れ、悪を避けることができるようになったとき、人間は神の身分と本質を自分のものにすることができますか。（できません。）何があったとしても、結局のところ人間は依然として人間なのです。あなたは被造物です。あなたが神から神の言葉と神の道を受け取ったとき、あなたは神の言葉を源とするいのちをもっているだけであり、決して神になることはできないのです。

ここでもとの論題に戻ると、わたしはあなたがたに質問を一つしました。アブラハムは聖なる存在ですか。（いいえ。）ヨブは聖なる存在ですか。（いいえ。）この聖さの中には神の本質がこもっています。人間には神の本質も性質もありません。たとえ人間が神の言葉をすべて経験し、それらの現実を備えたとしても、人間は依然として神の聖なる本質を自分のものにすることはできません。人間は人間です。これは理解していますね。それでは、「神が人間の心を占有する」という表現を今ではあなたがたはどのように理解しますか。（神様の言葉、神様の道、神様の真理が人間のいのちとなります。）あなたがたはこの言葉を記憶しました。あなたがたがさらに深い認識を得ることを願います。「それでは、なぜ神の使いや天使が聖なる存在ではないと言うのか」と質問する人がいるかもしれません。この質問について、あなたがたはどう考えますか。おそらくこれまでこんなことは考えたことがなかったかもしれません。簡単な例を使います。あるロボットを起動させると、ロボットは踊り話すことができ、人はロボットの言うことを理解できます。あなたはそのロボットを美しいとか生き生きしているとか言うかもしれませんが、ロボットにはそれが理解できません。なぜならロボットには命がないからです。ロボットの電源を切ると、ロボットはそれでも動くことができますか。ロボットが起動しているときは、それを生き生きとして美しいものとして見るのが可能です。実質的にであれ、あるいは表面的にであれ、あなたはロボットを評価しますが、いずれにせよ、ロボットが動いているのが見えます。しかし、ロボットの電源を切ったとき、ロボットに何らかの特質が見られますか。ロボットが何らかの本質を有しているのが見えますか。わたしが言っていることの意味を理解していますか。つまり、このロボッ

トは動くことも停止することもできても、ロボットに何かの本質があると表現することは決してできません。これは事実ではありませんか。これについてはこれ以上話しません。あなたがたがその意味の一般的な知識をもっていれば十分です。これでわたしたちの終わりを終わります。ごきげんよう。

2013年12月17日

脚注

a.「緊箍呪」は中国の小説『西遊記』の中で三蔵法師が使った呪文である。三蔵法師はこの呪文を使い、孫悟空の頭にはめられた金属の輪を締め上げ、激しい頭痛を生じさせることで彼を操り支配下に置いた。そこからこの表現は、人を縛るものを表わす比喻になった。

唯一無二の神自身 5

神の聖さ（2）

兄弟姉妹の皆さん、きょうは讃美歌を歌いましょう。皆さんが好きで、よく歌っている歌を一つ選んでください。（神の御言葉の歌「汚れなき純粋な愛」を歌いたいです。）

1.「愛」とは、純粋で汚れのない感情を指し、心をもって愛し、感じ、思いやりをもつということである。愛においては条件、障壁、距離がない。愛においては疑念、偽り、悪賢さもない。愛においては取引も不純なものもない。愛するならば、偽ったり、不平を言ったり、裏切ったり、反抗したり、強要したり、何かを得ようとしたり、一定の量を得ようとしたりすることはない。

2.「愛」とは、純粋で汚れのない感情を指し、心をもって愛し、感じ、思いやりをもつということである。愛においては条件、障壁、距離がない。愛においては疑念、偽り、悪賢さもない。愛においては取引も不純なものもない。もし愛するならば、喜んで自分の身を捧げ、苦難に耐え、わたしと融和するようになる。あなたは自分の持つすべてのものをわたしのために捨てるだろう。家族、将来、青春、結婚をあきらめるだろう。そうでなければ、あなたの愛は愛などではなく、偽りと裏切りである！

良い歌を選びました。皆さん、この讃美歌を歌うのが好きですか。（はい。）この歌を歌った後、何を感じますか。このような愛を皆さん自身の中に感じることはできますか。（いいえ、まだできません。）この歌のどの言葉に皆さんが一番深く感動しますか。（「愛に条件や障壁や距離はない。愛に疑い、偽り、取引、狡さはない。愛に選択は

なく、何一つ不純なものはない」です。けれど、わたしの中にはまだ不純なところ、神様と取引をしようとするところがたくさんあります。実際には純粋で汚れのない愛にはまだ達成していません。) 純粋で汚れのない愛を達成していないのならば、あなたの愛はどの程度ですか。(わたしは進んで求めようとし、切望している段階にいるに過ぎません。) あなた自身の霊的背丈にもとづいて、自分の経験から、どの程度を達成したと言えますか。あなたには偽りがありますか。不満がありますか。(あります。) 心の中に要求がありますか。神から欲しいと思い、望んでいるものが何かありますか。(はい。自分の中にはそのような汚れたところがあります。) どのような状況でそれは出てきますか。(神様がわたしのために準備してくださった状況が、わたしの観念に合わないときや、わたしの要求が満たされなかったときに、その種の墮落した性質を露わにします。) 台湾の兄弟姉妹の皆さんも、この讃美歌をよく歌いますか。皆さんが「汚れなき純粋な愛」をどのように理解しているか、少し話してくれませんか。なぜ神は愛をこのように定義するのでしょうか。(わたしはこの讃美歌が本当に好きです。この愛が完全な愛であることがわかるからです。でも、その基準を満たすには、わたしは依然として多くの道を歩まなければならない、真の愛を達成するにはまだまだほど遠いと感じています。神様の御言葉からもらった力と祈りを通して、自分が進歩して協力することができるようになった事柄が幾つかあります。けれど、ある種の試練や暴きに直面したときなど、自分には将来も運命も、そして終着点もないと感じます。そのようなときには自分がとても弱く感じますし、よくこの問題で動揺します。) 「将来と運命」と言うとき、あなたが本当に意味しているものは何ですか。具体的に言及しているものが何かありますか。それは図や想像した何か、自分の将来や運命、実際に見ることのできる何かですか。それは実際の物体ですか。わたしは皆さん一人ひとりに、次のことを考えてほしいと思います。つまり、あなたがたが自分の将来と運命に抱く懸念は、いったい何を指しているのかということです。(それは救われて生き残ることです。) 他の兄弟姉妹の皆さんも、「汚れなき純粋な愛」をどのように理解しているかについて、少し話し合いなさい。(「汚れなき純粋な愛」をもつとき、人は自分自身に不純なところが一切なく、将来や運命に支配されません。神様がどのように取り扱おうと、神様の働きと指揮に完全に従うことができ、最後の最後まで神に付き従うことができます。神様へのこのような愛だけが純粋で汚れのない愛です。そのことにわたし自身を対比させると、神様を信仰してきたこの数年間に、表面的には自分自身の身を捧げて何かを放棄してきたかもしれませんが、わたしは神様に対して真に心を捧げることができていないことがわかります。神様がわたしのことを暴くとき、自分は救われないのだと感じ、否定的な状態に留

まってしまう。自分の本分を尽くしながらも、同時に神様と取引しようとして、心から神を愛することができず、自分の終着点、将来、運命について常に考えていることがわかります。)

皆さんはこの讃美歌をある程度理解しており、自分の実際の経験と多少は結びつけてきたようです。けれど、「汚れなき純粋な愛」の歌詞の一つひとつについて、あなたがたの受け取り方の程度は異なります。それは意欲についてのものだと考える人もいれば、自分の将来を捨て去ろうとする人もいますし、家族を捨てようとしている人もいれば、何も受け取ることを求めている人もいます。また他には、偽らず、文句を言わないこと、神に反抗しないことを自分に要求している人がいます。なぜ神はこのような愛を提唱し、人が神をこのように愛することを要求するのでしょうか。これは人が達成できるような愛ですか。つまり、人はこのように愛することができますか。人はこのような愛を微塵ももっていないので、自分にはできないと思うかもしれません。そのような愛をもっていない場合、根本的に愛について知らない場合に、神がこれらの言葉を語りますが、そうした言葉は人には馴染みのないものです。人はこの世に生き、その墮落した性質において生きているので、もしこのような愛をもっていたなら、あるいは、ある人がこのような愛をもつことが可能で、それは一切の願いも要求ももたない愛、自分を捧げ、苦しみに耐え、所有するすべてをあきらめようとする愛であるなら、このような愛をもつ人は他の人の目にはどのように映るのでしょうか。完全な人でしょうか。(はい。)

そのような完全な人がこの世に存在しますか。そんな人は存在しない。そうではありませんか。そのような人は、真空に生きていない限り、この世には絶対に存在しません。そうですね。そのため、経験を通して、この歌詞が描写するもののようになろうと大変な努力をする人々もいます。彼らは自らを取り扱い、自らを抑制し、それどころか自らを放棄し続けます。苦しみに耐え、抱いていた観念を捨て去ります。自分の反抗的な行為を断ち、自らの欲望や要求を捨てます。けれども最後には、やはり基準に達することはできません。なぜこうなるのでしょうか。神がこれらのことを言うのは、人が従うべき基準を提供するためで、それにより神が人に求めている基準を彼らが知るようになるためです。けれど、そもそも神は、人はそれを直ちに達成しなければならないと言いますか。そもそも神は、どれほどの時間でそれを達成しなければならないと人に言いますか。(いいえ。)

そもそも神は、人は神をこのように愛さなければならないと言いますか。この一節はそう言っていますか。いいえ。言っていません。神はただ、神が言及していた愛について人に話しているだけです。人が神をこのように愛し、このように扱

うことができるかどうかということを通して、神が人に要求していることは何ですか。それらをただちに達成する必要はありません。なぜなら人にはできないからです。皆さんは、このように愛するために人が満たす必要のある条件とはどのようなものかを考えたことがありますか。これらの言葉をたびたび読めば、人はそのような愛を徐々にもつようになるでしょうか。（いいえ。）では、条件とは何ですか。まず初めに、人はどうすれば神に対して疑いをもたずにいることができますか。（誠実な人だけがそれを達成できます。）偽らないようにするにはどうしますか。（やはり誠実でなければなりません。）神と取引しようとししない人になるためにはどうしますか。これも誠実な人でなくてはなりません。狡猾にならないようにするにはどうしますか。愛において選択はないと言うとき、それは何を意味していますか。それらはすべて誠実な人であるということに行き着きますか。ここには多くの細目があります。神がこのような愛について語り、定義できるということは何を証明していますか。神はこのような愛をもっていると言うことができますか。（はい。）皆さんはこれをどこに見ますか。（神様の人間への愛に見ます。）神の人間への愛は条件付きですか。（いいえ。）神と人間のあいだには障壁や距離がありますか。（いいえ。）神は人間のことを疑っていますか。（いいえ。）神は人間を観察して理解しています。人間を真に理解しているのです。神は人間を騙そうとしますか。（いいえ。）神がこの愛についてこれほど完全に話すということは、神の心あるいは神の本質も完全であるということですか。（はい。）人が愛をこのように定義したことがありますか。どのような状況で人間は愛を定義してきましたか。人間は愛についてどのように話しますか。与える、あるいは差し出すという観点から話していませんか。（そうです。）この愛の定義はあまりにも単純で、本質が欠けています。

神の愛の定義と愛の語り方は、神の本質の一面と関連していますが、それは神の本質のどの面ですか。前回わたしたちはとても重要な主題について交わりました。それは人々がこれまでにたびたび話し合ったことのある主題です。この主題で取り上げている内容は、神を信仰する過程でたびたび話されるある言葉ですが、それは皆にとって馴染みがあると同時に馴染みのないように思える言葉です。なぜわたしはこれについて語るのでしょうか。それは人間の言語に由来する言葉ですが、人間のあいだにおけるその定義は明瞭であり、曖昧でもあります。それは何という言葉ですか。（聖さです。）聖さ、それが、前回わたしたちが交わったときの題目でした。わたしたちはこの題目の一部分について交わりをもちました。前回の交わりを通して、神の聖さの本質について皆さん全員が新たな理解を得ましたか。（はい。）皆さんは、この理解のこういったところがこ

れまでにない新たなものだと思いますか。つまり、その理解あるいはそれらの言葉の何ゆえに、皆さんの神の聖さについての理解が、交わりの際にわたしが話した神の聖さとは違う、あるいは変わっている、と感じましたか。それについて何か感銘を受けましたか。（神様は御心でお感じになったことを仰います。神の言葉は汚れていません。それは聖さの一面の現れです。）（神様が人間に対して激怒なさっているときにもやはり聖さがあります。神の激怒には汚れがありません。）（神様の聖さについて、神様の義なる性質には神様の激怒と憐れみがあると理解しています。これはわたしにとっても強い印象を残しました。前回の交わりでは、神様の義なる性質が唯一無二であることにも触れられましたが、わたしは以前にこのことを理解していませんでした。神様が交わってくださったことを聞いて初めて、神様の激怒は人間の怒りとは異なるものであることを理解しました。神様の激怒は好ましいもので、それは原則にもとづいています。それは神様の元来の本質ゆえにもたらされます。神様は何か好ましくないものをご覧になり、それで激怒されるからです。それは、いかなる被造物も有していないものです。）わたしたちのきょうの題目は神の聖さです。神の義なる性質についてはすべての人が耳にしたことがあり、何かを学んでいます。さらに、多くの人はいくく神の聖さを神の義なる性質と同時に語って、神の義なる性質は聖なるものだと言います。誰もが「聖なる」という言葉には馴染みがあり、それは一般的に使われる言葉です。けれど、その言葉の内にある意味について、人は、神の聖さのどのような表現を見ることができますか。人が認識できる何を神は明らかにしましたか。これは誰も知らないことのようにです。わたしたちは神の性質は義であると言いますが、それではもし人が神の義なる性質を取り上げて、それは聖なるものだと言うならば、それは少し曖昧で、少し混乱気味に思えます。なぜですか。神の性質は義であるとか、神の義なる性質は聖なるものであるとか人は言いますが、それでは皆さんの心の中では神の聖さをどのようにみなし、どのように理解していますか。つまり、神が明らかにしたもの、また神が所有するものと神そのものを、人々は聖いものとして認識しているのでしょうか。これについて以前に考えたことがありますか。わたしが見たのは、人は一般的に使われる言葉を言ったり、何度も繰り返された文言を使ったりしますが、自分が何を言っているのかさえ知らないということです。それはただ誰もがそのように言うからであり、習慣的にそう言うのであり、そのために決まり文句になるのです。けれど、細目を調べ本当に研究するならば、本当の意味が何であるのか、あるいはそれが何を指しているのかを自分が知らないことに気づくでしょう。ちょうど「聖なる」という言葉のように、自分が語る神の聖さに関して、神の本質のいったいどの側面に言及しているのかは誰も正確に知らず、「聖なる」という言葉と神

をどう一致させればよいか誰一人知らないのです。人は心の中で混乱しており、神の聖さに関する認識も曖昧ではっきりしていません。神がどれほど聖いかについて、はっきり理解している人は誰もいないのです。きょう、わたしたちは「聖なる」という言葉を神と一致させるためにこの題目について話し合います。それにより、人が神の聖さの本質について実際の中身を見ることができるようにするためです。これにより、一部の人が、自分の言うことが何を意味しているのか、あるいは正確且つ的確なのかを知らない状態で、この言葉を習慣的に不注意に使ったり、でまかせに物事を言ったりすることを防ぎます。人はいつもこのように語ってきました。あなたもあの人もこのように語ったので、これは一つの口癖になりました。それにより、この言葉をうかつにも汚しているのです。

「聖なる」という言葉は、表面的にはとても理解しやすそうに思えます。そうではありませんか。少なくとも人は、「聖なる」という言葉は清く、汚れがなく、神聖で、純粹という意味であると信じています。「聖さ」を、わたしたちがたった今歌った讃美歌、「汚れなき純粹な愛」の中の「愛」と関連付ける人もいます。それは正しいです。それは愛の一部です。神の愛は神の本質の一部ですが、すべてではありません。けれど、人の観念では、この言葉を見て、それを自分自身が純粹で清いとみなすもの、あるいは自分たちが個人的に汚れていないと思うものと関連付ける傾向があります。例えば、蓮の花は清い、汚れた泥から汚れのない花を咲かせる、と言った人々がいます。ゆえに、人は「聖なる」という言葉を蓮の花に当てはめ始めました。架空の恋物語を聖なるものとみなした人々がいますし、架空の威風堂々たる劇中人物を聖なるものとした人もいます。さらに、聖書の人物、あるいは靈的書物に記された他の人々、つまり聖徒や使徒、あるいは過去に神がその働きを行なったときに神に従った人々などを、聖なる靈的経験をしたとみなす人々もいます。これらはすべて人が考え出したもので、人が抱く観念です。なぜ人はこのような観念を抱くのですか。その理由はとても単純です。つまり、人は墮落した性質の只中に生きており、邪悪と不浄の世界で生活しているからです。人が見るものすべて、触れるものすべて、経験するものすべてがサタンの邪悪であり、サタンの墮落であるとともに、サタンの影響下にいる人々のあいだで起こる陰謀、内紛、争いです。そのため、神が人において働きを行なうときでさえ、神が人に語りかけ神の性質と本質を明らかにするときでさえ、人は神の聖さと本質を見ることも知ることもできないのです。人はよく神は聖であると言いますが、真の理解はしていないのです。ただ、空っぽの言葉を述べているだけです。人は不浄と墮落にまみれて、サタンの領域に生

きており、光を見ることはなく、前向きな物事を何も知らず、さらには真理を知らず、「聖なる」という言葉が意味するものを本当に知る人は誰もいません。では、この墮落した人類の中に聖なるものや聖なる人は存在しますか。確信をもって言えます。いません。なぜなら神の本質のみが聖なるものだからです。

わたしたちは前回の交わりにおいて、神の本質がいかに聖なるものであるかについて、ある面を取り上げて話し合いました。それは神の聖さについて人が認識を得るための手掛かりとなりましたが、十分ではありません。人が完全に神の聖さを知るには十分ではありませんし、神の聖さが唯一無二であることを人が理解するにも十分ではありません。さらに、神において完全に具現化されている聖さの真の意味を人に理解させるにも十分ではありません。したがって、わたしたちはこの主題について交わりを続けることが必要です。前回の交わりでは題目を三つ話し合いましたから、きょうは四番目の題目を話し合います。それではまず、聖書の一節を読むことから始めます。

サタンの誘惑

マタイによる福音書 4:1-4 さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。そして、四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんください」。イエスは答えて言われた、「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある」。

これは悪魔が主イエスを初めて試みようとしたときの言葉です。悪魔の言ったことの内容は何ですか。（「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんください」。）悪魔が言ったこれらの言葉は極めて単純ですが、その本質に問題はありますか。悪魔は「もしあなたが神の子であるなら」と言いましたが、心の中では悪魔はイエスが神の子であることを知っていましたか。キリストであることを知っていましたか。（知っていました。）それでは、なぜ悪魔は「もし……であるなら」と言ったのですか。（神様を試そうとしていたのです。）しかし、そうする悪魔の目的は何でしたか。悪魔は「もしあなたが神の子であるなら」と言いました。心の中では、悪魔はイエス・キリストが神の子であることを知っていました。このことは悪魔の心の中ではとても明確でした。しかし、それを知っていながら、悪魔は主イエスに服従、あるいは主イエスを礼拝しましたか。（いいえ。）悪魔は何がしたかったのですか。悪魔はこの方法とこれらの言葉を用いることで、主イエスを怒らせ、自分の意図にしたがって行動するよう、主イエスを騙したかったのです。これが悪魔の言葉の裏に意図されたこ

とではありませんでしたか。サタンは心の中では、明らかにそれが主イエス・キリストであることを知っていましたが、それにもかかわらずこう言ったのです。これがサタンの本性ではありませんか。サタンの本性は何ですか。（ずるくて、邪悪で、神様への畏敬の念がありません。）神への畏敬の念をもたないことで生じる結果は何でしょうか。サタンは神を攻撃したかったのではありませんか。神を攻撃するのにこの方法を用いたかったのです。それゆえに悪魔は、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」と言いました。これはサタンの邪悪な意図ではありませんか。はたして悪魔は何をしようとしていたのですか。悪魔の目的は明らかです。この方法を用いて主イエス・キリストの地位と身分を反証しようとしたのです。それらの言葉の意味は、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい。もしできないなら、あなたは神の子ではないので、その働きを今後一切行なうな」ということでした。そうではありませんか。悪魔はこの方法で神を攻撃したかったのです。神の働きを取り壊し、つぶしたかったのです。これはサタンの悪意です。サタンの憎悪はその本性の自然な表れです。サタンは主イエス・キリストは神の子であり、神の受肉そのものであると知っていたのに、このようなことをせずにはいられず、神の後ろをつけ、執拗に神を攻撃し続け、神の働きを妨害し破壊しようと手を尽くしたのです。

さて、サタンが言った「これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」という表現を分析しましょう。石をパンにする、これは何かを意味していますか。もし食べ物があるのなら、なぜそれを食べないのですか。なぜ石を食べ物に変える必要があるのですか。ここには何の意味もないと言えますか。このとき主イエスは断食をしていましたが、食べ物をもっていたはずです。（もっていました。）つまり、ここにサタンがこの言葉を言ったことの馬鹿らしさがあります。サタンの狡猾さと悪意にもかかわらず、わたしたちはその馬鹿らしさと愚かさがわかるのです。サタンの行なう幾つものことを通して、サタンの悪意に満ちた本性が、サタンが神の働きを破壊するのが見え、とても憎むべき腹立たしいものだと感じます。けれど、他方ではサタンの言動の背後に幼稚で愚かな本性も見えませんか。これはサタンの本性が露呈しているのです。サタンはこのような本性をもつため、このようなことをします。この言葉は今日の人々には馬鹿げていて笑えてきます。けれど、このような言葉は確かにサタンが言いそうなものです。サタンは無知で愚かだと言うことができますか。サタンの邪悪はいたるところにあり、絶えず暴露されています。そして主イエスはどのように返答しましたか。（「人はパンだけ

で生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」。) これらの言葉には力がありますか。(あります。) なぜ力があると言うのですか。これらの言葉は真理だからです。では、人はパンだけで生きるものですか。主イエスは四十日四十夜断食しました。飢え死にしましたか。(いいえ。) 飢え死にしませんでした。そこでサタンは主イエスに近づいて、「石を食べ物に変えれば、食べるものがあるではないか。それなら断食する必要もなく、空腹にならずにすむではないか」というようなことを言って、主イエスに石を食べ物に変えるように促しました。けれど主イエスは、「人はパンだけで生きるものではなく」と言いました。これは、人間は肉体に生きてはいるが、人間の肉体を生かし、呼吸させるものは食べ物ではなく、神の口から出るありとあらゆる言葉である、という意味です。一方で、これらの言葉は真理であり、人々に信仰を与え、自分は神に頼ることができ、神は真理であると感じさせます。他方で、この言葉には実際的な面がありますか。主イエスは四十日四十夜断食したあと、それでも立ち、なお生きていたのではありませんか。これは実例ではありませんか。主イエスは四十日四十夜のあいだ一切の食べ物を食べていませんでした。それでもまだ生きていました。これはこの聖句を裏付ける強力な証拠です。これらの言葉は単純ですが、主イエスはサタンに試みられたときにだけそれらを語ったのでしょうか、それともこれらの言葉はすでに、当然ながら主イエスの一部だったのでしょうか。別の言い方をするならば、神は真理であり、神はいのちですが、神の真理といのちは後に追加されたものでしたか。それは後の経験から生まれたものでしたか。いや、それは神に元来備わっているものです。つまり、真理といのちは神の本質なのです。神に何が起ころうと、神が表すものは真理です。この真理、この言葉は、その内容の長短に関わらず、人間を生かし、人間にいのちを与えることができます。この言葉は、人間がその中に真理を見出し、人生の道について明らかにし、神への信仰をもつことを可能にします。言い換えるなら、神がこの言葉を用いたことの源泉は肯定的です。それではこの肯定的なことは聖なるものだと言うことができますか。(はい。) サタンの言葉はサタンの本性に由来します。サタンはその邪悪な本性、悪意にみちた本性をいたるところで常に暴露します。さて、サタンはこのような暴露を自然に行ないますか。誰かが指図するのですか。誰かが手を貸すのですか。誰かが強要するのですか。(いいえ。) それはすべて自発的な暴露です。これがサタンの邪悪な本性です。神が何を、どのように行なおうと、サタンは神のすぐ後に付いて来ます。サタンのこのような言動の本質と真の本性が、邪悪で悪意に満ちたサタンの本質なのです。さて、続きを読みます。サタンは他に何を言いましたか。先を読みましょう。

マタイによる福音書 4:5-7 それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから」。イエスは彼に言われた、「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」。

まず初めにサタンのこの言葉を見ましょう。サタンは「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい」と言い、そして「神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう」と聖書から引用しました。皆さんはサタンの言葉を聞いて、どう感じますか。とても幼稚ではありませんか。この言葉は幼稚で、馬鹿げていて、うんざりします。なぜわたしはこう言うのですか。サタンはたびたび愚かなことをして、自分をとて頭が良いと思っています。またサタンはたびたび聖書を、神の言葉そのものさえ引用して、そのような言葉を神に反して用い、神を攻撃し試そうとします。これをするサタンの目的は、神の働きの計画を破壊することです。サタンの言った言葉の中に何か気づくことがありますか。（そこには邪悪な意図があります。）サタンはその行為において、常に人類を試みようとしてきました。サタンは直截な話し方をせず、誘惑や欺き、そそのかしを使って遠まわしな話し方をします。サタンは、神もまた無知で愚かであり、人間と同じく物事の本当の形をはっきり区別できないと信じつつ、あたかも神が普通の人間であるかのように、神を試そうと取り組みます。サタンは神と人間は同様にサタンの本質を見通さず、神も人間もサタンの偽りや邪悪な意図を見抜けないと思っています。これがサタンの愚かなところではないでしょうか。さらに、サタンは堂々と聖書を引用します。こうすることで、自らに信頼性が備わり、相手はその言葉の中に欠点を見つけることもできなければ、騙されるのを避けることもできないと思っているのです。これがサタンの愚かで幼稚なところではないでしょうか。これはちょうど誰かが福音を広めて神へ証しをするときのようなものです。非信者は時としてサタンが言ったことと同じようなことを言いませんか。皆さんは誰かが同じようなことを言うのを聞いたことがありますか。そのようなことを聞くと、どう感じますか。うんざりしますか。（はい。）うんざりするとき、皆さんは根強い反感と憎悪も感じますか。そのような感情を抱くとき、サタンと、サタンが人間の中に入り込ませる墮落した性質が邪悪であることを認識することができますか。皆さんの心の中には、少しでも次のような気づきがありますか。「サタンが話すとき、それは攻撃と誘惑を意味する。サタンの言葉は愚かで、お

かしく、幼稚で、うんざりする。けれど、神は決してこのような方法を用いて話すことも働きを行なうこともなく、実際、神はこれまでにそんなことをしたことはない」。もちろん、この状況においては、人々はわずかに感じるができるだけで、神の聖さを把握できずにいます。違いますか。皆さんの現在の霊的背丈をもってすると、皆さんは「神が言うことはすべて真理だ。それはわたしたちに有益で、受け入れなければならぬ」と感じているだけです。これを受け入れることができるか否かに関わらず、例外なく皆さんは、神の言葉は真理で神は真理だと言いますが、真理そのものが聖さであり、神は聖なるものであることを皆さんは知らないのです。

さて、サタンの言葉に対するイエスの返答は何でしたか。「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」。イエスがいったこの言葉には真理がありますか。（はい。）そこには真理があります。表面的には、それらの言葉は人が従うべき掟であり、単純な表現ですが、それにもかかわらず、人間もサタンもたびたびこれらの言葉に背いてきました。それで、主イエスはサタンに「主なるあなたの神を試みてはならない」と言いました。なぜならば、これはサタンがたびたび手をかけ苦労して行なったことだからです。恥を知らずにずうずうしくも行なったと言えるでしょう。神を畏れず心に神への畏敬の念をもたないのはサタンの根源的な本性です。サタンが神のそばにいて神を見ることができたときでさえ、神を試さずにはいられなかったのです。それで、主イエスはサタンに「主なるあなたの神を試みてはならない」と言ったのです。これは神がサタンにたびたび言ってきた言葉です。では、この言葉を今日にあてはめることは適切ですか。（適切です。わたしたちもよく神様を試すからです。）なぜ人はよくそうするのですか。人が墮落したサタンの性質で満たされているからですか。（はい。）では先にサタンが言ったことは人がよく言うことですか。また、どのような状況で人はその言葉を発しますか。人はこのようなことを時間や場所を問わず言ってきたと言うことができます。これは、人の性質はサタンの墮落した性質とまったく同じだということを証明しています。主イエスは単純な言葉、真理を表す言葉、人が必要とする言葉を話しました。けれど、この状況において、主イエスはそのような話し方でサタンと議論していたのですか。主イエスがサタンに言ったことに、何か対立的のものがありませんか。（いいえ。）主イエスは心の中でサタンの誘惑をどのようにみなしましたか。主イエスはうんざりして嫌悪感をもちましたか。（はい。）主イエスはうんざりして嫌悪感を抱きましたが、サタンと議論はしませんでしたし、ましてや大原則について話したりはしませんでした。それはなぜですか。（サタンはそのような状態で、変わることはないから

です。) サタンは道理が通じないと言うことができますか。(はい、できます。) サタンには神は真理だということが認識できますか。サタンは神が真理であるということを決して認識しませんし、神が真理であるということを決して認めません。これがサタンの本性です。さらにもう一つ、サタンの本性でおぞましいことがあります。それは何ですか。主イエスを試そうと手を尽くす中で、サタンはもし神を試して成功しなかったとしても、とにかくやってみようと考えました。懲罰されるとしても、とにかくするので。そうすることで何ら好都合なことを得られないとしても、サタンはとにかく試し、最後の最後まで手を尽して執念深く神に立ち向かいます。これはどういう本性ですか。邪悪ではありませんか。神のことを話に出すと激昂して怒り出す人は、神を見たことがありますか。神を知っていますか。その人は神が誰か知りませんし、神を信じませんし、神はその人に語りかけたことはありません。神はその人に構ったことはありません。では、その人はなぜ怒るのでしょうか。その人は邪悪だと言うことができますか。俗世の潮流、飲食、快楽の追求、および著名人を追いかけることなどが、そのような人を悩ませることはありません。しかし「神」という一言が出たとたん、あるいは神の言葉の真理に触れた瞬間、その人は突然激怒します。これは邪悪な本性に該当するものではないでしょうか。これは、人間の邪悪な本性を十分証明しています。さて、皆さんに関しては、真理のことを話に出すと、あるいは人類に対する神の試練や、人間への神の裁きの言葉のことを話に出すと、避けたい気持ちになり、嫌悪感を抱き、そのことは聞きたくないと思う時がありますか。皆さんは心の中で、「人は皆、神は真理だと言っていないか。その言葉の一部は真理ではない！ これは明らかに神の人間に対する訓戒の言葉に過ぎない」と思うかもしれません。心の中で強い反感を抱く人さえいるかもしれません。「これは毎日話題になる。我々に対する神の試練、神の裁き、これはいつ終わるのか。我々はいつ良い終着点を与えられるのか」と思うのです。この理不尽な怒りがどこからもたらされるのかは知られていません。これはどのような本性ですか。(邪悪な本性です。) これはサタンの邪悪な本性に導かれているのです。神の観点からすると、サタンの邪悪な本性と人間の墮落した性質について、神は決して人と議論したり恨みを抱いたりせず、人が愚かな行動をしたときも騒ぎ立てません。神が物事に関して人と同様の見解をもつことは一切ありませんし、さらに、神が人間の観点や知識、科学、哲学、想像を用いて物事を処理することもあります。もっと正確に言えば、神が行なうすべてのことと、神が明らかにするすべてのことは真理につながっています。つまり、神が発してきたあらゆる言葉と、神が行なってきたあらゆる行為は真理と結びついているのです。この真理は、根拠のない空想の産物ではありません。この真理とそれらの言葉は

、神の本質と神のいのちゆえに神が表すものなのです。これらの言葉と神が行なってきたあらゆることの本質は真理なので、神の本質は聖なるものであると言うことができます。言い換えると、神の言動のすべては人に活力と光をもたらし、人が前向きな物事とその現実性を見ることができるようにし、人が正しい道筋を歩けるよう、人に道を示します。これらの物事はすべて神の本質ゆえに決定され、神の聖さの本質ゆえに決定されます。今、皆さんにはこのことがわかりますね。続けて聖書を読みます。

マタイによる福音書 4:8-11 次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」。するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」。そこで、悪魔はイエスを離れ去り、そして、御使たちがみもとにきて仕えた。

悪魔のサタンは、先の二つの策略に失敗しますが、また別の策略を試します。主イエスにこの世のすべての国々とその栄華を見せ、悪魔を拝むように要求しました。皆さんはこの状況から、この悪魔の真の特徴について何を見て取れますか。悪魔のサタンはとてつもなく恥知らずではありませんか。（はい。）どのような点が恥知らずなのでしょう。万物は神により創造されたにもかかわらず、サタンはそれを逆さまにして神に見せ、「これらの国々の富と栄華を見なさい。わたしを拝むなら、これらを皆あなたにあげましょう」と言ったのです。これは完全に役割の逆転ではありませんか。サタンは恥知らずではありませんか。神は万物を創造しましたが、それは神自身の楽しみのためでしたか。神は人類に万物を与えましたが、サタンはそれをすべて奪うことを望み、それをすべて奪い、「わたしを拝め！ わたしを拝めば、これをみなあなたに与える」と言いました。これがサタンの醜い顔です。恥知らず以外の何物でもありません。サタンは「恥」という単語の意味さえ知りません。これがまさにサタンの邪悪を示しているもう一つの実例です。サタンは恥が何であるかさえ知りません。サタンは明らかに、神が万物を創造し、それを管理し支配していることを知っています。万物は神に属し、人間に属するのではなく、ましてやサタンに属するのでもありません。それなのにサタン悪魔はずうずうしくも自分が神に万物を与えようと言ったのです。これこそサタンが再び愚かで恥知らずなことをしていることを示すもう一つの実例ではありませんか。このことで神はサタンをさらに憎悪していますね。しかし、サタンが試みたことで、主イエスが騙されたことはありましたか。主イエスは何と言いましたか。（「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」です。）この言葉には実際的意味がありますか。（はい。

）どのような実地的意味ですか。サタンの言葉にはサタンの邪悪と恥知らずさが見えます。では、もし人間がサタンを拝んだら、結末はどうなるでしょうか。人は国々の富と栄華を受け取るでしょうか。（いいえ。）人は何を受け取りますか。人類もサタンと同じくらい恥知らずで笑いの的になるでしょうか。（はい。）人はサタンと何ら変わりなくなるでしょう。それゆえに、主イエスはこの言葉を言ったのであり、それは一人ひとりの人間にとって重要な言葉です。「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」ここでは、主以外に、神自身以外に誰かを拝むならば、もし悪魔のサタンを拝むならば、サタンと同じ不浄の中でもがくことになる」と述べています。そうすると、サタンの恥知らずさと邪悪を共有することになり、サタン同様に神を試し、神を攻撃します。そうするとあなたの結末はどうなるでしょうか。神に嫌悪され、神に打ち倒され、神に破壊されるでしょう。サタンは主イエスを何度も試しては失敗に終わりました。サタンは再度試しましたか。サタンは再度試さず、去りました。これは何を証明しますか。これはサタンの邪悪な本性、その悪意、愚かさ、馬鹿らしさは神の前において触れるにさえ値しないことを証明します。主イエスはサタンを三つの文章だけで打ち負かしました。その後、サタンは尻尾を巻いて逃げ去り、恥ずかしさのあまり顔を見せることもできず、二度と主イエスを試すことはありませんでした。主イエスはこうしたサタンの誘惑を打ち負かしたので、今やすべき働きを容易に継続することができ、目の前にある課業に取り組むことができました。この状況において主イエスが話し、行なったことすべてが現在に適用されたなら、それは一人ひとりの人間にとって実地的意味を伝えるでしょうか。（はい。）どのような実地的意味ですか。サタンを打ち負かすのは簡単にできることですか。人はサタンの邪悪な本性について明確な認識をもつべきですか。人はサタンの誘惑について正確に理解するべきですか。（はい。）自分自身の生活においてサタンの誘惑を経験したとき、サタンの邪悪な本性を見抜くことができたならば、あなたはサタンを打ち負かすことができますか。もしサタンの愚かさ、馬鹿らしさを知っていたとして、それでもサタンの側につき、神を攻撃しますか。もしサタンの悪意と恥知らずさが、あなたを通していかに暴露されているかを理解し、もしこれらのことを明確に認識し理解していたとして、それでもこのように神を攻撃し試しますか。（いいえ、しません。）どうしますか。（サタンに対抗し、サタンを捨て去ります。）それは簡単にできることですか。これは簡単ではなく、実行するには、人は頻繁に祈り、頻繁に神の前に出て内省しなければなりません。そして神の鍛錬、裁き、刑罰が自分の身に降りかかるようにしなければなりません。このようにすることでのみ、人はサタンの惑わしと支配から自分を解放できるのです。

サタンが言ったこれらの言葉から、サタンの本質を作り上げているものを要約していきます。第一に、サタンの本質は神の聖さとは対照的に、概して邪悪であると言えます。なぜわたしはサタンの本質は邪悪であると言うのでしょうか。この答えを得るには、サタンが人に対してすることのなりゆきを観察しなければなりません。サタンは人間を墮落させて支配し、人間はサタンの墮落した性質の下に行動し、サタンに墮落させられた人々の世界で暮らしています。人間は無意識のうちにサタンにとりつかれ同化されます。したがって、人間はサタンの本性である墮落した性質をもっています。サタンの言動のすべてに、その傲慢さを見ましたか。その偽りと悪意を見ましたか。サタンの傲慢さはおもにどのように示されますか。サタンはいつも神の地位を占めることを欲していますか。サタンはいつも神の働きと神の地位を破壊して自分のものとするのを望み、それにより人がサタンに従い、サタンを支持し、拝むようにしたいのです。これがサタンの傲慢な本性です。サタンが人を墮落させるとき、サタンは人が何をすべきか人に直接言いますか。サタンが神を試みるとき、サタンは出てきて「わたしは神を試し、神を攻撃している」と言いますか。絶対に言いません。では、サタンはどのような方法を用いますか。サタンはそそのかし、誘惑し、攻撃し、罠を仕掛け、聖書の引用さえします。サタンはその邪悪な目的を達成し、意志を叶えるために様々な方法で話し、行動します。サタンがこれを行なった後、人間に表れるものに何を見て取れますか。人も傲慢になっていませんか。人間は何千年ものあいだサタンの墮落した性質に苦しめられたので、傲慢で、欺瞞と悪意に満ちて、理知が働かなくなりました。これはすべて、サタンの本性のせいで起こりました。サタンの本性は邪悪なため、人間にこの邪悪な本性を与え、この邪悪で墮落した性質をもたらしめました。したがって、人間は墮落したサタンのような性質の下に生き、サタンのように人間も神に逆らい、神を攻撃し、神を試し、もはや神を崇拝することができず、神を敬い畏れる心をもたないほどまでになっているのです。

神の聖さについては、これは馴染みのある題目かもしれませんが、これについて話し合うにあたり、ある人にとってはやや抽象的になるかもしれませんが、また多少深遠で手が届かないかもしれません。けれど、心配することはありません。神の聖さとは何であるかを皆さんが理解できるよう、わたしが手助けします。ある人がどのような人間なのかについては、その人がすることと、その人の行動の結末を観察すれば、その人の本質を見ることができます。そのように言えますか。（はい。）それでは、まず初めに神の聖さについてこの観点から話し合しましょう。言い換えれば、サタンの本質は邪悪なので、

サタンの人間に対する行動は、とめどなく人間を墮落させてきました。サタンは邪悪なので、サタンが墮落させた人々は確実に邪悪です。そうですね。「サタンは邪悪だが、サタンが墮落させた人はおそらく聖なる人であろう」と言う人がいるのでしょうか。冗談でしょう。いったいそんなことがありえるのでしょうか。（いいえ。）サタンは邪悪であり、その邪悪には本質的な面と実質的な面が両方存在します。これはただの無意味な話ではありません。わたしたちはサタンを中傷しようとしているわけではありません。ただ、真実と現実について交わりをもっているのです。この題目の現実性について交わりをもつことは、何人かの人、あるいはなんらかの部類の人を傷つけるかもしれませんが、それに悪意はありません。おそらく皆さんはきょうこれを聞いて、少し不愉快に感じるでしょうが、近いうちに、それを認識できるようになったとき、自分を見下し、わたしがきょう話したことは自分にとって極めて有益でとても価値があることだと感じます。サタンの本質は邪悪です。それゆえに、サタンの行動の結果は必然的に邪悪であるか、少なくともサタンの邪悪と結びついていると言うことができますか。（はい。）それではサタンはどのように人間を墮落させるのでしょうか。この世において、そして人類のあいだにおいてサタンがなす悪事のうち、具体的に人に見えて人が知覚できるものはどういった面ですか。皆さんは、これまでにこのことについて考えたことがありますか。あまり考えたことがないかもしれませんから、わたしがいくつか要点を挙げてみます。サタンが提案する進化論のことは誰でも知っていますね。それは人間が研究している知識の分野の一つではありませんか。（そうです。）サタンはまず知識を用いて人間を墮落させ、独自のサタンの方法で人間に知識を与えます。そしてサタンは科学を用いて人間を墮落させ、人間の知識、科学、神秘的な物事、あるいは人々が探索してみたいと思う物事への関心を喚起します。次にサタンが人間を墮落させるのに用いるのは、伝統文化と迷信です。これに続いて、サタンは社会動向を用います。これらはすべて人々が日常生活において遭遇する物事で、すべて人々の身近にあるもので、すべてが見るもの、聞くもの、触れるもの、経験するものに関連しています。一人ひとりの人間がこれらの物事に取り囲まれながら暮らしており、逃れることも抜け出ることもできないものだと言うことができます。これらの物事に遭遇すると、人間は無力であり、ただ影響を受け、感化され、支配され、束縛されることしかできません。それらから抜け出すには人は無力なのです。

1. サタンはいかに知識を用いて人間を墮落させるか

最初に知識について話し合います。知識とは誰もが好ましいとみなすものではないで

しょうか。あるいは、少なくとも人は「知識」という言葉の言外の意味は否定的というよりは肯定的だと考えます。それではなぜ、サタンは人間を墮落させるために知識を用いるとわたしたちはここで言っているのですか。進化論は知識の一面ではありませんか。ニュートンの科学的法則は知識の一部ではありませんか。地球の引力もやはり知識の一部ですね。（はい。）それではなぜ、人類を墮落させるためにサタンが用いるものの項目のうちに知識が挙げられるのですか。皆さんはこのことをどうとらえますか。知識はその中に少しでも真理を含んでいますか。（含んでいません。）では、知識の本質は何ですか。人間が得る知識は何を基盤として習得されますか。それは進化論にもとづいていますか。人間が探究と総括から得た知識は、無神論にもとづいていませんか。この知識のうちの何かに神とのつながりがありますか。それは神を崇拝することとつながっていますか。真理とつながっていますか。（いいえ。）では、サタンはどのように知識を用いて人間を墮落させるのでしょうか。わたしはたったいま、この知識に関するもので神を崇拝することや真理につながっているものは一切ないと言いました。このことについて、「知識は真理とは何の関係ないかもしれないが、それでも人を墮落させることはない」と考える人もいます。皆さんはこれをどうとらえますか。人の幸福は人が自らの手で作り出すものだ、あなたは知識を通して教えられましたか。人間の運命は自らの手にあるとあなたは知識を通して教えられましたか。（はい。）今話しているのはどのような話ですか。（それは戯言です。）その通り！ これは戯言です！ 知識は、話し合うには複雑なものです。知識の一分野は知識以上の何ものでもないと簡単に言うことができます。それは、神を崇拝しないという状態、そして、神が万物を創造したことを理解していない状態を基盤として習得される知識の一分野です。このような知識を学ぶとき、人は神が万物を統治しているものとして見ず、神が万物を監督、管理しているものとして見ません。その代わりに人がすることは、その分野の知識をひたすら研究し、探究し、知識にもとづいた解答を求めるだけです。けれど、もし人が神を信じず、代わりにただ研究を追い求めるだけならば、決して真の解答を見つけ出すことはないということが真実ではありませんか。知識は、人がひもじい思いをしないように、生活の糧を与え、仕事を提供し、収入をもたらすだけです。しかし、それは決して人に神を崇拝させることはなく、人を悪から遠ざけることはありません。知識を学べば学ぶほど、神に反抗し、神を自分の研究対象とし、神を試し、神に逆らいたくなります。それでは今、知識が人に教えているのは何であるとわかりますか。これはすべてサタンの哲学です。サタンが墮落した人類のあいだに広めた哲学と生存の法則は、真理と何らかのつながりがありますか。真理とはまったく無関係ですし、実のところ、真理とは正反対です。人

はよく、「生きていることは動いていることである」とか「人は鉄で、米は鋼である。食事を抜くと人は空腹を感じる」などと言います。これらの言い習わしは何ですか。いずれも間違った考えで、聞くとうんざりします。人間の知識と言われるものに、サタンは自身が生きるための哲学と思想をかなり浸み込ませています。またサタンはそうしつつ、人間にサタンの思想、哲学、観点を取り入れさせて、人間が神の存在を否定し、万物と人間の運命への神の支配を否定するようにしむけようとしています。だから、人間の勉強が進み、より多くの知識を把握するにつれ、神の存在が曖昧になるのを感じ、もはや神が存在することさえ感じなくなるかもしれません。サタンが人間の頭脳に観点、観念、思想を追加する、この過程で人間は墮落させられるのではありませんか。（そうです。）今日の人間の生活の基盤は何ですか。人間は本当にその知識の基盤の上に生活していますか。いいえ。人間はその知識に隠されたサタンの思想、見解、哲学を自らの生活の基盤としています。サタンによる人間の墮落の核心はここから生じています。これがサタンの目的であり、人間を墮落させる方法なのです。

初めに、知識の最も表面的な部分について話し合います。語学の文法や単語は人を墮落させることができますか。単語が人を墮落させられますか。（できません。）単語は人を墮落させません。それらは人が話すために使う道具であり、人が神と交わるのに用いる道具でもあり、現在では言うまでもなく、言語と言葉は神が人と交わる方法です。それらは道具であり、必要なものです。 $1 + 1 = 2$ 、 $2 \times 2 = 4$ 、これは知識ですね。でも、これが人を墮落させる可能性はありますか。これは常識であり規則ですから、人を墮落させることはありません。では、どのような知識が人を墮落させるのでしょうか。墮落させる知識とは、サタンの観点と思想が混ざり込んだ知識です。サタンはこれらの観点や思想を、知識を通して人類に教え込ませようとしています。例えば、論文において、そこに書かれた語句に問題はありません。問題は、著者が論文を書いたときの観点と意図、そして著者の思想の内容にあります。これらは霊的な物事であり、人を墮落させることができます。例えば、もしテレビ番組を観ていたとして、その中のどのようなことが人の見解を変え得るでしょうか。出演者が言ったこと、その台詞そのものが人を墮落させる可能性はありますか。（いいえ。）どのようなことが人を墮落させるのでしょうか。それはおそらく番組の核心的な思想と内容で、ディレクターの見解を反映しているものでしょう。それらの見解に込められた情報が人々の心と頭脳を揺さぶるかもしれません。そうではありませんか。さて、サタンが知識を用いて人を墮落させる話において、皆さんはわたしが何を指しているのかわかっています。皆さんは誤解しないでしょう

ね。では、次回小説か論文を読むとき、書かれている言葉に表現されている思想が人類を墮落させるか否か、人類に貢献するか否かを判断することができますか。（はい、ある程度はできます。）これはゆっくり学習し経験しなければならないことで、ただちに容易に理解するものではありません。例えば、ある分野の知識を研究したり学習したりするとき、その知識の肯定的な側面が、その分野の常識を理解する手助けとなり、また同時に、人が避けるべき事柄をあなたがわかるようにする場合があります。例として「電気」を取り上げましょう。これは知識の一分野ですね。電気は人を感電させて傷つけることがあると知らなかったなら、あなたは無知だということになりませんか。けれど、一旦この分野の知識を理解すれば、不注意に電気の流れている物に触れることがなくなり、電気の使い方を覚えます。これらはどちらも肯定的なことです。知識がいかにして人を墮落させるかについて、わたしたちが何を話し合っているか明確にわかっていますか。この世において学習される知識には多くの種類があり、それらを皆さんが自分で区別するには時間をかけなければならないのです。

2. サタンはいかに科学を用いて人間を墮落させるか

科学とは何ですか。一人ひとりの人間の考えにおいて、科学は高い威信のあるもので、深いものとみなされていませんか。科学と言うと、「それは一般人の理解を超えたものであり、科学の研究者か専門家だけが触れることのできる話題だ。我々のような一般人とは何の関係もない」と人は感じませんか。一般人と科学は何らかの関わりがありますか。（あります。）サタンはいかに科学を用いて人間を墮落させますか。ここでは、人々が生活において頻繁に遭遇する物事のみ話し合い、それ以外のことは度外視します。「遺伝子」という言葉があります。皆さんは聞いたことがありますか。この用語は皆さん、よく知っていますね。遺伝子は科学を通して発見されたのではなかったですか。人にとって遺伝子とはいったい何を意味しますか。遺伝子は、人体とは神秘的なものだと人に感じさせませんか。この題目を持ち出されると、一部の人々、中でも好奇心の強い人たちは、もっと知りたい、もっと詳細が欲しいと思うのではないのでしょうか。こうした好奇心の強い人たちは、この主題に全力を注ぎ、他にすることがないときに書籍やインターネットで情報を探し、さらに詳しく学ぼうとします。科学とは何ですか。単純明快に言うと、科学とは人間が好奇心をもっている物事、神から人間に向けて語られていない未知の物事に関する思想と理論です。科学とは、人間が探究したいと思う神秘に関する思想と理論です。科学の範囲とは何ですか。それは幅広いと言えるでしょう。人間は興味を抱いたすべての物事を調査し、研究します。科学とは、そうした物事の細目

や法則を研究し、あらゆる人が納得するだけの妥当な理論を発表することを意味します。「この科学者たちは本当にすばらしい！よく知っていて、これらの事柄を理解するだけの十分な知識をもっている！」と誰もが思うのです。人々は科学者に大いに感服していますね。科学を研究する人々は、どのような見解をもっていますか。彼らは宇宙を研究し、自分の関心のある分野における神秘的な物事を研究したいのではありませんか。その最終的な成果は何ですか。科学の中には、人が推測により結論を導き出す分野もあれば、人の経験を基にして結論を出す分野もあります。さらに、歴史的観察や背景の考察により結論を導き出す分野もあります。そうではないですか。それでは、科学は人のために何をしますか。科学が人にするのは、物質的世界において対象物を見ることができるようになることだけで、単に人間の好奇心を満たすに過ぎず、神が万物を支配している法則を見せてはくれません。人間は科学に解答を見出しているようですが、その解答は不可解で、一時的な満足感をもたらすに過ぎず、その満足感人間の心を物質的世界に閉じ込めることにしか役立ちません。人間は科学に解答を見出したと感じているので、どのような問題が起きようとも、科学的見解を基盤としてその問題を証明し、受け入れようとしします。人間は、心が科学に取り憑かれて魅了されるあまり、もはや神を知り、神を拝む心、万物は神からもたらされていると信じ、解答を得るには人は神に目を向けるべきであると信じる心をもたないまになります。そうではありませんか。科学を信じれば信じるほど人は愚かになり、何事にも科学的な解決策があり、研究によって何もかも解決できると信じるのです。人は神を求めず、神の存在を信じません。長年神に従ってきた人でさえ、気まぐれに細菌の研究を始めたり、問題の答えを求めて情報を調べたりします。このような人は、問題を真理の視点から検討せず、ほとんどの場合、科学的な見解や知識、あるいは科学的な解決策に頼って問題を解決しようとししますが、神に頼らず、神を求めません。このような人の心に神は存在しますか。（存在しません。）科学に携わるのと同じ方法で神について研究したがる人さえいます。例えば、箱舟がたどり着いた山に行った宗教専門家が多数いて、彼らはそれによって箱船の存在を証明しました。しかし箱舟の外観に神の存在を見ないのです。彼らはただ物語と歴史を信じます。それが彼らの物質的世界に関する科学的研究の結果です。物質的なものを研究しても、それが微生物学であれ、天文学であれ、地理学であれ、神が存在する、あるいは神が万物を統治するということを明らかにする結果を見つけることは決してありません。では、科学は人に何をしますか。科学は人間を神から遠ざけるのではありませんか。科学は人が神を研究対象とするようにしていませんか。科学は神の存在について人をますます疑い深くしているのではないですか。（そうです。）では、サタンは人

間を墮落させるためにどのように科学を用いたのですか。サタンは科学的結論を用いて人を騙し麻痺させ、曖昧な解答を用いて人の心をしっかり捕まえて、人が神の存在を追求したり信じたりしないようにしたいのではありませんか。（その通りです。）それゆえに、科学はサタンが人を墮落させる方法の一つであるとわたしは言うのです。

3. サタンはいかに伝統文化を用いて人間を墮落させるか

伝統文化の一部とみなされるものは多くありますか。（はい。）この「伝統文化」とは何を意味しますか。祖先から伝えられたものだと言う人がいますが、これは伝統文化の一面です。当初から、生活様式、習慣、言い伝え、規則は、家族、民族集団、さらには全人類のあいだでさえも伝えられてきており、それは教え込まれて思想の中に染み込んでいます。人はそれら自体が生命であるかのように見て、それを自分の生活の一部として欠かせないものであり、規則であると考えています。実際、それらは祖先から伝えられたものなので、人はこれらを変えたり捨てたりしたくないと思っています。伝統文化には他の側面もあります。例えば、孔子や孟子から伝えられたものや、中国の道教や儒教から教えられたものなどで、それらは人の骨の髄まで浸透しています。そうですね。伝統文化にはどのようなものがありますか。人々が祝う祭日がありますね。例えば、春節や元宵節、清明節、端午節、それに中元節や中秋節。老人がある年齢に達するのを祝ったり、子供が生まれてから一ヶ月あるいは百日経つと祝ったりする家庭さえあります。まだ他にもありますが、これらは皆、伝統的な祭日です。これらの祭日の根底には伝統文化が存在しませんか。伝統文化の核心は何ですか。それは神を礼拝することと何か関係がありますか。人に真理を実践するように言うことと何か関係がありますか。人が神に犠牲を捧げ、神の祭壇へ行き神の教えを受けるための祭日はありますか。そのような祭日はありますか。（ありません。）祭日に人々は何をしますか。現代では、祭日は食べて、飲んで、楽しむための機会とみなされています。伝統文化の根底にある源泉は何ですか。伝統文化は誰からもたらされていますか。（サタンです。）それはサタンからもたらされています。これらの伝統文化の陰で、サタンは人間に物事を教え込みます。それはどのようなことですか。人々が自分たちの祖先を忘れないようにすること、これはその一つですか。例えば、清明節のあいだ、人々は墓をきれいに整えて祖先に供え物を捧げます。自分たちの祖先を忘れないようにするためです。また、サタンは人々が愛国心を確実に忘れないようにしますが、端午節などはその一例です。中秋節はどのようなものですか。（家族の再会です。）家族の再会の背景は何ですか。その理由は何ですか。それは情緒的に意思疎通してつながるためです。もちろん、旧正月を祝うので

あれ元宵節を祝うのであれ、こうした祝祭の背景にある理由の説明には何通りもの方法があります。これらの背後にある理由をどのように説明するにしろ、一つひとつはサタンがその哲学と思想を人間に教え込む方法であり、その結果、人々は神から離れたままで、神がいることを知らず、祖先かサタンに捧げ物をするようになるか、肉の欲望のために飲み食いし楽しむようになるのです。これらの祭日の一つひとつが祝われるにつれ、サタンの思想と見解が人々の知らないうちにその精神の中に深く植え付けられます。人が四十代、五十代、あるいはもっと高齢になるとときには、サタンのこれらの思想や観点は既に心に深く根付いています。さらに、人はこれらの思想を、正しかろうが間違っていようが、次世代へ見境なく、率直に伝えようと懸命になります。そうですね。（はい。）伝統文化とこれらの祭日は人をどのように墮落させますか。知っていますか。（人はそれら伝統の規則に制約され束縛されるようになり、そのため神様を求める時間もエネルギーもなくなります。）これが一つの側面です。例えば、誰もが旧正月を祝います。もし祝わなかったなら、悲しく感じるのではないですか。何か心の中にしまっている禁忌はありますか。「わたしは旧正月を祝わなかった。旧正月のこの日は悪い日だったし、今年の残りすべてが悪い日になるのだろうか」と感じないでしょうか。落ち着かなく、少し怖くなりませんか。何年ものあいだ祖先に供え物を捧げず、ある日突然故人が金銭を要求する夢を見る人々さえいます。彼らは何を感じるのでしょうか。「この故人がお金を必要としているとは、何て悲しいことだ。この人のために紙銭を何枚か焼いてあげよう。そうしないのは良くない。お金を焼かなかったら、生きている我々が何かトラブルに遭遇するかもしれない。災難にいつ襲われるか、誰にわかるというのだ」。人々は、心の中に恐れと心配の小さな雲を常に抱えているのです。この心配を人々にもたらすのは誰ですか。（サタンです。）サタンがこの心配の根源です。これはサタンが人間を墮落させる方法の一つではありませんか。サタンは様々な方法と口実を用いて人間を支配し、脅迫し、束縛し、その結果、人間は茫然として、屈して、サタンに従います。こうしてサタンは人間を墮落させるのです。人が弱っているときや状況を完全に認識していないとき、うっかり何かを間抜けなやり方でする、つまり、意図せずサタンの腕の中に落ち、無意識に行動し、何かをしてしまいながらも、自分が何をしているのかわかっていないということがよくあります。これはサタンが人間を墮落させる方法です。現在、深く根ざした伝統文化から離れたがらない人さえ数多くいます。彼らはどうしてもそれを捨てられないのです。人は特に弱く受け身になっているときに、これらのような祭日を祝い、サタンに出会い、サタンを再び満足させることを望みます。それを通して自らの心を慰めるためです。伝統文化の背景は何ですか。サタンの黒い手が陰で糸

を引いているのですか。サタンの邪悪な本性が物事を操り、支配しているのですか。サタンはこのようなことのすべてに影響を与えているのですか。（はい。）人が伝統文化の中で生活し、このような伝統的な祭日を祝う時、それは人がサタンに騙され、墮落させられる環境であり、さらに、人はサタンに騙されて墮落させられるのがうれしいのだと言えるのでしょうか。（はい。）これは、皆さん全員が認識し、知っていることです。

4. サタンはいかに迷信を用いて人間を墮落させるか

皆さんは「迷信」という言葉をよく知っていますね。迷信と伝統文化には接点が幾つかありますが、きょうはそれらについては話し合いません。その代わりに、迷信のうち最も一般的に遭遇することについて話します。つまり、易断、運勢占い、焼香、仏陀の崇拝です。易断をする人や、仏陀を崇拝して焼香する人もいれば、運勢を占ってもらったり顔の特徴にもとづいて自分の運勢を占ってもらったりする人がいます。皆さんの中に運勢占いや人相占いを受けたことのある人は何人いますか。これはほとんどの人が関心のあることですね。（はい。）それはなぜですか。運勢占いや易断から人はどのような恩恵を受けますか。そこから人はどのような満足を得ますか。（好奇心です。）それは好奇心だけですか。わたしの考えでは、必ずしも好奇心とは限りません。易断や占いの目的は何ですか。なぜ行なわれるのですか。それは将来を知るためではないのですか。将来を予見するために人相を読んでもらう人もいれば、幸運に恵まれるか否かを知るためにそれをする人もいます。自分の結婚がどのようなものになるかを知るためにする人もいますし、その年がどのような運勢をもたらすかを知るためにする人もいます。人相を読んでもらって、自分や自分の息子や娘の展望がどうなるかを知ろうとする人もいれば、どれくらい金銭を儲けるかを予見してもらい、どのような行動をとるべきかの指導を受けるために占いをする実業家もいます。これはただ好奇心を満たすためですか。人が人相を読んでもらったり、その類のことをしたりするとき、それは自分の将来の個人的恩恵のためです。人はこのようなことがすべて自分自身の運命と密接に関係していると信じています。この中に有益なことはありますか。（いいえ。）なぜ有益でないのですか。そのようなことについて少し認識を得るのは良いことではありませんか。これを実践することで、いつ災いが起きるのかを知ることができ、こうした災いについて事前にわかっていれば、災いを避けられますね。運勢を占ってもらえば、迷路の中から正しい道を見つける手掛かりとなるかもしれませんし、その結果、その年は良い年となり、事業で大きな富を成せるかもしれません。これは有益ですか。それが有益かどうかは

わたしたちに無関係であり、きょうの交わりではその話題は取り上げません。サタンはいかに迷信を用いて人間を墮落させますか。人は誰しも自分の運命を知りたがるので、サタンは彼らの好奇心を利用して誘惑します。人々は易断や占い、あるいは人相見によって、自分に将来何が起きるかや、自分の前途はどのようなものかを知ろうとします。しかし最終的に、人々がこれほど気にしている運命や将来の見通しは、誰の掌中にありますか。（神様の掌中です。）これらのことはすべて神の掌中にあります。これらの方法を用いて、サタンは人に何を知らせたいのですか。サタンは人相占いや運勢占いをを用いて、サタンが人のこの先の運勢を知っているということ、サタンがそれを知っているだけでなく支配しているということを人に伝えたいのです。サタンはこの機会をとらえ、それらの方法を用いて人を支配し、人がサタンを盲信しサタンのすべての言葉に従うようにしたいのです。例えば、もしあなたが人相占いをしてもらい、占い師が目を閉じて過去数十年間にあなたに起きたことをすべて明確に述べたら、内心どのように思いますか。「とても正確だ。わたしの過去についてこれまで誰にも話したことがないのに、どうやって知ったのだろう。この占い師には本当に感心する！」と直ちに感じるでしょう。サタンにとって、あなたの過去を知るのは、それほど困難なことではありませんね。神はきょうまであなたを導いてきました。そして、その間ずっとサタンは人を墮落させ、あなたをつけ回してきました。あなたの数十年の流れはサタンにとって何でもなく、サタンがそれらの物事を知るのは困難ではありません。サタンが言ったことが正確だと知ると、あなたはサタンに心を委ねるのではありませんか。将来や運勢を掌握するために、サタンの支配に依存していませんか。一瞬のうちに、あなたの心はサタンへの尊敬や畏敬を覚え、人によっては、この時点で既に魂をサタンにひつつかまれているかもしれない。そしてあなたは直ちに占い師に、「次は何をすべきですか。来年は何を避けるべきですか。してはならないことは何ですか」と尋ねるのです。すると占い師は、「そこへ行ってはならない、それをしてはならない、何色の服を着るな、どこそこへ行くな、これこれをもっとすべきだ……」と言うのです。あなたは占い師の言うことをすべて即座に心に刻むのではないのでしょうか。それらを神の言葉よりも早く記憶するでしょう。なぜそれほど早く記憶するのでしょうか。サタンに依存して幸運を得たいからです。このときにサタンがあなたの心を掴むのではないのでしょうか。サタンの言葉が予言通りに相次いで実現すると、あなたは来年の運勢はどうなるのかを知るためにサタンのところにすぐに戻りたくなるのではないのでしょうか。（その通りです。）あなたはサタンがせよと言うことは何でも行ない、サタンが避けよと言うものを避けます。こうしてサタンの言うことすべてに従っているのではないのですか。たちまち、あなたはサタン

の手中に落ち、迷わされ、支配されます。これは、サタンの言うことは真実であると感じるから、サタンがあなたの過去の人生、現在の人生、将来がどうなるかを知っていると信じるから起こるのです。これが人を支配するためにサタンが用いる方法です。けれど現実には、本当に支配しているのは誰ですか。それは神自身であり、サタンではありません。サタンはの場合ただその巧みな策略を用いて無知な人、物質的世界しか見ない人を騙し、サタンを信じて依存するように仕向けているのです。このようにして、人はサタンの掌中に陥り、その言葉すべてに従います。しかし、人が神を信じ、神に従うことを望むとき、サタンは手を緩めるでしょうか。サタンは手を緩めません。この状況において、人は本当にサタンの掌中に陥っていますか。（はい。）これに関するサタンの振る舞いは恥知らずだと言うことができますか。（はい。）なぜそう言うのですか。それらは詐欺的で人を騙す戦術だからです。サタンは恥知らずで、サタンが人の何もかもを支配し、その運命を支配しているのだと信じ込ませます。これにより、無知な人は完全にサタンに従うようになります。そうした人は二言三言で騙されます。人は茫然としてサタンにひれ伏すのです。では、サタンは人にサタンを信じさせるためにどのような方法を用い、どのような言葉を言いますか。例えば、あなたはサタンに自分の家族の人数を言っていないかもしれませんが、それでもサタンはあなたの家族の人数と、両親と子どもの年齢を伝えるかも知れませんが、最初サタンを疑い、不信を抱いていたかも知れませんが、それを聞くとサタンのことを少し信用できると感じるのではありませんか。するとサタンは、最近、あなたの仕事はどれほど大変だったとか、上司はあなたが受けるに値する評価を与えず、いつもあなたの不利になるようなことをしているなどと言うかも知れませんが、これを聞くと、あなたは「まさにその通り。職場での状況は順調じゃない」と思います。それで、サタンをさらにもう少し信じます。するとサタンは別の事を言ってあなたを惑わし、さらにサタンを信じさせます。少しずつ、あなたは自分がサタンに抵抗したり、疑ったりすることができないことに気づきます。サタンは些細な策略や、ちょっとしたたくらみを数回用いるだけで、あなたを混乱させます。混乱させられるにつれて、あなたは自分の方向を確立することができなくなり、何をすべきか途方に暮れて、サタンの言うことに従い始めます。これが人を墮落させるためにサタンが用いる「なんとも見事な」方法であり、あなたはそのせいで知らないうちにサタンの罠に陥り、誘惑されるのです。サタンは人が良いと想像することをいくつか言い、何をすべきか、何を避けるべきかをあなたに伝えます。このようにしてあなたは知らないうちに騙されるのです。ひとたびそこに陥ると、あなたにとって物事が厄介になります。サタンが言ったこと、サタンがせよと言ったことを常に考え、気付かぬうちにサタン

に取りつかれます。これはなぜですか。それは人には真理が欠如しているため、サタンの誘惑に対して自分の立場を貫くことができないからです。サタンの邪悪と虚偽、狡猾さ、悪意に対して、人類はとても無知で、未熟で、弱いのです。そうですね。これはサタンが人間を墮落させる方法の一つではありませんか。（そうです。）人間は知らないうちに、少しずつ、サタンの様々な方法により騙され、欺かれます。人間には肯定的なものと否定的なものを区別する能力が欠如しているからです。人間にはこの霊的背丈、サタンに打ち勝つ能力が欠如しているのです。

5. サタンはいかに社会動向を用いて人間を墮落させるか

社会動向が存在するに至ったのはいつですか。それは現代においてのみ起こった現象ですか。社会動向はサタンが人間を墮落させ始めたときに生まれたと言えます。社会動向にはどのようなものがありますか。（服装や化粧のスタイル。）これは人がよく接することです。服装のスタイル、ファッション、流行、それは小さな側面です。他にも何かありますか。人がよく生み出す一般的な格言も数に入りますか。人が望む生活様式も入りますか。人々が好む音楽のスター、有名人、雑誌、小説は数に入りますか。（はい。）皆さんの考えでは、これらの社会動向のどの側面が人間を墮落し得ると思いますか。これらの社会動向で、皆さんにとって最も魅力的なのはどれですか。「我々はもう五十代、六十代、七十代、八十代で、ある程度の年齢に達しているので、そのような流行には合わないし、それほど興味はない」と言う人がいます。これは正しいですか。「我々は有名人を追いかけてたりしない。それは二十代の若者のすることだ。流行の服も着ないし、それは外見を重視する人たちのすることだ」と言う人もいます。では、これらのうちで人を墮落し得るのは何ですか。（一般的な格言です。）こうした格言は人を墮落させるでしょうか。一つ例を挙げます。それが人を墮落させるか否かがわかります。「地獄の沙汰も金次第」。これは社会動向ですか。これは、皆さんが挙げたファッションや美食の社会動向と比較すると、もっと悪いものではありませんか。「地獄の沙汰も金次第」はサタンの哲学であり、人類全体に、あらゆる人間社会に蔓延しています。この格言は人間一人ひとりの心に染み込んでいるので、社会動向であると言えます。当初、人はこの格言を受け入れていなかったのですが、やがて現実の人生に触れたとき、それを暗黙のうちに受け入れるようになり、これらの言葉は実は本当だと感じるようになりました。これは、サタンが人間を墮落させる手順ではありませんか。おそらく人々はこの格言を同等に理解しておらず、自分の周辺で起きたことや個人的な経験もとづいて、一人ひとりがこの格言について異なる程度の解釈と認識をもっています。

これは事実ですね。この格言について、ある人がどれほどの経験をしているかを問わず、これがある人の心に及ぼし得る否定的な影響とはどのようなものですか。皆さん一人ひとりを含め、この世にいる人々の人間的性質を通して明らかに示されるものがあります。この明らかに示されるものをどのように解釈しますか。それは金銭崇拜です。それをある人の心から排除するのは困難ですか。極めて困難です！ サタンによる人間を墮落させる方法は実に悪賢いようです。サタンがこの社会動向を用いて人を墮落させた後、それは人にどのように表れますか。皆さんはお金がなくてはこの世で生き延びられない、一日でさえもお金なしでは過ごせないと感じませんか。人の地位はその人がどれだけお金をもっているかに基づいており、それは人が受ける尊敬の念についても同じです。貧しい人々は恥じて背を丸め、その一方で富裕な人々は高い地位を享受しています。彼らは胸を張って威張り、大きな声で話し、傲慢に暮らします。この格言と社会動向は人に何をもたらしますか。多くの人がお金を求めて何らかの犠牲を払っているというのが真実ではありませんか。より多くのお金を求めて自分の尊厳や高潔さを犠牲にしていますか。しかも、お金のために、自らの本分を尽くして神に従う機会を失っていませんか。これは人にとって損失ではありませんか。（損失です。）この方法と格言を用いて人間をここまで墮落させるサタンは邪悪ではありませんか。これは悪意に満ちた策略ではありませんか。この流布している格言に反対する状態から最終的にそれを真理として受け入れる状態へと進むにつれて、人の心は完全にサタンの掌中に落ち、そのため気付かないうちにこの格言によって生きるようになります。この格言は、どの程度あなたに悪影響を及ぼしましたか。あなたは真の道を知り、真理を知っているかもしれませんが、それを追求するには無力なのです。あなたは神の言葉が真理であることを明確に知っているかも知れませんが、真理を得るために代償を払う気も、苦しむ気もありません。それよりは、自分自身の将来と運命を犠牲にして、最後の最後まで神に逆らう方が良いと思うのです。神が何を言おうと、神が何をしようと、あなたへの神の愛が深く偉大であることをどれほど理解していようと、あなたは頑なに我が道を歩くことに固執し、この格言のために代償を払うのです。つまり、この格言は既にあなたの行動や思想を支配しており、あなたはそれをすべて放棄するよりも、むしろそれに自分の運命を支配されることを望んでいるのです。人がこのように行動し、この格言に支配され、操られているという事実は、サタンによる人間を墮落させる方法が影響しているということを示していませんか。これはあなたの心に根付いているサタンの哲学と墮落した性質ではありませんか。もしあなたがそれをする、サタンはその目的を達成したことになりますか。（なります。）サタンがこのように人間を墮落させてきたことが見えますか。感

じることができますか。（いいえ。）あなたはそれを見も感じもしなかったのです。ここにサタンの邪悪が見えますか。サタンはあらゆる時にあらゆる場所で人間を墮落させます。サタンは人間がこの墮落に対して防御することを不可能にし、それに対して人間を無力にさせます。あなたがうっかりしていたり、自分に何が起きているかを認識していなかったりする状況において、サタンはその思想、観点、サタンに由来する邪悪な物事をあなたに受け入れさせます。人はそれらをすっかり受け入れ、それに異議を唱えることもありません。それらを宝のように大切に抱えてすがりつき、それらが自分を操り、もてあそぶにまかせます。このようにしてサタンによる人間の墮落はますます深刻になるのです。

サタンはこれらいくつかの方法を用いて人間を墮落させます。人間には知識と、何らかの科学的原理に関する理解があり、伝統文化の影響下に生きており、一人ひとりが伝統文化の継承者にして伝達者です。人間はサタンから与えられた伝統文化を継承するように縛られており、またサタンが人類に提供する社会動向に順応して行動します。人間はサタンから切り離すことができず、サタンのすることすべてに常に順応し、その邪悪、虚偽、悪意、傲慢さを受け入れます。サタンのこれらの性質を身に付けるようになった人間は、この墮落した人類のあいだで幸せに暮らしていますか、それとも悲しんでいますか。（悲しんでいます。）なぜそう言うのですか。（人間はそれらの墮落した物事に束縛され、操られ、罪のうちに生き、つらい苦闘に呑み込まれているからです。）眼鏡をかけて聡明そうな外観をしている人がいます。その人はとても立派に語り、その話は雄弁で筋が通っていて、また多くの物事を経てきたので、とても経験豊かで洗練されているかもしれません。その人は大小様々な事柄について詳細に話すことができ、物事の信憑性や理由を評価できるかもしれません。ある人は、こうした人たちの行動や外観を見て、またその人の性格、人間性、あるいは振る舞いなどを見て、その人に一切欠点を見出さないかもしれません。このような人は現代の社会動向にひととき順応することができます。その人が歳をとっていても、決して時代の動向に遅れることなく、歳をとりすぎていて学べないということは一切ありません。表面的には誰もそのような人に欠点を見つけることができませんが、内面はサタンによって完全に徹底的に墮落させられています。そうした人は、外面的には何の欠点も見つからず、表面的には上品で洗練され、知識があり、ある程度の道徳性も備えています。高潔で、知識の面においては若者に劣るところがありません。けれど、本性と本質に関しては、この人はサタンの完全な生ける模型で、サタンの生き写しです。これはサタンによる人間を墮落させる方法が「

実を結んだ」ということです。わたしが言ったことは、皆さんにとっては辛いことかも知れませんが、これはすべて本当です。人間が学習する知識、理解する科学、社会動向に適合するために選ぶ手段は、例外なくサタンが人間を墮落させるのに使う道具なのです。これは絶対的な真実です。したがって、人間はサタンにより完全に墮落させられた性質の中に生き、神の聖さとは何なのか、あるいは神の本質とは何なのかを知る術を一切もちません。なぜなら、表面的にはサタンが人間を墮落させる方法に欠点を見つけることはできず、ある人の振る舞いから何かが不適切だと判断することはできないからです。人は一人ひとり、普通に働き普通の生活を送り、普通に書籍や新聞を読み、普通に学習し話します。中には多少の道徳を学び、話に優れ、ものわかりがよくて親しみやすく、役に立ち、寛大で、つまらない喧嘩を売ったり、人を利用したりしない人もいます。けれど、その人のサタンのな墮落した性質は内面に深く根付いており、その本質は外部的な努力に頼って変えることはできません。この本質ゆえに、人間は神の聖さを知ることができず、また神の聖なる本質が人間に向けて開示されているにもかかわらず、人間はそれを真剣にとらえません。これは、様々な手段を通してサタンが既に人間の思いや考え、観点、思想を完全に占有しているからです。この占有と墮落は一時的なものでも偶発的なものでもなく、いたるところに常に存在します。したがって、神を三、四年、あるいは五、六年も信じながら、サタンに吹き込まれた思想、観点、論理、および哲学に、まるで宝を握りしめるように固執し、それらを手放せない人が多数いるのです。人間はサタンの本性からもたらされる邪悪で傲慢で悪意に満ちたものを受け入れたため、必ずや人間関係において対立、論争、不和が頻繁に起こります。それらはサタンの傲慢な本性の所産として生じているのです。もしサタンが人類に肯定的なものを与えていたなら、例えばもし人間が受け入れた伝統文化の儒教や道教が良いものであるなら、それらを受け入れた後、同じ種類の間同士は互いに仲良くやっていけるはずです。ではなぜ同じ物事を受け入れた人々のあいだにそれほどの大きな分裂があるのですか。なぜですか。それは、それらの物事はサタンからもたらされ、サタンが人々のあいだに分裂を生み出すからです。サタンが提供する物事は、それらがいかに表面的には立派で偉大に見えたとしても、人間にもたらし、人間の生活に生み出すものは傲慢さのみであり、それはサタンの邪悪な本性による虚偽でしかありません。そうではありませんか。自分自身の正体を隠すことができる人、豊かな知識をもつ人、あるいは育ちの良い人は、自分の墮落したサタンのな性質を隠すのにやはり苦労するでしょう。つまり、こうした人がどれほど多くの方法で自分を覆い隠しても、あるいはあなたがその人のことを聖人だ、完璧だ、あるいは天使だと思ったとしても、その人のことをどれほど純粋だと思った

としても、その人の生活は陰ではどのようなものでしょうか。その人の性質が明らかにされると、どのような本質が見えるのでしょうか。疑いなく、サタンの邪悪な本性が見えるでしょう。そう言うことができますか。（はい。）例えば、誰か親しい知人がいて、あなたはこの人のことを善人だと思っており、あるいは偶像化していたとします。現在のあなたの霊的背丈において、その人のことをどう思いますか。まず、あなたはどのような人に人間性があるか否か、誠実か、人々に対して真の愛があるか、その人の言動は他の人のためになり助けになるかを観察します。（その人にそういう部分はありません。）こうした人が示している親切、愛、あるいは善と言われるものとは何ですか。それはすべて偽物で、見せかけです。この見せかけの陰には、隠された邪悪な目的があります。それは、その人が愛され、偶像化されることです。皆さんにはこのことがはっきり見えますか。（はい。）

サタンが人を墮落させるために用いる方法は人類に何をもたらしますか。それに何か肯定的なものはありますか。まず、人間は善と悪を区別できますか。この世において、それが有名人であれ偉人であれ、あるいは何らかの雑誌であれその他の出版物であれ、人々が何かの善悪や正誤を判定する際に用いる基準は正確だと言えるですか。出来事や人々に関する彼らの評価は公正ですか。そこに真理がありますか。この世、人間は、真理の基準にもとづいて肯定的なものと否定的なものを評価しますか。（いいえ。）なぜ人にはその能力がないのですか。人は大量の知識を習得し、科学について多くを知っているゆえに、偉大な能力を備えているのではないのですか。なぜ人は肯定的なものと否定的なものを区別できないのですか。これはなぜですか。（人は真理を備えていないからです。科学や知識は真理ではありません。）サタンが人間にもたらすものはすべて邪悪で、墮落であり、それには真理、いのち、道が欠如しています。サタンが人間にもたらす邪悪と墮落をもってすると、サタンには愛があると言うことができますか。人間には愛があると言うことができますか。「あなたは間違っている。貧しい人やホームレスの人を助ける人が世界中に大勢いる。彼らは良い人ではないのか。また、良い取り組みを行なう慈善団体もあり、それらの団体がしていることは善行ではないのか」と言う人もいることでしょう。では、これに対して何と言いますか。サタンは様々な方法や理論を用いて人間を墮落させます。この人間の墮落は曖昧な概念ですか。いいえ、曖昧ではありません。サタンは実践的なことも行ない、この世界と社会において、何らかの観点や理論を提唱します。各王朝、各時代において、サタンは理論を提唱し、人間に思想を教え込みます。それらの思想や理論は、徐々に人の心に根付き、人はその理論や思想に

基づいて生きるようになります。いったんそれらのものによって生き始めると、人は知らず知らずのうちにサタンになるのではありませんか。そうすると人はサタンと一体になりませんか。人がサタンと一体になったとき、最後には人の神への態度はどのようなものになっていますか。それはサタンの神への態度と同じではありませんか。誰もこれをあえて認めようとしませんね。これはとても恐ろしいことです。なぜわたしはサタンの本性は邪悪だと言うのですか。何の根拠もなく、サタンが邪悪だと言っているのではありません。サタンの本性はサタンが行なったことと明示した物事に基づいて判断され、分析されています。もしわたしがただサタンは邪悪だと言ったなら、皆さんはどう思いますか。皆さんは、「サタンは明らかに邪悪だ」と思うでしょう。そこで、わたしは質問します。「サタンのこういった面が邪悪ですか」。もし「サタンが神に抵抗することが邪悪だ」と返答しても、まだ明確に話していることにはなりません。今、わたしたちはこのように詳細について話しました。皆さんはサタンの邪悪の本質の具体的な内容について理解しましたか。（はい。）サタンの邪悪な本性をはっきり見ることができるなら、自分自身の状態も見えるようになります。これら両者に何らかのつながりがありますか。それは皆さんの役に立ちますか、それとも役立ちませんか。（役に立ちます。）わたしが神の聖なる本質について説教するとき、サタンの邪悪な本質について話すことは必要ですか。これについて皆さんの意見はどうですか。（はい、必要です。）なぜですか。（サタンの邪悪は、神様の聖さをはっきりと浮き彫りにするからです。）そうですか。サタンの邪悪なしには、人は神が聖なるものであるということを知ることはないという意味において、それは部分的に正しいです。正しいですが、もし神の聖さはサタンの邪悪との対比においてのみ存在すると言うと、それは正しいですか。この弁証的な考え方は誤りです。神の聖さは神に内在する本質です。神はそれを神の業を通して明らかにしますが、それはやはり神の本質の自然な表現であり、神に内在する本質です。それは常に存在し続けてきた、神自身に内在している固有のものです。人間は見ることができません。なぜなら人間はサタンの墮落した性質の只中でサタンの影響下に生き、聖さについて知らず、ましてや神の聖さの具体的な内容について知るよしもないからです。それでは、わたしたちがまず最初にサタンの邪悪な本質について交わりをもつのは必要ですか。（はい、必要です。）「あなたは神自身について説教しているのに、なぜいつもサタンがいかに人間を墮落させ、サタンの本性がいかに邪悪であるかについて話すのか」と、疑念を表明する人がいるかもしれません。今、皆さんはこのような疑念を払拭しましたね。人は、サタンの邪悪を識別し、その正確な定義をもち、邪悪の具体的な内容と明示をはっきりと見て、邪悪の源と本質を明確に理解してはじめて、神の聖

さについての話し合いを通して、神の聖さとは何か、聖さとは何かについてはっきりと理解、あるいは認識することができます。もしわたしがサタンの邪悪について話さないなら、人々が社会や人々のあいだで行なうこと、或いはこの世に存在する何かを、聖さと関係するものと誤解する人がいるでしょう。そのような見方は間違いではありませんか。（間違いです。）

このように、わたしはサタンの本質について話してきました。皆さんは、ここ数年の自分の経験、神の言葉を読むこと、神の働きを経験すること、それらを通して、神の聖さについてどのような理解を得ましたか。それについて話してごらんなさい。聞こえの良い言葉を使う必要はないので、ただ自分自身の経験から話してください。神の聖さは神の愛だけで成り立っていますか。わたしたちが聖さと形容するのは単に神の愛ですか。それではあまりに一面的です。そうですね。神の愛の他に、神の本質には他の側面がありますか。皆さんは見たことがありますか。（あります。神様は祭礼や祭日、慣習、迷信を嫌悪されます。これも神様の聖さです。）それは、神は聖なるものなのでそれらの物事を嫌悪する、という意味ですか。つまるところ、神の聖さとは何ですか。神の聖さには実質的内容はなく、ただ神が物事を嫌悪するということですか。皆さんは頭の中で「神はこれらの邪悪な物事を嫌悪するので、したがって神は聖なるものと言うことができる」と考えているのですか。これは推測ではありませんか。それは推定と判断の一種ではありませんか。神の本質を理解するにおいて、避けなければならない最大の禁忌は何ですか。（現実を離れて教義を語ることです。）これが最大の禁忌行為です。他には。（憶測と想像です。）これらもとても重要な禁忌です。なぜ憶測と想像は有用でないのですか。憶測したり想像したりする物事は、本当に見えるものですか。それらは神の真の本質ですか。（いいえ。）他に避けなければならないことは何ですか。神の本質を形容するのに、ただ響きの良い言葉をまとめて朗唱するのは禁忌ですか。（はい。）それはおおげさで無意味ではありませんか。判断と憶測も、響きの良い言葉を並べることと同様に無意味です。空虚な称賛も無意味ですね。神は、このような無意味なことを人が話すのを聞いて楽しめますか。（いいえ。）神はそれを聞くと不愉快に感じます。神はある集団の人々を導き、救いますが、この集団の人々が神の言葉を聞いた後、彼らはやはり神の意味することを理解していません。誰かが「神は善良か」と尋ね、別の誰かが「善良だ」と答え、「どれくらい善良か」、「とっても善良だ」、「神は人間を愛しているか」、「愛している」、「どれくらい愛しているのか形容できるか」、「とっても愛している。海よりも深く、空よりも高い」とやりとりしたら、これは戯言ではありませんか。

ませんか。この戯言は、皆さんがたった今言ったこと、「神はサタンの墮落した性質を嫌悪するので、よって神は聖なるものだ」に似ていませんか。（似ています。）皆さんが言ったことは、戯言ではないでしょうか。語られる無意味な戯言の大部分はどこからもたらされますか。（サタンです。）語られる無意味な戯言はおもに人の無責任さと神への不敬から来ます。そう言うことができますか。あなたは何も理解していなかったのに、それでも戯言を述べました。それは無責任ではありませんか。それは神に失礼ではありませんか。少々の知識を習得し、少々の論法と少々の論理を理解し、それらを用い、さらに、神を知る一手段としてそれらを用いました。神は、あなたがそのように話すのを聞いて不愉快に感じると思いますか。どうしてそのような方法で神を知ろうとすることができるのですか。そのような話し方をすると、ぎこちなく聞こえませんか。したがって、神の認識については、とても注意深くなければなりません。神について知っている範囲内で話さない。正直に実践的に話し、当たり障りのない褒め言葉で話を飾り立てたり、媚びへつらうような言葉を使ったりしてはいけません。神にそれは必要なく、そのようなことはサタンからもたらされるのです。サタンの性質は傲慢で、サタンは誉めそやされたり、心地よい言葉を聞いたりするのが好きなのです。もし人が覚えた響きの良い言葉を全部並べて、それらをサタンのために朗唱するなら、サタンは喜び満足します。けれど、神にそれは必要ありません。神はへつらいやお世辞を必要とせず、人が戯言を言い、盲目的に神を讃美することを要求としません。神は、現実離れした讃美やお世辞を嫌悪し、聞くことさえしません。それで、誰かが神を不誠実に讃美し、盲目的に誓いを立て、神に祈るとき、神は一切聞きません。あなたは自分の言うことに責任をもたなければなりません。もし何かを知らないのなら、ただそう言いなさい。もし何かを知っているのなら、それを実践的な方法で表現しなさい。では、神の聖さには具体的に、および実際に何が伴うのか、皆さんは本当に理解しましたか。（わたしが反抗的な面を見せたとき、過ちを犯したとき、神様の裁きと刑罰を受けましたが、そこにわたしは神様の聖さを見ました。そして、わたしの期待通りではない環境に遭遇したとき、わたしはそれらについて祈り、神様の意図を求めました。神様が言葉によりわたしを啓き、導いてくださるにつれて、わたしは神様の聖さを見ました。）それはあなた自身の経験からですね。（わたしはそれについて神様が仰ったことから、サタンに墮落させられ、傷つけられたあと、人間がどのようなになったかがわかりました。けれど、神様はわたしたちを救うためにすべてを与えて下さり、そこにわたしは神様の聖さを見ます。）それは現実的な話し方で、真の認識です。これについて、違う見方はありますか。（エバに罪を犯させようとサタンが言った言葉や、サタンが主イエスを誘惑しようとしたこ

とに、サタンの邪悪を見ます。神様がアダムとエバに食べてよいものと、食べてはならないものを説明された神様の御言葉は、直截で清く信頼できるものでした。ここにわたしは神様の聖さを見ます。)これらの発言を聞いた中で、誰の言葉に皆さんが一番「アーメン」と言いたくなりますか。誰の交わりが、きょうのわたしたちの交わりの題目に一番近かったですか。誰の話が一番現実的でしたか。最後に話した姉妹の話はどうでしたか。(良かったです。)この姉妹の言ったことに「アーメン」と言うなら、彼女の話ししたことでの的を射ていたのは何でしたか。(最後に話した姉妹の語った言葉に、神様の言葉は直截で明瞭で、サタンの回りくどい話とは全く違うということを知りました。わたしはそのことに神の聖さを見ます。)それは一部です。それは正しかったですか。(はい。)とてもよろしい。ここ最近の二回の交わりで、皆さんが何かを得たのがわたしにはわかりますが、皆さんは努力し続けなければなりません。努力し続けなければならない理由は、神の本質を理解することは、とても深い学びであり、一夜にして理解できるものでも、ほんの数語で明確に語れるものでもないからです。

人の墮落したサタンの性質の一つひとつの側面、知識、哲学、人間の思想と観点、個々人の側面が、人が神の本質を知るのを大いに妨げます。そのため、これらの題目を聞くときは、幾つかの題目は皆さんの手が届かないもので、幾つかの題目は理解できず、幾つかの題目は基本的に現実と一致させることができないものかもしれません。それでも、神の聖さに関する皆さんの理解について聞きましたし、神の聖さについてわたしが話し、説教したことを皆さんが心の中で認識し始めていることがわかります。皆さんの心の中で、神の聖さの本質を理解したいという願望が芽生えつつあることを、わたしは知っています。けれど、わたしがさらに幸せを感じるのは、皆さんのうちの何人かが既に、神の聖さについての認識を最も簡潔な言葉を用いて描写できることです。これは言うのは単純なことで、以前にも言ったことではありますが、皆さんの大半の人の心の中では、これはまだ認められておらず、実際、何の印象も残していません。それでもなお、何人かの人たちはこれらの言葉を記憶にとどめています。それはとても良いことで、良い始まりです。皆さんが深いと思う題目、皆さんの手に届かない題目については、熟考を続け、さらに多くの交わりをもつことを望みます。手が届かない問題については、誰かが皆さんにさらなる指導を施すでしょう。現在皆さんの手に届く分野に関して、さらに交わりをもつことに取り組めば、聖霊がその働きを行ない、皆さんはさらなる理解に到達することでしょう。神の本質を理解すること、神の本質を知ることは、人のいのちの入りにとって極めて重要です。皆さんがこのことを無視したり、それを遊びとみ

なしたりしないことを望みます。なぜなら神を知ることが、人間の信仰の基盤であり、人間が真理を追求して救いを得る鍵だからです。もし人が神を信仰していながら、神を知らず、字句や教義の中に生きるだけなら、たとえ真理の表面的な意味に従って行動し、生きるとしても、救いを得るのは不可能です。つまり、あなたが神を信じながら神を知らないなら、あなたの信仰はすべて無意味であり、そこには何の現実性也没有ありません。わかりますか。（はい、わかります。）きょうの交わりはここで終わります。（神様に感謝。）

2014年1月4日

唯一無二の神自身 6

神の聖さ（3）

前回の交わりの主題は神の聖さでした。神の聖さは神自身のどの側面に関連しますか。神の本質に関連しますか。（はい。）それではわたしたちが話し合った神の本質のおもな側面とは何ですか。神の聖さですか。神の聖さは、神だけの独特な本質です。わたしたちが前回話し合ったおもな内容は何でしたか。（サタンの邪悪さを識別することでした。つまり、サタンがどのように知識、科学、伝統文化、迷信、社会動向を利用して人間を堕落させるかについてです。）それが前回話し合った主題でした。サタンは、知識、科学、迷信、伝統文化、社会動向を利用して人間を堕落させます。これら、あわせて五つがサタンが人間を堕落させる方法です。そのうちサタンが人間を堕落させるために最も多用するものはどれだと思いますか。人間を最も深刻に堕落させるために使われるものはどれですか。（伝統文化です。孔孟の教えをはじめとするサタンの哲学が、わたしたちの心に深く根付いているからです。）「伝統文化」が答えだと考える兄弟姉妹がいます。他の答えがある人はいますか。（知識です。知識は決して人間に神を崇拜させません。知識は神の存在と神の支配を否定します。つまり、サタンは幼少時からわたしたちに勉強するように、勉強と知識の取得によってのみ、将来に明るい展望があると教えます。）サタンは知識を用いて、あなたの将来と命運を支配し、あなたを意のままに服従させます。サタンはこのように人間を最も深刻に堕落させるとあなたは考えています。つまり、あなたがたのうち大部分が、サタンが人間を最も深刻に堕落させるために使うのは知識だと考えていますが、他の答えがある人はいますか。たとえば、科学や社会動向はどうですか。これらも答えになると思う人はいますか。（はい。）今日は、サタンが人間を堕落させる五つの方法について再度あなたがたに伝え、それが終わっ

てから、それらのどれを利用してサタンは人間を最も深刻に墮落させるかが正確にわかるように、あなたがたに幾つか質問します。

サタンが人間を墮落させる五つの方法のうち、最初に言及したものは知識なので、まず知識を話し合いの主題として取り上げましょう。サタンは知識を餌として用います。注意して聴きなさい。知識は餌の一種に過ぎません。人間は学習に励み、日々自己を向上させ、知識を武器のように身に付け、知識を用いて科学の扉を開けるよう誘惑されます。つまり、身に付ける知識が多ければ多いほど、さらに多くの物事を理解するようになるのです。サタンは、人間にこのようなことを言います。また、サタンは人間に、知識を身に付けるとともに、高尚な理想を育み、大志と願望を持つよう命じます。人間に知られることなく、サタンはこのようなメッセージを数多く送り、無意識のうちにそれが正しい、あるいは有益であると人間に感じさせます。人間は、知らぬ間にそうした道に足を踏み入れ、知らぬ間に自分自身の理想と大志に導かれて進んでゆきます。サタンに与えられた知識から、人間は偉人や有名人の考え方を気付かぬうちに一步步学びます。また、英雄とみなされている人の行動からいくつかのことを学びます。こうした英雄の行動の何をサタンは人間に奨励していますか。サタンは人間に何を吹き込みたいのですか。人間は愛国心に溢れ、自国に忠誠であり、勇敢でなければならない。歴史や英雄の伝記から人間は何を学びますか。それは、人への忠義心を持つこと、あるいは友人やきょうだいのためであれば何でもすることです。こうしたサタンの知識から、人間は無意識のうちに多くの良からぬ物事を学びます。サタンが人間のために用意した種は、知らぬ間に人間の未熟な精神に植え付けられ、その種は、偉大な人物にならなければ、有名にならなければ、英雄にならなければ、愛国的でなければ、家族を愛する人間にならなければ、友人のためならば何でもしなければ、忠義感を持つ人間にならなければ、と人間に感じさせます。サタンに魅惑された人間は、サタンが人間に用意した道を知らず知らず進んでゆきます。その道を歩んでゆくうちに、人間はサタンの生活規則を受け入れることを余儀なくされます。自分でまったく気付かぬうちに、人間は独自の生活規則を作り出しますが、それはサタンが人間に強制的に吹き込んだ生活規則に過ぎません。サタンはこの学習過程において、サタンの餌に人間が食らいつくまで、人間を少しずつ誘惑するために、物語や伝記など使える限りのありとあらゆる手段を用いて、サタンの物事を人間に吹き込むと同時に、人間に独自の目標を掲げさせ、独自の人生の目標や生活規則、人生の進路を決めさせます。こうして学習過程において、ある人は文学を、ある人は経済を好むようになり、ある人は天文学や地理に興味を持つようになります。

。政治を好むようになる人、また物理や化学、はては神学を好む人までいます。これらはすべて知識という全体の一部です。あなたがたは各自がこれまでにそうした知識に接する機会があったので、それが本当はどのようなものを心の中で知っています。知識に関しては、誰もがそのうち特定の分野について、際限なく語ることができます。したがって、知識が人間の精神にどの程度深く入り込んでいるかは明白です。知識が人間の思考において占めている位置や、人間に及ぼしている影響の深さを見るのは簡単です。人が知識のある一面を好むようになり、それを深く愛するようになると、無意識のうちに大志が生まれます。ある人は著述家を目指し、ある人は文学者を目指し、ある人は政治を職業にすることを目指し、ある人は経済活動に従事して実業家となることを目指します。また英雄や、偉人、有名人になろうとする人もいます。どのような人になりたいかにかかわらず、目標は、知識を習得する方法により、自分自身の目的のためにそれを利用して願望や大志を実現することです。それがどれほど聞こえが良くても、つまり、自分の夢を実現したい、人生を無駄にしたくない、あるいは何らかの職業に就きたいということで、高尚な理想と大志を育んでいても、本質的には何が目的ですか。あなたがたは、このことについて考えたことがありますか。サタンはなぜこのように行動するのですか。サタンがこんな事を人間に吹き込む目的は何ですか。あなたがたの心は、この問題について明瞭に理解しなければなりません。

それでは、サタンが知識を用いて人間を墮落させる方法について話しましょう。まずは次のことをはっきり理解しなければなりません。サタンは知識を用いて人に何を与えたいのですか。どのような道を歩むように人間を導きたいのですか。（神様に抵抗する道です。）まさしくその通り。神に抵抗させたいのです。これが人が知識を得た結果の一つ、つまり神への抵抗であることがわかります。それでは、サタンの邪悪な動機は何ですか。はっきりと理解していないのではありませんか。人間が知識を習得する過程において、サタンは、物語であったり、一つの知識を与えるだけのことであったり、人間に自分の願望や大志を実現させたりと、あらゆる手段を用います。サタンはあなたをどの道に導きたいと思っていますか。人間は知識を習得することは自然であり、何も悪いことがないと考えています。聞こえの良い言い方をすれば、高尚な理想を育むことや、大志を抱くことは、向上心があるということであり、それは人生において正しい道のはずです。自らの理想を実現したり、職業で成功することができれば、そのように生きる方が人間にとって素晴らしいのではありませんか。そのようにすれば、自分の祖先に栄誉をもたらすのみならず、歴史に自分の名を残すことができ、それは良いことではありません。

ませんか。これは世俗的な人から見れば、良いことであり適切で前向きなことです。しかし、邪悪な動機をもつサタンが人間をそのような道へと導いて、それですべてですか。当然そうではありません。実際には、人間の理想がいかに高尚であったとしても、また人間の願望がいかに現実的であり、適切であったとしても、人間が成し遂げたい事、求める事は、二つの言葉と不可分に関連しています。その二つの言葉は、あらゆる人の生涯にとって極めて重要であり、サタンが人間に吹き込みたいことです。その二つの言葉とは何ですか。それは「名声」と「利得」です。サタンは極めて温和な方法、人間の観念に極めてうまく適合する方法、まったく過激でない方法を用いて、それにより人間は、無意識のうちにサタンの生き方や生活の規則を受け入れるようになり、人生の目標や方向性を決定し、またそうすることにより無意識のうちに人生における大志を抱くようになります。そうした人生の大志にどれほど高尚な響きがあったとしても、「名声」と「利得」に複雑に関連しています。偉人や有名人、実はあらゆる人が人生において従う事柄はすべて「名声」と「利得」だけに関連しています。人間はひとたび名声と利得を手に入れば、それを利用して高い地位や莫大な富を堪能し、人生を楽しむことができますと考えます。名声と利得を、悦楽の追求と不徳な肉の快楽を手に入れるために利用できるある種の資本と考えるのです。人間は、自分が求める名声と利得のために、無意識ではあるが率先して、自分の心身や所有するすべて、将来、運命をすべてサタンに引き渡します。こうするのに実は一瞬たりとも躊躇することなく、引き渡したものをすべて奪回する必要にも気づかないままです。このようにしていったんサタンを頼りにし、サタンに忠義を尽くしたなら、人間は自分自身を支配していることができるのでしょうか。もちろんできません。人間はすっかり完全にサタンに支配されます。すっかり完全に泥沼に沈み込んだのであり、そこから抜け出すことは不可能です。ひとたび名声と利得の泥沼に陥いると、人間は明るいもの、義なるもの、美しく良いものを求めなくなります。これは、人間に及ぼす名声と利得の魅力が強すぎるため、それが人間が生涯を通して終わりなく永遠に追求すべきものになってしまうからです。これが真実ではないですか。中には「知識の習得とは読書することや知らない事を幾つか習得して、時勢や世の中に遅れを取らないようにすることに過ぎない。知識を習得するのは、ただ生活の糧を得るため、自らの将来のため、必需品のためである」と言う人もいます。必需品や食糧の問題を解決するためだけに、十年におよぶ辛い学習を行なう人がいるのでしょうか。そんな人は一切いません。それでは、辛い学習に長年にわたり耐えるのはなぜですか。それは名声と利得のためです。名声と利得がはるか前方に待っており人を呼んでいるため、勤勉と辛苦と努力をもってその道を進むほかなく、それによって名声と利得を得ら

れるものと信じているのです。自らの将来の道のため、将来の快楽と生活向上のために辛苦を味わう必要があるのです。そんな知識とはいったい何なのか、わたしに説明できますか。それは人に植え付けられた生存の法則、人が知識を習得する過程でサタンが人に教える法則ではないですか。サタンが人間に吹き込む人生の「高尚な理想」ではないですか。たとえば、偉人の思想や、有名人の高潔さ、英雄の気概を、あるいは武侠小说の侠客や剣術家の俠骨や親切心を考えてみなさい。これらはどれもサタンが理想を植え付けるやり方ではありませんか。（はい。その通りです。）これらは世代を超えて影響を及ぼし、各世代の人々はそうした思想を受け入れて、そのために生き、永遠にそれを求めるように仕向けられます。これがサタンが知識を用いて人間を墮落させる方法であり、手段です。サタンが人をこの道へと導いた後、人が神を崇拝することはまだ可能ですか。サタンにより人間に吹き込まれた知識や思想には、神を崇拝することを少しでも含んでいますか。真理に属する何かがありますか。神を畏れ、悪を避けることに関する何かが含まれていますか。（いいえ、含まれていません。）あなたがたの話しぶりはあまり確信がないようですが、構いません。「名声」と「利得」がサタンが人間を邪惡な道へと誘惑するのに用いる二つの重要な語句だと理解しているかぎり、それで十分です。

ここでこれまで話し合ったことを簡単に確認します。サタンが人間を確実に支配するために使用するものは何ですか。（名声と利得です。）サタンは名声と利得を用いて人間の思想を支配し、人間が名声と利得しか考えられないようにします。人間は名声と利得のために奮闘し、名声と利得のために苦労し、名声と利得のために恥辱に耐え、持てるすべての物事を犠牲にし、名声と利得のためにすべての判断と決断を下します。このようにして、サタンは目に見えない足かせを人間にかけ、人間にはそれを外す力も勇氣もありません。したがって、無意識のうちに人間は足かせをかけられ、大変苦労しながら歩んでゆきます。この名声と利得のために、人類は神を避け、神を裏切り、ますます邪惡になります。このようにして世代を追うごとに人間はサタンの名声と利得の只中で破壊されてゆきます。サタンの行動を検討すると、サタンの邪惡な動機は、極惡非道ではありませんか。あなたがたはいまだに人は名声と利得なくしては生きてゆけないと考えているので、サタンの邪惡な動機を見抜くことができないかも知れません。名声と利得を捨て去ったら、将来が見えなくなり、目標を見失い、将来が暗く陰鬱になってしまうと人は考えています。しかし、ゆっくりとではありますが、名声と利得はサタンが人間を束縛するために用いる非常に重い足かせであると、やがてあなたがた皆が気づく日

が来ます。その日が来れば、サタンの支配と、サタンがあなたを束縛するために使う足かせをあなたは徹底的に拒否します。サタンがあなたに吹き込んだあらゆる物事を捨て去りたいと望む時が来ると、あなたはきっぱりサタンと訣別し、サタンがあなたにもたらしたものすべてを心から嫌悪します。その時になって初めて、人は神への真の愛と羡慕をもつのです。

サタンが人間を墮落させるために知識を利用する方法について述べたので、次にサタンが人間を墮落させるために科学を利用する方法について分かち合いましょう。まず、サタンは科学という名を使って、人間の好奇心、科学を探究し神秘を調査する欲望を満たします。また、科学の名のもとに、人間の物質的必要と生活の質を継続的に向上させる要求を満たします。サタンはこのような口実のもと、科学を利用して人間を墮落させるのです。サタンがこのように科学を用いて墮落させるのは、人間の思想や精神だけですか。わたしたちに見え、わたしたちが接する人や出来事、物事のうち、サタンが科学を用いて墮落させるのは他に何がありますか。（自然環境です。）その通り。あなたがたはこのためかなり被害を受け、深く影響を受けているようですね。科学によるさまざまな発見や結論を用いて人間を欺くほか、サタンは科学を利用して神が人間に与えた生きる環境を無残に破壊し、濫用します。サタンはこれを、人間が科学的研究を実施すれば人間の生存環境と生活水準は継続的に向上し、さらには、科学の発展は、増え続ける日常生活における物質的要求や生活の質を継続的に改善させたいという人間の要求を満たすために行なわれるという口実のもと行ないます。これが、サタンの科学発展の理論的根拠です。けれど、科学は人類に何をもたらしましたか。わたしたちを取り巻く環境は何で構成されていますか。人類が呼吸する空気は汚染されていませんか。わたしたちが飲む水は今でも本当に純粋ですか。（いいえ。）わたしたちが食べる食糧は自然のものでしょうか。その大部分は化学肥料や遺伝子組み換えにより栽培され、様々な科学的手法による変異が生み出されています。人間が食べる野菜や果実でさえ、もはや天然ではありません。自然な卵を見つけるのさえ困難で、その卵もサタンのいわゆる科学により加工されてしまったせいで、かつてのような味はしません。全体像を見ると、大気全体が破壊され、汚染されており、山や湖、森林、河川、海洋その他地上や地下にあるものすべてが、いわゆる科学的進歩により破壊されています。つまり、自然環境全体、神が人類に与えた生きる環境がいわゆる科学により破壊、崩壊されているのです。生活の質に関してずっと望んでいたものを手に入れ、欲望と肉体の両方を満たしている人が多数いますが、人間が生活する環境は、科学によりもたらされたさまざまな「成果」により根

本から破壊され、荒廃しています。現在、わたしたちにはきれいな空気をほんの少し呼吸する権利さえもありません。これは人類にとって、悲しみではありませんか。このような空間で生活する人間に、何かしら幸福なことが残っていますか。人間が生きているこの空間、この環境はそもそも当初、人間のために神が創ったものでした。人間が飲む水、呼吸する大気、食べる食糧、植物、樹木や海洋など、この生活環境は、すべて神が人間に与えたものであり、天然であり、神が定めた自然の法則にそって営みを行っています。仮に科学が存在しなかったならば、神の道に従って、神が人間に与えたとおりに、人間は幸福で、あらゆる物事を最も自然な状態で享受していたでしょう。しかし現在、サタンによりすべて破壊され、損なわれ、人間の基本的な生活環境はもはや純粹ではなくなってしまいました。それなのに、この結果を招いた原因や、この結果に至った経緯を認識できる人はおらず、さらに多くの人々が科学に取り組み、サタンに吹き込まれた思想を用いて科学を理解しています。これは極めて忌み嫌うべき哀れなことではないでしょうか。サタンが人間の存在する空間と生活環境を占領し、人間をこのように墮落させ、また人類もこのような状態を継続している今日、神が直接手を下して人間を滅ぼす必要がありますか。人間がこのような発展を継続するのであれば、どのような方向へ進むでしょうか。（絶滅します。）どのように絶滅するのでしょうか。名声と利得の貪欲な追求に加え、人間は科学的探求や徹底した研究を継続しており、自らの物質的欲求や願望を満たすために絶え間なく動いていますが、人間の結末はどのようなものになるのでしょうか。第一に、生態系の均衡が失われ、それに伴い人間の身体、内臓はそうした環境に汚染され、傷みつけられ、様々な疫病や伝染病が世界各地に蔓延しています。これはもはや人間には制御できない状況であるというのが真実ではありませんか。今やあなたがたはこれを理解したのですから、もし人間が神に付き従わず、こうして常にサタンに付き従い、知識により自らを豊かにし続け、科学により絶え間なく人生の将来を探求し、このような方法で生き続けたなら、人類の自然な結末がどうなるかが分かりますか。（破滅します。）そうです。人類は破滅します。人類は一步步自らの破滅へと向かっているのです。今や科学とは、サタンが人間のために作った秘薬のようです。そのせいで、人間が物事を判断しようとしても五里霧中となり、いくら目を凝らしても明瞭に見ることができず、いくら努力しても理解できなくなるのです。しかし、サタンは依然として科学の名のもとに人間の欲望を刺激し、機先を制して人間を意のままに服従させ、地獄と死へと導こうとしています。そうではありませんか。（はい。）これがサタンが人間を墮落させる二番目の方法です。

サタンが人間を墮落させる三番目の方法は、伝統文化です。伝統文化と迷信には、多くの類似点がありますが、相違点は、伝統文化には物語や引喩、典拠などがあることです。サタンは民間伝承や歴史書に登場する物語を数多く作り上げて、人間に伝統文化や迷信の登場人物などを深く印象付けています。例としては、中国には「八仙過海」「西遊記」「玉皇大帝」「ナーザの大暴れ」「封神演義」などがあります。これらは、人間の心に深く根ざしていませんか。あなたがたのうちには物語の詳細をすべて把握していない人もいるでしょうが、あらすじは知っており、内容の概要が心や頭に残って忘れることができないのです。これらは、サタンがはるか昔に人間向けに用意した様々な思想や伝説であり、異なる時期に流布されてきたものです。このような事柄は人間に直接的な危害を加え、人間の魂を蝕み、人々に次々と呪文をかけます。つまり、ひとたびそうした伝統文化、伝説、迷信的な物事を受け入れ、それが頭の中で定着し、心から離れなくなった時点で、あなたは呪文にかけられたようなものであり、このような文化の罟、思想、伝説的物語に捕らわれ、影響されるようになるのです。これは生活や人生観、判断力に影響を与えます。人生における真の道の追求にはさらに影響を与えるので、これはまさしく呪文です。どれほど努力しても捨てられず、切っても切り捨てられず、打っても打ち倒すことができません。さらに、人間が無意識のうちにこの種の呪文にかかった場合、知らぬうちにサタンを信仰するようになり、心の中にサタンの像を育てます。つまり、サタンを偶像、崇拜対象とし、過度の場合は神とみなします。こうした物事は人間の心に無意識のうちに存在し、人間の発言や行動を支配します。さらに、こうした物語や伝説をはじめのうちは虚偽とみなしますが、その存在を無意識のうちに認め、そこから本当の人物を作り出し、本当の存在する物事に変えていきます。知らないうちに意識下で、これらの思想や物事の存在を受け入れるのです。意識下で悪魔、サタンそして偶像も自宅や心に受け入れるのです。これはまさしく呪文です。あなたがたも、そう感じませんか。（感じます。）あなたがたのうちに、香を焚いて仏陀を崇拜したことのある人はいますか。（はい。）香を焚いて仏陀を崇拜した目的は何でしたか。（平安を祈ることでした。）今、考えてみれば、サタンに平安を祈るのは愚かなことではありませんか。サタンが平安をもたらしますか。（いいえ。）当時、自分がいかに無知だったかわかりませんか。そのようなふるまいは愚かで、無知でうぶなことです。そうではありませんか。サタンは人間を墮落させることしか考えていないので、平安をもたらすことはありえず、束の間の休息を与えるのみです。しかし、この休息を得るためには誓いをたてねばならず、約束やサタンにたてた誓いを破ったならば、それがいかにあなたを苦しめることになるかを思い知ります。あなたに誓わせることにより、サタンは実はあ

なたを支配したいのです。あなたがたは平安を祈って、平安を得ましたか。（いいえ。）平安を得なかったばかりか、逆に不幸や終わりのない災難やたくさんの悲慘な出来事が、まさに際限のない辛苦の大海原のごとく起こりました。サタンの領域に平安はない、というのが真実です。これは封建的な迷信と伝統文化が人類にもたらした結果です。

サタンが人間を墮落させる最後の方法は、社会動向をとおしてです。社会動向には様々なものがあります。「それは最新ファッションや化粧品、ヘアスタイルやグルメに關することですか」などと言う人がいます。これらは社会動向とみなされますか。それらも社会動向の一部ですが、ここでそうした物事については取り上げません。ここでは、社会動向が人間にもたらす考えや、社会動向が人間に世の中での行動にどう影響するか、そして社会動向が人間にもたらす人生の目標や人生観についてのみ話し合います。これらは人間の精神状態を支配し、影響を与えることがあるので、極めて重要です。社会動向は次々と生まれ、それぞれに人間を墮落させ続け、良心、人間性、理知を失わせ、道徳や人格をどんどん低下させる邪惡な影響があり、それゆえ現在、大部分の人には誠実さや人間性、良心などなく、さらには理知さえ欠如しているとさえ言えるほどです。では、そのような社会動向とは何ですか。それは裸眼では見ることができない動きです。ある社会動向が席卷するとき、その最先端にいて仕掛け人となるのはごく僅かな人たちです。その人たちは何か新しいことを始め、次に何か新しい考え方や物の見方を受け入れます。しかし大部分の人々は無意識のうちに、そのような動向に続けて汚染され、取り込まれ、魅惑され、やがてそれを知らず知らずのうちに無意識のうちに受け入れ、それに呑み込まれて支配されるようになります。このような社会動向のせいで、心身が健全でなく、真理とは何かを知らず、肯定的なものと否定的なものの区別ができない人たちは、そうした動向を次々と喜んで受け入れ、さらにはサタンに由来する人生観や価値観も受け入れてしまいます。このような人は、人生にどう取り組むかに関するサタンの言葉を受け入れ、サタンから「授けられた」生きる道を受け入れます。その人には抵抗する強さも能力もなく、ましてやその認識もありません。それでは、そんな社会動向とは一体何でしょうか。あなたがたが徐々に理解できるような簡単な例を選びました。たとえば、昔は誰も騙されないように、買い手が誰であろうが同じ価格で商品を販売して、商業を営んでいました。ここに良心と人間性が感じられませんか。人がこのように信頼にもとづいて商業を営んでいたとき、ある程度の良心や人間性が当時あったと言うことがわかります。しかし、金銭への要求が増加を続けるにつれて、人間は知らぬ間に金銭や利得、快樂をますます愛するようになりました。つまり、人間は金銭を以前より

重要であると考えようになったのです。人間が金銭を重要視するとき、人間は知らぬ間に自分自身の評判や名声、信望や人格を軽視するようになります。そうではありませんか。商業をしていると、他の人が様々な手段を用いて人を騙し、裕福になるのを見ます。不正手段による利得ですが、人はますます裕福になってゆきます。あなたはこのような人と同じ商業を営んでいて、よその家族全体があなたよりも人生を楽しんでいるので、あなたは気分が悪くなり、「自分も同じようにできないのはなぜだろう。あの人たちのように稼げないのはなぜだろう。もっと稼ぐ方法を考えて、商業を繁栄させなければ」などと思ふやくのです。そしてあなたはどうすれば大金を作れるか、全力で熟考します。誰にでも同じ金額で販売する通常の商売の方法に従えば、取得した金銭は良心によるものです。しかし、これではすぐに裕福になることはできません。利益を得る衝動に駆られると、考えが徐々に変化してゆきます。この変化の過程において、行動原則も変化し始めます。誰かを初めて欺く時、「人を騙すのはこれが最後、二度としない。人を騙すことはできない。人を騙すと、その報いを受けて災難が降りかかるだけ」などと言って、遠慮があります。初めて人を騙す時、心には躊躇があります。これが人間の良心の機能です。ためらいと自責の念のために、誰かを騙すと不自然に感じられるのです。しかし、うまく誰かを騙すと、以前よりも多くの金銭を持っていることに気付き、その方法が極めて有益になり得ると考えます。心に鈍い痛みがあるものの、自分の「成功」を祝いたくなり、自分に満足した気分になります。そこで初めてあなたは、自分の振る舞いと欺瞞行為を是認します。ひとたび人間がこの不正行為に汚されると、賭博に手を出してギャンブラーになってしまう人と同様です。無意識のうちに、自分の不正行為を容認し受け入れます。無意識のうちに、不正は正当な商業行為であり、自分の生存と生活のための最も便利な手段であるとみなし、この方法ですぐ裕福になれると考えます。これはひとつの過程です。最初は、人間はそんな行為を受け入れることはできず、そのような振る舞いや行為を侮蔑しますが、ひとたび自分自身で試し、自分なりの方法で実行し始めると、心は次第に変わり始めます。これはどういう変化ですか。それは、この動向を是認すること、この社会的動向により自分の内に浸透した考え方を是認することです。商売で他人を騙さなければ、自分は損をするといつの間にか感じます。他人を騙さなければ、自分が何かを失ったように感じます。知らぬ間に、こうした不正が自分の魂そのものとなり、背骨となり、不可欠な振る舞いとなって、それが自分の人生の原則になります。人間がこのような行動と考え方を受け入れた後、人間の心が変化していませんか。心が変化してしまったら、人格も変化していますか。人間性は変化していますか。良心は変化していますか。（はい。）そうです。心から思考まで、人のすべての

部分が質的な変化を遂げ、内側からすっかり変わってしまうほどです。この変化により、あなたは神から次第に遠ざかって行き、次第にサタンに近くつながり、サタンに似てくるのです。

これらの社会的動向を見て、それは人に大きな影響を及ぼすと言えるでしょうか。人間に深刻な悪影響を及ぼしますか。（はい。）社会動向は人に極めて深刻な悪影響を及ぼします。社会的動向を次々と用いて、サタンが墮落させるのは人間の何ですか。（人間の良心、理知、人間性、道徳、人生観です。）社会的動向は人間を徐々に退廃させます。違いますか。サタンはこうした社会的動向を用いて、少しずつ人間を誘惑して悪の巣窟へと導き、社会的動向に捕らわれた人間は気付かぬうちに金銭や物欲、邪悪と暴力を擁護するようになります。ひとたびこうした物事が人間の心に入ると、人間はどうなりますか。人間は邪悪なサタンと化すのです。なぜですか。なぜなら、人間の心にはどのような心理的傾向がありますか。人間は何をあがめますか。人間は邪悪と暴力を好むようになり、美や善を喜ばず、またそれ以上に平和を嫌います。人間は正常な人間性による質素な生活を送ろうとせず、高い地位や大きな富を楽しむことを望み、肉の享樂に耽溺し、自分の肉を際限も制約もなく満足させるために努力を惜しまず、したいことならば何でも行ないます。人間がこうした動向に没頭した場合、取得した知識は人が自分を解放するのに役立ちますか。伝統文化や迷信を理解していることは、この窮地から逃げるのに役立ちますか。人が知る伝統的な道徳や儀式は、人間が自制する上で役立ちますか。例として、『三字経』を考えてみなさい。これは、人間がこれらの社会動向の泥沼から抜け出すのに役立ちますか。（役立ちません。）このように、人間はますます邪悪で、傲慢で、尊大で、自己中心的で悪意に満ちてゆきます。もはや人間の間にも家族の間にも愛情はなく、親戚や友人の間に理解もなくなり、人間関係は暴力に満ちたものとなっています。誰もが暴力的方法で世間を生きていこうとして、自分自身の生活を確保するために暴力を使います。地位や利益を得るためにも暴力を用い、また乱暴で邪悪な方法でしたい放題です。このような人類は恐ろしくありませんか。（恐ろしいです。）今わたしが述べた事を聞いて、サタンが人類を墮落させているこの環境、この世界、このような人々のそばで暮らすのは恐ろしいと思いませんか。（恐ろしいと思います。）それでは、あなたがたは自分達が哀れだと感じたことはありますか。今、少々そのように感じているはずです。（はい。）あなたがたの口調からすると、あなたがたは「サタンは実に様々な方法で人間を墮落させている。サタンはあらゆる機会を捉え、あらゆる所に存在する。それでも人間は救われることができるだろうか」と考えているようで

す。それでも人間は救われることができますか。人間は自分自身を救うことができますか。（できません。）玉皇大帝は人間を救うことができますか。孔子は人間を救うことができますか。観世音菩薩は人間を救うことができますか。（できません。）それでは、誰が人間を救うことができますか。（神様です。）しかし、心の中に疑問を抱く人もいます。たとえば、「サタンは人間を極めて激しく害するので、わたしたちには生きていく希望もなければ自信もない。わたしたちは皆墮落のただ中で生活し、いずれにしても誰もが神を拒否している。今や、人間の心は落ち込めるところまで落ちてしまった。サタンが人間を墮落させている間、神はどこにいるのか。神は何をしているのか。神が人間のために何をしているとしても、人間にはそれを感じるができない」ということもあれば、どうしようもなく意気消沈し、なんとなく落胆することもあります。そうですね。あなたがたにとって、この気持ちは極めて深いものです。なぜなら、わたしがずっと述べてきたことは、皆に徐々に理解させ、希望がないことをますます強く感じさせ、神に見捨てられたとますます強く感じさせるためだからです。しかし、心配してはなりません。今日の主題「サタンの邪悪さ」は、わたしたちの真の主題ではありません。とは言え、神の聖さについて話すためには、まずサタンがどのように人間を墮落させるのか、そしてサタンの邪悪さについて話し合い、人間が現在置かれている状況を人に明確にする必要があります。これらの事を議論する目的のひとつは、人間がサタンの邪悪さを知ることであり、もうひとつは真の聖さとは何かを一層深く理解できるようにすることです。

わたしはこのようなことについて前回よりもはるかに詳細に話していませんか。（はい。詳細です。）それでは、あなたがたの認識は深まりましたか。（はい。）多くの人が神の聖さとは正確には何なのかをわたしが話すことを今や期待していることは承知していますが、神の聖さについて述べるのに、まず神の行なう業について話します。みな注意深く聞かなければなりません。その後で神の聖さとは正確には何なのかをあなたがたに尋ねます。あなたがたに直接述べず、代わりにあなたがたに自分で理解してもらいます。そのための余地を与えます。このやり方をどう思いますか。（良いと思います。）それではわたしが話すのを注意して聞きなさい。

サタンが人間を墮落させるとき、あるいは留まることを知らない危害を加えるとき、神は何もせず傍観することも、神の選民を無視したり、見て見ぬふりをしたりすることもあります。サタンが行なうことすべてを神は完璧に明瞭に理解しています。サタンが何をして、サタンがどのような動向を引き起こしたとしても、神はサタンが何をし

ようとしているかを知っており、神はその選民を見捨てることはないのです。神は、その代わりに、誰の気を引くこともなく、秘密裏に、静かに、必要なことすべてを行ないます。神が誰かに働き始める時、誰かを選ぶ時、神はそれを誰にも告げず、またサタンに告げることもなければ、それを誇示することもあります。神は静かに、そして自然に必要なことを行なうのみです。まず、神はあなたのためにある家庭を選びます。つまり、家庭背景、両親、祖先などを神は前もって決定します。つまり、これらは神が思いつきで決めたことではなく、遠い過去に始めた業です。神があなたの家庭を選ぶと、神はあなたが生まれる日を選びます。神はあなたが産声を上げてこの世に生まれて来るのを見えています。あなたの誕生を、あなたが最初の言葉を口にするのを、あなたが躓きながら歩くことを覚えるのを見えています。あなたは最初の一步を踏み出し、その後もう一步を踏み出し、今では走ったり、跳んだり、話をしたり、感情を表現したりできます。こうして人間が成長するにつれて、サタンの眼差しは獲物を睨む虎のように、人間一人ひとりに注がれています。しかし神は働く時、人間や出来事、物、場所や時間の制限を受けることが一切なく、神は行なうべきこと、行なわなくてはならないことを行ないます。成長過程において、あなたは自分が好まない物事、たとえば疾病や挫折に遭遇することがあります。しかしあなたがその道を進むにつれて、あなたのいのちと将来は厳密に神の加護のもとにあります。神は生涯にわたって有効な保証をあなたに与えます。神はあなたの傍らにあり、あなたを守り、見守るからです。あなたは、それを知らずに育ちます。あなたは新たな物事に接し、この世の中と人類を知るようになります。あなたにとってすべてが新鮮です。あなたには好きなことがあります。あなたは自分の人間性と環境の中で生活し、神の存在については一切の認識がありません。それでも神はあなたが成長し、前進してゆく過程のすべてを見えています。あなたが知識を習得したり、科学を学習したりしている時でさえ、神はあなたの側から一步も離れることがないのです。あなたは他の人とまったく同様に、この世を知り、この世と関わるようになるなかで、あなた自身の理想を確立し、趣味を持ち、興味の対象を持ち、高尚な大志を抱くようになります。あなたは自分の将来について頻繁に思索し、自分の将来がどうなるかを思い描きます。しかし、その過程で何があったとしても、神はすべてをはっきりと見えています。あなたは自分の過去について忘れたかもしれませんが、神にとっては、神よりもあなたを理解できる者はありません。あなたは神の見守る中で生活し、成長し、成熟します。この間、神の最も重要な務めは、誰も気付かず、誰も知らないことです。神がそれについて誰かに伝えることは当然ありません。この最も重要なこととは何ですか。それは、神がある人間を救う保証であると言えます。つまり、神がその人を救うことを望

むのであれば、神はそうしなければならないのです。その務めは人間にとっても神にとっても極めて重要です。それが何か知っていますか。あなたがたは、このことについて実感や概念がまったくないようなので、わたしが話します。あなたが生まれた時から現在に至るまで、神はあなたに多くの働きを行なってきましたが、神は行なったことをすべて詳しく伝えることはありません。神はあなたに知らせることはなく、あなたに伝えませんでした。しかし、人類にとって、神の行ないはすべて重要です。神にとって、それは行なうべきことです。神の心には、神がなすべきことで他の何よりも遙かに重要なことがあります。それは、人間が生まれてから現在に至るまで、神はその人の安全を保証する必要があるということです。これを聞いても、あなたがたは完全に理解できないように感じ、「その安全とは、それほど重要なものなのか」と言うかも知れません。「安全」という言葉の文字通りの意味は何ですか。あなたがたは、それを平安である、災害や災難に遭遇することがないことである、良い生活を送ることである、普通に生活することであるなどと理解しているかもしれません。しかし、安全とはそれほど単純なものではないということを、あなたがたは心の中で知らなければなりません。それでは、わたしが話している、神が行うべきこととは一体何ですか。安全は神にとって何を意味しますか。それは本当に普通の意味の「安全」の保証のことですか。いいえ。それでは、神が行なうことは何ですか。この「安全」とは、あなたがサタンに食い尽くされない、ということです。これは重要ですか。サタンに食い尽くされないことは、あなたの安全に関連しますか。はい。これはあなた自身の安全に関わり、それよりも重要な事はありません。ひとたびサタンに食い尽くされたなら、あなたの魂も肉も、もはや神に属しません。神はあなたをもはや救いません。神はサタンに食い尽くされた魂や人を見捨てます。ですから、神が行なうべき最も重要なことは、あなたの安全、あなたがサタンに食い尽くされないことを保証することだと言うのです。これは極めて重要ではありませんか。ではなぜ、あなたがたは回答できないのですか。あなたがたは神の大いなる優しさを感じるができないようですね。

神は、人間の安全を保証すること、サタンに食い尽くされないことを保証すること以外にもかなりのことを行ないます。神は誰かを選んで救う前に準備の働きをかなり行ないます。まず、あなたはどのような性格になるか、どのような家庭に生まれるか、両親は誰か、兄弟姉妹は何名いるか、生まれる家庭の状況や経済的な地位や条件はどのようなものかなどについて、神は詳細な準備をします。神の選民の大部分がどのような家庭に生まれてくるかを知っていますか。名門の家庭ですか。名門家庭に生まれてくる人は

まったくいないとは断言できません。何人かいるかもしれませんが、極めて少ないです。百万長者や億万長者など極めて裕福な家庭に生まれてきますか。その種の家庭に生まれてくることはほぼありません。それでは、神がそれらの人々の大部分に用意するのは、どのような家庭ですか。（普通の家庭です。）それでは、どのような家庭が「普通の家庭」とみなされますか。そこには労働者の家庭が含まれます。つまり、賃金に頼って生き延び、基本的な必需品を購入することができ、過度に裕福ではない家庭です。そこには農家の家庭も含まれます。農民は作物の栽培に頼って食糧を得ており、食糧として穀物があり、また着る衣服もあって、飢えたり凍え死んだりすることはありません。また、小規模な商売を営む家庭や、両親が知識人で普通の家庭と見なされる場合もあります。また両親が事務員や下級公務員である場合もあり、それらは名門家庭とは見なすことはできません。ほとんどは普通の家庭に生まれ、それはすべて神が用意したことです。つまり、まず、あなたの生活する環境は、人が想像するような資産家の家庭ではなく、神があなたのために決めた家庭であり、大部分の人がこうした家庭の制約範囲内で生活します。それでは、社会的地位はどうか。大部分の親の経済状況は平均的であり、社会的地位は高くありません。彼らにとっては、職があるだけで十分です。長官はいますか。それでは大統領はいますか。（いません。）地位が高かったとしても、小企業の管理職や経営者です。社会的地位は中間で、経済状態は平均的です。もう一つの要素は家庭の生活環境です。まず、自分の子どもに明らかに影響を与えて易断や運勢判断などの道へ進ませるような親はこれらの家庭にはいません。このようなことに関わる人はほとんどいません。大部分の親は極めて普通です。神は人間を選択すると同時に人間のためにこうした環境を用意しますが、それは人間を救う神の働きにとって大いに有益です。外面的には、神は人間のために何ら劇的なことをしていないように見えます。神は行なうことをすべて静かに秘密裏に、かつ謙虚に沈黙のうちにやります。しかし実際には、神がすることはすべてあなたの救いのための基盤を築き、将来の道を用意し、救いに必要なすべての条件を用意するためです。次に、ある特定の時間になると、神は一人ひとりを神の前に戻します。あなたが神の声を聞き、神の前に出るのはその時です。その時が来るまでに、既に人の親となっている人もいれば、まだ誰かの子のままの人もいます。換言すると、既に結婚して子をもうけた人もいれば、独身のままで自分の家庭を持っていない人もいます。しかし、状況を問わず、あなたが選ばれる時期、神の福音と言葉があなたに届く時期を、神は既に決定しています。あなたが神の言葉を聞くように、神は状況を設定し、あなたに福音をもたらす特定の人物や状況を決定しています。神は必要なすべての条件をあなたのために既に用意しています。このように、こと

が起きていることを気づいていないものの、人は神の前に来て、神の家に戻ります。また、人は知らないうちに神に付き従い、神が人のために用意した働きの過程のそれぞれの段階に入っていきます。この時、人間のために何かを行なうのに、神はどのような方法を使うでしょうか。まず、最低限は、人間が享受する配慮と保護です。それ以外には、人間が神の存在と神による業をそこに見出せるように、神は様々な人や出来事、物を用意します。たとえば、家族が病を患っているために神を信仰する人がいます。誰かが彼らに福音を宣べ伝え、神を信じるようになり、その神への信仰は状況が原因となって生まれました。それでは、この状況を用意したのは誰ですか。（神様です。）この病により、全員が信者である家庭が存在する一方で、二、三人だけが信仰者である家庭も存在します。外見上は家族の誰かが病気にかかったのですが、実はその疾病は神の前へに行くように、あなたに与えられた条件であり、すなわちそれは神の優しさです。家庭生活が困難で平安を見出すことができない人のために、偶然の機会が訪れ、誰かが福音を伝え「主イエスを信じれば、平安が訪れる」と言うかもしれません。そうして、無意識のうちに、彼らは極めて自然に神を信じるようになります。これは一種の条件ではありませんか。それでは、家庭に平安がないというのは、神が彼らに与えた恵みではありませんか。他の理由で神を信じるようになる人もいます。信仰には様々な理由や在り方がありますが、神を信じるようになった理由がどのようなものであれ、実際には、それはすべて神が用意し、導いたものなのです。最初、神は様々な方法であなたを選び、あなたを神の家に連れてきます。これが神があらゆる人に与える恵みです。

この終わりの日における神の働きの現在の段階では、神はもはや以前のようにただ恵みと祝福を人間に与えるのではなく、また人間をなだめて前に導くこともありません。この働きの段階で、人間は経験した神の働きのあらゆる側面から何を見ましたか。人間は神の愛と神の裁きと刑罰を見ました。この期間、神は人間に施し、人間を支え、啓き、導き、人間は次第に神の意図、神が語る言葉、そして神が人間に与える真理を知るようになります。人間が弱く、落胆し、行き場を失った時、神は言葉を用いて人間を慰め、忠告し、励ますので、人間の小さな霊的背丈は次第に伸び、強くなり、前向きに立ち上がることができ、神と協力することを望むようになります。しかし、人間が神に従わず、神に抵抗する時、あるいは自分自身の墮落を表す時、神は容赦なく人を懲らしめ鍛錬します。しかし、人間の愚かさ、無知、弱さ、未熟さに神は寛容と忍耐を示します。このように、神が人間のために行なうすべての働きにより、人間は次第に成長、成熟し、神の意図を知り、何らかの真理を知り、何が肯定的で何が否定的な物事なのか、邪悪

と闇とは何かを知るようになります。神は人間を懲らしめ、鍛錬する一つだけの方法を取らず、また常に寛容と忍耐を示すとは限りません。むしろ、神は各人に異なる方法で、様々な段階において、人間の異なる霊的背丈や能力に応じて施すのです。神は、人間のために多くのことを行ない、大きな代償を払います。人間はその代償や業を認識することはないものの、神のすることは本当に人間一人ひとりに実際に行なわれています。神の愛は实际的です。神の恵みにより、人間は災害を次々と回避する一方で、人間の弱さには、神は何度となく寛容を示します。神の裁きと刑罰により、人間は人類の墮落とサタンのような本質を次第に認識するようになります。神が与えること、神が人間を啓くこと、そして神による導きにより、人類は真理の本質、人間に必要なこと、進むべき道、人生の目的、自分の人生の価値と意味、将来へと進む方法をますます知ることができるようになります。こうした神の業は、神の唯一の元来の目的と不可分です。それでは、その目的とは何ですか。神がそのような方法で人間への働きを行なうのは、なぜですか。神はどのような結果を実現したいのですか。言い換えれば、神は人間に何を見、人間から何を得たいのですか。神は、人間の心が蘇ることを見たいのです。神が用いるこのような方法は、人間の心を目覚めさせ、霊を目覚めさせ、人間がどこから来たのか、人間を導き、支え、人間に施しているのは誰か、人間の存在を現在まで維持しているのは誰かを認識させるための継続した努力です。創造主は誰であるか、誰を礼拝すべきか、人間はどのような道を歩むべきか、人間はどのようにして神の前に来るべきかを人間に認識させるための手段です。人間が神の心を知り、理解し、神の人間を救う働きの背後にある大いなる慈しみと愛を理解するように、人間の心を次第に蘇らせるための手段です。人間の心が蘇ると、人間は退廃し墮落した性質で生きることを望まなくなり、その代わりに神を満足させるために真理を追い求めることを望むようになります。人間の心が目覚めると、人間はサタンと完全に訣別できるようになり、サタンによる危害を受けなくなり、サタンに支配されることも騙されることもなくなります。その代わりに、人間は神の働きと言葉に積極的に協力して神の心を満足させることができ、神を畏れ、悪を避けることができるようになります。これが神の働きの元来の目的です。

サタンの邪悪についてたった今した話しは、人間は極めて不幸に生きており、人間の生活は不運を極めていると皆に感じさせます。しかし、神の聖さと神の人間への働きについて話すと、あなたがたはどのように感じますか。（非常に幸福です。）神の行なうすべてや、人間のために神が慎重に用意する物事がすべて完璧であることが今では分かります。神が行なうことには誤りがありません。つまり、非の打ち所がなく、誰の修正

も、助言も、変更も必要ないのです。個々の人間のために神が行なうことには、疑問の余地がなく、神はあらゆる人を手を引いて導き、あなたを常に見守り、あなたの傍らを決して離れません。このような環境と背景で人間が成長するのなら、実際のところ人間は神の手の中で成長すると言えるのではないですか。（はい。）それでは、あなたがたは依然として喪失感を抱いていますか。落胆している人はいますか。神は人類を見捨てたと感じる人はいますか。（いません。）それでは、神は一体何を行ないましたか。（神様は人類を見守ってくださいました。）神がすることすべてに注ぐ大いなる思いと慈しみには、疑問の余地がありません。さらに、働きを行なうとき、神は無条件で行なってきました。神があなたのために負う代償をあなたが知り、それゆえ神に深謝することを、あなたがたのうちの誰にも要求したことはありません。神はかつてそのようなことを要求したことがありますか。（ありません。）長い人生の中では、誰もが数多くの危険な状況や誘惑に遭遇します。これは、あなたの傍らにはサタンが存在し、あなたを常に見据えているからです。サタンは、あなたが災害に見舞われたり、災難が降りかかり、何事もうまくいかなかったり、あなたがサタンの罠にかかることを大いに喜びます。しかるに神は、常にあなたを守り、次々起こる逆境や災難からあなたを守ります。これが、平安や喜び、祝福、身体の安全など、人間が持つものは、実際のところすべてが神の支配下にあり、神が各人の運命を導き決定している、とわたしが言う理由です。しかし、一部の人が言うように、神は自己の地位について仰々しい概念を持っていますか。神はあなたに、「わたしは最も偉大な存在であり、わたしがあなたがたを支配している。あなたがたはわたしに慈悲を請わなければならず、わたしに従わないなら死をもって罰とする」と言いますか。神はかつて、このように人類を脅迫したことがありますか。（ありません。）神は、これまでに「人類は堕落しているので、わたしが人間をどのように好き勝手に扱ってもどうでもよい。人間のために周到な用意を行なう必要はない」などと言ったことがありますか。神はこのように考えますか。神がそのように行動したことがありますか。（ありません。）それとは反対に、神による人間一人ひとりの扱いはまじめで責任感があり、あなたが自分自身を扱うよりも責任感に溢れています。そうではないですか。神は無益に言葉を述べることも、その高い地位を誇示することも、人を欺くこともありません。その逆で、神は誠実かつ静かに行なうべきことを行ないます。それらの業は人間に祝福、平安、喜びをもたらします。それらは人間を平安かつ幸福のうちに神の見えるところへ、神の家へと連れて行きます。すると人間は正常な理知と思考をもって、神の前で生きて神の救いを受け入れます。それならば、神はその働きにおいて人間について他意があったことがありますか。かつて神が人間に対して親切

を装い、少々の愛想のよい言葉で騙し、それから背を向けたことがありますか。（ありません。）かつて神が、あることを述べ、それと一致しないことを行なったことがありますか。かつて神が、これをしてあげよう、あれをするのを助けてあげようと空虚な約束をし、豪語した上で消え去ったことがありますか。（ありません。）神には狡猾さや偽りがありません。神は信実で、神はそのすることすべてにおいて真実です。神は、人間が信頼できる唯一の存在であり、自分の人生、もっているものすべてを託すことのできる神です。神には狡猾さがなければ、神は最も真摯な存在であると言えますか。（はい。）当然言えます。「真摯な」という言葉は神に当てはめるには無力すぎ、人間的でありすぎるものの、他にどんな言葉が使えるというのでしょうか。これが人間の言語の制約です。神を「真摯である」とするのは不適ですが、当座はこの語を用います。神は信実かつ真摯です。それでは、こうした側面について話すとき、何を指していますか。神と人間の相違点や、神とサタンの相違点ですか。そう言うこともできます。なぜなら人間は、サタンの墮落した性質をまったく神に見出すことができないからです。これは正しいですか。その通り（アーメン）ですか。（アーメン！）サタンの邪悪さが神において明らかにされるのを見る事は決してありません。神が行ない明示することはすべて人間にとって有益であり、人間を助け、人間に施すために行なわれ、いのちに満ちあふれ、人間に進むべき道と方向性を与えます。神は墮落しておらず、さらに神のすることすべてを検討すると、神は聖なる存在であると言えますか。（はい。）神には人類の墮落が一切なく、人類の墮落した性質やサタンの本質と同一なものも一切なく、また神にはこれらに類似するものも一切ないので、この観点から、神は聖なる存在であると言えます。神が墮落を示すことはありません。神自身が聖であることは、その働きにおいて本質が明示されていることにより確認することができます。このことが理解できますか。神の聖なる本質を知るために、次の二つの側面について検討しましょう。①神には墮落した性質がまったくなく、②人間への神の働きの本質により、人間は神自身の本質を理解することができ、この本質は完全に肯定的である。神の働きの一つひとつの部分が人間にもたらすものは、すべて肯定的だからです。まず、神は人間が誠実であることを要求します。これは肯定的なことではありませんか。神は人間に知恵を与えます。これは肯定的ではないですか。神は人間が善と悪を見分けることができるようにします。これは肯定的ではないですか。神は人生の意味と価値を人間に理解させます。これは肯定的ではないですか。神は人間に人、出来事、物の本質を真理に従って理解させます。これは肯定的ではないですか。（はい、そうです。）これらすべての結果として、人間はもはやサタンに騙されたり、危害を加えられ、支配され続けることが

なくなります。つまり、これらのおかげで人間はサタンの墮落から完全に自己を解放し、そうすることで神を恐れ悪を避ける道を徐々に歩むことができます。あなたがたはこの道を今までどの程度歩いてきましたか。言いにくいのではないのでしょうか。しかし、少なくともあなたがたには、サタンが人間を墮落させる方法や、何が邪悪であり、何が否定的であるかに関して初歩的な知識がありますか。あなたがたは少なくとも正しい道を歩んでいます。そう言えますか。（はい。）

神の聖さについての話はこれで終わりにしますが、これまで聞いたり学んだりしたことから、神の聖さが何であることを述べる人可以いますか。わたしの言う神の聖さとは、何を指しますか。暫く考えなさい。神の真実さは、神の聖さですか。神の誠実さは、神の聖さですか。神の無私さは、神の聖さですか。神の謙虚さは、神の聖さですか。神の人間への愛は、神の聖さですか。神は人間に真理といのちを無償で与えます。これは神の聖さですか。（はい。）神が顕すことは、すべて唯一無二であり、墮落した人間には存在せず、人間にはそれを見出すことはできません。サタンが人間を墮落させる過程において、またサタンの墮落した性質やサタンの本質や本性にはまったく見る事ができないものです。神のもつもの神であるものはすべて唯一無二であり、そうした本質を持つのは神自身のみです。ここまでの話で、あなたがたの中でこれほど聖なる人間を見たことがある人可以いますか。（いません。）あなたがたが崇拝する有名人や偉人、人類の偶像のうち、これほど聖なる人可以いますか。（いません。）それでは、神の聖さは唯一無二であると言うと、それは誇張ですか。（いいえ。）その通りです。これらに加えて、神の聖さには実際面もあります。今、わたしが述べている聖さと、あなたがたが以前考え、想像していた聖さには差がありますか。（はい。）どの程度の差ですか。（とても大きな違いです。）人間が聖さについて話すとき、それは大抵何を意味しますか。（何らかの外見的振る舞いのことです。）振る舞いや何かを聖なると人が言うのは、ただ清潔で感覚的に気持ちが良いからです。しかし、それらには聖さの真の本質が欠けています。これは教義的な側面です。さらに、人間が考える「聖さ」の実際面は何を指していますか。それはおもに人間の想像や判断によるものですか。たとえば、仏教徒には修行中、座して寝ている時に死ぬ人がいます。こうした死者は聖なる存在となり、天国へと飛び立ったと言う人がいます。これも想像の産物です。また、天国から舞い降りる妖精が聖なる存在であると考える人がいます。実際には、人間の「聖なる」という言葉の概念は、従来から基本的に実際的な内容のないうつろな想像と理論であり、また聖さの本質とは無関係のものです。聖さの本質は真の愛ですが、それ以上に真理や義

、光の本質なのです。「聖なる」という言葉は、神に用いられた時のみ適切であり、被造物のうちで聖なると呼ぶに相応しいものは存在しません。人間はこれを理解しなければなりません。これからは、神にのみ「聖なる」という言葉を使います。これは妥当なことですか。（はい、そうです。）

ここで、人間を墮落させるためにサタンが用いる手段について、もう一度話し合しましょう。あなたがた一人ひとりが体験できる、神が人間に働く様々な方法については話したところなので、詳細にはあまり触れません。しかし、あなたがたの心の中では、人間を墮落させるためにサタンが用いる手段や策略については不明瞭であるか、少なくとも具体的な理解が不足していることでしょう。これについてわたしがもう一度話すことは、あなたがたにとって有益ですか。（はい。）あなたがたはこれについて学びたいですか。あなたがたのうちには「またサタンの話をするのはなぜか。サタンの話となると怒ってしまう。その名前を聞くとまた居心地が悪くなる」と思う人がいるかもしれませんが、どれほど居心地が悪くなくても、事実と直面しなくてはなりません。これらのことは、人が理解できるように分かりやすく説明しなくてはなりません。そうしなければ、人間はサタンの影響から本当に脱出することはできません。

サタンが人間を墮落させる五つの方法については、既に話し合いました。これらにはサタンが用いる手段があります。サタンが人間を墮落させる方法は、表面的なもので、その下に隠された手段が極めて狡猾で、サタンはそれを用いて目的を達成します。それは何ですか。要約してください。（騙し、誘惑し、脅迫することです。）列挙するほど、正確になってゆきます。あなたがたはサタンから深刻な危害を受け、この問題について強く思うところがあるようです。（サタンは甘い言葉を用い、影響を与え、強制的に占拠します。）強制的に占拠することは、極めて強い印象を与えます。人間はサタンの強制的な占拠を恐れています。そうですね。他には。（暴力により人間を傷つけ、脅迫と誘惑の両方を用い、嘘をつきます。）嘘はサタンの行動の内容であり、サタンはあなたを騙すために嘘をつきます。嘘の特性は何ですか。嘘と騙すことは同じではないですか。嘘をつくのは実は騙すことが目的です。他にも手段がありますか。知っているサタンの手段についてすべて話しなさい。（誘導し、危害を加え、盲目にして惑わします。）惑わすことについては、あなたがたの大部分が同じように感じているのではありませんか。（サタンは人間を支配し、虜にし、恐怖に陥れ、人間の神への信仰を阻みます。）あなたがたの言っていることの全体的な意味は分かりますし、すべて良い答えです。あなたがたは皆これについて何かしら知っています。ここでこれらの手段を要約しまし

よう。

人間を墮落させるためにサタンが用いる手段は、おもに六つあります。

第一の手段は支配と威圧です。つまり、サタンはあなたの心を支配するために、あらゆることを行ないます。「威圧」とは何ですか。脅迫と強制的な戦術を用いてあなたに言うことを聞かせ、従わなかった場合の結末を考慮させることを意味します。あなたは恐れて、逆らうような真似はせず、サタンに服従します。

第二の手段は騙しとごまかしです。「騙しとごまかし」には何が伴いますか。サタンは物語や嘘をでっち上げて人を騙してそれらを信じさせます。サタンは人間が神に造られたとは決して言いませんが、人間は神に造られたのではないとも直接的に言いません。サタンは「神」という言葉をまったく用いず、あなたを惑わすために言い換えの言葉を用いるので、あなたは神の存在については基本的に何も知りません。このごまかしには当然、これ以外にも様々な側面があります。

第三の手段は強制的な教化です。何について人は強制的に教化されますか。強制的な教化は、人間自身の選択により行なわれますか。人間の同意のもとで行なわれますか。（いいえ。）人間が同意しなくても、どうすることもできません。あなたの無意識のうちに、サタンの思想や生活法則、本質があなたに吹き込まれます。

第四の手段は脅迫と誘惑です。つまり、あなたにサタンを受け入れさせ、あなたをサタンに付き従わせ、サタンのために行動させるために、サタンは様々な手段を用います。サタンは目標達成のためならば、手段を選びません。サタンは時々あなたに僅かに恩恵を施し、あなたを誘惑して罪を犯させます。あなたがサタンに従わなかった場合、サタンはあなたを苦しめ、あなたに罰を与え、あなたを攻撃して罅にかけるために様々な手段を用います。

第五の手段は惑わしと麻痺です。「惑わしと麻痺」とは、人間を騙すことが唯一の目的なのに、あたかもサタンが人間の肉や生活、将来を考慮しているように見えるよう、人間の考え方と合致するような甘い言葉や思想をでっち上げることです。サタンはそうして人間を麻痺させるので、人間は善悪の判断がつかなくなり、人間は知らないうちに騙され、サタンに支配されてしまうのです。

第六の手段は、心身の破壊です。サタンは人間のどの部分を破壊しますか。（人間の精神と存在のすべてです。）サタンは人間の精神を破壊し、あなたを無力にして反抗させないようにします。つまり、あなたの心は自分の意思に反して少しずつサタンへ向い

てゆきます。サタンは、考えや文化などを用いて、そのようなことを日常的に人間に吹き込み、人間に影響を及ぼし、教化し、少しずつ人間の意志を滅ぼし、もはや善人になりたくないと考えさせ、人間が義と呼ぶものを堅持する意志をくじきます。知らないうちに、人間は流れに逆らって上流へと進む意志の力を失い、下流に流されていきます。

「破壊」とは、サタンが人間を苦しめるあまり、人間の幽霊で、もはや人間ではない状態にした上で、その機会に人間を食い尽くすことです。

サタンが人間を墮落させるこれらの手段は、どれもが人間を無力にして反抗できない状態に陥れることが可能です。どれもが人間にとって致命的なものです。つまり、サタンの行動とサタンが用いる手段は、すべてあなたを墮落させ、サタンの支配下に置き、罪惡の泥沼に陥れることができます。これらがサタンが人間を墮落させるために用いる手段です。

サタンは邪惡であると言えますが、それを確認するためには、サタンによる人間の墮落の結末と、それがどのような性質と本質を人間にもたらすかを検討しなければなりません。これについてはあなたがたの誰もが何かを知っていますから、発言しなさい。サタンによる人々の墮落の結果は何ですか。彼らはどの墮落した性質を表しますか。（傲慢さ、横柄さ、身勝手さ、卑劣さ、不正と狡猾さ、陰湿さ、惡意、そして人間性の完全な欠如です。）全体として、人間性が欠如していると言えます。他の兄弟姉妹も発言しなさい。（ひとたび人間がサタンに墮落させられると、通常その人間は傲慢で独善的、思い上がってうぬぼれが強く、貪欲で利己的になります。こうした性質が最も深刻だと感じます。）（人間がサタンに墮落させられた後、人間は物質的なものや富を手に入れるためなら、何があっても立ち止まりません。そして神様にさえ敵意を持ち、神様を拒否し、神様に反抗し、人間がもつべき良心と理知を失います。）あなたがたが言ったことは、細部の相違点があるものの、基本的にはどれも同じことです。ただ詳細を多めに含めた人もいます。概括すると、墮落した人間性にまつわることで最も突出しているのは、傲慢さ、不正直、惡意、および利己心です。しかし、あなたがたは皆同じことを見落とししました。良心のない人たちは、理知を失い人間性が欠如していますが、あなたがたの誰も挙げなかったとても重要なことがもうひとつあります。それは裏切りです。サタンに墮落させられた人間全員に存在する性質の究極的な結末は、神への裏切りです。神がどのような言葉を人間に述べても、どのような働きを人間に行なっても、墮落した人間は、真理であると分かっている事柄に注意を払いません。つまり、神をもはや認めず、神を裏切るのです。これがサタンによる人間の墮落の結末です。それは人間

の墮落した性質すべてに共通することです。人間が習得する知識、知っている科学、人間が理解している迷信や伝統文化、社会動向など、サタンが人間を墮落させるのに用いる方法の中に、何が義であり、何が不義であるかを判断するために人間が使用できるものがありますか。人間が何が聖なるもので何が邪悪かを判断するのに役立つものがありますか。これらを評価するための基準がありますか。（ありません。）人間に役立つ判断基準や基礎はそこにはありません。人々は「聖なる」という言葉を知っていても、聖なるものが何であるかを誰も実際には知りません。こうしたサタンが人間にもたらす物事により、人間は真理を知ることができますか。それにより、人間はさらなる人間性をもって生きることができますか。それにより、人間が神をますます礼拝できるように生きる助けになりますか。（なりません。）それにより人間が神を礼拝することや、真理を理解することや、聖さと邪悪が何であるのかを知ることができないことは明らかです。それとは反対に、人間は一層墮落し、神から遠ざかって行きます。これがサタンは邪悪であると言われる理由です。サタンの邪悪な性質を数多く解剖して、サタンの性質や、サタンの本質に関するあなたがたの認識において、サタンに何らかの聖さの要素を見出しましたか。（いいえ。）それは確かです。それでは、サタンの本質の側面のどれかに、神との類似点を見出しましたか。（いいえ。）サタンの表出には、神との類似点がありますか。（いいえ。）それでは、あなたがたに尋ねます。神の聖さとは、あなたがたの言葉で言うと、正確には何ですか。まず、「神の聖さ」という言葉は何と関連して語られますか。神の本質に関連して語られますか。それとも、神の性質の一部に関連してですか。（神様の本質に関連して語られます。）望むとおりの話題にたどり着くために明確に基盤を確認しなければなりません。「神の聖さ」という言葉は、神の本質に関連して語られます。まず、神の本質の引き立て役として、サタンの邪悪さを用いましたが、神の中に何らかのサタンの本質を見出しましたか。人類の本質についてはどうですか。（いいえ、見出していません。神様は傲慢でも利己的でもなく、裏切ることもなく、ここに神様の聖なる本質が明示されているのが見えます。）他に追加することはありますか。（神様には、サタンの墮落した性質の形跡がまったくありません。サタンが持つものは完全に否定的ですが、神様のもっておられるものはすべてが肯定的です。わたしたちの幼児期から生涯をとおして、現在に至るまで、とくに混乱して道を見失った時に、神様はいつもそばにいてわたしたちを見守り、安全を守ってくださったことがわかります。神様には偽りや誤魔化しがありません。神様は明瞭かつ分かりやすく御言葉を述べられ、それもまた神様の真の本質です。）よろしい。（神様には、他意も、豪語も、空虚な約束も、偽りもなく、サタンの墮落した性質は一切見られません。神様は人間

が信じることのできる唯一の方であり、神様は信実で真摯です。神様の働きからは、神様は人間に誠実であるようにお教えになり、人間に知恵をお与えになり、善悪を見分け、様々な人、出来事、物を識別できるようにしてくださるのが分かります。そこに神様の聖さが見えます。) それですべてですか。自分の回答に満足していますか。あなたがたの心には本当にどの程度の神に関する認識がありますか。神の聖さをどの程度理解していますか。あなたがたのそれぞれ心の中には、ある程度の知覚的な理解があることは知っています。なぜなら各々が自分への神の働きを感じることができ、また程度の差があるものの、多くの物事を神から得ているからです。神から恵みや祝福を受け、啓きと照らし、神の裁きと刑罰を得ているので、人間は神の本質について、ある程度の簡単な認識を得ます。

今日わたしたちが話し合っている神の聖さは、大部分の人にとって奇妙に感じられるかもしれませんが、それにもかかわらず、この話題を始めました。あなたがたが今後道を進んでいくにつれて理解を深めることになります。経験のなかで、徐々に感じ、理解することが必要なのです。現在、神の本質に関するあなたがたの知覚的な理解には、学び、確認し、実感し、経験するための長い時間が必要です。やがて心の奥から「神の聖さ」が、神の本質が完璧なこと、神の愛が無私なこと、神が人間に与えるすべてが無私であることを知り、神の聖さは汚れがなく、非難の余地がないことを知ります。神の本質のこれらの側面は、神が自身の身分を誇示するために用いるただの言葉ではなく、むしろ神はその本質を用いて、静かに、真摯に個々の人間を取り扱うのです。つまり、神の本質は空虚なものでも、理論的なものでも、教義上のものでもなく、ましてやある種の知識などではないのです。それはまた人間のための教育の一種ではなく、神自身の行ないの真の顕示であり、神がもつもの、神であるものの本質の顕示です。人間はこの本質を知り、理解しなければなりません。なぜなら神が行なうこと、神が言う言葉にはすべて一人ひとりの人間にとって大いなる価値と意義があるからです。あなたが神の聖さを理解するようになれば、神を真に信仰することができます。神の聖さを理解するようになれば、「唯一無二の神自身」という言葉の真意を本当に理解できます。あなたはこの道以外にも他の道を歩むことも可能であるなどと想像することはもはやなく、神があなたのために用意したすべてを裏切ろうとはもはや思わなくなります。なぜなら神の本質は聖なるものなので、あなたは神によってのみ義なる光の道にて人生を歩むことができ、神によってのみ人生の意味を知ることができ、神によってのみ真の人間性を生きることができ、真理を獲得し、知ることができ、神によってのみ真理からいのちを得るこ

とができるからです。人間が悪を避けるのを助け、サタンの危害と支配から人間を救うことができるのは神だけです。神以外に、あなたがこれ以上苦しまないように、辛苦の海から救い出すことができる人や物はありません。このことは、神の本質により決まっています。無私にあなたを救うのは神自身のみであり、あなたの将来や運命、人生に究極的に責任を負うのは神のみであり、神はあなたのためにあらゆる物事を手配します。これは被造物や非被造物のいずれも成し得ないことです。なぜなら被造物や非被造物に、このような神の本質を持つものは存在しないので、あなたを救い導く能力のある人や物は存在しないからです。これが人間にとっての神の本質の重要性です。あなたがたは、わたしがたった今語ったこれらの言葉が原理的には多少役立つとを感じるかも知れません。しかし、あなたが真理を追い求め、真理を愛しているのであれば、わたしのこれらの言葉はあなたの運命を変えるのみならず、人生の正しい道へとあなたを導くことを体験するようになります。あなたがたはこのことを理解していますね。それでは、神の本質を知ること、今では多少の関心がありますか。（はい。）あなたがたが関心があるということを知るのは良いことです。それでは、神の聖さを知るという主題について話し合うのは今日はここまでにします。

本日の集会の最初にあなたがたがしたことであたしを驚かせたことについて話します。あなたがたの中にはおそらくありがたく思っていたり、感謝の気持ちを抱いていたたりした人がいたのでしょう。そして、その思いが行為につながりました。その行為は咎められることなく、正しくも誤ってもいません。しかし、あなたがたに理解して欲しいことがあります。それは何でしょうか。まず、あなたがたが、たった今したことについて尋ねます。それは礼拝のためのひれ伏し、あるいはひざまずきですか。誰か答えられますか。（ひれ伏しだと思います。）あなたがたはそれはひれ伏しだったと思っているということですが、その意味は何ですか。（礼拝です。）それでは、ひざまずいて礼拝することとは何ですか。これまであなたがたとこのことについて話し合ったことはありませんが、今日はこのことを話す必要があると感じます。あなたがたは普段の集会でひれ伏しますか。（いいえ。）祈るときにはひれ伏しますか。（はい。）条件が許す場合、祈る度にひれ伏しますか。（はい。）それはよろしい。しかし、今日わたしがあなたがたに理解してもらいたいのは、神は二種類の人間によるひざまずきしか受け入れないということです。聖書を参照したり、霊的人物の行動を参照したりする必要はありません。わたしが今ここで、ある真実を述べます。まず、ひれ伏すことと、ひざまずいて礼拝することは同じではありません。ひれ伏す者がひざまずくのを神が受け入れるのは

なぜですか。それは、神が誰かを神のもとへ呼び、神からの任務を受け入れるよう命ずるのですから、神はその人が神の前でひれ伏すのを許します。これが第一の種類の人間です。第二の種類は、神を畏れ、悪を避ける人間がひざまずいて礼拝することです。この二種類の人間があるだけです。あなたがたはどちらの種類に属していますか。答えられますか。多少気持ちが傷つく人もいるかも知れませんが、これは事実の真相です。祈りを捧げる際に人々がひざまずくことについては、何も言うことはありません。それは適切であり、然るべきものでしょう。なぜなら、人々が祈る時大抵は、神に自分の心を開き、神と対面して、何かを求めて祈っているからです。それは神との心と心の意思疎通、意志交換です。ひざまずいて礼拝することは単なる形式となるべきではありません。今日のあなたがたの行動について咎めるつもりはありません。あなたがたがこの原則を理解できるように、明確にしたいだけです。わかりますね。（はい。わかります。）

同じことが再び起こらないように、このように話しているだけです。それでは、人間が神の前でひれ伏し、ひざまずく機会がありますか。そのような機会は決してないということはできません。遅かれ速かれ、その時が来ますが、それは今ではありません。わかりますか。この話のせいで動揺していますか。（いいえ。）よろしい。こうした言葉はあなたがたの動機付けや激励となり、現在の神と人間との窮状や、神と人間の関係がどのようなものであるかをあなたがたは心で理解することができるかもしれません。最近、わたしたちはずいぶん話し合い、交流していますが、神に関する人間の認識は、未だに十分と言うには程遠いです。人間が神を認識するために進むべき道のりは、まだ先が長いです。わたしの意図は、あなたがたに早急にそうさせることでも、そうした意欲や感情を示させることでもありません。あなたがたが今日したことは、おそらくあなたがたの真の気持ちを示し表現するもので、わたしはそれを感じました。そうしたわけで、あなたがたがそうしている最中、わたしは立ち上がって、あなたがたの幸いを願うわたしの気持ちを表したかったのです。なぜなら、わたしはあなたがた全員の幸いを願っているからです。わたしは、あらゆる言動において、あなたがたがあらゆることを正しく理解して正しい見方ができるように、あなたがたを助け、導くことに最善を尽くしています。このことは理解できますね。（はい。）よろしい。神の様々な性質、神がもつものの、神であるものの側面、また神の働きについて、人はある程度理解しているものの、この理解の大部分が、表面的な読書、原理の理解、あるいは単にそれらについて考えることに留まっています。人間に最も不足しているのは、実経験から得られる真の理解と見解です。人間の心を目覚めさせるために神は様々な方法を用いているものの、このことが達成されるまでの道のりは、まだ先が長いです。わたしは、神に取り残され、無視

され、見捨てられたように誰かが感じるのを見たくありません。わたしは、あなたがた全員が真理と神への理解を追求し、揺るがぬ意志で、不安や負担なく、勇気を持って前進することを望んでいます。あなたがこれまでどのような悪いことを行なったとしても、どれほど大きく道を外れたとしても、どれほど過ちを犯したとしても、そうしたことを神を知ろうとする追求における負担や重荷としてはなりません。絶えず前進なさい。人間を救うことは常に神の心にあります。これは決して変わりません。これが神の本質のなかで最も貴い部分です。これで、少し気持ちが楽になりましたか。（はい。）あなたがたが万事において、そしてわたしが語った言葉に関して、正しく取り組めることを願っています。それでは、これでこの会を終わしましょう。皆、ごきげんよう。（ごきげんよう。）

2014年1月11日

唯一無二の神自身 7

神の権威、神の義なる性質、および神の聖さの概論

祈りを捧げ終わったとき、あなたがたは神の前で心の静寂を感じますか。（感じます。）心を静められるとき、人は神の言葉を聞いて理解し、真理を聞いて理解することができます。心を静められず、心が絶えずさまよっていたり、いつも他のことを考えていたりすれば、集会に出て神の言葉を聞く際、あなたに影響を与えます。わたしたちが話し合ってきた物事の中で、その核心にあるものは何ですか。主要な点をみんなで少し振り返りましょう。唯一無二の神自身を知ることについて、最初に議論したのは神の権威でした。二回目に議論したのは神の義なる性質、そして三回目は神の聖さについて議論しました。それぞれの回で議論した具体的な内容は、あなたがたに印象を残しましたか。初回の「神の権威」では、何がもっとも印象に残りましたか。どの部分からもっとも強い影響を受けましたか。（神はまず、自身の御言葉の権威と力をお伝えになりました。神は言行一致していらっしゃる、神の御言葉は実現されます。それが神に固有の本質です。）（神はサタンに、ヨブを試みてもよいが命は奪ってはならないと命じられました。このことから神の御言葉の権威が見て取れます。）それ以外に付け加えることはありますか。（神は御言葉を用いて天地を造り、その中に万物を造り、御言葉を語って人間との契約を立て、人間に祝福を与えられました。それらはすべて神の御言葉がもつ権威の実例です。それに、主イエスがラザロに墓から出るよう命じられたこともわかりました。それは、生と死が神の支配下にあること、サタンには生死を支配する力がないこ

と、そして神の働きが肉においてなされようと、霊においてなされようと、神の権威は神特有のものであることを示しています。）これが、あなたがたがこの交わりを聞いて得た認識なのですね。神の権威について言えば、あなたがたは「権威」という語をどのように理解していますか。神の権威の範囲内で、人は神の業、神があらわす事柄の何がわかりますか。（神の全能性と知恵がわかります。）（神の権威が常に存在し、それが実在するものであることがわかります。巨視的には神が万物を支配なさることの中に、微視的には神が各人の人生を司っていらっしゃることに、神の権威が見て取れます。神は人生の6つの節目を実際に計画し、支配なさっています。さらに、神の権威は唯一無二の神自身をあらわし、被造物やそれ以外の存在にはそれがないことがわかります。神の権威は、神の身分の象徴です。）「神の地位と身分の象徴」というあなたがたの理解は、いささか教条的なように思えます。あなたがたは神の権威について本質的な理解をしていますか。（わたしたちが幼いころから、神はわたしたちを見守っておられます。そのことから神の権威がわかります。わたしたちは自分を待ち受ける危険に気づいていませんでしたが、神はその背後でいつもわたしたちを守ってくださいました。これも神の権威です。）素晴らしい。よく言ってくれました。

神の権威について話すとき、話の中心、話の要点は何ですか。なぜそれを話し合う必要がありますか。これを話し合う第一の目的は、神の造物主としての身分と、万物における神の地位とを、人々の心に打ち立てることです。それは、人間が最初に知り、理解し、感じるようになるものです。あなたが理解し、感じる物事は、神の業、神の言葉、そして万物に対する神の支配に由来します。では、神の権威を通じて見る物事、学ぶ物事、知る物事から、人間は何を真に理解しますか。第一の目的についてはすでに議論しました。第二の目的は、神がその権威によって行なった業、述べた言葉、支配した事柄のすべてを通じ、神の力と権威を人々に知らしめることです。神が万物を支配する中でいかに力強く賢明かを、あなたが理解できるようにするためです。これは、神特有の権威に関する以前の議論において、その中心、その要点ではなかったでしょうか。その議論からそれほど時間は経っていませんが、あなたがたの中にはすでにこのことを忘れた人がいます。そのことは、あなたがたが神の権威について深く理解していないことを証明しています。人間はいまだ神の権威を目の当たりにしたことがないとさえ言えるでしょう。いま、あなたがたは多少なりとも理解しましたか。神が権威を振るうのを目の当たりにして、あなたは何を実感しますか。あなたは神の力を実感したことがありますか。（あります。）神が万物をどう創造したかに関する言葉を読んだとき、あなたは神

の力と全能を感じます。人間の運命に対する神の支配を見て、あなたは何を感じますか。神の力と知恵を感じますか。神にこの力や知恵がなかったとしたら、万物と人間の運命を支配する資格があるでしょうか。神には力と知恵があるので、権威があります。これは神特有のものです。すべての被造物の中で、神のような力をもつ人や生物を見たことはありますか。天地と万物を造り、それらを支配し、統治する力をもつ人間や物は存在しますか。全人類を統治し、導き、かついつでもどこでも存在できる人間や物は存在しますか。（存在しません。）これで、神特有の権威にまつわる真の意味を理解しましたか。あなたがたはいま、それについていくらか理解しましたか。（しました。）これで、神特有の権威という主題の振り返りを終わります。

第二の部分で神の義なる性質を議論しました。その主題についてはさほど多くの議論を行ないませんでした。それはこの段階において、神の働きがおもに裁きと刑罰から成っているからです。神の国の時代、神の義なる性質は明瞭かつ極めて詳細にあらわされています。神は創造以来語らなかった言葉を語り、その言葉を読んで経験したすべての人が、その中に神の義なる性質があらわれたのを目の当たりにしてきました。それでは、神の義なる性質に関する議論の中で、その主要な点は何ですか。あなたがたはそれを深く理解していますか。経験から理解していますか。（神がソドムを焼き尽くされたのは、当時の人々が深く墮落し、神の怒りを招いたからです。そのことから、神の義なる性質がわかります。）まずは次の点を検討しましょう。仮に神がソドムを破壊しなかったら、あなたは神の義なる性質を知ることができるでしょうか。それでも知ることができたはずですね。神の国の時代に神があらわしてきた言葉と、神が人類に向けてきた裁き、刑罰、呪いの中に、それを見ることができます。神がニネベを滅ぼさなかったことから、あなたがたは神の義なる性質を理解できますか。（理解できます。）いまの時代において、人は神の慈悲、愛、寛容さをいくらか見ることができ、また人間が悔い改めたことを受けて神の心が変わったことの中にも、それを見ることができます。この二つの例を挙げて神の義なる性質の議論に組み入れたことで、神の義なる性質が明示されてきたことが極めて明確にわかります。しかし実際には、神の義なる性質の本質は、聖書に記されたこれら二つの挿話で明かされているものだけとは限りません。これまでに学んで理解したこと、および神の言葉と働きの中で経験したことから、あなたがたは神の義なる性質が何だと理解していますか。あなたがた自身の経験から話してください。（神が人のために造られた環境においては、人が真理を求め、神の御旨にしたがって行動できるとき、神は人を導き、啓き、人が心の明るさを感じられるようにし

てくださいます。人が神に背き、神を拒み、神の御旨にしたがって行動しなければ、あたかも神に見捨てられたかのように、その人の中には大きな闇があります。たとえ祈っているときも、神に何を言うべきかを知りません。しかし自分の観念と想像を脇に捨て、進んで神に協力し、自分を改善しようと努めるようになると、その人は神の笑顔を徐々に見ることができるようになります。そのことから、わたしたちは神の義なる性質の聖さを経験します。神は聖なる国に出現なさいますが、不浄の地にお隠れになるのです。）（神による人の扱い方の中に、神の義なる性質を見ることができます。わたしたち兄弟姉妹はそれぞれ霊的背丈や素質が異なり、神が各人にお求めになる物事も違います。わたしたちはみな、それぞれ異なる度合いで神の啓きを受けられますが、その中に神の義を見ることができます。なぜなら、わたしたち人間がこのように人を扱うことはできず、神にはおできになるからです。）さて、あなたがたはみな、自分ではっきり表現できる実践的認識をいくらか身につけました。

あなたがたは、神の義なる性質を理解するうえで鍵となる認識は何か知っていますか。この主題について、経験から語れることはたくさんありますが、まず、あなたがたに伝えなければならない要点がいくつかあります。神の義なる性質を理解するには、最初に神の感情を理解する必要があります。すなわち、神が何を嫌うか、何を憎むか、何を愛するか、誰に寛容で慈悲深いか、どのような人間にその慈しみを授けるかを理解しなければいけません。これが要点のひとつです。さらに、神がいかに愛情深くても、どれほど多くの慈悲と愛を人に対して抱くとしても、神は自身の地位や身分、および尊厳に背く者を決して容赦しないことも理解しなければいけません。神は人を愛していますが、好きなようにさせることはありません。神は人に愛と慈しみを与え、寛容を示しますが、人を甘やかすことは一切ありません。神には神の原則と限界があります。あなたがどれほど神の愛を感じてきたとしても、その愛がどれほど深かったとしても、他の人間と接するように神と接してはいけません。確かに、神は人をこのうえない親しさをもって扱いますが、人が神を単なる別の人として、あるいは友人や崇拝の対象といった、他の被造物であるかのようにみなした場合、神はそうした人間の前から姿を消し、彼らを見捨てます。これが神の性質であり、人はこの件を軽率に扱ってはいけません。そのため、自身の性質について神がこのように語っている言葉を、わたしたちはしばしば目にします。あなたがどれほど多くの道を歩み、どれほど働き、どれほど堪え忍んできたとしても、いったん神の性質に背けば、神はあなたがたひとりひとりに対し、自分がしたことに応じて報いを与えます。このことは、神がこのうえない親しさをもって人を扱う

としても、人は神を友達や親戚のように扱ってはいけないことを意味します。神を「友達」と呼んではいけません。あなたがいかに多くの愛を神から受けてきたとしても、いかに多くの寛容さを示されてきたとしても、決して神を友達のように扱ってはいけません。これが神の義なる性質です。わかりましたか。これについてさらに述べる必要はありますか。この事柄について、あなたがたは事前に理解していましたか。一般的に言えば、教義を理解しているかどうか、この件をじっくり考えたことがないかどうかにかかわらず、これは人がもっとも犯しがちな過ちです。人が神に背くとき、それは一つの出来事、あるいは一つの発言が原因だとは限らず、むしろその人の態度や状態が原因です。これは極めて恐るべきことです。自分は神を理解し、神についていくらか知り、神を満足させられるとさえ信じる人がいます。このような人は、自分は神と同等である、あるいはうまく立ち回って神と友達になったなどと感じるようになります。こうした感覚は大きな誤りです。あなたがこれについて深く理解せず、明瞭に認識していなければ、神や神の義なる性質にいとまたやすく背いてしまいます。これについてはわかりましたね。神の義なる性質は唯一無二のものではありませんか。それが人間の性格や品性と同等であることがあり得ますか。あり得ません。ゆえに、神が人をどう扱おうと、人のことをどう考えようと、神の地位、権威、身分は決して変わらないということを忘れてはいけません。人類にとって、神は常に万物の主であり、創造主なのです。

神の聖さについて、あなたがたは何を学びましたか。「神の聖さ」に関する部分で、サタンの邪悪さを引き立て役として使うという事実以外に、神の聖さにまつわる議論の要点は何でしたか。それは神が所有するものと神そのものではないですか。神が所有するものと神そのものは、神特有のものですか。（そうです。）それは被造物にはないのであり、神の聖さが唯一無二だと言うのはそのためです。あなたがたはそのことを理解できたはずです。神の聖さという主題について、わたしたちはこれまで三回にわたって集会を開きました。神の聖さとは何か、あなたがたは自分の言葉と認識でもって、自分の考えを説明できますか。（前回神がわたしたちと交わってくださった際、わたしたちは神の御前でひざまずいて頭を垂れました。ひれ伏して頭を垂れ、神を礼拝することに関する真理を、神はわたしたちに伝えてくださいました。自分が神の要求を満たさないままひざまずいて頭を垂れ、神を礼拝するのは、神の御旨に反することだとわかりました。またそのことから、神の聖さがわかりました。）まさにその通りです。その他にありますか。（人間に対する神の御言葉において、神は簡潔かつ明瞭に、また率直に要点を述べられていることがわかります。サタンは遠回しな語り口で話し、嘘でいっぱい

です。前回、わたしたちが神の御前でひれ伏したときの出来事から、神の御言葉と御業が常に原則に基づくものであることを理解しました。わたしたちがどのように振る舞うべきか、何を守るべきか、どのように実践すべきかを述べる時、神は常に明瞭かつ簡潔でいらっしゃいます。しかし、人間はそうではありません。サタンによって墮落させられてからというもの、人間は自分の個人的な動機や目的、心の中の願望をもって振る舞ったり語ったりしてきました。神が人間をどのように見守り、気遣って保護して下さるかということから、神の御業がどれも肯定的であり、明瞭であることがわかります。わたしたちはその中に、神の聖さの本質があらわれたのを見るのです。）素晴らしい回答です。誰か、他に付け加えることはありますか。（神がサタンの邪悪な本質を暴かれることで、わたしたちは神の聖さを目の当たりにし、サタンの邪悪さをよりよく知ることになり、人類の苦悶の根源を見ます。それまで、わたしたちはサタンの支配下にいる人の苦悶に気づいていませんでした。神がそれを明らかにしてくださって初めて、名声と富の追求に起因する苦悶がすべてサタンの働きだということを知ったのです。そうしてようやく、神の聖さは人類の真の救いであると感じました。）それ以外に付け加えることはありますか。（墮落した人類には、神に関する真の認識も、神への愛もありません。わたしたちは神の聖さの本質を理解しておらず、また神の御前でひれ伏し、頭を垂れて礼拝するとき、不純な考えや隠れた動機と意図をもってそうするので、神は機嫌を損ねていらっしゃいます。そこから、神とサタンはまったく違うことがわかります。サタンは人に慕われ、媚びられ、人がひれ伏して頭を垂れ、自分を礼拝することを望みます。サタンには原則がありません。そのことから、神の聖さに気づけます。）素晴らしい。神の聖さについて交わってきたいま、あなたがたは神の完璧さを理解しましたか。（理解しました。）神が肯定的な物事すべての源であることを理解しましたか。神が真理と正義の権化であることを理解できましたか。神が愛の源であることを理解しましたか。神が行なう業、神があらわす物事、神が明らかにする物事が、どれも完璧であることを理解しましたか。（理解しました。）これらは、わたしが述べてきた神の聖さの要点です。現在、これらの言葉はあなたがたにとって教義に過ぎないと思われるかもしれませんが、いつの日か、神の言葉と働きから真の神自身を体験し、目の当たりにするとき、あなたは、神は聖く、人間とは異なり、神の心、性質、本質はすべて聖いと、心の底から言うでしょう。この聖さにより、人間は神の完璧さや、神の聖さの本質が完璧であることを理解できるのです。神が唯一無二の神自身であることは、神の聖さの本質により決定され、同時に神が唯一無二の神自身であることを、人間が理解して証明できるようにします。これが要点ではありませんか。（その通りです。）

本日は、過去の交わりにおけるいくつかの主題について、その概要を説明してきました。今日の概説はここで終わることにします。あなたがた全員が、一つひとつの事項や主題の要点を、心に留めることを望みます。それらを単なる教義と考えず、時間があるときに熟読し、じっくり考えてください。それらを心に留めて現実に生かせば、神の性質と、神が所有するものと神そのものを神があらわすことについて、わたしが述べてきた現実のすべてを本当に経験できます。しかし、簡単にメモを取るだけで、それを読むことも検討することもなければ、それらを自分のものにすることは決してできません。いま、あなたがたは理解していますね。これら3つの主題を伝えられ、神の身分、本質、性質について、全体的な認識、さらには具体的な認識も得るようになると、神に関するその人の認識は完全になりますか。（なりません。）それでは、神に関するあなたがた自身の認識の中で、より深く理解しなければならないと感じる分野が他にありますか。つまり、神の権威、神の義なる性質、神の聖さに関する認識を得たいま、神特有の地位や身分があなたの心の中で確立されたかもしれませんが、あなたは依然として自分自身の経験を通じ、神の業、力、本質を目の当たりにし、理解し、それらに関する認識を深める必要があります。これらの交わりを聞きたいま、信仰に関する事柄が多かれ少なかれ心の中で確立されています。すなわち、神が実在し、万物を支配しているのは事実だということです。誰も神の義なる性質に背くことはできません。また神の聖さは、誰にも疑問視する余地のない、確かなものです。それらは事実です。これらの交わりにより、神の地位や身分が人の心の中で基礎をもつことができます。いったんこの基礎が確立されれば、人々はより理解しようと努めなければなりません。

神は万物のいのちの源である（1）

本日は、新たな主題についてあなたがたと交わります。その主題とは何でしょうか。題名は「神は万物のいのちの源である」です。この主題はいささか大ごとに聞こえますか。少し手の届かないものに感じますか。「神は万物のいのちの源である」という主題は、人々にとっていささか遠く感じられるかもしれませんが、神に従う全員が理解しなければいけない事柄です。なぜならそれは、神に関する各人の認識、およびその人が神を満足させ、畏れを抱けることと密接に関係しているからです。わたしがこの主題について交わろうとしているのはそれが理由です。人々はこの主題に関する基本的な理解がきっと以前からあるでしょう。あるいは、ある程度それを認識しているかもしれません。一部の人々の心の中では、この認識ないし意識に、単純な理解や浅い理解が伴っているかもしれません。また、心の中に特別な経験があり、この主題と個人的に深く関わっ

た人もいるかもしれません。しかし、深いか表面的かを問わず、こうした事前の認識は一方的であり、また十分具体的なものではありません。ゆえに、わたしがこの主題を交わりの対象としたのは、あなたがたより深く具体的な理解に至れるよう、それを助けるのが目的です。この主題についてあなたがたと交わるにあたり、わたしは特別な方法を用います。この方法はそれまで用いたことがないものであり、いささか違和感を覚えたり、多少不快に感じたりするものかもしれません。あとになれば、わたしのいわんとすることがわかります。あなたがたは物語が好きですか。（好きです。）では、物語を話すことを選んだのはよかったようです。あなたがたは全員、それが大好きだからです。さて、始めましょう。メモする必要はありません。静かに落ち着いていてください。周囲の環境や人に気が散るのであれば、目を閉じて構いません。あなたがたに聞かせる素晴らしい物語があります。それは種、大地、木、日光、鳥、そして人間の物語です。主要な登場人物は誰ですか。（種、大地、木、日光、鳥、人間です。）神は登場人物の一人ですか。（違います。）そうだとすると、いったんこの物語を聞くと、必ずや新鮮な気分になって満足します。では、静かに耳を傾けてください。

第1の物語：種、大地、木、日光、鳥、そして人間

一粒の種が大地に落ちました。大雨が降ったあと、種は柔らかい芽を出し、地中にゆっくり根を下ろしていきました。やがて、激しい雨風に負けず、季節の移り変わりを目にしながら、月の満ち欠けとともに、その芽は伸びていきます。夏には、芽が厳しい暑さに耐えられるよう、大地が水を贈りました。大地のおかげで暑さにやられずに済み、やがて夏の酷暑は過ぎていきました。冬になると、大地は芽を暖かく包み込み、大地と芽はしっかり抱き合いました。大地が芽を温めたおかげで、芽は厳しい冬の寒さを生き延び、寒風と吹雪の中でも無事でした。大地に守られながら、芽は立派に、かつ嬉しげに伸びてゆき、大地が与えた無私の育みによって元気に力強く成長しました。雨の中で歌い、風の吹くまま踊りながら、幸せに伸びていったのです。芽と大地は互いに頼り合っていました……

年月が過ぎ、芽は大樹へと育ちました。その木は大地に力強く立ち、太い枝をつけ、その先端には無数の葉が茂っていました。根は以前と同じく大地を掘り続け、いまや地中に深く根ざしています。小さな芽を守っていた大地は、いまではそびえ立つ木の基礎となっていました。

日光が木に降り注ぎ、木は幹を揺らして枝を広げ、日光に照らされた空気を深く吸い込みます。地面がその木と息を合わせて呼吸し、大地は若返ったように感じていました

。そのとき、新鮮な風が枝の間に吹き込み、木は喜びに震え、元気よくカサカサと音を立てました。こうして、木と日光は互いに頼り合っていたのです……

人々は涼しい木陰に座り、さわやかでかぐわしい空気を浴びています。その空気は人々の心臓や肺、血液を清めました。こうして人々の身体はもう無気力でも、束縛されてもいませんでした。人々と木は互いに頼り合っていたのです……

さえずり鳴く小鳥の群れが木の枝に留まりました。おそらく捕食者を避けるため、雛を産んで育てるため、あるいはしばらく休憩するために、そこに留まったのでしょう。鳥と木は互いに頼り合っていたのです……

木の根は曲がりくねって絡み合い、大地の中に深く根ざしていました。木はその幹をもって大地を風雨から守り、大枝を伸ばして足元の地面を保護していました。なぜなら、大地はその木の母だからです。木と大地は互いに強め合い、頼り合い、決して離れることはありませんでした……

これで物語は終わりです。わたしが語ったのは、種、大地、木、日光、鳥、そして人間の物語でした。2、3の光景しかありません。この物語はあなたがたにどのような印象を与えましたか。このように話をして、わたしの言うことを理解しましたか。（理解しました。）どうかあなたがたの感想を聞かせてください。この物語を聞いてどのように感じましたか。最初に言っておきますが、物語の登場人物はみな見たり触れたりできるものです。それらは実際の物事であって、比喩ではありません。わたしが述べたことを考えてみてください。わたしの物語に難解な箇所はありません。そしてこの物語の要点は作中の2、3の文章であらわすことができます。（この物語の描写は美しい。種が芽生え、成長する過程で春夏秋冬の四季を経験します。大地は芽吹いた種を母親のように育てます。冬になると、芽が寒さの中で生き延びられるよう、大地が温もりを与えます。芽が木へと成長したあとは、日光がその枝に触れ、木に大いなる喜びを与えます。多数にのぼる神の創造物の中で、大地もまた生きており、大地と木が互いに頼り合っていることがわかります。また、日光が木に大きな温もりを与え、普通の生物に過ぎない鳥が、木や人間と完全に調和して共生していることがわかります。これらが、この物語を聞いて心に抱いた感情です。これらのものがすべて本当に生きていたことがわかりました。）素晴らしい発言です。他に付け加えることはありますか。（種が芽吹いて大樹に育つこの物語の中で、神の創造の素晴らしさがわかります。神は万物が互いに強め合い、頼り合い、つながり合い、奉仕し合うようになさったことがわかるのです。神の知恵、神の驚異を見てとることができ、神が万物のいのちの源でいらっしゃることがわか

ります。)

わたしがいま述べたことはどれも、あなたがたが以前に見たことのあるものです。種を例にとると、それは成長して木になりますが、たとえその過程を一つひとつ細かく見ることはできないとしても、種が木になることはわかりますね。また、あなたは大地と日光についても知っています。鳥が木に留まっている光景は、誰しも見たことがあるはずです。それに木陰で涼む人々の姿も、あなたがたは見たことがあるでしょう。そうですね。(はい。)では、これらがすべてひとつの光景に含まれている場合、その光景はどのような感情をもたらしますか。(調和の感情です。)このような光景に含まれている一つひとつのものは、神に由来するものですか。(そうです。)それらは神に由来するものなので、神は地球上に存在するこれら様々なものの価値と重要性を知っています。神が万物を造り、それぞれのものを計画して創造したとき、神には意図がありました。そして神がそれらのものを創った際、それぞれにいのちが吹き込まれたのです。人類の存在のために神が創った環境は、いまの物語で描かれていたとおり、種と大地が互いに頼り合う環境、大地が種を育み、種が大地と結びつく環境です。この関係は、創造の最初において神によって決められたものです。木、日光、鳥、そして人間が登場する光景は、神が人間のために造った生活環境を描いたものです。まず、木は大地から離れることができず、日光なしで生きることできません。では、神が木を造った目的は何ですか。それはひとえに大地のためだと言えるでしょうか。ひとえに鳥のためだと言えるでしょうか。ひとえに人のためだと言えるでしょうか。(言えません。)それら同士の関係はどのようなものですか。それら同士の関係は、相互に強め合う関係、相互依存と不可分性の関係です。つまり、大地、木、日光、鳥、そして人間は、相互に頼り合って存在し、互いに育み合っています。木は大地を守り、大地は木を育み、日光は木に降り注ぎ、木は日光から新鮮な空気を得る一方で、大地に降り注ぐ太陽の焼けつくような熱さを軽くしています。そこから最後に恩恵を受けるのは誰ですか。それは人間ですね。これは、神が造って人間が暮らす環境の背景にある原則のひとつであり、神が最初からそれをどのように意図していたかを示しています。この光景は単純なものではありますが、その中に神の知恵と意図を見出すことができます。人類は大地や木、鳥、日光なくしては生きられません。違いますか。これは物語に過ぎませんが、描いているのは神による天地と万物の創造、および人間が生きられる環境を神が贈ったことの縮図なのです。

神は人間のために天地と万物を造り、生存環境も造りました。まず、この物語で述べ

たことの要点は、万物が相互に強め合っていること、相互に依存し合っていること、そして共存していることです。この原則のもと、人類の生存環境は守られており、存在と持続が可能になっています。そのおかげで人類は繁栄し、子孫を残すことができるのです。わたしたちが見たのは木、大地、日光、鳥、そして人間がともにある光景でした。この光景に神はいましたか。そこで神を目にすることはありませんでしたね。しかし、その光景に登場するもの同士の強め合いと相互依存の法則は目にしました。人はこの法則の中に、神の存在と主権を見ることができます。神はこうした原則と法則を用いることで、万物のいのちと存在を維持しているのです。神はこのようにして万物と人類に施します。この物語はわたしたちの主題と関連していますか。表面的には関連していないように見えますが、実際には、神が万物を造った法則と神による万物の支配は、神が万物のいのちの源であることと密接に関係しています。これらの事実は不可分なのです。さあ、何かを理解し始めましたね。

神は万物の活動を律する法則を指揮します。そして万物の生存を律する規則を指揮し、万物を支配し、それらが互いに強め合い、依存し合うように定めます。それにより、神はそれらが滅びたり消滅したりしないようにするのです。そうして初めて人類は生きることができ、このような環境の中、神の導きによって暮らすことができます。神はそれら活動法則の主であり、人類はそれに干渉することも、それを変えることもできません。神自身だけがこれらの法則を知り、それを管理するのです。木々がいつ芽吹くか、雨がいつ降るか、大地が植物にどの程度の水と栄養を与えるか、葉がどの季節に落ちるか、木々がどの季節に実を結ぶか、日光が木々にどの程度の栄養を与えるか、日光から栄養を得た木々が何を排出するかといった事柄はすべて、誰にも破られない法則として、神が万物を造ったときに予定したことなのです。生物であろうと、人間の目には生物であると見えないものでであろうと、神が造った物事は神の掌中にあり、神はその中でそれらを操り支配しています。これらの法則を変えたり破ったりできる人はいません。つまり、神は万物を造ったとき、木は大地がなければ根を下ろすことも、芽吹くことも、成長することもできず、木々がなければ大地は渴き、また木々は鳥のすみかとなり、風から身を守る場所になるよう定めたのです。日光なくして木は生きられますか。（生きられません。）大地だけがあっても木は生きられないでしょう。これらはどれも、人間と人間の生存のためのものです。人間は木から新鮮な空気を受け取り、木が守っている大地の上で暮らしています。人間は日光や他の様々な生物がなければ生きられません。これらの関係は複雑ですが、万物が互いに強め合い、依存し合って共存できるよう、神

が万物を律する法則を定めたことを、あなたは忘れてはいけません。言い換えれば、神が造った一つひとつのものにはそれぞれ価値と意味があるのです。意味のないものを造ったとしたら、神はそれを消滅させるでしょう。これは、神が万物に施す際に使う方法のひとつです。この物語のなかで「施す」という単語は何を指していますか。神が毎日木に水をやることですか。木が呼吸するのに神の助けは必要ですか。（必要ありません。）ここで「施す」とは、創造された万物を神が管理していることを指します。それらを律する法則が確立されれば、あとは神がそれらを管理するだけで十分なのです。いったん種が大地に植えられれば、木は独力で成長します。木が成長する条件は、すべて神によって造られました。神は日光、水、土、空気、周囲の環境、風、霜、雪、雨、四季を造りました。これらは木が成長するために必要な条件であり、神が用意したものです。それならば、こうした生存環境の源は神ですか。（神です。）神は毎日木々の葉の数を数えなければなりません。そんなことはありません。また、木が呼吸するのを助けたり、「木を照らす時間だ」と言って毎日日光を目覚めさせたりする必要もありません。神はそのようなことをする必要がないのです。日光は法則に従い、照らす時間が来ればひとりでに照らします。日光があらわれて木を照らすと、その木は必要とあれば日光を吸収し、必要なければそのまま法則の中で暮らします。あなたがたはこの現象を明確に説明できないかもしれませんが、にもかかわらず、それは誰もが見て認めることのできる事実です。あなたは、万物の存在を律する法則が神に由来していること、神が万物の成長と存続を司っていることを認識するだけでよいのです。

さて、この物語には、人々が言うところの「比喩」が含まれていますか。この物語は擬人化されていますか。（擬人化されていません。）わたしは実話を語りました。あらゆる生物、すべてのいのちあるものは、神に支配されています。それぞれの生物は創造されたときに神からいのちを吹き込まれました。あらゆる生物のいのちは神に由来するものであり、それを導く軌道と法則に従います。人間がそれを変える必要はなく、人間による助けも必要としません。それは、神が万物に施す方法の一つです。わかりますね。人はこのことを認識する必要があると、あなたがたは思いますか。（思います。）それでは、この物語には生物学が関係していますか。何らかの形で知識や学問の分野と関係していますか。わたしたちは生物学を議論しているのでもなければ、ましてや生物学的な研究を行なっているのでもありません。わたしたちの議論の要点は何ですか。（神が万物のいのちの源であるということです。）あなたがたは創造物の中で何を見ましたか。木々を見ましたか。大地を見ましたか。（見ました。）日光を見たことはあります

ね。木にとまっている鳥を見たことはありますか。（あります。）このような環境で生活している人間は幸福ですか。（幸福です。）つまり、人間の住まいや生活環境を維持して守るために、神は万物、つまり自分が造ったものを用いるのです。そのようにして、神は人間と万物に施すのです。

わたしがこのような形で話し、あなたがたと交わることについて、あなたがたはどう感じていますか。（分かりやすく、実生活の実例が数多くあります。）わたしが話しているのは空虚な言葉ではありませんね。神が万物のいのちの源であることを理解するのに、人はこの物語を必要としますか。（必要です。）それでは、次の物語へと進みましょう。次の物語は内容が多少異なり、要点も少しばかり違います。物語に登場する物事は、神の創造物のうち、人がその目で見られるものばかりです。さて、次の話を始めましょう。静かに耳を傾け、わたしの言わんとすることを理解できるかどうか確かめてください。物語のあと、あなたがたに質問して、あなたがたがどの程度学んだかを確認します。この物語の登場人物は大きな山、小川、強風、そして巨大な波です。

第2の物語：大きな山、小川、強風、そして巨大な波

曲がりくねった小川があり、その小川は大きな山の麓へと流れ込んでいました。この山は小川の流れを遮っていたので、小川は「わたしを通してください。あなたが立ちふさがっているので、先へ進むことができません」と、か弱い小聲で山に頼みました。すると山は、「どこへ行くのか」と尋ねました。小川は「自分の故郷を探しています」と答えました。山は「わかった。わたしを超えて流れてゆくがいい」と言いましたが、小川は弱く、幼かったので、そのような大きな山を越えて流れることなどできません。そうしたわけで、小川は引き続き大きな山の麓に流れ込むことしかできませんでした……

強風が吹き込み、砂や瓦礫を山がそびえる場所へと運んできました。強風は大声で「わたしを通せ」と怒鳴りました。すると山は、「どこへ行くのか」と尋ねました。強風が「山の向こう側へ行きたいのだ」と怒鳴り返したところ、山は「わかった。わたしの胴体を割って通れるのであれば、通ってよろしい」と答えました。強風はあちこちから吹き込みましたが、どれほど強く吹き込んでも山の胴体を割ることはできませんでした。そのうちに疲れてしまい、吹くのを止めて休んだのですが、山の反対側でそよかぜが吹き始め、そこにいる人たちを喜ばせました。それは人々に対する山からの挨拶だったのです……

海辺では、小波が岩だらけの岸に優しく打ち寄せていました。すると突然、大波が現

れ、山の方へと押し寄せていきました。大波が「そこをどけ」と叫んだところ、山は「どこへ行くのか」と尋ねました。大波は止まることができず、「領地を拡大しているところだ。両腕を伸ばしたいんだ」と答えました。山は「わかった。わたしの頂を越えて通れるのであれば、道を譲ろう」と言いました。すると大波は少し下がってから、再び山へ向かって押し寄せました。しかしどれほど頑張っても、山の頂を越えることができません。大波は徐々に海へと退くことしかできませんでした……

小川は何千年にもわたって山の麓を優しく流れ続けました。山が指し示す方向をたどり、故郷に戻って大河と合流し、やがて海へと流れ込んだのです。小川は山の慈しみを受け、決して迷うことがありませんでした。小川と山は互いに頼り合い、強め合い、交流し合い、共存していました。

強風は数千年経っても相変わらず山に吹きつけていました。そして大きな渦を巻く砂を巻き込みながら、しばしば山を「訪れ」ました。山を脅かしたものの、その胴体を割ることはできませんでした。風と大きな山は互いに強め合い、頼り合い、交流し合い、共存していました。

大波もまた数千年にわたって休むことなく、激しい勢いで押し寄せ、絶えず領地を広げていました。何度も山へと押し寄せたものの、山はまったく不動のままでした。山は海を見守り、そのために海中の生物は増加し、繁栄しました。波と山は互いに強め合い、頼り合い、交流し合い、共存していました。

さて、物語はこれで終わりです。まず、この物語は何に関するものでしたか。最初に大きな山があり、小川、強風、そして巨大な波が登場しました。最初の部分では、小川と大きな山の間で何がありましたか。わたしが小川と大きな山について話すことを選んだのはなぜですか。（大きな山による慈しみのもと、小川は道に迷うことがありませんでした。互いに頼り合っていたのです。）山は小川を守っていたと言えますか、それとも妨害していたと言えますか。（守っていました。）しかし、小川を妨害してはいませんでしたか。山と小川は互いに見守り合っていました。山は小川を守りながら、同時に妨げてもいたのです。山が小川を守っていたので、小川は大河へと流れ込むことができましたが、同時に山は小川の流れを遮り、それによって洪水を引き起こして人々に災害をもたらすのを防いだのです。これが、この一節が言わんとしていたことではありませんか。小川を保護し、同時にその流れを妨げることで、山は人々の家を守ったのです。やがて小川は山の麓で大河と合流し、海へと流れ込みました。それは小川の存在を律する法則ではありませんか。小川が大河へと流れ込み、そして海へと流れ込めたのは何の

おかげですか。それは山のおかげではなかったですか。小川は山の保護と障壁に頼っていました。では、それが要点ではないのですか。その中に、山の小川に対する重要性を見て取れますか。大きかろうと小さかろうと、すべての山を造ったことについて、神には計画があったのでしょうか。（ありました。）これは短い一節に過ぎず、小川と大きな山に過ぎませんが、そこからわたしたちは、神がこれら二つのものを造ったことの価値と意義を理解することができます。また、それらを支配することにおける、神の知恵と目的も示しています。そうではありませんか。

この物語の次の部分は何に関するものでしたか。（強風と大きな山です。）風はよいものですか。（よいものです。）そうとは限りません。風が強すぎて災害を引き起こすことがあります。強風の中に立たせられたらどう感じますか。それはその強さ次第ですね。風力3、4程度であれば我慢できるでしょう。せいぜい目を開け続けるのが難しくなるだけです。しかし、風が強くなって暴風になったら、あなたは耐えられますか。耐えられないでしょう。したがって、風は常によりものである、あるいは常に悪いものである、と人々が言うのは間違っています。なぜなら、それは風の強さによるからです。さて、ここで大きな山はどのように機能していますか。風防として機能しているのではありませんか。山は強風をどの程度まで弱めていますか。（そよ風にしています。）では、人間が暮らす環境の中で、大半の人が晒されているのは強風ですか、それともそよ風ですか。（そよ風です。）それは、神が山を造った目的の一つ、意図の一つではありませんか。風に吹かれた砂が激しく舞い上がり、それを防ぐものも、妨げるものもない環境の中で人間が生活したとすると、それはどのような生活ですか。砂や石が飛び交う土地など、人間には住めないのではありませんか。石が人に当たり、砂が人の目を見えなくするでしょう。人間が足元をすくわれたり、空中に飛ばされたりすることもあるでしょう。家は破壊され、様々な災害が起こるに違いありません。それでもなお、強風の存在に価値はありますか。わたしが、風は悪いと言ったので、人はそれに何の価値もないと感じるかもしれませんが、果たしてそうですか。そよ風に変われば価値があるのではないですか。湿度が高くむせかえるような天気のと看、人が一番必要とするのは何ですか。そよ風が優しく吹いて気分を爽快にし、頭をすっきりさせ、思考を研ぎ澄まし、精神状態を直して改善することが必要です。たとえば、あなたがたはいま、多くの人がいる風通しの悪い部屋に座っていますが、あなたがたに一番必要なものは何ですか。（そよ風です。）空気がよどんで汚れている場所に入ると、人間の思考は遅くなり、血行は悪くなり、頭脳明晰度も落ちます。しかしながら、少しばかり空気を動かして循環さ

せれば、空気が新鮮になって人の気分も変わります。小川や強風は災害を起こす可能性もありますが、山がそこにある限り、その危険を人間にとって有益な力に変えるはずで
す。そうではありませんか。

この物語の3番目の部分はどのような内容でしたか。（大きな山と大波の話でした。
）そのとおり、大きな山と大波の話です。この一節の舞台は山の麓の海岸です。山、波
しぶき、そして大波が登場します。この一節の中で、大きな山は大波にとってどのよう
な存在ですか。（保護するものであり、障壁でもあります。）山は保護するものであり
、かつ障壁です。大波を保護することで、海が消え去るのを防ぎ、その中の生物が増殖
して繁栄できるようにします。障壁としての山は、海水が溢れて災害を引き起こし、人
々の家を破損したり破壊したりするのを防いでいます。したがって、この大きな山は保
護するものであり、障壁でもあると言えます。

このことは大きな山と小川、大きな山と強風、そして大きな山と大波の相互関係の意
義を示しています。それらが互いに強め合い、妨げ合い、共存していることの意義です
。神が造ったこれらのものは、規則と法則によってその存在を律せられています。では
、あなたがたはこの物語の中で、神のどのような業を目の当たりにしましたか。神は万
物を造って以来、それらを無視してきましたか。神は法則を設け、万物がどのように機
能するかを計画したにもかかわらず、そのあとはそれらを無視しましたか。そのような
ことがありましたか。（ありません。）それでは、どのようなことがあったのですか。
神はいまだに支配しています。水、風、波を支配しているのです。神は、そうした物事
が荒れ狂うことも、人々が暮らす家を破損したり破壊したりすることも許しません。そ
のおかげで、人は地上で生活し、増殖して繁栄することができるのです。つまり、神は
万物を造ったとき、すでにそれらの生存法則を計画していました。神は一つひとつの物
事を造ったとき、それが人間に資することを確認し、またそれを支配することで、人間
を悩ませたり、災害をもたらしたりすることがないようにしたのです。神による管理が
なかったとしたら、水は何の制限も受けずに流れるのではないのでしょうか。風も制限を
受けずに吹くのではないのでしょうか。水と風は法則に従いますか。神がそれらを管理せ
ず、それらを律する法則もなければ、風は吹き荒れ、水は何の制限も受けずに洪水を引
き起こすでしょう。波が山より高かったとしたら、海は存在できるでしょうか。できな
いはずで
す。大きな山が波ほど高くなければ、海は存在しないでしょうし、大きな山は
その価値と意義を失うに違いありません。

これら二つの物語の中に、あなたがたは神の知恵を見て取れますか。神は存在する一

切のものを造り、それを支配しています。神はそのすべてを管理し、それらに施しを与え、また万物のあらゆる言動を見て吟味しています。それゆえ、神は人間生活のあらゆる部分をも見て吟味しているのです。したがって、神は一つひとつの物事の機能、本質、およびその生存法則から、そのいのちの意義、そして生存の価値に至るまで、自ら造ったあらゆる物事を、掌を指すかのように詳しく知っており、それはどれも完全に神の知るところとなっています。神は万物を造りましたが、それらを律する法則について研究する必要が神にはあると思いますか。神は人間の知識や科学を研究し、それらについて学んで理解する必要がありますか。（必要ありません。）人間のうち、神のように万物を理解できるほど、知識と学識を備えた人はいるでしょうか。いませんね。万物が生きて成長するか、その法則を真に理解している天文学者や生物学者がいるでしょうか。そのような人たちに、一つひとつの物事の存在価値を真に理解することができますか。（できません。）それは、万物が神によって造られたからであり、人間がどれほど多く、どれほど深くこの知識を研究したとしても、あるいはどれほど時間をかけてそれを知ろうと努力したとしても、神による万物創造の奥義や目的を推測することは決してできません。違いますか。さて、ここまでの議論から、あなたがたは「神は万物のいのちの源である」という言葉の真意を部分的に理解したと感じていますか。（感じています。）「神は万物のいのちの源である」というこの主題について述べると、多くの人は「神は真理であり、言葉を使ってわたしたちに施す」という別の言葉をすぐに思い浮かべ、この主題の意味についてそれ以上は何も考えないでしょう。中には、神が人間の生活に施し、日々の食べ物や飲み物、そして日常のあらゆる必需品を与えていることは、神が人間に施しているとはみなされないとすら感じる人もいるでしょう。一部の人はこのように感じているのではないですか。しかし、神の創造の意図は明らかではないですか。つまり、人が正常に存在して生きられるようにすることではないのですか。神は人が暮らす環境を維持し、人間が生き延びるのに必要なものを残らず与えます。さらに、神は万物を管理し、支配しています。こうしたことにより、人間は正常に生活し、繁栄して増殖することができるのです。神はこのようにして、すべての被造物と人間に施します。人間は、こうした物事を認識して理解する必要があるのではないのでしょうか。「この主題は、真の神自身に関するわたしたちの認識からあまりにかけ離れているし、わたしたちはパンだけで生きるのではなく、神の言葉によって生きるのだから、こうしたことなど知りたくもない」と言う人もいるかもしれません。そうした認識は正しいですか。（正しくありません。）なぜ正しくないのですか。神が言ったことに関する認識があるだけで、神を完全に理解することができますか。神の働き、裁き、そして刑罰を受け入

れるだけで、神を完全に理解することができますか。神の性質や権威のごく一部を知っているだけで、神を理解するには十分だと考えられますか。（考えられません。）神の業は万物の創造に始まり、現在も続いています。神の業が不明瞭だったことは一瞬たりともありません。神が人々の一団を選んで彼らに働きを行ない、彼らを救ったというだけで、神は存在していると信じ、他の何も神とは関係なく、神の権威、身分、あるいは業とも関係ないと信じるなら、その人は神を真に知っていると思えますか。このいわゆる「神に関する認識」をもつ人は、一方的な理解しかしておらず、それによって神の業を人の一団に限定します。それは、神に関する真の認識ですか。このような認識を持つ人々は、神による万物の創造と支配を否定しているのではないですか。中にはこの点に関わろうとせず、「万物に対する神の支配を、わたしは見たことがない。その考えはあまりに自分とかけ離れていて、わざわざ理解しようとは思わない。神は望むことを何でも行なうが、それはわたしに無関係である。わたしは、自分が神によって救われ、完全にしてもらえるよう、神の導きと御言葉を受け入れるだけだ。他の何もわたしには関係ない。神が万物を造ったときに定めた規則や、万物と人間に施すために行なうことは、わたしと何の関係もない」などと思い込む人がいます。何という話でしょうか。これは反抗ではないですか。あなたがたの中に、このように認識している人はいますか。たとえそう言わなくとも、ここにいるあなたがたの大半がこのように考えていることを、わたしは知っています。このような型通りの人間は、自分の「霊的」観点からすべてを見ます。彼らは、神が語った言葉によって神を聖書に限定し、文字どおりの言葉の意味に限定しようとするばかりです。この種の人には神をさらに知ることを望まず、神が他の業を行なうことに注意を割くのを望みません。こうした考え方は子供じみたもので、同時に極めて宗教的です。こうした見方をする人は神を知ることができますか。こうした人が神を知るのはとてつもなく難しいでしょう。今日、わたしは二つの物語を話したわけですが、それぞれが異なる側面に触れています。それらを耳にただけでは、いずれも難解だったり、多少抽象的だったりして、理解するのが難しいと感じているかもしれません。それを神の業や神自身と関連づけるのは難しいでしょう。しかし、神の業、そして神が万物や人間の中で行なったことはどれも、すべての人、神を知ろうとするすべての人が、明瞭かつ正確に知らなければならないものです。この認識は、神の真の存在に対する信仰を確固たるものにします。また、神の知恵と力、そして神が万物に施す方法についても、正確な認識をあなたにもたらしめます。さらにこの認識は、あなたが神の真の存在をはっきり知覚し、神の存在が架空のものでも伝説でもなく、漠然としたものでもなく、学説でもなく、ましてや一種の精神的な慰めでもなく、現実の存在であるこ

とを理解できるようにします。そのうえ、神が常にすべての被造物と人間に施してきたことを、人々に知らしめます。神は自身の方法で、神自身の律動にしたがってこれを行ないます。ゆえに、神の予定のもと、万物が自分に割り当てられた任務を行ない、自分の責任を果たし、自分の役割を果たせるのは、神が万物を造り、それらに法則を与えたからなのです。神の予定のもと、一つひとつの物事は人間のため、人間が暮らす空間と環境のため、それぞれの役割を果たします。仮に神がそのようにせず、人間がこのような生活環境をもっていなければ、人間が神を信じたり神に従ったりすることは不可能でしょう。それは単なる無駄話にしかならないはずです。違いますか。

先に述べた大きな山と小川の物語に再び目を向けましょう。この山の役目は何ですか。山には生物が繁殖しているので、その存在には固有の価値があり、同時に小川を妨げて自由に流れるのを防ぎ、人々に災害をもたらさないようにしています。そうではありませんか。山は独自の形で存在し、そこに住む無数の生物、つまり木々や草やその他の動植物が繁栄できるようにしています。山はまた小川が流れる方向を導き、水を集めて山の麓を自然に流れさせ、そこで小川は大河へと流れ込み、最終的に海へと到達できます。これらの法則は自然に生じるものではなく、創造の際、神が特に定めたものです。大きな山と強風の部分について言えば、山は強風も必要としています。山は、そこに棲む生物に風が心地よく吹きつけることを必要とする一方で、風が無闇に吹かないよう、強風の力を押さえつけています。ある点において、この法則は大きな山の義務を体現しています。それでは、山の義務に関するこの法則は、自然と生じたものでしょうか。（違います。）それは神によって定められたものです。この大きな山には義務があり、強風にも義務があります。今度は大きな山と巨大な波に目を向けましょう。山の存在がなかったとしたら、大波は自分で流れる方向を探し当てていたでしょうか。（そのようなことはありません。）水は洪水になるでしょう。山には山としての存在価値があり、海には海としての存在価値があります。しかし、両者が正常に共存でき、相互に干渉しない状況において、両者は相互に制限もします。大きな山は、海が洪水を起こさないように制限し、それによって人々の家を守ります。また、海を制限することで、海中に棲む生物を養うことができます。この光景は自然に生まれたものでしょうか。（違います。）これもまた神によって造られたものです。この光景から、神は万物を造ったとき、山がそびえる場所、小川が流れる場所、強風が吹き出す方角と吹き込む方角、巨大な波の高さを予め決めていたことがわかります。これらのすべてに神の意図と計画が込められており、それは神の業なのです。さて、万物に神の業が存在することを理解できました

か。（理解できました。）

これらの事柄を議論する目的は何ですか。神が万物をつくった法則を人に研究させるためですか。天文学や地理学への興味をかき立てるためですか。（違います。）それでは何ですか。その目的は、人々に神の業を理解させることです。人は神の業の中に、神が万物のいのちの源であることを確かめられます。これを理解できれば、自分の心の中に神の居場所があり、神が神自身であり、唯一の存在であり、天地と万物の創造主であることを、真に確信することができます。では、万物の法則と神の業を知ることは、あなたが神を理解するうえで有益ですか。（有益です。）どの程度有益ですか。まず何より、神の業を理解したとき、あなたは依然として天文学や地理学に関心がありますか。依然として猜疑心をもち、神が万物の創造主であることを疑いますか。依然として研究者の心をもち、神が万物の創造主であることを疑いますか。（疑いません。）神が万物の創造主であることを確信し、神の創造の法則を一部でも理解したとき、神が万物に施すことを、あなたは心の中で本当に信じますか。（信じます。）ここでいう「施す」には特定の意味がありますか、それとも具体的な状況を指すのに使われますか。「神が万物に施す」という言葉には、極めて広い意味と範囲があります。神は人々に、食べ物や飲み物を日々施すだけでなく、人間が必要とするあらゆるものを施しますが、その中には人に見える一切のものだけでなく、人に見えないものも含まれています。神は、人間に必要不可欠なこの生活環境を維持し、管理し、支配します。つまり、それぞれの季節で人間がどのような環境を必要としようとも、神はそれを用意してきたのです。神はまた、人間の生存に適したものになるよう、大気の状態や気温も管理しています。これらの物事を律する法則は、自然に生じたものでも不規則に生じたものでもありません。それらは神の支配と業の結果なのです。これらの法則の源、万物のいのちの源は神自身です。あなたが信じるかどうか、見えるかどうか、理解できるかどうかにかかわらず、これは立証された議論の余地のない事実なのです。

大部分の人々は聖書に含まれている神の言葉と働きしか信じていないことをわたしは知っています。神は少数の人々のために自身の業をあらわし、人々が神の存在価値を理解できるようにしました。また、神は人々に神の地位をいくらか認識させるとともに、神の存在の事実を確信させてきました。しかし、それよりさらに多い人間にとっては、神が万物を造り、万物を管理し、万物に施すという事実は、漠然としているか曖昧なように思えます。このような人は懐疑的な態度さえとります。彼らはこの態度のせいで、自然界の法則は自発的に形成されたものであるとか、自然の変化、移り変わり、現象、

そして自然を律する法則は自然それ自体から発生したものであると、しつこく信じるようになります。人々は、神がどのようにして万物を創造し、支配しているかを心の中で知覚できず、また神が万物をどのように管理し、万物に施しているかを理解できません。人はこの前提に制限を受け、神が万物を創造し、支配し、万物に施していることを信じられません。信じる人でさえ、自分の信仰においては律法の時代、恵みの時代、そして神の国の時代に制限されます。つまり、神の業、および人間に対する神の施しは、ひとえに神の選民のためだと信じるのです。わたしはそれを見るのがとてつもなく嫌で、胸が強く痛みます。なぜなら、人間はたとえ神から与えられた物事を残らず享受していても、神の業や神から与えられた物事をすべて否定するからです。人間は、天地と万物はそれ自体の自然の法則に律せられ、それ自体の自然の法則によって生存し、それらを管理する支配者も、施しを与えてそれらを守る統治者もないと信じるだけです。あなたが神を信じていたとしても、これらのすべてが神の業だと信じない可能性もあります。事実、神の信者、神の言葉を受け入れる人、そして神に付き従う人の全員によって、しばしば無視されることの 하나가これなのです。そうしたわけで、わたしが聖書と無関係な何か、いわゆる霊的な用語と無関係な何かを話したすやいなや、うんざりしたり、あきあきしたり、不快にすらなったりする人がいます。わたしの言葉が霊的な人々や霊的な物事からかけ離れているように見えるのです。これは恐ろしいことです。神の業を認識することについて言えば、天文学に触れなかったり、地理学や生物学を研究しなかったりしたとしても、わたしたちは神の万物に対する支配を理解し、神が万物に施していること、神が万物の源であることを知らなければなりません。これは必要不可欠な教訓であり、学ぶ必要があります。みなさん、わたしの言葉がわかったと思います。

先ほど述べた二つの物語は、いささか独特な内容で、表現方法も変わっており、そのうえ語り口もいささか特殊だったかもしれません。しかしそれは、より難解な事柄をあなたがたが把握して受け入れることができるよう、明解な言葉と簡潔な方法を使うわたしの試みだったのです。それがわたしの唯一の目的です。これらの短い物語とそこで描かれた光景から、神があらゆる被造物の支配者であることをあなたがたが理解し、信じるようになってほしかったのです。これらの物語を話したことの目的は、物語の制限の中で、あなたがたが神の無限の業を理解し、わかるようにすることです。あなたがたがその成果をいつ自分の中で完全に実現し、達成できるかは、あなたがた自身の経験と追求次第です。あなたが真理を追い求め、神を知ることが求める人であれば、こうした事柄はさらに強力な助言として役立つでしょう。それらはあなたに深い認識と明瞭な理解

をもたらし、神の実際の業と徐々に近づき、まったく距離も誤りもない程度まで密接するようにします。しかし、あなたが神を知ることを求める人でなくても、これらの物語があなたがたに危害を加えることはあり得ません。これらは真の物語だと考えればそれでいいのです。

これら二つの物語から、あなたがたは何かを認識しましたか。まず、これら二つの物語は、人間に対する神の懸念という以前の議論と無関係なものです。固有のつながりがありますか。これら二つの物語から、神の業と、神が人間のために計画しているあらゆることの中に、神が払っている周到な配慮を見て取れるというのは本当ですか。神の業と考えがすべて人間の存在のためにある、というのは本当ですか。（本当です。）人間に対する神の細心の考えと配慮は、極めて明瞭ではありませんか。人間は何もする必要がありません。神は人間のために空気を用意しました。人間はそれを呼吸すればいいのです。人間が食べる野菜や果物はすぐに用意されます。東西南北の各地域には、それぞれ独自の自然資源があります。また様々な穀類、果物、野菜が神によってすべて用意されています。より大きな環境において、神は万物が相互に強め合い、依存し合い、助け合い、共存するようにしました。これが、万物の生存と存在を維持する神の方法と法則なのです。そのようにして、人間はその生活環境の中で安全かつ静かに育ち、現在に至るまで世代ごとに増加を続けてきました。つまり、神は自然環境に調和をもたらすのです。神の統治と支配がなかったとしたら、依然として神によって環境が造られたとしても、それを維持して調和させる能力は誰にもないでしょう。空気が存在しない場所もあり、人間はそのようなところで生活できません。そして、神は人間がその場所へ行くことを許しません。したがって、境界を越えてはいけません。それは人間を守るためであり、そこには神秘があるのです。こうした環境の各側面、地球の長さや幅、ないし生死を問わず地球上のすべての生物は、いずれも神が前もって知覚し、用意したものです。それぞれのものはなぜ必要であったり、不要であったりするのですか。ものをここに置いたりあそこにもっていったりする目的は何ですか。こうした疑問について神はすでに考え抜いており、人が考える必要はありません。山を動かすことを常に考えている愚かな人々もいますが、山を動かさず、その代わり野原へ移動すればいいでしょう。山が好きではないのであれば、なぜ山の近くに住むのですか。それは馬鹿げていませんか。山を動かしたら何が起こるのでしょうか。台風や巨大な波がやって来て、人間の家は破壊されるでしょう。それは愚かな行動ではないのでしょうか。人間には破壊することしかできません。唯一の生きる場所すら維持できず、それでいて万物に施すことを望んでいま

す。それは不可能です。

人間が万物を管理し、その主となることを神は許していますが、人間はよい仕事をしていますか。人間は破壊できるものを何でも破壊しています。神が人間のために造ったあらゆるものを、人間は最初の状態に維持することができず、逆のことをして神の創造物を破壊します。人間は山を動かし、海を埋めて陸に変え、野原を誰も住めない砂漠に変えてきました。それでもなお、人間は砂漠に産業を興し、原子力発電所を建てるなどして、あらゆる場所に破壊をもたらしています。もはや川は川でなくなり、海は海でなくなったのです……人間が自然環境の調和と法則を破壊すると、災難と死が間近に迫ります。それは避けられません。災害が発生すると、神が自分に造ってくれたものがどれほど貴重か、それが人間にとっていかに重要かを、人は知ります。人間にとって、適切なときに風雨がやって来る環境で暮らすことは、楽園で暮らすことに似ています。人間はそれが祝福だとは気づいていませんが、それをすっかり失った瞬間、それがどれほど稀少で貴重かを知るのです。いったんなくなったら、それを取り戻すにはどうすればいいですか。神が再び創造するのを望まなかったとしたら、人間には何ができるでしょうか。あなたがたにできることはありますか。（いいえ、何もありません。）実は、あなたがたにできることがあります。それは極めて単純であり、それが何かを言えば、実行可能であることはすぐわかります。人間の存在が現在のような状態に置かれたのはどうしてですか。それは人間の貪欲さと破壊のためですか。人間が破壊を止めたら、生活環境は自然と徐々に修復されるのではないですか。神が業を一切行なわず、人間のために業を行なうことを望まなくなったとしたら、つまり神がこの件に介入しなかったら、破壊を一切止め、生活環境が自然の状態に戻るようにするのが人類の最善の解決策でしょう。そうした破壊をすべて止めるというのは、神が造った物事を略奪したり、荒らしたりするのを止めるという意味です。そうすることで、人間が生活する環境は次第に回復しますが、それを怠った場合、生活環境はいっそう不快なものになり、時間とともに破壊が進むでしょう。わたしの解決策は単純ですか。それは単純であり、実行可能です。違いますか。単純であることに間違いはなく、また一部の人にとっては実行可能なものです。しかし地球上の大部分の人々にとって、これは実行可能ですか。（実行可能ではありません。）少なくともあなたがたにとって、これは実行可能ですか。（実行可能です。）あなたがたが「実行可能です」と言うのはなぜですか。それは、神の業の認識という基礎から生じるものだと言えるでしょうか。その条件は神の支配と計画に従うことだと言えるでしょうか。（言えます。）物事を変える方法がありますが、いま話し合っ

ている主題ではありません。神は人間のいのちの一つひとつについて、その最後の時まで責任を負います。神はあなたに施し、サタンに破壊されたこの環境の中、たとえあなたが病を患ったり、汚染されたり、害を受けたりしても、そうしたことは関係ありません。神はあなたを施し、あなたを引き続き生かします。あなたがたはこのことを信じますか。（信じます。）神は人が死ぬのを軽々しく許したりはしません。

あなたがたはいま、神を万物のいのちの源として認めることの重要性について、何かを感じるようになりましたか。（なりました。）何を感じていますか。教えてください。（それまでは、山、海、それに湖を、神の御業と関連づけようとは考えませんでした。今日、神の交わりを聞いて初めて、これらのものの中に神の御業と知恵があることがわかりました。神は万物を造り始めたときでさえ、一つひとつのものの中に運命と神の善意をすでに吹き込まれていたことがわかります。万物は相互に強め合い、頼り合っており、人間は最終的な受益者です。本日の話は新鮮かつ斬新に感じるものであり、神の御業がどれほど現実的かが感じられます。現実の世界、わたしたちの日常生活、そして万物との遭遇において、そのとおりであることがわかります。）あなたは本当にわかったのですね。神は確固たる根拠をもたずに、人間に施すことはありません。神の施しは2、3の短い言葉ではないのです。神は数多くのことを行ない、たとえあなたの目に見えなくても、それはすべてあなたに資するものなのです。人間は、神が人間のために造った万物の中、人と万物が相互に依存する環境において暮らしています。たとえば、植物は空気を清める気体を吐き、人は清められた空気を呼吸してそこから益を得ます。一方、一部の植物は人間にとって有害ですが、別の植物がそうした有毒な植物を妨げます。これは神の創造の奇跡です。しかしその主題は後に回しましょう。今日、わたしたちの議論はおもに人間とその他の被造物との共存についてであり、それら被造物がなければ人間は生きられません。神による万物創造の重要性は何ですか。人間はその他の被造物がなければ生きられませんが、それは生きるのに空気を必要とするのと同じことです。真空状態に置かれれば、あなたはすぐに死んでしまいます。これは、人間がその他の被造物から離れて生きられないことを示す、極めて単純な原則です。では、人間は万物に対してどのような姿勢をとるべきでしょうか。それらを大事にし、守り、有効に使い、破壊せず、無駄遣いせず、気まぐれに変えないという姿勢をとるべきです。万物は神から生じて人間に施されたものであり、人間はそれらを良心的に取り扱わなければならないからです。本日は、これら二つの主題について議論しました。これらの内容を入念に考え、じっくり考慮してください。次回是一部の内容についてさらに詳しく議論しま

す。本日の集会はこれで終わりです。ごきげんよう。（ごきげんよう。）

2014年1月18日

唯一無二の神自身 8

神は万物のいのちの源である（2）

前回からの交わりの話題を続けましょう。前回話した話題を憶えていますか。（「神は万物のいのちの源である」です。）「神は万物のいのちの源である」というのは、あなたがたには縁のないように感じる話題ですか。あるいは、それについての大まかな認識が、すでに心の中にありますか。この主題に関する前回の交わりの要点について、ここで誰か話してくれませんか。（神様による万物創造を通じて、神様が万物を養い、また人類を養うことがわたしには分かります。過去には、神様が人間にお与えになる時は、神様の選民にだけ神様の言葉をお与えになるのだといつも思っていました。神様は万物の法則を通して人類を養っていらっしゃるということには気付きませんでした。真理のこの側面を神様が伝えて下さったことを通してのみ、わたしは神様が万物の源であること、万物のいのちは神様によって与えられていること、神様がこれらの法則を操っておられること、そして神様が万物を養っておられることを感じてきました。神様による万物の創造にわたしは神様の愛を見ます。）前回わたしたちは、おもに神による万物創造について、また、万物のために神がどのようにして法則と原則を確立したのかということについて交わりを持ちました。このような法則と原則の下で、神の支配の下、神の目に見守られながら、万物は人間と共に生き、死に、人間と共存しています。わたしたちはまず始めに、神が万物を創造し、自身の方法を使って、万物が成長する法則、及びその成長過程とパターンを定めたことを話しました。また、神は万物がこの地上で生存する方法を定めて、それらのものが成長と繁殖を続け、相互依存の中で生存できるようにしました。このような方法や法則により、万物がこの地でうまく平和に存在し成長することができます。このような環境をもつことによってのみ、人間は安定した家庭や生活環境をもつことができ、神の導きの下で発展し続け前進し、また発展しては前進することができます。

前回、わたしたちは神が万物に施すという基本的な概念について話し合いました。神は万物に対し、それらが人類の益のために存在し生きるよう、このようにして施しました。言い換えれば、このような環境は神によって定められた法則の故に存在しています。神がこのような法則を維持し管理することによってのみ、人類は今いる生活環境をも

つことができるのです。わたしたちが前回話したことは、以前話した神についての認識からの大きな飛躍です。なぜこのような飛躍が存在するのですか。それは、神を知ることについて過去に話した時、わたしたちは、神が人類を救い経営すること、つまり神の選民の救いと経営という範囲内において、神を知ること、神の業、神の性質、神がもつものと神であるもの、神の意図、神がどのようにして人間に真理といのちを与えるのかについて議論していたからです。しかし、わたしたちが前回話した話題は、もはや聖書だけに限られず、また神が自分の選民を救うという範囲に限られていませんでした。むしろ、神が自らについて語るために、この範囲からとび出し、聖書から、神が選民に対して行なう働きの三つの段階という制限からとび出しました。ですから、わたしの話のこの部分を聞く時、あなたは神に関する認識を聖書と神の働きの三つの段階だけに限定してはなりません。代わりに、あなたは絶えず広い視野をもっていなければなりません。あなたは神の業、神がもち神であるもの、神がどのようにして支配し、経営しているのかをあらゆるものに見なければなりません。この方法により、これを基礎とすることで、神がすべてのものをどのように与えるのかを見ることができます。これにより、人類は神が万物のいのちの真の源であり、これこそが神自身の真の身分であることを理解することができます。すなわち、神の身分、地位、権威、そして神のすべては、現在神に従っている人々だけに向けられているのではなく、つまりこの集団の人々であるあなたがただけではなく、万物を対象としています。したがって、万物の範囲は非常に広いのです。神がすべてのものを支配する範囲を言い表すために、わたしは「万物」と言う表現を使います。何故なら、神によって支配されているものには、あなたがたの目に見えるものだけではなく、すべての人々に見える物質的世界、及び物質的世界の外にあり人間の目には見えない別の世界も含まれており、さらには人類が現在存在する場所以外の宇宙や惑星も含まれているからです。それが万物への神の支配の範囲です。万物への神の支配の範囲は非常に広いのです。あなたがたについて言うと、あなたがたが理解すべきこと、見るべきこと、何から認識を得るべきか、これらのことはあなたがたの一人ひとりが理解し、見、確信しなければならないことです。この「万物」の範囲は非常に広いものですが、わたしはあなたがたがまったく見ることのできない範囲や、接触できない範囲については話しません。誰もが「神は万物のいのちの源である」という言葉の真の意味に気づけるように、人間が接触でき、理解でき、認識できることの範囲内にある事柄についてだけ、あなたがたに話します。そうすれば、わたしがあなたがたに伝えることは、何ひとつ空しい言葉にはなりません。

今回は、神はすべてのものをどのように与えるのかということについて、あなたがたが基本的な理解を得られるよう、物語り形式を使って「神は万物のいのちの源である」という話題の簡単な概要を提供しました。あなたがたにこの基本概念を教え込む目的は何でしょうか。それは、聖書と神の三段階の働き以外にも、神は人間が見ることも接触することもできないさらなる働きを行なっていることをあなたがたに知らせることです。このような働きは神自らにより行なわれています。もし、神の経営の働き以外のこのような働きなしに、神がその選民を前へと導いているだけなら、あなたがた全員を含む、この人類が前進し続けることは非常に困難になり、人類とこの世は発展を続けることができなくなるでしょう。これこそが、今日わたしがあなたがたに伝えている「神は万物のいのちの源である」という言葉の重要性なのです。

神が人類のために創造する基本的な生活環境

わたしたちは、「神は万物のいのちの源である」という言葉に関連する多くの話題や内容を議論してきましたが、神があなたがたに言葉を与え、あなたがたに刑罰と裁きを行なうこと以外には、どんなものを人類に授けるのか、あなたがたは心の中で分かっていますか。ある人たちは、「神はわたしに恵みと祝福を授け、鍛錬と慰め、そして思いやりと加護をあらゆる方法で与えてくださいます」と言うかもしれません。他の人たちは、「神はわたしに毎日食べ物や飲み物を与えてくださる」と言うでしょう。一方、「神はわたしにすべてのものを授けてくださいます」とさえ言う人もいるでしょう。人々が日常生活で接することができるこれらのことに関して、あなたがたは皆、自らの物理的な生活体験に関連する答えをいくつか持っているかもしれません。神は一人ひとりに多くのものを与え、わたしたちがここで議論していることは人々の日常の必要の範囲だけに限定されてはおらず、各人の視野を広げ、巨視的な視点から物事を見るようにするためです。神は万物のいのちの源ですが、どのようにして万物のいのちを維持するのでしょうか。万物が存在し続けることができるように、それらのものの存在を維持し、それらのものの存在に関する法則を維持するために、神は万物に何をもたらしますか。これこそ、今日わたしたちが議論していることの要点です。あなたがたはわたしが言ったことを理解していますか。この話題はあなたがたにはあまり馴染みがないかもしれませんが、わたしはあまりに深遠な教義については何も話しません。これを聞いた後にあなたがたが皆理解できるように、わたしは努めています。あなたがたはどんな負担も感じる必要はありません。注意して聴くだけで良いのです。しかしながら、もう少し強調しなければなりません。わたしが話している話題は何ですか。言ってください。（「神は

万物のいのちの源である」です。) それでは、どのようにして神はすべてのものを供給しますか。「神は万物のいのちの源である」と言えるためには、神は万物に何を与えるのですか。あなたがたには、何かこれに関する考えや思いがありますか。わたしが話しているこの話題は、おおむねあなたがたの心と頭をまったく空白にしてしまうようです。しかし、わたしが今から話す話題と物事を、あなたがたが知識、または人間の文化や研究に結び付けるのではなく、神の業に結び付けることを望みます。わたしはただ神について、神自身について話しています。それがあなたがたへのわたしの提案です。あなたがたは理解していますね。

神は人類に多くのものを授けました。わたしは、人々が見ることができるもの、つまり、感じられるものについて話すことから始めます。これらは、人々が心で理解し、受け入れることができることです。それではまず、神が人類に何を与えてきたかについて話すために、物質界から始めましょう。

1. 空気

まず最初に、神は人間が呼吸できるように空気を創りました。空気は、人間が日常的に接触することができる物質であり、また人間がどの瞬間でも、たとえ眠っているあいだでも依存しているものです。神が創造した空気は人類にとって途方もなく重要です。それは人類の吐く息一つひとつと、命そのものの不可欠な要素です。感じることはできるが目には見えないこの物質は、万物への神からの最初の贈り物です。空気を創り出した後、神はただちに店じまいしたでしょうか。空気を創ったあと、神は空気の密度について考慮しましたか。神は空気の中身について考慮しましたか。(はい。) 空気を創った時、神は何を考えていたのでしょうか。なぜ神は空気を創り、またその理由は何でしたか。人間には空気が必要であり、呼吸することが必要です。まず、空気の密度は人間の肺に適していなければなりません。誰か空気の密度を知っていますか。これは人々が知らなければならないことではありません。知っている必要はありません。空気の密度に関する正確な数値は必要ありません。ただ一般的な考えがあればそれでいいのです。神は人間の肺が呼吸するのに最も適した密度で空気を創られました。つまり、人間は心地よく感じ、呼吸しても体に害を与えることはありません。これが空気の密度の背後にある考えです。次に、空気の中身について話します。第一に、空気の中身は人間にとって有毒ではなく、肺や身体を害することはありません。神はこれらのことすべてを考慮しなければならませんでした。神は人間が呼吸する空気が穏やかに入ったり出たりするように、そして空気が吸い込まれた後、血液や肺と体内のいらぬ空気が適切に代謝さ

れるように空気の内容と量を整え、また、空気には何も有害な成分が含まれないように考慮しなければなりません。これらの二つの基準に関しては、沢山の知識をあなたに詰め込むようなことはしたくありません。ただ、神があらゆるもの、まさに最良のものを創造した時、特定の思考過程が念頭にあったことだけを伝えておきます。さらに、空気中の粉じんの量、地球上の塵、砂、泥の量、及び空から地上に舞い落ちる粉じんの量に関して言えば、神にはこれらのことを管理する方法があり、それはこれらのものをきれいに除去するか、分解させるというものでした。塵がいく分ある時は、神は、塵が人間の身体と呼吸に害を及ぼさないように、塵が身体に有害にならないような大きさにしました。神による空気の創造は神秘的ではありませんか。それは神の口からただ一息の空気を吐き出すくらいに単純なことでしたか。（いいえ。）極めて単純なものを神が創造する時でさえ、神の奥義と心と思いと知恵のすべてが明らかです。神は実際的ではないでしょうか。（はい、そうです。）つまり、単純なものを創ることにおいても、神は人類のことを考えていました。まず、人間が呼吸する空気はきれいであり、その内容物は人間の呼吸に適しており、毒性がなく、人間に害を及ぼさず、密度は人間が呼吸できるように調整されています。人間が吸って吐き出すこの空気は、人間の身体に、肉体にとって不可欠です。だから人間は制限も心配もなく、自由に呼吸することができます。人間は正常に呼吸することができます。空気は、神が最初に創造した、人間の呼吸に不可欠なものです。

2. 気温

二番目のものは、気温です。誰でも気温が何かは知っています。気温は、人間の生存に適した環境に備わっていることが必要とされるものです。たとえば摂氏40度を超えるなど、もし気温が高すぎるなら、それは人間を大いに消耗させるのではないのでしょうか。人間がそのような状況で生きるのは極めて疲れることではないのでしょうか。もし摂氏零下40度になるほど気温が低すぎる場合はどうですか。それもまた人間には耐え難いでしょう。したがって、神はこの気温の範囲設定において極めて几帳面でした。人体が適応可能な気温の範囲は、基本的に摂氏零下30度から摂氏40度までです。これは南から北までの基本的な気温の範囲です。寒冷地域では気温はおそらく摂氏零下50度から60度まで落ちることもあります。そうした地域は、神が人間の居住を許可する場所ではありません。なぜそのような寒冷地域が存在するのですか。そこに、神の知恵と意図があります。神は、人間がそのような地域付近に行くことを許しません。神は暑すぎる地域や寒すぎる地域を保護しているのです。すなわち神はそこに人間が居住する準備

をしていないのです。それは人類のためではないのです。なぜ神は地上にそのような場所を存在させているのでしょうか。もし神がそこに人間が居住したり存在したりするのを許していないのであれば、なぜ神はそれを創るのでしょうか。そこには、神の知恵があります。つまり、人間の生存のための環境の基本的な気温もまた、神により適宜調整されてきたのです。ここにもまた法則があります。神はこうした気温の維持に役立ち、気温を制御するものを創りました。この気温を維持するために何が用いられていますか。まず、太陽は人間に温もりをもたらしますが、暑すぎると人間は耐えることができますか。太陽にあえて近づこうとする人はいますか。地球上には太陽に近づけることのできる計器はありますか。（ありません。）なぜですか。熱すぎるからです。太陽に近づき過ぎるものはすべて溶けます。したがって、神は具体的な働きを行ない、入念な計算と基準に従って太陽の高度、および人類との距離を定めました。また、地球には南北二つの極があります。それらの地域は凍っており、一面の氷河です。人類は氷河地帯に住めますか。そのような場所は人間の生存に適していますか。（適していません。）それらは人間の生存に適していないので、人々はそれらの場所に行きません。人が南極や北極に行かないので、そこにある氷河は保たれ、気温を管理するという自身の目的を果たすことができます。わかりますね。南極も北極もなければ、太陽が絶えず発する熱のせいで地球の人間は消滅するでしょう。しかし、神はこれら二つの極だけを遣って、人間の生存に適した気温の範囲を保っているのでしょうか。違います。それ以外にも、野原の草、様々な種類の木々、そして森のあらゆる種類の植物など、太陽の熱を吸収するありとあらゆる生き物が存在します。これらは太陽の熱を吸収する中で、太陽の熱エネルギーを中和し、それによって人間が生活する環境の気温を調整します。また、河川や湖沼などの水源も存在します。河川や湖沼の表面積は、誰かが決めることのできるものではありません。誰も地球上の水の量や、水の流れる先、方向、水量、流れる速度を制御できません。それは神だけが知っています。地下水や、人間が見ることのできる地表の河川や湖沼などの様々な水源もまた、人間が生活する気温を調整することができます。それに加えて、山や平野、峡谷や湿地など、様々な地形が存在します。こうした様々な地形とそれぞれの表面積や規模はみな、気温制御の役割を果たしています。たとえば、ある山の円周が100キロメートルである場合、その100キロメートルには100キロメートル分の有用性があります。神が地上に創ったそれらの山地や峡谷の数についても、神は十分に考慮しました。つまり、神が創造したひとつひとつのものの背後には、それぞれに物語があり、それぞれに神の知恵と計画が含まれているのです。たとえば、森とあらゆる種類の植生について考えましょう。それらが生育する地域の範囲と規模はいかなる

人間にも制御できず、それらについて最終的に決定できる人間はいません。森と植生がどの程度の水を、どの程度の太陽の熱エネルギーを吸収するかについても、人間には制御できません。これらの物事は、すべて神の万物創造時に、神により計画された物事の範囲にあるのです。

また、そうした適切な気温の環境において人間が生活できるのは、そのすべての側面においての神の周到な計画、検討、采配のおかげです。したがって、太陽など人間が自らの目で見える個々のもの、南極や北極など人間が頻繁に話を聞くもの、地上や地中、水中の様々な生き物、森その他の植生の面積、水源、様々な形態の水域、淡水や海水の量、さらに様々な地理的環境など、神はこれらを用いて人間の生存のための常温を維持しているのです。これは絶対です。そうした適切な気温の環境において人間が生活できるのは、神のそのような考慮のおかげです。それは寒すぎることも暑すぎることもありません。人体が順応できる気温を超えるほど暑い場所は、神があなたのために用意した場所ではないことは間違いありません。気温が低すぎて寒すぎる場所、すなわち人間が到着するとただちに数分で凍えてしまい、話すことができず、脳が凍り、思考不可能となり、すぐに息が詰まるような場所も、神が人間のために用意した場所ではありません。人間がどのような研究を行なうことを望み、革新したい、あるいはこうした制約を打破したいと考えたとしても、人間が何を考えるかに関わらず、人体が順応可能な限界を超えることは決してできません。人間は神が人間のために設けたこのような限界を解消することは決してできないのです。これは神は人間を創ったので、人体が順応可能な温度について一番良く理解しているのです。しかし、人間自身は知りません。なぜ人間は知らないと言うのですか。人間はどのような愚行を行なってきましたか。北極や南極に常に挑みたい人が多数いませんでしたか。彼らは北極や南極へ向かい、その地を占有して定住して開発することを常に望んでいます。これは馬鹿げた行為ではないでしょうか。たとえあなたが南極と北極を完全に調査したとしても、それが何だと言うのでしょうか。たとえあなたがその気温に順応して暮らすことができ、南極と北極の現在の生存環境を「改善」したとしても、それが何らかの形で人類に恩恵をもたらすでしょうか。人間には生存できる環境があっても、静かに、かつ従順にそこに留まることはなく、あくまで生存不可能な場所へと冒険しようとしします。それはなぜですか。人間はこの適切な気温の中で生活することに飽きているのです。人間はあまりに多くの祝福を享受してきました。また、この通常の生活環境は、人類によってかなり破壊されて来たので、南極や北極へ行って更なる破壊を行なったり、ある種の「先駆者」となれるように、何らかの

「活動」を行なおうということのようです。これは愚かではありませんか。つまり、祖先であるサタンの指導の下に、この人類は次から次へと愚かなことをし続け、神が人類のために創った美しい住処を、見境なくみだりに破壊してゆくのです。これはサタンがしたことです。さらに、地球上における人類の生存が多少危うくなったのを見て、月へ行ってそこに住む方法を見つけない、月に住めるか否かを見極めて出口を見つけない人が大勢います。しかし結局、月には酸素がありません。酸素なしで人間は生存できますか。月には酸素がないので、人間が居留できる場所ではありませんが、人間は相変わらず月へ行きたがります。これは何ですか。これは自滅行為ですね。それは空気のない場所で、気温も人間の生存に不適ですから、神が人間のために用意した場所ではないのです。

たった今話をした気温は、人間が日常生活で接することのできるものです。気温はすべての人間が体感できるものですが、この気温がどのようにして現れたか、あるいは人間の生活に適した気温を誰が制御しているのかは、誰も考えません。これが本日わたしたちが知りつつあることです。これには、神の知恵がありますか。これに神の業がありますか。（はい。）人間の生活に適した気温の環境を神が創ったことを考えると、これは神が万物を与えるひとつの方法ですか。（はい。）そうです。

3. 音

三番目は何ですか。それは人間の通常の生活環境が備えているべきものでもあります。それは、神が万物を創った時に取り扱わなければならなかったものです。神にとって、そして皆にとっても、極めて重要なものです。もし神がこれを扱わなかったとしたら、人間の生存に対する大きな障壁となっていたことでしょう。つまり、人間の身体と生活に著しい影響を及ぼし、人類がそのような環境で生存することは不可能となっていたでしょう。また、あらゆる生き物がそうした環境では生存できないと言うことができます。これは何ですか。それは音です。神は万物を創り、万物は神の手の中で生きます。神の目から見ると、万物は動き、生きています。言い換えるならば、神が創造した万物のひとつひとつの存在には、価値と意義があります。つまり、万物には、すべてその存在の背後に必要性があるのです。神の目には、それぞれに命があります。万物はみな生きているので、音を発します。たとえば、地球も太陽も、そして月も常に自転しています。万物の繁殖と発達、動きからは、常に音が発生します。地上にある物は常に繁殖し、成長し、動いています。たとえば、山の基盤は動いており、移動しており、海中の生き物はすべて移動し、泳いでいます。そのことは、これらの生き物、および神の視界に

ある万物が、確立されたパターンにしたがい、絶えず規則的に動いていることを意味します。それでは、こうした密かな繁殖や、発達、運動は何をもたらしますか。力強い音です。地球以外のあらゆる惑星もまた継続的に運動し、それらの惑星上の生き物や有機体もまた継続的に繁殖し、成長し、運動しています。つまり、すべて生命のあるもの、ないものは、神の目から見るとすべて継続的に前向きに動いており、それらは同時に音を発生させています。神はこうした音も取り扱ったのです。あなたがたはなぜこれらの音を取り扱われるのかを知っているはずです。飛行機に近付くと、飛行機の轟音のために人はどうなりますか。あまりに長くその近くにいと、人間の耳は聞こえなくなります。人間の心臓はその音に耐えられますか。心臓の弱い人の中には耐えきれない人がいます。もちろん、心臓の強い人間であっても、その音が長く続き過ぎると耐えられませんが、音の人体に対する影響は、それが耳に対してであれ心臓に対してであれ、各人にとって極めて甚大であり、音量が大きすぎる音は人間に危害を与えるのです。したがって、神が万物を創造し、万物が正常に機能し始めた後、こうした音すなわち運動する物の音にも神は適切な処置を施しました。これもまた、人類のための環境を創る時に、神にとって必要な配慮のひとつでした。

まず、地表からの大気の高さは音に影響します。さらに、土壤にある隙間の大きさもまた、音を操作し、音に影響します。そして、様々な地理環境が重なり、それも音に影響を与えます。つまり、人間の耳や心臓が耐えることのできる環境で人間が生存できるように、神はなんらかの方法を用いて音の一部を消すのです。さもなければ、人間の生存にとって音は大きな障害をもたらす、人間の生活上の大問題となります。これは人間にとって大問題です。つまり、神は大地と大気、そして様々な地理的環境の創造において、極めて几帳面だったのです。こうしたことのすべてに神の知恵が含まれています。このことに関する人類の理解は、それほど詳細である必要はありません。知っていなくてはならないのは、その中に神の業が含まれているということのみです。さて、言ってください。神が行なったこの働きはまさに、音を精密に調整して人間の生活環境と通常の生活を維持するものでしたが、それは必要でしたか。（はい。）この働きが必要であったなら、その観点から見て、神はそうした方法を用いて、すべてを与えたと言うことができますか。神は、人間の身体が何らの妨害もない環境で極めて正常に生活できるように、また人類が普通に存在して生活できるように、人類のためにそうした環境を創り、そして与えたのです。これは神が人類に施す方法のひとつですか。神が行なったこのことは極めて重要でしたか。（はい。）それは是非必要でした。それでは、あなたがた

はその価値をどのように認識していますか。たとえあなたがたが、これが神の業であったと覚えることができず、当時それを神がどのように行なったかを知らなかったとしても、神がこれを行なうことの必要性を感じることができますか。これに神が注ぎ込んだ知恵や気遣い、思いを感じることができますか。（はい。）それを感じることができるだけでよろしい。それで十分です。人間が感じたり見たりすることのできない物事で、神が行なったことは多数あります。今わたしがこう述べる目的は、ただ神の業に関する情報をあなたがたに与えることで、それはあなたがたが神を知るようになることができるようにです。こうした手がかりにより、あなたがたは神をさらによく理解することができます。

4. 光

四番目は、人間の目に関係しています。それは光です。光もまた極めて重要です。眩しい光を見て、その光の明るさがある程度に達すると、人は失明します。つまるところ、人間の目は、肉の目なのです。刺激に耐えることができません。誰か太陽の光を敢えて直視しますか。中には試した人がいます。サングラスをかければ大丈夫ですが、道具を使う必要があります。道具なしには、人間は裸眼で太陽を直視する能力がありません。けれど、神は人類に光を与えるために太陽を創ったのであり、この光も操作しました。神は単に太陽を創り終え、それをどこかに置き、あとは放っておいたのではありません。神はそのように物事を行ないません。神は自身の業において極めて慎重であり、それを徹底的に考え抜きます。神は人類のために目を創って彼らが見えるようにし、また人間がものを見るための光についても、その特性を前もって決めました。光があまりに薄暗ければ、何の役にも立たないでしょう。目の前にある自分の指も見えないほど暗い場合、人間の目は機能せず、役に立ちません。明る過ぎる場所は人間の目には耐えられず、何も見えなくなります。したがって、人類の生活環境において、神は人間の目に適した量の光を与えました。この光は、人間の目に損傷を与えません。さらに、この光は人間の目の機能を失わせることもありません。神が太陽と地球の周囲に雲を加えたのは、このためであり、また空気の濃度も人間の目や肌を傷つける光を普通に除去することができます。これは相互に関連しています。さらに、神が創った地上の色彩もまた太陽光やあらゆる種類の光を反射させ、人間の目を不快にする光の明るさの一部を除去します。こうしたわけで、人間は屋外を歩きまわり生活を営めるようにと、色の濃いサングラスを常時着用する必要がないのです。通常の条件下では、人間の目は視界内の物を見ることが可能であり、光により妨害されることはありません。つまり、光は眩しすぎて

も暗すぎてもいけないのです。あまりに薄暗ければ人の目は損傷を受け、少し使えば駄目になるでしょう。光があまりに明るければ、人の目はそれに耐えられないはずです。人間が目にしてあるまさにこの光は、人間が見るのに適したものでなければならず、神は様々な方法を通して、光が人間の目に与える損傷を最小限にしてきたのです。そしてこの光が人間の目に恩恵をもたらそうと、あるいは不都合をもたらそうと、人間が自分の目の機能を維持しつつ、寿命を迎えるようにするのに十分です。神はそれを徹底的に考慮したのではありませんか。しかし、悪魔サタンはそうした考慮を一切せずに行動します。サタンにとって、光は常に眩しすぎるか、暗すぎるかのどちらかです。これがサタンの物事の行ない方です。

神は視力、聴力、味覚、呼吸、感覚など、人体の全側面にこのようなことを行ない、人類の生存のための順応力を最大限にし、人間が普通に生き、そうし続けることができるようにしています。つまり、神が創った、こうした現存する生活環境は、人類の生存に最適かつ最も有益な生活環境なのです。これは大したことなく、すべて至って普通であると考え人もいるでしょう。音、光、そして空気は、人間が生来もっているもの、生まれた瞬間から享受できるものと感じるものです。しかし、人間がこれらのものを享受する陰で神が行なった業は、人間が知り理解すべきことです。これを理解し知る必要があると感じるかどうかに関わらず、簡潔に言うと、神がこれらのものを創った時、神は配慮し、計画をもち、ある考えをもっていたのです。神は単純に、何気なく、あるいは何も考えることなしに、そうした環境の中に人間を置いたわけではないのです。わたしがこうした些細な物事の一つひとつをあまりに大げさに話したと、あなたがたは考えるかも知れませんが、わたしの考えでは、神が人類に施した一つひとつの物事は人類の生存に必要なものです。ここに神の業があります。

5. 気流

五番目は何でしょうか。これは一人ひとりの日常生活と密接に関係するものです。それと人間生活との関係はあまりに密接で、それなしでは、この物質世界で人間の身体が生きてゆくことはできないほどです。それは気流です。「気流」は、おそらくすべての人が理解する言葉です。では、気流とは何ですか。空気の流れは「気流」と呼ばれる、と言えるでしょう。気流とは、人間の目に見えない風です。またそれは、気体の運動形態のひとつでもあります。しかし、わたしたちがここでおもに話し合っている気流とは、何ですか。わたしが言えば、あなたがたはすぐに分かります。地球は回りつつ、山や海や万物を抱えており、地球が回るとき、速度があります。あなたが回転を感じなくて

も、地球は確かに回転しています。この回転は何を生じさせますか。あなたが走るとき、風が起きて耳の後ろへ吹き去りませんか。人間が走ると風が発生するのが可能なら、地球が回転した時に風が発生しないということがどうして有り得るのでしょうか。地球が回転する時、万物は運動しています。運動し、一定の速度で回転していますが、それと同時に地上の万物はまた継続的に繁殖し、発展しています。したがって、一定速度で移動すると、当然気流が発生します。これが気流です。この気流は人体に何らかの影響を及ぼすのでしょうか。台風を考えてみましょう。通常台風はそれほど強力ではありませんが、台風に見舞われると、人間はしっかり立つことすらできず、風の中を歩くのは困難です。一歩進むのさえ難しいのです。あまりに強くて人が風で何かに押し付けられ動くことができなくなることがあります。これは、気流が人類に影響を与える形態のひとつです。もし地球全体が平野であったならば、ある程度の速度で地球の回転と万物の動きで発生する気流に人体が耐えるのは極めて困難となるでしょう。それに対処するのは、極めて困難です。そうであれば、この気流は人類に危害を及ぼすだけでなく、破壊してしまいます。このような環境では、誰も生存できないでしょう。そうしたわけで、神は様々な地理的環境を創ることで、こうした気流を解消しました。こうして様々な環境において気流はますます弱くなり、その方向や速度、威力が変わるのです。山、山脈、平野、丘陵、盆地、峡谷、高原、川などの様々な地理的環境が見られるのは、そのためです。神はこうした様々な地理的環境を適用して気流の速度、方向、威力を変化させ、このような方法を用いて気流を適切な風速、風向、風力へと縮小あるいは操作するので、人間は通常的生活環境を得ることができます。そうすることは必要ですか。（はい。）こうしたことを行なうのは、人間にとって困難に思われますが、神にとっては容易です。なぜなら神は万物を監督しているからです。神にとって、人類に適した気流のある環境を創ることは極めて単純かつ容易です。したがって、神が創ったこのような環境において、万物のそれぞれひとつひとつが不可欠なのです。それらのすべてその存在に価値と必要性があります。しかし、この原則がサタンや堕落させられた人類に理解されることはありません。彼らは破壊と開発を続け、むやみに山々を平野へと換え、峡谷を埋め立て、平野に高層ビルを建て、コンクリートジャングルを造り出します。神が人間のために用意した人間に最適な環境において、人間が幸福に暮らし、幸福に成長し、幸福な毎日を送れることが神の望みです。人類の生活環境を扱うことに関して、神が不注意であったことが決してないのはこのためです。人類の生活環境と身体が自然条件に起因する障害の影響を一切受けず、人類が正常に生活し、繁殖し、万物と調和して共に正常に生活できるように、神は気温から空気、音、光にいたるまで、精緻な計画を立て、精

緻な采配を行なってきました。これらはすべて神により万物と人類に与えられています。

人間の生存のためのこれら五つの基本的条件を神が取り扱った方法から、神が人類に与えるものが分かりますか。（はい。）つまり、神は人間生存のための最も基本的条件を作ったのです。同時に、神はこれらを管理し、制御し、人間が存在するようになって数千年を経た今も、依然として継続的に人間の生活環境を変化させ、人類にとって最善かつ最適な生活環境を与え、人間の生活が普通に維持されることができるようになっています。これはいつまで維持されるでしょうか。言い換えるなら、どれくらいのあいだ神はそうした環境を与えるでしょうか。神がその経営（救い）の働きを完了するまでです。その後は、神は人類の生活環境を変化させます。それは同様の方法によるかもしれませんが、あるいは異なる方法によるかもしれませんが、今人間が真に知る必要のある事は、神は人類に必要なものを与え続け、人類の生活環境を管理し、保存し、保護し、維持しているということです。神の選民がこのように普通に生活し、神の救いと刑罰、そして裁きを受けることができるのは、こうした環境のゆえです。神の支配のおかげで万物は存続し、また神がこうして与えているのおかげで全人類は進歩を続けています。

たった今わたしが話をした部分は、あなたがたに何か新たな考えをもたらしましたか。あなたがたは、今では神と人類の最大の違いを感じますか。それでは、万物の支配者は誰ですか。それは人間ですか。（いいえ。）それでは、万物の取り扱い方における神と人間の相違は何ですか。（神様は万物を支配して取り決められ、人間はそのすべてを享受します。）あなたがたはこの意見に賛成ですか。神と人類の最大の相違点は、神は万物を支配し、すべてを与えるということです。神は万物の源であり、人間は神が与える万物を享受します。つまり、神が万物に与えるいのちを人間が受け入れる時、人間は万物を享受するということです。人類は神の万物創造の成果を享受するのに対し、神は主です。それでは、万物の立場から見ると、神と人類の相違点は何ですか。神は万物の成長法則を明瞭に見ることができ、万物の成長法則を制御し、支配します。すなわち、万物は神の目の中にあり、神の監視範囲内にあります。人間には万物が見えますか。人間に見えるものには制限があります。つまり、自分の目の前にあるものに限られるのです。もし人間が山に登ると、人間に見えるのは、その山です。その山の反対側にあるのは見えません。人間が海岸へ行くと、人間に見えるのは目の前にある海ですが、その対岸の海がどのようなものであるかは知りません。人間が森に辿り着くと、人間には自分の周囲と目の前にある植物が見えますが、その先に何があるかは見えません。人間は高い場

所、遠い場所、深い場所を見ることができません。人間に見えるのは目の前にあるものと、視野の中にあるものだけです。人間が一年間の四季の法則や万物の成長法則を知っていたとしても、万物を管理したり支配したりすることはできません。その一方、神の万物の見方は、あたかも神が自ら製作した機械を見るようなものです。神はそれぞれの部品について熟知しているのです。その原則が何か、その法則は何か、その目的は何かについて、神はこれらのことすべてを明白に知っています。それゆえに、神は神であり、人間は人間なのです。たとえ人間が科学や万物の法則の研究を続けたとしても、それは依然として限界のある範囲内であり、その一方で神は万物を支配しています。それは人間にとって無限です。もし人間が神が行なった極めて小さな何かを研究したならば、生涯を研究に捧げても、何ら実質的な成果を達成しないことがあります。もしあなたが知識や学習した事柄を用いて神を研究しても、神を知ることとも理解することとも決してできないのは、このためです。しかし、もし真理を求め、神を求める道を用い、神を知ろうとするという観点から神を見つめるのならば、やがて神の業と知恵が随所にあることを認め、また神が万物の主、そして万物のいのちの源であると言われるのはなぜかを知るでしょう。そうした認識をさらに得れば得るほど、神がなぜ万物の主と呼ばれるのかを一層理解するでしょう。あなた自身を含めた万物、すべてのものは、神から安定した施しを間断なく受け取っています。また、あなたはこの世界で、人類の只中に、万物の存在を支配し、管理し、維持するこのような力と本質をもつことのできるのは、神を除いて存在しないことを明らかに感じるすることができます。あなたがこうした理解を得る時、あなたは神があなたの神であることを真に認めるでしょう。あなたがこの点に達する時、あなたは神を真に受け入れ、神をあなたの神であり主であるとしたのです。あなたがそうした認識を得、あなたのいのちがそのような点に達した時、神はもはやあなたを試したり、裁いたりせず、またあなたに対して要求しなくなります。なぜなら、あなたは神を理解し、神の心を知り、神をあなたの心の中で真に受け入れたからです。このことは、神の万物支配と管理に関するこれらのことを伝える重要な理由です。このことは、人々により一層の認識と理解を与えるためであり、単にあなたに神の業を認めさせるだけでなく、それについてのさらなる実践的な認識と理解を与えるためです。

神が人類のために用意する日常の食料と飲料

ここまでは、全体的な環境の一部、すなわち神が世界を創造して以来、人類のために用意した人間の生存に必要な条件について話をしました。五つのことについて話しましたが、この五つが全体的な環境です。次に話すことは、肉にある人間ひとりひとりの

生活と密接に関連しています。それは、肉にある人間の生活に一層よく当てはまり、則した必要条件です。それは食料です。神は人間を創り、適切な生活環境に置きました。その後、人間には食料と飲料が必要になりました。人間には、そうした必要があり、それで神は人間のためにそのような用意をしました。したがって、神の働きの歩みのひとつひとつと神の行なうひとつひとつの業は、空虚な言葉ではなく、実際に行なわれているのです。食料は人間の日常生活において不可欠なものです。食料は空気よりも重要ですか。それらは等しく重要です。どちらも人間の生存と、人間の生命の継続を守るのに不可欠な条件であり物質です。空気の方が重要ですか。それとも水の方が重要ですか。気温の方が重要ですか。それとも食料の方が重要ですか。これらはすべて重要です。人間はそのいずれも欠くことができないので、選択できません。これは現実的な問題であり、選択できるものではありません。あなたは知りませんが、神は知っています。あなたが食料を見ると、「食べ物なしは無理だ」と感じるでしょう。しかし、あなたが創られた直後、自分には食べ物が必要だということを知っていましたか。あなたは知らなかったでしょうが、神は知っています。あなたが空腹になり、そしてあなたが食べられるように木に果実があり、地面に穀粒があるのを見てはじめて、食べ物が必要だと気づきます。喉が渇き、泉の水が目に入り、それを飲んでから始めて、自分が水を必要としているのだと気づくのです。水は神が人間のために用意したものです。食料については、一日三食摂るか、二食か、あるいはそれ以上かは問題ではなく、要するに、食料は人間の日常生活に不可欠なものである、ということです。食料は人体の正常な生存を維持するために必要なもののひとつです。それでは、食料はおもにどこから来ますか。第一に、土から来ます。土は神により人間のために用意されました。土は、木や草だけでなく、様々な植物の生存に適しています。神は人類のためにあらゆる種類の穀粒とその他様々な食材の種を用意し、種を蒔くのに適した土壌と土地を人類に与え、人類はこれらのもので食料を得ました。どのような種類の食料があるのでしょうか。あなたがたは、これについて明確に理解しているはず。そうですね。第一に、様々な穀粒があります。穀粒には何が含まれていますか。小麦、粟、キビ、米など、殻のついているものです。禾穀類は様々な種類に分けられます。禾穀類には、大麦、小麦、オート麦、蕎麦など、南部から北部まで様々な種類があります。様々な地域での栽培に適した、様々な種類が存在します。また、米にも様々な種類があります。南部には南部特有の様々な種類の米があり、穀粒が長く、粘り気が強すぎず、南部の人々に適しています。南部は気候が比較的温暖なので、インディカ米のような種類の米を食べなければなりません。米は粘り気が強いと食べ難く、食欲を失うので、粘り気は強すぎてもなりません。北部の人々が

食べる米は、比較的粘り気が強いです。北部は気候が常に寒冷なので、粘り気の強い米を食べなければなりません。それに加えて、様々な種類の豆があります。豆は地上で栽培します。また、ジャガイモ、サツマイモ、タロイモ、さらに多くの土中で成育するものもあります。ジャガイモは北部で育ちます。北部のジャガイモはとても高品質です。人々が食べる穀物がないとき、ジャガイモが食生活で主食となることがあり、それで人々は一日三食を維持できます。ジャガイモも食料となりえます。サツマイモは品質においてジャガイモほど良くありませんが、一日三食を維持するために主食として使うことができます。穀物が入手できないとき、人々は腹を満たすためにサツマイモを食べることができます。タロイモは、南部の人がよく食べますが、同様の使い方ができ、また主食となりえます。これらが多種多様な穀物であり、人々の日常の食料および飲料として必要なものの一部です。人間は様々な穀類を用いて麺、蒸しパン、米、ビーフンなどを作ります。神は、こうした様々な種類の穀類を人類に豊富に与えました。なぜこれほど多くの種類が存在するのですか。そこに神の意図を見出すことができます。一方で、これは東西南北で異なる土壌と気候に適合するためです。他方で、これらの穀類に含まれる様々な成分が、人体の様々な成分と一致するのです。人間が自分の身体に必要とされる様々な栄養素や成分を維持することができるのは、こうした様々な穀類を食べることによるのです。北部の食料と南部の食料は異なるものの、両者には相違点よりも共通点の方がずいぶん多くあります。これらの食料は、人体の通常の実用性をすべて満たし、人体の正常な生存を維持することができます。このように、各地において生産される種類がとても豊富な理由は、人体がこれらの食料が供給するものが不可欠だからです。人体の正常な生存を維持し、通常の間生活を実現するために、土中から発育した様々な食料により共有されるものを人間は必要とします。つまり、神は人類に対して大いに配慮していたのです。神が人間に与えた様々な食料は無味乾燥ではなく、極めて多種多様です。シリアルを食べたければ、シリアルを食べることができます。麦よりも米が好きな人、麦を好まない人は米を食べることができます。米には穀粒が長い米、短い米など様々な種類があり、それらすべてが人間の味覚を満たします。したがって、もし人がこれらの穀類を食べるのであれば、食べ物に対する好みや極端に激しくない限り、人間は栄養不足にならず、老いるまで健康に生きることが保証されています。それが、神が人類に食料を与えた時の当初の考えでした。人体にはこれらが不可欠です。これが現実ではありませんか。人類は、こうした現実の問題を解決できませんが、神は既に準備し、そのことについて十分に検討したのです。随分前に、神は人類のための物事を用意したのです。

神は人類にこれらの他にもさらに与えました。野菜もあります。米を食べるとき、食べるものが米だけでは、栄養が不足するかもしれません。そこで、炒めものの小皿の料理を2種類作ったり、サラダを作って付け合わせにしたりすれば、野菜に含まれるビタミン類や複数の微量元素その他の栄養素は、人体に必要とされる物をきわめて正常に供給することができます。人間が主な食事を取っていないときには、果物を食べることもできます。そうですね。時折、人間が追加の水分やその他の栄養素、異なる味が必要なとき、野菜や果物があります。北部、南部、東部、西部で土壌や気候が異なるので、様々な種類の野菜や果物があります。南部の気候は暑すぎるので、果物や野菜の大部分は清涼効果のある種類で、食べた時に人体の冷気と熱気の均衡を保つことができます。一方、北部では果物や野菜の種類が比較的少ないですが、それでも北部の人々が楽しむのに十分な種類が揃っています。しかし、近年における社会の発展や、いわゆる社会的進歩、および東西南北を結ぶ通信手段や交通機関や通信の改善により、北部の人々もまた南部の果物や野菜、および特産品を、四季を通じて食べることができます。これにより、人々は食欲や物欲を満たすことができるものの、人体は知らないうちに様々な度合いの危害に晒されています。それは、神が人類のために用意した食料には、南部の人間に適した食料や果実や野菜と、北部の人間に適した食料や果実や野菜があるからです。つまり、南部で生まれた場合、その人には南部産の食料を食べることが極めて適しているのです。神がこれらの食料、野菜や果物を用意したのは、南部には特有の気候があるからです。北部には、北部の人々の身体に必要とされる食料があります。しかし人間は非常に貪欲な食欲があるため、知らぬ間に社会的発展の波に吞まれ、そうした法則を知らぬ間に反してしまうのです。人間は現在の生活が向上したとを感じるものの、こうした社会的発展は隠れた危害を一層多くの人体にもたらします。これは神が見たいことでも、神がこれらの食料、果物、野菜を人類に与えたときに意図していたものでもありません。人間は神の法則に反することで、みずから現在の状況を招いたのです。

加えて、神が人類に与えたものは豊富であり、各地域に独自の特産物がありました。たとえば、（ナツメという名称でも知られる）ベニナツメが豊富な場所もあれば、クルミが豊富な場所もあり、また落花生やその他の様々なナッツ類が豊富な地域もあります。こうした物質的な物はみな、人体が必要とする栄養素を供給します。しかし、神は季節や時期に従って人類に物を供給し、かつ適切な時期に適切な分量を与えます。人類は物理的な快楽を求め、貪欲であるため、神が人類を創った時からの人類の成長の正常な法則に反しやすくなっています。サクランボを例にとりましょう。サクランボは六月頃

に熟します。通常状況においては、サクランボは八月までには出回らなくなります。サクランボは二ヶ月間だけ新鮮ですが、科学的手法により、人間は現在それを十二ヵ月、翌年のサクランボの旬の時期まで延長することができます。これは、サクランボは年間を通してあるということです。この現象は正常ですか。（いいえ。）それでは、サクランボを食べるのに最適な季節はいつですか。それは、六月から八月までの期間です。この期間以外は、サクランボをどれほど新鮮に保ったとしても、サクランボの味は同じではなく、人間の身体が必要とするものではありません。一旦期限日が過ぎた後は、どのような化学薬品を使用しても、自然に栽培されたときと同じにすることはできません。加えて、化学薬品が人間に与える危害は、誰が何を試みても解消したり変化させたりすることはできません。では、現在の市場経済は人間に何をもたらしますか。人々の生活は向上しているように思われ、あらゆる方向の交通の便は極めて良くなり、人々はあらゆる種類の果物を一年中どの季節でも食べることができます。北部の人々がバナナや南部の食品や特産品や果物を頻繁に食べることができます。しかし、これは神が人類に与えたい生活ではありません。このような市場経済は人間の生活にいくらかの恩恵をもたらしますが、害もまたもたらします。市場の豊かさのために、多くの人は何でも食べますが、考えずに食べるのです。これは、自然な法則に反していて、人間の健康にとって有害です。ですから市場経済は人間に真の幸福をもたらすことはできません。自分の目でご覧なさい。ブドウは四季を通じて市場で売られているではありませんか。実際には、ブドウが新鮮であるのは、収穫後の極めて短い期間のみです。もしブドウを翌年の六月まで取っておいたなら、それは依然としてブドウと呼ぶことができますか。それを生ゴミと呼ぶことはできますか。そのブドウは、ブドウ本来の成分をもはやもっていないだけでなく、化学薬品の含有量が増えています。一年経過すると、ブドウは新鮮でないのみならず、栄養素も既になくなっていきます。ブドウを食べるとき、「本当に嬉しい。三十年前、この季節にブドウが食べられただろうか。食べたくても食べられなかっただろう。現代はなんと素晴らしい生活だろう」と人は感じます。これは本当に幸福ですか。興味があれば、化学薬品で保存されたブドウを調べてその成分構成がどうなっていて、それが人間に有益であるかどうかを確認すればよろしい。律法の時代には、イスラエルの人々がエジプトから出た後に路上にあった時、神は彼らにうずらとマナを与えました。神は彼らにそれらを保存することを許しましたか。一部の人は先見の明がなく、翌日に何も残っていないことを心配したので、その後のために多少残しました。すると、何が起こりましたか。翌日までには、腐ってしまいました。神は、イスラエルの人々に、予備として残しておくことを許しませんでした。なぜなら、神は既に用意をして

いたからであり、それによりイスラエルの人々は飢えないことが保証されていたからです。人類にはその確信も、神への真の信仰もないのです。人間は常に将来のために少しでも残し、神が人類のために用意したものの背後にある配慮と意思を見ることが決してできないのです。人間にはどうしてもそれを感じることができず、常に神を疑い、「神の業は信頼できない。神がそれを人類に与えるのか、いつ与えるのか誰が知っているのだ。本当に空腹なのに神が与えなかったとしたら、わたしは飢えるのではないか。栄養が不足するのではないか」と常に考えています。人間の確信がいかに小さいかを御覧なさい。

穀物や果物、野菜、様々な種類のナッツ類は、すべて植物性の食料です。それらは植物性の食料ですが、人体の必要性を十分に満たすだけの栄養素が含まれています。しかし、神は「これだけ人類に与えれば十分だ。人類はこれだけ食べていればよい」とは言いませんでした。神はそこで止めず、その代わり人類のために一層美味しい食料を用意しました。それは何ですか。それは、あなたがたのほとんどが見て食べるのできる様々な肉や魚です。神が人間のために用意したとても多くの種類の肉や魚があります。魚はすべて水中で生きています。魚肉は、食感が地上で育つ肉とは異なり、また人類に様々な栄養素を供給できます。魚の特性もまた人体の冷氣と熱気を調整できるので、魚は人類にとって極めて有益です。しかし、美味しいものは、食べ過ぎてはなりません。それは次の言葉通りです。すなわち、神は人類に適切な時に適切な分量を与えるので、人間は季節と時期に従って正常かつ適切にそれらのものを享受することができます。家禽には何が含まれますか。ニワトリ、ウズラ、ハトなどです。アヒルやガチョウを食べる人々も多いです。神はこれらありとあらゆる肉を与えましたが、律法の時代、神は自身の選民に対してある種の要求を行ない、食事に関する特定の制限を課しました。現在、この制限は個人の好みと解釈にもとづいています。こうした様々な種類の肉により、人体に様々な栄養素が供給され、それはタンパク質や鉄を補給し、血液を豊かにし、筋肉や骨を強化し、エネルギーを増加します。要するに、人間が用いる肉の調理方法や食べ方を問わず、肉は一方で味覚と食欲を向上させ、他方で腹を満たすことができます。肉は人体に必要な日常的栄養素を供給できるということが最も重要な点です。それが、神が人類に食料を用意した時に神がもっていた気遣いです。植物性の食品と肉があります。これは豊富で潤沢なことではないでしょうか。しかし、人間は、神が人類のための食料を用意した時の神の本来の意図が何であったかを理解する必要があります。それは、こうした食料を人類が過度に享受するようにさせるためでしたか。人間が物質的満足

に耽溺すると、どうなるでしょうか。栄養過剰になるのではありませんか。栄養過剰は、人体に様々な疾病を引き起こすのではありませんか。（はい。）これが、神が適切な時期に適切な分量を分割し、様々な時期と季節において、様々な食料を人間が享受できるようにした理由です。たとえば、酷暑の夏を過ごした後、人間の身体には、大量の熱気、病気の原因となる乾気や湿気が蓄積されます。秋が来ると、多くの種類の果実が熟れ、人間が果物を食べると、その湿気は解消されます。同時に、牛や羊は遅しく成長するので、人間はその肉を栄養補給として食べるべきなのです。様々な肉を食べた後、人体はエネルギーと熱気を得て、それが冬の寒さに耐えるのに役立つので、冬を無事に乗り越えることができます。人類のために、いつ何を用意するか、いつ何を生長させるか、結実させるか、熟れさせるか、これらのことは、すべて神によりとても慎重に管理され支配されています。これが「神はいかに人間の日常生活に必要な食料を用意するか」に関する題目です。あらゆる種類の食料のほか、神は人類に水源を与えています。人間は、食事の後に水を飲まなければなりません。果物を食べるだけで十分ですか。人間は果物を食べるだけでは耐えられず、なおまた、果物がない季節もあります。それでは、人間の水問題は、どうすれば解決できますか。湖沼、河川、泉など、地上や地中に多数の水源を用意した神によってです。これらの水源からは、汚染や人間による処理や損害がない場合、飲むことができます。つまり、人間の物理的身体の生活のための食料源に関しては、神は極めて正確で、精密で、適切な用意を行なったので、人間の生活は豊かで潤沢であり、何も不足していないのです。これは、人々が感じ見ることができることです。

さらに神は、万物の中でも、人体の怪我や病気を癒やすことを目的とした植物や動物、そして様々な草を創りました。たとえば、火や熱湯でたまたま火傷したらどうすべきですか。水で洗い流すだけでいいですか。布切れで巻くだけでいいですか。そのようなことをすれば膿が溜まって化膿するかもしれません。たとえば、発熱したり、風邪をひいたり、肉体労働で負傷したり、悪いものを食べて胃の病気になったり、生活習慣や情緒的問題のせいで、脈管病や精神疾患、内臓疾患などの病気になった場合、これらすべてを癒すための植物があります。血行を促進して血行不良を改善する植物、痛みを緩和する植物、止血する植物、麻酔効果のある植物、正常な皮膚の回復を促進する植物、鬱血を解消する植物、解毒する植物などがあります。要するに、これらすべては日常生活で利用できるのです。これらは人間にとって役に立ち、必要な場合に備えて人体のために神が用意しました。人間が偶然発見できるようにされた植物もあれば、神がそうする

よう選んだ人によって発見された植物もあり、神が指揮した特定の現象の結果として発見された植物もあります。発見の後、人類はそれらを伝えて多くの人々が知ようになるのです。このように、神によるこうした植物の創造には、価値と意味があります。すなわち、これらはすべて神に由来し、神が人類のための生活環境を創った時に用意し、植え付けられたものです。これらはすべて極めて必要性が高いです。神の配慮は人間の配慮よりもよく考えつくされていますか。神が行なったことのすべてを見る時、神の実際的な側面を感じることが出来ますか。神は密かに働いたのです。この世界に人間がまだ現れていない時、神がこの人類と接する前に、神は既にこれらすべてを創っていました。神が行なったことは、すべて人類と、人類の生存のためであり、また人類の存在のために配慮されたものであるので、人類は、神が人類のために用意したこのような豊かで潤沢な物質世界で、食料や衣料について心配することなく、何かに不足することなく、幸せに生活することができるのです。人類はそうした環境の中で繁殖し、生存し続けています。

神が行なうことで、その大小を問わず、価値や意義がないものがありますか。神のすることにはすべて価値と意義があります。このことについて、人々が頻繁に口にする疑問から話しましょう。ニワトリと卵はどちらが先に現れたか、と多くの人はいつも尋ねます。（ニワトリです。）ニワトリが先です。これは確実です。なぜニワトリが先ですか。なぜ卵が先であるはずがないのですか。ニワトリは卵から生まれるのではないのですか。卵を二十一日間抱いた後に、ニワトリが生まれます。そのニワトリは卵を産み、その卵から再びニワトリが生まれます。それでは、ニワトリと卵のどちらが先に現れたのですか。あなたがたは自信をもって「ニワトリ」と答えましたが、なぜですか。（聖書には、神様が鳥と獣を創られたと書いてあるからです。）それは聖書に基づいています。神の業に関する実際の認識があなたがたにあるかどうかを見るために、あなたがた自身の認識について話さない。自分の答えに確信していますか、確信していませんか。（神様はニワトリをお創りになり、ニワトリに繁殖する能力をお与えになりました。つまり、卵を孵化させる能力です。）その解釈はだいたい正しいです。ニワトリが先に現れ、次に卵が現れた。それは確かです。これはそれほど遠大な奥義ではありませんが、この世の人々は、極めて深いものと捉えて、論法に哲学を用います。結局、彼らはいまだに結論に達していません。神がニワトリを創ったことを、人々は知らないようです。人間はこの根本的な原則を知らず、また卵とニワトリのどちらが先に現れたのかもはっきり分からないのです。何が先に現れるべきかを知らないで、いつも答えを見出す

ことができません。ニワトリが先だったことは、極めて普通です。もし卵がニワトリよりも先であったとしたら、それは異常です。絶対にニワトリが先に現れました。これは非常に単純なことです。博識である必要はありません。神はそれらすべてを創ったのです。神の当初の意図は、それを人間が享受することでした。一旦ニワトリが現れると、当然のこととして卵がそれに続きます。これが容易な解答ではありませんか。もし卵が先に創れたなら、卵を孵化させるニワトリが必要ではありませんか。直接ニワトリを創るほうが、はるかに容易な解答です。このようにして、ニワトリは卵を産み、その中のひよこをかえせると同時に、人間がニワトリを飼って食べることもできます。何と便利ではありませんか。神がものごとを行なう方法は簡明で、煩わしくありません。卵はどこから来ますか。ニワトリからです。ニワトリなしには卵はありません。神が創ったのは、生き物でした。こうした単純な問題にはまり込み、挙げ句の果てに数々の邪論さえ生み出す人類は、愚かで滑稽です。なんと子供っぽいことでしょう。卵とニワトリの関係は明白です。ニワトリが先に現れた。これが最も正確な説明であり、理解の仕方であり、回答です。これが正しいのです。

たった今わたしたちは何について話しましたか。最初に、人間の生活環境やその環境のために神が何を行ない、用意し、取り扱ったことについて話し、また、神が人類のために用意したあらゆるものの関係、そして万物が人類に危害を加えるのを防ぐために、神がこれらの関係をどのように取り扱ったかについても話しました。また神は、万物がもたらす様々な要素が人類の環境に与える悪影響を解決し、万物がそれぞれの機能を最大化することを実現し、好ましい環境とあらゆる有益な要素を人間に与え、よって人類がそうした環境に順応して、繁殖と生命の周期を正常に繰り返すことができるようにしました。次は、人体が必要とする食料、すなわち日常の食料と飲料でした。これもまた人類の生存の必要条件です。つまり、人体は、呼吸するだけ、日光や風だけ、あるいは適切な気温だけでも生きられないということです。人間はまた腹を満たす必要もあります。人間の腹を満たす食料や飲料もまた、すべて神が人類のために用意したものであり、それが人類の食料源です。こうした豊富で潤沢な産物、すなわち人類の食料や飲料の源を見たとき、神は人類とすべての被造物の供給源であると言えますか。創造の際、神が草木だけ、あるいはその他多数の生き物だけを創り、それらの様々な生き物や植物が、どれも牛や羊が食べるためのものだったり、あるいはシマウマや鹿やその他の様々な動物のためだったりして、たとえばライオンはシマウマや鹿などを食べ、虎は羊や豚などを食べるものの、人間の食料として適したものがひとつもなかったとした

ら、それでうまく行っていたでしょうか。うまく行かないでしょう。人類は生存を続けられなかったでしょう。もし人間が木の葉だけを食べたとしたら、どうでしょうか。それでうまく行くでしょうか。人間は羊のために用意された草を食べられるでしょうか。少し試すだけなら害はないでしょうが、そのようなものを長期間にわたって食べ続けたとしたら、人間の胃はそれに耐えられず、長くは生きていられないでしょう。動物は食べることができても、人間が食べるには有毒なものさえあります。毒があり、人間は食べられなくても、動物は影響を受けることなく食べられるものもあります。言い換えると、神は人間を創ったので、人体の原則や構造、人間に必要なものを最も良く知っているのです。人体の構成、成分、必要なもの、人体の内臓がどのように機能し、吸収し、排出し、代謝するかを神は完全に把握しています。人間はこのことについてそれほど把握しておらず、やみくもに食べたり補給したりすることがあります。補給しすぎて、結果として不均衡を引き起こします。もし神が人間のために用意したものを普通に食べ享受していれば、何も問題は起こりません。たとえ時に気分がすぐれず、鬱血があったとしても、それは問題ではありません。ただ特定の植物を食べなくてはならないだけで、それで鬱血は解消されます。神はこうしたことをすべて用意したのです。それで、神の目から見ると、人類はその他のどの生き物よりも遙かに優れています。神は、ありとあらゆる植物の生息環境を用意し、ありとあらゆる動物の棲息環境と食料を用意しましたが、人類の生活環境に対する必要条件は最も厳格で、軽視が許されません。そうでなければ、人類は発展と生殖、正常な生活を継続できないでしょう。神は心の中でこれが一番良く知っています。このことを行なった時、神はそれを他の何よりも重要視しました。あなたが人生の中で見て享受できる平凡なもの、あるいは自分が生まれたときからもっていて、見て享受している何かの重要性を、おそらくあなたは感じ取れないかもしれませんが、神ははるか昔に、あるいは密かに、あなたのために用意していたのです。人類にとって好ましくなく、人体に危害を加え得る否定的な要素を、神はすべて最大限に除去し、解消しました。これは何を明らかにしますか。神が今回人類を創った時の神の人類への姿勢が明らかになりますか。その姿勢はどのようなものでしたか。神は、厳格かつ真剣な姿勢であり、神以外のいかなる要素や条件、勢力の妨害を一切容赦しませんでした。このことから、今回神が人類を創ったときと、今回の人類の経営における神の姿勢が分かります。神の姿勢とは何ですか。人類が享受する生活環境や生存環境、日常の食料や飲料、必需品を通して、人類を創造して以来神が有してきた人類に対する責任の態度と、さらに今回人間を救うことへの神の決意が分かります。こうした物事から、神の真実性が分かりますか。神の驚異性が分かりますか。神の無限の遠大性が分かりま

すか。神の全能性が分かりますか。神はその全能かつ知恵深い仕方で、全人類に与え、また万物にも与える。このことに関して、わたしがこれだけ話した後、神が万物のいのちの源であるとあなたがたは言うことができますか。（はい。）それは確実です。疑いがありますか。（いいえ。）神による万物への施しは、神が万物のいのちの源であることを示すのに十分です。なぜなら、神は万物が存在し、生き、繁殖し、継続することを可能にしてきた施しの源であり、神自身以外の源はないからです。それが環境に関する最も基本的な必要性であれ、日常生活に必要なものであれ、あるいは神が人々の霊に施す真理にとって必要なものであれ、神は万物に必要なものと人類に必要なものすべてを施します。あらゆる視点から見て、人類にとっての神の身分と地位に関しては、万物のいのちの源は神自身のみです。これは正しいですか。（はい。）つまり、神は人間が目で見えることのできるこの物質世界の支配者であり、主であり、供給者です。人類にとって、これは神の身分ではありませんか。これは完全に正しいです。したがって、空を飛ぶ鳥が見えれば、神は空を飛べるものを創ったことを理解しなければなりません。しかし、水中を泳ぐものも存在し、それらもまた様々な仕方で生存しています。土中で生きる草木は春に芽吹き、秋に結実して落葉し、冬には完全に落葉して冬を過ごします。これが、それらの生存の仕方です。神は万物を創り、万物はそれぞれ異なる形態と方法により生き、様々な方法を用いてその生命の力と形態を示します。その方法が何であれ、それはすべて神の支配下にあります。神が様々な形態の生命体と生き物を支配する目的は何ですか。それは人類の生存のためですか。（はい。）神は人類の生存のために、生命の法則のすべてを支配します。これは、神にとって人類の生存がいかに重要であるかを示しています。

人間が正常に生存し、繁殖することは、神にとって最も重要です。したがって、神は常に人類と万物に与えます。神はあらゆるものを様々な方法で与え、万物の生存維持の状況下において、人類の正常な存在を維持するために、神は人間が前進を続けられるようにします。これらが、今日わたしたちが話し合っている二つの側面です。その二側面とは何ですか。（巨視的観点からは、神様は人類のために生活環境をお創りになりました。これが最初の側面です。また、神様は人間が必要とし、目で見えて触れることのできる物質的なものを用意なさいました。）それら二側面を通して、わたしたちは本日の主題を話し合いました。主題は何ですか。（神様は万物のいのちの源です。）今では、わたしがそのような主題の下になぜこうした内容を伝えたのかについて、あなたがたはある程度の認識を得ているはずです。これまで、その主題と無関係の話がありましたか。

ありませんでした。そうですね。これらの事柄を聞いて、おそらくある程度の認識を得てこれらの言葉が重要であると感じている人もあなたがたのうちにいるでしょうが、他の人たちは文字通りに受け取った知識を少し得ただけで、それらの言葉はどうでもよいと感じているかも知れません。あなたがたがこれを今どのように理解しているかに関わらず、あなたがたの経験の過程において、やがてあなたがたの認識がある点に達する時、つまり、神の業と神自身に関する認識がある特定の点に達し、あなたがたは自分自身の実践的な言葉を用いて神の業の深い真の証しをするでしょう。

現在におけるあなたがたの認識はいまだに極めて単純で、文字通りに受け取っているだけであるとわたしは思います。しかし、わたしがこれら二側面をあなたがたに話すのを聞いた後では、あなたがたは少なくとも神が人類に与えるためにどのような方法を用いるかや、神が人類に何を与えるかを認識することができますか。あなたがたには基本的な概念と理解がありますか。（はい。）しかし、わたしが伝えたこれら二側面は、聖書と関連していますか。（いいえ。）神の国の時代における神の裁きと刑罰に関連していますか。（いいえ。）それでは、なぜわたしはこの二側面について話をしたのでしょうか。それは、神を知るためには人間はこれらの側面を理解しなければならないからです。（はい。）これらを知り、理解することはとても必要です。神に関するすべてを理解するために、聖書に、神の人間への裁きと刑罰だけに限ってはいけません。わたしがこう言うことの背後にある目的は何ですか。それは、神は、ただ神の選民だけの神ではないことを人々に知らせることです。現在あなたは神に付き従っており、神はあなたの神ですが、神に付き従う人々以外の人々にとって、神は彼らの神でもありますか。神は、神に付き従う人々以外の、あらゆる人々の神ですか。神は万物の神ですか。（はい。）それでは、神は神に付き従う人々だけに対して働きや業を行ないますか。（いいえ。）神の働きと業の範囲は何ですか。最も狭いレベルでは、神の働きと業の範囲には人類全体と万物が含まれます。最も広いレベルでは宇宙全体が含まれ、人には見ることはできません。したがって、神は全人類のあいだで働きと業を行なうと言うことができます。人々に神自身に関するすべてを知らせるには、これで十分です。神を知りたい、神を真に知りたいのであれば、ただ神の働きの三段階に限ってはいけません。神が以前に行なった働きの話だけに限ってはいけません。そのようにして神を知ろうとするのならば、神を一定の制限内に留めていることになります。神をあまりに取るに足らないものとみなしています。そうすることで人はどのような影響を受けるでしょうか。あなたは神の驚異性や崇高性、神の力や全能性、そして神の権威の範囲を決して知

ることはいけません。そのような認識は、神が万物の支配者であるという真理をあなたが受け入れる能力、そして神の真の身分と地位に関するあなたの認識に影響を及ぼすでしょう。すなわち、もし神に関するあなたの認識の範囲が限られているならば、あなたが受け取ることのできるものも限られています。範囲を拡張して視野を広げる必要があるのは、このためである。それが神の働きの、神の経営の、神の支配の、あるいは神に支配され管理されている万物の範囲であるかに関わらず、あなたはそれらすべてを知り、その中にある神の業を知るべきです。そのような理解方法により、あなたは神が万物を支配し、管理し、万物にあらゆるものを供給しているということを知らないうちに感じるでしょう。それと同時に、あなたは自分が万物の一部であり、万物の一員であることを実感するでしょう。神は万物を供給するので、あなたも神の支配と供給を受け入れます。これは誰も否定することのできない事実です。万物はそれぞれの法則にさらされていて、その法則は神の支配下にあり、また万物にはそれぞれの生存のための規則があり、それもまた神の支配のもとにあります。その一方で、人類の運命や人類に必要なものもまた神の支配や神による供給と密接に関連しています。このため、神の統治と支配下において、人類と万物は相互に関連し、相互に依存し、織り交ぜられているのです。これが、神による万物創造の目的と価値です。いま、あなたがたはこれがわかりましたね。そうであれば、今日の交わりはここで終わりにしましょう。さようなら。（神様に感謝。）

2014年2月2日

唯一無二の神自身 9

神は万物のいのちの源である（3）

この期間、神を知ることに関する様々な主題を話してきましたが、最近はそれに関する極めて重要な主題を話しました。その主題は何ですか。（神は万物のいのちの源である、です。）わたしが語った要点と題目は、みなさんにはっきりした印象を与えたようです。前回神が人間のために造った生存環境と、神が人類のために用意した、人が生活するうえで必要な様々な必需品について、その二、三の側面に関する話をしました。実際のところ、神の業は、人々の生存環境を用意することや、日常の必需品を用意することに限りません。むしろそれは、人類の生存と生活に必要とされる多種多様な側面や要素に関わる、多数の神秘的かつ必要な業を完成させることから成っています。それはすべて神の業です。これらの神の業は、人間の生存環境や日常的な必需品を用意す

ることに限らず、それよりはるかに広い範囲にわたっています。神はこれら二種類の業のほか、人間が生活するのに必要な多数の生存環境と生存条件を用意します。これが、本日話をする主題です。この主題も神の業と関係しています。そうでなければ、ここで話をしても無意味でしょう。人が神を知ることを望んでいても、「神」という言葉に関する文字どおりの認識、あるいは神が所有するものと神そのものの様々な側面にまつわる文字どおりの認識しかなければ、それは真の認識ではありません。それでは、神の認識に至る道とはどのようなものですか。それは、神の業を通じて神を知るようになり、神のあらゆる側面において神を知るようになることです。そこでわたしたちは、万物創造時における神の業という主題についてさらに交わりをもたなければなりません。

神が万物を造って以来、万物は整然と、かつ神が定めた法則に基づいて機能し、進化し続けてきました。神による見守りと支配のもと、人は生存し、同時に万物は整然と発展してきました。その法則を変えたり破壊したりすることができるものは何一つありません。あらゆる生き物が増殖できるのは、神による支配があるからであり、あらゆる生き物が生存できるのは、神の支配と管理があるからです。つまり、神の支配下においては、あらゆる生き物が規則正しく現れ、繁栄し、消滅し、転生する、ということです。春になると降り注ぐ雨が新鮮な季節の感覚をもたらし、地を潤します。地では雪解けが始まり、草が土を押し上げて芽吹き始め、木々も次第に緑色へと変わります。これらすべての生き物が、地に新鮮な活力をもたらすのです。これが、あらゆる生き物が現われ繁栄しているときに見られる光景です。ありとあらゆる動物が巣穴から出て春の温もりを感じ、新しい年を始めます。夏になると、すべての生き物が暑さのなかで日差しを浴び、夏の暖かさを楽しみます。草木や様々な植物が急速に生長し、やがて花を咲かせて実を結びます。夏の間は、人間を含めたすべての生き物が活発になるのです。秋には雨が涼しさをもたらし、あらゆる生き物が刈り入れの時期の到来を感じます。すべての生き物が実を結び、人間は冬に備えて食料を得るべく、これら様々な作物の刈り入れを始めます。冬になると、すべての生き物が静けさの中で落ち着き、寒い冬の訪れの中、人間もまた休息して冬を過ごします。季節から季節へ、春から夏、夏から秋、秋から冬への移り変わりは、すべて神が定めた法則によって生じます。神はこの法則を用いてあらゆる物事と人間を導き、人間のために豊かで色彩に富んだ生活形態を作り出し、様々な気温と季節のある生存環境を用意します。ゆえに、こうした規律ある生存環境の中で、人間は規律ある形で生存し、繁殖することが可能なのです。人間はこの法則を変えることができず、どんな人や生き物もこれらの法則を打ち壊すことはできません。無数の変

化が生じ、海は野に、野は海になったものの、これらの法則は存続し続けます。それが存在するのは神が存在するからであり、神の支配と管理のゆえなのです。この種の秩序ある、大規模な環境の中、人間の生活はそうした法則と規則の中で進歩します。これらの法則は何世代もの人々を養い、何世代もの人々がこれらの法則のもとで生存してきました。人々はこの秩序ある生存環境に加え、神が造った数多くの物事のすべてを何世代にもわたって享受してきました。たとえ人々が、この種の法則は生来のものだと思い、当然のものとして軽視したとしても、また神がこれらの法則を指揮し、支配していることを感じられなかったとしても、どんな場合であれ、神は絶えずこの不変の働きに従事しています。神がこの不変の働きを行う目的は人類の生存であり、人類が生きられるようにするためです。

神は全人類を育むために万物の境界を定める

本日は、神が万物にもたらしたこの種の法則が全人類を養うとはどういうことか、という主題について話をします。これはいささか大きな主題なので、いくつかの部分に分け、それらの各部分をあなたがたにはっきり説明するため、ひとつずつ話をしていきます。この方法であれば、あなたがたにとって把握しやすくなり、徐々に理解できるよう。

では最初の部分から始めましょう。神は万物を創造したとき、山、平野、砂漠、丘、河川、湖沼の境界を定めました。地上には山、平野、砂漠、丘、そして様々な水域が存在します。これらが様々な種類の地形を構成しています。そうですね。神はそれらの間に境界を定めました。境界の設定という場合、それは山には山の、平野には平野の領域があり、砂漠には一定の範囲が、丘には一定の面積があることを意味します。さらに、河川や湖沼などの水域にも一定の水量があります。つまり、神は万物を造った際、あらゆるものを極めて明確に分割したのです。神は、ある山の半径は何キロメートルであるべきか、その範囲はどのようなものかを、すでに決めてきました。また、ある平野の半径は何キロメートルであるべきか、その範囲はどのようなものかも決めてきました。万物を造ったときも、神は砂漠の境界、丘の範囲やその割合、そしてそれらの境界が何によって定められるかなどの事柄をすべて決めてきました。それらはすべて神によって決められたのです。神は創造を行うあいだに、川や湖沼の範囲を決めました。それらはいずれもそれぞれの境界をもちます。では、わたしたちが「境界」について話すとき、それは何を意味しますか。つい先ほど、神は万物の法則を定めることで万物を支配している、という話をしました。つまり、地球の回転や時間の経過のせいで、山の範囲と境界

が広がったり狭まったりすることはないのです。それらは固定されており、変わることはありません。その不変性を決めるのは神です。平野の面積、範囲、境界についても、それは神によって定められました。平野にはそれぞれの境界があり、それゆえ平野の地面から土が勝手に盛り上がることはあり得ません。平野が突然山になることもありません。それは不可能でしょう。これが、わたしたちが先ほど話し合った法則と境界の意味です。砂漠について言えば、その具体的な役割はここでは触れません。またその他の地形や地理的位置の具体的役割についてもここでは触れず、それらの境界にだけ触れることにします。神の支配下では、砂漠の範囲も拡大することはありません。なぜなら、神が砂漠にその法則と範囲を与えたからです。砂漠の面積、機能、境界、および所在地などは、神によってすでに定められています。砂漠はその範囲を超えることも、移動することもなく、面積が勝手に広がることもありません。河川や湖沼などの水流には秩序があり、途絶えることはないものの、その範囲から出て移動したり、境界を越えたりすることは決してありません。それらはすべて一方向に、流れるべき方向に秩序正しく流れます。ゆえに、神の支配の法則下において、水や湖沼が勝手に干上がったたり、地球の回転や時間の経過が原因で勝手に方向を変えたり、流量を変えたりすることはないのです。それはすべて神の支配下にあります。つまり、神によって造られ、この人類の間に存在する万物には、それぞれ固定された場所、面積、そして範囲があるのです。すなわち、神が万物を造った際にそれらの境界が定められたのであって、勝手に変更すること、更新すること、変えることもできません。「勝手に」とは何を意味しますか。それは、天候や気温、地球の回転速度などが原因で、こうした境界がやみくもに移動したり、拡大したり、変形したりすることはない、ということです。たとえば、山には特定の高さがあり、その麓には特定の面積があり、また特定の標高、特定の植生があります。それらはどれも神により計画され、計算されたものであり、勝手に変わることはありません。平野について言えば、人類の大部分は平野に住んでおり、気候の変化がその面積や存在価値に影響を及ぼすことはありません。神によって造られたこれら様々な地形や地理的環境に含まれている物事さえも、勝手に変わることはありません。たとえば、砂漠の構成要素、地中にある鉱物資源の種類、砂漠の砂の量、色、厚さなどが、勝手に変わることはありません。それらが勝手に変わらないのはなぜですか。神の支配と管理がその理由です。神が造ったこれら様々な地形や地理的環境の中で、神はあらゆる物事を、計画された秩序ある方法で管理しています。そうしたわけで、これらの地理的環境は、神によって造られてから数千年、さらには数万年が経った後でもいまだ存在し、依然として機能しているのです。火山が噴火したり、地震が発生したり、大規模な地殻変動

が起きたりする期間もありますが、神はいかなる種類の地形であっても、それが本来の機能を失うことを許しません。人間が見て享受できるこれらすべてのものが地球上で秩序正しく存在できるのは、ひとえに神がそれを管理し、これらの法則を統治、支配しているからです。では、地球上に存在するこれら様々な地形を、神がこのような形で管理するのはなぜですか。神の目的は、様々な地理的環境の中で生存しているすべての生物が安定した環境を得られるようにすること、それらの生物がその安定した環境の中で生き続け、増殖できるようにすることです。動けるものや動けないもの、鼻孔で呼吸するものやそうしないものなど、これらすべての物事が、人類の生存のために独自の環境を構成しているのです。この種の環境だけが何世代にもわたって人間を養い、人間が何世代にもわたって平和に生存し続けられるようにするのです。

わたしが先ほど話したことはいささか大きな主題なので、おそらくあなたがたの生活からいくぶんかけ離れたことのように思えるでしょう。しかし、みなさん理解はできたはずです。違いますか。つまり、万物の支配における神の法則は、極めて重要だということです。まさに重要なのです。この法則のもと、すべての生物が成長する前提条件は何ですか。それは神による支配です。神による支配のもと、万物がそれぞれの役割を果たすのは、神の支配のゆえなのです。たとえば、山は森を養い、森はそこに棲む様々な鳥や獣を養って守ります。平野は人間が作物を栽培するために用意された場所であり、また様々な鳥や獣のために用意された場所でもあります。平野があるおかげで、人類の大半が平らな地面で生活でき、人々の生活に便宜がもたらされます。また、平野には草原が含まれます。広大な草原です。草原は地表を植物で覆います。草原は土を守り、草原に棲む牛、羊、馬を養います。砂漠もその役割を果たします。砂漠は人間の住む場所ではなく、その役割は多湿な気候を乾燥させることです。河川や湖沼の水流は、人々が簡単に飲み水を得られるようにします。水が流れている所であれば、人はどこでも飲み水を得ることができ、万物の水に対する必要性が簡単に満たされます。これらが、神が様々な地形に対して定めた境界です。

こうした神が定めた境界のため、様々な地形がそれぞれ異なる生存環境を生み出し、それらの生存環境は様々な鳥や獣にとって好都合であって、同時に生存空間も与えてきました。そこから、様々な生物の生存環境の境界が生まれたのです。これが次に話をする第二の部分です。まず、鳥や獣、昆虫はどこに棲息していますか。森や林に棲息していますか。それらが鳥や獣、昆虫の住みかです。つまり、神は様々な地理的環境の境界を定めたほか、様々な鳥、獣、魚、昆虫、植物の境界と法則も定めたのです。様々な地

理的環境の差異、そして様々な地理的環境の存在が原因で、各種の鳥、獣、魚、昆虫、植物にはそれぞれ異なる生存環境があります。鳥、獣、昆虫は様々な植物の中で生活し、魚は水中で生活し、植物は大地で育ちます。その大地には、山、平野、丘陵など様々な地帯があります。鳥や獣はいったん住みかを定めると、あちこちさまよい歩くことはありません。鳥獣の住みかは森林と山です。いつか鳥獣の住みかが破壊されるとしたら、その秩序は乱れて混乱に陥るでしょう。秩序が乱れて混乱に陥った場合、どのような影響が即座に現れますか。最初に被害を受けるのは誰ですか。（人類です。）それは人類です。神が定めたこれらの法則と制限の中で、何か異常な現象を見たことはありますか。たとえば、砂漠を歩く象を見たことはありますか。そのような光景を見たことはありますか。そのようなことが本当に起きたなら、それは極めて異常な現象です。なぜなら、象は森林で暮らしており、それが、神が象に用意した生存環境だからです。象には象の生存環境と決まった住みかがあるのに、なぜそこを離れて走り回るのでしょうか。岸辺を歩くライオンや虎を見たことがある人はいますか。誰もいません。ライオンや虎の住みかは森と山です。大海の鯨や鮫が砂漠を泳いでいるのを見たことがある人はいますか。誰もいません。鯨や鮫は海を住みかにしています。人間の生活環境において、ヒグマと共に生活している人がいますか。家の中でも外でも、常にクジャクやその他の鳥に囲まれながら生活している人がいますか。鷹や雁が猿と戯れているのを見たことがある人はいますか。（いません。）これらはどれも異常な現象です。とても奇妙に聞こえるこれらの現象について話す理由は、それが一箇所に固定されているか、あるいは鼻から呼吸できるかどうかを問わず、神が造った万物にはそれぞれの生存法則があるということ、あなたがたに理解してもらうためです。これらの生物を造るはるか以前、神はそれらの住みかと生存環境をすでに用意していました。これらの生物には、それぞれ固定された生存環境、固有の食料、固定された住みか、生存に適した一定の場所、生存に適した気温をもつ場所があったのです。こうして、それらの生物が方々を彷徨ったり、人類の生存を脅かしたり、人々の生活に影響を及ぼしたりすることはありませんでした。これが、神が万物を管理する方法であり、人類に最高の生存環境をもたらしているのです。万物のうち生物には、生き延びるための食料がそれぞれの生存環境の中にあります。その食料のために、生物は生来の生存環境に固定されているのです。そのような環境の中、生物は神が定めた法則に従い、引き続き生き延び、増殖し、前進します。この種の法則や神の予定があるため、万物は人類と調和して暮らし、人類は万物と相互依存の中で共生しているのです。

神は万物を造り、それらの境界を定め、その中であらゆる生物を養いましたが、一方で人類のための様々な生存手段も用意したので、人間が生き延びる方法は一つだけでなく、生存環境も一種類だけでないことがわかります。先ほど、神が人間のために様々な食料や水源を用意したことについて話しましたが、それらは人類が肉体的に生き続けるうえで不可欠なものです。しかし、人類の全員が穀物を食べて生存しているわけではありません。地理的環境や地形の相違のために、人間には様々な生存手段があります。これらの生存手段は、すべて神が用意したものです。したがって、すべての人間が主として農耕に従事しているとは限りません。つまり、すべての人が耕作によって食料を得ているわけではないのです。これが、本日お話しする三番目の部分です。境界が発生したのは、人類の生活様式が多様だからです。それでは、人間の生活様式として、他にどのような種類のものがありますか。様々な食料源という観点から見たとき、他にどのような種類の人々がいますか。そこには主なものが数種類あります。

一番目は狩猟の生活様式です。それが何かは誰もが知っています。狩猟で生きる人は何を食べますか。（獲物です。）こうした人々は森で獲った鳥や獣を食べます。「獲物」とは現代の言葉です。狩人はそれを獲物とは考えず、食料、日々の糧と考えます。たとえば、狩人は鹿を獲ります。狩人が鹿を獲るのは、農民が土から作物を得るのと同じです。農民は土から食料を得るので、その食料を見たとき、喜んで安堵します。家族は作物を食べることができるので、飢えることはありません。農民の心は不安から解放され、満足します。狩人も獲物を見て安堵し、満足します。これ以上食料の心配をせずに済むからです。次の食事で食べるものがあれば、飢える必要はありません。これが生活のために狩猟をする人です。狩猟を生業とする人々の大半は山の森で生活します。農耕はしません。そこで耕作に適した土地を見つけるのは困難なので、様々な生物、すなわち獲物を食べて生存します。これが普通の人々と異なる生活様式の一番目です。

二番目は牧畜民の生活様式です。牧畜で生活する人は土地を耕すこともしませんか。（しません。）では、何をしますか。どのように生活しているのですか。（生活の大半を牛や羊の飼育に費やし、冬に家畜の屠殺を行なってそれを食べます。主食は牛肉と羊肉で、ミルクティーを飲みます。牧畜民は四季を通じて多忙ですが、食事は豊かです。ミルク、乳製品、肉が豊富にあります。）牧畜で生計を立てる人はおもに牛肉と羊肉を食べ、羊の乳と牛乳を飲み、牛や馬に乗って風を髪に受け、顔に日光を浴びながら、野原で牧畜を行います。彼らが現代生活のストレスに晒されることはありません。広大な青空と草原を一日中眺めているのです。牧畜で生計を立てている人の大半は草原に住み、

何世代にもわたって遊牧民の生き方を続けられてきました。草原での生活はいささか孤独ですが、とても幸福な生活でもあります。悪くない生き方です。

三番目は漁をして暮らす生き方です。人類の中には、沿岸部や小さな島に住む人々がごく一部存在します。彼らは水に囲まれ、海に面しています。これらの人々は漁を生業としています。漁を生業とする人々の食料源は何ですか。彼らの食料源には様々な魚や海産食物や海産物が含まれます。漁を生業とする人は大地を耕さず、その代わり毎日漁に出ます。主食は様々な魚や海産物で、時々それらを米や小麦粉や日用品と交換することがあります。これが沿岸部に住む人々の、他とは異なる生活様式です。海の近くに住む人々は食料を海に頼っており、漁は彼らに食料をもたらすだけでなく、彼らが生計を立てる手段でもあるのです。

農耕を行う以外に、人類の大部分は上記三種類の生き方にしがたって暮らしています。しかし、大半の人々は農耕を生業としており、牧畜や漁や狩猟によって暮らす人々の集団は少数しかありません。それでは、農耕を生業とする人々は何を必要としますか。彼らが必要とするものは土地です。彼らは何世代にもわたり、地中に作物を植えることで暮らしており、野菜を植えようと、果実を植えようと、あるいは穀物を植えようと、彼らが食料と日々の必需品を得るのは大地からなのです。

こうした様々な人間の生活様式を支える基本条件は何ですか。人々が生存できる環境を基本的な水準に維持することが絶対に必要ではありませんか。つまり、狩猟で暮らす人が山や森、鳥や獣を失ったとしたら、彼らの食料源はなくなってしまいます。この民族、およびこうした人々が向かうべき方向は不確実なものになり、彼らが消えてしまう恐れすらあるでしょう。また、牧畜を生業とする人々はどうですか。こうした人々は何に頼っていますか。彼らが頼っているのは家畜ではなく、家畜が生存できる環境、すなわち草原です。草原がなければ、牧畜民はどこで家畜を放牧すればよいのでしょうか。牛や羊は何を食べればよいのでしょうか。家畜がなかったとしたら、これら遊牧民には生活の糧がなくなるでしょう。生活の糧を得る源がないとしたら、これらの人々はどこへ行けばよいのでしょうか。生き続けることが極めて難しくなり、未来はなくなるでしょう。水源がなくなり、河川や湖沼が干上がってしまったら、水に頼って暮らすすべての魚はそれでも存在するのでしょうか。存在しないでしょう。水と魚に生活の糧を頼る人々は、引き続き生存できるのでしょうか。こうした人々の食料や、生活の糧を得る源がなくなったとしたら、生存し続けることは不可能でしょう。つまり、ある民族が生活の糧や生存に関する問題に直面した場合、その民族は存続できず、地球上から消えて絶滅するでしょう。

う。また、農業を生業とする者が土を失い、ありとあらゆる植物を植えてそこから食料を得られなくなったら、その結末はどうなるでしょうか。食料がなかったとしたら、人間は餓死するのではないのでしょうか。人間が餓死しつつあるなら、その人種は消滅するのではないのでしょうか。そうしたわけで、これが多種多様な環境を維持する神の目的なのです。神が様々な環境や生態系を維持し、そしてそこに住む様々な生物をすべて維持する目的は、ただひとつしかありません。その目的とは、様々な人々、様々な地理的環境の中で暮らす人々を養うことです。

すべての被造物がそれぞれの法則を失ったとしたら、それらは存在しなくなるでしょう。万物の法則が失われたとしたら、万物のうち、あらゆる生物が存続できないでしょう。人類もまた、生存のために頼っている環境を失うでしょう。人類がそのすべてを失うとしたら、これまでのような世代を超えた繁栄と繁殖は継続不可能になるはずです。人間が現在まで生存してきたのは、神が人間にすべての被造物を与え、様々な方法で人類を養ってきたからです。人類が現在まで、今日まで生存してきたのは、ひとえに神が様々な方法で人類を養っているからです。自然の法則が整然としている、固定された好ましい生存環境により、地球上のありとあらゆる人々、ありとあらゆる人種が、予め定めた領域の中で生存できるのです。これらの領域や境界を越えられる人はいません。なぜなら、それらを定めたのは神だからです。神がこのように境界を定めたのはなぜですか。このことは全人類にとって大いに重要な問題です。本当に重要な問題なのです。神はひとつひとつの生物に対して範囲を定め、各種の人間に対して生存の手段を定めました。また神は、地球上の様々な人や人種を分割し、それぞれの範囲を定めました。これが次に話す事項です。

四番目は、神が様々な人種の間に境界を引いたことです。地球上には白色人種、黒色人種、褐色人種、黄色人種が存在します。これらは異なる人種です。神はこれら異なる種類の人々についても範囲を定めました。そして神による管理のもと、人々は無意識のうちに適切な生存環境の中で暮らしています。そこから逸脱できる人はいません。たとえば、白人のことを考えてみましょう。白人の大半が暮らす地理的範囲はどこですか。大半はヨーロッパとアメリカで生活しています。黒人がおもに暮らす地理的範囲はアフリカです。褐色人種はタイ、インド、ミャンマー、ベトナム、ラオスなど、おもに東南アジアと南アジアで暮らしています。黄色人種は中国、日本、韓国など、おもにアジアで暮らしています。神はこうした様々な人種をすべて適切に分布させたので、これら異なる人種は世界各地に分布しています。これら世界各地において、神は遠い昔に各人種

に適した生存環境を用意しました。これらの生存環境において、神は様々な色と成分を有する土壌を用意しました。言い換えると、白人の身体の構成要素は黒人の身体のそれと同じではなく、それ以外の人種のそれとも異なります。神は万物を創造した際、その人種の生存環境をすでに用意していたのです。神がそのようにした目的は、その人種が増殖し、人数が増加し始めたとき、そうした人々が一定の範囲に固定されるようにすることでした。神は人間を創る前に、そのすべてをすでに考え抜いていたのです。神はヨーロッパとアメリカを白人のためにとっておき、彼らが発展し、生存できるようにしました。つまり、神は地球を造っていたとき、その地域に何を置き、その地域で何を養うかについて、すでに目標と目的を定めていたのです。たとえば、その地にどのような山、どれほど多くの平野、どれほど多くの水源、どのような種類の鳥や獣、どのような魚、どのような植物を置くかについて、神ははるか以前にすべて定めていたのです。ある特定の種類の人間、すなわちある特定の人種の生存環境を用意するにあたり、神は地理的環境、土壌の構成、様々な種の鳥と獣、様々な魚の大きさ、魚の身体の構成要素、水質の違い、および様々な種類の植物など、数多くの問題についてありとあらゆる角度から検討する必要があったのです。神はそのすべてを遠い昔に用意していました。その種の環境は、神が白人のために造り、用意し、もともと白人のものである生存環境です。神は万物を創造したとき、そこに多くの考えを込め、計画的に業を行なったことを、あなたがたはわかっていましたか。（はい。様々な種類の人間に対する神の配慮が極めて周到だったことを、わたしたちはわかっていました。各種の人間のためにお造りになった生存環境に対し、どのような鳥や獣や魚、いくつの山、いくつの平野を用意するかについて、神はこのうえない周到さと正確さをもってそれらを考慮なさったのです。）白人を例にとりましょう。白人はおもに何を食べますか。白人が食べる食料は、アジア人が食べる食料と極めて異なっています。白人の主食はおもに肉、卵、ミルク、家禽から成っています。パンや米などの穀類は一般的に副食であり、皿の端に盛られます。野菜サラダを食べるときも、焼いた牛肉や鶏肉を何切れかそこに加えがちであり、小麦を原料とする食料を食べるときも、チーズや卵や肉を加えがちです。つまり、白人の主食は小麦を原料とする食料や米でなく、彼らは肉やチーズを大量に食べます。それに、極めて高カロリーな食料を食べるので、頻繁に氷水を飲みます。そうしたわけで、白人は並外れて丈夫なのです。これらが彼らの生活の糧であり、神が白人のために用意した生活環境です。その生活環境のおかげで、白人は他の人種の生活様式と違うこのような生き方ができるのです。こうした生き方が正しいか間違っているかは問題ではなく、それは神が予定し、神の指図と采配から生じた生来のものなのです。この人種にはこのような

生活様式と、生活の糧を得るこれらの源がありますが、それは彼らの人種に起因するものであり、また神が彼らに用意した生存環境に起因するものです。神が白人のために用意した生存環境、および白人がその環境から得る日々の糧は豊富だと言えるでしょう。

神は他の人種についても生存に必要な環境を用意しました。黒人も存在しますが、どこに分布していますか。おもにアフリカの中央部と南部に分布しています。神は黒人のためにどのような生活環境を用意しましたか。熱帯雨林、ありとあらゆる鳥や獣、砂漠、そして人々と共に生きる様々な植物も用意しました。黒人には水源があり、生活の糧があり、食料があります。神は黒人に偏見をもちませんでした。彼らが何をしたとしても、その生存が問題になったことは一度もありません。黒人もまた、世界のなかで特定の場所と地域を占めているのです。

ここで、黄色人種について話しましょう。黄色人種は主として地球の東方に分布しています。環境と地理的位置に関して、東洋と西洋の違いは何ですか。東洋では土地の大部分が肥沃であり、資源や鉱床に恵まれています。つまり、地上においても地下においても、ありとあらゆる資源が豊富なのです。そしてこの人々の集団、つまりこの人種に対しても、神は彼らに適した土壌、気候、および様々な地理的環境を用意しました。そうした地理的環境と、西洋の地理的環境との間には大きな差異があるものの、人々に必要な食料、生活の糧、そして生存のための食料源もまた神によって用意されました。生活環境が西洋の白人の環境とは異なるというだけのことです。ともあれ、わたしがあなたがたに話さなければならないことは何ですか。東方人種の人口は比較的多いので、神は地球のその部分に、西洋とは異なる要素を数多く加えました。多様な地形とありとあらゆる豊富な資源をそこに加えたのです。東洋の自然資源は極めて豊富です。地形も種類に富んでおり、東方人種の莫大な人口を養うのに十分です。東洋と西洋の相違として、東洋は東西南北全域にわたって西洋より気候が良好である、という点があります。四季がはっきり異なり、気温は最適であり、自然資源は豊富であり、自然の景観や地形の種類は西洋に比べ格段に優れています。神がこのようなしたのはなぜですか。神は白人と黄色人種との間で、極めて合理的な釣り合いを取ったのです。それは何を意味していますか。白人の食料、使っているもの、および享樂のためにもたらされた物事のあらゆる側面が、黄色人種が享受している物事よりはるかに優れているということです。しかし、神はいかなる人種もひいきしません。神は黄色人種に対し、より美しく良好な生存環境を与えました。これが釣り合いです。

神はどの人種が世界のどの地域に住むかを予め定めましたが、人間はその範囲を超え

てゆくことができますか。（いいえ、できません。）なんと不思議なことでしょう。様々な時代、あるいは特別な時期に戦乱や侵略があったとしても、神が各人種に対して予め定めた生存環境が、そうした戦乱や侵略によって破壊されることはありません。つまり神は、世界の特定の地域に特定の人種が住むように定めたので、人間はその範囲を超えてゆくことができないのです。自らの領域を変えたり拡大したりしようとする、ある種の野望が人間にあったとしても、神の許可がなければ、その野望を果たすのは極めて困難です。それを成功させるのはこのうえなく困難なことです。たとえば、白人は領域を拡大しようと、他国を植民地化しました。ドイツ人は数ヵ国を侵略し、イギリスはかつてインドを占領しました。結果はどうなりましたか。最終的に、そうした活動は失敗に終わりました。彼らの失敗から何がわかりますか。神が予め定めた物事を破壊することは許されない、ということです。ゆえに、イギリスの拡大の勢いがいかに強かったとしても、最終的にイギリスは撤退せざるを得ず、その地はいまだインドに属しています。その地に住む人々は依然としてインド人であり、イギリス人ではありません。神がそれを許さないからです。歴史や政治を研究する一部の人が、これに関する論考を発表してきました。これらの人たちは、イギリスが失敗したのは、特定の民族を征服することが不可能なためである、あるいはその他の人間的な原因が理由であるとしています。それらが真の理由ではありません。真の理由は神であり、神がそれを許さないのです。神は特定の民族を特定の場所に住ませ、そこに定住させます。神がその民族に対し、あの場所から移動してくることを許さなければ、その民族は移動することができません。神が一定の地域を与えた場合、その民族はその地域の中で生活します。人類は、その一定の範囲を離れたり、そこから脱出したりすることができません。それは確かです。侵略者の勢力がどれほど強力であったとしても、あるいは侵略される側がどれほど脆弱であったとしても、侵略が成功するかどうかは最終的に神が決めることです。それは神によってすでに予定されたことであり、誰も変えることができません。

以上が、神が行なった様々な人種の分布方法です。神はどのような働きを行なって、様々な人種を分布させてきましたか。まず、神は大規模な地理的環境を用意し、人々に様々な場所を割り当てました。その後、人間はその場所で何世代にもわたり生存しました。これで、生存する場所の設定が済んだのです。そして人間の生活、彼らが何を食べるか、何を飲むか、その生活の糧など、神はこれらの事柄もすべて遠い昔に決定しました。また、神は万物を創造した際、様々な種類の人のためにそれぞれ異なる用意を行いました。そのため、土壌の構成要素、気候、植物、地理的環境には様々なものがあるの

です。異なる場所には異なる鳥や獣がおり、異なる水域にはそれぞれに固有の魚や水産物があります。昆虫の種類でさえも神により決定されました。たとえば、アメリカ大陸で育つものはみなとても大きく、とても背が高く、極めて頑丈です。山中の森の木々は根が浅いものの、極めて高い木々に育ちます。高さ百メートル以上になることすらありますが、アジアの森のほとんどの木々はそこまで高くはありません。アロエを例に取りましょう。日本のアロエは極めて細身で薄いですが、アメリカのアロエはとても大きいものです。ここに違いがあります。同じ名前をもつ同じ種類の植物でありながら、アメリカ大陸では極めて大きく育つのです。これら様々な側面の相違点は、人間には見たり感じたりできないかもしれませんが、神は万物を造っている際にそれらを決め、異なる地理的環境、地形、生物、人種を用意しました。それは、神が様々な種類の人間を造り、それぞれの人種に必要とされる物事やその生活様式について知っているからです。

これらの物事についていくらか話をしましたが、いま話し合った内容の主題について何かを学んだように思いますか。理解しつつあると感じますか。わたしがより広範な主題の中からこれらの事項を選び、それについて話すことを選んだのはなぜか、あなたがたはいま大まかにわかったはずだと思います。そうではありませんか。自分がそれについてどれほど理解したか、少し話してください。（全人類は、神が万物に対して定められた法則によって養われてきました。神はこれらの法則を定められているとき、様々な環境、生活様式、食料、気候、気温を様々な人種にもたらされました。これは、人類全員が地球に住み、生存できるようにするためでした。このことから、人類の生存に関する神の計画は非常に精密であることがわかり、神の知恵、完璧さ、そして人類に対する神の愛を知ることができます。）（いかなる人や出来事や物事も、神が定められた法則と範囲を変えることはできません。それらはみな、神の支配下にあるのです。）神によって定められた、万物の成長に関する法則の観点から見ると、人類はその種類を問わず、すべて神から施され、養われているのではないのでしょうか。これらの法則が破られたり、神がそれらの法則を人類に対して定めなかったとしたら、人類の見通しはどのようなものになるのでしょうか。これらの基本的な生存環境を失ったあと、人類には食料源があるのでしょうか。食料源が問題になることは考えられます。もし食料源を失ったら、つまり食べ物を何ひとつ得られなければ、人は何日持ちこたえられるのでしょうか。おそらく一ヵ月と持ちこたえられず、人間の生存そのものが危機に晒されるでしょう。したがって、神が人間の生存、継続的な存在、繁殖、存続のために行う業のひとつひとつが極めて重要なのです。神が被造物に対して行う業のひとつひとつが、人類の生存と密接に

関連しており、それと不可分なのです。人類の生存が問題となった場合、神の経営（救い）は続行可能でしょうか。神の経営はなおも存在するでしょうか。神の経営は、神が養う全人類と共にあるので、神が被造物にどんな用意をしようと、人間に何を行おうと、それはどれも神にとって必要であり、人類の生存に不可欠です。神が万物のために定めたこれらの法則が守られなかったり、それが破られたり、あるいは乱されたりしたとすれば、万物はもはや存在できず、人間の生存環境も日常の糧も、そして人類自体もすべて存続不可能になるでしょう。そのため、神による人類の救いの経営もまた消滅するでしょう。

ここで話したことはどれも、人間ひとりひとりの生存と密接に関連しています。あなたがたの中には「あなたの言うことは話が大きすぎ、わたしたちには理解できない」という意見があったり、あるいは「あなたの言うことはわたしに関係ない」という人がいたりするかもしれません。しかし、自分が万物のひとつとして生きていること、神の支配下にあるすべての被造物のひとつであることを忘れてはいけません。神の被造物は神の支配から切り離すことができないので、神の支配から自分を切り離せる人間は誰ひとりいません。神による支配と施しを失うと、人間のいのち、すなわち人間の肉体のいのちは消滅するでしょう。これが、神が人類の生存環境を定めたことの重要性です。自分がどの人種に属しているかを問わず、また東洋であろうと西洋であろうと、自分が生きている地域を問わず、神が人類のために用意した生存環境から自分を切り離すことはできず、神が人類のためにもうけた生存環境による養育と施しから自分を切り離すこともできません。あなたの生計の糧が何か、何に頼って暮らしているか、何に頼って肉のいのちを維持しているかにかかわらず、あなたは神による支配と管理から自分を切り離すことはできません。中には、「わたしは農民でないので、作物を栽培して生計を立てているわけではない。食料を天に依存していないので、神が定めた生存環境で生存しているわけでもない。そうした環境からは何も与えられていない」などと言う人がいます。それは正しいですか。自分は作物を栽培して生計を立てているわけではないと言いますが、穀類を食べないのですか。肉や卵を食べないのですか。それに野菜や果物を食べないのですか。あなたが食べるものや必要とするものはどれも、神が人間のために定めた生存環境と切り離すことができません。人間が必要とするものの源も、神が造った万物と切り離すことができず、それはあなたの生存環境を完全に構成しているのです。あなたが飲む水、着ている衣服、使っているあらゆるもののうち、神の創造物に由来しないものがありますか。中には、「神の創造物に由来しないものがいくつかある。プラスチック

ックがその一つだ。プラスチックは人間が造った化学物質だ」と言う人がいるかもしれませんが。それは正しいですか。プラスチックは確かに人間が造った化学物質ですが、プラスチックの原材料は何ですか。原材料は神が造った物質から得られたものです。あなたが見るもの、享受するもの、使うものはどれも、神が造ったものから得られます。つまり、どの人種に属しているか、生活の糧は何か、どのような生存環境で暮らしているかにかかわらず、人は自分自身を、神が施してきた物事から切り離せません。では、本日話してきた事柄は「神が万物のいのちの源である」という主題に関連していますか。本日話してきた事柄は、このより大きな主題に含まれますか。（含まれます。）本日の話には多少抽象的なところがあり、話し合うのがいささか難しいかもしれません。しかし、それに関するあなたがたの理解は向上したことでしょう。

これまで数回の交わりで説明した事項は、比較的広範囲におよぶものであり、その対象もかなり幅広いものだったので、すべて理解するには多少の努力が必要です。と言うのも、これらの事項は、神に対する人々の信仰のなかでかつて取り扱われたことがないものだからです。これらの事柄を聞いて神秘と捉える人もいれば、物語として捉える人もいます。どちらの視点が正しいですか。あなたがたはこれらすべてをどのような視点から聞いていますか。（神がすべての創造物を整然と整えられたこと、万物に法則があることを理解しました。またこれらのお話を通じ、人類の救いを目的とした神の御業と、神による周到な采配について理解が深まりました。）数回にわたる交わりの中で、神による万物の支配がどれほど広範囲にわたるかを理解しましたか。（全人類、あらゆるものにわたっています。）神はあるひとつの人種の神ですか。ある一種類の人間の神ですか。少数の人間の神ですか。（違います。）違うということですが、神に関するあなたがたの認識にしたがえば、神が少数の人間の神でしかない、あるいは神があなたがただけの神であるなら、その見解は正しいでしょうか。神は万物を管理、支配しているので、神による万物の支配の中にあらわれる神の業、知恵、全能性を理解できるはずです。これは人々が理解すべき事柄です。神が万物と全人類を管理、支配していると言いながら、神による全人類の支配に関する認識も理解も皆無だとすれば、神が万物を支配していることを真に認められますか。あなたは心の中で「自分にはわかる。わたしの人生もひとえに神によって支配されていることがわかるからだ」と考えるかもしれません。しかし、神はそれほど小さな存在ですか。神はそのような存在ではありません。あなたは自分に対する神の救いと働きしか理解せず、それらのことからしか神による支配を見えていません。それでは範囲が狭すぎるので、あなたが神に関する真の認識をもつ見込み

に悪影響を与えます。それはまた、神による万物の支配について、あなたの真の認識を制限します。神に関する自分の認識を、神があなたに与える物事と救いに限定するなら、神が万物と全人類を支配していることは決して理解できません。これらのすべてを理解できなかった場合、神があなたの運命を支配していることを、あなたは真に理解できますか。いいえ、できません。その側面を理解することも、そのような高い理解度に至ることも決してできないのです。わたしの言うことがわかりますね。事実、わたしが話している事項と内容について、あなたがたがどの程度理解できるかはわかっています。では、それについてわたしが話し続けているのはなぜですか。これらの事項は、神に付き従い、神に救われることを求める全員が理解すべき事柄だからです。これらの主題を理解するのは必要不可欠なことなのです。現時点で、あなたはそれらを理解していませんが、いつかあなたのいのち、真理の経験、そしていのちの性質の変化が一定の段階に達し、ある程度の霊的背丈を得て初めて、わたしがこの交わりで伝えている事項により、あなたは真に糧を得て、神に関する認識の追求を満足させられるでしょう。そうしたわけで、これらの話は、今後あなたがたが神による万物の支配を理解し、神自身を認識するうえで、その基礎を固め、あなたがたに準備させるためのものなのです。

人々が心の中で神を認識している度合いは、神がそれらの人の心を占めている度合いでもあります。心の中でどれほど神のことを知っているかは、その人の心の中で神がどれほど偉大か、ということでもあります。あなたの知る神が空虚で漠然としていれば、あなたが信じる神もまた空虚で漠然としています。あなたの知る神はあなたの個人的生活の範囲に限定されており、真の神自身と何の関係もありません。ゆえに、神の実際の業、神の現実、神の全能、神自身の真の身分、神が所有するものと神そのもの、神が万物においてあらわした業を知ることは、神の認識を追い求めるひとりひとりにとって極めて重要なことなのです。それらは、人が真理の現実に入れるかどうかに関係しています。神に関する認識が言葉だけに限られる場合、あるいは自分自身の数少ない経験や、あなたが神の恵みと考えるものや、あなたのささやかな神の証しだけに限られる場合、あなたが信じている神は絶対に真の神自身ではないと断言します。それだけでなく、あなたが信じる神は想像上の神であり、真の神ではないとも言えます。なぜなら、真の神は万物を支配し、万物の中で歩み、万物を管理する神だからです。その神こそが、人類全体と万物の運命をその手中に握っている神なのです。わたしが話している神の働きと業は、ごく一部の人々に限られるものではありません。つまりそれらは、現在神に付き従う人に限定されないのです。神の業は、万物の中に、万物の生存の中に、そして

万物が変化する法則の中にあらわされています。

すべての被造物における神の業を見ることも、それを認識することもできないのであれば、あなたは神の業を何ひとつ証しできません。神の証しをすることができず、自分が知っている小さな「神」、自分自身の考えに限定され、自分の狭い心に閉じ込められた神について語り続けるなら、つまりそのような神について語り続けるなら、神があなたの信仰を讃えることは決してありません。神の証しをするとき、自分がいかに神の恵みを受し、神の鍛錬と懲らしめを受け、また神の証しをする中でいかに神の祝福を受しているかという観点からしかそうしないのであれば、それはまったく不十分であり、神に満足してもらうには程遠いものです。神の旨にかなう形で神の証しをしたい、真の神自身の証しをしたいのであれば、神が所有するものと神そのものを神の業から理解しなければなりません。神による万物の支配から神の権威を理解し、神が全人類に施すという真実を理解する必要があるのです。自分の日々の糧や生活必需品が神に由来することを認めるだけで、神はすべての被造物を用いて全人類に施すという真実、また万物を支配することで全人類を導いているという真実を理解できないのであれば、神の証しは決してできません。わたしがこのように言う目的は何ですか。あなたがそれを軽視しないようにすること、わたしの話したことは自分のいのちへの入りと無関係であると考えないようにすること、そしてこれらの事項は単なる知識や原理に過ぎないと思わないようにすることです。そうした態度でわたしの言うことを聞けば、あなたがたは何ひとつ得られません。神を知るこの素晴らしい機会を失うのです。

わたしがこれらのことを話す目的は何ですか。人々に神を知らしめること、神の実際の業について理解させることが目的です。神を認識し、神の業を知って初めて、神を知る機会と可能性が生じます。たとえば、ある人について理解したい場合、あなたがたはどのようにしてその人のことを理解するようになるのでしょうか。その人の外見を観察することによってでしょうか。その人の着衣や着こなし方を観察することによってでしょうか。その人の歩き方を観察することによってでしょうか。その人の知識の範囲を観察することによってでしょうか。（違います。）それでは、あなたがたはどのようにしてその人のことを理解しますか。その人の言動、思考、およびその人があらわしたり晒したりする自分自身についての物事に基づいて判断します。これが、あなたがたがその人を知り、理解するようになる方法です。同様に、神を知り、神の実践的側面、神の真の側面について理解したいのであれば、神の業、そして神が行うひとつひとつの実践的な事柄を通じて神を知る必要があります。これが最善かつ唯一の方法です。

神は万物の関係の釣り合いを取り、人類に安定した生存環境を与える

神は万物に対して自らの業を示し、万物を支配し、万物の法則を司っています。ここまでは、神が万物の法則を支配する方法に加え、その法則のもと、神が全人類に施し、養う方法について話をしました。これがひとつの側面です。次にもうひとつの側面、つまり神が万物を支配するにあたって用いる、あるひとつの方法について話をします。わたしがこれから話すのは、神は万物を造ったあと、いかにして万物の関係の釣り合いを取ったのか、ということです。これもまたいささか大きな事項です。万物の関係の釣り合いを取るのは、人間に可能なことですか。いいえ、人間にそのような業は不可能です。人々は破壊することしかできません。人間には、万物の関係の釣り合いを取ることができないのです。人間にはそれを管理することができず、そうした強大な権威や力は人間の能力を超えるものです。そのようなことが可能な力は神自身にしかありません。しかし、神がそのようなことをする目的は何ですか。これもまた、人間の生存と密接に関係しています。神が行おうとしているひとつひとつのことは、どれも必要なことばかりです。つまり、行うかどうかかわからないことなど、神にはないのです。神が人類の生存を保護し、人々に好ましい生存環境を与えるためには、神が行わなければならない、不可欠かつ極めて重要なことがあります。

「神が万物の釣り合いを取る」という言葉の文字通りの意味からすると、この事項は極めて広範なように見えます。まずその言葉は、「万物の釣り合いを取る」ことが神による万物の支配も指しているという概念を、人に対して与えます。この「釣り合いを取る」という語は、いったい何を意味していますか。まず、「釣り合いを取る」という語は、何かが釣り合いから外れた状態にならないようにすることを指しています。それは天秤を使って物の重さを量るようなものです。天秤の釣り合いを取るには、両側の重さを等しくする必要があります。神は多様なものを造りました。その場所に固定されたもの、移動するもの、生きているもの、呼吸しているもの、それに呼吸しないものも造りました。これら万物の間に、互いを強め合い、制限し合う相互依存の関係、相関関係が生まれるのは容易なことですか。そのすべてに原理があることは間違いありませんが、それらはとても複雑なものです。違いますか。神にとっては難しくありませんが、人間にとっては極めて複雑な研究対象です。「釣り合い」は極めて単純な単語です。しかし、人間が釣り合いを研究したり、あるいは自分自身で釣り合いを取る必要があったりして、人間生物学者、天文学者、物理学者、化学者、さらには歴史家など、ありとあらゆる学者がそれに取り組んだとしたら、その研究の最終結果はどのようなものになるでし

ようか。その最終結果は無です。なぜなら、神による万物創造はあまりに驚異的であり、人類がその謎を解明することは決してないからです。神は万物を造った際、それらの間に原理を定め、相互の制限、補完、および養育を目的とする、様々な生存方法を定めました。こうした様々な方法は極めて複雑であり、単純なものでも一方的なものでも決してありません。人間が自分の頭脳、獲得した知識、そして観測した現象を使い、神による万物支配の根底にある原理を確認ないし研究しようとしても、これらの事柄は解明が極めて困難であり、何らかの結果を得ることも極めて困難です。人間が何らかの成果を挙げることはとても難しく、人間の思考と知識に頼って神によるすべての創造物を統治しようとしても、釣り合いを維持するのは極めて困難なのです。人間は万物の生存に関する原理を知らないので、この種の釣り合いを保つ方法を知らないからです。したがって、人間が万物を管理し、統治することになった場合、その釣り合いを壊す可能性が極めて高いでしょう。釣り合いが壊れるやいなや、人類の生存環境は破壊され、その後は人類の生存が危機に晒されるでしょう。それは災害をもたらすに違いありません。人類が災害の中で生きるとすれば、その将来はどうなるのでしょうか。その結末は推測が極めて難しく、確信をもって予想するのは不可能です。

それでは、神はどのようにして万物の間の釣り合いを取っていますか。まず、世界には、年間を通じて氷雪に覆われている地域もあれば、四季を通じて春のような気候で、冬が訪れない地域もあります。そのような地域では、ひとかけらの氷も、一粒の雪も見当たりません。いまは広範囲にわたる気候について話しており、この例は神が万物の関係の釣り合いを保つ方法のひとつです。次に二つ目の方法を話します。連なる山々が青々とした植生に覆われ、様々な種類の植物が地面を覆い尽くし、広大な森が生い茂っていて、その中を歩くと陽の光さえも見えないほどです。しかし別の峰を見ると、そこには一本の草も生えておらず、荒れた不毛な山々が延々と続いています。外見は両者とも、基本的には土が大量に盛り上がってできた山ですが、片方は木が生い茂る森に覆われ、もう片方は草一本生えない不毛の山です。これが、神が万物の関係の釣り合いを取る二つ目の方法です。三つ目の方法を話しましょう。こちらを見ると、草が風に揺れる原野が見渡す限り続いています。しかしあちらを見ると、甲高い音をあげて吹きすさぶ砂の中、生物が一切おらず、ましてや水源などない、見渡す限りの砂漠が続いています。次いで四つ目の方法です。こちらを見ると、広大な水域である海の中にすべてが沈んでいます。あちらを見ると、新鮮な湧き水の一滴を見つけるのも困難な場所があります。五つ目の方法はこれです。こちらの土地では霧雨が頻繁に降り、霧が多く湿った気候

ですが、あちらの土地では太陽がしばしば空で燦々と輝き、一粒の雨が降ることさえ滅多にありません。六つ目の方法はこれです。空気が薄く、呼吸をするのも難しい高原がある一方、別の場所には沼地や低地があり、そこは様々な渡り鳥の生息地になっています。これらは様々な気候の種類、あるいは様々な地理的環境に対応する気候または環境です。つまり神は、ひとえに人間が生存する環境の空気、気温、湿度の釣り合いを取るため、気候から地理的環境に至るまで、そして様々な土壌の構成要素から水源の数に至るまで、大規模な環境という点から見た、人類が生存する基本的環境の釣り合いを取っているのです。こうした対照的な地理的環境のおかげで、人々には安定した空気があり、四季を通じて気温と湿度が安定しているのです。これにより、人々はいつものように、そうした生存環境で生活し続けることができます。まずは大規模な環境の釣り合いを取る必要があります。これは様々な地理的位置、地理的構成、および様々な気候の変化を活用することで行われ、それによって互いに制限し合い、神が望み人類が必要とする釣り合いが成し遂げられます。これは大規模な環境という観点からの話です。

次に植生など、より詳細なことについて話しましょう。それらの釣り合いはどのようにして取ることができますか。つまり、釣り合いの取れた生存環境の中、植生が生存し続けるにはどうすればよいですか。その答えは、様々な植物の寿命、成長速度、繁殖速度を管理し、その生存環境を保護することです。草を例にとりましょう。草には春の若芽、夏の花、秋の実があります。草の実が地に落ちます。翌年、その実の種が芽を出し、引き続き同じ法則にしたがいます。草の寿命は極めて短く、すべての種が地に落ち、根と芽が出て花が咲き、実をつけるという過程は、わずか三つの季節、つまり春と夏と秋で終わります。またありとあらゆる樹木にも、それぞれの寿命、芽をだす時期、実をつける時期があります。中にはわずか三十年から五十年で死ぬ樹木もあり、それがそうした樹木の寿命です。しかしその実が地に落ち、やがて実から根と芽が出て、花を咲かせ、実をつけ、三十年から五十年にわたって生きます。これがその樹木の反復周期です。高齢の樹木が死に、若い樹木が生長するのです。森で樹木が常に成長しているのを見られるのはこのためです。しかし、樹木にも通常の生死の周期と過程があります。樹木によっては千年以上生きるものもあり、中には三千年もの間生きる樹木もあります。植物の種類やその寿命の長さを問わず、一般的に言えば、神はその寿命、繁殖能力、繁殖速度、繁殖頻度、およびそれが生み出す子孫の数を管理することで、植物の釣り合いを取ります。それにより、草から樹木に至るまで、植物は釣り合いのとれた環境の中で継続して繁殖し、成長することが可能になります。そうしたわけで、地球上の森を見たと

き、その中で生長するあらゆるもの、つまり草も樹木もそれぞれの法則に従って継続的に繁殖と生長を続けています。植物は追加の労力や人間の助けを必要としません。植物がそれぞれの生存環境を維持できるのは、ひとえにこうした釣り合いが取られているからです。世界中の森林や草原が地上で生存できるのは、ひとえにそうした植物に適した生存環境があるからです。植物の存在は、何世代にもわたる人間だけでなく、鳥、獣、昆虫、そしてありとあらゆる微生物など、森や草原を棲息地とするすべての生き物を育みます。

神はありとあらゆる動物の釣り合いも操っています。神はこの釣り合いをどのように操っていますか。動物も植物と同様であり、神は動物の繁殖能力、繁殖数とその頻度、そして動物界で果たす役割によって釣り合いを取り、個体数を決定しています。たとえば、ライオンはシマウマを食べますが、ライオンの数がシマウマの数を超える場合、シマウマの運命はどうなるでしょうか。シマウマは絶滅するでしょう。また、シマウマの産む子どもの数がライオンのそれよりはるかに少なければ、シマウマとライオンはどのような運命を辿るでしょうか。この場合、シマウマもライオンも絶滅するでしょう。したがって、シマウマの数はライオンの数よりはるかに多くなければなりません。なぜなら、シマウマは自分自身のためだけでなく、ライオンのためにも存在するからです。また、一頭一頭のシマウマはシマウマ全体の一部ですが、それはライオンの口に入る食料でもある、と表現することもできるでしょう。ライオンの繁殖速度がシマウマのそれを超えることはないので、ライオンの数がシマウマの数を上回ることはできません。このような形でのみ、ライオンの食料源は保証されます。それゆえ、ライオンはシマウマの天敵であるものの、この二つの種が同じ地域でのんびり休息しているのを、人は頻繁に見かけるのです。ライオンがシマウマを狩って食べるせいで、シマウマが数を減らしたり絶滅したりすることはなく、また「百獣の王」という地位のために、ライオンの個体数が増えることもありません。この釣り合いは、はるか昔に神が定めたものです。つまり、すべての動物がこのような釣り合いをとれるよう、神はそれらの釣り合いに関する法則を定めたのであって、それは人間がしばしば目にすることです。シマウマの天敵はライオンだけでしょうか。違います。ワニもまたシマウマを食べます。シマウマは極めて無力な動物のように見えます。シマウマにはライオンのような獰猛さがなく、ライオンという手強い敵と対峙しても逃げることしかできません。その無力さたるや、抵抗すらできないほどです。逃げ切れなかったシマウマは、ライオンに食べられるしかありません。これは動物界で頻繁に見られる光景です。そのような光景を見て、あなたがたは

どのような感情や思いを抱きますか。シマウマを哀れむでしょうか。ライオンを嫌悪するでしょうか。シマウマはとても美しい容姿をしています。しかしライオンは、常に貪欲な目をシマウマに向けています。そして愚かにも、シマウマは遠くへ逃げません。ライオンが涼しい木陰で待ち伏せているのを、シマウマは目にします。いつやって来て自分を食べるかわかりません。シマウマは心の中でそれを知っていますが、その場を去ろうとしません。これは不思議なこと、神の予定と支配を示す不思議なことです。あなたはシマウマを哀れむものの救うことはできず、ライオンを嫌っても打ち負かすことができません。シマウマは神がライオンのために用意した食料ですが、ライオンがどれほど多く食べても、シマウマが消え去ることはありません。ライオンが産む子孫の数は極めて少なく、繁殖速度も遅いので、ライオンがどれほど多くのシマウマを食べようと、ライオンの数がシマウマの数を超えることはありません。そこには釣り合いがあるのです。

このような釣り合いを維持している神の目的は何ですか。それは人々の生存環境だけでなく、人類の生存とも関係しています。シマウマやそれに類似する鹿など、ライオンの獲物となる動物の繁殖速度があまりに遅く、ライオンの数が急増した場合、人間はどのような危険に直面するでしょうか。ライオンが獲物を食べるというのは普通の現象ですが、ライオンが人間を食べるのは悲劇です。こうした悲劇は神が予定したものではなく、神の支配下で起きるものでも、ましてや神が人類にもたらすものでもありません。むしろ、それは人間が自ら招くものです。そうしたわけで、神が考えたとおり、万物の釣り合いは人類の生存に不可欠なのです。植物であるか動物であるかを問わず、その適切な釣り合いを失えるものはありません。植物、動物、山、湖沼など、神は人類のために整然とした生態環境を用意してきました。このような生態環境、釣り合いの取れた生態環境があって初めて、人間の生存が保証されるのです。草木の繁殖能力が芳しくなかったり、繁殖速度が極端に遅かったりしたら、土は水分を喪失するのではないのでしょうか。水分がなくなっても土はまだ健全でしょうか。土が植生と水分を喪失すると、浸食が急速に進み、それは砂に変わってしまいます。土壌が悪化すると、人間の生存環境も破壊されるに違いありません。この環境破壊には数多くの災害が伴うでしょう。こうした生態系の釣り合いや生態環境が存在しなければ、万物間の不均衡が原因となって、人間は頻繁に災害に見舞われるはずです。たとえば、カエルの生態系の破壊につながる環境の不均衡が生じたとき、すべてのカエルが集まり、その個体数が激増して、都市部で大量のカエルが道路を横断するのが目撃されることすらあります。大量のカエルが人間

の生存環境を占領したとしたら、それは何と呼ばれるでしょうか。災害と呼ばれます。それが災害と呼ばれるのはなぜですか。人類に益をもたらすこれらの小動物は、それらに適した場所に留まっていれば、人々にとって有益です。それらは人間の生存環境の釣り合いを維持できるからです。しかし、それら小動物が災害になるとしたら、人間生活の秩序に影響を与えます。カエルの体に付随するあらゆる物事や要素が、人間の生活の質に影響を及ぼすのです。人間の器官が攻撃されることすらあります。これは災害の一種です。人間が頻繁に経験するそれとは別種の災害として、イナゴの大量発生があります。これは災害ではありませんか。そう、まさに恐るべき災害です。人間は飛行機や大砲、原子爆弾を造れますが、そうした人間の能力がどれほどのものかを問わず、イナゴが侵略した際、人類にはどのような対策があるでしょうか。イナゴに対して大砲を使えるでしょうか。イナゴを機関銃で撃つことはできますか。いいえ、できません。それでは、イナゴに殺虫剤を噴霧して駆除できるでしょうか。それも容易なことではありません。そうした小さなイナゴは何をするために来ますか。特に作物や穀物を食べるためです。イナゴの行くところ、穀物は跡形もなくなります。イナゴが襲来すると、農民が生活の糧とする一年分の食料を、イナゴが瞬く間に食べ尽くしてしまうのです。人間にとって、イナゴの襲来は不都合だけでなく、災害です。ゆえに、多数のイナゴの出現は災害の一種であるとわたしたちは知っていますが、ネズミはどうですか。ネズミを餌食とする鷹がいなければ、ネズミは想像をはるかに超えるほど急速に繁殖します。ネズミが妨げられることなく氾濫した場合、人間はよい生活を送ることができますか。人間はどのような状況に直面するでしょうか。（疫病が発生します。）しかし、疫病が唯一の結果だと思いませんか。ネズミはあらゆる物をかじり、木でさえも噛みつきます。一軒の家にネズミが二匹しかいなくても、そこに暮らす全員にとって悩みの種になるでしょう。ネズミは油を盗んで飲んだり、パンや穀物を食べたりすることがあります。たとえ食べなくても、かじりついて完全に滅茶苦茶にします。ネズミは衣服や靴や家具など、何でもかじります。食器棚に上ることもありますが、ネズミが歩いたあと、それらの食器はまだ使い物になるでしょうか。消毒しても安心できないので、捨てるしかありません。これがネズミによって人間にもたらされる不都合です。ネズミはごく小さな動物ですが、人間には対処する方法がなく、その侵食を我慢するより他ありません。たった二匹のネズミでも、困惑を引き起こすのに十分なのです。大量のネズミについては言うまでもありません。ネズミの数が増加して災害になると、その被害は想像を絶するでしょう。蟻ほどの大きさしかない生物さえも災害になり得ます。その場合も、人間に及ぼす被害は無視できません。蟻は家屋が倒壊するほどの損害を引き起こすことができます。そ

の力は無視できません。様々な鳥が災害をもたらした場合も、恐ろしいことになるのではないのでしょうか。（なります。）言い換えると、どのような動物や生物であったとしても、その釣り合いが失われた場合、必ずや通常と異なる異常な範囲で増殖し、繁殖し、棲息することになります。そうした状況は、想像を絶する影響を人類に及ぼすでしょう。人々の生存や生活に影響を与えるだけでなく、人類に災害をもたらし、人々は完全な絶滅という運命を辿るまでになるはずです。

神は万物を造ったとき、ありとあらゆる手段と方法を用いて万物の釣り合いを取り、山や湖沼、植物や様々な動物、鳥、昆虫の生存状態の釣り合いを取りました。神の目的は、自ら定めた法則のもと、様々な生物が生活し、繁殖できるようにすることでした。あらゆる被造物はこれらの法則から外れることができず、またこれらの法則は破ることができないものです。この種の基本的な環境の中でのみ、人間は何世代にもわたって安全に生存し、繁殖することができるのです。ある生き物が、神が定めた量や範囲を越えた場合、あるいは神が定める増加率、生殖頻度、数を超過した場合、人類の生存環境は様々な程度の被害を受けるでしょう。それと同時に、人類の生存が脅かされるでしょう。ある種の生物の個体数が多すぎる場合、その生物は人間の食料を奪い、人間の水源を壊し、その住みかを破壊するでしょう。そうすれば、人類の繁殖と生存状態は即座に影響を受けるはずです。たとえば、水は万物にとって極めて重要です。ネズミ、蟻、イナゴ、カエルなど、各種の動物の数が多すぎる場合、それらの動物はさらに多くの水を飲みます。動物が飲む水の量が増加すると、固定された飲み水の水源と水域において、人々の飲み水と水源は減少し、人間は水不足を経験します。ありとあらゆる動物が増加した結果、人間の飲み水が損なわれたり、汚染されたり、寸断されたりした場合、そうした過酷な生存環境のもと、人類の存続は深刻な危機に陥ります。適切な数を超える動物がわずか一種類、あるいは数種類しか存在しなくても、人間の生存空間の空気、気温、湿度、そして空気の構成成分ですら様々な程度で被害を受け、破壊されるでしょう。こうした状況のもと、人間の生存と運命もまた、それらの生態学的要素による脅威に晒されるはずです。したがって、これらの釣り合いが失われた場合、人間が呼吸する空気は損害を受け、飲み水は汚染され、必要とする気温も変化し、様々な程度の影響を受けるでしょう。こうした事態になった場合、もともと人類のものである生存環境に甚大な影響と問題が発生します。人間の基本的な生存環境が破壊されるというこの種のシナリオにおいて、人類の運命と見通しはどのようなものになるのでしょうか。これは極めて深刻な問題です。被造物のひとつひとつが人間のために存在しているのはなぜか、各種の神

の創造物の役割は何か、ひとつひとつのものが人間にどのような影響を及すか、それが人類にどの程度の益をもたらすかを神は知っており、そして神の心の中では、そのすべてに計画があり、また神は自ら造った万物のあらゆる側面を管理しているので、神が行う業はどれも人類にとって極めて重要であり、必要なものなのです。なのでこれからは、神の創造物の生態的な現象や、神の創造物の間で働く自然の法則を見るたび、神が造った物ひとつひとつの必要性に疑念を抱かなくなるはずです。神による万物の采配や、神が人類に施す様々な方法について、無知な言葉を使って勝手に判断することもなくなります。また、すべての被造物に対する神の法則についても、勝手な結論に至ることはありません。そうではありませんか。

ここまで話してきた事柄は何に関するものですか。しばらく考えてください。神の業のひとつひとつには、神自身の意図があります。神の意図は人間にとって不可解であるものの、常に人間の生存と密接かつ強力に関連しています。それは絶対に不可欠なのです。なぜなら、神は無益な業を一切行わないからです。神が行うひとつひとつのことの裏にある原理原則には、神の計画と知恵が吹き込まれています。その計画の背後にある目的と意図は人間の保護すること、および災害や他の生物による侵害、そして神の創造物が引き起こす人間への危害を回避するにあたり、人類を助けることです。では、この主題の中で見てきた神の業は、神が人間に施すもうひとつの方法だと言えるでしょうか。神はこの方法を通じて人間に糧を与え、人間を牧養していると言えるでしょうか。（言えます。）この主題と「神は万物のいのちの源である」という表題の間には、強い関連性がありますか。（あります。）とても強い関連性があり、この主題はその一側面です。これらの主題について話をするまで、人々にあるのは神、神自身、そして神の業に関する漠然とした想像だけであり、真の認識はありませんでした。しかし、神の業と神がなした物事について伝えられると、人は神の業の原則を認識し、それを理解して手の届くところに達することができます。そうではありませんか。万物を創造したり、万物を支配したりするといったように、神が業を行うたび、その心中にはありとあらゆる複雑極まりない理論、原則、法則があります。たとえそうだとしても、交わりの中でその一部を学びさえすれば、神の業が存在すること、それらが極めて現実的であることを、心の中で理解できるのではないですか。（できます。）それでは、あなたがたの現時点における神の認識は、以前に比べてどれほど異なっていますか。それは本質的に異なっています。それまで、あなたがたの認識は極めて空虚であり、漠然としていましたが、いまやあなたがたの認識には、神の業と合致し、神が所有しているものと神そのものと

合致する具体的な証拠が多数含まれています。したがって、わたしが話してきたことはどれも、あなたがたが神を理解するうえで素晴らしい教材なのです。

本日の集会はこれで終わりです。ごきげんよう。さようなら。（神様、さようなら。）

2014年2月9日

唯一無二の神自身 10

神は万物のいのちの源である（4）

今日は特別な事項について話し合います。信者一人ひとりが知り、経験し、理解すべきおもな事項は二つしかありません。その二つとは何ですか。一つは個人のいのちへの入りであり、もう一つは神を知ることに関するものです。神を知るという主題について私たちが最近話し合ってきた事項に関し、それは達成可能だと思いますか。それは大部分の人々にとって、まさに手の届かない領域にあると言えるでしょう。あなたがたはわたしの言葉に納得しないかもしれませんが、わたしがこう述べるのはなぜですか。その理由は、わたしが以前に述べた事柄をあなたがたが聞いたとき、わたしがどのように述べたか、どのような言葉を用いたかにかかわらず、それらの言葉が何を語っているのか、あなたがたは文字どおりの意味においても、理論的にも知ることができたからです。しかし、あなたがた全員にとって、わたしがそのような事柄を述べた理由、そうした主題について話した理由を理解していなかった、というのは深刻な問題です。これがこの件の要点です。したがって、これらの事柄を聞くことにより、神や神の業に関する認識がわずかに増し、豊富になったにもかかわらず、あなたがたは依然として、神を知るには大きな努力が必要だと感じるのです。つまり、あなたがたの大半はわたしの話を聞いても、わたしがその話をした理由も、その話と神を知ることとのつながりも理解していないのです。その話と、神を知ることとのつながりを理解できないのは、あなたがたのいのちの経験があまりに表面的だからです。神の言葉に関する人々の認識と経験がごく浅い段階に留まっていれば、神に関する人間の認識は漠然として抽象的なものになります。どれも一般的で、教義上、および理論上のものになるのです。理論上は論理的かつ合理的なもののように見えたり聞こえたりするかもしれませんが、大部分の人々が口にする神についての認識は、実際には空虚なものです。では、わたしがそれを空虚なものと言う理由は何ですか。それは、神を知ることに関する自分の言葉の真実性と正確さを、自分でもはっきり理解していないからです。そうしたわけで、神について知ること

関する情報や話題を、大半の人々が聞いたことがあるにもかかわらず、こうした人々の神に関する認識は理論の域を超えておらず、また漠然として抽象的な教義の域をも超えていません。それでは、この問題はどうすれば解決できますか。あなたがたはそのことを考えたことがありますか。真理を追求せずして、現実を自分のものにできますか。真理を追求しなければ、その人は間違いなく現実を自分のものにしておらず、それゆえ神の言葉に関する認識や経験が絶対にありません。神の言葉に関する認識をもたない人は、神を知ることができますか。絶対にそのようなことはありません。その二つは相互に関連し合っているのです。したがって、大部分の人々はこう言います。「神を知ることがこれほど難しいのはなぜなのか。自分を知ることについては何時間でも話せるが、神を知ることになると言葉につまってしまう。この件について何か言えたとしても、それは無理やり口にした言葉で、単調なものに聞こえる。自分で聞いても不自然に思われるほどだ」。これが原因です。神を知るのは難しすぎる、たくさんの努力が必要だ、自分には取り上げるべき話題もなく、他人や自分に伝えたり教えたりする現実的な物事が何ひとつ思い浮かばない、などと感じるなら、そのことは、あなたが神の言葉を体験したことがない人であることを証明しています。神の言葉とは何ですか。神の言葉は、神が所有するものと神そのものをあらわすものではないですか。神の言葉を経験したことがないのに、神が所有するものと神そのものについて何らかの認識を得られますか。間違いなくできません。これらの事柄はすべて相互に関連しています。神の言葉に関する経験がなければ、神の旨を把握することはできず、神の性質はどのようなものか、神が好む物事や嫌悪する物事は何か、人々に対する神の要求は何か、善人に対する神の姿勢、悪人に対する神の姿勢はどのようなものかを知ることがありません。そのすべてがあなたにとって漠然としていて、はっきりしないことは間違いありません。そのようにはっきりしない中で神を信じれば、自分は真理を追い求めて神に従う人だと言い張ったところで、そうした主張は現実的でしょうか。現実的ではありません。それを踏まえて、神を知ることについて交わりを続けましょう。

みなさんは、本日交わる事項を聞きたくてたまらないでしょう。本日の話題は、最近話し合った「神は万物のいのちの源である」という主題にも関連しています。「神は万物のいのちの源である」という主題についてはこれまでたくさん話し合いました。その中で、神が造ったこの地球上に、万物が存在できるようにするため、神はあらゆるものをどのように支配しているのか、どのような手段を用いてそうしているのか、どのような原則にしたがって万物を管理しているのかについて、様々な方法や観点をを用いて伝えま

した。また、神が人間に施す方法、つまり、神はいかなる手段でそのような施しを与えるか、人間にどのような生活環境を施すか、そして人間に安定した生活環境を与えるうえでどのような手段を用いるか、どこから始めるか、といったことについても多くの事柄を話しました。神による万物の支配および統治と、神による経営（救い）との関係については直接話をせず、神がこのような方法で万物を統治する理由、そして神がこのような方法で人類に施し、人類を養う理由について、間接的に話をしました。これらはすべて神の経営に関係しています。巨視的な環境から、人々の基本的な必需品や食糧など、それよりずっと小さな事柄に至るまで、また神が万物を支配して整然と機能させることから、各人種のために神が造った適正かつ正常な生活環境に至るまで、いままで話してきた内容は極めて広範囲にわたっていました。この広範な内容はどれも、人間が肉体としてどのように生きるかに関連しています。つまりそのすべてが、山、川、海、平原など、人間が目で見えて感じることができる、物質世界の物事に関連しているのです。これらはどれも見て触れることができるものです。わたしが空気や気温について話をすると、あなたがたは呼吸によって空気の存在を直接感じ、また身体によって気温の高低を感じることができます。森の中の木々や草、鳥や獣、および空を飛ぶものや地を歩むもの、巣穴から出てくる様々な小動物は、どれも人間の目で見えるもの、人間の耳で聞こえるものです。こうしたものは極めて広範囲にわたっていますが、神が造った万物の中で、それらは物質世界だけをあらわしています。物体とは人間が見たり感じたりすることができるものです。つまり、手で触れたときにそれを感じ、目を見たときに脳があなたに画像を示すものです。それらは実在する現実のものであり、あなたにとって抽象的なものでなく、形があるものです。角ばっていたり丸かったり、背が高かったり低かったりするなど、一つひとつがあなたに異なる印象を与えます。これらの物体はどれも、被造物の物質面を代表しています。それでは神にとって、「神による万物の統治」という言葉の「万物」には、何が含まれていますか。この「万物」には、人間が見て触れることのできるものだけでなく、目に見えず、触れることもできないすべてのものも含まれます。これが、神による万物の統治がもつ真の意味のひとつです。このような物事は、人間には見ることも触れることもできませんが、神にとっては、自らの目で観察することができ、かつ自らの統治の範囲内にある限り、それらは実在しています。人間にとって、それらの物事は抽象的であり、想像不可能であり、さらには目に見えず触れることもできないという事実にもかかわらず、神にとってそれらは実在するのです。これが、神が支配する万物のもうひとつの世界であり、神が支配する万物の範囲の、もうひとつの部分なのです。これが本日交わる事項です。つまり、神が霊界をどのように支配し

、統治するかについて話をします。この事項には、神がどのように万物を支配、統治するかが含まれているので、物質世界の外にある世界、すなわち霊界に関連しています。したがって、私たちは絶対に理解しなければいけません。この内容について交わり、それを理解して初めて、「神は万物のいのちの源である」という言葉の真の意味を、人は本当に理解できるようになります。それが、この事項についてこれから話し合う理由です。その狙いは、「神は万物を支配し、管理する」という主題を完結させることです。この事項を聞いて、聞き慣れない、あるいは理解しがたいと感じるかもしれません。しかし、あなたがたがどう感じるかにかかわらず、霊界が神によって支配される万物の一部である以上、あなたがたはこの事項について何らかの理解を得なければなりません。いったんこの事項を理解して初めて、「神は万物のいのちの源である」という言葉の意味をさらに深く理解し、認識することができるでしょう。

神が霊界を支配、統治する方法

物質世界では、ある種の物事や現象を理解できなければ、人はそのたびに関連する情報を探したり、様々な方法を使ってそれらの原因や背景を調べたりすることができます。しかし、本日話をするそれ以外の世界、すなわち物質世界の外に存在する霊界について言えば、人間にはそれについて何かを知る手段も方法も絶対にありません。わたしがこう述べるのはなぜですか。わたしがそのように言うのは、人間世界では物質世界のあらゆる物事が人間の物理的存在と切り離せないから、人々は物質世界のあらゆる物事が自分の物理的ないのちと不可分だと感じているから、そして大半の人間は眼前にあって見ることができる物体しか意識していない、あるいは見ていないからです。しかし霊界、すなわちその他の世界のあらゆるものに関しては、大部分の人々が信じないと言っていいでしょう。人にはそれが見えず、それを理解したり知ったりする必要がないと信じ、ましてや霊界が物質世界とまったく違うことについては何ひとつ述べる必要がないと信じているので、そして霊界は神の目から見れば開かれているが、人間に対しては秘密で閉ざされていると信じているので、その世界の様々な側面を理解するにあたり、その方法を見つけるのはとても困難です。これからお話しする霊界の様々な側面は、神の管理と統治だけに関係するものです。わたしは謎を解明するつもりも、あなたがたが知りたい秘密を教えるつもりもありません。それは神による統治、支配、施しだけに関係するものだからであり、したがってあなたがたが知る必要のある部分だけを話すことにします。

まず、あなたがたに質問します。あなたがたの心の中で、霊界とは何ですか。一般的

に言うと、霊界とは物質世界の外側の世界であり、人間にとって見ることも触れることもできない世界です。しかし、あなたがたの想像の中で、霊界とはどのような世界でしょうか。霊界は見る事ができないので、おそらくそれについて考えることはできないでしょう。しかし、何らかの伝説を聞くと、霊界について依然考え、それを止めることはできません。わたしがこう述べるのはなぜですか。多くの人が幼いころに経験することがあります。誰かが幽霊や亡霊にまつわる怪談をすると、それを死ぬほど怖がるというものです。怖がるのはいったいなぜですか。それは、そうしたことを想像するからです。幽霊や亡霊を見ることはできなくても、自分の部屋、隠れた場所、暗い隅っこなどの至る所にそれらが存在するように感じるので、恐怖のあまり寝ようとしません。特に夜中は、恐ろしくて一人で部屋にいたり、庭に出たりすることもできません。それがあなたがたの想像する霊界であり、人間が恐ろしいと考える世界です。事実を言うと、誰もがそれをある程度まで想像し、わずかに感じる事ができるのです。

それでは、霊界について話を始めましょう。それは何ですか。簡潔に説明すると、霊界とは、物質世界と異なる重要な場所です。それが重要だと言う理由は何ですか。それをこれから詳しく話し合います。霊界の存在は、人類の物質世界と切り離すことができないつながりをもっています。それは神による万物の統治のうち、人間の生死の周期において重要な役割を担っていますが、そのことが、霊界の存在が重要である理由のひとつなのです。霊界は五感で認知することができない領域なので、それが存在するかどうかを正確に判断できる人はいません。その様々な運動状態は人間の生存と密接に関連し、そのため人類の生活の秩序もまた霊界から大きな影響を受けます。これは神による統治に関連していますか。そう、関連しています。こう述べてと、わたしがこの事項について話をする理由がわかるでしょう。霊界は神による統治と管理に関連している、というのがその理由です。人間が見ることのできないこのような世界において、天の命令や法令、行政組織はどれも、物質世界におけるどの国家の法令や組織よりもはるかに優れており、この世に生きるもののうち、それらに背いたり、反したりしようとする人は一切いないでしょう。これは神による統治と管理に関連していますか。霊界には、明確な行政命令、明確な天の命令、そして明確な法令があります。様々な段階、様々な領域において、担当官は厳密にその任務と規則を遵守します。なぜなら、天の命令に背いたときの報いが何かを知り、神がどのように悪を罰して善に報いるか、神がどのように万物を管理、支配するかを明確に認識しているからです。さらに、神がどのようにして天の命令と法令を実施するかをはっきり理解しています。これらのことは、人類が住む物質

世界と異なりますか。そう、大いに異なります。霊界は物質世界とまったく異なる世界なのです。天の命令と法令があるため、それは神による統治と管理、そして神の性質、および神が所有するものと神そのものに関連しています。この話を聞いて、わたしがこの事項について話す必要性が大いにあると感じませんか。それにまつわる秘密を知りたいとは思いませんか。（思います。）いま述べたのが霊界の概念です。霊界は物質世界と共存し、同時に神による管理と統治の対象となっていますが、神による霊界の管理と統治は、物質世界におけるそれよりはるかに厳格なものです。詳細については、まず霊界が人類の生死の周期の働きにどう関与しているかという問題から始めなければなりません。と言うのも、それが、霊界に存在するものが担う働きの主要な部分だからです。

ここですべての人間を三つの種類に分類します。最初の種類は未信者で、宗教的な信仰をもたない人のことです。このような人を未信者と呼びます。未信者の圧倒的大部分は金銭だけを信じ、自分自身の利益だけを追求し、物質主義者であり、物質世界だけを信じています。生死の周期、あるいは神性や幽霊に関する話は何も信じません。これらの人たちを未信者と分類し、それを第一の種類とします。第二の種類は未信者以外の様々な信者の人たちです。人類のうち、こうした信者は数種類に大別されます。一番目はユダヤ教、二番目はカトリック、三番目はキリスト教、四番目はイスラム教、そして五番目は仏教というように、五つの種類があります。様々な信者がいるのです。第三の種類には神を信仰する人々が含まれ、あなたがたもここに入ります。この種の信者は現在神に付き従っている人々で、神の選民と効力者の二種類に分かれます。これらのおもな種類は明確に区別されています。これで、人間の種類と階層を心の中で明確に区別できるようになりました。違いますか。第一の種類は未信者から成っており、それがどのような人かはすでに述べました。天の父を信じる人は未信者に数えられますか。多くの未信者は天の父を信じるだけで、風雨や雷などはすべてこの存在によって支配されていると信じ、穀物の植え付けや収穫の際に頼るものの、神への信仰の話になると神を信じるのを嫌がります。これを信仰と呼べるのでしょうか。こうした人々は未信者に含まれます。わかりましたね。これらの種類を誤解してはいけません。第二の種類は信者の人々で、第三の種類は神に現在付き従っている人々です。では、わたしがすべての人間をこれらの種類に分けたのはなぜですか。（様々な種類の人たちには、それぞれ異なる結末と終着点があるからです。）それは側面のひとつです。これら異なる人種や種類の人々が霊界へと戻るとき、彼らはそれぞれ異なる場所へと向かい、生死の周期に関する様々な法則の対象になります。ゆえに、わたしが人間をこれら三つの主要な種類に分けたのは

、それが理由です。

1. 未信者の生死の周期

まずは未信者の生死の周期から話を始めましょう。人は死ぬと、霊界の担当官に連れ去られます。では、その人のいったい何が連れ去られますか。連れ去られるのは肉体ではなく魂です。魂が連れ去られた人は、死後間もない人の魂を専門に受け付ける霊界の部局に辿り着きます。（注：死者が死後最初に行く場所は、その魂にとって未知の場所です。）魂がこの場所に連れて来られると、係員が最初の検査を行い、名前、住所、年齢、そしてすべての経歴を確認します。その人が生前行った物事は残らず帳簿に記録され、それが正確であることが確認されます。それらの確認が完了すると、その人の生前の振る舞いや行動により、懲罰を受けるか、人間として再び肉体を与えられるかが判断されます。これが第一段階です。この第一段階は恐ろしいですか。それほど恐ろしいものではありません。なぜなら、その人が暗く馴染みのない場所に到着するだけだからです。

第二段階では、生前多くの悪事を行い、邪悪な所行をなした人は、刑場へと連れられて取り扱いを受けます。それは明らかに、人々を懲罰する場所です。人間が具体的にどう懲罰されるかは、その人が生前犯した罪や、悪事を行った回数に左右されます。これが第二段階で最初に行われることです。中には、懲罰を受けた後に生き返ったとき、つまり物質世界に再び生まれたとき、生前行った悪事や邪悪な所業のせいで、引き続き人間になる人もいれば、動物になる人もいます。つまり、霊界に戻った人は、自分が犯した悪事のために懲罰され、さらにその悪業のため、次に生き返る際、人間ではなく動物として戻ることもあるのです。こうした人が生まれ変わる動物には、牛、馬、豚、犬などが含まれます。中には鳥、アヒル、ガチョウなどに生まれ変わる人もいます。動物として生まれ変わった後に再び死ぬと、その人は霊界に戻ります。そして前回と同じく、霊界はその人の生前の行いにに基づき、人間として生まれ変わるかどうかを決めます。大部分の人々はあまりに多くの悪事を犯し、その罪が重すぎるため、七回から十二回は動物として生まれ変わります。七回から十二回とは恐ろしくはありませんか。（恐ろしいです。）あなたがたを恐れさせるのは何ですか。人間が動物になるのは恐怖です。人間にとって、動物となって最もつらいことは何ですか。言葉をもたず、単純な考えしかできず、動物が行う物事を行い、動物が食べるものしか食べられなくなり、動物の単純な精神と身振りによる言葉を用い、まっすぐ立って歩くことも、人間と意思疎通を図ることもできず、また人間の振る舞いや活動は動物とまったく無関係であるという事実があ

ります。つまり、万物の中で動物になったあなたがたは、すべての生物のうち最低の存在となり、そこには人間よりもはるかに多くの苦しみがあります。これが、数多くの悪事を行い、深刻な罪を犯した人に対する、霊界の懲罰の一側面です。懲罰の重さについて言えば、それは人間がどのような動物になるかで決定されます。たとえば、豚になるのは犬になるよりましですか。豚の生活は犬の生活よりましですか、それとも悪いですか。悪いでしょう。人間が牛や馬になったら、豚よりもまじに暮らせるでしょうか。（まじに暮らせます。）猫として生まれ変われば、さらに快適でしょうか。動物となるのに変わりはありませんが、牛や馬になるより猫になるほうがずっと簡単でしょう。なぜなら、ほとんどの時間を怠けて寝て過ごすことになるからです。牛や馬になると苦勞が増えます。ゆえに、牛や馬に生まれ変わった人は必死に働く必要があり、それは重い懲罰と同じことです。犬になるのは、牛や馬になるより少しだけましでしょう。なぜなら、犬は飼い主と親しい関係にあるからです。犬の中には三ないし五年ペットとして飼われたあと、飼い主の言葉の多くを理解できるようになるものもあります。ときには飼い主の気分や要求に合わせることもでき、すると飼い主の扱いがよくなり、食べ物や飲み物もまじになり、苦痛を感じると看護してもらえます。そうすれば、犬は幸福な生涯を送るのではないのでしょうか。ゆえに、犬になるのは牛や馬になるよりましです。このように、懲罰の重さによって、何回動物に生まれ変わるか、どのような動物として生まれ変わるかが決定されます。

中には生前に犯した罪の数が多すぎるため、七回から十二回にわたり動物として生まれ変わるという懲罰を受ける人がいます。十分な回数の罰を受けて霊界に戻ったとき、こうした人々は別の場所へと連れて行かれます。そこにいるのは、すでに懲罰を受けており、人間として生まれ変わる準備をしている様々な霊です。この場所では、どのような家庭に生まれるか、生まれ変わってからどのような役割を担うかなどにより、魂が一つひとつ分類されます。たとえば、この世に生まれて歌手になる人がおり、そうした人は他の歌手の中に置かれます。この世に生まれて実業家になる人は他の実業家の中に置かれ、人間として生まれてから科学研究者になる人は、他の科学研究者の中に置かれます。分類された魂は、現在の人々が電子メールを送信するときのように、それぞれ異なる予定日に送り出されます。これで生死の周期の一巡が完了します。霊界に到着したその日から懲罰が終わるまで、あるいは何度も動物として生まれ変わり、人間として生まれ変わる準備をするまで、これは完全な過程なのです。

懲罰を受け終えて動物として生まれ変わる人がない人は、すぐに物質世界へと送ら

れて人間として生まれ変わるでしょうか。その人が人間のもとにたどり着くには、どの程度の期間を要するでしょうか。そうなる頻度はどの程度でしょうか。これには時期的な制限があります。霊界で起きるすべての出来事には、正確な時間的制限と規則が適用されるのです。数値で説明すれば理解できるでしょう。短期間のうちに生まれ変わる人については、その人が死んだ際、人間として生まれ変わる準備がすでに行われています。それにかかる期間は最短で三日です。その期間が三ヵ月の人もいれば、三年の人も、三十年の人も、三百年の人もいます。それでは、こうした時期的な規則についてどのようなことが言えますか。また、その規則の詳細はどのようなものですか。それは、物質世界、つまり人間の世界が魂から必要とするものと、その魂がこの世で担うべき役割に基づいています。普通の人間として生まれ変わる場合、大部分の人がごく短期間で生まれ変わります。人間の世界には、こうした普通の人々に対する差し迫った需要があるからです。ゆえに、こうした人は三日後、死ぬ前の家庭と完全に異なる家庭へと送られます。しかし、中にはこの世で特別な役割を担う人もいます。「特別な」というのは、人間の世界にはそうした人々に対する大きな需要がないということです。そうした役割を担わなければならない人の数が多くないので、三百年後になる場合もあります。言い換えると、こうした魂は三百年に一度、あるいは三千年に一度しかこの世に現われません。それはなぜですか。その理由は、三百ないし三千年間、そうした役割は人間の世界で必要とされず、したがってそれらの魂は霊界のどこかに留められているからです。たとえば、孔子は中国の伝統文化に甚大な影響を及ぼし、その出現は、当時の人々の文化、知識、伝統、思想に大きな影響を与えました。しかし、そのような人間はどの時代にも必要というわけではなく、したがって孔子は霊界に留められ、生まれ変わるまで三百年、ないし三千年待つ必要があったのです。人間界はこのような人を必要としていなかったため、孔子は何もせずに待機している必要がありました。なぜなら、孔子のような役割は極めて少なく、そうした人がなすべきこともほとんどないからです。ゆえに、孔子はほとんどの期間、霊界のどこかに留められ、何もすることなく、人間界が彼を必要とするとき、そこに送られるのをひたすら待ち続けました。大半の人が生まれ変わる頻度について、霊的領域の時間的規則はこのようなものです。普通の人間か特別な人間かを問わず、霊界にはその生まれ変わりの処理に関する適切な規則と正しい慣行があり、そうした規則と慣行は神から送られたものであって、霊界の担当官やその他の存在が決めたり管理したりするものではありません。これでわかりましたね。

あらゆる魂にとって、その生まれ変わり、生涯における役割、生まれる家庭、そして

その人生がどのようなものかは、その魂の前世と密接に関連しています。ありとあらゆる人々が人間界に現れますが、その人たちが果たす役割も、行う務めもそれぞれ異なります。それでは、その務めとは何ですか。中には負債を返済するために来た人がいます。過去の生涯で他人からの借入が多すぎた場合、この世でそれらの負債を返済のために来るのです。その一方で、債権を回収するために来る人もいます。こうした人たちは過去の生涯であまりに多くのものや金銭をだまし取られたのであり、結果として霊界に到着した後、公平な扱いを受け、その生涯で債権を回収することが許されるのです。また、恩返しをするために来る人もいます。このような人は前世において、つまり以前の生まれ変わりにおいて誰かの厚意を受けたのであり、この世に生まれ変わるという素晴らしい機会を与えられたおかげで、その恩返しをするために再び生まれたのです。その一方で、人命を奪うために生まれ変わった人々もいます。それでは、こうした人たちは誰の命を奪うのですか。彼らが奪うのは、以前の生涯でそうした人々を殺した者の命です。要するに、各人のいまの人生は、過去の生涯と密接な関わりをもっており、そのつながりを断つことはできません。つまり、各人のいまの人生は、前世によって大きく影響されるのです。たとえば、チャン氏が生前リー氏から巨額の金銭をだまし取ったとしましょう。チャン氏はリー氏に借りがありますか。借りがあるので、当然リー氏はチャン氏の借りを回収すべきです。結果として、両氏の死後には精算されるべき貸し借りが残ります。両氏が生まれ変わった際、チャン氏が人間になったとすれば、リー氏はどのようにしてチャン氏の借りを回収しますか。回収方法のひとつに、チャン氏の息子として生まれ変わるというものがあります。つまり、チャン氏が大金を稼ぎ、リー氏がそれを浪費するのです。チャン氏がどれほど多くの収入を得ても、息子のリー氏がそれを浪費するというわけです。チャン氏がどれほど多く稼いでも、それで十分ということは決してなく、どういうわけか彼の息子が、父親の金を様々な手段で常に消費してしまうのです。チャン氏は不思議に思ってこう考えます。「なぜ息子はいつもこんな悪運をもたらすのか。他人の息子がこんなに立派なのはなぜなのか。私の息子に野心がなく、役立たずで収入を得られず、常に私が支援しなければならないのはどうしてなんだ。私は息子を支援する必要があるので支援するが、私がいくら金銭を渡しても、息子が常にそれ以上の金額を必要とするのはなぜだろうか。息子がまっとうな仕事に就けず、ぶらぶらしたり、飲み食いしたり、風俗や賭博に明け暮れたりするなど、ありとあらゆることをするのはどうしてだ。一体どうなっているんだ」。チャン氏はしばらく考えます。「前世で息子に借りがあるのかもしれない。それなら借りを返そう。私が返し終わるまで、これが終わることはないだろう」。やがて、リー氏が借りを返してもらう日が来て、四

十代、あるいは五十代になって突然正気に戻るでしょう。そして次のように気づくのです。「自分はこの半生でずっと、善い行いを何ひとつしてこなかった。父が稼いだ金をすべて浪費してしまった。だから、私は善人にならなければならない。私は決心した。正直な人になって正しい生活を送り、二度と父を悲しませない」。リー氏がこのように考える理由は何ですか。リー氏が突然よい方向に変わるのはなぜですか。その理由は何ですか。（リー氏が貸しを回収したからです。チャン氏は借りを返したのです。）これには因果関係があります。話の発端はずっと以前、両者が現在送っている人生の前にまで遡ります。両者の前世における経緯が現在にまで持ち越されているので、どちらも相手を責められません。チャン氏が息子に何を諭しても、息子は一切聞こうとせず、真面目に働こうとしませんでした。しかし借りがなくなった日、息子を諭す必要はなくなり、息子は自然と理解しました。これは簡単な例です。このような例は数多くありますか。（あります。）この例は人々に何を伝えていますか。（人間は善良でなければならず、悪事を行ってはいけないということです。）悪事を行ってはず、悪業には報いがあるということです。未信者の大半は数多くの悪事を行い、その悪業は報いを受けます。そうですね。しかし、こうした報いは恣意的なものです。すべての行いについて、それに対する報いには背景と原因があります。誰かから金銭をだまし取っても、自分には何も起こらないと思いますか。その金銭を騙し取った後、何の結果も生じないと思いますか。そのようなことはあり得ません。必ず結果が生じます。自分が誰であろうと、あるいは神がいることを信じようと信じまいと、すべての個人は自分の行動に責任を負い、その行動による結果を背負わなければなりません。ここで挙げた簡単な例では、チャン氏が懲罰を受け、リー氏が借りを返してもらいましたが、これは公平なことではないですか。人間がこのようなことをした場合、こうした結果が生じるのです。このことは霊界の管理と切り離せない関係にあります。たとえ未信者であっても、神を信じない人の存在はこうした天の法令や命令の対象となり、誰もそれから逃れられず、この現実を避けられません。

信仰をもたない人は、人間の目に見えるものはどれも存在し、見るできないものの、あるいは人間から遠く離れたものは存在しないとよく考えます。そのような人は、「生死の周期」も「懲罰」も存在しないと考えたがり、それゆえためらうことなく罪を犯し、悪業を行います。その後、彼らは懲罰を受け、動物に生まれ変わるのです。様々な未信者のうち大半の人がこの悪循環に陥っています。なぜなら、あらゆる生物の管理について、霊界が厳格であることを知らないからです。信じるかどうかを問わず、この

事実は存在します。神の目が届く範囲から逃れられる人や物はなく、神の天なる法令や命令によるきまりや制限から逃れられる人や物も存在しないからです。したがって、神を信じようと信じまいと、罪を犯して悪事を行うことは認められず、すべての行動には結果が伴うということを、この簡単な例は一人ひとりに教えています。他人から金銭をだまし取った人は懲罰を受け、その懲罰は公平です。こうした典型的な行動は、霊界においては罰せられ、その懲罰は神による命令と天の法令によって下されます。ゆえに、強姦や強奪、詐欺や欺き、窃盗や強盗、殺人や放火といった重大な犯罪や悪事に対しては、それにも増して様々な重さの懲罰の対象となるのです。こうした様々な重さの懲罰にはどのようなものがありますか。期間によって重さが決まる懲罰もあれば、その方法によって重さが決まる罰、あるいは生まれ変わるときの行き先で重さが決まる懲罰もある。たとえば、中には口汚い人がいます。ここで「口汚い」とは何を意味しますか。よく他人に暴言を吐いたり、他人を罵る悪意に満ちた言葉を使ったりすることです。悪意に満ちた言葉が強調しているのは何ですか。それは、その人が悪意に満ちた心の持ち主であることを示しています。そうした人の口からは、他人を罵る汚い言葉がしばしば飛び出ますが、そのような悪意に満ちた言葉は深刻な結果をもたらします。そうした人々は死んで相応の懲罰を受けた後、口の利けない人として生まれ変わるかもしれません。中には生前極めて計算高かった人がいます。そのような人はしばしば他人を利用し、その手口は極めて周到であって、人を傷つけることを数多く行います。こうした人は生まれ変わると、知能や精神に障害がある人として生まれ変わる可能性があります。また、他人のプライベートな物事を頻繁にのぞき見て、見るべきではない内情を山ほど見たり、知るべきではない事柄を数多く知ったりする人もいます。そうした人は結果として、全盲者として生まれ変わるかもしれません。生前短気で喧嘩をすることが多く、邪悪なことを多数行った人もいます。彼らはそのせいで身体や手足に障害を負って生まれ変わったり、片腕をもたずに生まれ変わったりするでしょう。さもなくば、背中や首が曲がった状態、足を引きずって歩く状態、あるいは一方の足が他方よりも短い状態で生まれ変わるかもしれません。これらの場合、その人は生前に行った悪事の程度に基づいて、様々な懲罰の対象とされたのです。斜視の人がいるのはなぜだと思いますか。そのような人は数多くいますか。現在、斜視の人は数多くいます。生前に目を使いすぎてあまりに多くの悪事をなし、そのため斜視をもってこの世に生まれ変わり、深刻な場合は全盲者として生まれる人もいます。これが報いなのです。また中には、生前に他の人々と仲よくできて、自分の親族、友人、同僚、あるいはその他の知り合いに対して多数の善行を重ねる人がいます。こうした人は他人に思いやりと配慮を傾けたり、金銭的に支援し

たりします。そして人々は彼らを高く評価します。こうした人は霊界に戻っても懲罰を受けません。未信者が何らかの形で懲罰を受けないということは、その人が極めて善人だったことを意味します。こうした人は神の存在を信じず、天の父だけを信じています。自分の頭上に魂があり、あらゆる行いを見ていると信じていますが、その人が信じているのはそれだけです。結果として、その人は極めて行いがよいのです。こうした人たちは親切で思いやりがあり、最終的に霊界へと戻った際、極めて優遇され、すぐに生まれ変わります。彼らは生まれ変わったとき、どのような家庭に生まれますか。そのような家庭は裕福ではないものの、何の害悪もなく、家族は互いに調和しています。生まれ変わった人は安全かつ幸福な日々を送り、誰もが喜びに満ちた素晴らしい生活を送るのです。これらの人たちは成人すると大家族になり、子供たちは才能に溢れて成功し、その家族は幸運に恵まれます。そしてこのような結果は、それらの人たちが送った過去の人生と密接に関係しています。つまり、死んで生まれ変わった人がどこに行くか、男になるか女になるか、その人の使命がどのようなものになるか、人生で何を経験するか、どのような挫折に苦しむか、どのような祝福を享受するか、誰に出会うか、そして我が身に何が起こるかについては、誰もそれらを予測したり、回避したり、逃げ隠れしたりすることができないのです。すなわち、いったんあなたの人生が定められると、自分に何が起ころうと、そしてあらゆる方法を用いてそれを避けようとしたとしても、神が霊界であなたのために定めた人生の進路から外れることは決してできません。なぜなら、生まれ変わったとき、あなたの人生の運命はすでに決定されているからです。それがよいか悪いかを問わず、誰もがそれに向き合い、前進し続ける必要があります。これは、この世に生きる誰もが避けられない問題であり、これ以上に現実的な問題は存在しません。わたしが言ったことは全部理解しましたね。

これらを踏まえて、未信者の生死の周期について、神が極めて精密かつ厳格な確認と管理を行っていることを、あなたがたはもう理解しましたか。まず、神は霊界における様々な天の法令、命令、組織を定めました。それらはいったん宣言されると、霊界で様々な役務を担当する者により、神が定めた通り極めて厳密に施行され、あえて違反する人はいません。したがって、人間界における人類の生死の周期には、動物として生まれ変わるか、人間として生まれ変わるかについて、その両方に法則が存在するのです。これらの法則は神に由来するため、それに背こうとする人はおらず、背くことができる人もいません。人に見える物質世界が規則正しく整然としたものであるのは、ひとえにこうした神の統治と法則があるからなのです。そして、人間が自分にはまったく見えない

別の世界と平和に共存し、そこで調和して生活できるのは、神によるこの統治のためであり、それはどれも神の統治と切り離すことができません。人の肉体的ないのちが死を迎えても、魂にはいのちがあるとすれば、神の管理下になければどうなるでしょうか。その魂はありとあらゆる場所をさまよい、どこにでも侵入し、人間界の生き物を害することすらあるでしょう。こうした危害は人類だけでなく植物や動物にも加えられますが、最初に害を受けるのは人間でしょう。このようになれば、つまりこうした魂が管理されておらず、人間に本当の危害を加え、実際に邪悪な物事を行ったとしたら、この霊は霊界で適切に取り扱われることにもなるでしょう。事態が深刻な場合、その魂はたちまち消滅し、滅ぼされるはずです。可能であれば、どこかに置かれて生まれ変わるでしょう。つまり、霊界における様々な魂の管理は整然としており、様々な段階と規則に従って実行されます。人間の物質世界が混乱に陥らず、物質世界の人間が正常な精神と理性をもち、秩序ある肉体的生活を送っているのは、ひとえにこうした管理があるからです。人類がそうした正常な生活を送って初めて、肉体において生きる人は何世代にもわたって繁栄し、増え続けることができるのです。

たったいま聞いたことについて、あなたがたはどう思いますか。新鮮に感じますか。今日の交わりの主題は、あなたがたにどのような印象を残しましたか。新鮮さ以外に何かを感じましたか。（人間は正しく行動する必要があると思いました。また神は偉大でいらっしゃるので、畏れるべき方だと感じました。）（神が様々な種類の人間の結末をどのように采配なさるかについて神のお話を聞いたばかりですが、神の性質はいかなる背きも許さず、神を敬うべきだと感じました。その一方で、神がどのような人を好まれるか、どのような人を好まれないかも認識しました。なので、神が好まれる人間になりたいと思います。）この分野における神の行動に原則があることを、あなたがたは理解しましたか。神はどのような原則に従って行動しますか。（神は人間の結末を、その人のすべての行いに従ってお決めになります。）それは先ほど話した、未信者の様々な結末に関する事柄です。未信者について、神の業の背後にある原則は、善を讃えて悪を懲罰するものですか。例外はありますか。（ありません。）神の業に原則があることを理解しましたか。未信者は実際に神を信じておらず、神の指揮に従うこともありません。加えて神の統治を認識しておらず、ましてや神を認めることなどありません。さらに深刻なことに、こうした人々は神を冒瀆し、神を呪い、神を信じる者に対して敵意を抱いています。神に対する彼らのこの態度にもかかわらず、彼らに対する神の統治は、依然として神の原則から逸脱しません。神は自身の原則と性質に従い、秩序ある形でこうし

た人々を管理するのです。神はこうした人々の敵意をどのように見なしますか。無知と見なします。結果として、神はこうした人々、すなわち未信者の大部分を、以前に動物として生まれ変わらせたのです。それでは、神の目から見て、未信者とはいったいどのようなものですか。どれも獣です。神は人類だけでなく家畜も管理するので、この種の人に対しても同じ原則があります。これらの人々に対する神の管理中にさえ、やはり神の性質と、神による万物支配の法則が見て取れます。これで、わたしが先ほど触れた、未信者を管理する原則における神の統治を理解しましたか。神の義なる性質がわかりましたか。（わかりました。）言い換えると、神が取り扱う万物のうち、それが何であれ、神は自身の原則と性質に従って業を行うのです。これが神の本質です。神は、こうした人を獣と見なしているからといって、自ら定めた規則や天の法令を軽々しく破ることは決してありません。神は原則に従って業を行います、無闇にそうすることは決してありません。そして神の業はいかなる要素にも影響されることが一切ありません。神が何をしようと、それはすべて神自身の原則に従います。神には神自身の本質があるからであり、それはいかなる創造物も有していない神の本質の一側面です。自ら造ったあらゆる物、人、生物の取り扱い、取り組み、経営、管理、支配について、神は誠実で責任をもっており、その点に関して注意を怠ることは決してありません。神は善良な人々に対して慈悲深く親切であり、邪悪な人々に対しては容赦ない懲罰を与えます。また様々な生物については、人間界におけるその時々必要性に従い、時宜を得た規則的な方法で適切な采配を行うので、そうした様々な生物は、それぞれが受け持つ役割に従い、整然と生まれ変わり、秩序をもって物質世界と霊界の間を行き来するのです。

生物の死、すなわち物理的な生命の終焉は、その生物が物質世界から霊界へと移動したことを示します。一方、新たな物理的な生命の誕生は、生物が霊界から物質世界に来て、その役割を引き受けて果たし始めることを示しています。それが生物の出発であろうと到着であろうと、いずれも霊界における働きと切り離すことはできません。ある人が物質世界に到来した段階で、その人が生まれる家庭、到着する時代と時刻、そしてその人が担う役割について、その人に適した采配と定義が神によってすでになされています。そうしたわけで、その人が送る一生、行う物事、そして進む道は、霊界でなされる采配に従い、一切逸脱せずに進行します。さらに、物理的な生命が終焉を迎える時、そして生命が終わるかたちと場所は、霊界においては明瞭で識別可能です。神は物質世界と同時に霊界も支配し、魂の正常な生死の周期を遅らせることは一切なく、その周期の采配で間違いを犯すことも一切ありません。霊界の各部局に所属する担当者は、神の指示

と支配に従ってそれぞれの任務を遂行し、なすべきことを行います。ゆえに人間界では、人が目にするあらゆる物質的現象に秩序があり、混沌は一切存在しないのです。こうしたことは、すべて神による整然とした万物の支配と、神の権威が万物を支配しているという事実の賜物です。神の支配には、人間が生活する物質世界のほか、人類の背後にある目に見えない霊界が含まれます。そうしたわけで、人間がよい生活を願い、好ましい環境の中で暮らすことを望むのであれば、目に見える物質世界全体の施しを受けることに加え、霊界の施しも受けなければなりません。そして、それは誰も見ることができず、人間のためにあらゆる生き物を統治し、そして整然としたものです。これで、神は万物のいのちの源であると言った際の、「万物」に対する意識と認識が高まったのではないですか。（高まりました。）

2. 各種の宗教を信仰する人の生死の周期

これまでは、第一の種類の人々、つまり未信者の生死の周期について話してきました。ここからは、第二の種類である各種の宗教を信じる人たちの話をします。「各種の宗教を信仰する人の生死の周期」もまた重要な事項であり、これについて理解することは必要不可欠です。まずは、「信仰する人」の「信仰」が何を指すかについて話をしましょう。それは、ユダヤ教、キリスト教、カトリック、イスラム教、仏教の五大宗教です。未信者に加え、これら五大宗教を信仰する人が、世界の人口のうち大きな割合を占めています。これら五大宗教では、その信仰を職業とする人は少ないですが、信者は多数存在します。このような人は死ぬと別の場所に行きます。誰とは「別の場所」に行きますか。それは先ほど話した未信者、つまり信仰をもたない人です。五大宗教の信者は、死ぬと他の場所、未信者とは異なる場所に行くのです。しかし、その過程は依然として同じです。霊界では、こうした人たちについても、死ぬまでのすべての行いに基づいて裁きを下し、次いでその裁きに従って処理します。ですが、これらの人たちが別の場所に送られて処理されるのはなぜですか。そこには重要な理由があります。それは何ですか。ひとつ例を挙げて説明します。しかしその前に、あなたがたは「それはおそらく、彼らが少しは神を信じているからだ。完全な未信者ではないからだ」と考えているかもしれません。ですが、それが理由ではないのです。彼らが他の人たちから離されるのには、とても重要な理由があります。

仏教を例にとってあなたがたに事実を述べます。第一に、仏教徒とは仏教に改宗した人であり、その人は自分の信仰が何かを知っています。仏教徒が剃髪して僧や尼僧となった場合、それは俗世から自分を切り離し、人間界の喧噪をあとにしたことを意味しま

す。こうした仏教徒は毎日読経し、仏陀の名を唱え、精進料理しか食わず、禁欲的な生活を送り、冷たくほのかな行灯の光だけで日々を過ごします。仏教徒はこのようにして一生を送るのです。仏教徒は肉体的人生が終わると、自分の生涯をまとめますが、死後に自分がどこへ行くか、誰と会うか、結末がどのようなになるかは知りません。心の奥底で、こうした事柄についてはっきり認識していないのです。仏教徒は盲目的に一種の信仰を続けるだけで一生を過ごし、盲目的な願いと理想を抱いて人間界を去ります。それが仏教徒の肉体的生命の終焉であり、生者の世界を離れるときなのです。その後は霊界の本来の場所に戻ります。この人が生まれ変わって現世に戻り、修行を続けるかどうかは、生前における行いや習慣によって決まります。生涯にわたって過ちを犯さなかった人は、すぐに生まれ変わって現世に戻り、そこで再び僧や尼僧になります。つまり、初回の人生と同じように、この肉体的人生でも修行を行い、その肉体的人生が終わると霊の領域に戻り、そこで検査を受けるのです。そこで問題が無ければ、再び人間界へと戻り、再度仏教に改宗して修行を続けます。仏教徒は三回から七回生まれ変わったあと、肉体的人生が終わるたびに帰っていた霊界へと、もう一度戻るのです。人間界における仏教徒の様々な資格や行動が霊界における天の法令に準じていれば、その時点以降、その仏教徒は霊界に留まります。それ以上人間として生まれ変わることも、地上での悪業について懲罰を受ける恐れもなくなるのです。この仏教徒がこの過程を経ることは二度とありません。むしろ、状況に応じて霊の領域における地位を得ます。それが、仏教徒が言うところの「解脱」です。解脱とはおもに、霊界の役人として成果を挙げ、その後は生まれ変わることも、懲罰を受ける危険もなくなることを意味します。さらにそれは、生まれ変わって人間になることの苦悩がなくなることを意味します。では、仏教徒が動物に生まれ変わる可能性はありますか。（ありません。）それは、霊界である役割を担い続け、生まれ変わることがなくなることを意味します。これが、仏教において解脱に達することの一例です。解脱に達しなかった仏教徒について言えば、霊界に戻るとすぐ担当する役人によって検査と確認が行われ、生前仏教で定められた通り熱心に修行することもなければ、誠実に読経して仏陀の名を唱えることもなかったのが突き止められ、数多くの悪事を行い、よこしまな振る舞いが数多くあったと判断されます。そして霊界において、その悪事について裁きが下された後、間違いなく懲罰を受けます。これについて例外は一切ありません。そうであれば、このような人が解脱に達するのはいつですか。生涯一度も悪事を犯さなければ、霊界に戻った際、生前に過ちを犯さなかったことが確認されます。そしてその人は生まれ変わり続け、読経をして仏陀の名を唱え、行灯の冷たくほのかな明かりとともに毎日を過ごし、殺生を行わず、肉を食べません。人

間界に加わることなく、人間の問題から遠く離れ、他人と一切言い争いません。この過程の中で、仏教徒はいかなる悪事も犯さず、その後は霊界に戻り、あらゆる行動や振る舞いが検証され、人間の領域に再び送られますが、その過程は三回から七回繰り返されます。この間に一度も悪事を犯さなければ、解脱を成し遂げることに何も影響がなく、それが遅れることもありません。これが、すべての人に関する、生死の周期の特徴です。人は「解脱」を成し遂げて霊界である地位を占めることができます。それが人と未信者の違いです。まず、霊界である地位を占めることができる人は、いまだこの世に生きている間、どのように自分を律しますか。こうした人たちは、悪事を一切行わないようにしなければなりません。殺人、放火、強姦、強奪などを行ってはなりません。詐欺、詐欺、窃盗、強盗などを行った場合、解脱に達することはできません。言い換えると、何らかの形で悪事に関与すれば、霊界が下す懲罰から逃れることはできないのです。霊界では、解脱を遂げた仏教徒に対する適切な采配が行われます。仏教を信じ、天の父を信じていると思しき人々を監督する役割を与えられるかもしれません。または裁判権を与えられるかもしれません。あるいは、未信者を担当したり、ごくささやかな職務を与えられたりするだけかもしれません。こうした任命は、その魂がもつ様々な本性に従って行われます。これが仏教の例です。

先に述べた五大宗教のうち、キリスト教は比較的特殊です。では、キリスト教を特殊なものにしているのは何ですか。彼らは真の神を信じる人たちです。真の神を信じる人たちがここで挙げられているのはなぜですか。キリスト教は宗教の一種だと言うとき、それが信仰にしか関係していないことは確かです。キリスト教は一種の儀式、一種の宗教に過ぎず、真に神に付き従う信仰とはまったく別のものです。わたしがキリスト教を五大「宗教」のひとつに挙げたのは、それがユダヤ教、仏教、イスラム教と同じ程度まで零落したからです。ここにいる大半の人は、神が存在することも、神が万物を支配していることも信じておらず、まして神の存在など信じていません。その代わり、聖句を用いて神学を論じ、神学を用いて親切にすること、辛苦に耐えること、善行をなすことを人々に諭すだけです。キリスト教はこのような宗教になってしまったのです。つまり、神学理論だけに集中し、人間を経営して救う神の働きとは何ら関係ないのです。それは、神に従いながら、実際には神に認められていない人々の宗教になりました。しかし神には、そのような人たちを扱う原則もあります。未信者に対するのと同じく、クリスチャンを軽々しく取り扱ったり、気の向くままに取り扱ったりすることはありません。神はクリスチャンを、仏教徒と同じように扱います。生きている間に自己鍛錬を行い、

十戒を厳しく守り、律法と戒律に従う形で自分の振る舞いを律し、生涯にわたってそれらを遵守することができれば、そのクリスチャンも生死の周期を同じ期間くり返した後、いわゆる「携挙」を真に獲得することができるはずです。この携挙を獲得したあと、クリスチャンは霊界に留まり、そこで何らかの地位を得て役人になります。同様に、地上で悪事を行った場合、つまりあまりに罪深く、数多くの罪を犯した場合、そのクリスチャンは必ずや様々な重さの懲罰や懲らしめを受けることになります。仏教において解脱とは、極楽浄土に入ることを意味します。では、それはキリスト教では何と呼ばれますか。それは「天国に入る」、「携挙」されると呼ばれます。真に携挙された人もまた生死の周期を三回から七回にわたって繰り返す、その後死ぬと、あたかもそれまで寝ていたかのように霊界へと辿り着きます。そして基準を満たしていれば、そこに留まって何らかの役割を担うことができ、地上の人々とは異なり、単純に生まれ変わることも、慣例にしたがって生まれ変わることもありません。

これらすべての宗教において、信者が語り、獲得しようと努めている結末は、仏教で言う解脱の達成と同じです。ただ、その「解脱」を成し遂げる方法は様々です。これらの宗教はすべて似たようなものです。これら宗教の信者のうち、行動において宗教上の教えを遵守できる一部の人に対し、神はそれぞれにふさわしい終着点と目的地を与え、適切に対処します。それはどれも合理的ですが、人々が想像するようなものではありません。違いますか。ここまで、キリスト教の人々がどうなるかに関する話を聞いて、あなたがたはどう感じますか。彼らの苦境は不公平なものだと思いますか。彼らに同情しますか。（多少同情します。）これについてできることはありません。彼らは自分を責めるしかないのです。わたしがそのように言うのはなぜですか。神の働きは真実であり、神は生きて実在し、神の働きは全人類、すべての個人を対象にしています。ならば、彼らがそれを受け入れないのはなぜですか。気が狂ったように神に反抗し、神を迫害するのはなぜですか。彼らは、このような結末を得られるだけでも幸運だと思うべきなのに、あなたがたが彼らを哀れむのはどうしてですか。彼らがこのような処遇を受けることは、大いなる寛大さを示しています。神に反抗する度合いに基づけば、彼らは滅ぼされるべきです。しかし神はそのようにせず、キリスト教を普通の宗教と同じように扱うだけです。では、その他の宗教についても詳細に踏み込む必要がありますか。これらすべての宗教の理念は、人間がさらに多くの苦難を背負い、悪事をなさず、善行を重ね、他人の悪口を言わず、他人を裁かず、論争を避け、善人となることです。大半の宗教の教えはこのようなものです。ゆえに、これらの人たち、つまり様々な宗教や教派の信者

が、宗教上の教えを厳しく守れるなら、地上にいる間は大きな過ちや罪を犯すことはありません。そして三回から七回生まれ変わったあと、宗教上の教えを厳しく守れるこれらの人たちは、概して霊界に留まり、そこで地位を得ます。このような人は数多くいますか。（いません。）その答えの根拠は何ですか。善行を重ね、宗教上の規則や掟を遵守するのは容易なことではありません。仏教では人間が肉を食べることは禁じられていますが、あなたにそれができますか。一日中灰色の法衣をまとい、寺で読経し、仏陀の名を唱えなければならないとしたら、あなたにそれができますか。容易ではないでしょう。キリスト教には十戒や戒律や律法がありますが、それらは容易に遵守できるものですか。容易ではありません。他人の悪口を言わないこと、というのを例にとりましょう。人々はこの決まりをまったく守れていません。自制できずに他人の悪口を言うのです。そして悪口を言ったあと、それを取り消すことはできませんが、そこで人間はどうしますか。夜になると自分の罪を告白します。他人の悪口を言ったあとも心中に憎しみを抱き、その人をさらに傷つけようと企むことすらあります。要するに、こうした死んだ教義のなかで生活している人々にとって、罪を犯したり悪事を行ったりすることを避けるのは容易でないのです。ゆえにどの宗教でも、実際に成果を挙げられる人は一握りしかいないのです。極めて多くの人々がこれらの宗教に従っているのだから、霊の領域に留まって何らかの役割を果たせる人はかなりの数になるだろうと、あなたは思うでしょう。しかし、実際にそうできる人は多くありません。人の生死の周期は概してこのようなものです。こうした人々の相違点は成果を挙げられるということであり、それが未信者との違いです。

3. 神に付き従う人の生死の周期

次に、神に付き従う人の生死の周期について話をしましょう。これはあなたがたに関係することなのでよく聞いてください。まず、神に付き従う人がどのように分類されるかを考えましょう。（神の選民と効力者に分類できます。）神に付き従う人は、神の選民と効力者の二つに分けられます。まずは、少数しかいない神の選民について話します。「神の選民」とは誰を指しますか。神が万物を創造して人類が存在するようになったあと、神は自身に付き従う人々の集団を選びましたが、その人たちは単に「神の選民」と呼ばれます。神がその人たちを選ぶにあたっては、特別な範囲と意義があります。その範囲は、神が重要な働きを行うときに来なければならない、選ばれた少数の人に限られていたという点で特別です。その意義は何ですか。その人たちは神に選ばれた集団なので、その意義は大きいものです。つまり、神はその人たちを完全な存在にして完成さ

せることを望み、その経営の働きが終わると、これらの人を自分のものにするのです。この意義は偉大なものではないですか。したがって、これらの選民は神にとって極めて重要な存在です。なぜなら、神はこれらの人たちを自身のものにしようと考えているからです。一方の効力者についてですが、その前に神の予定の話をしばらく中断し、まずは効力者の由来について話をします。「効力者」は文字通り奉仕を行う人です。奉仕を行う人は一時的な存在です。長期的に、あるいは恒常的に奉仕するのではなく、一時的に雇われたり、起用されたりする人たちなのです。効力者の由来ですが、彼らの大半は未信者から選ばれた人たちです。その人たちが神の働きの中で効力者の任務を担うよう命じられたとき、効力者は地上に現われます。前世において動物だったり、未信者だったりすることもあります。これが効力者の由来です。

それでは、神の選民についてさらに話しましょう。神の選民は死んだ際、未信者や様々な宗教の信者とはまったく異なる場所に行きます。そこは、神の選民が天使と神の使いに付き添われ、神自身が管理している場所です。この場所において、神の選民は自分の目で神を見ることはできませんが、霊界における他のどの場所とも異なっています。それは違う場所に位置しており、神の選民が死後に行く場所なのです。神の選民は死んだときもまた、神の使いによる厳格な調査の対象になります。それでは、何が調査されるでしょうか。神の使いは、これらの人たちが神への信仰において生涯歩んできた道を調べます。つまり、その間神に反抗したり神を呪ったりしたかどうか、重い罪や悪事を犯したことがあるかどうかを調べるのです。この調査により、ある特定の人がそこに留まるのを許されるのか、それとも立ち去らなければならないかが決まります。ここで「去る」とは何を意味しますか。また、「留まる」とは何を意味しますか。「去る」とは、自分の行動に基づき、神の選民の一員として留まるかどうかを意味します。また「留まる」ことを許されるとは、終わりの日、神によって完全にされる人々の中に留まることができる、という意味です。留まる人について、神は特別な采配を行います。つまり働きの各期間において、神はそうした人々を送り、使徒として行動させたり、教会を復興させる、あるいは教会に奉仕する働きをさせたりするのです。しかし、こうした働きを行える人は、何世代にもわたって生まれ変わる未信者ほど頻繁に生まれ変わりません。むしろ、神の働きの必要性和段階に従って地上へと戻るなのであって、頻繁に生まれ変わることはないのです。では、選民が生まれ変わる時期には規則がありますか。神の選民は数年ごとに生まれ変わりますか。そうした頻度で現われますか。現われません。それは神の働き、働きの段階、神の必要性に基づいており、決まった規則はありません。

唯一の規則は、神が終わりの日に働きの最終段階を行う際、これら選民が全員現れ、その到来が彼らにとって最後の生まれ変わりになる、ということです。それはなぜですか。これは、神による働きの最終段階で実現されるべき結果に基づいています。働きの最終段階において、神はこれらの選民を残らず完全にします。それは何を意味しますか。この最終段階においてこれらの人たちが完全にされるのであれば、それまでのように生まれ変わることはありません。人間として存在する過程、そして生まれ変わる過程が完全に終わるのです。このことは留まる人に関連しています。それでは、留まることができない人はどこに行きますか。留まることを許されていない人には、その人にふさわしい終着点があります。まずは自分の悪事、犯した過ち、そして罪の結果として、彼らも懲罰を受けます。彼らが懲罰を受けたあと、神はその状況に従い、彼らを未信者のもとに送るよう采配するか、様々な人たちの間に行くよう采配するかします。言い換えると、彼らには二つの結果があり得るわけです。その一つは、懲罰を受けて生まれ変わったあと、おそらくある宗教の信者として生きるというものであり、もう一つは未信者になるというものです。未信者になった場合、彼らはすべての機会を失います。しかし、たとえばキリスト教などの信者となった場合は、依然として神の選民に戻る機会があります。このことには極めて複雑な関係が存在しています。簡潔に言うと、神の選民が神に背くことをした場合、その人は他の全員と同様に懲罰されます。以前に話し合ったパウロを例にとりましょう。パウロは懲罰を受けた人の一例です。わたしが言っていることの意味を理解していますか。神の選民の範囲は一定ですか。（ほぼ一定です。）ほぼ一定ですが、わずかに一定でない部分があります。それはなぜですか。ここでは最も分かりやすい理由として、悪事を行うことを挙げました。悪事を行った人を神は望まず、その人を様々な人種や人々の中に放り込みます。すると、その人には望みがなくなり、戻るのが難しくなります。そのすべてが、神の選民の生死の周期と関連しているのです。

次のテーマは効力者の生死の周期に関するものです。効力者の由来については先ほど話しました。つまり、こうした効力者は以前の生涯で未信者や動物になってから、生まれ変わったのです。働きの最終段階が始まると、神は未信者の中からこうした人の一団を選びますが、この集団は特別な存在です。神がこれらの人たちを選ぶのは、彼らを神の働きに奉仕させるのが目的です。「奉仕」という言葉は、それほど美しいものでも、誰かが望むようなものでもありませんが、私たちはその対象となる人に目を向けるべきです。神の効力者の存在には特別な意義があります。効力者は神に選ばれた人たちのなので、その役割を果たせる人は他にいません。では、これら効力者の役割は何ですか。そ

それは神の選民に奉仕することです。大半の場合、効力者の役割は神の働きに奉仕し、それと協調し、神が選民を完全なものにするのを助けることです。効力者が働いているか、何らかの側面の働きを行っているか、ある種の任務を遂行しているかを問わず、神がこれら効力者に対して要求しているのは何ですか。神は効力者に多くのことを求めていますか。（いいえ、神は効力者が忠実であることしかお求めになりません。）効力者もまた忠実でなければなりません。あなたの由来や、神があなたを選んだ理由を問わず、あなたは神に忠実でなくてはならず、また神があなたに託した使命、あなたが担当する仕事、そしてあなたが尽くす本分に対しても、忠実でなければなりません。忠実で神を満足させられる効力者について、その結末はどのようなものになりますか。こうした効力者は留まることができます。留まる効力者であることは祝福ですか。留まるとは何を意味しますか。その祝福の意義はどのようなものですか。効力者の地位は神の選民の地位と異なるように思われます。しかし実際には、効力者がその生涯において享受するのは、神の選民が享受するものと同じではないのですか。少なくとも、その生涯において享受するものは同じです。それは否定できませんね。神の発する言葉、神の恵み、神の施し、そして神の祝福を享受しない人がいるでしょうか。誰もがそうした豊かさを享受します。効力者の身分は奉仕する人ですが、神にとっては自ら造った万物のひとつに過ぎず、単にその人の役割が効力者であるというだけです。効力者と神の選民はいずれも神の創造物ですが、両者の間に何らかの違いはありますか。事実上、違いはありません。名目上は違いがあり、その本質、そしてその人が果たす役割において違いがあるのですが、神はこの人々の集団を不公平に扱いません。それでは、これらの人々が効力者に定められているのはなぜですか。それについて、あなたがたは理解しなければいけません。効力者は未信者から生じます。効力者は未信者から生じると話したとたん、効力者はよくない背景をもっていることが明らかになります。彼らはみな無神論者であり、過去においてもそうでした。彼らは神を信じず、神、真理、そして肯定的なすべての物事に敵意を抱いていました。神を信じることも、神の存在を信じることもなかったのです。それならば、効力者は神の言葉を理解できますか。大まかに言えば、理解できないと言って構いません。動物が人間の言葉を理解できないように、効力者は神が何を言っているのか、何を求めているのか、なぜそのような要求をするのかが理解できないのです。これらのことは効力者にとって理解不能であり、依然として啓かれていないままです。そのため、これらの人たちはこれまで語ってきたいのちをもっていない。いのちなくして、人は真理を理解できますか。真理を備えていますか。神の言葉に関する経験や認識がありますか。（ありません。）これが効力者の由来です。しかし、神はこうし

た人々を効力者とするので、神の効力者に対する要求にはやはり基準があります。神は効力者を無下にすることも、いい加減に扱うこともありません。効力者は神の言葉を理解できず、いのちがないにもかかわらず、神は依然として効力者を親切に扱い、また効力者に対する神の要求には基準があります。その基準は先ほど話したとおりです。つまり、神に忠実であること、神の言葉に従うことです。奉仕を行うにあたっては、必要とされる場所で奉仕しなくてはならず、最後まで奉仕しなければなりません。あなたが忠実な効力者になって最後の最後まで奉仕することができ、また神から託された使命を果たせるなら、あなたは価値のある人生を送ります。価値ある人生を送れるなら、あなたは留まることができます。それに加えてもう少し努力し、懸命に試み、神を知ろうとする取り組みを強化し、神を知ることについて多少は語ることができ、神の証しをすることが可能で、さらには神の旨について何かしら理解し、神の働きに協力でき、神の旨を多少なりとも心に留めることができるなら、効力者であるあなたは運命の変化を経験するでしょう。では、その運命の変化とは何ですか。単に留まれるだけではなくなるのです。あなたの行動、そして個人的な熱意と追求に応じ、神はあなたを選民の一人にします。これがあなたの運命の変化です。効力者にとって、この変化による最大の利益は何ですか。それは、神の選民になれるということです。神の選民になることは、未信者のように動物として生まれ変わることがもはやなくなることを意味します。これはよいことではありませんか。これはまたよき知らせでもあります。それは、効力者が形作られることを意味するのです。奉仕するよう神によって定められた効力者が、永遠にそうし続けるということはありません。必ずしもそうではないのです。神はその人の行いに適した形で、彼らを扱い、彼らに対処します。

とは言え、最後まで奉仕できない効力者もいます。奉仕の途中で諦め、神を捨てる人もいれば、複数の悪事を犯す人もいます。さらには、神の働きに甚大な害と損失を与える人、神を呪う効力者さえいます。そうした取り返しのつかない結果は、何を指し示しますか。こうした邪悪な行いは、奉仕の中断に結びつきます。奉仕における行いがあまりに悪く、度が過ぎたので、あなたの奉仕が基準以下であることを知った神は、あなたから奉仕する資格を剥奪し、これ以上あなたが奉仕するのを許さず、あなたを神の眼前、神の家から排除します。あなたは奉仕したくないのですか。絶えず悪事を犯したがつているのではないですか。一貫して不忠ではないのですか。そうであれば、簡単な解決策があります。あなたから奉仕する資格を剥奪するのです。神にとって、効力者から奉仕する資格を剥奪することは、その効力者が終わりを宣告されたことを意味します

。こうした効力者はもはや神に奉仕する資格をもたず、神はその人の奉仕を必要としなくなり、その人がいかに美辞麗句を並べても無駄なのです。物事がここまで達すると、状況を元通りにするのは不可能です。そうした効力者は後戻りできないのです。では、神はこうした効力者をどのように取り扱いますか。単に奉仕をやめさせるだけですか。そのようなことはありません。単に留まらせないようにするだけですか。あるいは、そうした人たちを一箇所に集め、改心するのを待ちますか。それも違います。実のところ、相手が効力者になると、神はそこまで愛情深くありません。ある人が神に奉仕する際にそうした態度をとる場合、神はその態度の結果として、その人から奉仕する資格を剥奪し、再び未信者の中に放り込みます。それでは、未信者の中に放り込まれた効力者の運命は、どのようなものですか。その運命は未信者のそれと同じであり、動物として生まれ変わり、霊界で未信者と同じ懲罰を受けます。さらに、神はその人の懲罰に対し、個人的な関心を示しません。なぜなら、そのような人はもはや神の働きと何の関係もないからです。それは、その人にとって神を信仰する生活の終焉となるだけでなく、その人自身の運命の終焉であり、その人の運命の宣告でもあります。ゆえに、効力者の奉仕がよくなければ、その人は自分自身でその結果を背負わなければならないのです。効力者が最後まで奉仕できなかった場合、あるいは途中で奉仕する資格を剥奪された場合、その人は未信者の中に放り込まれます。そうなれば、その人は家畜と同じように、あるいは知性や理性のない人々と同じように扱われます。このように説明すれば、あなたがたにも理解できますね。

以上が、神の選民と効力者の生死の周期を神が取り扱う方法です。それを聞いて、あなたがたはどう感じますか。わたしが以前にこの事項を話したことはありますか。神の選民と効力者という主題を語ったことはありますか。実はあるのですが、あなたがたは覚えていません。神は、神の選民と効力者に対して義です。あらゆる点で神は義なのです。違いますか。そのことに疑問の余地はありますか。中には、「神が選民に対してこれほど寛容なのはなぜか。また神が効力者に対し、少ししか寛容でないのはなぜか」と言う人がいるのではないのでしょうか。効力者の肩を持ちたい人はいますか。「神は効力者にもっと時間を与え、もう少し寛容であることができないのか」と疑問の声をあげるのは正しいことですか。（正しくありません。）どうして正しくないのですか。（効力者にされただけでも、私たちに厚意が示されたからです。）効力者は奉仕することを許されただけでも、厚意を示されたのです。「効力者」という呼び名も、効力者が行う働きもなかったとしたら、それらの人々はどこにいらっしゃるでしょうか。未信者の中にいて、家

畜とともに生き、そして死ぬでしょう。神の前、神の家に来ることが許されている効力者は、今日何と大きな恵みを享受しているのでしょうか。これは並外れて大きな恵みです。神があなたに奉仕する機会を与えなかったとしたら、あなたには神の前に来る機会が一切なかったはずです。少なくとも、あなたが仏教徒であって、解脱を成し遂げたとしても、せいぜい靈界の使い走りとなる程度です。神に会うことも、神の声や言葉を聞くこともなく、神の愛と祝福を感じることもなければ、神と対面することもまずできないでしょう。仏教徒には単純な任務しかありません。仏教徒はとうてい神を知ることができず、ただ服従するだけですが、効力者は働きのこの段階においてとても多くのものを得ます。まず、効力者は神と対面し、神の声と言葉を聞き、神が人々に授ける恵みと祝福を体験することができます。さらに、効力者は神から授けられる言葉や真理を享受することができます。効力者は実に多くのものを得るのです。したがって、あなたが効力者として正しく力を尽くすことさえできなければ、神はあなたを効力者として留めることができますか。神はあなたを留めておけません。神はあなたに多くを求めないのに、あなたは神が求めていることを何一つ正しく行わず、自分の本分を遵守したこともありません。ゆえに、神は疑問の余地なくあなたを留めておくことができないのです。これが神の義なる性質です。神があなたを甘やかすことはありませんが、あなたを差別することはありません。神はこれらの原則に従って行動します。神はすべての人と被造物をこのような形で扱うのです。

靈界では、様々な生物が誤ったことをしたり、自分の仕事を正しく行わなかったりした場合、神はそれに対応する天の法令と命令でもってそれらを取り扱います。これは絶対的なことです。したがって、神の数千年にわたる経営の働きの期間においては、過ちを犯した担当官の一部は一掃され、一部は今日に至るまで拘留されて懲罰を受けています。これは、靈界にいるあらゆるものが直面しなければならないことです。何か間違ったことをしたり悪事を犯したりした場合、その人は罰せられますが、それは神の選民や効力者に対する神の姿勢と同じです。ゆえに、靈界か物質世界かを問わず、神が業を行う原則は変わりません。あなたが神の業を見られるかどうかにかかわらず、その原則が変わることはないのです。あらゆるものに対する神の姿勢、および万物に対する神の処遇には、一貫して同じ原則があります。これは不変です。未信者のうち比較的眞面目に生活している人に対し、神は親切であり、また各宗教の信者のうち、行いが正しく悪事を犯さない人の機会を神は守り、神が経営しているすべての物事において役割を担うこと、そしてなすべきことをなすことを許しています。同様に、神に付き従う人、そし

て神の選民についても、神は自身の原則に従い、誰一人として差別しません。神は心から神に従えるすべての人に対して親切であり、またそのような人を愛します。未信者、様々な宗教の信者、そして神の選民など、様々な種類の人々について、神が授ける物事は異なるということなのです。未信者を例にとりましょう。未信者は神を信じておらず、神はこうした者を獣と見なしていますが、彼らの一人ひとりに食べるべき食糧、自分の居場所、そして通常の生死の周期があります。悪事を行う人は罰せられ、善い行いをする人は祝福されて神に親切にされます。そうではありませんか。信仰のある人について言えば、生まれ変わるたびに宗教上の教えを厳しく守れるなら、それら生まれ変わりのあと、最終的に神から宣言が与えられます。同様に、今日のあなたがたについても、神の選民であろうと効力者であろうと、神は自ら定めた規則と行政命令にしたがい、あなたがたをそれと同調させるとともに、あなたがたの結末を決めます。様々な種類の人のうち、各種の宗教の信者、つまり様々な宗教に属する人たちに対し、神は生きるべき空間を与えてきましたか。ユダヤ教徒はどこにいますか。神が彼らの信仰に介入したことはありますか。ありませんね。では、キリスト教はどうですか。神はこちらにも介入したことはありません。これらの人々がそれぞれの手続きに従うことを神は許し、彼らに語りかけたことも、何らかの啓きを与えたこともなく、さらには何一つ明らかにしたこともありません。それが正しいと思うなら、そのように信じなさい。カトリック教徒はマリアを信仰し、マリアを通してイエスに知らせが伝えられたと信じています。それがカトリック教徒の信仰の形です。神が彼らの信仰を正したことはありますか。神は彼らの自由にさせ、彼らに注意を払わず、一定の生活空間を与えています。イスラム教徒や仏教徒に対しても、神は同じではないですか。ここでも神はそれぞれの信仰に口出しせず、彼らのために境界を設け、各々の生活空間をもつことを許しています。すべてが整然としているのです。では、これらのことから何がわかりますか。神には権威があるが、それを濫用することはない、ということがわかります。神は完全なる秩序の中で万物を采配し、秩序正しくそれを実行しますが、そこには神の知恵と全能があるのです。

本日は新たに特別な事項、すなわち霊界に関する事柄について触れてきましたが、それは神による霊界の管理と支配の一側面をあらわしています。これらのことを理解していないと、あなたがたはこのように言うかもしれません。「それに関する事柄はどれも奥義であり、私たちのいのちへの入りとは関係ない。こうしたことは、人が実際どのように生活するかとは切り離されており、理解する必要もなければ聞こうとも思わない。こうしたことは神を知ることと絶対に関係ない」。さて、こうした考え方に問題がある

と思いますか。これは正しいですか。（正しくありません。）こうした考え方は正しくないうえ、深刻な問題をはらんでいます。と言うのも、神がいかに万物を支配するかを理解したければ、単に自分の目に見える物事と、自分の考え方で把握できる物事を理解するだけでは不可能だからです。自分の目に見えないながらも、目に見えるこの世界と不可分の関連性がある別の世界についても、あなたはいくらか理解する必要があります。このことは神の統治と、「神は万物のいのちの源である」という本日の事項にも関連しており、それに関する内容です。この内容がなければ、神が万物のいのちの源であることに関する人々の認識には、誤りや不足があるはずです。したがって、本日話した事柄は、前回までの各事項を締めくくるとともに、「神は万物のいのちの源である」の内容をも締めくくるものであると言えるでしょう。これを理解したうえで、あなたがたはいま、この内容を通じて神を知ることができますか。それより重要なのは、本日、わたしがあなたがたに、効力者に関する極めて重要な情報を伝えたことです。あなたがたがこうした事項に喜んで耳を傾け、真剣に考慮していることはわたしも知っています。では、わたしが本日話したことに満足していますか。（満足しています。）中にはあまり強い印象を残さなかった事柄もあるでしょうが、効力者について語ったことは、あなたがた全員の魂に触れるものなので、ひととき強く印象に残ったはずです。

人類に対する神の要求

1. 神自身の身分と地位

ここで「神は万物のいのちの源である」、そして「神は唯一無二の神自身である」という主題は終わりを迎えたが、そうするにあたってまとめを行う必要があります。どのようなまとめをしなければいけませんか。それは神自身に関する結論です。そうであれば、それは神のあらゆる側面と、人々が神をどう信じているかに必ずや結びついていなければなりません。そこで、まずあなたがたに質問します。ここまでの説教を聞いて、あなたがたの心の目に見える神は誰ですか。（創造主です。）心の目に見える神は創造主です。それ以外に回答はありますか。神は万物の主である。それは適切な言葉ですか。（適切な言葉です。）神は万物を支配し、管理している存在です。神は存在するすべての物事を造り、管理し、支配し、それらに施します。これが神の地位であり、また神の身分です。万物、そして存在するすべての物事について、神の真の身分はあらゆる被造物の創造主であり、支配者なのです。それが神の所有する身分であり、神は万物にあって唯一無二の存在なのです。神の被造物のうちひとつとして、人類の中にあるか、あるいは霊界にあるかを問わず、何らかの方法や言い訳を使って、神の身分と地位を

装ったり、神の代理となったりすることができる人はいません。なぜなら、被造物を支配する身分、力、権威、そして能力をもつ存在はただひとつだけであり、それは唯一無二の神自身だからです。神は万物の中で生き、動いています。神は万物のうえ、最も高い場所へと昇ることができます。また神は、血と肉のある人間のひとりに身をやつし、人々と向き合って苦楽を共にすることもできます。それと同時に、神は存在するすべてのものを支配し、その運命と進む方向を決定するのです。さらに、神は人類全体の運命と方向性を導きます。このような神は、あらゆる生物が崇め、付き従い、知るべき存在です。したがって、人類のうちどの集団、どの種類に属しているかを問わず、あらゆる個人、あらゆる生物にとって、神を信じ、神に付き従い、神を畏れること、また自分の運命に対する神の支配と神の采配を受け入れることが、唯一かつ必然の選択肢なのです。神が唯一無二の存在であることの中に、人は神の権威、義なる性質、そして神の本質を理解し、神が万物に施す方法がどれも完全に独自のものであることを理解します。また神が唯一無二の存在であることにより、神自身の真の身分と地位が決定されるのです。そうしたわけで、あらゆる被造物のうち、霊界や人間界に存在する生物が神の代わりになろうとしても、それが成功することはありません、また神になりすまそうとする試みがうまく行くこともあり得ません。これは事実です。神自身の身分、力、そして地位をもつこのような創造主、支配者が、人類に要求することは何ですか。これは誰もがはっきり理解し、覚えておくべきことであり、神と人間の両方にとって極めて重要なことです。

2. 神に対する人類の様々な態度

人が神に対してどのような態度をとるかによって、その人の運命が決まるとともに、その人に対する神の態度と取り扱いも決まります。ここで、人が神に対してどのような態度をとるか、その例をいくつか挙げます。神の前における各々の振る舞いが正しいかどうか、じっくり耳を傾けて確かめてください。まずは次に挙げる七種類の人間の行動について考えましょう。

1) 神に対する態度がことさら不条理な種類の人々がいます。こうした人たちは、神は菩薩、あるいは民話に登場する聖なる存在のようなものであり、人間が神と会うときは三回礼をして、食後に香を焚かなければならないと考えています。結果としてこうした人たちは、神の恵みを心の底からありがたいと思い、神に感謝するたび、このような衝動を感じるのです。この人たちは、いまの自分が信じている神が、心の中で慕っている聖なる存在のように、自分たちのやり方、すなわち神と会うとき三回礼をし、食後に

香を焚くというやり方を受け入れられることを強く願っています。

2) 神のことを生き仏と見なし、あらゆる生物を苦しみから引き上げ、救うことができると考えている人がいます。彼らは神のことを、苦しみ的大海から自分たちを救い出せる生き仏として見ているのです。こうした人々の神に対する信仰には、神を仏陀として崇めることが伴っています。彼らは香を焚くことも、叩頭することもなく、捧げ物もしませんが、神はまさに仏陀のような存在であって、自分たちが親切であり、寛大であり、殺生を行わず、他人の悪口を言わず、正直に見える人生を送り、悪事を行わないよう求めているだけだと思っています。神は自分たちにこれしか求めていないと信じているのです。これが、こうした人々が心に抱く神なのです。

3) 神を偉人や有名人のごとく崇拝する人がいます。たとえば、その偉人が好む話し方、語る口調、用いる言い回しや語彙、その語調、手振り、意見、行動、そして態度がどのようなものであろうと、こうした人たちはそのすべてを模倣しますが、それらは神を信仰する中で、完全にできるようにならないとかならない事柄なのです。

4) 神を君主と見なす人がいます。こうした人たちは、神は誰よりも高位にあり、あえて神に逆らおうとするものはおらず、逆らった場合、その人は刑を科されると感じています。彼らがこのような君主を崇めるのは、自分の心のある部分がその君主に占められているからです。君主の考え、振る舞い、権威、本性、さらには関心事や個人生活までもが、すべて自分たちが理解すべきこと、考慮すべき問題となっているのです。結果として、こうした人たちは神を君主として崇拝しています。このような形の信仰は馬鹿げています。

5) 神の存在についてある特定の信仰をもち、その信仰が深遠かつ揺るぎないものである人がいます。しかし、こうした人たちの神に関する認識は極めて表面的なものであり、神の言葉に関する経験が少ないため、神を偶像として崇拝するのです。この偶像が彼らの心中における神であり、畏れ、服従し、付き従い、模倣しなければならないものだと思っています。彼らは神を偶像と見なし、生涯にわたって付き従わなければならないものだと考えています。こうした人たちは神の口調を模倣し、神が好む人々の外見を真似します。純粹無垢で正直に見えることを頻繁に行い、決して離れられない仲間、あるいは道連れであるかのように、偶像に付き従うことさえします。これがこの種の人たちによる信仰の形です。

6) 神の言葉を数多く読み、説教を大量に聞いたにもかかわらず、心の奥底で、絶え

ず神にこびへつらうこと、あるいは非現実的な形で神を讃美することが、神に対する自分の振る舞いにおける唯一の原則だと思っている類の人がいます。こうした人たちは、自分がこのように振る舞うよう神は求めていると信じています。さらに、自分がそれを怠ると、いつ何時神の怒りを招いたり、神に対して罪を犯したりするかもしれず、その罪のせいで神に懲罰されると信じています。これが、こうした人たちが心の中で抱いている神なのです。

7) そして次に、神の中に精神的な施しを見出す人がいますが、そのような人は大半を占めています。それは、この世で生活しており、平和も幸福もなく、慰めを見出すこともできないからです。こうした人たちはいったん神を見つけ、神の言葉を聞いて理解すると、心の中で密かな幸福と高揚感を抱き始めます。それは自分の魂が幸福になる場所と、精神的な支えをもたらす神を、ようやく見つけ出したと信じているからです。神を受け入れ、神に付き従い始めると、彼らは幸福になり、生活が満たされます。もはや未信者のように振る舞うことはなく、あたかも動物のようにあてどなくさまようこともなくなり、人生に期待できるものがあると感じます。ゆえにそうした人たちは、この神が自分の精神的な必要性を大いに満たし、精神と魂の両面において自分に大きな幸福をもたらせると考えているのです。彼らは無意識のうちに、こうした精神的な支えを与え、自分の精神と家族全員に幸福をもたらす神から離れられなくなります。神への信仰は精神的な支えさえもたらせばよいと信じているのです。

以上、神に対する様々な態度に触れてきましたが、あなたがたの中にそうした態度の人がいますか。（います。）神への信仰において、心の中にこうした態度のいずれかがある場合、その人は真に神の前に来ることができますか。心の中にこうした態度がある人は、神を信じていますか。そのような人は唯一無二の神自身を信じていますか。（信じていません。）唯一無二の神自身を信じていないのであれば、あなたは何を信じているのですか。信じているのが唯一無二の神自身でないとすれば、あなたは偶像、偉人、あるいは菩薩を信仰しており、心の中にいる仏陀を崇拝している可能性があるのです。さらに、あなたは普通の人を信じている可能性もあります。要するに、様々な信仰形態と神に対する態度が原因となって、人は自分が認識している神を心に据え、神に自分の想像を押しつけるとともに、神に対する自分の態度と想像を唯一無二の神自身と同列に位置づけ、それを高く掲げて神聖なものにしているのです。神に対してこうした不適切な態度をとることは、何を意味しますか。それは真の神自身を捨て、偽の神を信仰していることを意味すると同時に、神を信じながら神を捨て、神に反抗していること、そし

て真の神の存在を否定していることを示しています。こうした形の信仰にしがみつくとしたら、その人にはどのような結果が待ち受けていますか。このような形の信仰によって、神の要求を少しでも満たすことができますか。（できません。）それとは逆に、自分の観念や想像のせいで、神の道からさらに遠ざかるだけです。なぜなら、そうした人たちが求める方向性は、神が彼らに求める方向性と正反対のものだからです。あなたがたは「南轅北轍」の故事を聞いたことがありますか。これはまさに、志と行動が相反する「南轅北轍」であると言えます。こうした滑稽な形で神を信じるなら、必死に試みれば試みるほど、神から遠ざかってゆくことになります。そこで、あなたがたに次のように忠告します。何よりも先に、自分が本当に正しい方向へと進んでいるかどうかを識別しなければなりません。集中して努力し、必ずこのように自問しなさい。「自分が信じている神は、万物の支配者だろうか。自分が信じている神は、精神的な支えを与えるだけの存在に過ぎないだろうか。それは単に自分の偶像ではないのか。自分が信じている神は、私に何を求められているのか。私が行うすべてのことを、神は認めていらっしゃるだろうか。自分の行動と追求はどれも、神を知るよう求めることに則しているだろうか。それらは、神が私に求められることに則しているだろうか。私が歩んでいる道を、神は認め、称賛してくださるだろうか。神は私の信仰に満足していらっしゃるだろうか」。あなたは何度も繰り返し、これらを自問しなければなりません。神に関する認識を求めたいのであれば、神に満足してもらう前にまず、はっきりとした意識と目標をもたなければなりません。

神が自身の寛容さの結果、先に述べたこれら不適切な態度をしぶしぶ受け入れることはあり得るでしょうか。神がこのような人の態度を称賛することがあり得るでしょうか。（あり得ません。）人間、そして神に付き従う人に対する神の要求は何ですか。神が人々にどのような態度をもつよう求めているか、あなたがたははっきり理解していますか。ここまで、わたしは多くの物事を述べてきました。神自身、神の業、神が所有するものと神そのものという主題について、数多くのことを語ってきたのです。これで、神が人間から何を徳たいと望んでいるかがわかりましたか。神があなたに何を求めているかがわかりましたか。意見を述べてください。経験と実践からの認識が依然なかったり、あったとしてもごく表面的な場合、それらの言葉に関する自分の認識を述べても構いません。あなたがたは、その概要を認識していますか。神は人間に何を求めていますか。（これまで数回の交わりのなかで、私たちが神を知り、神の業を知り、神が万物のいのちの源であることを知り、神の身分と地位を知るよう、神は私たちに強く求められま

した。) 神が人間に対し、神を知るよう望んでいる場合、その最終的な結果はどのようなものになりますか。(人間は、神が創造主であり、人間が被造物であることを理解します。) 人がそうした認識を得た際、その人の神に対する態度、本分の尽くし方、そしていのちの性質に、どのような変化が生じますか。あなたがたはそれについて考えたことがありますか。神を知って理解した人は善良な人間になると言えるでしょうか。(神への信仰に、善良な人間になろうと求めることは含まれません。むしろそれは、基準を満たす神の被造物、正直な人になろうと追求することです。) 他にありますか。(真に、そして正しく神を知ると、私たちは神を神として扱えるようになり、神がいつも神でいらっしゃることに、私たちは被造物であって神を崇拝すべきであること、そして正しい立場に留まるべきであることを知るようになります。) 素晴らしい。他の意見も聞きましょう。(私たちは神を知り、最終的には真に神に従い、神を畏れ、悪を避ける人間になることができます。) その通りです。

3. 神が人類にもつよう求める神への態度

実際のところ、神は人間にさほど多くを求めておらず、少なくとも人間が想像するほど多くを求めてはいません。神が何の言葉も発することなく、自身の性質や業を表わしていなければ、あなたがたが神を知ることは極めて難しくなるでしょう。なぜなら、人は神の意図と旨を推測しなければならず、それは非常に難しいことだからです。しかし、神は自身の働きの最終段階において、数多くの言葉を語り、多くの働きを行い、人間に数多くのことを求めてきました。自身の言葉と数多くの働きにおいて、神は自身が何を好むか、何を嫌悪するか、そして人間はどうあるべきかを人々に対して知らせてきました。これらの事柄を理解した人は、神の要求に関する正確な定義を心の中でもてゐるはずで、なぜなら、漠然とした状態の中で神を信じるのがなく、漠然とした神を信じることも、漠然とした状態の中で、あるいは虚無の中で神へのこともなくなるからです。むしろ、神の発する言葉を聞き、神の要求の基準を理解し、それを達成することができるのであって、神は人間の言葉を用いて、人間が知って理解すべきことを人に伝えます。現在、神とは何か、神は自分たちに何を求めているのか、人はなぜ神を信じるべきなのか、あるいは神をどのように信じ、神にどう接するべきかを人が依然として認識していなければ、そこには問題があります。たったいま、あなたがた一人ひとりが、ある特定の分野について述べました。それが具体的であるか、一般的であるかを問わず、あなたがたは何かを認識しているのです。しかしわたしは、神の人類に対する、正確で、完全で、具体的な要求について話をしたいと思います。それはわずかな数語の単純なもの

です。あなたがたはそれをすでに知っているかもしれません。人類、そして神に付き従う人に対して神が要求することを以下に述べます。神は自身に付き従う人に対し、以下の五つを要求しています。つまり真の信仰、忠実な追随、絶対的服従、真の認識、そして心からの畏敬です。

この五つの事柄の中で、神は人々に対し、これ以上神を疑わないこと、そして自分の想像や、漠然とした観点によって神に付き従わないことを求めています。人々は想像や観念をもとに神に付き従ってはいけないのです。神は自身に付き従う一人ひとりに対し、忠実に付き従い、気持ち半分、あるいは無責任に付き従わないことを求めています。神があなたに何かを求めたり、あなたを試したり、裁いたり、取り扱って刈り込んだり、あるいは懲らしめて打ちすえたりしても、あなたは神に完全に服従するべきです。理由を尋ねたり、条件を付けたりしてはならず、ましてや理屈をこねたりしてはいけません。あなたの服従は完全なものでなければなりません。人間に最も足りないのは神に関する認識です。人間は神と何ら関係のない諺、発言、そして言葉をしばしば神に押しつけますが、そうした言葉が神に関する認識の最も正確な定義だと信じているのです。人間の想像に由来するこれらの諺、および人間自身の理論や知識は、神の本質とまったく無関係ですが、人はそのことをほとんど知りません。したがって、神が人々にもつよう望んでいる認識について言えば、神はあなたが神を認識し、神の言葉を認識することを求めているだけでなく、神に関するあなたの認識が正確であることを求めているのです。たとえひと言しか述べられなかったり、ほんの少ししか知らなかったりしても、そのわずかな認識は正確であり、真実であり、神自身の本質と一致しているということです。神は見間違いだったり無分別だったりする讃美や賞賛を嫌悪するからです。そのうえ神は、人間が神を空気のように扱うことを忌み嫌います。人が神に関する事柄を話するとき、事実と無関係な発言をしたり、何のためらいもなく適当に話したり、思いのままに語ったりするのを、神は忌み嫌います。また、自分は神を知っていると思い込み、神に関する認識を吹聴し、何ら気兼ねなくみだりに神に関する事柄を論じる人を、神は忌み嫌います。前述した五つの要求のうち最後のものは、心からの畏敬です。これは、神に付き従う者全員に対する神の最終的な要求です。神に関する正確かつ真の認識があれば、その人は真に神を恐れ、悪を避けることができます。この畏敬はその人の心の底から生まれるものであり、自ら進んで与えられたものであって、神による圧力の結果ではありません。神はあなたに対し、好感のもてる態度や行動、あるいは外面的な振る舞いといった贈り物を求めるのではなく、心の底から神を崇め、畏れることを求めます。この

ような畏敬は、あなたのいのちの性質が変化し、神に関する認識と神の業に関する理解を得て、神の本質を理解するようになり、自分が神の被造物の一つであるという事実を認めることで実現されます。ゆえに、わたしがここで「心からの」という言葉を用いて畏敬を定義づけるのは、神に対する畏敬は心の底から生じなければならないものであることを、人間が理解できるようにするというのが目的なのです。

ここで、この五つの要求について検討します。あなたがたの中に、最初の三つを達成できる人はいますか。最初の三つとは、真の信仰、忠実な追随、そして絶対的服従です。あなたがたの中にこれらのことができる人はいますか。五つすべてとなると、あなたがたの誰もそれができないのは確かですが、その数を三つに減らしました。自分がその三つを達成したかどうか考えてください。「真の信仰」は簡単に成し遂げられますか。

（簡単ではありません。）それは簡単ではありません。と言うのも、人間はよく神に対して疑念を抱くからです。では、「忠実な追随」はどうですか。この「忠実」とは何を指しますか。（半信半疑ではなく一心に、ということです。）半信半疑ではなく一心に、ということ。まさにその通りです。それでは、あなたがたはその要求を達成することができますか。あなたがたはもっと努力する必要があります。違いますか。目下のところ、あなたがたはこの要求を達成していません。「絶対的服従」についてはどうですか。あなたがたはそれを成し遂げましたか。（成し遂げていません。）あなたがたはこの要求も成し遂げていません。あなたがたはよく不従順になって反抗することがあり、耳を貸さず、従おうとせず、聞こうとしないことも度々あります。これらは、いのちへの入りを成し遂げた人が達成する最も基本的な三つの要求ですが、あなたがたはこれらの要求をいまだ成し遂げていません。それでは、現時点において、あなたがたには高い潜在能力がありますか。本日わたしの言葉を聞いて不安に感じていますか。（感じています。）あなたがたが不安を感じるのは正しいことです。不安を避けようとしてはいけません。わたしがあなたがたに代わって不安を感じます。残る二つの要求については立ち入りません。それらを達成できる人がいないのは確かだからです。あなたがたは不安です。では、あなたがたは自分の目標をすでに決めていますか。あなたがたはどのような目標をもって、どちらに向かって追求し、努力すべきですか。あなたがたには目標がありますか。わかりやすく説明しましょう。この五つの要求をすべて達成すれば、あなたがたは神を満足させたことになります。その一つひとつが、いのちへの入りを成就させたことの指標であり、また最終的な目標なのです。これらの要求から一つだけ選んで詳細を説明し、あなたがたに達成するよう求めたとしても、それは簡単なことではないで

しょう。ある程度の困難に耐え、ある程度努力する必要があるのです。あなたがたはどのような心構えをもつべきですか。それは、手術を待つがん患者と同じ心構えです。わたしがこう述べるのはなぜですか。あなたが神を信じることを望み、神、そして神の満足を得ることを望むのであれば、ある程度の苦痛に耐え、ある程度の努力をしない限り、それらを達成することはできません。あなたがたは多くの説教を聞いてきましたが、単にそれを聞いただけでは、その説教を自分のものにしたことにはなりません。あなたはその説教を吸収し、自分自身のものに变化させなければなりません。それを自分のいのちに同化させ、自分自身の生とし、それらの言葉と説教を人生の指針にするとともに、自分の人生に存在価値と意義をもたらすものにしなければならないのです。そのときこれらの言葉は、あなたが聞くだけの価値があるものになります。わたしの語る言葉があなたの人生を何ら向上させず、あなたの存在に何の価値も加えないなら、あなたがわたしの話を聞く意味はありません。これについては理解しましたね。それを理解したなら、次に何が起きるかは自分次第です。あなたがたは努力しなければなりません。あらゆることに真剣でなければなりません。混乱してはいけません。時が経つのは早いのです。あなたがたの大半は、十年以上にわたって神を信じてきました。その十年を振り返って、あなたがたはどれほど多くのものを得ましたか。そして、あなたがたの人生はあと何十年残されていますか。それほど多くの時間は残されていません。神の働きが自分を待っているかどうか、神が自分に機会を残したかどうか、神が同じ働きを再びするかどうかは忘れなさい。そのようなことを話してはいけません。あなたは人生の時計の針を十年戻せますか。一日経過して一步進むごとに、あなたに残された時間は一日ずつ少なくなります。歲月人を待たず、です。神への信仰から益を得られるのは、食糧や衣服などよりも、自分の人生において何より大切なものとして、神の信仰に取り組んだ場合だけです。時間がある時だけ信仰し、自分の意識を残らず信仰に捧げることができず、いつも混乱に捕らわれていたら、あなたは何も得られません。これについては理解しましたね。本日はここで終わります。ごきげんよう。（神に感謝します。）

2014年2月15日

附録：神の裁きと刑罰に神の出現を見る

わたしたちは主イエス・キリストに従う他の何億人もの人々と同じように、聖書の律法と戒めに従い、主イエス・キリストの豊かな恵みを受け、主イエス・キリストの名の下に集まり、祈り、賛美し、仕えている。そしてそのすべてを、主の配慮と加護のもと

に行っている。わたしたちは時として弱くなったり強くなったりするが、自分たちの行動はすべて主の教えに従うものだと思っている。そのため言うまでもなく、自分たちが天の父の旨を行う道にいることも信じている。わたしたちは主イエスの再来を、その輝かしい降臨を待ち望んでおり、また地上における生活の終わりと、神の国の出現、そしてヨハネの黙示録に預言されたことすべての実現を待ち望んでいる。主が到来して災害をもたらし、善人をねぎらい、悪人を懲らしめ、そして主に従いその再臨を歓迎するすべての人々を天に引き上げ主にまみえさせる。このことを考えるたび、わたしたちは感動し、感謝の念に包まれずにはいられない。わたしたちはこの世の終わりに生まれ、幸運にも主の到来を目の当たりにすることができるのだ、と。わたしたちは迫害の苦難を受けているが、その見返りに「永遠の重い栄光をあふれるばかりに」受けたのだ。何と素晴らしい祝福だろうか。こうしたすべての切なる願いと主から授けられた恵みによって、わたしたちは油断なく祈るようになり、より熱心に集っている。おそらく来年、明日、さらには誰も予想できないほど早く、主は突然やって来て、主をひたすら待ち望んできた人々のもとに現れることだろう。主の出現を目の当たりにする最初の集団となるために、天に引き上げられる人々の一員となるために、みな遅れを取らないよう、我先にと争っている。わたしたちはその日のために、どんな犠牲もいとわず、すべてを捧げてきた。仕事をあきらめた者や家族を捨てた者もいるし、結婚を放棄した者、蓄えをすべて寄付した者もいる。何という無私無欲の献身であろう。このような誠意と忠誠心は、過去の聖徒たちさえも超えるに違いない。主は自らが好む者に恵みを与え、自らが好む者に憐れみをかけるので、わたしたちの献身や支出はもうずっと前から神の目に留まっているものとわたしたちは信じている。そしてわたしたちの心を込めた祈りも神の耳に届いているし、主がわたしたちの献身に報いてくださるものと信じている。しかも神はこの世を造る前からすでにわたしたちを慈しんでおり、誰もわたしたちに与えられた神の祝福や約束を取り上げることはできない。わたしたちはみな未来のための計画を立てており、当然のこととして献身や支出を、天に引き上げられ主に会うための逆手、または見返りの元手としている。さらには何のためらいもなく、わたしたちが将来玉座に就き、すべての国とすべての民族を支配する、あるいは王として治めるものと考えている。わたしたちはこれらのことをすべて、当然の、当たり前期待されるものと捉えているのである。

わたしたちは主イエスに逆らうすべての人々を軽蔑しており、彼らは皆最終的に滅ぼされることになる。一体誰が彼らに、主イエスが救い主であることを信じるなど言った

のか。もちろんわたしたちは主イエスに習って、世の人々に対し思いやりを持つときもある。彼らは理解していないのであり、わたしたちは寛容になって彼らを許すべきなのだ。わたしたちの行いはすべて聖書の言葉に従っている。聖書と一致しないものはすべて邪教であり、異端だからである。このような信念はわたしたち一人一人の心の中に深く根付いている。わたしたちの主は聖書の中にあり、聖書から離れなければ、主からも離れることはない。この原則に忠実であれば、わたしたちは救われるのだ。わたしたちは互いに励まし合い支え合っており、集まる時はいつでも、わたしたちの言動のすべてが主の旨に適い主に受け入れてもらえることを願っている。過酷な環境の中でも、わたしたちの心は喜びに満ちている。これほど簡単に手に届く祝福のことを思えば、棚上げにできないものなどあるだろうか。手放しがたいものなどあるだろうか。これらはすべて言うまでもないことであり、すべては神の目に注意深く見守られている。掃きだめから引き上げられたこの一握りの貧しい者であるわたしたちは、主イエスのすべての信奉者たちと同様に、天に引き上げられること、祝福を受けること、そしてすべての国を治めることを夢見ている。わたしたちの墮落は神の目の前にさらけ出されており、わたしたちの欲望と貪欲さは神の目から見れば罪に定められている。それでもこうしたことはみなごく普通に、ごく論理的に起こることなので、わたしたちの誰も自分の切望が正しいかどうかなどと疑問を持たないし、ましてや誰一人自分の固守しているすべてのことの的確さを疑いもしない。誰が神の旨を知ることができるというのだろうか。人が歩いているのは一体どんな道なのか、わたしたちは探すことも調べることも知らず、ましてや尋ねようとする関心などない。なぜならわたしたちが気にしているのは、自分たちが天に引き上げられるかどうか、祝福が受けられるかどうか、天の国には自分の居場所があるかどうか、いのちの川の水といのちの木の果実の分け前にあずかれるかどうかということだけだからである。わたしたちはこれらを得るために主を信じ、主に従っているのではないのか。わたしたちの罪は赦され、わたしたちは悔い改めて、苦き杯から飲み、十字架を背負った。わたしたちの払った代価を主が受け入れないなどと誰が言えるだろう。わたしたちが油を十分準備していなかったなどと誰が言えるだろう。わたしたちはあの愚かな乙女にも、捨てられた者の一人にもなりたくない。しかもわたしたちはしばしば神に祈り、偽キリストに騙されないようにと主に求めている。それは、聖書に次のようにあるからだ。「そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう」（マタイによる福音書 24:23-24）。わたしたちは皆こうした聖書の言

葉を記憶に刻み、すべて諳んじていて、それらを貴重な宝であり、いのちであり、救われ天上に引き上げられるかどうかを決める信用状だと考えているのだ。

何千年もの間、生者はその願望や夢を携えて亡くなっていったが、その人たちが天国へ行ったのかどうかについて、誰一人本当に知る者はない。死者は戻って来るが、過去に起こったことはすべて忘れてしまい、依然として先人の教えや歩んだ道に従っている。このためどれほど月日が経とうとも、主イエスが、神が、わたしたちのすることをすべて本当に受け入れてくれるかどうかは誰にもわからない。わたしたちはただ一つの結果を待ち望み、これから起こるすべてのことを想像するだけだ。しかし神は沈黙を守り通しており、人間の前には一切姿を現さず、言葉を発することもない。だからわたしたちは聖書に従いしるしに基づいて、自らの意思で神の旨と性質を判断している。わたしたちは今では神の沈黙に慣れてしまい、自分たちの行動が正しいか間違っているかの判断を自らの見方で測ることに慣れてしまった。そして神のわたしたちに対する要求ではなく、自分の知識、観念、道徳的倫理に依存することに慣れてしまった。神の恵みを享受することに慣れてしまい、神の助けが必要な時にいつでも神が与えてくれることに慣れてしまった。さらに神に向かって両手を伸ばしてあらゆるものを求め、神にあれこれ指図することに慣れてしまい、ただ規則を守るだけで、聖霊の導きに注意を払わないことにも慣れてしまった。そしてそれ以上に、自分自身が自分の主人である日々慣れてしまった。わたしたちはこのようにして、一度も直接会ったことがない神を信じている。神の性質とはどんなものか、神が所有するものと神そのものとはどんなものか、神はどのような姿をしているのか、神が現れたときわたしたちはそれが神だとわかるだろうか、などという疑問はどれも重要ではない。重要なのは、神がわたしたちの心の中にいるということと、わたしたちが皆神を待ち望んでいるということであり、わたしたちは神の姿をこうだあだと想像できるだけで十分なのだ。わたしたちは自分の信仰を評価し、自分の霊性を大切にしている。わたしたちはすべてを不潔なものに見なし、すべてのものを踏みつけていく。わたしたちは栄光なる主を信じる者なので、その旅路がいかに長く困難であろうとも、いかなる苦難と危険に晒されようとも、わたしたちが主に従って行くとき、わたしたちの歩みを止めることができるものは何もない。「いのちの水の川は、水晶のように輝き、神と小羊の御座から出ていた。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜

は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する」（ヨハネの黙示録 22:1-5）。この言葉を唱えるたびに、わたしたちの胸は無限の喜びと満足感に満たされ、目からは涙が溢れ出る。主がわたしたちを選ばれたことに感謝し、主の恵みに感謝する。わたしたちは神からこの世で百倍もの報いを受け、来世では永遠の命を与えられている。もし神に今死になさいと言われてれば、わたしたちは一言の文句も言わずそうするだろう。ああ主よ、どうぞ早く来てください。わたしたちがどれほどあなたを待ち焦がれており、あなたのためにすべてを捨てたかをご覧になって、もう一分も、一秒も遅らせないでください。

神は沈黙しており、わたしたちの前に姿を現したことはないが、神の働きは止むことがない。神は全世界を見渡し、あらゆる物事を支配しており、人の言葉と行動の一切をつぶさに見ている。神はその経営を計画に従ってゆっくりと慎重に行っており、それは静かに、特に劇的な効果も見せず進行しているが、神の歩みは一步一步進んでますます人類に近付き、神の裁きの座は電光石火の速さで宇宙に設けられ、その直後に神の玉座がわたしたちのもとに降りて来る。それは何と神々しい光景であり、威厳と神聖に満ちた情景だろうか。鳩のように、うなり声をあげるライオンのように、聖霊がわたしたちのもとにやって来る。神は知恵であり、義であり、威厳である。神は権威を持ち、愛と憐れみに満ちて、そっとわたしたちの間にやって来る。誰も神の到来に気づかず、誰もその到来を歓迎せず、その上誰も神がこれからしようとしていることを知らない。人の生活は相変わらずで、心にも変化は無く、毎日がいつも通りに過ぎていく。神はわたしたちの間に、普通の人のように、信仰者の中で最も取るに足らない者として、平凡な一信者として生きている。彼には独自の探求や目標があり、そのうえ神は普通の人でない神性を備えている。誰もその神性の存在に気づいておらず、誰も彼と人の本質の違いを見抜いていない。彼はわたしたちの目には取るに足らない一人の信者にしか見えないので、わたしたちはのびのびと恐れることもなく彼と共に暮らしている。彼はわたしたちの一挙一動を観察しており、わたしたちの考えや思いつきはすべて彼の前に晒されている。誰一人として彼の存在に関心を持たないし、その役割を想像もせず、さらに誰一人その正体をかけらも疑っていない。わたしたちはただ自分たちの活動を継続している。あたかも彼はわたしたちと何の関係もないとでも言うように。

聖霊がたまたまこの人を「通して」一編の言葉を発することもあり、それは非常に意外なことに感じられるが、わたしたちはそれを神の発した声だと認め、すぐに神から出たものとして受け入れる。なぜならその言葉を誰が発しようと、それが聖霊から

出たものである限り、わたしたちはそれを受け入れるべきであり、否定することはできないからだ。次の発言はわたしを通して出されるかもしれないし、あなたや他の誰かを
通して出されるかもしれない。それが誰かにかかわらず、すべては神の恵みなのだ。し
かしそれが誰であろうと、その人を崇拜してはならない。何があろうとその人が神であ
ることはありえないし、そのようなごく普通の人を選んでわたしたちの神とすることは
決してできないからだ。わたしたちの神は非常に偉大でかつ尊い。どうしてそのような
取るに足らない人が、神に代わることなどできようか。さらにわたしたちは神が天の国
へと連れ戻しに来てくれるのを待っているのに、そのような重大で困難な仕事を、そん
な取るに足らない人がどうして行えようか。主が再臨するとすれば、白い雲の上に乗っ
て現れるはずなのだから、すべての人がそうとわかるだろう。それは何と荘厳なことだ
ろうか。どうして神が平凡な人々の中にそっと隠れていることなどできるだろうか。

しかしそれでも、人々の間に紛れているこの平凡な人こそが、わたしたちを救うため
の新しい働きを行っているのだ。この人は何も説明することはないし、来た理由を話す
こともなく、ただ意図した働きを整然と、自分の計画に沿って行うだけだ。彼はますま
す頻繁に声を発し、発言するようになる。それには慰め、励まし、忠告、警告から非難
や懲らしめまで、そして穏やかで優しい口調から荒々しく荘厳な言葉までがあり、その
すべてが人に憐れみを与えるとともに戦慄を植え付ける。彼が言うことはすべて、わた
したちの奥深くに隠された秘密に命中し、彼の言葉はわたしたちの心を突き刺し、霊を
突き刺し、わたしたちを耐え難いほど恥じ入らせ、どこに隠れてよいかもわからない気
持ちにさせる。そしてわたしたちは、この人物の心の中にいる神は本当にわたしたちを
愛しているのか、一体何をしようとしているのか、と疑い始める。もしかすると、この
ような痛みには耐えなければ天国に引き上げてもらえないのだろうか。これからの行く先
や未来の運命について、わたしたちは頭の中で思案する。しかしそれでもまだ、誰一人
として神がすでに肉体を得てわたしたちの間で働きを行っているとは考えない。神はこ
れほど長い間わたしたちと共にあり、これほど多くの言葉をわたしたちに直接語ってき
たが、わたしたちはいまだにそのような平凡な人を、自分たちの未来の神だとは認めた
がらないし、ましてその取るに足らない人に自分たちの未来と運命の支配を任せたりは
したがないのだ。わたしたちは彼から絶えることのないいのちの水を享受し、彼を通
して神と向き合いながら生活している。しかしわたしたちは天におられる主イエスの恵
みには感謝するが、神性を備えたこの普通の人々の気持ちには一切注意を払ってこなかっ
た。それでも彼は従来どおり、肉体の中に隠れて謙虚に仕事を続け、その心の奥に秘め

た思いを表し、人類が彼を拒んでも気にもならないかのように、また人の稚拙さも無知も永久に赦すかのように、自らに対する人々の非礼をひたすら黙認しているのだ。

わたしたちが知らないうちに、この取るに足りない人はわたしたちを神の働きの一つ一つの段階へと導き入れてきた。わたしたちは数え切れないほどの試練に耐え、数々の懲らしめを受け、死をもって試される。そして神の義なる威厳に満ちた性質を知り、神の愛と憐れみも享受し、神の偉大な力と知恵を感じられるようになり、神の愛らしさを目のあたりにし、そして人類を救いたいという神の強い願いを目にする。この平凡な人の言葉を通して、わたしたちは神の性質と本質を知り、神の旨を理解し、人の本性と本質をも理解し、そして救いへの道と完全にされるための方法を知るようになる。その言葉はわたしたちを「死なせ」、そして「生き返らせる」。その言葉は安らぎを与えるが、同時に罪悪感と恩義の念でわたしたちを苦しめもする。その言葉はわたしたちに喜びと平安をもたらすが、同時に無限の痛みも与える。わたしたちは時にその手によって屠られる子羊のようであり、時に最愛のもののようにその慈愛を享受する。また時にはその人の敵のようでもあり、そのまなざしのもとでその怒りによって焼かれ灰にされる。わたしたちは彼に救われる人類であり、その目から見れば蛆であり、彼が日夜見つけ出そうと躍起になっている迷える子羊である。彼はわたしたちに対して慈悲深くもあれば、わたしたちを軽蔑もし、立ち上がらせ、慰め励まし、導き啓き、懲らしめ鍛え、そして呪いさえする。彼は昼も夜もわたしたちのことを心配し続け、昼も夜も守り気遣い、決してわたしたちの傍を離れず、わたしたちのためにその心血を注ぎ、いかなる代償も払う。この小さく平凡な肉体から出る言葉の中に、わたしたちは神のすべてを享受し、神がわたしたちに授けた終着点を見た。それにもかかわらず、わたしたちの心の中ではいまだ虚栄心のために問題が起こっており、このような人を積極的に神として受け入れることができずにいる。この人はわたしたちに非常に多くのマナや、多くの喜びを与えたが、それでもわたしたちの心の内にある主の地位を奪うことはできない。わたしたちはこの人の特別な身分と地位を嫌々ながらに尊重しているのだ。彼が口を開いて、わたしたちに自分が神であることを認めるよう求めない限り、わたしたちは決してこの人を、まもなく現れる、そして同時にすでにわたしたちのもとで長く働いてきた神として、あえて認めようとはしないだろう。

神は発話を続けており、さまざまな方法や観点をを用いてわたしたちにすべきことを諭しつつ、同時にその心を言葉に表している。その言葉は生命力を備えており、わたしたちが歩むべき道を示し、真理とは何かを理解させてくれる。わたしたちはその言葉に引

き付けられるようになり、その口調や話し方に注目し始め、そして無意識のうちに、この目立たない人の心の内に関心を持ち始める。彼はわたしたちのために労力を惜しまず、わたしたちのために睡眠も食欲もなくし、涙を流し溜息をつき、病気に苦しみ、わたしたちの終着点と救いのために屈辱を耐え忍び、わたしたちが鈍感で反抗的なために心から涙と血を流している。このような存在とその持てるものは、普通の人を超えているし、墮落した人間が誰一人として所有も到達もできないものだ。彼には普通の人にはない寛容と忍耐力が備わっており、その愛はどんな被造物にも授けられていないものなのだ。わたしたちの考えをすべて知り、わたしたちの本性や本質をこれほど明確かつ完全に把握し、人類の反抗的で墮落した性質を裁き、天国の神の代理としてわたしたちに語りかけ、このように人の間で働くことができる人は、この人をおいて他にいない。彼以外に神の権威、英知、そして威厳を授けられている者はいない。この人からは神の性質、そして神が所有するものと神そのものが、あますところなく発せられている。この人以外に、わたしたちに道を示し、光をもたらせる者はいない。彼以外に、神が天地創造から今日まで明かしてこなかった奥義を明らかにできる者はいない。彼以外に、わたしたちをサタンの束縛やわたしたち自身の墮落した性質から救える者はいない。彼は神を体現しており、神の心の奥底にあるものと訓戒、そして全人類に対する神の裁きの言葉を表現している。彼は新しい時代、新しい紀元を開き、新たな天地と新しい働きを到来させた。そして彼はわたしたちに希望をもたらし、漠然としていたわたしたちの生活を終わらせ、わたしたちの全存在をもって救済の道を完全にはっきりと目撃できるようにしてくれたのである。彼はわたしたちの存在そのものを征服し、わたしたちの心を得た。その瞬間からわたしたちの心は覚醒しており、霊が生き返ったように思われる。この平凡で取るに足らない人物、わたしたちの間で生きながらも長年わたしたちに拒否され続けてきたこの人こそ、わたしたちが寝ても覚めても絶えず思い続け、日夜待ち望んできた主イエスではないだろうか。そう、彼なのだ。実際そうなのだ。この人こそがわたしたちの神なのだ。彼こそが真理であり、道であり、いのちである。彼はわたしたちがもう一度生きて光を見ることができるようにし、わたしたちの心のさまよいを止めてくれたのだ。わたしたちは神の家に戻り、神の玉座の前に戻り、神と顔を合わせ、神の顔を目撃し、行く手にある道をこの目で見た。今、わたしたちの心は完全に彼に征服され、わたしたちはもはや彼が誰であるか疑わず、もうその働きや言葉に反抗することもなく、ただ彼の前にひれ伏す。わたしたちの望みは、ただ残りの人生をずっと神の足跡に従って生きること、神に完全にされること、そして神の恵みとわたしたちへの愛に報い、神の指揮と采配に従い、神の働きに協力し、できる限りのことをして神に委ねられた物

事を全うすることだけである。

神に征服されることは、まるで武術の試合のようだ。

神の言葉は一つ一つがわたしたちの急所を突き、わたしたちは傷ついて恐れに満たされる。彼はわたしたちの観念、想像、そして墮落した性質を明らかにする。すべての言動から思いや考えの一つ一つに至るまで、わたしたちの本性や本質は神の言葉によって暴かれ、わたしたちは恥じ入って隠れる場所もなく恐怖に震える。彼はわたしたちの行動、目的や意図、そして自分でも知らなかった墮落した性質まで、すべてを一つ一つわたしたちに示すので、わたしたちは自分の惨めな不完全さをすべて見せつけられ、さらには完全に打ち負かされた気持ちになる。彼はわたしたちが反抗したことを裁き、神を冒瀆し糾弾したことでわたしたちを罰し、自分たちが神の目には何の贖うべき特徴もなく、生きたサタンなのだと思わせる。希望は粉々にされ、もはや神に理不尽な要求をしたり希望を持ったりすることもなくなり、夢さえも一夜にして消え去る。これは誰一人として想像できず、受け入れることもできない事実である。一瞬のうちにわたしたちは内面の平静を失い、この先どうやって進んでいけばいいのか、どうやって信仰を保っていけばいいのかわらなくなる。まるで自分たちの信仰が振り出しに戻ったような、そして主イエスに会ったことも、主を知ったこともないような気持ちになる。目の前のすべてがわたしたちを困惑させ、ためらいに揺れ動かせる。わたしたちは狼狽し、落胆し、そして心の奥深くには抑えきれない憤りと屈辱感がくすぶる。そしてうっづんを晴らそう、出口を探そうと試み、さらには救い主イエスを待ち続けて、イエスに胸中を打ち明けようとさえ考える。表面上は平静で、高慢でも謙虚でもないように見えるときもあるが、心の中ではこれまでにない喪失感に苛まれている。ときには表面上いつになく冷静に見えることもあるかもしれないが、内面は荒れた海原のような苦悶に揺れている。彼の裁きと刑罰はわたしたちの希望と夢のすべてを奪い去ったため、贅沢な望みはみな葬られ、わたしたちはあの人を救い主で自分たちを救えるのだと信じようとはしなくなる。彼の裁きと刑罰はわたしたちと神との間に亀裂を作り、それがあまりに深いため、誰も渡ろうとさえしない。彼の裁きと刑罰によって、わたしたちは人生で初めてこれほどの挫折と屈辱を感じたのである。わたしたちは彼の裁きと刑罰によって、神の名誉と人の侮辱に対する神の不寛容とを本当に認識した。それと比べると、わたしたちはなんと卑しく汚れていることか。彼の裁きと刑罰によってわたしたちは初めて、いかに自分たちが傲慢で尊大か、いかに人間が決して神と同等でなく、神と肩を並べることは一切ないかを悟らされた。神の裁きと刑罰によって、わたしたちはもうこのような墮落した性

質の中で生きることをやめたい、この本性と本質からできるだけ早く抜け出したい、神にとって卑劣で不快なものでなくなりたいと願うようになった。神の裁きと刑罰によって、わたしたちは神の言葉に喜んで従うようになり、もはや神の指揮と采配に反抗することはなくなった。彼の裁きと刑罰によって、わたしたちは生き残ることを再び切望するようになり、喜んで彼を救い主として受け入れるようになった……。わたしたちは征服の働きから抜け出し、地獄から、死の影の谷から抜け出した……。全能神はわたしたちを、この一群の人々を得たのだ。神はサタンに打ち勝ち、数多くの敵を打ち倒したのだ。

わたしたちはごく普通の、墮落したサタンのような性質を持つ人々の集団であり、有史以前から神によって運命の定められた、神が掃きだめからすくい上げた貧しい者たちである。わたしたちはかつて神を拒絶し糾弾したが、今は神に征服されている。わたしたちは神からいのちを受け、永遠のいのちの道を授かった。地球上のどこにいても、どのような迫害や試練を受けても、全能神の救いから離れることはできない。なぜなら神こそわたしたちの創造主であり、唯一の贖い主であるからだ。

神の愛は泉の水のように溢れ出て、あなたやわたしや他の人々に、そして真理を求め神の出現を待ち望むすべての人々に与えられる。

終わりのない昼夜の入れ替わりの中で月がいつも太陽を追っているように、神の働きは決して止むことがなく、あなたやわたしや他の人々に、そして神の足跡に従い神の裁きと刑罰を受け入れるすべての人々に行われる。

2010年3月23日

これは『全能神教会の起源と発展』の序文として神が記した文章である。

あとがき

これらの言葉は、神が表したものの全てでは無いが、神を知ることと性質の変化という目的を人が果たすのに十分である。中国本土における神の働きが既に終わっているために、これは神が語るべき言葉を全て語り、これらが神が語ることのできる全ての言葉

なので神は一切新たな言葉を述べることは有り得ないことを証明するものだと考える人もあることであろう。さらに、『言葉が肉体で現れる』には神の国の時代に神が表出した物事の全てが含まれ、この書を受け取ることは、神の全てを受け取ることに等しい、あるいは聖書がしたように今後はこの書が人類を導くであろうと考える人もいる。こうした考えの人々は少数派ではないと確信している。なぜなら人々は常に神に対して制限を加えたがるからである。このような人は皆、神が全能であり全てを包含していると主張するが、人間の本性のため、人間は神を特定の範囲に制限しがちになる。人はそれぞれ神を知ると同時に、神を拒否し、制限しているのである。

神の国の時代における神の働きは、始まったばかりである。本書中にある神の言葉の全ては、その時点で神に付き従っていた人々だけを対象としており、現在肉にある神の表出した内容の一部でしか無く、神の全てに相当するものではない。それ以上に、今回の受肉の間に神が行う働きの全てを含んでいるとは言えない。神は、様々な民族や背景の人々を自らの言葉の対象とし、全人類を征服し、旧来の時代を完了する。それならば、神の言葉のこれほどの僅かな部分を表しただけで、どうして働きが完了することができようか。それは単に、神の働きは様々な期間と段階に分割されている、ということである。神は神の計画に従って働き、神の段階に従って神の言葉を表している。神の全能性と知恵をどうして人間が想像できようか。現在わたしが説明している事実は、神であるもの、神がもつものは永遠に無尽蔵であり、無限であるということである。神は生命と万物の源である。神は、創造物が想像し得ないものである。最後に、すべての人に再度思い出させなければならないことがある。すなわち、神を書籍や言葉、従来の言葉に制限してはならない、ということである。神の働きの特徴は「新しい」という一語に尽きる。神は旧来の道を辿ったり、働きを反復するのを好まない。さらに、神は人間が神を一定範囲に制限した上で礼拝することを望まない。これは神の性質である。